

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 116

# 津 寺 遺 跡 4

山 陽 自 動 車 道  
建 設 に 伴 う 発 掘 調 査

1 4

(第1分冊)

1 9 9 7

日本道路公団中国支社岡山工事事務所  
岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 116

# 津 寺 遺 跡 4

山 陽 自 動 車 道  
建 設 に 伴 う 発 掘 調 査

1 4

(第 1 分冊)

1 9 9 7

日本道路公団中国支社岡山工事事務所  
岡 山 県 教 育 委 員 会



弥生～古墳時代の遺構検出状況



古墳時代前期の水田



古墳時代後期の竪穴住居



古墳時代後期の土器



奈良時代の掘立柱建物群



奈良時代の土器



- 1 上：検出状況
- 2 下：出土土器

土器埋納壙-1



3 二彩小壺出土状況



4 出土二彩小壺

土器埋納壙-2



1 検出状況



2 銅銭出土状況



3 出土遺物



4 出土銅銭



中世の土壙墓



井戸-5出土の木札



# 序

山陽自動車道は、大阪府吹田市を起点として瀬戸内海沿岸の主要都市を結び、山口県下関市に至る総延長約487kmの高速自動車道であります。岡山県においては、昭和63年3月の笠岡～早島インターの供用開始に始まり、平成5年12月には県内全線を開通することができました。広島県においても平成5年10月に全線が開通しており、ここに岡山県と九州を結ぶ交通の大動脈が完成することとなりました。

この山陽自動車道を建設するにあたり、建設省および日本道路公団では、その予定路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて岡山県教育委員会と協議し、昭和56年から記録保存のための発掘調査を岡山県教育委員会に委託して実施してまいりました。その成果は、13冊の報告書として岡山県教育委員会によりまとめられています。

第14分冊にあたる本書には、昭和63年から平成4年にかけて実施した岡山市津寺遺跡の発掘調査の成果を収載しました。津寺遺跡は、岡山ジャンクションの位置に所在する弥生時代～中世の集落遺跡で、その発掘調査は87,000㎡にもおよぶ大規模なものとなりましたが、本書に報告するような数々の貴重な成果をあげることができました。この本が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、教育・学術のために広く活用されことを期待します。

最後に、発掘調査の実施や本書の編集にあたって御尽力いただいた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成9年3月

日本道路公団中国支社岡山工事事務所  
所長 和田 峻

# 序

瀬戸内地方は温暖な気候と風土にめぐまれ、我が国の歴史を彩る幾多の文化を育んできました。その瀬戸内海沿岸を東西に結ぶ山陽自動車道は、平成5年12月に県内全線が開通し、これらの地域相互の経済・文化の交流を促進する新たな交通網として重要な役割を果たしています。

この山陽自動車道の建設にあたって、岡山県教育委員会では、その予定路線内に所在する埋蔵文化財の保護を図るため、繰り返し協議・調整をはかってまいりました。現状での保存が困難なものについては、記録保存の措置を講ずることとし、昭和56年から建設省岡山国道工事事務所あるいは日本道路公団広島建設局の委託を受けて発掘調査を実施してまいりました。その成果については、既に13冊の報告書として刊行したところです。

津寺遺跡は、弥生時代～中世の集落跡で、古代の官衙や護岸施設などの存在が明らかとなり、この地域を代表する遺跡として注目を集めていますが、第14分冊にあたる本書では、この東側の地区の発掘調査成果を収載しました。この地区では、県内において調査例の少ない古墳時代後期の集落跡や奈良時代の胞衣壺の出土など数多くの成果をあげることができました。

この報告書が埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、教育・学術のために広く活用されることを期待します。

最後に、発掘調査の実施や本書の作成にあたっては、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方に有益な御助言と御指導を賜り、また関係各位からは多大な御協力をいただきました。ここに深甚なる謝意を表するものであります。

平成9年3月

岡山県教育委員会

教育長 森 崎 岩 之 助

# 例 言

1. 本書は、岡山県教育委員会が高速自動車国道山陽自動車道の建設に伴い日本道路公団の委託を受けて実施した、岡山市津寺に所在する津寺遺跡の発掘調査報告書の第4分冊である。
2. 本書に収載した発掘調査は、昭和63年度から平成4年度にかけて実施したもので、調査面積は22,191㎡である。
3. 津寺遺跡の発掘調査および報告書作成にあたっては、高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の指導を得た。

水内 昌康（岡山県文化財保護審議会委員）	昭和61年4月～
鎌木 義昌（岡山県文化財保護審議会委員）	昭和61年4月～平成5年3月
西岡憲一郎（岡山県遺跡保護調査団）	昭和61年4月～平成3年3月
西川 宏（岡山県遺跡保護調査団）	昭和61年4月～
間壁 葎子（倉敷考古館）	昭和61年4月～
高見 周夫（岡山県遺跡保護調査団）	昭和63年4月～
根木 修（岡山市教育委員会）	昭和61年4月～
稲田 孝司（岡山大学）	平成3年6月～平成5年3月
新納 泉（岡山大学）	昭和61年4月～平成3年5月 平成5年4月～
亀田 修一（岡山理科大学）	平成5年4月～
土井 基司（岡山大学）	平成3年6月～平成5年6月

4. 本書の作成は、平成7年度に岡山県古代吉備文化財センター津寺事務所において実施した。遺構・遺物の整理は、岡山県古代吉備文化財センター職員 大村俊幸・山本晋也・亀山行雄・大橋雅也・谷口広幸・杉山一雄・澁田東美の7名が担当した。
5. 本書の執筆は、発掘調査者および整理担当者があたり、文責はそれぞれ文末に記した。
6. 掲載した地形図には、国土地理院発行の1/25,000の地形図、総社東部・倉敷を複製して使用した。
7. 本書で使用した時代区分は歴史学の原理的区分に従い、その細分には一般的な政治史区分を使用した。ただし、原始・先史時代については考古学的時代区分を使用し、その時期区分については第2章第4節に解説を付した。
8. 本書の編集・構成は亀山・大橋が担当した。
9. 遺跡の環境や遺物の材質等に関する鑑定・同定については、下記の方々の協力を得た。

墨 書 釈 読	志田原重人（比治山女子短期大学） 加原耕作（岡山県立博物館）
人 骨 鑑 定	井上貴央（鳥取大学）
脂 肪 酸 分 析	中野益男・福島道広（帯広畜産大学） 株式会社ズコーシャ総合科学研究所

動物遺体鑑定	金子浩昌（早稲田大学）
植物遺体鑑定	畔柳 鎮（岡山商科大学） パリノ・サーヴェイ株式会社
花粉・珪酸体分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
植物種子同定	粉川昭平（大阪市立大学）
C <sup>14</sup> 年代測定	パリノ・サーヴェイ株式会社
胎土分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所） 巽淳一郎・村上 隆（奈良国立文化財研究所）
ガラス滓分析	苅谷道郎（株式会社ニコン）
鉄滓分析	大澤正己 九州テクノリサーチ株式会社
赤色顔料分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
石材同定	妹尾 護（倉敷芸術科学大学）
石材産地同定	藁科哲男（京都大学）
陶磁器鑑定	大橋康二（九州陶磁文化館）

10. 本書に収載した遺物および記録の一切は、岡山市西花尻1325-3に所在する岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

# 凡 例

1. 本書で使用した方位は磁北を用いた。
2. グリッドは国土座標により、100mごとに設定した。
3. 本書で使用した標高は、海拔高である。
4. 図版の縮尺は、原則として次のように統一した。

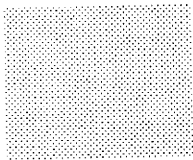
## 遺構

竪穴住居・掘立柱建物 1/60 井戸・土壇・土器棺墓・土壇墓 1/20・1/30

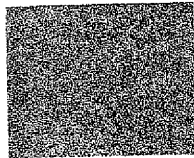
## 遺物

土器 1/4 土製品・石製品・金属製品 1/3・1/2 玉類 1/1

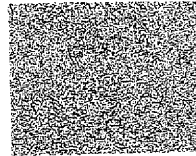
5. 遺構の平面図において、一点又線は底面の輪郭を、二点又線は最大幅の輪郭を表現している。
6. 炭・灰や粘土・焼土の分布、被熱範囲は、次のスクリーントーンで表示した。



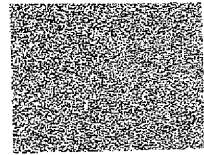
粘 土



炭・灰



焼 土



被熱範囲

7. 遺構・遺物は、それぞれの種類に区別して調査区ごとに番号を付した。

また、遺構の全体図・配置図においては遺構の種類を表す記号として以下のものを用いた

竪穴住居：H 掘立柱建物：B 井戸：E 袋状土壇：FK 土壇：K  
焼成土壇：XB 土壇墓：XK 土器棺墓：XC 土器溜り：XA 溝：D  
たわみ：XD 柱穴列：F

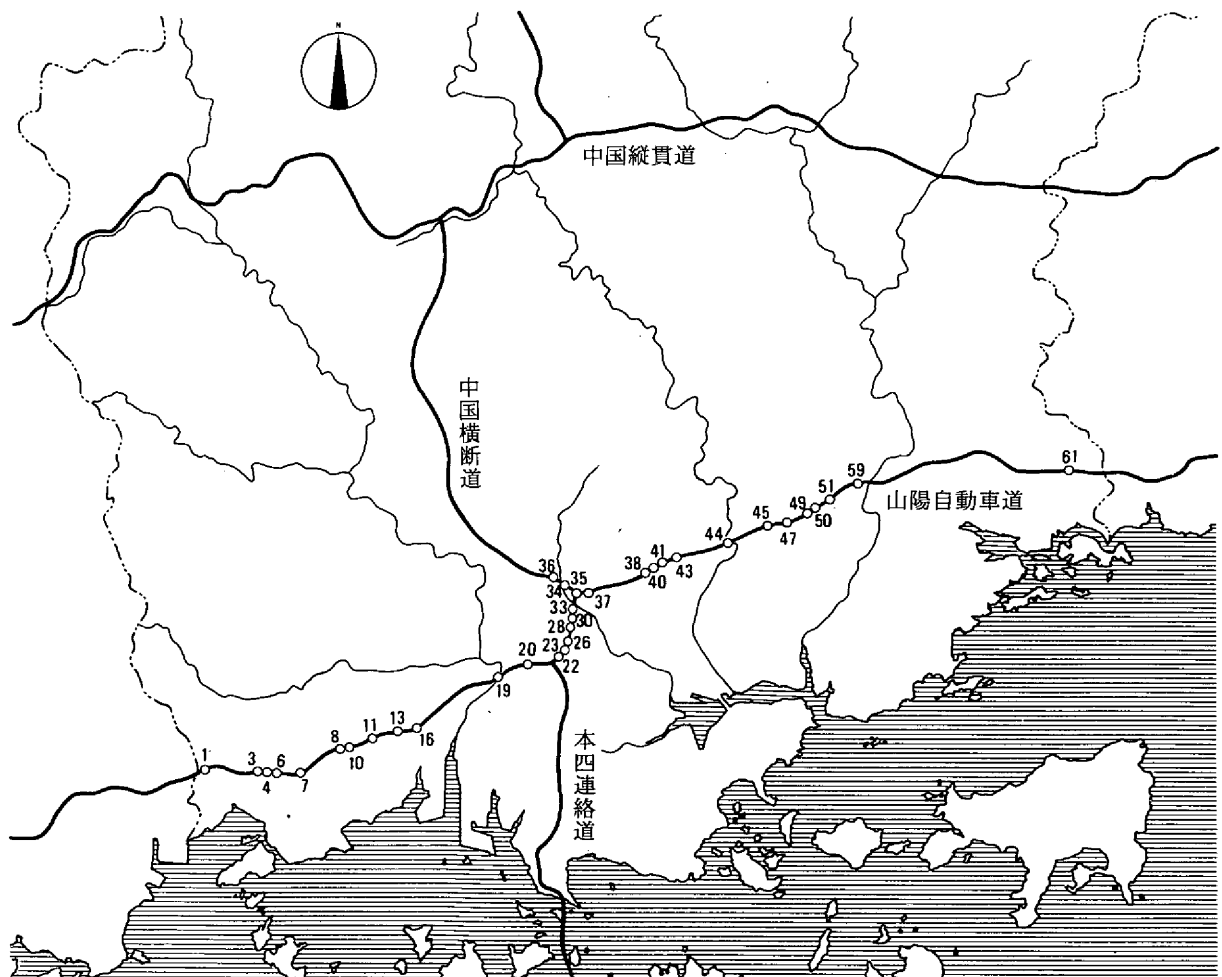
遺物には、それぞれの材質を表示するため、番号の前に次の記号を付した。

土製品：C 石製品：S 木製品：W 金属製品：M 玉類：J

山陽自動車道関連発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年度	調査面積	調査担当者	報告書
1	内山遺跡	笠岡市篠坂	遺構・遺物なし	昭和59年度	550㎡	福田	70
2	中畦遺跡	笠岡市小平井	遺構・遺物なし	昭和59年度	98㎡	福田	70
3	鍛冶屋遺跡	笠岡市小平井	古墳時代～中世の集落・製鉄跡	昭和59～61年度	29,328㎡	松本・岡田・福田・田中・武田	70
4	園井土井遺跡	笠岡市園井	中世の集落	昭和59～60年度	5,570㎡	福田・田中	70
5	彌直ヶ峠遺跡	笠岡市園井	遺構・遺物なし	昭和59年度	460㎡	福田	70
6	本谷遺跡	笠岡市今立	中世の集落	昭和59年度	200㎡	福田	70
7	沖の店遺跡	鴨方町小坂西	中世の窯跡	昭和55年度	—	伊藤・浅倉	42
8	和田遺跡	鴨方町益坂	弥生時代の墳墓群	昭和54年度	—	伊藤・浅倉	42
	宮の脇古墳	鴨方町地頭上	古墳時代の墳墓	昭和54年度	—	伊藤・浅倉	42
9	向原遺跡	鴨方町益坂	遺構・遺物なし	昭和54年度	—	伊藤・浅倉	42
10	阿坂古墳	鴨方町益坂	古墳時代の墳墓	昭和54年度	—	伊藤・浅倉	42
11	上竹西の坊遺跡	金光町阿坂	弥生時代～古代の集落・窯跡	昭和56・58年度	9,650㎡	正岡・井上・福田・古谷野・武田	69
12	唐津池北遺跡	倉敷市玉島道口	弥生時代の集落	昭和58～59年度	5,230㎡	正岡・福田・古谷野	69
13	道口遺跡	倉敷市玉島	古墳時代の集落	昭和58～59年度	1,830㎡	正岡・福田・古谷野	69
14	沢寺遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚	昭和58～59年度	2,940㎡	正岡・福田・古谷野	69
15	西光坊遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚	昭和58～59年度	480㎡	正岡・福田・古谷野	69
16	亀山遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚・窯跡・墳墓	昭和58～60年度	10,160㎡	正岡・岡田・福田・古谷野・田中・武田	69
17	中山貝塚	船穂町中山	中世の貝塚	昭和59年度	850㎡	浅倉・中野	81
18	酒津八幡山遺跡	倉敷市酒津	古墳時代の遺物包含層	昭和59年度	770㎡	浅倉・中野	81
19	酒津-水江遺跡	倉敷市酒津	弥生時代～中世の遺物包含層	昭和59年度	260㎡	浅倉・中野	81
20	菅生小学校裏山遺跡	倉敷市西坂	旧石器～中世の集落	昭和59・60～62年度	21,450㎡	浅倉・中野・亀山・小松原	81
	西坂古墳	倉敷市西坂	古墳時代の墳墓	昭和61年度	—	中野・亀山	81
21	三田散布地	倉敷市三田	中世の水田	昭和61年度	200㎡	井上	81
22	二子14号墳	倉敷市二子	古墳時代の墳墓	昭和61～62年度	1,700㎡	井上・松本・亀山	81
23	矢部古墳群A	倉敷市矢部	古墳時代の墳墓群	昭和59・61年度	4,760㎡	浅倉・大智	81
24	矢部古墳群B	倉敷市矢部	弥生時代の集落・古墳時代の墳墓群	昭和59・61～62年度	2,820㎡	井上・内藤・大智	82
25	矢部大坑遺跡	倉敷市矢部	弥生時代の集落・中世の祭祀跡	昭和62年度	1,200㎡	内藤・大智	82
26	矢部奥田遺跡	倉敷市矢部	縄文時代の貝塚・古墳時代の粘土採掘跡	昭和59・62年度	3,200㎡	山磨・浅倉・中野・内藤・大智・佐守	82
27	矢部堀越遺跡	倉敷市矢部	弥生時代～中世の集落・墳墓	昭和59・62年度	7,400㎡	浅倉・中野・内藤・大智・石田	82
28	郷境墳墓群	岡山市津寺	弥生時代～古墳時代の墳墓群	昭和61～62年度	1,365㎡	松本・亀山	89
29	前池内遺跡	岡山市津寺	弥生時代～中世の集落・墳墓	昭和61～62年度	6,835㎡	中野・小松原	89
30	前池内3号墳	岡山市津寺	古墳時代の墳墓	昭和62年度	1,675㎡	田中・亀山	89
	前池内4～7号墳	岡山市津寺	古墳時代の墳墓群	昭和63年度	990㎡	中野・後藤	89
31	後池内遺跡	岡山市津寺	弥生時代・中世の集落	昭和63年度	240㎡	正岡・田中・川崎・亀山	89
	後池内古墳	岡山市津寺	古墳時代の墳墓	平成元年度	—	高畑・土井	89
32	黒住・雲山遺跡	岡山市津寺	縄文時代～中世の集落・墳墓	昭和61～63年度	24,463㎡	正岡・山磨・川崎・佐守	89
33	甫崎・天神山遺跡	岡山市津寺	縄文時代～中世の集落・墳墓・城跡	昭和61～平成元年度	15,729㎡	宇垣・岡本・片山・大智・澤山・柴田	89
34	三手遺跡	岡山市三手	古墳時代～近世の集落・水田・墳墓	昭和61・63年度	20,584㎡	正岡・小柴・山磨・二宮・吉田・中野・川崎・小田・福田・亀山・大橋・後藤	90
35	津寺遺跡	岡山市津寺	弥生時代～近世の集落・水田・官衛・墳墓	昭和61・63～平成4年度	87,290㎡	葛原・正岡・小柴・井上・松本・高畑・山磨・岡田・二宮・福田・浅倉・林・吉田・野上・中野・窪田・栗尾・垣内・井上・川崎・光永・島崎・源・小田・福田・広瀬・山本・片山・田代・亀山・安井・佐守・大橋・小松原・澤山・弘田・柴田・古市・村田・久保・森・後藤・飯島・佐伯・谷岡・土井・石黒・波多野・守屋	90 98 104 116
36	高塚遺跡	岡山市高塚	弥生時代～中世の集落・祭祀跡	昭和62～平成元年度	16,195㎡	正岡・松本・浅倉・窪田・古谷野・江見・岡本・栗尾・垣内・川崎・平井・長川・佐守・小松原・弘田・横山・森・谷岡・石田	未刊
37	政所遺跡	岡山市加茂	弥生時代～中世の集落・墳墓・鋳造跡	平成元～4年度	17,683㎡	正岡・松本・浅倉・窪田・古谷野・出原・江見・岡本・吉久・平井・川崎・長川・平松・亀山・古市・佐守・澤山・弘田・横山・柴田・森・守屋	未刊
38	富原西奥古墳	岡山市富原	古墳時代の墳墓	昭和63年度	300㎡	松本・佐守	83
39	富原大池奥山遺跡	岡山市富原	遺構・遺物なし	昭和63年度	300㎡	松本・佐守	83
40	大岩遺跡	岡山市富原	弥生時代～古墳時代の集落・江戸時代の墓	平成4年度	1,583㎡	正岡・浅倉・二宮・古谷野・中野・松岡・澤山・柴田	未刊
41	田益遺跡	岡山市田益	弥生時代～中世の集落	平成2～3年度	5,440㎡	伊藤・松本・下澤・岡田・二宮・窪田・野上・山本・佐守・長門	未刊
42	白壁古墳	岡山市横井上	古墳時代の墳墓	平成2年度	300㎡	松本・佐守	83

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年度	調査面積	調査担当者	報告書
43	白壁奥遺跡	岡山市横井上	古墳時代～古代の製鉄跡・墳墓	平成4年度	3,500㎡	下澤・竹井・滝川	未刊
44	平瀬古墳群	岡山市玉柏	古墳時代の墳墓群	平成元～2年度	1,000㎡	葛原・井上・大智	83
45	馬屋遺跡	山陽町馬屋	古代～中世の集落	平成3～4年度	10,412㎡	伊藤・下澤・二宮・窪田・野上・平松 横山	99
46	池新田遺跡	山陽町穂崎	遺構・遺物なし	平成3年度	1,120㎡	伊藤・下澤・二宮・窪田・野上・平松 横山	99
47	新屋敷遺跡	山陽町穂崎	弥生時代の集落	平成3年度	1,164㎡	伊藤・下澤・二宮・窪田・野上・平松 横山	99
48	長尾遺跡	山陽町	遺物包含層	平成3年度	50㎡	下澤・平松・横山	99
49	斎富遺跡	山陽町斎富	縄文時代～中世の集落	平成3～4年度	20,580㎡	伊藤・下澤・井上・岡田・福田・平井・ 二宮・窪田・大森・野上・古谷野・竹井・ 吉久・山田・石田・山本・長川・田原・ 東呂木・松岡・安井・大橋・高田・ 横山・氏平・滝川・長門・根木	105
50	斎富古墳群	山陽町斎富	古墳時代・中世の墳墓群	平成3～4年度	1,683㎡	福田・松岡・安井・古市・澤山	99
51	勘定口2号墳	瀬戸町塩納	古墳時代の墳墓	平成4年度	370㎡	福田	99
52	塩納成遺跡A	瀬戸町塩納	遺構・遺物なし	平成2年度	73㎡	下澤・栗原	99
	塩納成遺跡B	瀬戸町塩納	遺物包含層	平成2年度	80㎡	下澤・栗原	
54	疾教寺北遺跡	瀬戸町万富	遺構・遺物なし	平成2年度	270㎡	下澤・栗原	99
	疾教寺南遺跡	瀬戸町万富	遺物包含層	平成2年度	340㎡	下澤・栗原	
55	保木池尻遺跡	瀬戸町保木	遺構・遺物なし	平成元年度	190㎡	下澤・大智	99
56	保木西遺跡	瀬戸町保木	遺構・遺物なし	平成元年度	220㎡	下澤・大智	99
57	保木窯跡	瀬戸町保木	古代の墳墓	平成2年度	200㎡	下澤・栗原	99
58	奥池西遺跡	瀬戸町万富	遺構・遺物なし	平成2年度	537㎡	下澤・栗原	99
	奥池北遺跡	瀬戸町万富	遺構・遺物なし	平成2年度			
59	松尾古墳群	瀬戸町万富	古墳時代の墳墓群	平成元～2年度	610㎡	下澤・栗原・大智	99
	松尾窯跡	瀬戸町万富	中世の窯跡	平成元年度			
60	満願寺遺跡	熊山町奥吉原	遺構・遺物なし	平成2年度	58㎡	下澤・栗原	99
61	荒神社東遺跡	備前市福石	遺構・遺物なし	昭和51年度	—	岡本	25



山陽自動車道関連調査遺跡位置図 1/300,000

# 目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 遺跡をとりまく環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査と整理の経過	9
第1節 調査の契機	9
(1) 既往の調査	9
(2) 第1次調査	9
第2節 調査の目的と方法	10
(1) 調査の目的と方法	10
(2) 調査の体制	10
第3節 調査の経過	14
(1) 調査の経過	14
(2) 日誌抄	15
第4節 整理の方法と経過	18
(1) 整理の方法	18
(2) 整理の体制	18
(3) 整理の経過	19
第5節 報告書の構成	20
(1) 報告書の構成	20
(2) 時期区分	20
第3章 中屋調査区	23
第1節 調査の概要	23
(1) 調査区の位置	23
(2) 基本層序	23
第2節 弥生時代の遺構・遺物	25
(1) 概要	25
(2) 竪穴住居	25
(3) 掘立柱建物	43



(4) 袋状土壌	44
(5) 土壌	55
(6) 土器棺墓	80
(7) 土器溜り	82
(8) 溝	82
(9) 水田	84
(10) その他の遺構・遺物	89
第3節 古墳時代の遺構・遺物	101
(1) 概要	101
(2) 竪穴住居	101
(3) 掘立柱建物	179
(4) 焼成土壌	181
(5) 土壌	182
(6) 土器溜り	193
(7) 溝	204
(8) 水田	215
(9) その他の遺構・遺物	218
第4節 古代の遺構・遺物	242
(1) 概要	242
(2) 掘立柱建物	245
(3) 焼成土壌	258
(4) 土壌	259
(5) 溝	275
(6) その他の遺構・遺物	293
第5節 中・近世の遺構・遺物	313
(1) 概要	313
(2) 掘立柱建物	313
(3) 井戸	327
(4) 土壌	331
(5) 土壌墓	341
(6) 溝	344
(7) その他の遺構・遺物	362
第4章 高田調査区	371
第1節 調査の概要	371
第2節 弥生時代の遺構・遺物	373
(1) 概要	373
(2) 溝	373
(3) その他の遺構・遺物	380

第3節 古墳時代の遺構・遺物	382
(1) 概要	382
(2) 竪穴住居	390
(3) 井戸	484
(4) 焼成土壇	485
(5) 溝	489
(6) 水田	504
(7) その他の遺構・遺物	510
第4節 古代の遺構・遺物	514
(1) 概要	514
(2) 掘立柱建物	514
(3) 柱穴	533
(4) 土器埋納壇	534
(5) 土壇	536
(6) たわみ	538
(7) 溝	541
(8) その他の遺構・遺物	547
第5節 中・近世の遺構・遺物	552
(1) 概要	552
(2) 掘立柱建物・柱穴列	552
(3) 柱穴	565
(4) 井戸	566
(5) 土壇	569
(6) 土壇墓	582
(7) 溝	583
(8) その他の遺構・遺物	595
<b>第5章 結語</b>	<b>599</b>
第1節 縄文～弥生時代の津寺遺跡	599
(1) 縄文時代の遺構・遺物	599
(2) 弥生時代の遺構・遺物	599
第2節 古墳時代の津寺遺跡	608
(1) 古墳時代前期の遺構・遺物	608
(2) 古墳時代中期の遺構・遺物	613
(3) 古墳時代後期の遺構・遺物	614
第3節 古代の津寺遺跡	622
(1) 奈良時代の遺構・遺物	622
(2) 平安時代の遺構・遺物	634
第4節 中・近世の津寺遺跡	637

(1) 中世の遺構・遺物 .....	637
(2) 近世の遺構・遺物 .....	642
<b>附 編 自然科学的考察 .....</b>	<b>649</b>
I. 津寺遺跡出土の墨書木札 .....	651
II. 津寺遺跡出土人骨について .....	653
III. 津寺遺跡出土土器に残存する脂肪の分析 .....	655
IV. 津寺遺跡出土の動物遺体 .....	660
V. 津寺遺跡出土の植物遺体 .....	666
VI. 津寺遺跡出土柱材の年代および樹種 .....	671
VII. 津寺遺跡出土の植物珪酸体・花粉分析 .....	673
VIII. 津寺遺跡出土の須恵器、土師器の胎土分析 .....	694
IX. 津寺遺跡出土の陶製小壺の釉について .....	703
X. 津寺遺跡出土のガラス滓について .....	705
XI. 津寺遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査 .....	707
XII. 津寺遺跡出土土器に遺存する赤色顔料 .....	726
XIII. 津寺遺跡の石材についての顕微鏡観察結果 .....	730
XIV. 津寺遺跡出土ヒスイ製大珠の産地分析 .....	733
<b>遺構一覧表・遺物観察表・遺構名称対照表 .....</b>	<b>743</b>
<b>図 版</b>	
<b>抄 録</b>	

# 目 次

第1図 津寺遺跡周辺微地形図 1/4,000	2	第35図 袋状土壙-80(2) 1/4	55
第2図 第一次調査土層断面図 1/40	2	第37図 土壙-192~194 1/30・4	56
第3図 中屋調査区出土の硬玉製大珠 1/2	3	第38図 土壙-195~198 1/30	56
第4図 津寺遺跡周辺遺跡分布図 1/40,000	4	第39図 土壙-199(1) 1/30・4	57
第5図 調査区配置図	15	第40図 土壙-199(2) 1/3・4	58
第6図 中屋調査区標準断面図	24	第41図 土壙-200~205 1/30	59
第7図 竪穴住居-125(1) 1/60	26	第42図 土壙-206 1/30・4	60
第8図 中屋調査区弥生時代遺構全体図(1) 1/600	27~28	第43図 土壙-207・208 1/30・3・4	60
第9図 竪穴住居-125(2) 1/2・3・4	29	第44図 土壙-209 1/30・4	61
第10図 中屋調査区弥生時代遺構全体図(2) 1/600	30	第45図 土壙-210 1/30・4	62
第11図 竪穴住居-126 1/60	31	第46図 土壙-211・212 1/30・4	63
第12図 中屋調査区弥生時代遺構配置図 1/300	32	第47図 土壙-213 1/30・4	64
第13図 竪穴住居-127(1) 1/60	33	第48図 土壙-214 1/30・4	65
第14図 竪穴住居-127(2) 1/4	34	第49図 土壙-215 1/30・3・4	66
第15図 竪穴住居-127(3) 1/2・4	35	第50図 土壙-216・217 1/30・3・4	67
第16図 竪穴住居-128 1/60・2・3	36	第51図 土壙-218 1/4	68
第17図 竪穴住居-129・130(1) 1/60	37	第52図 土壙-219~221(1) 1/30・4	69
第18図 竪穴住居-130(2) 1/60	38	第53図 土壙-221(2) 1/2・4	70
第19図 竪穴住居-130(3) 1/2・3・4	39	第54図 土壙-222・223 1/30・4	71
第20図 竪穴住居-131 1/60・4	40	第55図 土壙-224・225 1/4	72
第21図 竪穴住居-132 1/60・4	40	第56図 土壙-226・227 1/30・4	73
第22図 中屋調査区弥生時代遺構全体図(2) 1/600	41~42	第57図 土壙-228 1/30・4	74
第23図 掘立柱建物-16 1/60	43	第58図 土壙-229~231 1/30・4	74
第24図 掘立柱建物-17 1/60	43	第59図 土壙-232・233 1/30・4	76
第25図 袋状土壙-70・71 1/30・4	44	第60図 土壙-234・235 1/30・3・4	77
第26図 袋状土壙-72・73 1/30・4	45	第61図 土壙-236(1) 1/4	78
第27図 袋状土壙-74・75 1/30・4	46	第62図 土壙-236(2) 1/4	79
第28図 袋状土壙-76・77(1) 1/30・3・4	48	第63図 土壙-237~239 1/30・4	79
第29図 袋状土壙-77(2) 1/4	49	第64図 土器棺墓-9・10 1/20・4・6	80
第30図 袋状土壙-78(1) 1/30・4	50	第65図 土器棺墓-11 1/20・6	81
第31図 袋状土壙-78(2) 1/4	51	第66図 土器溜り-2 1/4	82
第32図 袋状土壙-78(3) 1/4	52	第67図 溝-91・92・95 1/30・40・4	83
第33図 袋状土壙-78(4) 1/4	53	第68図 溝-97・98 1/40	84
第34図 袋状土壙-79 1/30	53	第69図 水田-1 1/600	85
第35図 袋状土壙-80(1) 1/30・4	54	第70図 水田-2 1/600・4	86
		第71図 水田土層断面図 1/60	87
		第72図 包含層(1) 1/4	89

第73図 包含層(2) 1/4	90	第113図 竪穴住居-151 1/60・4	130
第74図 包含層(3) 1/4	91	第114図 竪穴住居-152・153(1) 1/60	131
第75図 包含層(4) 1/4	92	第115図 竪穴住居-152・153(2) 1/2・3・4	132
第76図 包含層(5) 1/4	93	第116図 竪穴住居-154(1) 1/60	133
第77図 包含層(6) 1/4	94	第117図 竪穴住居-154(2) 1/4	134
第78図 包含層(7) 1/4	95	第118図 竪穴住居-155(1) 1/60	135
第79図 包含層(8) 1/4	96	第119図 竪穴住居-155(2) 1/4	136
第80図 包含層(9) 1/4	97	第120図 竪穴住居-155(3) 1/3・4	137
第81図 包含層(10) 1/2	98	第121図 竪穴住居-156 1/60・3・4	138
第82図 包含層(11) 1/3	99	第122図 竪穴住居-157(1) 1/60	139
第83図 中屋調査区古墳時代遺構全体図(1) 1/600	101	第123図 竪穴住居-157(2) 1/4	140
第84図 中屋調査区古墳時代遺構配置図(1) 1/300	102	第124図 竪穴住居-157(3) 1/4	141
第85図 竪穴住居-133・134(1) 1/60	103	第125図 竪穴住居-157(4) 1/3・4	142
第86図 竪穴住居-134(2) 1/4	104	第126図 竪穴住居-158(1) 1/60	142
第87図 竪穴住居-134(3) 1/4	105	第127図 竪穴住居-158(2) 1/4	143
第88図 竪穴住居-134(4) 1/3・4	106	第128図 竪穴住居-159~162 1/60・4	144
第89図 竪穴住居-135(1) 1/60	107	第129図 中屋調査区古墳時代遺構全体図(2) 1/600	
第90図 竪穴住居-135(2) 1/3・4	108	.....	145~146
第91図 竪穴住居-136 B 1/60	109	第130図 中屋調査区古墳時代遺構全体図(3) 1/600	147
第92図 竪穴住居-136 A 1/60	110	第131図 中屋調査区古墳時代遺構配置図(2) 1/300	148
第93図 竪穴住居-136(1) 1/4	111	第132図 竪穴住居-163(1) 1/60	149
第94図 竪穴住居-136(2) 1/4	112	第133図 竪穴住居-163(2) 1/2・4	150
第95図 竪穴住居-137 1/60・4	113	第134図 竪穴住居-164(1) 1/60・4	150
第96図 竪穴住居-138 1/60	113	第135図 竪穴住居-164(2) 1/3・4	151
第97図 竪穴住居-139~141 1/60	114	第136図 竪穴住居-165(1) 1/60	151
第98図 竪穴住居-139(1) 1/60	115	第137図 竪穴住居-165(2) 1/3・4	152
第99図 竪穴住居-139(2) 1/3・4	116	第138図 竪穴住居-166(1) 1/60	153
第100図 竪穴住居-140・141(1) 1/60	117	第139図 竪穴住居-166(2)・167 1/3・4	154
第101図 竪穴住居-140・141(2) 1/4	118	第140図 竪穴住居-168 1/60・4	155
第102図 竪穴住居-142 1/60・3・4	119	第141図 竪穴住居-169・170・171 1/60・4	156
第103図 竪穴住居-143 1/60・3・4	120	第142図 中屋調査区古墳時代遺構全体図(4) 1/600	
第104図 竪穴住居-144~146 1/60	121	.....	157~158
第105図 竪穴住居-145・146 1/60	122	第143図 竪穴住居-172(1) 1/60	159
第106図 竪穴住居-144~146 1/2・4	123	第144図 竪穴住居-172(2)・173(1) 1/4・60	160
第107図 竪穴住居-147(1) 1/60	124	第145図 竪穴住居-173(2) 1/4	161
第108図 竪穴住居-147(2) 1/3・4	125	第146図 竪穴住居-174(1) 1/60・4	162
第109図 竪穴住居-148 1/60	126	第147図 竪穴住居-174(2) 1/4・6	163
第110図 竪穴住居-149 1/60	127	第148図 竪穴住居-174(3) 1/4	164
第111図 竪穴住居-150(1) 1/60	128	第149図 竪穴住居-175 1/60・4	165
第112図 竪穴住居-150(2) 1/3・4	129	第150図 竪穴住居-176 1/60・4	166

第151図	竪穴住居-177・178	1/60	167
第152図	竪穴住居-179	1/60・3・4	168
第153図	竪穴住居-180	1/60・4	169
第154図	竪穴住居-181(1)	1/60	170
第155図	竪穴住居-181(2)	1/4	171
第156図	竪穴住居-182	1/60・4	172
第157図	竪穴住居-183(1)	1/60	173
第158図	竪穴住居-183(2)	1/4	174
第159図	竪穴住居-184	1/60・4	175
第160図	竪穴住居-185	1/60	176
第161図	竪穴住居-186	1/60・3・4	177
第162図	掘立柱建物-18	1/60	178
第163図	掘立柱建物-19	1/60	179
第164図	焼成土壌-1~3	1/30	180
第165図	土壌-240~243	1/30・4	181
第166図	土壌-244~251	1/30・4	182
第167図	土壌-252	1/30・4	183
第168図	土壌-253~255	1/30・4	184
第169図	土壌-256~260	1/30	185
第170図	土壌-261~263	1/30・4	187
第171図	土壌-264~267	1/30・4	188
第172図	土壌-268	1/30・4	189
第173図	土壌-269~274	1/30・4	191
第174図	土器溜り-3(1)	1/4	192
第175図	土器溜り-3(2)	1/3・4	193
第176図	土器溜り-4	1/4	194
第177図	土器溜り-5(1)	1/4	195
第178図	土器溜り-5(2)・6	1/4	196
第179図	土器溜り-7	1/4	197
第180図	土器溜り-8(1)	1/4	199
第181図	土器溜り-8(2)	1/4	200
第182図	土器溜り-8(3)	1/3・4	201
第183図	土器溜り-9・10・11	1/4	202
第184図	溝-101(1)	1/30・4	204
第185図	溝-101(2)	1/4	205
第186図	溝-101(3)	1/4	206
第187図	溝-102(1)	1/30・4	207
第188図	溝-102(2)	1/4	208
第189図	溝-102(3)	1/4	209
第190図	溝-102(4)・103	1/4・30	210

第191図	溝-104~106	1/30・4	211
第192図	溝-108・109	1/30・4	212
第193図	溝-113~120	1/30・3・4	213
第194図	水田-3	1/600	214
第195図	水田-4	1/600	215
第196図	水田(1)	1/4	216
第197図	水田(2)	1/4	217
第198図	包含層(1)	1/4	218
第199図	包含層(2)	1/4	219
第200図	包含層(3)	1/4	220
第201図	包含層(4)	1/4	221
第202図	包含層(5)	1/4	222
第203図	包含層(6)	1/4	223
第204図	包含層(7)	1/4	224
第205図	包含層(8)	1/4	225
第206図	包含層(9)	1/4	226
第207図	包含層(10)	1/4	227
第208図	包含層(11)	1/4	228
第209図	包含層(12)	1/4	229
第210図	包含層(13)	1/4	230
第211図	包含層(14)	1/4	231
第212図	包含層(15)	1/4	232
第213図	包含層(16)	1/4	233
第214図	包含層(17)	1/4	234
第215図	包含層(18)	1/4	235
第216図	包含層(19)	1/4	236
第217図	包含層(20)	1/3	238
第218図	包含層(21)	1/2・3	239
第219図	包含層(22)	1/2・3	240
第220図	掘立柱建物-20	1/60	242
第221図	中屋調査区古代遺構全体図(1)	1/600	243~244
第222図	掘立柱建物-21	1/60・4	246
第223図	掘立柱建物-22	1/60	247
第224図	掘立柱建物-23・24	1/60	248
第225図	掘立柱建物-25	1/60	249
第226図	掘立柱建物-26	1/60	250
第227図	掘立柱建物-27	1/60	251
第228図	掘立柱建物-28	1/60	252
第229図	掘立柱建物-29	1/60	253
第230図	掘立柱建物-30	1/60	254

第231图	掘立柱建物-31	1/60	255
第232图	掘立柱建物-32	1/60	255
第233图	掘立柱建物-33	1/60	256
第234图	中屋調査区古代遺構全体图(2)	1/600	257
第235图	焼成土壇-4~7	1/30	258
第236图	土壇-275~277	1/30	259
第237图	土壇-278~280	1/30・4	260
第238图	土壇-281	1/30・3・4	261
第239图	土壇-282	1/30・4	262
第240图	土壇-283~285	1/30・4	263
第241图	土壇-286・287	1/30・4	264
第242图	土壇-288~291	1/30・3・4	265
第243图	土壇-292・293(1)	1/30・4	266
第244图	土壇-293(2)	1/4	267
第245图	土壇-294・295	1/30・4	268
第246图	土壇-296	1/30・4	269
第247图	土壇-297~299	1/30・4	269
第248图	土壇-300	1/30・4	271
第249图	土壇-300~302	1/4・30	272
第250图	土壇-303~305	1/30・4	273
第251图	土壇-306	1/30・4	274
第252图	溝-128~130	1/60・4	275
第253图	溝-130・131	1/4・30	276
第254图	溝-132(1)	1/30	276
第255图	溝-132(2)	1/4	277
第256图	溝-132(3)	1/4	278
第257图	溝-132(4)	1/4	279
第258图	溝-132(5)	1/4	280
第259图	溝-132(6)	1/4	281
第260图	溝-132(7)・133	1/3・4・30	282
第261图	溝-134	1/30・4	283
第262图	溝-135・137	1/30・4	284
第263图	溝-136・137	1/30・4・6	285
第264图	溝-138~227(1)	1/300	286
第265图	溝-142~227	1/30	287
第266图	溝-138~227(2)	1/4	288
第267图	溝-138~227(3)	1/3・4	289
第268图	溝-241~284(1)	1/300	291
第269图	溝-241~284(2)	1/30・3	292
第270图	包含層(1)	1/4	293

第271图	包含層(2)	1/4	294
第272图	包含層(3)	1/4	295
第273图	包含層(4)	1/4	296
第274图	包含層(5)	1/4	297
第275图	包含層(6)	1/4	298
第276图	包含層(7)	1/4	299
第277图	包含層(8)	1/4	300
第278图	包含層(9)	1/4・6	301
第279图	包含層(10)	1/4	302
第280图	包含層(11)	1/4	303
第281图	包含層(12)	1/4	304
第282图	包含層(13)	1/4	305
第283图	包含層(14)	1/4	306
第284图	包含層(15)	1/4	307
第285图	包含層(16)	1/4	308
第286图	包含層(17)	1/4	309
第287图	包含層(18)	1/4	310
第288图	包含層(19)	1/4	311
第289图	包含層(20)	1/2	312
第290图	掘立柱建物-34・35	1/60	313
第291图	中屋調査区中世遺構全体图(1)	1/600	314
第292图	中屋調査区中世遺構全体图(2)	1/600	315~316
第293图	掘立柱建物-36	1/60	317
第294图	掘立柱建物-37	1/60	318
第295图	掘立柱建物-38	1/60	319
第296图	掘立柱建物-39	1/60	320
第297图	掘立柱建物-40・41	1/60	321
第298图	掘立柱建物-42	1/60	322
第299图	掘立柱建物-43	1/60	322
第300图	掘立柱建物-44・45	1/60	323
第301图	掘立柱建物-46	1/60	324
第302图	掘立柱建物-47	1/60	325
第303图	掘立柱建物-48	1/60	326
第304图	井戸-3	1/30・4	327
第305图	中屋調査区中世遺構配置图(1)	1/300	328
第306图	井戸-4	1/30・4・6	329
第307图	井戸-5・6	1/30・4	330
第308图	土壇-307・308	1/30	331
第309图	土壇-309	1/30・3・4・6	332
第310图	土壇-310~314	1/30	333

第311図	土墳-315~317	1/30・4	334
第312図	土墳-318・319	1/30・4	336
第313図	土墳-320~324	1/30・4	337
第314図	土墳-325~328	1/30・4	338
第315図	土墳-329~332	1/30・4	340
第316図	土墳墓-12	1/30・3	341
第317図	土墳墓-13・14	1/30・4	342
第318図	土墳墓-15・16・17	1/30・3・4	343
第319図	中屋調査区中世遺構全体図(3)	1/600	345
第320図	溝-70(1)	1/60・4・6	346
第321図	溝-70(2)	1/2・3・4	347
第322図	溝-287~293	1/30・4	348
第323図	溝-294・295	1/30・4	349
第324図	溝-296~302	1/30・3・4	350
第325図	中屋調査区中世遺構全体図(4)	1/600	351~352
第326図	溝-307~316	1/30	354
第327図	溝-320(1)	1/30・4	355
第328図	溝-320(2)	1/2・4	356
第329図	溝-321・322	1/30・4	357
第330図	溝-323・324・326	1/30	358
第331図	溝-329~367	1/300・30	359
第332図	溝-387~432	1/30・4	360
第333図	包含層(1)	1/4	363
第334図	包含層(2)	1/4	364
第335図	包含層(3)	1/4	365
第336図	包含層(4)	1/2・3	366
第337図	包含層(5)	1/2・3	367
第338図	包含層(6)	1/2・3	369
第339図	包含層(7)	1/3・4	370
第340図	高田調査区基本層準模式図		372
第341図	溝-1・2(1)	1/60	373
第342図	溝-1・2(2)	1/4	374
第343図	高田調査区弥生時代遺構全体図	1/600	375~376
第344図	溝-1・2(3)	1/4	377
第345図	溝-3	1/60	378
第346図	溝-4	1/60・3	378
第347図	溝-5	1/60・4・3	379
第348図	溝-6	1/30	379
第349図	包含層(1)	1/4	380

第350図	包含層(2)	1/6・4・3・2	381
第351図	高田調査区古墳時代前期遺構全体図	1/600	383~384
第352図	高田調査区古墳時代中・後期遺構全体図	1/600	385~386
第353図	高田調査区古墳時代中・後期遺構配置図(1)	1/400	387
第354図	高田調査区古墳時代中・後期遺構配置図(2)	1/400	388
第355図	高田調査区古墳時代中・後期遺構配置図(3)	1/400	389
第356図	竪穴住居-1・2	1/60	390
第357図	竪穴住居-3	1/60・4・3	391
第358図	竪穴住居-4	1/60・4	392
第359図	竪穴住居-5	1/60・30・20・4	393
第360図	竪穴住居-6	1/60・4	395
第361図	竪穴住居-7	1/60・30・4	396
第362図	竪穴住居-8	1/60・30・4	397
第363図	竪穴住居-9(1)	1/60・4	398
第364図	竪穴住居-9(2)	1/30・4	399
第365図	竪穴住居-10(1)	1/60	400
第366図	竪穴住居-10(2)	1/30・5・4	401
第367図	竪穴住居-10(3)	1/4	402
第368図	竪穴住居-11	1/60	402
第369図	竪穴住居-12	1/60・30	403
第370図	竪穴住居-13	1/60・30・4	404
第371図	竪穴住居-14	1/60・4	405
第372図	竪穴住居-15(1)	1/60・4・3	406
第373図	竪穴住居-15(2)	1/30	407
第374図	竪穴住居-16	1/60・30	408
第375図	竪穴住居-17(1)	1/60・4	409
第376図	竪穴住居-17(2)	1/30	410
第377図	竪穴住居-18(1)	1/60	411
第378図	竪穴住居-18(2)	1/30・4	412
第379図	竪穴住居-18	1/3	413
第380図	竪穴住居-19	1/60・3	413
第381図	竪穴住居-20	1/60・4・2	414
第382図	竪穴住居-21	1/60	415
第383図	竪穴住居-22	1/60・30・4・3	416
第384図	竪穴住居-23(1)	1/60・30	417



第385图	竖穴住居-23(2)	1/4·3	418
第386图	竖穴住居-24	1/60	419
第387图	竖穴住居-25~29	1/80	419
第388图	竖穴住居-25(1)	1/60	420
第389图	竖穴住居-25(2)	1/30·4	421
第390图	竖穴住居-26	1/60	422
第391图	竖穴住居-27(1)	1/60·4	422
第392图	竖穴住居-27(2)	1/30	423
第393图	竖穴住居-28	1/60·30·4	424
第394图	竖穴住居-29	1/60·4	425
第395图	竖穴住居-30	1/60·30·4·3	426
第396图	竖穴住居-31	1/60	427
第397图	竖穴住居-32	1/60·30	428
第398图	竖穴住居-33	1/60	429
第399图	竖穴住居-34	1/60·4	429
第400图	竖穴住居-35·36	1/60·4	430
第401图	竖穴住居-37	1/60·4	431
第402图	竖穴住居-38	1/60·4·3·2	432
第403图	竖穴住居-39(1)	1/60	433
第404图	竖穴住居-39(2)	1/4	434
第405图	竖穴住居-40	1/60·4	434
第406图	竖穴住居-41	1/60	435
第407图	竖穴住居-42(1)	1/60	435
第408图	竖穴住居-42(2)	1/30·4·2	436
第409图	竖穴住居-43(1)	1/60	437
第410图	竖穴住居-43(2)	1/30	438
第411图	竖穴住居-44	1/60·30·4	439
第412图	竖穴住居-45(1)	1/60	440
第413图	竖穴住居-45(2)	1/30·4	441
第414图	竖穴住居-46	1/60·4	442
第415图	竖穴住居-47	1/60·4·3	443
第416图	竖穴住居-48	1/60·4	444
第417图	竖穴住居-49	1/60·4·3	444
第418图	竖穴住居-50·51	1/60·4	445
第419图	竖穴住居-51	1/2	446
第420图	竖穴住居-52~55	1/80·4	447
第421图	竖穴住居-56	1/60·4·3	448
第422图	竖穴住居-57	1/60·30·4	449
第423图	竖穴住居-58(1)	1/60·4	450
第424图	竖穴住居-58(2)	1/3	451

第425图	竖穴住居-58(3)	1/30	451
第426图	竖穴住居-59	1/60·4	452
第427图	竖穴住居-60(1)	1/60·4	452
第428图	竖穴住居-60(2)	1/3	453
第429图	竖穴住居-61	1/60·4	454
第430图	竖穴住居-62	1/60·4	455
第431图	竖穴住居-63·64(1)	1/60	456
第432图	竖穴住居-63·64(2)	1/4	457
第433图	竖穴住居-65	1/60	457
第434图	竖穴住居-66	1/60·4	458
第435图	竖穴住居-67~69(1)	1/60	459
第436图	竖穴住居-67~69(2)	1/4·3	460
第437图	竖穴住居-70	1/60·4	461
第438图	竖穴住居-71	1/60·4·3	462
第439图	竖穴住居-72	1/60·4·2	463
第440图	竖穴住居-73	1/60·4	464
第441图	竖穴住居-74	1/60·4	465
第442图	竖穴住居-75	1/60·4·3	466
第443图	竖穴住居-76	1/60·4	467
第444图	竖穴住居-77	1/60	467
第445图	竖穴住居-78	1/60·30·4	469
第446图	竖穴住居-79	1/60·4·3	470
第447图	竖穴住居-80	1/60·4	471
第448图	竖穴住居-81	1/60	471
第449图	竖穴住居-82·83	1/60·4	472
第450图	竖穴住居-84	1/60	473
第451图	竖穴住居-85	1/60	473
第452图	竖穴住居-86(1)	1/60·4·3	474
第453图	竖穴住居-86(2)	1/30	475
第454图	竖穴住居-87	1/60·30·4	476
第455图	竖穴住居-88	1/60·30·4	477
第456图	竖穴住居-89	1/60·30·4	478
第457图	竖穴住居-90	1/60·30·4	479
第458图	竖穴住居-91	1/60	480
第459图	竖穴住居-92(1)	1/60	480
第460图	竖穴住居-92(2)	1/30·4	481
第461图	竖穴住居-93(1)	1/60·4	482
第462图	竖穴住居-93(2)	1/30	483
第463图	竖穴住居-94	1/60	483
第464图	井戸-1	1/20·4	484

第465図	焼成土壌-1	1/30	485
第466図	焼成土壌-2	1/30・4	485
第467図	焼成土壌-3	1/30	486
第468図	焼成土壌-4	1/30・4	486
第469図	焼成土壌-5	1/30・4	487
第470図	焼成土壌-6	1/30	487
第471図	焼成土壌-7	1/30	488
第472図	焼成土壌-8~10	1/30	488
第473図	溝-8(1)	1/4	489
第474図	溝-8(2)	1/4	490
第475図	溝-9	1/60・30・4・3	491
第476図	溝-10	1/4	492
第477図	溝-11	1/4	492
第478図	溝-8・10~17	1/60	493
第479図	溝-12	1/60・4	494
第480図	溝-13	1/4	495
第481図	溝-14	1/4	496
第482図	溝-15	1/4	496
第483図	溝-16	1/4	496
第484図	溝-18・19	1/40	497
第485図	溝-20~24	1/60・4	497
第486図	溝-25	1/40・4	498
第487図	溝-26	1/40	498
第488図	溝-27	1/30	498
第489図	溝-28	1/30・4・3	499
第490図	溝-29・30	1/30・4	500
第491図	溝-29	1/4・3	501
第492図	溝-31・32	1/30・4	502
第493図	溝-33	1/30・4	503
第494図	溝-34・35	1/30	503
第495図	溝-36	1/40・30	504
第496図	水田-1	1/600	505
第497図	水田-2	1/600	506
第498図	水田-1・2(1)	1/80	507
第499図	水田-1・2(2)	1/300	508
第500図	水田-1・2(3)	1/4	508
第501図	洪水砂	1/4	509
第502図	包含層(1)	1/4	510
第503図	包含層(2)	1/4	511
第504図	包含層(3)	1/4・2	512

第505図	包含層(4)	1/3	513
第506図	高田調査区古代遺構全体図	1/600	515~516
第507図	高田調査区古代遺構配置図(1)	1/400	517
第508図	高田調査区古代遺構配置図(2)	1/400	518
第509図	高田調査区古代遺構配置図(3)	1/400	519
第510図	掘立柱建物-1	1/80	520
第511図	掘立柱建物-2	1/80	521
第512図	掘立柱建物-3	1/80	521
第513図	掘立柱建物-4	1/60	522
第514図	掘立柱建物-5(1)	1/80	523
第515図	掘立柱建物-5(2)	1/4・3	524
第516図	掘立柱建物-6	1/60	524
第517図	掘立柱建物-7	1/80	525
第518図	掘立柱建物-8	1/80	525
第519図	掘立柱建物-9	1/80	526
第520図	掘立柱建物-10	1/60	527
第521図	掘立柱建物-11	1/80・2	528
第522図	掘立柱建物-12・13	1/80	529
第523図	掘立柱建物-14	1/80・3	530
第524図	掘立柱建物-15	1/80	531
第525図	掘立柱建物-16	1/80	531
第526図	掘立柱建物-17	1/80	532
第527図	掘立柱建物-18	1/60	532
第528図	掘立柱建物-19	1/60	533
第529図	柱穴	1/4	533
第530図	土器埋納墳-1	1/5・4	534
第531図	土器埋納墳-2	1/10・2	535
第532図	土器埋納墳-3	1/5・4・2	535
第533図	土壌-1	1/80・4	536
第534図	土壌-2・3	1/30	537
第535図	土壌-4	1/20・4	538
第536図	たわみ-2	1/4	539
第537図	たわみ-3	1/4・3	540
第538図	溝-38・39(1)	1/20・30・50・200	541
第539図	溝-38・39(2)	1/4	542
第540図	溝-40~44	1/30	543
第541図	溝-40	1/4	544
第542図	溝-42・43	1/4・3	544
第543図	溝-45	1/30	544
第544図	溝-46	1/30・4	545

第545図	溝-47	1/40・4	546
第546図	溝-48~53	1/150・30	546
第547図	包含層(1)	1/4	547
第548図	包含層(2)	1/4	548
第549図	包含層(3)	1/6・4・2	549
第550図	包含層(4)	1/4	550
第551図	包含層(5)	1/4	551
第552図	高田調査区中・近世遺構全体図(1)	1/600	
			553~554
第553図	高田調査区中・近世遺構全体図(2)	1/600	
			555~556
第554図	高田調査区中・近世遺構配置図(1)	1/400	557
第555図	高田調査区中・近世遺構配置図(2)	1/400	558
第556図	高田調査区中・近世遺構配置図(3)	1/400	559
第557図	高田調査区中・近世遺構配置図(4)	1/400	560
第558図	掘立柱建物-20	1/60	561
第559図	掘立柱建物-21	1/60	561
第560図	掘立柱建物-22	1/80	562
第561図	掘立柱建物-23	1/60	562
第562図	掘立柱建物-24	1/60	563
第563図	掘立柱建物-25	1/60	563
第564図	掘立柱建物-26	1/60	564
第565図	柱穴列-1	1/60	564
第566図	柱穴	1/4・3・2	565
第567図	井戸-2(1)	1/20	566
第568図	井戸-2(2)	1/4	567
第569図	井戸-3	1/60・30・4	568
第570図	土壌-5	1/60	569
第571図	土壌-6	1/60・4	569
第572図	土壌-7	1/60・4	570
第573図	土壌-8	1/30・4・2	571
第574図	土壌-9	1/30・4・3	571
第575図	土壌-10・11	1/60	571
第576図	土壌-12(1)	1/80	572
第577図	土壌-12(2)	1/30・4・3	573
第578図	土壌-13	1/40	573
第579図	土壌-14	1/30・4・3	574
第580図	土壌-15	1/40・4・3	575
第581図	土壌-16・17	1/30	576
第582図	土壌-18	1/30	576

第583図	土壌-19(1)	1/60	577
第584図	土壌-19(2)	1/4	578
第585図	土壌-19(3)	1/4	579
第586図	土壌-20~22	1/30	580
第587図	土壌-23	1/20・8・4	581
第588図	土壌-24~26	1/60・30	582
第589図	土壌墓-1	1/20	582
第590図	溝-54(1)	1/60	583
第591図	溝-54(2)	1/4	584
第592図	溝-54(3)	1/4・3	585
第593図	溝-54(4)	1/4	586
第594図	溝-54(5)	1/3	587
第595図	溝-55~58	1/60・4・3	588
第596図	溝-59	1/30・4・3	589
第597図	溝-60	1/30・6・4	589
第598図	溝-61	1/60・4・3	590
第599図	溝-62	1/60・4	591
第600図	溝-63~66	1/30	591
第601図	溝-67	1/30	591
第602図	溝-68・69	1/30	592
第603図	溝-72~80	1/30	592
第604図	溝-81・82	1/30	593
第605図	溝-83	1/4	593
第606図	溝-84~87	1/30	593
第607図	溝-88~104	1/30・3	594
第608図	溝-105・106	1/30	594
第609図	溝-107・108	1/30・4	595
第610図	包含層(1)	1/4	596
第611図	包含層(2)	1/6・4・3・2	597
第612図	包含層(3)	1/4・3	598
第613図	津寺遺跡弥生時代中期遺構全体図	1/1,500	
			601~602
第614図	津寺遺跡弥生時代後期遺構全体図	1/1,500	
			603~604
第615図	弥生~古墳時代の水田		605
第616図	古墳時代前期の竪穴住居		608
第617図	竪穴住居A群の構成		608
第618図	竪穴住居B群の構成		608
第619図	竪穴住居C群の構成		608
第620図	津寺遺跡古墳時代前期遺構全体図	1/1,500	

.....	609~610	第653図 A地点 試料採取地点の土層断面	1/30	674
第621図 土器に描かれた特殊な文様	1/3	第654図 B地点 試料採取地点の土層断面	1/30	674
第622図 古墳時代中期の竪穴住居	613	第655図 C地点 試料採取地点の土層断面	1/30	675
第623図 津寺遺跡古墳時代中・後期遺構全体図	1/1, 500	第656図 D地点 試料採取地点の土層断面	1/30	675
.....	615~616	第657図 E地点 試料採取地点の土層断面	1/30	676
第624図 古墳時代後期の竪穴住居	617	第658図 F地点 試料採取地点の土層断面	1/30	676
第625図 竪穴住居の時期	619	第659図 A地点 植物珪酸体組成の層位的分布	678	
第626図 竪穴住居出土の鉄滓	619	第660図 B地点 植物珪酸体組成の層位的分布	679	
第627図 奈良時代の総柱建物の規模(岡山県)	622	第661図 C地点 植物珪酸体組成の層位的分布	680	
第628図 奈良時代の掘立柱建物の棟方向	622	第662図 溝-320埋積物中の花粉化石群集	681	
第629図 津寺遺跡古代遺構全体図	1/1, 500	第663図 D地点 植物珪酸体組成の層位的分布	682	
第630図 土師器(食器)の分量	626	第664図 E・F地点 植物珪酸体組成の層位的分布	683	
第631図 須恵器(食器)の分量	627	第665図 A・C地点の植物珪酸体	688	
第632図 二・三彩小壺の比較	1/1.5	第666図 C・D地点の植物珪酸体	689	
第633図 叩き目の類型	632	第667図 D・E地点の植物珪酸体	690	
第634図 平瓦に見られる布目	633	第668図 C地点の花粉化石(1)	691	
第635図 岡山県出土の袴帯と石帯	633	第669図 C地点の花粉化石(2)	692	
第636図 津寺遺跡中・近世遺構全体図1	1/1, 500	第670図 E地点の花粉分析プレパラート内状況	692	
.....	639~640	第671図 E・F地点の花粉分析プレパラート内状況	693	
第637図 津寺遺跡出土の中世土器	641	第672図 $K_2O/CaO-Sr/Rb$ 散布図 津寺遺跡6世紀末~7	695	
第638図 小杯形土器の分布	642	世紀前半の須恵器と生産地窯跡との比較	695	
第639図 津寺遺跡中・近世遺構全体図2	1/1, 500	第673図 $K_2O/CaO-Sr/Rb$ 散布図 津寺遺跡8世紀前半の	695	
.....	643~644	須恵器と生産地窯跡との比較	695	
第640図 墨書木札の釈文	652	第674図 $K_2O/CaO-Sr/Rb$ 散布図 津寺遺跡6世紀末~10	696	
第641図 出土長幹骨	653	世紀の土師器の胎土別比較	696	
第642図 土器および土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成	656	第675図 蛍光X線分析による検出元素の検出強度の相対比較	704	
.....	656	(大気中測定)	704	
第643図 土器および土壌試料に残存する脂肪のステロール組成	657	第676図 蛍光X線分析による検出元素の検出強度の相対比較	704	
.....	657	(真空中測定)	704	
第644図 試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	658	第677図 津寺遺跡出土製鉄関連遺物分析試料	1/3	708
第645図 試料に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	658	第678図 鉄鉱石・鉄滓の顕微鏡組織	716	
.....	658	第679図 鉄滓の顕微鏡組織(1)	717	
第646図 津寺遺跡高田調査区溝-38ウマ出土状況概念図	661	第680図 鉄滓の顕微鏡組織(2)	718	
.....	661	第681図 鉄滓・鉄塊系遺物の顕微鏡組織	719	
第647図 津寺遺跡出土の動物遺体(1)	664	第682図 鉄塊系遺物の顕微鏡組織(1)	720	
第648図 津寺遺跡出土の動物遺体(2)	665	第683図 鉄塊系遺物の顕微鏡組織(2)	721	
第649図 津寺遺跡出土の木材(1)	669	第684図 鉄滓のマクロ組織	722	
第650図 津寺遺跡出土の木材(2)	670	第685図 鉄塊系遺物のマクロ組織	723	
第651図 津寺遺跡出土の柱材	672	第686図 砂鉄系精錬鍛冶滓(TT-5)の特性X線像	724	
第652図 試料採取地点の位置	673	第687図 鉄塊系遺物(TT-14)鉄中非金属介在物の特性X線		

像と定量分析値	725
第688図 拡大反射顕微鏡写真(1)	728
第689図 拡大反射顕微鏡写真(2)	729
第690図 津寺遺跡出土石材の外観写真(左)および 顕微鏡写真(右)(1)	731
第691図 津寺遺跡出土石材の外観写真(左)および 顕微鏡写真(右)(2)	732
第692図 ヒスイとヒスイ類似岩の原産地	734
第693図 ヒスイ原石の元素比值Zr/Sr対Sr/Feの分布 および分布範囲	737

第694図 ヒスイ原石の元素比值Ca/Si対Sr/Feの分布 および分布範囲	738
第695図 ヒスイ原石の元素比值Na/Si対Mg/Siの分布 および分布範囲	738
第696図 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠のZr/Sr対Sr/Feの分布	739
第697図 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠のCa/Si対Sr/Feの分布	740
第698図 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠のNa/Si対Mg/Siの分布	740

## 表 目 次

表1 発掘調査一覧表	17
表2 岡山県の土器編年対比表	22
表3 袋状土壌の類型	599
表4 袋状土壌の類型別規模	600
表5 竪穴住居A群の類型	611
表6 竪穴住居B群の類型	611
表7 竪穴住居C群の類型	611
表8 古墳時代中期の竪穴住居	613
表9 古墳時代後期の竪穴住居	617
表10 時期別に見た竪穴住居出土鉄滓	619
表11 竪穴住居出土鉄滓の種類	620
表12 津寺遺跡における鉄器の組成	621
表13 奈良時代の土器組成	629
表14 叩き目の類型別出土量	632
表15 平瓦の類型別出土量	632
表16 岡山県の中近世土壌墓	637
表17 三手・津寺遺跡の中世土壌墓	638
表18 近世軒丸瓦観察表	646
表19 近世軒平瓦観察表	646
表20 中世土師器碗の編年案対照表	647
表21 津寺遺跡高田調査区土器埋納墳-3出土の土器および 土壌試料の残存脂肪抽出量	656
表22 試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合	657
表23 岡山県津寺遺跡獣骨同定結果一覧(1)	662
表24 岡山県津寺遺跡獣骨同定結果一覧(2)	663
表25 岡山県津寺遺跡貝類同定結果一覧	663

表26 岡山県津寺遺跡人骨同定結果一覧	663
表27 樹種同定結果	667
表28 放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果	672
表29 A地点植物珪酸体分析結果	678
表30 B地点植物珪酸体分析結果	679
表31 C地点植物珪酸体分析結果	680
表32 溝-320埋積物中の花粉分析結果	681
表33 D地点植物珪酸体分析結果	682
表34 E・F地点植物珪酸体分析結果	683
表35 E・F地点花粉分析結果	684
表36 胎土から推定される須恵器の産地(古墳時代)	698
表37 胎土から推定される須恵器の産地(奈良時代)	699
表38 津寺遺跡胎土分析試料一覧表(1)	700
表39 津寺遺跡胎土分析試料一覧表(2)	701
表40 津寺遺跡胎土分析試料一覧表(3)	702
表41 津寺遺跡出土ガラス滓組成分析結果	705
表42 ガラス滓の主成分の比較	706
表43 津寺遺跡高田調査区出土供試材の履歴と調査項目	707
表44 供試材の化学組成	712
表45 鉄生産における脈石成分の挙動	715
表46 ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)	736
表47 ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)	736
表48 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠の元素分析値	739
表49 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠の原石産地推定結果	741

# 巻頭図版目次

## 巻頭図版 1

1. 弥生～古墳時代の遺構検出状況
2. 古墳時代前期の水田

## 巻頭図版 2

1. 古墳時代後期の竪穴住居
2. 古墳時代後期の土器

## 巻頭図版 3

1. 奈良時代の掘立柱建物群
2. 奈良時代の土器

## 巻頭図版 4

1. 土器埋納墳-1 検出状況(南東から)

2. 土器埋納墳-1 出土土器

3. 土器埋納墳-2 二彩小壺出土状況(西から)

4. 土器埋納墳-2 出土二彩小壺

## 巻頭図版 5

1. 土器埋納墳-3 検出状況(南から)

2. 土器埋納墳-3 銅銭出土状況(南から)

3. 土器埋納墳-3 出土遺物

4. 土器埋納墳-3 出土銅銭

## 巻頭図版 6

1. 中世の土墳墓

2. 井戸-5 出土の木札

# 図版目次

## 図版 1

1. 弥生～古墳時代全景(南東から)
2. 竪穴住居-125検出状況(南東から)
3. 竪穴住居-125(南東から)

## 図版 2

1. 竪穴住居-126・135(南から)
2. 竪穴住居-127(南から)
3. 竪穴住居-127中央穴(南東から)

## 図版 3

1. 竪穴住居-127遺物出土状況(北西から)
2. 竪穴住居-128(北から)
3. 竪穴住居-130B(北から)

## 図版 4

1. 竪穴住居-130中央穴(北から)
2. 掘立柱建物-16(西から)
3. 掘立柱建物-17(北から)

## 図版 5

1. 袋状土壇-72(南東から)
2. 袋状土壇-73(北西から)
3. 袋状土壇-77(南から)

## 図版 6

1. 袋状土壇-78(北西から)
2. 袋状土壇-78遺物出土状況(北から)

3. 袋状土壇-80(西から)

## 図版 7

1. 土壇-199(北から)
2. 土壇-200(東から)
3. 土壇-207(南東から)

## 図版 8

1. 土壇-209(南西から)
2. 土壇-210(南東から)
3. 土壇-212(北東から)

## 図版 9

1. 土壇-213(南東から)
2. 土壇-214(南から)
3. 土壇-215(南から)

## 図版10

1. 土壇-217(南から)
2. 土壇-219(西から)
3. 弥生時代全景(北から)

## 図版11

1. 土壇-220(南から)
2. 土壇-221(北から)
3. 土壇-224(西から)

## 図版12

1. 土壇-227(南西から)

2. 土壙-232(北から)
3. 土壙-238(南東から)

図版13

1. 土器棺墓-10(南から)
2. 土器棺墓-11(東から)
3. 土器棺墓-11部分(北東から)

図版14

1. 竪穴住居-133~135(東から)
2. 竪穴住居-133・134(東から)
3. 竪穴住居-134(東から)

図版15

1. 竪穴住居-135(南から)
2. 竪穴住居-136A・B(西から)
3. 竪穴住居-136B(西から)

図版16

1. 竪穴住居-137(南から)
2. 竪穴住居-139~141(南東から)
3. 竪穴住居-140・141中央穴(北西から)

図版17

1. 竪穴住居-142(西から)
2. 竪穴住居-142方形土壙(西から)
3. 竪穴住居-143遺物出土状況(東から)

図版18

1. 竪穴住居-144~146(北西から)
2. 竪穴住居-144中央穴(南東から)
3. 竪穴住居-147(東から)

図版19

1. 竪穴住居-148(南東から)
2. 竪穴住居-149(南西から)
3. 竪穴住居-150B(東から)

図版20

1. 竪穴住居-150A方形土壙(東から)
2. 竪穴住居-152・153(南から)
3. 竪穴住居-152中央穴(北から)

図版21

1. 竪穴住居-153(北東から)
2. 竪穴住居-155(南から)
3. 竪穴住居-155方形土壙(北から)

図版22

1. 竪穴住居-155出土遺物(南から)

2. 竪穴住居-157遺物出土状況(西から)
3. 竪穴住居-157(東から)

図版23

1. 竪穴住居-158(北から)
2. 竪穴住居-158中央穴(西から)
3. 竪穴住居-163(北東から)

図版24

1. 竪穴住居-163カマド(東から)
2. 竪穴住居-164(東から)
3. 竪穴住居-165・166(北西から)

図版25

1. 竪穴住居-165(南東から)
2. 竪穴住居-165カマド(南東から)
3. 竪穴住居-166(南東から)

図版26

1. 竪穴住居-168(西から)
2. 竪穴住居-171(東から)
3. 竪穴住居-172カマド(南から)

図版27

1. 竪穴住居-173(南西から)
2. 竪穴住居-174遺物出土状況(北東から)
3. 竪穴住居-174カマド(南西から)

図版28

1. 竪穴住居-174(北東から)
2. 竪穴住居-176(西から)
3. 竪穴住居-176カマド下部構造(西から)

図版29

1. 竪穴住居-179(南西から)
2. 竪穴住居-180(南東から)
3. 竪穴住居-181(東から)

図版30

1. 竪穴住居-181カマド(北から)
2. 竪穴住居-182(南東から)
3. 竪穴住居-182カマド(北東から)

図版31

1. 竪穴住居-182出土遺物(東から)
2. 竪穴住居-183(南東から)
3. 竪穴住居-183カマド下部構造(東から)

図版32

1. 竪穴住居-184(南から)

2. 竪穴住居-186(北から)
3. 竪穴住居-186カマド下部構造(北西から)

図版33

1. 掘立柱建物-18(南から)
2. 焼成土壇-1(西から)
3. 土壇-256(北から)

図版34

1. 土壇-258(北西から)
2. 土壇-259(西から)
3. 土壇-261(北から)

図版35

1. 土壇-262(北から)
2. 土壇-263(西から)
3. 土壇-268(北から)

図版36

1. 掘立柱建物-20(北西から)
2. 掘立柱建物-21(北西から)
3. 掘立柱建物-22~25(北東から)

図版37

1. 掘立柱建物-23・24(西から)
2. 掘立柱建物-25(南西から)
3. 掘立柱建物-26~32(南から)

図版38

1. 掘立柱建物-26(南東から)
2. 掘立柱建物-28(北から)
3. 掘立柱建物-29(北から)

図版39

1. 掘立柱建物-30(北から)
2. 掘立柱建物-31(東から)
3. 掘立柱建物-32(西から)

図版40

1. 中世全景1(東から)
2. 中世全景2(南から)
3. 掘立柱建物-38~40(北東から)

図版41

1. 掘立柱建物-34(南から)
2. 掘立柱建物-43(北西から)
3. 掘立柱建物-46(北から)

図版42

1. 井戸-3(北から)

2. 井戸-4(西から)
3. 井戸-5(東から)

図版43

1. 土壇-309(北西から)
2. 土壇-330(東から)
3. 土壇-328出土遺物(南西から)

図版44

1. 土壇墓-12(東から)
2. 土壇墓-13(東から)
3. 土壇墓-14(東から)

図版45

1. 土壇墓-15(北西から)
2. 土壇墓-16(北東から)
3. 土壇墓-17(南から)

図版46

1. 溝-320(東から)
2. 溝-320(南西から)
3. 溝-440~456(北から)

図版47

竪穴住居-125・127 1/3・4

図版48

竪穴住居-127・130~132、袋状土壇-72・77 1/3・4

図版49

袋状土壇-77・78 1/3・4・5

図版50

袋状土壇-78・80 1/3・4・5・6

図版51

袋状土壇-80、土壇-199 1/3・4

図版52

土壇-199・209~211・214 1/3・4

図版53

土壇-217 1/3・4・6

図版54

土壇-218・219・221 1/3・4・5

図版55

土壇-221・225・232 1/3・4・5

図版56

土壇-232・236 1/3・4

図版57

土壇-236、土器棺墓-10 1/3・4・7



図版58

土器棺墓-9~11、包含層 1/3・4・6

図版59

中屋調査区包含層出土弥生土器(1) 1/2

中屋調査区包含層出土弥生土器(2) 1/2

図版60

竪穴住居-134 1/3

図版61

竪穴住居-134 1/3・4

図版62

竪穴住居-134~136 1/3・4

図版63

竪穴住居-136・141 1/3・4

図版64

竪穴住居-141~146 1/3・4

図版65

竪穴住居-144~148・150 1/2・3・7

図版66

竪穴住居-150・152~155 1/3・4・5

図版67

竪穴住居-155 1/3・4

図版68

竪穴住居-155~157 1/3・4・5

図版69

竪穴住居-157・158 1/3

図版70

竪穴住居-158・163~166・168・169・172・174 1/3・4

図版71

竪穴住居-174 1/3・4

図版72

竪穴住居-174・180・181・183 1/3・4

図版73

竪穴住居-183、土壙-240・255・262・263 1/3・4・5

図版74

土壙-264~268・274 1/3・4

図版75

土壙-273、土器溜り-4~8 1/3・4

図版76

土器溜り-8 1/3・4・5

図版77

土器溜り-8~10 1/3・5

図版78

土器溜り-10・11、溝-101 1/3・4・5

図版79

溝-101・102 1/3・4・5

図版80

溝-102 1/3・4・5

図版81

溝-102・104 1/3

図版82

溝-104・108・109・113・114、水田、包含層 1/3・4・5

図版83

水田、包含層(1) 1/3・4

図版84

包含層(2) 1/3・4

図版85

包含層(3) 1/3・5

図版86

包含層(4) 1/3

図版87

包含層(5) 1/3・4

図版88

包含層(6) 1/3・4

図版89

包含層(7) 1/3・4

図版90

包含層(8) 1/3・4

図版91

焼成土壙-4、土壙-280~282 1/3・4

図版92

土壙-282・286・293・295 1/3・4

図版93

土壙-296・299~301 1/3・4

図版94

土壙-300~303・306、溝-128・130 1/3・4

図版95

溝-132・133 1/3

図版96

溝-134~136・138~227 1/3・4・5・6

図版97

溝-138~227、包含層(1) 1/3

図版98

包含層(2) 1/3

図版99

包含層(3) 1/3・6

図版100

包含層(4) 1/3

図版101

井戸-4、土壇-315~317・320・326・331、土墳墓-13・15、  
溝-294・295 1/3

図版102

溝-320・322、包含層 1/3・4

図版103

中屋調査区出土石製品(1) 1/1.5

中屋調査区出土石製品(2) 1/1.5

図版104

中屋調査区出土石製品(3) 1/3

中屋調査区出土石製品(4) 1/1

図版105

中屋調査区出土土製品(1) 1/1.5

中屋調査区出土土製品(2) 1/1.5

図版106

中屋調査区出土土製品(3) 1/2

中屋調査区出土土製品(4) 1/2

図版107

中屋調査区出土瓦(1) 1/2

中屋調査区出土瓦(2) 1/2

図版108

中屋調査区出土金属製品(1) 1/1.5

中屋調査区出土金属製品(2) 1/1.5

図版109

中屋調査区出土金属製品(3) 1/1.5

中屋調査区出土金属製品(4) 1/1

図版110

中屋調査区出土金属製品(5) 1/1.5

図版111

中屋調査区出土木製品 1/1.5

図版112

1. 竪穴住居-3(北西から)

2. 竪穴住居-4(東から)

3. 竪穴住居-4・6~9(北から)

図版113

1. 竪穴住居-5(南西から)

2. 竪穴住居-5焼土面(南西から)

3. 竪穴住居-6(南東から)

図版114

1. 竪穴住居-7(南東から)

2. 竪穴住居-7カマド(北上から)

3. 竪穴住居-7カマド(南東から)

図版115

1. 竪穴住居-8(西から)

2. 竪穴住居-9(西から)

3. 竪穴住居-9カマド(北上から)

図版116

1. 竪穴住居-10(北東から)

2. 竪穴住居-10カマド近接(北東から)

3. 竪穴住居-14(西から)

図版117

1. 竪穴住居-15~19(南東から)

2. 竪穴住居-15(南から)

3. 竪穴住居-16(南から)

図版118

1. 竪穴住居-17(南から)

2. 竪穴住居-18(東から)

3. 竪穴住居-18カマド近接(東上から)

図版119

1. 竪穴住居-23(南から)

2. 竪穴住居-25~30(南から)

3. 竪穴住居-29(東から)

図版120

1. 竪穴住居-30(南から)

2. 竪穴住居-38紡錘車出土状況(南西から)

3. 竪穴住居-40・41・42(南から)

図版121

1. 竪穴住居-42(西から)

2. 竪穴住居-42カマド近接(南から)

3. 竪穴住居-45(北から)

図版122

1. 竪穴住居-47~50(南から)

2. 竪穴住居-58(南東から)

3. 竪穴住居-58カマド近接(南西から)

図版123

1. 竪穴住居-66(南から)

2. 竪穴住居-76(西から)

3. 竪穴住居-70~73・78~83(北から)

図版124

1. 竪穴住居-86(南東から)

2. 竪穴住居-86カマド近接(南東から)

3. 竪穴住居-89(西から)

図版125

1. 竪穴住居-90(南から)

2. 竪穴住居-92・93(南から)

3. 竪穴住居-93カマド近接(東から)

図版126

1. 井戸-1(南から)

2. 焼成土壇-3(南から)

3. 焼成土壇-4(東から)

図版127

1. 焼成土壇-5(北西から)

2. 焼成土壇-6(東から)

3. 焼成土壇-6、溝-29(東から)

図版128

1. 溝-1・2北半(南から)

2. 溝-1・2南半(南西から)

3. 溝-1・2土層断面(南から)

図版129

1. 水田-1(南西から)

2. 水田-1(南から)

3. 水田-1(南から)

図版130

1. 水田-2(北から)

2. 水田-2(北から)

3. 水田-2(北から)

図版131

1. 水田-2畦畔断面

2. 水田-1足跡

3. 水田-1杭痕跡

図版132

1. 掘立柱建物-1(南から)

2. 掘立柱建物-1・2(東から)

3. 掘立柱建物-10(南から)

図版133

1. 掘立柱建物-11(北から)

2. 掘立柱建物-15(南西から)

3. 掘立柱建物-17(南から)

図版134

1. 土壇-4(東から)

2. 土器埋納壇-1(北東から)

3. 土器埋納壇-2(西から)

図版135

1. 土器埋納壇-3(南から)

2. 土器埋納壇-3(上から)

3. 溝-38獣骨出土状況(北から)

図版136

1. 掘立柱建物-22(南から)

2. 井戸-2(南上から)

3. 井戸-3(南から)

図版137

1. 土壇墓-1(東から)

2. 土壇-7(南から)

3. 土壇-11(南から)

図版138

1. 土壇-12(南から)

2. 土壇-12木樋近接(南から)

3. 土壇-14(東から)

図版139

1. 土壇-15(南東から)

2. 土壇-19(西から)

3. 土壇-23(北から)

図版140

1. 中・近世遺構全景(南西から)

2. 溝-54(西から)

3. 溝-61、井戸-3(北東から)

図版141

溝-1・2・5、包含層 1/3・4・6

図版142

竪穴住居-3~6・9 1/3・4

図版143

竪穴住居-10・13・15・20 1/3・4

図版144

竪穴住居-23・27・28・34・48・52・53・56 1/3・4

図版145

竪穴住居-58・60・61・68・69 1/3

図版146

竪穴住居-75・79・80・90 1/3・4

図版147

井戸-1、溝-8 1/3・4

図版148

溝-9~11 1/3・4

図版149

溝-12・13・16・20・28 1/3・4

図版150

溝-29・32、洪水砂 1/3

図版151

包含層 1/3・4

図版152

包含層 1/3

図版153

土器埋納坑-1~3、土壙-4 1/1・3

図版154

たわみ-3、溝-38・40・46 1/3

図版155

包含層 1/2・3

図版156

井戸-3、土壙-6・7・14・15 1/3

図版157

土壙-19・23、溝-54 1/3・4・6

図版158

溝-54 1/3

図版159

溝-54~57・107 1/3

図版160

包含層 1/3・4

図版161

高田調査区出土石製品 1/1・2.5・3・4

図版162

高田調査区出土金属製品(1) 1/1.5・2

図版163

高田調査区出土金属製品(2) 1/1.5・2

図版164

高田調査区出土土製品(1) 1/2・3

図版165

高田調査区出土土製品(2) 1/3

図版166

高田調査区出土土製品(3) 1/3・4

図版167

高田調査区出土土製品(4)・骨製品・木製品

1/1.5・2・3

# 第1章 遺跡をとりまく環境

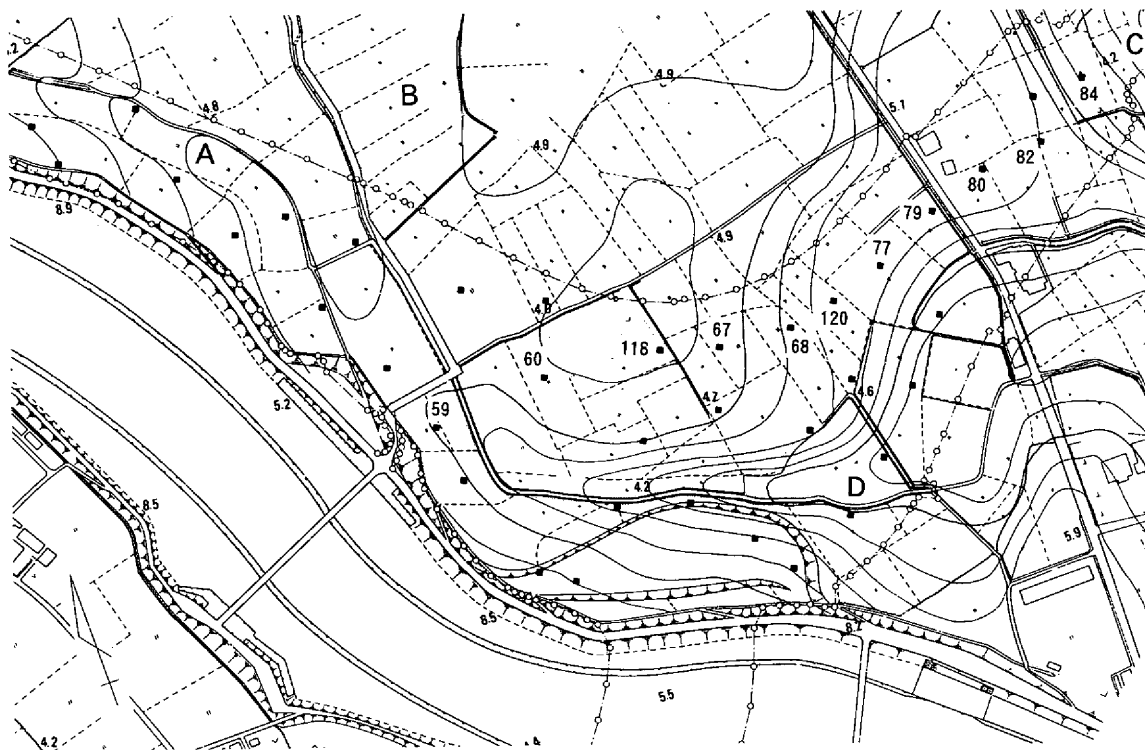
## 第1節 地理的環境

岡山県南部の中央を流れる足守川は吉備高原に源を発し、その流域に谷底平野を形成する。中流域の西岸には、標高223mの仕手倉山と302mの福山を中心とした山地が東北東から西南西にかけて連なる。その傾斜は北に比べて南が緩やかで、非対象の山容をなす。その北側に広がる標高40~70mあまりのなだらかな都窪丘陵は、主として白亜紀末の花崗岩・閃緑岩の深成岩からなるが、清音付近には古生層が認められる。この古生層を貫くように、古第三紀に貫入した流紋岩の岩脈が三因から矢部にかけて走っており、津寺と呼ばれる丘陵を形作っている。また、矢部や砂原の丘陵斜面には扇状地が発達し、縄文時代~古墳時代の生活の場として利用されている。足守川の東岸に位置する中山丘陵は、標高の162mの起伏にとんだ孤立丘陵で、ホルンフェルス化して灰緑色をなす砂岩・泥岩などの古生層で形成されている。花崗岩類からなる丘陵に比べて谷密度は低いが、ここでも北麓を中心に扇状地が発達しており、縄文時代以来の集落が営まれている。北には、白亜紀の花崗岩類からなる地形が広がっている。北東には、標高285mの竜王山を中心とする足守丘陵地が広がり、北西には標高403mの鬼城山の前面に総社丘陵地が続く。こうした丘陵の頂部には、数多くの墳丘墓や古墳が立地している。

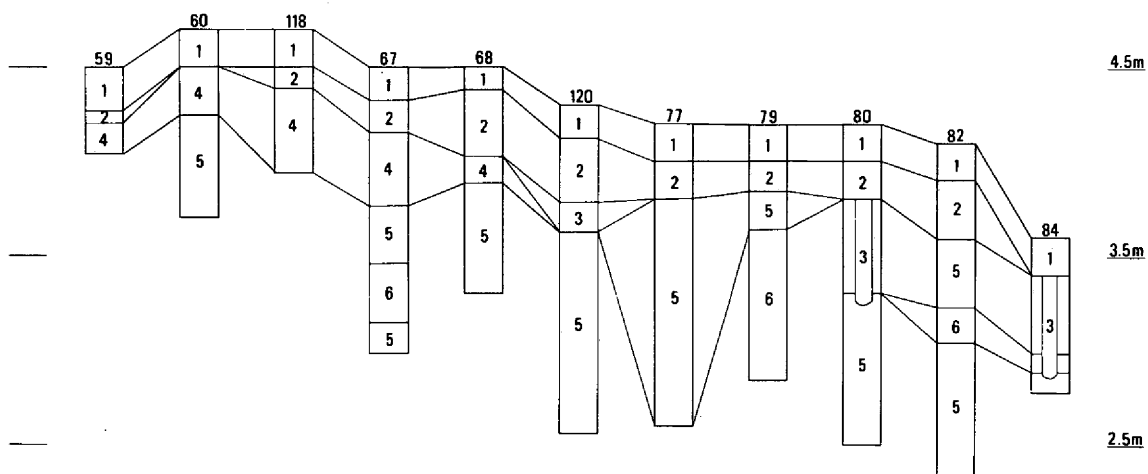
さて、足守川中流域に広がる幅2kmの平野部は谷底平野に分類されるが、沖積層の厚さは5~10mと旭川流域に比べ比較的浅い。現在では圃場整備や宅地開発によって判読が難しいが、大縮尺の地形図や航空写真を参照すると、網目のように走る旧河道やその縁辺に形成された自然堤防を読みとることができる。自然堤防上は弥生時代から集落が営まれており、現在においても伝統的な集落はこの地形面に立地している。また、こうした自然堤防の背後に広がる氾濫原では、最近工場や住宅の進出が著しいものの、その大半は現在でも水田として利用されている。この地域の水田の多くは乾田に分類されるが、河道跡が低位部として残る加茂や新邸、立田付近、あるいは低位部が新たに築かれた堤防によって遮断される新庄や黒住などは、湿田や半湿田として残されている。

ところで、網目のように走る河道のうち、その本流をなすのは高梁川の東分流であった。これは三手遺跡の南、津寺遺跡や政所遺跡の北を通過して板倉に至り、東山に向けて南流するもので、その上幅は100mにも及ぶことが発掘調査によって明らかとなっている。この河道は平家物語に現れる板倉川に相当し、現在の加茂用水はほぼその流路に沿って走っている。板倉川の廃川時期については明らかではないが、太平記にもその名がみえるところから、少なくとも中世前半までは存在したことが知られる。また、津寺遺跡と三本木遺跡を隔てている河道は、一軒屋遺跡の東で東に向きを替え、加茂城を迂回して南流している。加茂城がこの河道を防御として利用していたことを考えれば、少なくとも中世末までは何らかの形で機能していた可能性がある。このように、津寺遺跡の周辺には多くの河道の痕跡が認められ、現在では想像できないほど起伏に富んだ地形であったことが知られる。これは生活の場として好適な環境を生み出した反面、条里のような広域な開発を遅らせた一因となったものと考えられる。

(亀山)



第1図 津寺遺跡周辺微地形図 (1/4,000)



- |            |            |        |
|------------|------------|--------|
| 1. 現代水田層   | 3. 古代包含層   | 5. 砂層  |
| 2. 中・近世水田層 | 4. 古墳時代包含層 | 6. 粘土層 |

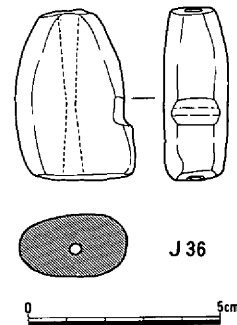
第2図 第一次調査土層断面図 (1/40)

## 第2節 歴史的環境

### 旧石器時代～縄文時代

この地域における最初の人類の足跡は旧石器時代まで溯る。甫崎天神山遺跡で出土したナイフ形石器は、かつて日差山山塊に生活の場を求めた人々がいたことを物語っている。

縄文時代になると、矢部伊能軒遺跡や矢部奥田遺跡で早期の押型文土器が出土しているが、集落の痕跡が確認できるのは中期後半以降のことである。この時期には山麓の緩斜面を中心に甫崎天神山遺跡(後期後半～晚期前半)・矢部貝塚(中期後半～後期前半)・西尾貝塚(後期)・山地貝塚・大内田貝塚(中期)などが知られている。津寺遺跡でも後期後半の土器が出土しており、この時期に低地への進出がはじまったことがうかがわれる。また、中屋調査区の中近世の溝埋土中から出土した硬玉製大珠は、中四国地方では初例であり、九州地方に分布する同種の遺物を理解するうえで重要な資料といえる。



第3図 中屋調査区出土の硬玉製大珠(1/2)

### 弥生時代

弥生時代になると、沖積地に大規模な集落が営まれるようになる。前期にはじまる集落は、今のところ岩倉遺跡・新邸遺跡・津寺遺跡などが知られている。中期になると、上東遺跡・高田遺跡・政所遺跡・前池内遺跡など、その数は飛躍的に増加する。これらの集落の多くは古墳時代にも継続して営まれているものが多い。その一方で、この時期の末には矢部大塚遺跡のように丘陵頂部に立地する短期間の集落も認められる。後期の集落では、高塚遺跡の銅鐸や貨泉、政所遺跡の銅釧、矢部南向遺跡の小銅鐸など、舶載品を含む多量の青銅器の出土が認められ、後に吉備と呼ばれる地域の中枢を形成していたことがうかがわれる。それはまた、楯築遺跡や鯉喰神社遺跡・雲山烏打遺跡・浦尾遺跡など平野を取り巻く丘陵上に築かれた墳丘墓の存在からもうかがわれる。ことに楯築遺跡は、長径30mの円丘の両端に狭長な突出部を備えた当時としては最大規模の墳丘墓で、主体部は排水溝を備えた木郭に木棺を納める特異な構造をとる。また、墳頂やその周囲には立石や特殊器台をめぐるなど、従来の墓制には見られない特徴を備えており、傑出した首長の存在がうかがわれる<sup>1</sup>。その被葬者は、特殊器台に象徴される祭式を共有した諸集団の中心的位置を占めていたものと推測され、以後造山古墳へと繋がる首長系譜の先駆けをなすものと考えられる。

### 古墳時代

この地域における最古の前方後円墳には、特殊器台形埴輪をもつ中山茶臼山古墳(全長120m)や撥形的前方部をもつ矢部大塚古墳(全長40m)などがあるが、13面の三角縁神獣鏡を副葬する車塚古墳(全長40m)や箸墓古墳の1/2規模墳である浦間茶臼山古墳(全長140m)が築かれた備前南部と比較してその数は少ない。しかし、加茂A・B遺跡や津寺遺跡の状況からすればこの地域が他地域との交流の拠点であったことは疑いようがなく、なおかつ箸墓古墳をはじめとする出現期の古墳に備中の特殊器台が持ち込まれていることからすれば畿内の首長との直接的な交流を想定すべきである。むしろこ



- |            |            |             |             |             |
|------------|------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 矢部奥田遺跡  | 9. 高田遺跡    | 17. 鯉喰神社遺跡  | 25. 小造山古墳   | 33. 大崎廃寺    |
| 2. 矢部伊能軒遺跡 | 10. 矢部南向遺跡 | 18. 楯築遺跡    | 26. 新池大塚古墳  | 34. 二子御堂奥窯跡 |
| 3. 西尾貝塚    | 11. 加茂A遺跡  | 19. 矢部大塚古墳  | 27. 王墓山古墳   | 35. 御堂奥廃寺   |
| 4. 上東遺跡    | 12. 津寺遺跡   | 20. 中山茶臼山古墳 | 28. 二子14号墳  | 36. 賀陽氏居館跡  |
| 5. 岩倉遺跡    | 13. 政所遺跡   | 21. 小盛山古墳   | 29. 日畑廃寺    | 37. 日幡城     |
| 6. 新邸遺跡    | 14. 高塚遺跡   | 22. 佐古田堂山古墳 | 30. 惣爪廃寺    | 38. 加茂城     |
| 7. 川入遺跡    | 15. 浦尾遺跡   | 23. 造山古墳    | 31. 津嶋駅推定地  | 39. 天神山城    |
| 8. 東山遺跡    | 16. 雲山烏打遺跡 | 24. 折敷山古墳   | 32. 都宇郡衙推定地 | 40. 三本木知行所  |

第4図 津寺遺跡周辺遺跡分布図 (1/40,000)



の地域における初期の古墳の僅少性は、畿内をはじめとする他地域との交流を独占し、他の造墓活動を規制しうような有力な首長の存在を反映しているのではなからうか。これに続く尾上車山古墳は狭長な前方部をもつ全長140mの前方後円墳で、湊茶臼山古墳や牛窓天神山古墳と類似した形態を取るとともに、臨海性の立地においても共通している。ところが前期後半になると、首長墳の立地は内陸部へと移る。大平山の一支丘に築かれた佐古田堂山古墳は、2段に築成された全長150mの前方後円墳であるが、埴輪の使用は認められない。この時期の備前南部には全長160mの金蔵山古墳が築かれているが、網浜茶臼山古墳から続いた大形前方後円墳の築造はこの古墳をもって途絶える。前期の集落は、津寺遺跡のほか加茂A・B遺跡、矢部南向遺跡、政所遺跡、高塚遺跡、上東遺跡などがある。特に津寺遺跡では数百軒の竪穴住居が営まれており、この時期に最盛期を迎えている。

佐古田堂山古墳につづいて築かれる造山古墳は、全長350mといわれる吉備最大の前方後円墳で、ほぼ同規模の大阪府石津ヶ丘古墳との関係が指摘されている<sup>2</sup>。この古墳と同時期の大形前方後円墳はこれまで知られておらず、造墓に対する規制が働いたものと解釈されている<sup>3</sup>。これに続く首長墳には作山古墳や寺山古墳があるが、いずれも総社平野の南部に移り以後足守川中流域に築かれる首長墳は全長140mの小造山古墳を最後に姿を消す。中期の集落には、高塚遺跡や津寺遺跡がある。これらの集落はカマドをつくりつけた竪穴住居で構成されており、朝鮮半島系の遺物を出土するものも見られる。また、奥ヶ谷遺跡では陶質系土器の生産が行われており、渡来系の氏族が居住していた可能性を示唆している<sup>4</sup>。このことは後の文献からもうかがわれるが<sup>5</sup>、その背景に造山古墳の存在があったことは、その陪塚である榊山古墳に朝鮮半島系の遺物の出土をみることを思えば容易に理解できる。

後期にはいると、平野をとりまく丘陵上には三上山古墳群や矢部古墳群、王墓山古墳群といった数多くの群集墳が造営される。また、コウモリ塚古墳(全長90m)のような後期としては大形の前方後円墳の築造もみられるようになり、横穴式石室の導入を契機とした古墳秩序の再編成が想定されている。この地域にあっても、大形の横穴式石室に浪形石製の家形石棺を納め装飾付馬具を副葬した王墓山古墳(全長20m)があり、その中心的な役割を担っていたものと推測される。しかし、全長40mの江崎古墳を最後に、この地域では古墳の築造が衰退していくが、その一方で二子14号墳のような外護列石をめぐらす2段築成の方墳(全長14m)も築かれている。また、これと相前後して大崎廃寺、日畑廃寺などの古代寺院の造営が始まる。これらの立地には群集墳との対応関係が見られ、在地の首長の中には中央政権に官人としてとりこまれるとともに、いちはやく新来のイデオロギーを受容した人々が存在したことを示している<sup>6</sup>。ところで、二子御堂奥窯跡ではこれらの寺院に供給された瓦の生産が行われているが、その瓦は備中式と呼ばれる特色をもち、壬申の乱における吉備の役割と、その後の吉備分割へとつながる政治的動向を反映するものとして注意されている<sup>7</sup>。この時期の集落には前代から継続して営まれるものがある一方で、新たに形成された微高地に進出する分村的な集落も数多く見受けられる。ことに、窪木薬師遺跡では鉄器の生産が行われており、集落の拡大・拡散の背景にはこうした分業の発達を背景とする可耕地の拡大があったことが知られる。

### 奈良時代～平安時代

律令体制の整備とともに、この地域も板倉川を境として北の加夜郡(評)、南の都宇郡(評)に分けられた。都宇郡は4つの郷からなる小郡で、津寺遺跡一帯は河面郷に属していたものと推定される<sup>8</sup>。都宇郡の郡衙は現在のところ明らかではないが、加茂地内の幸利神社一帯に比定する向きもある<sup>9</sup>。

この場所のすぐ南には古代山陽道が推定されており、これに南面する水田中には惣爪廃寺の塔心礎が残る。その寺域や伽藍配置などは不明であるが、天平11年の大税負死亡人帳にみえる津氏の氏寺、あるいは都宇(津)郡の郡衙にかかわる寺院とする考えもある。惣爪廃寺から足守川を西に渡ると、津舘駅に比定される矢部廃寺がある<sup>10</sup>。ここから出土している平城宮式の軒瓦は、備中の「国府系瓦」として小田駅に比定される毎戸廃寺や国分寺・国分尼寺、泊に関わる施設に擬せられる川入遺跡などでも用いられている<sup>11</sup>。この時代の集落については不明な点が多いが、東山遺跡や矢部南向遺跡、津寺遺跡などで掘立柱建物により構成される集落が見つかっている。また、黒住・雲山遺跡などの丘陵裾部でもこの時期の遺物が出土しており、小規模な集落が営まれていた可能性がある。これに近接する前池内古墳群や甫崎古墳群ではこの時期に横穴式石室へ火葬骨を納める追葬がみられ、この地域に根差した官人層の墓と見られる<sup>12</sup>。

律令体制の衰えとともに、この周辺でも足守庄・生石庄といった荘園の経営がはじまっている。政所遺跡は、その名からも荘園とのかかわりが想定されるもので、実際緑釉陶器や墨書土器、風字硯などの出土を見ている。また、ここでは多量の平安前期の瓦とともに梵鍾の鑄造跡も見つかっていて、荘家にかかわるような小規模な寺院が存在していたものと思われる<sup>13</sup>。なお、これと同様な寺院跡は、政所遺跡と同範の軒瓦を出土している大内田廃寺や御堂奥廃寺など周辺の丘陵部に散見される<sup>14</sup>。また、日差山の山頂近くにある日差寺は、報恩太師開基の伝承をもつ天台宗の山上寺院で、寛永12年、法華改宗を迫った戸川氏に抗して山上の寺地を捨て廃寺となったが、かつては大伽藍を備えた密教寺院であったという。また、吉備津神社が文献に現れるのもこのころである。吉備津神社は吉備津彦の廟所として崇敬をあつめたが、中世においてはこの地域を支配する有力な領主であった。この吉備津神社に神官として仕えた賀陽氏は賀陽郡を本貫とする氏族で<sup>15</sup>、「善家異記」によればその大領を務めていたことが知られる。また、賀陽豊年・真宗などの学者を輩出しており、臨濟宗の祖である栄西もその一族であるという。東山遺跡の北には賀陽氏のものと伝えられる居館跡が現在も残っている。

### 鎌倉時代～室町時代

長く平家の勢力下にあった備中は、その滅亡後、院の近臣が国守に任じられる一方で、土肥実平のような有力御家人が守護として配された。承久の乱後は一時幕府の料所となったが、その後北条得宗家領となっていく。鎌倉時代におけるこの地域の動向は、東大寺再興のための料所とされた備前と比べれば必ずしも明らかではないが、吉備津常行堂を根拠に勸進僧重源の活躍が伝えられており、この地域においてもその宗教的な影響が及んでいたものと思われる。また、東大寺領となった備前国野田荘との争論に加茂荘の名が見えるなど、この地域とのかかわりを伝える資料も残されている。鎌倉幕府滅亡から南北朝に至る動乱において、この地域は度々その抗争の舞台となり、幾多の戦いが繰り広げられた。ことに、福山城の合戦では新田氏のもとに活躍した多くの国人が名が見える。この時代の集落としては三手遺跡や川入遺跡、東山遺跡、高塚遺跡などが知られているが、その構成については必ずしも明らかではない。しかし、墓の中には輸入磁器などの副葬品をもつものがあり、農民層のなかにも階層の別が存在したことをうかがうことができる<sup>16</sup>。

室町時代の備中は、当初足利一門が守護に任じられていたが、南北朝合一後は細川氏の領国となり、以後幸山城に拠る守護代石川氏の支配するところとなる。一時、庄元資の反乱などもあったが、赤松氏と山名氏の抗争に明け暮れた備前に比べれば比較的安定した政治状況にあった。しかし、応仁の乱

を契機に細川氏の領国支配が弱まるにつれ国人の台頭が目立つようになり、この周辺でも禰屋氏・日幡氏・生石氏・高塚氏などの活躍が伝えられている。天正3年(1575年)、備中守護代石川氏は、三村氏とともに毛利氏に攻められて滅亡し、この地は毛利氏の支配下に置かれた。しかし、中国地方の支配を目指す織田氏との争いがこの地をめぐる行われ、日幡城や加茂城はその合戦の舞台となった<sup>17</sup>。この戦いが織田方の勝利に終わると、この地域はいち早くこれに与した宇喜多氏の領有に帰し、その家臣である花房氏の支配するところとなった<sup>18</sup>。この地域における宇喜多氏の治世については明らかでないが、足守川の築堤がこの時期と考えられることからすれば何らかの開発がここでも進められていたものと思われる<sup>19</sup>。元和の時点で、花房家が加茂村に703石もの開田に成功している事実は、こうした先行する開発によるところが大であったに違いない。室町時代の集落は、津寺遺跡土筆山調査区や三手向原遺跡、高塚遺跡などがあるが、これらのなかには周囲を溝で区画した屋敷が現れている。区画内には数棟の建物や井戸、墓を備えており、国人へと成長して行く自立した農民層の姿を彷彿とさせる。

### 江戸時代以降

家中騒動を契機に宇喜多家を退転した花房職之は、関ヶ原の戦後この地を所領として与えられたが、その死後は次男榊原職直に遺領が分知され、三本木に知行所を開いた。しかしその運営は、専ら花房家の高松知行所に配された2名の代官に委ねられていた<sup>20</sup>。当初、加茂村において800石を分知されていた榊原領は、正保の時点で加茂村の558石、新庄村の242石に変更されており、花房氏との間で所領の再分配が行われたものと推測される<sup>21</sup>。新庄村の枝村であった黒住などはこの際に編入されたようで、現在のように足守川を越えて広がる津寺村はこれらをもとにして成立したと思われる。

ところで、津寺村は「寛永備中国絵図」に村高32石余の加茂の枝村と記されているが、宝永年間には村高812石を数える本村となり、以後この村高が踏襲されている。近世津寺村の成立には、旗本領の分知という政治的な要因も働いているものと思われるが、その背景には江戸中期以降急速に進んだ開発があったものとみられ<sup>22</sup>、このことは発掘調査の結果からも裏付けられるところである。

明治維新後は倉敷代官所支配となるが、明治3年には足守藩の管轄とされた。明治4年の廃藩置県後は深津県の所管に移り、翌年には小田県と改められた。当時この地域は第14大区小26区と呼ばれたが、明治11年に大小区制廃止の後は岡山県都窪郡津寺村と改称され、明治22年には加茂・新庄上・新庄下・惣爪村と合併して加茂村となる。昭和30年には高松町・生石村と合併して吉備郡高松町となり、昭和46年には岡山市に編入されて現在に至っている<sup>23</sup>。

発掘調査の端緒となった山陽自動車道の建設は、この地域におけるさまざまな開発を促進し、かつて一面に広がっていた緑なす沃野にかえて、近郊地としての新たな景観を形作りつつある。(亀山)

註1. 近藤義郎「榊築弥生墳丘墓の研究」1992

2. 岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究154』考古学研究会、1992

3. 葛原克人「大古墳」『えとのす25』1984

4. 柴田英樹「奥ヶ谷窯跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告21』岡山県教育委員会、1994

5. 天平11年の大税負死亡人帳には、秦人部・史戸・東漢人・西漢人・忍海漢部といった渡来系氏族の名が記されており、これらが占める割合は40%を越える。

直木孝次郎「吉備の渡来人と豪族」『岡山県の歴史と文化』1983

6. 亀山行雄「7世紀の古墳」『吉備の考古学的研究(下)』1992
7. 伊藤晃「備中式瓦について」『古代97』早稲田大学考古学会、1994
8. 平城京二条大路出土木簡には、「備中国都宇郡中男作物楡蟹二斗九升 天平九年十一月」とあり、楡として蟹を納めていたことが知られる。  
「平城宮発掘調査出土木簡概報22」奈良国立文化財研究所、1990
9. 千田稔「埋もれた港」1974
10. 津嶋は「ツサカ」と訓まれ、丘陵を越える峠道を指すものと見られる。この地にあつて備中の「国府系瓦」とも言うべき平城宮6225・6663型式の軒瓦を出土する矢部廃寺はその有力な候補である。
11. 高橋美久二「市と交易」『古代史復元9』1989
12. 中野雅美ほか「前池内遺跡・前池内古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会、1994  
柴田英樹ほか「甬崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会、1994
13. 平井泰男ほか「政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告21』岡山県教育委員会、1991
14. 高畑知功「大内田廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告53』岡山県教育委員会、1983  
葛原克人ほか「御堂奥廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2』岡山県教育委員会、1972
15. 賀陽清仲が生石荘の荘官を務めていたことが、「嘉応2年8月9日生石荘田土者散位賀陽清仲解」によって知られる。
16. 松本和男ほか「津寺遺跡土筆山調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994
17. 小早川方が布陣した甬崎天神山城は、発掘調査によって丘陵頂部に造成された主郭の周りに複数の郭面を配した構造が明らかとなっている。  
宇垣匡雅ほか「甬崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会、1994
18. 津寺遺跡の南方、加茂字岡塊の水田中に残る腰投げ地蔵は、永禄12年の銘をもつ「文英様石仏」で、熱烈な日蓮宗の信者であった花房氏による統治以前の民間信仰を伝える石造物である。  
根木修「吉備の文英様石仏」『山陽新聞サンブックス』1993
19. 矢部南向遺跡では、堤防下から15世紀末の集落が検出されており、築堤の上限がこの時期にあることを示している。また、関ヶ原の戦以後、この地域が複数の旗本領に分割されている状況を考えれば、統一的な土木事業が容易であったとは思われない。むしろ、高松城の水攻めに用いられた上方の先進的な築堤技術を学んだ宇喜多氏によって、こうした工事がなされたと見るべきであろう。  
江見正己「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995
20. 「備中国御蔵入并御給所」『岡山県史 近世Ⅱ』岡山県、1985
21. これは、十二ヶ郷用水の水掛りに、花房家の本田に代わって榊原家の新田を当てる意図から出ており、「慶長年中湛井懸り高書付写」に津寺村の名が見えるのはこうした理由によるものであろう。  
「岡山県土木史」1956
22. 註21文献
23. 郷土誌編集委員会「郷土誌たかまつ」1971

## 第2章 調査と整理の経過

### 第1節 調査の契機

#### (1) 既往の調査

津寺遺跡をはじめとする足守川流域では古くから土器の散布が知られており、吉備考古館にはその一部が収蔵・展示されている。

昭和47～56年、岡山市教育委員会によって行われた分布調査によって、岡山市長田から政所、一軒屋にわたる広範囲に遺跡の所在が確認された。昭和54年には、その北に接する三手遺跡で庄内幼稚園の建設に伴う発掘調査が実施され、古墳時代～中世の集落跡が検出されている。また、津寺遺跡の西を流れる足守川の河床では、河川改修工事に伴って昭和55～63年にわたり足守川加茂A・B遺跡、足守川矢部南向遺跡の発掘調査が行われ、弥生時代～中世の集落跡が確認された。この調査では、弥生時代の小銅鐸や小形銅鏡などの青銅器をはじめ、特殊器台や卜骨、多量の搬入土器など、この地域の特殊性を示す遺物が多数出土している。昭和63年には、津寺遺跡の南に接する加茂小学校で校舎建設に伴う発掘調査が岡山市教育委員会によって実施された。ここでも弥生時代～中世の集落跡が検出されたが、とくに古墳時代後期の竪穴住居が多数検出されて注目を集めた。さらに、津寺遺跡の調査が行われていた平成元～3年には、津寺地内を南北に走る県道大内田高松線の改良工事に先立って津寺三本木・一軒屋遺跡の発掘調査が実施され、弥生時代～中世にわたる遺構が確認された。

こうして、従来足守川下流域に比べてその実態が詳らかではなかったこの地域においても、弥生時代～中世にわたる多くの集落遺跡が存在することが明らかとなっていった。

#### (2) 第1次調査

山陽自動車道の建設に先立って実施された分布調査によって、ジャンクション部分に広域な散布地が存在するものと推定された。このため、遺跡の範囲とその構造を把握することを目的として、昭和62年1～2月にかけて第1次調査を実施することとなった。調査は、北に連なる三手遺跡とあわせて、2×2mのグリッドを82箇所設定し掘り下げを行った。その結果、三手から津寺に至る路線のほぼ全面に弥生時代～中世の遺構が確認された。

これをうけた文化課は、遺跡の取り扱いについて道路公団と数度にわたり折衝を重ねたが、現時点での路線変更は困難であり、記録保存とせざるをえないとの結論に達した。しかしながら151,000㎡にも及ぶ遺跡の調査は、岡山県においてはかつて例のないことであり、調査人員の確保や調査条件の整備など、さまざまな困難が予想された。しかも、平成4年の供用開始にあわせて短期間のうちに調査を終了させることは極めて難しいものと思われた。したがって、調査の対象となる面積を極力限定することとし、文化庁とも協議を重ねた結果、盛土の薄いジャンクション中央の植栽部分や仮設道については、地下の遺構に及ぼす影響が軽微であるものと判断されたため、これを除く87,000㎡を当面

の調査対象として昭和63年度から第2次調査に入ることとなった。

しかし、調査が進行する中で、古代の護岸施設や官衙跡が確認されるなどして津寺遺跡の重要性に対する認識が深まり、植栽部分についても調査対象とするよう遺跡保護調査団から要望がなされるに至った。このため岡山県教育委員会は、当面この部分にジオグリッドを敷設するなどして土圧の軽減や不等沈下の防止を図り、後年次に調査を実施することで日本道路公団と覚書をかかわした。

なお、仮設道部分については、平成6年度に三手遺跡において一部調査を実施している。

## 第2節 調査の目的と方法

### (1) 調査の目的と方法

第2次調査は、1次調査によって明らかとなった津寺遺跡の範囲のうち、山陽自動車道の建設によって地下の遺構に何らかの影響を及ぼすと考えられる橋脚ならびに本線盛土部分を対象として実施した。この調査は、記録保存を前提としたものとならざるを得なかったが、調査の結果その重要性が明らかとなった護岸施設については、航空撮影や断面転写などによる詳細な記録を作成したのち、砂締め工法により一部保存の手当をして現状のまま埋め戻す保存措置が講じられた。

調査は工事と競合して実施したため、調査区の設定も工事工程にあわせることとなり、グリッドや現地割りなどに応じた形とはなっていない。調査にあたっては、まず調査員の指示の下に重機によって耕作土を除去した後、人力により遺構の検出・掘り下げを行った。その際、排土の運搬には騒音等に配慮して電動ベルトコンベアーを使用した。また、湧水や雨水の排出には排水ポンプを用いたが、その使用にあたっては沈砂池を設けるなどして用水への土砂や濁水の流入防止に努めた。作業員は、従来から地元住民から募集を行ってきたが、調査規模の拡大と共に地元での採用にも限りが生じることとなったため、総社市西部と岡山市北部からの2区間のバス路線を独自に設定するなどして、その確保を行った。

検出した遺構の測量は、国土地理院第5座標系に基づき、 $X = -145400$ 、 $Y = -48700$ を起点とする100mのグリッドを設定したうえ、これを10mの小区画に分割して行った。また高度は、一等水準点を基準として、海拔高を使用した。これらの基準杭の設定は、当初業者に委託していたが、平成元年からは土木部から技師の出向を仰いでこれに対応した。写真撮影には、工事用の足場を組み立てて使用し、転落・倒壊による事故の防止に万全を期した。これら調査の記録には、主に調査員があたり、調査補助員がこれを補佐した。

### (2) 調査の体制

昭和63年度における山陽自動車道関連の調査は、岡山県古代吉備文化財センターの調査2課が担当し、調査員33名がこれに専従することとなった。また、備前市教育委員会から専門職員1名の派遣援助を仰ぎ、また倉敷市教育委員会、総社市教育委員会からも随時協力を得た。調査は、これらの調査

員3名を一組として11班を編成し、甫崎天神山遺跡以東の3遺跡の調査にあたった。なお、この年度から調査補助員を8名採用して、調査実務の充実をはかった。

平成元年度には、岡山県古代吉備文化財センターに調査3課が新設され、山陽自動車道関連の調査のうち高塚遺跡と政所遺跡の調査を担当することとなった。津寺遺跡の調査を担当する調査2課では、教員11名・土木部出向職員1名を含む調査員27名を配置し、9班を編成して調査にあたった。

平成2年度は、調査2課に調査員24名、調査3課に調査員12名を配置し、11班を編成して津寺遺跡の調査にあたった。このうち教員は16名、土木部職員は2名である。

発掘調査の体制（昭和61年度～平成4年度）

昭和61年度（1986年度）

岡山県教育委員会					
教育長		宮地暢夫	教育次長		石井敏雄
文化課	課長	高橋誠記	文化課	文化財保護主査	山磨康平
	課長代理	逸見英邦		主任	仁宮秀博
	埋蔵文化財係長	正岡睦夫			
岡山県古代吉備文化財センター					
所長		橋本泰夫	課長		河本清
総務課	課長	佐々木清	調査課	文化財保護主査	井上弘
	主査	遠藤勇次		文化財保護主任	浅倉秀昭・中野雅美
	主任	花本静夫		主事	亀山行雄・大智浩

昭和63年度（1988年度）

岡山県教育委員会					
教育長		竹内康夫	教育次長		前亮治
文化課	課長	吉尾啓介	文化課	主査	藤川洋二
	課長代理	河野衛			
	課長補佐	伊藤晃			
岡山県古代吉備文化財センター					
所長		水田稔	係長		松本和男
総務課	課長	佐々木清	調査係	文化財保護主査	岡田博・浅倉秀昭
	総務主幹	藤本信康		文化財保護主任	栗尾昭和・垣内一也
	主任	花本静夫・岡田祥司		文化財保護主事	井上篤
調査2課	1	課長	葛原克人	主事	佐守学・澤山孝之
		課長補佐	正岡睦夫		柴田英樹・弘田和司
	文化財保護主幹	小柴充明	3	係長	高畑知功
	文化財保護主査	山磨康平・二宮治夫		文化財保護主査	福田正継
	文化財保護主任	吉田正士		文化財保護主事	光永真一・広瀬隆明
	文化財保護主任	中野雅美・川崎肇	主事	田代健二・小松原基弘	
	文化財保護主事	小田卓生・福田計治		飯島賢治・佐伯英樹	
主事	亀山行雄・大橋雅也	谷岡孝久			
		後藤信義			

第2章 調査と整理の経過

平成元年度（1989年度）

岡山県教育委員会										
教育長		竹内康夫		教育次長		竹本博明				
文化課	課長		吉尾啓介(～11/30) 鬼澤佳弘(12/1～)		文化課	課長補佐		伊藤 晃		
	課長代理		河野 衛			主 査		藤川洋二		
岡山県古代吉備文化財センター										
所 長		長瀬日出明		調査係		係 長		高畑知功		
次 長		河本 清				文化財保護主任		中野雅美・島崎 東		
総務課	課 長		竹原成信		調査係	文化財保護主事		福田計治・山本了峰		
	総務係	課長補佐		藤本信康		主 事		村田秀石・石黒 勉 後藤信義・土井一行		
		主 任		岡田祥司・平松郁男 片山淳司						
調査2課	課 長		葛原克人		調査係	係 長		岡田 博		
	1	課長補佐		井上 弘		文化財保護主任		井上 篤		
		文化財保護主査		二宮治夫・林 久夫 吉田正士		文化財保護主事		片山泰輔・亀山行雄		
	2	文化財保護主任		光永真一・源 俊二		主 事		澤山孝之・柴田英樹 古市秀治・波多野宏和		
		文化財保護主事		広瀬隆明・安井 悟						
		主 事		大橋雅也						

平成2年度（1990年度）

岡山県教育委員会										
教育長		竹内康夫		教育次長		杉井道夫				
文化課	課 長		鬼澤佳弘		文化課	主 査		藤川洋二		
	課長代理		光吉勝彦							
	課長補佐		伊藤 晃							
岡山県古代吉備文化財センター										
所 長		長瀬日出明		調査2課		係 長		岡田 博		
次 長		河本 清				文化財保護主査		野上和信		
総務課	課 長		竹原成信		調査係	文化財保護主任		栗尾昭和		
	総務係	課長補佐		藤本信康		文化財保護主事		片山泰輔		
		主 任		平松郁男・坂本英幸		主 事		澤山孝之・柴田英樹		
調査1課	課 長		葛原克人		調査係	課 長		正岡睦夫		
	1	課長補佐		井上 弘		課長補佐		松本和男		
		文化財保護主査		二宮治夫・林 久夫		文化財保護主査		江見正己		
	文化財保護主任		光永真一・井上 篤			文化財保護主任		平井泰男・川崎 肇		
	文化財保護主事		源 俊二			文化財保護主事		平松義則		
	文化財保護主事		広瀬隆明・安井 悟			主 事		横山伸一郎		
主 事		大橋雅也		係 長		浅倉秀昭				
調査2課	係 長		高畑知功		調査係	文化財保護主査		窪田廣志・古谷野寿郎		
	文化財保護主査		吉田正士・中野雅美			主 事		弘田和司・森宏之 守屋佳慶		
	文化財保護主事		福田計治・山本了峰 亀山行雄							
主 事		古市秀治・久保恵里子								



平成3年度は、調査2課に教員1名を含む6名の調査員を配置して報告書作成にあたったが、後年次対応としていた箇所発掘調査をこのうちの2名が担当した。平成4年度も、報告書作成に従事した教員2名を含む6名の調査員のなかから、2名の調査員を配置して、前年に引き続き後年次対応部分の発掘調査を実施した。これによって5カ年にわたった津寺遺跡の発掘調査はひとまず終了し、以後その報告書作成に専念することとなった。(亀山)

## 平成3年度(1991年度)

岡山県教育委員会					
教育長		竹内康夫	教育次長		森崎岩之助
文化課	課長	鬼澤佳弘(～12/31) 渡邊淳平(1/1～)	文化課	課長補佐	柳瀬昭彦
	課長代理	大橋義則		主査	時長 勇
岡山県古代吉備文化財センター					
所長		横山常實	調査2課	課長	正岡睦夫
次長		河本 清		係長	浅倉秀昭
総務課	課長	藤本信康	係	文化財保護主事	亀山行雄
	課長補佐	小西親男		主事	古市秀治
	主査	平松郁男			
	主任	坂本英幸			

## 平成4年度(1992年度)

岡山県教育委員会					
教育長		竹内康夫	教育次長		森崎岩之助
文化課	課長	渡邊淳平	文化課	主査	時長 勇
	課長代理	松井新一			
	課長補佐	柳瀬昭彦			
岡山県古代吉備文化財センター					
所長		横山常實	調査2課	課長	正岡睦夫
次長		河本 清		係長	浅倉秀昭
文化財保護参事		葛原克人	係	文化財保護主事	澤山孝之・柴田英樹
課長	北原 求				
課長補佐	小西親男				
主査	石井 茂				
主任	石井善晴・三宅秀吉				

## 調査協力

政田 孝・守屋佳慶・有森万久・濱本雅樹・馬場 洋・大谷博志・難波雅志・山田悌史  
 錦戸 正・石井 啓・宝蔵光辰・福島伸啓・藤岡耕一

## 第3節 調査の経過

### (1) 調査の経過

昭和63年4月から始まった第2次調査は、中屋調査区の中央にあたる橋脚部分から着手された。ここでは、複雑に切り合った古墳時代前期の竪穴住居や、後に官衙の区画施設と推定されるに至った奈良時代の溝などが検出された。やや遅れて9月から調査に入ったH3区では、微高地の南東端が確認されるとともに、その縁辺に広がる水田が検出された。この水田は2層にわたり、出土遺物から上層が古墳時代前期、下層が弥生時代後期のものと判断された。また、耕作にかかわるものと思われる格子状の溝が検出され、奈良時代の遺物が多量に出土した。これらについては前述した官衙との関連が推定されている。

平成元年には中屋調査区の発掘調査が本格化し、H3区に隣接するB1～3区では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が数多く検出された。また、平成2年に調査したH6区やM11I区でも、弥生時代の竪穴住居や袋状土壇、古墳時代前期～中期の竪穴住居などが密集して検出されている。

平成2年も後半に入ると、発掘調査の中心は中屋調査区の東および高田調査区に移って行った。E1～4区は、微高地の北東端にあたっており、H3区に対応する弥生時代～古墳時代前期の水田を検出できた。また、古墳時代中期の竪穴住居や中世の屋敷を思わせる掘立柱建物・井戸・土壇墓がまとめて検出されている。とくにE1区では、総柱の掘立柱建物とともに、奈良時代の遺物が多量に出土して注意された。E区に東接するM12I～VI、3BUI・II区からは、ほぼ全域にわたって弥生時代～中世の水田が検出された。ことに3BUI・II区では、これらの水田の東端を確認するとともに、水田の区画が明瞭に検出された。また、ここでは南北に並ぶ総柱の大形建物を中心とする掘立柱建物群が確認されており、円面硯や帯金具の出土とも相俟って注目された。中屋調査区の東端にあたる3BI～III区では古墳時代後期の竪穴住居がまとめて検出された。その中には鉄滓を出土するものがあり、同時に検出された焼成土壇とともに、この遺跡において鉄生産が行われていたことを窺わせる資料となった。

一方、中屋調査区と平行して平成2年から発掘調査に入った高田調査区は、まず東端のP1～4区から調査に着手した。ここでは、厚い洪水砂に覆われた弥生～古墳時代前期の水田の北東端が確認された。またその上層では、奈良時代の掘立柱建物とともに、二彩の小壺や匏衣壺と見られる土器を納めた土壇が検出された。その西側にあたるA1区では、P3区から続く水田の上層で古墳時代後期の竪穴住居がまとめて検出された。その広がりや、西側に接するM1I～V区に続き、中屋調査区の3B区に至る広範囲にわたることが判明した。しかも、3B区において観察されたように、ここでも多量の鉄滓が竪穴住居から出土していて、この集落が鉄生産と深くかかわっていたことが推定されるに至った。P区からつづく弥生～古墳時代前期の水田はM1I～V区で南西端が確認され、北西から南東にのびる幅63mの帯状を呈することが明らかとなった。また、その西側の3BI～VI区では南北に走る大溝が検出され、用水路として機能していたものと推定された。これらの上層では、近世の掘立柱建物や井戸が検出されており、近世津寺村につながる集落と考えられる。(亀山)

(2) 日誌抄

昭和63年

- 9月13日(月) 中屋H3区調査着手
- 10月12日(水) 埋蔵文化財保護対策委員会

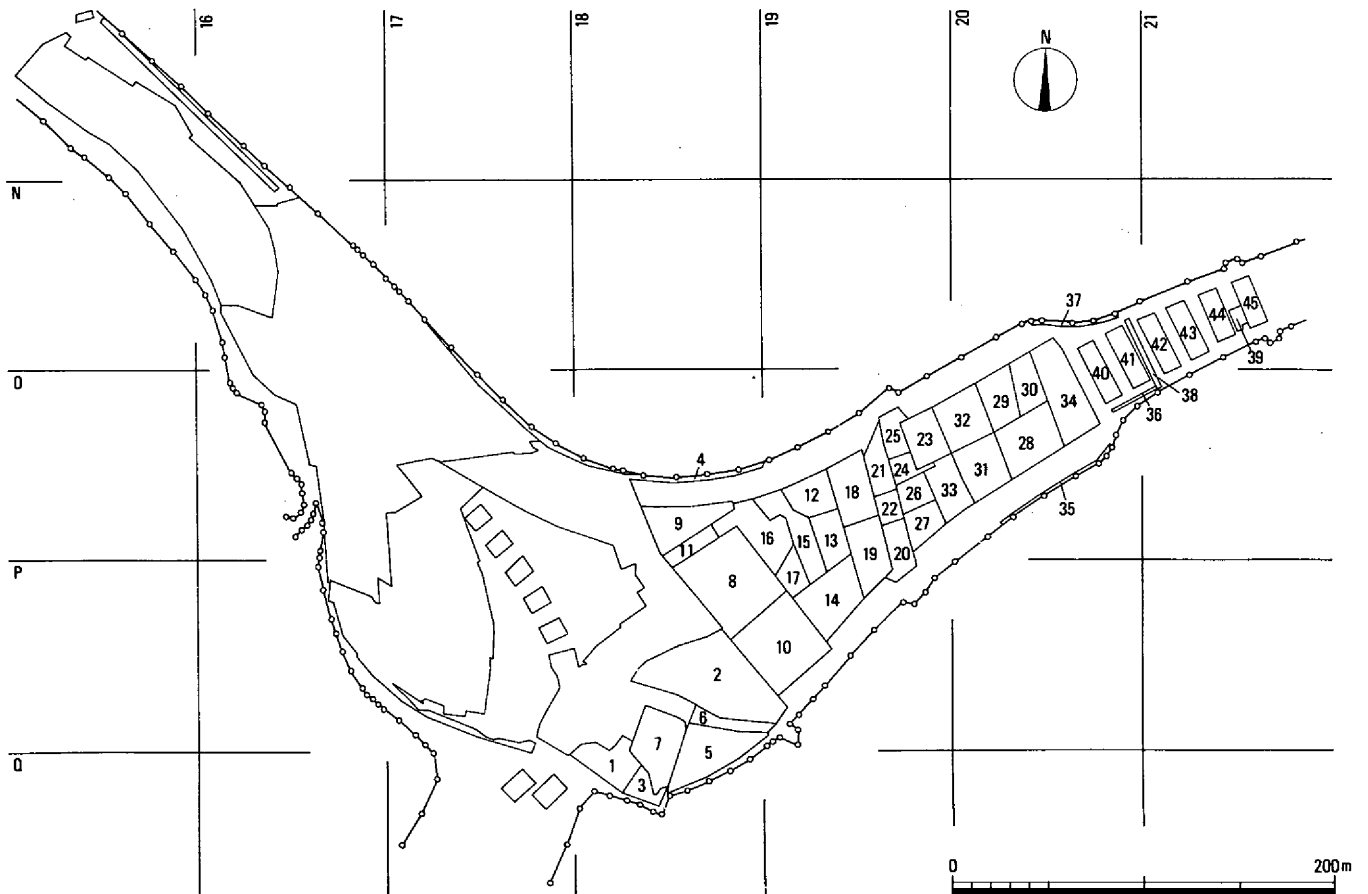
- 10月2日(月) 中屋B3区調査終了
- 10月30日(月) 埋蔵文化財保護対策委員会

平成元年

- 1日31日(火) 埋蔵文化財保護対策委員会
- 3月17日(火) 埋蔵文化財保護対策委員会
- 3月31日(金) 中屋H3区調査終了
- 3月25日(土) 津寺遺跡現地説明会開催
- 4月4日(火) 中屋B1区調査着手
- 6月5日(月) 中屋B3区調査着手
- 6月6日(火) 中屋B2区調査着手
- 6月17日(土) 埋蔵文化財保護対策委員会
- 6月29日(木) 中屋B1・2区調査終了
- 9月1日(土) 高田M1IV区調査着手

平成2年

- 4月4日(水) 中屋E1区調査着手
- 中屋H6区調査着手
- 中屋3BU I・II調査着手
- 4月5日(木) 高田P1~4区調査着手
- 高田H1区調査着手
- 4月17日(火) 中屋H6区調査終了
- 5月7日(月) 高田A1区調査着手
- 6月4日(月) 中屋M1I区調査着手
- 6月7日(木) 高田P5・6調査着手
- 6月8日(金) 中屋3BU II区調査終了



第5図 調査区配置図 (番号は表1に対応)

第2章 調査と整理の経過

6月9日(土)	高田M1Ⅰ区調査着手	10月26日(金)	高田3BⅢ区調査着手
6月12日(木)	埋蔵文化財保護対策委員会	10月30日(火)	高田北用水区調査終了
6月20日(水)	中屋M12Ⅰ区調査着手	11月1日(木)	中屋M11Ⅰ区調査終了
6月25日(月)	中屋E2区調査終了	11月7日(水)	中屋M12Ⅲ区調査終了
	中屋E4区調査着手	11月8日(木)	中屋M12Ⅳ区調査着手
6月28日(木)	中屋M12Ⅱ区調査着手	11月9日(金)	高田3BV区調査着手
7月4日(水)	中屋E4区調査終了	11月13日(火)	高田3BⅣ区調査着手
7月8日(日)	古墳時代の集落確認の新聞報道	11月27日(火)	埋蔵文化財保護対策委員会
7月14日(土)	高田M1Ⅱ区調査着手	11月27日(火)	高田M1Ⅱ区調査終了
7月19日(木)	飛鳥時代の軒瓦出土の新聞報道	11月29日(木)	中屋3BⅡ区調査終了
			高田3BⅢ区調査終了
7月23日(月)	高田M1Ⅲ区調査着手	11月30日(月)	中屋E1区調査終了
7月30日(月)	高田P5・6区調査終了	12月1日(土)	中屋3BⅢ区調査着手
7月31日(火)	中屋E3区調査終了		高田M1Ⅳ区調査終了
8月1日(水)	中屋M12Ⅲ区調査着手	12月4日(火)	高田3BⅠ・Ⅱ区調査終了
8月29日(水)	中屋M12Ⅰ区調査終了	12月9日(日)	官衛の高桜確認の新聞報道
8月30日(木)	中屋3BⅠ区調査着手	12月13日(木)	高田3BⅣ区調査終了
	高田P1～4区調査終了	12月15日(土)	中屋3BⅢ区調査終了
	高田H1区調査終了	12月20日(木)	中屋M12VⅠ区調査終了
9月1日(土)	高田M1Ⅳ区調査着手		高田M1V・VⅠ区調査終了
	高田3BⅠ区調査着手		高田3BV区調査終了
9月4日(火)	高田M1V区調査着手	12月25日(火)	中屋M12Ⅳ区調査終了
9月10日(月)	中屋M12V区調査着手	12月27日(木)	中屋M12V区調査終了
	高田A1区調査終了		
9月27日(水)	埋蔵文化財保護対策委員会	<b>平成3年</b>	
10月1日(月)	高田HⅡ区調査着手	3月1日(金)	埋蔵文化財保護対策委員会
10月3日(水)	高田HⅡ区調査終了	<b>平成4年</b>	
10月5日(金)	中屋M12Ⅳ区調査着手	2月15日(土)	高田H1区調査着手
10月15日(月)	中屋3BⅡ区調査着手	2月28日(金)	高田H1区調査終了
10月18日(木)	中屋3BⅠ区調査終了		埋蔵文化財保護対策委員会
10月20日(土)	高田M1Ⅲ区調査終了		高田M1Ⅳ区調査終了
10月22日(月)	高田北用水区調査着手	4月9日(木)	高田H2区調査着手
	高田3BⅡ区調査着手	4月30日(木)	高田H2区調査終了
10月23日(火)	中屋M12Ⅱ区調査終了	7月20日(水)	埋蔵文化財保護対策委員会
10月25日(木)	高田M1Ⅰ区調査終了	<b>平成7年</b>	
	高田M1Ⅳ区調査着手	8月18日(金)	埋蔵文化財保護対策委員会
		<b>平成8年</b>	
		2月15日(木)	埋蔵文化財保護対策委員会

	調査区	調査面積	調査期間	出土遺物	調査担当者	整理担当者
1	中屋M11 I	649㎡	H 2. 6. 4~H 2. 11. 1	165箱	高畑知功・吉田正士・山本了峰	山本晋也・亀山行雄 谷口広幸・澁田東美
2	中屋H 3	2207㎡	S 63. 9. 13~H 1. 3. 31	155箱	正岡睦夫・川崎 肇	
3	中屋H 5	95㎡	H 2. 1. 30~H 2. 3. 30	17箱	井上 弘・吉田正士・大橋雅也	
4	中屋H 6	115㎡	H 2. 4. 4~H 2. 4. 17	2箱	井上 弘・亀山行雄・大橋雅也	
5	中屋B 1	955㎡	H 1. 4. 4~H 1. 6. 29	40箱	古谷野寿郎・川崎 肇・森 宏之	
6	中屋B 2	105㎡	H 1. 6. 2~H 1. 6. 29	5箱	古谷野寿郎・川崎 肇・森 宏之	
7	中屋B 3	830㎡	H 1. 6. 5~H 1. 10. 2	122箱	古谷野寿郎・川崎 肇・森 宏之	
8	中屋E 1	1134㎡	H 2. 1. 17~H 2. 11. 30	150箱	岡田 博・野上和信・栗尾昭和・井上 篤・波多野宏和	
9	中屋E 2	630㎡	H 2. 4. 4~H 2. 6. 25	13箱	光永真一・広瀬隆明・安井 悟	
10	中屋E 3	1280㎡	H 2. 4. 4~H 2. 7. 31	34箱	二宮治夫・源 俊二	
11	中屋E 4	197㎡	H 2. 6. 25~H 2. 7. 4	4箱	光永真一・広瀬隆明・安井 悟	
12	中屋M12 I	506㎡	H 2. 6. 20~H 2. 8. 29	7箱	光永真一・広瀬隆明・安井 悟	
13	中屋M12 II	380㎡	H 2. 6. 28~H 2. 8. 23	7箱	亀山行雄・古市秀治	
14	中屋M12 III	904㎡	H 2. 8. 1~H 2. 11. 7	11箱	二宮治夫・源 俊二	
15	中屋M12 IV	835㎡	H 2. 11. 8~H 2. 12. 25	16箱	二宮治夫・源 俊二	
16	中屋M12 V	684㎡	H 2. 9. 10~H 2. 12. 27	26箱	岡田 博・野上和信・栗尾昭和・井上 篤	
17	中屋M12 VI	60㎡	H 2. 10. 5~H 2. 12. 20	19箱	高畑知功・吉田正士・山本了峰	
18	中屋3 B U I	668㎡	H 2. 4. 4~H 2. 7. 17	12箱	片山泰輔・澤山孝之・柴田英樹	
19	中屋3 B U II	642㎡	H 2. 4. 4~H 2. 6. 8	13箱	井上 弘・吉田正士・大橋雅也	
20	中屋3 B I	435㎡	H 2. 8. 30~H 2. 10. 18	10箱	光永真一・広瀬隆明・安井 悟	
21	中屋3 B II	335㎡	H 2. 10. 15~H 2. 11. 29	7箱	光永真一・広瀬隆明・安井 悟	
22	中屋3 B III	173㎡	H 2. 12. 1~H 2. 12. 15	5箱	光永真一・広瀬隆明・安井 悟	
23	高田3 B I	498㎡	H 2. 9. 1~H 2. 12. 4	21箱	中野雅美・福田計治・久保恵里子	大村俊幸・大橋雅也 杉山一雄
24	高田3 B II	198㎡	H 2. 10. 22~H 2. 12. 4	4箱	中野雅美・福田計治・久保恵里子	
25	高田3 B III	344㎡	H 2. 10. 26~H 2. 11. 29	28箱	亀山行雄・古市秀治	
26	高田3 B IV	255㎡	H 2. 11. 13~H 2. 12. 13	10箱	井上 弘・亀山行雄・大橋雅也・古市秀治	
27	高田3 B V	286㎡	H 2. 11. 9~H 2. 12. 20	2箱	片山泰輔・澤山孝之・柴田英樹	
28	高田M 1 I	886㎡	H 2. 6. 9~H 2. 10. 25	42箱	井上 弘・林 久夫・井上 篤・大橋雅也	
29	高田M 1 II	530㎡	H 2. 7. 14~H 2. 11. 27	24箱	片山泰輔・澤山孝之・柴田英樹・浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶	
30	高田M 1 III	354㎡	H 2. 7. 23~H 2. 10. 20	20箱	浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶	
31	高田M 1 IV	672㎡	H 2. 9. 1~H 2. 12. 1	30箱	井上 弘・林 久夫・大橋雅也	
32	高田M 1 V	627㎡	H 2. 9. 5~H 2. 12. 20	45箱	片山泰輔・澤山孝之・柴田英樹	
33	高田M 1 VI	557㎡	H 2. 10. 25~H 2. 12. 20	14箱	井上 弘・林 久夫・大橋雅也	
34	高田A 1	966㎡	H 2. 5. 7~H 2. 9. 10	46箱	浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶	
35	高田H 1	98㎡	H 4. 2. 15~H 4. 2. 28	8箱	亀山行雄・古市秀治	
36	高田H 2	45㎡	H 4. 4. 9~H 4. 4. 30	4箱	澤山孝之・柴田英樹	
37	高田北用水	115㎡	H 2. 10. 22~H 2. 10. 30	2箱	浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶	
38	高田用水 I	106㎡	H 2. 4. 5~H 2. 8. 30	2箱	江見正己・平松義則・横山伸一郎	
39	高田用水 II	52㎡	H 2. 10. 1~H 2. 10. 3	1箱	古谷野寿郎・弘田和司・森 宏之	
40	高田P 1	326㎡	H 2. 4. 5~H 2. 8. 30	56箱	江見正己・平松義則・横山伸一郎	
41	高田P 2	323㎡	H 2. 4. 5~H 2. 8. 30		江見正己・平松義則・横山伸一郎	
42	高田P 3	310㎡	H 2. 4. 5~H 2. 8. 30		江見正己・平松義則・横山伸一郎	
43	高田P 4	301㎡	H 2. 4. 5~H 2. 8. 30		江見正己・平松義則・横山伸一郎	
44	高田P 5	277㎡	H 2. 6. 7~H 2. 7. 30	2箱	平井泰男・川崎 肇	
45	高田P 6	246㎡	H 2. 6. 7~H 2. 7. 30	3箱	平井泰男・川崎 肇	
	合計	22191㎡	S 63. 9. 13~H 4. 4. 30	1204箱	36名	7名

表1 発掘調査一覧表

## 第4節 整理の方法と経過

### (1) 整理の方法

山陽自動車道建設に伴う発掘調査にかかわる報告書の作成は、平成3年度から毎年、6名の調査員を配置して実施してきた。とくに津寺遺跡では、87,000㎡にも及ぶ広大な面積を短期間のうちに調査したため、この遺跡にかかわった調査員はのべ117人にもものぼる。このため、調査担当者がことごとく整理にたずさわることは不可能となった。しかも、数多の緊急調査を抱える状況にあっては、その整理に十分な専門職員を配置することさえ困難であった。したがって、平成7年度は臨時職員2名を含む4名の専門職員と3名の出向教員を配置して整理作業を行うこととなった。

整理作業は、中屋調査区を4名、高田調査区を3名の職員が分担して行った。担当の内訳は別表のとおりである。整理作業は、これらの担当者の指導の下に、作業員12名が復元を、14名が実測・浄書を行った。また、遺物の写真撮影にあたっては江尻泰幸の協力を得た。

本文の執筆については、整理作業の成果をもとに原則として調査担当者が行った。ただし、複数の調査区にまたがる遺構や遺跡全体の概要については整理担当者が分担して執筆した。

### (2) 整理体制

平成7年度（1995年度）

岡山県教育委員会									
教育長		森崎岩之助		教育次長		黒瀬定生			
文化課	課長		大場 淳		文化課	課長補佐		高畑知功	
	課長代理		樋本俊二			主任		若林一憲	
	参事		葛原克人						
岡山県古代吉備文化財センター									
所長		河本 清		課長		正岡睦夫			
次長		葛原克人(文化課兼務) 高塚恵明		調査係	課長補佐		岡田 博		
					文化財保護主任		大村俊幸		
		丸尾洋幸			文化財保護主事		山本晋也・亀山行雄 大橋雅也		
総務課	課長補佐		井戸丈二		主事		谷口広幸・杉山一雄 澁田東美		
	総務主幹		守安邦彦						
	主査		石井善晴						
	主任		木山伸一						

#### 整理協力者

柏野由美子・川崎康代・川原啓子・神原さちみ・近藤明子・熊代明美・杉本弘美・高塚睦子  
辻 尚子・原田美佐子・藤田さち子・山本恵美子・山元尚子・吉田万里子・渡辺弘子

### (3) 整理の経過

平成7年4月に整理担当者間で、今年度の整理方針と全体の計画について打ち合わせを行った。そのうえで、調査および整理担当者による第1回編集会議を開催し、これらについての了承を得た。整理作業は、遺構と遺物を平行して行った。遺構については、整理担当者が調査担当者の協力を得て下図を作成し、トレースを行った。この際、遺構の一覧表をあわせて作成し、整理によって得られた情報を盛り込むこととした。遺物は、遺構ごとに接合・復元を行って、遺構相互の関係や遺物のまとまりを把握するとともに、遺構・遺物の時期や性格を考慮して実測遺物を選択した。整理の終了した遺物は台帳を作成して収納したが、その際、実測番号と掲載番号の対照が可能となるよう配慮した。また、遺構原図についてもマイクロフィルムを作成し保管している。

こうした遺物の整理と平行して、その自然科学的検討を行った。中屋調査区から出土した奈良時代の土器について岡山理科大学の白石純氏に蛍光X線分析による産地同定を依頼し、複数の産地からもたらされている可能性が指摘された。また、高田調査区から出土した鉛釉陶器については、奈良国立文化財研究所巽淳一郎・村上隆氏の分析により二彩陶器であることが判明した。和同開珎を納めた土器については、残存する脂肪酸の分析を帯広畜産大学の中野益男氏に依頼し、胞衣壺の可能性が高いとの結果を得ている。中世の土壙墓から出土した人骨については鳥取大学医学部の井上貴央氏、古代～中世の溝や水田から出土した獣骨については早稲田大学の金子浩昌氏にそれぞれ鑑定を依頼した。中屋調査区の井戸から出土した種子については大阪市立大学の粉川昭平氏から、水田雑草との教示を受けた。パリノ・サーヴェイ社に委託した弥生～古墳時代の水田土壌の分析では、イネのプラントオパールが検出された。また、木製品や構造材についても同社に樹種の同定を依頼している。なお、弥生時代の竪穴住居や奈良時代の掘立柱建物の構造材については、同時にC<sup>14</sup>年代測定を依頼し、それぞれ調和的な結果を得ている。古墳時代の土器に付着した赤色顔料は、パリノ・サーヴェイ社の分析により、ベンガラとの結果を得た。古墳時代の竪穴住居から出土した鉄滓については、大澤正己氏から鍛冶滓であるとの指摘を受けたが、九州テクノリサーチによる成分分析の結果、鉾石系に混じってごく少量の砂鉄系鉄滓が含まれていることが判明した。土壌から出土したガラス滓についてもニコン株式会社の荻谷道郎氏により従来から知られているガラス滓と同じ成分であることが明らかにされている。さらに、石器については吉備国際大学の妹尾護氏から材質の鑑定を受けるとともに、総社市教育委員会の平井典子氏から種別等について教示を得た。また、硬玉製大珠については京都大学の薬科哲男氏の分析により、糸魚川産の翡翠であることが推定されている。

8月には対策委員会が開催され、報告書作成における留意点などについて指導を受けた。平成8年1月に開催した第2回編集会議では、整理の進捗状況について報告するとともに、整理の過程で生じた問題点について意見の交換を行った。この段階で、遺物の整理作業は一部の実測を残してほぼ終了したため、確定した遺構の時期をもとに時代別の全体図の作成および図版の割り付けに入った。この作業と平行して、調査および整理担当者により各遺構・遺物に関する原稿の作成を行った。2月に開催された対策委員会では、整理作業の進捗状況を報告するとともに、これまでに明らかとなった成果について説明し、指導を受けた。こうした報告書作成にかかわる一連の作業は3月末にはほぼ完了した。

(亀山)

## 第5節 報告書の構成

### (1) 報告書の構成

本書は、中屋調査区と高田調査区の概要をまとめた本文編と、遺構・遺物の自然科学的考察および観察表や写真をまとめた図版編の2分冊の構成をとることとした。本書に現れる遺構・遺物の番号は、同一調査区での重複を避けるため、調査区ごとに一連の番号を割り振った。調査の概要は、調査区ごとに時代を追って記述した。ただし、遺構・遺物の時期については執筆者の判断に委ね、編集段階で統一は図っていない。また、時期・性格等の不明な遺構については配置図に掲載するに留めて記述を省略したものがある。文末には遺構の一覧表と遺物の観察表を付した。遺構の一覧表には、規模や構造を類型化してまとめている。また、遺物の観察表には、実測図に表現できない情報を盛り込むことに留意した。とくに煤や黒斑、記号等については類型化を図って記述している。遺物写真については、図上に表せない細部を表現することに留意して選択した。また、遺物写真は縮尺を極力統一するよう努めるとともに、実測図版よりも縮尺を拡大してその理解を深めるよう配慮した。

### (2) 時期区分

本書では、「津寺遺跡2」において採用した編年案を基本的に踏襲した<sup>1</sup>。これは、百間川遺跡群で行っている大枠での時期区分に合わせたもので<sup>2</sup>、弥生時代前期をⅠ～Ⅲ、中期をⅠ～Ⅲ、後期をⅠ～Ⅳ、古墳時代前期をⅠ～Ⅲ、中期をⅠ～Ⅱ、後期をⅠ～Ⅲに大別する(表2)。このうち古墳時代中期以降については、津寺遺跡の資料に基づき新たに時期区分を設定したものである<sup>3</sup>。ただし、本書に用いる編年は、津寺遺跡の資料全体を見通したものとはなっていないため、地域性や編年上の問題点については、今後のまとめの中で示されて行くものと考えている。なお、文中に現れる弥・前・Ⅰ等の表記は、弥生時代前期Ⅰの略記であり、以下に概述する津寺遺跡の編年案に基づくものであることを意味する。

弥・前・Ⅰは、壺や甕の口頸部に見られる段や無軸木葉文に特徴づけられる時期で、岡山市津島遺跡の資料を標識とする。弥・前・Ⅱは、削り出し突帯が施される壺やへら描沈線文をめぐらす甕を特徴とする時期で、この地域においては岡山市高尾貝塚の資料があげられる。弥・前・Ⅲでは、壺に施された突帯が断面三角形の貼付突帯になり、壺や甕に施されたへら描沈線文が多条化する。この時期は、従来門田式と呼ばれたもので、津寺遺跡でも遺構に伴わない土器がわずかながら出土している。弥・中・Ⅰは、へら描沈線文が櫛描文に変わる時期で、新相の壺は櫛描文と突帯で飾るが、甕では櫛描文が消失する。弥・中・Ⅱは、従来のこも池式に対応し、津寺遺跡において集落の形成がはじまる段階である。壺や甕では内面下半にへらケズリが見られるようになり、高杯が普及する。また器台が出現するのもこの頃である。弥・中・Ⅲは、凹線文が盛行する時期で、壺や甕に見られた内面下半のへらケズリが一般化する。また凹線文を飾る口縁部の拡張は著しく、器台も普及する。中屋調査区の溝-3に当該期の遺物を見ることができる。

弥・後・Ⅰは、上東・鬼川Ⅰ式に相当する。壺の頸部に施されていた凹線が沈線へと変化し、甕とともに行われる内面のへらケズリは頸部直下まで及ぶようになる。高杯は口縁端部を拡張して多条



の凹線をめぐらし、長い脚部に施された透かしは退化傾向を示す。津寺遺跡では、西川調査区を中心に弥・中・Ⅲから弥・後・Ⅰへの過渡的な様相を示す資料が多く出土している。上東・鬼川市Ⅱ式にあたる弥・後・Ⅱでは、上東式の特徴である長頸壺と大形の器台が盛行する。高杯は、外反する口縁部が変わり、短い脚部は薄くつくる端部をもつようになる。また、別づくりの脚部が見られるようになるのもこの頃である。この時期の遺物は、西川調査区の溝-2において比較的まとまった出土を見る。弥・後・Ⅲは長頸壺の最終段階で、上東・鬼川市Ⅲ式に相当する。高杯は短脚となり、小形化する。また、小形の器種では精良な胎土が使用されるようになる。器台は、墳墓などで特殊なものが見られるものの、集落においては減少する。オノ町Ⅰ・Ⅱ式にあたる弥・後・Ⅳは、酒津式の主体となる時期である。壺は頸部に長頸壺のなごりを留めるものの、甕では口縁部に擬凹線をめぐらすものが現れる。高杯は依然として小形であるが深い杯部をもつようになる。津寺遺跡の集落が拡大し始める時期である。

古・前・Ⅰは、下田所式にあたる。壺は強く外反する二重口縁をもち、甕は擬凹線にかわって櫛描沈線を飾る。高杯は中実気味につくられた長い脚部に变化する。中屋調査区の溝-16から出土した遺物の主体をなす時期である。亀川上層式にあたる古・前・Ⅱでは、壺や甕の体部に球形化が進み、底部は完全な丸底となる。布留式の指標とされる小形の器種が揃うのもこの時期である。中屋調査区の溝-4では、この時期の遺物が多く出土しており、古・前・Ⅰ～Ⅱ津寺遺跡の最盛期とも言うべき時期にあたる。古・前・Ⅲは津寺遺跡の集落が縮小した段階であり、わずかに中屋調査区の堅穴住居-55において遺物の出土を見るにすぎない。壺は崩れた二重口縁をもち、甕では短く外反する口縁にかわる。球形の体部の内面はユビナデで調整する。高杯は、杯部がしだいに深さを増し、内面をヘラケズリする脚部も長さを減じて透かし孔を消失する。

古・中・Ⅰは、須恵器が出現する段階であり、津寺遺跡においてカマドをもつ堅穴住居が現れるのもこの時期である。崩れた二重口縁をもつ壺がわずかに残るが、その法量は甕と大差なく、これ以後土師器の主要な器種ではなくなっていく。高杯は、杯部の屈折が鈍くなり、椀形のものも現れる。脚部の透かしは脚柱部に施されるようになる。西川調査区の堅穴住居-49では古相、中屋調査区の堅穴住居-118では新相の遺物が出土しており、大阪府陶邑古窯址群のTK73～TK208型式に並行するものと思われる<sup>4</sup>。古・中・Ⅱになると、長胴の甕が出現し、高杯は、椀形の杯部に絞り込んだ脚部をもつものが主体となる。集落で須恵器が見られるようになるのはこの時期であり、陶邑古窯址群のTK23～TK47型式に並行するものと思われる。

古・後・Ⅰ～Ⅲについては土師器の資料が十分でなく、須恵器をもってこれに代えたい<sup>5</sup>。また、7世紀以降は実年代を用いることとし、陶磁器等については従来編年を援用した<sup>6</sup>。 (亀山)

註1. 正岡睦夫「時期区分」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995

2. 江見正己「時期区分について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』岡山県教育委員会、1980

3. この地域の編年案としては次のようなものが出されている。

柳瀬昭彦「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会、1980

高橋護「弥生土器-山陽1～4」『考古学ジャーナル173・175・179・181』1980

高橋護「土師器の編年-中国・四国」『古墳時代の研究6』1991

高畑知功・平井泰男・柴田英樹「土師器」『吉備の考古学的研究(下)』1992

4. 田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ、1966

第2章 調査と整理の経過

5. 岡山県の須恵器の編年案として以下のものがあるが、他地域との対比も考慮して、ここでは註4文献に従う。  
 山磨康平・島崎東「須恵器」『吉備の考古学』1987  
 伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』1987  
 中野雅美「須恵器の編年—山陽」『古墳時代の研究6』1991  
 山本悦世・土井基司・田代健二「須恵器」『吉備の考古学的研究(下)』1992
6. 本書で採用した陶磁器等の編年として次のようなものがある。  
 間壁忠彦・間壁葎子「備前焼ノート1~4」『倉敷考古館研究集報1・2・5・18』1966~1984  
 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館、1978  
 鈴木康之「土師質土器の変遷過程」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、1994

年代	時代	時期		津 寺	上 東	百聞川	雄 町	高橋	編年	田辺編年
50	弥生時代	前期	津 島	弥・前・Ⅰ		百・前・Ⅰ		Ⅰ期	a	
				b						
			弥・前・Ⅱ	百・前・Ⅱ		雄町1		Ⅱ期	a	
		門 田	弥・前・Ⅲ	百・前・Ⅲ	雄町2		b			
			c							
		中期	南 方	弥・中・Ⅰ	百・中・Ⅰ	雄町3	Ⅲ期	a		
				b						
			菰 池	弥・中・Ⅱ	百・中・Ⅱ	雄町4	Ⅳ期	a		
				b						
		前山Ⅱ	弥・中・Ⅲ	鬼川市0	百・中・Ⅲ	雄町5	Ⅴ期	a		
						b				
		仁 伍				雄町6	Ⅵ期	a		
b										
250	後 期	上 東	弥・後・Ⅰ	鬼川市1	百・後・Ⅰ	雄町7	Ⅶ期	a		
						b				
						c				
			弥・後・Ⅱ	鬼川市2	百・後・Ⅱ	雄町9	d			
						雄町10	Ⅷ期	a		
						b				
		弥・後・Ⅲ	鬼川市3	百・後・Ⅲ		c				
						d				
		酒 津	才ノ町1 才ノ町2	百・後・Ⅳ	雄町11	Ⅸ期	a			
					雄町12		b			
雄町13	c									
	X期				a					
古・前・Ⅰ		下田所	百・古・Ⅰ		b					
	c									
350	古 期		古・前・Ⅱ	龜川上層	百・古・Ⅱ	雄町14	期	d		
								e		
								古・前・Ⅲ		百・古・Ⅲ
b										
400	墳 時	中 期	古・中・Ⅰ	川入大溝			XⅡ期	a	TK73~ TK208	
							b			
500	時 代	後 期	古・中・Ⅱ				XⅢ期	a	TK23~ TK47	
							b			
600	代	後 期	古・後・Ⅰ						MT15~ TK10	
			古・後・Ⅱ						TK43~ TK209	
			古・後・Ⅲ						TK217	

表2 岡山県の土器編年対比表

## 第3章 中屋調査区

### 第1節 調査区の概要

#### 1. 調査区の位置

今回報告するのは中屋調査区の東半にあたる部分で、東西210m、南北140mにわたり、北緯34°40′45″～50″、東経133°49′25″～40″に位置している。

これは、山陽自動車道が中国横断自動車道と合流する岡山ジャンクションの東側にあたり、中国横断自動車道の総社インターチェンジと山陽自動車道の岡山インターチェンジ、山陽自動車道の倉敷・岡山インターチェンジ間を結ぶ本線盛り土部分にあたる。すでに「津寺遺跡3」において報告した中屋調査区の南東に接し、東には本著第4章に報告する高田調査区が続いている。

#### 2. 基準層序

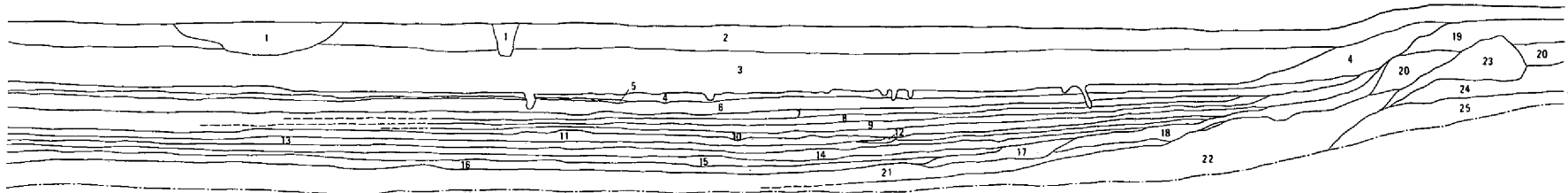
調査前は、西で4.6m、東で8.9mと、東に向かって低くなる地形にあり、ほぼ全面に水田が広がっていた。このため、調査区全体は厚さ20cmほどの黒褐色をなす耕作土に覆われており、その下には橙色をなす粘質の床土が厚さ3cmにわたって認められた。この現代水田層の下層には、灰褐色をなす粘質土層が堆積していた。この層中には酸化鉄の沈着層が複数認められ、その下面には二酸化マンガンの厚い集積が確認された。これらのことから、この層は水田耕作にかかわる土層とみられ、包含される遺物から中・近世に属するものと推定される。

標高の高い調査区の西側では、この下層に褐色の砂質土層が広がり、中世以前の段階では微高地を形成していたものと思われる。この時期の遺構は、おおむねこれを基盤として掘りこまれているが、上層に広がる水田層の影響などから、上面における遺構の検出は難しく、多くの場合、この土層を若干掘り下げる過程で遺構の検出を行っている。

また調査区の東側では、灰褐色粘質土層は60cmと厚く堆積しており、中世の段階では低位部が広がっていたものと推定される。しかし、ここでも古代～中世の掘立柱建物や溝などが検出されており、中・近世の水田造成に際して掘削がおよんだものと想定される。その下層には古墳時代中期の土器を包含する淡褐色砂層が厚さ100cmにわたって堆積している。これを除去すると黄橙色をなす粘質土層が現れるが、この土層は厚さ10～20cmの砂層を間に挟みながら数層にわたって確認できる。この層の上面では畦畔と見られる高まりが認められ、イネのプラント・オパールも検出されていることから、弥生中期末～古墳時代初頭の水田層と判断された。この水田は幅50mほどの帯状をなし、起伏に富んだ下層の水田では島状の高まりが随所に認められた。また、ここでは弥生中期中葉の竪穴住居が検出されており、水田化される以前は比較的高燥な環境にあったことを物語っている。この水田層のさらに下層には砂礫や植物遺体などの河道堆積物が見られ、この低位部が旧河道を反映するものであることが判明した。これらの河道によって区画された津寺遺跡の微高地は、東西200m、南北400mほどの楕円形をなすものと推定され、その形成は縄文後～晩期に遡ることが明かとなっている。（亀山）

A

A' 400cm

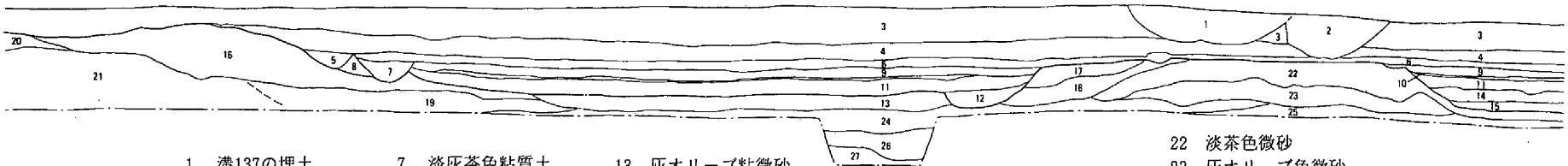


- |              |            |                    |                    |             |
|--------------|------------|--------------------|--------------------|-------------|
| 1 灰黄細砂       | 6 淡黄褐色土    | 11 橙茶色粘質微砂(弥生終末水田) | 16 黄褐色粘質微砂(弥生後期水田) | 21 灰黄色細砂    |
| 2 淡灰黄細砂(洪水砂) | 7 古墳初頭水田   | 12 褐色土             | 17 淡灰褐色砂質土         | 22 灰色細砂     |
| 3 黄褐色微砂      | 8 淡褐色粘質微砂  | 13 暗黄灰色粘質微砂        | 18 灰黄色細砂           | 23 淡灰褐色粗砂・礫 |
| 4 黄褐色粘質土     | 9 淡黄褐色粘質微砂 | 14 淡灰黄褐色粘質微砂       | 19 淡灰黄褐色砂質土        | 24 灰褐色細砂    |
| 5 白黄色微砂(洪水砂) | 10 淡黄灰色粘質土 | 15 茶黄褐色粘質微砂        | 20 明灰黄色微砂          |             |



B

B' 350cm



- |           |            |               |            |             |
|-----------|------------|---------------|------------|-------------|
| 1 溝137の埋土 | 7 淡灰茶色粘質土  | 13 灰オリブ粘微砂    | 18 淡茶色粘質微砂 | 22 淡茶色微砂    |
| 2 溝136の埋土 | 8 淡灰茶色粘質土  | 14 明茶灰オリブ色粘質砂 | 19 灰オリブ色微砂 | 23 灰オリブ色微砂  |
| 3 明茶褐色粘質土 | 9 明黄色粘質土   | 15 灰オリブ粘質土    | 20 茶色微砂    | 24 灰オリブ色シルト |
| 4 明黄茶褐色微砂 | 10 明黄色粘質微砂 | 16 淡茶色微       | 21 明茶色微砂   | 25 灰色微砂     |
| 5 淡灰茶色粘質土 | 11 茶褐色微砂   | 17 淡茶色微砂      |            | 26 灰褐色粘質土   |
| 6 明黄色粘質土  | 12 暗灰色粘質土  |               |            | 27 明灰色細砂    |



第6図 中屋調査区標準土層断面図 (1/60)

## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

### (1) 概要

弥生時代の遺構は、竪穴住居9軒、掘立柱建物2棟、袋状土壇11基、土壇49基、土器棺墓3基、土器溜り1カ所、溝8条、水田などを報告する。弥生時代中期以前の遺構は確認されていないが、包含層の遺物として弥生時代前期の土器が若干出土している。中期の遺構は、調査区の北東から南西にかけて帯状に存在する低位部に挟まれた微高地上に弥・中・Ⅱの竪穴住居が1軒と弥・中・中の掘立柱建物が1棟確認されたほか、調査区北西部の微高地上に弥・中・Ⅲの土器棺墓2基が検出されている。水田は、土層断面上に認められたが、畦畔としてはつながりが確認できなかった。この時期の土器は遺構に伴うもののほか包含層より出土が見られたが多くない。後期の遺構は、調査区の西端部に形成された微高地上にまとまって確認され、弥・後・Ⅱを中心とした時期の竪穴住居、袋状土壇などが微高地の西南部に密集した形で検出された。調査区の東半部には帯状に広がる畦畔が認められ、弥・中・中において住居などが存在し生活領域であった地は水田域として利用されている。後期の土器は、遺構の集中する弥・後・Ⅱを中心とした時期のものが包含層においても多く認められた。(瀧田)

### (2) 竪穴住居

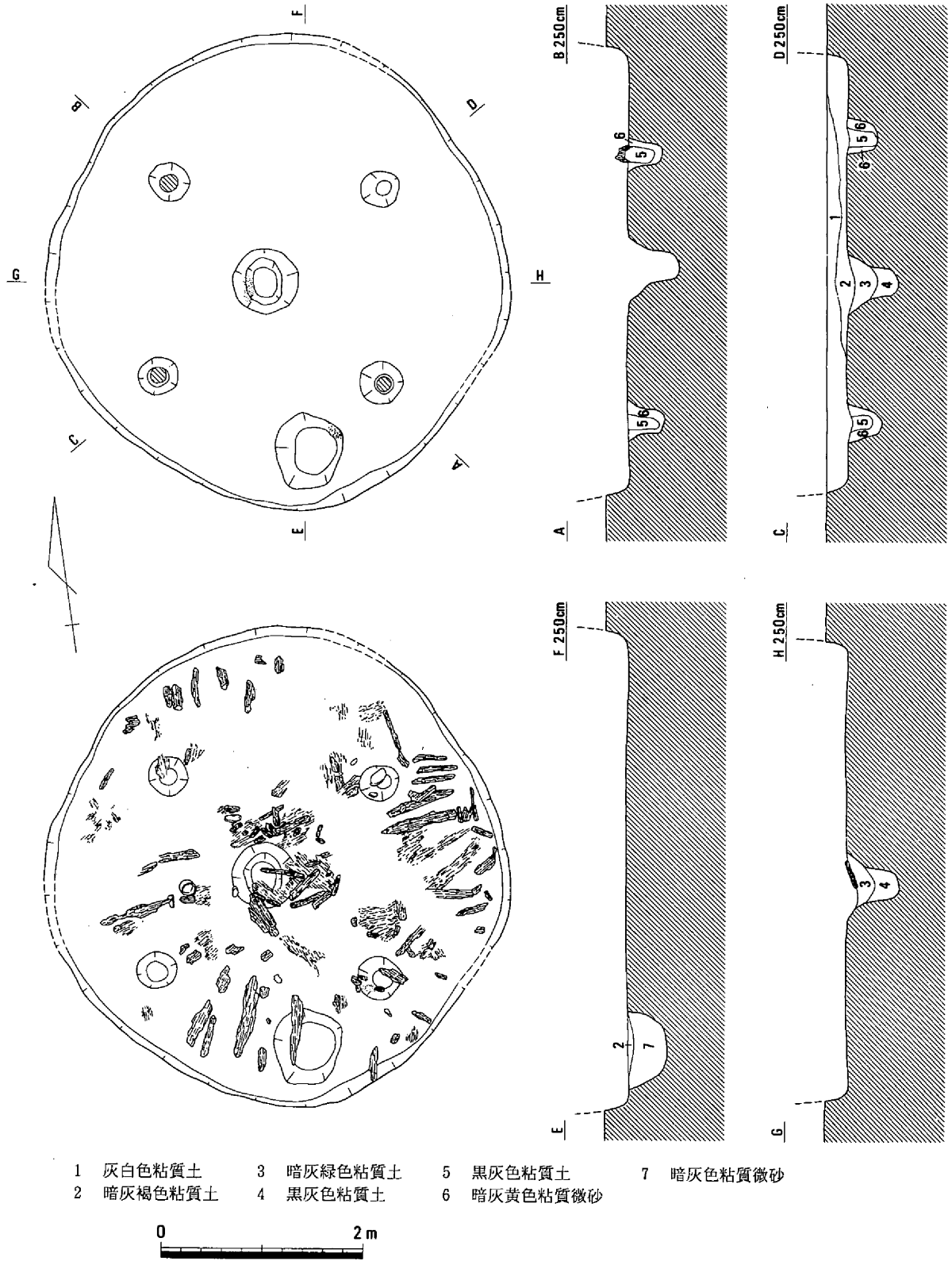
#### 竪穴住居-125 (第7・9図、図版1・47)

P19区の北西部で北東から南西に延びた「島状高まり」が検出された。この遺構は弥生時代後期の水田層を除去した後に確認できた遺構である。さらに下層の状況把握のためにトレンチによる掘り下げを行っていて多量の炭化物が確認された。さらに周辺を広げて再度確認を行ってみると、この「島状高まり」遺構の東側に位置して火災によって廃棄された竪穴住居を確認検出することができた。

検出された竪穴住居は切り合いもなく、1軒のみであることが確認できた。この住居は弥生時代の水田層下での発見であったため、水田開田に伴ってかなりの削平を受けている。検出された住居の平面形態は、長軸で482cm、短軸は453cmを測るほぼ円形であることがわかった。検出面から床面までの深さは約20cm、床面の海拔高は188cm、床面積は15.1㎡との数値を得た。この火災で放棄された住居の床面直上には炭化材が放射状に分布していた。そのうち東側にはきわめてよく残っていた。住居(家屋)は完全燃焼の状態と推定されるが、家屋内床面からの遺物の出土はきわめて少なかった。遺物の運び出しがうまく行われたものと思われる。出土遺物には2948の鉢形土器・S132～S138の石器が床面直上で認められている。さらに同位置から1点ではあるが鉄製品の出土もみられた。

本住居の柱穴は4本からなり、その柱間は193～223cm、柱穴すべてが径約40cmの円形を呈し、床面からの深さは30～35cmであった。また、北東隅の柱穴以外には柱痕が炭化した状態で確認された。さらに中央部には径約65cmの円形を呈し、深さは50cmを測る中央穴をも検出することができた。また南側の若干隅丸を呈する壁体に近接して長辺65cm、短辺60cm、床面からの深さ約40cmの隅丸方形の土壇が併設されていることも確認することができた。

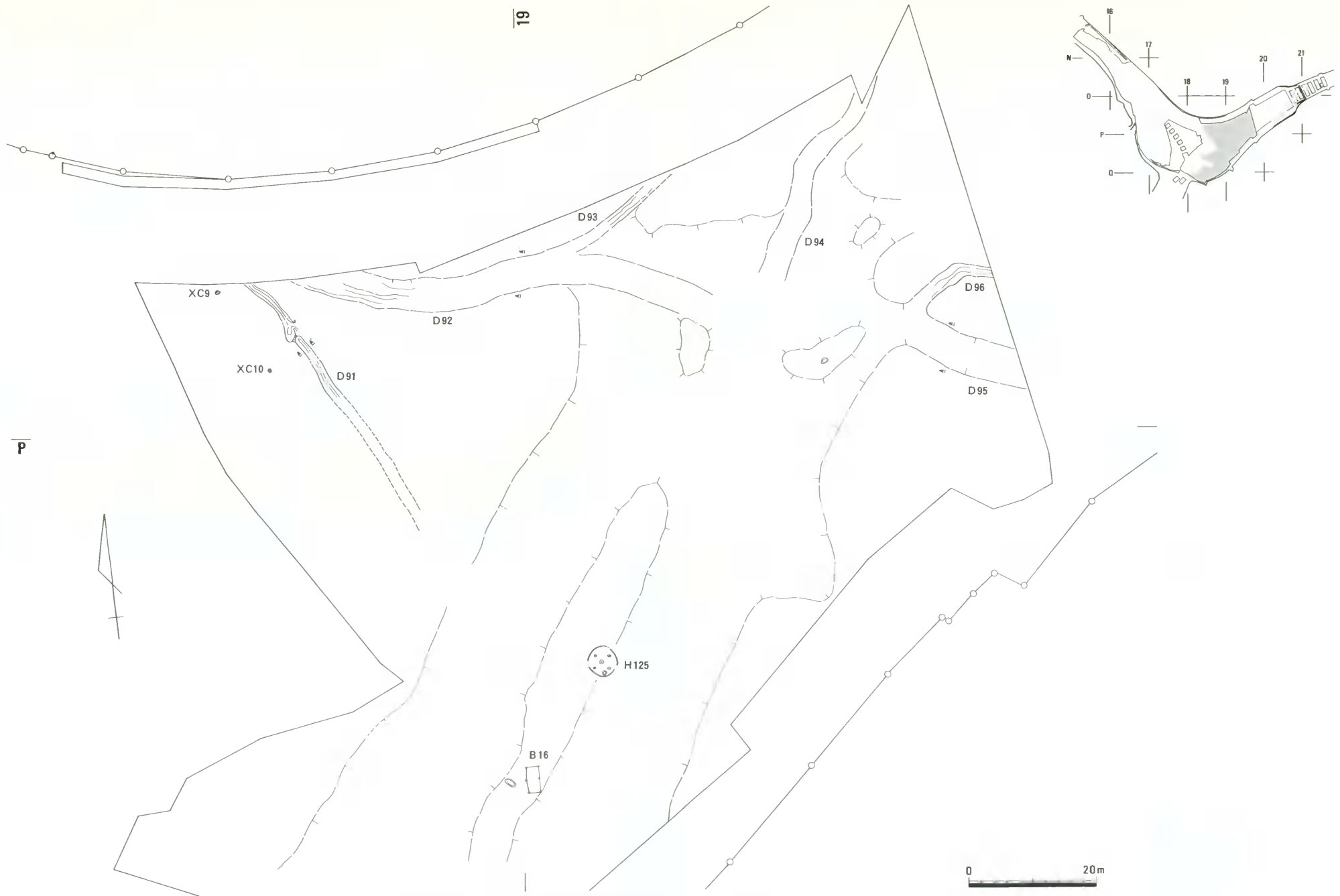
本住居内出土遺物は前述以外に小片の土器片も含まれている。時代の決め手は2948からみて弥・中・Ⅱに比定される。この時代の住居内からの鉄製品(器種不明)はきわめて貴重な資料である。(二宮)



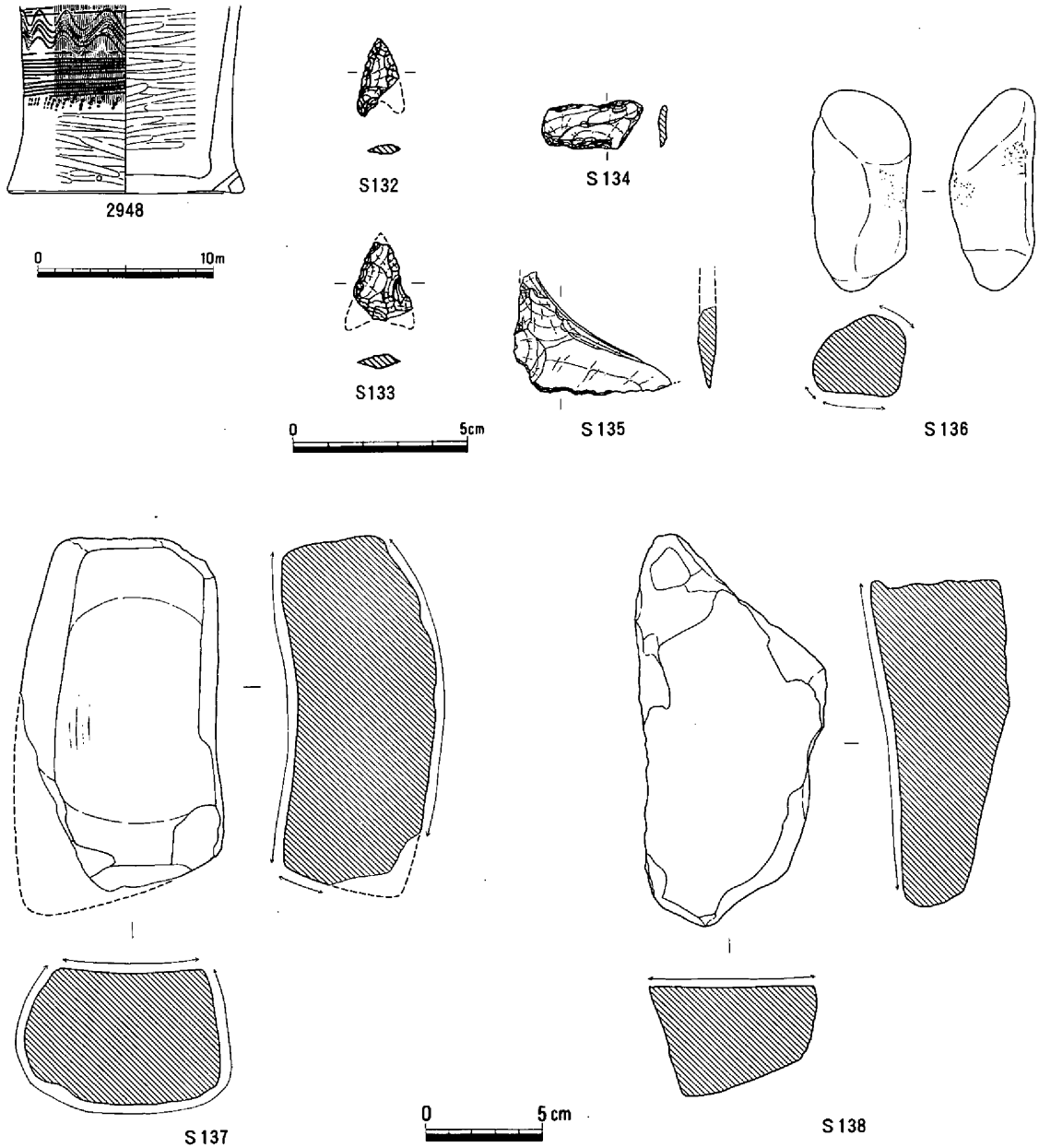
第7図 竪穴住居-125

竪穴住居-126 (第11図、図版2)

Q18区の北北西に位置する。古・前・Ⅱ期の竪穴住居-135と切り合い関係にあり、そのため南東部が大きく削平を受けている。推定長軸375cm、短軸350cmの方形にて、検出面から床面までの深さ約35cmを測る。レンズ状に堆積した埋土には遺物をほとんど含まず、北東柱穴の床面付近で2949・2951



第8図 中屋調査区弥生時代遺構全体図(1) 1/600



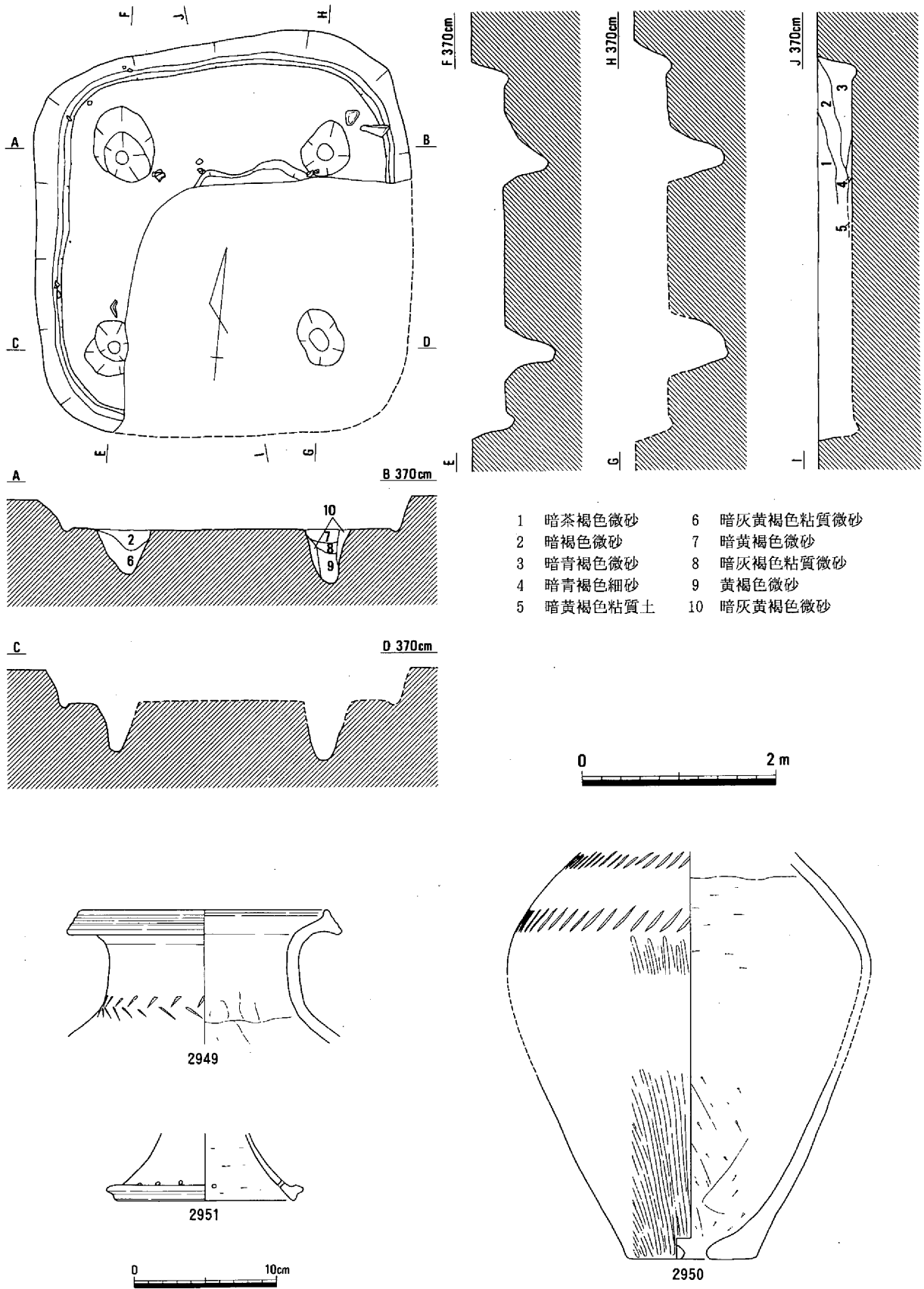
第9図 竪穴住居-125 (2948・S132~138)

がみられ、底部に穿孔のある2950は埋土からの出土である。他に床面の遺物に平坦面を持つ30×10×5 cm、18×13×5 cmの河原石が北東柱穴北側の壁体溝上に認められた。床面海拔高は320 cm、床面積は12.2㎡で、住居内は幅10 cm、深さ約10 cmの壁体溝が巡り、北辺主柱穴間の南側に深さ5 cmの土壌の一部が残存している。主柱穴は4本からなり、床面からの深さ約50~60 cmを測り、それぞれに差が認められる。なお、柱の掘り方埋土からは明瞭な柱痕跡は確認できなかった。北辺柱穴間の距離は210 cm、西辺が198 cm、南辺が217 cm、東辺が195 cmを測り、住居の長軸方向に直交する南、北辺の柱間が少し長くなっている。壺2949は頸部から肩への変換点にハケ状工具による「ハ」字形の刺突文が一巡する。2950にも肩部の2段にハケ状工具による刺突文が施されているが、2949の施文工具とは多少異なるものである。この住居は弥・後・Iの段階には廃絶していたと考えられる。(高畑)

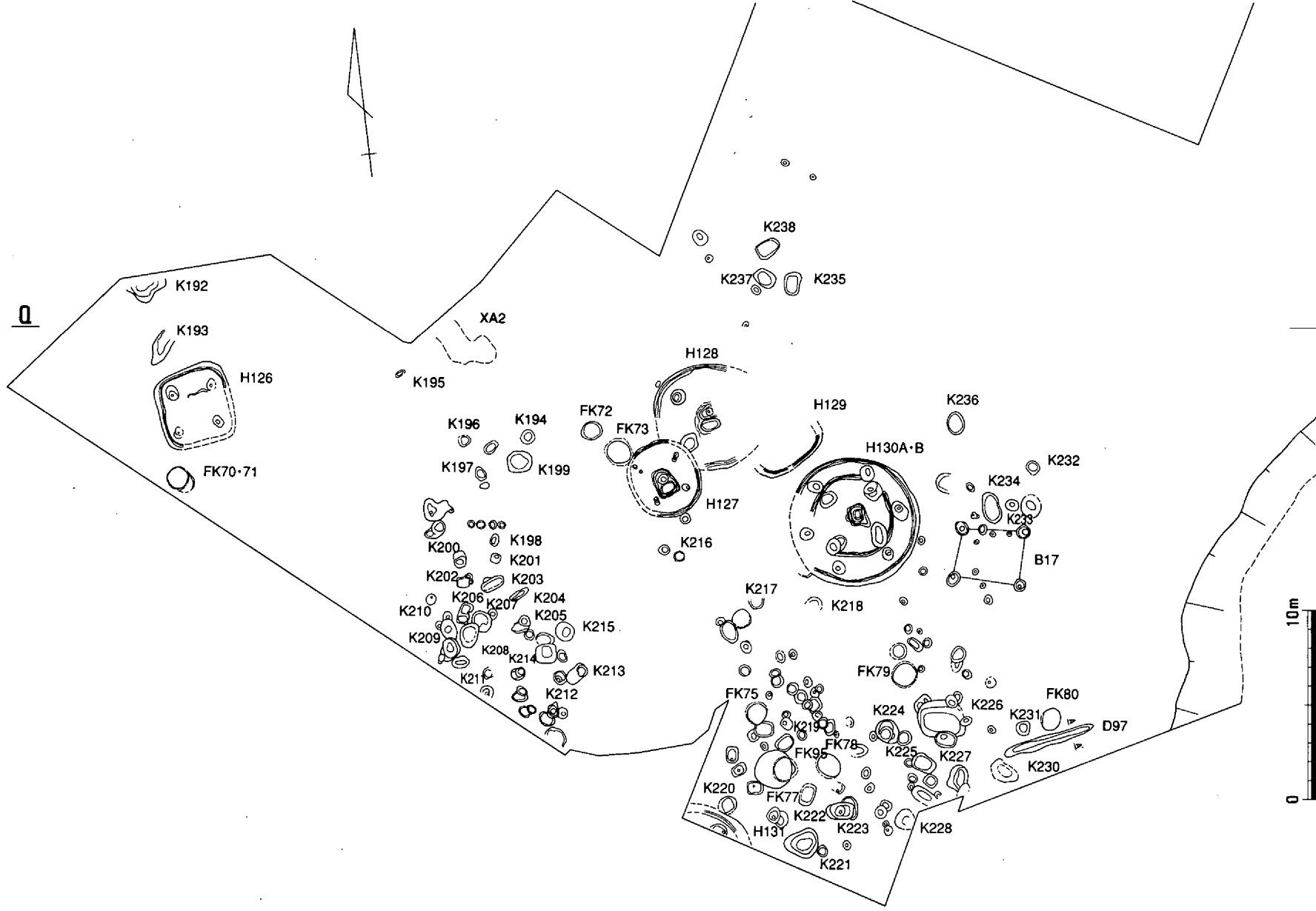




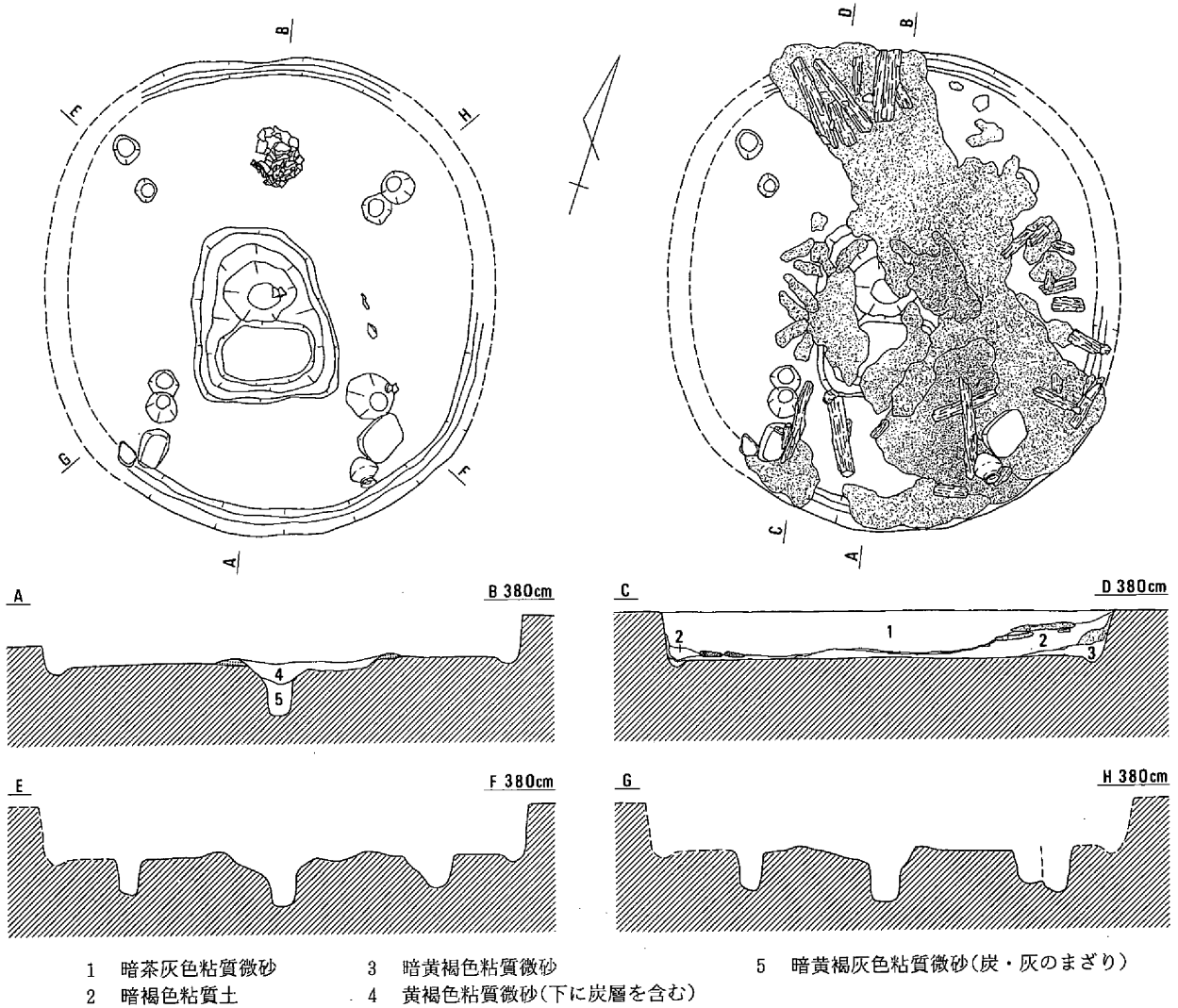
第10図 中屋調査区弥生時代遺構全体図2 1/600



第11図 竪穴住居-126 (2949~2951)



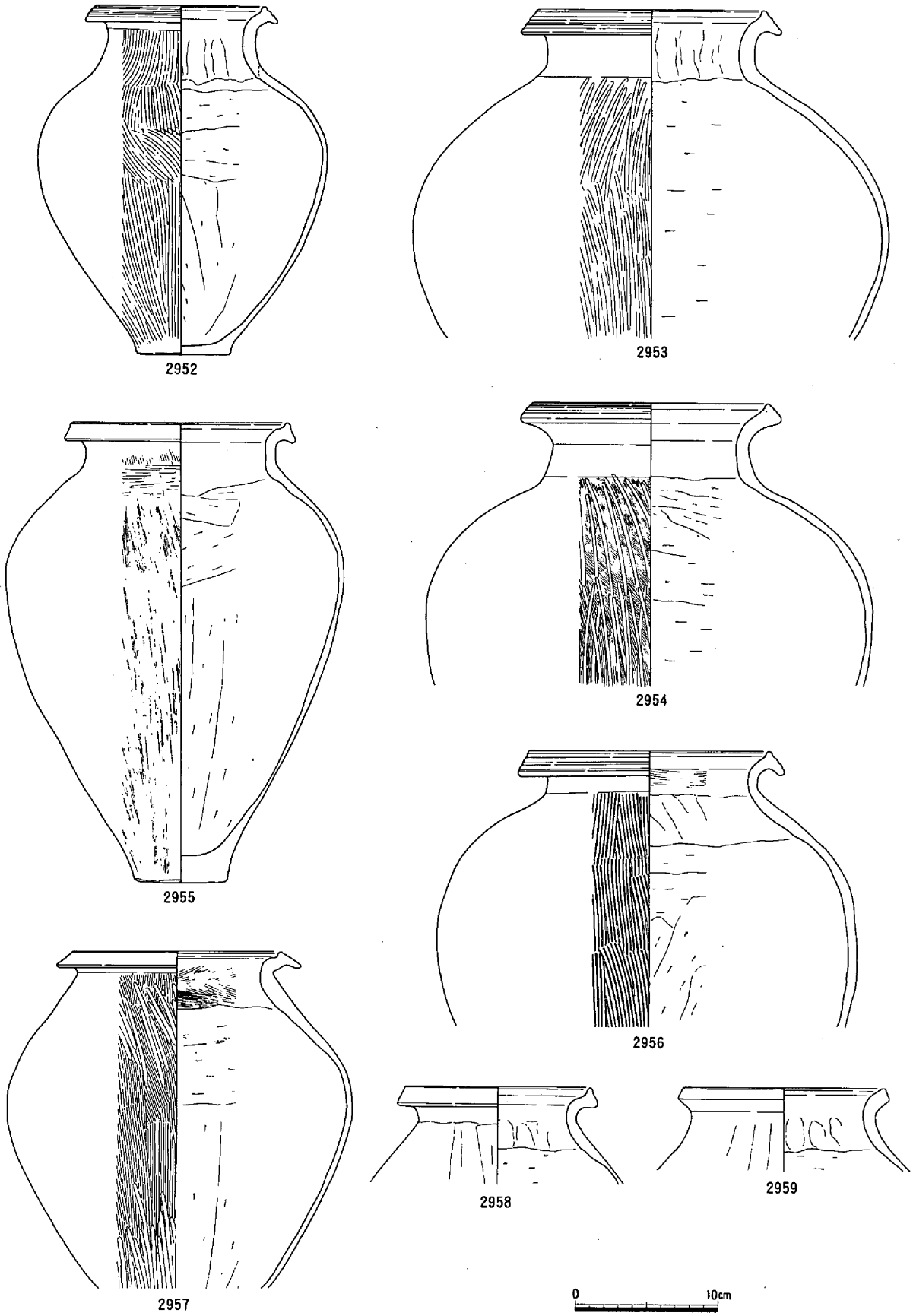
第12図 中屋調査区弥生時代遺構配置図 1/300



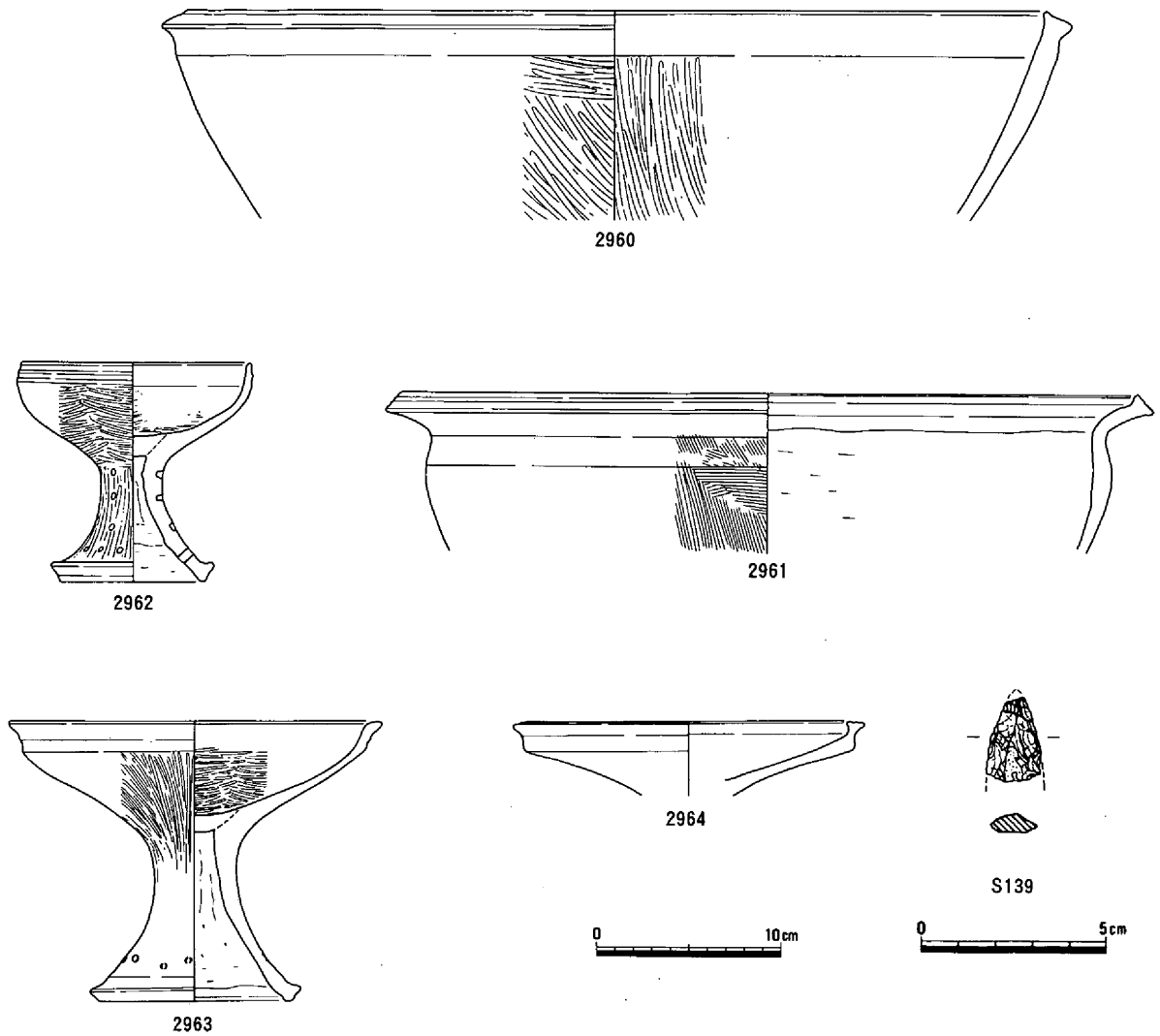
第13図 竪穴住居-127

竪穴住居-127 (第13・14図、図版2・3・47・48)

Q18区の北辺中央部に位置し、火災により廃棄された竪穴住居である。切り合いを含め4～5軒の竪穴住居が重なり合うすぐ東側にあり、古・前・Iの竪穴住居-139により西側部分が削平を受けている。長軸395cm、推定短軸362cmの円形にて検出面から床面までの深さ約40cm、床面海拔高は329cm、床面積は10.9㎡を測る小形のものである。住居内ほぼ全面に炭化材と焼土が分布し、なかでも北側の壁体は他と比較して著しい赤化が認められた。おそらく、完全燃焼に近い火災状況と推定され、土器等は持ち出すことができず、狭い間隔で放射状に分布する垂木等の炭化材の下位あるいはその間からの出土が目立った。2952・2955・2962・2963・2964が床に接した土器であり、2958は中央穴内よりの出土である。他に40×30×12cm、32×22×12cmを測り、上面に平坦部を向けた比較的大きい花崗岩が南辺柱穴の外側に配置されていた。何かの作業を行う場合の台と考えられる平石であろう。住居の主柱穴は4本からなり、柱間は177～204cm、床面からの深さは少し浅く30～40cmを測る。一回の建て替えが考えられほぼ同じか近い位置に同規模の柱穴が認められた。中央部には前方後円形に土堤が巡り、内面北側に円形にて深さ45cmの中央穴と、その南に東面に長い方形にて深さ約10cmを測る土壇が併設されている。土堤下位には面的に炭層があり、盛土により形成されたものである。



第14図 竪穴住居-127 (2952~2959)



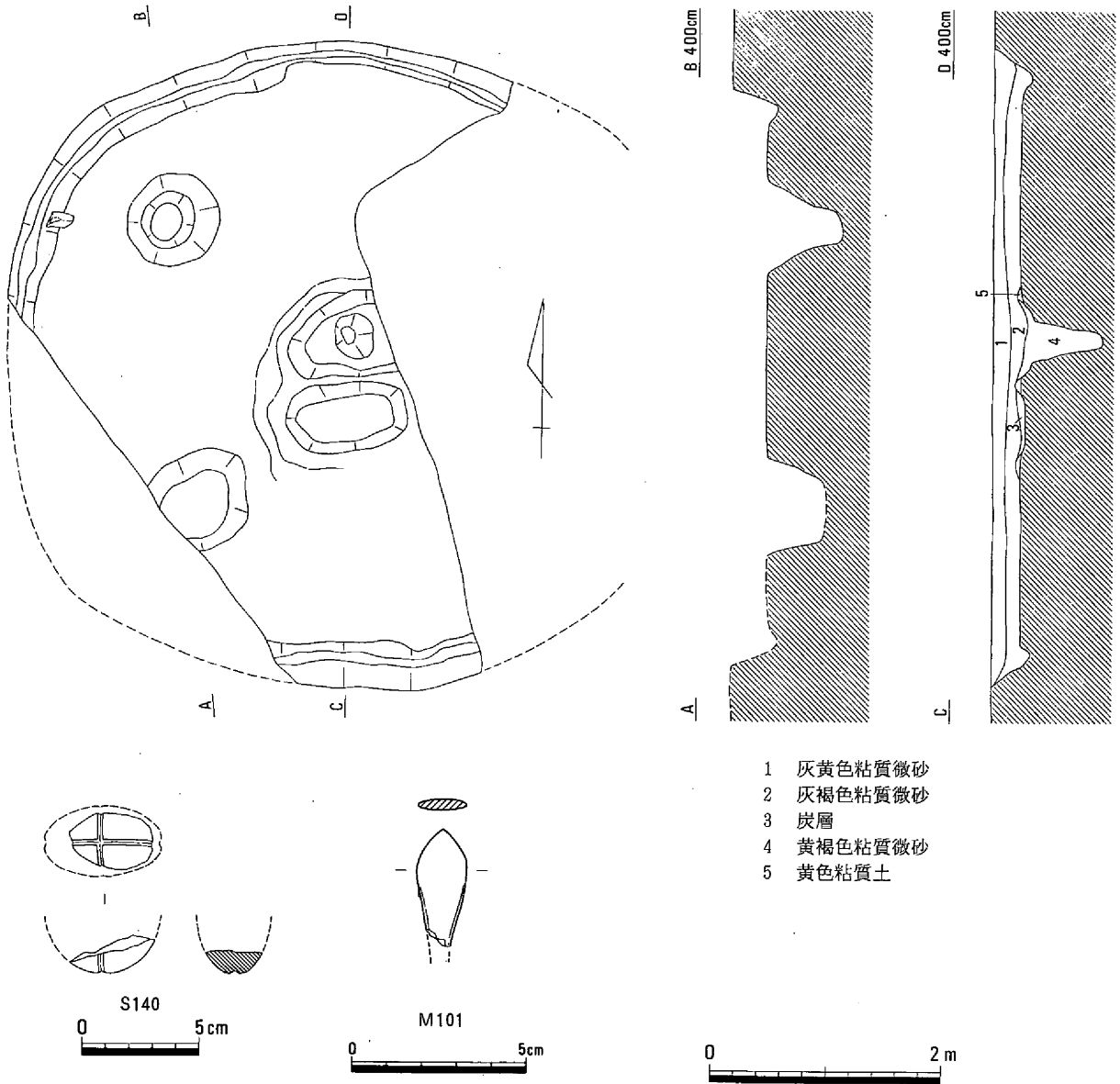
第15図 竪穴住居-127 (2960~2964・S139)

遺物には壺、甕、高杯、鉢等がみられ、火災前における同時性を示す一括の資料である。壺は口縁部に数条の凹線文が施され、口縁部下端が若干垂れ気味の痕跡をとどめている。最大径は胴部上半に位置し、底に向かい細く窄まり底部の厚さは2952・2955の両者が認められる。器壁は均一にヘラケズリされたものでなく、胴部上半、とりわけ口縁・頸部が厚みを持って仕上げられている。内面にみられるヘラケズリは胴部下半が縦位、上半横位のヘラケズリは頸部の屈曲部にまでおよぶ。色調は橙色、褐色系統が主流であり、胎土には礫、粗砂、細砂を含む。これらの特徴から本住居は弥・後・Iの新相段階に火災を受けたと考えられる。(高畑)

竪穴住居-128 (第16図、図版3)

中屋調査区の南部に位置し、付近に弥生時代の竪穴住居が数軒まとまって検出された。この地点は上層に古墳時代の竪穴住居が多数あり、本住居もかなり削平を受けている。さらに、東側は竪穴住居-150、南西側は竪穴住居-139によって床面まで切られている。2軒の住居は古墳時代のものである。残存する部分が約半分しかないため、詳細な点は分からない。

平面形は円形を呈し、直径580cm、床面の標高339.5cmを測る。周囲には、壁体溝が巡っている。中央部には、深く掘り込まれた穴があり、南側に浅い穴を伴っている。中央穴の周囲には土堤を伴っている。深く掘り込まれた穴の大きさは、38cm×32cm、深さ58cmである。柱穴は中央穴の西側に南北



第16図 竪穴住居-128 (S140・M101)

に並んで2本あり、本来4本柱であったと推測される。2本の柱間は250cmである。

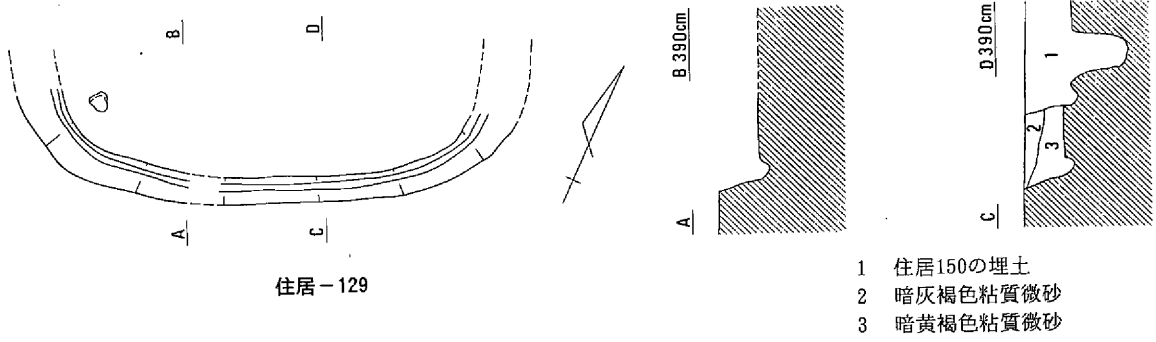
埋土中からは、壺、甕、高杯、杯、鉢、器台の破片と土錘、鉄鏃がある。土錘は楕円形を呈し、十字に溝を入れた有溝土錘で、表面だけが剝離して残った小破片である。鉄鏃は茎を欠失しているが、柳葉形を呈し、現存長3.4cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、現存の重さ4.2gである。

時期は出土遺物から弥・後・Ⅱに比定される。 (正岡)

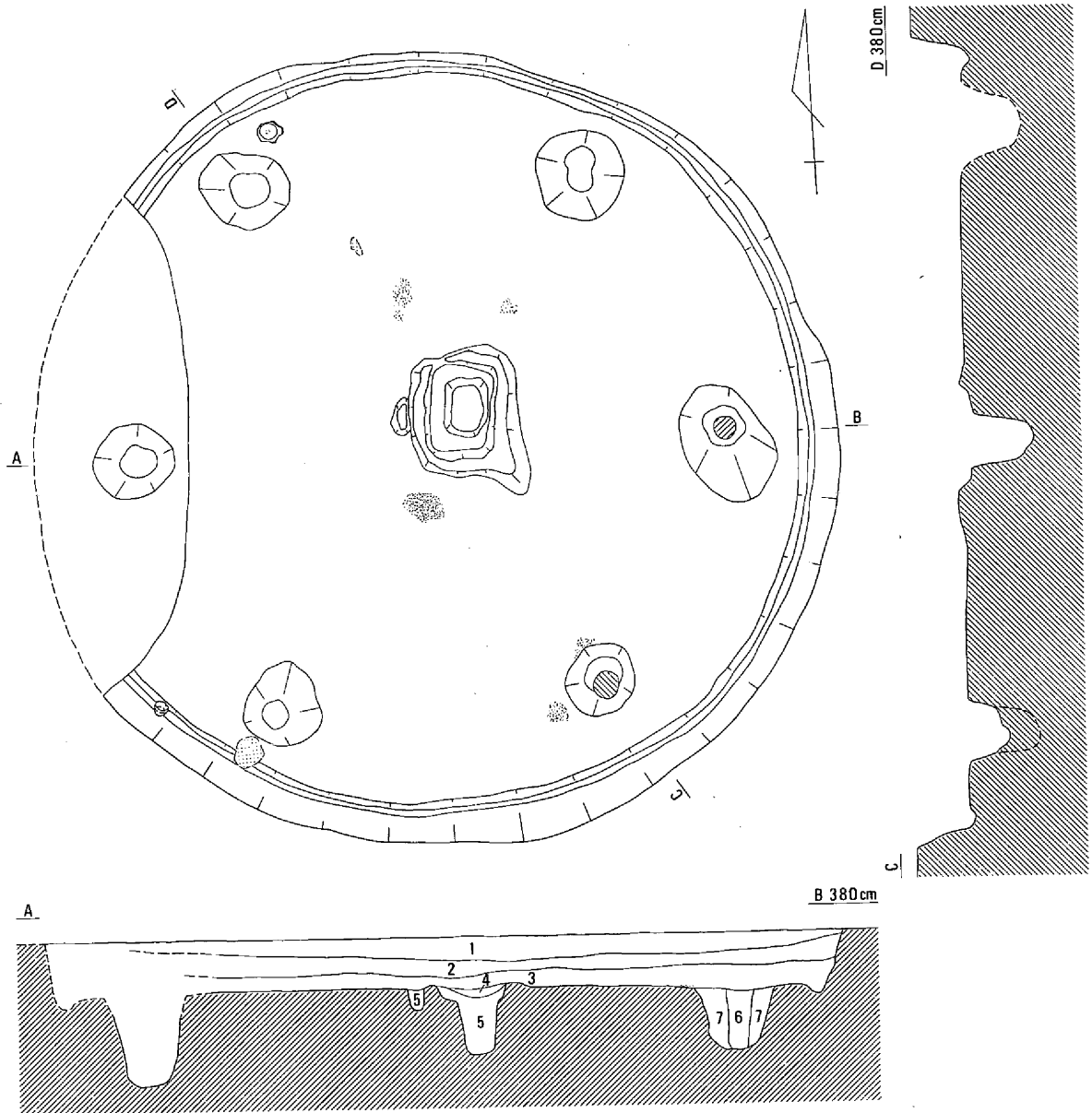
竪穴住居-129 (第17図)

中屋調査区の南部に位置し、竪穴住居-128の南東側にあり、重複する関係にある。北西側の大部分が古墳時代の竪穴住居-150によって切り取られているため、詳細なことは分からない。わずかに残っている南東部で見ると平面形は隅丸方形を呈し、周囲に壁体溝を巡らせている。床面の標高は332cmを測る。

埋土中からは、良好な土器は検出されていないため、時期は決めにくいが、弥生時代後期で、弥・後・Ⅳと推測される。 (正岡)

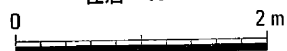


住居-129



- |              |             |                               |
|--------------|-------------|-------------------------------|
| 1 黄灰褐色粘土混り微砂 | 4 灰色粘土      | 7 灰褐色微砂混り粘土<br>(黄褐色粘土ブロックを含む) |
| 2 黄灰褐色微砂混り粘土 | 5 黄灰色粘土     |                               |
| 3 灰褐色微砂混り粘土  | 6 灰褐色微砂混り粘土 |                               |

住居-130

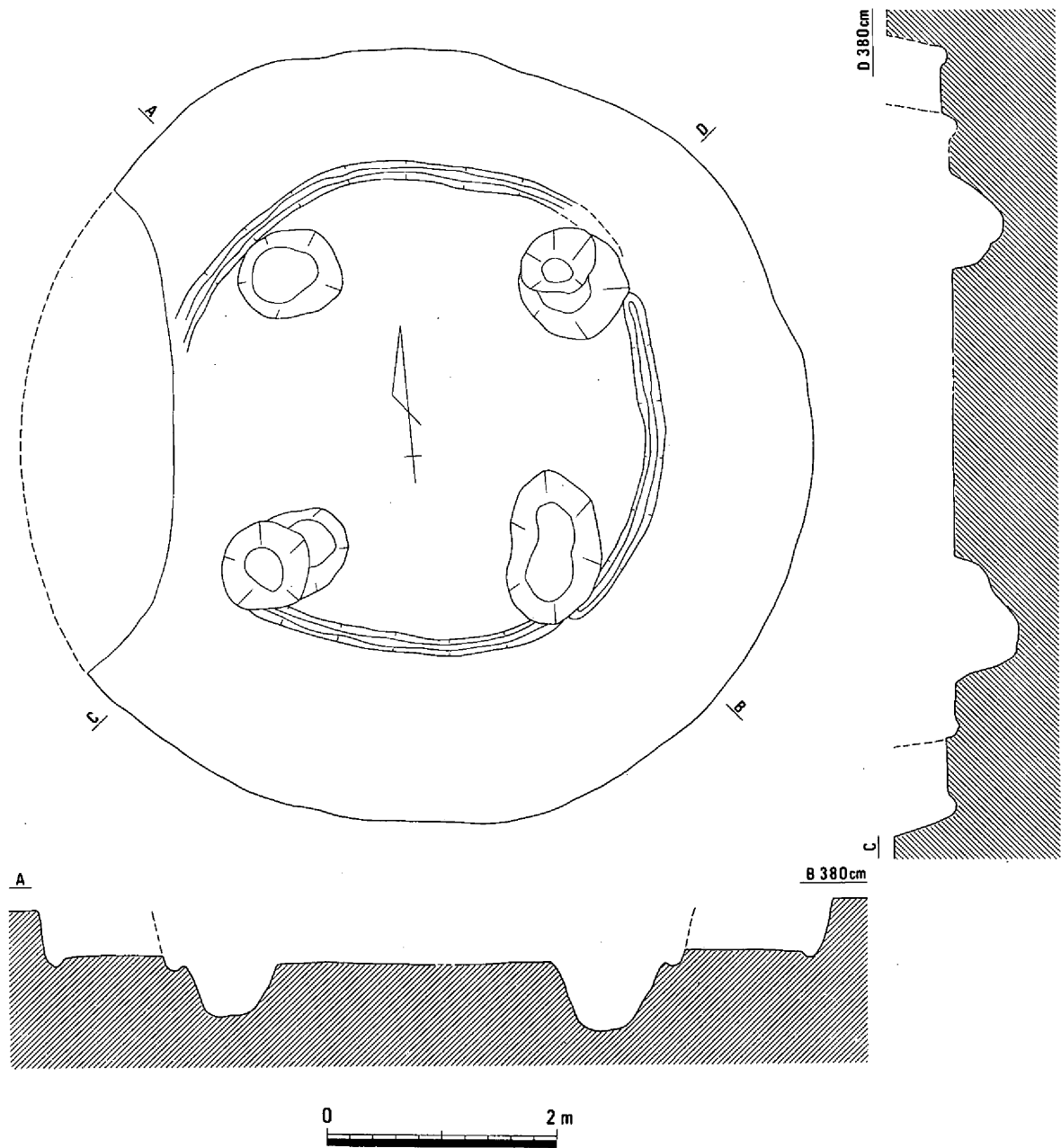


第17図 竪穴住居-129・130 B

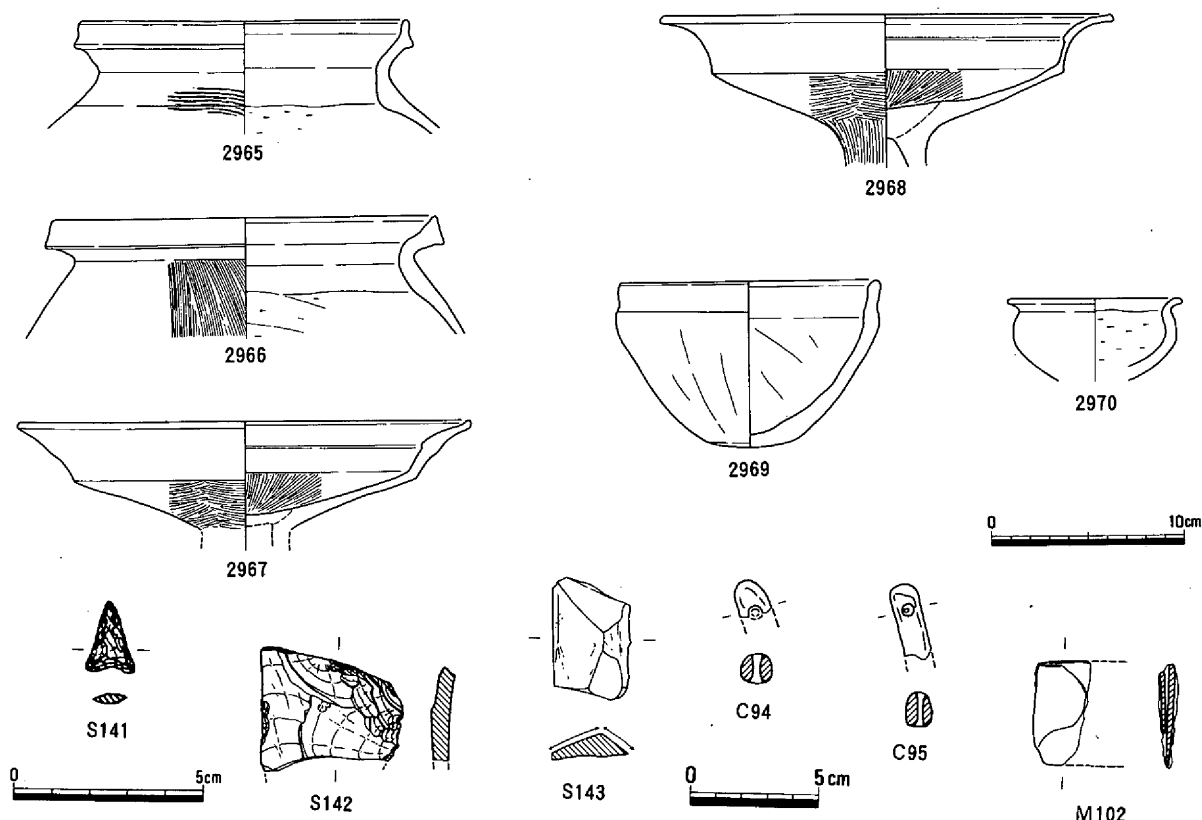


竪穴住居-130 (第18・19図、図版3・4・48)

中屋調査区の南部に位置し、古墳時代の竪穴住居群と重なっているが、比較的全容が分かる。西側の一部は、古墳時代の竪穴住居-152によって切られている。調査の過程で、当初の住居がやや浅い床面として拡大されていたことが判明した。そのため、当初のものをA、拡大後のものをBとする。まず最終面である130Bについて述べる。平面形は円形を呈し、周囲に壁体溝を巡らせている。大きさは、直径655cm、床面標高322cmを測る。中央部には、土堤を巡らせた長方形の穴がある。周囲を浅く掘り下げ、中央部は深くなる。深い部分は、55cm×40cm、深さ50cmである。周囲には炭化物が残存している。柱穴には、6本が円形に配置されている。掘り方の平面形は円形～楕円形を呈し、柱痕跡の見られるものもある。柱穴間の距離は、長いところで285cm、短いところで235cmである。床面には、5か所に焼土面が存在する。



第18図 竪穴住居-130 A



第19図 竪穴住居-130 (2965~2970・M141~143・C94・95・M102)

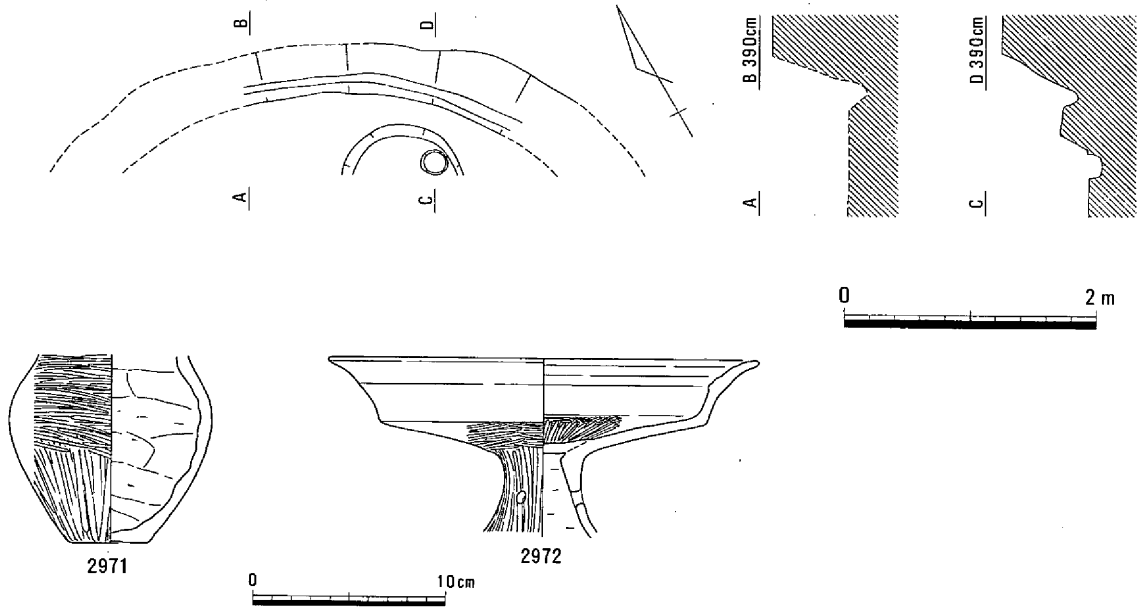
当初のものである130Bは、平面形が円形を呈し、周囲に壁体溝を巡らしている。大きさは、直径435cm、床面の標高312cmを測る。柱穴は4本あり、壁にかなり近接した位置にある。平面は円形~楕円形を呈する。柱穴には、抜き取り痕か柱の建て替えと推定される痕跡が残っている。柱穴間の距離は、長いところで265cm、短いところで240cmである。床面の焼土面は確認されなかった。

埋土中からは、壺18、甕59、高杯30、杯4、鉢19の破片があり、製塩土器の小片も確認されている。ほかに、石鏃、剥片、砥石、土製勾玉、鍬先もある。図面化できた土器には、甕2965・2966、高杯2967・2968、鉢2969・2970がある。砥石S143は頁岩製で、長さ4.8cm、幅4.2cm、厚さ0.7cm、重さ12.2gである。土製勾玉C94・C95は2点あり、いずれも頭部のみが残存し、下半部を欠失している。太さは径1.1~1.5cmのものであり、円形の穴が穿たれている。鍬先M102は鉄製で、片側の小破片である。長さは4.1cmを測る。サヌカイト製石鏃S141、剥片S142は古い時期のものと推測される。住居の時期は、弥・後・Ⅱに比定される。(正岡)

竪穴住居-131 (第20図、図版48)

Q18区の中央部のやや北よりに位置する。竪穴住居-130の南約13mに検出した。調査区の南西端部にその一部分を検出した。調査した部分は壁体とそれに伴う壁体溝のごく一部であるため全体の形状は不明であるが、おおむね円形を呈するものと考えられる。床面には円形の土壌を検出した。柱穴の可能性もあるが、全体の配置が不明であるため確定的ではない。住居跡全体の規模は不明であるが、検出面から床面までの深さは約60cm、壁体溝の幅約10cm、深さ12~13cmを測る。

出土遺物としては、壺、高杯などがある。2971は小形壺の胴部である。外面はヘラミガキ、内面は頸部近くまでヘラケズリが施される。2972は高杯で、口縁部は緩やかに開き、ヘラミガキが施される。時期は弥・後・Ⅱに属するものと考えられる。(井上)



第20図 竪穴住居-131 (2971・2972)

竪穴住居-132 (第21図、図版48)

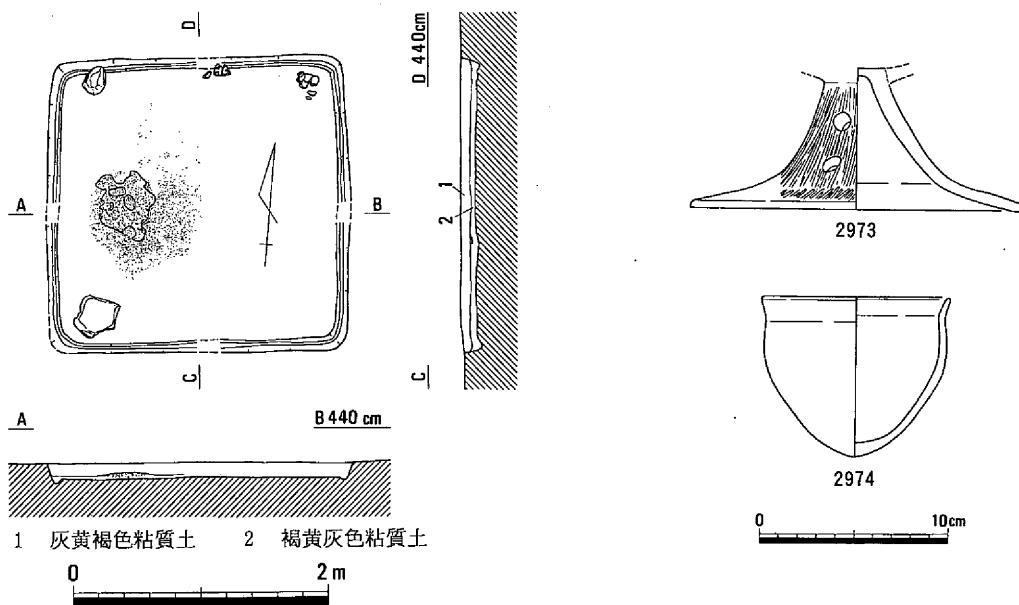
南北235cm、東西240cmを測るほぼ正方形を呈する隅丸方形の竪穴住居である。壁体溝は、断面U字形を示し、周壁を全周する。

中央西よりの床面では、径約50~60cmの範囲に被熱面がひろがり、炭の破片が周辺に散在しているが、明瞭な火処とみなせるような掘り込みは確認されていない。

床面では、柱穴も検出されていない。本来柱穴が掘り込まれず、比較的簡単な上部構造をもつ竪穴で、住居というよりはむしろ工房のような恒常的に居住しない施設であった可能性がある。

床面からの出土遺物には、2973の高杯、2974の小形鉢があり、弥・後・IV期に比定される。また、床面南東隅で、一人持ち大の花崗岩の平たい石が据え置かれており、作業台として使用されたことが推察される。

(岡田)



第21図 竪穴住居-132 (2973・2974)



第22図 中屋調査区弥生時代遺構全体図(2) 1/600

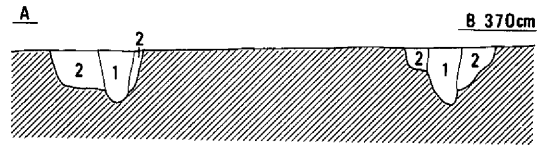
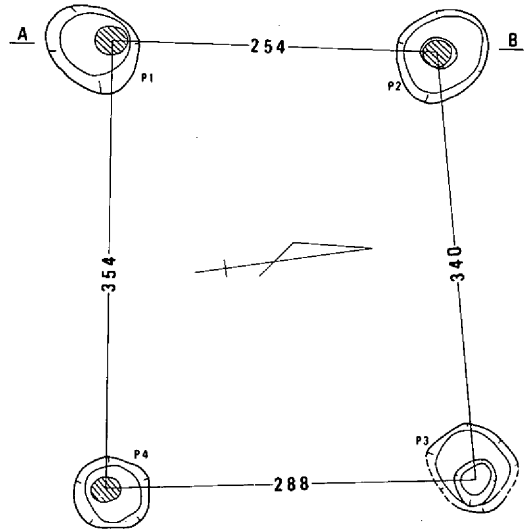
(3) 掘立柱建物

掘立柱建物-16 (第23図、図版4)

P19区西辺やや北よりに位置し、竪穴住居-125の南西約18mにあり、住居と同様に「島状高まり」上で検出された2間×1間の掘立柱建物である。建物は南北方向で、桁行は東辺で196~224cm、西辺は200~203cm、梁間は南辺が195cm、北辺は189cmとまちまちの数値を得た。柱穴の掘り方は円形を呈し、径は27~37cm、深さ14~27cmを測る。時期は弥生水田層下においての検出であり、弥・中・中と考えられる。(二宮)

掘立柱建物-17 (第24図・図版4)

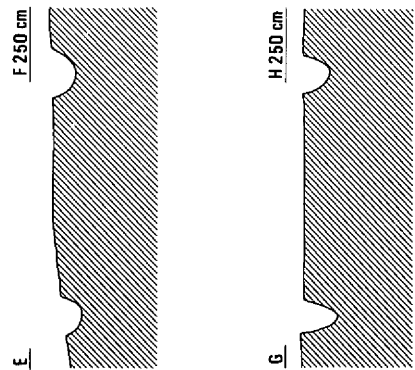
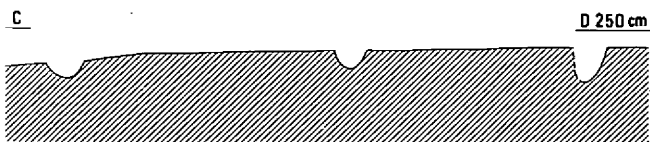
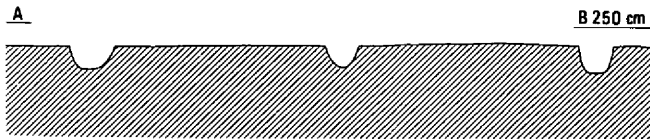
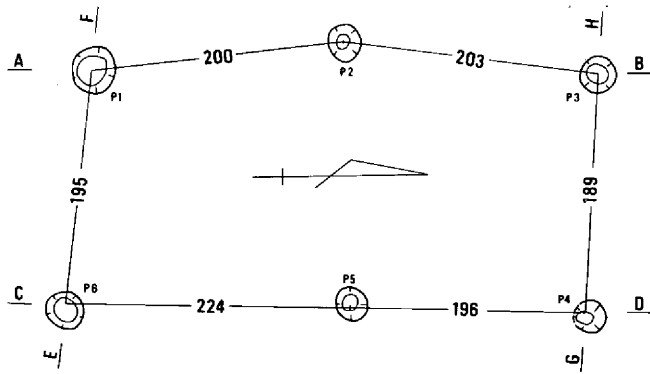
中屋調査区の南端部に位置し、竪穴住居-30の東側に近接している。微高地の東端部にも近く、水田に近い。1×1間の掘立柱建物で、主軸はN-80°-Wを示す。規模は、桁行170~178cm、梁間127~144cmで、東側がやや広い。柱穴の埋土中から甕の破片が検出されたことから、時期は弥・後・前に比定される。(正岡)



1 灰茶色粘質土 2 橙灰茶色粘質微砂



第24図 掘立柱建物-17



第23図 掘立柱建物-16

(4) 袋状土壙

袋状土壙-70 (第25図)

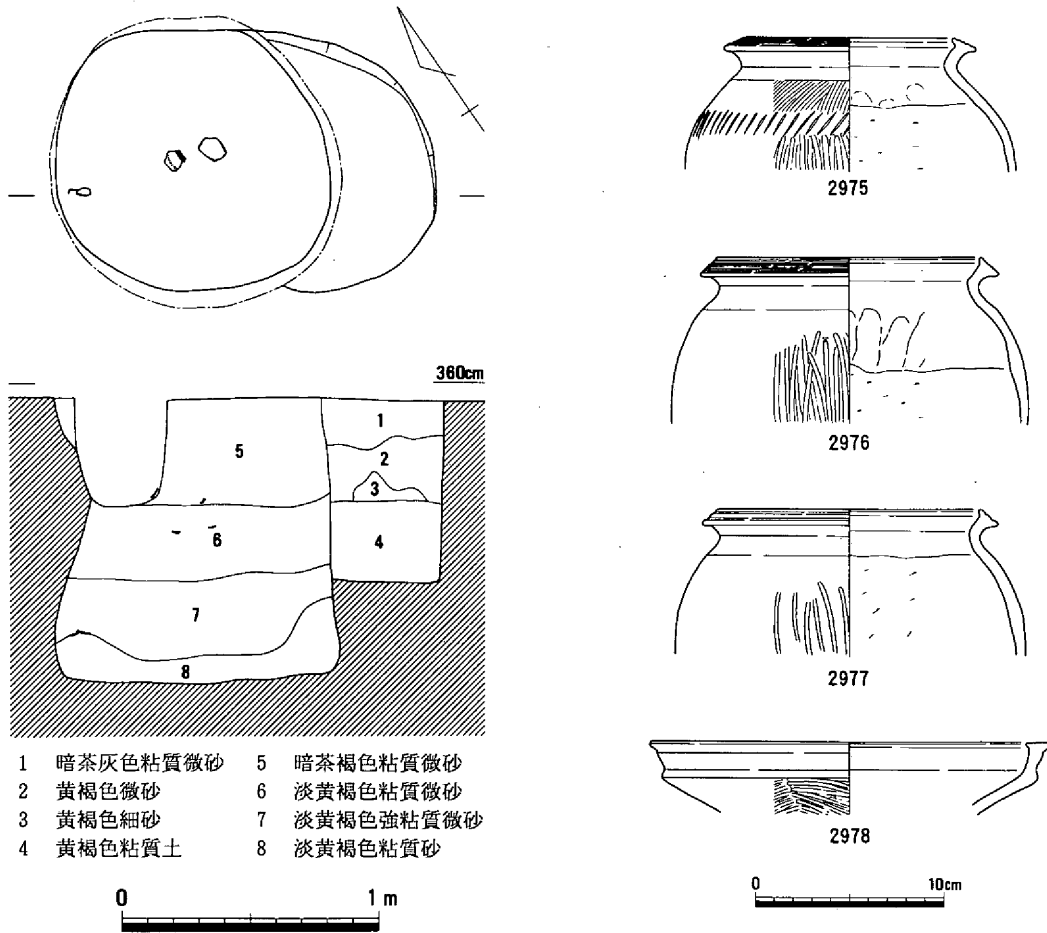
Q18区の北北西、竪穴住居-126のすぐ南西に位置する。残存の上面径114cm、底面径116cm、深さ113cmを測るほぼ円形の袋状土壙である。底面の海拔高240cmにて、底より約15cm上位に袋部最大径120cmが求められる。土壙内の埋土は大きく4層からなり、第8層の自然堆積の形状を除けば上位の第7~第5層は水平堆積であり、人為的に埋められた土の可能性が強い。土質はすべて粘質微砂を基調としている。第5~第8層は土器片、炭粒を少量含んでおり、2975等は第6層出土の土器である。出土土器の特徴から竪穴住居-126と同時に併存した可能性が強く、弥・後・I段階の袋状土壙であろう。(高畑)

袋状土壙-71 (第25図)

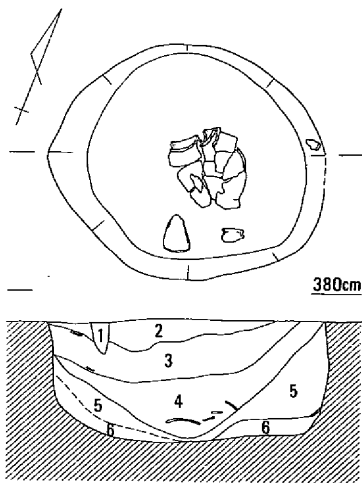
袋状土壙-70により西側半分に掘削を受けている土壙である。推定上面径99cm、同じく底面径92cm、深さ72cmを測る小形のものである。ほぼ垂直に掘り込まれた穴であり、使用後は袋状土壙-71とほぼ同様に人為的に埋めもどされた土層断面を呈する。なお、底部の海拔高は281cmを測り、埋土内には土器細片を含む。袋状土壙-70を新しく掘開する段階で廃棄された可能性も考えられる。(高畑)

袋状土壙-72 (第26図、図版5・48)

Q18区の北辺中央部、弥・後・Iの竪穴住居の北北西約2mに位置する。上面径110cm、底面径90

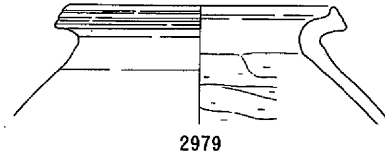


第25図 袋状土壙-70・71 (2975~2978)

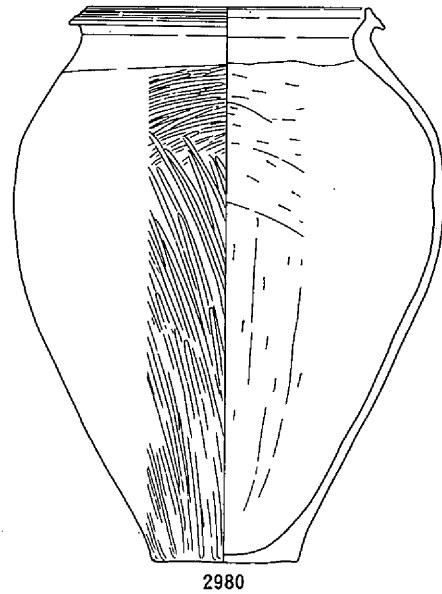


- 1 茶黄色粘質微砂
- 2 暗茶色粘質微砂
- 3 淡茶褐色粘質微砂
- 4 茶褐色粘質微砂
- 5 茶橙色粘質微砂
- 6 灰橙色粘質微砂

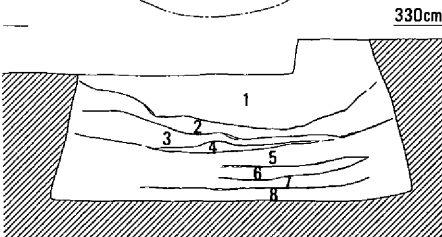
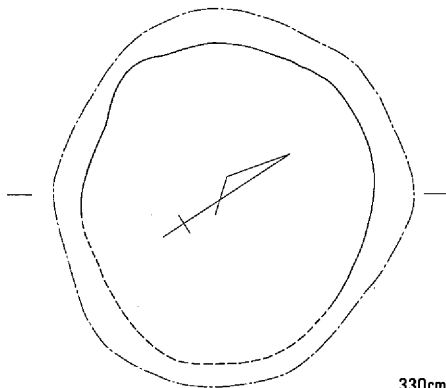
袋状土坑-72



2979



2980



- 1 暗茶褐色粘質微砂
- 2 暗灰褐色粘質微砂
- 3 暗褐灰色粘質微砂
- 4 灰色粘質微砂
- 5 暗褐灰色粘質微砂
- 6 黄褐色粘質微砂
- 7 黄褐色粘質微砂
- 8 黄褐色粘質微砂

袋状土坑-73



cm、深さ48cmを測る円形の土坑である。埋土は5層であり、レンズ状の堆積状況を呈する。第1層と第3層に焼土、炭が多く認められ、2979・2980ともに第4層の凹部に横転した格好での出土である。第5・6層間には底面に接する細い炭の層がみられる。底部の海拔高は321cmである。2979・2980ともに弥・後・Iの所産である。

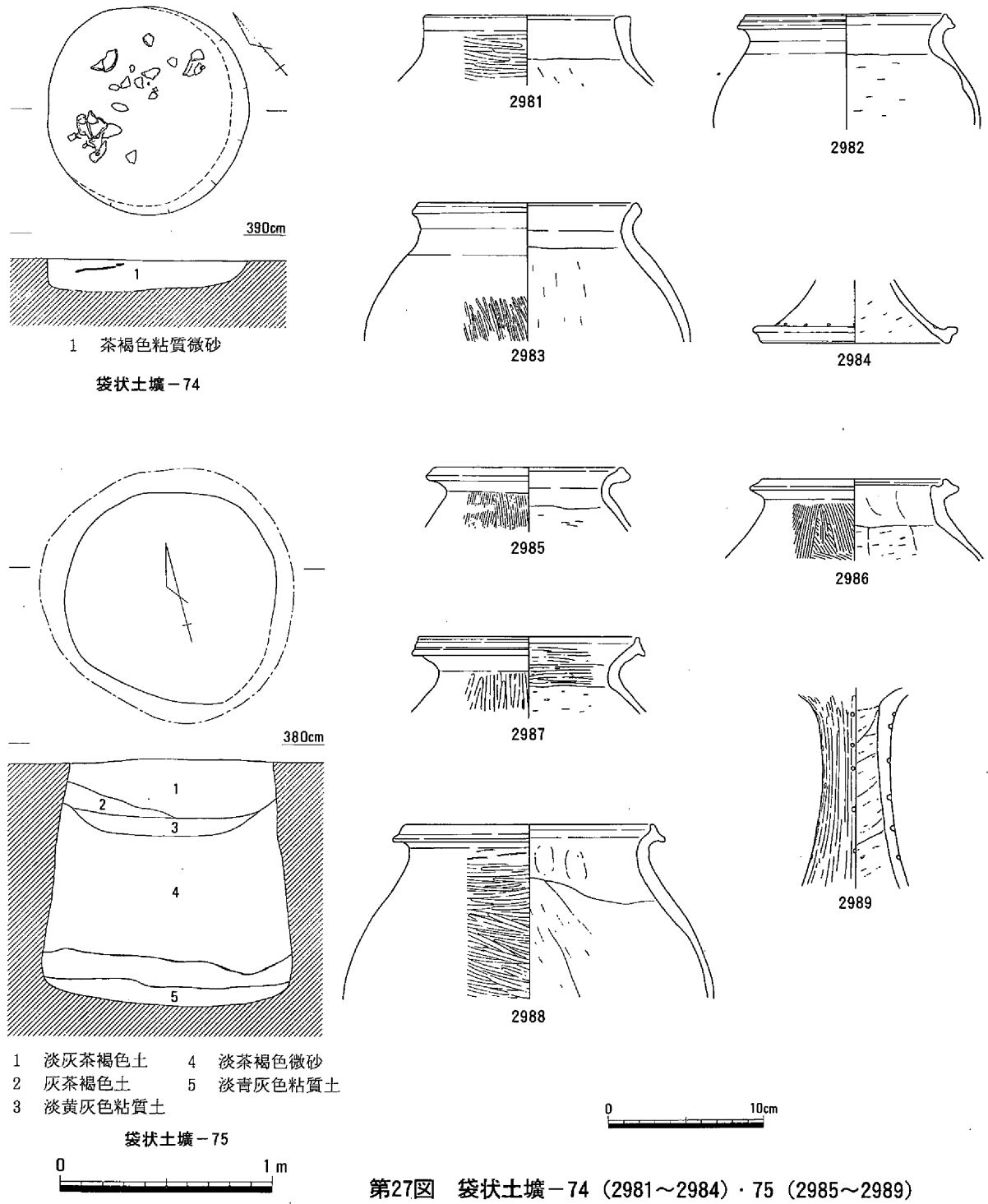
(高畑)

袋状土坑-73 (第26図、図版5)

竪穴住居-127と袋状土坑-72の両者に挟まれて位置する。層位的には同一場所で古墳時代前・中期の竪穴住居-139~141、165の下位からの出土であり、推定上面径128cm、底面径150cm、深さ65cmを測る袋状土坑である。底面は不整形を呈し、底部の高低差はほとんどなく、最下面が最大径になる形態のものである。埋土は8層からなるが、層自体の厚さは5cm前後と薄く、それぞれの土層間には幅1~2cmの炭あるいは灰層が認められる。消耗品の廃棄場所として機能していたと考えられ、袋状土坑-72ともども竪穴住居-127との関連が強いものである。

(高畑)

第26図 袋状土坑-72 (2979・2980)・73



第27図 袋状土壙-74 (2981~2984)・75 (2985~2989)

袋状土壙-74 (第27図)

Q18区のほぼ中央、竪穴住居-127の南南東6mに位置する。上面径101cm、底面径94cm、深さ15cmを測るほぼ円形の土壙である。底部海拔高は362cmを測り、袋状土壙-70の底部との比較では120cmほどの差が認められる。遺物は炭を少量含む茶褐橙色粘質微砂中に小片がまとまって出土しており、土壙内の多少の埋土後に廃棄された状況を呈する。1個体に復元できるものはなく、高杯脚部、甕・壺の胴部上半等の破片のみである。2983の灰褐色以外は橙色の色調を基調としており、器形の特徴等から弥・後・Iの所産と考えられる。(高畑)



## 袋状土壇-75 (第27図)

Q18区の中央部やや北よりに位置する。袋状土壇-74の南約4mに検出した。検出面での平面形は南側が少し歪であるが円形を呈しており、長径100cmを測る。底面の平面形も円形を呈しており、床面は少し窪むもののほぼ平坦である。底面の長径は120cm、最深部の標高は253cmを測る。壁面は少し内傾しながら直線的に立ち上がるため、底径に比べ口径が小さい。検出面からの深さは、119cmを測る。出土遺物は2958~2988は甕で、内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキが施される。2989は高杯の脚柱部である。時期は弥・後・IIに属するものと考えられる。(井上)

## 袋状土壇-76 (第28図)

Q18区中央部やや北よりに位置する。袋状土壇-75の南南西約2mの位置に検出した。袋状土壇-77に大きく削平されているため検出面での平面形は不明であるが、弧状に曲がる一部分を検出した。底面の平面形は東側に少し拡張するような不整形円形を呈するもので、床面は西に向けて少し傾斜するが平坦である。底面の長径は125cm、最深部の標高は264cmを測る。壁面は少し内傾しながら直線的に立ち上がるため、断面形は台形状を呈するものである。検出面からの深さは122cmを測る。土壇内の埋土は残存部分が少ないため細かく観察することはできなかったが、分層できる状況ではなくほぼ同一の土で埋まる状態であった。出土遺物は2990は高杯の杯部で、体部から立ち上がる口縁部端部は少し外傾し拡張するものである。2992は甕で、外面下半はヘラミガキ、内面の下半はヘラケズリ、上半は指頭圧痕が見られる。C96は紡錘車である。時期は弥・後・Iと考えられる。(井上)

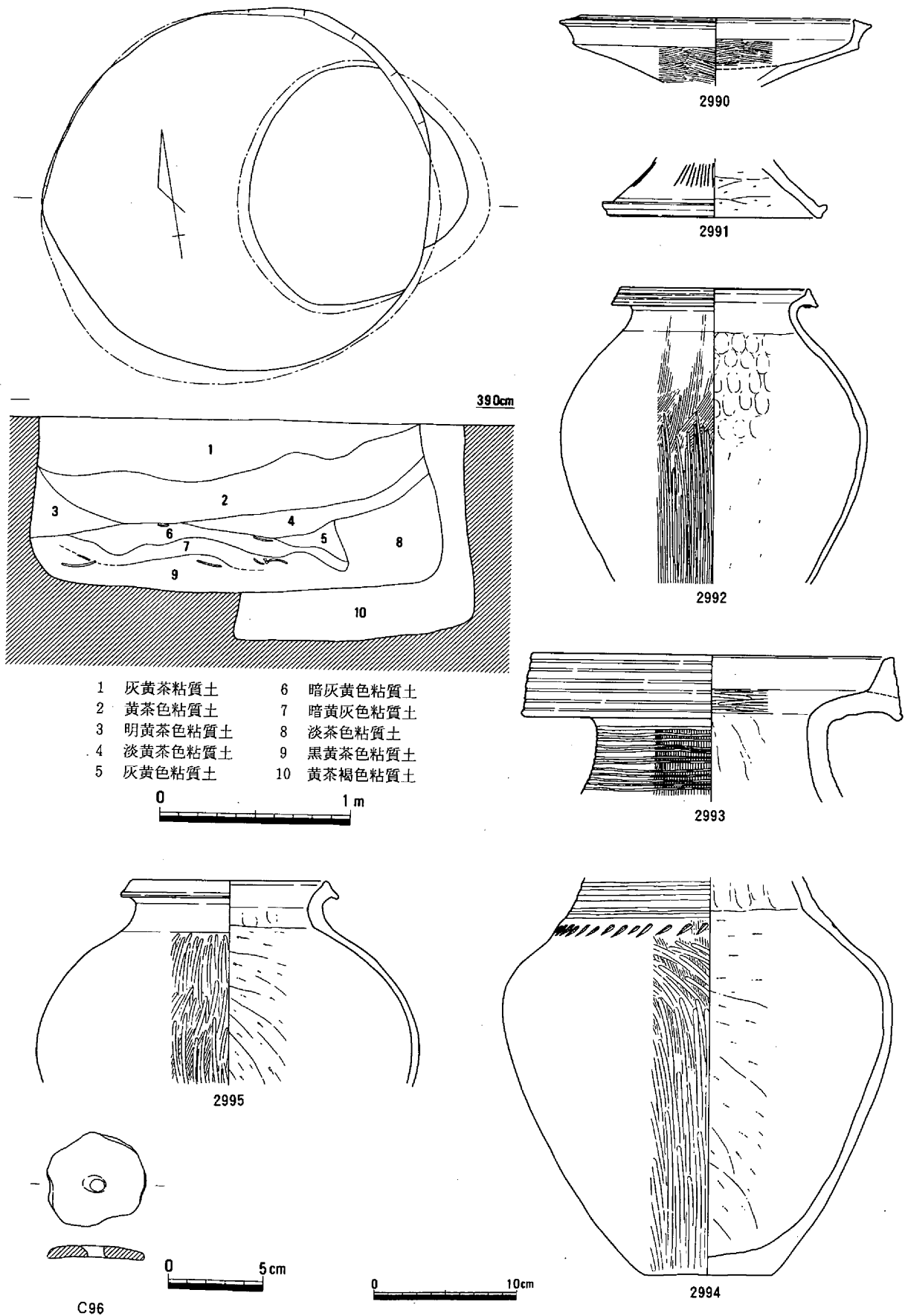
## 袋状土壇-77 (第28・29図、図版5・48・49)

Q18区中央部やや北よりに位置する。袋状土壇-76と重複しており、それをほとんど削平する状態で検出した。検出状況においては1個の土壇をと考えていたが調査の進行に伴い、東側に新たな土壇の重複を発見した。検出面での平面形は円形を呈するものであり、長径200cmを測る。底面の平面形も円形を呈しており、床面はほぼ平坦である。底面の長径は213cm、最深部の標高は288cmを測る。壁面は、東側は下半が少し膨らむもので、西側は若干内傾して直線的に立ち上がる。検出面からの深さは93cmを測る。土壇内の埋土はレンズ状に堆積し、土壇の下半を中心に土器が出土した。出土遺物は壺、甕、鉢などがある。2993は壺で、口縁端部が上方に大きく拡張する。頸部はヘラガキ沈線とハケメが施される。2994は壺の胴部で、外面はハケメとヘラミガキ、内面は頸部までヘラケズリが施される。2995・2996は胴部が大きく膨らむもの、2997~3002は胴部が細いものである。何れも内面全体にヘラケズリが施される。3004は製塩土器の脚部である。時期は弥・後・IIと考えられる。(井上)

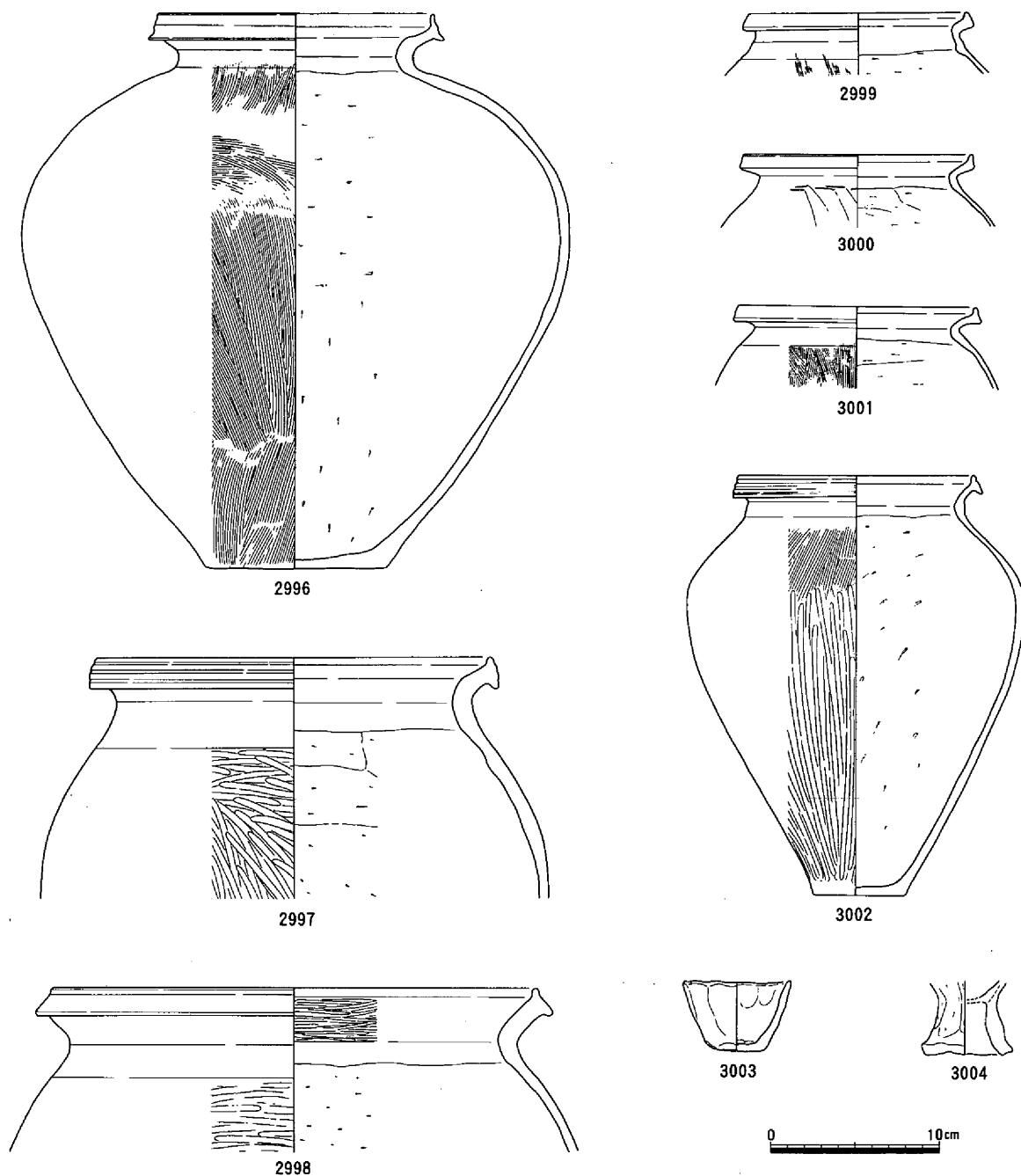
## 袋状土壇-78 (第30~33図、図版6・49・50)

Q18区中央部やや北よりに位置する。袋状土壇-77の東約1mに検出した。検出面の平面形は円形を呈するもので、直径117~128cmを測る。底面の平面形も円形を呈するもので、直径115~148cmを測る。床面は湧水により崩れたため明確ではないがほぼ平坦であると観察された。最深部の標高は崩壊直前の計測で255cmを測る。壁面は北東側は若干内傾して直線的に立ち上がる。南西側は検出面直下はほぼ垂直であるが、その下方は少し膨らむものである。検出面からの深さは108cmを測る。

出土遺物は土壇内の下層を中心に土器が出土した。3005~3011は壺である。3005は頸部から口縁部にかけて緩やかに弧を描きながら開くもので、口縁端部は丸く収められる。外面は頸部から胴部にかけてはヘラミガキ、内面は頸部はヘラミガキ、胴部はヘラケズリが施される。3006・3007は頸部にハケメと沈線が施されるもので、3008~3009は頸部にヘラミガキが、3010はハケメが施される。3012~

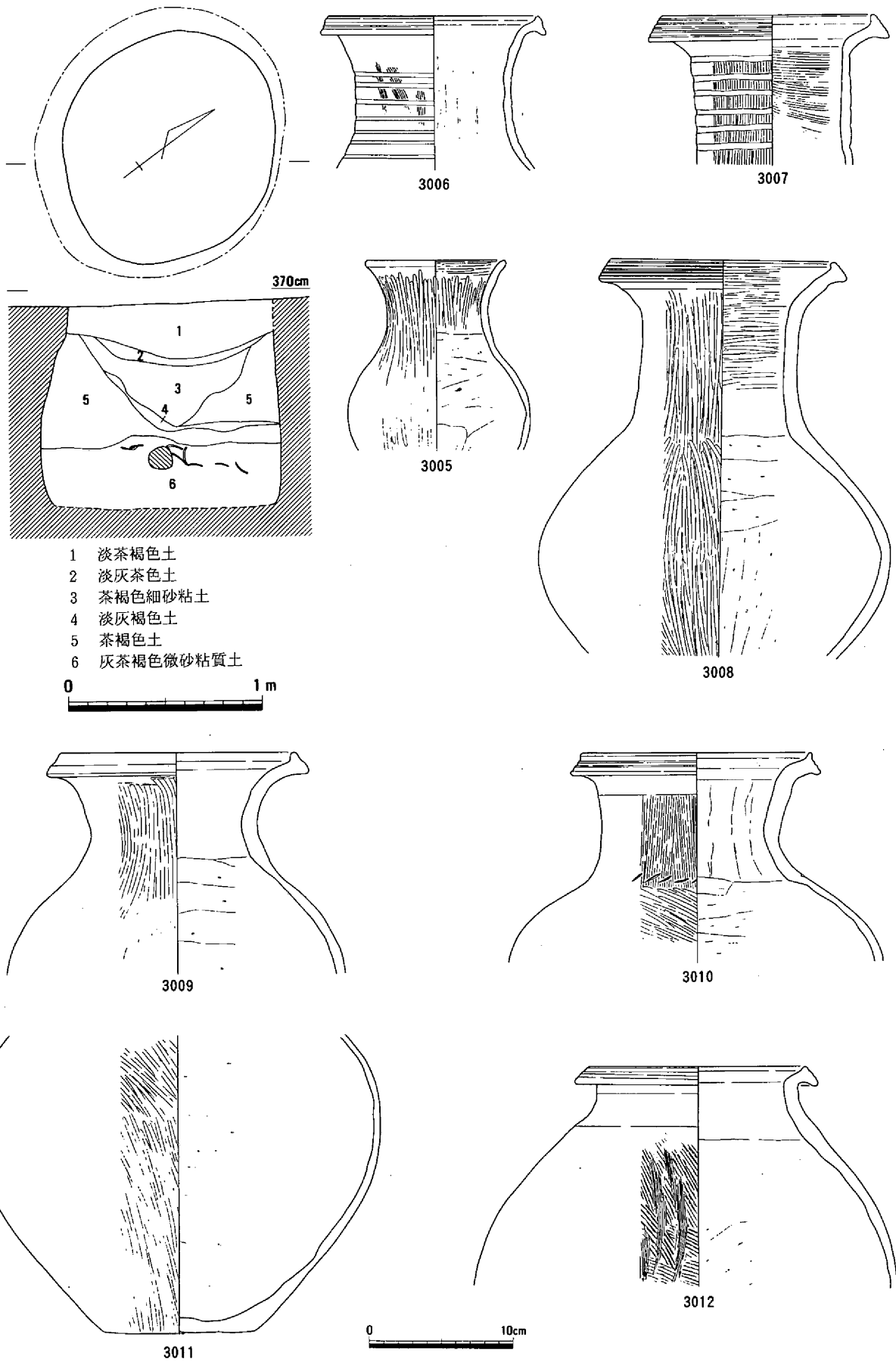


第28図 袋状土塊-76 (2990~2992)・77 (2993~2995)



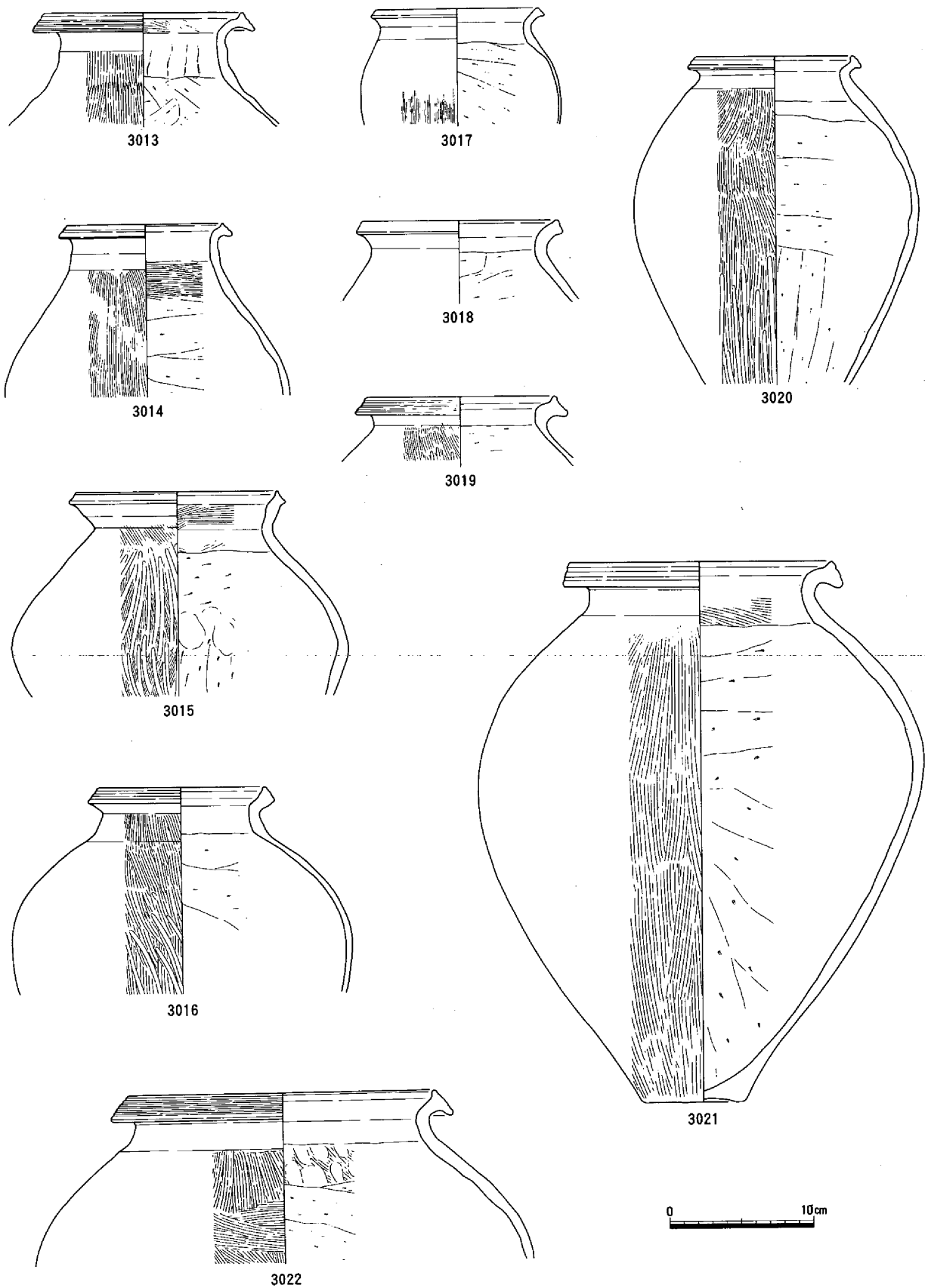
第29図 袋状土壇-77 (2996~3004)

3025は甕である。何れも胴部外面はハケメもしくはハケメとヘラミガキが、内面はほぼ全体にヘラケズリが施される。3021~3014は口縁端部が上下に拡張するもの、3015~3018は口縁端部がわずかに肥厚するものである。3015は胴部が大きく張り、その最大径の位置がやや低い。3026~3029は高杯である。体部から少し開きながら立ち上がる口縁部の端部は少し外傾して拡張する。杯部の内外面はヘラミガキが施される。3030・3031は台付鉢である。大きく外反した口縁部の端部は少し拡張する。胴部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが施される。3032・3033は鉢である。大きく開いた体部に少し段をもちながら開く口縁部をもつ。内外面にヘラミガキが施される。3034・3035は器台である。3035は口縁部に凹線と竹管文、胴部に円形と方形の透かし孔が各4個施され、脚部には両方ともに凹線が施される。時期は弥・後・Iに属すると考えられる。(井上)

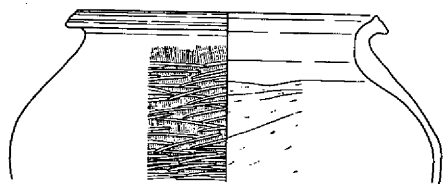


- 1 淡茶褐色土
- 2 淡灰茶色土
- 3 茶褐色細砂粘土
- 4 淡灰褐色土
- 5 茶褐色土
- 6 灰茶褐色微砂粘質土

第30図 袋状土壌-78 (3005~3012)



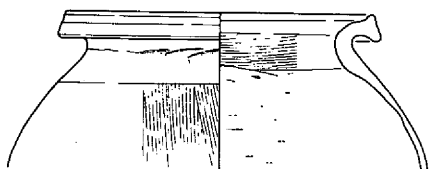
第31図 袋状土壺-78 (3013~3022)



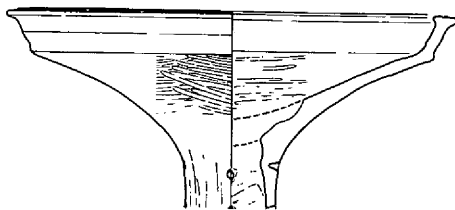
3023



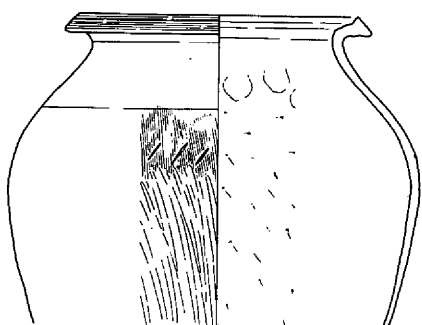
3026



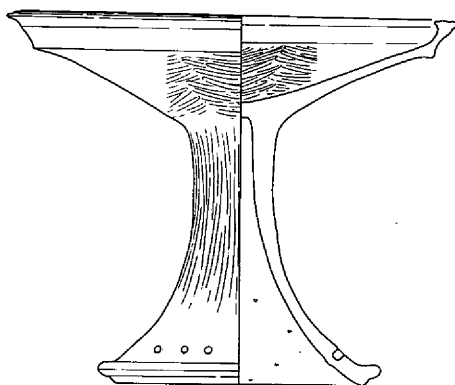
3024



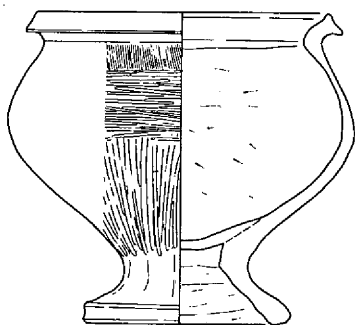
3027



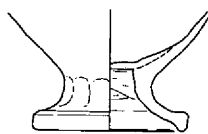
3025



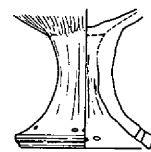
3028



3031



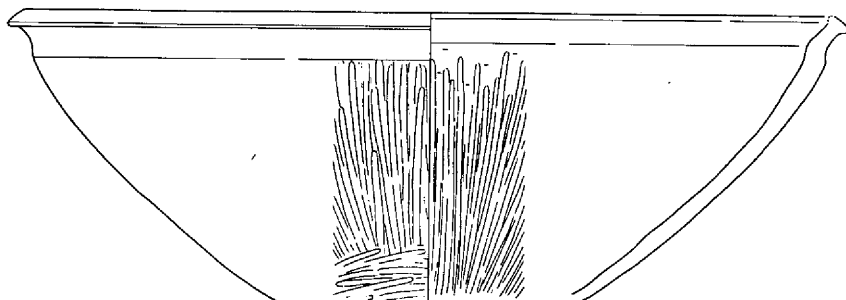
3030



3029



3032



3033



第32図 袋状土壙-78 (3023~3033)

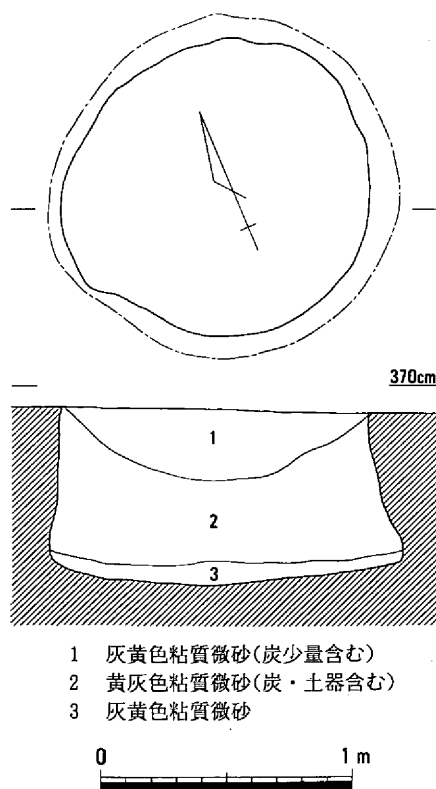
袋状土壇-79 (第34図)

中屋調査区の南端部に位置し、竪穴住居-130や掘立柱建物-17の南側に近接している。平面形は円形を呈し、下部はフラスコ形にひろがる。底面は中央部をわずかに窪めているが、ほぼ平坦である。大きさは、検出面で径122cm、底面径138cm、深さ70cmを測る。底面の標高は291cmである。埋土の下半部で土器片が検出された。時期は弥・後・前に比定される。(正岡)

袋状土壇-80 (第35図、図版6・50・51)

中屋調査区の南端部に位置し、溝-97に接している。微高地の東端部でもあり、水田にも近い。

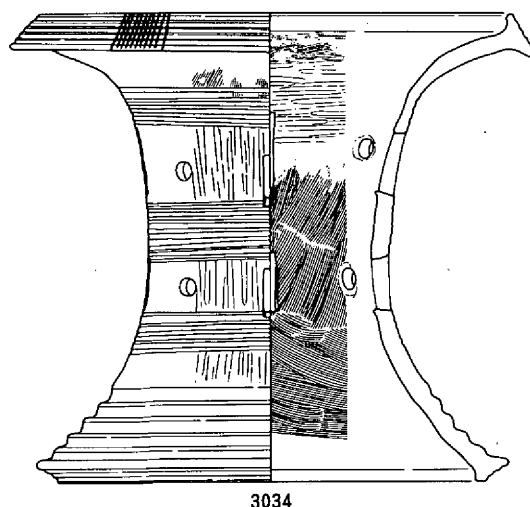
検出面での平面形は不整形円形を呈する。東側の壁は、少し内側に傾斜するが、西側の壁は、少し内側に傾斜したあと、外側へ向かって張り出し、えぐ



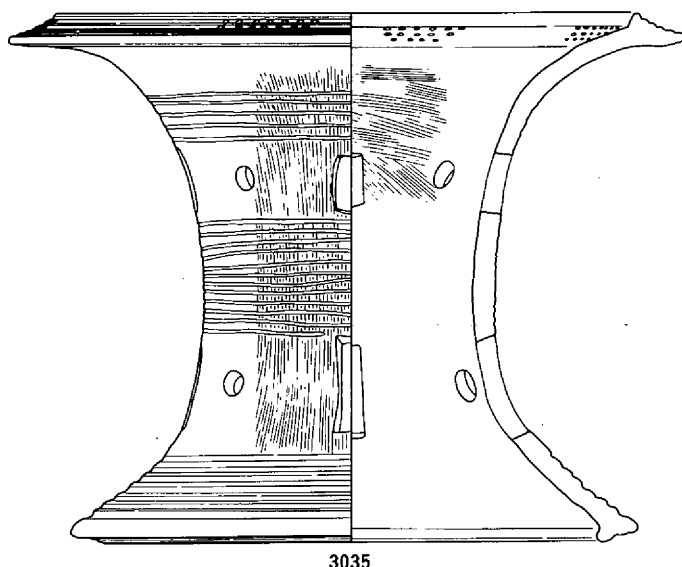
- 1 灰黄色粘質微砂(炭少量含む)
- 2 黄灰色粘質微砂(炭・土器含む)
- 3 灰黄色粘質微砂

0 1 m

第34図 袋状土壇-79



3034



3035

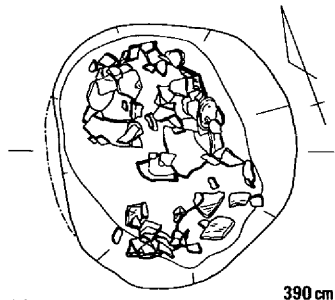
0 10cm

第33図 袋状土壇-78 (3034・3035)

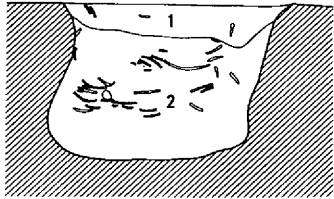
り込むようになっている。底面の形状は、中央部をわずかに窪めているが、ほぼ平坦である。

大きさは、検出面で径90cm、底面で径74cm、深さ62cmを測る。底面の標高は315cmである。埋土中には土器片を多量に含んでいる。底面より上層に多く、土壇の埋没中に投棄されたものと推測されるが、復元できる個体も数点あり、近くで使用されたものであろう。

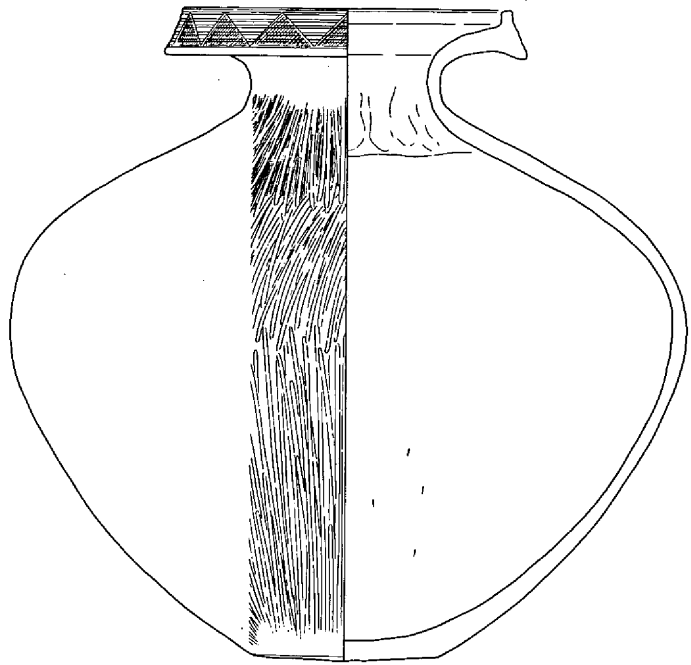
埋土中の土器には、壺5個、甕34個、高杯5個、鉢1個、器台1個がある。図化したものとみると、広口の短頸壺3036、甕3037~3042、高杯3043・3044、鉢3045、器台3046がある。時期は弥・後・Ⅱに比定される。(正岡)



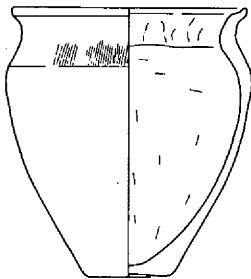
390 cm



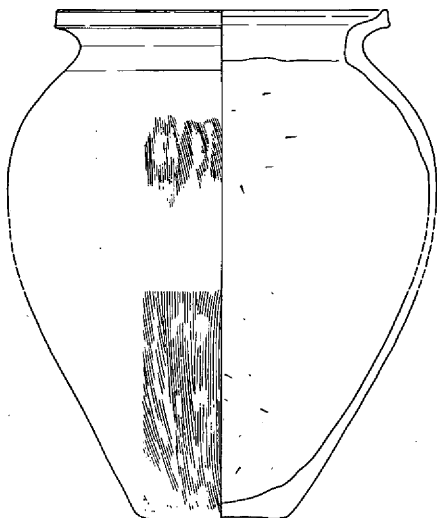
- 1 黒褐色粘質微砂
- 2 暗黒褐色粘質微砂



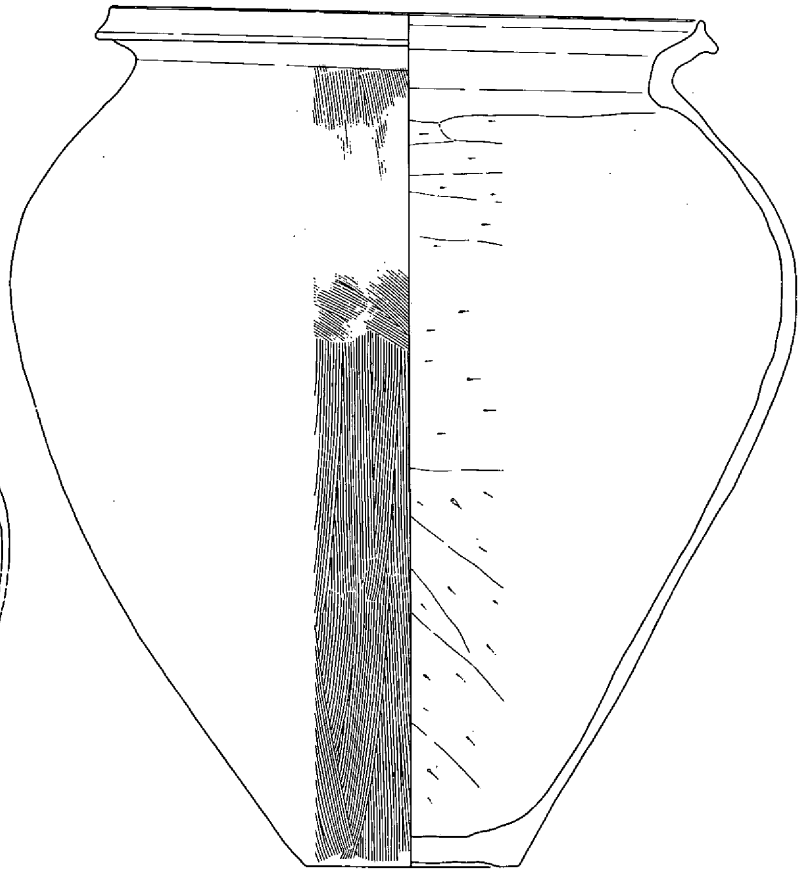
3036



3037



3038

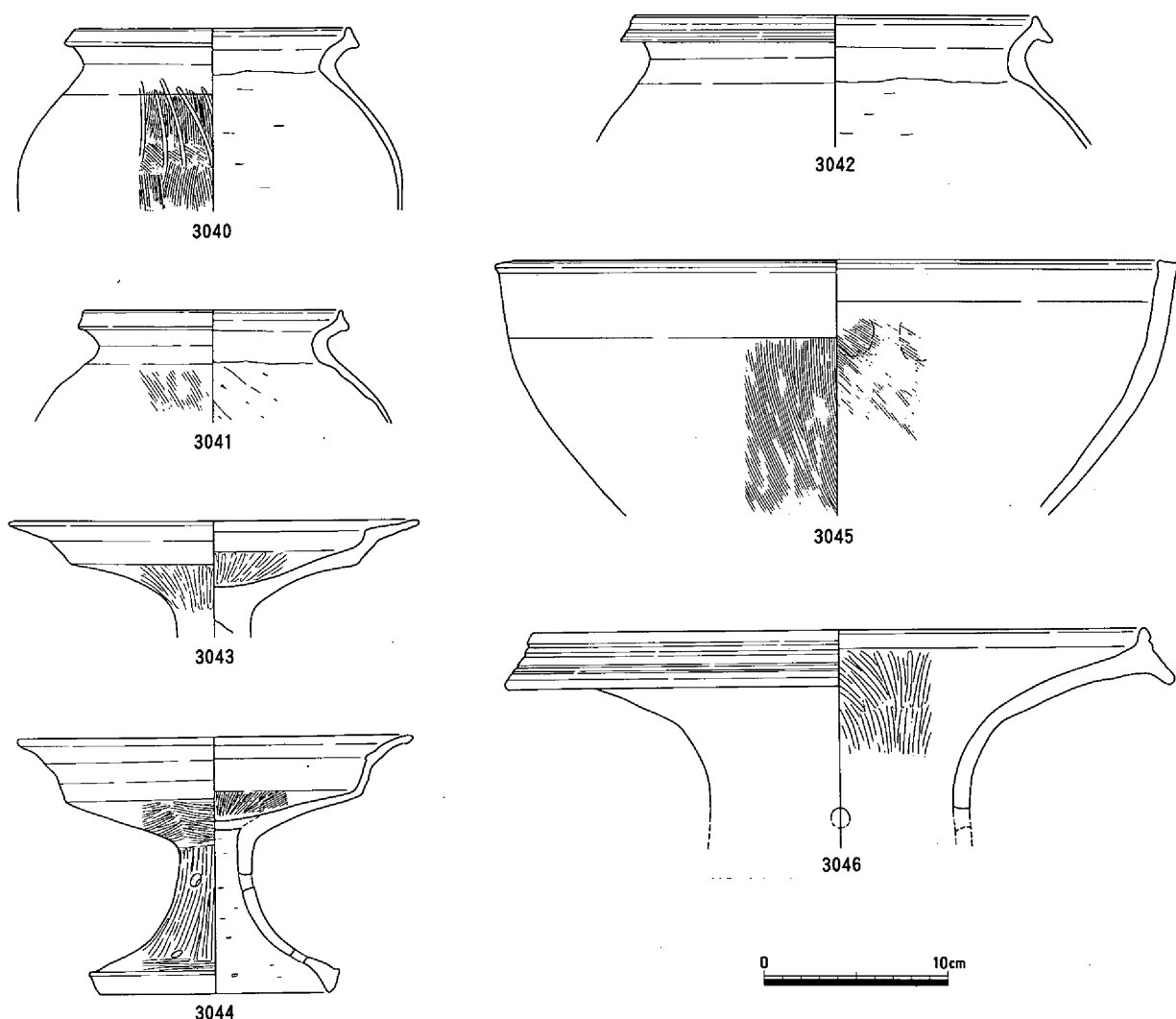


3039



第35図 袋状土坑-80 (3037~3039)





第36図 袋状土壇-80 (3040~3046)

(5) 土 壇

土壇-192 (第37図)

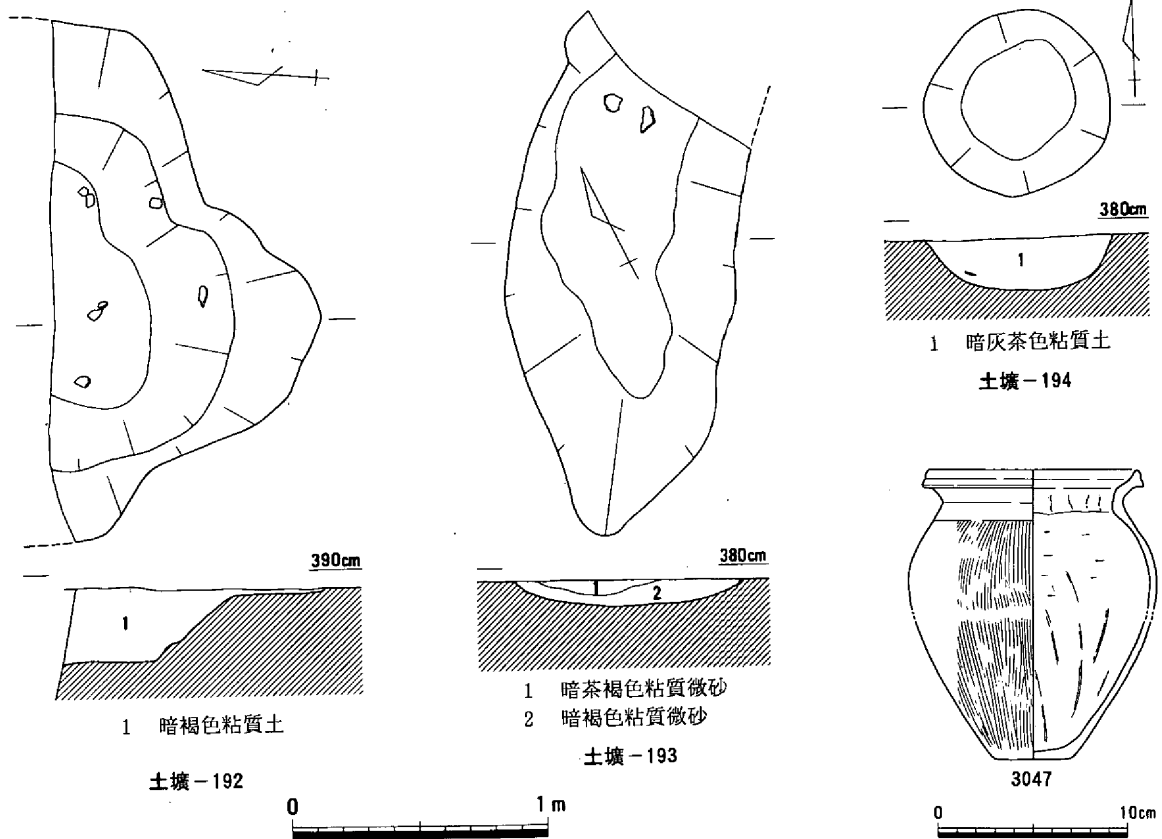
P18区の南南西隅に位置する。古・前・Ⅱの竪穴住居-134のすぐ西側に接し、東西206cm、深さ29cmの不整形の土壇であり、底部海拔高345cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土の1層であり、そこから土器小片が数点出土している。それらは弥・後・Ⅰの特徴が認められる。(高畑)

土壇-193 (第38図)

Q18区の北々西隅、竪穴住居-126の北側すぐ0.8mに位置する。土壇は古・前・Ⅱの竪穴住居-134Bにより北側に掘削を受けており、現存長210cm、幅90cm、深さ11cmを測る。最深部で海拔351cmを測り、埋土は2層からなる。第1層は炭化物を多く含み、第2層は土器片3点のみである。甕胴部下半、内外面にヘラケズリが認められ、弥・後と考えられる。(高畑)

土壇-194 (第37図)

Q18区の北側で土壇-199の北0.3mに位置する。長さ73cm、幅70cm、深さ23cmの円形土壇である。断面形は楕状を呈し、底面の海拔高は352cmを測る。埋土の暗茶褐色粘質土中から炭、土器小片が少量確認されている。3047は復元実測した甕で、弥・後・Ⅱの所産であろう。(高畑)



第37図 土壌192~194 (3047)

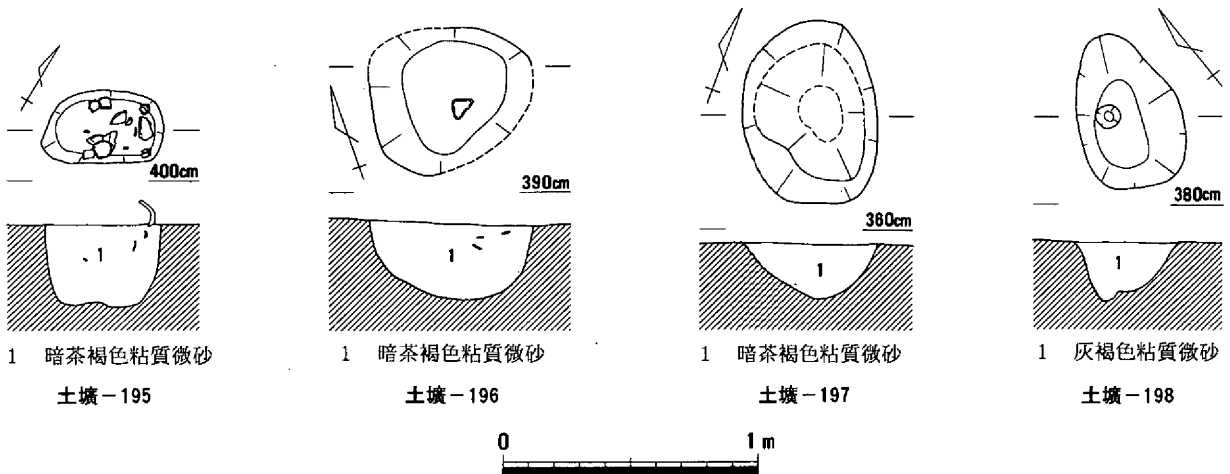
土壌-195 (第38図)

Q18区の北側、土壌-247の北東2.6mに位置する。長さ47cm、幅29cm、深さ33cmを測る不整形の土壌である。断面では明確にし得なかったが、底面には柱穴状の2穴が認められ、海拔高349~351cmを測る。遺物は土壌東側にまとまって出土しており、長頸壺、甕、高杯等の小片約20点が見られた。それらは弥・後・Ⅱの古相の特徴が認められる。(高畑)

土壌-196 (第38図)

Q18区北側、土壌-194の西2.6mに位置する。長さ68cm、推定幅58cm、深さ30cmを測る不整形の土壌である。底面の海拔高は348cmを測り、断面は碗形を呈する。時期は弥・後・Ⅱであろう。

(高畑)



第38図 土壌-195~198

土壙-197 (第38図)

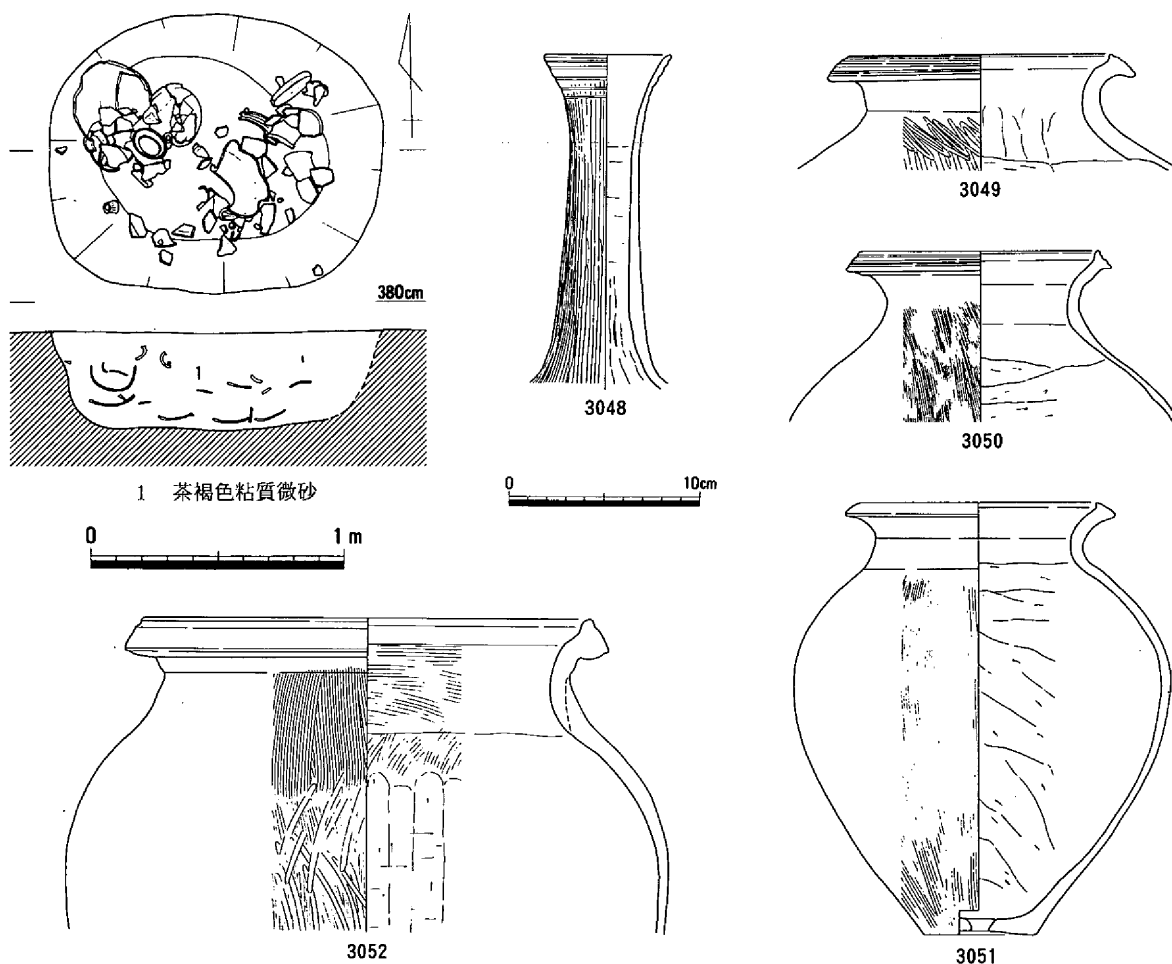
Q18区北側、土壙196の南1.3mに位置する。長さ73cm、幅59cm、深さ22cmを測る楕円形の土壙である。底面海拔高は332cmにて断面形は挿鉢状を呈する。埋土中から遺物は見られないが土壙-195、196、および周辺の土壙内埋土との類似から、弥・後・Ⅱに近いものと考えられる。(高畑)

土壙-198 (第38図)

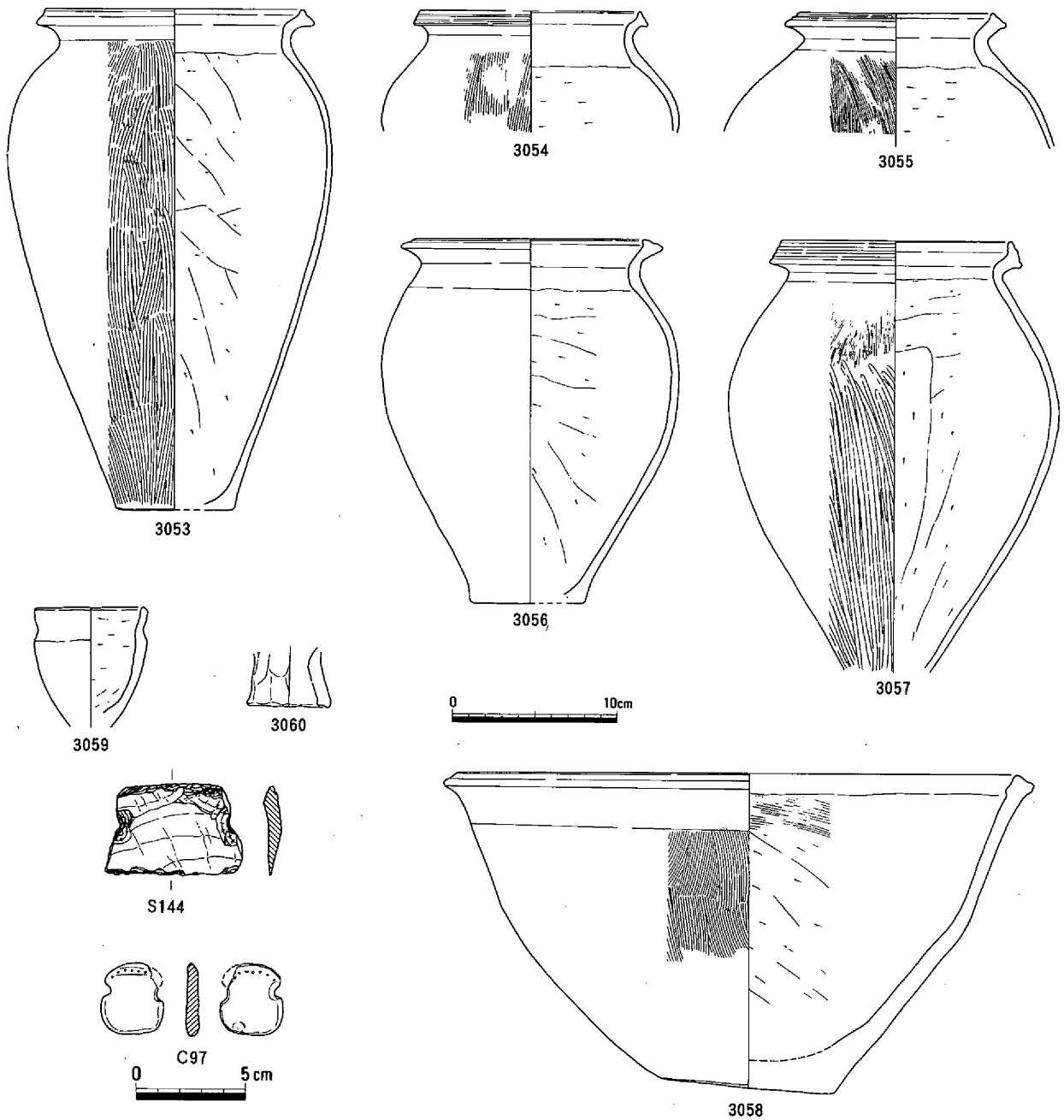
Q18区北側、土壙-197の南3mに位置する。長さ62cm、幅41cm、深さ23cmを測る不整楕円形の土壙である。底面海拔高は341cmにて埋土は灰褐色粘質微砂の1層である。埋土中から遺物は土器小片のみの出土であり、時期の確定はできないが、大きくは弥・後・前半に比定できる。(高畑)

土壙-199 (第39・40図、図版7・51・52)

Q18区の北側、土壙-194の0.4m南に位置する。弥・後・Ⅱの竪穴住居-126、127の間にある約50基の土壙中では大形に属する。長さ134cm、幅110cm、深さ38cmを測り、東西方向に長軸を持つ隅丸方形の土壙である。土壙内東端は新しい柱穴により一部破壊を受けており、底面海拔高は329cmを測る。土壙内の上層に茶褐色粘質微砂があり、下層は土器、石器、焼土ブロック、炭等が認められる。焼土ブロック下に炭層があり、土壙南側に多く認められる。土器等の遺物は平面形に沿う格好で環状に巡り、中央に土器の所在しない場所がある。遺物は床面より少し上位からの出土であり、比較的大形片が中心を占め、器種では壺、甕、高杯、鉢、製塩土器が見られた。なかでも甕が多く、3051・3053・



第39図 土壙-199 (3047~3052)



第40図 土壙-199 (3053~3058・S144・C97)

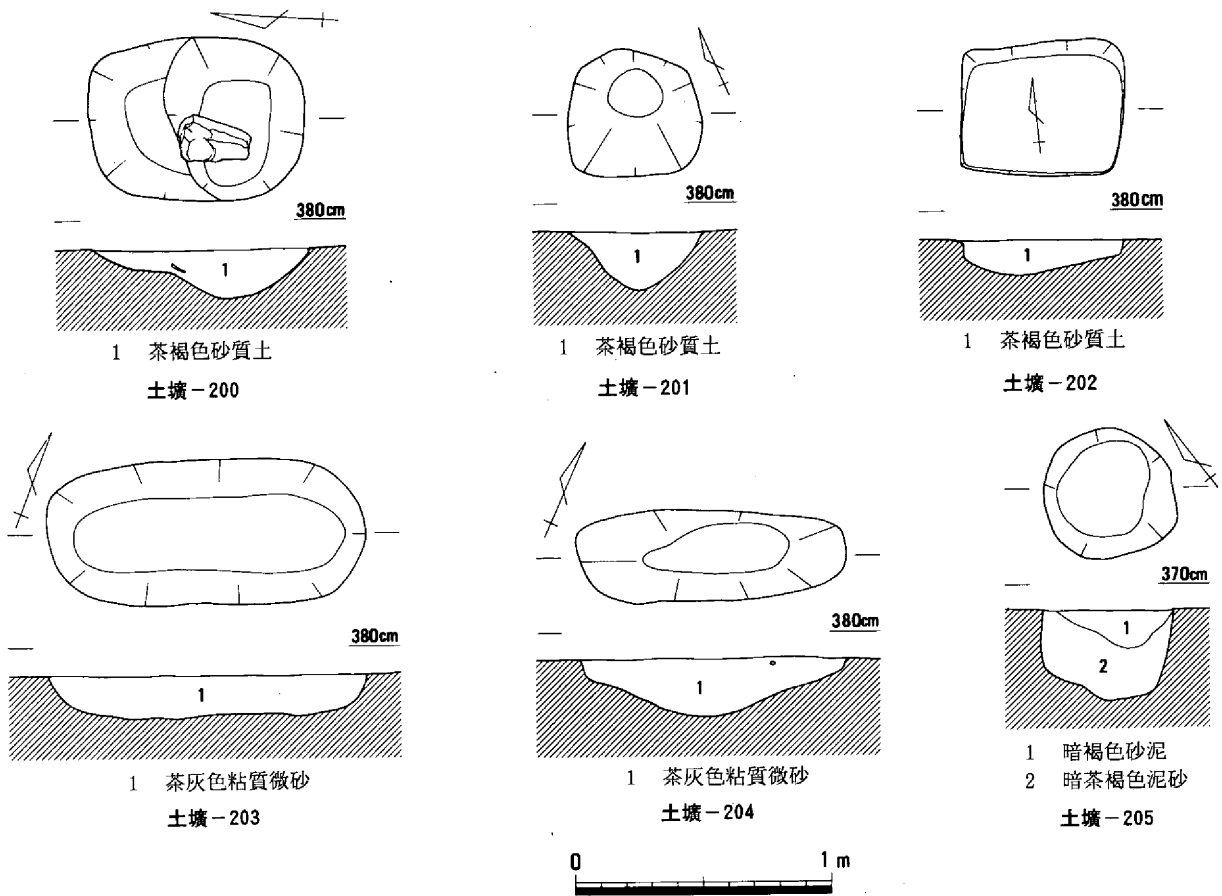
3056・3058がほぼ完形に復元し得たものである。他には打製石包丁と分銅形土製品がこれらの土器に混在して出土している。S144はサヌカイト製にて最大長6.2cm、最大幅4.2cm、厚さ0.95cm、重さ25.5gを測る。C97は上部を少し欠損しており、縦3.3cm、横2.8cm、厚さ0.5cm、重さ7.2gを測る小形品である。土器の特徴から弥・後・Ⅱと考えられる。(高畑)

土壙-200 (第41図、図版7)

Q18区北側、土壙-199の南々西5mに位置する。長さ80cm、幅55cm、深さ13cmを測る楕円形の土壙である。埋土中に長さ28cm、幅18cm、厚さ18cmの石と土器小片一点が認められた。性格は不明であるが、周辺の土壙群の状況からは弥・後・前半に比定できる可能性が強いものである。(高畑)

土壙-201 (第41図)

Q18区北側、土壙-200の東1.3mに位置する。長さ52cm、幅50cm、深さ22cmを測る不整形の土壙



第41図 土壌-200～205

である。挿鉢状の断面形を呈し、底面海拔高は343cmを測る。埋土内には遺物は認められないが、茶褐色砂質土は周辺の土壌と共通しており、弥・後・前の時期に比定することが可能である。(高畑) 土壌-202 (第41図)

Q18区の北西、土壌-200の南0.4mに位置し、長さ63cm、幅54cm、深さ14cmを測る方形土壌である。円形、楕円形、不整形、隅丸方形等の土壌プランの中で数少ない方形のものである。埋土は茶褐色砂質土の1層であり、炭、土器等の遺物は認められなかった。底面の海拔高は354cmを測る。(高畑) 土壌-203 (第41図)

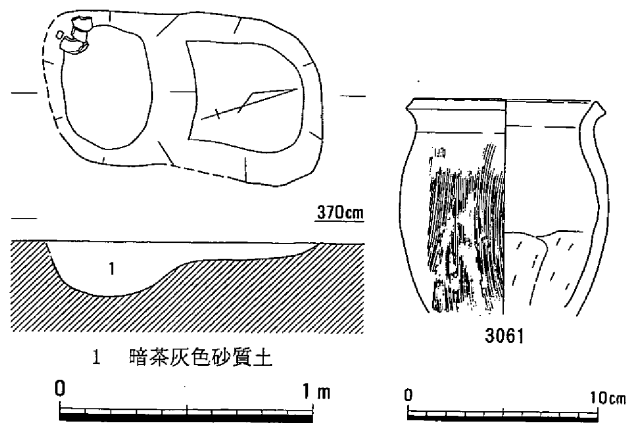
Q18区の北西、土壌-202の東側0.6mに位置する。長さ125cm、幅57cm、深さ12cmを測る楕円形の土壌である。長軸の方向をほぼ東西にとり、埋土は茶灰色粘質微砂の1層である。土壌底海拔高は351cmを測る。層中から土器小片が3点出土しており、弥・後・前半に比定できる。(高畑) 土壌-204 (第41図)

Q18区の北西、土壌-203の東側0.7mに位置する。長さ106cm、幅57cm、深さ12cmを測る楕円形の土壌である。主軸方位は土壌-203とほぼ並行しており、埋土は茶灰色粘質微砂の1層である。土壌底海拔高は347cmを測る。土器小片が5点出土しており、弥・後・IIと考えられる。(高畑) 土壌-205 (第41図)

Q18区北西、土壌-204の南側1.7mに位置する。長さ54cm、幅52cm、深さ35cmを測る円形の土壌である。埋土は2層からなり、第1層の暗褐色砂泥中から、炭および土器小片が出土している。第2層からの遺物は認められない。底面は高低差が認められ、深い方で海拔322cmを測る。弥・後・前半と考えられる。(高畑)

土壇-206 (第42図)

Q18区の北西、土壇-202の南0.8mに位置する。長さ104cm、幅65cm、深さ21cmを測り、長軸を東西にとる不整形の土壇である。北半が浅く、南半が深いもので底面海拔高333cmを測る。埋土は暗茶灰色砂質土の1層からなり、上位に甕3061が壊れた状態で出土している。3061は底部を欠いており、口径9.6cm、最大径11.0cmを測る。器外面下半に煤の付着が認められ、器形の特徴から弥・後・前半に比定できる。



(高畑)

第42図 土壇-206 (3061)

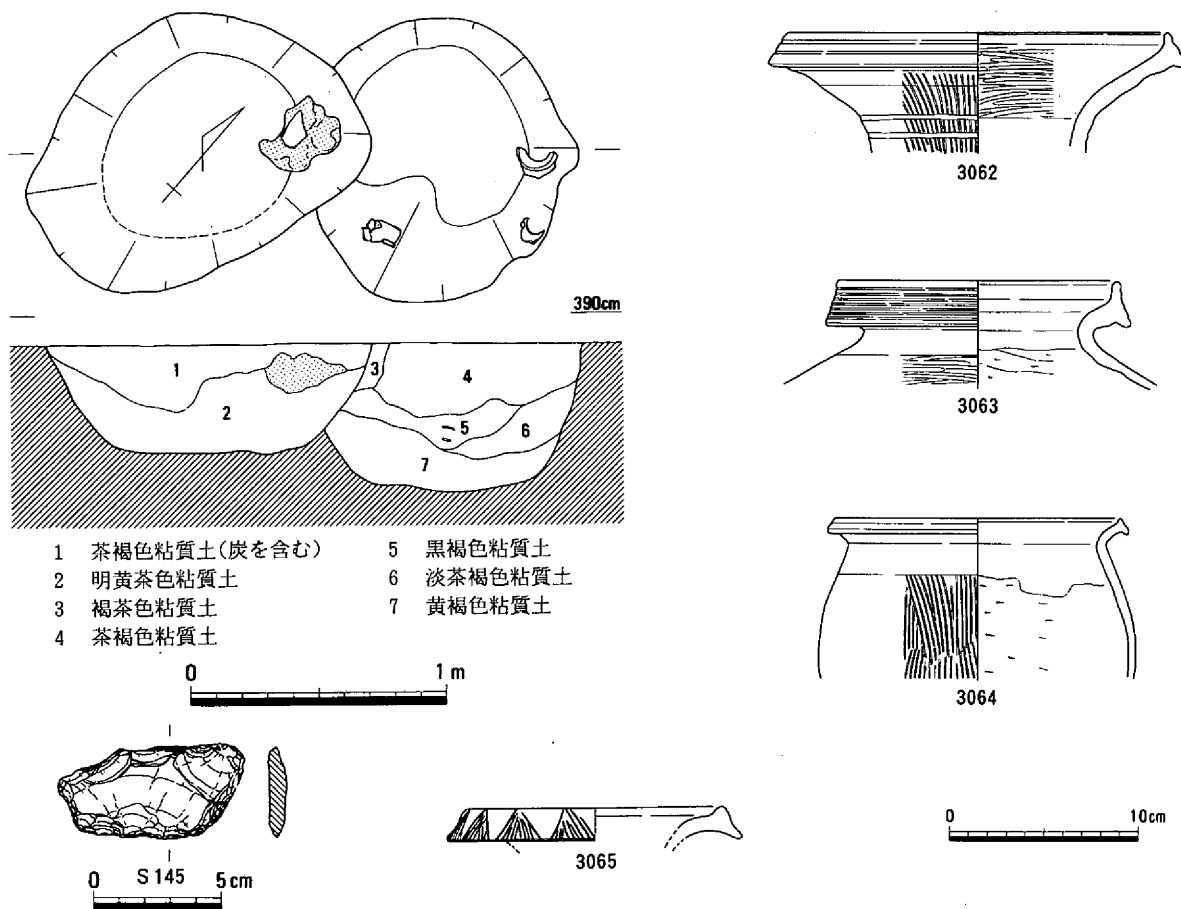
土壇-207 (第43図、図版7)

Q18区の北西、土壇-206のすぐ東側に位置する。土壇-208により切られており、長さ114cm、推定幅105cm、深さ55cmを測る円形の土壇である。埋土は5層からなり、第7層に遺物が認められ、底部海拔高は319cmを測る。規模等は土壇-208~210に近いものであり、弥・後・IIに比定できるものである。

(高畑)

土壇-208 (第43図)

Q18区の北西、土壇-207を切ってその南西に位置する。長さ136cm、幅97cm、深さ42cmを測る不整



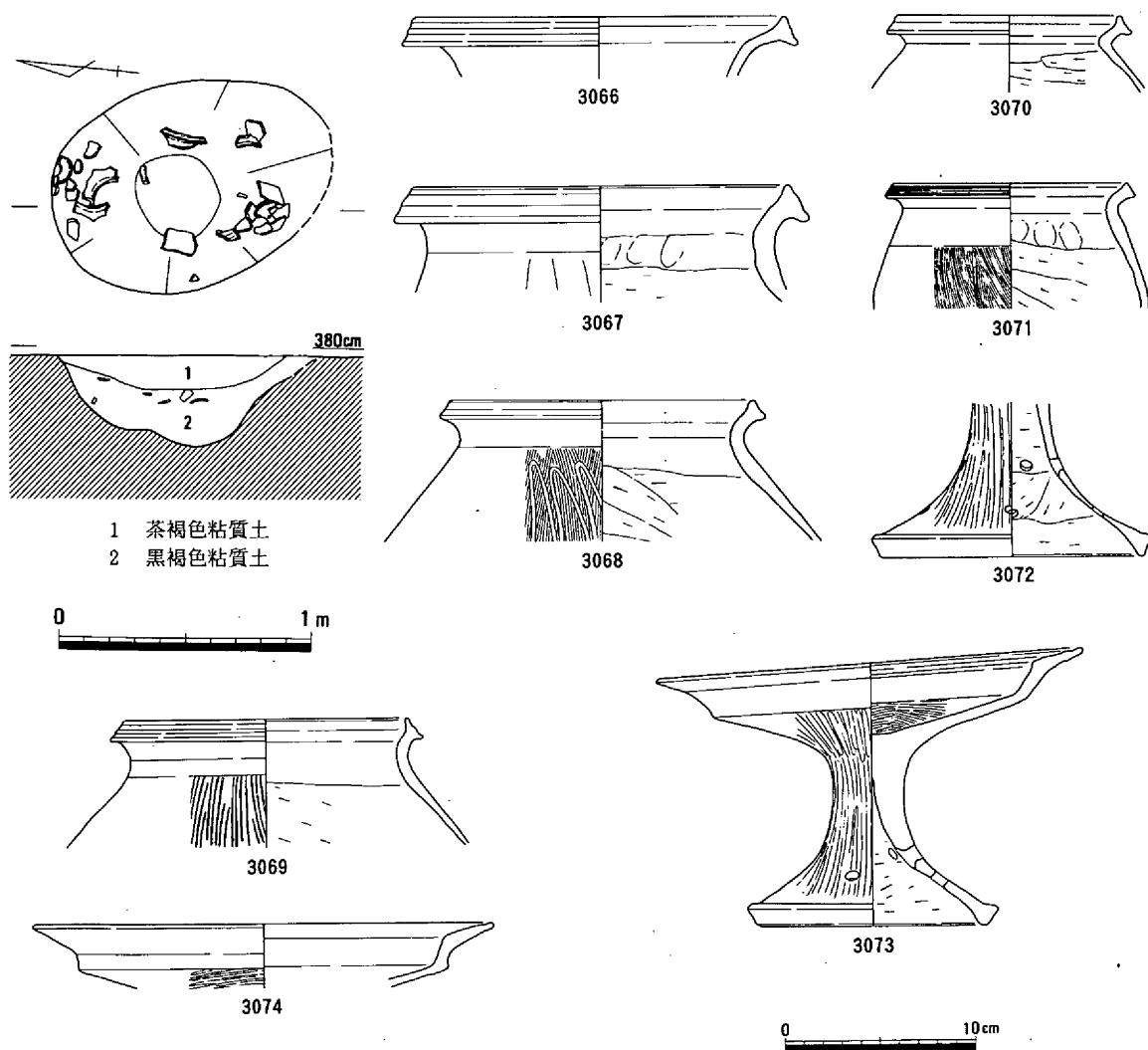
- |                |           |
|----------------|-----------|
| 1 茶褐色粘質土(炭を含む) | 5 黒褐色粘質土  |
| 2 明黄茶色粘質土      | 6 淡茶褐色粘質土 |
| 3 褐茶色粘質土       | 7 黄褐色粘質土  |
| 4 茶褐色粘質土       |           |

第43図 土壇-207・208 (3062~3065・S145)

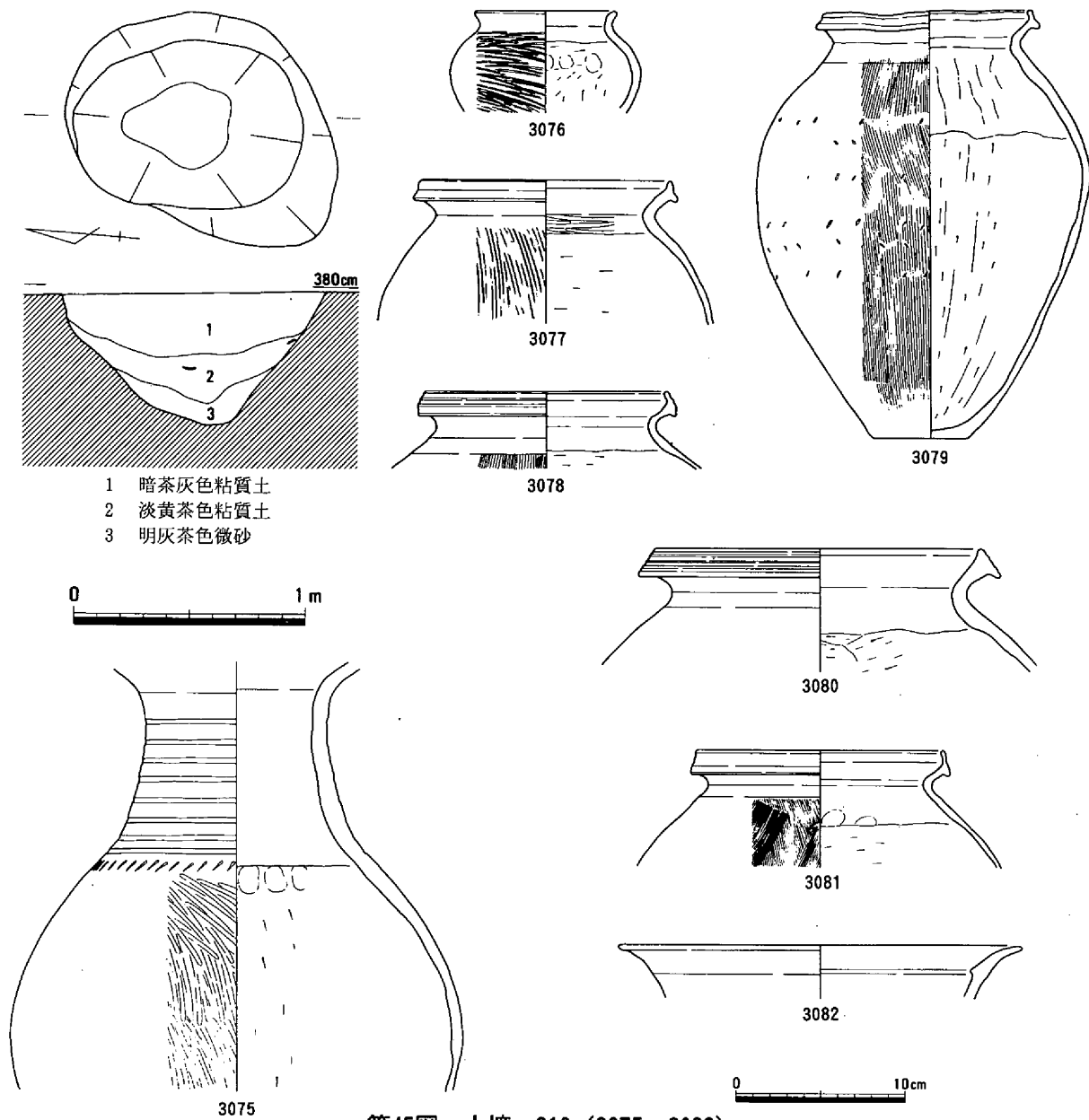
楕円形の土壌である。埋土は2層からなり、第1層中に炭、土器小片を含み、第2層間に粘土塊がみられた。その規模は30×23×15cmである。土壌底はほぼ平坦にて海拔高333cmを測る。遺物は茶褐色粘質土中から散布した状況で出土しており、高杯、甕、壺等の小片が10数点みられた。高杯の杯部の特徴から弥・後・Ⅱに比定できる。なお、土壌-208はほぼ同規模の土壌-207が埋没完了後に新たに掘削されたものであるが、出土の土器には時期的な隔たりはあまり感じられない。(高畑)

土壌-209 (第44図、図版8・52)

Q18区の北西、土壌-208の0.5m西に位置する。土壌-210により南端を一部削られている。長さ126cm、幅94cm、深さ59cmを測る不整円形の土壌である。埋土は2層からなり、第1層が土器を含まない茶褐色粘質土、第2層は炭、土器片を比較的多く含む黒褐色粘質土である。土器はすべて破片であり、底面に接着するものはほとんど無く、床面から浮いた状態での出土である。器種は壺、甕、高杯がみられ、色調では3066・3071の壺、甕が赤褐色、他の土器が鈍い橙色を呈する。胎土においても2mm以下の石英、長石、雲母が混入されており、大きな差は認められない。高杯3072は脚筒部に二段の透し孔があり下段が4孔、上段が3孔となっている。高杯3073では脚筒部に3072と同じく二段の透し孔があり、下段に3孔、上段に3孔が認められる。ほぼ完形となる3073の法量は、口径22cm、最大径22.4cm、底径11.7cm、器高14.7cmを測る。また、脚内部は中空と中実の二者が存在する。(高畑)



第44図 土壌-209 (3066~3074)



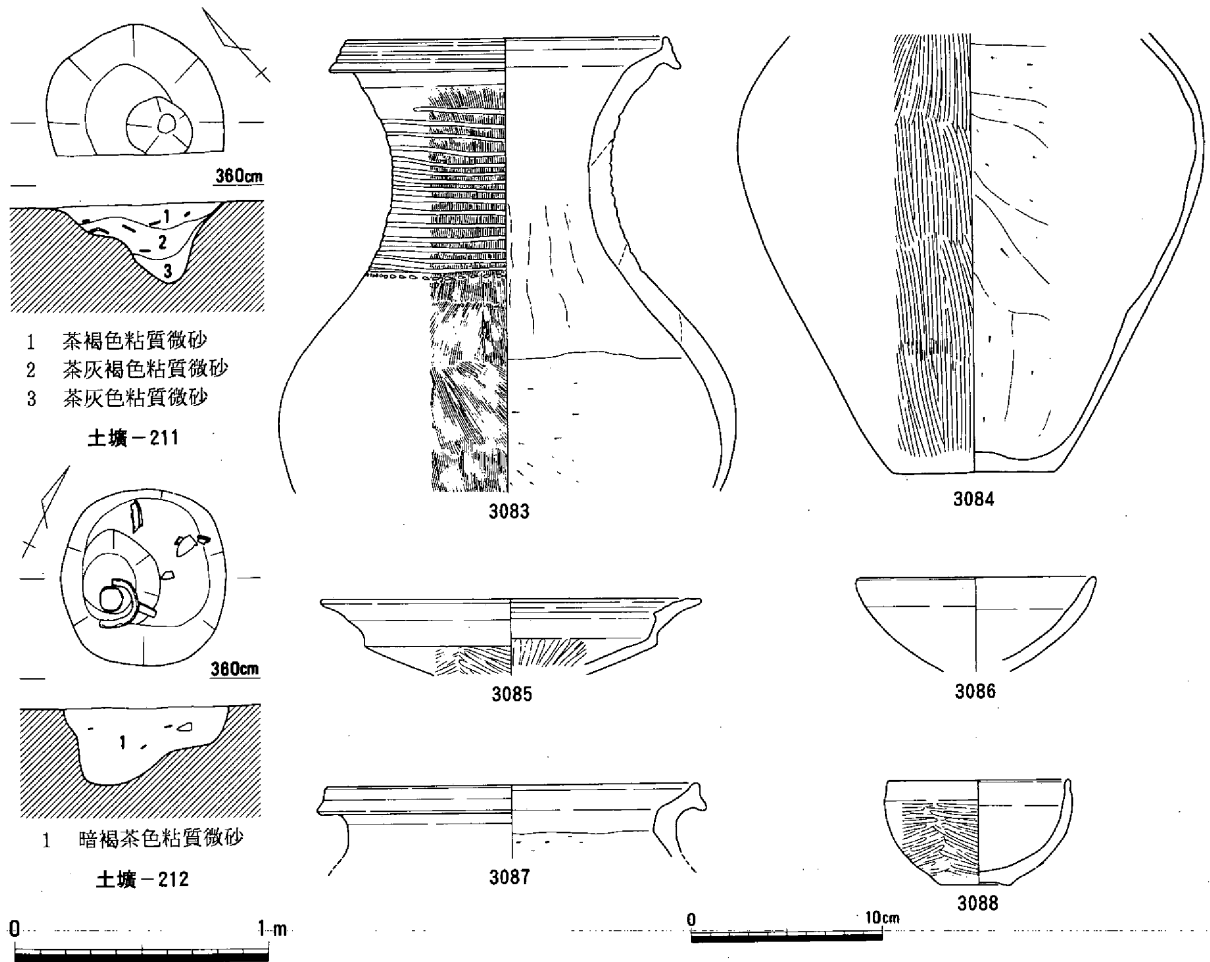
- 1 暗茶灰色粘質土
- 2 淡黄茶色粘質土
- 3 明灰茶色微砂

第45図 土壌-210 (3075~3082)

土壌-210 (第45図、図版8・52)

Q18区の北西、土壌-209を切り、すぐ南に位置する。長さ114cm、幅82cm、深さ34cmを測る楕円形の土壌である。埋土は3層からなり、各層に土器片、炭、焼土塊、ガラス滓を含む。断面形は播鉢状を呈し、底部海拔高334cmを測る。土器は3079が唯一ほぼ完形に復元されたが、他はすべて小片である。3077・3080が第1層出土であり、3075・3076・3081が第2層の出土である。器形、調整の特徴から弥・後・Ⅱに比定できる。焼土塊は第1層に多く、米粒状から2×1.5cmまでのものが221g、被熱した石、花崗岩(2×2cm)が606g、炭粒が2gである。第2層も焼土塊が207g、花崗岩の礫311g、炭粒が11gと出土している。ガラス滓は第1層に最も多く、下層に行くにしたがって少なくなり、第3層では6.1gである。ガラス滓の総量は約500gあり、長さ5cm、幅4cm、厚さ1cmの滓が最大で、小さいもので米粒位である。灰色塊状で多孔質であり、引き伸ばされた筋状の痕跡および圧着された溝状の痕跡が認められるものもある。他に2.5×1.5cmの鉄器の小破片が出土しているが、器種については不明である。製塩土器の脚小破片が2点確認されている。(高畑)





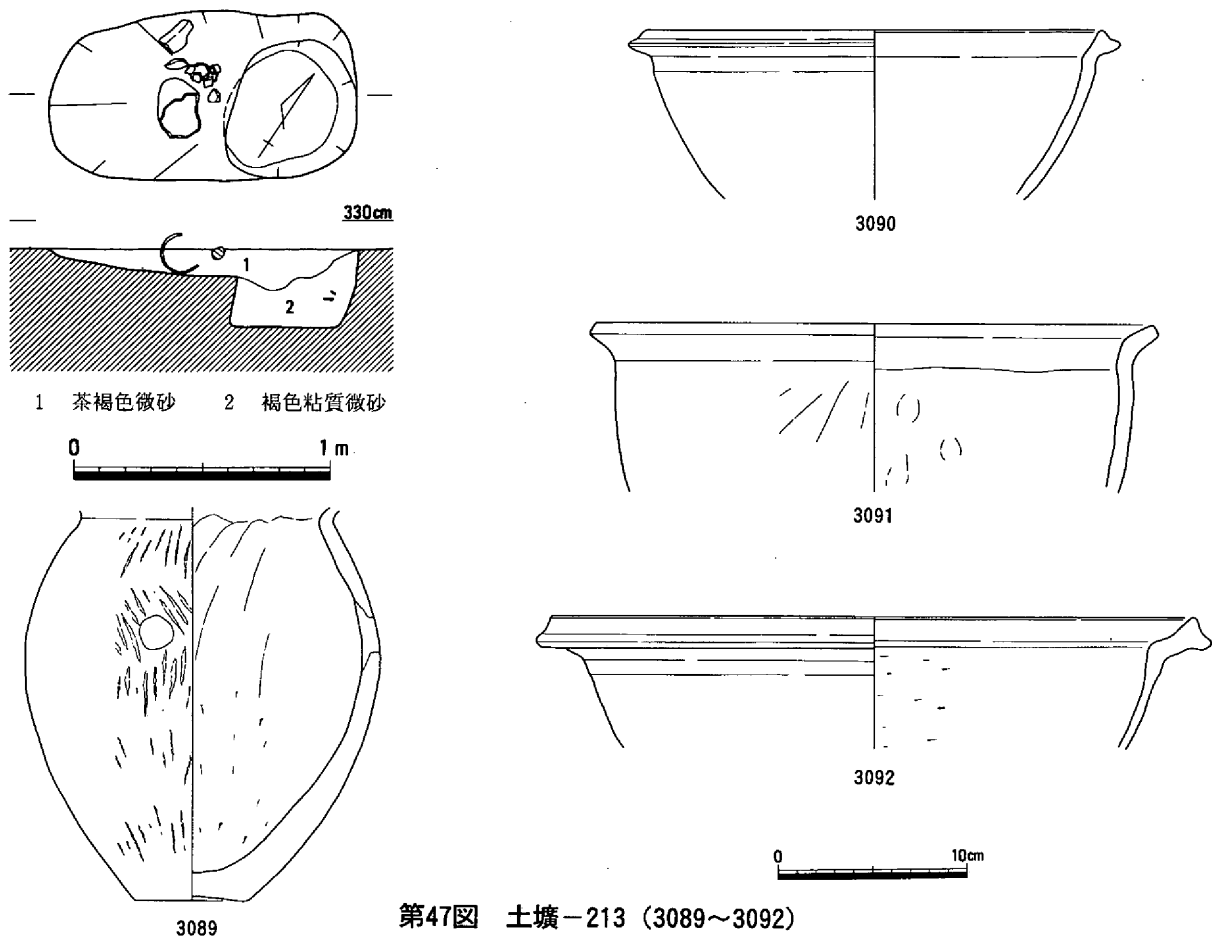
第46図 土壇-211 (3083~3086)・212 (3087~3088)

土壇-211 (第46図、図版52)

Q18区の北西、土壇-210の南東2.2mに位置する円形の土壇である。長さ70cm、推定幅70cm、深さ31.5cmで底面海拔高は322cmを測る。埋土は3層からなり、第1層、第2層に炭および土器片を含み、第3層には遺物は認められない。とりわけ遺物は第2層の茶灰褐色粘質微砂中に多く、若干粘性の強い土と混在して出土している。器種は壺、甕、高杯、鉢等があり、すべて破片である。破損後に廃棄された状況での出土である。長頸壺3083は頸部に連続するヘラ描き沈線文が施文されている。3085杯部の口縁は外面に屈曲部を持たず、内面に屈曲部を有する。杯部内外面は円滑なヘラミガキにより仕上げられている。この形状を呈する高杯の出土例は非常に多く、地域色を呈示している。出土遺物の特徴から弥・後・IIの古相に比定できる。(高畑)

土壇-212 (第46図、図版8)

Q18区の北西、土壇-211の東3.4mに位置する。長さ70cm、幅65cm、深さ30cmを測る円形の土壇である。土壇-211と規模、断面形等が類似している。段があり、底面海拔高は339cmを測る。埋土は1層からなるが、上、中、下層において硬さが異なり、炭層の状況からも多少分層が可能か。遺物は底面に付着するものではなく、甕、高杯、鉢等の破片が10点ほど出土している。これらも廃棄された状況を呈しており、3088の鉢のみが完形に近いものである。土壇-212、213、215等も比較的まとまった土器が認めらる。土器、なかでも高杯小片の特徴から弥・後・IIの時期に比定できる。(高畑)



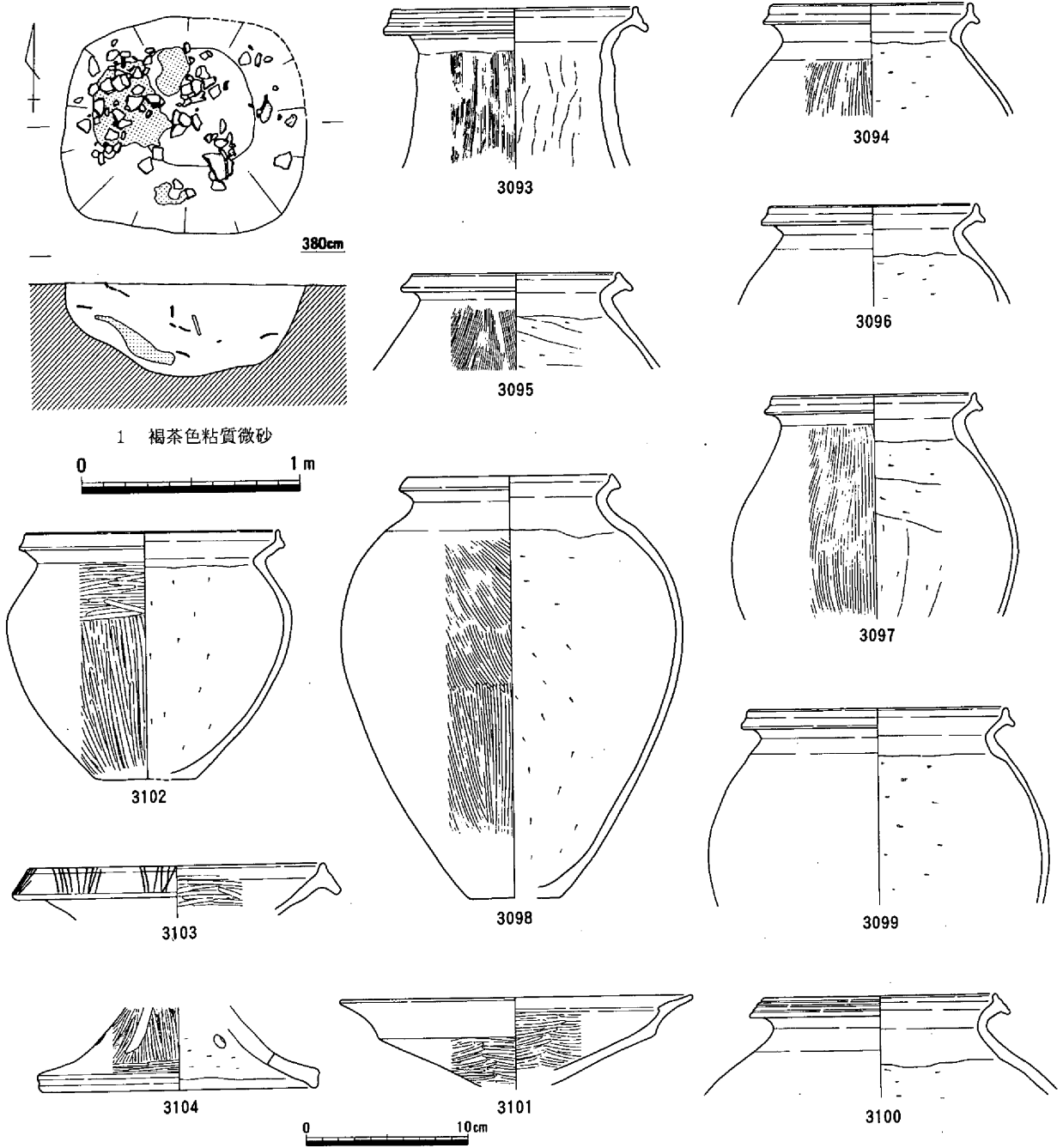
第47図 土壇-213 (3089~3092)

土壇-213 (第47図、図版9)

Q18区の北西、土壇-212に接して西隣りに位置する。長さ120cm、幅67cm、深さ31cmを測る隅丸方形の土壇である。断面形は2段になっており、底面海拔高は336cmを測る。埋土は2層からなり、第1層は砂質、第2層は粘質が強い土である。遺物は第1層中からのものが中心であり、3089が底着である。他の土壇同様に土器は廃棄された状況を呈している。鉢、甕、高杯片がみられ、3089は胴の最大径部分に径1.7cmの穿孔が認められる。器形、手法の特徴から弥・後・Ⅱと考えられる。(高畑)

土壇-214 (第48図、図版9・52)

Q18区の北西、土壇-213の北北西1mに位置する。長さ112cm、幅100cm、深さ42cmを測る隅丸方形の土壇で、北東隅を古・中・Ⅱの竪穴住居-166により一部壊されている。土壇の埋土は褐茶色粘質微砂の1層としたが、炭、土器片の堆積状況はレンズ状を呈している。底面の海拔高は322cmを測る。遺物は北西から投入されたものが数多く、他に粘土塊が3箇所認められた。底面近くで40×40×0.9cmの方形を呈するもの、土器片と混在する若干小形のもの2点である。土器は壺、甕、高杯、器台、鉢等の破片が出土している。器種は甕の多さが目立ち、壺、高杯、鉢が少し混入する状況である。口縁外面に凹線文を残す3100に外の甕は、少し強いヨコナデにより口縁外面の中央がくぼみ、口縁端部が真上に引き出された形態となっている。器外面の調整は縦位、斜位のハケメにより行われており、器内面は頸部屈曲位置の近くまで横位のヘラケズリが施されている。3102は鉢であり、器外面は胴部下半が縦位、上半が横位のヘラミガキが施され、内面は縦位のためのヘラケズリである。土器の特徴から弥・後・Ⅱの時期に比定できる。(高畑)



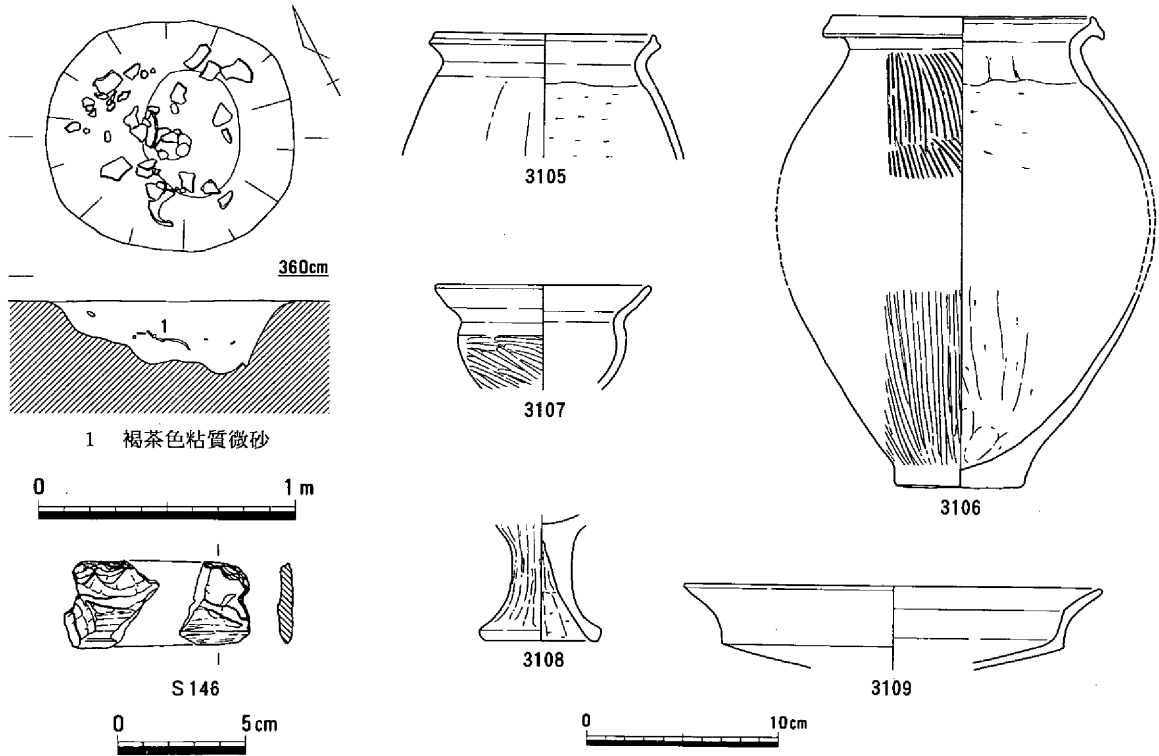
第48図 土壇-214 (3093~3104)

土壇-215 (第49図、図版9)

Q18区の北西、土壇-214の北東0.5mに位置する。長さ96cm、幅87cm、深さ29cmを測る円形の土壇である。土壇底は平坦でなく、西から東に傾斜が認められる。遺物は海拔高325cmを測る底面から少し離れた状態で出土しており、すべてが破片である。壺、甕、高杯、鉢、器台が認められる。3109は土壇-211、214の高杯と比較すると多少新しい形状の高杯である。3107も新しい時期のものであろう。他にはサヌカイト製の打製石包丁片が2点出土しており、同一の個体と考えられる。

本土壇を含めて土壇-212~214の4基の土壇は約9㎡の範囲内にまとまって存在し、土器廃棄の堆積状況、ほとんど近接する時期の所産であることなどより、弥生時代後期前半の竪穴住居と有機的関係を保持しながら生活機能を占有場所により分担していたものと考えられる。おそらく、物の廃棄場所に位置づけられる。

(高畑)



第49図 土壙-215 (3105~3109・S146)

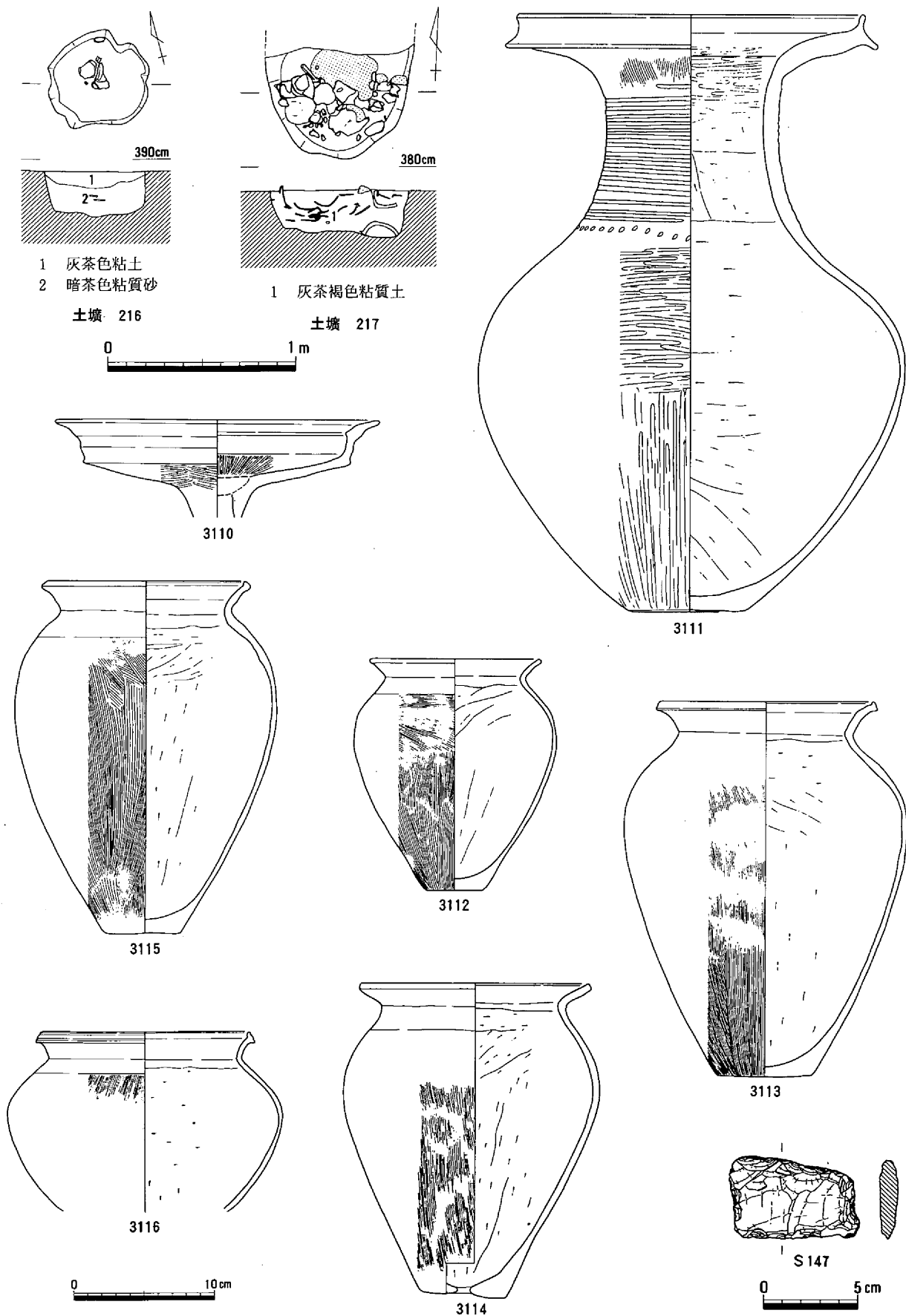
土壙-216 (第50図)

Q18区の北、竪穴住居-127の真南1.7mに位置する。長さ56cm、幅51cm、深さ20cmの不整円形の土壙である。埋土は2層からなり、第1層は粘土塊、第2層は暗茶灰褐色粘質砂である。粘土塊は50×53×0.9cmにて第2層を被覆しており、遺物は第2層中の上位から出土している。3110の高杯が1点であり、破損した状態での出土である。高杯の形状等から弥・後・Ⅱに比定できる。(高畑)

土壙-217 (第50図、図版10・53)

Q18区の北、土壙-216の東南東に位置する土壙である。古・前・Ⅱの竪穴住居-153によって削平され、北半を消失している。南北残存長55cm、幅78cm、深さ23cmを測る楕円形の土壙であろう。底部はほぼ平坦にて海拔高343cmを測る。土壙内は土器片が充満しており、かろうじて灰茶褐色粘質土が土器の間に入り込む状況である。遺物は土器が中心であるが、石器が1点出土している。長頸壺、甕、高杯、鉢、製塩土器等である。甕3114・3115は外面の胴部下半に煤が付着しており、3114は底部の穿孔が認められる。弥・後・Ⅱに比定できる。

中屋調査区の弥生時代後期の土壙は、同時代の竪穴住居-127を挟んで東西の2群に分かれる。西群が土壙-195~215を中心に約50基、東群が土壙-216~238を中心に約50基が存在する。とりわけ、西群では17×8mの南北に長い範囲内に分布がまとまっており、遺物の廃棄穴として利用されている。しかし、土壙-210のようにガラス滓、焼土粒を多く含むもの、さらに大形の粘土塊を持つ土壙-208、214等が認められる。東群では竪穴住居-130A・Bの南側を中心に6基の袋状土壙と混在して土壙が分布し、それらの中にも西群と同じく粘土塊を有する土壙-216、217が存在した。数軒の住居と約100基からなる土壙群のまとまる50×30mの範囲(南に広がる可能性は大きい)において、ガラス滓、粘土塊の遺物から土製品の製作、ガラス製品の製作を含め、周辺に生産遺跡の存在を考えると可能であろう。(高畑)



第50図 土壌-216 (3110)・217 (3111~23116・S147)

土壙-218 (第51図、図版54)

中屋調査区の南端部に位置し、竪穴住居-130の南に近接している。

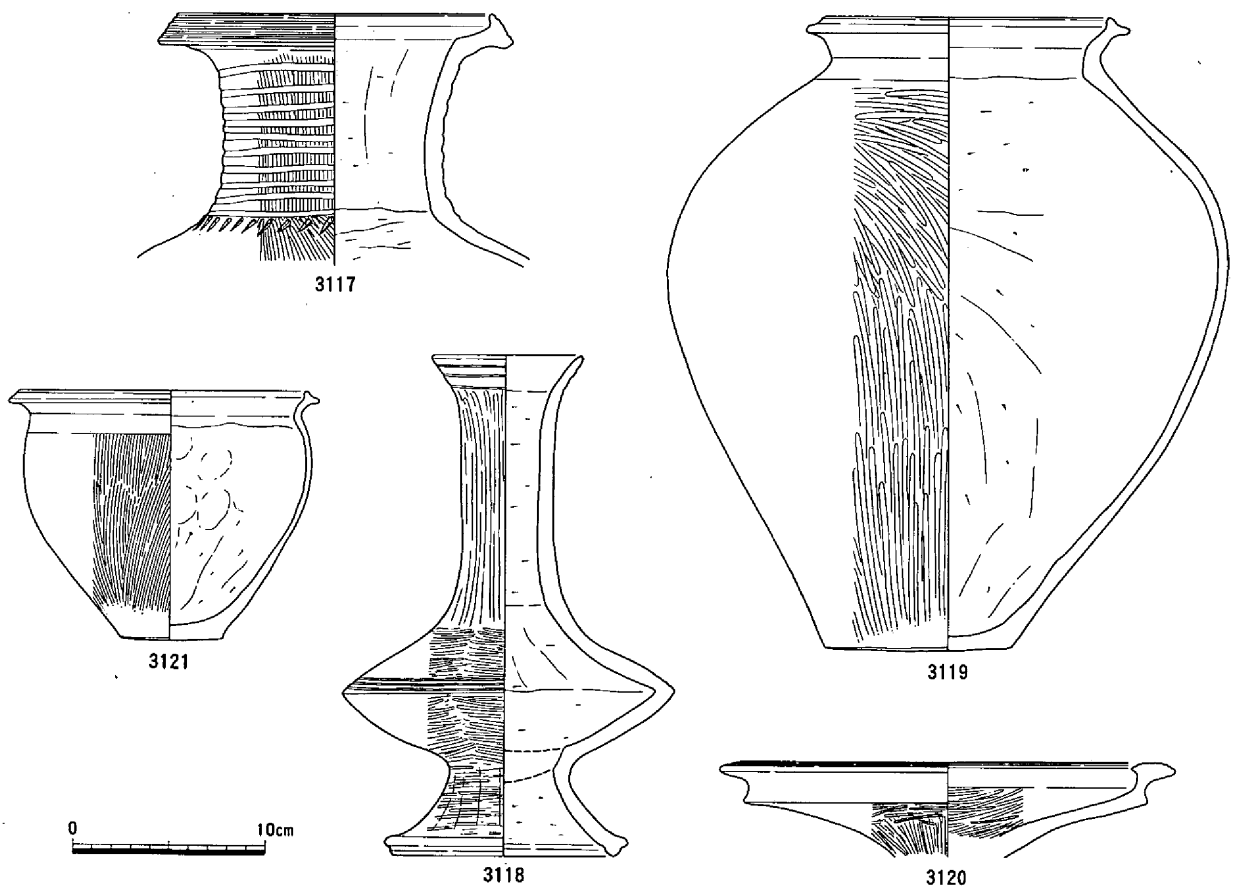
小形の楕円形を呈する土壙である。小形の土壙にもかかわらず、埋土中には、少しまとまった土器が出土した。復元可能な個体もあり、近くで使用されたものと推測される。

埋土中の土器には、壺2個、甕3個、高杯1個、鉢1個がある。図化したものでは、長頸壺3117、台付細頸壺3118、甕3119、高杯2120、鉢3121がある。

長頸壺は、胴部以下を欠失しているが、胴部から朝顔形に開く口縁部で、頸部には沈線を施し、肩部には「ノ」の字状文の施文がみられる。細頸壺は、胴部がそろばん玉の形状を呈し、頸部は細長く上方へのび、口縁部は小さく開く。短い脚が付き、脚端部は肥厚する。甕と壺は、口縁部を「く」の字状に曲げ、端部を肥厚する。時期は弥・後・Iに比定される。 (正岡)

土壙-219 (第52図、図版10・54)

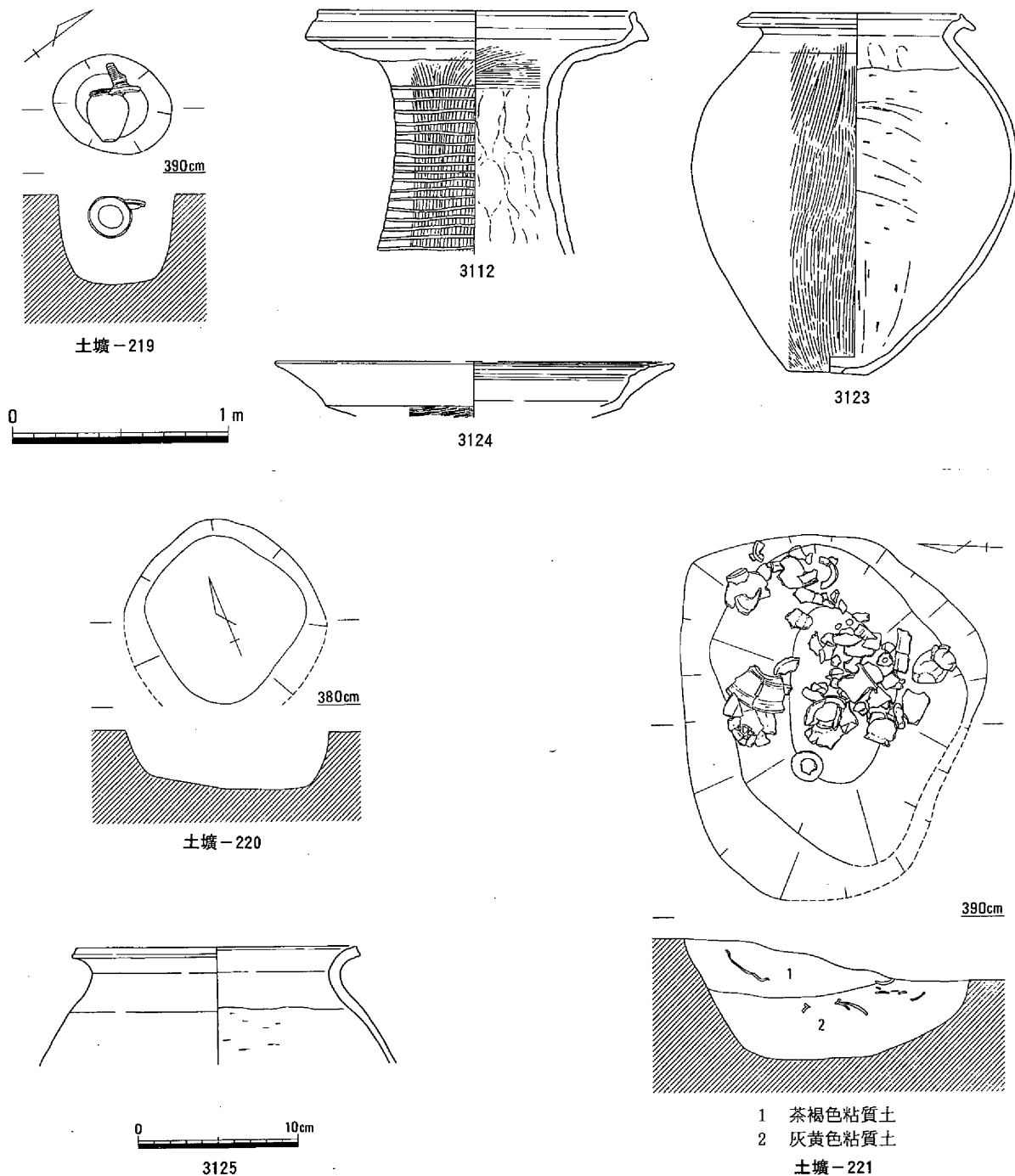
Q18区中央部やや北よりの位置に検出した。検出面での平面形は少し東西方向に長いが円形を呈している。検出面での規模は長径54cm、短径44cmを測る。底面は浅く窪み、標高は340cmを測る。壁面は緩やかにふくらみを持つ。検出面からの深さは40cmを測る。出土遺物は、壺3122がある。裾に向けて少し開く頸部にハケメとヘラガキ沈線が施される。3123は甕で、胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリと口縁部直下にユビオサエが施される。胴部の最大径はほぼその中位にある。底部には小円孔が穿たれている。3124は高杯の杯部である。時期は弥・後・IIに属するものと考えられる。 (井上)



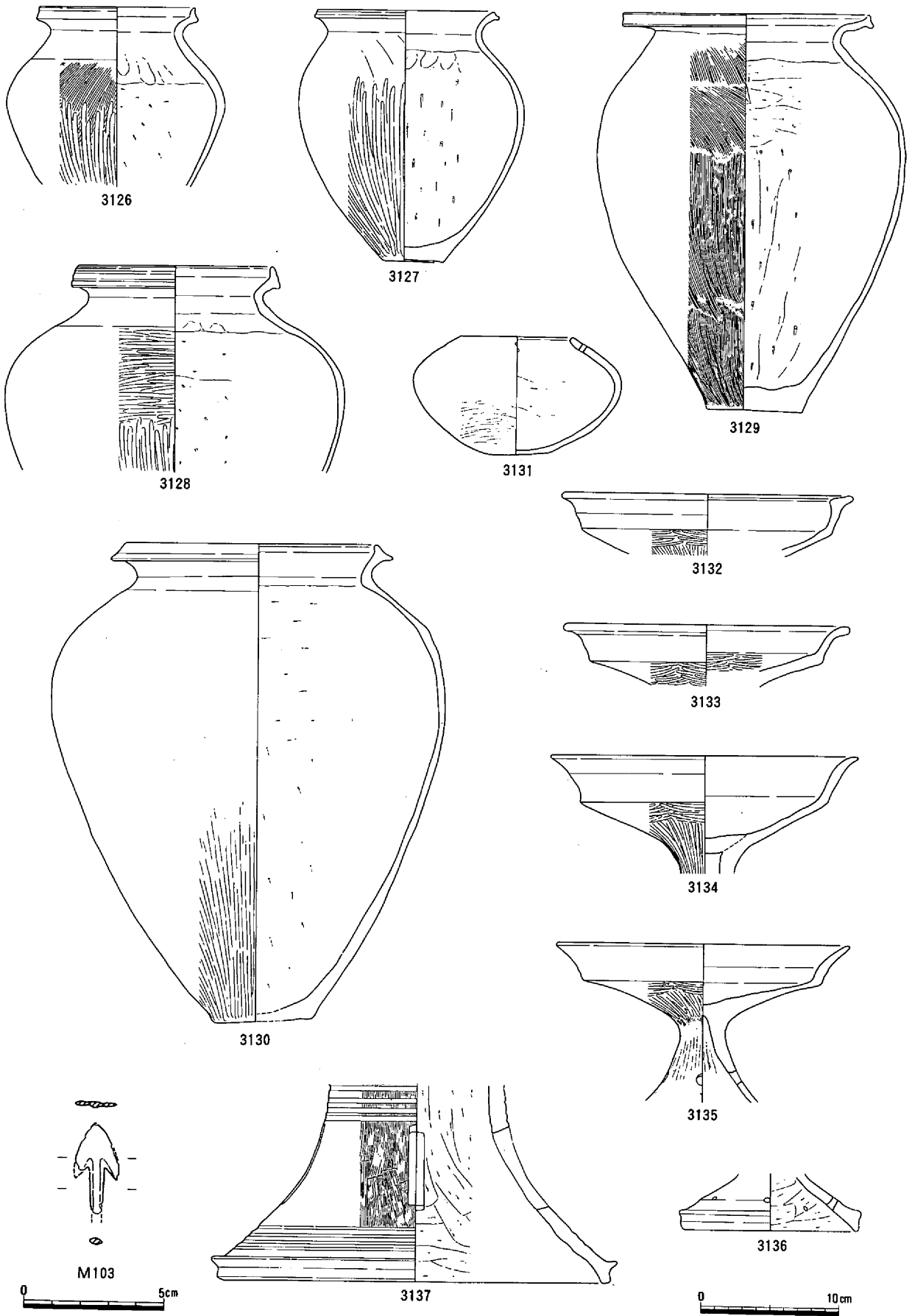
第51図 土壙-218 (3117~3121)

土壇-220 (第52図、図版11)

Q18区中央部やや北よりの位置に検出した。検出面において平面形の全体は把握しきれなかったが隅丸方形に近い形状を呈していたものと推測される。検出できた最大径は90cmを測る。底面は少し北東方向に傾斜するが床面は平坦である。底面の径は80~72cm、最深部の標高は341cmを測る。壁面は少し開きながら立ち上がり、検出面からの深さ28cmを測る。土壇からの出土遺物は極めて少なく図示できたのは一点のみである。3125は甕である。外反した口縁部の端部はほとんど肥厚することなく端面はわずかに窪む。胴部内面はヘラケズリが施される。時期は弥・後・IIと考えられる。(井上)



第52図 土壇-219 (3122~3124)・220 (3125)・221



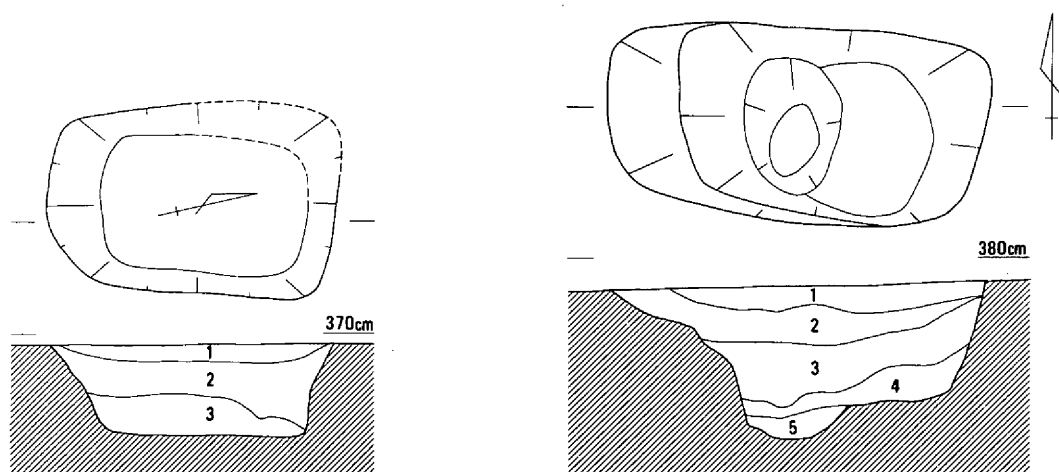
第53図 土壙-221 (3126~3137・M103)



土壇-221 (第52・53図、図版11・54・55)

Q18区中央部やや北より、調査区の南端に近い位置に検出した。南西側の一部を新しい時期の遺構により削平されているため全体の形状は不明であるが、五角形に近い不整形を呈している。検出面での長さ170cm、幅142cmを測る。底面は平坦に近いが浅く窪み、最深部の標高は319cmを測る。壁面は大きく開きながら直線的に立ち上がり、断面形は椀形を呈している。検出面からの深さは53cmを測る。土壇からは上層を中心に多量の土器が出土した。

出土遺物として甕、高杯、鉢、器台、銅鏃などがある。3126~3130は甕である。3127・3129は口縁端部がわずかに肥厚するものである。他のものは口縁端部が上方、もしくは上下に拡張するものである。胴部外面はヘラミガキ、ヘラミガキとハケメが施される。胴部内面はほぼ全面にヘラケズリが施されるが、3126~3128は口縁部直下にユビオサエが見られる。3131は鉢である。胴部最大径がほぼ中位にあり、大きく張る形状を呈している。口縁端部は丸く収められ、端部に近い位置に小円孔が穿たれている。3132~3136は高杯である。3123は体部から立ち上がった口縁部の端部が少し内傾して拡張するものである。3133~3135は体部から立ち上がる口縁部が外方に湾曲しながら伸びるものであり、端部は丸く収められる。坏部の内外面にはヘラミガキが施される。3134は杯部と脚部との堺には円盤状の粘土を充填するものである。3135は脚部の一部が残存するもので、脚柱部少し短くなる傾向が見られる。3137は器台の下半部である。外面は沈線とハケメが施される。内面はヘラケズリが施され、方形の透かし孔が見られる。M103は銅鏃である。茎の一部を欠くがほぼ完形品である。残存長3.3cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重量0.8gを測る。時期は弥・後・Ⅱに属するものと考えられる。(井上)



- 1 茶褐色粘質土
- 2 明茶褐色粘質土
- 3 淡黄茶色粘質土

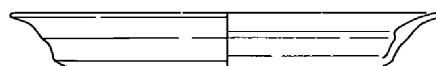
土壇-222

- 1 淡黄褐色土
- 2 淡茶褐色土
- 3 淡灰褐色土
- 4 淡灰茶褐色土
- 5 淡黄色土

土壇-223



3138



3139



第54図 土壇-222 (3138)・223 (3139)

土壇-222 (第54図)

Q18区中央部やや北よりの位置、土壇-221の北約1mに検出した。検出面の平面形は長方形を呈するもので、長さ114cm、幅75cmを測る。底面は平坦で、平面形は長方形を呈し、最深部の標高は332cmを測る。壁面は開きながら立ち上がり、検出面からの深さは37cmを測る。出土遺物として3138の甕がある。時期は遺物が少ないため明確ではないが弥・後・前に属するものと考えられる。(井上)

土壇-223 (第54図)

Q18区中央部やや北よりの位置、土壇-222の東約1mに検出した。検出面での平面形は長方形を呈するもので、長さ147cm、幅77cmを測る。土壇は二段に掘られており、東側に少し浅い平坦面がある。東側の壁は少し開きながら直線的に立ち上がる。最深部の標高は306cmを測る。西側は段を形成しながら立ち上がる。出土遺物は3139の高杯がある。時期は弥・後・Ⅱと考えられる。(井上)

土壇-224 (第55図、図版11)

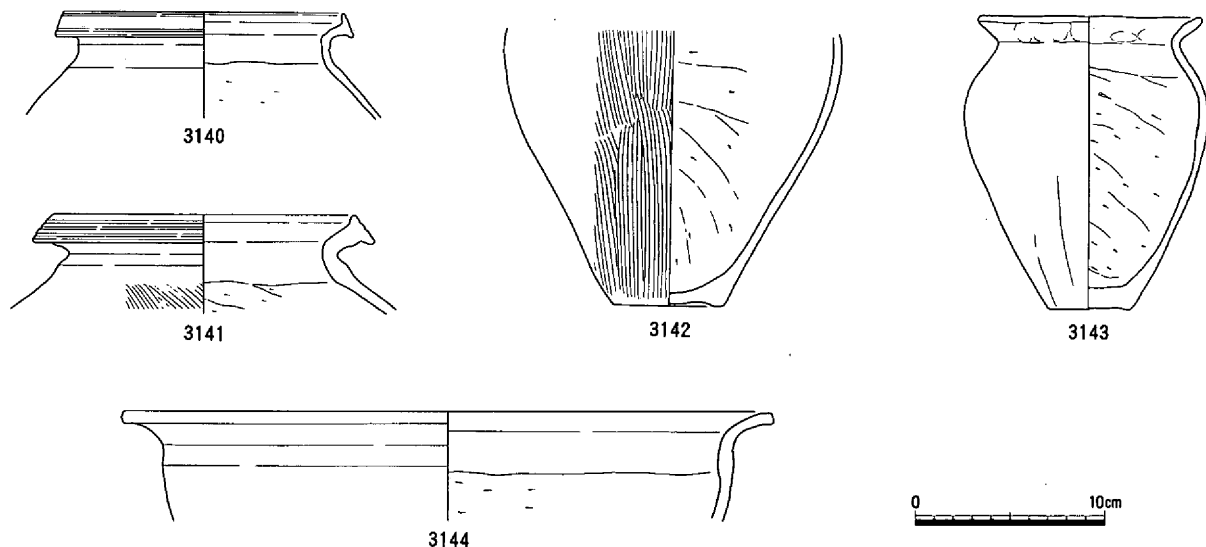
中屋調査区の南端部に位置し、竪穴住居-130の南に位置する。土壇の集中したところにある。平面形は不整形円形を呈し、大きさは、長径120cm、短径97cmを測る。埋土中からは、壺の小片のほか、甕3個、鉢1個が検出された。図化できたのは甕3140だけであるが、口縁部を外反させ、端部を上下に拡張し、頸部直下までヘラケズリを施している。時期は土器の形状から弥・後・前に比定される。

(正岡)

土壇-225 (第55図、図版54)

中屋調査区の南端部に位置し、竪穴住居-130の南にあたる。土壇の集中したところであり、土壇-224とは接していて、東側にある。微高地上面にあるが、東によっていて、水田部までは15mにすぎない。平面形は不整形円形を呈し、長径72cm、短径68cmを測る。小形の土壇にもかかわらず、埋土中には、多数の土器を含んでいる。出土した土器には、壺の小破片のほか、甕12個、高杯4個、鉢2個、器台1個がある。図化できたのは、甕3141~3143、鉢3144である。甕は口縁部を「く」の字状に屈曲させ、口縁端部を上下に拡張して小さな凹線文を施すもの3141と端部を丸くおさめたもの3143がある。鉢3144は大形のもので、口縁部を外方へ湾曲させ、端部に面をもっている。時期は土器の形状から弥・後・Ⅱに比定される。

(正岡)



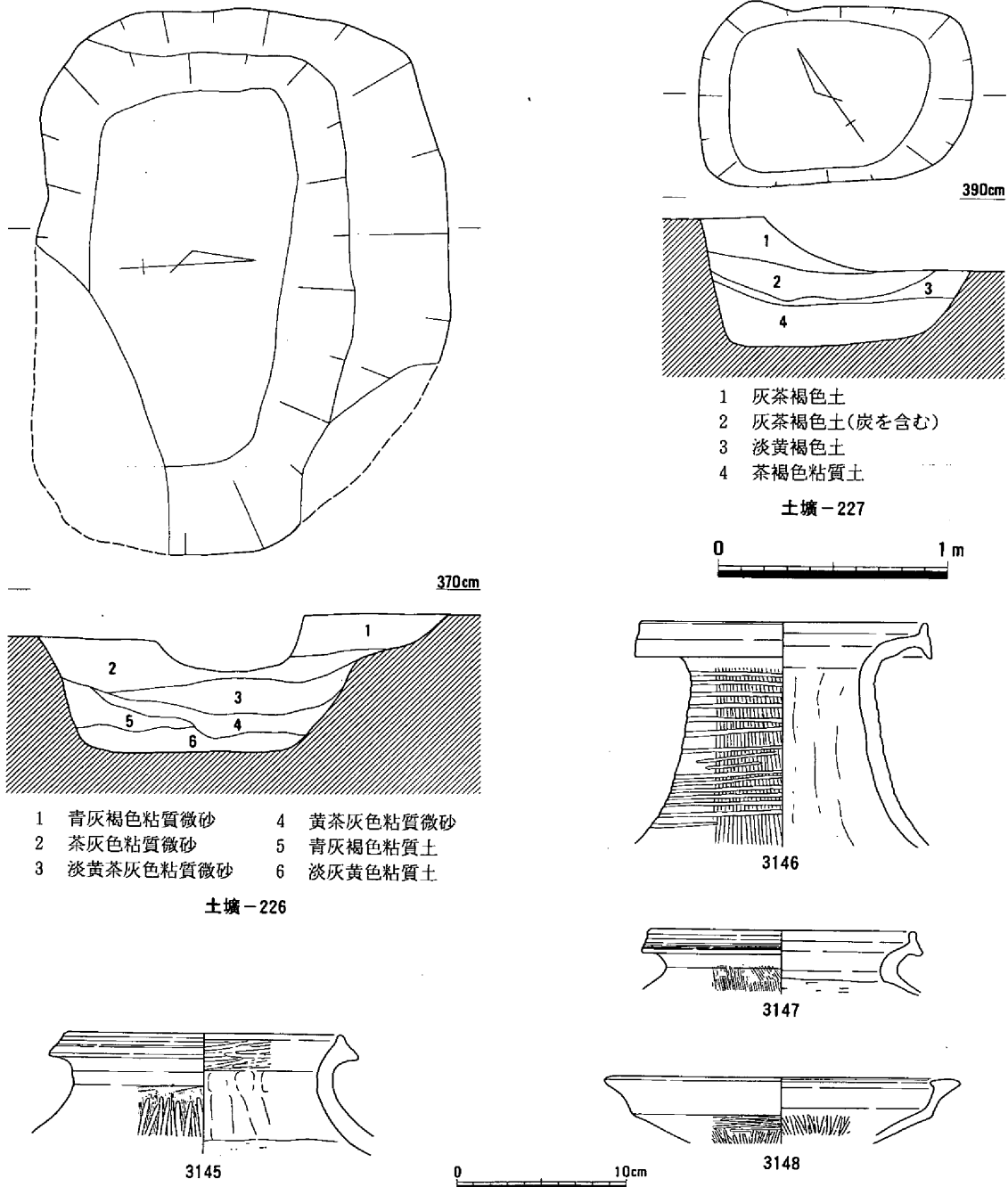
第55図 土壇-224 (3140)・225 (3141~3144)

土壇-226 (第56図)

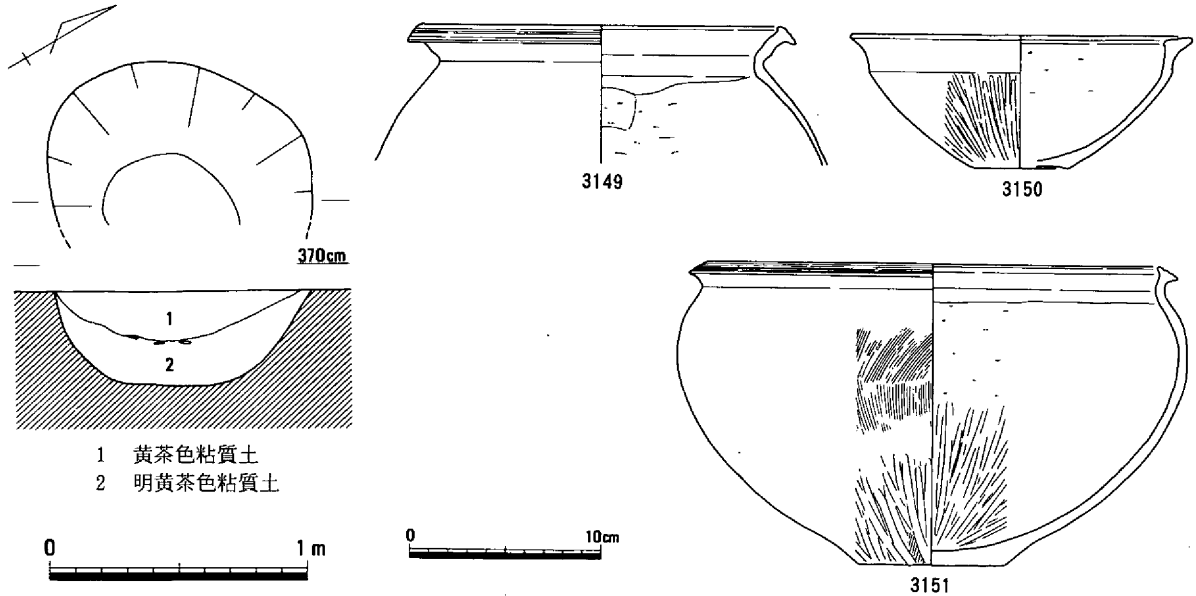
中屋調査区の南端部に位置し、土壇-225の東側にあたる。土壇-227によって、南側の一部を切られている。平面形は不整長方形を呈し、長さ242cm、幅182cm、深さ62cmを測る。埋土中からは、壺1個、甕8個、高杯2個の破片を出土した。図化した短頸壺3145は、口縁部を短く外反し、端部を肥厚している。時期は土器の形状から弥・後・Ⅱに比定される。(正岡)

土壇-227 (第56図、図版12)

Q18区中央部やや北よりの位置、土壇-226の南約1mに検出した。検出面での平面形は南西側が少し丸いものの長方形に近い形状を呈しており、長さ120cm、幅77cmを測る。底面は平坦で、その最



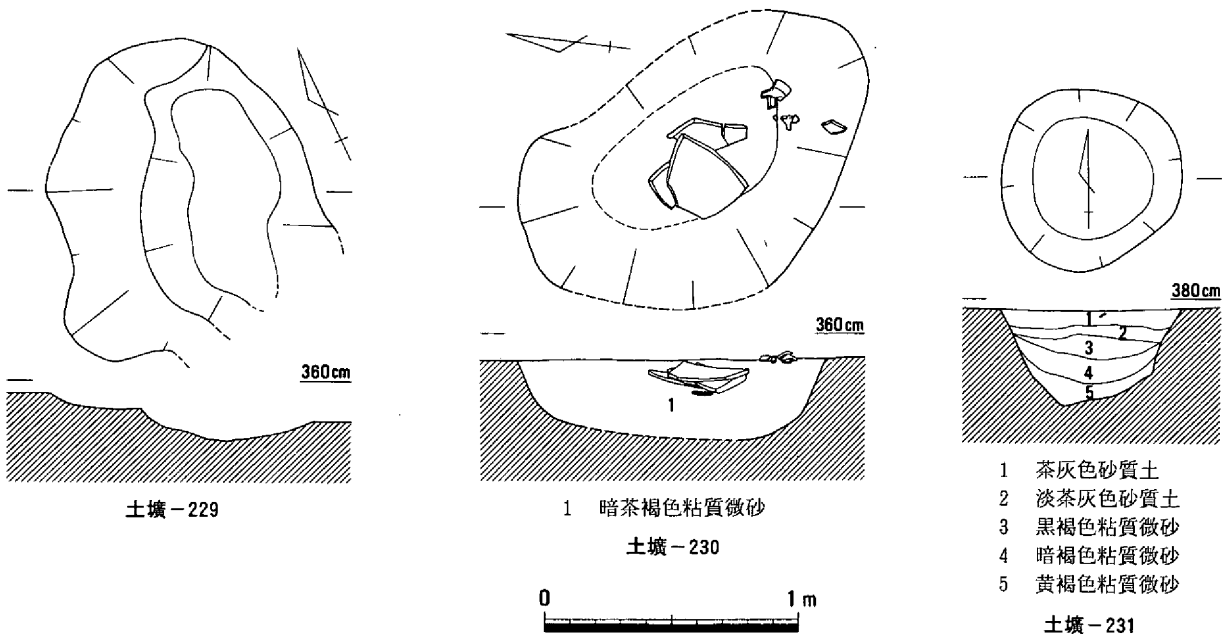
第56図 土壇-226 (3145)・227 (3146~3148)



第57図 土壇-228 (3149~3151)

深部は標高325cmを測る。壁面は少し開きながら直線的に立ち上がる。検出面からの深さは57cmを測る。土壇からは少量の土器が出土している。3146は壺で、下方に向けて少し開く頸部にクシメと沈線が施される。3147は甕で、胴部内面は全体にヘラケズリが施される。3148は高杯で、体部から少し開きながら立ち上がる口縁部の端部が拡張するものである。時期は弥・後・IIと考えられる。(正岡) 土壇-228 (第57図)

Q18区中央部やや北よりの位置、土壇-227の南約2mに検出した。調査区の端に検出したため南西側の一部は調査できなかった。そのため全体の形状は不明であるが円形に近い形状を呈していたものと推測される。検出面での規模は長さ100cm、幅90cmを測る。底面は平坦で、標高は322cmを測る。壁面は丸く弧を描きながら立ち上がるもので、断面形は楕円形を呈している。検出面からの深さは38cm



第58図 土壇-229~231

を測る。出土遺物は、3149は甕で、口縁端部は下方に拡張する。胴部内面は全体にヘラケズリが施される。3150は鉢である。上方に開いた体部と上に伸びる口縁部の端部は少し内傾して水平方向に拡張する。3151も鉢である。丸みを持つ体部の外面は上半はハケメ、下半はヘラミガキが施される。内面は上半にヘラケズリ、下半にヘラミガキが施される。時期は弥・後・Ⅱと考えられる。(井上)

#### 土壌-229 (第58図)

Q18区中央部やや北よりの位置に検出した。検出面での平面形は定まった形状は呈していない。検出面での規模は長さ130cm、幅100cmを測る。底面は西側が浅く、東側が深い二段になり浅く窪んでいる。最深部の標高は337cmを測る。壁面は大きく開くもので、断面形は浅い皿状を呈している。検出面からの深さは10cmを測る。時期は弥・後・Ⅱに属すると考えられる。(井上)

#### 土壌-230 (第58図)

中屋調査区の南端部に位置し、土壌-229の東側に近接している。水田部までは8mのところである。

平面形は不整形を呈し、楕円形に近い。長径153cm、短径復元97cm、深さ32cm、底部の標高380cmを測る。埋土中の特に上層部から壺1個、甕1個、高杯1個の破片が出土しているが、良好なものはなく、図化されなかった。土器の形状から時期は弥・後・Ⅱに比定される。(正岡)

#### 土壌-231 (第58図)

中屋調査区の南端部に位置し、土壌-230の北東にあって、袋状土壌-80の西側に近接している。平面形は不整形を呈し、長径75cm、短径70cm、深さ29cm、底面の標高327cmを測る。埋土中には、壺2個の破片のほか、甕の小片もある。図化されなかったが、土器の形状から百・後・Ⅱに比定される。(正岡)

#### 土壌-232 (第59図、図版12・55・56)

中屋調査区の南端部に位置し、掘立柱建物-17の北東に近接している。微高地上にある弥生時代の遺構としては、東端になり、水田までは9mである。数基の土壌が建物の北側に近接している。

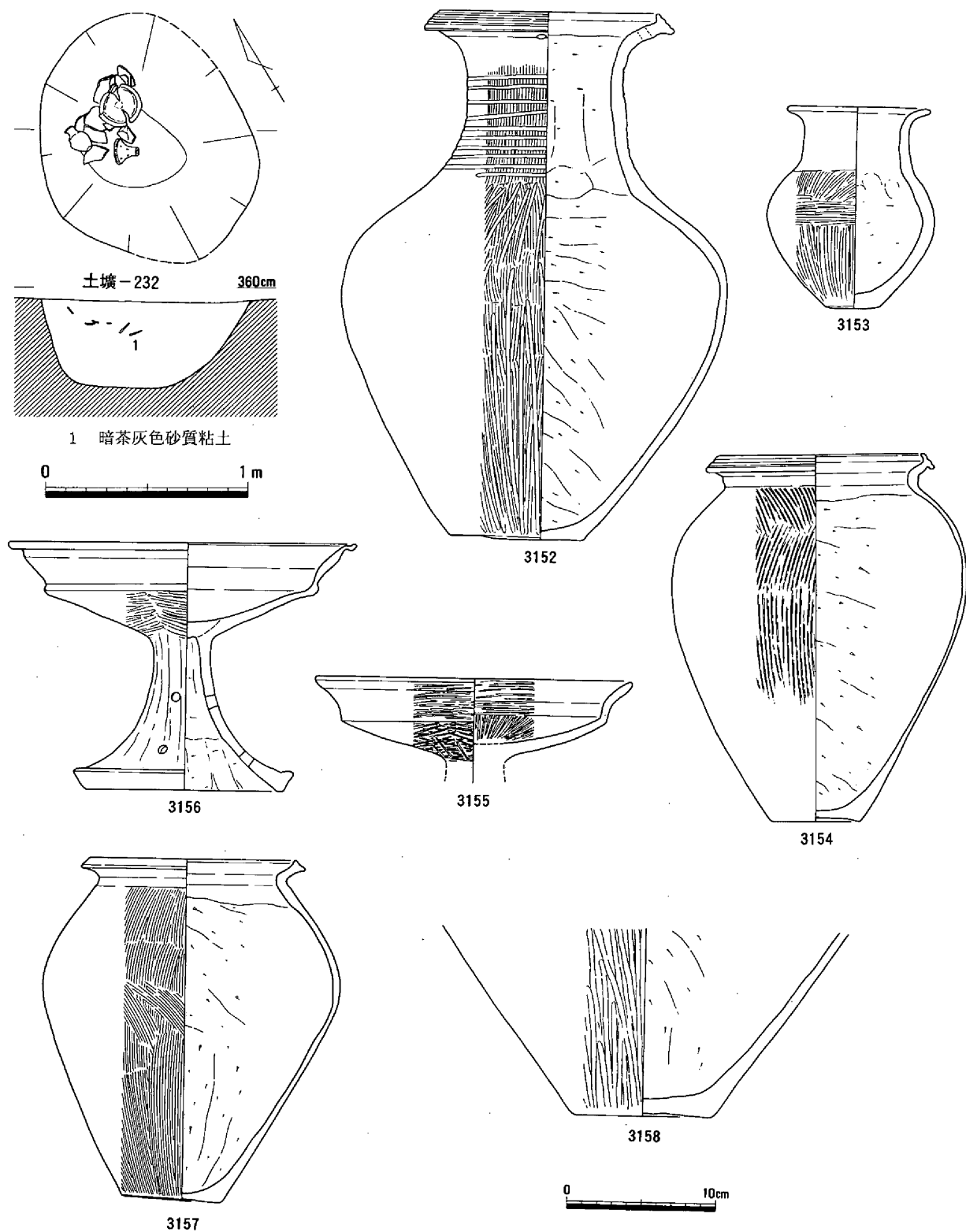
平面形は不整形を呈し、長径118cm、短径105cm、深さ43cm、底面の標高309cmを測る。埋土中には、少しまとまって土器が入っていた。出土した土器には、壺2個、甕2個、高杯2個、器台1個がある。復元可能なものがあり、近くで使用されたものと推測される。

図化できたのは、長頸壺2個、甕2個、高杯2個、底部1個である。長頸壺には、通常の大さきもの3152と小形のもの3153がある。通常の大さき壺は、頸部上方へ向かってしぼり、口縁部は外反して、端部を肥厚する。口縁端部に凹線文を施し、口縁部に穿孔している。頸部外面には横位の沈線を描く。小形の長頸壺は頸部を直立し、口縁部を短く外反し、端部を丸く収めている。頸部への施文はない。甕3154は口縁部を「く」の字状に折り曲げ、端部を上下に拡張し、外面に凹線文を施している。甕3157は口縁部を折り曲げ、端部を若干肥厚しただけである。高杯3155・3156は、杯部の口縁部を大きく開き、端部は薄くなって終わる。脚部は緩やかに広がり、端部は肥厚する。

時期は土器の形状から弥・後・Ⅱに比定される。(正岡)

#### 土壌-233 (第59図)

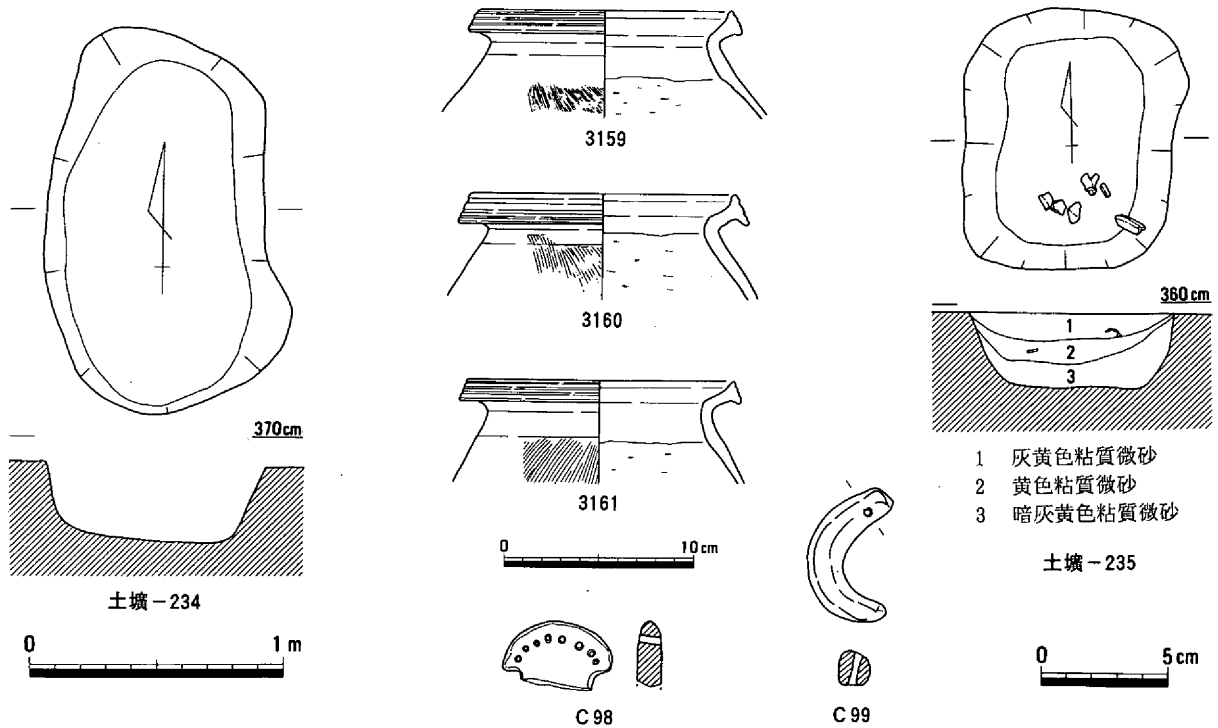
中屋調査区の南端部に位置し、掘立柱建物-17の北に接している。土壌-232の西側に接している。平面形は楕円形を呈し、長径70cm、短径60cmを測る。埋土中からは、甕の小破片が出土しているに過ぎないが、時期は、弥・後・前に比定される。(正岡)



第59図 土壙-232 (3152~3157)・233 (3158)

土壙-234 (第60図)

中屋調査区の南端部にあり、掘立柱建物-17の北側に位置する。平面形は不整長楕円形を呈し、大きさは、長径153cm、短径88cm、深さ29cm、底面の標高326cmを測る。埋土中からは、甕3159と分銅形土製品C98が出土した。分銅形土製品は下半を欠失し、大きさは、現存長2.6cm、幅4.1cm、厚さ0.9



第60図 土壌-234 (3159・C98)・235 (3160・3161・C99)

cmを測る。時期は弥・後・Ⅱに比定される。

(正岡)

土壌-235 (第60図)

中屋調査区の南部にあり、竪穴住居-128の北東に位置する。近接して数基の土壌があり、そのうちで最も東側にある。平面形は隅丸長方形を呈し、大きさは、長さ130cm、幅81cm、深さ29cm、底面の標高326cmを測る。埋土中からは、壺1個、甕6個、高杯1個の破片と土製勾玉1個が出土した。甕3160・3161は口縁部を「く」の字に折り曲げたものである。土製勾玉C99は完存し、長さ5.4cm、幅1.5cm、厚さ1.5cm、孔径0.4cm、重さ18.4gを測る。時期は弥・後・Ⅱに比定される。

(正岡)

土壌-236 (第61・62図、図版57)

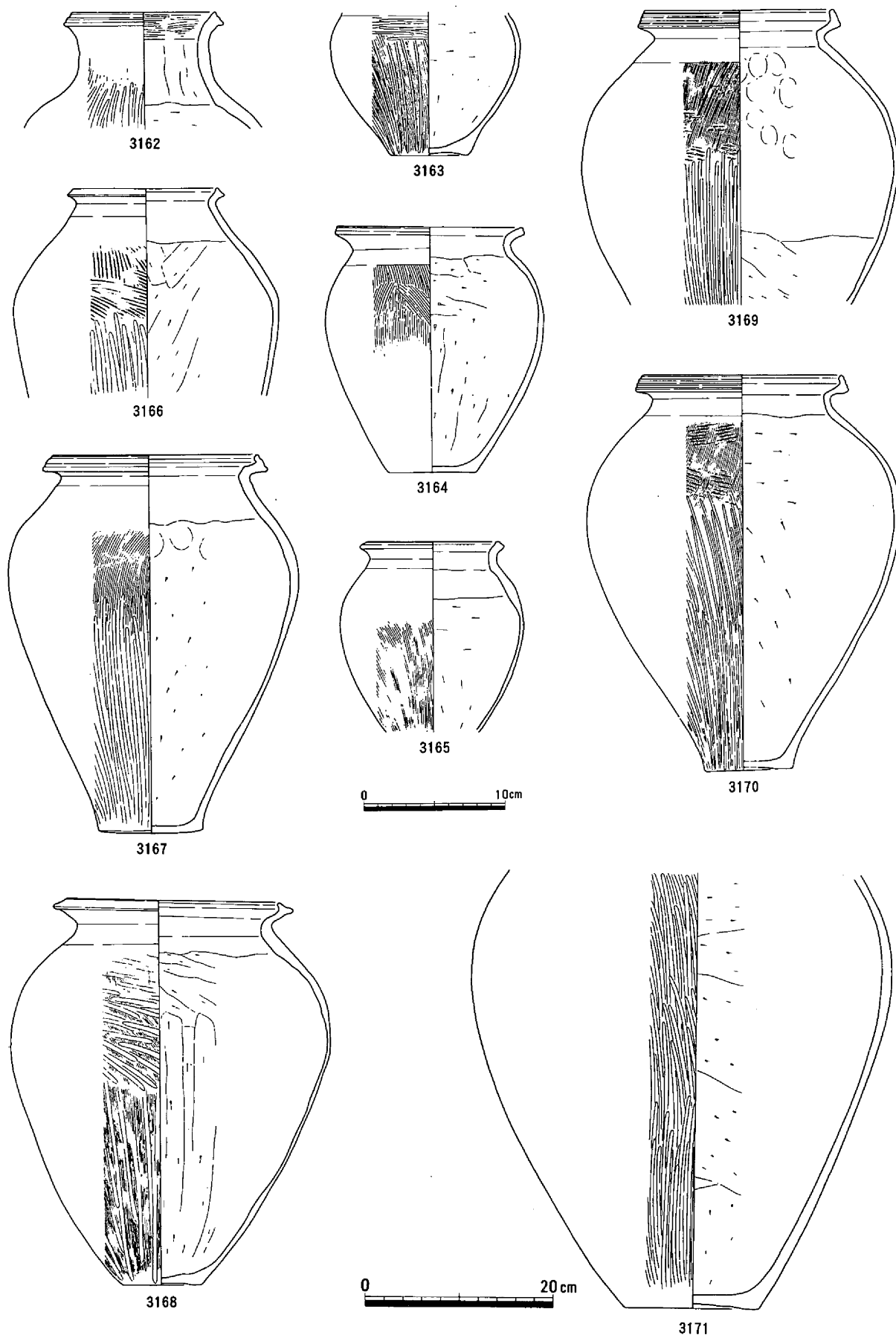
中屋調査区の南部にあり、竪穴住居-130の北東に位置する。近接した土壌はない。平面形は楕円形を呈する。埋土中からは多量の土器を出土した。出土した土器には、壺7個、甕15個、高杯1個、器台1個の破片があり、完形に復元されるものもある。図化できたものには、壺1個、甕9個、高杯3個がある。壺3162は少し頸の長いもので、口縁部を小さく外反し、端面に凹線文を施す。甕3166~3171は、いずれも肩が張り、底部はすぼまっている。口縁部のつくりは、「く」の字に折り曲げたあと、上方へ拡張し、端面に凹線文を施すもの3167・3169・3170、口縁端部を肥厚するもの3166・3168、ほとんど肥厚しないで無文のもの3164・3165がある。高杯3172~3174は、杯部の口縁部を外反し、端部は肥厚する。脚部は緩やかに広がり、端部を肥厚して立ち上がる。時期は弥・後・Ⅰに比定される。

(正岡)

土壌-237 (第63図)

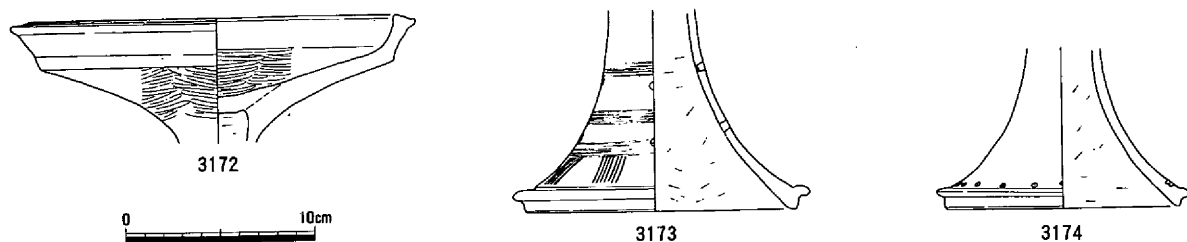
中屋調査区の南部にあり、竪穴住居-130の北東に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、大きさは、長径102cm、幅78cm、深さ55cm、底面の標高297cmを測る。埋土中から壺と甕の小破片を検出したことから、時期は弥・後・前に比定される。

(正岡)



第61図 土壙-236 (3162~3171)





第62図 土壇-236 (3172~3174)

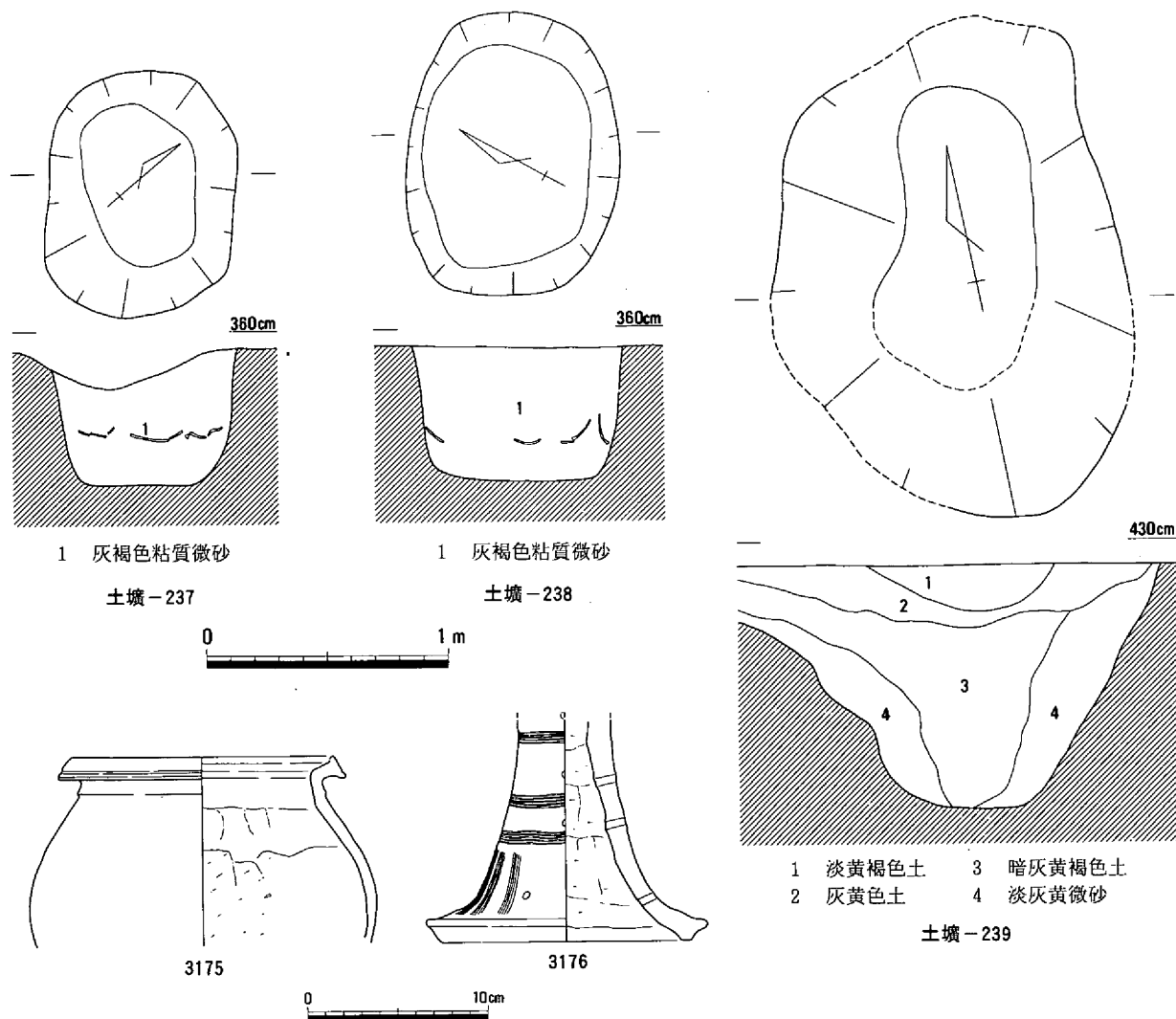
土壇-238 (第63図、図版12)

中屋調査区の南部に位置し、竪穴住居-130の北東に位置する。平面形は楕円形を呈し、大きさは、長径117cm、短径89cm、深さ56cmを測る。埋土中からは、壺、甕、高杯の破片が出土した。図化できたものには、甕3175、高杯3176があり、時期は弥・後・Iに比定される。(正岡)

土壇-239 (第63図)

いびつな長円形を呈する土壇である。深さは約1mで、搦鉢状にすぼんでいびつな壇底に達している。この土壇の用途・性格は明らかでないが、井戸の可能性も十分にある。

出土遺物は皆無であるが、埋積土の観察から時期的には弥・後・Iの可能性が高い。(岡田)

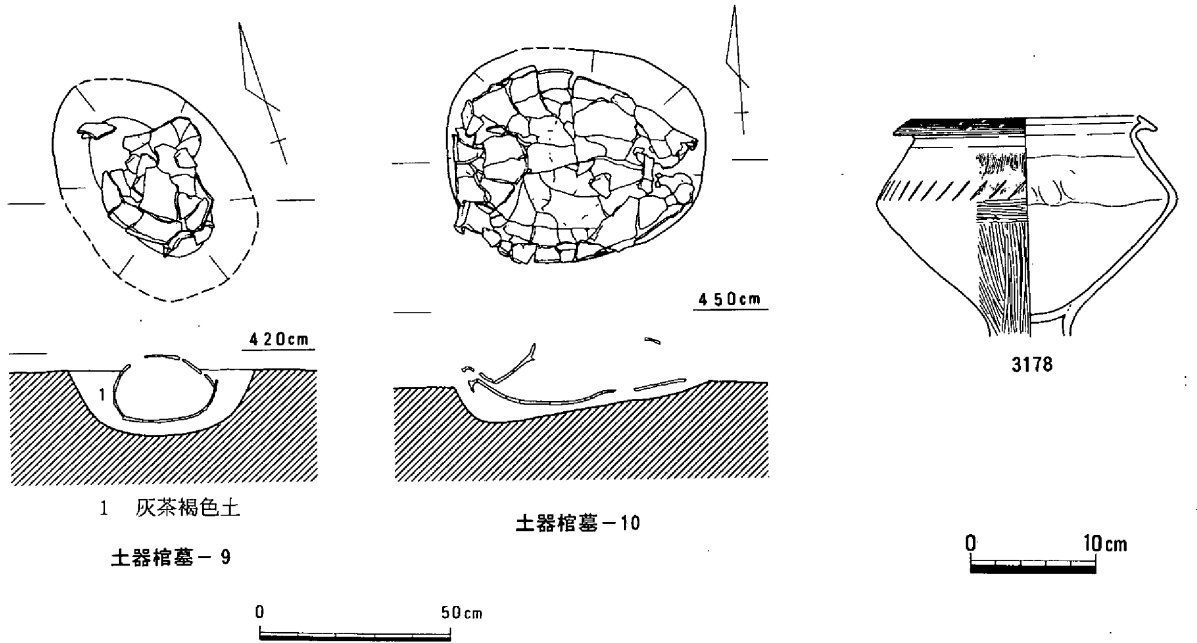


第63図 土壇-237・238 (3175・3176)・239

(6) 土器棺墓

土器棺墓-9 (第64図、図版58)

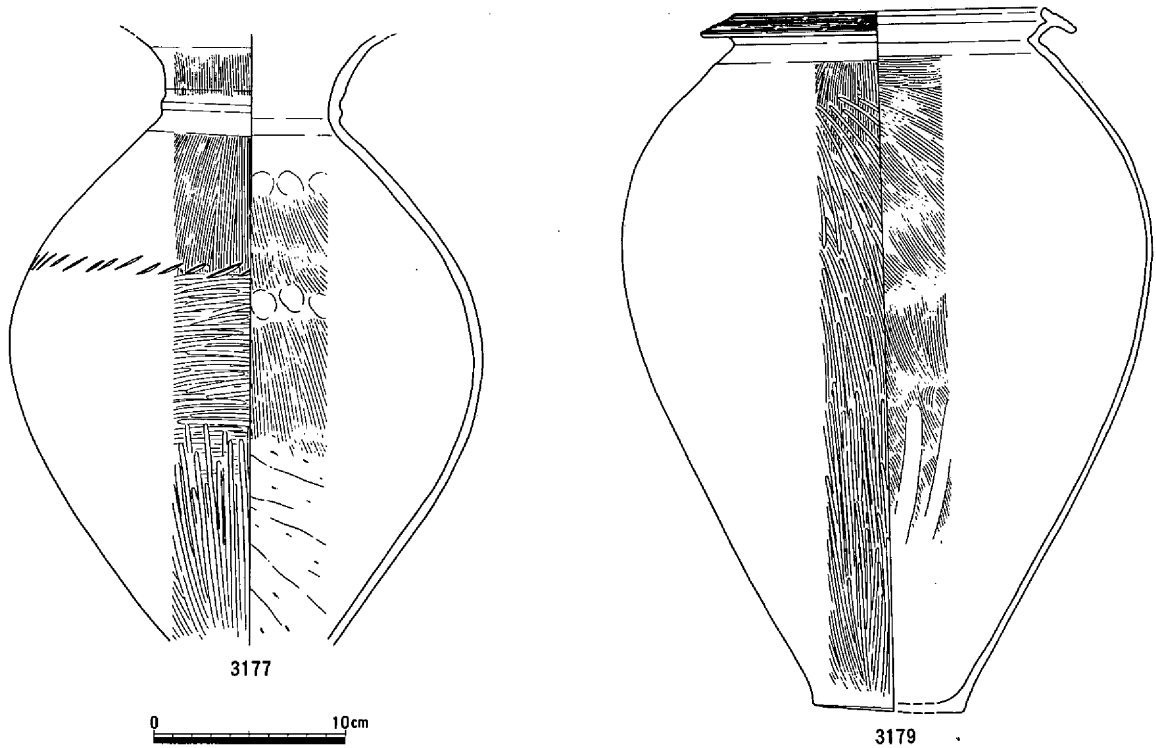
〇18区南部中央寄りに位置し、土器棺墓-10との距離約15mを測る。口縁部と底部の両端を欠く弥生土器の壺3177が、口縁部を南に向けて横転して出土したもので、平面形楕円形と想定される掘り方は短径43cm、復元長径約65cm、深さ18cmを測る。蓋と考えられる遺物の出土はなく、口縁部への打ち欠きも不明瞭であるが、土器棺の可能性を考える。時期は、弥・中・Ⅲに比定される。(光永)



1 灰茶褐色土  
土器棺墓-9

土器棺墓-10

0 10cm



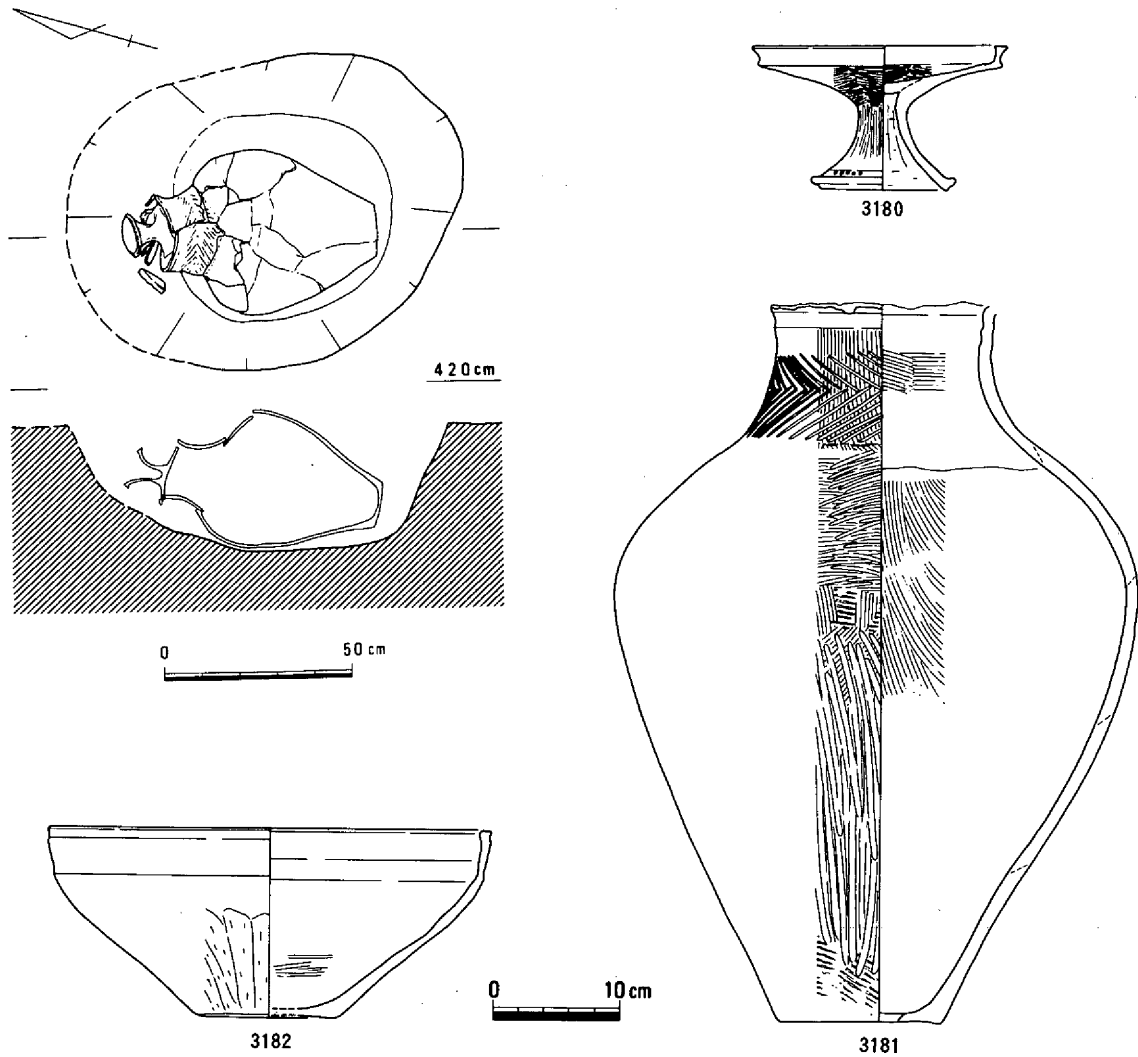
3177

0 10cm

3179

第64図 土器棺墓-9 (3177)・10 (3178・3179)

土器棺墓10



第65図 土器棺墓-11 (3180~3182)

土器棺墓-10 (第64図、図版13・57・58)

〇18区南東部に位置し、溝-91との距離約5.5mを測る。

横転した弥生土器の甕3179の口縁部に、台部を打ち欠かれた台付鉢3178がはめ込まれた状態で出土したもので、口縁部は西へ向けられている。両者とも後世の削平により上位の大半を失っているが、確認できた掘り方は平面形楕円形を呈し、長径68cm、短径57cmで、残存する土器片上端からの最大深さ20cmを測る。

時期は、弥・中・Ⅲに比定される。

(光永)

土器棺墓-11 (第65図、図版13・58)

微高地縁辺部で検出された。やや長円形を示す土壌掘り方の検出状態はきわめて良好で、やや大形の頸部上位から口縁部を打ち欠いた大形の壺を横向きに埋設し、頸部の部分を完形の高杯の杯部で閉塞している。

おそらく副葬遺物ももたない小児棺として使用された可能性が高いが、壺の内部には人骨はもとより歯も遺存していなかった。

棺に使用された3181の壺は、頸部に羽状の連続刺突文が巡る。蓋として使用された3180の高杯はやや小形で低い脚をもつ。これらの土器は、弥・後・Ⅰに比定される。

(岡田)

(7) 土器溜り

土器溜り-2 (第66図)

Q18区の北辺に接し、土壇-195の北2.4mに位置する。土器片の分布は長さ330×150cm内におさまり、海拔390cmのほぼ同一面に接している。小片を含むと約100点ほどになるが、それらの配置に規則性は認められない。壺、甕、高杯の器種が認められ、小礫をも含む。遺構についても明確にしえなかったが、海拔390cmの面にて弥・後・Ⅱの遺物を出土する土壇は発見されていない。(高畑)

(8) 溝

溝-91 (第67図)

O18区南東部の微高地上を北西から南東方向へ流走する。断面逆台形で、上幅83~130cm、下幅25~40cm、深さ30~50cm程度であるが、北から約10mの地点では土手状部分を挟んで流路が食い違っている。弥生土器の壺3189、鉢3190の出土により、時期は弥・中・Ⅲに比定される。(光永)

溝-92 (第67図)

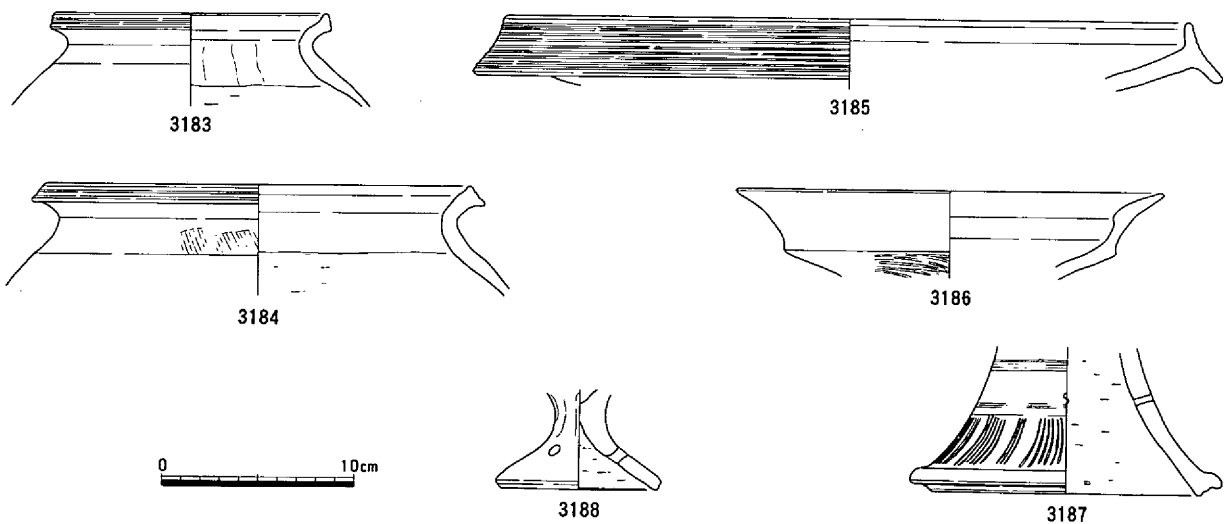
O18区南東部の微高地端部を削り、O19区南西部の低位部に注ぎこむ形で東西方向に流路を置き、ゆるやかに蛇行する。西端での規模は、上幅約5m、下幅約3m、深さ1.8m程度で、数回の溝浚えを受け、堆積土には粘質土が多い。(光永)

溝-95 (第67図)

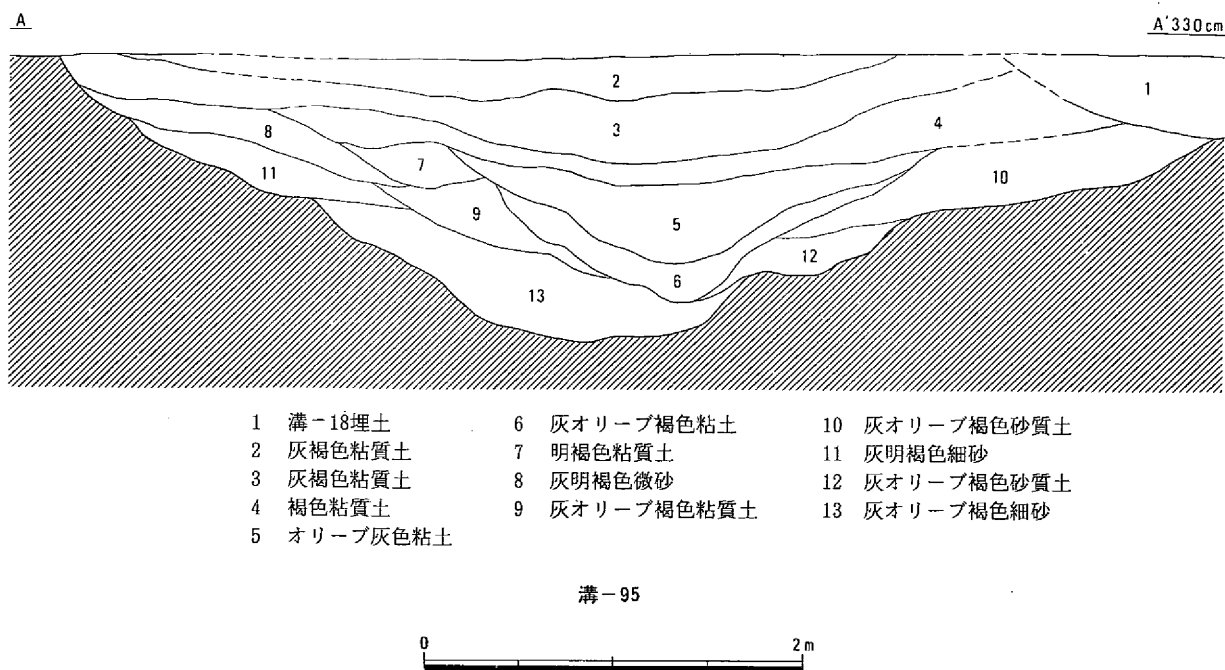
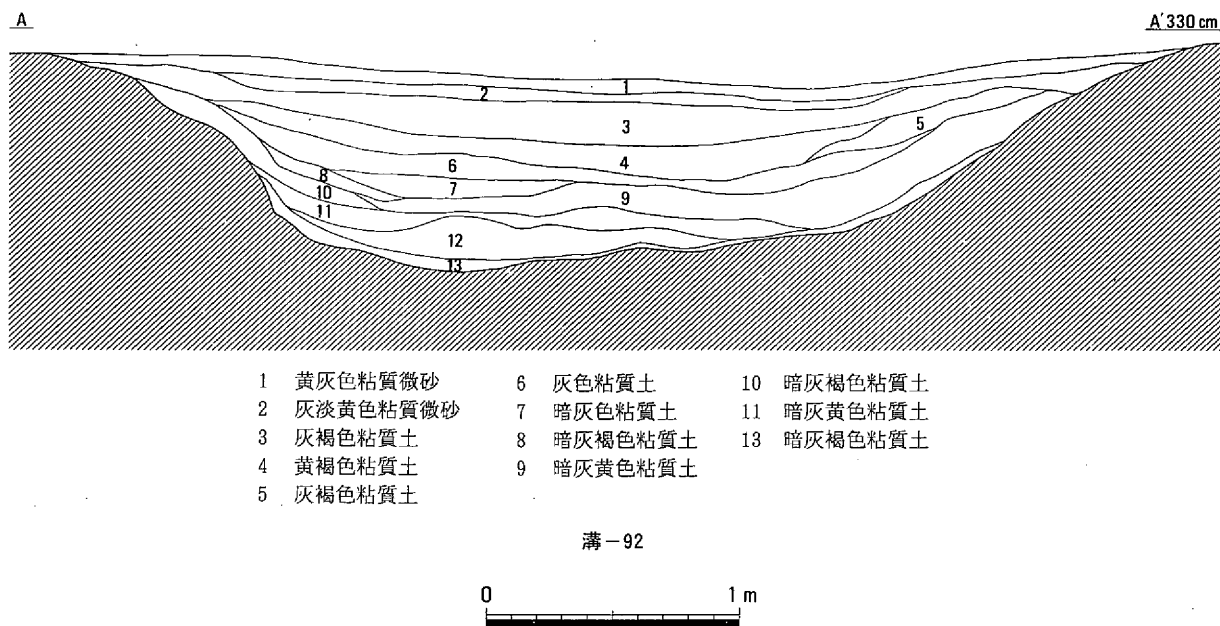
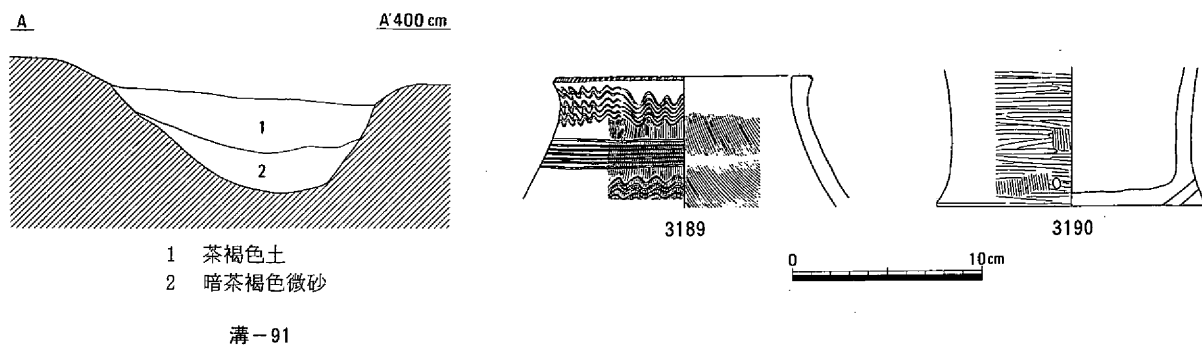
O19区南東部の微高地に掘られ、北西-南東方向に流路を置く。上幅約6m、下幅130cm前後、深さ150cm程度の規模で、数回の溝浚えを受けている。流走方向を決めがたく、低位部から取水したもののか、これに注ぎこむものか不明である。(光永)

溝-98 (第68図)

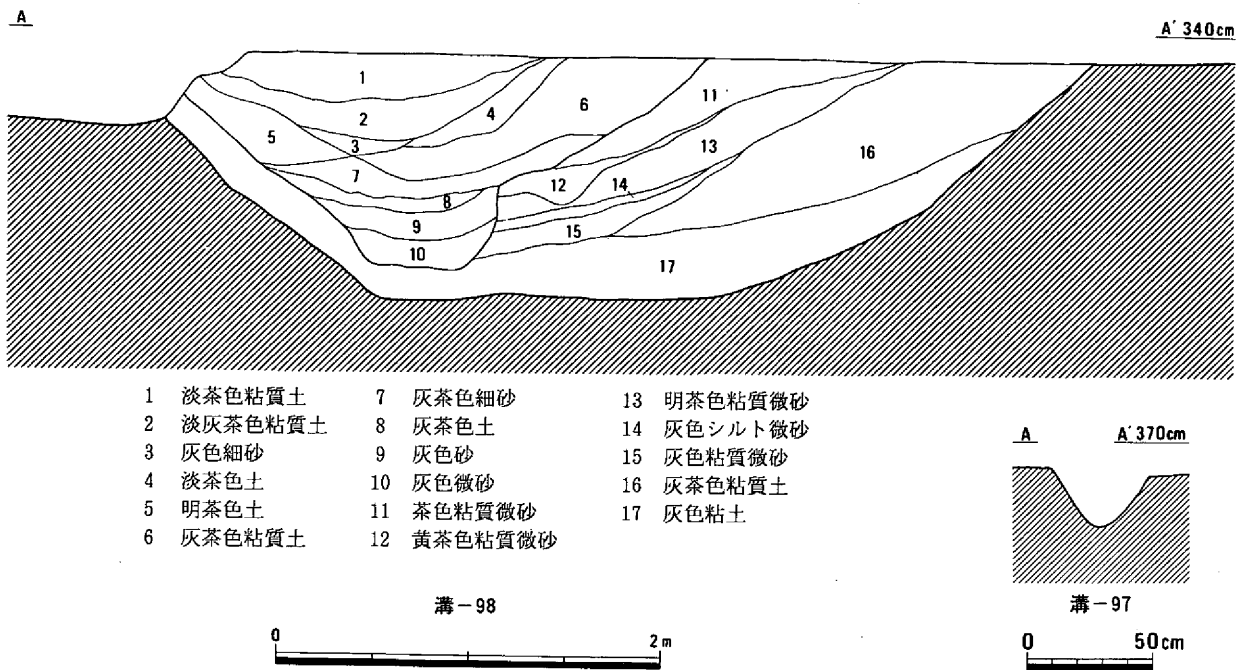
O19区南東部からP19区北東部にかけて、北から南へ流れ、南東方向へ屈曲する。全掘できていないが、上幅約5m、下幅約2m、深さ130cm程度の溝で、規模を縮小しながらの溝浚えが複数回認められる。堆積土は粘性の低い砂質土が多い。(光永)



第66図 土器溜り-2 (383~388)



第67図 溝-91 (3189・3190)・92・95



第68図 溝-97・98

(9) 水田

水田-1 (第69図)

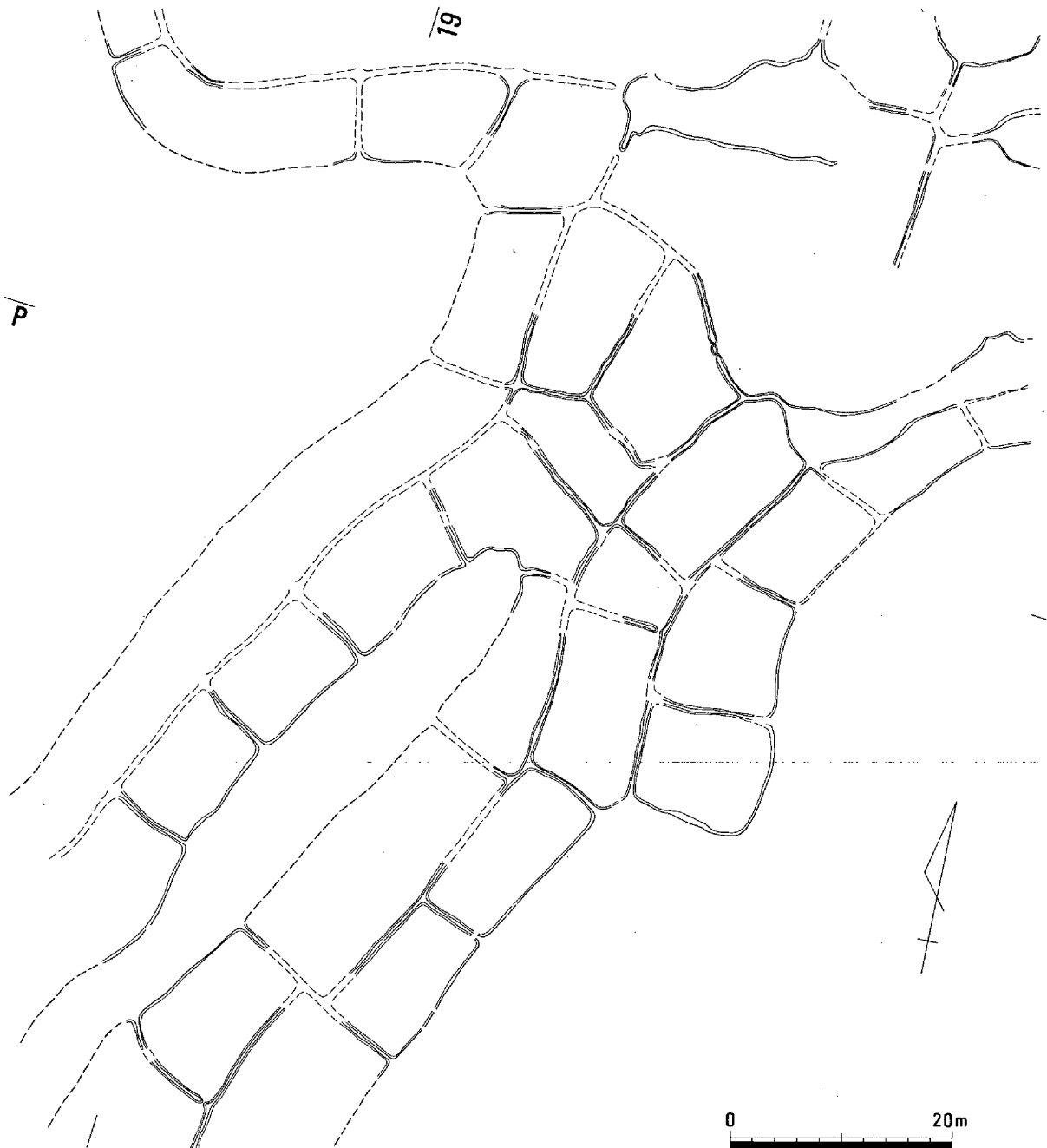
旧河道の低位部を利用した水田で、微高地の東～南側縁において検出した。この水田層は、酸化鉄の沈着によって黄褐色を呈する粘質土層としてとらえたが、耕作土と床土を識別することはできなかった。この水田は、その北側が北東から流れる旧河道と北西から微高地に沿って流れる旧河道が合流する地点にあっているためか、畦畔の方向に規則性が認められず、また大小さまざまな島状高まりが複雑に削り残されている。これに対し、南側は幅45mほどの帯状をなし、その中央には幅9mの狭長な島状の高まりが長さ60m以上にわたって背割りをするように残されている。これらの田面の標高は、北東で280cm、南西で248cmを測り、その比高は18cmあまりである。高さ5cm、幅30cmほどの畦畔によって仕切られた33面の区画は、長さ12～16m、幅8～11mほどの長方形をなすが、島状高まりが随所に残る北東では不整形や五角形を呈するものも見られる。面積は52～131㎡で、平均108㎡を測る。これらは微高地に沿って一列に並び、水配りも直線的なものとなっている。なお、この下層にも部分的に水田層が確認されているが、間層が薄かつ粘質を帯びていることもあって明瞭に識別することが難しく、畦畔などの面的な広がりを把握するには至らなかった。

この水田層からは、3191～3194の土器が出土している。3191・3192は高杯の脚部で、脚径7.5～7.8cmを測る。裾部を2条の沈線で区画して三角形の透かしを穿ち、肥厚しておわる端部には凹線をめぐらす。3193は壺で、口径14.0を測る口縁の端部を上下に拡張し、凹線をめぐらす。口径15.6cmを測る壺3194は、口縁端部を肥厚させ、内面を頸部直下までヘラケズリする。これらは、3191・3193が弥・中・Ⅲ、3193・3194が弥・後・Ⅰ～Ⅱに相当し、中期末から後期前半を中心とした時期を想定しうる。

(亀山)

水田-2 (第70図)

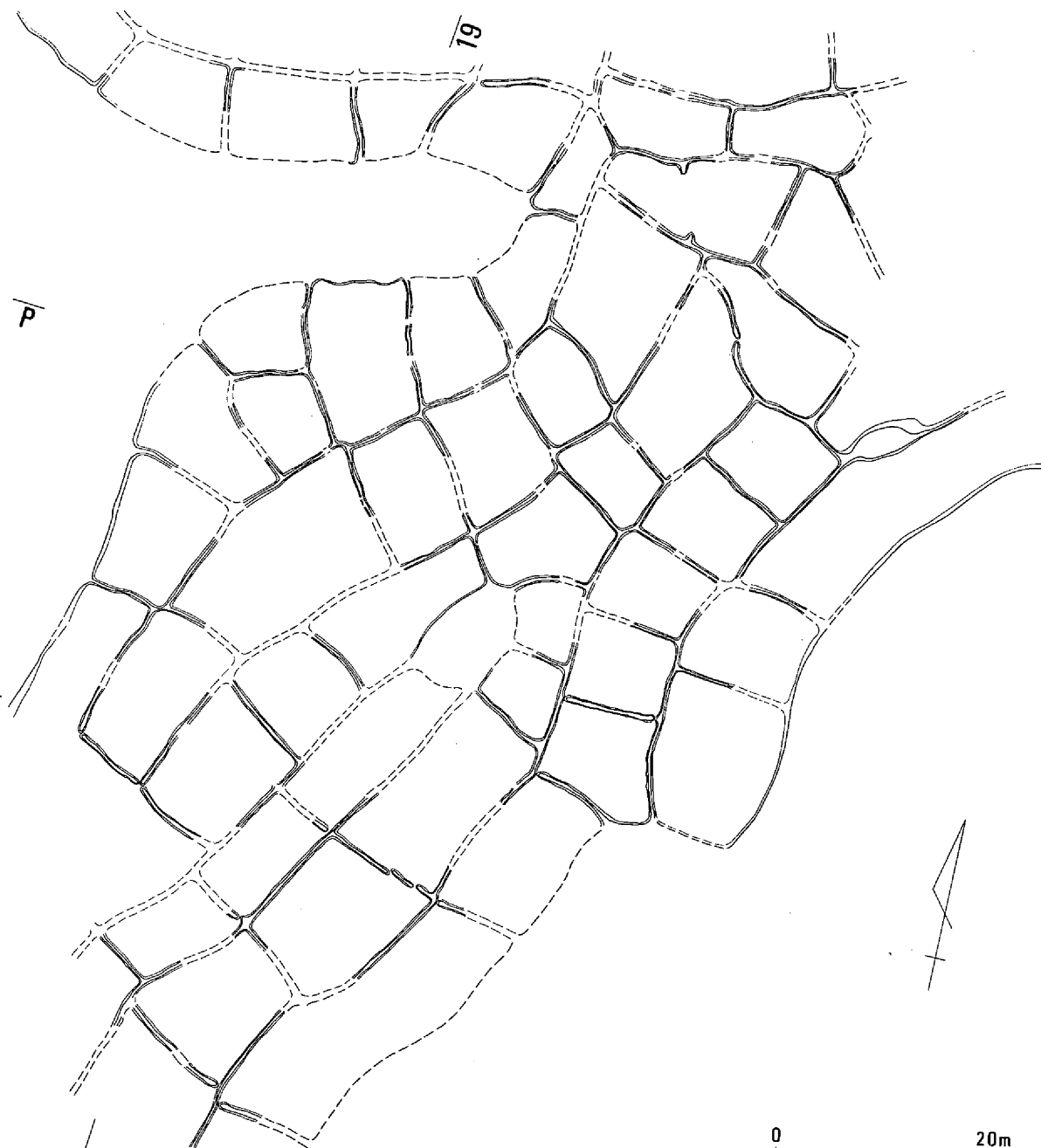
水田-1の15cmほど上層で検出したもので、北側の標高は246cm、南側の標高は272cmを測り、その



第69図 水田-1

比高は16cmと水田-1よりも傾斜が穏やかになっている。また、水田-1で見られた島状高まりの多くは埋積と掘削によってこの段階には姿を消し、わずかに2箇所で見出しえたにすぎない。南側の带状をなす水田は、幅50mと北西に向かって拡幅され、北側に広がる水田との間に、舌状の高まりが削り残される。方形をなす区画の面積は67~121㎡(平均71㎡)と小形化が進み、不整形のものも目立つようになるが、その水配りは依然として直線的である。

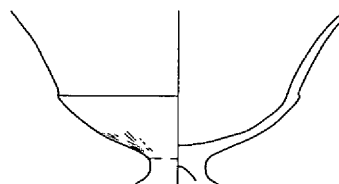
この水田層から出土した3193は、精良な粘土をもつ高杯である。深い杯部に差し込んで接合された脚注部は短く、弥・後・Ⅳの特徴を示している。このほか、図示できなかったが口縁部に擬凹線をめぐらす甕なども出土しており、概ね水田の時期を推測しうる。(亀山)



3191



3193



3195



3192

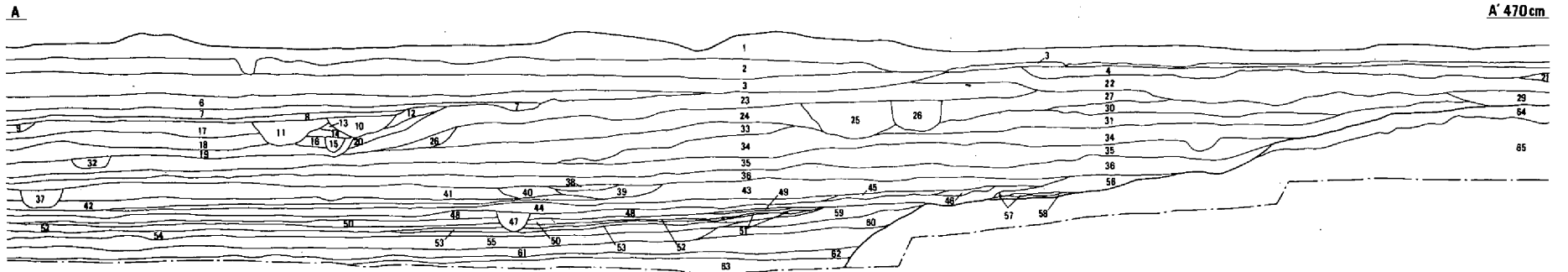


3194



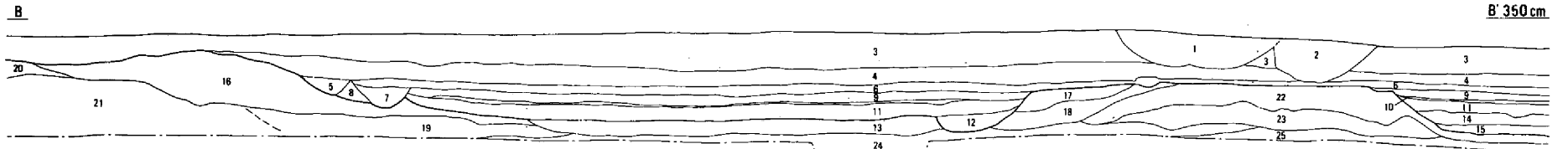
第70図 水田-2 (3191~3195)





A' 470cm

- |                |                 |             |           |             |
|----------------|-----------------|-------------|-----------|-------------|
| 1 耕作土          | 14 茶灰色粘質土       | 27 濃灰褐色粘質土  | 40 濃茶灰色細砂 | 53 濃褐色微砂    |
| 2 淡茶色細砂(近世水田層) | 15 青灰色粘質土       | 28 濃灰色粘質土   | 41 茶灰色微砂  | 54 濃褐色微砂    |
| 3 黄灰色粗砂        | 16 黄灰色微砂        | 29 茶灰色細砂    | 42 濃茶灰色微砂 | 55 褐灰色粘質土   |
| 4 明灰色細         | 17 黄灰色微砂(Mn含む)  | 30 褐灰色微砂    | 43 濃茶灰色細砂 | 56 茶褐色細砂    |
| 5 淡茶褐色微砂(中世水田) | 18 黄灰色微砂        | 31 黄褐色灰色粘質土 | 44 明茶灰色微砂 | 57 茶灰色細砂    |
| 6 褐灰色粘質土(古代水田) | 19 黄灰色粘質土       | 32 濃黄灰色粘質土  | 45 明茶灰色微砂 | 58 明茶灰色細砂   |
| 7 灰褐色微砂(古代溝)   | 20 明褐色粘質土(Mn含む) | 33 灰褐色微砂    | 46 黄灰色粗砂  | 59 褐灰色粘質土   |
| 8 明灰色粘質        | 21 濃黄褐色微砂(Mn多含) | 34 茶褐色粘質土   | 47 濃茶灰色細砂 | 60 茶灰色微砂    |
| 9 黄灰色微砂(土器片含む) | 22 濃黄褐色微砂(Mn多含) | 35 濃灰色粘質土   | 48 黄色細砂   | 61 茶青灰色粘質微砂 |
| 10 明黄褐色粘質微砂    | 23 濃灰褐色微砂       | 36 濃灰色粘質土   | 49 灰褐色微砂  | 62 黄灰色粘質土   |
| 11 茶灰色粘質土      | 24 濃茶灰色粘質土      | 37 黄灰色粘質土   | 50 黄褐色微砂  | 63 濃灰色粘質土   |
| 12 明茶灰色粘質土     | 25 濃茶褐色粘質土      | 38 濃茶灰色粘質土  | 51 茶褐色微砂  | 64 茶灰色細砂    |
| 13 明茶灰色粘質土     | 26 灰褐色粘質土       | 39 茶灰色粘質土   | 52 黄灰褐色微砂 | 65 茶色粗砂     |



B' 350cm

- |           |            |               |              |
|-----------|------------|---------------|--------------|
| 1 溝137の埋土 | 7 淡灰茶色粘質土  | 13 灰オリーブ粘微砂   | 22 淡茶色微砂     |
| 2 溝136の埋土 | 8 淡灰茶色粘質土  | 14 明茶灰オリーブ粘質砂 | 23 灰オリーブ色微砂  |
| 3 明茶褐色粘質土 | 9 明黄色粘質土   | 15 灰オリーブ粘質土   | 24 灰オリーブ色シルト |
| 4 明黄茶褐色微砂 | 10 明黄色粘質微砂 | 16 淡茶色微       | 25 灰色微砂      |
| 5 淡灰茶色粘質土 | 11 茶褐色微砂   | 17 淡茶色微砂      | 26 灰褐色粘質土    |
| 6 明黄色粘質土  | 12 暗灰色粘質土  |               | 27 明灰色細砂     |



第71図 水田土層断面図

## (10) その他の遺構・遺物

### 前期の土器 (第72図、図版58・59)

前期の土器は、主として微高地南端の斜面堆積層から出土している。3196・3197は大形の壺で、3196は口径30.3cm、3197は口径35.8cmを測る。いずれも外反する口縁部と頸部のあいだに2条のヘラ描き沈線を巡らしている。3198～3202は壺の肩部で、頸部との境に2～3条のヘラ描き沈線を巡らし、3198・3200では無軸木葉文を飾る。

3204は口径23.4cmを測る甕で、外反する口縁端部にはヘラ状工具による刻目を施す。口径24.8cmを測る3203は、外反する口縁端部に沈線を巡らして上下に刻目を施すもので、体部とのあいだに段をなす。短く外反する口縁端部に刻目を施す3205～3210は、体部に2条のヘラ描き沈線を巡らし、3209ではその間に刺突を加えている。これらの多くは弥・前・Ⅱ期に比定されるが、3203・3204は弥・前・Ⅰ期にまで溯る可能性がある。

口径22.0cm、器高22.7cmを測る3211は、ほぼ完形に復元できた甕である。逆L字形の口縁部と多条のヘラ描き沈線を飾る体部をもち、径6.1cmを測る平底には穿孔を施す。弥・前・Ⅲ期に下るものと思われる。

### 中期の土器 (第73図)

中期の土器は、微高地東端の斜面堆積層から出土したもののほか、水田層下部を掘り下げる過程で出土したものも含まれている。口径15.8～19.2cmを測る3212～3213は、逆L字形の口縁部をもつ甕で、外面を細かいハケメ、内面をナデで調整しており、前半に位置付けられる。

壺には大形の広口壺3214～3216と小形の無頸壺3218・3220がある。長い頸部に凹線をめぐらす3214・3215は、口径24.8～25.0cmを測る口縁端部を上下に拡張し凹線や棒状浮文を飾る。口径10.3cmを測る3218は、内傾する口頸部を2～3条の沈線で区画し斜格子文を埋める。また3220は、口径8.4cmを測る口頸部に凹線を巡らし、肩部に刺突文を連続して施している。

甕3217は口径11.6cmを測り、上下に拡張した口縁端部には凹線をめぐらす。外面はハケメ、内面はナデで調整する。

3219は、口径25.6cmを測る大形の鉢で、内傾する口縁部に凹線を巡らした後刻み目を施し、3本を一对とした棒状浮文を貼り付ける。

高杯には3222～3224がある。3222は杯を失っているが、径8.4cmを測る脚裾部に綾杉文を飾る。3223はほぼ全形を知り得るもので、口径19.0cmを測る口縁部には凹線を飾る。

これらは3218・3219が中葉に、そのほかは後半に位置付けられる。

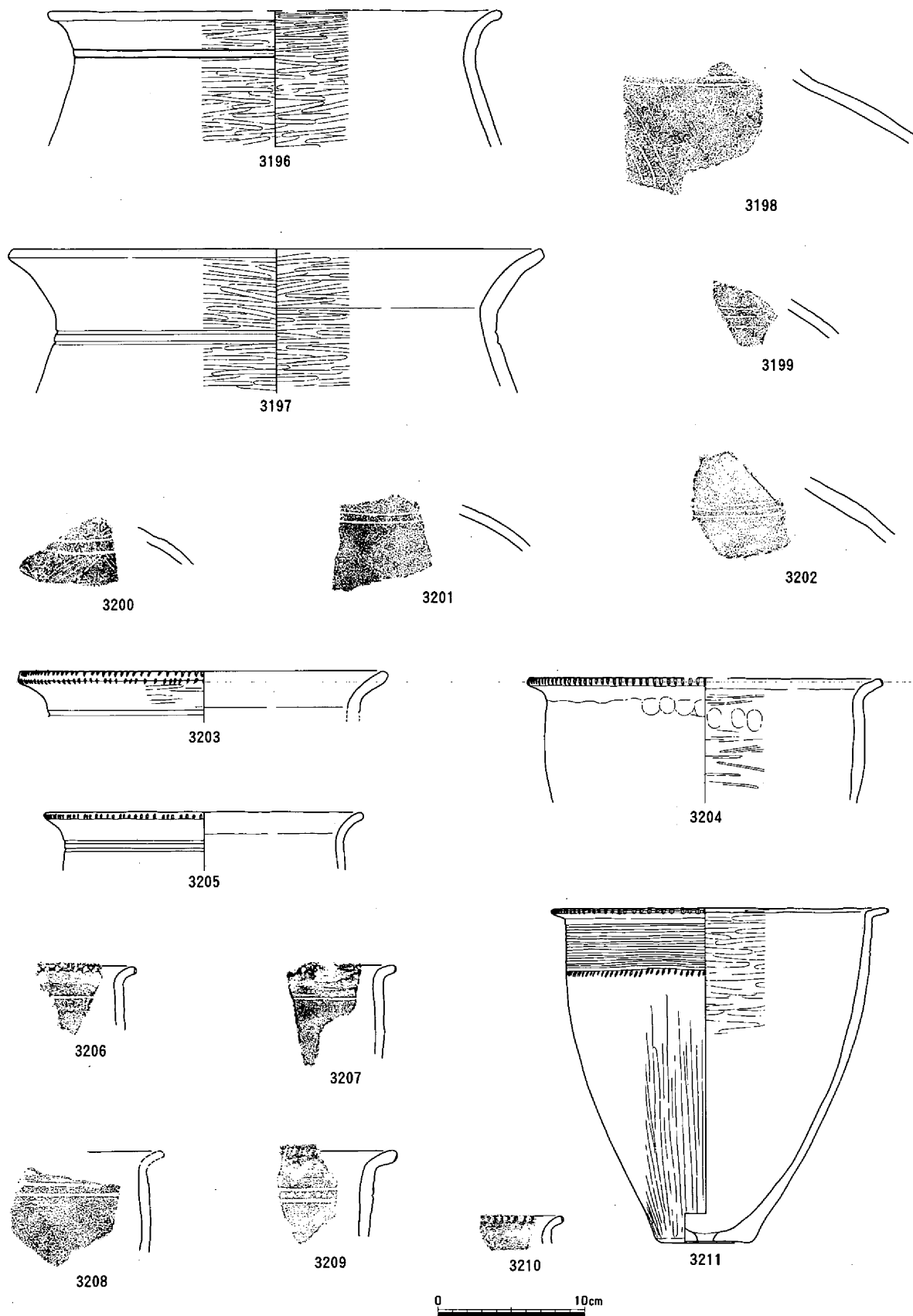
### 後期の土器 (第74～80図)

後期の土器は、微高地南側の遺構検出中に出土したものが大半を占めている。

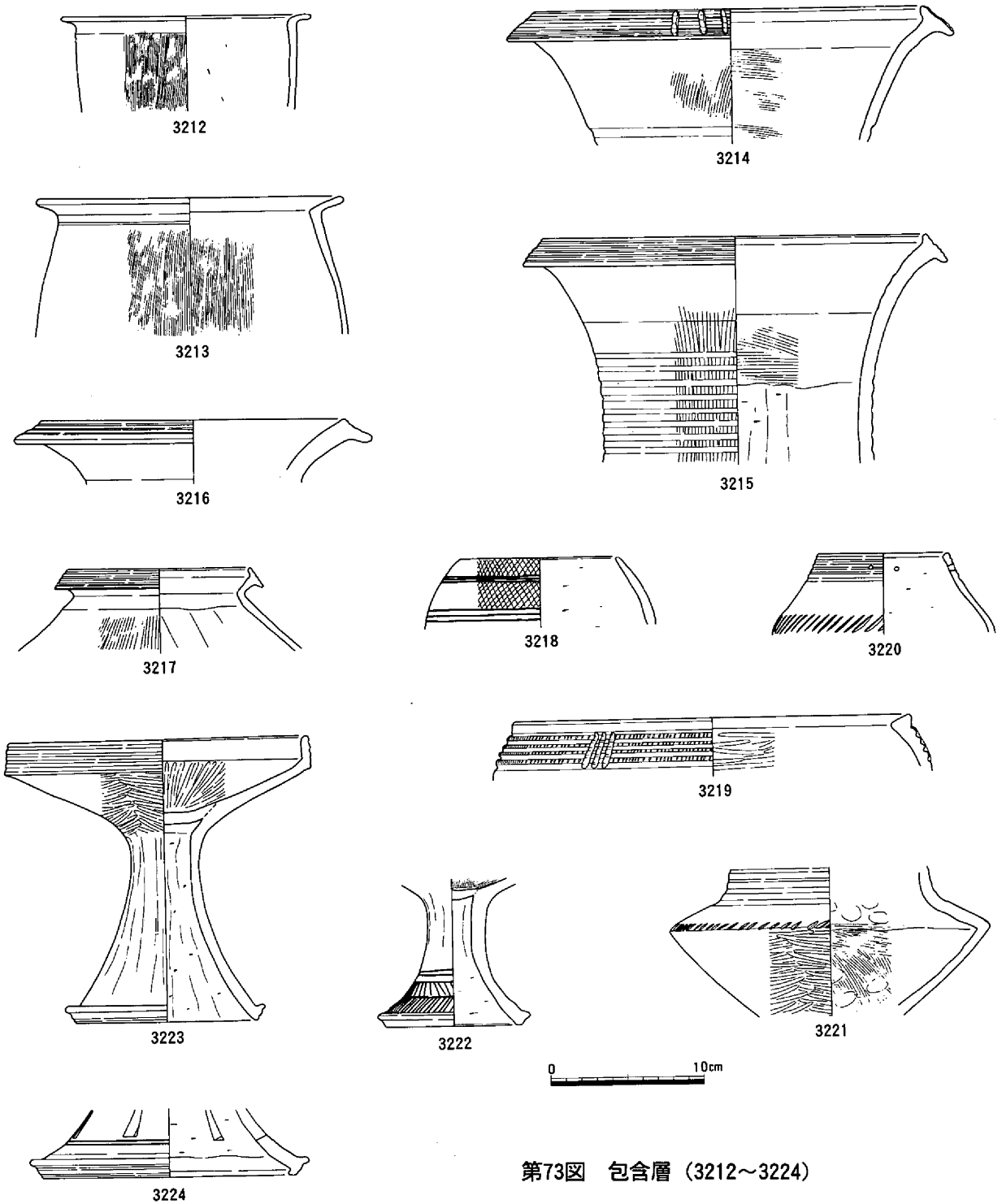
3226～3236は口径19.2～22.0cm長頸壺で、上下に拡張した口縁部には凹線を巡らし、長い頸部には沈線を飾る。

甕には口径9.2～12.6cmを測る小形3248～3254、口径12.0～18.8cmを測る中形3260～3268・3270～3292、口径20.0～28.6cmを測る大形3257～3259・3269・3293～3295がある。いずれも肥厚ないし拡張した口縁端部をもち、内面を頸部直下までヘラケズリするものが主体をなす。

鉢には、口径19.3cmを測る小形の3296と、口径40.0～47.3cmの大形になる3297・3298がある。大形



第72図 包含層 (3196~3211)



第73図 包含層 (3212~3224)

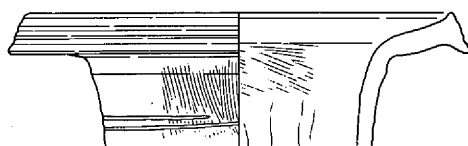
の3297では外反する口縁の端部を肥厚ないし拡張し、3298では凹線をめぐらしている。また、3299は脚台をもつ鉢と見られ、径15.5cmを測る口縁の端部をわずかに上方へ拡張し、凹線をめぐらしている。外面はハケメで調整し、内面はヘラミガキを施す。

3303~3320は高杯である。口径21.8cmを測る3303は、口縁部が外傾するものの端部の拡張は弱い。これに対し、3304~3306では、口縁端部は水平に拡張され、凹線が施される。さらに、3307~3310では、口縁端部に見られた面は幅広く内傾するようになり、緩やかに外反する口縁へと変わっている。

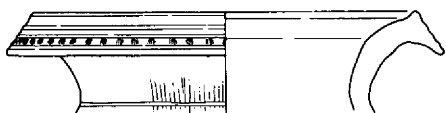
器台には、小形の3322と、大形の3323~3327がある。3322は脚部を失っているが、口径15.0cmを測



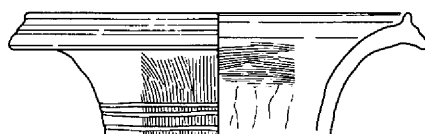
3225



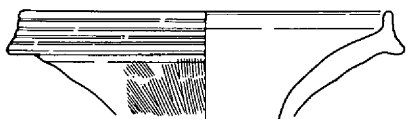
3226



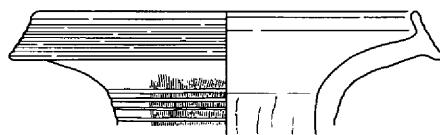
3227



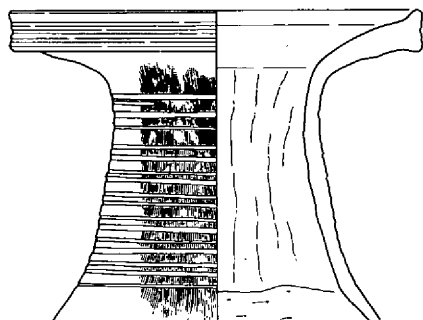
3228



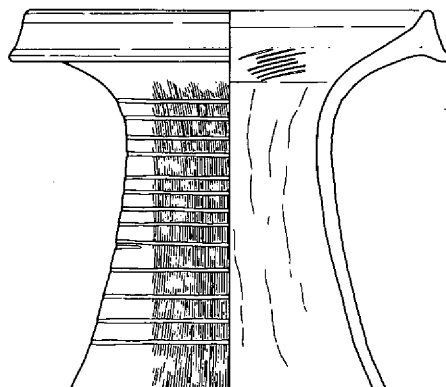
3230



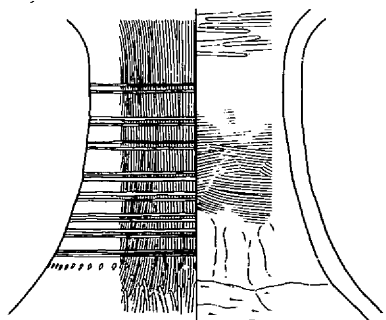
3229



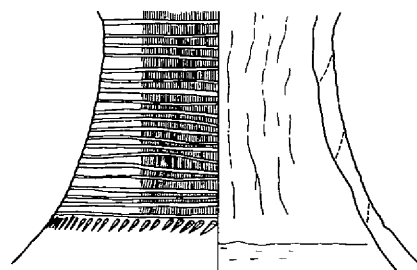
3231



3232



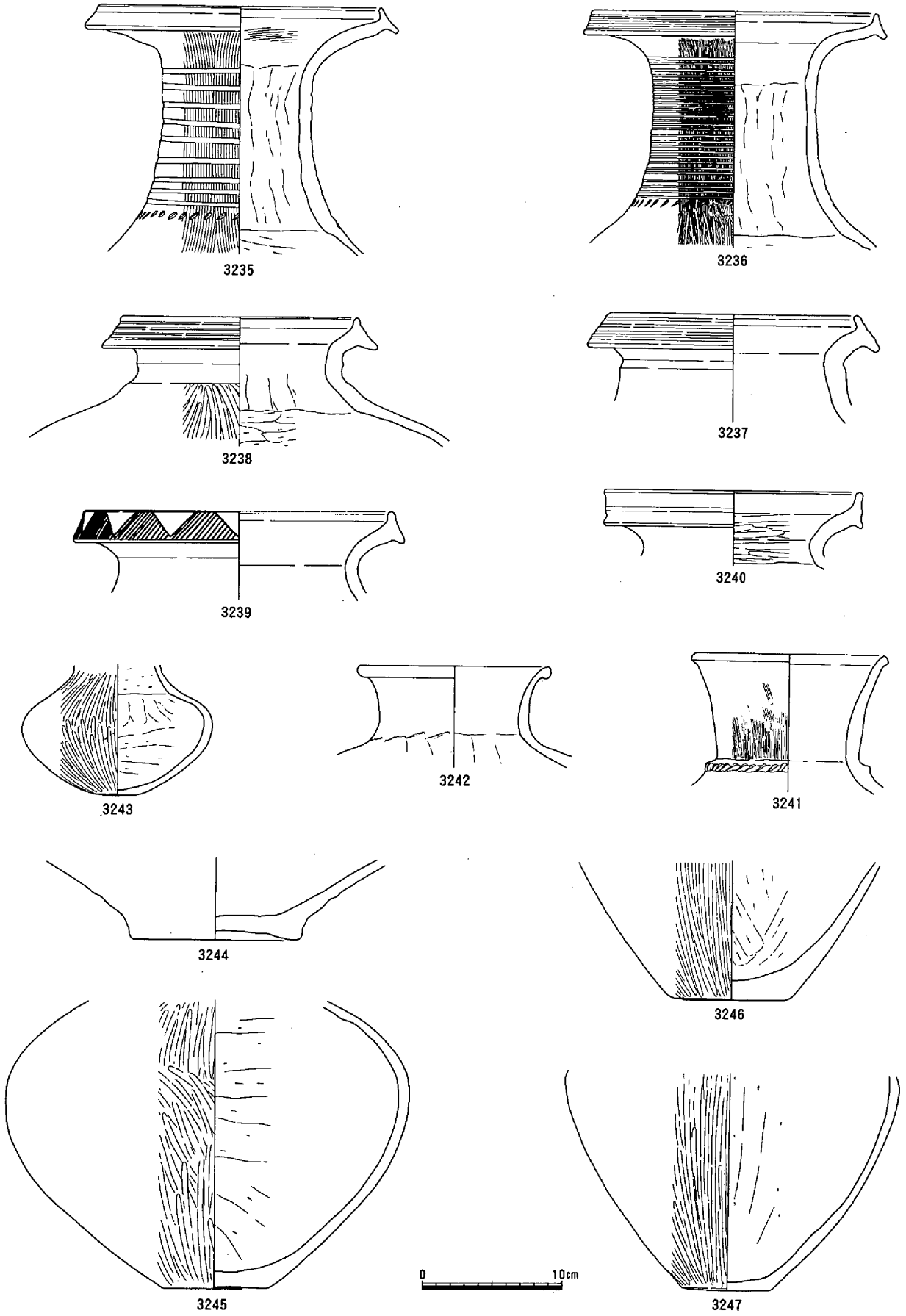
3233



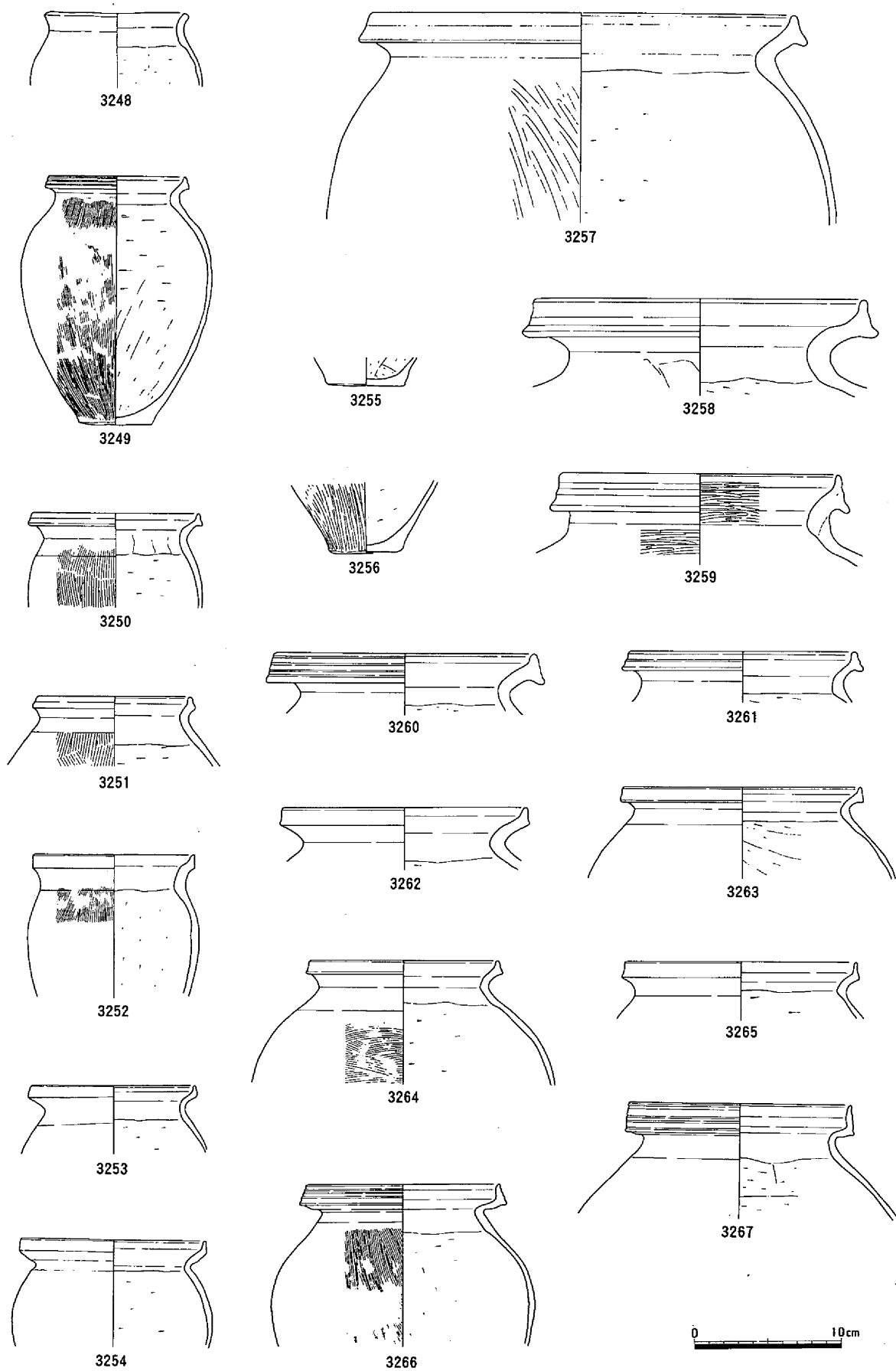
3234



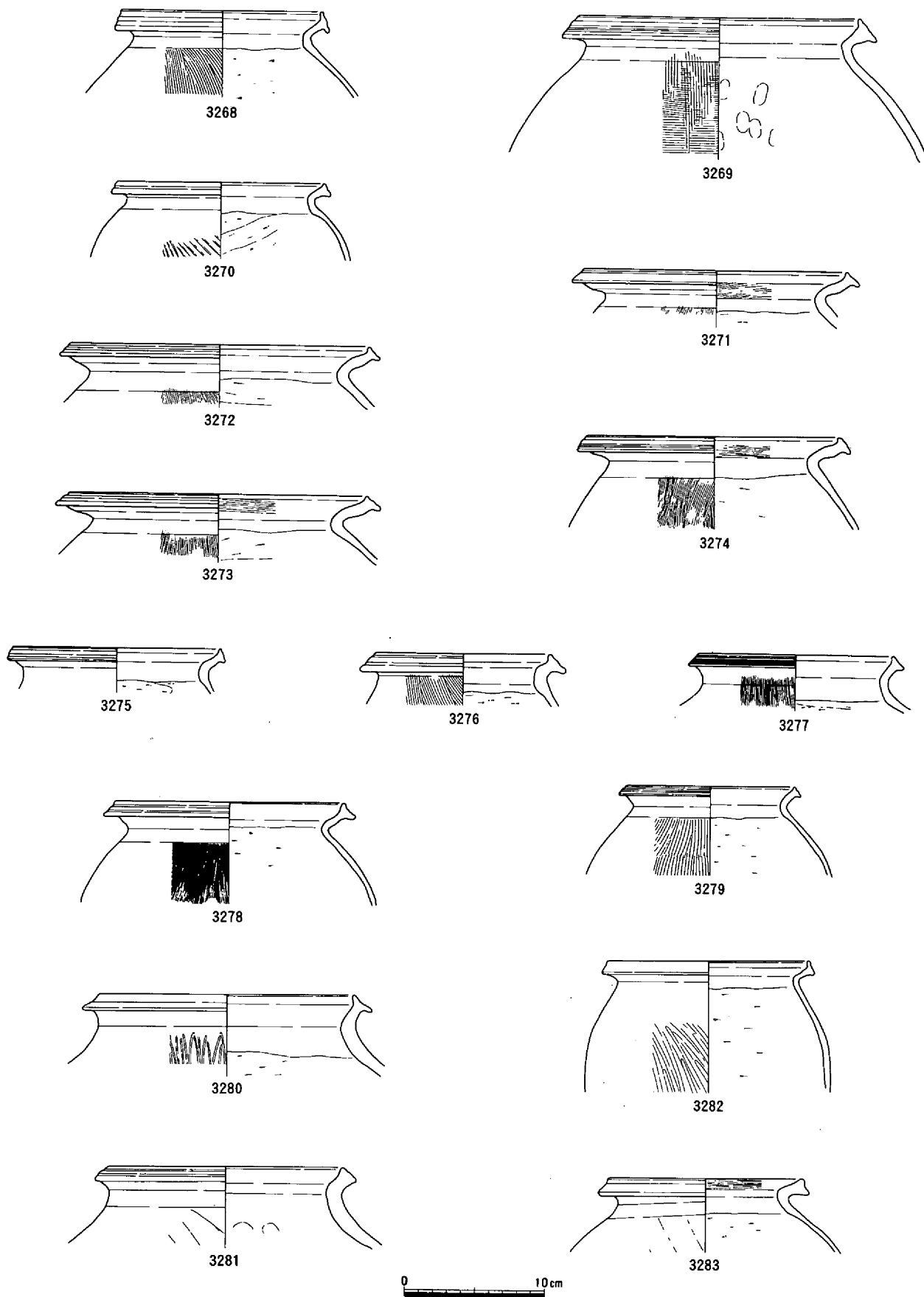
第74図 包含層 (3225~3234)



第75図 包含層 (3235~3247)

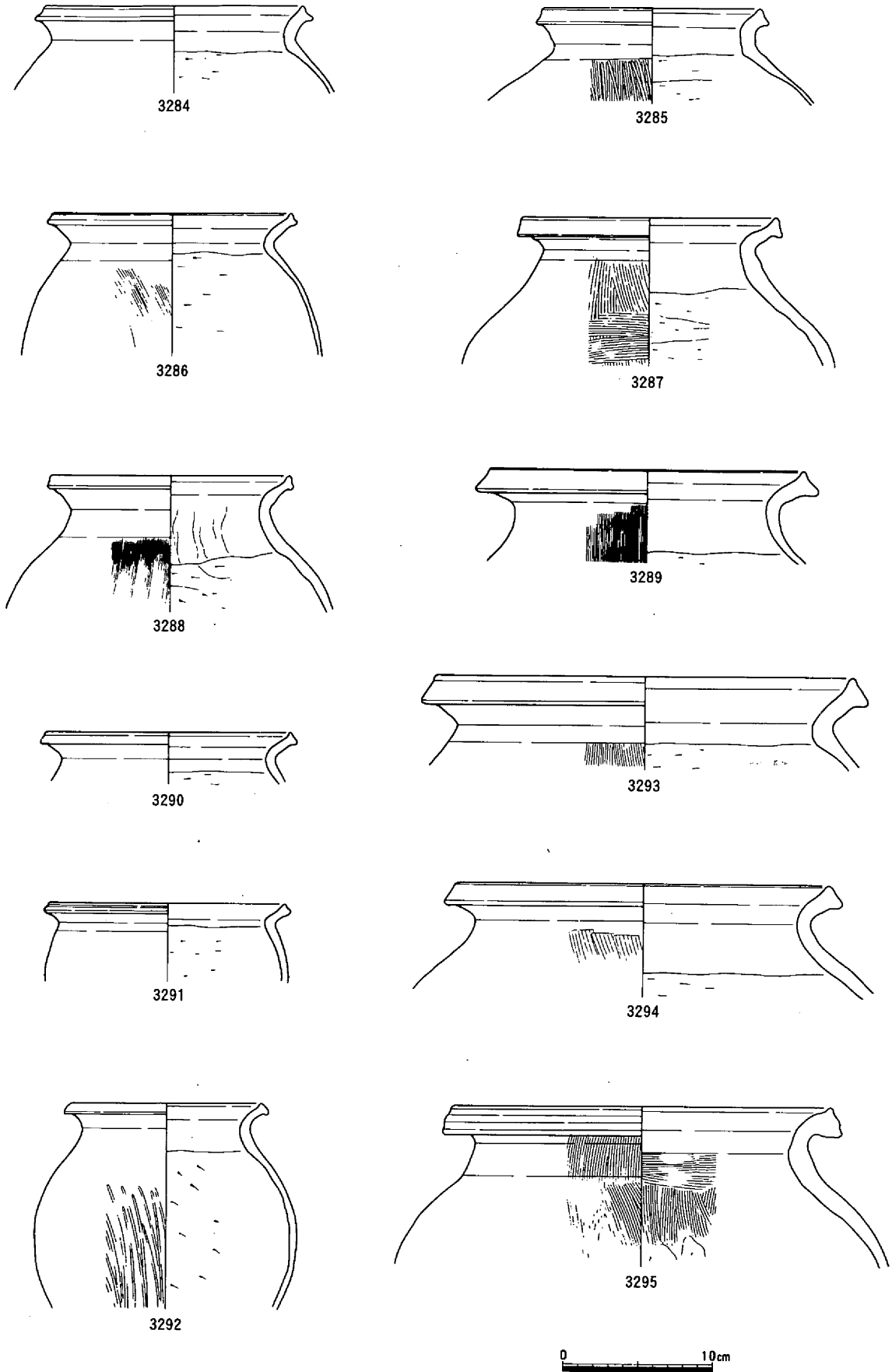


第76図 包含層 (3248~3267)

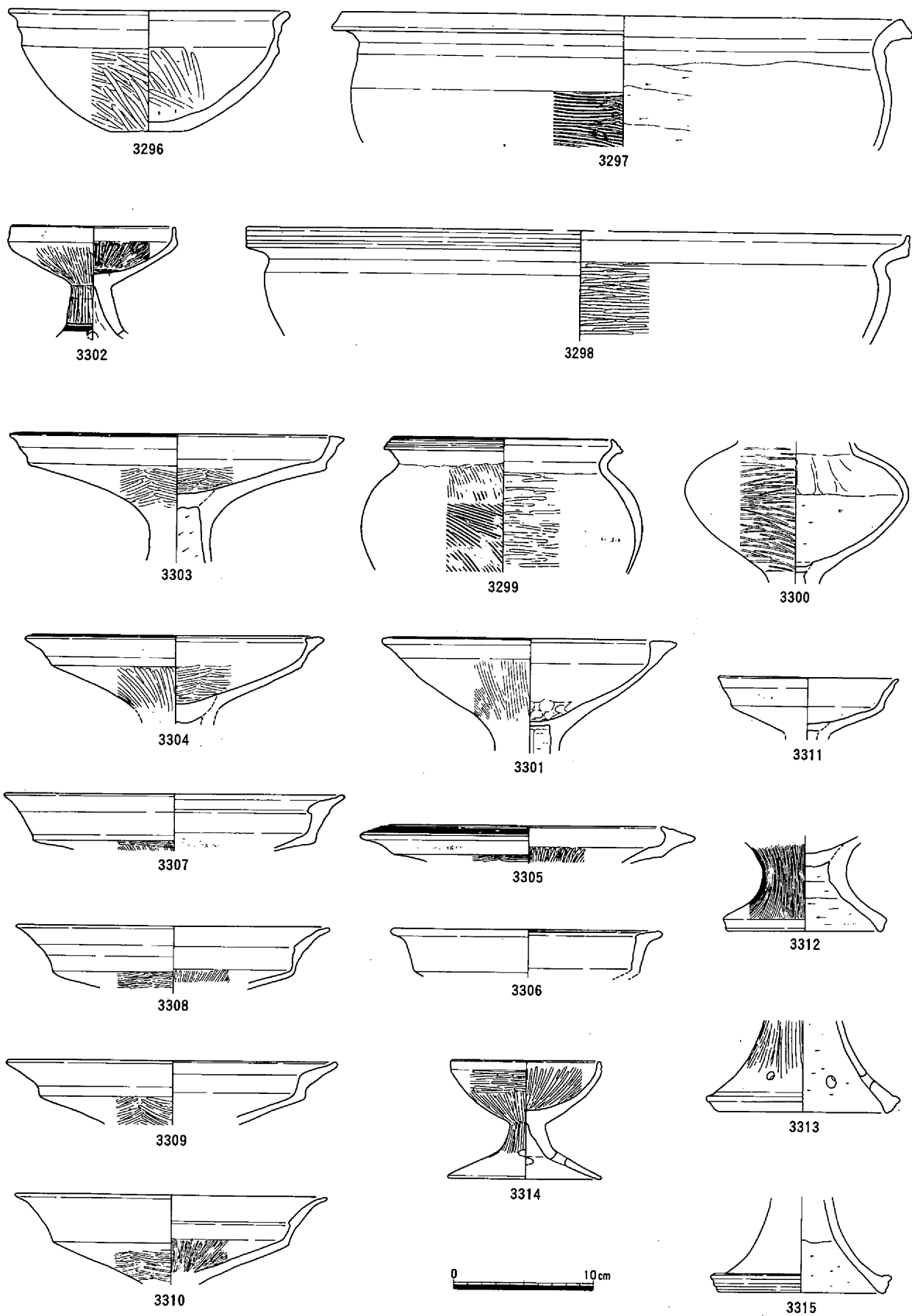


第77図 包含層 (3268~3283)

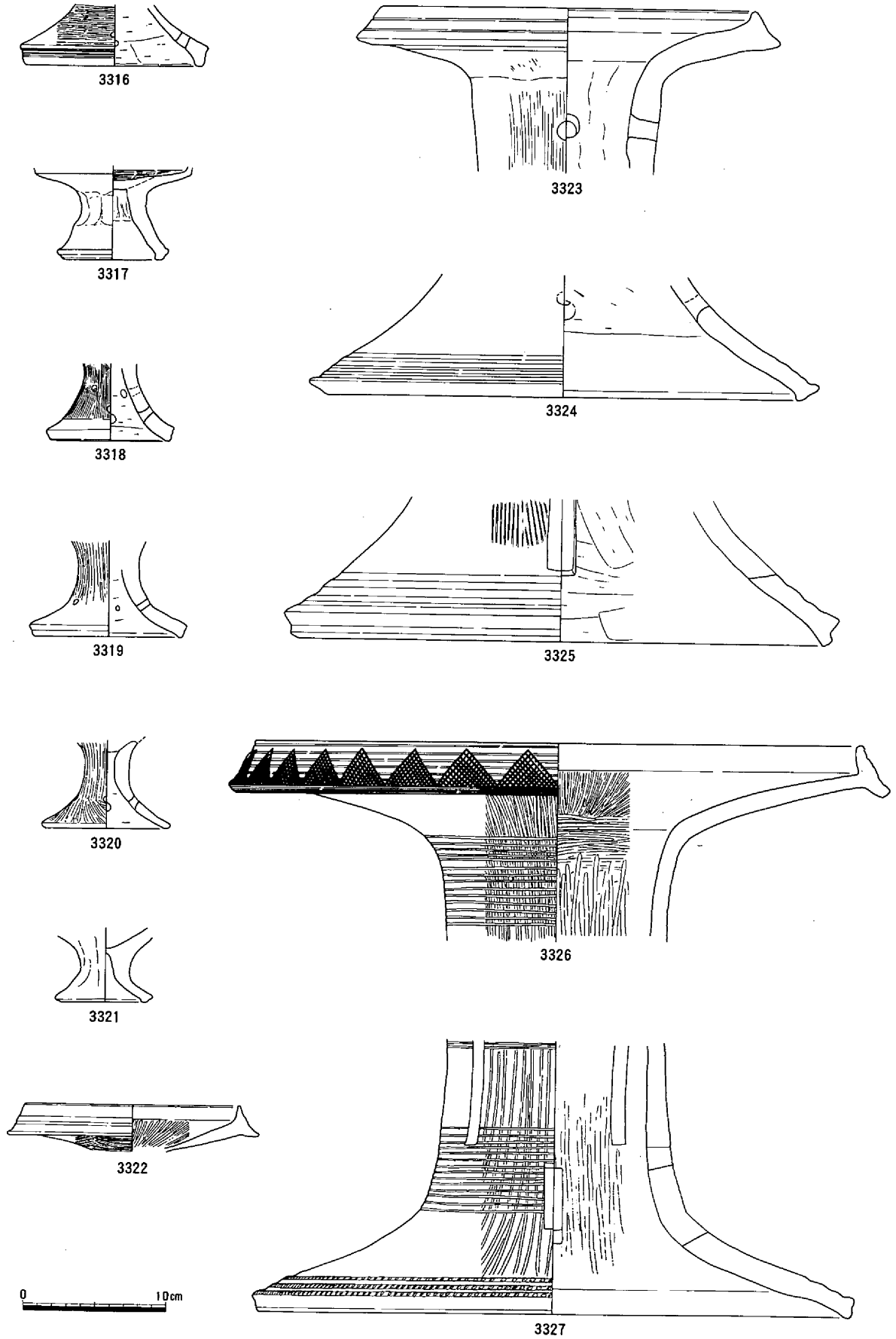




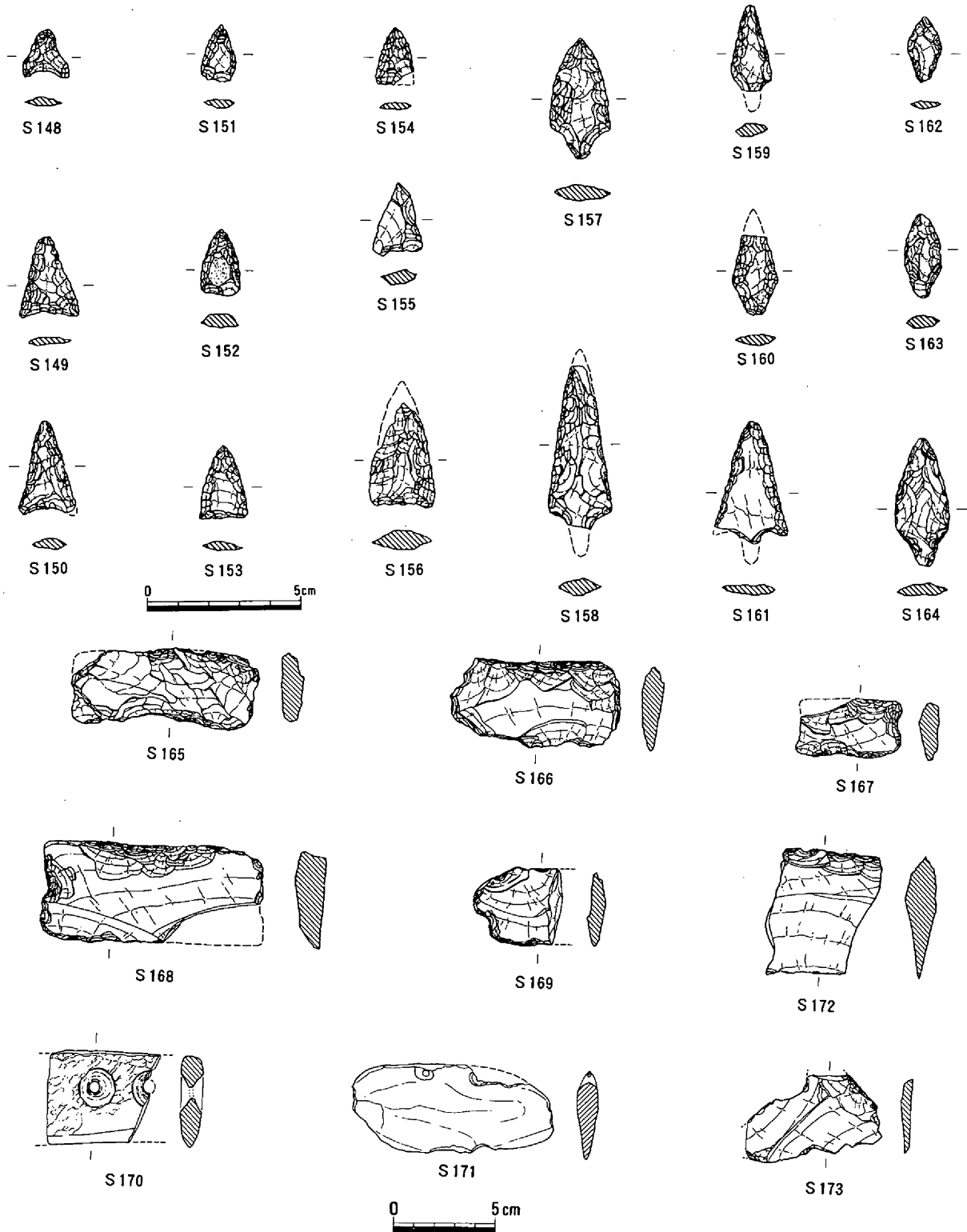
第78図 包含層 (3284~3295)



第79図 包含層 (3296~3315)



第80図 包含層 (3316~3327)



第81図 包含層 (S148~173)

る受け部の端を上下に拡張し凹線をめぐらしている。厚手につくられた3323は、受け部の端をわずかに上方へ拡張し凹線を施すもので、口径25.8cmを測る。筒部の外面をハケメ、内面をナデで調整し、円形の透かし孔を穿つ。3324は径32.6cmを測る脚部で、3323と同一個体である可能性が高い。裾部には数条の凹線を飾り、角張って終わる端部はわずかに上下に拡張される。3325も緩やかに広がる脚部で、径36.4cmを測る端部は凹面をなす。裾部には数条の凹線をめぐらし、方形の透かし孔を穿つ。外

面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。3326・3327は同一個体と見られる器台の受け部と脚部である。水平に広がる受け部は、端部を上下に拡張して凹線をめぐらし、斜格子で埋めた鋸歯文を飾る。筒部は十数条を単位とする沈線によって二段に区画し、方形の透かし孔を穿っている。大きく広がる脚部は径41.2cmを測り、裾部には3条の凹線をめぐらして刻目を施す。

#### 石器 (第81図、図版104)

弥生時代の石器には、石鏃、石包丁、石刃などがある。石鏃は、凹基鏃、平基鏃、有茎鏃、凸基鏃に分けられる。凹基鏃は、全長1.6cm、幅1.3cm、重量0.6gと小形のS148と、全長2.7~3.1cm、幅1.8~1.9cm、重量1.4~1.6gと中形のS149・150に分類される。同様に、平基鏃も全長1.8~2.5cm、幅1.1~1.6cm、重量0.8~1.8gと小形のS151~155と、全長4cm以上、幅2.1cm、重量4.3g以上の中形に分けられる。有茎鏃は、鏃身が三角形をなすI類と、木葉形をなすII類がある。I類では、全長4cm、幅2.0~2.5cm、重量4gあまりの中形のS157・161と、全長7cm、幅2.1cm、重量6gほどの大形のS158がある。またII類でも、全長3cm、幅1.3~1.5cm、重量2gあまりの小形のS159・160と、全長4.3cm、幅1.8cm、重量2.9gの中形のS164に分けられる。凸基鏃は、S162・163があるが、全長2.2cm、幅1.1~1.2cm、重量0.5~1.4gといずれも小形である。

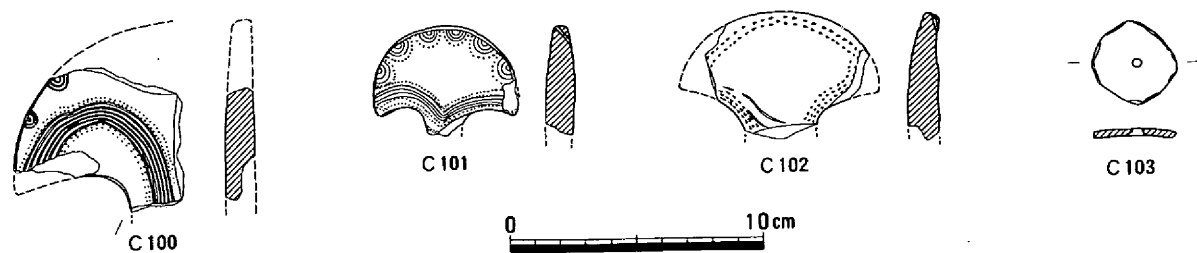
石包丁には、打製S165~169・172と磨製S170・171とがある。打製は、いずれも長方形の両端に抉りこみを設けたもので、その法量から長さ10.8cm、幅5.0cmの大形と、長さ8.4~9.1cm、幅4.0~4.3cmの中形、長さ5.3cm、幅2.9cmの小形に分類できる。素材はサヌカイトが主であるが、S165のように粘板岩製のものも見られる。磨製には、凝灰岩製と片岩製があり、ほぼ完存するS171で長さ10.0cm、幅4.6cmを測る。

#### 土製品 (第82図、図版106)

土製品には、分銅形土製品と紡錘車がある。分銅形土製品は3点あるが、その文様によって楯描文タイプと、刺突文タイプに分けられる。楯描文タイプには、幅12cmあまりに復元される大形のC100と、幅4.4cmと小形のC101とがある。いずれも、楯状工具により眉状の表現を描き、周縁には重弧文を飾っている。一方、刺突文タイプのC102は幅5.5cmと中形に属し、周囲を楯状工具の刺突によって縁取っている。C100・101に比べて抉りこみは浅く、端部も丸く収めている。

紡錘車C103は、土器片を打ち欠いて、径3.3cmの円盤状に加工したもので、片面から径0.3cmの孔を穿っている。重量は3.7gを測る。

(亀山)



第82図 包含層 (C100~103)

## 第3節 古墳時代の遺構・遺物

### (1) 概要

古墳時代の遺構には、竪穴住居54軒、堀立柱建物2棟、焼成土壇3基、土壇35基、土器溜まり9箇所、溝20条、水田がある。このうち、前期に属する遺構は、竪穴住居30軒のほか、土壇35基、土器溜まり9箇所、溝20条、水田からなる。これらは、弥生時代後期の遺構と重複するように微高地の南西にまとまっている。竪穴住居には1辺3mの小形から6mを越えるような大形のものが見られたが、特に大形住居の占める割合が高い。また、いずれの住居においても建て替えが顕著に認められた。水田は、弥生時代末の範囲をほぼ踏襲しているが、島状高まりはほぼ削平されている。また、区画は一層小形化し、平坦化する。中期の遺構には、竪穴住居9軒、土壇35基などがある。この段階には水田が完全に埋積し、カマドを造り付けた竪穴住居が東へ向けて展開していく状況が窺われる。後期には、竪穴住居15軒のほか、堀立柱建物2棟、焼成土壇3基、土壇35基、溝20条がある。これらは調査区の中央において中期の遺構と一部重なりを見せるものの、その主体は中屋調査区の東端へ移っている。これらの住居では屋内に炉状の遺構が見られるものがあり、鉄滓も少なからず認められる。また、その周辺では焼成土壇も検出されていることからすれば、小規模な鉄生産が行われていたものと思われる。

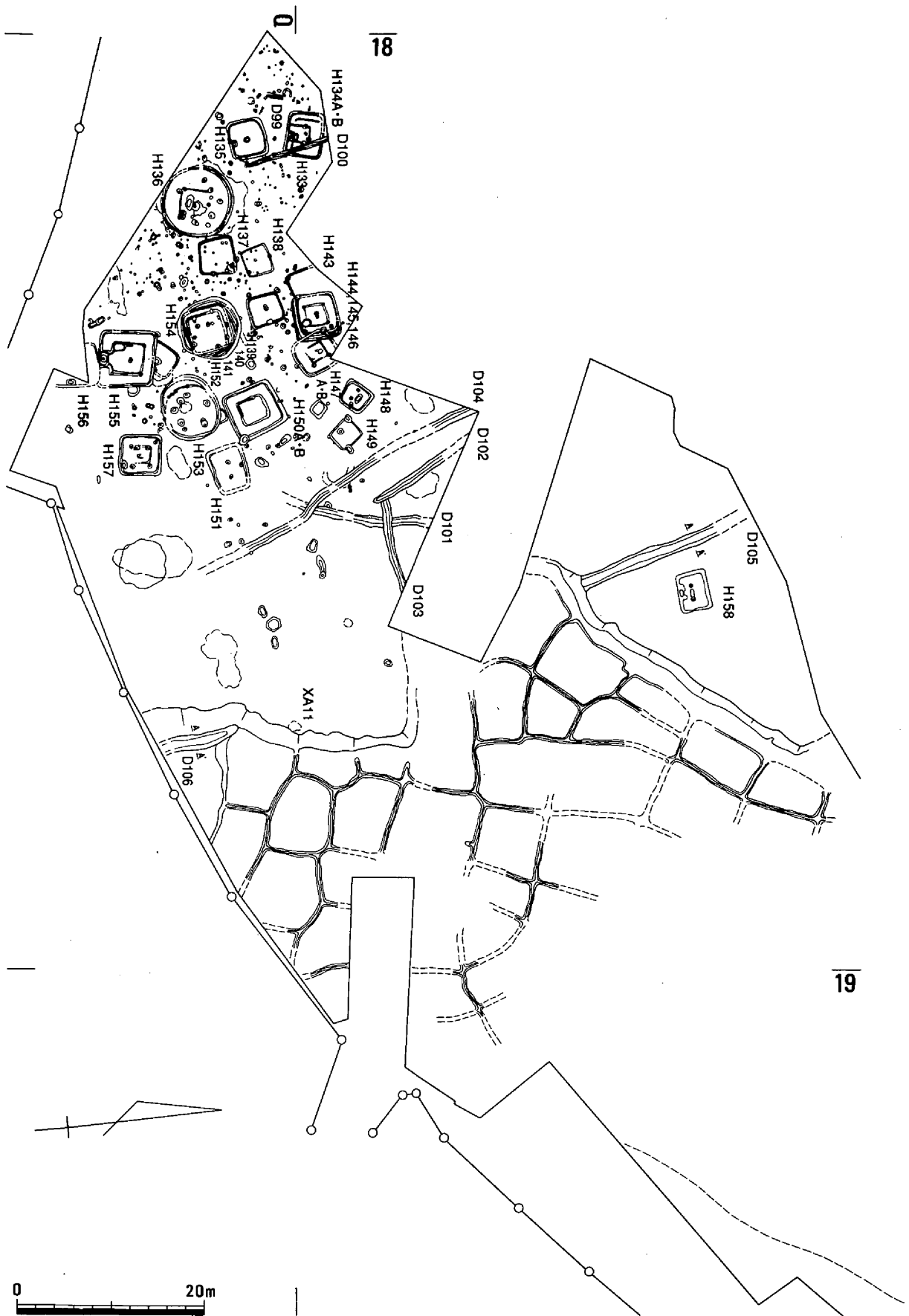
(亀山)

### (2) 竪穴住居

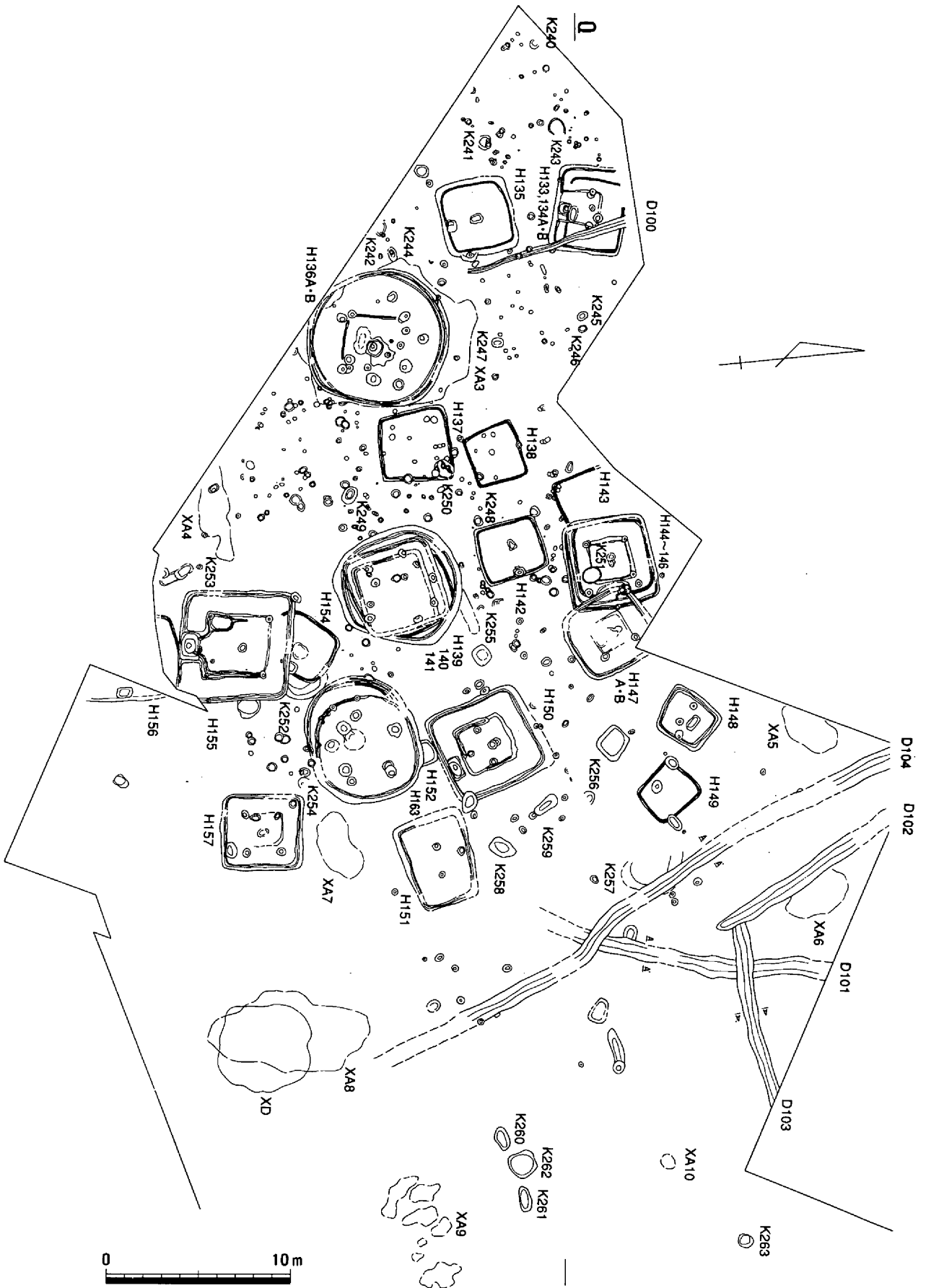
#### 竪穴住居-133・134 (第85~88図、図版14・60・61)

P18区の南西隅、Q18区の北西隅、Q線上に位置する。竪穴住居-135の北側1.5mにあり、棟方向をN-78.5°-Wのほぼ南北に持つ竪穴住居である。本住居が最も新しい竪穴住居-134Bであり、その下位にはほぼ同形同大の竪穴住居-134Aがあり、さらに下位に竪穴住居-133が存在した。互いに切り合うことはなく、同一意識の中で拡張されて3軒の重複関係になっている。

竪穴住居-134Bは長軸445cm、短軸340cmの長方形にて検出面から床面までの深さ36cm、床面海拔高は338cm、床面積14.7㎡を測る中形でも小さい方である。埋土は大きく4層からなり、第3層の暗青黒褐色微砂土中に土器、炭化材を多量に含む。平面的には住居南東隅の270×160cm範囲内に完形品を含み、土器片、石材等が多く、北西隅にも投棄された土器群が存在する。埋土除去後は東西、および北辺にベッド状遺構と呼称される「コ」字形の高床部が現れ、中央から南辺に高床部より4~8cm低い床部(3.4㎡)が設けられている。棟を支える支柱穴は柱間204cmにて高床部から掘り込まれており、その柱穴間中央に炭の入った浅い土壇、その底面には40×15cm範囲に焼土面と35×29×6cmの土壇が認められた。焼土面から南に85cmの所に方形土壇があり、上面から3334・3339の甕が出土している。土壇内北側の小土壇が大土壇より新しい土層である。遺物は高床部から3345・3347等の高杯片と石材3点、砥石1点が出土している。他の掲載遺物は第3層出土のものであり、古・前・Ⅱに比定できる。竪穴住居-134Aは竪穴住居-134Bの前身であり、支柱穴、方形土壇、壁体溝はほぼ同一場所にある。柱穴間の土壇は若干北東に寄り、焼土面もさらに北側にあるが、住居平面は竪穴住居-134Bと同規模である。大きく異なるのは高床部が設けられていないことである。

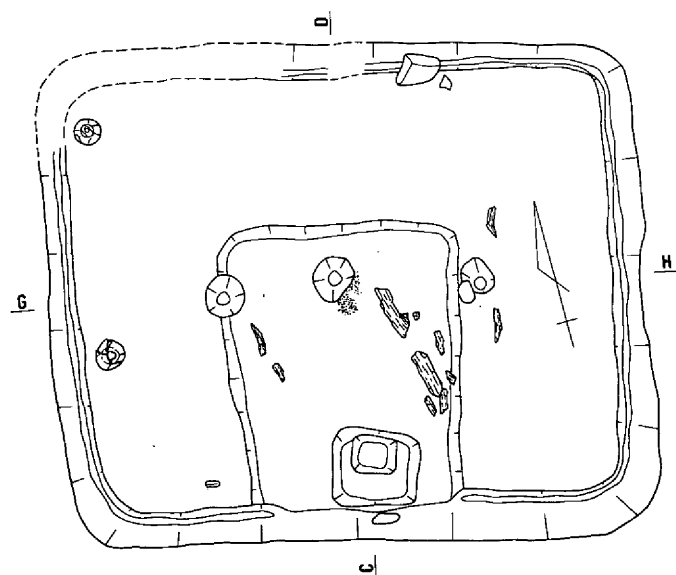
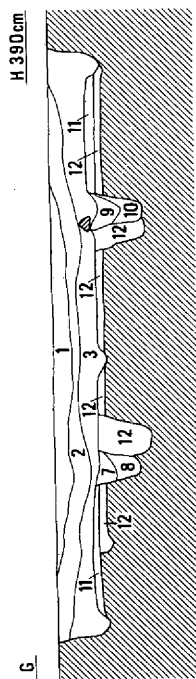
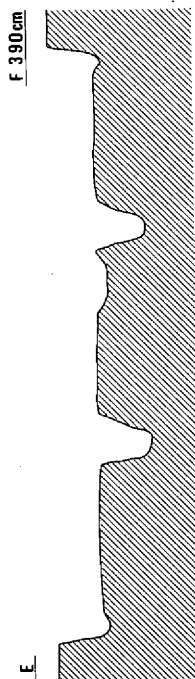
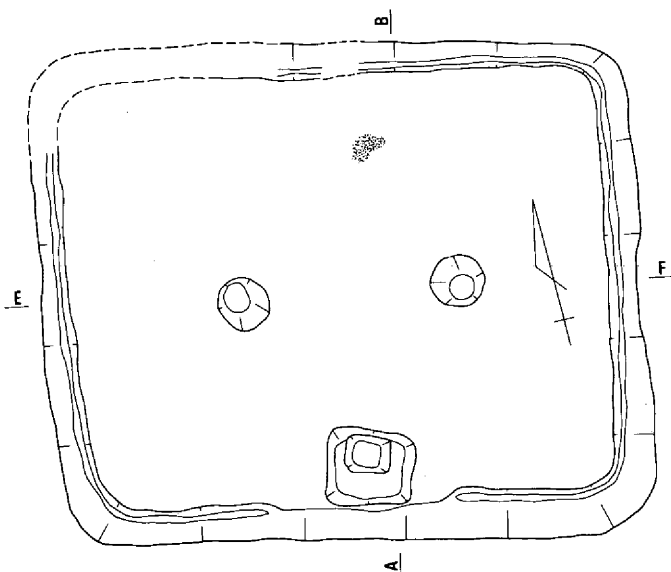
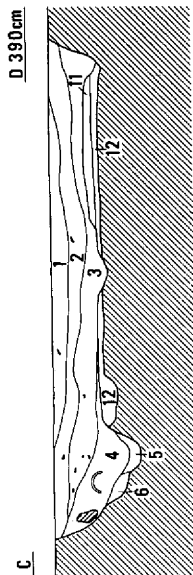
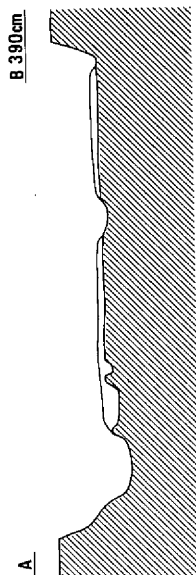
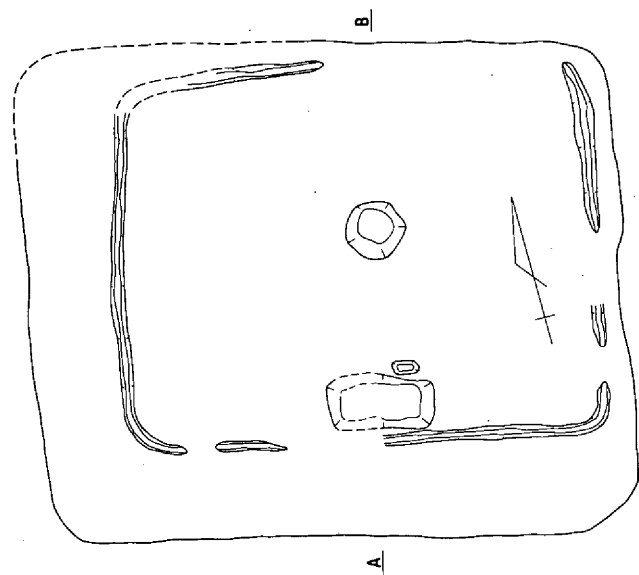


第83図 中屋調査区古墳時代遺構全体図1 1/600



第84図 中屋調査区古墳時代遺構配置図1 1/300

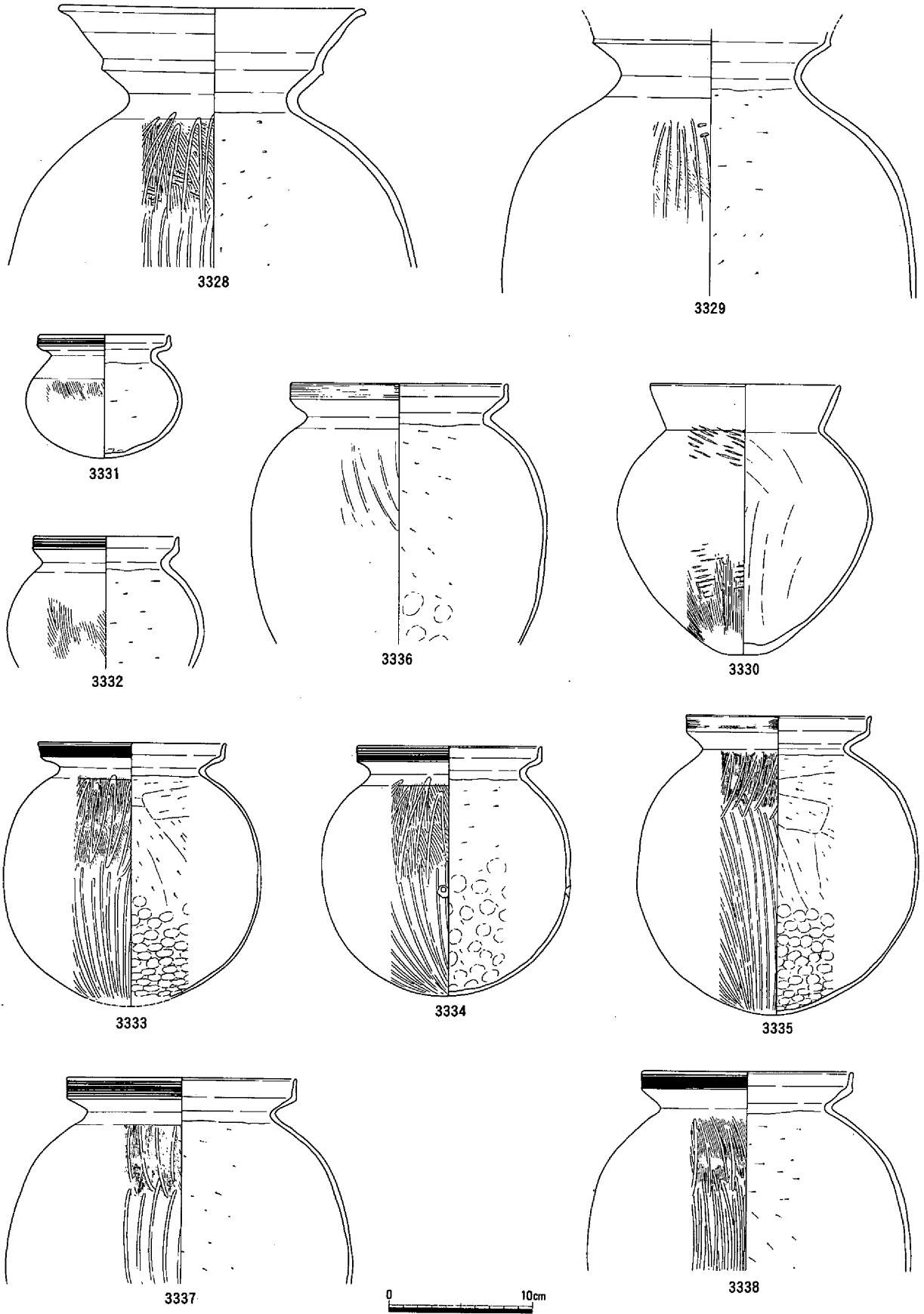




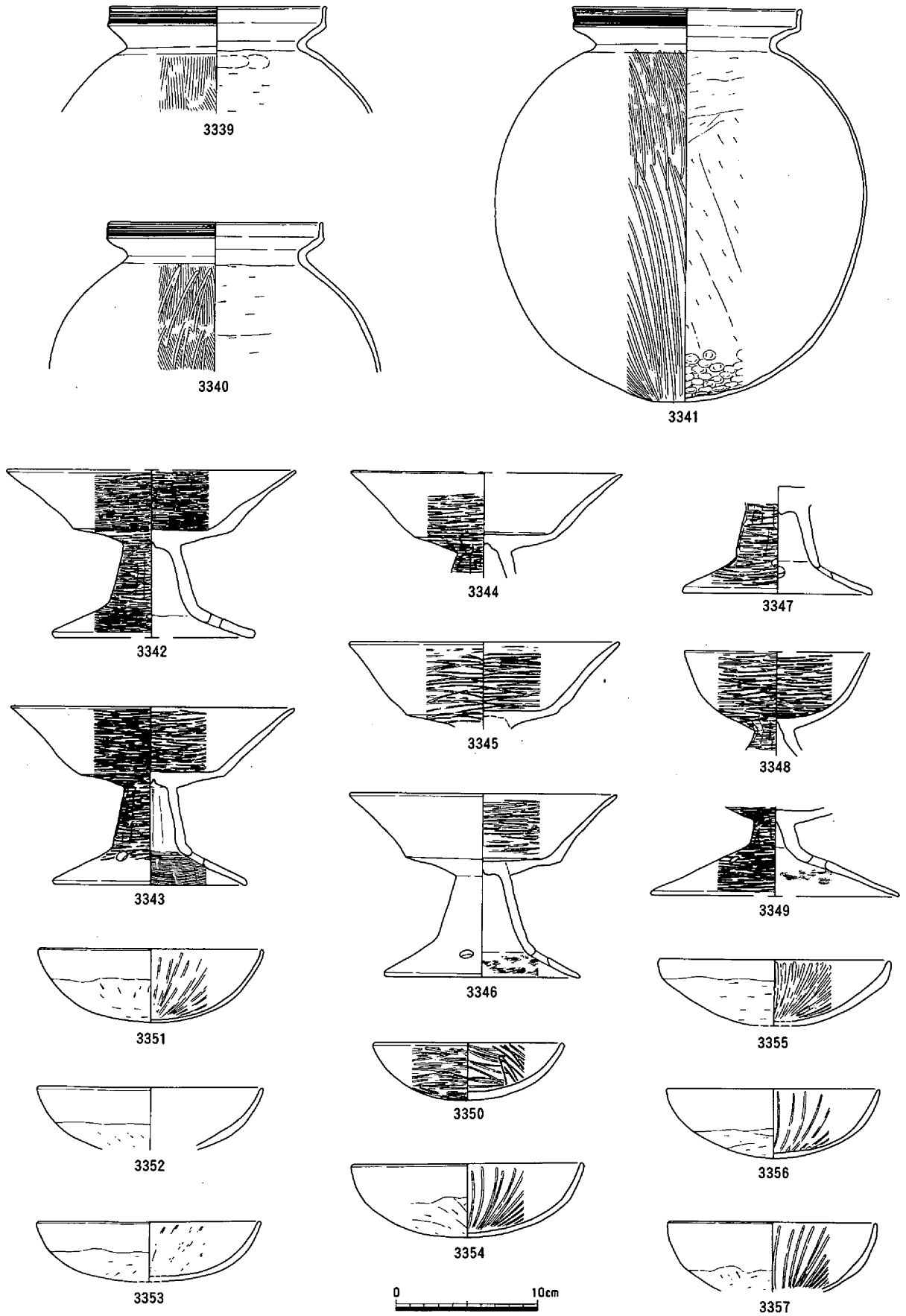
- 1 褐色粘質微砂
- 2 褐色微砂
- 3 暗青黒褐色微砂(土器・炭化材を多量に含む)
- 4 暗褐色微砂
- 5 暗茶褐色微砂
- 6 暗黄褐色微砂
- 7 暗茶褐色微砂(炭化材・炭を含む)
- 8 暗黄褐色粘質微砂
- 9 暗青褐色粘質微砂
- 10 暗青灰色粘質微砂(炭化物を含む)
- 11 暗青灰褐色粘質微砂
- 12 暗灰色砂質土



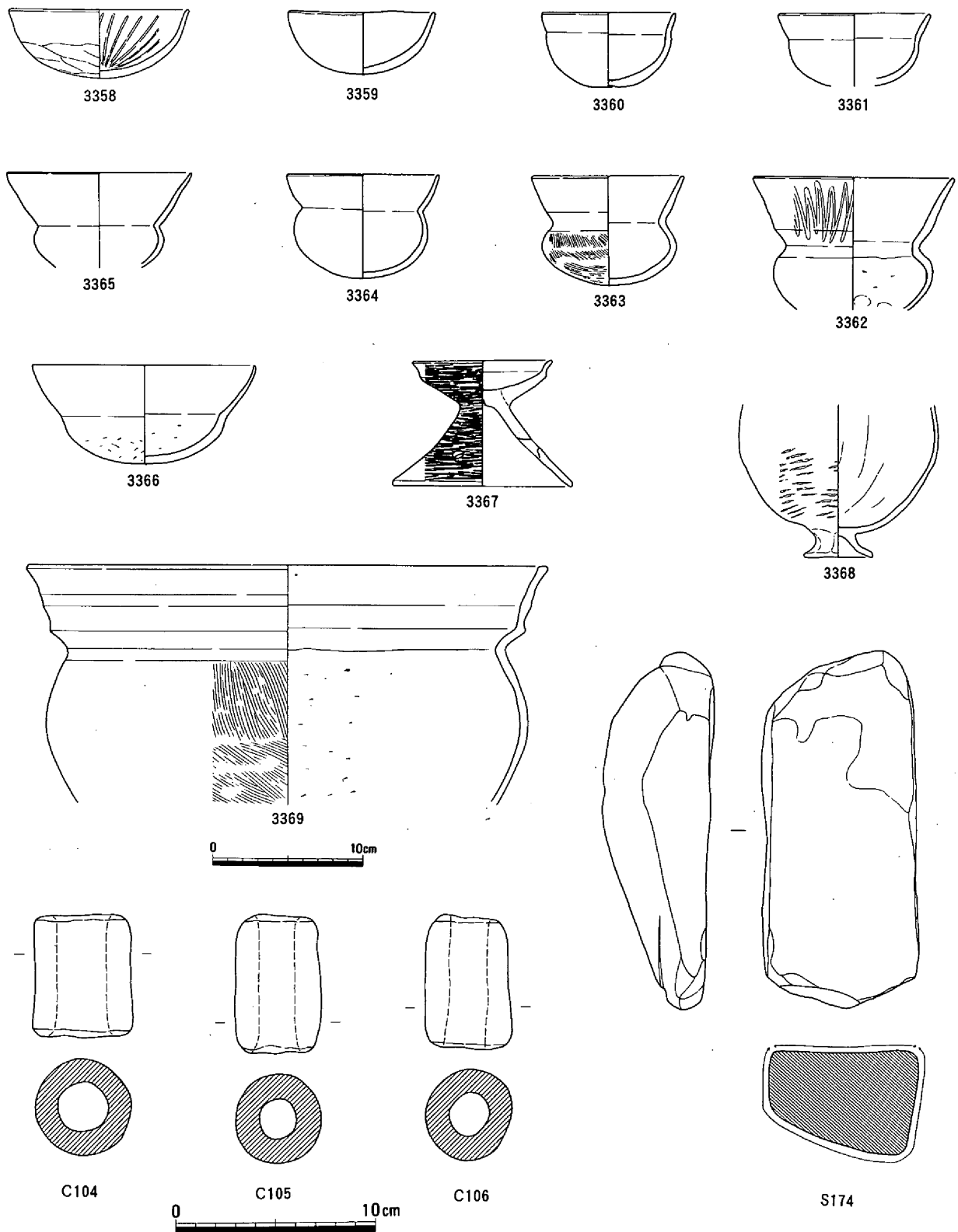
第85図 竪穴住居-133・134



第86図 竪穴住居-134 (3328~3338)



第87図 竪穴住居-134 (3339~3357)



第88図 竪穴住居-134 (3358~3369・S174・C104~106)

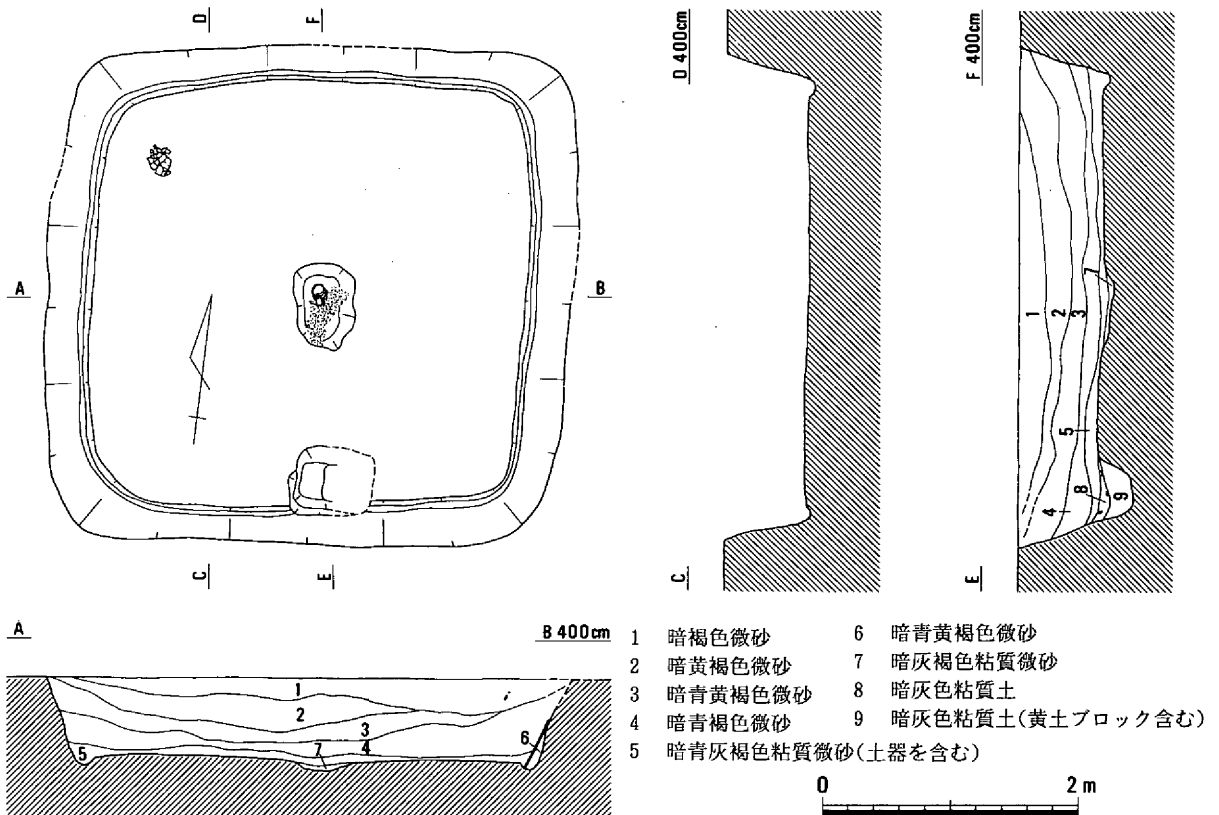
竪穴住居-133は竪穴住居-134Aの床面下約10cmから検出されたものである。長軸375cm、短軸298cm、床面海拔高は331cm、床面積は10.8㎡を測る。住居内付属の施設は長さ85cm、幅42cm、深さ23cmの方形土壇と小穴、中央穴と壁体溝である。本住居の対角線の距離が、対角線上に拡張された竪穴住居-134の長辺に近い数値を示す。  
(高畑)

竪穴住居-135 (第90図、図版15・62)

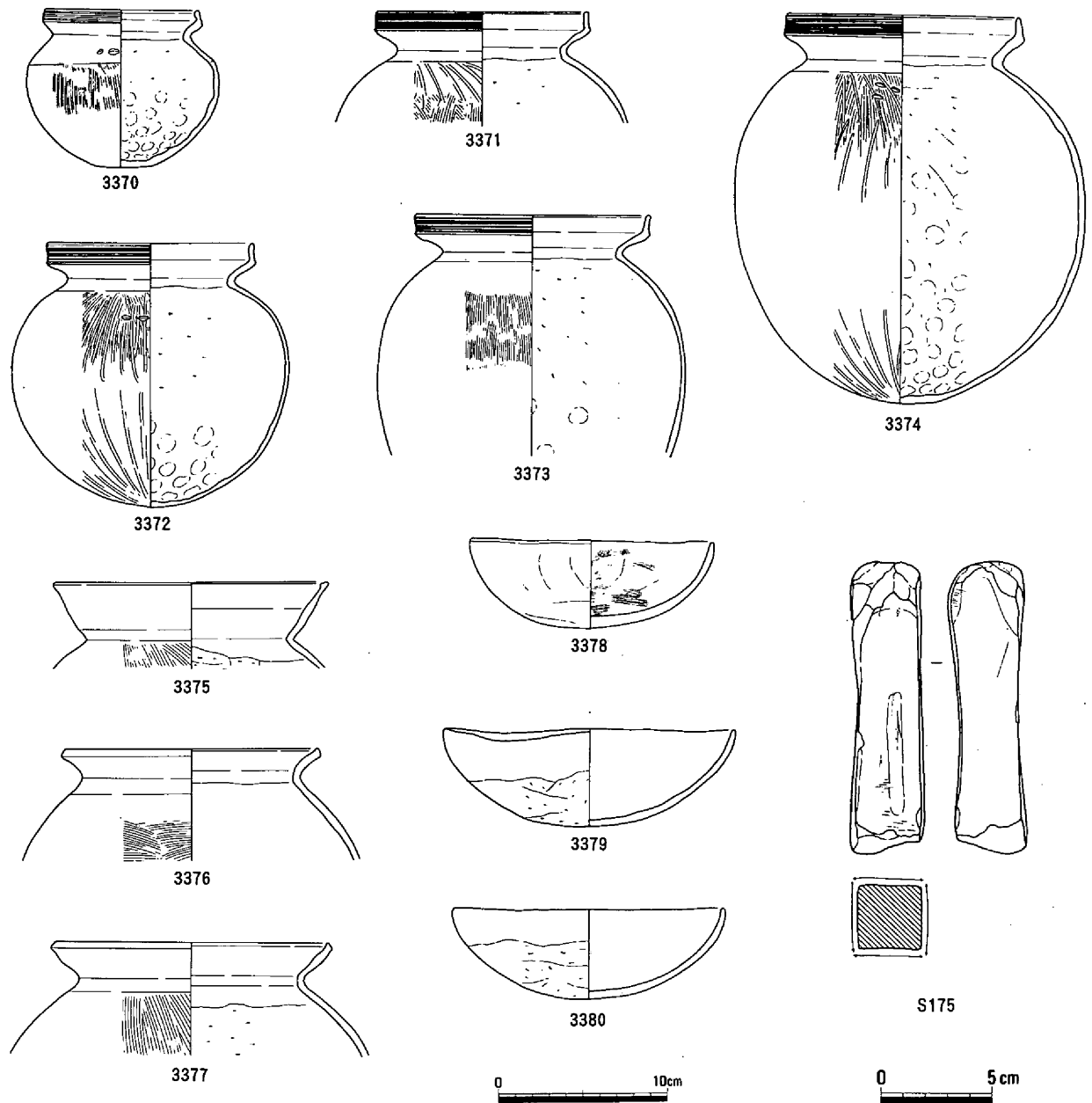
Q18区の北西隅、竪穴住居-133・134の南1.5mに位置する。長軸357cm、短軸348cmの方形にて、検出面からの深さ65cm、床面積は11.4㎡を測る小形の竪穴住居である。床面海拔高は304cmを測り、Q18区では最も低位置となる。埋土は大きくは5層からなり、レンズ状の堆積を呈し、第1層において多少の土器片が認められた。しかし、竪穴住居-134のような多量の投棄状況は示さない。床面は地山である黄色粘質土の上に暗灰色粘質土を貼り土に利用しており、中央穴と壁体溝の間を高くしている。床面には中央穴、方形土壇、壁体溝が設けられており、中央穴底部は北側を主に50×20cmの範囲に焼土面、南側は炭層があり3370の甕が出土している。方形土壇は後世の工事により東半分を消失している。2層からなり、第8層の暗灰色粘質土中に鉢3379を含む。東西断面の東端壁体溝内には、幅2cm、長さ30cmの木質の土壌化した痕跡が埋め込まれた状況を示す。南辺壁体部でも平面形で幅2cm、長さ30cm単位の板材の土壌化痕跡が床面で表れており、その単位が連続して4板、120cmの長さが確認されている。床面から出土の遺物は3370と3380があり、3380が土圧により破碎され床面に密着していた。他の遺物は埋土からの出土であり、3377の甕が他と色調胎土が異なる。土器の特徴から古・前・Ⅱに比定できるが、竪穴住居-134の遺物より少し古相を呈している。 (高畑)

竪穴住居-136 (第91~94図、図版15・63)

Q18区の北西、竪穴住居-135の南東2.3mに位置する。1回の建て替えが行われており、同心円状の拡張が認められる。住居プランは円形から隅丸の五角形に変化している。柱穴も4本から五角形の角に5本が配される形になり、中央穴の位置も少し南に移動し、新たな貼り床が行われている。

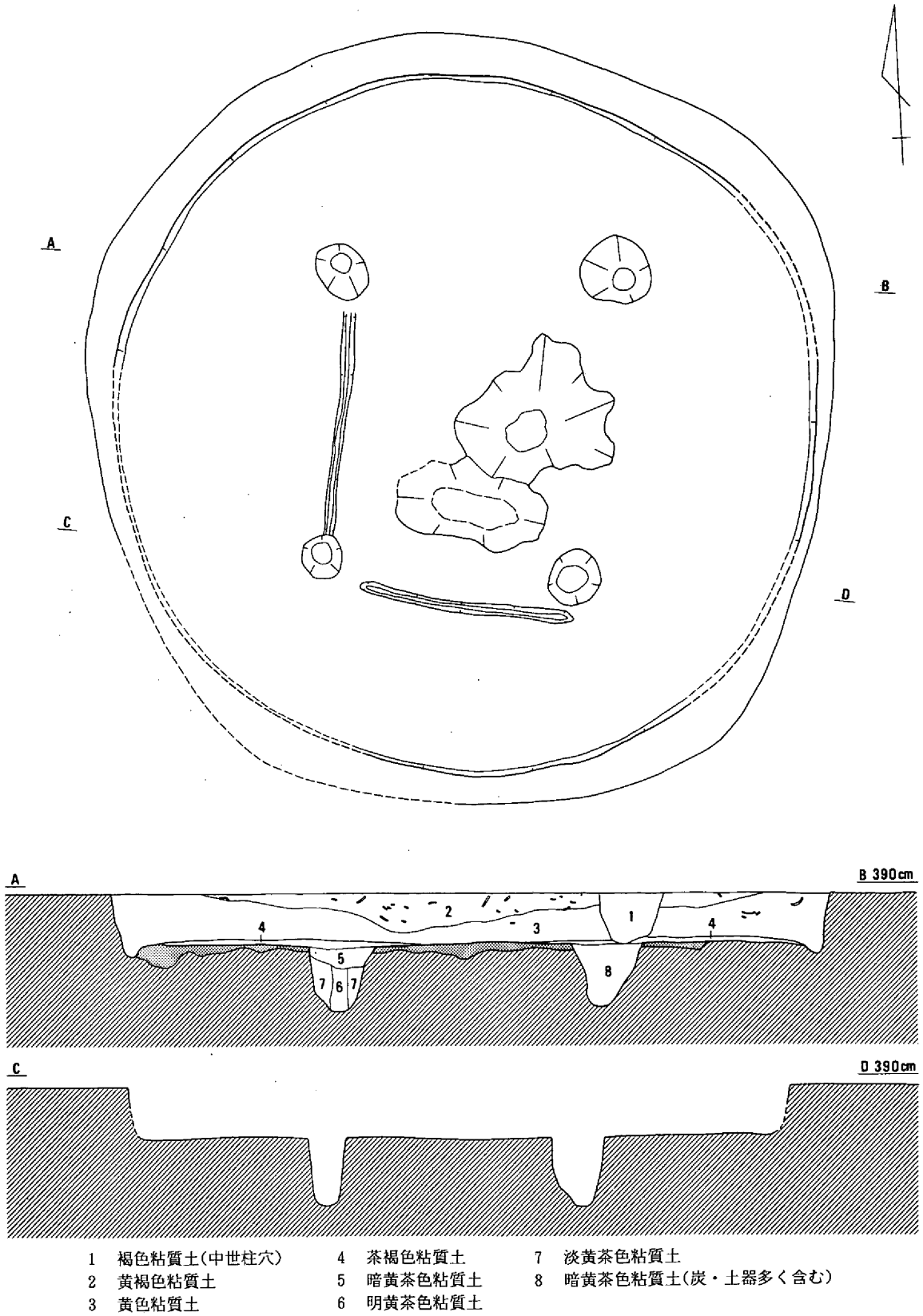


第89図 竪穴住居-135

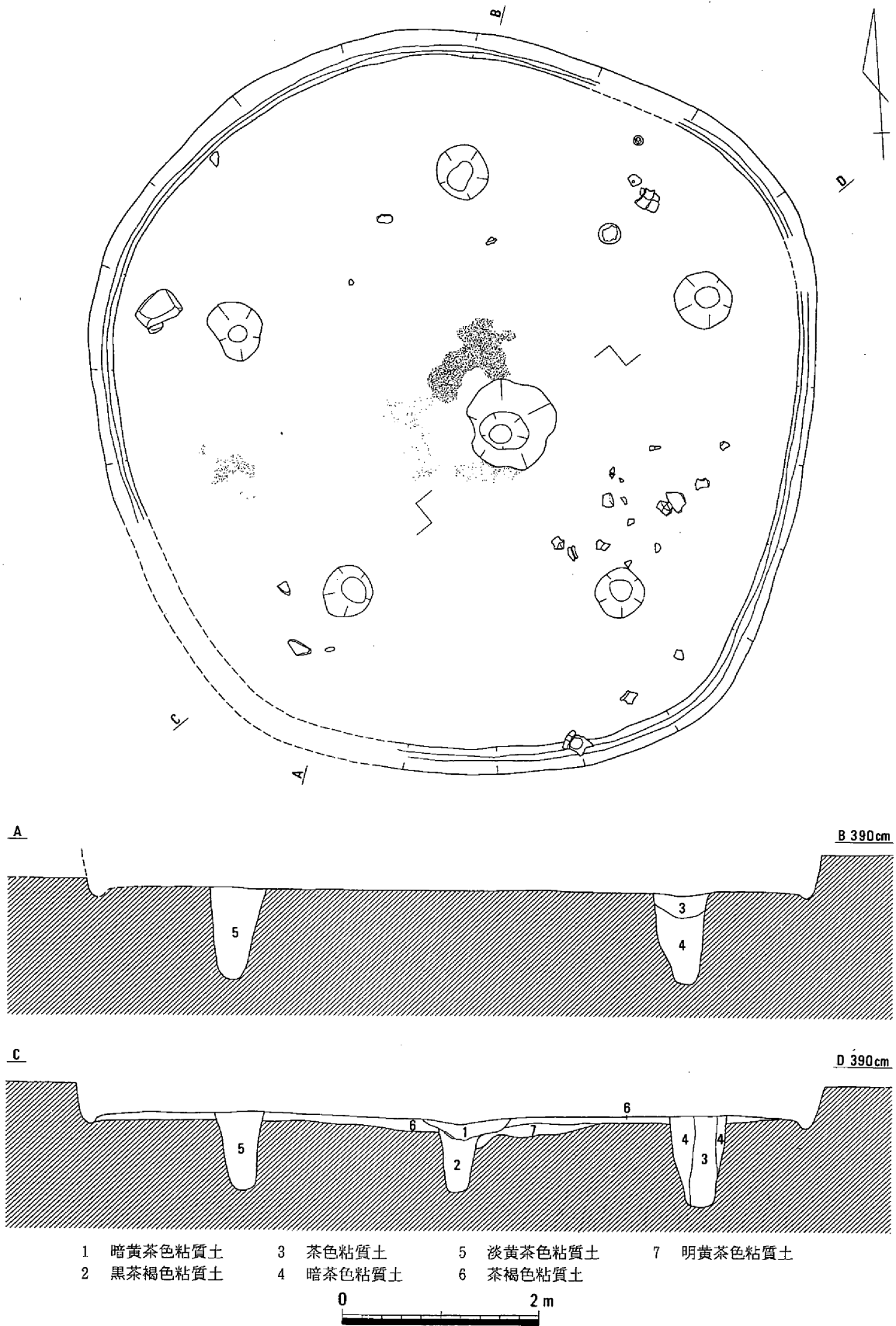


第90図 竪穴住居-135 (3370~3380・S175)

竪穴住居-135 Bは長軸754cm、短軸700cm、検出面から床面までの深さは48cmであり、床面海拔高335cmを測る。床面積は41.1㎡とQ18区では最大の規模を持つものである。住居上面は弥・後・Ⅱ、古・前・Ⅰの時期を中心に多量の土器片、河原石が散布しており、住居プランを覆ってさらに南北に広がる出土状況であった。調査時には溝状遺構と土器溜りの2つの遺構内遺物として取り上げたが、時期差のある土師器群が混在した要因は不明であり、ここでは住居内への廃棄物として扱った。埋土は2層からなり、第1層は第2層に比べて多く土器片を含む。床面には5本の支柱穴、壁体溝、中央穴が設けられ、北西部柱穴と壁体溝間には45×30×15cmで平坦面を持つ石が東に少し傾いて出土している。床面からの遺物はほとんど無く、3396が1点である。3383が柱穴内、3384・3394が中央穴からの出土である。甕の尻すぼみと一部平底等から上東・川入遺跡の下田所式より少し新しく、亀川上層式より古相を呈する。古・前・Ⅰの新相に比定できる。(高畑)

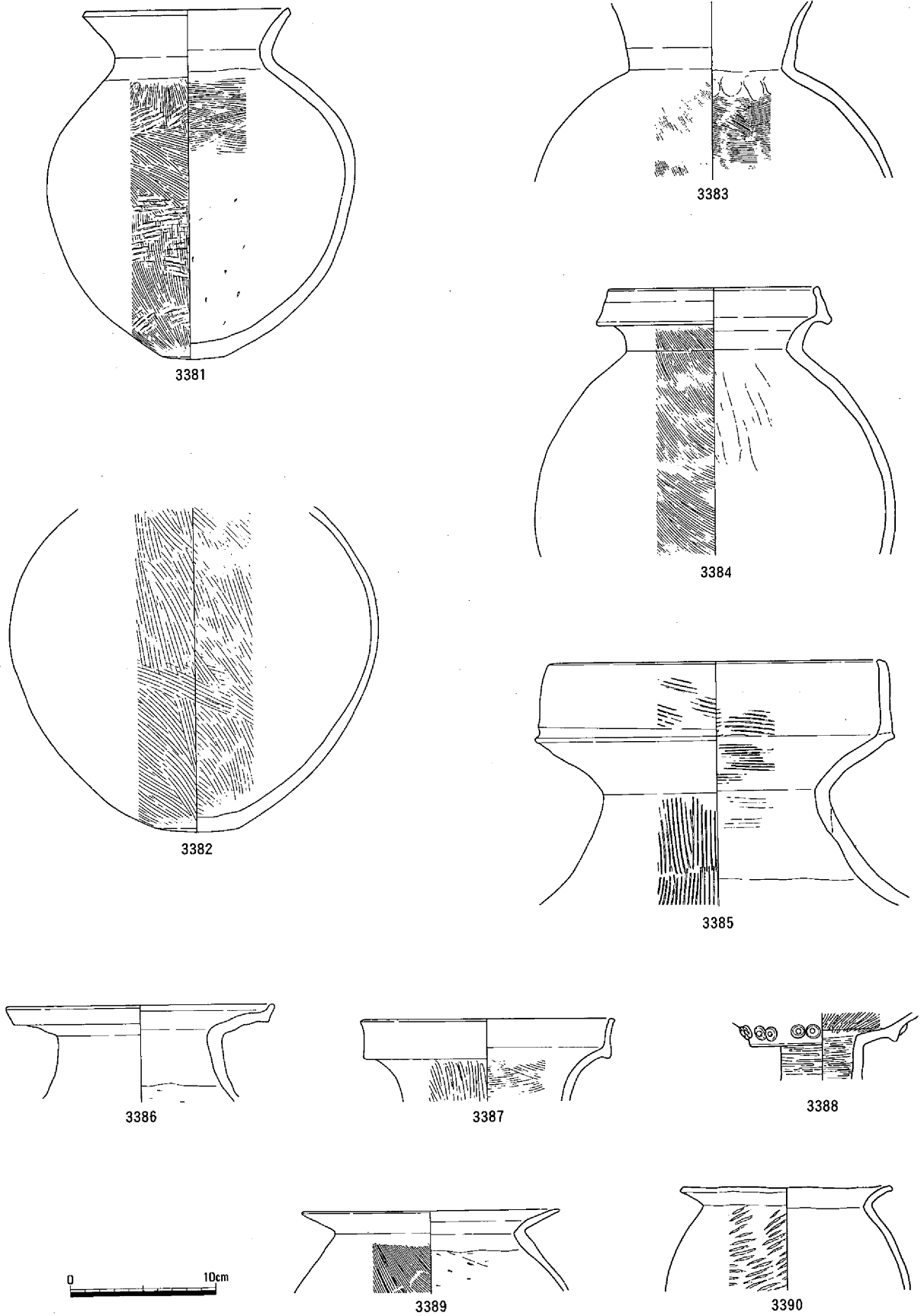


第91図 竪穴住居-136B

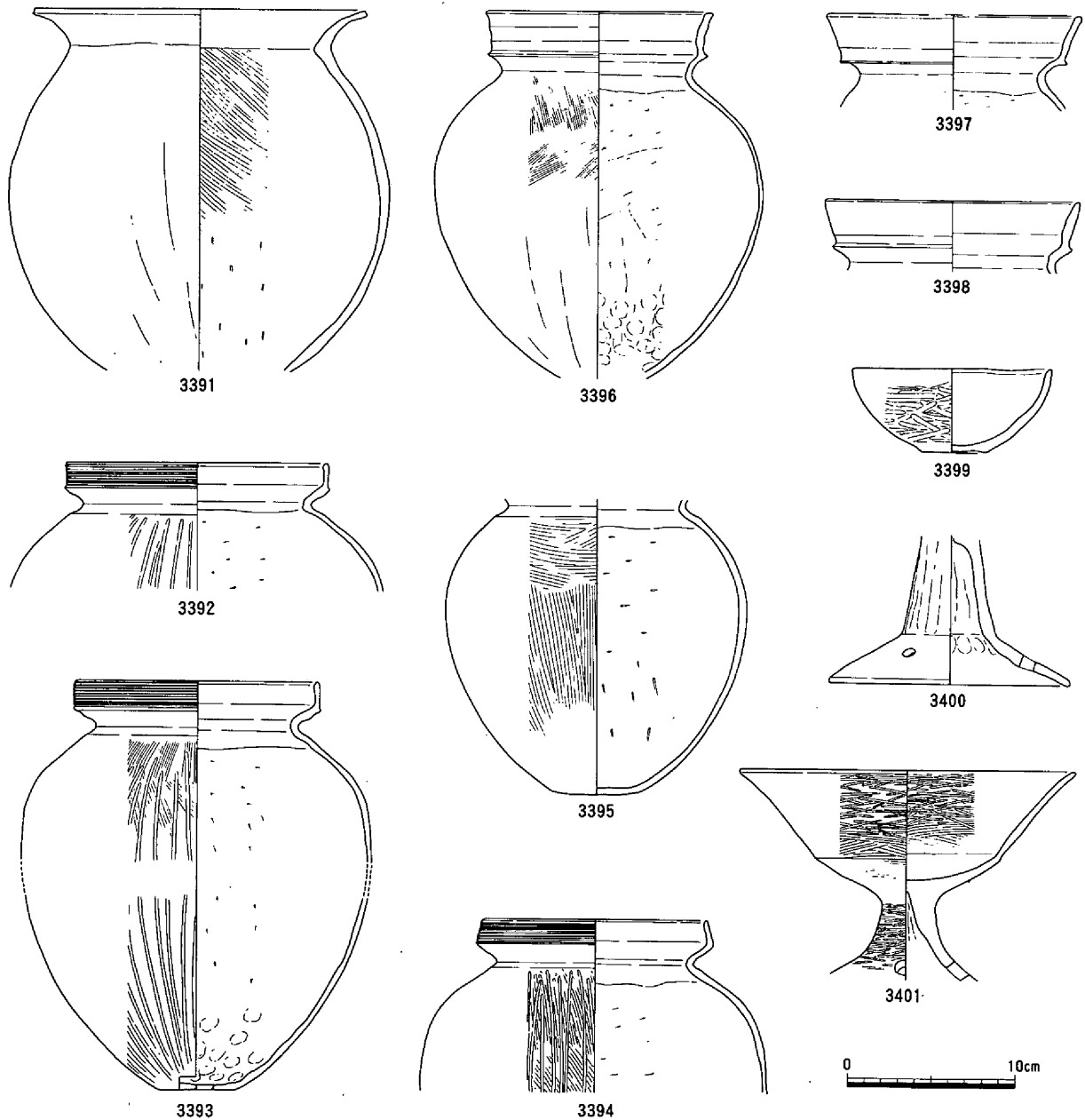


第92図 竪穴住居-136A





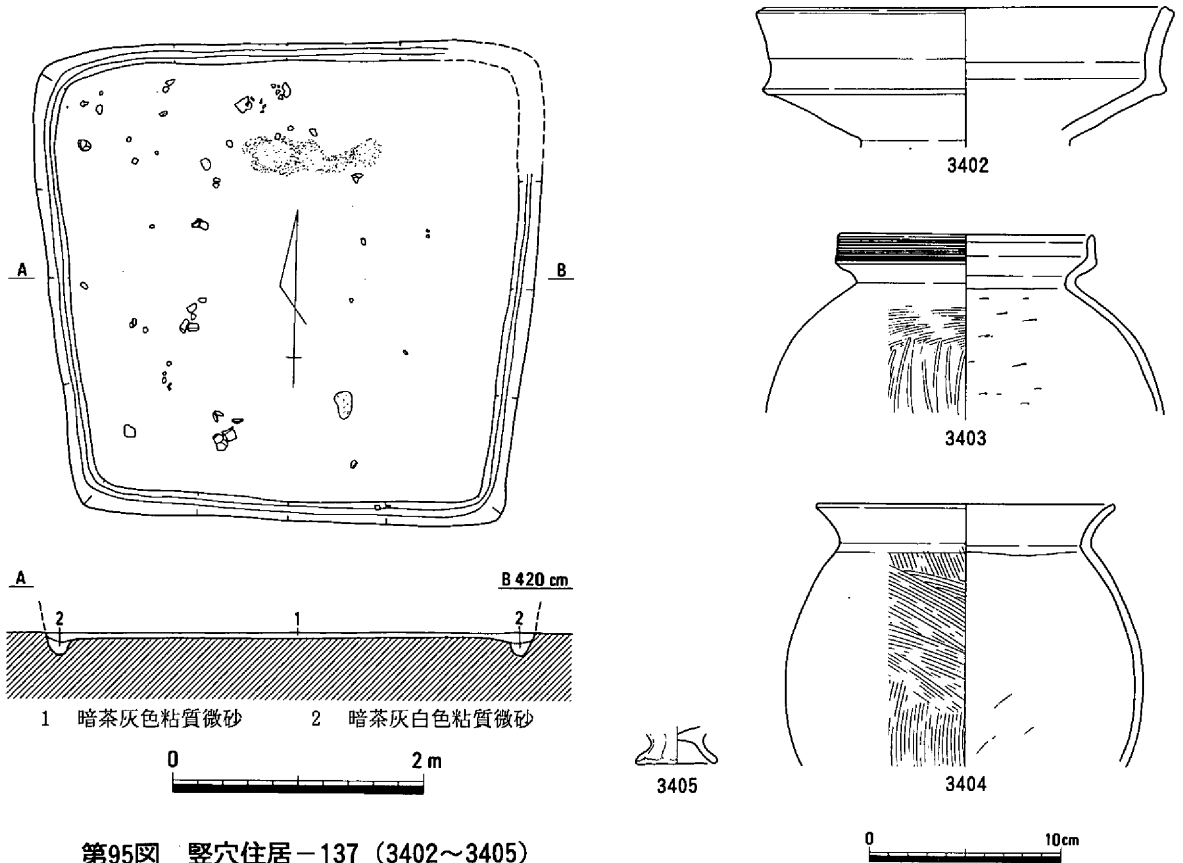
第93図 竪穴住居-136 (3381~3390)



第94図 竪穴住居-136 (3391~3401)

竪穴住居-137 (第95図、図版16)

Q18区の北西、竪穴住居-136のすぐ東側に位置する。長軸382cm、短軸364cmの方形にて検出面から床面までの深さ4cm、床面海拔高375cm、床面積は12.7㎡を測る小形の残りの悪い竪穴住居である。平面形は厳密には台形であり、北辺が382cm、南辺が320cmと62cmの差が認められる。埋土は暗茶灰色粘質微砂の1層で、壁体溝は埋め土が行われており、床面には壁体溝と被熱面が3箇所認められた。北辺中央部に113×32cmの被熱範囲があり、西、中央、東の3点に赤化した焼土面を持つ。西辺中央部にも34×21cmの暗い焼土面、同様のものが南辺中央付近にも存在した。住居床面には柱穴は認められない。遺物は土器小片が床面ほぼ全域に散布しているが、実測可能なものはほとんど無い。3403は北辺中央部の焼土面のすぐ北西から細片で出土した甕である。口縁部外面に9条の櫛描沈線文が施され、胴部はハケ調整後に暗文風の縦のヘラミガキがみられる。古・前・Iと考えられる。(高畑)



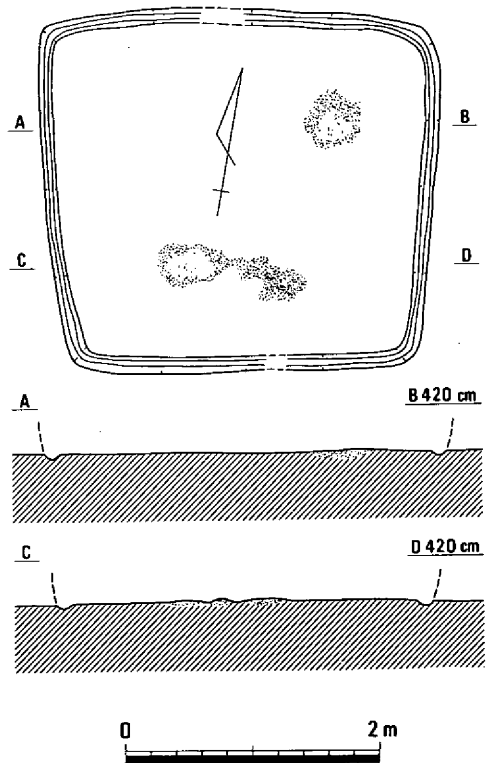
第95図 竪穴住居-137 (3402~3405)

竪穴住居-138 (第96図)

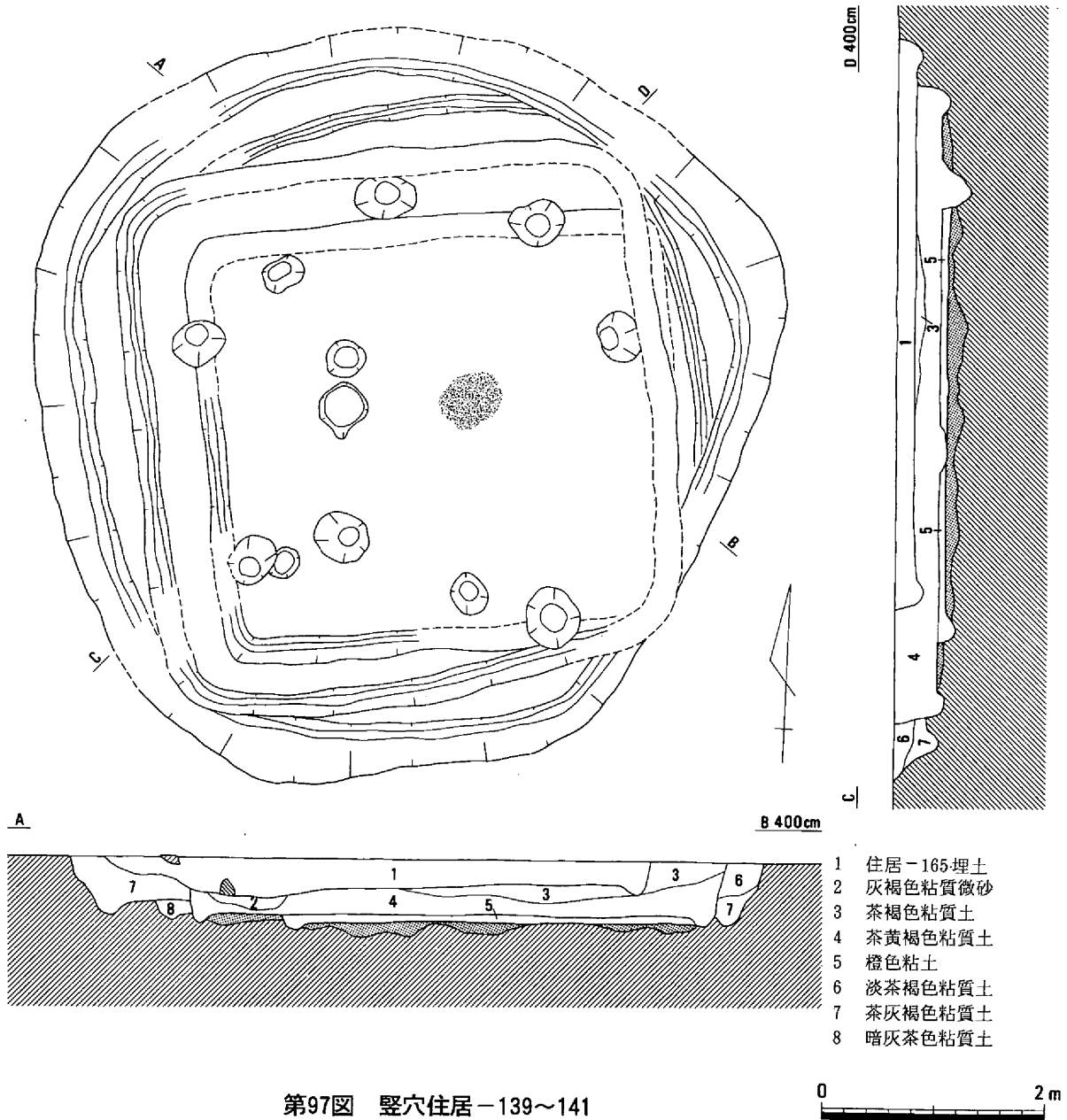
Q18区の北西、竪穴住居-137の北側65cmに位置する。長軸304cm、短軸277cmの方形にて検出面から床面までの深さ1cm、床面海拔高は383cm、床面積7.9㎡を測る小形の残りの悪い竪穴住居である。2箇所の被熱面を持ち、両側のものが120×32cmの被熱範囲があり東西に各1点ずつの焼土面を持つ。北東部の被熱範囲は46×42cmであり中心部分が焼土化している。両被熱場所の中間に127×50cmの浅い凹地が認められる。この住居も柱穴は存在しない。時期は竪穴住居-137に近いものと考えられる。(高畑)

竪穴住居-139 (第97~99図、図版16)

Q18区の北西、竪穴住居-137の東2.5mに位置する。古墳時代前半期の竪穴住居-139、140、141が規模の縮小、拡大を繰り返しながら同一場所を占有した痕跡を留める。さらにこれらの上にカマドを持つ古・中・Ⅱの竪穴住居-165が造られていた。比較的明瞭に検出することのできた竪穴住居で最も古いものが竪穴住居-139であり、竪穴住居-140、141と続いている。住居の位置関係からは竪穴住居-139の埋没凹部を利用し、竪穴住



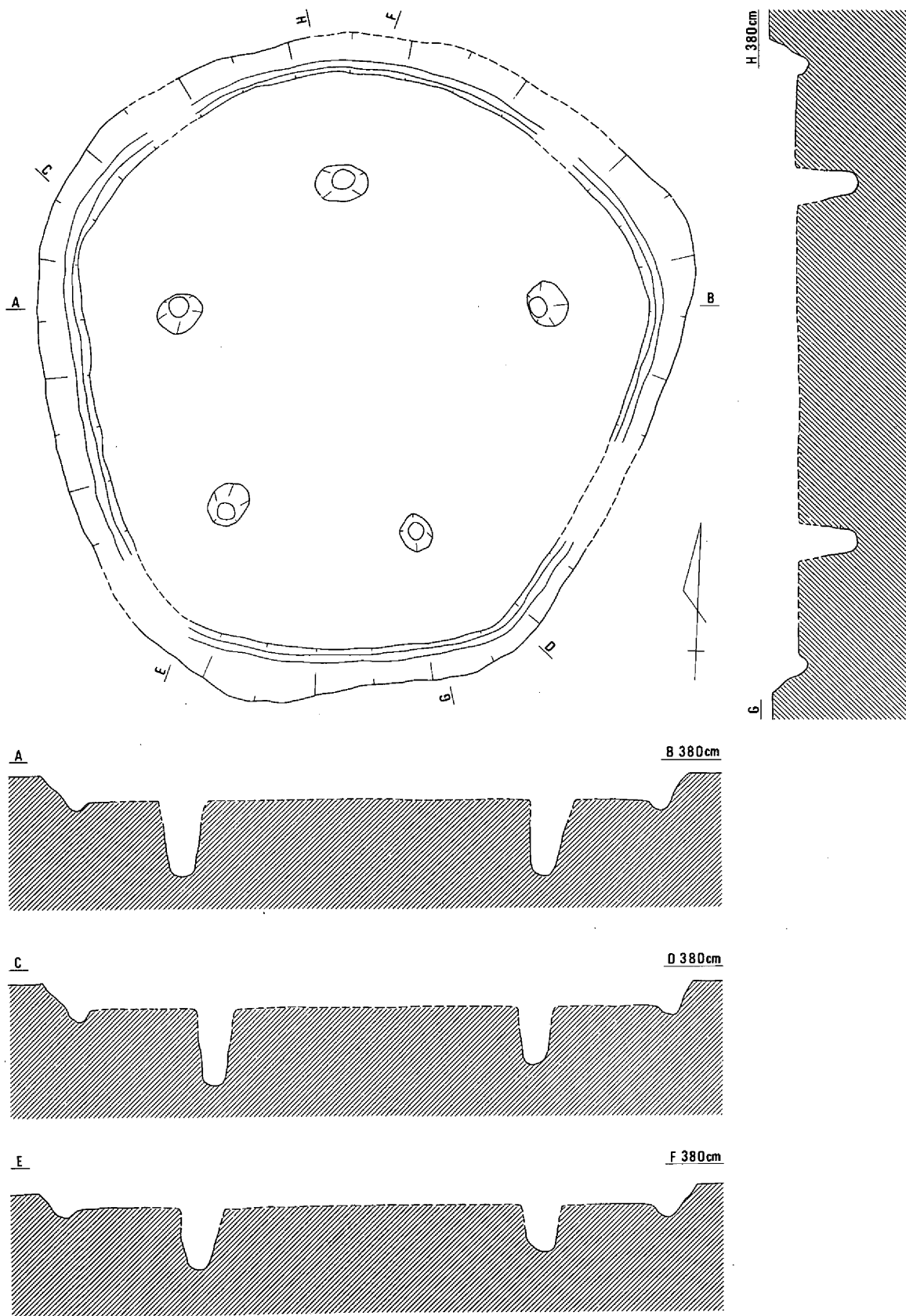
第96図 竪穴住居-138



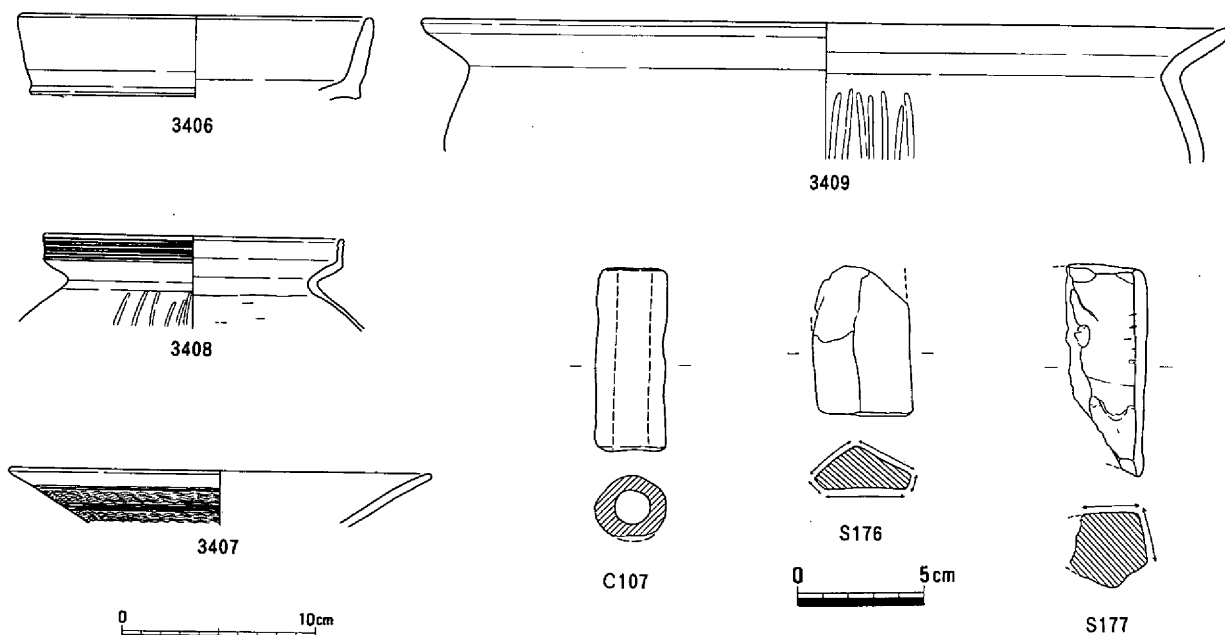
第97図 竪穴住居-139~141

居-140が造られ、ついでそれを拡張して竪穴住居-141が造られ、廃絶埋没後にしばらく時間を置いて竪穴住居-165が造られたようである。

竪穴住居-139は隅丸五角形を呈し、長軸629cm、短軸594cm、検出面から床面までの深さ43cm、床面海拔高336cmを測る。中形でも大きい部類に入り、床面積28.6㎡で5本の主柱穴からなる。柱間は206~238cmと多少バラツキが認められるが、五角形の隅部近くに主柱穴が配置された格好となる。しかし、竪穴住居-140、141を造る時に本住居内は削平を受けており、北西辺の主柱穴以外の3本はすべて床面を失っている。床面から柱穴底までの深さは判明しているもので64.7~75.8cmを測る。埋土は竪穴住居-140、141によりほとんどを失っており、包含される遺物は少ない。3406~3409の土器が認められ、他に土錘、砥石片などがある。3414が唯一床面出土の完形に近い甕であり、口径14.5cm、胴部最大径23.1cm、器高26.1cmを測る。古・前・Iの新相であろう。(高畑)



第98図 竖穴住居-139



第99図 竪穴住居-139 (3406~3409・S176・177・C107)

竪穴住居-140 (第100・101図、図版16)

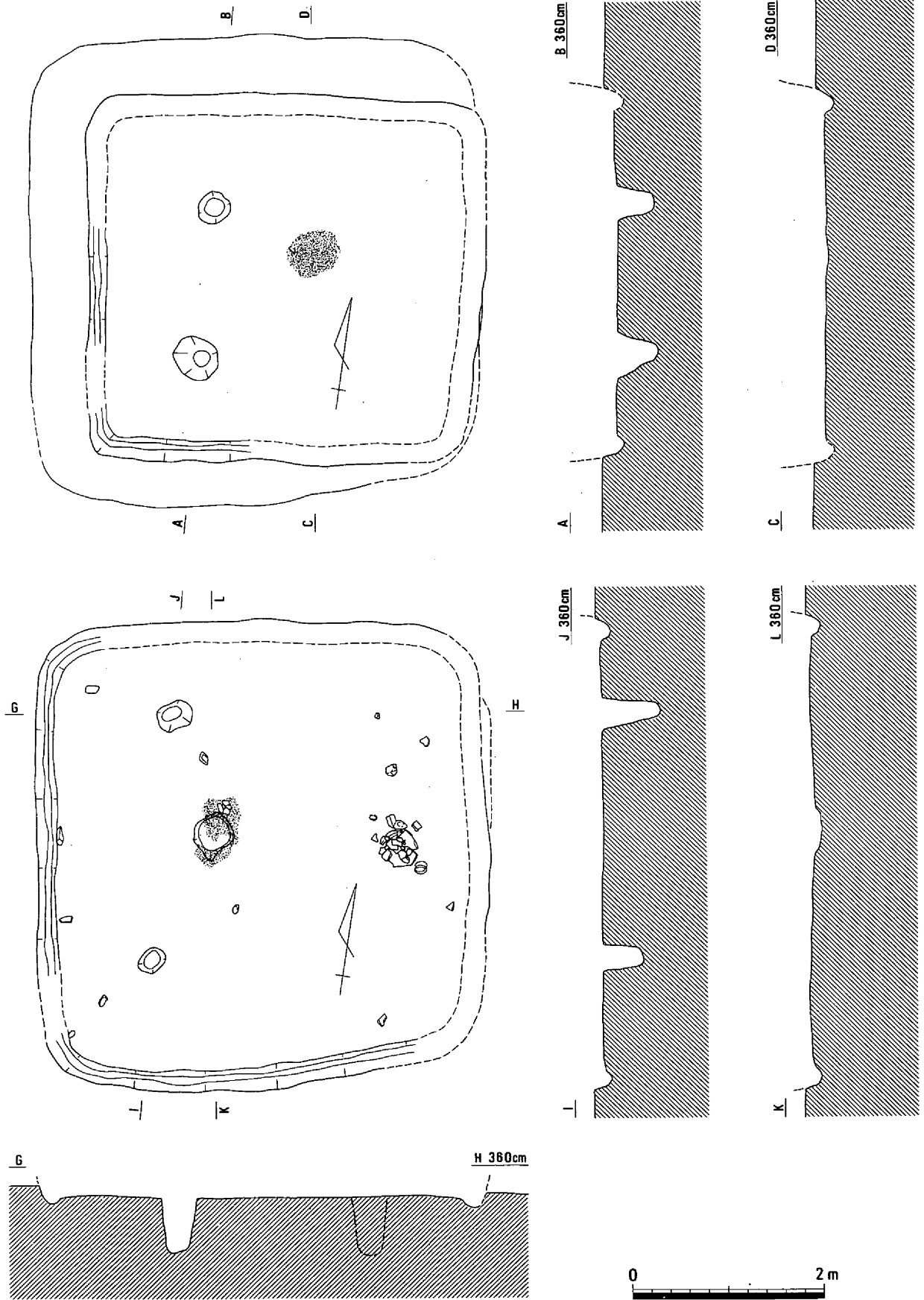
長軸393cm、短軸373cm、検出面から床面までの深さ12cm、床面海拔高315cm、床面積は14.1㎡を測る方形の竪穴住居である。住居プラン内には18個の柱穴が存在したが、その内の4本が竪穴住居-139のものであり、残りの柱穴ではバランスが悪く本住居プランに対応するにはまとまりを欠き、明確にはできなかった。床面においてもしかりであり、明瞭な色調からの把握は困難であった。その上に調査中、数回の大雨に見舞われ、微砂を主流に形成された微高地内部はその度に水の洗礼を受け、検出状況に大きな変化を生じる結果となっていた。

おそらく、第5層の橙色粘土ブロックを含む下面に床が形成されていたことが考えられる。

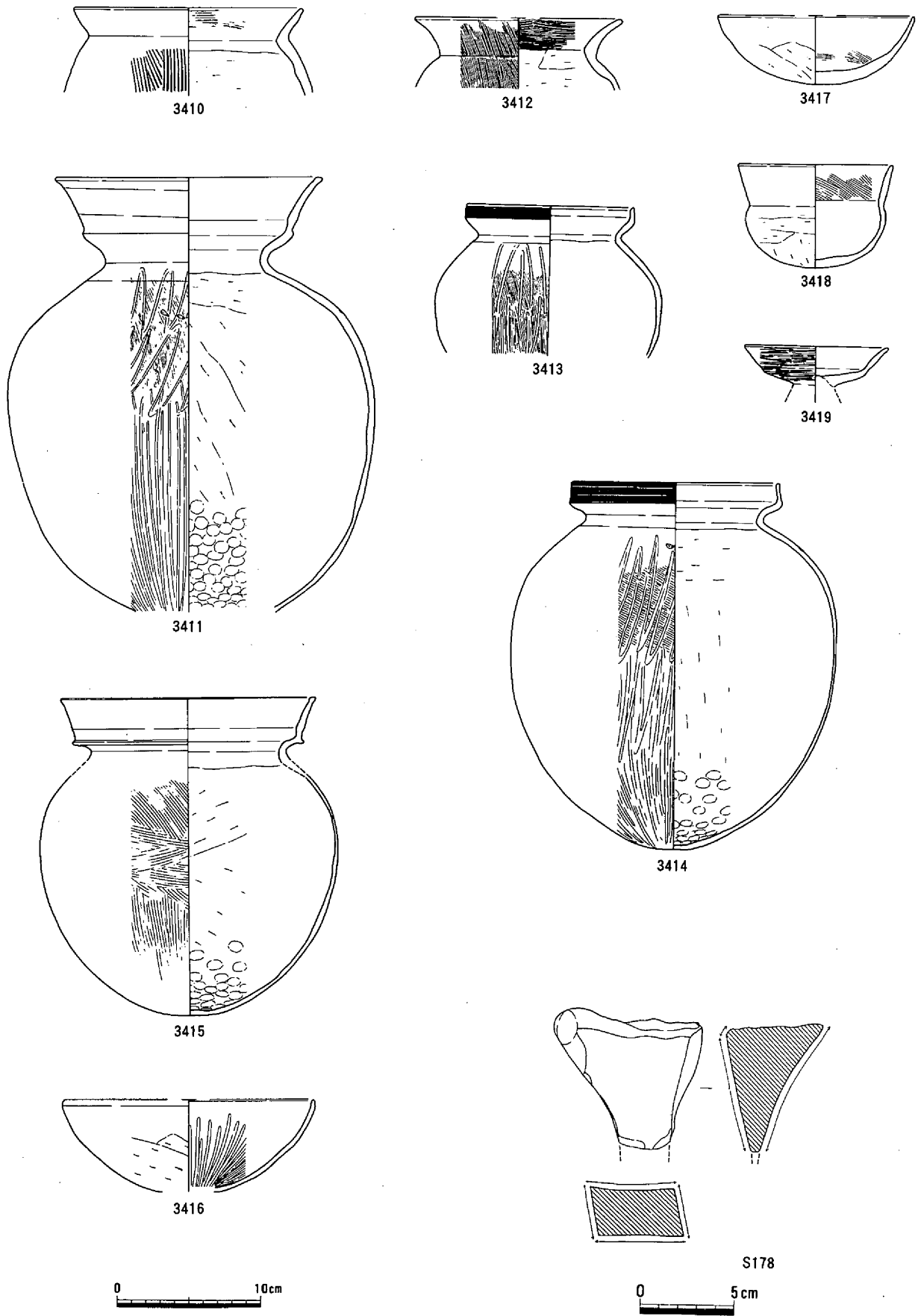
遺物はほとんど認められず、3410の甕口縁が1点出土している。口径15.7cm、胎土中に長石、石英の2mm以下のものを含み、色調は内外ともに鈍い橙色を呈する。(高畑)

竪穴住居-141 (第100・101図、図版16・63・64)

古・前・Iの竪穴住居-139、140、141のうち最も新しい時期のものであり、他の2軒に比べて火処、遺物の出土状況等が明確に把握できたものである。長軸475cm、短軸448cm、検出面から床面までの深さ52cm、床面海拔高328cm、床面積202㎡を測る中形の竪穴住居である。竪穴住居-140の南東隅を起点に北・西・南に拡張が行われており、平面はほぼ方形を呈する。床面には若干の凹凸が認められ、遺物は海拔325~330cmの間、床面全体に散布する。20×10cm弱の河原石が10石、および土器等がある。土器は中央から東半分にとまりをみせて分布しており、なかには焼土面に付着しているものまで認められた。火処と考えられる焼土面は住居中央より少し西側に位置し、幅40~50cm、深さ8cmの円形土壇を囲んでおり、特に北側が赤化が著しく、東、南側へ繋がっている。西側はあまり明瞭ではない。土壇の周縁、底面にも赤化部分は認められ、炉の周辺には炭の分布が存在する。他に280×60cmを測る砂利敷の施設が認められた。遺物は砂利部分に集中し、3411・3413・3416・3418・3419の土器、S178の砥石が出土している。3412が埋土中であり、3417が火処の焼土面に密着しての出土である。3418はほぼ完形での出土である。3414を床面に持つ竪穴住居-139を切っており、また器種の変化等から古・前・IIに近くなっている時期であろう。(高畑)

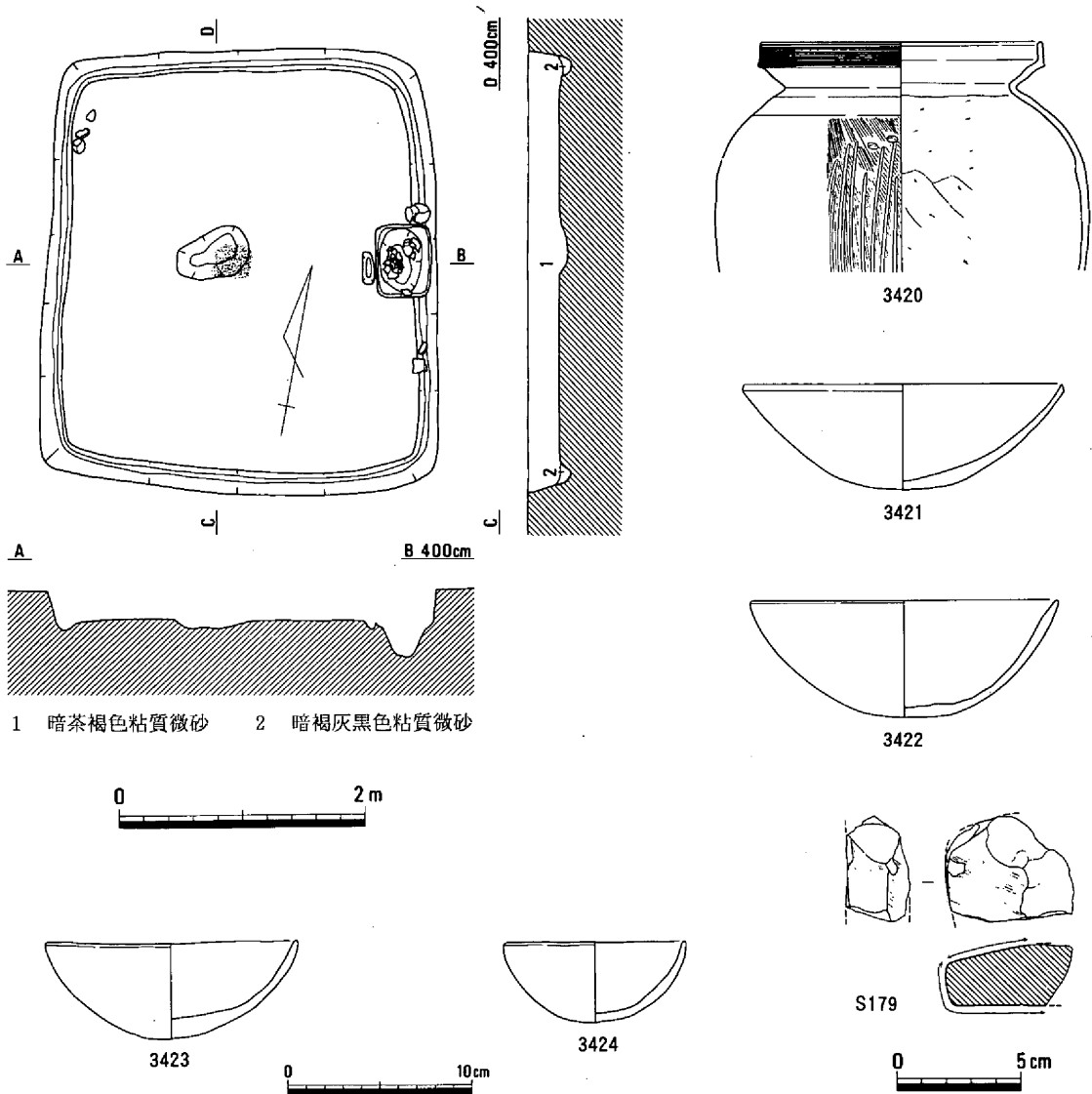


第100図 竪穴住居-140・141



第101図 竪穴住居-140 (3410)・141 (3411~3419・S178)

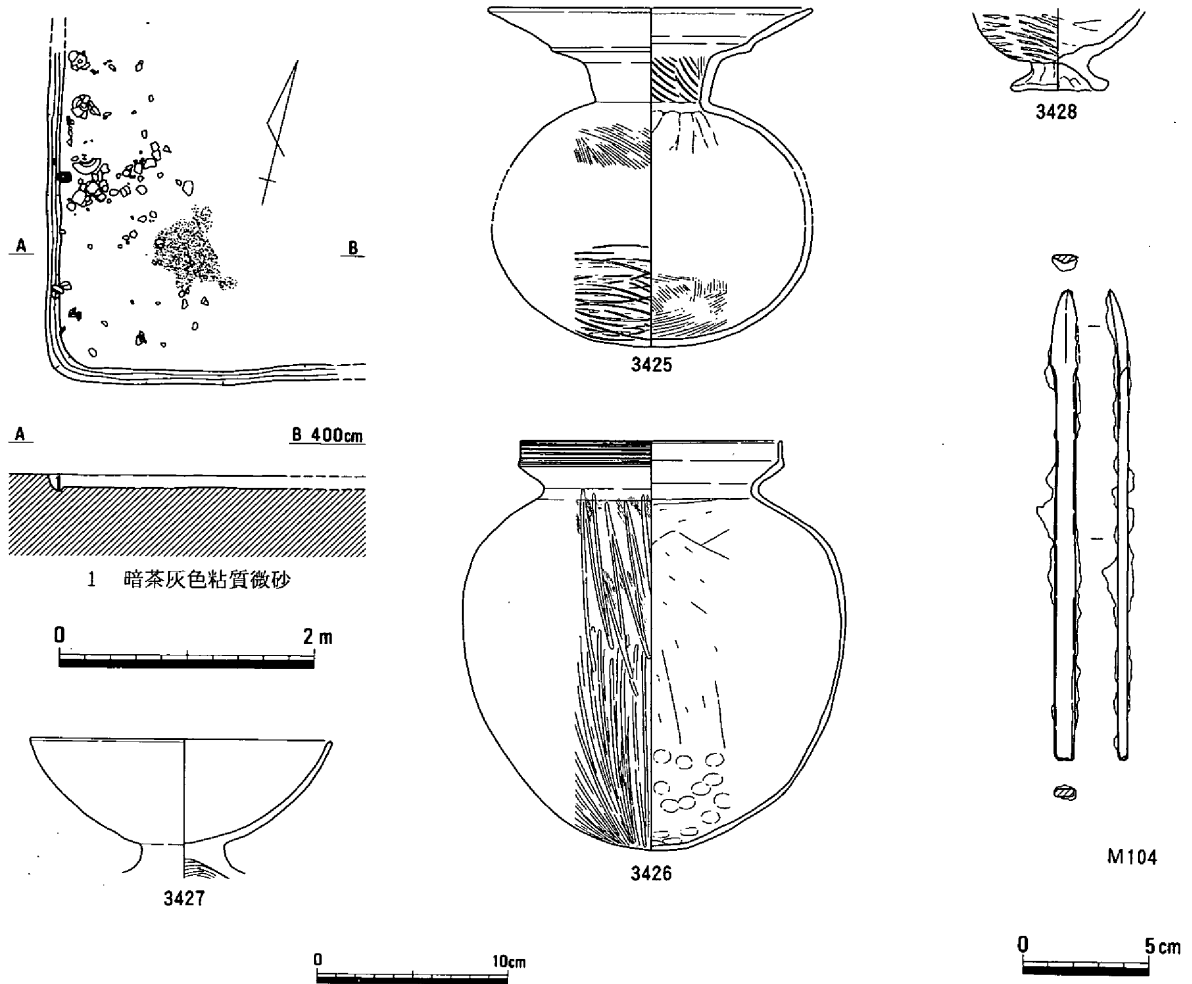




第102図 竪穴住居-142 (3420~3424・S179)

竪穴住居-142 (第102図、図版17・64)

Q18区の北西、竪穴住居-139の北側1.1mに位置する竪穴住居である。長軸337cm、短軸299cm、検出面から床面までの深さ26cm、底面海拔高は348cm、床面積9.5㎡を測り小形で方形を呈する。埋土は暗茶褐色粘質微砂の1層であり、下位が粘質が強く、炭および土器小片を含む。床面は南北に長く、東西が40cmほど短い長方形プランを呈し、丁寧にしっかりと掘られた壁体溝が存在した。床面ほぼ中央に火処が設けられており、東西61cm、南北38cm、深さ6~7cmの浅い土壇内東側に赤化した焼土面が認められる。東辺中央には方形土壇とその西に小形の土壇が設けられている。上端が58×45cm、深さ9cmの方形、そして内側下段が50×32cmの楕円形で深さ19cmを測る。上端の深さ9cm部分には板材等による蓋状のものが置かれた可能性が考えられる。西側の小穴は27×10×5.5cmを測り、古墳時代初頭の竪穴住居に時々認められる。床面は中央焼土壇より外側に向かって4.4㎡の範囲が硬い状況を呈していた。遺物は東辺の方形土壇内および、その周辺の床面近くから出土しており、3420~3424等がそれらにあたる。3421~3423の鉢は精製された粘土を使用している。なお、床着のものとして北西隅に10×5cmを測る角礫が床面にみられた。古・前・Iの新しい段階に比定できる。(高畑)



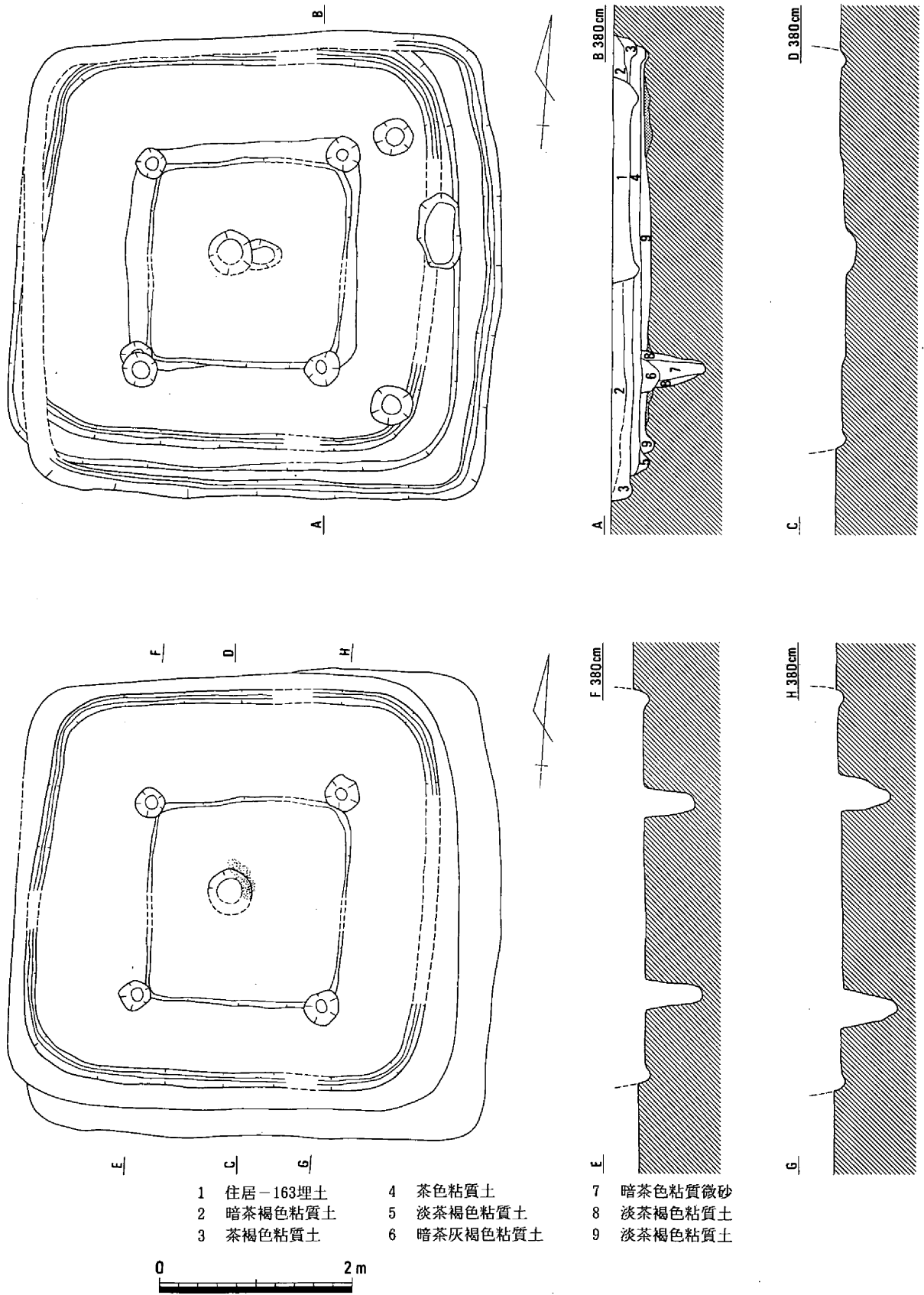
第103図 竪穴住居-143 (3425~3428・M104)

竪穴住居-143 (第103図、図版17・64)

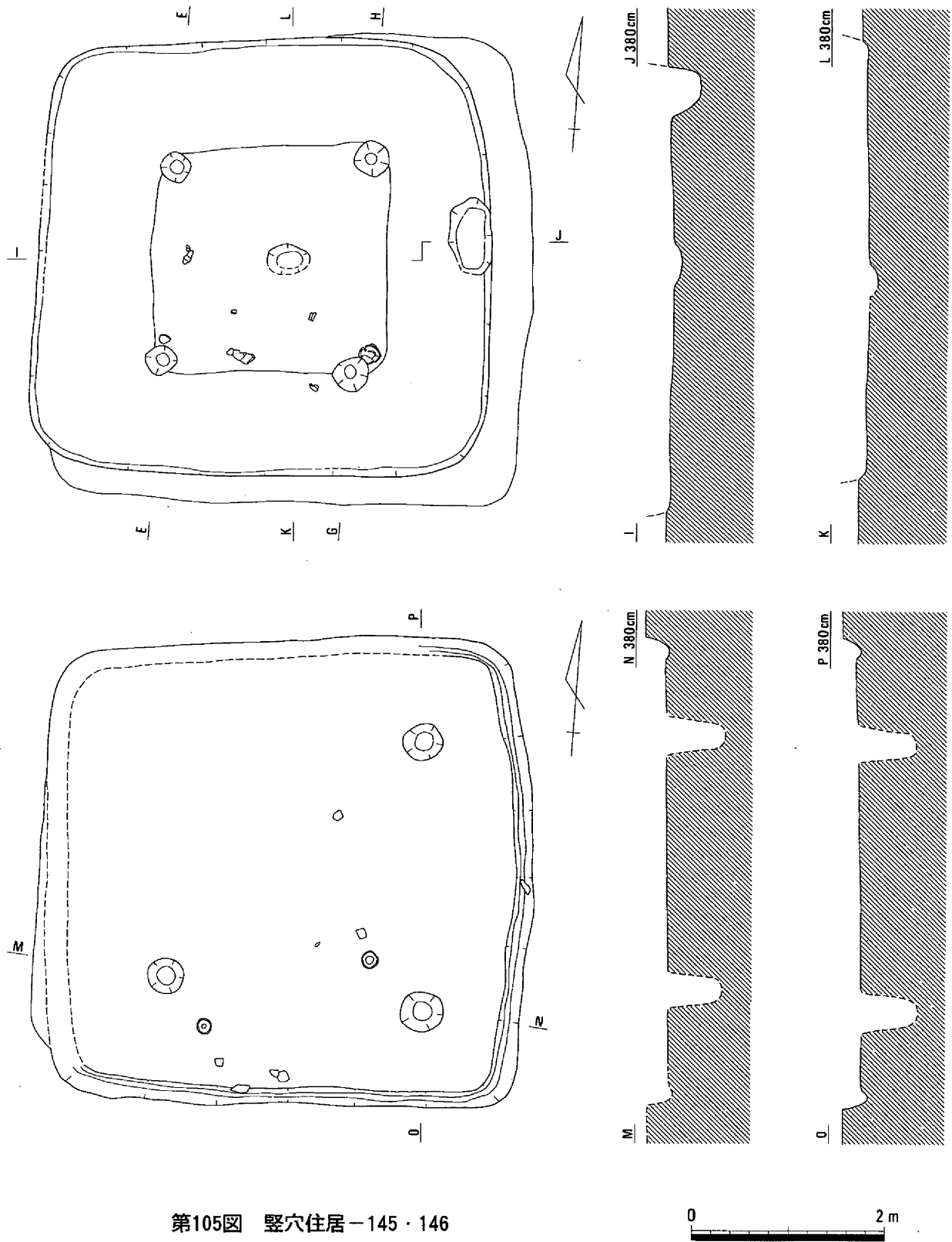
Q18区の北西、竪穴住居-142の北側1.6mに位置する。竪穴住居-146によって住居東側半分以上を削平されている。西辺現存長は255cm、南辺現存長230cmを測る方形の竪穴住居である。検出面から床面までの深さ10cm、床面海拔高364cmを測る。ほぼ床面全体に土器が散布しており、炭化材と混在する状況での出土である。壺3425は口縁部と胴部下半が分離して出土したものである。逆転して出土した口縁部の西側に接してM104が尖頭部を北に向け出土しており、全長18.95cm、重さ19.6gを測るほぼ完形品である。他に甕、壺、鉢等もみられ、古・前・I~古・前・IIに比定できる。(高畑)

竪穴住居-144 (第104・106図、図版18・64・65)

Q18区の北西、竪穴住居-142の北0.8mに位置する。12×6mの範囲内に重複関係にあるもの3軒、切り合い関係が2軒の格好で総数5軒の方形住居が出土している。前述した竪穴住居-139~141、165の關係に類似をしている。すなわち、占地パターンの共通性で古・前・Iの重複関係にある数軒の住居を少し時間をおいた古・中・IIの竪穴住居がそれらを切って存在することである。ここでの竪穴住居-144は重複関係にある竪穴住居-145、146に先行して造られたものである。長軸398cm、短軸394cm、検出面から床面までの深さ40cm、底面海拔高336cm、床面積13.3㎡を測る小形の住居である。ほぼ正方形にて高床部を四方に有し、支柱穴4本からなる。床面中央に直径46cm、深さ約10cmの土壇があり、北側上端部分は焼土化しており、南側には1.4×0.9mの範囲に炭が認められる。(高畑)



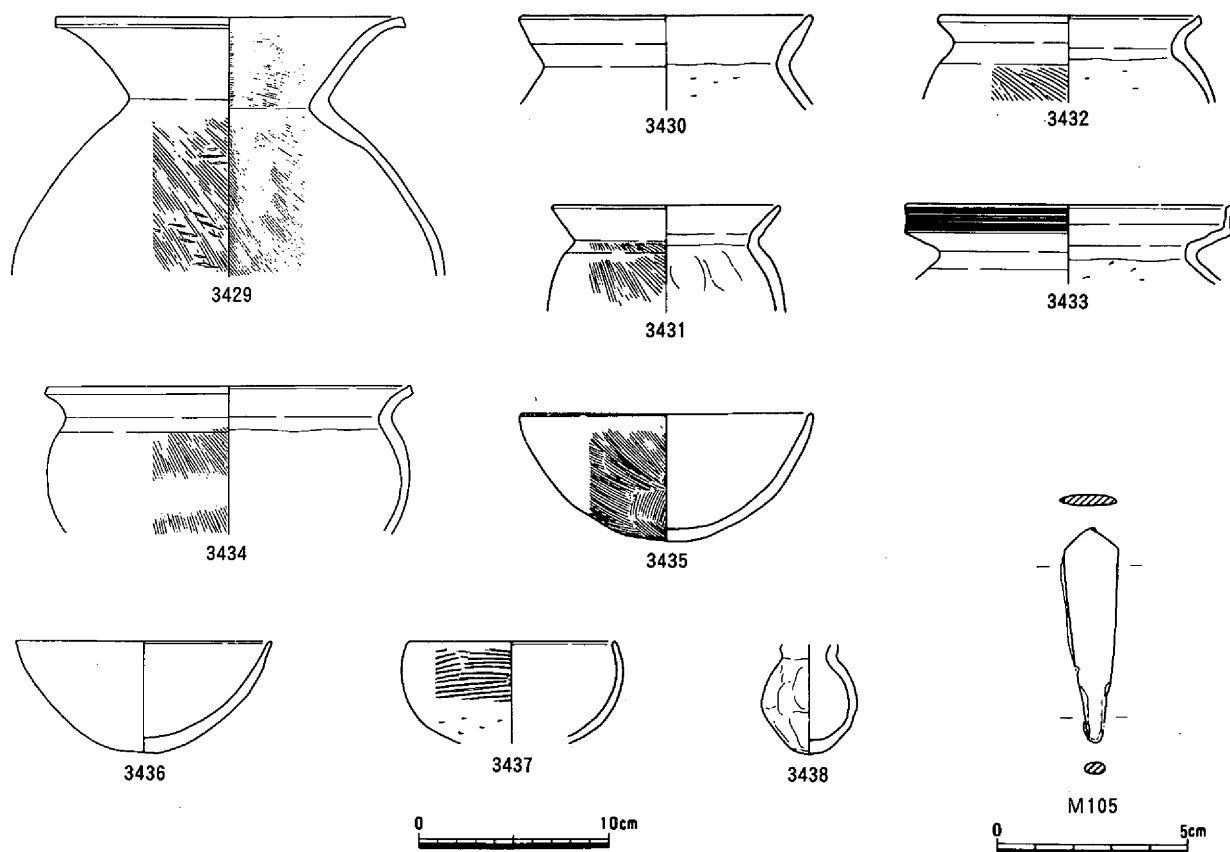
第104図 竪穴住居-144~146



第105図 竪穴住居-145・146

竪穴住居-145 (第104・105図、図版18・64・65)

本住居は長軸436cm、短軸432cm、検出面から床面までの深さ28cm、床面海拔高342cm、床面積18.6㎡を測る中形のものである。支柱穴は4本からなり、竪穴住居-144の柱位置をほぼ踏襲したものと考えられる。ちなみに柱間は北辺で193cm、東辺227cm、南辺で190cm、西辺198cm、高床部から柱穴底

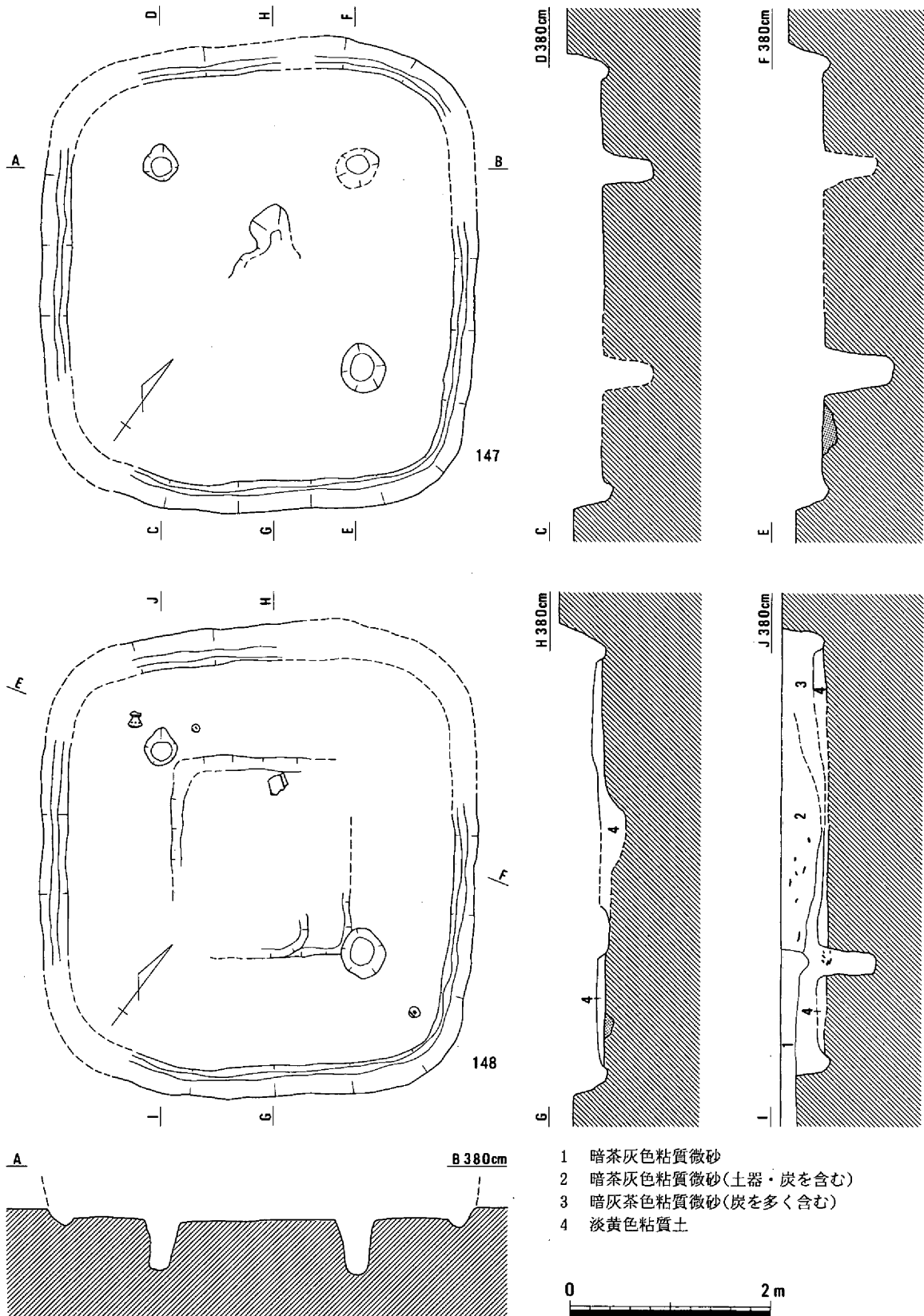


第106図 竪穴住居-144~146 (3429~3438・M105)

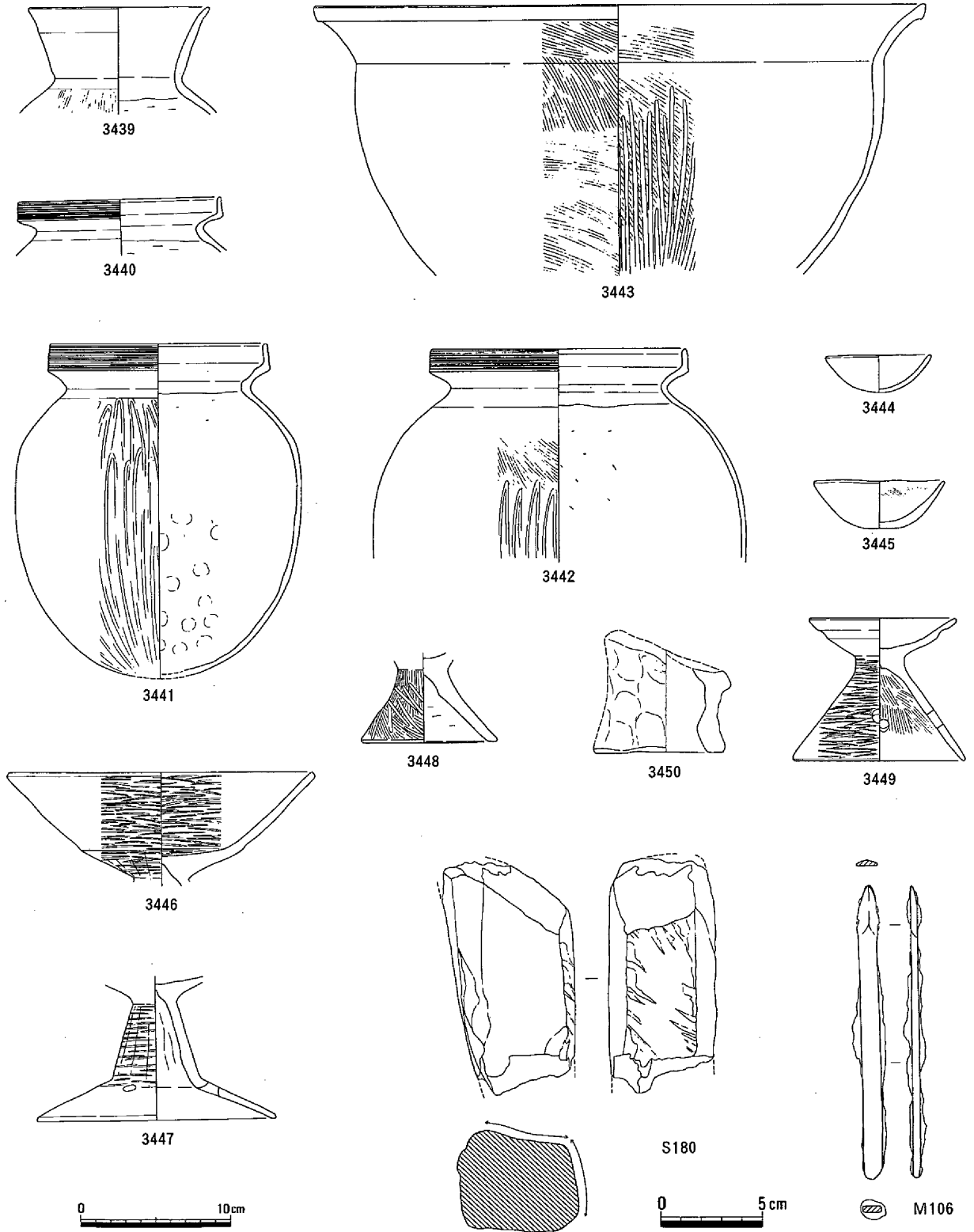
までは55.5~64cmを測り、北辺の柱穴底が南辺の柱穴底より約10cm高い状況を呈する。柱穴の外側四方に高床部があり、床面中央に43×35cm、深さ10cmを測る楕円形の土壌がある。土壌底には炭が認められる。竪穴住居-144の貼り床上に3~6cmの黄茶色土でもって客土し、竪穴住居-145の床面としている。埋土中に土器小片が認められたが、床面から出土したものは少なく数点であり、すべて破片である。南東の柱穴北側に壺の口縁が逆転して出土しており、3429が本住居に伴う土器である。口径18.2cm、残存器高13.7cmを測り、胴部外面には右下がりの細筋タタキメ、内面には斜位のハケメが認められる。くびれ部および、肩部に粘土紐による接合痕跡を顕著にとどめる。古・前・Iに比定できる。(高畑)

#### 竪穴住居-146 (第104~106図、図版64・65)

竪穴住居-144~146の中で最も新しい時期に造られたものである。住居プラン等は竪穴住居-163により北西部を削平されている。長軸465cm、短軸(463)cm、検出面から床面までの深さ12cm、床面海拔高345cm、床面積(20.3)㎡の中形の住居である。遺物は散布する出土状況である。土器片が中心であり、鉄器を1点含む。3435・3436等の鉢が2点とM105である。3433は東辺の土壌内、3438の小壺は北東支柱穴内の出土である。3435はほぼ完形にて、口径15.2cm、器高6.7cmを測る。器外面は斜位のハケメがみられ、内面は指等による円滑なナデが施されている。焼成は良好にて器外面の色調は橙色を呈する。3436は若干小振りの鉢であり、口径13.4cm、器高5.9cmを測る。胎土は3435よりは砂粒が小さいが、精製粘土の利用ではない。M105は南東の支柱穴すぐ西側の床面から出土した鉄鏃であり、全長5.65cm、最大幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ5.01gを測る剣菱形の完形品である。3軒ともに古・前・Iの古相~新相の幅の中で開始、廃棄されたことが考えられる。(高畑)



第107図 竪穴住居-147



第108図 竪穴住居-147 (3439~3449・S180・M106)

竪穴住居-147 (第107・108図、図版18・65)

P18区の北辺に沿って検出されており、西隅角部の一部が竪穴住居-144~146に重複する。北隅角部の一部も用地境にかかっており、全容の検出には至っていないが、南北方向で460cm、東西方向で420cmを測り、隅丸形状を呈することが確認された。検出面から床面までは、約30cm遺存しており、

その壁面は緩やかに立ち上がる。床面は、海拔高が330cm、床面積15.1㎡を測り、幅30cm、深さ10cm程度の壁体溝が住居内をめぐる。その内側は4方向ともに高床状を呈しているが、いずれも低く、中央部の床との境に周溝は確認されなかった。さらにその中央には中央穴らしき不整形の凹穴が認められるが、その性格は不明である。

柱穴は高床部を取り除き精査したが、3基しか確認されなかった。その検出位置から4本柱であったことは容易に推定できるが、残りの1基については検出には至っていない。なお検出した3基ともに、いずれも不明瞭で、柱痕跡も確認できていない。

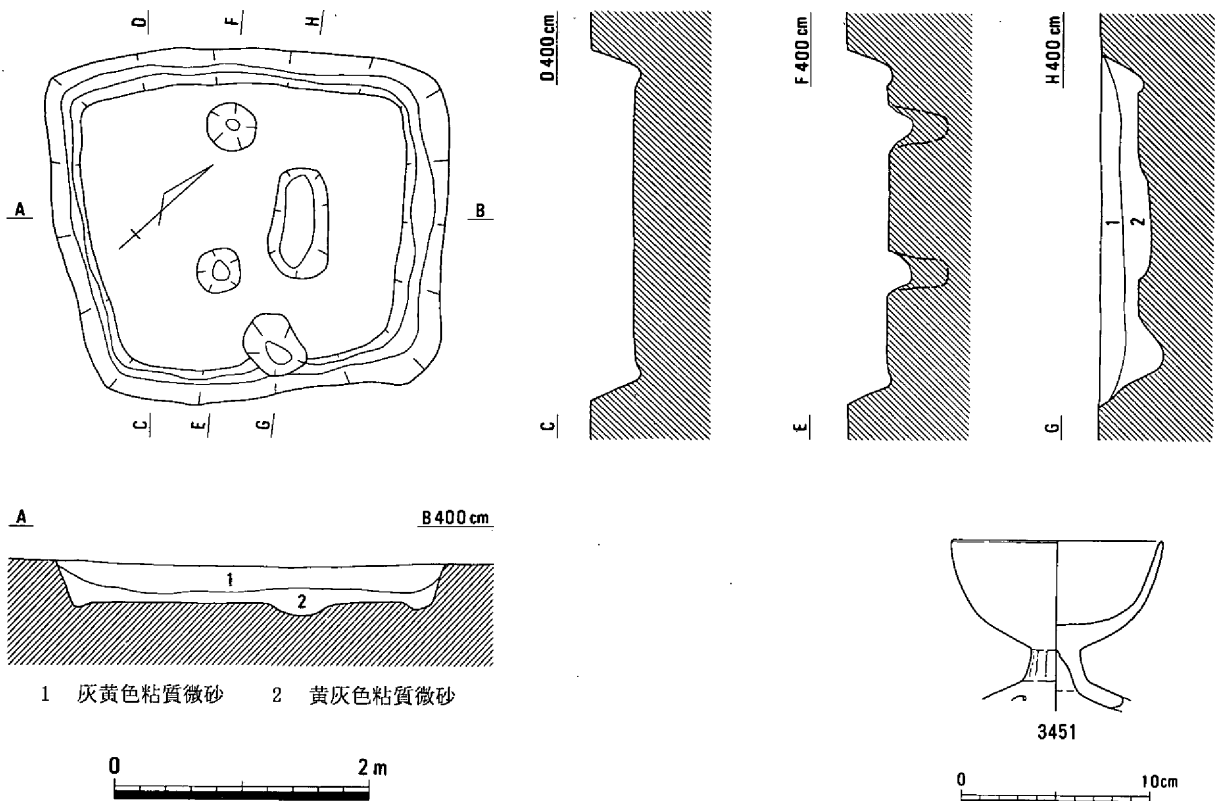
遺物は、土器が図示した3439~3450やS180の流紋岩質熔岩製の砥石、M106の鉋などが出土している。これら出土遺物から時期は、古・前・Iに比定される。(森)

竪穴住居-148 (第109図、図版19・65)

P18区の南辺寄りに位置しており、後述する竪穴住居-149の東1mにある。

平面形は西角部が張り出す不整形を呈し、主軸をN-38°-Wにとる。規模は、長さ270cm、幅247cmを測る。床面までは30cm程度が遺存しており、その壁面はわずかに勾配をもって立ち上がる。床面の海拔高は339cmを測る。ほぼ平坦な床面に貼り床は認められず、幅30cm、深さ10cmほどの壁体溝が全周する。床面の中央やや東寄りには90×50cmの長楕円の中央穴があるが、深さ15cmと浅い。また南辺中央にも不整形を呈する方形土壇も認められるが、これも20cmと浅い。なお、この方形土壇は壁体溝を切っている。支柱穴は2基検出されており、柱間は147cmを測るが、いずれも主軸からは西にずれている。柱痕跡は、どちらも確認されていない。

時期は、図示した3451が出土していることから、古・前・Iと考えられる。(森)



第109図 竪穴住居-148 (3451)

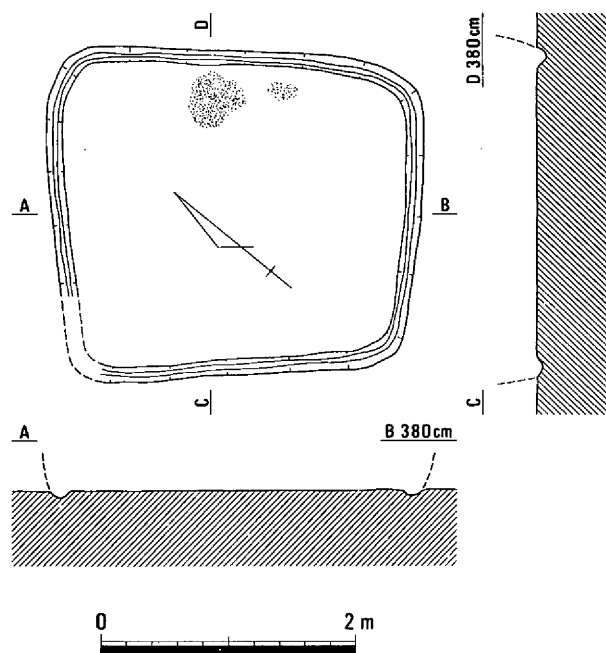


### 竪穴住居-149 (第110図、図版19)

P18区の中央南寄りに検出した住居で、溝-105の西岸に隣接する。

平面形は主軸をN-35°-Wにとる方形を呈し、規模は長さ280cm、幅250cmを測る。壁体溝しか検出できておらず、中央穴・柱穴ともに確認できていないが、床面積が6.1㎡と小さいことから無柱であったものと考えられる。また時期・規模ともに類似する竪穴住居-148が2本柱を持つが、比較的明瞭な柱穴であったことからやはり柱の存在は考えにくい。さらに、西辺中央あたりの床面からは、焼土塊も出土しており、焼失住居の可能性も併せて考えられる。

なお、時期は出土遺物が僅少のうえ細片ばかりで確証に欠くが、周囲の竪穴住居との関連から古・前・前と考えたい。(森)



第110図 竪穴住居-149

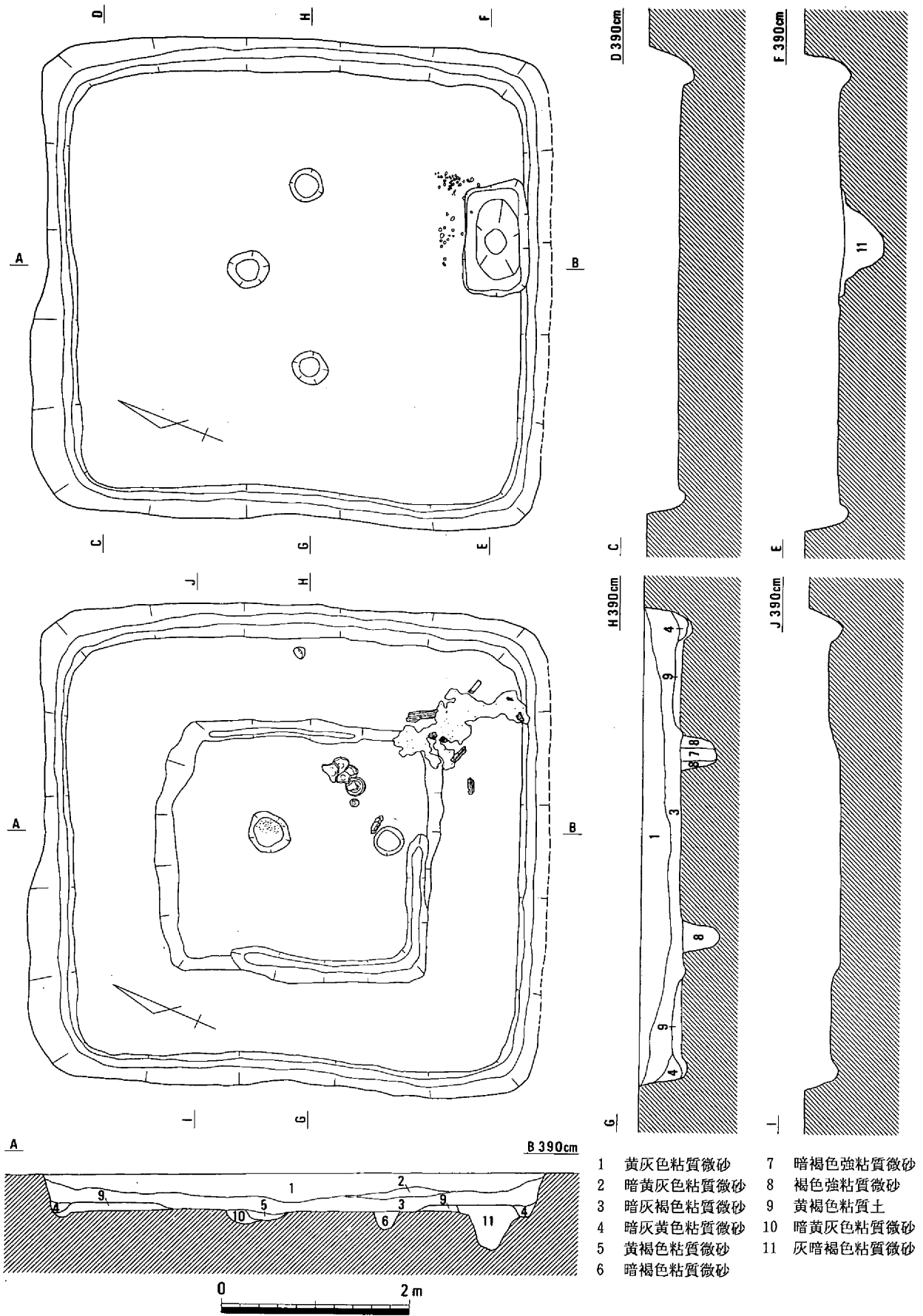
### 竪穴住居-150 (第111・112図、図版19・20・65・66)

竪穴住居-152・153の北側に隣接する一辺505cmを測る方形の住居で、主軸をN-21°-Eにとる。検出面から床面までは約40cm遺存しており、その壁面は直立気味に立ち上がる。床面は、海拔高が324cm、床面積22.7㎡を測る。幅30~40cm、深さ10cmの壁体溝が住居内をめぐり、その内側は4方向ともに高床部が設けられている。この結果、中央部南北300cm、東西280cmの範囲で10cm程度低くなっており、高床部との境から、部分的に周溝も確認されている。なお、この周溝からは、板状のものが立てられていた痕跡も認められている。併せて中央低位部からは中央穴も検出されているが、総じて浅く皿状を呈する。

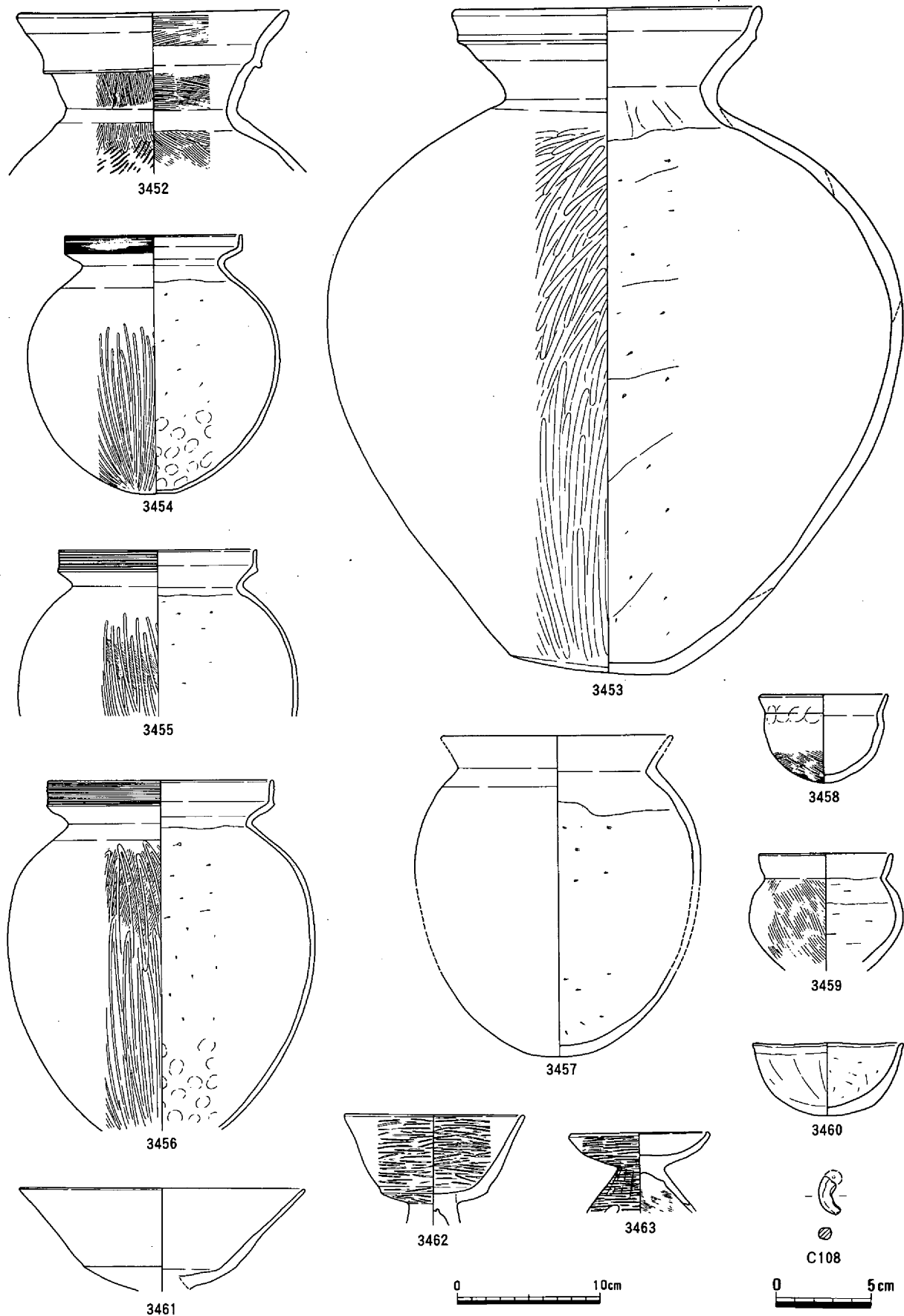
高床部南東隅からは、焼土塊も検出されている。この周辺については、検出時から炭などの散乱があったが、住居内においてこのほかでの被熱痕跡は認められておらず、その性格は不明である。

高床部を除去した後、精査すると柱穴が2基検出された。主軸にほぼ一致する位置から検出されており、柱間距離は197cmを測る。さらに、南辺に沿った中央あたりからは、土壌が検出された。土壌自体の平面形は長楕円形を呈するが、周囲に長方形を呈する深さ3cmほどの掘り込みが認められ、覆土が先の周溝内の板状痕跡に似ていることや、その形状から蓋状のものがあった可能性が示唆される。併せて住居の出入口を考えるうえでも示唆的である。

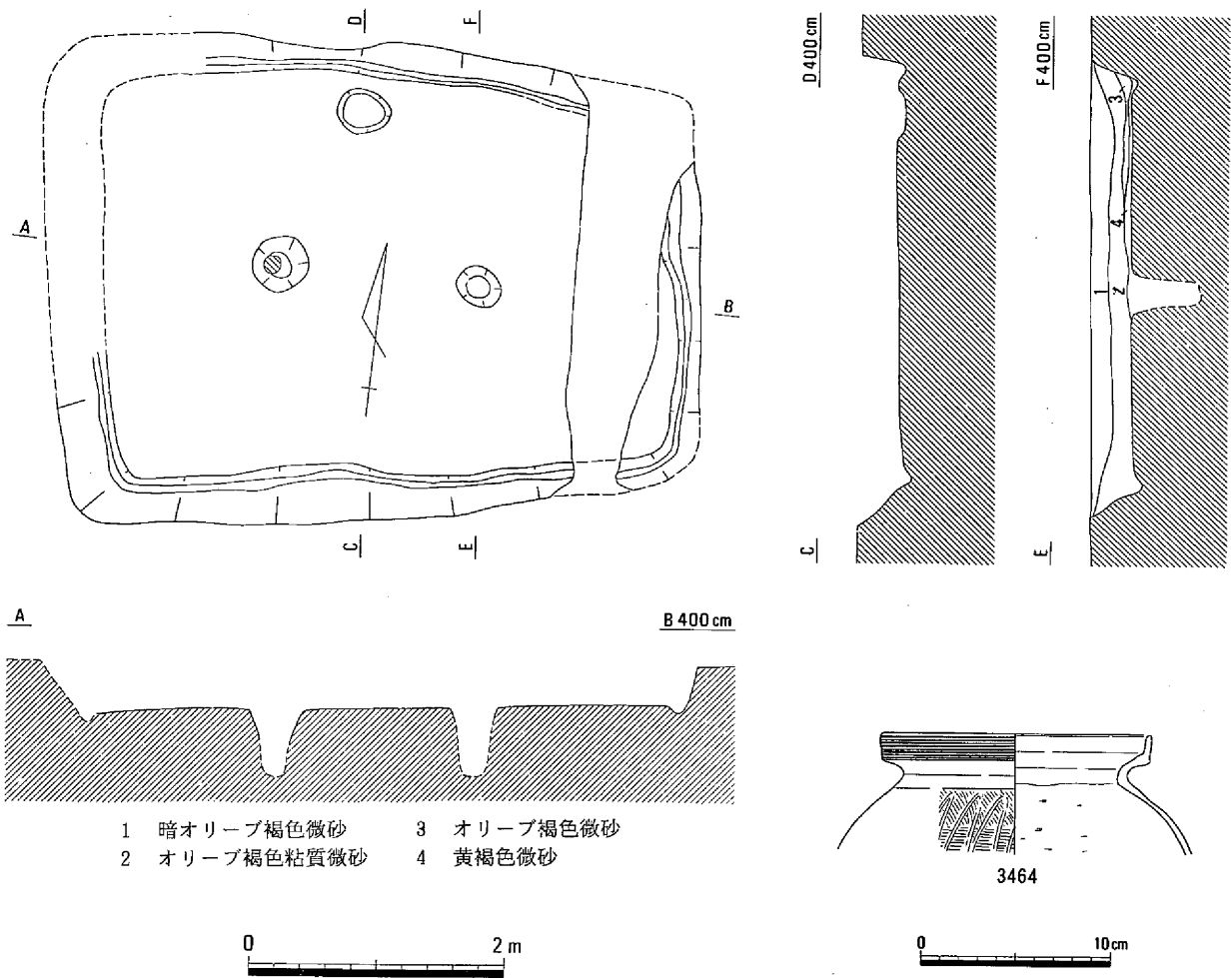
遺物は覆土から壺2、甕12、高杯2のほか、小形の埴、椀、器台などが出土している。壺の2個体は二重口縁のものと「く」の字状口縁のもので、甕もまた、いわゆる「吉備型甕」と「く」の字状口縁のものが混在する。また、埴の11個体をはじめ椀・器台と併せて13個体もの小形品が出土しているのも特徴的である。その他、覆土中からは土製の勾玉も出土している。これら出土遺物は古・前・Iに相当する。(森)



第111図 竪穴住居-150



第112図 竪穴住居-150 (3452~3463・C108)



第113図 竪穴住居-151 (3464)

竪穴住居-151 (第113図)

竪穴住居-150の東隅角部に隣接する竪穴住居で、主軸をN-3°-Wにとる。東側の一部を溝-101が切っており、北西の一部もすでに欠損していたため、全容はわからないが、南北380cm、東西502cmの規模を有し、不整長方形を呈する。

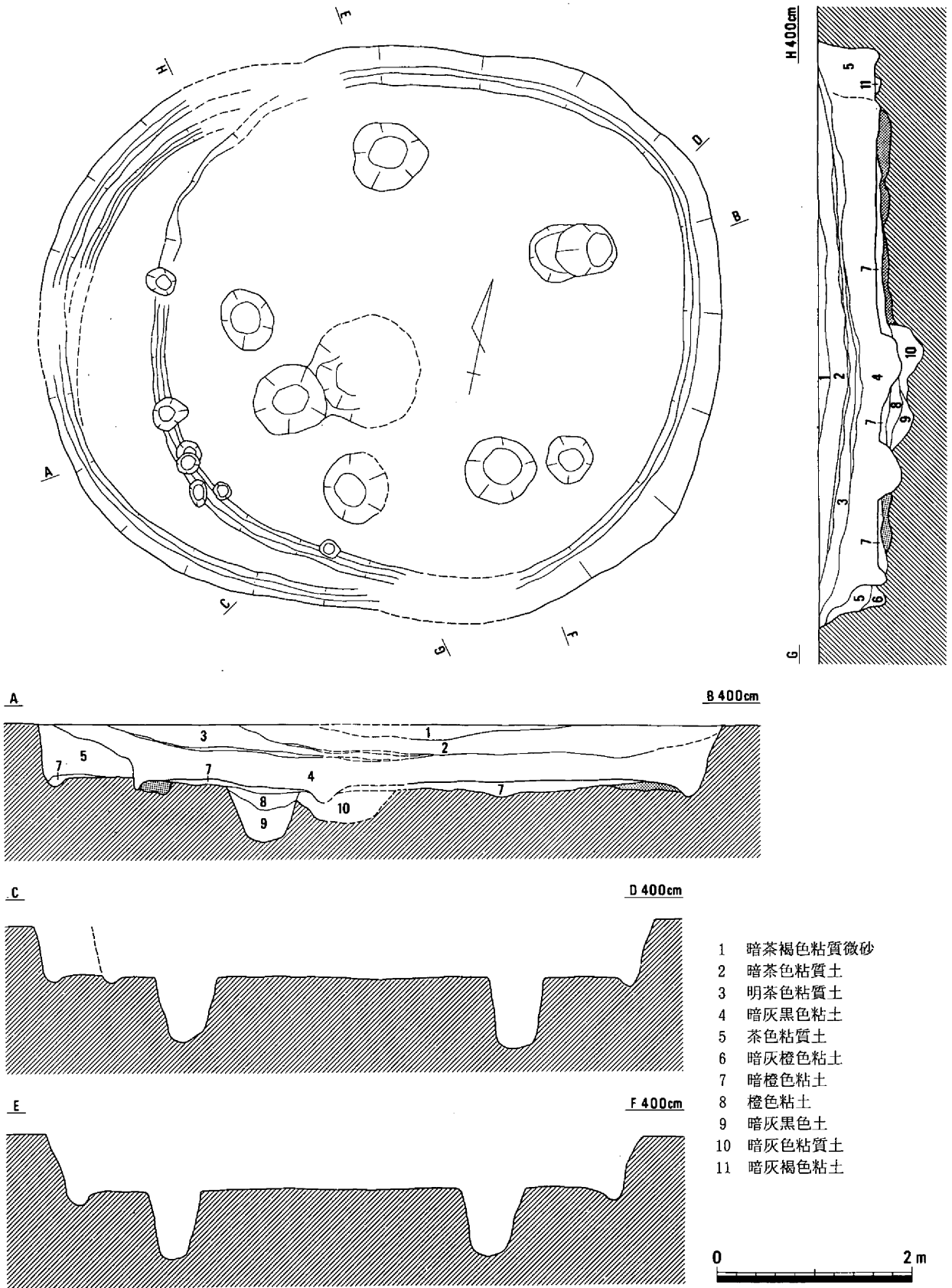
検出面から床面までは30cm程度が遺存しており、床面には貼り床は認められなかった。床面の標高は332cmを測る。壁体溝は、遺存部分については床面を全周しており、支柱穴床面ほぼ中央に、2本確認された。柱間距離は165cmを測る。

時期は、僅少であるが図示した3464が出土していることから、古・前・Iと考えられる。(森)

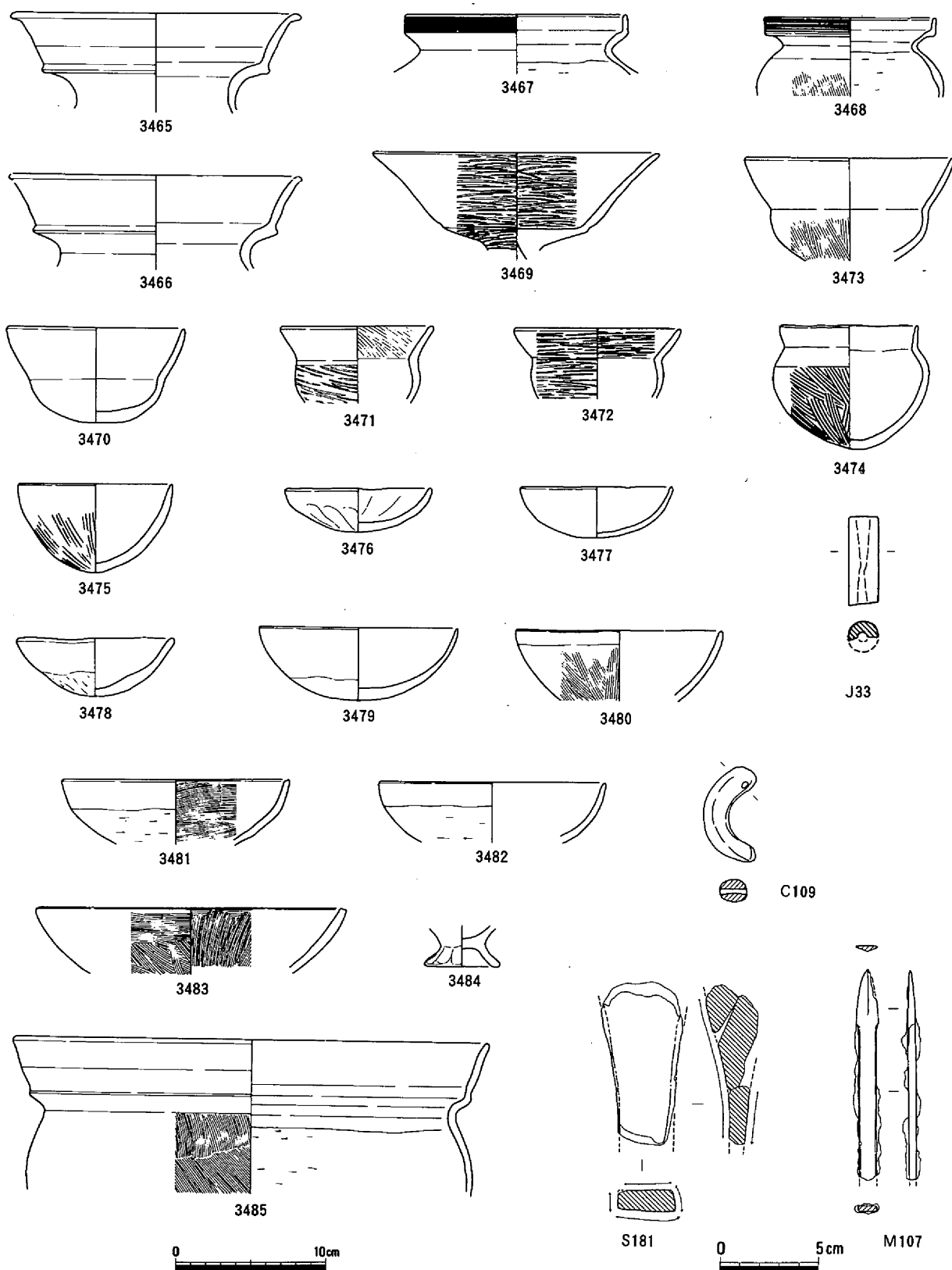
竪穴住居-152・153 (第114・115図、図版20・21・66)

竪穴住居-152・153はQ18区北側中央に位置し、2軒重複して検出されている。出土遺物から大きな時期差は認めにくく、ごく短期間のうちに建て替えられたものと考えられ、平面形はいずれも円形を呈している。いずれも幅30~40cmほどの壁体溝が住居内をめぐる。

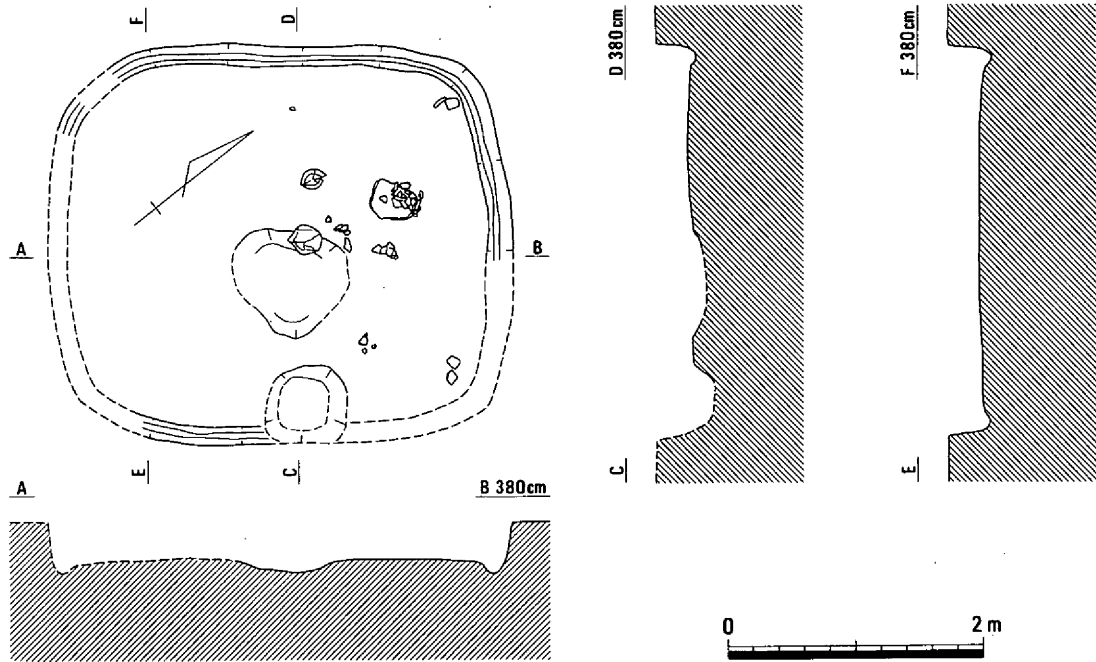
竪穴住居-152は153に切られているため全容はわからないが、検出面から床面までは約55cm遺存していた。遺存部分については、幅15cmほどの壁体溝が住居内をめぐる、部分的に二重に検出されており、竪穴住居-153への建て替え以前にも拡張があったことを想定させる。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は海拔高326cmを測る。



第114図 竪穴住居-152・153



第115図 竪穴住居-152・153 (3465~3485・S181・C109・J33・M107)



第116図 竪穴住居-154

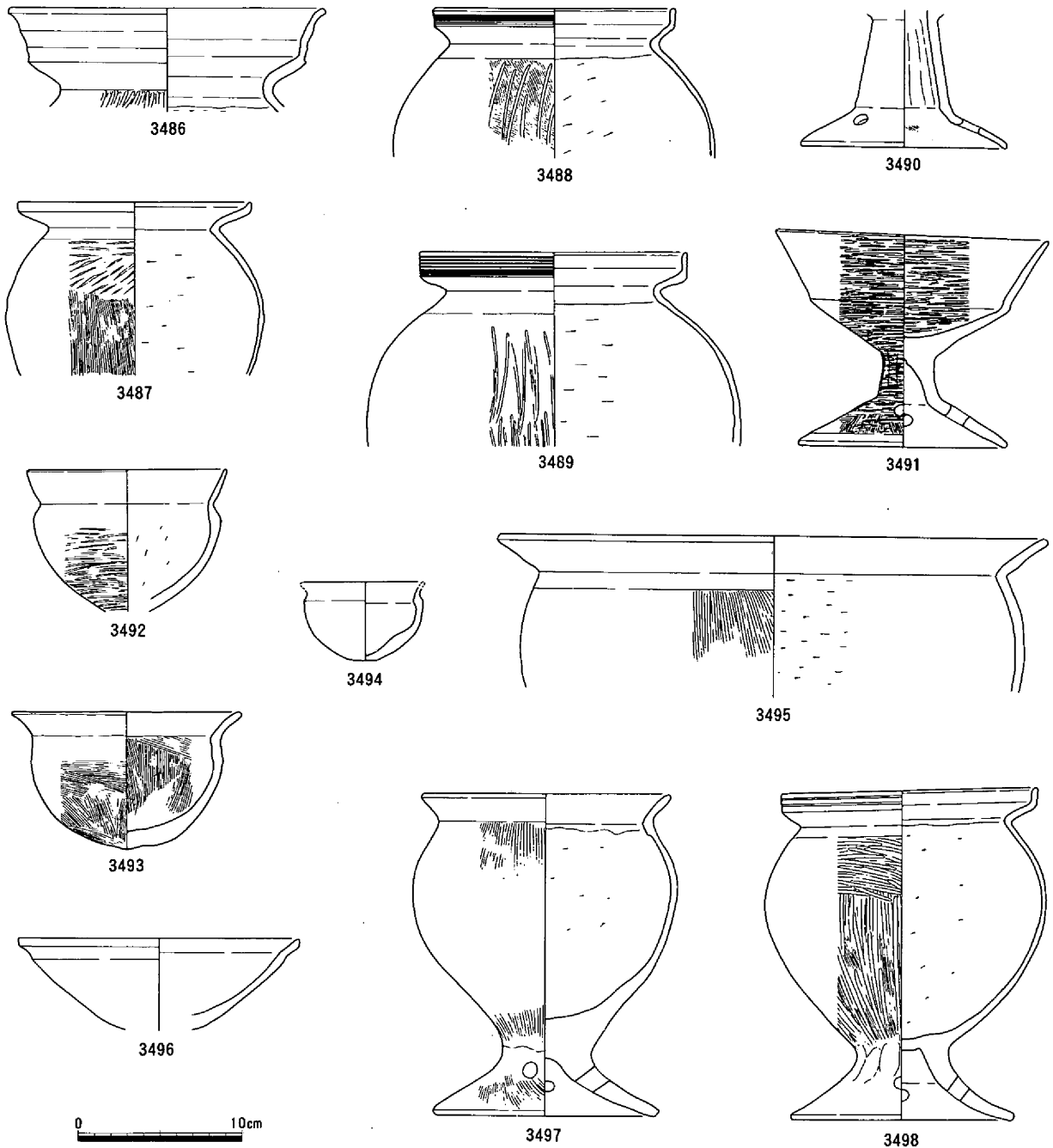
竪穴住居-153は、竪穴住居-152より床面がやや低かったために比較的良好に遺存しており、壁体溝も全周にわたって検出された。貼床もほぼ全面にわたって良好に検出されており、その面積は23.7㎡、標高322cmを測る。主柱穴は5基確認されており、柱間は最大で231cm、最小で157cmを測るが、中心からは西南にずれているようである。いずれも柱材がすでに抜き取られていたのか、断面からは柱痕跡は確認されていないが、北東隅の1基については、抜き取り穴を伴って検出された。

遺物は、第109図に図示した3465~3485やS181、C109、J33、M107などが出土している。S181は流紋岩質凝灰岩の砥石、C109は土製勾玉、J33は碧玉製の管玉、M107は鉄製の鉞である。時期はこれら出土遺物から古・前・Ⅱと考えられる。(森)

#### 竪穴住居-154 (第116・117図、図版66)

Q18区の北西、竪穴住居-144の南々東1mに位置する。竪穴住居の密集する部分にあたり、北東の竪穴住居-153に接し、竪穴住居-155によって南半分を切られている。その上に排水用のトレンチにより中央穴等が切断され、住居そのものの形状把握が困難であった。

長軸(345)cm、短軸300cm、検出面から床面までの深さ45cm、床面海拔高328cm、床面積8.7㎡を測る小形の住居である。住居プランは南辺が広く、北辺が狭い不整形を呈する。壁体溝が巡り、中央やや東よりに炭が堆積した土壌が認められる。土壌は中央穴と考えられるが、トレンチの掘削がその中心におよび正確な深さは不明である。(100)×85×(10)cmにて、土壌周縁北部に焼土化した部分がみられ、土壌内には断面に沿って1.5cm幅の炭層があり、火処として機能していたと考えられる。東辺には不整形の土壌があり、比較的多くの焼土塊が含まれていたが壁体溝下位から検出されている。床面には29×23×11.5cmの平石が住居北東にみられ、土器等の遺物は中央穴の北側を中心に出土している。台付鉢、鉢、甕、高杯等が床面にみられ、3493・3497・3498等がある。3498は平石の上に密着しており、口径15.8cm、最大径17.5cm、器高20.4cmに完形復元が可能であった。他の遺物は埋土あるいは関連するトレンチ内からの出土であり、本住居に伴う可能性は弱いものと考えている。(高畑)

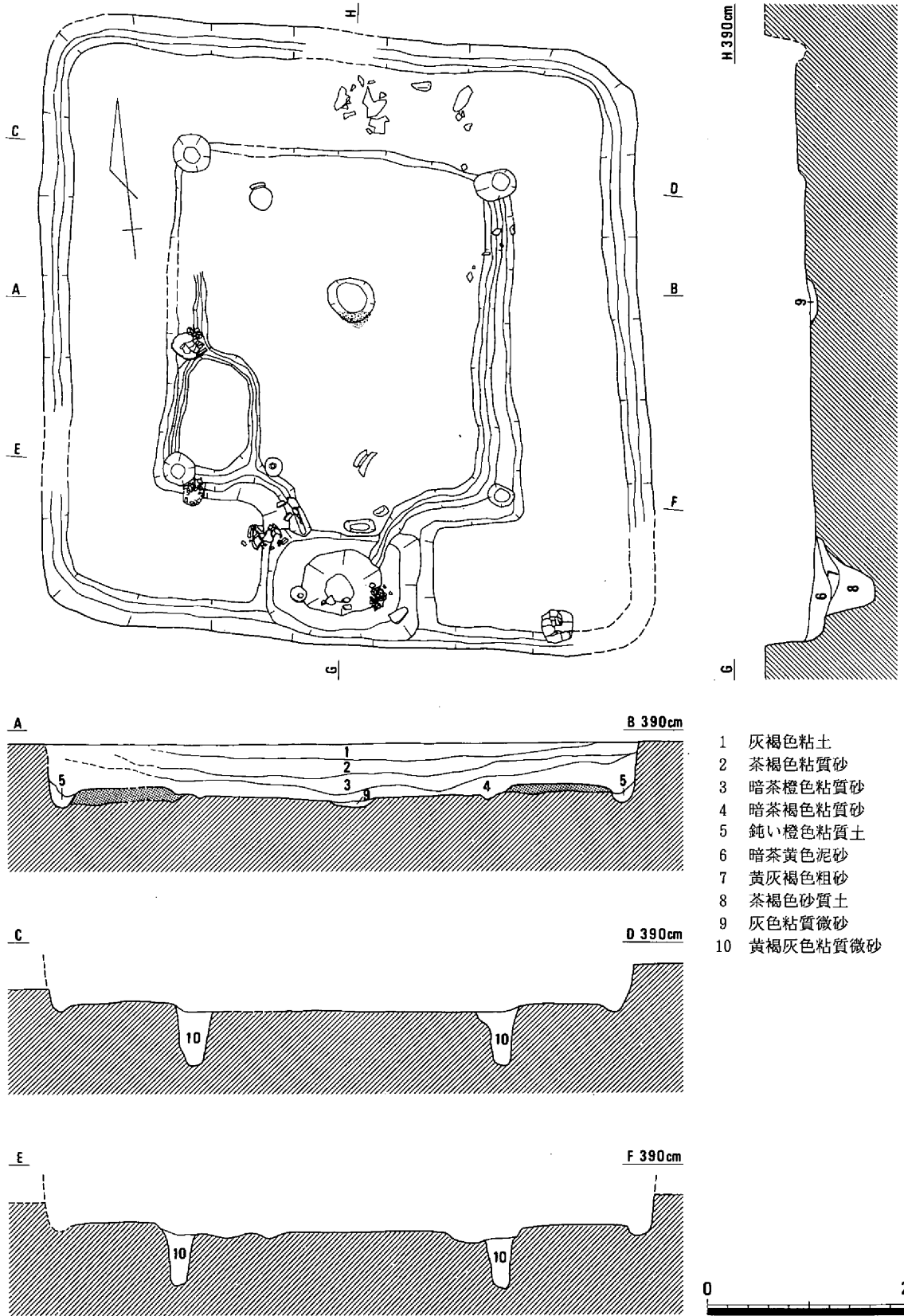


第117図 竪穴住居-154 (3486~3498)

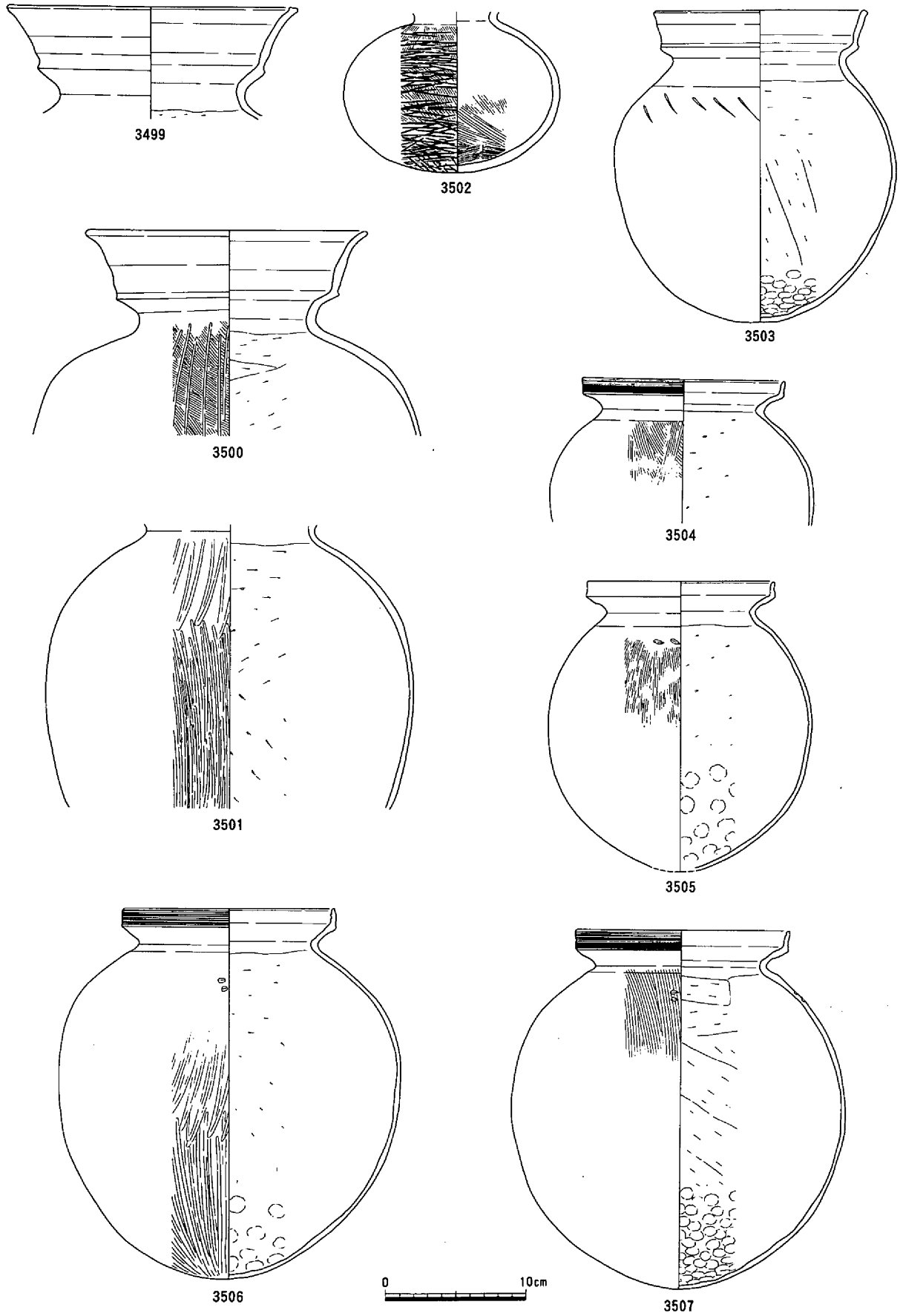
竪穴住居-155 (第118~120図、図版21・22・66~68)

Q18区の北西、竪穴住居-144の南東3mに位置する。古・前・Iの竪穴住居-154を切って造られており、南側は竪穴住居-156と接している。長軸580cm、短軸575cm、検出面から床面までの深さ30cm、高床部まで20cm、床面海拔高314cm、高杯部で334cm、床面積31.2㎡を測る大形の竪穴住居である。この時期のものとしては大形の部類に入り、住居内は壁体溝、高床部、支柱穴、方形土壇の施設が認められる。高床部は南辺の方形土壇部に無く、幅100cm、高さ10cmにて四辺を巡っており、北辺から南辺に向かい若干傾斜をしている。床面および床溝においても同様に傾斜をしており、床溝は方形土

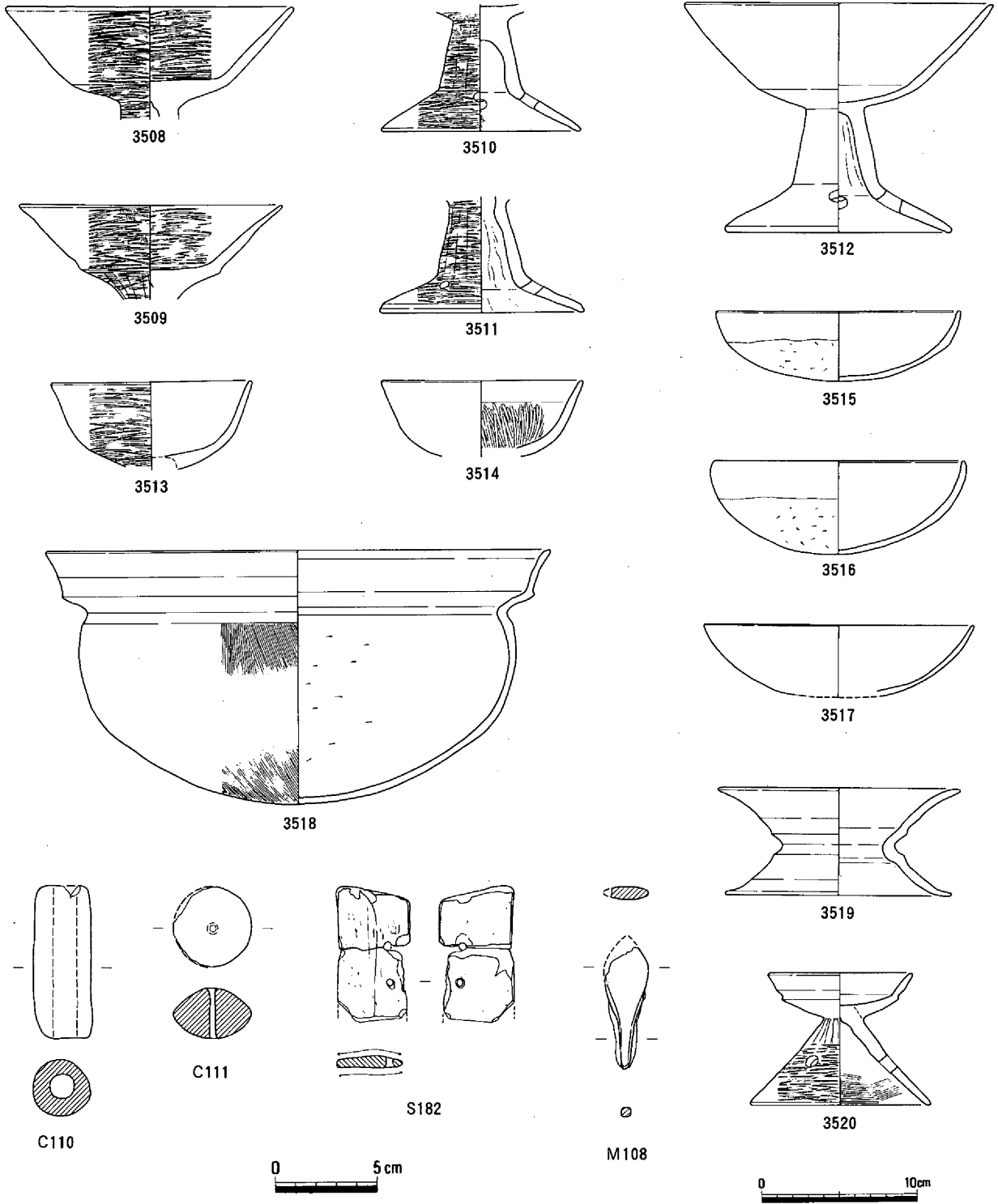




第118図 竪穴住居-155

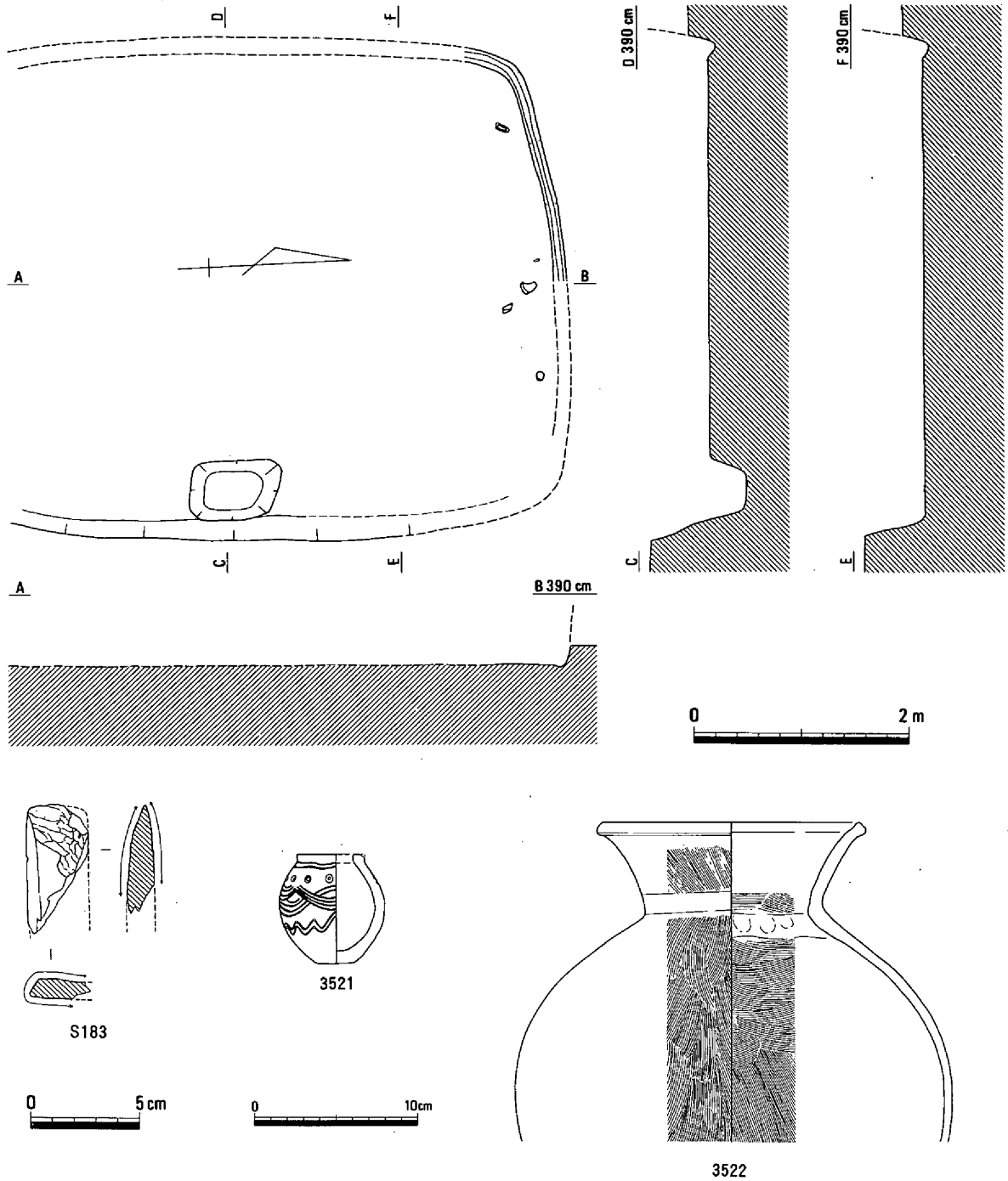


第119図 竪穴住居-155 (3499~3507)



第120図 竪穴住居-155 (3508~3520・S182・C110・111・M108)

墳の北西、北東の隅に連結している。方形土壇は東西幅178cm、南北幅100cm、深さ75.2cmを測り、上端が長方形にて下端が楕円形となる。竪穴住居-142と同じく上端に板などによる蓋状のものが付設できそうな構造である。方形土壇のすぐ北東に25×8×12cmの長方形の小土壇が認められた。北西隅にも方形土壇がみられた。支柱穴は4本からなり、床の四隅に配されている。北辺の柱間304cm、右廻りに309cm、314cm、314cmを測る。南西柱穴の北東に110×65cmの高床部があり、前述の高床よりさらに10cmほど高く造られている。床面中央に48×45×10cmの円形土壇があり、南側上端周辺が33×15

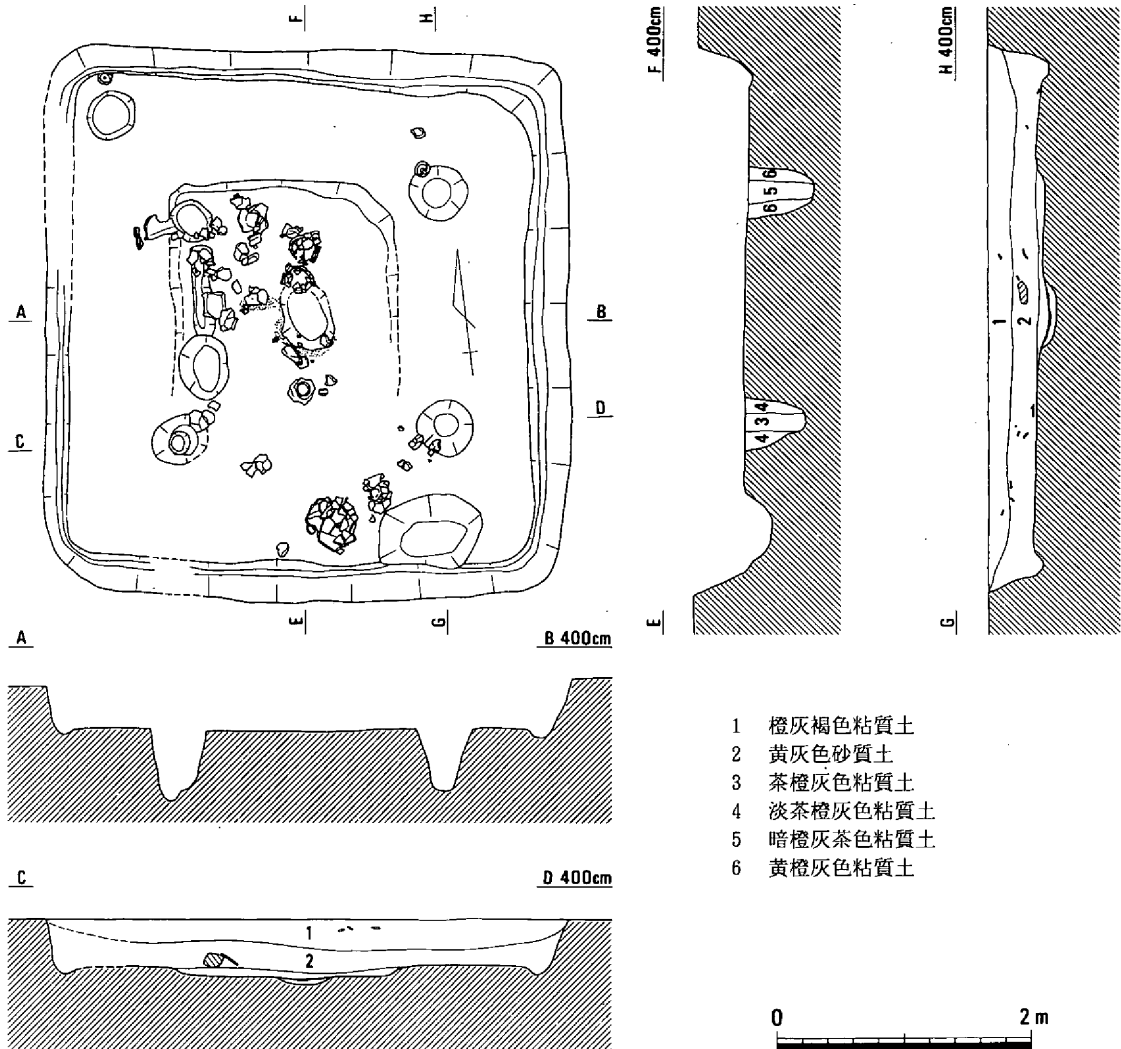


第121図 竪穴住居-156 (3521・3522・S183)

cmの範囲で焼土化している。遺物は3500・3501・3503・3512・3520等が床面出土であり、他は埋土中のものである。古・前・Ⅱにはすでに埋没が完了していたようである。(高畑)

竪穴住居-156 (第121図、図版68)

Q18区中央部やや北よりの位置、竪穴住居-155の南に一部重複して検出した。重なる様子を観察すると竪穴住居-155がこの住居跡を切るものであり、古いものと判断された。住居跡は二つの調査区に分かれて調査したこと、調査区の端部に検出したことからその全形については不明である。検出したのは、壁体溝の一部とそれに接する方形の土壌である。平面形は方形を呈するものと考えられ、東西方向の幅は約490cmを測ると推定される。方形土壌は東側の壁体に接して検出した。平面形は方



第122図 竪穴住居-157

形を呈するもので、長さ81cm、幅54cm、深さ35cm、床面の標高は320cmを測る。遺物は3521・3522の壺、S183の砥石などが出土している。時期は古・前・Iに属するものと考えられる。(井上)

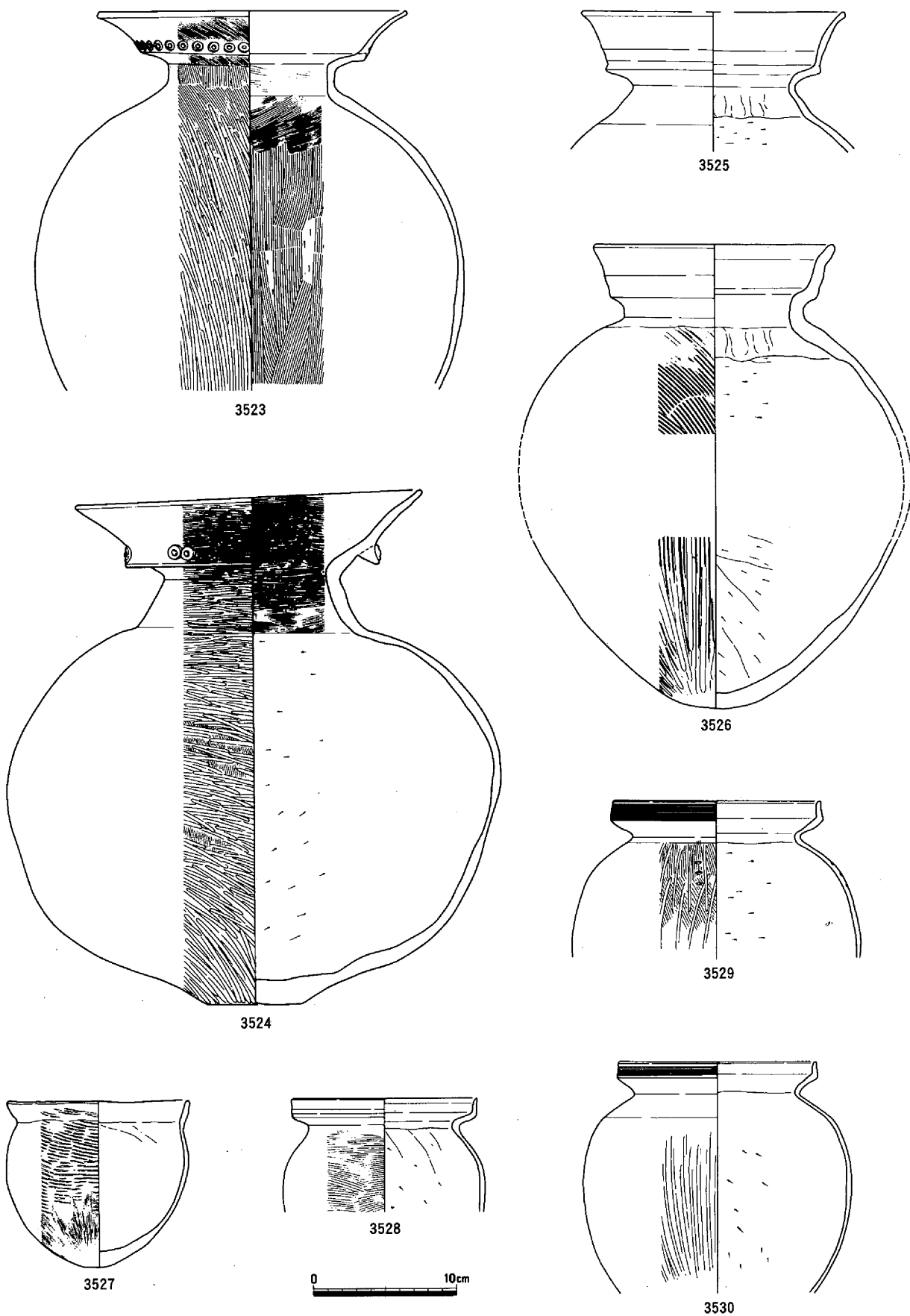
竪穴住居-157 (第122~125図、図版22・68・69)

調査区の最南にあたり、竪穴住居-152・153の南東1mに位置する。

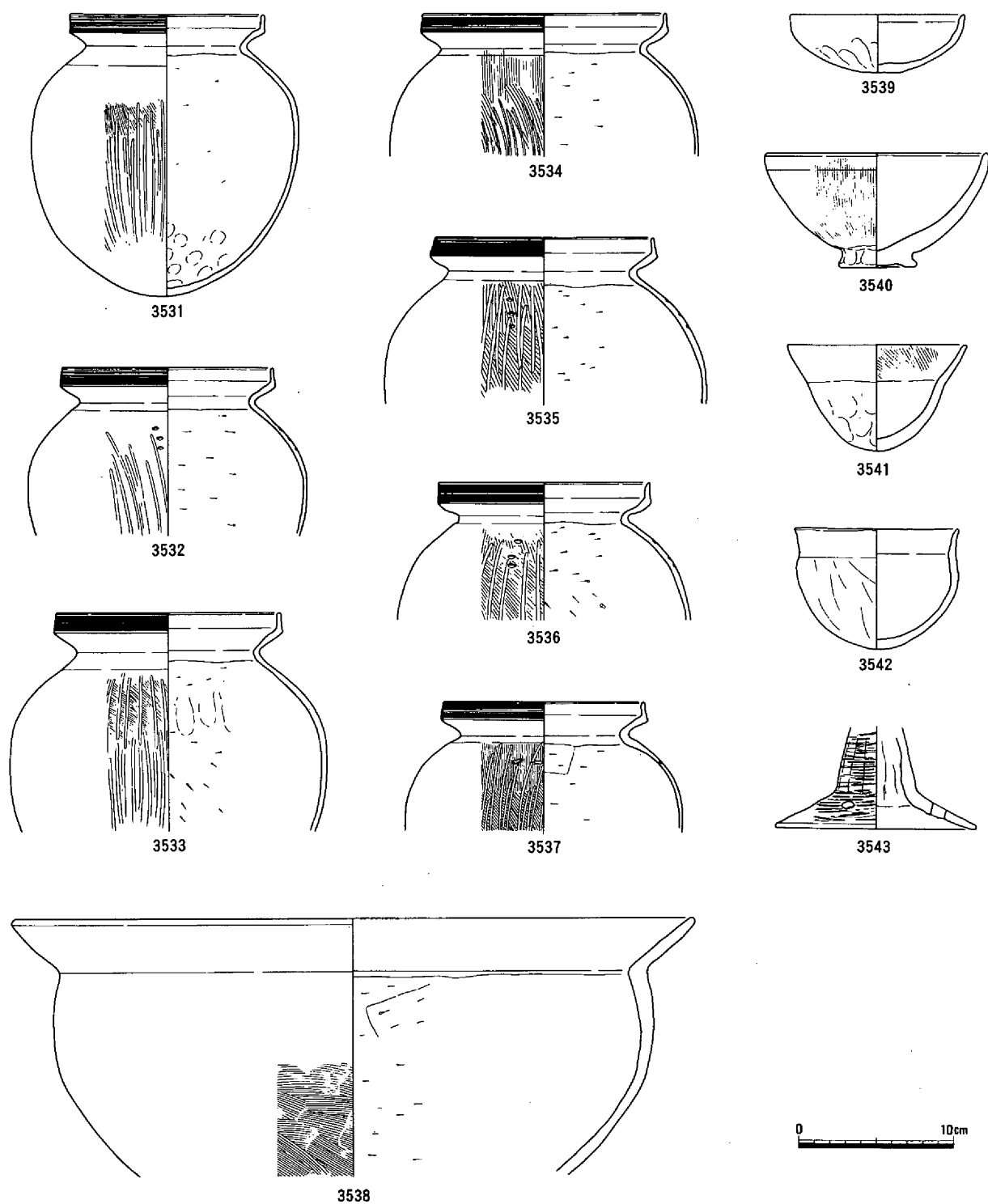
平面形は主軸をN-6°-Eにとる方形を呈し、規模は南北440cm、東西416cmを測る。検出面から床面までは約40cm遺存しており、その壁面は直立気味に立ち上がる。床面は、海拔高が321cm、床面積14.4㎡を測る。幅20~30cm、深さ10cmの壁体溝が住居内をめぐり、その内側のうち東・西・北の3方向が高床状を呈しているが、3方向ともに低く、床との境に周溝はない。さらにその中央部には、60×40cmの長楕円を呈する中央穴があるが、深さ15cmと浅く、皿状を呈する。覆土からは炭や焼土塊などが出土し、底面には被熱痕跡も見られる。

また支柱穴は4基確認されている。柱間は最大で213cm、最小で175cmを測り、そのいずれの柱穴からも柱痕跡が確認された。さらに南東隅角部では、深さ20cm程度の方角土壇も確認されている。

遺物は図示した3523~3538などが出土している。いずれも床面もしくは床面近くから出土したもので、時期を示唆する最も有力な手掛かりとなるものである。



第123図 竪穴住居-157 (3523~3530)

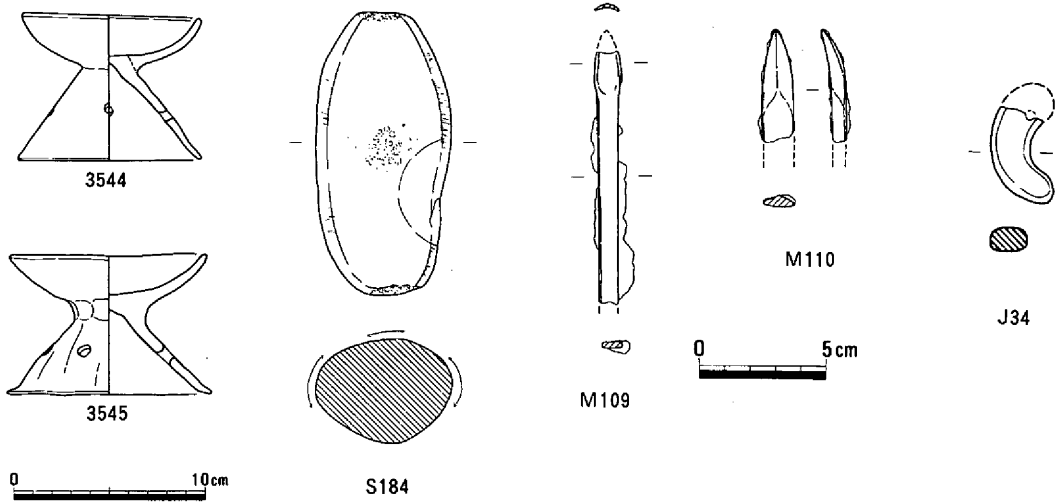


第124図 竪穴住居-157 (3531~3543)

壺は、いずれも二重口縁であるが、口縁部が外反し円形浮文を付す3523・3524と、口縁部が直立気味に開く3525・3526との二種がある。甕はいわゆる「吉備型甕」3528~3537が多く認められるが、3527のように「く」の字口縁で胴部にタタキが施される「畿内型甕」も混在する。S 184は砂岩製の敲石、M109・M110はいずれも鉦である。また、覆土中からはヒスイ製の勾玉も出土している。

これら出土遺物から時期は古・前・Iに比定される。

(森)

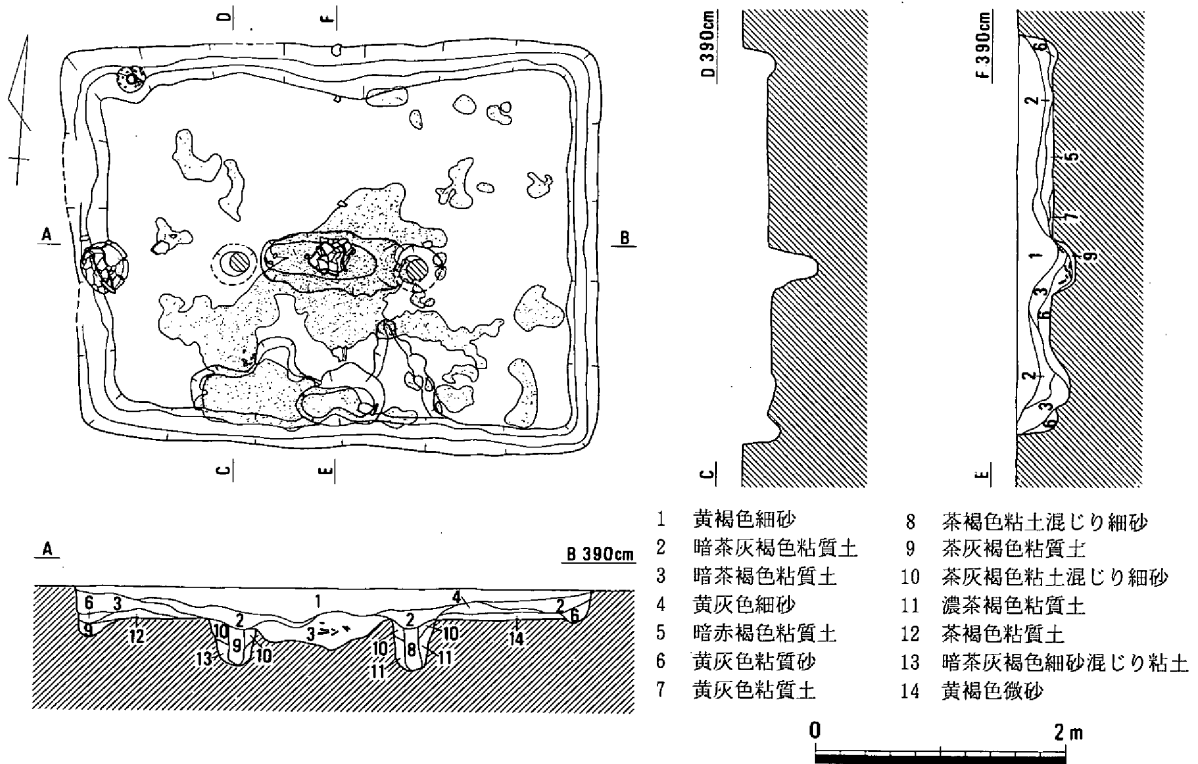


第125図 竪穴住居-157 (3544・3545・S184・J34・M109・110)

竪穴住居-158 (第126・127図、図版23・69・70)

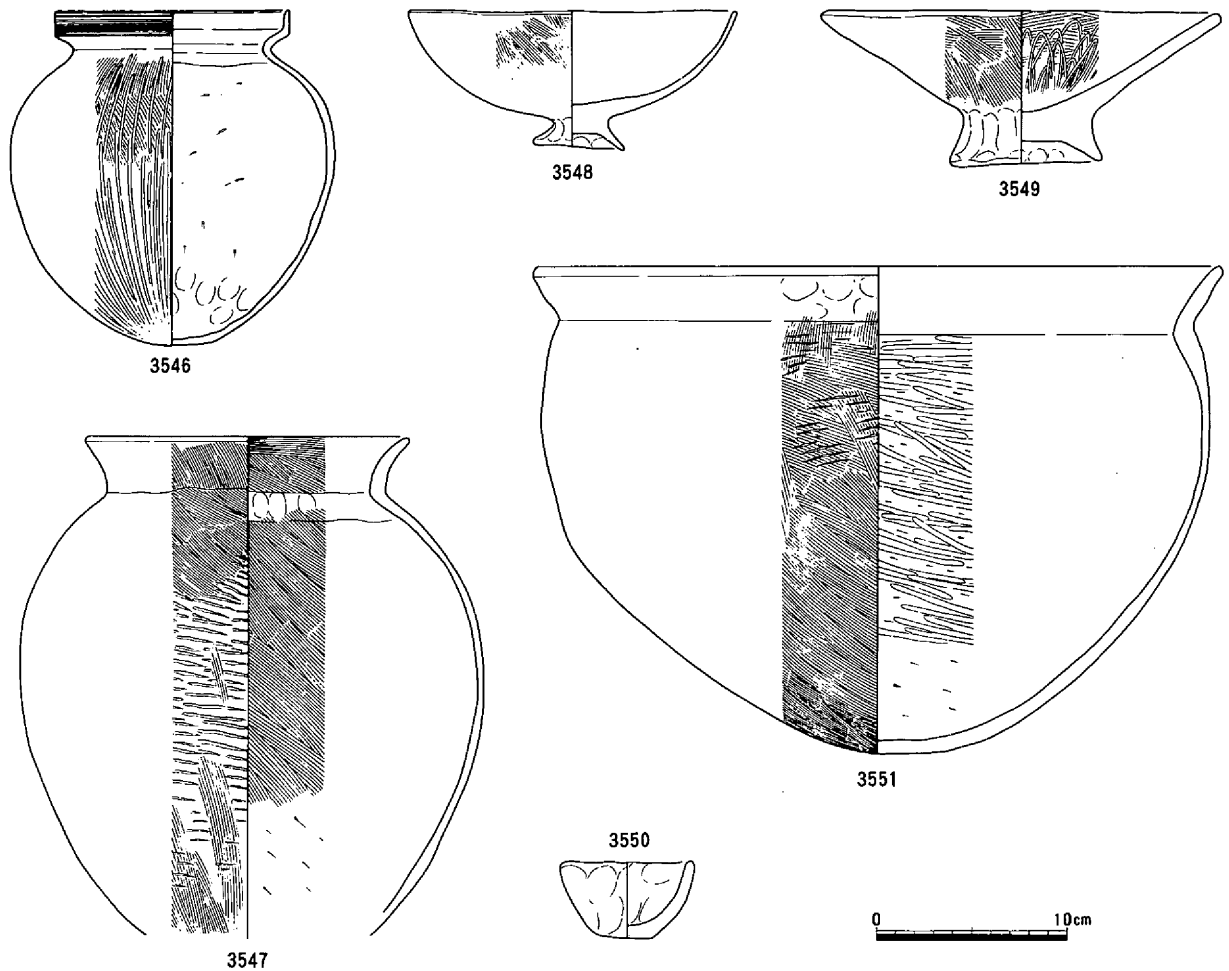
竪穴住居-158は中屋調査区のほぼ中央に位置する。北西から派生する微高地の縁辺に立地しており、溝-105の東岸に隣接する。主軸をN-45°-Wにとる長方形を呈しており、規模は南北方向で266cm、東西方向で382cmを測る。床面までの深さは約25cm遺存しており、床面の海拔高は345cmを測る。床面に貼り床は認められていないが、ほぼ平坦で、周囲を幅30cmほどの壁体溝が全周している。床面の中央には、45×110cmを測る長楕円の中央穴があり、中央穴中央部からは壺1個体分も出土している。さらにその南1cmからは、壁面に沿って45×68cmの方形土壇も検出されている。

中央穴の両端からは2基の柱穴が検出されており、柱間芯心距離は147cmを測る。いずれの柱穴か



第126図 竪穴住居-158





第127図 竪穴住居-158 (3546~3551)

らも柱痕跡も確認されており、これより主柱は径10cm程度の円柱であったことが窺えた。

中央部から南辺一体にかけて、焼土塊や炭が著しく認められることから焼失住居と考えられるが、建築部材を想起させる明確な炭化材は認められなかった。

出土遺物は、前述した中央穴や床面から、図示した3546~3551が出土しており、時期は古・前・Iに比定される。 (森)

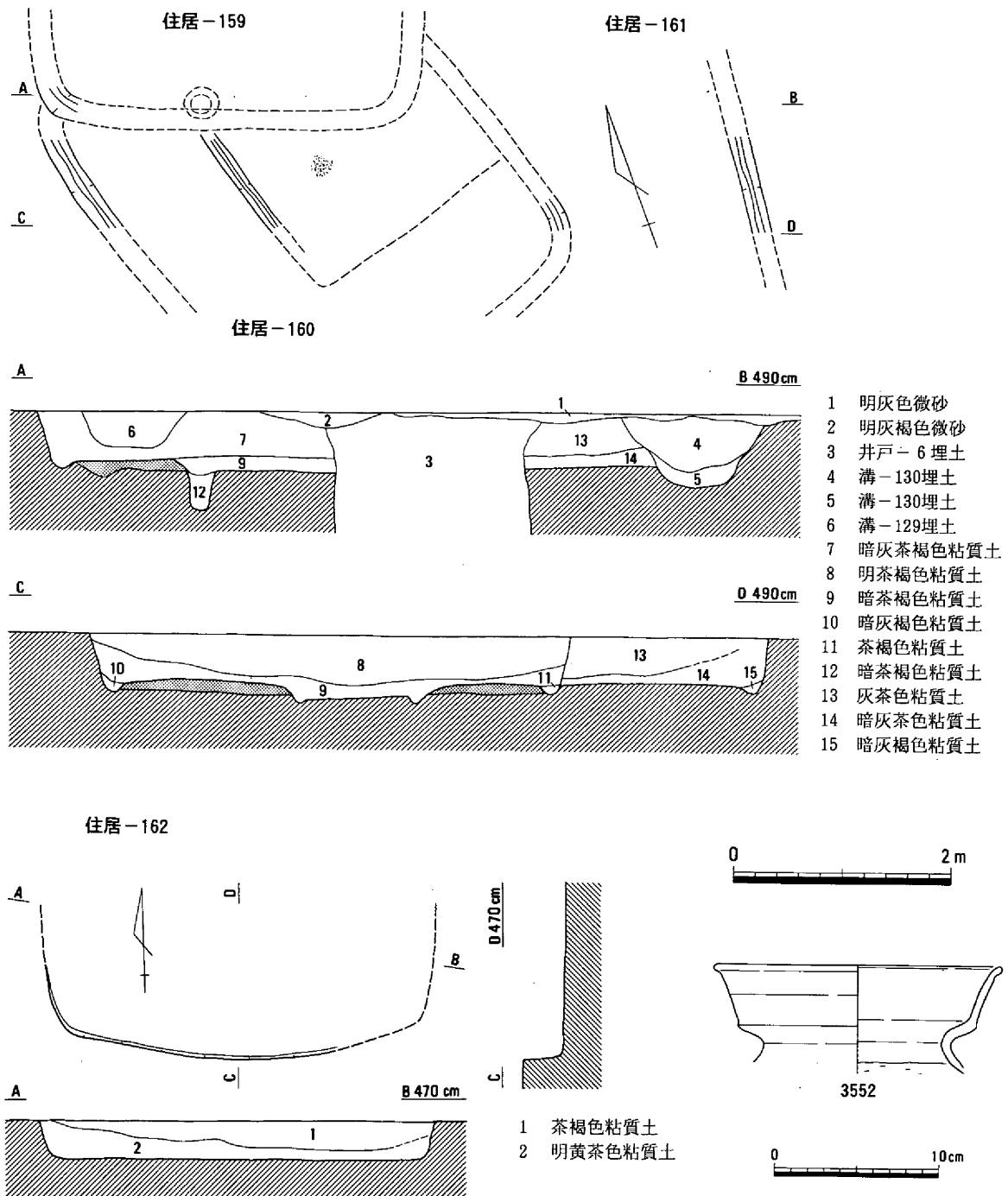
#### 竪穴住居-159~161 (第128図)

〇18区西部で検出した。調査範囲が幅2mほどと狭かったため、これらの全容を把握することはできなかったが、土層断面の観察を中心にして、3軒の竪穴住居が重複していることが判明した。竪穴住居-159が最も新しく、次いで竪穴住居-160、これらに先行して竪穴住居-161が築かれている。

竪穴住居-159は、竪穴住居-160の北西辺を壊して、重複している。井戸-6、奈良時代の溝-129とも重複しており、平面的には床面を検出できなかったものの、おおよその規模を把握した。これによれば、一辺約350cmほどの方形をなすものと思われる。柱穴等は検出していない。

竪穴住居-160は、400×360cmほどの規模の方形をなすと推測される。床面の把握は部分的に留まったが、「コ」字をなすものと思われる高床部の存在を確認し、その一隅に柱穴を検出している。

竪穴住居-161は、東辺の一部を確認したにすぎない。床面のほとんどは後出する竪穴住居-160、井戸-6等によって壊されており、規模等は把握できなかった。



第128図 竪穴住居-159~162 (3552)

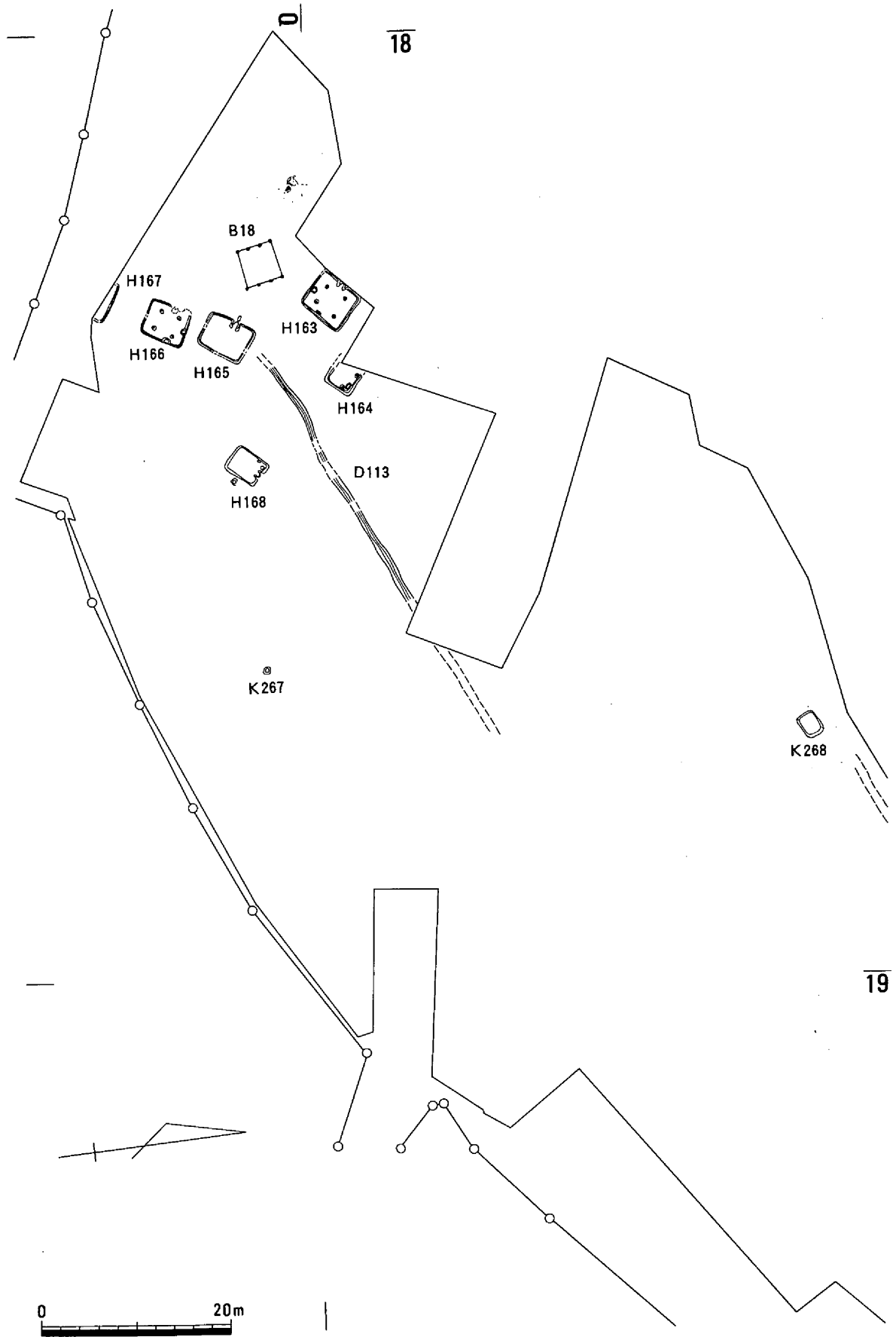
これらの竪穴住居からの出土遺物は細片であり、図示していないが古墳時代前半のものであり、大きな時期差なく、相次いで建て直されたものと思われる。(大橋)

竪穴住居-162 (第128図)

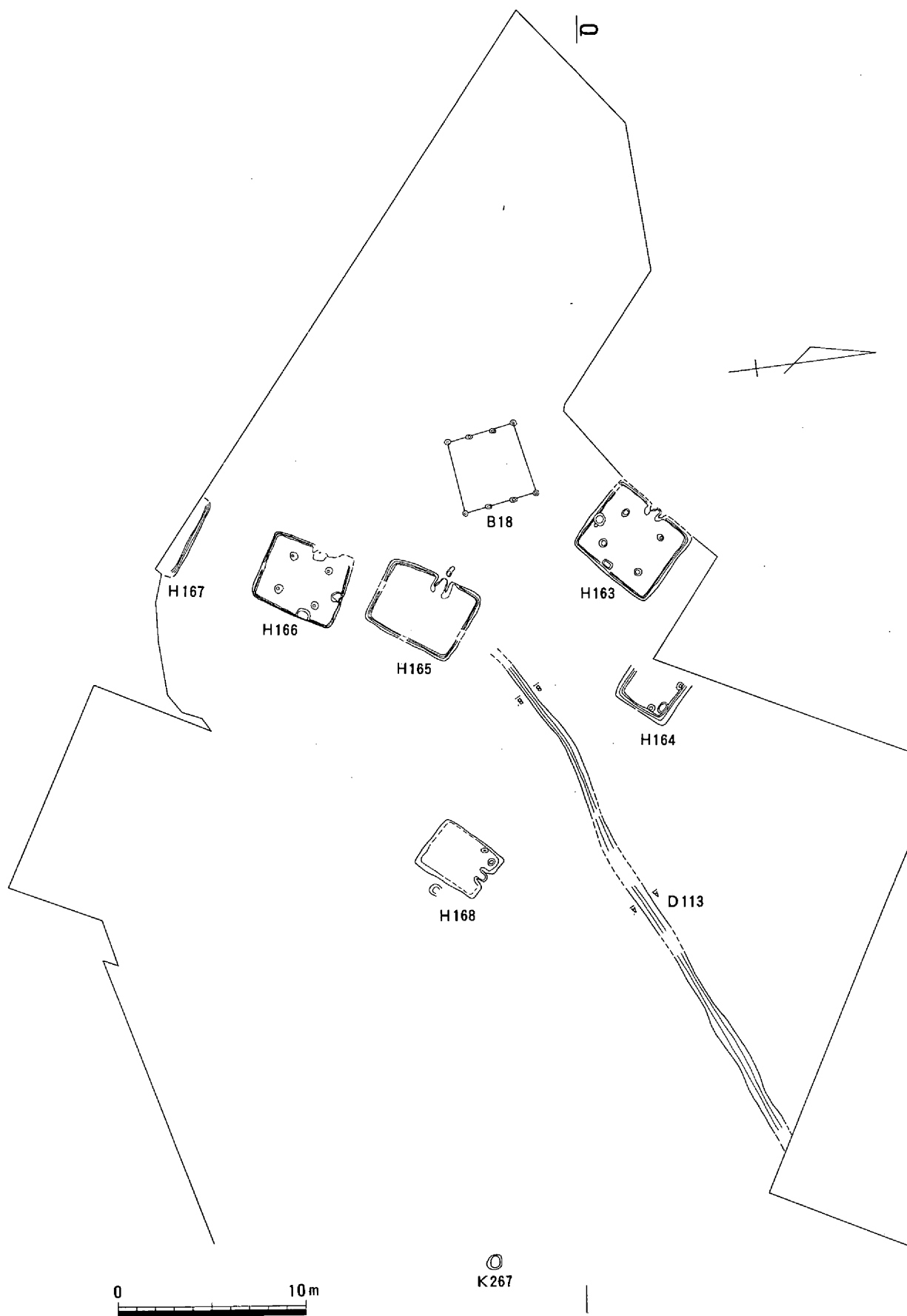
先述した竪穴住居-159~161の東に隣接して検出した。北半は調査区外にあり、南半の一部を把握したに過ぎない。一辺340~350cmほどの小形の竪穴住居と思われる。壁体溝は検出してない。柱穴等も確認していない。出土遺物は、3552の二重口縁の壺を図示しているが、このほかに甕の小片もある。この竪穴住居の時期も、古墳時代前半と判断されるが、詳細な時期は保留したい。(大橋)



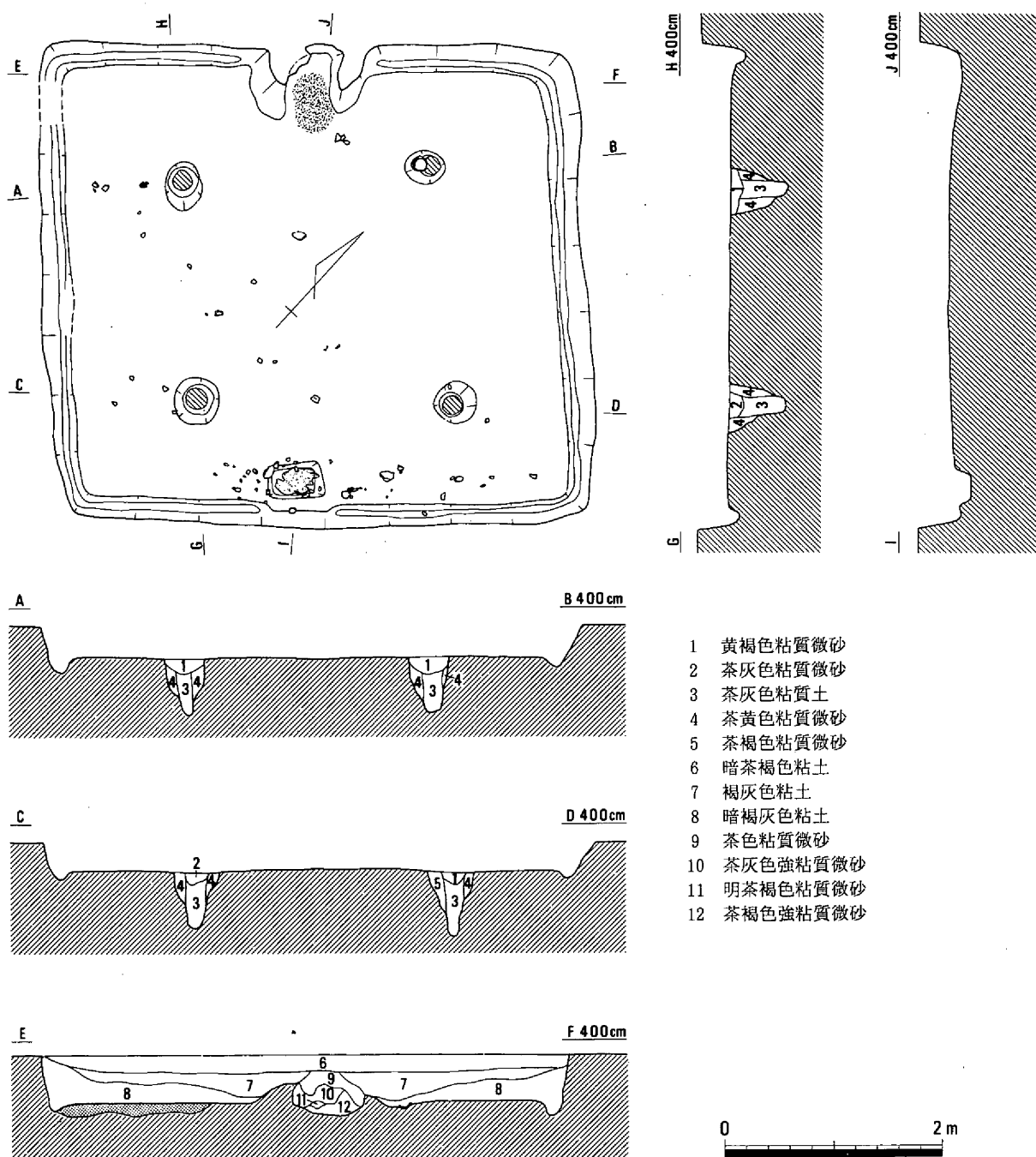
第129図 中屋調査区古墳時代遺構全体図 2 1/600



第130図 古墳時代遺構全体図3 1/600



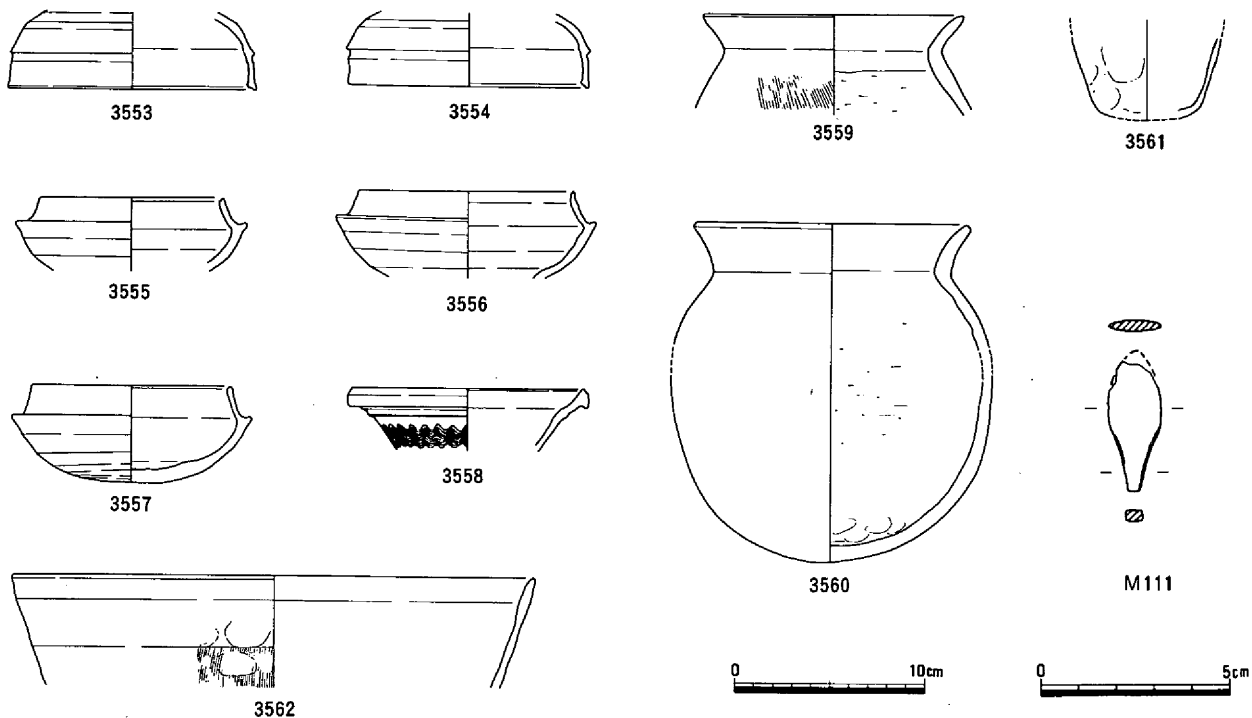
第131図 古墳時代遺構配置図2 1/300



第132図 竪穴住居-163

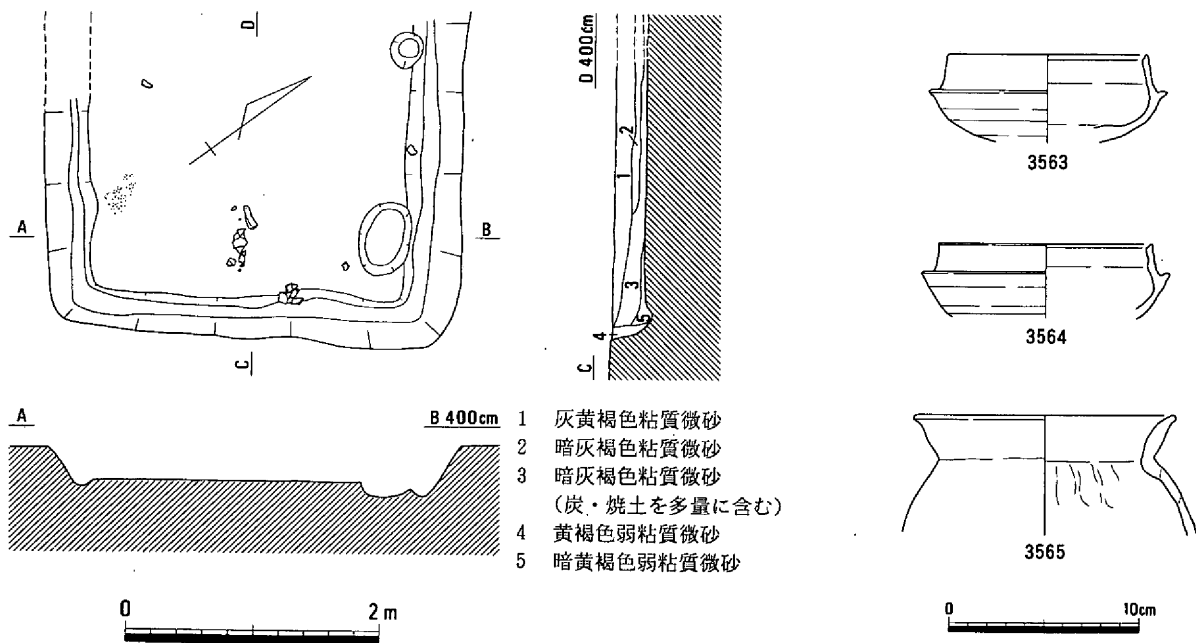
竪穴住居-163 (第132・133図、図版23・24・70)

P18区の南西、竪穴住居-164の南西1mに位置する。Q線を跨ぐ格好で6軒の竪穴住居が分布し、本住居は西端の場所を占める。長軸467cm、幅412cm、検出面から床面までの深さ約30cm、床面海拔高352cm、床面積19.3㎡を測る。埋土は暗茶褐色粘質微砂の1層にて、須恵器、土師器、炭等の小片を含み、とりわけ南東辺を中心に多く認められた。住居内の施設は北西辺中央にカマド、対応する南東辺中央に方形土壇と4本の支柱穴からなる。カマドは調査区の境界部にあたり詳細は把握できなかったが、断面にみられた袖幅は43cm、高さ30cmを測り、壁は焼土化していた。方形土壇は60×40×18.5

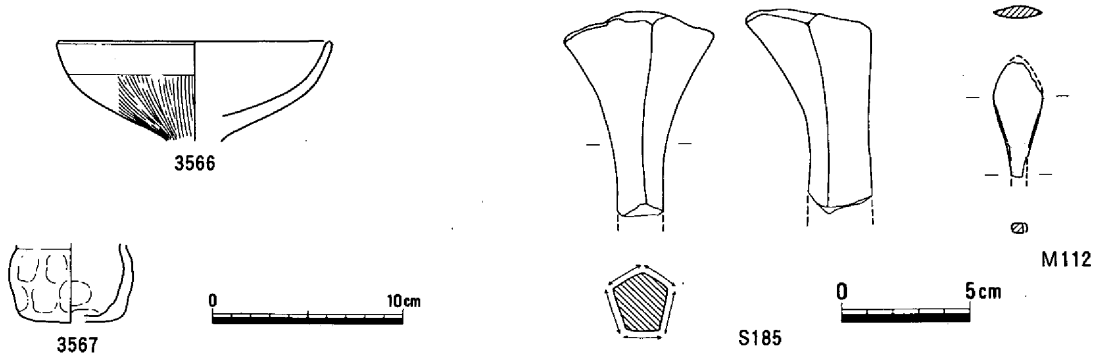


第133図 竪穴住居-163 (3553~3562・M111)

cmを測り、土壇底には焼土塊が全面に投げ込まれた状況で出土している。主柱穴間は北西辺で228cm、右廻りに222cm、233cm、198cmを測り、北東辺が少し広い傾向を示し、整然と配置されている。住居に伴う遺物は3557のみが完形であり、他は小片である。3557は北の柱穴掘り方内上面から出土しており、口径10.3cm、最大径12.9cm、器高5.1cm、ヘラケズリは右廻りである。甕は外面平行タタキ、内



第134図 竪穴住居-164 (3563~3565)

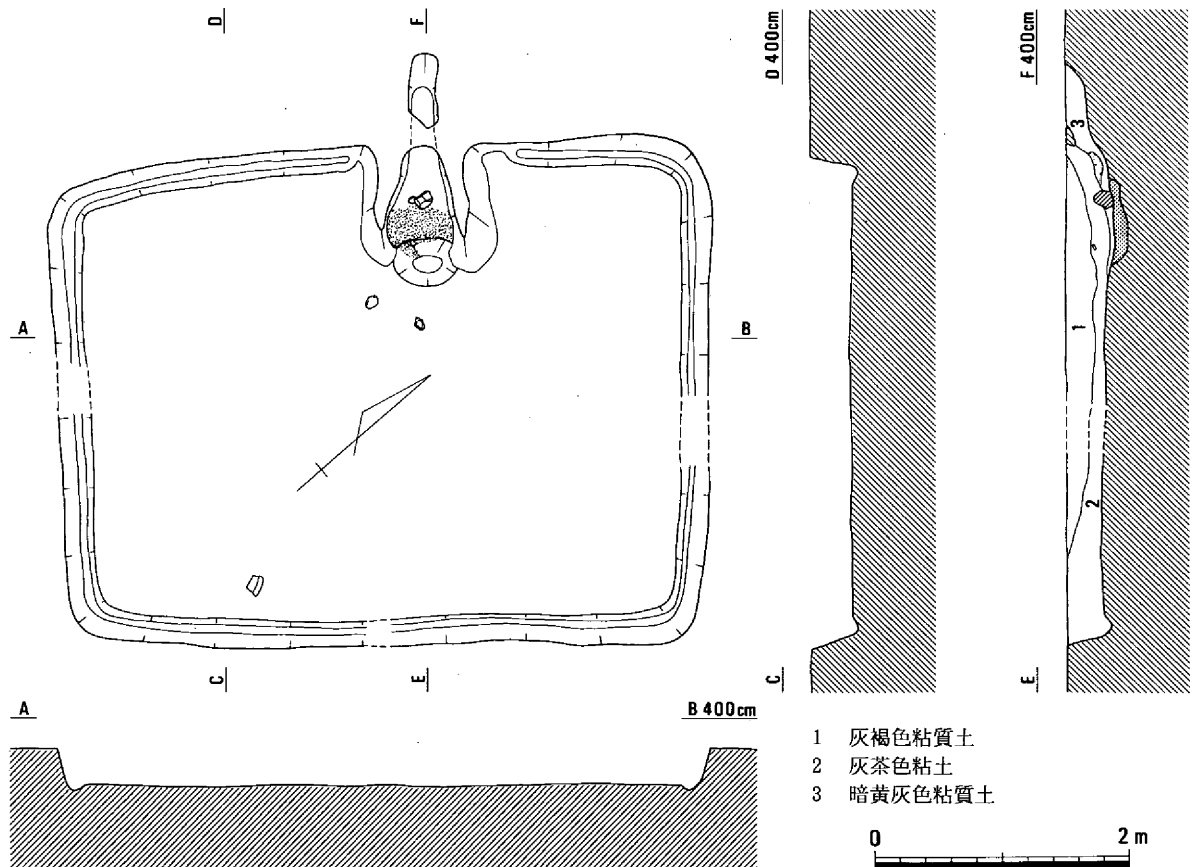


第135図 竪穴住居-164出土遺物 (3566・3567・S185・M112)

面スリケシの小片等である。製塩土器の小片も認められる。古・中・Ⅱに比定できる。(高畑)

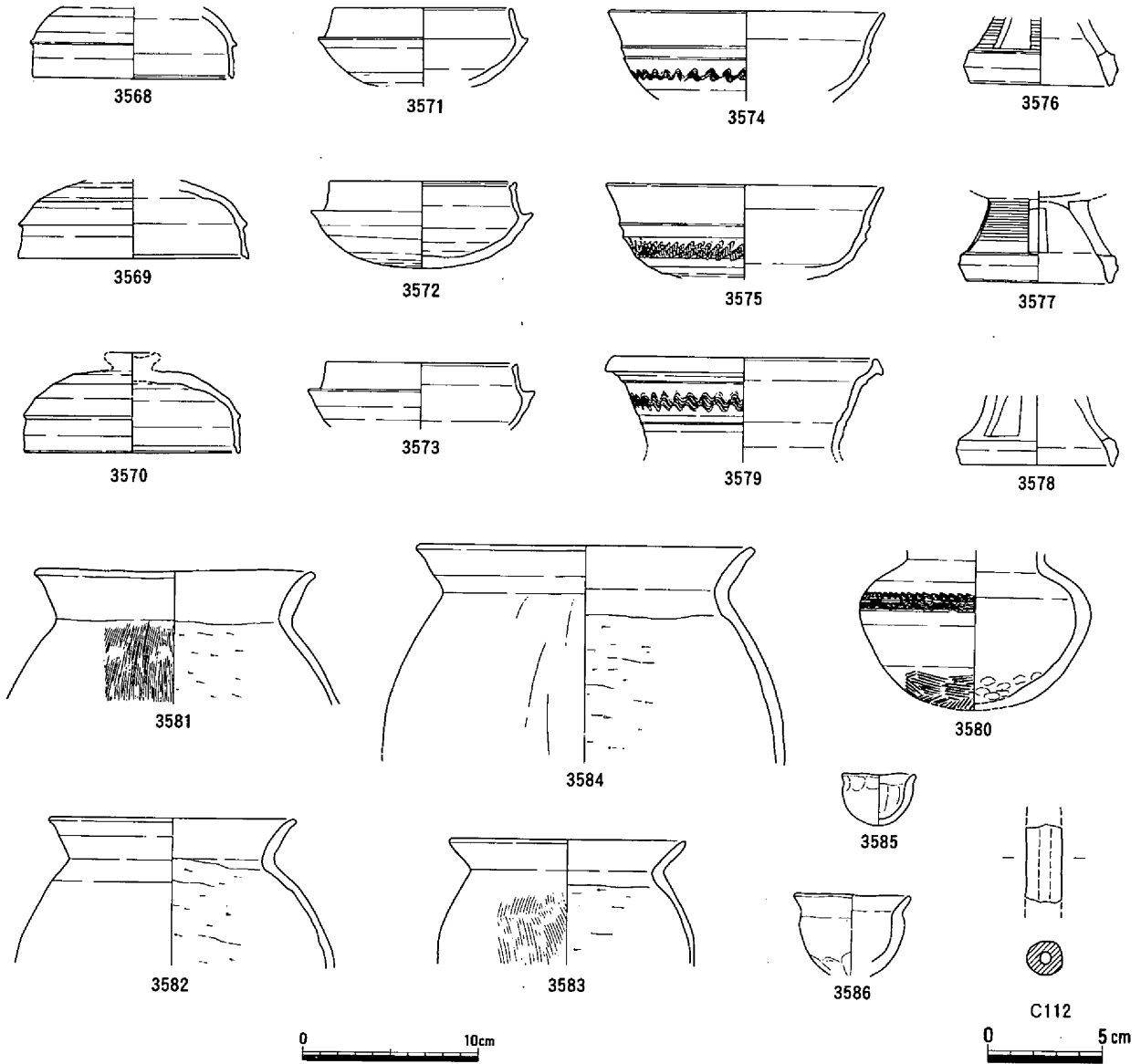
竪穴住居-164 (第134・135図、図版24・70)

P18区の南辺中央西寄りにて検出された。調査区境にあって北西部を欠いているため全容はわからないが、幅280cmを測り、方形を呈することが確認された。軸線をN-37°-Eにとり、周囲の竪穴住居-163や165とほぼ棟を揃えている。検出面から床面までは30cm程度が残存しており、床面には貼り床は認められなかった。床面の海拔高は356cmを測る。壁体溝は、検出部分については床面を全周していたが、柱穴が確認されておらず、無柱であった可能性も考えられる。なお、北辺の壁溝上で円形



第136図 竪穴住居-165





第137図 竪穴住居-165 (3568~3586・C112)

のピットと西隅角部で長楕円形の土壌が確認されたが、詳細・用途については推定しがたい。

この竪穴住居は検出時から炭等の散乱が目立ち、覆土にも相当量の炭や焼土塊が含まれていた上に、床面南隅部分に被熱痕跡が認められたことから焼失住居の可能性もあるが、炭化材等の出土は見なかった。時期は、覆土中から図示した3563~3565が出土していることや、前述した竪穴住居-163などと軸線が合うことを考えると古・中・Ⅱに比定される。(森)

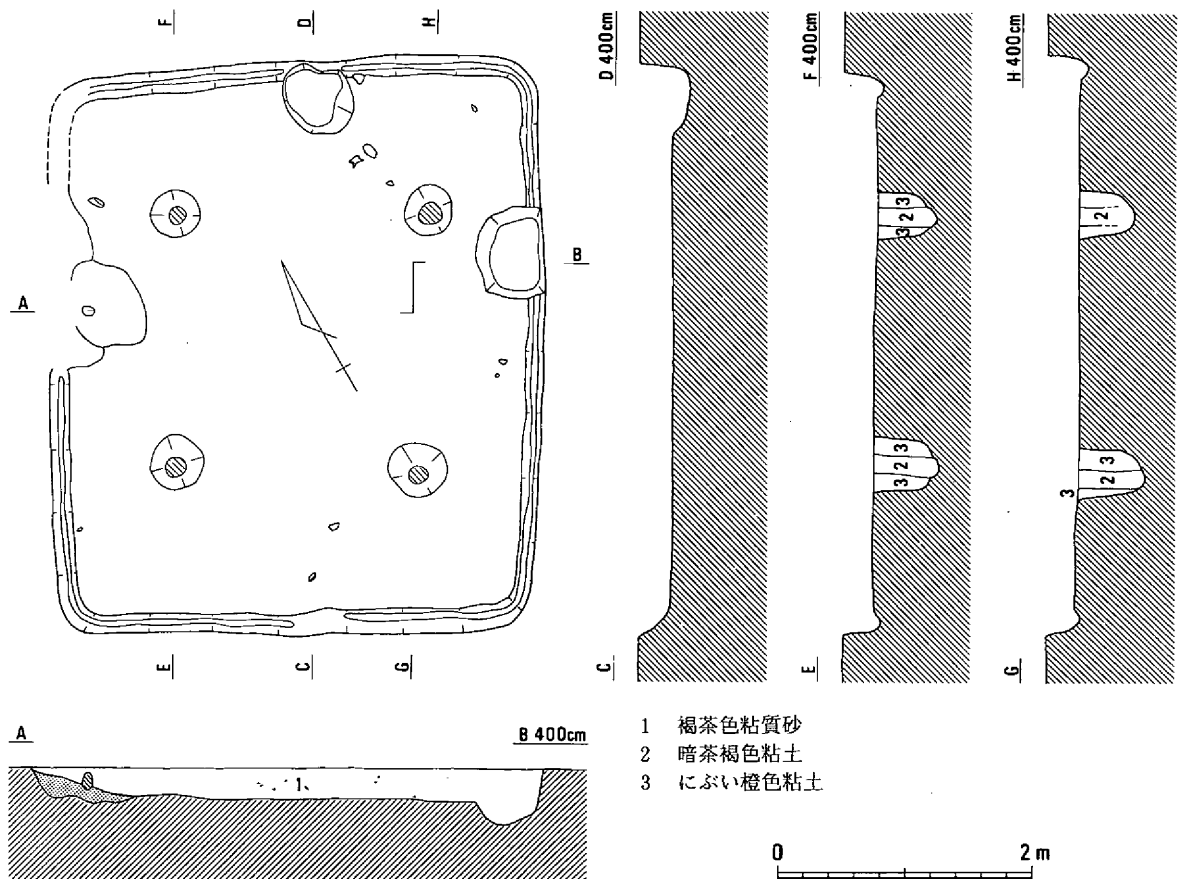
竪穴住居-165 (第136・137図、図版24・25・70)

Q18区の北西、竪穴住居-163の南東5.8mに位置する。古・前・Ⅰの竪穴住居-139~141等の廃絶後に同位置に造られた方形の住居である。長軸491cm、短軸371cm、検出面から床面までの深さ35cm、床面海拔高347cm、床面積17.4㎡を測る。住居内施設は壁体溝、カマドからなる。カマドは北西辺の中央やや右寄りに配置されており、天井部を失っているが焚口から煙道までが残存していた。炭、灰の掻出し土壌から煙道端まで175cm、掻出しと考えられる土壌は50×36×7.5cmで赤化部は認められな

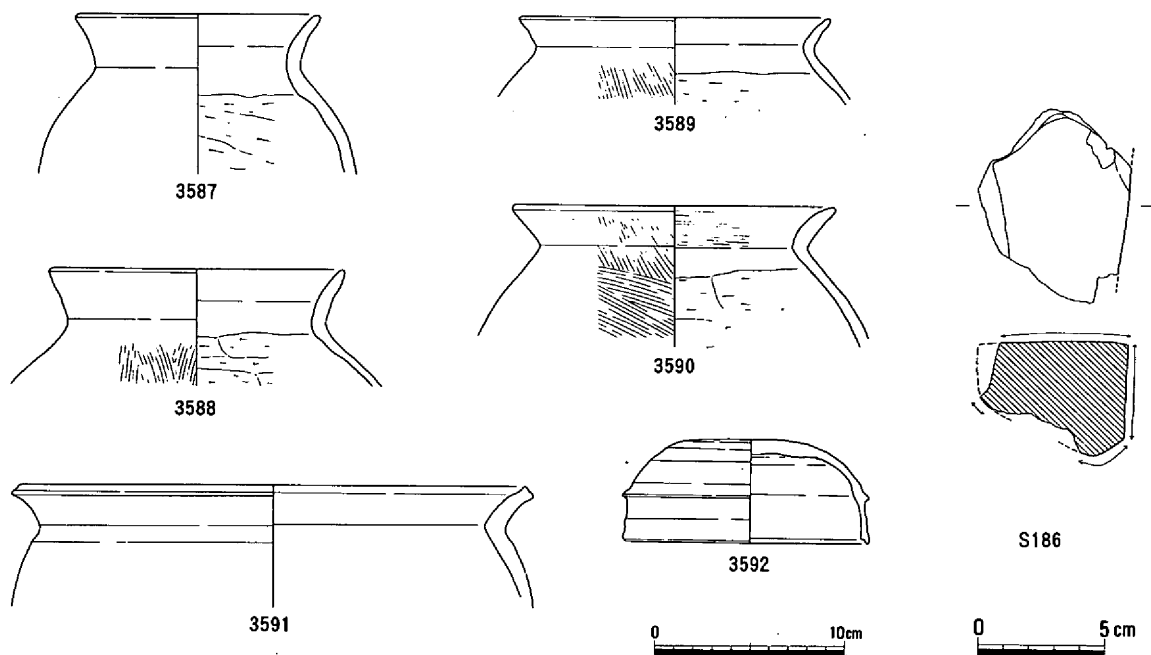
い。カマド壁は変形の「ハ」字状を呈し、カマド内高さ80cm、奥部幅25cm、焚口部幅53cm、残存高23cmを測り、その中央部に花崗岩の角礫を利用した支石(16×14×11cm)が立脚している。カマド内の両壁は最も焼土化しており、支石の手前部も赤化が認められた。煙道はカマドが壁体にて終止した所より約19cmを暗渠で貫けて、さらに外に向かって52cmのびている。煙道径は20×14cmを測り、断面隅丸方形を呈する。住居内埋土は2層からなり、第2層中に遺物は含まれていた。住居内も北西床面を除いてほぼ全体に散布しており、カマド周辺を中心に須恵器が多く認められた。支柱穴は2本であり、柱間233cmを測る。遺物は3585のみが完形品であり、口径4.7cm、器高3.0cmを測る手捏ね土器である。他はすべて破片であり、接合でもって完形になるものもない状態である。(高畑)

竪穴住居-166 (第138・139図、図版24・25・70)

Q18区の北西、竪穴住居-165の南南西1.6mに位置する。5世紀末～6世紀初頭の須恵器を出す竪穴住居-165～167がほぼ同主軸で一列に並び、その中央部にあたる。長軸435cm、短軸374cm、検出面から床面までの深さ25cm、床面海拔高354cm、床面積15.6㎡を測る。住居内の施設は壁体溝、カマド、方形土壇、支柱穴4本からなる。カマドは西辺壁体の中央やや北よりに配置されており、袖部と支石が残存している。竪穴住居-165のカマドに近い形態と考えられるが煙道部については把握ができなかった。支石は13×8×6cmの河原石を利用しており、カマド全体の下部土壇を埋めながらカマド床中央に立てられている。方形土壇は対応する東辺の中央よりやや北側にあり、68×41×20cmを測る。



第138図 竪穴住居-166



第139図 竪穴住居-166 (3587~3591・S186)・167 (3591)

主柱穴は北辺柱間205cm、右廻りに214cm、192cm、204cmを測る。住居内埋土は1層であり、多少の土器片が出土している。なかでもカマドの支石周辺に散布が目立ち、土師器把手、製塩土器等があり、3588は床直上出土である。古・中・Ⅱの時期が考えられる。(高畑)

竪穴住居-167 (第139図)

Q18区の北西、竪穴住居-166の南々西3.6mに位置する方形の住居である。調査区には北東辺のみの出土であり、4.3mのみが確認できた。検出面から床面までの深さ11.5cm、床面海拔高372cmを測る。住居内の施設は壁体溝のみの確認であり、幅25cm、深さ6cmを測る。床面北東隅部より杯蓋が出土しており、口径12.7cm、器高5.5cm、ヘラケズリは左廻りである。古・中・Ⅱに比定できる。(高畑)

竪穴住居-168 (第140図、図版26・70)

Q18区の北辺中央から検出された方形の竪穴住居で、竪穴住居-165の東10mに位置する。軸線をN-38°-Eにとり、規模は幅260cm、長さ355cmを測る。検出時から北辺中央に馬蹄形の被熱痕跡が見られたことから、カマドの存在は確認されたが、床面まではわずか10cmほどしかなく、精査したが柱穴も壁体溝も確認されなかった。

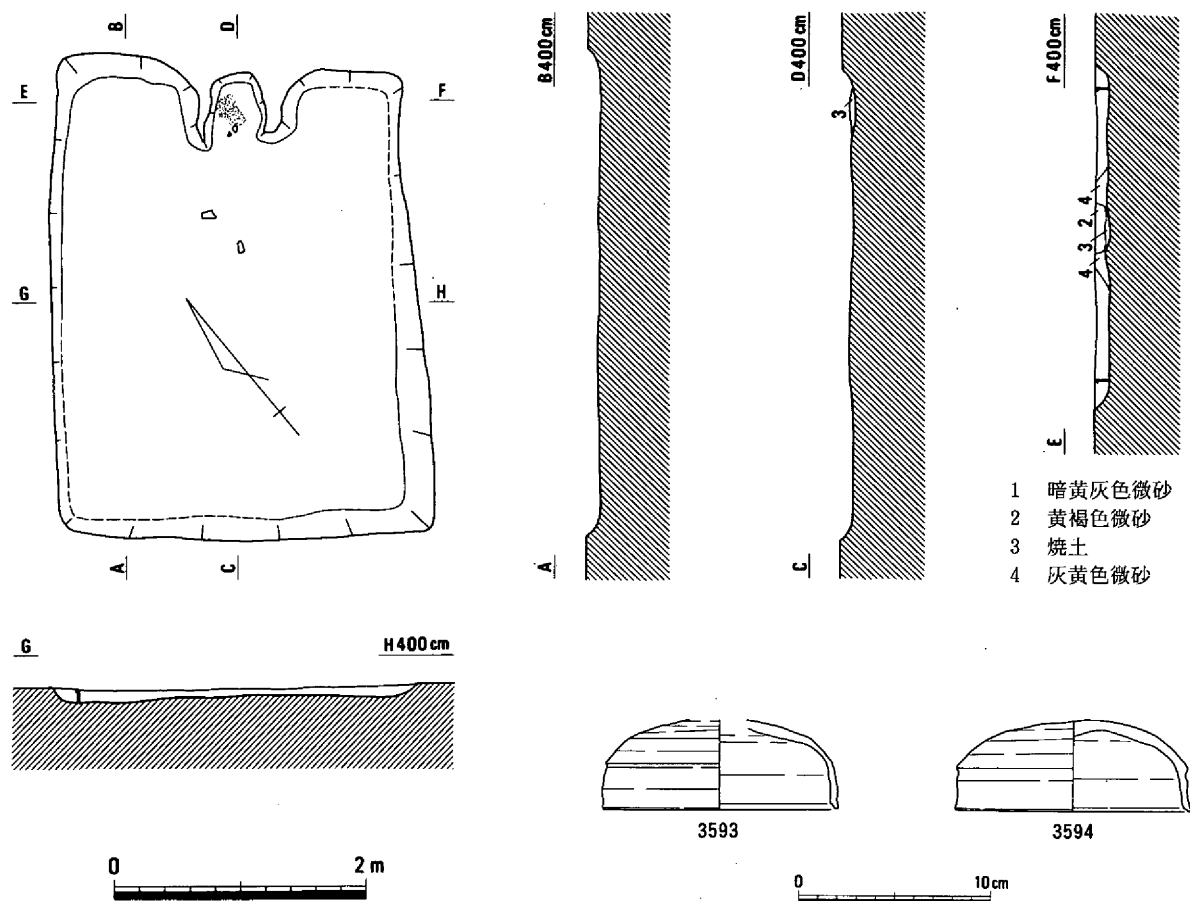
カマドは、削平のため煙道部の残りはよくないが、燃焼部は床面を少し掘りくぼめられており、被熱痕跡をとどめていた。なお、今回報告する造り付けカマドをもつ住居は、軸線はおおむね揃えるものの、カマドは当該住居をのぞきすべて東側に付設されており、当該住居のみ唯一北辺にカマドが備えられている。

出土遺物は僅少であるが、図示した3593や3594が出土している。3593・3594ともに須恵器の杯蓋で、TK47型式に位置づけられ、周辺の竪穴住居に一致する。(森)

竪穴住居-169 (第141図、図版70)

O18区南部中央寄りに位置し、北半は調査区域外である。

平面形は方形と考えられるが、南隅の壁体溝と柱穴1基を検出できたのみで、その距離は55cmを測



第140図 竪穴住居-168 (3593・3594)

る。柱穴の掘り方はほぼ円形で、径40cm、深さ47cmを測り、床面は不明瞭であるが高床部はなく、海拔4.21mである。

須恵器の蓋3595が出土しており、時期は古・後・Ⅱに求められる。(光永)

竪穴住居-170 (第141図)

〇18区南東部に位置し、北半は調査区域外で、西半は溝-116・118に削られて不明である。

平面形は方形と想定され、高さ10cm強が残る南東隅の壁体から約55cm内側に、径40cm、深さ30cmの柱穴が位置し、方形土壇は95×40×10cmの規模である。海拔3.66mの床面には明瞭な高床部はなく、壁体溝も検出されない。

須恵器の高杯3596~3598が出土しており、古・後・Ⅲに比定される。(光永)

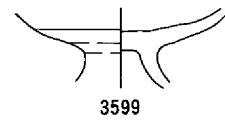
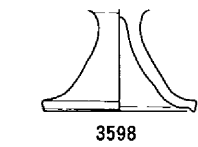
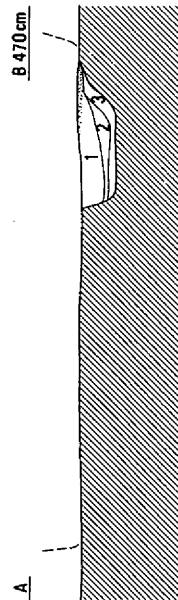
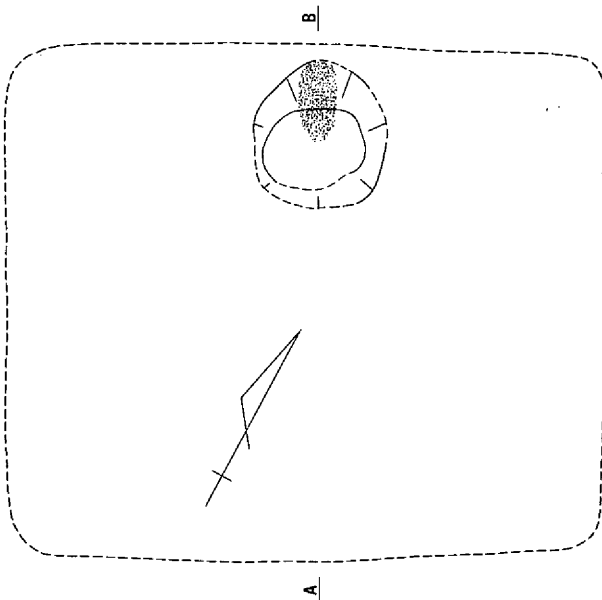
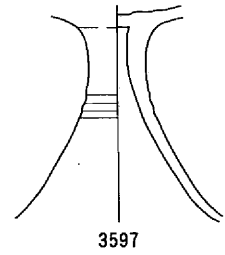
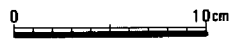
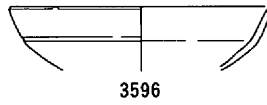
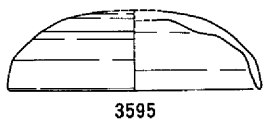
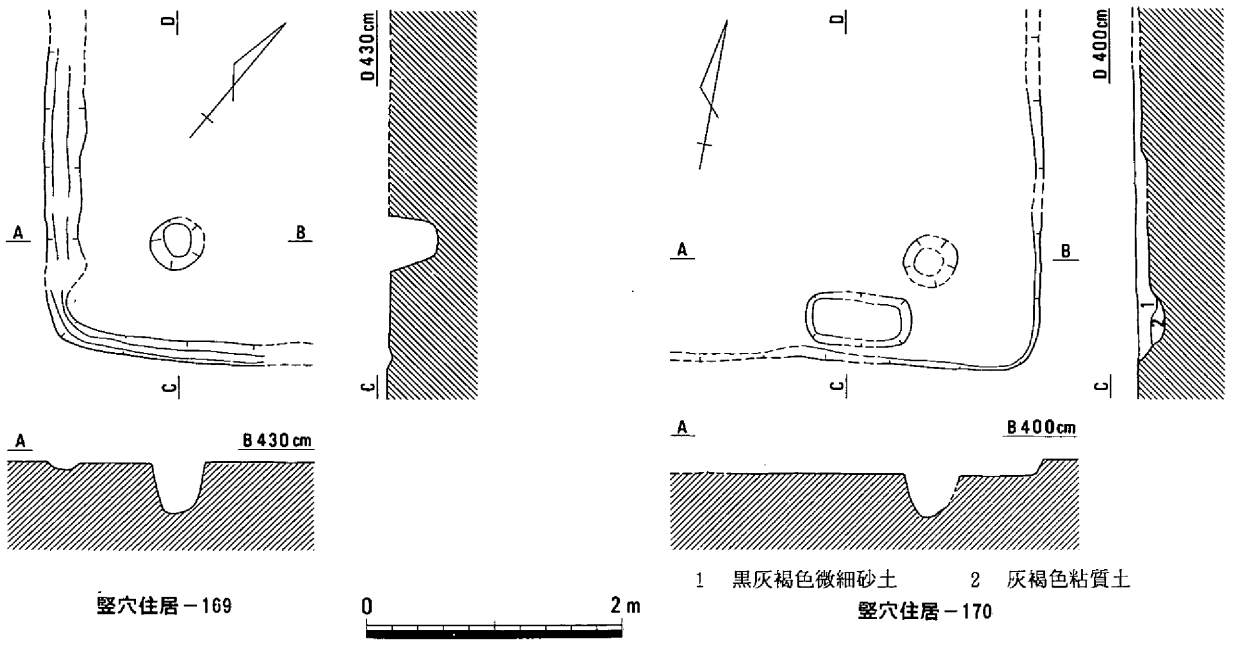
竪穴住居-171 (第141図、図版26)

〇18区南部中央寄りに位置し、竪穴住居-169との距離約4.5mを測る。

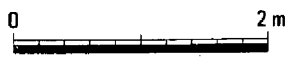
カマドの底面と考えられる焼土面とその下部に掘られた土壇を検出し得たのみであるが、これらの南側で長軸長460cm、短軸長400cmを測る平面形長方形の範囲が床面と想定される。床面の海拔高は、4.17mを測り、壁体溝・柱穴等は確認できなかった。土壇は平面形が不整形で、長径116cm、短径103cm、深さ25cmを測り、その上面北端が深さ3cm程度に弱い熱影響を受けている。埋土には、炭・焼土等を含むというような特徴は認められない。

須恵器の高杯3599が出土しており、時期は古・後・Ⅲに比定される。(光永)

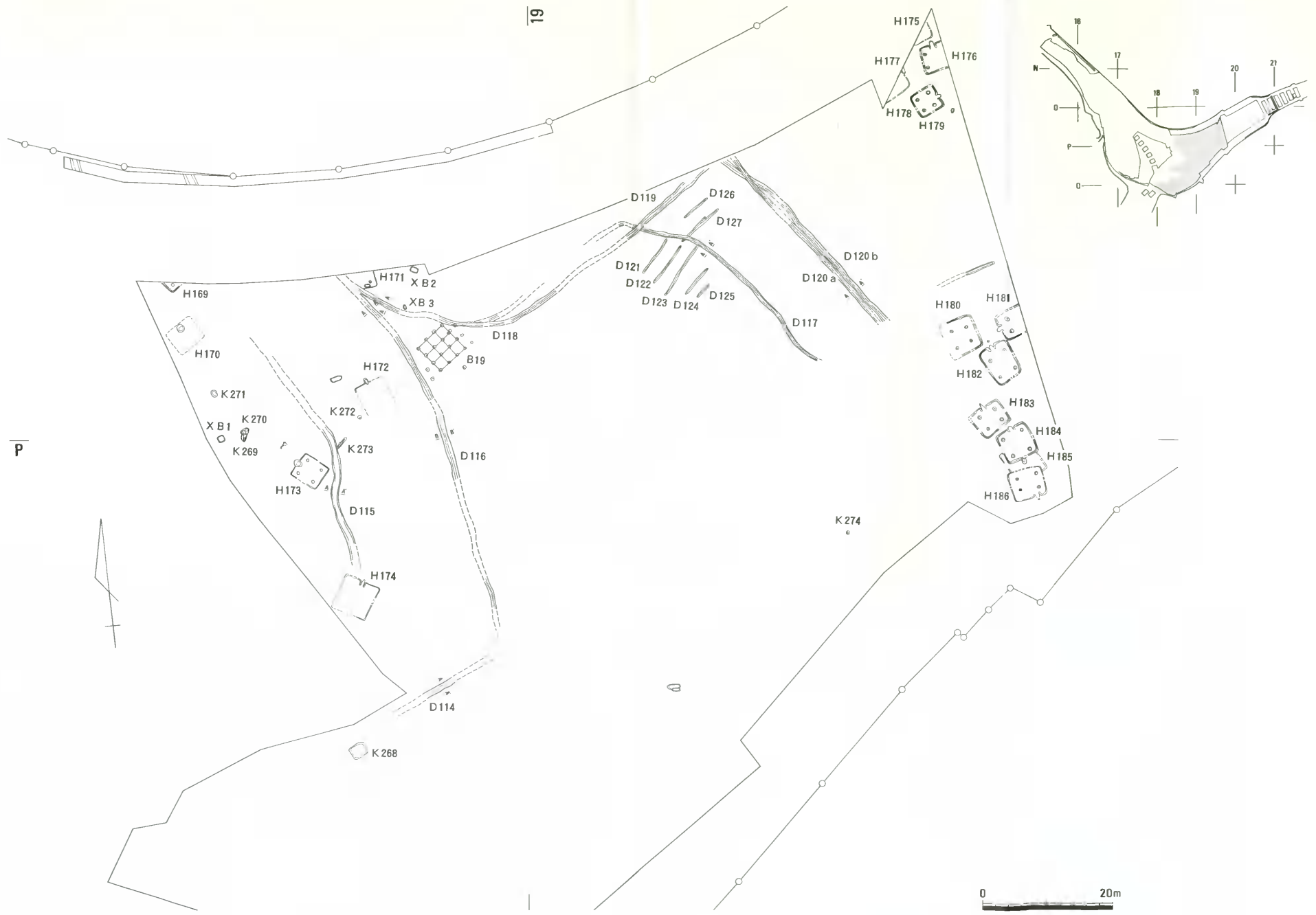
第3章 中屋調査区



- 1 灰茶褐色土
- 2 暗灰褐色弱粘質土
- 3 暗灰茶色土



第141図 堅穴住居-169 (3595)・170 (3596~3598)・171 (3599)



第142図 中屋調査区古墳時代遺構全体図 4 1/600

竪穴住居-172 (第143・144図、図版26・70)

平面的には方形の住居と考えられ、北西隅のみ検出された。検出部分では、壁体溝の痕跡は確認されていない。

北側にカマドが造り付けられた部分と南西隅の土器出土部分をあわせた検出部分により竪穴住居と復元推定された。

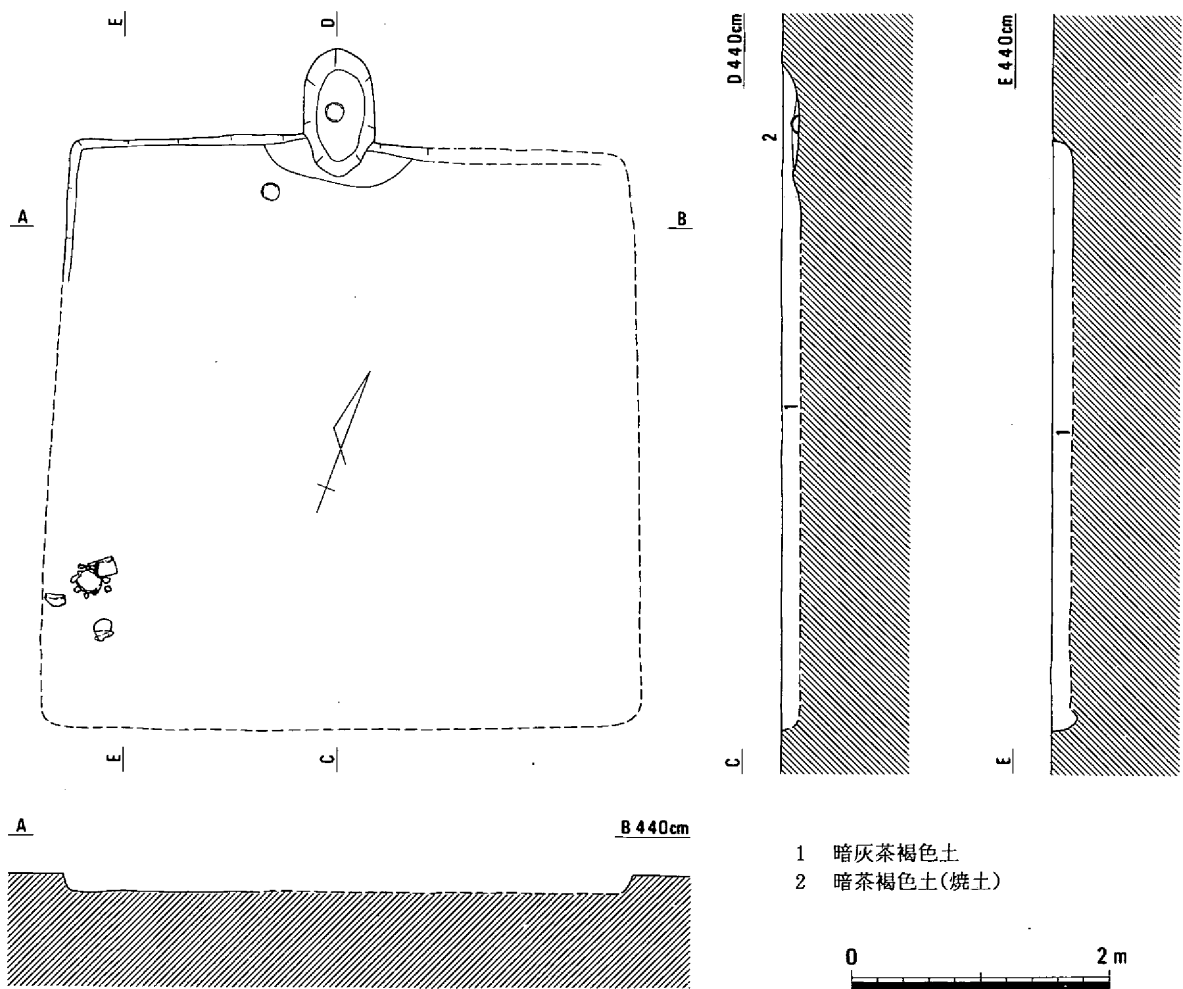
住居内の床面では、多くの住居がそうであるように柱穴の痕跡は確認できなかった。住居内の埋積土は、基本的に単一土層で建て替えや貼り床などの形跡はない。

床面の南西隅付近では、土器類が集中して出土している。これらを含めた住居内からの出土遺物には、須恵器3600~3602、土師器3603~3605がある。

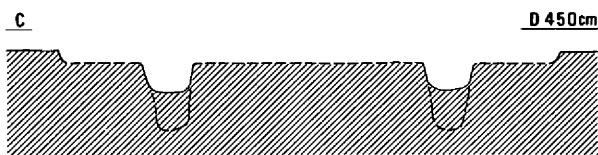
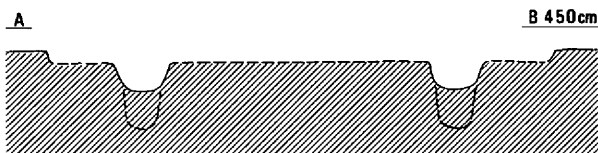
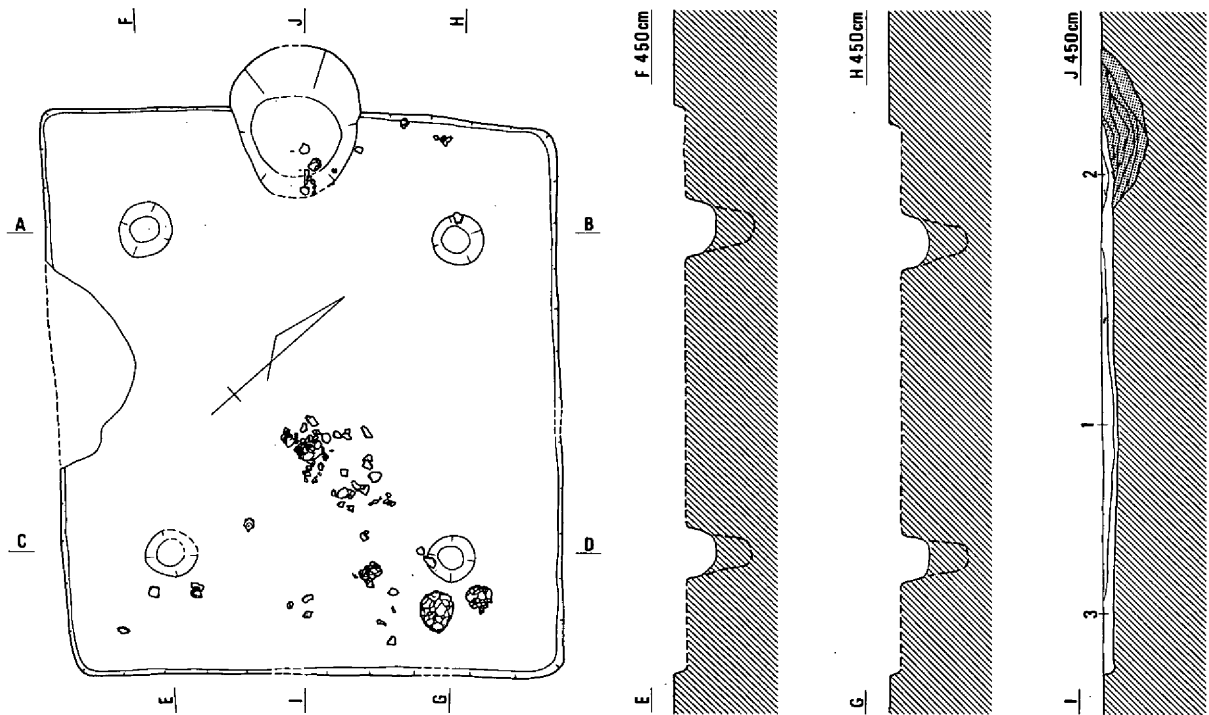
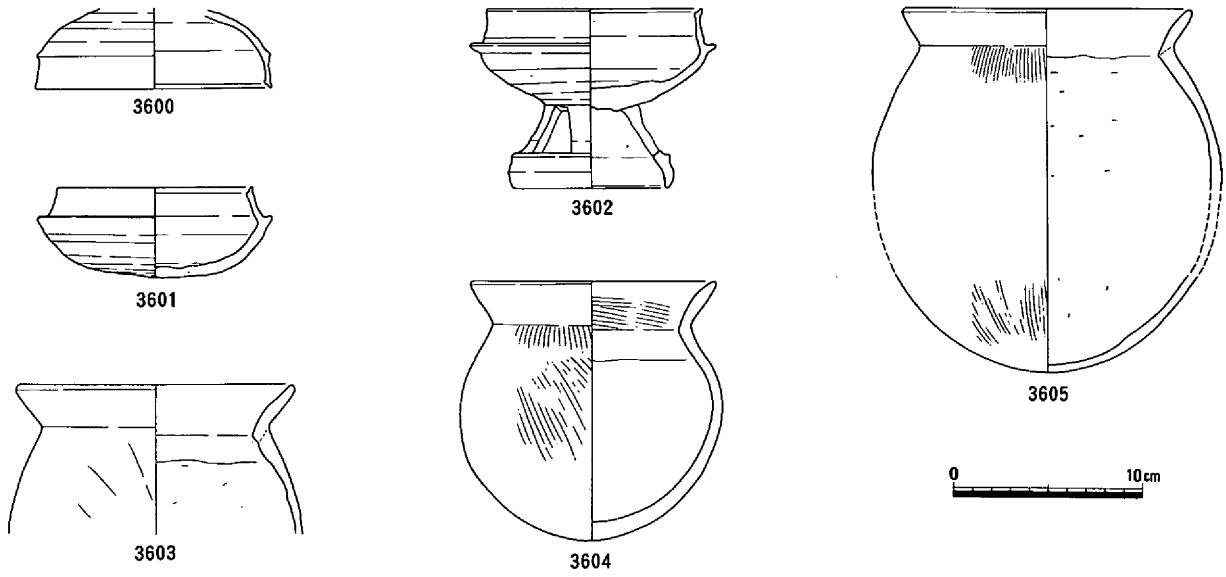
3600と3601は、おそらくセットとなる蓋・杯である。3600の体部と天井部との境界は、鋭い稜をなしている。3602は有蓋高杯である。3603~3605は、土師器甕でいずれもやや小形である。3604は、ほぼ完形である。

以上の出土遺物から住居の時期は、古・中・Ⅱに比定される。

(岡田)



第143図 竪穴住居-172



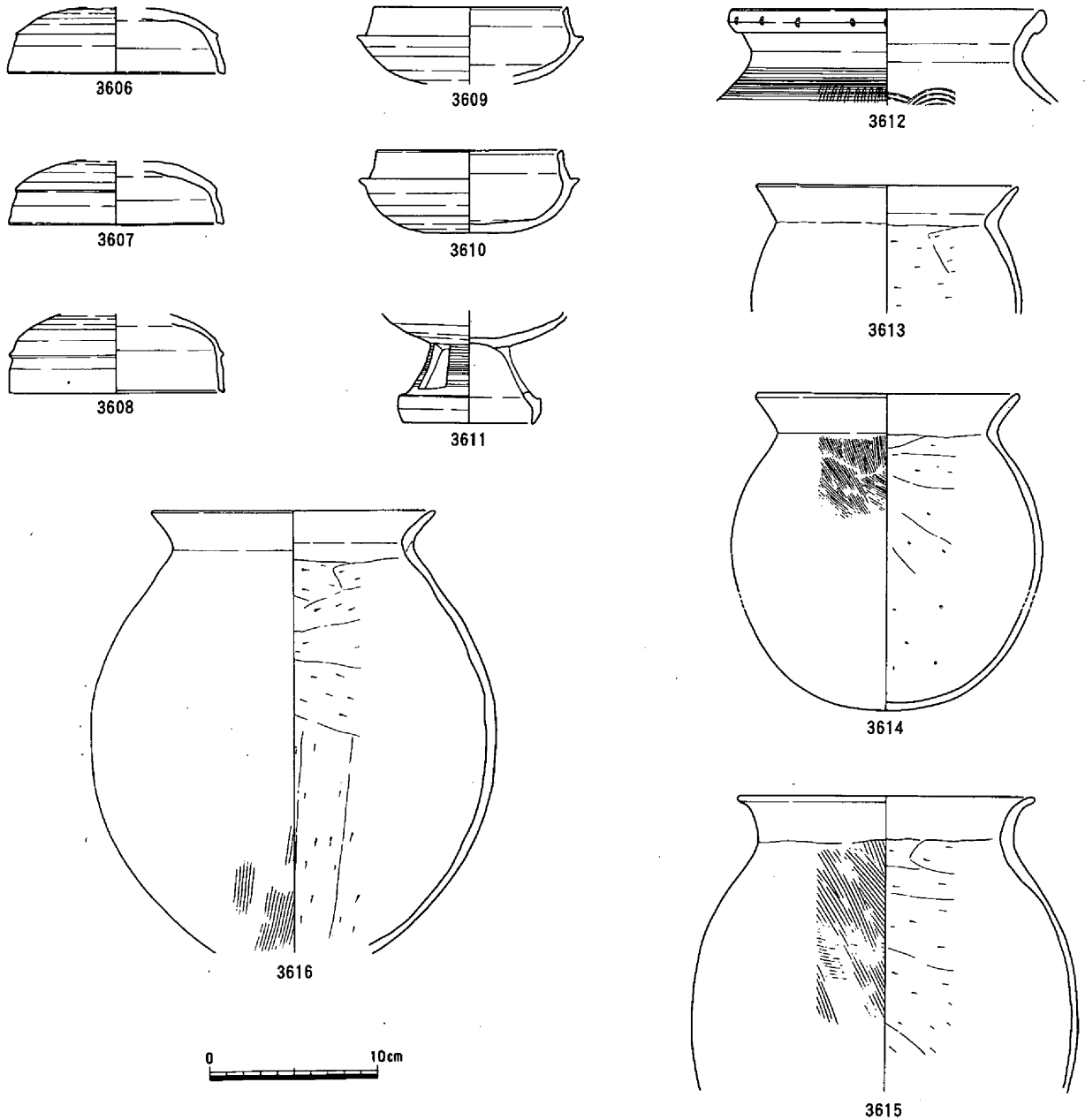
- 1 暗褐色微砂粘土
- 2 黄褐色粘質微砂
- 3 灰褐色粘質微砂

竪穴住居-173



第144図 竪穴住居-172 (3600~3605)・173





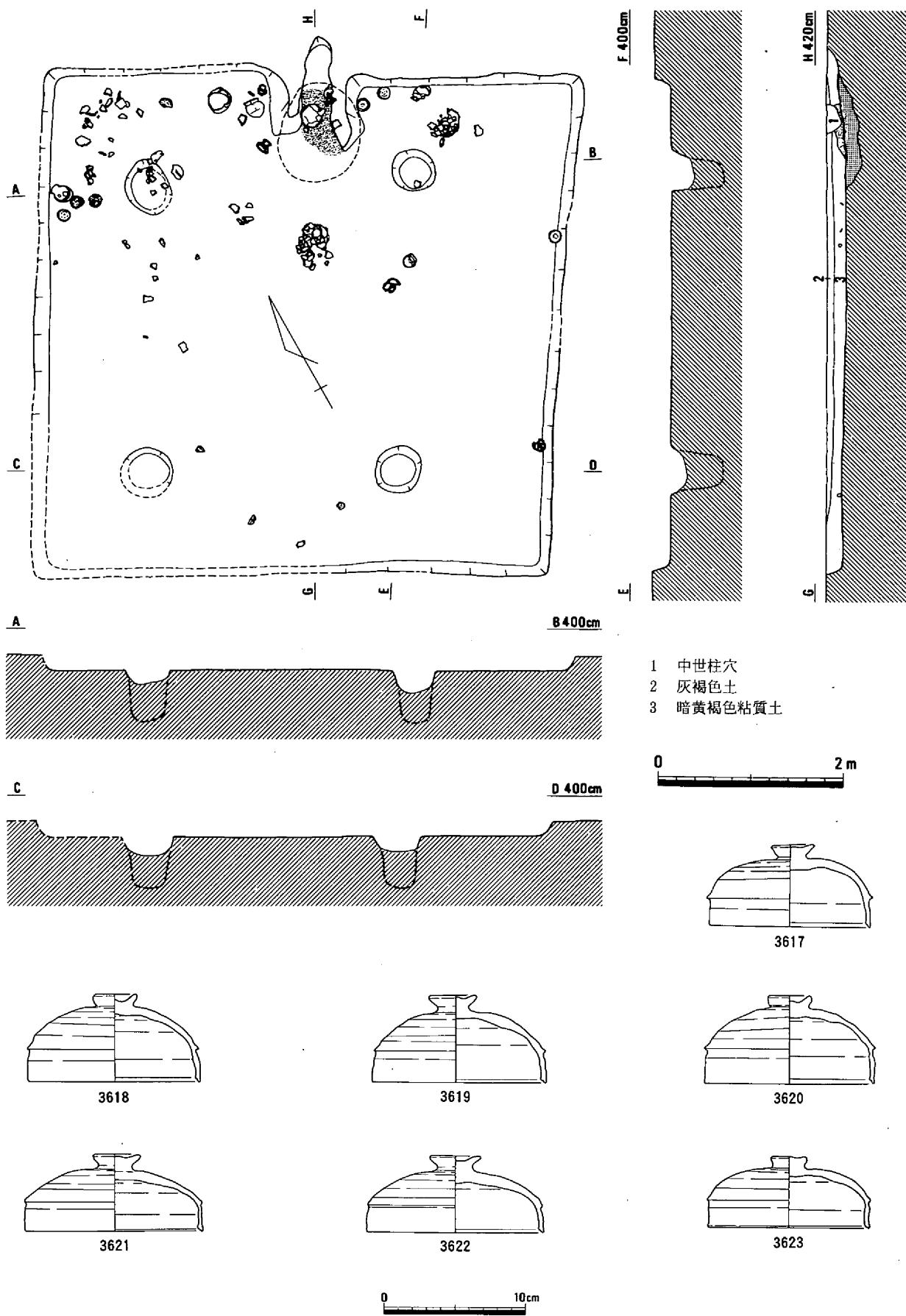
第145図 竪穴住居-173 (3606~3616)

竪穴住居-173 (第145図、図版27)

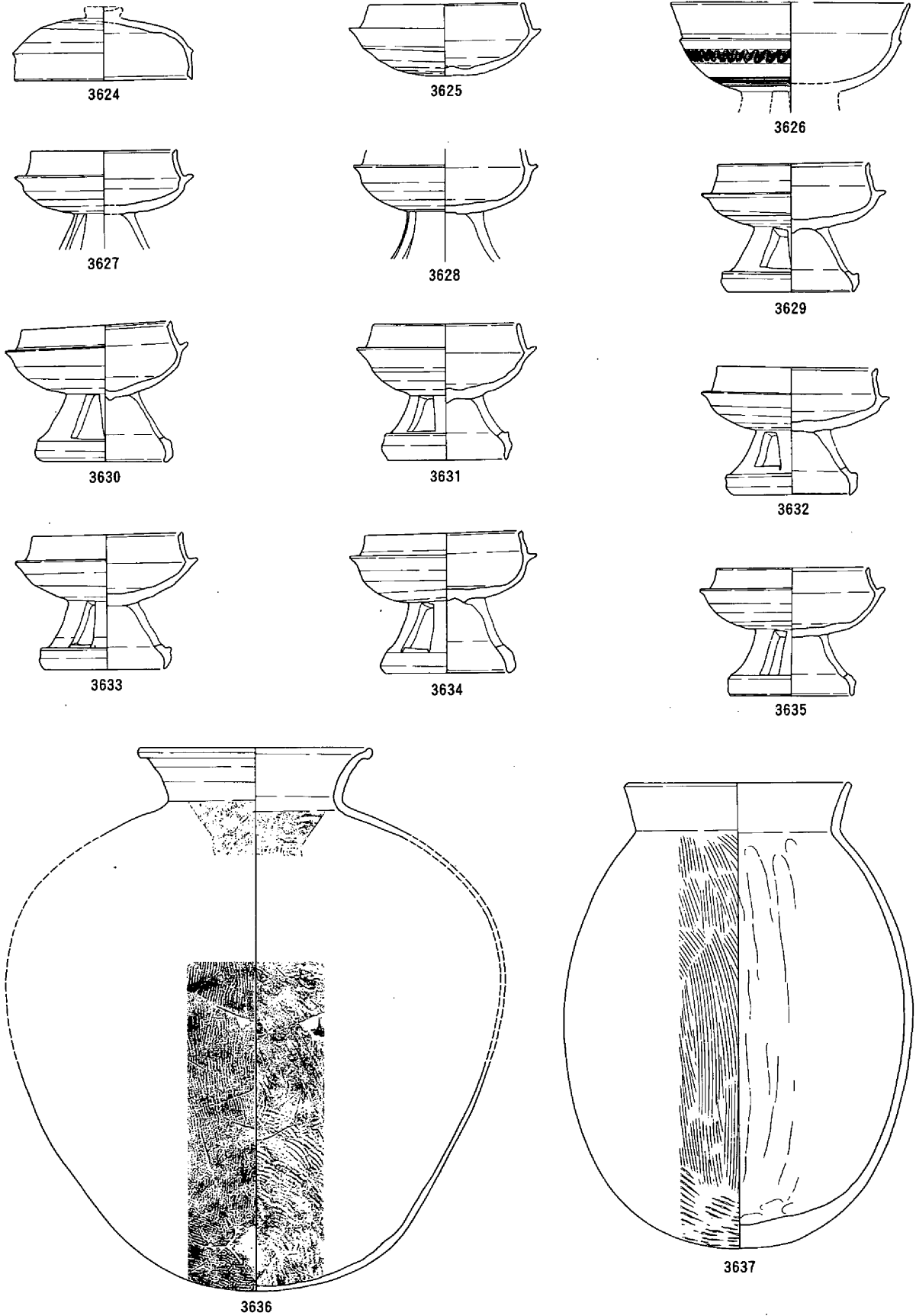
長方形の竪穴住居で、北西側にカマドが造り付けられたようであるがほとんど崩壊し、被熱部分の残存状態は悪い。下部の構造はその痕跡を明瞭に残している。

床面には柱穴の痕跡が4ヵ所あり、円形の浅い掘り方が確認されている。しかし、深く柱が埋め込まれたのではなく、埋め置く程度であったと思われる。

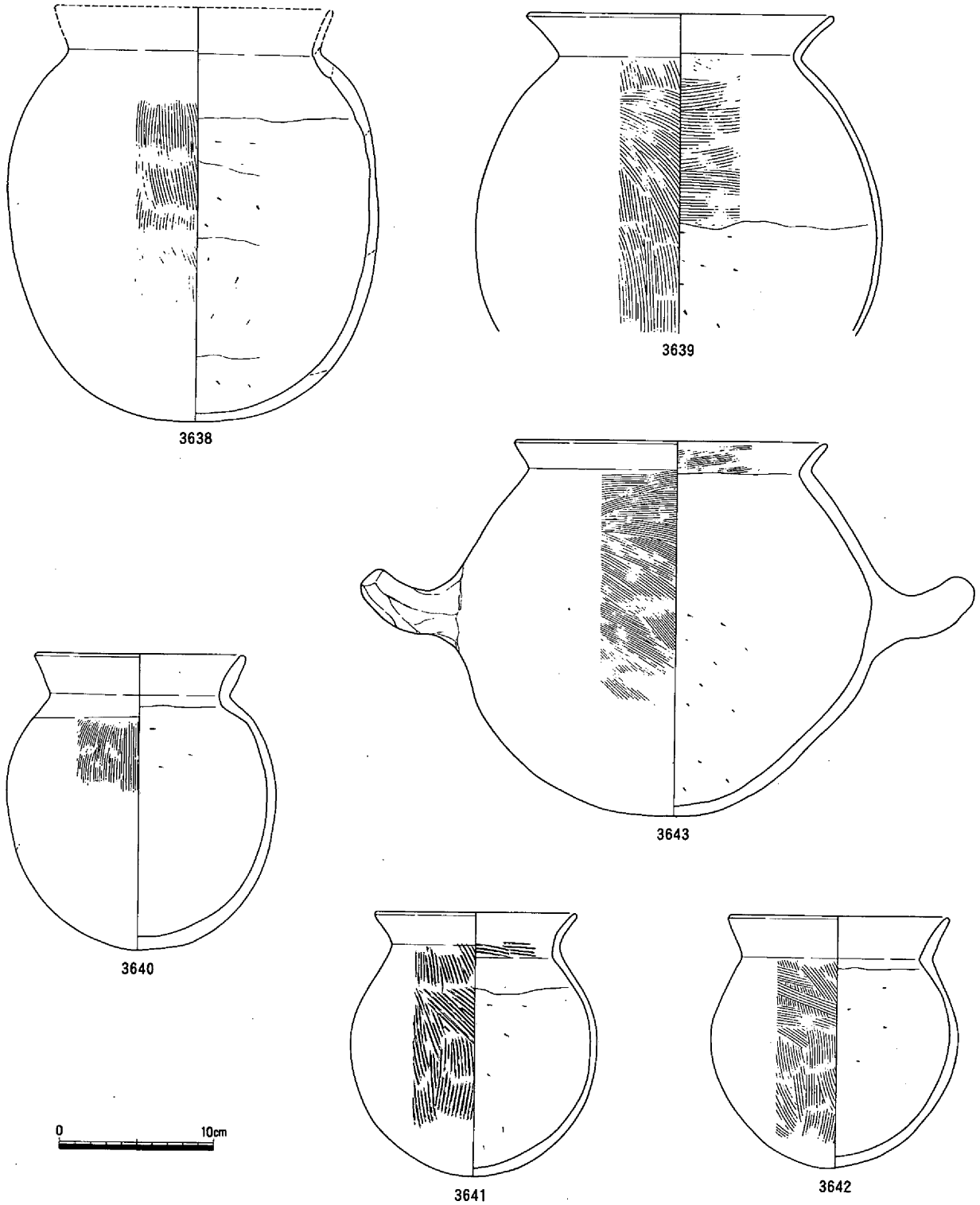
床面の南半分およびカマド付近からは比較的多数の土器が出土している。いずれも住居内で用いられる、生活雑器を主体としている。3606~3612は須恵器、3613~3616は土師器である。3606~3608は蓋で、いずれも体部と天井の境界に鋭い稜をなす。3609・3611は高杯である。3610は杯で高い立ち上がりが看取される。3612は中形の甕で口縁部に装飾的な連続する刻み目が施されている。土師器のすべては、やや長胴の甕で3614には煤の付着が目立つ。時期は古・中・Ⅱに比定される。(岡田)



第146図 竪穴住居-174 (3617~3623)



第147図 竪穴住居-174 (3624~3637)



第148図 竪穴住居-174 (3638~3643)

竪穴住居-174 (第146~148図、図版27・28・70・71・72)

竪穴住居-173の南約15mで検出された方形の竪穴住居である。東半分は掘り方はきわめて明瞭であるが、西側ではやや不明瞭である。

カマドは北側に造り付けられ、袖の残存状態も比較的良好である。壁体溝は確認できなかったが、

本来存在しなかった可能性が高い。

柱穴は、4ヵ所で粘性を帯びたほぼ円形の平面形が認められたが、深く掘りこんで柱を据え置いたという状態ではない。したがって、柱痕跡も不明瞭である。

遺物は、住居の床面全体からまんべんなく出土したもので須恵器・土師器が主体である。後者は、カマドの周囲で集中して出土しており、約半数に煤の付着が顕著であることから、住居での日常的な煮沸などに使われたことを示唆している。

須恵器は、有蓋高杯の多さが目につく。3617～3624の蓋はすべて高杯に伴うもので、すべてに円形の小さなツマミが天井部の中心に取り付けられている。天井部と体部の境界には、鋭い稜が認められる。3625は杯であるが破片を考慮しても杯の出土は少ない。

3627～3635はほとんど同一の手法によって製作された高杯で、脚部には三方の透かしがある。いずれも焼成は良好な、均質な須恵器である。3626は、体部下位に波状文が巡る高杯である。これらの高杯の出土の多さは、日常的に使用される頻度の高さを示しているともみられる。

3636は、床面の中央部分で破片となって出土したもので、住居で生活が営まれた最終段階では、細片となって散らばっていた状態であったと推定される。

3637～3642は、大小の甕である。3637はやや長胴の甕でカマド付近から出土していることから、直接カマドに架けて使用された器種であろう。3643は、一对の把手が体部中央部に取り付けられた鍋である。

これらの出土遺物から時期は、古・中・Ⅱに比定される。

(岡田)

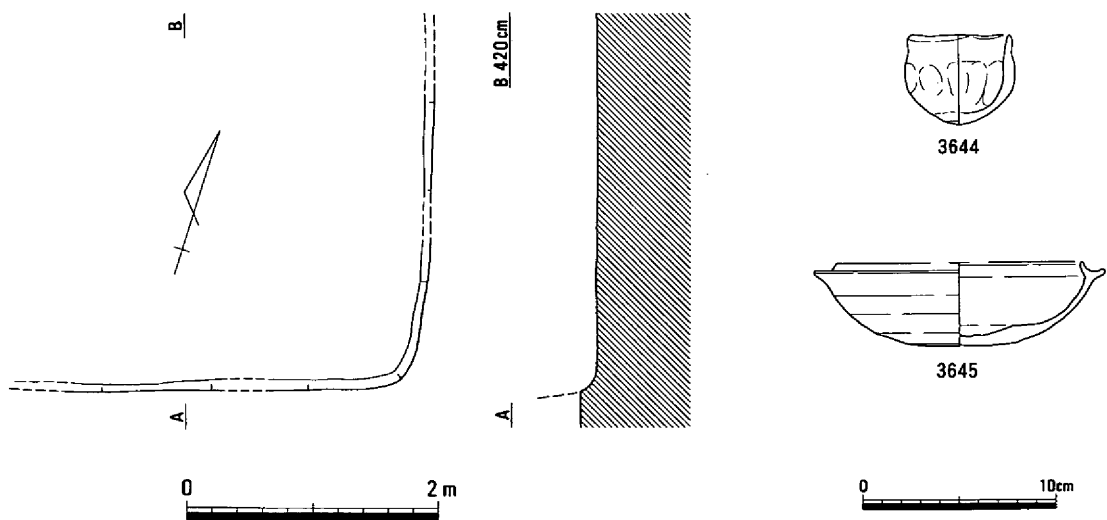
#### 竪穴住居－175 (第149図)

019区北東部に位置し、北西部の過半は調査対象外である。

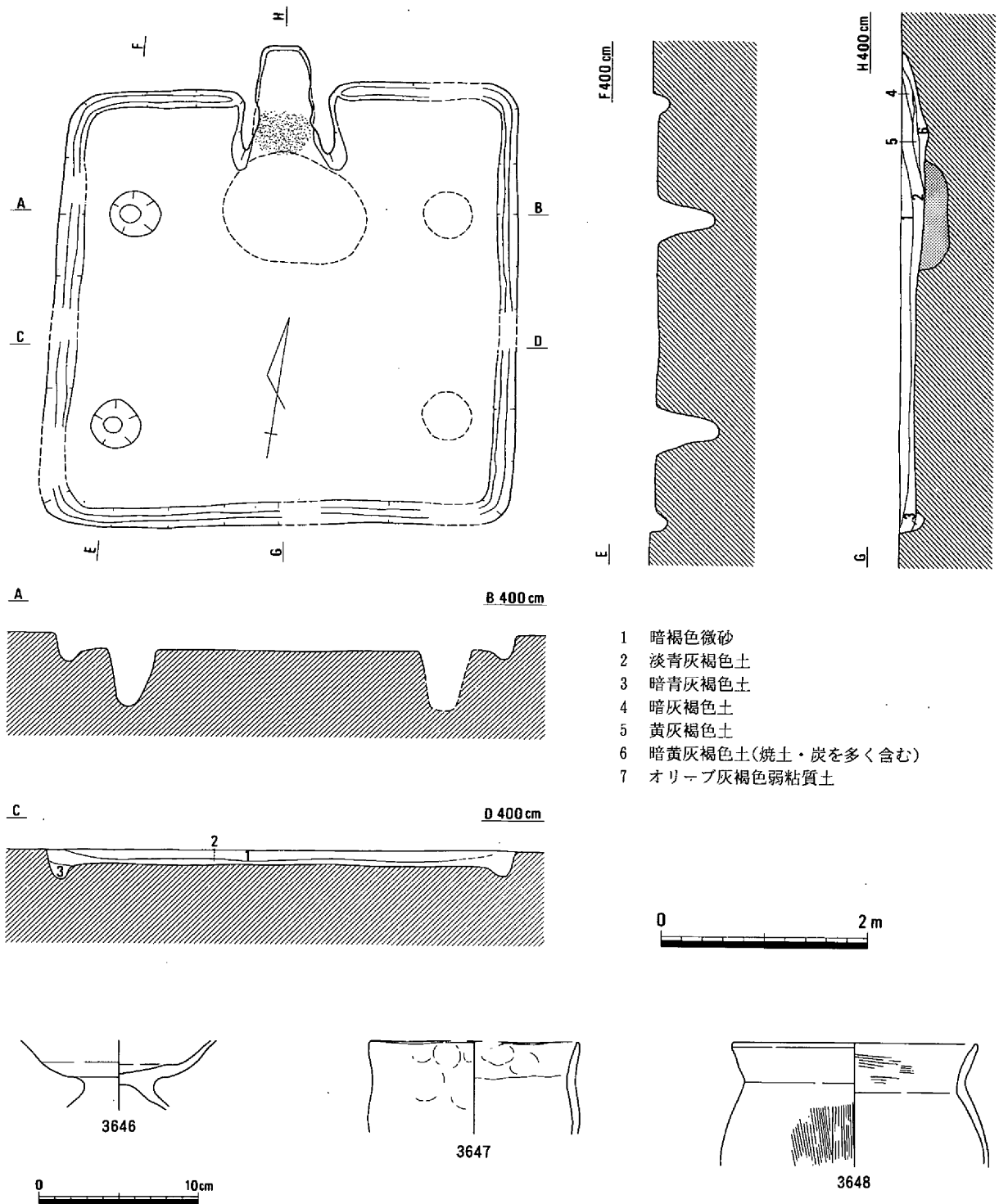
海拔3.42mの床面から高さ20cm程度が残る側壁は、東辺で230cm、南辺で270cmが検出され、平面形は方形に復元される。カマドは検出されず、壁体溝も認められない。周辺の竪穴住居における側壁と柱穴の距離によれば、柱穴が1基は所在するはずであるが、検出されなかった。

土師器手捏ね土器3644、須恵器杯3645の出土により、古・後・Ⅲに比定される。

(光永)



第149図 竪穴住居－175 (3644・3645)



第150図 竪穴住居-176 (3646~3648)

竪穴住居-176 (第150図、図版28)

O19区北東部に位置し、竪穴住居-175・177~179に隣接する。

平面形は1辺406~417cmの方形を呈し、海拔3.56mで高床部のない床面の面積は16.7㎡である。北辺中央に上部を失ったカマドが造り付けられており、側壁から約60cm内側まで袖をのぼし、炭化物・焼土粒が堆積する下幅50cm強の底面中央には支え石を据えたかとも考えられる窪みが認められる。煙道は緩く傾斜して40cm外側まで伸び、カマド南側の床面下には135×108×28cmの規模の平面形楕円形

の土壌がオリーブ灰褐色弱粘質土で埋められている。側壁はほぼ直立して15cm程度が残り、これに深さ10cm程度の壁体溝がカマドの部分を除いて全周している。西辺側壁から25cm内側で径44~48cm、深さ55~58cmの2基の柱穴を検出し、その距離206cmを測るが、東側の2本分の柱穴が想定される部分は、調査着手時の側溝で失われて確認できなかった。

須恵器の高杯3646、土師器の甕3648・製塩土器3647等により、古・後・Ⅲに比定される。(光永)

**竪穴住居-177 (第151図)**

O19区北東部に位置し、大半を調査対象外におくが、竪穴住居-178を削っている。

平面形は方形と想定され、その南東隅から115cmの東辺で、カマドが煙道を50cm外側までのぼしている。海拔3.54mの床面から高さ15cm程度が残る側壁には壁体溝は伴わない。柱穴その他の構造は不明である。

遺物を伴わないが、周辺の竪穴住居に近い時期に属すると思われる。(光永)

**竪穴住居-178 (第151図)**

O19区北東部で、北半を調査対象外におき、東辺を竪穴住居-177に削られている。

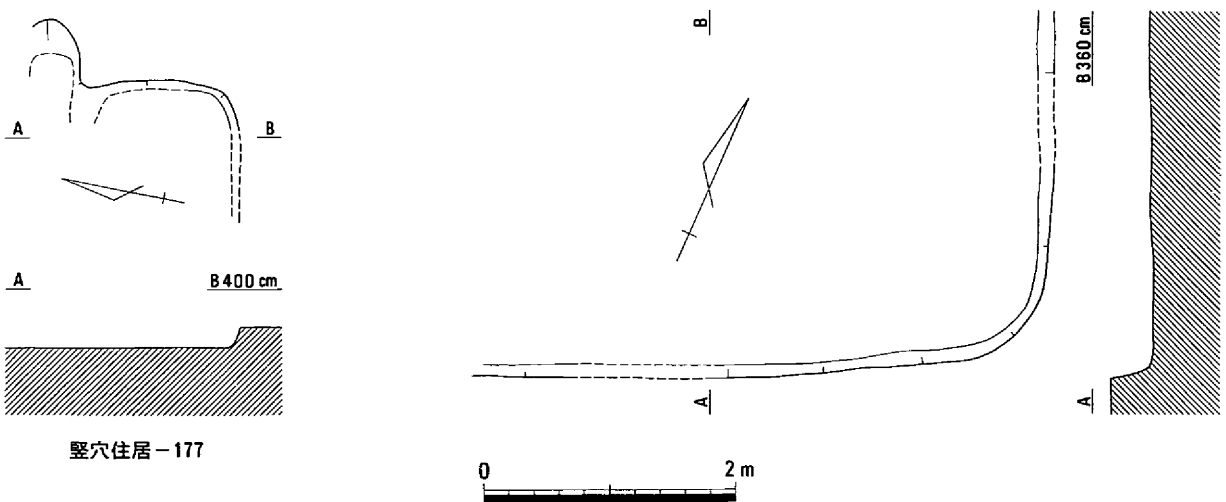
平面形は方形と想定され、南辺で460cmが残る側壁は高さ25cm前後で直立し、壁体溝は伴わない。海拔3.16mで高床部をもたない床面では、柱穴等は検出されなかった。

時期を示す遺物は出土していない。(光永)

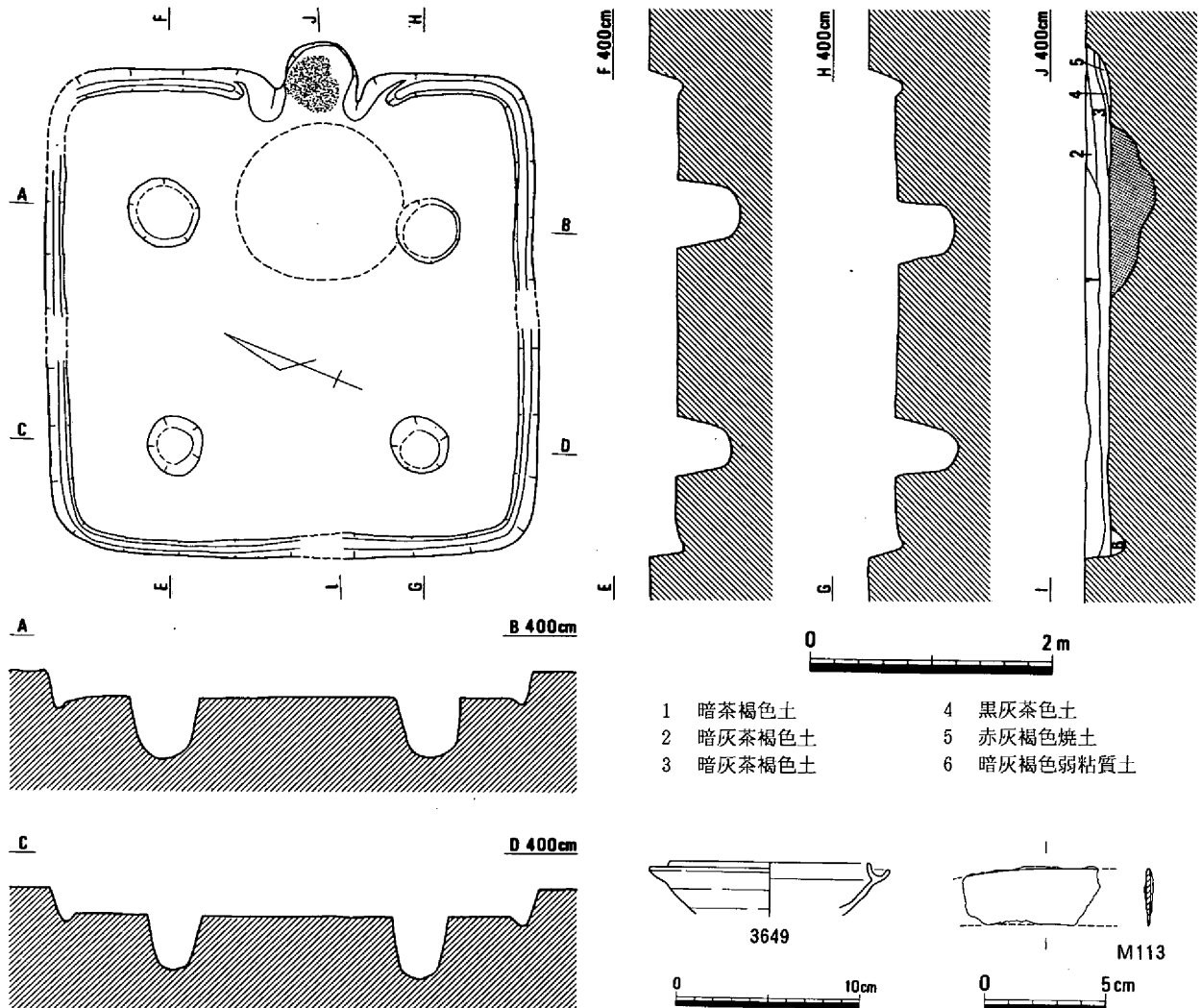
**竪穴住居-179 (第152図、図版29)**

O19区北東部に位置し、竪穴住居-178との距離約1.3mと近い。

平面形は方形を呈し、1辺376~380cmを測る側壁は高さ25cm程度が残り、ほぼ直立する。これに幅20cm、深さ10cm前後の壁体溝が、カマド部分を除いて全周している。海拔3.50mの床面には高床部は認められず、面積は14.0㎡である。側壁から54~70cm内側で、柱穴4基を検出しており、柱間は南北方向で200~217cm、東西方向で181~193cmを測り、主軸方向はN-23°-Wを示す。柱穴掘り方の平面形は楕円形で、長径48~59cm、深さ47~53cmを測り、柱痕跡等は認められない。側壁東辺ほぼ中央にカマドが造り付けられている。上部を失っているが、袖は下端で30cm程度の張り出しと短く、煙道



第151図 竪穴住居-177・178



第152図 竪穴住居-179 (3649・M113)

奥までの長さ60cm、幅55cmで、煙道は外側へ25cm伸びているのみである。カマド西側の床面下には、平面形不整円形で、135×135×38cmの規模の土壌が埋められている。

出土遺物には、須恵器の杯3649の他に、鎌と考えられる鉄器M113がある。時期は、古・後・Ⅲに比定される。

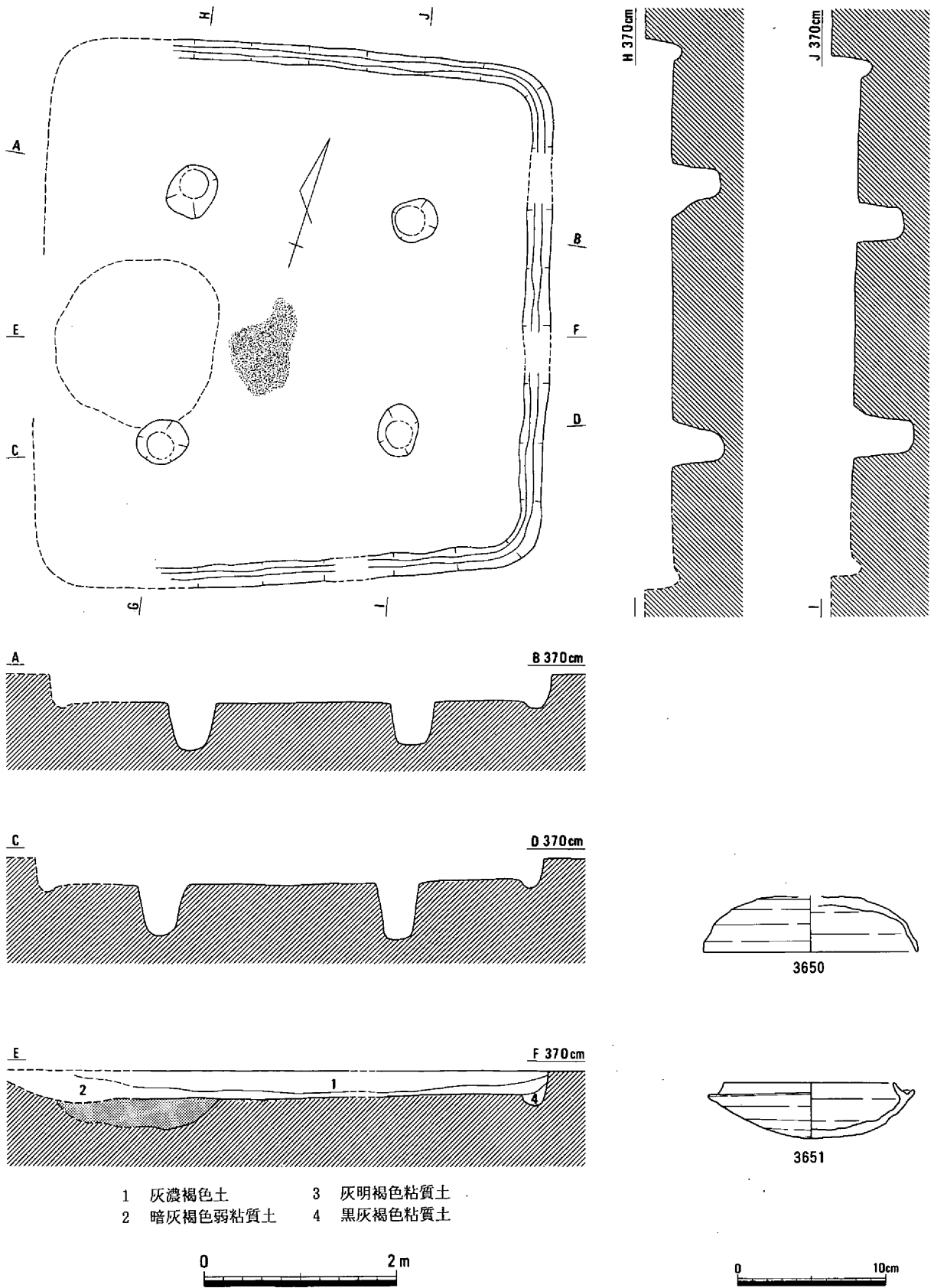
(光永)

竪穴住居-180 (第153図、図版29・72)

〇19区南東部で、以下に記述する竪穴住居群の西端に位置する。

西辺を失っているが、平面形は方形と想定され、南北方向の最大長575cm、東西方向400cmをそれぞれ測る。側壁はほぼ直立して18cm程度が残り、3辺とも幅20cm、深さ5cm前後の壁体溝を伴う。側壁から105~125cm内側で4基の柱穴を検出している。掘り方の平面形は楕円形で、長径47~54cm、深さ44~60cmの規模をもち、柱間は南北方向で218~260cm、東西方向で230~242cmを測って、やや台形を呈するが、主軸はN-73°-Eに置かれる。この西辺の柱穴間の床面下で130以上×175×30cmを測る平面形楕円形の土壌が検出され、住居の西辺ほぼ中央にカマドが想定される。海拔高3.32mの床面には明瞭な高床部は見られないが、南辺の柱穴より外側はやや高くなっている。中央部の105×65cmの





第153図 竪穴住居-180 (3650・3651)

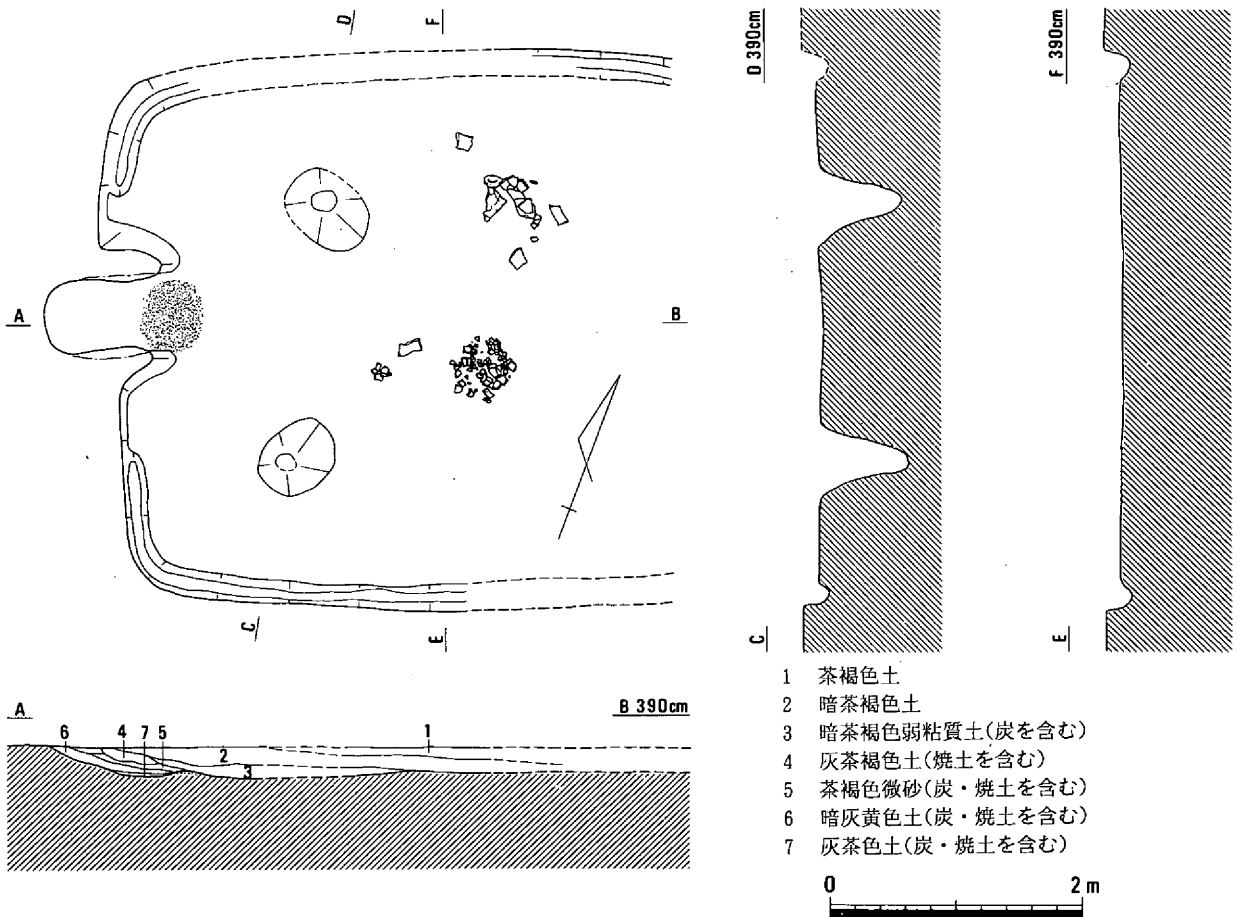
範囲で炭化物・焼土の集中する部分が検出された他、北半の床面に鉄分の沈着が認められ、鉄滓が出土するなど、鍛冶関連の工房の可能性が示されている。また、埋土の2層上面では、南東部において炭化物が散在していた。

須恵器の蓋3650・杯3651が出土しており、時期は古・後・Ⅱに比定される。 (光永)

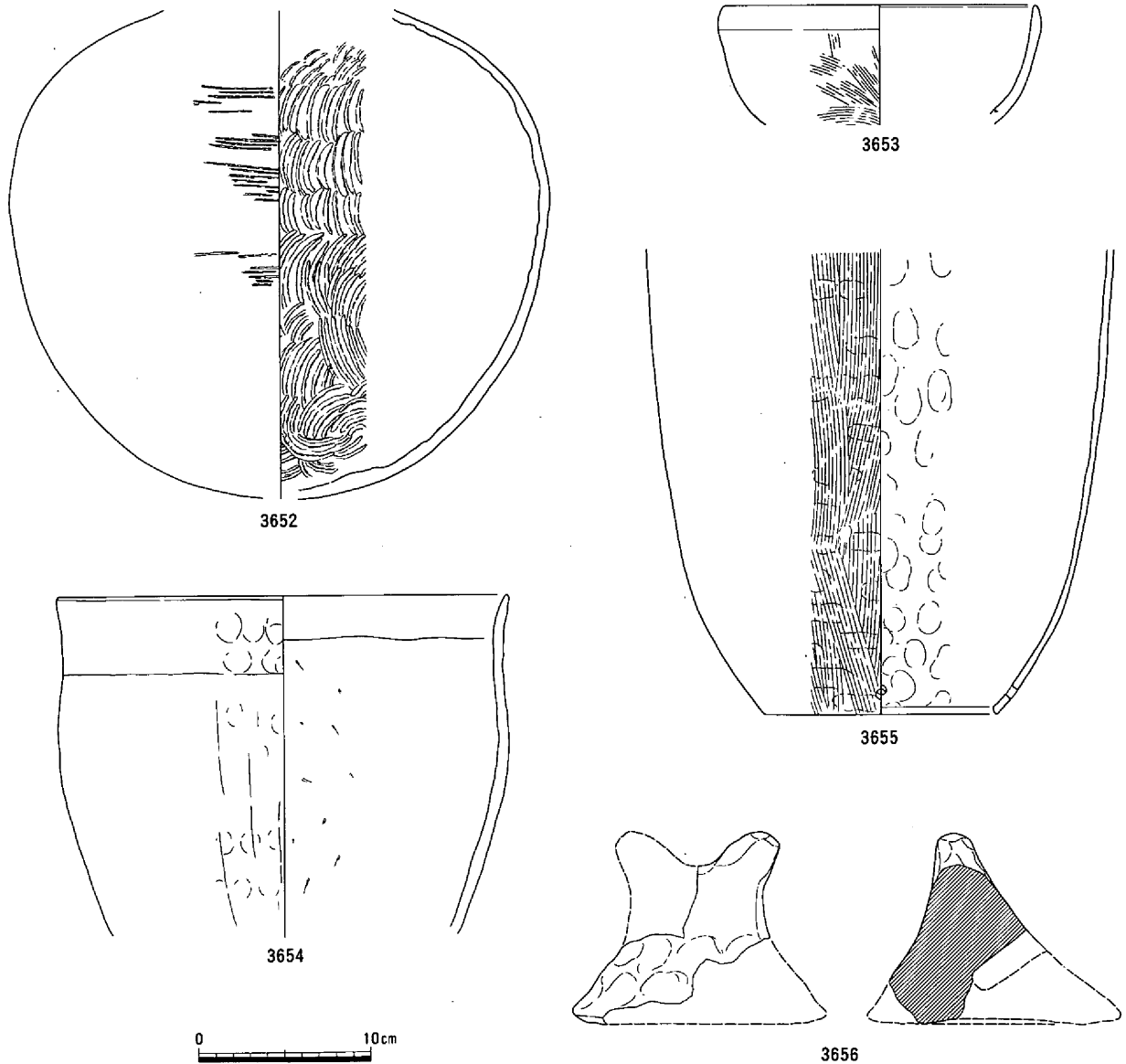
**竪穴住居-181 (第154・155図、図版29・30・72)**

O19区南東部に位置し、竪穴住居-182に近接して、上層を掘立柱建物-33に削られている。

東端を調査対象外としているが、平面形は長方形と想定され、現存長軸長450cm、復元短軸長450cmを測る。側壁はほぼ直立して約10cmが残り、幅15~20cm、深さ9~15cm程度の壁体溝がカマド部分を除いて伴っている。西辺のほぼ中央に造られたカマドは上部を失っているが、袖を35~60cm内側へのばし、下幅66cmの燃焼部から緩やかな傾斜で煙道が40cm外側までのびる。床面下の土壌は検出されなかったものの、カマド東側の床面が長径150cm、短径125cm、深さ10cm程度の楕円形に窪んでいる。西側壁から100~130cm内側では、2基の柱穴が柱間210cmで検出された。柱掘り方は長径64~71cm、深さ67~70cmの楕円形で、東辺に想定される柱穴との柱間は280cm以上となる。これを主軸とすると、N-69°-Eを示す。海拔高3.47mの床面では、中央北寄り須恵器の甕3652、ほぼ中央で土師器の甕3655がそれぞれまとまって出土している。この他、土師器の鉢3653・甕3654・支脚3656等に加えて鉄滓少量が出土しており、時期は古・後・Ⅲに比定される。 (光永)



第154図 竪穴住居-181



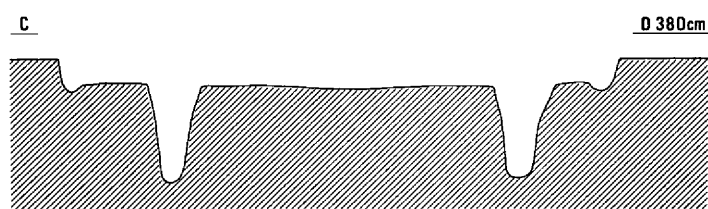
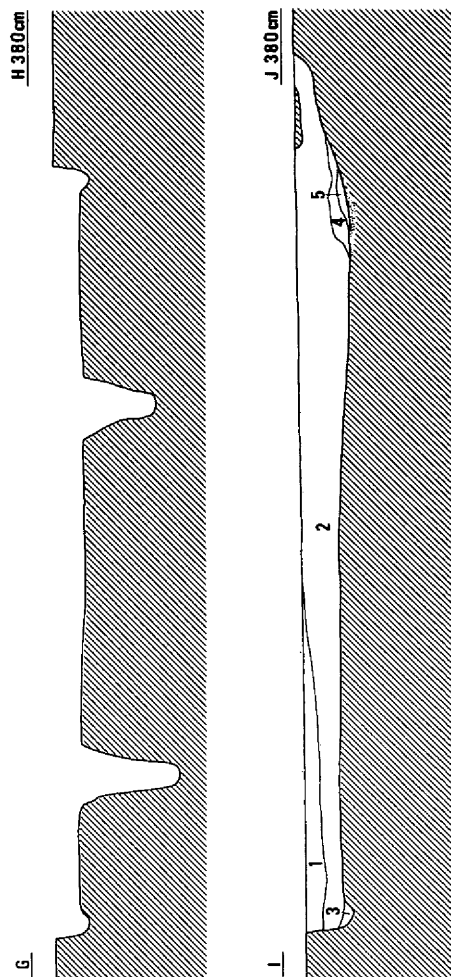
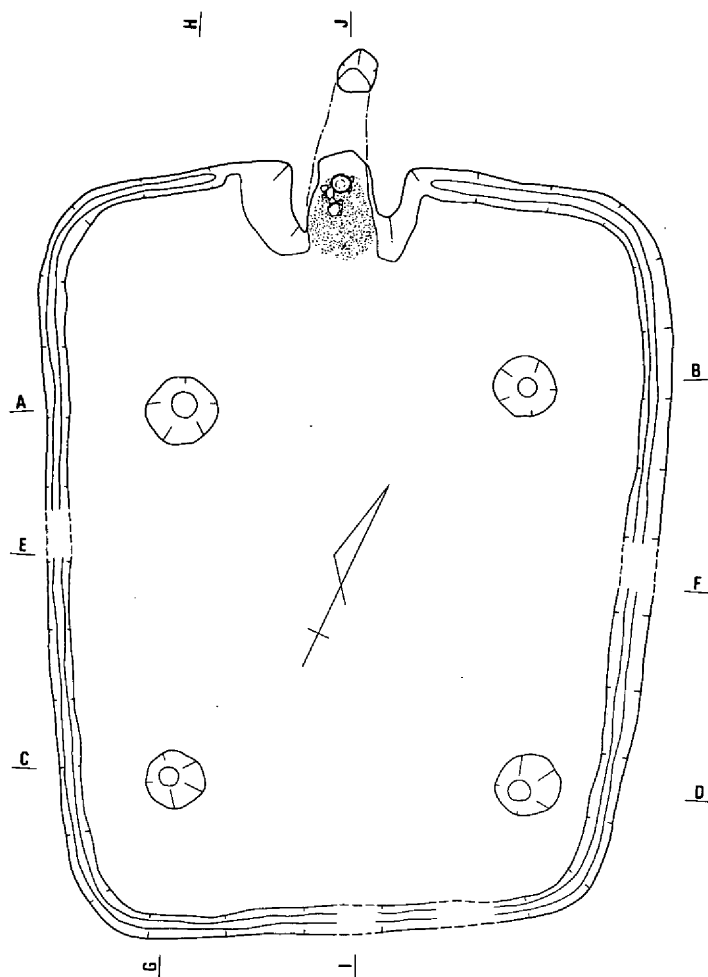
第155図 竪穴住居-181 (3652~3656)

竪穴住居-182 (第156図、図版30・31)

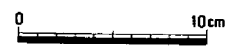
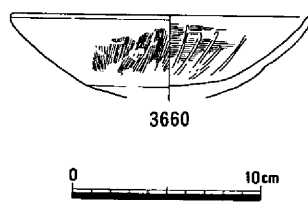
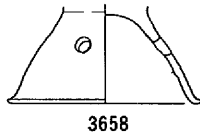
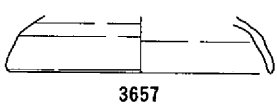
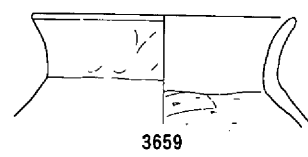
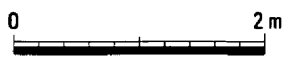
〇19区南東部で、竪穴住居-180・181・183の間に位置し、上層を溝-326に削られている。

平面形は長方形を呈し、長軸長586cm、短軸長474cmを測る。側壁はほぼ直立して20cm前後が残り、幅15~25cm、深さ2~7cm程度の壁体溝がカマド部分を除いてこれに伴っている。柱穴は側壁から35~160cm内側で4基を検出している。柱掘り方の平面形は不整形円で、径45~67cm、深さ58~80cmの規模で、柱間は南北方向で295~324cm、東西方向で269~273cmを測り、主軸方向はN-23°-Wにおかれる。カマドは北辺ほぼ中央に造られており、袖を70cm程内側へ伸ばした燃焼部の下幅は50cm弱で、第4層は上部構造の崩落したものと考えられ、土師器の高杯3660が底面に置かれている。煙道は天井部が残り、緩い傾斜で側壁の60cm外側に30×35cmで開口している。床面下では土壌は検出されなかった。海拔高3.37mでほぼ平坦な床面は面積25.1㎡を測り、カマド前に若干の赤色焼土面が認められた他、南半中央部で鉄分の沈着が見られ、鉄滓が出土している。

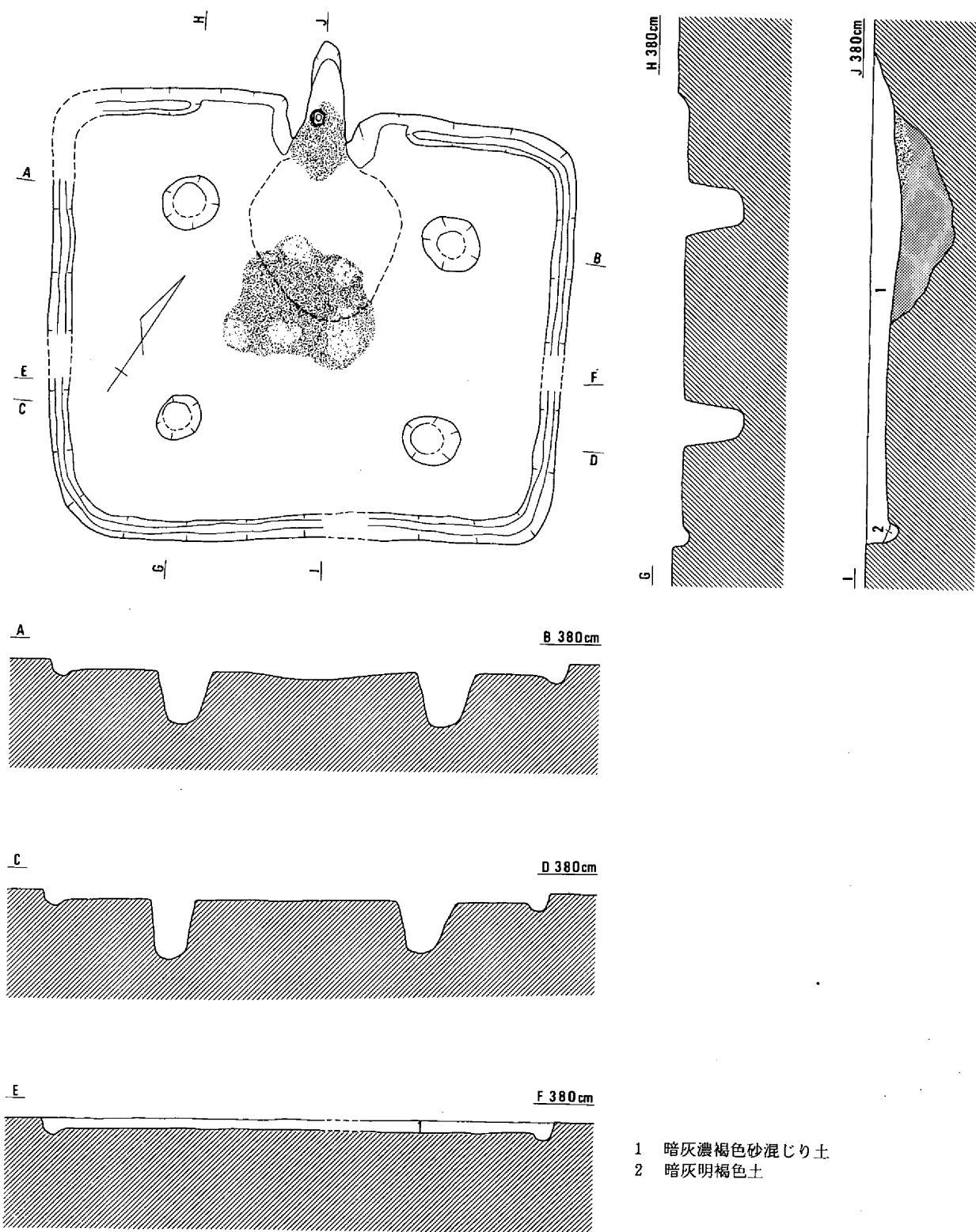
須恵器の蓋3657・脚3658、土師器の甕3659等の出土により、古・後・Ⅱに比定される。(光永)



- 1 明灰褐色砂質土
- 2 暗灰褐色土
- 3 暗オリーブ灰褐色粘質土
- 4 暗灰褐色粘質土(焼土多量に含む)
- 5 暗灰褐色粘質土



第156図 竪穴住居-182 (3657~3660)

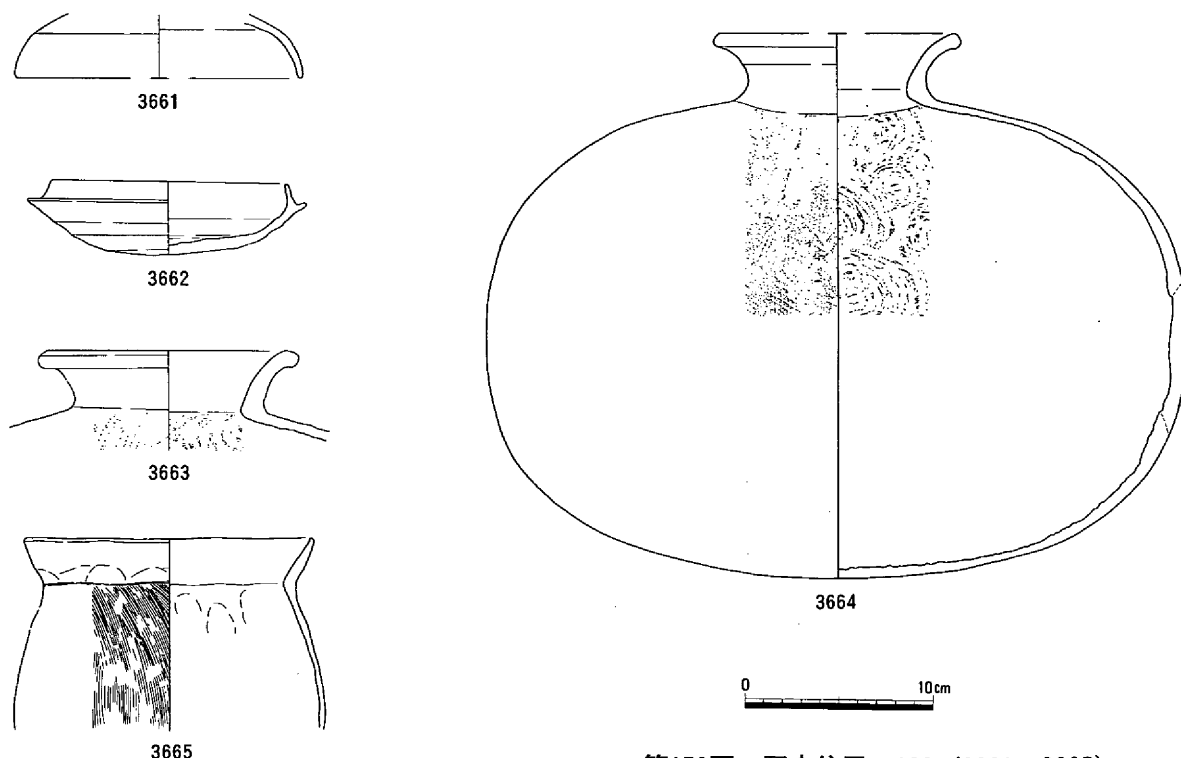


第157図 竪穴住居-183

竪穴住居-183 (第157・158図、図版31・72・73)

O19区南東部で、竪穴住居-182と竪穴住居-184の間に位置する。

平面形は長方形を呈し、長軸長508cm、短軸長405cmを測り、10cm弱が残る側壁には、カマド部分を



第158図 竪穴住居-183 (3661~3665)

除いて幅15~20cm、深さ5cm前後の壁体溝が伴う。側壁から70~110cm内側で4基の柱穴を検出している。柱掘り方は長径48~61cm、深さ47~59cmの楕円形で、柱間は東西方向で255~267cm、南北方向で195~215cmを測り、主軸方向はN-30°-Wを示す。北辺のほぼ中央に位置するカマドは、45~55cm内側に袖をのばし、下幅50cmの底面に須恵器横瓶の口縁部破片3663が置かれている。煙道は緩い傾斜で45cm外側までのびている。カマドから南の床面下には、208×150×50cmの不整楕円形の土壌が埋められている。面積約19.5㎡、海拔高3.48mの床面のうち、カマド前の160×150cmが7cmほど窪み、その南肩の150×115cmが焼土化している。さらにその中に20×25cm~30×50cm程度の熱影響の高い部分が5箇所認められる。床面からは須恵器の蓋3661・杯3662・横瓶3664、土師器の甕3665等とともに鉄滓が出土しており、焼土面との関係が注目される。時期は、古・後・Ⅱに比定される。(光永)

竪穴住居-184 (第159図、図版32)

O19区南東部で、竪穴住居-183と竪穴住居-186の間に位置し、竪穴住居-185を削っている。

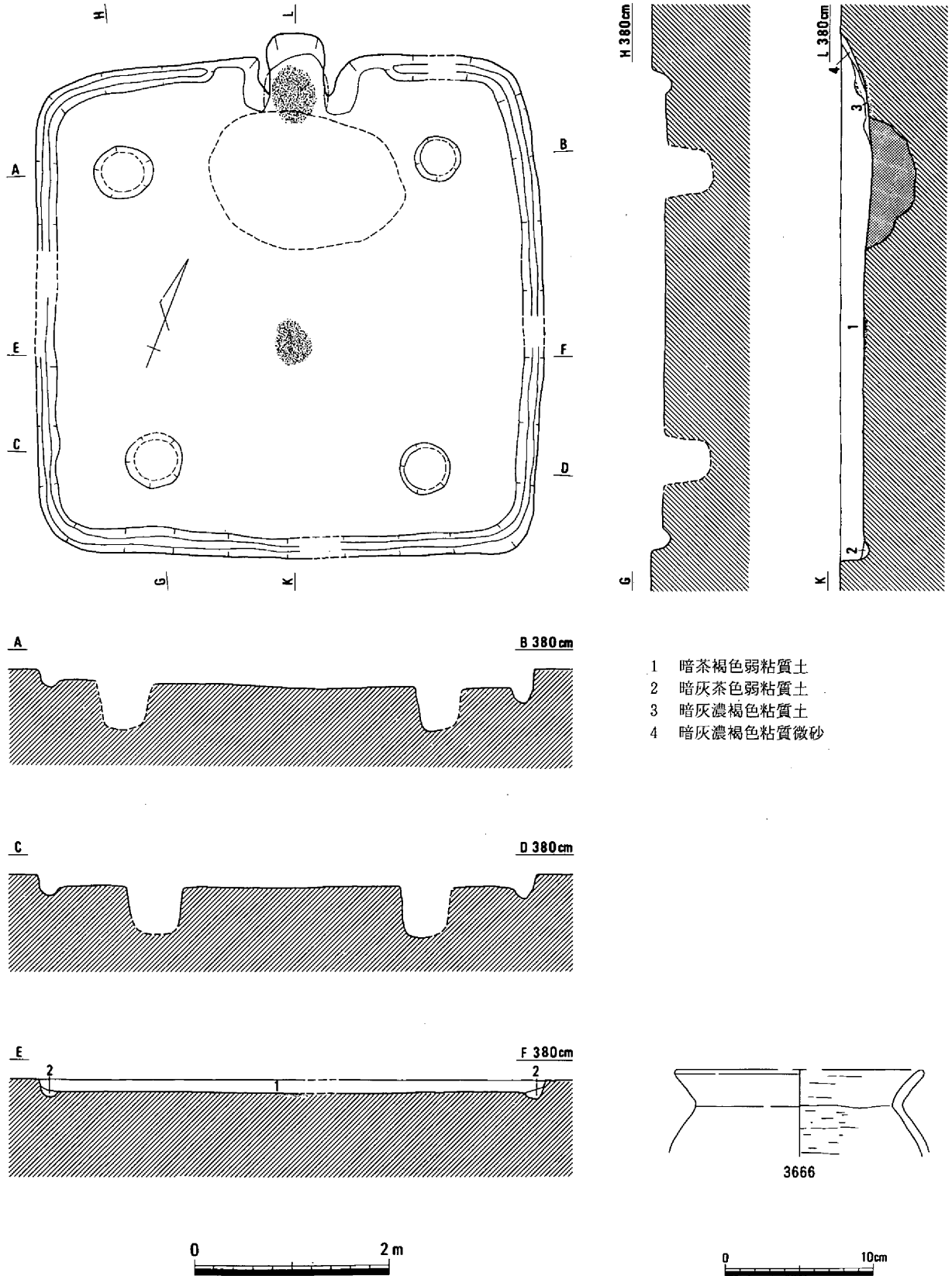
平面形は1辺491~508cmの方形を呈し、ほぼ直立する側壁は15cm程度が残り、幅15~25cm、深さ5~25cmの壁体溝がカマド部分を除いて伴っている。側壁から55~85cm内側で4基の柱穴を検出している。柱掘り方は長径45~55cmの楕円形で、深さは東側の2基で45cm前後であるが、西側の2基については不明確である。北辺中央部のカマドは、袖を40cm程伸ばし、下幅65cmの燃焼部から、煙道は25cm程度のびるのみである。カマド前の床面下には、205×140×45cmの楕円形の土壌が埋められている。海拔高3.43mで、面積23.8㎡の床面は、カマド前が浅く窪むが高床部はなく、中央部に50×35cmの焼土面が認められる。土師器の甕3666が図示できるのみであるが、古・後・Ⅱ~Ⅲに位置付けられよう。

(光永)

竪穴住居-185 (第160図)

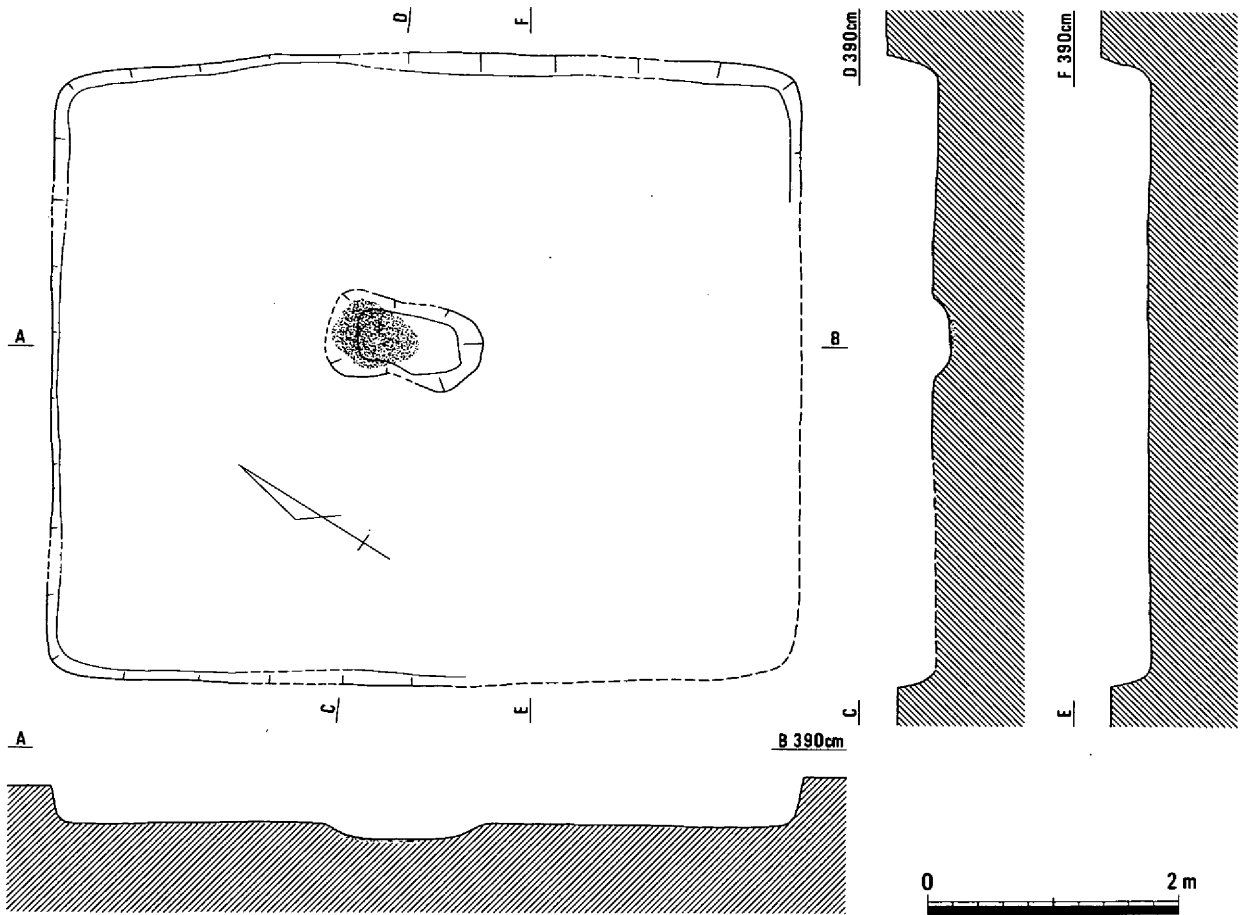
O19区南東部に位置し、竪穴住居-184・186に削られている。

平面形は長方形と想定され、長軸長570cm、短軸長480cmを測り、床面積は27.4㎡に復元される。ほ



第159図 竪穴住居-184 (3666)

ほぼ直立する側壁は20cm弱が残り、壁体溝は検出されなかった。柱穴は確認されなかったが、側壁からみた主軸方向はN-32°-Wを示している。カマドは検出されず、床面下の土壌も確認されなかった。



第160図 竪穴住居-185

海拔高3.28mで高床部をもたない床面のほぼ中央部で、炉が検出された。平面形は瓢形で、現存長径120cm、短径65~70cm、深さ10cmの規模で、北半の底面及び側壁が熱影響を受けている。

時期を決める遺物の出土はないが、柱穴・カマドをもたず、中央に掘りこんだ炉を伴うなど、周辺の竪穴住居に先行するものの、平面形から古墳時代に属するものと考えられる。(光永)

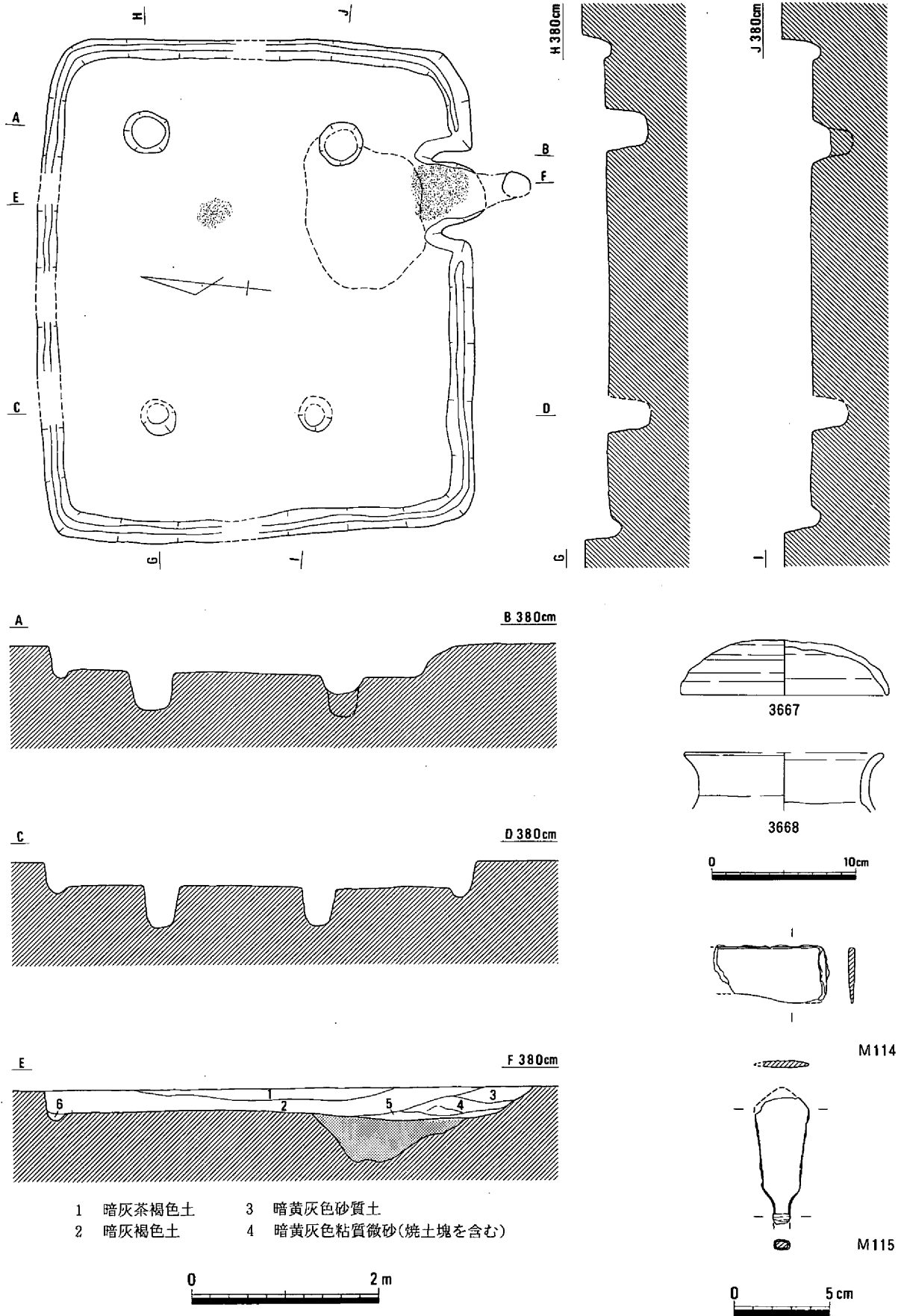
竪穴住居-186 (第161図、図版32)

O19区南東部で、竪穴住居-184の南に位置し、竪穴住居-185を削っている。

平面形は長方形を呈し、長軸長513cm、短軸長443cmを測り、ほぼ直立する側壁は25cm程度が残り、幅20cm、深さ10cm前後の壁体溝がカマド部分を除いてこれに伴う。カマドは南辺の東寄りに造られ、袖が50~60cm内側に伸びて、天井部が残る煙道は側壁の45cm外側で開口する。カマド前の床面下には170×125×45cmの楕円形の土壇が埋められている。側壁から75~140cm内側で4基の柱穴が検出されている。東側の2基と西側の2基では規模が違うものの、柱掘り方は径33~47cm、深さ37~47cmの円形で、柱間は東西方向で290~301cm、南北方向で170~205cmを測り、主軸方向はN-5°-Wを示している。面積21.6㎡、海拔高3.29mの床面には明確な高床部は認められないが、北半が低い。その北半でカマド周辺に240×58cmの範囲で焼土面が見られる他、約150cm北にも35×30cmの焼土面がある。

遺物としては、須恵器の蓋3667、土師器の甕3668等の土器の他に、鎌M114・鍬M115の鉄器が出土しており、時期は古・後・Ⅱに比定される。(光永)





第161図 竪穴住居-186 (3667・3668・M114・115)

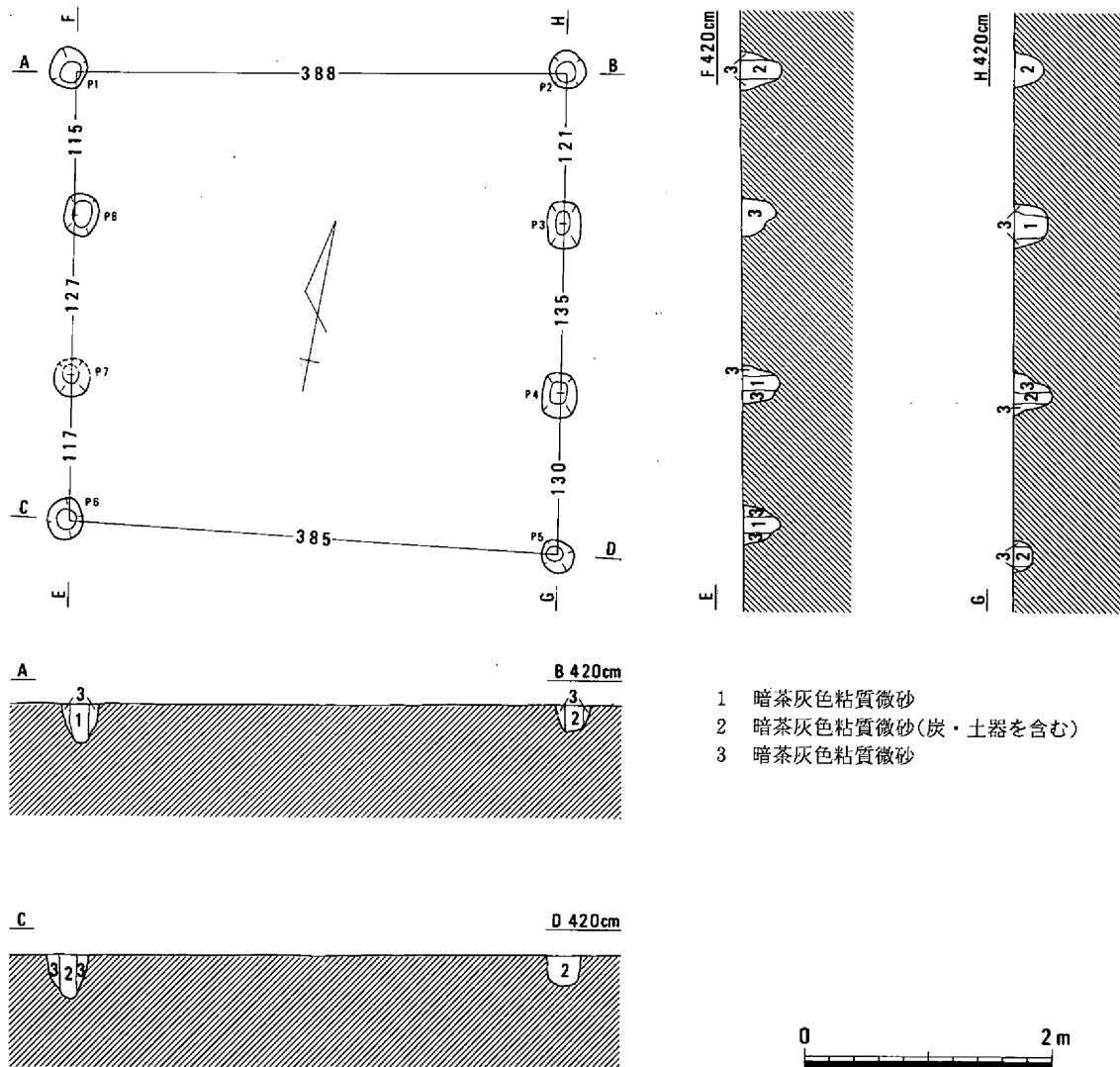
(3) 掘立柱建物

掘立柱建物-18 (第162図、図版33)

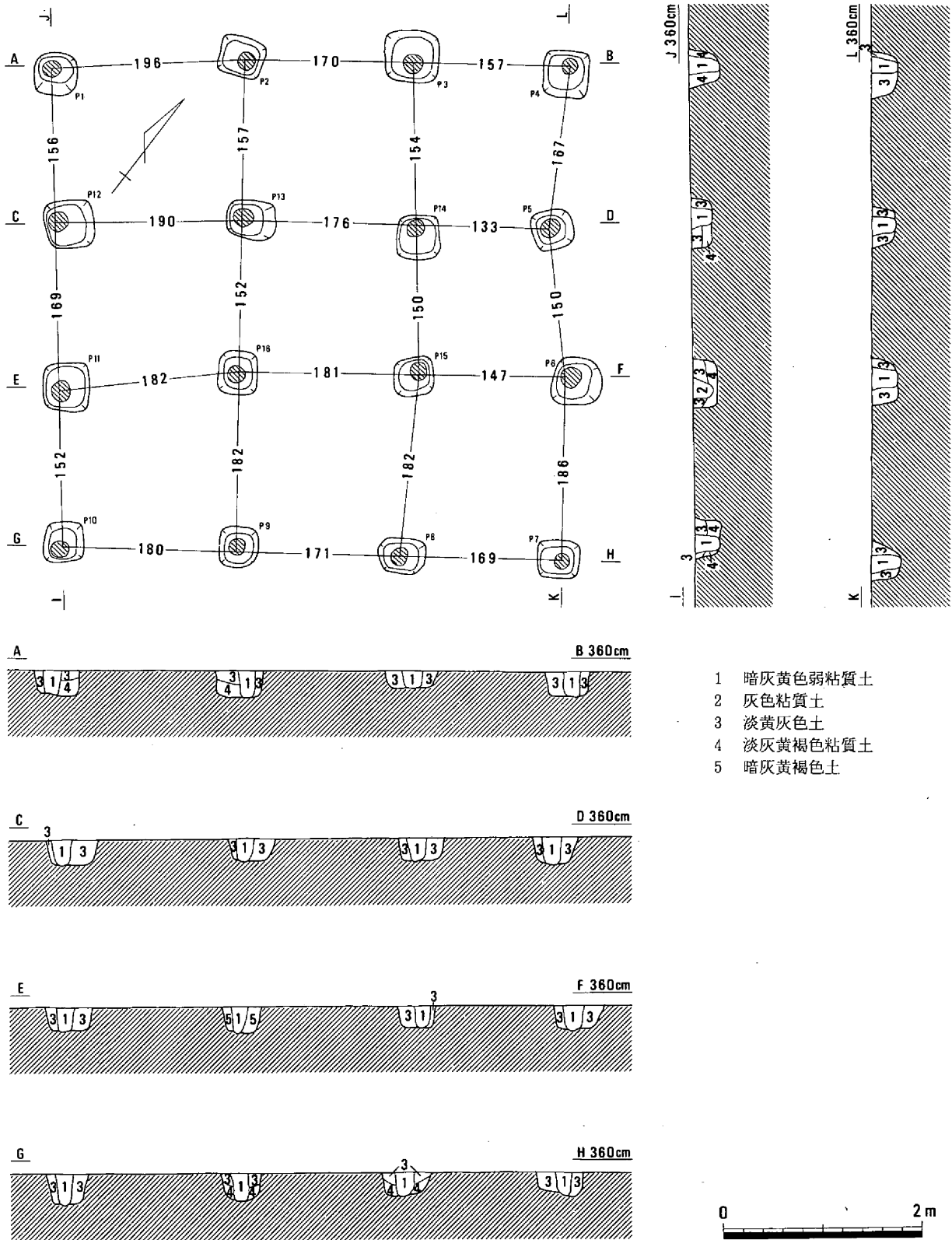
Q18区の北西、竪穴住居-163の南西3mに位置する。桁行395cm、梁行385cm、床積14.6㎡を測る3×1間の掘立柱建物である。棟方向はN-9°-Wを示し、竪穴住居-138を跨ぐ形になり、古・前・I、IIの時期の竪穴住居と同方向をとる。梁は少し間が抜けた長さであり、桁間に関しては115~135cmを測り、統一した長さの使用は認めがたい。柱穴の掘り方も高低差があり、18~35cmのバラツキが認められた。柱穴内からは弥・後・IIの小土器片が多く認められたが、切り合い関係も含めて本住居に伴う土器は確認できなかった。古・中・後の時期を想定しておく。(高畑)

掘立柱建物-19 (第163図)

竪穴住居-173の北東方約25m、溝-116のすぐ東に位置する総柱の掘立柱建物である。棟方向は東西と考えられるが、ほとんど正方形を呈する建物である。柱間は不揃いで、北・西・南側柱列以外は直線をなさない。



第162図 掘立柱建物-18



第163図 掘立柱建物-19

柱掘り方は、そのほとんどが隅丸方形を呈していて円形でない点が注目される。すべての掘り方には、径約20cm前後の丸い柱痕跡が観察される。

柱穴の土層断面の観察によっても建て替えなどの形跡は認められない。検出された深さは、約20～

30cm前後とほぼ一定である。

柱掘り方内からは、ごく少量ながら須恵器片が出土しており、その観察からこの掘立柱建物の時期は古・後・ⅡないしⅢに比定される可能性が高いと判断した。

この掘立柱建物の性格は明らかではないが、竪穴住居とは異なり高床の倉庫のような建物かあるいは、楼閣風のある程度の高さのある建築物であった可能性もある。 (岡田)

#### (4) 焼成土壙

##### 焼成土壙-1 (第164図、図版33)

O19区とP19区の境界に位置し、土壙-269・270との距離約2.5mである。

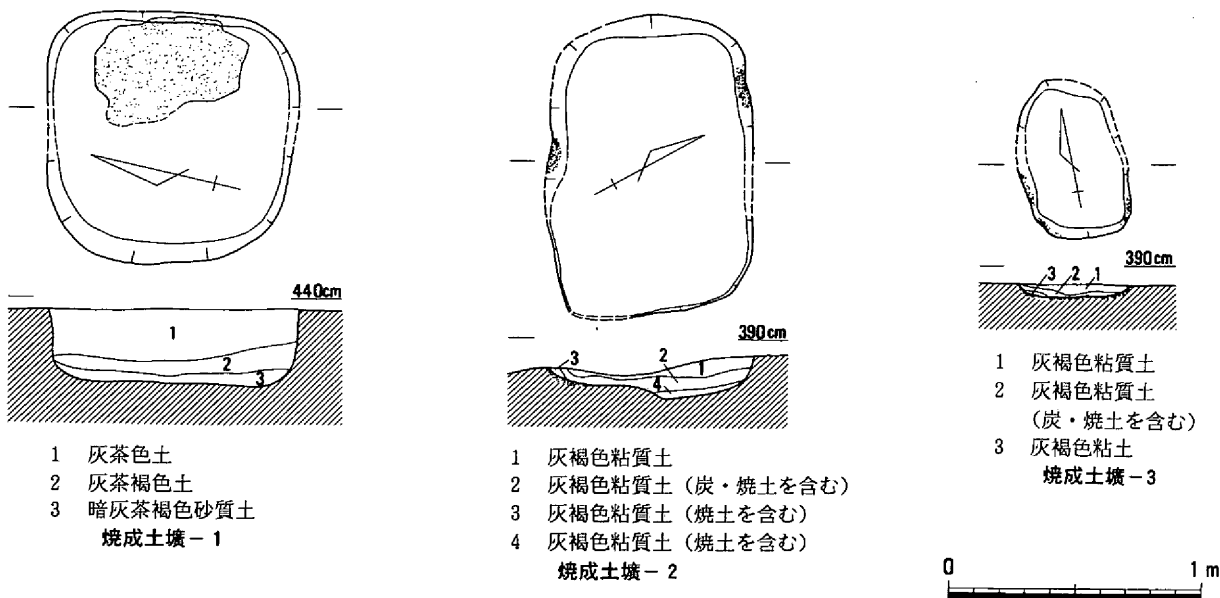
平面形は隅丸の方形を呈して1辺96~100cmを測り、海拔高4.06mの底面は87×92cmの規模で平坦である。深さ30cmの断面形はBb型で、埋土は3層に分かれ、第3層に焼土粒が混じる。側壁に顕著な熱影響は認められないが、東半の底面から側壁にかけて焼土・炭の堆積が顕著である。 (光永)

##### 焼成土壙-2 (第164図)

O19区南東部に位置し、焼成土壙-3との距離約5.5mである。平面形は不整な長方形を呈し、長軸長118cm、短軸長81cmを測る。海拔高3.70m前後の底面から8~15cmの断面形はAa型で、第2~4層には炭・焼土粒が含まれ、特に第3・4層に多い。不均等ではあるが側壁に熱影響が認められ、北辺と南辺の一部が特に強い焼土化をみせる。 (光永)

##### 焼成土壙-3 (第164図)

O19区南東部に位置し、溝-118に近接する。北東部を失っているが、平面形は不整な長方形を呈し、長軸長64cm、短軸長44cmをそれぞれ測る。海拔高3.76mのほぼ平坦な底面まで10cm程が残る断面形はAb型で、第2層に炭・焼土粒が含まれる。側壁から底面にかけて熱影響を受けており、南辺の側壁において顕著である。 (光永)



第164図 焼成土壙-1~3

(5) 土壇

土壇-240 (第165図、図版73)

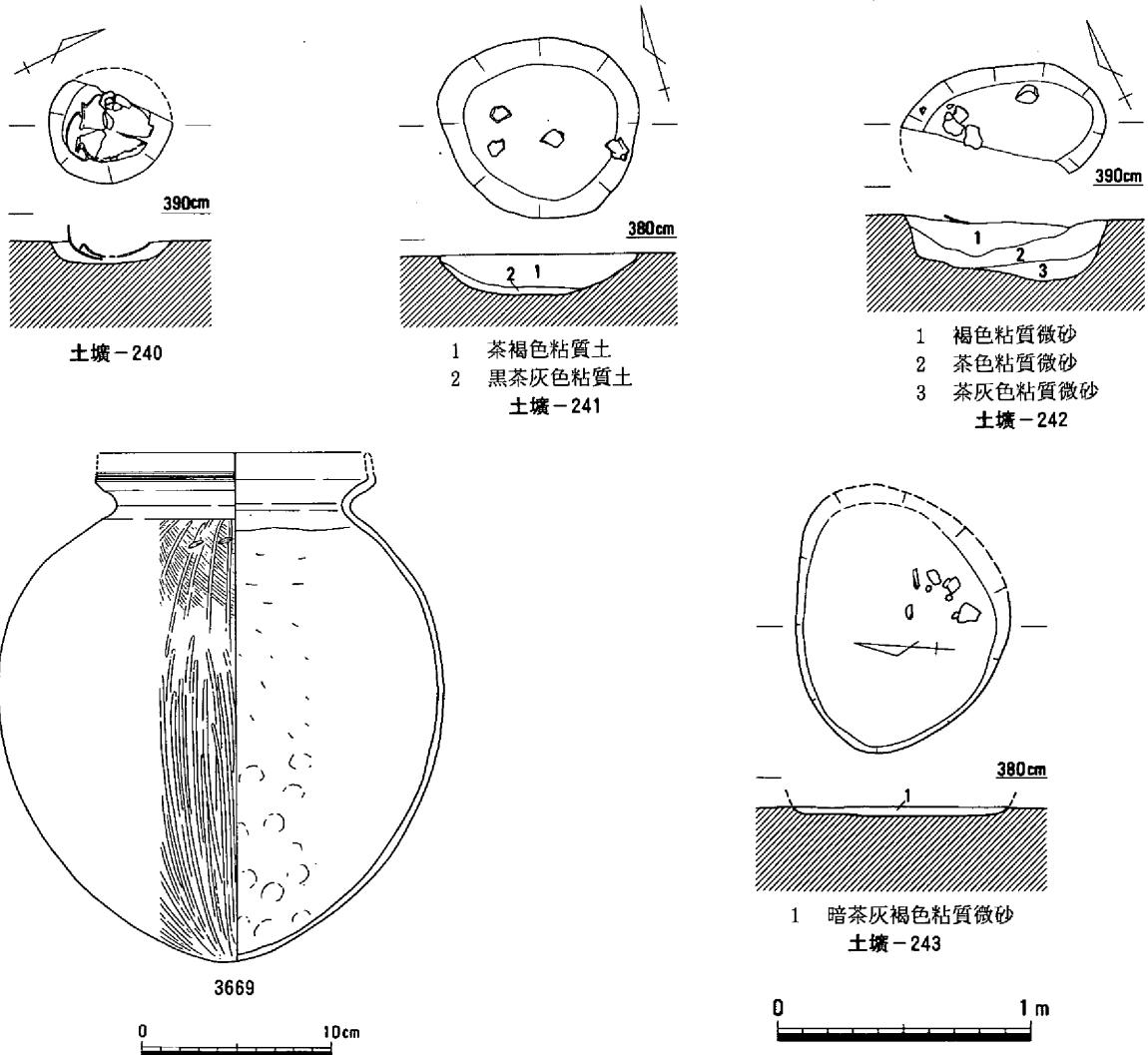
Q18区の北西端、竪穴住居-134の西方6.7mに位置する。長さ49cm、幅(44)cm、深さ8cm、底面海拔高370cmを測る円形の土壇である。甕が口縁部を少し下げた横位の格好にて、同一個体片が蓋の形状を呈していた。口縁立ち上がりはすべて打ち欠かれている。古・前・Ⅱに比定可能か。(高畑)

土壇-241 (第165図)

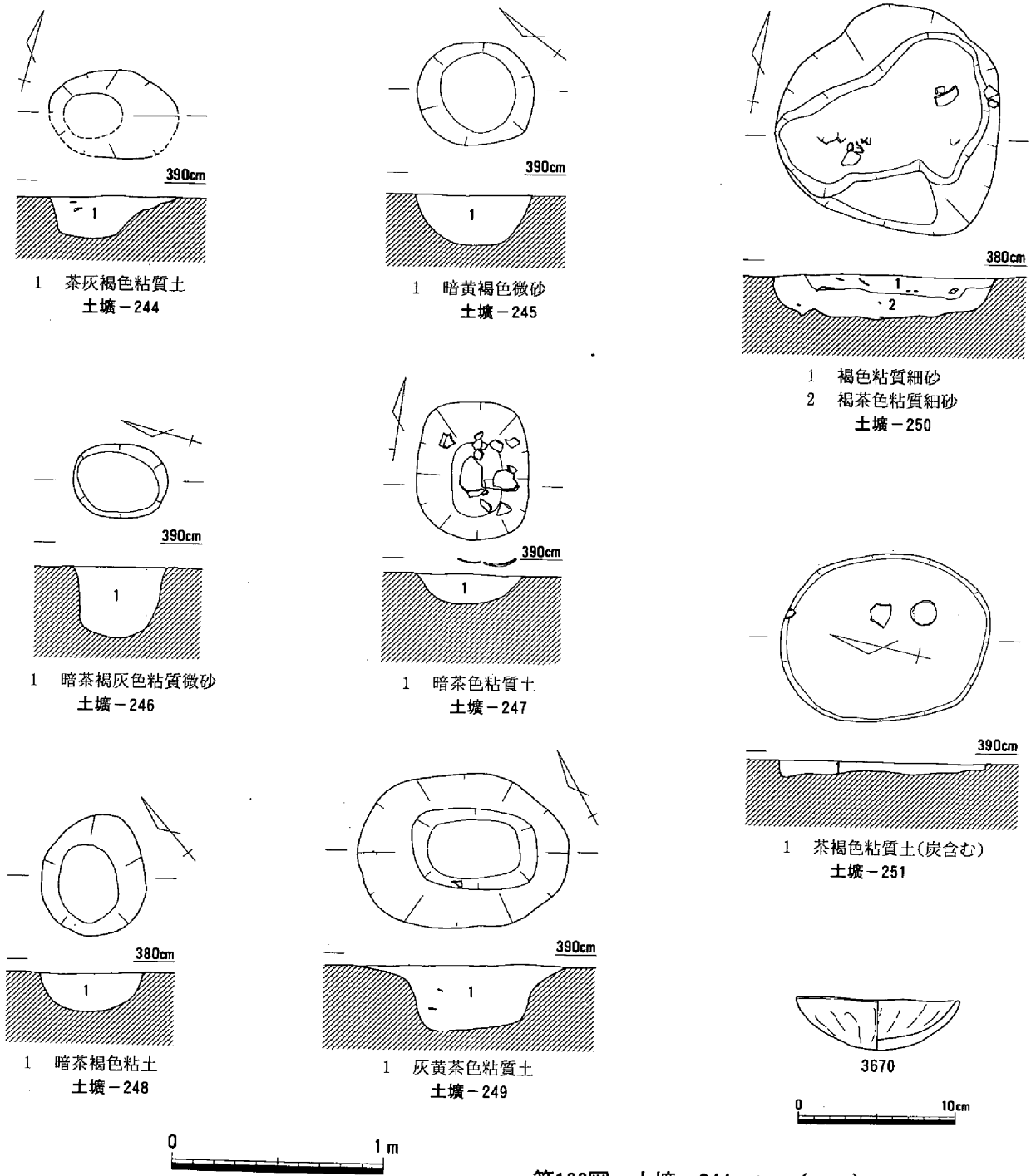
Q18区の北西、土壇-240の南東5.5mに位置する。長さ79cm、幅74cm、深さ16cm、底面海拔高357cmを測る円形の土壇である。埋土は2層からなり、第1層の茶褐色粘質土中より甕、高杯片が出土している。土器の特徴等より、古・前・Ⅰに近いものと考えられる。(高畑)

土壇-242 (第165図)

Q18区の北西、土壇-244の南西0.7mに位置する。長さ(76)cm、幅(44)cm、深さ8cm、底面海拔高357cmを測る楕円形の土壇である。埋土は3層からなり、第1層中に土器小片が含まれていた。甕の胴部、高杯の杯部等であり、その特徴は古・前・Ⅱに比定できる。(高畑)



第165図 土壇-240 (3669)・241~243



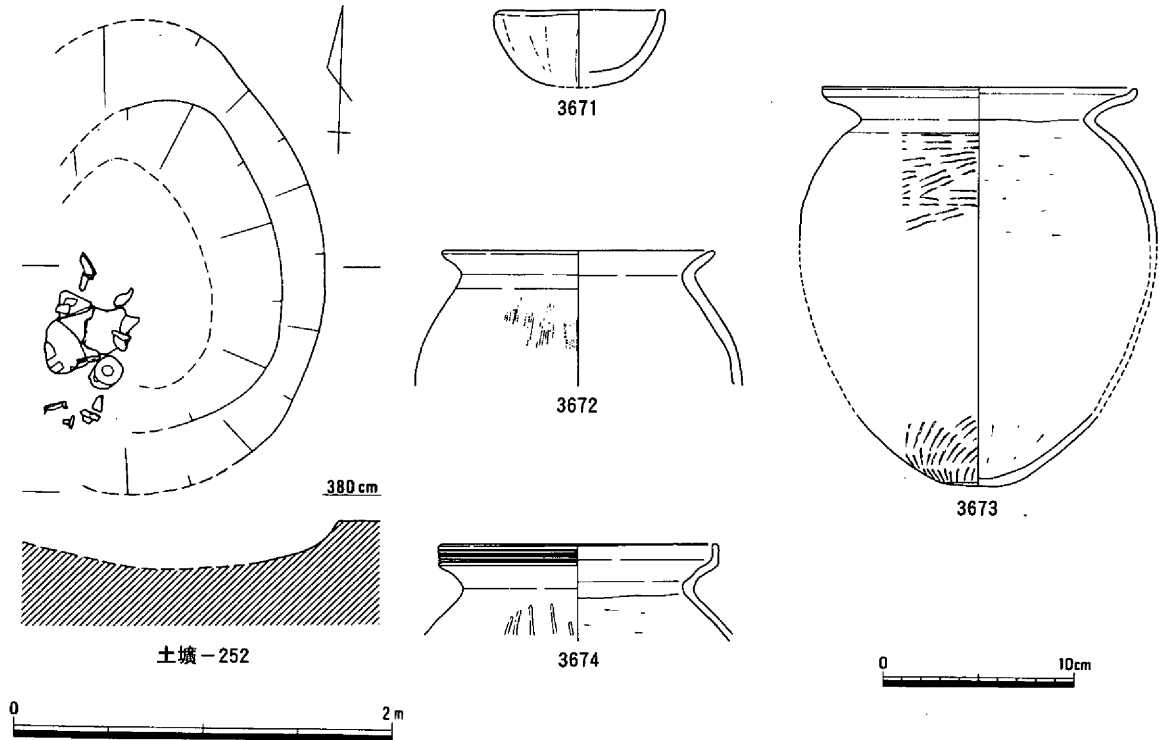
第166図 土壌-244~251 (3670)

土壌-243 (第165図)

Q18区の北西、土壌-241の北方3mに位置する。長さ100cm、幅80cm、深さ3cm、底面海拔高364cmを測る不整楕円形の土壌である。浅い土壌であり、埋土は暗茶灰褐色粘質微砂層からなり、甕の小土器片を含む。甕胴部上位にヨコハケの顕著な例がある。古・前・Ⅱに比定できる。(高畑)

土壌-244 (第166図)

Q18区の北西、土壌-242の北東0.7mに位置する。長さ62cm、幅42cm、深さ20cm、底面海拔高363cmを測る楕円形の土壌である。埋土は土器片、炭等を含む茶灰褐色粘質土の1層である。土器小片が比較的多く認められ、甕、高杯の短脚、鉢の器面に線刻模様をもつもの等がある。(高畑)



第167図 土壌-252 (3671~3674)

**土壌-245 (第166図)**

P18区の南西、土壌-246の西側0.3mに位置する。長さ55cm、幅48cm、深さ24cm、底面海拔高361cmを測る円形の土壌である。埋土は暗黄褐色微砂の1層であり、層中には土器片を含んでいない。土色、周辺の状況から古・前・前に比定しておきたい。(高畑)

**土壌-246 (第166図)**

P18区の南西、土壌-245の東側0.3mに位置する。長さ45cm、幅35cm、深さ34cm、底面海拔高354cmを測る隅丸方形の土壌である。埋土は暗茶褐灰色粘質微砂の1層であり、層中に土器小片を多く含む。甕、高杯等があり、それらの特徴から古・前・Ⅱに比定することが可能である。(高畑)

**土壌-247 (第166図)**

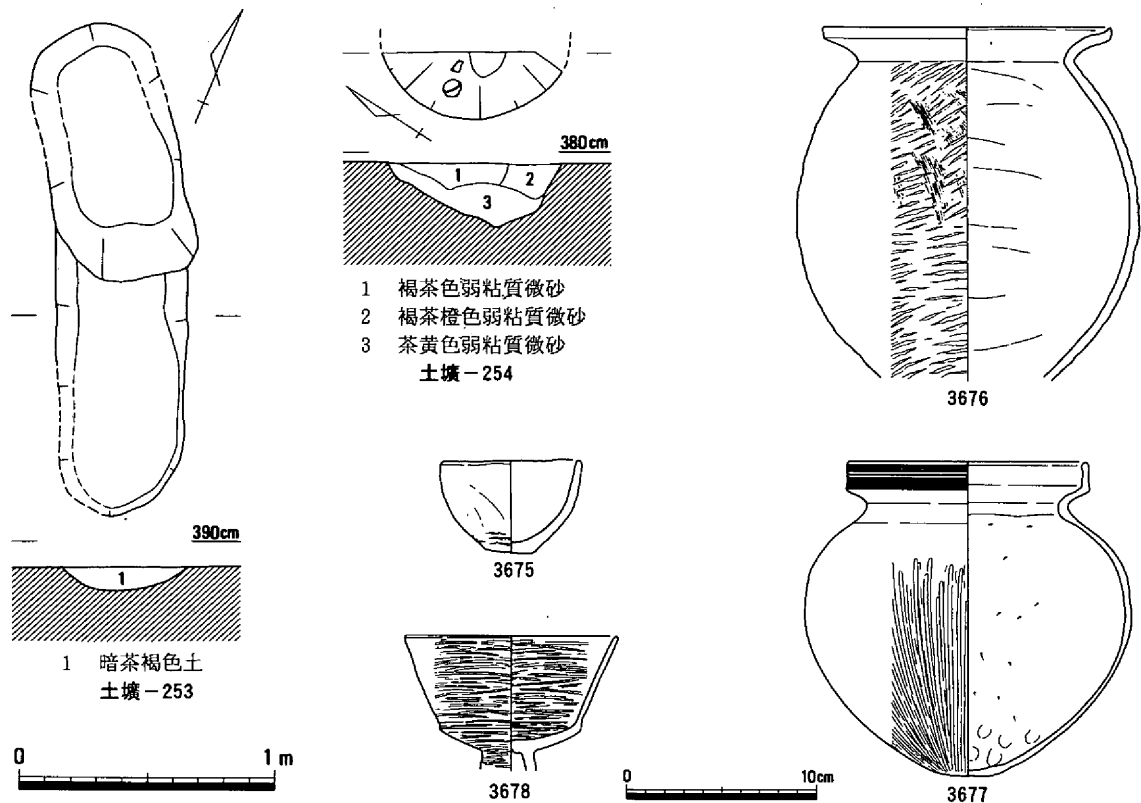
Q18区の北西、土壌-246の南方4mに位置する。長さ66cm、幅53cm、深さ14cm、底面海拔高368cmを測る隅丸方形の土壌である。埋土は暗茶褐色粘質土の1層にて遺物は本層および上面から出土している。弥・後・Ⅱの土器の混在が認められたが、おおむね古・前・前の時期と考えられる。(高畑)

**土壌-248 (第166図)**

Q18区の北西、竪穴住居-142の南東隅北側に位置する。長さ58cm、幅51cm、深さ18cm、底面海拔高355cmを測る不整円形の土壌である。断面はボール状を呈し、埋土は暗茶褐色粘土の1層からなる。遺物は認められないが、埋土の色調、土壌形状から古・前・前に比定できる。(高畑)

**土壌-249 (第166図)**

Q18区の北西、土壌-250の南4.2mに位置する。長さ100cm、幅73cm、深さ31cm、底面海拔高354cmを測る楕円形の土壌である。埋土は灰黄茶色粘質土の1層であり、層中に甕、短脚の高杯片等を含む。甕の底部は丸底化しつつも小さい底を残している。弥・後・Ⅲから古・前・Ⅰまでの特徴を持つ土器片が含まれているが、古・前・Ⅰのものが他より少し多いようである。(高畑)



第168図 土壌-253・254 (3675)・255 (3676~3678)

土壌-250 (第166図)

Q18区の北西、土壌-249の北方4.2mに位置する。長さ110cm、幅102cm、深さ21cm、底面海拔高353cmを測る不整円形の土壌である。埋土は2層からなり、第1層の褐色粘質細砂中に土器小片が多く見られた。高杯、甕、器台等の特徴から古・前・Ⅱに比定できる。(高畑)

土壌-251 (第166図)

Q18区の北西、竪穴住居-146と切り合い、土壌-248の北東6mに位置する。長さ99cm、幅80cm、深さ8cm、底面海拔高429cmを測る楕円形の土壌である。埋土は1層であり、底に接して鉢3670が出土している。口径10.3cm、器高3.3cm、色調は鈍い黄橙色を呈する。古・前・前に属する。(高畑)

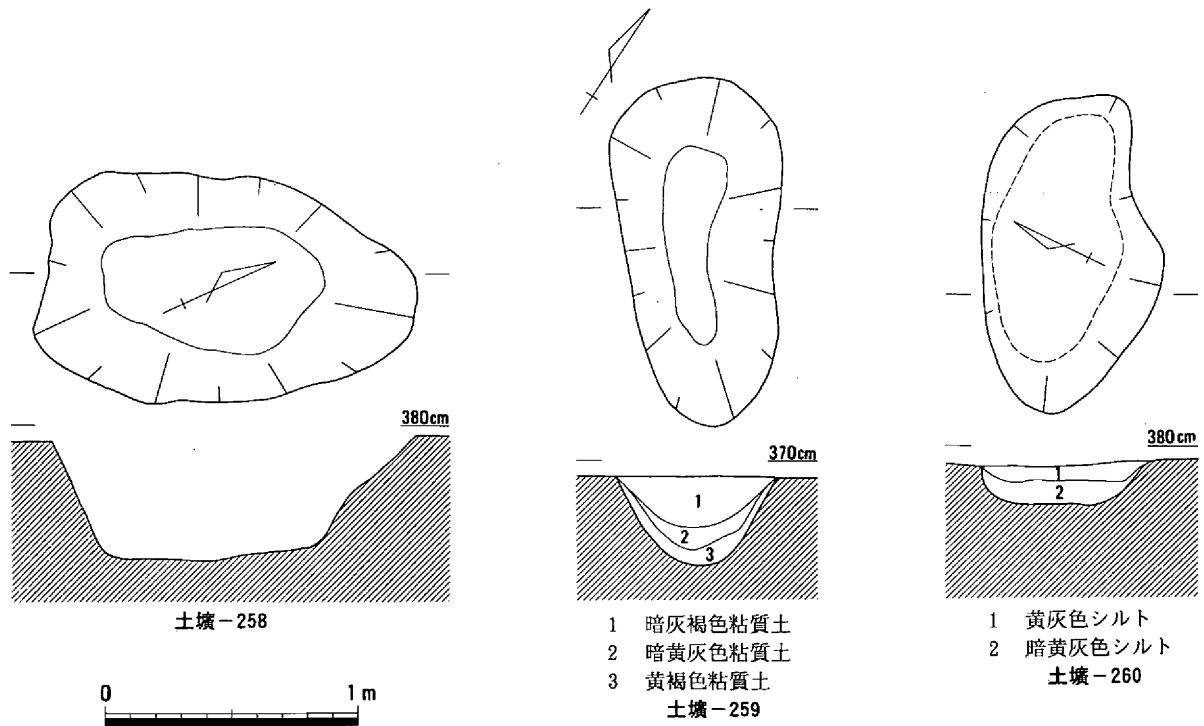
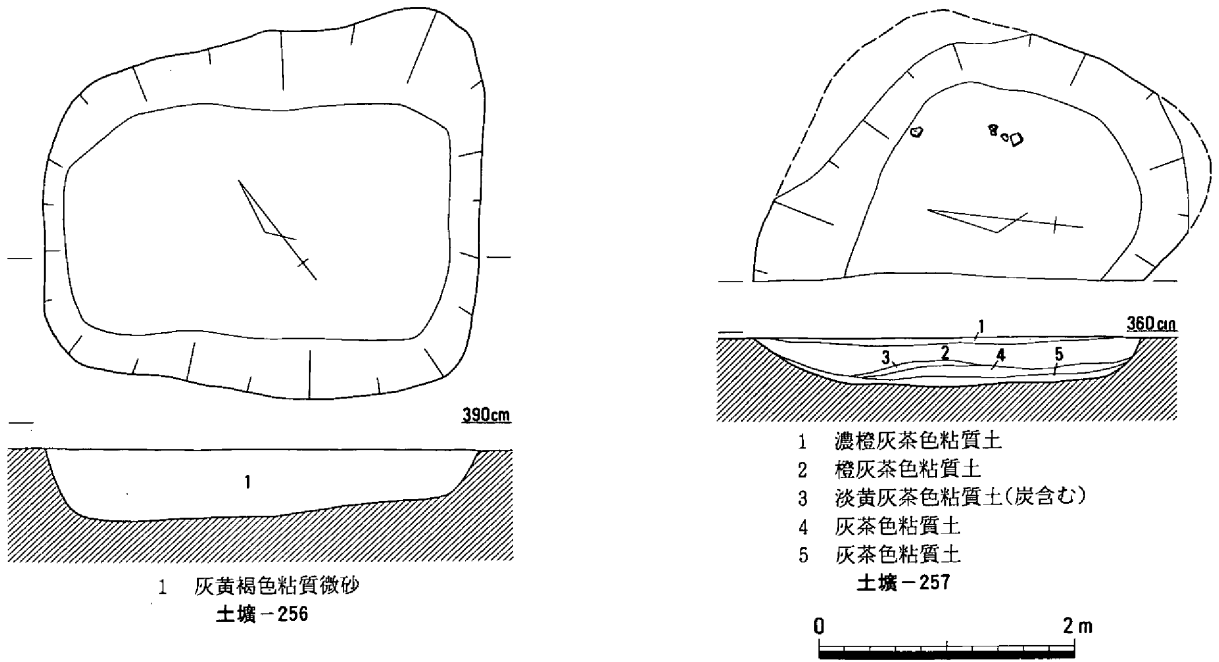
土壌-252 (第167図)

Q18区の北西、土壌-253の北東8mに位置する。古・前・Ⅱの竪穴住居-155により南半を削平されている。長さ(250)cm、深さ25cm、底面海拔高341cmを測る土壌である。埋土中に甕、鉢等の遺物が出土しており、すべて破片である。100×60cmの範囲内にまとまって認められた。3671は褐灰色を呈する手捏ねの鉢である。3673は外面および底部に細筋のタタキメが施されており、内面下位は縦位、上半は横位のヘラケズリが施されている。古・前・Ⅰの範疇であろうか。(高畑)

土壌-253 (第168図)

Q18区の北西、土壌-252の南西8mに位置する。長さ193cm、幅56cm、深さ11cm、底面海拔高344cmを測る長楕円形の土壌である。埋土は暗茶褐色土の1層であり、埋土中は小片のみの出土である。時期の決定は困難であるが、埋土の色調、周辺遺構の関連等より古・前・前の範疇に収まるものと考えられる。(高畑)





第169図 土壙-256~260

土壙-254 (第168図)

Q18区の北西、土壙-252の東4.5mに位置する。長さ(73)cm、深さ26cm、底面海拔高350cmを測る円形土壙である。埋土は3層からなり、遺物は第1層中に含まれていた。3675は口径7.0cm、器高4.9cm、底径2.4cmを測る小形の鉢である。古・前・IIの範疇で把えておきたい。(高畑)

土壙-255 (第168図、図版73)

Q18区の北西、土壙-248の東側約5mに位置する。トレンチによる断面のみの視察であるが、幅

100cm以上、深さ35cm、底面海拔高336cmを測る溝状土壌と考えられる。埋土は明茶褐色粘質微砂の1層であり、炭・焼土を少量含む。遺物は上位からの出土であり、3676～3678の3点は破片である。3676は口径15.1cmを測り、胴部外面は左下がりの太筋のタタキメ、内面は横位のハケメが認められる。他の土器も含め、古・前・Iに比定できる。(高畑)

**土壌-256** (第169図、図版33)

中屋調査区の南部にあり、竪穴住居-150の北に位置する。平面形は不整長方形を呈し、大きさは、長さ172cm、幅145cm、深さ28cm、底面の標高351cmを測る。埋土中から出土した少量の土器片から、時期は、古・前・前に比定される。(正岡)

**土壌-257** (第169図)

中屋調査区の南部にあり、竪穴住居-149の南東に位置する。東側は溝-104によって切られ、西側は調査区の関係で十分調査できなかった。平面形は不整方形を呈し、南北295cm、深さ40cmを測る。埋土中から出土した少量の土器片から、時期は古・前・前に比定される。(正岡)

**土壌-258** (第169図、図版34)

中屋調査区の南部にあり、竪穴住居-151の北に近接している。平面形は不整形を呈し、大きさは、長径148cm、短径88cm、深さ47cm、底面の標高325cmを測る。埋土中から出土した少量の土器片から、時期は古・前・前に比定される。(正岡)

**土壌-259** (第169図、図版34)

中屋調査区の南部にあり、竪穴住居-150の東に近接している。平面形は不整長楕円形を呈し、大きさは、長径137cm、短径68cm、深さ35cm、底面の標高325cmを測る。埋土中から出土した少量の土器片から、時期は古・前・前に比定される。(正岡)

**土壌-260** (第169図)

中屋調査区の南部にあり、住居群から東へ離れていて、水田まで6mの位置にある。平面形は不整長楕円形を呈し、長径125cm、短径71cm、深さ16cm、底面の標高358cmを測る。埋土中から検出された甕の破片から、時期は古・前・前に比定される。(正岡)

**土壌-261** (第170図、図版34)

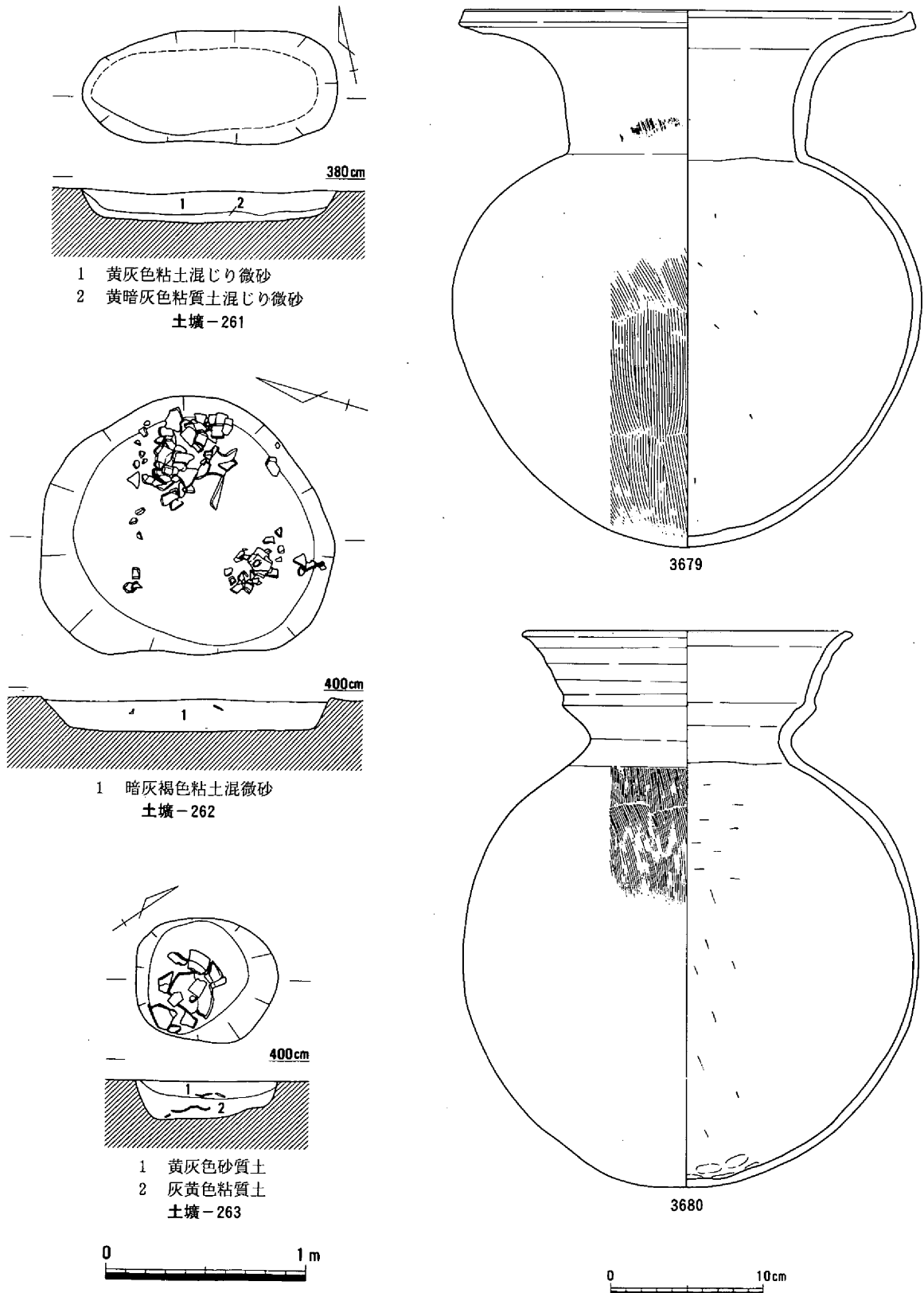
中屋調査区の南部にあり、住居群から東へ離れていて、土壌-260の東側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径127cm、短径55cm、深さ16cm、底面の標高358cmを測る。埋土中から検出された壺・甕の破片から、時期は古・前・前に比定される。(正岡)

**土壌-262** (第170図、図版35・73)

中屋調査区の南部に位置し、住居群から離れていて、3基の土壌群の中にある。平面形は不整円形を呈し、長径127cm、短径55cm、深さ16cm、底面の標高369cmを測る。埋土中には、壺・甕・高杯・皿・器台等の破片が多数検出された。図化した広口壺3679は、香川県に多い器形である。時期は土器の形状から、古・前・Iに比定される。(正岡)

**土壌-263** (第170図、図版35・73)

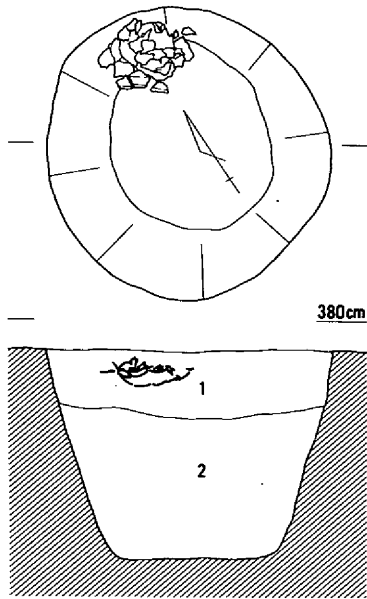
中屋調査区の南部にあり、住居群から東へ離れていて、近接した遺構もない。南西にある土壌群までは12mある。平面形は不整円形を呈し、長径71cm、短径61cm、深さ19cm、底面の標高371cmを測る。埋土中には、壺1個が潰れた状態で検出された。形状は、口縁部が大きく開き、底部は丸底である。時期は古・前・IIに比定される。(正岡)



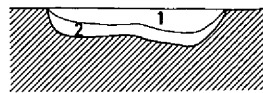
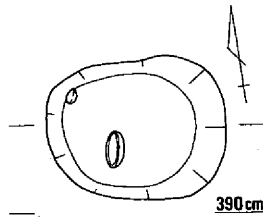
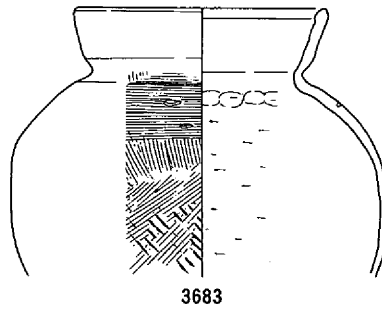
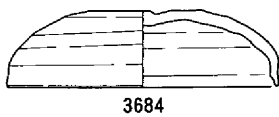
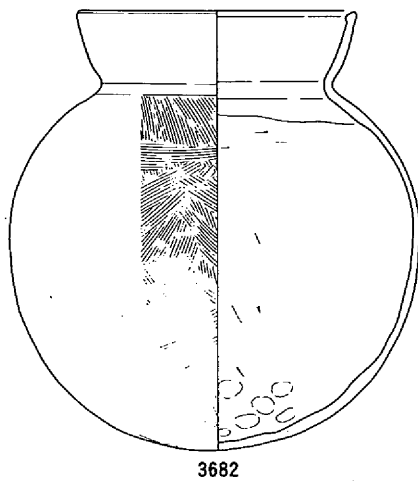
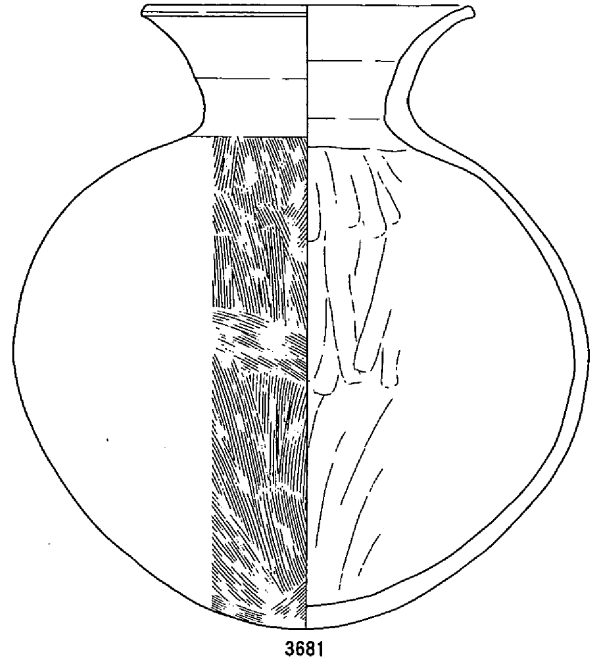
第170図 土壙-261・262 (3679)・263 (3680)

土壙-264 (第171図、図版74)

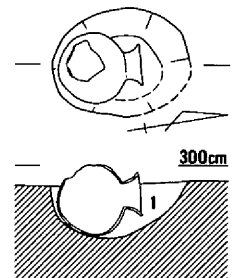
P19区で検出された土壙である。この土壙は検出時点での平面形態は楕円形を呈し、その規模は長辺53cm、短辺43cm、検出面からの深さは21cmの数値であった。また、断面形態は楕鉢状を呈し、壙



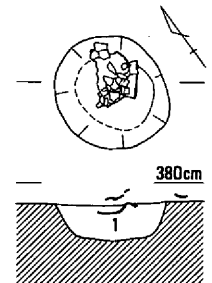
- 1 暗黄茶褐色土  
2 暗黄茶褐色土(灰白色粘質土含む)  
土壌-265



- 1 淡黄灰色微砂  
2 淡黄灰色粘質微砂  
土壌-267



- 1 緑灰色シルト  
土壌-264



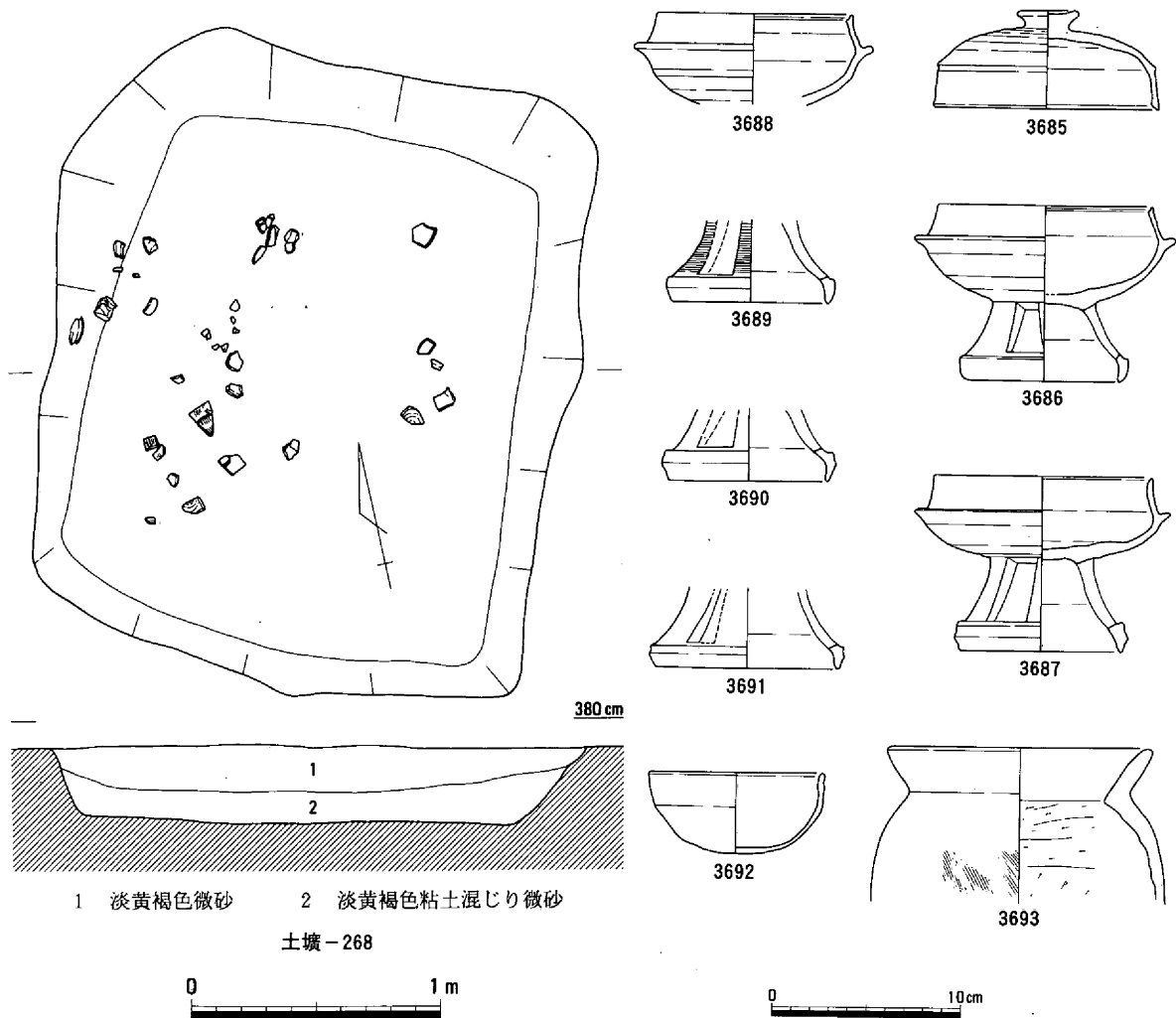
- 1 暗黄茶色土  
土壌-266

第171図 土壌-264 (3681)・265 (3682)・266 (3683)・267 (3684)

内には口縁部を北に向けた状態で壺3681が出土している。

このような検出された状態からして壺棺の可能性が考えられる遺構である。土壌の時期は古・前・Iと考えたい。

(二宮)



第172図 土壙-268 (3688~3693)

土壙-265 (第171図、図版74)

前記土壙と同じくP19区に位置し検出した土壙で、検出時では円形を示す遺構であったが、掘り上げ後の規模は116×110cmと若干数値の違いはあるが、円形の平面形を呈している。また検出面からの深さは83cmで底面の海拔高は333cm。井戸の可能性もある。土壙の埋土は2層が認められ、その上層(1層)内に甕3682が散っていた。時期は古・前・Ⅲと考えたい。(二宮)

土壙-266 (第171図、図版74)

土壙-265と同じ区域において検出された土壙であり土壙-264と同規模を示すものであり、平面形態は48×43cmではほぼ円形を呈し、深さは14cmの逆台形の断面形であり、底面の海拔高は337cmであった。さらに壙内には甕3683、高杯片が埋没していた。

本土壙の時期は出土遺物等からして、土壙-265と同じ古・前・Ⅲと考えたい。(二宮)

土壙-267 (第171図、図版74)

中屋調査区の南部にあり、住居群から東へ離れていて、近接した遺構もない。平面形は楕円形を呈し、長径70cm、短径55cm、深さ15cm、底面の標高361cmを測る。埋土中には、杯蓋3684個が完存した。口径14.0cm、器高4.1cmを測り、形状から、時期は古・後・Ⅱに比定される。(正岡)

**土壙-268** (第172図、図版35・74)

土壙-267の北55mで検出した土壙で、P18区の中央東よりに位置している。

上面で長さ252cm、幅205cm、底面で長さ211cm、幅173cmの方形をなす大形の土壙で、深さは30cmを測る。壁面は、標高338cmを測る平坦な底面から、やや急な傾斜をもって立ち上がる。上下2層に分かれる埋土は、周囲から流入、堆積した状況を示すが、淡黄褐色をなす下層には地山土と見られる粘土塊を少量含んでいる。また、上層からは須恵器3685~3691、土師器3692・3693を出土している。

3685は口径11.7cm、器高5.2cmを測る高杯の蓋で、直立する口縁の端部は凹面をなし、ボタン状のつまみを貼り付ける天井部との間には鋭い稜が巡る。高杯3686~3691は、口径10.3~11.4cm、器高9.3cmを測り、長く直立する口縁の端部には凹線を巡らす。また、径8.0~9.6cmを測る低い脚部には三方に方形の透かしを飾る。これらは、5世紀後半に位置付けられる。(正岡)

**土壙-269** (第173図)

O18区とP18区の境界に位置し、北端を土壙-270に削られている。平面形は不整な楕円形で、現存長径148cm、短径72cmを測り、深さ50cmの断面形はA a型で、二段に掘られている。78×34cmの楕円形を呈する下段の底面は海拔高3.54mで、やや凹凸が見られる。(光永)

**土壙-270** (第173図)

O18区の南東部に位置し、土壙-271との距離約6.5mである。平面形は不整な楕円形を呈し、長径133cm、短径82cmで、深さ92cmの断面形はA a型である。大きくは二段に掘られ、下段の底面は56×43cmの楕円形で海拔高3.63mとなる。(光永)

**土壙-271** (第173図)

O18区南辺中央部に位置し、竪穴住居-170との距離約7mである。平面形は楕円形を呈し、長径110cm、短径90cmを測る。深さ25cmの断面形はA a型で、二段に掘られ、75×62cmの上段中央が38×25cmに掘られて、下段底面の海拔高は4.04mを示す。(光永)

**土壙-272** (第173図)

竪穴住居-172の南寄りすぐ西で検出されたやや長円形の浅い土壙である。焼土・炭を多く含む埋積土の状況から、検出時には竪穴住居のカマドあるいは、その下部土壙の可能性が考えられたが断定する

ことはできなかった。時期的には古・中・Ⅱに比定される可能性が高い。(岡田)

**土壙-273** (第173図)

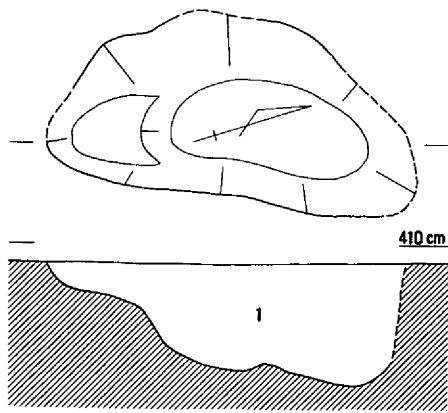
溝-115に接して検出された、全長2mあまりの細長い溝状の浅い土壙である。深さは一定でなく起伏に富む。東端で3694の須恵器杯が出土している。

時期は、古・後・Ⅱに比定される。(岡田)

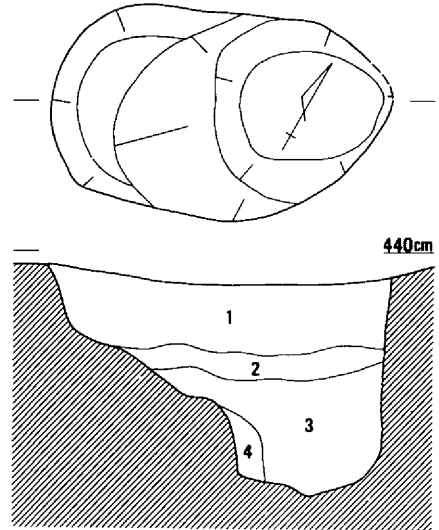
**土壙-274** (第173図、図版74)

前述の土壙-265、266と同じくP19区にあって検出された小形で平面形態がほぼ円形を呈した土壙である。壙内には3695の土器が図のように投入されたかのように出土した。土壙の規模は長辺55cm、短辺48cm、検出面からの深さは14cmを測り、底面は南を一段掘り窪めていた。

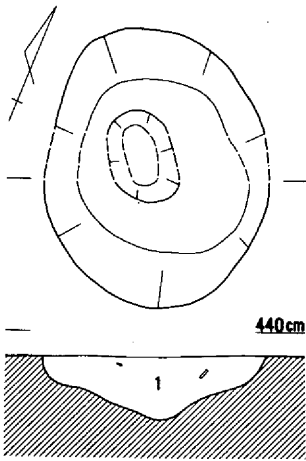
土壙の時期は壙内出土土器3695から古・後・Ⅲに属するものと考えられる。(二宮)



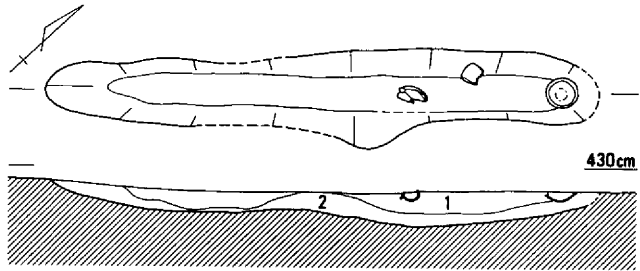
1 暗灰茶褐色砂質土  
土壙-269



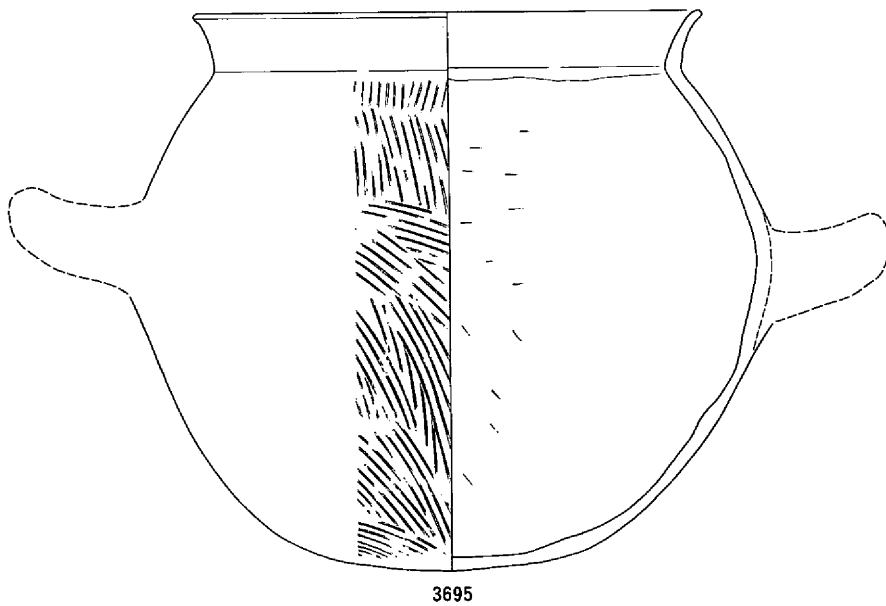
1 灰茶褐色土 3 暗灰褐色微砂  
2 暗灰褐色土 4 暗灰褐色細砂  
土壙-270



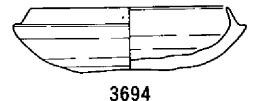
1 黒灰褐色土  
土壙-271



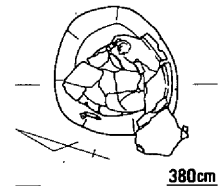
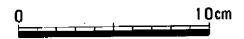
1 明褐色土(焼土塊多) 2 褐色土(焼土塊少)  
土壙-273



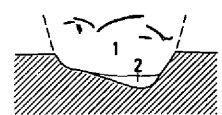
3695



3694



380cm



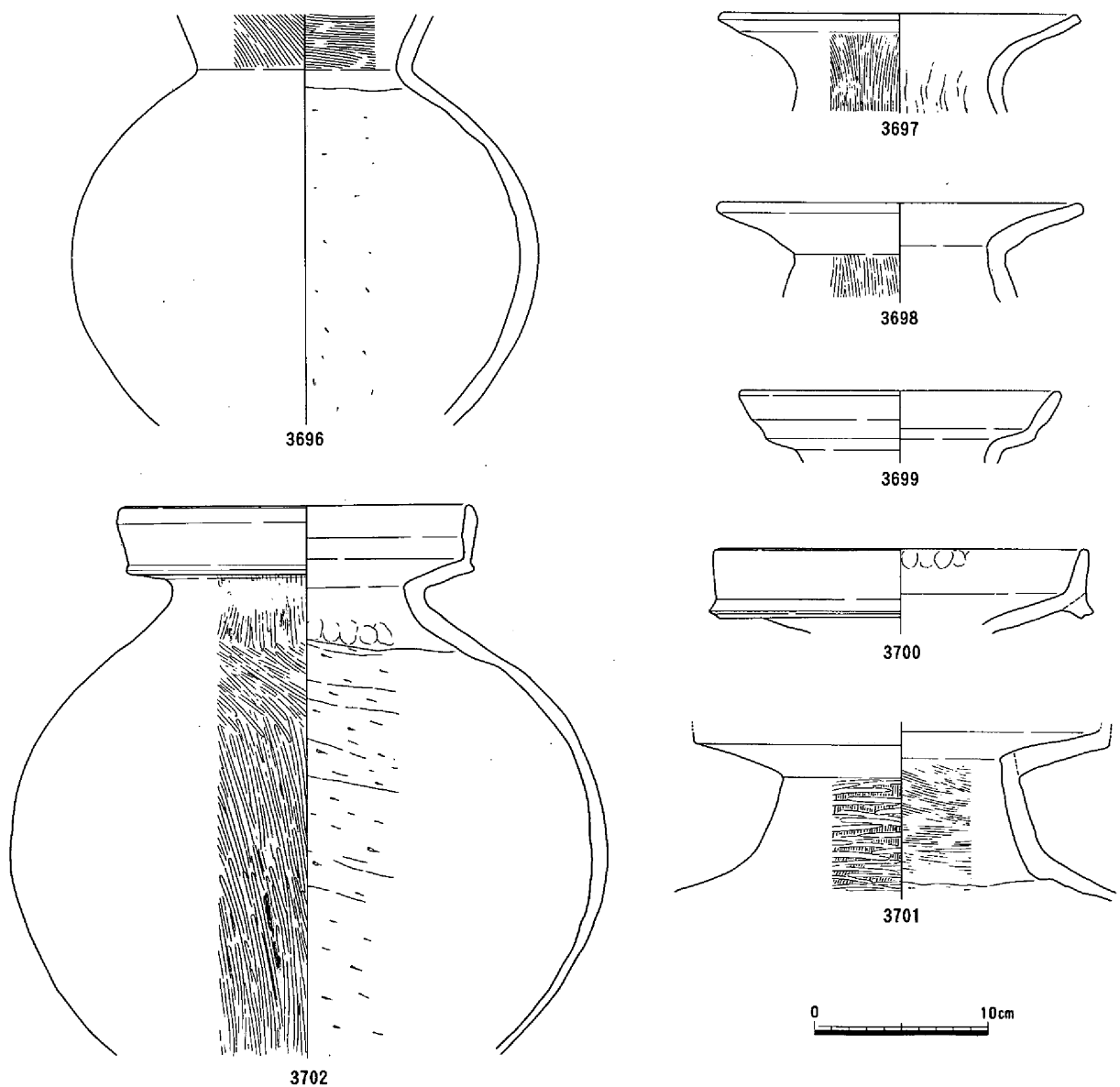
1 暗黄茶褐色土  
2 暗茶褐色  
土壙-274

第173図 土壙-269~271・273 (3694)・274 (3695)

(6) 土器溜り

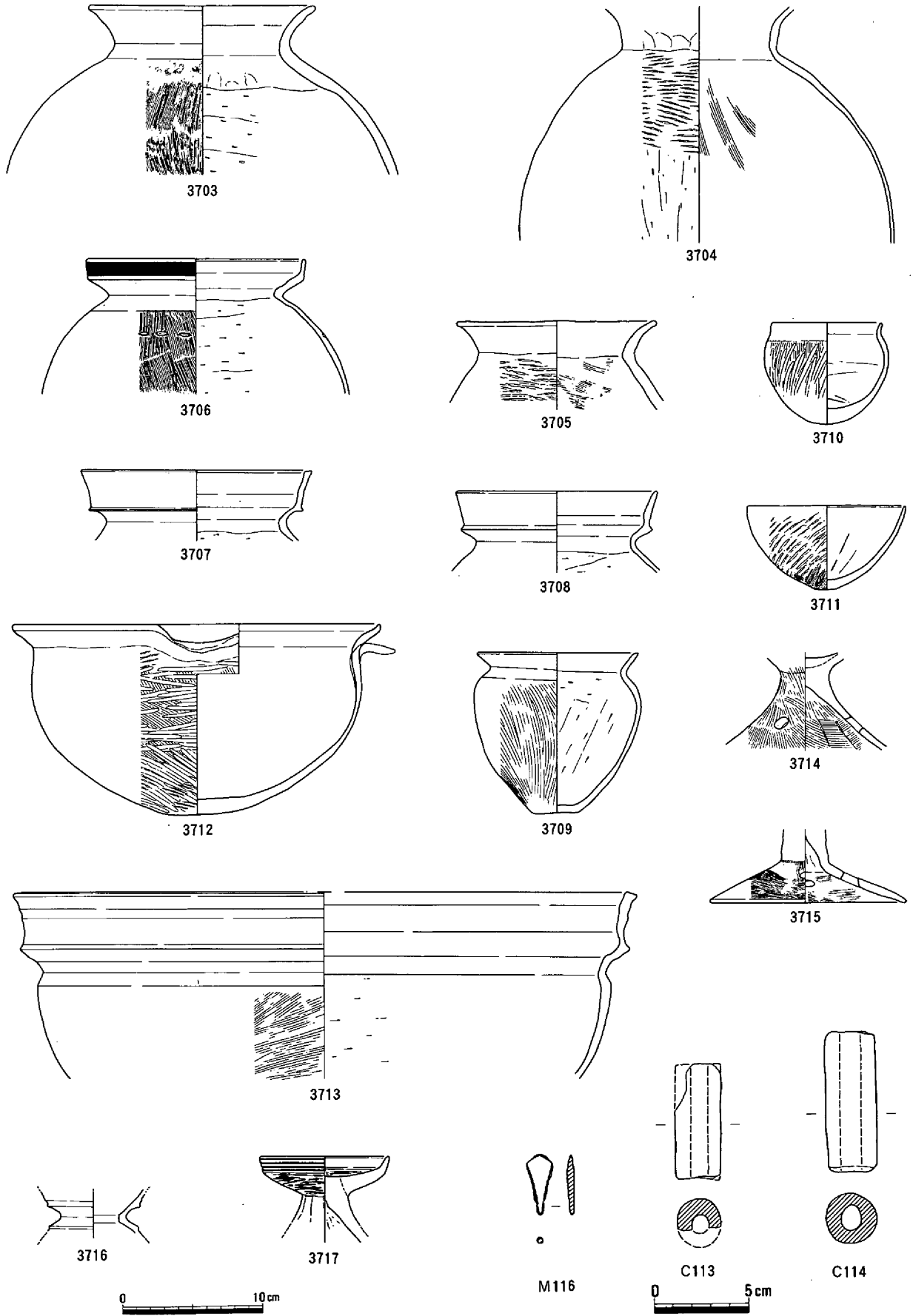
土器溜り-3 (第174・175図)

Q18区の北西、竪穴住居-136の上面に位置する。その分布範囲は竪穴住居-136の平面よりさらに広がりを見せ、8×8mに及ぶ。検出時点では大形品の出土状況から南北方向に延びる溝状土壌をも想定した。しかし、それは竪穴住居-136が埋積してゆく過程において住居中央部分に出来た7×1mの凹地の可能性が強くなった。掲載した土器以外に弥・後・Ⅱの土器片が多く出土する状況からも遺構の性格が早急には把握できなかったが、下位から出土した竪穴住居-136の時期が古・前・Ⅰということが明らかになり始めて「土器溜り」と判断をした経緯がある。8×8mの範囲内よりコンテナ(54×34×15)27箱分があり、8割方が土器片、2割が河原石を中心とする人頭大までの円礫であった。遺物の確認レベルは380~400cm間である。土器は壺、甕、高杯、片口鉢、鉢、鼓形器台、小形器台等

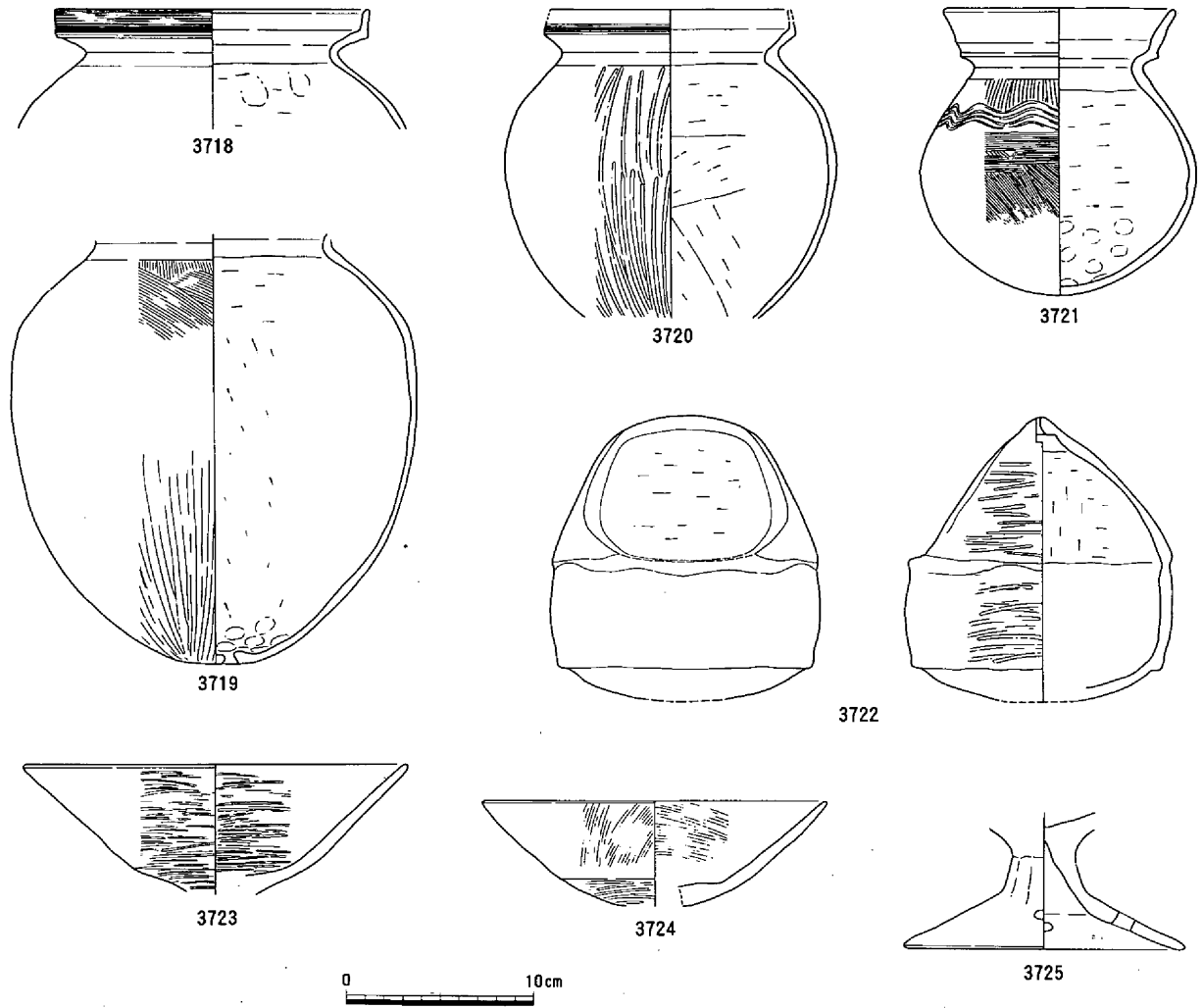


第174図 土器溜り-3 (3696~3702)





第175図 土器溜り-3 (3703~3717・C113・114・M116)

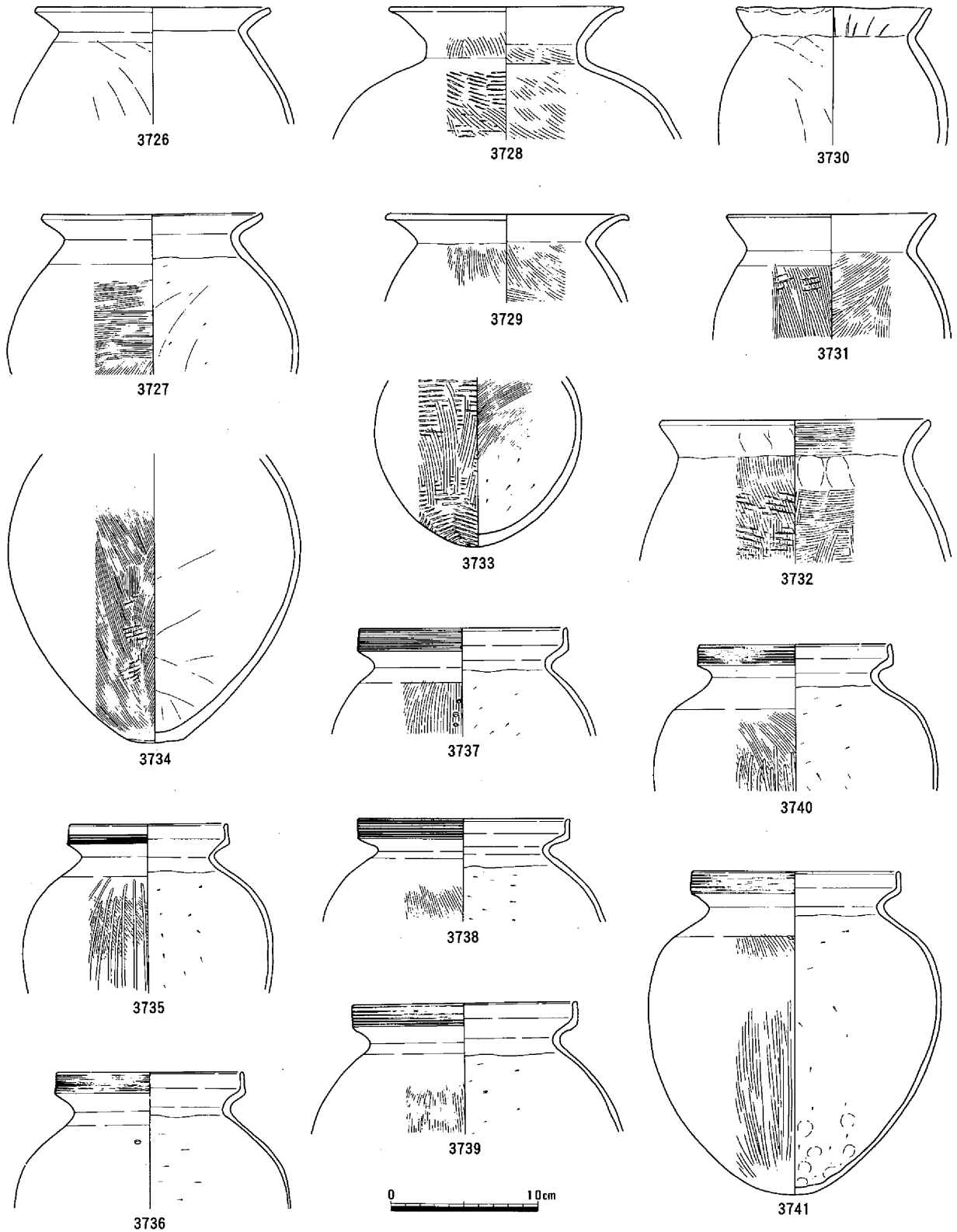


第176図 土器溜り-4 (3718~3725)

があり、他に鉄鏃、土錘等が出土している。なお、河原円礫類については検討できなかった。土器類は大半が破片であり、ほぼ完形品は3710のみである。3709の甕は古い時期の混入と考えられるが、他は古・前・Iの範疇で把えることができる。3707・3708・3716は山陰系と考えられる甕、鼓形器台であり、他にも小片ではあるが広島方面、播磨、讃岐、畿内のものと考えられる器種が認められる。この土器溜りの形成には、堅穴住居-136より特に東側に位置する堅穴住居からの土器の投棄が行われた可能性が思考される。(高畑)

土器溜り-4 (第176図、図版75)

Q18区の北西、土器溜り-3の南東7mに位置し、周辺に古墳時代の土壇数基が存在する。土器の分布範囲は東西に5m以上、南北1.6mであり、土器溜り-3と比べて非常に小規模である。南より北に向かって緩やかに傾斜が認められるが、おそらく自然の地形によるものであろう。その変換部分に集中分布した痕跡をとどめる。コンテナ1箱分の出土量であり、甕、高杯、手焙形土器、河原石の円礫等がある。すべて破片ではあるが、3719・3720・3721・3722・3725は半分くらい残存している。3721は口径12.2cm、胴部最大径14.9cm、器高15.5cmを測り、色調明褐灰色を呈する壺であり、山陰系の技法が顕著に認められる。土器分布に混在して鉄製品が7点出土しており、M119・M122・M123・M126・M131等がそれにあたる。これらの土器、鉄器の出土状況から、さらに土器溜りの南方向に



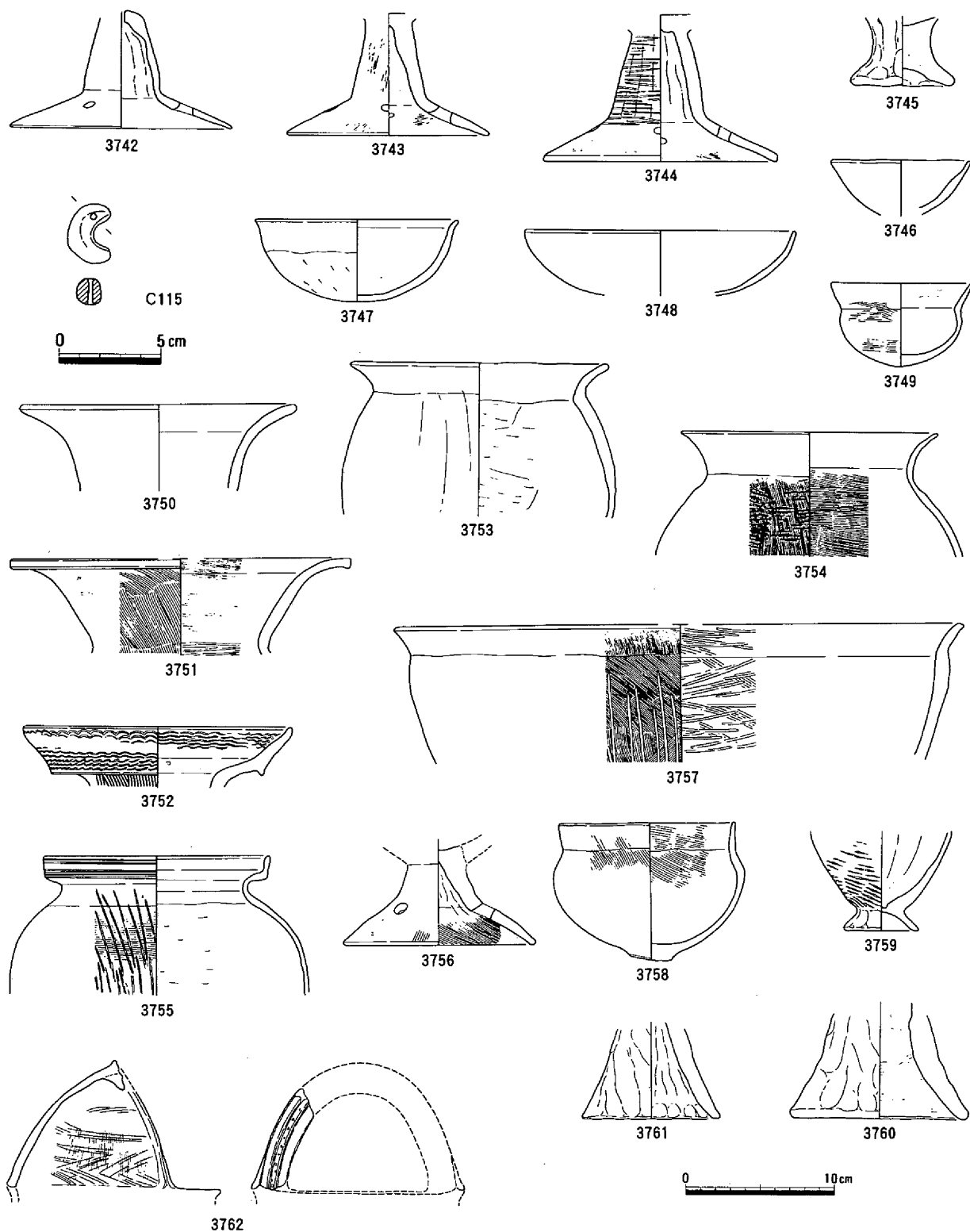
第177図 土器溜り-5 (3726~3741)

微高地が高くなり多くの竪穴住居等の遺構が存在する可能性を示している。

(高畑)

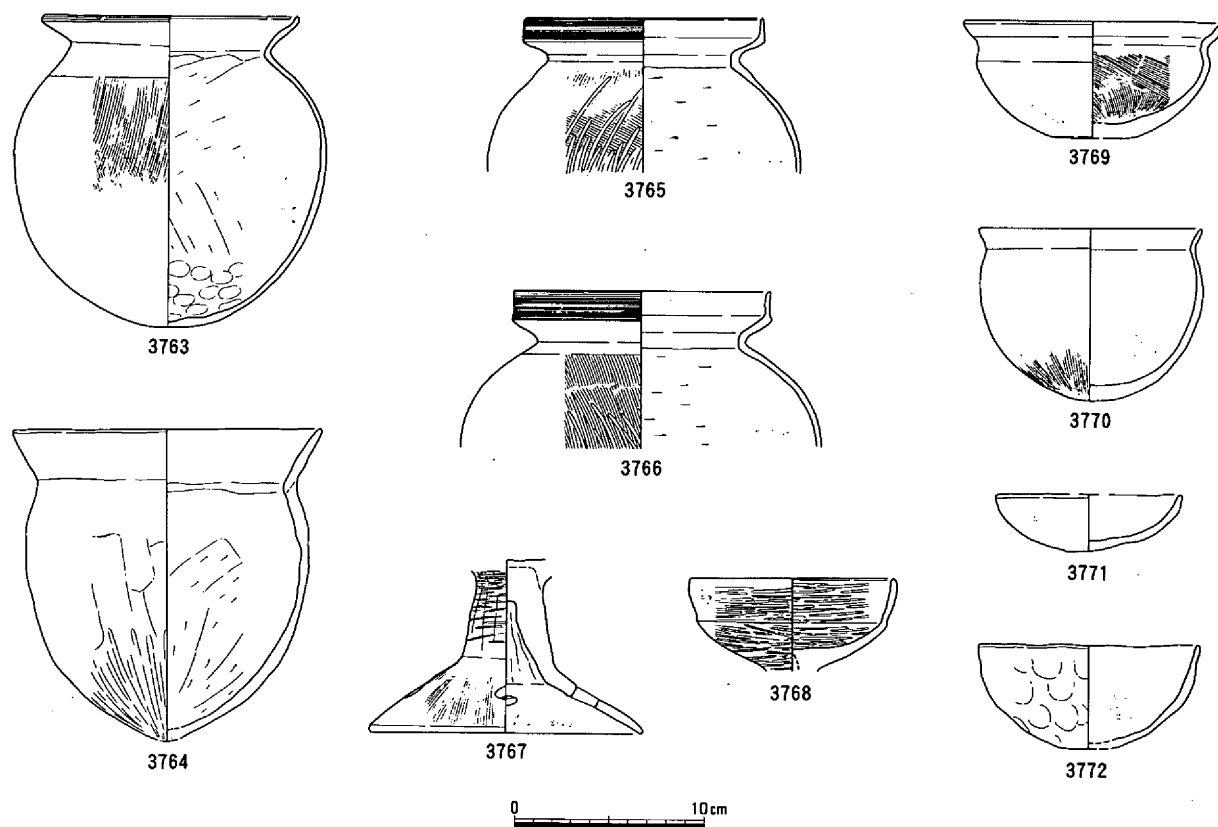
土器溜り-5 (第177・178図、図版75)

中屋調査区の南部にあり、住居群の東側沿辺部に位置している。竪穴住居-148の北にあり、溝-



第178図 土器溜り-5・6 (3742~3762・C115)

104の西側に近接している。4×2 mの範囲に投棄された状況で検出された土器群である。土器の器種には、甕・高杯・鉢があり、土製勾玉1個も検出された。台付鉢の脚部3745は弥生時代に属するもので、土器溜り中から出土しているが古い時代のものの混入である。



第179図 土器溜り-7 出土遺物 (3763~3772)

甕には、口縁部を「く」の字状に折り曲げたもの3726~3732と口縁部を上方へ屈曲し、外面に櫛描文を施したもの3733~3741がある。口縁部を「く」の字に折り曲げたものの中にも、外上方へ湾曲させるもの3728・3729のように特色をもったものもある。成形にタタキ技法を用いたもの3728・3731~3734がみられる。内面にはヘラケズリを施すものが多いが、ハケメを施したもの3728・3729・3731~3733もみられる。底部は丸底のもの3733とわずかに平底の痕跡を残すもの3734がある。

口縁部に櫛描文を施したものは、いずれも外面をハケメとヘラミガキで整え、内面にはヘラケズリを施している。底部には、指頭圧痕のみられるもの3741がある。肩部に刺突文のあるもの3736・3737もある。高杯は脚部のみであるが、少し長い柱状部から裾部が屈曲して広がる。鉢には、椀形のもの3747、皿状のもの3748、柑に近似したもの3749がある。土製勾玉C 115は、長さ3.0cm、幅1.1cm、厚さ1.5cm、重さ8.7gを測る。時期は古・前・前に比定される。(正岡)

#### 土器溜り-6 (第178図、図版75)

中屋調査区の南部にあり、住居群より少し東側に位置している。溝-102に近接している。4×2mの範囲へ投棄された状況で検出された土器群である。土器の器種には、壺・甕・鉢・高杯・台付鉢・手焙り・土製支脚がある。

壺には、口縁部を大きく朝顔形に開くもの3750・3751と二重口縁のもの3752がある。二重口縁の壺は内外面に櫛描の波状文を施し、近畿地方の系譜をもっている。甕は口縁部に櫛描文を施すものである。大形の鉢3757は口縁部を「く」の字に小さく外反させているが、施文はない。内面はハケメである。小形鉢3758は、柑に近似するもので小さな底部がある。高杯は短脚のものである。台付鉢3759はタタキ成形で、いわゆる製塩土器である。

土製支脚3760・3761は、上部を欠失している。手捏ねによる成形である。手焙り形土器は、上の一部だけであるが、覆部の端を拡張し、施文している。

時期は古・前・前に比定される。

(正岡)

#### 土器溜り－7 (第179図、図版75)

中屋調査区の南端部にあり、住居群の東端部に位置する。竪穴住居－157の北側に近接している。西側と北側にも竪穴住居がある。4×2mの範囲に投棄された状況で検出された土器群である。土器の器種には、甕・高杯・鉢がある。

甕には、口縁部を「く」の字状に折り曲げたもの3763・3764と口縁部を上方へ屈曲させ、外面に櫛描文を施すもの3765・3766がある。3763の口縁は、端部を小さく内側に屈曲させている。高杯の杯部3768は、口縁部を上方へ立ち上げ、脚部3767は短い。杯部の内外面には小さなヘラミガキが施されている。鉢には、口縁部を上方へ屈曲させたもの3769、「く」の字状に小さく曲げたもの3770、皿状のもの3771、手捏ねのもの3772がある。

時期は古・前・前に比定される。

(正岡)

#### 土器溜り－8 (第180～182図、図版75～77)

中屋調査区の南端部にあり、住居群から少し離れた東側に位置する。水田部までは5mのところであり、微高地の端に近い。9×4mの範囲に投棄された状況で検出された土器群である。溝－104に近接している。土器の器種には、壺・甕・高杯・鉢・台付鉢がある。ほかに、砥石2個が存在する。台付鉢の脚部3804は、弥生時代のもので、土器溜りへ混入したものである。

壺には、口縁部を「く」の字状に折り曲げたもの3773・3774と二重口縁としたもの3775～3778・3792がある。「く」の字状に折り曲げたものには、端部を小さく屈曲させたもの3773と口縁部を上方へ拡張したものがある。3774の胴部には、篋目が残っている。二重口縁の壺には、明瞭な上開きの頸部をもつもの3775・3778、しぼられた頸部から一度外反し、さらに上方へ拡張するもの3776・3777・3792がある。3778の壺は口縁部の内外に小さなヘラミガキを施し、胴部内面はハケメ調整となっている。胴部外面には、篋目が残っている。

甕には、口縁部を「く」の字状に折り曲げたもの3779～3781と口縁部を上方へ屈曲させ、櫛描文を施すもの3782～3790、擬凹線文を施すもの3791がある。3781の口縁端部は上方へ小さく屈曲させている。口縁部に櫛描文を施すものでは、胴部下半に指頭圧痕があり、上半はヘラケズリを施している。3791は櫛描文ではなく擬凹線文を施していて、古い様相を残したものである。また、底部に平底からの系譜をもつくせを残したもの3789・3790・3791などがみられ、櫛描文となる甕としては、古相であることが分かる。高杯の杯部は、内外面とも小さなヘラミガキを施している。鉢には、小形のもの3799～3801と大形のもの3802・3803がある。ほかに、流紋岩質溶岩製の砥石が2個ある。

時期は古・前・Iに比定される。

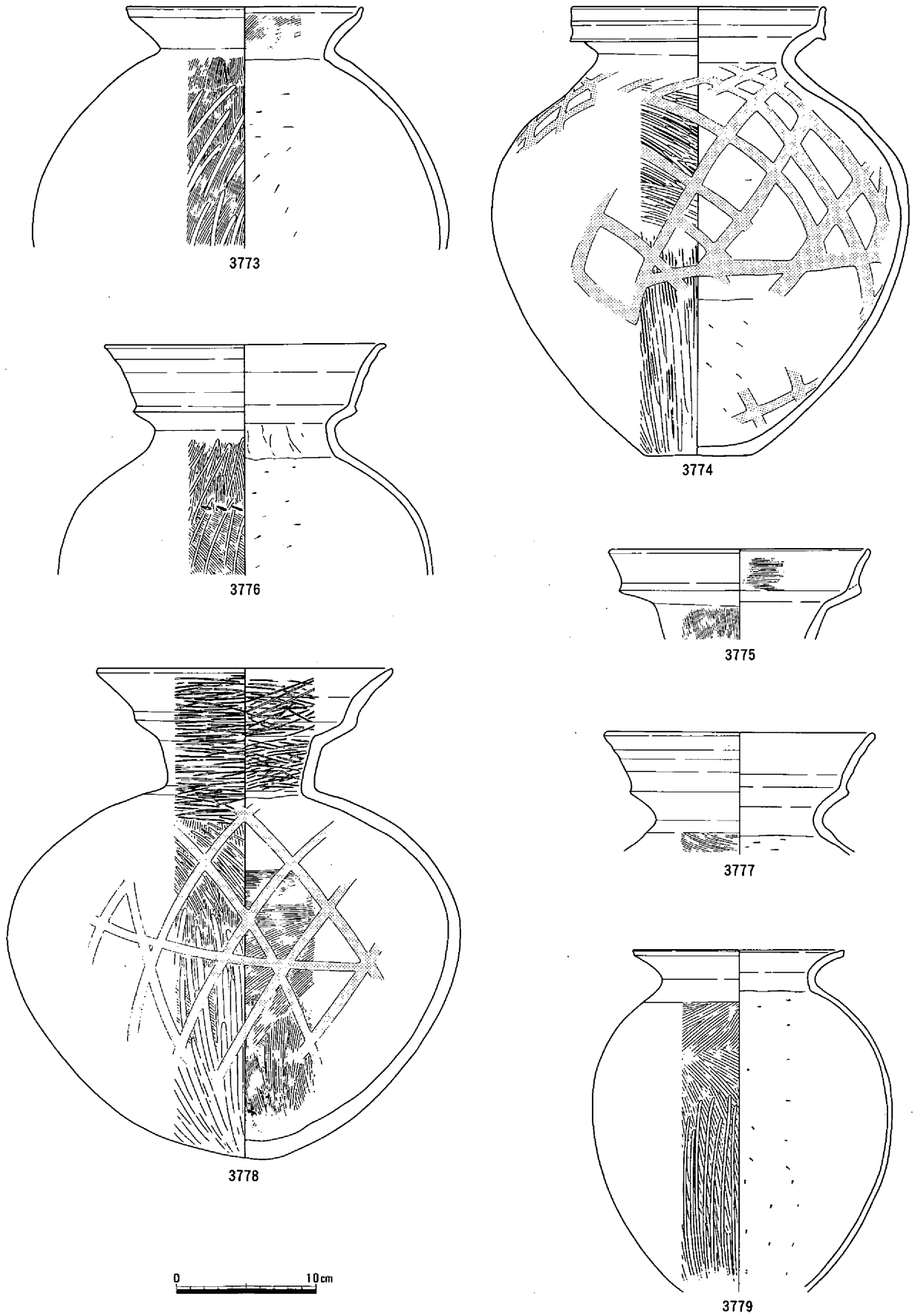
(正岡)

#### 土器溜り－9 (第183図、図版77)

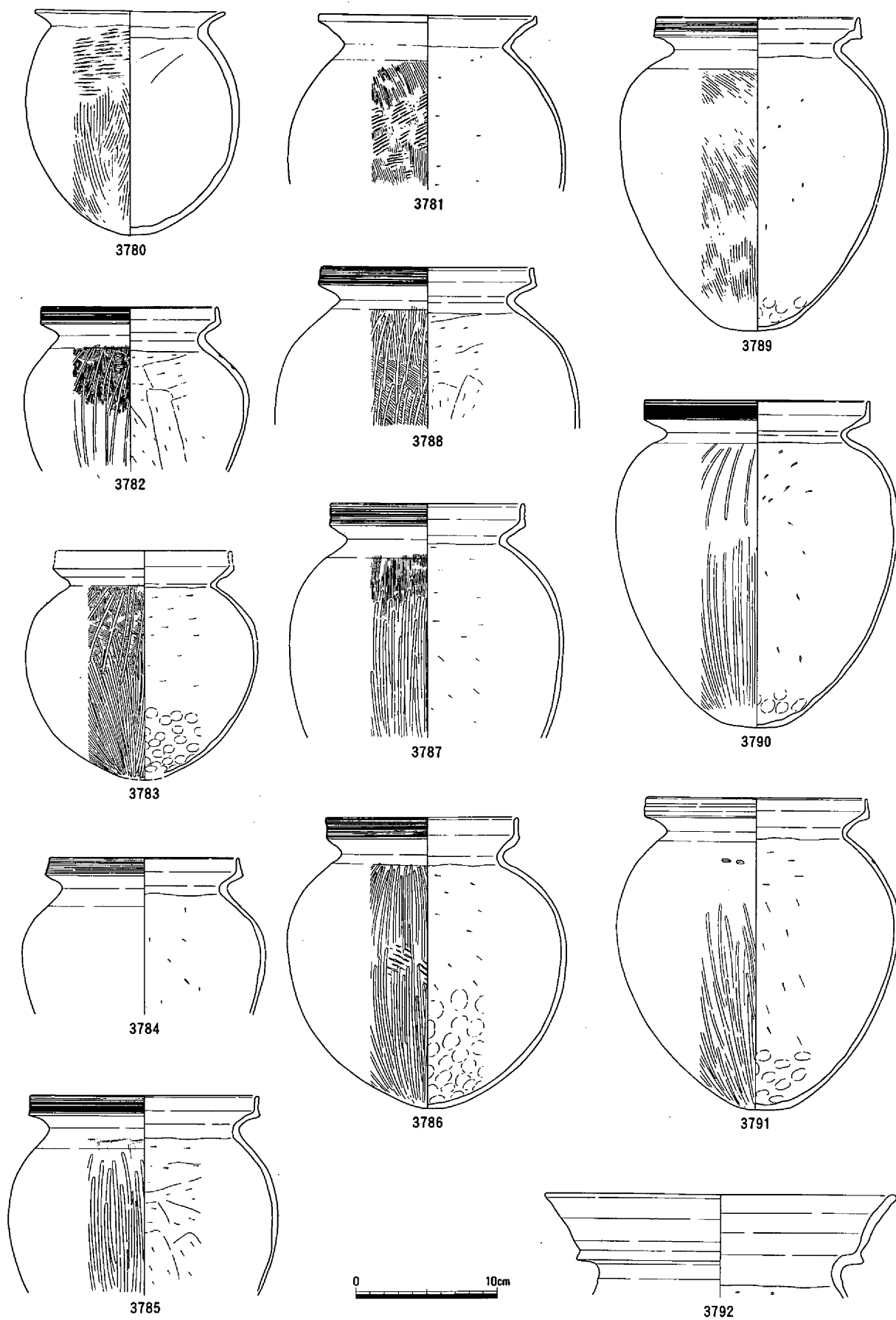
中屋調査区の南端部に位置し、住居群から東へ離れている。微高地端部にあり、水田部への傾斜面にある。破片が散布した状況にある。

ここから出土した高杯3805は、杯部が深く、脚部は長くなり、裾部は屈曲して開く。時期は古・前・前に比定される。

(正岡)

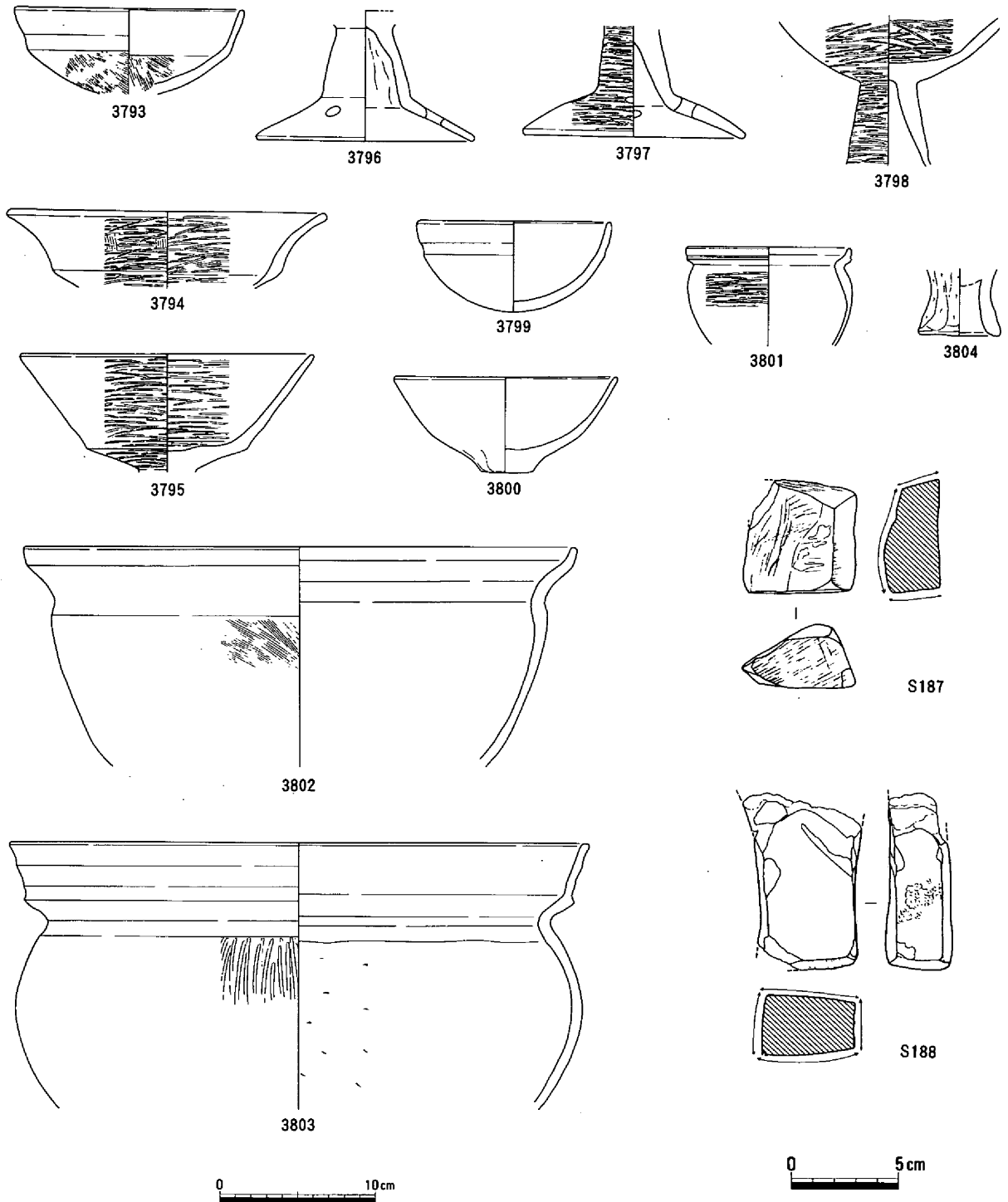


第180図 土器溜り-8 (3773~3779)



第181図 土器溜り - 8 (3780~3792)





第182図 土器溜り-8 (3793~3804・S167・168)

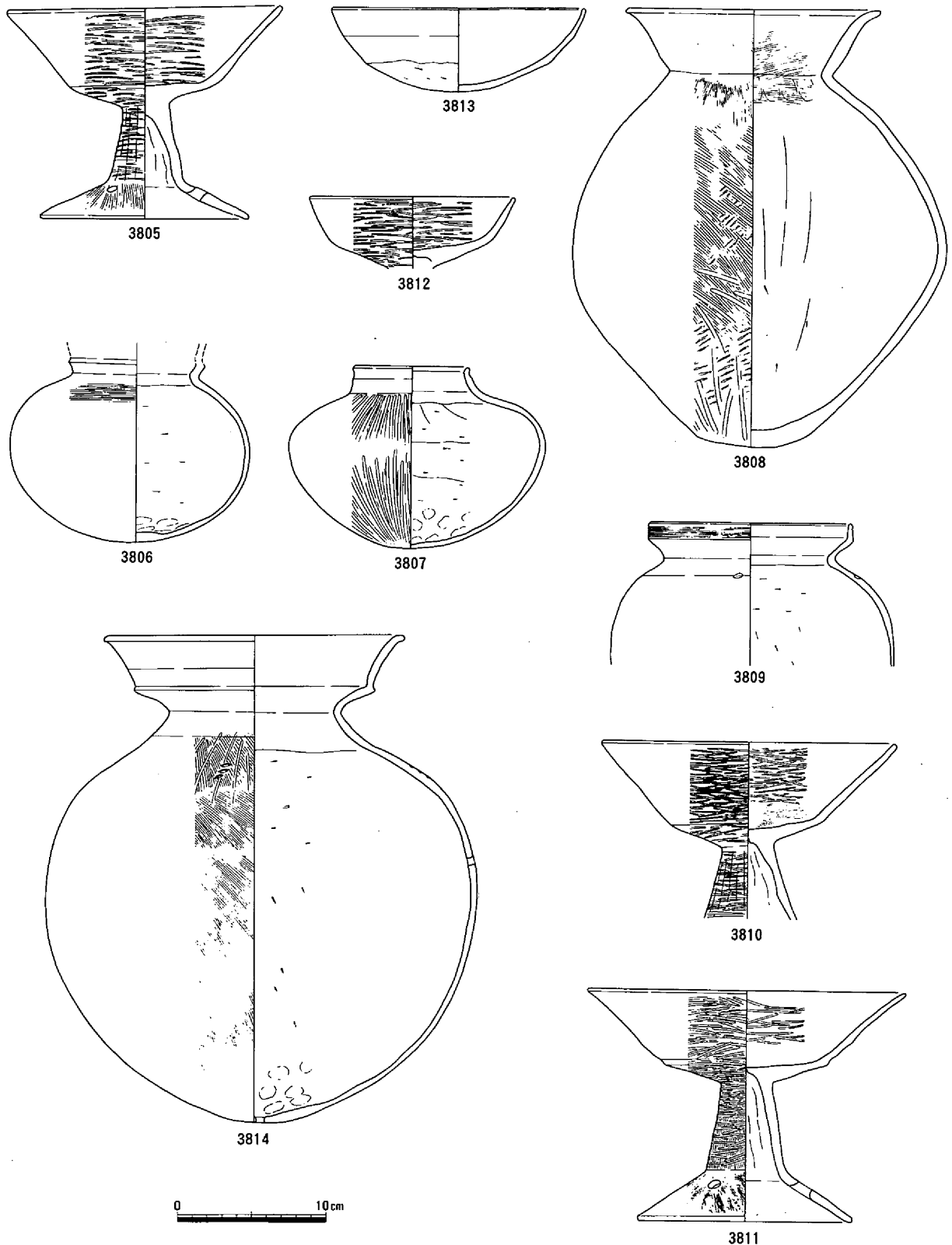
土器溜り-10 (第183図、図版77・78)

中屋調査区の南部にあり、住居群から東へ離れている。径1mくらいのまとまりである。

出土した土器には、壺・甕・高杯・鉢がある。3806は、球形の胴部から口縁部が立ち上がるもので、山陰系のものである。3807は短頸の壺で、3808は口縁部を「く」の字状に開くものである。甕は口縁部に櫛描文を施すものである。高杯は、杯部の内外面を小さなヘラミガキを施し、脚部は長い。鉢3813は皿状のもので、底部付近をヘラで削っている。

時期は古・前・前に比定される。

(正岡)



第183図 土器溜り-9 (3805)・10 (3806~3813)・11 (3814)

土器溜り-11 (第183図、図版78)

中屋調査区の南部にあり、住居群から東へ離れている。微高地の端部にあり、水田部に近接している。土器溜り-10からは北東へ8mの所である。ここから出土した壺3814は、二重口縁となり、肩部に刺突文を配し、胴部と底部に穿孔している。時期は古・前・前に比定される。(正岡)

## (7) 溝

## 溝-101 (第184~186図、図版78・79)

中屋調査区の南部にあり、住居群の東側に位置する。溝-103・104によって切られている。幅1mほどの浅い溝であるが、多量の土器を出土した。土器には、壺・甕・高杯・鉢・鼓形器台がある。

壺には、口縁部を朝顔形に開くもの3815・3816と二重口縁になるもの1817~1821がある。二重口縁の壺には、底部内面に指頭圧痕を残すもの3820がある。3821の壺は、口縁部の立ち上がりが他のものに比べて小さく、肩部に横位のヘラミガキを施すなど特徴がある。

甕は口縁部を上方へ折り曲げ、外面に櫛描文を施している。肩部に斜位のハケメを施したあと、肩部に粗く、胴部下半に密なヘラミガキがなされている。器壁は薄く、煤が付着しているものもある。肩部に刺突文を配したもの3824・3829がある。

高杯の杯部は深くなり、口縁部が直線的にのびるもの3830~3833と二段になるもの3841~3843がある。脚部は長いものと短いものがある。裾部は屈曲して広がり、円孔を3~4個配している。

鉢には、大形のもの3844と台付のもの3845・3846、小形手捏ねのもの3847、椀形のもの3848、埴形のもの3849がある。鼓形器台3850は小形のものである。

時期は古・前・前に比定される。

(正岡)

## 溝-102 (第187~190図、図版79~81)

中屋調査区の南部にあり、住居群の東側に位置する。溝-104と併走し、途中でなくなる。埋土中からは、多量の土器が出土した。土器の器種には、壺・甕・鉢・高杯がある。

壺には、二重口縁のもの3851~3855・3857・3858と頸部から大きく外反し、端部を少し肥厚し、角張るもの3856がある。二重口縁のものは、すばまった頸部から外反し、屈曲して口縁部が斜め上方へ広がるもの3851~3853・3855と短いが上方で内傾する頸部を有するもの3852がある。3856には篋目が残っている。この土器は香川県に系譜をもつものである。3857の壺は、頸部の上方へ開き、口縁部は大きく開く。外面には、丁寧なヘラミガキが施され、内面はハケメである。この土器は近畿地方に系譜をもつものである。

甕には、口縁部を「く」の字に折り曲げるもの3860・3861と口縁部に櫛描文を施すもの3862~3874がある。鉢には、埴形のもの3875~3879と椀形のもの3880~3886、小さな脚の付くもの3887、タタキメのある台付鉢3888、大形のもの3889がある。高杯には、杯部に段をもつもの3893ともたないもの3890~3892がある。時期は古・前・前に比定される。

(正岡)

## 溝-103 (第190図)

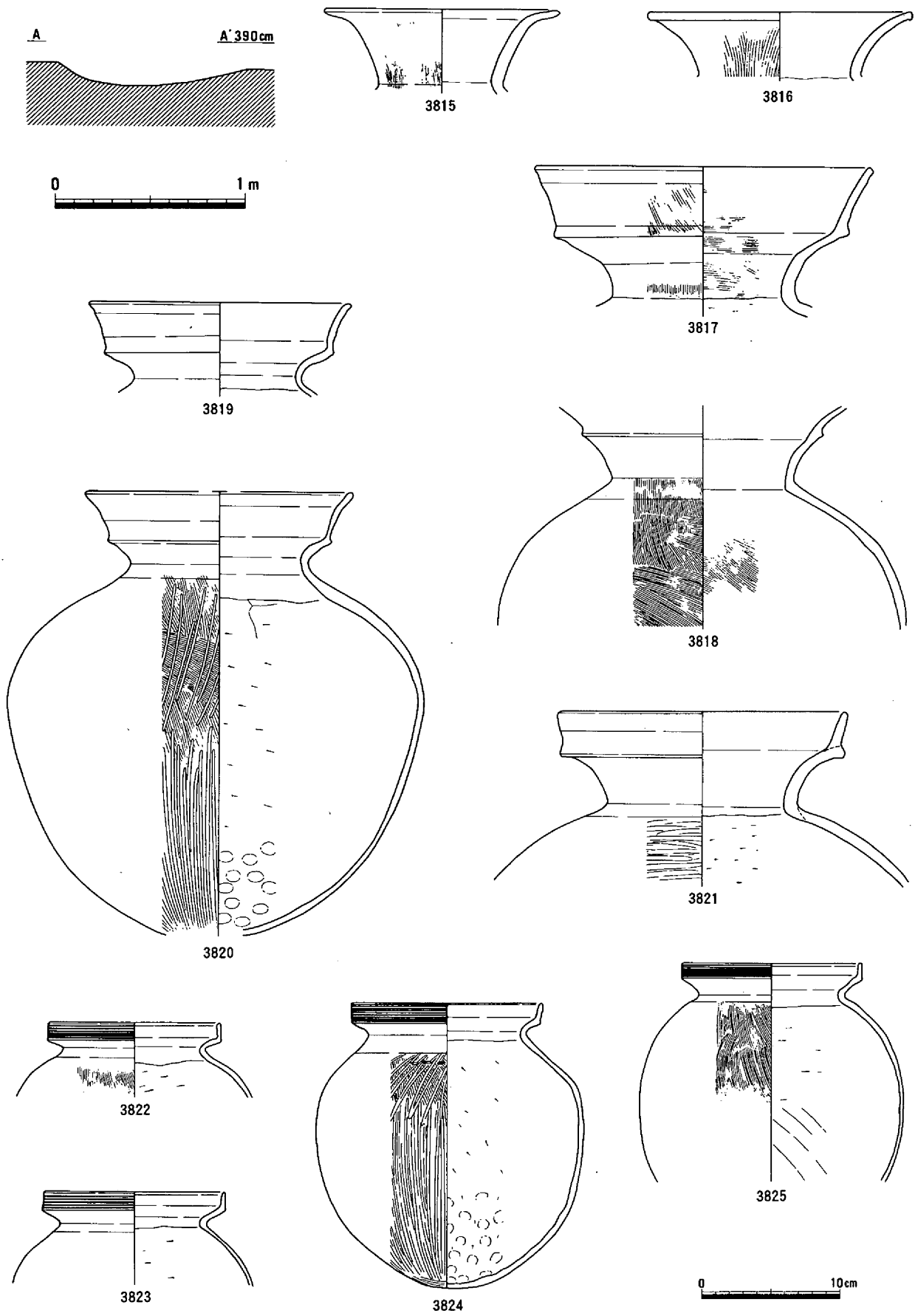
中屋調査区の南部に位置し、溝-101を切っている。他の溝が南北方向に流れるのに対し、東西方向を示している。幅50cmほどの浅い溝で、埋土中から少量の土器が出土している。出土した土器には、口縁部に櫛描文を施す甕3898がある。時期は古・前・前に比定される。

(正岡)

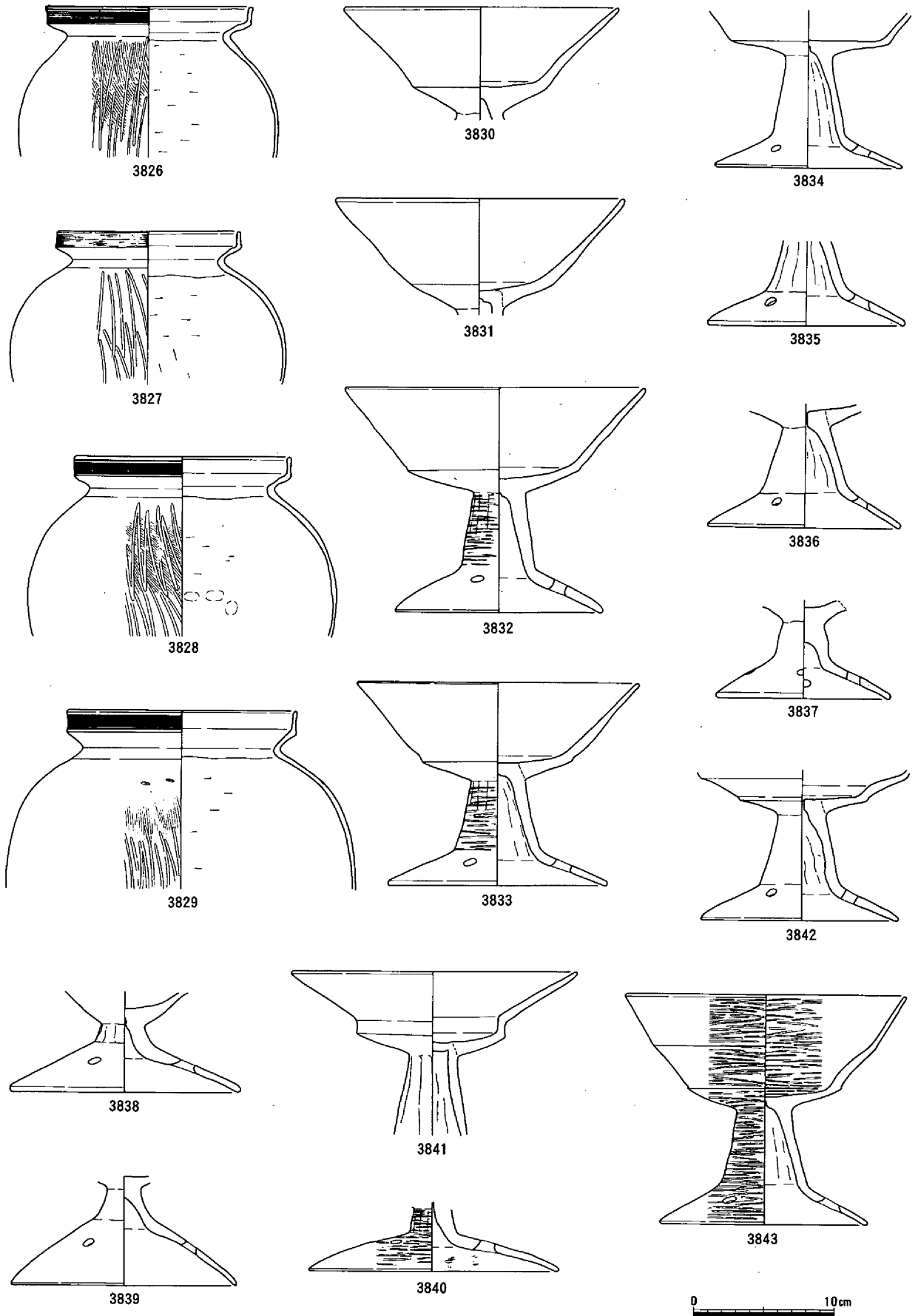
## 溝-104 (第191図、図版81・82)

中屋調査区の南部にあり、住居群の東側に沿って流れている。幅80cmほどの浅い溝であるが、埋土中から土器と砥石を出土した。土器には、壺・甕・鉢・三連壺がある。

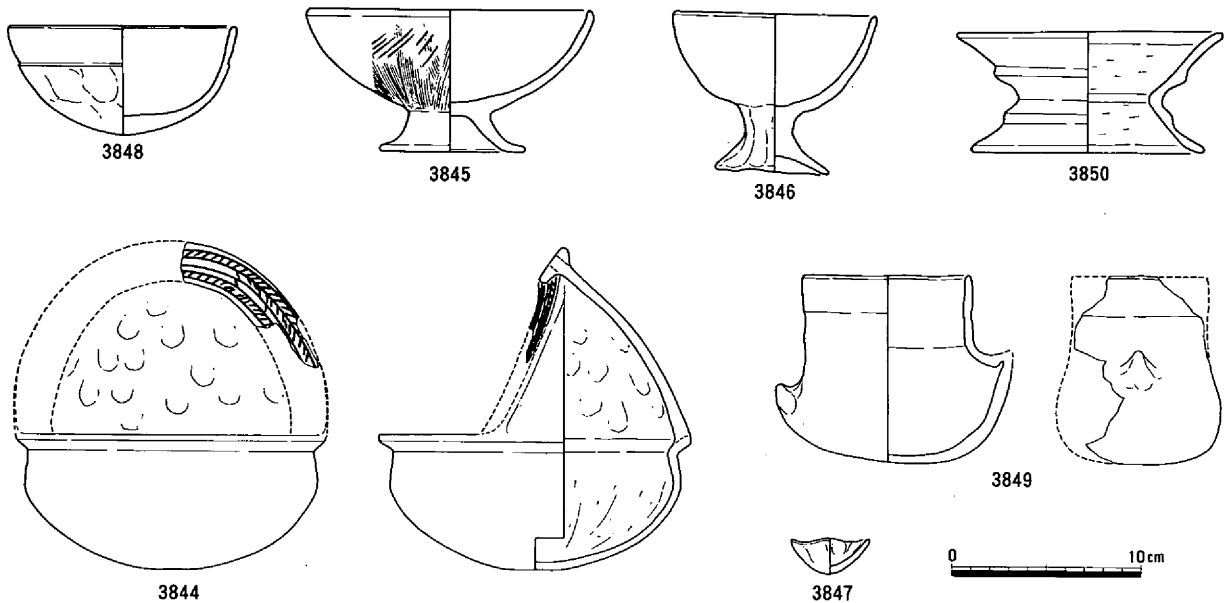
壺3899は、上方で開く頸部から口縁部がさらに外反する。甕3900・3901は口縁部に櫛描文を施すものである。鉢には、小形のもの3902と大形のもの3903がある。三連壺3904は特異なもので、3個の埴



第184図 溝-101 (3815~3825)



第185図 溝-101 (3826~3843)



第186図 溝-101 (3844~3850)

を管状の粘土紐でつなぎ、脚部が付くものである。脚は欠損している。砥石C189は流紋岩質溶岩製のものである。時期は古・前・前に比定される。(正岡)

溝-105 (第191図)

中屋調査区の南部にあり、竪穴住居-158の西側に近接している。北北西から南南東へ流れ、低位部の水田へ流入する。断面形はU字形を呈し、幅130cm、深さ30cmを測る。埋土中の遺物は少ないが、時期は古・前に比定されよう。(正岡)

溝-106 (第191図)

中屋調査区の南部にあり、微高地裾部と水田の間に位置する。土器溜り-8付近から南へ流れている。断面形はU字形を呈し、幅150cm、深さ20cmを測る。用水に利用されたものと考えられる。時期は水田と同じで、古・前・前に比定される。(正岡)

溝-107 (第141図)

微高地上で検出されたほぼ南北方向を指し示す浅い溝である。検出全長は約17mである。明確な掘り方を示すというよりは、溝が存在した痕跡と言った方がよいほどの残存状態である。

時期的には、古・前・IないしIIに比定される。(岡田)

溝-108 (第192図、図版82)

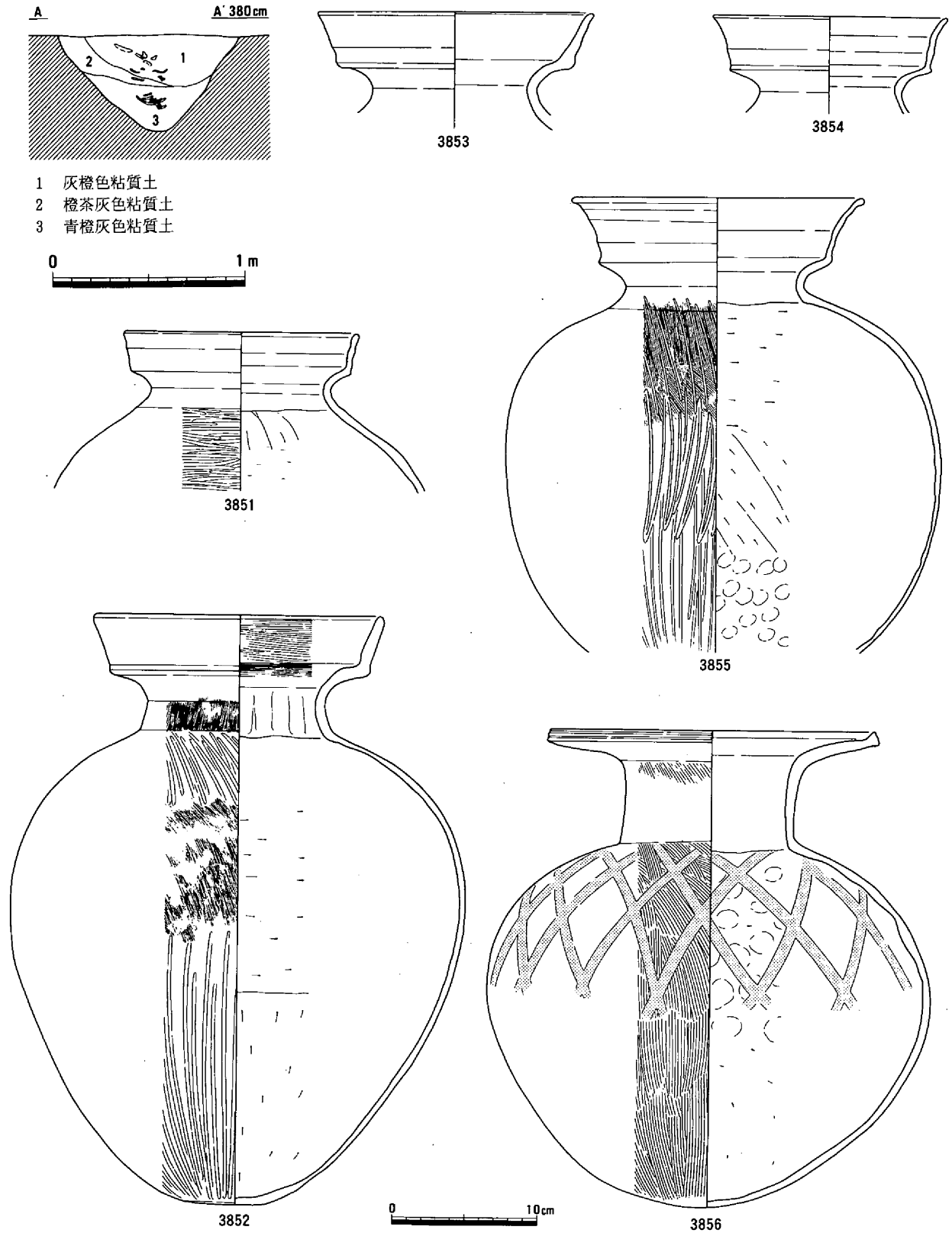
O19区南東部からP19北東部にかけて、北北東から南南西へ流走し、溝-109に削られる。標準的な規模は、上幅160~198cm、下幅110~170cm程度で、断面形はA b型を呈する。底面の海拔高は2.85~3.17mを測り、大きく1回の溝浚えが見られる。(光永)

溝-109 (第192図、図版82)

O19区東部からP19区北東部で、溝-108を削り、溝-110・111に削られる。微高地沿辺を北から南へ流れ、標準的規模は上幅210~300cm、深さ121cm、下幅50~90cmを測り、断面形はA b型を呈す。遺存状態が悪く不明確であるが、低位部の水田に開口していたと考えうる箇所もある。(光永)

溝-110 (第141図)

O19区北東部で、溝-109の上層に位置して、北西から南東方向へ直線的に掘られている。規模は

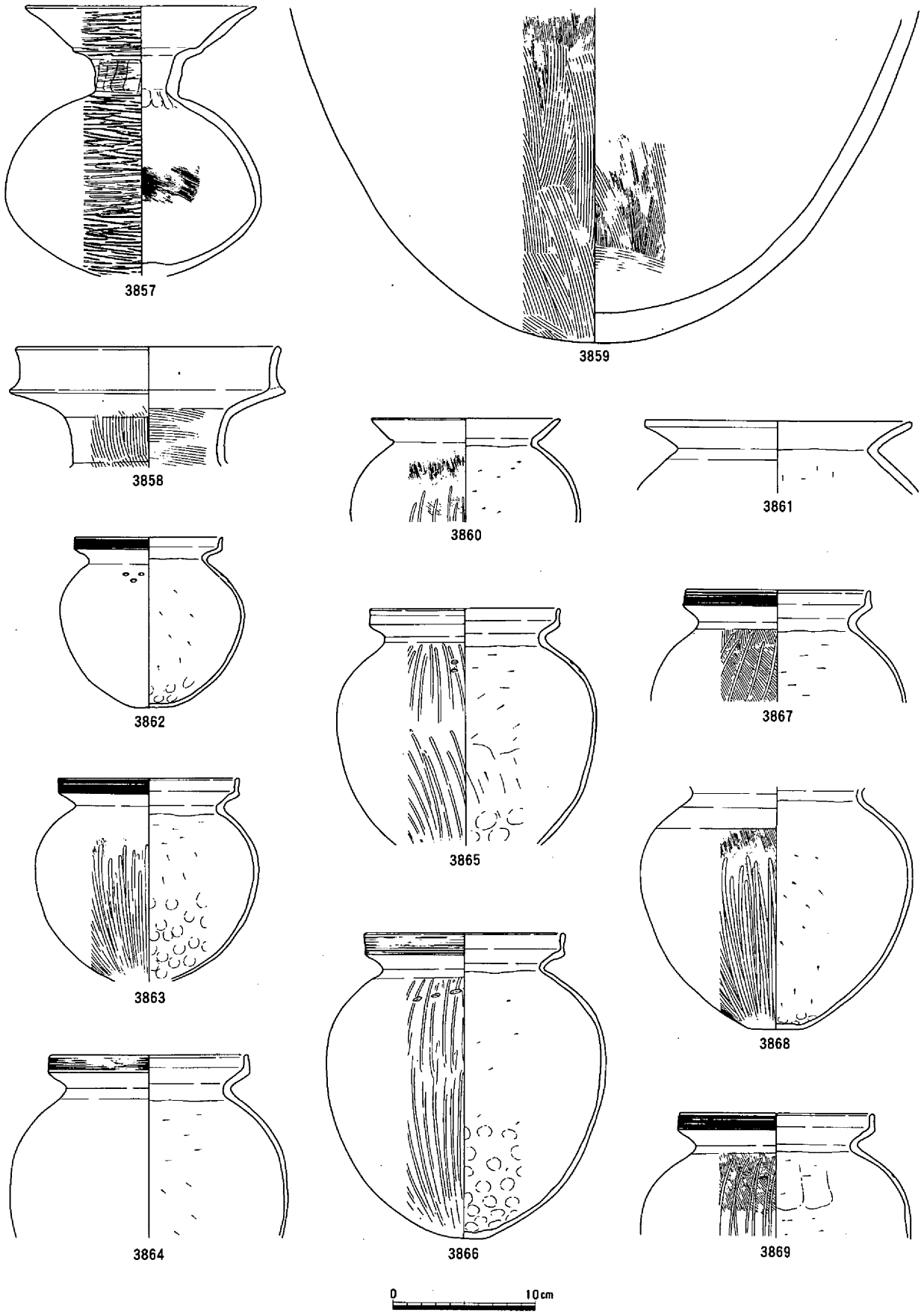


第187図 溝-102 (3851~3856)

上幅80~90cm、下幅10cm、深さ13cm程度で、断面形はA a型である。底面の海拔高は3.30m前後を示す。(光永)

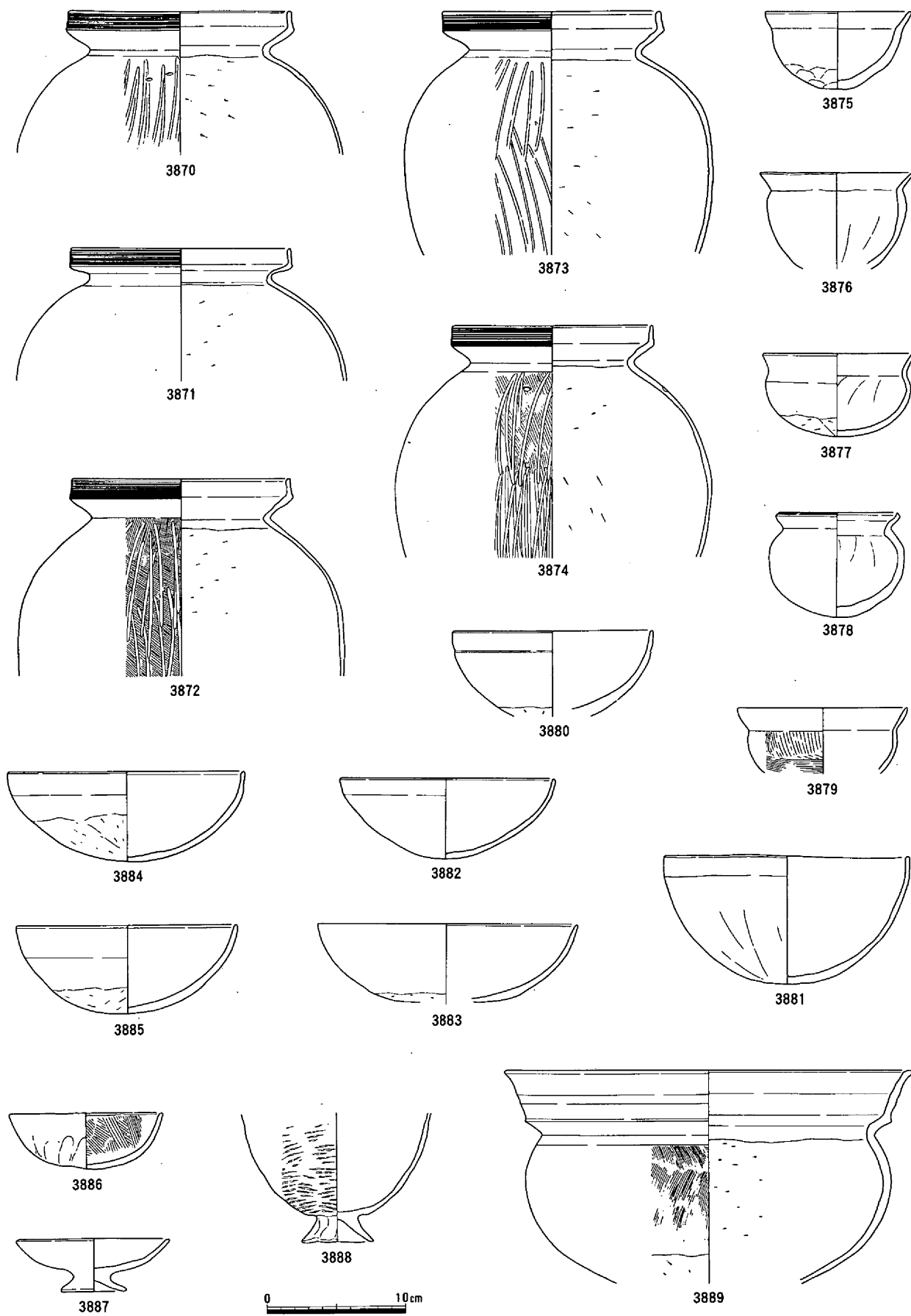
溝-111 (第141図)

019区南東部で検出され、溝-109を削っている。検出した位置が微高地肩口であり、北東から微

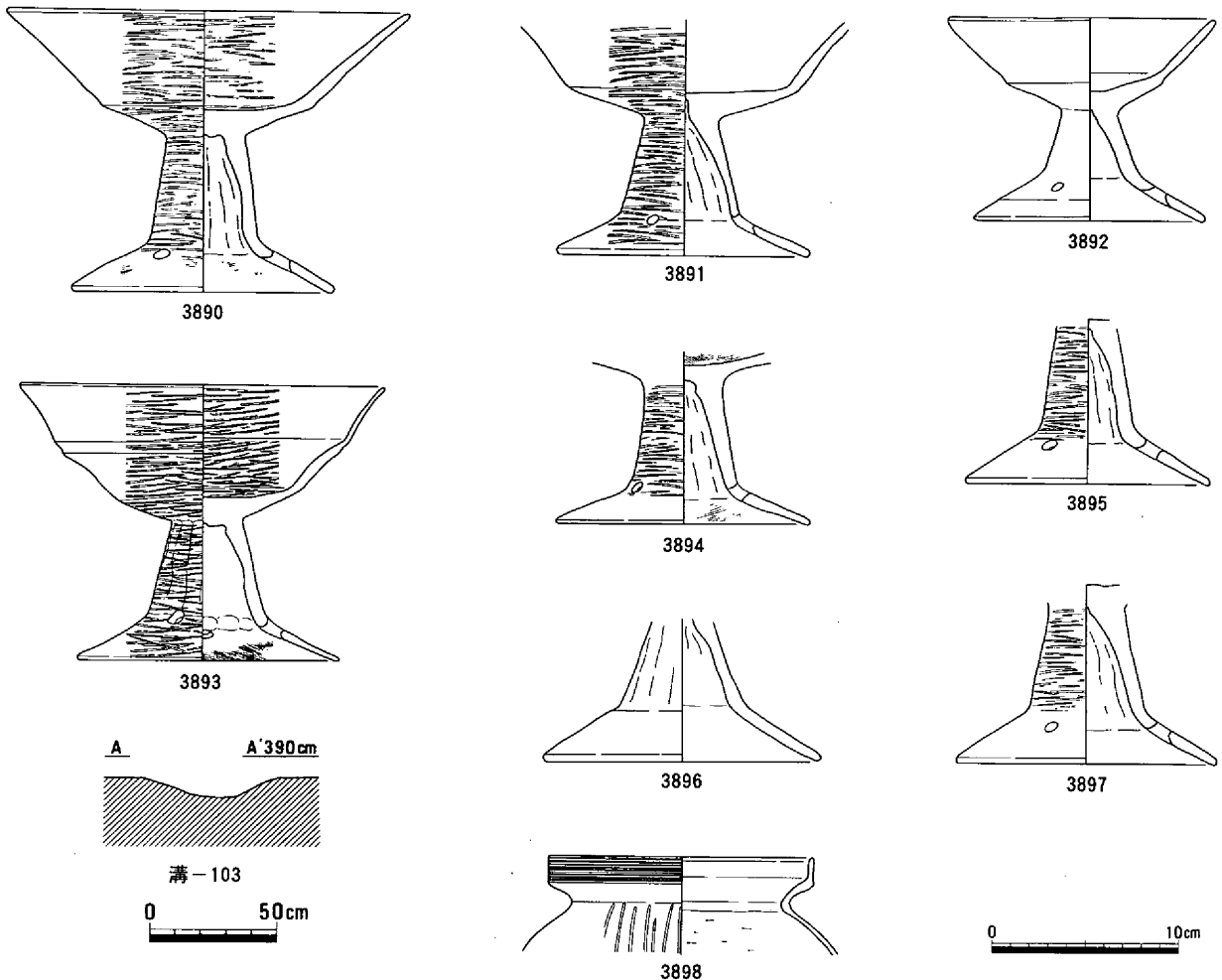


第188図 溝-102 (3857~3869)





第189図 溝-102 (3870~3889)



第190図 溝-102 (3890~3897)・103 (3898)

高地に掘られた溝が低位部へ開口する状況を示している。微高地部分での規模は、上幅270~305cm、下幅60~120cmで、深さ98cmの断面形はA a型である。(光永)

溝-112 (第141図)

O19区南東部からP19区北東部で検出されたが、平面的な掘り下げが行なえず、北北東から南南西へ蛇行する流路は断面観察を繋いだものとなっている。規模は上幅で290~426cm、下幅で50cm前後を測り、深さ112cm以上となる断面形はA b型である。(光永)

溝-113 (第193図、図版82)

中屋調査区の南部にあり、住居群から東へ伸びている。北東から南西へ流れるようで、住居群のところで分からなくなる。断面形はU字形を呈し、幅60cm、深さ10cmを測る。埋土中から壺3907が出土した。時期は古・前・前に比定される。(正岡)

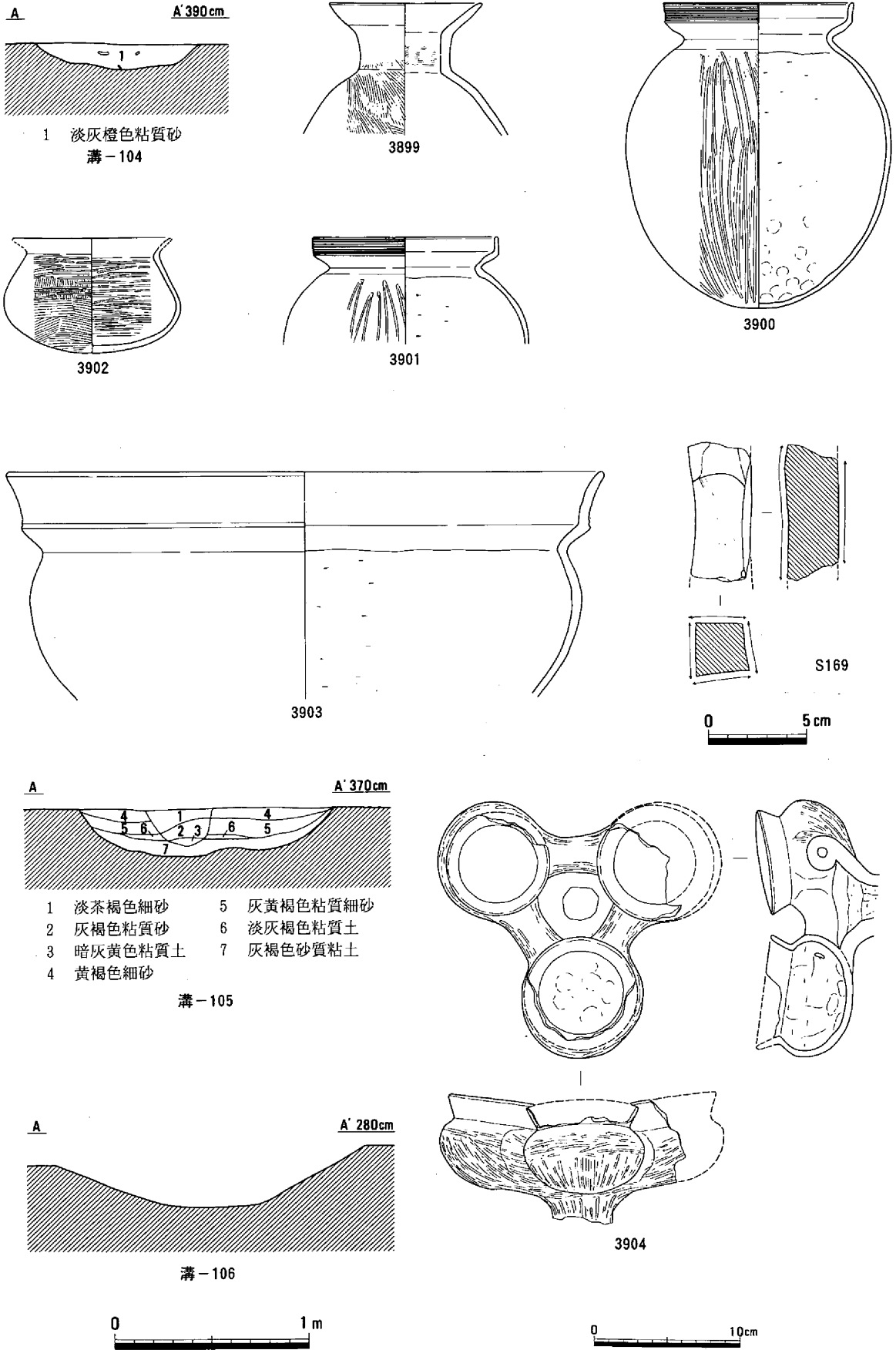
溝-114 (第193図、図版82)

竪穴住居-174の南方約15mで検出された東西方向の溝である。検出全長はわずかに5mほどである。幅約80cm、深さ約30cmを測り溝底はU字形を示す。

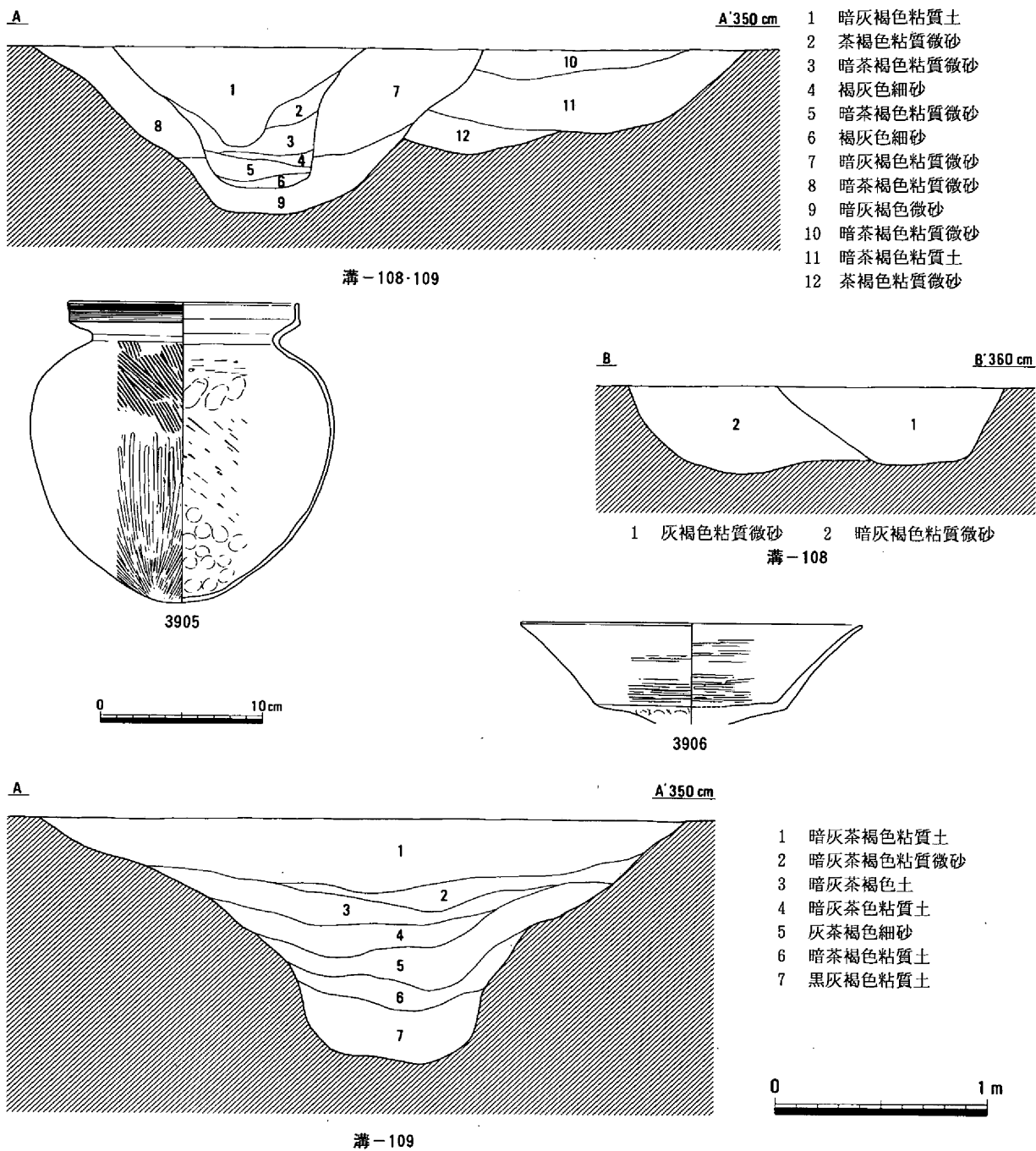
出土遺物には3909の須恵器杯があり、時期的には古・後・ⅡないしⅢに比定されよう。(岡田)

溝-115 (第193図)

竪穴住居-173の東から竪穴住居-174にかけてほぼ南北方向に蛇行しながら検出された浅い溝であ



第191図 溝-104 (3899~3904・S169)~106



第192図 溝-108・109 (3905・3906)

る。幅約50cm前後、深さ約10cmを測る。

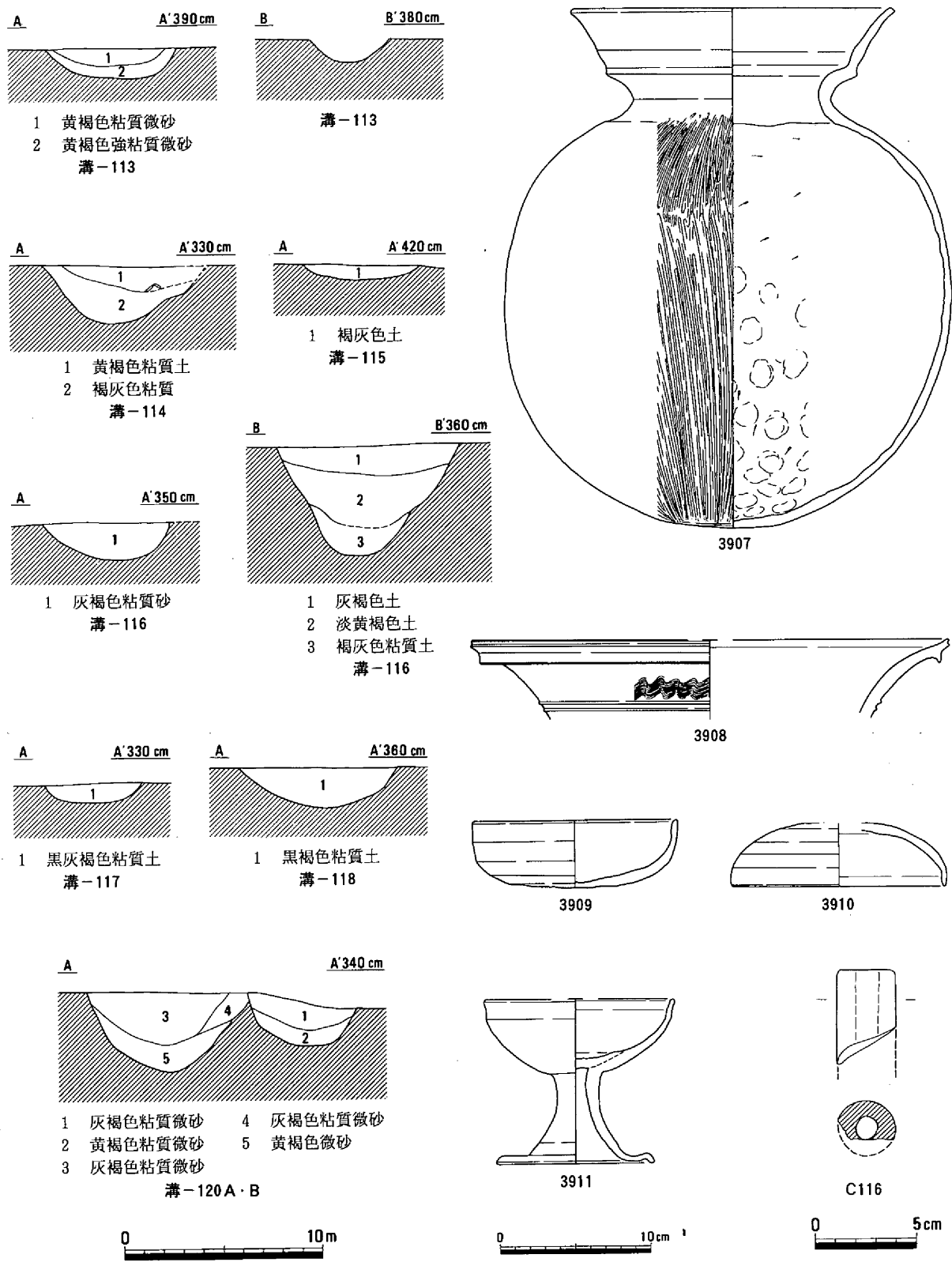
出土遺物はないが、時期的には古・中・Ⅱないし古・後・Ⅰに比定されよう。(岡田)

溝-116 (第193図)

掘立柱建物-19の西側で緩やかに弧を描いて検出された長大な溝で、ほぼ南北方向を示し、検出全長約50mに及ぶ。出土遺物には3910の須恵器蓋があり、古・後・Ⅲに比定される。(岡田)

溝-117~119 (第193図)

O18区南東部からO19区南西部の低位部において検出されたもので、溝-118はその西端で溝-116に削られ、東進して北東方向へ曲って上下2層に分岐する。下層に繋がる溝-117は南東へ流走し、上層は溝-119となって北東へ進み、これと直交する溝-120に繋がる可能性がある。(光永)



第193図 溝113~120 (3907~3911・C116)

溝-120 A・B (第193図)

P19区の南西に位置する。断面形は楕形を呈す。規模はAが幅52~92cm、深さ36cm、Bが幅92~58cm、深さ20cmを測る。流路方向はともにN-36°-Wで、Aの流れは北西から南東と推測される。遺物はAから須恵器高杯3911などがみられた。時期は古・前・Ⅲ期と思われる。(澤山)

### (8) 水田

#### 水田-3 (第194図)

O19区の南西からP18区の北東にかけて検出したものである。弥生時代来の水田-2の範囲をほぼ踏襲しているが、田面の標高は北で280cm、南で265cmを測り、比高は15cmとより平坦化が進んでいる。また、検出された64面の区画は、一辺4~16mの方形ないし不整形を呈し、面積は88~111㎡(平均59㎡)と水田-2よりも小さくなっている。これらは、前代を踏襲して直列的な配置となっているが、田面の比高が少なくなったためか、微高地側からの懸け流しが認められる。島状高まりは1箇所を残すのみで、埋積の進行に伴う開田の進捗が窺える。 (亀山)



第194図 水田-3

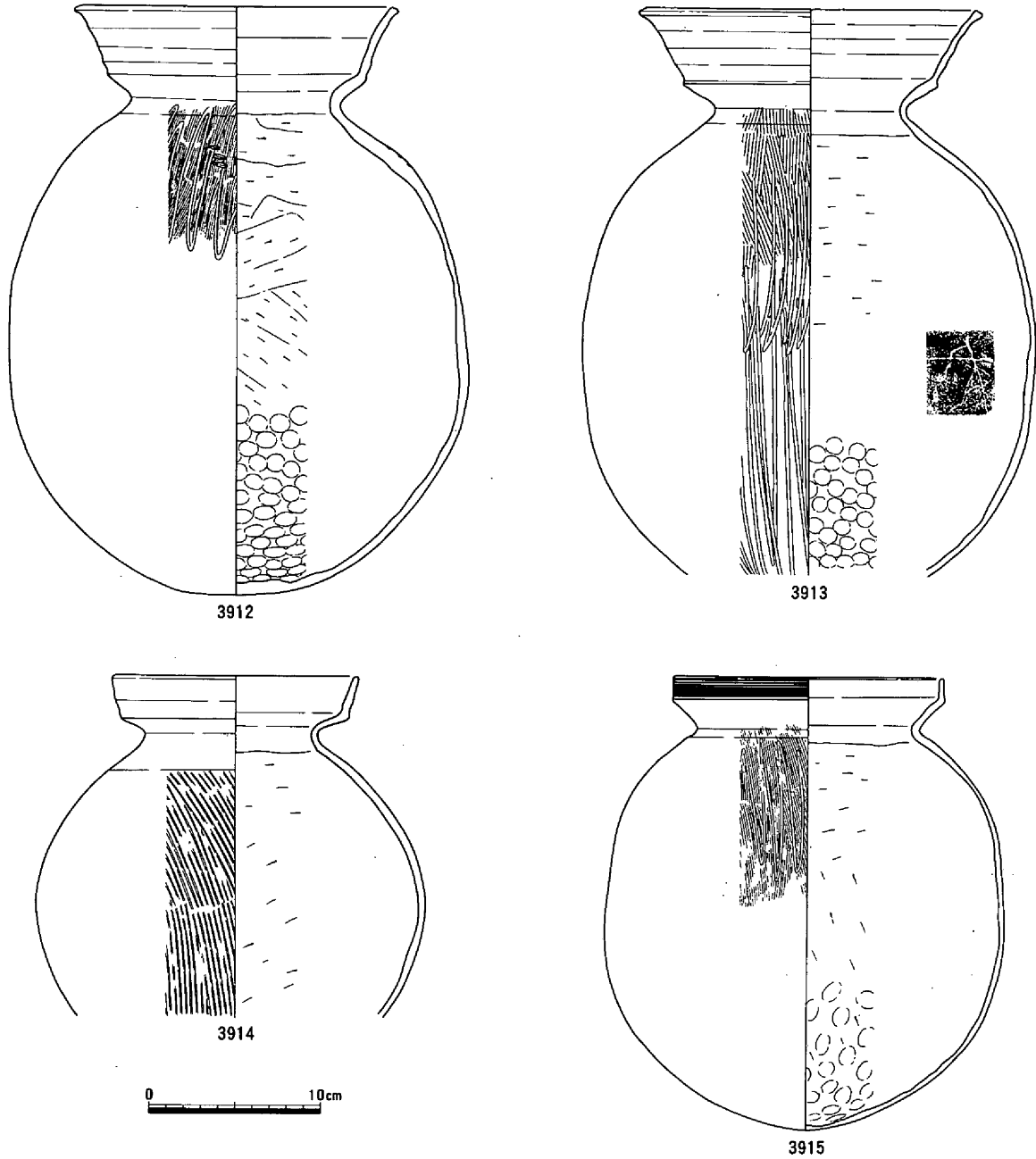
水田-4 (第195図)

水田-3の10cmほど上層で検出したもので、その広がり水田-3の範囲をほぼ踏襲しているものの、北西に見られた舌状の高まりはこの段階には見られない。検出された92面の区画は、一辺3~12mの方形を呈し、面積は15~100㎡(平均36㎡)とここで検出された水田面の中で最も小さい。また、田面の標高は北で278cm、南で290cmを測り、田面の比高は12cmを測るにすぎない。これらは、北東から南西に向かって直列的な配置をとるが、北西ないし南東においては互違いに接しており、微高地側からの懸け流しがより顕著に認められる。

水田に至る微高地斜面や、水田を覆う洪水砂から3912~3919の土器が出土している。3912は口径18.0cm、最大胴径26.6cm、器高34.7cmを測る。楕円形の体部は外面をタテハケ後ヘラミガキで調整し、



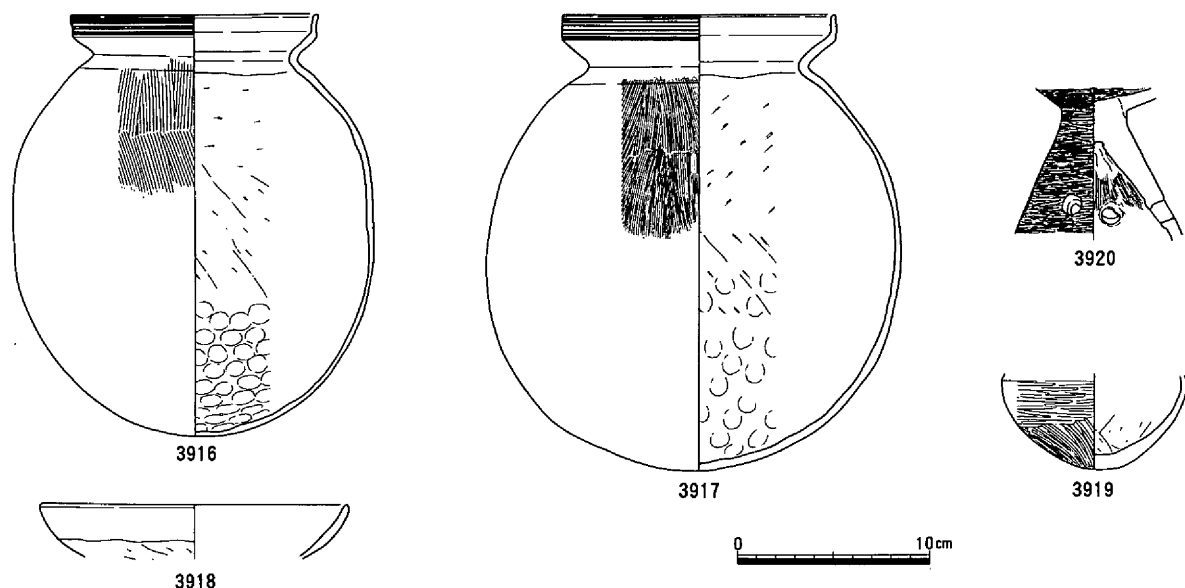
第195図 水田-4



第196図 水田 (3912~3915)

ヘラケズリで仕上げた内面下半にはユビオサエが顕著に残る。また、これに類似した3913の内面には木葉の圧痕が見られる。口径14.0cmを測る3914は二重口縁をもつ壺で、球形を呈する体部は外面を粗いタテハケで調整し、内面をヘラケズリで仕上げている。3915~3917は短い二重口縁に楕円沈線をめぐらす甕である。いずれも、球形をなす体部の外面をタチハケ、内面をヘラケズリで調整する。口径16.0cmを測る3918は皿形をなす鉢で、外面の下半にヘラケズリを施している。3920は小形の器台で、開きの弱い脚部には3つの透かし孔を穿つ。外面は緻密なヘラミガキで調整している。これらの土器は古・前・Ⅱ期の特徴を備えており、水田が放棄された時期を示すものと思われる。(亀山)





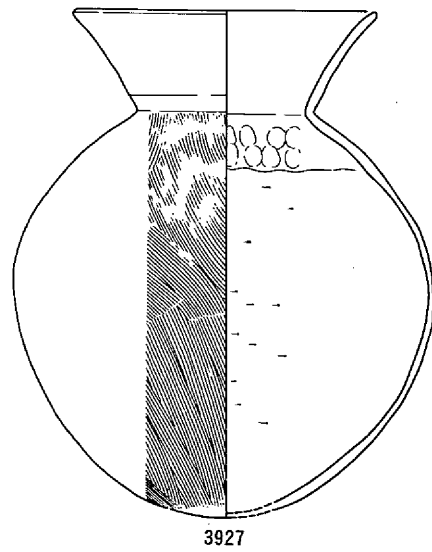
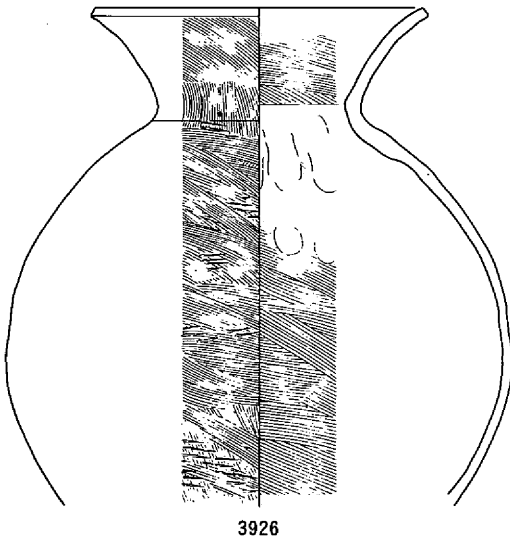
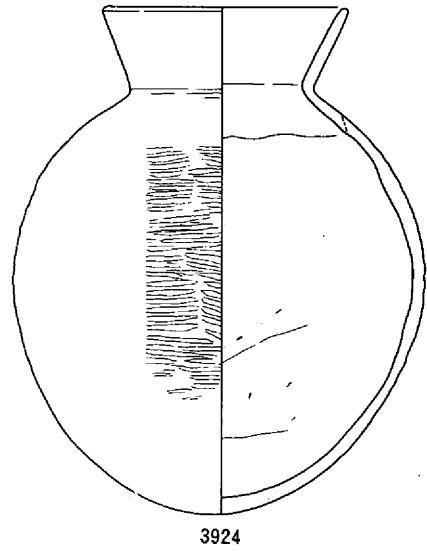
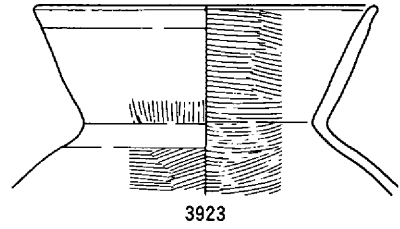
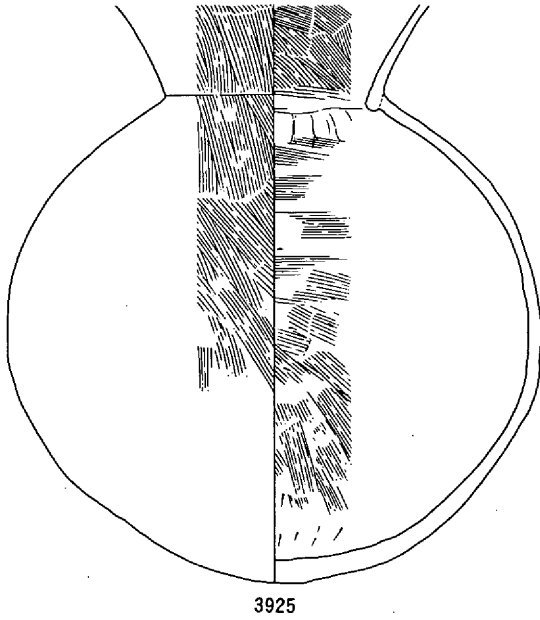
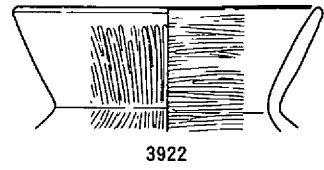
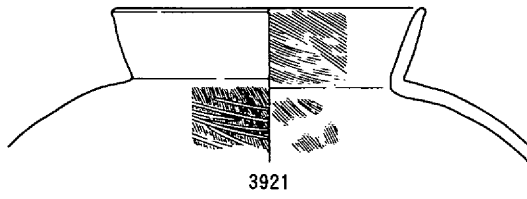
第197図 水田 (3916~3920)

## (9) その他の遺構・遺物

包含層出土の遺物として土師器、須恵器のほか、土製品、石製品、金属製品がある。これらは遺構の検出中に出土したもののほか、微高地の南ないし東端の斜面堆積から出土したものがある。なお、これらの中には弥生時代末のものも若干含まれているが、時間的連続性を考慮して、ここで一括して取り扱う。

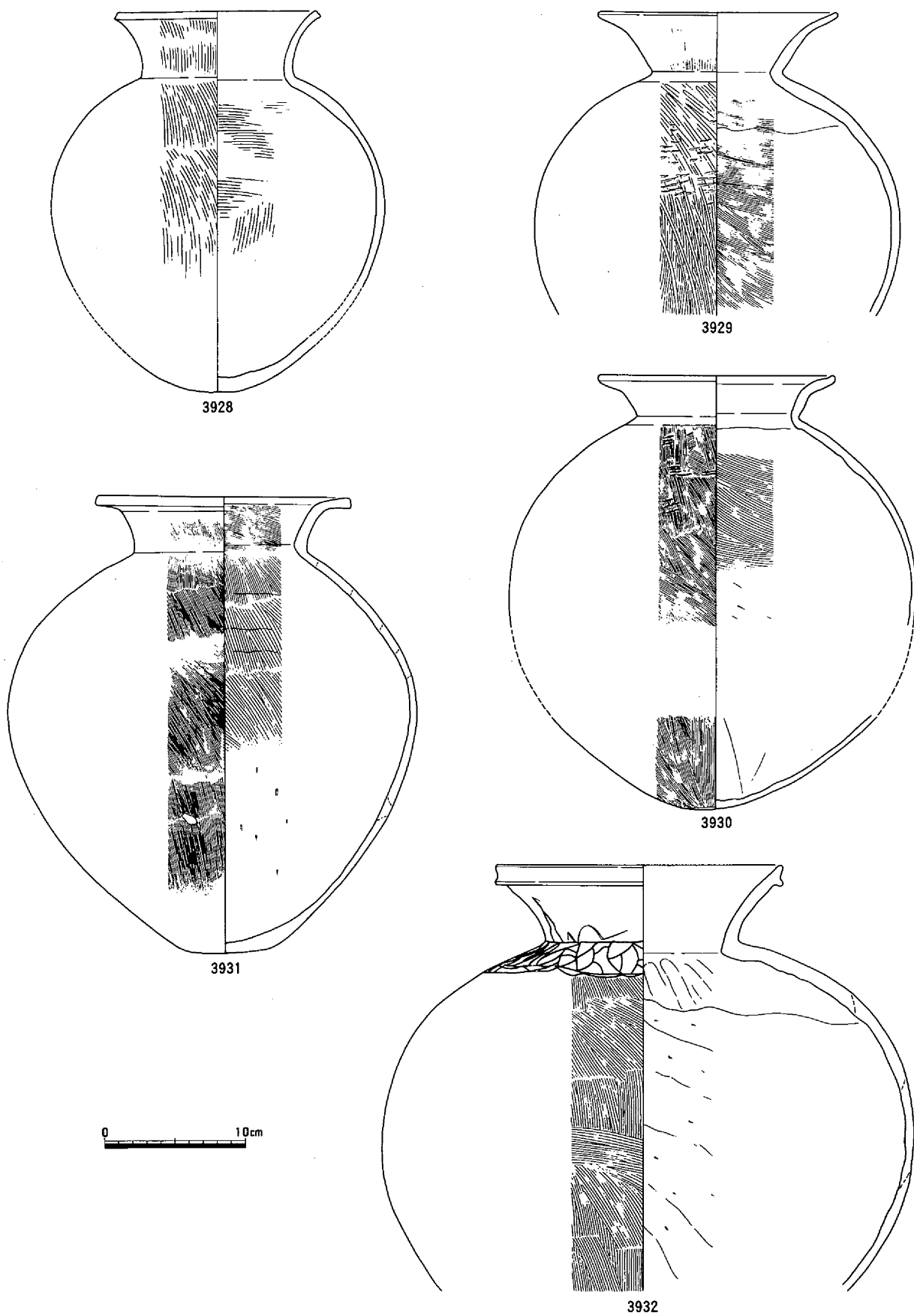
## 前期の土器 (第198~214図、図版84~91)

3921~3964は壺である。3921は短い口縁部が直立ぎみに立ち上がるもので、口径15.8cmを測る。肩の張る体部は外面をハケメとヘラミガキ、内面をハケメのみで調整する。3924は、直立ぎみの口縁部と楕円形の体部からなり、口径12.6cm、最大胴径21.6cm、器高26.8cmを測る。粗いタタキを水平に施した体部は、内面をヘラケズリののちナデを加えて仕上げている。3925は上方に開く口縁部をもつ壺で、球形をなす体部は内外面をハケメで調整する。3926の口縁部は斜め上方にのび、口径17.0cm、最大胴径26.4cmを測る。内外面をハケメで調整する体部にはタタキ成形の痕を残す。3929もタタキ成形になる壺で、上方に向かって開く口縁部と球形をなす体部をもつ。口径16.4cm、最大胴径25.6cmを測り、外面はハケメとヘラミガキ、内面はハケメで調整する。3930・3931・3934は口径15.4~17.7cm、器高28.0~28.9cmを測る。外傾する短い頸部から屈折して水平に伸びる口縁部をもつ。倒卵形をなす体部はタタキ成形ののち、内外面をハケメで調整する。明褐色を呈する胎土には金雲母・角閃石を含んでおり、讃岐からの搬入品と見られる。3932は、斜め上方に伸びる口縁部と偏球形をなす体部からなる。外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整しており、肩部には崩れた組帯文を描く。口径20.0cm、最大胴径37.4cmを測る。3933は短く直立する頸部から屈折して開く口縁部をもつ壺で、口径12.4cm、器高16.5cmを測る。偏球形をなす体部は、外面に緻密なヘラミガキを施し、内面はナデで調整する。3938は口径20.4cmを測り、最大胴径32.2cmある体部から屈折して短く伸びる口縁の端部を上方に拡張する。口径19.0~18.4cmを測る3939・3940は、上方に窄まる頸部から屈折して斜めに伸びる口縁をもち、その端部はわずかに上方へつまみあげる。外面は3439がハケメ、3940がヘラミガキで調整し、内

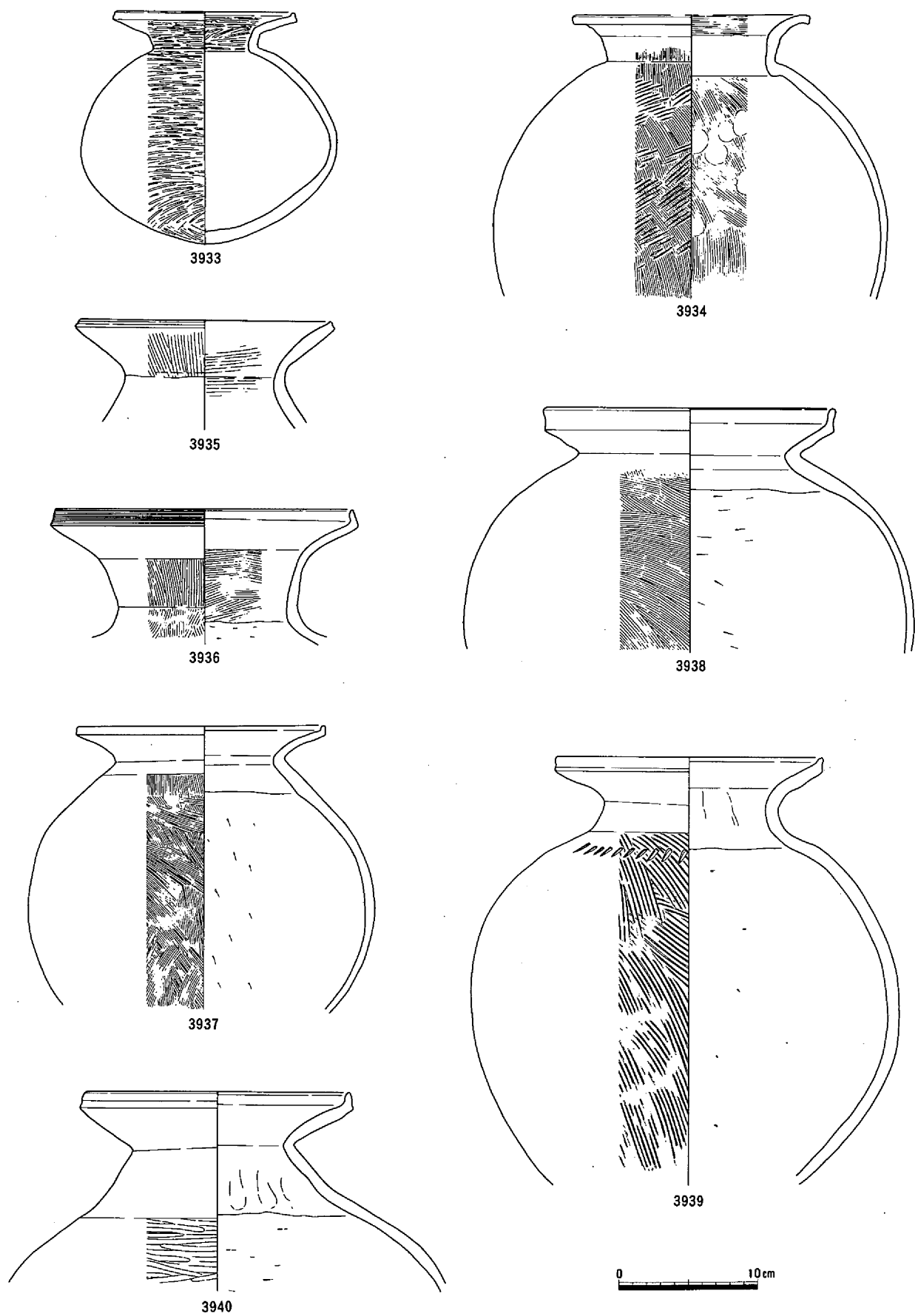


0 10cm

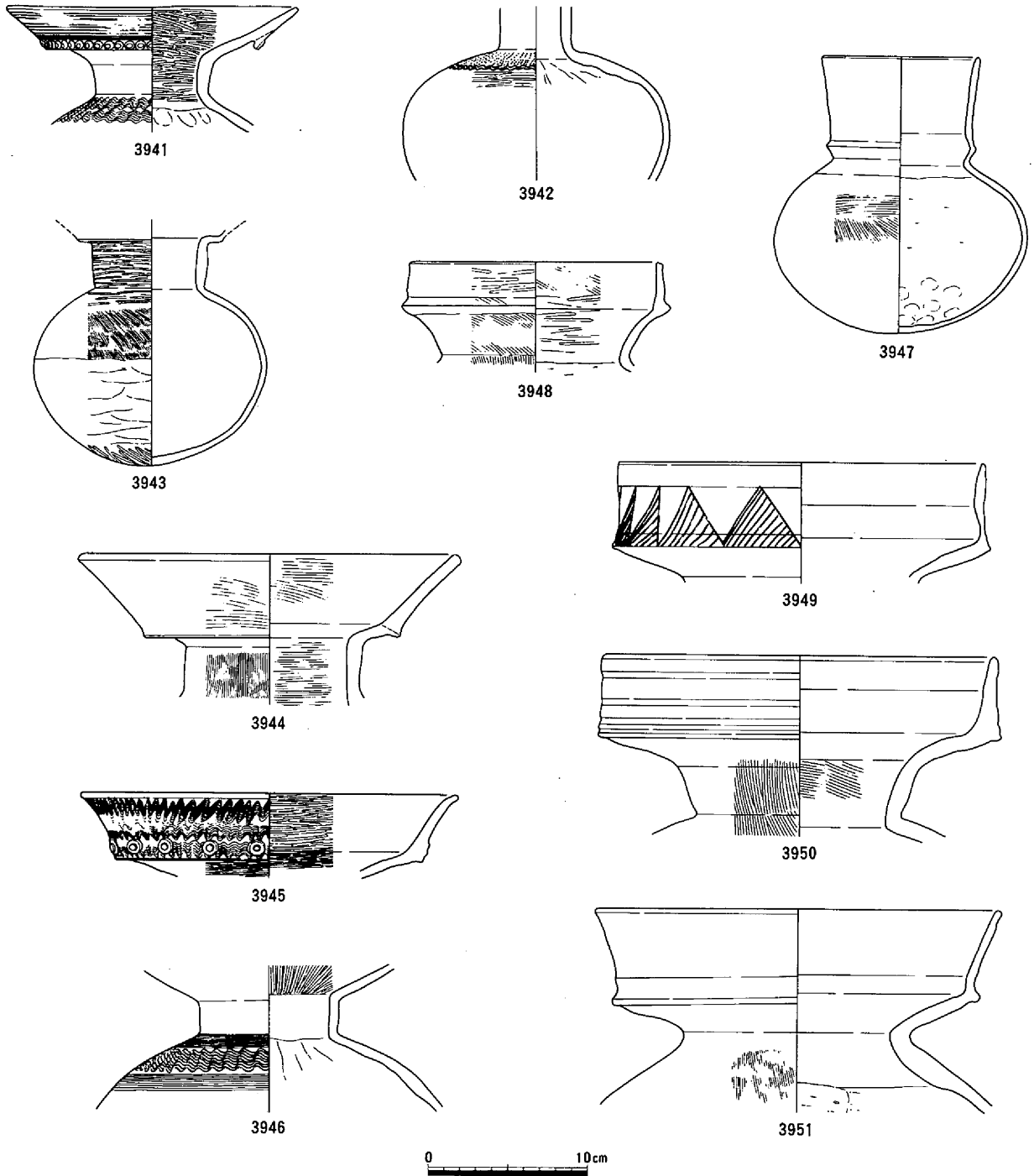
第198図 包含層 (3921~3927)



第199図 包含層 (3928~3932)

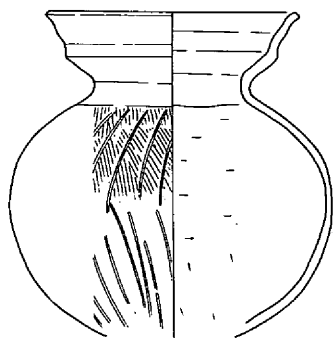


第200図 包含層 (3933~3940)

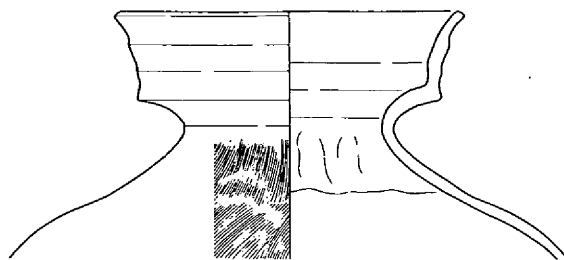


第201図 包含層 (3941~3951)

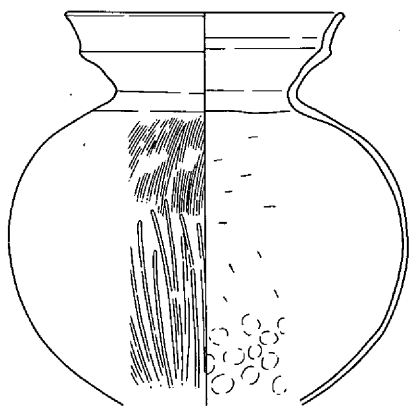
面はいずれもヘラケズリする。3941~3946は直立する頸から大きく開く二重口縁と偏球形の体部からなる畿内系の壺で、口径18.0cmを測る小形の3941~3943と、口径23.3cmを測る大形の3945・3946とがある。口縁部や肩部には波状文や円形浮文などの装飾を施すものが多い。3947は、ヨコナデで調整した長い二重口縁をもつ直口壺で、口径9.6cm、器高17.3cmを測る。偏球形の体部は、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施しており、山陰東部からの搬入品と見られる。口径24.8~22.3cmを測る3949~3951は長く直立する二重口縁をもつ壺で、3949では斜線で埋めた鋸歯文を描いており、弥生時代末に位置付けられる。3952~3954は二重口縁をもつ小形の壺で、口径14.5~12.6cm、器高22.0~18.3cmを



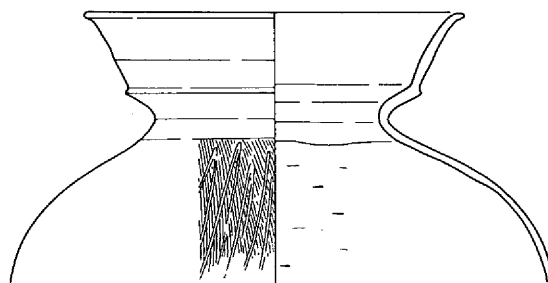
3952



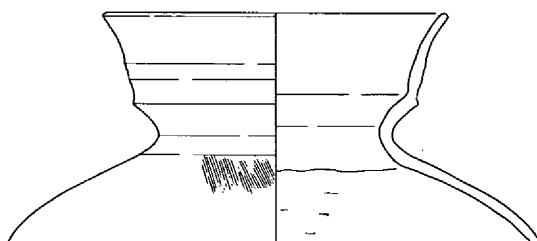
3956



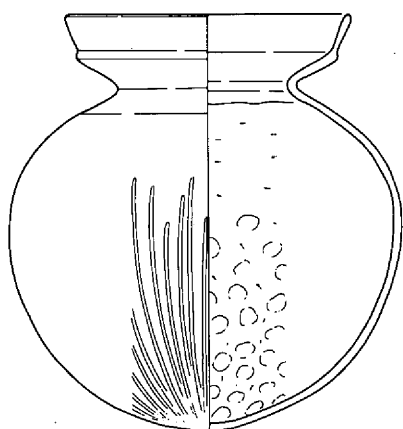
3953



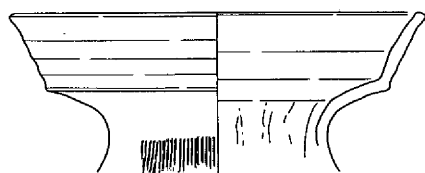
3957



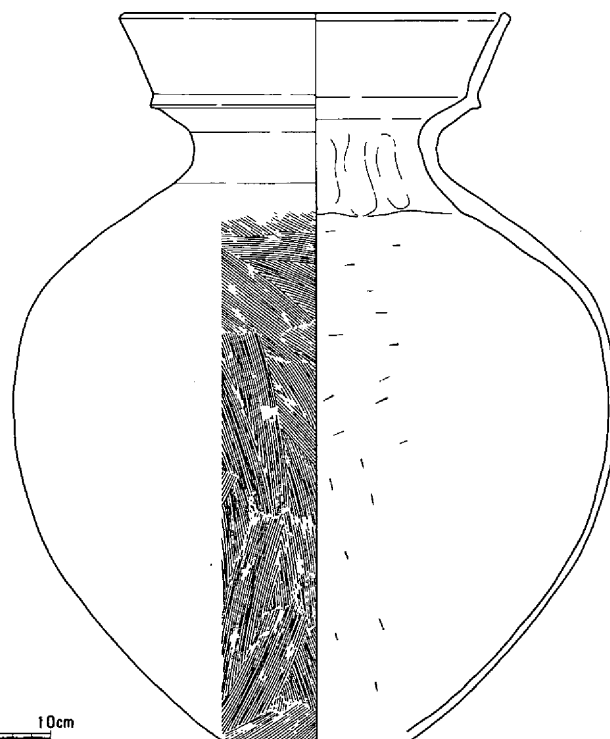
3958



3954



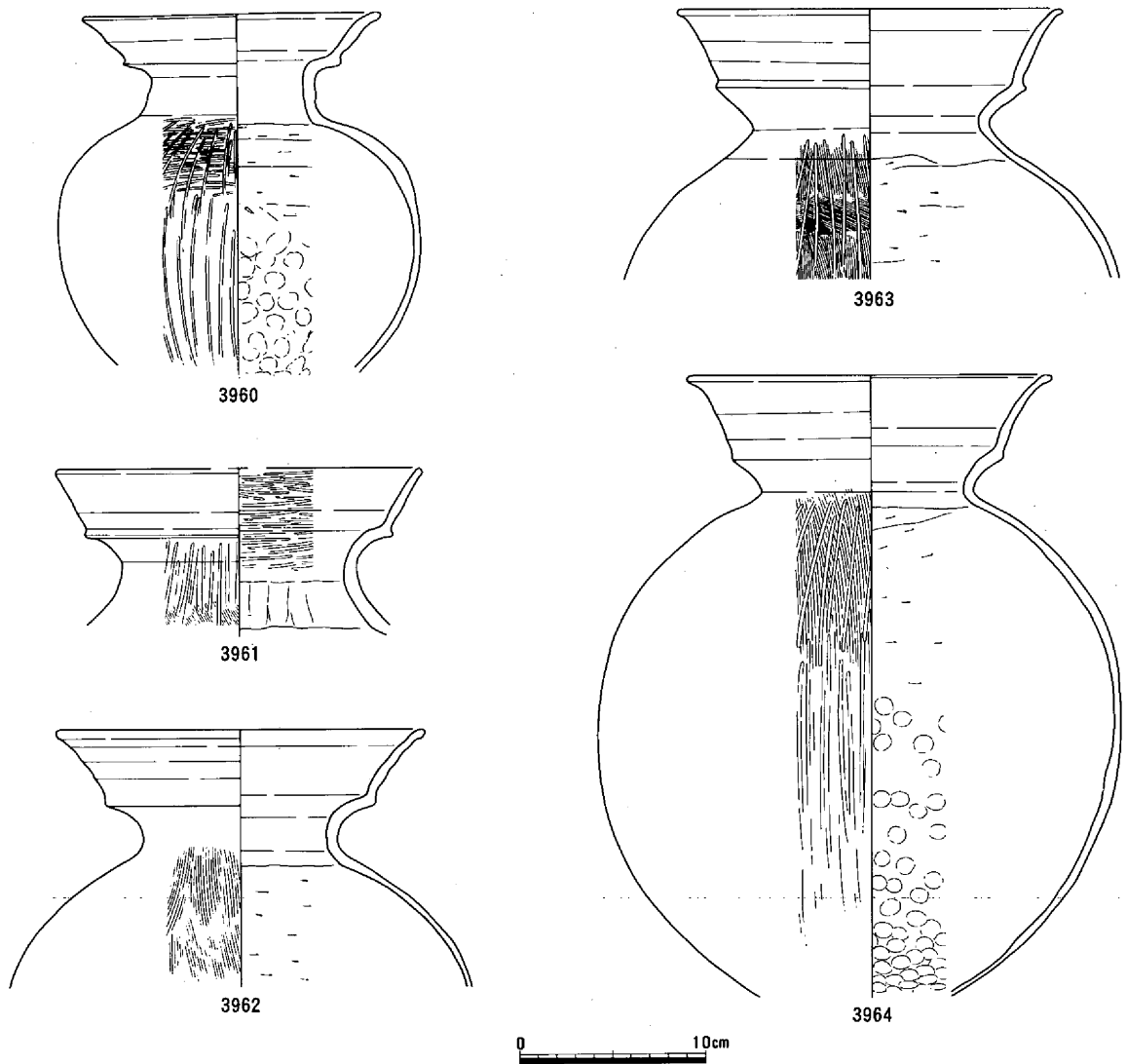
3955



3959



第202図 包含層 (3952~3959)

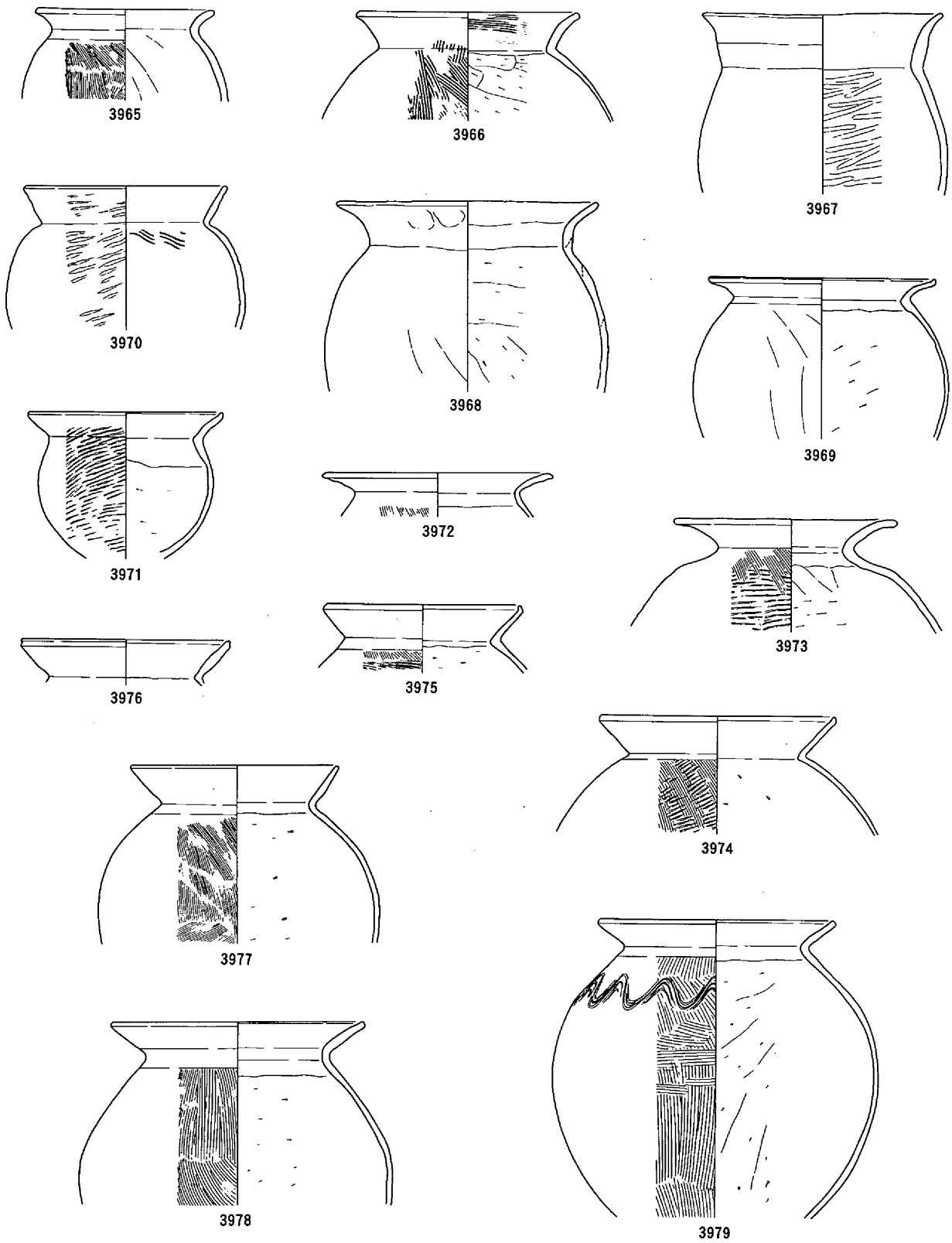


第203図 包含層 (3960~3964)

測る。球形をなす体部は、外面をハケメとヘラミガキで調整し、ヘラケズリを施した内面にはユビオサエが顕著に認められる。3955・3959・3961は、口径19.5~20.8cmを測る二重口縁と屈曲する長い頸部をもつ壺である。体部の外面は細かなハケメで調整し、内面はヘラケズリする。外反して開く二重口縁をもつ3957・3958・3963・3964は、口径20.4~17.8cmを測る。体部の外面はハケメで調整したのちヘラミガキを施し、内面はヘラケズリで仕上げる在地の壺である。

甕には、く字形口縁をもつA類、短い二重口縁に櫛描沈線を飾るB類、ヨコナデで調整する二重口縁をもつC類4003~4008に分けられる。

A類には3965~3979がある。3965は口径11.6cmを測る小形の甕で、外反する口縁端部は丸く収めている。体部の外面はタテハケで調整し、内面はナデで仕上げる。口径14.7cmを測る3966は外反する口縁端部が角張り、面をもって終わる。肩の張る体部は外面をタテハケ、内面をヘラケズリで調整する。3967は口径16.0cmを測る甕である。横方向のナデで調整する口縁部はいびつで、頸部の締めりは弱い。体部の外面はナデで調整し、内面には粗いヘラミガキを施す。口径17.4cmを測る3968は、外反する口縁部にユビオサエの痕を残す。体部の外面はナデで調整し、内面はヘラケズリで仕上げる。3969は水平に伸びる口縁部をもつ甕で、口径は15.3cmを測る。体部の外面にはナデを施し、内面

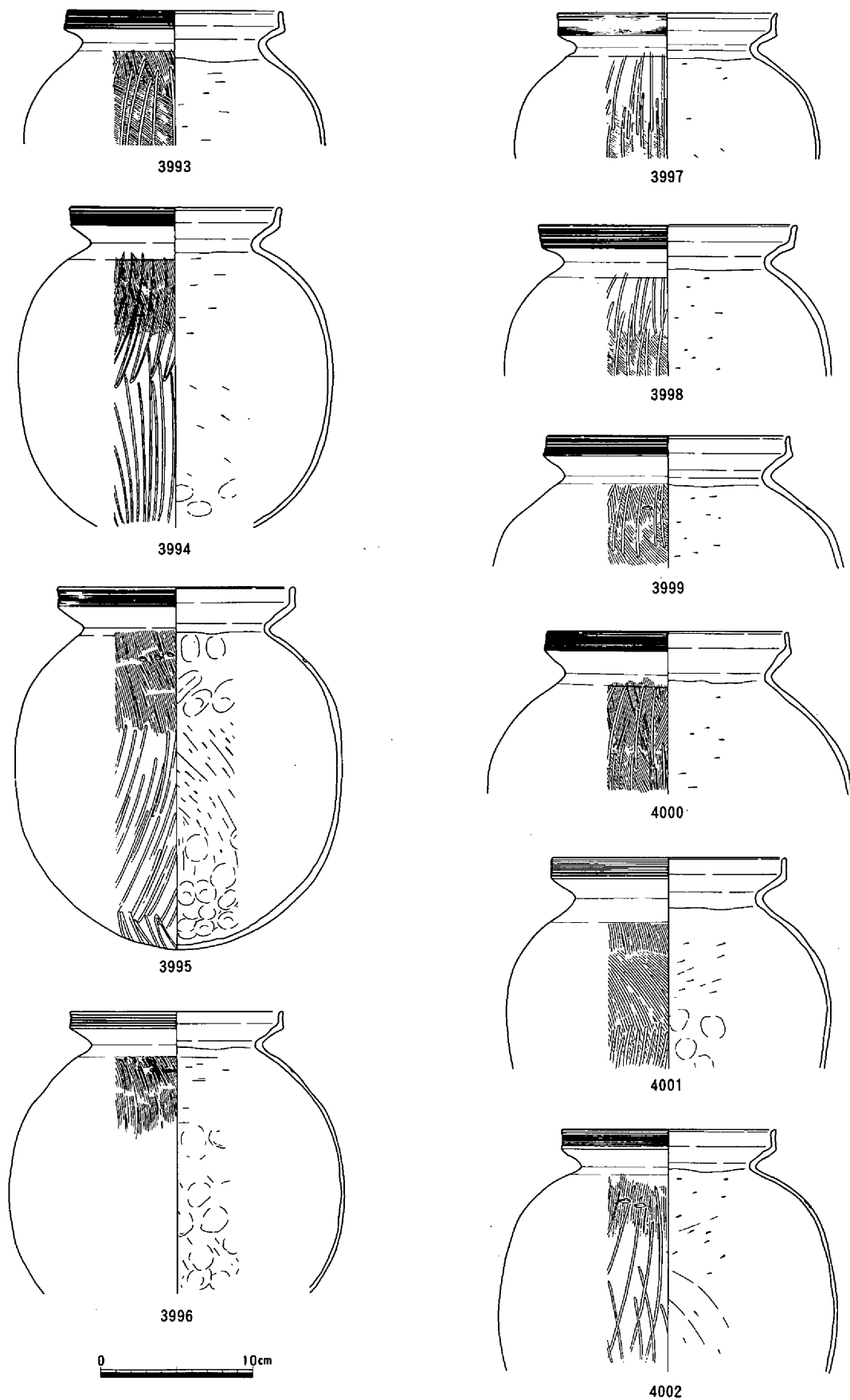


第204図 包含層 (3965~3979)

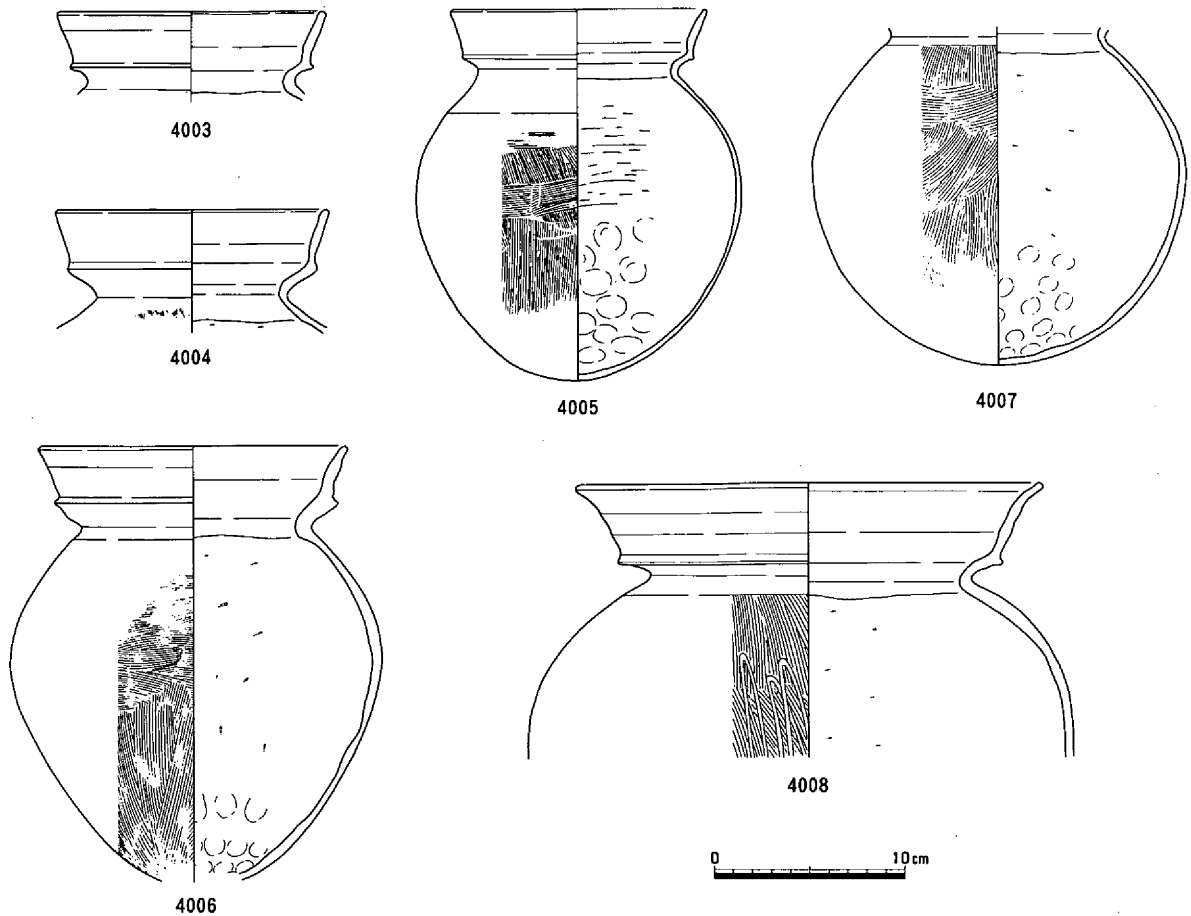




第205図 包含層 (3980~3992)



第206 包含層 (3993~4002)

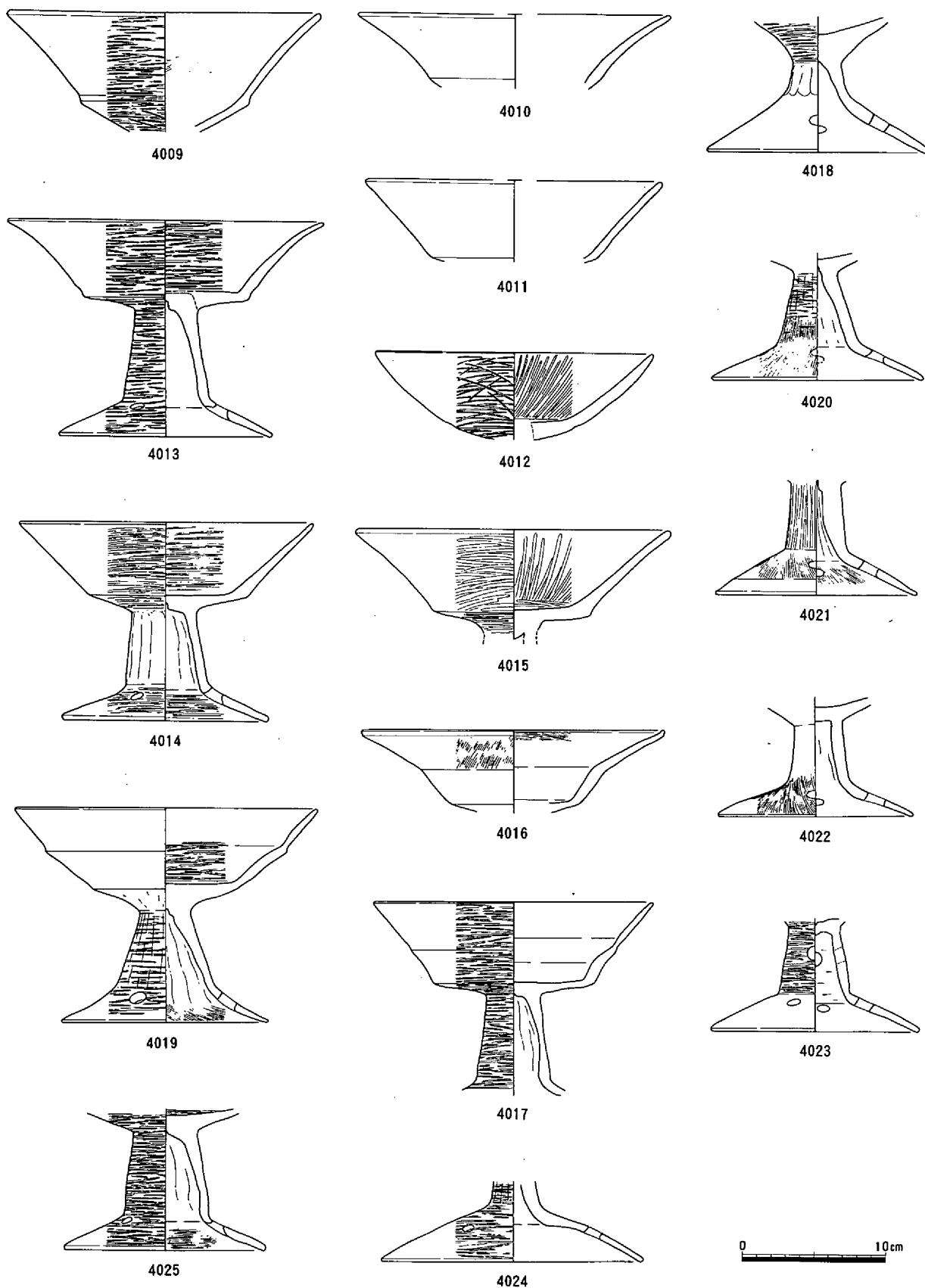


第207図 包含層 (4003~4008)

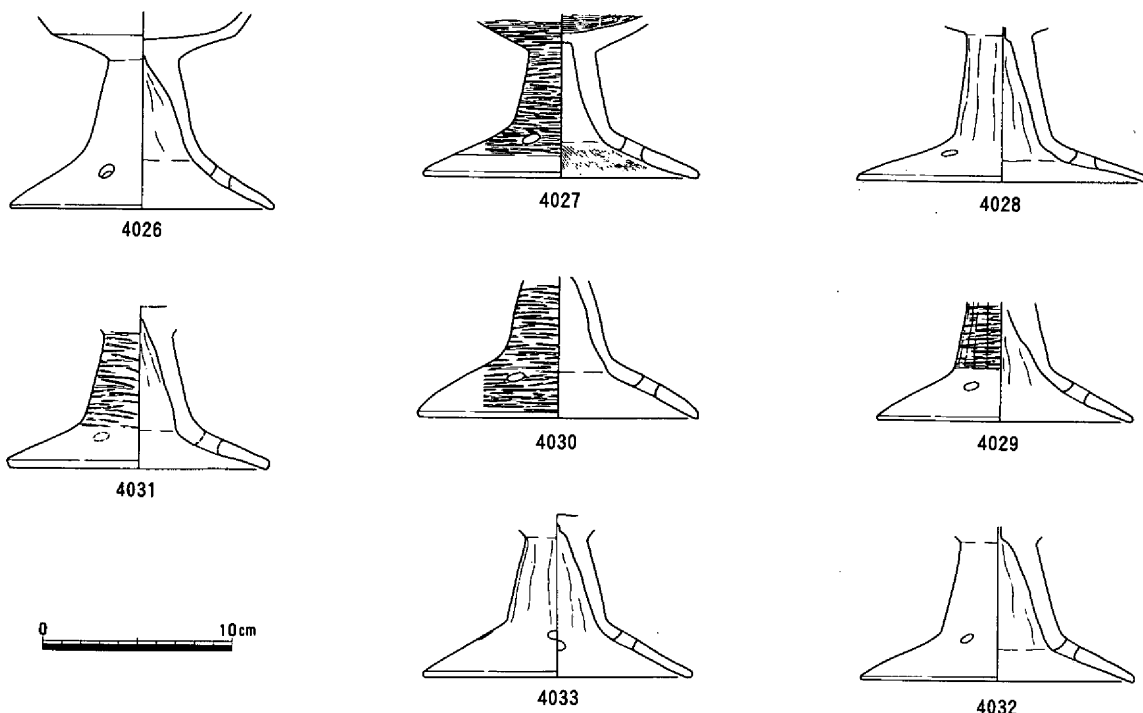
はヘラケズリで調整する。口径13.2cmを測る3970は、斜め上方にのびる口縁部と球形の体部からなる。外面には平行タタキの痕をとどめ、内面はナデで仕上げている。3971は口径13.0cmを測る小形の甕で、外面には平行のタタキメを残し、内面はヘラケズリしている。口径14.8cmを測る3973は、口縁部を水平ぎみに長く引き出すもので、体部の外面は水平にタタキを施した後ハケメで調整し、内面はヘラケズリで仕上げる。3974~3979は畿内系の甕である。このうち3974~3976では、16.0~13.0cmを測る口縁の端部をわずかに上方へつまみ上げる。球形となる体部の外面は、右上がりに細かいタタキを施した後ハケメで調整し、内面はヘラケズリで仕上げる。一方、3977・3978では17.0~13.8cmを測る口縁の端部を丸くおさめるとともに、球形となる体部の外面をハケメで調整する。いずれも褐色を呈する胎土には金雲母、角閃石を含み、河内からの搬入品と見られる。また、口径16.0cmを測る3379は、倒卵形をなす体部の外面をハケメで調整し、肩部に波状文を描いたもので、その胎土からすれば播磨からの搬入品である可能性がある。

B類3980~4002はその法量によって、口径13.0~12.0cm、最大径18.1~15.9cm、器高18.1~17.9cmの小形3980~3985と、口径17.0~13.8cm、最大径24.1~19.7cm、器高24.0~22.3cmの中形3986~4002に分けられる。小形の体部はいずれも球形をなすが、中形では体部が倒卵形をなす3986~3992・3999~4001と球形を呈する3994~3996・4002が見られる。外面は、ハケメののちヘラミガキを二段に分けて施し、ヘラケズリする内面の下半にはユビオサエが顕著に残る。また、肩部には四種類(A1~3、B2)の刺突記号が見られる。

C類4003~4006は、口径14.2~13.3cm、器高19.6cmを測る中形の甕である。ヨコナデで調整



第208図 包含層 (4009~4025)



第209図 包含層 (4026~4033)

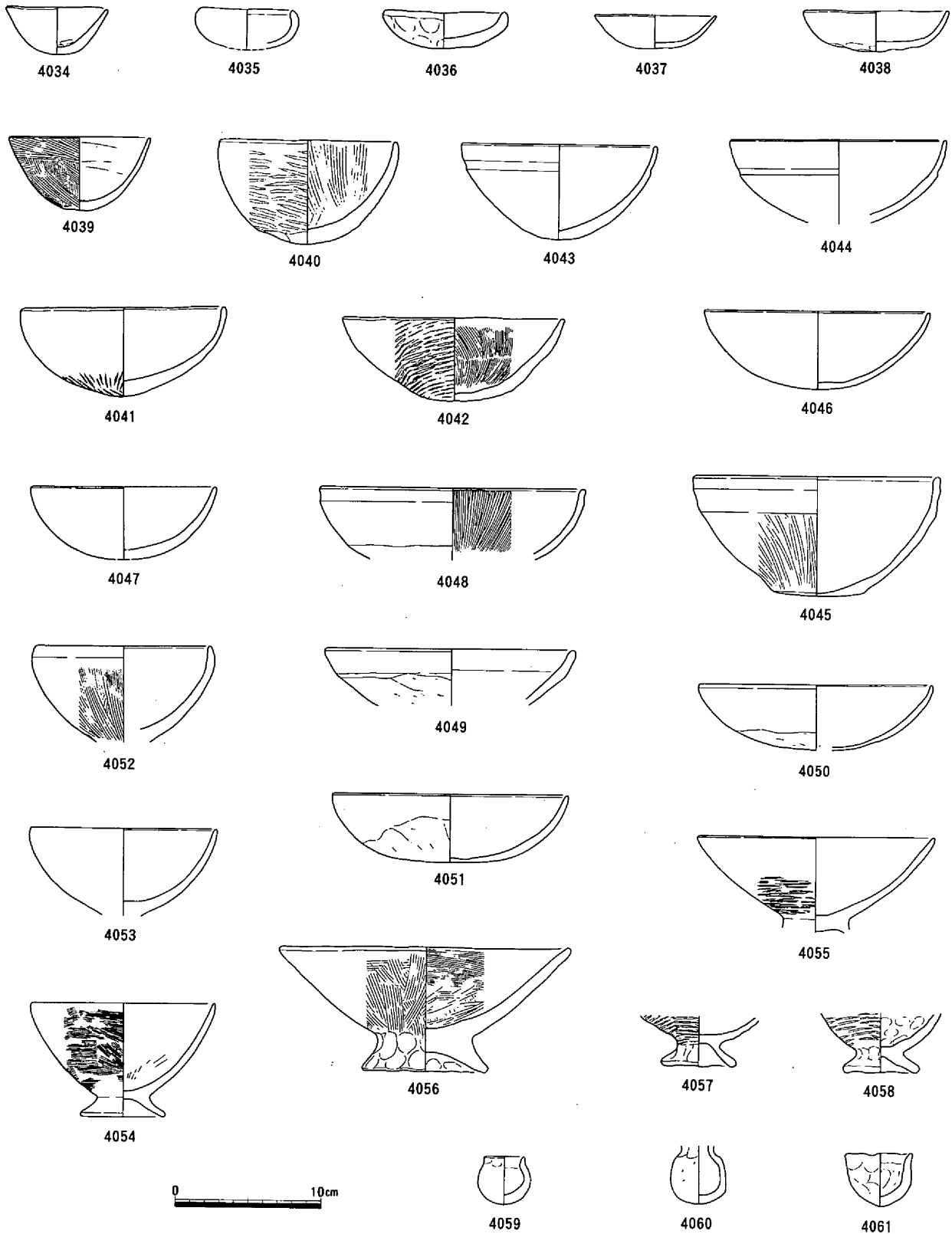
する口縁部は頸部との間に鋭い稜をなす。倒卵形をなす体部は、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。このうち、4003~4005はその特徴から山陰東部からの搬入品と見られるものである。これに対し、4006は分厚くつくられた口縁部が頸部の間に段をなし、口径16.0cm、器高22.9cmを測る。外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する体部は、張りのある肩部から下半が強く窄まり、4005とは異なる形態をとる。中国山間部での製作になる可能性も考えられる。4008は口径24.1cmと大形で、肩の張る体部の外面をハケメ後ヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する在地の甕である。

高杯には、4009~4032がある。4009は、口径21.2cmを測る深い杯部をもつ。体部から屈折してのびる口縁部は外面に緻密なヘラミガキを施す。脚部を欠いているが、4019のように短い柱状部と4つの透かし孔を飾る裾部を備えていたものと推定され、古・前・Iでも古い様相を示している。4013~4015は、平坦な底部から斜め上方に広がる杯部をもつ。脚部は中空の柱状部から屈折して水平に開く裾部からなる。口径21.4~19.9cm、脚径13.9cm、器高13.8cmで、外面をヘラミガキで調整し、脚裾部には3つの透かし孔を穿つ。これらは古・前・IIに位置付けられる。

口径20.8cmを測る4016は、平坦な底部から立ち上がる口縁部が中程で屈折する杯部をもち、その端部はわずかに上方へつまみあげる。内外面をハケメないしナデで調整する。

4017・4018は、口縁部が中程で屈折し段をなすものである。4017の杯部は19.2cmを測る口径に比して浅く、中空につくられた脚部には3つの透かし孔を飾る。内外面をヨコナデないしヘラミガキで調整する。4018は平坦な底部から斜め上方に立ち上がる杯部をもち、口径15.0cmを測る。脚裾部を欠いているものの、中空につくられた脚柱部は外面にヘラミガキを施す。

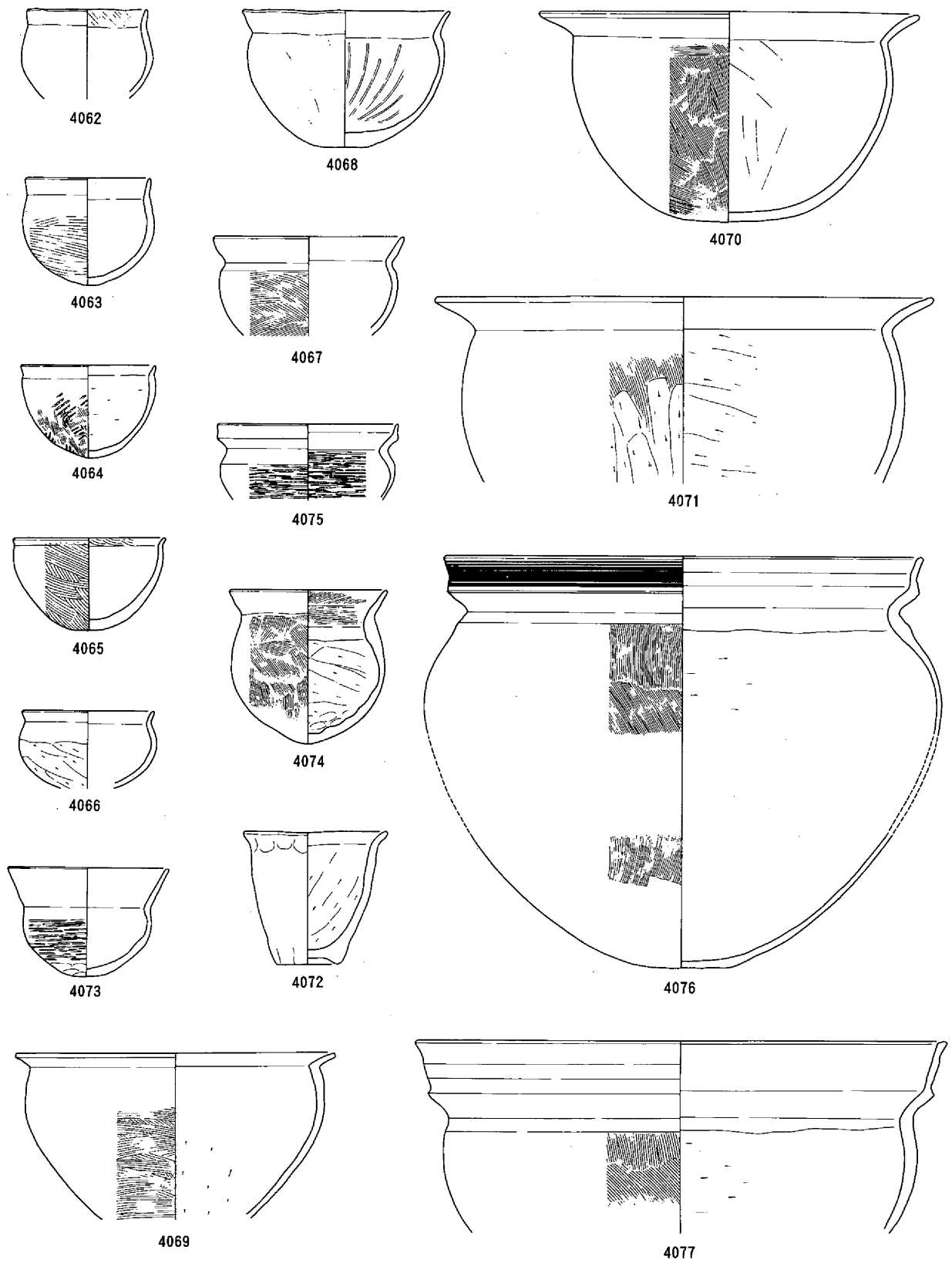
4020~4023は絞りこんだ脚柱部をもつもので、4021のように中実ぎみにつくられたものもある。裾部には4つの透かし孔を穿つが、4023では柱状部にも2つの透かし孔が施されている。脚柱部の外面は緻密なヘラミガキを横に施すが、4021では縦のヘラミガキで調整している。脚径17.9cmを測る4024は、短い柱状部と大きく広がる裾部からなる。外面にはヘラミガキを施し、3つの透かし孔を飾る。



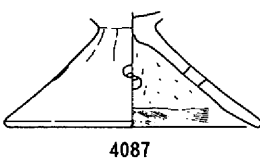
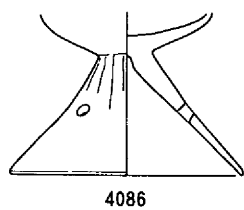
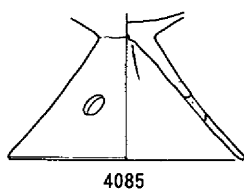
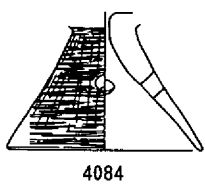
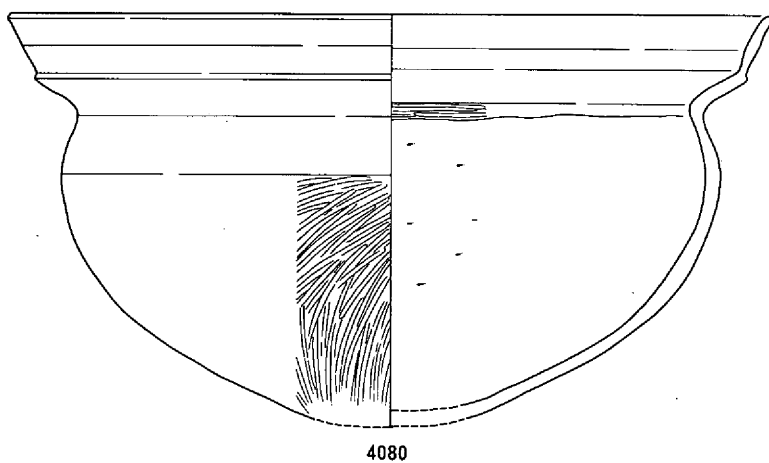
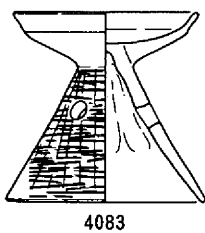
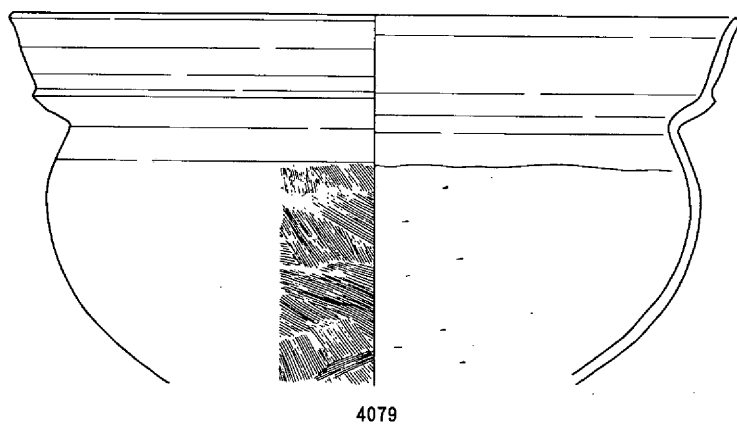
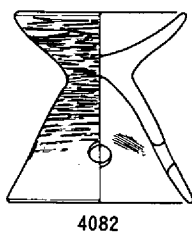
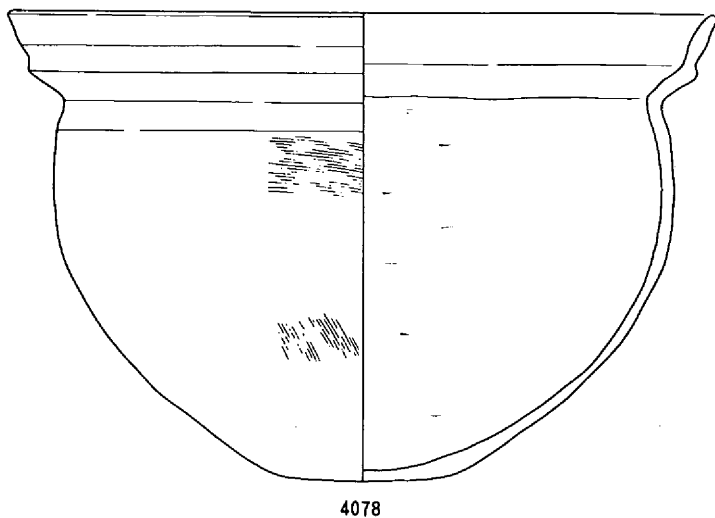
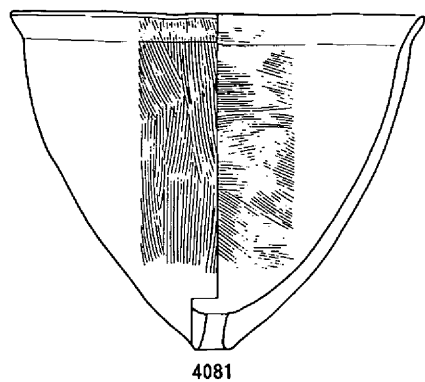
第210図 包含層 (4034~4061)

杯部を失っているが、口径10cmあまりの小形になるものと推定される。4026~4032は高杯の脚部で、中空につくられた柱状部から屈折して開く裾部には3つの透かし孔を飾る。

4034~4081は鉢である。4034~4038は口径9.8~6.0cm、器高3.2~2.3cmと小さな皿形をなす。4040~4048は口径16.6~11.8cm、器高8.4~5.7cmの椀形をなす。このうち、4040~4042は外面にタタ

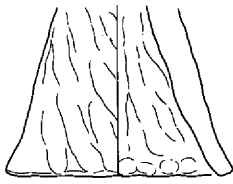


第211図 包含層 (4062~4077)

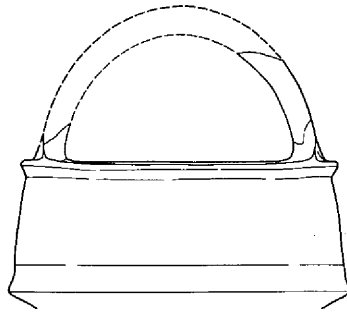


第212図 包含層 (4078~4087)

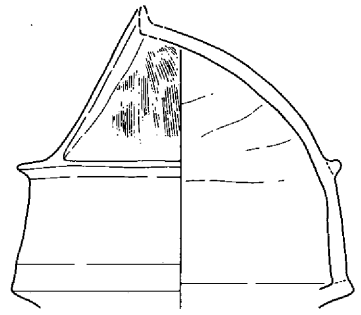




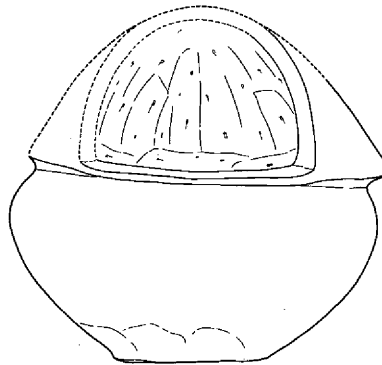
4088



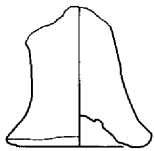
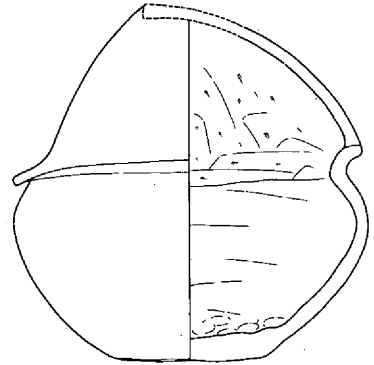
4095



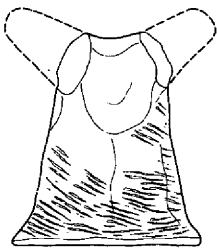
4089



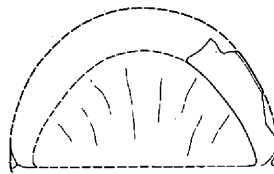
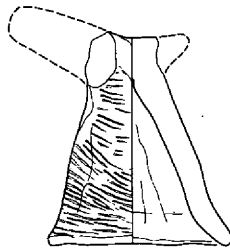
4096



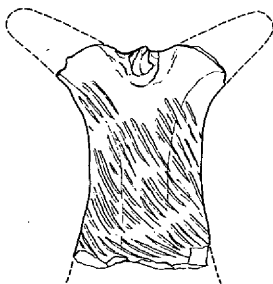
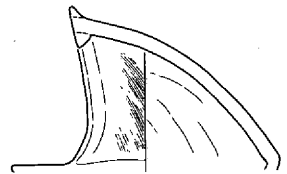
4090



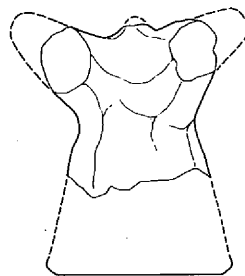
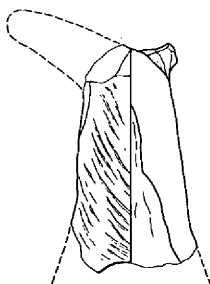
4091



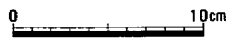
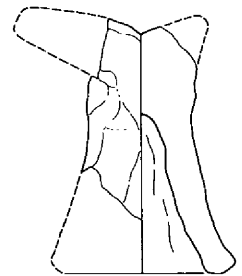
4094



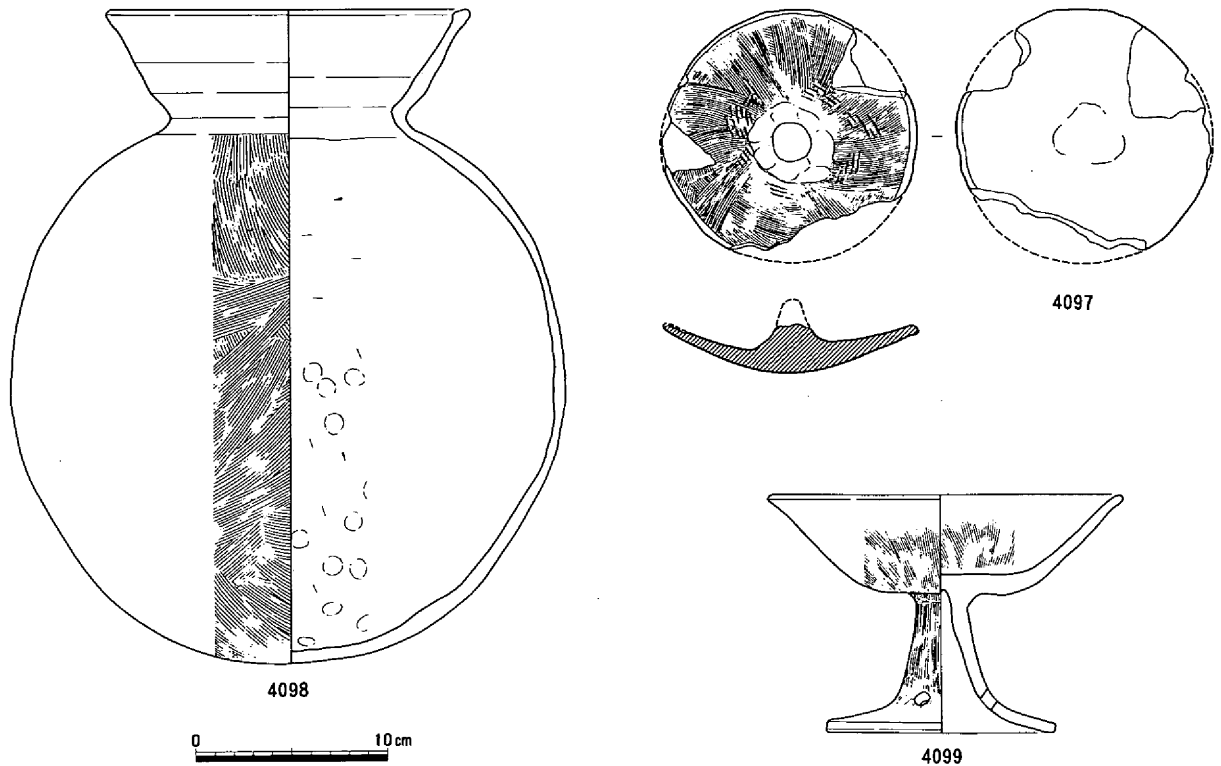
4092



4093



第213図 包含層 (4088~4096)

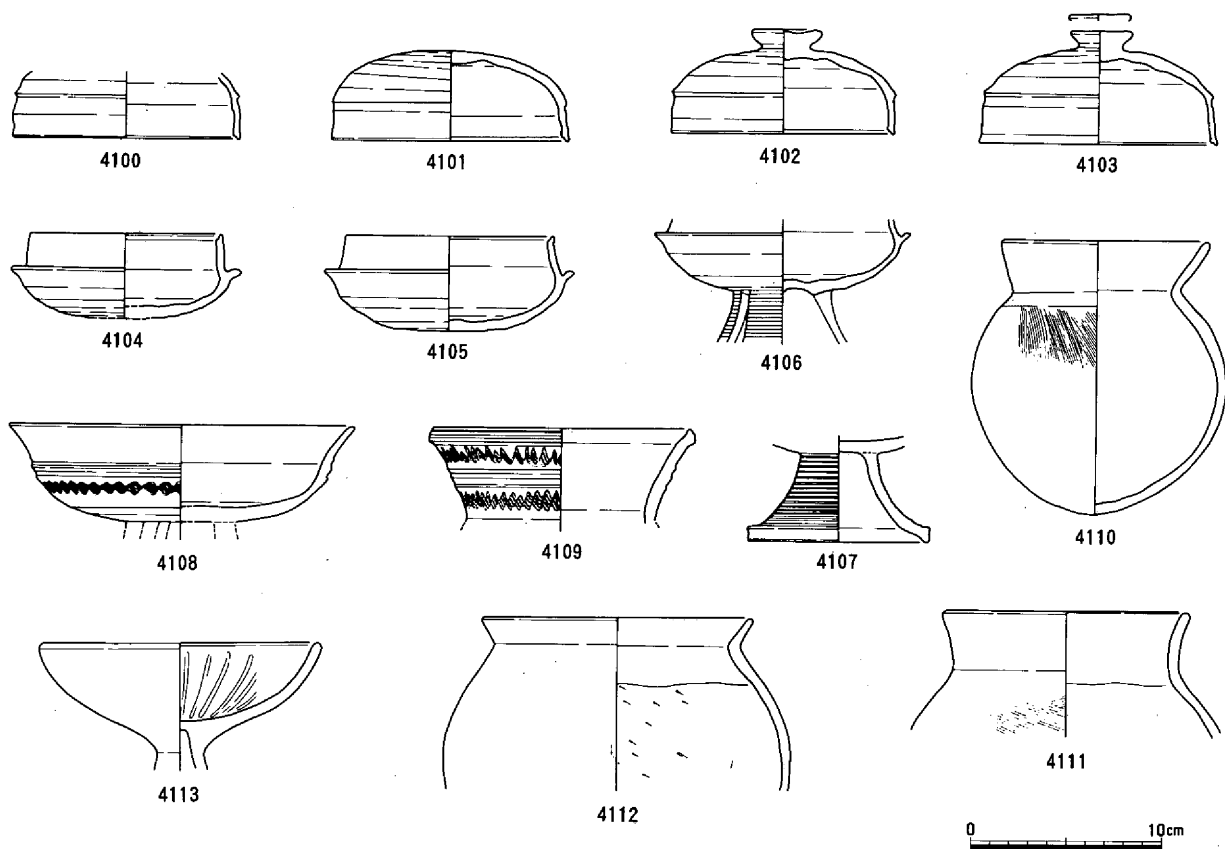


第214図 包含層 (4097~4099)

キメを残すもので、ことに4042は金雲母・角閃石を含む胎土から、他地域からの搬入品と思われる。また、4043~4045は、口縁部に段をもつもので、精良な胎土を用いている。口径16.8~16.0cm、器高4.7~4.5cmを測る4049~4051は皿形をなす鉢で、体部の外面をヘラケズリで仕上げている。4052~4056は台付き鉢で、鉢部が口径12.5~11.7cm、器高7.8cmと小さな椀形をなす4052~4054と、直線的に広がる鉢部をもつ口径19.4~16.2cm、器高18.7cmの4055・4056に分けられる。外面をハケメ、内面をナデで調整するものが多い。また、4057・4058は径5.0~4.5cmと小さな脚台を備えた鉢で、外面には平行タタキの痕をとどめる製塩土器である。4062~4068は口径14.0~8.4cm、器高9.3~6.3cmを測る小形の鉢で、口縁部がわずかに外反する。また、口径12.2cmを測る4075は二重口縁をもち、内外面をヘラミガキで調整する。4069~4071は口縁部が水平にのびる鉢で、口径25.5~22.0cm、器高14.2cmを測る4069・4070は中形、口径33.4cmを測る4071は大形に属する。4076は大形の鉢で、径32.2cmを測る二重口縁には沈線をめぐらす。口径40.0~35.8cm、器高24.7~21.8cmを測る4077~4080は、二重になる口縁部をヨコナデで調整する。4081は口径21.4cm、器高17.7cmを測る。口縁部はわずかに外反し、内外面を粗いハケメで調整する。また、尖りぎみの底部には円孔を穿っている。

器台には4082~4087がある。4082の受け部は径8.6cmを測り、端部を丸くおさめる。4つの透かし孔を飾る脚部は径9.4cmで、10.1cmを測る器高に比して広がり小さい。4083は受け部が斜め上方に立ち上がり、その径は9.4cmを測る。器高は10.0cmあり、脚径10.1cmと4083と同様に広がり小さい脚部には3つの透かし孔を穿つ。4085・4086は受け部を失っているが、脚部の広がり12.3~12.0cmと大きく、内外面をナデで仕上げたうえ3つの透かし孔を飾る。脚部の広がり13.2cmを測る4087で最も大きく、それに比例するように器高は低くなっている。4085~4087は、4082~4084に比べて新しい様相を示しており、前者が古・前・II、後者が古・前・Iに比定される。

土製支脚には4088~4093がある。4090は底径6.4cmを測る小形の土製支脚で、腕部を欠失している。



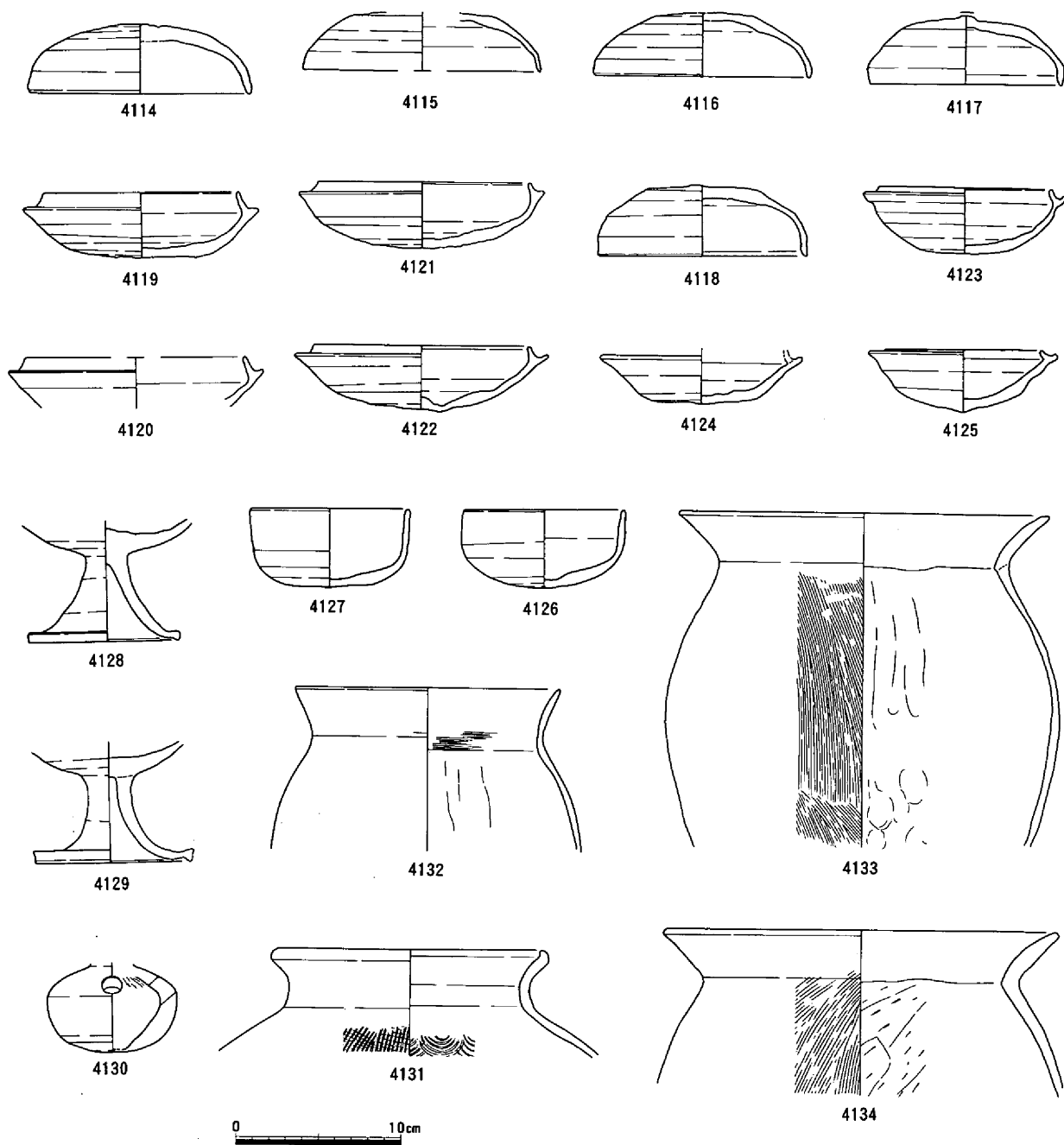
第215図 包含層 (4100~4113)

中実につくられており、底面には棒状工具による刺突が数箇所認められる。4089・4091・4092は、外面に平行タタキを残す土製支脚である。いずれも中空につくられており、内面の上部には絞りが見られる。底径は4089・4091とも9.5cmを測る。4091・4092では支持部を失っているものの、正面に2本の腕を貼り付け、その背面に小さな突起をつくりだしていたものと思われる。4088・4093は内外面をナデによって調整するもので、やはり中空の作りとなっている。底径は4088で10.6cm、4093で8.5cmを測る。4093は2本の腕と小さな突起を備えていたようであるが、いずれも先端を欠いている。これらの土器は瀬戸内沿岸地方で広く見られるが、この周辺では出土がまれであり、他地域から搬入された可能性も考えられる。

4094~4096は手焙り形土器である。4095は覆部と底部を失っているが、鉢部径14.1cm、覆部高8.3cmに復元される。鉢部は、皿状の底部の上に円筒状の体部を積み上げ、覆部を接合したもので、接合部には断面三角形の突帯を貼り付けている。外面は、鉢部をヨコナデ、覆部をハケメで調整し、内面はいずれもナデで仕上げている。4096は、覆部の一部を欠いているもののほぼ完形である。口径19.3cm、器高10.7cmの鉢に覆部を付加したものである。鉢部は内外面をナデで調整する。高さ8.8cmの覆部は外面をナデ、内面はヘラケズリで仕上げている。

4097は蓋形の土器で、径12cm円形を呈する。大きく凹む上面はハケメで調整し、中央に突起を貼り付ける。また、凸面をなす下面は、粗いナデで仕上げている。

4098は、前期でも後半に位置付けられる土器である。水田の埋積土から出土した口径18.6cm、器高34.6cmを測る壺で、斜め上方に伸びる口縁の端部は内傾する面をなす。球形をなす体部は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。4099は口径18.3cm、脚径11.8cm、器高12.6cmを測る高杯である。



第216図 包含層 (4114~4134)

中期の土器 (第215図、図版91)

須恵器には、蓋、杯、高杯、壺がある。蓋4100・4101は、口径12.4~11.8cm、器高4.8cmで、直立する口縁は端部に内傾する面をもつ。丸みを帯びた天井部は外面をヘラケズリし、口縁部との間に鈍い稜をなす。また、口径12.4~11.6cm、器高6.0~5.5cmを測る4102・4103では天井部にボタン状のつまみを貼りつけており、高杯の蓋になる可能性がある。杯4104・4105は口径10.9~10.0cm、器高5.0~4.5cmで、立ち上がりは長く直立し、端部にはやはり内傾する面をもつ。受け部は水平に引き出され、丸みを帯びた底部は外面を丁寧にヘラケズリする。4106は有蓋高杯で、カキメを施した脚部には三方に方形透かしを飾る。口径19.9cmを測る4108は無蓋高杯で、脚部を失っている。外反する口縁と体部の間に2条の稜線をめぐらして波状文を飾り、底部外面はヘラケズリで仕上げる。口径13.5cmを

測る壺4109は、上方にのびる口縁の端部をわずかに肥厚させてあまい面をなす。また、中程に2条の凹線を施し、その上下に楕状工具により波状文を描いている。

土師器には壺、甕、高杯がある。壺4110は口径10.6cmを測り、斜め上方にのびる口縁の端部は丸く収めている。球形をなす体部は外面をハケメ、内面をナデで調整する。口径12.6cmを測る4111は、なだらかな体部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。体部の外面をハケメで調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。甕4112は、短くのびる口縁部をもち、口径14.0cmを測る。なだらかな肩をもつ体部は、外面をナデ、内面をヘラケズリで調整する。高杯4113は、皿形の杯部と細く絞った脚部からなる。口径14.4cmを測る杯部は外面をナデで調整し、内面には放射状のヘラミガキを施している。

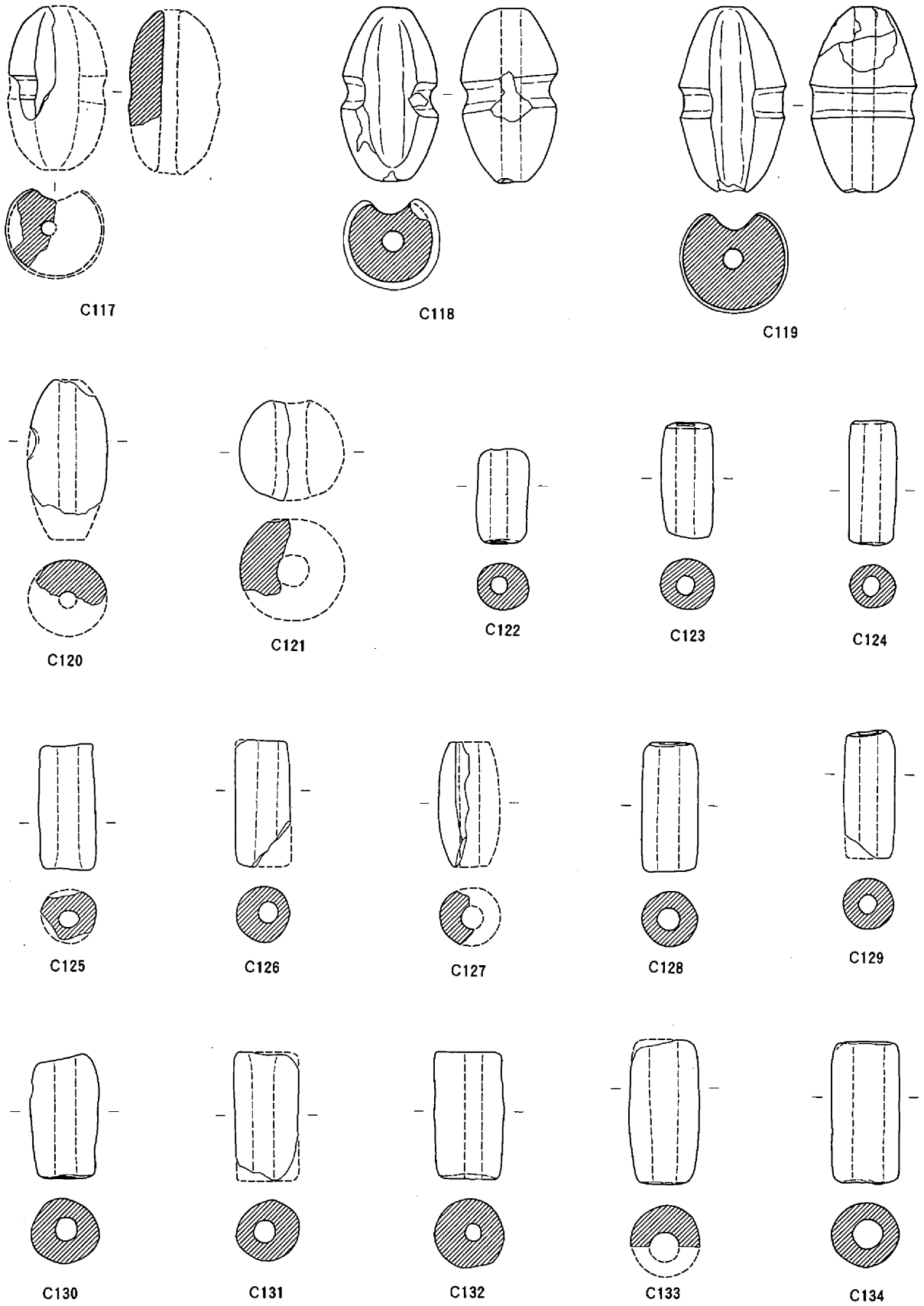
#### 後期の土器（第216図、図版91）

須恵器には、蓋、杯、椀、高杯、甕がある。4114は口径13.1cm、器高4.2cmで、斜め下方にのびる口縁は端部を丸くおさめており、大阪府陶邑古窯址群のTK43～209型式に併行する。4115・4116は器高3.9cmで、口径14.3～13.0cmを測る口縁は尖りぎみの端部をもつ。平坦な天井部はヘラキリのままであり、TK209～217型式に併行する。口径12.7～11.6cm、器高4.2～3.4cmを測る4117・4118は、短く直立する口縁をもち、端部を尖りぎみにおさめている。天井部は平坦で、ヘラキリ後の調整を省略するものでTK217型式に併行する。杯4119～4122は口径13.0～11.8cmで、立ち上がりは短く内傾する。器高は4.1～4.0cmと低く、底部は粗くヘラケズリする。TK43～209型式に併行する。4123～4125は口径10.4～9.5cm、器高4.0～3.8cmを測る。立ち上がりは短く内傾し、丸みを帯びた底部はヘラキリ未調整とする。TK217型式にほぼ併行する。4126・4127は口径11.1～9.4cm、器高4.8cmを測る椀で、ヨコナデする口縁部は上方にのび、丸みを帯びた底部は外面をヘラケズリで調整する。4128・4129は高杯で、いずれも杯部を欠いている。径10.1～9.0cmを測る脚の端部は下方に引き出している。4130は胴径7.9cmと小形の体部をもつ甕で、肩部に円孔を穿っている。4131は甕で、径16.0cmを測る口縁を丸く収め、その端部をわずかにつまみ上げる。肩の張る体部は、外面を平行タタキで成形し、内面には同心円の当具痕を残す。

土師器の甕4133・4134は、口径23.8～22.4cmを測るく字形の口縁の端部を尖りぎみにおさめている。長胴の体部は外面を粗いタテハケで調整し、内面をヘラケズリないしナデで仕上げる。同じ甕でも口径16.0cmを測る小形の4132では、口縁の外反は弱く、内外面ともナデで仕上げている。

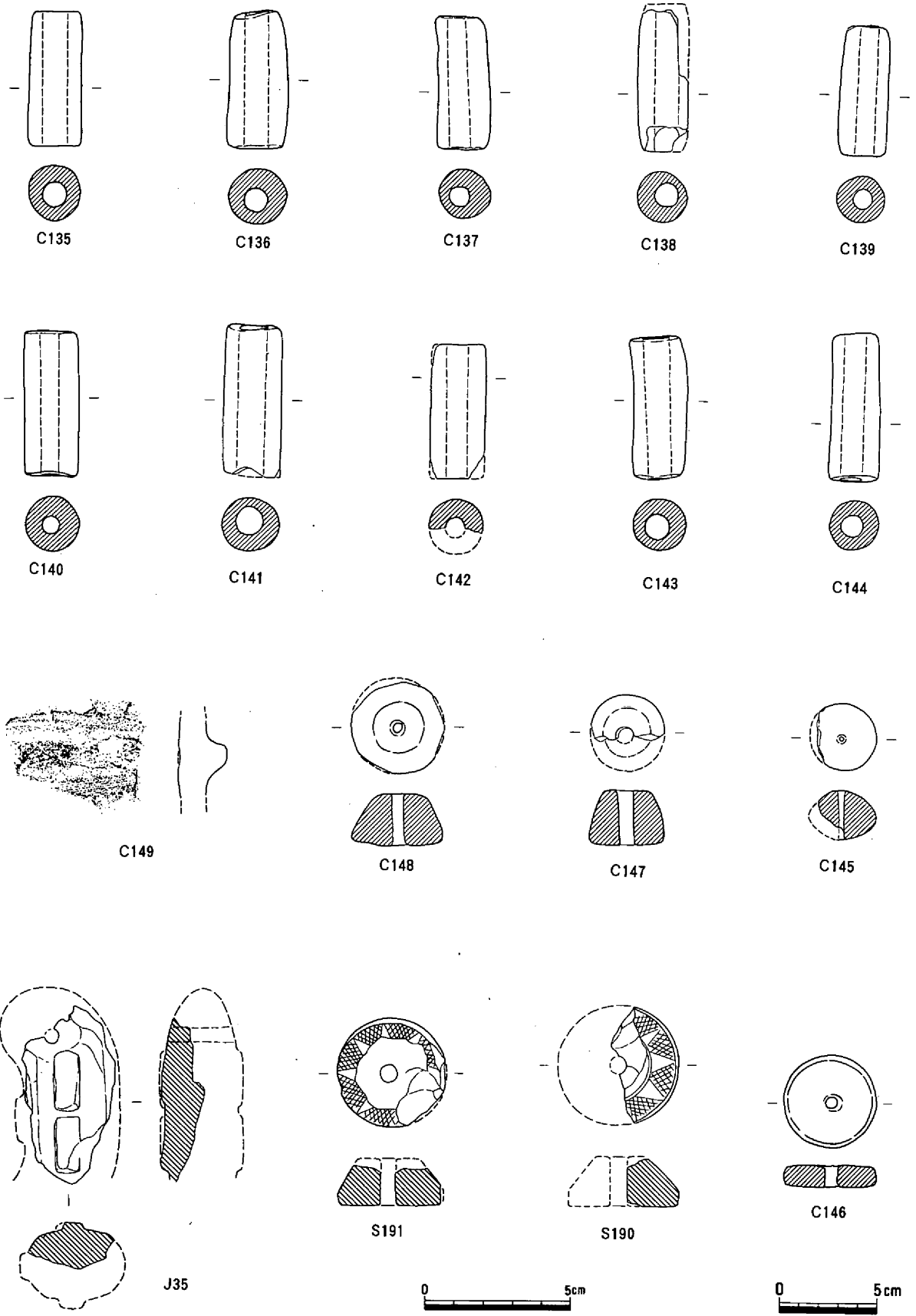
#### 土製品（第217・218図、図版106・107）

土製品には、土錘、紡錘車、埴輪などがある。土製品のうち28点と最も多数を占める土錘は、管状土錘と有溝管状土錘に分けられる。有溝管状土錘C117～119は、長さ9.0～9.5cm、幅4.9～5.5cm、重量172～201gの楕円形をなし、径0.8～1.0cmの孔を穿つ。紐掛かりとなる溝は、中央を一周するとともにこれに直交して孔の両端を結ぶように設けられている。管状土錘は、その形状によって楕円形、球形、円筒形に分類される。C120は楕円形をなし長さ9.0～9.5cm、幅4.9～5.5cm、重量172～201gの楕円形をなし、径0.8～1.0cmの孔を穿つ。球形のC121は長さ9.0～9.5cm、幅4.9～5.5cm、重量172～201gを測り、径0.8～1.0cmの孔を穿つ。C122～144は円筒形を呈する管状土錘で、その法量によって長さ6.0～6.0cm、幅2.4～2.9cm、孔径1.0～1.2cm、重量36～51gと小形のA類、長さ6.5～7.4cm、幅2.7～3.6cm、孔径1.1～1.6cm、重量63～107gと太身のB類、長さ7.0～7.9cm、孔径1.0～1.5cm、重量45～76gとB類より細身のC類に分けられる。紡錘車には、円盤形のC146、裁頭円錐形のC147・148がある。C146は径4.8cm、厚さ1.1cmの円盤形の中央に径0.6cmの孔を穿ったもので、重量

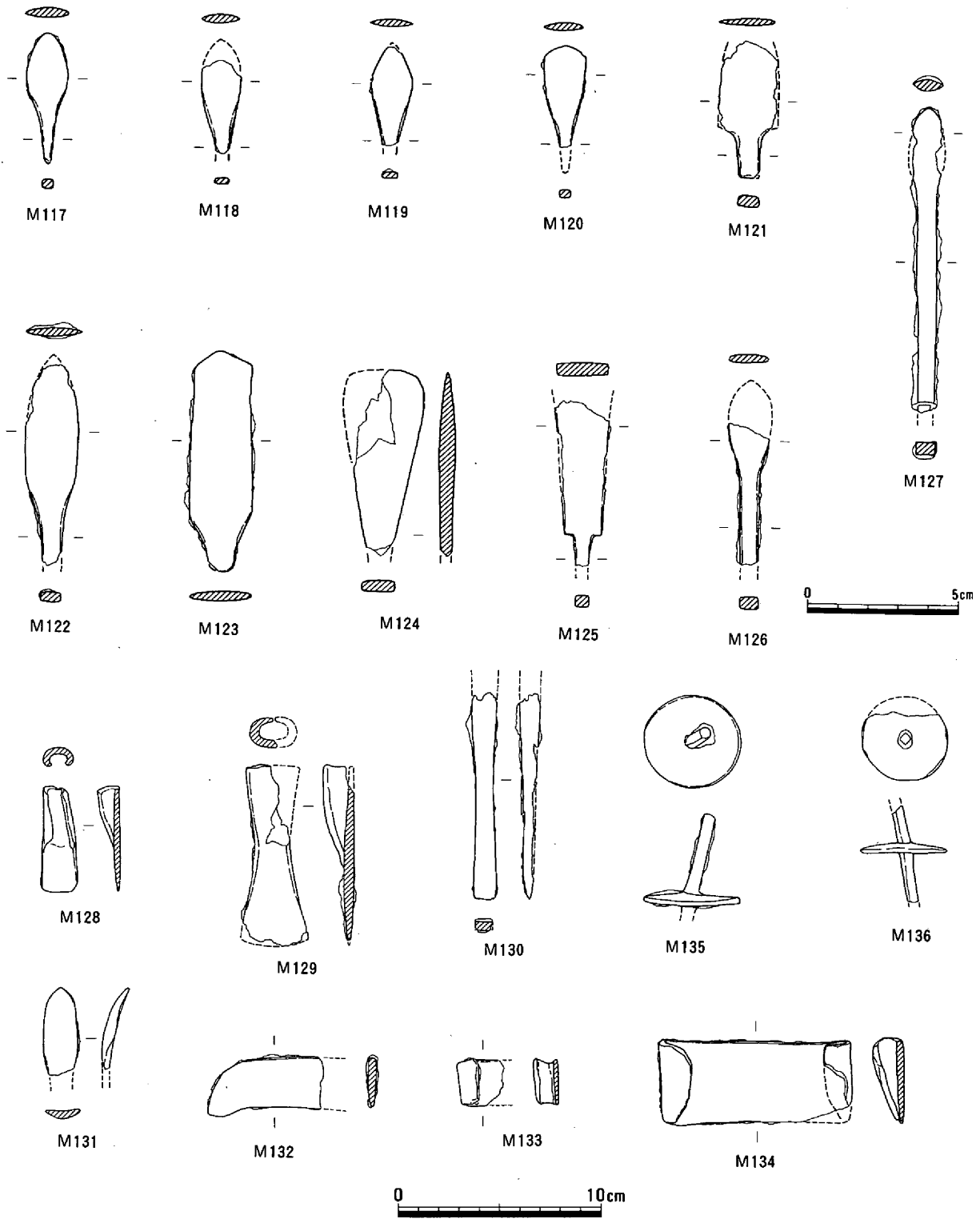


0 10cm

第217図 包含層 (C117~C134)



第218図 包含層 (C135~146)



第219図 包含層 (M117~M136)

は31.9gある。C147は半ばを失っているが、径3.9cm、高さ2.8cm、重量50g前後に復元される。中央に穿たれた円孔は径0.9cmを測る。C148はほぼ完形で、径4.7cm、高さ2.8cmの截頭円錐形をなす。重量は57.2gあり、その中心には径0.5cmとC147よりやや細い孔が穿たれている。C149は円筒埴輪の破片で、外面を粗いタテハケで調整した後、断面台形をなす突帯を貼り付けている。胎土に長石・石英からなる礫を含み、やや軟質な焼成を示す。



## 石製品 (第218図、図版105)

J35は暗緑色の滑石でつくられた子持勾玉の破片で、包含層から出土したものである。現存長6.2cm、幅3.2cmであるが、全長8.5cm、幅3.5cm、厚さ3cmほどに復元される。体部の側面に長方形をなす2個の突起をつくり出す。また、腹部にも1個の突起をつくり出した痕跡が残るものの、背部については明らかでない。紡錘車S191・192は、ともに褐色を呈する滑石を素材としてつくられている。S191は径4.0cm、高さ1.7cm、S192は径3.8cm、高さ1.7cmを測る裁頭円錐形をなし、その中央には径0.8cmの孔を穿つ。また、側面には斜格子で埋めた鋸歯文を飾る。いずれも完形ではないが、重量は35~40gあまりと推定される。

## 金属製品 (第219図、図版109)

いずれも鉄製品で、鏃、斧、鑿、鉞、鎌、摘鎌、鋤ないし鋤先、紡錘車がある。M117~120は木葉形の身をもつ鏃で、長さ4.3cm、幅1.3~1.5cm、重量3.5gを測る。M121は先端を欠失しているが、長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmの三角形の身に復元されるもので、長さ1.6cm、幅0.6cmの偏平な茎を備えている。柳葉形の身をもつM122は茎を欠くものの、現状で長さ6.7cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重量7.2gを測る。圭頭式のM123はほぼ完形で、長さ7.1cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重量16.1gを測る。M124・125は方頭式の鏃で、先端を両刃につくる。M126・127は、長さ2.5cm、幅1.0cmを測る木葉形の身に、幅0.6cm、厚さ0.4cmの長い頸部をもつ。いずれも身と茎の一部を欠いており、M127で現存長10.2cm、重量11.6gを測る。鉄斧にはM128・129がある。このうち、M128は長さ5.3cm、幅1.6cm、重量9.3gと小形で、実用品とは考えられない。M129は、袋部から撥形に開く刃部をもち、長さ9.1cm、幅3.3cm、重量29.0gを測る。M130は現状の長さ10.3cm、厚さ1.0cm、重量26.4gを測る鑿で、基部を失っているものの、先端を打ち延ばして幅1.2cmの両刃につくる。鉞M131は刃部のみが残る。現状で、長さ3.9cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測り、先端に向かって反り上がっている。M132の鎌は、基部を失っているが、幅2.6cmを測る刃部はわずかに内湾する。摘鎌M133は、幅2.6cmの鉄板の両端を折り曲げて板に装着している。M134は、鋤か鋤の刃先と見られ、幅4.0cm、厚さ0.6cmの鉄板の両端を折り曲げて装着している。刃先の幅9.6cm、重量54.9gを測る。紡錘車にはM135・136がある。いずれも、径4.2~4.8cm、厚さ0.4cmの紡輪に、0.5cm角の紡茎を通したものである。紡茎の両端を欠損しているため全長は不明であるが、高田調査区の例からして全長20~25cm、重量は30~40gほどに復元される。

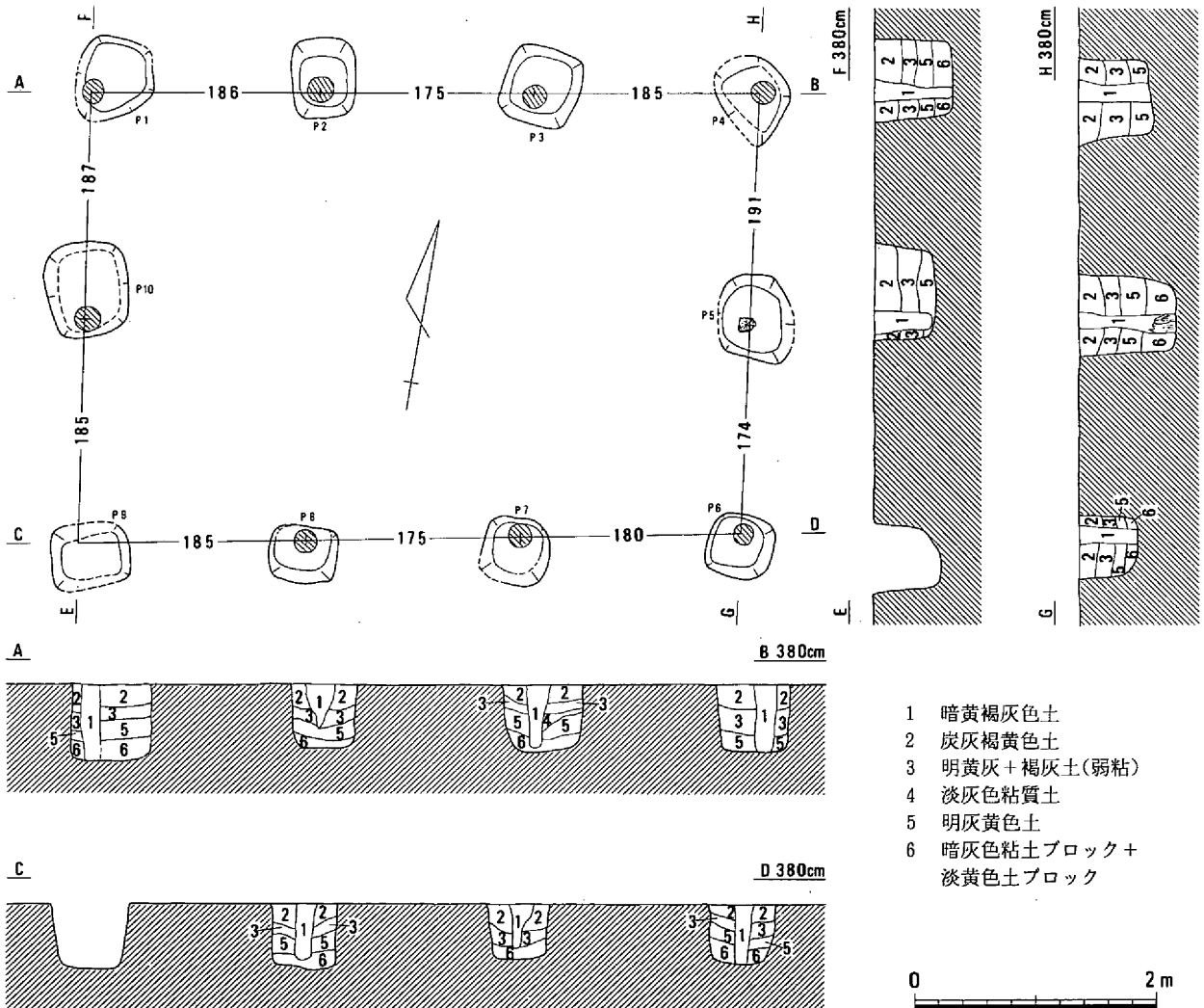
(亀山)

## 第4節 古代の遺構・遺物

### (1) 概要

古代の遺構には、掘立柱建物14棟、柱穴列2条、焼成土壇4基、土壇32基、溝157条がある。これらは、北東から南西にのびる低位部を挟んで調査区の東西に分かれて存在する。ことに、調査区の西側では3m前後の間隔をもって格子状に重複する素掘りの溝が見られ、その周辺から土器をはじめとする遺物が多数出土している。また、高田調査区に接する東側では、3×3間ないし3×2間の総柱建物をはじめとする掘立柱建物がまとまって見られるものの、それらの間には企画性に乏しい。このほか、西側に散在する4基の焼成土壇は前代においても見られたものであるが、この段階においても引き続き使用されている様子が窺える。

これらの遺構およびその周辺から出土した遺物には、供膳具や煮炊具、貯蔵具と考えられる土師器



第220図 掘立柱建物-20



第221図 中屋調査区古代遺構全体図1 1/600

や須恵器のほか、円面硯、帯金具、瓦などがある。これらの遺物は、この北方に広がる官衙状遺構との関わりを想定し得るものであり、その性格を考えるうえで重要な手掛かりとなっている。また、ここから出土した遺物は、その量や組成において高田調査区とは異なる様相を示しており、それぞれの場の機能の違いを物語るものとして注目される。(亀山)

## (2) 掘立柱建物

### 掘立柱建物-20 (第220図、図版36)

緩いカーブを描きながら南北方向に流走する溝-132の東約6mに位置する。もっとも近接した部分では、溝の方向と直行する位置を示す。棟方向はほぼ東西を示し、桁行3間、梁間2間の側柱建物である。柱間心々距離は、174~191cmを測り基本的に6尺前後の基準を示す。

柱の掘り方は、方形を基本とするが大きさも形状も不揃いで、不整な隅丸方形あるいは、いびつな円形を示すものもある。桁行の柱通りは一直線を示し、残存する柱痕跡の観察では径15cm前後の丸柱が用いられたことが看取される。

柱穴の断面形は、逆台形の直線的な形態を示し、平坦な柱穴底面に柱を据えた後、灰黄色~灰褐色を基調とした土で版築状に水平につき固めている様子が明瞭に観察される。

東方にはほぼ同規模の掘立柱建物-21が存在するが、南方約4mの土壌-304付近にも同一の埋積土、平面形を示す柱穴が散在していることから、さらに数棟の掘立柱建物が存在した可能性がある。時期的には、奈良時代の時期的範囲に比定される。(岡田)

### 掘立柱建物-21 (第222図、図版36)

掘立柱建物-20の東方約9mに位置する。棟方向はほぼ東西を指し示す総柱建物である。桁行3間、梁間2間の規模で東西に長い掘立柱建物である。

柱の掘り方は、掘立柱建物-20に比べると整った隅丸方形を呈しているが、南側柱列など直線を示さない。整然とした掘り方からすると、柱通りはやや雑然として乱れている。

柱間は、141~180cmとばらつきがあり5尺弱~6尺のかなり大雑把な数値が示される。この傾向は同規模の掘立柱建物-23・24などとも共通する点に注意される。

すべての掘り方には、柱痕跡が看取され径15cm前後の丸柱が用いられたことがわかる。柱の土層断面によると、柱が抜き取られたことを示す逆「ハ」字形の「抜き取り穴」が観察され、建物の廃棄後、柱だけ転用された可能性がある。

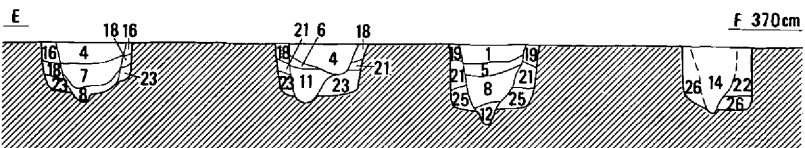
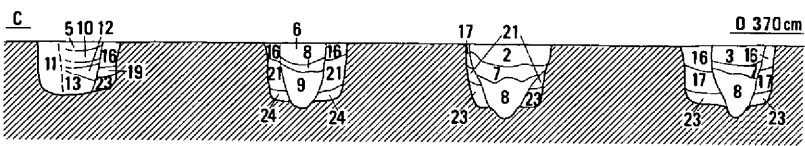
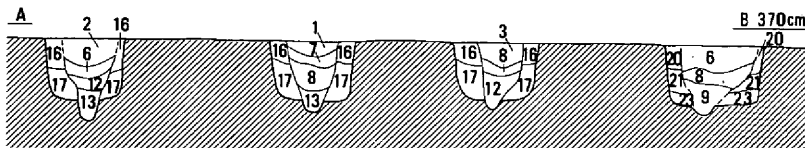
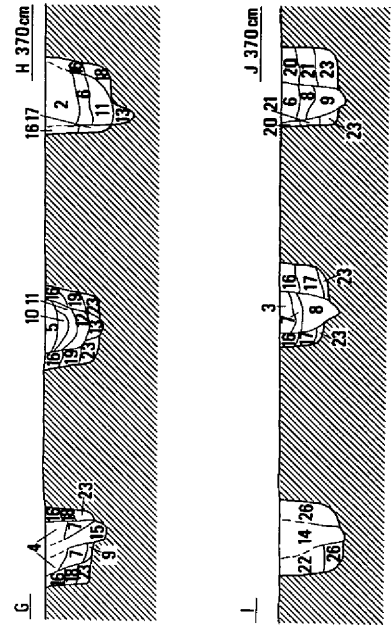
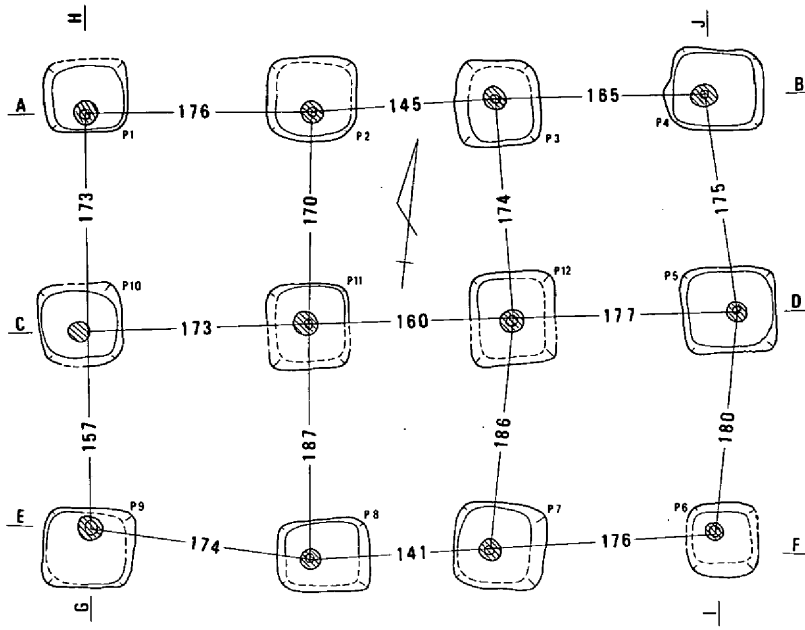
掘り方からの出土遺物には4135の土師器杯があり、これによってこの掘立柱建物が古代、それも奈良時代に建築されたことが推察される。(岡田)

### 掘立柱建物-22 (第223図、図版36)

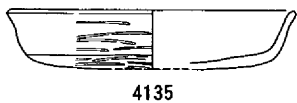
P19区の南西に位置する。規模は3×2間の総柱建物であり、棟方向はN-21°-Wを示す。柱間寸法は桁150~186cm、梁192~206cmであり、桁行は496cm、梁間は407を測る。面積は20.8㎡である。

柱穴の掘り方は方形であり、規模は一辺が73~102cm、深さ64~81cmを測る。なお、P3からかなり劣化していたが柱材が確認されている。

出土遺物は認められなかったが、建物の形態から推測すると、遺構の時期は古代でも前半期のものであると思われる。(澤山)



- 1 淡灰褐色粘質土(マンガン斑含む)
- 2 淡灰褐色粘質土(マンガン斑含む)
- 3 橙灰色粘質土(マンガン斑含む)
- 4 淡黄褐色粘質土
- 5 淡橙色粘質土
- 6 淡橙灰色粘質土(マンガン斑含む)
- 7 淡黄褐色粘質土
- 8 淡黄灰色粘質土
- 9 黄灰色粘質土
- 10 淡褐橙色粘質土(マンガン斑含む)
- 11 淡灰褐色粘質土
- 12 淡灰色粘質土
- 13 灰色粘土粘質土
- 14 明黄茶色粘質土
- 15 褐灰色粘質土(炭・焼土含む)
- 16 淡灰褐色粘質土
- 17 淡灰色粘質土
- 18 淡褐黄色粘質土
- 19 淡褐橙灰色粘質土
- 20 淡橙灰色粘質土
- 21 淡黄灰色粘質土
- 22 茶褐色粘質土
- 23 灰色粘質土
- 24 灰色粘土
- 25 淡灰色粘質微砂
- 26 淡茶色粘質土

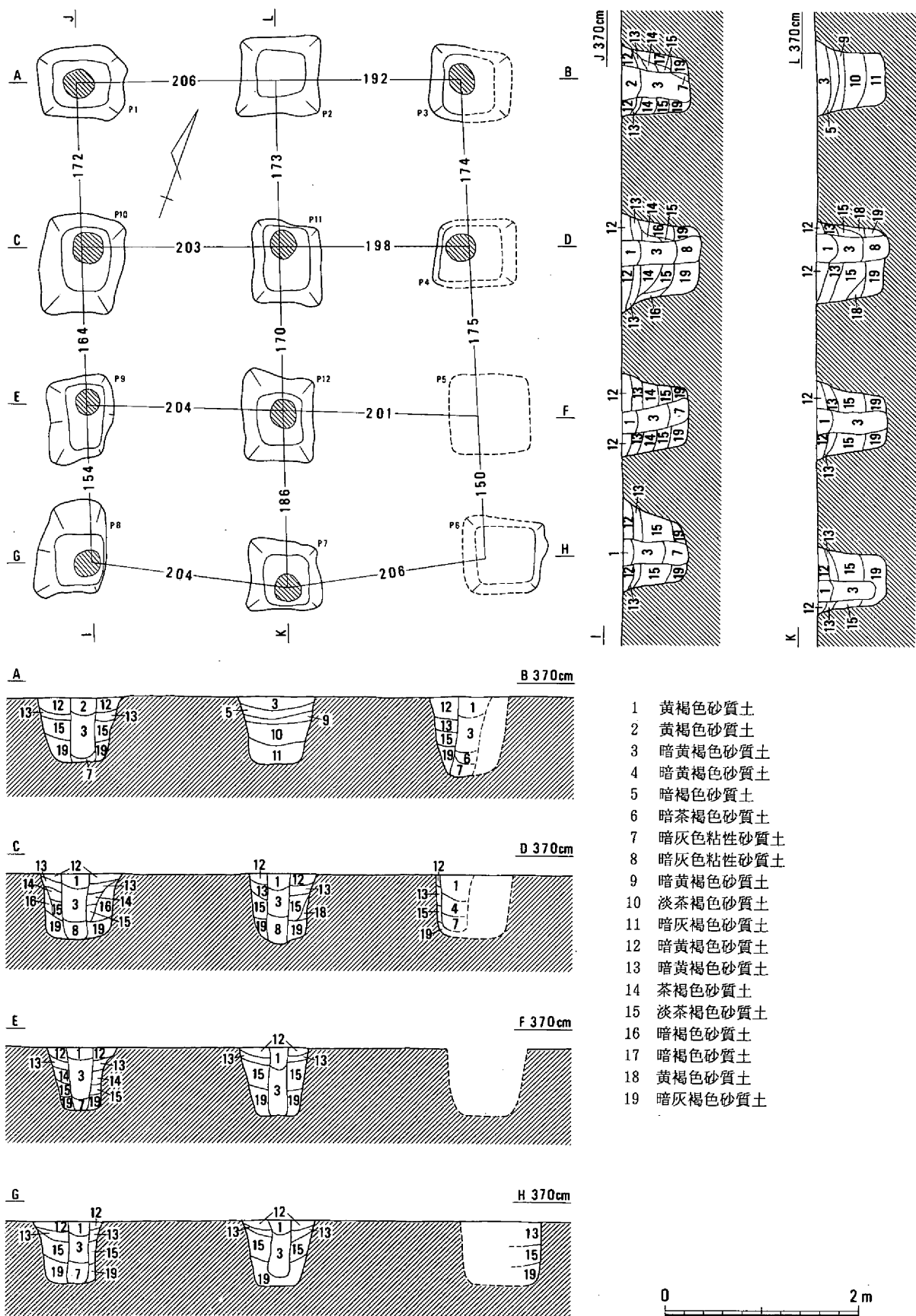


第222図 掘立柱建物-21

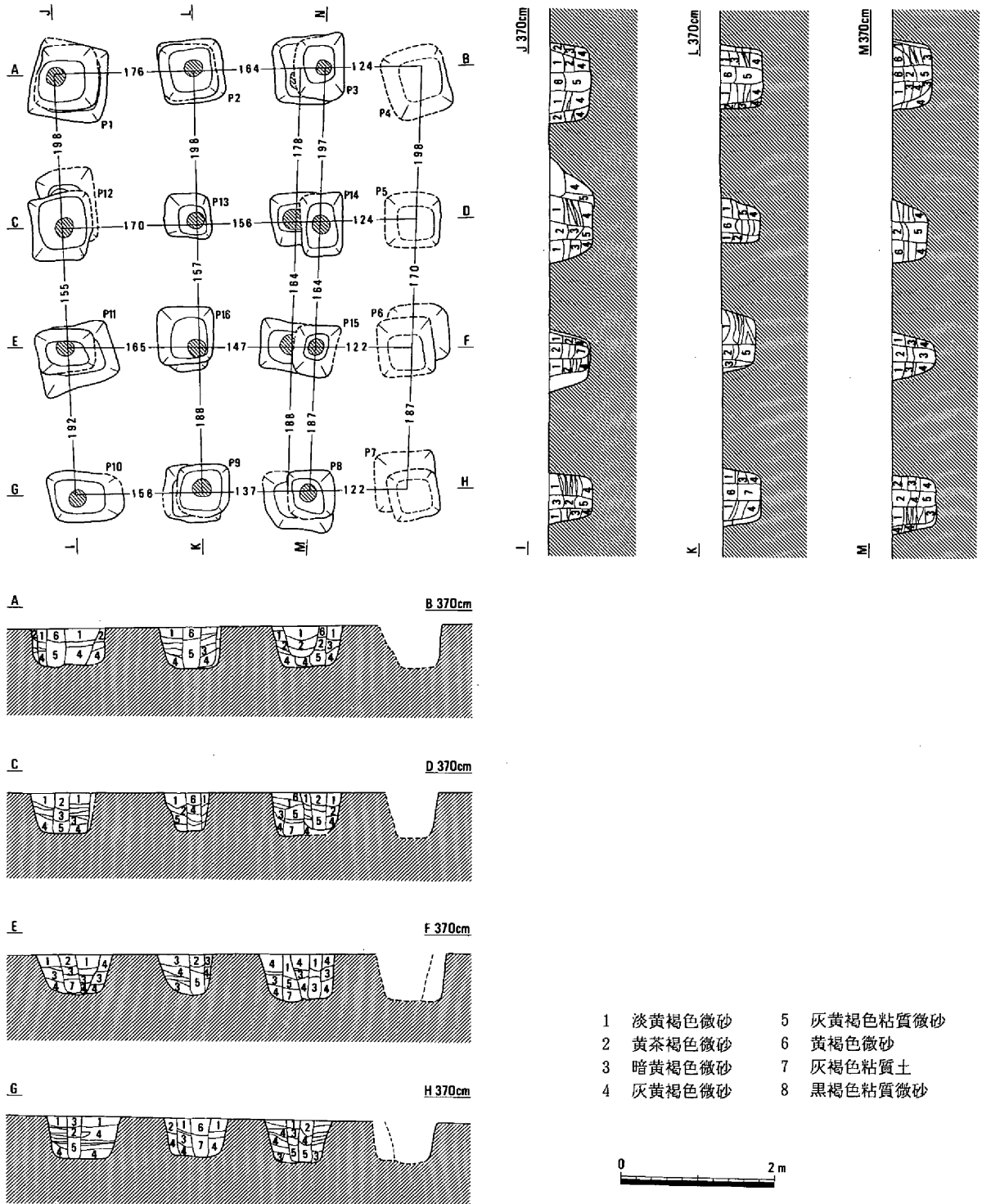
掘立柱建物-23・24 (第224図、図版36・37)

掘立柱建物-23・24は、中屋調査区の東端、掘立柱建物-22の南に隣接する掘立柱建物である。掘立柱建物-22との間隔は3mあり、また棟方向をほぼ同じくし、西辺をそろえている。掘立柱建物-22と比べるとやや小さい建物である。これと同様な遺構は周囲において認められなかった。東辺の柱穴は、調査時の側溝の掘り下げによりその平面形は確認できなかった。

建て替えが認められており、古いものが掘立柱建物-23、新しいほうが掘立柱建物-24である。い



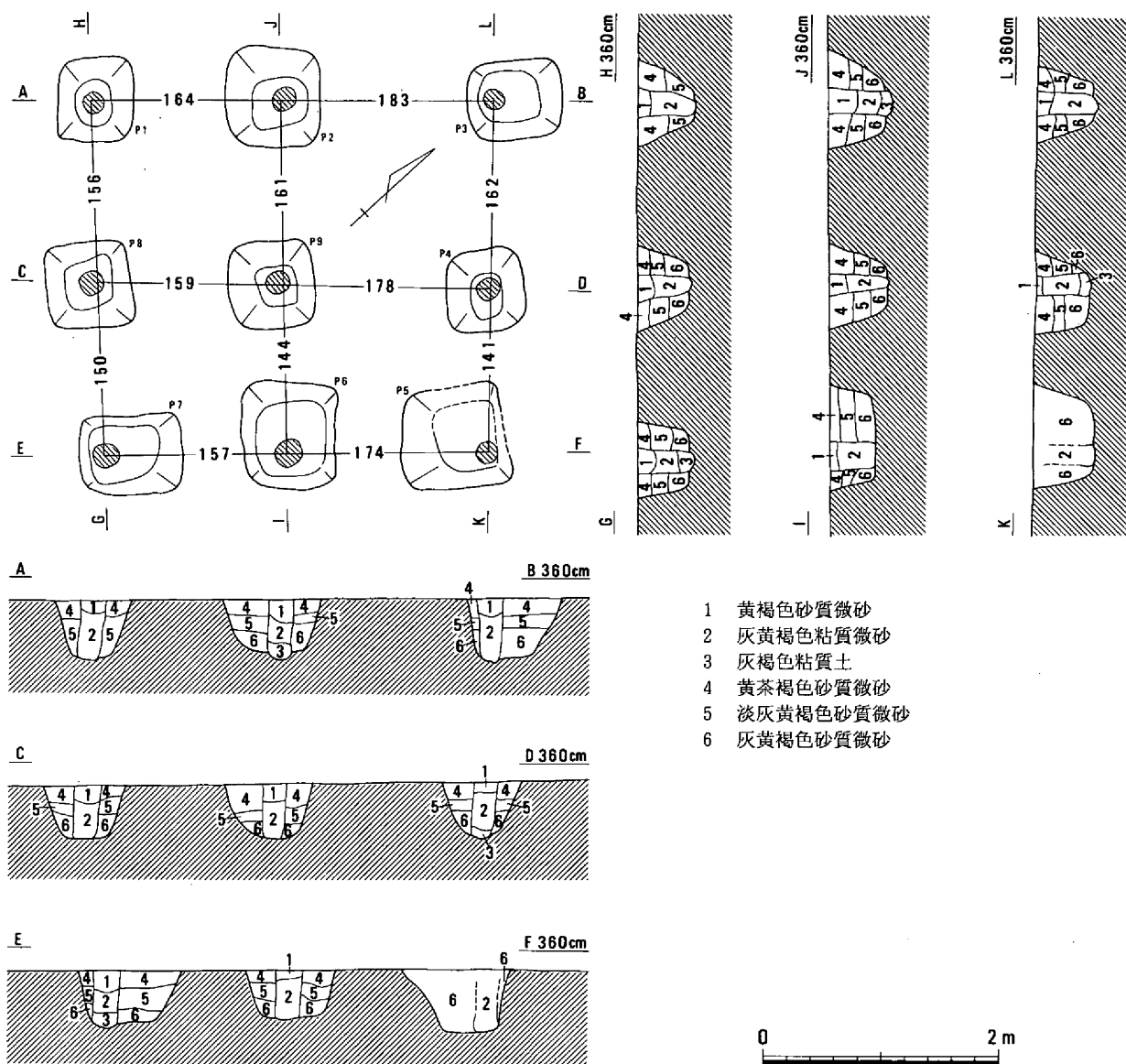
第223図 掘立柱建物-22



第224図 掘立柱建物-23・24

いずれも3×3間の総柱建物で、棟方向はN-17°-Wであるが、東辺はやや東に振っている。

掘立柱建物-23の正確な規模などは、建て替えのために明らかではないが、掘立柱建物-24とあまり変わらず、桁行総長が531cm程度、梁間総長が460cm前後を測ると推定される。柱間寸法は、桁行で164~190cm程度、梁間で128~170cm程度になると思われる、ややばらつきがある。特に中央の梁間は掘立柱建物-24と比べて狭くなっている。



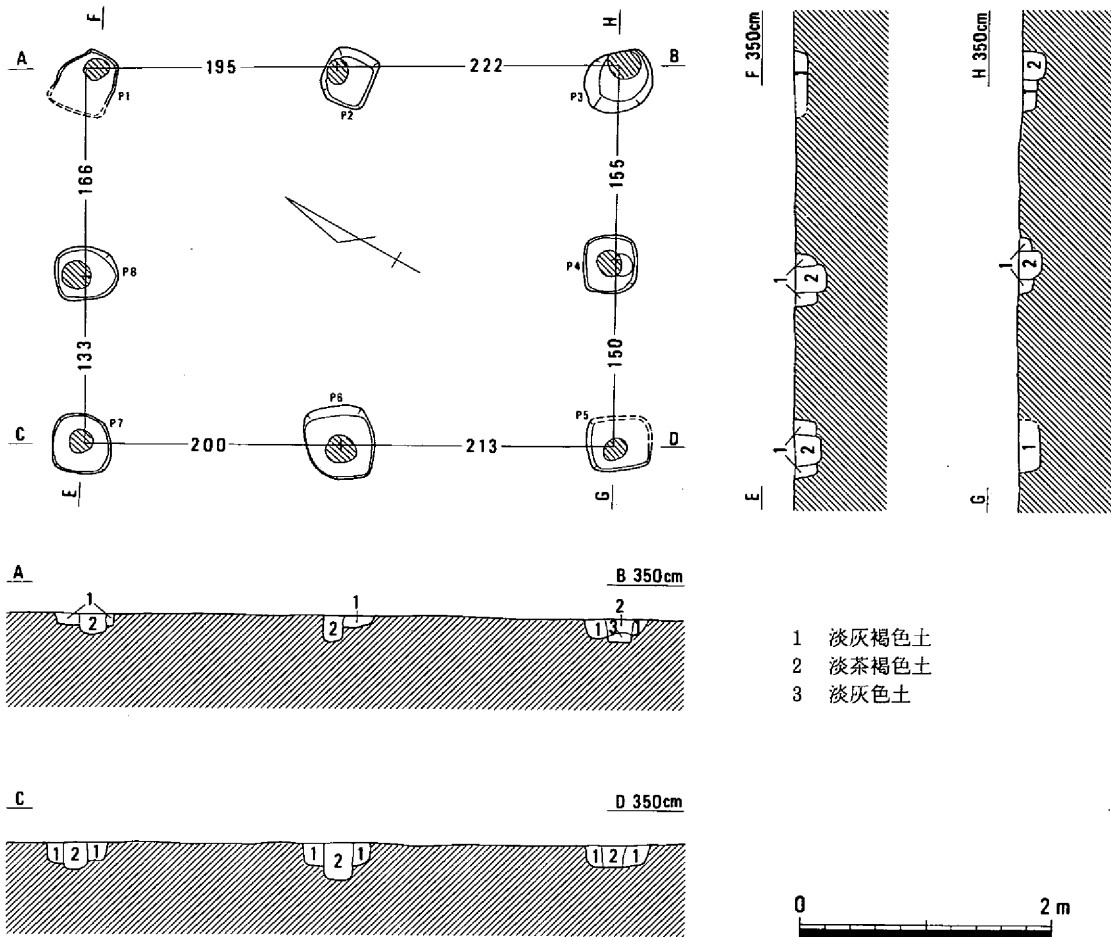
第225図 掘立柱建物-25

掘立柱建物-23の柱穴は平面方形で1辺60~100cm、深さ57~58cmを測り、掘り方平面の大きさはややばらつきがある。P13~15で平面円形の柱痕跡が確認できており、径28cmを測る。柱痕跡の下部は灰褐色粘質土として確認された。柱穴の掘り方埋土から須恵器や土師器の小片が出土している。

掘立柱建物-24は、桁行総長547cm、梁間総長463cmを測る。柱間寸法は、桁行で155~197cm、梁間で122~176cmを測り、ややばらつきがある。建て替えによって中央の梁間は30cm程度東に寄せられている。掘立柱建物-24の柱穴は平面方形で1辺60~85cm、深さ49~56cmを測る。各柱穴で平面円形の柱痕跡が確認できており、径24~28cmを測る。柱痕跡の下部は灰褐色粘質土や灰黄褐色粘質微砂として確認され、わずかに木質が残存するものもあった。

両者の柱穴の掘り方底面は平らで、直接柱を据えている。柱の周りの埋土は比較的丁寧に施されており、互層状の土層が観察された。建物の面積は24.1㎡である。柱穴掘り方埋土から須恵器の破片が出土しており、建物の時期は奈良時代と考えられる。(柴田)





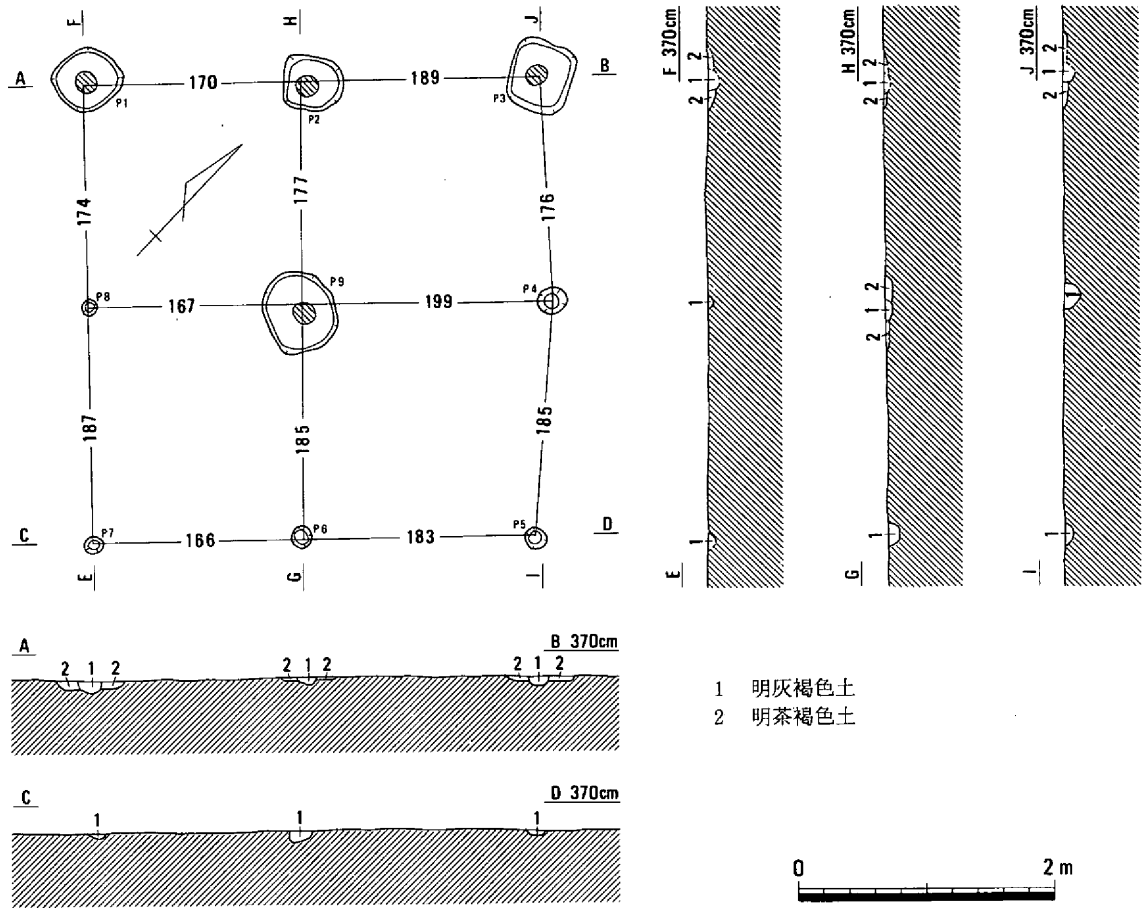
第226図 掘立柱建物-26

掘立柱建物-25 (第225図、図版36・37)

掘立柱建物-25は、中屋調査区の東端、掘立柱建物-23・24に切られた掘立柱建物である。この建物のP5が掘立柱建物-23・24のP10に切られている。掘立柱建物-25は2×2間の総柱建物で、棟方向はN-42°-Eである。掘立柱建物-23・24と比較するとかなり西へ振っている。桁行総長は346cm、梁間総長は305cmを測る。柱間寸法は、桁行で157~183cm、梁間で162~164cmを測る。柱穴は平面方形で1辺71~90cm、深さ44~54cmを測る。各柱穴で平面円形の柱痕跡が確認できており、径30cm前後を測る。柱穴の底面はほぼ平らで、直接柱を据えている。柱のまわりの埋土は丁寧に施されており、2~3の土層が観察された。建物の面積は12㎡である。柱穴掘り方埋土から須恵器の破片が出土しており、建物の時期は奈良時代と考えられる。(柴田)

掘立柱建物-26 (第226図、図版37・38)

掘立柱建物-25の南約11mにあり、O19区の南端に近い位置に検出した。桁行2間、梁行2間の建物で、平面形は長方形を呈する。建物の主軸方向はN-30°-Wと大きく西に振っている。柱穴の平面形は方形を呈するもので、一辺60~45cm、検出面からの深さ29~15cmを測る。柱穴の全に柱痕跡を検出した。直径25~20cmを測るものである。柱痕跡の心芯間の距離は、桁行で222~195cm、梁行で166~133cmを測る。桁行きの全長は東側が417cm、西側が413cmとわずかに東が長い。梁行の全長は南側が305cm、北側が299cmと南側がわずかに長い。その差は僅差であり、各々対面する壁はほぼ平行す



第227図 掘立柱建物-27

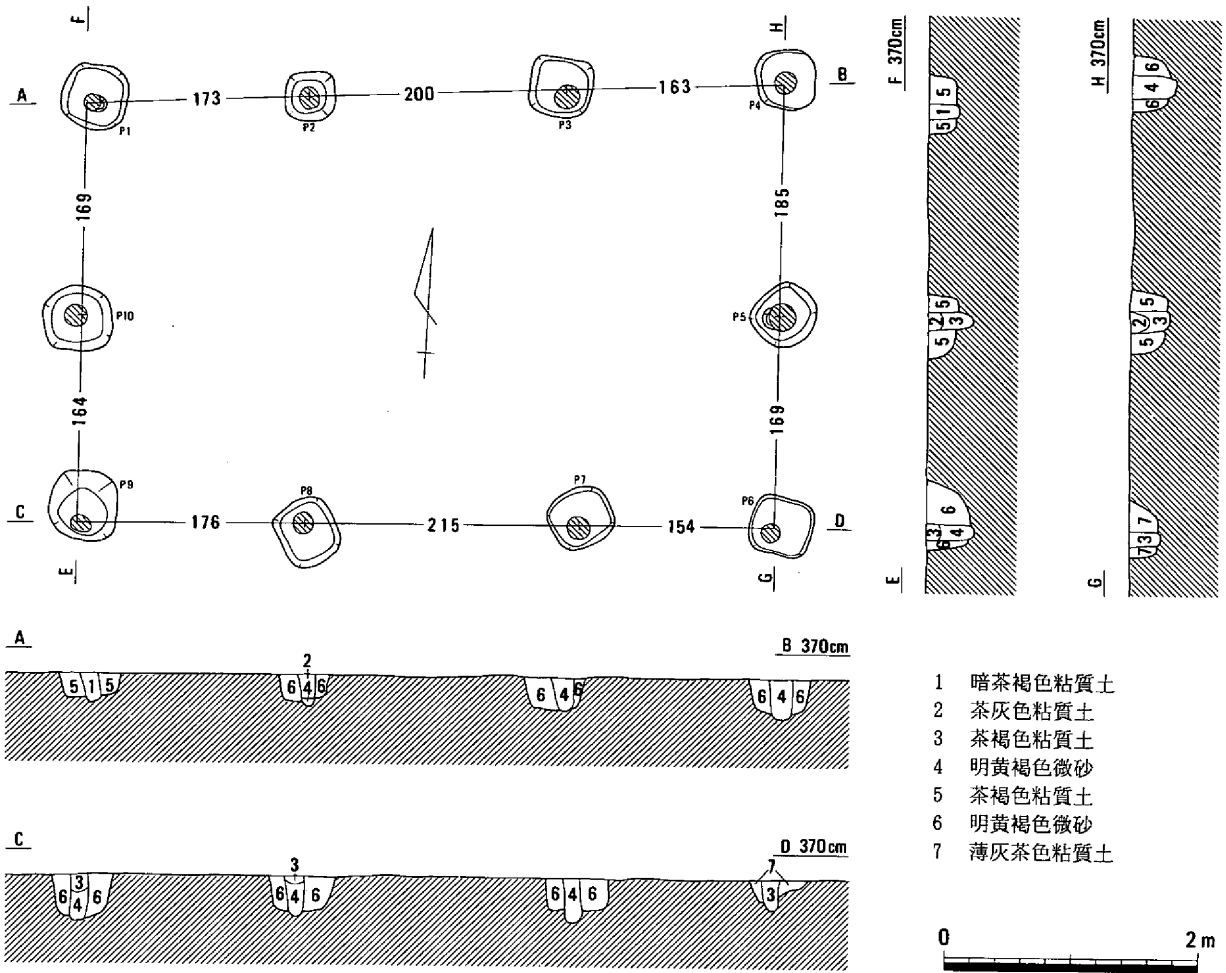
るものである。建物の平面積は12.5㎡を測る。時期は出土遺物が少ないため明確ではないが、検出した層位や周囲の状況から古代に属するものと考えられる。(井上)

掘立柱建物-27 (第227図)

O19区の南端に位置するもので、掘立柱建物-26の南東約14mに検出した。桁行2間、梁行2間の総柱建物である。この建物は大きく削平されていたため柱穴を検出したのは4個のみで、残りのものは柱の痕跡のみが残存していた。柱穴の平面形は方形を呈するもので、一辺60~47cm、検出面からの深さ11~5cmを測る。柱痕跡はすべての位置に検出した。その心芯間の距離は、桁行で187~174cm、梁行で199~166cmを測る。桁行の総長は北東側が361cm、中央が362cm、南西側が361cmを測り、その長さはほぼ一定している。それに比べて梁行の総長は北西側が359cm、中央が366cm、南東側が349cmを測り、若干の長短がある。建物の平面形は正方形を呈するもので、主軸の方向はN-44°-Wと大きく西に振っている。建物の床面積は13.5㎡を測る。時期は出土遺物がほとんど無いため明確ではないが、検出した層位や周囲の状況から古代に属するものと考えられる。(井上)

掘立柱建物-28 (第228図、図版38)

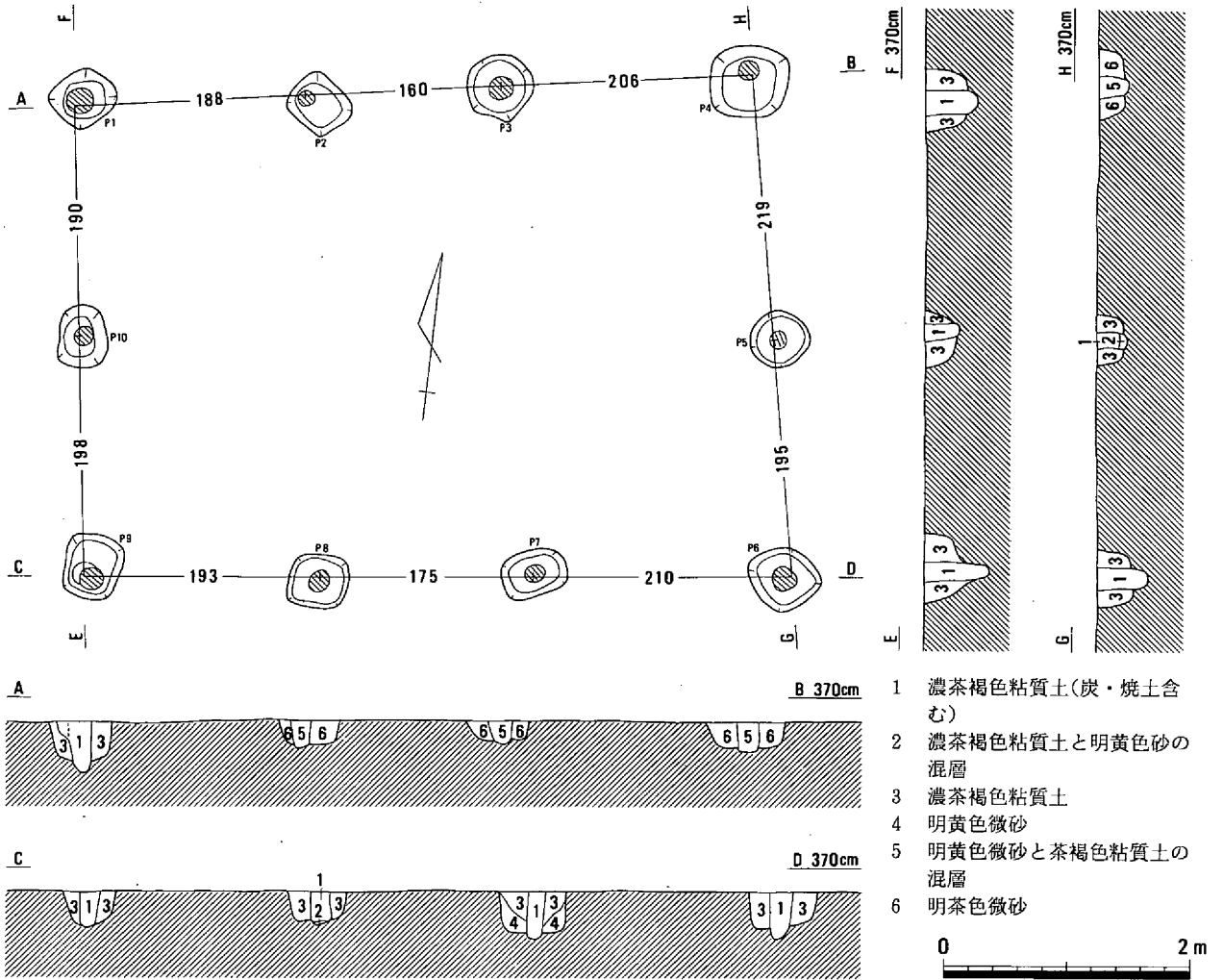
P19区の北端に近い位置に所在し、掘立柱建物-27の南約6mに検出した。桁行3間、梁行2間の建物である。建物の平面形は長方形を呈するものである。その主軸方向はN-86°-Eとほとんど東西方向を向いている。柱穴の平面形は方形を呈するもので、建物の主軸方向にその辺を合せるものが



第228図 掘立柱建物-28

ほとんどである。柱穴掘り方の一辺は53~42cm、検出面からの深さは48~22cmを測る。柱穴掘り方のすべてから柱痕跡を検出した。柱痕跡の芯心間の距離は、桁行で215~154cmを測り、中央の柱間が両側に比べて少し広い。梁行の距離は、185~164cmを測り、北側の柱間が少し広い。桁行の総長は北側が536cm、南側が545cmを測り、南側が少し長い。梁行の総長は西側が333cm、東側が354cmを測り、東側が少し長い、歪さを感じさせない。建物の床面積は18.6㎡を測る。時期は出土遺物がほとんど無いため明確ではないが、検出した層位や周囲の状況からして古代に属すると考えられる。(井上) 掘立柱建物-29 (第229図、図版38)

P19区の北端に近い位置に所在し、掘立柱建物-28の南西端部とこの建物の北東端部の一部が重複した状態で検出した。桁行3間、梁行2間の建物である。建物の平面形はおおむね長方形を呈するもので、その主軸方向はN-82°-Eと非常に東西方向に近い方向を向いている。柱穴の平面形はそのほとんどが方形を呈している。柱穴掘り方の一辺は63~46cm、検出面からの深さ52~22cmを測る。柱穴掘り方のすべてから柱痕跡を検出した。柱痕跡は柱穴掘り方のほぼ中央に検出したものである。柱痕跡の心芯間の距離は、桁行で210~160cmを測り、中央の柱間が狭く両側が広く造られている。桁行の総長は南側が578cm、北側が554cmと南側が少し長い。梁行は219~190cmを測り、各々の距離はすべて異なる。梁行の総長は東側が414cm、西側が388cmと東側が少し長い。このように各側面の総長に若



第229図 掘立柱建物-29

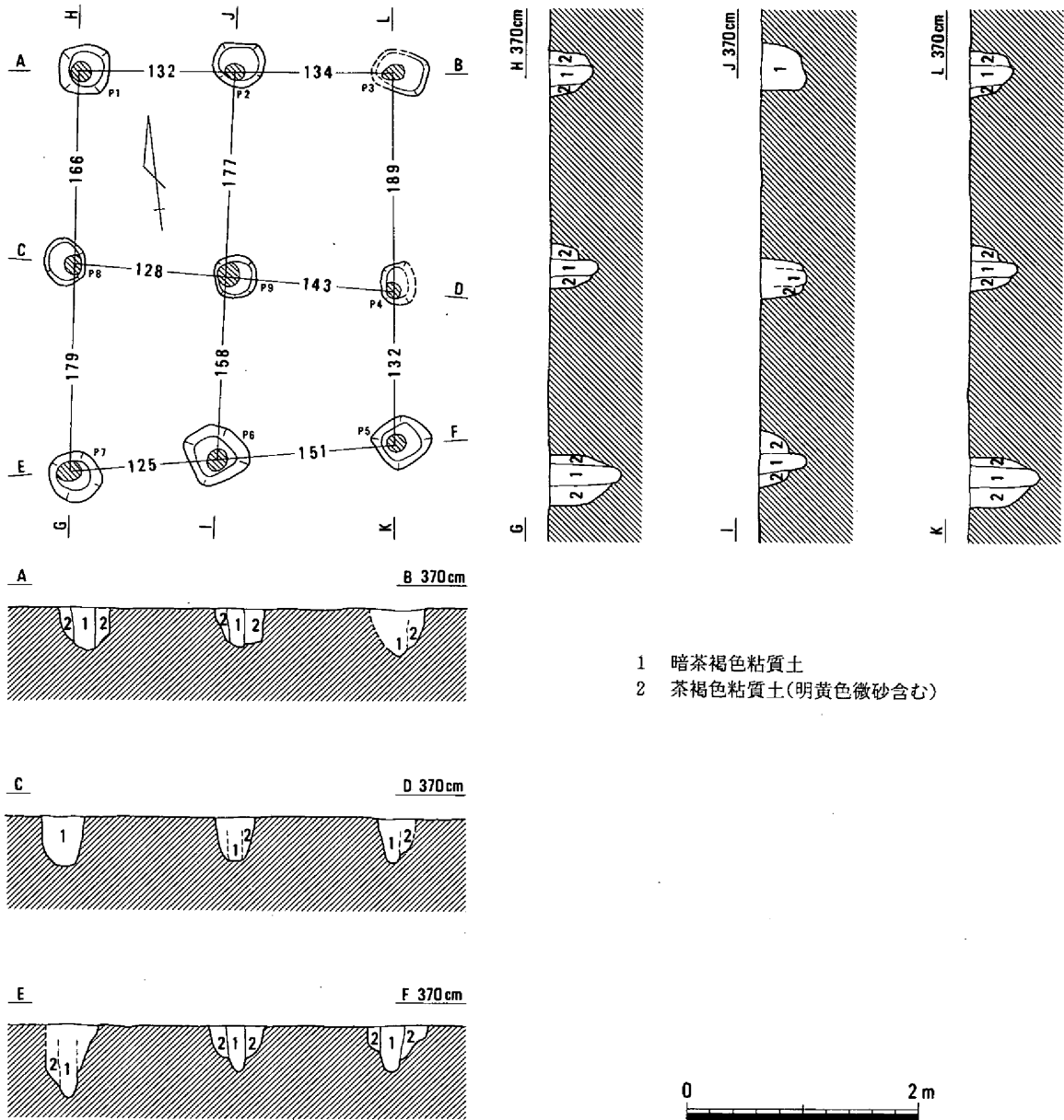
干の長短が見られる。建物の床面積は22.7㎡を測る。時期は出土遺物がほとんど無いため明確ではないが、検出した層位や周囲の状況からして古代に属するものと考えられる。(井上)

掘立柱建物-30 (第230図、図版39)

P19区の北端に近い位置に所在し、掘立柱建物-29の北西端の柱穴とこの建物の北東端の柱穴が切りあう状態で検出した。検出状況からこの建物が古い。建物は桁行の間数は不明であるが梁行は2間の総柱建物である。主軸方向はN-86°-Wと東西方向を向く。柱穴の平面形は方形を呈するものが多い。柱穴掘り方の一辺は49~36cm、検出面からの深さ62~36cmを測る。柱穴掘り方のすべてから柱痕跡を検出した。柱痕跡の心芯間の距離は、桁行151~125cm、梁行189~132cmを測り、柱痕跡間の距離に同一のものはない。時期は出土遺物がほとんど無いため明確ではないが検出した層位や、建物の柱穴掘り方の切りあい状況から古代に属するものと考えられる。(井上)

掘立柱建物-31 (第231図、図版39)

P19区の北端に近い位置に所在し、掘立柱建物-30の南約2mに検出した。桁行2間、梁行2間の建物である。建物の主軸方向はN-78°-Eと東西方向から少し北に振れている。柱穴の平面形はそのほとんどが方形を呈している。柱穴掘り方の一辺は60~34cm、検出面からの深さ32~24cmを測る。柱穴掘り方のすべてから柱痕跡を検出した。柱痕跡の直径は25~20cmを測るものである。柱痕跡の心

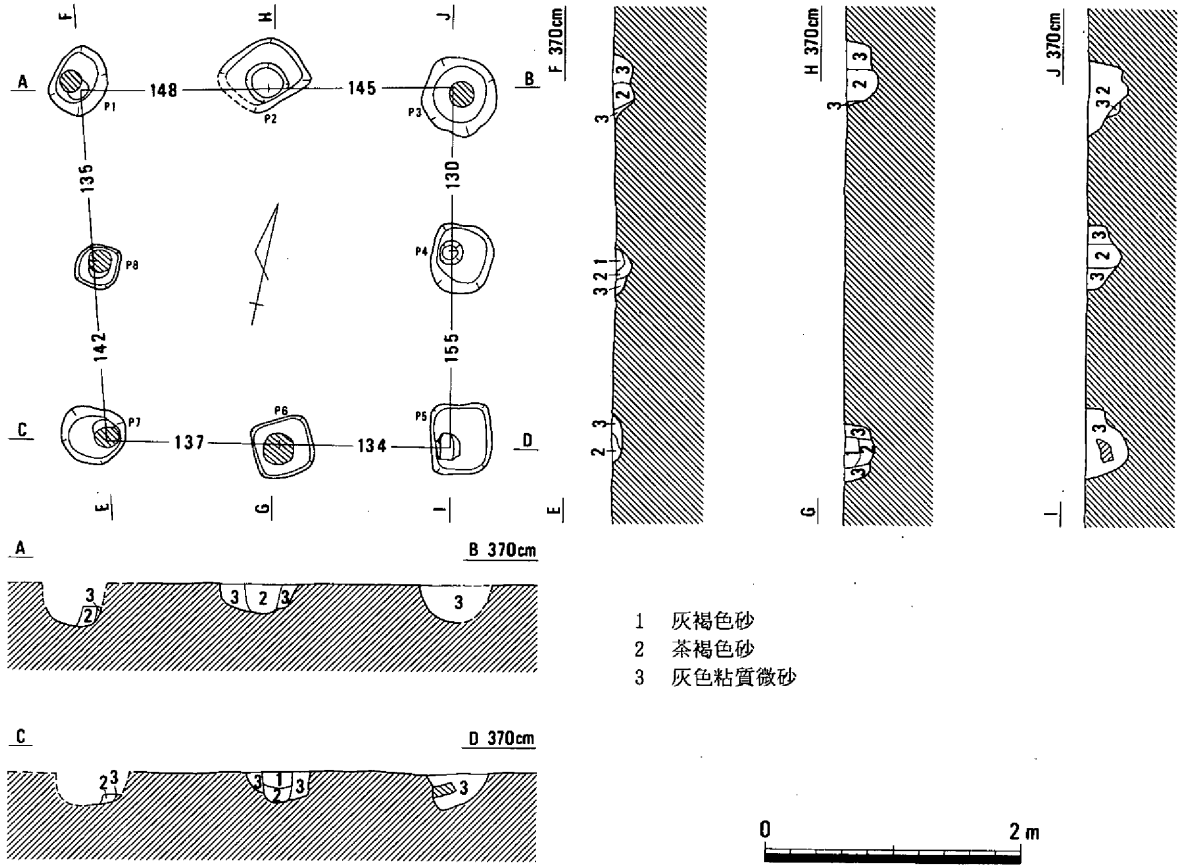


第230図 掘立柱建物-30

芯間の距離は、桁行148~134cm、梁行155~130cmを測るもので、同一の距離を示すものはない。桁行の総長は293cm、梁行の総長は285cmを測り、建物の平面形は正方形に近い台形状を呈している。建物の床面積は7.9㎡を測る。時期は出土遺物がほとんど無いため明確ではないが検出した層位や周囲の状況からして古代に属するものと考えられる。(井上)

掘立柱建物-32 (第232図、図版39)

P19区の北端に近い位置に所在し、掘立柱建物-29の南約1mに検出した。この部分は調査区の南端部にあたるため建物の一部を検出したのみで、その全体については不明である。全体が検出されなかったため、建物の規模は不明であるが、P3の東側にはこの建物に関係すると考えられる柱穴は検出されていないので、東西方向は2間の建物と推定される。柱穴の平面形は方形を呈するもので、掘り方の一辺は55~48cm、検出面からの深さは19~11cmを測る。柱穴掘り方からは柱痕跡を検出した。柱痕跡間の距離は161~158cmを測り、ほぼ等間隔である。建物の主軸方向はP1~P3で測るとN-



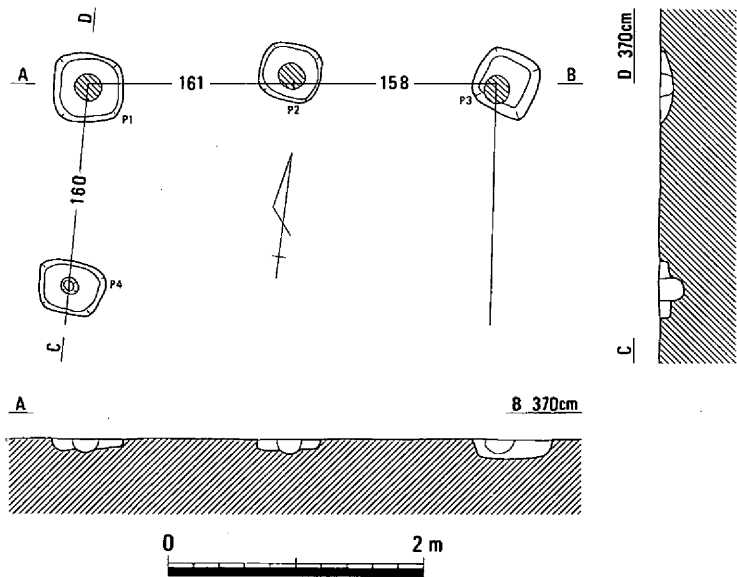
第231図 掘立柱建物-31

82°-Eとなり、掘立柱建物-29と平行もしくは直交する。時期は出土遺物が少ないため明確ではないが、検出した層位や周囲の状況から古代に属するものと考えられる。(井上)

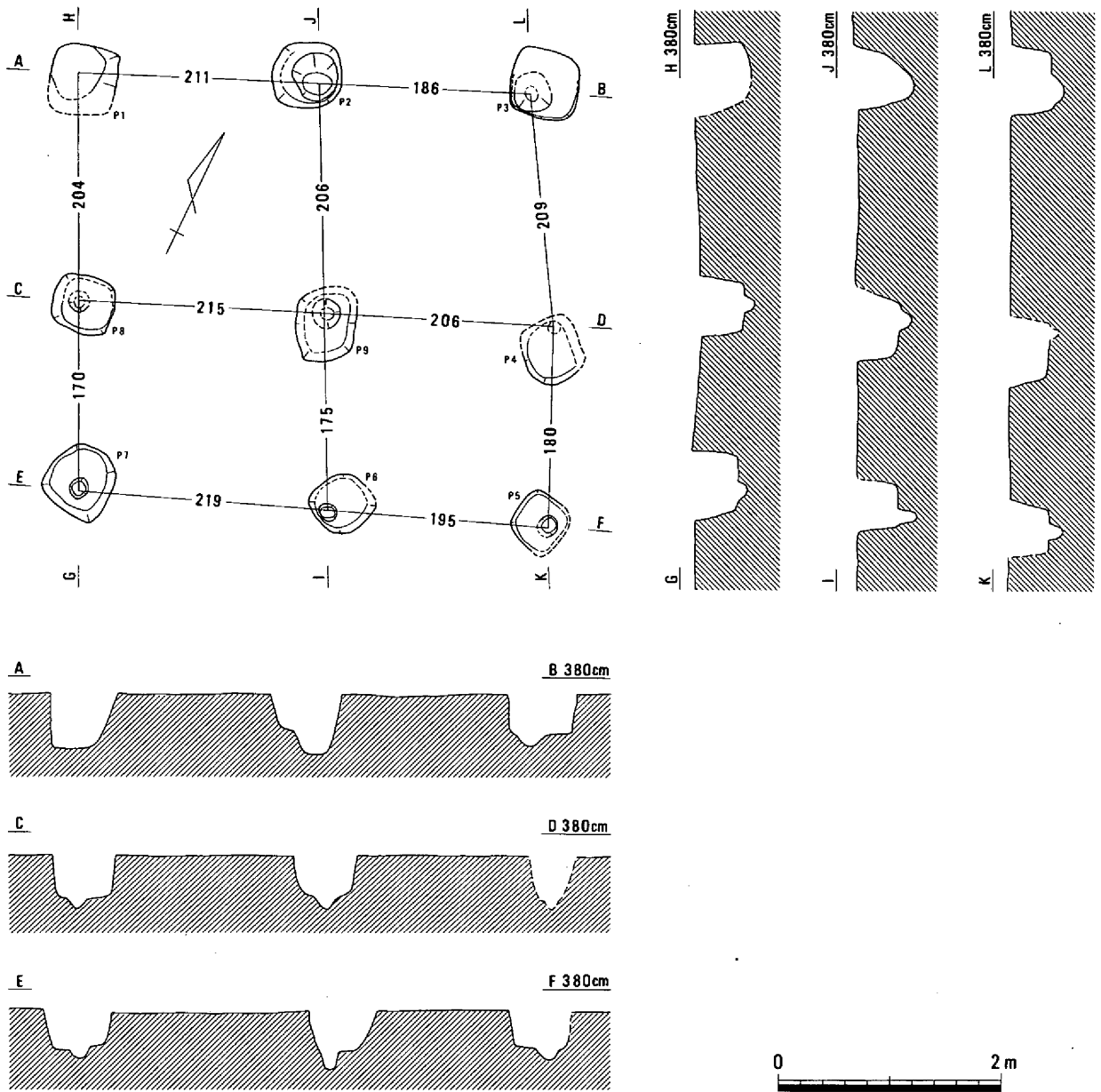
掘立柱建物-33 (第233図)

O19区南東部で、溝-136の南1.5mに位置する。

2×2間の総柱建物で、柱掘り方底面に残る柱痕跡をつなぐと平行四辺形を呈するが、桁行416cm、梁間339cmを測り、面積は15.7㎡で、主軸方向はN-68°-Wを示す。柱間は桁行で186~219cm、梁間で170~209cmといずれも不揃いであり、南および東の柱間が短い。柱掘り方は方形で、1辺48~60cm、深さ43~54cmを測るが、柱掘り方の辺の方向は建物のそれに沿わない。(光永)



第232図 掘立柱建物-32



第233図 掘立柱建物-33

柱穴列-1 (第234図)

中屋調査区の南部に位置し、旧微高地の南端にあたる。柱穴列-2とは少し方位を違えていて、建物とはならなかった。他にも周辺部を追求したが、検出されなかったことから柱穴列とした。4本の柱穴が直線上に並び、両側の柱間は5.6mとなり、柱間は1.85mを測る。主軸はN-7°-Wを示している。柱穴は上部がかなり削平されていて、深さ20cm程しか残っていないが、検出面での平面形は隅丸方形を呈している。良好な遺物は検出されていないが、周辺の遺構との関係から奈良時代のものと推定される。

(正岡)

柱穴列-2 (第234図)

柱穴列-1の東側に位置し、主軸はN-4°-Eを示している。3本の柱穴が並び、両側の柱間は3.4mを測る。柱穴の掘り方は方形を呈する。時期は奈良時代と推定される。

(正岡)



第234図 中屋調査区古代遺構全体図2 1/600



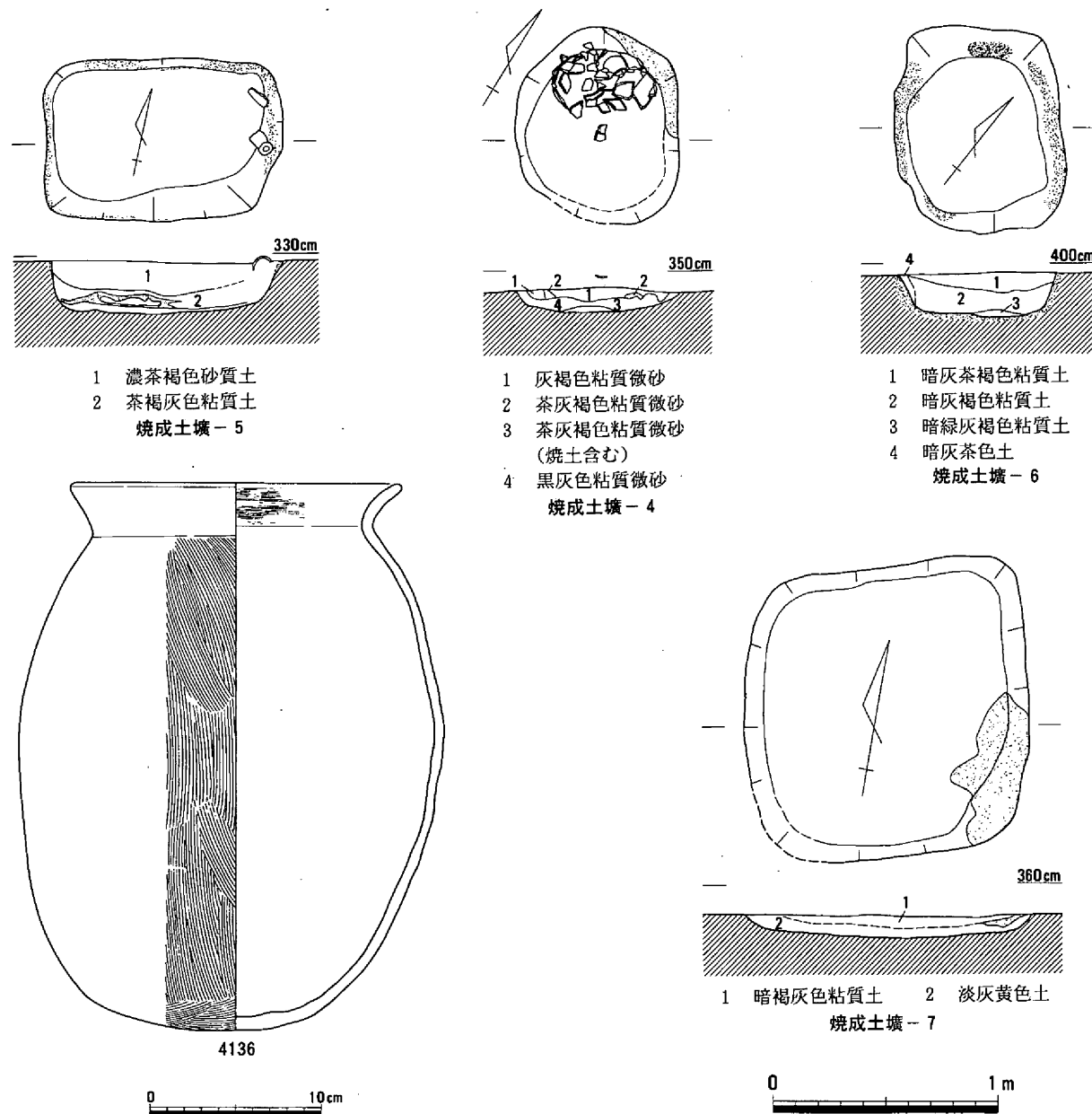
(3) 焼成土壌

焼成土壌-4 (第235図、図版91)

中屋調査区の南部に位置し、南北と東西に並ぶ溝群の中にある。周辺には不整形の土壌が多い。平面形は不整形を呈し、角張ってはいない。大きさは、長径102cm、短径71cm、深さ17cmを測る。北側が特に焼けている。内部から甕4136が検出されたことから奈良時代に比定される。(正岡)

焼成土壌-5 (第235図)

溝-132の西約10mで検出された。長軸をほぼ東西とする隅丸長方形を呈し、塹底は比較的平坦である。塹底ではほとんど被熱が認められないが、周壁では顕著に認められ、南東壁の一部を除いて橙褐色に変色している。出土遺物は見当たらないが古代、それも奈良時代に比定されよう。(岡田)



第235図 焼成土壌-4 (4136)・5~7

焼成土壇－6（第235図）

O18区南東部で、溝－132の西4.5mに位置する。平面形は不整な長方形を呈し、長軸長91cm、短軸長75cmを測り、海拔高3.74mではほぼ平坦な底面まで深さ20cmが残る断面形はA b型である。底面から側壁に熱影響が認められるが、側壁に顕著である。出土遺物はない。（光永）

焼成土壇－7（第235図）

溝－132の検出北端の約6m西側で検出された。平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、軸線はほぼ東西南北を示す。明瞭な掘り方を示すが深さは約10cmあまりときわめて浅く、土器などの出土遺物は見当たらないが、奈良時代に比定される可能性が高い。（岡田）

（4）土壇

土壇－275（第236図）

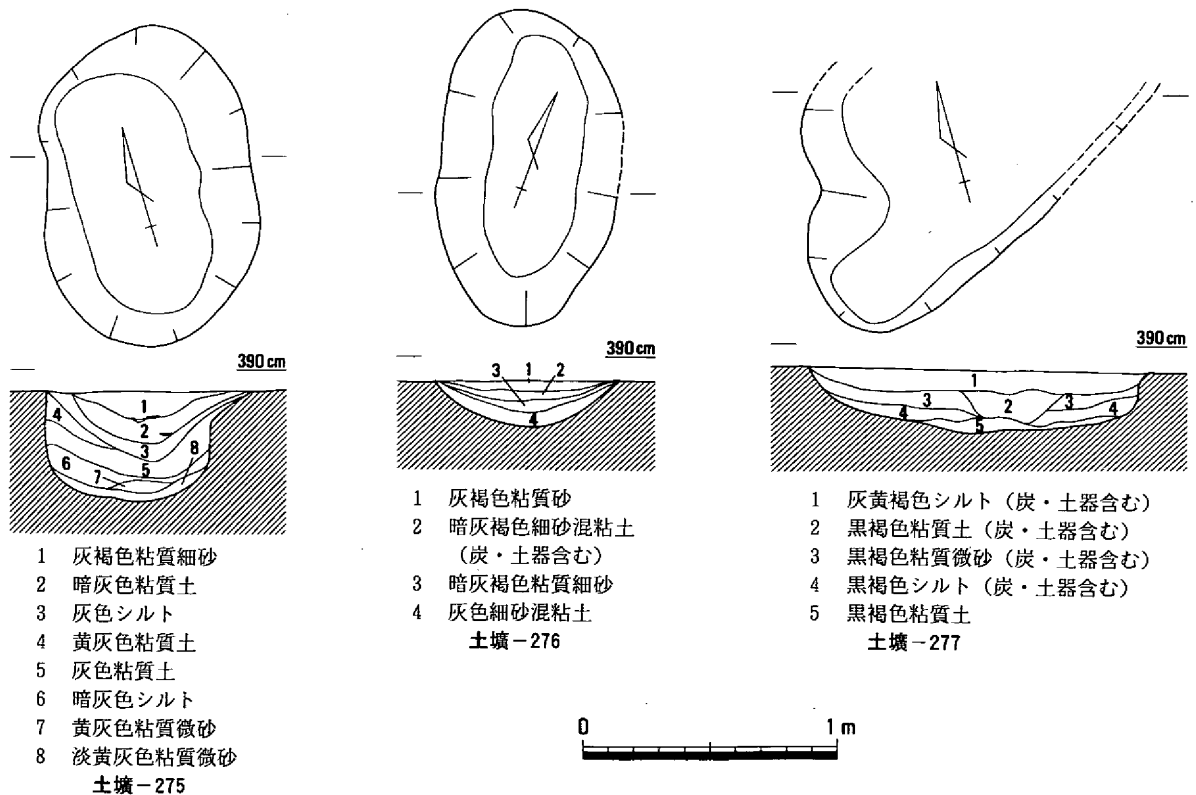
中屋調査区の南部にあり、東西と南北の方向に並ぶ溝群の西端に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径127cm、短径80cm、深さ45cm、底面の標高338cmを測る。埋土中から須恵器の壺・杯と土師器の甕・皿の破片が出土している。時期は奈良時代に比定される。（正岡）

土壇－276（第236図）

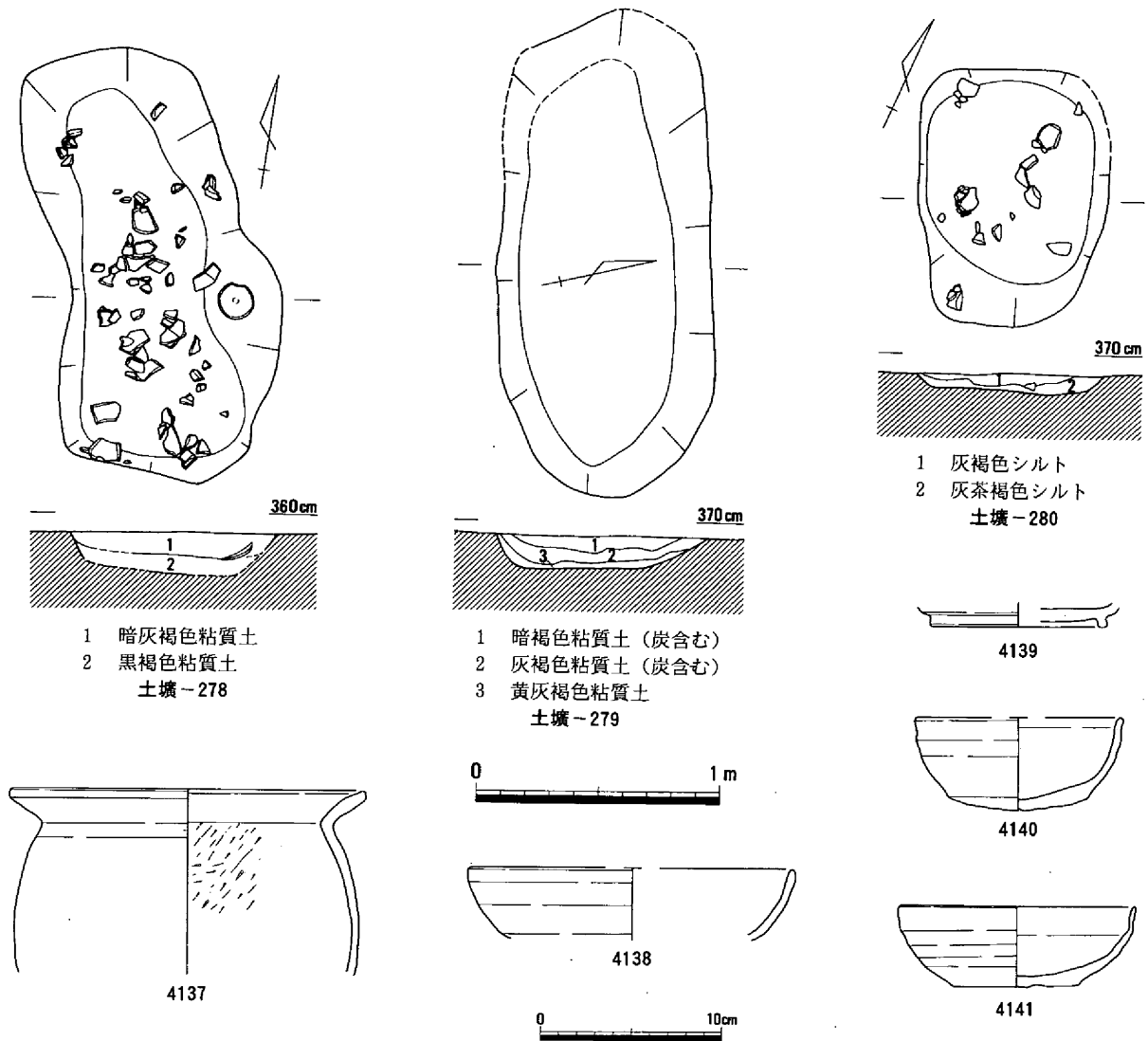
溝群の西端にあり、土壇－275の南に位置する。形状は長楕円形を呈し、長径126cm、短径73cm、深さ18cm、底面の標高368cmを測る。断面は浅いU字形を呈している。埋土中から遺物は検出されていないが、掘り込みの状況や埋土から、時期は奈良時代と推定される。（正岡）

土壇－277（第236図）

溝群の中にあり、一部は現代の水路によって切られている。平面形は不整形を呈する。長径は不明



第236図 土壇－275～277



第237図 土壌-278(4137)・279(4138)・280(4139~4141)

であるが、短径105cm、深さ25cm、底面の標高357cmを測る。断面は浅い皿状を呈している。埋土中からは土師器の壺・杯・皿の破片が出土し、時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壌-278 (第237図)

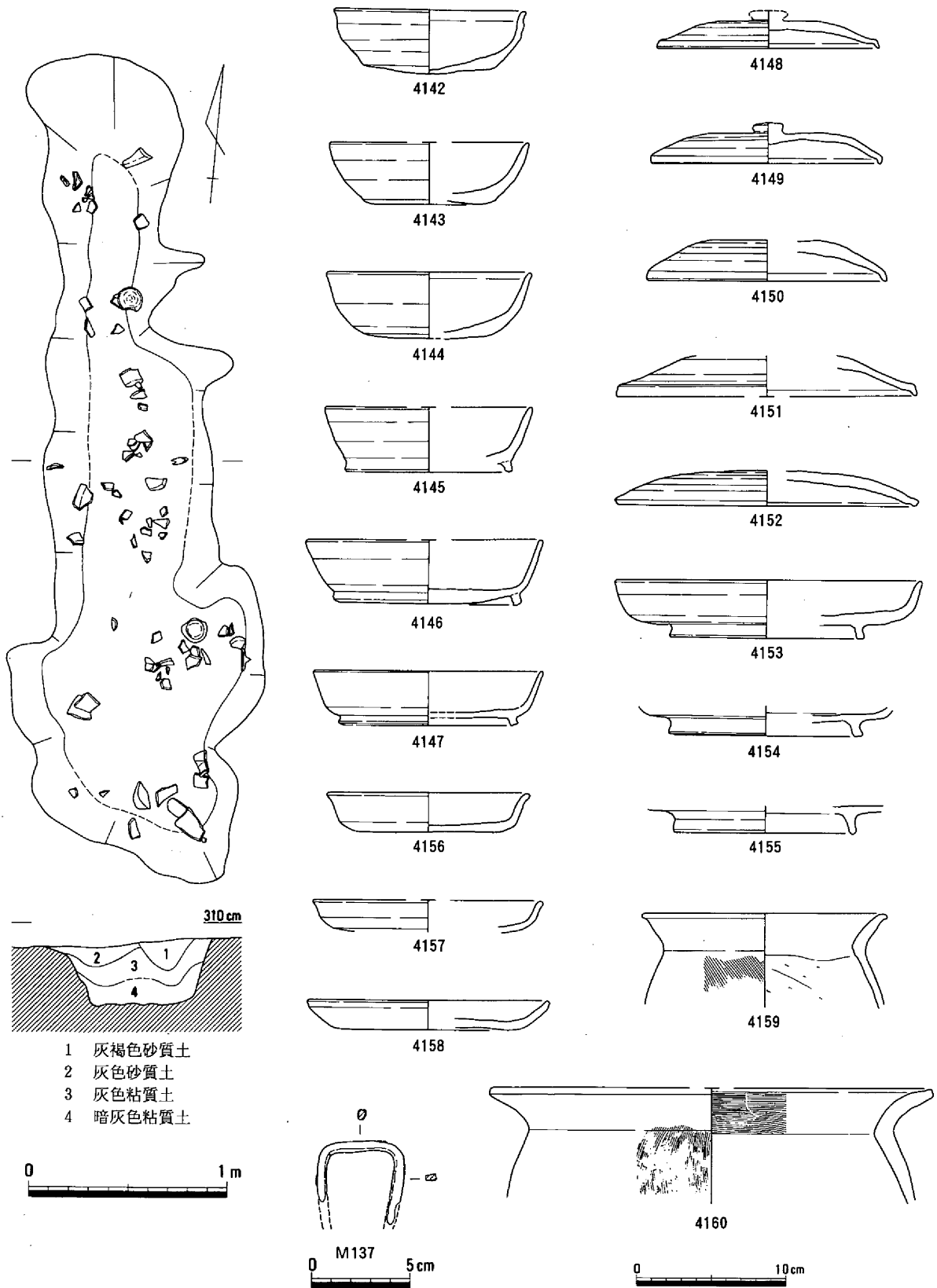
中屋調査区の南端部に位置し、南北方向の溝と重複している。平面形は不整形を呈し、長径186cm、短径90cm、深さ14cm、底面の標高360cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土中から土師器の甕4137が出土し、時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壌-279 (第237図)

溝群の中にあり、付近に土壌が集中している。平面形は楕円形を呈し、長径205cm、短径90cm、深14cm、底面の標高360cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土中から須恵器の杯4138と土師器の甕・皿の破片が出土している。時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壌-280 (第237図、図版91)

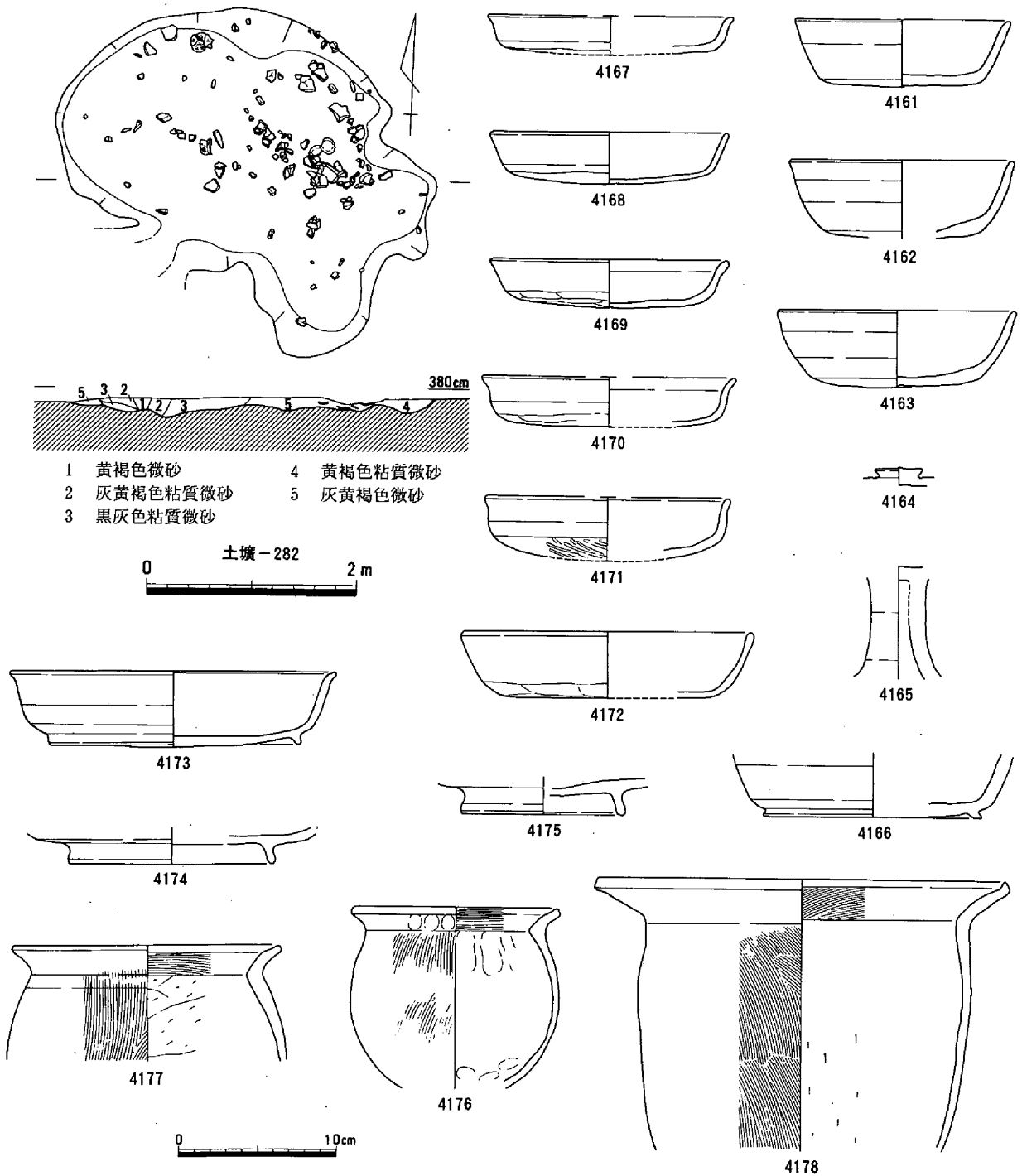
溝群の中にあり、土壌-279の北西に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長径108cm、短径79cm、深さ8cm、底面の標高363cmを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土中からは須恵器の杯4139~4141と土師器の甕片が出土している。時期は奈良時代に比定される。(正岡)



第238図 土坑-281(4142~4160・M137)

土坑-281 (第238図、図版91)

溝群の中にあり、土坑-280の西側に位置する。形状は南北に長い不整形の溝状を呈している。長径392cm、短径128cm、深さ30cm、底面の標高368cmを測る。断面の形状は鍋底形を呈している。埋土

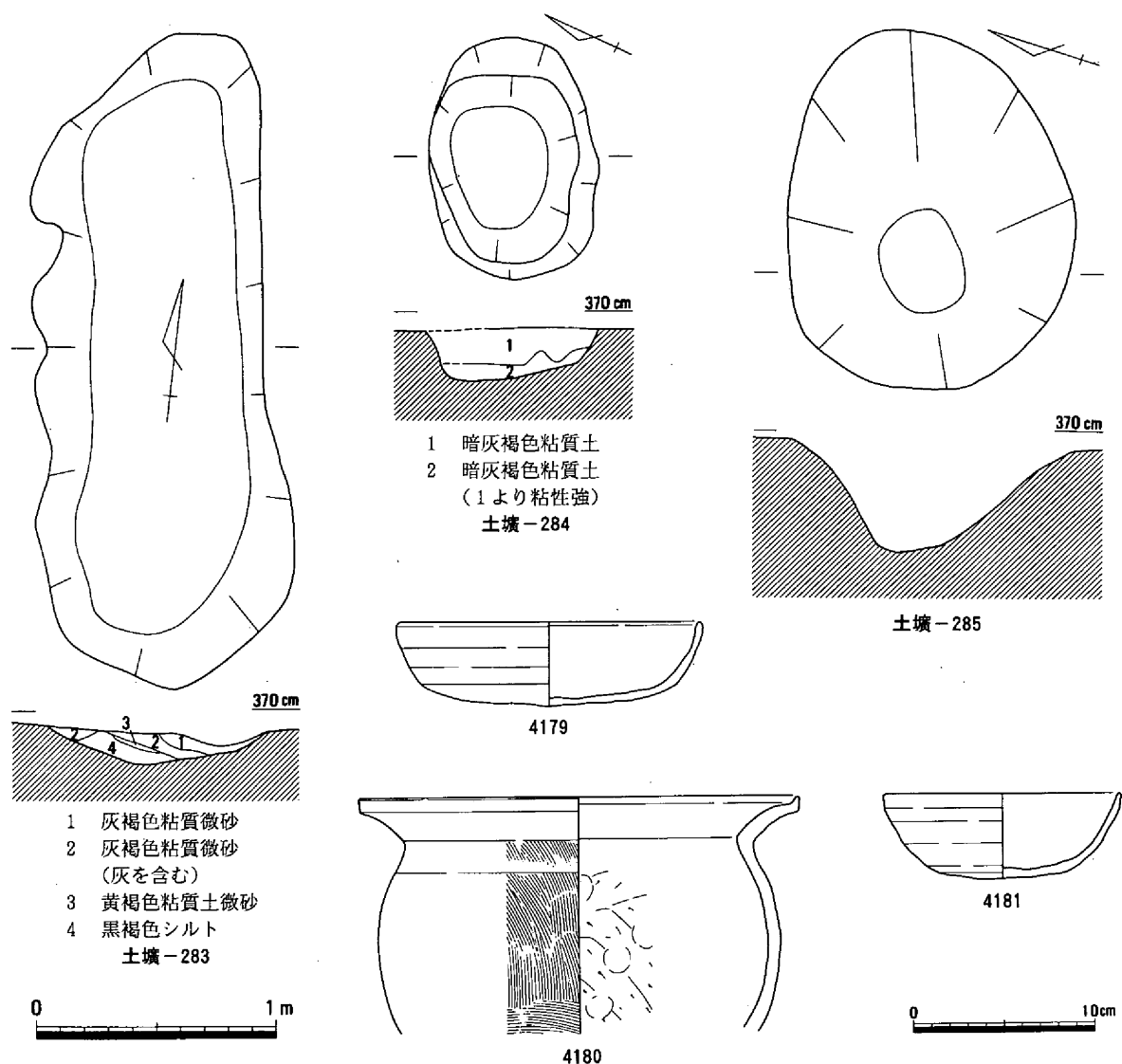


第239図 土城-282(4161~4178)

中からは、須恵器の壺・甕・杯・皿、土師器の甕・杯・皿・鉢・カマドの破片が出土している。

須恵器には、高台の付かない杯身4142~4144、高台の付く杯身4145~4147、蓋4148~4150・4152、皿4153がある。高台の付かない杯の口径は、12.6~13.4cmと小形のものである。高台の付く杯身の口径は、13.7~15.2cmを測る。高台は、高さが低く、ほぼ方形を呈し、少し外反する。杯蓋にはつまみが確認されるもの4148・4149がある。

土師器には、蓋4151、高台付杯4154、高台付の皿4155、高台の付かない皿4156~4158、甕4159・4160がある。土師器の杯・皿には、ほとんど丹塗りが施されている。甕には大きいものと小さいもの



第240図 土壌-283~285(4179~4181)

がある。ほかに、「コ」の字形に折り曲げた鉄製の金具M137がある。

時期は奈良時代に比定される。

(正岡)

土壌-282 (第239図、図版91・92)

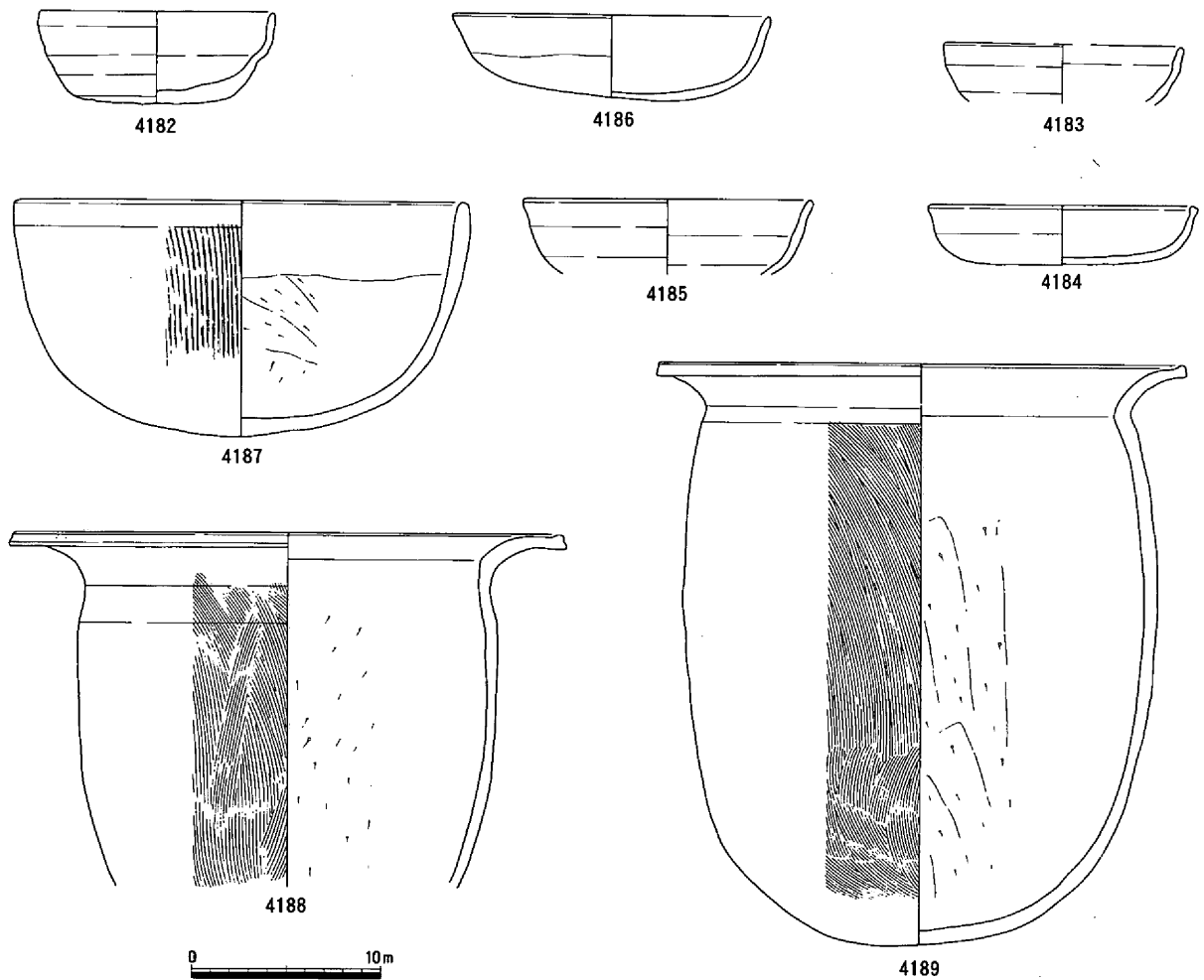
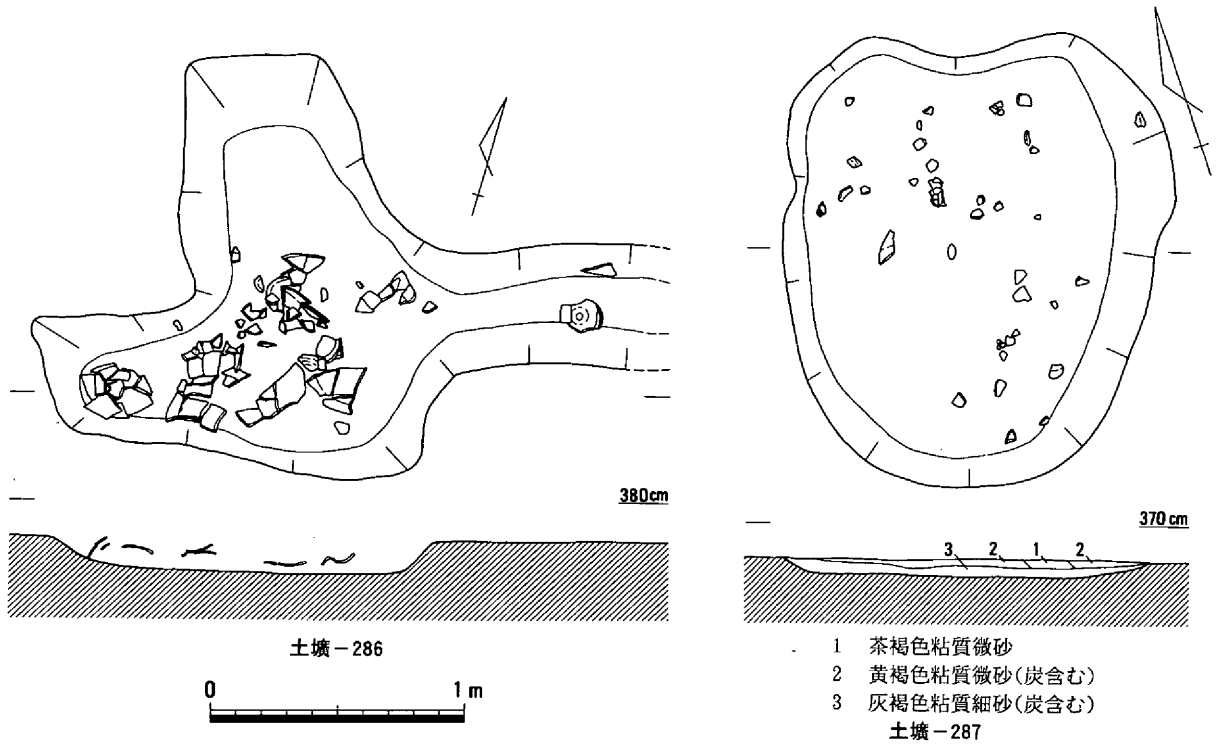
溝群の中にあり、土壌-181の北に位置する。平面形は不整形を呈し、長径363cm、短径250cm、深さ20cm、底面の標高361cmを測る。やや大形の土壌である。埋土中からは、須恵器の壺・甕・高杯・杯、土師器の甕・杯・皿・カマドの破片が出土している。

須恵器には、高台の付かない杯身4161~4163、蓋4164、高杯4165、高台付の杯4166がある。杯蓋のつまみは小片であるが、上面がほとんど突出しない。高杯の脚部は細くて長い。

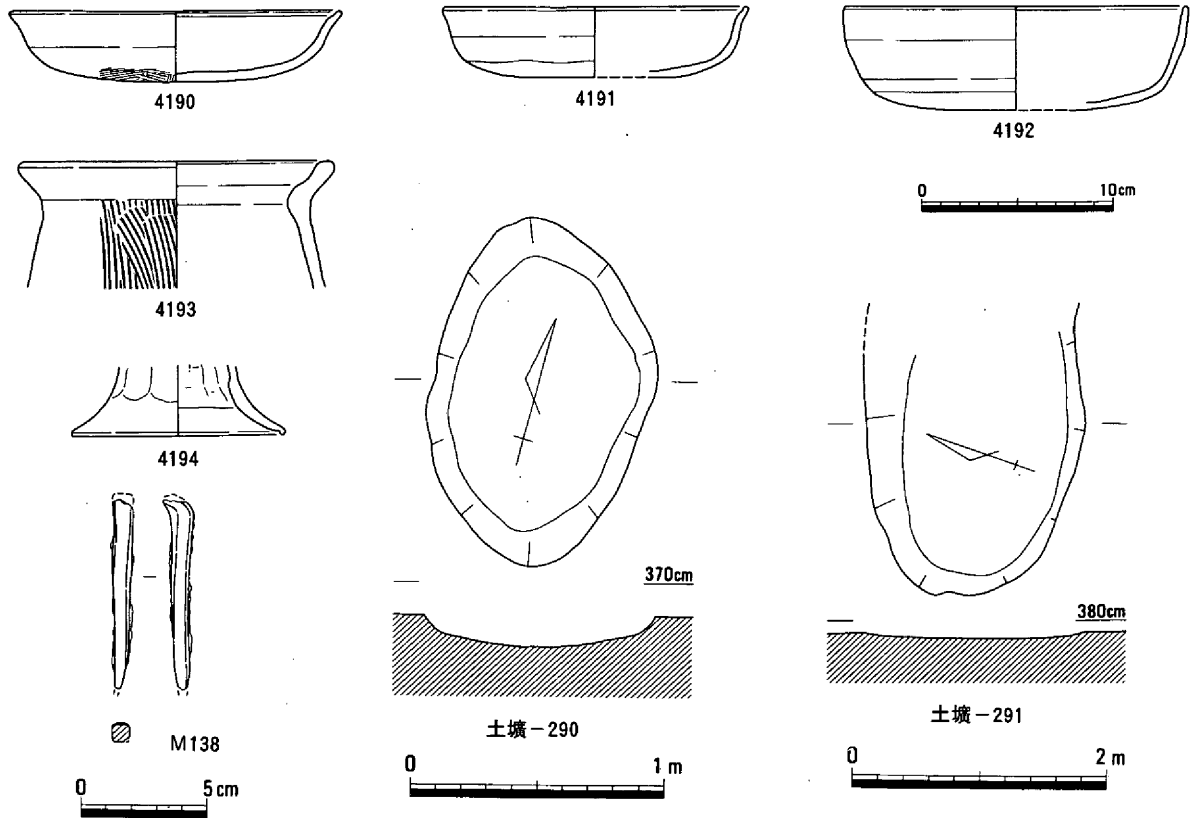
土師器には、高台の付かない杯4167~4172、高台の付く杯身4173、高台の付く皿か杯4174・4175、甕4177~4178がある。4173の杯身は須恵器の形状を写したものである。杯の口縁部は端部に屈曲部があって、小さく外反するもの4167~4169・4171・4173と外反しないもの4168・4172がある。土師器の杯には丹塗りを施している。

時期は奈良時代に比定される。

(正岡)



第241図 土壤-286(4182・4184・4189)・287(4183)



第242図 土壇288(4190)・289(4191～4193)・290(M138)・291(4194)

土壇-283 (第240図)

溝群の中にあり、土壇-282の東側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径274cm、短径91cm、深さ17cm、底面の標高348cmを測る。埋土中には、須恵器の杯・平瓶、土師器の甕・杯・皿の破片がある。時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壇-284 (第240図)

溝群の中にあり、土壇-283の南東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径101cm、短径70cm、深さ21cm、底面の標高342cmを測る。埋土中からは、土師器の杯・甕が出土している。杯4179は高台の付かないもので、口径16.6cmを測る。甕4180は胴部がやや丸く、口径24.1cmである。時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壇-285 (第240図)

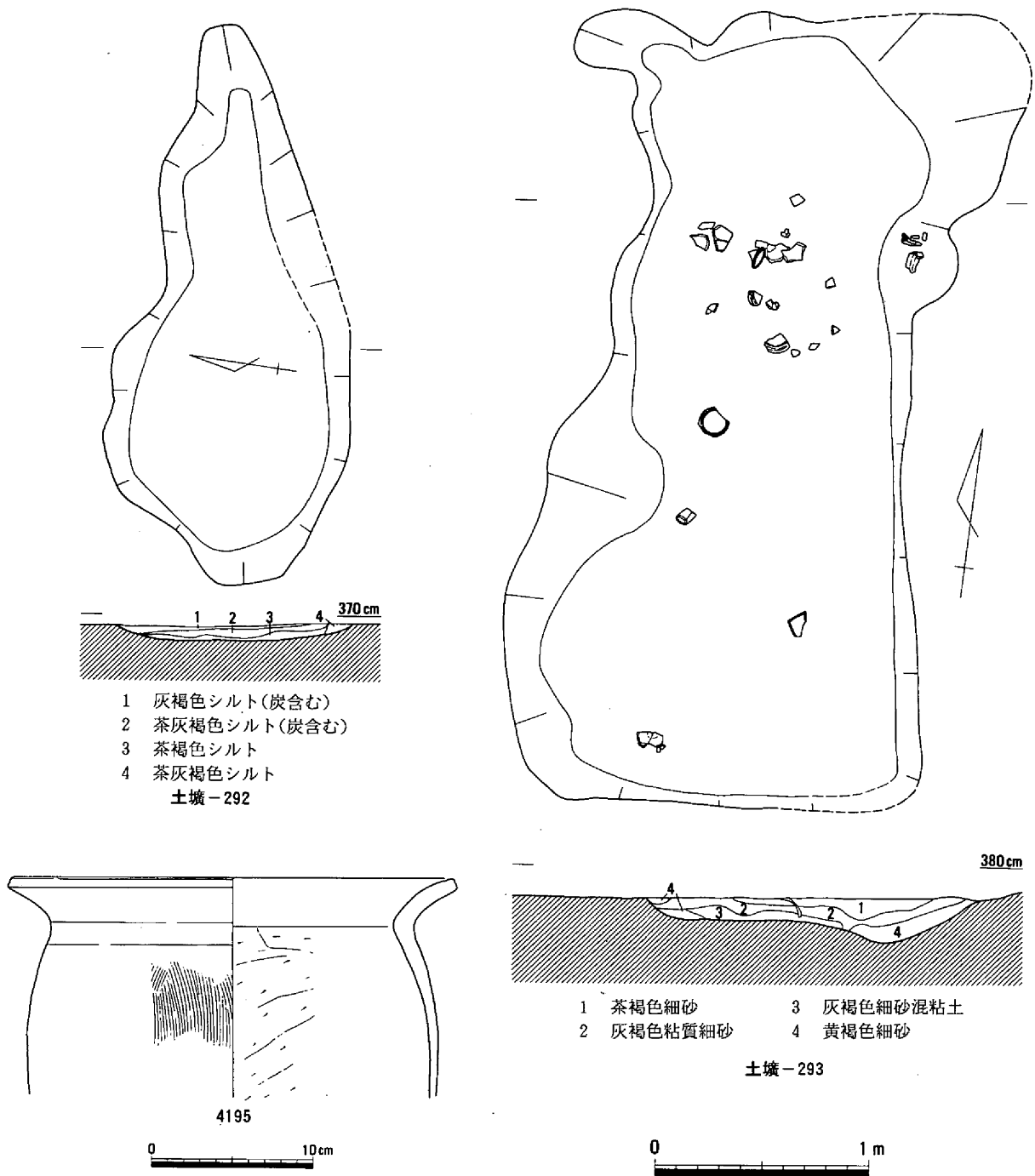
中屋調査区の南端に近く、溝群の中に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径104cm、短径118cm、深さ47cm、底面の標高320cmを測る。埋土中からは、須恵器の甕・杯、土師器の甕・杯・皿の破片が出土している。須恵器の杯4181には高台が付かない。時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壇-286 (第241図)

中屋調査区の南部にあり、溝群の中であって、土壇-285の南に近接している。平面形は不整形で、長径280cm、短径168cm、深さ14cm、底面の標高351cmを測る。東側は東西方向の溝の一部になる可能性がある。埋土中からは、須恵器の杯、土師器の甕・杯・皿・鉢の破片が出土している。

須恵器の杯4182は高台の付かないものである。土師器の杯4184～4186は高台の付かないもので、丹塗りが施されている。4184の口縁端部はくせをもち、内側へ小さくくびれる。鉢4187は口径23.1cm、





第243図 土壙-292(4195)・293

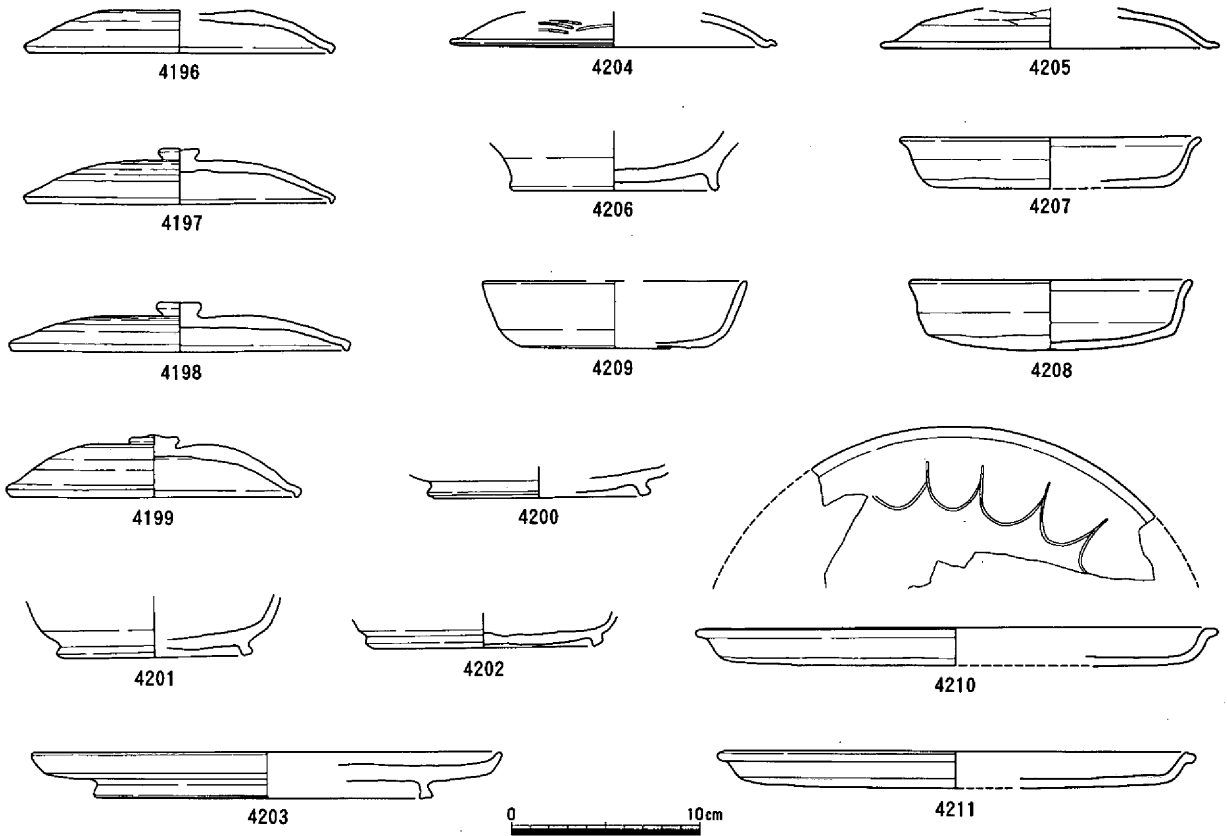
高さ12.5cmと大きい。甕4188・4189はいわゆる長胴甕で、胴部が長く、口縁部を斜め上方へ湾曲しながら外反し、端部を上方へ小さく屈曲する。底部は丸底である。外面にはハケメ、内面にはヘラケズリを施している。4189の大きさは、口径27.7cm、高さ31.0cmである。

時期は奈良時代に比定される。

(正岡)

土壙-287 (第241図)

中屋調査区の南部にあり、溝群の東端にあって、土壙-286の北東に位置する。平面形は不整形円形を呈し、長径172cm、短径147cm、深さ8cm、底面の標高348cmを測る。埋土中からは、須恵器の杯、



第244図 土壇-293(4191~4211)

土師器の高杯・皿の破片が出土している。須恵器の杯身4183は高台の付かないものであろう。時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壇-288 (第242図)

溝群の東端部にあり、土壇-287の南に位置する。調査中はたわみとしていたもので、3×1.5mの浅い穴である。埋土中からは、須恵器の甕・杯、土師器の甕・杯・皿の破片が出土している。図化したものに皿4190がある。時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壇-289 (第242図)

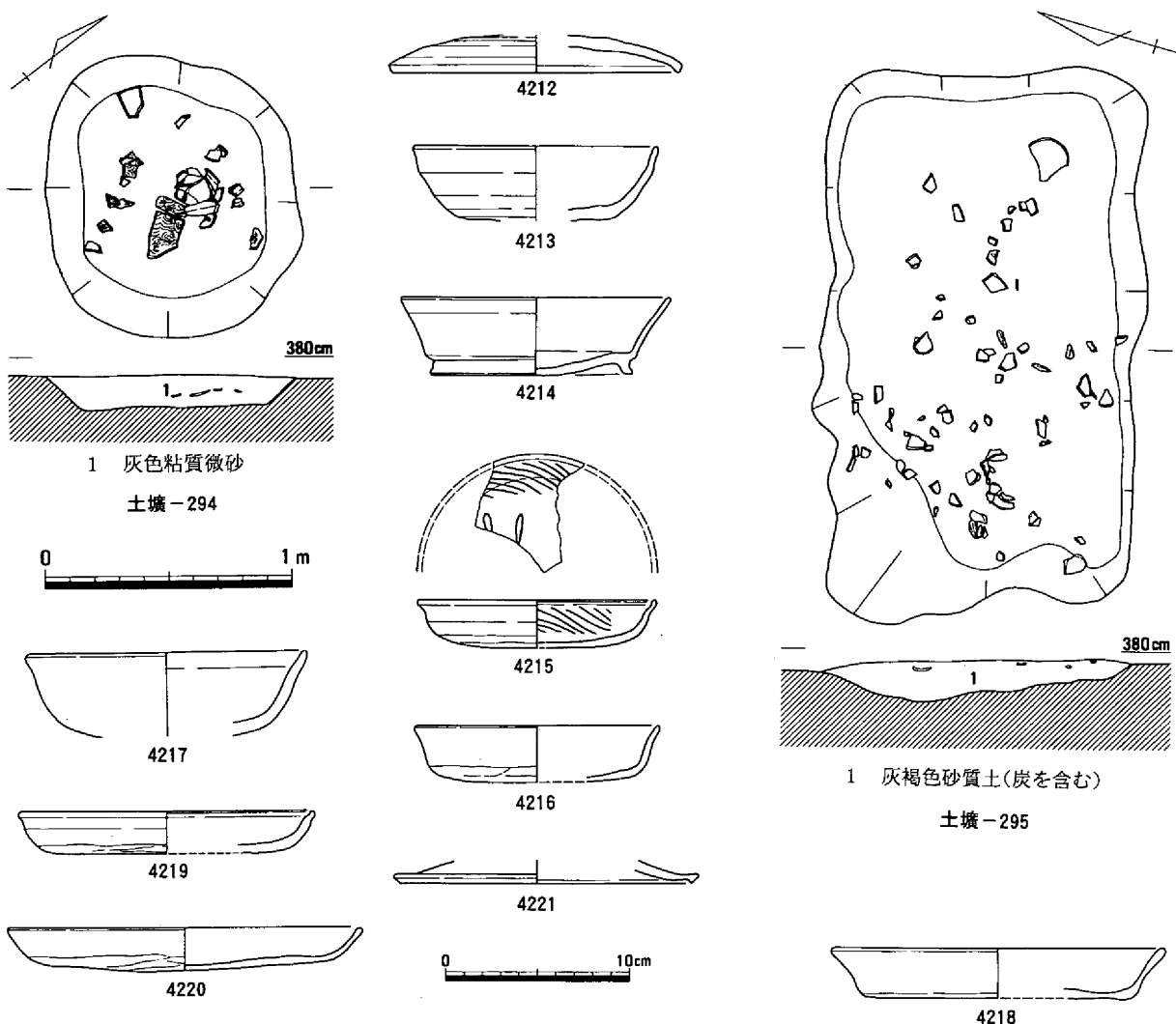
溝群の東端部にあり、土壇-288の東側に接している。調査中はたわみとしたもので、4×3mの浅い穴である。埋土中からは、須恵器の甕・杯、土師器の甕・杯・皿の破片が出土している。図化したものに土師器の杯4191・4192、甕4193がある。時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壇-290 (第242図)

溝群の中にあり、土壇-282の北西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径136cm、短径87cm、深さ12cm、底面の標高345cmを測る。埋土中からは、須恵器の甕・杯の破片・釘M138が出土している。時期は奈良時代に比定される。(正岡)

土壇-291 (第242図)

溝群の西寄りにあり、土壇-290の北西に位置する。平面形は不整形を呈し、現存長210cm、短径172cm、深さ5cm、底面の標高365cmを測る。埋土中からは、須恵器の甕・杯、土師器の高杯・皿の破片が出土している。図化した土師器の高杯4194は脚部の小破片である。時期は奈良時代に比定される。(正岡)



第245図 土壙-294・295(4212~4221)

土壙-292 (第243図)

溝群の東端部にあり、土壙-291の北東に位置する。平面形は不整長楕円形を呈し、長径261cm、短径114cm、深さ8cm、底面の標高358cmを測る。埋土中から甕4195の破片が出土している。時期は甕の形状から奈良時代に比定される。(正岡)

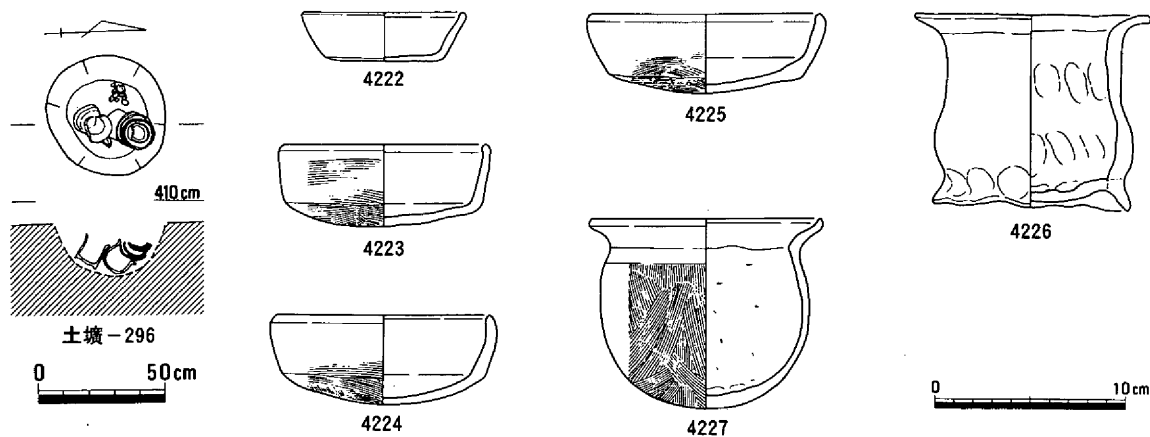
土壙-293 (第243・244図、図版92)

溝群の中にあり、土壙-290の北西に近接している。平面形は不整形を呈し、長径370cm、幅190cm、深さ20cm、底面の標高345cmを測る。埋土中からは、須恵器の杯・平瓶、土師器の杯・皿・カマドの破片が出土している。

須恵器には、蓋4196~4199、高台付の杯4200・4202、椀4201、皿4203がある。土師器には、蓋4204・4205、高台付の杯4206、高台の付かない杯4207~4209、皿4210・4211がある。時期は土器の形状から奈良時代に比定される。(正岡)

土壙-294 (第245図)

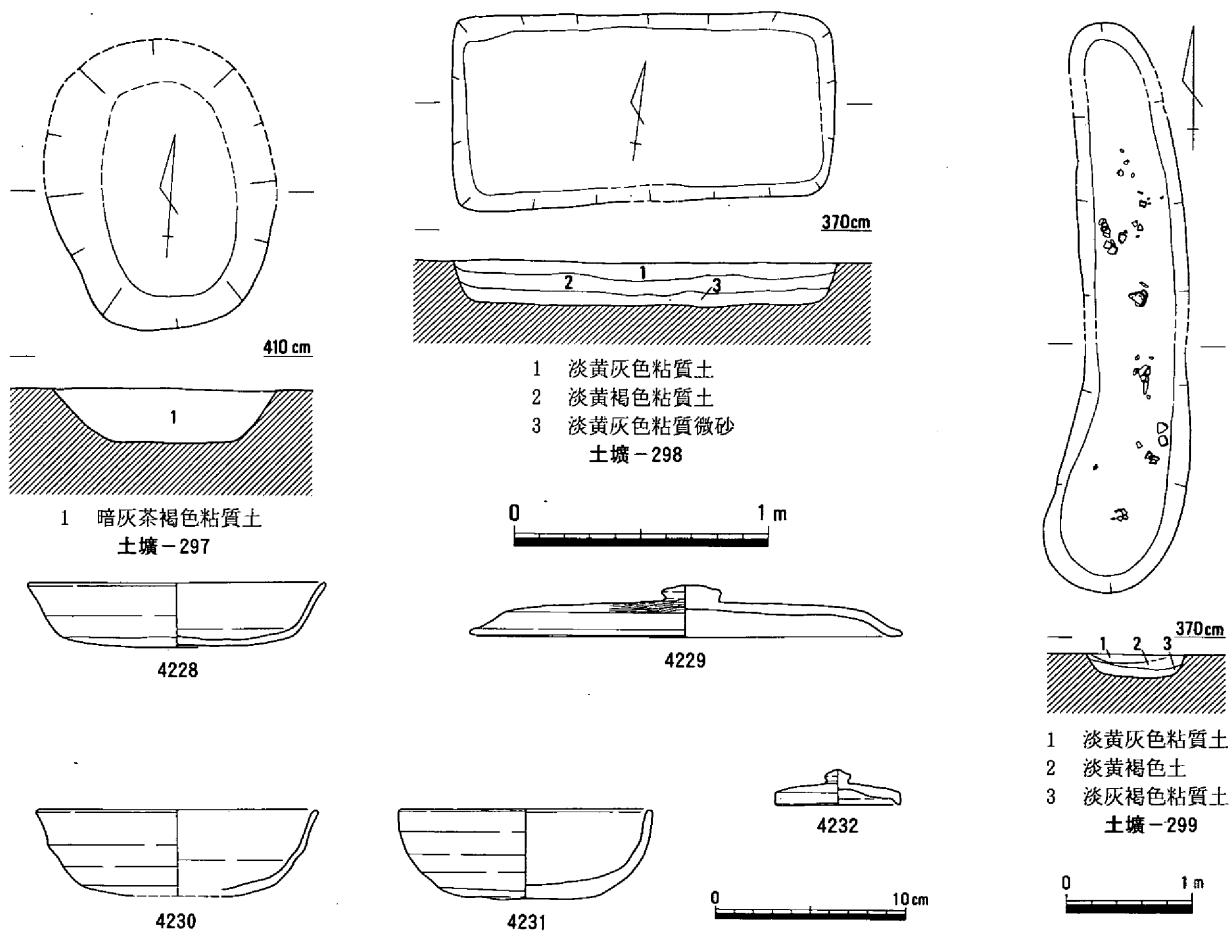
溝群の一面にあり、土壙-291の南西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径116cm、短径110cm、深さ14cm、底面の標高359cmを測る。埋土中からは、須恵器の甕、土師器の甕・皿の破片が出土している。時期は奈良時代に比定される。(正岡)



第246図 土壙-296(4223~4227)

土壙-295 (第245図、図版92)

溝群の西端部にあり、土壙-294の西に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長径211cm、短径130cm、深さ14cm、底面の標高359cmを測る。埋土中からは、須恵器の壺・杯・平瓶、土師器の甕・杯・皿が出土している。須恵器には、杯蓋4212、高台の付かない杯身4213、高台の付く杯身4214がある。土師器には、高台の付かない杯身4215~4217、皿4218~4220、蓋4221がある。4216の杯身の内面には、暗文がみられる。時期は奈良時代に比定される。(正岡)



第247図 土壙297~299(4228~4232)

土壙-296 (第246図、図版93)

O18区南東部で、溝-132と焼成土壙-6の中間に位置する。

径45~48cmを測る平面形円形の土壙の中に、6点の土師器が一括して入れられていた。正位に置かれた甕4227の上に4222~4225の杯が重ねられ、これらに接して台付壺4226が置かれたもので、その傍らでは10数個の円礫が出土している。埋土が基盤層と区分しがたく、掘り方は不明確であるが、深さ20cm前後に想定される。(光永)

土壙-297 (第247図)

O18区中央部やや南よりに検出した。調査区の端部に検出したため全体の形状は不明であるが、楕円形を呈しているものと推定される。規模は、幅91cm、深さ22cmを測る。長さは114cm程度と推定される。断面形は逆台形を呈している。遺物は少量出土しており、時期は古代と考えられる。(井上)

土壙-298 (第247図)

掘立柱建物-21の北側で検出された長方形を呈する土壙である。形状から土壙墓と推定されたがそれを裏付ける明確な手がかりは得られなかった。深さ約20cmを測る土壙内部には3層の埋積土が観察され、ほぼ水平な埋積過程を示している。(岡田)

土壙-299 (第247図、図版93)

掘立柱建物-21の北西方で検出された溝状の土壙である。検出全長約4.5m、幅70~110cm、深さ約20cm前後を測る。ほぼ南北方向を指し示している点に注意される。溝の中からの出土遺物には、4228・4229の丹塗りの土師器が特筆される。4230・4231は、椀ともいふべき形態をもつ杯で丸みをもった体部が特徴的である。4232は、小壺の蓋と考えられる小形須恵器でミニチュアと思えない精緻な作りが観察される。これらの遺物から土壙の廃絶時期は奈良時代中期に比定される。(岡田)

土壙-300 (第248・249図、図版93・94)

溝-132と掘立柱建物-20との間で検出された不整な長円形を呈する土壙である。掘り方の法面は緩やかで、壙底は比較的平坦である。

出土遺物はおもに上層から出土しており、4233の土師器甕のほか4234・4235のカマド2個体分が出土している。前者のカマドは全形がほぼ復元推定できる貴重な資料で、図のように復元実測が可能となっている。4236~4248の小型の須恵器や丹塗りを含む土師器は、供膳形態をよく示す一括品である。これらの遺物から土壙の廃絶期は、古代それも奈良時代の範囲におさまることが推察されるが、周辺の掘立柱建物などと密接に関連する遺構と考えられる。(岡田)

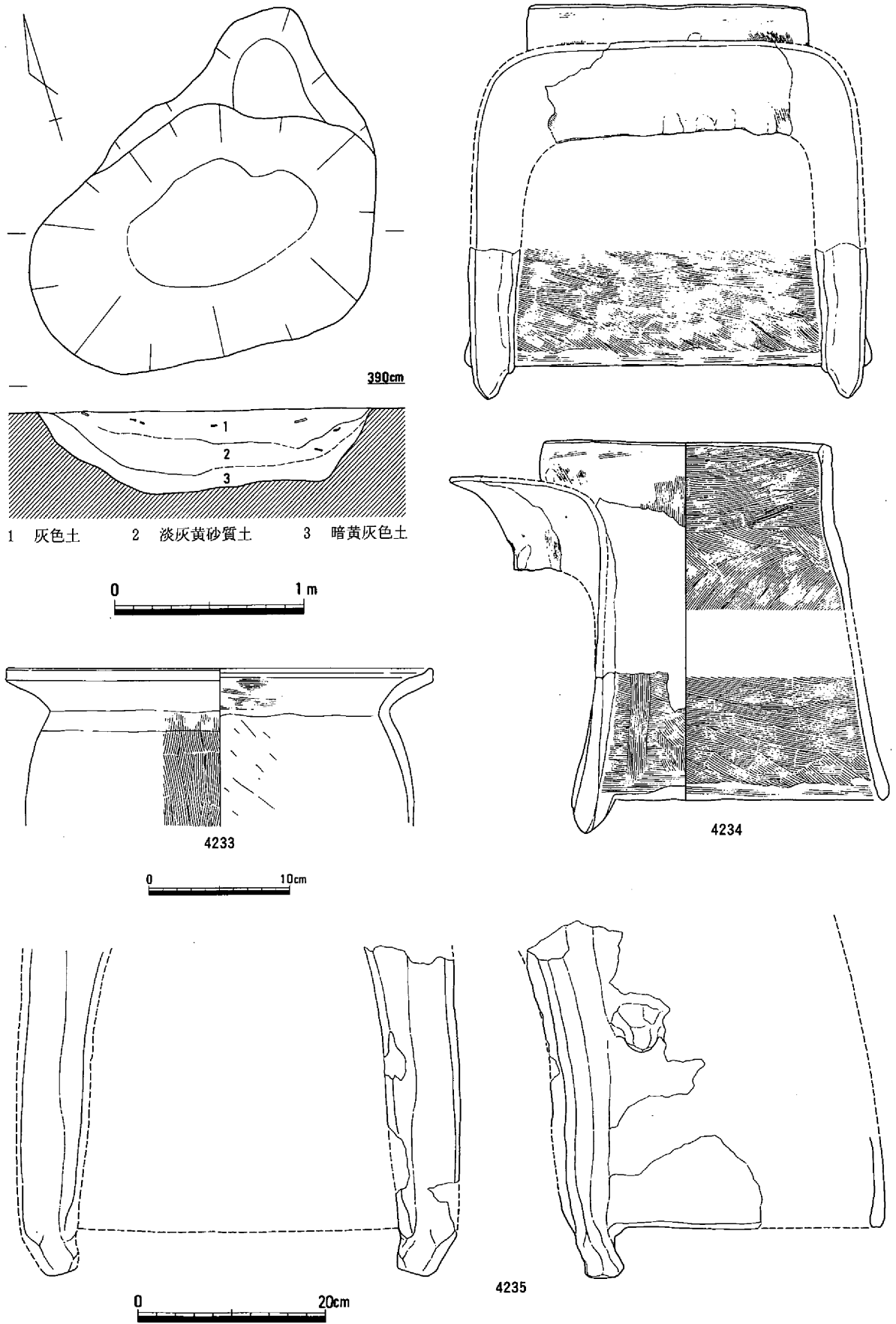
土壙-301 (第249図、図版93・94)

掘立柱建物-20の南西、土壙-300の南約2mで検出されたややいびつな長円形の土壙である。東端は土壙-302に切られる。緩やかな法面を経て、ほぼ平坦な壙底にいたる。

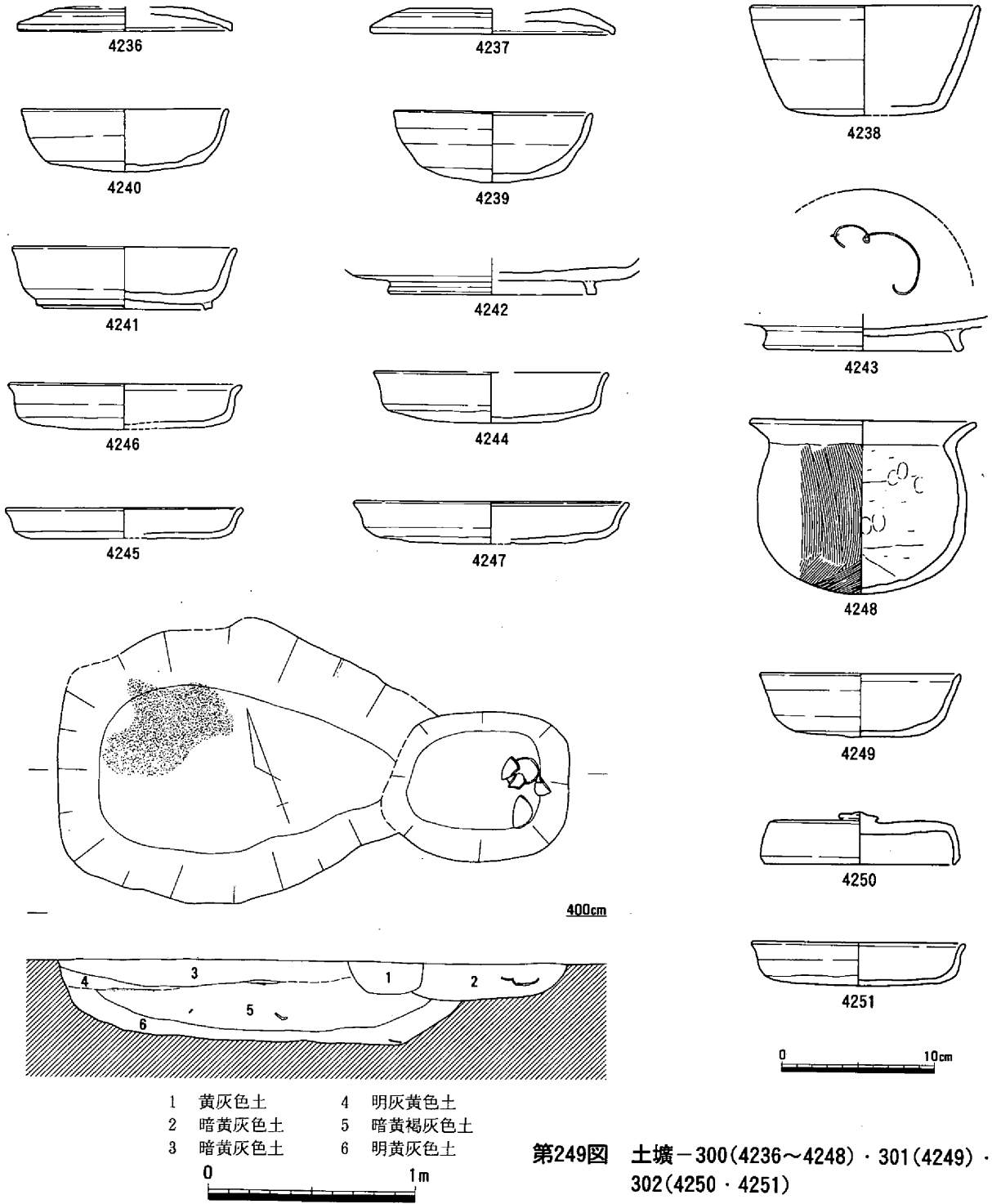
土壙の北西よりでは、40×60cmの範囲に焼土が集中して検出されたがこの場所で火を使った痕跡とは考えられない。出土遺物には4249の奈良中期に比定される須恵器杯がある。(岡田)

土壙-302 (第249図、図版94)

土壙-301の東端に掘りこまれた小土壙であるが、隅丸の方形に近い平面形を呈している。単一の埋積土が観察され、4250・4251の出土遺物がある。前者は壺Aなどの短頸壺あるいは、薬壺などの蓋に用いられた可能性が高い独特な形状を示すほぼ完形の須恵器である。後者は、丹塗りが施された土師器杯でほぼ完形に復元された。奈良中期に比定される良好な遺物である。(岡田)



第248図 土坑-300(4233~4235)



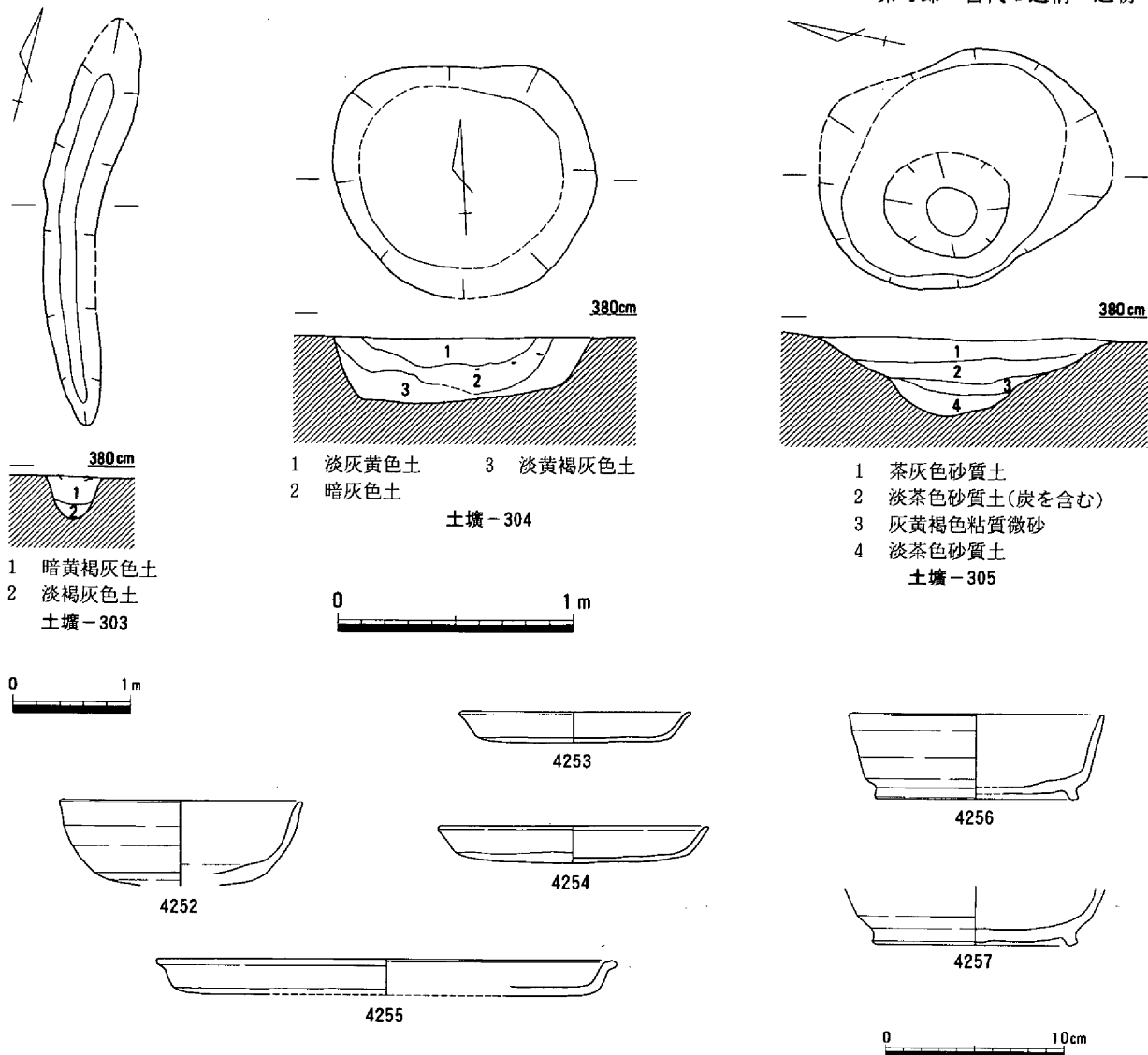
土壙-303 (第250図、図版94)

掘立柱建物-20の南約8mで検出された溝状の土壙である。やや弧を描く南北方向の溝として検出され、断面形はU字形を示している。

出土遺物には4252の須恵器杯のほか4253~4255の土師器があるが、後者はすべて丹塗りである点に注意される。いずれも奈良中期に比定される遺物と考えられる。(岡田)

土壙-304 (第250図)

土壙-303の南端のすぐ東に位置する。やや不整な円形を呈し、壙底はほぼ平らではあるが西側に



1 淡灰黄色土 3 淡黄褐色土  
2 暗灰色土  
土壇-304

1 茶灰色砂質土  
2 淡茶色砂質土(炭を含む)  
3 灰黄褐色粘質微砂  
4 淡茶色砂質土  
土壇-305

1 暗黄褐色土  
2 淡褐色土  
土壇-303

第250図 土壇-303(4252~4255)

傾斜している。この形状からは柱穴と推定することはできない。

出土遺物には4256の奈良中期に比定される高台付きの須恵器杯がある。 (岡田)

土壇-305 (第250図)

P19区北東部に位置し、掘立柱建物-28との距離約11mを測る。

平面形は不整な円形を呈し、長径122cm、短径97cmで、深さ33cmが残る断面形はA a型に2段に掘られている。

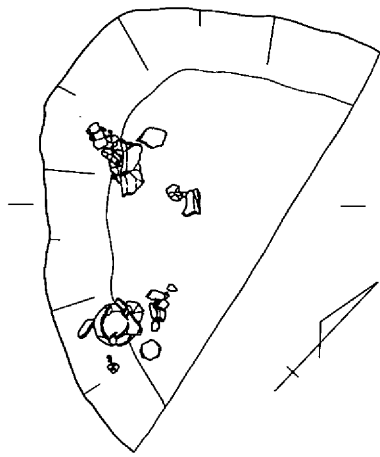
須恵器の杯4257の出土により、8世紀代に比定される。 (光永)

土壇-306 (第251図、図版94)

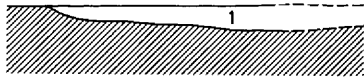
O19区の南側中央において検出した土壇で、溝-137の上層に位置している。西半を検出するにとどまったが、本来は長さ450cm、幅350cm以上の楕円形を呈するものと思われる。しかし、深さは20cmしかなく、断面は浅い皿形をなすことから、凹み状の地形とも考えられる。

ここからは、土師器の甕ばかりが4個体分出土している。いずれも斜めに引きだされた口縁部は、端部を丸くおさめている。長胴になる体部は内面をヘラケズリするが、外面は4258・4259ではナデ、4260・4261では粗いハケメを施している。これらは8世紀の中で理解できるものである。 (亀山)

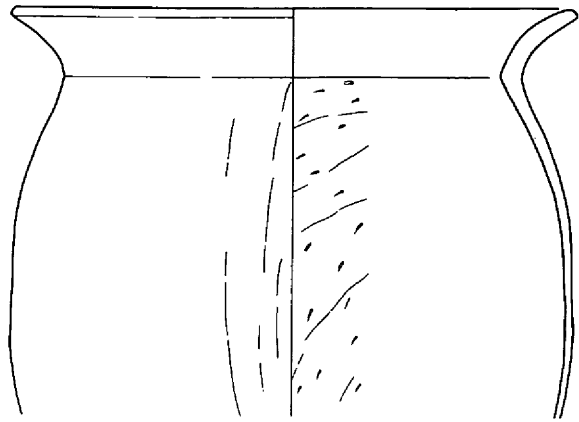




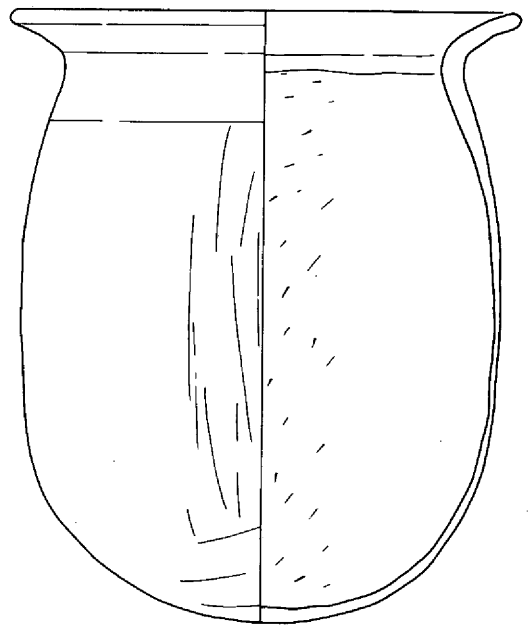
380cm



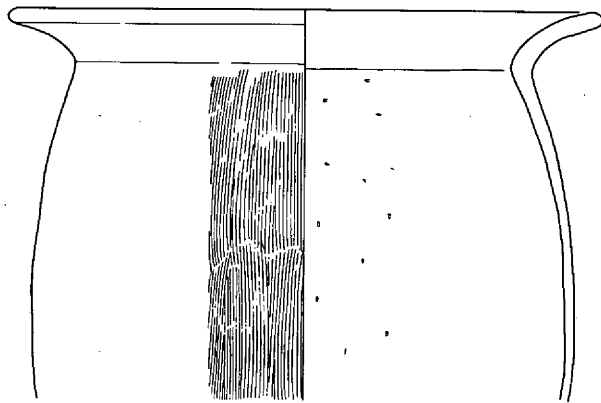
1 褐色粘質微砂  
土壌-306



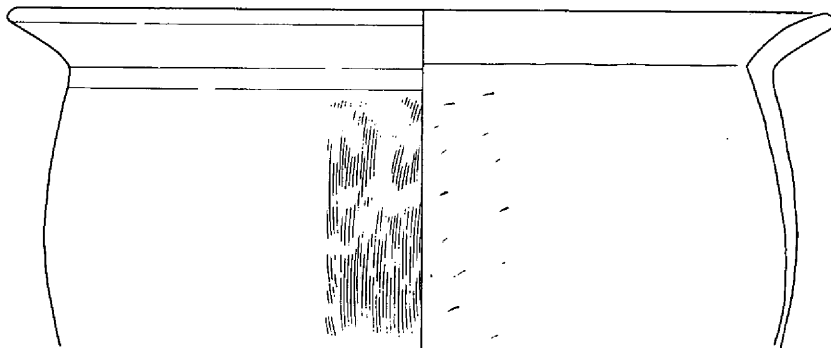
4259



4258



4260



4261



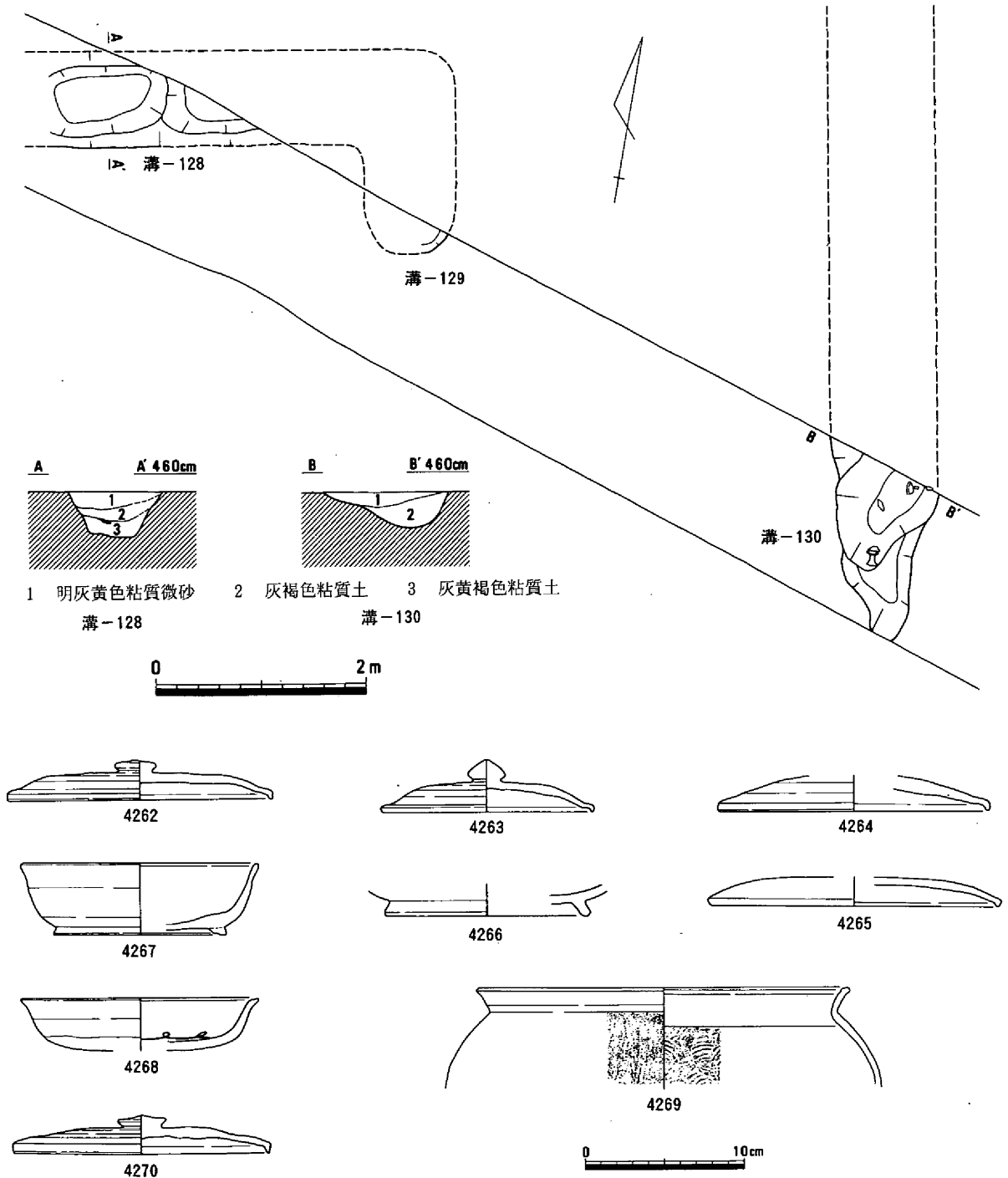
第251図 土壌-306(4258~4261)

(5) 溝

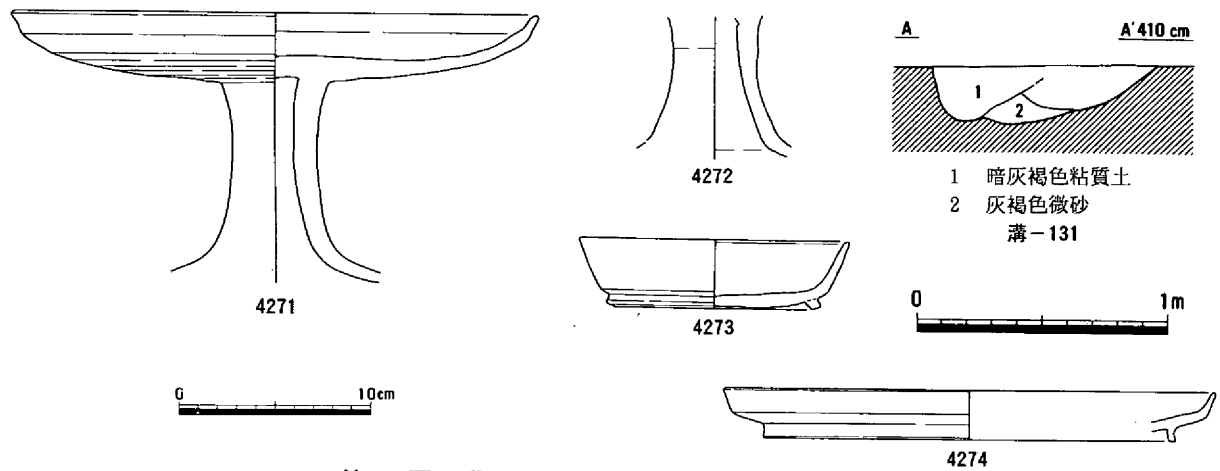
溝-128 (第252図、図版94)

019区の西側中央で検出した溝で、全容をとらえるに至らなかったが、その位置関係からして溝-129の北端から西へ折れ曲がってのびる溝の一部と想定される。幅79cmを測る溝の主軸はほぼ東西にあり、長さ376cmにわたって検出した。48cmの深さにある底面には、長さ120cm、幅65cmの土壇状の凹凸が認められる。溝の埋土からは8世紀半ばに位置付けられる土師器・須恵器が出土している。

(亀山)



第252図 溝-128 (4262~4270)・129・130



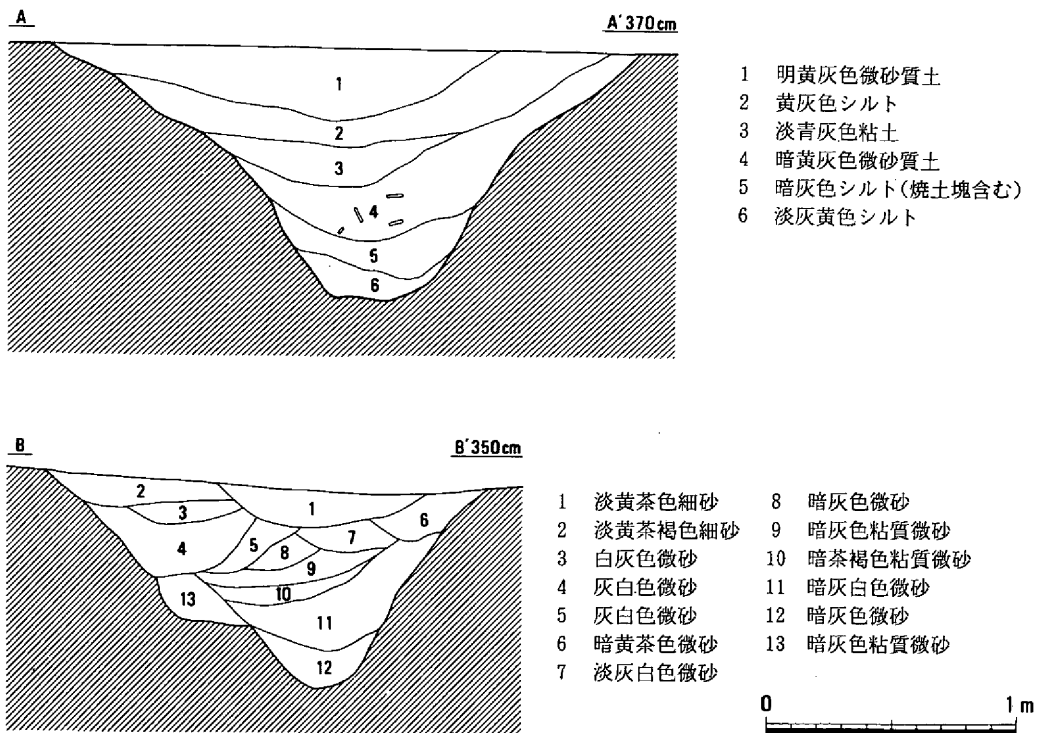
第253図 溝-130(4271~4273)・131(4274)

溝-129

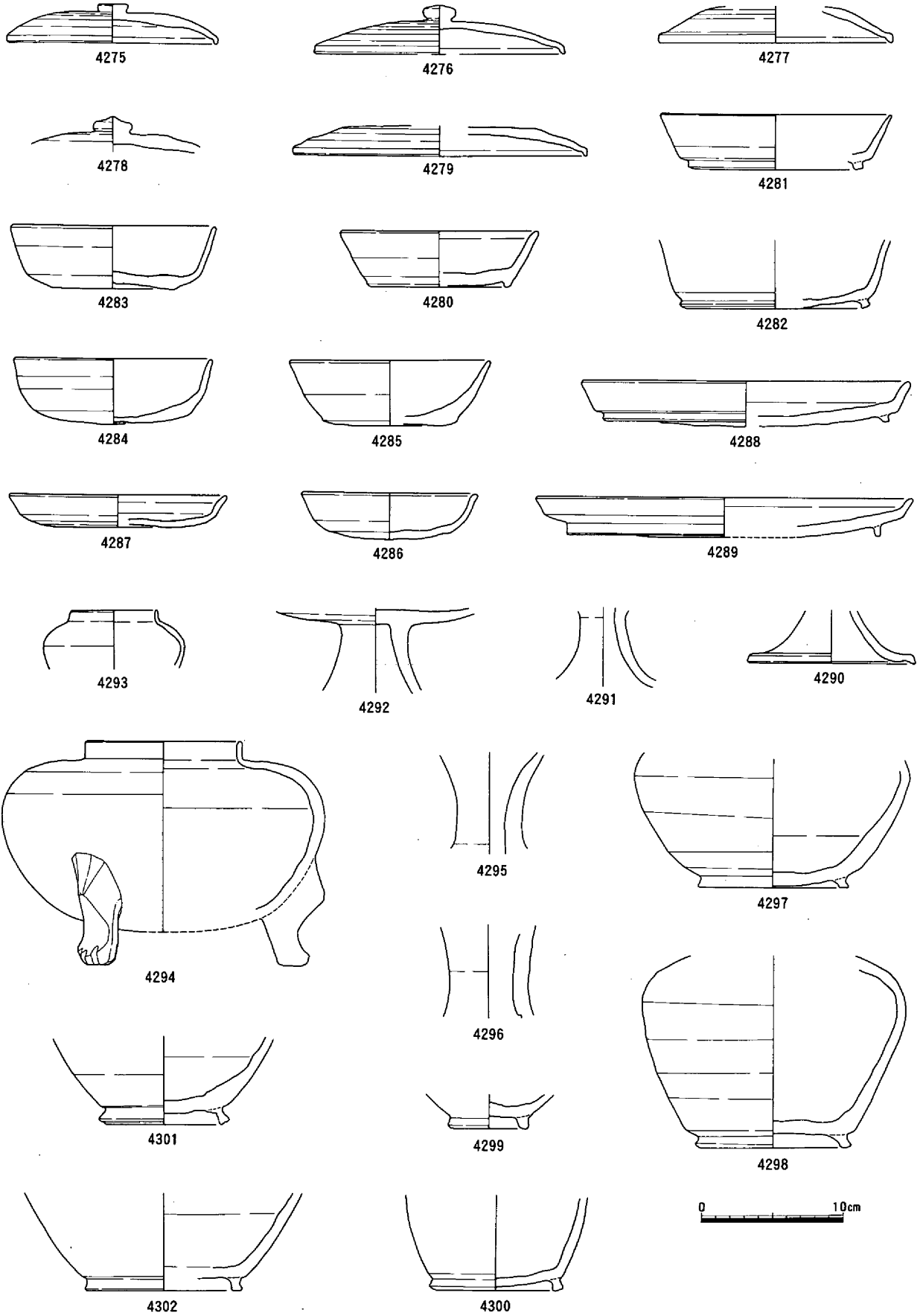
溝-128の南東1mの位置において、調査区の北壁にかかって検出したもので、現状では幅77cm、長さ24cm以上の土壌状を呈する。深さは34cmと浅いが、その埋土の状況からして溝-128と一連の施設と考えられ、溝-128とともに方形区画の北東隅を構成していたものと推定される。遺物は出土していないが、前述した理由から溝-128と同時期とみて差し支えない。(亀山)

溝-130 (第253図、図版94)

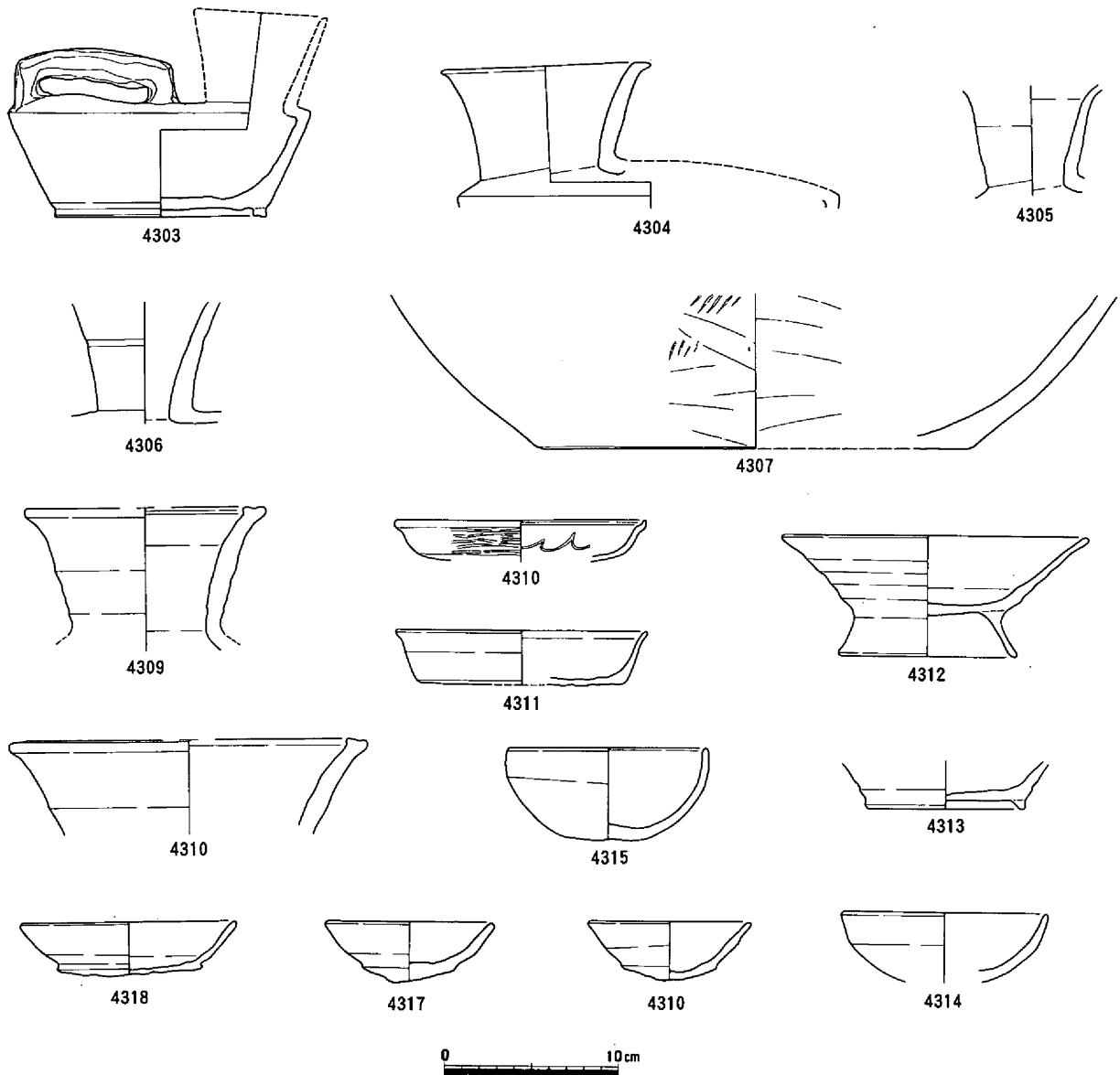
溝-129の東4mの位置において検出した、ほぼ南北にのびる溝である。最大幅112cmを測るが、南端において狭まる傾向にある。深さ29cmにある底面は北端で一段と深くなり、幅85cm、長さ95cm以上の楕円形をなす土壌状を呈している。埋土からは、口径27.1cmを測る高杯4271や口径14.0cm、器高3.7cmの杯4273などが出土しており、溝-128・129と同時に機能していたものと推定される。(亀山)



第254図 溝-132



第255図 溝-132(4275~4302)



第256図 溝-132(4303~4318)

溝-131 (第253図、図版95)

O18区中央部やや南よりの位置に検出した。細長い調査区を横断するように検出したため全長は116cmと短い。検出面での規模は幅88~60cm、深さ20cmを測る。土層断面から観ると3本の溝が同じ場所に重複した状況を呈している。出土遺物4274から、時期は古代と考えられる。(井上)

溝-132 (第254~260図、図版95)

検出全長約130mに及ぶ、遺跡のなかでも最大規模の遺構である。きわめて緩やかな弧を描くもののほぼ南北方向に流路が指し示される。幅は狭いところで2m、最大約2.5m、深さ80~100cmを測り後世の削平を考慮すればこの溝が機能していた時期には、容易に渡ることができない規模であったことが推察される。地形的には北方が高いが、二箇所の土層断面図の位置での溝底レベル差はわずか5cmを測るにすぎない。断面形はV字形を呈しているが、狭い溝底は平坦である。A-A'では徐々に埋積していった過程が明瞭に観察されるが、B-B'では幾度かの掘り返しが行なわれたようで、複雑な埋積状況が示されている。出土遺物は、須恵器では蓋・杯・高杯などの小形器種のほか、獣足付

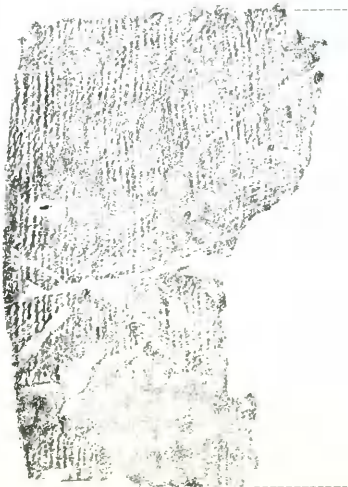
第257図 漆-132(C150・151)

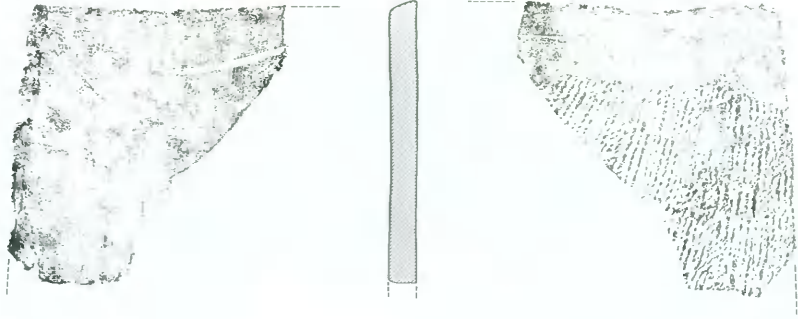
0 10cm

C151

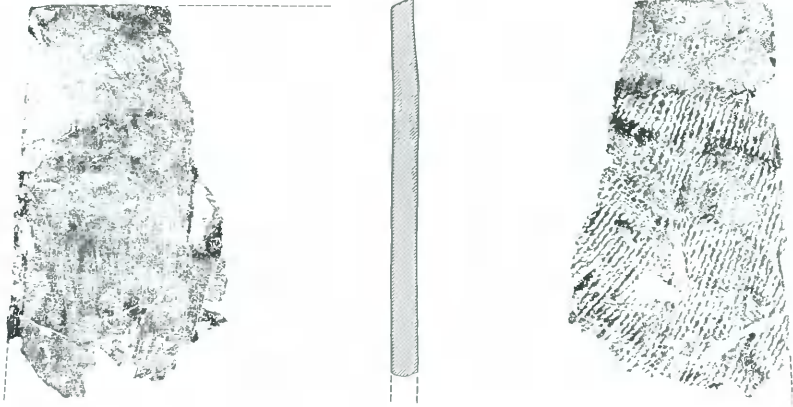


C150





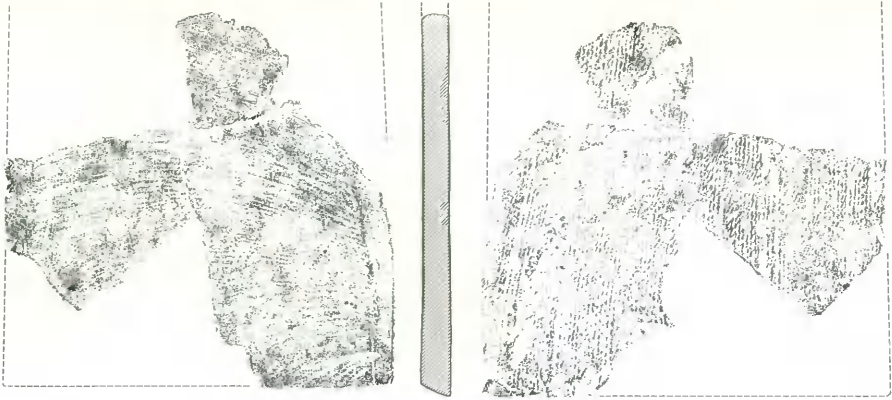
C152



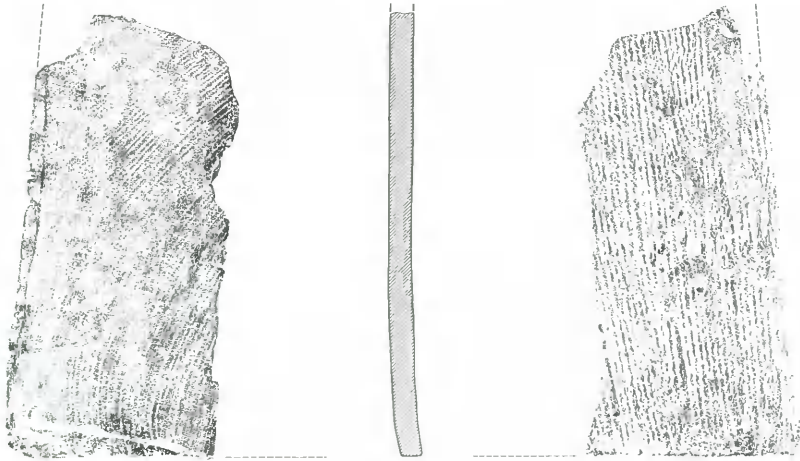
C153

0 10cm

第258図 溝-132 (C152・153)



C154

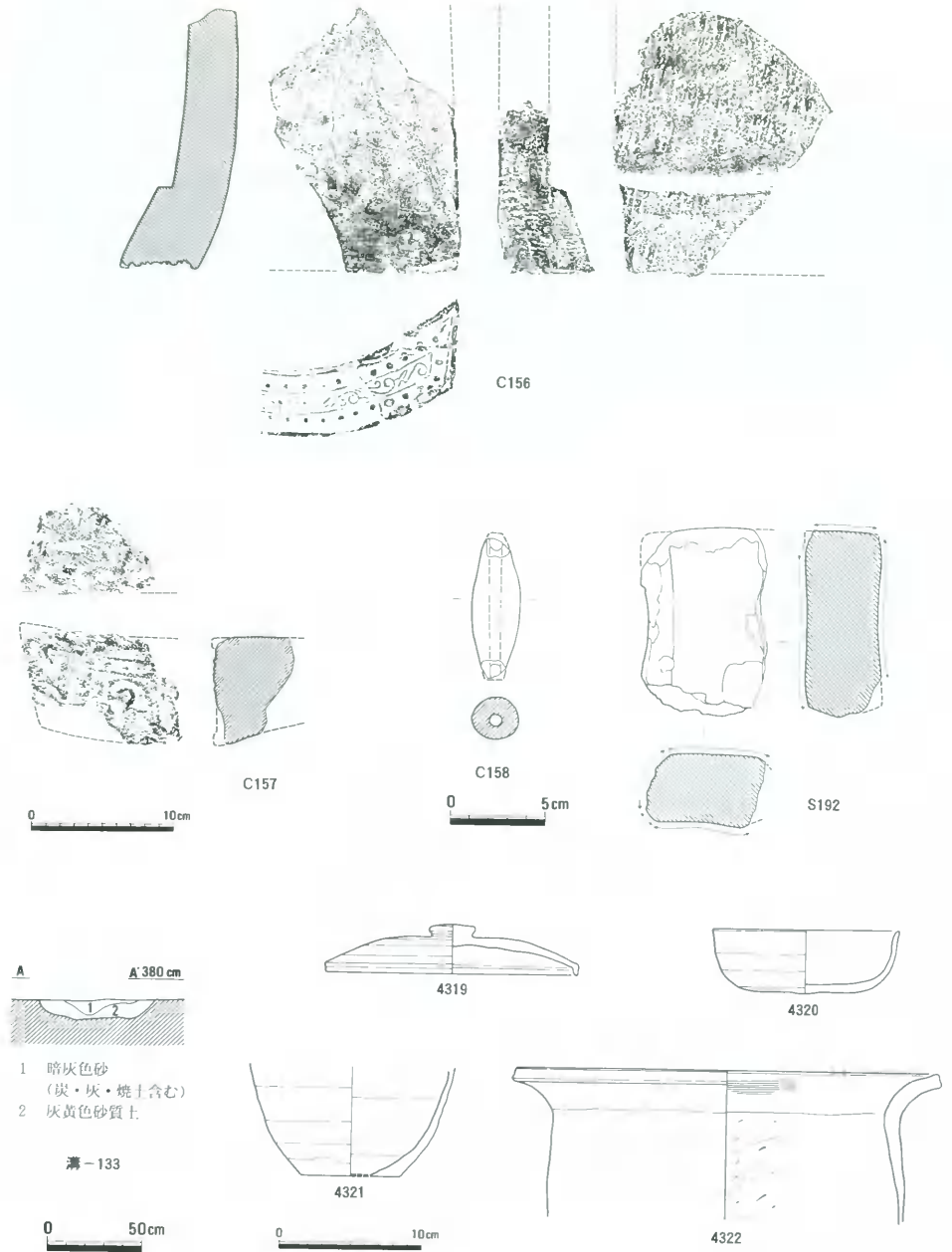


C155

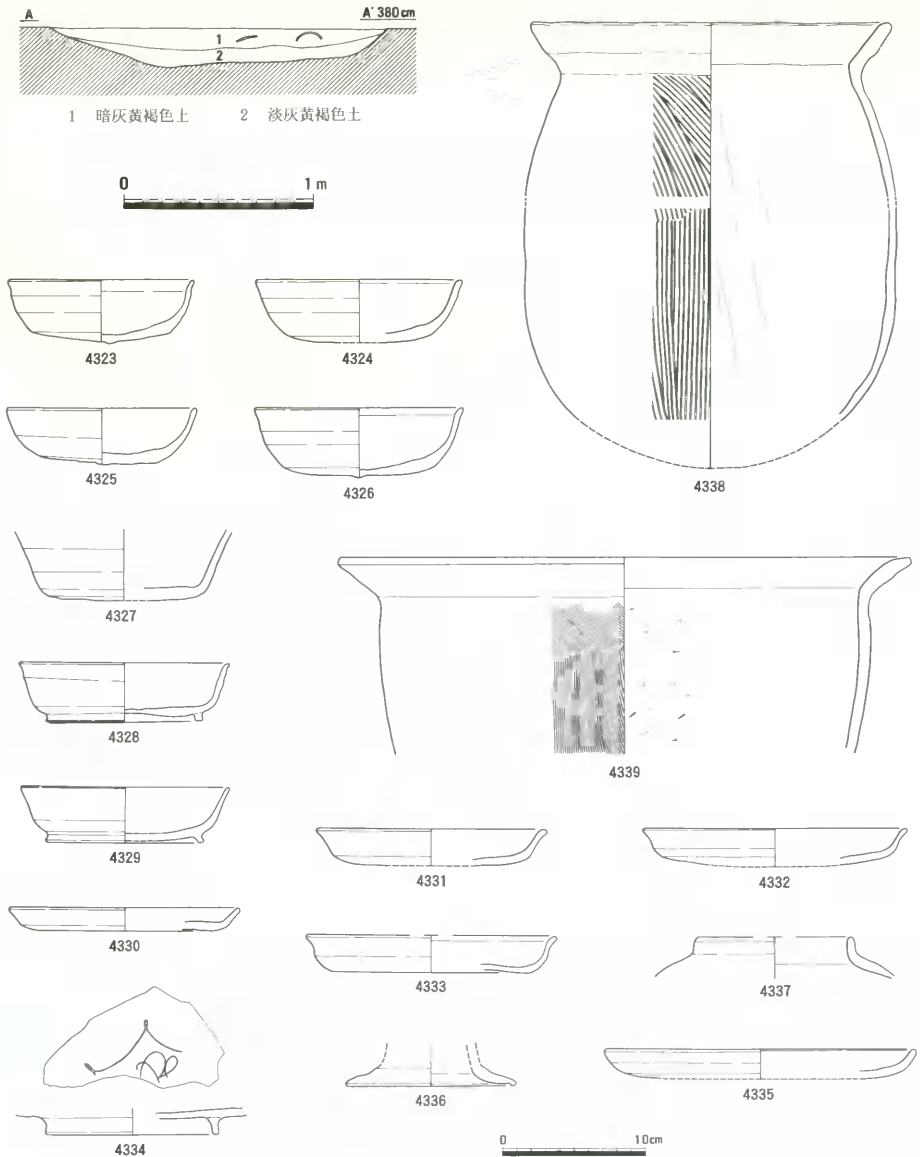
0 10cm

第259図 溝-132(C154・155)



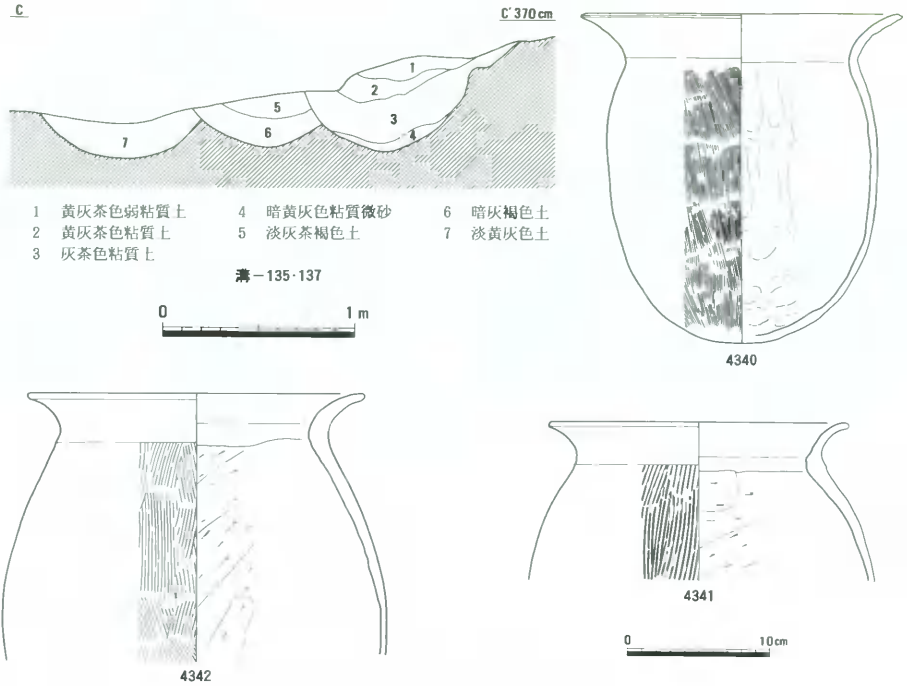


第260図 溝-132(S192・C156・157)・133(4319~4322)



第261図 溝-134(4323~4337)

の壺4294、提梁をもつ平瓶4303など特筆される。土師器では、丹塗りでしかも暗文をもつ4310の杯がみられる。これらの土器の示す時期は奈良中期と推定される。4312~4318の土師器は時期的に平安時代に降るもので、溝の最終廃絶期を示していると考えらるべきであろう。C150~156の瓦は周辺に瓦葺きの建物が存在していた可能性を示唆する遺物で、今後明らかにされる遺跡中枢部分すなわち、この溝の西側に広がる遺構群との関わりに注意される。(岡田)



第262図 溝-135(4340~4342)・137

溝-133 (第260図、図版95)

掘立柱建物-20の北側で検出された東西方向の溝である。断面形は逆台形を呈し、残存幅約60cm、深さ約10cmを測る。位置的に掘立柱建物-20の北雨落ち溝とも推察されたが、厳密には方位が一致せず近すぎる。むしろ溝-266~271などの溝群の方位と合致している点が注目される。

4319~4312などの出土遺物から奈良中期に比定される遺構である。 (岡田)

溝-134 (第261図、図版96)

掘立柱建物-20の東側で検出された検出全長約7mを測る南北方向の溝である。掘立柱建物-20より古く、南端は確認されていないが、土壌-304付近までは続かないものとみられる。

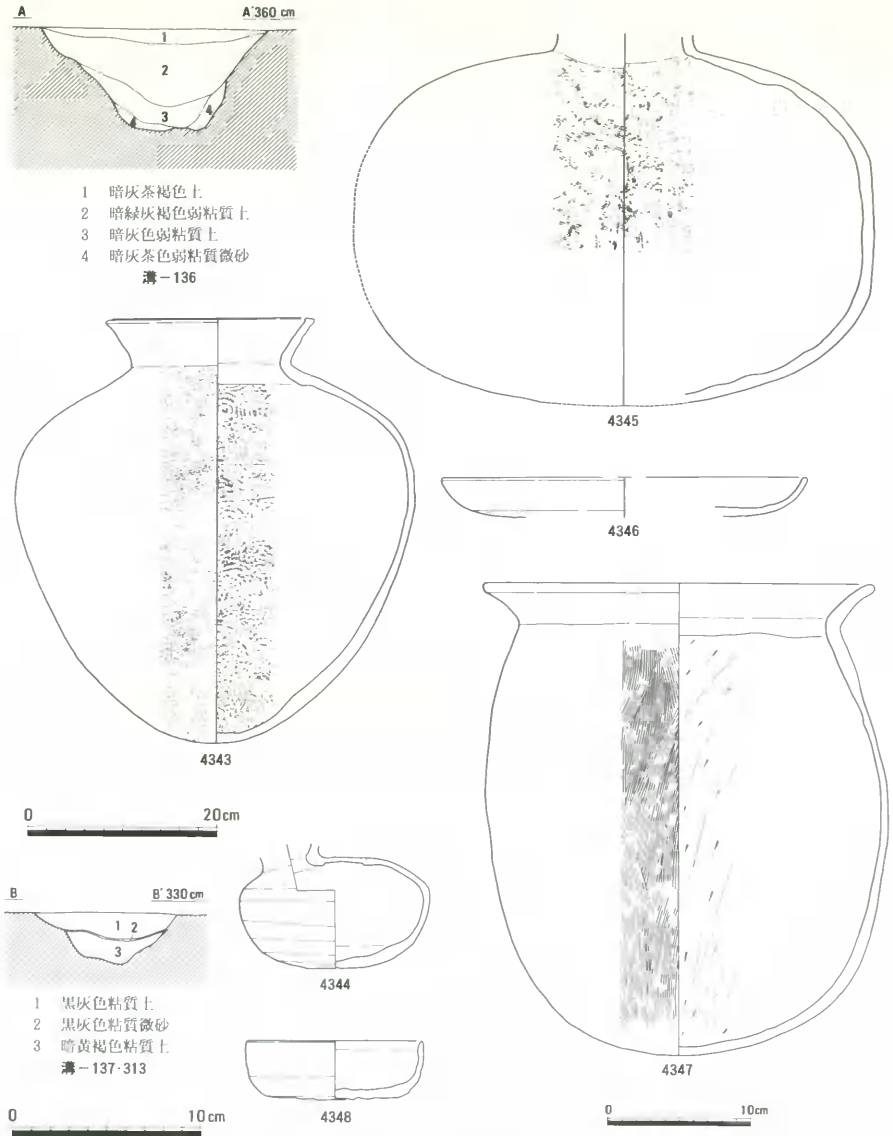
出土遺物は、4323~4330の小形須恵器である杯のほか4331~4337の土師器皿などがある。4334には、丹塗りと暗文が観察される。また大形器種では、鍋4339や長胴の甕4338がある。 (岡田)

溝-135 (第262図、図版96)

O19区の南側を北東から南西に向けてわずかに蛇行しながら流れる溝で、27.75mを検出した。その東端は溝-136・137に切られており、これらに先行するものと思われる。幅は140~58cmあり、深さ28cmを測る断面は緩やかなU字形をなす。埋土から土師器の甕4340~4342が出土しており、8世紀代に機能していたものと推定される。 (亀山)

溝-136 (第263図、図版96)

O19区の南端部に検出した。西南西から東北東に向けて流れるもので、全長23.2mを調査した。溝の幅は139~90cm、検出面からの深さ55.5cmを測る。底面には平坦面が見られる。壁は大きく開き

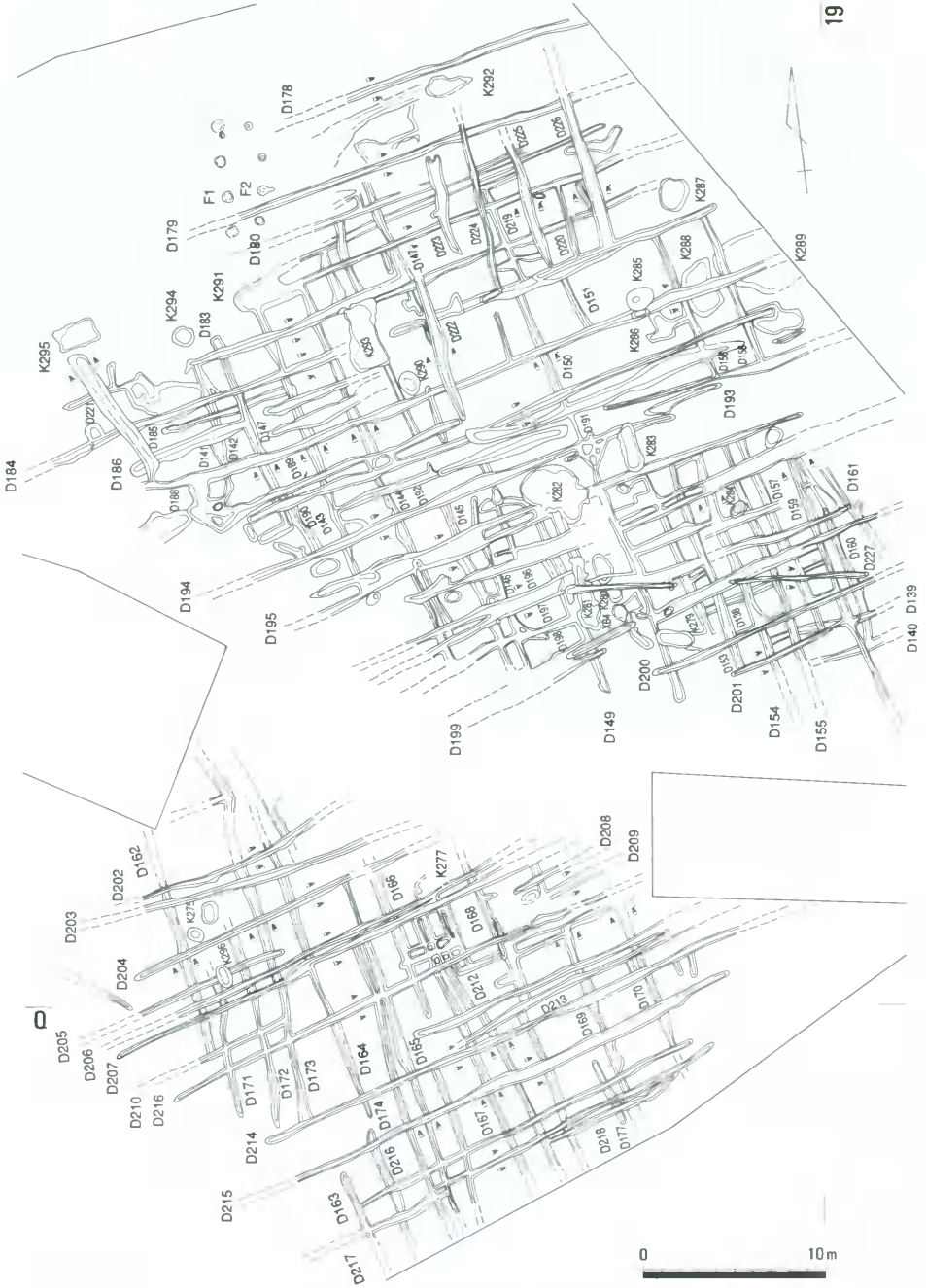


第263図 溝-136(4343-4347)・137(4348)

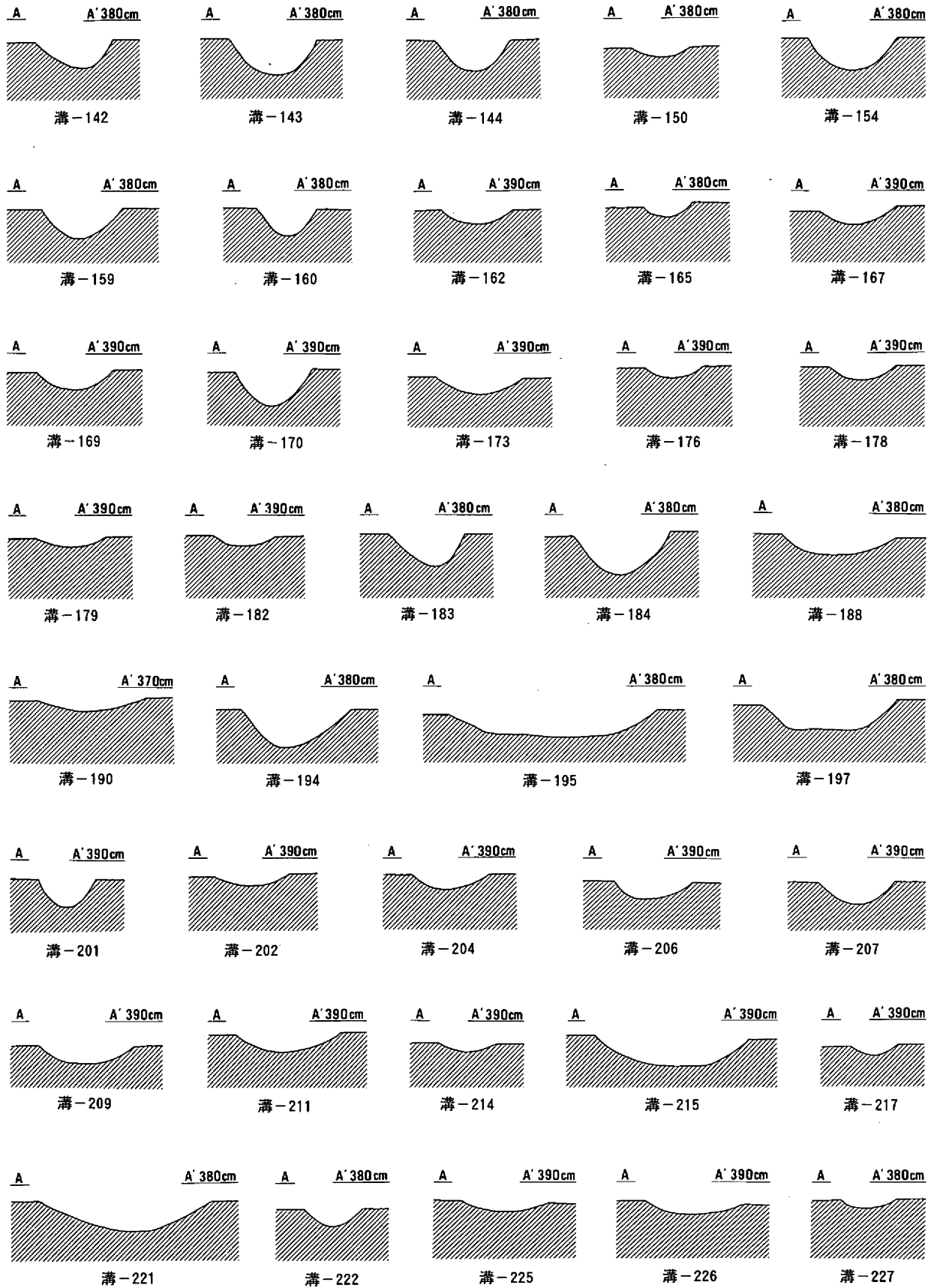
ながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。遺物は須恵器4343~4345の壺、平瓶、横瓶、土師器4346・4347の皿、甕などが出土している。時期は古代に属するものと考えられる。(井上)

溝-137 (第262・263図)

O19区の南東からP19区の南西側に向かって弧状に走る溝である。104.2mを検出したが、その北東端で溝-135・136の一部を切っている。幅は138~45cmを測り、深さ51cmある断面は緩やかなじ字形をなす。出土した須恵器4348から、溝-135・136と近似した時期が想定される。(亀山)

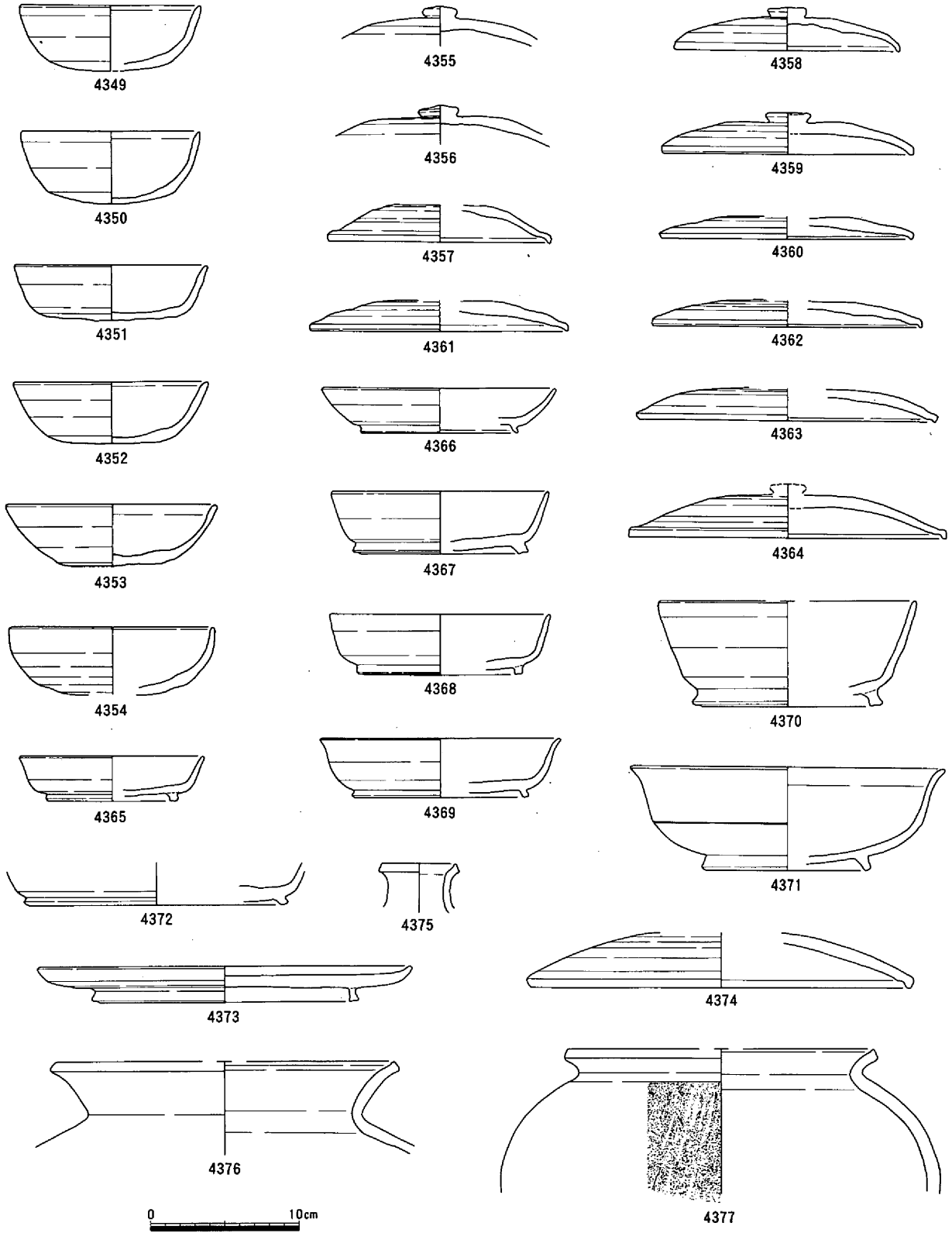


第264図 溝-138~227 1/300



0 10m

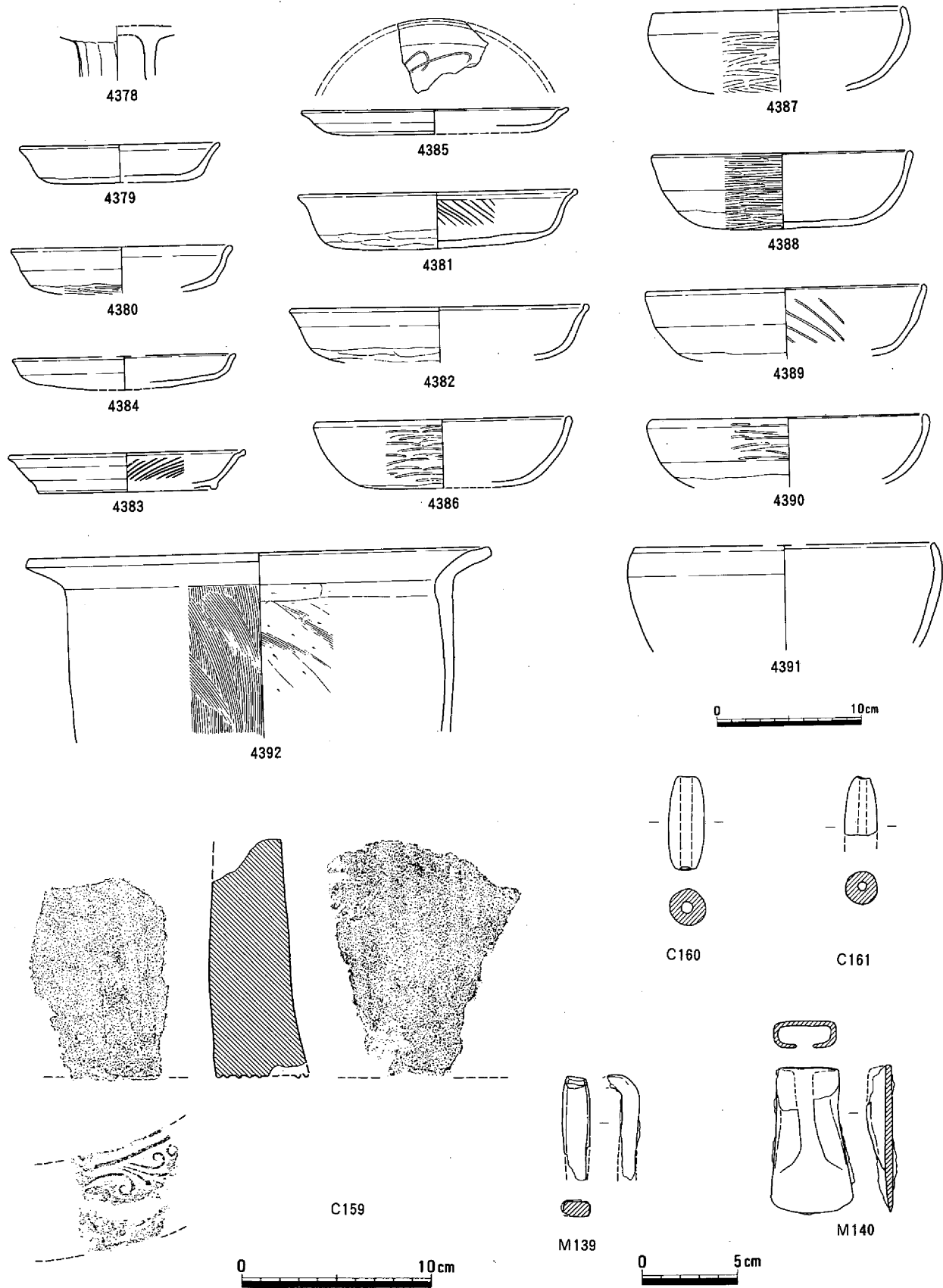
第265図 溝-142~227



第266図 溝-138~227(4349~4377)

溝-138~227 (第264~267図、図版96)

ジャンクションの中心部には、弥生時代以前の微高地があり、東と南へ傾斜している。ここには弥生時代以後水田がつくられているが、古墳時代前期以後、洪水砂などによって徐々に埋没し、微高地



第267図 溝-138~227(4378~4392・C159~C161・M139・140)



との差が少なくなり、古墳時代後半には、平坦地が形成された。この平坦地の一部には、ほぼ東西と南北方向の溝が集中している。溝-138~227は微高地の南東部に位置している。掘立柱建物は検出されていないが、円形~不整形の土壌が分布していて、多数の遺物を出土した。溝の中からも多数の遺物を出土している。溝群の中央部に位置する中世から現代の水路にかかる部分は削られている。

溝はほぼ直線的で、途中でなくなるものもある。溝の間隔は1~3mで、南北方向のものに先行するものが多く、東西方向のものに新しいものが多いが、かならずしも一定していない。また、少し斜め方向になるものもある。断面の形状は、ほとんどがU字形を呈し、浅いものと深いものがある。中世の水田によって、上部を削平されていることから、本来の深さは分からない。幅は30cm前後のものから1m余りのものがある。溝の埋土中からは、須恵器の蓋・杯・皿・椀・鉢、土師器の杯・皿・高杯・鉢・甕の破片、土錘、鉄釘、鉄斧が出土している。

須恵器には、高台の付かない杯4349~4354、蓋4355~4364・4374、高台の付く杯4365~4370、椀4371、皿4372、盤4373、壺4375、甕4376・4377、鉢4391がある。4371の椀の胴部には、明瞭な稜線があり、口縁部は緩やかに外湾していて、器壁は薄い。金属器の椀をモデルにして、須恵器で作ったものと推測される。

土師器には、高杯4378、高台の付かない杯4379~4382・4386・4388~4390、高台の付く杯4383、皿4384・4385、鉢4387・甕4392がある。4383の杯・4385の皿・4389の杯の内面には、暗文が施されている。高杯の柱状部は面取りされていて、稜線を明瞭に残している。

瓦は軒平瓦C159で、唐草文の一部が残っている。土錘C160・C161は紡錘形を呈し、完存するC160は15.8gである。鉄製品には、鉄釘M139、袋状鉄斧M140がある。

時期はいずれも奈良時代に比定される。 (正岡)

#### 溝-228~259 (第268・269図)

溝-132の東側、掘立柱建物-20・21の北側周辺に集中して検出された細かい溝群である。いずれも1~1.8m間隔で検出され、断面形はすべてU字形を呈する。

溝-228~239は北西-南東方向を指し示し、北側に広がる溝-240~259の東北東-南南西(北北東-南南東)の溝群に時期的に先行する。

すでに津寺遺跡丸田調査区でも同様な遺構が検出されているが、農業生産遺構と推定されている。この溝群より後に掘立柱建物が建築されていることから、微高地状の高位に位置しており、水田よりもむしろ畑作の可能性が高いことを示しているといえるかもしれない。 (岡田)

#### 溝-260~284 (第268・269図)

ほぼ東西方向の溝群より南北方向の溝の方が多く検出された。北北東-南南東の溝群は、約2~4m間隔で検出されたが、厳密には東西方向の溝とは直行していない。しかし、切り合い関係はなく同時に機能していたことは明らかである。断面形はやや幅広で角張ったU字形を示す。

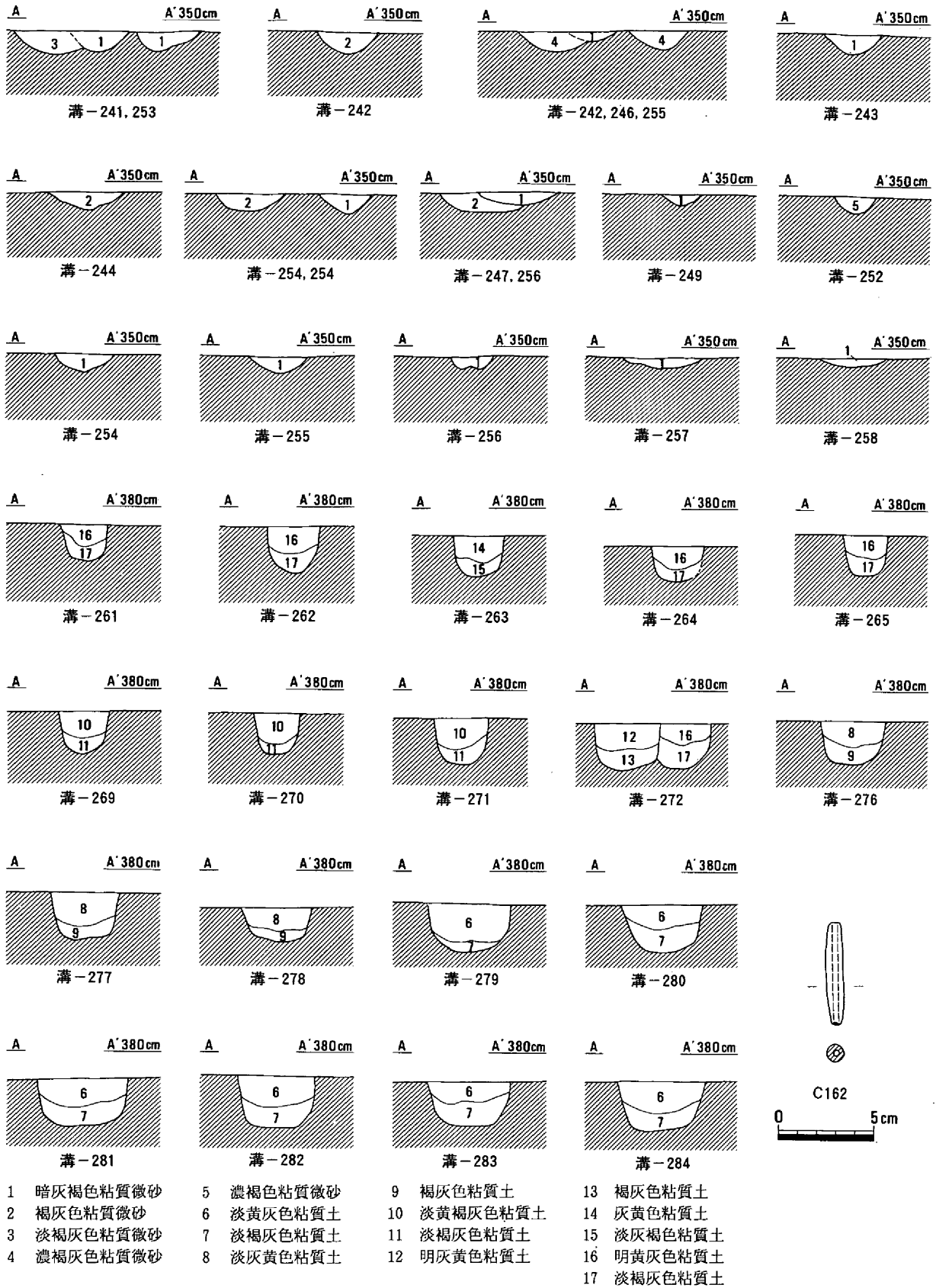
掘立柱建物-20・21の棟方向とは、基本的に方向が合致し、時期的に共存していた可能性もある。また、溝-131の接近した位置では平行しており、同時期に存在した可能性がある。

明確な出土遺物によって裏付けることはできないが、周辺の検出遺構との時期的関係等から奈良時代前期から中期に比定される遺構と考えられる。 (岡田)

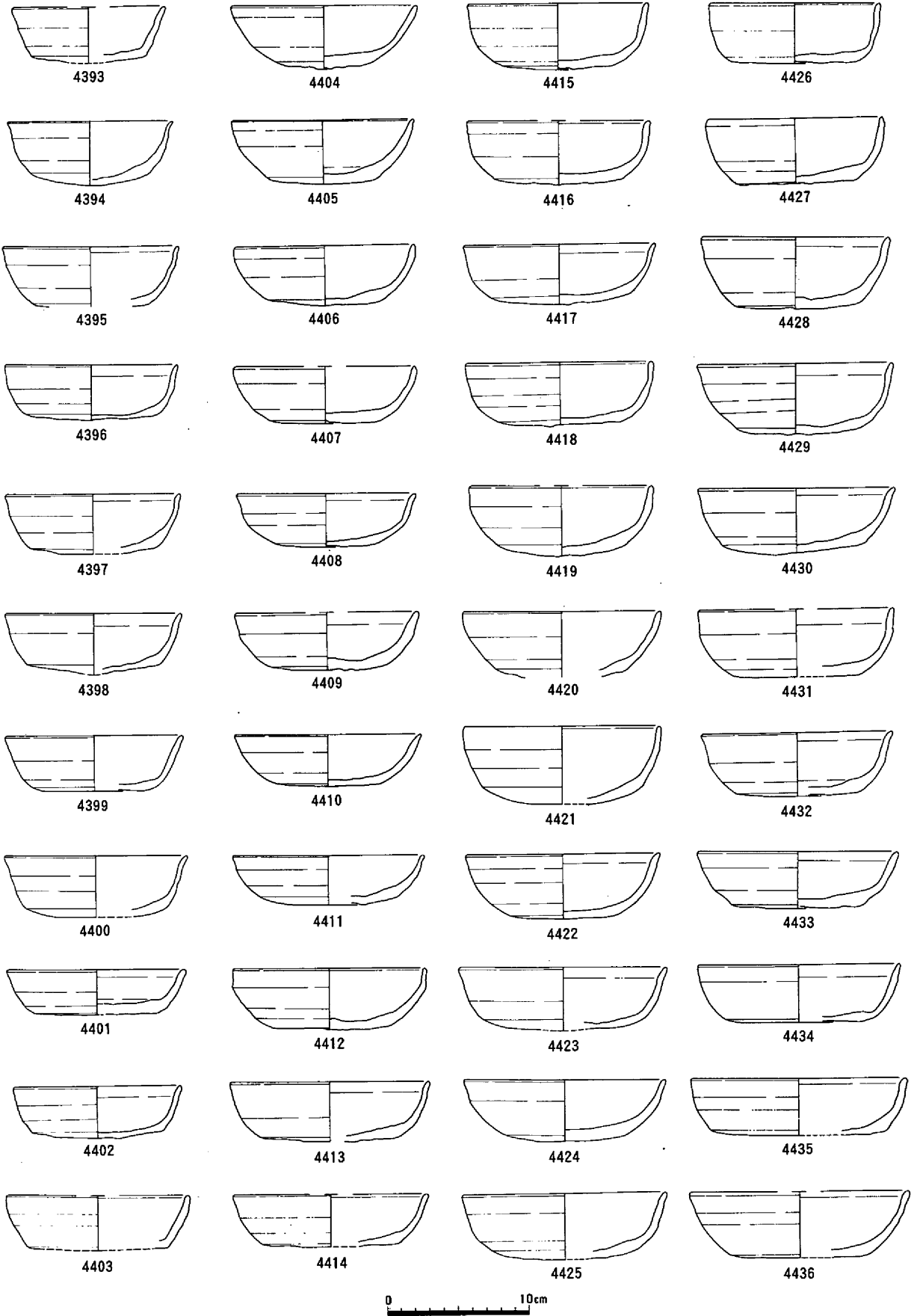


第268図 溝-241~284 1 / 300

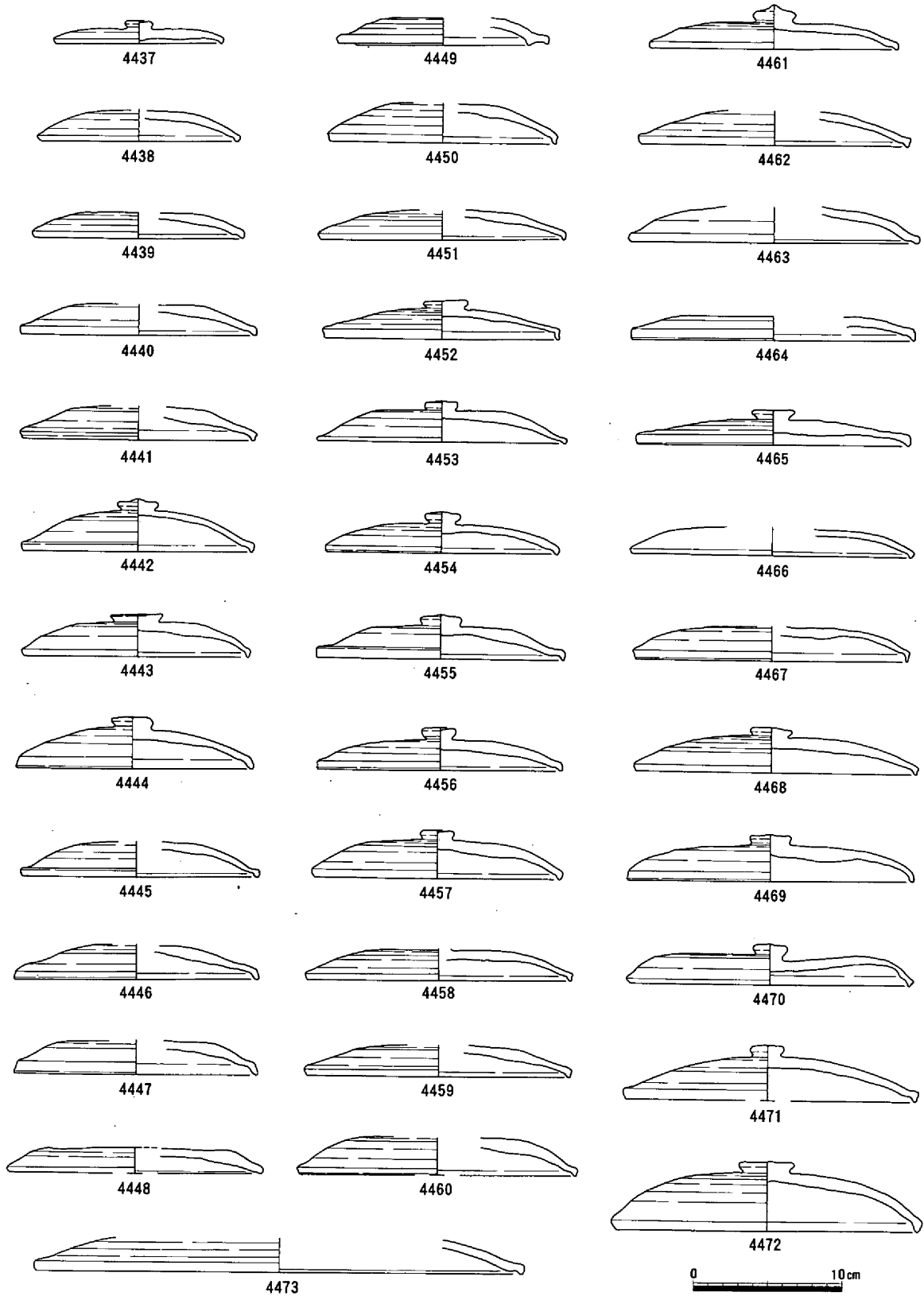
第3章 中屋調査区



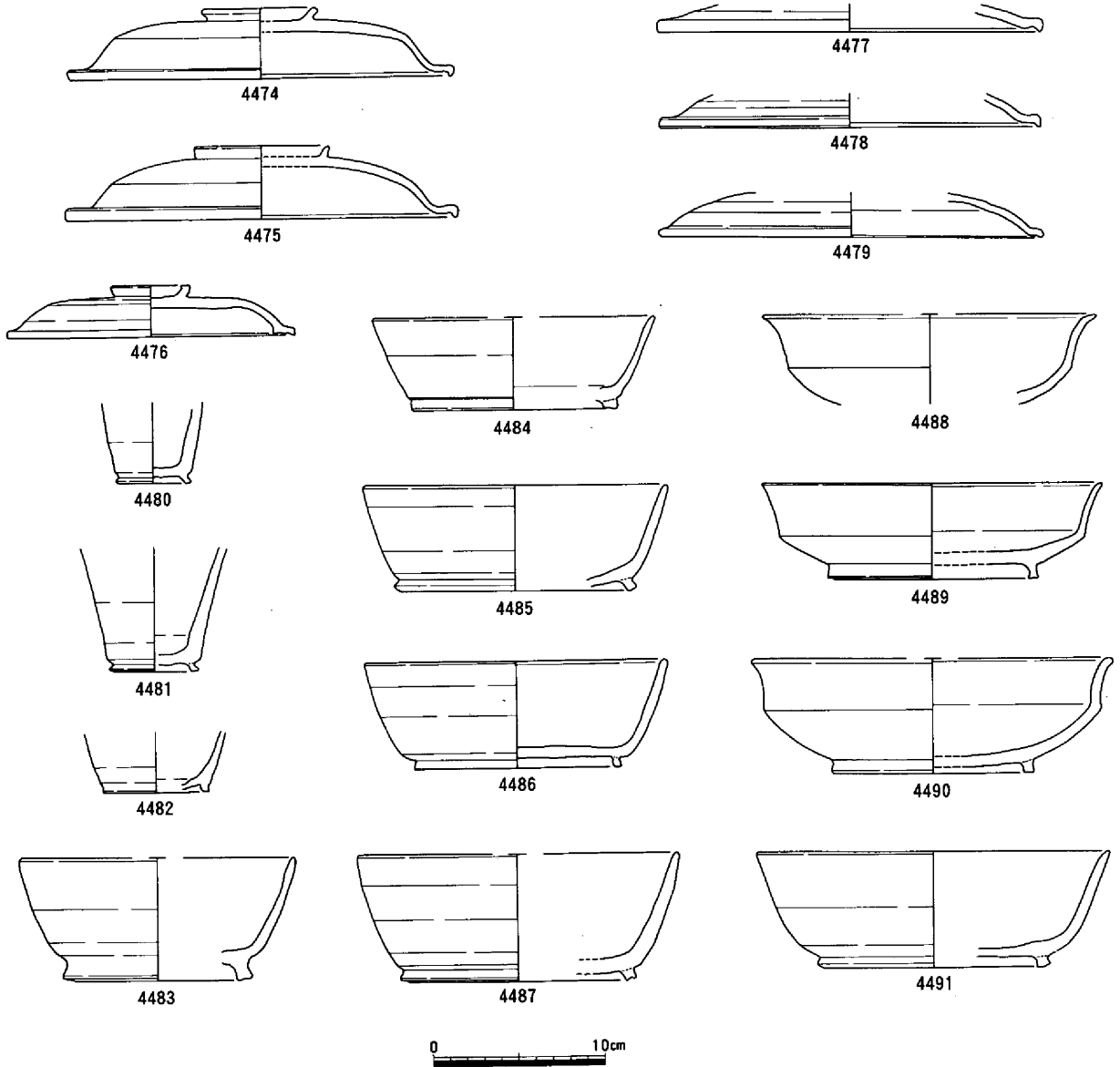
第269図 溝-241~284 (C162)



第270図 包含層(4393~4436)



第271図 包含層(4437~4473)



第272図 包含層(4474~4491)

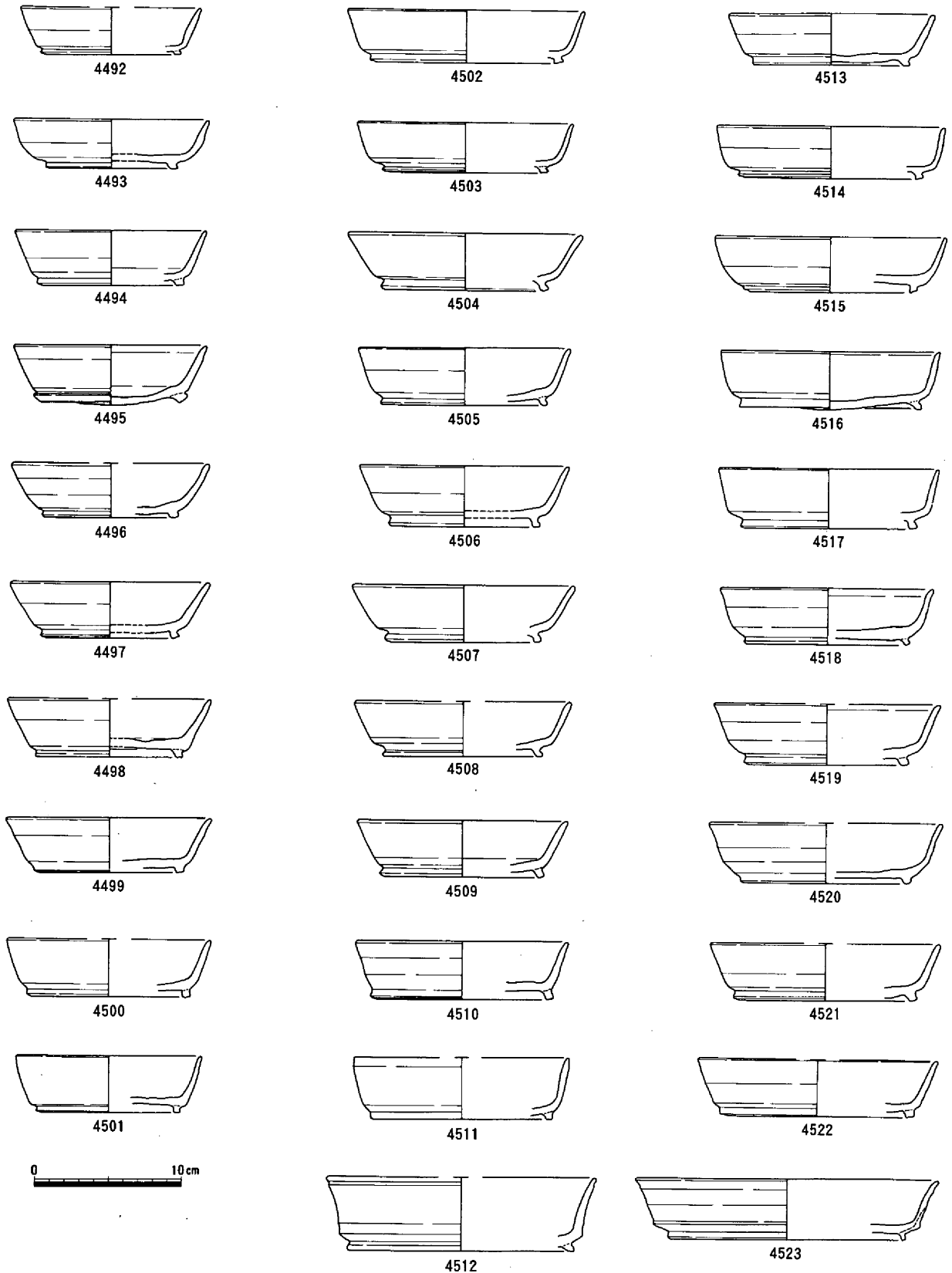
(6) その他の遺構・遺物

包含層から出土した古代の遺物には、須恵器・土師器などの土器のほか、瓦や金属製品がある。これらは格子状をなす溝や掘立柱建物の周辺から主として出土している。

須恵器(第270~278図、図版98~100)

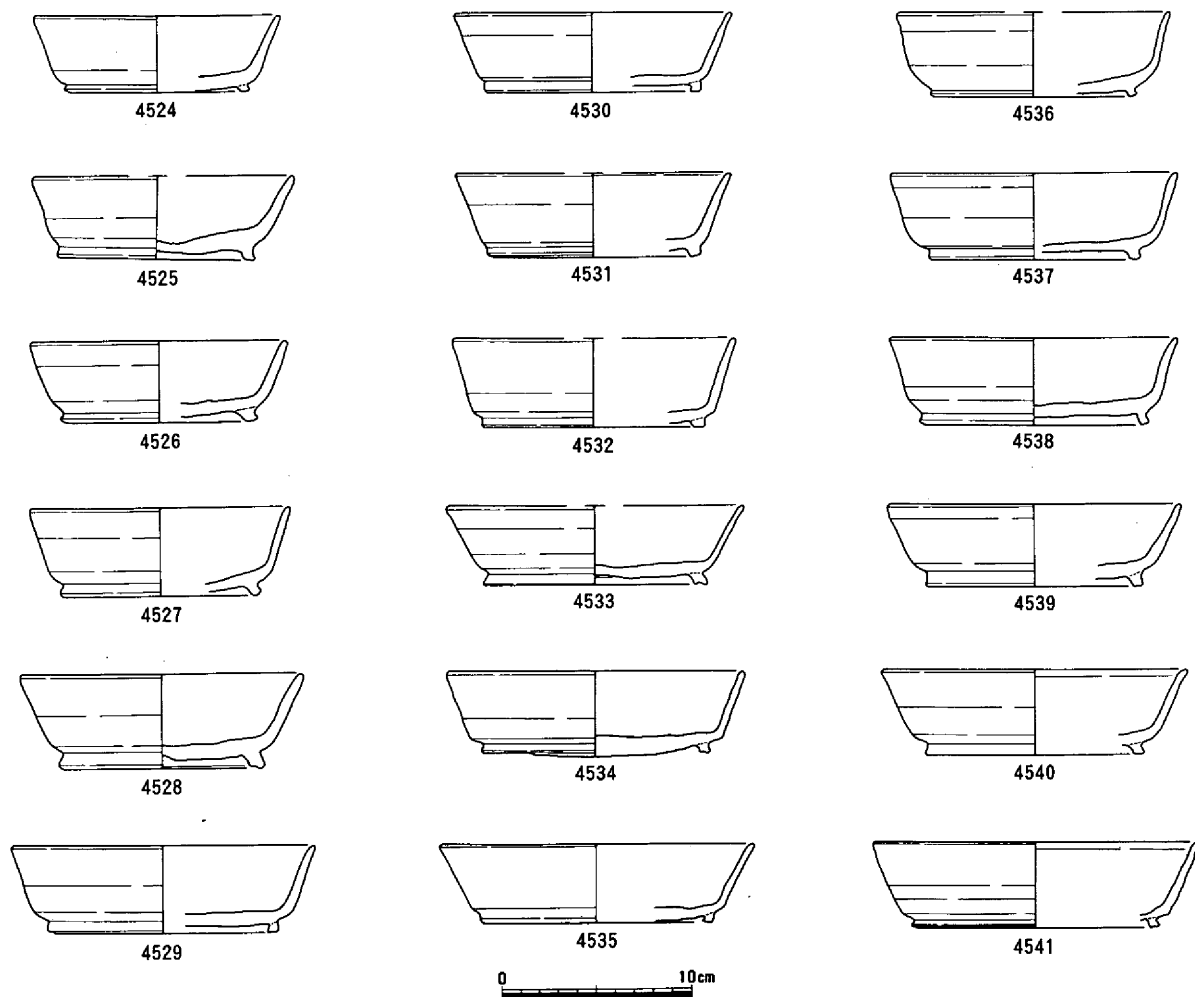
須恵器には杯、蓋、皿、鉢、壺、甕、硯などがある。

杯には無台のA類と高台をもつB類に分けられる。A類には、口径10.8~13.7cm、器高3.9~5.5cm、径高指数2.5~3.0のa類4393~4400・4404~4409・4415~4422・4426~4432と口径11.7~15.4cm、器高3.2~4.7cm、径高指数3.1~3.9のb類4401~4403・4410~4414・4423~4425・4433~4436とがある。底部はヘラキリ後ナデで仕上げるものが多く、ヘラ記号の見られるものもある。胎土には礫を多く含み、灰白色の軟質な焼き上がりを示すものが大半を占める。



第273図 包含層(4492~4523)

4437~4479は杯B類の蓋である。このうち、口径14.0cmを測る4449は、内面に低いかえりをもつ蓋である。4437~4472は、その法量から口径10.8~13.7cmの小形、口径14.8~16.5cmの中形、口径17.4~20.1cmの大形に分けられる。また、天井部に貼り付けたつまみには、低平な擬宝珠形をなす1類



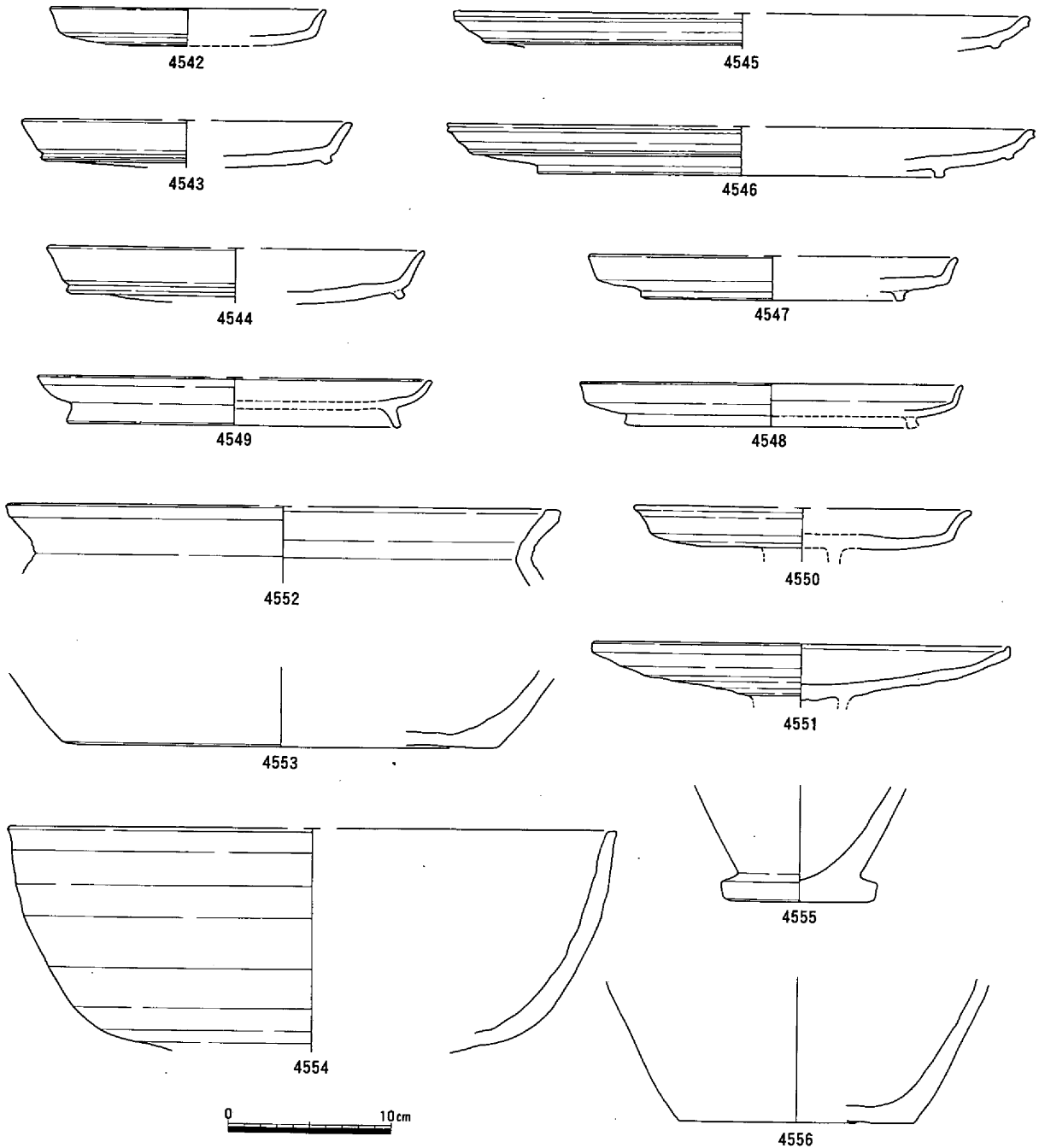
第274図 包含層 (4524~4541)

4442・4454・4455・4461・4469・4470・4472やボタン形の2類4437・4443・4444・4452・4453・4456・4457・4465・4468・4471、環状をなす3類4474~4476がある。1・2類の法量はほぼ重複するが、大形では1類が、小形では2類が主体をなす。また、口径22.0~22.6cmと大形の3類は、4371のような杯に組み合うもので、他地域からの搬入品と見られる。

4480~4541は底部に高台を貼り付けたB類の杯である。B1類4480~4482は高台径3.8~5.8cmを測る小形の杯で、平城京では枅として使用された例が知られている。B2類4483~4487・4491は、口径15.8~18.4cm、器高5.4~7.4cmを測る大形の杯で、径高指数2.2~2.5の2a類4483・4487、径高指数2.8~3.0の2b類4484~4486・4491、径高指数3.6の2c類4512、径高指数5.0の2d類4523に分けられる。このうち、4512・4523は体部と底部の境が屈折して稜をなす特徴をもち、製作地が同一である可能性が高い。B3類は小形の杯で、径高指数3.6~4.0のa類、2.9~3.5のb類に細分が可能である。4類4488~4490はいわゆる稜椀で、口径19.0~20.8cm、器高4.9~5.6cmを測り、径高指数は3.5~4.2ある。口縁部と体部の屈折は強く、その胎土からも邑久窯跡群での生産になるものと思われる。

皿には無台のA類と高台をもつB類がある。A類の4542は口径16.7cm、器高2.3cmで、底部は回転ヘラケズリする。A類の出土は少なく、津寺遺跡では2点しか確認できなかった。B類は、口縁と底部の境に高台を貼り付けるB1類4543・4544と、底部の中央に高台を貼り付けるB2類4545~4549と



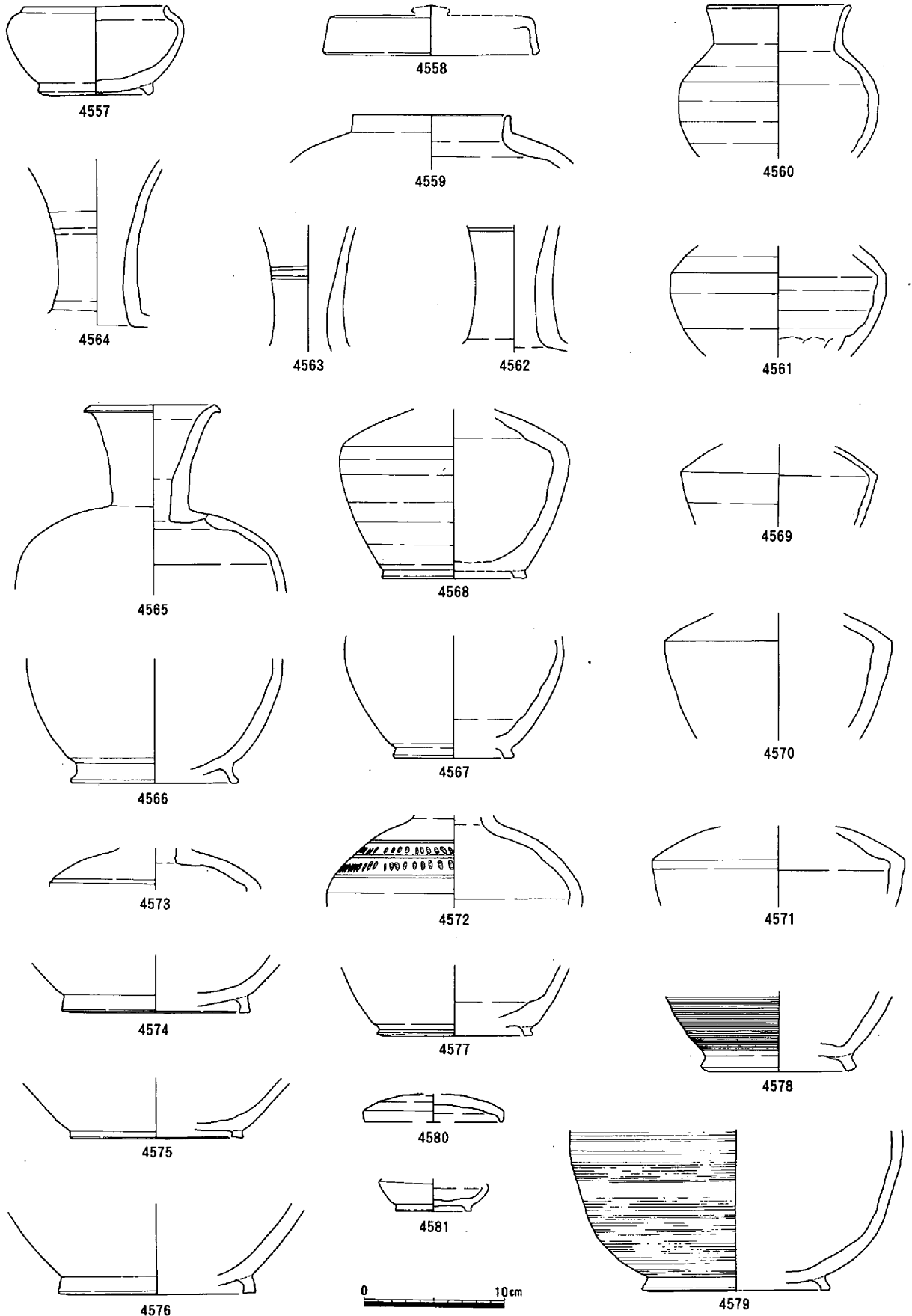


第275図 包含層(4542~4556)

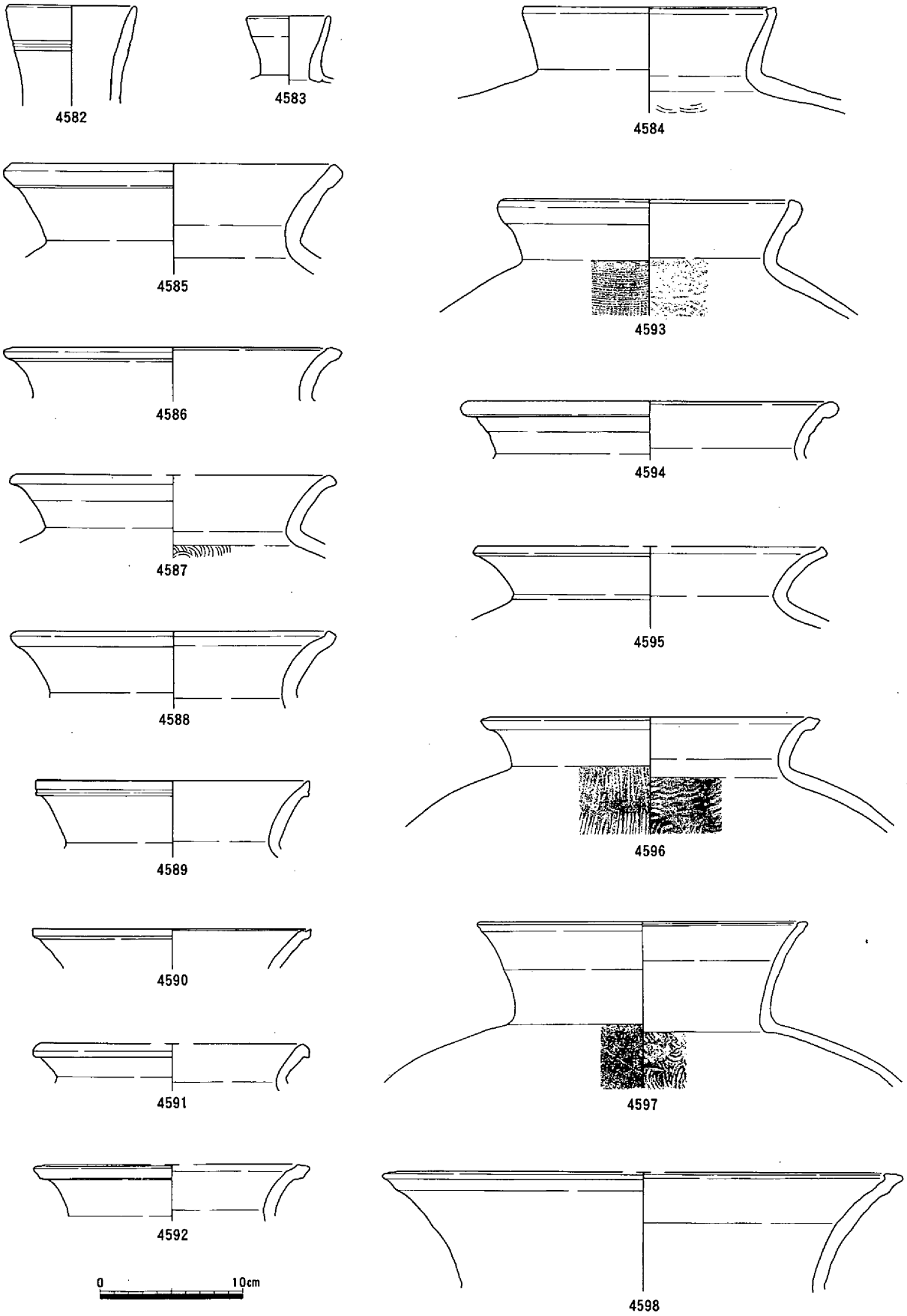
がある。B 1 類4543・4544は口径22.9~19.8cm、器高3.4~2.9cmで、径高指数は6.7~6.8である。B 2 類は口径24.1~22.6cm、器高3.0~2.8cm、径高指数8.0~11.8のB 2 a 類4547~4549と、口径36.2~35.4cm、器高3.0~2.2cm、径高指数12.1~16.0のB 2 b 類4545・4546とがある。後者は大形で、口縁と底部の境に断面矩形をなす突帯を貼り付けている。

高杯には4550・4551がある。口径20.8cmを測る4550は皿Aに、口径25.6cmの4551は蓋に、それぞれ脚部を取り付けた形態をとる。

4553~4555は鉢である。4553は径26.8cmの平底をもつA類で、外面をヘラケズリで調整する。口径36.9cmを測るB類4554は、口縁部が底部から屈曲しながら立ち上がり、その端部は角張っておわる。C類4555はすり鉢で、分厚くつくられた底部は径9.2cmを測る。



第276図 包含層(4557~4581)



第277図 包含層(4582~4598)

壺には4557～4581がある。4557～4559は短頸壺である。4557は口径9.9cm、器高6.3cmと小形で、底部には高台を貼り付ける。礫を含む胎土は灰白色を呈し、やや軟質の焼成を示す。口径10.9cmを測る4559は、邑久窯跡群の製品と想定されるもので、4558のような蓋と組合うものと思われる。4560・4561は直立する口縁をもつ壺で、口径9.8cmを測る。7世紀まで溯る可能性がある。4564～4573は長頸壺である。4562～4564は上方に向かって開く頸部で、中程に1～2条の凹線をめぐらす。4569～4573は肩の張る体部をもち、4572は3条の沈線で区画した中に楕状工具による刺突文を連続して施す。4565～4567はなだらかな肩をもつ長頸壺で、径8.8cmを測る口縁部は肥厚して面をなし、底部には断面矩形の高台を貼り付ける。

甕には4584～4599がある。4584は直立する口縁部をもち、口径17.5cmを測る。4585～4596・4599は外反する口縁端部が肥厚して段をなす甕である。掘立柱建物に接して出土した4599は、口径9.7cm、器高48.7cmを測り、平行タキで成形した体部の内面には同心円の当具痕を残す。4598・4597は、外反する長い口頸部をもつもので、4598は口径34.6cmを測る大甕である。

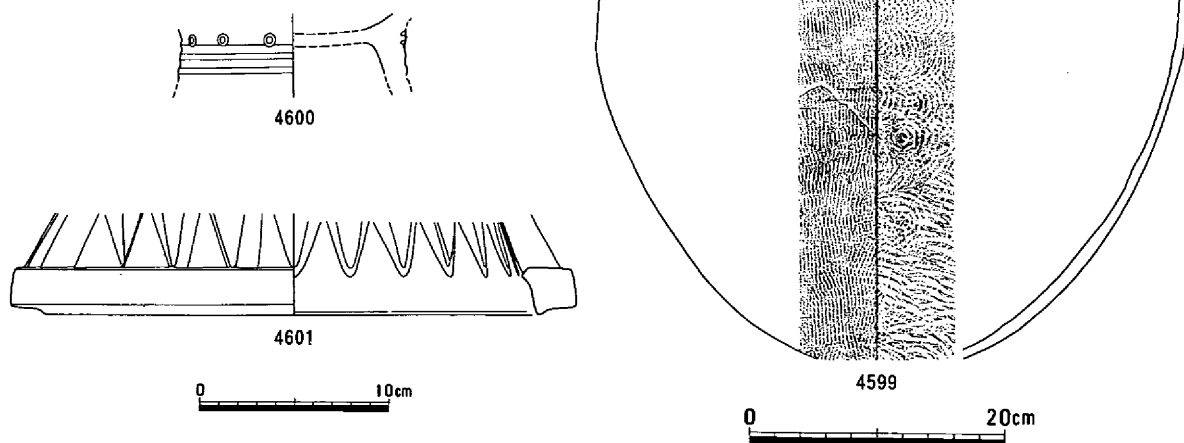
4600・4601は円面硯である。4600は2条の凹線をめぐらした上に竹管文を施す。4601は蹄脚硯で、底径は25.8cmと大形である。邑久窯跡群の製品である可能性が高い。

#### 土師器 (第279～283図、図版100・101)

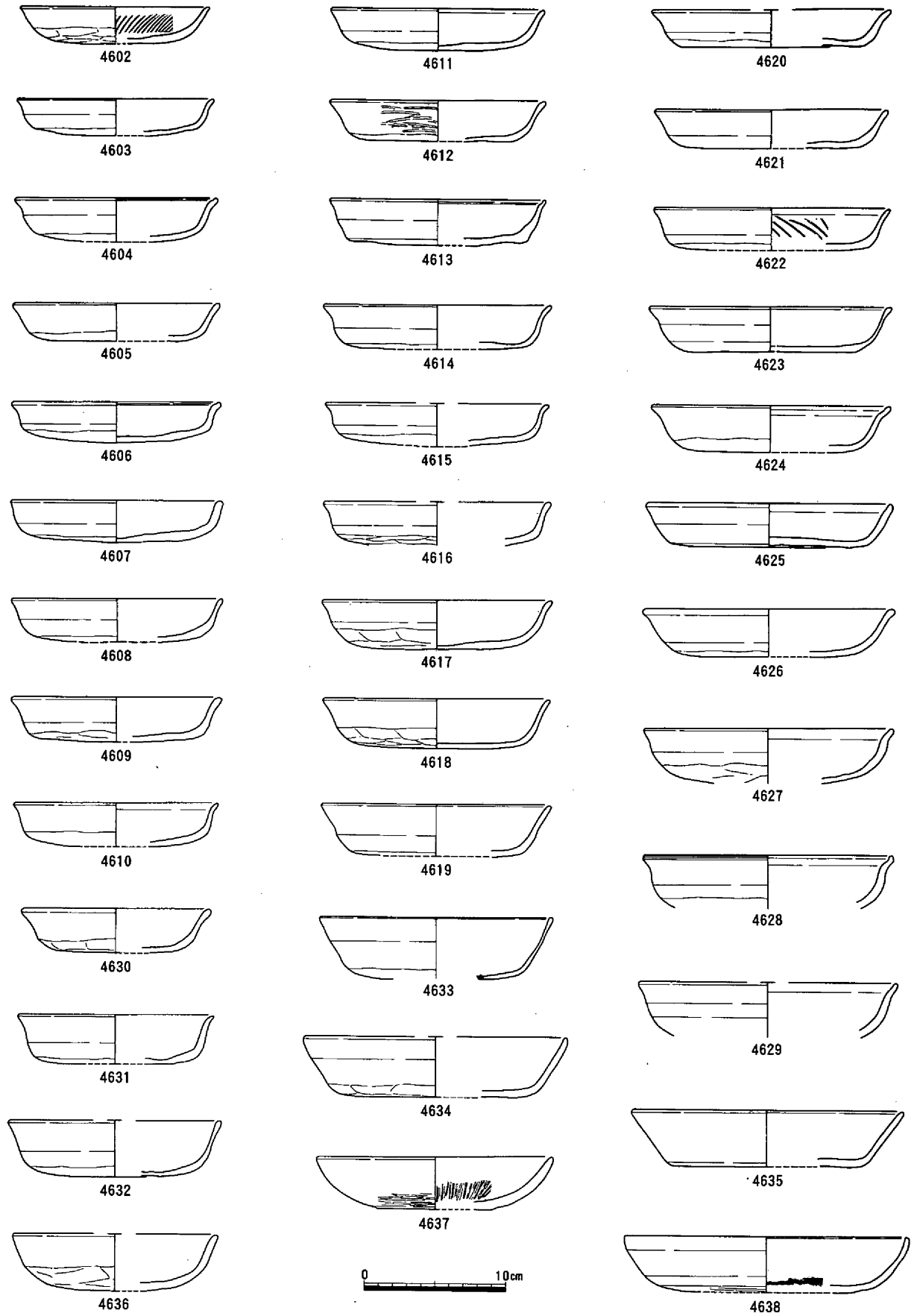
土師器には杯、蓋、皿、鉢、高杯、甕、甔、カマドがある。杯には無台のA類と、高台をもつB類とがある。A類のうち、口径19.9～13.0cm、器高4.3～2.6cmを測る1類4602～4638は、径高指数4.4～5.3である。2類4643～4650は、口径20.2～16.2cm、器高6.2～5.6cmを測る深めの杯で、径高指数3.1である。3類4639～4642は底部を丸くヘラケズリした杯で、口径18.0～12.9cm、器高5.9～4.3cmを測り、径高指数は2.9～3.2である。3類には丹塗りは認められないが、1類においても4602のように橙色を呈するものは丹塗りを欠く傾向にある。底部はヘラケズリで仕上げているが、1・2類ではまれに粗いハケメを施すものも見られる。

また、粗いヘラミガキを施すものもあるがその量は少なく、斜放射の暗文をもつものもごくまれである。

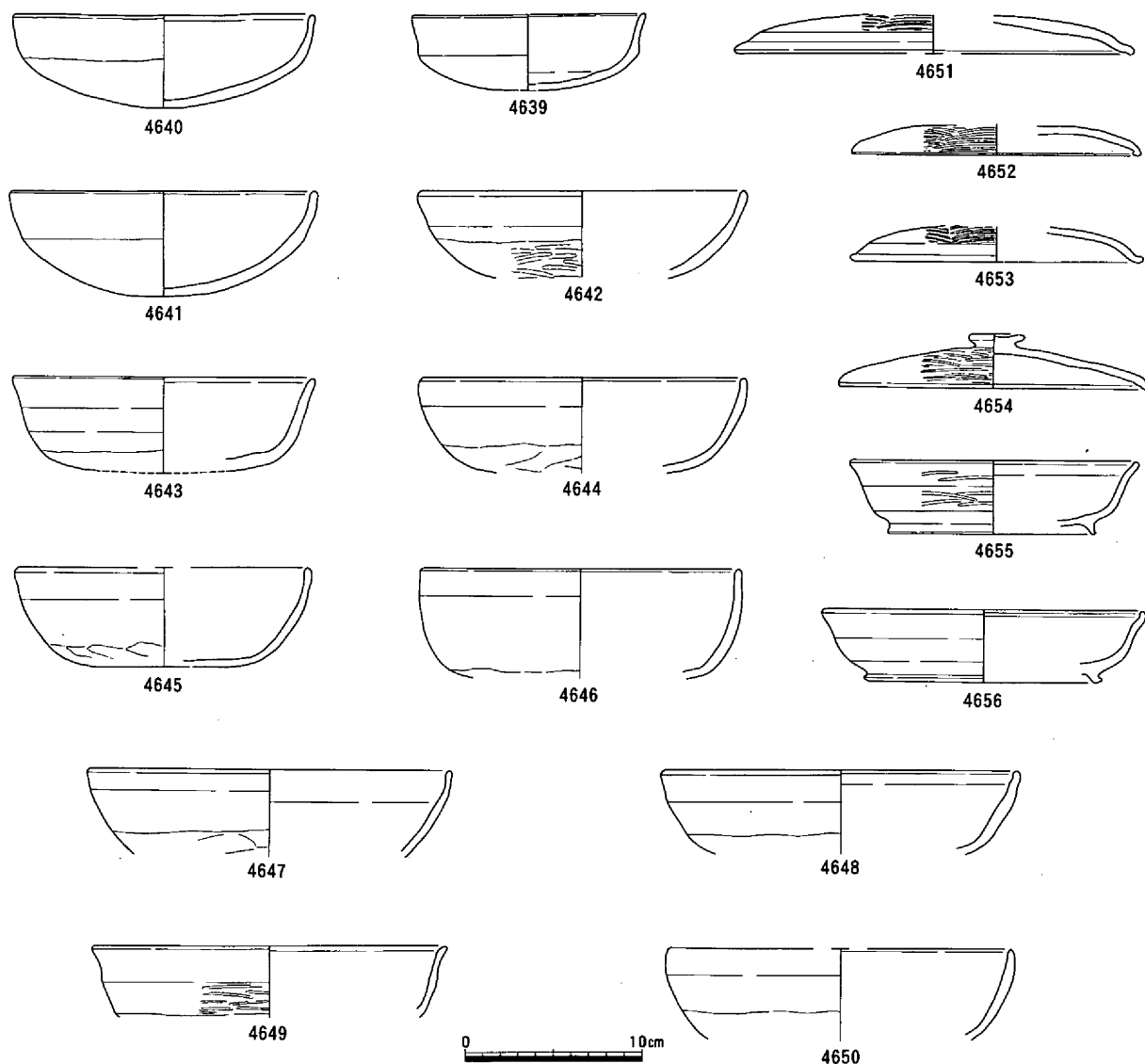
B類は出土量が少なく、全形を知り得る



第278図 包含層(4599～4601)



第279図 包含層(4602~4638)



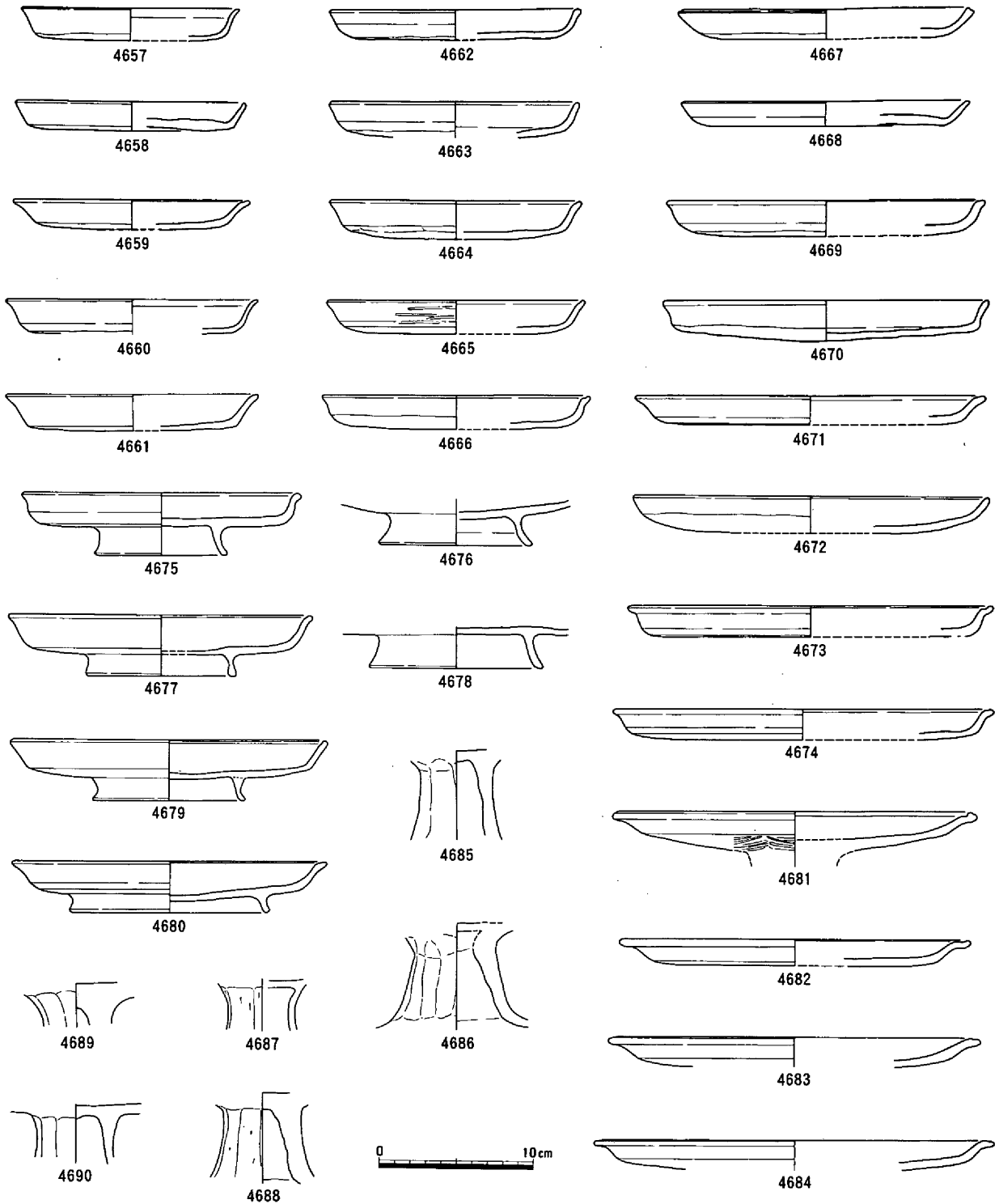
第280図 包含層(4639~4656)

ものもわずかである。4655・4656は口径17.7~15.9cm、器高4.1cmを測り、径高指数は3.9~4.3である。

蓋4651~4654は、口径16.8~15.8cmの1類と、口径21.8cmの2類とがある。1類は杯B、2類は皿Bに組合うものと思われる。また、これらは形態のうえから口縁部が斜め下方にのびる4652・4654と、わずかに外反する4651・4653とに分けられる。いずれも、ヘラミガキで調整する天井部には4654のようにボタン状のつまみを貼り付けていたものと思われる。

皿には無台のA類と、高台をもつB類とがある。A類は、口径17.1~13.8cm、器高2.5~1.9cm、径高指数6.4~7.8の1類4657~4666、口径20.8~18.2cm、器高2.7~1.6cm、径高指数7.7~11.3の2類4667~4670、口径24.2~22.6cm、器高2.4~1.9cm、径高指数9.6~12.1の3類4671~4674がある。B類4675~4680は、口径20.0~17.5cm、器高4.1~3.4cmを測り、径高指数は2.6~5.0である。いずれも底部はヘラケズリするが、ハケメを施すものも見られる。また、内面に螺旋の暗文を施すものごとくまれに見受けられる。

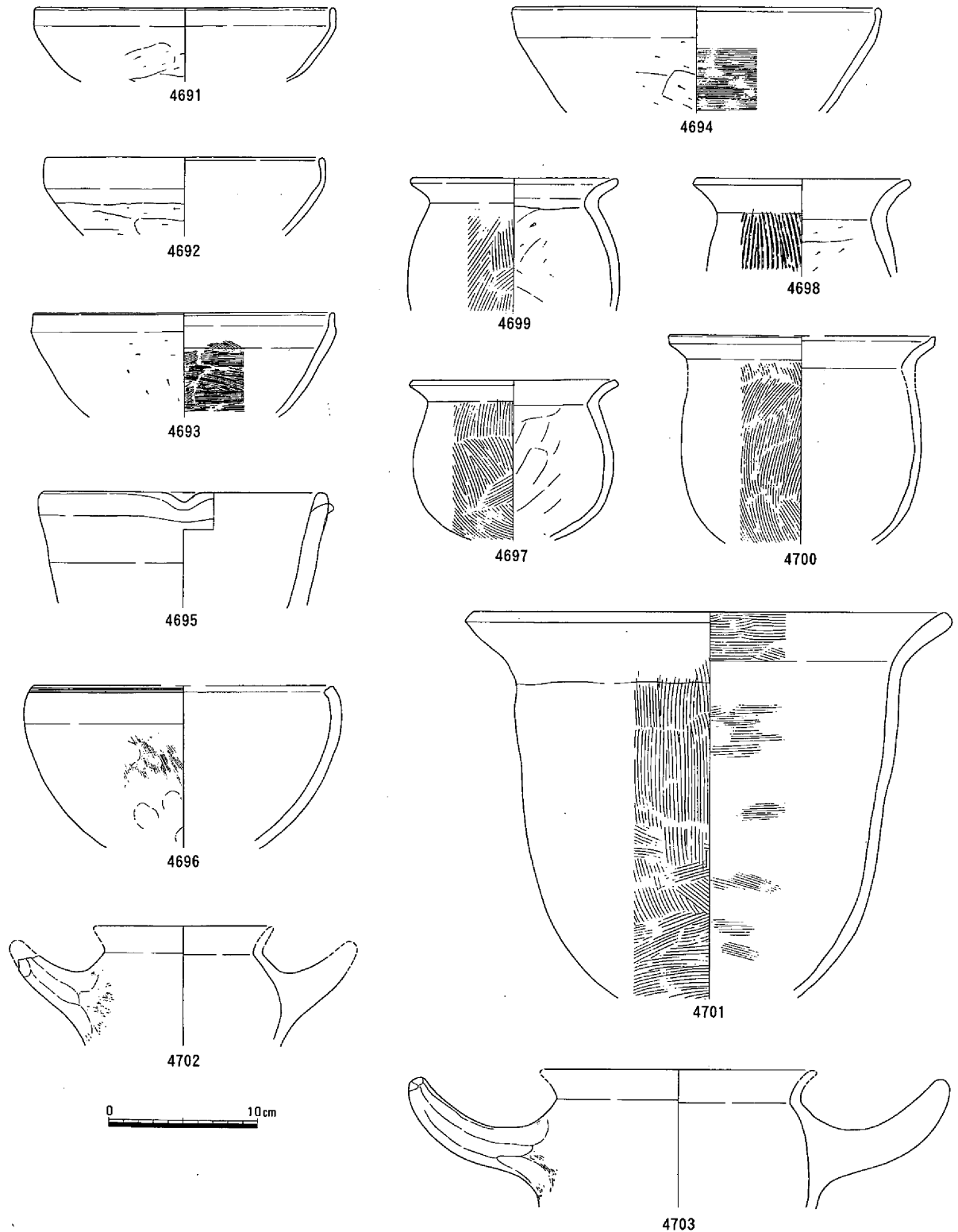
4681~4690は高杯である。杯部4681~4684は、口径25.0~22.6cmを測り、外面をヘラケズリした後



第281図 包含層(4657~4690)

粗いヘラミガキを施す。4685~4690は脚部で、外面を縦に幅広く面取りする。

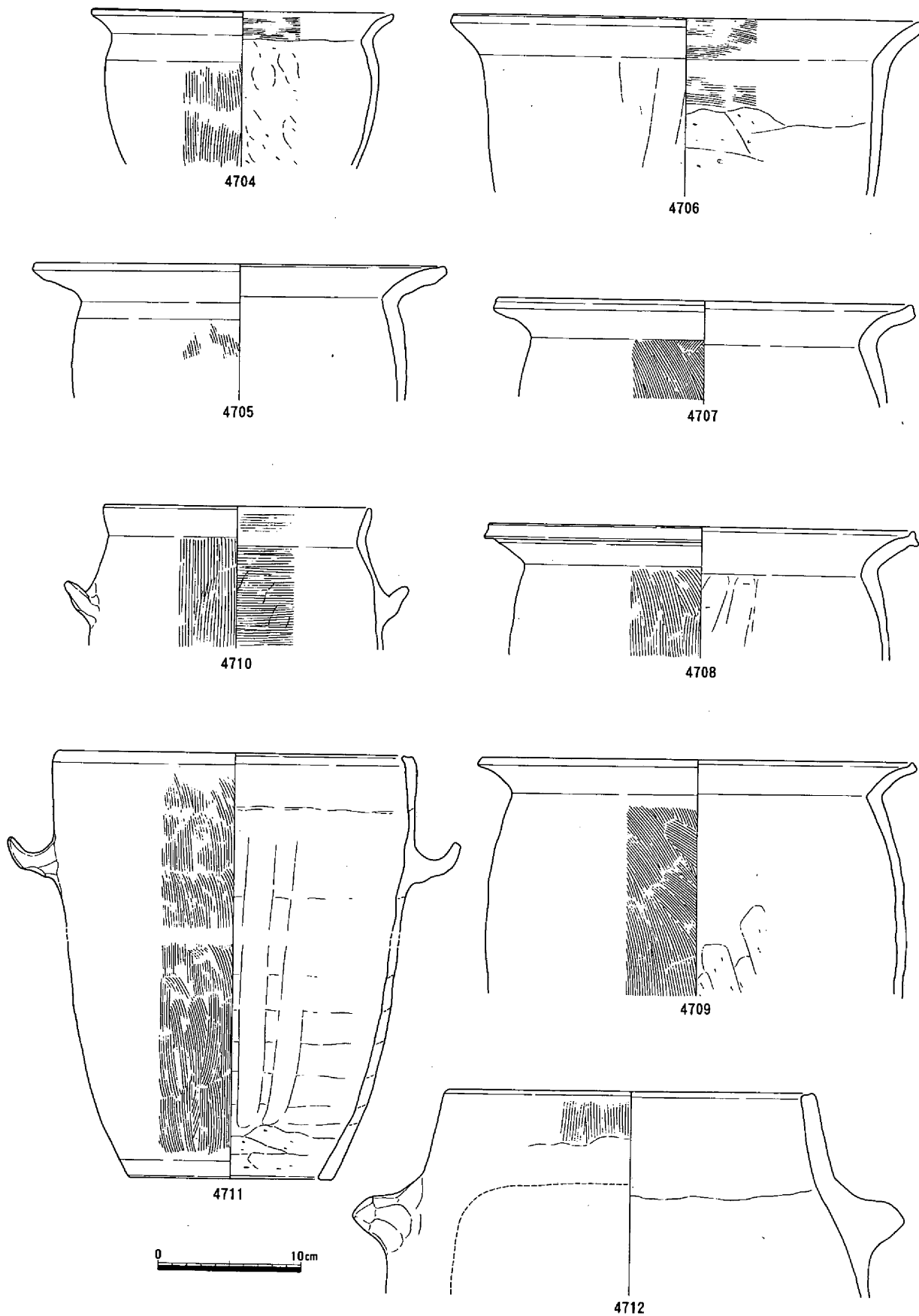
鉢には4691~4696がある。底部から直線的に広がるA類4691~4694は、口径20.0~18.4cmの1類と口径24.0cmの2類とがある。いずれも体部の外面をヘラケズリ、内面をハケメで調整する。口縁部から底部に向かって緩やかに湾曲するB類4696は、口径19.9cmを測り、外面をハケメ、内面をナデで調整する。C類4695は片口をもつ鉢で、口径18.6cmを測る。内外面を粗いナデで仕上げている。



第282図 包含層(4691~4703)

甕には、外反する口縁部と長胴ぎみの体部をもつA類4699~4709と、口縁部はわずかに外反し体側に把手をもつB類4710がある。A類は口径19.4~17.3cm、器高11~15cmの小形4699~4700、口径20.8cmの中形4704、口径28.4~32.9cmの大形4701・4705~4709に分けられる。また、小形のA類には角状の把手をもつ4703・4704もある。いずれも体部の外面は粗いタテハケで調整し、内面はヨコハケない

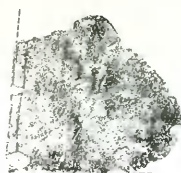




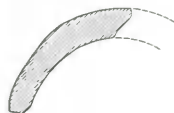
第283図 包含層(4704~4712)



C163



C164



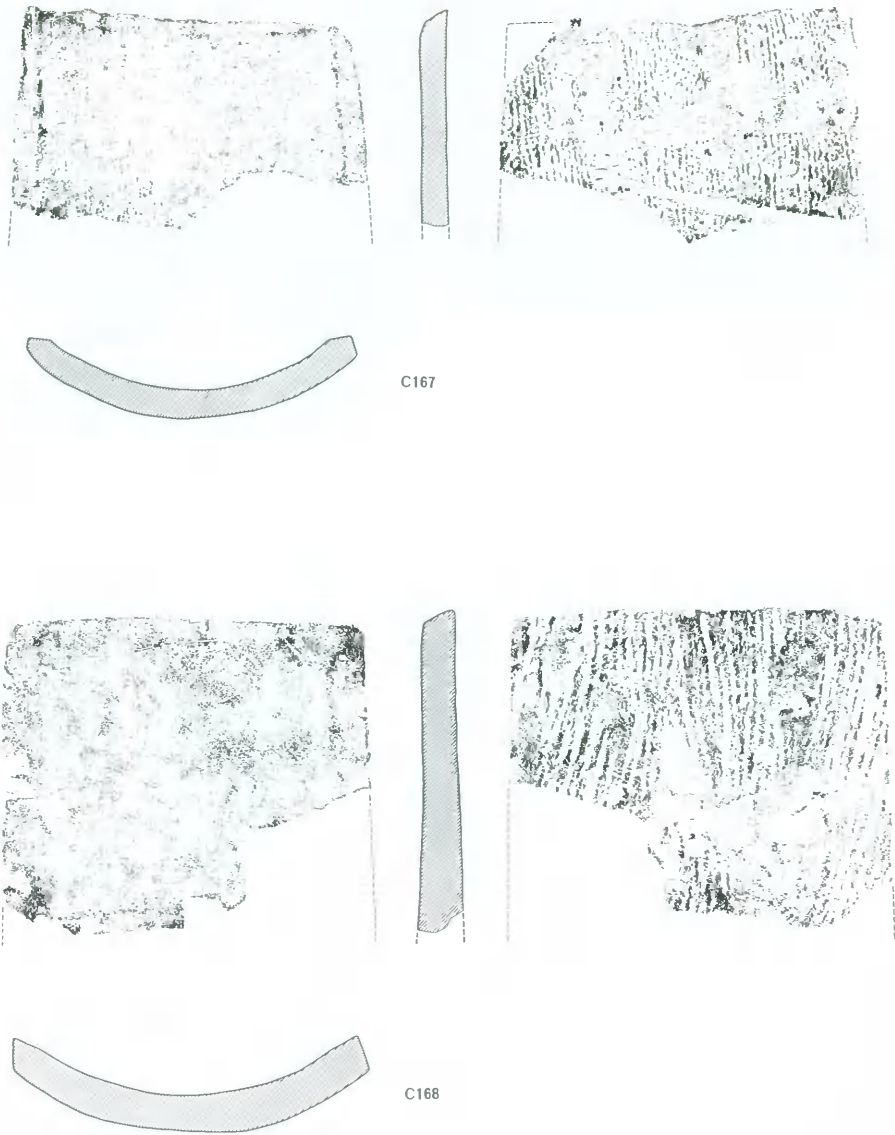
C165



C166



第284図 包含層(C163~166)



C167

C168

0 10cm

第285図 包含層(C167・168)



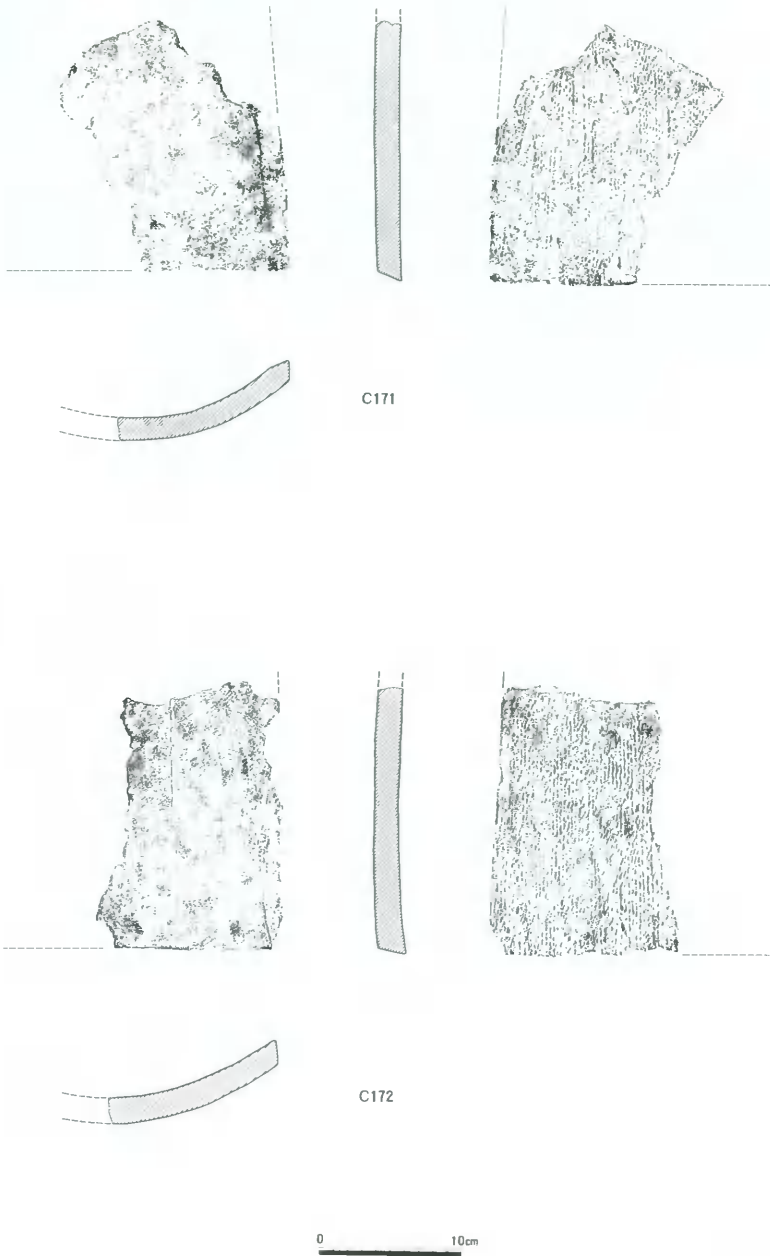
C169



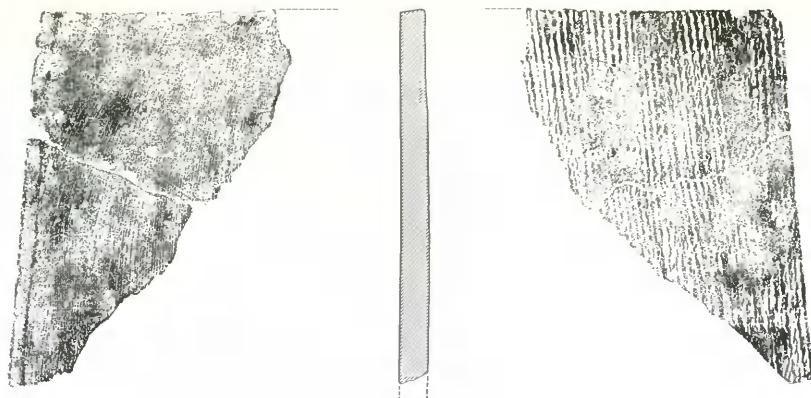
C170

0 10cm

第286図 包含層(C169・170)



第287図 包含層(C171・172)



C173



C174

0 10cm

第288図 包含層(C173・174)

しナデで仕上げる。

竈は図化できたものは少ないが、焚口の下端に設けられた突起や、側面に貼り付けられた把手の数からして8個体程度を確認できる。外面を粗いタテハケで調整したのち、焚口のまわりに庇を貼りつけている。側面の把手には4712のように瘤状をなすもののほか角状を呈するものもある。胎土は甕Aと同様に、多量の長石粒と金雲母を含む。

**土製品** (第284～288図、図版108)

瓦には、軒丸瓦のほか、丸瓦、平瓦がある。C163は軒丸瓦の瓦当の一部で、厚さは3.7cmあり、面径は15.3cmに復元される。平城宮の6225Aに類似するもので、県下では倉敷市柿梨堂遺跡や矢部遺跡、矢部南向遺跡、二子御堂窯跡などから出土するものと同一である。内区には隆線で表現された16葉の細弁蓮華文を飾り、二重の圏線で隔てられた周縁には線鋸歯文をめぐる。中房は失われているが、圏線で区画した中に1+8の大粒な蓮子を配していたものと推定される。

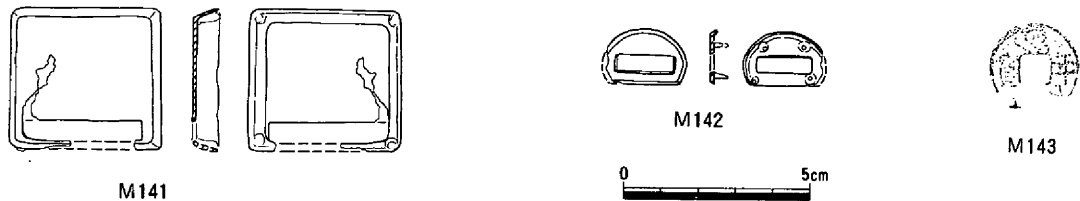
丸瓦は平瓦に比べて出土量が少なく、瓦全体の1割を占めるにすぎない。C164は、厚さ2.0cmを測り、幅は15cmほどに復元される。凸面はナデで調整し、側端を幅狭く面取りする。

平瓦は、その法量や製作手法によっていくつか分類される。C165は、凸面に格子目タタキを残すもので、側面の上下両端を面取りする。厚さは3.0cmあり、凹面に残る布目の糸は5cm四方に30本を数える。C167は狭端幅23.0cm、厚さ2.3cmを測る平瓦で、凹面の端を面取りする。凸面には、側辺に平行するように5cm幅に10条を測る縄目をとどめる。狭端幅24.0cmを測るC168は、厚さ3.2cmと厚手のつくりとなっている。側辺に平行して凸面に施された縄タタキは、5cm幅に8条と粗く、凹面に残る布目の糸も5cm四方に20～30本を数える。C169・170は、棒状工具に縄を巻き付けた原体を用いて叩き締めたもので、凸面に残る縄目は5cm幅に12条を測る。厚さは1.9～2.1cmで、側面の上端を面取りしている。C171・172は厚さ1.8cmとやや薄手のつくりで、凸面に残る縄目は5cm幅に20条と細かい。しかし、凹面に見られる布目の糸は5cm四方に10～25本で、やや粗い瓦布が用いられている。

**金属製品** (第289図、図版110・111)

M141・142は銅製の銚帯である。M141は、掘立柱建物-1に隣接した中・近世水田層から出土した巡方で、長さ4.1cm、幅3.8cmの方形を呈している。高さ0.7cm、厚さ0.2cmを測り、重量は13.8gある。上面の下端には、長さ3.1cm、幅0.5cmの長方形をなす孔があげられている。また裏面の四隅には脚金具が鑄だされている。M142は、長さ2.2cm、幅1.5cmの半円形をなす丸柄で、下端にそって長さ1.5cm、幅0.4cmの長方形をなす孔が開けられており、裏面には四つの脚金具が鑄だされている。

M143は、掘立柱建物-22～24周辺の中近世水田層から出土した萬年通寶(初鑄764年)である。下端を欠いているが、径2.4cm、厚さ0.1cmを測り、重量は3gほどに復元される。(亀山)



第289図 包含層(M141～143)

## 第5節 中・近世の遺構・遺物

### (1) 概要

中・近世の遺構には、掘立柱建物15棟、井戸5基、土壇27基、土壇墓6基、溝72条、水田がある。これらの遺構は北東から南西に広がる水田を挟んで調査区の東西にまとまっている。建物は、3×1間ないし2×1間が多く、2～3棟の建物が棟筋を揃えて並んでいる。ことに、P19区の北東では、建物と井戸、墓がまとまって存在し、屋敷としての空間が復元される。墓には、土葬と火葬の両者が見られるが、副葬品は土師器と刀子程度でいたって少ない。

遺物には、土師器や備前・魚住・常滑・唐津などの陶器、青磁・白磁・染付などの磁器、土錘などの土製品、椀や折敷などの木製品、釘や銭などの金属製品がある。これらの遺物は13世紀以降、18世紀に微高地全域が耕地化されるまで、専ら居住域として利用されていたことを示している。(亀山)

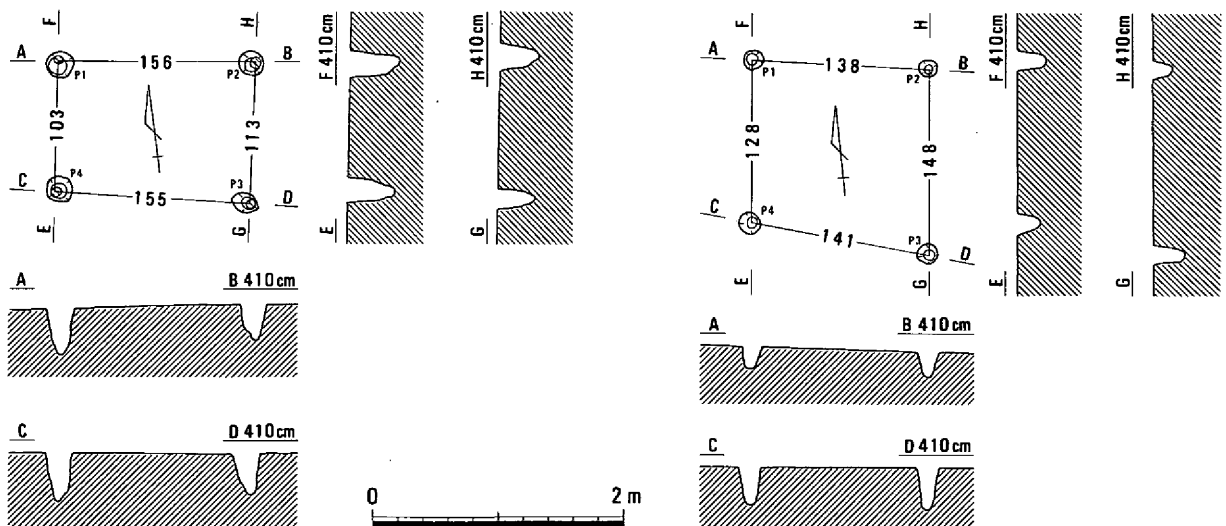
### (2) 掘立柱建物

#### 掘立柱建物-34 (第290図)

Q18区の北西、掘立柱建物-35の西側1.5mに位置する。N-45°-Wの方角で南北に走る溝-332を切った1×1間の小規模な掘立柱建物である。主軸を溝-332と直交する方向に持ち、東西に長く、桁行156cm、梁行113cm、面積1.7㎡を測る。柱穴掘り方は円形にて直径15~23cm、深さ18~34cm、埋土は灰色の強い黄茶灰色粘質土からなる。溝-332との同時性が推測される溝-335から亀山焼の小片が出土しており、本建物は溝を切っていることから中世以降の所産と考えられる。(高畑)

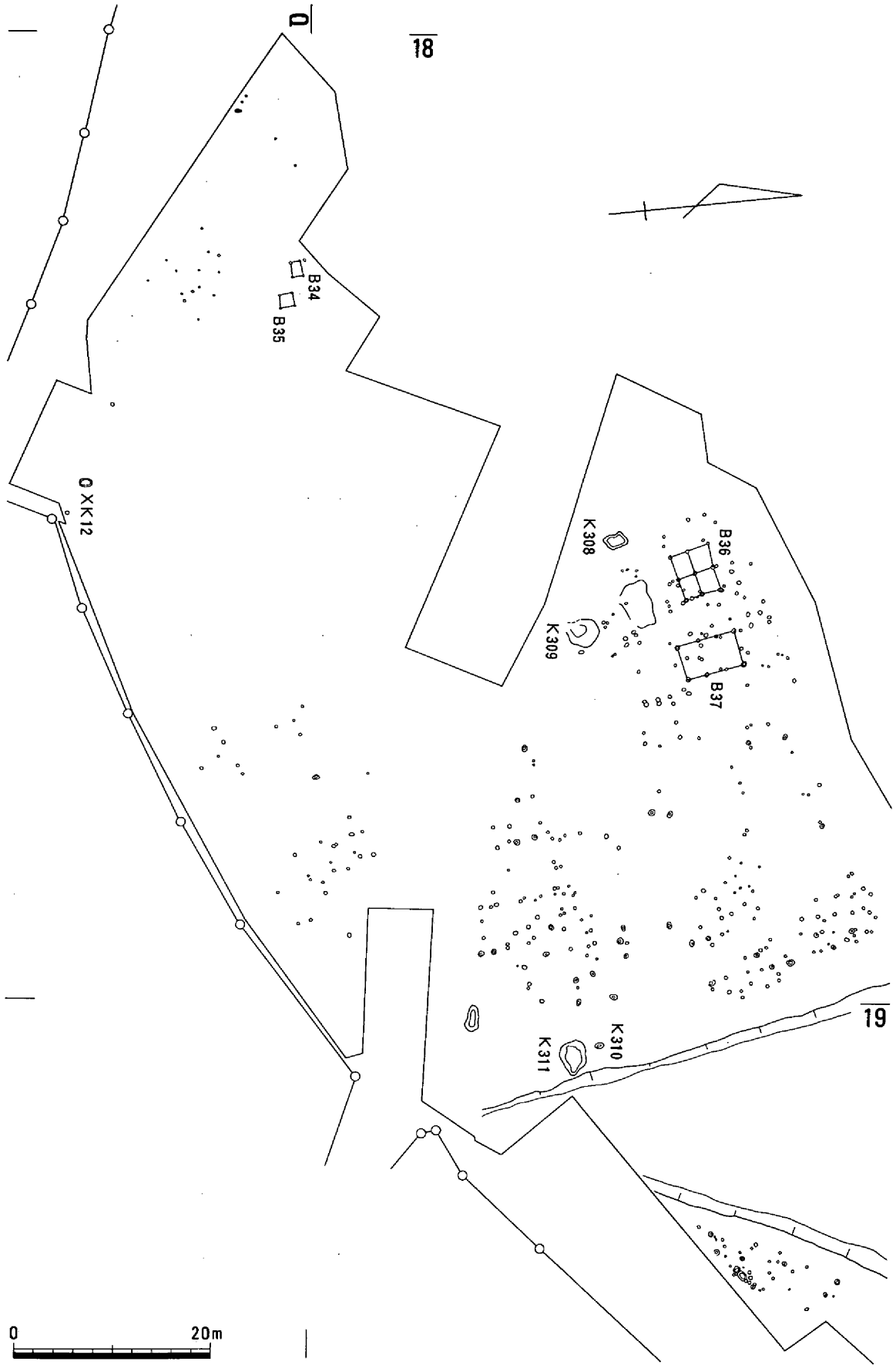
#### 掘立柱建物-35 (第290図、図版41)

Q18区の北西、掘立柱建物-34の東側1.5mに位置する。東側の柱穴が溝-333を切る格好で検出されており、埋土の色調、棟方位、規模等から掘立柱建物-34と同時に並存し、また、東西方向の溝-



第290図 掘立柱建物-34・35

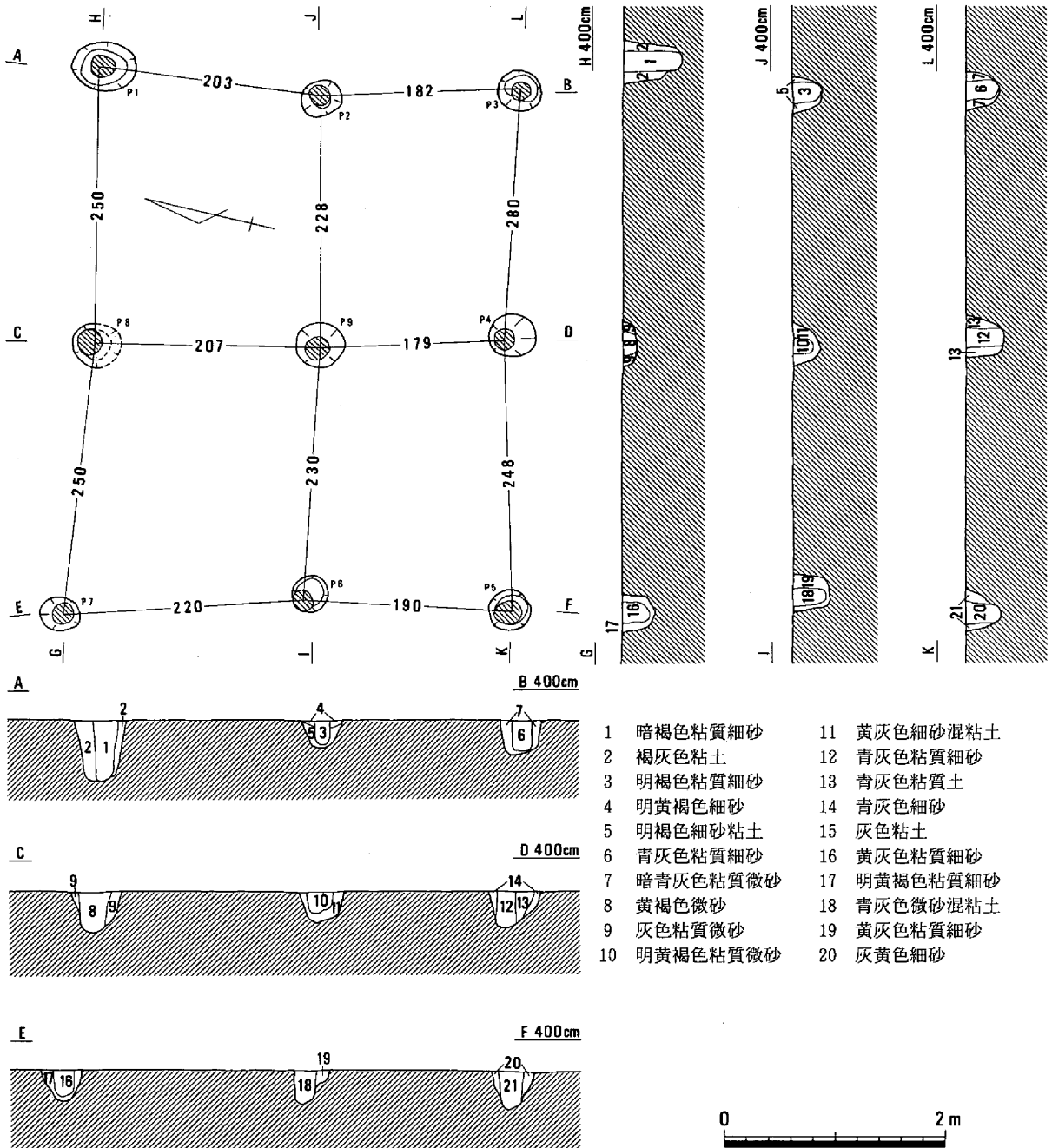




第291図 中屋調査区中世遺構全体図1 1/600



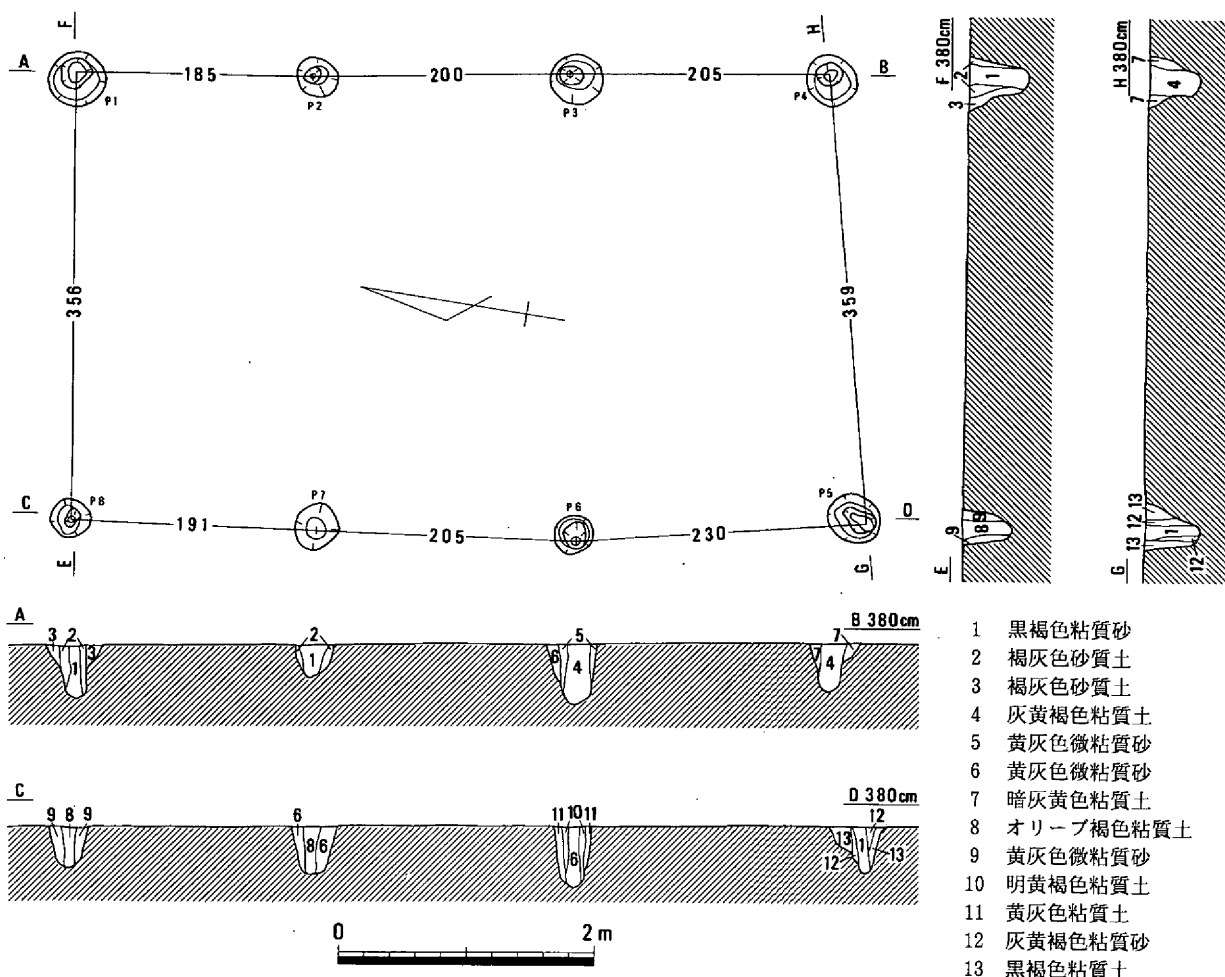
第292図 中屋調査区中世遺構全体図2 1/600



第293図 掘立柱建物-36

341~367とも有機的関連をもって機能した可能性の強い農作業用の物置小屋的な建物と考えておきたい。規模は1×1間にて東側柱穴間が少し長めの方角を呈する。桁行148cm、梁行141cm、面積1.8㎡を測る。柱穴の掘り方、深さ等においても掘立柱建物-34との大差は認められない。両建物の柱穴内からは弥・後・Ⅱの小土器片が出土しているが、建物の時期を決める遺物は皆無である。（高畑）  
掘立柱建物-36（第293図）

中屋調査区の南部にあり、旧微高地上に位置する。掘立柱建物-37の西にあり、並行している。建物は桁行2間、梁間2間の総柱で、やや長方形を呈する。柱痕跡も明瞭に検出されたが、柱穴の並びは少しずれている。大きさは、桁行505cm、梁間410cm、面積19.7㎡を測る。柱間は、桁行228~255cm、



第294図 掘立柱建物-37

梁間179~220cmである。柱穴の掘り方は円形を呈し、径35~60cm、深さ15~56cmである。柱痕跡によると柱の直径は20cm前後である。主軸の方向はN-76°-Eを示している。柱穴の埋土中からは、早島式の椀と土師器の小皿・鍋の破片が出土している。時期は出土遺物の形状から鎌倉時代に比定される。

(正岡)

掘立柱建物-37 (第294図)

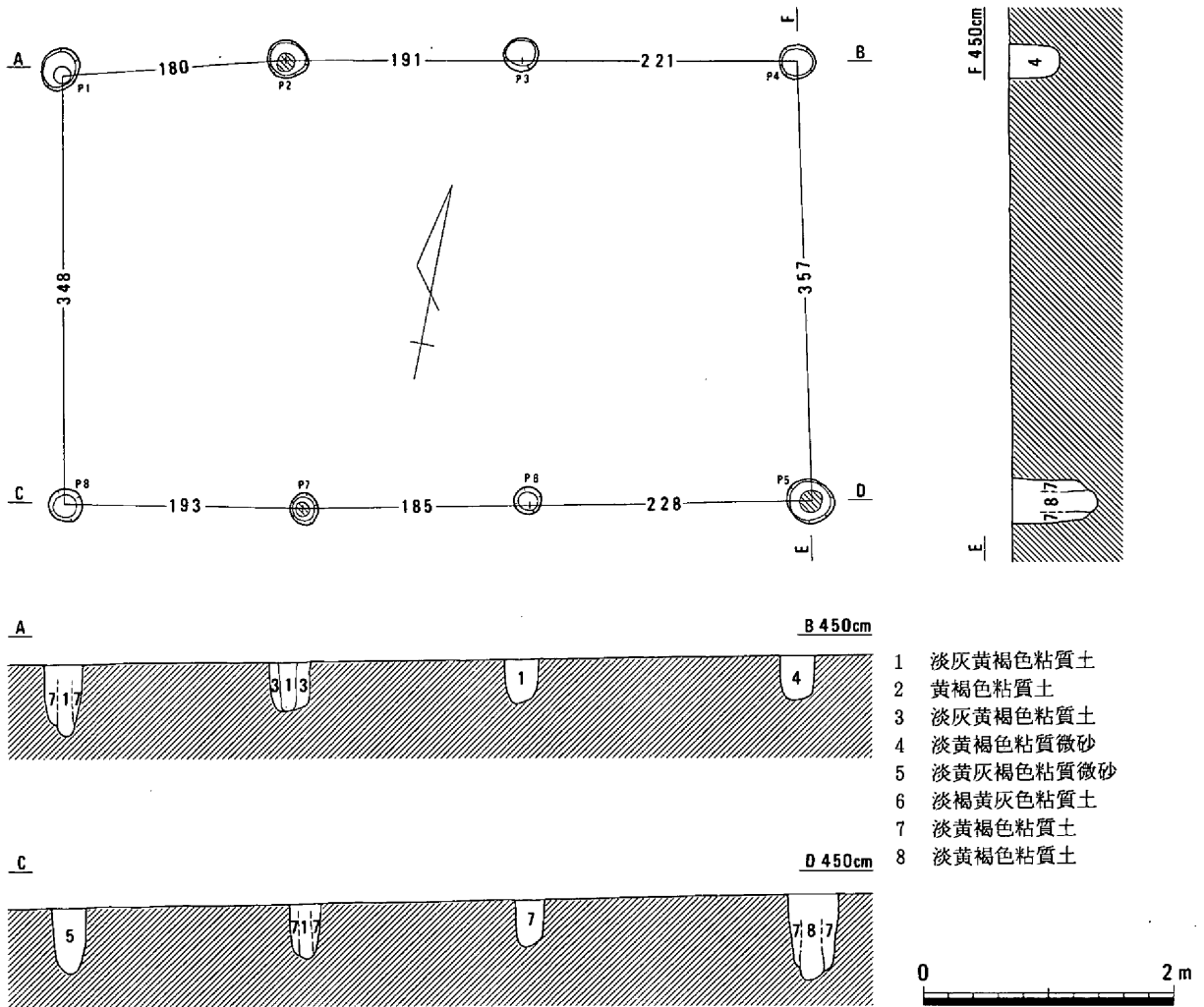
中屋調査区の南部にあり、掘立柱建物-36の東側に位置し、並行している。建物は、桁行3間、梁間1間で、長方形を呈する。柱痕跡も明瞭に検出されたが、柱穴の並びは少しずれている。大きさは、桁行626cm、梁間359cm、面積22.6㎡を測る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径31~44cm、深さ25~48cmである。柱痕跡によると、柱の直径は15~20cmである。主軸の方向はN-15°-Wを示している。柱穴の埋土中からは、早島式の椀と土師器の小皿・鍋の破片が出土している。掘立柱建物-36とは位置関係から判断して、同時に存在した可能性が高い。

時期は出土遺物の形状から鎌倉時代に比定される。

(正岡)

掘立柱建物-38 (第295図)

桁行3間、梁間1間の東西方向の側柱建物である。東に近接して存在する掘立柱建物-39と棟方向はほぼ一致する。本来存在したはずの棟持ち柱の掘り方は検出されず、礎石が置かれていた可能性もある。桁行はほぼ20尺を測り、柱間距離にはばらつきがあるものの北側・南側の桁行の数値は一致する。柱穴は径約20~40cmを測る円形を呈する掘り方を示す。一部の柱穴には柱痕跡が明瞭に看取され、



第295図 掘立柱建物-38

底面でその部分は窪んでいる。柱穴からの出土遺物はないが、埋積土等から中世後期に比定される掘立柱建物と考えられる。(岡田)

掘立柱建物-39 (第296図)

掘立柱建物-38のすぐ東に位置する桁行3間、梁間1間のほぼ東西方向の側柱建物である。桁行は23尺前後を測り、掘立柱建物-39より長い。10尺強の梁間には棟持柱の掘り方は検出されず、掘立柱建物-38と同様礎石が用いられた可能性がある。柱通りはきわめて不揃いで直線的でない。

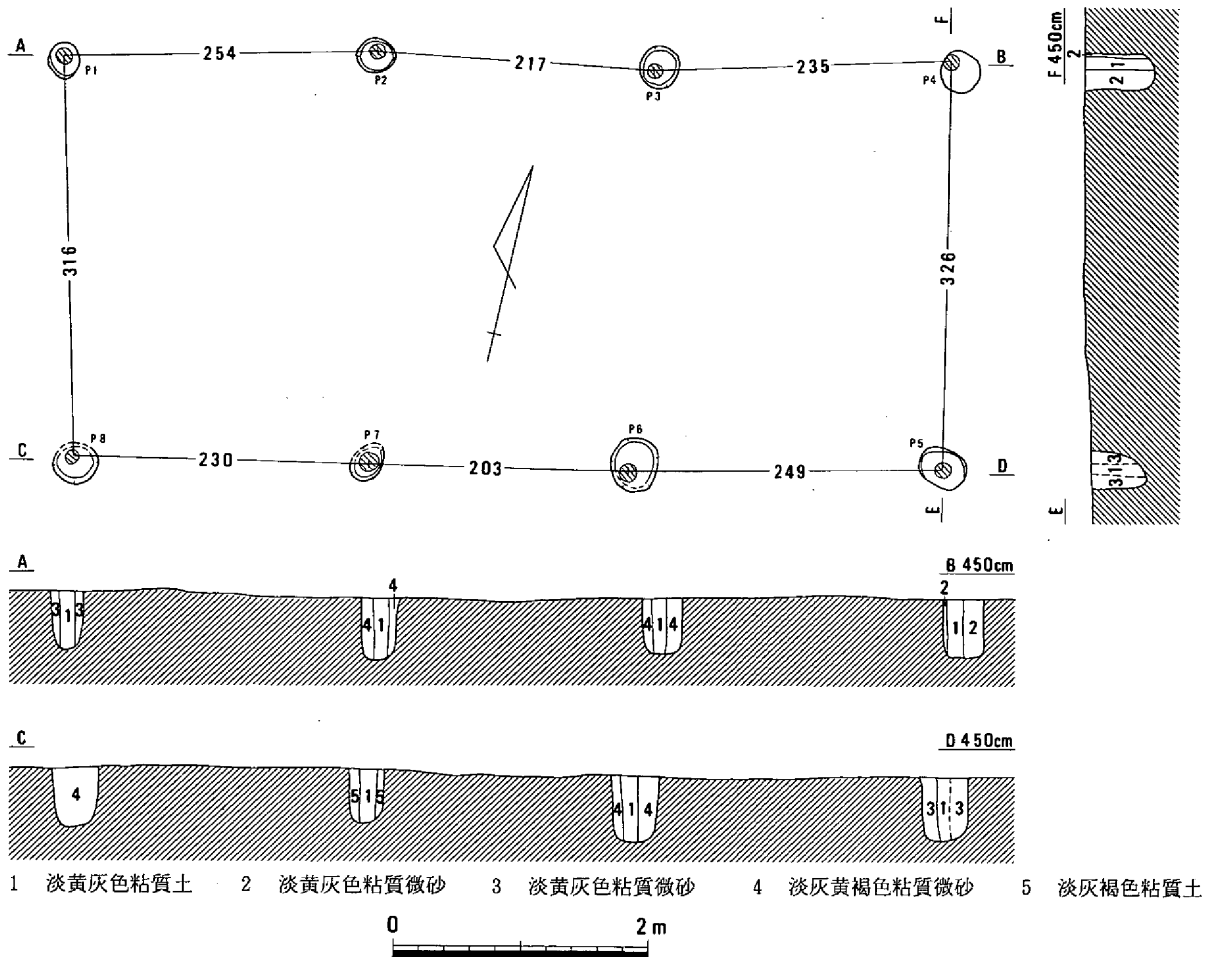
柱穴には円形の柱痕跡が明瞭に残り、径約10cm前後を測る。柱掘り方底面は丸みをもっておさまり、深さはまちまちである。

出土遺物は皆無であるが、掘立柱建物-38と同様中世後期に比定される掘立柱建物と考えられ、共存して並び建っていた可能性が高い。(岡田)

掘立柱建物-40 (第297図)

掘立柱建物-39のすぐ東側で検出された南北方向の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の小規模な建物で棟方向はやや西振する。

柱間は、7.5~8尺等間を基本としている。不揃いな柱掘り方の半数には柱痕跡が観察される。規



第296図 掘立柱建物-39

模から推察すると居住のための家屋というよりは、物置や家畜などの飼育が行なわれた雑舎とみるべきであろう。時期的には先の掘立柱建物-38・39と共存し、それらと屋敷地を形成していた可能性がきわめて高いといえる。  
(岡田)

掘立柱建物-41 (第297図)

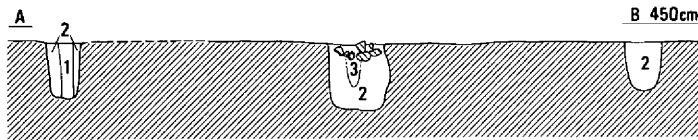
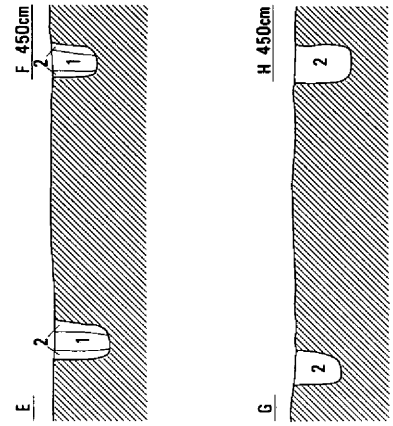
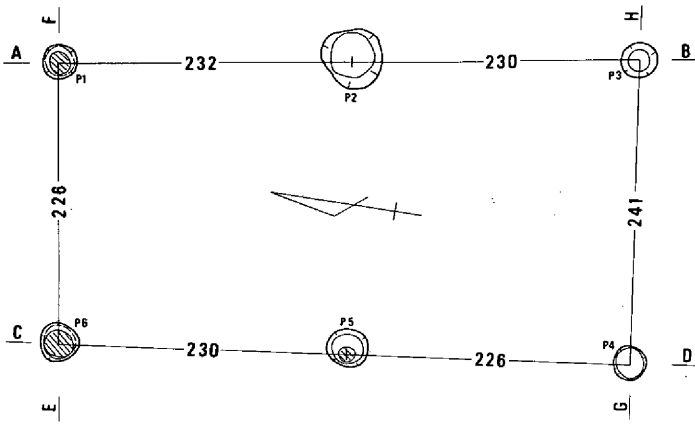
Q18区の東辺南隅近くに位置する2間×1間の北東桁行が短くなっている掘立柱建物である。建物の桁行は北東辺の2間で364cm、南西辺で399cm、梁間は212cmと193cmを測る歪な長方形建物であり、棟方向はN-45°-W。柱穴の掘り方は円形を呈し、径35~40cm、検出面からの深さは約25~30cmを測る。柱穴の半数からは柱痕跡が確認することができる。

この建物に伴う遺物は皆無であるが、遺構の検出された層位から推定すれば、中世における建物といえよう。  
(二宮)

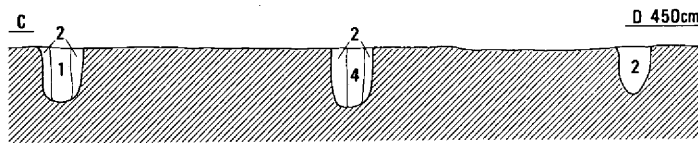
掘立柱建物-42 (第298図)

Q19区の西辺南西隅近くに位置し、掘立柱建物-41の南東側にあり、2棟の建物は一直線になっている。建物の規模も同様に2間×1間と同じくしているが、桁行、梁間間がわずかに異なっていることと、梁間間の短い側が左右対になっている点である。

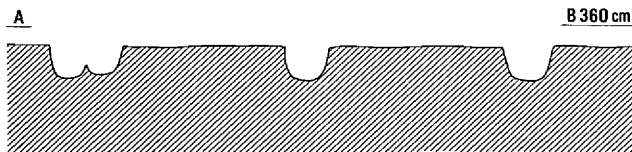
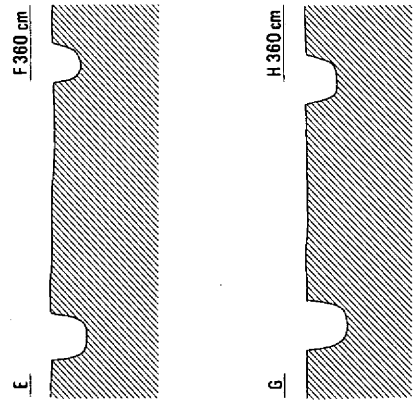
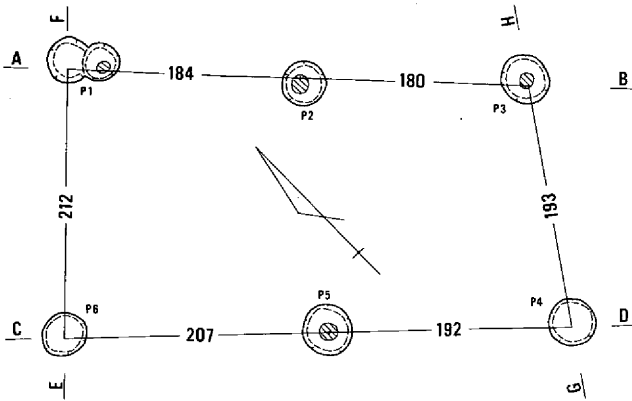
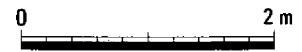
桁行は北東辺の2間で313cm、南西辺では308cm、梁間は215cm、249cmを測る。正方形に近い建物であり、棟方向はN-48°-W。柱穴は円形の掘り方を呈し径約25~30cm、深さは約15~25cm。柱痕跡



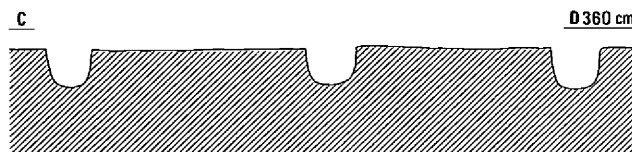
- 1 淡黄灰色粘質土
- 2 淡黄褐色粘質土
- 3 淡灰色粘質土
- 4 淡黄灰色粘質土(マンガン斑含む)



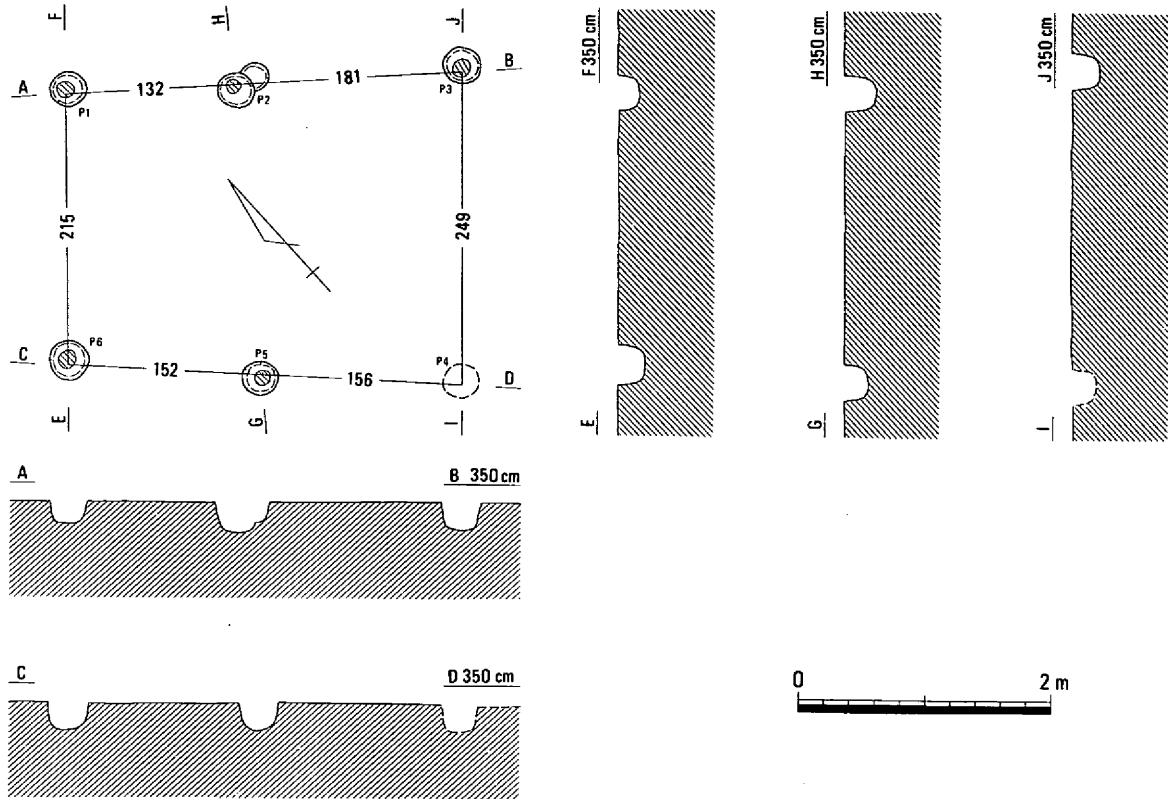
掘立柱建物-40



掘立柱建物-41



第297図 掘立柱建物-40・41



第298図 掘立柱建物-42

は約半数で認められている。時期は掘立柱建物-41と同時存在の可能性のある建物である。(二宮)

掘立柱建物-43 (第299図、図版41)

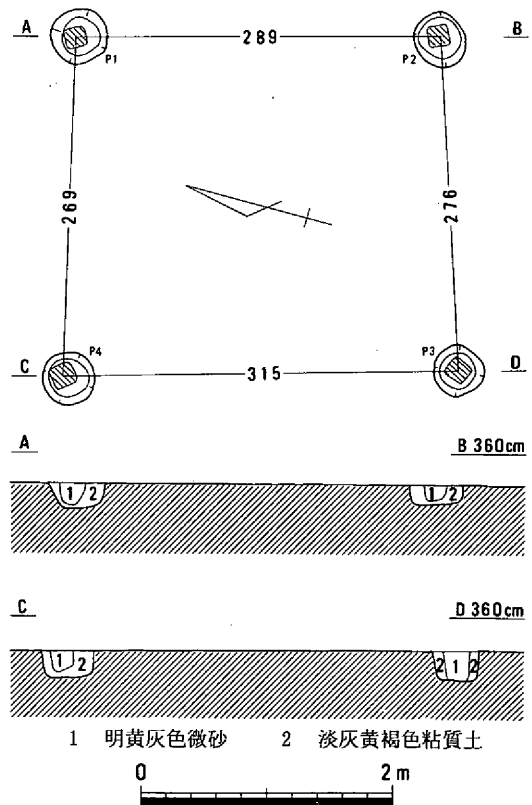
掘立柱建物-40の南東方向約30mで検出されたややびつな1×1間の小規模な掘立柱建物である。

南北にやや長い掘立柱建物であるが、棟方向はやや西に振る。

柱掘り方はほぼ円形でおおよそ40cm前後を測る。4本の柱掘り方すべてに一边約15cmの角柱の痕跡が明瞭に観察される点が興味深い。付近に建物が存在せず、周辺で発見されている複数の建物群とは離れている点が特筆されるが、この点で特別な性格の掘立柱建物であるといえる可能性もある。(岡田)

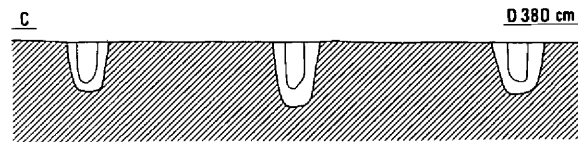
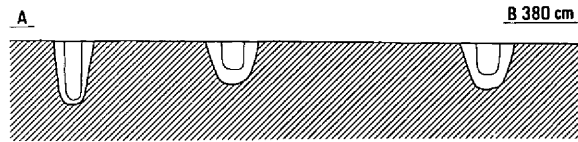
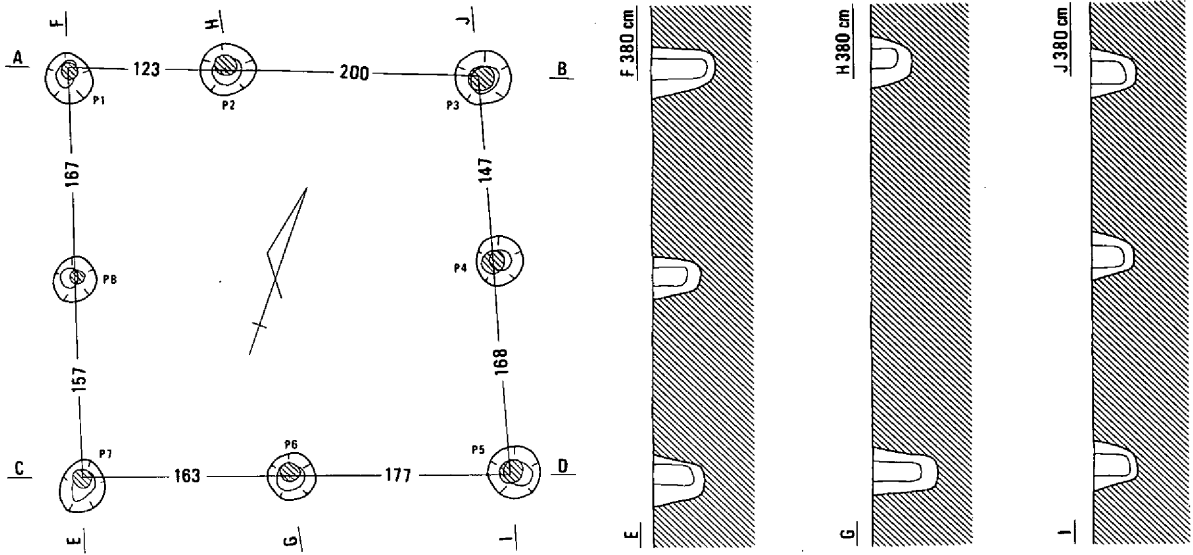
掘立柱建物-44 (第300図)

P19区中央部やや北よりに位置して検出された2間×2間の掘立柱建物である。建物は北辺桁行が323cm、南辺で340cm、梁間は東辺315cm、西辺324cmを測り、平面形では方形に近い建物で、棟方向はN-72°-Eを示している。柱穴の掘り方は円形を

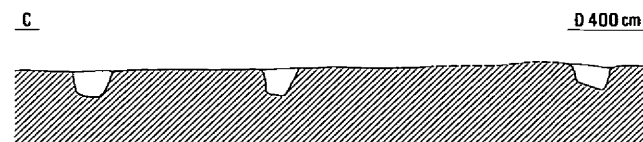
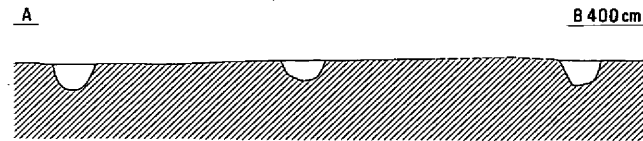
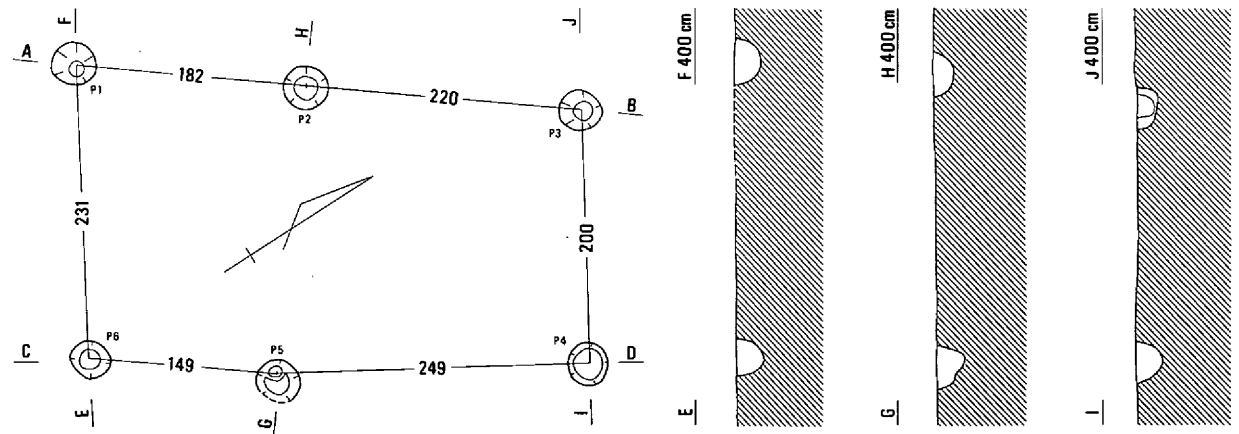


第299図 掘立柱建物-43





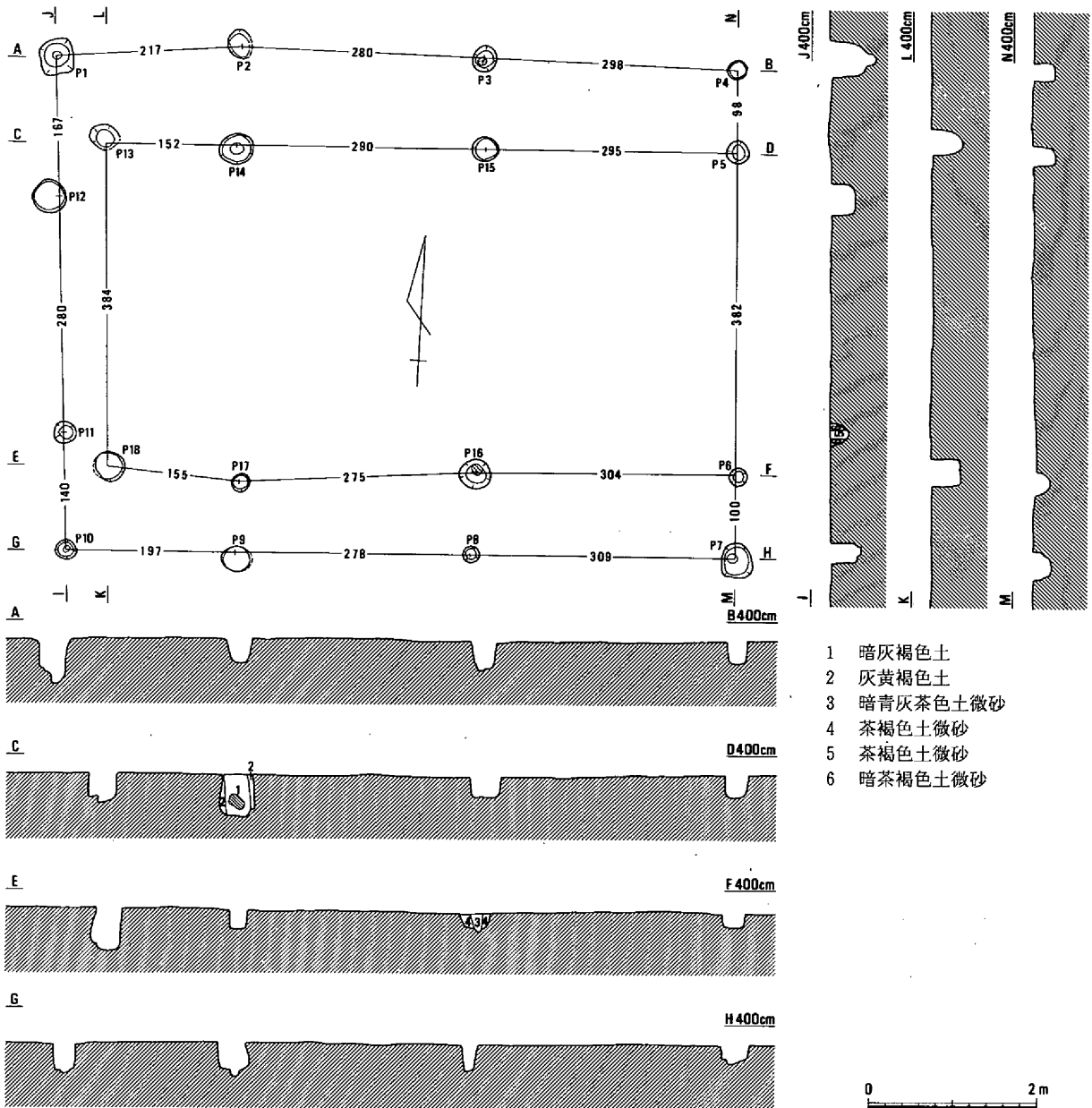
掘立柱建物-44



掘立柱建物-45



第300図 掘立柱建物-44・45



第301図 掘立柱建物-46

呈し、径約35~45cm、検出面からの深さは約15~20cmを測り、柱痕跡も良く残存している。

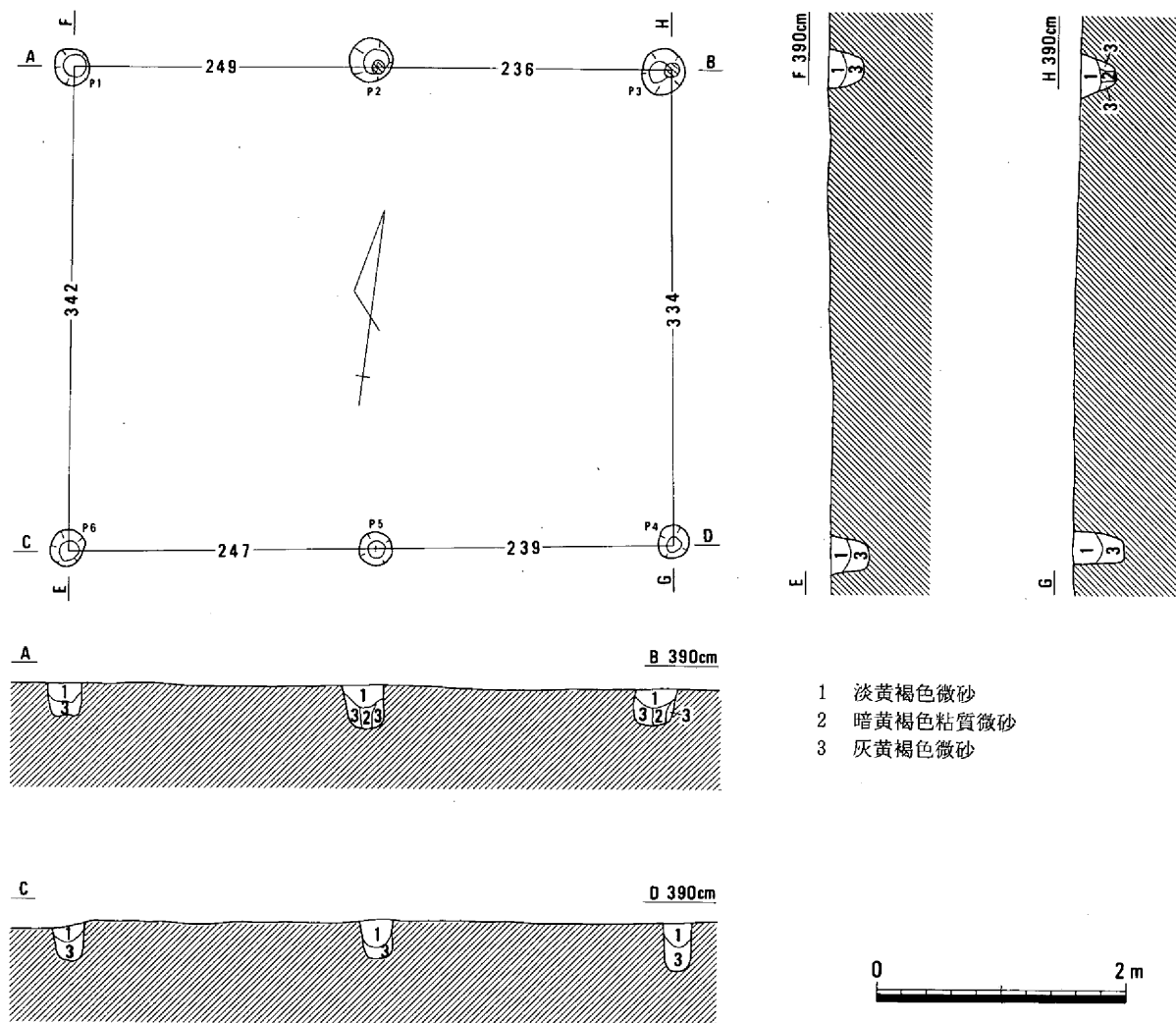
この建物が検出確認された遺構面の時期は中世に相当する。したがって中世に建っていたと言える建物である。

(二宮)

掘立柱建物-45 (第300図)

P19区中央やや北辺で南は調査区境の所に位置し、掘立柱建物-44の南東約15mで検出された2間×1間の掘立柱建物である。

建物は北西辺桁行402cm、南東辺398cm、梁間は南西辺が231cm、北東辺で200cmを測る北梁間の狭い歪な長方形建物である。棟方向はN-36°-Eであり、この方向の建物は調査区内では1棟のみであった。柱穴の掘り方は円形を呈し、径は30~35cm、深さ15~25cmを測る。柱痕跡は明瞭には認めら



第302図 掘立柱建物-47

れなかった。

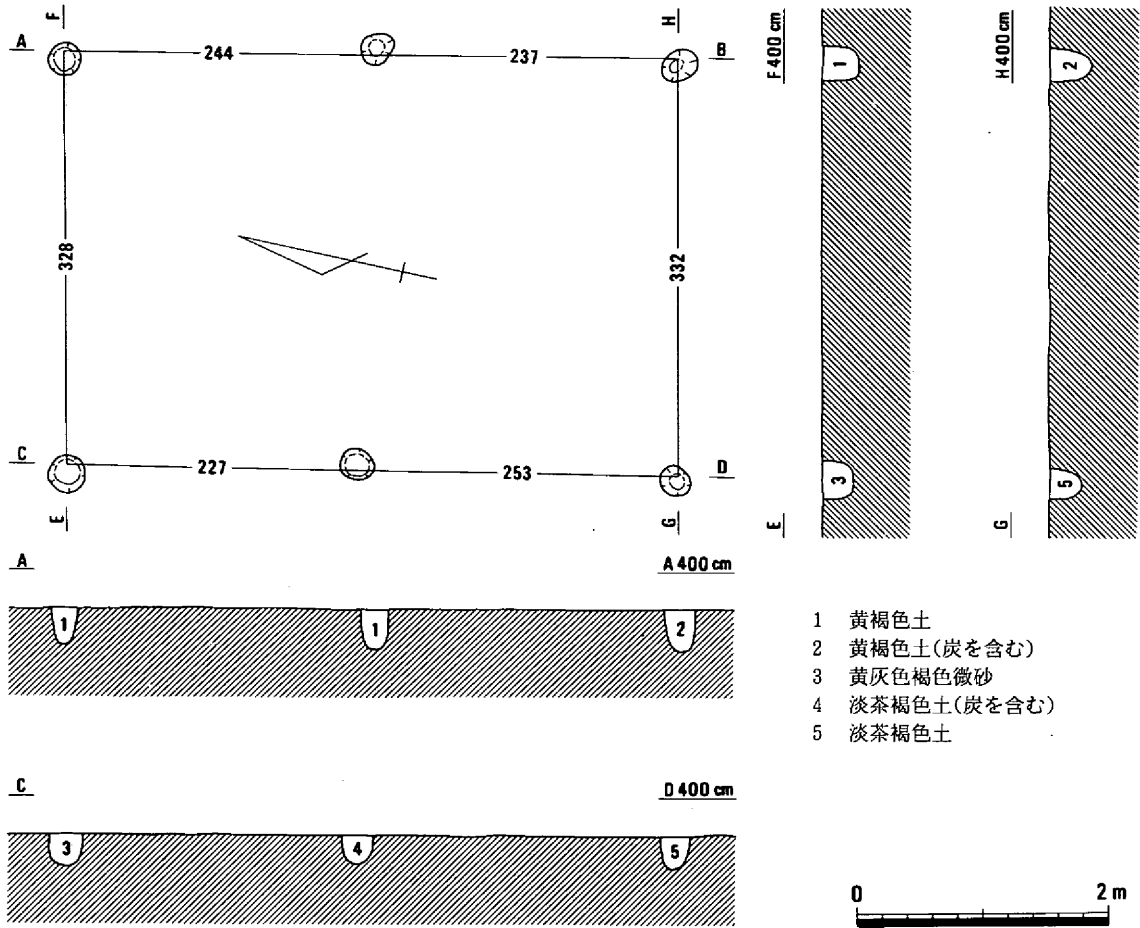
時期は検出面から中世に属すると考えられる。

(二宮)

掘立柱建物-46 (第301図、図版41)

P19区の北端中央部に検出した。桁行3間、梁行3間の掘立柱建物である。建物の主軸方向はN-87°-Eとほぼ東西方向を向くものである。建物は桁行3間、梁行1間の母屋の北、西、南の三方向に幅の狭い庇状の構造物が付くものである。この部分は軒の下に差し出された小屋根、もしくはそれを囲んだ小さな屋の様なものと考えられる。その幅は50~100cmを測るものである。柱穴の配列を見ると、東壁側は四本の柱が直列する。柱間の距離は中央が382cm、北側が98cm、南側が100cmを測る。東西方向に並ぶ柱列を見ると、P3、P15、P16、P8とP2、P14、P17、P9の並びが南北方向に直列するもので、建物としての企画性を示している。柱間の距離は桁行304~152cm、梁行384~140cmを測り、東側が広く西側が狭く造られている。柱穴の平面形は円形を呈するもので、直径43~20cm、検出面からの深さ54~15cmを測る。建物の床面積は46.1㎡を測る。時期は出土遺物が少ないため明確ではないが、検出した層位や周囲の状況から中世に属するものと考えられる。

(井上)



- 1 黄褐色土
- 2 黄褐色土(炭を含む)
- 3 黄灰色褐色微砂
- 4 淡茶褐色土(炭を含む)
- 5 淡茶褐色土

第303図 掘立柱建物-48

掘立柱建物-47 (第302図)

P19区の南西に位置する。規模は2×1間であり、棟方向はN-83°-Eを示し、四方位を意識していると思われる。柱間寸法は桁236~247cm、梁334~342cmであり、桁行は487cm、梁間342cmを測る。面積は19.0㎡である。

柱穴の掘り方は円形であり、規模は長径36cm、短径26cm、深さ26~38cmを測る。またP2、P3の柱穴埋土では柱痕跡が確認された。

出土遺物は認められなかったが、遺構検出時の周辺の状況からみて時期は中世のものであると思われる。(澤山)

掘立柱建物-48 (第303図)

O19区中央部やや南よりに位置し、掘立柱建物-47とは距離約3.5mで、主軸方向を直角させ、南辺を揃えている。

平面形は2×1間の長方形を呈し、主軸方向をN-10°-Wにおいて、桁行481cm、梁間332cmで、面積は15.9㎡である。柱間は桁行227~254cm、梁間328~332cmを測り、柱掘り方の平面形は円形ないし楕円形で、径26~30cm、深さ22~34cmである。埋土は一様ではないが、いずれにも柱痕跡は確認できない。

図示できる遺物の出土はないが、掘り方埋土等から、中世の遺構と考えられる。(光永)

(3) 井戸

井戸-3 (第304図、図版42)

径約180cmを測るほぼ円形の掘り方を示す井戸である。深さは約120cmを測り、井底は径約40cmほどのいびつな円形を呈する。

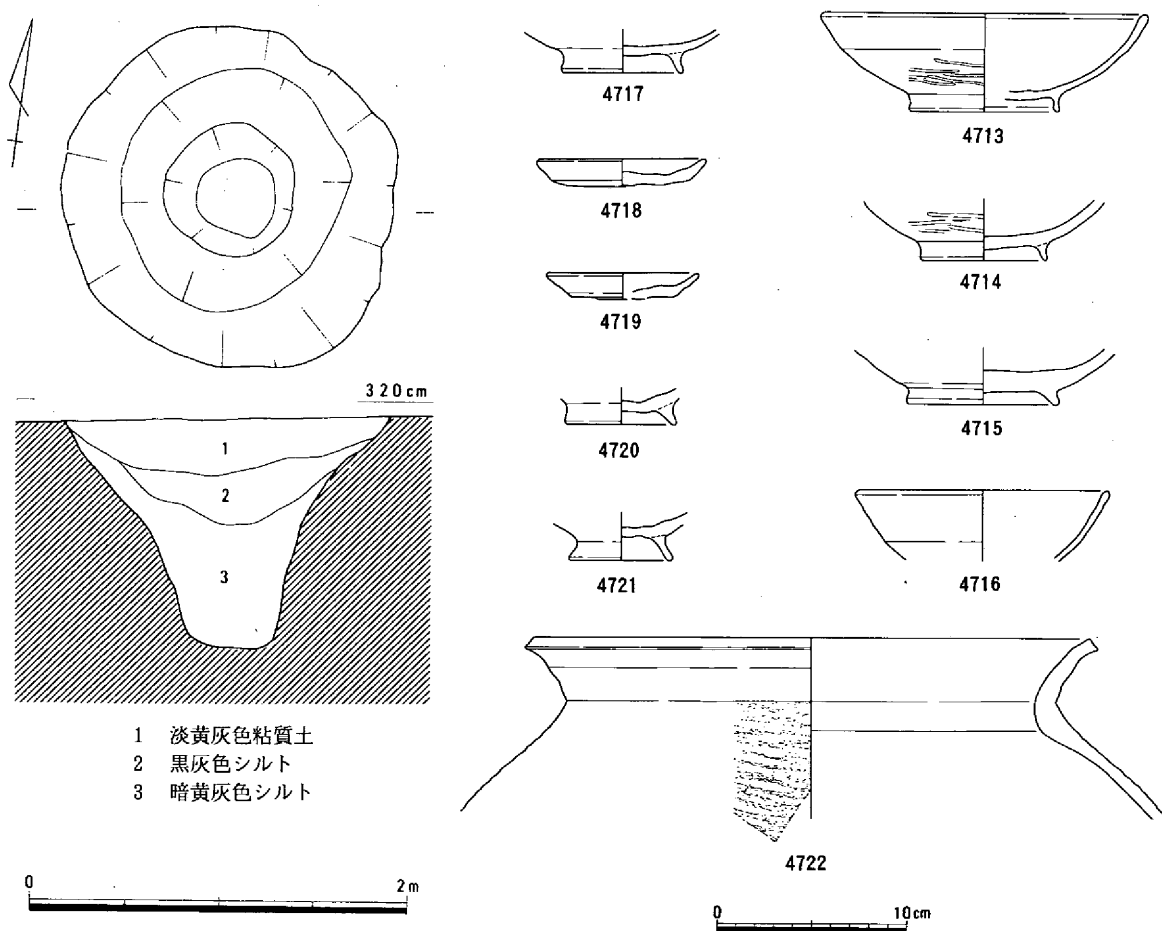
井側部材はまったく出土していないので、単なる素掘りの井戸の可能性もある。

出土遺物には、土師器の小皿・碗が大半を占める。4713・4714などは、早島式土器で体部下半にヘラミガキの調整が観察される。4722は亀山焼の甕で体部に格子目のタタキが施される。口縁部は比較的直立し、鎌倉時代前半に比定される特徴が観察される。(岡田)

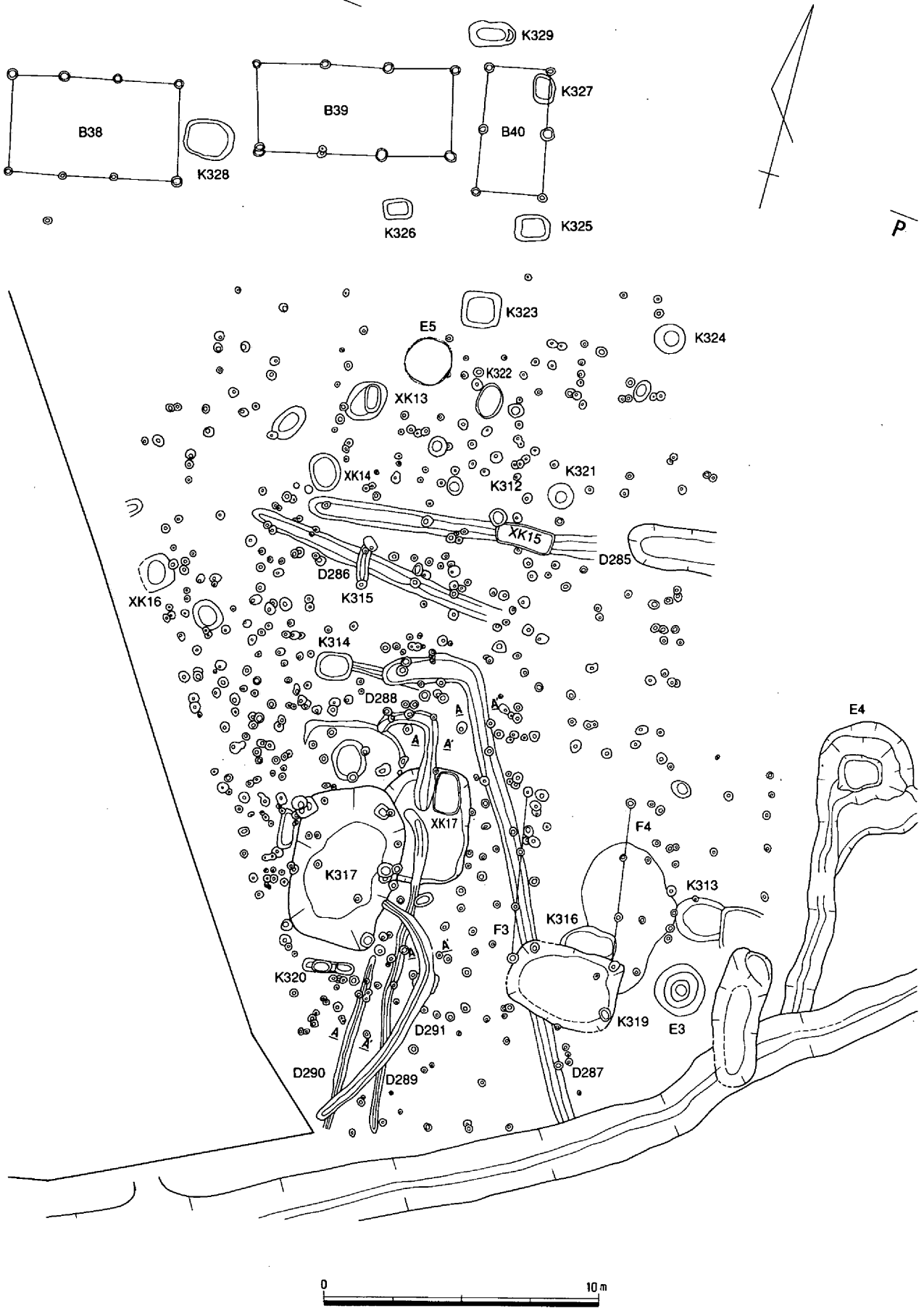
井戸-4 (第306図、図版42)

井戸-3の北約5mに位置する。径約3m以上の掘り方を持ち、井側にあたる部分では1.5m前後の隅丸方形を呈している。南東隅から東方、および南側に向けて大きく弧を描く溝が検出されているが、埋積土からこの井戸と共存していた可能性が高い。おそらく、農業用水などの用途が考えられ、溝は井戸からの配水機能があったものと推察される。

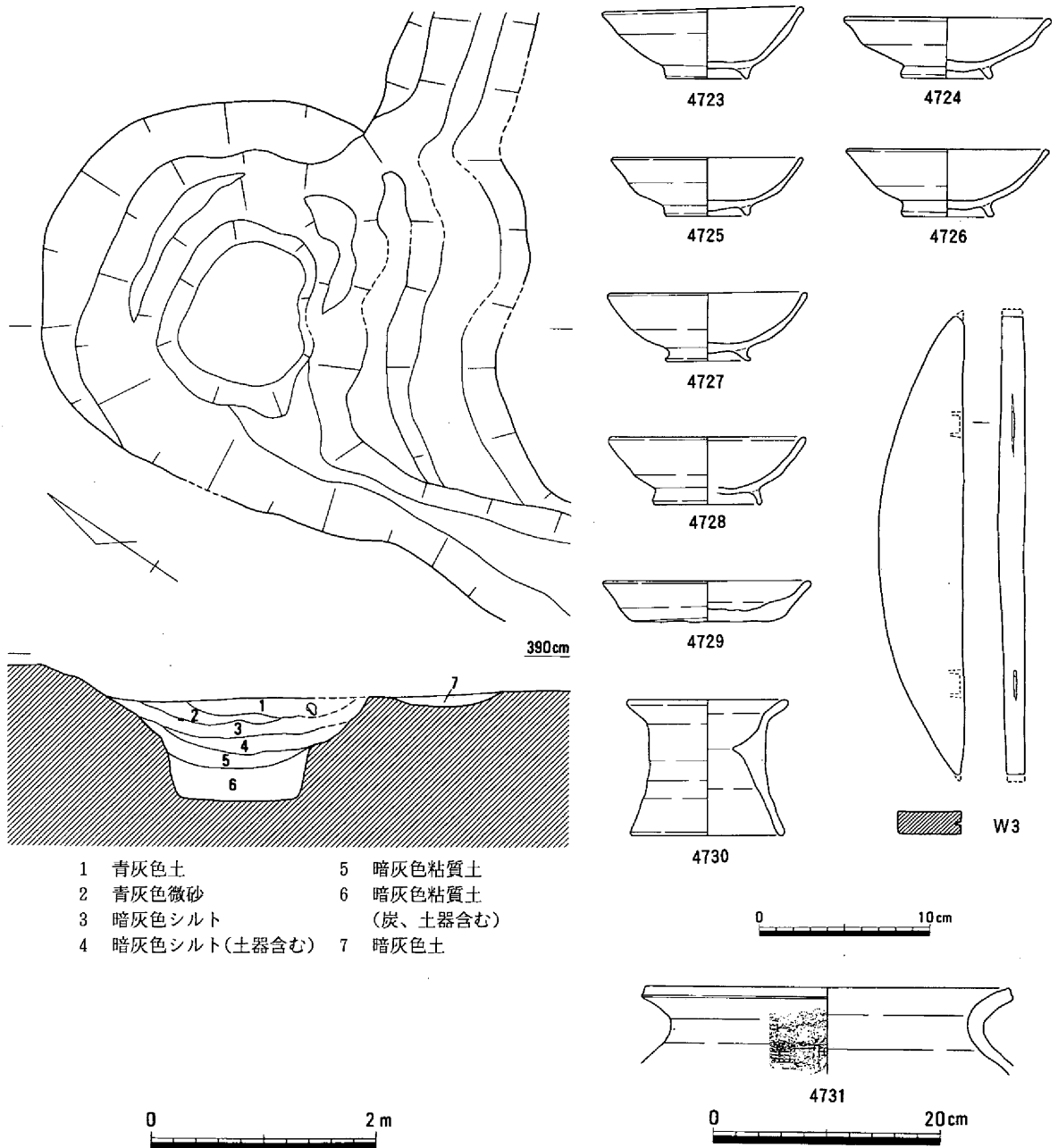
出土遺物には、土師器のほか4731の亀山焼甕がみられる。土師器のなかでも4723~4728は早島式土器で、井戸-3出土品より時期的に降る鎌倉後期に比定される。W3は曲物の底板の一部分である。径30cmを越える大形曲物で、底板は何枚かを繋ぎ合わせたため目隠しで継いだ痕跡がある。(岡田)



第304図 井戸-3 (4713~4722)



第305図 中屋調査区中世遺構配置図 1 / 200



- |                |          |
|----------------|----------|
| 1 青灰色土         | 5 暗灰色粘質土 |
| 2 青灰色微砂        | 6 暗灰色粘質土 |
| 3 暗灰色シルト       | (炭、土器含む) |
| 4 暗灰色シルト(土器含む) | 7 暗灰色土   |

第306図 井戸-4 (4723~4731・W3)

井戸-5 (第307図、図版42)

掘立柱建物-39の南約4 mに位置する。掘り方はほぼ円形を呈し、約180 cmを測る。深さは、もっとも深いところで120 cmあまりと比較的浅い。掘り方の法面は袋状に膨らむ部分があり、そこから井底に向けて急激にすぼむ。井側はやや東よりで検出された石積みによるもので、大きな石を数個据えた後、小児頭大の石を粗雑に積み上げて形づくっている。掘り下げ時、その隙間からタカサブローの種子が少量出土した。これは水田雑草の一種で、近くに水田が存在したことを示唆している(元大阪市立大学教授川川昭平先生のご教示を得た)。出土遺物には2点の木製品がある。W6は折敷で、ヒノキと思われる薄板で表裏に墨書が認められ、走る裸馬2頭とやや不鮮明な仮名文字が看取される。おそらく「絵馬」に転用された可能性が高いといえる。文字の釈読については、本報告書巻末に志田原先生に頂いた玉稿を収載したので合わせてご高覧頂きたい。時期的には、周囲の掘立柱建物と同時期

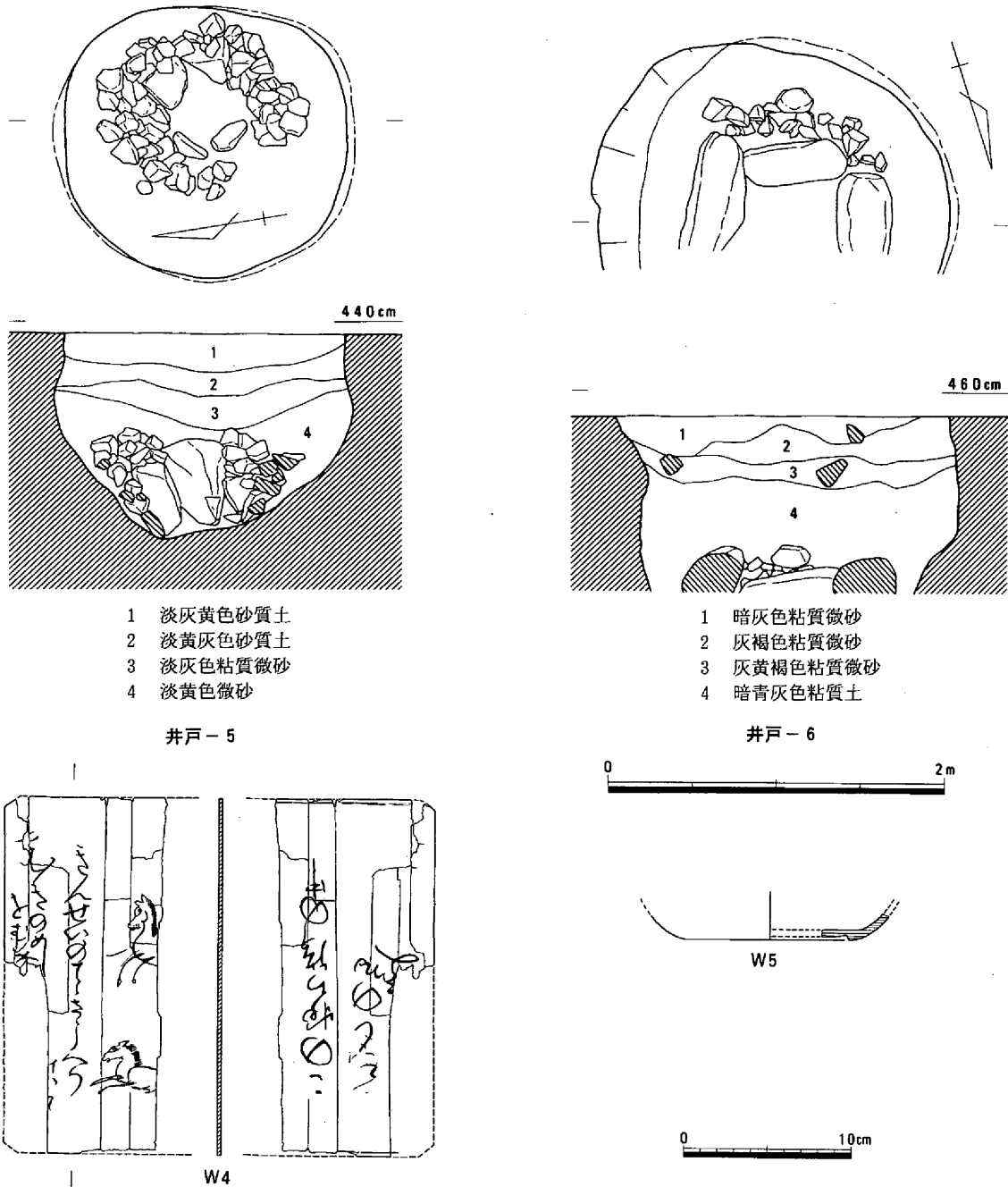
の中世後期に比定されよう。

(岡田)

井戸-6 (第307図)

018区の西側中央、井戸-5の北西66mに位置している。調査区の北にかかって検出したため全容を知り得ないが、その掘り方は径211cmの円形をなすものと推定される。現状で高さ108cmある壁面はほぼ垂直に立ち上がるものの、所々に崩落による変形が認められる。底面は、湧水が激しく確認できなかったが、深さ79cmの位置から一辺60cmほどの方形に復元される石組みを検出した。これは、長さ80~60cm、幅35~23cmの長手の石材を組み合わせたもので、湧水の見られる砂層の上に直接据えられているようである。掘り方の埋土には土塊や石を含んでおり、人為的に埋め戻された様子が窺われる。ここからは伊万里の染付が出土しており、18世紀まで機能していたものと思われる。

(亀山)



第307図 井戸-5 (W4・5)・6



(4) 土壌

土壌-307 (第308図)

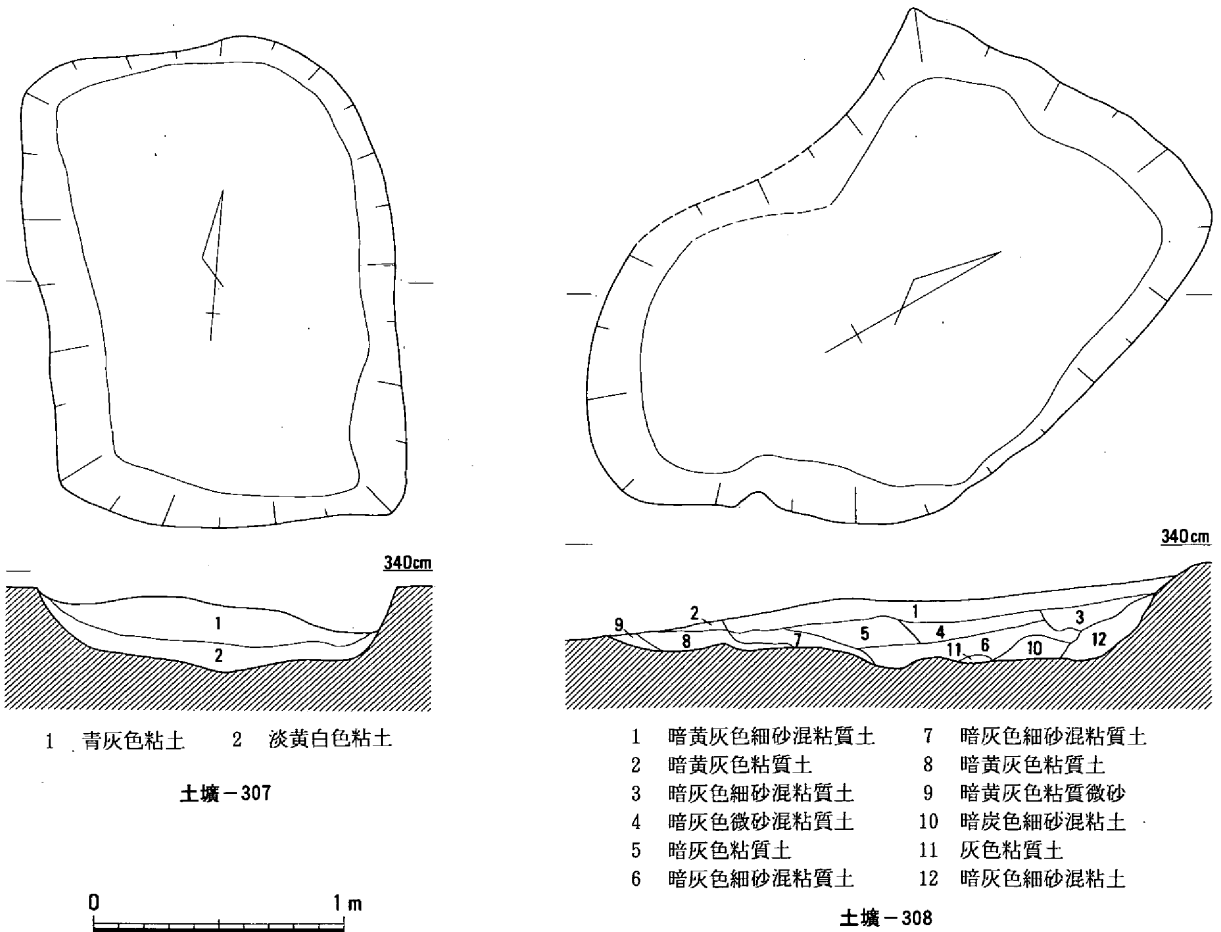
中屋調査区の南部にあり、幹線水路である溝-70から微高地沿いに南へ分かれる溝-295の中で検出された土壌である。平面形は長方形を呈し、長径196cm、短径142cm、深さ34cmを測る。埋土中から早鳥式の椀、土師器の小皿・鉢、備前焼と亀山焼の甕などの破片が出土していて、時期は鎌倉時代に比定される。(正岡)

土壌-308 (第308図)

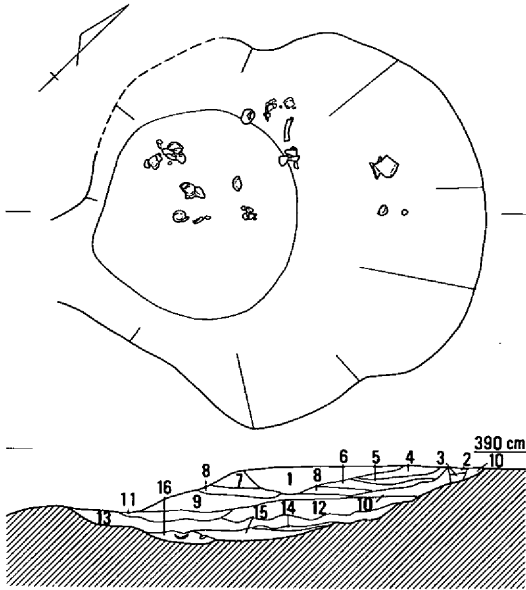
中屋調査区の南部にあり、掘立柱建物-36の南西に位置する。平面形は不整形を呈し、長径260cm、短径203cm、深さ43cm、底面の標高291cmを測る。埋土中から明瞭な遺物は出土していないが、埋土の状況から、時期は中世に比定される。(正岡)

土壌-309 (第309図)

中屋調査区の南部にあり、掘立柱建物-36の南に位置する。平面形は不整形を呈し、長径157cm、短径160cm、深さ31cm、底面の標高306cmを測る。浅い皿状を呈している。埋土中からは多量の遺物を出土している。出土遺物には、早鳥式の椀122個、土師器の小皿92個のほか、鍋の破片や砥石も出土している。図化した遺物では、小皿4732~4740・杯4741~4745、高台付の椀4746~4757、亀山焼の甕

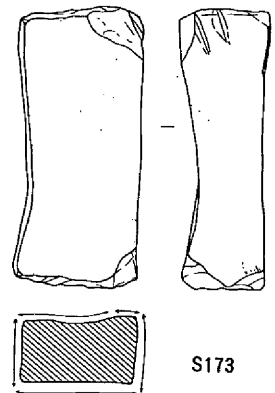
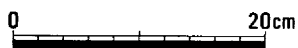
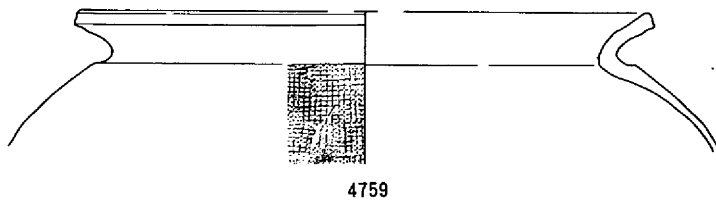
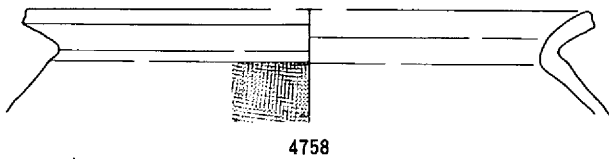
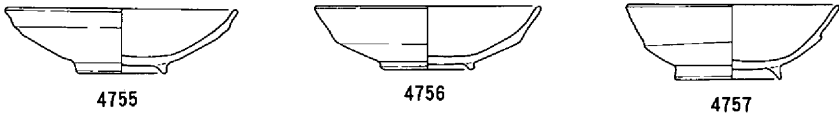
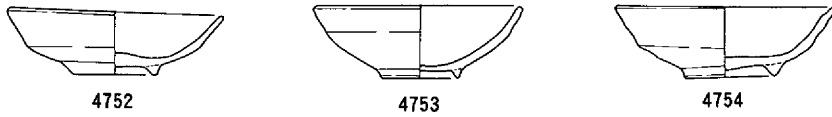
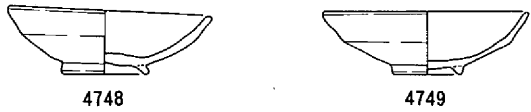
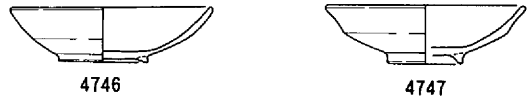
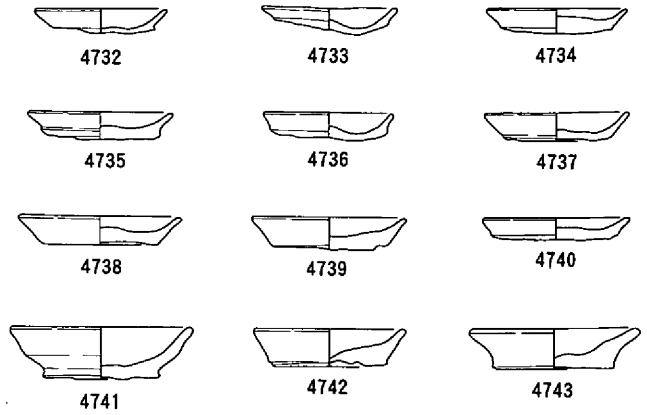


第308図 土壌-307・308

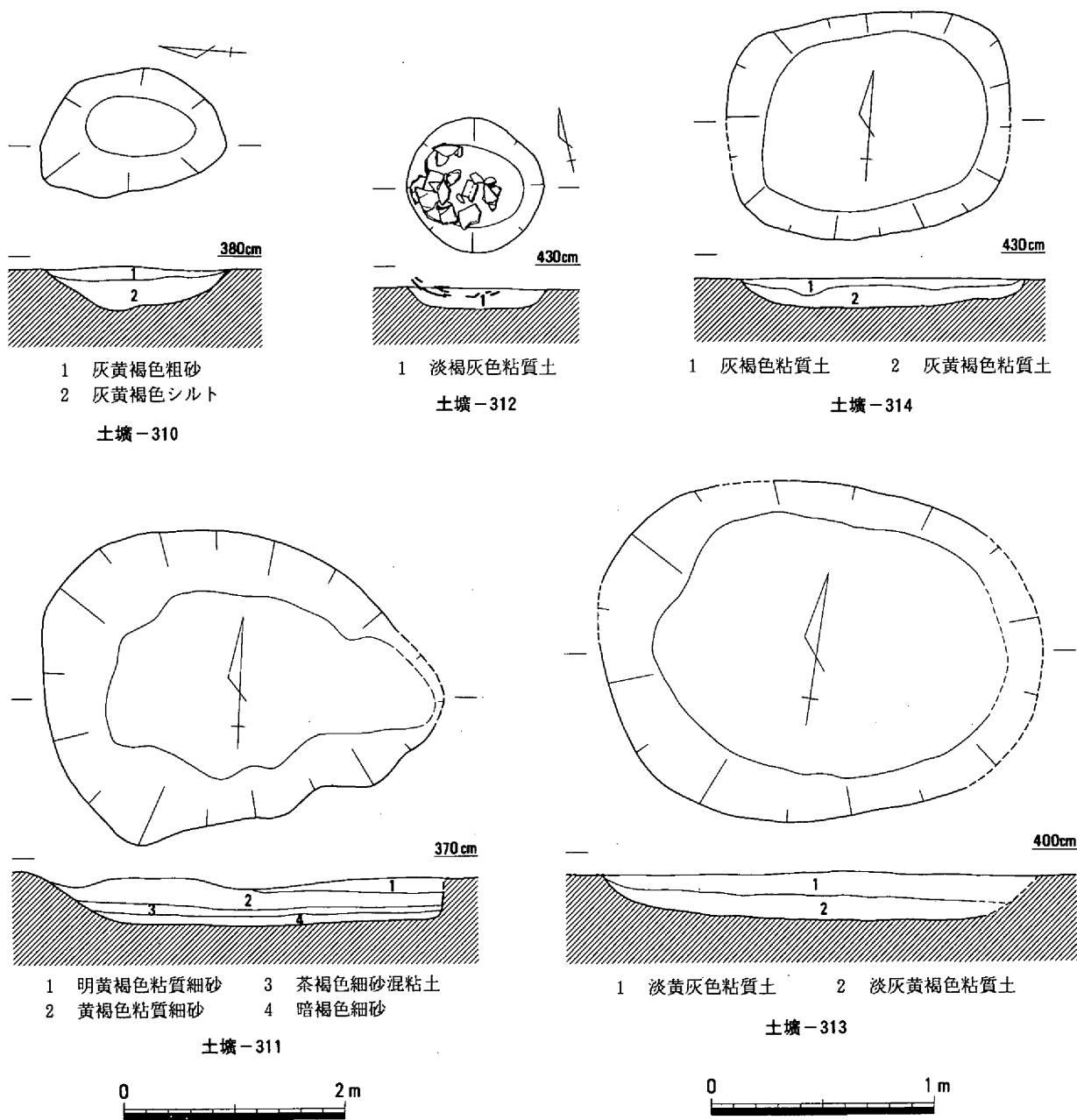


- |            |                       |
|------------|-----------------------|
| 1 暗茶褐色粘質細砂 | 10 灰褐色粘質細砂            |
| 2 茶褐色粘質細砂  | 11 灰色粘質土              |
| 3 暗茶褐色粘質細砂 | 12 褐灰色粘質土<br>(細砂との互層) |
| 4 黄褐色粘質細砂  | 13 灰色粘質土              |
| 5 茶褐色粘質細砂  | 14 灰茶色粘質土             |
| 6 濃茶褐色粘質細砂 | 15 灰色粘質土<br>(細砂との互層)  |
| 7 暗灰褐色粘質細砂 | 16 灰色粘質土              |
| 8 黄褐色粘質土   |                       |
| 9 黄褐灰色粘質土  |                       |

土壌-309



第309図 土壌-309 (4732~4759・S173)



第310図 土壙-310~314

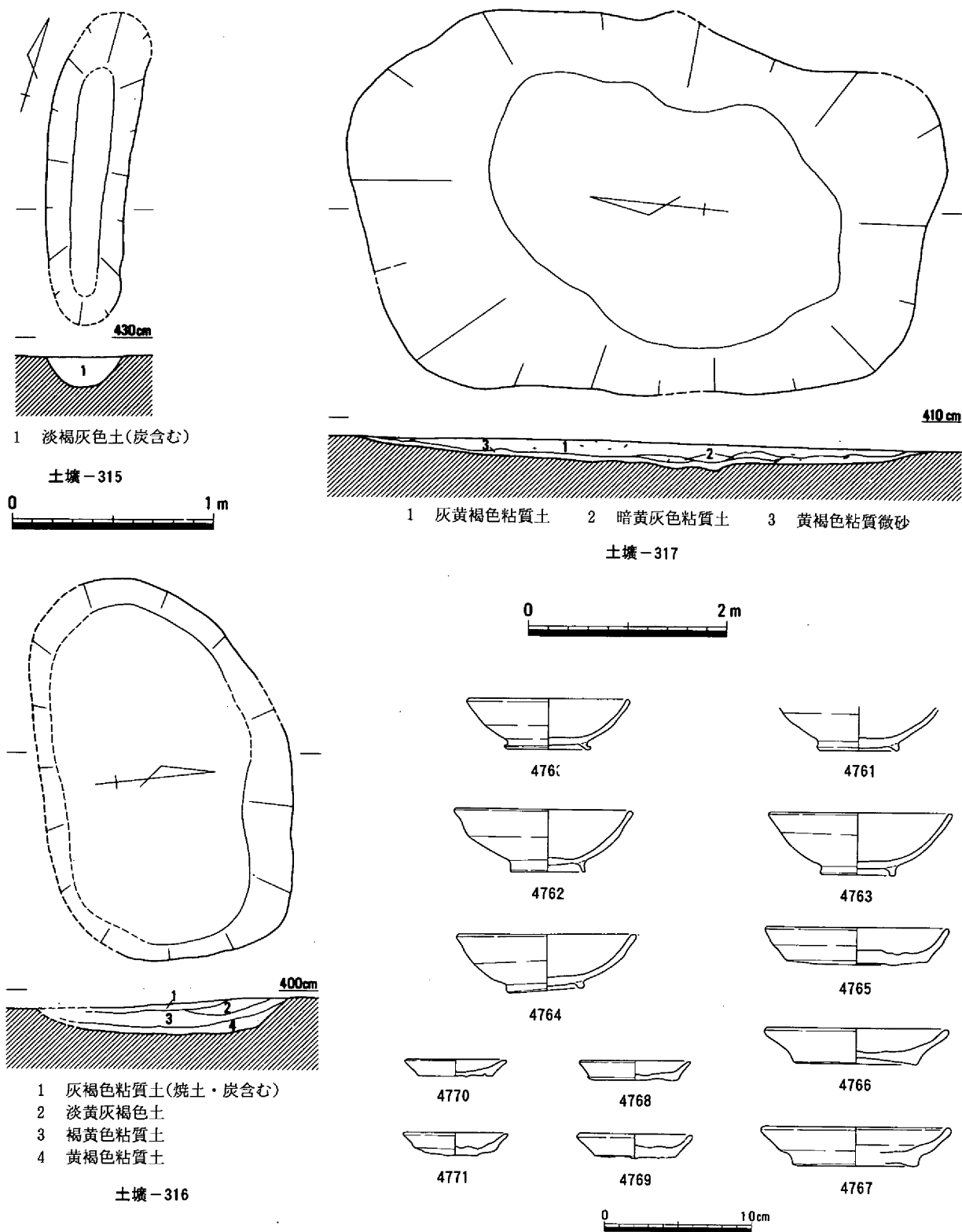
4758・4759、砥石 S 173がある。時期は出土遺物の形状から鎌倉時代に比定される。 (正岡)

土壙-310 (第310図)

中屋調査区の南東部にあり、掘立柱建物-37の南東に位置する。平面形は不整形を呈し、長径83cm、短径55cm、深さ20cm、底面の標高358cmを測る。埋土中から早島式の椀、土師器の鍋の破片が出土していて、時期は鎌倉時代後期に比定される。 (正岡)

土壙-311 (第310図)

中屋調査区の南東部にあり、土壙-310の南に位置する。平面形は不整形を呈し、長径360cm、短径265cm、深さ40cm、底面の標高309cmを測る。埋土中から早島式の椀の破片が出土していて、時期は鎌倉時代後期に比定される。 (正岡)



第311図 土壌-315~317 (4760~4771)

土壌-312 (第310図)

P18区の北東で検出した土壌で、土壌墓-15の北西を壊して掘りこまれている。上面は、長さ60cm、幅56cmの円形を呈し、深さ10cmほどある断面は浅い皿形をなす。埋土は淡褐色をなし、標高410cmを測る底面の上方から鎌倉時代後期に比定される土師器の椀、皿、鍋、竈が出土している。(岡田)

**土壙-313 (第310図)**

井戸-4の南方に位置する。

不整な長円形を呈し、長軸はほぼ東西方向を指し示している。壙底は平坦で、上下2層の埋積土は粘質である。

出土遺物は皆無であるが、中世それも鎌倉時代に比定されよう。(岡田)

**土壙-314 (第310図)**

溝-287の北端のすぐ西側に位置する。

小形の隅丸方形を呈する浅い土壙で、長軸はほぼ東西方向を指し示す。2層の埋積土はいずれも粘質である。出土遺物はないが検出状況から鎌倉時代に比定されよう。(岡田)

**土壙-315 (第311図)**

溝-286を切る溝状の細長い土壙である。

断面形は、幅広なU字形を示し単一土層が埋積している。出土遺物は土師器細片以外目立ったものはほとんど見当たらないが、時期的には鎌倉時代に比定されよう。(岡田)

**土壙-316 (第311図)**

土壙-319に切られる不整な長円形を呈する土壙である。

4層の埋積土はいずれも粘質である。最上層の1層には、焼土・炭が多く含まれている。出土遺物は鎌倉時代の土師器細片がわずかに認められているに過ぎない。(岡田)

**土壙-317 (第311図)**

溝-287の西側の遺構密集部分で検出された、きわめて不整な長円形を呈する土壙である。

実際にはもう一回り大きな凹地であったことが推察され、掘り方は不明瞭である。したがって、検出された平面形は部分は炭・焼土を含む粘質土の範囲であるといつてよい。

出土遺物には、4760~4771の土師器を主体に比較的多数の土器片がみられる。実測が可能となった4760~4764は早島式土器の椀である。4765~4767は皿、4768~4771は小皿である。時期的には、鎌倉時代の中ごろ前後に比定されよう。(岡田)

**土壙-318 (第312図)**

土壙-317に切られる浅い窪地状の土壙である。柱穴や土壙などが密集して検出された部分で、溝-288・289にも切られ、時期的に古いことが示されている。出土遺物には、4772の土師器鍋、4773の土師器カマドがみられ、鎌倉時代の時期的範囲におさまる。(岡田)

**土壙-319 (第312図)**

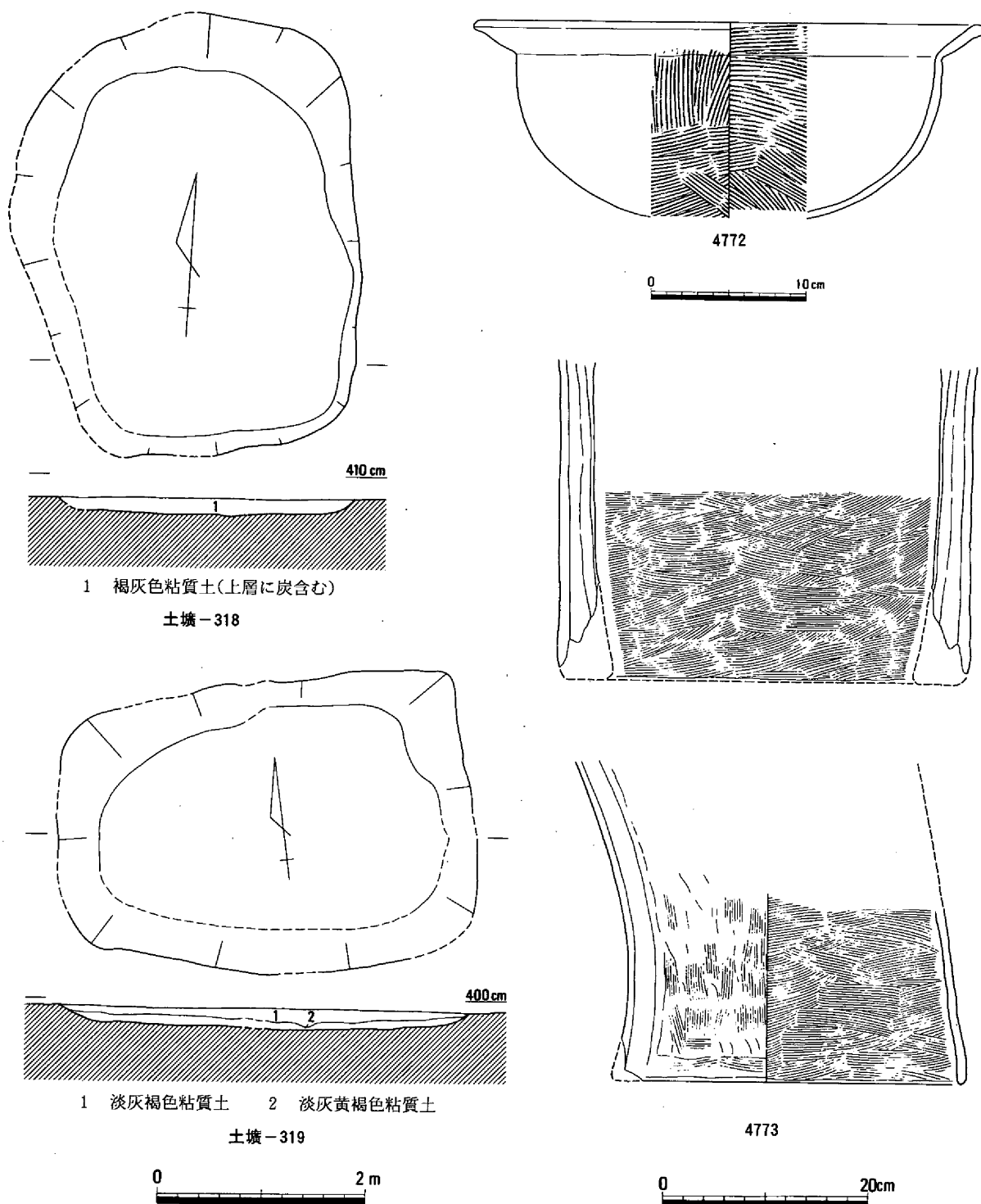
溝-287、土壙-316などを切って検出された浅い土壙である。

一辺約1.3~2mの隅丸の長方形を呈して検出された。

各辺は比較的直線的で、東辺が西辺よりも長めである。また、深さは、わずか20cm足らずでほぼ平坦な壙底に達する。

上下2層の埋積土はいずれも粘質で、掘り方全体で均質に検出された。掘り方の形状や埋積状態など、土壙-317・318などともきわめて類似しているおり、これらの土壙が集落のなかでどういう性格・用途があったのか興味深い。

後世の大幅な削平によって、上面が失われていることは明らかであるから、遺物の多少にこだわらないならば、ゴミ穴のような廃棄壙あるいは、便所のような存在であった可能性もある。(岡田)



第312図 土坑-318 (4772・4773)・319

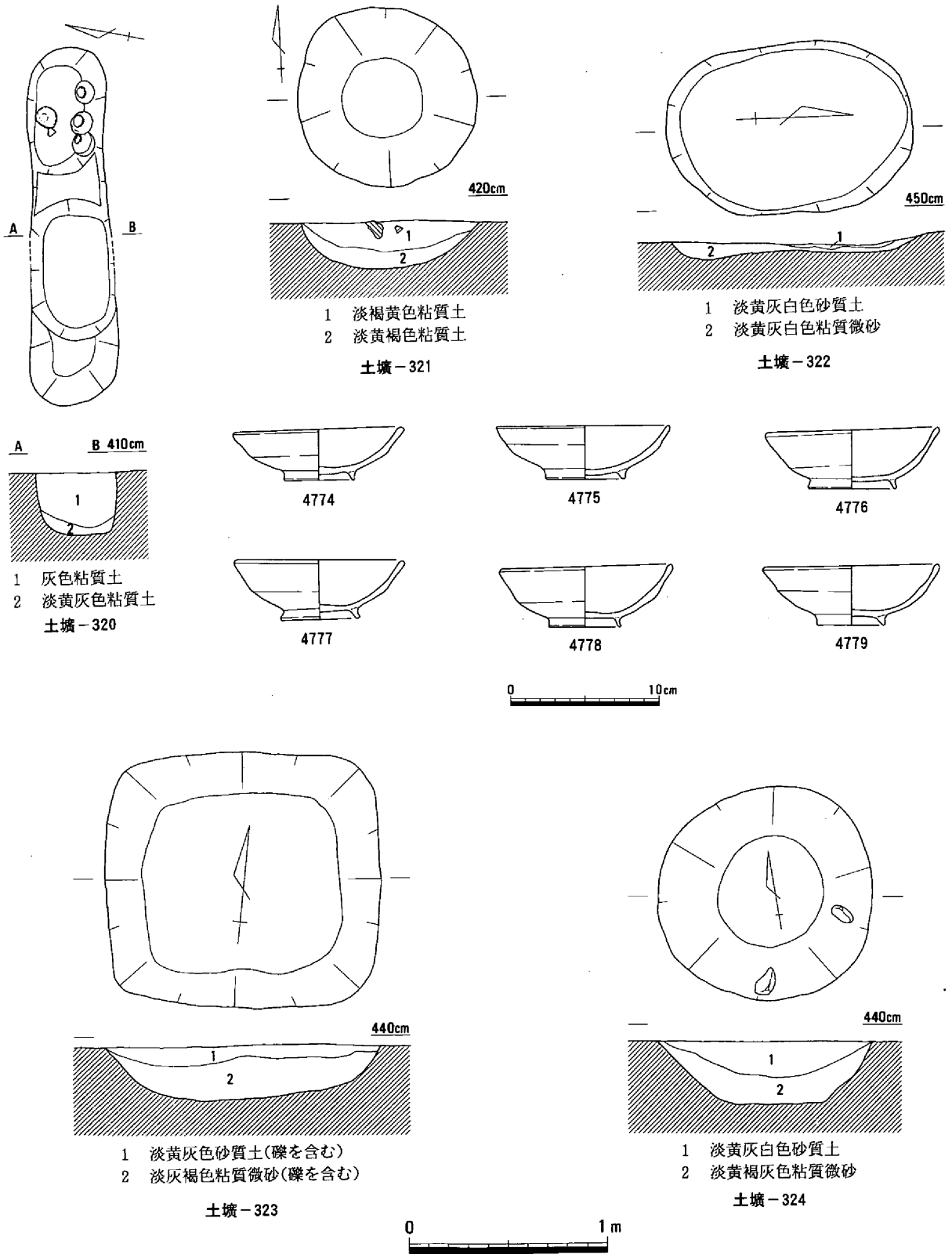
土坑-320 (第313図、図版101)

土坑-317の南辺に沿って検出された溝状の土坑である。長円形の土坑と溝状の土坑が重複しているように存在する。

東端で6個体の完形の土師器(早島式土器)碗がかたまって伏せ置かれた状態で出土している。埋葬遺構の可能性もあったが、ほかの土坑墓のように明瞭な人骨の出土や埋葬痕跡はない。

時期的には鎌倉時代中ごろ前後に比定される。

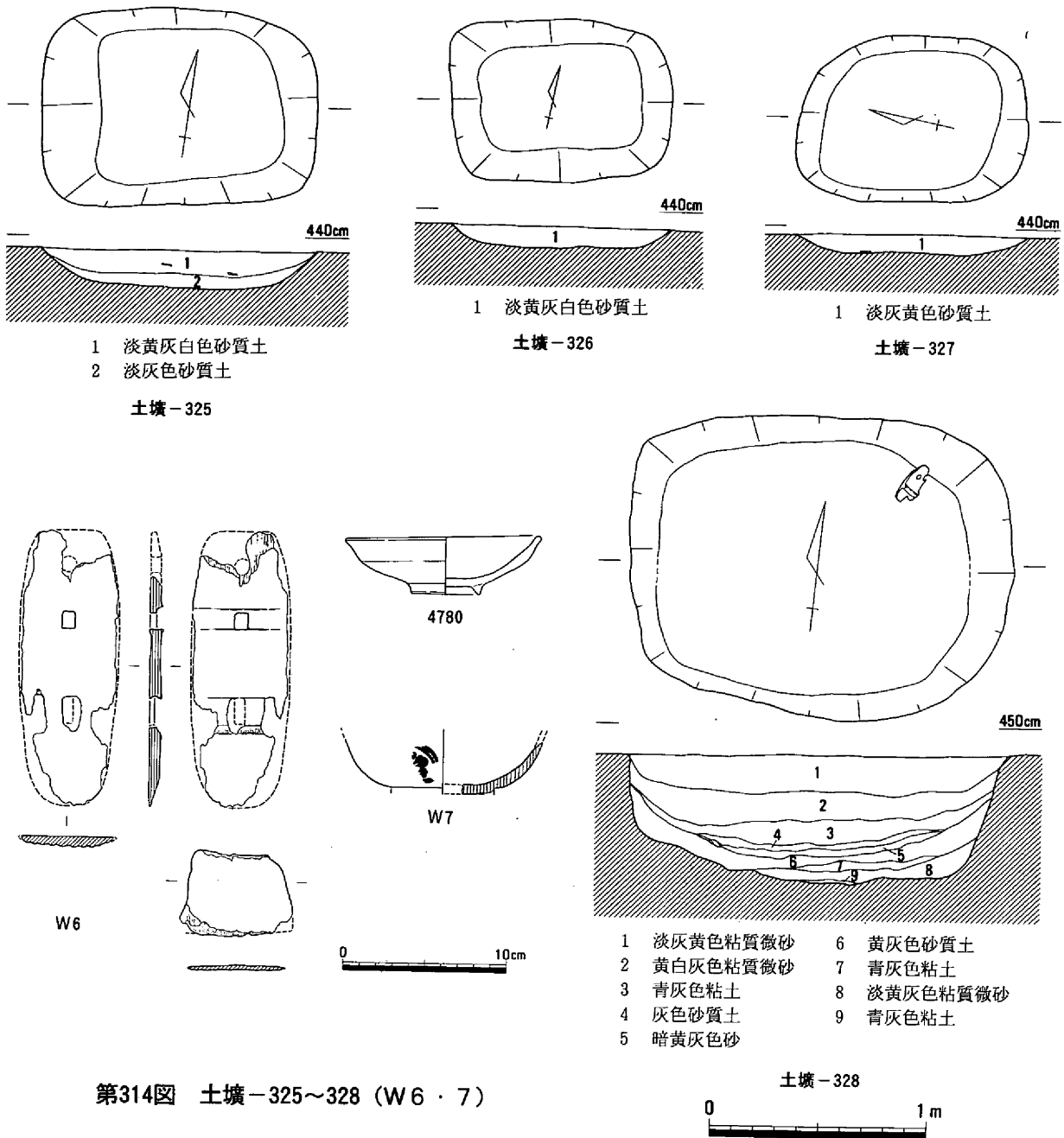
(岡田)



第313図 土壙-320 (4774~4779)・321~324

土壙-321 (第313図)

溝-285のすぐ北で検出されたほぼ円形を呈する小土壙である。壙底にかけての法面は、緩やかな丸みをもっている。出土遺物は皆無であるが、中世それも鎌倉時代に比定されよう。(岡田)



第314図 土壌-325~328 (W6・7)

土壌-322 (第313図)

井戸-5の南東方で検出された浅い小土壌である。長径120cm、短径90cmほどの長円形の掘り方を示している。埋積土から推察すると、掘立柱建物-3~40、井戸-5などと同時期すなわち中世後期に比定されよう。(岡田)

土壌-323 (第313図)

井戸-5のすぐ北東方で検出された方形の土壌である。ほぼ東西南北の長辺140cm、短辺130cm、深さ約30cmを測る。出土遺物は皆無であるが、时期的には埋積土の観察から掘立柱建物-38などが形成する屋敷地内で共存した中世後期の遺構と考えられる。(岡田)

土壌-324 (第313図)

土壌-323の東約7mで検出された円形の小土壌である。断面形は楕鉢状を呈し、壙底は平坦である。出土遺物はないが、埋積土から中世後期に比定される。(岡田)



## 土壌-325 (第314図)

掘立柱建物-40のすぐ南側で検出された小土壌である。いびつな隅丸長方形を呈し、長辺はほぼ東西を示している。墳底は比較的平坦であるが、法面はきわめて緩やかである。

埋積土の観察から、掘立柱建物-40などと時期的に共存する土壌である。(岡田)

## 土壌-326 (第314図)

掘立柱建物-39の南約2mで検出された。各辺はほぼ東西南北の方位を指し示す隅丸長方形の浅い土壌である。出土遺物には、土師器4780があるが土壌そのものの時期を示さず、混入遺物の可能性もある。埋積土からは、やはり中世後期に比定されよう。(岡田)

## 土壌-327 (第314図)

掘立柱建物-40の内部(身舎)で検出された小土壌である。土壌-326などと同様な隅丸長方形を呈する浅い土壌である。屋内土壌の可能性もある。

時期的には、埋積土の観察から中世後期に比定される。(岡田)

## 土壌-328 (第314図、図版43)

掘立柱建物-38と掘立柱建物-39の間で検出された比較的大形の土壌である。長辺170cm、短辺140cm、深さは約60cm前後を測る。出土遺物には2点の木製品がある。W6は差歯下駄で前緒穴は中央よりである。W7は、残存状態が悪い漆塗りの椀である。時期的には中世後期に比定される。(岡田)

## 土壌-329 (第315図)

掘立柱建物-39のすぐ北側で検出された、東西方向に長円形を示す土壌である。掘立柱建物-39や掘立柱建物-40などと共存した可能性が強い。出土遺物には、4783の土師器皿がある。時期的には、周囲の遺構と同時期の中世後期に比定される。(岡田)

## 土壌-330 (第315図、図版43)

O18区南西部に位置する。西辺を一部失っているが、平面形は不整な方形を呈し、現存長軸長123cm、短軸長114cmを測り、海拔高4.02mでやや凹凸のある底面まで深さ13cmが残る断面形はAa型である。土師器の小皿4782の出土により、鎌倉時代に比定される。(光永)

## 土壌-331 (第315図)

P19区の南西に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、平坦な底面から上方に広がる掘り方を有する断面形である。規模は長さ132cm、幅117cm、深さ68cm、底面海拔高243cmを測り、周辺では比較的深い形状を呈する。

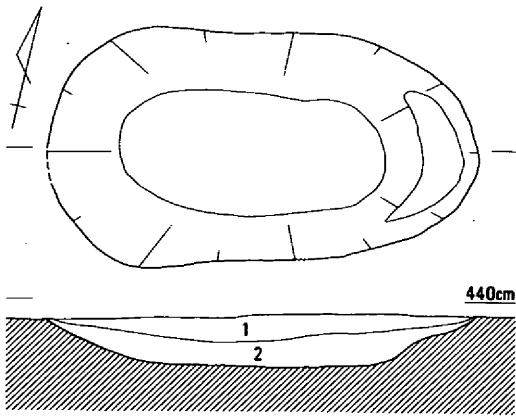
出土遺物は、土師器高台椀4781、皿4784、小杯4785~4788などがみられた。遺構の時期は中世前半のものと思われる。(澤山)

## 土壌-332 (第315図)

P19区の中央部北端に近い位置に所在するものである。平面形は方形を呈するもので、長さ123cm、幅90cm、検出面からの深さ20cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。底面の海拔高は371cmを測る。4789は土師器の椀で、底部が窪んでいる。時期は鎌倉時代後期と考えられる。(井上)

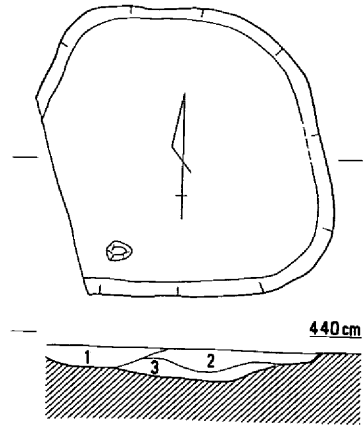
## 土壌-333 (第315図)

P19区の中央部北端に近い位置に所在し、土壌-332の南西約300cmに検出した。平面形は南辺に凹凸がある不整形方形を呈している。規模は長さ140cm、幅73cm、検出面からの深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は大きく開きながら立ち上がる。時期は鎌倉時代後期と考えられる。(井上)



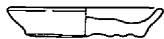
1 淡灰黄色砂質土 2 淡黄灰色砂質土

土坑-329



1 淡灰褐色土  
2 暗灰褐色土  
3 淡灰黄褐色土

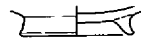
土坑-330



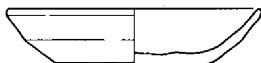
4783



4782



4781



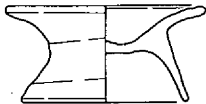
4784



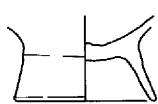
4785



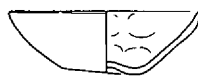
4786



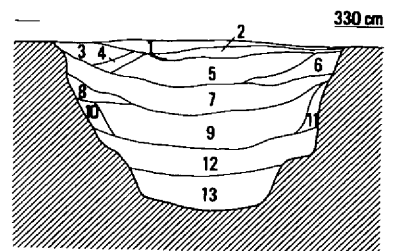
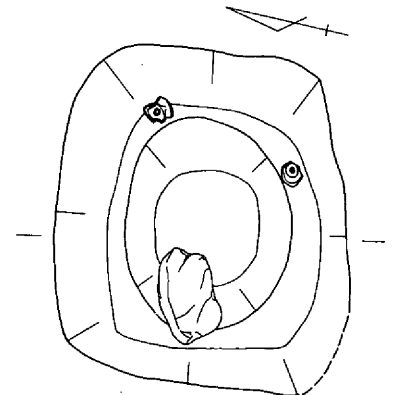
4787



4788

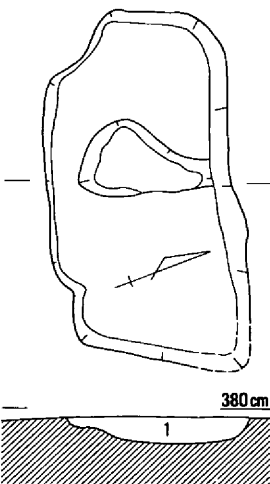


4789



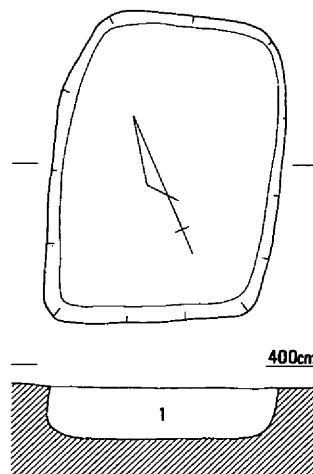
1 淡青黄灰色土 8 淡青灰色土  
2 淡青灰色土 9 青灰色粘質土  
3 淡青灰色粘質土 10 淡青灰色粘質土  
4 淡青茶色砂質土 11 淡青灰色粘質土  
5 淡青灰色粘質土 12 淡青灰色土  
6 青灰色粘質土 13 暗青灰色土  
7 青灰色土

土坑-331



1 灰褐色土

土坑-333



1 暗灰褐色粘質土

土坑-332



第315図 土坑-329 (4783) · 330 (4782) · 331 (4781 · 4784~4788) · 332 (4789) · 333

(5) 土墳墓

土墳墓-12 (第316図、図版44)

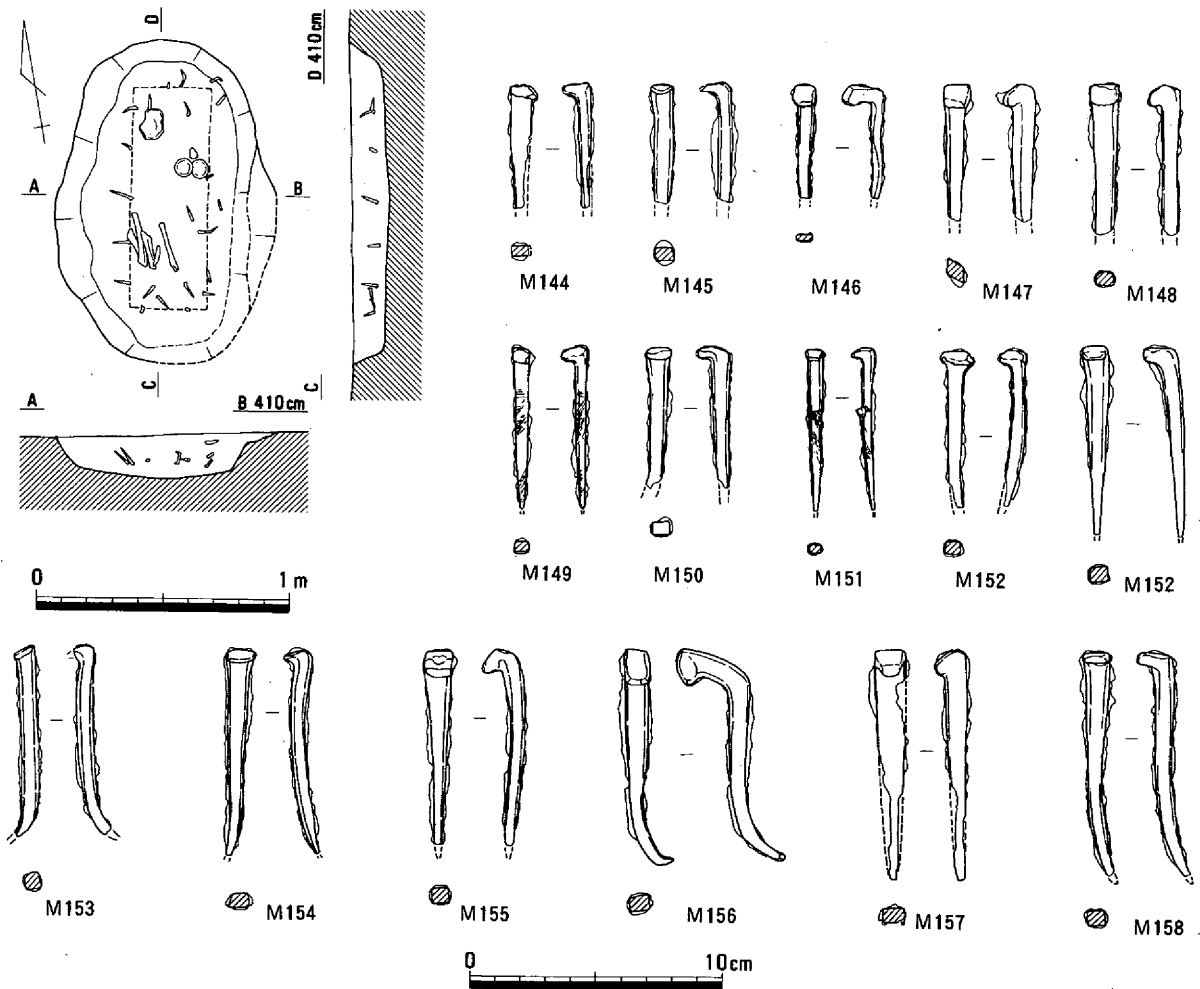
中屋調査区の南端部に位置する。周辺には他に土墳墓を検出していない。掘り方の平面形は長楕円形を呈し、長さ130cm、幅87cm、深さ17cm、底面の標高383cmを測る。上部は削平されているが、埋土中にあまり移動していない状態で鉄釘を16本検出した。これらをもとに検討し、長方形の木棺痕跡を確認した。内部には、人骨の一部が残存している。鉄釘は、長さ4.6~9.2cm、幅0.6~1.1cm、厚さ0.4~1.0cm、重さ3.2~18.4gで、大小のばらつきがみられる。

時期は埋土の状況などから中世に比定される。

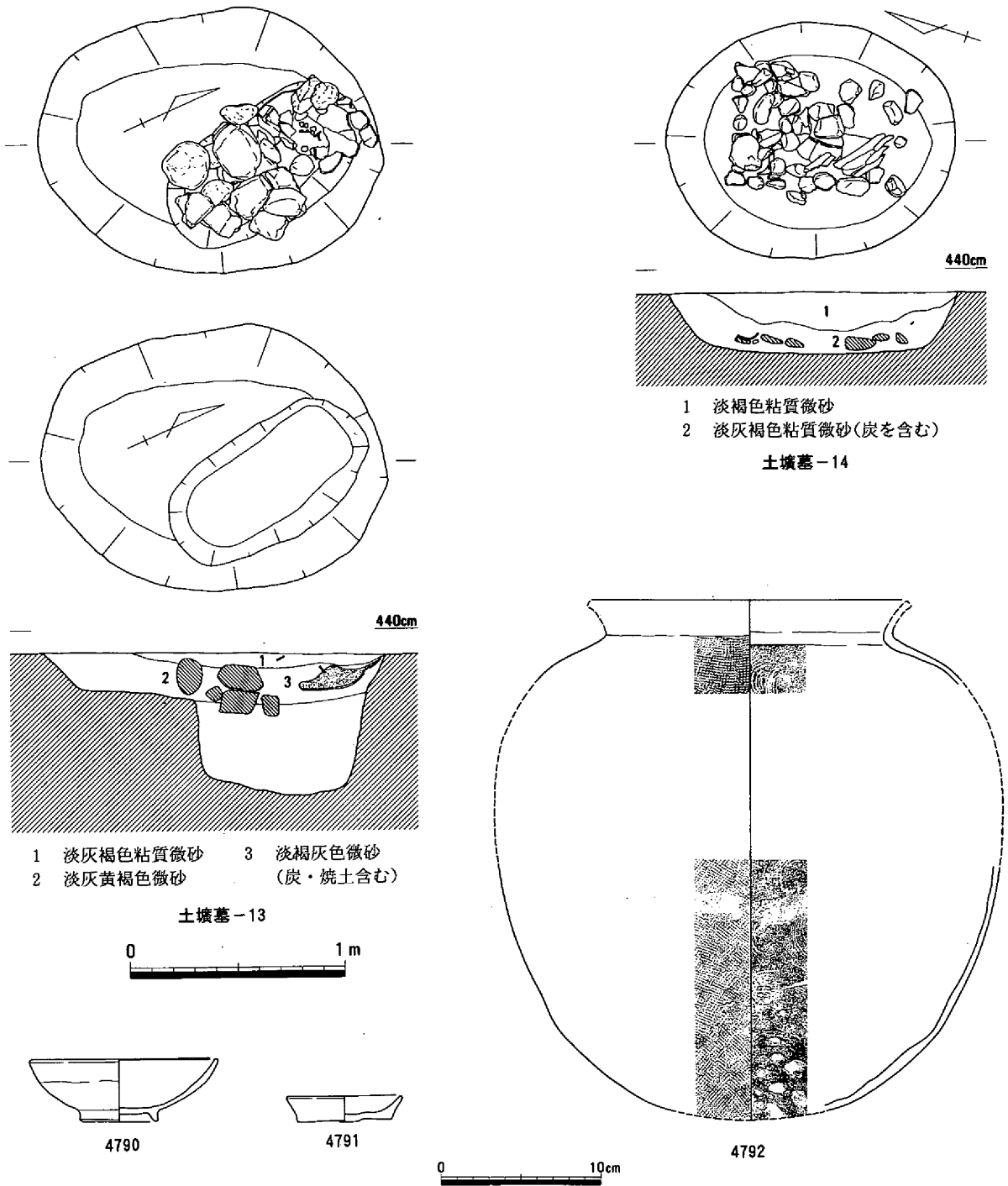
(正岡)

土墳墓-13 (第317図、図版44・101)

掘立柱建物-39の南約10mで検出されたやや長円形の土墳墓であるが、本来は長径150cm、短径120cmの土墳の上面に、小児頭大の礫を用いた長方形の墓が造られたものと考えられる。埋葬形態としては特異で、まず深目の長方形の穴(約100×60cm)を掘り、少し埋めてから礫と亀山焼の甕の破片を敷いている。その上の北側に焼骨特有の亀裂がみられる脳頭蓋骨と左頬骨の破片が出土しているが、7本の永久歯も歯根を残すだけである。性別の判別はできないが成人骨である。土墳の形態から、火葬骨を埋納あるいは、再葬された可能性が高い。上面にも花崗岩の礫が置いてあり、板か何かで簡単な



第316図 土墳墓-12 (M144~158)

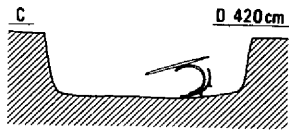
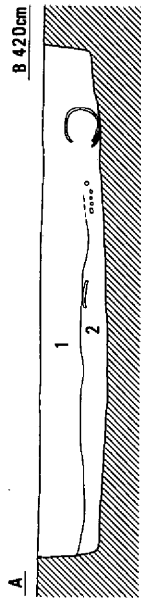
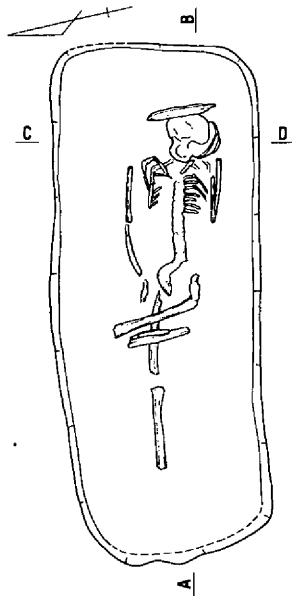


第317図 土墳墓-13 (4790~4791)・14 (4792)

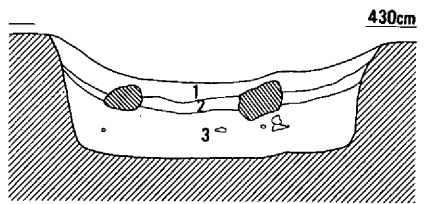
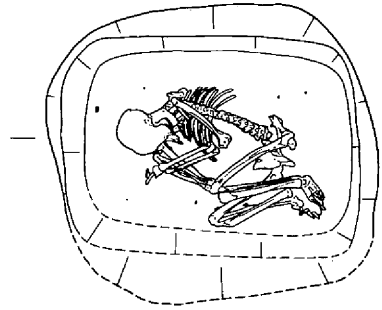
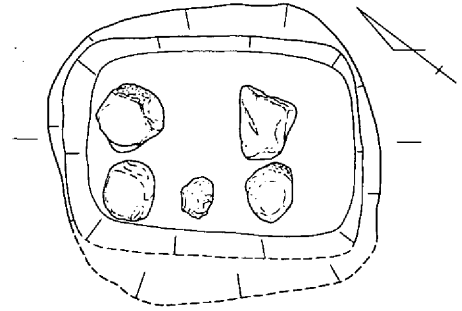
蓋をしてその重しに使われた可能性もある。出土遺物には4790・4791の土師器があり、鎌倉時代中ごろ前後の時期が比定される。(岡田)

土墳墓-14 (第317図、図版44)

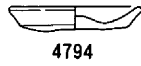
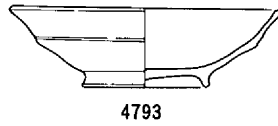
土墳墓-13の南約2mで検出された。掘り方は長円形であるが、四肢骨の一部が遺存していた小礫が置かれた範囲は約90×60cmの長方形をなしている。礫の隙間には、土墳墓-13と同様4792の亀山焼の甕体部片が敷かれている。遺体は屈葬の状態と埋葬され、四肢骨の位置から頭位は北側と考えられる。副葬された遺物はないが、4792の亀山焼から鎌倉時代の中ごろ前後の墓と推定される。(岡田)



- 1 淡灰褐色粘質微砂
  - 2 淡灰黄褐色粘質微砂
- 土壙墓-15



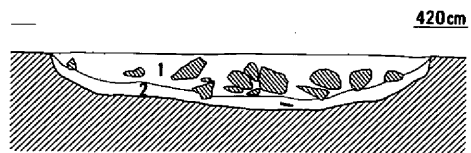
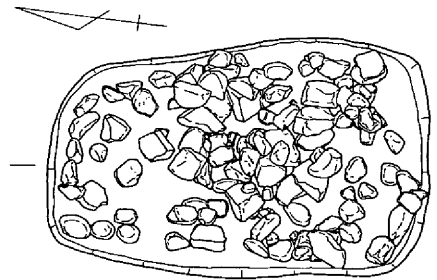
- 1 灰褐色粘質微砂
  - 2 黄灰色微砂
  - 3 暗灰色粘質土
- 土壙墓-16



M159

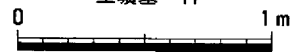


M160



- 1 暗灰褐色粘質土 (炭含む)
- 2 灰黄褐色粘質土 (炭含む)

土壙墓-17



第318図 土壙墓-15 (4793・4794・M159・M160)・16・17

土墳墓-15 (第318図、図版45・101)

土墳墓-14の東7mで検出された、東西方向の掘り方を示す伸展葬の土墳墓である。全身骨格の大部分が残存しているが、頭位は東を指し示し頭蓋に接してM159の刀子が出土している。また頭部の南側に完形の土師器椀が添え置かれるように出土している。

骨の保存状態はきわめて悪いが、四肢骨の位置などは当時の埋葬状態をよく残している。左足は膝を曲げた状態である。詳細な観察が可能となった部位は下顎骨のみであり、左右とも大臼歯はなく、その歯槽は閉鎖されている。下顎体が低く、下顎枝骨が大きいので老年骨と推定されるが性は不明である。時期は、鎌倉時代中ごろに比定される。(岡田)

土墳墓-16 (第318図、図版45)

土墳墓-15の西約13mで検出された。方形の掘り方を示し、良好な保存状態を保った人骨が屈葬の状態で見つかった。掘り方上面は、遺体の埋納後木蓋が何かで密閉されたと考えられ、その重しとみられる5個の礫が整然と検出された。これらの礫は、木蓋の陥没により本来の位置よりも下位の掘り方の内部におさまっている。掘り方内では保存の悪い棺釘が7点出土しており、遺体は小形の棺に納められていたことが推察される。掘り方の北に置かれた頭蓋骨の左半分の残りは悪いが、上・下顎骨には第3大臼歯を除く全歯が釘植している。また、四肢骨の残りもきわめて良い。寛骨の形状から女性の遺体が埋葬されたことが判定され、歯の磨耗が軽微で大臼歯の咬頭も明瞭に認められることから、壮年前半のものとして推定される。時期は明確ではないが中世、鎌倉時代に比定されよう。(岡田)

土墳墓-17 (第318図、図版45)

土墳墓-15の南約10mで検出された。ややいびつな長方形を呈する掘り方を示し、緩やかな墳底に拳大の礫多数が敷かれている。その隙間に少量の土師器片がみられる。礫の上面南側に木炭片が集中して検出された。人骨の遺存は認められないので墓の可能性は低いと考えられる。(岡田)

## (6) 溝

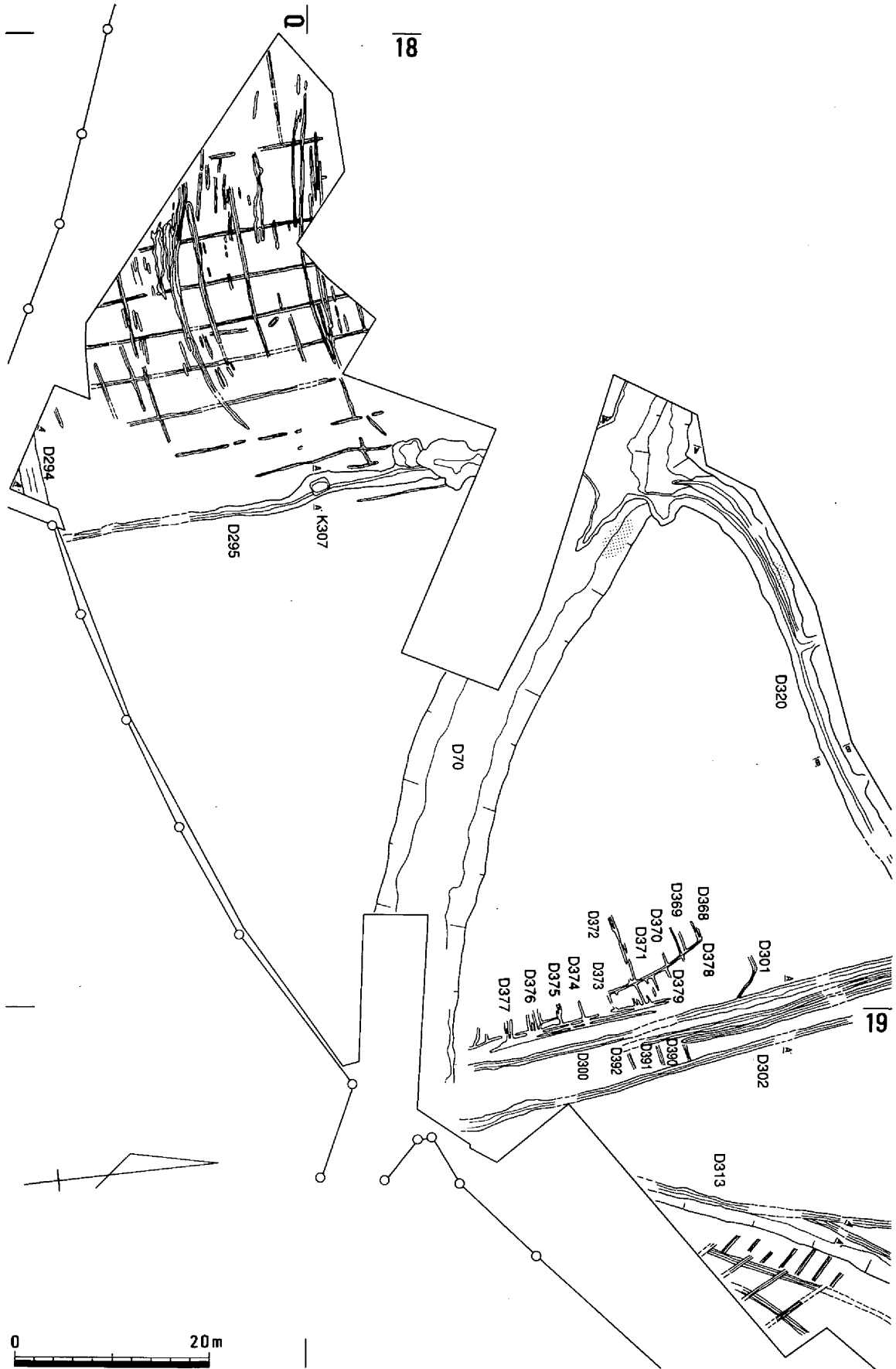
溝-70 (第320・321図)

中屋調査区の南部にあり、北西に所在する微高地を掘削して溝をつくり、さらに南東へのびるものである。微高地端部に沿って両側に分岐する溝があり、分岐点には多数の杭が打ち込まれていて、護岸と分水の施設を造っている。分岐する上流側の断面が第320図である。両側に護岸の杭があり、幅810cm、深さ93cm、底面の標高284cmを測る。規模の大きな幹線水路で、北西から南東へ流れる。埋土は砂を主体とし、下部には、粘土と砂の互層が見られる。埋土中には遺物が多く、土師器・備前焼・亀山焼・白磁などの焼物のほか、木製品、石製品、土製品、金属製品、銭貨がある。

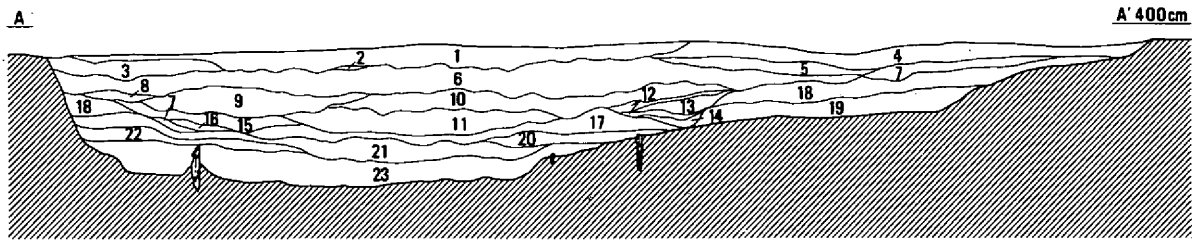
土師器には、皿4795~1797、椀4799~4813、備前焼には甕4814、播鉢4817・4818・4820、亀山焼には甕4815・4816、播鉢4819、白磁には碗4799がある。木製品にはヒノキ製の折敷W8とトチノキ製の漆椀W9がある。

土製品には、管状の土錘C175、フイゴの羽口C176がある。石製品には、滑石製の石鍋S194、流紋岩の砥石C195・C197~199、頁岩の砥石S196がある。金属製品には銅製の煙管M161がある。銭貨には、開元通寶、嘉祐通寶、元豊通寶、元祐通寶、咸平元寶がそれぞれ1枚ある。

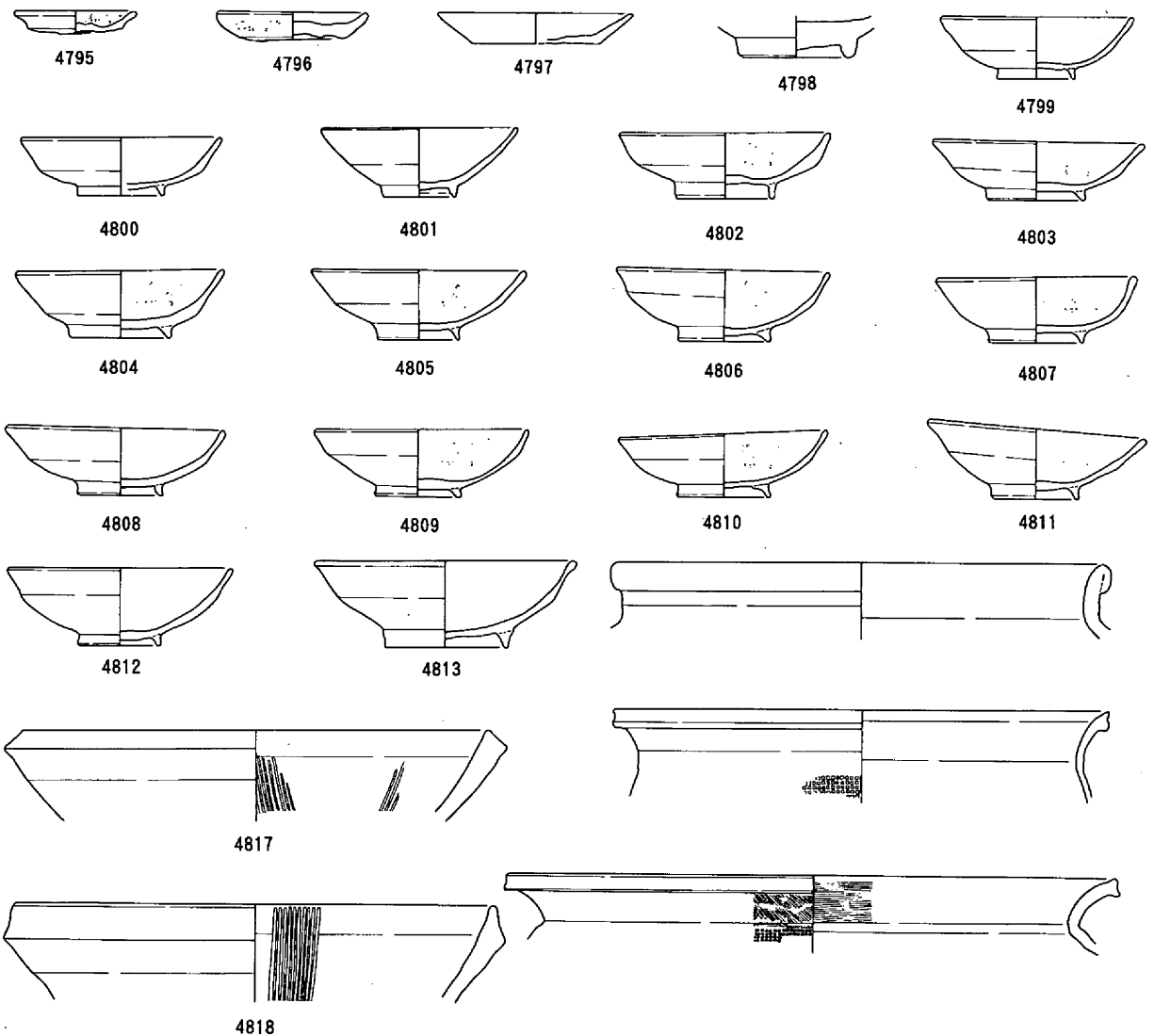
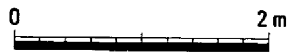
時期は中世に属するが、埋土の上層は近世につづいている。現代の用水路も若干ずれているが上層にあり、中世以来、同じところに水路を継続していることが分かる。(正岡)



第319図 中屋調査区中世遺構全体図3 1/600

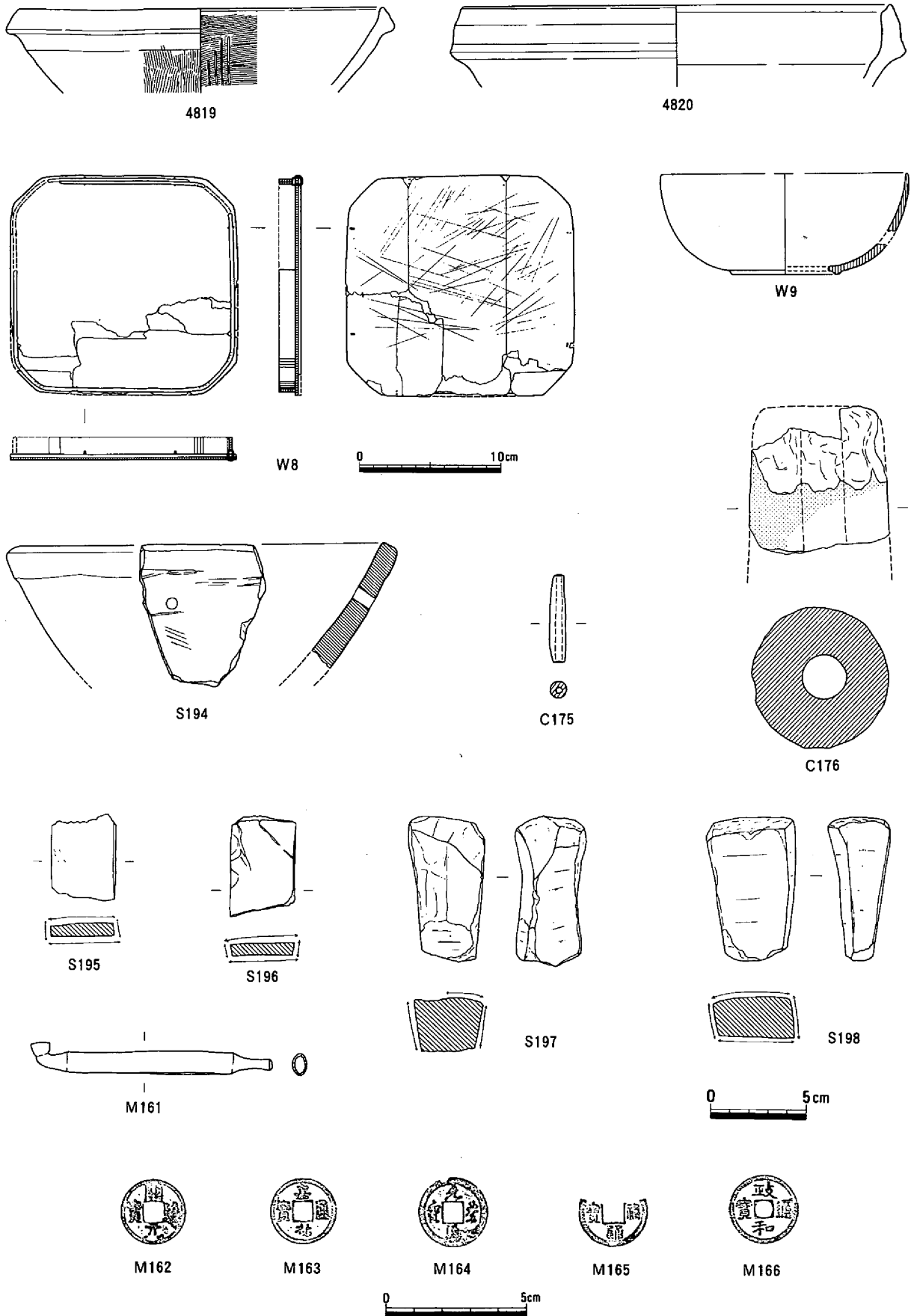


- |            |             |              |             |
|------------|-------------|--------------|-------------|
| 1 黄灰色粘質微砂  | 7 暗灰黄色粘質細砂  | 13 灰オリーブ粘土   | 19 灰オリーブ粘質土 |
| 2 黄灰色粗砂    | 8 オリーブ褐色砂質土 | 14 灰色粘質土     | 20 黄灰色粘質土   |
| 3 黄褐色粘質細砂  | 9 黄褐色砂質土    | 15 黄褐色砂質土    | 21 黄褐色粘質土   |
| 4 暗灰黄色粘質細砂 | 10 灰オリーブ砂質土 | 16 灰色砂礫      | 22 黄褐色粘質微砂  |
| 5 暗灰黄色細砂   | 11 黄灰色砂礫    | 17 黄褐色粘質砂    | 23 黄褐色粘質細砂  |
| 6 黄褐色粘質細砂  | 12 暗オリーブ粗砂  | 18 オリーブ褐色粘質土 |             |

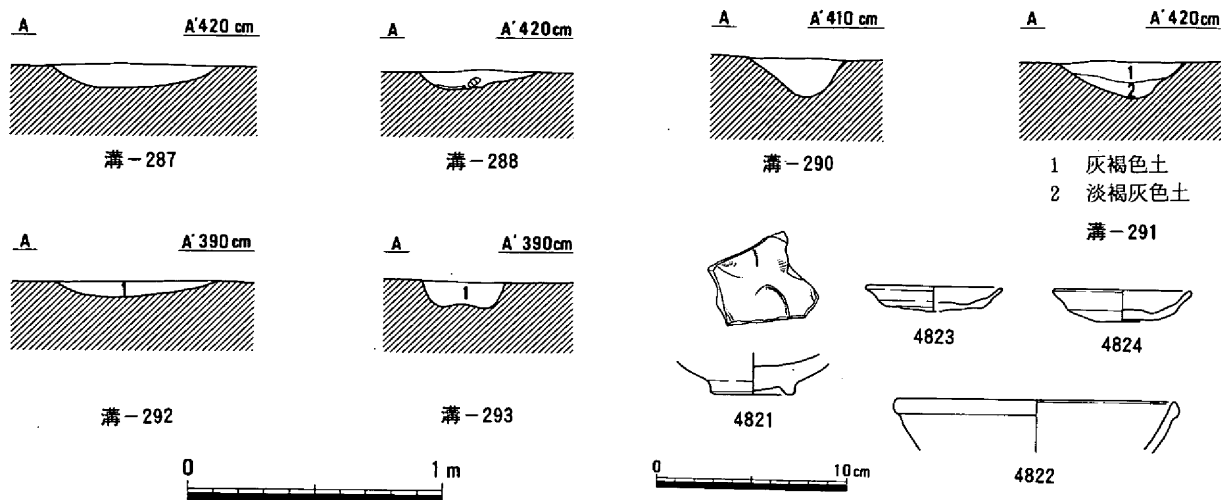


第320図 溝-70 (4795~4818)





第321図 溝-70 (4819・4820・W8・9・S194~198・C175・176・M161~166)



第322図 溝-287 (4821)・288 (4822)・289 (4823・4824)・290~293

溝-287 (第322図)

北端がほぼ直角に屈曲する検出全長約17mあまりの溝である。土壌-317をはじめ多数の柱穴などが検出された一画にあり建築物などを区画する溝の可能性が高いとみられる。

出土遺物には4822の白磁碗があり、この溝が鎌倉時代に使用埋没したことが示唆される。(岡田)

溝-288 (第322図)

溝-287の北寄りの西で検出された、やはり北の端が屈曲する溝である。溝-289と接続するように検出されたが途切れている。建築物などを囲う区画溝の一部と考えられる。

出土遺物には、4823の土師器小皿があり、中世それも鎌倉時代に比定される。(岡田)

溝-289 (第322図)

溝-288の南に10m以上のびる浅い溝である。ほぼ直線的に南北方向を示し、途中2箇所溝-291に切られる。

出土遺物には4825の土師器小皿があり、時期的には鎌倉時代に比定される。(岡田)

溝-290 (第322図)

土壌-317・320の南東方向で検出された、ほぼ南北方向を示す直線的な溝である。幅が狭い割にV字に深く、排水溝の可能性もある。

出土遺物は皆無であるが、埋積土から中世、鎌倉時代に比定される。(岡田)

溝-291 (第322図)

土壌-317から派生する溝で、緩やかな弧を描いて検出された。検出全長8m以上を測り、溝-289・290の両方を切る。土壌-317にともなう排水溝の可能性はある。

出土遺物はないが、中世それも鎌倉時代に比定される。(岡田)

溝-292 (第322図)

P19区中央部北端に検出した。検出した全長は1179cmで、L字状に屈曲するものである。検出面での規模は、幅89~26cm、深さ5cmを測る。断面形は浅い皿状を呈しており、北東から南西方向に流れるものである。底面の海拔高は375~372cmを測る。検出状況から時期は中世と考えられる。(井上)

溝-293 (第322図)

O19区南東部において、延長約4.5mが検出された弧状を呈する溝状の遺構である。幅40~58cm、

深さ12cm程度の規模で、断面形はA c型である。西端の延長上には、溝-292の北端が位置し、両者の関連が考えられる。(光永)

溝-294 (第323図)

Q18区中央部やや北よりに位置するものである。調査区の南端部に検出したために調査した全長は577cmと短い。幅は220cm、深さ53cmを測る。底面は少し平坦面があり、壁は大きく開きながら立ち上がるものである。流路方向は東から西に向くものである。時期は中世と考えられる。(井上)

溝-295 (第323図)

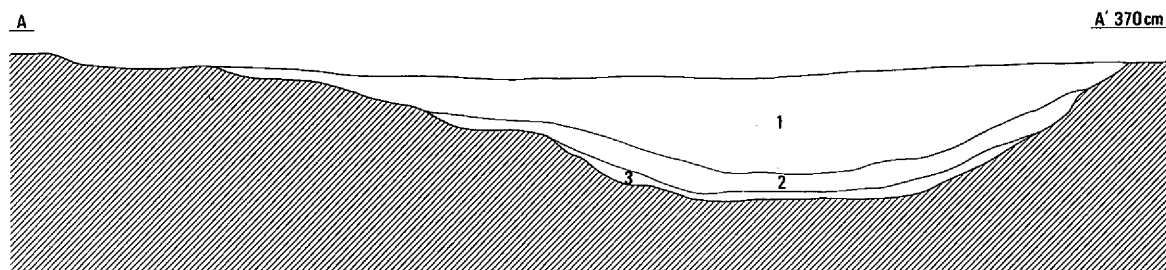
中屋調査区の南部に位置し、溝-70から南へ分岐する用水路である。埋土中からは、土師器の椀4826・4827、魚住焼の播鉢4828、備前焼の播鉢が出土している。時期は出土遺物の形状から中世に比定される。(正岡)

溝-296 (第324図)

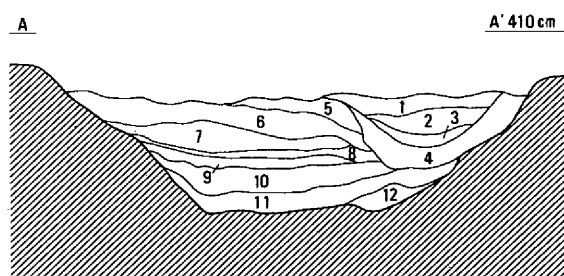
P19区で検出された直線的に延びている溝であり、検出された全長は2818cmで、溝幅は80~120cm、その深さは約15cmを測る。また溝底の海拔高は325~337cmであり、断面形はA a型を呈し、流路方向は北北西→南南東。検出面等から中世と考えている。(二宮)

溝-297 (第324図)

溝-296と同区で検出され、直線的に延びているものである。溝全長は3088cm、同幅は62~158cm、



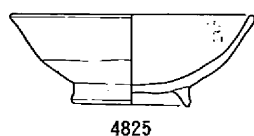
0 2m 1 青緑色粘質土 2 淡青緑色粘質土 3 青茶色粘質土 溝-294



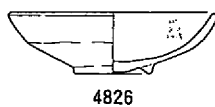
溝-295

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1 灰黄色粘質微砂 | 7 黄灰色シルト  |
| 2 黄灰色シルト  | 8 青灰色粘質土  |
| 3 黄灰色粘質微砂 | 9 灰色粗砂    |
| 4 黄灰色粘質土  | 10 青灰色シルト |
| 5 黄白色粘質微砂 | 11 青灰色粘土  |
| 6 黄灰色粘質微砂 | 12 明青灰色粘土 |

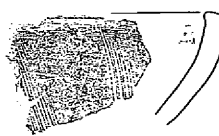
0 1m



4825



4826



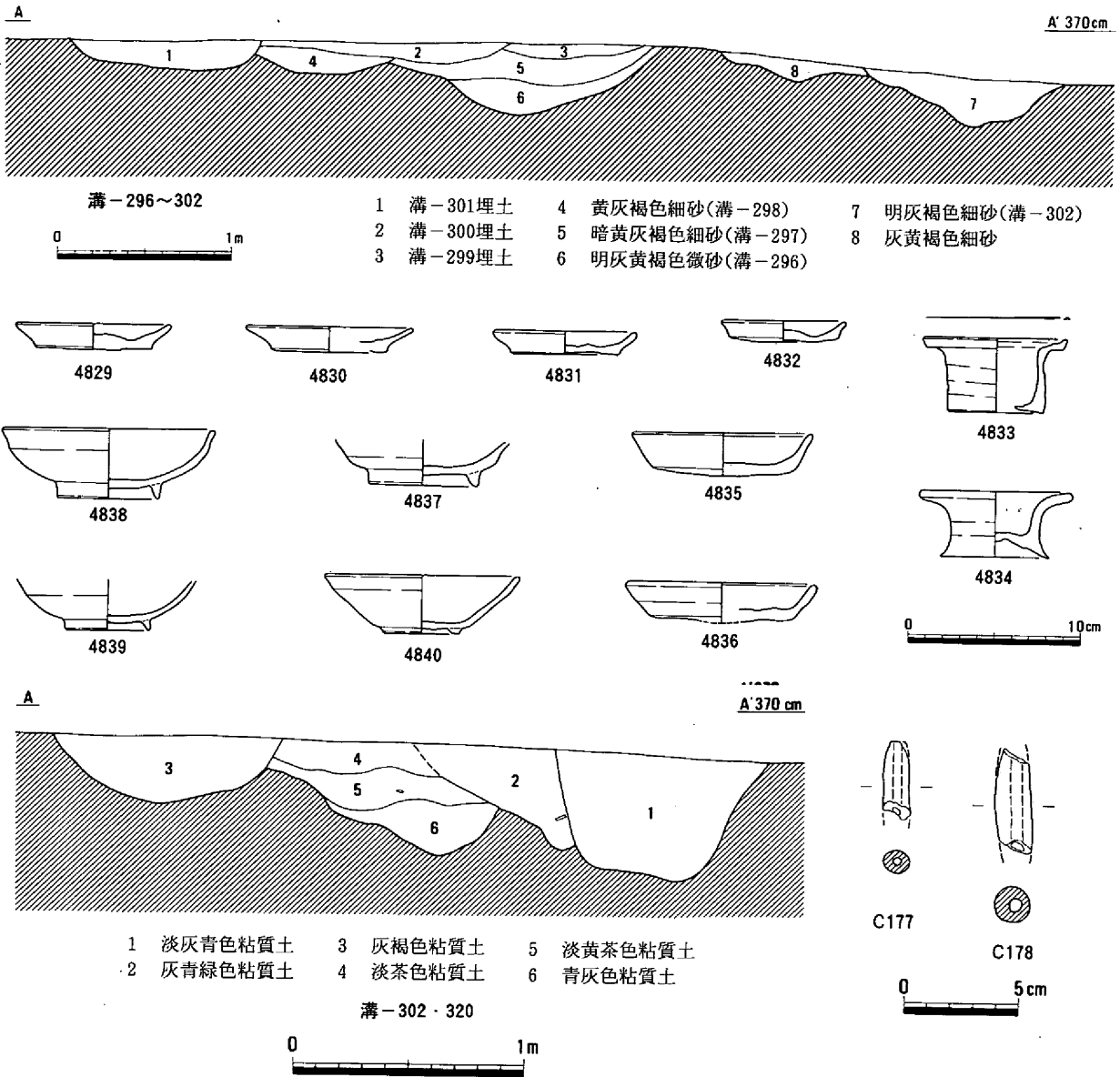
4827



4828

0 10cm

第323図 溝-294・295 (4825~4828)



第324図 溝-296 (C177)・297~300 (4829)・301・302 (4830~4840・C178)

また検出面からの深さは約24cmを測り、溝底の海拔高は326~342cmである。断面形はA b型を呈す。流走方向は前溝とは逆の南南東→北北西。同時代と言える。(二宮)

溝-298 (第324図)

前溝と同区で検出されて、直線的に延びている溝であり、確認全長は2736cm、溝はきわめて浅いものであり、幅は推定で90~100cm位と思われる。溝底海拔高は340cm強であり、その断面形はA a型を呈し、流路方向はN-7°-W。中世の遺構と言えよう。(二宮)

溝-299・300 (第324図)

P19区で19ラインを跨いで流走するものであるが、双方とも北、南部を欠削しているがN-9°-Wである。現存長も2772、3050cm、最大幅も100cm以下である。また断面形はA a型を呈し、浅く、溝底海拔高も平均で350~360cmである。いずれの溝の時期も前述溝同様と言える。(二宮)

溝-301 (第324図)

中屋調査区の南東部に位置し、数本の溝が並んでいる。北から南へ向かって直線的に流れる溝で、



第325図 中屋調査区中世遺構全体図4 1/600

溝-300と並走している。北側ではやや東へ湾曲する。幅48~112cm、深さ14cm、底面の標高341~355cmを測る。明瞭な遺物は出土していないが、周辺状況から時期を中世に比定される。(正岡)

#### 溝-302 (第324図)

P19区の西端に位置し、中・近世水田の西縁を南北に走る溝である。溝-299~301と並走し、その北端は井戸-4に繋がっている。検出長88m、幅168~78cm、深さ47cmを測り、断面は逆台形を呈する。出土遺物から13世紀後半~14世紀前半の年代が考えられる。(亀山)

#### 溝-303・304 (第325図)

P19区で、19ラインに付くようにして、溝-302に並走して検出されている溝であり、検出長が303で900cm弱、幅は30~45cm位、溝-304は400cm弱、幅50cm前後で303とほぼ同じであり、検出面からの深さはどちらも10cm以下であった。いずれの溝も中世と言えるであろう。(二宮)

#### 溝-305・306 (第325図)

P19区西辺19ラインを跨いで数本の溝(299・300)等に重複して検出された溝であり、検出長は305で2620cm、幅40~70cm、深さ26cmを測る直線的に延びる溝。306は758cm、幅40~60cm、深さは10cm以下の溝。双方の溝底海拔高は295~305cmでほぼ同位であった。中世に属する溝である。(二宮)

#### 溝-307 (第326図)

P19区中央やや北西に位置し、水田と微高地の境界部を北東部が「U」字形に区別するかのように流走し、両端部を溝-313に切られた形で検出された溝である。検出長は5880cm、幅30~90cm、深さ10cm以下。溝底海拔高は約300~320cm。北西-南西への流走。中世で313より古い。(二宮)

#### 溝-308 (第326図)

P19区の微高地北西斜面部で北東から南西にかけて流走する溝で、平面的には弧状を呈する。検出長は4240cm、幅30~130cmで、深さは10cm以下で、溝-312からの継続すると考えられ、現微高地をめぐり、313と並走して用地外へと延びる。時期は中世に属すが307以前の溝である。(二宮)

#### 溝-309 (第326図)

P19区の中世微高地上南西端で検出された検出長624cm、幅30~50cm、深さ10cmで、両端が削平によって消滅しているが直線的に延びている溝である。溝は微高地の端部において検出されたため、現存するところでは北東-南西に流走していたものである。時期は中世に属すると考えられる。(二宮)

#### 溝-310 (第326図)

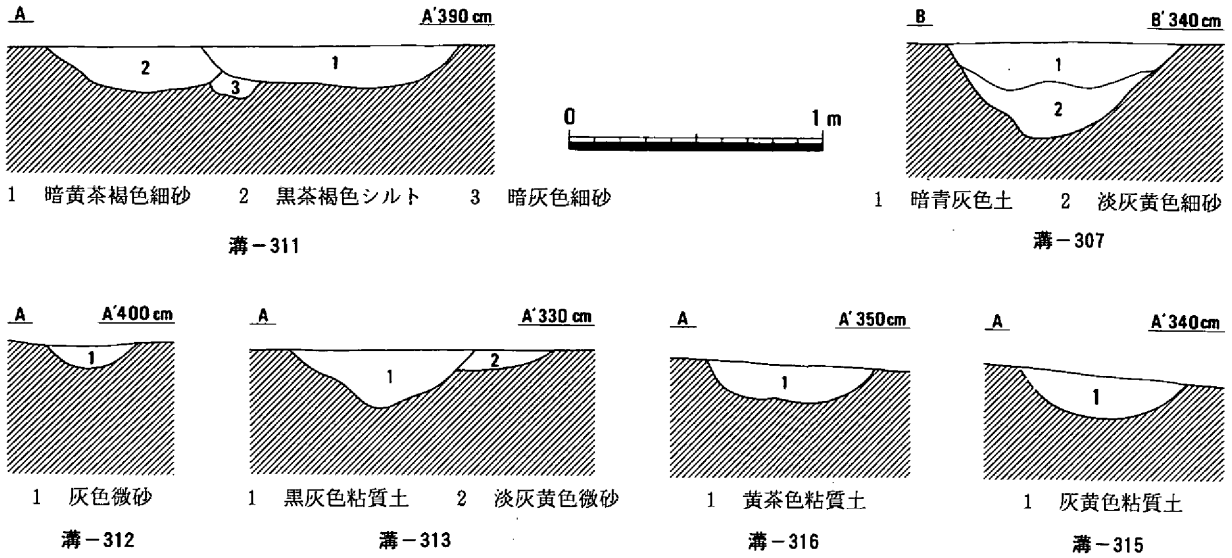
P19区中央北よりで溝-307の東側にて検出された「L」字状の平面形を呈している溝である。溝の検出長は566cm、幅40~86cm、深さ平均4cmを測る溝である。溝の海拔高はほぼ水平的で366cm位であり、北北東から東南東に流走しているものと思われる。時期は中世に属する。(二宮)

#### 溝-311 (第326図)

P19区の微高地上に位置する逆「S」字状に屈折し微高地端部から曲がりを持って微高地の中央部へと延びている溝である。検出長は2356cm、幅70~185cm、深さ16cmで溝底海拔高は360cm前後である。溝は北西末端で深みを持ち丸く終わっている。東から北西に下向した溝で、中世に属する。(二宮)

#### 溝-312 (第326図)

P19区中央部北端に近い位置に検出した。検出した全長は1977cmで全体が「へ」字状に屈曲している。幅は61~32cm、深さ13cmを測る。断面形は浅い皿状を呈するものである。流路方向は南南西から東南東に流れるものである。底面の海拔高は385~378cmを測る。時期は中世と考えられる。(井上)



第326図 溝-307～316

溝-313 (第326図)

P19区内で溝-307の北西部を切って、北東から南西にほぼ直線的に流走し、溝-317に切られ消滅する溝である。検出全長は6290cm、幅40～100cm、深さ約27cmを測る。断面形はA a型を呈する。北東部の溝-324から継続し、317で消滅する溝。中世に比定されよう。(二宮)

溝-314 (第326図)

P19区北西部で北西から南東に延びる検出全長1450cm、幅約30～50cm、深さ10cm以下で溝-317に直角に連結する直線的な溝である。この溝の性格は中世の水田耕作に伴って造られていた中溝の可能性を持っていると言えよう。時期は中世に比定される。(二宮)

溝-315・316 (第326図)

P19区北西隅近くに位置し、315は314と直交し、北東に延びて317に連結する。検出長は1724cm、幅60～70cm、深さ10cm強、断面形はA a型。316も315と並走し検出長1800cm、幅60～115cm、深さ20cm、断面形A a型を呈す。溝は南西側で消滅するが、301等に続くと思える。中世に属する。(二宮)

溝-317 (第325図)

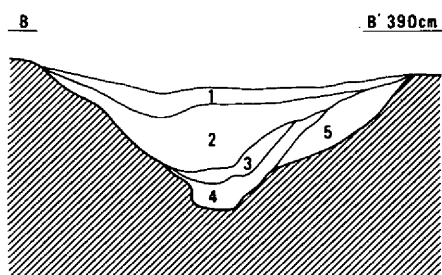
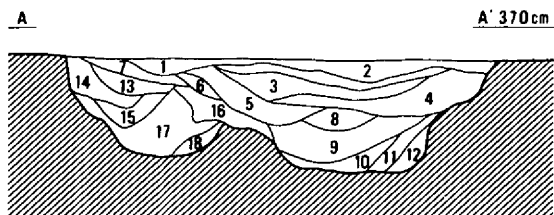
Pラインを跨いで溝-314と並走する検出長1238cm、幅40～70cm、非常に浅い溝である。この溝は315に連結し、南南西の方向に流走していると思われる水田区画溝(排水時の溝か)の可能性を示している。中世に比定される遺構である。(二宮)

溝-318 (第325図)

O19区の南西端部近くに位置する「く」の字状の平面形を呈し、南東端部は先細りで終わる。検出全長620cm、幅15～60cm、深さ5cm以下と非常に浅い溝である。溝の北西側は別の溝-320に吸収され消滅している。いずれにせよ中世に属する遺構である。(二宮)

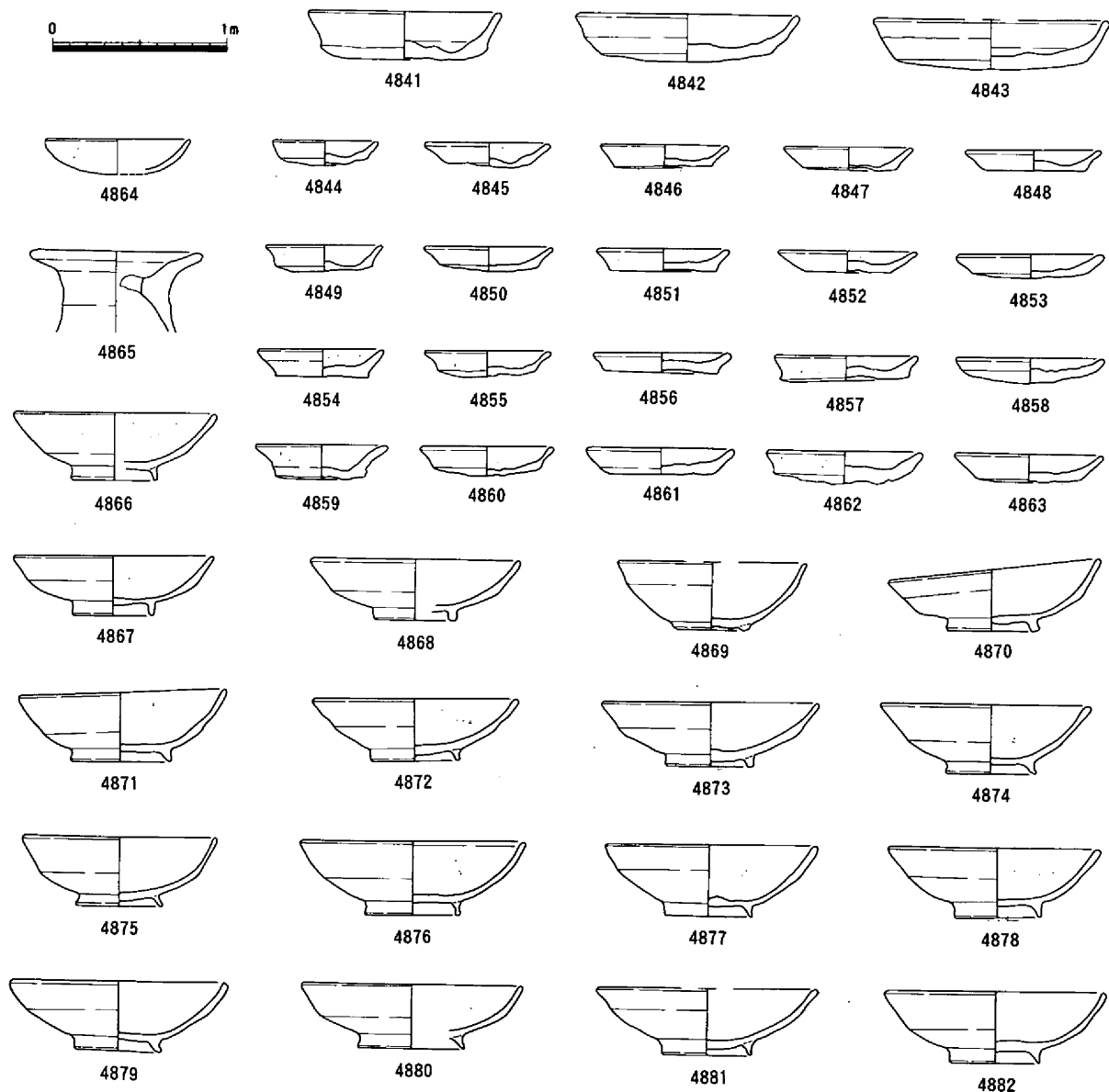
溝-319

P19区の北西隅を中心に検出長16.7m、幅90～98cm、深さ60cm、底面海拔高292～306cmを測る用排水路である。微高地周縁に集中する溝では最も高所に位置する。部分的な調査のみであり具体性に欠けるが、早島式土器、東播系の須恵器片がみられる。12世紀末～13世紀初頭に機能か。(高畑)



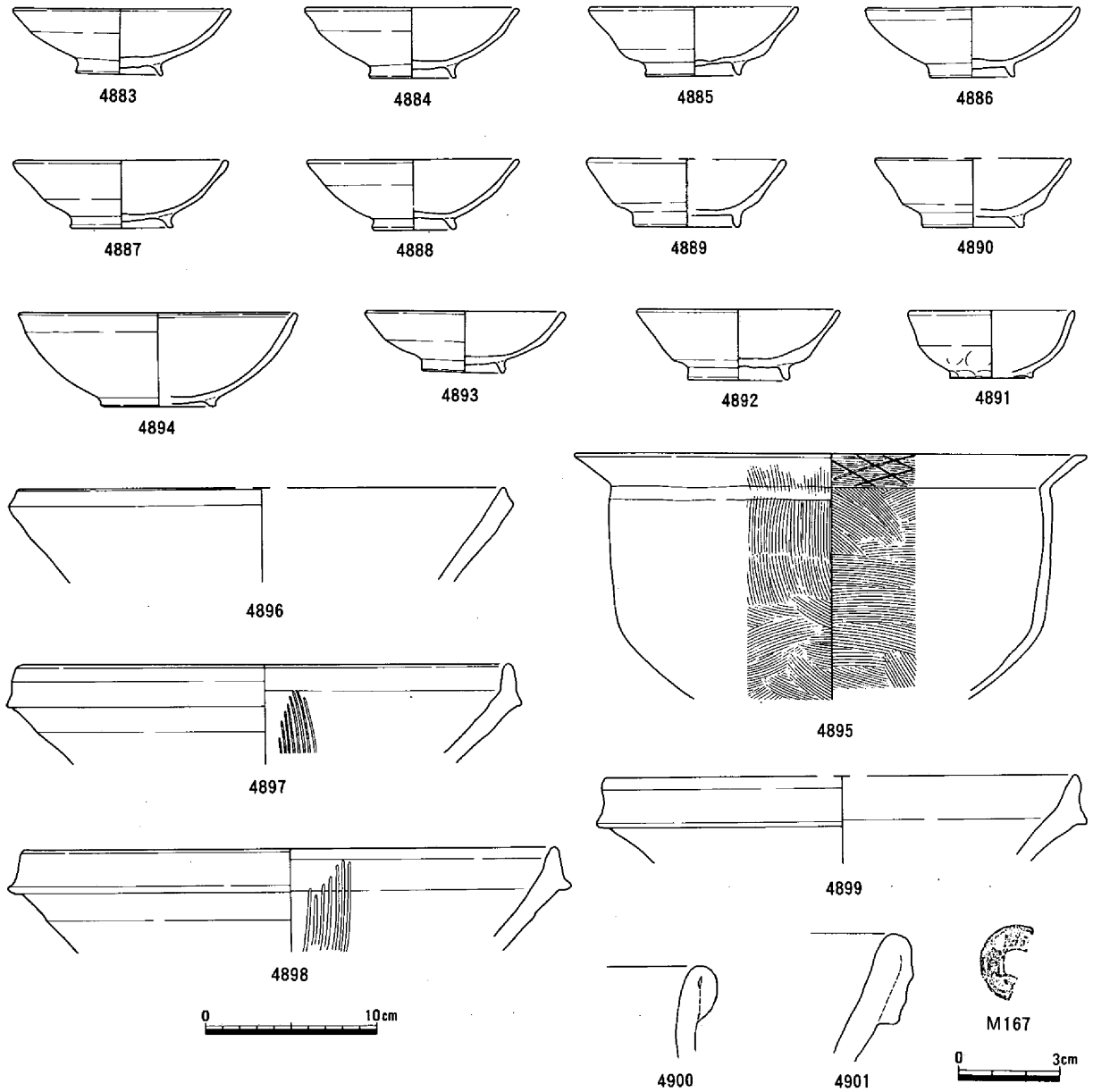
- |             |              |
|-------------|--------------|
| 1 淡黄褐灰色微砂   | 10 灰色粘質土     |
| 2 明茶灰褐色微砂   | 11 灰色粘土      |
| 3 青灰茶色粘質微砂  | 12 暗灰色粘土     |
| 4 青灰黄色微砂    | 13 淡青灰茶色粘質微砂 |
| 5 青灰色粘質微砂   | 14 灰茶褐色粘質微砂  |
| 6 青灰黄茶色粘質微砂 | 15 灰黄色粘質土    |
| 7 青灰茶褐色粘質微砂 | 16 淡灰黄色粘質微砂  |
| 8 暗青灰色粘土    | 17 暗灰色黄褐色粘質土 |
| 9 淡灰黄色粘質土   | 18 暗灰黄色粘土    |

- |           |
|-----------|
| 1 青灰色シルト  |
| 2 青灰色粘質微砂 |
| 3 青灰色粘質土  |
| 4 青灰色シルト  |
| 5 暗青灰色シルト |



第327図 溝-320 (4841~4882)





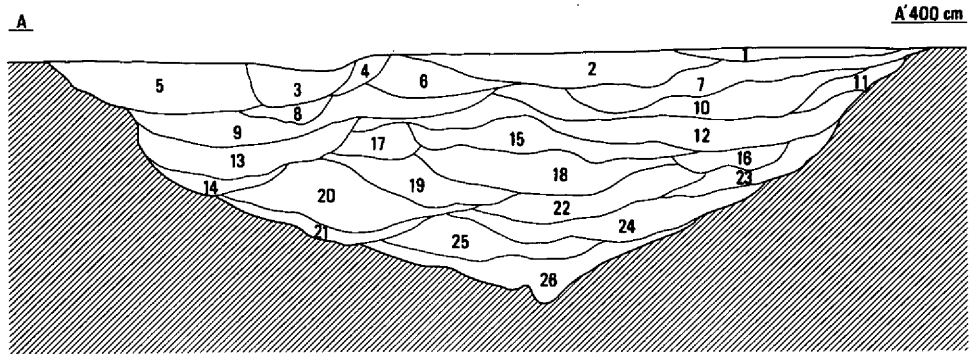
第328図 溝-320 (4883~4901・M167)

溝-320 (第327・328図、図版46・102)

O19区からP18区にかけて弧状にのびる溝で、その北端は溝-321・322に分岐し、南端は溝-70と合流する。検出長は123mを測るが、幅150cmほどの溝が重複しており、見かけの上幅は388~148cmを測る。深さは80cmで、断面は緩やかなV字形ないし逆台形を呈し、北東に向かって流走する傾向を示す。この溝からは、溝-70との合流地点を中心に多量の土器が出土している。4866~4893は灰白色をなす土師器の椀で、口径12.7~9.6cmを測る。備前焼には播鉢4897~4899と甕4900・4901がある。これらの遺物から、この溝は13世紀後半から17世紀にわたって機能していたものと思われる。(亀山)

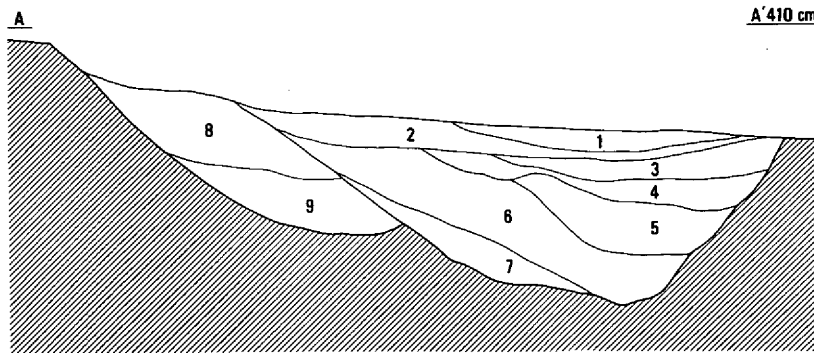
溝-321 (第329図)

O18・19区にかけて検出した溝である。この溝は溝-322と直交して溝-320に続くものである。第329図の土層断面図での状況は、数本の溝が重複している。最終的には北西・北東からの溝が合流して溝-320へと流走している。中世における用水路の役割をなしている溝である。(二宮)



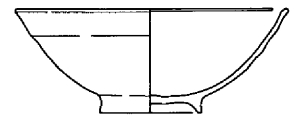
- |           |            |              |            |
|-----------|------------|--------------|------------|
| 1 灰茶褐色微砂  | 8 茶褐色灰色微砂  | 14 淡灰黄褐色粘質微砂 | 20 淡青色微砂   |
| 2 淡灰茶褐色微砂 | 9 淡茶灰褐色微砂  | 15 灰茶青色微砂    | 21 灰青色粘質土  |
| 3 灰茶褐色微砂  | 10 茶灰褐色微砂  | 16 灰青茶褐色微砂   | 22 灰褐色粘質土  |
| 4 淡灰褐茶色微砂 | 11 淡茶灰褐色微砂 | 17 淡灰黄色微砂    | 23 淡灰色粘質土  |
| 5 淡灰茶褐色微砂 | 12 淡灰褐色微砂  | 18 淡灰青色微砂    | 24 灰色粘質土   |
| 6 灰褐茶色微砂  | 13 淡灰茶色微砂  | 19 淡灰青色粘質土   | 25 淡灰黄色粘質土 |
| 7 淡茶灰褐色微砂 |            |              | 26 暗灰黄色粘質土 |

溝-321

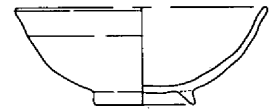


- |             |           |           |
|-------------|-----------|-----------|
| 1 淡灰茶褐色粘質微砂 | 4 淡茶褐色粘質土 | 7 暗灰色粘質土  |
| 2 灰茶褐色粘質微砂  | 5 灰色粘質土   | 8 灰茶褐色粘質土 |
| 3 灰茶褐色粘質土   | 6 灰色粘質土   | 9 灰色粘質微砂  |

溝-322



4902



4903



第329図 溝-321・322 (4902・4903)

溝-322 (第329図、図版102)

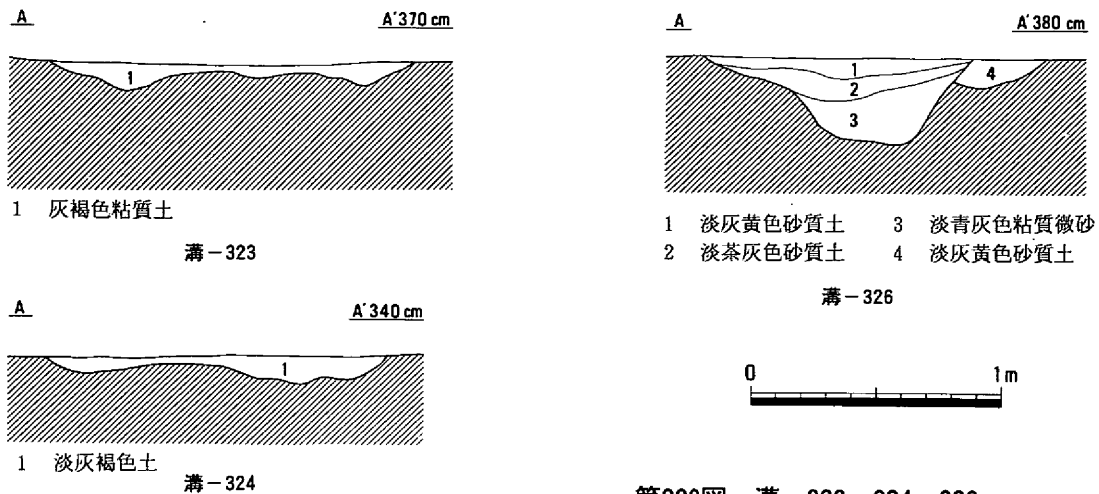
O19区南西部において、北東から南西に流路を置いて検出された。上幅240~300cm、深さ75cm程度の規模で、断面形はA a型を呈し、大きく3回の掘り直しを受けている。西端は溝-320・321に直角に合流しており、その合流部は大きく膨らんでいる。(光永)

溝-323 (第330図)

O19区南西部において、溝-322の南2.5mでこれと平行して検出された。上幅138~172cm、深さ13cmを測り、断面形はA a型である。東端は溝-324に直角に繋がるが、溝-322との平行関係が、これとの同時期性ないしはある時期にその機能を代替したものとして考えられる。(光永)

溝-324 (第330図)

P19区の南西に位置し、微高地下がりの縁辺を巡る。検出時の平面形態はL字状を呈し、断面形態は碗形である。規模は現状において長660cm、幅46~126cm、深さ9cm、底面海拔高は312~328cmを測る。流路方向についての推測は難しい。遺構の時期は周辺の状況から中世のものと思われる。(澤山)



第330図 溝-323・324・326

溝-325 (第325図)

P19区の南西に位置し、微高地下がりの縁辺を巡る溝-324と一部並行する。平面形は直線状を呈し、断面形は楕形である。規模は幅31~48cm、深さ10cm、底面海拔高は351~366cmを測る。流路はN-32°-W方向に伸びている。遺構の時期は周辺の状態から中世のものと思われる。(澤山)

溝-326 (第330図)

O19区南東部において、南東から北西方向へ流路が検出された。上幅120~164cm、深さ33cm前後の規模で、断面形はA b型である。溝-324が鋭角に屈曲する部分に開口する形となっており、これとの関係が考えられる。吉備系土師器碗4903・4904が出土しており、14世紀代に比定される。(光永)

溝-327・328 (第325図)

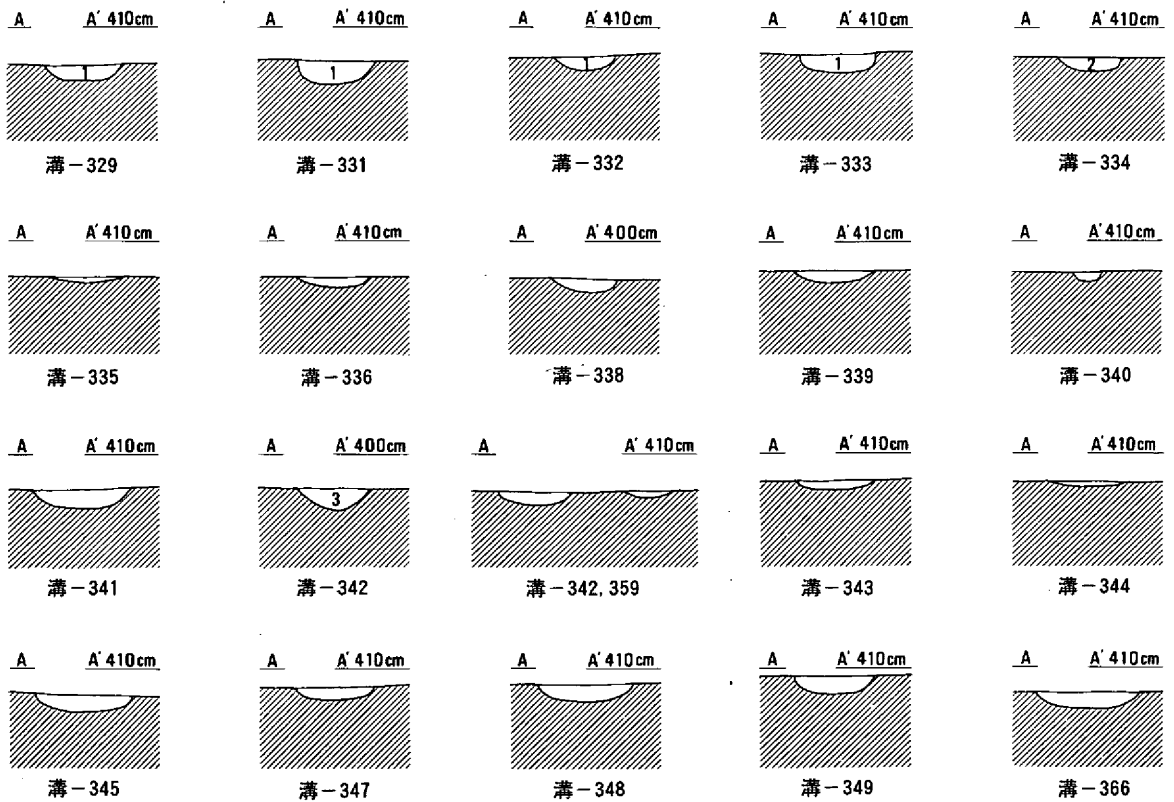
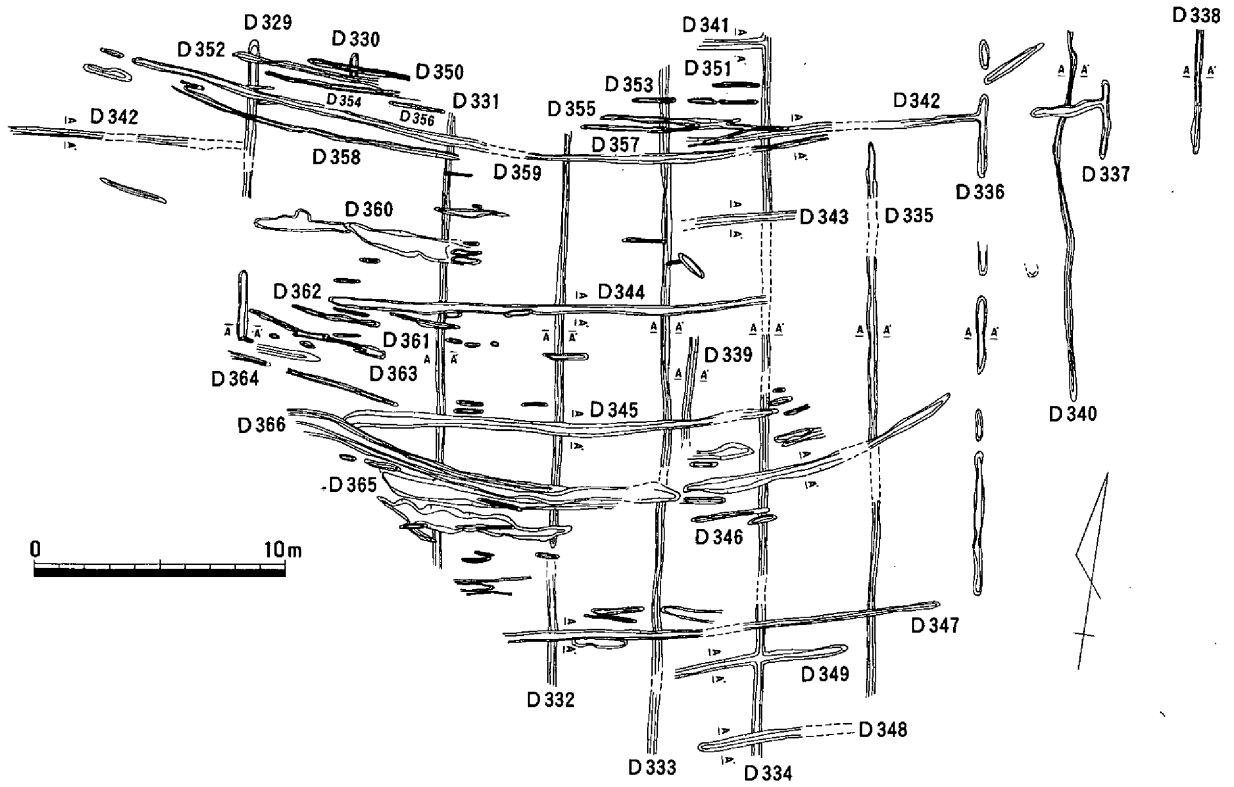
O19区中央部やや西寄りの位置に検出した。2本の溝は直線状を呈するもので約16mの間隔において平行に並ぶものである。細長い調査区に直行するため検出した全長は146~110cmと短い。幅は溝-328が少し広く150~144cm、溝-327が123~121cmを測る。時期は中世と考えられる。(井上)

溝-329~340 (第331図)

P・Q18区に跨り検出された南北溝12条である。N-5°-W前後の軸線でもって延長約30mを測る。溝-329・340はこれらとは若干様相が異なるものである。溝-329~338までの東西幅は37.3mを測り、さらに確認できた個々の溝中心間の距離は西から4.0m、3.8m、4.5m、4.15m、4.0m、4.35mと約4.0mに近い単位で分割されている。溝の幅は25~40cm、深さ8cmにて埋土は黄茶色系の粘質土からなる。溝-335から亀山焼の小片が出土しており、掘立柱建物-34・35等がこれらの溝を切って造られている。(高畑)

溝-341~367 (第331図)

前述の溝-329~340と直交する格好で東西におおよそ30条前後の痕跡が認められる。明瞭に連続するものと、それらより幾分古く部分的に溝形状を留めるものが存在する。溝-329~338等のような直線的に統一された方向性を持つものではなく、北側から南側に向かって緩やかに傾斜している微高地形状に則して弧を描きながら溝-329~338と「田」の字状を形成している。しかし、同時に併存した溝ではなく、東西溝が南北溝を切った状況を呈し、埋土においても掘立柱建物-34・35の柱穴埋土に近い黄茶灰色粘質土が認められた。これらは水田あるいは畑地における用排水路とか、それぞれの単位をある程度正確に把握する区画の基準遺構として計画的に造られたものであろう。(高畑)



1 黄茶色粘質土 2 茶褐色粘質土 3 茶黄灰色粘質微砂



第331図 溝-329~366

溝-368~379 (第325図)

中屋調査区の南東部に位置し、溝-301の西側に近接している。細い溝で、南北方向のものと西へ短くのびるものがある。南北方向の溝-378・379とこれに直交ないし西へのびる溝-368~377がある。溝-379では、幅6~22cm、深さ5cmを測る。これらの溝は水田や畑地の耕作に伴うものと判断される。時期は周辺の状態から中世に比定される。(正岡)

溝-380・381・387 (第332図)

溝-380・381はO18区南東部で3mの間隔で並行して検出され、溝-387はこれらから約29m離れてP19区北西部で検出されたが、前者と方向性を一にしている。上幅19~42cm、深さ11~16cmで、溝-320以西では数少ない素掘り溝である。(光永)

溝-382~386 (第325図)

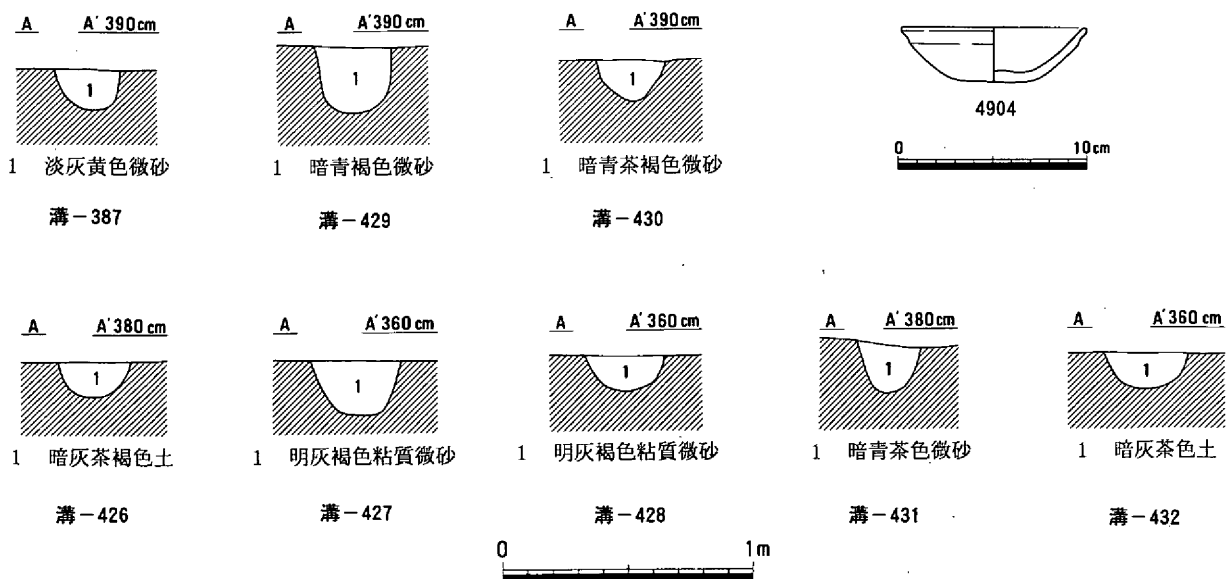
O19区の調査区境界で19ラインに接する位置に検出されている溝である。382~384は直線状を呈し、検出長も400cm程度、幅はほぼ20~45cm前後、深さは5cm前後を測り、南北方向に流走する溝である。385は若干方向が異なっているがほぼ直線状を呈する。386は北東から南西に延びるもので、前記溝と違っている。検出長536cm、幅20~25cm、深さ5cm前後。いずれも中世に属す。(二宮)

溝-388・389 (第332図)

P19区の北西、溝-313・314・315・317により形成される長方形区画内に溝-388・389は位置する。海拔314cmにて検出した2条の溝で、部分的に残存しており、長さ300cm、幅18~24cm、深さ2cmを測る。洪水砂層を除去しての検出であり、古墳時代後期と考えられる水田層を切って素掘り溝が造られている。(高畑)

溝-390~392 (第325図)

P19区南西部境界付近に位置して検出され、いずれもほぼ東西方向に向いている溝であり、その長さもほぼ同じように240cm程度、幅10~25cmで非常に浅い凹状の断面を示している溝である。この溝は299と302によって切られている。水田や畑に伴う耕作時の溝と判断される。(二宮)



第332図 溝-387~432

## 溝-393~399 (第325図)

P19区の微高地から水田に傾斜する面に位置する溝で、308の東辺でいずれの溝も微高地端部で直交するように検出されている。検出長300cm前後、幅10cm前後、これまた非常に浅い凹状の溝である。このように微高地上にて検出された溝は水田時ではなく畑作時の畦溝と判断される。(二宮)

## 溝-400~409 (第325図)

前記と同じP19区の微高地端部近くに位置していずれの溝も北西-南東方向の溝であり、溝の間隔も約200cm程度である。また、検出長もまちまちで数10cm~700cm程度までである。幅、深さはほぼ一定である。溝の性格は前述の遺構と同じと思われる。10本の溝の時期は中世に属するものであり、同時に存在していた可能性が高く、畑作の畦溝と考えられる。(二宮)

## 溝-410~425 (第325図)

P19区中央北辺の微高地上で北東-南西、北西-南東といったまちまちの方向で検出した溝であり、410~413の溝間は120~180cmの格子状を呈している。また414~417は並走、422、423、425はほぼ並走、424と423が直交。検出長は350~最長950cm、幅は最狭10cm程度から最広で50cm、深さはすべて浅く10cm以下である。乾田時の畦溝と思われる。中世に属すると考える。(二宮)

## 溝-426~428 (第332図)

P19区中央部の北端部に近い位置に検出した。3本の溝はほぼ東西方向に直線状に検出したもので、270~290cmの間隔をおいて平行に並ぶものである。溝の幅は44~35cm、深さ14cmを測る。断面形は何れもU字状を呈している。底面の海拔高は343~336cmを測る。時期は中世と考えられる。(井上)

## 溝-429~431 (第332図)

P19区中央部の北端部に近い位置に検出した。3本の溝は直線状に検出したもので、320~510cmの間隔をおいて平行に並ぶものであり、溝-426~428とは斜交する。溝の幅は48~19cm、深さ21cm、海拔高314~302cmを測る。断面形は何れもU字状を呈する。時期は中世と考えられる。(井上)

## 溝-432~437 (第332図)

O19区南東部で検出された素掘り溝群で、溝-433~437が約2.5m間隔で並行し、溝-432がそれらの南に約5m離れて方向を同じくして検出された。上幅30~38cm、深さ12cm前後の規模で、溝-436で長さ910cmを測る。方向性は北の溝-441~448に直交する形となっている。(光永)

## 溝-438~440 (第325図)

P19区の南西に位置する。いずれも検出時の平面形は直線状で、断面形は楕形である。規模は現状において長695cm、幅32~48cm、深さ25cm、底面海拔高は321~334cmを測る。流路はN-32~37°-W方向に延びており、前述の溝-324・325とほぼ並行する。遺構の時期は周辺の状況から中世と思われる。(澤山)

## 溝-441~448 (第325図)

P19区の南西に位置する。溝-441~445の規模は幅20~46cm、深さ11cmを測る。流路はN-71~79°-E方向に延び、西端はN-78~83°-E方向に曲がる。また底面にはピット状の凹みが連なって検出された。溝-446~448の規模は幅26~50cm、深さ3cmを測る。流路はN-71~73°-E方向に延びる。断面形は楕形である。遺構の時期は周辺の状況から中世と思われる。(澤山)

## 溝-449~456 (第325図)

P19区の南西に位置する。性格は耕作溝と思われる。いずれも検出時の平面形は直線状で、断面形

は椀形である。規模は現状において長1315cm、幅20～58cm、深さ26cm、底面海拔高は346～366cmを測る。流路はN-58～60°-E方向に延びており、前述の溝-438～440と直交する。遺構の時期は周辺の状況から中世と思われる。(澤山)

### (7) その他の遺構・遺物

中世の遺構を検出する過程で多量の遺物が出土している。これらの多くは、溝-70の埋土や水田層から出土したものである。

#### 土師器 (第333～335図、図版103)

4905～4938は灰白色を呈する土師器の椀で、いわゆる早島式土器である。4905～4913は口径11.4～10.0cm、器高4.0～2.9cmを測り、底部に断面三角形をなす高台を貼り付ける。4917～4936は口径12.4～10.9cm、器高5.0～3.4cmで、底部に貼り付けた高台は長く、断面矩形をなすものも見られる。これらはおおむね13～14世紀に位置付けられる。口径13.4cm、器高5.0cmを測る4937は、外面下半をヘラケズリし、内面にヘラミガキを施す。細砂を含む胎土は鈍い橙色を呈し、早島式土器とは異なる。4939は口径17.2cmを測る楠葉型の瓦器椀で、黒灰色を呈する内外面はヘラミガキで調整している。12世紀に比定される。

4940は古代に溯る杯で、口径9.7cm、器高3.4cmを測り、底部はヘラキリする。厚手につくられた皿4941・4942も底部をヘラキリするもので、4941は口径12.3cm、器高3.0cm、4942は口径16.5cm、器高3.4cmを測る。4943～4987は小皿である。このうち、4943～4946は口縁部が外反するもので、口径9.0～7.7cm、器高2.9～1.7cmを測る。4949～4987は、口径9.2～6.6cm、器高2.0～1.1cmを測り、いずれも底部はヘラキリしている。これらは椀4905～4938と同時期と想定される。

鍋4989～4991は径39.0～37.4cmを測り、口縁端部を丸くおさめる4989・4991と、あまい面をなす4990とがある。いずれも底部を欠いているが、外面を縦、内面を横方向に粗いハケメで調整する。

#### 陶磁器 (第335図)

4992・4988は魚住焼である。椀4992は、口径14.8cm、器高5.6cmを測り、径4.8cmある底部には糸切りの痕をとどめる。口径14.8cmを測る甕4988は、外反する口縁の端部が角張り凹面をなす。体部は下半を失っているが、外面には格子目タタキ、内面には弧状の当具痕を残す。

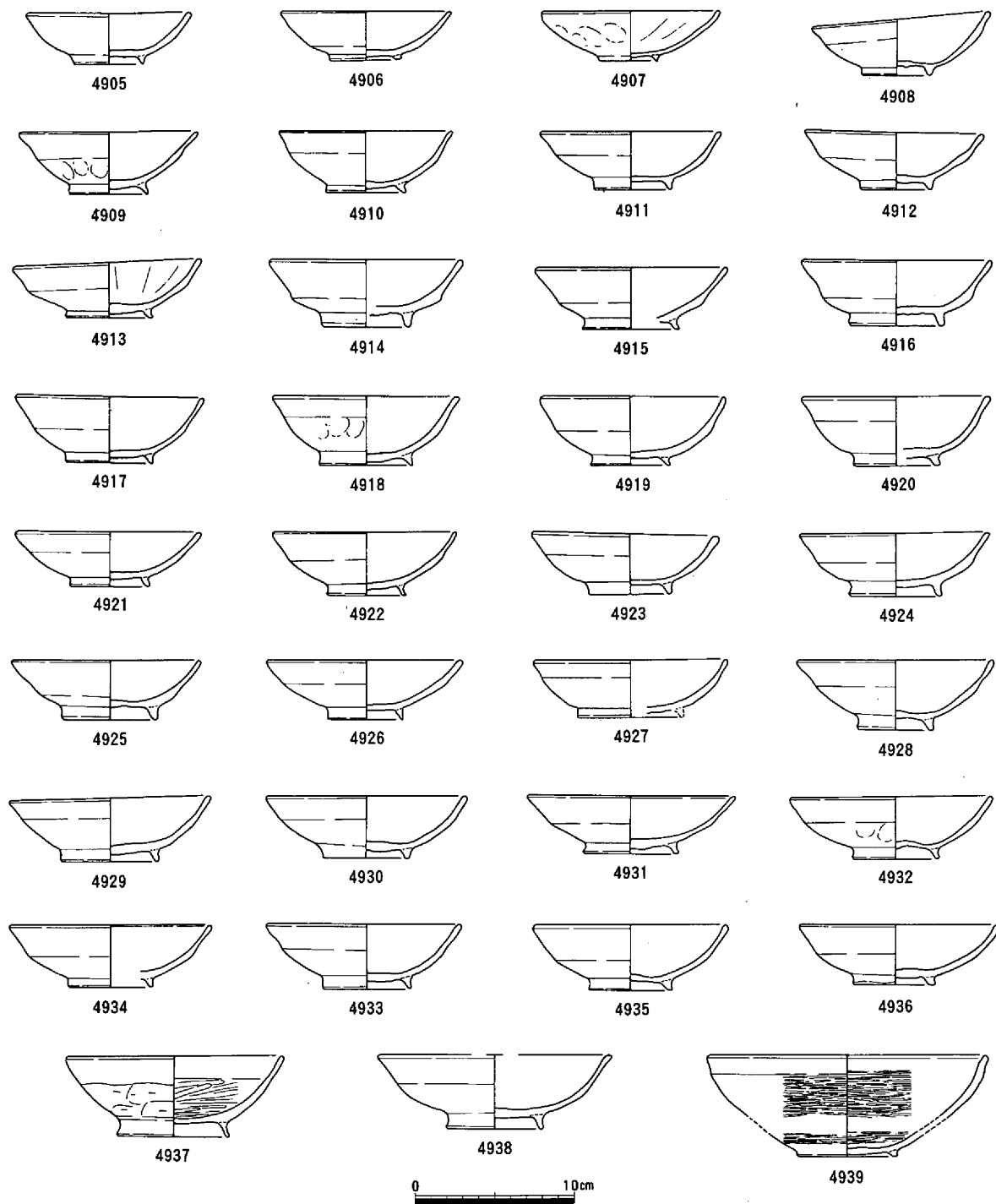
白磁4993～4999には、碗と合子がある。碗4993・4994は、口縁部が玉縁をなし、口径15.4～15.0cmを測る。4997・4999の高台は低く、削り出しもわずかであるが、4995・4996では高く、その断面は三角形をなしている。

5000～5006は青磁の碗である。5001は見込みに劃花文を飾るもので、低い高台は断面矩形をなす。口径15.0cmを測る5003は、輪郭で表した蓮弁文を飾る。5004・5005も細長い蓮弁文を飾る碗で、5004の見込みには文字印が認められる。いずれも13～14世紀代に位置付けられるものである。

5007は中・近世水田層から出土した唐津焼の椀で、口径6.6cm、器高4.1cmを測る。17世紀前半に比定される。染付5008は伊万里焼の碗で、18世紀に位置付けられる。

#### 土製品 (第336図、図版107・108)

土製品には土錘、面子、羽口、瓦などがある。これらの中には古代以前に遡るものも含まれている可能性があるが、識別が困難であるため一括して取り扱う。土錘は、有溝土錘C179・180と管状土錘C181～198に分けられる。有溝土錘は、長さ7.6～7.5cm、幅3.4～3.0cmの楕円形の主軸に沿って紐が

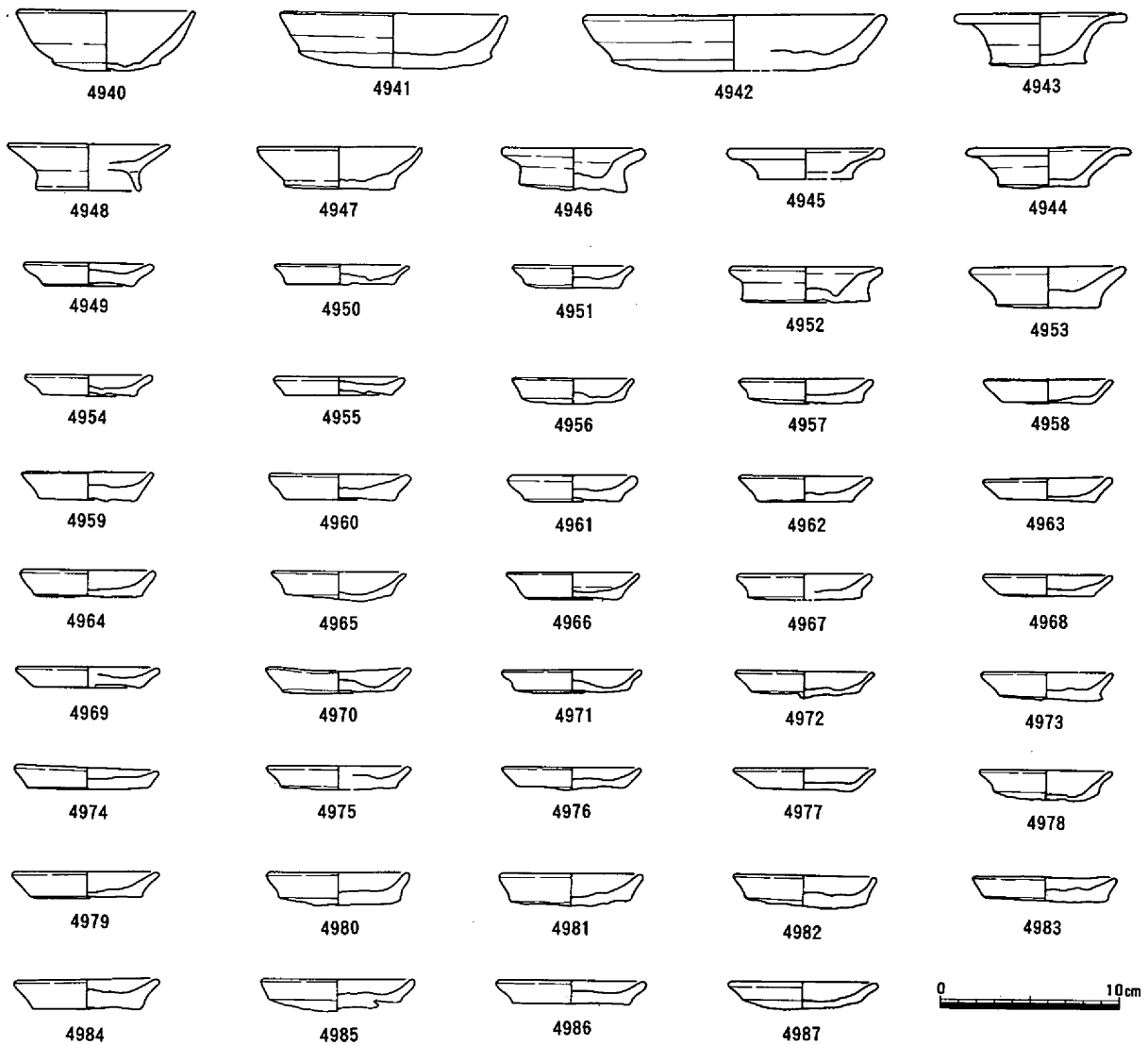


第333図 包含層 (4905~4939)

かりとなる断面V字形の溝をめぐらしたもので、重量は72~59gある。管状土錘は、棒状をなすC181~183・188~191・194~198と、中央が膨らむ紡錘形を呈するC183~187・192とがある。また、これらはその法量によって、長さ8.8cm、幅1.5cm、重量17.7gの1類、長さ6.4~5.2cm、幅2.1~1.8cm、重量23.3~18.7gの2類、長さ4.5~3.1cm、幅1.7~1.1cm、重量8.8~3.8gの3類に分けられる。いずれも河川における刺し網に用いられたものと推定される。

C199~202は土製円盤で、面子としての用途が想定される。C199は平瓦片を加工したもので、径5.2cm、厚さ2.1cm、重量66.3gある。周囲は擦って仕上げしており、片面に布目が残る。備前焼の破片





第334図 包含層 (4940~4987)

を打ち欠いたC200は、径5.3cm、厚さ1.4cm、重量48.4gを測る。C201・202は須恵器の破片を加工したもので、径2.7~2.2cm、厚さ1.0~0.9cm、重量6.9~6.8gある。このほかに、陶磁器の高台部分を利用して円盤状に加工したものがいくつか出土している。これらについては容器の栓としての用途が考えられる。C203は羽口の破片で、径7.7cm、孔径2.7cmに復元される。

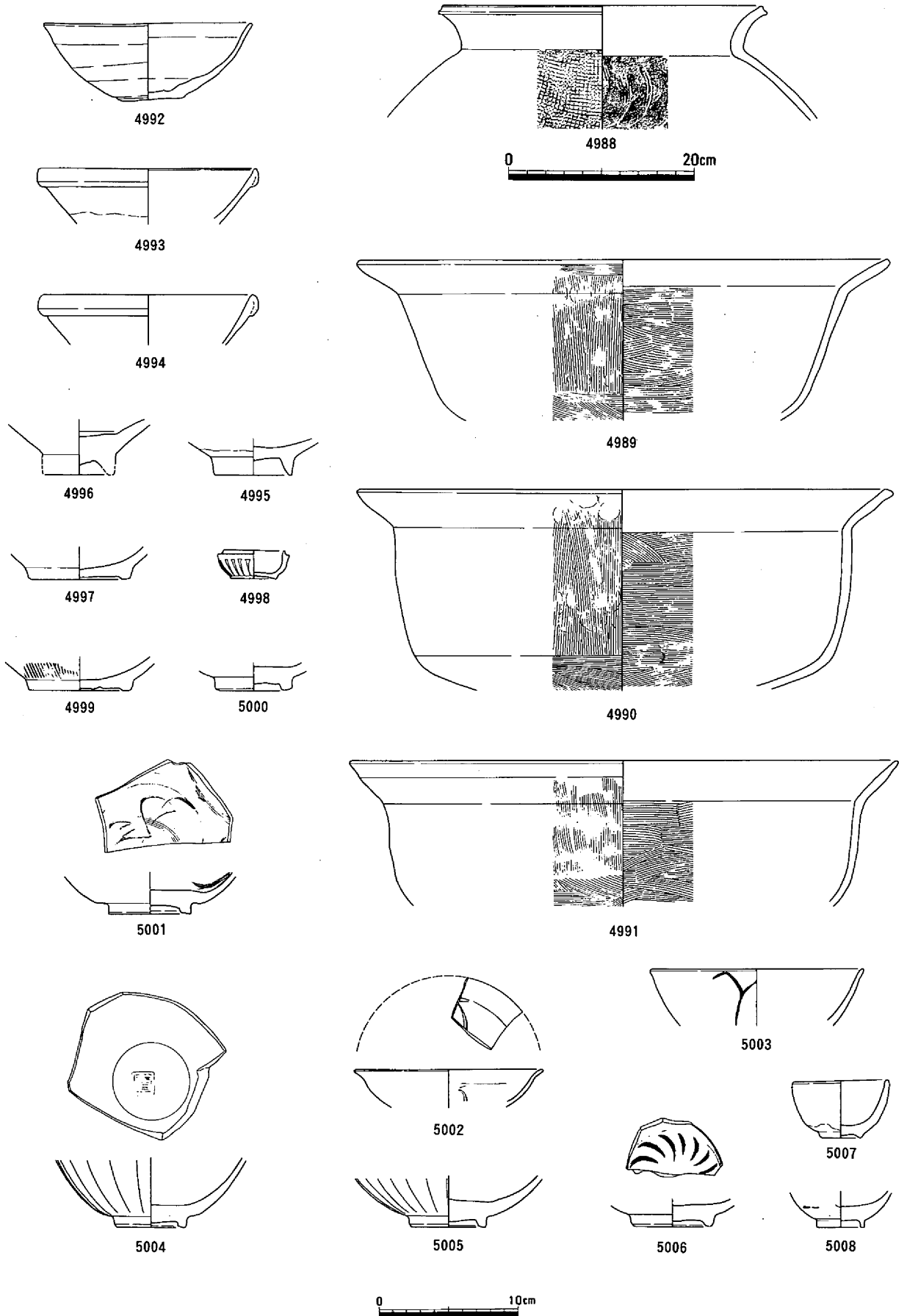
C204は唐草文を飾る軒平瓦である。瓦当面の幅は7.8cmで、弧顎となる。比較的堅緻な焼成を示し、中世前半の所産と考えられる。

**木製品** (第336図、図版112)

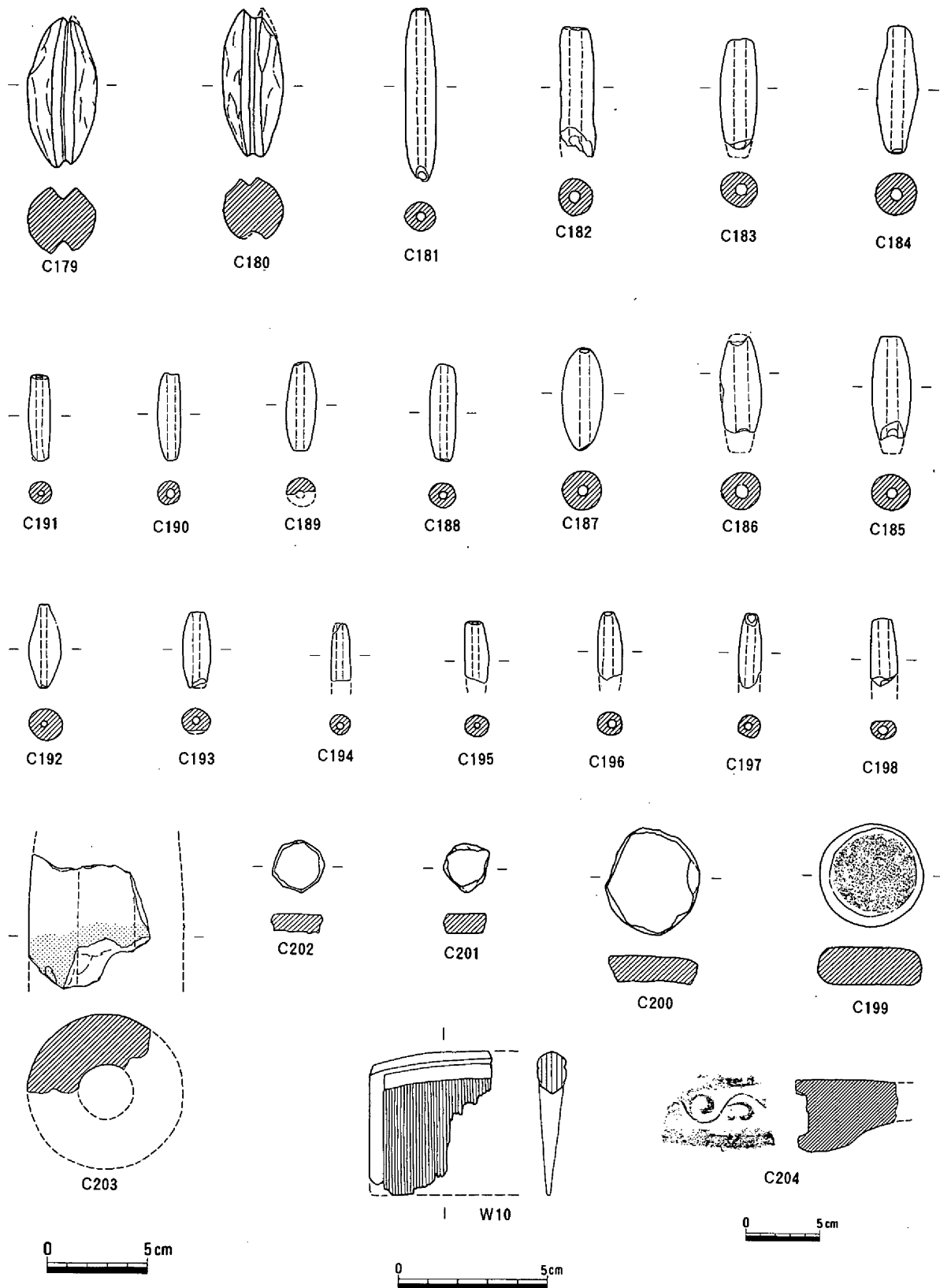
W10は中・近世の水田層から出土した横櫛である。過半を失っているが、現状で長さ4.0cm、幅4.8cm、厚さ0.9cmを測る梳櫛で、イスノキを素材としている。

**金属製品** (第337・338図、図版110・111)

金属製品には、鉄製の釘、刀子、火打ち金、金具、犁先のほか、銅製の刀装具や銭などがある。釘はいずれも頭部を折り曲げた角釘で、長さ6.0~5.1cmのM168~172、長さ8.8~7.7cmのM173~177、長さ13.1cmのM178に分けられる。M179は長さ2.7cmを測る銅製の釘で、幅0.2cmの頭部は笠形につく

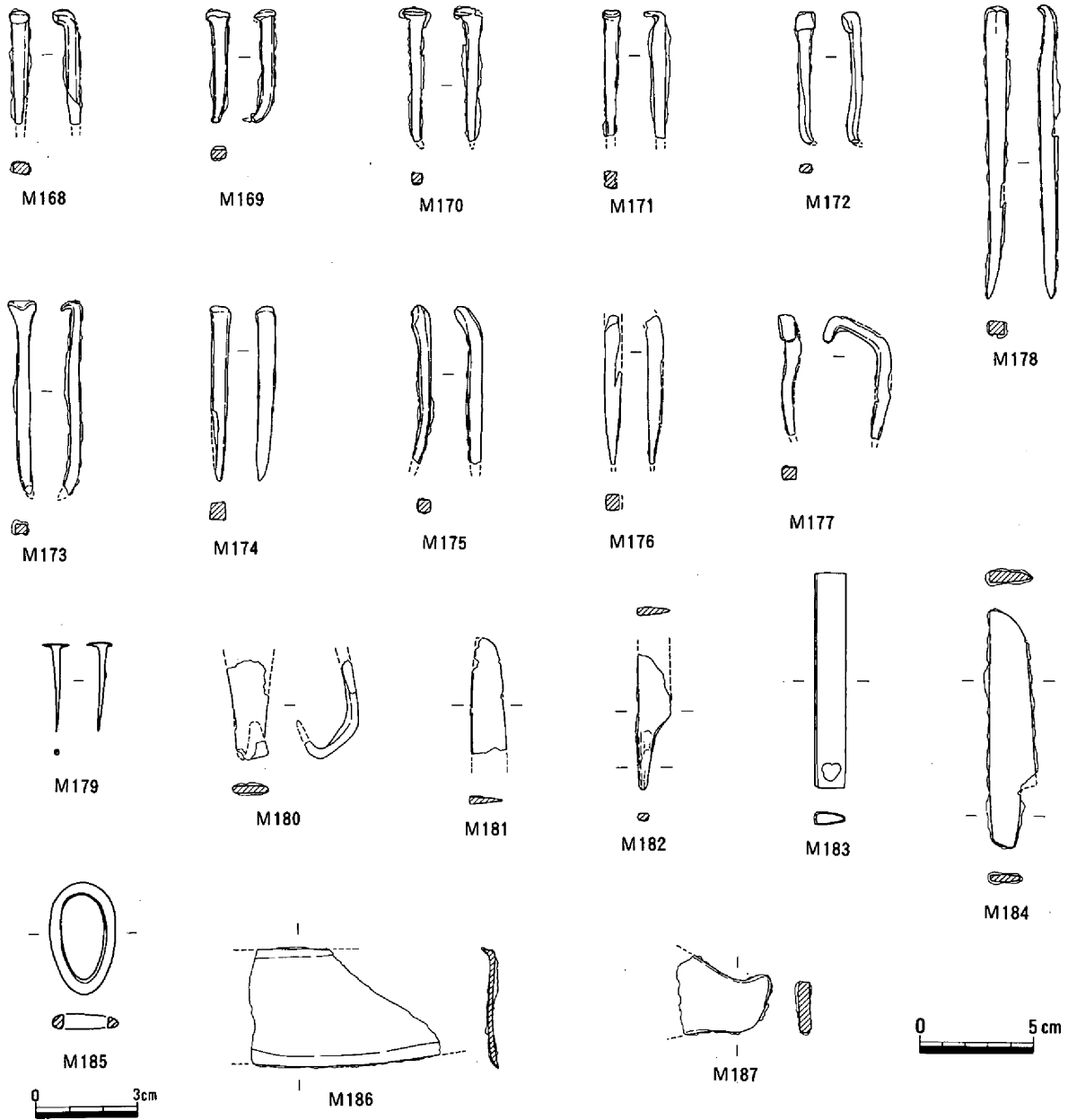


第335図 包含層 (4988~5008)



第336図 包含層 (C179~204・W10)

られている。全体にわたって鍍金が施されており、飾り鋏と考えられる。M182・183・184は刀子で、ほぼ完形のM184は長さ10.7cm、幅2.1cmを測る。M183は小刀の柄で、長さ9.6cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmを測る。銅の薄板を巻いてつくられており、基部には心葉形の透かしが見られる。M187は山形を

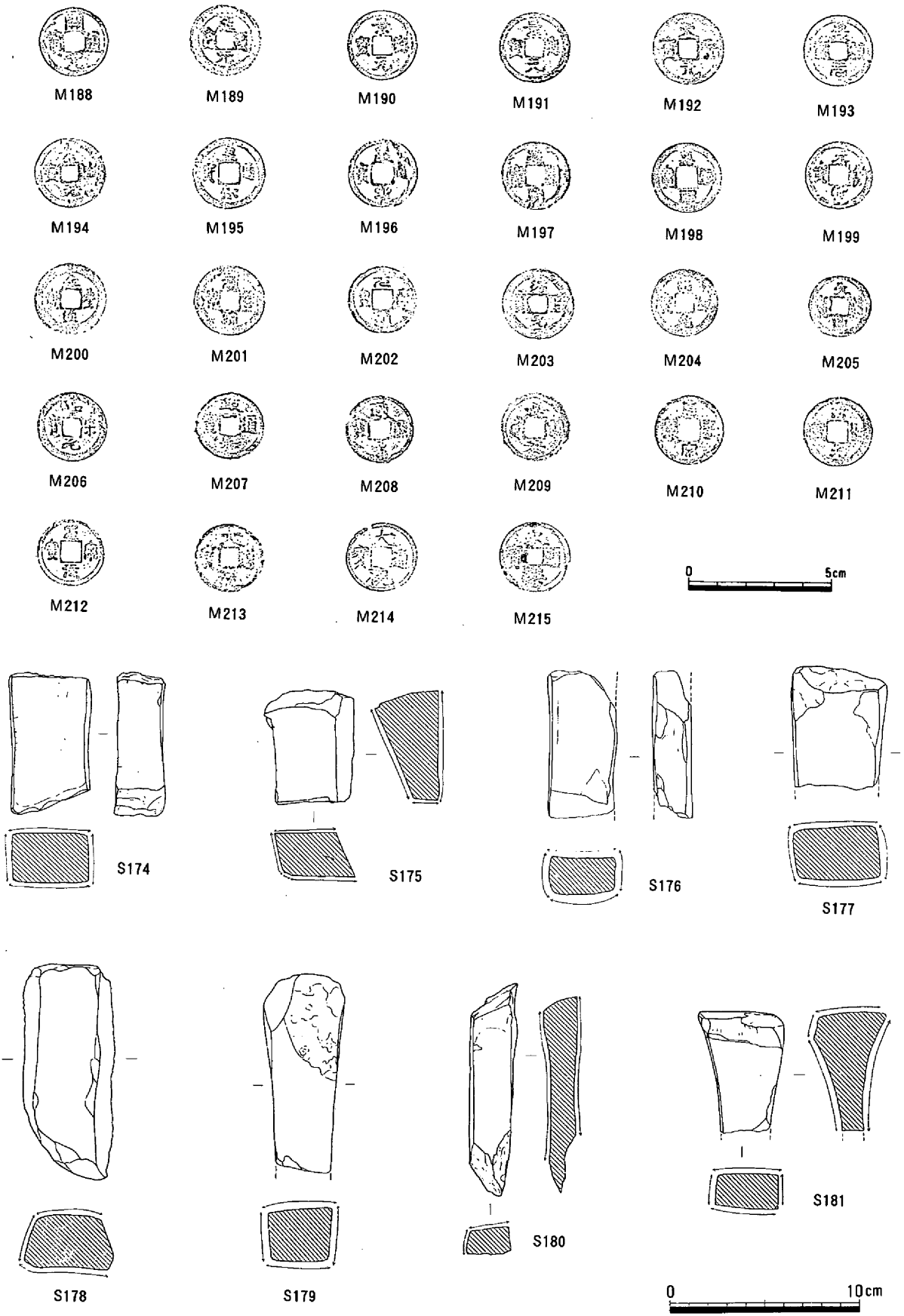


第337図 包含層 (M168~187)

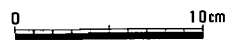
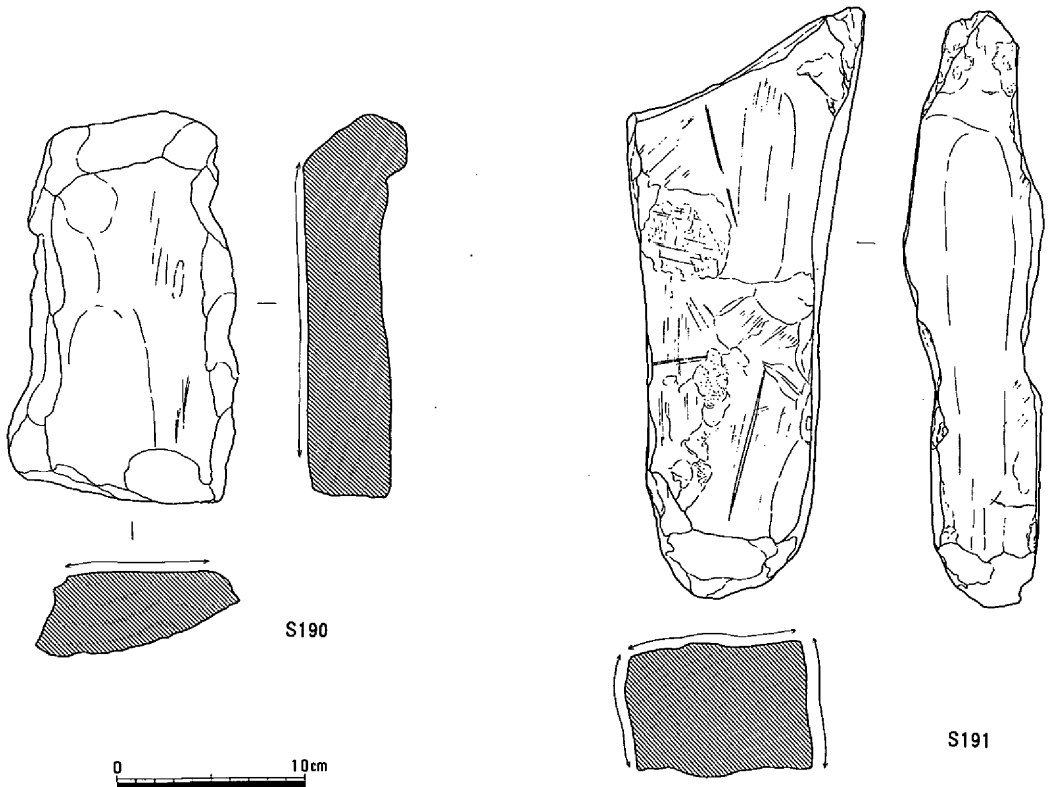
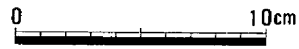
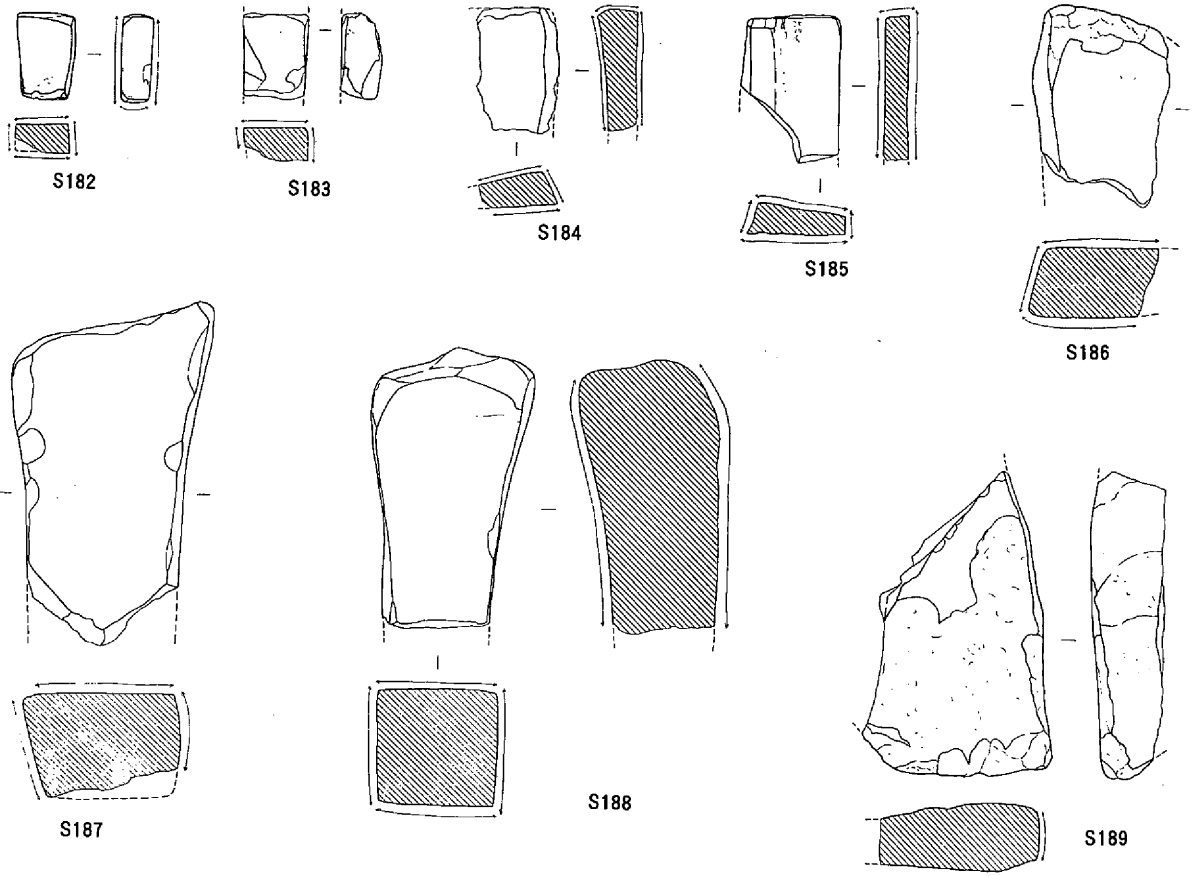
なす火打ち金で、過半を失っているが厚さは0.5cmある。銭はいずれも中国からの輸入銭で、径2.6~2.2cm、厚さ0.2~0.1cm、重量4.9~2.0gを測る。このうちM188~209は縐状を保って出土したものである。M188は唐の開元通寶(初鑄621年)、M189は北宋の至道元寶(同995年)、M190・191は北宋の景德元寶(同1004年)、M192は北宋の天聖元寶(同1023年)、M193・194は北宋の景祐元寶(同1034年)、M195~197・210は北宋の皇宋通寶(同1039年)、M198は北宋の嘉祐通寶(同1056年)、M199~201は北宋の元豐通寶(同1078年)、M202は北宋の元祐通寶(同1086年)、M203・204・211は北宋の紹聖通寶(同1094年)、M205は北宋の元符通寶(同1098年)、M206・212は北宋の聖宋元寶(同1101年)、M207・208は北宋の政和通寶(同1111年)、M213・214は北宋の大觀通寶(同1078年)、M209は南宋の嘉泰通寶(同1201年)、M215は明の永樂通寶(同1408年)である。(亀山)

石製品(第338・339図、図版105)

S174~S191は砥石である。S174は中形で、使用された面は滑らかに摩滅しており、表面には鋭



第338図 包含層 (M188~215・S174~181)



第339図 包含層 (S182~191)

い細線状の使用痕が見られる。S175は表面に縦方向の使用条痕が見られる。S176は表面は平坦に欠損したのちに再利用されたもので、側面は縦方向の溝状使用痕が多く見られる。裏面は欠損後、わずかに使用の跡が見られる。S178は細粒の花崗岩質のもので、重量が大きい。S179は表面上半部を欠損後も使用の跡が見られる。S180は裏面が板状に剝離したあとに摩滅痕が見られる。S181は残存部の5面が使用のため摩耗し、表面、裏面ともに縦方向の条痕が見られる。特に上端部の狭い範囲には深く鋭い条痕が顕著に見られる側面、上面は横方向に条痕が見られる。S182～185は小製品で、薄い板状を呈す。携帯用の砥石としての用途が考えられる。S182、183は使用面が滑らかに摩滅しており、全体に多方向への条痕が見られる。S187は中央部がやや凹面をなし、使用による摩滅が集中する。S188は表面に縦方向の条痕が見られる。S190、191は大形品である。S191の材質はホルンフェルスで、裏面を除き全体に光沢をもち、摩滅度が高い。弥生時代の遺物の可能性がある。(澁田)

## 第4章 高田調査区

### 第1節 調査の概要

#### (1) 調査区の概要

高田調査区は、津寺遺跡の東部にあたり、西端は中屋調査区と、東端はこれも山陽自動車道建設に伴って調査された政所遺跡と接する。調査面積は8,372㎡である。平成2年に道路敷盛土部分、橋脚部分、および水路部分の一部の調査を行った。また、平成3年度・4年度には付帯する水路付け替え工事に伴って小面積の調査を行った。

発掘調査は、道路敷盛土部分を12の小区画に分割し、これを5つの調査班が分担して進めた。また、6ヶ所の橋脚部分については、2つの調査班があたった。実際の発掘調査にあたっては、現在の耕作土および近世以降の水田層の一部を重機によって掘削し、これより下位について、遺構・遺物の検出に努めた。このため、近世水田の広がり等は、十分な把握をできなかった。

次節以降で報告する遺構は、竪穴住居94軒、掘立柱建物26棟、井戸3基、土器埋納墳3基、焼成土壇10基、土壇26基、土壇墓1基、溝108条である。これらの他にも、多数の柱穴、土壇等が検出されたが、形状が不定なものや遺物を伴わなかったものなどは、一部割愛している。 (大橋)

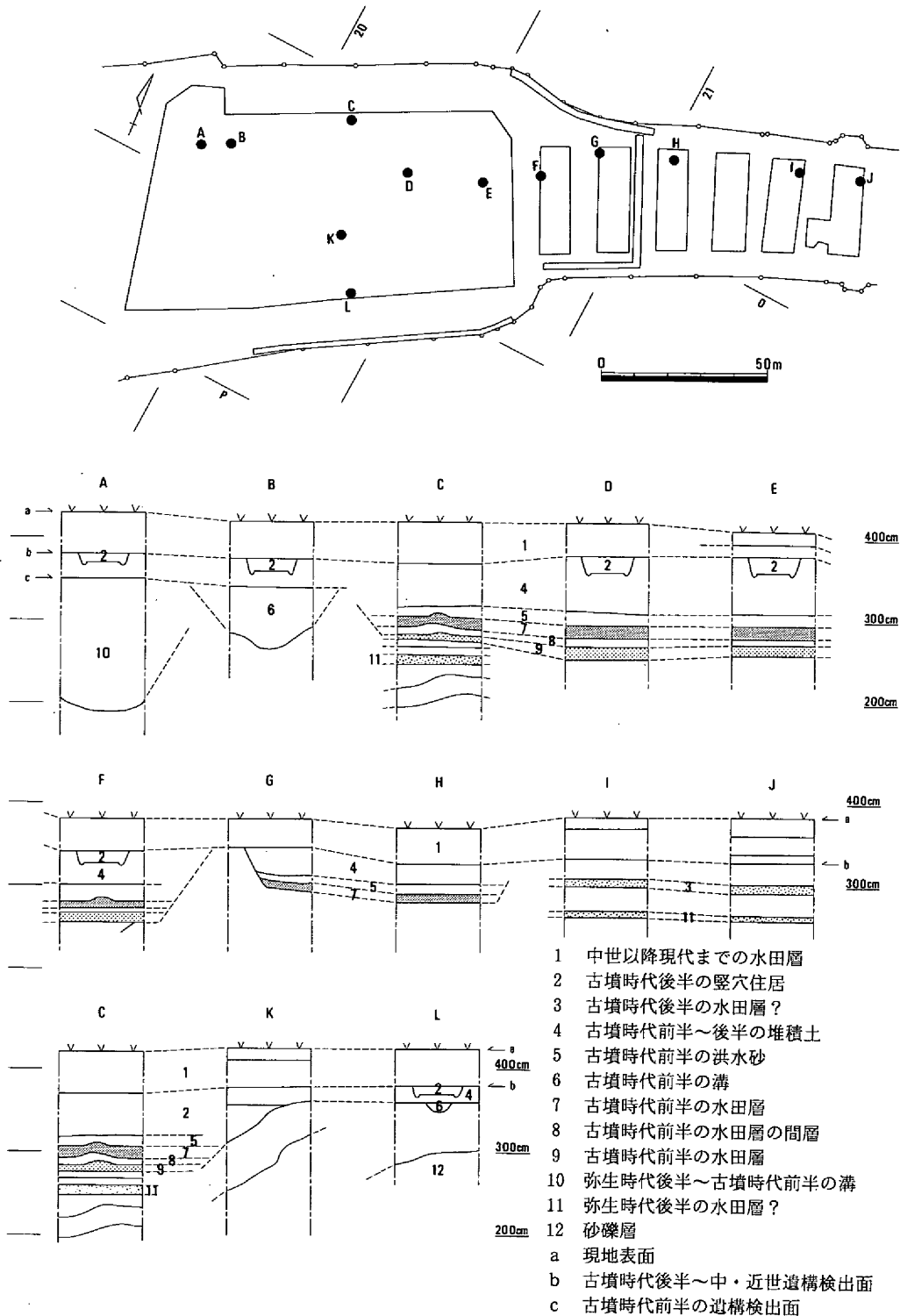
#### (2) 基本層準と地形・土地利用の変化

調査区の基本層準を模式的に表したのが第340図である。調査前の状況は、標高420cm～370cmとやや東へと低く傾斜して水田が全域に広がる景観を見せていた。

今回の調査で明らかとなった最も古い遺物は弥生時代前期のものである。これは、遺構に伴わずK地点付近を頂点とした三角形に広がる微高地から出土している。L地点の12層がこの微高地の核となる礫層であり、弥生時代前期以降の堆積の進行に伴い微高地が形成されていったものと思われる。西側で隣接する中屋調査区との間はやや低くなり、これを利用して溝が南流している。また、この微高地と周囲の低位部の比高差は約60cmほどと思われる。確実に、この低位部に水田が営まれるのは古墳時代初頭段階であるが、C・I・J地点ではこれより下層に水田層が認められており、弥生時代後期までその開始時期が遡るとも推測された。古墳時代初頭段階には、比較的安定した微高地と水田といった景観が想像される。7・9層で示すように少なくとも2段階の水田層が確認されている。これ以降、激しい洪水、土砂の堆積が認められる。5層は水田を被覆する洪水砂層である。これによって水田は放棄され、遺構・遺物ともほとんど見られず、荒廃した状況が看取される。また、絶え間ないこうした土砂の堆積の進行によって、大幅な地形の変化がもたらされ、かつて水田が広がった低位部は埋没し、微高地へと変化していったものと思われる。こうして、安定した居住地が営まれたのは、古墳時代後半6世紀後半からである。この時期、居住域は東西でA地点からG地点まで広がるが、そ



の竪穴住居の床面標高に著しい差異は認められず、比較的平坦な地形状況が復元される。また、G地点以東には、居住域が広がらず、東接する政所遺跡までのあいだは、なお荒廃した湿地であったと思われる。この地形、および土地利用のありかたは古代の時期まで大きくは変化ない。中世以降においても基本的な地形の状況は変化なく、微高地として居住が許されるのはG地点以西である。しかしながら、K地点を頂点とした安定した微高地を残し、この段階に再び耕作が始まる。そして、近世後半には、ほとんどが現在のような水田景観へと変化していく状況がうかがえる。 (大橋)



第340図 高田調査区基本層準模式図

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

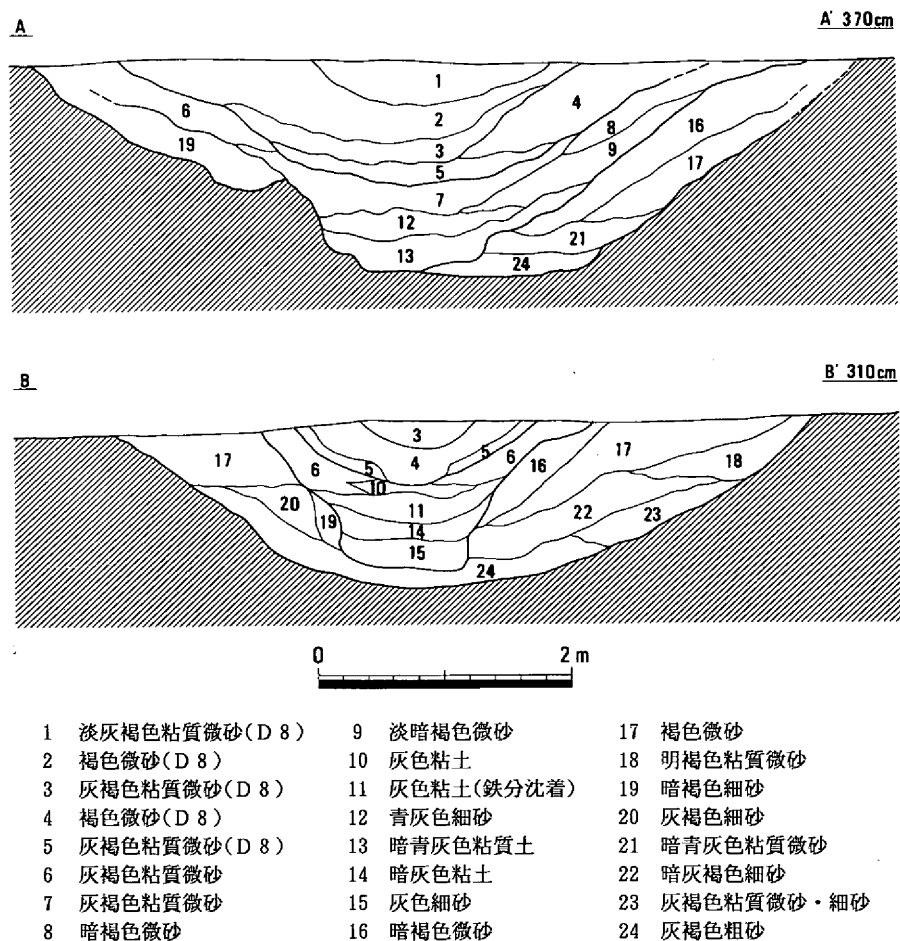
### (1) 概要

弥生時代の遺構としてここで報告するのは溝6条である。この時期、高田調査区には住居域は認められず、溝以外の遺構は検出されなかった。前節で触れたように主に低位部であったためと考えられる。また、範囲等詳細が不明であったため個別に触れることはできなかったが、溝-5の東部で水田層と思われる層位を確認している。弥生時代後期のものと判断されたが、部分的な把握にすぎず、全容は不明であった。この地の水田開始時期が一部この時期に遡及する可能性は残される。(大橋)

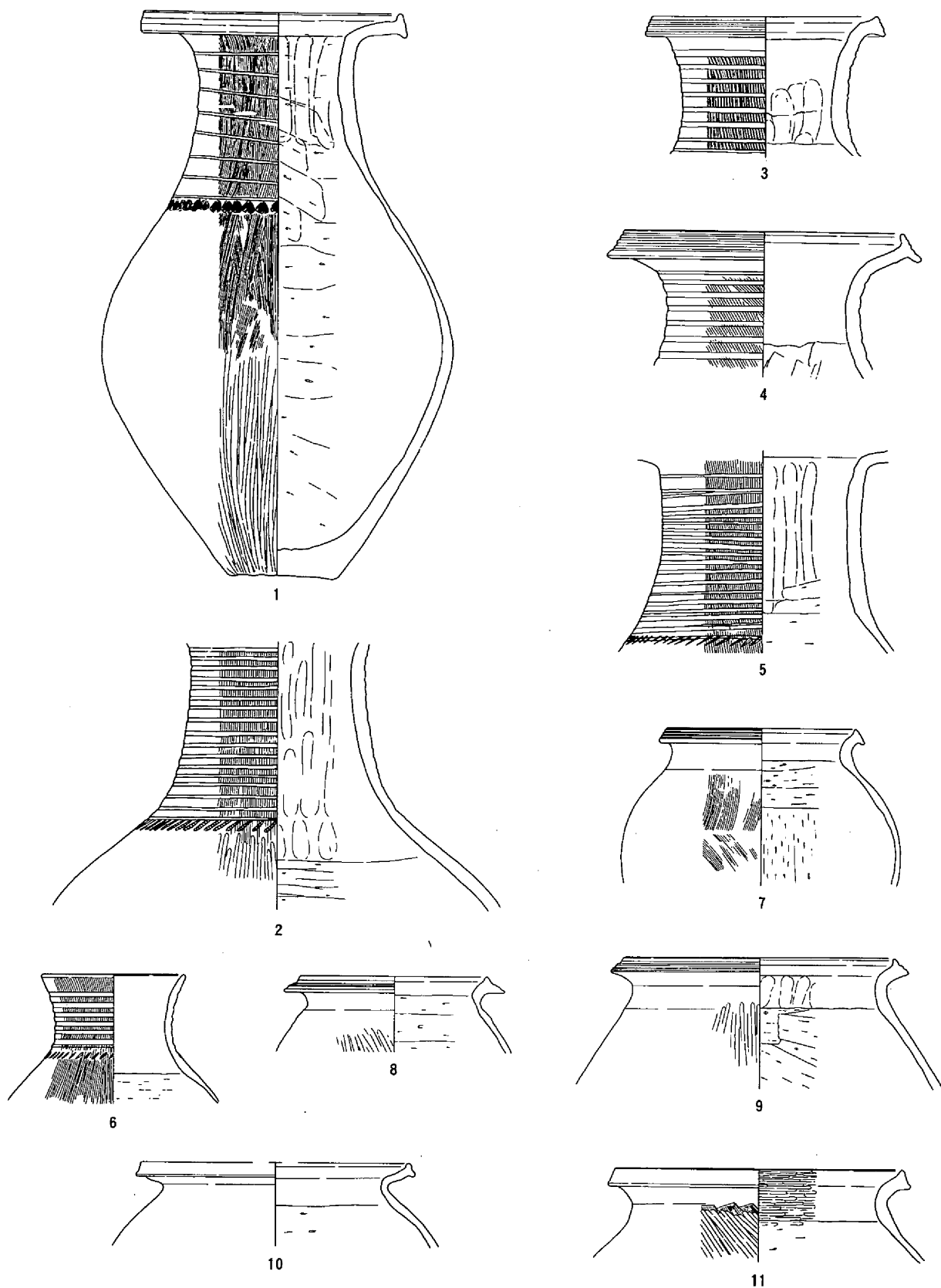
### (2) 溝

溝-1・2 (第341~344図、図版128・141)

溝-1・2は、調査区の西端で検出された。北西方向から逆「く」の字に屈曲し、南流する溝である。第341図の土層断面に示す1~5層は古墳時代前半の溝-8であり、6~15層が溝-2である。溝-1は16~24層である。このように、土層断面観察を中心にして大きく3段階の同一流路をとる溝

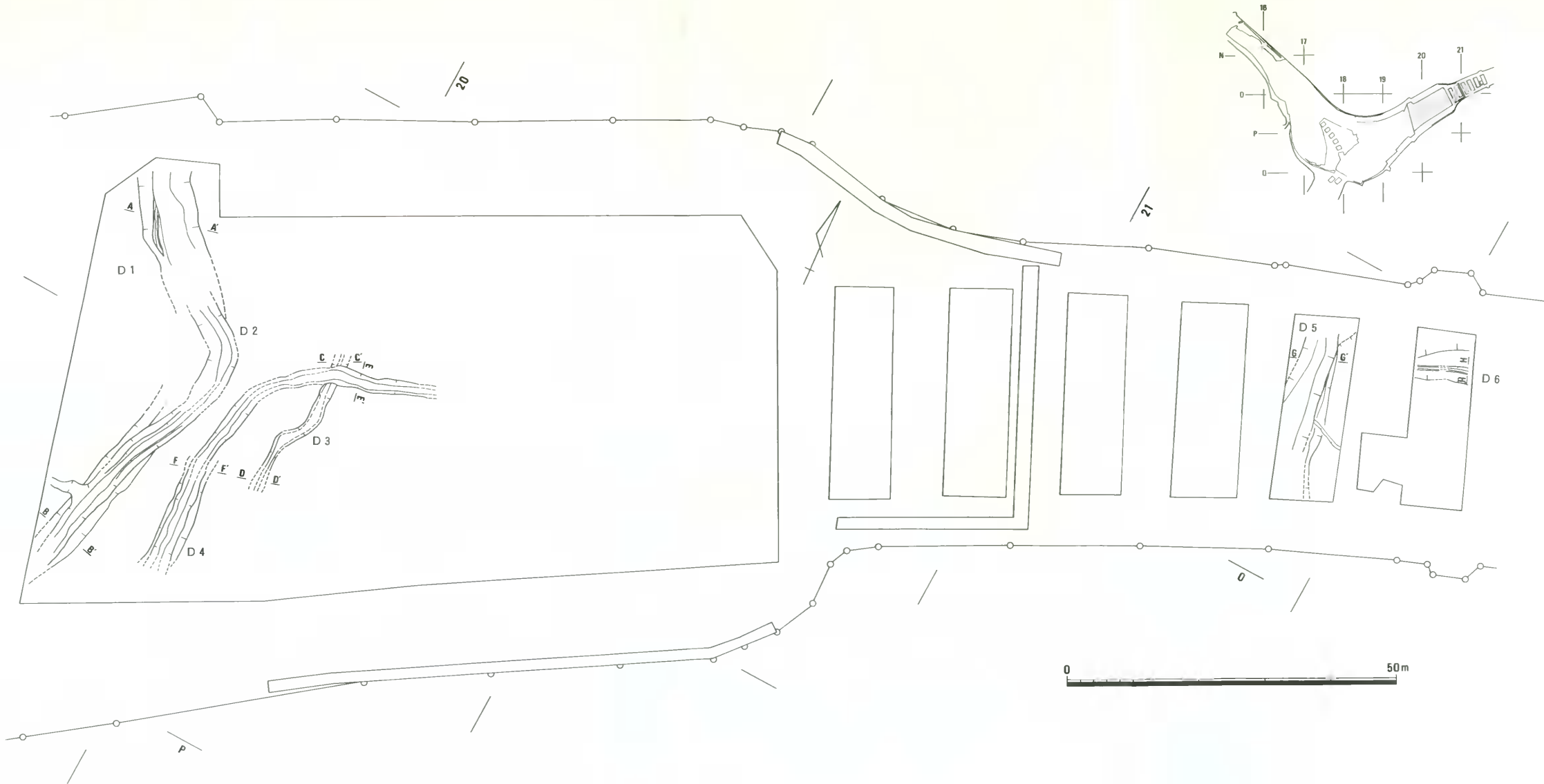


第341図 溝-1・2

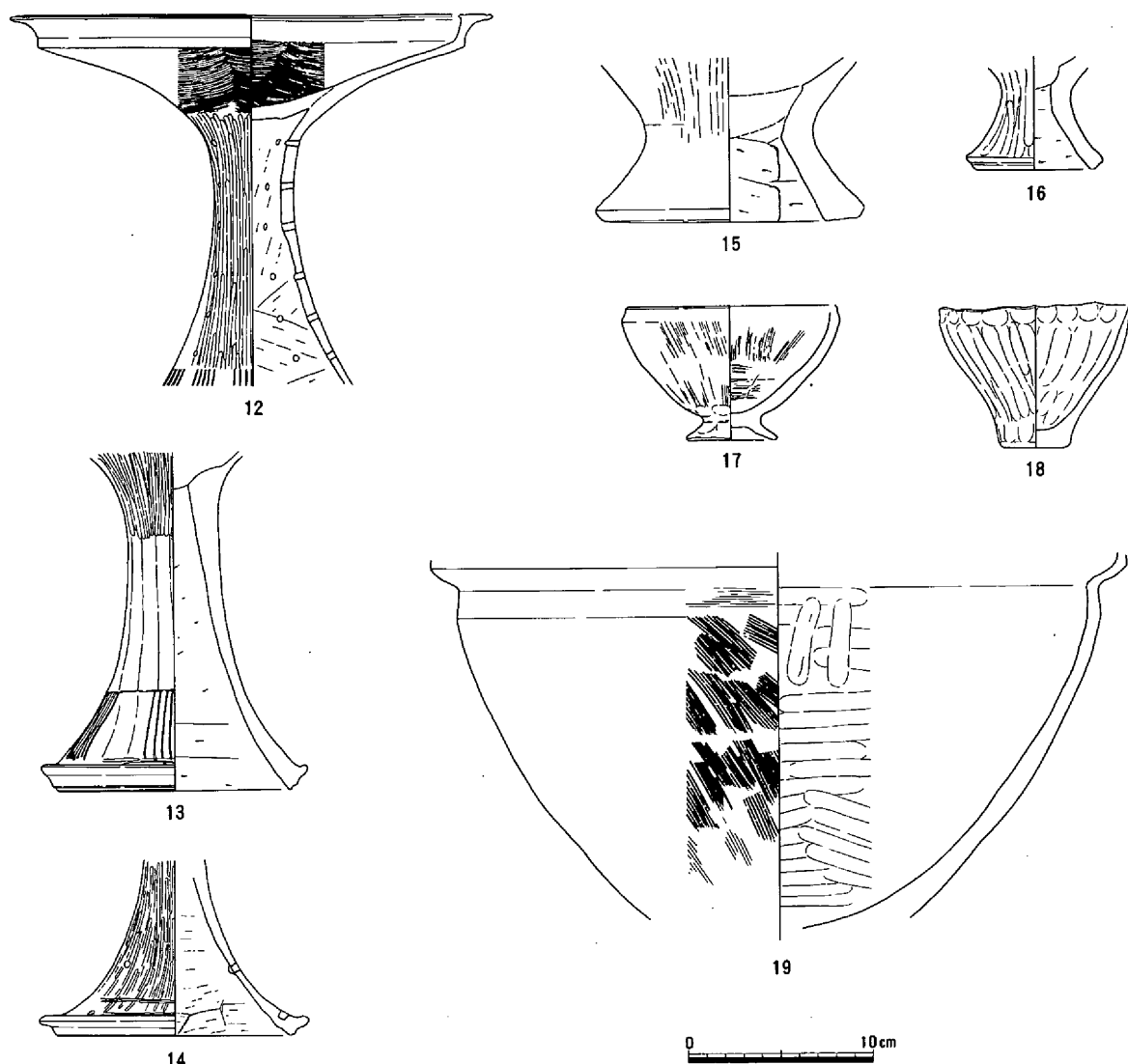


0 10cm

第342図 溝-1・2 (1~11)



第343図 高田調査区弥生時代遺構全体図 1/600



第344図 溝-1・2 (12~19)

の重複と理解したが、堆積状況、溝底の形状などからさらに複数回の底浚えなどが看取され、長期間にわたる踏襲利用が想定できる。ここでは、弥生時代の溝-1・溝-2について説明を加える。

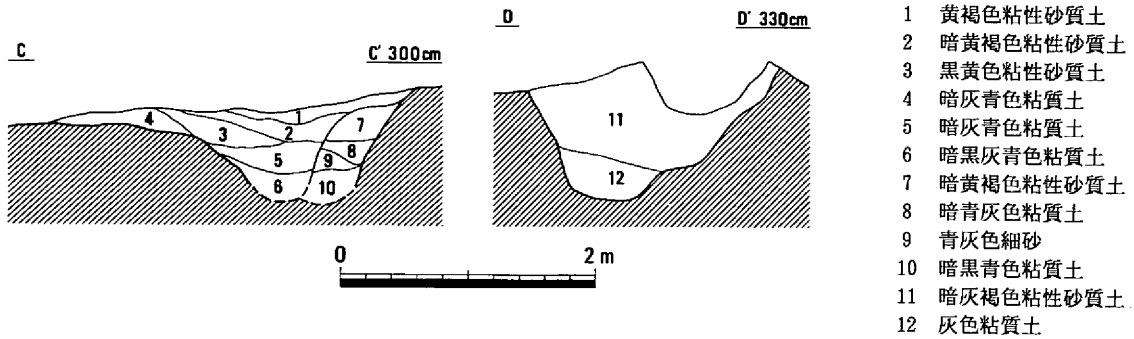
溝-1は、検出面での幅850cm、深さは最も深い位置で165cmある。溝底の標高は150cm~188cmであり、南方向へ流れるものと判断された。最下層には粗砂が堆積している。溝-2は上流部が平面的には確認できていないが、土層断面観察によって把握している。検出面での幅550cm、深さは175cmを測り、溝底の標高は171cm~195cmである。また、調査区南端部近くで西側へ幅200cmの溝が分流し、中屋調査区へと続く。B-B'の断面図に示すように11層は粘土層であり下面には鉄分が沈着していることから、ある時期の流量の減少と滞水状態が推測される。溝-1・2は中屋調査区と高田調査区間に広がる低位部、あるいは自然河道を利用して用水路として掘削されたものと考えている。

出土遺物は1~19を図示したが、このほかにも多量の土器がある。1~5は長頸壺、7~11は甕、12~14が高杯、15~17は台付鉢、18・19が鉢である。溝-1・2間での接合資料もあり、遺物から詳細な時間差は明らかにしえなかった。溝の埋没時期は長頸壺に見るように弥・後・II~III段階の時期が中心と考えられるが、掘削開始時期はこれより遡る可能性は否定できない。調査範囲内ではこの段階の確実な水田の広がりを捉えきれていないが、近隣にあるものとする根拠の一つとなる。(大橋)

溝-3 (第343・345図)

溝-1・2の東方12mで南北に流路をとる溝である。幅220cm、検出面からの深さは74cm、溝底の標高は209cmである。後述する溝-4に切られ、また南端、北端とも古墳時代の溝と重複しており方向が不明となっている。この溝もおそらくは南流するものと思われる。

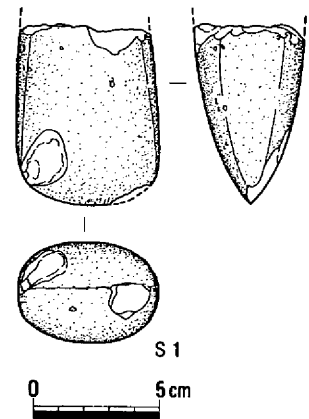
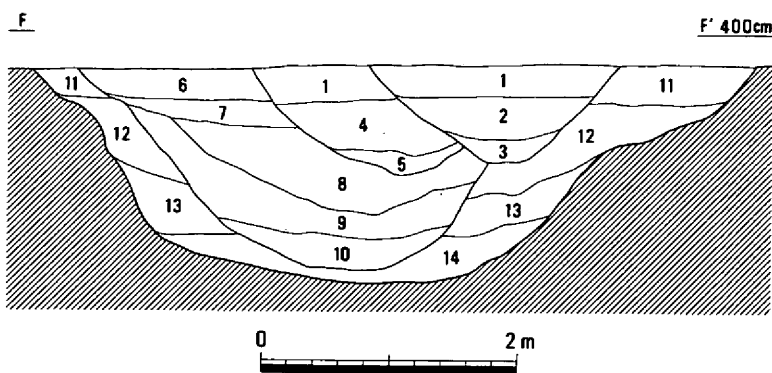
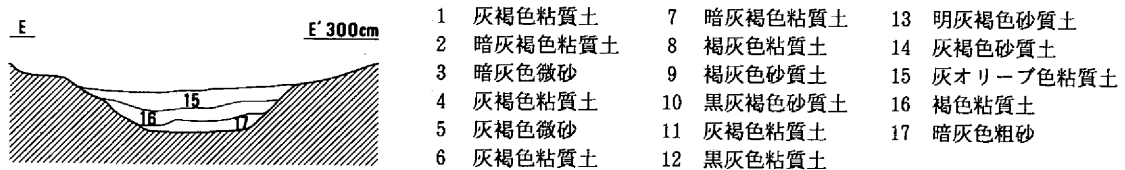
出土遺物は図示していないが、弥生時代後期の土器片があり、この時期のものとして推測した。(大橋)



第345図 溝-3

溝-4 (第343・346図、図版161)

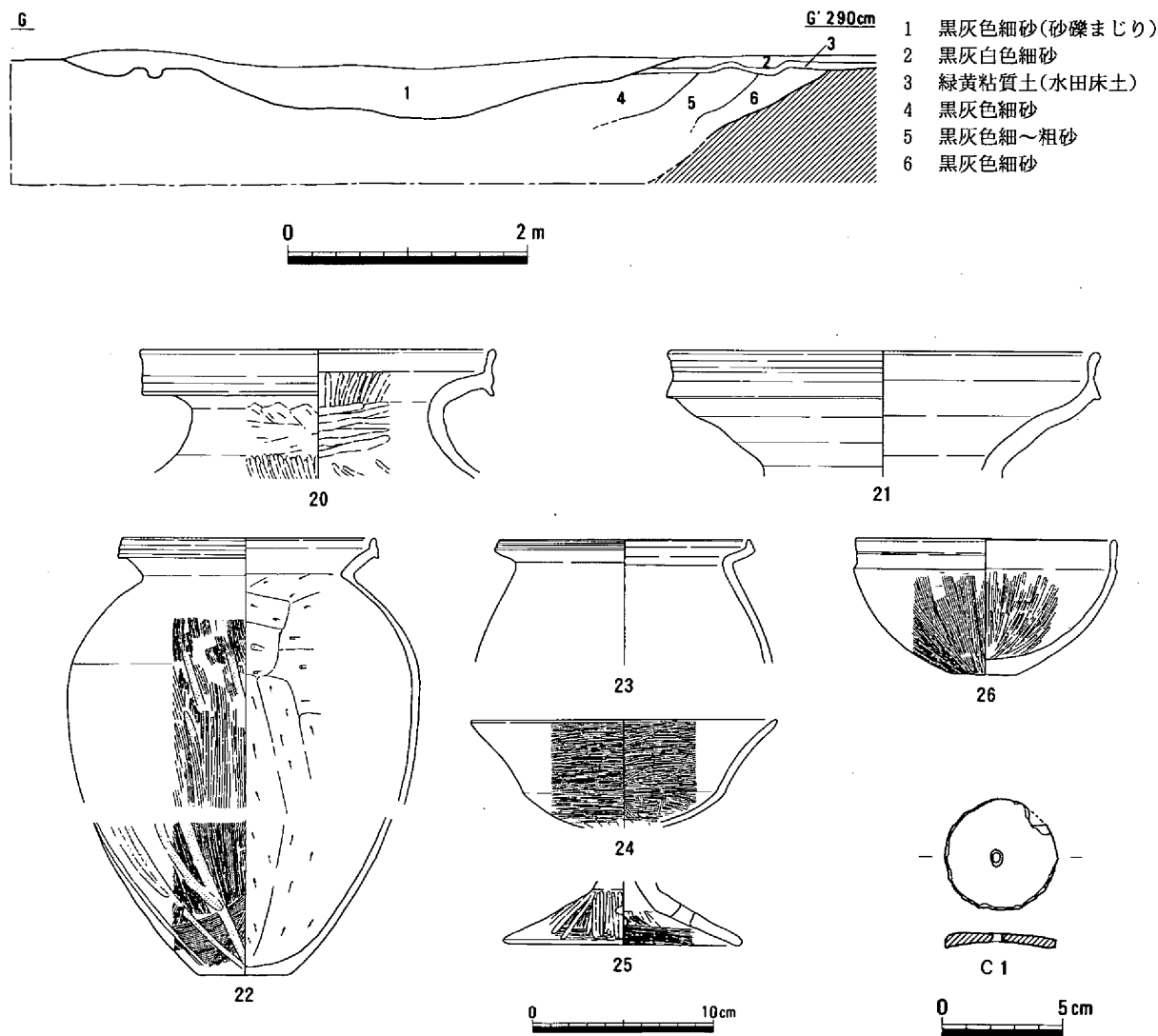
溝-4は、溝1・2の東6mで検出した溝である。東西方向から屈曲し南北方向に流走する。溝-3を切る。検出面での幅は、最も広い箇所では550cmを測り、深さは170cmを測った。溝底の標高は201cm~239cmである。なお、土層断面図F-F'に示す1~5層は古墳時代前半の溝-10であり、この部分で重複している。また、この溝自体も大きくは2条の重複と判断され、11~14・17層が古段階、6~10・15・16層が新段階と考えられる。出土遺物は、弥生時代後期の甕の破片があり、この時期のものとして推定している。また、図示したS1の安山岩製の蛤刃の磨製石斧が出土している。(大橋)



第346図 溝-4 (S1)

溝-5 (第343・347図、図版141)

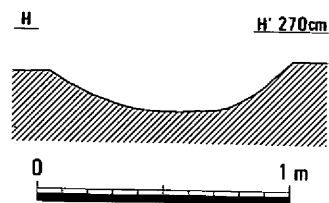
N21区の南西部に位置し、北西から南東に流走しているものと考えられるが、幅や深さについては土層の識別が困難であったため必ずしも明確ではない。断面図に示したように、埋土は大きくは1層(上層)と4・5・6層(下層)とに区分することができ、しかも弥生時代の水田層と考えられる2・3層の堆積状況から、上層と下層とに時期差を想定することができるものの、各層から出土した土器からは明確な時期差を捉えることができなかったため、一つの溝番号にして掲載している。遺物は土器、土製紡錘車が出土している。図示した土器のうち、23は弥生時代中期と考えられるが、その他は弥・後・IVであろう。また22の底部として図示した土器の外面にはカゴメが観察できた。(平井)



第347図 溝-5 (20~26・C1)

溝-6 (第343・348図)

N21区の中央部に位置し、検出できた幅は48~96cm、深さは30cm前後で、埋土は淡褐灰色粘土である。出土遺物はなかったが、溝-5で述べた弥生時代後期の水田層を除去したのちに検出できており、時期は弥生時代であろう。(平井)



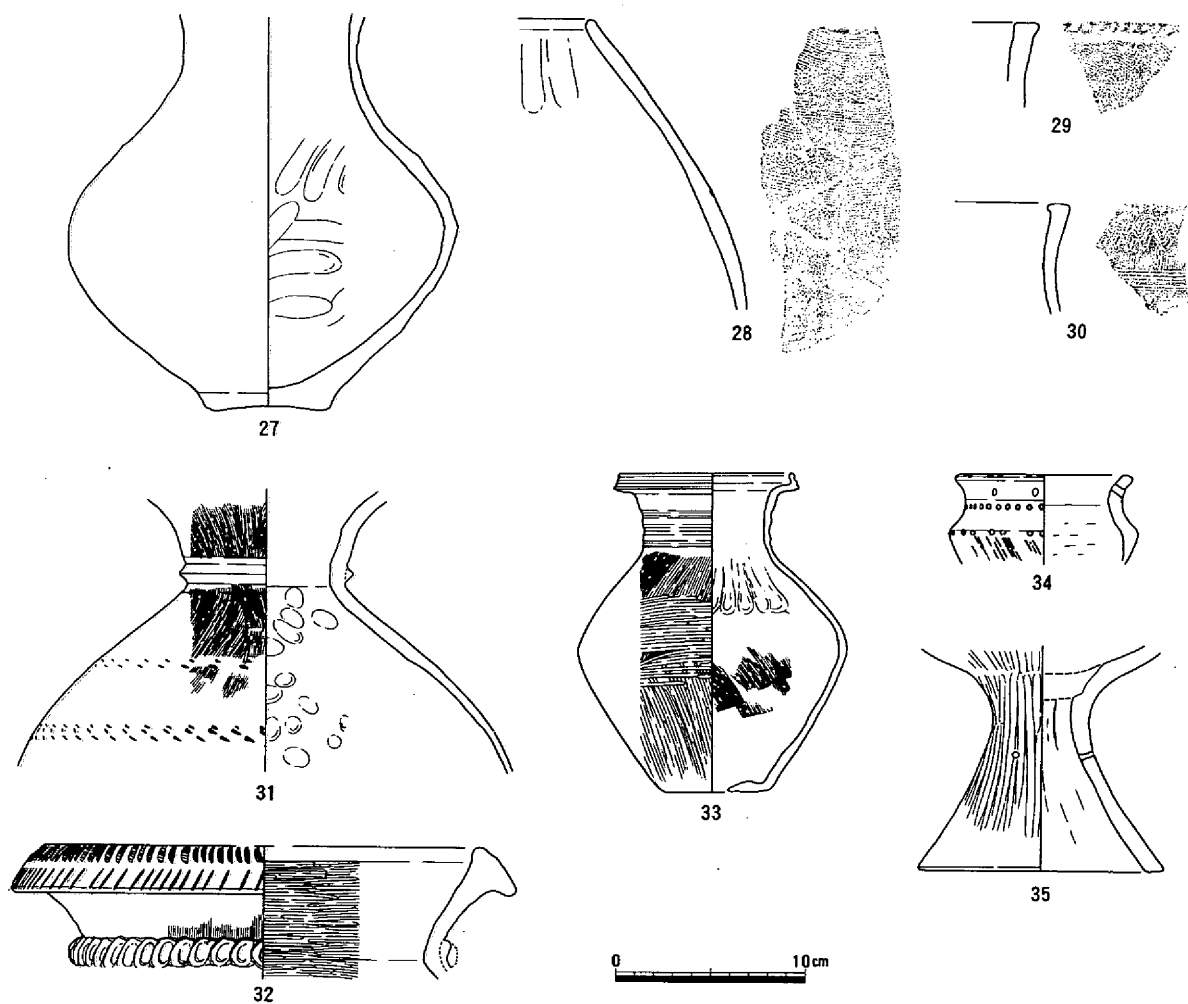
第348図 溝-6

(3) その他の遺構・遺物

ここでは、遺構検出面までの掘り下げ中、あるいは古墳時代以降の遺構に混入した弥生時代の遺物について特徴的なものについて概観する。

高田調査区で確認されたもっとも古い遺物は、27の弥生時代前期前葉の壺である。これは、O20区南側の微高地中から出土しており、この微高地の形成時期を推測する要素となった。器壁外面は著しく磨滅しており調整は不明である。内面は粗いナデ様の調整が観察される。弥生時代前期の遺物はこれのみであり、またその磨滅状況から、この時期の集落域は調査地から比較的離れた位置にあるものと推測される。

28~35は弥生時代中期のものである。28は無頸壺であり、外面にクシガキの波状文、沈線が施されている。29・30は壺の口縁部であり、端部に刻目が施されている。31は頸部下端に貼り付け突帯をもち、体部には2段の刺突文が巡る。内面は指頭圧痕が施されている。32は指頭圧痕を施した貼り付け突帯をもつ。口縁部外面には2段の刻目が施されている。33は小形の壺であり、頸部は凹線文が巡る。内面にはハケメ調整が観察され、底部は穿孔されている。図示した中では33のみが灰白色系の胎土である。34の小形の鉢には竹管文が施され、2個一対の孔があげられている。35は台付鉢の脚部であろう。小さな透かし孔が3個あげられている。



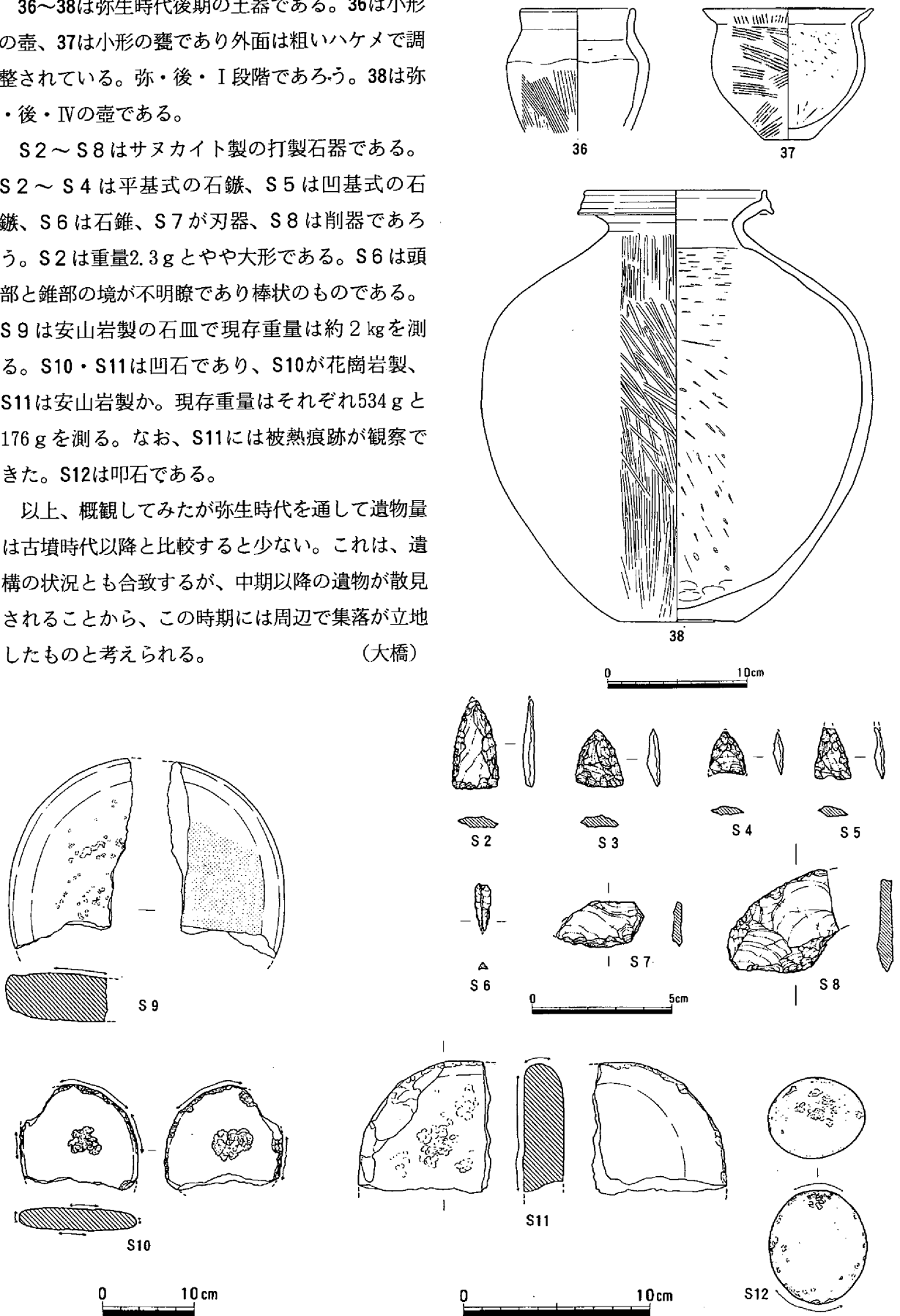
第349図 包含層 (27~35)



36～38は弥生時代後期の土器である。36は小形の壺、37は小形の甕であり外面は粗いハケメで調整されている。弥・後・I段階であろう。38は弥・後・IVの壺である。

S2～S8はサヌカイト製の打製石器である。S2～S4は平基式の石鏃、S5は凹基式の石鏃、S6は石錐、S7が刃器、S8は削器であろう。S2は重量2.3gとやや大形である。S6は頭部と錐部の境が不明瞭であり棒状のものである。S9は安山岩製の石皿で現存重量は約2kgを測る。S10・S11は凹石であり、S10が花崗岩製、S11は安山岩製か。現存重量はそれぞれ534gと176gを測る。なお、S11には被熱痕跡が観察できた。S12は叩石である。

以上、概観してみたが弥生時代を通して遺物量は古墳時代以降と比較すると少ない。これは、遺構の状況とも合致するが、中期以降の遺物が散見されることから、この時期には周辺で集落が立地したものと考えられる。(大橋)



第350図 包含層 (36～38・S2～S12)

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

#### (1) 概要

本節では、高田調査区で検出された古墳時代の遺構と遺物について記述していく。各時代を通して、この時代の遺構・遺物が最も多く検出されている。本節で報告する遺構は、竪穴住居94軒、井戸1基、焼成土壌10基、溝30条および水田である。特に、竪穴住居、焼成土壌はすべて古墳時代後半の6世紀後半から7世紀前半にかけてのものであり、その集落様相の実体を考える良好な資料となった。

古墳時代前半の遺構は、そのほとんどが溝と水田である。これらの溝は中屋調査区の微高地と高田調査区の微高地間に広がる低位部を基本的には南流するものである。弥生時代以降、ほぼ同一の流路を踏襲しながら基幹用水路として利用されていたものと想定される。また、この低位部には洪水砂で被覆された水田が検出されている。前節でも触れたが、その開始段階が弥生時代まで遡る可能性があるものの確証を得ることはできなかった。この水田を生活基盤とする集落は高田調査区においては確認されておらず、調査区外に広がっていたものと思われる。これは、この時期、溝・水田以外の唯一の遺構である井戸が調査区北端で検出されていることも傍証の一つと思われる。

古墳時代前期末になると、この地の地形状況は一変する。水田経営は厳しい気象環境のもと、絶え間ない洪水による土砂の流入、堆積によって放棄される。この状況は隣接する中屋調査区においても同様であり、古墳時代前期前半に爆発的な規模の拡大をみせた集落が急速に解体した様相を暗示するものと思われる。

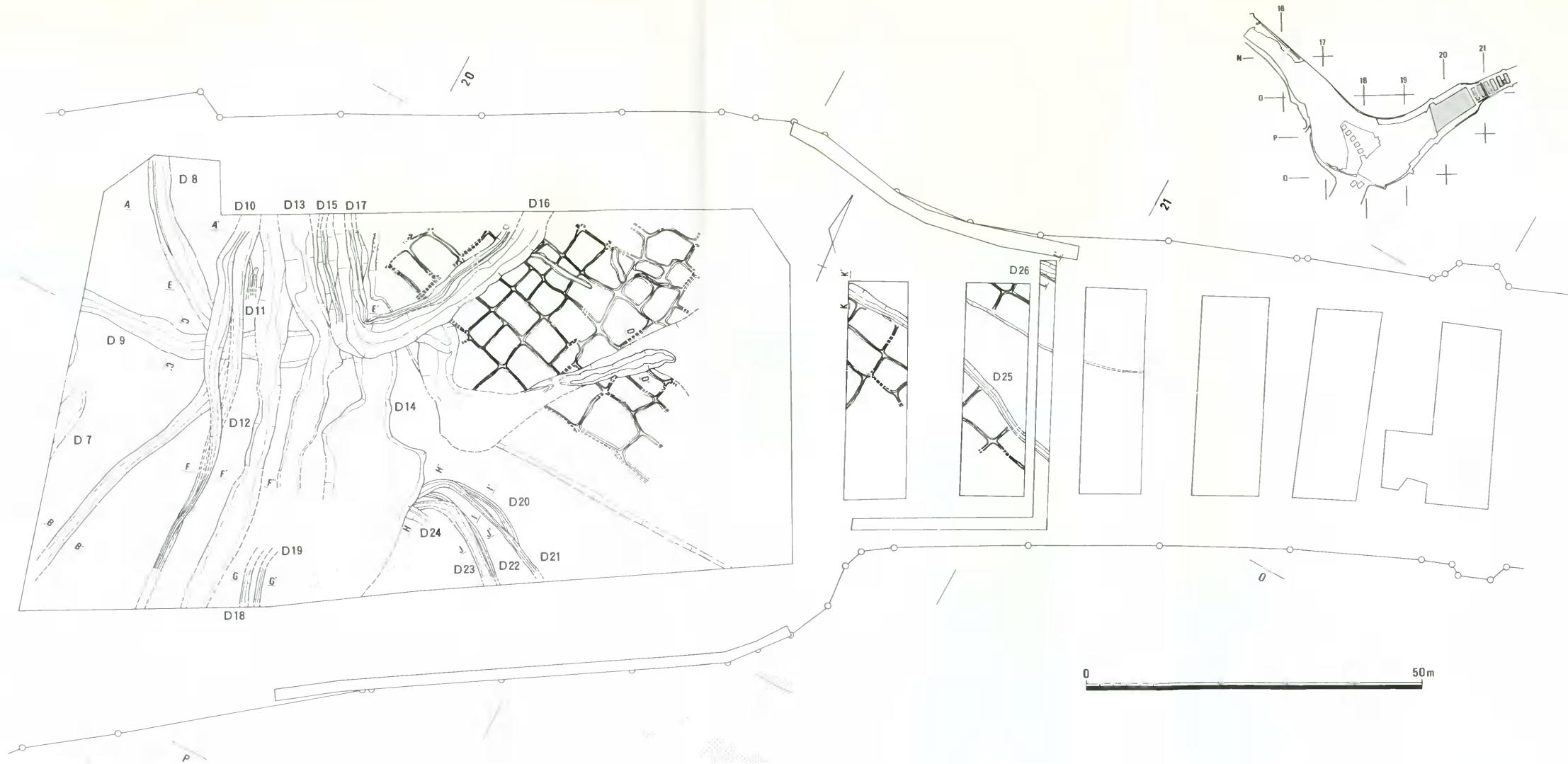
古墳時代中期段階には明確な遺構は確認しておらず、この段階には荒廃した湿地の状況が広がっていたことが推測される。

古墳時代後期になると古墳時代前期前半まで低位部であった箇所は次第に堆積の進行によって微高地へと変化し、6世紀後半に忽然とカマドをつくりつけた竪穴住居を中心とした集落が営まれたりするようになる。本調査区では計94軒の竪穴住居が密集して確認されているが、その継続期間が長くみても100年に満たないことから比較的短期間で建て替えが行われていたことが想定される。また、これらの竪穴住居は溝を境として6群に別れ、その配置、重複状況、住居主軸方向、出土遺物などから基本的に1群が数棟1単位とする集団経営規模であったと推測することが可能と思われた。

さらに、特筆されることは住居内からの鍛錬鍛冶滓を中心とした製鉄関係遺物の出土である。これは、住居床面の被熱箇所の存在と相まって鍛冶集団の様相を推測させた。なお、本報告書では、焼成土壌と呼称している壁面が被熱した方形プランを有する土壌は、鍛冶の際に使用する炭窯の機能を持っていたものと思われる。これらの鍛冶の実体については第5章で後述するが、集落内における比較的小規模な消費に応じたものと理解している。

以下、各遺構・遺物について、個別に詳述していく。なお、形状が不定な土壌、ピットなどについては一部割愛したものがあつた。また、古代以降の遺構に混入したと思われる古墳時代の遺物については特徴的なものについてのみ本節の最後にあわせて掲載した。

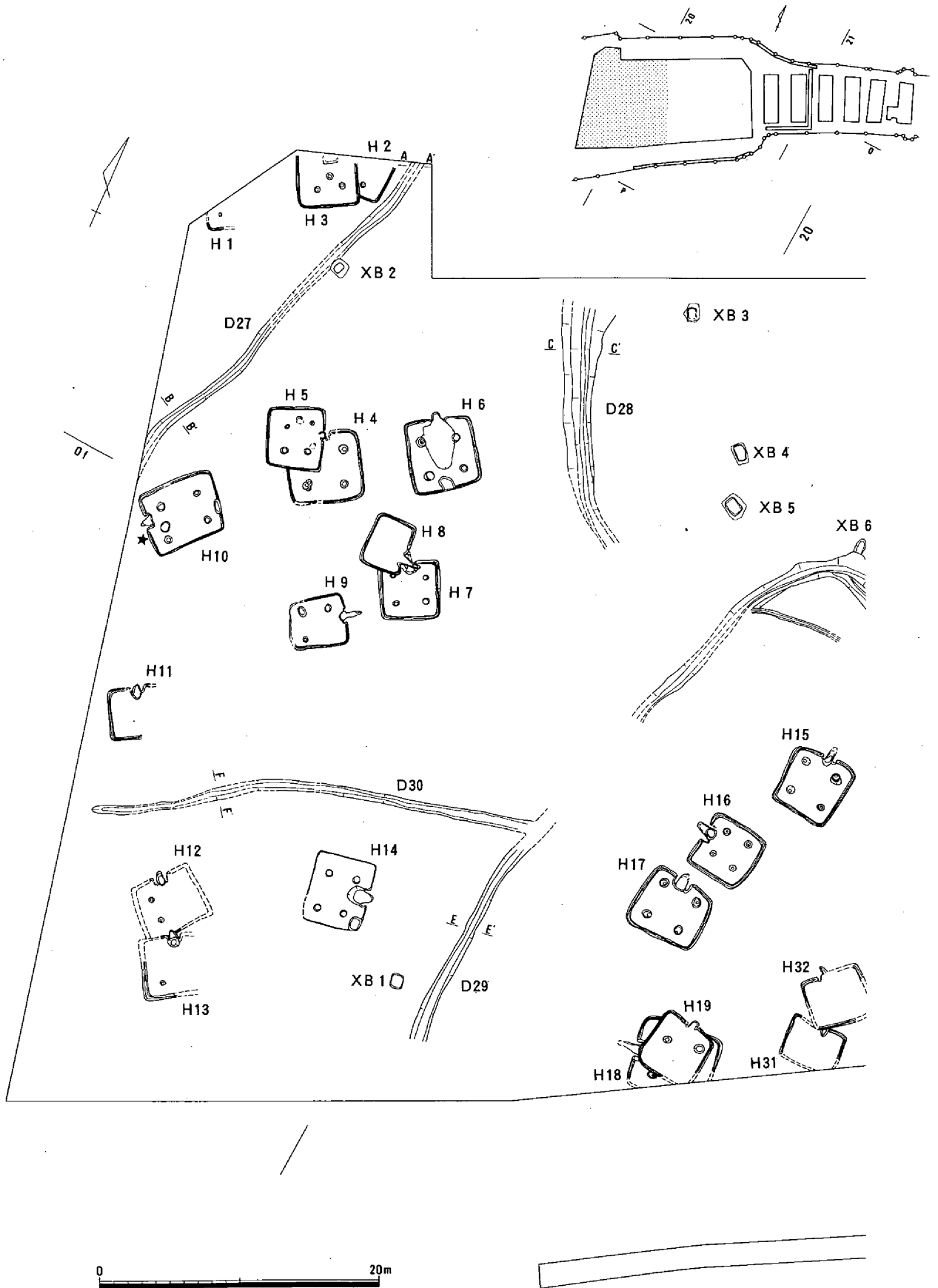
(大橋)



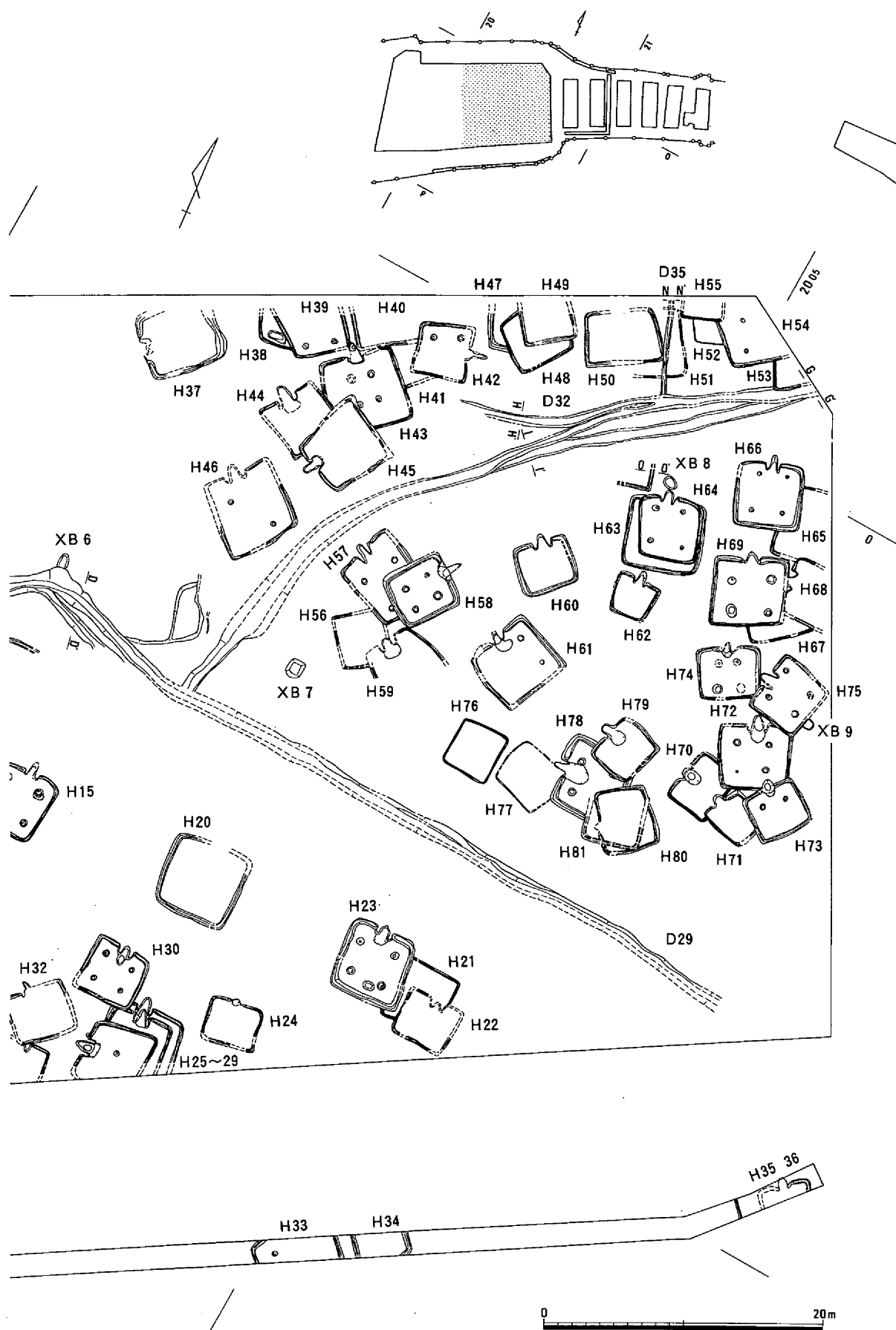
第351図 高田調査区古墳時代前期遺構全体図 1/600



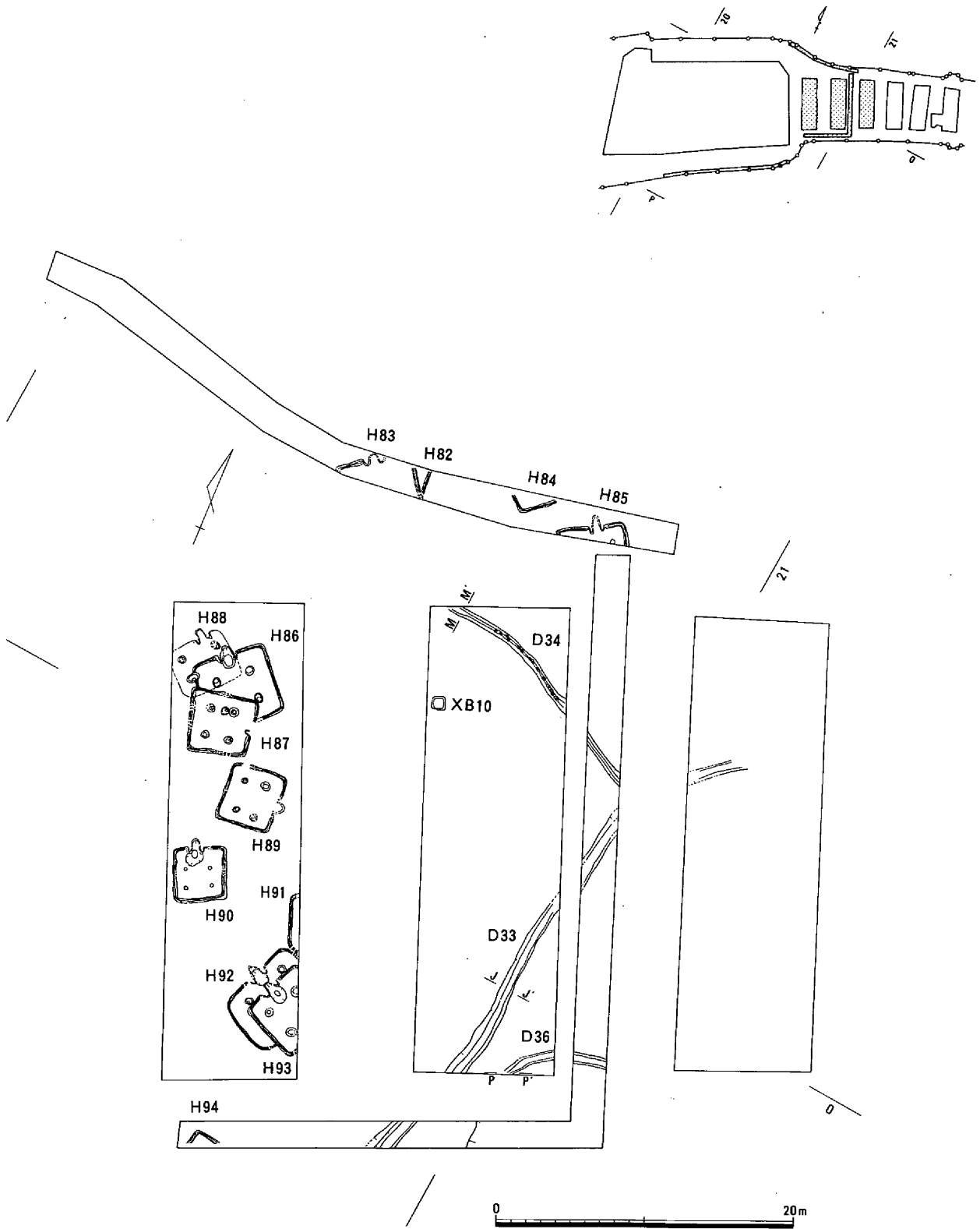
第352図 高田調査区古墳時代中・後期遺構全体図 1/600



第353図 高田調査区古墳時代中・後期遺構配置図(1) 1/400



第354図 高田調査区古墳時代中・後期遺構配置図(2) 1/400



第355図 高田調査区古墳時代中・後期遺構配置図(3) 1/400

## (2) 竪穴住居

### 竪穴住居-1 (第356図)

調査区の北西にかかって検出したもので、O19区の北東に位置している。古代の溝-38に東半を切られ、わずかに南西隅を確認するにとどまったため全形を知り得ないが、その形状からして一辺5m前後の方形を呈するものと思われる。現状の深さは7cmと浅く、標高365cmを測る床面の周囲には幅12cm、深さ4cmの溝がめぐる。主柱は、壁体から92cm離れた位置で1本のみ検出したが、本来4本で構成されていたものと見られ、径26cmの円形をなす掘り方は深さ23cmほどある。出土遺物はなく、時期については正確を期しがたいが、他の住居とほぼ近い6世紀末~7世紀前半と想定して差し支えないものと思われる。

(亀山)

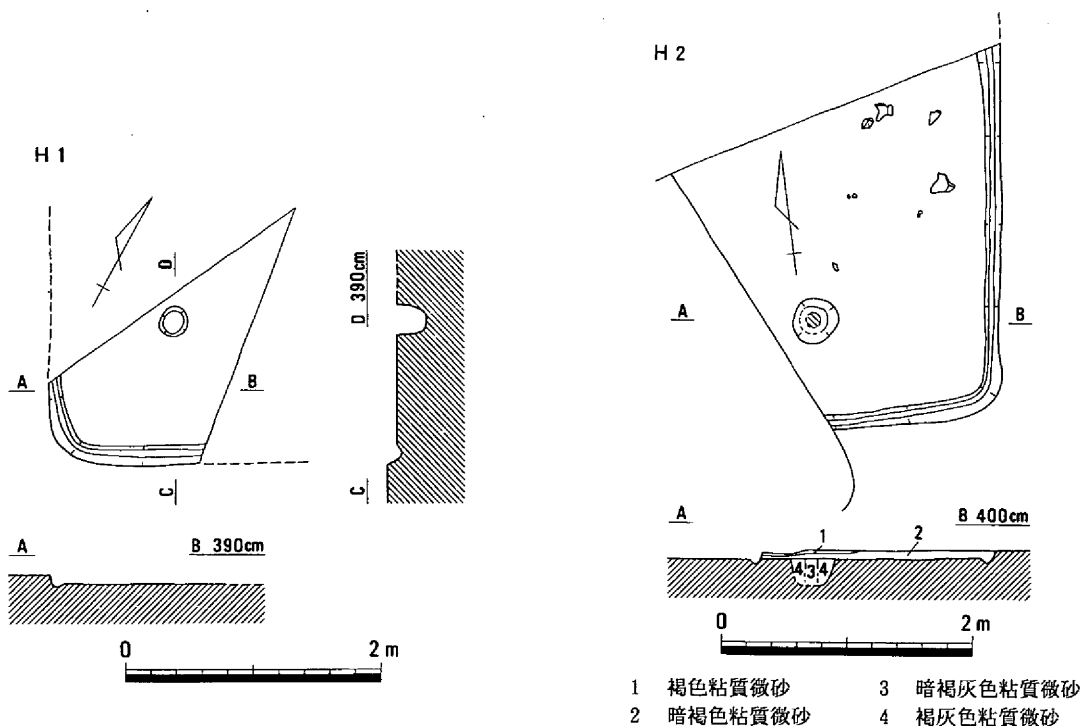
### 竪穴住居-2 (第356図)

竪穴住居-1の東10mに位置し、西半を竪穴住居-3によって切られている。このため全体の形状については明らかでないが、やはり一辺5mほどの方形をなすものと思われる。壁面は高さ7cmほど遺存するにすぎず、床面の標高は370cmを測る。1本検出した主柱は、東壁から120cm、南壁から61cmとやや偏った位置にあり、平面形が長方形となる可能性を示唆する。径37cm、深さ21cmの掘り方には、径10cmあまりの柱痕跡が確認できる。床面からは、少量の鍛練鍛冶滓と土師器の甕が出土しており、6世紀末ないし7世紀前半に比定できるものである。

(亀山)

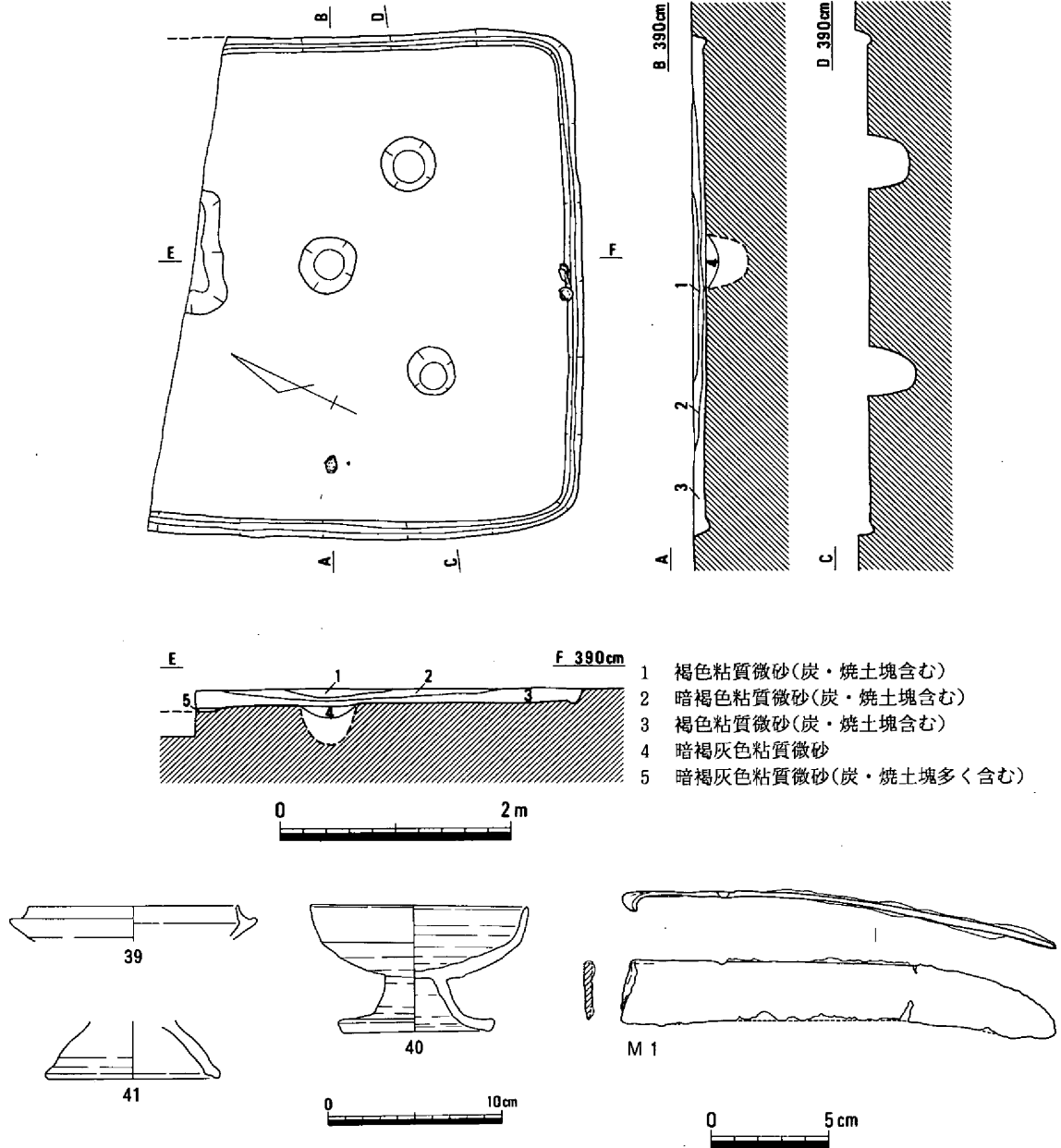
### 竪穴住居-3 (第357図、図版112・142・163)

竪穴住居-2の西半を壊してつくられた住居で、北端は調査区外にのびているが、東西長420cm、南北長450cmあまりの長方形をなすものと推定される。検出面から深さ15cmの位置にある床面の標高は366cmで、その周囲には壁体溝がめぐる。検出できた2本の主柱は、いずれも壁体から82~115cmの位置にあり、柱間は182cmを測る。掘り方は、径42~48cmの円形で、深さは34~40cmある。床面の中



第356図 竪穴住居-1・2





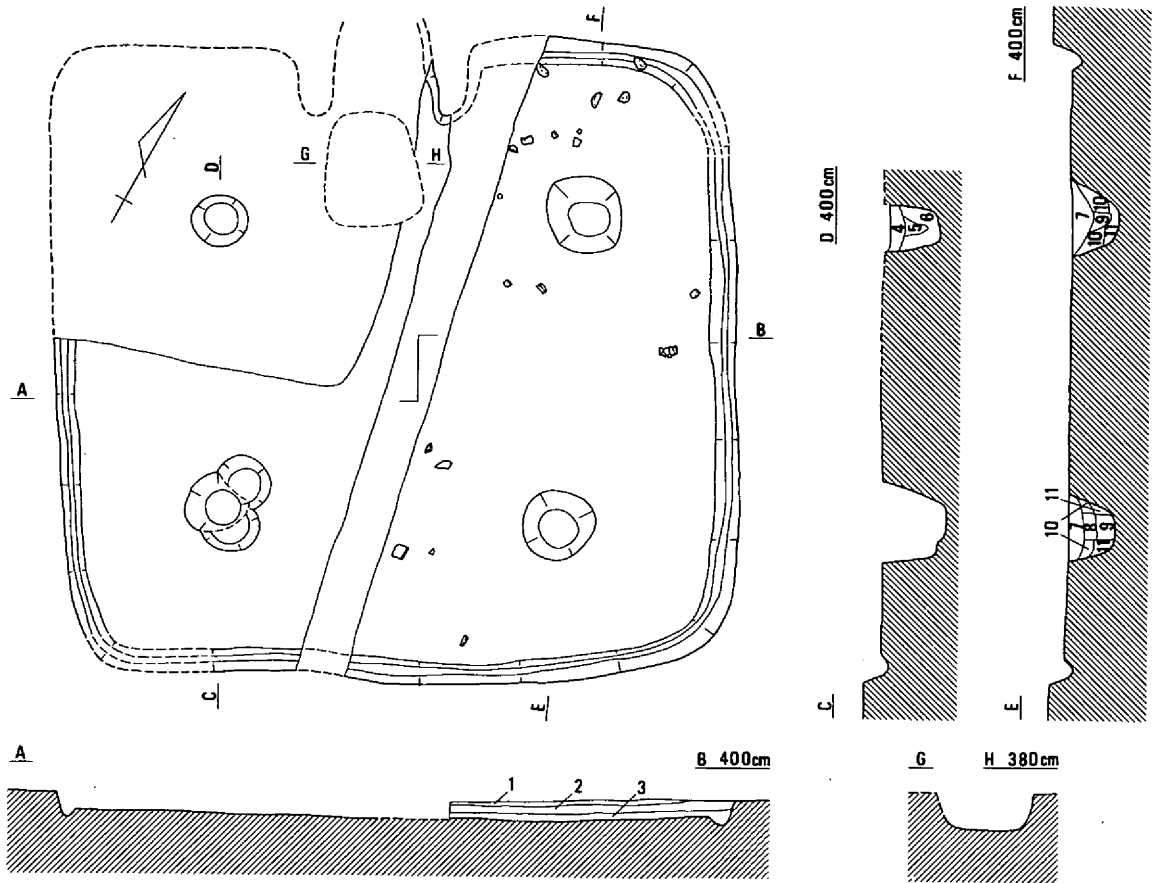
第357図 竪穴住居－3 (39～41・M1)

中央には径51cm、深さ11cmの平面円形をなす土壌が認められた。また、その北側63cmの位置には長さ108cm、深さ3cmの長方形に復元される浅い土壌が検出された。埋土には炭や焼土が多く含まれていたが、その具体的な機能については明らかでない。

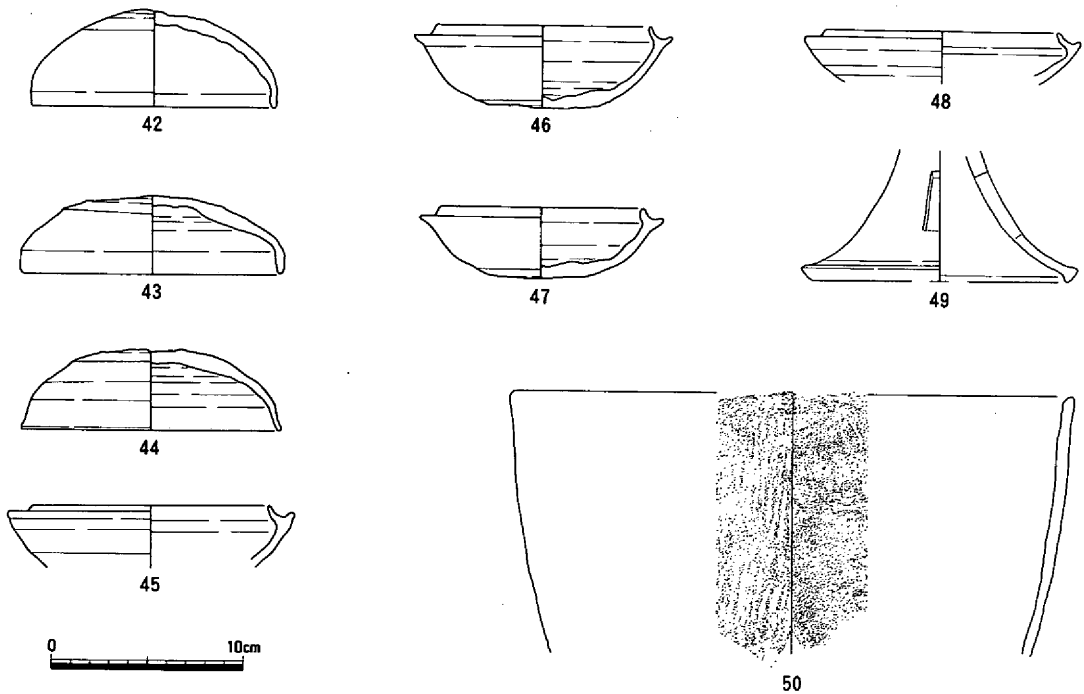
出土遺物には須恵器39～41と鉄鎌M1、少量の鉄滓がある。口径12.0cmを測る39は、脚部41とともに有蓋高杯となる可能性がある。いずれも小片ではあるが、立ち上がりは短く、端部は尖りぎみで、おおむね7世紀初頭に位置付けられるものである。(亀山)

竪穴住居－4 (第358図、図版112・142)

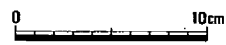
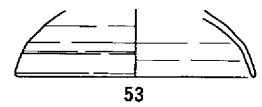
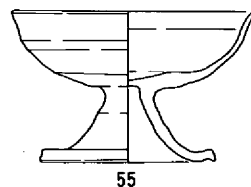
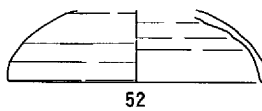
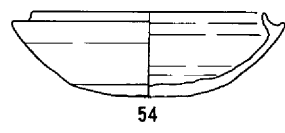
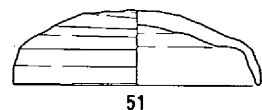
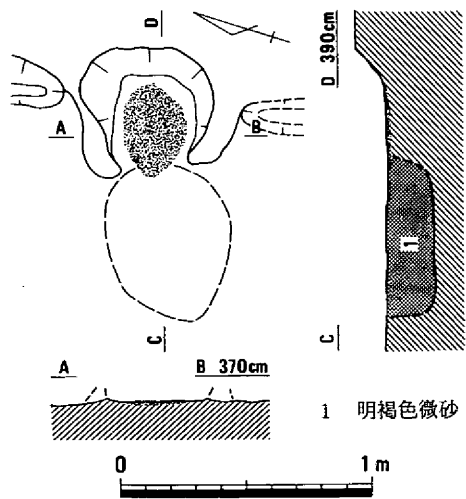
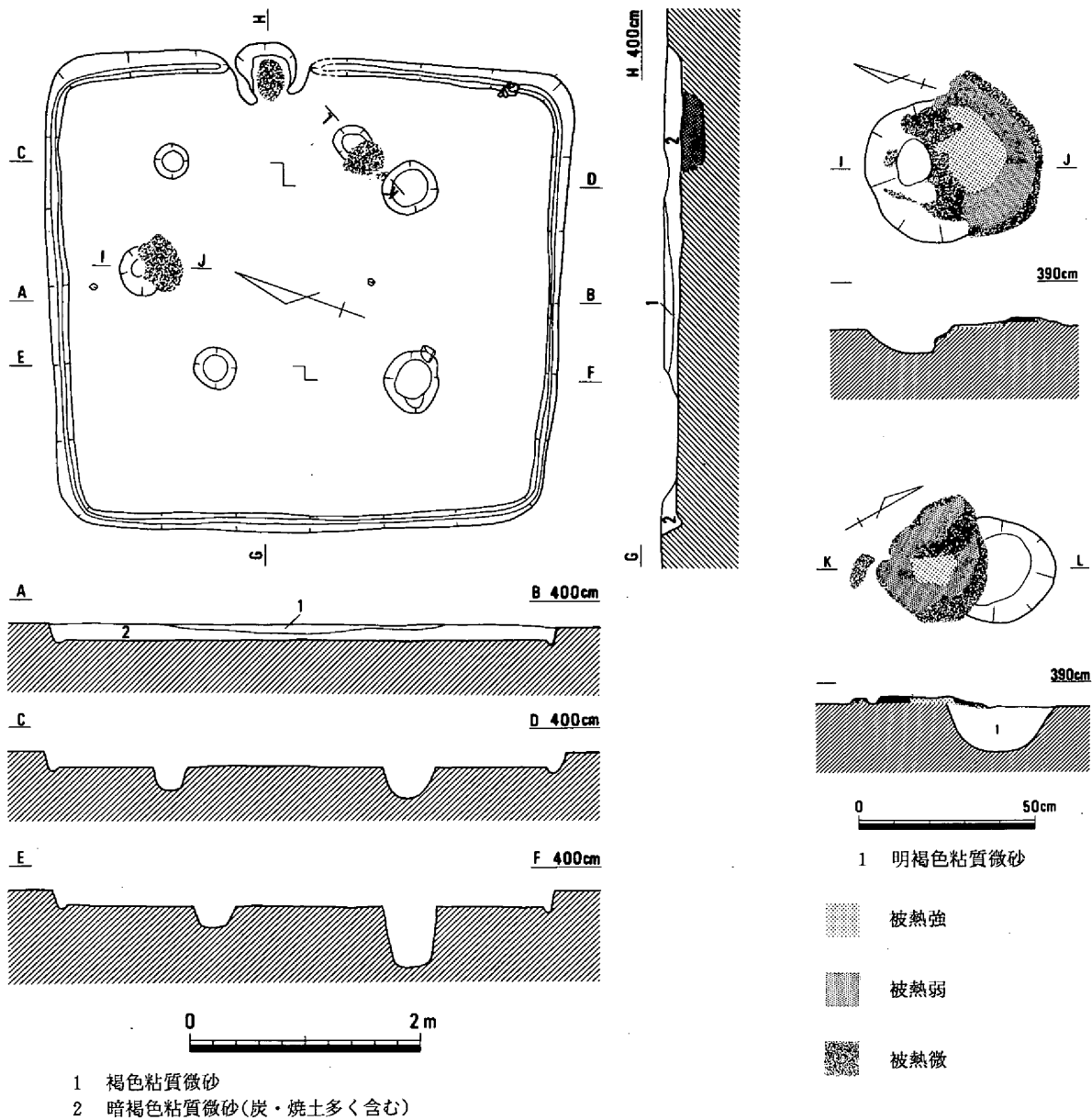
竪穴住居－3の南南東16mに位置し、北西隅を竪穴住居－5によって切られている。長さ520cm、幅495cmの方形を呈する住居で、標高360cmを測る床面は23.9㎡あり、その周囲には壁体溝がめぐる。4本ある支柱は、壁体から76～102cmの位置にあり、それぞれ径44～69cm、深さ37～51cmの円形をな



- |            |            |             |
|------------|------------|-------------|
| 1 暗灰茶褐色砂質土 | 5 褐色粘質微砂   | 9 暗灰褐色粘質土   |
| 2 暗灰黄褐色砂質土 | 6 茶褐色粘質細砂  | 10 暗茶灰褐色粘質土 |
| 3 灰褐色砂質土   | 7 暗黄褐色粘質土  | 11 暗灰褐色砂質土  |
| 4 黄褐色粘質微砂  | 8 暗灰茶褐色砂質土 |             |



第358図 竪穴住居 - 4 (42~50)



第359図 竪穴住居-5 (51~55)

す掘り方をもつ。掘り方内には径15~20cmの柱痕跡が遺存しており、その柱間は290~232cmに復元される。北西辺の中央に設けられたカマドは大半を失い、長さ70cmあまりの東袖と下部構造と見られる長さ93cm、幅77cm、深さ27cmの土壇をかりうじて確認したに過ぎない。遺物は、床面から須恵器42~49、土師器50のほか122gの鍛練鍛冶滓が出土している。42~44は蓋で、口径12.6~13.4cmを測り、丸みを帯びた天井部はヘラ切りする。杯45~48は口径10.6~12.3cmで、底部はやはりヘラ切りのままである。49の高杯は脚部のみであるが、2段2方の透かしを飾り、端部をわずかに下方へ拡張する。これらの須恵器は陶邑古窯址群のTK217型式に併行し、7世紀前半に位置付けられる。(亀山)

**竪穴住居-5 (第359図、図版112・141)**

竪穴住居-5の北西を壊してつくられた4本柱の住居で、O19区の西側中央に位置する。長さ438cm、幅395cmの方形を呈し、柱間は207~168cmを測る。標高363cmを測る床面には、炉底と見られる径38~49cmほどの被熱範囲が2カ所で認められ、その下部には径32~43cm、深さ7~13cmの土壇が掘りこまれていた。東辺の中央北よりにつくりつけられた全長55cmを測るカマドは、幅54cmの燃焼部から壁体に向けて緩やかに立ち上がり、屋外へのびる煙道は確認できない。また、カマドの前には長さ63cm、幅50cm、深さ20cmの土壇が掘りこまれていた。出土遺物として須恵器の蓋51~53、杯54、高杯55のほか、180gの含鉄鉄滓があり、これらは7世紀前半に位置付けられる。(亀山)

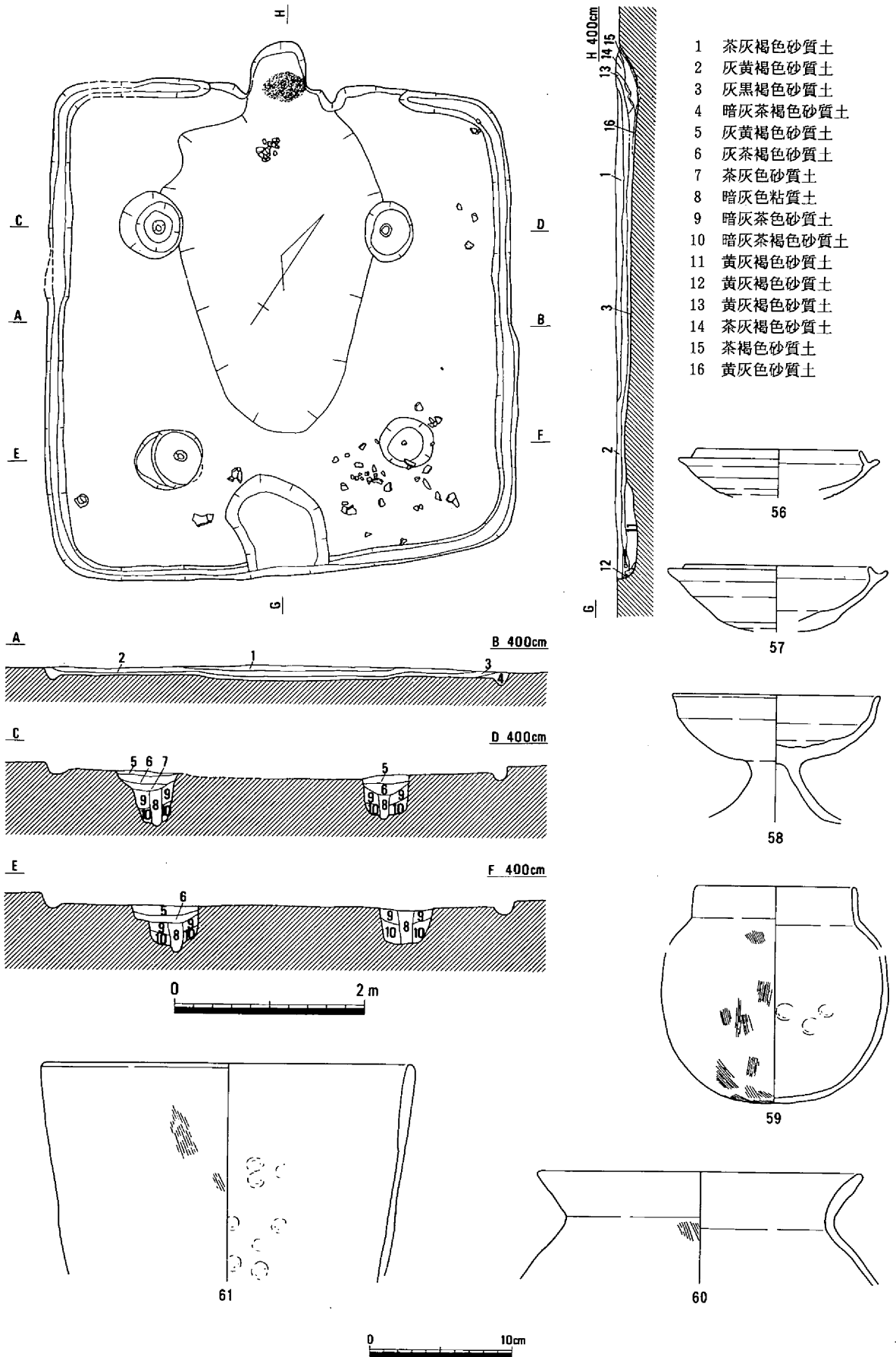
**竪穴住居-6 (第360図、図版112・141)**

この竪穴住居は、調査区の西端部に位置しており、竪穴住居-4の東側約3mにほぼ平行して検出された。竪穴住居の規模は、512×478cmを測りほぼ方形を呈する。深さは床面まで約8cm残存しており、床面には支柱穴4本が検出された。柱穴は、直径約60cm前後の円形を呈しており、深さは40~50cmであった。柱穴には、すべて直径約10cmの柱痕跡が確認できた。柱穴は、ほぼ220cm前後の位置関係に存在している。また、床面にはカマド部を除いて壁体溝が検出された。さらに南辺の中央部には、深さ約10cmのやや不整形な方形土壇が存在した。カマドは、北辺のほぼ中央に位置しており、残存状態は悪かった。カマドには支脚は確認できなかったものの焼土面の位置から燃焼部は壁体部線上に位置していることが明らかである。また、煙道部の残存状態も悪かった。

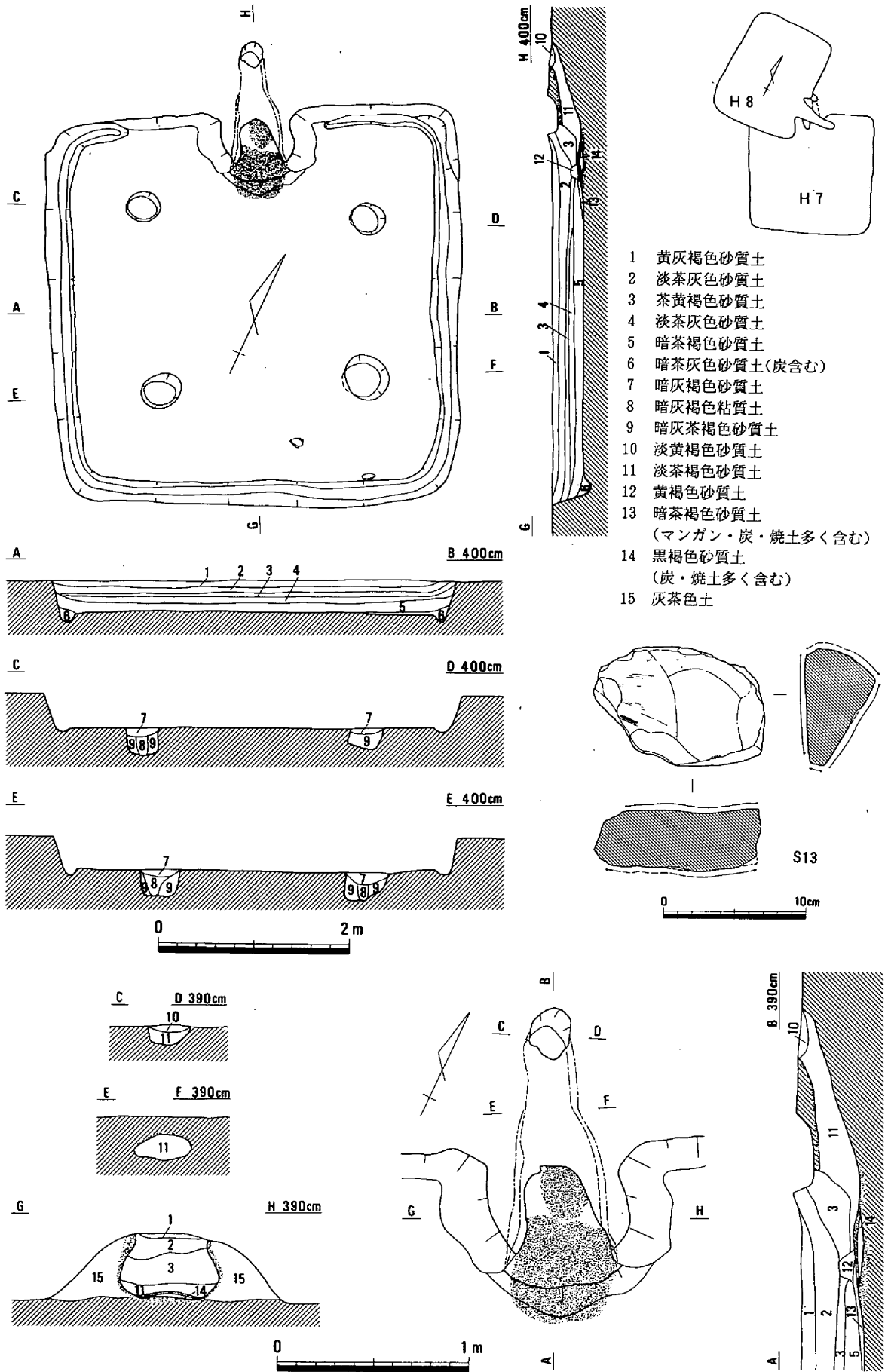
出土遺物は、図示した以外にも少量検出されている。56~58は須恵器で、56・57の杯身は底部をヘラケズリを施している。59~61は土師器で、甕の59・60、甌の61がある。また、鉄滓も9点合計64.5g確認されている。遺物は7世紀前半の特徴を示している。(中野)

**竪穴住居-7 (第361図、図版114)**

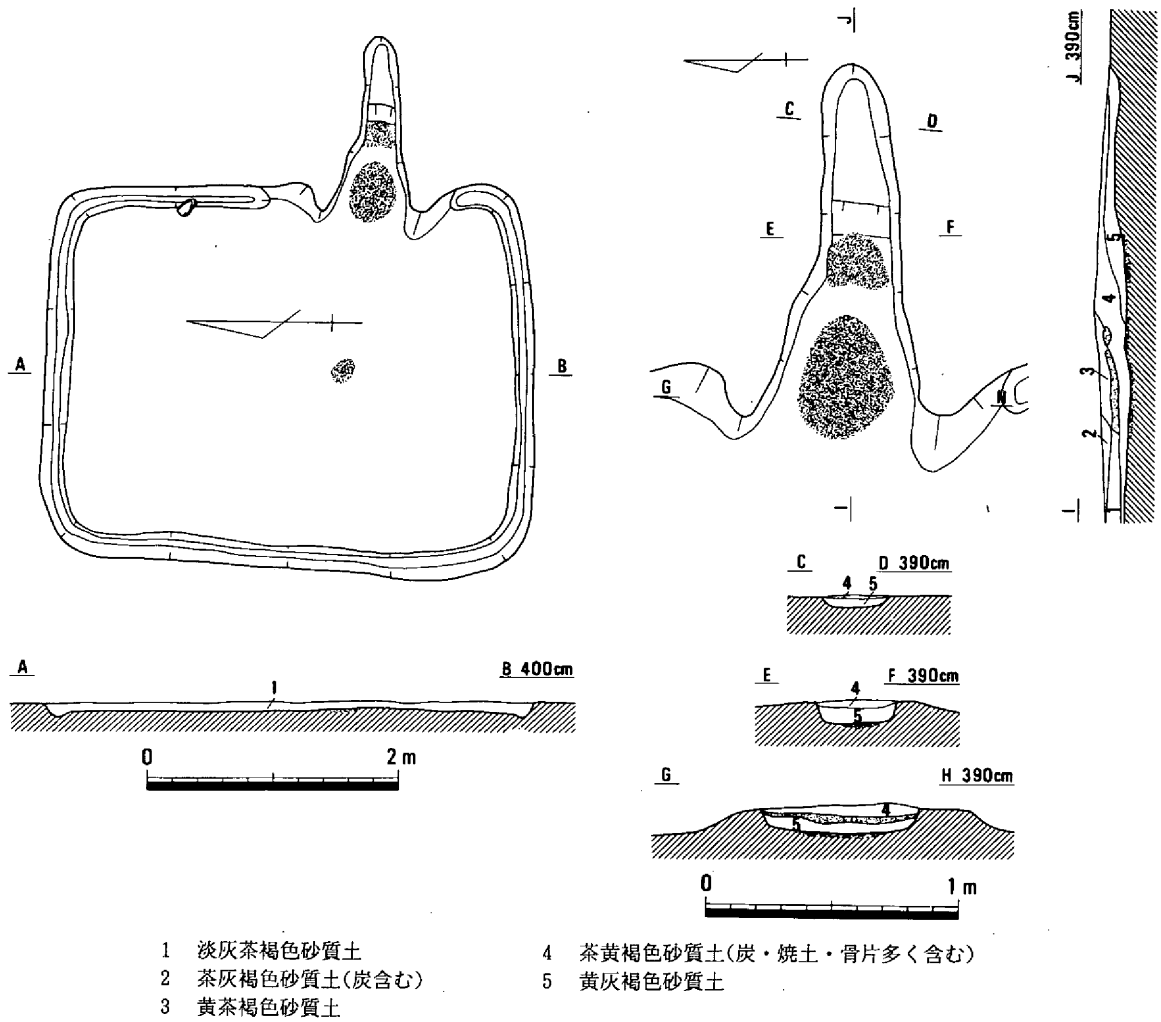
この竪穴住居は、調査区の西端部に位置しており、竪穴住居-6の南約5mに検出された。竪穴住居-4・6とは平行する位置関係に存在する。竪穴住居の北西端部は竪穴住居-8によって切られている。しかしながら、竪穴住居の残存状態は非常によく、検出段階で煙道口が明瞭に確認された。竪穴住居の規模は、398×395cmを測り、ほぼ正方形を呈している。深さは、床面まで約35cm残存しており、床面では支柱穴が4本検出された。柱穴は径約40~50cmの円形で、深さは約20~30cmを測る。壁体溝は、カマド部を除き幅約15cm、深さ約7cmで掘られている。カマドは、北辺部のほぼ中央部に作りつけられている。カマドは残存状態がよく、袖部の高さは約35cmに達していた。煙道部は、約60cm程筒状に残存しており、煙道口も明瞭であった。出土遺物は図示できるものはほとんどないが、須恵器の杯・高杯・甕、土師器の甕・甌の小破片が検出されている。また、鉄滓21点合計123.9gも出土している。時期は7世紀前半と考えられる。(中野)



第360図 竖穴住居-6 (56~61)



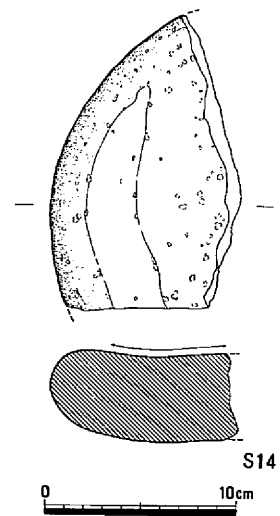
第361図 竪穴住居-7 (S13)



竪穴住居－8 (第362図、図版115・161)

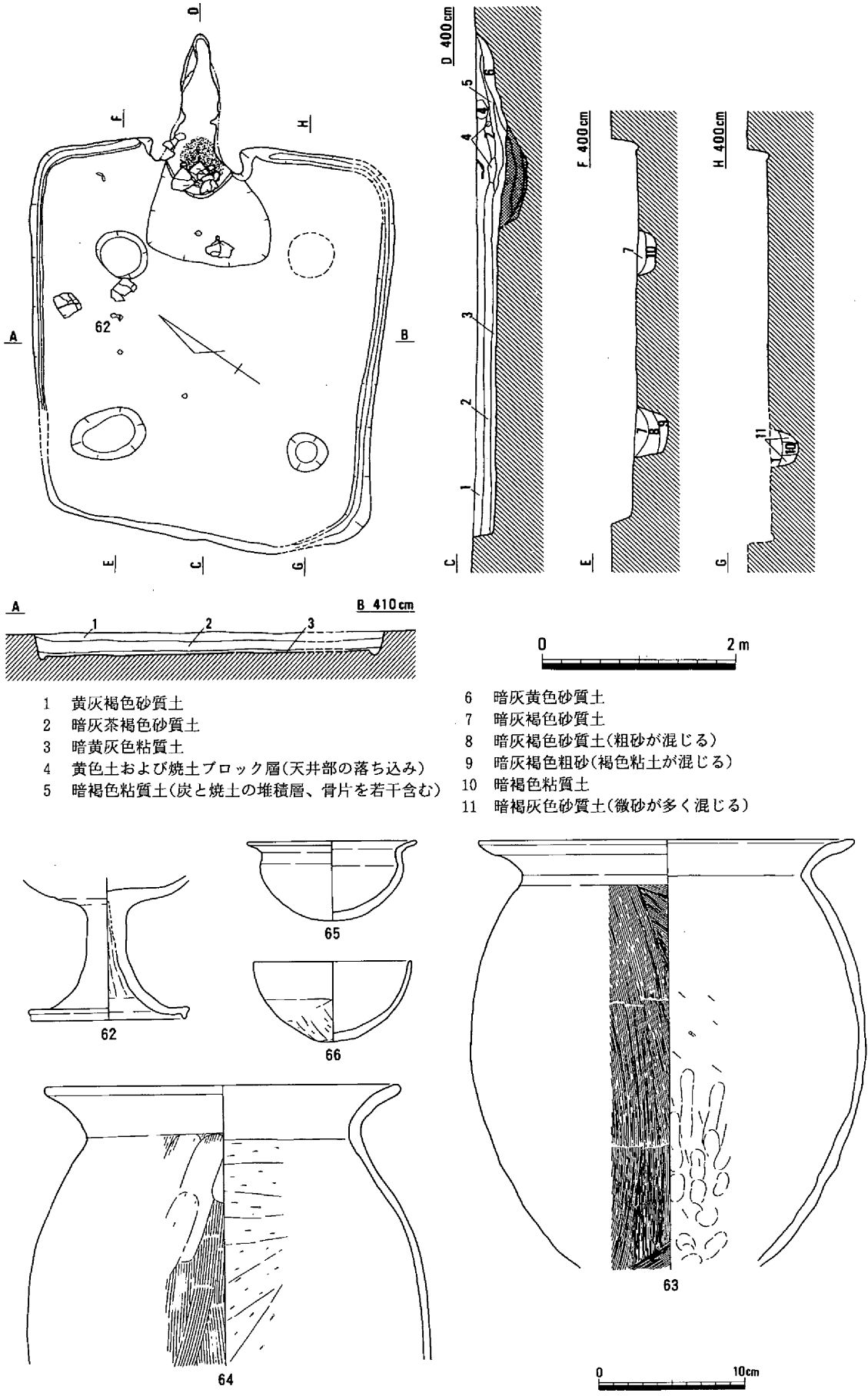
この住居は、調査区の西端部中央に位置しており、竪穴住居－7の北西に一部重複して検出された。竪穴住居－8は、検出状況からみて竪穴住居－7が破棄されたのち構築されている。

竪穴住居の規模は、372×285cmを測り、ほぼ方形を呈する。床面積は約10㎡と検出されている同時期のものと比べるとやや小規模である。深さは床面まで約8cmで残存状態は悪かった。柱穴は精査にもかかわらず検出できず、小規模な竪穴住居に起因する可能性が考えられる。床面には、カマド部を除き壁体溝が巡る。カマドは、竪穴住居東辺の中央部よりやや南寄りに構築されている。カマドには支脚は確認されなかったが、その焼土面の存在から燃焼部が明らかであり、その位置はほぼ壁体部に位置している。煙道部は約100cm残存していた。また、カマドの位置の延長上の床面中央部には、焼土面が確認されている。出土遺物は、ほとんどないものの竪穴住居－7とほぼ同時期と考えられる。



第362図 竪穴住居－8 (S14)

(中野)



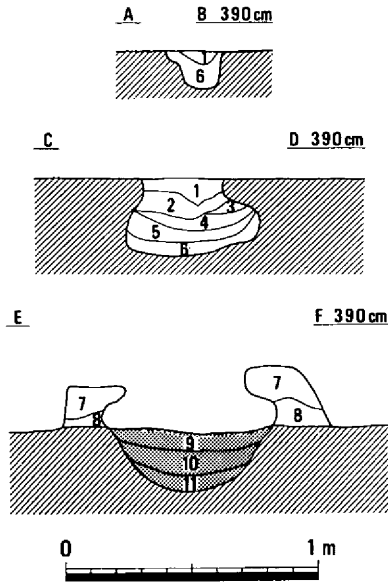
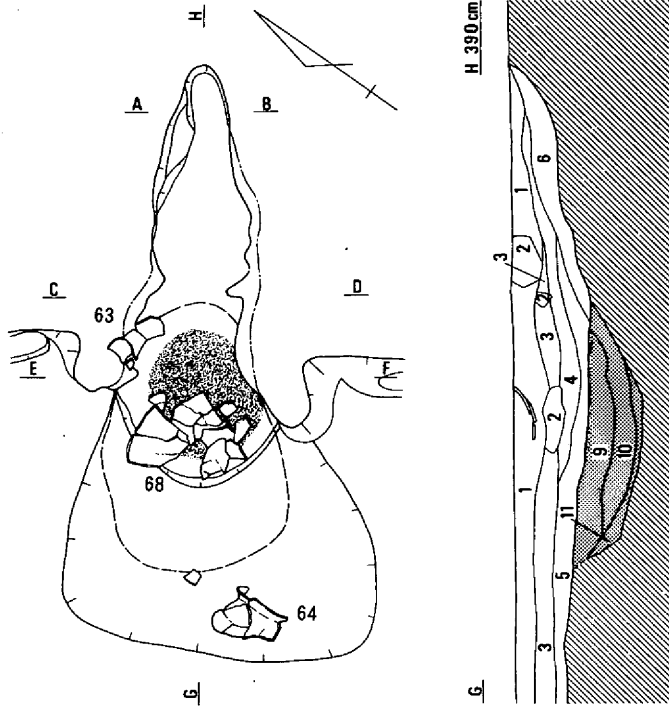
第363図 竪穴住居 - 9 (62~66)



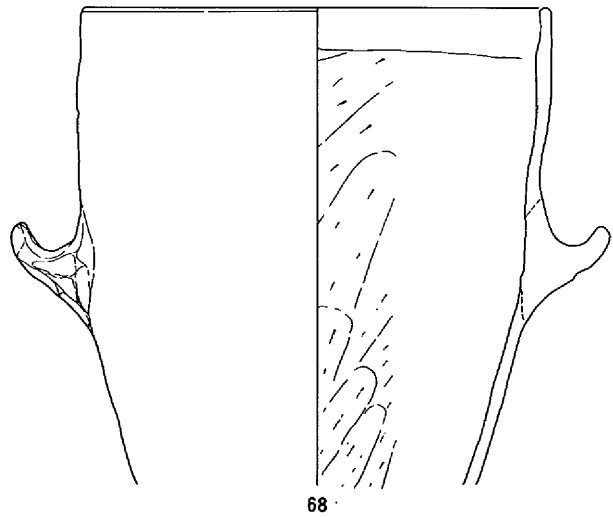
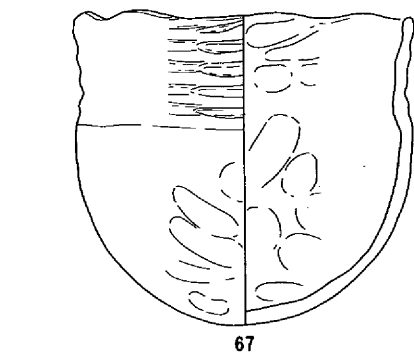
竪穴住居-9

(第363・364図、図版115・142)

竪穴住居-8の南約3mに位置する。東西410cm、南北353cmのやや東西に長い方形で、東辺中央にカマドをつくりつけている。主柱は4本検出された。カマドの遺存状況は比較的良好、落ち込んだ天井も観察された。G-H断面にみられる天井崩落土の間隔は約30cmで、懸け口の大きさを反映するものかもしれない。煙道は緩やかな傾斜で、1m近く外方にのびている。燃焼部付近の袖はアーチ状に高さ30cm程度残存しており、袖内面も被熱により赤変していた。また、燃焼部から前庭部にか



- 1 黄灰褐色砂質土
- 2 黄色土および焼土ブロック層(天井部の落ち込み)
- 3 暗灰茶褐色砂質土
- 4 暗褐色粘質土(炭と焼土の堆積層、骨片を若干含む)
- 5 暗黄灰色粘質土
- 6 暗灰黄色砂質土
- 7 灰黄色土
- 8 褐灰黄色砂質土(微砂混じり)
- 9 暗黄褐色粘質土
- 10 暗茶灰褐色砂質土
- 11 暗灰褐色粘質土(微砂混じり)



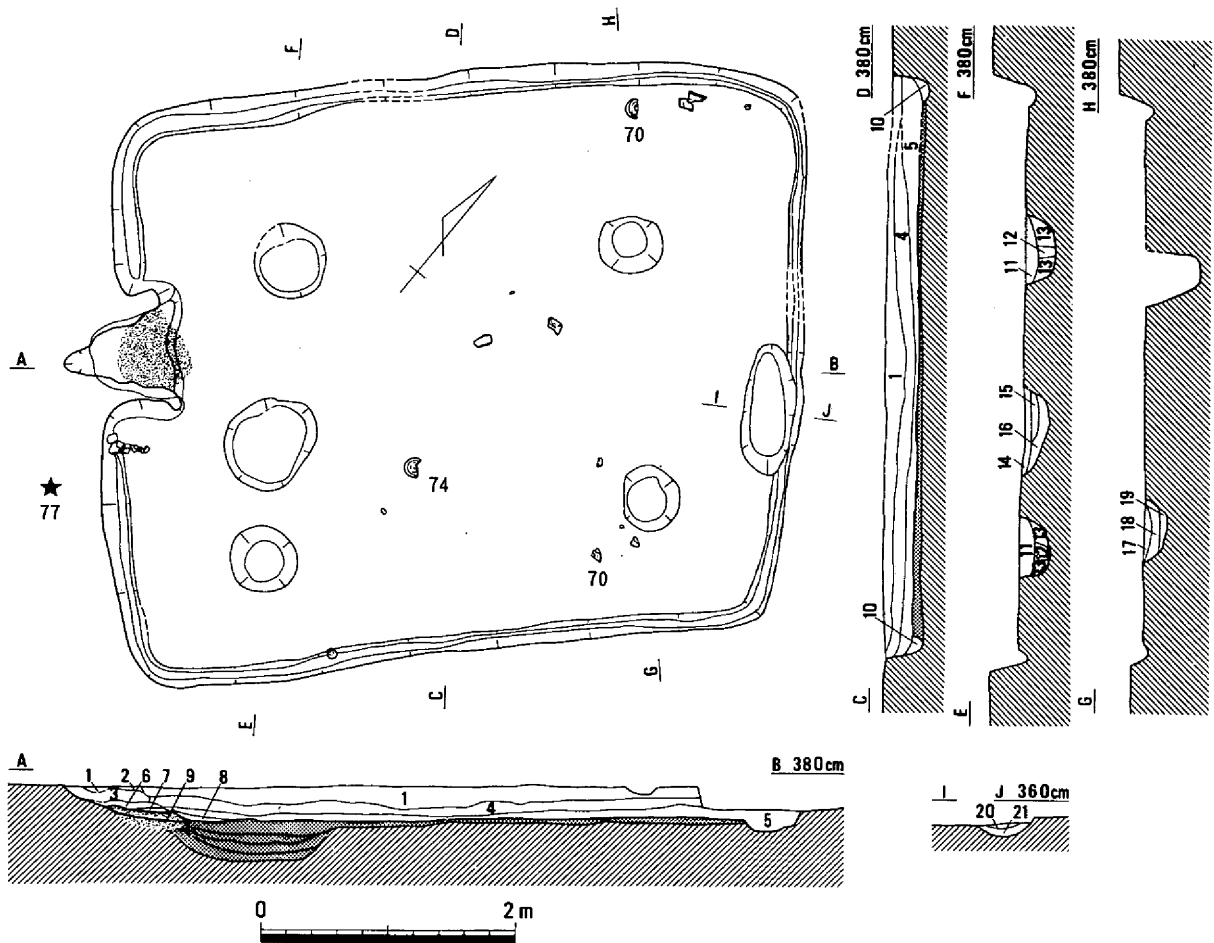
第364図 竪穴住居-9 (67・68)

けて土壌が掘削されているが、被熱しているのはその上面で、カマド使用時にはすでに埋められた状態であったと想定される。出土遺物には図示した以外に須恵器甕、鉄滓などがある。遺物の出土状況をみると、燃焼部上方の崩落した天井の上部で68が、北側袖上で63が、カマド前庭部から64が出土している。63の胴部および64の口縁部と胴部にススが付着していた。北東の柱穴上面には複数個体の製塩土器の破片が散乱していたが、図化しえたのは67のみである。出土状況から住居廃絶後に投棄されたと考えられるが、竪穴住居-6および7出土の破片と接合している。時期は、古・後・Ⅲ期と考えられる。

(久保)

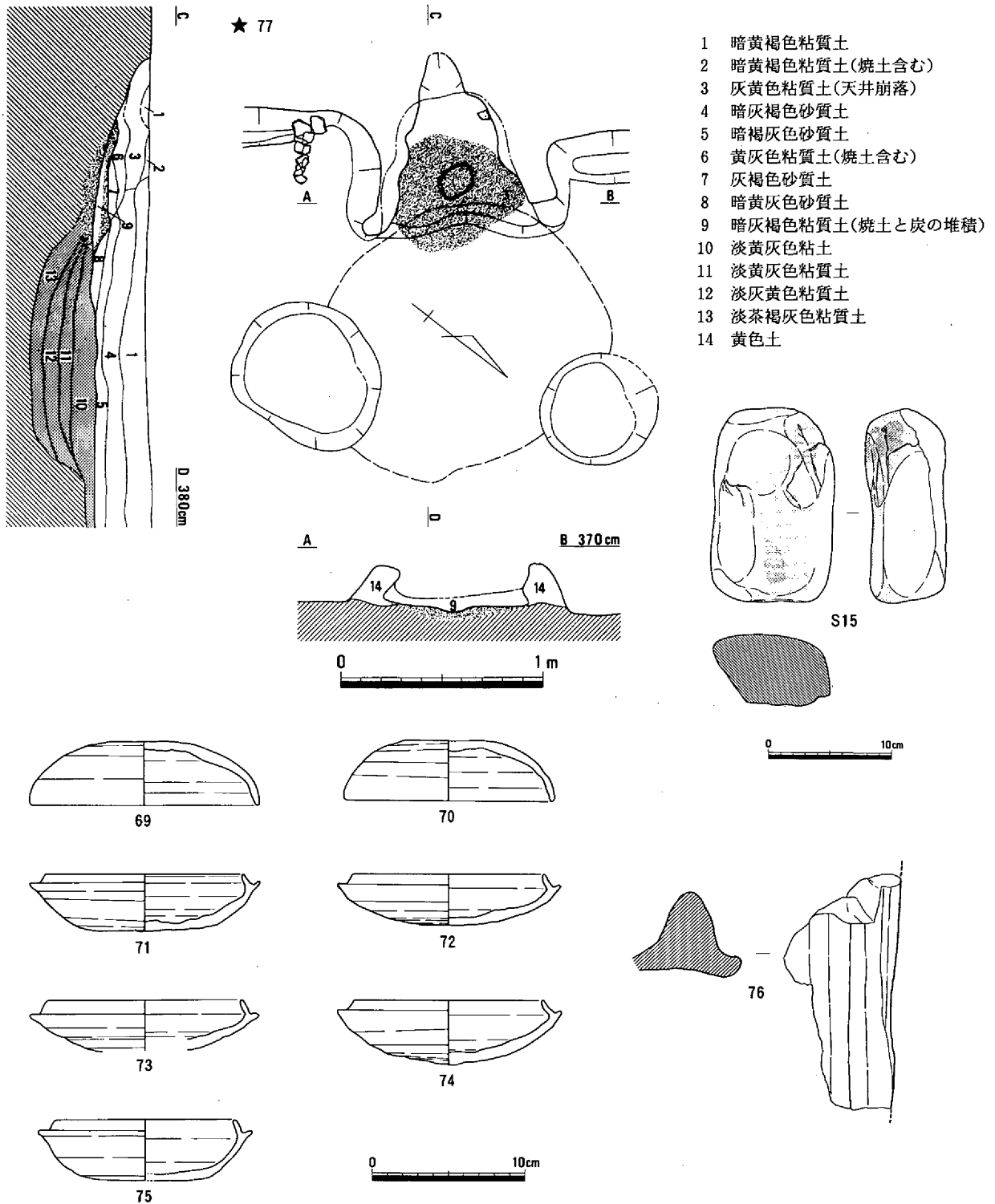
竪穴住居-10 (第365・366・367図、図版116・143・161)

竪穴住居-9の西約7mに位置する。南北532cm、東西440cmのやや南北に長い方形で、南辺中央にカマドをつくりつけている。高さ約20cm残存しているが、竪穴住居-9と比べて煙道が短い。燃焼部



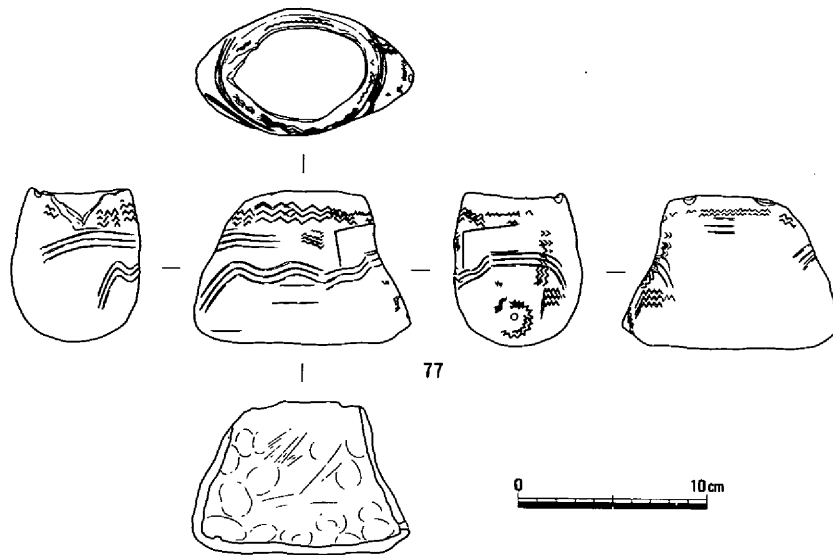
- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 1 暗黄褐色粘質土           | 11 褐灰色砂質土          |
| 2 暗黄褐色粘質土(焼土混じる)    | 12 暗茶灰褐色砂質土        |
| 3 灰黄色粘質土(天井崩落)      | 13 暗灰褐色粘質土         |
| 4 暗灰褐色砂質土           | 14 淡黄灰色粘質土(炭含む)    |
| 5 暗褐灰色砂質土           | 15 淡黄灰褐色粘質土(炭多く含む) |
| 6 黄灰色粘質土(焼土含む)      | 16 灰褐色粘質土(炭多く含む)   |
| 7 灰褐色砂質土            | 17 褐灰色砂質土          |
| 8 暗黄灰色砂質土           | 18 暗黄灰褐色砂質土        |
| 9 暗灰褐色粘質土(炭・焼土多く含む) | 19 暗灰褐色粘質土(粗砂混じる)  |
| 10 暗褐色粘質土(粗砂混じり)    | 20 暗茶灰色砂質土(炭多く含む)  |

第365図 竪穴住居-10



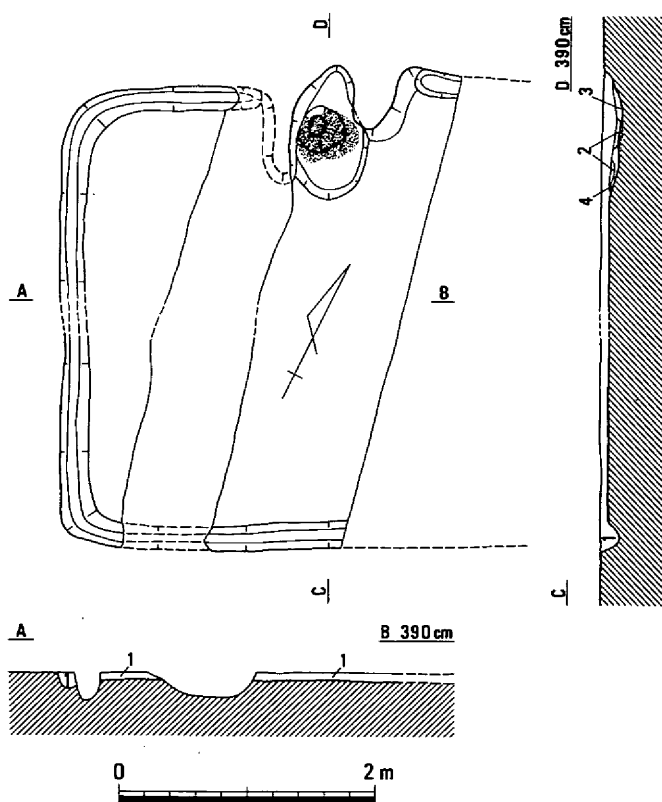
第366図 竪穴住居-10 (69~76・S15)

奥から煙道にかけての傾斜が若干きついようである。前庭部下部には土壌を掘削している。燃焼部の被熱は9層下面と上面の2面認められ、同一のカマドを継続して使用した状況がうかがえる。上面中央には若干のくぼんだ部分があるが、住居埋土内から支脚S15が出土しており、支脚抜き取り痕と推察される。S15には被熱痕があり、頂部にはススが付着している。また、カマドの対辺に方形土壌を有している。方形土壌は不整形で深さも10cm程度と浅いが、壁体溝と接続するものである。出土遺物には須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器カマド・甑(?)・高杯、鉄滓などがある。76以外にも中央床面に



第367図 竪穴住居-10 (77)

において土師器カマドの庇が出土している。床面には被熱面は認められず屋内で使用したとは考えにくい。カマド袖南側の破片は須恵器甕、カマド内は須恵器杯身である。77は第365図の★印で竪穴住居検出中に出土した。竪穴住居との位置関係は壁体溝からの距離40cm、床面からの比高差は約20cmである。この土器が竪穴住居内にあったとするには、壁体全体が低い、この部分が棚状に低くなっていると考えねばならず考慮の余地があるが、ベースに含まれる可能性や他の遺構に伴う可能性も低く、竪穴住居と有機的な関係があるものと考えた。時期は古・後・Ⅱ期である。(久保)

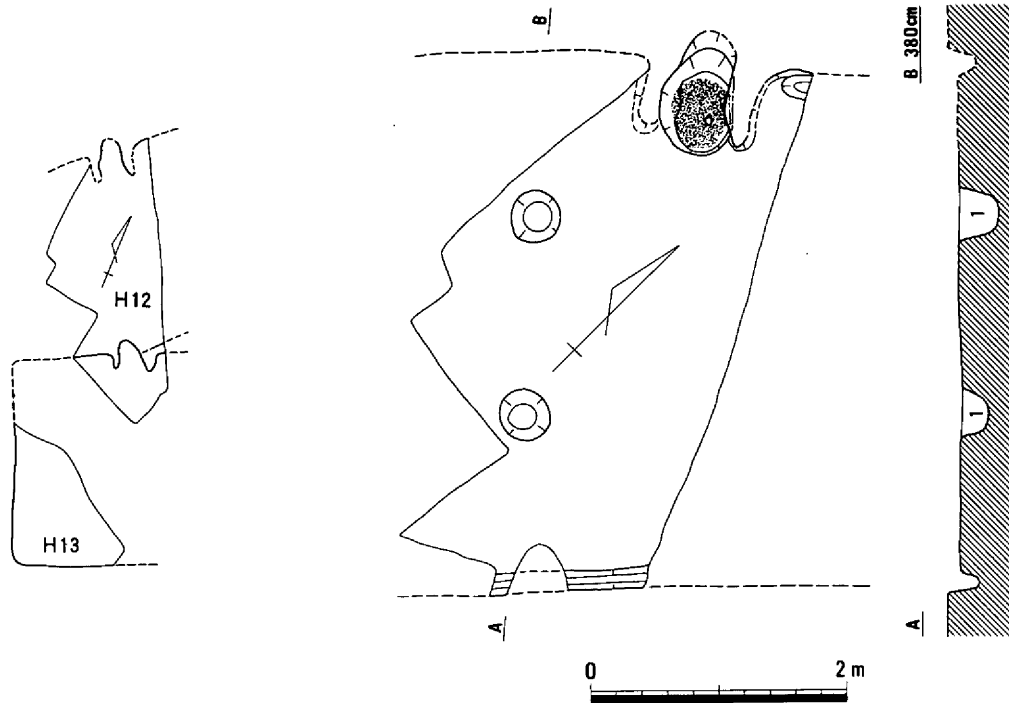


竪穴住居-11 (第368図)

竪穴住居-10の南9mで検出したもので、東半を近世の溝によって削平されているが、長さ420cm、幅350cmの方形に復元される。標高358cmを測る床面の周囲には幅20cm、深さ8cmの溝がめぐる。北辺に設けられたカマドは、古代の溝-38によって西袖を失っているものの、現状で全長103cm、袖長40cm、燃焼部幅61cmを測る。遺物は出土していないが、他の住居との関係から6世紀末～7世紀前半の範疇で理解される。(亀山)

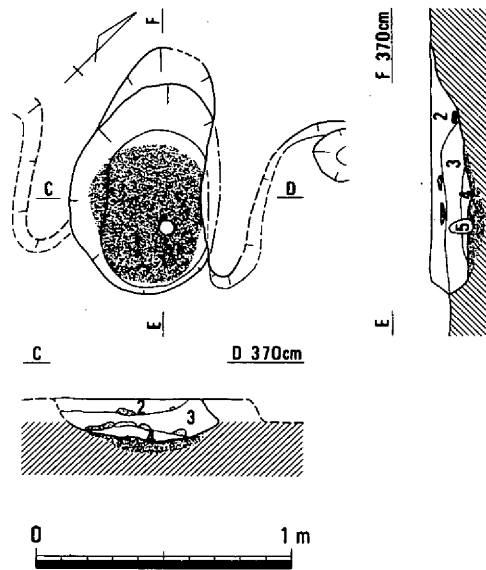
- 1 暗褐色粘質微砂土(炭・焼土塊含む)
- 2 淡褐色粘質微砂
- 3 茶灰色粘質微砂(焼土塊多く含む)
- 4 褐灰色粘質微砂(炭・焼土塊多く含む)

第368図 竪穴住居-11



竪穴住居-12 (第369図)

竪穴住居-12は、高田調査区の南西隅に位置する。残存状況が悪く、かろうじてカマド等が確認された。南東辺を竪穴住居-13に切られている。平面は、方形になると推定され、主軸方向はN-45°-Wである。規模は南北方向で425cmを測る。支柱穴のうち、西側の柱穴2本はいずれも径40cmの円形で、壁体溝から120~130cm前後離れており、柱間は160cmを測る。カマドは北西壁に位置し、楕円形の燃焼部は壁体溝より住居内側にあり、支脚の抜き取り痕跡が認められる。煙道の傾斜は12°を測る。時期を確定できる出土遺物は認められないが、遺構の時期は古・後・Ⅱ~Ⅲと思われる。(柴田)

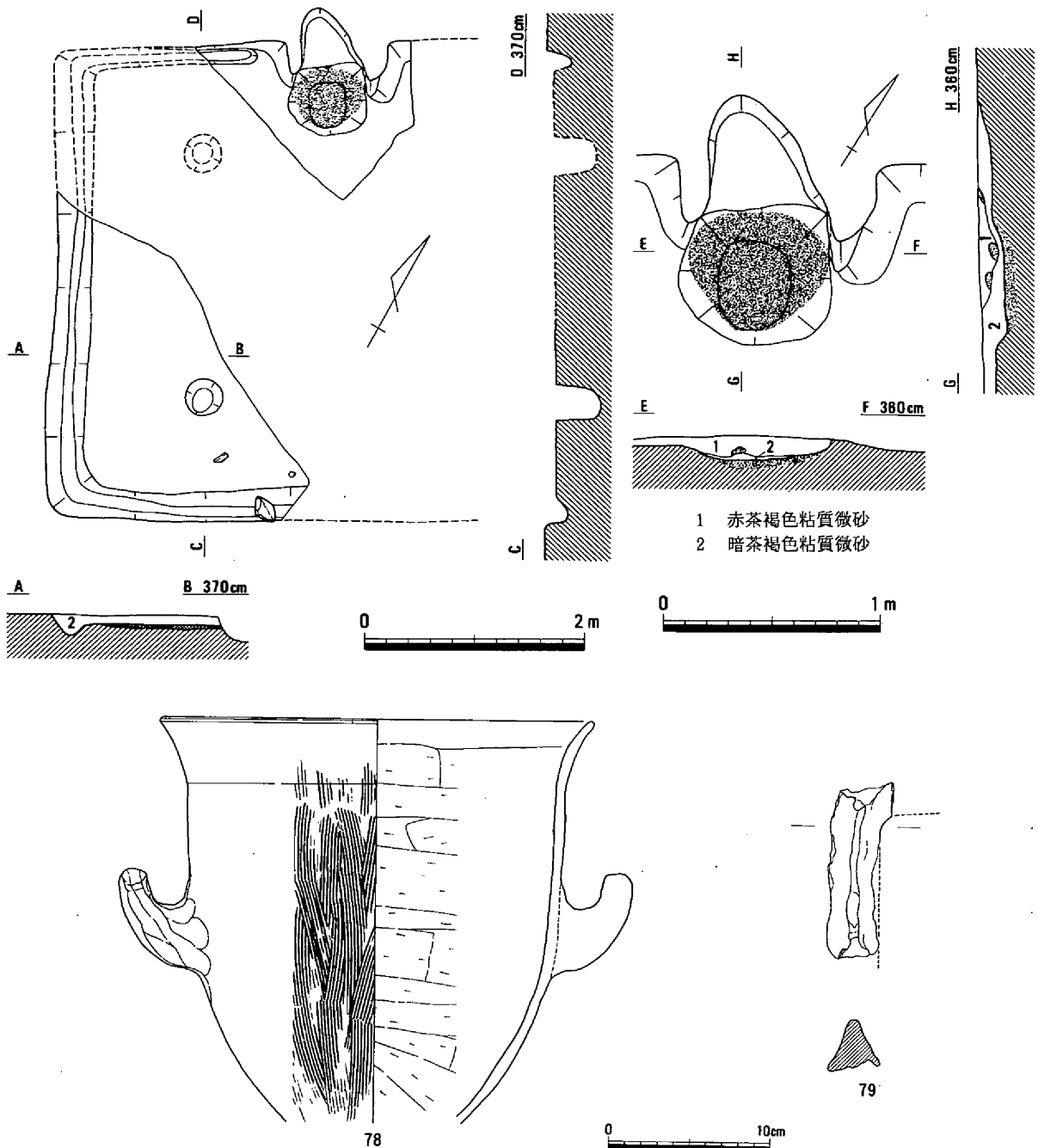


- 1 淡黄褐色粘質微砂
- 2 暗茶褐色粘質微砂(下面に焼土塊)
- 3 淡黄褐色粘質微砂(下面に焼土塊)
- 4 暗黄褐色粘質微砂
- 5 黒褐色粘質土(支脚抜き取り痕跡?)

第369図 竪穴住居-12

竪穴住居-13 (第370図、図版143)

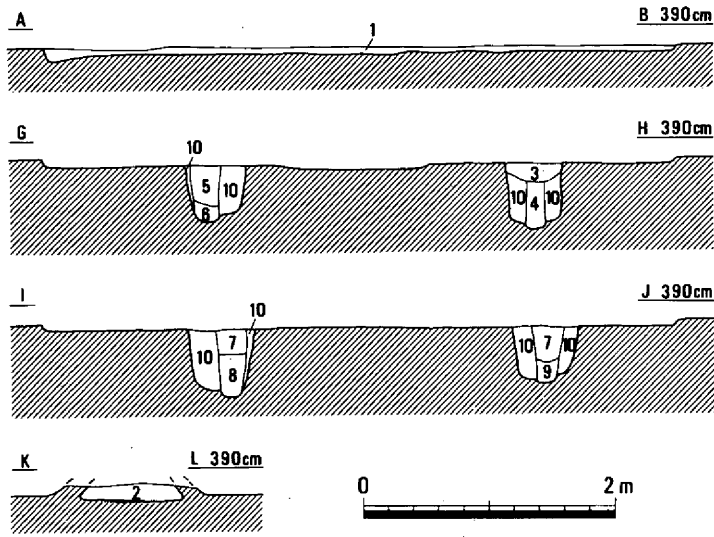
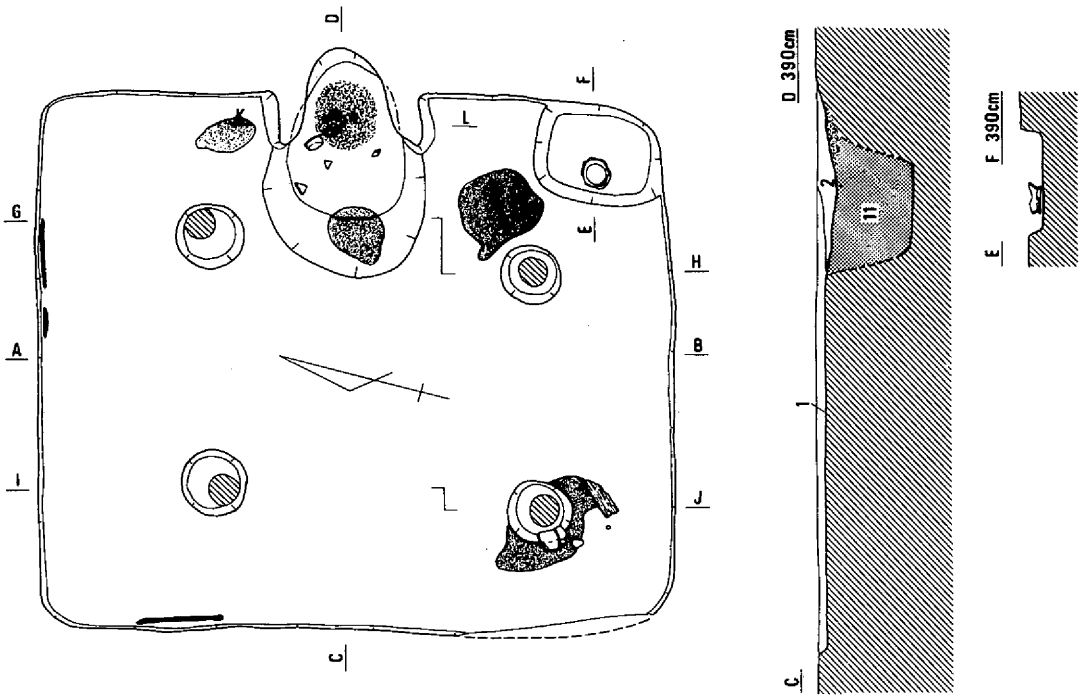
竪穴住居-13は、調査区の南西隅に位置する。遺構の残存状況は悪く、かろうじてカマド等が確認された。カマドは竪穴住居-12の南東辺を切っている。平面は方形になると推定され、主軸方向はN-60°-W、規模は南北方向で422cmを測る。柱穴は南西隅の1本が南壁寄りに検出された。平面は径35cmの円形、深さは43cmである。カマドは北西壁に作られており、隅丸方形気味の燃焼部は壁体溝より住居内側に位置する。カマド内から甑78、覆土中から土師質のカマド片79が出土している。遺構の時期は古・後・Ⅱ~Ⅲと思われる。(柴田)



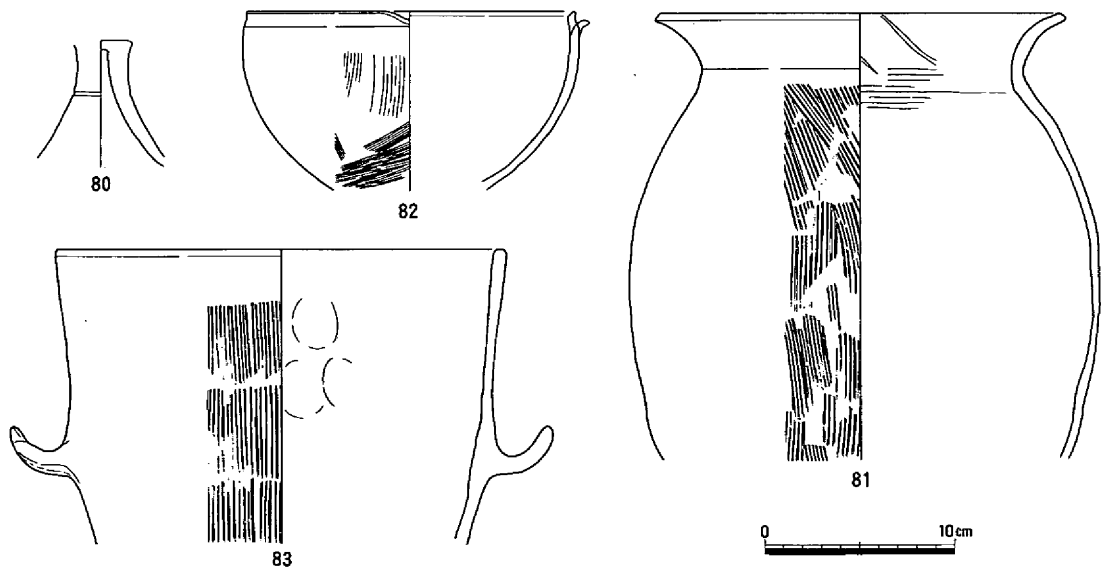
第370図 竪穴住居-13 (78・79)

竪穴住居-14 (第371図、図版116)

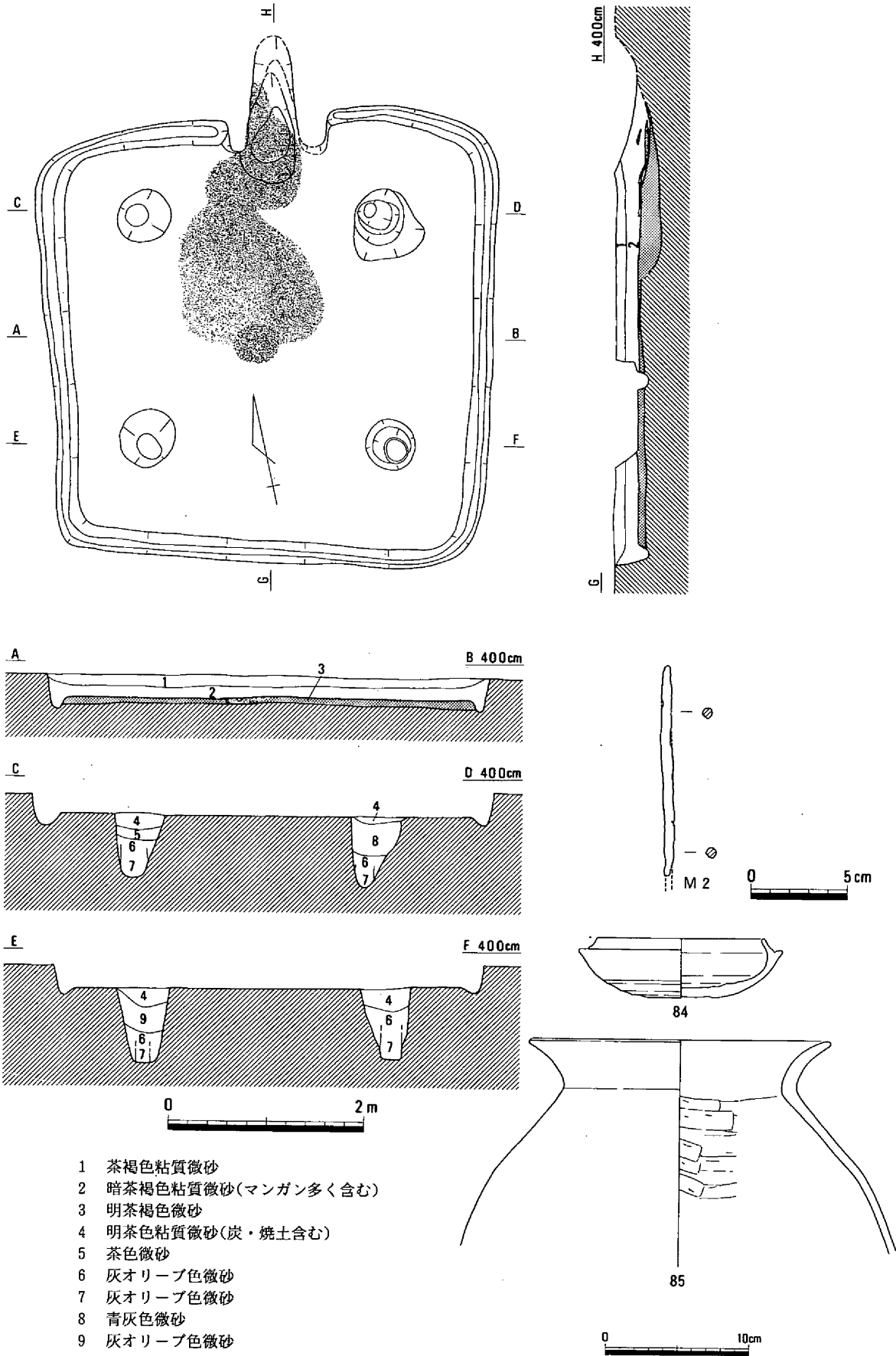
竪穴住居-12・13の7m北東に位置する。500×423cmの方形を呈する竪穴住居である。検出面から床面までの深さは5cmほどと残りは悪い。壁体溝は認められなかった。床面南東隅部で97×75×11cmの規模の方形土壌を検出し、ここから打ち欠かれた甕81の口縁部があたかも台として利用されたかのように逆位で出土している。カマドは東辺中央部に作りつけられており、その主軸は住居と同一である。燃焼部の幅は約50cmほどである。煙道部は、現状で住居外へ30cmほど延びるのみである。カマド下には下部構造として深さ60cmほどの土壌が作られている。支柱は4本であり、柱間は270~191cmと南北にやや長く、柱穴から径約20cmほどの柱痕跡を確認した。床面からは炭化材が出土しており、火



- 1 茶褐色粘質土(炭・焼土含む)
- 2 濃茶褐色粘質土(炭・焼土多く含む)
- 3 暗茶褐色粘質土(炭・焼土含む)
- 4 灰茶褐色粘土
- 5 明茶色粘質土
- 6 茶色粘質土
- 7 濃茶色粘質土(炭・焼土含む)
- 8 灰オリーブ色粘土
- 9 暗茶褐色粘質土
- 10 濃茶褐色粘質微砂
- 11 灰褐色粘質微砂



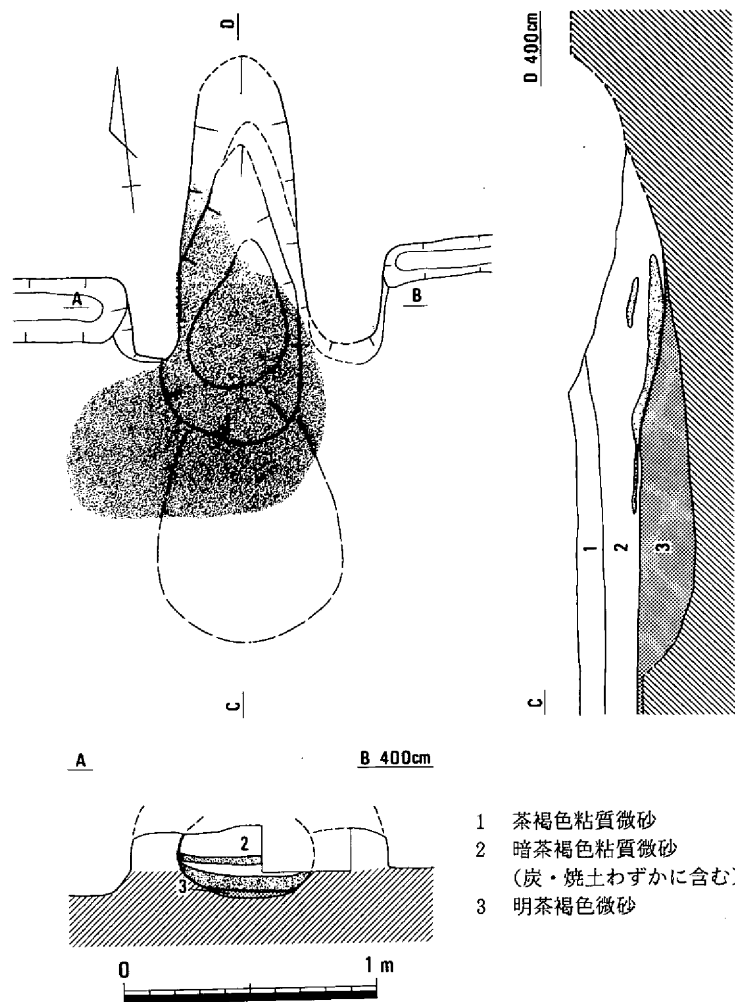
第371図 竪穴住居-14 (80~83)



- 1 茶褐色粘質微砂
- 2 暗茶褐色粘質微砂(マンガン多く含む)
- 3 明茶褐色微砂
- 4 明茶色粘質微砂(炭・焼土含む)
- 5 茶色微砂
- 6 灰オリーブ色微砂
- 7 灰オリーブ色微砂
- 8 青灰色微砂
- 9 灰オリーブ色微砂

第372図 竪穴住居-15 (84・85・M2)





第373図 竪穴住居-15

災住居であった可能性があるが、部分的であり片づけを示唆するものかもしれない。

出土遺物は、須恵器高杯80、土師器の甕81、片口鉢82、甑83を図示した。詳細な時期決定には躊躇するが古・後・Ⅲと判断している。 (大橋)

竪穴住居-15 (第372・373図、図版116・142・161)

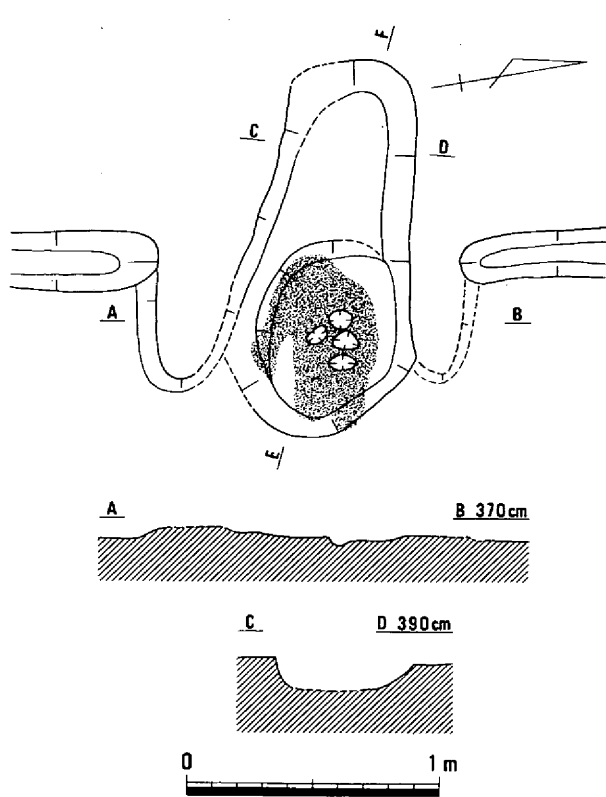
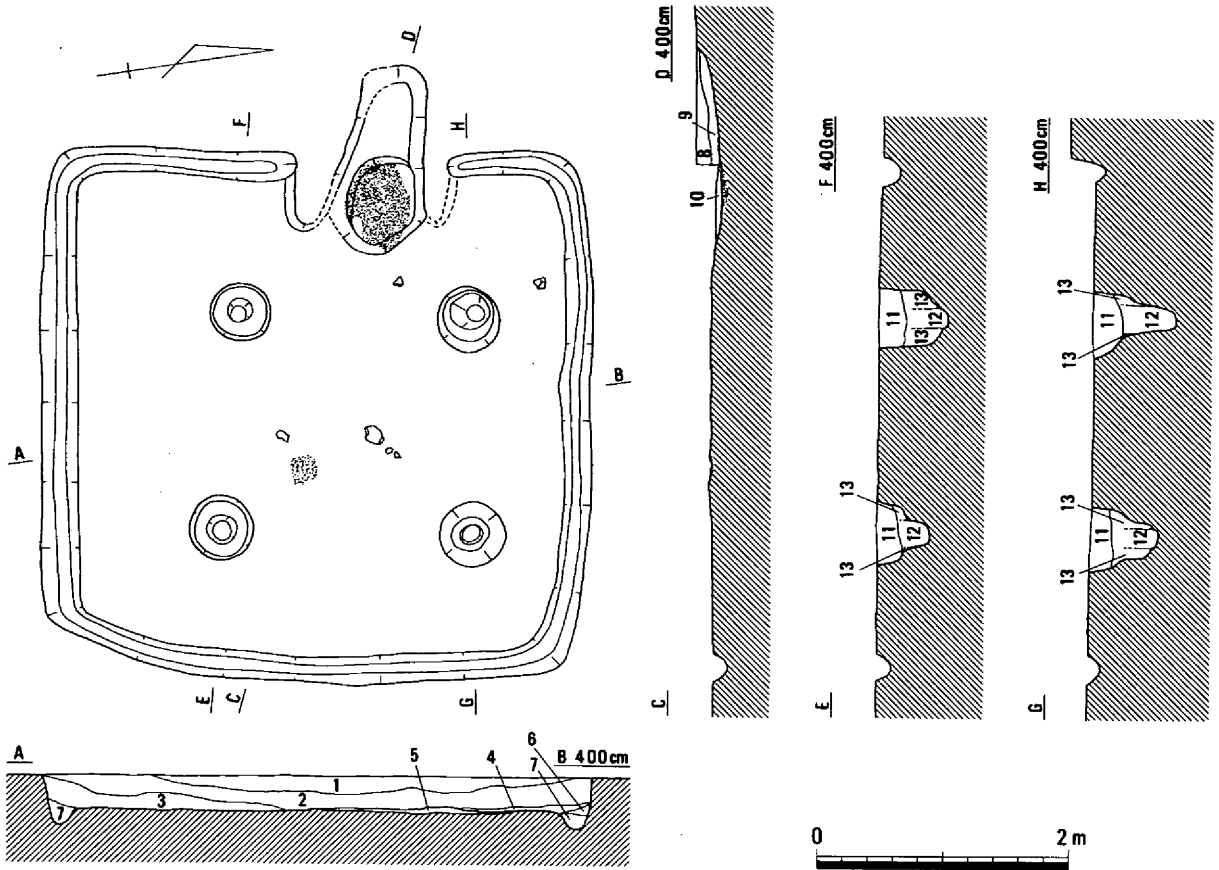
O20区北に位置する。方形の竪穴住居であり、北辺中央部にカマドが作りつけられている。また、このカマドを境にして、北辺壁は段違いになっている。規模は、465×457cmで、検出面から床面までの深さは30cmほどであり、床面の標高は362cmである。カマドの燃焼部幅は40cmほどであり、残存する煙道長は約90cmある。このカマド下部から前面にかけて深さ20cmほどの

土壌が掘られており、下部構造をなすものと理解される。また、床面中央部にも火処が検出されていることが注目される。支柱は4本であり、柱間は252~240cmとほぼ正方形に近く配されている。床面は、10cm未満の厚さの置き土の上に作られていることが判明した。

出土遺物は、図示した須恵器杯84、土師器甕85のほかにも、細片ではあるが、須恵器の蓋・甕・高杯などがある。また、カマド片も出土している。また、M69は針状の鉄製品であり、鍛錬鍛冶滓も出土している。この竪穴住居の時期は、84の杯を参考にすれば古・後・Ⅱ段階と思われる。 (大橋) 竪穴住居-16 (第374図、図版117)

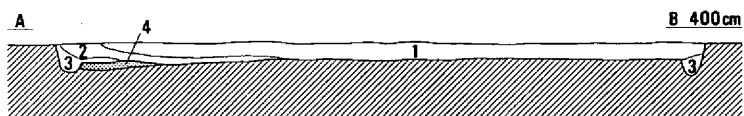
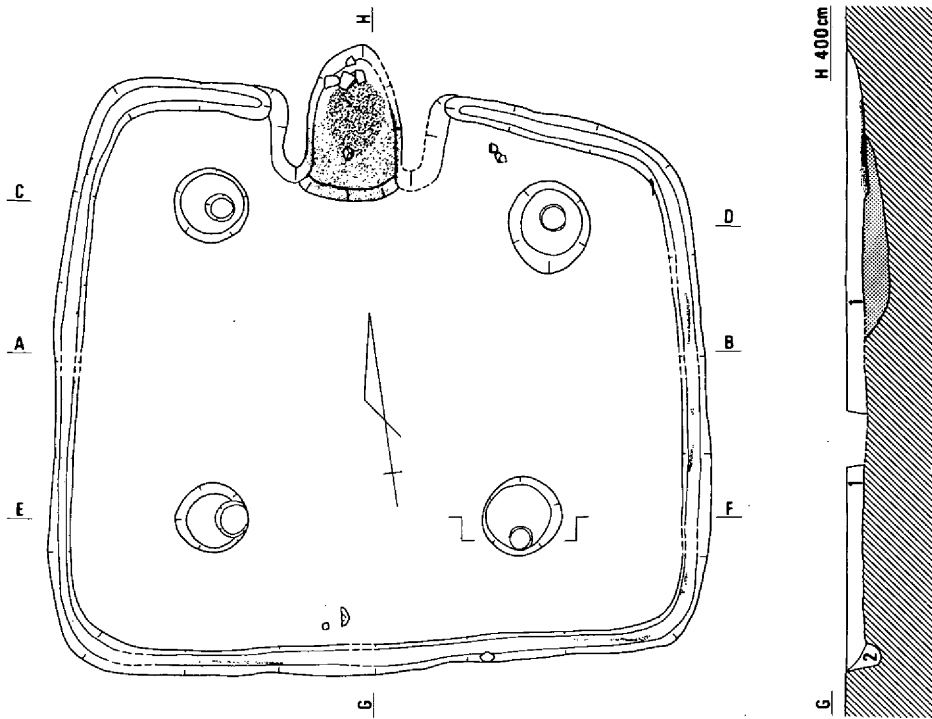
竪穴住居-15の約3m南で検出された。西壁やや北寄りにカマドを作りつけた竪穴住居である。410×400cmの規模を有しほぼ正方形をとるが、4本の柱穴はやや北寄りに配され、住居中央と柱穴で囲まれた方形プランの中央はややずれる。床面は標高361cmであり、カマドの遺存は悪く袖部分もほとんど残っていなかった。また、カマド下部の土壌も検出されていない。燃焼部には支脚を据えた痕跡とも思われる小穴を確認した。煙道は現状で70cmを測り、その主軸は住居主軸から7°振る。また、この延長線上の床面に焼土面を確認している。鉄鉱石もこの住居から出土しており、関連性が推測される。

出土遺物は細片で図示し得なかったが、須恵器杯4個体、蓋2個体、および甕と土師器の壺・甕がある。これらを参考にすれば、古・後・Ⅱ段階と判断された。 (大橋)



- 1 暗茶褐色粘質微砂  
 2 暗茶色粘質微砂  
 (暗灰褐色粘質土塊多く含む)  
 3 淡灰茶色粘質微砂  
 4 暗灰黄色粘質微砂  
 (マンガン多く含む)  
 5 灰黄色粘質微砂  
 (貼り床)  
 6 暗灰黄色粘質微砂  
 7 灰黄色微砂  
 8 黄茶褐色微砂弱粘質土  
 9 黄茶褐色微砂質土  
 10 暗茶色粘質微砂  
 (炭・焼土塊含む)  
 11 黄灰色微砂粘質土  
 12 暗灰色微砂粘質土  
 13 暗灰色微砂粘質土

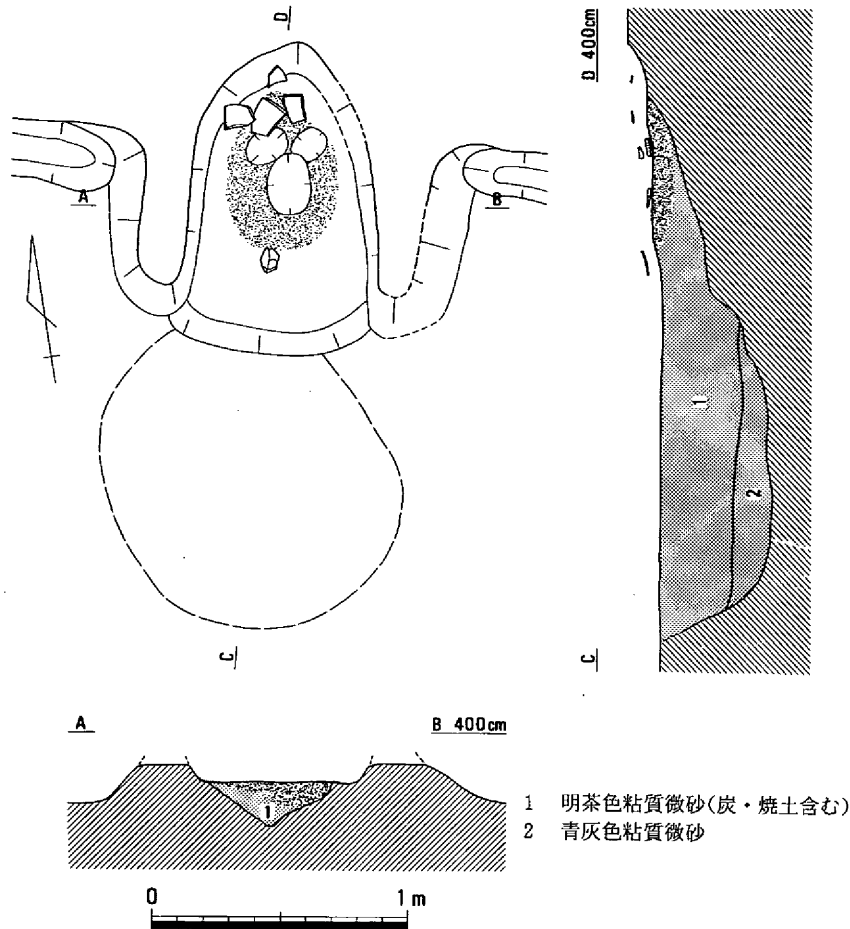
第374図 竪穴住居-16



- 1 灰褐色粘質微砂
- 2 暗黄茶色微砂粘質土
- 3 暗黄茶褐色微砂質土
- 4 茶褐色微砂質土
- 5 灰オリーブ粘質微砂
- 6 灰オリーブ色シルト質粘質土
- 7 灰オリーブ色シルト質粘質土
- 8 茶褐色粘質微砂(マンガン・鉄分・炭含む)
- 9 暗灰色粘土



第375図 竖穴住居-17 (86)



第376図 竪穴住居-17

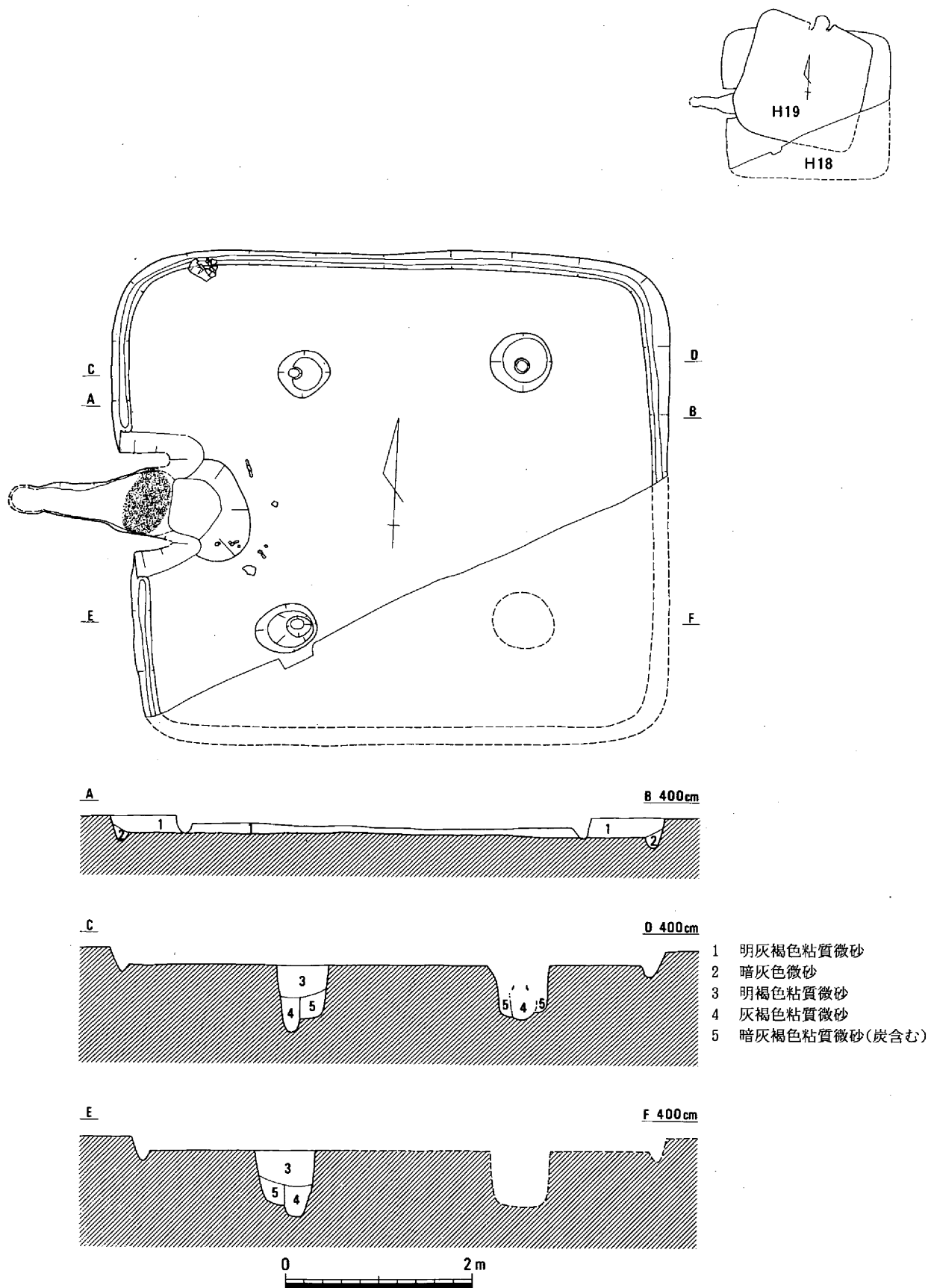
竪穴住居-17 (第375・376図、図版117・118)

竪穴住居-16の南に隣接する。上辺約400cm、下辺約470cm、高さ500cmほどの規模の台形状を呈する平面形を有す。カマドはこの台形の斜辺、北辺やや西寄りに作りつけられており、燃焼部はやや奥まった位置にある。このカマドにも支脚据えつけ痕跡が認められた。煙道部の遺存は悪く、現状で住居外へ約30cmほど延びるのみである。また、カマド下部から前面にかけて140×120×45cmほどの楕円形を呈する土壌が掘られており、床面はこれを埋めて築かれている状況を把握した。柱穴は4本であり、最も深いもので床面から80cmの深さを測った。

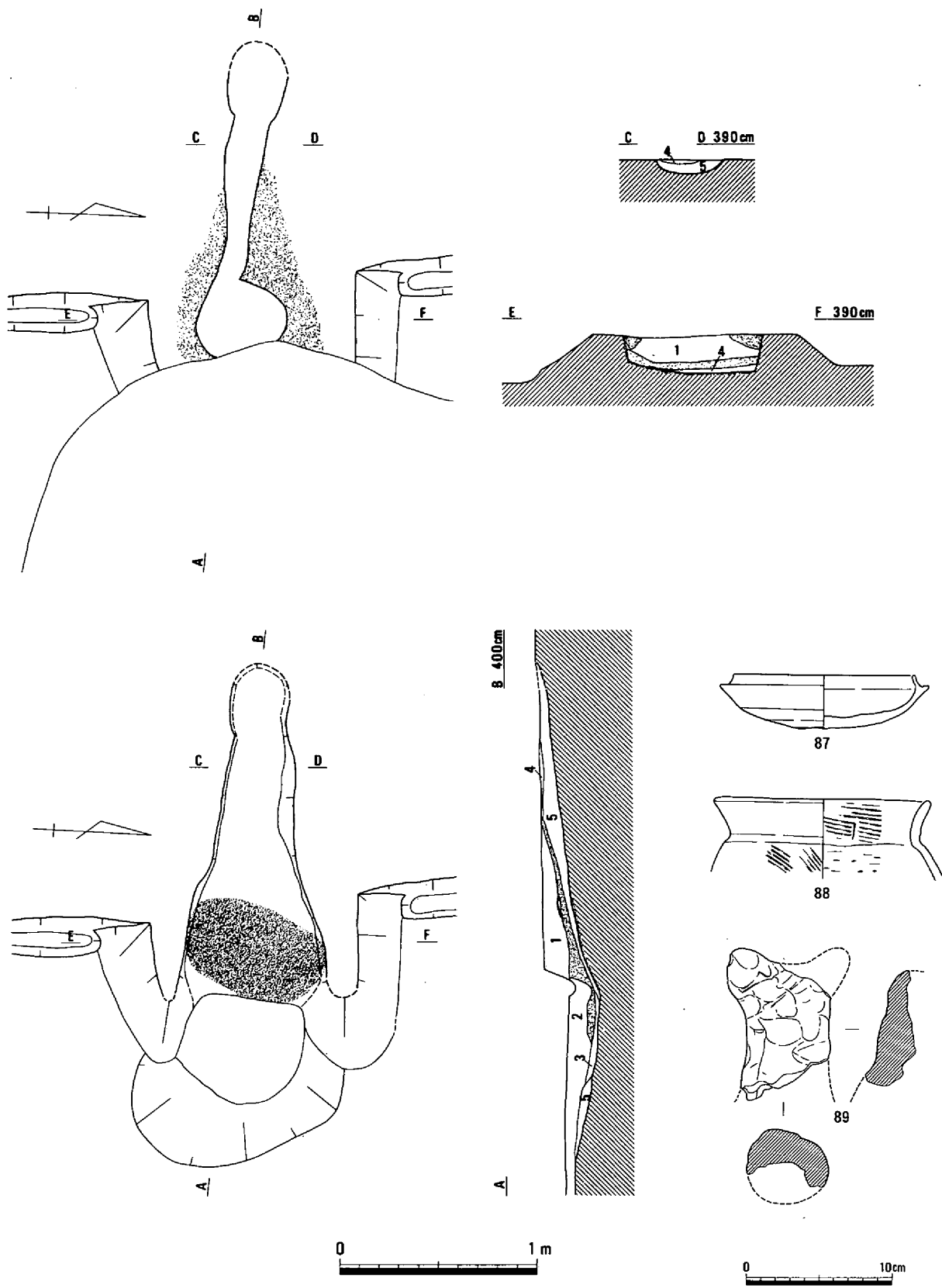
出土遺物は、86の須恵器杯を図示した。焼成不良のものであり、胎土にも砂礫を多く含んでいる。このほか、横瓶の小破片もある。この竪穴住居の時期は古・後・II段階と考えている。(大橋)

竪穴住居-18 (第377~379図、図版117・118・163)

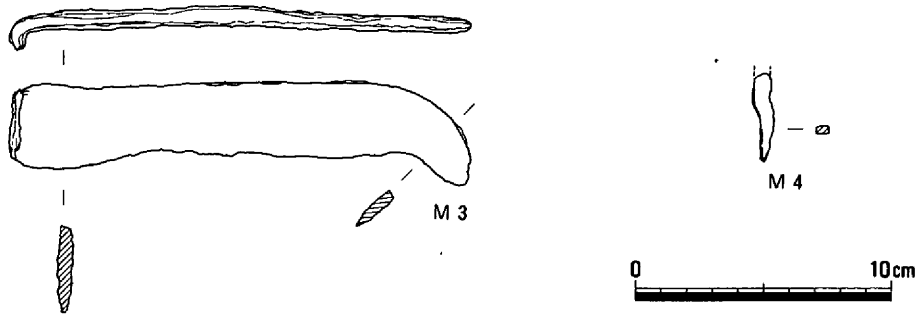
O20区の南西部で検出したもので、竪穴住居-17の南南東約5mに位置する。後述する竪穴住居-19と重複し、これに先行する。住居の南東隅部は調査範囲外にあるため未検出である。住居規模は東西の長軸方向で567cmを測る。短軸方向は推定で510cmほどと思われる。床面の標高は361cmを測る。支柱は4本で構成すると推測され、そのうち3本を検出している。また、柱穴から径30cmの柱痕跡を確認した。壁面の西辺中央に作りつけカマドが設けられており、その遺存状況は比較的良好である。第378図上図は検出面の状況を示したものであるが、カマド上部が形状を損なわずに直下に落ち込んだものと判断された。この被熱範囲の状況からカマドの掛け口が径45cmほどのものと推測される。カ



第377図 竪穴住居-18



第378図 竪穴住居-18 (87~89)



第379図 竪穴住居-18 (M3・M4)

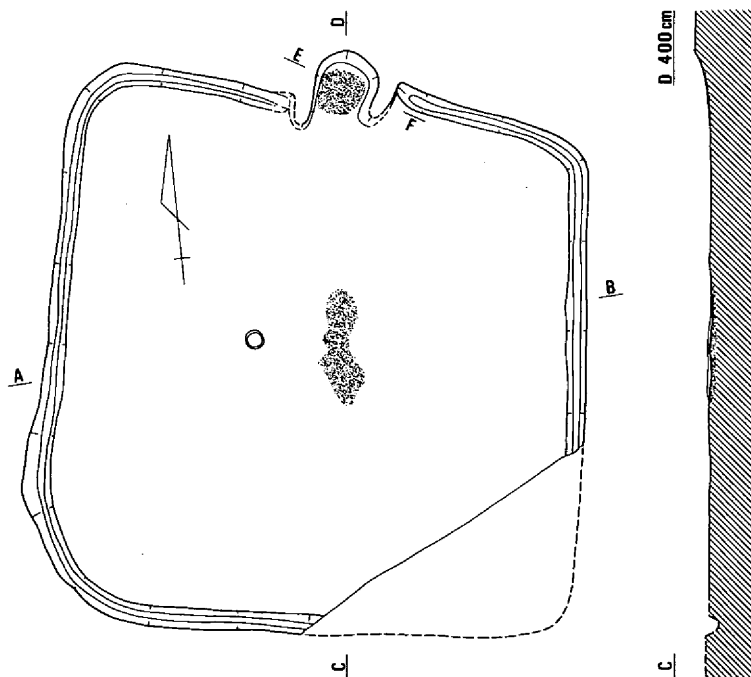
マド前面は床面からやや傾斜しており、燃焼部へと続く。カマド下部の土壌は存在しない。

出土土器は87の須恵器の杯、88の土師器の甕を図示しているが、提瓶の破片もある。また、89は土製支脚の破片である。このほかに鉄製品としてM3の鎌、M4の針状の不明製品がある。なお、鍛錬鍛冶滓が埋土中から出土している。

竪穴住居の時期は、87の杯を参考にすれば古・後・II段階と思われる。(大橋)

竪穴住居-19 (第380図)

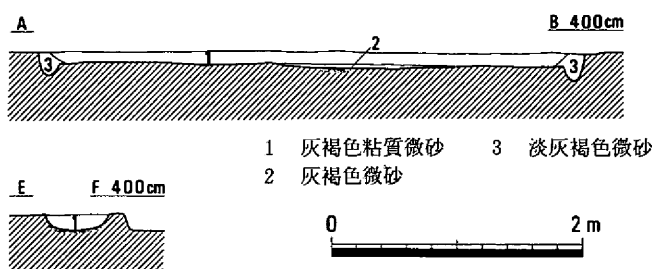
竪穴住居-18と重複して検出し、これを一部壊している。住居主軸は竪穴住居-18よりやや東偏する。カマドは北辺に作りつけられている。住居は423×420cmのややいびつな方形を呈する。床面の標高は竪穴住居-18より約10cm高い。この床面中央部には長楕円形をなす被熱面がある。カマドの遺存



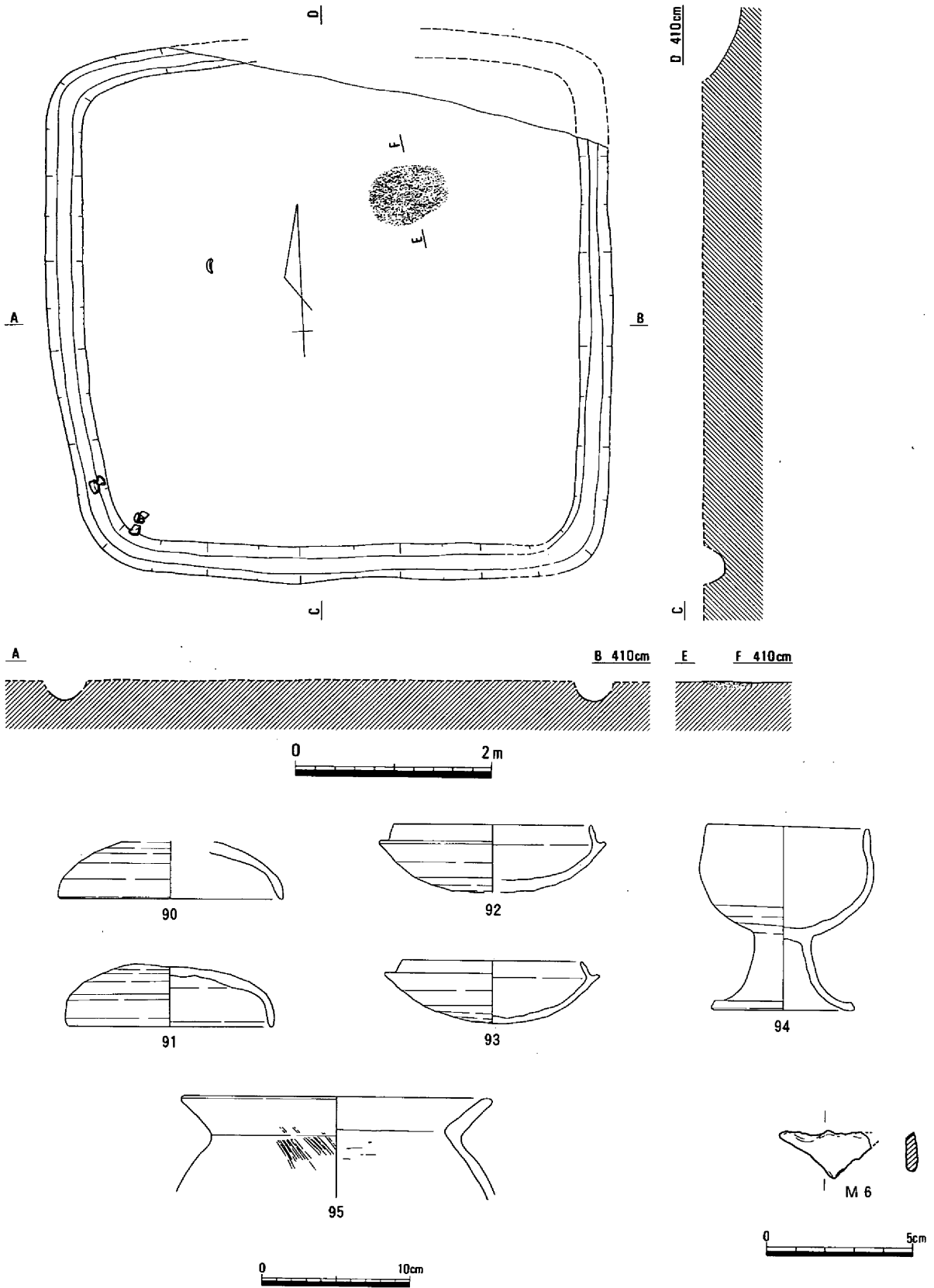
状態は悪く、特に袖部は不明瞭であった。また、カマド位置を境にして住居の北壁は段違いになっている。

出土遺物は細片ではあるが須恵器蓋杯・甕、土師器甕片がある。図示したM5は先端と基部が欠けた鉄鎌と思われる。なお、鍛錬鍛冶滓も出土している。

住居の時期は、竪穴住居-18との切り合い関係から古・後・II～III段階と思われる。(大橋)



第380図 竪穴住居-19 (M5)



第381図 竪穴住居-20 (90~95・M6)



竪穴住居-20 (第381図、図版143・162)

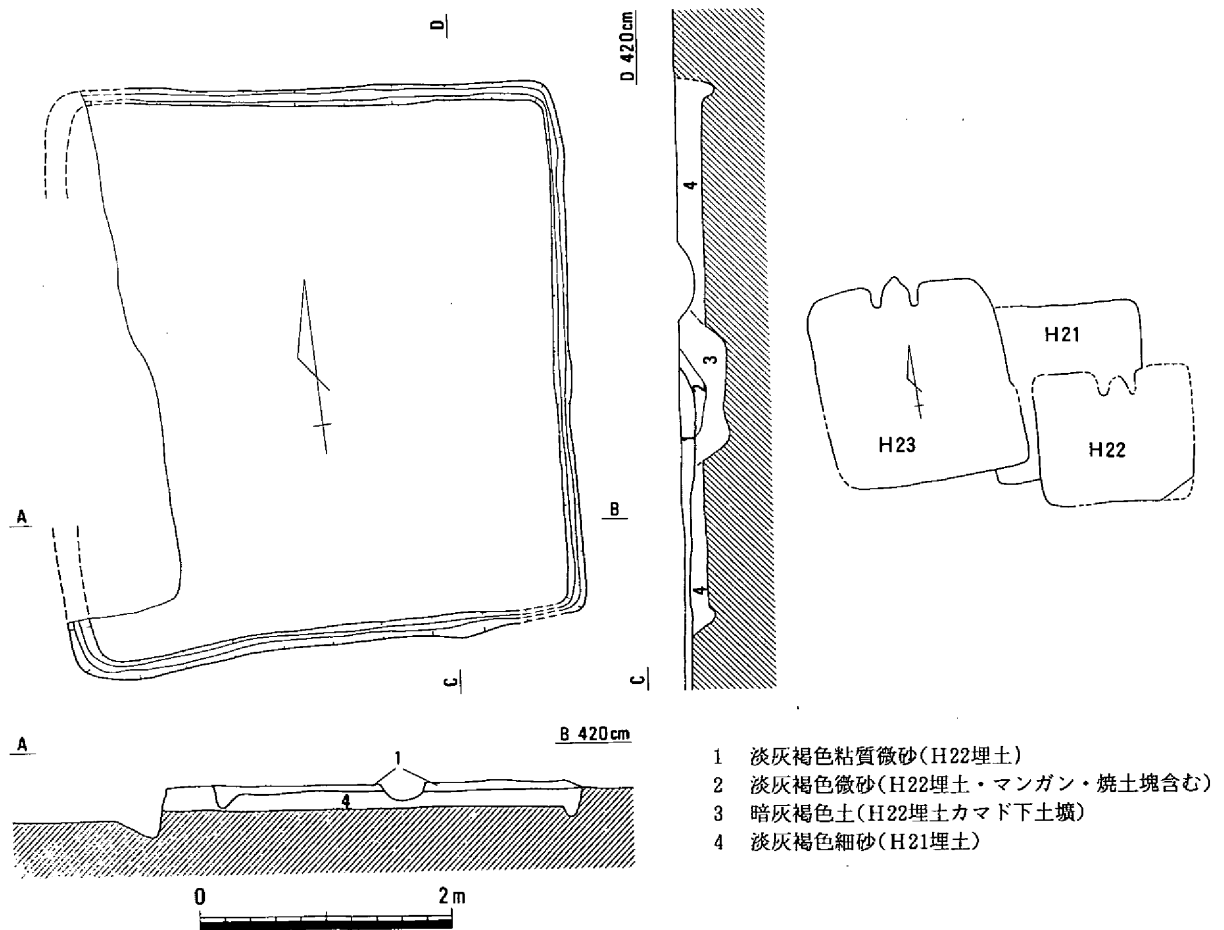
○20区中央やや西寄りで検出した。竪穴住居-15の東約10mに位置する。537×525cmを測るほぼ正方形の竪穴住居であるが、床面はほとんど残遺しておらず、周囲を巡る壁体溝を確認し、その概要を把握したものである。住居の主軸はほぼ南北を指す。床面中央やや北東付近で楕円形を呈する被熱面を確認しており、地床炉とも思われる。住居の北側は一部中世の溝によって削平されているため、作りつけのカマドが存在したかどうかは確定できない。また、柱穴も確認できなかった。

出土遺物は須恵器の杯3個体、蓋2個体、甕破片、台付椀、土師器甕を確認しており、そのうち90~95として図示している。須恵器はいずれもロクロ方向が逆回りである。また、M6として図示したのは鉄素材と判断した三角鉄片であり、現重量2.6gを測る。床面の被熱面の存在と相まって小鍛冶を行っていた可能性が指摘される。なお、この竪穴住居からは鉄滓等は出土しておらず、住居の放棄に伴い片づけをしていたとも推測される。竪穴住居の時期は古・後・II段階と判断した。(大橋)

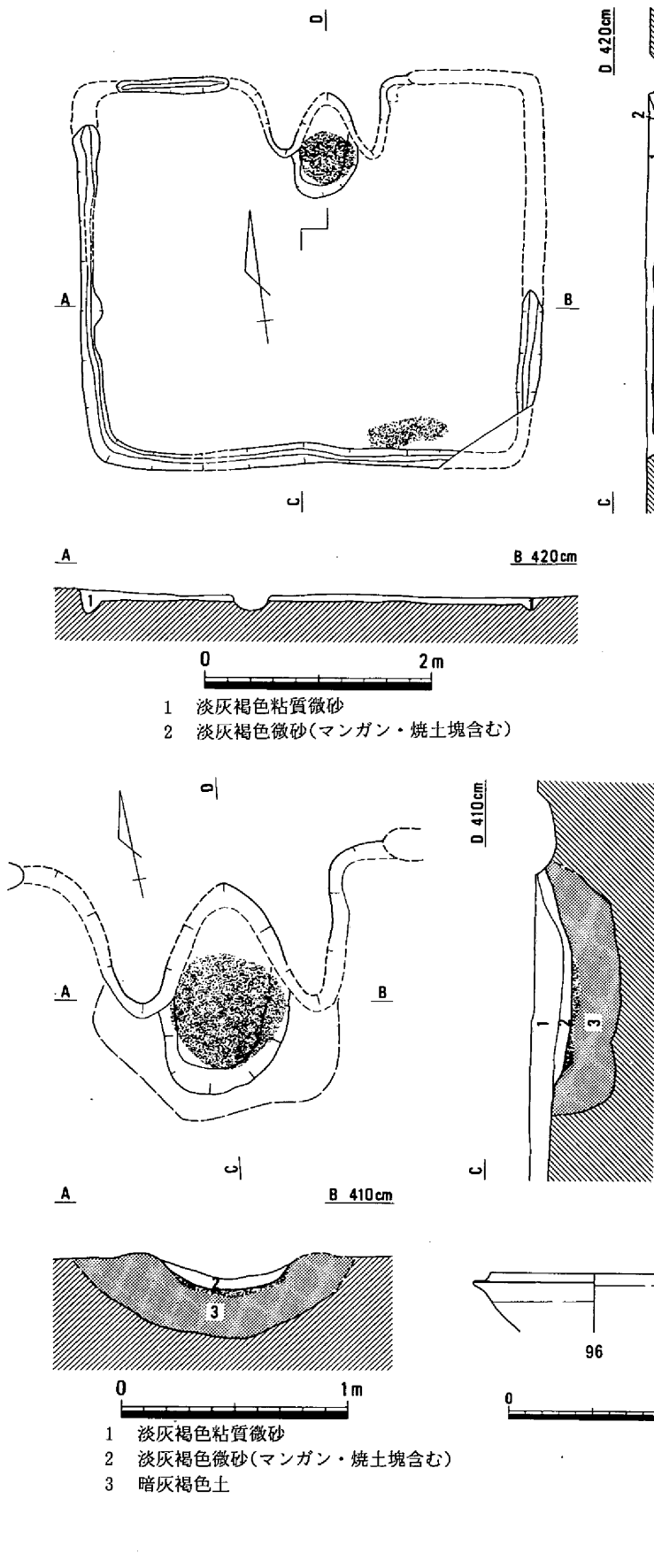
竪穴住居-21 (第383図)

○20区中央で検出したもので、竪穴住居-20の東20mに位置する。後述する竪穴住居-22・23と重複し、3軒のうち最も先行する。長辺457cm、短辺は推定400cmほどのややいびつな長方形をなす。床面の標高は367cmを測る。カマドおよび、支柱は明らかでない。

出土遺物は須恵器の細片があるのみで詳細な時期判断はできないが、切り合い関係を参考にすれば古・後・II段階と考えても差し支えないものと思われる。(大橋)



第382図 竪穴住居-21



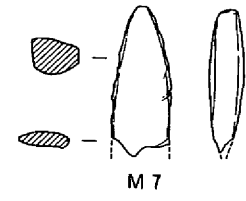
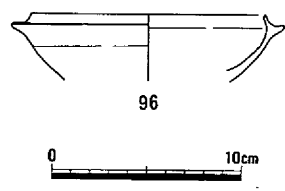
竪穴住居-22

(第383図、図版162)

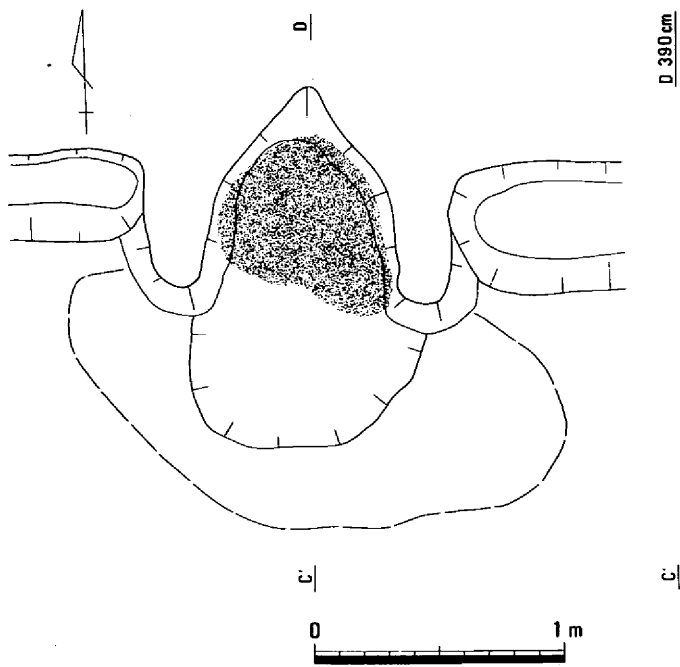
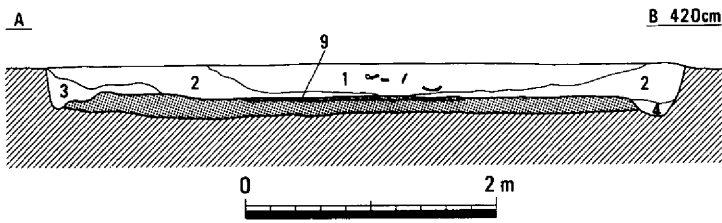
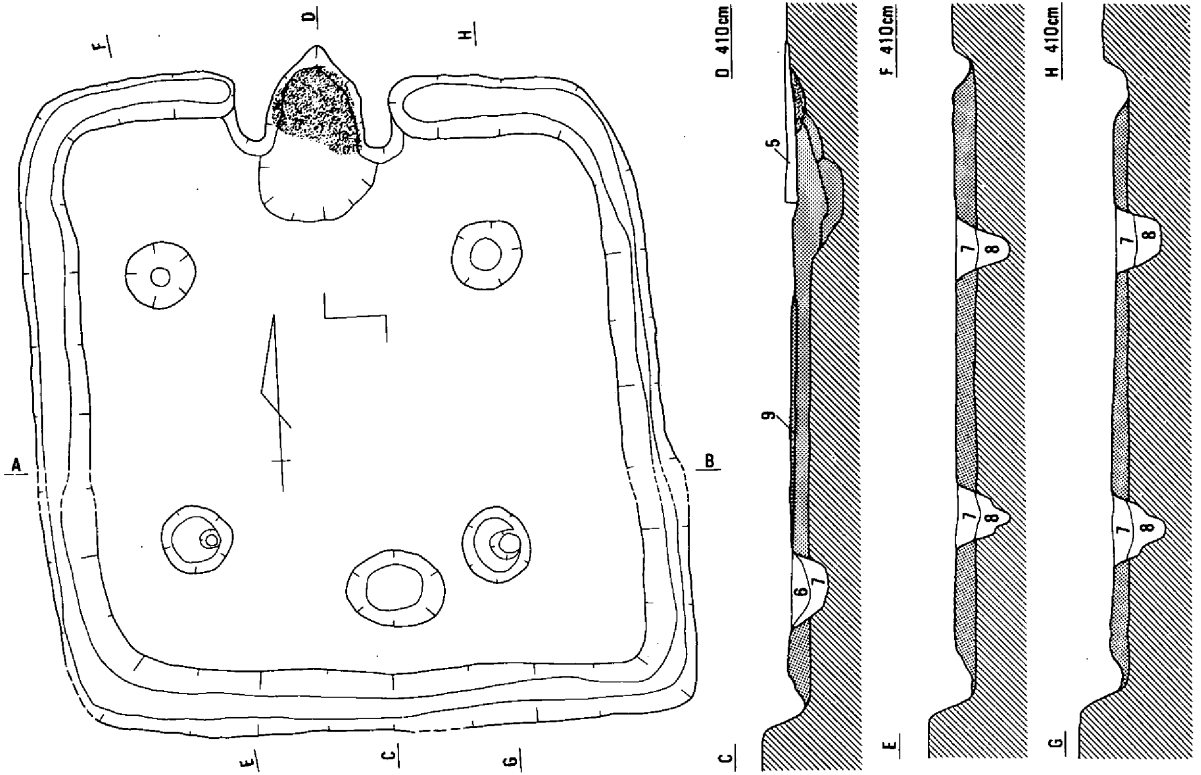
竪穴住居-21の南西部と重複し、これを壊して建てられている竪穴住居である。検出面から床面までは5cmほどしか残っておらず、また中世の遺構によって大きく削平されており、残存していた壁体溝の一部と被熱面の存在によってその概要を把握した。これによれば、392×333cmほどの規模をなす方形を呈する竪穴住居と推測される。床面の標高は重複している竪穴住居-21より15cmほど高い。北辺中央にはカマドが作りつけられているが、その燃焼部は住居内側へと寄っており、袖部、煙道部とも残りは悪い。カマド下部には深さ30cmほどの不整形な土壌が掘られている。また、カマド対辺の壁際近くの床面に一部被熱箇所を検出している。

出土土器は96の須恵器の杯を図示しているが、このほかに須恵器蓋の小片と土師器甕の口縁部がある。また、M7は鉄製の鑿と思われるもので、重量30gを測る。

出土遺物が小片であるため、時期決定に躊躇するが、古・後・Ⅲと考えている。(大橋)

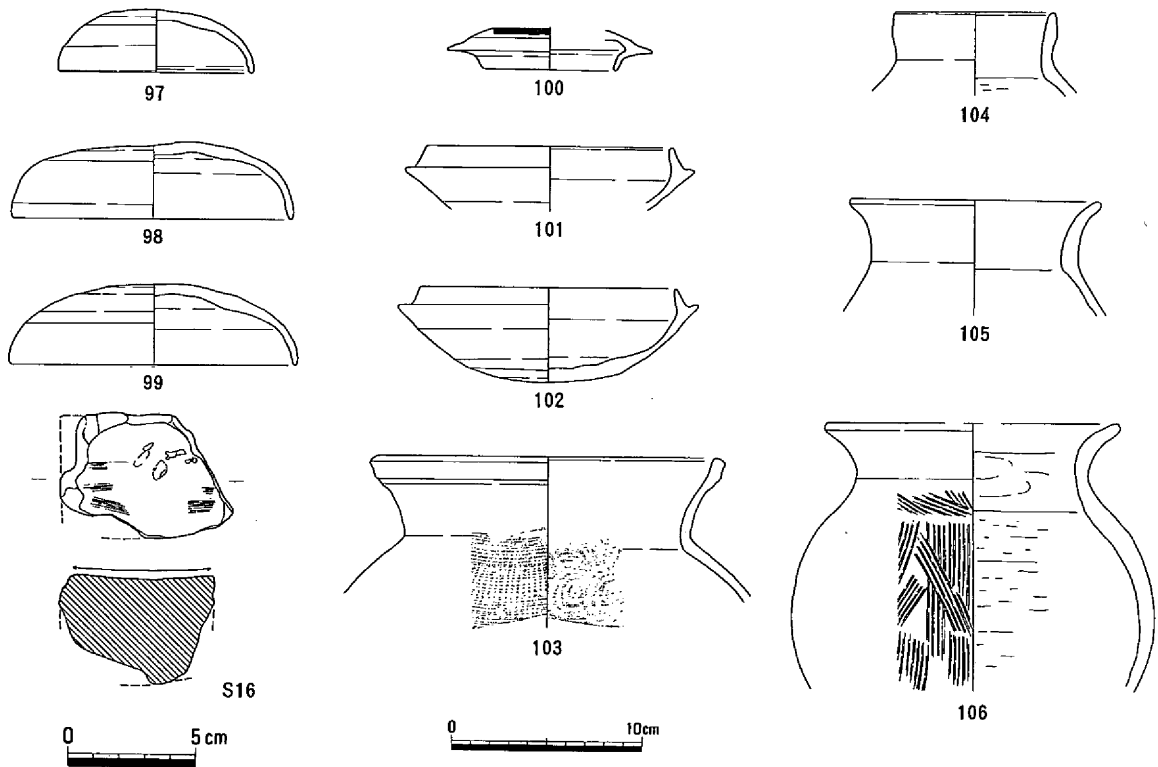


第383図 竪穴住居-22 (96・M7)



- 1 暗茶褐色粘質土
- 2 茶褐色粘質土
- 3 暗灰茶褐色・黒灰茶褐色粘質土
- 4 灰茶褐色粘質土
- 5 暗茶褐色粘質土(炭・焼土塊含む)
- 6 暗灰褐色粘質土
- 7 暗灰褐色粘質土及び明黄灰色微砂
- 8 明青灰色微砂及び暗灰褐色粘質土
- 9 明黄色微砂(貼り床)
- 10 明茶褐色微砂及び暗褐色粘質土
- 11 茶灰褐色粘質土
- 12 暗灰褐色粘質土

第384図 竪穴住居-23



第385図 竪穴住居-23 (97~106・S16)

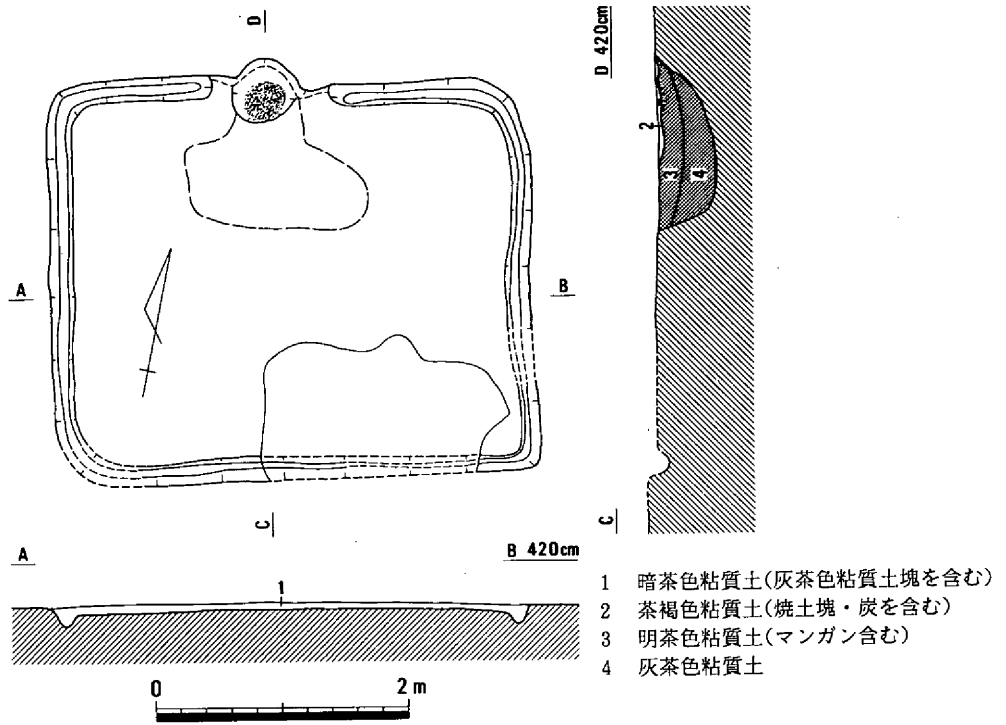
竪穴住居-23 (第384・385図、図版119・144)

竪穴住居-21の西半部分と重複し、その床面を壊して作られている。住居主軸をほぼ南北に採り、南北497cm、東西475cmの規模を有するやや歪つな長方形を呈する竪穴住居である。床面の面積は21.8㎡であり、その標高は363cmと竪穴住居-21と比較し4cm低い。また、この床面は15cmほどの厚さの置土の上に叩き締めて作られており、四周に幅20cmほどの幅広の壁体溝が確認された。北辺中央にはカマドが作りつけられている。カマド下には床面から40cmほどの深さを測る不整形な土壌が設けられている。住居の主柱は4本で構成されており、柱間距離はやや南北方向が長く最大で260cmを測った。また、床面南壁側中央付近に68×59cmの規模の楕円形を呈する深さ約30cmほどの土壌を検出した。出土遺物は97~103の須恵器、104~106の土師器とS16の砥石を図示した。このほかにも提瓶等の小破片がある。また、土師製のカマド小破片も確認している。なお、腕形鍛冶滓を含め計140gの製鉄関連遺物が出土している。この竪穴住居の時期は、出土遺物から古・後・II段階と判断している。(大橋)

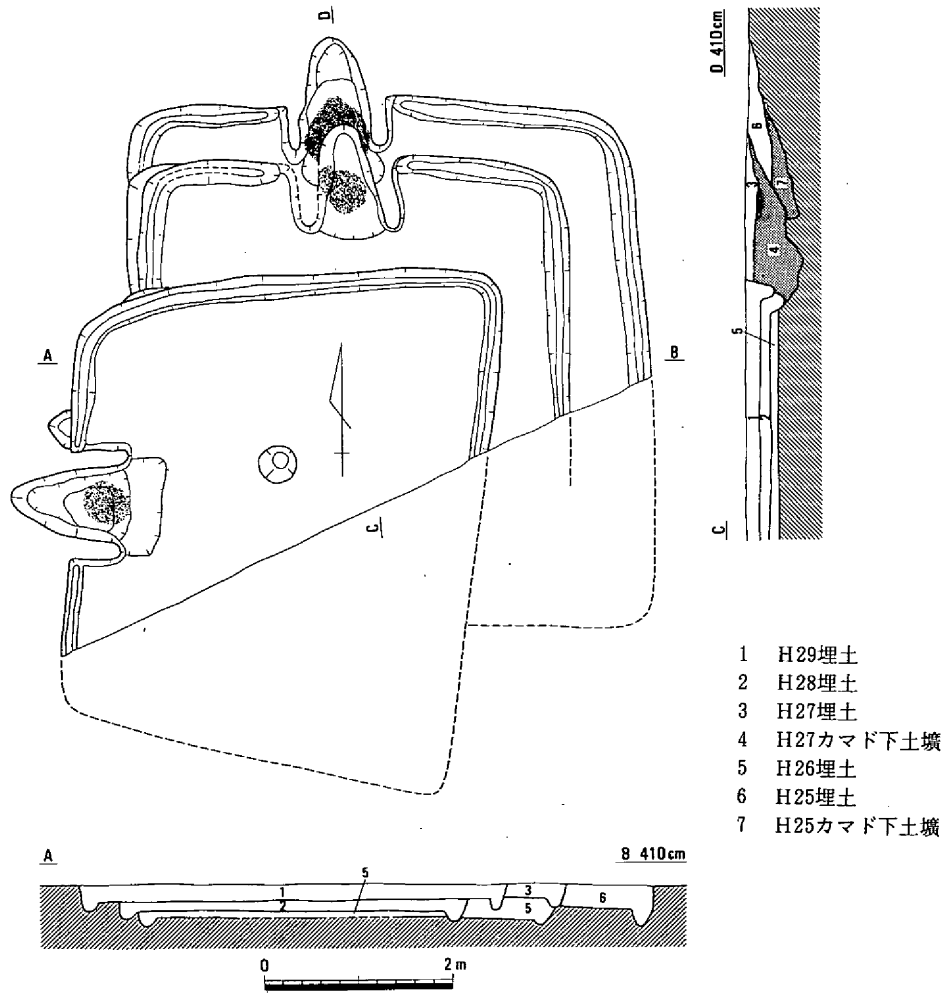
竪穴住居-24 (第386図)

竪穴住居-23の南西約5mで検出した。遺構の残存状況は悪く、検出面から床面までの深さは10cm未満である。住居主軸をN-11°-Wに採り、長辺で362cm、短辺で305cmを測るやや長方形の平面形を持つ。床面の標高は380cmであり、他の竪穴住居と比較してやや高い。床面の一部は後世の削平を受け、推定で床面積10.5㎡ほどに復元される。柱穴は検出されず、無柱と判断した。北辺側に作りつけのカマドを有するが、遺存が悪く袖部は明らかでない。カマド下には平面凸形の不整形な深さ45cmの土壌を検出している。出土遺物は須恵器細片のみで図示していないが、このほか鉄滓も出土している。

時期は周囲の竪穴住居の状況から古・後・II~III段階とみることは可能と思われる。(大橋)



第386図 竪穴住居-24



第387図 竪穴住居-25~29

竪穴住居-25 (第387~389図、図版119)

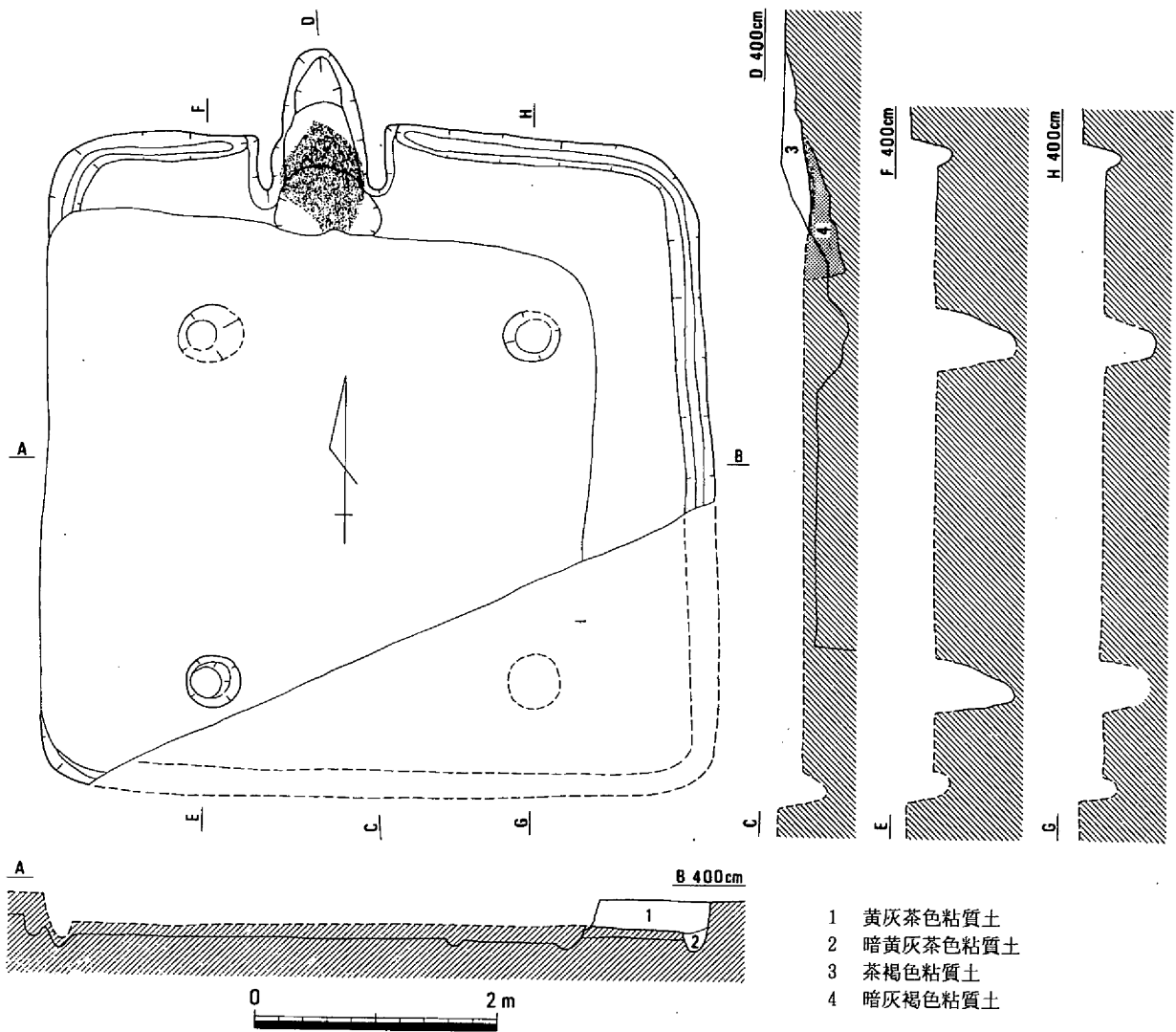
O20区中央やや南西寄りに位置する竪穴住居である。竪穴住居-24からは約1m南西に離れている。後述する竪穴住居-26~29とあわせ第387図に示すように計5軒がほぼ同一の箇所で重複しており、そのなかで最も先行するものである。住居の南東部は調査範囲外に延び、また他の竪穴住居と重複しているため、床面自体は北側と東側のL字状にのみ確認した。さらに、南西隅の壁体の一部も検出できたことを考えあわせ、住居の規模は535×508cm、床面積約27㎡の方形の平面形を呈するものと復元される。なお、住居主軸はN-1°-Wを指す。床面の標高は361cmを測る。柱穴は3本確認しており、その配置から4本で構成されていたものと考えられる。

この住居の北辺中央やや西寄りの部分にカマドが作りつけられているが、その主軸は住居主軸よりやや西偏し、その延長線は住居中央を向く。カマド下には床面からの深さ約35cmを測る土壌が設けられており、防湿の役割を果たしていたものと推測される。

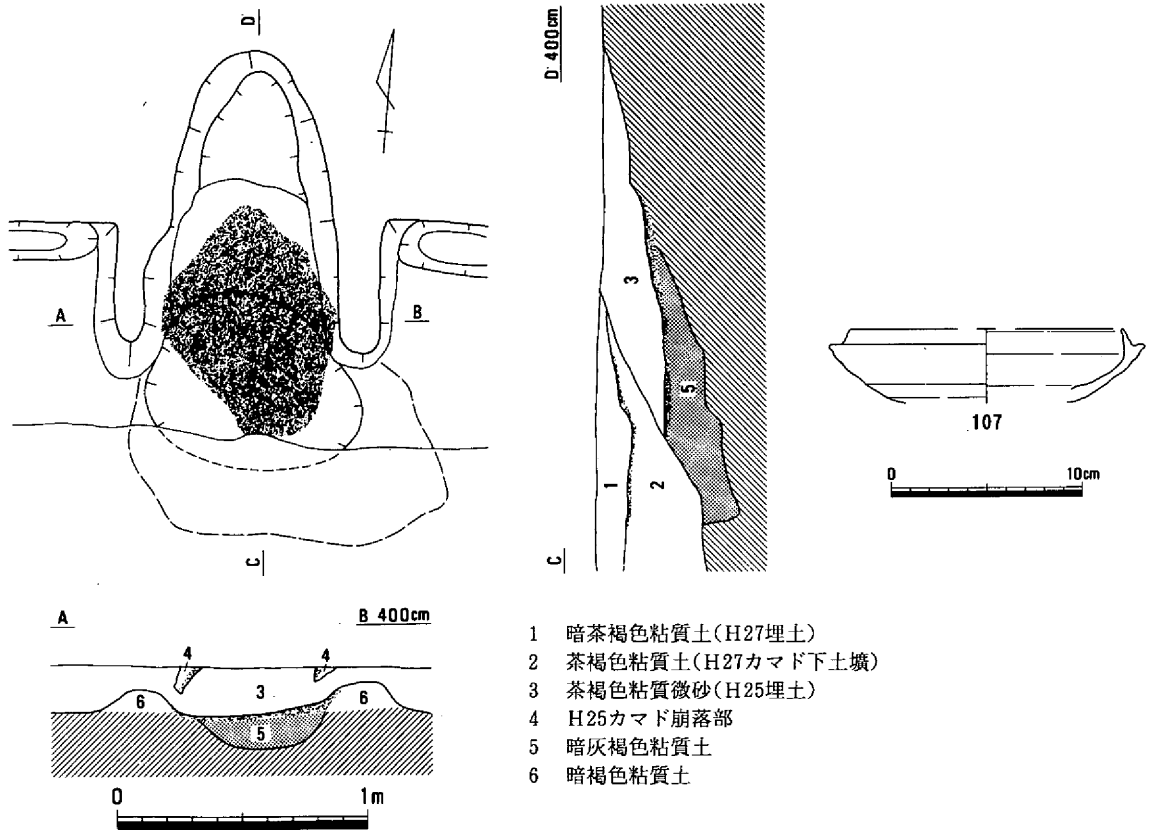
出土遺物は5軒の住居が重複しているため、おのおの分離できていないものもある。図示しているのは杯の小破片であるが、このほかに製塩土器の破片も出土している。

竪穴住居の時期は古・後・II段階と判断している。

(大橋)



第388図 竪穴住居-25



- 1 暗茶褐色粘質土(H27埋土)
- 2 茶褐色粘質土(H27カマド下土壌)
- 3 茶褐色粘質微砂(H25埋土)
- 4 H25カマド崩落部
- 5 暗灰褐色粘質土
- 6 暗褐色粘質土

第389図 竪穴住居-25 (107)

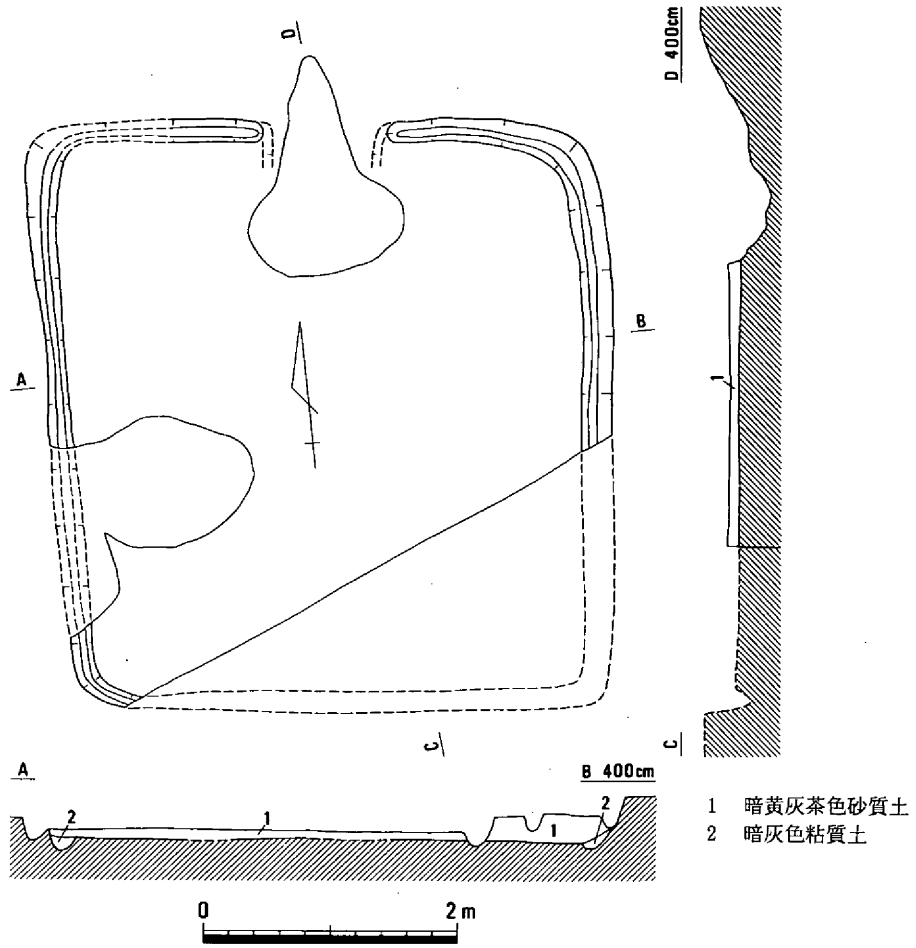
竪穴住居-26 (第387・390図、図版119)

竪穴住居-25~29の重複した5軒のうち、竪穴住居-25に次いで作られたものである。住居主軸方向は、竪穴住居-25に近似する。竪穴住居-25に比べやや小形化し、位置を西側の壁が重複するように南西にずらしている。規模は推定で460×425cmを測る平面やや長方形を呈するものである。床面積は約18.5㎡に復元され、床面標高は竪穴住居-25より10cm深い位置にある。北辺の壁体溝の検出状況からこの中央にカマドが本来作りつけられていたものと思われるが、竪穴住居-25のカマド下土壌によって削平されているため、未検出である。また、柱穴も明らかにできず、無柱構造を採っていた可能性が指摘される。出土遺物は細片のため図示していないが、須恵器壺、横瓶の破片がある。切り合いの状況からこの竪穴住居の時期も古・後・Ⅱ段階とみることが可能と思われる。(大橋)

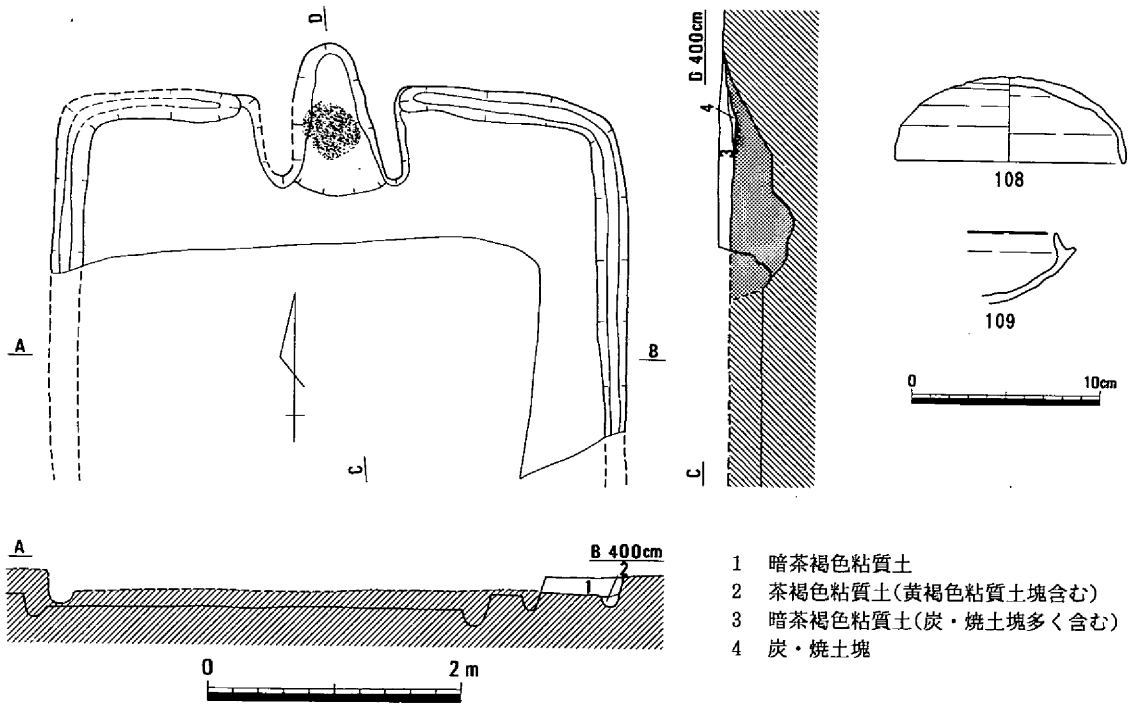
竪穴住居-27 (第387・390・391図、図版119・144)

重複した5軒のうち、3番目に作られた竪穴住居である。後述する竪穴住居-28・29に大きく床面が削平されており、全容は明らかにしえないが、竪穴住居-26とほぼ同一の箇所同一の形状をもって構築されたものと思われる。残存している床面の標高は重複した5軒の竪穴住居のうち最も高い。また、竪穴住居-26より約25cmほど高く、その床面を埋めて建て替えたものと判断した。カマドは、北辺に作りつけられているが、竪穴住居-25同様その主軸は、住居主軸からやや西偏する。このカマド下にも深さ約50cmほどの土壌が設けられている。柱穴は明らかにしえなかった。

出土遺物は108の須恵器蓋、109の須恵器杯を図示した。ほかに提瓶、土師器甕、製塩土器等の小破片がある。これらの出土遺物と切り合い関係から時期は古・後・Ⅲにかけてと思われる。(大橋)

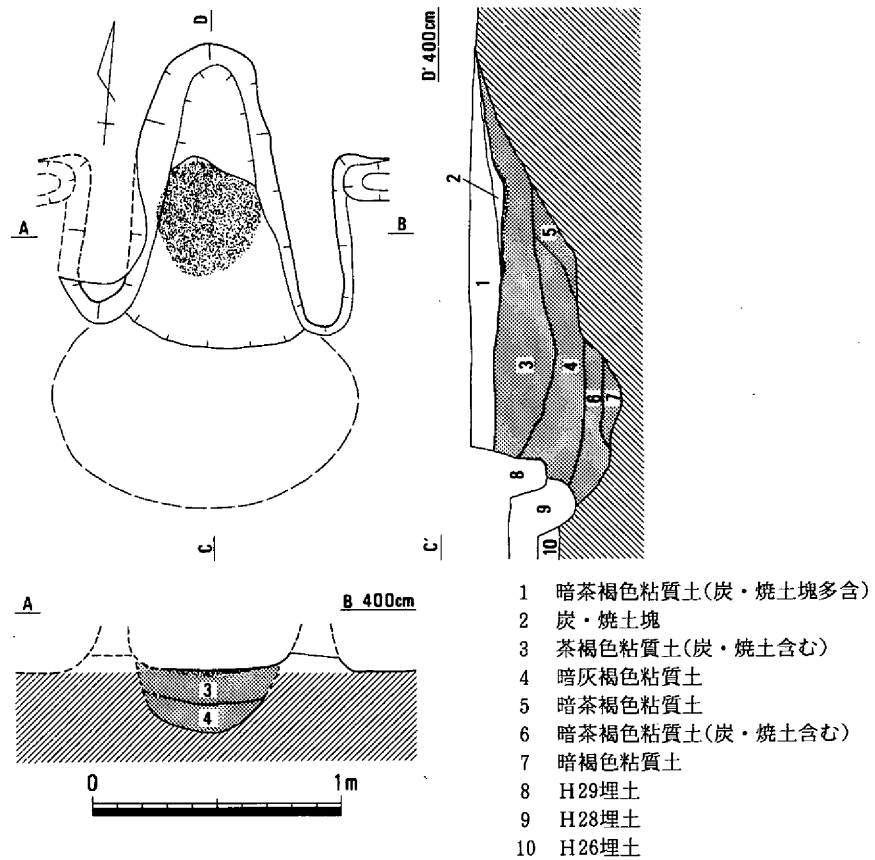


第390図 竪穴住居-26



第391図 竪穴住居-27 (108・109)





第392図 竪穴住居-27

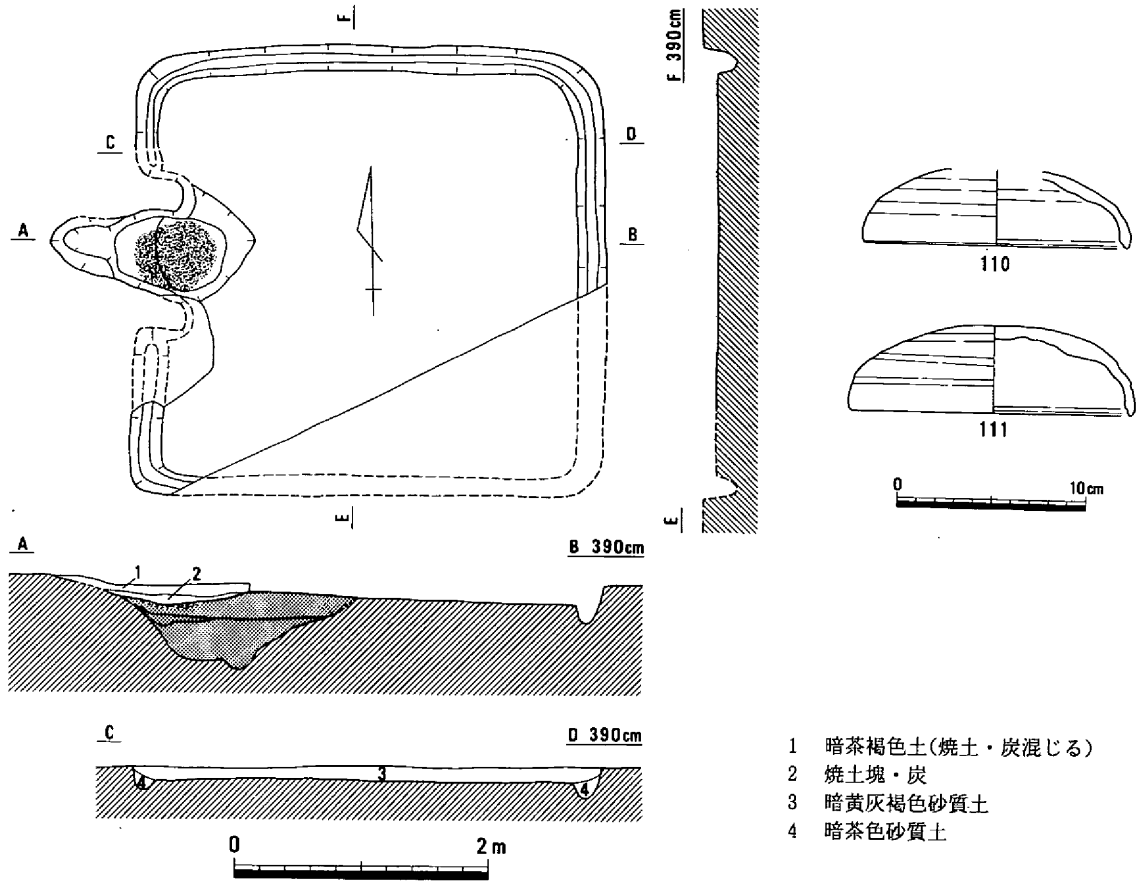
竪穴住居-28 (第387・393図、図版119・144)

重複した5軒のうち、4番目に作られた竪穴住居である。住居主軸は先行する3軒とほぼ近似するが、カマドが西辺に作りつけられており、構造の点で異なる。住居の南東部は調査区外にある。340～350cmの規模のほぼ正方形を呈する平面形をもつ。床面積は約11㎡を測り、やや小形の竪穴住居である。床面標高は360cmと竪穴住居-27より15cmほど低い。カマドは、袖部の遺存が不良である。燃焼部は住居内側にある。このカマド床面下で深さ約60cmほどの楕円形を呈する土壌を検出した。

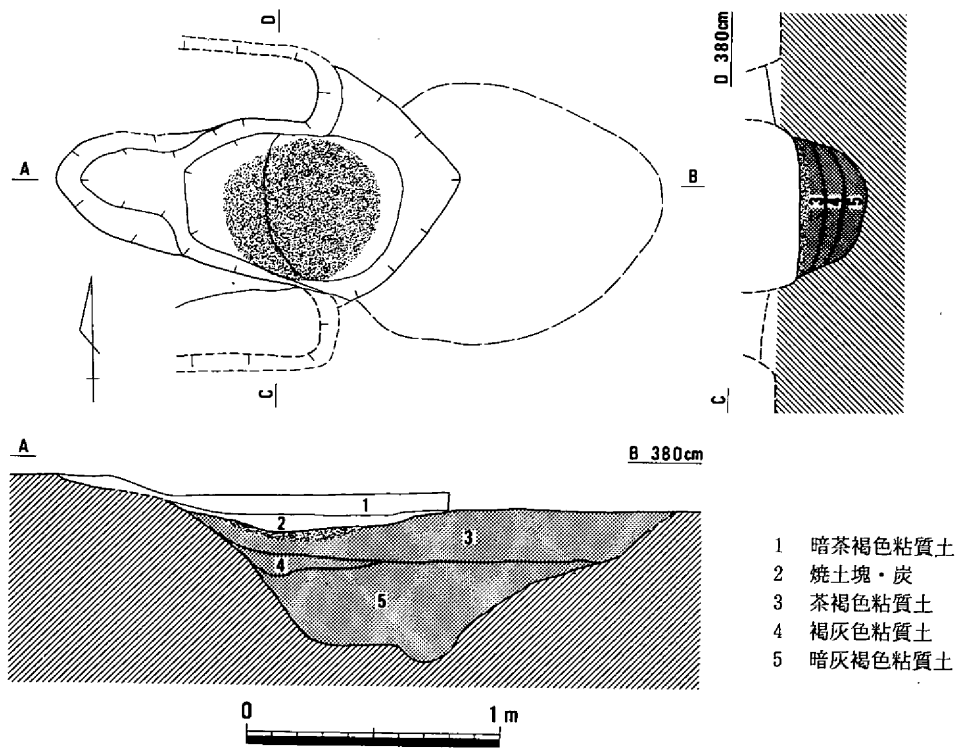
出土遺物は110・111の須恵器杯を図示している。111は口径が14.7cmを測るやや大振りのものであり、TK43相当と思われるが、前述した重複状況からみて混入した可能性を考えている。(大橋)

竪穴住居-29 (第387・394図、図版119)

重複した5軒のうち、最も新しい竪穴住居である。南半部は調査区外にあるが、検出できた部分から考えて、台形の平面形を持つものと判断される。短辺422cm、長辺535cmほどに復元され、床面積は19.5㎡を測るものと推定される。床面の標高は372cmを測り竪穴住居-28より12cm高い。住居主軸はN-5°-Eを測り、他の4軒よりやや東偏する。柱穴は1本のみ確認したが、その配置から本来2本で構成されていたものと推測している。カマドは竪穴住居-28と同様に短辺側の西辺中央に作りつけられている。燃焼部は住居内側にあり、床面よりわずかにくぼむ。カマド床面下には他の住居と同様に深さ30cmほどの不整形な土壌が作られている。なお、検出した埋土上面で径50cmほどの焼土塊を検出している。

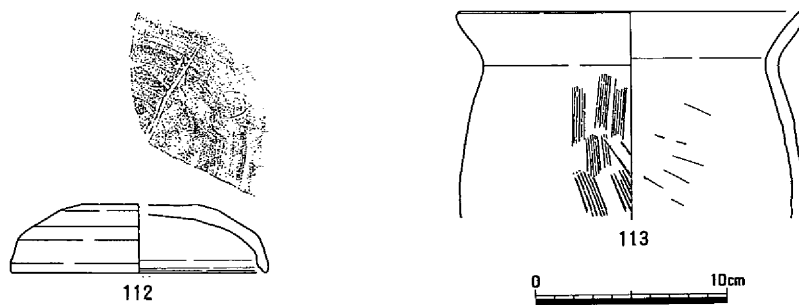
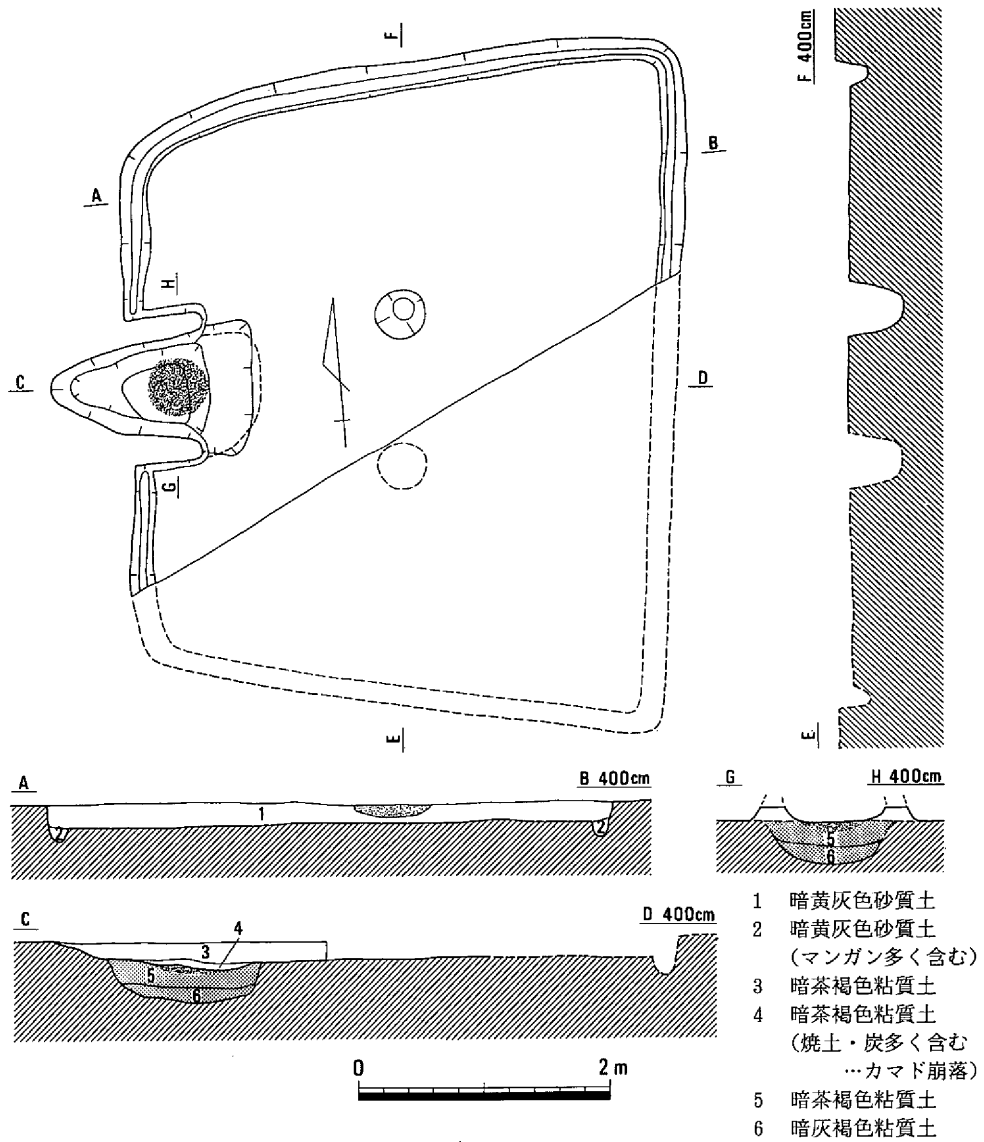


- 1 暗茶褐色土(焼土・炭混じる)
- 2 焼土塊・炭
- 3 暗黄灰褐色砂質土
- 4 暗茶色砂質土



- 1 暗茶褐色粘質土
- 2 焼土塊・炭
- 3 茶褐色粘質土
- 4 褐灰色粘質土
- 5 暗灰褐色粘質土

第393図 竪穴住居-28 (110・111)

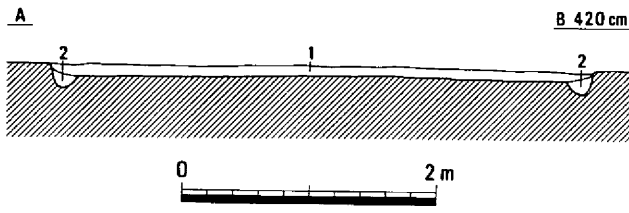
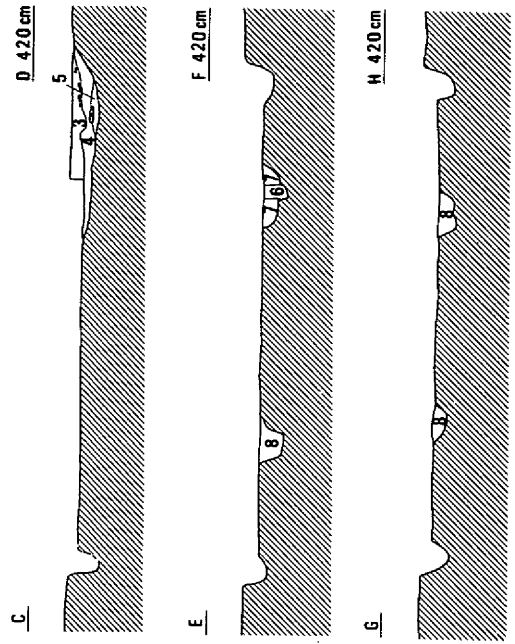
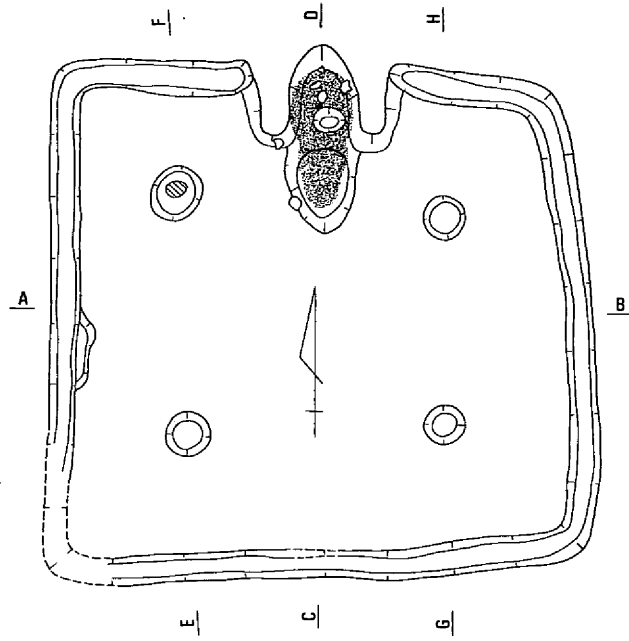


第394図 竪穴住居-29 (112・113)

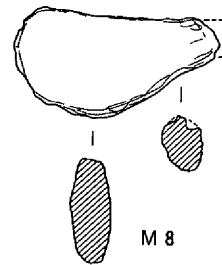
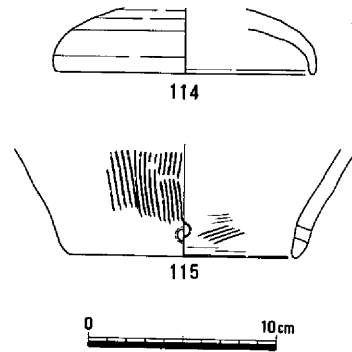
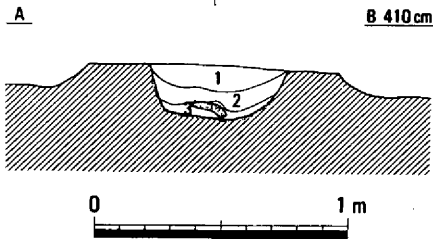
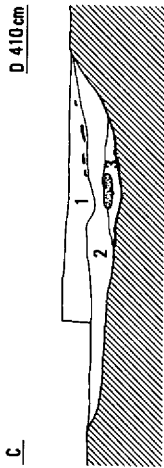
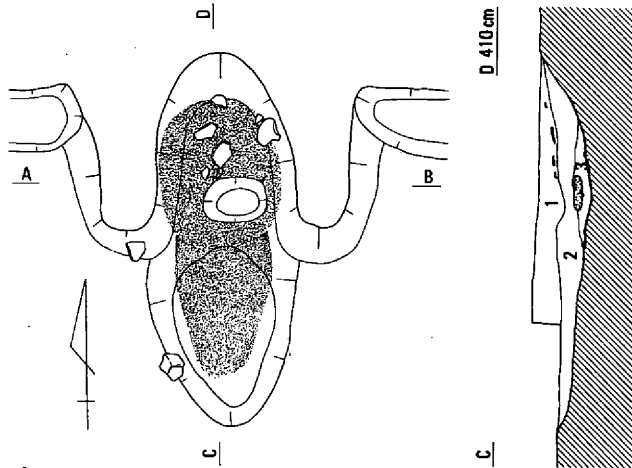
出土遺物は112の須恵器蓋と113の土師器甕を図示した。112の天井部外面には直線上のへら記号がつけられている。図示したほかに、須恵器甕、高杯、提瓶の小破片がある。竪穴住居の時期は切り合い関係を参考にして古・後・Ⅲ段階と考えた。

以上の竪穴住居-25~29の5軒は、その重複の状況、カマドの位置等から、竪穴住居-25~27の3軒と竪穴住居-28・29の2軒に様相が分かれ、これがそのおのおの異なった連続性を示唆するものと思われる。

(大橋)



- 1 黄灰茶色微砂粘質土
- 2 暗黄灰茶褐色微砂質土
- 3 暗黄灰色弱粘質土(焼土・炭が混じる)
- 4 暗黄灰茶色粘質土(焼土・炭が混じる)
- 5 暗黄灰色粘質土
- 6 濃茶褐色細砂
- 7 明茶褐色細砂(マンガン含む)
- 8 茶灰褐色粘質土細砂(マンガン含む)



- 1 暗黄灰色弱粘質土(焼土・炭含む)
- 2 暗黄灰茶色粘質土(焼土・炭含む)
- 3 暗黄灰色粘質土(焼土・炭含む)

第395図 竪穴住居-30 (114・115・M8)

### 竪穴住居-30 (第395図、図版119・120・162)

竪穴住居-25~27の北西隅部を一部壊して作られている竪穴住居である。ややいびつな方形を呈し、長辺側で412cm、短辺側で395cmを測る。住居主軸はN-3°-Wを測り、床面の標高は376cmである。床面積は約15㎡に復元できる。カマドが北辺中央に作りつけられており、燃焼部は住居内側にある。燃焼部内には支柱を設けた痕跡が確認された。主柱は4本で構成され、北西の柱穴には柱痕跡を検出した。

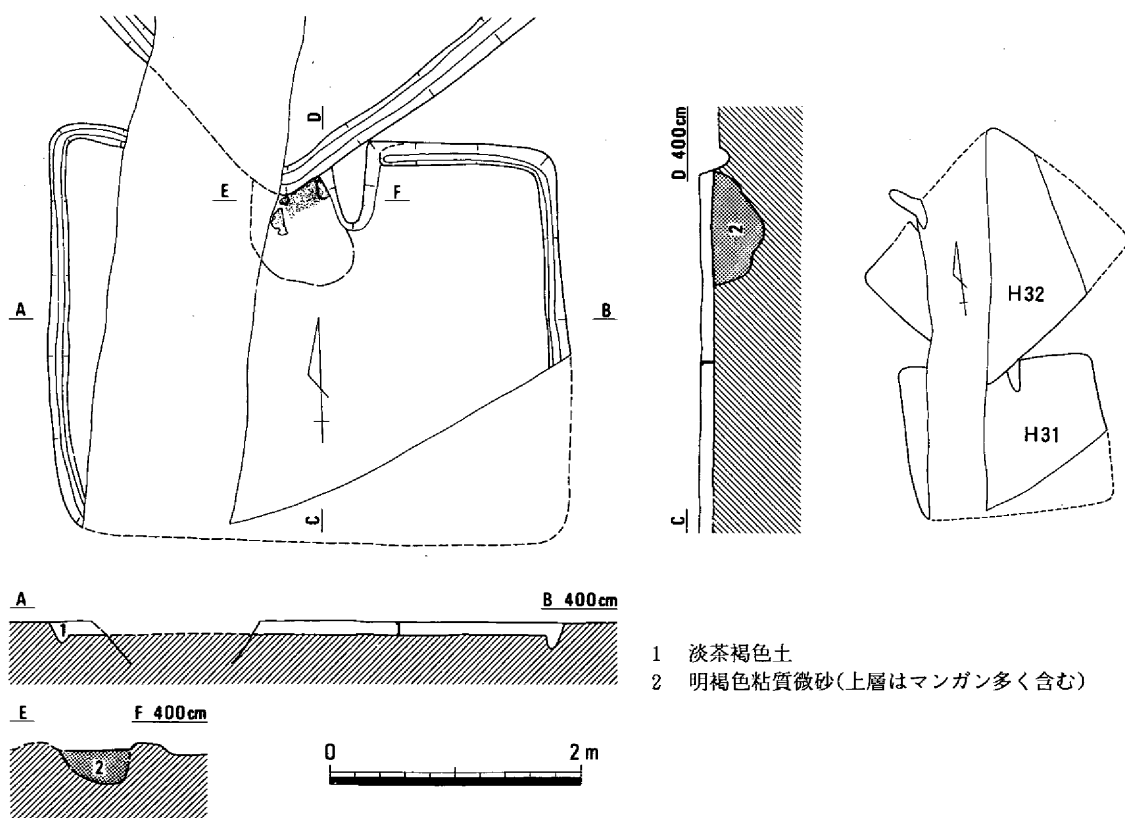
出土遺物は114が須恵器蓋、115は土師器甕である。この甕には透かし孔が1個確認された。また、M8は鉄製品であるが、器種は不明である。竪穴住居の時期は古・後・Ⅱ段階と思われる。(大橋)

### 竪穴住居-31 (第396図)

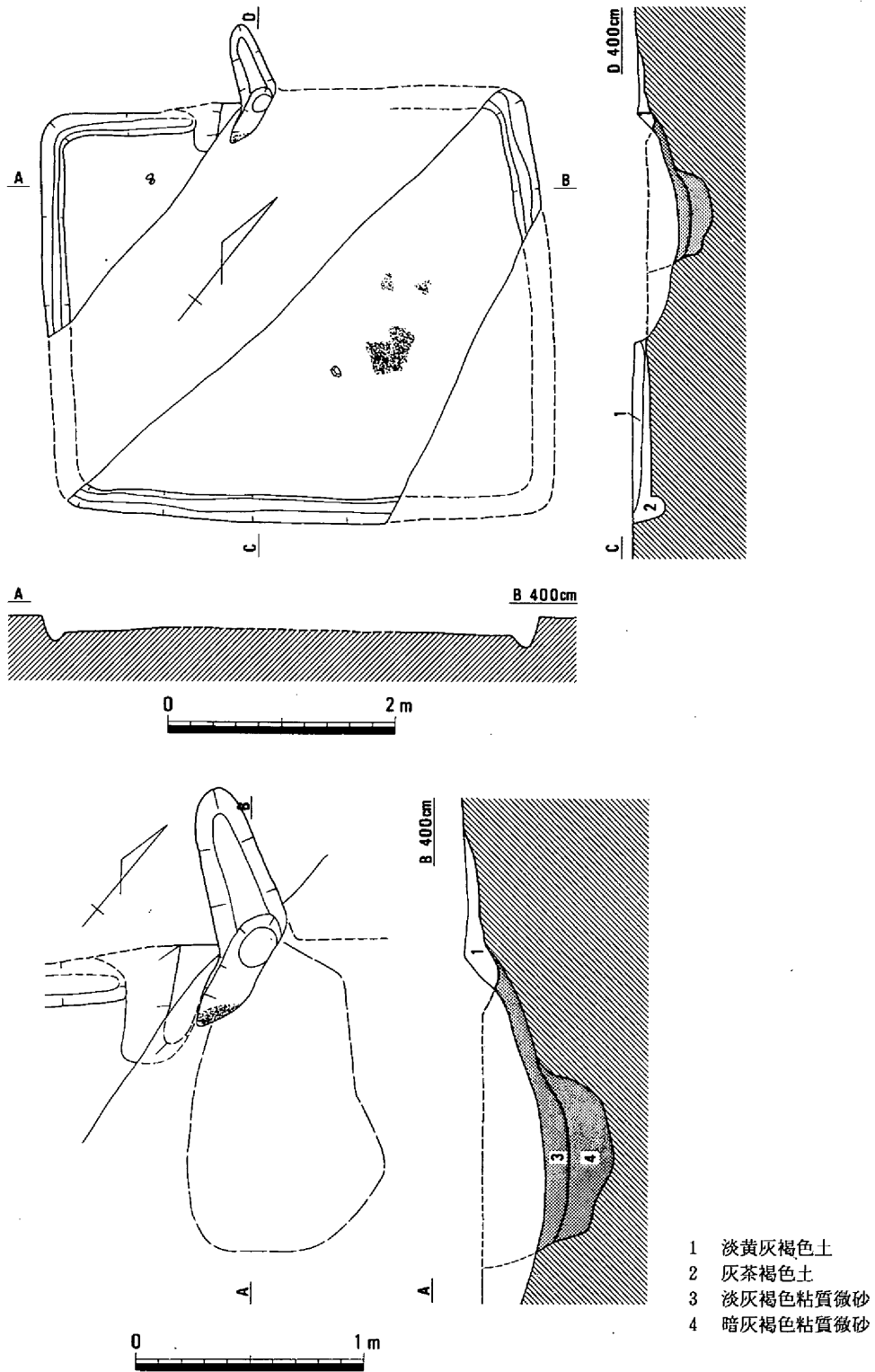
竪穴住居-25~29の約2m西で検出された竪穴住居である。後述する竪穴住居-32に切られ、また床面西半部は後世の溝によって削平を受けている。なお、住居の南東隅部は調査区外にある。長辺約400cm、短辺310cmに復元されるやや長方形の平面形をもつと考えられる。住居主軸はほぼ南北方向を指す。柱穴は確認できなかった。カマドは北辺側に作りつけられているが、重複する他の遺構によって一部壊されていたが、その下で深さ45cmほどの土壌を検出した。出土遺物は須恵器の細片がみられたのみであり、他の竪穴住居の状況を勘案して時期を古・後・Ⅱ~Ⅲと判断した。(大橋)

### 竪穴住居-32 (第397図)

竪穴住居-31の北側にこれとわずかに重複して位置する。カマドと床面の一部を確認したのみであるが、これから長辺側で415cm、短辺側で340cmほどの規模をもつ方形の住居と推測される。床面の標高は374cmほどと竪穴住居-31とほぼ同じ高さにあるが、住居主軸はN-41°-Wを指し大きくずれる。カマドは北西辺中央に設けられており、その主軸方向は住居主軸から16°西偏している。また、その

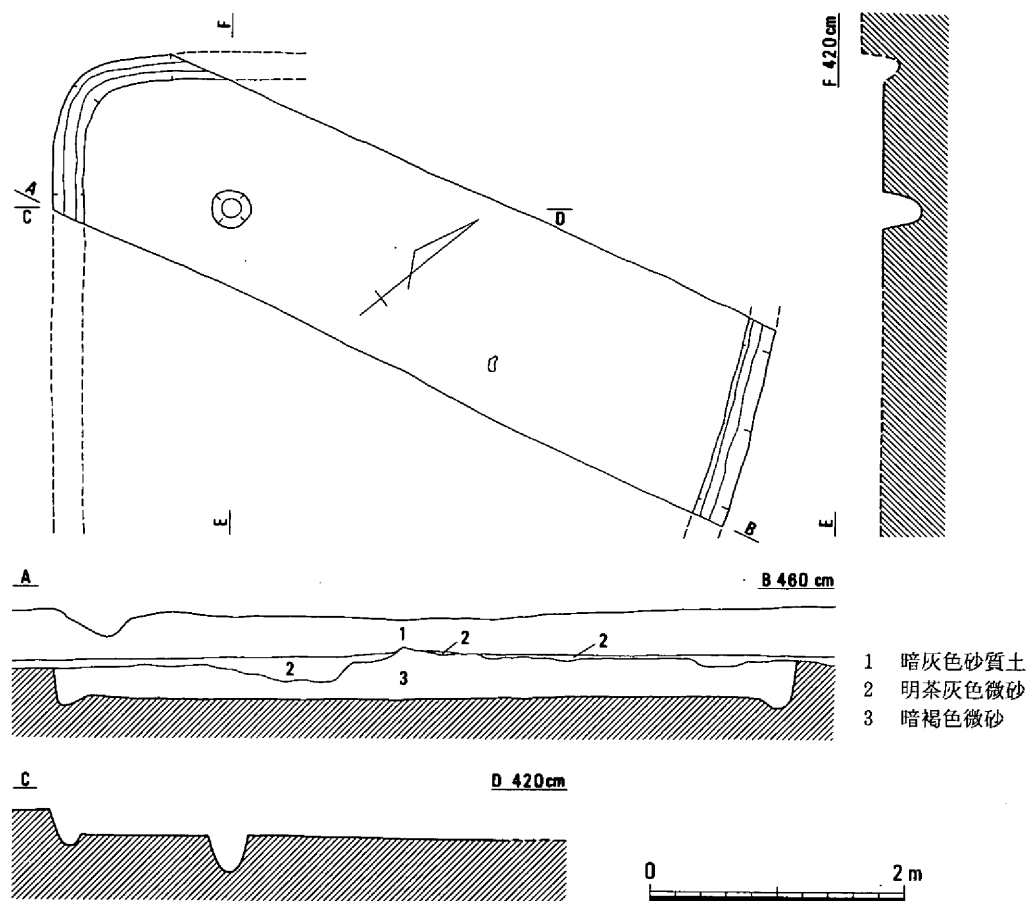


第396図 竪穴住居-31

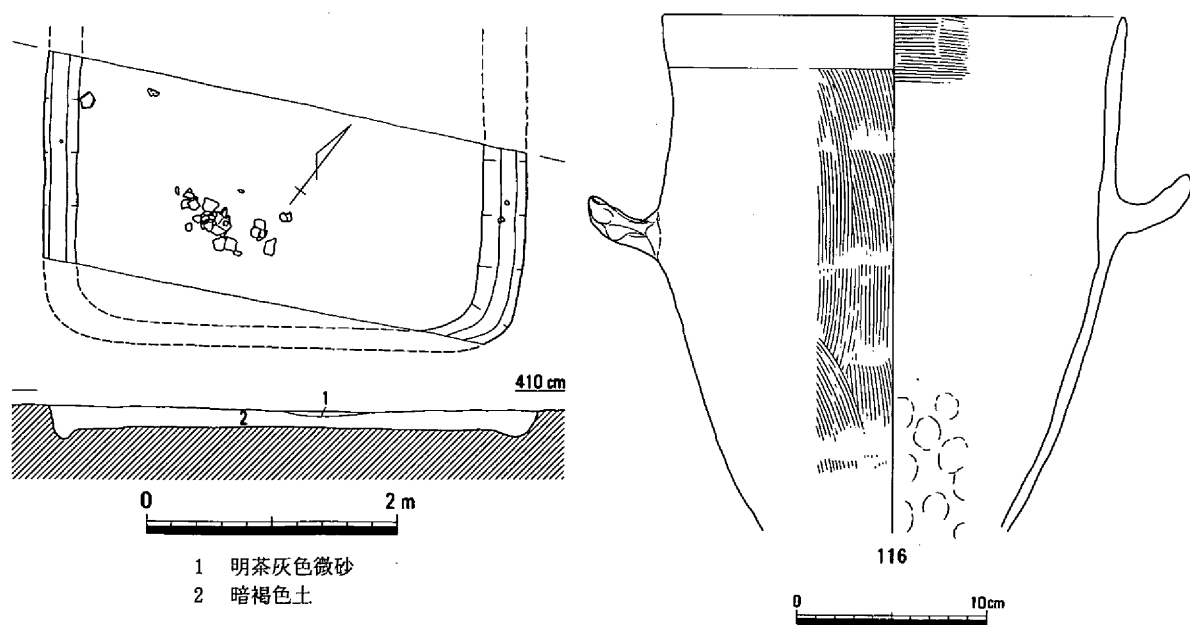


第397図 竪穴住居-32

下で深さ60cmほどの長楕円形をなす土壌を確認している。なお、床面中央やや東寄りの箇所で被熱面を検出している。この住居からは碗形滓をはじめとして合計300gを超える鉄滓が出土しており、その関連が興味深い。出土遺物は細片のみで、須恵器蓋杯、甗、提瓶などがある。これらと切り合い関係などを参考にして、この竪穴住居の時期も古・後・Ⅱ～Ⅲと考えている。(大橋)



第398図 竪穴住居-33



第399図 竪穴住居-34 (116)

竪穴住居-33 (第398図)

O20区の中央で検出したもので、竪穴住居-24の南東13mに位置する。調査区が狭長であるため、西隅と北東辺の一部を検出するにとどまり、全形を把握するに至らなかった。しかし、かろうじて得られた情報から一辺558cmの不整形をなすものと推定された。深さ53cmの位置にある床面の標高は370cmで、その周囲に幅23cm、深さ10cmの溝がめぐる。主柱は西隅の1本を検出するにとどまったが、本来は4本で構成されていたものと思われる。掘り方は径32cm、深さ29cmの円形をなす。床面から土師器の甕と見られる小片を出土したのみで詳細な時期については明らかでないものの、他の住居との関係から6世紀末～7世紀前半と見て大過ないものと思われる。(亀山)

竪穴住居-34 (第399図、図版144)

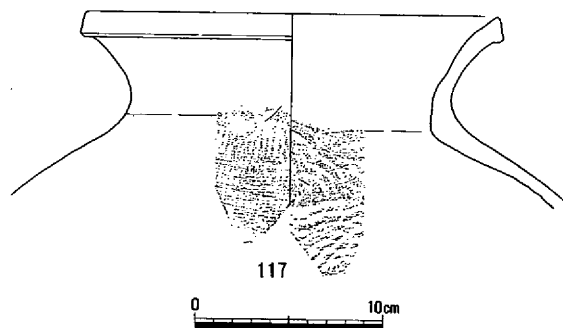
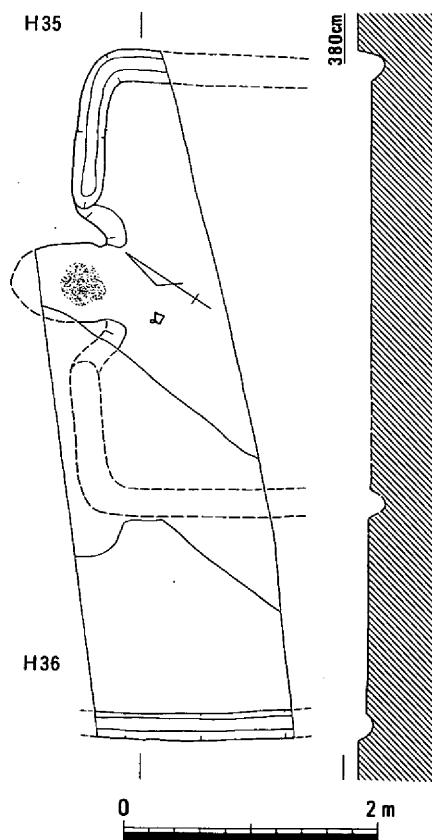
竪穴住居-33の北東1mに接して検出されたもので、南半のみを確認している。現状では長さ360cmほどの方形を呈しているが、カマドの有無については明らかでない。検出面からの深さは17cmで、標高380cmを測る床面の周囲には幅18cm、深さ8cmの溝がめぐる。主柱は確認できなかったが、住居の規模からして本来柱をもたない構造であった可能性がある。遺物は床面上から土師器の甕116が出土している。口径24.1cm、側面に貼りつけた偏平な把手の差し渡しは31.7cmを測り、外面をタテハケ、内面をナデないしユビオサエで仕上げている。時期は7世紀前半に比定される。(亀山)

竪穴住居-35 (第400図)

O17区の中央東側で検出したもので、竪穴住居-34の北東23.5mに位置している。東半を竪穴住居-36および近世の溝によって切られており、西辺の一部を確認するにとどまった。このため、住居の全形を把握するに至らなかったが、主軸をN-33°-Wにおく方形を呈するものと想定される。(亀山)

竪穴住居-36 (第400図)

竪穴住居-35の東半を壊してつくられたもので、北東隅を検出したにすぎないが、北辺に設けられたカマドの位置から、幅350cmほどの方形に復元される。標高356cmを測る床面の周囲には壁体溝が検出されたが、主柱は確認できなかった。出土遺物には須恵器の甕117があり、7世紀前半に位置付けられる。(亀山)



第400図 竪穴住居-35・36 (117)



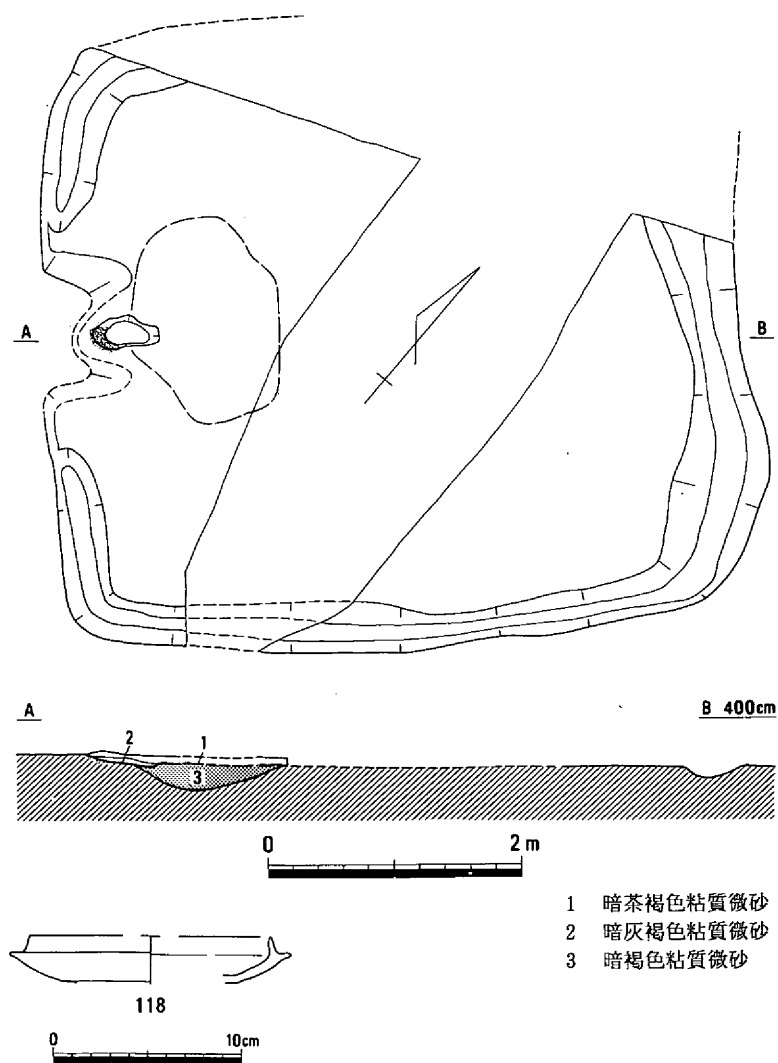
竪穴住居-37 (第401図)

竪穴住居-37は、O20区北西部に位置する。基盤となる土層が比較的軟弱な砂層であることや削平等により遺構の残存状況は悪く、かろうじて壁体溝とカマドの一部を検出したに過ぎない。平面形はやや東西方向に長い長方形で、主軸方向はN-46°-Eである。規模は東西方向で525cm、南北方向で450cmを測る。支柱穴は土質のためか確認できなかった。カマドは南西壁に作りつけられており、燃焼部は壁体溝より住居内側に位置する。煙道はほとんど残存していない。燃焼部下には不整楕円形の土壇が認められる。土壇の規模は、東西160cm・南北120cm、深さ20cmを測る。

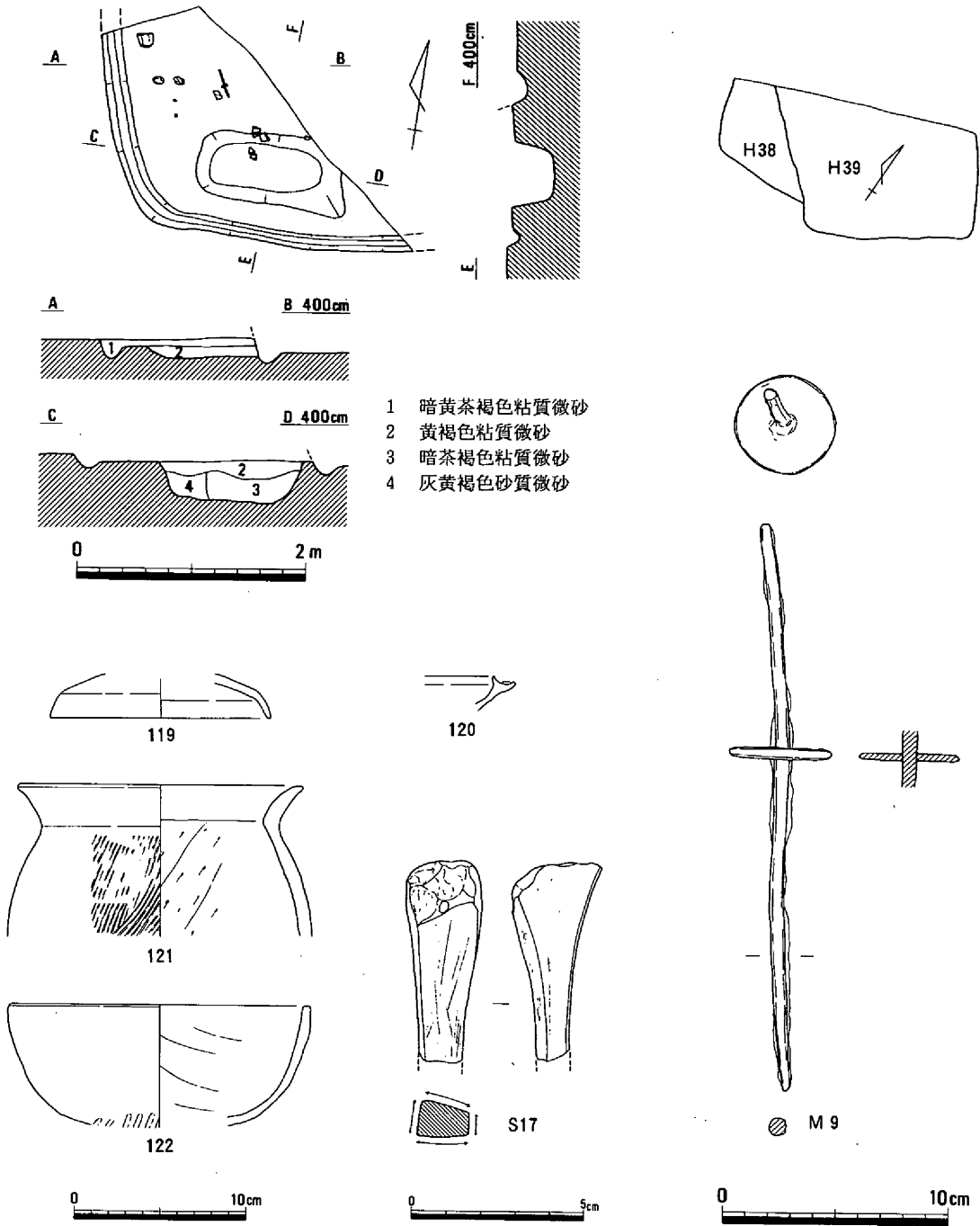
覆土中から須恵器杯118が出土している。118は器高が低く、口縁部の立ち上がりは短い。遺構の時期は古・後・Ⅱ～Ⅲと思われる。(柴田)

竪穴住居-38 (第402図、図版120・161・163)

竪穴住居-38は、竪穴住居-37の北東隣に位置する。かろうじて床面は残存していたものの、基盤となる土層が比較的軟弱な砂層であることや削平等により検出は困難であった。カマドを伴う竪穴住居と思われるが、大半の部分が調査区外に存在するため確定できない。壁体溝の屈曲が鈍角になっており、平面形は方形を基本とするが、いずれかの方向の壁が広くなると思われる。また、後述する竪穴住居-39に大きく壊されている。柱穴は確認できなかったが、南西隅付近の床面において南壁に平



第401図 竪穴住居-37 (118)



第402図 竪穴住居-38 (119~122・S17・M9)

行する長方形の土壇が認められる。この土壇の規模は、東西128cm、南北65cm、深さ35cmを測る。

覆土中から須恵器蓋119・杯120、土師器甕121・鉢122、頁岩製の砥石S17、鉄製紡錘車M9、精錬鍛冶滓、製錬滓が出土している。120は口縁部の立ち上がりが非常に矮小化している。遺構の時期は古・後・Ⅲと思われる。

(柴田)

竪穴住居-39 (第403・404図)

竪穴住居-39は竪穴住居-38と重複し、これを切っている。竪穴住居-38と同様遺存状況は悪く、かろうじて床面は残存していたものの、検出は困難であった。カマドを伴う住居と思われるが、北西

部分は調査区外であり確定はできない。平面形は方形を基本とすると考えられるが、北西部分が広くなっている。主軸方向はN-41°-Wである。主柱穴は南東の壁体溝から30~40cm離れたところに2本が確認できた。柱間は196cm、柱穴は平面円形で径45cm、深さ20~30cmを測る。床面の北西部分で

は成因不明の浅いくぼみが認められ、そこを埋めたような状況を呈していた。

覆土中から須恵器蓋123・杯124、土師器甕125、鍛練鍛冶滓が出土している。123は器高はやや高く、口縁部の立ち上がりは直立している。124は口縁部の立ち上がりが非常に矮小化している。125は胴部が球形で、肥厚した口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。時期は古・後・Ⅲと思われる。(柴田)

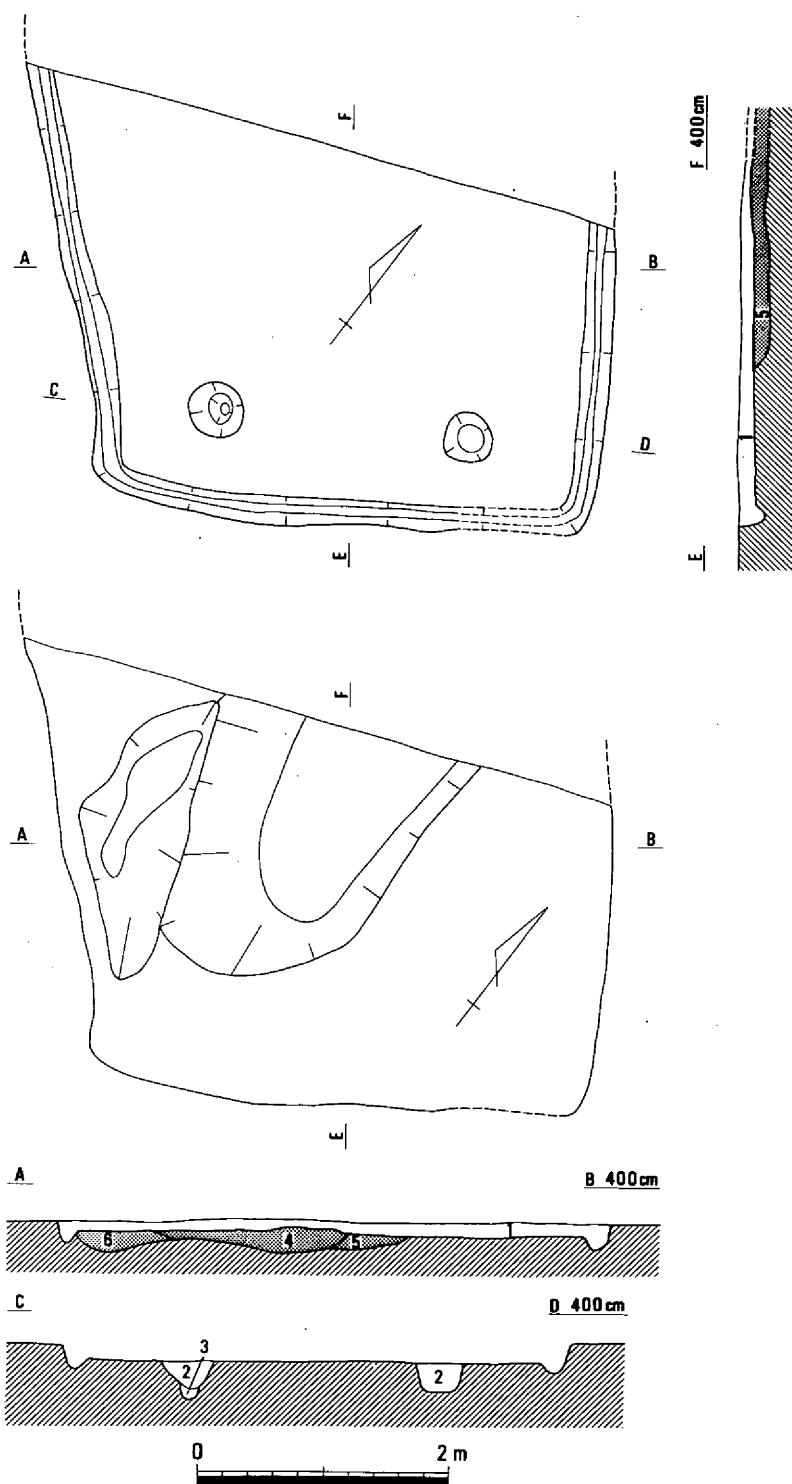
竪穴住居-40

(第405図、図版120)

竪穴住居-40は、竪穴住居-39の東隣に位置し、竪穴住居-41に切られている。かろうじて壁体溝を検出したに過ぎない。カマドを伴う方形の住居と思われるが、北半部は調査区外である。柱穴は土質のためか確認できなかった。床面の中央部で成因不明のくぼみが認められ、そこを埋めたような状況を呈していた。

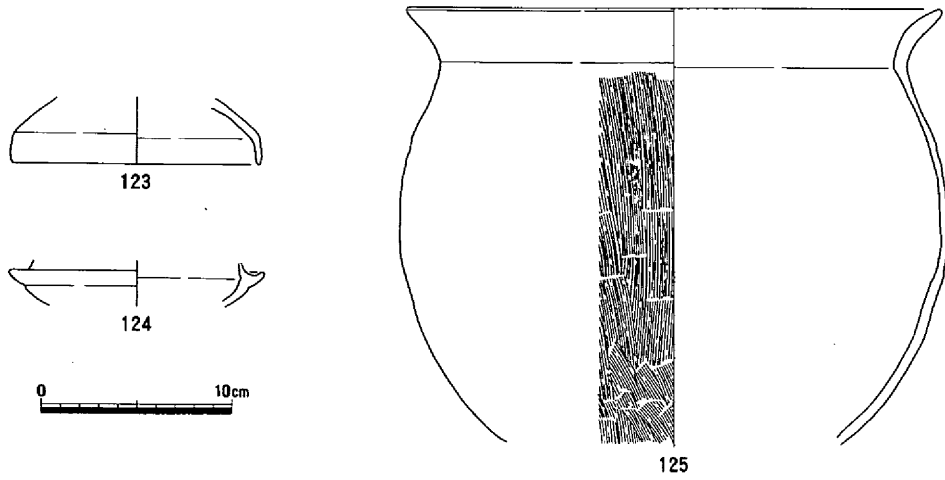
覆土中から須恵器蓋126・杯127、土師器小形甕128が出土している。127は口縁部の立ち上がりが短い。128は口縁部が緩やかに「S」字状に湾曲する。遺構の時期は古・後・Ⅱ~Ⅲと思われる。

(柴田)

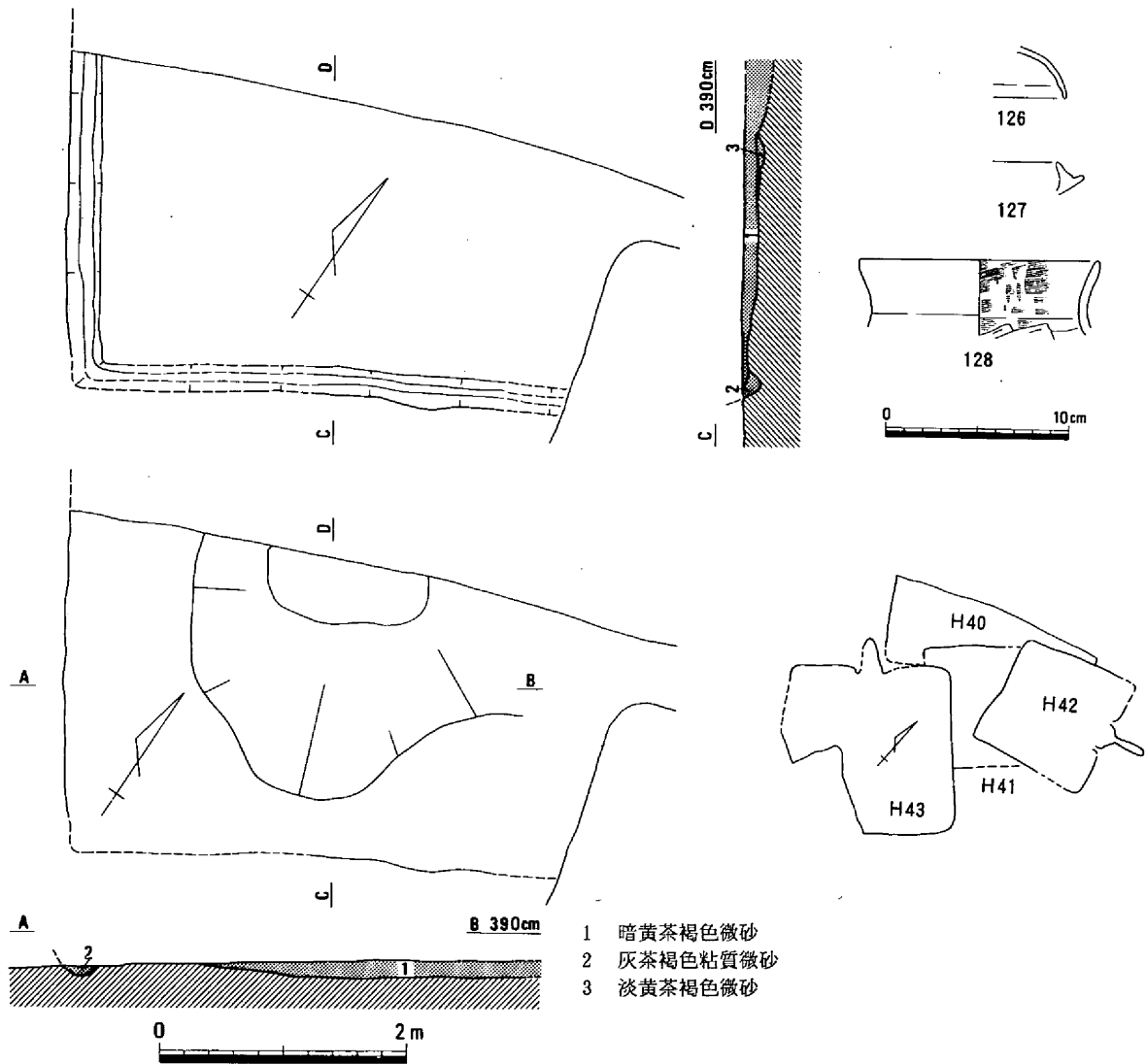


- |            |            |
|------------|------------|
| 1 暗茶褐色粘質微砂 | 4 黄茶褐色粘質微砂 |
| 2 黄褐色粘質微砂  | 5 黄褐色粘質微砂  |
| 3 暗茶褐色粘質土  | 6 暗茶褐色粘質微砂 |

第403図 竪穴住居-39



第404図 竪穴住居-39 (123~125)



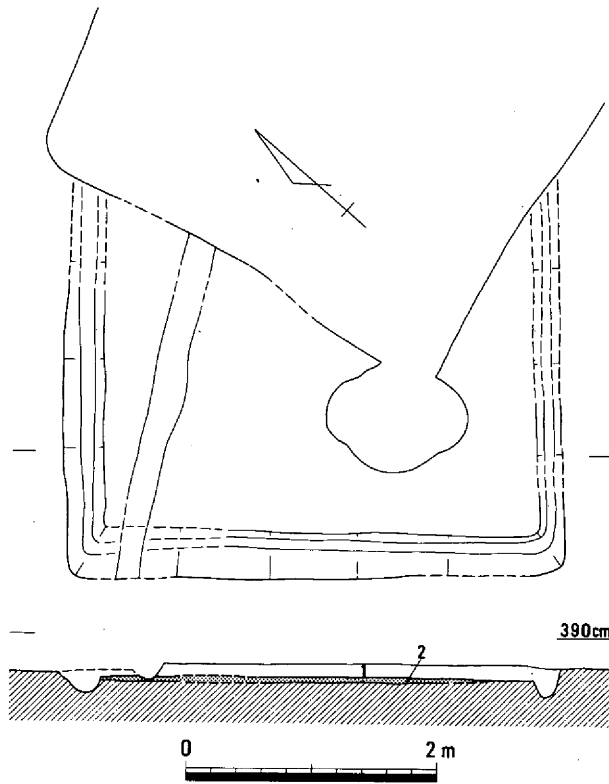
第405図 竪穴住居-40 (126~128)

竪穴住居-41 (第406図、図版120)

竪穴住居-41は、竪穴住居-40の南側と重複し、これを切り、竪穴住居-42・43に切られている。北東壁に作りつけカマドを持つ方形の竪穴住居と思われるが、北東部を切られており確認できない。基盤となる土層が比較的軟弱な砂層であることや削平等により遺構の残存状況は悪く、かろうじて床面は残存していたが、検出は困難であった。住居の主軸方向はN-43°-Wで、規模は南北方向で368cmを測る。支柱穴は土質のためか確認できなかった。床面は竪穴住居-39・40のようにくぼみは認められないが、ほぼ全体を埋めて作られた状況を呈する。

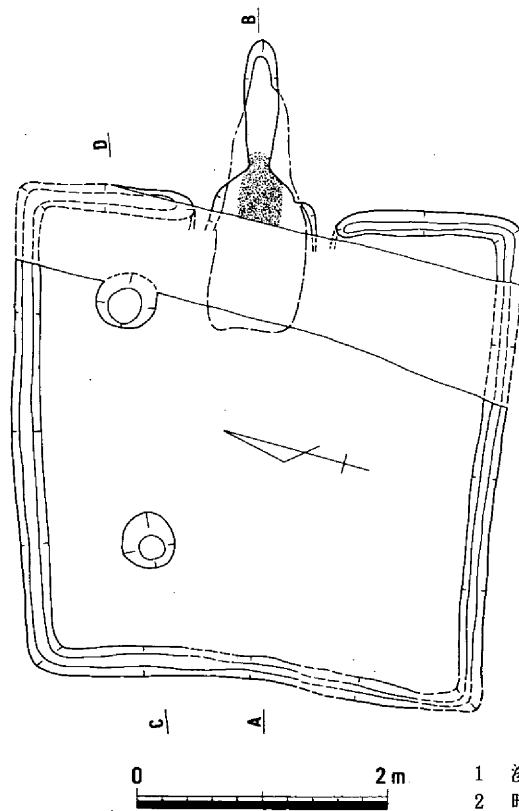
時期を示す遺物は出土していないが、遺構の時期は古・後・Ⅱ~Ⅲと思われる。

(柴田)



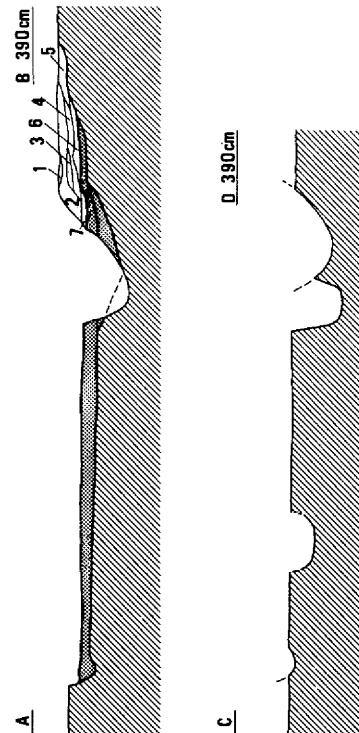
- 1 暗黄茶褐色粘質微砂
- 2 茶褐色粘質微砂(貼り床)

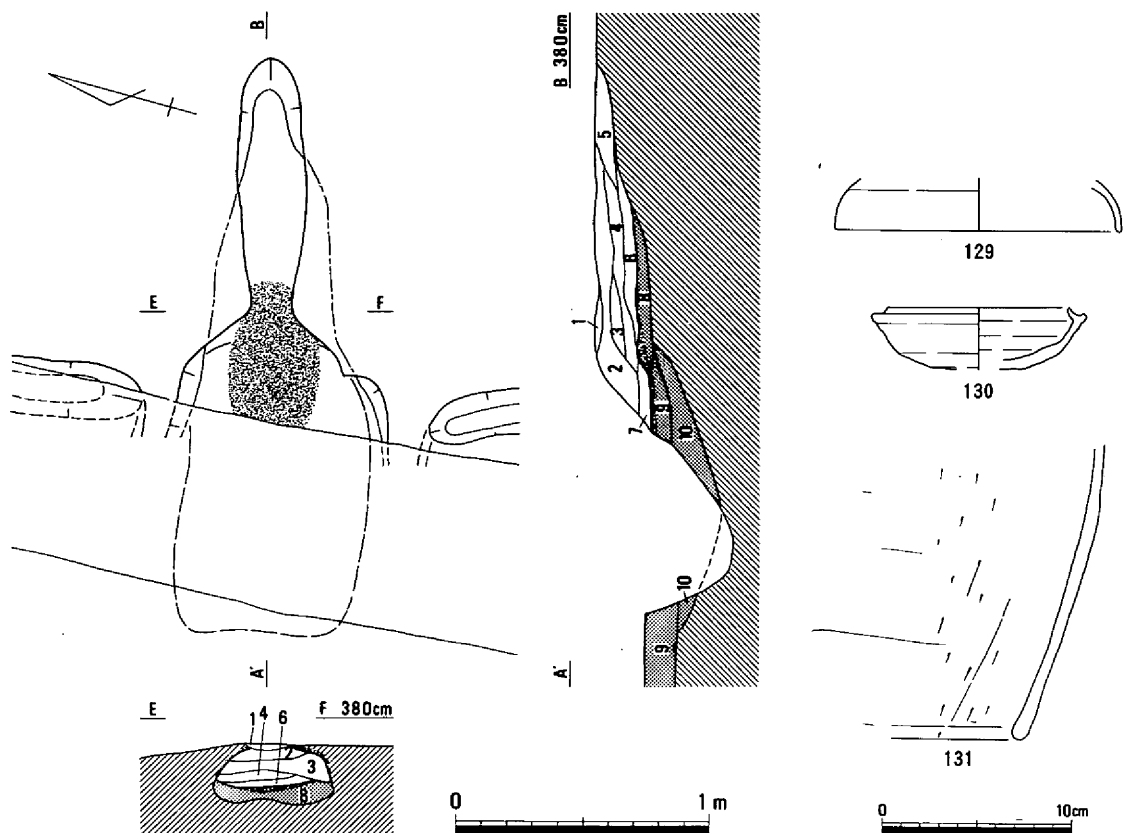
第406図 竪穴住居-41 1/60



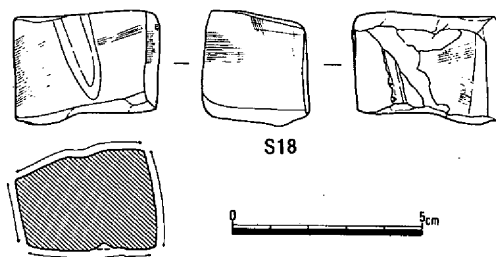
- 1 淡黄褐色微砂
- 2 暗茶褐色微砂
- 3 茶褐色微砂(焼土塊含む)
- 4 黄茶褐色微砂(焼土塊含む)
- 5 茶褐色微砂
- 6 灰茶褐色微砂
- 7 灰茶褐色粘質微砂(炭・焼土塊含む)

第407図 竪穴住居-42





- 1 淡黄褐色微砂
- 2 暗茶褐色微砂
- 3 茶褐色微砂(焼土塊含む)
- 4 黄茶褐色微砂(焼土塊含む)
- 5 茶褐色微砂
- 6 灰茶褐色微砂
- 7 灰茶褐色粘質微砂(炭・焼土塊含む)
- 8 暗茶褐色微砂
- 9 淡黄茶褐色微砂
- 10 黄茶褐色微砂(炭・焼土含む)

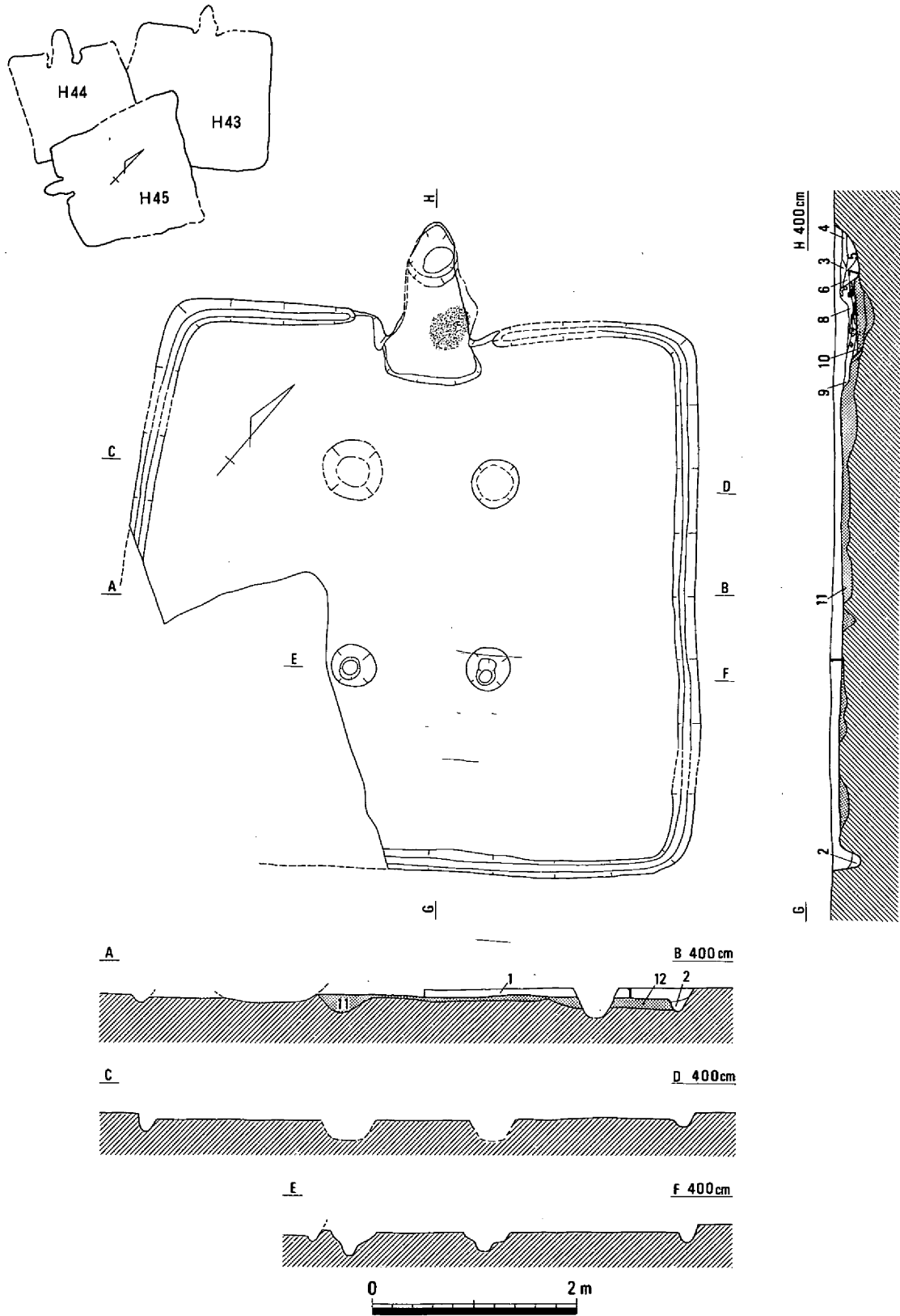


第408図 竪穴住居-42 (129~131・S18)

竪穴住居-42 (第407・408図・図版120・121)

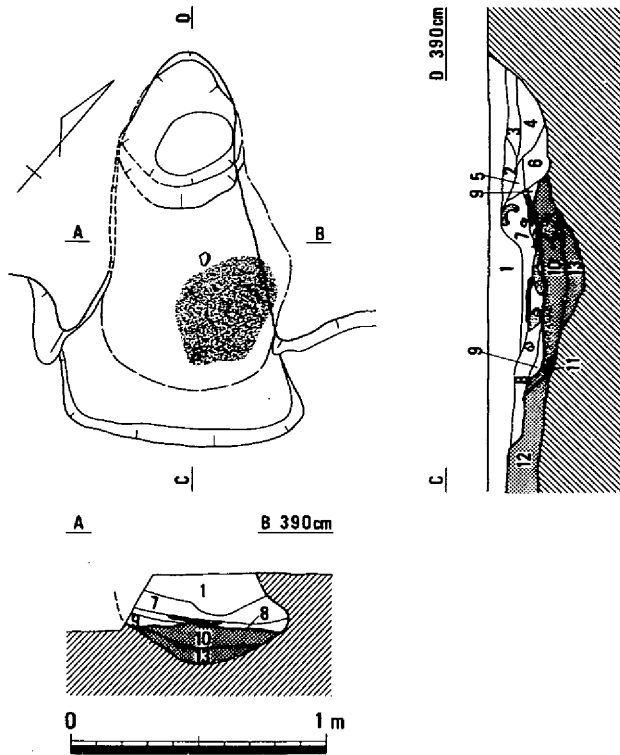
竪穴住居-42は、竪穴住居-41の東側と重複しこれを壊している。なお、東部分を中世の溝-59に切られている。基盤となる土層が比較的軟弱な砂層であることや削平等により遺構の残存状況は悪く、かろうじて壁体溝とカマドが検出された。平面形は東がやや広い方形で、主軸方向はN-75°-W、規模は384×375cmを測る。床面北側の壁体溝から50~70cm程度離れた位置に円形の柱穴2本が検出された。柱間は193cmを測る。床面は竪穴住居-39・40のようにくぼみは認められないが、竪穴住居-41などと同様に床面のほぼ全体を埋めたような状況を呈する。

長さ150cm以上のカマドは東壁に作りつけられている。燃焼部は壁体溝付近に位置し、外に向かってのびるが、溝-59で切られており、詳細は不明である。煙道の傾斜は8°、燃焼部と先端の比高は25cm以上を測る。燃焼部下には長方形を呈する東西115cm・南北74cm、深さ30cmの土壌が確認された。



- |           |                    |              |
|-----------|--------------------|--------------|
| 1 灰黄褐色微砂  | 5 暗黄茶褐色粘質微砂        | 9 暗黄茶褐色微砂    |
| 2 茶褐色粘質微砂 | 6 茶褐色微砂            | 10 灰黄褐色微砂    |
| 3 淡黄茶褐色微砂 | 7 黄茶褐色粘質微砂         | 11 淡黄茶褐色粘質微砂 |
| 4 黄茶褐色微砂  | 8 淡黄茶褐色微砂(焼土塊多く含む) | 12 黄茶褐色粘質微砂  |

第409図 竖穴住居-43



- 1 灰黄褐色砂質微砂
- 2 淡黄茶褐色微砂
- 3 黄茶褐色微砂
- 4 暗黄茶褐色粘質微砂
- 5 茶褐色微砂
- 6 黄茶褐色粘質微砂
- 7 淡黄茶褐色微砂(焼土塊多く含む)
- 8 暗黄茶褐色微砂
- 9 灰黄褐色微砂
- 10 灰黒褐色微砂
- 11 灰黄褐色微砂
- 12 淡黄茶褐色粘質微砂
- 13 灰黒褐色微砂

第410図 竪穴住居-43

覆土中から須恵器杯の小片、鉄滓（鍛練鍛冶滓、ガラス質滓）が出土している。遺構の時期は古・後・Ⅱ～Ⅲと思われる。（柴田）

竪穴住居-44（第411図）

O20区北西に位置し、東側を竪穴住居-45に削平されている。平面形は方形と考えられ、主軸はN-33°-Eである。規模は長さ推定412cm、幅410cmを測り、床面積は推定15.4㎡である。床面海拔高は366.0cmを示す。主柱穴は検出し得なかったが、床面南隅で焼土面を1ヵ所確認した。カマドは住居の西北西辺に取り付き、その主軸は住居主軸から左回りに5°振っている。規模は全長139cm、袖長64cm、袖間幅91cm、煙道幅62cmを測り、煙道傾斜は20°である。また、燃烧部位置は住居内側にあり、カマド下部には土壌を確認している。なお鍛練鍛冶滓が1点26.5g出土している。

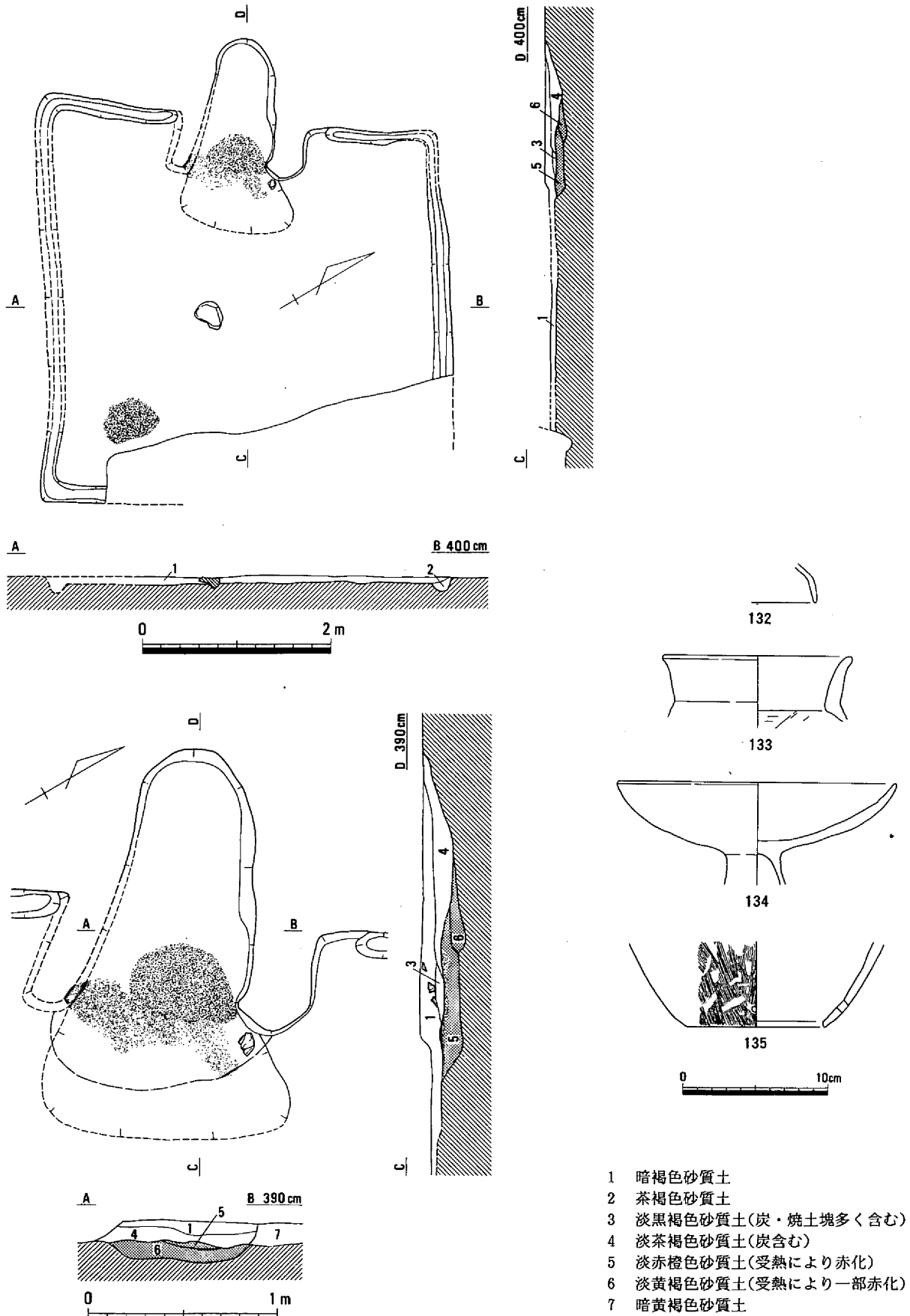
出土遺物としては須恵器杯蓋132、土師器甕133、高杯134、甕135などがみられる。時期は古・後・Ⅱ～Ⅲ期と思われる。（澤山）

覆土中から須恵器蓋129・杯130、土師器甕131、流紋岩質溶岩製の砥石S18、鉄滓が出土している。130はかなり小形で、口縁部の立ち上がりは矮小化している。遺構の時期は古・後・Ⅲと思われる。（柴田）

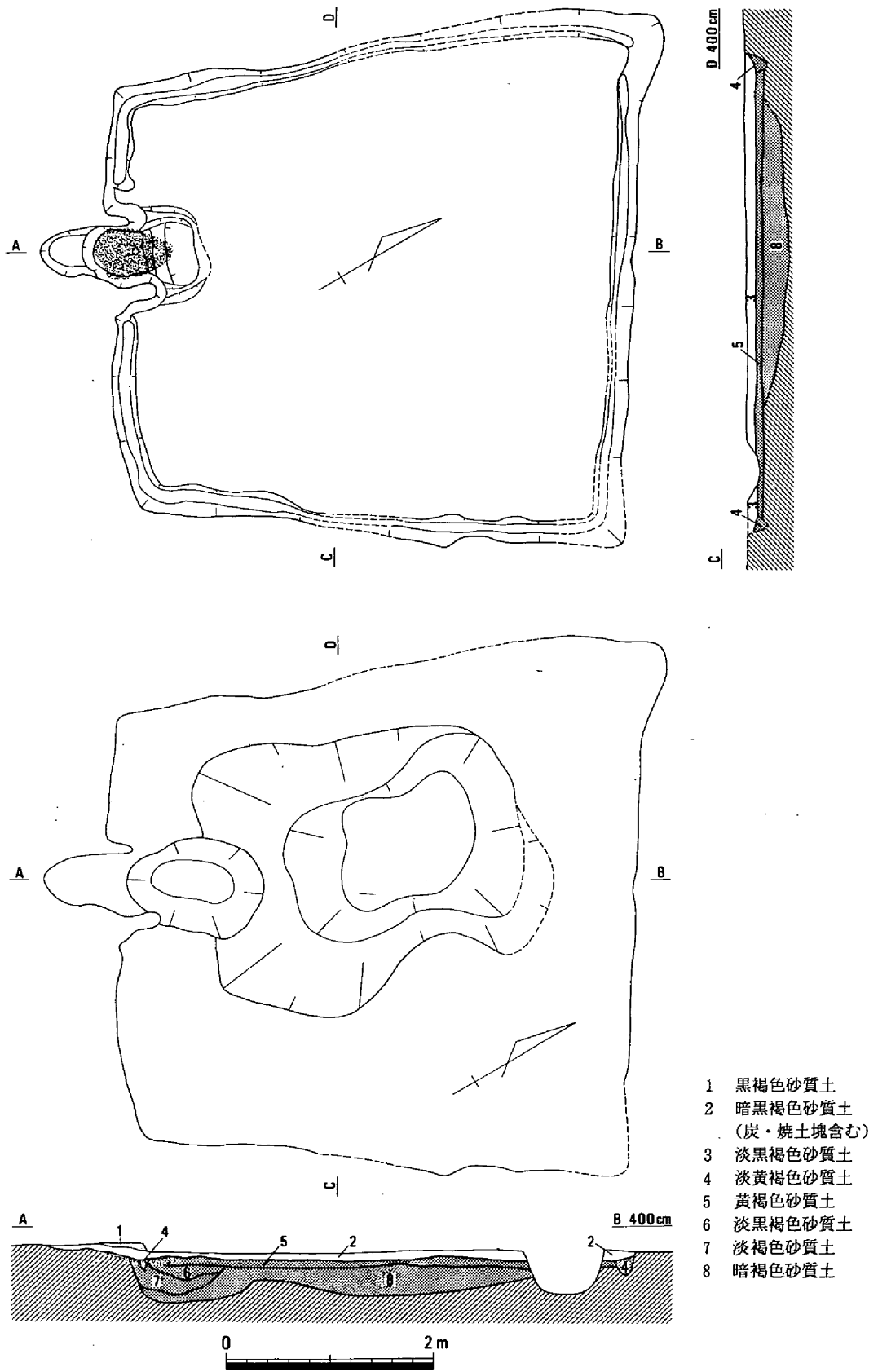
竪穴住居-43（第409・410図）

竪穴住居-43は、竪穴住居-39・40の南隣に位置し、南隅を竪穴住居-44・45に切られている。基盤となる土層が砂であることや削平等により残存状況は悪く、かろうじて床面は遺存していたが、検出は困難であった。平面形は南東がやや広い方形で、主軸方向はN-35°-W、規模は535×532cmを測る。床面中央寄りに円形の柱穴4本が検出されたが、基盤の土質のためか不明瞭である。掘り方の底面は、竪穴住居-39・40のようにくぼみは認められないが、全体的に小さな凹凸があり、竪穴住居-41などと同様に床面を埋めて作った状況を呈する。長さ130cm以上のカマドは北西壁に作りつけられており、燃烧部は壁体溝近くに位置する。煙道は地下式と思われる、先端は比較的急に上方に上がる。煙道の傾斜は23°を測る。燃烧部下には楕円形の土壌が認められ、78×70×16cmを測る。





第411図 竪穴住居-44 (132~135)



第412図 竪穴住居-45

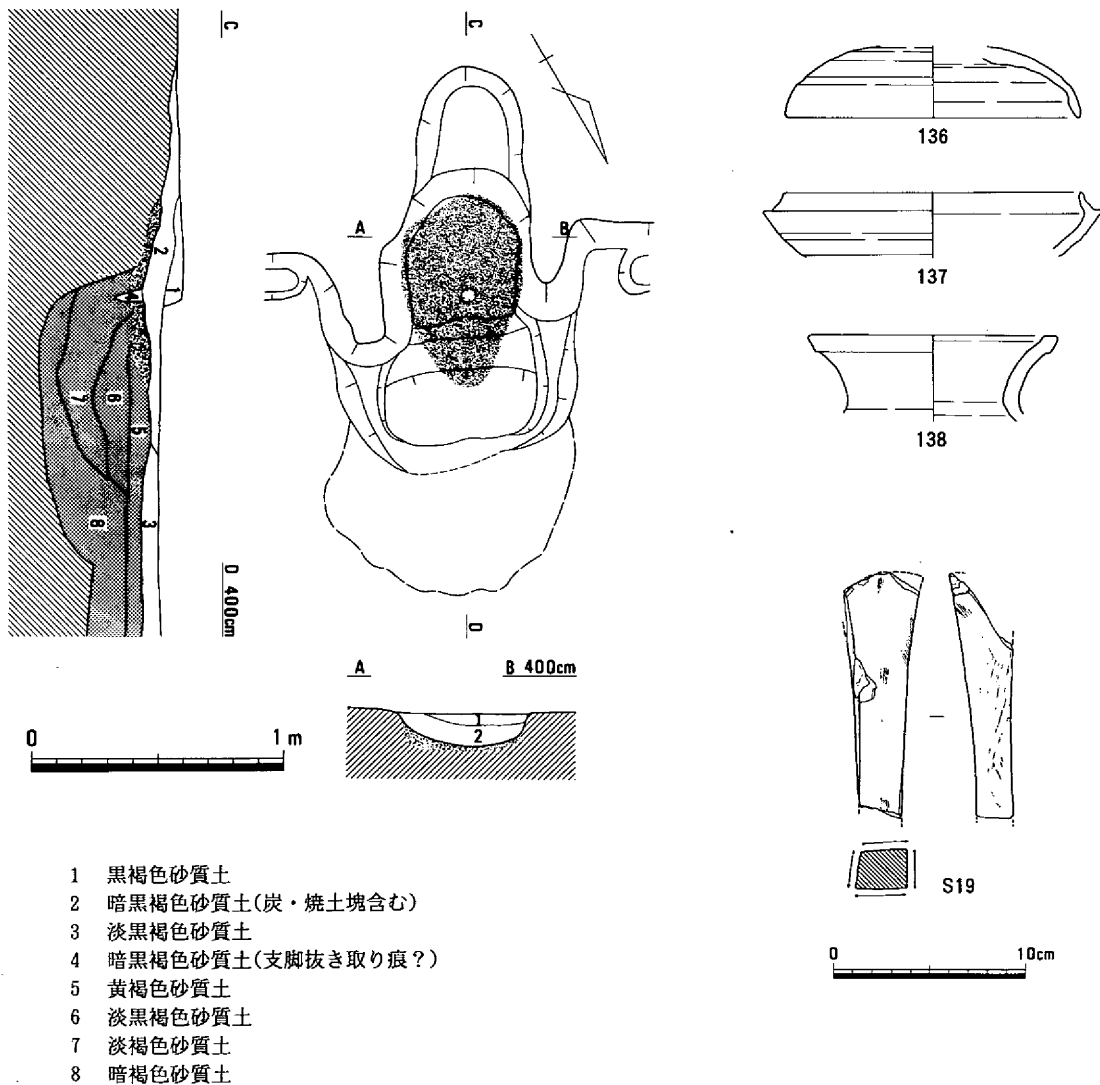
竪穴住居-45 (第412・413図、図版121・161)

O20区の北西に位置し、竪穴住居-44を切っている。平面形は台形を呈し、主軸はN-27°-Eである。規模は長さ、幅とも490cmを測り、床面積は21.0㎡である。床面海拔高は359cmを示す。支柱穴は検出しえなかった。床面下には建設時の掘り方が認められ、住居の床自体は、これを整地して作られていると判断した。カマドは住居南西辺に取りつき、その主軸は住居主軸から左回りに2°振る。規模は全長119cm、袖長45cm、袖間幅62cm、煙道幅43cmを測り、煙道傾斜は5°である。燃焼部には支脚の抜き取り痕が認められた。また下部には土壌を確認している。

出土遺物としては須恵器杯蓋136、杯身137、壺138、砥石S19を図示しているが、このほかに鍛練鍛冶滓とガラス質滓などが認められた。

この竪穴住居の時期は古・後・Ⅱ期と思われる。

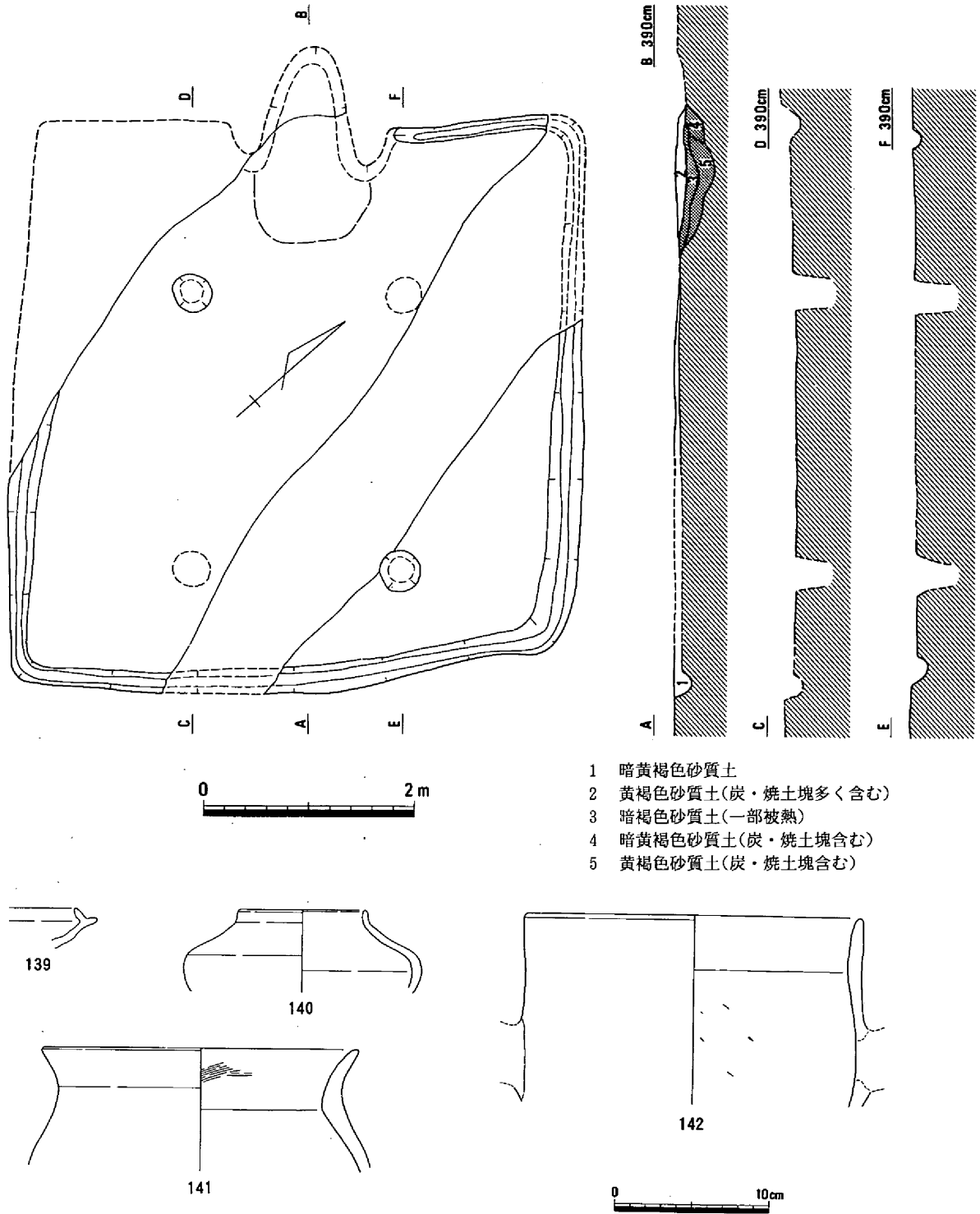
(澤山)



第413図 竪穴住居-45 (136~138・S19)

竪穴住居-46 (第414図)

竪穴住居-44・45の南約2mに位置する。西側隅に削平を受け検出に困難したが、平面形は方形と考えられる。住居主軸はN-42°-Eである。規模は長さ、幅とも515cmを測り、床面積は推定25.9㎡と大形である。床面の標高は362cmを示す。支柱穴は想定4本柱のうち2本検出した。カマドは住居



第414図 竪穴住居-46 (139~142)

北西辺に作りつけられ、その主軸は住居軸と一致する。規模は全長132cm、袖長52cm、袖間幅90cmを測るが、煙道幅長、煙道傾斜角度および燃烧部位置は削平により不明である。カマド下部には土壌を確認している。

出土遺物としては須恵器杯身139、短頸壺140、土師器甕141、甕142、および鍛練鍛冶滓などの鉄滓が計50.2gがみられる。時期は古・後・Ⅲ期と思われる。(澤山)

竪穴住居-47 (第415図、図版122)

O20区北端中央部で検出した。3軒切り合った住居群の内一番西側に位置し、最も古い竪穴住居である。平面形は方形を呈する。住居の北約1/3は調査区外であり、確認できないがカマドは北側に作りつけられていると考えられる。壁体溝は三方で検出し、床面上での幅30cm、深さは25cmを測る。床面の東西規模420cmを測る。床面の海拔高は366cmである。柱穴は検出できなかった。

遺物は埋土から少量の土器と鉄器・鉄滓が出土している。143は土師器鉢、M10は鉄製の手鎌である。

遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期と考えられる。(浅倉)

竪穴住居-48 (第416図、図版122・144)

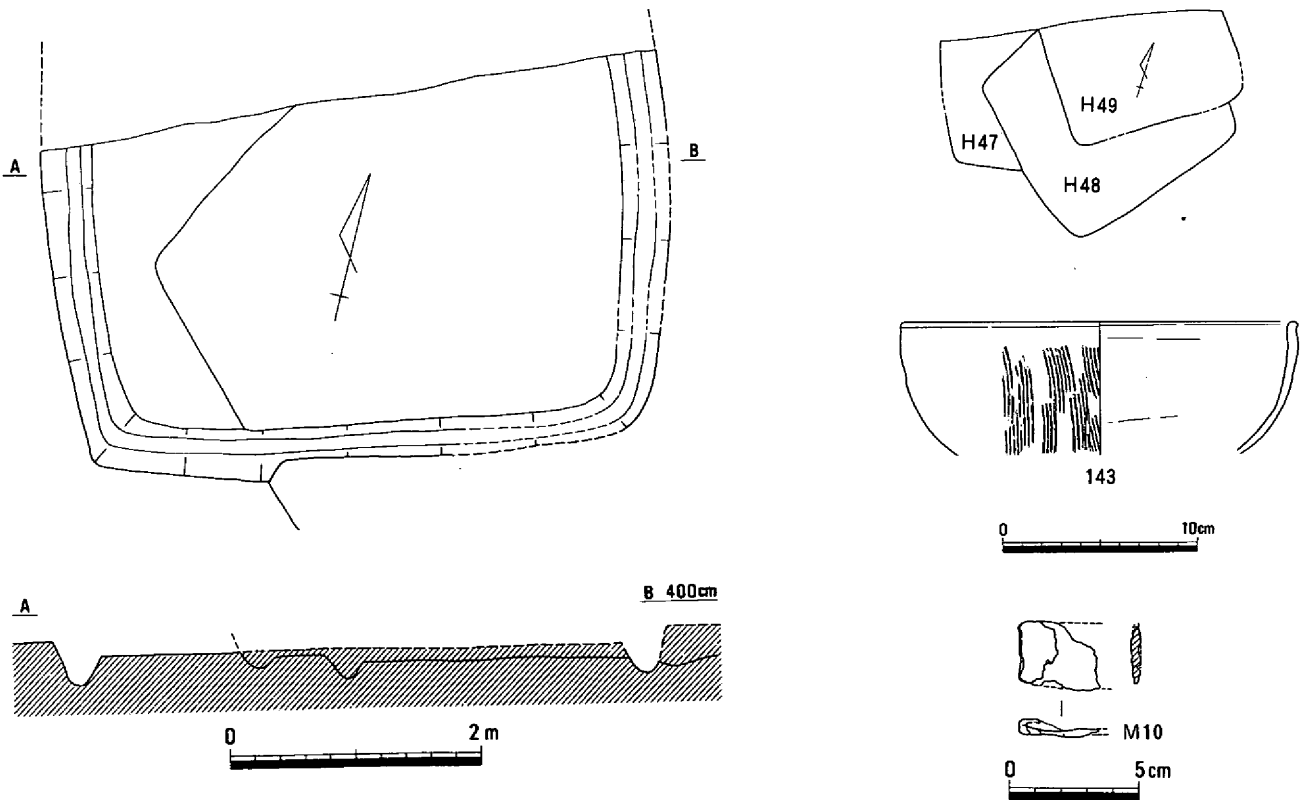
竪穴住居-47を切り、竪穴住居-49に切られている住居である。平面形は方形である。住居全体の北約1/2は竪穴住居-49に切られていて、北東側に作りつけられていると考えられるカマドの有無は確認できない。壁体溝は四方で検出できた。床面での壁体溝の幅20cm、床面からの深さは10cmを測る。床面の東西幅は370cmを測る。床面の海拔高は362cmである。柱穴は検出できなかった。

遺物は埋土から少量の土器・鉄滓が出土している。144は須恵器蓋である。145は須恵器の甑と思われる。

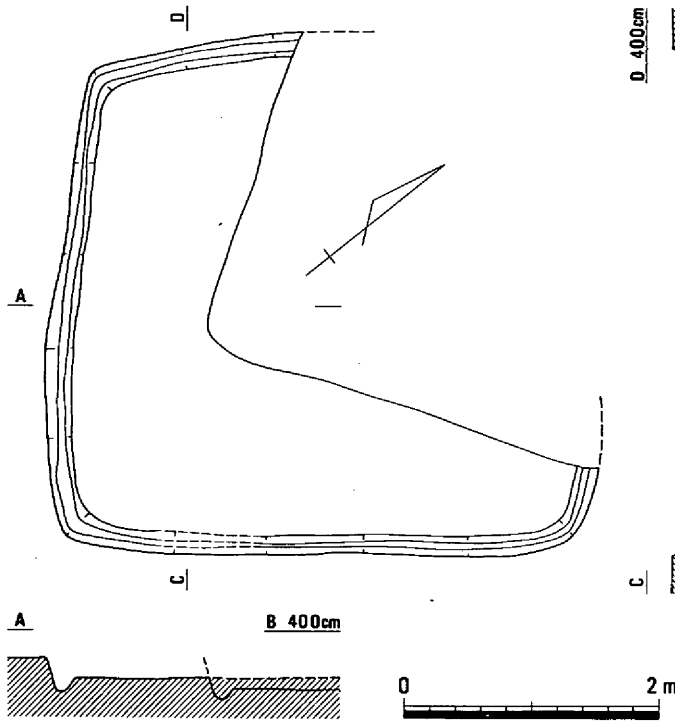
遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期と考えられる。(浅倉)

竪穴住居-49 (第417図、図版122)

前述した3軒切り合った住居群の内一番東に位置し、竪穴住居-48を切る住居である。平面形は方形。住居全体の北約1/2は調査区外で、北側に作りつけられていると考えられるカマドの有無は確



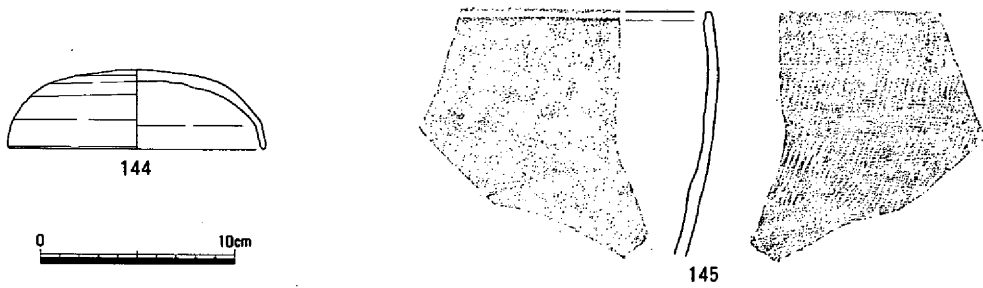
第415図 竪穴住居-47 (143・M10)



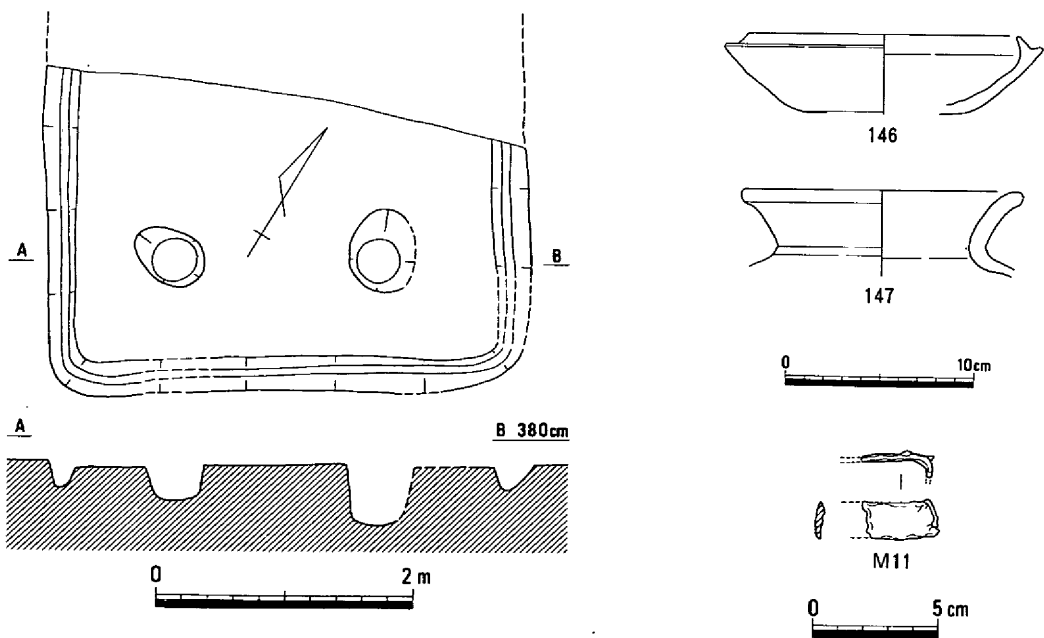
認できない。壁体溝は三方で検出でき、床面での幅20~30cm、床面からの深さは15cm、床面の東西幅330cmを測る。床面の標高は357cmある。柱穴は2本検出できた。柱間は芯々160cm、柱穴の大きさは底で径35cm、深さ30~45cmを測る。

遺物は埋土から少量の土器と鉄器・鉄滓が出土している。146は須恵器杯身、147は須恵器甕、M11は手鎌と思われる。

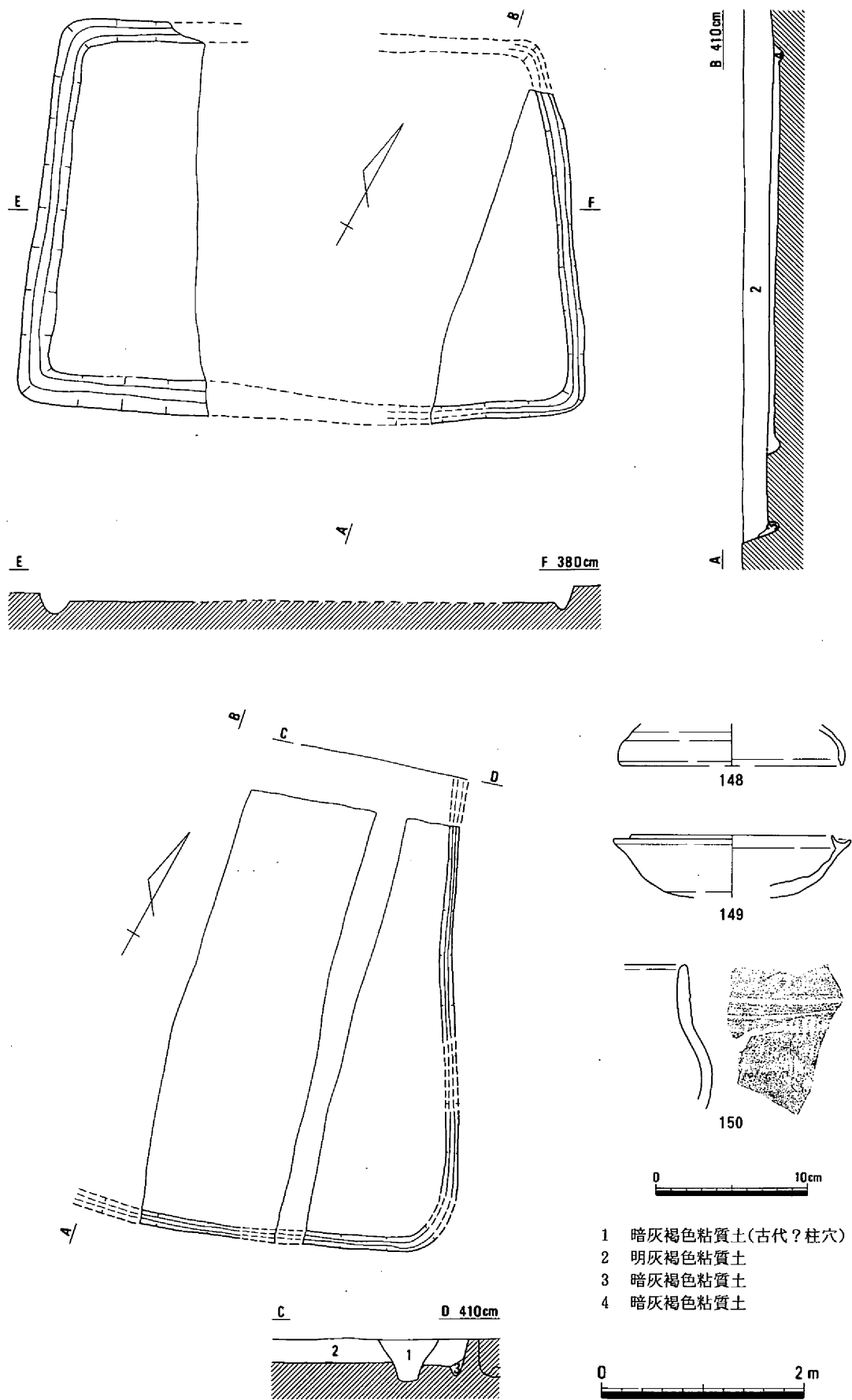
遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・7C前半と考えられる。(浅倉)



第416図 竪穴住居-48 (144・145)



第417図 竪穴住居-49 (146・147・M11)



- 1 暗灰褐色粘質土(古代?柱穴)
- 2 明灰褐色粘質土
- 3 暗灰褐色粘質土
- 4 暗灰褐色粘質土

第418図 竪穴住居-50・51 (148~150)

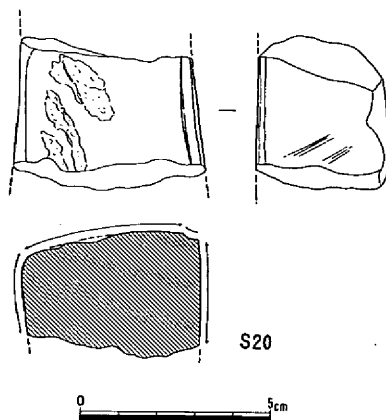
竪穴住居-50 (第418図、図版122)

N20区南端中央部で検出した北辺がやや短い台形を呈する住居である。四方に壁体溝を巡らす。柱穴・カマドは確認できなかった。カマドがつくとすれば北辺であろうか。床面の規模は北辺440cm、南辺520cm、南北340cmで、面積は約39㎡を測る。床面標高は348cmである。なおA-B土層断面に示す4層が、竪穴住居-50である。

遺物は土器と鉄滓が出土している。148は須恵器蓋、149は須恵器杯、150は土師器鉢である。

遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・7C前半と考えられる。

(浅倉)



第419図 竪穴住居-51 (S20)

竪穴住居-51 (第418・419図)

竪穴住居-50の上部で検出した住居である。北辺と西辺は小分割した調査区の都合上検出できなかった。壁体溝を東辺と南辺の一部で確認し、壁の高さは25cm残っていた。壁体溝の幅は床面上で10cm、深さは10cmである。柱穴・カマドは見つけられなかった。床面の標高は364cmである。

遺物は土器が少量と砥石・鉄滓が出土している。S20は流紋岩質溶岩製の砥石である。

遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・7C前半と考えられる。

(浅倉)

竪穴住居-52 (第420図、図版144)

N20区南端中央部で検出した。竪穴住居-52~55の4軒重複した住居群のうち一番古い住居である。西南隅部分が検出できただけであるが、平面形は方形であろう。壁体溝は検出していない。柱穴・カマドは見つけられなかった。遺物は土器が少量出土している。151は須恵器蓋で、152は土師器鉢の製塩土器である。遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・7C前半と考えられる。

(浅倉)

竪穴住居-53 (第420図、図版144)

竪穴住居-52~55の住居群のうち一番南に位置する住居である。南西隅部分が検出できただけである。平面形は台形であろうか。壁体溝は検出したが、柱穴・カマドは見つけられなかった。遺物は須恵器・土師器が少量出土している。152は須恵器長脚二段透かし高杯である。格子目叩きの製塩土器も出土している。遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・6C後半と考えられる。

(浅倉)

竪穴住居-54 (第420図)

竪穴住居-52~55の住居群のうち二番目に新しい住居である。南西部分を検出しており、平面形は方形に復元される。壁体溝と柱穴を2本確認したが、その配置から本来4本柱と思われる。カマドは調査範囲外に存在すると思われる。遺物は須恵器・土師器・製塩土器・鉄滓が少量出土している。153は土師器甕である。遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期と考えられる。

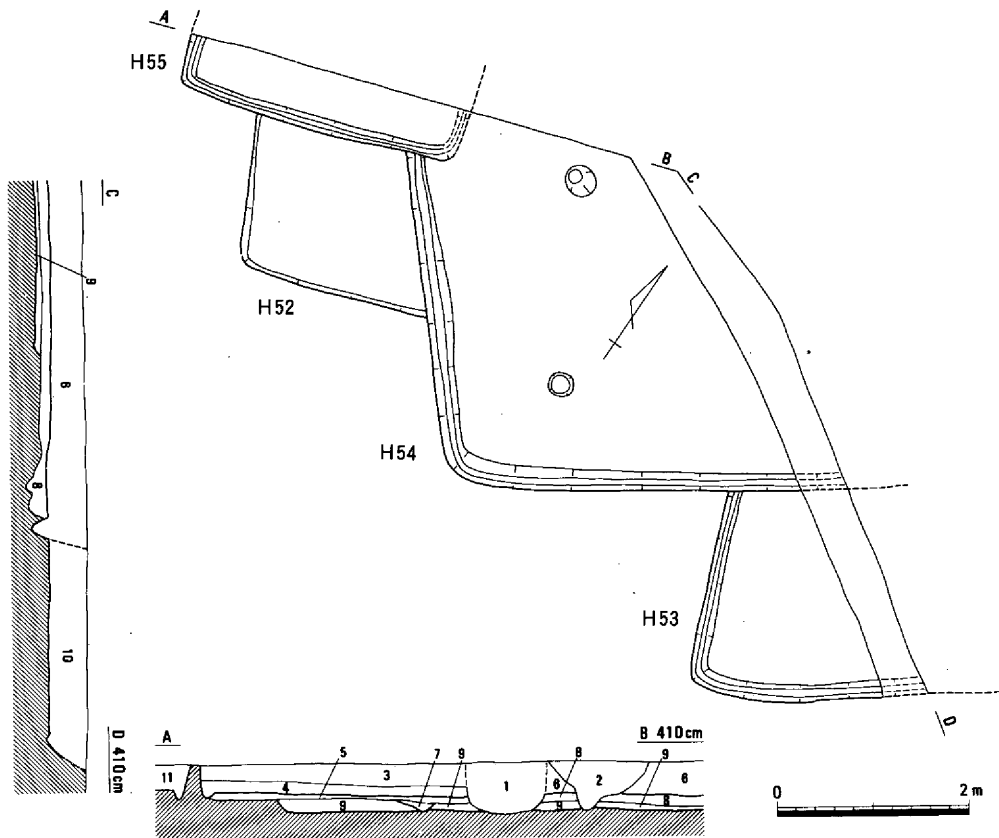
(浅倉)

竪穴住居-55 (第420図)

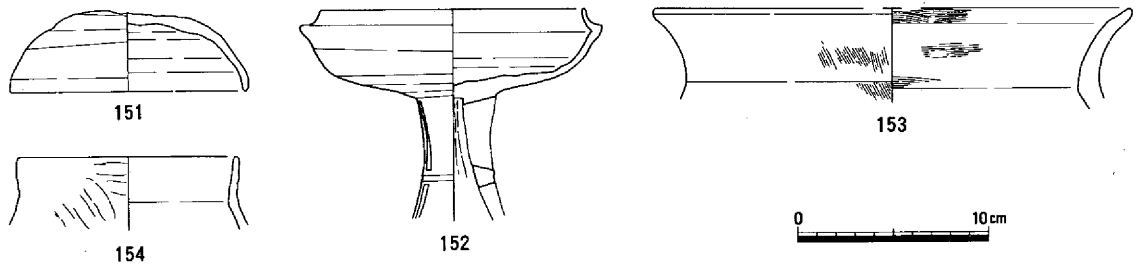
竪穴住居-52~55の住居群のうち一番新しい住居である。南側の一部分が検出できただけで、大半は調査区の外である。平面形は方形であろう。壁体溝は東辺と南辺を平面的に検出し、壁の高さは20cm残っていた。壁体溝の幅は床面上で10cm、深さは10cmである。柱穴・カマドは見つけられなかった。遺物は土師器・須恵器小片が出土している。この住居の廃絶時期は不明であるが、古墳時代後期と考えたい。

(浅倉)





- |                    |                  |
|--------------------|------------------|
| 1 淡灰褐色粘質土(古代?柱穴埋土) | 7 灰黄色粘質土(H54埋土)  |
| 2 暗灰褐色粘質土(古代?柱穴埋土) | 8 灰褐色粘質土(H54床下)  |
| 3 灰褐色粘質土(H55埋土)    | 9 暗灰褐色粘質土(H52埋土) |
| 4 暗灰褐色粘質土(H55埋土)   | 10 灰褐色粘質土(H53埋土) |
| 5 灰褐色粘質土(H55床下)    | 11 灰褐色粘質土(H50埋土) |
| 6 淡灰褐色粘質土(H54埋土)   |                  |

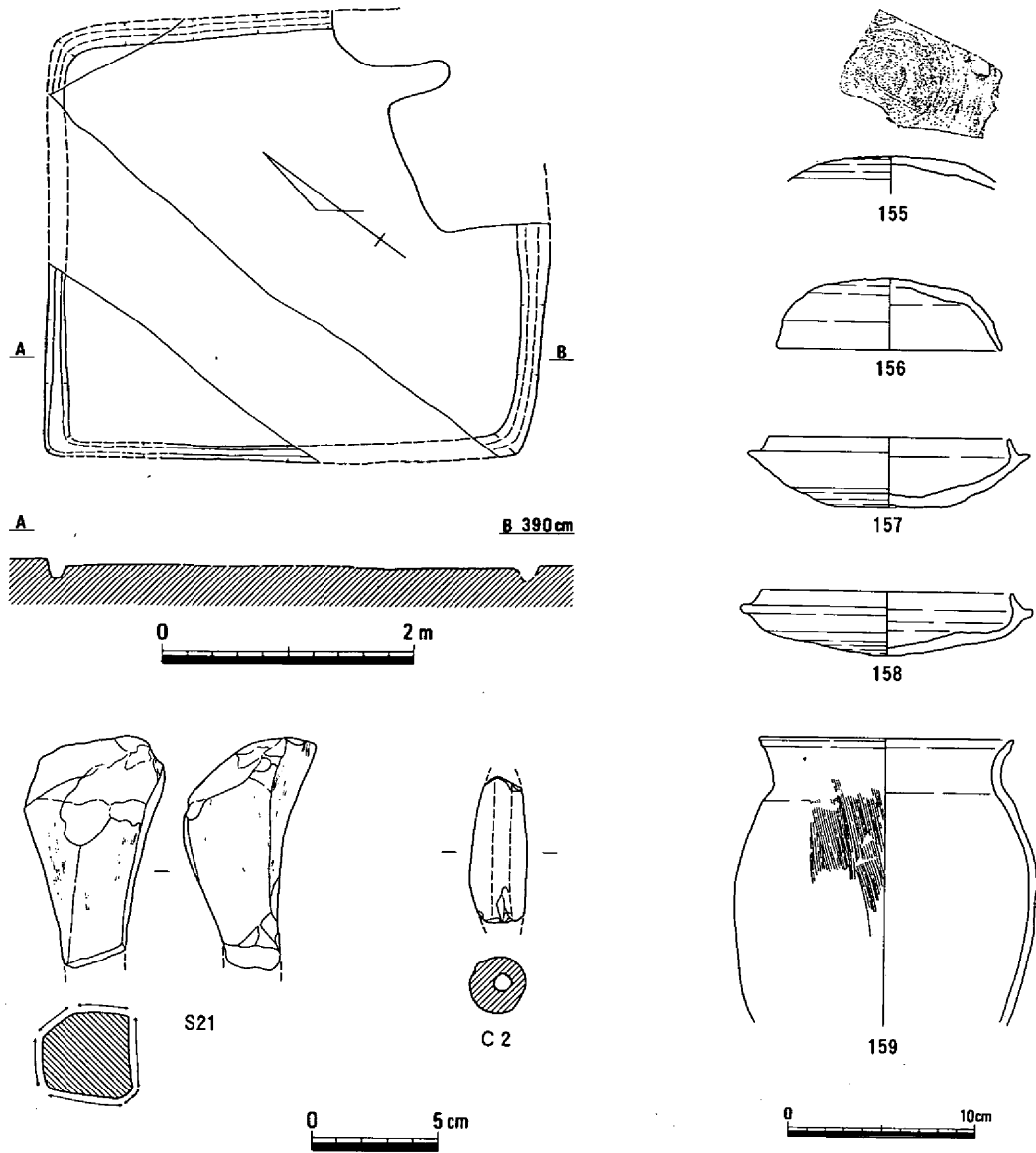


第420図 竪穴住居-52~55 (151~154)

竪穴住居-56 (第421図、図版144・161・164)

O20区の中央やや北寄りに位置し、北側隅を竪穴住居-57、東側隅を竪穴住居-59と切り合い関係をもつ。確認されたのは壁体溝のみであり、支柱穴は検出し得なかった。ただし周辺の住居の状況から、削平部分にカマドが取りついた可能性が高いと思われる。平面形は方形と考えられ、主軸はN-39°-Wである。規模は長さ380cm、幅347cmを測り、床面積は推定12.9㎡である。床面の標高は362cmを示す。

出土遺物としては須恵器杯蓋155・156、杯身157・158、土師器甕159、砥石S21、土錘C2、鍛練



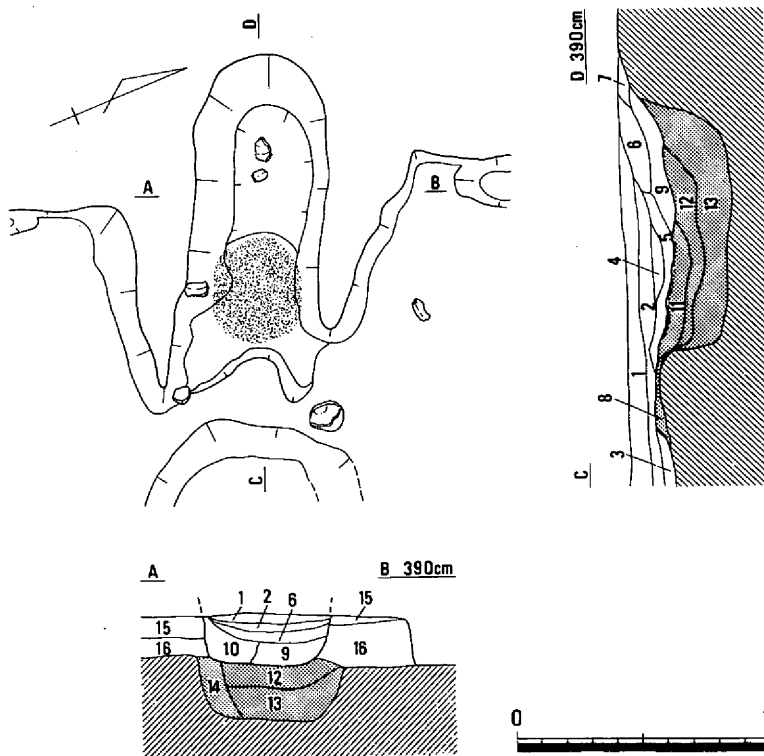
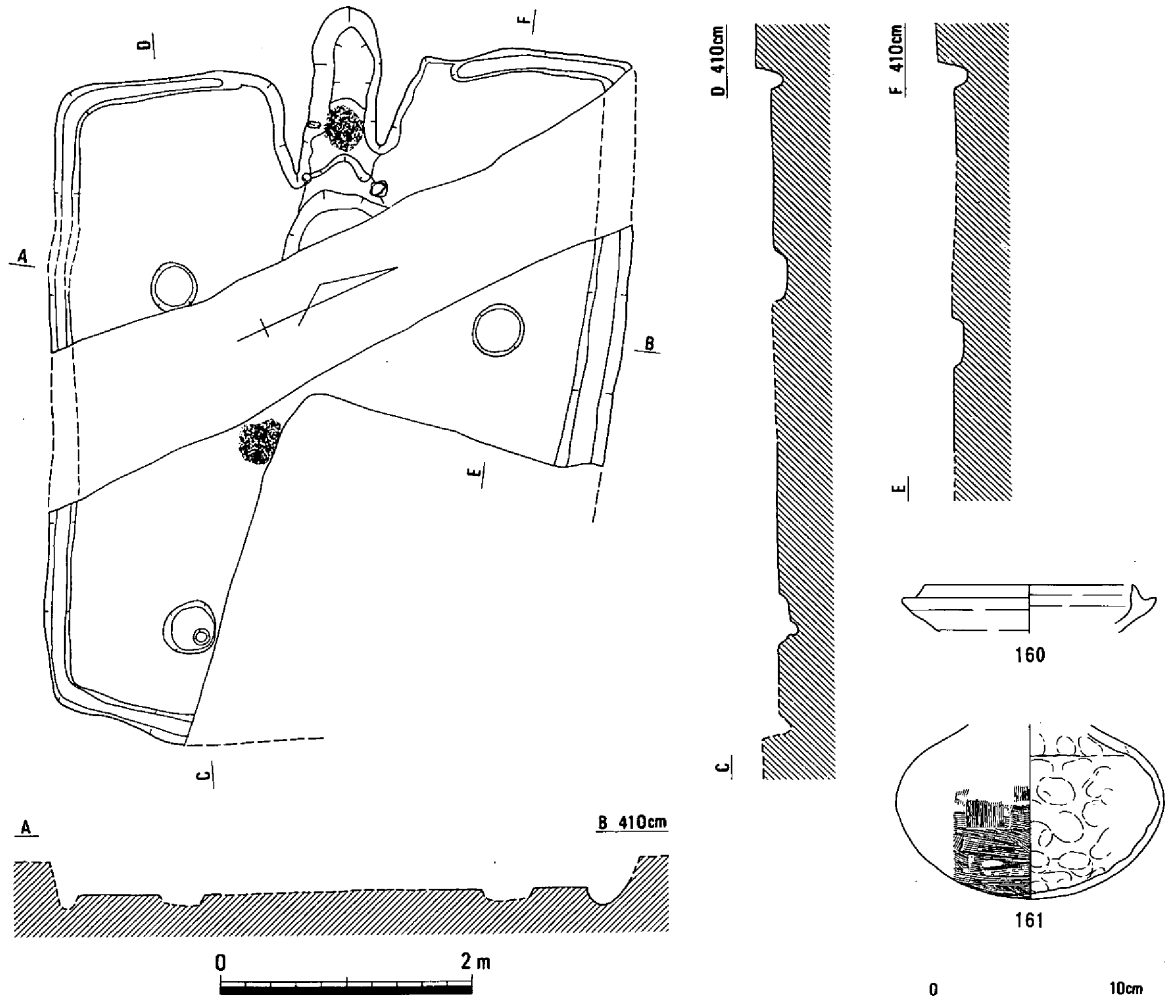
第421図 竪穴住居-56 (155~159・C 2・S21)

鍛冶滓が14点計132.5gなどがみられる。155の天井部にはヘラ記号が認められた。時期は古・後・Ⅱ期と思われる。  
(澤山)

竪穴住居-57 (第422図)

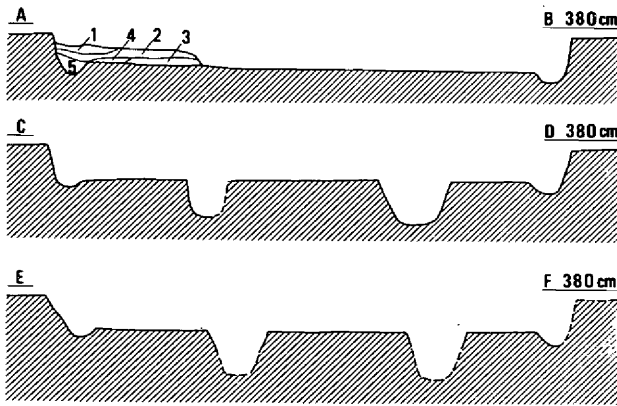
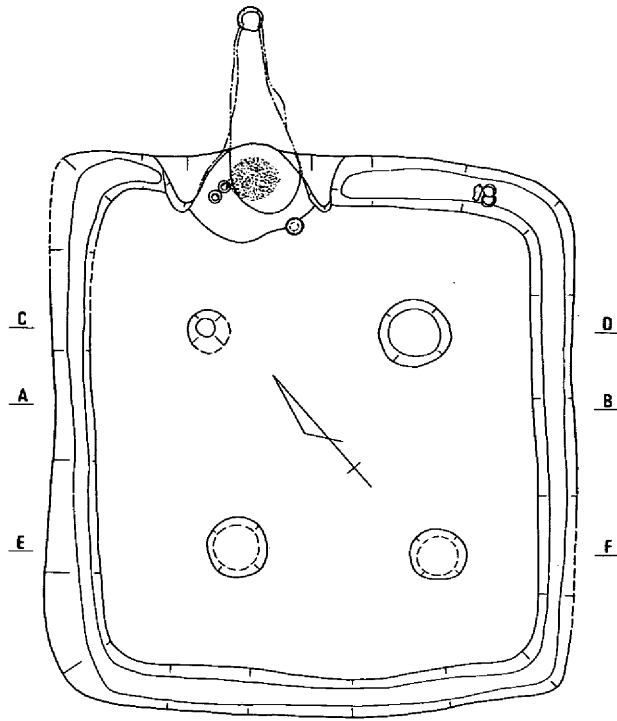
O20区の中央やや北寄りに位置し、東側を竪穴住居-58により大きく削平されている。平面形は不整形を呈している。主軸はN-27°-Eを示す。規模は長さ512cm、幅432cmを測り、床面積は推定20.1㎡である。床面の標高は359cmを示す。主柱穴は想定4本柱のうち3本検出した。また床面中央付近で焼土面を1ヵ所確認した。カマドは住居の西北西辺に取りつき、その主軸は住居主軸から左回りに2°振っている。規模は全長141cm、袖長82cm、袖間幅58cm、煙道幅52cmを測り、煙道の傾斜は28°である。燃焼部位置は住居内側にあり、カマド下部には比較的大形の土塊を確認している。またカマド前庭付近には炭や灰の掻き出しで生じたものと思われる浅い窪みが形成されている。

出土遺物としては須恵器杯身160、土師器壺161、鉄滓が9点計43.3gなどが認められる。時期は古・後・Ⅱ期と思われる。  
(澤山)

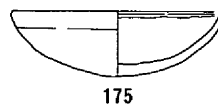
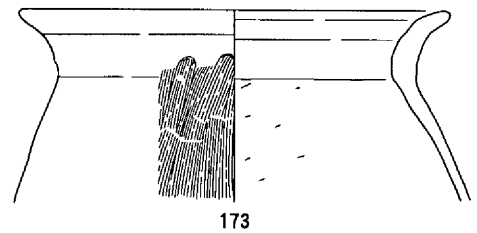
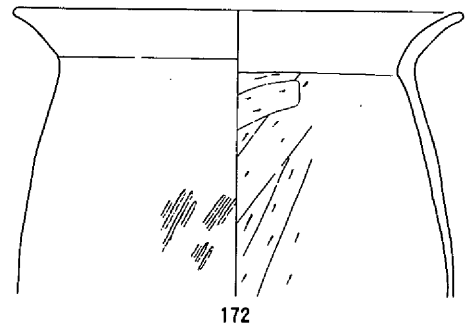
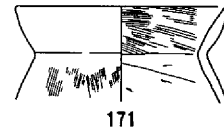
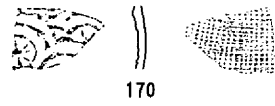
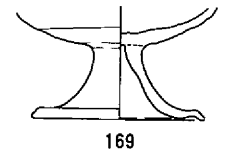
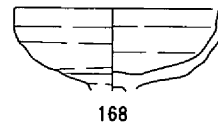
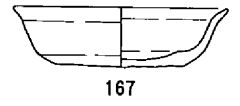
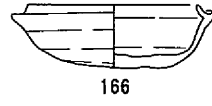
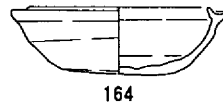
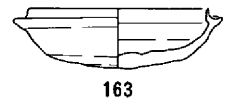
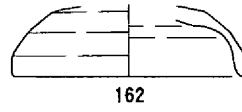
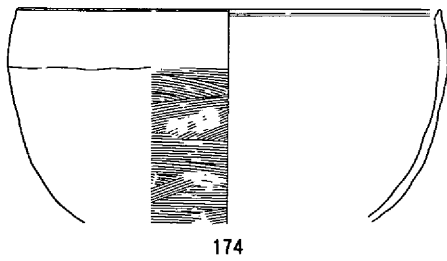


- 1 淡黄褐色砂質土
- 2 黄褐色砂質土
- 3 暗黄褐色砂質土(炭・灰含む)
- 4 赤橙色砂質土(焼土含む)
- 5 暗茶褐色砂質土(炭・灰多く含む)
- 6 暗茶褐色砂質土(炭含む)
- 7 暗黄褐色砂質土
- 8 淡茶褐色砂質土
- 9 淡褐色砂質土
- 10 茶褐色砂質土  
(下部に炭・灰・焼土多く含む)
- 11 淡茶褐色砂質土(上面被熱)
- 12 茶褐色砂質土
- 13 淡褐色砂質土
- 14 暗茶褐色砂質土(炭含む)
- 15 暗褐色砂質土
- 16 暗黄褐色砂質土

第422図 竪穴住居-57 (160・161)



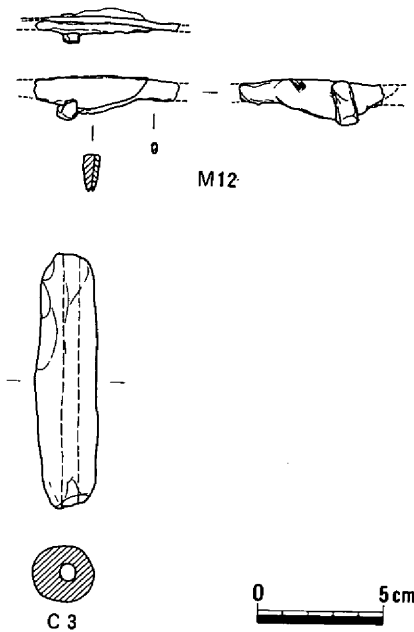
- 1 灰褐色砂質土
- 2 暗灰褐色砂質土(炭・焼土多く含む)
- 3 淡灰褐色砂質土
- 4 灰褐色砂質土(焼土含む)
- 5 灰褐色砂質土



第423図 竪穴住居-58 (162~176)

竪穴住居-58 (第423~425図、図版122・145・162・164)

竪穴住居-57の北西隅と重複する非常に残存状況の良い竪穴住居である。平面形は長方形で、住居の主軸は45°東に振っている。壁体溝は四方で検出でき、床面での幅20cm、深さは20cmを測る。床面規模は東西で340cm、南北480cmを測る。床面の標高は344cmである。柱穴は4本検出できた。1本を除いて他はほぼ同じ大きさで、径50cm、深さ35cmを測る。カマドは北壁の中央よりやや西寄りに作りつけられている。焚き口の幅は100cmあり、床面より20cm程掘込んでいる。焚き口の左右には粘土により土手状に壁を50cm程貼り付けている。天井部を含め上部構造は崩落しているため不明である。煙道部は、長さ100cmほど天井が残存していた。煙道の入口はかまぼこ形の横断面を呈し、先端付近は円形の横断面になっている。また、縦断面はL字状に屈曲して径20cmの円形の出口に至る。焚き口に近い方が良く火を受けて灰褐色に

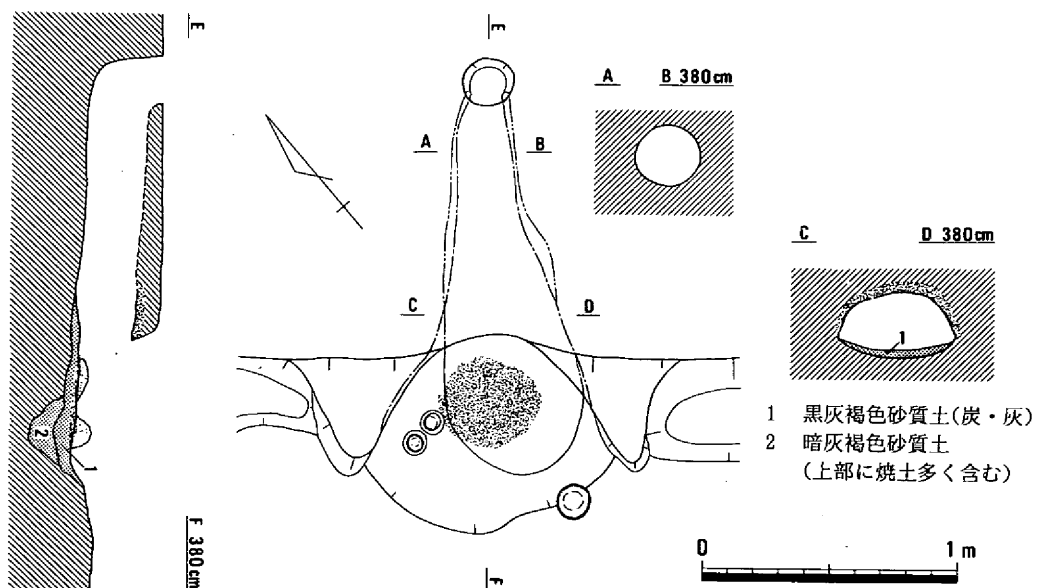


第424図 竪穴住居-58 (M12・C3)

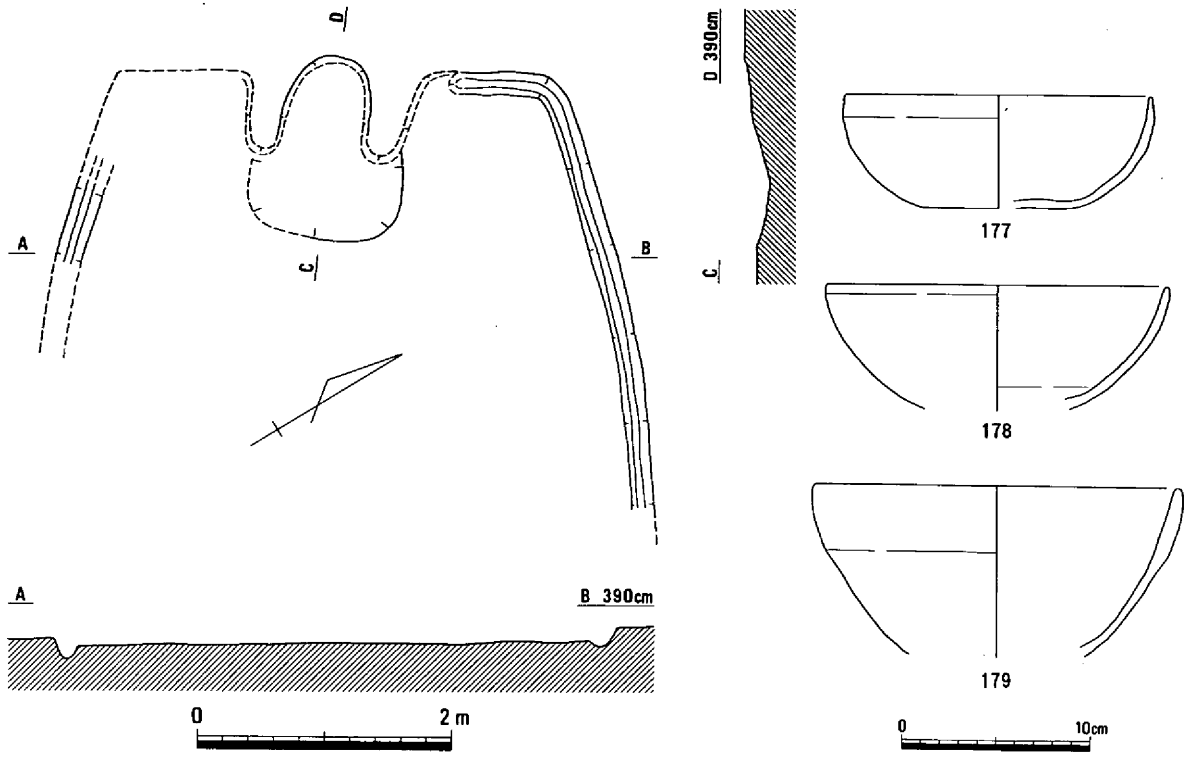
還元され、先端付近はあまり焼けておらず酸化して赤褐色を呈する。

遺物はカマドの中とその周辺の床に密着した状態で須恵器・土師器・鉄器・鉄滓・土錘が出土している。162は須恵器蓋、163~166は須恵器杯、167は立ち上がりと受け部がない須恵器杯身、168・169は須恵器高杯、170は内面に車輪文の当て具痕を持つ須恵器甕、171~173は土師器甕、175・176は土師器碗、174は土師器鉢、M12は刀子であり2個体が刃先をたがえ錆着している。C3は管状土錘である。

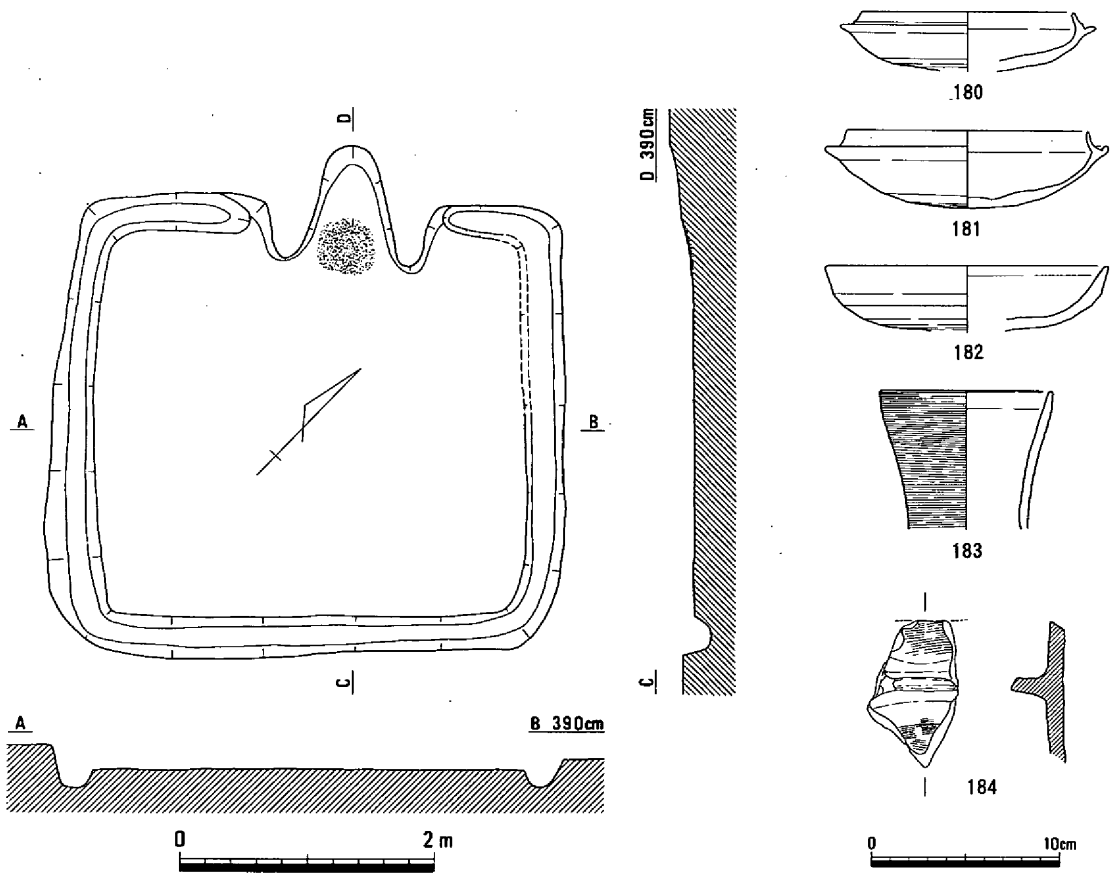
遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・7C前半と考えられる。また、遺物の出土状態から火災にあって急に逃げ出したもののように考えられる。(浅倉)



第425図 竪穴住居-58



第426図 竪穴住居-59 (177~179)



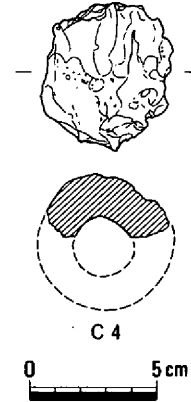
第427図 竪穴住居-60 (180~184)

### 竪穴住居-59 (第426図)

竪穴住居-58の南隣で検出した浅い残りの良くない住居である。平面形は台形であろうか。壁体溝はカマド部以外は巡っていたようである。北西壁の中央部にカマドの下部が残存していた。床面の標高は358cm、カマドの焚き口に近い部分のA-B間の床面幅は400cmを測る。

遺物は少量の土器が埋土から出土している。177~179は土師器椀・鉢である。甑も出土している。鉄滓は233gある。遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期と考えられる。

(浅倉)



第428図 竪穴住居-60 (C4)

### 竪穴住居-60 (第427・428図、図版145・164)

O20区北部中央で検出した。竪穴住居-58の北西約5mに位置する比較的残りの良い住居である。平面形はほぼ正方形である。カマドは北西側の壁のほぼ中央部に作りつけられている。このカマドを除く全周に壁体溝が巡っている。A-B間で床面の幅は350cm、C-Dでは300cmを測る。床面の標高は360cmである。カマドの焚き口の幅は80cm、焚き口から煙道先端まで約1mほど残存している。

遺物は須恵器・土師器・かまど片・羽口片・鉄滓が埋土から出土している。181・180は須恵器杯で、182は須恵器杯か高杯であろうか。183は須恵器直口壺、184はかまど片、C4はふいごの羽口片である。

これらの遺物と遺構の特徴からこの住居の廃絶時期は、6C後半と考えられる。(浅倉)

### 竪穴住居-61 (第429図、図版145)

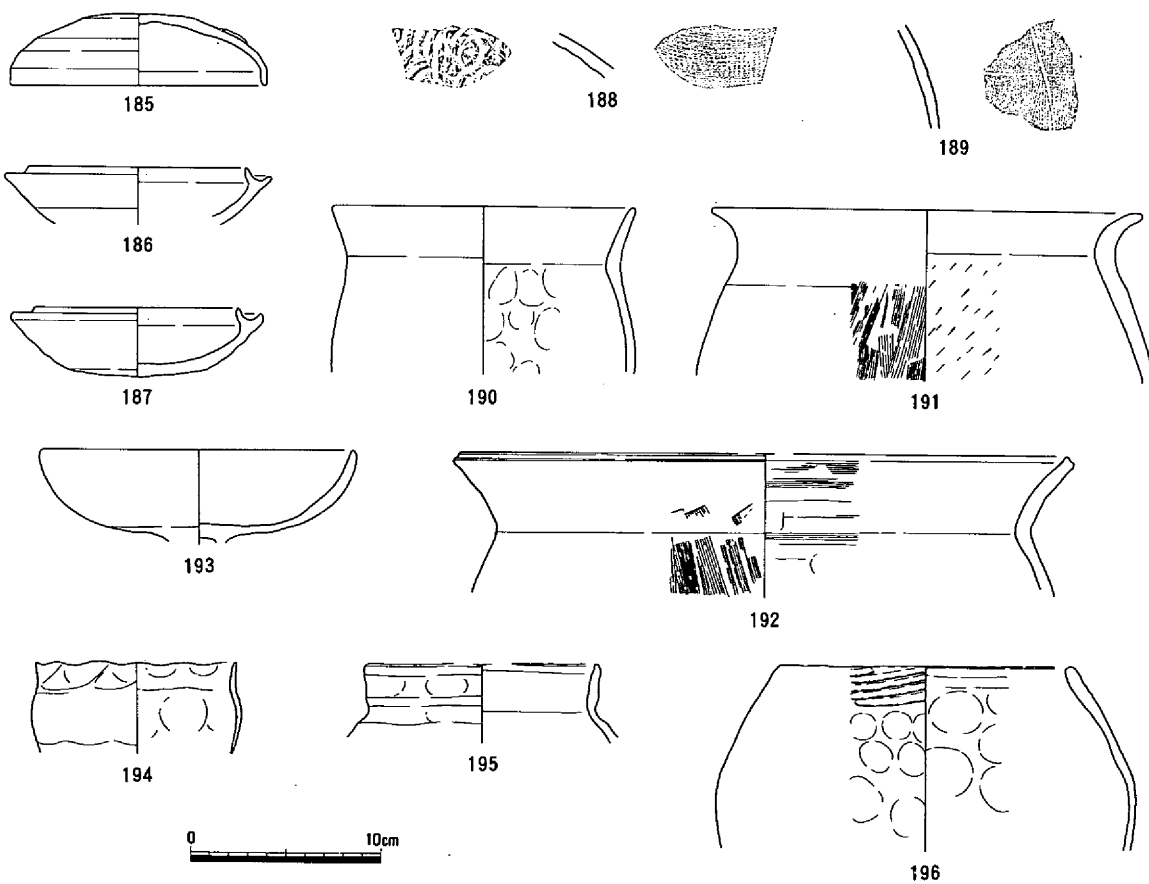
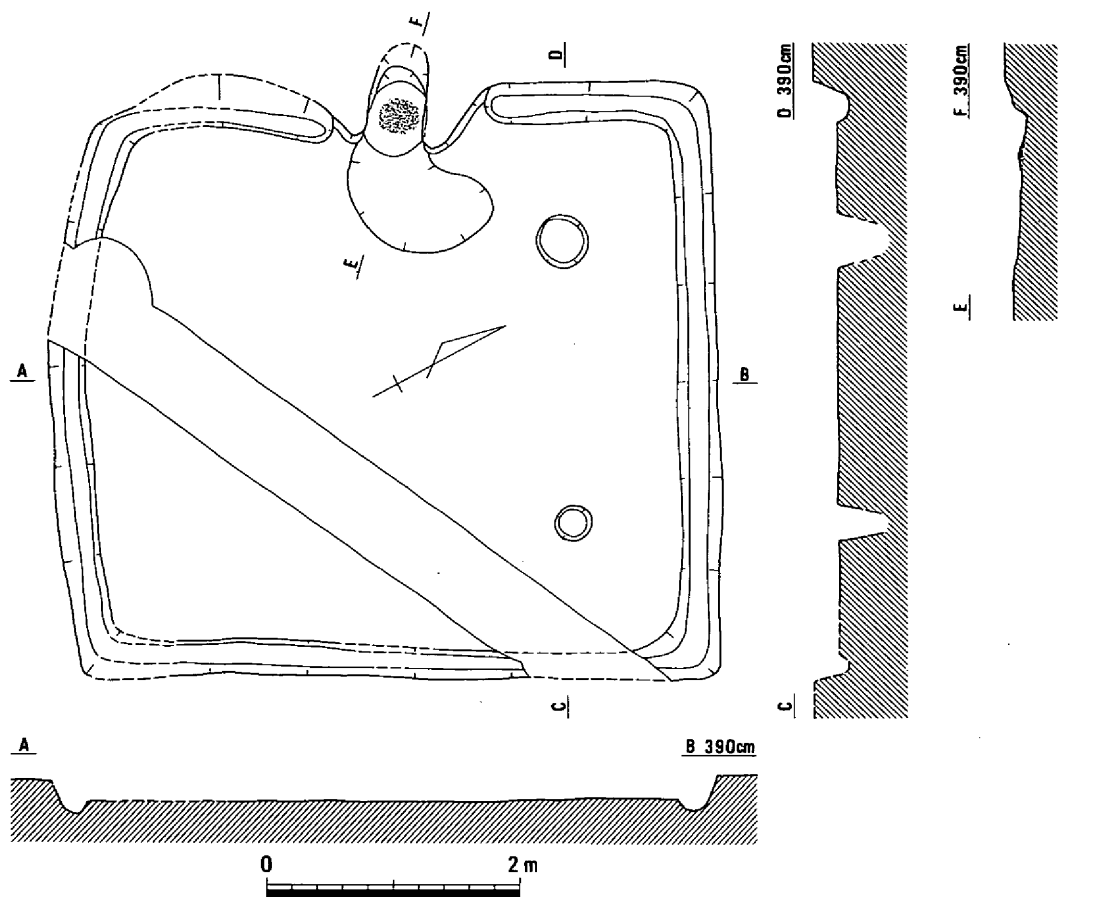
竪穴住居-60の2m南で検出した比較的残りの良い住居である。平面形はほぼ正方形である。カマドは北西側の壁のほぼ中央部に作りつけられている。このカマドを除く全周に壁体溝が巡っている。床面規模はA-B間では415cm、C-D間では420cmを測る。床面の標高は356cmである。カマドの焚き口の幅は50cm、焚き口から煙道先端まで約1mほど残存している。焚き口手前には深さ5cm程の浅い凹みが認められる。炭・灰などの掻き出しによる使用上の凹みであろう。柱穴は2本検出できた。カマドに近いものは少し大きく径40cm、東のそれは少し小さく径28cm、深さはどちらも40cm以上ある。対になるべき柱穴が見つからないことはあるいはこの2本もこの住居に伴わない可能性がある。

遺物は土器片が比較的多数出土している。185は須恵器杯蓋、186・187は須恵器杯、188は須恵器甕腹、189は須恵器甕で外面に線刻がある。190・191は土師器甕、193は土師器高杯、194~196は製塩土器である。この住居では鉄滓が819g出土している。他にウシカウマの焼骨がカマド内で出土しており、注目される。

これらの遺物からこの住居の廃絶時期は、7C前半と考えられる。(浅倉)

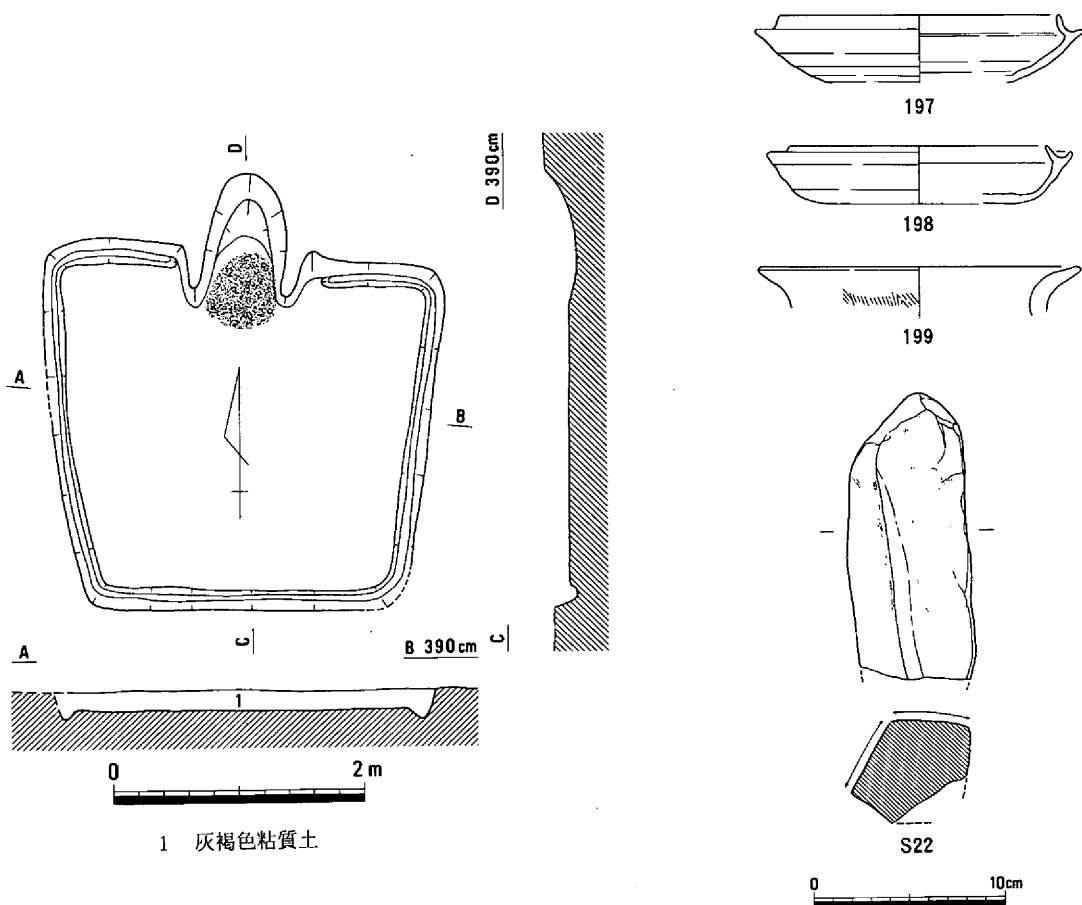
### 竪穴住居-62 (第430図、図版161)

O20区北部、竪穴住居-61の北約5mで検出した比較的残りの良い小形の住居である。平面形は台形である。カマドは北側の壁のほぼ中央部に作りつけられている。このカマドを除く全周に壁体溝が巡っている。床面規模はA-B間で260cm、C-D間で250cmを測り、床面の標高は350cmである。カマドの焚き口の幅は75cm、焚き口から煙道先端まで約1mほど残存している。カマド底部には灰が薄く覆っていた。残存していたカマド両脇の壁は粘土を貼り付けたのではなく地山を削り残したもの



第429図 竪穴住居-61 (185~196)





第430図 竪穴住居-62 (197~199・S22)

である。柱穴は検出できなかった。これほど小形の竪穴住居には柱が中にあると邪魔になるのであろう。

遺物は少量の土器・砥石が出土している。197・198は須恵器杯身、199は土師器甕、S22は砥石である。これらの遺物からこの住居の廃絶時期は、6C後半と考えられる。(浅倉)

竪穴住居-63 (第431・432図)

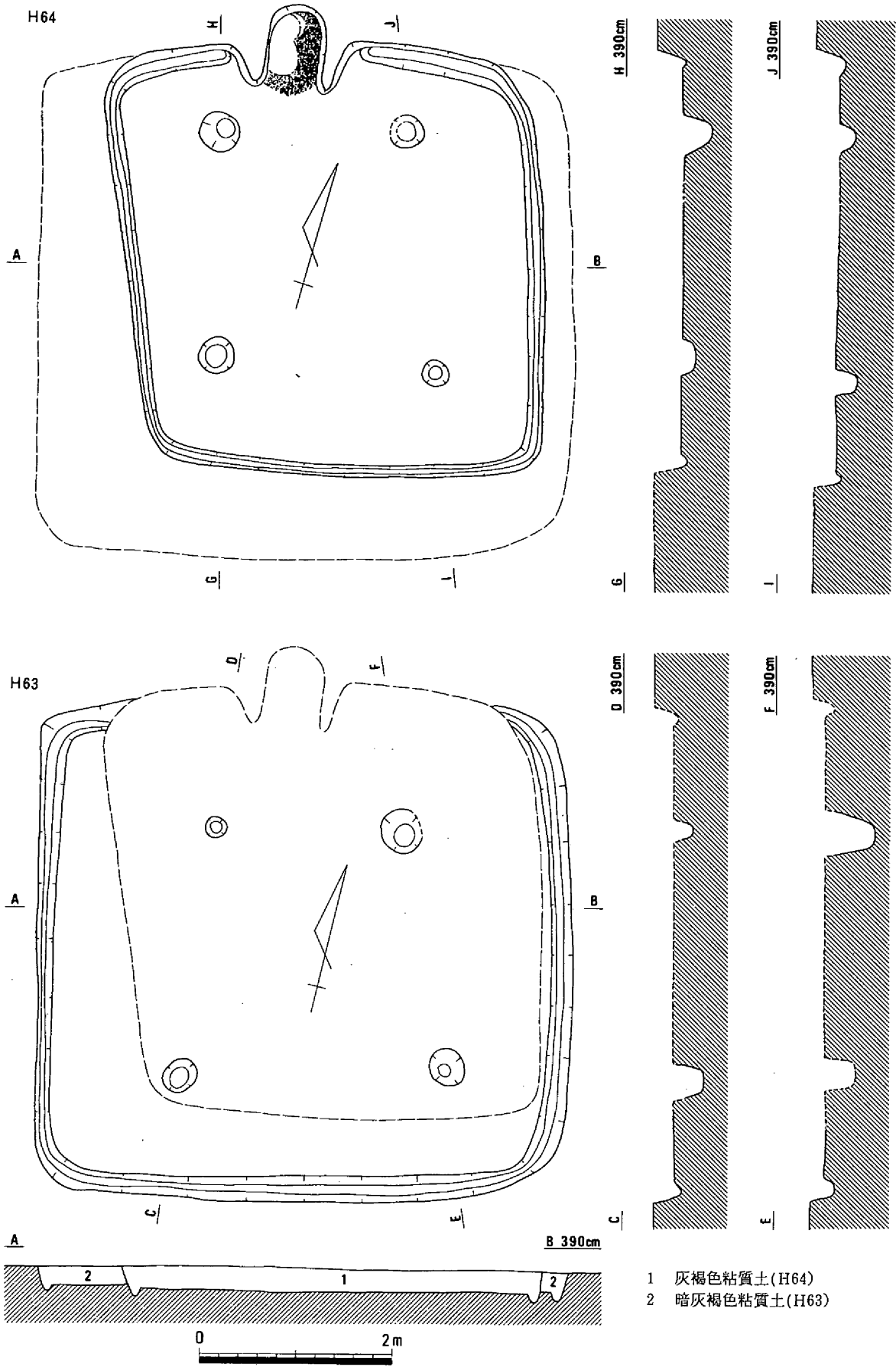
竪穴住居-62の北隣で検出した。後述する竪穴住居-64とはほぼ重複し、床面のほとんどをこれによって壊されている。平面形はほぼ正方形である。床面規模はA-B間で510cmを測り、床面標高は344cmである。カマドは北辺に作りつけられていたものと推測されるが、重複する竪穴住居-64によって壊されている。柱穴は4本で、径30~45cm、深さ15~30cmを測り、柱間は196~276cmを測る。

遺物は少量の土器・鉄滓が出土している。200は須恵器杯身である。

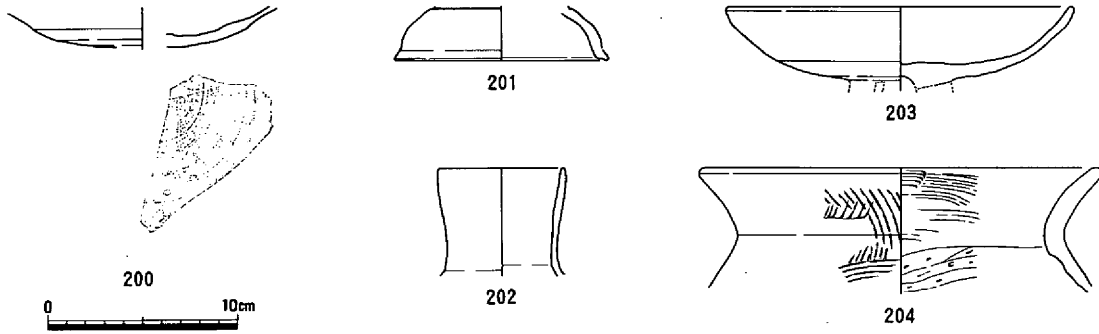
これらの遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期と考えられる。(浅倉)

竪穴住居-64 (第431・432図)

竪穴住居-63の上部で検出したそれより一回り小さい住居である。平面形はほぼ正方形である。床面規模はA-B間で400cm、I-J間で410cmを測る。床面の標高は竪穴住居-63より約15cm低い。柱穴は4本検出され、径20~40cm、深さ20~50cm、柱間は186~255cmを測る。カマドは北側の壁のほぼ中央部に作りつけられている。このカマドを除く全周に壁体溝が巡っている。カマドの焚き口の幅は80cm、焚き口から煙道先端まで約80cm残存している。カマド底部には灰が薄く覆っていた。カマド両脇の壁は粘土を貼り付けたものではなく地山を削り残したものである。



第431図 竪穴住居-63・64



第432図 竪穴住居-63(200)・64(201~204)

遺物は少量の土器が出土している。201は須恵器杯蓋、202は須恵器直口壺、203は須恵器高杯であろうか。204は土師器甕である。

この遺物と検出遺構面、切り合いからこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期と考えたい。(浅倉)  
**竪穴住居-65 (第433図)**

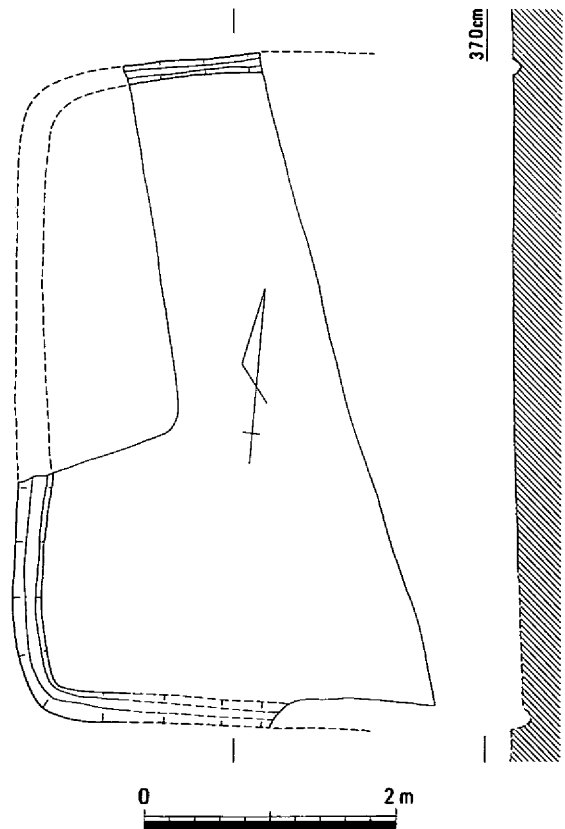
O20区北端中央で検出した住居である。竪穴住居-63・64の東約5mに位置する。全体の1/2東部分は調査範囲外のため平面形はほぼ正方形と推定するほかない。カマドは検出できていない。全周に壁体溝が巡っていたようである。北西隅は竪穴住居-66に壊されている。南北軸で床面の幅は505cmを測り、床面の標高は343cmである。柱穴は検出していない。遺物は出土していない。したがってこの住居の廃絶時期は、検出遺構面、切り合いから古墳時代後期と考えたい。(浅倉)

**竪穴住居-66 (第434図、図版123)**

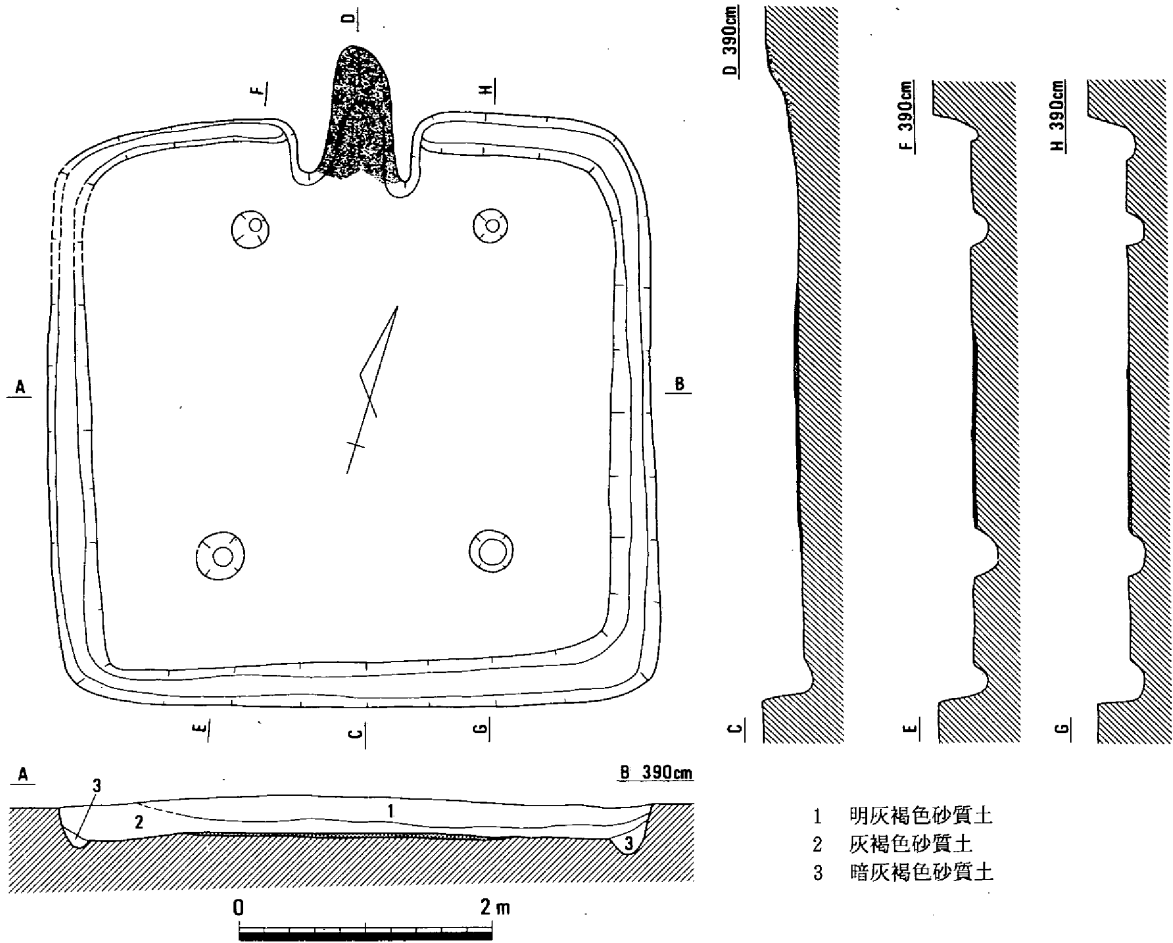
竪穴住居-65の北西部分と重複する。平面形はほぼ正方形である。カマドは北側の壁のほぼ中央部に作りつけられている。このカマドを除く全周に壁体溝が巡っている。床面の標高は342cmを測る。カマドの焚き口の幅は80cm、煙道は焚き口から約80cmほど残存している。カマド底部には灰が薄く覆っていた。カマド両脇の壁は粘土を貼り付けたものではなく地山を削り残したものである。柱穴は4本で、直径25~40cm、深さ15~20cm、柱間は185~266cmを測る。

遺物は少量の土器・鉄滓が出土している。205は須恵器杯身、206は須恵器直口壺か甕、207は須恵器高杯、208は須恵器甕で内面の叩きは車輪文、209は製塩土器である。

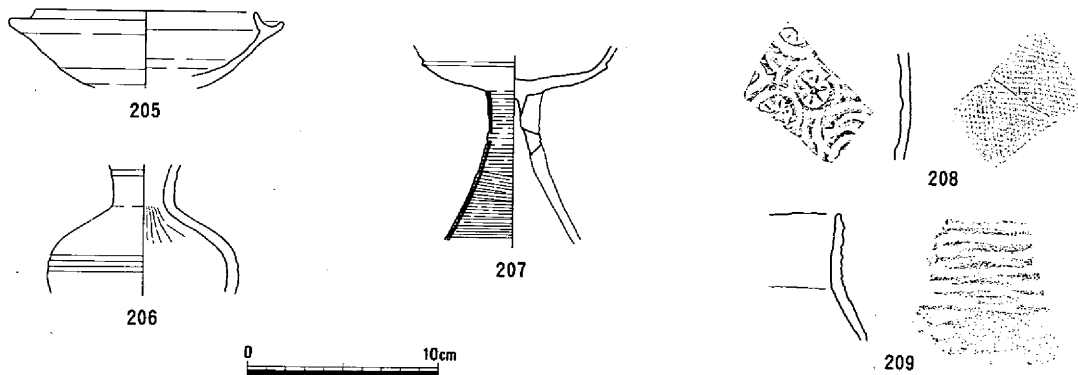
これらの遺物からこの住居の廃絶時期は、6C後半と考えられる。(浅倉)



第433図 竪穴住居-65



- 1 明灰褐色砂質土
- 2 灰褐色砂質土
- 3 暗灰褐色砂質土



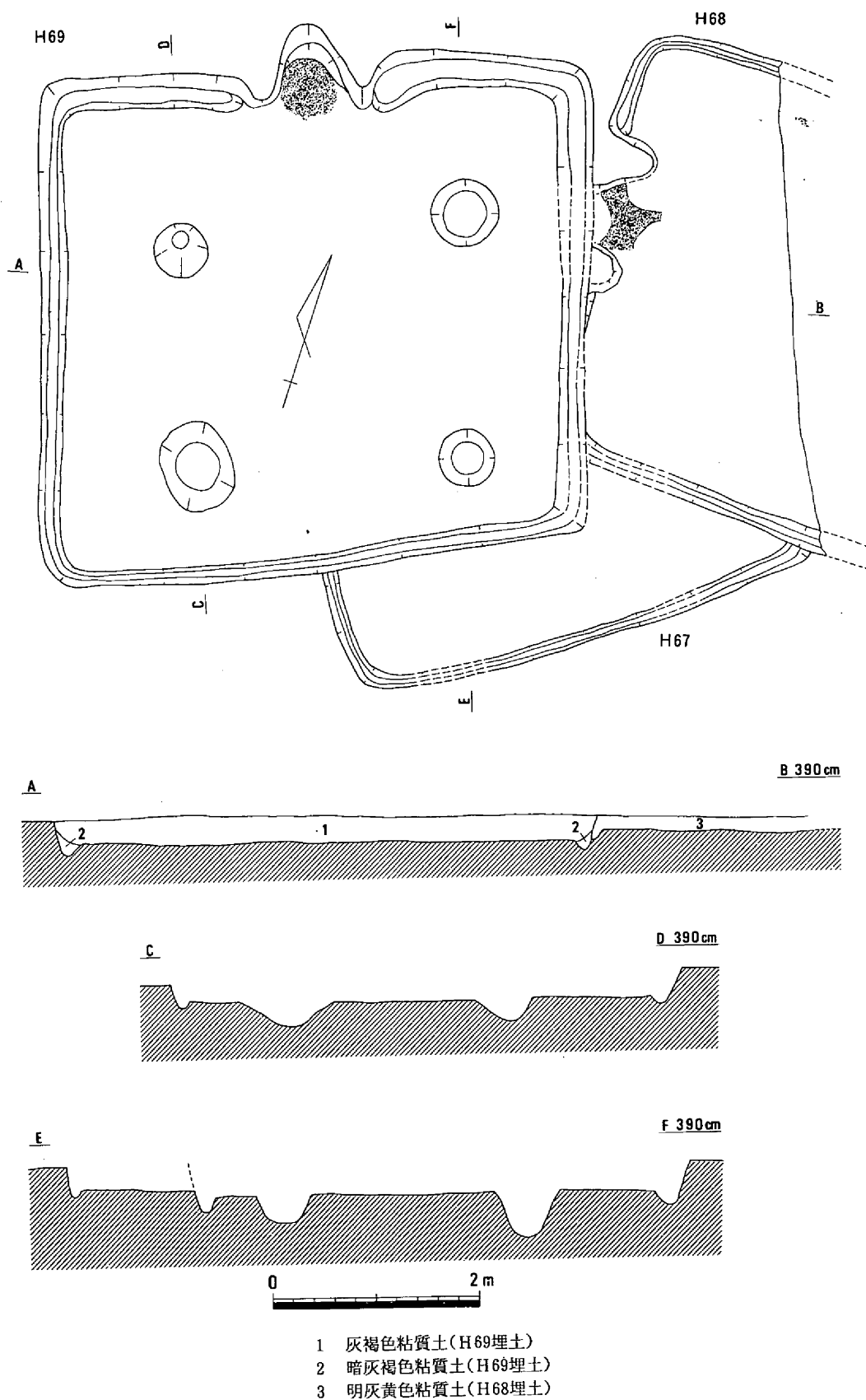
第434図 竪穴住居-66 (205~209)

竪穴住居-67 (第435・436図)

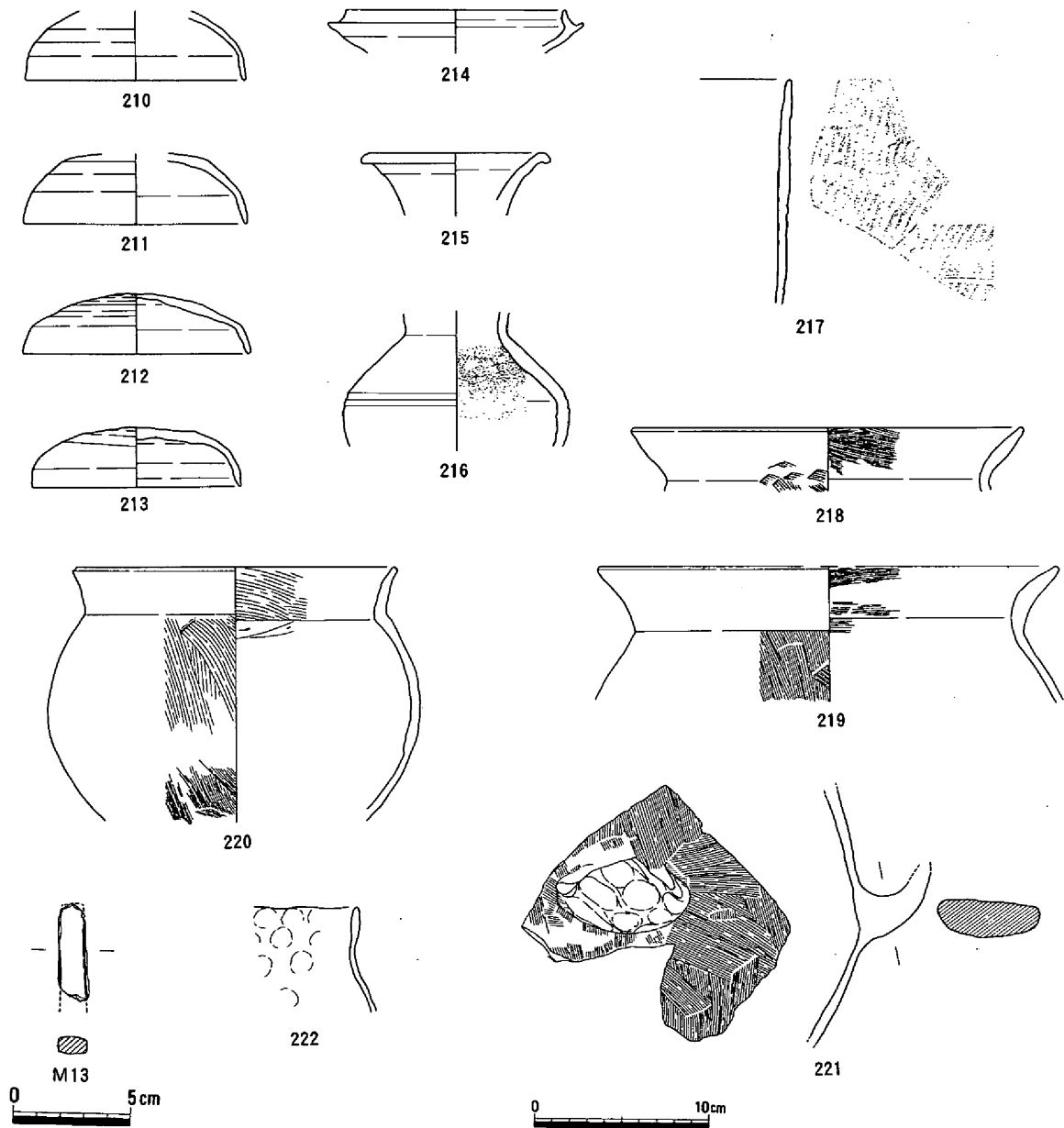
〇20区北端中央部で検出した住居である。北部2/3は後述する竪穴住居-68・69に切られているが、平面形はほぼ方形と推測される。カマドは検出できていない。全周に壁体溝が巡っていたようである。東西辺で床面の幅は410cm、床面の標高は334cmを測る。柱穴は見つからなかった。検出面から床面までの深さは30cmである。

出土遺物として図示した216は須恵器直口壺か甗の細片であり、内面に葉脈状のオサエ痕跡を認めた。

この遺物と検出遺構面、切り合いからこの住居の廃絶時期は古墳時代後期と考えたい。(浅倉)



第435図 竪穴住居-67~69



第436図 竪穴住居-67~69 (210~222・M13)

竪穴住居-68 (第435・436図、図版145)

竪穴住居-67と重複し、これを切り、竪穴住居-69に一部切られている。東側 2/3 は調査区外であるが、平面形はほぼ正方形になるものと推定できる。住居主軸はほぼ南北を向く。壁体溝は三方で検出できた。床面規模は南北で400cmを測る。床面の標高は326cmである。柱穴は検出できなかった。カマドは西側の壁の中央部分に作りつけられている。焚き口の幅は100cmあり、床面より20cm程掘込んでいる。焚き口の左右には土手状に壁を削り出しているが、天井を含め上部の構造は崩れ落ちているため詳細は不明である。煙道部は竪穴住居-69に壊されている。

遺物は埋土から土器・鉄滓が出土している。210~212は須恵器杯蓋、214は須恵器杯身、215は須恵器壺が高杯、219は土師器甕、222は製塩土器である。

遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・6C後半と考えられる。 (浅倉)

竪穴住居-69 (第435・436図、図版145・162)

竪穴住居-67・68と重複し、これらに後出する。平面形はほぼ正方形になる。住居主軸は約10°西に振る。壁体溝は四方で検出できた。床面規模はA-B間で475cm、C-D間で450cmを測る。床面の標高は340cmである。柱穴は4本検出しており、径50~70cm、深さ20~50cm、柱間220~270cmを測る。カマドは北側の壁の中央部分に作りつけられている。焚き口の幅は100cmあり、床面よりわずかに凹んでいる。焚き口の左右には土手状に壁を削り出しているが、竪穴住居-68のカマド土手より短い。天井を含め上部の構造は崩落しているため詳細は不明である。

遺物は埋土から土器・鉄器・鉄滓が出土している。213は須恵器杯蓋、217は須恵器鉢、218・220は土師器甕、221は土師器甕の把手部分である。M13は鉄製鏝であろうか。

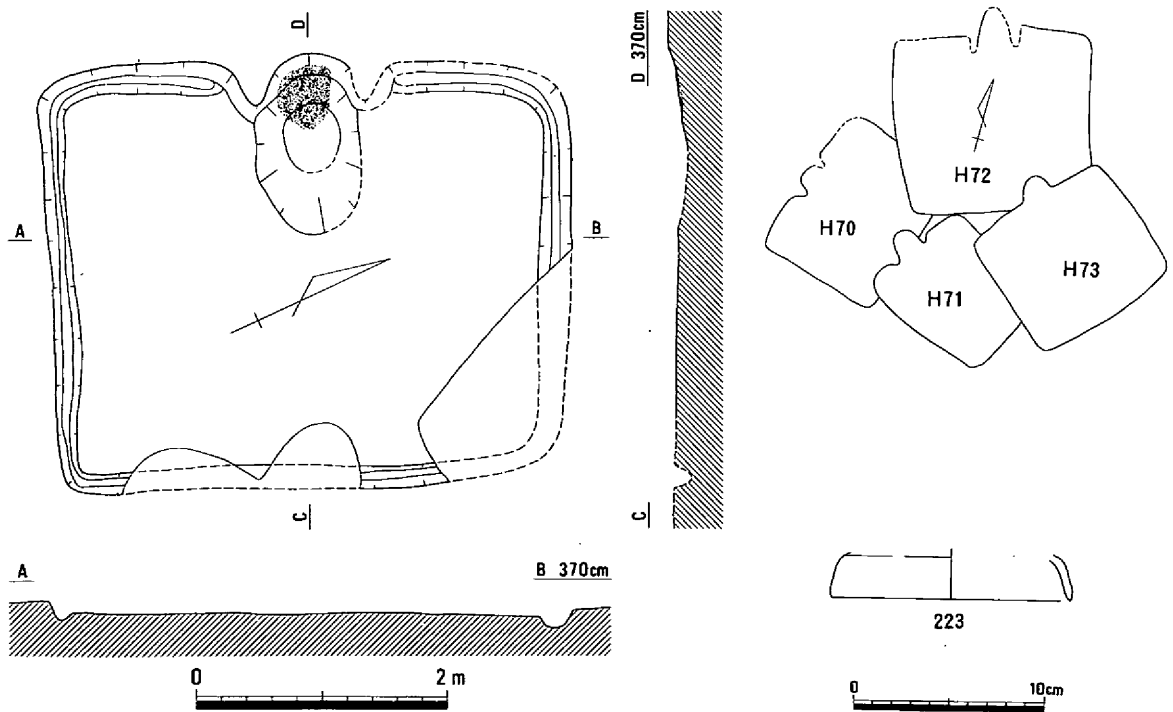
遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・6C後半と考えられる。(浅倉)

竪穴住居-70 (第437図、図版123)

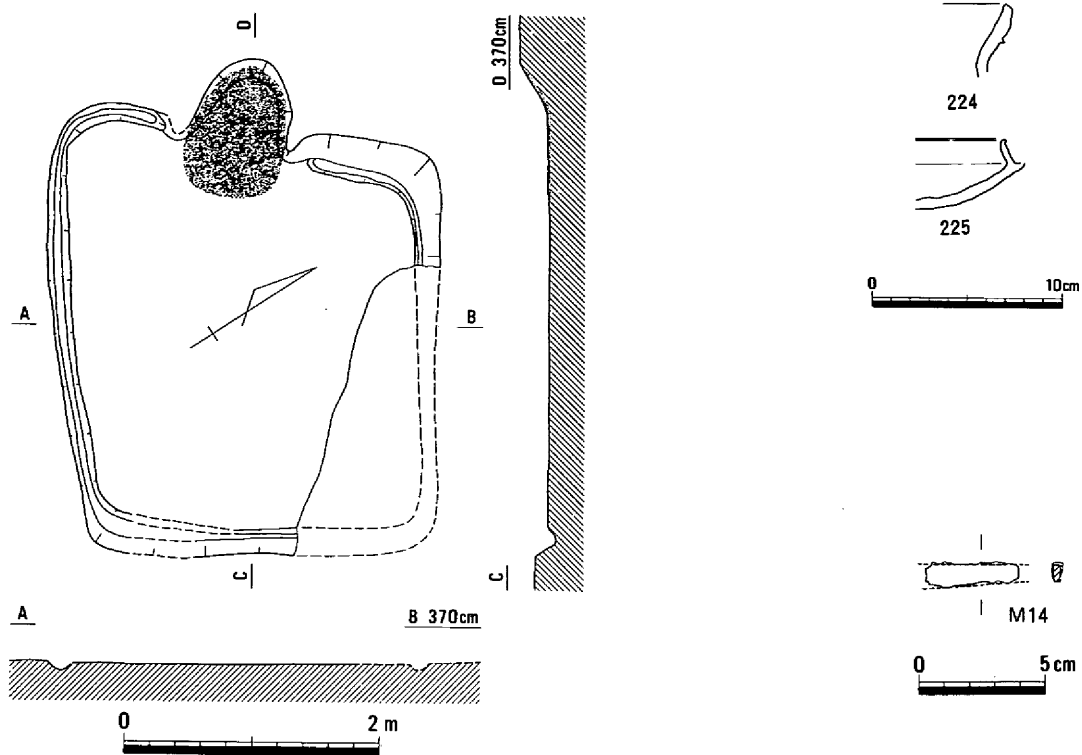
O20区北半部中央で検出した小形の住居である。竪穴住居-71・72に切られる。平面形は南北に長い長方形になる。住居主軸は約15°東に振る。壁体溝は四方で検出できた。床面規模はA-B間375cm、C-D間300cmを測る。床面の標高は348cmである。柱穴は検出できなかった。小形の住居には柱穴を掘らないことがこの時期の特徴であろうか。カマドは西側の壁の中央部分に作りつけられている。焚き口の幅は80cmあり、カマド底部は床面よりわずかに凹んでいる。焚き口の左右には土手状に壁を削り出しているが、竪穴住居-68のカマド土手より短い。これも小形住居の床面積を広く使用するための知恵であろうか。

遺物は須恵器蓋・高杯・甕の細片・鉄滓が出土しているだけである。

わずかこの遺物と検出遺構面および住居形態から廃絶時期は、古墳時代後期と考えたい。(浅倉)



第437図 竪穴住居-70 (223)



第438図 竪穴住居-71 (224~225・M14)

竪穴住居-71 (第438図、図版123)

竪穴住居-70・73と重複し、竪穴住居-70を壊し、竪穴住居-73に壊されている。平面形は東西に長い長方形になる。住居の主軸は30°東に振る。壁体溝は四方で検出できた。床面規模はA-B270cm、C-D間310cmを測る。床面の標高は338cmである。柱穴はやはり検出できなかった。カマドは西側の壁の中央部分に作りつけられている。焚き口の幅は80cmあり、カマド底部は床面とほぼ同一レベルであるが、底部は赤色に良く焼けている。焚き口の左右には土手状に壁を削り出しており、裾部の残存は悪い。

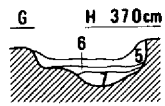
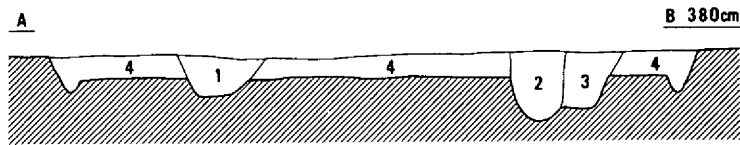
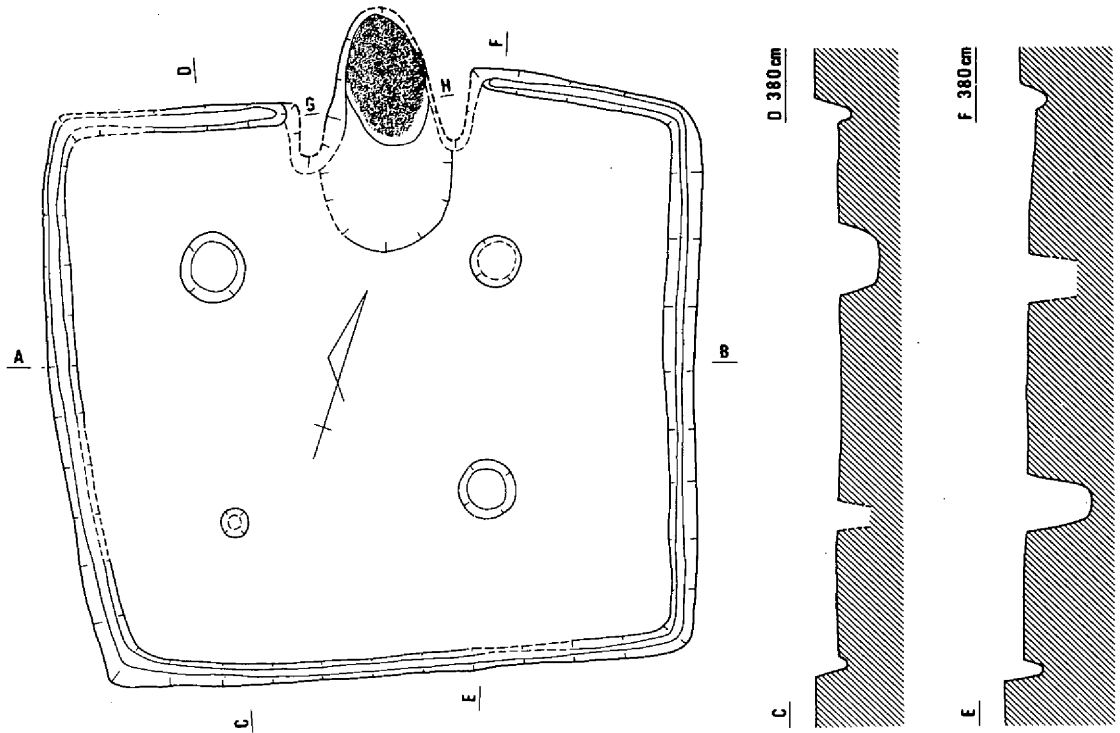
遺物は須恵器の細片と鉄器・鉄滓・獣骨の焼骨が出土している。224は壺、225は杯身、M14は刀子である。遺物と切り合い関係から廃絶時期は、古墳時代後期・6C後半と考えたい。(浅倉)

竪穴住居-72 (第439図、図版123・164)

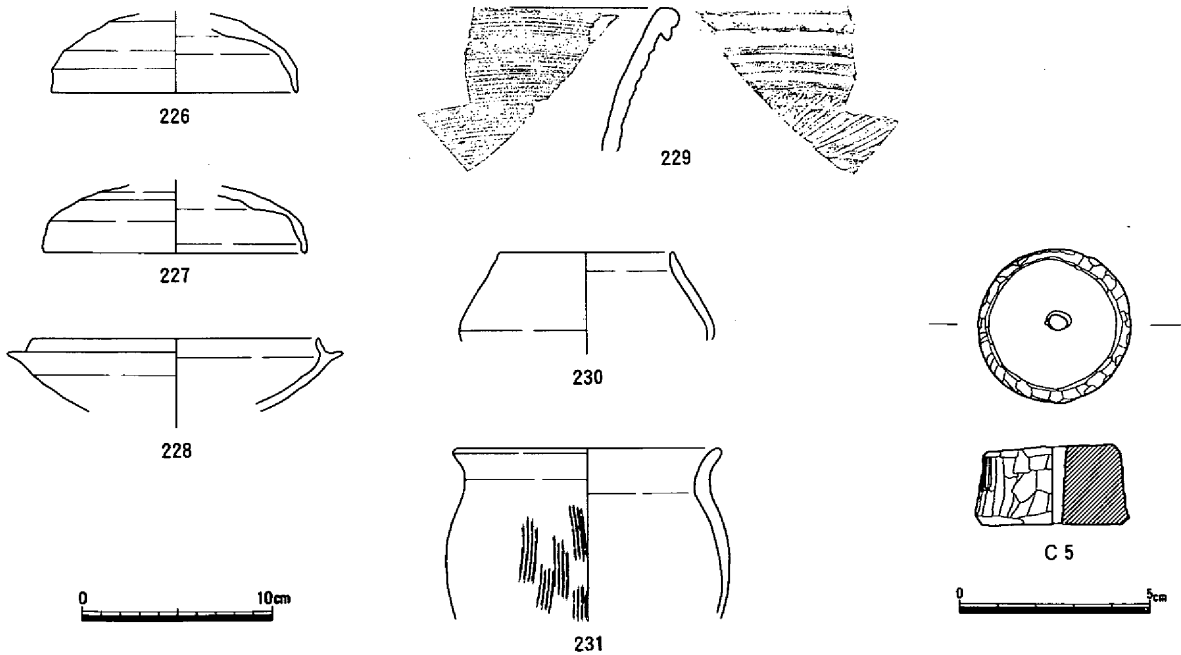
竪穴住居-70・73と重複する比較的大形の住居である。竪穴住居-70を切り、73に切られる。平面形は台形ぎみの方形である。住居主軸は約10°西に振る。壁体溝は四方で検出できた。床面規模はA-B間460cm、C-D間425cmを測る。床面の標高は338cmである。柱穴は4本検出し、径20~50cm、深さ30~50cm、柱間182~225cmを測る。カマドは北側の壁の中央部分に作りつけられているが、この壁は500cmを測り四辺の内一番長い。カマド焚き口の幅は100cmあり、焚き口付近は床面よりやや凹む。焚き口の左右には土手状に壁を削り出している。

遺物は須恵器・土師器・鉄滓が多少出土している。226・227は蓋、228は杯身、227は壺の口縁か器台の脚端部であろう。230は無頸壺、231は甕、C5は須恵質紡錘車であり、細かな面取りがみられる。以上の遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・6C後半と考えたい。(浅倉)

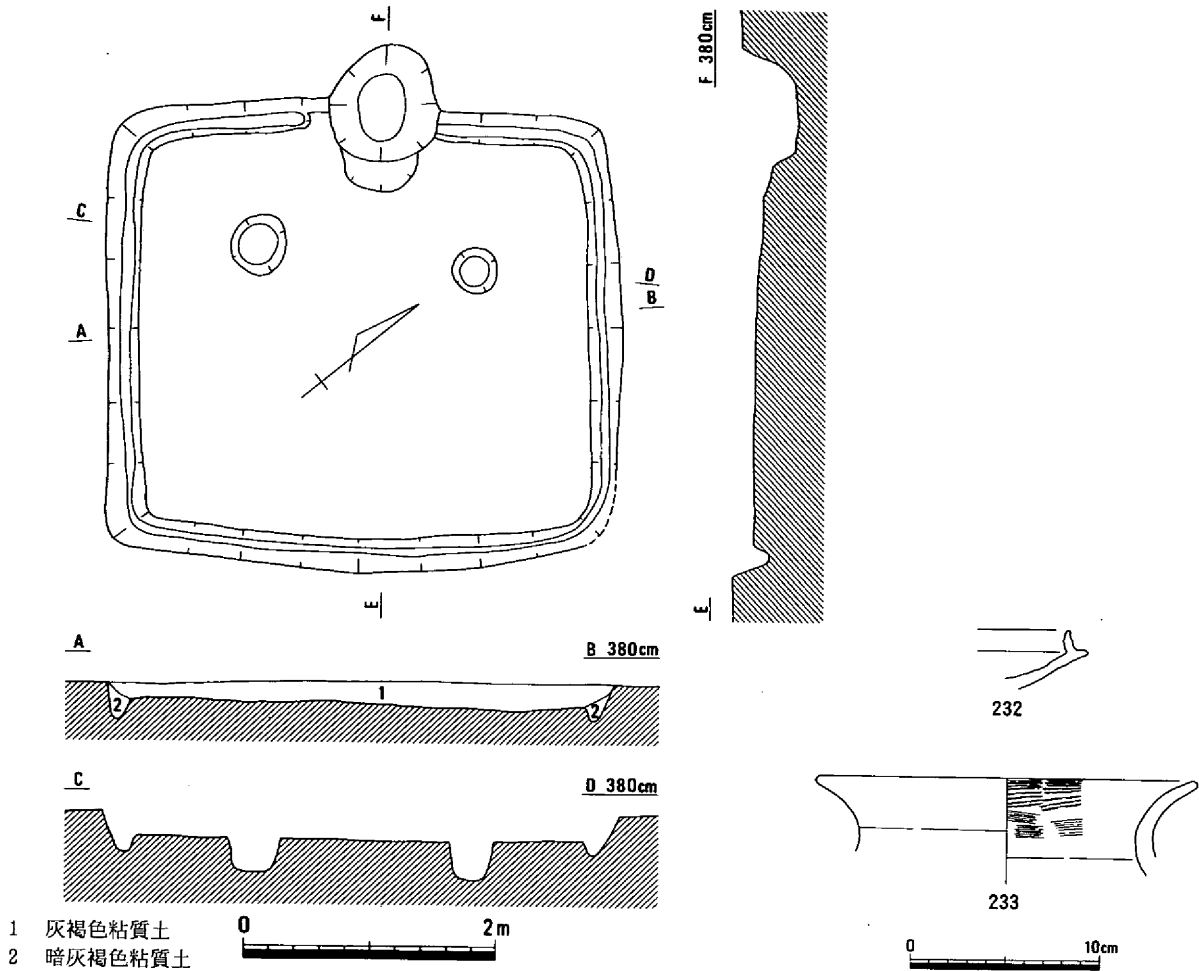




- 1 暗黄褐色粘質土(古代~中世柱穴)
- 2 暗灰黄褐色粘質土(古代~中世柱穴)
- 3 暗黄灰色粘質土(古代~中世柱穴)
- 4 淡褐色粘質土
- 5 淡黄灰褐色粘質微砂(焼土含む)
- 6 暗灰褐色粘質土(炭・焼土含む)
- 7 褐色粘質土(焼土含む)



第439図 竪穴住居-72 (226~231・C 5)



第440図 竪穴住居-73 (232・233)

竪穴住居-73 (第440図、図版123)

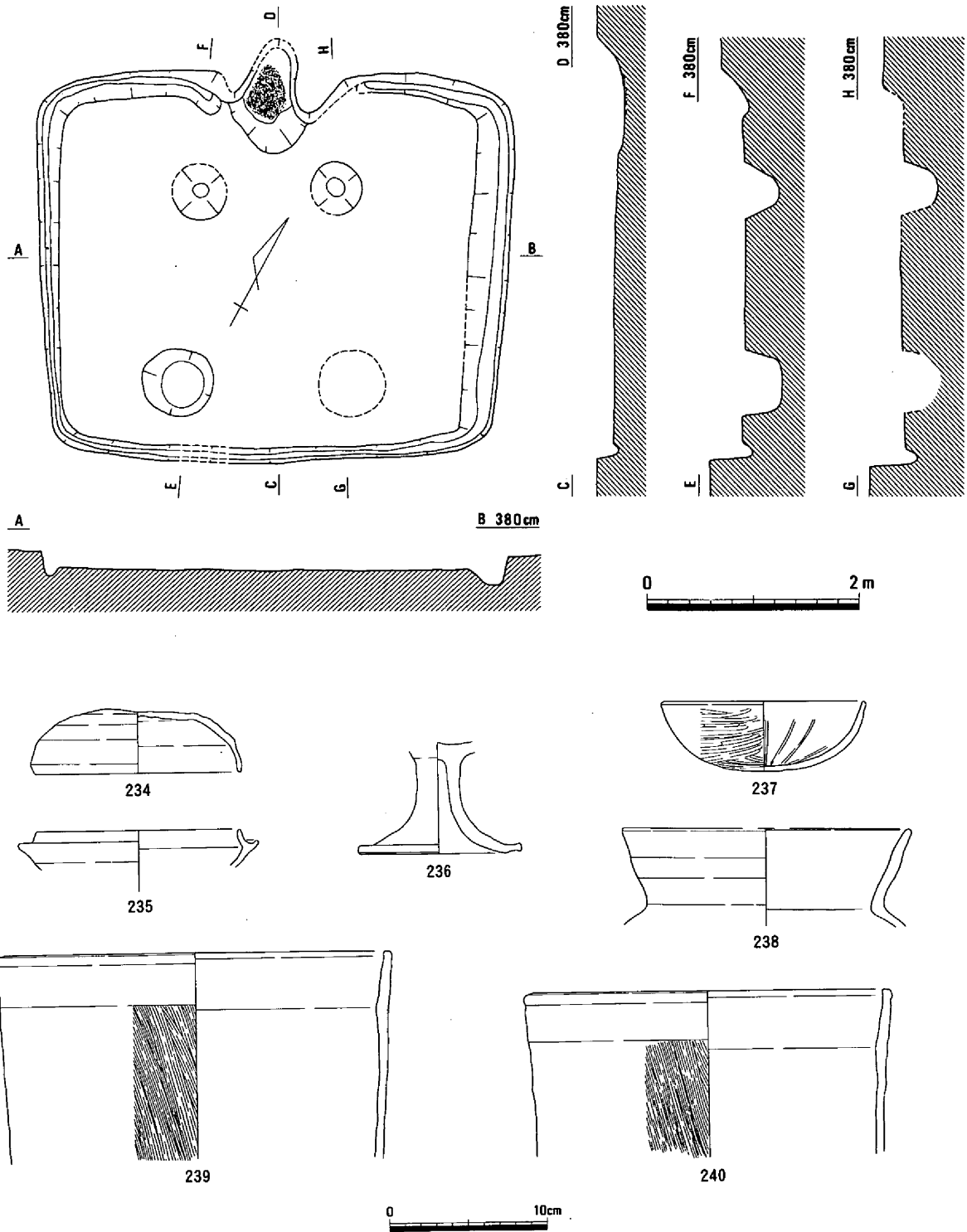
竪穴住居-71・72と重複する。竪穴住居-71・72を切り、竪穴住居70~73の4軒のうち一番新しい住居と言える。平面形はやや長方形になる。住居の軸は約45°西に振る。壁体溝は四方で検出できた。床面規模はA-B間355cm、E-F間315cmを測る。床面の標高は342cmである。柱穴はカマドに近い側の2本のみ検出できた。柱穴規模は径35~40cm、深さ20~25cmを測り、柱間は173cmである。カマドは西北の壁中央部に作りつけられていたようで、土壇状の痕跡が確認できた。

遺物は須恵器・土師器・鉄滓が若干出土している。232は須恵器杯、233は土師器甕である。

遺物、切り合い関係等から住居の廃絶時期は、古墳時代後半6C後半と考えたい。(浅倉)

竪穴住居-74 (第441図)

O20区北半中央で検出した住居である。竪穴住居-72の北約2mの位置にあり、平面形はやや長方形になる。住居主軸は26°西に傾いている。壁体溝は四方で検出できた。床面規模はA-B間390cm、E-F間330cmを測る。床面の標高は340cmである。柱穴を4本確認し、その規模は径50~70cm、深さ35~40cmを測る。柱間は130~180cmである。カマドは北壁に作りつけられている。焚き口付近は床面よりやや凹む。



第441図 竪穴住居-74 (234~240)

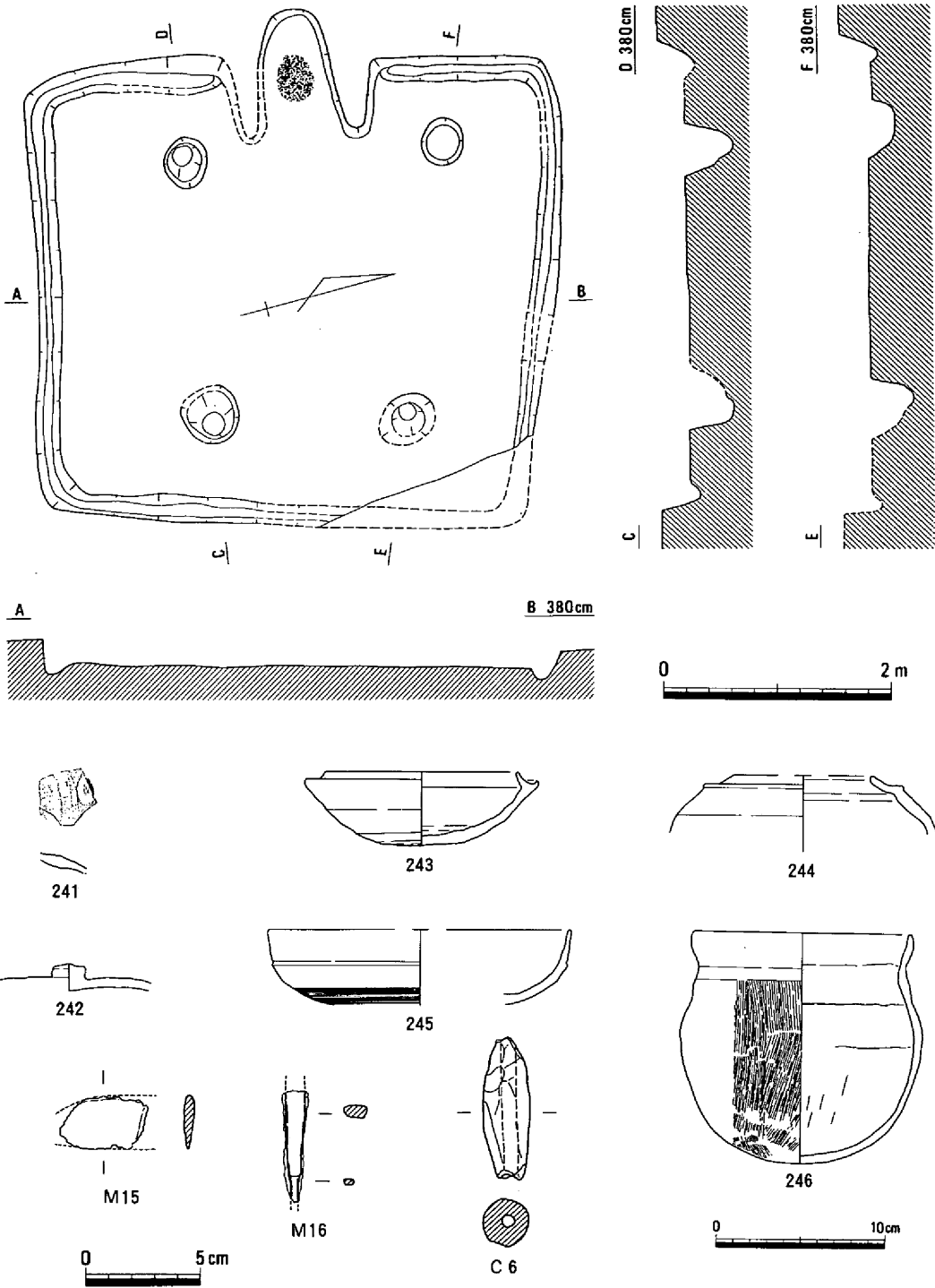
遺物は須恵器・土師器・鉄滓・軽石が出土している。234は杯蓋、235は杯身、236は高杯、238は土師器壺、237は土師器椀、239・240は土師器甔である。

遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・6C後半と考えたい。

(浅倉)

竪穴住居-75 (第442図、図版146・162~164)

竪穴住居-74の東隣で検出した。平面形はやや長方形になる。住居主軸は16°東に振る。壁体溝は



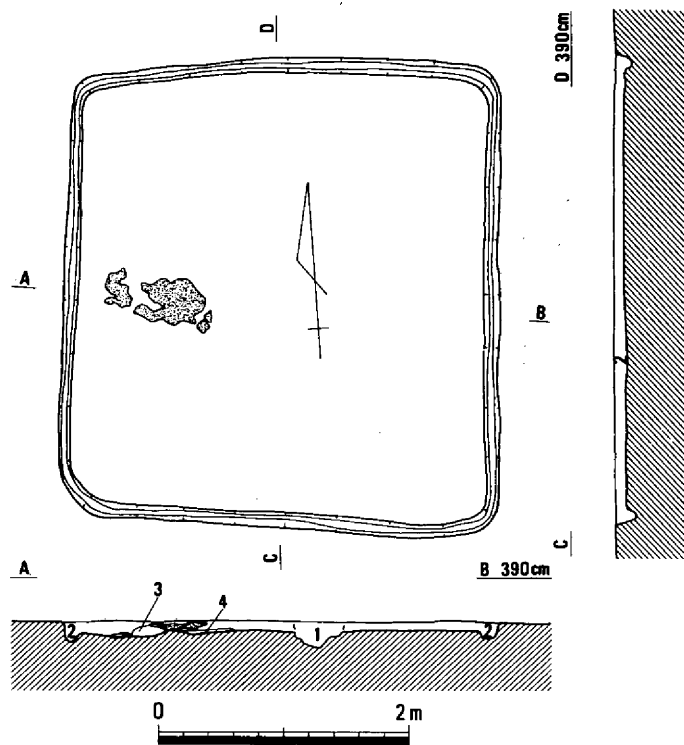
第442図 竪穴住居-75 (241~246・M15・M16・C6)

四方で検出できた。床面規模はA-B間400cm、E-F間380cmを測る。床面の標高は335cmである。柱穴は4本検出できた。直径35~50cm、深さ20~40cm、柱間170~240cmを測る。カマドは西側の壁の中央部分に作りつけられている。カマド底面と床面は同一レベルである。

遺物は須恵器・土師器・鉄器・鉄滓・土錘が出土している。M15が鎌、M16は鎌と思われる。

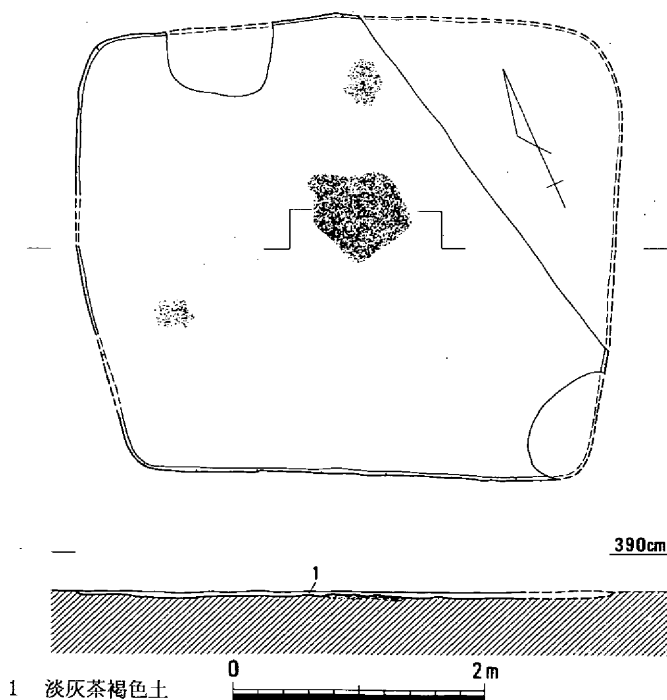
遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・7C初頭と考えたい。

(浅倉)



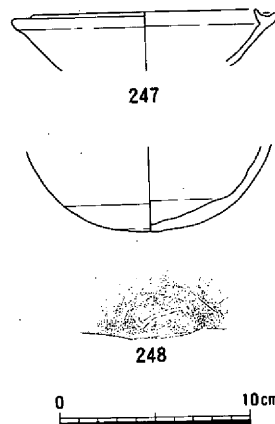
- 1 灰褐色土
- 2 淡灰茶褐色土
- 3 灰褐色土(焼土塊含む)
- 4 暗褐色土

第443図 竪穴住居-76 (247・248)



- 1 淡灰茶褐色土

第444図 竪穴住居-77



竪穴住居-76 (第443図、図版123)

竪穴住居-61の2 m南に位置し、約370×340cmを測る長方形の平面形を呈する。床面の標高は348cm、床面積は12㎡であり小形の竪穴住居である。カマドは作りつけられておらず、床面西側に地床炉と考えられる被熱面が存在した。柱は検出されなかった。

出土遺物は247の須恵器杯と248の須恵器壺を図示した。248の底部外面にはヘラ記号が認められる。なお、鍛錬鍛冶滓がわずかに出土している。これらから、この竪穴住居の時期は古・後・Ⅲ段階と考えられる。(大橋)

竪穴住居-77 (第444図)

竪穴住居-76・78に隣接して位置する。北東隅部は確認できなかった。およそ長辺側で420cm、短辺側で355cmほどのいびつな方形プランを呈するものと推測される。床面の標高は355cmを測った。柱穴は検出できず、またカマドも作りつけられていない。なお、床面中央と北側、西側の計3カ所で地床炉と推察される被熱面を検出した。

出土遺物は細片少量であるが、およそ古・後・Ⅱ～Ⅲ段階とみても差し支えないと思われる。(大橋)

竪穴住居-78 (第445図、図版123)

隣接した竪穴住居-77~81の住居群の中で最大かつ最古の住居である。竪穴住居-79~81に切られている。平面形は不整形な正方形である。住居主軸はほぼ東西南北を向く。壁体溝は四方で検出できたが歪んでおり、床面での幅30cm、深さ15cmを測る。床面規模はA-B間で430cm、C-D間で445cm、E-F間で415cmを測る。床面の標高は340cmである。柱穴は4本検出し、その規模は径50~90cm、深さ15~40cmを測った。柱間220~250cmである。

カマドは西側の壁の中央部分に作りつけられており、焚き口の幅は60cmであり、前面は床面より5cm程凹む。焚き口の左右の袖は高さ40cm残存しており、断面形は台形を呈する。天井部は崩落しており、煙道部は50cmほど遺存していた。高田調査区の中でも比較的残存状況の良いカマドを持つ。カマドの右側の住居の壁は左の壁に比べて50cm以上外に張り出す。その反対側の東の壁は少し内側に入り込んでおり、つまり住居北半分は西にずれていることになる。

遺物は埋土から須恵器・土師器・鉄器・鉄滓が出土している。249は須恵器杯、250は壺か甗である。遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・6C後半と考えられる。(浅倉)

竪穴住居-79 (第446図、図版123・146・162)

竪穴住居-78と重複し、その北半を壊している。平面形はやや長方形になる。住居主軸は約25°東に振っている。壁体溝は四方で検出できた。床面規模はA-B間で350cm、C-D間で295cmを測る。床面の標高は344cmである。柱穴は他のこの大きさの住居と同様検出できなかった。カマドは西側の壁の中央部分に作りつけられているが、壁に直角に取りついていない。焚き口手前はわずかに凹む。

遺物は埋土から土器・鉄器・鉄滓が出土している。252~256は須恵器甕で外面に細かい格子目タタキメ、内面に車輪文の当て具痕跡が認められる。258~260は土師器甕である。260は丸底になり、その体部内面の上半で葉脈状を呈するのオサエ痕跡が観察できた。M17は鉄製の刀子で、刃部の長さ8cm、茎部4cmを測る。

遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期と考えられる。(浅倉)

竪穴住居-80 (第447図、図版123・146)

竪穴住居-78・81と切り合い関係を持つやや小形の住居である。竪穴住居-78を切る。平面形はやや長方形になる。住居主軸は37°西へ振る。壁体溝は四方で検出できた。床面規模はC-D間350cm、E-F間420cmを測る。床面の標高は340cmである。柱穴はやはり検出していない。カマドは西側の壁の中央部分に作りつけられている。焚き口手前は床面よりわずかに凹んでいる。壁体はカマドの左右で竪穴住居-78と逆に左の方が30cm程外側に出ている。

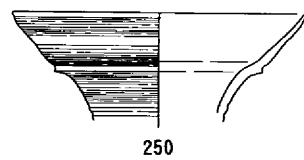
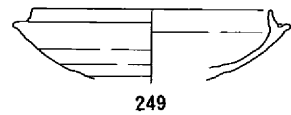
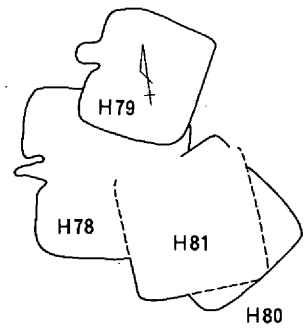
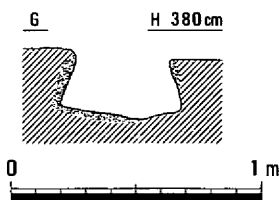
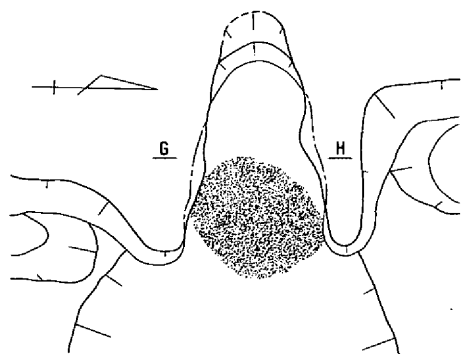
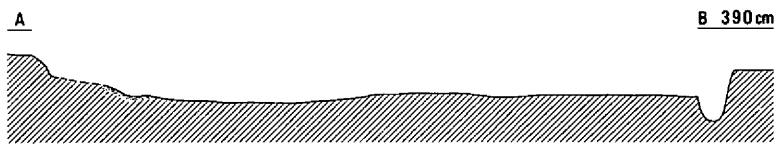
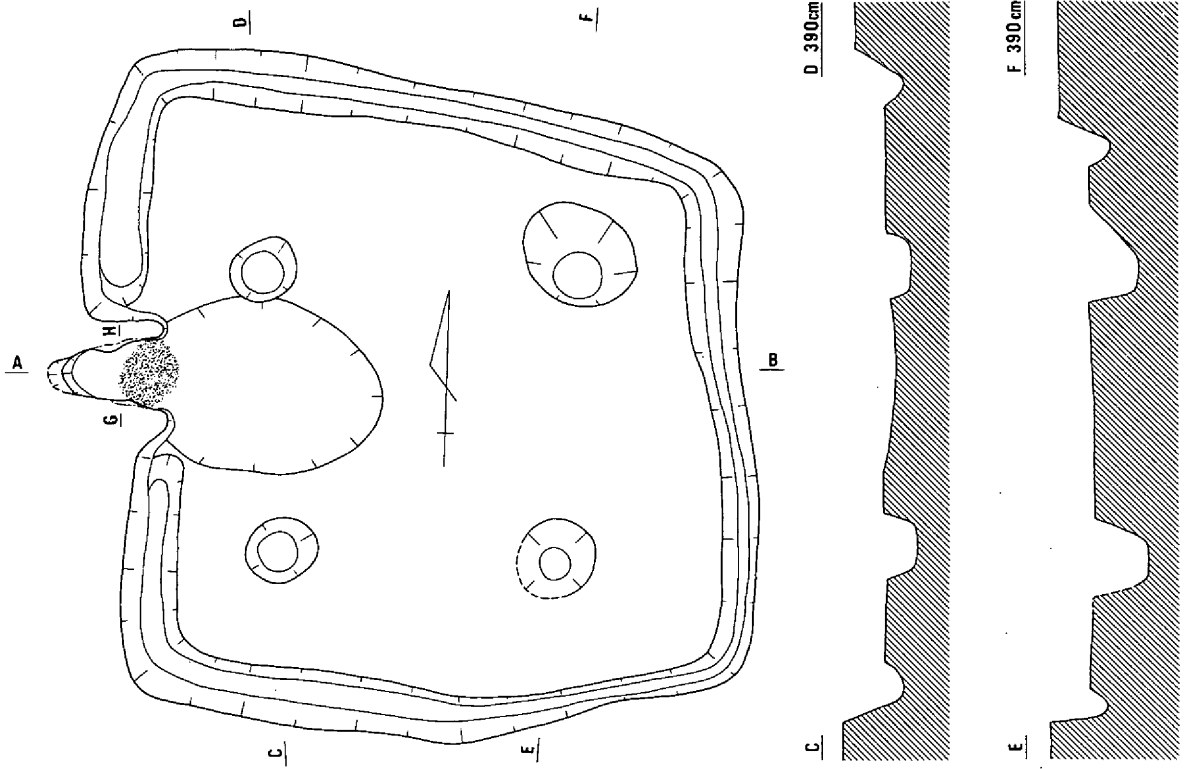
遺物は図示した土師器甕261と鉄滓が出土している。261は体部外面と口縁部内面はハケメを施すが外面にはさらに小さな平坦面が観察された。

この遺物と検出遺構面および住居形態から廃絶時期は、古墳時代後期と考えたい。(浅倉)

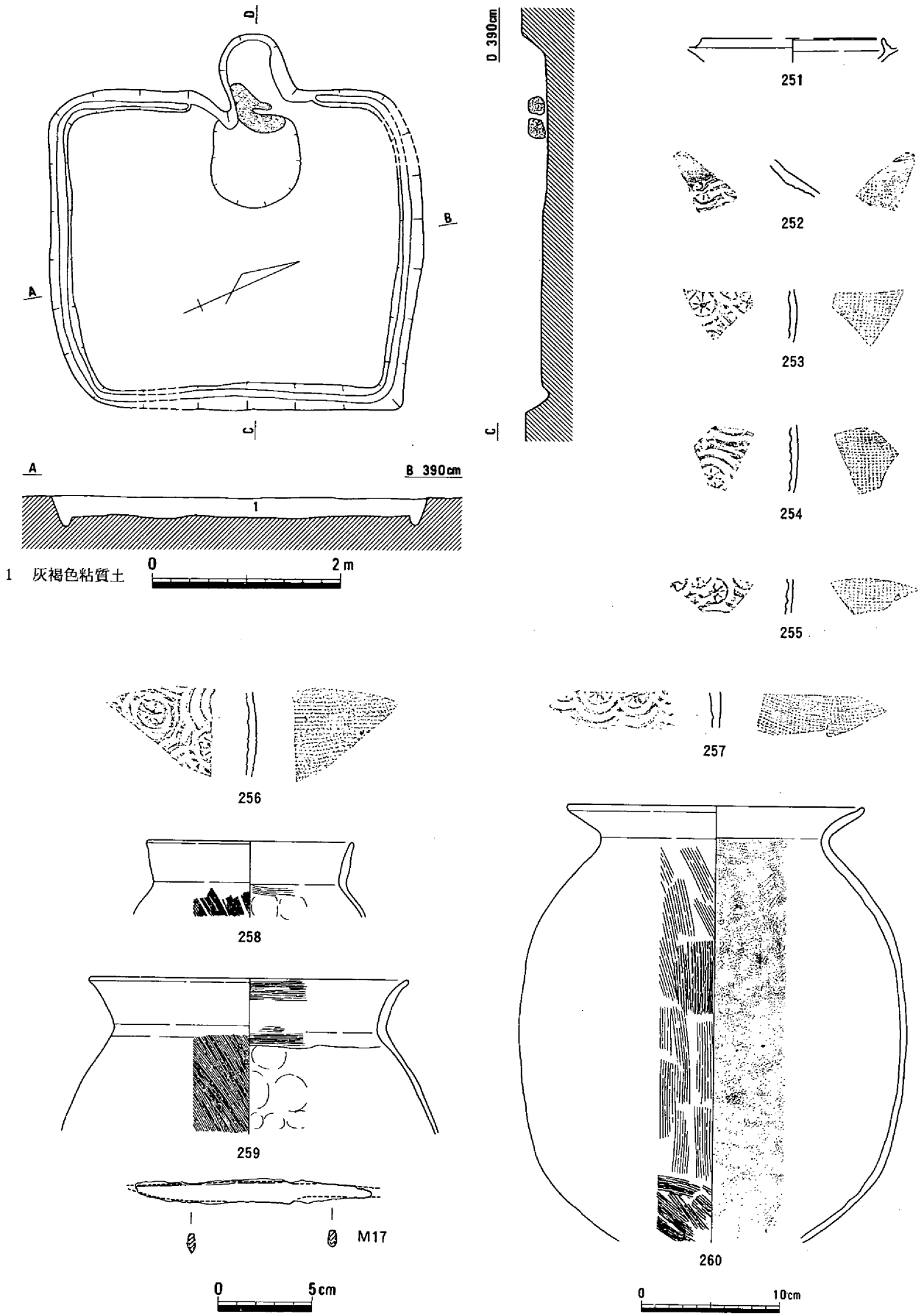
竪穴住居-81 (第448図、図版123)

竪穴住居-80と重複する小形の住居である。竪穴住居-80の上部にあることが土層断面を検討する中で判明したが、発掘時点では新旧逆に掘ってしまった。平面形は南北にやや長い方形になると推定される。住居主軸は8°西に振る。壁体溝は三方で確認できた。床面のA-B間で365cmを測り、床面の標高は338cmである。柱穴は検出できなかった。カマドも検出できなかった。遺物は不明である。

切り合い関係、検出面から廃絶時期は、古墳時代後期と考えたい。(浅倉)

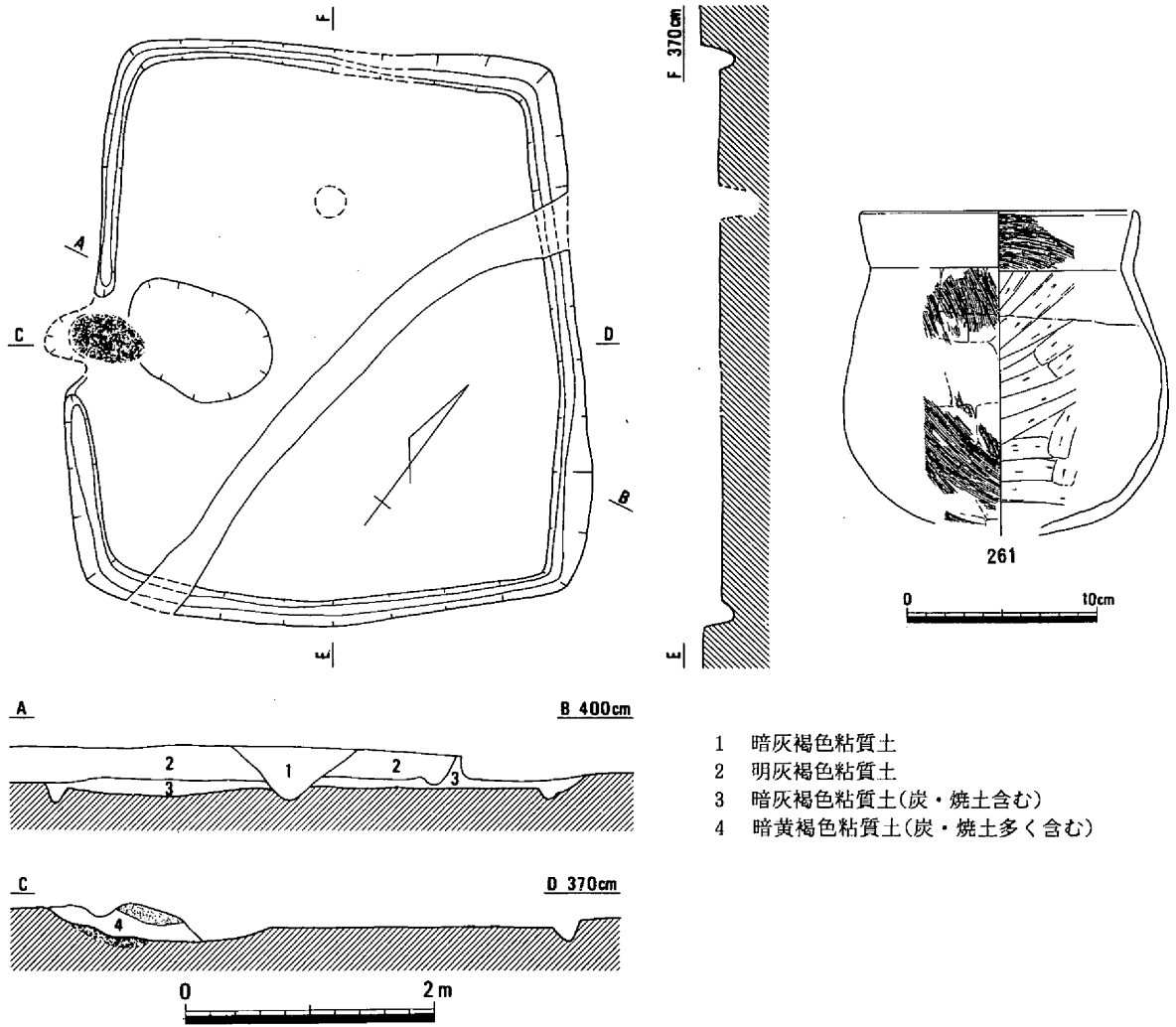


第445図 竪穴住居-78 (249・250)

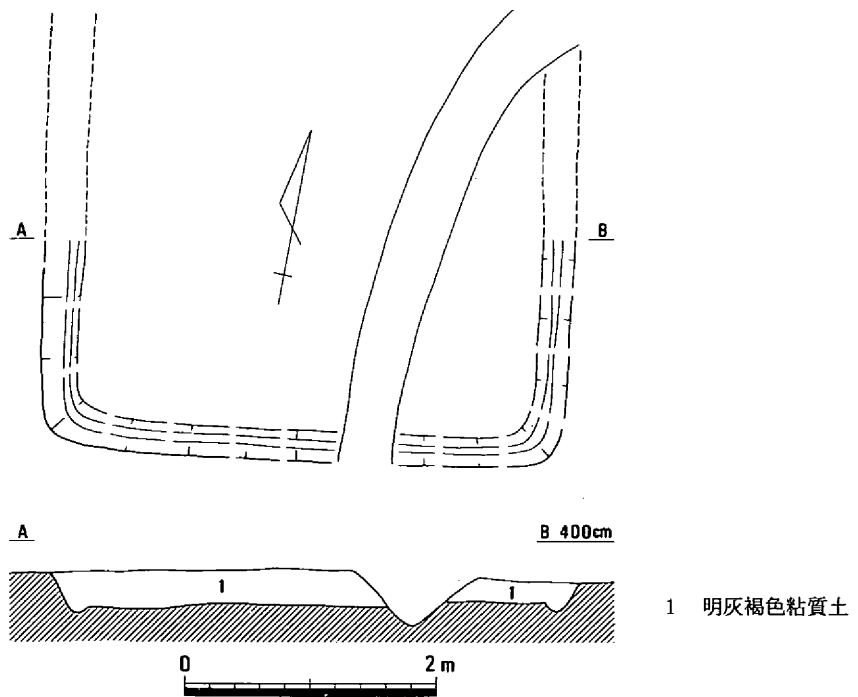


第446図 竪穴住居-79 (251~260・M17)

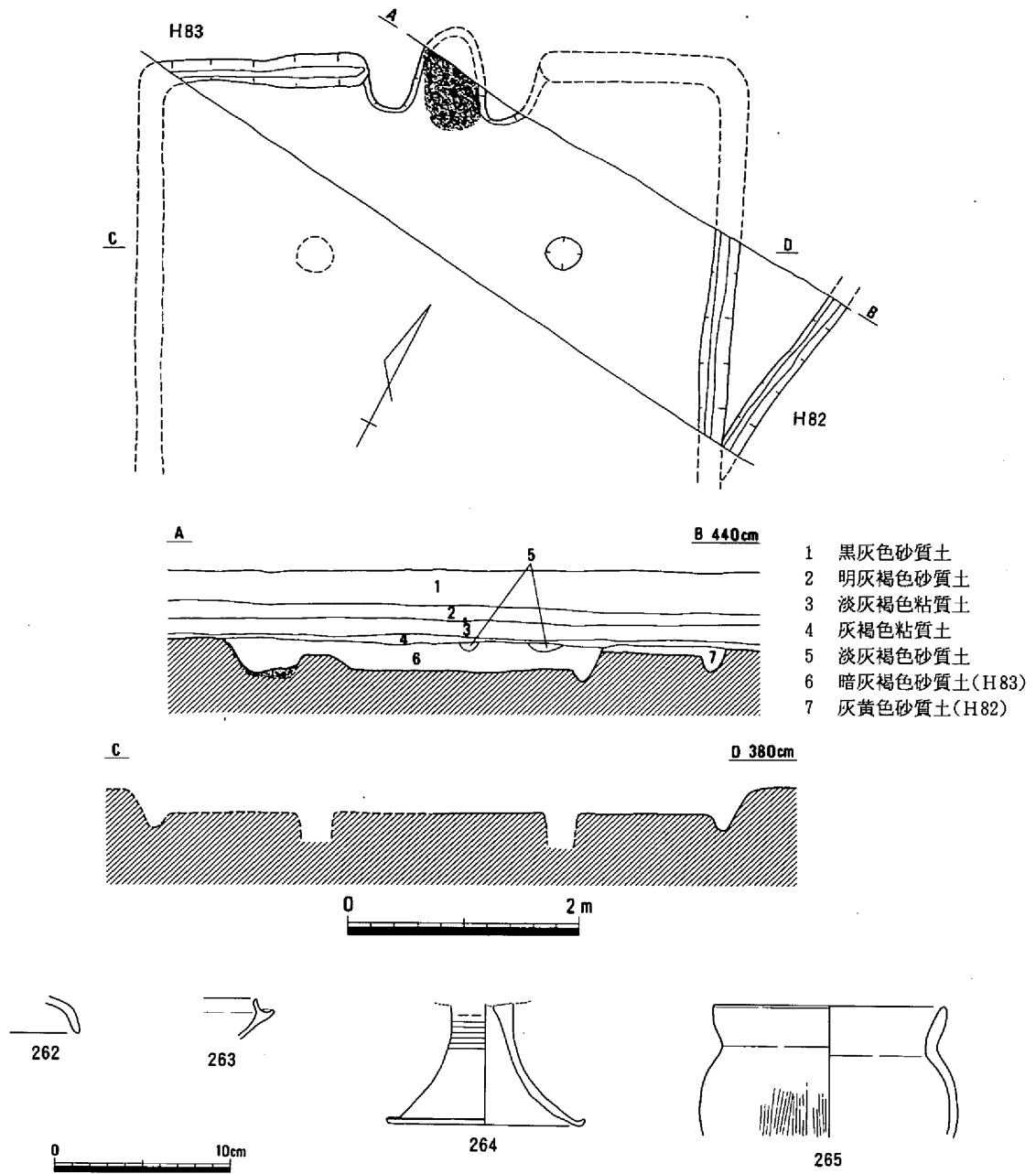




第447図 竪穴住居-80 (261)



第448図 竪穴住居-81



第449図 竪穴住居-82・83 (262~265)

竪穴住居-82 (第449図、図版123)

N20区南部やや東寄りで検出した。西辺の壁体溝の一部を確認したが、竪穴住居-83に大きく削平されており、またそのほとんどが調査区外にあるため詳細は不明である。床面の標高は340cmである。遺物は出土していないが、切り合い関係、土層から時期は、古墳時代後期と思われる。(浅倉)

竪穴住居-83 (第449図、図版123)

竪穴住居-82と重複する大形の住居である。竪穴住居-82を切る。平面形は正方形になると推定できる。調査区幅が150cmしかないため規模は推測するほかないが、C-D間で約470cmに復元した。床面の標高は326cmである。住居主軸は25°西へ振る。柱穴は1本検出できた。径30cm、深さ20cm以上ある。カマドは北壁中央に作りつけられており、焚き口幅は70cmである。焚き口の左右には土手状に袖

部を削り出している。

遺物は須恵器・土師器が多少出土している。262は杯蓋、263は杯身、264は高杯の脚部。265は土師器の小形甕である。

以上の遺物からこの住居の廃絶時期は、古墳時代後期・6C後半と考えたい。(浅倉)

竪穴住居-84 (第450図)

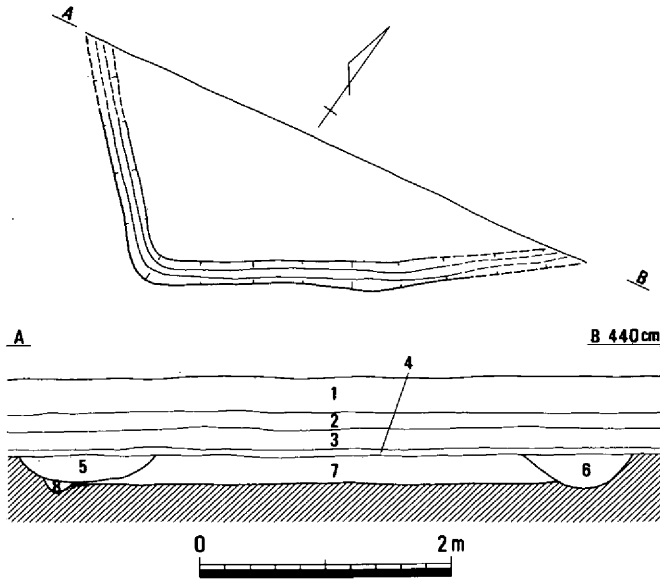
竪穴住居-83の東約10mで検出した住居であるが、狭い調査範囲のため詳細は不明である。平面形はやや台形になると思われる。床面の標高は326cmである。

土層関係から時期は、古墳時代後期と推察される。(浅倉)

竪穴住居-85 (第451図)

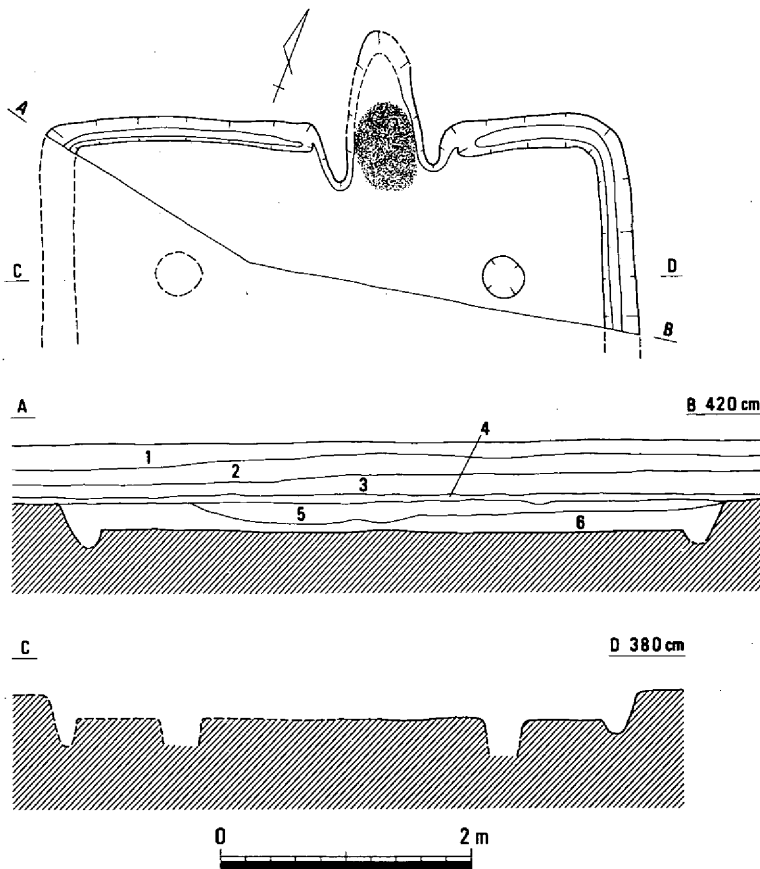
竪穴住居-84の南東に隣接する住居である。平面形は方形か。住居の主軸は22°西に振る。壁の方向は東西南北より15°傾く。壁体溝は二方で検出できた。床面規模はC-D間で420cmに復元される。床面の標高は328cmを測る。柱穴は1本検出し、径30cm、深さ20cm以上ある。カマドは北側の壁の中央やや東寄りに作りつけられている。

遺物は須恵器の小破片と鉄滓が出土している。時期は古墳時代後期と考えたい。(浅倉)



- |              |                |
|--------------|----------------|
| 1 黒灰色砂質土(表土) | 5 暗灰褐色粘質土      |
| 2 明灰褐色砂質土    | 6 暗灰褐色粘質土(D86) |
| 3 淡灰褐色粘質土    | 7 灰褐色砂質土       |
| 4 灰褐色粘質土     | 8 灰褐色砂質土       |

第450図 竪穴住居-84

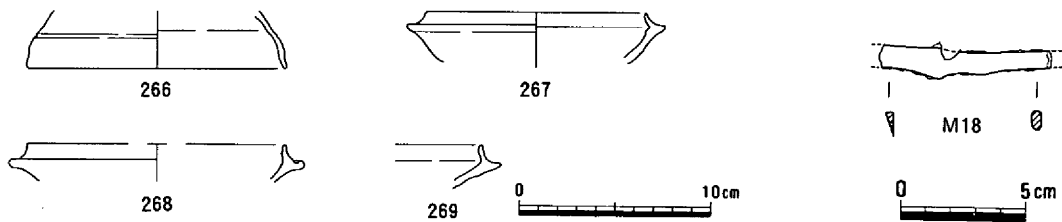
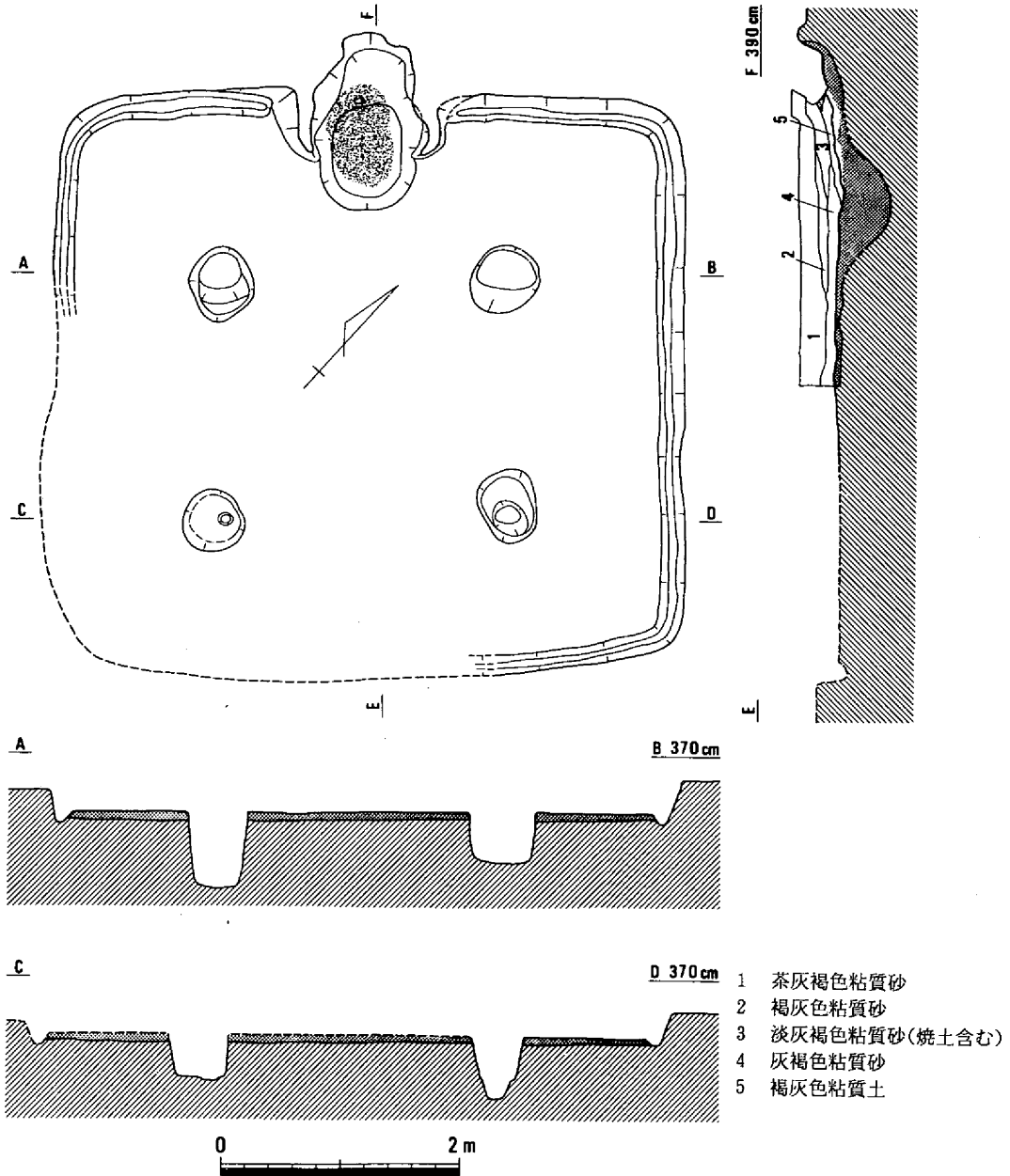


- |              |
|--------------|
| 1 黒灰色砂質土(表土) |
| 2 明灰褐色砂質土    |
| 3 淡灰褐色粘質土    |
| 4 灰褐色粘質土     |
| 5 暗灰褐色粘質土    |
| 6 灰黄色粘質土     |

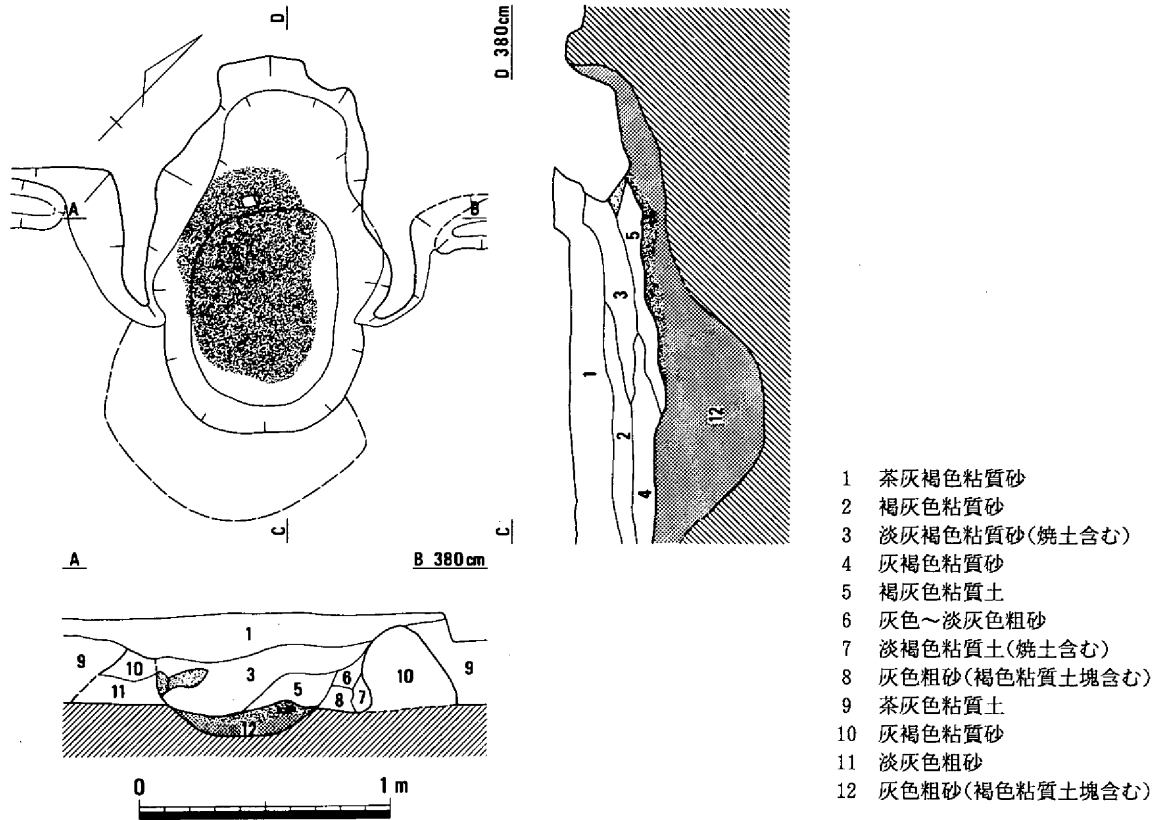
第451図 竪穴住居-85

竪穴住居-86 (第452・453図、図版124)

竪穴住居-86はO20区の北東、橋脚部分に位置し、竪穴の上部および南半部は後述する竪穴住居-87・88によって削平を受けている。平面形はわずかに東西方向に長い方形を呈し、規模は505×407cm、床面積23.5㎡、床面の標高は318cmを測る。主柱は4本からなり、柱間は東西方向約240cm、南北方向



第452図 竪穴住居-86 (266~269・M18)



第453図 竪穴住居-86

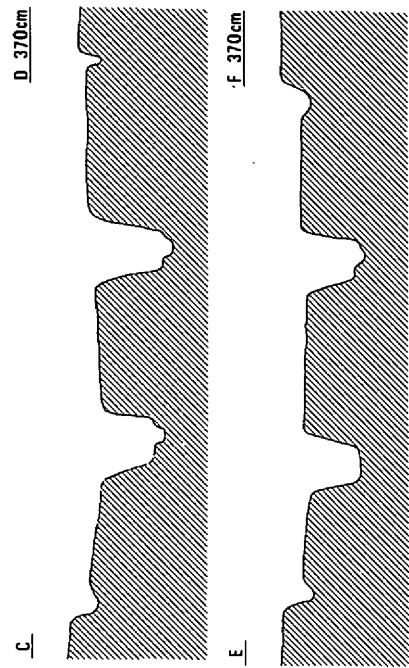
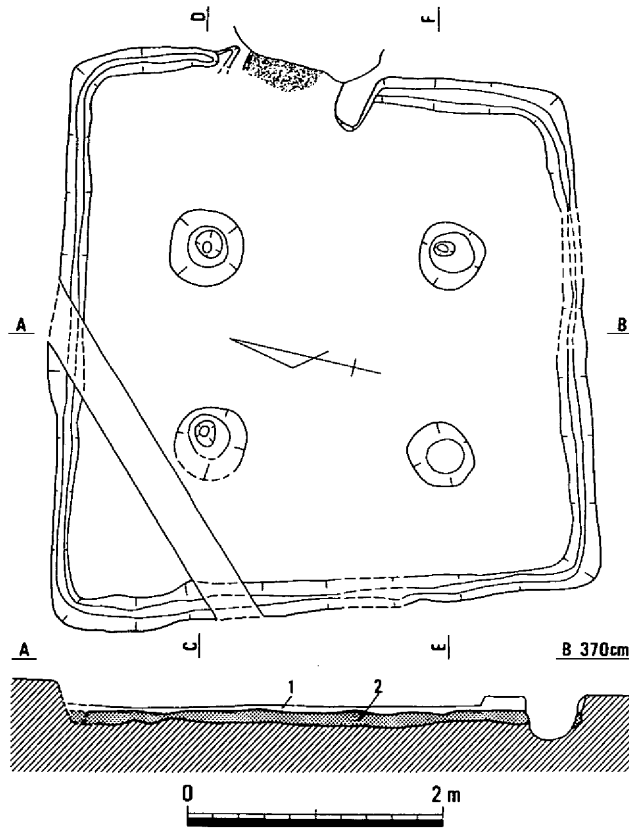
約220cmを測る。床面には厚さ10cm弱の貼り床がなされていた。カマドは北辺中央に位置し、全長114cm、燃烧部幅88cmを測り、被熱面は燃烧部分やや西寄りに広がっていた。また、カマド下部には燃烧部半部から前庭部にかけて径約100cm、深さ約40cmを測る土壌が掘られていた。出土遺物は図示した須恵器杯・蓋266～269のほか土師器甕、高杯などもみられたが、いずれも細片であった。M18は刀子片と思われる。このほか、覆土中からは羽口片?をはじめ、鍛錬鍛冶滓、ガラス質滓が約199g出土している。遺物細片の特徴から、竪穴住居の時期は古・後・Ⅲ期と判断される。(江見)

竪穴住居-87 (第454図)

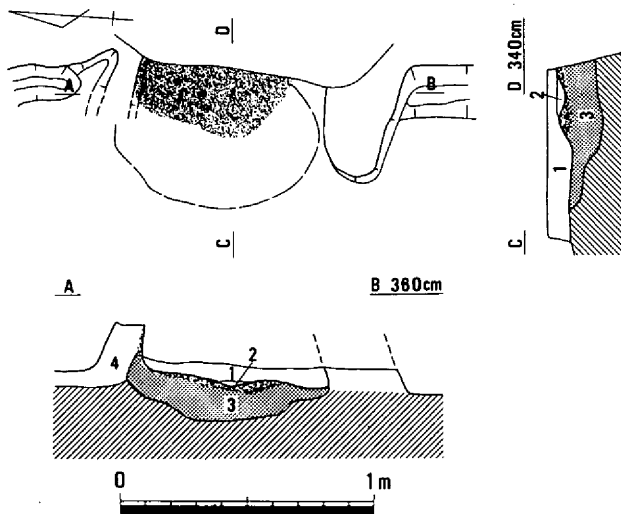
竪穴住居-86の南に位置し、一部重複して検出された竪穴住居である。平面形は北辺が長い台形気味のいびつな方形を呈す。規模は438×410cm、床面積15.7㎡、床面の標高323cmを測る。支柱は4本からなり、柱間は東西方向140cm、南北方向190cmとやや南北に長い。床面には厚さ約10cmの貼り床がなされていた。住居東辺中央北寄りからカマドが検出されたが、煙道部分は後世の土壌によって削平を受けていた。カマドは主軸がR22°と右にふれており、残存する燃烧部は幅77cmを測る。燃烧部中央は残存する被熱部分のあり方から住居壁からほとんど離れないものと推定される。また、カマド下部には径約80cm、深さ約10cmの小規模な土壌が掘られていた。出土遺物は図示した須恵器杯270のほか、須恵器・土師器の細片、羽口片、鉄片、鍛錬鍛冶滓約20gなどがある。出土遺物の特徴から、竪穴住居の時期は古・後・Ⅲ期と判断される。(江見)

竪穴住居-88 (第455図)

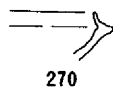
竪穴住居-87の北に接して検出された住居で、竪穴住居-86とほぼ同様の主軸方向を示す。平面形



- 1 暗茶褐色粘質砂(黄色粘土塊・灰色砂含む)
- 2 淡茶褐色粘質土(灰色砂含む)



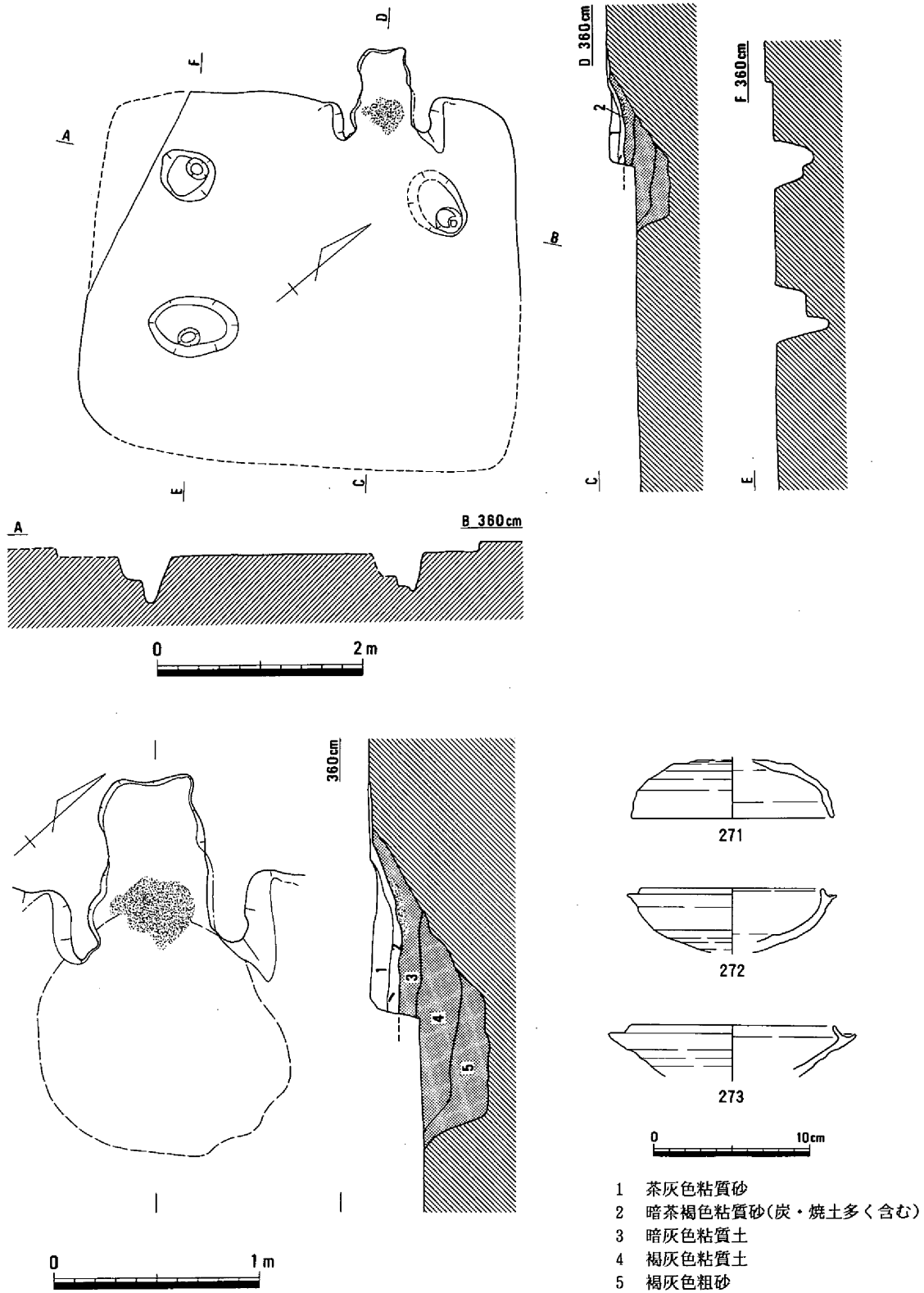
- 1 暗茶灰色粘質砂
- 2 黒灰色炭層
- 3 茶灰色粘質砂
- 4 淡茶灰褐色粘質砂



第454図 竪穴住居-87 (270)

は東西方向に長い方形を呈し、規模は420×350cm、床推定面積14.7㎡、床面の標高336cmを測る。主柱は4本からなると思われたが、南東にあたる柱穴は検出し得なかった。柱間は東西方向252cm、南北方向162cmを測る。また、住居の残存度が低く、壁体溝も検出し得なかったが、本来は巡っていたものと思われる。カマドは北辺東寄りから検出され、規模は全長100cm、燃焼部幅58cmを測り、煙道傾斜角は5°と緩い。カマド下部には径約120cm、深さ約40cmを測る、柱穴掘り方に一部およぶ規模の土壌が掘られていた。出土遺物は須恵器片のみで、図示し得た271~273の特徴から、当住居は古・後・Ⅲ期と考えられる。(江見) 竪穴住居-89 (第456図・図版124)

竪穴住居-87の南東に位置する平面方形の竪穴住居である。規模は392×373cm、床面積13.7㎡、床面の標高321cmを測る。主柱は4本からなり、南北方向約220cm、東



第455図 竪穴住居-88 (271~273)

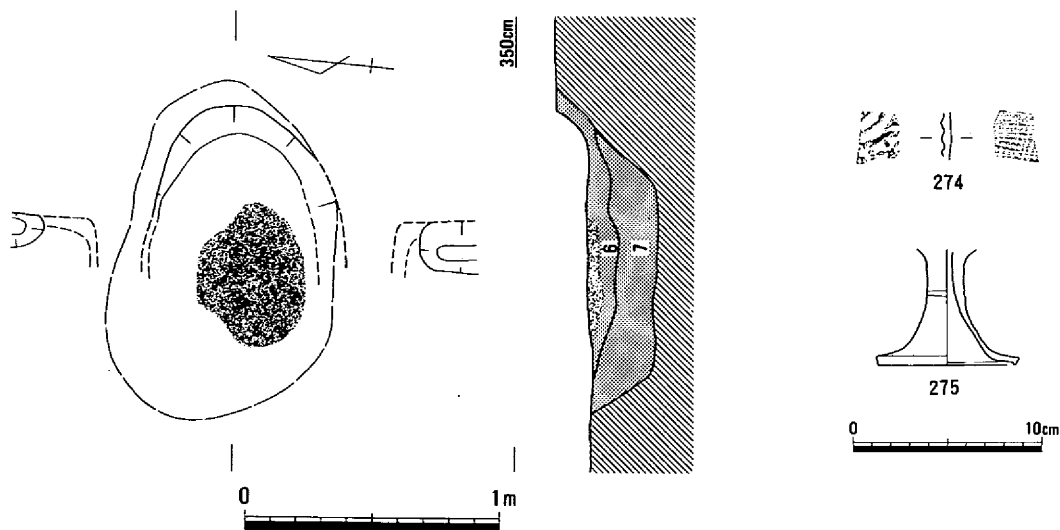
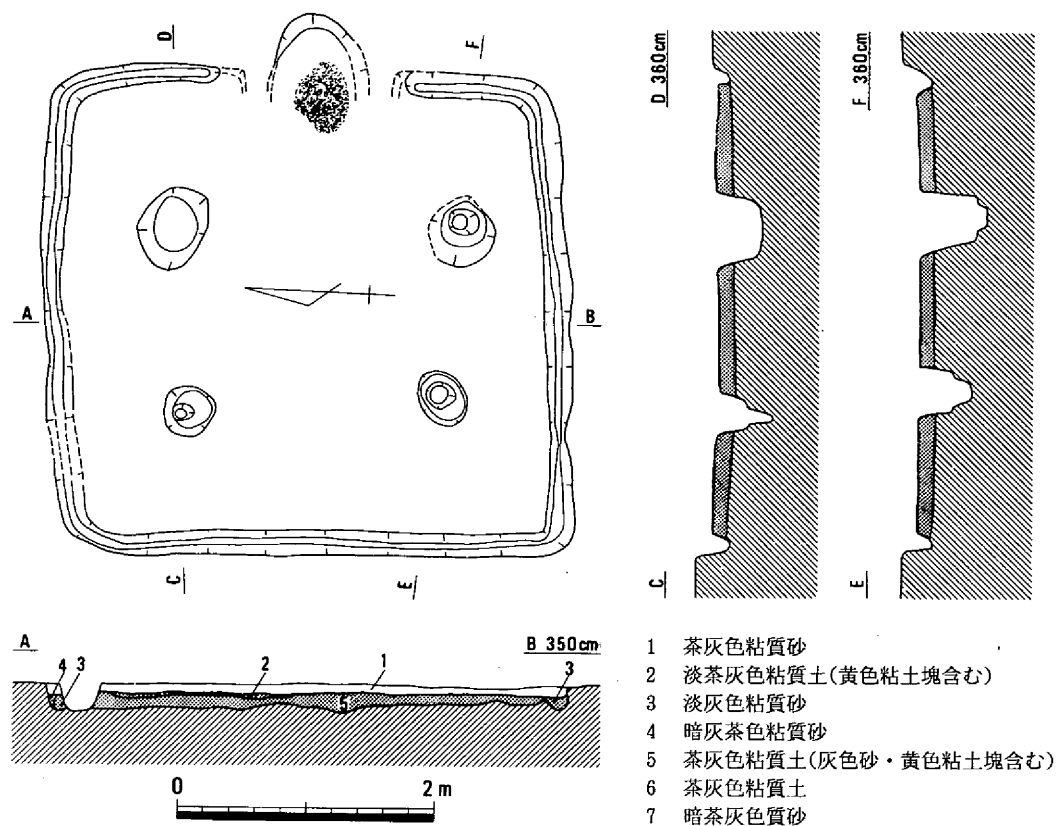
西方向約150cmを測り、東側の柱間は西側に比べ若干長い。床面には厚さ約10cmに貼り床がなされていた。住居東辺中央にはカマドが設置されており、その両袖は不明瞭であったが、推定長80cm、燃焼部幅75cmを測る。カマド下部には130×90cm、深さ約20cmの土壌が掘られていた。

出土遺物はわずかで、須恵器甕274の内面には車輪文の当て具痕跡が認められる。他に須恵器甕片、

土師器片、鉄滓、ガラス質滓などが出土しているが、高杯275の特徴から住居の時期は古・後・Ⅲ期と判断される。(江見)

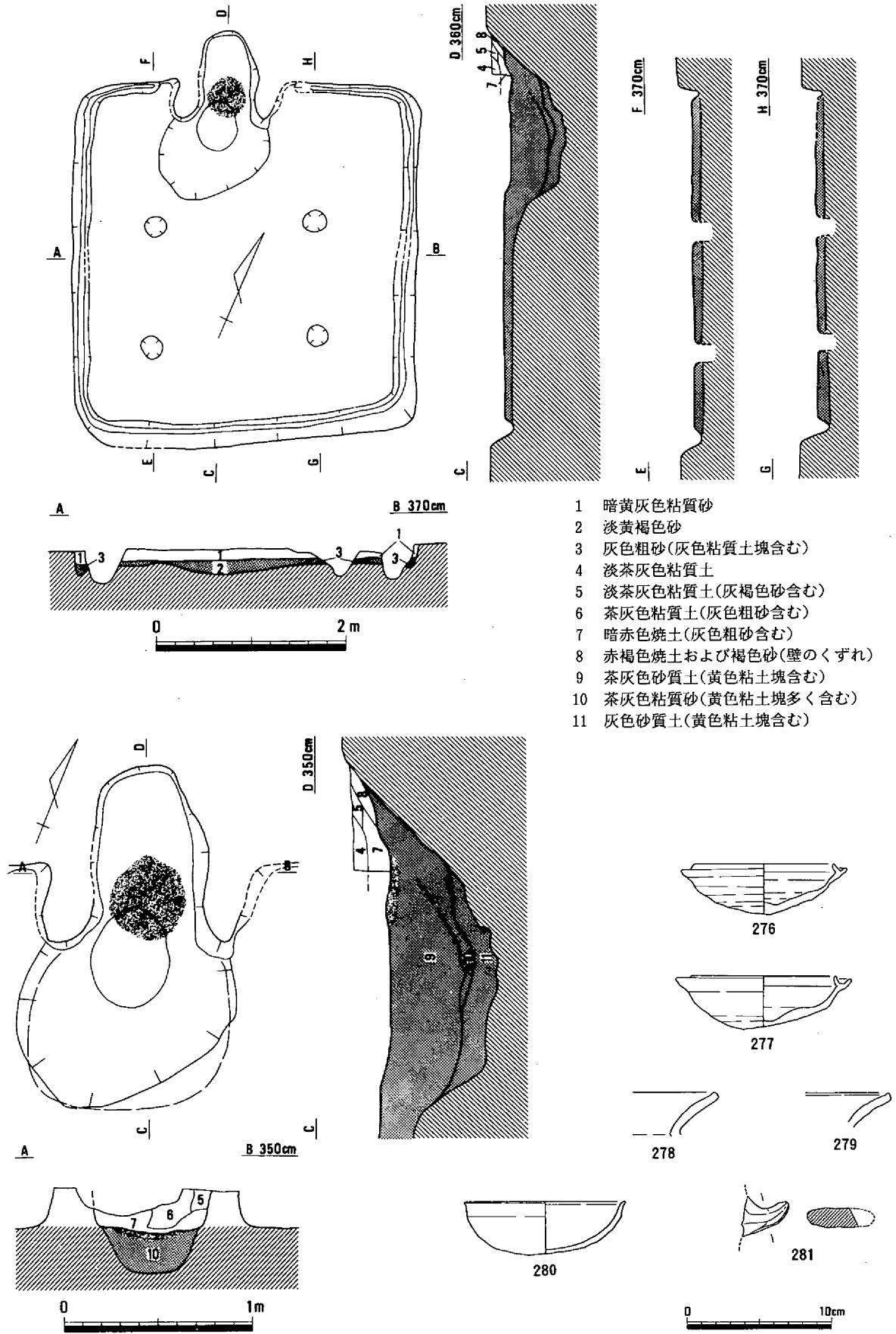
竪穴住居-90 (第457図、図版125)

竪穴住居-89の南に位置する、平面方形を呈す竪穴住居である。規模は362×345cm、床面積11.6㎡、床面の標高319cmを測る。主柱は4本からなり、柱間は東西方向175cm、南北方向約125cmを測る。なお、柱穴は湧水のため掘り下げられず、柱根部分のみの確認となった。床面には約10cmの貼り床がな

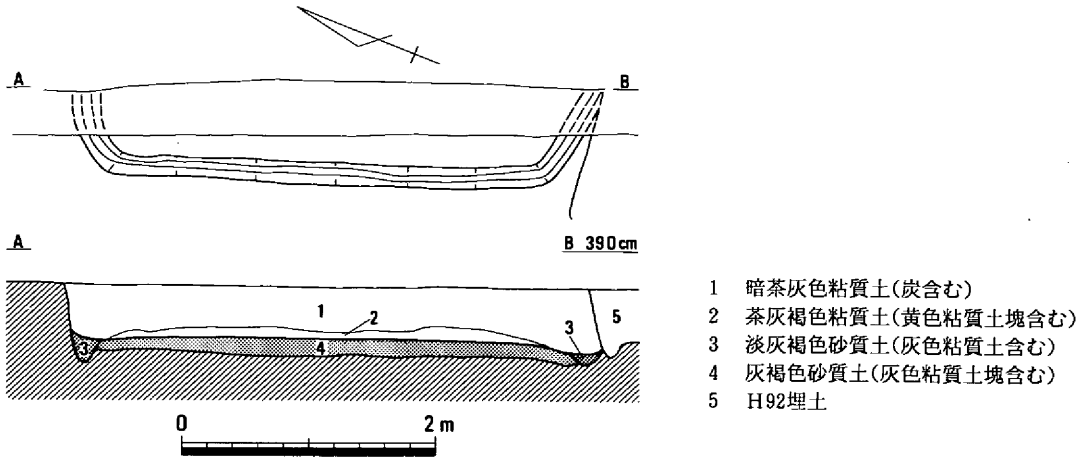


第456図 竪穴住居-89 (274・275)

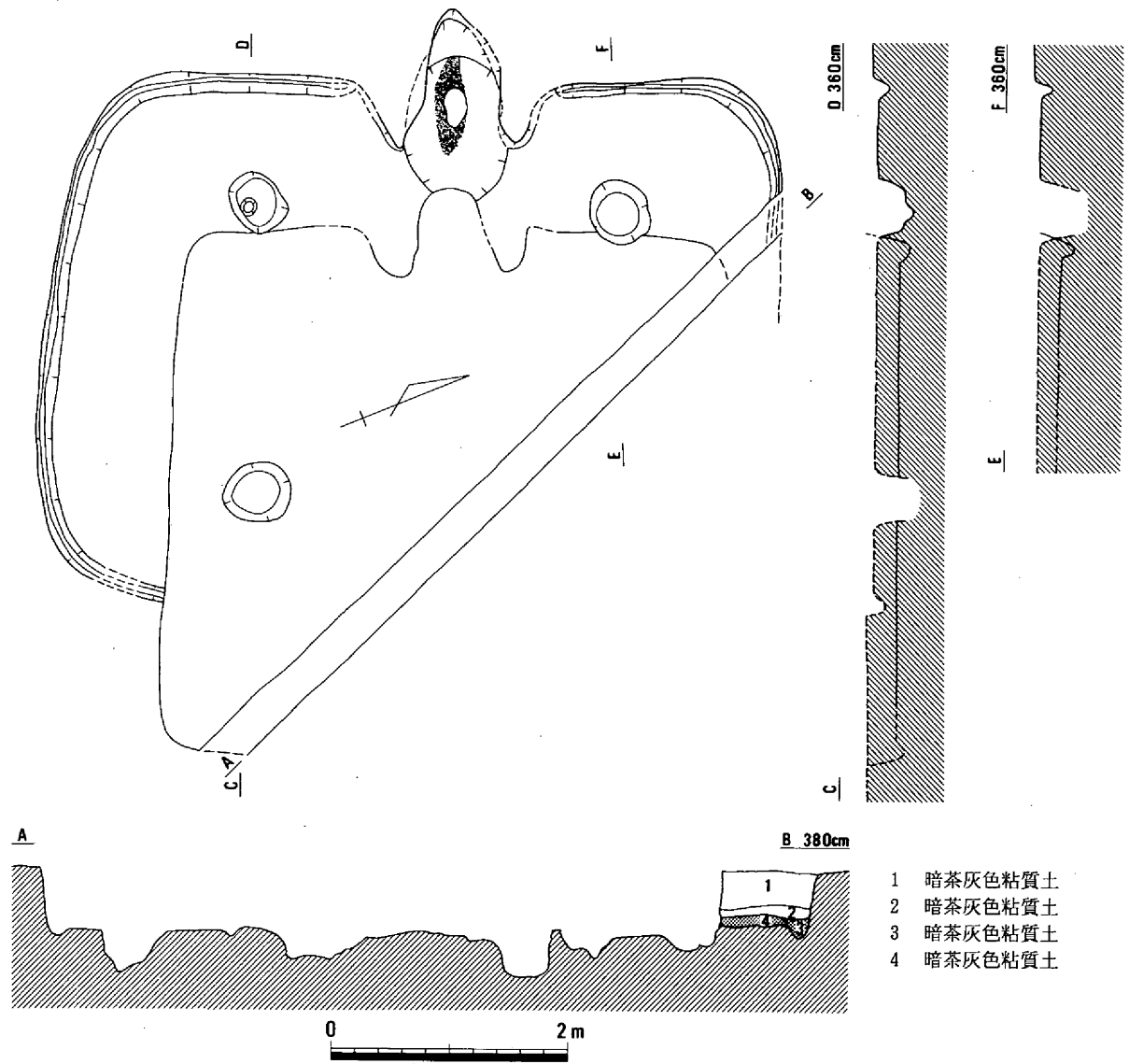




第457図 竪穴住居-90 (276~281)



第458図 竪穴住居-91



第459図 竪穴住居-92

されていた。住居北辺ほぼ中央にはカマドが設置され、規模は全長100cm、燃焼部幅62cm、煙道傾斜角は28°を測る。このカマドにおいても下部には径約100cm、深さ60cm余りの比較的規模の大きな土壙が掘られていた。

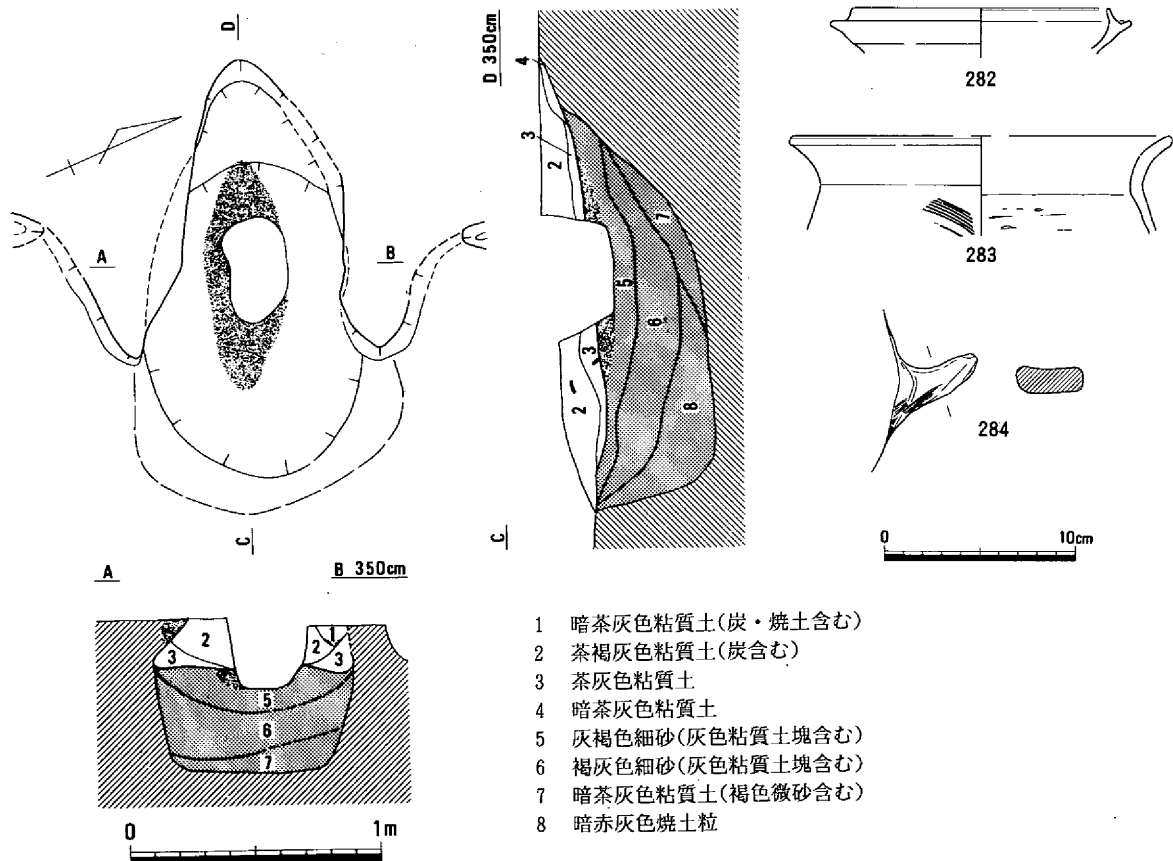
遺物は須恵器杯277および土師器杯280が床面から、他は覆土中から出土しており、これら土器の特徴から当住居は古・後・Ⅲ期には廃絶したものと考えられる。(江見)

竪穴住居-91 (第458図)

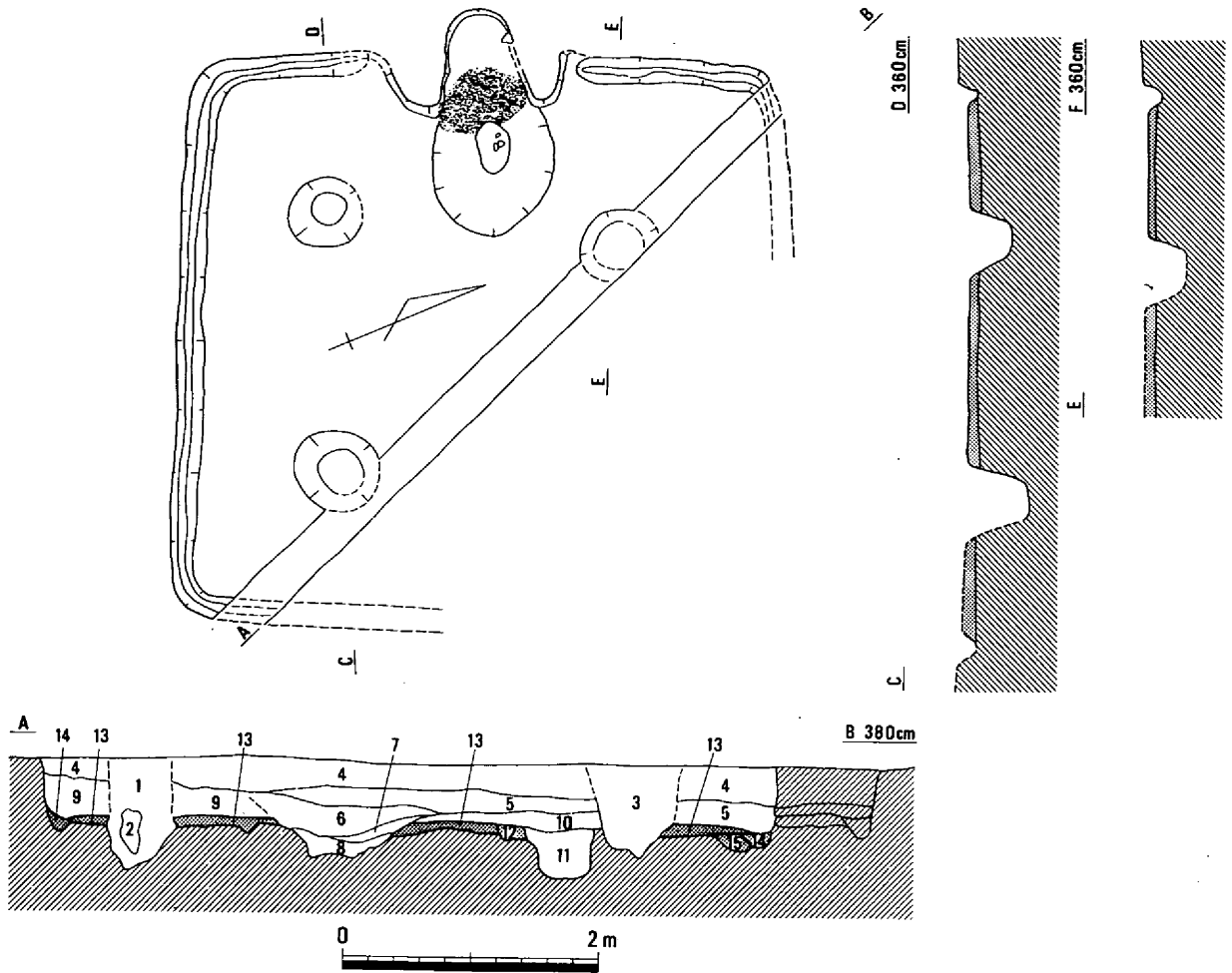
竪穴住居-90の東に位置し、後述する竪穴住居-92・93に切られて検出された竪穴住居で、大半は調査区外に延びる。検出し得た住居西辺から一辺350cm前後の小規模な住居と推定される。床面の標高は316cmを測り、厚さ約15cmの貼り床が認められた。なお、出土遺物は皆無であった。(江見)

竪穴住居-92 (第459・460図・図版125)

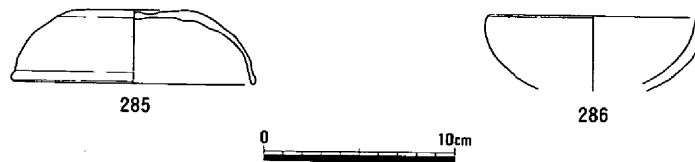
竪穴住居-90の南に位置し、竪穴住居-93によって大半が削平を受けるとともに北東部は調査区外に延びる。平面は南北方向にやや長い方形を呈し、規模は594×435cm、推定床面積25.5㎡、床面の標高は327cmを測る。主柱は4本と考えられ、柱間は南北方向313cm、東西方向245cmを測る。床面には厚さ約10cmの貼り床が認められた。カマドは住居西辺中央に設置され、全長121cm、燃焼部幅80cmを測る。カマド中央に形成された被熱面は縦方向に長く紡錘形に延びており、他と状況を異にする。なお、左袖部の残りは比較的良好で湾曲して立ち上がる壁面をわずかながら追うことができたものの、袖部構成土と基盤層との差違は不明瞭であった。遺物は土師器甕283がカマドから、須恵器杯282・土



第460図 竪穴住居-92 (282~284)



- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 1 淡灰褐色粘質砂(古代柱穴)        | 9 茶褐灰色粘質土(褐色・灰色粘質土混じる) |
| 2 褐灰色粘質土(古代柱穴)         | 10 茶灰色粘質土(褐色・灰色粘質土混じる) |
| 3 茶灰色粘質土(古代柱穴)         | 11 淡灰褐色粘質砂(灰色粘質土塊混じる)  |
| 4 暗茶灰色粘質土              | 12 淡灰褐色粘質土             |
| 5 暗茶灰色粘質土(褐色砂質土混じる)    | 13 淡灰褐色粘質砂(灰色粘質土混じる)   |
| 6 茶褐灰色粘質土(褐色・灰色粘質土混じる) | 14 灰色粘質土(灰色粗砂混じる)      |
| 7 暗茶灰色粘質土(炭多く含む)       | 15 淡灰粘質土               |
| 8 茶灰色粘質土(灰褐色粘質砂混じる)    |                        |

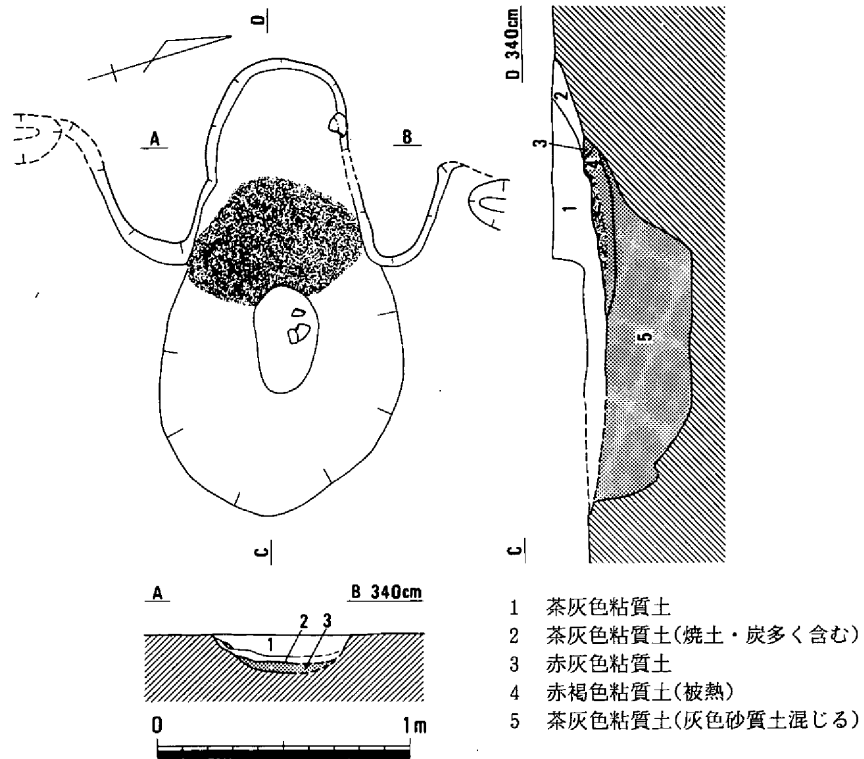


第461図 竪穴住居-93 (285・286)

師器甑284が覆土から出土しており、これら土器の特徴から当住居は古・後・Ⅲ期には廃絶したものと考えられる。(江見)

竪穴住居-93 (第461図)

竪穴住居-92の東に重複して検出された住居で、北東半部は調査区外に延びる。平面方形を呈し、



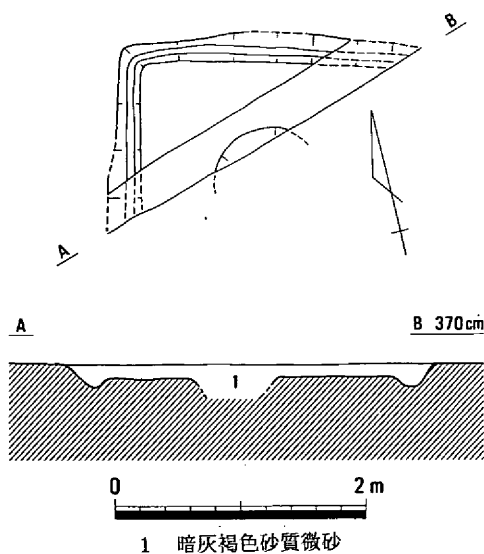
第462図 竪穴住居-93

規模は一辺450cm前後、床面20㎡と推定され、床面の標高は336cmを測る。主柱は4本と考えられ、その配置がやや歪つながら柱間は約220cmを測る。床面には厚さ約10cmの貼り床が認められた。住居西辺中央にはカマドが設置され、全長82cm、燃烧部幅72cm、煙道傾斜角は18°を測る。カマド下部には前庭部を中心に径約110cm、深さ約30cmの土壙が掘られていた。

遺物は須恵器杯蓋285がカマド前庭部から、土師器杯身286が覆土から出土しており、これら遺物から当住居は古・後・Ⅲ期に廃絶したものと考えられる。(江見)

竪穴住居-94 (第463図)

竪穴住居-94は、高田調査区東部、O20区東側に位置する竪穴住居である。排水管敷設に伴う調査ということで、そのごく一部を検出したに過ぎない。かろうじて床面は残存していた。ここでは、住居の北西隅とこれに伴うと思われる柱穴が確認されたが、カマドについては調査区外に存在すると思われる。方形の住居であると推定され、柱穴は壁体溝から60cm程度離れた位置に認められた。柱穴は推定径60cm以上の円形と思われる。遺構の時期は古・後・Ⅱ～Ⅲと思われる。(柴田)



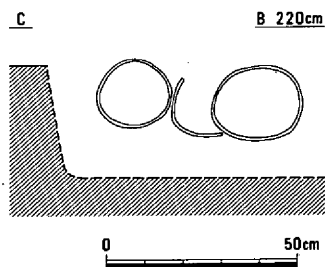
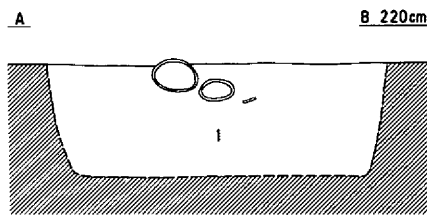
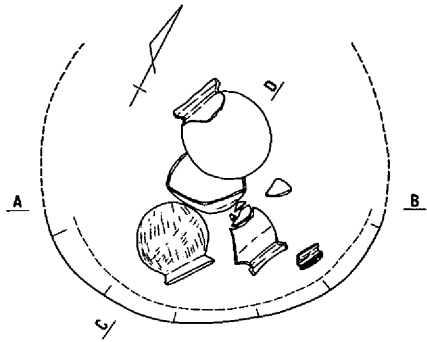
第463図 竪穴住居-94

(3) 井戸

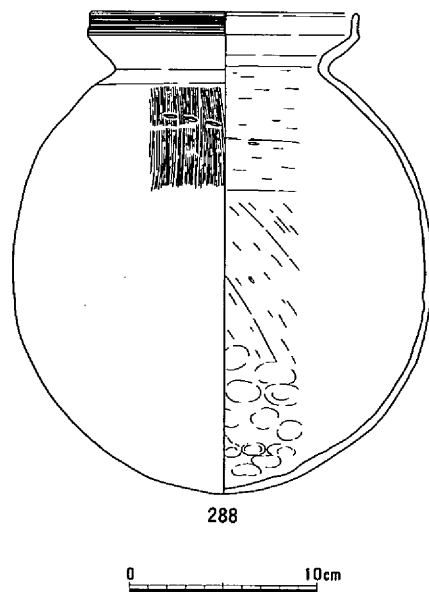
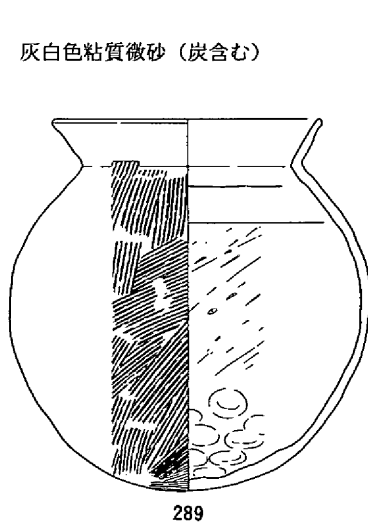
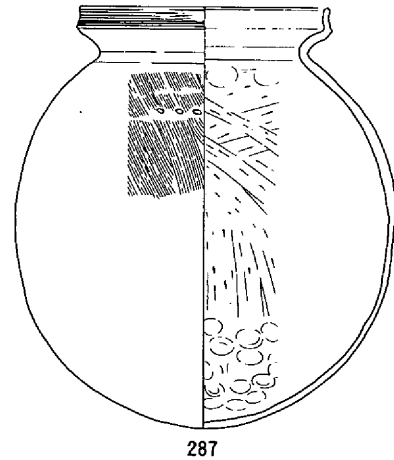
井戸-1 (第464図、図版126)

O20区北端で検出した素掘りの井戸である。上面には溝-17があり、どの層から切り込んでいるかははっきりしなかったが、断面観察から水田層を切っていることが分かった。検出面は水田上面である。

北1/3は調査区外であるが、平面形は円形で直径90cmに推定できる。深さは検出面から30cmしかない。古墳時代後期の竪穴住居検出面からの比高は120cm程を測る。埋土下層から完形の甕が3個体出土している。出土土器からこの井戸の廃絶された時期は古・前・Ⅱと言える。(浅倉)



1 灰白色粘質微砂 (炭含む)

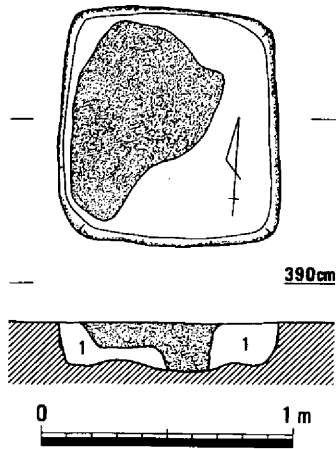


第464図 井戸-1 (287~289)

(4) 焼成土壌

焼成土壌-1 (第465図)

〇20区の西端やや南寄りに位置し、溝-29と溝-30に挟まれた箇所で見出された。長さ95cm、幅88cmの方形の掘り方をもつ。検出面からの深さは20cmほどであった。墳内には焼土塊が多量に入っていたが、底面は被熱していない。出土遺物がないものの、他の同様な遺構の状況を勘案すれば古墳時代後半と推測される。(大橋)

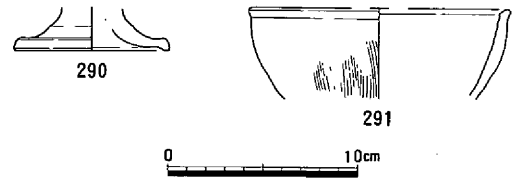
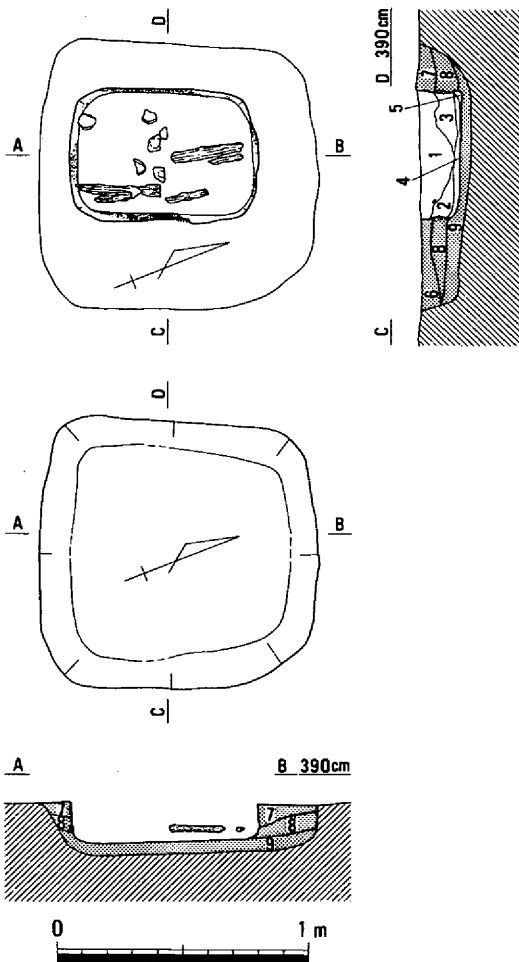


1 明茶褐色粘質微砂

第465図 焼成土壌-1

焼成土壌-2 (第466図)

〇19区の北東に位置し、溝-27の東岸を切ってつくられている。検出当初は長さ75cm、幅53cmの長方形を呈する被熱土壌と考えられたが、その後の精査によって、ひとまわり大きな掘り方を有することが判明した。この掘り方は、長さ112cm、幅107cmの方形を呈し、高さ34cmの壁面は比較的急な傾斜をもって立ち上がる。埋土には炭や焼土を含んでいるが、被熱痕跡は認められなかった。この掘り方内に設けられた被熱土壌は、垂直な壁面の上部が赤変硬化するものの、底部では炭化材が見出されたのみで被熱痕跡は認められなかった。出土遺物には須恵器の高杯290や土師器の鉢291があり、おおむね7世紀前半に比定される。(亀山)



- 1 黒褐色粘質微砂土(炭・焼土塊多く含む)
- 2 暗黄褐色粘質微砂土(炭・焼土塊含む)
- 3 暗褐色粘質微砂土(炭・焼土塊含む)
- 4 黄褐色粘質微砂土(上面に炭層が薄く存在)
- 5 暗褐色粘質微砂土(炭多く含む)
- 6 暗褐色粘質微砂土(炭・焼土塊含む)
- 7 褐色粘質微砂土(炭・焼土塊多く含む)
- 8 褐色粘質微砂土(炭・焼土塊多く含む)
- 9 灰褐色粘質微砂土

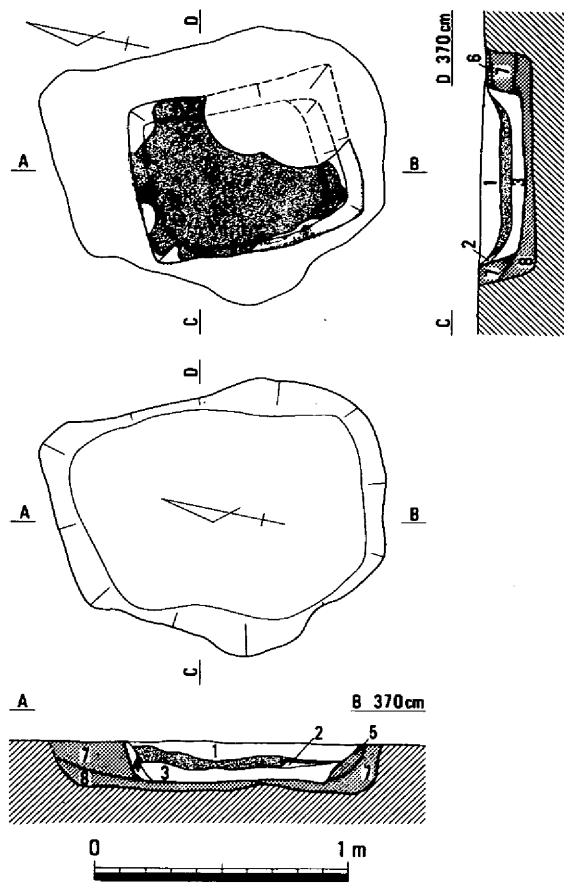
第466図 焼成土壌-2 (290・291)

焼成土壇 - 3 (第467図、図版126)

O19区の北東付近に位置する。形態は平面形が不整形で断面形が平坦な底面から立ち上がる掘り方の内側に、平面形が方形で断面形が平坦な底面から外反する焼成壇をもつ二重構造を呈している。掘り方の規模は長さ130cm、幅106cm、深さ23cm、底面の標高337cmを測り、焼成壇は長さ88cm、幅66cm、深さ19cm、底面の標高346cmである。焼成壇内の第1～4層には炭・焼土などが含まれている。他の焼成土壇の状況から遺構の時期は古墳時代後期と思われる。(澤山)

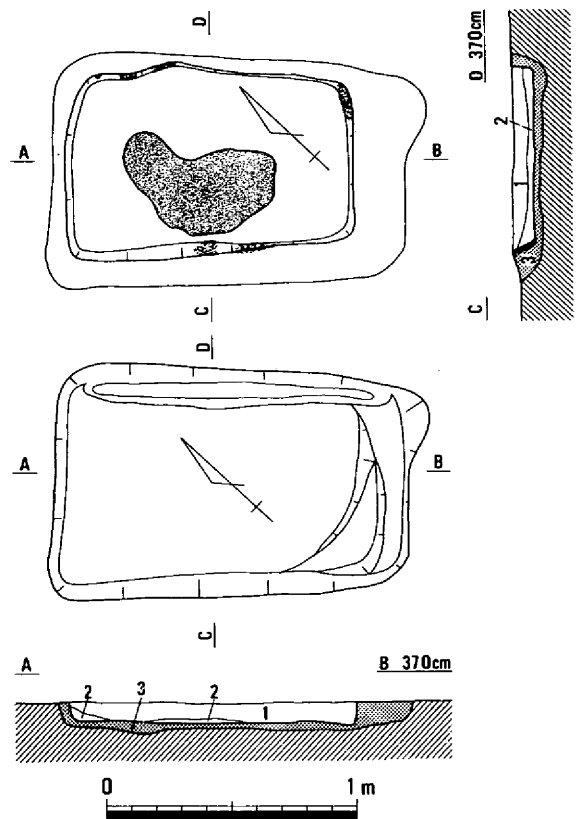
焼成土壇 - 4 (第468図、図版126)

焼成土壇 - 4は、焼成土壇 - 3の南東約10mに位置する。北西がやや広い長方形で、規模は147×95cm、深さ14cmを測る。床面に厚さ4cm程度、壁側で6～22cmの埋土が施され、焼成部が作られる。焼成部は掘り方北寄りで平面長方形、115×78cm、深さ9cmを測る。壁面は部分的に焼けており、わずかに外傾している。流入土から須恵器蓋292が出土している。時期は古墳時代後期と思われる。(柴田)



- 1 明黄褐色砂質土(炭・焼土塊含む)
- 2 灰褐色砂質土(炭少し含む)
- 3 暗黄褐色砂質土(炭・焼土塊少し含む)
- 4 淡赤褐色砂質土(炭・焼土含む)
- 5 暗褐色砂質土
- 6 茶褐色砂質土
- 7 黄褐色砂質土
- 8 茶褐色砂質土

第467図 焼成土壇 - 3



- 1 淡茶褐色砂質土(炭・焼土含む)
- 2 灰黄褐色粘質微砂
- 3 淡茶褐色粘質微砂

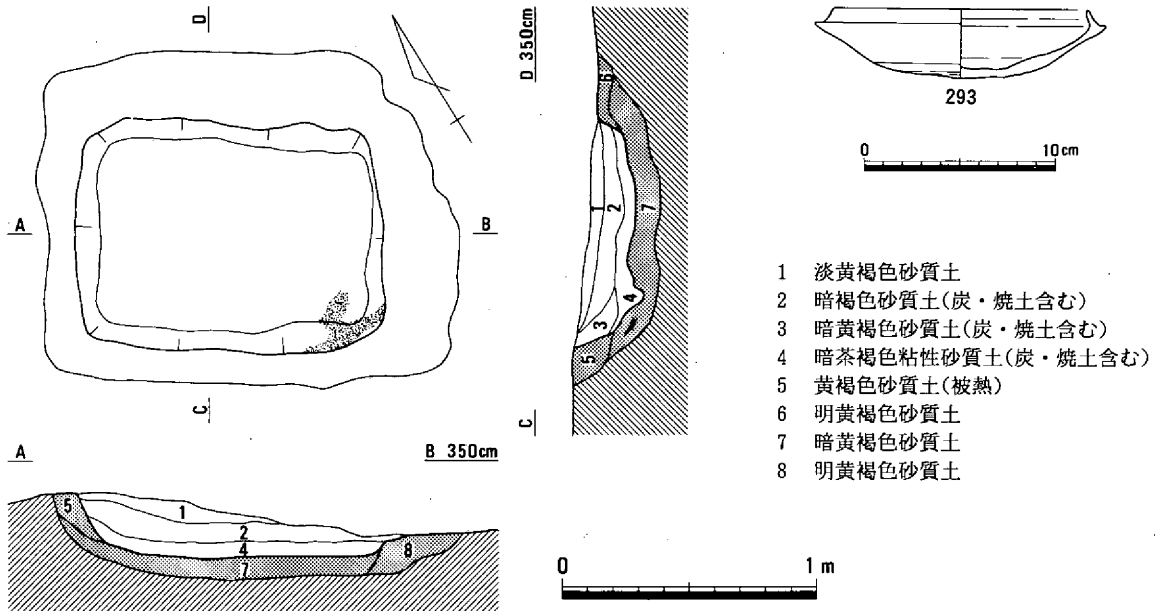


第468図 焼成土壇 - 4 (292)

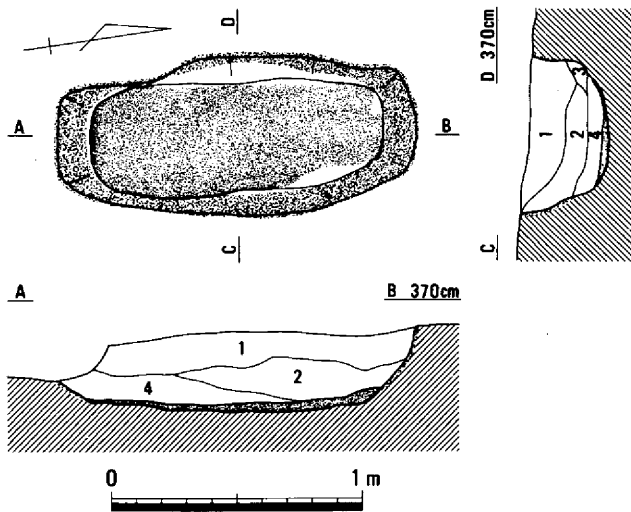


焼成土壇-5 (第469図、図版127)

〇20区の北西付近に位置し、焼成土壇-4の南東に存在する。平面形は不整形でその内側に方形の焼成壇を有する二重構造である。断面形はいずれも平坦な底面から外反している。掘り方の規模は長さ163cm、幅131cm、深さ34cm、底面標高303cmを測り、焼成壇は長さ122cm、幅93cm、深さ28cm、底面の標高は311cmである。遺物は須恵器杯293などがある。時期は古墳時代後期と思われる。(澤山)



第469図 焼成土壇-5 (293)



第470図 焼成土壇-6

焼成土壇-6 (第470図、図版127)

焼成土壇-6は、竪穴住居-37等の一群が所在する〇20区北西部、住居の空白地に位置する。周辺の焼成土壇と異なり、掘り方平面形は細長い長方形である。規模は142×63cm、深さ35cmを測る。掘り方そのものが焼成部であり、壁面は焼けており、外傾している。遺構の時期は古・後・II～IIIと思われる。(柴田)

焼成土壇-7 (第471図)

焼成土壇-7は、竪穴住居-37等の一群が所在する〇20区北西部、住居の空白地に位置する。掘り方平面形は方形で、規模は134×115cm、深さ34cmを測る。この床面には、焼土を少量含む厚さ23cm程度の土が認められ、この上面が焼けている。この土層が埋土であるかどうかは不明である。焼成

部は、辺約1mの方形であると推定される。遺構の時期は古墳時代後期と思われる。(柴田)

焼成土壌-8 (第472図)

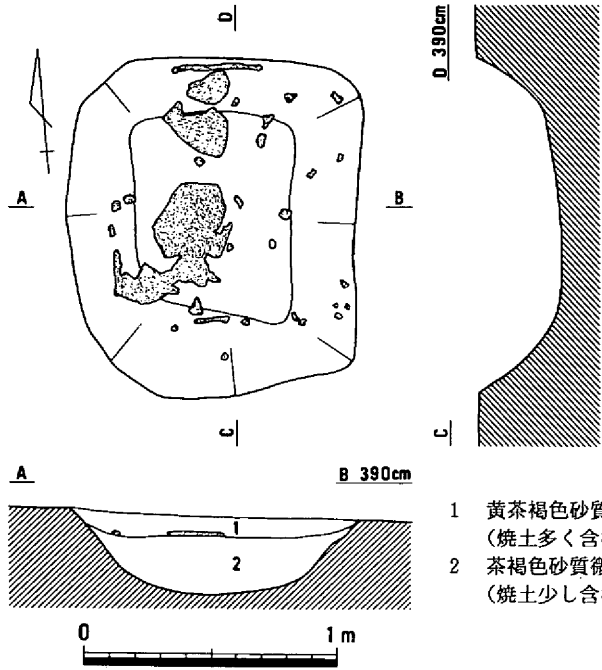
O20区北端中央部、竪穴住居-10の北1mで検出した壁の焼けた土壌である。不整形の箱形を呈する。床は全く焼けていない。大きさは長さ89cm、幅78cm、深さ16cmを測る。遺物は出ていないので、時期は不明である。(浅倉)

焼成土壌-9 (第472図)

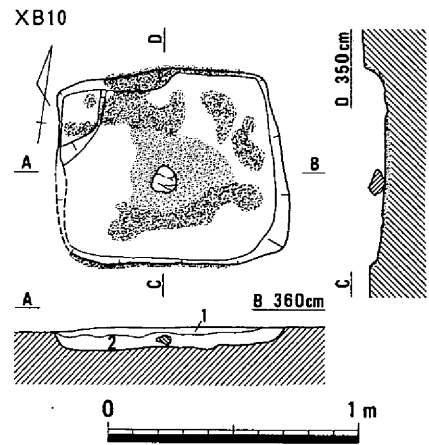
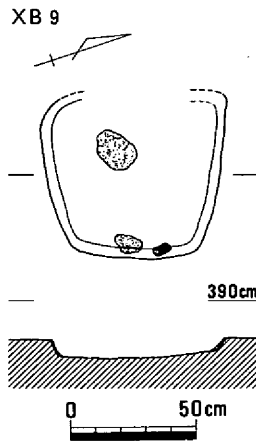
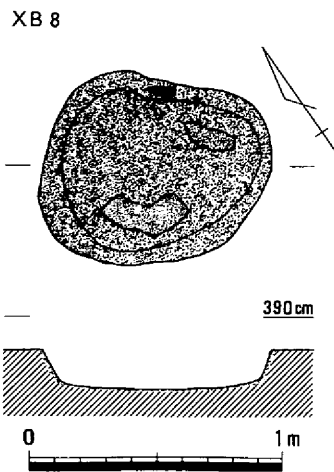
焼成土壌-8の南東約20mで検出した壁の焼けた土壌である。不整形を呈する。床は全く焼けていない。大きさは長さ73cm、幅65cm、深さ7cmを測る。切り合いから時期は古墳時代以降と思われる。(浅倉)

焼成土壌-10 (第472図)

N20区の南東、橋脚部分から検出された。平面方形を呈し、規模は92×80cm、深さ約10cmを測る。土壌北東部にはわずかに段を呈す部分が認められたが、おおむね平坦で、壁は急に立ち上がる状況を呈していた。土壌底部中央および壁面、特に南北壁に被熱面が形成され、厚い部分で約1cmを測る。土壌内には焼土塊や炭粒が堆積し、拳大の石が出土したが遺物は皆無であった。(江見)



第471図 焼成土壌-7



第472図 焼成土壌-8~10

## (5) 溝

## 溝-7 (第351図)

O19区南半、高田調査区西端で検出された。南北に流路をとる溝であり、南側は中屋調査区へと続く。検出面の最大幅220cmを測るが、深さ35cmほどと浅い。溝底の比高差から南流するものと推測される。出土遺物は細片のみであるが、溝の時期は古墳時代前期と判断した。(大橋)

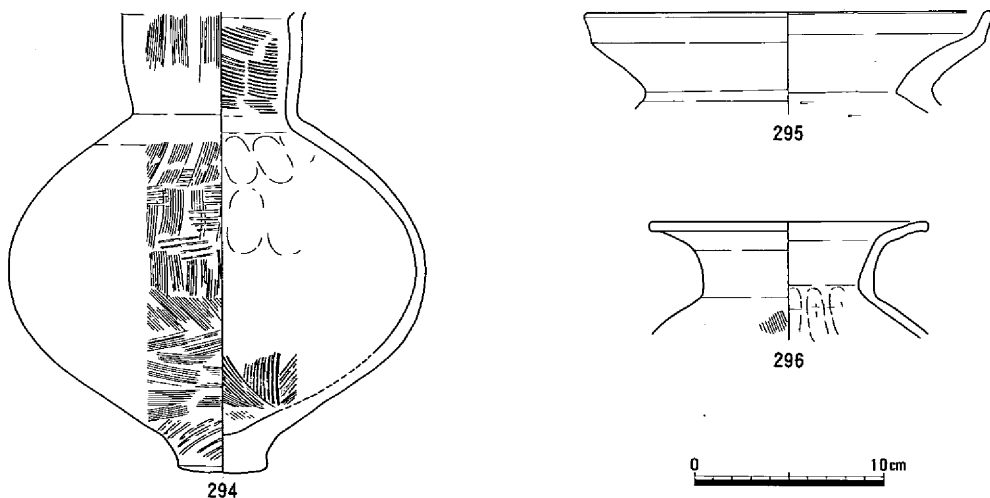
## 溝-8 (第341・351・473・474・478図)

高田調査区西端部をいったん東に屈曲しながら南北に流路をとる溝である。弥生時代の溝-1・2の上層で確認され、これらとほぼ流れを同一にするものであり、断面観察によりその存在を認識した。高田調査区と中屋調査区間の低位部を利用し、繰り返し掘り直されたものと考えられる。後述する溝-9・10と交差するが、これらに先行する溝と判断した。

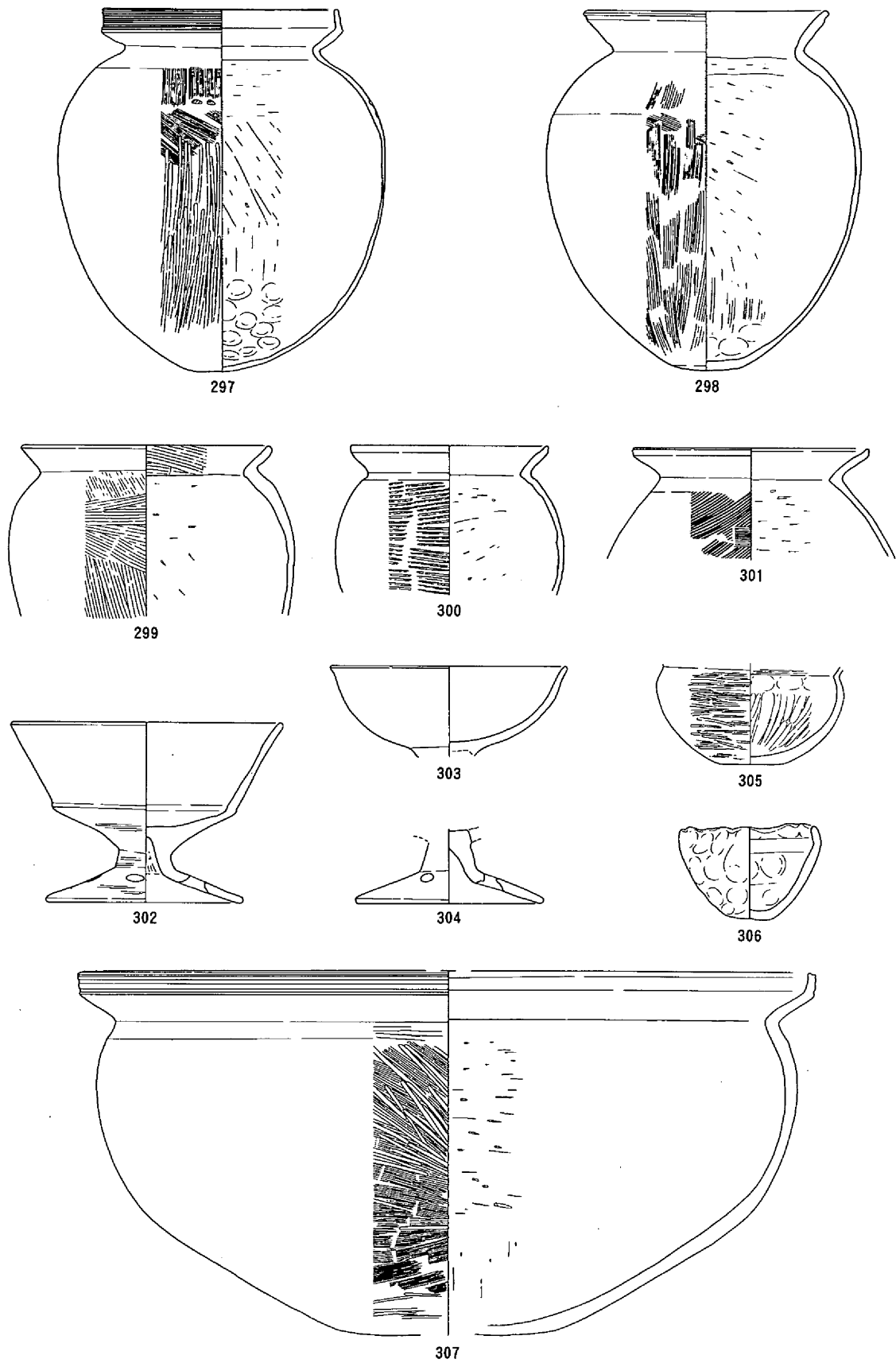
第341図に示す1~5層、第478図の1~7層が溝-8にあたる。検出面の高さの違いからその溝幅は北半部と南半部では異なるが、最大溝幅は470cmを測り、検出長75mあまりである。検出面から溝底までの深さは約1mほどであり、その標高は235cm~265cmと北側が高く、南方向へと流れていたものと推測できる。

第473・474図に示した出土遺物は溝-8の層位からの出土遺物であるが、比較的形状の明らかなもの、および特徴的なものに限って掲載しており、このほかにも多量の土器がある。294~296は壺である。294は畿内系の土師器であり外面タタキメ後細かいハケメを施している。頸部は直立し、底部は絞り込んだ平底である。296の壺も非在地系のものである。297~301は甕であり、この中で298~301が「く」の字口縁をもつ。300はタタキメを外面に施し、301は畿内系のものと思われる。302~304は高杯である。302は精良な水漉粘土の胎土であり、303は椀状の杯部をもち、比較的砂粒の粗い胎土である。305~307が鉢であり、306は手ずくね様に指頭圧痕が顕著に認められた。

これらの出土遺物と重複する他の溝との関係から、溝-8は弥生時代の溝-1・2の流れを踏襲しながら掘り直され、遅くとも古・前・II段階には埋没したものである。また、この溝の北東に広がる水田の幹線水路として利用されていたものと考えている。(大橋)



第473図 溝-8 (294~296)



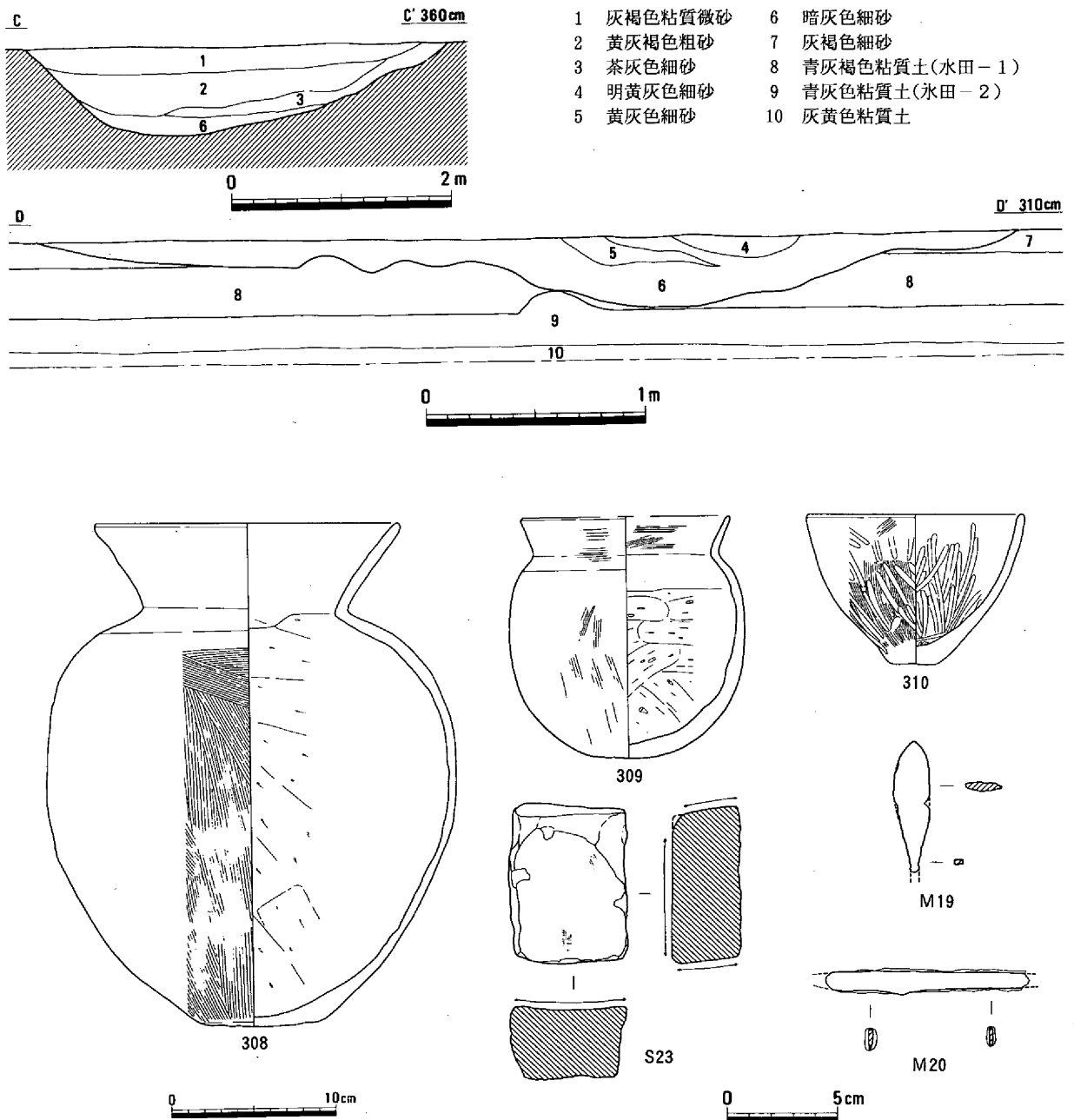
0 10cm

第474図 溝-8 (297~307)

溝-9 (第351・475図)

高田調査区を蛇行しながら東西に走る溝である。東端は第475図D-D'断面に示すように水田層とこれを覆う砂層を切っており、水田埋没後に流れた溝と判断される。溝-8を切るが、溝-10・13などに切られる。検出溝幅は4mほどであるが、東端部は大きく広がる。溝底の標高は約180cmから290cmと東側が低く、東へと流れたものと推測される。出土遺物は比較的完形に近い308~310の土師器、およびS23の流紋岩製の砥石、M19鈍、M20の刀子を図示した。

これらの出土遺物を参考にしながらも他の遺構との切り合い関係を勘案して、この溝の時期は古墳時代前期と考えられる。しかしながら、蛇行する溝の状況や、水田域上で拡散することなどから水路として人為的に掘削されたものではなく、洪水等による自然流路と判断される。(大橋)



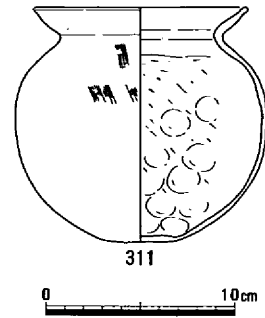
第475図 溝-9 (308~310・S23・M19・M20)

溝-10 (第346・351・476・478図)

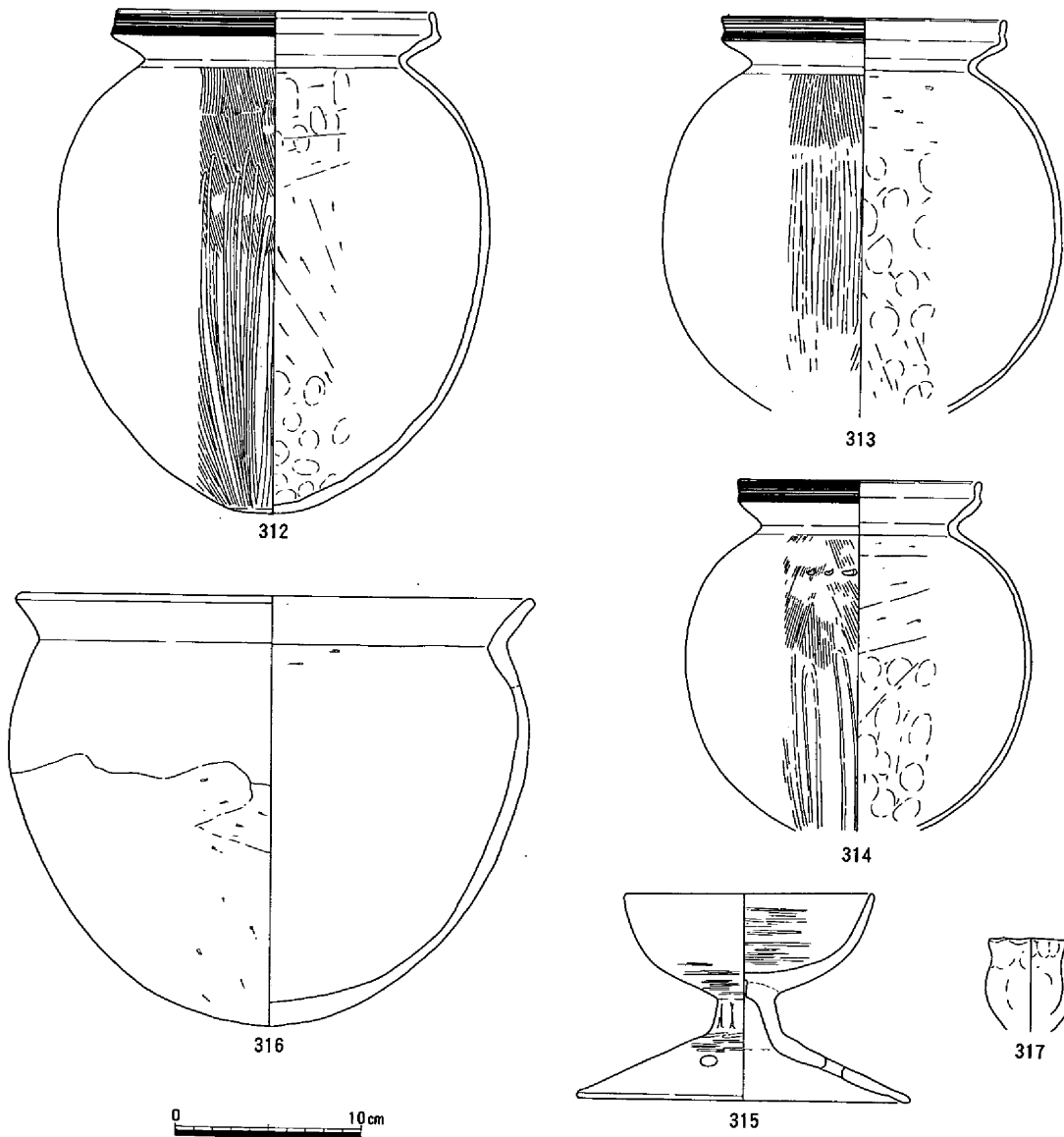
溝-8の東側を南北に流れる溝である。溝-8の屈曲部で溝-9とともに一部交わり、これを切る。

また、南半部では溝-4と同一の流路となる。第346図1~5層、第478図8~13層が溝-10に相当するが、これに示すように本来幅2mあまりの2条の溝が交差したものと理解している。なお、平面図では南半部での検出面が低いため溝幅に大きな差異がある。溝底の標高は280~300cmと南側が低くなっており南側へと流れたものと理解される。出土遺物は細片が多く、図示したのは311の甕のみである。この甕は器高12.4cmとやや小形のもので内面の指頭圧痕が顕著に観察された。

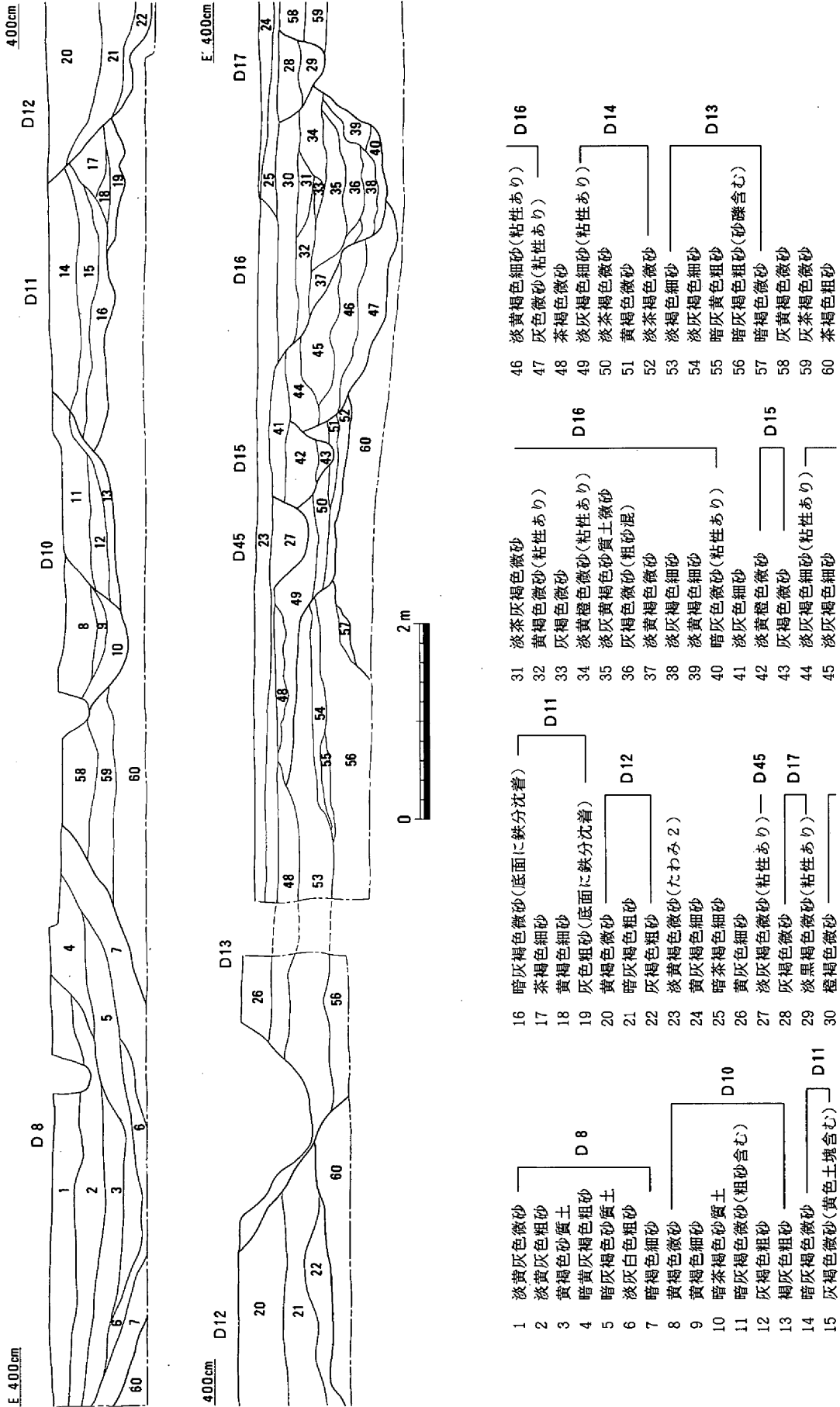
溝の時期は他の溝との切り合い関係と図示できなかった細片の土師器を勘案すれば、古墳時代前期になると思われる。 (大橋)



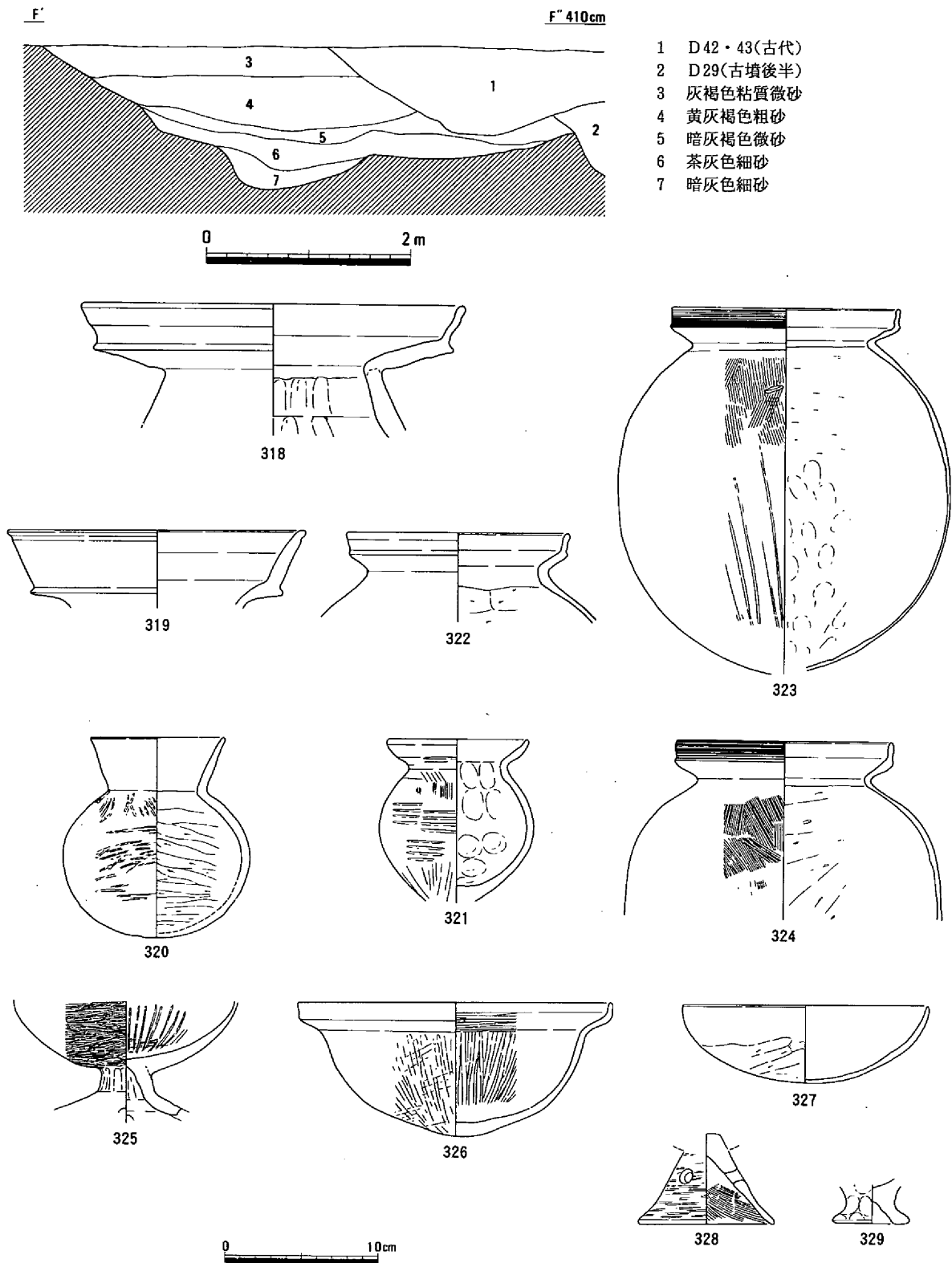
第476図 溝-10 (311)



第477図 溝-11 (312~317)



第478図 溝-8・10~17



第479図 溝-12 (318~329)

溝-11 (第351・478図)

溝-10と後述する溝-12の間で検出された溝状のものである。第478図の14~19層が溝-11として捉えたものである。そのほとんどを溝-10・12に切られているためか、検出できたのは溝底近くの一



部分であるものの比較的多くの出土遺物が認められた。溝-10・12に先行する流路と判断される。

図示した出土遺物は312~314の在地甕、315の高杯、316の大形の鉢、317のてづくねである。在地の甕には時期差があるものの、他との溝との切り合い関係を考慮すればこの溝の時期も古墳時代前期の中におさまると判断した。 (大橋)

#### 溝-12 (第351・478・479図)

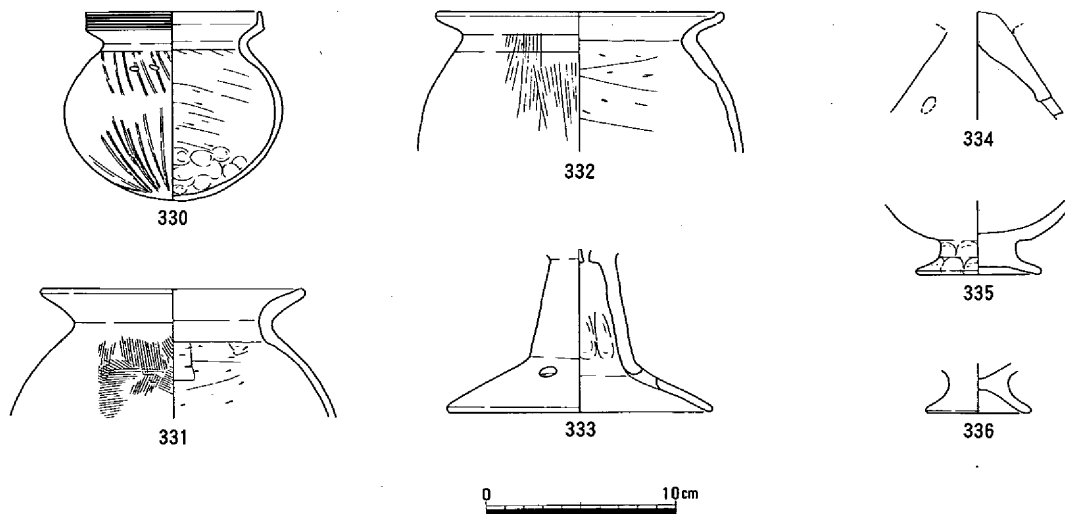
溝-10の東側にほぼ平行して流走する最大溝幅355cmを測る溝である。調査区北端では溝-13に切られ、南半部では第479図に示すように古墳時代後半の溝-29および古代の溝-40・41に大きく削平を受けており、長期間にわたって南半部ではこの流路が踏襲されていたと推測される。なお、第478図20~22層がこの溝に相当する。溝底の標高は北部で約280cm、南部で約230cmを測り、南側へ流れていたものと判断される。出土遺物は318~329を図示した。318・319が二重口縁の壺、320が丸底の壺、321は外面にタタキメが施された小形の壺である。322は甕であろうか。323・324は在地の甕である。325は椀状の杯部をもつ高杯、326・327は鉢である。328は小形器台、329は製塩土器である。このうち319の壺の口縁外面には赤色顔料が認められた。これらの出土遺物および他の溝との関係からこの溝も古墳時代前期には埋没していたと考えられる。 (大橋)

#### 溝-13 (第351・478・480図)

溝-10の東側にほぼ平行して流走する最大溝幅530cmを測る溝である。第478図53~57層が対応する層位であり、これにみるように溝-12を切る。最深部の溝底標高は215cmでありこの溝も南側へと流れていたものと推測している。しかしながら、南半部は近世の溝-54によって削平されており、詳細は不明である。

出土遺物は細片が多いものの、このなかから図化できるものとして330~336を掲載した。330~331は甕、333が高杯脚部、334は小形器台、335が台付の鉢と思われる。336は製塩土器の脚部である。

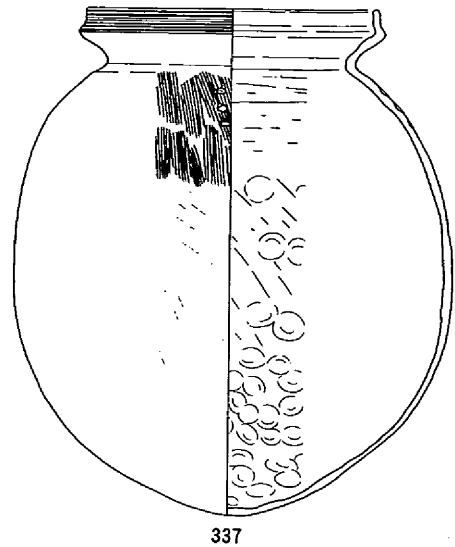
これらの出土遺物と他の溝との層位関係からこの溝も古墳時代前期と判断している。 (大橋)



第480図 溝-13 (330~336)

溝-14 (第351・478・481図)

溝-13の東に位置する。北半は溝-15~17によって上部を削平されており、南半は大きく開口する流路である。第478図の49~52層がこの溝にあたる。水田を被覆する洪水砂の上位で検出され、洪水などによる濁流の結果と思われる。出土遺物は、337の甕のほかにも古墳時代前期の土師器片が散見された。(大橋)



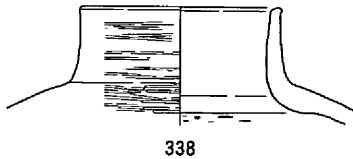
337

0 10cm

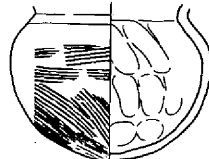
第481図 溝-14 (337)

溝-15 (第351・478・482図)

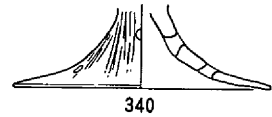
溝-14の北半部でその上位で検出された幅70~120cmの溝である。検出総長は約16mほどであり、南半部は不明である。第478図42・43層がこの溝にあたる。溝底の標高は282~302cmと南側が低い。この溝も古墳時代前期に形成されたものと思われる。(大橋)



338



339



340

0 10cm

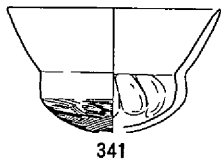
第482図 溝-15 (338~340)

溝-16 (第351・478・483図)

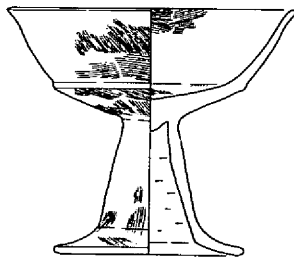
第478図30~40層がこの溝にあたる。幅230~530cm、深さ109cm、底面標高210~263cmを測る。流路方向は北東から南西へ流れ、屈曲した後、溝-14の上位へと方向を変える。遺物は341~346の土師器などがある。高杯343などから遺構の時期は古・前・Ⅲ期と思われる。(澤山)

溝-17 (第351・478図)

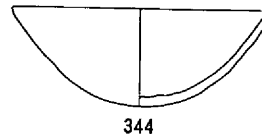
溝-16の北辺に沿う溝である。第478図28・29層がこの溝である。規模は幅70~165cm、深さ87cm、底面標高は270~292cmを測る。流路方向は北東から南西再び北と推測される。遺物は土師器片が少量認められた。遺構の時期は古・前・Ⅲ期と思われる。(澤山)



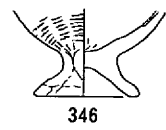
341



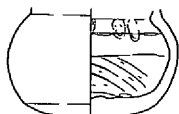
343



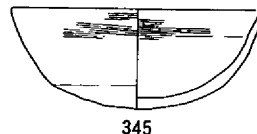
344



346



342



345

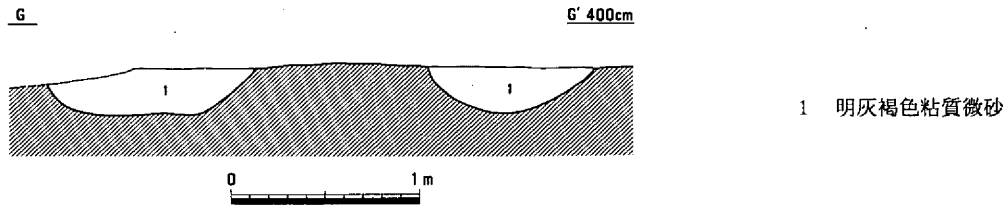
0 10cm

第483図 溝-16 (341~346)

溝-18・19 (第351・484図)

〇20区南西、溝-12の東側で検出された平行する2条の溝である。溝-18は最大幅120cm、深さ25cmを測り、溝-19は最大幅95cm、深さ24cmを測った。それぞれ約6mほどの検出長である。いずれも溝底の標高差から北側へと流れたものと推測される。なお、後述する溝-20~24のいずれかにつながるものと思われる。

出土遺物は細片のみで明らかではないが、古墳時代前期の範疇と判断した。(大橋)

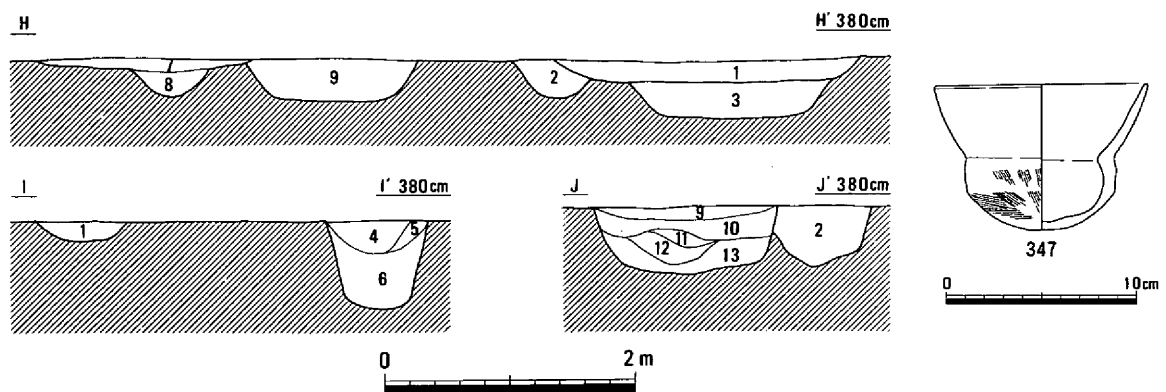


第484図 溝-18・19

溝-20~24 (第351・485図)

〇20区中央で検出した相互に切り合った弧状を描く5条の溝である。西側は、溝-14によって不明となるが、溝-18・19へと続くものと推測される。溝-20は溝幅96cm、深さ57cm、溝-21は溝幅150cm、深さ58cmを測る。溝-22は溝幅135cm、深さ42cm、溝-23は溝幅200cm、深さ53cm、溝-24は溝幅190cm、深さ23cmを測る。溝-20・21と溝-22・23がそれぞれほぼ重複関係にあり、溝-24が最も後出する。流路の方向は溝底の標高差から西方向から東方向と判断される。

遺物は細片がほとんどであったが、溝-20から出土した小形丸底鉢を参考にすれば、これらの溝の時期は古墳時代前期の範疇と思われる。(大橋)

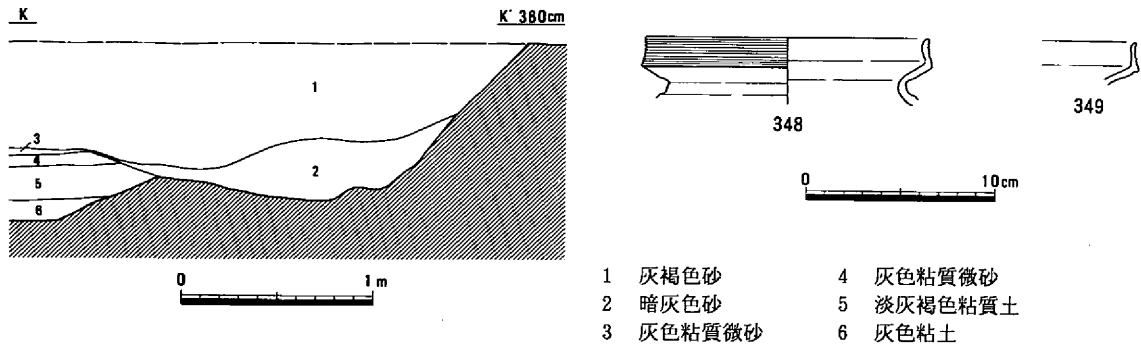


- |                |               |                |
|----------------|---------------|----------------|
| 1 暗灰褐色微砂(D21)  | 5 灰褐色細砂(D20)  | 9 暗黄灰褐色微砂(D23) |
| 2 暗褐色微砂(D21)   | 6 暗褐色微砂(D20)  | 10 暗黄茶色微砂(D23) |
| 3 暗青灰褐色微砂(D20) | 7 灰褐色微砂(D24)  | 11 黄茶色微砂(D23)  |
| 4 暗褐色微砂(D20)   | 8 淡灰褐色微砂(D24) | 12 暗茶色微砂(D23)  |
|                |               | 13 暗茶色細砂(D23)  |

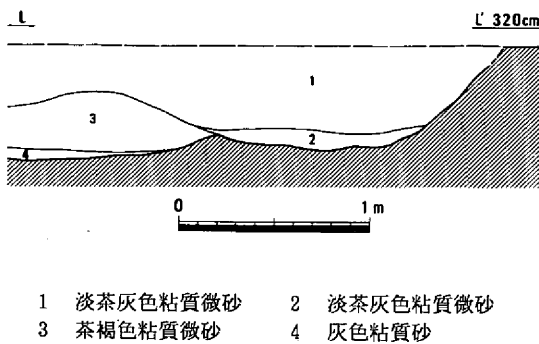
第485図 溝-20~24 (347)

溝-25 (第486図)

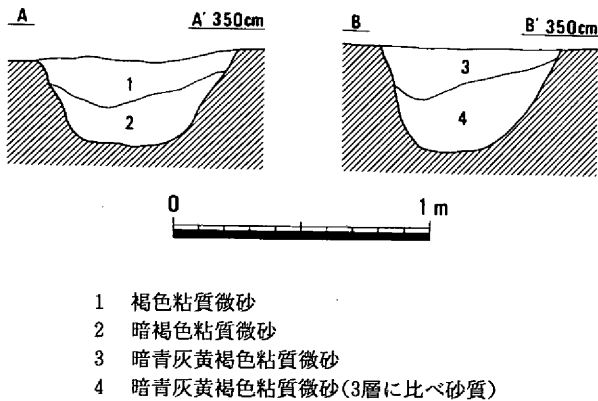
高田調査区の東部、橋脚部分から検出された溝である。東西方向に細長く伸びた微高地南辺に沿って東方向に流走する溝で幅約150cm、深さ約70cm、溝底の標高は275cmを測る。溝の南からは水田跡が検出されたが、これら溝および水田は洪水によると推定される微砂層によって覆われており、同時に埋没したものと考えられる。出土遺物から埋没時期は古・前・I～II期と思われる。(江見)



第486図 溝-25 (348・349)



第487図 溝-26



第488図 溝-27

調査区北半で約20m検出され、北西から南東方向に流走しさらにやや東向きに進路を変えている。調査区南半は、後世の掘削が存在し溝の流路は明らかでない。溝の規模は、幅約270cmを測り、深さは約60cmで断面形はV字形を呈していた。溝内の堆積は、第489図で示したように第1～4層で砂層を

溝-26 (第487図)

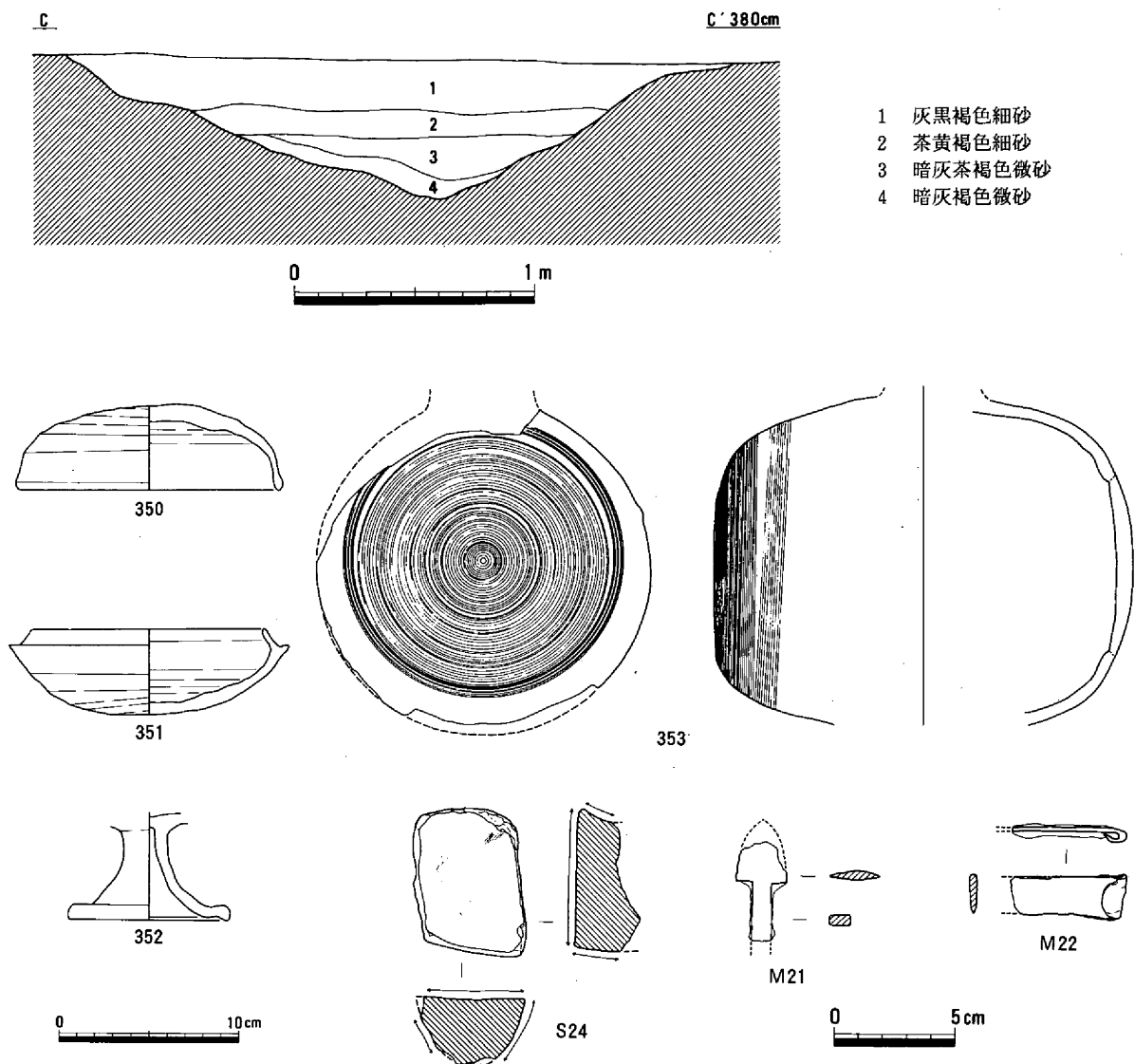
溝-25の北方約20mの位置から検出された。溝-25とほぼ同規模で、流走方向も同様に東流するものと考えられるが、带状に伸びる微高地および低位部の水田を挟んだ北側に位置する。幅約190cm、深さ45cm、溝底の標高は250cmを測る。遺物は皆無であったが、形態および埋没状況から、当溝は古墳時代前半に埋没したものと推定される。(江見)

溝-27 (第352・353・488図)

O19区北東を北々東から南々西に向かってほぼ直線的にのびる溝で、現状では上幅90～64cm、深さ64cmの断面U字形をなす。底面の標高は301～311cmとほぼ一定で埋土にも流水の痕跡が認められないことから、居住地の区画を目的とした施設とも考えられる。時期は焼成土壇-2との関係から6世紀後半と見られる。(亀山)

溝-28 (第352・353・489図)

この溝は、調査区の西端部に位置しており、竪穴住居-6の東側約6mに検出された。溝は、



第489図 溝-28 (350~353・S24・M21・M22)

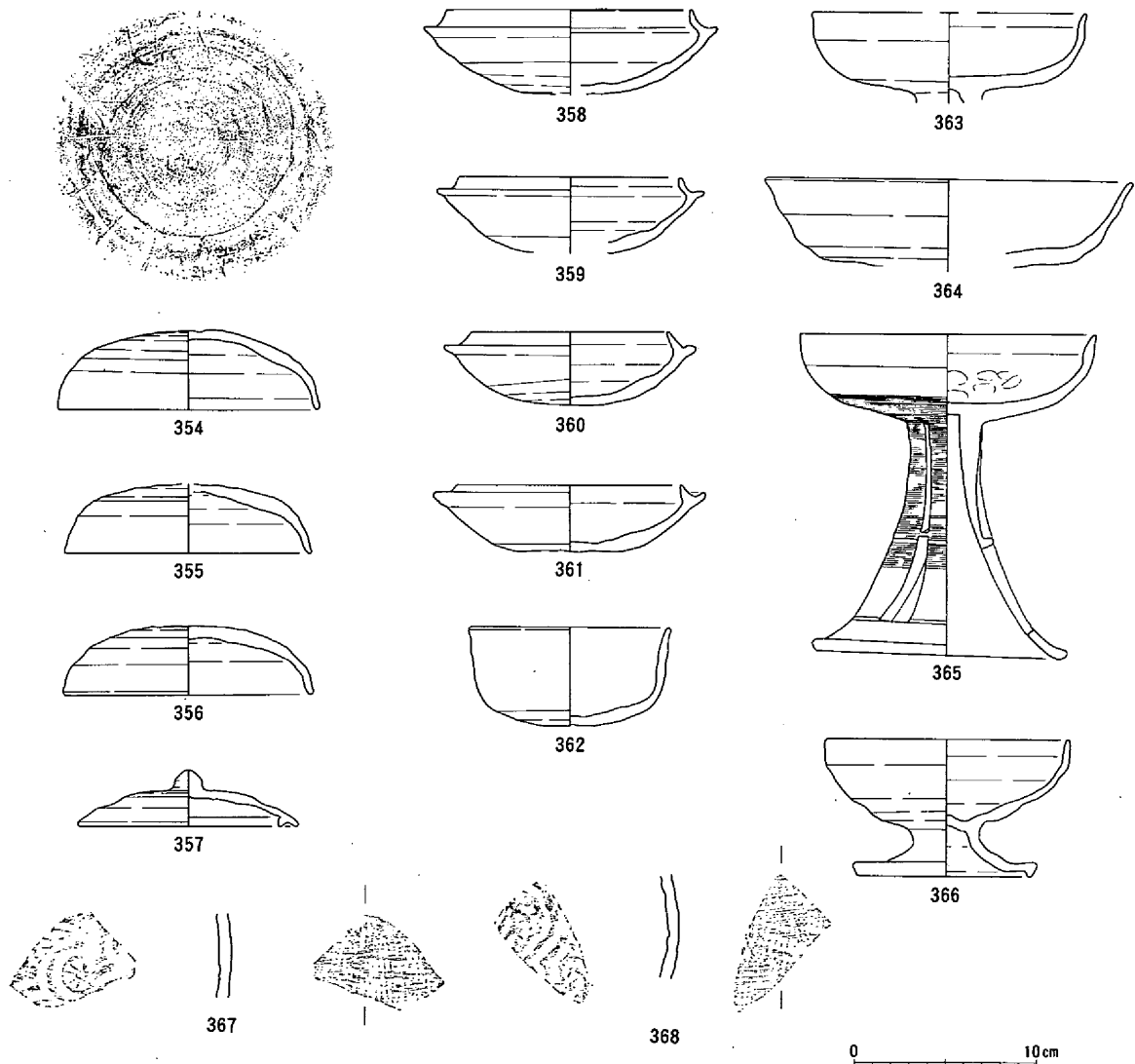
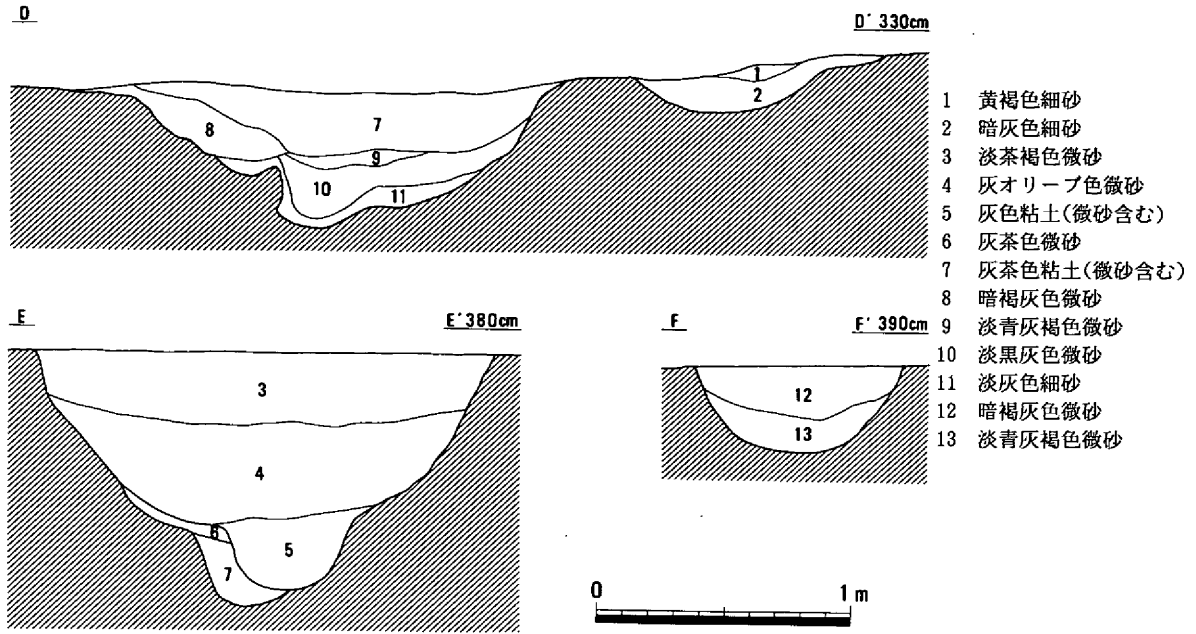
中心とした堆積であった。

出土遺物は、古墳時代後期から古代前半期の遺物が検出されている。出土遺物の中心は7世紀代のもの須恵器、土師器などがある。しかし、溝の下層を中心に図示した6世紀後半の遺物が検出されている。また、上層では平瓦、丸瓦片もある。さらに鉄鏃M21、手鎌M22、砥石S24、鉄滓753.2gも出土している。  
(中野)

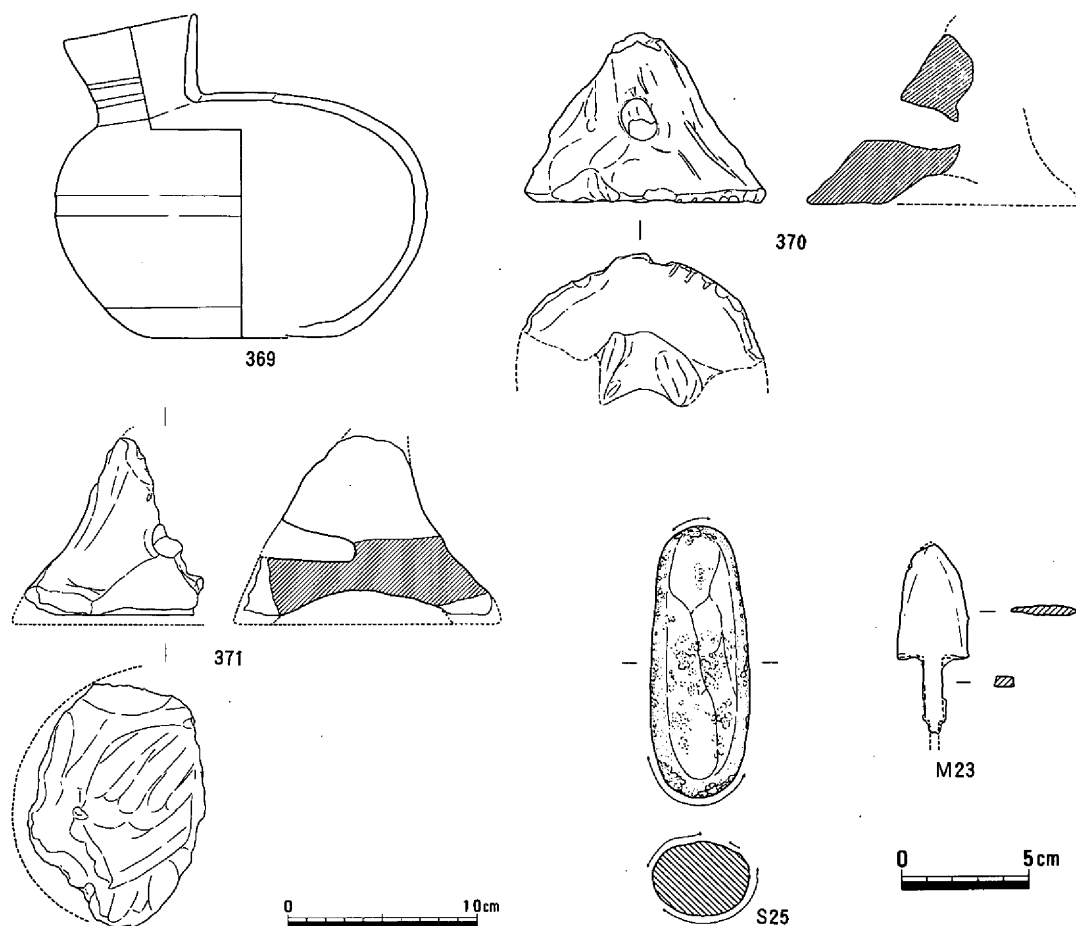
溝-29・30 (第352・490・491図)

O20区中央を東西に走り、ほぼ直角に折れ南北に走るものを溝-29、これから派生してさらに西側へ伸びるものを溝-30とした。なお、溝-29は溝-28および、溝-31とも合流している。

溝-29は最大幅185cm、深さ70cmを測り、検出総長は約100mを超える。L字状に折れ曲がるもので竪穴住居-15~32までを囲う様相を呈する。なお、E-E'断面3~5層は重複する古代の溝-40・41の層位である。溝-30は最大幅85cm、深さ38cmを測る。竪穴住居-12~14が位置する箇所北限を示す状況を呈する。



第490図 溝-29・30 (354~368)

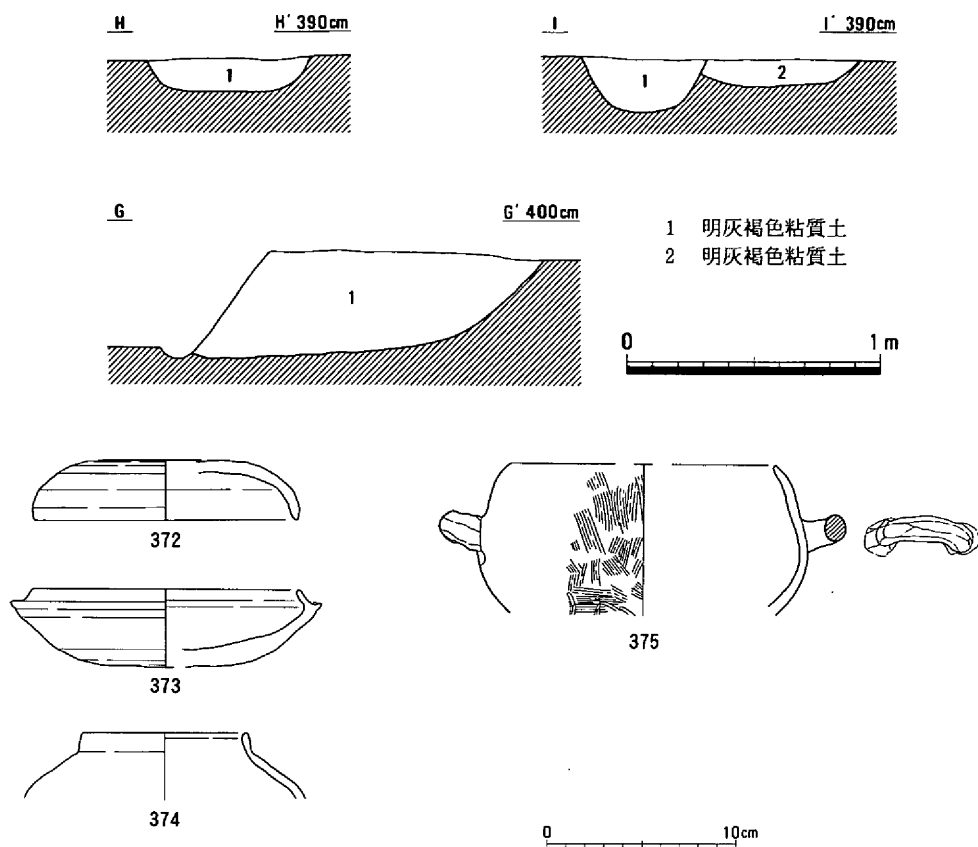


第491図 溝-29 (369~371・S25・M23)

出土遺物として図示した354~369の須恵器、半損している371・372の土製支脚、S25叩き石、M23鉄鏃は、いずれも溝-29出土のものである。溝-28の出土遺物は細片で図化し得なかった。354~357は蓋で、354の天井部には直線状のヘラ記号が認められ、357はつまみをもつものである。358~362は杯で360の径は10.5cmと小形である。これらの出土遺物から、この2条の溝は古墳時代後半、6世紀後半から7世紀にかけての時期があてはめられるが、いずれの溝も流水の痕跡が認めがたく、区画を主目的としたものと推測される。(大橋)

溝-31・32 (第492図)

調査区の北東にかかって検出した溝で、O20区の北辺中央に位置する。北東から南西に向けてほぼ直線的に走る溝で、南西端は不明瞭に終わり、北東端は溝-32に切られている。検出長は23.9mで、幅は72cm~100cmあり、深さは19cmを測る。断面は浅い皿形を呈し、明灰褐色粘質土によって埋まっている。また、溝-32はO20区の中央北よりで検出した溝で、北東から南西に向けて走っており、北東端は溝-31と切り合いをもちながら調査区外へ延びる。また、南西端は途中で南に向きを変えて溝-29に接続する。検出長は65.6mあり、幅48cm~110cm、深さ29cmを測る。明灰褐色粘質土で埋まる溝の断面は浅いU字形をなす。これらの溝からは、須恵器の蓋杯372・373や短頸壺374、側面に把手をもつ土師器の鉢375などが出土しており、6世紀後半には機能していたものと思われる。(大橋)



第492図 溝-31・32 (372~375)

溝-33 (第493図)

高田調査区の東部、橋脚部分を横断して検出された溝で北～北東方向へ延びる。幅約130cm、深さ約80cmを測り、西半部では断面逆台形状を呈す。溝底の標高は約270～230cmを測る。溝内は上部に比較的締まった砂層が堆積し、下部に向かい粘質を増す状況であった。遺物は須恵器376～379をはじめ土師器細片が出土しており、土器の特徴から当溝は古・後・Ⅲには埋没したものと考えられる。なお、溝-29は断面形がやや異なるが、当溝はこれにつながるものと理解している。(江見)

溝-34 (第494図)

N20区の南東に位置し、北西から南東に流走する溝で、平面的には前述の溝-33に直交し、合流するものと推定される。溝の断面は「U」字状を呈し、幅約50cm、深さ40cm、溝底の標高は330～300cmと東に低い。遺物は皆無であるが、溝-33と同様に住居群を囲む溝と考えられる。(江見)

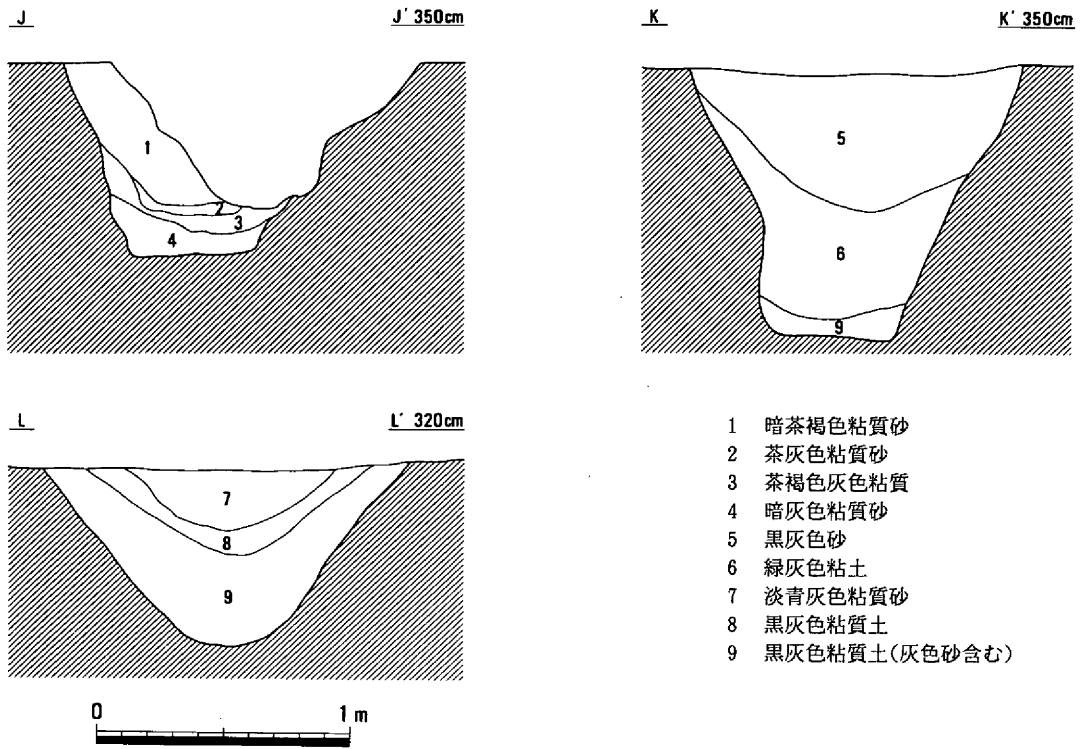
溝-35 (第494図)

N20区南端中央をほぼ南北に貫通し、南方で緩やかに右曲がりして消滅する溝である。検出全長1676cm、最大幅38cm、最大の深さ17cmを測り、断面の形はやや矩形を呈する。流路は南から北である。切り合いから古墳後期と言える。(浅倉)

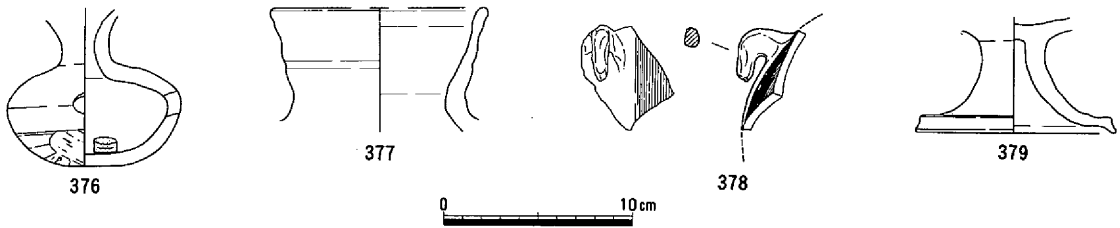
溝-36 (第495図)

O20区の北東、溝-33の東に位置する弧状に延びる溝である。溝の断面は逆台形状を呈し、幅約100cm、深さ約50cm、溝底の標高は291～285cmとわずかに東から南東に向かって低い。溝内から須恵器および土師器細片が出土しており、古墳時代後半期に埋没したと思われる。(江見)





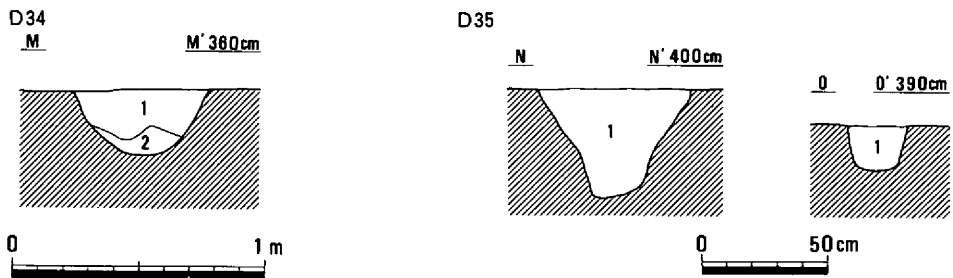
- 1 暗茶褐色粘質砂
- 2 茶灰色粘質砂
- 3 茶褐色灰色粘質
- 4 暗灰色粘質砂
- 5 黒灰色砂
- 6 緑灰色粘土
- 7 淡青灰色粘質砂
- 8 黒灰色粘質土
- 9 黒灰色粘質土(灰色砂含む)



第493図 溝-33 (376~379)

溝-37 (第495図)

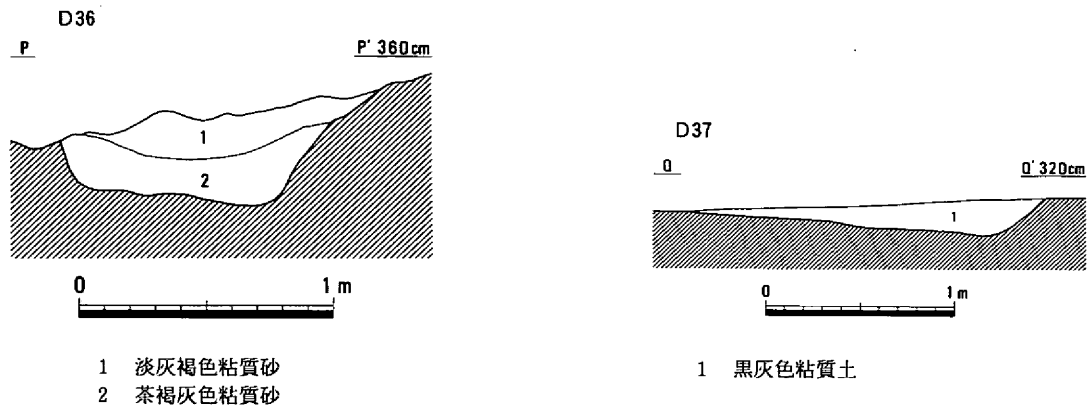
N21区の南西部の二つの調査区において検出できた溝をその位置や埋土から一連の溝として捉えている。南西から北東方向に流走しており、検出できた幅は90~300cm、深さは5~20cmを測る。底面の海拔高は2.75~3m前後で、南西部が最も浅く平面形も不明確になっている。遺物は出土しなかったが、埋土が溝-33に類似していることから時期は古・後・II~IIIと考えている。(平井)



- 1 茶灰色粘質土
- 2 灰褐色砂質土(暗灰色粘質土塊含む)

- 1 暗灰褐色粘質土

第494図 溝-34・35



第495図 溝-36・37

## (6) 水田

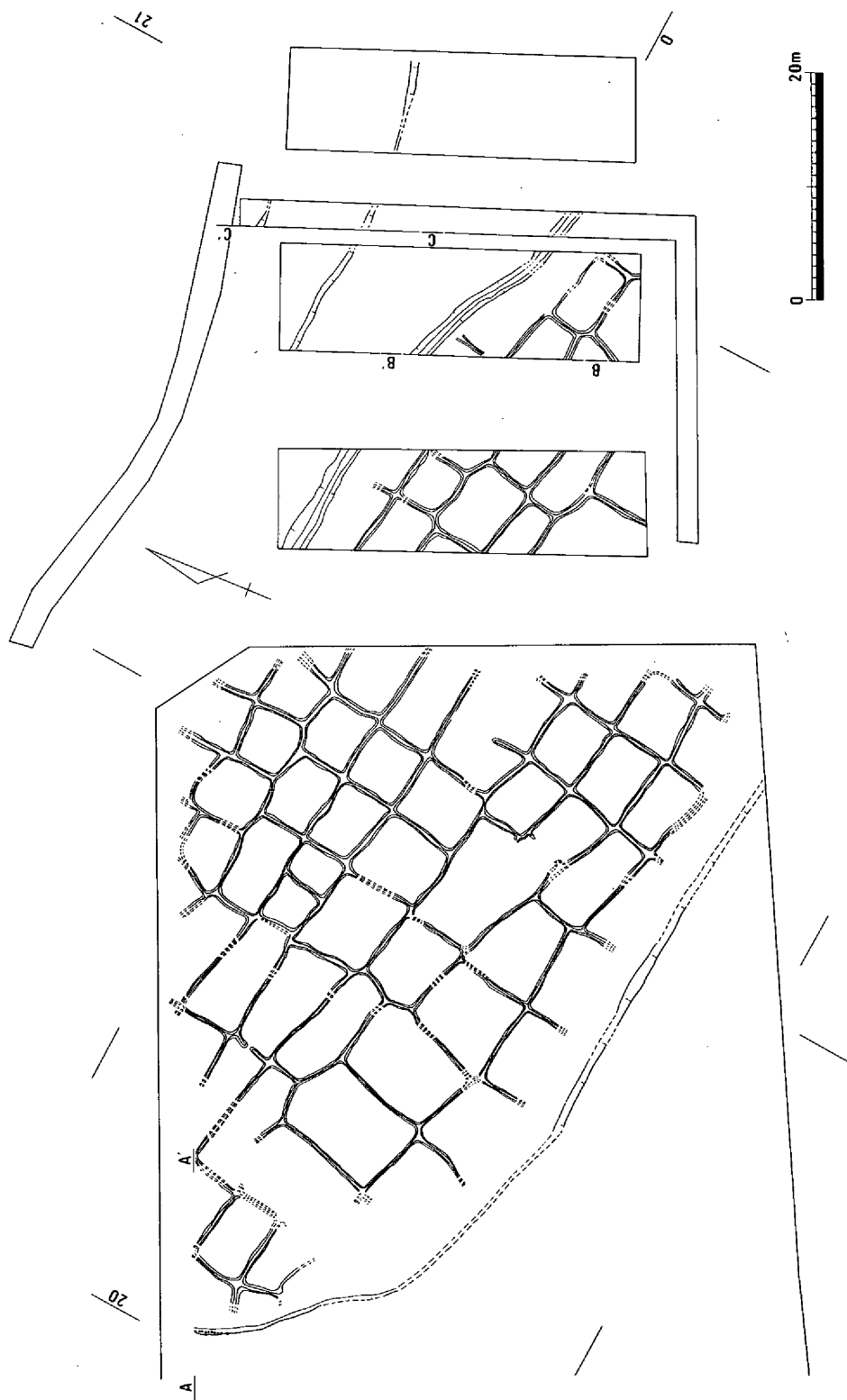
### 水田-1・2 (第496~500図・図版129~131)

古墳時代後期の集落の下層で検出したもので、O20区北半を中心に広がっている。水田層は上下2層にわたって確認されたが、いずれも粘性を帯びた砂質層からなり、酸化鉄の沈着によって黄灰色ないし褐灰色を呈していた。これらの水田層の間には西側を中心に厚さ10~15cmほどの砂層が見られたが、東側では2層の水田層が重複している。また、上層の水田は厚い砂によって覆われており、これらの水田が洪水によって放棄されたことを窺わせる。

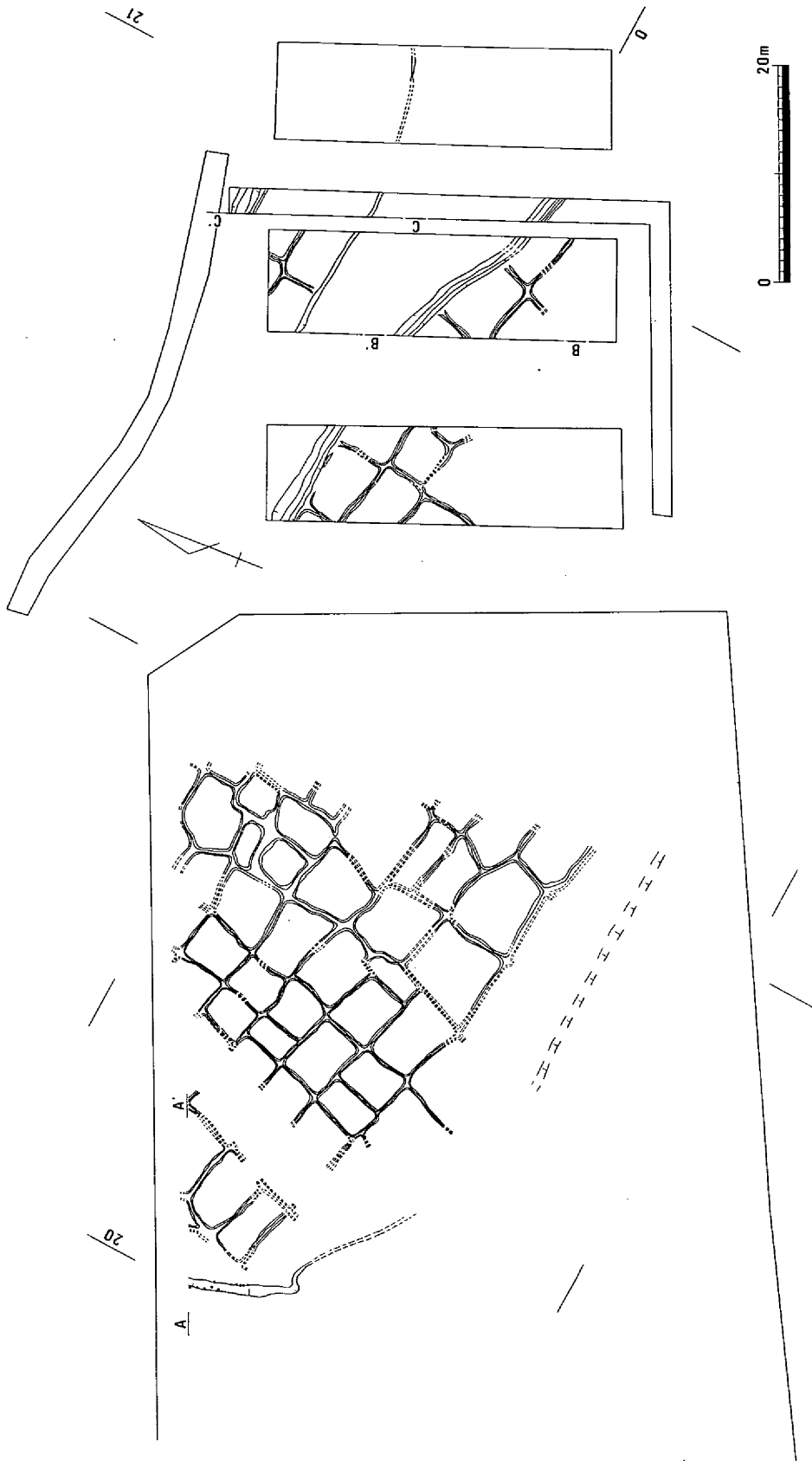
水田-1は幅約45mの帯状をなし、西から東へ向けて広がっている。田面の標高は、西で275cm、東で264cmを測り、40mほどの間で10cmほどの比高を生じている。幅30cm、高さ10cmあまりの畦畔で仕切られた区画は、長さ2.5~6.7m、幅1.8~4.6mの方形ないし長方形をなし、82面検出した。面積は13~69㎡あり、平均で31㎡を測る。これらの区画は東西においてほぼ直列的な配列をなすが、南北において互い違いに接し、微高地からの掛け流しが想定される。これは、北側の微高地に沿って用水と見られる溝が走ることから窺える。また、この水田の北側には、幅4~9mの微高地を隔てて、東西に走る帯状の水田を検出している。畦畔は確認できなかったが、標高は南側の水田よりもわずかに高くなっている。これらの水田は、北西において中屋調査区の水田-3と合流するものと見られる。

水田-2は、水田-1の10~15cmほど上層で検出したもので、その範囲をほぼ踏襲している。検出された72面の区画は、長さ2.0~4.5m、幅1.3~4.3mの方形ないし長方形を呈している。面積は7~40㎡(平均18㎡)あり、水田-1よりも小さくなっている。田面の標高は、西側で280cm、東側で290cmで、比高は10cmほどある。区画の配列は直線的であるが、畦畔がT字形に交差する箇所が多く見られ、下層の水田よりも複雑な水配りが想定される。また水田の北縁を走る幅180cm、深さ40cmほどの溝は用水として機能していたものと思われる。この水田は中屋調査区の水田-4に対応する。

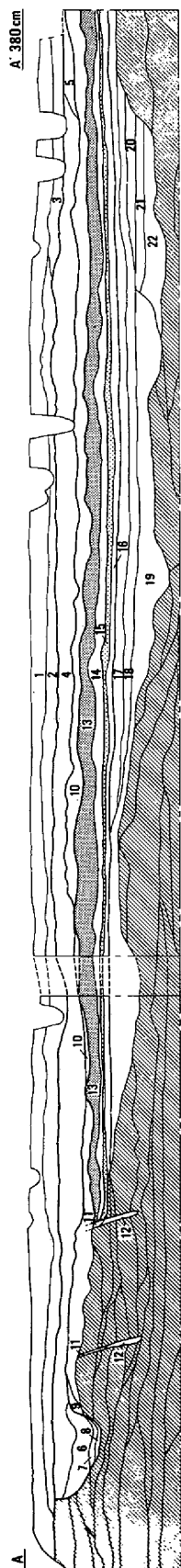
水田層からは高杯、鉢、器台、甕などの土師器が少量出土している。380~385は、短い二重口縁に多条の櫛描沈線をめぐらす壺で、口径は14.8~15.0cmを測る。なだらかな肩部の外表面はハケメで調整し、内表面は薄くヘラケズリする。386~389は「く」字形の口縁をもつ壺である。このうち388は、口縁端部をわずかに上方へつまみあげる。黄橙色をなす胎土には角閃石や金雲母を含み、畿内からの搬入品とみられる。高杯390は杯部を欠いているが、脚柱部は太く中空につくられている。391は小形の器台で、脚径5.7cmを測る。受け部を欠損しているが、直線的に開く脚部と一体につくられている。外



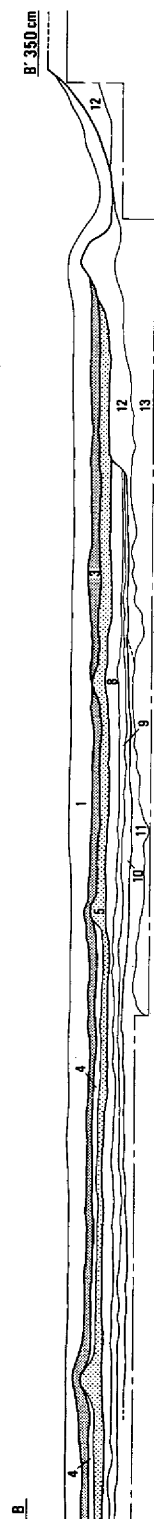
第496図 水田-1 1/600



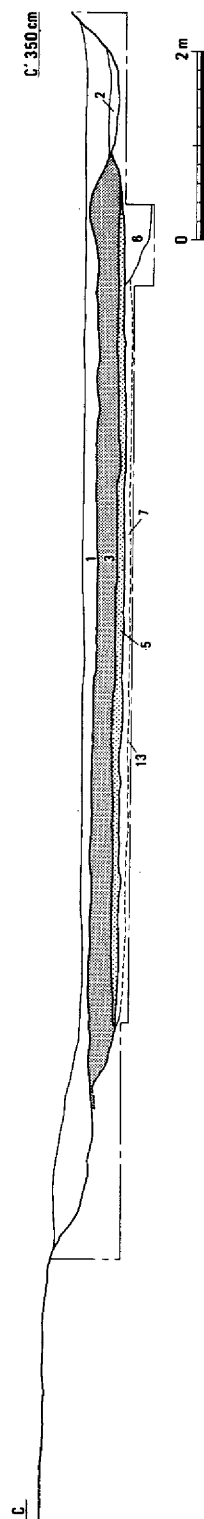
第497図 水田-2 1/600



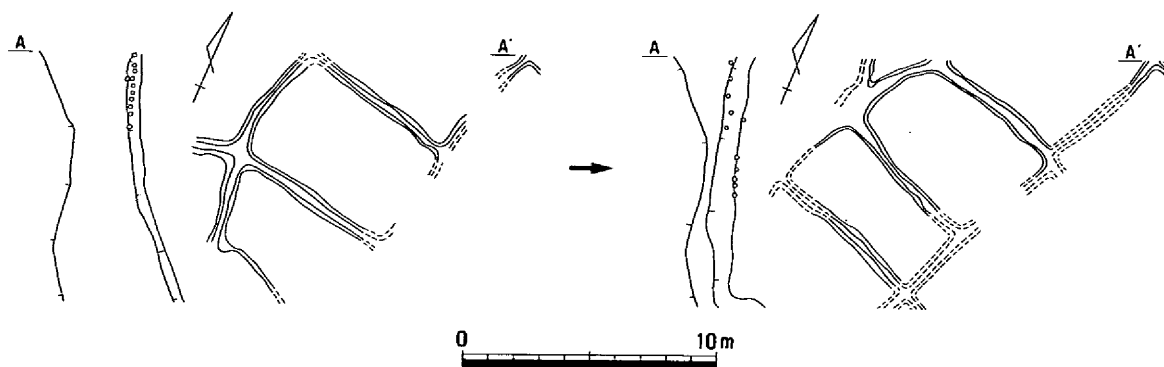
- |                    |                     |               |
|--------------------|---------------------|---------------|
| 1 淡黄褐色砂質土細砂        | 9 淡茶褐色砂質土微砂         | 17 淡黑褐色砂質土微砂  |
| 2 淡茶褐色砂質土細砂        | 10 淡黄褐色砂質土細砂(粗砂まじり) | 18 灰黄色粘性砂質土微砂 |
| 3 灰色砂質土細砂(粗砂まじり)   | 11 灰白色砂質土細砂(杭痕跡)    | 19 黑褐色粘性砂質土微砂 |
| 4 黄褐色砂質土細砂         | 12 灰黑色粘性砂質土微砂(杭痕跡)  | 20 灰褐色粘性砂質土微砂 |
| 5 淡灰色砂質土細砂         | 13 明褐色砂質土微砂細砂(水田-2) | 21 茶褐色粘性砂質土微砂 |
| 6 淡黄褐色砂質土細砂        | 14 灰褐色粘性砂質土微砂       | 22 淡黄褐色砂質土細砂  |
| 7 淡灰褐色砂質土細砂(粗砂まじり) | 15 淡灰地色粘性砂質土微砂      |               |
| 8 淡灰色砂質土細砂         | 16 灰黄色粘性砂質土微砂(水田-1) |               |



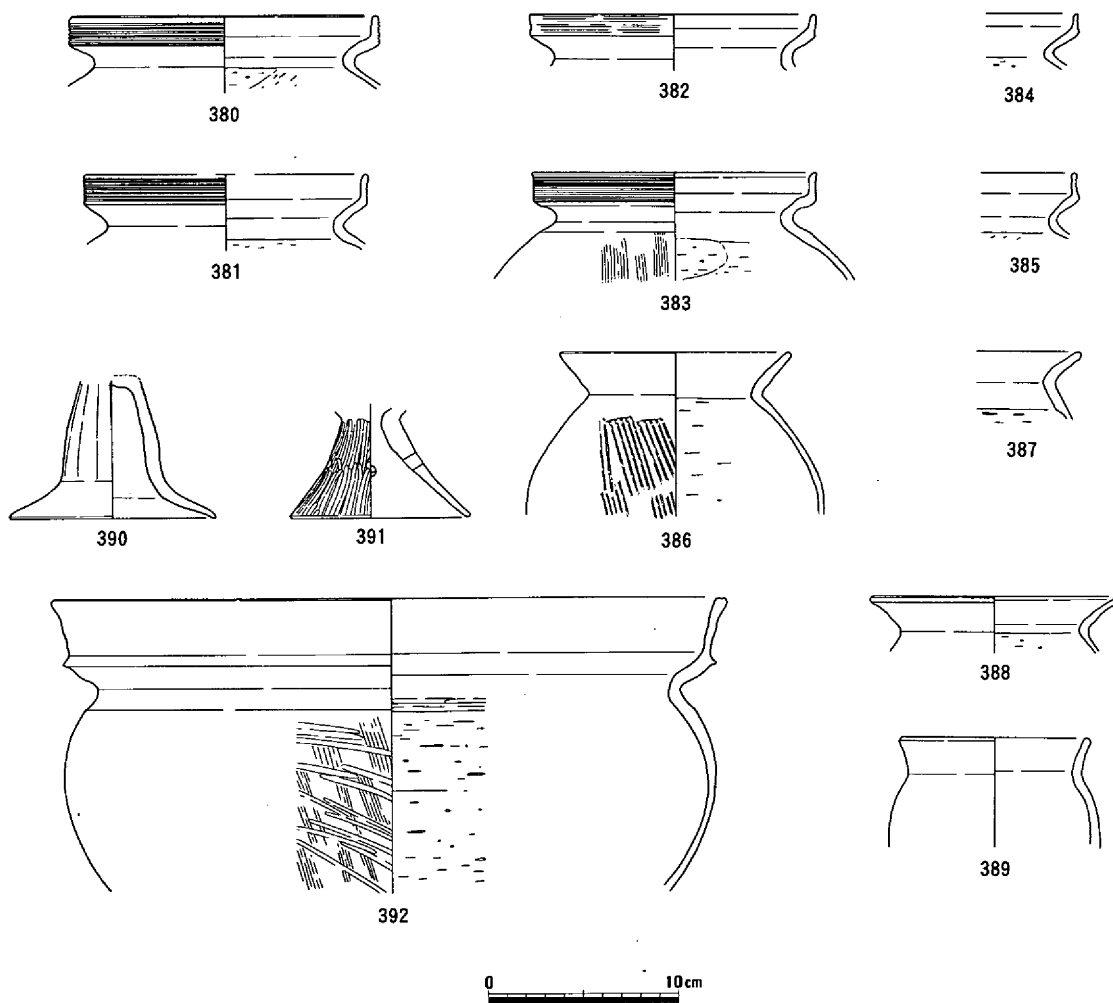
- |                 |            |            |
|-----------------|------------|------------|
| 1 灰褐色砂(洪水砂)     | 6 暗茶灰色粘質微砂 | 11 淡茶灰色粘質土 |
| 2 茶褐色粘質微砂       | 7 黄褐色粘質砂   | 12 茶灰色粘質土  |
| 3 灰色粘質微砂(水田-2)  | 8 褐灰色粘質土   | 13 灰色粗砂    |
| 4 灰色粘質微砂(水田-2)  | 9 灰色粘土     |            |
| 5 淡褐灰色粘質土(水田-1) | 10 淡灰黄色粘土  |            |



第498図 水田-1・2



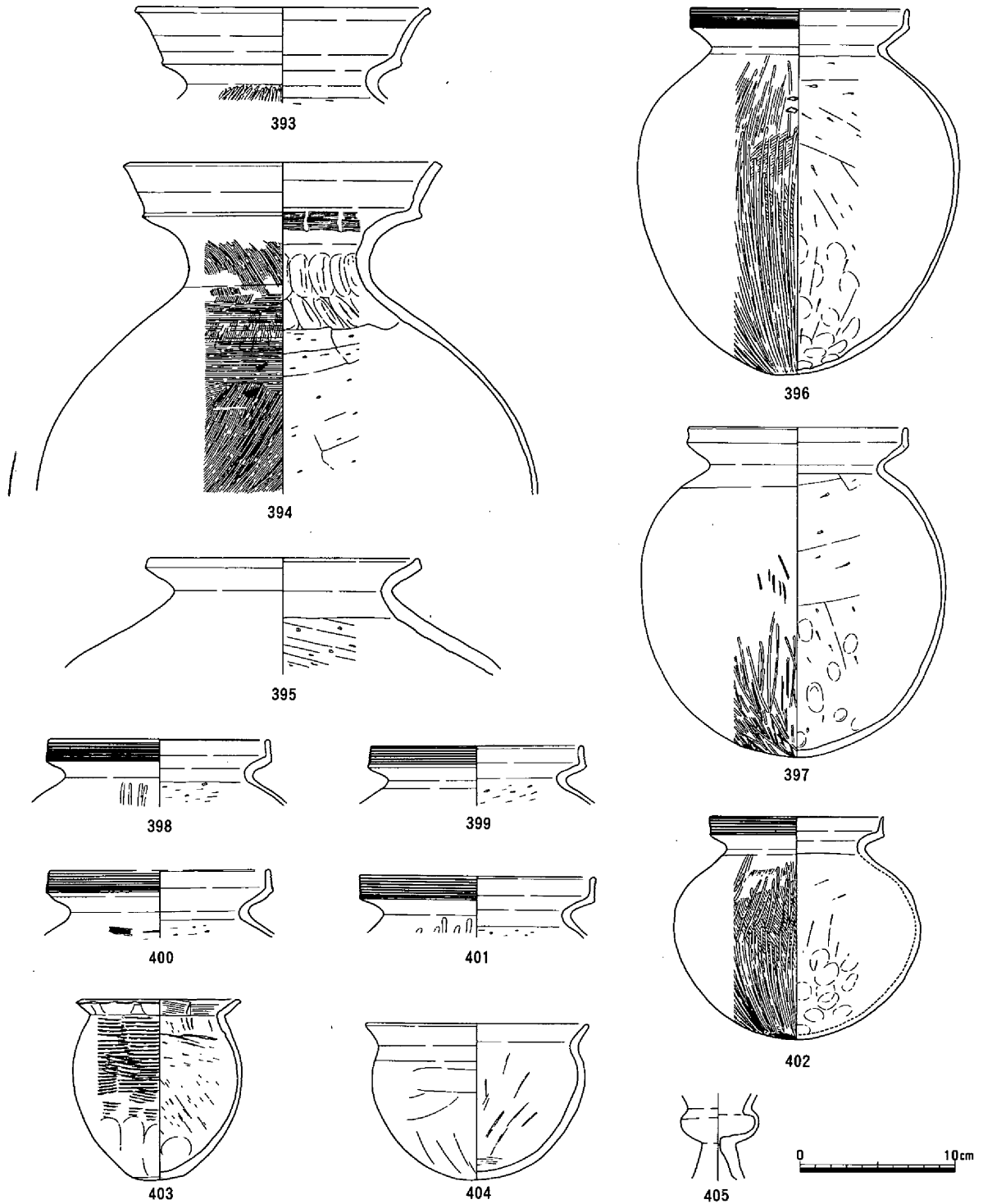
第499図 水田-1・2



第500図 水田-1・2 (380~392)

面は緻密なヘラミガキで調整し、4つの透かし孔を穿つ。392は口径34.8cmを測る大形の鉢で、二重につくる口縁の端部は平面をなす。偏球形をなす体部は外面をハケメのちヘラミガキで調整し、内面はヘラケズリを施したのち丁寧なナデを加える。これらはおおむね古・前・I~II期に属する。

一方、水田-2を覆う洪水砂からも遺物の出土が認められた。これらは少量ながら遺存の良好なものが多い。393・394は二重口縁をもつ壺で、394は中国山間部のものと思われる。396~401は口径13.6

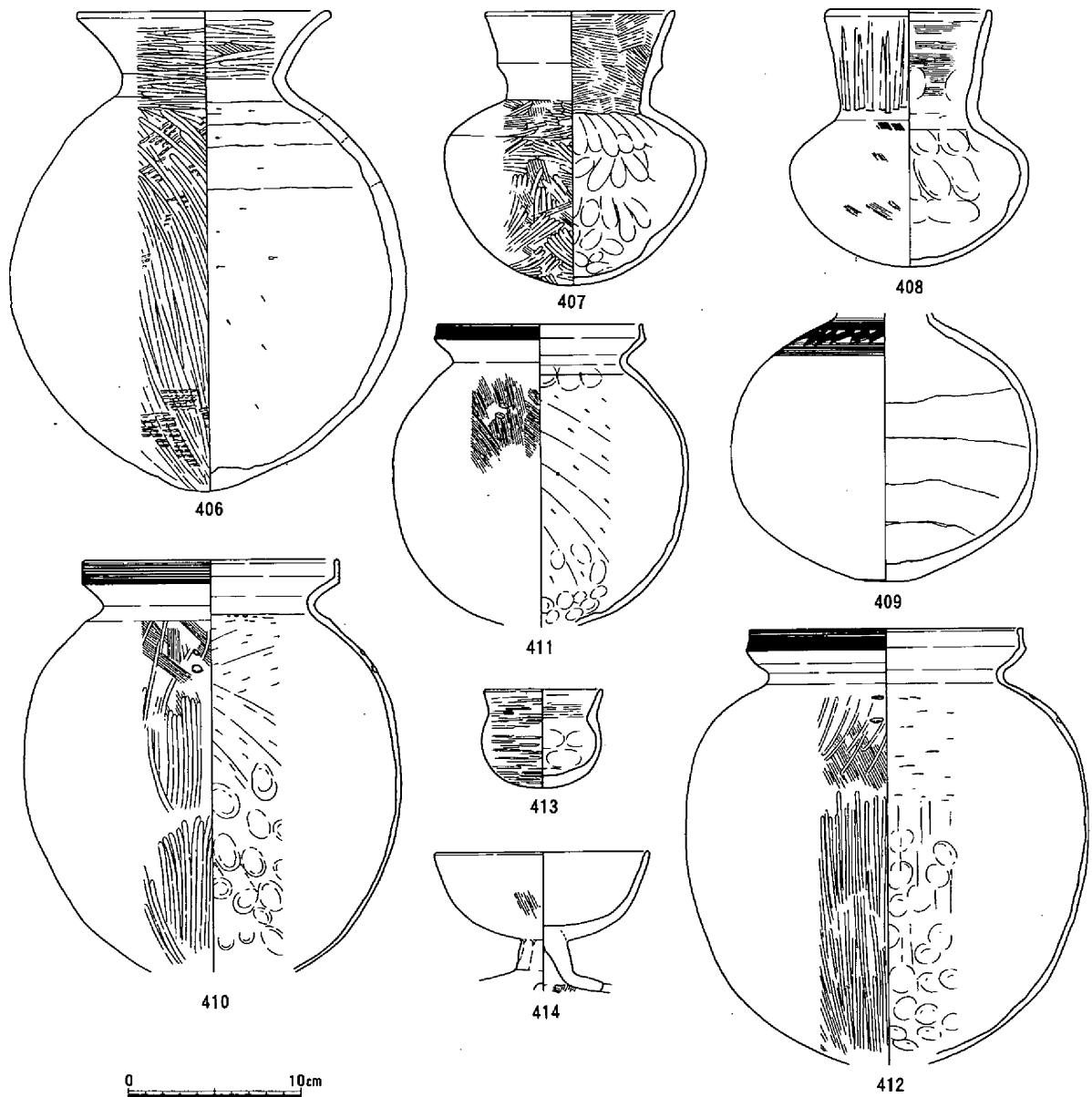


第501図 洪水砂 (393~405)

~15.0を測る中形の甕である。短く上方にのびる二重口縁に多条の櫛描沈線を飾るが、球形の体部をもつ397ではナデを加えている。また、倒卵形をなす396の肩部にはA2型の刺突文が見られる。口径10.0cmを測る403は、く字形をなす口縁部にユビオサエの痕を残す。不明瞭な平底を備えた体部の外面には水平のタキメをとどめ、内面は粗くヘラケズリする。これらの土器は水田-1・2のものと同じく、古・前・I~II期に比定される。(大橋)

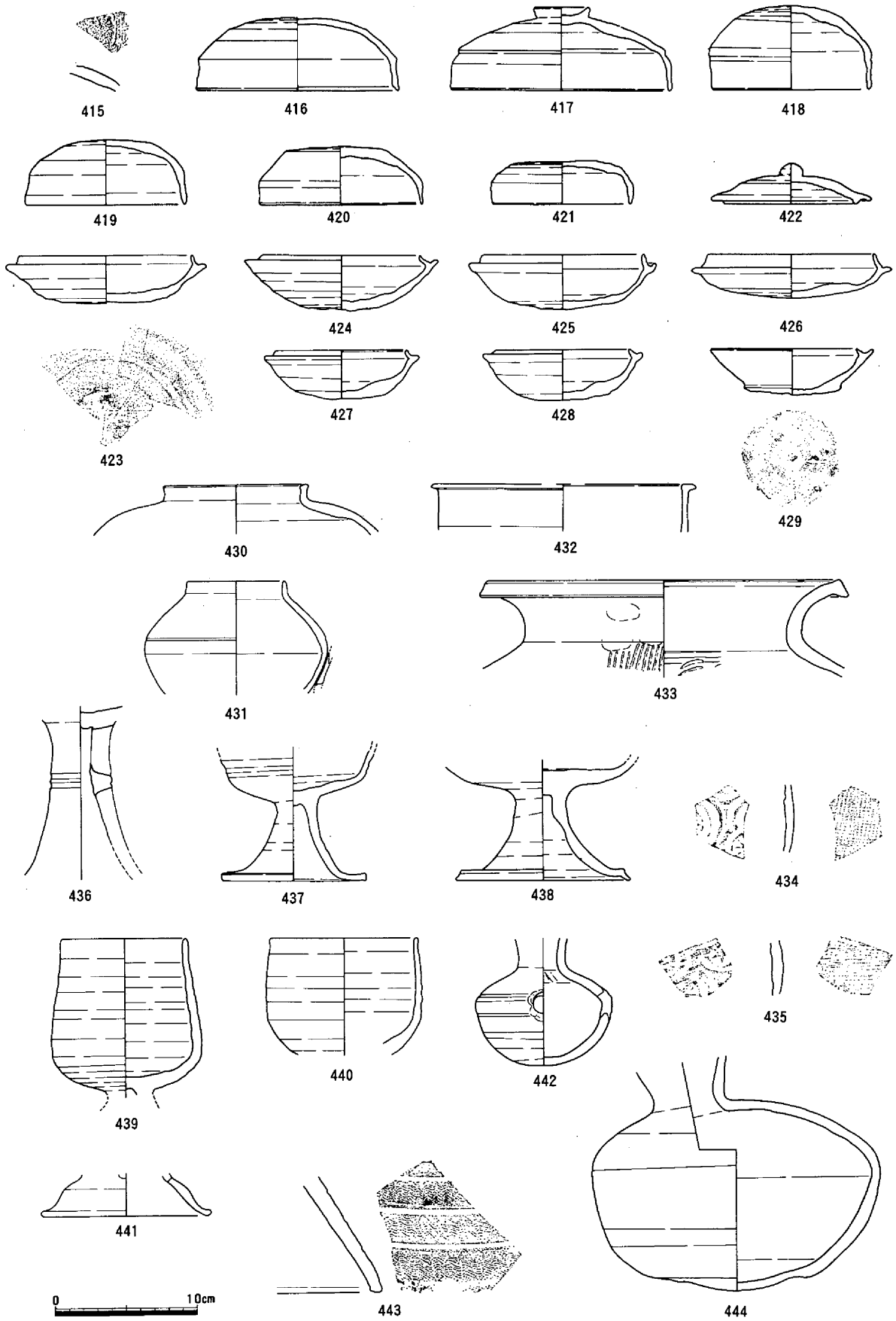
(7) その他の遺構・遺物

前・中期の土器には、壺、甕、鉢、高杯などがある。406は口径14.3cm、器高28.0を測る壺で、尖りぎみの底をもつ体部はタタキを施したのち、ヘラミガキで調整する。口径9.4~10.8cm、器高15.0~16.0cmを測る407・408は小形の直口壺で、407には崩れた二重口縁を呈する。409は口頸部を失っているが、球形をなす体部の肩に楕状工具による波状紋を飾る畿内系の土器である。410~412は、二重につくる口縁部に多条の楕描沈線をめぐらす甕で、411は口径11.7cm、器高47.6cmと小形であるが、口径14.8~15.8cm、器高24.0~25.3cmを測る410・412は中形に属する。いずれも球形をなす体部の肩にA2の刺突文をもつ。413は口径6.8cmを測る小形の鉢で、内外面をヘラミガキで調整する。高杯414は、口径11.8cmを測る碗形の杯部と短い脚部からなる。これらの土器は中期に下る407・408を除いて、おおむね古・前・I~IIに相当し、水田を被覆する洪水砂中の遺物と近似した時期を示す。



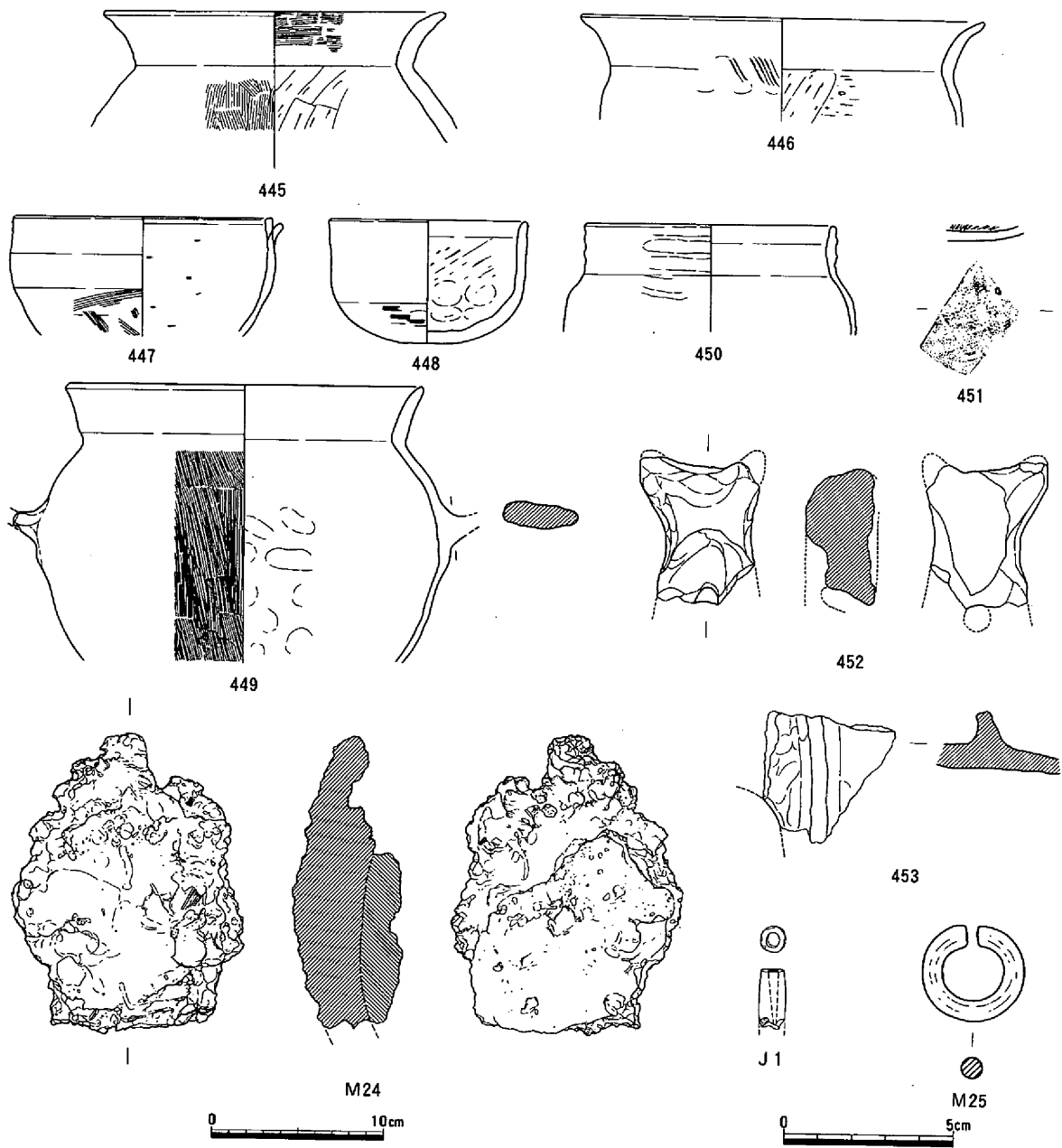
第502図 包含層 (406~414)





第503図 包含層 (415~444)

415～444は須恵器である。416は口径14.2cmを測る蓋で、口縁端部には内傾する凹面をもち、右方向にヘラケズリする天井部との間に鈍い稜をなす。口径11.5cmを測る420は、平坦な天井部をヘラキリのまま仕上げている。擬宝珠形をつまみをもつ422は口径9.0cmで、内面に低いかえりをもつ。杯423～429のうち、口径11.2～12.0cmを測る423～426は底部を右方向にヘラケズリする。427～429は口径9.0～9.2cmと小形で、平坦な底部はヘラキリ後の調整を省略する。430・431は短頸壺であるが、大形の430は奈良時代まで下る可能性もある。高杯はいずれも杯部を欠いているが、大形436と小形437・438とがあり、436は長い脚部に2方2段の透かしを飾る。439～441は口径8.6～10.3を測る深い椀に円孔を穿つ低い脚台を備えた台付椀である。443は甕の口縁部で、3段にわたり波状紋を飾る。土師器には壺や鉢、鍋のほかカマドや支脚がある。甕445・446は口径19.6～22.6cmを測り、外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整する。447・448は丸底の鉢で、口径11.3～13.6cmを測り、447には片



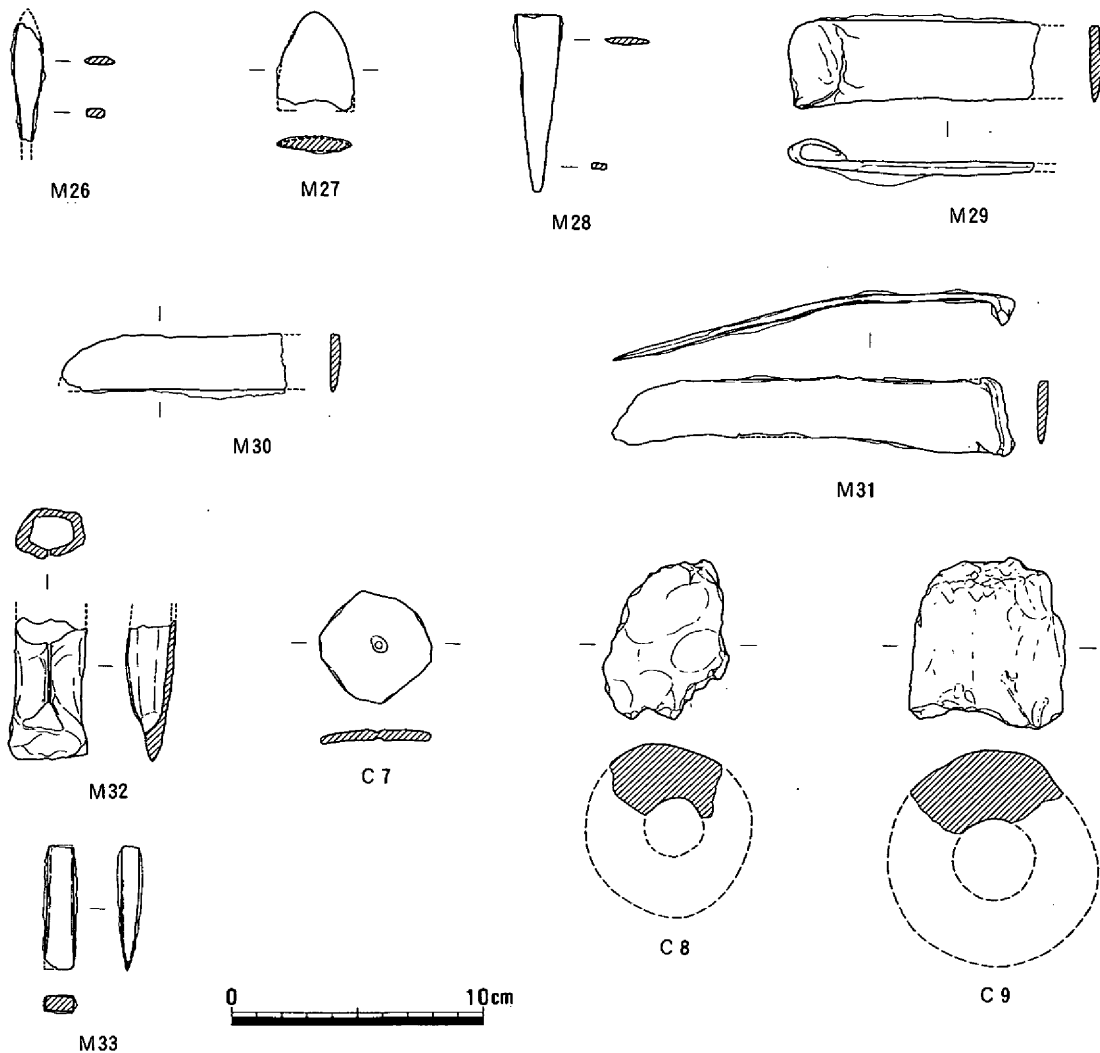
第504図 包含層 (445～453・M24・M25・J1)

口がつく。450は製塩土器で、口縁部が窄まる鉢形を呈する。口径20.4cmを測る449は球形の体部をもつ鍋で、側面には扁平な把手を貼りつける。452は土製支脚で、2本の短い腕を備えている。

金属製品には、鉄鏃、鉄鎌、鉄斧、鉄鏝、耳環などがある。M25は径0.6cmの銅芯を曲げた耳環で、径3.0cmを測る。M26～M28は鉄鏃であり、うちM26は長頸鏃と見られる。M27は長さ3.9cm、幅3.1cmの三角形をなす身部をもつ平根鏃で、茎を欠損している。長さ7.0cm、幅1.9cmを測るM28は、方頭形の平根鏃と推定した。M29～M31は鉄鎌で、遺存のよいM31は長さ15.7cm、幅3.1cmを測る。M29は左に、M31は右に基部を折り曲げて装着している。M32の鉄斧は、袋状をなす基部を欠いているが、刃部幅は3.1cmを測る。M33は鏝と見られるが、長さ4.9cm、幅1.3cm、厚さ0.7cmと小形である。なお、M24は椀形滓が2個体融着したものである。

土製品には円板形土製品C7と羽口C8・C9がある。C7は土器片を径4.5cmの円形に加工したもので、両面から穿孔を行っているが、貫通していない。紡錘車の未製品と見られ、前期に遡るものと思われる。C8・C9は径7～8cmに復元される大形の羽口で、送風孔の径は2～3cmを測る。

これらの須恵器、土師器、金属製品、土製品はおおむね古墳時代後期に属し、集落の時期と矛盾しない。 (大橋)



第505図 包含層 (M26～M33・C7～C9)

## 第4節 古代の遺構と遺物

### (1) 概要

本節では、古代、奈良・平安時代の遺構と遺物について説明する。ここで記述する高田調査区で明らかとなった奈良・平安時代の遺構は、掘立柱建物19棟、土器埋納壙3基、土壇4基、たわみ3カ所、溝16条である。以下、これらの概要について触れてみる。

掘立柱建物は、柱穴出土遺物の少なさから時期判定に困難をきわめたが、数少ない出土土器と、建物規模、棟方向、柱穴の形状、埋積土の差違などからこの時期のものと判断された。また、大きくは8世紀前半を中心とした奈良時代のものと、平安時代のものとが明らかにされた。このほかにも、柱穴がO20区を中心とした地区に数多く検出されており、掘立柱建物としてはまとまって認識できなかったものの、先に触れた19棟以上の建物が位置していたことは疑いないものと思われる。

掘立柱建物と関連して注目されるのは本書で土器埋納壙とした遺構である。これらのうち、土器埋納壙-2からは二彩小壺、土器埋納壙-3からは土師器の甕の中から和同開珎とともに分析によって人の脂肪酸の可能性が高いものが確認された。このことから、袍衣容器、あるいは地鎮に際したものと判断されたものであり、これらの風俗を習熟する当時の貴族階級の居宅地域であったと推測する材料となった。また、このことは中屋調査区で確認されている奈良時代の官衙関連遺構である長方形大形区画溝の存在と相まって、この時期の土地利用のあり方、生活習俗など多岐にわたって新たな資料をもたらした。このほかの遺構としては、土壇、たわみ、溝がある。たわみとして扱ったのは、比較的多くの土器を包含した大形のくぼみ地形であり、この埋積土中から稜椀が出土するなど注目される遺物もあり、当時の支配者層の生活用具の廃棄場としての性格を併せ持っていたものと推測される。溝は、古墳時代後期にみられた区画を意識したものを一部踏襲しており、これらの溝によって先に触れた貴族階級の居宅地の区画がなされていた可能性も示唆される。

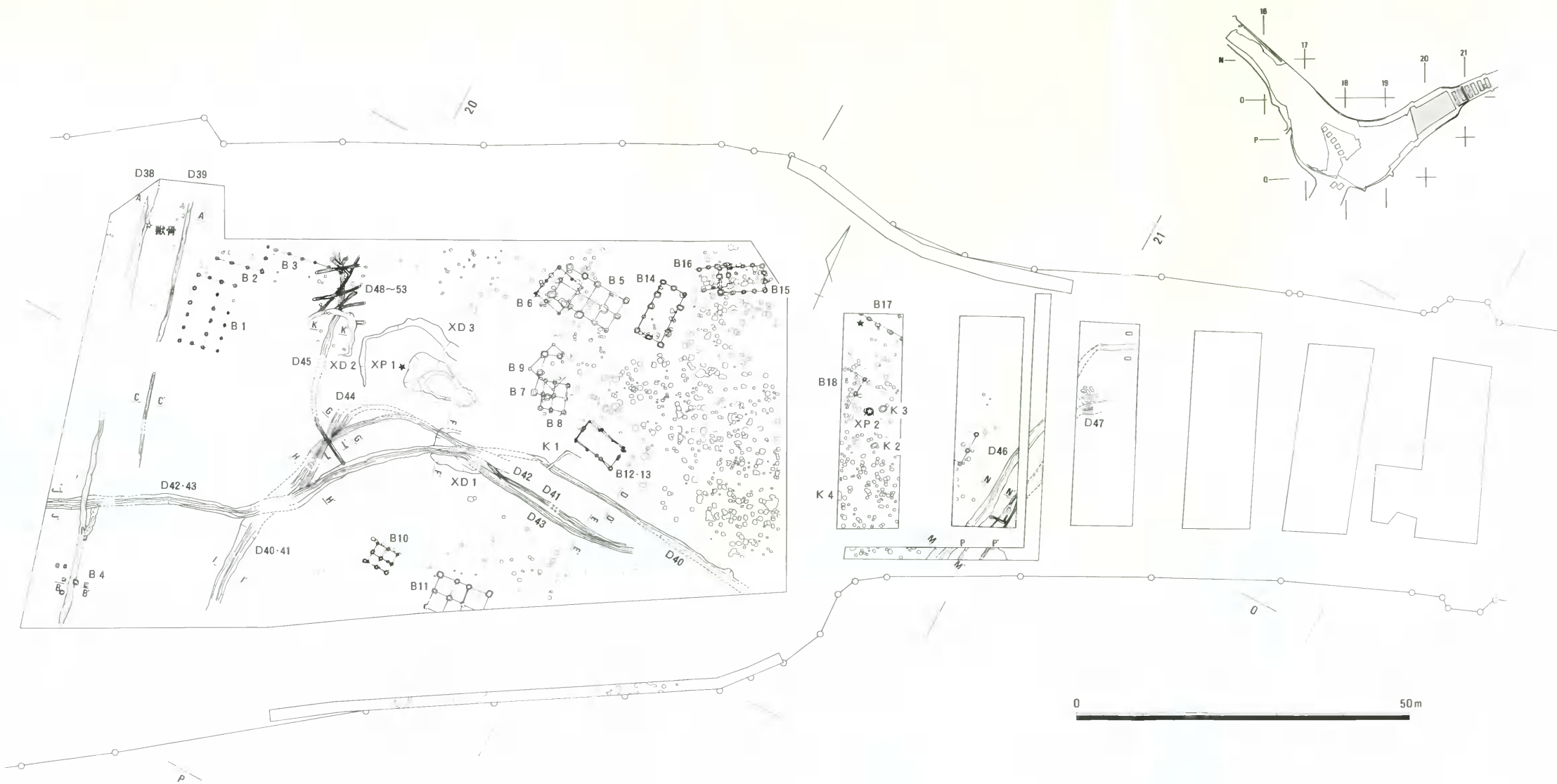
以上のほかに遺構検出中に出土したため遺構が確定できなかった遺物、および中世以降の遺構に明らかに混入したと思われる該当期の遺物について本節の最後にあわせて掲載した。 (大橋)

### (2) 掘立柱建物

#### 掘立柱建物-1 (第510図・図版132)

O19区の北東に位置する南北棟で、棟方向はN-8°-Wを指す。身舎は梁間2間、桁行5間で、東側に庇を有する。身舎の床面積は約37㎡である。桁行の柱間は、5間あるうち東西両辺とも同一で、中央のみ190cmと狭くなっている。また梁間も南北揃っており、規格性の高い建物と言えるであろう。身舎の柱穴P1~P14の平面形態は、やや角はとれているが方形を呈し、おおよそ40~50cm四方の規模を測る。断面も台形に近く、深さは30~40cmである。また、それぞれの柱穴で、直径20cm前後の柱痕跡が確認されている。一方、庇の柱穴P15~P19は円形に近く、規模も1辺30cm程度とひとまわり小さく、深さも20cm前後と浅い。

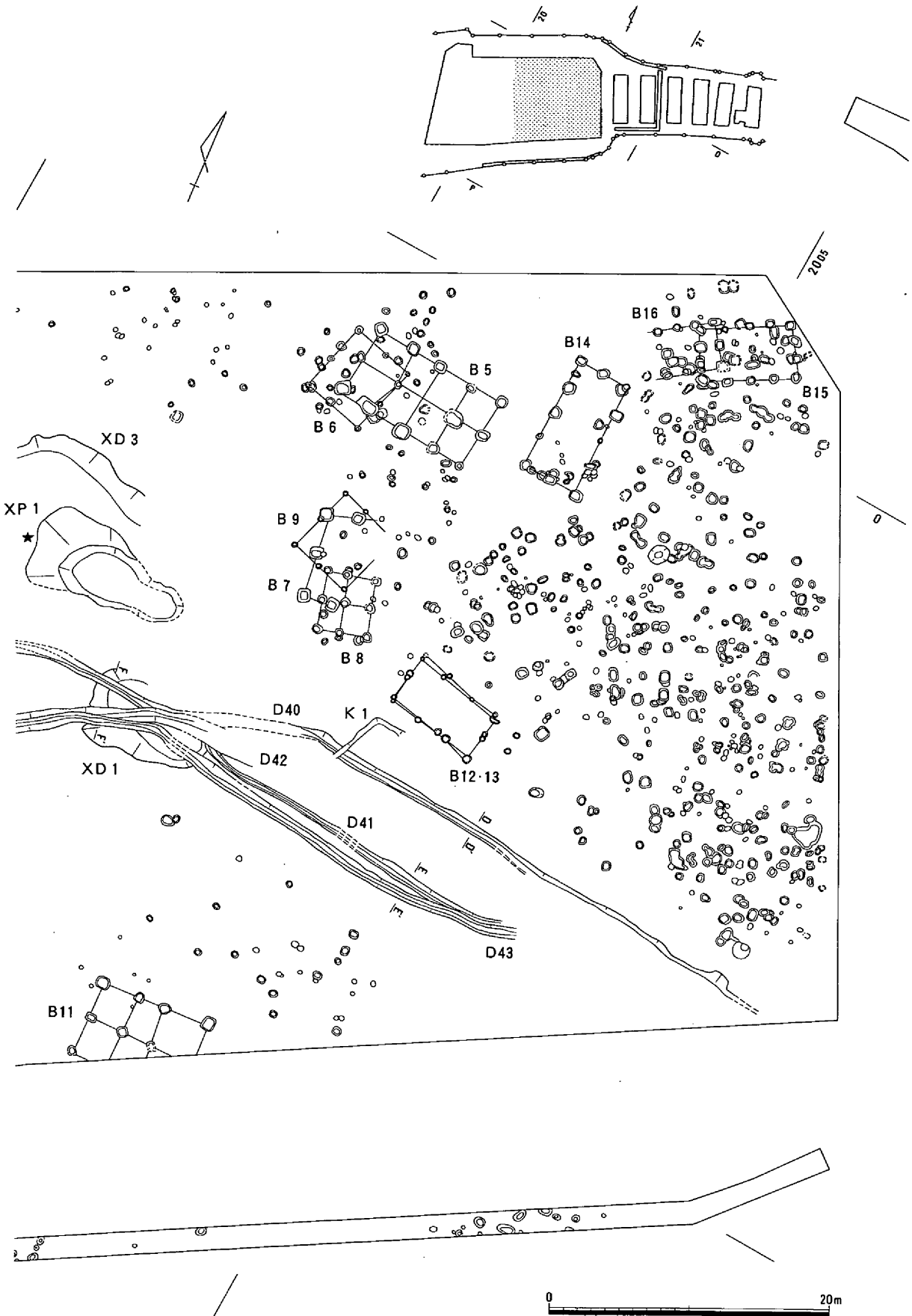
時期は、P11からの黒色土器椀の高台細片が出土しており、平安時代と考えられ、西に平行する溝-38・39と何らかの関係が想定される。 (久保)



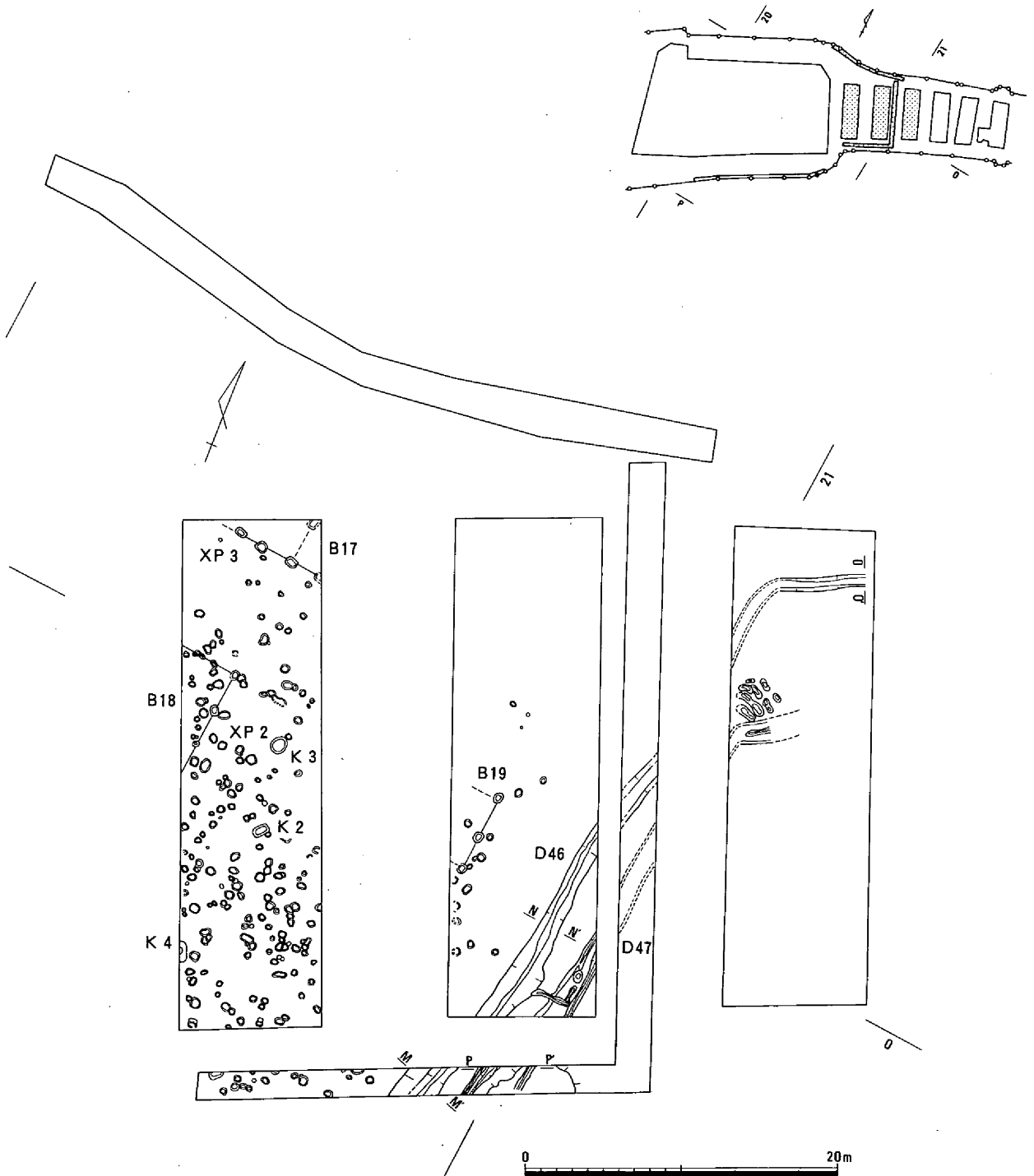
第506図 高田調査区古代遺構全体図 1/600



第507図 高田調査区古代遺構配置図(1) 1/400

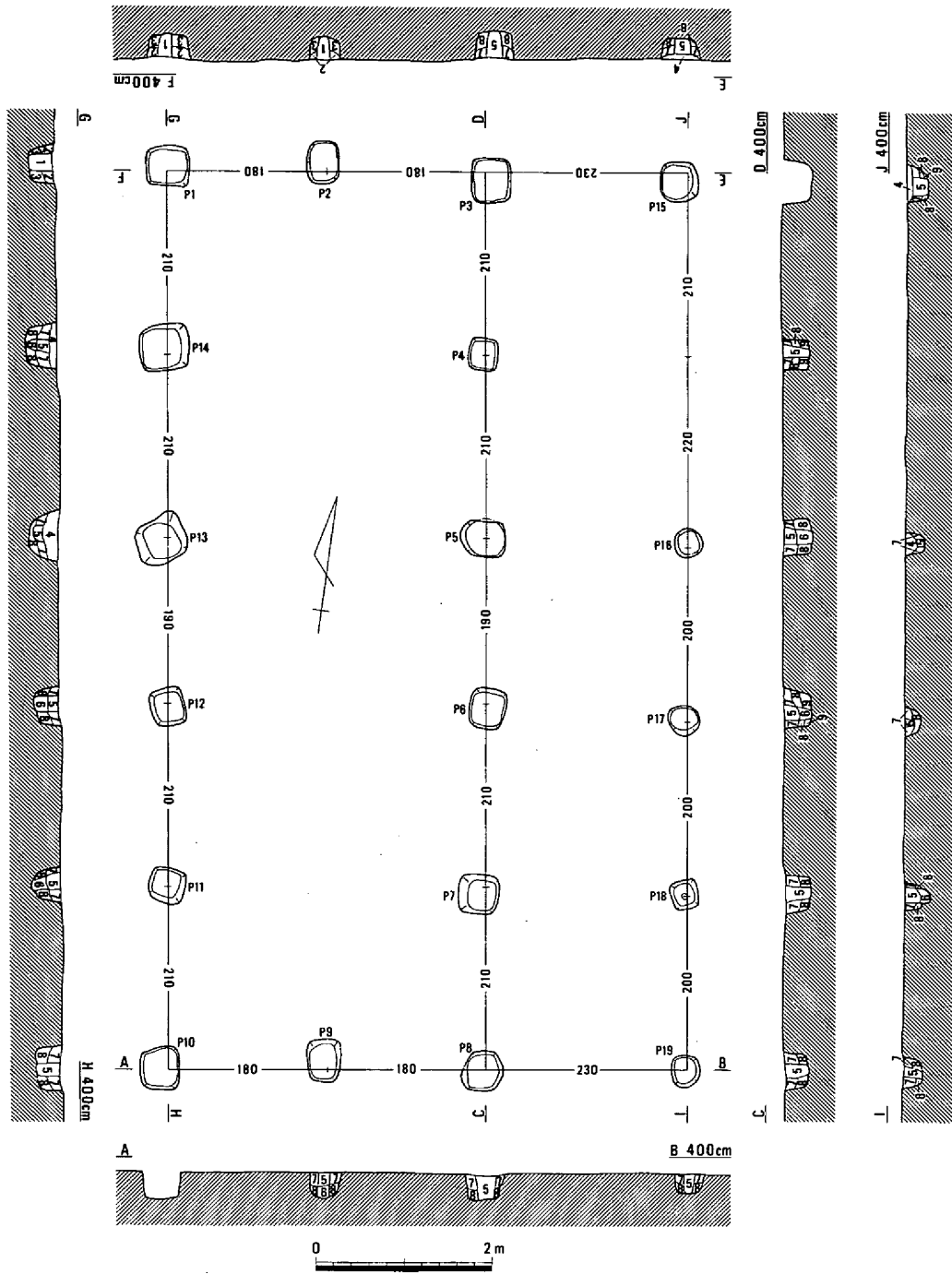


第508図 高田調査区古代遺構配置図(2) 1/400



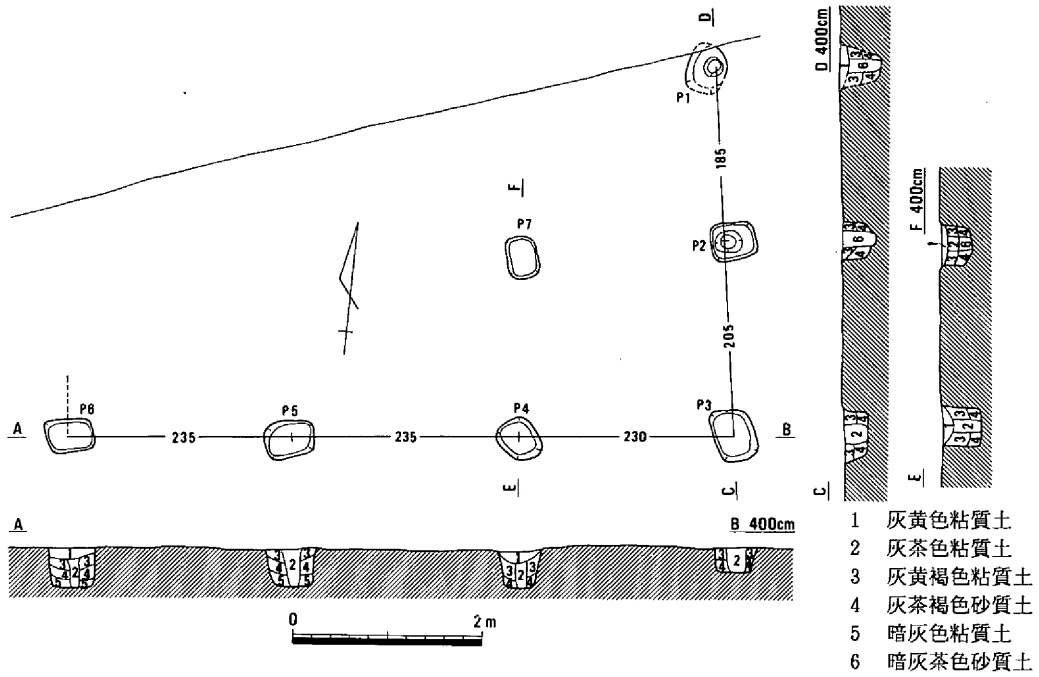
第509図 高田調査区古代遺構配置図(3) 1/400





- |           |            |           |
|-----------|------------|-----------|
| 1 灰茶色粘質土  | 4 暗褐色粘質土   | 7 暗茶褐色粘質土 |
| 2 灰褐色粘質土  | 5 灰茶褐色粘質土  | 8 暗灰褐色砂質土 |
| 3 灰茶褐色粘質土 | 6 暗黄灰褐色粘質土 | 9 暗灰色粘質土  |

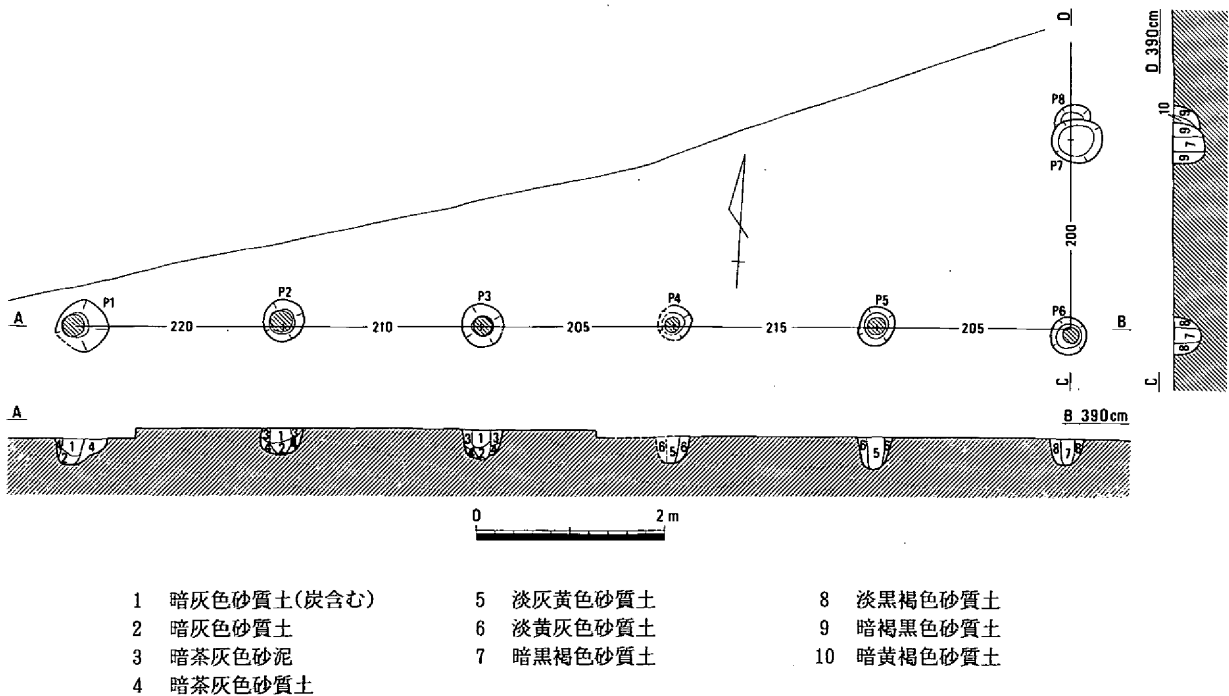
第510図 掘立柱建物 - 1



第511図 掘立柱建物-2 1/80

掘立柱建物-2 (第511図)

掘立柱建物-1の北約2.5mに位置する。北側は調査区外となるため、東西3間、南北2間しか検出されておらず、全容は不明である。しかし、柱間は東西辺より南北辺が短く、南北側を梁間側に想定している。柱穴の平面形態は方形に近く、1辺40~50cm、深さはP3が20cmと浅いが他は40cm前後を測り、掘立柱建物-1の柱穴と類似している。東西の軸も掘立柱建物-1とほぼ平行しており、同時期に併存していた可能性が考えられる。(久保)



第512図 掘立柱建物-3

掘立柱建物－3（第512図）

〇19区の北東付近に所在し、掘立柱建物－2・3の近隣に位置する。調査区境により北側の状況は不明である。規模は現状において5×1間であり、棟方向はN-86°-Eを示す。柱間寸法は桁205～220cm、梁200cmであり、梁間は不明であるが桁行は1050cmを測る。柱穴の掘り方は円形であり、その規模は長径38～52cm、短径38～51cm、深さ28～35cmを測る。

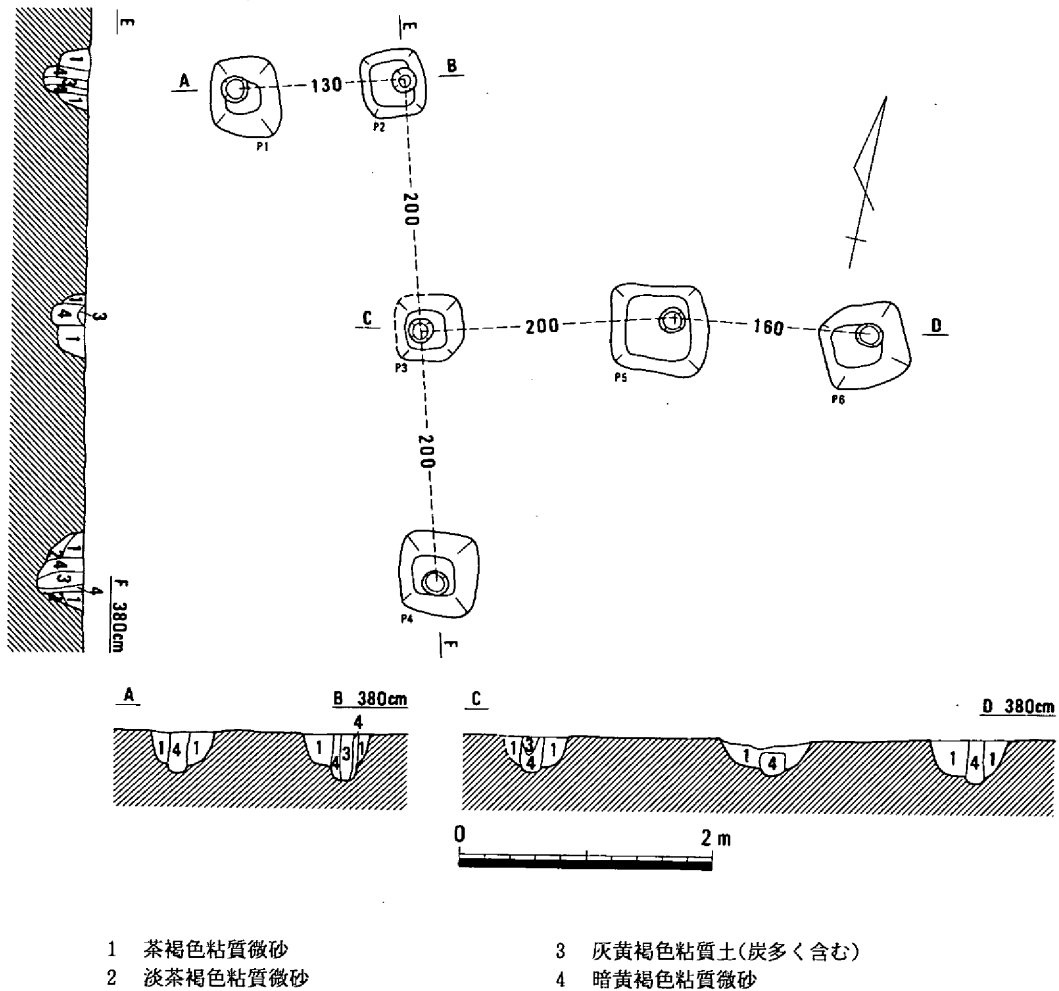
図化し得ていないが、少量の丹塗り土師器と内面黒色の黒色土器の破片2点が柱穴埋土より出土しており、遺構の時期は平安時代であると思われる。（澤山）

掘立柱建物－4（第513図）

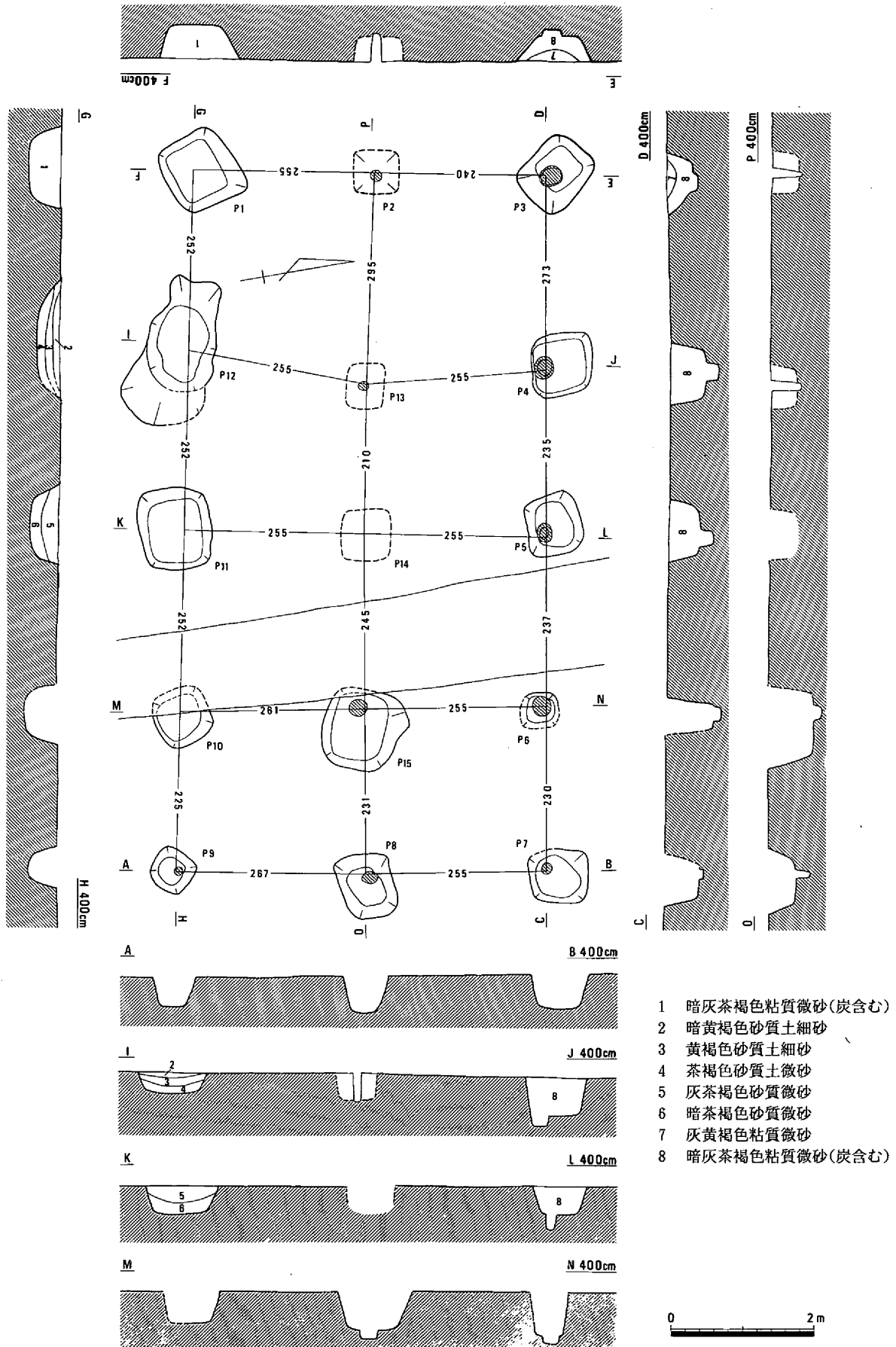
掘立柱建物－4は、高田調査区南西端に位置する。削平が著しく、すべての柱穴は確認されなかったが、総柱の建物になると推測される。ただし、建物以外の遺構の可能性も残されている。また、溝-38を切っている。柱穴の掘り方は方形で、規模は53～87cm×50～72cm、深さ27～38cmを測り、すべての柱穴に径20cmの円形の柱痕跡が認められた。柱間は200cmであるが、P1・P2間が130cm、P5・P6間が160cmと短い。出土遺物は認められないが、時期は古代の範疇に納まるとされる。（柴田）

掘立柱建物－5（第514・515図・図版164）

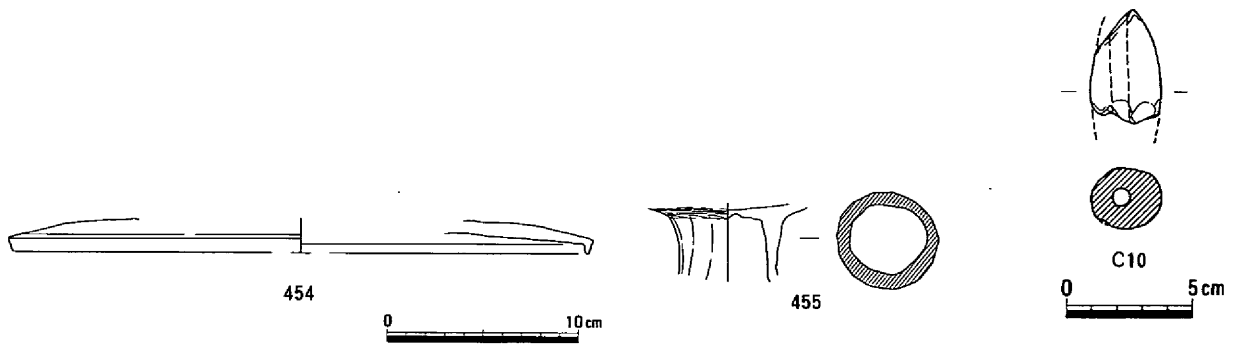
掘立柱建物－5は、掘立柱建物－6と重複し、高田調査区中央、〇20区中央北部に位置する。棟方向はほぼ東西で、4×2間の総柱建物になると推測される。桁行総長は982cm、梁間総長は520cmを測



第513図 掘立柱建物－4



第514図 掘立柱建物-5

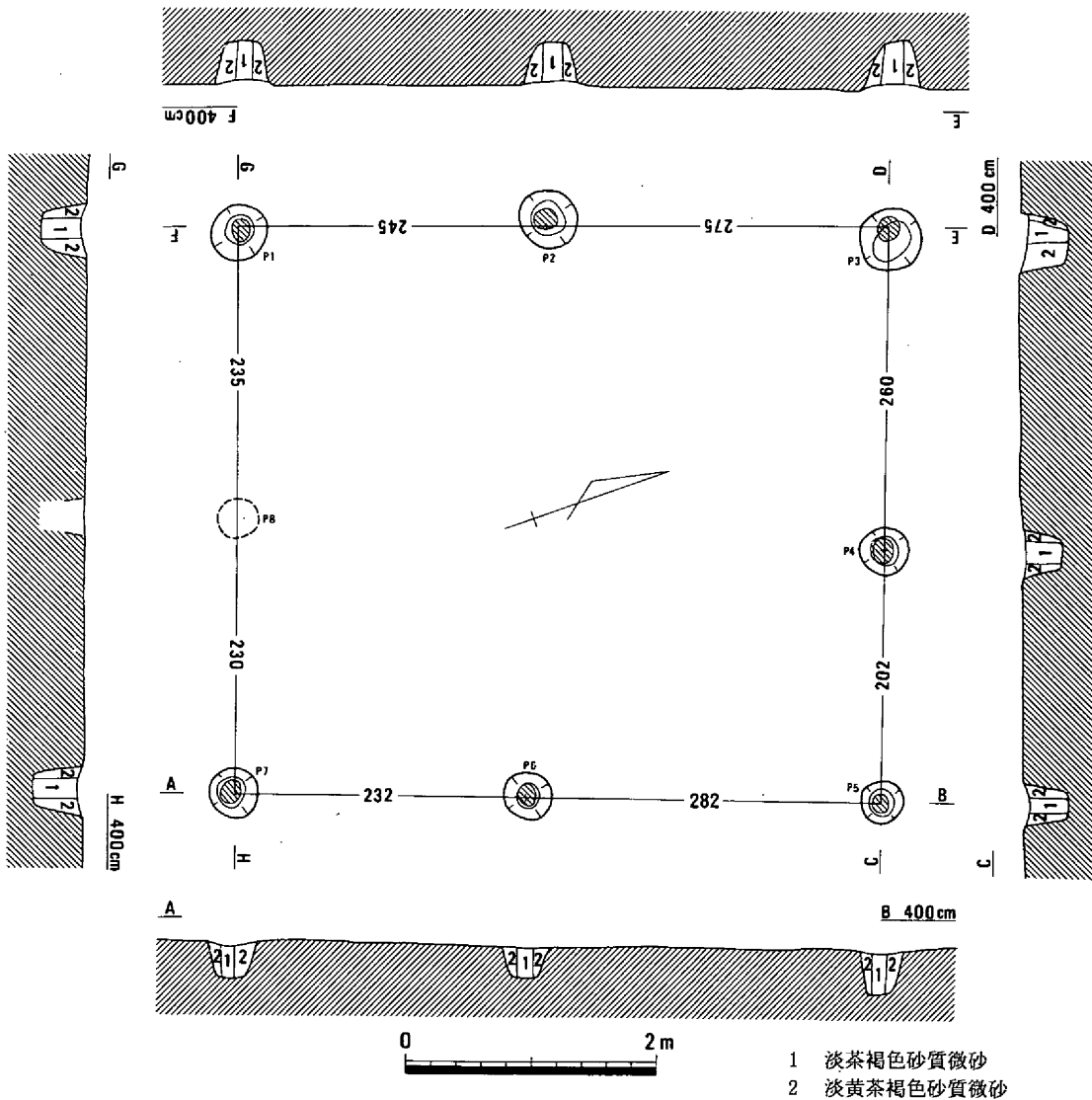


第515図 掘立建物-5 (454・455・C10)

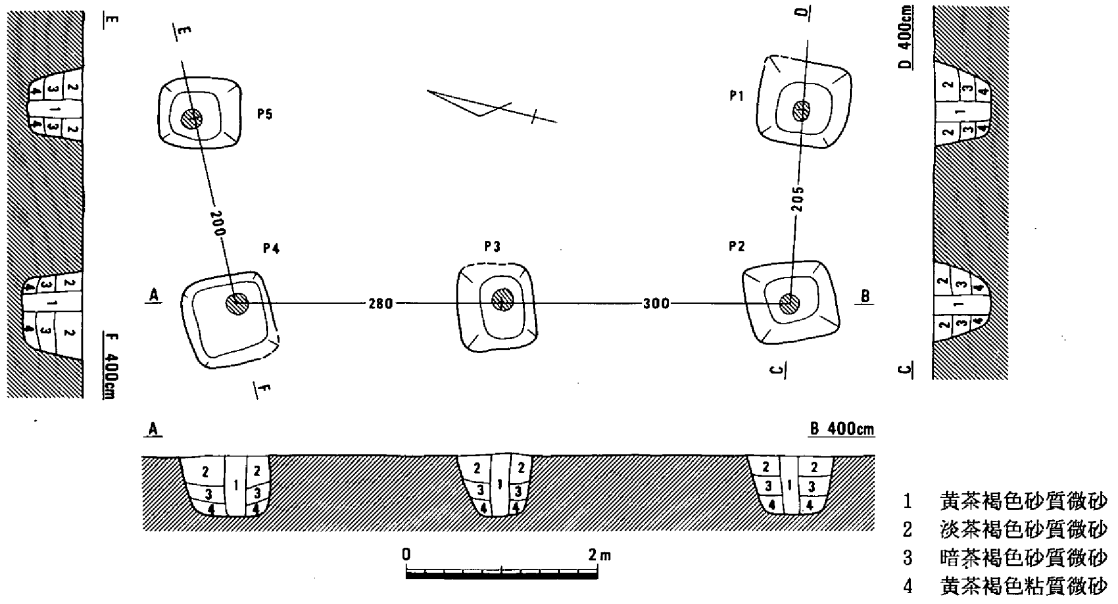
り、柱間は240cm前後である。柱穴の掘り方は方形で、規模はおおよそ80~100cm前後、深さ32~72cmを測るが、掘り方の方向や規模などの不均等が目立っている。10本の柱穴で径20~30cmの円形の柱痕跡が認められる。柱穴埋土から須恵器蓋454、土師器高杯455、土錘C10が出土している。

時期は古代の範疇に納まると思われる。

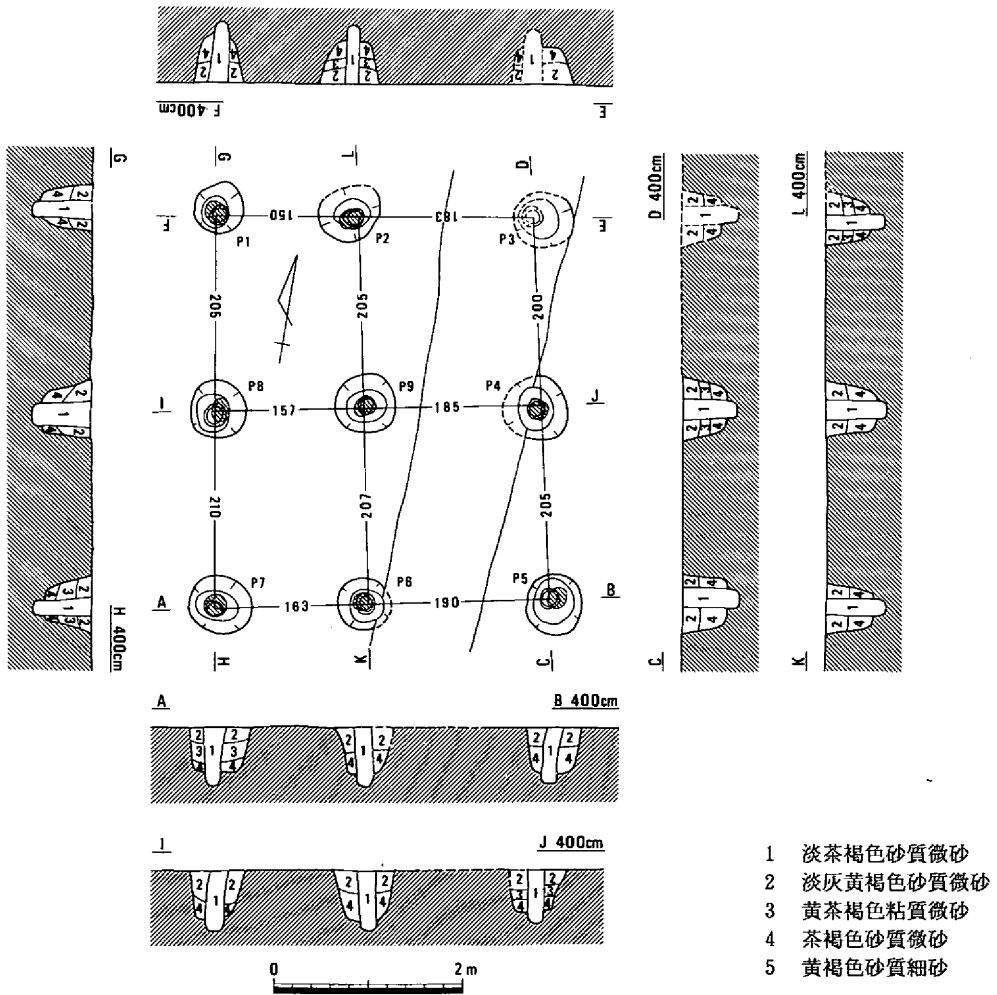
(柴田)



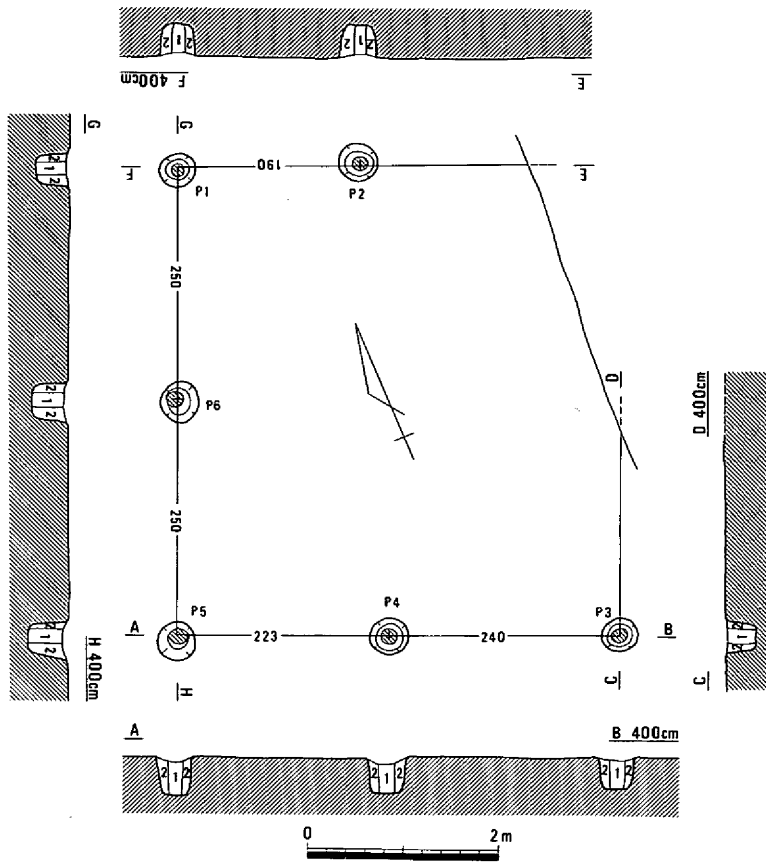
第516図 掘立柱建物-6



第517図 掘立柱建物-7



第518図 掘立柱建物-8



- 1 淡茶褐色砂質微砂
- 2 淡黄茶褐色砂質微砂

第519図 掘立柱建物-9

59に切られており、東辺の柱穴は確認されなかったが、2×2間の建物になると推測される。棟方向はほぼ南北である。桁行総長は580cmを測り、北西隅は開いている。柱間は桁行280~300cm、梁間200cm程度である。柱穴は方形で、規模は90cm前後、深さ60cm程度である。すべての柱穴で径20cmの円形の柱痕跡が認められる。時期は古代の範疇に納まると思われる。(柴田)

掘立柱建物-8 (第518図)

掘立柱建物-8は、高田調査区中央に位置し、掘立柱建物-7・9と重複する。溝-59に切られているが、2×2間の総柱建物になることが確認されている。棟方向はほぼ南北で、桁行総長415cm、梁間総長353cmを測る。柱間は桁行で210cm程度、梁間で150~190cmである。柱穴の掘り方は円形で、径52~68cm、深さ52~66cmを測る。すべての柱穴において径20cm程度の円形の柱痕跡が認められる。出土遺物は認められないが、時期は古代の範疇に納まると思われる。(柴田)

掘立柱建物-9 (第519図)

掘立柱建物-9は、高田調査区中央に位置し、掘立柱建物-7・8と重複する。溝-59に切られており、北東隅の柱穴は確認されなかったが、2×2間の建物である。棟方向はほぼ南北で、桁行総長500cm、梁間総長463cmを測る。柱間は桁行で250cm、梁間で190~240cmである。柱穴の掘り方は円形で、径40cm前後、深さ40cm程度である。すべての柱穴において径16cm程度の円形の柱痕跡が認められる。出土遺物は認められないが、時期は古代の範疇に納まると思われる。(柴田)

掘立柱建物-6 (第516図)

O20区の北西付近に位置し、掘立柱建物-5とは切り合い関係が認められる。規模は2×2間であり、棟方向はN-20°-Eを示す。柱間寸法は桁232~282cm、梁203~260cmであり、桁行は514・520cm、梁間462~465cmを測る。面積は23.8㎡である。柱穴の掘り方は円形であり、規模は長径35~51cm、短径34~50cm、深さ23~42cmを測る。

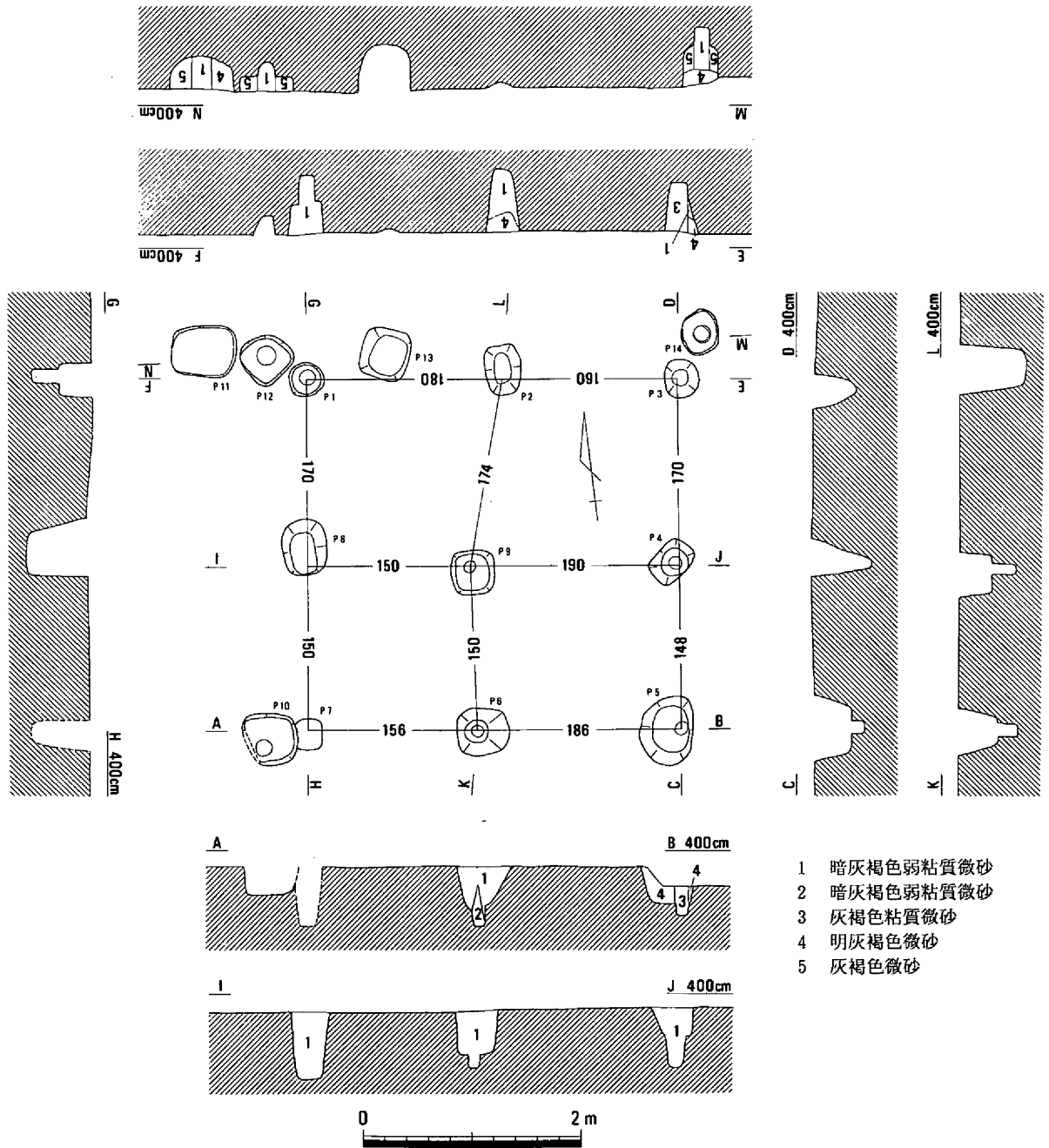
遺物は少量の丹塗土師器の破片が柱穴埋土より出土しており、これらの遺物から遺構の時期は古代の範疇であると思われる。(澤山)

掘立柱建物-7 (第517図)

掘立柱建物-7は、高田調査区中央に位置し、掘立柱建物-8・9と重複する。溝-

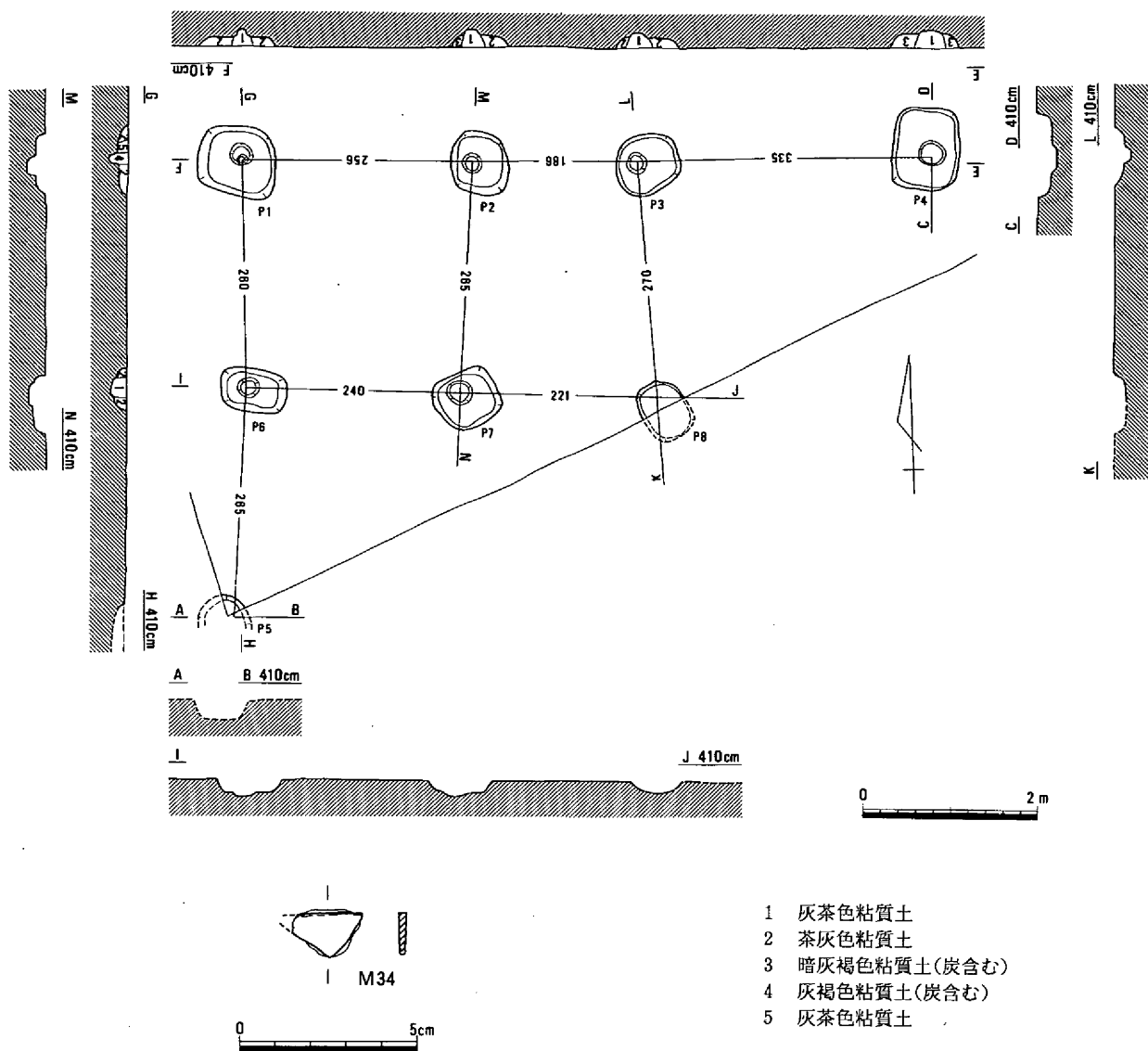
掘立柱建物-10 (第520図・図版132)

〇20区中央やや南西部に位置する。溝-40・41に画された南側に所在し、この箇所には掘立柱建物-11との2棟が検出された。棟方向をN-84°-Wにとる2×2間の総柱であり。桁行340cm、梁間324cmを測り、建物面積は約11㎡である。柱穴掘り方は方形を意識するものと思われ、最も深いもので49cm残存していた。また、北側の側柱の外側に列をなすP11~P14を検出しており、これらがこの建物と有機的な関係にあるものと思われるが、建て替えを示唆するものか、それ以外の要因によるものかは不明であった。建物方位、柱穴の形態、埋土などから奈良時代の可能性を考えている。(大橋)



第520図 掘立柱建物-10





第521図 掘立柱建物-11 (M34)

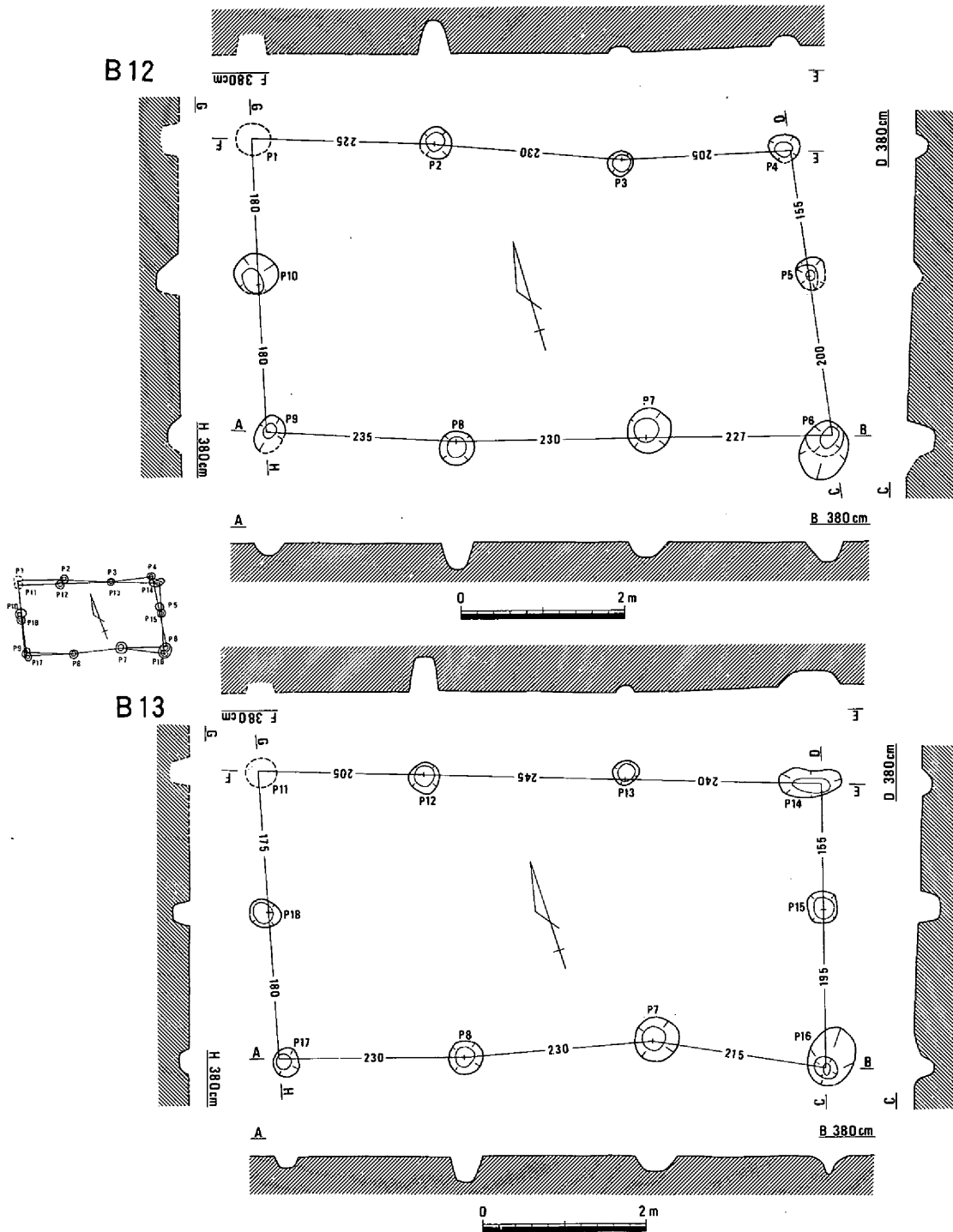
掘立柱建物-11 (第521図・図版133)

掘立柱建物-10の約7m東に位置し、北側の側柱の列をほぼ揃えており、建物方位もほぼ近似する。3×2間の総柱建物と判断されるが、南東部の4本の柱は調査区外に位置し検出していない。棟方向を東西に取り、桁行777cm、梁間525cmを測った。建物面積は約40㎡ある。柱穴の平面形はややいびつな方形であり、最も大きなもので一辺95cmの規模をもつ。なお、深さは75cm残存していた。

柱穴からの出土遺物は図示したM34の三角鉄片と7世紀初頭段階の須恵器の小破片があるが、これは重複する竪穴住居の遺物が柱穴埋土に混入したものと判断される。この建物の時期も奈良時代の中におさまるものと推測している。 (大橋)

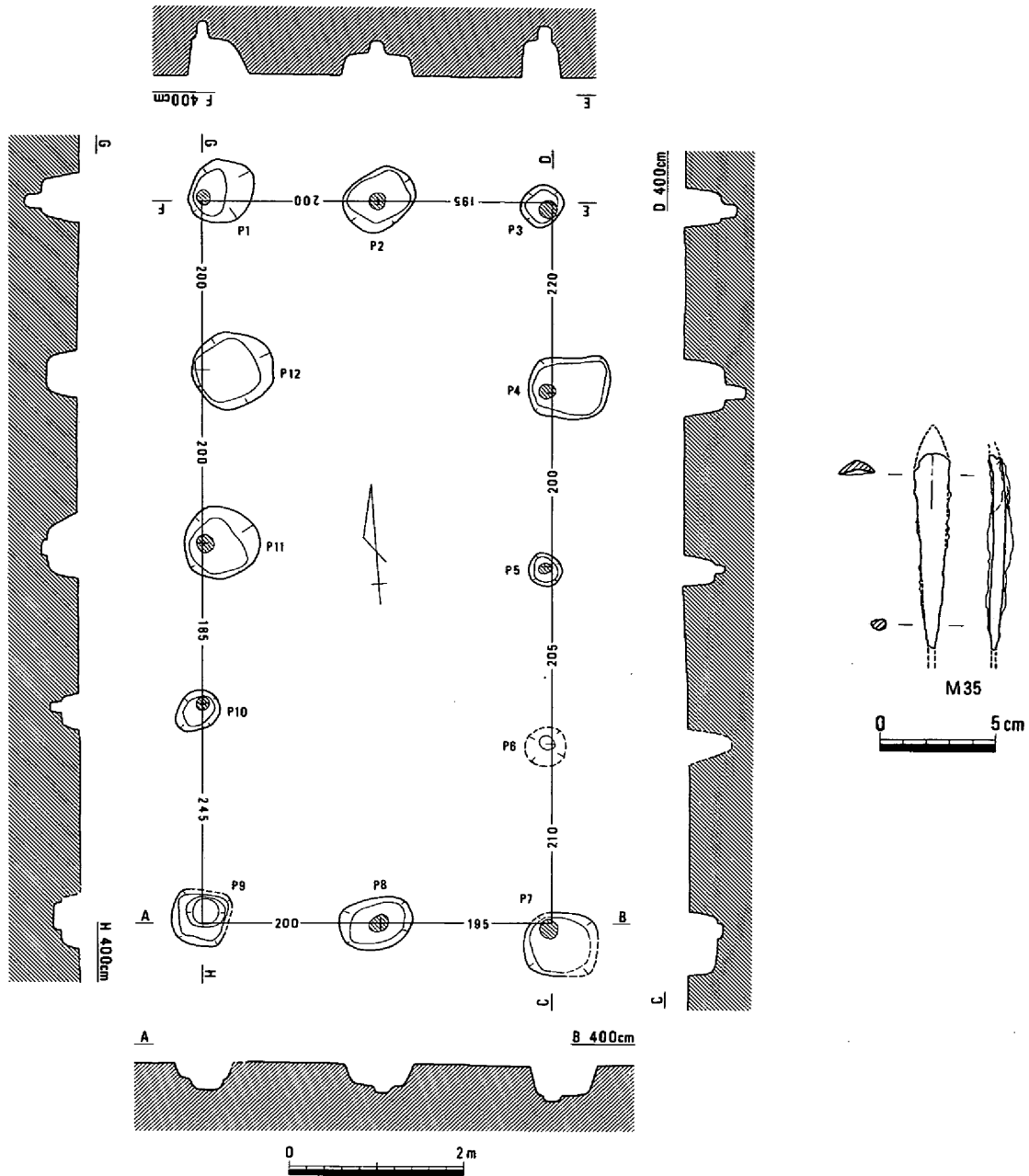
掘立柱建物-12・13 (第522図)

O20区中央で検出した3×2間の側柱建物である。柱はややいびつな並びを示すが、建て替えが行われた2棟の存在を認識し、柱穴の切り合いから古段階のものを掘立柱建物-12、新段階のものを掘立柱建物-13とした。掘立柱建物-12はP2～P10で構成されるものであり、P1については検出で



第522図 掘立柱建物-12・13

きていない。棟方向はN-73°-Wを示し、桁行は最大で692cm、梁間360cmを測る。建物面積は約24㎡である。柱穴の平面形はいびつな円形であり、径50cm内外と先述した掘立柱建物-10・11とは異なる。検出面からの深さは最深で56cmあった。掘立柱建物-13はP12~P18、P7、P8から構成され、北西隅のP11は検出できていない。棟方向、建物規模、柱穴規模とも掘立柱建物-12とほぼ近似している。柱穴からの出土遺物は図示していないものの、P6から細片ではあるが奈良時代末から平安時代初頭と思われる須恵器杯片があり、これら2棟の建物の時期もこの段階のものと判断した。(大橋)



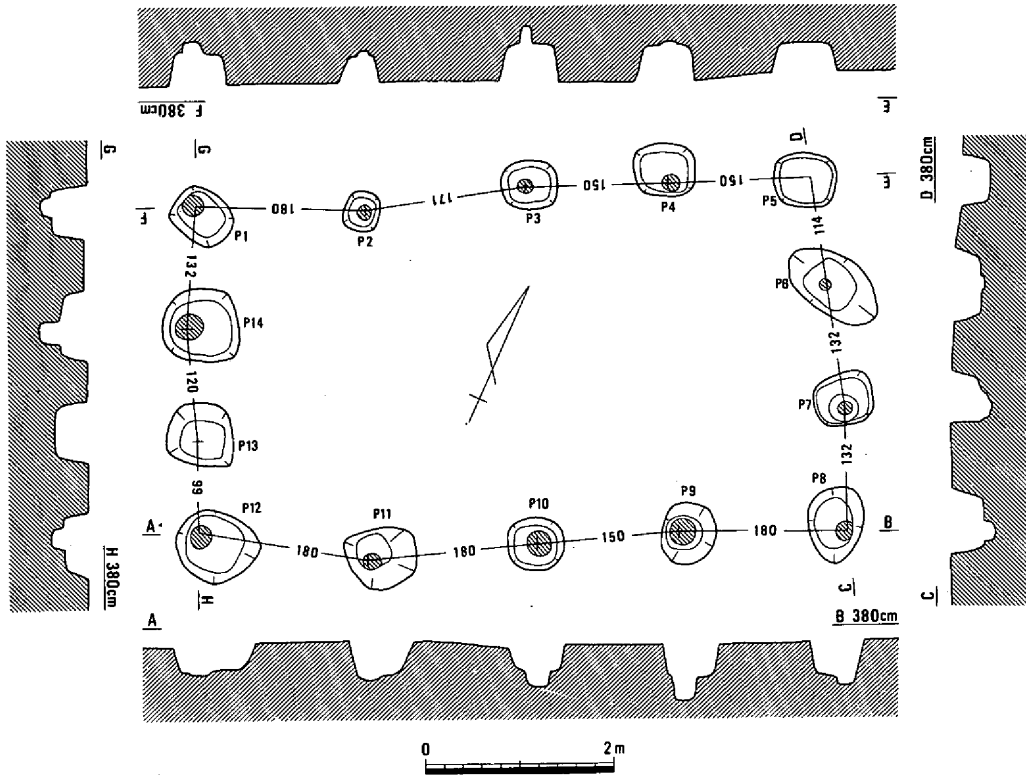
第523図 掘立柱建物-14 (M35)

掘立柱建物-14 (第523図・図版163)

O20区北側中央で検出した4×2間の掘立柱建物である。図面整理の段階で、認識したものである。桁行835cm、梁間395cmを測る長方形建物であり、棟方向はN-4°-Eを指す。柱穴掘り方は方形を呈し、一辺約92cm、深さ71~28cmを測る。柱痕跡は良く残存している。遺物は柱穴から土師器杯・鉄製の鉤M35が出土している。鉤は先端と基部が欠損している。最大計測値は長さ84.5mm、幅16.5mm、厚さ6.8mm、重量17.2gである。時期は古代と考えたい。(浅倉)

掘立柱建物-15 (第524図・図版133)

掘立柱建物-14の北西約8mに位置する4×3間の比較的大形の掘立柱建物である。桁行690cm、梁間378cmを測る長方形建物であり、棟方向はN-65°-Eを指す。柱穴の掘り方は方形を呈し、一辺



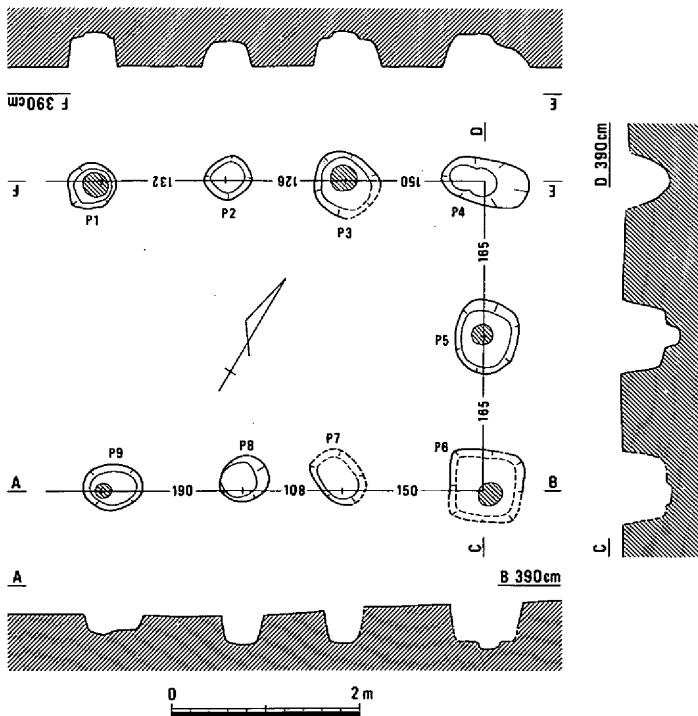
第524図 掘立柱建物-15

約80cm、深さ63~30cmである。遺物は丹塗土師器・暗文のある土師器片が柱穴から出土している。時期については古代と考えられる。(浅倉)

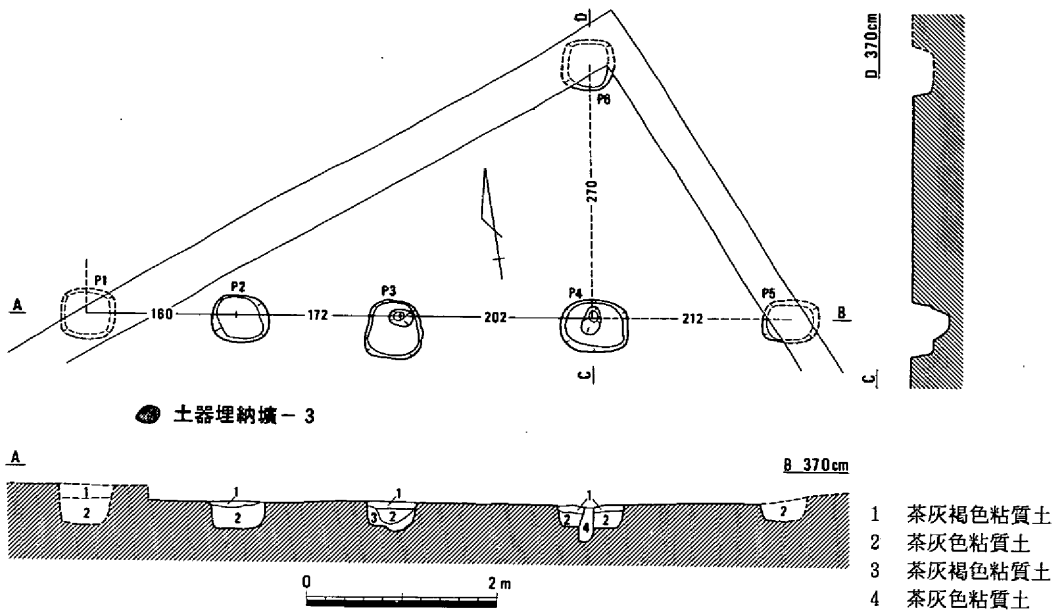
掘立柱建物-16 (第525図)

掘立柱建物-15と一部重複する。桁行は不明、梁間は2間であり330cmを測る長方形建物である。棟方向はN-60°-Eを指す。柱穴の掘り方は方形を呈し、一辺約79cm、深さ52~19cmである。遺物は柱穴から丹塗りの土師器片が出土している。掘立柱建物-15とは同時には存在できない事は明らかである。桁行は不明であるが、掘立柱建物-14を参考にすれば4間と思われる。時期については出土した土器片から古代と考えたい。

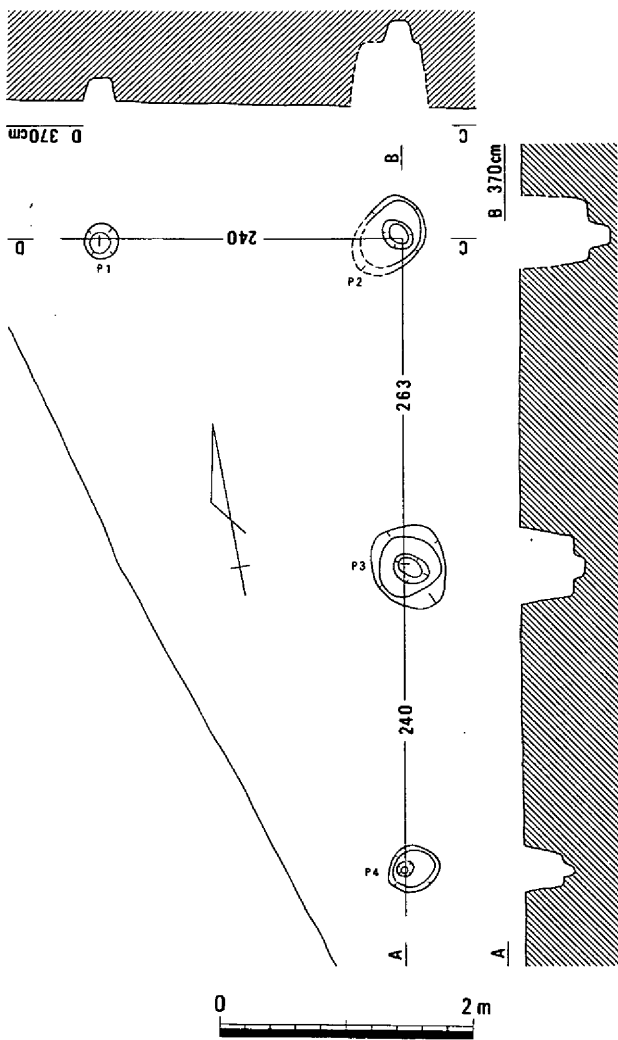
(浅倉)



第525図 掘立柱建物-16



第526図 掘立柱建物-17



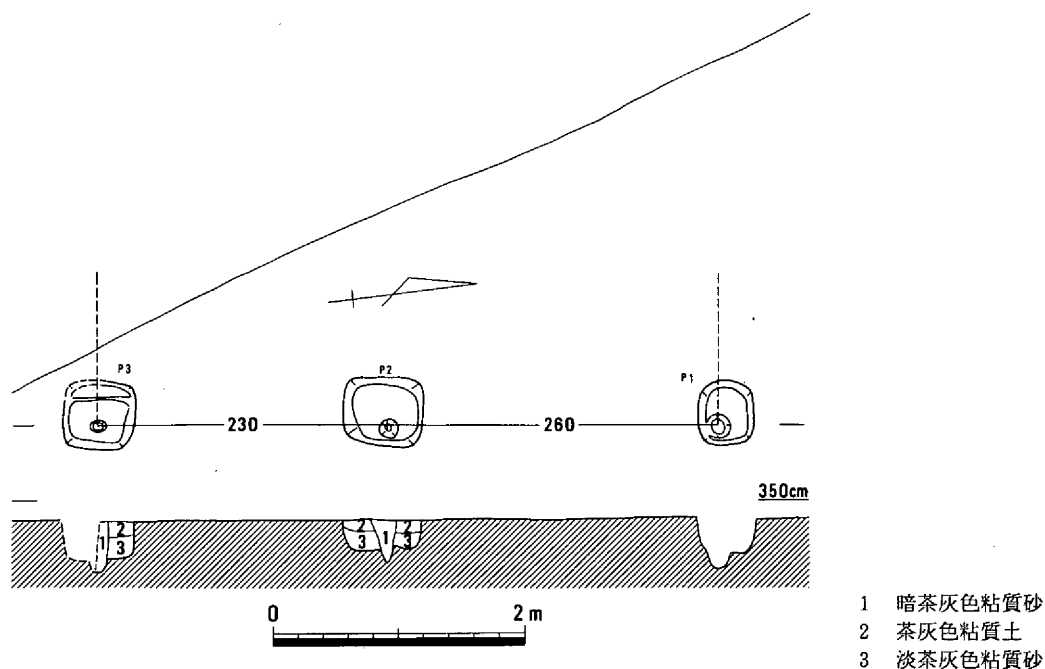
第527図 掘立柱建物-18

掘立柱建物-17 (第526図、図版133)

N20区の南東、橋脚部から検出された桁行4間×梁間1間の東西棟建物で、大半は調査区外に延びている。柱間は桁行160～212cm、梁間270cmを測る。柱穴の掘り方は方形で一辺50cm前後、深さ30cm余りを測るが、P5・P6の底部は他に比べやや標高が高い。遺物は丹塗土師器および須恵器甕の細片が出土するにとどまっているが、建物南西部から後述する胞衣壺(土器埋納壙-3)が出土しており、その出土位置との関係から、当建物は奈良時代のもと考えられる。(江見)

掘立柱建物-18 (第527図)

掘立柱建物-17の南方約10mに位置する桁行2間以上×梁間1間以上の南北棟建物と推定されるもので、大半は調査区外に延びる。柱間は240～263cmを測る。柱穴の掘り方は円形で径30～70cm、深さ20～50cmを測る。遺物はなく、柱穴の掘り方も円形であることから時期が下がる可能性もあるが、ここに記載した。(江見)



第528図 掘立柱建物-19

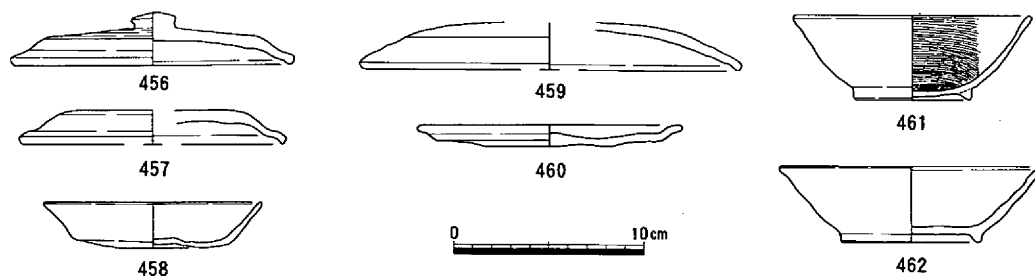
掘立柱建物-19 (第528図)

掘立柱建物-18の東方約20mに位置する建物で、柱穴3基を検出し得たのみで大半は調査区外に延びるものと推定している。柱間の距離は230・260cmを測る。柱穴掘り方は方形で一辺約60cm、深さ約30cmを測る。遺物は鉄滓および土師器片が出土しており、古代の範疇のものであろう。(江見)

(3) 柱穴 (第529図・図版163)

O20区の北部を中心として古代の建物と多数の柱穴が検出された。ここではこれら柱穴の埋土中から出土した遺物で、建物の時期を知る参考となるものを図示する。

456・457は須恵器の蓋である。458は土師器の杯である。外底部には体部との境界から約10mmほどの幅でヘラ切りがみられ、外底部中央には強い指頭調整を施している。459は外面丹塗りの土師器の蓋である。460は土師器の皿で、内底部は丁寧なナデ、外底部は口縁部との境界から約25mmほどの幅でヘラ切り後ナデ、中央部は指頭調整後の粗いナデが見られる。461は内面黒色土器の椀で、内面のミガキは比較的丁寧である。462は丹塗り土師器の椀で、口縁端部内面に沈線がめぐる。(杉山)



第529図 柱穴 (456~462)

(4) 土器埋納墳

土器埋納墳－1 (第530図・図版134・153)

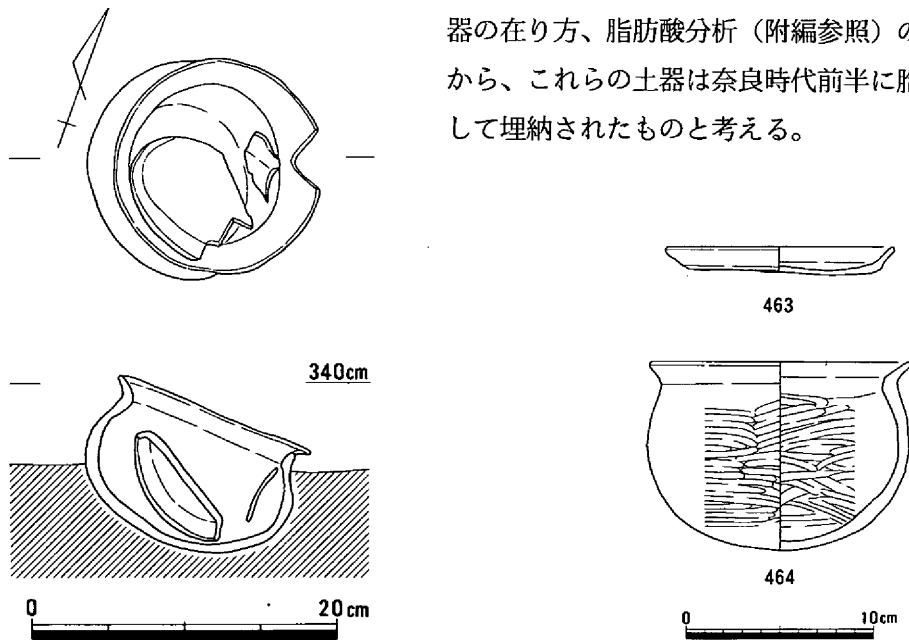
土器埋納墳－1は、高田調査区中央に位置するたわみ－3の床面で検出された。たわみ－3の埋土内には、奈良時代の土器片が比較的多く出土しており、当初はこれらと同様のものと思われたが、土器底部が地山内に入り込んでいたため断面観察を行った。その結果、掘り方は認められなかったものの、何らかの意図をもって埋納されたものと思われる。土師器甕464は口縁部を東に傾けて設置されており、落ち込んだ土師器皿463が蓋であったと思われる。時期は平安時代と思われる。(柴田)

土器埋納土壇－2 (第531図、図版134)

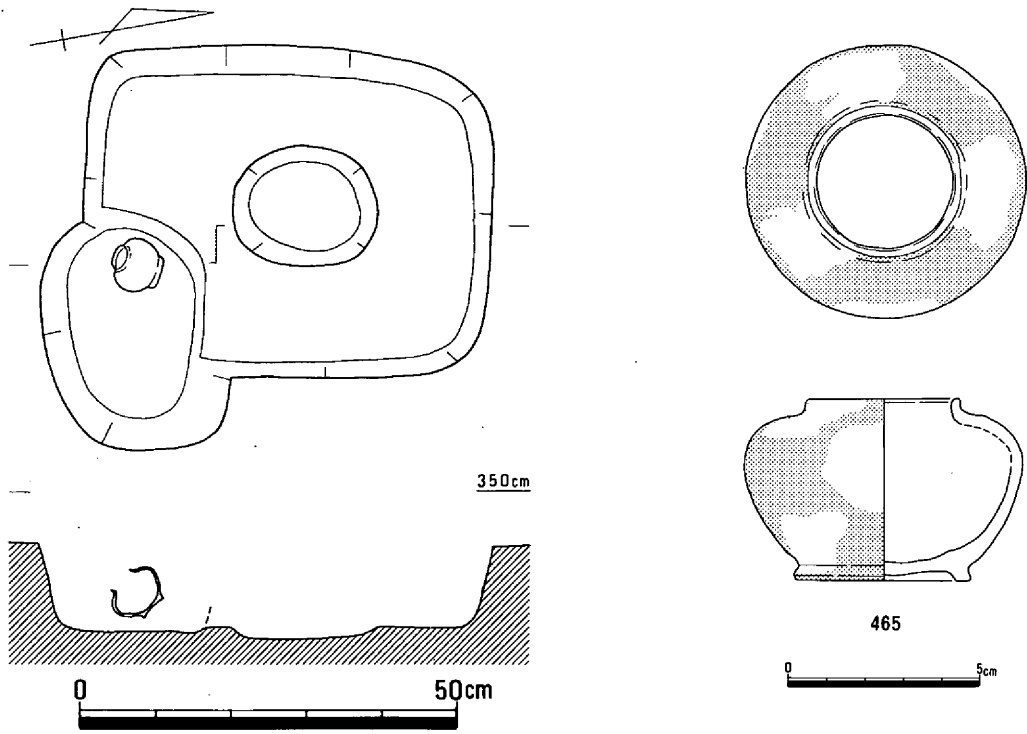
O20区の北東、高田調査区の橋脚部中央北寄りから検出された、完形の二彩小壺を埋納する土壇である。埋納墳は径約30cm、深さ約10cmを測る。墳内には黒灰色粘質土が堆積しており、小壺は体部を斜めに傾け、底面からわずかに浮いた状態で出土した。最大径7.2cm、高さ4.8cmを測り、施釉については附編に詳しい。なお埋納墳は堆積土を共にする平面方形の柱穴と重複関係にあった。この柱穴からなる建物を検出するには至らなかったものの、これと有機的な関係を探れば地鎮祭祀に使用されたものであろうか。時期は奈良時代前葉～中葉にかけてと考える。(江見)

土器埋納土壇－3 (第532図、図版135)

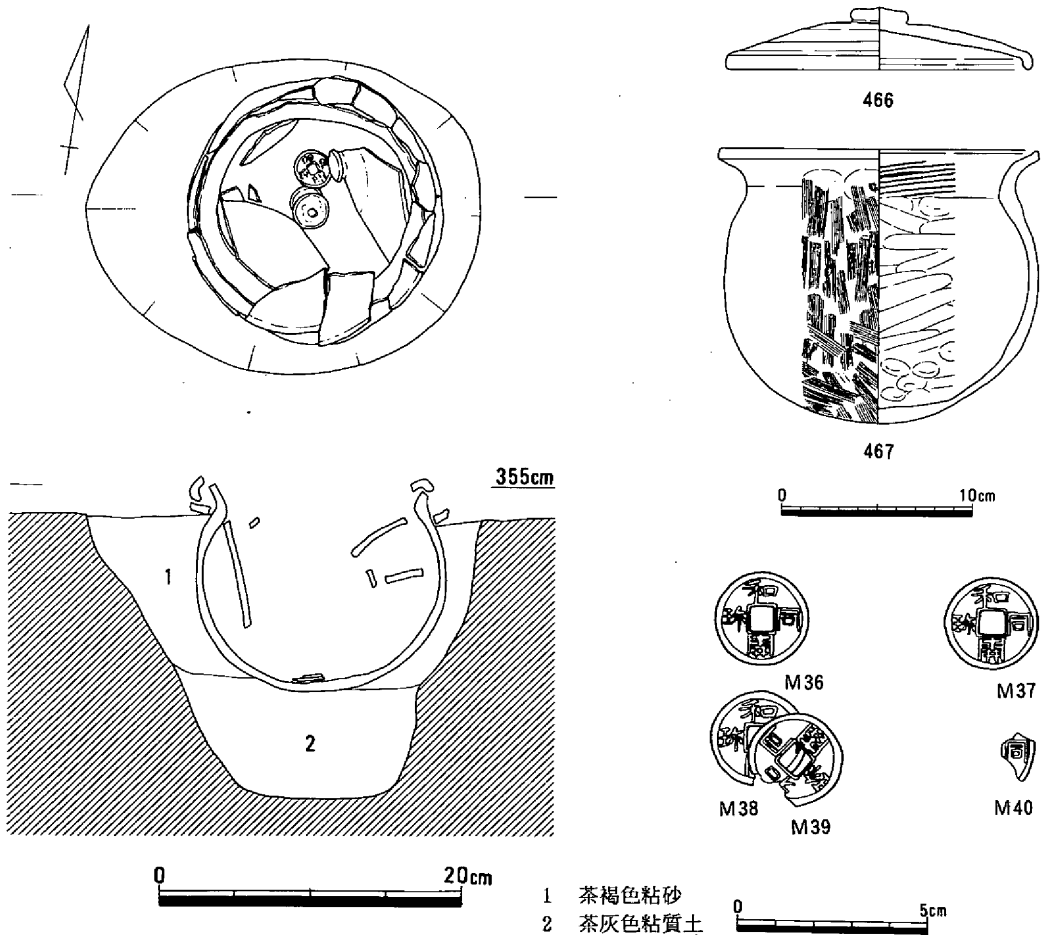
土器埋納墳－2の北西約12m、掘立柱建物－17の南西約1mの位置から検出された。径約40cm、深さ約35cmを測る土壇に土師器甕を埋置し、上部を須恵器杯蓋によって被覆されていたものと判断されるが、検出時において蓋は周縁を残し中央部が甕内に崩落していた。甕下半には土が充満しており、底部中央からは銭文を上に向けた5枚の和銅開珎M36～M40が重なり合いながら出土した。いずれも新和銅である。杯蓋466は全体にやや鈍重な印象を与えるもので、また、甕467は小形の器種で、いずれも現在県下での類例は少なく時期判定を困難にしているが、甕に比べ杯蓋はやや古い様相を残しているように思われる。土器埋納墳の検出位置、土器の在り方、脂肪酸分析(附編参照)の結果などから、これらの土器は奈良時代前半に袍衣容器として埋納されたものと考えられる。(江見)



第530図 土器埋納墳－1 (463・464)



第531図 土器埋納墳 - 2 (465)



第532図 土器埋納墳 - 3 (466・467・M36~M40)

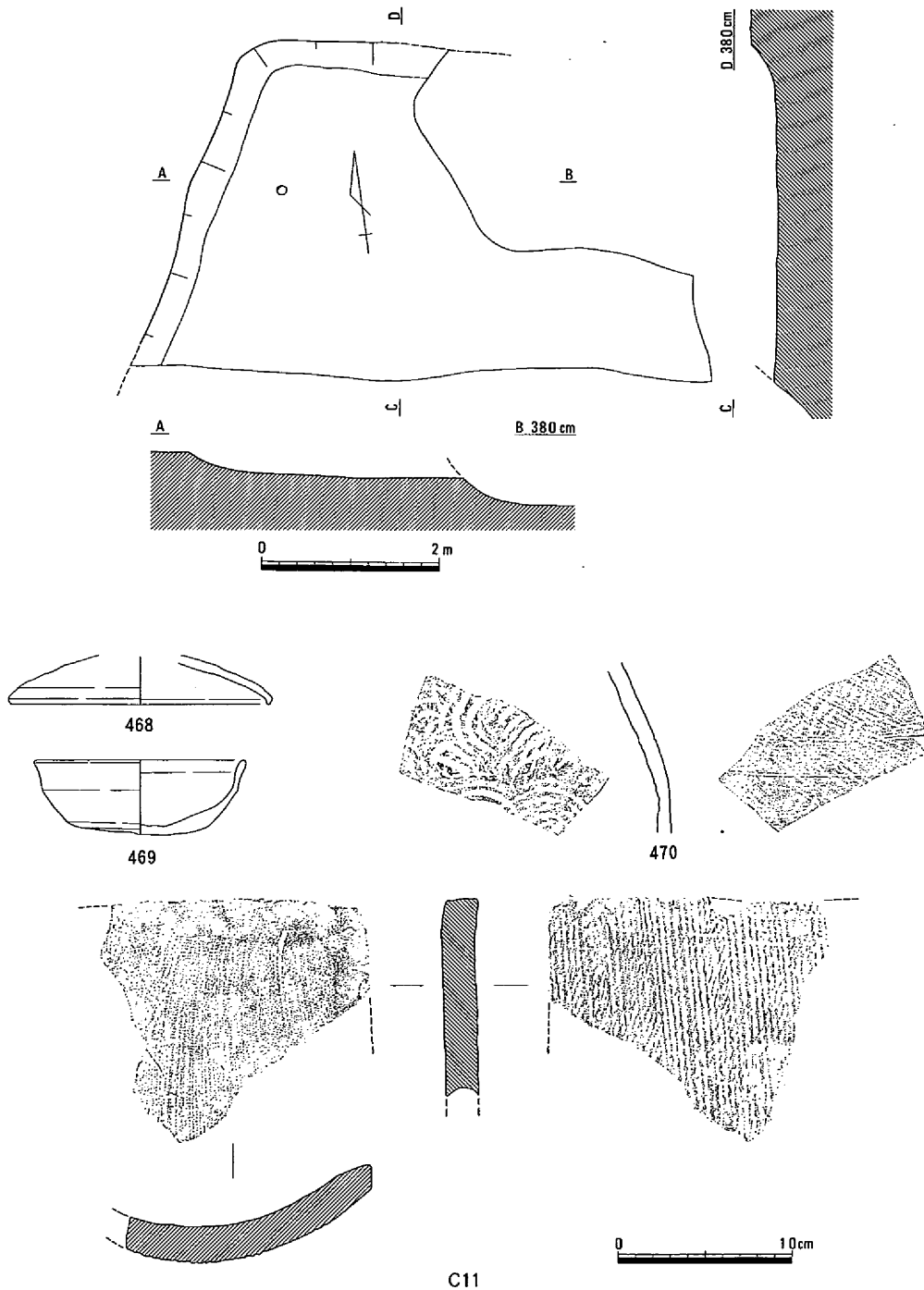
1 茶褐色粘砂  
2 茶灰色粘質土



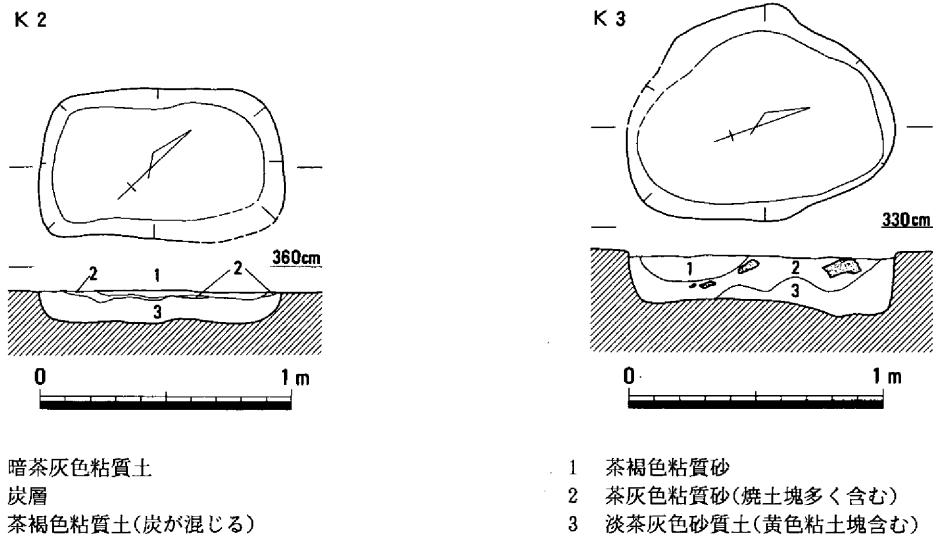
(5) 土 壙

土壙-1 (第533図)

O20区中央、掘立柱建物-12・13の南で検出された。南半を近世の溝-54、東半を近世の土壙-12によって削平されており、検出できたのは北西部のみと考えられる。検出できた範囲では6×4mの規模をもち、深さは15cmほど残存していた。本来方形の浅いものと思われ、土壙底面は平坦である。



第533図 土壙-1 (468~470・C11)



第534図 土壌-2・3

溝-40とも重複するが、これより後出するものと判断された。

出土遺物は、図示した468~470の須恵器、C11の瓦のほかにも須恵器甕、および丹塗り土師器の小片がある。468はかえりの消失した蓋、496は杯、470は甕の胴部であるが傾きは不詳である。C11は平瓦で凸面縄タタキである。これらの出土遺物から、土壌の時期は奈良時代と判断された。(大橋) 土壌-2 (第534図)

O20区の南東、橋脚部分ほぼ中央から検出された。平面は隅丸の長方形を呈し、北東から南西に主軸をもつ。規模は97×61cm、深さ13cmを測る。土壌壁は緩く、底部はおおむね平坦である。土壌内には上部に炭層の堆積が明瞭に確認されるとともに、第3層からは丹塗りの土師器片をはじめ、須恵器甕細片が出土しており、当土壌は古代の範疇に入るものと判断された。(江見)

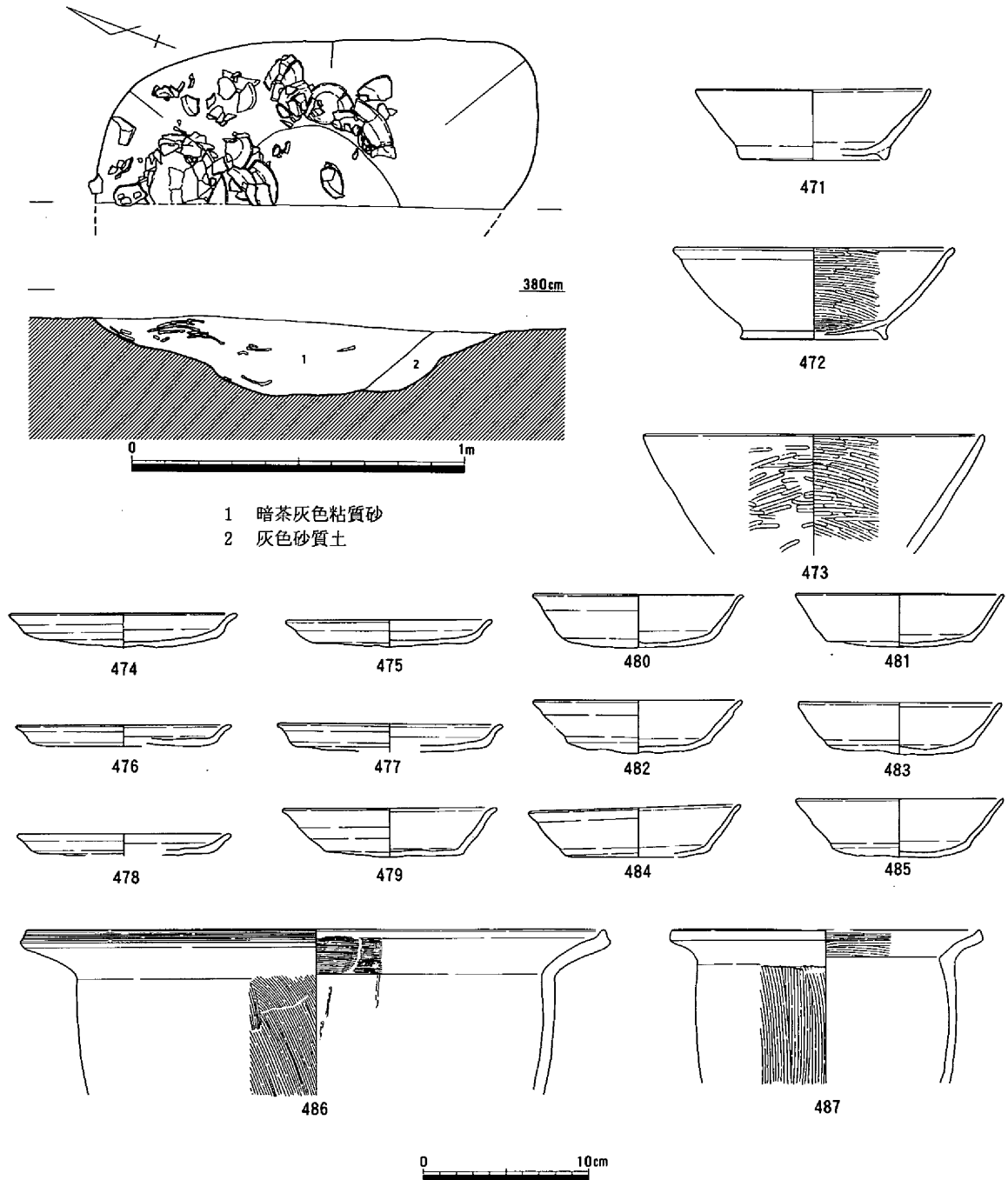
土壌-3 (第534図)

土壌-2の北方約5mに位置し、堅穴住居-89の柱穴を一部切って検出された。平面不整楕円形を呈し、南北方向に主軸をもつ。規模は106×87cm、深さ23cmを測る。土壌壁は急で、底部は平坦ではなく、北側に向かいやや低くなる。土壌内は3層に大別され、特に、第2層には焼土塊を多く含んでいたが、壁・底部などから被熱面を確認するには至らなかった。また、第3層においても基盤層の粘土塊が混入する状況を呈しており、人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物は土器細片が出土するのみであったが、その特徴から当土壌は古代の範疇に入ると思われる。(江見)

土壌-4 (第535図、図版134)

土壌-2の南方約10mに位置する平面不整円形を呈す土壌で、西半部は調査区外に延びる。規模は径約130cm、深さ20cmを測る。土壌壁は緩く斜めに下がり、おおむね平坦な底部に至る。土壌内は2層に分層されたが、第1層の暗茶灰色粘質砂中からは比較的多くの土器が、土壌北側から投げ込まれた状態で出土した。また、これらの土器は完形復元されたものが多く、単に破損品を放棄したのではなく、何らかの祭祀的行為の後に一括廃棄した可能性を想起させるものであった。

出土した土器は、土師器の高台付杯471をはじめ、杯479~485、小皿474~477、内黒の黒色土器碗472・473、甕486・487などで、杯・小皿には丹塗りされているものが多くみられた。土器の特徴から、当土壌の時期は平安時代と判断される。(江見)



第535図 土壇-4 (471~487)

(6) たわみ

たわみ-1 (第506・508図)

〇20区中央やや西よりで検出された。溝-40~43に先行するものである。長軸方向で870cm、短軸方向で570cm、深さ95cmを測るものである。埋土は黒色粘土およびシルトであり、たわみ-2・3と近似する。形状が不定なこと等から土壇とはせず、ここでたわみとして扱った。出土遺物は小片であるが須恵器片などがあり、これらから奈良時代から平安時代の年代を推定している。(大橋)

## たわみ-2 (第506・507・536図、図版167)

たわみ-2は、O20区西側中央に位置し、溝-45・48~53を切っている。平面形は不整形を呈し、長さ850cm、深さ24cmを測る。埋土中からは須恵器488~490、土師器491・492、平瓦など比較的多くの土器が出土している。488は壺で、華奢な高台が付いている。489は壺で、内面は同心円当て具の痕跡が認められる。490は甕で、口縁端部は上方に伸び、外面と上端部は面を形成している。492は長胴の甕で、口縁端部はわずかに上方に伸びる。C12は平瓦で、凸面は縄タタキである。

出土遺物から、遺構の時期は奈良時代である。

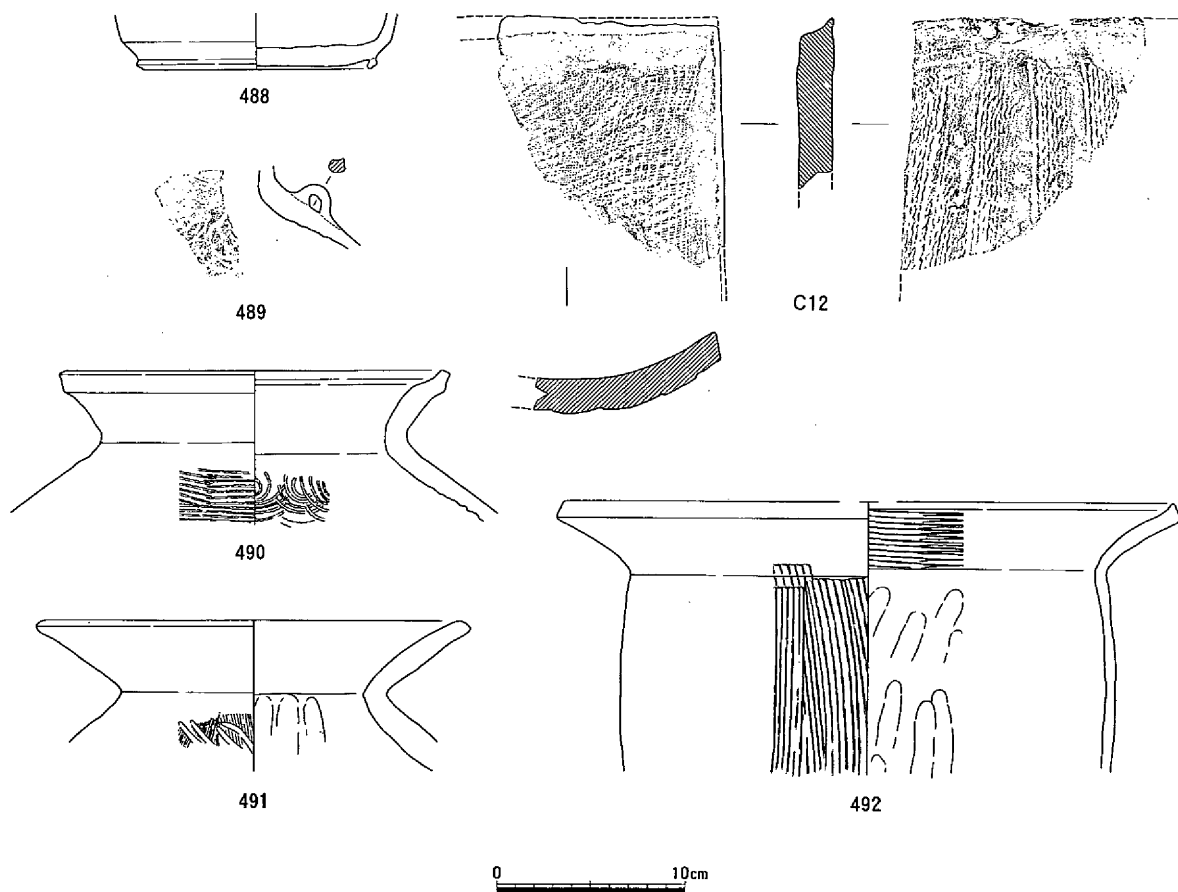
(柴田)

## たわみ-3 (第506~508・537図・図版154・163・166)

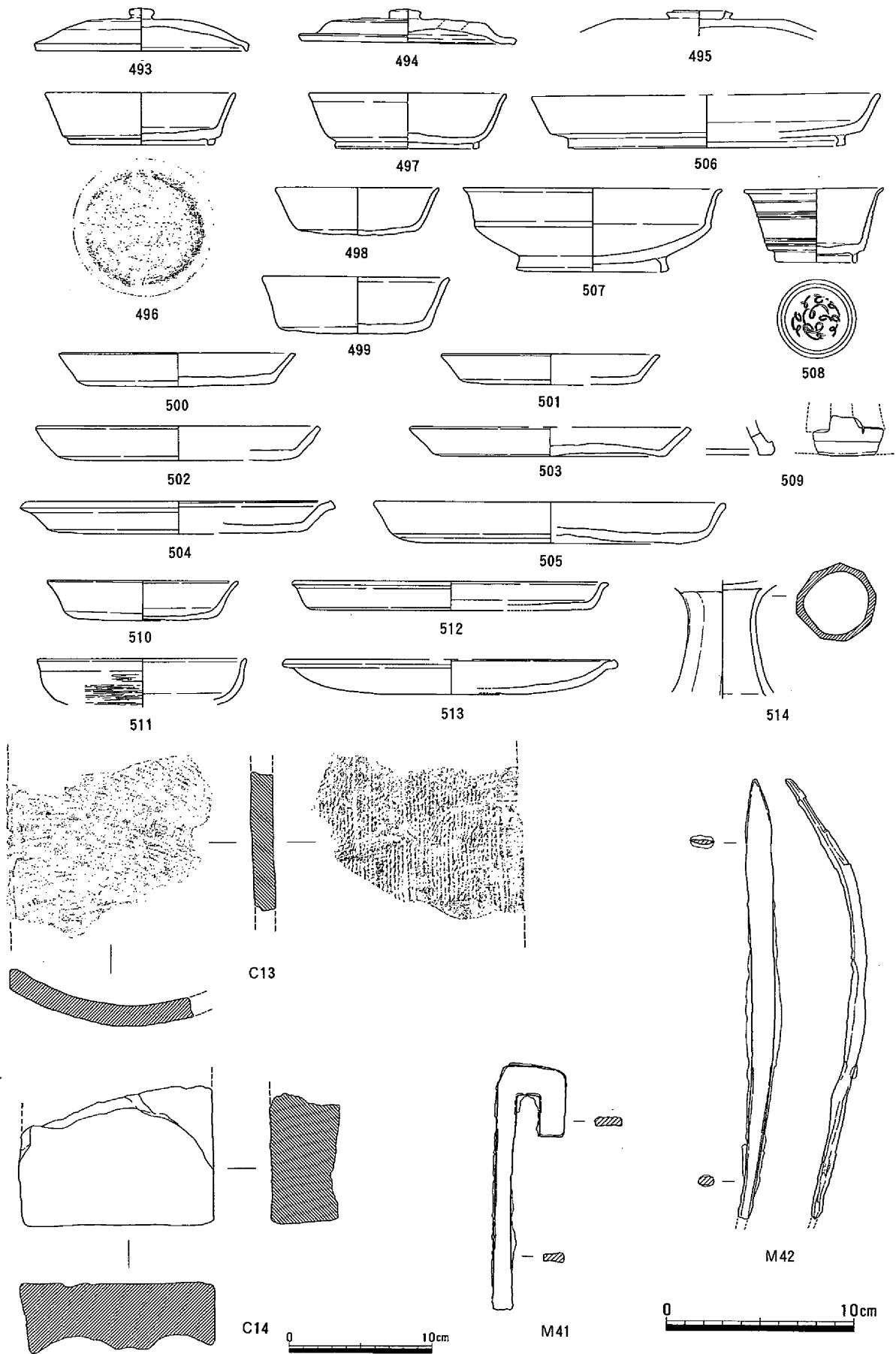
たわみ-3は、たわみ-2の東に位置する。2段になっており、上面は方形気味で、最深部は東寄りに位置し、不整楕円形を呈する。埋土中からは図示した須恵器493~508、円面硯509、土師器510~514、平瓦、不明鉄器M41、鉈M42をはじめとして多くの遺物が出土している。

493~495はつまみ付き蓋で、494は口縁部が屈曲し水平に伸びている。496・497は高台付杯、498・499は杯である。500~505は皿で、506は盤である。507・508は高台付の椀で、507は稜椀ともいえるものである。508の体部外面には4条の沈線、底部外面には暗文が施される。510・511は杯、512・513は皿で、いずれも口縁端部は外方へ引き出されている。C13は凸面に縄タタキが認められる。C14は磚である。出土遺物から、遺構の時期は奈良時代である。

(柴田)



第536図 たわみ-2 (488~492・C12)

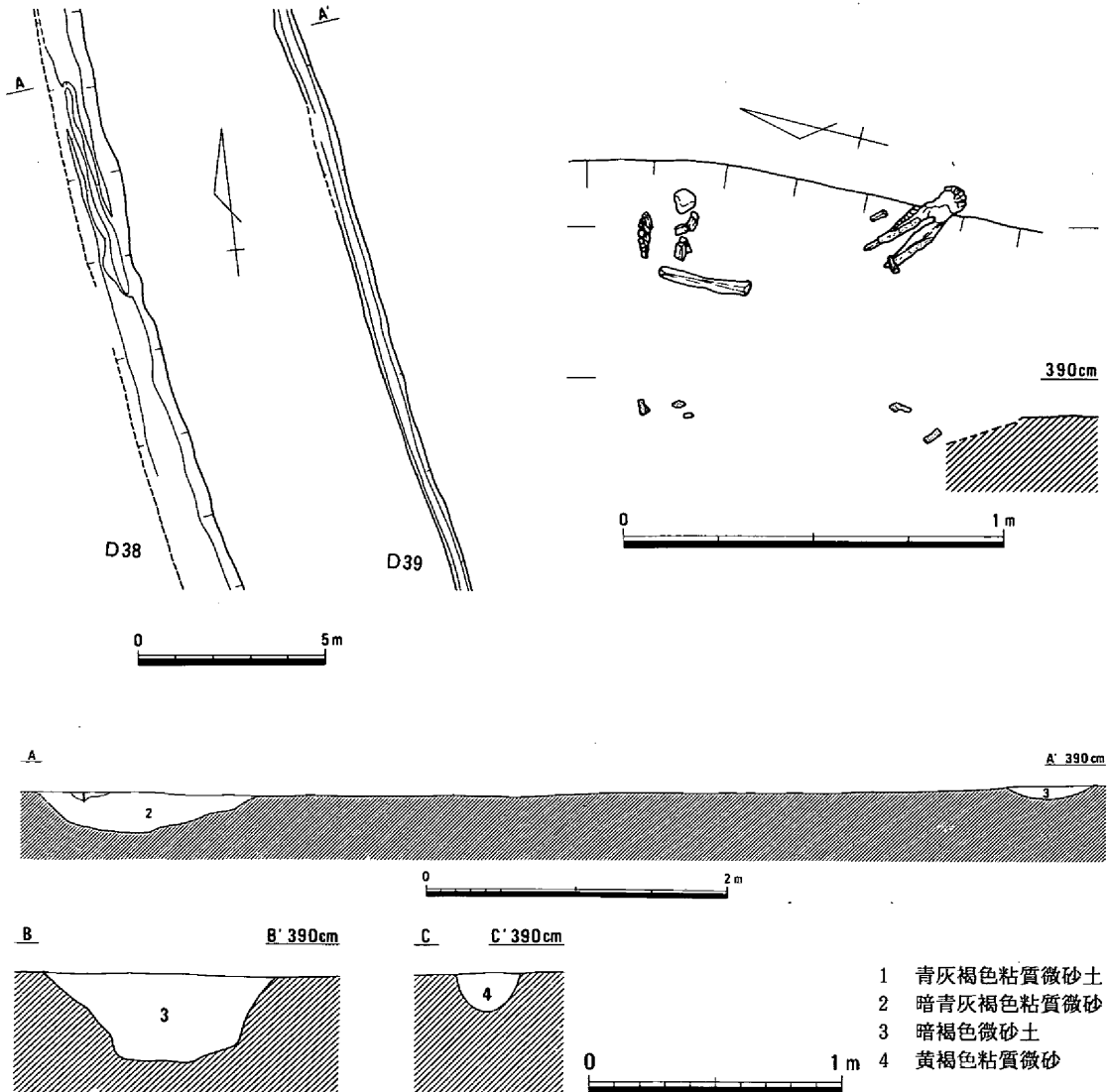


第537図 たわみ-3 (493~514・C13・C14・M41・M42)

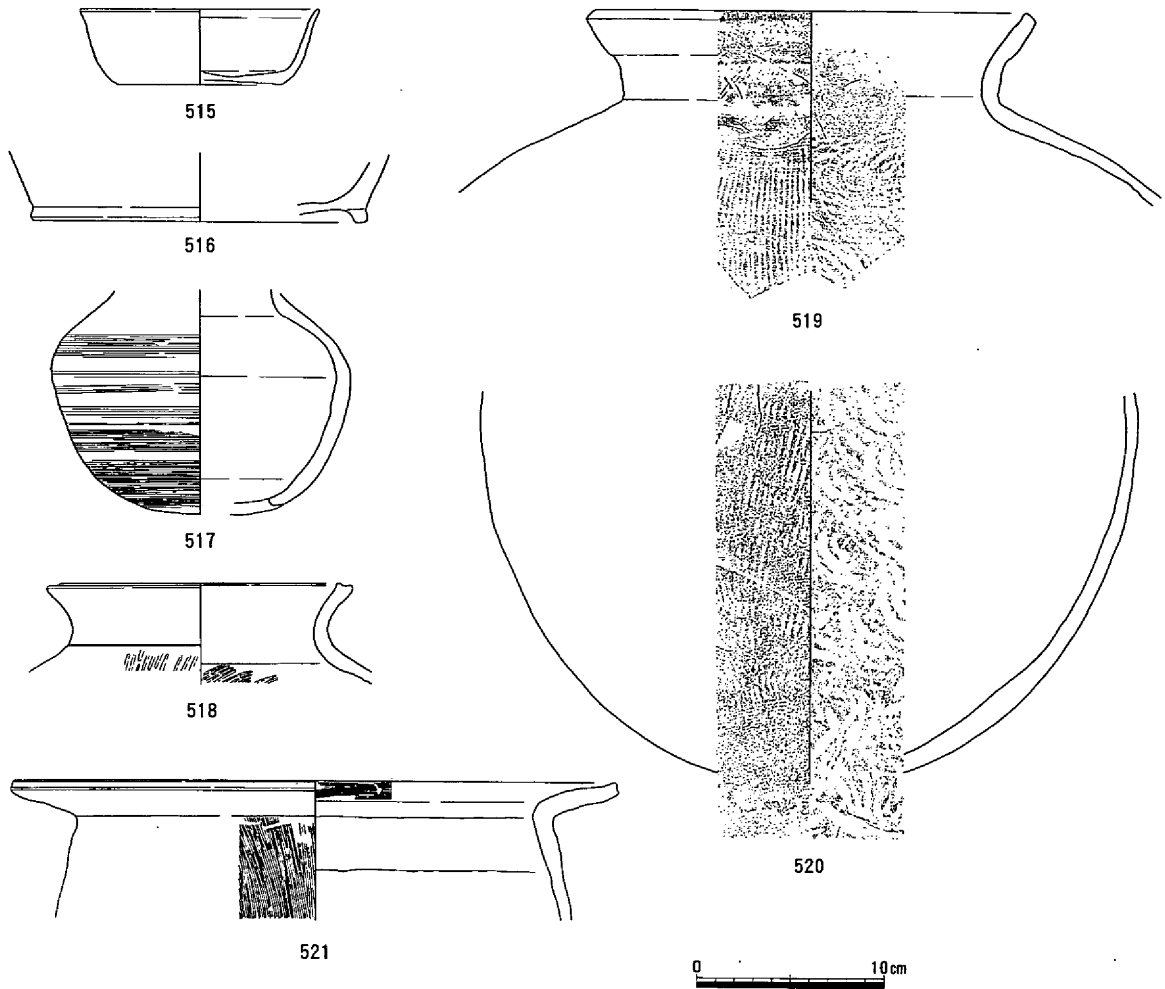
(7) 溝

溝-38・39 (第506・507・538・539図、図版135・154)

調査区の西端をN-11°-Wの主軸をもって並走する溝である。溝-38は、検出面で幅140cm、深さ42cmを測り、断面逆台形を呈する。底面の標高は305~349cmと凹凸が見られ、流走方向は判然としない。埋土からは須恵器515・517~520、土師器521が出土した。杯515は口径12.3cm、器高4.3cmを測り、底部はヘラ切りする。口径23.0cmを測る519は大形の甕で、外反する口縁部は肥厚して段をなす。甕521は、体部から屈折して水平にのびる口縁部をもち、口径31.4cmを測る。そのほか、埋土の上層から出土した1頭分のウマの頭骨がある。これらの遺物から、溝-38は奈良時代に機能したものと想定される。溝-39は、溝-38の東5.6mを平行して走るもので、検出面の幅68cm、深さ16cmを測る。断面はU字形をなし、溝-38より26cmほど浅い底面の標高は360~377cmとほぼ一定である。この溝からも須恵器516が出土しており、なおかつ主軸を同じくすることからすれば溝-38と同一時期とも考えられるが、その埋土の特徴はむしろ中世以降にまで下る可能性を示唆している。 (亀山)



第538図 溝-38・39



第539図 溝-38・39 (515~521)

溝-40~44 (第506・540~542図、図版154・162・165)

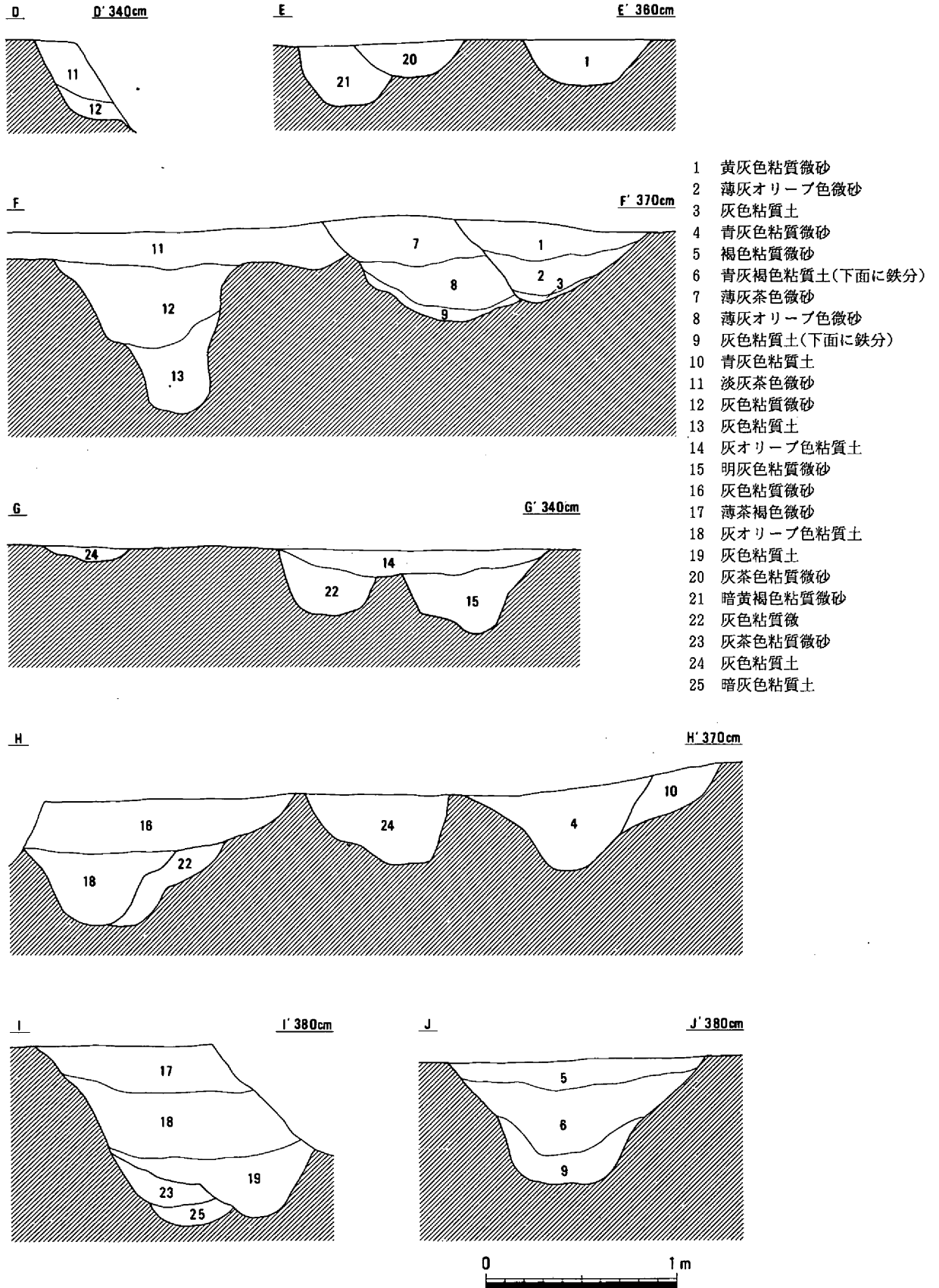
高田調査区中央部南半を屈曲して基本的には東西に流走する5条の溝である。いずれも東方向から西方向へ流れるものと理解される。これらは古墳時代後期の溝-29~30の流路を踏襲しながら、新たに付け替えられたものと思われる。また、溝-40・41と溝-42・43の大きく2条に流路が分かれ、溝-44は溝-40・41を切るものの近世の溝-54に削平を受けているためか、南端は明らかではない。

溝-40・41は、東西に流走し、屈曲して南北方向に流れを変えるものである。溝-40の最大幅は約120cm、深さは約90cmを測り、溝底の標高は260~300cmであった。第540図に示す11~19層がこの溝にあたる。溝-41は溝-40に切られ、20~23層がこの溝にあたる。

溝-42・43はやや蛇行して東西に流走する。溝-42の最大幅は約195cm、深さは84cm、溝底標高は300~332cmを測った。7~10層がこの溝に相当する。溝-43は溝-42に先行し、最大幅約200cm、深さ70cmを測り、溝底標高は290~333cmである。1~6層がこの溝に相当する。

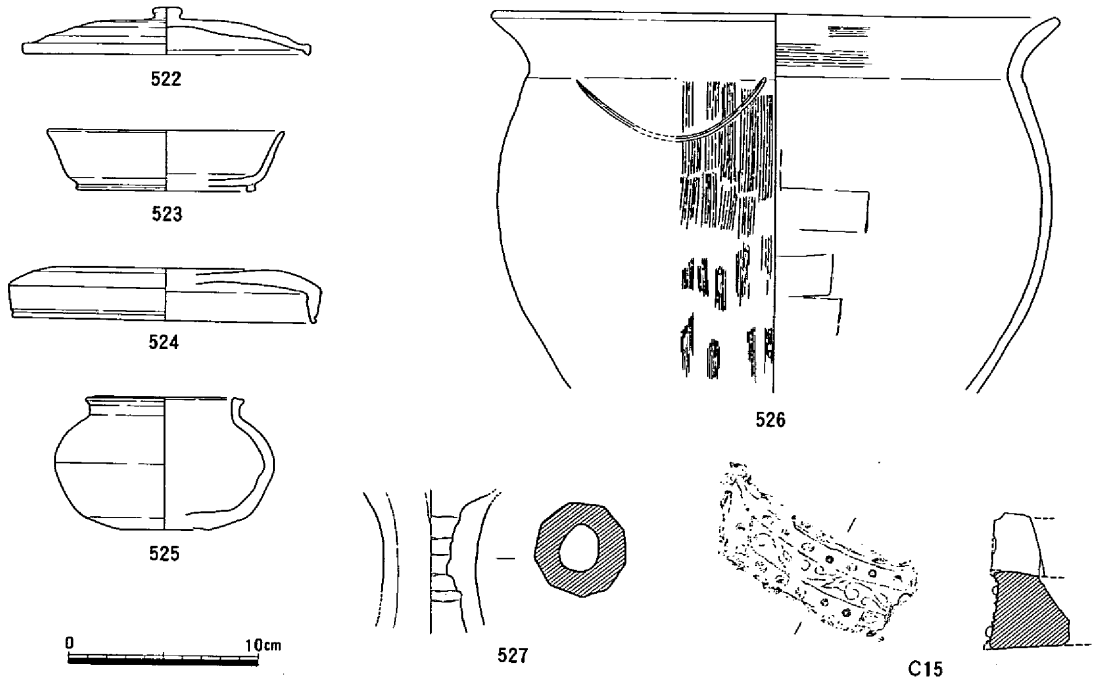
溝-44は溝-40・41の屈曲部近くでこれと交差し南北に流走するものであり、最大幅90cm、深さ42cmを測る。24層がこの溝の層位である。なお、25層は古墳時代後期の溝-29にあたる。

第541図に示したのは溝-40の出土遺物である。522~525は須恵器、526・527が土師器である。C15は軒平瓦であり、倉敷市矢部遺跡出土のⅢ類に似る。図示した須恵器以外にも内面車輪当て具痕が



第540図 溝-40~44





第541図 溝-40 (522~527・C15)

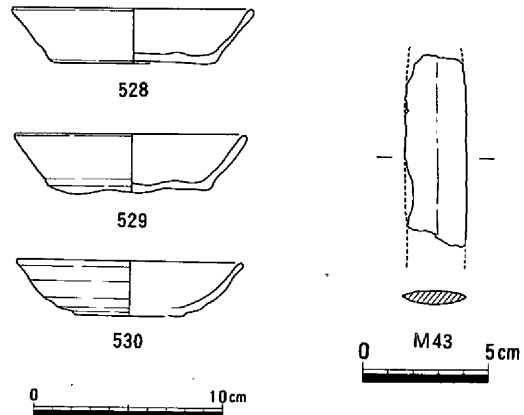
施される甕の破片などがある。第542図528~530は溝-43の出土遺物であり、丹塗り土師器の杯である。M43は溝-42から出土したものであり鉄剣の破片の可能性を考えた。このほかに、溝-40・41からは黒色土器碗の小破片も散見された。

これらの出土遺物と溝の検出状況から溝-40~44は古墳時代後期の溝の流路を踏襲しながら幾度かにわたって奈良~平安時代にかけて付け替えられたものであり、なんらかの掘立柱建物群の区画を意識したものと理解している。(大橋)

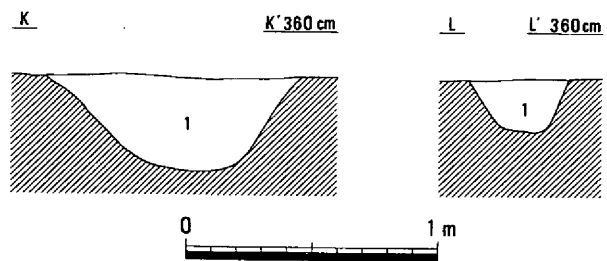
溝-45 (第506・507・543図)

O19区北東からO20区北西に位置する。規模は幅37~105cm、深さ25cm、溝底面の標高は308~330cmを測る。断面形は椀形である。流路方向は北から南と推測される。少量ではあるが須恵器杯蓋、甕の破片が認められた。

遺構の時期は奈良~平安時代のものと思われる。(澤山)



第542図 溝-42 (528~530)・43 (M43)

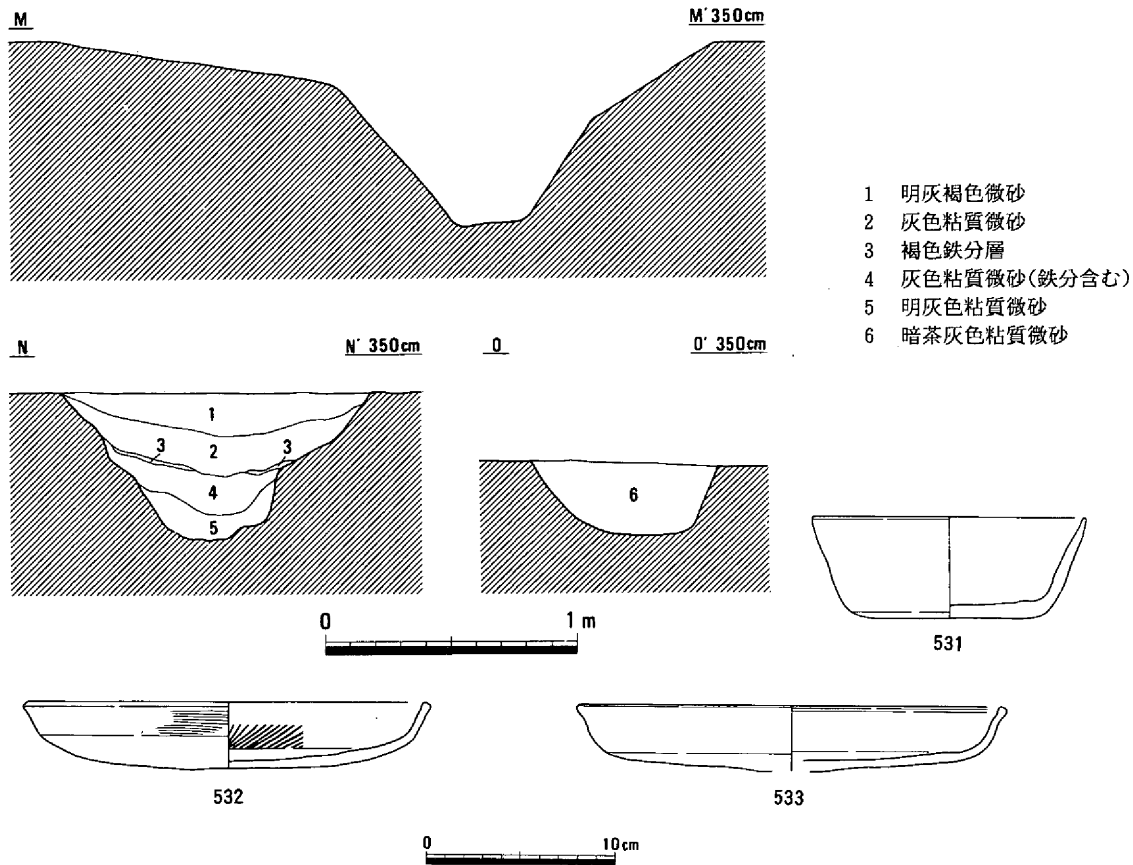


1 淡灰褐色粘質微砂

第543図 溝-45

溝-46 (第544図)

高田調査区の東端、橋脚部から検出された溝で、南北方向に直線的に延び、途中から東方へ屈曲する。断面「U」字状を呈し、幅約100cm、深さ約60cmを測る。溝底の標高は北東端で280cm、南端で258cmを測り、溝は北～南方向へと流走していたものと判断される。また、断面から明らかのように、堆積土は第3層までの上層と、以下、下層に大別されるとともに、溝の掘り直しがなされている。出土遺物は須恵器杯531、土師器皿532・533などで、溝の埋没時期は奈良時代と考えられる。(江見)



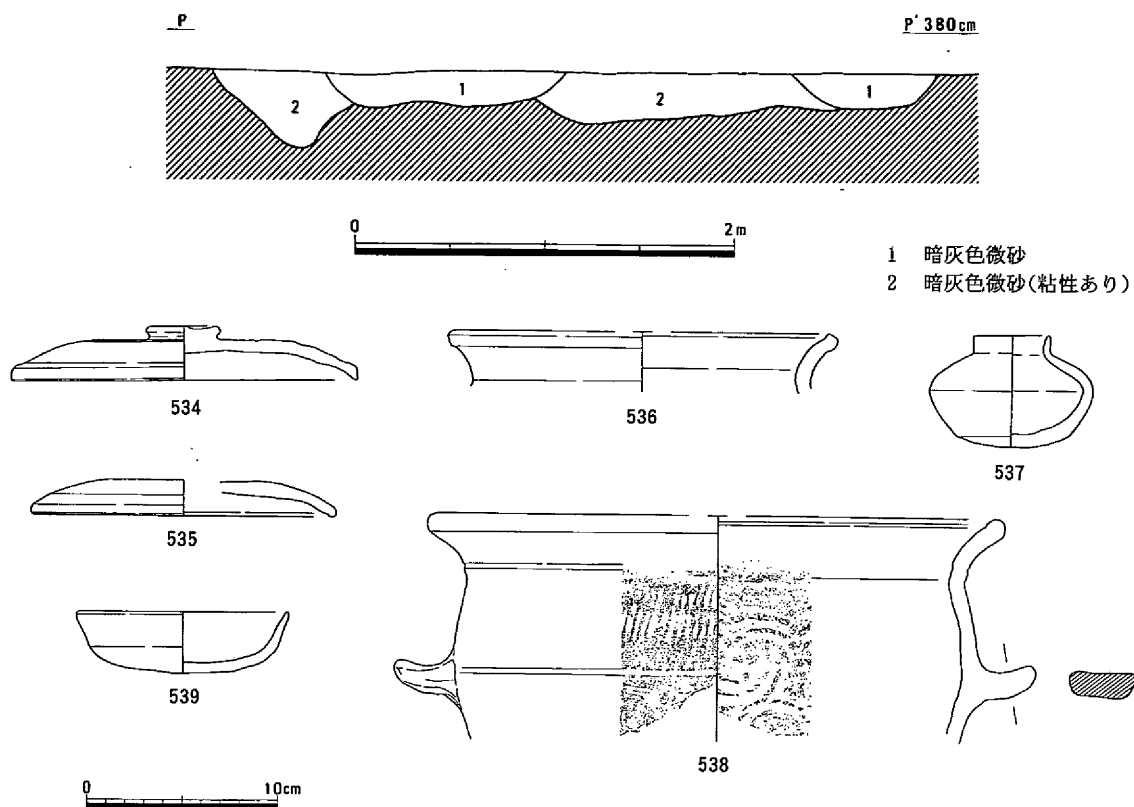
第544図 溝-46 (531~533)

溝-47 (第545図)

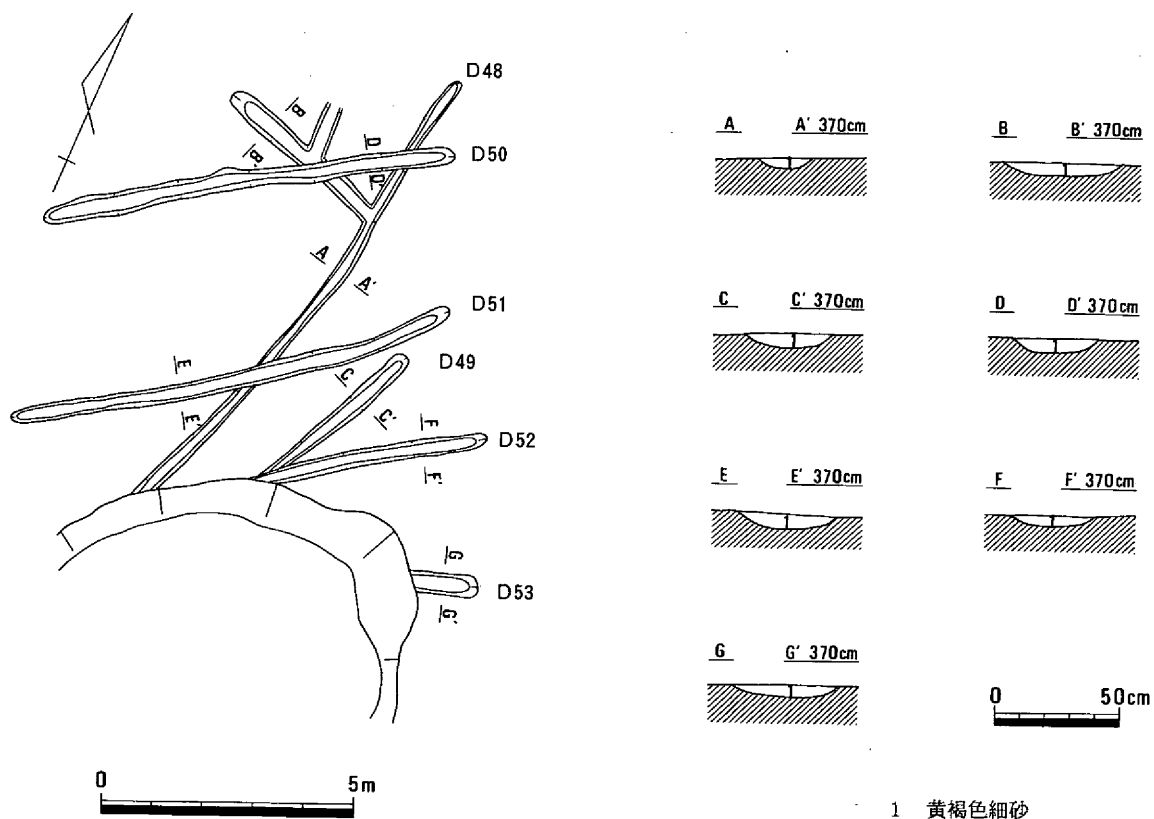
溝-46の東からほぼ並行して流走する溝で、幅約150cm、深さ約30cmを測り、平断面図から明らかのように重複する数条の溝からなる。溝の平面および流走方向は前述の溝-46と同様であるが、溝底の標高は全体に50cm余り高い。出土遺物は須恵器534~538、土師器539などで、小型壺537は完形である。溝の埋没時期は上記同様、奈良時代と判断される。(江見)

溝-48~53 (第506・507・546図)

溝-48~53は、高田調査区中央西寄りに位置する溝群で、掘立柱建物-3とたわみ-2に切られている。群内での切り合い関係と溝の方向から2時期のものと思われる。南北方向の溝-48・49が古く、東西方向に近い溝-50~53は新しいものである。両端が確認されている溝-50・51はそれぞれ長さ660cm・740cmを測る。他の溝も同様な形態になるものと思われる。断面は浅い皿状を呈し、上面で幅20~60cmを測り、遺構の残存状況は悪く、深さは3~7cmである。出土遺物は認められなかったが、時期は奈良時代と思われる。(柴田)



第545図 溝-47 (534~538)



第546図 溝-48~53

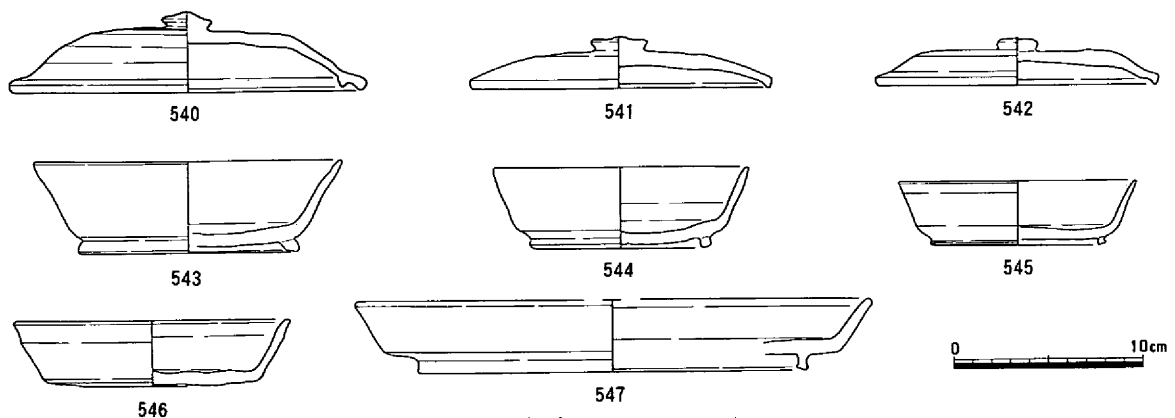
## (8) その他の遺構・遺物 (第547～541図、図版155・165～167)

遺構検出中や中・近世の遺構から出土した遺物の中で残存状況のよいものを中心に図示する。

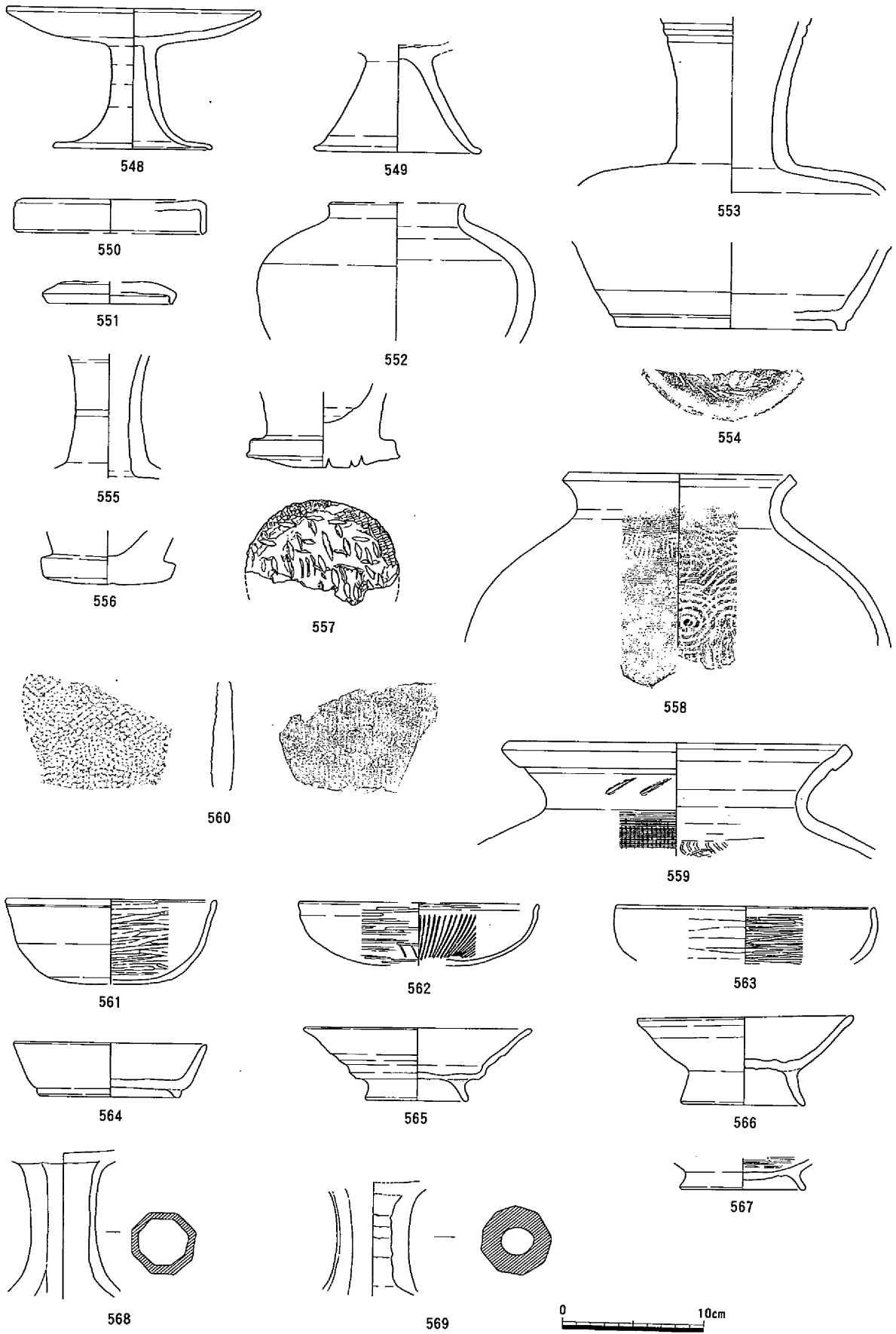
540～560は須恵器である。540～542は蓋、543～546は杯、547は高台付きの皿、548・549は高杯である。550・551は壺の蓋、552は短頸壺、553～555は長頸壺である。556・557は播鉢で、556は底部に刺突は見られないが、557には刺突が見られる。558～560は甕で、558は横瓶の可能性もある。559は頸部にヘラ記号が見られる。560は外面に平行タタキメ、内面に格子の圧痕が見られる須恵器片で、甕の体部片であろうか。類例に乏しく時期は不明だが、古代の遺物として紹介しておく。561～569は土師器である。561～563は無高台の杯で、563は表面丹塗りである。564～566は高台付きの杯で、564は表面丹塗り、565・566は表面に黒斑が見られる。567は黒色土器の椀である。568・569は高杯で、568は丹塗りで8面の面取り、569は9面の面取りが見られる。570・571は二彩陶器で、小片だが小型火舎と考えられる。県内での出土例は見られないが、他県では奈良県興福寺一乗院、同平城宮で報告されている。570は掘立柱建物-3、571は掘立柱建物-11の近隣で出土している。

572～574は緑釉陶器の皿で、掘立柱建物-10・11の近隣で出土している。貼り付け高台の端部内側には段または沈線が見られ、572・573は糸切りの痕跡が残る。また、572・573は硬陶で574はやや硬質の軟陶である。575はカマドである。576～579は風字硯でO19～O20区の西側で出土している。

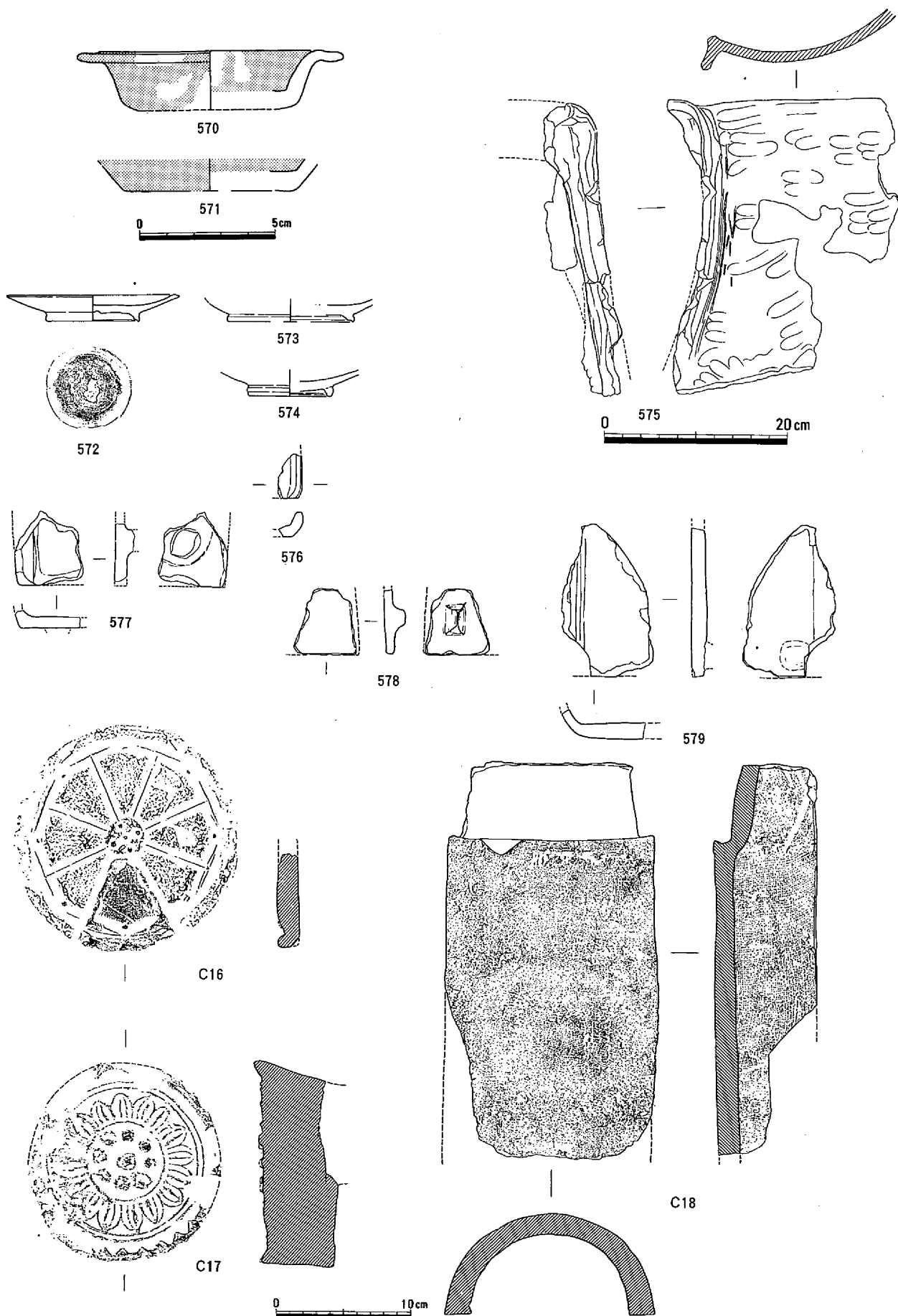
C16・C17は軒丸瓦である。C16は掘立柱建物-12～14の近隣で出土した飛鳥期の単弁八弁蓮華文で、一弁分のみの破片である。表面は白色を呈するが断面は白色砂粒を含んだ黒色を呈する。表面風化が著しいが花卉部分に範傷が見られる。C17はN21区東端のP6調査区の表土直下で出土した天平期の複弁八弁蓮華文でほぼ完形品である。瓦当面の風化は著しいが、文様と製作技法から倉敷市矢部遺跡出土品と類似している。C18は須恵質の玉縁の付く丸瓦である。古代の丸瓦は掘立柱建物-3および11のある地区を中心に高田調査区全体で214点25kgが出土している。確認できるものはすべて玉縁の付く型式である。C19～C25は平瓦である。古代の平瓦は掘立柱建物-3および11～13のある地区を中心に調査区全体で約1000点116kgが出土している。詳細については第5章で後述するが、内訳はC19～C22の凸面縄叩きのもの、C23の凸面平行叩きのもの、C24・C25の格子叩きのものがあり、凸面縄叩きのものが全体の約95%を占める。このうち平行叩きのものは凹面に模骨痕が見られることから桶巻き作りと考えられ、胎土・焼成からC16の飛鳥期の軒丸瓦に伴う可能性が高い。また、C24は隅部分が一部切れていることから隅切り瓦の可能性も考えられる。(杉山)



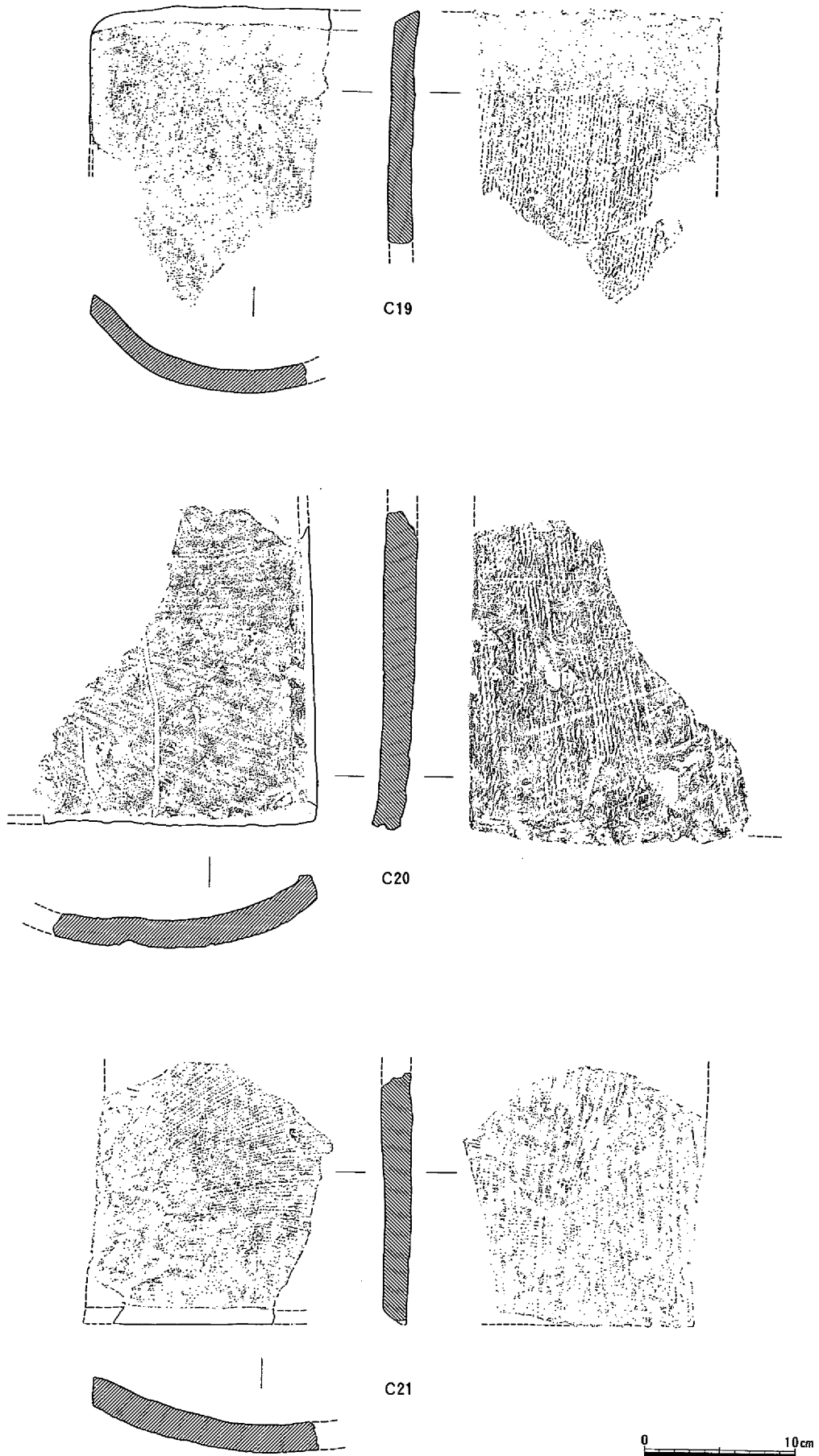
第547図 包含層 (540～547)



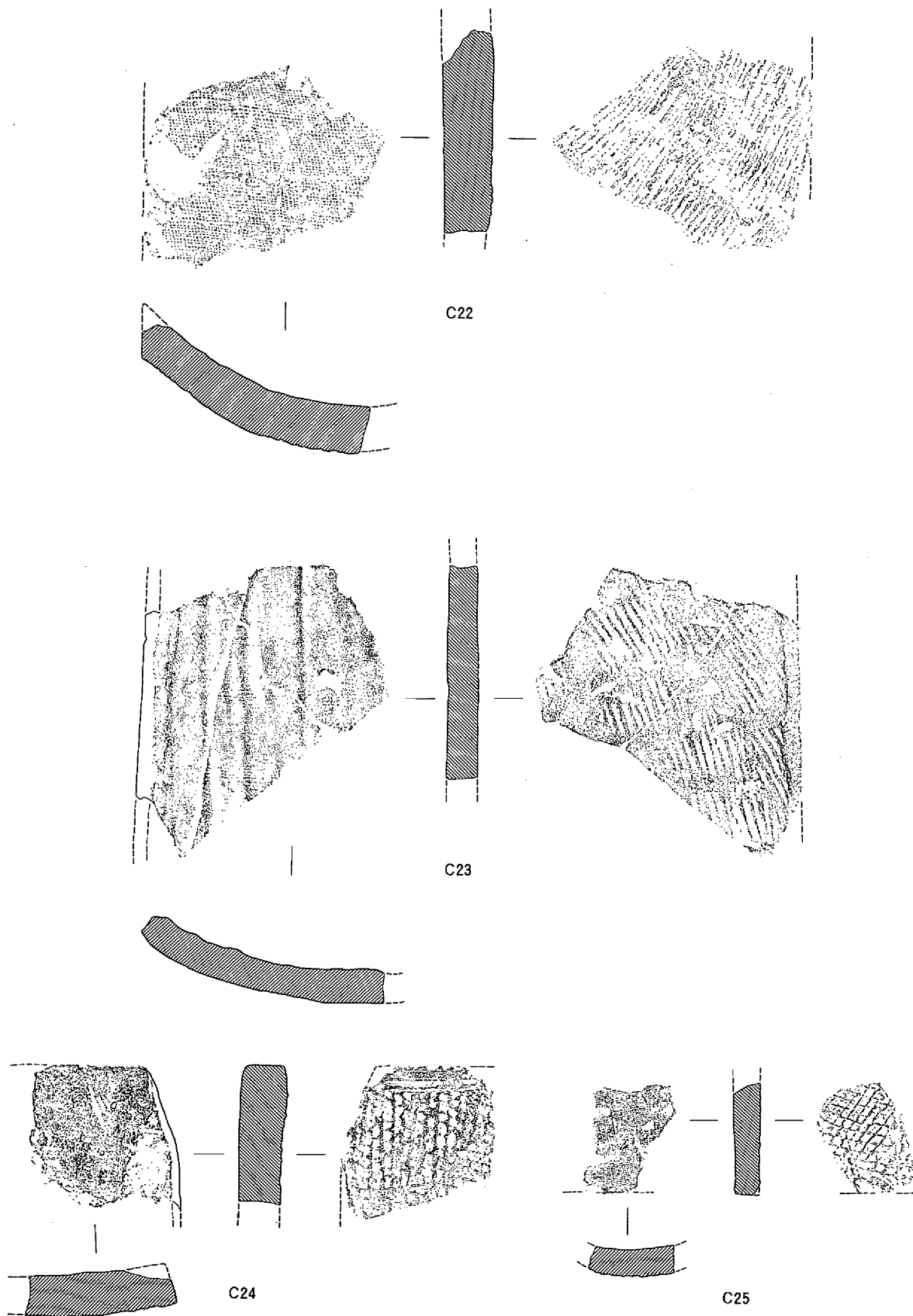
第548図 包含層 (548~569)



第549図 包含層 (570~579・C16~C18)



第550図 包含層 (C19~C21)



第551図 包含層 (C22~C25)



## 第5節 中・近世の遺構と遺物

### (1) 概要

ここでは、鎌倉時代以降の遺構と遺物を取り扱い、掘立柱建物7棟、柱穴列1列、井戸2基、土壇21基、土壇墓1基、溝55条などを報告する。

高田調査区全体で見られる遺構は、集落に関係するものと耕作に関係するものに大別されるが、両者を厳密に分離することは難しく、遺物の出土状況や周辺の状況からその主たる性格を推定した。

集落に関係する遺構としては、O20区の溝-54をはさんで北部の掘立柱建物-20・21のある地区、南部の掘立柱建物-22~24のある地区、N21区の南西部の掘立柱建物-25・26のある地区の3地区に集中する傾向が認められる。それぞれの地区での集落の営まれていた期間は互いに併存した期間はあるものの、中心となる時期は掘立柱建物-20・21のある地区は13世紀末から14世紀前半、掘立柱建物-22~24のある地区は16世紀後半から17世紀前半頃、掘立柱建物-25・26のある地区は14世紀前半から中頃と考えられる。ただし、掘立柱建物-22~24のある地区については14世紀代の遺物も多く見られることからその時期にも集落が営まれていたことが推測される。

耕作関係の遺構としては高田調査区全域に見られ、主に中世以前から踏襲され用水の機能をもっていると考えられる溝-54と、畝溝と考えられる浅く一定の方向性をもった素掘り溝が認められる。この畝溝と考えられる溝はO19区とO20区では若干方位を異にしているが、これは時期差として判断される。また、溝-54の北部で土壇-12のような木桶状遺構も確認され、大規模な耕地化が進められた様子がうかがえる。

これらのことから高田調査区の中で営まれていた居住域は、概ね13世紀以後徐々に耕地化が進み、15世紀前後には溝-54の南部を残し耕地化が完了したと考えられる。そして17世紀以後、溝-54の南部で営まれていた集落もその居住域を移動し、耕地化がすべて完了したと判断される。(杉山)

### (2) 掘立柱建物

#### 掘立柱建物-20 (第558図)

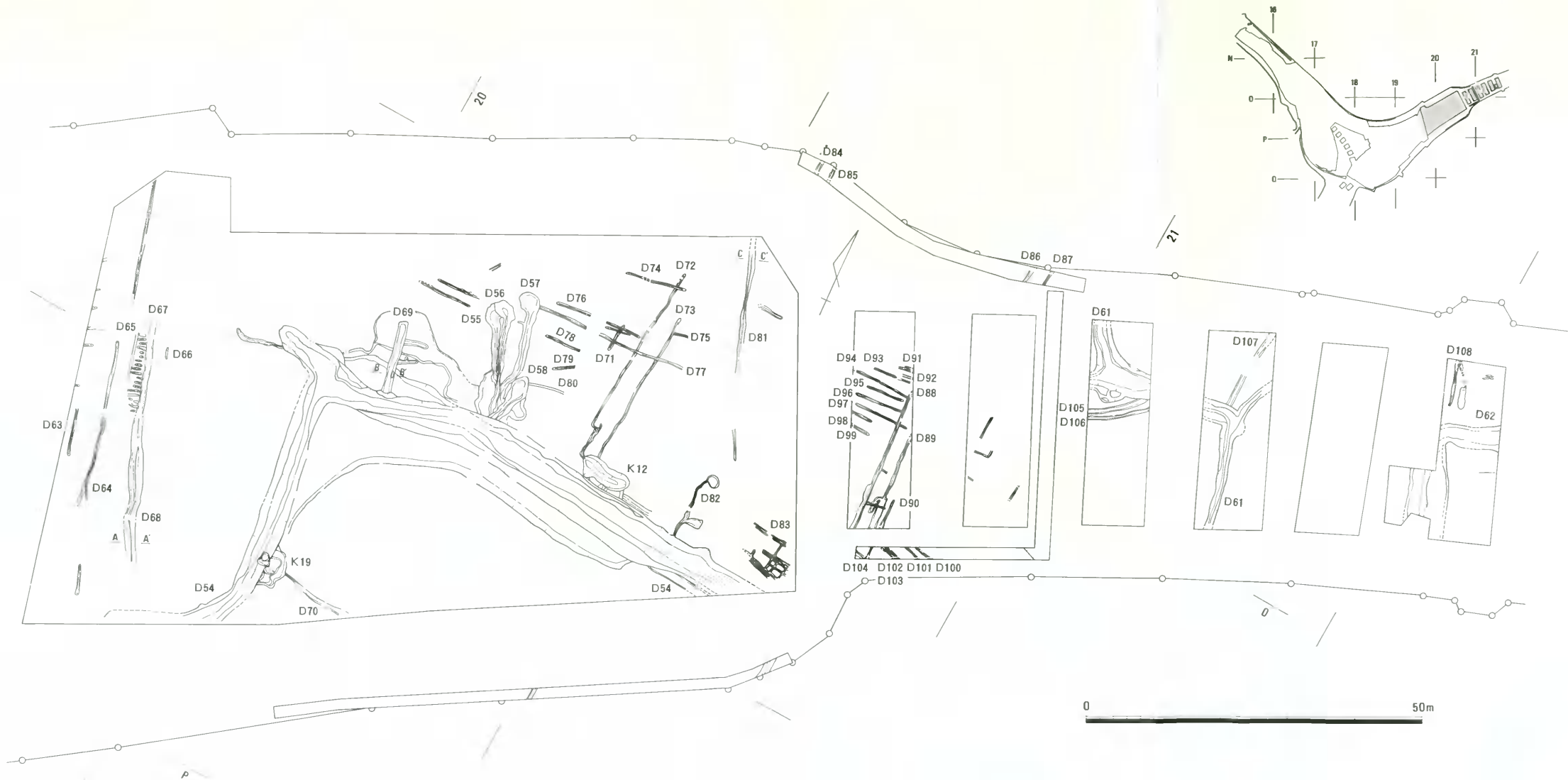
O20区の北西端付近に位置し、調査区境により北側の状況は不明である。規模は2×2間の総柱建物と推定され、棟方向はN-4°-Eを示す。現状において柱間寸法は桁175・190cm、梁142~165cmであり、桁行は365cm、梁間304・315cmを測る。面積は11.4㎡である。柱穴の掘り方は円形であり、規模は長径28~44cm、短径27~39cm、深さ10~37cmを測る。土師質の高台付椀や鍋の破片が柱穴埋土より出土しており、遺構は中世のものであると思われる。(澤山)

#### 掘立柱建物-21 (第559図)

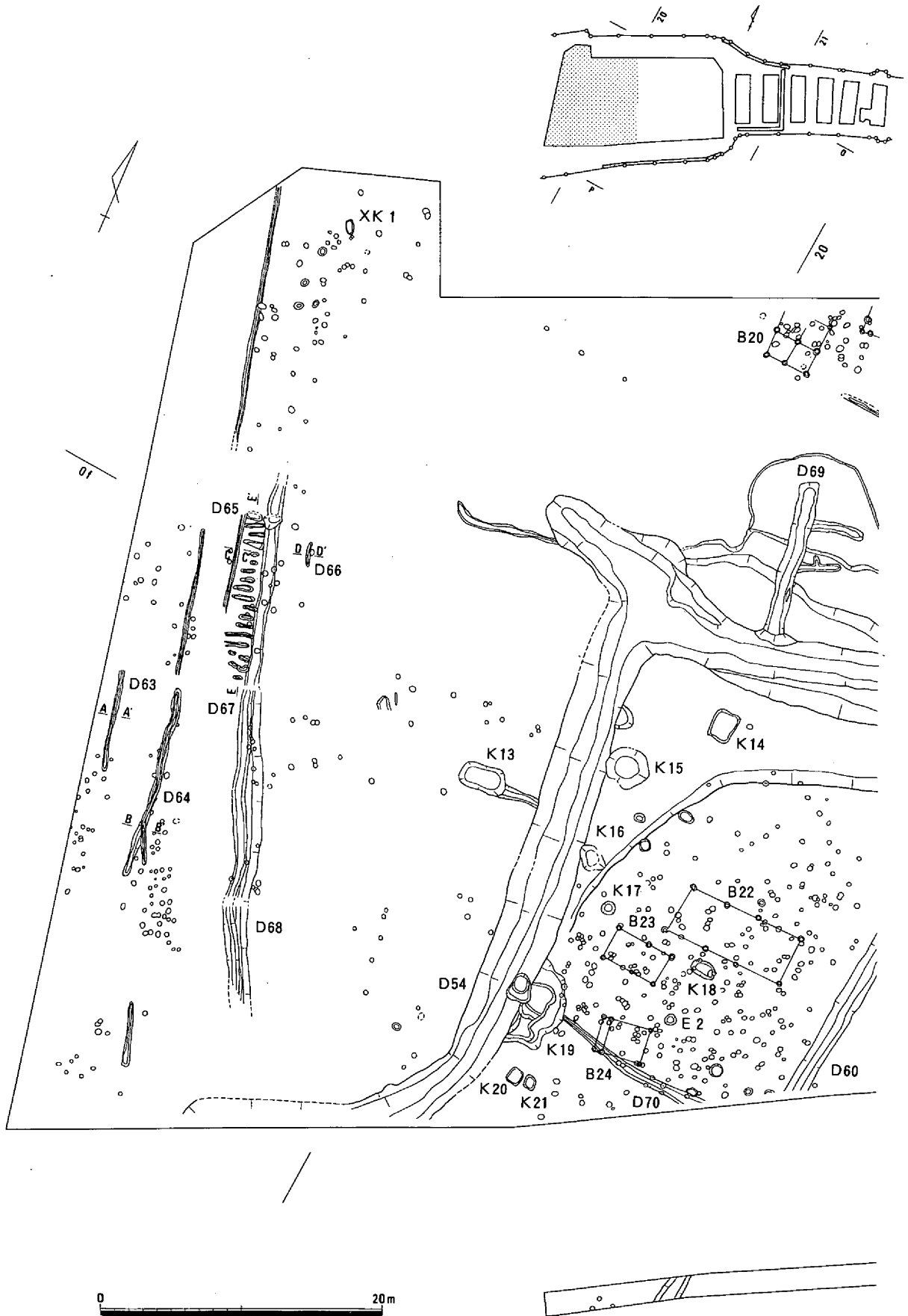
掘立柱建物-20の北西隣で検出された。調査区境により北側の状況は不明である。規模は東側に庇を有する3×3間の建物と推定され、棟方向はN-1°-Eを示す。現状において柱間寸法は桁75~130cm、梁110~210cmであり、桁行は430cm、梁間335・355cmを測る。面積は14.4㎡、身舎10.4㎡である。柱穴の掘り方は円形または楕円形であり、規模は長径18~43cm、短径17~39cmを測る。建物周辺で検出された柱穴の状況から、遺構は中世の範疇で捉えられるものと思われる。(澤山)



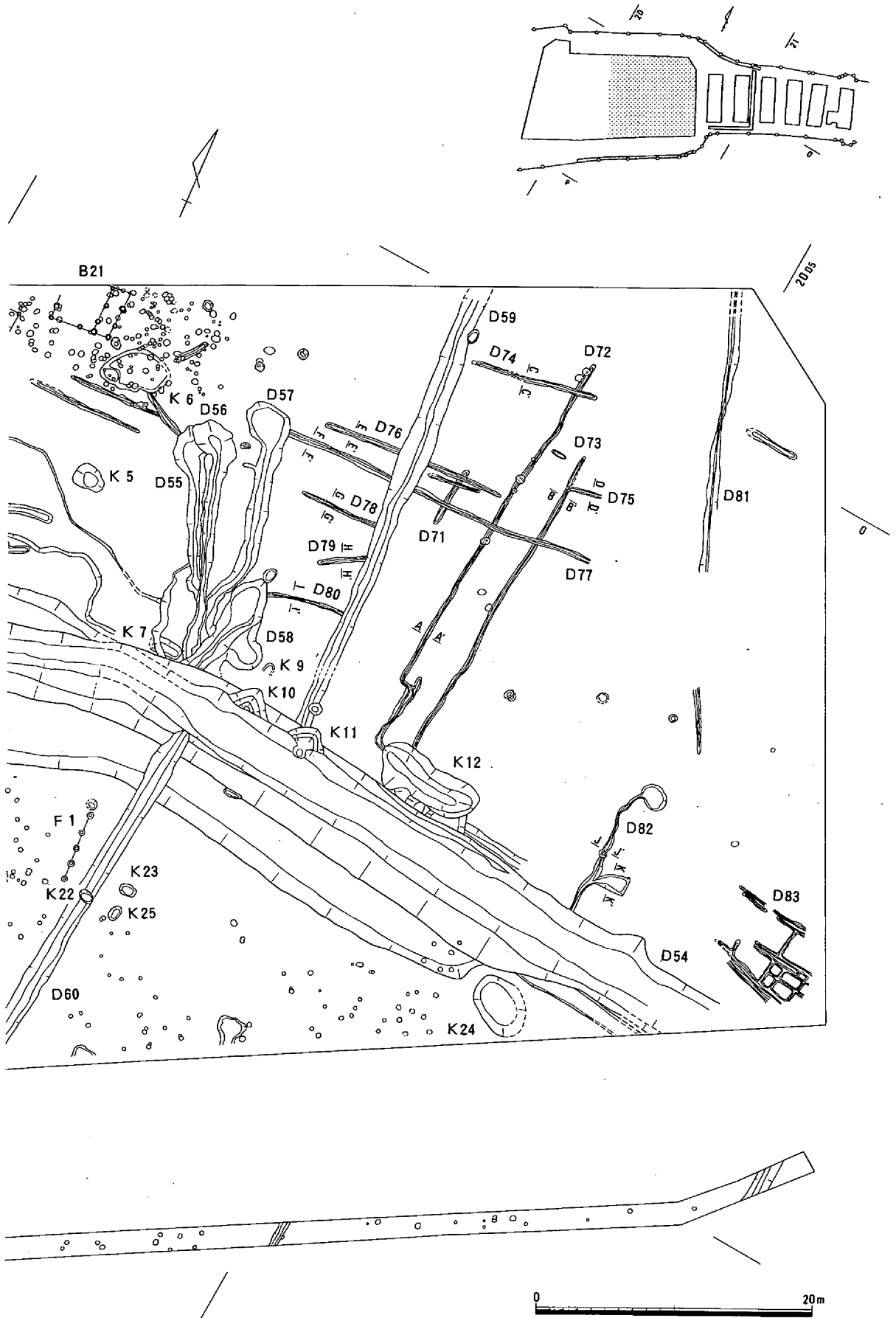
第552図 高田調査区中・近世遺構全体図1) 1/600



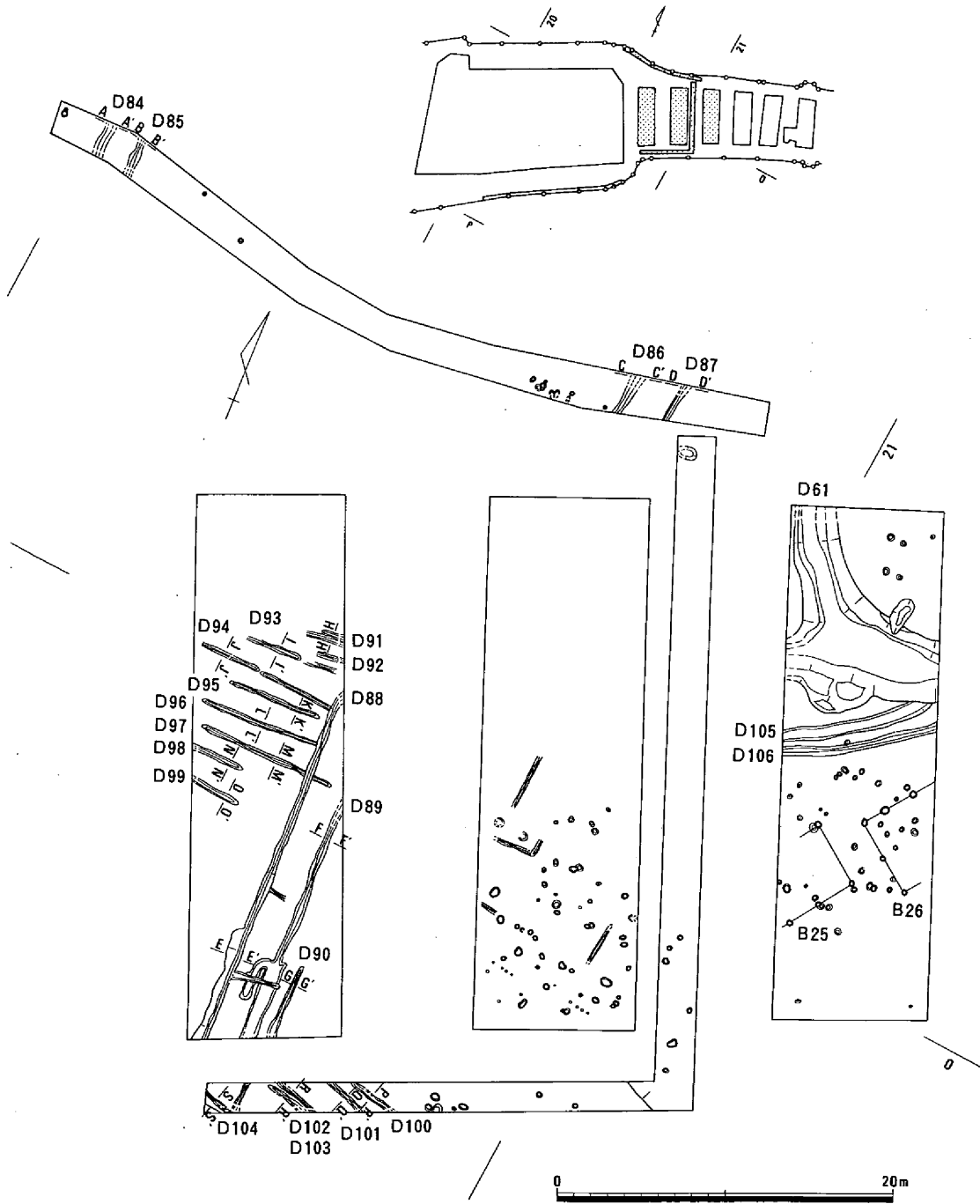
第553図 高田調査区中・近世遺構全体図(2) 1/600



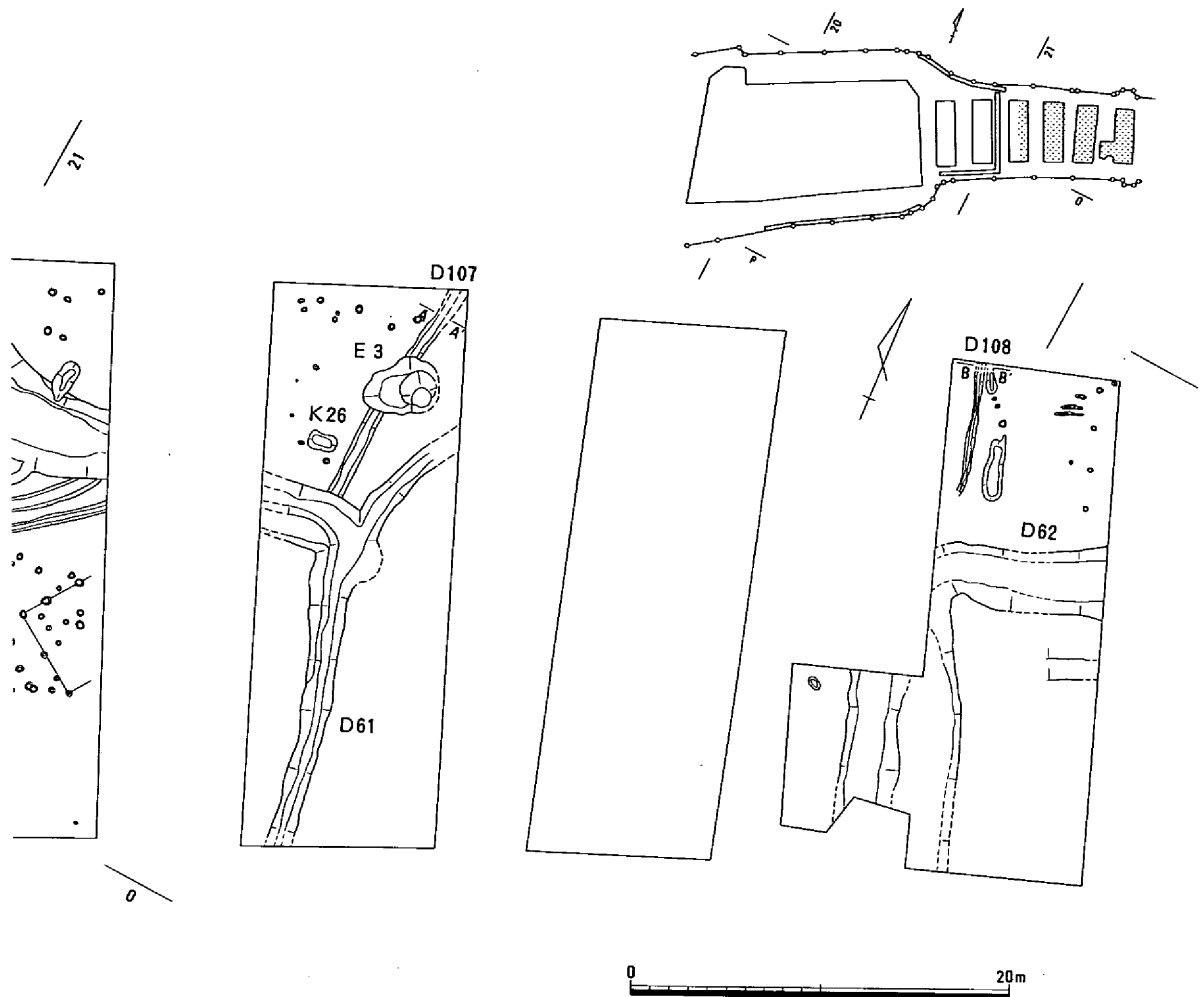
第554図 高田調査区中・近世遺構配置図(1) 1/400



第555図 高田調査区中・近世遺構配置図(2) 1/400



第556図 高田調査区中・近世遺構配置図(3) 1/400



第557図 高田調査区中・近世遺構配置図(4) 1/400

掘立柱建物-22 (第560図、図版136)

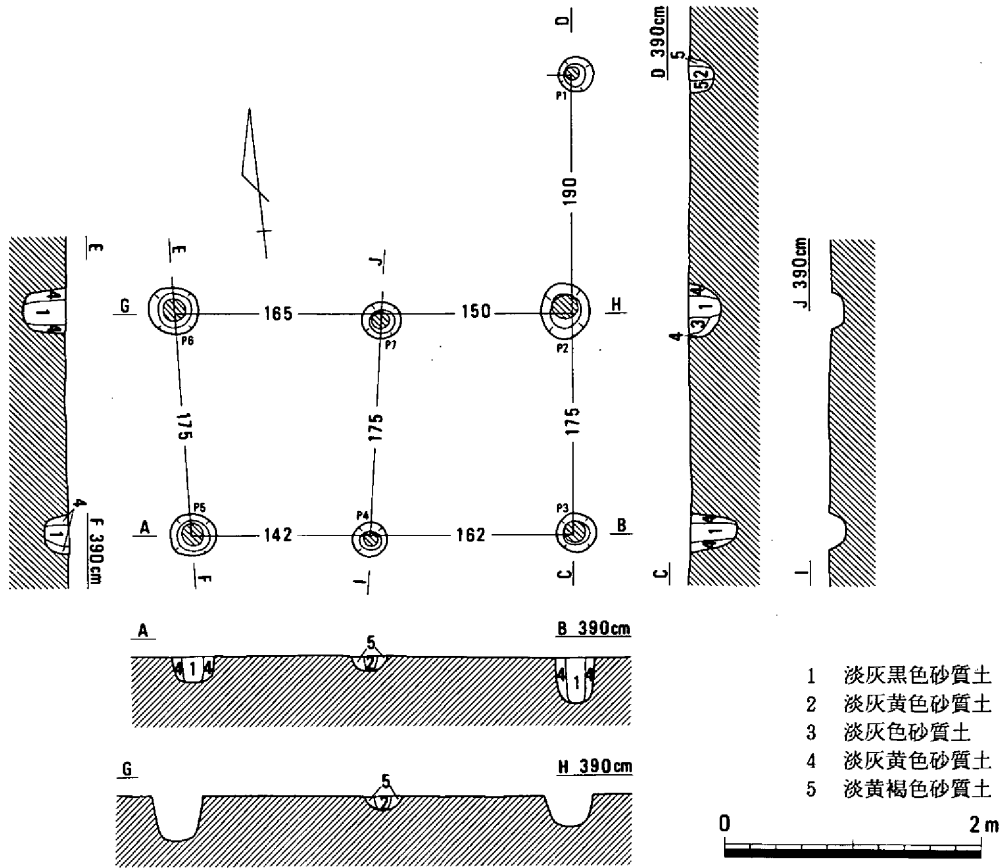
O20区西部中央で検出された3×1間の建物である。桁行は最大で880cm、梁間350cmを測り、建物面積は30.7㎡である。棟方向をN-84°-Wにとる。柱穴の平面形は径30~40cmほどの円形であり、その深さは最深で36cmを測った。柱穴から径20cmほどの柱痕跡を確認しているが、火災にあった状況を呈している。出土遺物はいわゆる早島式の土師器碗の小破片が散見されたが、柱穴埋土と井戸-2との関係を勘案すれば江戸時代の建物の可能性が高いものと思われる。(大橋)

掘立柱建物-23 (第561図)

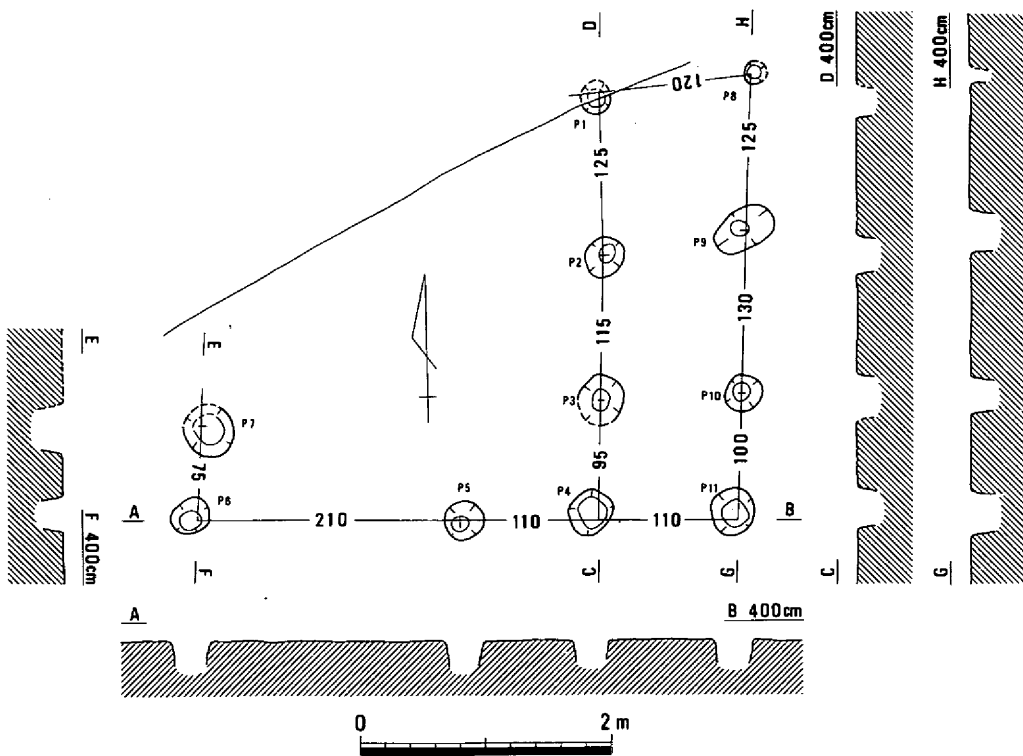
掘立柱建物-22の南西隣に位置する2×1間の建物である。北側の桁行が長く440cm、梁間233cmを測り、やや逆台形を呈する。棟方向、柱穴規模等は掘立柱建物-22と近似するが、建物面積は9.6㎡と一回り小形である。柱穴からの出土遺物は見なかったものの先に触れた状況から、掘立柱建物-22同様江戸時代の建物と理解している。(大橋)

掘立柱建物-24 (第562図)

掘立柱建物-23の南約3mで検出された身舎1×1間の建物である。西側にもう1間分の柱穴を検出しており片面庇の建物と理解した。桁行285cm、梁間245cm、身舎面積は6.8㎡を測る。棟方向は東西N-86°-Eを指す。柱穴埋土等からこの建物も江戸時代のもものと理解した。(大橋)

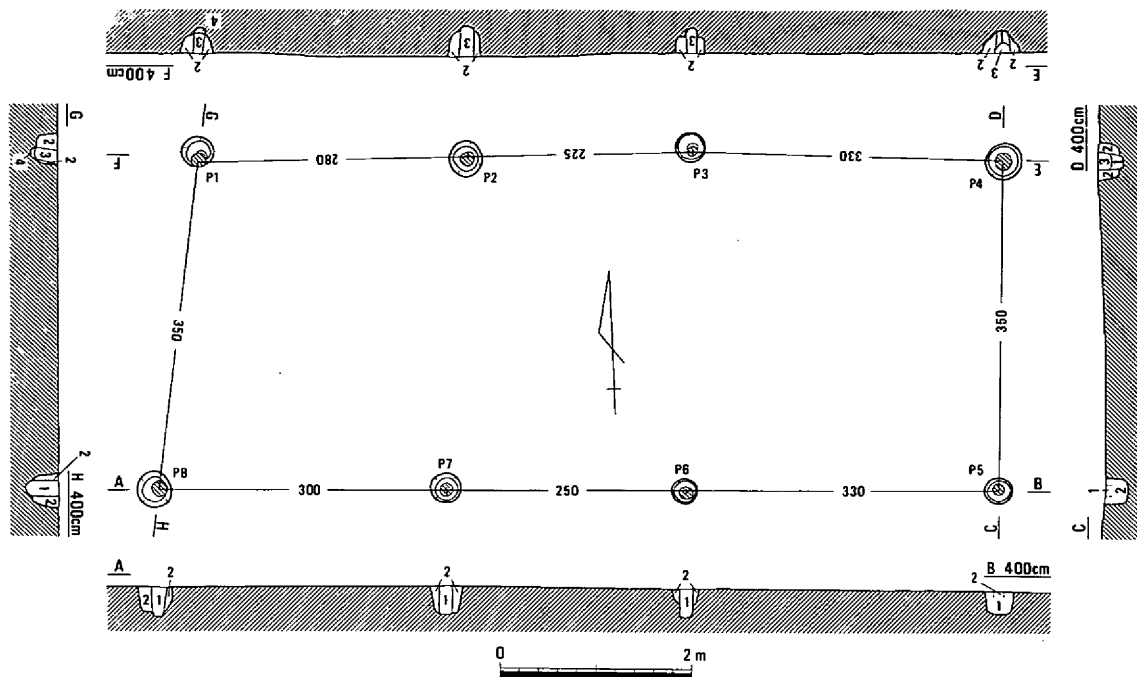


第558図 掘立柱建物-20



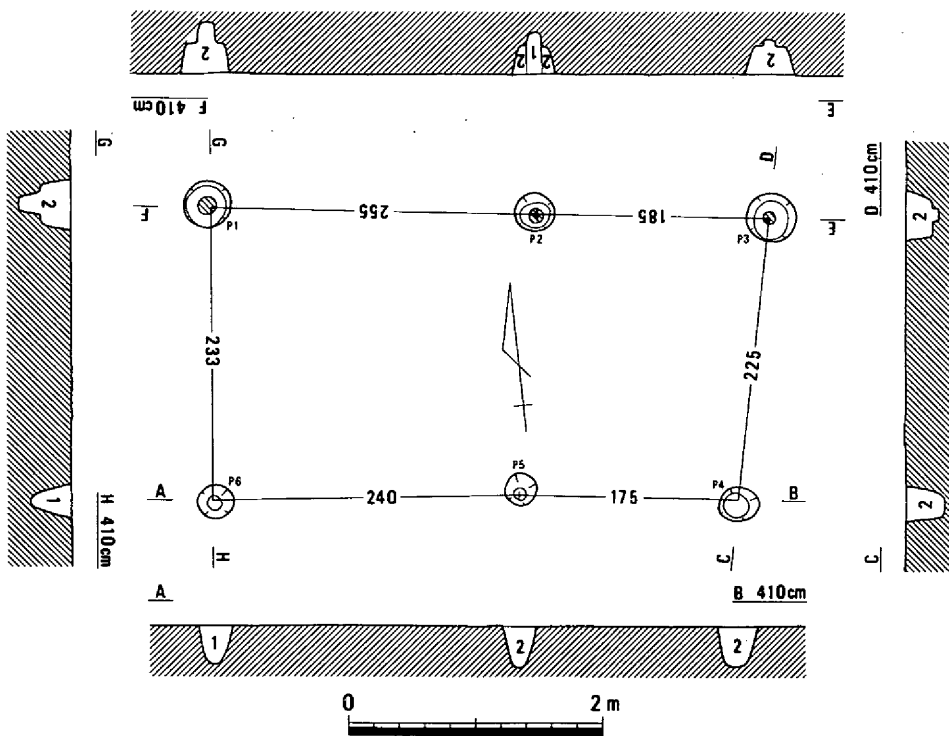
第559図 掘立柱建物-21





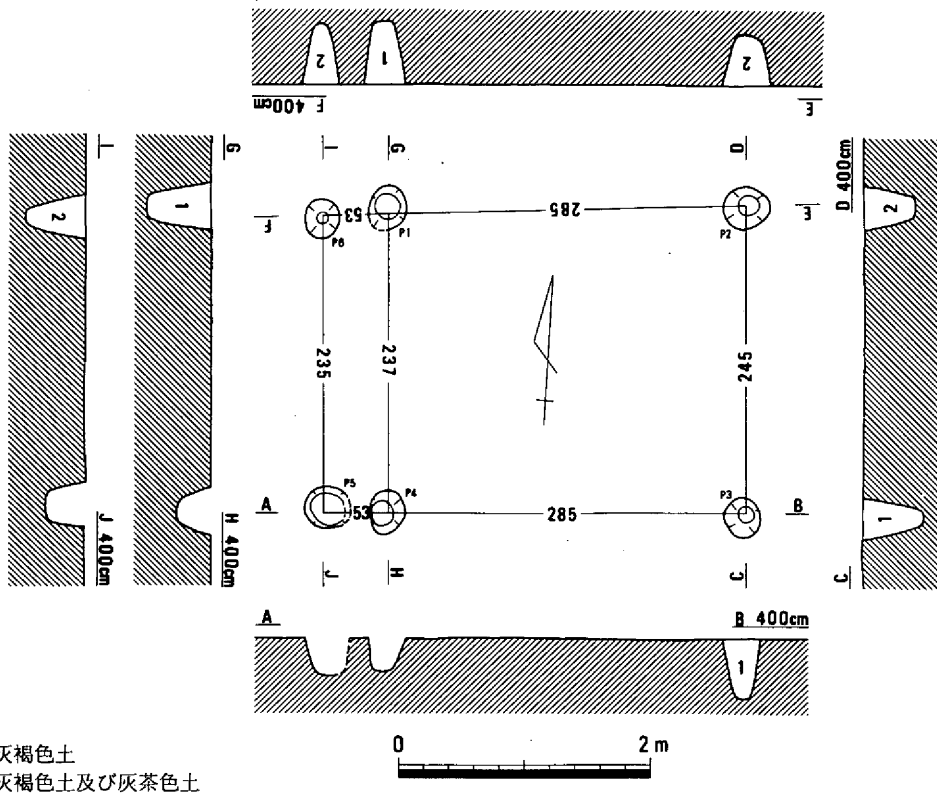
- 1 淡灰褐色粘質微砂(柱痕跡)
- 2 淡灰褐色粘質微砂
- 3 淡灰褐色粘質微砂(焼土塊含む)
- 4 暗黄褐色粘質微砂

第560図 掘立柱建物-22

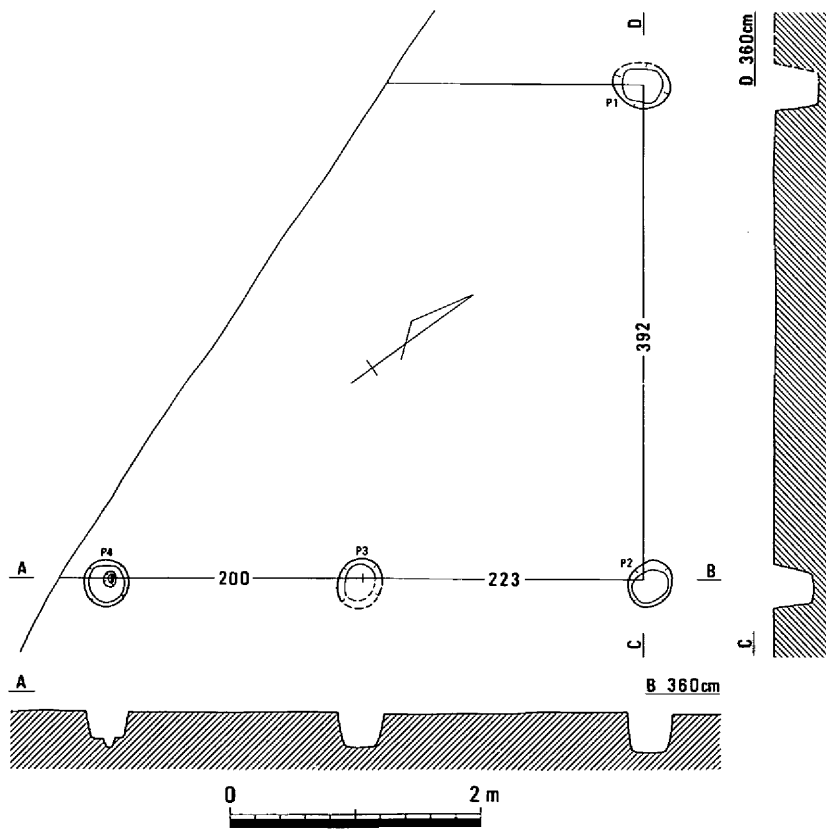


- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土及び灰茶色土

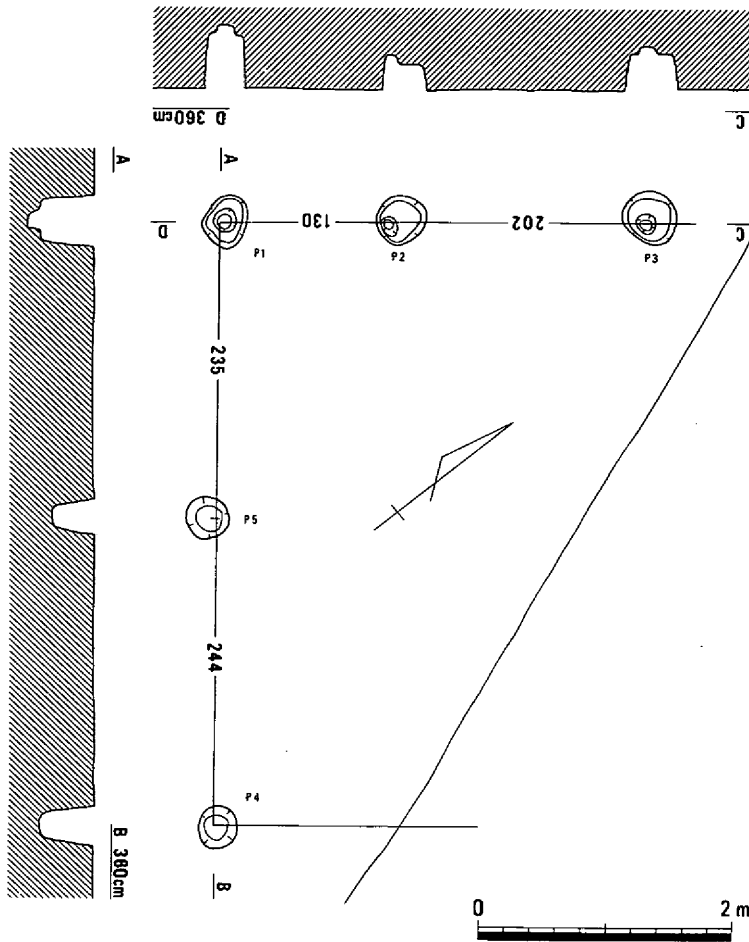
第561図 掘立柱建物-23



第562図 掘立柱建物-24



第563図 掘立柱建物-25



第564図 掘立柱建物-26

掘立柱建物-25 (第563図)

N21区の南西、高田調査区の橋脚部から検出された、桁行2間以上×梁間1間の南北棟建物で、南西部は調査区外に延びる。柱間は桁行223・200cm、梁間392cmを測る。柱穴の掘り方は円形で、径約40cm、深さ約30cmを測る。遺物は南東の2柱穴から早島式土器椀片が出土しており、鎌倉時代の建物と考えられる。

(江見)

掘立柱建物-26 (第564図)

掘立柱建物-25の北にほぼ接して検出された桁行2間以上×梁間2間の南北棟建物で、北東部は調査区外に延びる。柱間は桁行130・202cm、梁間235・244cmを測る。柱穴の掘り方は円形で、径約40cm、深さ20~40cmを測り、桁行および梁間中央の柱穴はいずれも

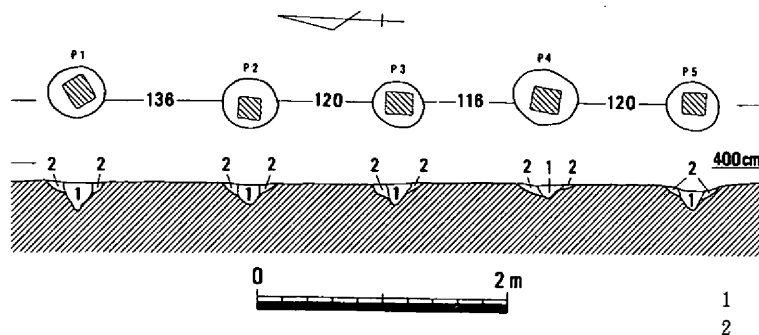
浅い。柱穴からは早島式土器片、土師質土器片などが出土しており、鎌倉時代の建物と考えられる。

(江見)

柱穴列-1 (第565図)

O20区南半、溝-60の西側に位置する。長さ492cmを測る4間分の柱列である。柱痕跡は25cmほどの方形を呈し、角柱であったと理解される。対になるものが検出できず柵状の構造物を想定した。時期については言及できる材料が無く、不明である。

(大橋)



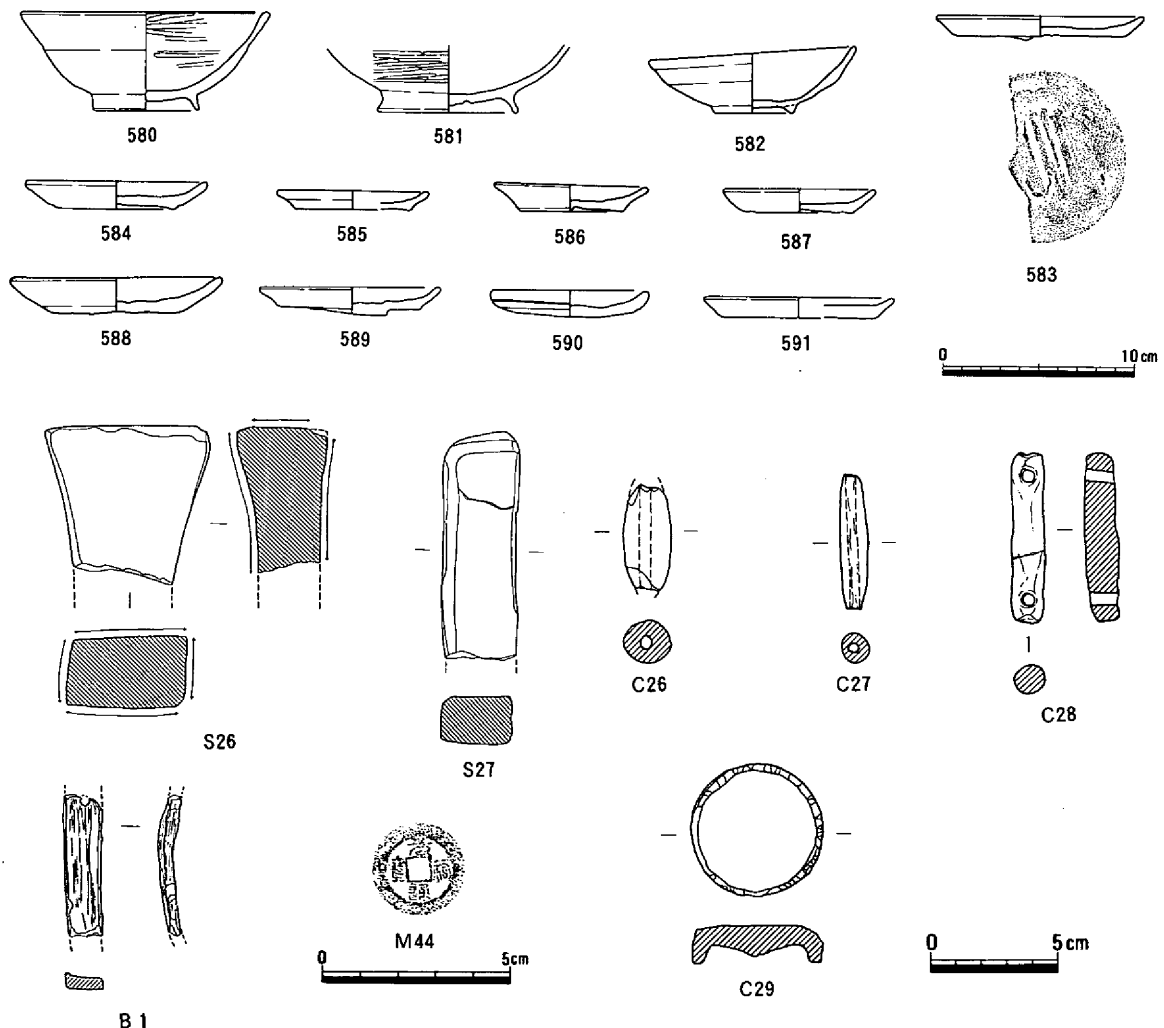
第565図 柱穴列-1

(3) 柱 穴 (第566図、図版163・164・167)

調査区内には建物にまとめることができなかつたが、建物を確認した地区を中心に多くの柱穴が存在する。この中で、集落が営まれていた時期を知る手掛かりを与えてくれる遺物を中心に報告する。

580～582は土師器の高台付椀で早島式土器と呼ばれる椀である。580・581は杯部がまだ丸みをもって深く、内外面にミガキが見られる。583～591は土師器の皿である。底部外面には584・585は不明だが、583には板目圧痕、586～591にはヘラ切り痕が見られる。S26は砥石である。S27は棒状の石片で、全面に摩滅痕が認めらる。これは、折損部で磨るまたは捏ねる用途が考えられる。C26～C28は土錘である。C29は国産陶器の椀の底部を転用した円板である。高台を残し周辺を細かく打ち欠いて整形している。B1は骨製の筭である。二次的な被熱により変形しているが、頭部には径2mmの穿孔がある。M45は銅銭で「元祐通宝」の銘が見られる。

これらのうちS26・S27・C26～C28は、出土地区の状況から中世以前の時期になる可能性もある。580・581・589～591はO21杭付近で出土しており、この付近では鎌倉時代前半にも居住地として利用されていたと判断される。また、583～588はO20区の溝-54の南側で出土しており、この地区も14世紀前半に集落として一部利用されていたと考えられる。(杉山)



第566図 柱穴 (580～591・C26～C29・S26・S27・B1・M44)

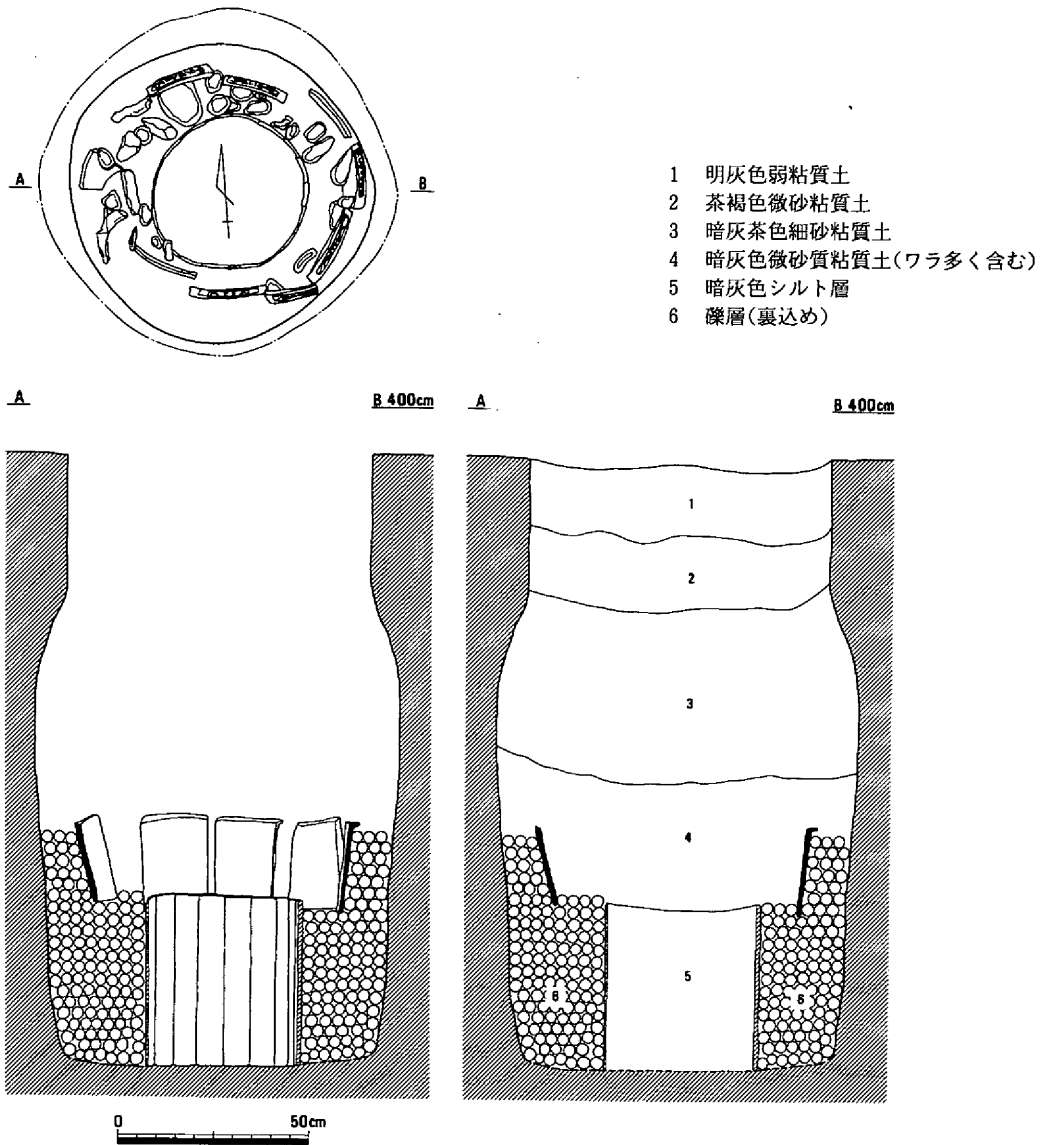
(4) 井戸

井戸-2 (第567・568図、図版136・165)

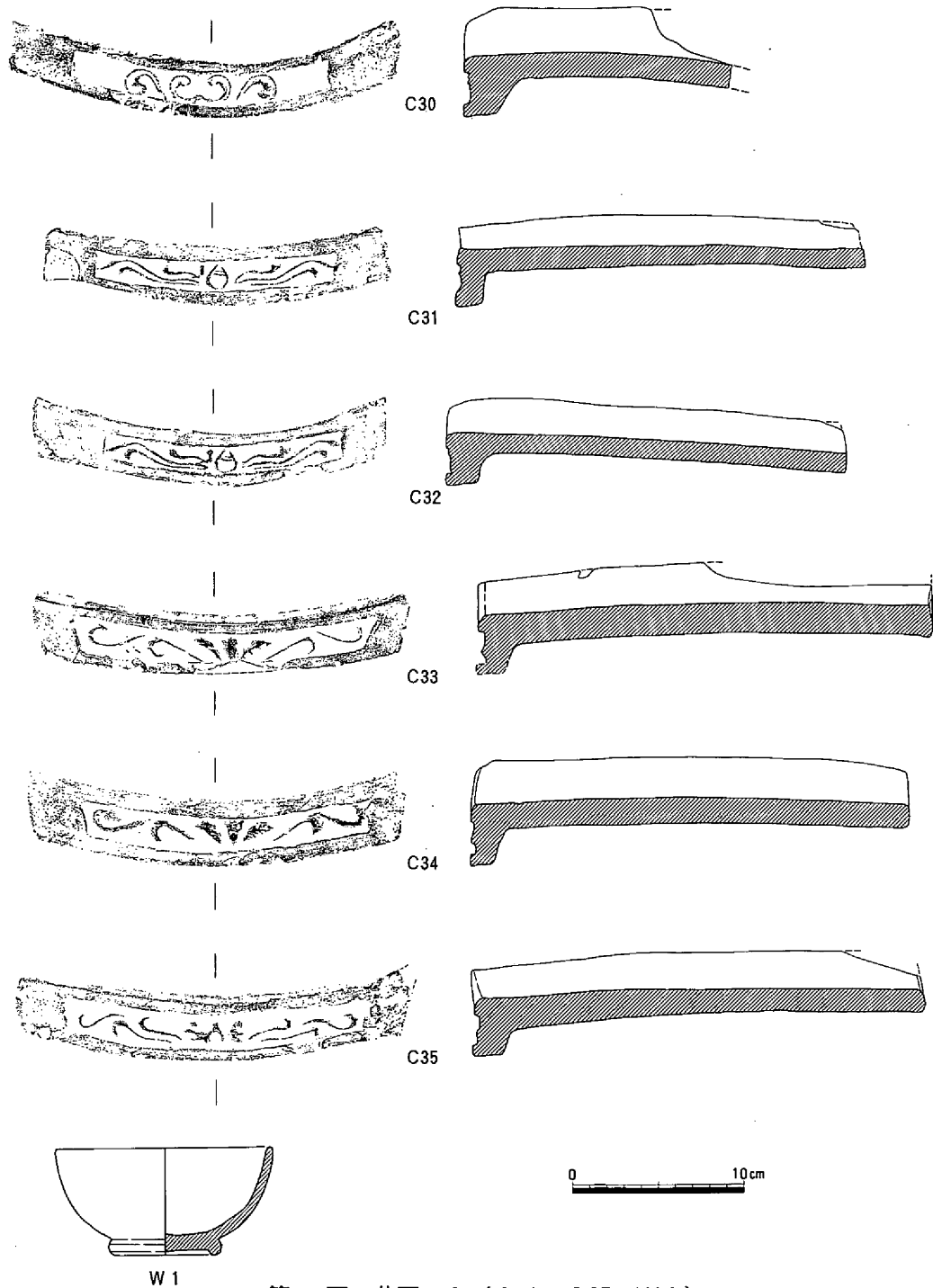
O20区南西部、掘立柱建物-22・23・24の近隣で検出した。検出面での掘り方の規模は径80cmを測り、井戸底までの深さは161cmである。井戸底部には径38cmの桶状のものを置き、その裏ごめとして拳大以下の円礫を積めている。また、桶の上部には瓦を用いてさらに径68cmの枠を形成している。

出土遺物は、井側を形成している軒平瓦9枚がある。いずれも燻し瓦である。C30は反転する唐草文を表現する軒平瓦であり、大阪城、聚楽第などの系譜をひくものと理解される。C31・C32は宝珠を中心に飾り、岡山城上層、後期高松城、総社宮などで同范と思われる出土例がある。C33・C34は三つ葉を中心に持つもので、類例は岡山城、下津井城などにみられる。C35は五七の桐を中心に飾るものであるが、桐文にはやや崩れが認められる。岡山城下層に類例を見る。その他、内外面黒漆塗の漆椀W1が出土している。井戸の時期は、軒平瓦を参考にすれば、江戸時代前半と考えられる。

(大橋)



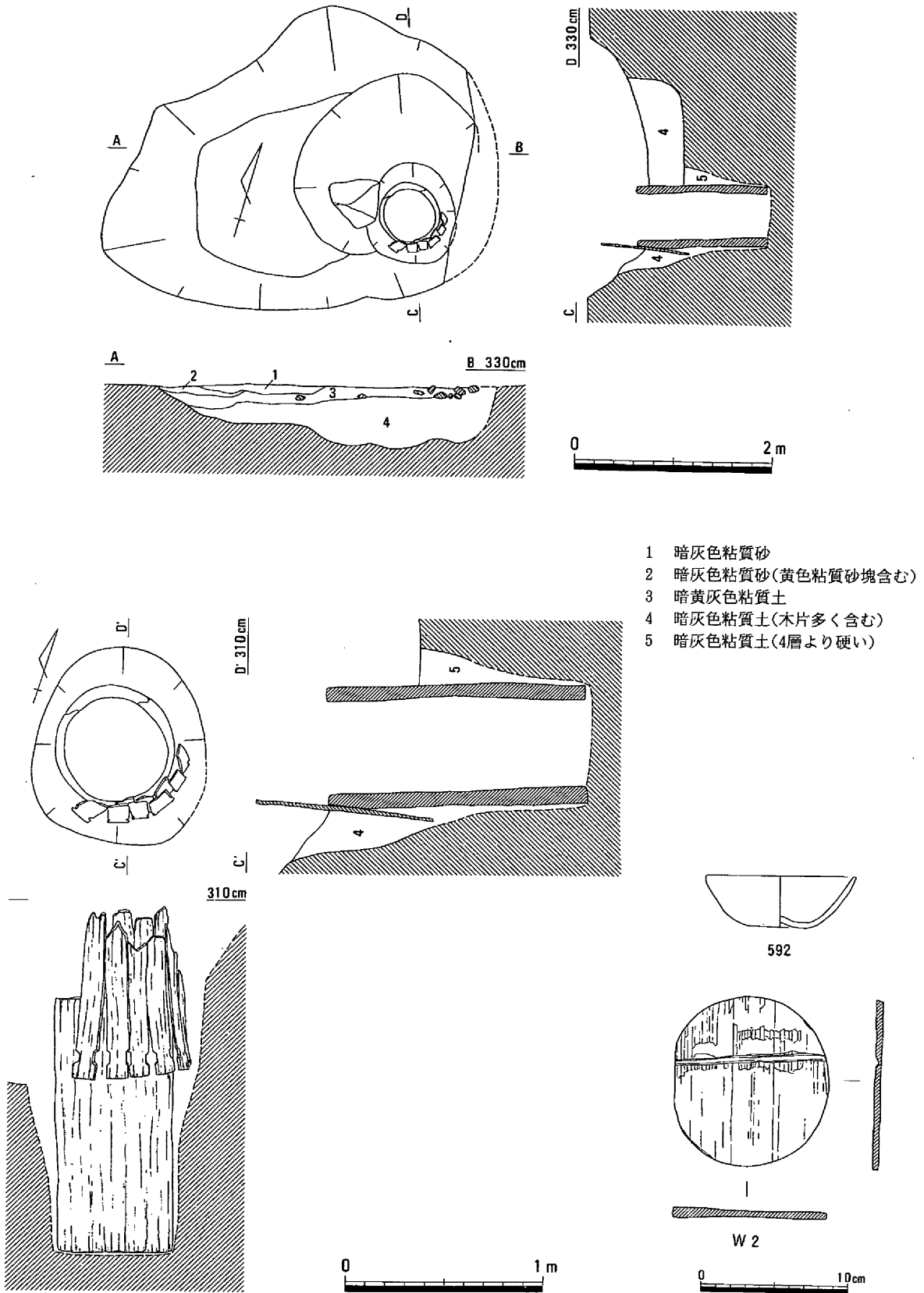
第567図 井戸-2



第568図 井戸-2 (C30~C35・W1)

井戸-3 (第569図、図版136)

N21区の南西、高田調査区の東端から検出された、丸木を剥り貫いて井筒とした井戸である。井筒は径約60cm、長さ130cmのコウヤマキが使用され、縁から厚さ10cmを残す。上部には幅約10cm、厚さ約2cmの加工痕跡をもつヒノキ板が巡らされていた。いっぽう、井戸の西側には検出面から約40cmの深さに1㎡余りの平坦面が認められ、湧水のため断面観察が十分ではなかったが、水汲みのための足場の機能を果たしたものと示唆された。出土遺物は土師質碗592、曲物の蓋? W2の他瓦片、石臼片などわずかであった。土器の特徴から井戸は鎌倉~室町時代のもと思われる。(江見)

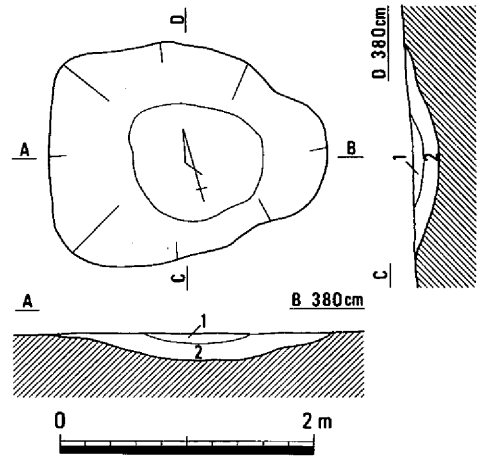


第569図 井戸-3 (592・W2)

(5) 土 壙

土壙-5 (第570図)

〇20区の北西付近に位置する。形態は不整形の平面形に、皿状の断面形を呈する。規模は長さ220cm、幅173cm、深さ27cm、底面標高340cmを測る。埋土には炭が含まれていた。中世水田を切っていることから時期はこれ以降のものと思われる。(澤山)

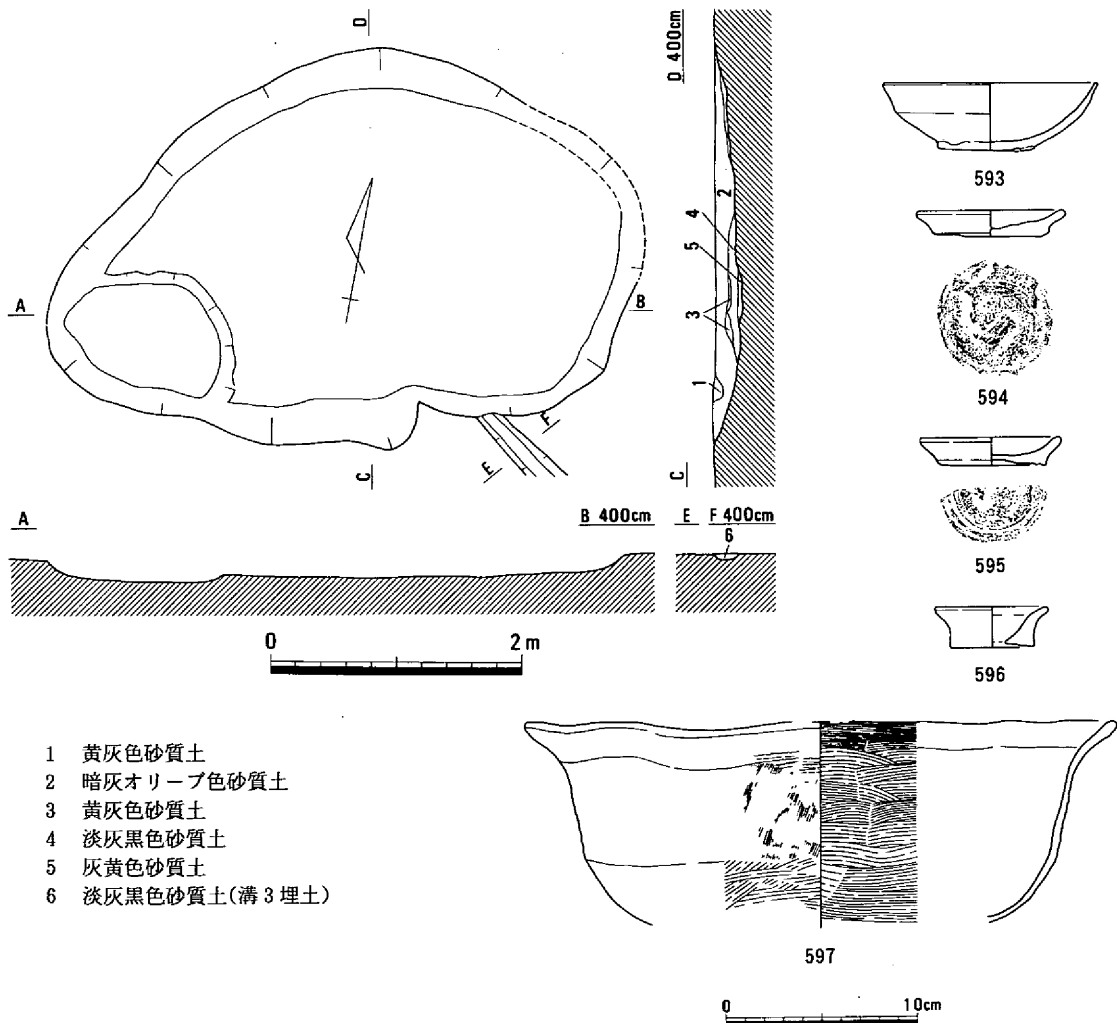


- 1 暗黄灰色砂質土(炭含む)
- 2 淡黄黑色砂質土(炭含む)

第570図 土壙-5

土壙-6 (第571図、図版156)

〇20区北西部、柱穴群内に位置する土壙である。不整楕円形を呈し、規模は460×319cmを測り、床面の西端が一部深くなっている。また、土壙に伴うかどうか不明であるが、細い溝が溝-55に向けて伸びている。土師器碗573、小皿574・575、鍋597などが出土している。時期は鎌倉時代後半である。(柴田)



- 1 黄灰色砂質土
- 2 暗灰オリーブ色砂質土
- 3 黄灰色砂質土
- 4 淡灰黑色砂質土
- 5 灰黄色砂質土
- 6 淡灰黑色砂質土(溝3埋土)

第571図 土壙-6 (593~597)



土壌-7 (第572図、図版137・156)

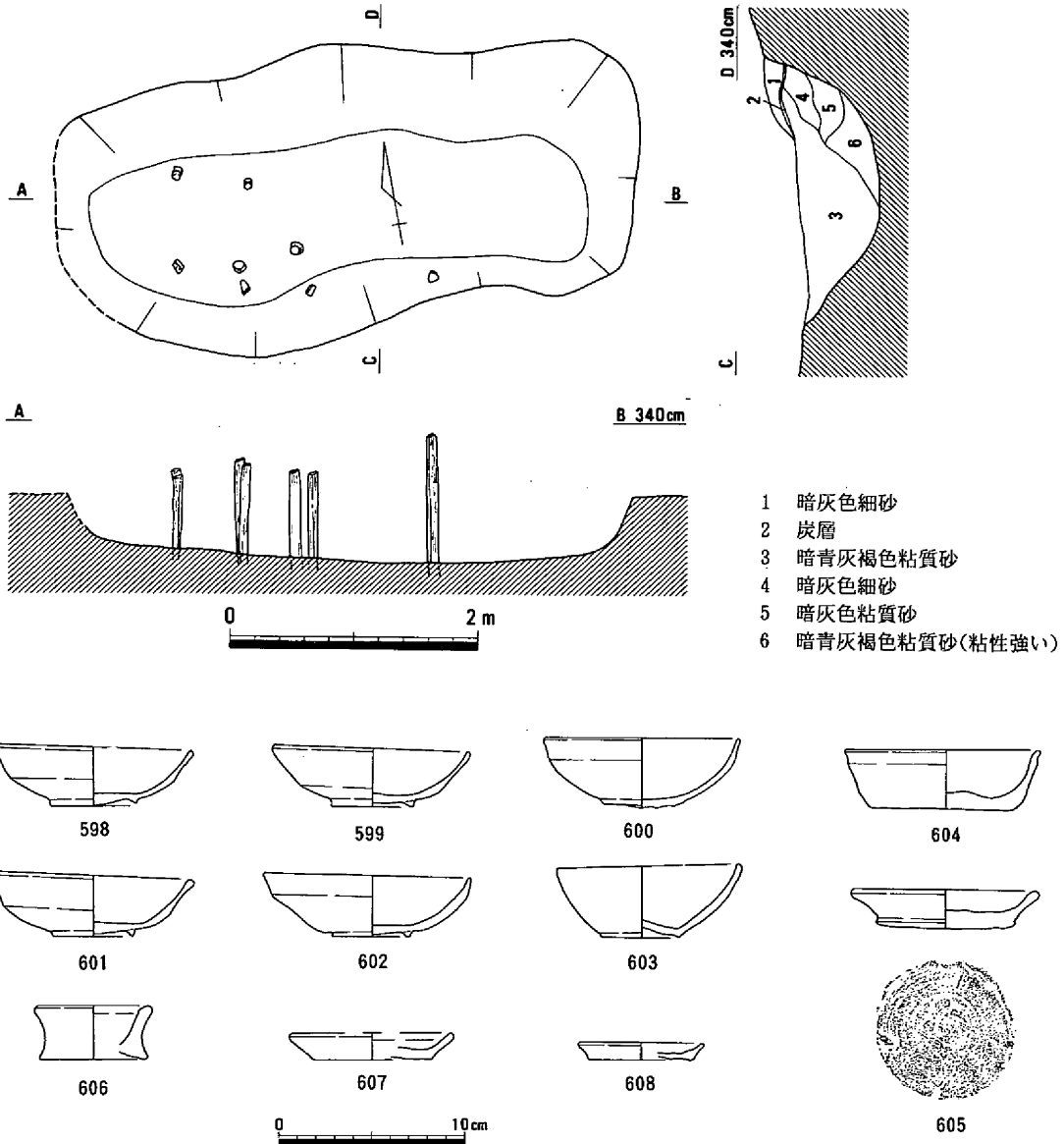
O20区中央付近に位置する。溝-56~58と溝-54との取り付け付近に存在し、これらに関連すると考えられる杭が土壌内で8本確認された。杭の太さは約10cm、杭頭の海拔高は300~330cm程度である。土壌の形態は不整楕円の平面形に、皿状の断面形を呈する。規模は長さ234cm、幅122cm、深さ28cmを測る。遺物は土師器高台付椀598~602、椀603、杯604、皿605、小杯606、小皿607・608などが認められた。遺構の時期は600・603の椀底部の形態から中世でも14世紀前半のものと思われる。(澤山)

土壌-8 (第573図、図版163)

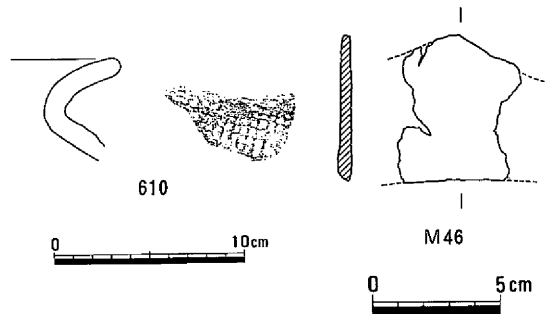
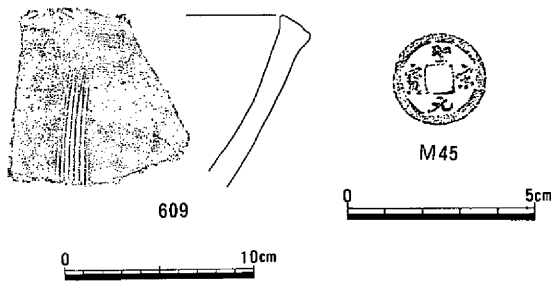
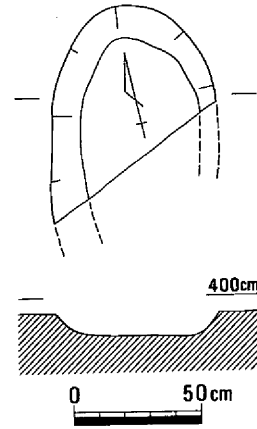
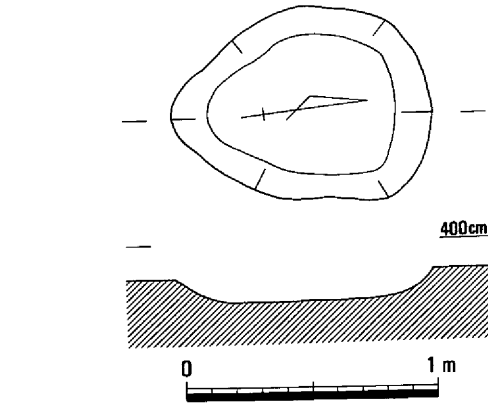
溝-58の北端に接する土壌である。掘り方平面は不整楕円形で、規模は南北103cm・東西77cmを測る。埋土中から備前焼播鉢609、銅銭M45が出土している。時期は南北朝の頃と思われる。(柴田)

土壌-9 (第574図、図版163)

土壌-9は、溝-58の東に位置する。南半分は削平されているが、楕円形と推定される。埋土中から亀山焼甕610、火打金M46が出土している。時期は近世と思われる。(柴田)

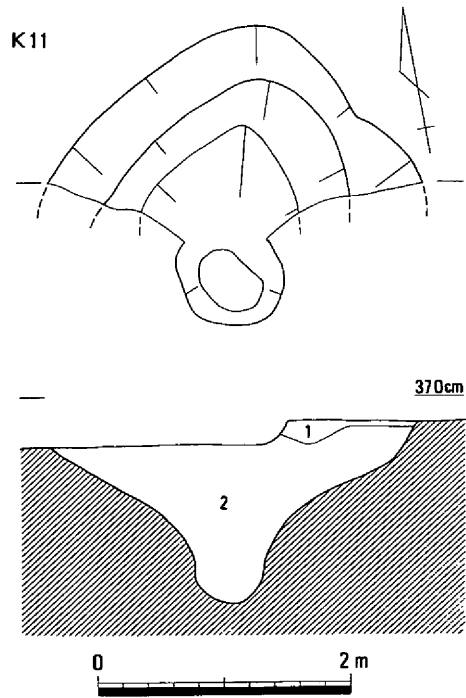
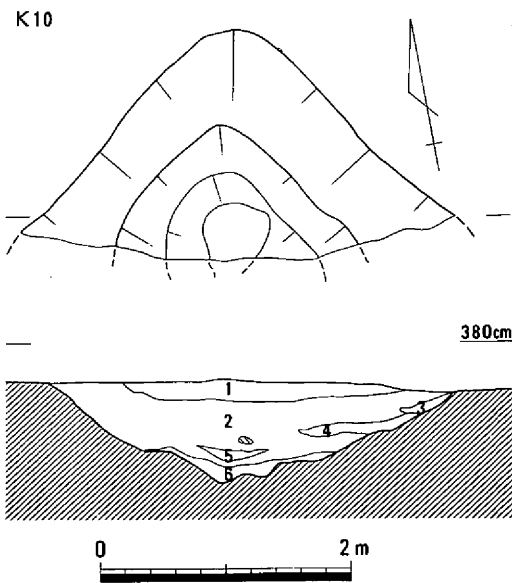


第572図 土壌-7 (598~608)



第573図 土坑-8 (609・M45)

第574図 土坑-9 (610・M46)



- 1 淡灰褐色微砂(少し粘性をおびる、鉄分の沈着有り)
- 2 灰褐色粘質微砂
- 3 明灰褐色微砂
- 4 暗灰褐色微砂
- 5 灰褐色微砂
- 6 明茶褐色細砂

- 1 マンガン及び鉄分の沈着
- 2 暗灰色粘質土(明茶色細砂ブロックが混じる)

第575図 土坑-10・11

土壌-10 (第575図)

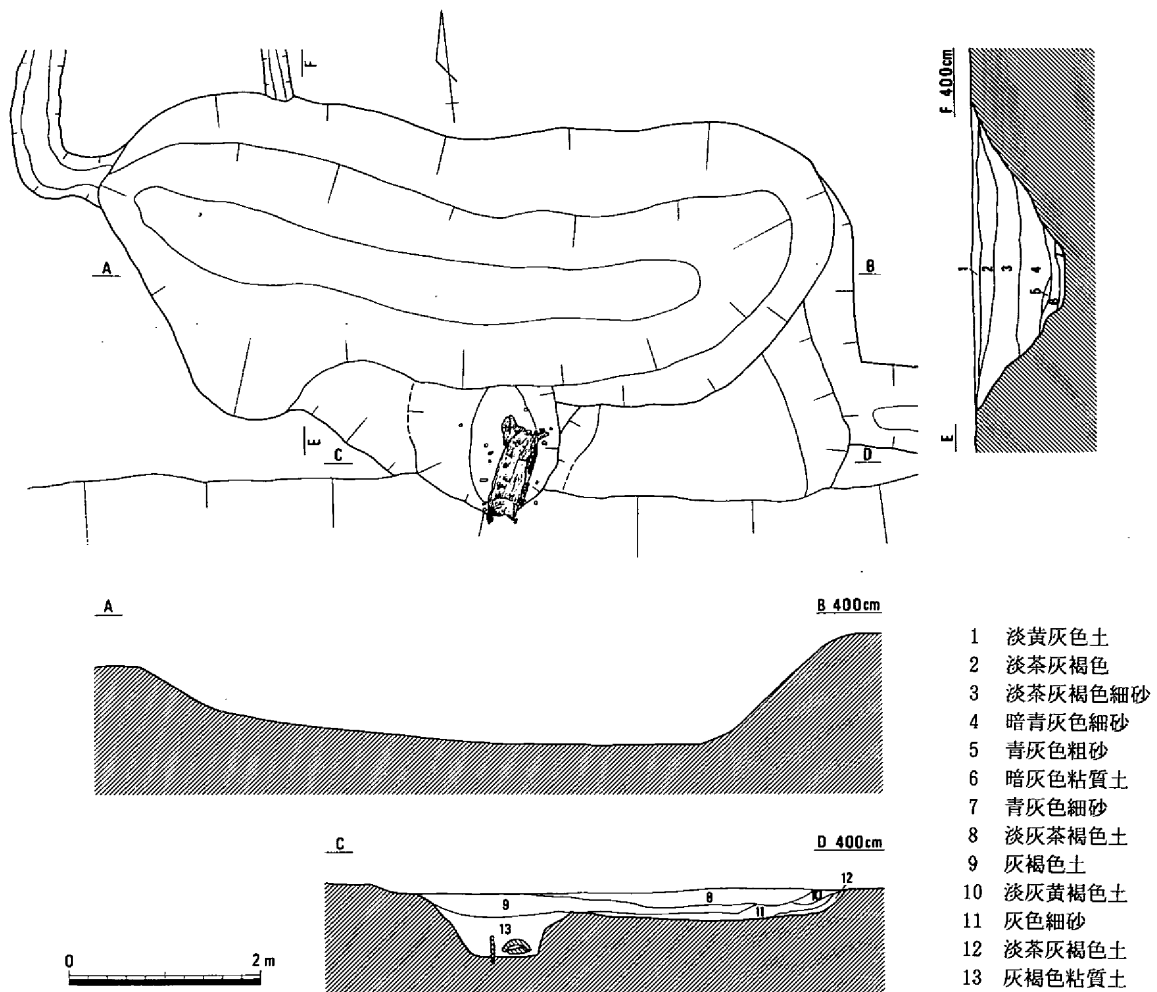
〇20区中央に位置し、南半を溝-54によって削平されている。検出できた範囲では東西350cm、南北180cmを測る。最深部までの深さは82cmあった。出土遺物は図示していないが備前焼の播鉢があり、これを参考にすれば土壌の時期は室町時代と考えられる。(大橋)

土壌-11 (第575図、図版137)

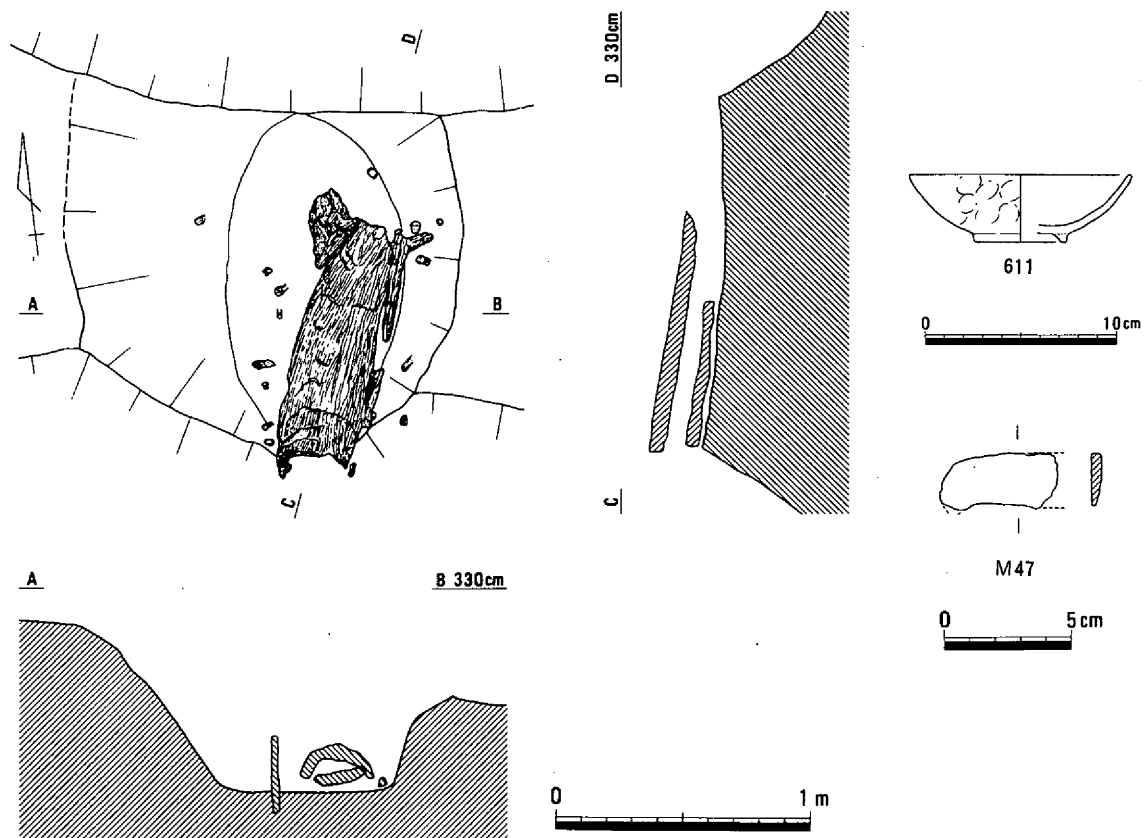
土壌-10の東隣で検出された。南半をやはり溝-54によって削平されており、検出できたのは径約300cmの半円状のものである。深さは約145cmを測った。出土遺物には輸入白磁の小片、羽釜があり、これから土壌-10と同様の時期を推測している。なお、ウシの歯も出土している。(大橋)

土壌-12 (第576・577図、図版138・163)

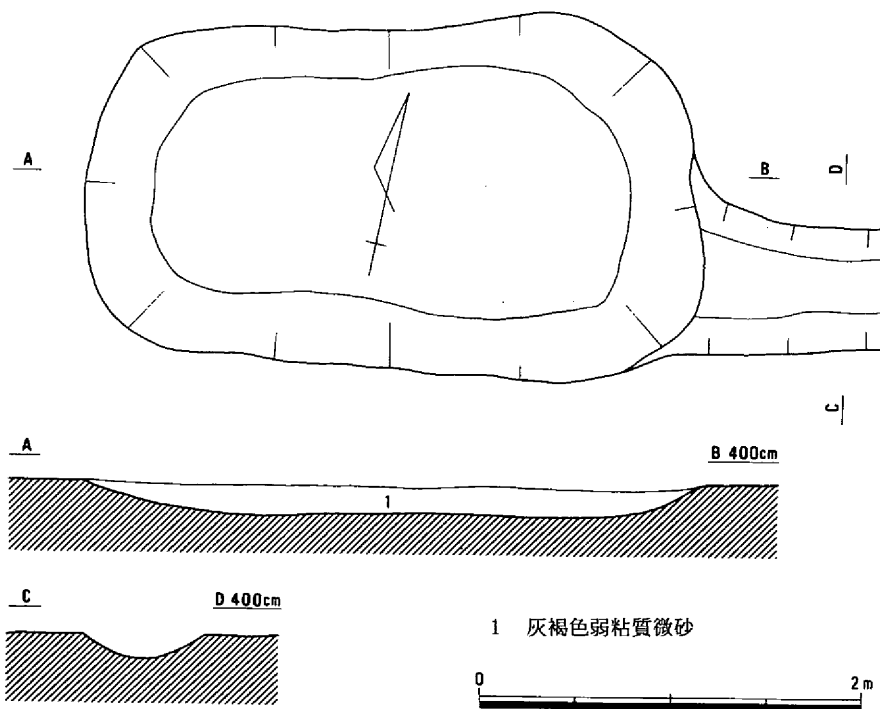
土壌-11の東隣で検出された東西790cm、南北410cm、深さ116cmを測る長楕円形を呈する土壌である。北側では溝-72・73がとりつき、南側は溝-54と接し、丸太をくり抜いて上下2枚にした材を樋として導水しているようである。木樋は径30~40cmを測り、杭で固定されている状況が看取された。出土遺物は611の高台付土師器椀、M47の鉄鎌を図示した。これらから、この土壌は室町時代に一時の水溜めとして田畑への水の供給を意図したものと推測される。(大橋)



第576図 土壌-12



第577図 土壌-12 (611・M47)



第578図 土壌-13

土壙-13 (第578図)

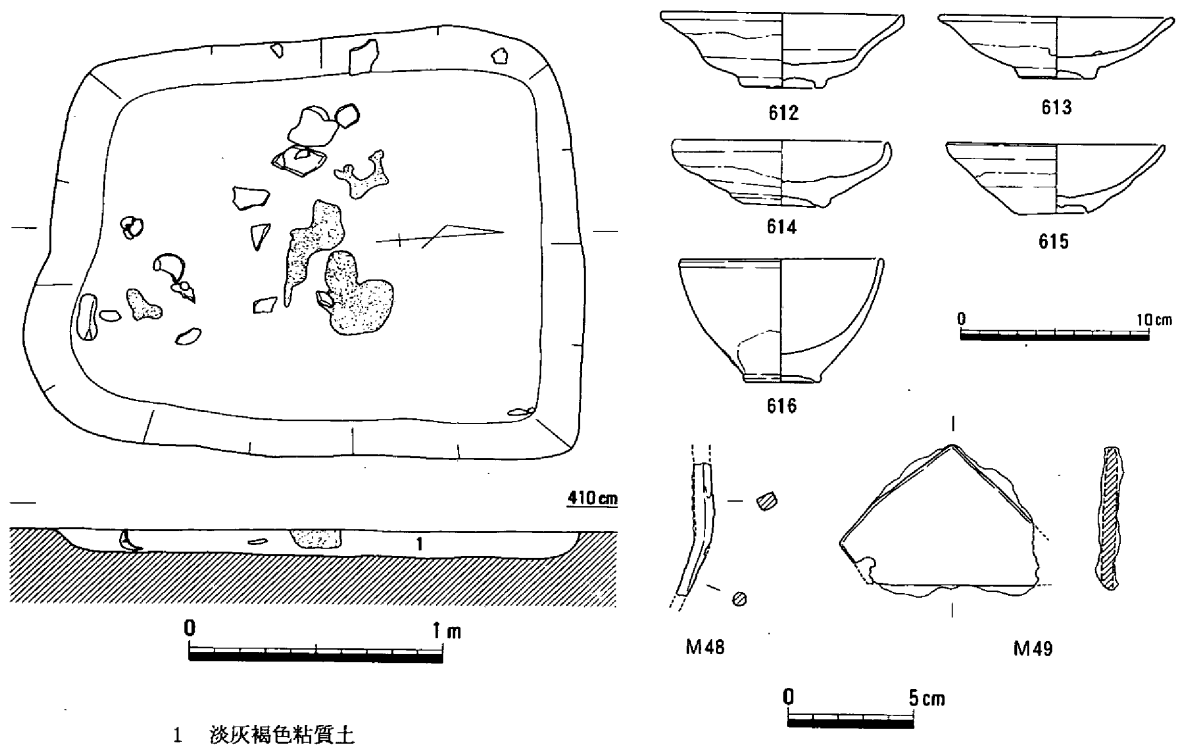
O19区東端中央部で検出された。溝-54と短い溝でつながっており、導水していた可能性が示唆される。土壙の規模は320×193cmを測り隅丸長方形を呈する。深さは30cmほど残存していた。

出土遺物は細片のみで時期は明らかではないが、周囲の遺構の状況と土壙埋土を勘察して中世段階の可能性を考えた。 (大橋)

土壙-14 (第579図、図版138・156・163)

O20区西端中央で検出された。221×173cmの平面方形を呈する土壙である。深さは約10cmほどで、底面は平坦気味となる。埋土からは図示した612~616、M48・M49とともに多くの焼土塊とわずかではあるが燻し瓦片が出土した。612~615は肥前陶器であり溝-54からも類似のものが出土している。616も肥前陶器碗である。M48は針状製品、M49は火打ち金と推測される。

この土壙は、出土遺物から江戸時代17世紀前半の時期と判断される。 (大橋)



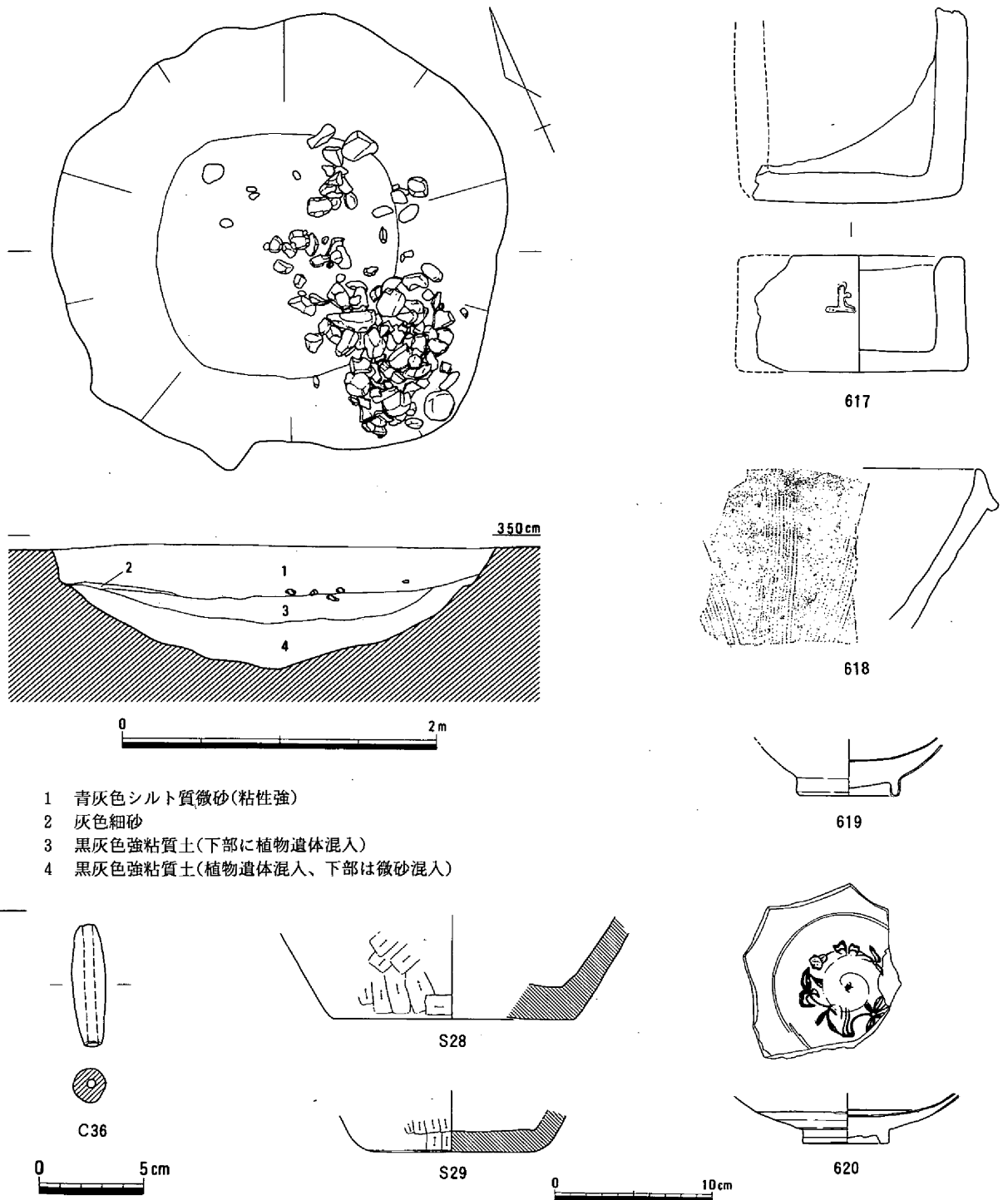
第579図 土壙-14 (612~616・M48・M49)

土壙-15 (第580図、図版139・156・164)

土壙-14の南西約5mで検出された。平面形は不整形円形を呈し、径約280~290cmを測る。壙底までの深さ75cmを測るが、1層下面において多量の拳大の礫とともに遺物の出土を見た。617は瓦質の方形鉢で、「上」の字が印刻されている。618は備前焼の插鉢、619は龍泉窯系の青磁碗、620は白磁碗で草花文が認められる。S28・S29は滑石製の石鍋の破片である。この他に燻し瓦、および獣歯がある。時期は、出土遺物を参考にして室町時代の範疇におさまると推測している。 (大橋)

土壙-16 (第581図)

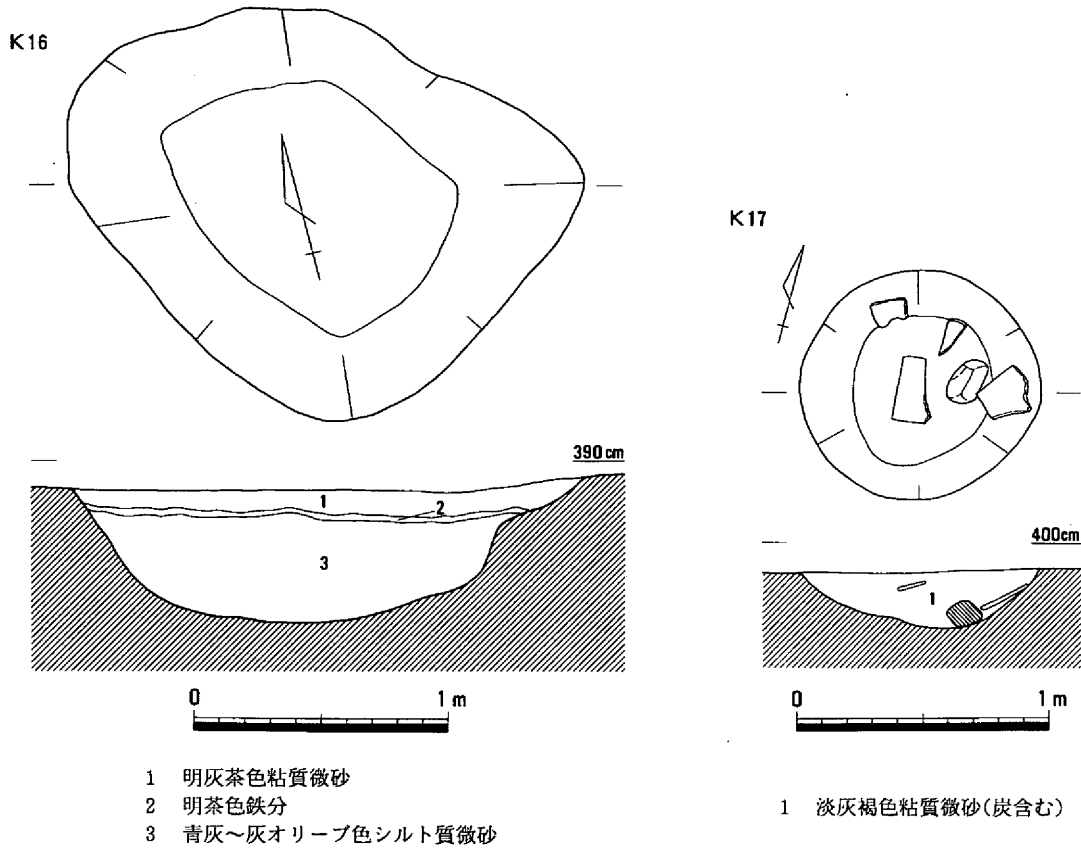
土壙-15の南5mで検出した。202×164×58cmの規模の不整形な土壙である。出土遺物が無く詳細は不明であるが、埋土などから中世段階のものと判断した。 (大橋)



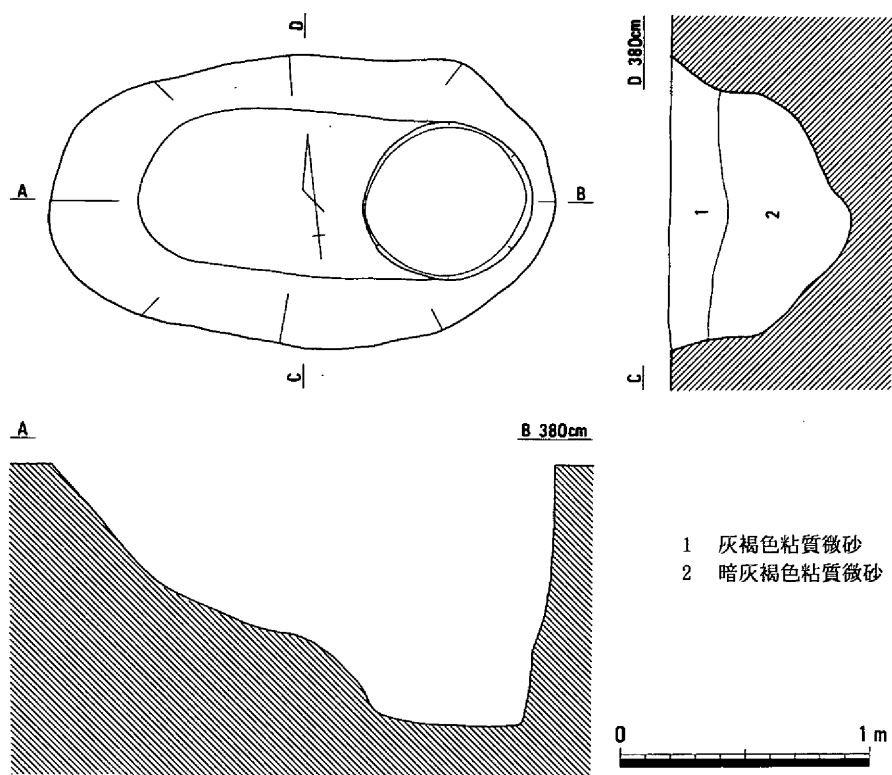
第580図 土壌-15 (617~620・C36・S28・S29)

土壌-17 (第581図)

土壌-16の南東約2m、掘立柱建物-23の北西隣に位置する。平面は96×92cmのほぼ円形を呈し、深さは24cmほど残存していた。遺物実測図としては図示していないが、平面図に示すように燻し瓦の破片と礫が出土している。埋土等を考慮すればこの土壌も中世以降の時期が推測される。(大橋)



第581図 土壌-16・17



第582図 土壌-18

土壌-18 (第582図)

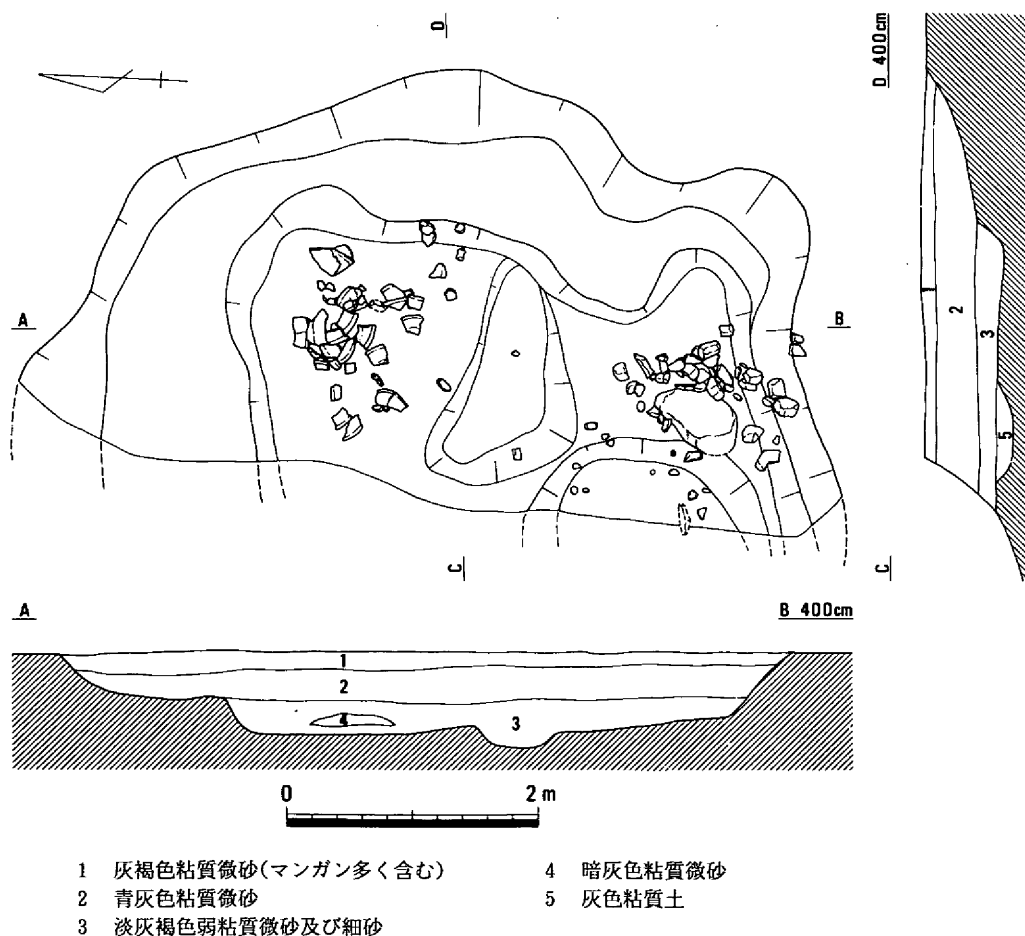
掘立柱建物-22の南隣で検出された。長軸約200cm、短軸117cmを測る東西に長い長楕円形の平面形を呈し、東側の底が一段低く深さ104cmを測る。出土遺物が無く、詳細は明らかにしえないが、掘立柱建物-22・23との関連を考慮すれば近世段階の時期が推測可能かもしれない。(大橋)

土壌-19 (第583~585図、図版139・157)

〇20区南西部、溝-54に接して検出された土壌である。不整形な平面形状を呈するが、南北方向で668cmを測る大形の土壌である。最深部までの深さは76cmを測る。3段の掘り込みが認められ、そのうち2段目内、断面図に示す3層に多量の礫と共に遺物が含まれていた。

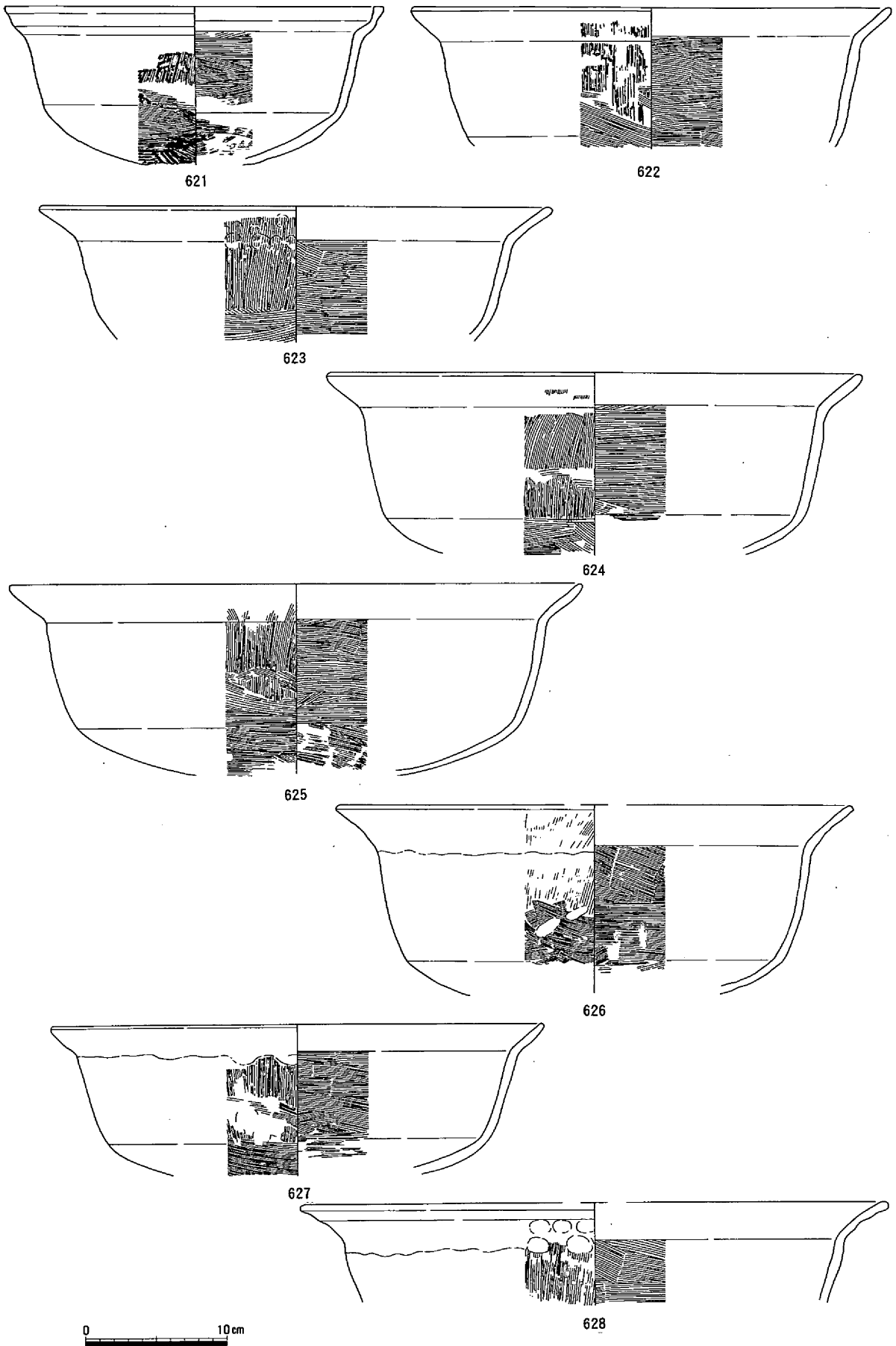
出土遺物は第584・585図に示すように圧倒的に土師器鍋が多く、16個体確認できた。このうち621~635を図示した。636・637は土師器小皿、638は備前焼播鉢である。鍋は、法量、形態などから、以下のような特徴が指摘できる。621はやや小形で鈍い二重口縁をもつ。622~625・632はやや斜めに立ち上がる体部から屈曲する口縁部をもちその端部は丸く納められる。626・633・635の口縁端部は面を形成しており、627の口縁部は他のものと比較して短い。628・629・634の口縁部は外方へ大きく屈曲する。630・631の体部は垂直気味となり底部との境が比較的明瞭である。これらの鍋はいずれも外面に煤が付着しており、また完形のものも無く、使用済みのものを廃棄していたものと推測される。

これらの出土遺物から土壌の時期は室町時代と判断される。(大橋)

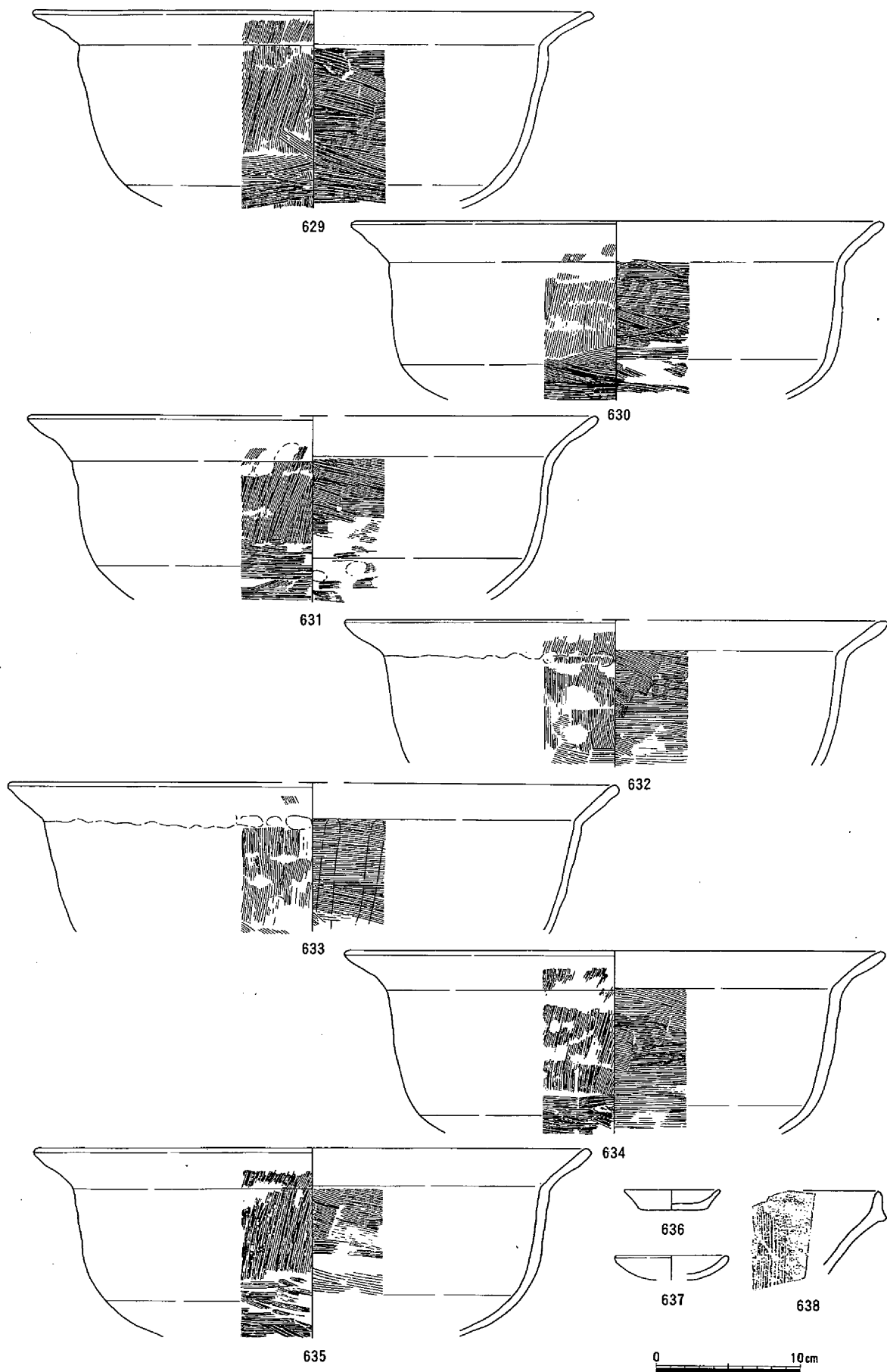


第583図 土壌-19



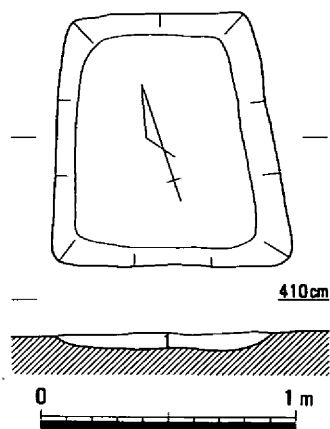


第584図 土壙-19 (621~628)



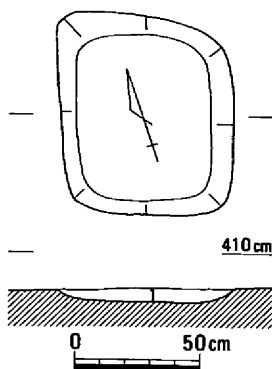
第585図 土壙-19 (629~638)

K20



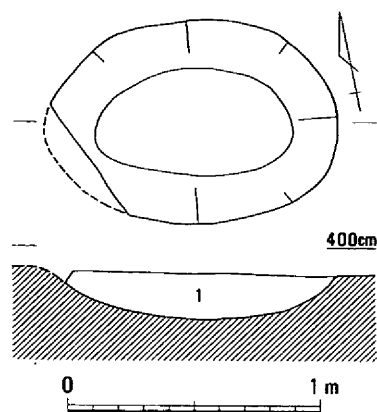
1 明灰茶色粘質微砂

K21



1 明灰茶色粘質微砂

K22



1 灰色弱粘質微砂(炭・土器を含む含む)

第586図 土壌-20~22

#### 土壌-20 (第586図)

土壌-19の南約2mの位置で検出した。南北にやや長く長軸で101cm、短軸で91cmを測るいびつな方形を呈する土壌である。検出面から墳底までは約7cmほどと遺存状況は悪い。出土遺物が無く、時期決定に躊躇するが他の土壌の状況を考慮すれば、中世~近世の遺構と考えられる。(大橋)

#### 土壌-21 (第586図)

土壌-20の東隣で接して検出された。土壌-20を一回り小形にした状況を呈し、長軸方向で81cm、短軸方向で69cm、深さは6cmあまりと遺存状況は良くない。この土壌からも出土遺物は見ないが、他の土壌の検出状況と照らし合わせれば、土壌-20と同時期のものの可能性が考えられる。(大橋)

#### 土壌-22 (第586図)

O20区中央、南北に流走する溝-60の上位で検出された。平面楕円形の土壌であり、長軸で115cm、短軸で82cmを測る。深さは18cmほどである。出土遺物は図示し得なかったが、土師器の小皿の小片が見られ、また瓦小片もある。土壌の時期は、小皿を参考にすれば中世段階の可能性はある。(大橋)

#### 土壌-23 (第587図、図版139・157)

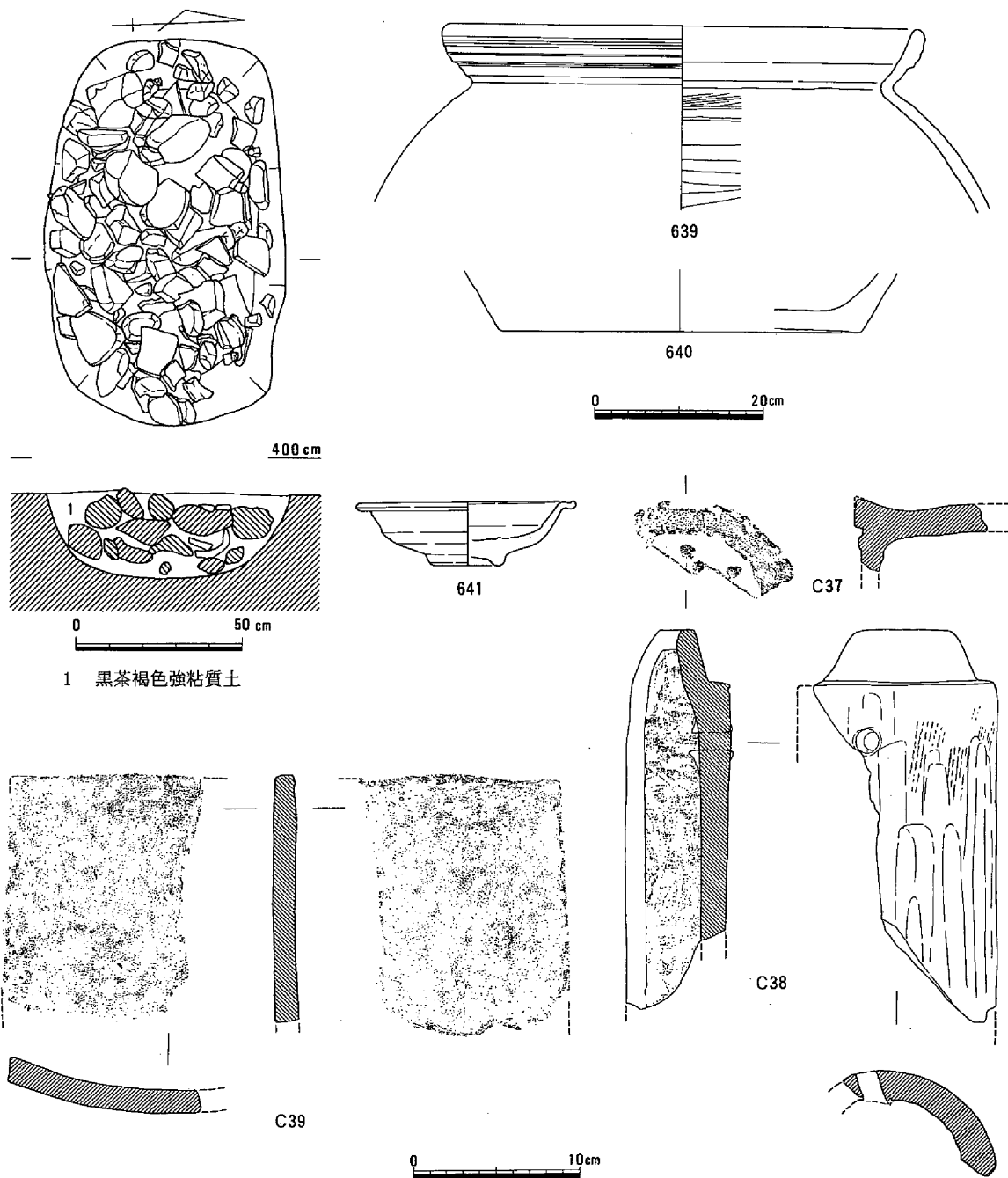
土壌-22の北西約2mに位置する。溝-60の東側で検出された。平面形は楕円を呈し、長軸115cm、短軸71cmを測る。検出面からの深さは26cmを測った。土壌内には、ほとんど隙間無く多量の礫が遺物と共に出土した。図示した出土遺物は、639・640が同一個体と思われる備前焼大甕、641は肥前陶器の皿で胎土目が認められる。肥前陶器の皿は図示していないものも合わせ、計4個体ある。C37は燻しの軒丸瓦、C38は丸瓦で凸面縄タキの後ナデが施されている。C39も燻し瓦で平瓦である。

土壌の時期は陶器皿を参考にすれば江戸時代、17世紀前半と考えられる。(大橋)

#### 土壌-24 (第588図)

O20区中央、溝-54の南側に位置する。平面不整楕円形を呈し、長さ約400cm、幅約300cm、深さ93cmの規模をもつ大形の土壌である。埋積土下層では植物遺体を多く含む層位を確認しており、シルト質であることなどから水溜めとして利用されていた可能性が示唆される。

出土遺物は細片少量であり図示し得なかったが、肥前陶器の破片が確認された。このことから土壌の時期は江戸時代、17世紀と考えた。(大橋)



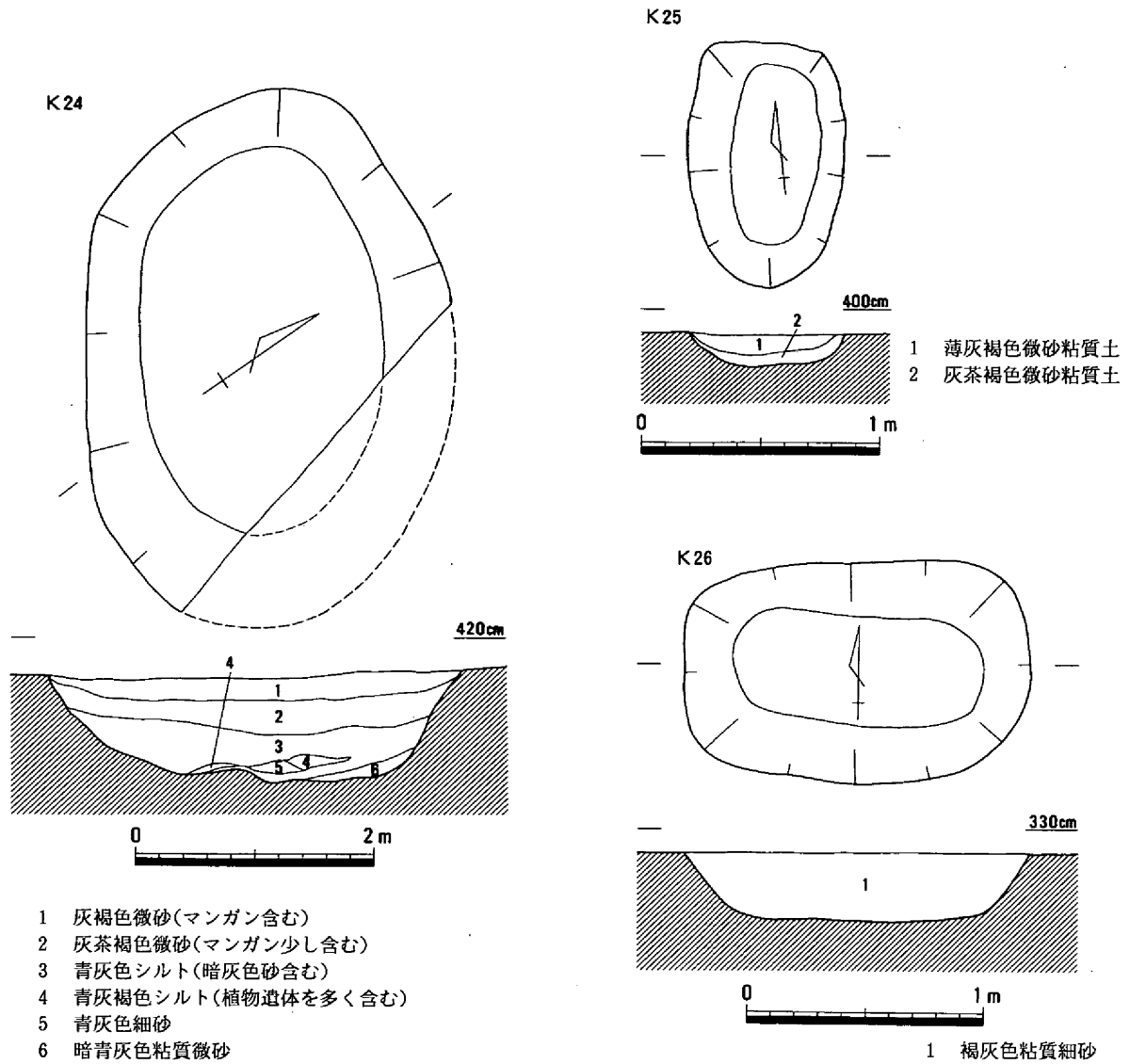
第587図 土壙-23 (639~641・C37~C39)

土壙-25 (第589図)

土壙-23の南約1mで検出された。やや細長い楕円形の平面形であり、長軸方向で104cm、短軸方向で66cm、深さは15cmほど残存していた。出土遺物は備前焼の小片が散見されたことから、土壙の時期を中世以降の時期と推定している。(大橋)

土壙-26 (第588図)

N21区の南西、高田調査区の東端から検出された。平面楕円形を呈し、主軸は東西方向を向く。規模は145×95cm、深さ28cmを測る。土壙壁は緩く、平坦である。遺物は瓦細片および備前焼?播鉢片が出土しており、時期は室町時代後半か。(江見)

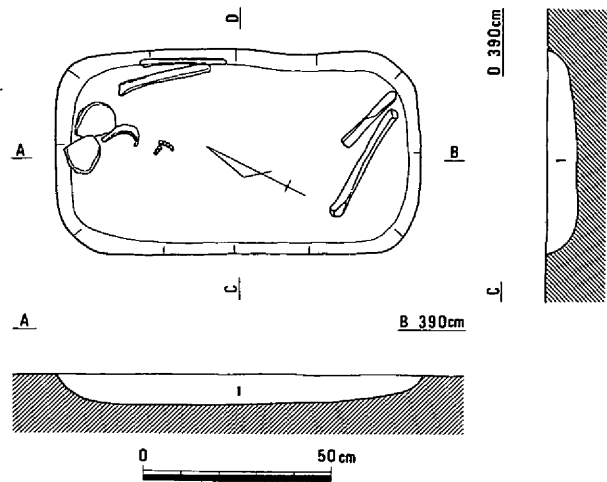


第588図 土壌-24~26

(6) 土壌墓

土壌墓-1 (第589図、図版137)

調査区の北西において少数の柱穴・土壌とともに検出したもので、長さ97cm、幅54cm、深さ8cmの方形を呈する墓壇をもつ。N-27°-Wに主軸をおく墓壇の北端には頭骨が、また東および南端には四肢と見られる長骨が確認され、仰臥ないし側臥屈葬であったものと想定される。副葬品等はなく詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構の状況からして13~14世紀の範疇におさまるものと推定される。(亀山)



第589図 土壌墓-1

(7) 溝

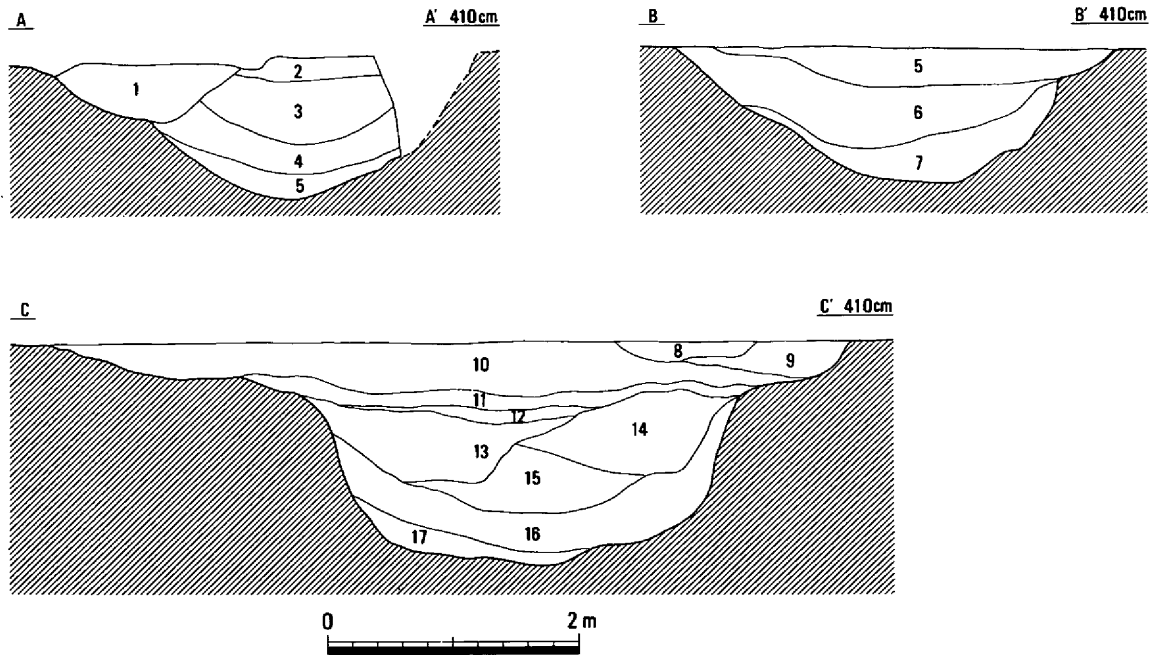
溝-54 (第553・590~594図、図版140・157~159・162~167)

O20区の南部で平面L字形を呈し、古代の溝の流路を踏襲した形で検出した。検出総長約13.8m、幅約2.5~7.0mを測り、底面標高が約2.1~2.9mであることから西から東に流れていたと判断される。

また、土層観察では数回の掘り直しが見られ、溝の性格が耕作のための用水であるとともに集落地の用排水であったと考えられることから、この地域の重要な溝であったことが推測される。

出土遺物は古墳時代から近世にいたる遺物が多量にあり、それらのごく一部を図示した。

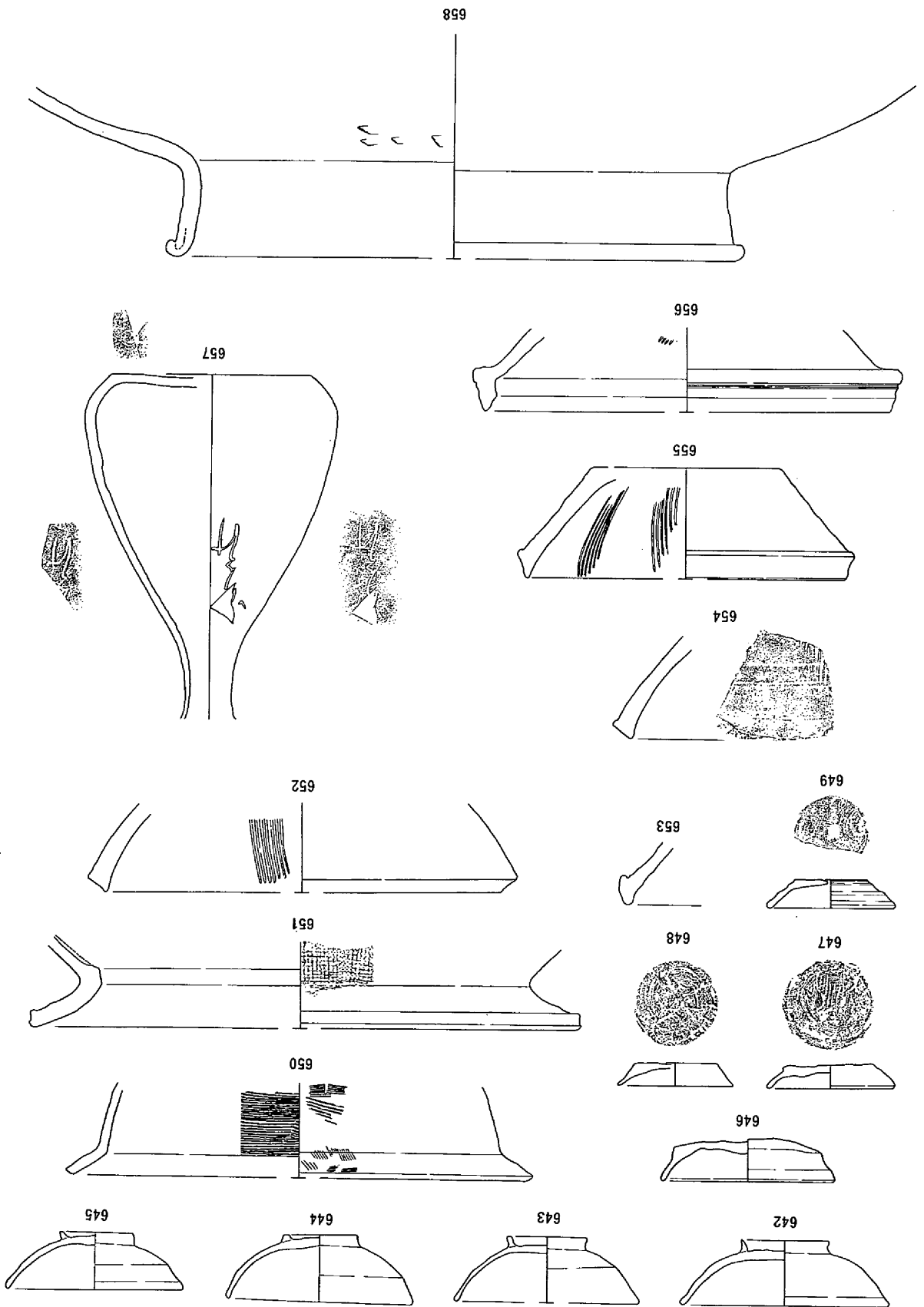
642~650は土師器で、642~645は高台付の椀で早島式土器である。646は底部へラ切りの杯、647・648は底部へラ切りの小皿、649は底部に穿孔のある糸切りの皿、650は鍋である。651は瓦質の亀山焼の甕である。652は東播系須恵器で壺と思われる。653~658は備前焼で、653~656は播鉢、657は徳利で胴部に「いりさけ」の銘と底部に三つ巴の印が見られる。658は大甕である。659・660は灰釉のかかった瀬戸陶器で、659は卸皿、660は皿である。661は灰釉のかかった唐津焼椀、662は透明釉のかかった底部糸切りの京焼系陶器の小皿である。663~677は唐津焼である。663~674は皿で、663は刷毛目文、664~674は砂目積みで668~670・673は外底部に「+」か「×」の墨書が見られる。675~677は絵唐津の鉢で片口部は残存していないため不明である。678・679・681は輸入磁器の染付である。680は関西系か瀬戸・美濃系の染付磁器である。W3は漆塗り椀で、内面朱漆、外面黒漆の上に朱漆

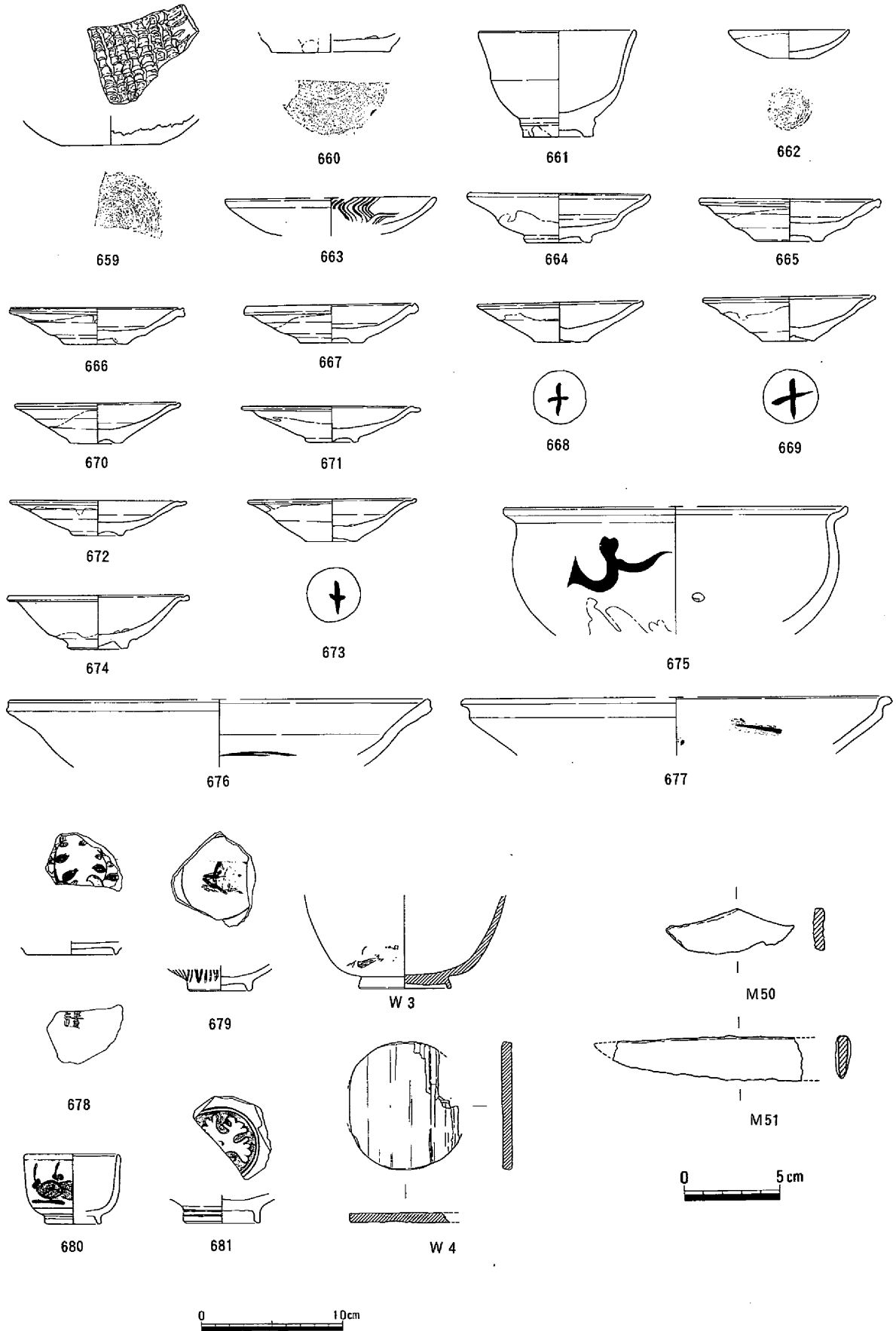


- |             |                        |                     |
|-------------|------------------------|---------------------|
| 1 淡灰色粘質微砂   | 7 暗灰褐色粘質土              | 13 暗青灰色粘土(植物遺体多く含む) |
| 2 灰褐色粘質微砂   | 8 薄青灰色微砂               | 14 青灰色粘土            |
| 3 淡灰褐色弱粘質微砂 | 9 薄茶色微砂                | 15 青灰色微砂            |
| 4 暗灰色粘質土    | 10 灰白茶色微砂(マンガン・鉄分多く含む) | 16 青灰色粘質微砂、細砂       |
| 5 灰白色粘質微砂   | 11 茶色微砂(鉄分多く含む)        | 17 青灰色粘土(微砂及び細砂を含む) |
| 6 灰緑褐色粘質土   | 12 青灰色粘質微砂             |                     |

第590図 溝-54

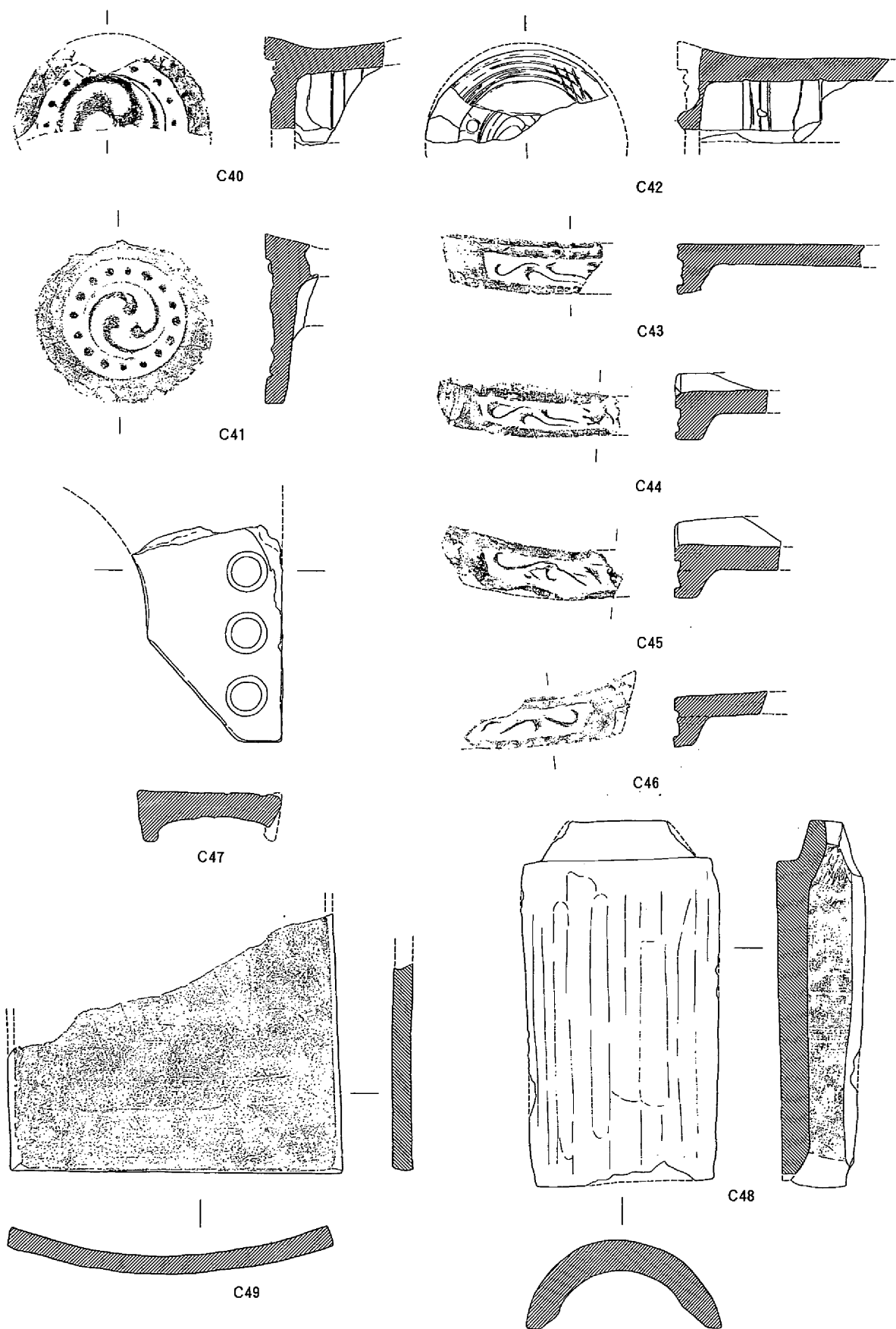
第591図 葦-54 (642~658)



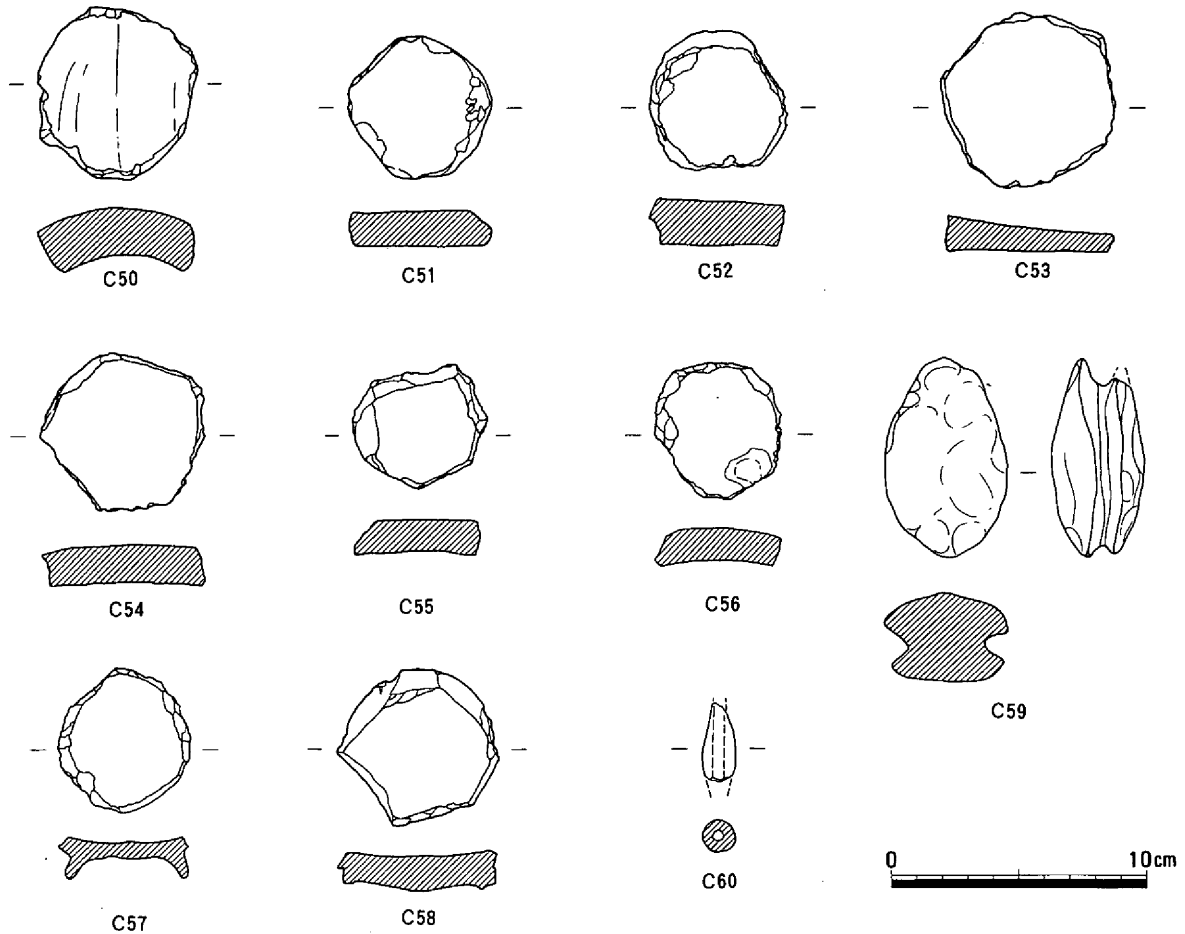


第592図 溝-54 (659~681・W3・W4・M50・M51)





第593図 溝-54 (C40~C49)



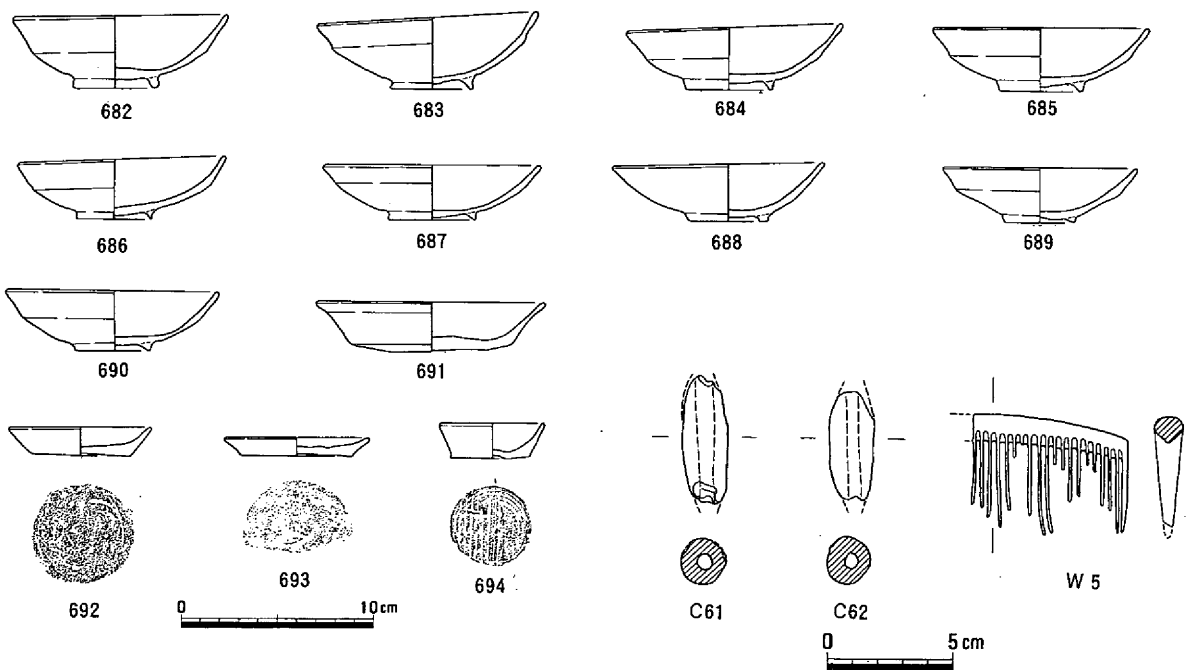
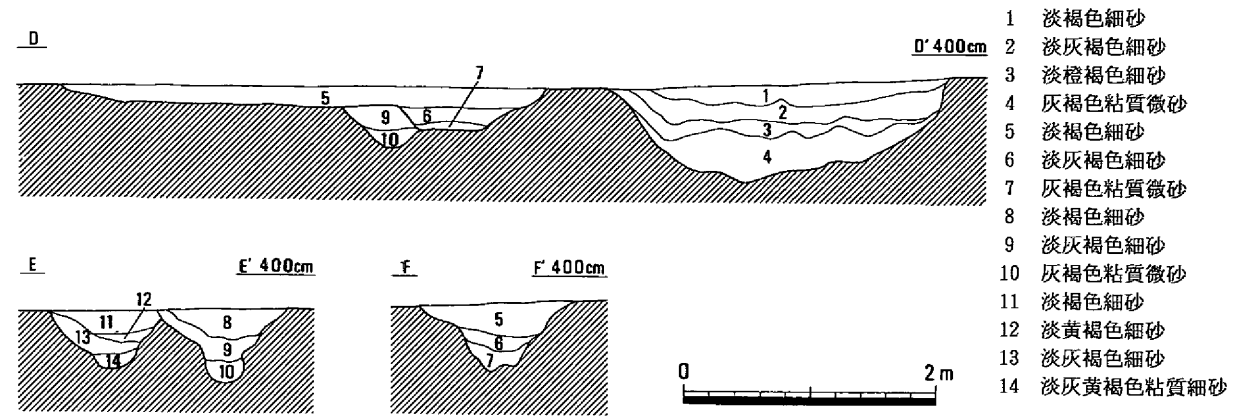
第594図 溝-54 (C50~C60)

による絵付けが見られる。乾燥による歪みが著しい。W4は蓋と考えられる。M50は鉄製の火打金、M51は鉄製の刀子である。C40~C41は三つ巴文軒丸瓦で、C40は瓦当径が小さく、瓦質であることから鎌倉時代末頃のものと考えられる。C41・C42は古い様相を残すもので中世末頃のものだろう。C43~C46は均整唐草文軒平瓦で瓦当面の幅が狭いことから近世初頭頃のものと考えられる。C47は道具瓦で鬼瓦であろうか。C48・C49は燻し瓦の丸瓦と平瓦である。C50~C58は円板で、C50は丸瓦、C51・C52は平瓦、C53は土師器、C54~C56は備前焼、C57は磁器、C58は陶器を転用している。C59・C60は土錘である。(杉山)

溝-55~58 (第553・555・595図、図版159・164・167)

O20区北西に位置する。溝-55の検出時の平面形は直線状で、断面形は楕形である。規模は現状で長1260cm、幅60~235cm、深さ33cm、底面標高は324~335cmを測る。溝-56の平面形は直線状で、断面形は楕形である。規模は長1645cm、幅42~280cm、深さ56cm、底面標高は316~330cmを測る。溝-57の平面形は弧状で、断面形は楕形である。規模は長1895cm、幅95~300cm、深さ44cm、底面標高は327~337cmを測る。溝-58の平面形は弧状で、断面形は平坦な底面から立ち上がる掘り方を有する。規模は長785cm、幅120~256cm、深さ83cm、底面標高は297~303cmを測る。また、溝55~57の北端部は大形の土塊状を呈する水溜めと推測され、溝-54から水を引き込んだと考えられる。

遺物は高台付碗682~690、杯691、小皿692・693、小杯694、土錘C61・C62、櫛W5の他に土師質のカマド、亀山焼、備前焼、青磁碗の破片がある。溝の時期は中世以降と思われ、水溜めを使用した



第595図 溝-55~58 (682~694・C61・C62・W5)

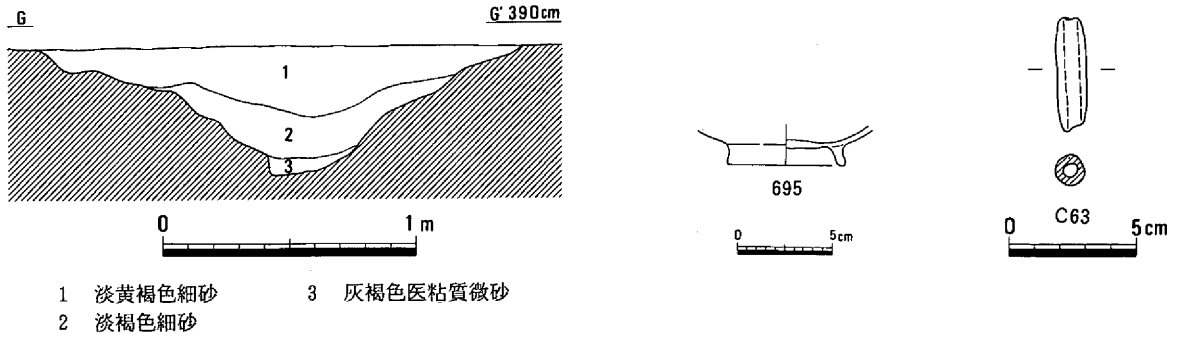
と考えられる掘立柱建物-20・21や柱穴群で構成する集落と同時期であろう。 (澤山)

溝-59 (第553・555・596図、図版164)

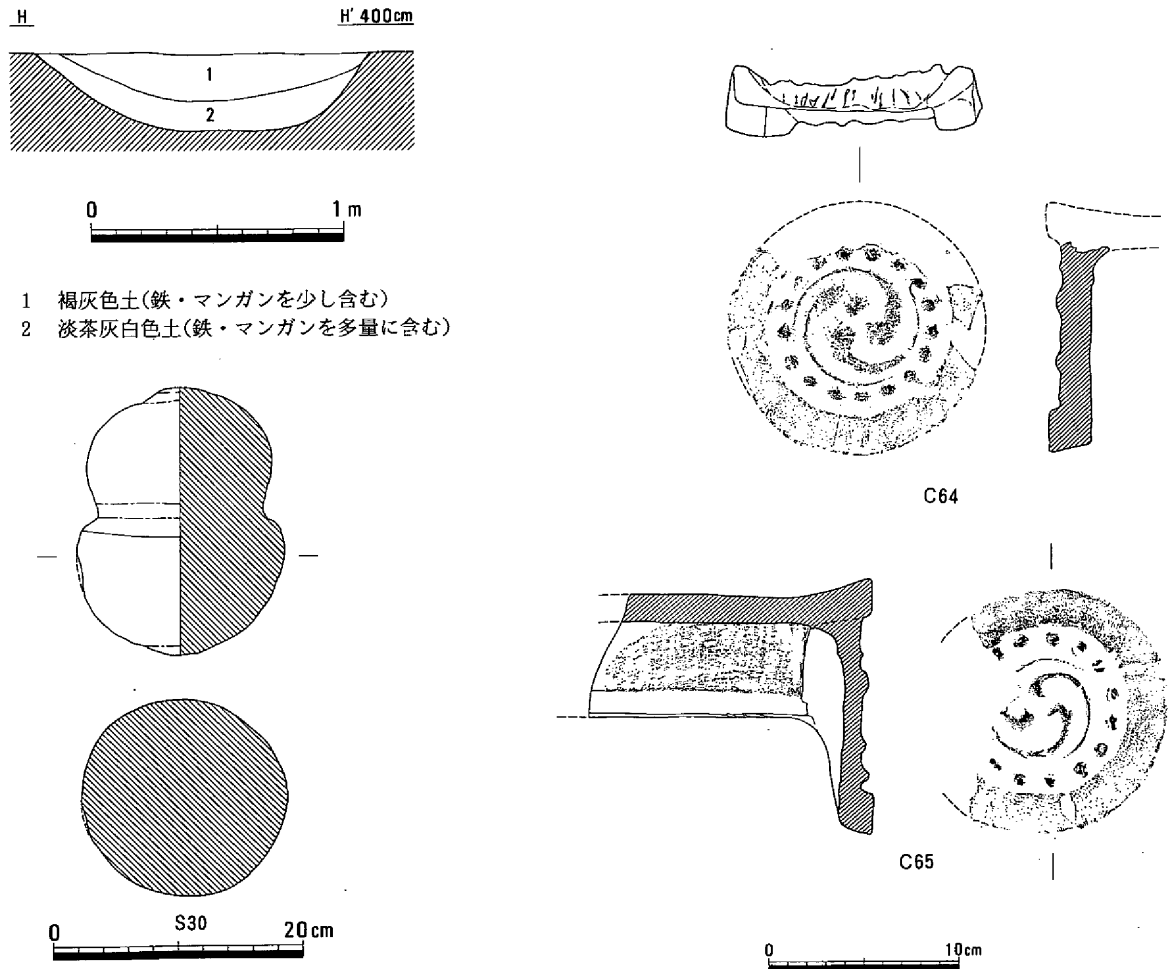
O20区北部、溝-55~58の西側で南北方向に直線状に流走する。検出長約33m、最大溝幅230cm、深さ63cmを測り、溝底の高低差から溝-54に流れ込んでいたと推測される。出土遺物は695の高台付椀があり、これを参考にすれば中世以降の時期が推測される。また、後述する溝-60と対になることが予想されることから溝-60と同時期に考えることが可能かもしれない。 (大橋)

溝-60 (第553~555・597図、図版165)

O20区南部の建物-22~24の東側で検出された。検出長約31m、幅128cm~175cm、深さ約60cmで直線的な形状で、底面の状況から溝-54に流れ込んでいたと考えられる。また、溝と掘立柱建物-22の方位がほぼ一致することから、この地区の居住域の区画溝としての機能をもっていた可能性が高い。図示した出土遺物はS30が五輪石の空風輪、C64・C65が軒丸瓦である。この他に肥前陶器が見られることから、溝の時期は近世初頭と判断される。 (杉山)



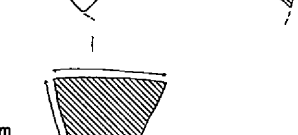
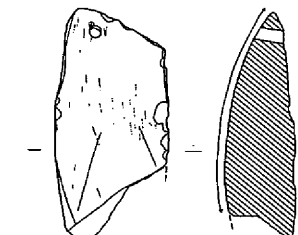
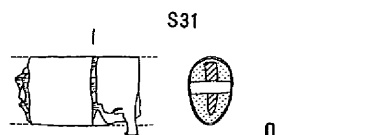
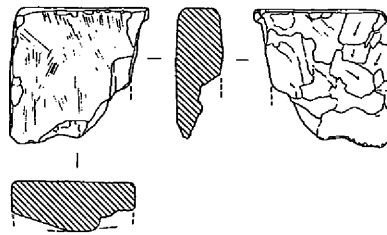
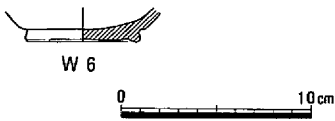
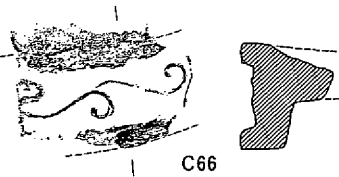
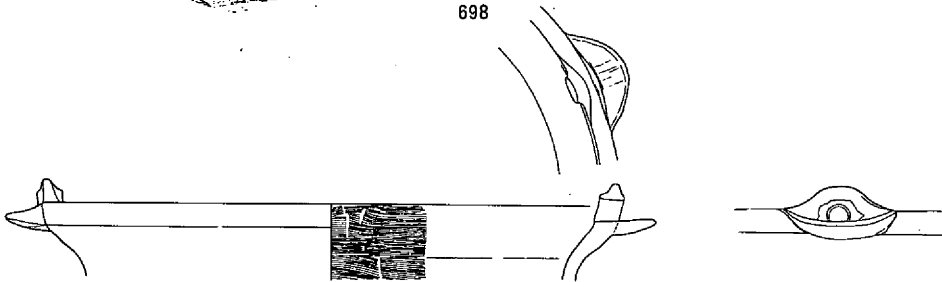
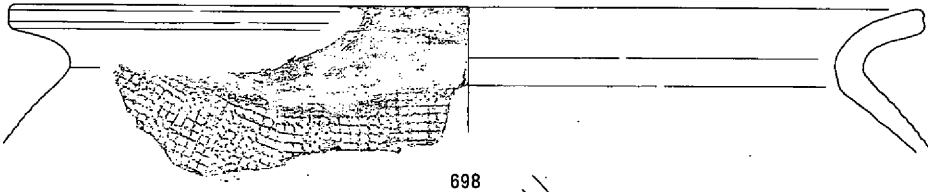
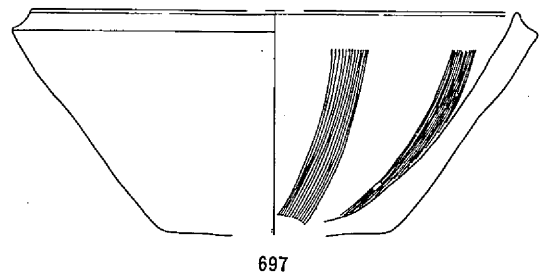
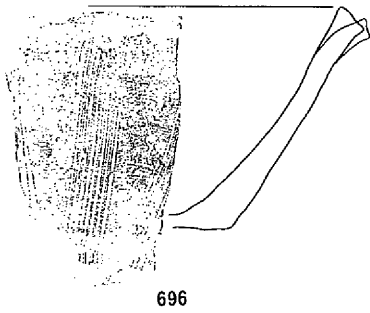
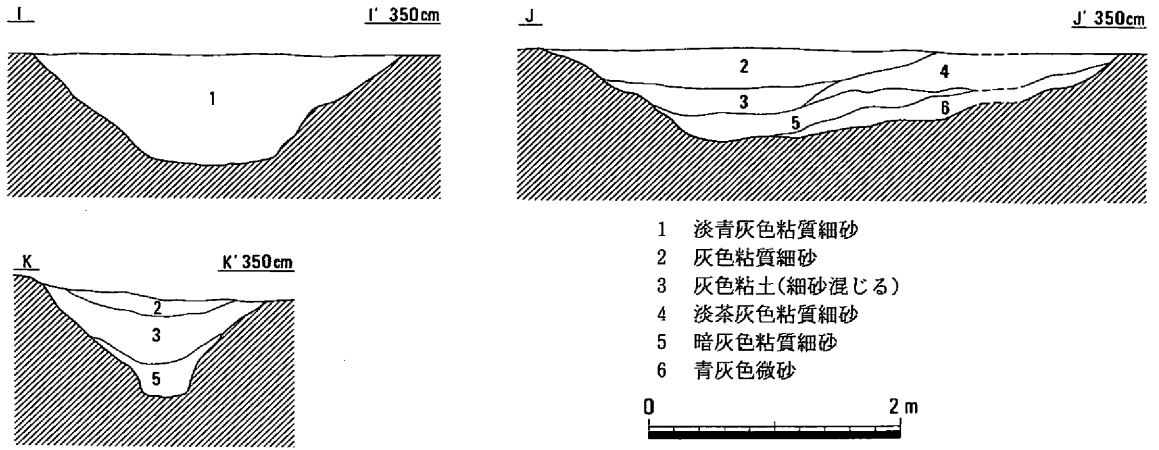
第596図 溝-59 (695・C63)



第597図 溝-60 (C64・C65・S30)

溝-61 (第552・553・556・557・598図)

N21区の南西、高田調査区東端に位置する「H」字状に延びる溝である。溝の規模は最も広いI-I'断面東部付近で幅475cm、狭いK-K'断面付近で幅約150cm、深さは約90cmを測る。溝は堆積状況から幾度かの改修がなされたものと判断されるが、溝の流走方向は溝底の標高から南東から北へ向かい、途中屈曲して西に向きを変え、北西ないし西方向へ分流していくようである。なお、溝北西部の南側が一部張り出しており、この溝部分には数本の杭痕跡が認められた。

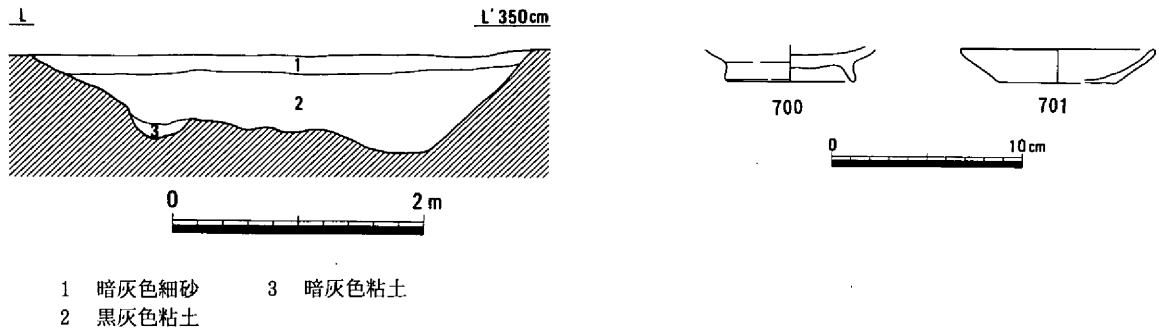


第598図 溝-61 (696~699 · C66 · S31 · S32 · M52 · W6)

溝内の堆積土はいずれも軟らかく締まりのない砂層が主体を占めた。これらは洪水によるものと判断されたが、それに混じって備前焼播鉢696・697、亀山焼甕698、瓦器外耳鍋699、軒平瓦C66、木製椀W6、温石？S31、砥石S32、刀の鍔M52などが出土している。溝の埋没時期は室町時代後半以降と考えられる。(江見)

溝-62 (第553・557・599図)

N21区の南部において検出したL字状の溝である。検出できた幅は2.7~6.0m、深さは最深部で71cmを測る。底面の海拔高は約2.9~3.1mで、北にむかって徐々に低くなっている。遺物は土師器の椀、皿、鍋の脚や瓦が少量出土しており、時期は鎌倉時代頃と考えられる。(平井)

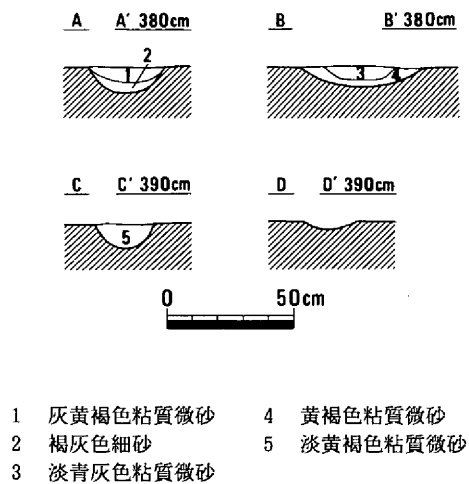


第599図 溝-62 (700・701)

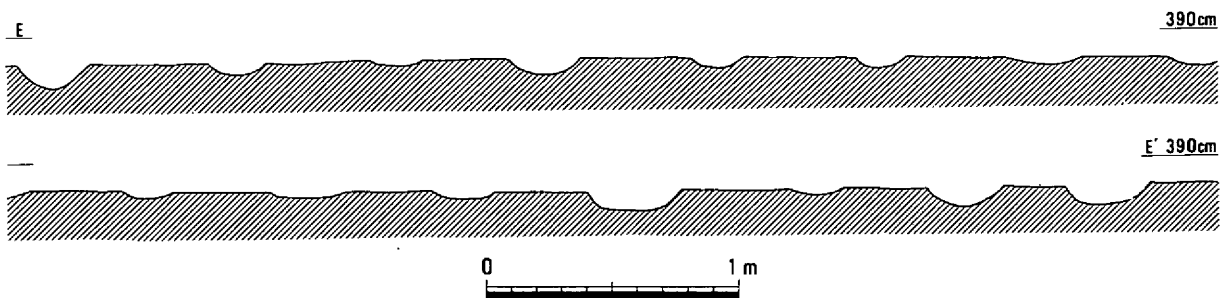
溝-63~67 (第553・554・600・601図)

O19区で検出した直線的な素掘り溝群である。これらの方位はN-7°~15°-W, N-73°~85°-Eとほぼ一致する。これらのうち、溝-64は断続的な検出だが他の溝より検出長が長く、その位置が古代の溝-38の上面に位置することから溝-38を踏襲した溝と考えられる。また、溝-67は他の溝に比べて個々が密接しており溝-65・68に伴う桂穴群の可能性もある。

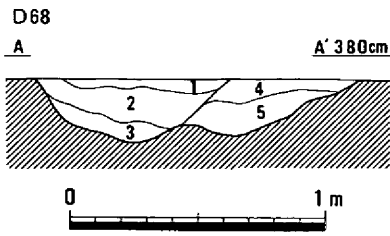
これらの溝には出土遺物がほとんど見られないため時期を限定することはできないが、その埋土と周辺の状況から中世以降と判断される。(杉山)



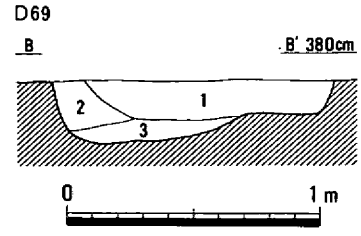
第600図 溝-63~66



第601図 溝-67



- |          |          |
|----------|----------|
| 1 淡褐色細砂  | 4 淡黒褐色細砂 |
| 2 灰褐色微砂  | 5 灰褐色微砂  |
| 3 淡黄褐色微砂 |          |



- |             |
|-------------|
| 1 暗黄茶褐色粘質微砂 |
| 2 茶褐色砂質微砂   |
| 3 黄茶褐色粘質微砂  |

第602図 溝-68・69

溝-68 (第553・554・602図)

O19区で検出した直線的な溝で、溝-63~66とはほぼ方位が一致している。しかし、他の溝と異なり流水と掘り返しの痕跡が認められ、底面の状況から南流する用水としての機能が推定される。

埋土中に時期を示す出土遺物は見られないが、周辺の状況から中世以降と判断される。(杉山)

溝-69 (第553・554・602図)

溝-69は、高田調査区中央西寄りのくぼみに位置している。南北方向に伸び、南端は溝-54に取りつく。断面形は箱形を呈し、1回の掘り直しが認められ、1条の幅は100cm、深さ16~26cmを測る。北から南に向かって流れていたと考えられる。時期は中世の範疇に納まると思われる。(柴田)

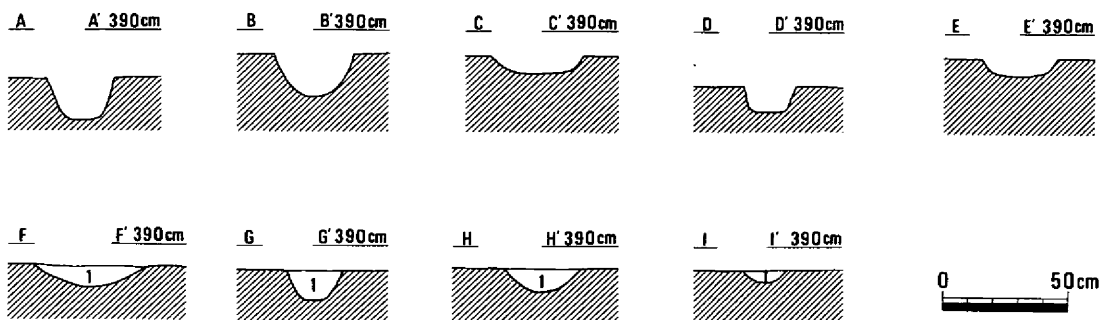
溝-70 (第553図)

O20区南西部で検出したやや弧状を呈する溝である。この西端に土壇-19と溝-54があり、底面の状況から東に流れていたと考えられることから、用水としての機能が推定される。

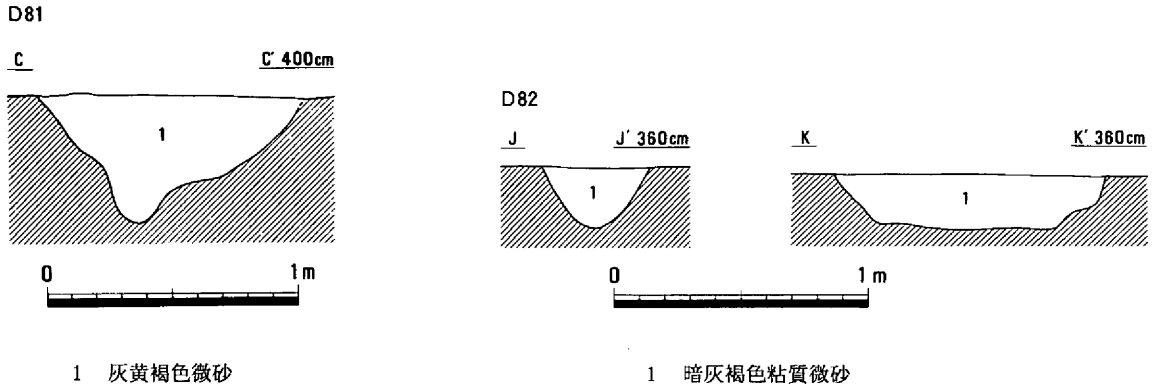
時期は、土壇-19と掘立柱建物-24との関係から中世と判断される。(杉山)

溝-71~80 (第553・555・603図)

O20区中央付近に位置する。遺構は耕作溝と思われ、これらの東側で確認された溝-89~104とは規模や流路方向が類似しており、両者は同性格のものと考えられる。平面形は溝-80が弧状であるほかは直線状を呈し、断面形は基本的に椀形である。規模は現状で長242~3235cm、幅17~50cm、深さ7~23cmであり、比較的幅狭で浅い。底面海拔高は352~377cmを測り、いずれも表土除去後すぐに確認された。流路方向は溝-79がN-65°-Eとやや方向を異にするが、溝-71~73がN-7~8°-E、溝74~78・80がN-83~90°-Eのまとまりを示し、前者の溝と後者はほぼ直交する関係をもつ。出土遺物はみられなかったが、遺構の時期は検出の状況から中・近世と思われる。(澤山)



第603図 溝-72~80

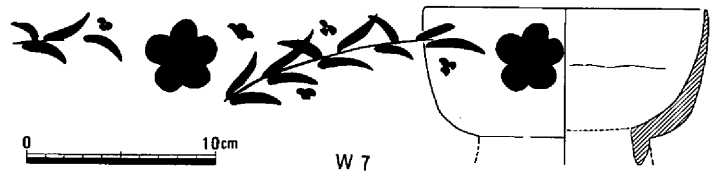


第604図 溝-81・82

溝-81 (第553・555・604図)

O20区中央で検出した直線的な溝で、底面の状況から南流していたと考えられる。

時期は、周辺の状況から中世以降と判断される。(杉山)



第605図 溝-83 (W7)

溝-82 (第553・555・604図)

O20区中央で検出した溝で土壌状の溜まりを2カ所もつ。底面の状況から溝-54の水を引き込んでいたと考えられ、耕作に関係する施設と推定される。

時期は、小片だが14世紀初頭の土師器碗が出土していることから中世以降と判断される。(杉山)

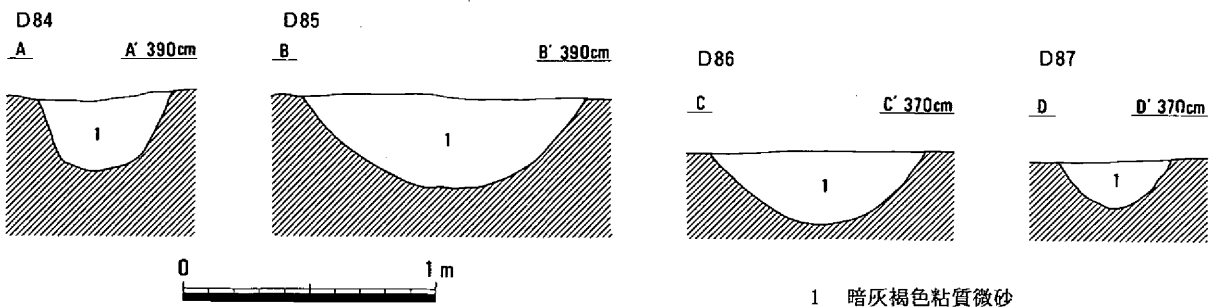
溝-83 (第553・555・605図)

O20区で検出した格子溝で、検出面からの深さは約15cmである。W7は口径14.8cmの内外黒漆塗りの碗で、外面には朱漆により草花文が描かれている。時期は、埋土中より備前焼の播鉢・甕、土師器鍋の破片等が出土していることから近世初頭と判断される。(杉山)

溝-84~87 (第553・556・606図)

N20区中央南側に位置する幅2mあまりの調査区で検出した南北方向に平行に走る4条の溝である。西から溝-84・85・86・87と呼称した。溝-84は、幅68cm、深さ17cmの溝である。須恵器杯・土師器小片が出土した。溝-85は、幅58cm、深さ9cmの溝である。遺物は中世土器の細片がある。溝-86は、幅82cm、深さ29cmの溝である。須恵器杯・土師器小片が出土した。溝-87は、幅40cm、深さ19cmの溝である。須恵器杯・土師器小片が出土している。

出土遺物、埋土の状況から時期は中世~近世に属すと考えられる。(浅倉)



第606図 溝-84~87

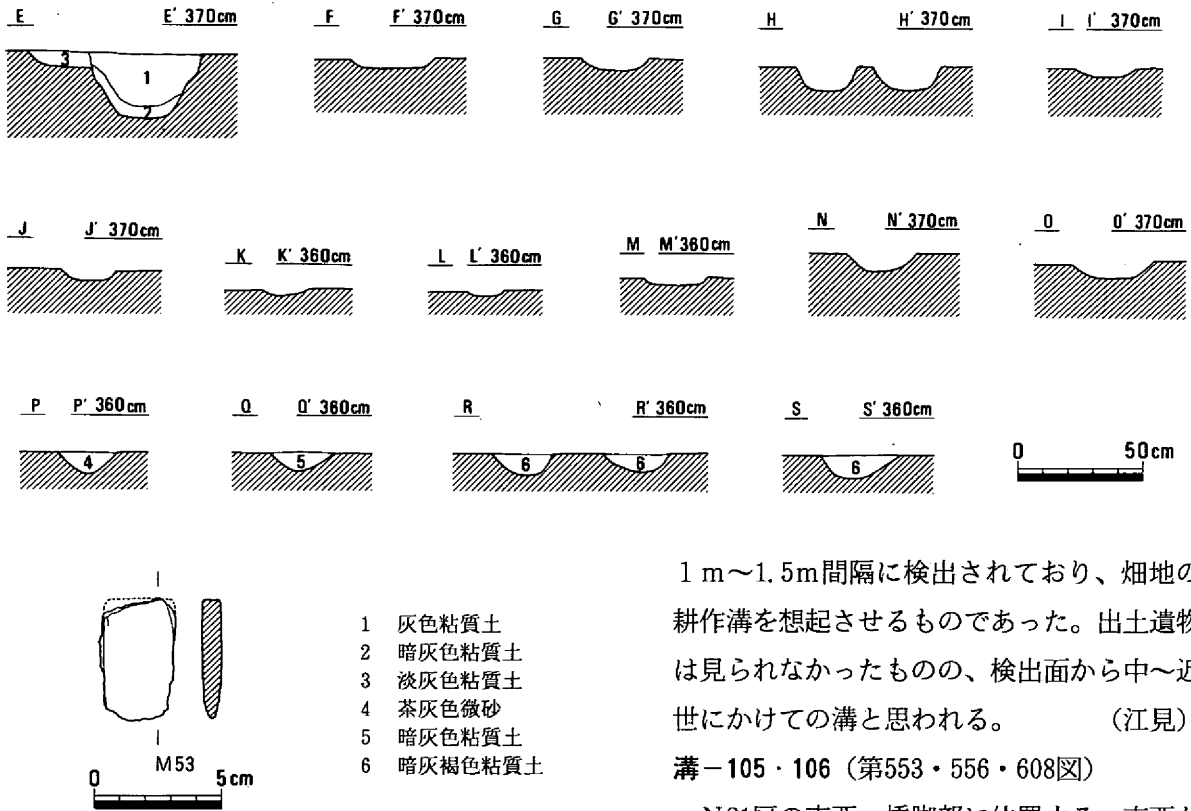


溝-88~90 (第553・556・607図)

〇20区の北東、橋脚部から検出された南北方向に延びる3条の溝である。いずれも小規模なもので、溝-88の幅約40cm、深さ25cmを測るのに対し、溝-89の幅は30cm、深さ5cm、溝-90の幅25cm、深さ5cmと、東に向かい縮小している。出土遺物は溝-88から楔? M53とともに陶器片、磁器片などが出土しており、中~近世にかけての溝と思われる。なお、当溝群の機能・用途は不明瞭であるが、西方向約40mに同一方向に延びる溝-72・73が検出されており示唆的である。(江見)

溝-91~104 (第553・556・607図)

上記溝群に直交して延びる小規模な溝群である。溝はその規模幅20cm前後、深さ5cm前後を測り、



第607図 溝-88~104 (M53)

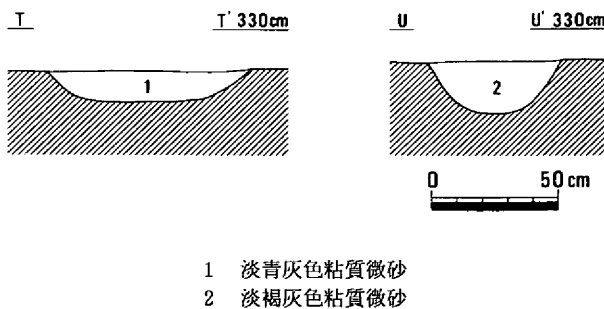
1m~1.5m間隔に検出されており、畑地の耕作溝を想起させるものであった。出土遺物は見られなかったものの、検出面から中~近世にかけての溝と思われる。(江見)

溝-105・106 (第553・556・608図)

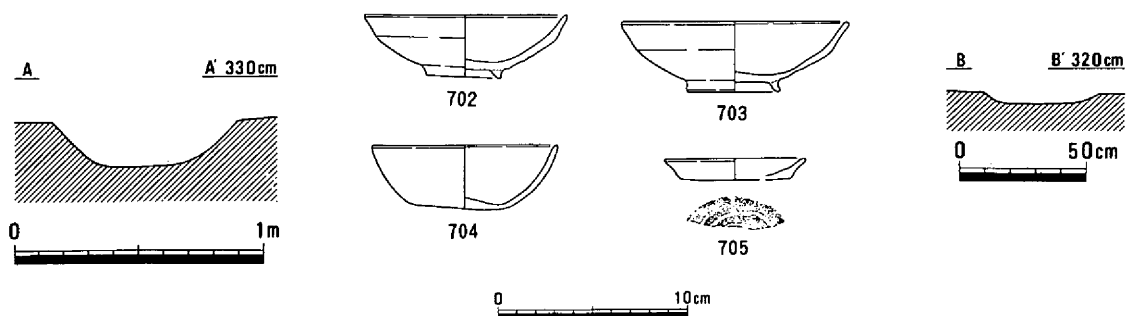
N21区の南西、橋脚部に位置する、南西から北東方向にやや弧状を呈しながら並行して延びる溝である。規模は溝-105が幅約80cm、深さ約15cm、溝-106は幅約50cm、深さ約20cmを測り、溝底の標高差からいずれも東流するものと思われる。検出面のあり方から中~近世の時期と思われる。(江見)

溝-107 (第553・557・609図)

溝-106の北東に位置する南北方向の溝で幅約真70cm、深さ約20cmを測る。溝は溝底の標高差から南流するものと思われ、出土遺物には中世前半のものが混じる。(江見)



第608図 溝-105・106



第609図 溝-107 (702~705)・108

## 溝-108 (第553・557・609図)

N21区で検出した直線的な溝で、検出面からの深さは約7cmと浅く出土遺物もない。

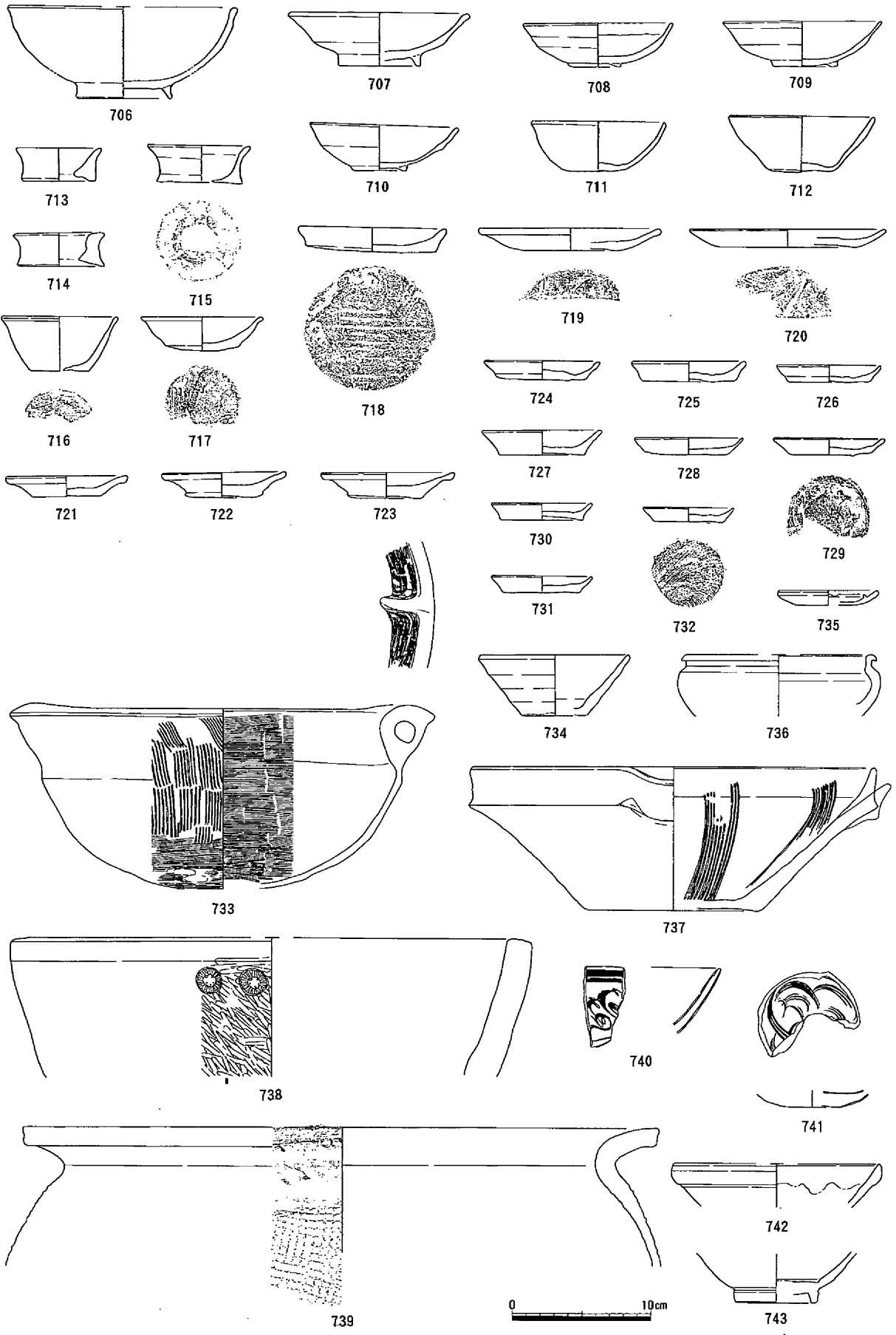
時期は、周辺の状況から中世以後と判断される。

(平井)

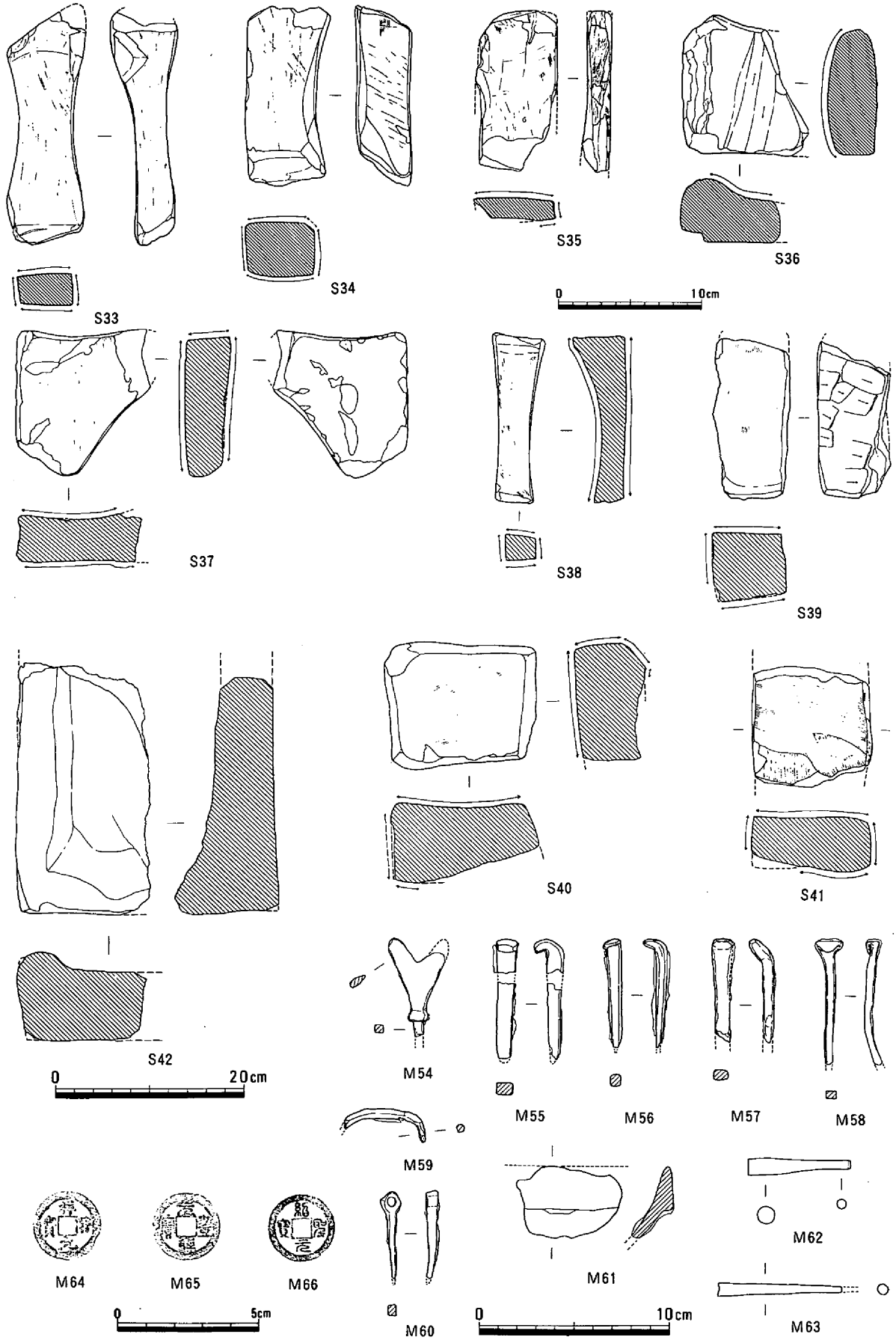
## (8) その他の遺構・遺物 (第610~612図、図版160~164・167)

遺構検出中に多量の遺物が出土したが、これらのうち残存状況のよいものを中心に中世以降のものと所属時期の不明のものをここで図示し、説明を加える。

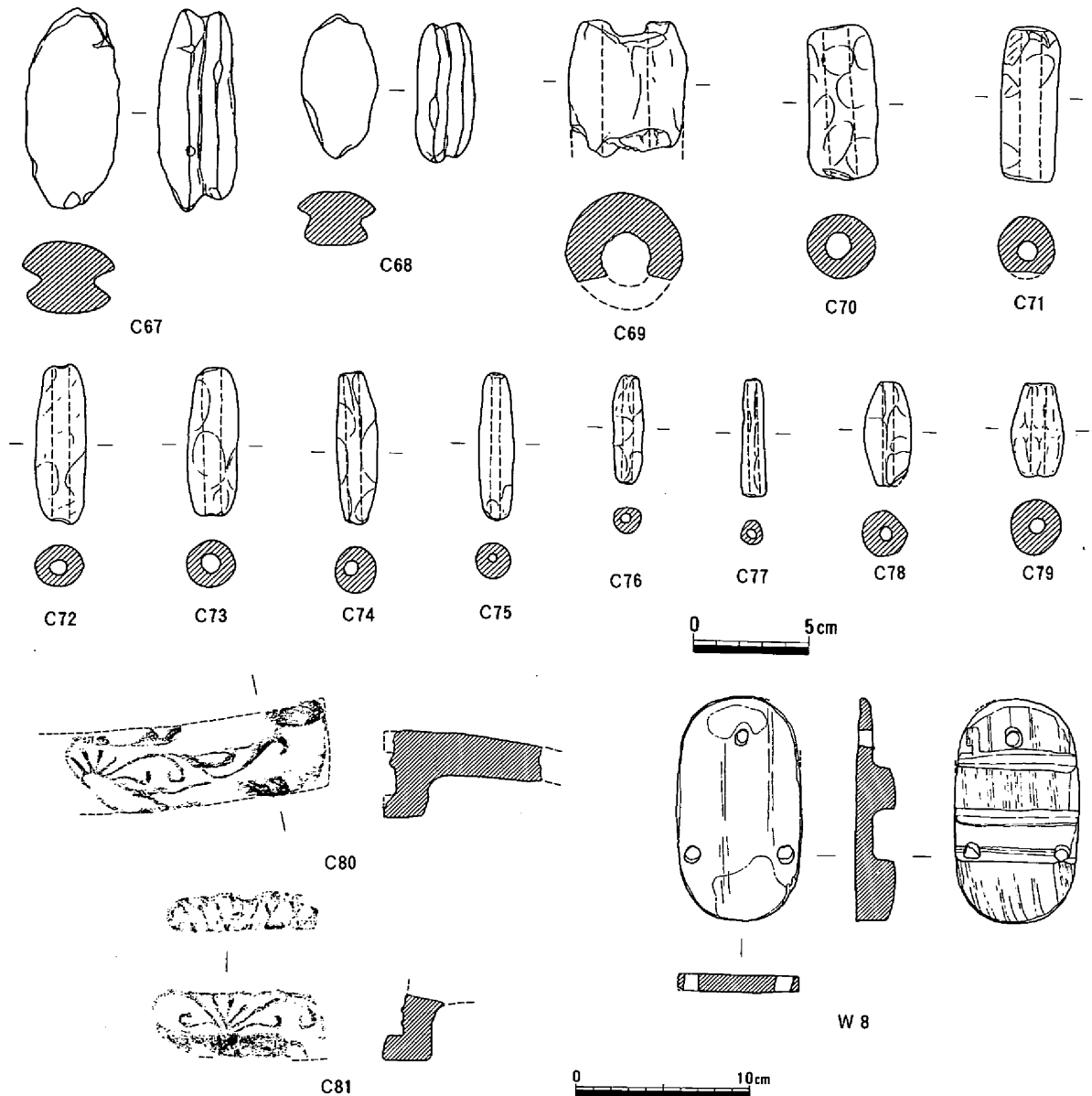
706~710は早島式土器で、706は深い杯部をもつことから12世紀前半と考えられ、他は13世紀後半から14世紀前半の時期が与えられる。しかしながら707~710は法量の点で類似しているものの、その形状、特に断面において口縁部が非常に薄くなるものと底部と体部の境界部が薄くなるものの二者が見られる。711・712は無高台の碗である。713~717は小杯で、うち713~715は従来脚台として報告され、天地についても不明確であったものである。ここで径の広い方を口縁と判断した理由は、口縁部が丁寧に作られるのに対して底部は一貫してヘラケズリ痕を残したままの粗いものが見られるためである。また、底部の穴については13世紀後半から14世紀前半を主体とした高田調査区で出土するものは全て底部に穴が空いているが、13世紀前半以前を主体とする中屋調査区では穴の空かないものが見られ、時期が下るとともに儀器化が進んだ結果と推測している。しかしながら、713~715のタイプと716のタイプとの機能差の有無については、今後出土状況を詳細に検討していく必要がある。718~720は土師器で、718は底部にヘラ切り後板目圧痕、719・720は糸切り痕が見られる。721~732は土師器小皿で、724~729は底部ヘラ切り、730~732は糸切りの痕跡が見られる。当地域では、土器製作時における切り離しには一般的にヘラ切りが使用されるが、中世のある時期から糸切りへ変わる。725~732は全てP4調査区から出土しているが、ヘラ切りのものと糸切りのものは、胎土、色調に明確な差異は認められず、また法量と口縁部の作り方の点でも差異は認められない。小皿の器形・法量の変化は他の器種に比べて明確な時期差を示さないが、出土した調査区の他の遺物から13世紀末から14世紀代の期間の中でヘラ切りから糸切りへ変化するのではなかろうか。733は土師器の内耳鍋である。734は古瀬戸の平底末広碗で、体部全面に透明の灰釉がかかる。古瀬戸編年の中I期(14世紀初頭頃)に当てられ、高田調査区の集落の時期と合致する。735~737は備前焼で、735は灯明皿、736は壺、737は播鉢である。735の灯明皿は受け部が短いことから17世紀後半以後のものであろう。738は瓦器鉢である。外面には菊と思われる花文のスタンプが押されている。739は瓦質の亀山焼の甕である。740・741は輸入青磁である。740は内面に飛雲文が見られる碗の口縁部、741は上げ底気味の皿の底部



第610図 包含層 (706~743)



第611図 包含層 (S33~S42・M54~M66)



第612図 包含層 (C67~C81・W8)

で、内底部に櫛描き文が見られる。742・743は輸入白磁である。743は削り出し高台の底部片で、内底面は水平で体部との境界部に幅1cmの釉剥ぎによる段が見られる。S33~S41は砥石で、S33は頁岩製、S36は砂岩製でその他は流紋岩質熔岩製である。S39の側面には幅1cm前後の工具による加工痕がられる。S42は火山礫凝灰岩製の加工石で、形状から墓石と推定されるが、風化が著しく碑銘、像などの痕跡は認められない。M54~M61は鉄製品である。M54は雁股の鎌である。M55~M60は釘で、M55~M57は頭部を折り曲げて作り出しているが、M58の頭部は叩き出されている。M59は頭部が残存していないが鋸の可能性もある。M60は頭部に径6mmの孔が見られる。M61は鍋の口縁部、M62~M66は銅製品でM62・63は煙管の吸い口である。M64~M66は北宋銭である。M64は「祥符元寶」、M65は篆書体の「元豊通寶」、M66は篆書体の「紹聖元寶」である。C67~C79は土錘である。C67・C68は側辺に溝の巡る有溝土錘、C69~C79は管状土錘である。C80・C81は軒平瓦である。C81は顎にあたる部分の粘土の上面に刻みを入れ平瓦部に接合している。W8は木製の一木作りの下駄である。

(杉山)

## 第5章 結 語

### 第1節 縄文～弥生時代の津寺遺跡

#### (1) 縄文時代の遺構・遺物

縄文時代の遺構はこれまで確認されていないが、微高地縁辺の基盤となる砂礫層や後代の包含層から、後期後半(彦崎KⅡ式)の深鉢(野上田400、中屋739)、晩期前半(黒土BⅠ式・船津原式)の深鉢(野上田401～404)、晩期後半(南方前池式)の深鉢などが出土している<sup>1</sup>。これらの土器には摩滅が認められず、近傍に何らかの遺構が存在していた可能性はある。

また、中屋調査区では中近世の溝埋土から硬玉製大珠J36が出土している。これは、長さ4.5cmで、cmを測る上端に比べ下端が3.0cmとやや広がっており、一方の側面には幅0.7cmの浅い抉りこみが見られる。厚さは1.6cmで、重量は44.7gを測る。上端から下端に抜ける円孔は直径0.3～0.5cmで、両面から穿たれたものと思われる。大珠は、中部地方を中心に東日本で多く出土しており、これまでに300余例を数える<sup>2</sup>。西日本でも九州地方で8例確認されているが、中・四国地方では初例であり、分布の空白を埋める資料として重要である。大珠は、東日本において中期に盛行するが、九州地方の8例はいずれも後期に属している。本例は遺構に伴っておらず正確を期しがたいが、前述したように後・晩期の土器が出土していることからすれば、そのいずれかの時期に属する蓋然性が高い。なお、本例の素材となるヒスイは、藁科氏による分析で新潟県糸魚川産であることが推定されており、縄文時代における流通を考えるうえでも貴重な資料となるものと思われる。

#### (2) 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は、これまでに竪穴住居64軒、掘立柱建物5棟、袋状土壌200基などが報告されている<sup>3</sup>。これらは西川調査区を中心とするO17区のA群と、中屋調査区の東半にあたるP17区のB群、そして今回報告したQ18区のC群に大別される。

A群は、30軒の竪穴住居とその周辺にまとまって分布する160基の袋状土壌からなり、B群は10軒の竪穴住居と60基の袋状土壌で構成される。これらの時期を見ると、A群が弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰを中心とするのに対し、C群では弥・後・Ⅱの遺構が多く見られる。ところで、今回報告したC群は、竪穴住居7軒、掘立柱建物1棟の南にまとまる11基の袋状土壌と土壌からなるが、その分布を詳しく見ると、竪穴住居-126と袋状土壌-70・71、竪穴住居-128・129と袋状土壌-72・73、竪穴住居-130と袋状土壌-79、竪穴住居-131と袋状土壌-75～77の対応関係が見て取れる。同様な在り方はB群でも認められ、各家族体に管理の主体があったことを物語る。これは、

		底 面			計
		a	b	c	
壁	A	2 25%	6 75%		8 12%
	B	7 19%	22 62%	7 19%	36 55%
面	C		20 95%	1 5%	21 32%
		計	9 14%	48 74%	8 12%

表3 袋状土壌の類型

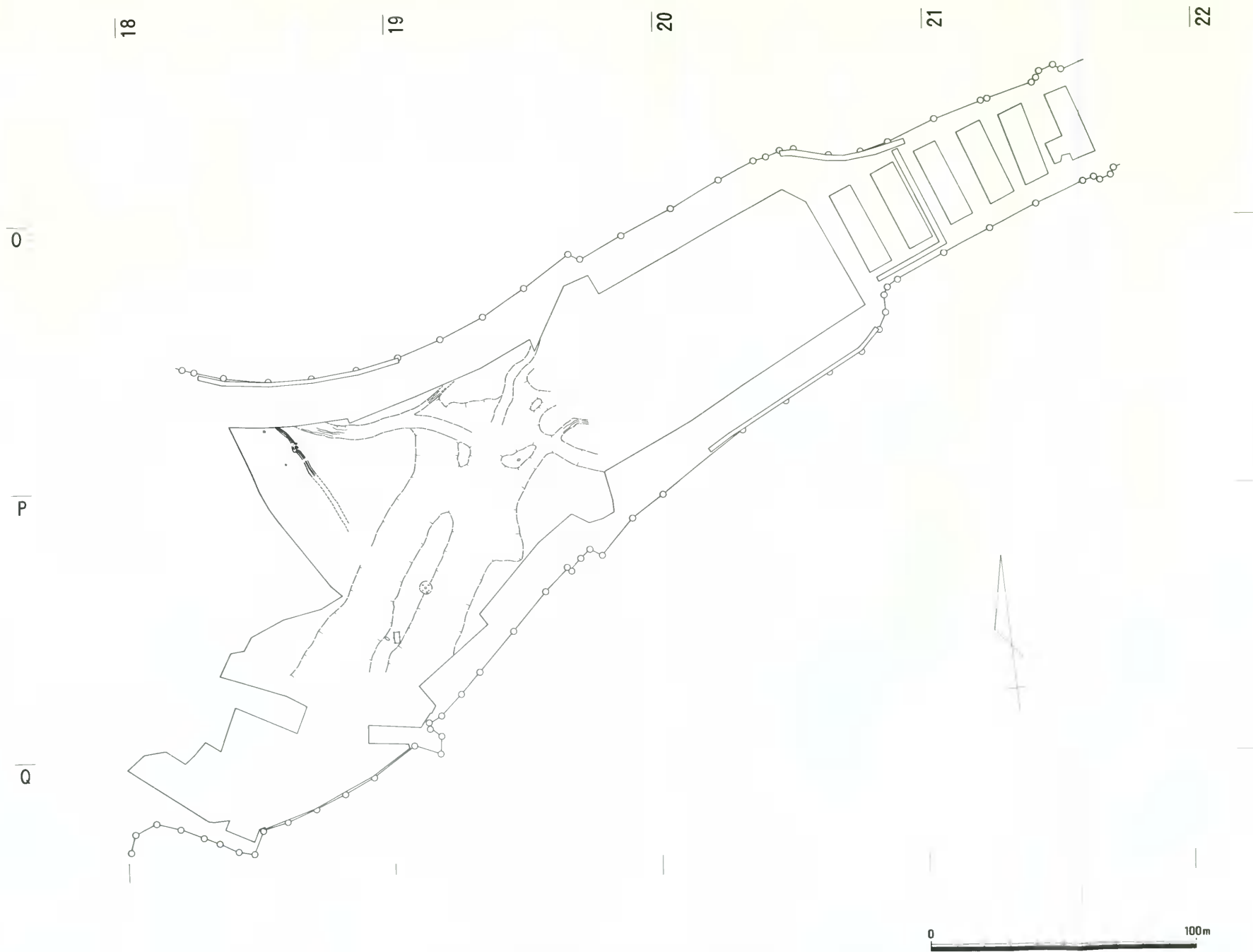
	50cm ～	60cm ～	70cm ～	80cm ～	90cm ～	100cm ～	110cm ～	120cm ～	130cm ～	140cm ～	150cm ～	160cm ～	170cm ～	180cm ～	計
a	1 25%	1 25%	2 50%												4 6%
b			2 4%	6 13%	1 2%	9 19%	6 13%	6 13%	3 6%	7 15%	3 6%	1 2%	2 4%	1 2%	47 76%
c				2 18%		1 9%	2 18%	2 18%	2 18%			1 9%	1 9%		11 18%
計	1 2%	1 2%	4 6%	8 13%	1 2%	10 16%	8 13%	8 13%	5 8%	7 11%	3 5%	2 3%	3 5%	1 2%	62 100%

表4 袋状土壙の類型別規模

袋状土壙の集中的な管理が想定されているA群とは対象的な在り方を示している。C群では弥・後・IIの遺構が多いことから、時期差によるものとも考えられるが、B群においても同様な状況が見られることからすればただちに首肯しがたい。むしろ、貯蔵物の相違や場の機能の違いに起因するものと理解すべきではなかろうか。

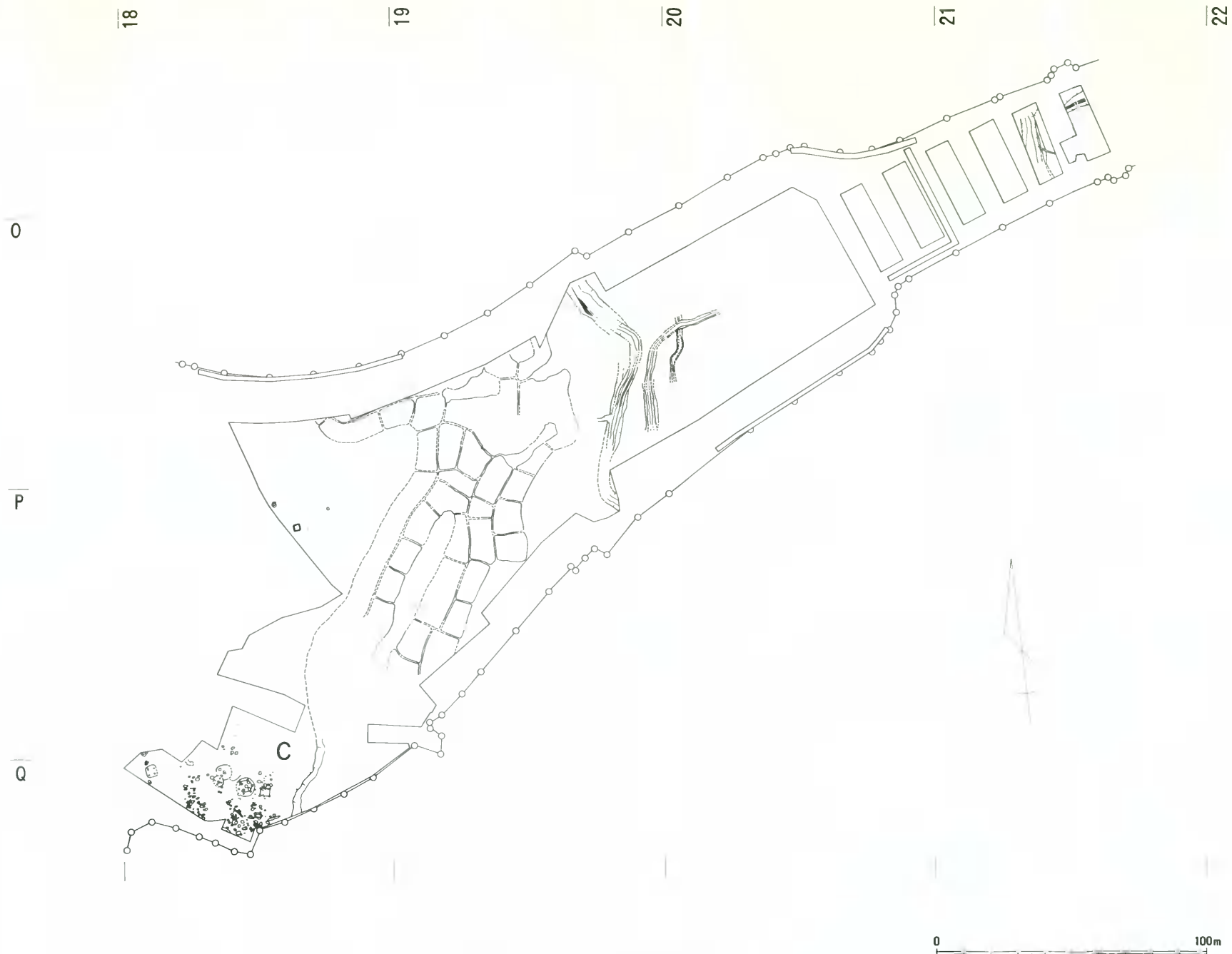
ところでB群の袋状土壙は、壁面の上部が広がるA(8基 12%)のほか、円筒形を呈するB(36基 56%)、下部が広がるC(21基 32%)も見られた。また、その底面は中央が窪むa(9基 13%)、平坦なb(51基 75%)、中央が盛り上がるc(8基 12%)が認められた。底面aは壁面Bのみに見られ、その規模は底径50～133cm(平均86cm)を測る。これに対し、底面bは壁面B、Cの双方において主体をなし、その規模も底径72～185cm(平均119cm)と底面aより大きい。さらに、底面cは壁面Bのほか壁面Cにも見られるが、底径83～175cm(平均114cm)を測る規模からすれば壁面Bとの関連が強い。以上のことから分かるように、底面aは小規模な貯蔵穴にのみ見られる構造であって、貯蔵穴としては粗雑なつくりと言える。また、底面aには中期末の土器を出土するものが多いことから、底面bに象徴されるような定形化した貯蔵穴に先行する形態と考えられる。ところが、A群では、中期末の段階においてすでにb類の底面をもつ袋状土壙が見られ、しかも、その規模はB・C群のものに比して大形である。A群の袋状土壙は、竪穴住居の数に比べてはるかに多く、なおかつ相互に複雑な切り合い関係が見られることからすれば、それらが機能した時間が極めて短かったことを予想させる。これらの埋土には、しばしば崩落した壁面に由来する粘土塊の堆積が認められるが、それらを除去し再利用した様子は窺われない。こうしたことからすれば、存続期間のうちに維持管理が行われない時期を想定することは可能である。

一方、このように多数検出されている袋状土壙に比べて、掘立柱建物(高床式建物)は数棟検出されているに過ぎない。袋状土壙の内部は高床式建物に比べて高湿な環境にあり、穀物の貯蔵施設として好適であったとは思われない<sup>4</sup>。しかし、袋状土壙は高床式建物と異なり小規模な労働力の投下によって設営が可能であり、その管理・保有の主体も井戸と同様に各家族体にあったことは十分に考えられる。もっとも、津寺遺跡で検出された200基もの袋状土壙は、60軒に過ぎない竪穴住居に比べてはるかに多い<sup>5</sup>。しかも、これらは弥生後期前半でも比較的古い段階に集中しており、なおかつ多くの袋状土壙で切り合い関係が見られることからすれば、それらが機能した時間が極めて短かったことを予想させる<sup>6</sup>。種籾であれば当然その貯蔵は収穫から播種までの期間に限定されるし、自家で消費する穀物であればこのような施設に常時貯蔵しておく必要はない<sup>7</sup>。また、津山市天神原遺跡に見ら



第613図 津寺遺跡弥生時代中期遺構全体図 1/1.500

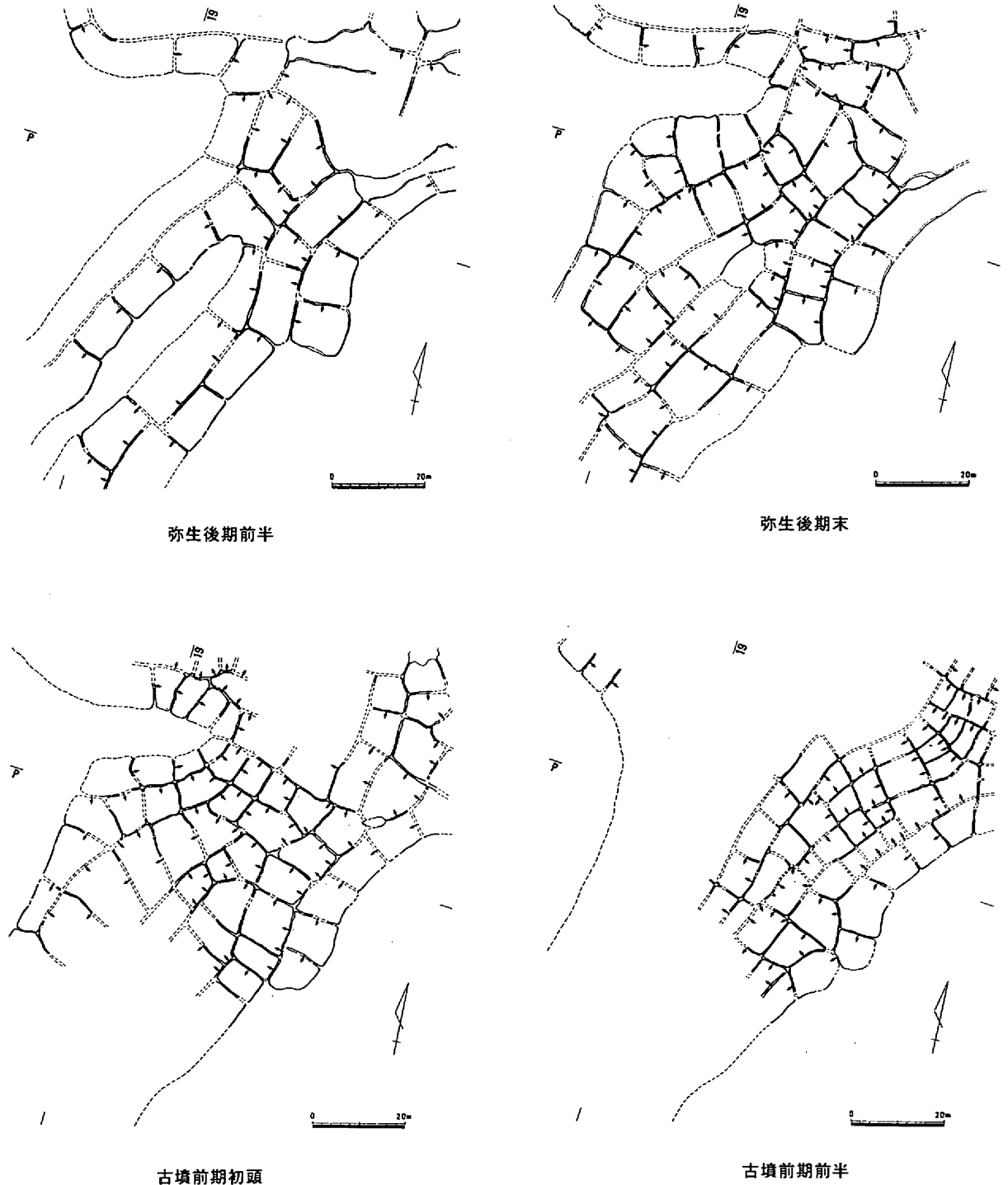




第614図 津寺遺跡弥生時代後期遺構全体図 1/1,500

れるような複数の貯蔵穴を床面に掘りこんだ竪穴住居の存在からすれば<sup>8</sup>、これらが集落単位で管理される場合があったことが知られ、高床式建物との季節や内容物による使い分けが行われていた可能性も考慮すべきであろう。

次に、今回報告した弥生～古墳時代の水田について、中屋調査区を中心にまとめておきたい。この水田は、微高地の東端に沿って走る河道を反映した低位部を利用して営まれたもので、下層の水田一



第615図 弥生～古墳時代の水田

1では幅40m、上層の水田-4では幅50mの帯状をなしている。また、水田-3の段階では高田調査区でも東にのびる幅29mの低位部に水田が展開する。水田層は酸化鉄の沈着により黄灰褐色を呈する粘質土で、耕作土と床土とを識別することはできなかった。水田-4に残る島状の高まりでは中期中葉の竪穴住居-125が検出されており、開田時期はこれを溯ることはない。また、住居の立地からすれば、この低位部が比較的高燥な環境にあったと推定され、当初から乾田もしくは半乾田として機能していたことを窺わせる。

田面の標高は、下層の水田-1で230~248cm、上層の水田-4で278~290cmを測る。また、その比高は水田-1の18cmから水田-4の12cmと、わずかではあるが減じており、上流から供給される土砂の堆積によって順次その標高を上げるとともに田面の平坦化を進めている。さらに下層水田の随所に見られた島状の高まりも、水田面上昇に伴ってしだいに縮小し、水田-4では完全に消失する。各層の間には厚さ10~15cmの砂層が認められたが、水田-4は厚さ20cmほどの砂層に覆われており、以後耕作が行われた形跡はない。水田の区画は、水田-1が長さ12~16m、幅8~11mの長方形をなすのに対し、水田-4では一辺3~12mの方形を呈している。その面積も、水田-1は52~131㎡、平均103㎡あるが、水田-4では15~100㎡、平均36㎡と小形化していく傾向が認められる。このことは結果として、水田区画の増加として現れるが、これが灌漑方法に起因する現象であるのか、あるいは集落規模の拡大(経営単位の増加)と対応する動きであるのか興味のもたれるところである。水田区画の配列は、低位部の主軸に沿った直線的なものとなっており、水配りも単純である。しかし、上層の水田では区画が互い違いに接するようになり、微高地側からの掛け流しが顕著になる。

これらの水田に対する給水は、高田調査区の西端を南北に走る溝によってなされているものと見られるが、調査範囲内において水田への導水状況を把握することはできなかった。しかし、高田調査区の水田では北縁に沿って走る溝を検出しており、前述した幹線水路から分岐して直接水田を灌漑する施設と見られる。以上、述べてきたように津寺遺跡の水田は、弥生~古墳時代の変遷をたどることができる例として貴重な情報を提供した。また、吉備の中核域を支える生産基盤が、その拠点集落と一体として捉えられるようになったという点でも、その意義は少なからぬものがある。(亀山)

註1. 大橋雅也ほか「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995

亀山行雄ほか「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』岡山県教育委員会、1996

2. 安藤文一「翡翠大珠」『縄文文化の研究9』1983

3. 亀山行雄ほか「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』岡山県教育委員会、1996

なお、第4章では袋状土壌の名称を使用した。袋状を呈するものは必ずしも多くはない。したがって、ここでは貯蔵穴と想定される土壌を指す名称として便宜的に袋状土壌の語を用いることとする。

4. それぞれの特性からすれば、袋状土壌と高床式建物とは内容物を異にしていたことも考えられる。しかし、現在までに確認されている袋状土壌の内容物にはシイ・カシ・モモ・ウメなどの果実も見られるものの、その大半はコメ・ムギ・アワ・ヒエ・アズキ・キビなどの穀物であり、袋状土壌の基本的な機能は米を主体とする穀物の貯蔵にあったと見るべきである。ただし、根菜類などの貯蔵あるいは食料以外の短期的な保管といった副次的な機能までもを否定するものではない。

5. 竪穴住居1軒あたりの袋状土壌の数は3~4基になる。

6. 貯蔵穴の数の多さは、使用期間の短さのほか、砂質の強い軟弱な地盤も深くかかわっているものと思われる。
7. 久米町領家遺跡の31号住居では5俵もの炭化米が出土している。これらは壁際の上部に設えられた棚のような施設に保管されていたものと想定されている。このほかにも竪穴住居から炭化米が出土する例は多く知られており、高床式建物など特別な貯蔵施設によらない穀物の保管が日常的に行われていたことをうかがわせる。
8. 橋本惣司ほか「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』岡山県教育委員会、1975

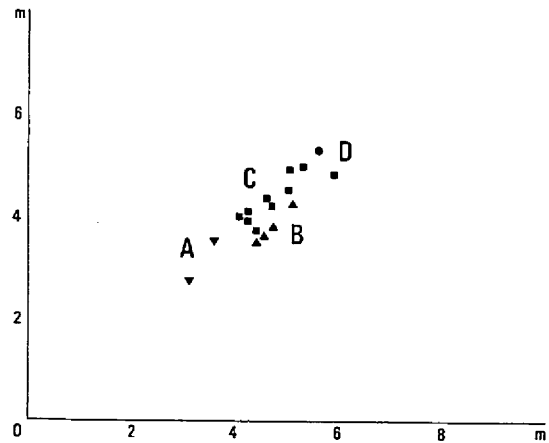
## 第2節 古墳時代の津寺遺跡

### (1) 古墳時代前期の遺構・遺物

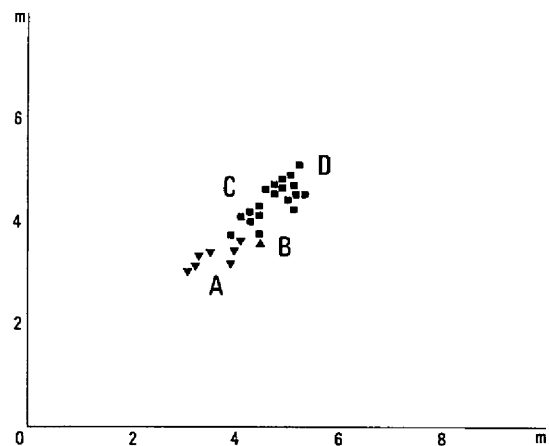
#### 古墳時代前期の遺構

古墳時代前期の遺構は、O17区のA群、P17区のB群、Q18区のC群に分けられるが、今回報告した34軒の竪穴住居はこのうちのC群に属する。これらの竪穴住居の過半において重複が認められたが、床面の拡張ないし貼り替えであって、A・B群で認められたような位置をずらしながらも主軸を揃えて建て替えるといった状況は顕著に認められなかった。

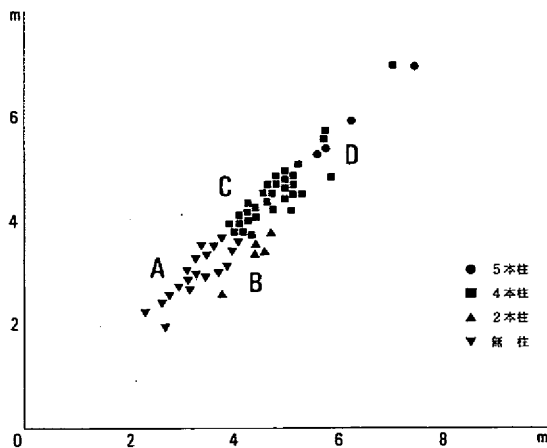
ところで、住居の平面形は方形・隅丸方形が39軒(81%)と大半を占めるが、隅丸多角形のものも9軒(19%)認められた。この隅丸多角形を呈する住居は、A群で1軒検出されているに過ぎず、C群を特徴づけるものである。また、これらの住居は、その規模によって長さ2.3~3.9m、幅2.3~3.7m、床面積5~12㎡のA類、長さ3.8~4.6m、幅2.6~3.4m、床面積10~14㎡のB類、長さ3.9~4.8m、幅3.7~4.7m、床面積14~20㎡、長さ5.7~7.5m、幅5.5~7.0m、床面積23~41㎡のD類に分けられる。A類は主柱をもたない小型の住居で、10軒(29%)検出している。5軒(14%)あるB類は、2本の主柱をもつ長方形の住居であ



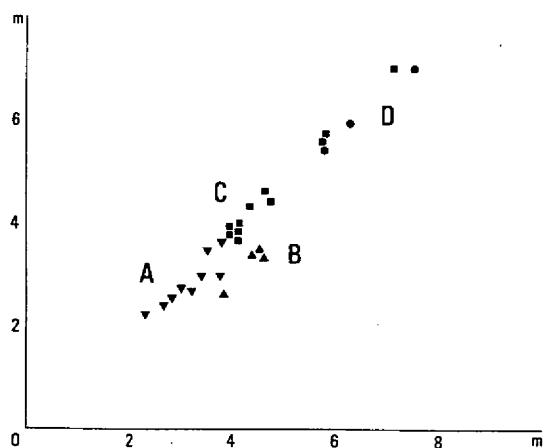
第617図 竪穴住居A群の構成



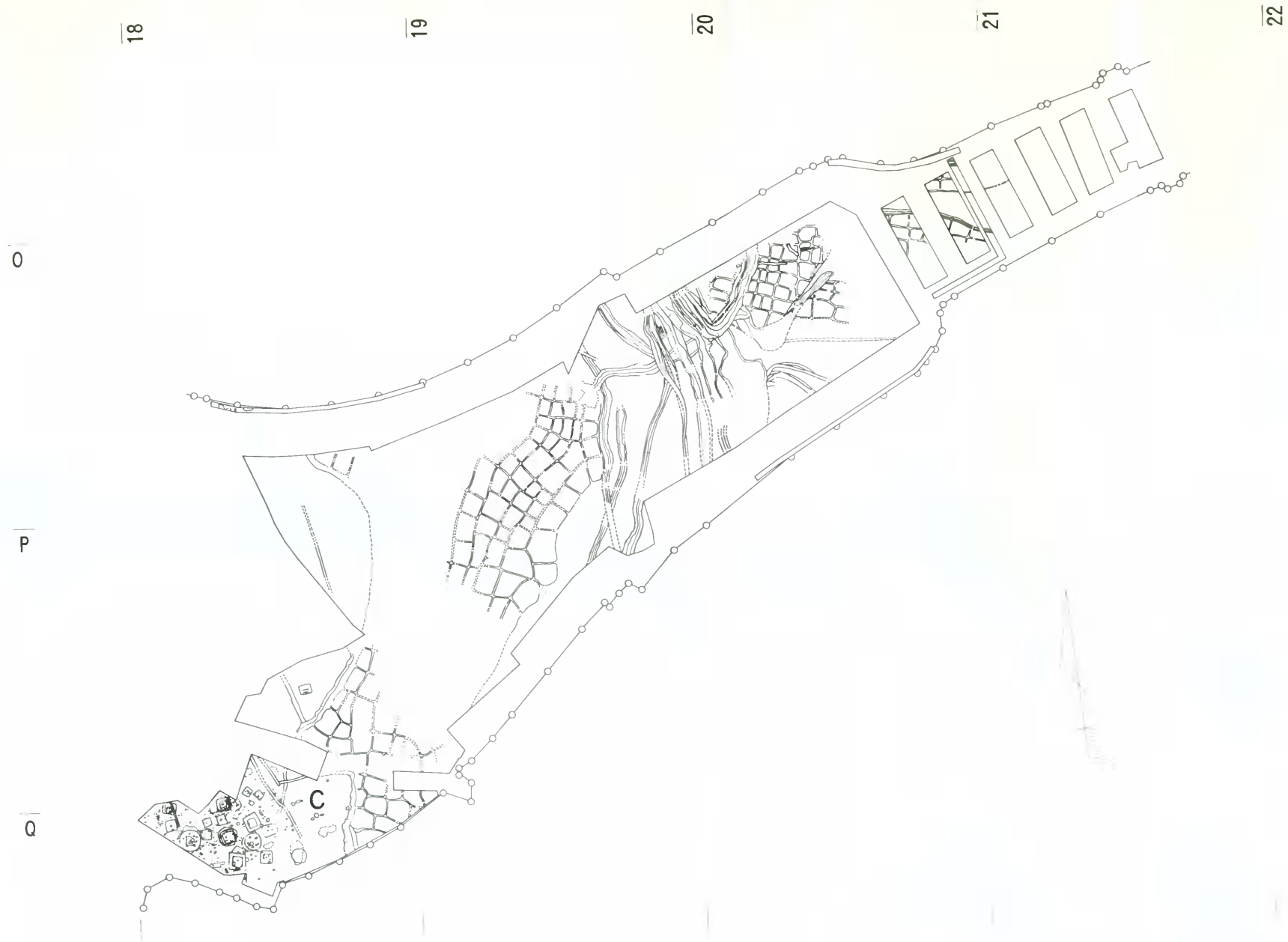
第618図 竪穴住居B群の構成



第616図 古墳時代前期の竪穴住居



第619図 竪穴住居C群の構成



第620図 津寺遺跡古墳時代前期遺構全体図 1/1,500

0 100m

		A 類	B 類	C 類	D 類	計
構成	軒数	3軒	4軒	9軒	6軒	22軒
	構成率	14%	18%	41%	27%	100%
規模	長さ	3.1~3.6m	4.4~5.1m	4.1~4.7m	5.0~5.9m	3.1~5.9m
	幅	2.7~3.5m	3.5~4.2m	3.7~4.3m	4.5~5.3m	2.7~5.3m
	床面積	7~12㎡	14~18㎡	14~18㎡	20~32㎡	7~32㎡
支柱	本数	0本	2本	4本	4・5本	0・2・4・5本
高床部	類型	I	II・IV	IV	IV・V	I・II・IV・V
	保有数	1/3	4/4	6/9	5/5	16/21
	保有率	33%	100%	67%	100%	76%
中央穴	保有数	1/3	4/4	9/9	5/5	19/21
	保有率	33%	100%	100%	100%	90%
方形土壇	保有数	2/3	4/4	7/9	4/6	17/22
	保有率	67%	100%	78%	67%	77%

表5 竪穴住居A群の類型

		A 類	B 類	C 類	D 類	計
構成	軒数	11軒	3軒	8軒	19軒	44軒
	構成率	27%	7%	20%	46%	100%
規模	長さ	3.1~4.1m	4.0~4.5m	3.9~4.5m	4.6~5.5m	3.1~5.5m
	幅	3.0~3.6m	3.7~3.9m	3.7~4.3m	4.2~5.1m	3.0~5.1m
	床面積	9~14㎡	15~16㎡	12~19㎡	19~28㎡	9~28㎡
支柱	本数	0本	2本	4本	4・5本	0・2・4・5本
高床部	類型	III・IV・V		IV・V	III・IV・V	III・IV・V
	保有数	4/11	0/2	5/8	12/14	21/35
	保有率	36%	0%	63%	86%	60%
中央穴	保有数	7/10	3/3	5/7	12/13	27/33
	保有率	70%	100%	71%	92%	82%
方形土壇	保有数	6/11	2/3	2/8	9/19	19/41
	保有率	55%	67%	25%	47%	46%

表6 竪穴住居B群の類型

		A 類	B 類	C 類	D 類	計
構成	軒数	10軒	5軒	11軒	9軒	35軒
	構成率	29%	14%	31%	26%	100%
規模	長さ	2.3~3.9m	3.8~4.6m	3.9~4.7m	5.7~7.5m	2.3~7.5m
	幅	2.3~3.7m	2.6~3.5m	3.7~4.6m	5.4~7.0m	2.3~7.0m
	床面積	8~12㎡	6~14㎡	13~18㎡	20~41㎡	8~41㎡
支柱	本数	0本	2本	4本	4・5本	0・4・5本
高床部	類型		IV	IV・V	IV・V	IV・V
	保有数	0/6	2/4	4/9	6/16	12/35
	保有率	0%	50%	44%	38%	34%
中央穴	保有数	2/5	5/5	4/7	7/12	18/29
	保有率	40%	100%	57%	58%	62%
方形土壇	保有数	3/6	5/6	2/9	5/15	15/36
	保有率	50%	83%	22%	33%	42%

表7 竪穴住居C群の類型

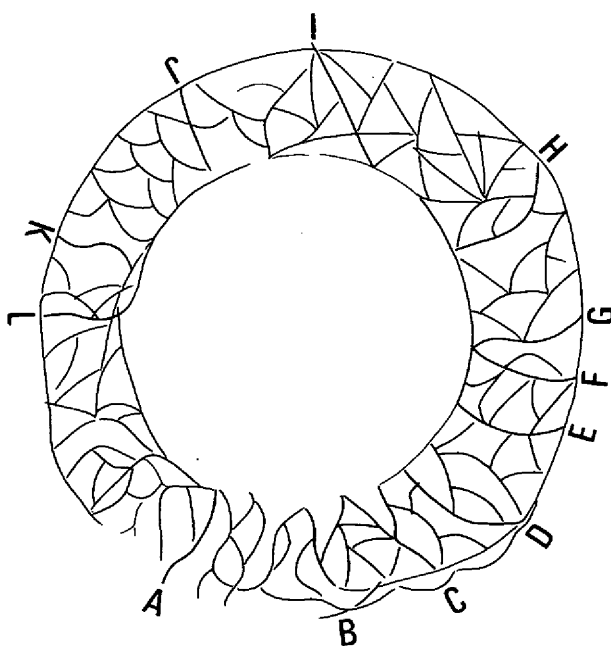
る。C類は4本の主柱をもつ方形の中型住居で、11軒(31%)確認している。9軒(26%)あるD類は、4本ないし5本の主柱をもつ大型住居で、隅丸多角形の住居はいずれもD類に属する。これをA・B群と比較すると、B・C類といった中型住居の占める割合が低く、かわって大型住居であるD類の割合が高くなっている。

次に、付属施設について見ると、高床部の保有率はA類で0%、B類で50%、C類で44%、D類で38%であり、住居の規模に比例して高くなっている。ただし、全体で36%という割合はA・B群に比べてやや低い。また、ここで見られる高床部は、竪穴の三辺につくりつけたIV類ないし四辺につくりつけたV類であり、特にD類においてV類の占める割合は高い。中央穴の保有率は、A類で40%、B類で100%、C類で57%、D類で58%であり、全体で62%を占める。A類を除いてその保有率は高いが、A・B群に比べればやや低い。方形土壇は、A類で50%、B類で83%、C類で22%、D類で33%を占める。D類における保有率の低さは、V類の高床部をもつ住居が多いことと関係している。

### 古墳時代前期の遺物

住居から出土した遺物には、多量の土師器があるが、その中には非在地系土器も少なからず認められる。畿内系の土器には、大きく開く二重口縁を備えた壺3388・3425・3857・3941~3946やく字形口縁をもつ甕3974・3975が、四国系の土器も、3679・3856・3930・3931のような壺がある。山陰系の土器には、長い口縁部をもつ壺3806・3947や二重口縁をヨコナデで調整する甕3396~3398・3415・3503・3707・3708・3721・4003~4005、低い脚台を備えた鉢3887や鼓形器台3519・3716・3850などがある。これらのなかでは山陰系土器に次いで畿内系土器が多く出土しており、既に報告した中屋調査区と比べると、この地点では四国系土器の占める割合がやや低い。しかしながら、こうした非在地系土器が主体となるような遺構は見られず、その全体に占める割合は必ずしも高くない。

また、特殊な文様を飾るものも認められた。包含層から出土した3932は、球形をなす体部の肩に幅4cmほどの文様帯をめぐらす壺である。文様は、Aから右に向かって描かれており、A~Lの単位が認められる。これらは上下2本の線の間を交差する弧線ないし直線で埋めたもので、弧線が鱗状をなす部分(JK)と直線がK字状をなす部分(HI)とがある。これは、組帯文を縦に配した連続文様に起源をもつものであり、立坂遺跡や黒宮遺跡出土の特殊器台などに類例を求めることができる。その点で直弧文とは系譜を異にする文様であるが、いくつかの区画に分割している点で直弧文との繋がりが窺える。その意味では、著名な酒津遺跡出土の壺などと同様の役割を期待されていたものと見られ、直弧文が葬送儀礼の器物を飾る特殊な文様として発達していく一方、依然として集落祭祀の中にとどめられた文様と考えられる。



第621図 土器に描かれた特殊な文様 1/3



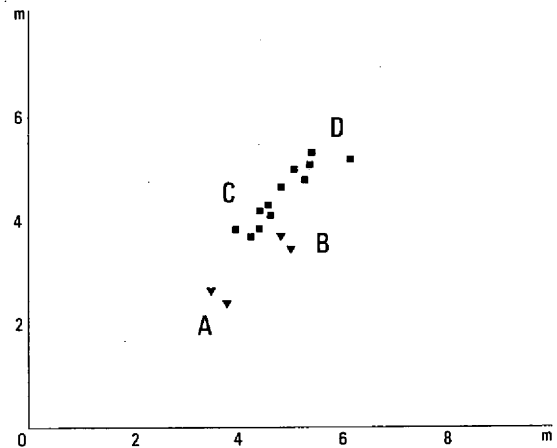
## (2) 古墳時代中期の遺構・遺物

## 古墳時代中期の遺構

中期の竪穴住居は17軒ある。これらの住居はその規模によって長さ3.5～3.8m、幅2.3～3.6m、床面積6～12㎡のA類、長さ4.9～5.0m、幅3.5～3.7m、床面積6～14㎡のB類、長さ3.8～4.7m、幅3.7～4.3m、床面積13～18㎡のC類、長さ4.9～6.1m、幅4.7～5.2m、床面積20～28㎡のD類に分けられる。A類は主柱をもたない長方形の住居で、2軒(12%)検出している。2軒(12%)あるB類も、主柱をもたない長方形の住居である。C類は4本の主柱をもつ方形の大型住居で、柱間は2.3～3.5mあり、6軒(35%)確認している。D類も4本柱の大型住居で、柱間は2.3～3.5mあり、7軒(41%)確認している。

これらの住居はO17区を中心とするA群、P17区のB群、Q18区のC群、P18区のD群に分けられる。8軒の住居からなるA群は、A～C類が散漫な分布を示す。またB群は6軒のB・C類住居で構成されているが、これらも、A群と同じく散在する傾向にある。これに対し、今回報告したC群は6軒の住居からなるが、B類の住居によって構成されており、C類が見られないのが特徴的である。これらの住居は、主軸がN-47°～62°-Wと北西にある5軒と、N-38°-Eと北東におく1軒とに分けられ、前者は陶邑古窯址群のTK23型式に、後者はTK47型式に併行する。また、D群はC類1軒、B類2軒の計3軒で構成される。これらの住居は、主軸がN-29°～42°-Eにある2軒と、N-20°-Wにおく1軒に分けられるが、いずれも陶邑古窯址群のTK23型式に併行する。

ところで、屋内に設けられたカマドは、竪穴北東辺ないし北西辺のほぼ中央につくりつけられている。その規模は、屋内で長さ100cm、幅110cmを測る。幅60cmある燃焼部は平面馬蹄形ないし「く」字形を呈し、その中央に遺存する支石の前面には被熱痕跡が認められる。また、カマドの下部には基礎構造と見られる不整形の土壌が掘りこまれていた。煙道は、壁体にそって立ち上がるA類が多いが、後期になると屋外へ長くのびるB類が主流となる。また、カマド内に据えられた支脚は、棒状の自然石を用い



第622図 古墳時代中期の竪穴住居

		A 類	B 類	C 類	D 類	計
構成	軒数	2軒	2軒	6軒	7軒	17軒
	構成率	12%	12%	35%	41%	100%
規模	長さ	3.5～3.8m	4.9～5.0m	3.8～4.7m	4.9～6.1m	3.5～6.1m
	幅	2.3～3.6m	3.5～3.7m	3.7～4.3m	4.7～5.2m	2.3～5.2m
	床面積	6～12㎡	6～14㎡	13～18㎡	20～28㎡	6～28㎡
主柱	本数	0本	0本	4本	4本	0・4本
方形土壌	保有数	0/2	0/2	2/6	0/7	2/17
	保有率	0%	0%	42%	0%	12%

表8 古墳時代中期の竪穴住居

ているものが多いが、高杯を転用するものも認められた。中期のカマドでは、ほとんどで支脚が遺存していたが、後期に入ると支脚がもち去られるためかその存在を確認することはできなくなる。

このカマドに向かい合うように、方形土壇が壁体に接して設けられている住居が2例認められた。長さ50～70cm、幅30～50cmの長方形を呈し、深さは20cmほどある。前期の方形土壇が2段の掘り方をもつのに比べ、この時期のものは上段を省略した小規模なものに変わっており、この構造は後期にも受け継がれる。その機能については、屋内施設の変遷からして排水ないしは貯水のための土壇と考えられるが、前期に比べればその保有率ははるかに低く、住居構造の変化(地上化)がその必要性を減じていったものと思われる。

### 古墳時代中期の遺物

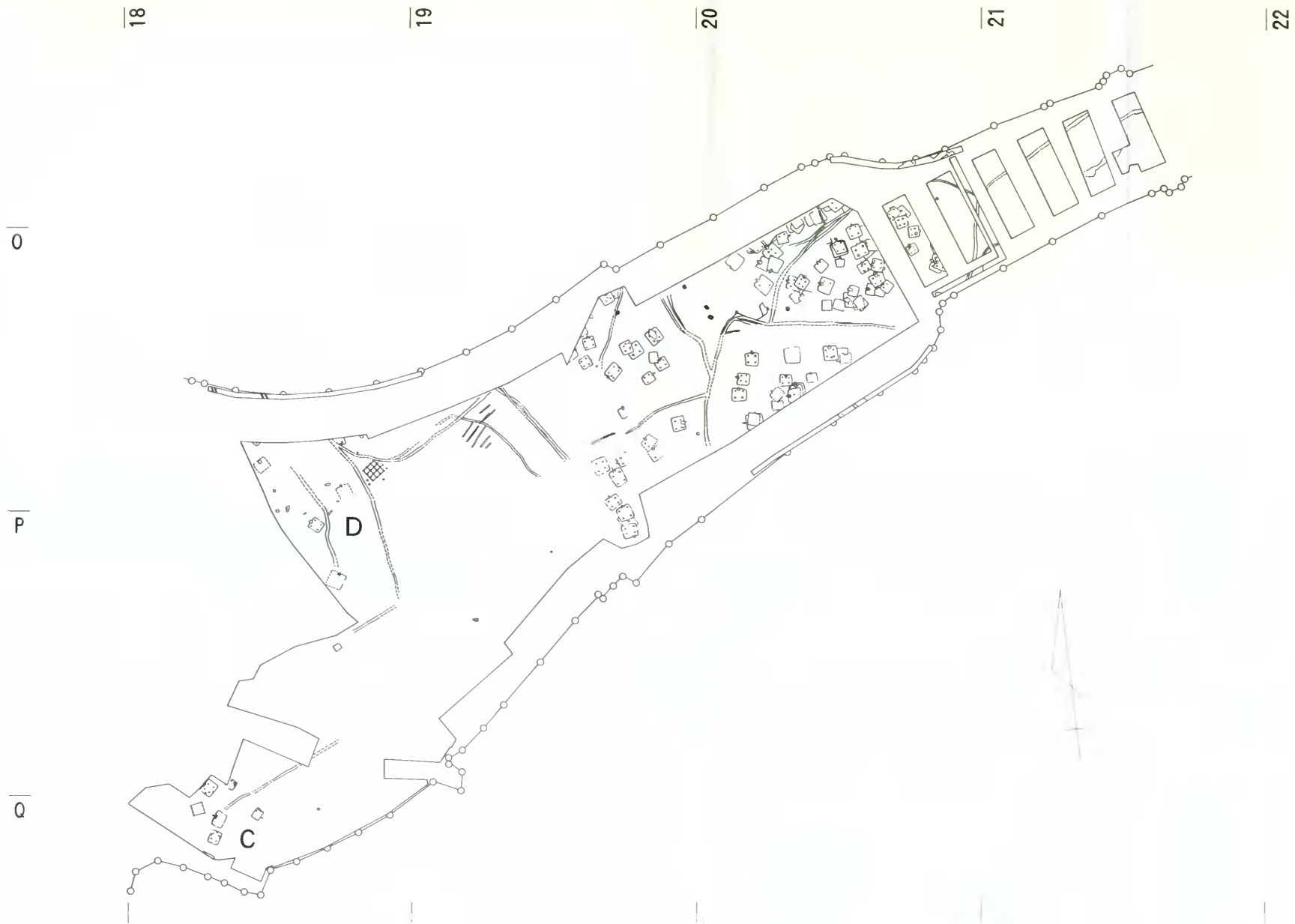
住居から出土した遺物には、土師器・須恵器のほか鉄鏃、砥石などがある。土師器は高杯・甕・鍋・甑などがあるが、甕がその主体をなす。甕は、口径13～14cm、器高16～20cmの球形を呈する体部をもつ小型と、口径15～24cm、器高28～32cmの長胴の体部を備えた大型に分けられるが、それぞれほぼ同率で用いられている。須恵器には、蓋・杯・高杯・壺・甕があるが、蓋・杯が最も多い。これに次ぐ出土を見る高杯は、TK208型式に併行する竪穴住居-188では土師器が優勢であるが、TK23型式では須恵器が支配的となり、以後土師器の高杯はほとんど見られなくなる。

このほかに、包含層からの出土ではあるが、滑石製の子持勾玉が1点ある。現存長6.1cm、幅3.2cmを測るが、全長8.5cm、幅3.5cm、厚さ3cmほどに還元される。体部の側面に長方形をなす2個の突起をつくり出す。また、腹部にも1個の突起をつくり出した痕跡が残る。子持勾玉は全国で350例あまり知られているが、岡山県では岡山市百間川原尾島遺跡、岡山市藤原遺跡、総社市大文字遺跡、勝央町植月東出土例につぐものである。これらの出土状況は単独で出土しているものが多いが、最近本例のような集落からの出土例が増加している。ことに、群馬県三ツ寺遺跡では石敷きを設けた遺構から玉や模造品とともに3個の出土を見ている。津寺遺跡でも、竪穴住居-114で滑石製の白玉18点と碧玉製の管玉1点、竪穴住居-119で滑石製の勾玉1点・白玉18点と琥珀製の平玉2点、竪穴住居-124で滑石製の管玉1点が出土している。これらは住居廃絶に際する祭祀的行為に用いられた遺物と想定され、いずれもTK23～TK47型式の須恵器を伴っている。本例も遺構に伴うものではないが、その出土状況からして中期後半(5世紀末～6世紀初頭)に集落の縁辺で行われた祭祀にかかわる遺物と考えられる。また、遺構に伴う金属製品は少ないが、土壇-68では羽口の出土をみており、小規模な鉄生産が行われていた可能性はある。このことは、新たに成立した中期の集落の性格とその生産基盤の問題ともかかわって興味のもたれるところである。

## (3) 古墳時代後期の遺構・遺物

### 古墳時代後期の遺構

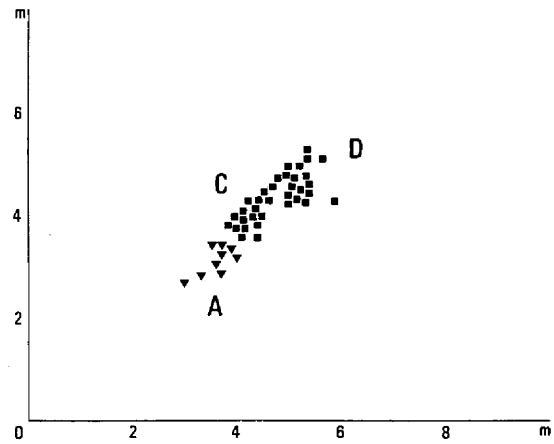
古墳時代後期の遺構には、竪穴住居109軒、井戸1基、焼成土壇13基、土壇35基、溝29条などがある。これらは、前期の段階で水田が広がっていた中屋調査区の東半から高田調査区にかけて展開している。竪穴住居は、その規模や構造からA～D類に分けられる。8軒検出されたA類は、柱をもたない小型の住居で、長さ3.0～4.2m、幅2.7～3.5m、床面積7～12㎡を測る。前・中期に見られた長方形をなす2本柱の住居B類は、この段階では認められない。C類は、長さ3.6～4.7m、幅3.4～4.5m、



第623図 津寺遺跡古墳時代中・後期遺構全体図 1/1,500



床面積11～19㎡を測る4本柱の方形住居で、39軒確認された。D類も方形をなす4本柱の住居であるが、その規模は長さ4.8～5.7m、幅4.2～5.3m、床面積18～28㎡とC類よりやや大きい。カマドは煙道が屋外に長くのびるB類が主体で、I～IV期のものでは北ないし西辺につくりつけているが、V期になると東辺中央に統一される。方形土壇は、前期に比べるとその保有率は低いが、C類で1軒(4%)、D類で4軒(18%)と、住居規模との関係を示唆する。



第624図 古墳時代後期の竪穴住居

ところで、これらの住居は溝-27～32を境にしてO19区北東のA群、O19区南東のB群、O20区南西のC群、O20区北西のD群に分けられる。これらを時期の判明したものに限って見てみると<sup>1</sup>、I期の段階に属する住居は5軒あり、主として比較的高位置にあるB・C群に2～3軒を単位として存在している。これらの住居のなかには竪穴の辺を揃えているものが認められ、住居の設営にあたって何らかの企画が存在していた可能性がある。II期には、10軒の住居が全体に展開し、2～3軒を単位として各群を構成する。そしてIII期になると、13軒の住居のうちの9軒がD群に集中し、他に対する優位を示すようになる。こうした傾向はIV期まで引き継がれるが、V期には住居が5軒と減少し、各群に単独で散在する。このような集落の変遷は、後述するような鉄器生産と深くかかわっているものと見られる。

		A 類	B 類	C 類	D 類	計
構成	軒数	12軒	0軒	39軒	34軒	85軒
	構成率	14%	0%	46%	40%	100%
規模	長さ	3.0～4.2m		3.6～4.7m	4.8～5.7m	3.0～5.7m
	幅	2.7～3.5m		3.4～4.5m	4.2～5.3m	2.7～5.3m
	床面積	7～12㎡		11～19㎡	18～28㎡	7～28㎡
主柱	本数	0本		4本	4本	0・4本
方形土壇	保有数	0/8		1/28	4/22	5/58
	保有率	0%		4%	18%	7%

表9 古墳時代後期の竪穴住居

### 古墳時代後期の遺物

竪穴住居からは、土師器や須恵器をはじめ、鎌、斧、紡錘車などの鉄器、鉄滓などが出土している。土師器には椀、高杯、鉢、甕、甑があるが、その大半は甕や甑などの煮炊具であり、土師器全体の8割近くを占める。とくに、甕には中期に見られたように大・小形が併用されており、大形のものには鍋が含まれている。また14%を占める鉢は、小形の供膳具が主体となる須恵器を補完する役割を果たしていたものと思われる。須恵器には蓋、杯、高杯、甕、壺、提瓶、横瓶、甕、甑などがある。須恵器全体の73%を占める蓋杯は、蓋が31%、杯が42%とわずかに杯が多いが、対になるものは少なく、それぞれが独立した食器として機能していたものと思われる。13%を占める高杯は、飲用器と推定される無蓋高杯で、有蓋高杯は少ない。貯蔵具には壺、瓶、甕などがあるが、遺存が悪いため全体の10%を占めるにすぎず、ことに液体容器である瓶類の僅少さは注意される。こうした土師器と須恵器

の割合は3 : 7で、中期より土師器の占める割合は減少している。これは、土師器が供膳具からほとんど姿を消し、専ら煮炊具として使用されたことによる。

鉄滓は大半の住居で出土が認められ、その総量は7830 gを測る。そうした中であって、鉄滓の出土が僅少もしくは全く見られなかった住居が10軒ある。これらの床面では1~2カ所の被熱面が検出されているが、その中には高田調査区竪穴住居-5のように鍛冶炉と見られるものがあり、これらの住居が工房として機能していた可能性がある。

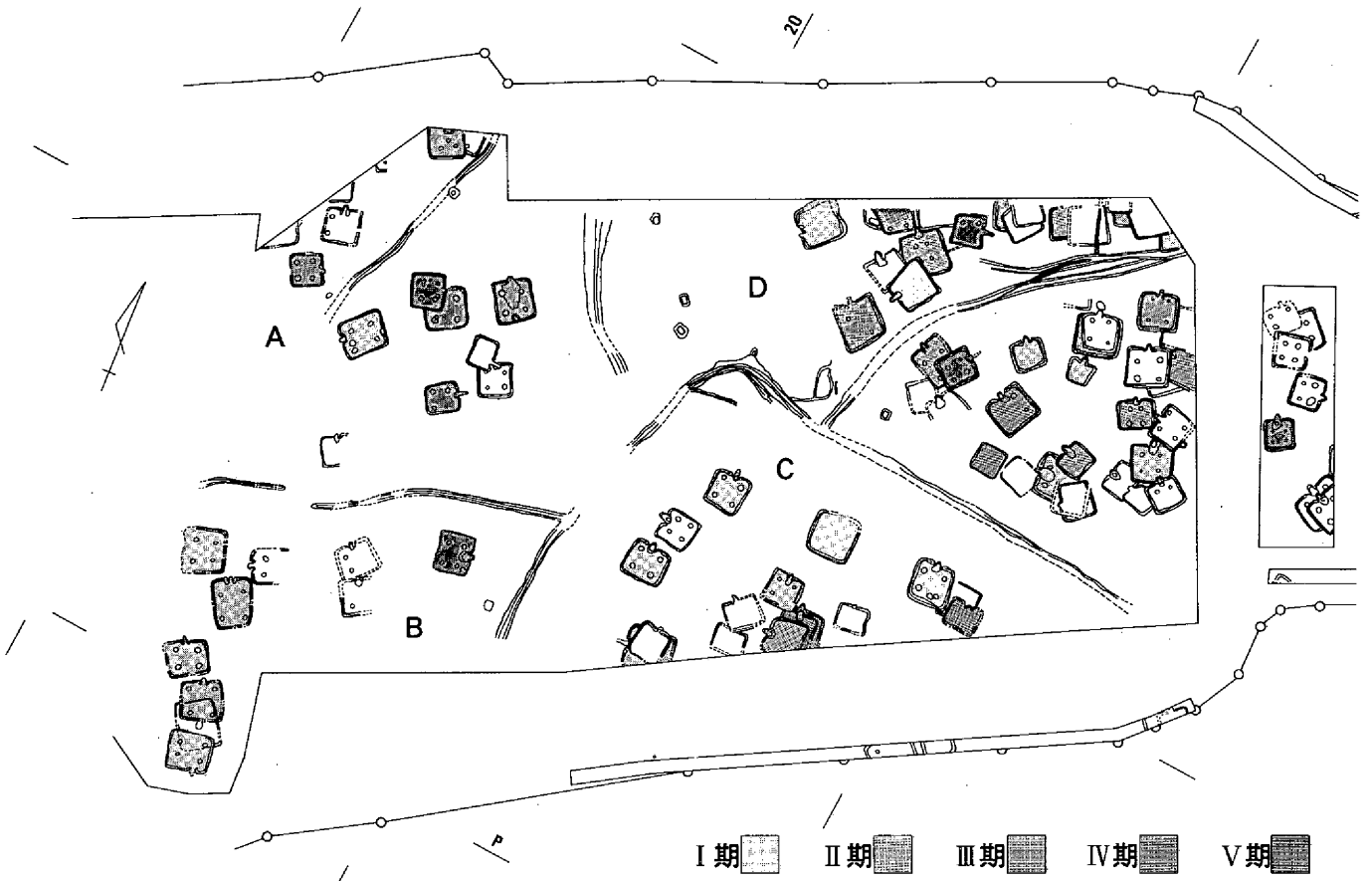
ところで、鉄滓の出土量を時期別に見ると、I期は54 gと格段に少なく、また精錬滓が見られないことからすれば、鍛錬鍛冶を主とした小規模な生産がC群を中心に行われていたものと推定される。II~IV期になると、鉄滓を出土する住居は10~13軒となり、その出土量も1297~1703 gと増加する。鍛錬鍛冶滓のほかに精錬滓が見られるようになり、A・D群を中心に本格的な鉄生産が行われるようになったと思われる。V期には、鉄滓を出土した住居が5軒と減少するにもかかわらず、その重量は1031 gとそれ以前とさほど変わっていない。しかし、出土点数は大幅に減じており、鉄滓自体が大形化していく様子が窺える。このことは、住居(工房)の減少が鉄器生産の量を表すのではなく、むしろ集中的な生産に移行していった可能性さえ指摘しうる。

このほかに鉄器生産にかかわる遺構として、高田調査区でまとまって検出された10基の焼成土壌があげられる。これらは長さ73~142cm、幅63~115cmの長方形をなす土壌で、いずれも被熱によって壁面が赤変している。ただし、ここでは一回り大きい掘り方をもつものが4基知られており、防湿のための特殊な構造と見られる。土壌内には炭化材が遺存するものもあり、製炭にかかわる施設と考えられている。これらは、住居群と重複して存在するものと、それらに囲まれた空地に位置するものがあるが、出土遺物から見て前者は後者に後出するようである。このことは、ただ単に場所の移動といった問題にとどまらず、操業の単位の変化にまで波及する可能性があり、住居群の動向とも併せて注意される。

鍛冶にかかわる道具としては、鉄を熔融するための羽口や、鉄器を加工する鑿が出土している。羽口は直径8 cm、送風孔の直径3 cmと比較的大形で、大鍛冶に用いられたものと思われる。また、鑿は

時期	出土軒数	出土重量	出土点数	鉄鉱石	製錬滓	精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓	椀形滓	ガラス質滓	屋内焼土面
I期	4軒 6%	54.9 g 1%	28点 6%				2/2 100%	1/2 50%	2/2 100%	2軒 22%
II期	10軒 15%	1297.5 g 17%	119点 23%			2/9 22%	7/9 78%	2/9 22%	3/9 33%	3軒 33%
III期	12軒 18%	1320.8 g 17%	115点 23%		1/9 11%	3/9 33%	9/9 100%	3/9 33%	5/9 56%	2軒 22%
IV期	13軒 20%	1703.1 g 22%	96点 19%		4/9 44%	3/9 33%	7/9 78%	1/9 11%	2/9 22%	1軒 11%
V期	5軒 8%	1031.2 g 13%	39点 8%	2/2 100%			2/2 100%	1/2 50%	1/2 50%	1軒 11%
不明	21軒 32%	2422.3 g 31%	112点 22%	1/21 5%	1/21 5%	6/21 29%	14/21 69%	1/21 5%	6/21 29%	
計	65軒 100%	7829.8 g 100%	509点 100%	1/52 2%	6/52 12%	16/52 31%	41/52 79%	9/52 17%	19/52 37%	9軒 100%

表10 時期別に見た竪穴住居出土鉄滓



第625図 竪穴住居の時期



第626図 竪穴住居出土の鉄滓

遺構名	鉄滓出土量		鉄滓等の種類							時期	備考
	重量(g)	点数	椀形滓	鍛錬 鍛冶滓	精錬 鍛冶滓	製錬滓	ガラス 質滓	鉍石 製錬滓	鉄鉍石		
竪穴住居-2	33.2	8		○							
竪穴住居-3	12.0	3		○						III	
竪穴住居-4	122.6	9		○			○			IV	
竪穴住居-5	180.5	9								V	含鉄鉄滓、焼土面
竪穴住居-6	64.5	9								IV	
竪穴住居-7	123.9	21		○			○				鉄塊系遺物
竪穴住居-8	0.0	0									焼土面
竪穴住居-9	137.7	14		○		○				IV	
竪穴住居-10	411.8	47	○	○	○		○			II	
竪穴住居-14	98.3	2								V	焼土面
竪穴住居-15	92.4	6		○						II	焼土面
竪穴住居-16	78.3	8		○					○		磁鉄鉍
竪穴住居-17	49.6	7								II	
竪穴住居-18	36.0	8		○						II	
竪穴住居-19	26.5	8		○							焼土面
竪穴住居-20	0.0	0								I	焼土面
竪穴住居-22	0.0	0								IV	
竪穴住居-23	137.8	23	○	○			○			I	
竪穴住居-24	173.5	4									
竪穴住居-25	9.6	1								I	
竪穴住居-26	8.7	1		○							
竪穴住居-27	48.2	3		○						IV	
竪穴住居-28	19.1	2								I	種別不明
竪穴住居-29	43.3	9		○						III	
竪穴住居-30	7.4	3								II	種別不明
竪穴住居-31	52.4	5			○?						
竪穴住居-32	313.5	11	○	○	○?						
竪穴住居-38	553.3	12			○	○				IV	
竪穴住居-39	29.5	3		○						IV	
竪穴住居-42	20.4	5								V	
竪穴住居-43	126.6	4		○			○				
竪穴住居-44	26.5	1		○							焼土面
竪穴住居-45	17.5	2		○			○			I	
竪穴住居-46	50.2	3		○						IV	
竪穴住居-47	155.9	10	○	○			○	○		III	
竪穴住居-48	369.4	21	○	○	○?					III	鉄塊系遺物、砂鉄系含む
竪穴住居-49	262.4	18		○	○		○			III	
竪穴住居-50	250.2	20	○	○			○			III	
竪穴住居-51	190.7	11		○	○	○	○				鉄塊系遺物
竪穴住居-52	15.5	1		○						IV	
竪穴住居-54	57.4	2			○?						
竪穴住居-56	132.5	14		○						II	
竪穴住居-57	43.3	9								III	焼土面
竪穴住居-58	700.0	20	○	○	○		○			V	砂鉄系含む
竪穴住居-59	233.2	3									
竪穴住居-60	20.6	3		○						II	
竪穴住居-61	819.3	29	○	○		○		○		IV	鍛造剝片
竪穴住居-63	46.0	8		○	○?					III	鉄塊系遺物
竪穴住居-66	45.7	4		○	○?		○			IV	
竪穴住居-68	15.5	1								III	鉄塊系遺物
竪穴住居-69	18.8	1		○							
竪穴住居-70	3.7	2									
竪穴住居-71	69.4	8		○			○			II	
竪穴住居-72	466.4	21	○		○		○			II	
竪穴住居-73	106.8	7		○			○				
竪穴住居-74	22.0	3								III	
竪穴住居-75	140.1	7			○	○				IV	
竪穴住居-76	7.1	2		○						IV	焼土面
竪穴住居-77	0.0	0									焼土面
竪穴住居-78	11.4	2		○						II	
竪穴住居-79	22.0	1		○						III	
竪穴住居-80	173.1	12		○	○		○				鉄塊系遺物
竪穴住居-85	64.8	1			○?						
竪穴住居-86	100.8	12		○			○			III	羽口片?
竪穴住居-87	20.7	8		○			○				羽口片
竪穴住居-89	2.0	1		○							
竪穴住居-90	32.0	3		○	○					V	

表11 高田調査区竪穴住居出土鉄滓の種類

	武器	工具				農具			その他
	鏃	刀子	斧	ヤリガンナ	鑿	鎌	摘鎌	鍬・鋤	紡錘車
古墳時代 前期	44(60%)	5(7%)	3(4%)	12(16%)		2(3%)	5(7%)	2(3%)	
	44(60%)	20 (27%)				9 (13%)			
古墳時代 後期	10(29%)	5(14%)	1(3%)		3(9%)	7(20%)	5(14%)		4(11%)
	10(29%)	9 (26%)				12 (34%)			4(11%)

表12 津寺遺跡における鉄器の組成

長さ5cmと小形で、鉄器の切削加工に用いられたものと推定される。しかし津寺遺跡では、窪木薬師遺跡と比較して三角鉄片といった未製品の占める割合は総じて低い。また、窪木薬師遺跡では鏃や刀などの武器が主体をなしていたのに対し、津寺遺跡では鎌や摘鎌といった農具の占める割合が高い(表12)。こうした差異が、集落間の分業を意味するのか、あるいはまた村方鍛冶と専門鍛冶の違いに起因するものか興味のもたれるところであるが、現段階では資料の制約からこれ以上の推測は困難である。しかしながら、後期にいたって集落が各地へ急速に展開していく状況は、こうした鉄器生産を背景とした可耕地の拡大に起因するものと見られ、津寺遺跡のような鍛冶集落が重要な役割を果たしたものと推察される。

本稿は、調査および整理を担当した亀山、大橋、杉山が討議した内容を亀山がまとめたものである。遺構・遺物の時期や評価については第4章とやや異なるところがあるが、その責は亀山にある。なお、鉄滓に関しては大澤正己氏から懇切なるご教示にあずかった。末筆ながら記して感謝する。(亀山)

註1. 本稿で用いた時期の細分は以下の図に示した編年観による。これを大阪府陶器古窯址群の編年と対比すると、おおむねⅠ期はMT85～TK43型式、Ⅱ期はTK43～TK209型式、Ⅲ期はTK209～TK217型式、Ⅳ～Ⅵ期はTK217型式に相当するものと思われる。

Ⅰ 期						
Ⅱ 期						
Ⅲ 期						
Ⅳ 期						
Ⅴ 期						
Ⅵ 期						



### 第3節 古代の津寺遺跡

#### (1) 奈良時代の遺構・遺物

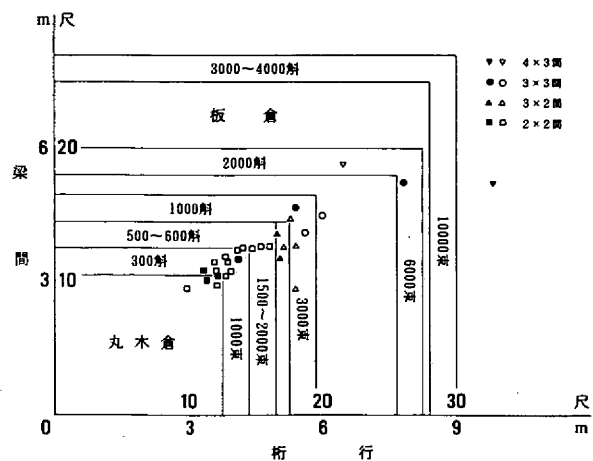
##### 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、掘立柱建物38棟のほか焼成土壇4基、土壇36基、土器埋納壇3基、溝173条がある。これらは、中屋調査区の溝-132、高田調査区の溝-38を境としてA~Cの3群に分けられる。

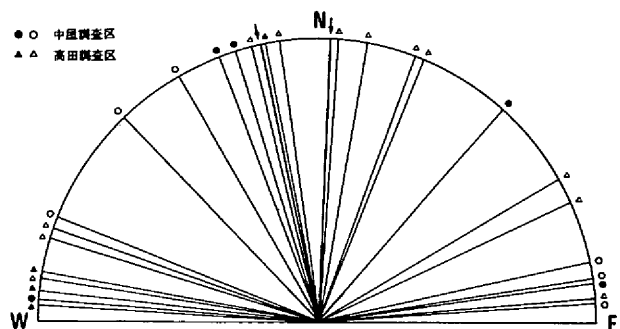
溝-70の東に広がるA群では多量の遺物が出土しているが、掘立柱建物は確認されておらず、専ら格子状をなす溝と土壇からなる。官衙と見られる方形区画の南東に接することから、これらにかかわる遺物の廃棄場所として使用されたものと思われる。また、格子状をなす溝は耕作にかかわるものと見られるが、その走向は溝-132と近似し、方形に区画された施設との時間的な差異を窺わせる。

B群は、N-11°-Eに軸をもつて並走する中屋調査区の溝-132と高田調査区の溝-38によって区画された、東西約100mの間に展開するもので、掘立柱建物11棟、溝、土壇などからなる。掘立柱建物には、側柱建物6棟、総柱建物5棟があるが、北西では3×2間の側柱建物と総柱建物が、北東では3×3間と3×2間の総柱建物が、棟筋を揃えて建てられている。また南東では3×2間と2×2間の側柱建物、2×2の総柱建物2棟がそれぞれ軸をあわせて建てられている。これらの軸は、N-44~68°-Wないしこれに直交するN-78~86°-Eで、B群を区切る2条の溝の走向とほぼ合致し、これらに規制された配置となっている。ところで、北東に見られた2棟の総柱建物は、官衙を構成する倉としては中規模で最も普遍的なタイプに属する。これを稲倉とすれば、松村恵司氏の想定する丸木倉ないし板倉にあたるのであろうが<sup>1)</sup>、手掛かりに乏しい現時点ではその内容物について不明といわざるを得ない。しかし、こうした倉の存在はB群の機能を示すのみならず、方形に区画された施設の性格を考えるうえでも重要である。

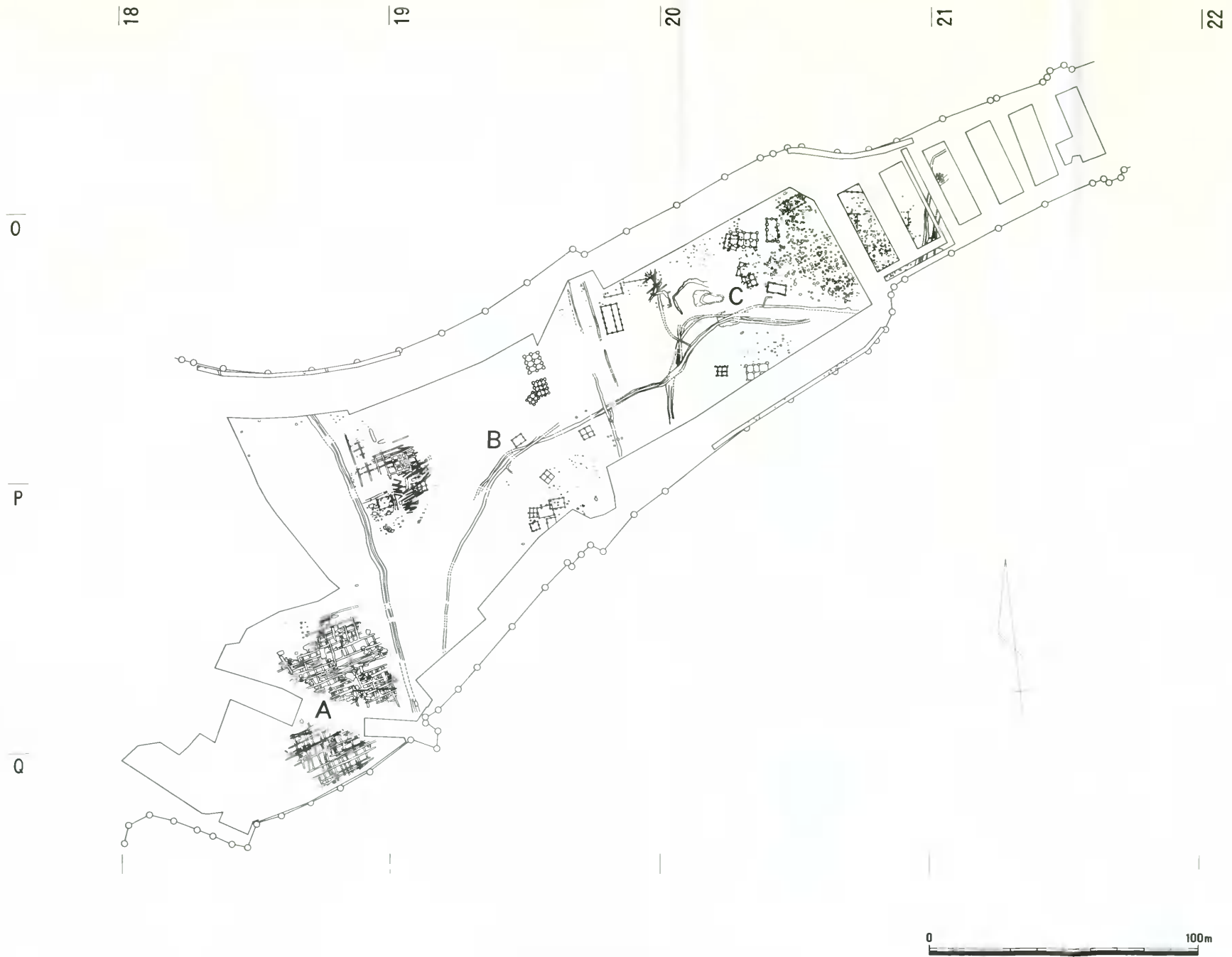
溝-38の東に展開するC群には、側柱建物12棟と総柱建物3棟とがあり、その軸はN-10°-E~N-16°-Wとこれに直交するN-20~22°-E・N-71~84°-Wに



第627図 奈良時代の総柱建物の規模(岡山県)



第628図 奈良時代の掘立柱建物の棟方向 (黒塗は総柱建物)



第629図 津寺遺跡古代遺構全体図 1/1,500

まとまる傾向にある。これは西方官衙の主軸とほぼ等しく、これらとの関係が想定される。また、ここでは第4章に報告したように3基の土器埋納墳が検出されている。建物の南に接して検出された1基は土師器の甕の口を須恵器の蓋で封じたもので、内部から5枚の和銅開珎が出土している。これについては出土状況や脂肪酸分析の結果などから胎衣容器と想定されている(附編参照)。また、方形の柱掘り方と重複して検出された二彩小壺は、地鎮具として埋納されたものと思われる。こうした遺物はC群の私的な空間としての性格を窺わせるに十分であり、倉の立ち並ぶB群とは異なった機能を印象づける。

以上、今回報告した遺構を中心に述べてきたが、これらの中枢を占める方形区画の全容が明らかにされていない現状では、その評価についても保留せざるを得ない。しかし、津寺遺跡の位置関係から『備中風土記』逸文に見える「新造御宅」に比定する見解は傾聴に値する<sup>2</sup>。造営が開始された天平6年(734年)という年代は、平城宮Ⅲ期を中心とする土器の編年観とも矛盾しない。また、この直後には平城宮第二次朝堂院の建造がはじまり、津寺遺跡で出土している6225・6313型式の軒瓦の製作も行われている。ところで、この記事には国司石川朝臣賀美につづいて賀夜郡の大領下道朝臣人主、少領藺臣五百國の名が記されており、郡衙としての性格を窺わせる。しかし、「御宅(三宅)」は、東大寺横江荘の荘家に比定される石川県横江遺跡や、正倉ないしは津にかかわる施設と見られる岡山市米田遺跡などでも用いられており、そこから公的施設という以上の具体的な性格は知り得ない。いずれにしても方形区画の全貌が明らかになった段階で、再度検討したい。

## 奈良時代の遺物

### 1. 土師器

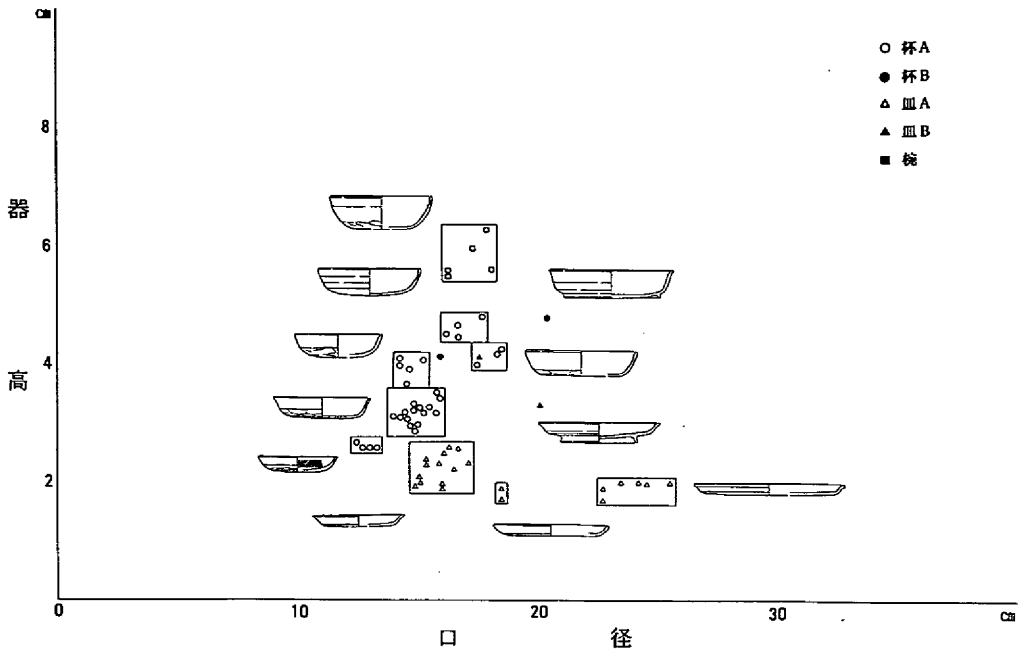
中屋調査区のA・B群からは、古代の土器が多量に出土した。A群では、格子状の溝や土壇から出土しており、その量は56箱におよぶ。また、B群では、北西で検出された掘立柱建物数棟の周辺から、31箱の土器がまとめて出土しているが、C群における土器の出土は20箱とごく少ない。

土師器には、杯A・B、椀、皿A・B、鉢、高杯などの供膳具、壺Aの貯蔵具、甕、甑、竈の煮炊具がある<sup>3</sup>。

杯は、その形態から杯Aと杯Bに分類される。平底の杯Aは、径高指数4.4~5.3のⅠ類、3.1のⅡ類、2.9~3.2のⅢ類に分けられる。これらはさらにその法量によって、Ⅱ類は2つに、Ⅲ類は3つに細分することができる。底部は手持ちヘラケズリののちナデで調整するが、ヘラミガキを施すものも少なからず認められた。また、極めてまれではあるが、ヘラケズリののち粗いハケメで調整するものも確認されている。内面には斜放射と螺旋の暗紋を施すものもあるが、その数は少ない。その方向は右下がり66%、左下がり34%で、右下がりとなるものが主体をなす。この右下がりの暗紋を施す杯では丹塗りが見られず、胎土も異なることから他地域から搬入された可能性もある。高台をもつ杯Bは復元できるものが少ないが、径高指数3.9~4.3のⅠ類と、6.0のⅡ類に分かれるようである。Ⅰ類は口径15.9~20.3cmの3つに細分できる可能性があるが、出土量が少ないため確定できない。Ⅱ類は高台を貼り付けた底部から外反ぎみにのびる口縁部をもつ特異な形態を備えており、胎土や調整においても他と異なることから他地域から持ち込まれた可能性がある。

椀は、径高指数2.9~3.2で、口径12.9cmの小形と、16.8~17.0cmの大形とがある。厚手のつくりで、底部は手持ちヘラケズリののちナデで調整する。丹塗りは認められない。

蓋には、口径15.8~16.8cmの小形と21.7~21.8cmの大形とがあり、杯Bの法量に対応するものと推



第630図 土師器(食器)の法量

定される。いずれも外面をヘラミガキし、ボタン状のつまみを取り付けている。

皿は、平坦な底部から口縁部が短く立ち上がる皿Aと、これに高台を貼りつけた皿Bがある。皿Aは、径高指数によって6.4~8.4のⅠ類、9.6~12.1のⅡ類に分けられる。底部は手持ちヘラケズリののちナデで調整し、内面には螺旋の暗紋を施すものがある。皿Bは、高台を貼り付ける位置によって、2つに区分される。1類は、底部と口縁部との境界に高台を貼り付けるもので、その法量から2つに細分される。2類は底部の中央に高台を貼り付けるもので、径高指数は4.3~5.9ある。底部は手持ちヘラケズリののちナデを施し、高台を貼り付けている。いずれも内外面に丹塗りを施す。

鉢は、湾曲する体部をもつ鉢Aと、直立する口縁部から直線的に窄まる鉢B、筒形をなす鉢Cとがある。鉢Aは口径19.9cmで、外面をハケメ、内面をナデで調整する。煮炊具と共通の胎土をもち、外面には煤が付着する。丹塗りの施される鉢Bは、外面下半をヘラケズリし、内面をハケメで仕上げている。片口をもつ鉢Cは、口径18.6cmの筒形をなし、内外面を粗いナデで調整する。A群で1点のみ出土した。

高杯は全形を知り得るものはないが、口径22.6~25.0cmを測る浅い杯部の口縁はわずかに外反し、短い脚部は外面をヘラを用いて縦に面取りする。脚柱部から屈折した裾部は、短く水平にのびて終わり、その端部は丸くおさめている。

壺はB群から1点出土した。口頸部が短く直立する壺Aで、口径11.2cmを測る。外面はヘラミガキで調整するようであるが、小片のため明らかでない。偏平な把手を備えていた可能性がある。

甕には、球形の体部をもつA類と長胴をなすC類とがあるが、主体をなす甕Cは法量によって4つに分類できる。いずれも外反する口縁部をもち、その端部をわずかに上方へつまみあげるものが多い。また、長石や金雲母を含む褐色の胎土を共有し、外面を粗いハケメ、内面をヘラケズリで調整する。A・B群において多量に出土している。

甗は、B群を中心に数個体出土しているが、図化できたのは1点のみである。口径24.8cm、器高

30.0cmで、側面には偏平な把手を貼りつける。

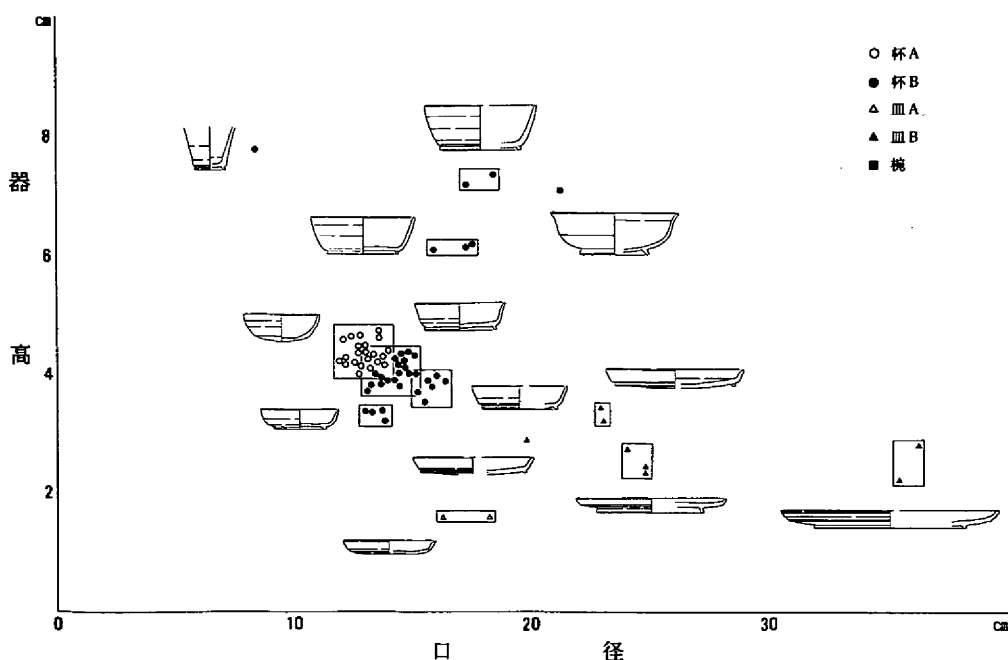
竈は復元できたものは少ないが、懸け口径25.6~28.7cm、器高38.0cmを測り、焚き口に底を貼り付ける。側面には角なし瘤状の把手を設ける。また焚き口の下端には突起を設けて竈を地上から持ち上げている。内外面をハケメで粗く調整する。基部の突起や把手の数からA群で5個体、B群で4個体以上の出土が確認できる。

## 2. 須恵器

須恵器には、杯A・B・E、蓋、皿A・B、鉢、高杯、壺A・E・K・L、盤、甕A・Bなどがある。

平底の杯Aは、径高指数によってⅠ~Ⅲ類に分けられる。底部をヘラキリしたのち調整を省略したものが多く、まれにヘラケズリを施すものも見られる。これらは杯Bの体部と形態的に似通っており、高台を省いたものと思われる。灰白色を呈する胎土には粗砂を含むものが多く、焼成不良のものが目立つ。高台をもつ杯Bは、径高指数のⅠ類、径高指数4.2~4.5のⅡ類、径高指数3.1~3.4のⅢ類、径高指数2.3~2.7のⅣ類に分けられる。このうちⅡ類とⅢ類は、その法量からそれぞれ3つに分けられる。杯Eはいわゆる稜椀で、口縁部と体部の間で段をなすⅠ類と屈折して稜をなすⅡ類とがある。Ⅰ類は口径21.2cm、器高は7.1cmで径高指数は3である。体部は「回転ヘラミガキ」で調整し、底部には径10.7cmの高台を貼り付ける。組み合わせる蓋は、「回転ヘラミガキ」を施した天井部に輪台状のつまみをもつ。A地点で4組が出土しており、いずれも大阪府陶邑窯跡群の製品と考えられる。径高指数3.5~4.2のⅡ類は口径19.0~20.8cm、器高4.9~5.6cmを測る。これに組み合わせる蓋は確認できず、杯Bないし皿Bの蓋と同じ形態をとる可能性が高い。A地点で2点、B地点で1点、C地点で1点出土しているが、その中には邑久窯跡群で生産されたものを含んでいる。

蓋は、口径14.2~19.0cmが最も多く、全体の69%を占める。これはほぼ杯Bに対応するものと見てよい。口縁端は折り曲げるものが大半であるが、かえりをもつものもごく少量存在する。また、口縁



第631図 須恵器(食器)の法量

端の折り曲げは鈍いものが主体となるが、鋭いものもわずかにある。つまみは、擬宝珠形をなす1類、ボタン状をなす2類、輪台状をなす3類に分けられる。これらの径は1.8～3.6cmを測り、その法量は口径とおおむね対応する。これをつまみの形態から見ると、2類が1.8～3.6cmと幅があるのに比べ、1類は2.1～3.5cmと比較的まとまっている。これは口径15cm以下の小形の蓋には1類が見られないことによる。つまみ3類をもつ蓋は、精良な胎土をもち、堅緻に焼成された器面はヘラミガキによって平滑に調整されている。その丁寧な調整や胎土・色調などの特徴から、杯Cに組み合うものと思われる。

皿はその形態によってA～Dに分けられる。皿Aは径高指数6.9で、口径16.6cm、器高2.4cmを測る。底部はヘラケズリののちナデで仕上げている。数は少なくA・B地点でそれぞれ1点確認したに過ぎない。皿Bは、底部と体部の境に高台を貼り付けた1類と底部の中央に高台を備えた2類とがある。1類は口径19.8～23.0cm、器高2.9～3.4cmを測り、径高指数は6.7～7.1ある。径高指数8～12の2類には、口径22.6～26.4cm、器高2.7～3.0cmの小形と、口径35.4～36.2cm、器高3.0cmの大形とがあり、大形は口縁部と体部との境界に突帯をめぐらす。皿Bはいずれも、細砂を含む胎土は灰白色を呈し、やや軟質な焼成を示す。

高杯は復元できるものが少ないが、口径27.1～25.6cmの大形と口径17.5～20.8cmの小形に分けられる。これらには、皿Aに長い脚部を取り付けるものと、蓋に低い脚部を備えたものがある。各群で出土が認められるが、その量は少ない。

鉢は丸みを帯びた底部から屈曲しながら立ち上がり、径36.9cmを測る口縁の端部は面をなしておわる。灰白色をなす胎土はやや軟質の焼成を示す。A群において1点出土した。

盤は口径41.4cm、器高9.1cmを測り、平坦な底部から直線的にのびる口縁は端部をわずかに肥厚させる。底部外面をヘラケズリしたのちヨコナデで調整する。

壺には、短頸壺と長頸壺があり、B群で多く出土している。壺Aは直立する頸部をもった短頸壺で、全形を知り得るものは口径10.8cm、胴径23.0cm、器高16.8cmで、高さ8.0cmほどの獣脚を備えている。蓋は口径12.4cm、器高3.4cmで、径2.7cmの擬宝珠形つまみを持つ。いずれも邑久窯跡群で焼成されたものである可能性が高い。壺Eは口径9.9cm、器高6.3cmを測る小形の短頸壺で、底部には高台を貼り付ける。灰白色を呈し、やや軟質の焼成を示す。壺Kは肩の張る長頸壺であるが、全形のわかるものはない。筒形をなす口頸部は上方に向かって開き、中程に2条の凹線をめぐらす。体部は、屈折する肩部から窄まり、高台を貼り付けた底部に至る。壺Lはなだらかな肩部をもつ長頸壺である。口頸部は壺Kと類似するが、端部をわずかに上方へ拡張する。体部は丸みを帯び、底部には高台を貼り付ける。壺K・Lには邑久窯跡群の製品と推定されるものが多く含まれている。

平瓶はB群に多く見られたが、全形を知り得るものは少ない。復元できたものでは胴径17.3cm、胴高7.2cmを測り、長方形の把手を貼り付ける。口頸部は上方に向かって開く筒形をなすようで、端部は内傾する面をもっている。胎土や焼成の特徴から邑久窯跡群での生産が想定されるものである。

横瓶は復元できるものが少なく、また古墳時代のものとの識別が困難であるため、古代に属するものはB群で1点確認するにとどまっている。これは、長さ36cm、径25cmの楕円形をなす体部をもち、平瓶と同様の口頸部を備えていたものと思われる。

甕にはA～C類があり、B群で多く出土している。上方に大きく開く口頸部をもつ甕Aは、短い口縁の端部が肥厚して段をなす1類と、口頸部が長く端部が面をもっておわる2類とに分けられる。口

径17.2~25.6cmを測る1類に比べて、2類は口径34.6~45.8cmと大形である。器高は1類で50cm前後に復元される。甕Bは直立する口頸部をもつもので、径17.5cmを測る口縁の端部は面をなす。A群で1点の出土がある。甕Cは球形ないし偏球形をなす体部をもつものと見られるが、全形の判るものはない。口縁部は短く外反し、33.4~46.0cmを測る口径が胴径に占める割合は大きい。甕は、胎土に砂礫を多く含み、灰色ないし灰白色の軟質な焼成を示すものが大半を占める。

### 3. 土器の組成

これらの土器のうち、図化したものに限って言えば、土師器は211点(38%)、須恵器は349点(62%)あり、ほぼ2:3の割合を示す。また、土師器では、供膳具が166点で77%を示すのに対し、貯蔵具は1点(1%)、煮炊具は44点(22%)と少ない。須恵器でも、供膳具が282点で81%を示すのに対し、貯蔵具は67点(19%)とかなり少ない。土器全体で見れば、供膳具は80%、貯蔵具は12%、煮炊具は8%を示し、供膳具を中心とした組成であることがわかる。このような土器の組成は、煮炊具が中心となる一般の集落とは大いに異なるところであり<sup>4</sup>、この遺跡の性格を特徴づけるものである。そこで供膳形態について、今少し詳しく見てみると、土師器では杯が最も多く、皿がこれに次ぐ。また杯、皿とも高台をもたないA類が主体をなしている。須恵器でも杯と皿が中心を占めることに変わりはないが、杯ではA・B類がほぼ拮抗し、皿ではB類が圧倒的に多い。また、これらの供膳具のうち、土師器の杯A、皿A・B、須恵器の杯B、皿BにはI~III類の法量分化が認められた。さらに、土師器の杯Aと須恵器の杯B、土師器の皿Aと須恵器の皿Bの間では、その法量において互換性が認められる。煮炊具においても、土師器の甕に法量分化が確認できるようである。こうした法量の分化や互換性は、その器種の分化とともに「律令的土器様式」を特徴づけるものであり、地方の官衙においてもこうした土器様式が強く指向されていたことを物語る。しかし、これらの形態的な偏差は大きく、その規格も厳密なものとはなっていない。

次に、これらの組成を出土地点ごとに見て行くと、A群では供膳具の占める割合が高く、とくに畿内からの搬入品と見られる杯Eはここでしか見られない。一方、B群では供膳具が主体を示す点では変わりはないが、煮炊具の占める割合はA群に比べて高い。また、壺・甕などの貯蔵具が多く見られるのもこの地点の特徴と言える。C群では土器自体が少ないが、暗文を施した須恵器の杯Bや二彩陶器など特殊なものが含まれている。各群におけるこうした組成の差は、それぞれの場の機能の違いを反映している可能性が高く、その性格を考えるうえで重要な手掛かりになるものと思われる。

土師器	供膳具								貯蔵具				煮炊具			計
	杯A	杯B	杯C	皿A	皿B	蓋	高杯	鉢	壺	甕	甗	竈				
	81	8	3	34	12	7 (3%)	14 (6%)	7 (3%)	1 1%	40 (19%)	1 (1%)	3 (1%)	211 28%			
	166 (77%)								1%				44 (21%)			
須恵器	供膳具								貯蔵具				煮炊具			計
	杯A	杯B	杯E	皿A	皿B	蓋	高杯	鉢	壺	平瓶	横瓶	甕				
	81	85	4	3	13	83 (24%)	8 (2%)	3 (1%)	36 (10%)	9 (3%)	1 (6%)	21 (6%)	339 72%			
	170 (50%)			16 (5%)						10 (3%)						
	282 (82%)								67 (19%)							
総計	448 (80%)								68 (12%)				44 (8%)			560

表13 奈良時代の土器組成

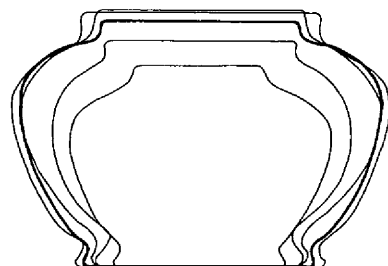
## 4. 胎土と焼成

ところで、こうした古代の土器は、その胎土によってA～D類に大別できる。土師器のA類は胎土に石英・長石からなる細砂を含み、明橙色を呈する。杯A・B、皿A・B、高杯などの供膳具に見られる。B類は石英・長石のほか赤色土粒を特徴的に含み褐色を呈する。A類と同様に、杯A・B、皿A・B、高杯などに認められる。C類は比較的精良な胎土で、赤橙色をなすものである。杯A・Bのみに認められるが、いずれも丹塗りは施されず、その形態や調整などから見て他地域からの搬入品である可能性がある。D類は茶褐色で長石・石英・金雲母からなる礫や粗砂を多量に含む。鉢や甕・甑・竈などの煮炊具に見られる。全体に占める割合は、A・B・D類の順に多く、C類はごくわずかである。須恵器のA類には、灰色で精良な胎土をもつものと、灰白色を呈し長石・石英からなる粗砂を含むものがある。いずれもガラス質の黒色粒を含むが、前者ではにじむように熔融する特徴があり、平城宮でⅡ群とされた須恵器にあたるものと思われる。これは、大阪府陶邑窯跡群の製品と想定されており、ここでは杯Eに限って認められた。また、後者は、外面に淡緑色の自然釉がしばしば見受けられる。杯B・Eや壺A・K、平瓶、円面硯などがあり、邑久窯跡群の製品である可能性が高い。B類は暗灰色ないし暗紫色で長石・石英からなる細砂を含むもので、焼成は良好である。杯A・Bや壺A・K、甕などに認められる。C類は灰色を呈し、堅緻に焼成された胎土には長石・石英からなる粗砂を含む。杯A・Bや壺A・K、甕などの器種がある。D類は灰白色で長石・石英からなる礫や粗砂を多量に含む。杯A・Bや皿A・B、壺E・L、鉢、盤、甕などに認められ、焼成不良のものが多い。これらは量的に最も多く、この周辺での生産が想定される。

このような肉眼観察と、自然科学的な分析の結果を対比したのが表36・37であるが、その結果は必ずしも整合していない。特に総社平野など遺跡周辺での生産になるものはほとんどなく、かえって邑久・牛窓窯跡群や陶・玉島窯跡群の製品と見られるものがかかり存在することが明らかとなっている。このように他方面からの供給を受けている状況は、官衙として性格を反映している可能性も考えられるため、古墳時代後期の集落から出土した土器との比較を行った。すると、遺跡周辺で生産されたものがある一方で、邑久・牛窓窯跡群や陶・玉島窯跡群の製品と見られるものもかなり存在する。このことは、古墳時代後期の段階ですでに広域な供給が行われていたことを示すものである。しかし、前池内3号墳や西坂古墳、二子14号墳などの古墳では、その周辺で生産されたと思われる須恵器を専ら副葬しており、特定の需要に応じて生産を行っていた窯跡群もまた同時に存在していたことを示す。両者のこうした相違が、その後の消長を決定づける要因として働いたことは想像に難くない。

## 5. 二彩陶器

高田調査区から二彩が3点出土している。1点は口径3.9cm、最大径7.3cm、器高4.8cmを測る小形の短頸壺で、掘立柱建物の柱穴と重複する土壌から出土した完形品である。張りのある肩部から矩形の高台を貼り付ける底部にかけて、灰白色の地色透過す釉を径3cmほどの範囲で三段にわたり三方交互にかけ、その間を緑釉で埋めている。その形態は長屋王邸宅出土の三彩壺に後出し、大飛鳥遺跡の三彩壺と類似するようで、8世紀中葉に位置付けられる<sup>5</sup>。もう2点は包含層から出土した小形火舎と思われるもので、そのうち法量のわかるものは口径7.9



第632図 二・三彩小壺の比較  
(細線は大飛鳥出土) 1/1.5



cm、器高2.2cmを測る。多彩釉陶器は、岡山県において岡山市賞田廃寺、岡山市幡多廃寺(三彩椀)、岡山市神力寺(二彩塔片)、笠岡市大飛鳥遺跡(三彩小壺)、熊山町熊山遺跡(三彩小壺)、津山市美作国府(二彩)などで知られている。これらは官衙や寺院、祭祀遺跡などであるが、祭祀遺跡で小形壺、寺院で火舎の出土例の多いことが指摘されている<sup>6</sup>。本例は出土状況からみて地鎮を目的として埋置されたものである可能性が高いが、同様な例は官衙のほか貴族の邸宅と推定される遺跡でも見つかり、C群の性格を考えるうえで参考となる。

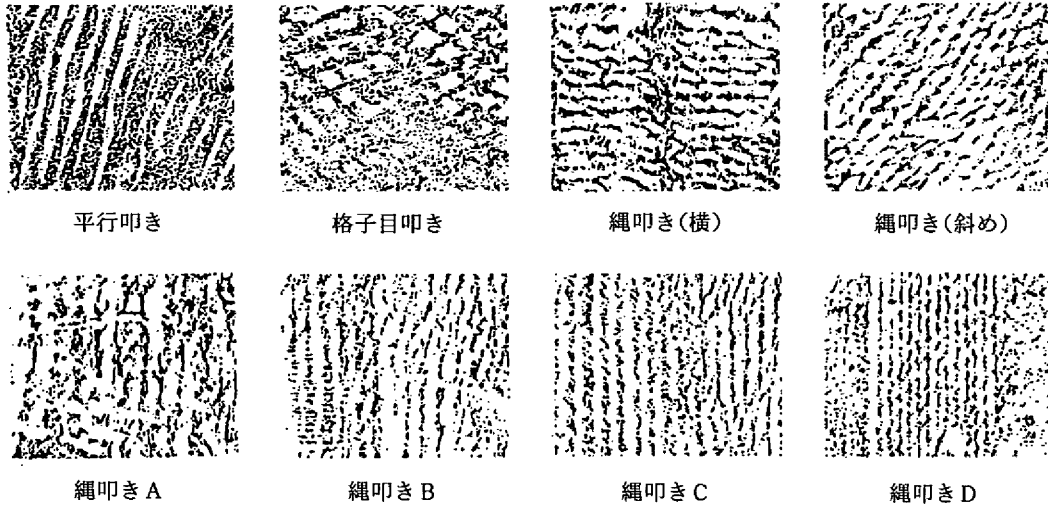
## 6. 陶硯

A・B群の間の包含層から4点、C群のたわみから1点の円面硯が出土している。このうちA～B群の3点は蹄脚を備えた須恵質の硯で、同一個体である可能性が高い。後年次の報告となるが、やはり同一個体と見られる硯片が今回の出土地点から東へ50mの位置からも出土しており、水田耕作等による広範囲な移動が窺われる。円面硯は岡山県下の官衙や寺院などから出土しているが、復元径25.8cmを測る蹄脚硯は円面硯の中でも大形の部類に属し、その使用も美作国府や平遺跡、米田遺跡など限定された状況にある<sup>7</sup>。これらは、後述する帯金具とともに、津寺遺跡の官衙としての性格を物語る遺物である。

## 7. 土製品

瓦は、A群で2箱、B群で8箱、高田調査区C群で30箱の出土を見ている。しかし、古代の遺構に伴うものは少なく、その多くは中・近世の溝や水田からの出土である。瓦の内訳を調査区別に見ると、中屋調査区では平瓦が120点、丸瓦が20点、高田調査区では平瓦が400点、丸瓦が50点であり、調査地点において両者の比率に大きな相違は認められない。軒瓦は軒丸瓦が1型式2点、軒平瓦が1型式2点がある。軒丸瓦は平城宮6225型式の複弁8葉蓮華文で、中屋調査区と高田調査区でそれぞれ1点出土している<sup>8</sup>。厚さ4～5cmを測る瓦当に刻み目を施したのち丸瓦を挿入し、周囲に粘土を補充して接合している。瓦当の周囲はヘラケズリしたのち、ナデで仕上げている。直径10.8cmを測る内区に飾られた蓮華文は繊細で隆起に乏しい。やや太めの子葉をもつ蓮弁の長さは2cmで、弁端は完結しない。また、線で表現される間弁はY字形をなす。圏線をめぐらす平坦な中房は5.8cmを測り、1+8の大粒な蓮子を飾る。斜縁となる外区には突線で鋸歯文を表し、内区との間には2重の圏線をめぐらす。軒平瓦は、外区に珠文をめぐらす均整唐草文である。双頭渦文をなす中心飾りの左右に三転する蕨手を二重に配し、その分岐点には子葉を表す。幅6cmの段顎で、側面も叩き締めている。右上隅に見られる範傷は、二子窯跡や矢部遺跡の軒平瓦にも認められ、同範瓦と考えられる<sup>9</sup>。

平瓦は全形を知り得るものはないが、長さ32～35cm、幅23～27cmを測る厚手で大形の1類と、長さ27cm以上、幅22cmの薄手で小形の2類に分けられる。また、凸面に施された叩き目には、平行・格子・縄の3種類が認められた。A類は、凸面を5cm幅で9条の平行線とこれに直交する浅い直線を刻んだ板で叩き締めるもので、凹面には、縦横30本の糸からなる布目と、幅3～4cmほどの模骨痕が残る。幅2cmを測る側面の角度は直角に近く、ヘラケズリののちナデで調整されている。5cm幅に縦8条、横8条の格子状に刻みを施した叩き板を用いて凸面を叩き締めるB類は滑らかな曲面をなす凹面には縦・横30本の布目が残る。厚さは2.5～3cmで、側面は両面から面取りする。C類は凸面に縄叩きを施すもので、狭端側は8～9cmにわたってナデ消される<sup>10</sup>。凹面は滑らかな曲面をなし、側面にはしばしば面取りが施される。これらは、叩き板の特徴やその手法からI～VI類に分類される。CI類は、凸面に横位の縄目を残すもので、5cm幅の縄密度は8～10条と粗い。叩きの幅は5cmと狭く、わずか



第633図 叩き目の類型

	平行叩き	格子目叩き	縄叩き						
			横	斜め	A	B	C	D	E
中屋調査区		6(4%)	15(11%)	5(4%)	7(5%)	64(45%)	29(20%)	16(11%)	
高田調査区	4(1%)	37(8%)			3(1%)	19(4%)	183(40%)	184(40%)	22(5%)
計	4(0.5%)	43(7%)	15(3%)	5(0.5%)	10(2%)	83(14%)	212(36%)	200(34%)	22(3%)

表14 叩き目の類型別出土量

中屋調査区

縄目		側面形態			厚さ (cm)				
条数	点数				I	II	III	IV	V
A	7	4	3				1	2	3
B	64	18	29	2	6	17	21	11	9
C	29		14		7	13	5	2	
D	16	1	3	2	5	6	2	2	1
E									
計	116	23	49	4	28	41	40	24	22

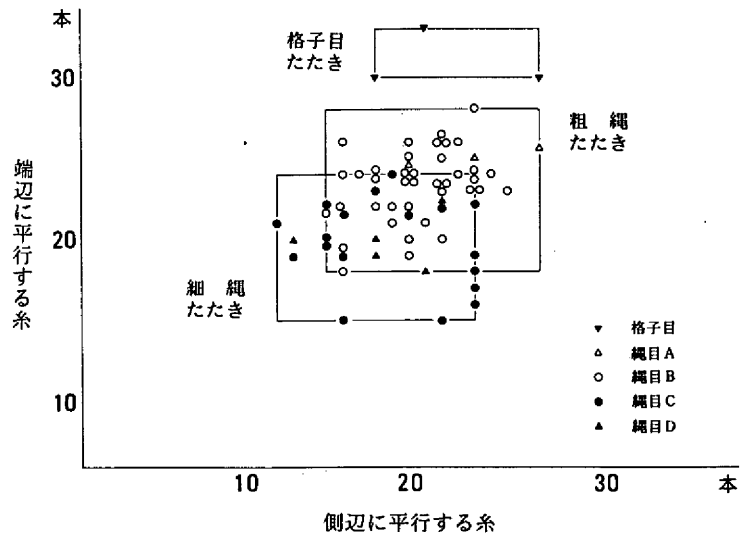
高田調査区

縄目		側面形態			厚さ (cm)				
条数	点数				I	II	III	IV	V
A	3	2	1			1	1	1	
B	19	3	3	2	7	5	5	1	1
C	183	50	17	9	77	72	27	4	3
D	184	54	28	8	82	60	34	6	2
E	22	5	4	1	12	9	1		
計	411	114	53	20	178	147	68	12	6

表15 平瓦の類型別出土量

に凹面をなすことから、幅の狭い板ないし棒状の工具に縄を巻き付けた原体が想定される。厚さは2.5cmほどで、側面は凹面側を面取りする。C II類は、凸面に斜めの縄叩きを施すもので、縄密度は11~12条を数える。厚さは2cmとI類に比べてやや薄い。側面はやはり凹面側を面取りしている。縦位の縄叩きを施すC III類は5cm幅の縄密度は8~10条と粗く、縄の径が3mm前後を測る。しかも叩

き板に二重に巻つけられたためか、縄の印象に差が生じている。厚さは3cmと厚く、焼成のあまいものが目立つ。側面は凹面側を幅広く面取りする。CIV類は凸面へ縦位に施された叩きの縄密度が11~14条を数えるもので、想定される原体はII類と類似する。厚さも2.5cm前後で、側面を面取りする。縄密度が15~20条と細い縄叩きを縦位に施すCV類は、厚さが2cmと薄く、端面の面取りも省略されているものが多い。また、堅緻に焼成されているものが多い。



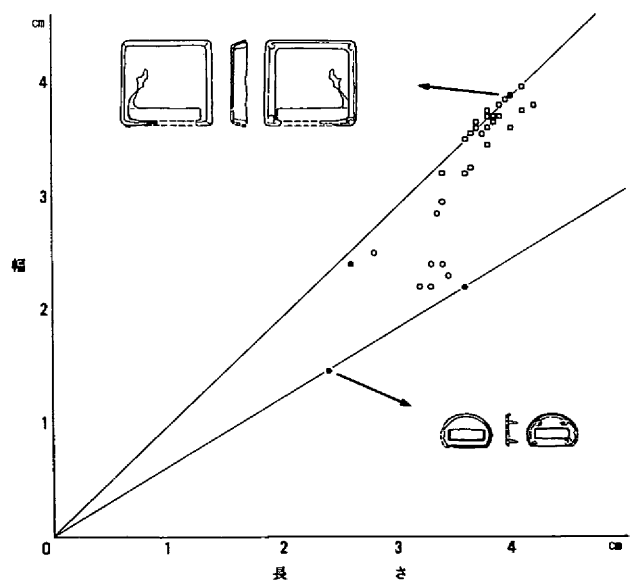
第634図 平瓦に見られる布目

中屋調査区に属するA・B群ではB・C I~V類が出土しているが、その主体をなすのはC III・IV類である。高田調査区のC群でもA・B・C II~V類が見られたが、中心はC IV~V類が占める。A・B群に見られる叩きは1類、C群の叩きは2類の平瓦に対応するようであるが、これは二子御堂奥窯跡の軒平瓦6類と軒平瓦7類にそれぞれ組み合わせる可能性がある。こうした類型の偏りは偶然とは思われず、A・B群とC群との時期差あるいは機能差を反映している可能性がある。

### 8. 金属製品

奈良時代の金属製品には、帯金具や銅銭がある。帯金具は中屋調査区から2点出土している。1点は微高地南端の柱穴から出土した丸軛で、長さ2.2cm、幅1.5cm、高さ0.3cm、重量1.3gで、裏面には4つの脚金具を作り出した铸造品である。もう1点は、掘立柱建物一周辺の包含層から出土した。長さ4.1cm、幅3.8cm、高さ0.6cmと大形の巡方である。裏面の四隅にはやはり脚金具を作り出しているがいずれも欠損している。重量は13.8gある。また、丸田調査区から出土した鉈尾については既に報告したところである。岡山県では石帯は多く

出土しているが<sup>11</sup>、銚帯は笠岡市大飛島遺跡(巡方2)、岡山市百間川当麻遺跡(丸軛1)、山陽町用木1号墳(巡方1)、下市瀬遺跡(巡方1)のほか知られていない。こうした銚帯について検討した阿部義平らは、その法量と官位・職階との対応関係を想定している<sup>12</sup>。これに対し亀田博は、法量に大きな格差は認められないうえ官位・職階との対応関係を示す出土状況が認められないことからこうした考えを否定し、帯金具の多様な在り方を想定している<sup>13</sup>。銚帯としては大形に属する本例もこうした考え方を支持するものである。ただし、その形態は亀田のI類に相当し、帯金



第635図 岡山県出土の銚帯(黒塗り)と石帯(白抜き)

具としても比較的古い例に属することからすれば、ごく限られた人々の着用を想定することは可能であり、国・郡衙の関連施設と推定される本遺跡に相応しい遺物である。

また、中屋調査区では万年通寶1枚が、高田調査区からは和同開珎4枚が出土している。中屋調査区の万年通寶は、中世の水田層からの出土であり、奈良時代の遺構に伴うものではない。出土状況からすれば中世の輸入銭とともに流通していたものとも考えられるが、本来奈良時代の遺構に包含されていたものであった可能性も否定できない。その場合、8世紀中葉とみられる土器の時期からすれば、初鑄(760年)後まもない時期に埋没したことになる。高田調査区から出土した和同開珎は、前述の胞衣壺と見られる容器に収められていたものである。直径2.45~2.49cm、厚さ1.2~2.3cm、重量2.3gある。縁は狭く、孔は一辺0.6cmを測る。銭文はいわゆる「隸開和同」であり、その重量から「新和同」に分類されるものである<sup>14</sup>。岡山県下では10例の出土が知られているが、その多くは寺院や官衙跡、墳墓であり、胞衣壺という新来の習俗をいち速く受容した官人の居住が想定される。(亀山)

## (2) 平安時代の遺構・遺物

### 平安時代の遺構

平安時代の遺構は高田調査区を中心に認められる。O19区の東部にまとまって見られる3棟の掘立柱建物は、5×2間の東庇の建物を中心に、3×2間、5×1間以上の建物がある。これらはN-8°-Wないしはこれと直交するN-86°-Eに棟方向をおいている。これは、高田調査区に展開する奈良時代の建物とは異なるが、B群の東西を区画する2条の溝の走流方向とはほぼ一致する。B群の西端を区切る中屋調査区の溝-132は平安時代まで機能していたことが出土遺物から窺われ、こうした区画がこのころまで意識されていた可能性はある。この時期、中屋調査区では遺構はほとんど確認できないが、野上田調査区において河道の西側から廃棄された状態で、緑釉陶器や墨書土器を含む9世紀を中心とした遺物が多量に出土しており、公的な施設の存在を窺わせる<sup>15</sup>。また、上流の丸田調査区でも10世紀の掘立柱建物群に伴って、緑釉陶器や灰釉陶器などの遺物が出土しており、報告者は生石荘との関連を想定している<sup>16</sup>。同様な状況は高田調査区の東に接する政所遺跡でも認められるが、高田調査区で検出された遺構がこれらとどのような関係にあったのか興味のもたれるところである。(亀山)

### 平安時代の遺物

平安時代の遺物は包含層中に須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器が散見されるが、古代の遺物の全体量からするとわずかである。

今回報告した中屋調査区では9世紀代の遺物まで散見されるが、10世紀以降の遺物がほとんど見られない。しかし、前年度までに報告した中屋調査区、野上田調査区などでは9世紀代から10世紀前半までの遺物が出土しており、中屋調査区中央に位置する官衙施設の西側への移動と相俟って、周辺遺構(施設)が随時移動して行ったと考えられる。

それに対して、高田調査区では9世紀代の遺物はほとんど見られず、10世紀代の遺物が主体的に見られる。しかし、8世紀代の遺構も密集していることから、9世紀代の遺構についても調査区外に存在している可能性は否定できない。

本調査区で見られた特殊遺物として陶製の風字硯4点、緑釉陶器3点以上がある。これらはいずれも、O20区北西部とO19区北東部の掘立柱建物のある地区で出土しており、これらに関連する遺物と

判断される。そして、このことは本調査区の該期の遺構が単なる一般集落ではなく官衙もしくは公的施設に関係した官人の屋敷地であることを示唆している。また、出土した緑釉陶器は器形から近江産と判断されるが<sup>17</sup>、出土点数が少なく器種も皿に限定されることから、日常食器としてではなく前代同様に儀器、祭器的な性格を強く持っていたと推察される。

土師器、黒色土器は包含層中に散見されるが、高田調査区東部の橋脚部調査地点から土壌に廃棄された一括性の高い土器が出土している。

本土壇は、長さ128cm、深さ22cmの不整楕円形を呈しており、この中から土師器の甕3個体、碗1個体、杯9個体以上、皿6個体以上と黒色土器の碗1個体以上、鉢1個体が見られる(第535図参照)。

土師器の甕は小形の口径18.8cmと大形の34.8cmの二者が見られる。両者とも体部外面には粗いタテもしくはナメハケメ、内面は口縁部にヨコハケメで体部は板状工具によるナデが見られる。器形は口縁端部に面をもち、口縁部上端はヨコナデにより上につまみ上げ、下端は鈍い稜を持つ。体部は比較的真っすぐで長胴になると思われる。碗471は口径14.2cm、器高4.3cm、高台径8.7cmで、底部と体部の境界に断面三角形の高台が付く。杯は口径12.3~12.9cm、器高3.0~3.5cm、底径8.4~9.2cmで、胎土が精良な480~484には丹塗りが見られる。皿は口径12.6~13.8cm、器高1.3~2.1cmで476~478には丹塗りが見られる。杯・皿ともに底部内面には指頭調整がされ、その後精粗の差はあるがナデるもの474~479・481・483もある。また、底部外面はヘラ切り後中央部には指頭調整が施されている。このうち479にはヘラの痕跡が認められ、これによると中央付近まで刺し入れたヘラを少し戻し、体部との境界から約13mmの範囲を回転台を利用して切り離している。このほかの杯・皿についても同様に杯では体部との境界から10~14mm、皿では15~20mmの範囲にのみヘラ切りの痕跡が認められる。この後、皿は体部との境界部分をナデて稜線を消す。これは杯480・485でも見られる。また、皿の体部から口縁部分をにかけては強いヨコナデにより口縁部を外方に屈曲させる。黒色土器は内面黒色のもので、碗472は口径16.9cm、器高5.6cm、高台径8.8cmで、内面に細かいミガキが見られる。底部と体部の境界にやや長い高台が外方に踏ん張る形で付く。また、口縁部外面には強いヨコナデにより屈曲が見られる。鉢は小片だが推定口径20.6cm、残存する部分の器高は7.3cmである。これは内外にやや粗いミガキが見られ、口縁端部はやや尖り気味に丸くおさまる。

これらの遺物の時期は法量、調整方法や皿の構成比率が高いことから10世紀前半に比定されるであろう<sup>18</sup>。

(杉山)

註1. 松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』1983

2. 岡田博「官衙」『吉備の考古学的研究(下)』1992

葛原克入「国府と官衙」『岡山県史原始・古代I』1991

3. 本稿では平城宮の土器分類に準拠した。このため、第3章第4節において示した分類とは必ずしも一致していない。

西弘海「平城宮出土土器の編年とその性格」『平城宮発掘調査報告VII』奈良国立文化財研究所、1976

4. 平田博幸「律令期地方都市遺跡の土師器」『文化財学論集』1994

5. 巽淳一郎氏教示。

6. 間壁忠彦「美作津山近郊出土と伝えられる奈良三彩蓋付壺」『倉敷考古館研究集報20』1988

7. 本例は透かし孔を切り取るB類であり、別づくりの脚部を合体させるA類(百間川当麻遺跡例など)に後出する。

吉田恵二「日本古代陶硯の特質と系譜」『国学院大学考古学資料館紀要1』1985

8. 平城宮の第二次朝堂院で採用された6225・6663型式の組み合わせは、備前・備中・美作の「国府系瓦」として用いられている。このうち備前・美作の6225型式は、蓮弁が密で中房に配された蓮子は小ぶりであり、6225C型式を模倣したものと推定される。これに対し、備中の6225型式は蓮弁が疎で、大粒な蓮子を飾る中房はやや狭く、6225A型式を模倣したものと考えられる。弁端が完結しない6225A型式は型式学的に見て6225C型式に遅れるものと考えられているが、備中の6225型式では線鋸歯文に置き換えられていることからして、さらに時期が下るものと想定される。6225C・6663C型式を最も忠実に模倣した美作国分寺の軒瓦は天平宝字年間(757~764年)の製作になるものと想定されており、備中の6225・6663垂式は、これよりやや遅れる8世紀第3四半期と考えられる。

佐川正敏「軒瓦6225A・Cと軒平瓦6663Cの年代」『平城宮発掘調査報告XIV』奈良国立文化財研究所、1993

9. 葛原克人「二子御堂奥窯跡」『岡山県史 考古資料編』1986
10. 平瓦の凸面に残る叩き目を狭端側のみナデ消す手法は、葺足を意識したものとも考えられるが、その位置からすれば下地になじませることを目的として施されたものと思われる。このような手法は、津嶋駅に比定される矢部遺跡などで認められる。これらは軒瓦から見ても二子御堂奥窯跡で生産されたものである可能性が高い。また、軒平瓦の側面を叩き締める手法は、矢部遺跡のほか小田駅と想定される毎戸遺跡の平城宮系瓦でも認められ、これらが平城宮系瓦の使用と密接な関係にあることも予想される。
11. 邑久町内(巡方2)、山陽町斎富遺跡(丸柄1)、倉敷市酒津山遺跡(巡方24・丸柄4)、勝央町平遺跡(丸柄1)、津山市美作国分寺(巡方1)、久米町久米廃寺(丸柄1)久米町領家遺跡(丸柄1)、新見市横見1号墳(巡方1)などが報告されている。
12. 阿部義平「銚帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』1976
13. 亀田博「銚帯と石帯」『考古学論叢』1983
14. 和同開珎は開元通寶を模倣したもので、初期の重量は4.7g前後であったが、その後3gの軽量に改められると言う。
13. 岡田博「官銜」『吉備の考古学的研究(下)』1992
15. 浅倉秀昭「津寺遺跡野上田調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994
16. 岡田博「津寺遺跡丸田調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994
17. 高橋照彦「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集、1994  
三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館編『緑釉陶器の流れ』1990
18. 土器の年代は以下の文献を参考にした。  
武田恭彰「古代土器生産についての一予察」『古代吉備』第12集、1990  
山本悦世「備前地域における古代後半の土器様相」『津島岡大遺跡6』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、1995

## 第4節 中・近世の津寺遺跡

### (1) 中世の遺構・遺物

#### 中世の遺構

中世の遺構は、O16区(野上田調査区)のB群、O17区(西川調査区)のA群、P17区(以下中屋調査区)のC群、P18区のD群、P19区のE群、O20区(以下高田調査区)のF群、N21区のG群に分けられる。これらは、柱穴や井戸、土壇、土壇墓などのまとまりとして表され、一定の居住空間を反映している。また、各群の間に広がる空閑地には畑や水田などの耕地が広がっていたものと想定される。これらの時期は、その出土遺物からB・D群が12世紀後半～13世紀前半に、F・G群が13世紀後半に、C群が14世紀後半、A群が16世紀代に位置付けられ、集落が微高地上を遷移した様子が窺える。

各群で多数検出された柱穴のうち、建物としてまとめられたものは少ないが、5×1間1棟、4×2間1棟、3×3間3棟、3×2間9棟、3×1間9棟、2×2間9棟、2×1間18棟、1×1間4棟を数える。これらは、2～3棟を単位として群を構成しているようであるが、A群では四面に庇をもつような複数の大形建物からなり、他とはやや異なる性格を有することも考えられる。

土壇墓は、これまでのところ三手遺跡向原調査区で12基、津寺遺跡土筆山調査区で19基、丸田調査区で6基、野上田調査区で6基、中屋調査区で15基、高田調査区で1基を検出している<sup>1)</sup>。これらは、黒色土器を副葬する向原調査区の土壇墓1を最古として、平安時代中期～室町前期に位置付けられるものである。これらの土壇墓には、4～5基のまとまりが見られ、なおかつ向原調査区では建物ないし柱穴群の東、土筆山・丸田調査区では西ないし南、野上田・中屋調査区では北に集中する傾向にあり、溝のような明瞭な区画を伴ってはないものの屋敷地の一面に営まれた屋敷墓としてとらえることができる。その一方で、土筆山調査区のように屋敷地の北に6基の土壇墓が墓地を形成している様子も見受けられる<sup>2)</sup>。これらは、長方形ないし方形を呈する墓壇に、木棺あるいはそのまま埋葬したもので、その規模は鎌倉前期で長さ140cm、幅90cm、室町前期で長さ120cm、幅70cmと時期が下るにつれ縮小する傾向にある。木棺は、釘などからその存在が推定されるものはわずかに4基に過ぎないが、野上田調査区では組み合せ式の木棺が検出されていて、その痕跡をとどめていない土壇墓においても木棺の使用をある程度想定することは可能性である。ところで、野上田調査区で検出された土壇墓-4の木棺は底板をもたない構造であった。このほか、野上田調査区土壇墓-7では曲物を、鳥羽離宮

遺構名	平面形	規模 (cm)	頭位	姿勢	副葬品								時期	
					碗	皿	刀子	毛抜	鉢	煙管	火打金	銭		
窪木薬師	長楕円形	170×95	西	横位	○									平安中期
三手・向原	長方形	140×50	北	横位	○									平安後期
津寺・土筆山	長方形	130×80	東	屈位	○	○	△							鎌倉時代
津寺・中屋	長方形	100×70	北	屈位		○	△							室町前期
大村中世墓	楕円形	80×60				○	△	△					△	室町後期
大村近世墓	円・方形	120×100		座位	△		○	○	○	○	○	○	○	江戸時代

表16 岡山県の中・近世土壇墓

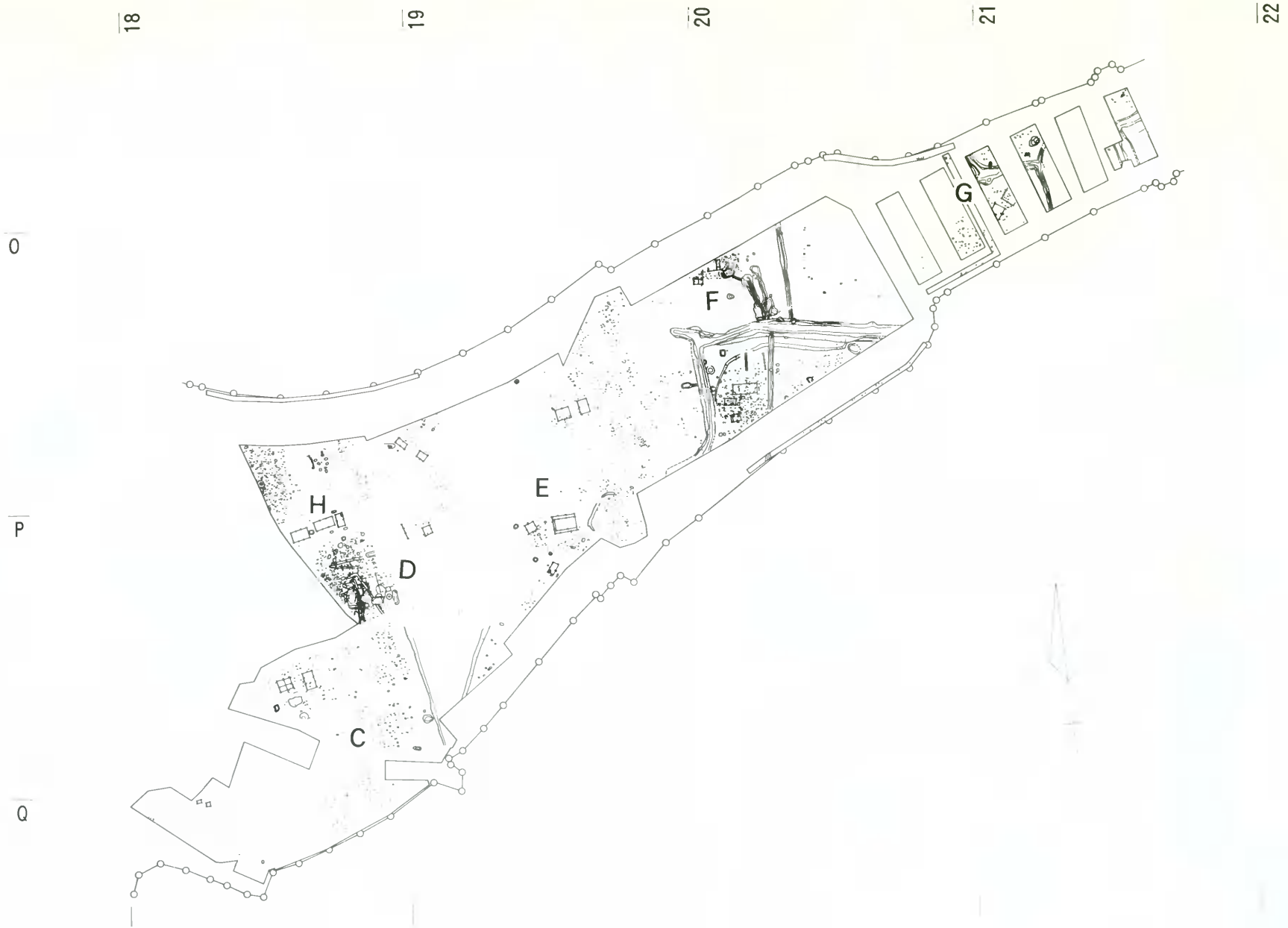
第5章 結語

遺構名	掘方規模	棺規模	頭位	埋葬姿勢	被葬者	副葬品	時期
向原土墳墓-1	140×50		南			椀	10C後半
2	200×105					椀	12C後半
3	70×65					椀	12C後半
4	150×90		北	右側臥屈葬	成人女性		鎌倉前期
5	190×110		西		壮年男性		鎌倉前期
6	95×55		北				鎌倉前期
7					壮年		鎌倉前期
8			北		成人男性		鎌倉前期
9	115×65		北	右側臥屈葬	壮年男性		鎌倉前期
10			北		成人		鎌倉前期
11	115×75		北	右側臥屈葬	成人男性		鎌倉前期
12	120×70		北	左側臥屈葬	壮年男性		鎌倉前期
土筆山土墳墓-1	×67		東	仰臥伸展葬		碗・椀・皿・刀	13C前半
2	78×60		北	右側臥屈葬	熟年女性	椀・皿	13C前半
3	144×73	○	東	仰臥伸展葬	成人女性	椀・皿・刀	13C前半
4			東	右側臥屈葬	老年男性	椀・皿・刀	12C後半
5	191×82	143×40	東	仰臥伸展葬	成人女性	碗・合子・椀・皿・刀・鏡	12C後半
6	95×72		北	右側臥屈葬	壮年女性	椀	13C後半
7	70×58		東	左側臥屈葬	壮年男性	椀・皿	12C後半
8	119×92						鎌倉時代
9	136×92					皿	鎌倉時代
10	120×70	○	北	右側臥屈葬			鎌倉時代
11	134×80				壮年男性		鎌倉時代
12	×70				小児		鎌倉時代
13	158×80						鎌倉時代
14	138×75	100×50			成人男性	皿	鎌倉時代
15	155×95		北	左側臥屈葬	壮年男性		鎌倉時代
16	148×72		東	左側臥屈葬	壮年	椀・皿	12C後半
17	100×35		東		幼児		鎌倉時代
18	95×65		東		成人	椀	13C前半
19	120×55				成人		鎌倉時代
丸田土墳墓-1	196×81		東	仰臥伸展葬	熟年男性		鎌倉時代
2	×55					碗・玉	鎌倉時代
3	200×70		北	仰臥伸展葬	壮年	椀・皿	鎌倉時代
4	204×76		東	仰臥伸展葬	壮年男性	刀	鎌倉時代
5	151×63		東	仰臥伸展葬	成人女性		鎌倉時代
6	×49		東	右側臥屈葬	壮年男性	椀・皿・刀・鍛冶具	13C前半
野上田土墳墓-1			西	右側臥屈葬			鎌倉時代
3	115×96		北		成人男女	椀・刀	13C後半
4	123×104	83×50	北		成人		鎌倉時代
5	106×84	63×43	北		成人	椀	13C後半
6	120×90	65×39	北	右側臥屈葬	壮年女性		鎌倉時代
7	75×	26×					
中屋土墳墓-5	140×65		東		成人	刀	
6	106×63				成人	皿	14C後半
7					小児		室町前期
8	97×65		北		成人	皿	14C後半
9	103×87	83×60	北	右側臥屈葬	成人	皿・刀子・砥石	14C後半
10	112×						室町前期
11	×59						室町前期
15	206×82		東	仰臥伸展葬	老年	椀・刀子	13C前半
16	129×113		北	右側臥屈葬	壮年女性	刀子	鎌倉時代
高田土墳墓-1	97×54		北	右側臥屈葬			鎌倉後期

表17 三手・津寺遺跡の中世土墳墓

跡では籠を転用した例も知られており<sup>3</sup>、簡便な棺形態が広く用いられていたことが考えられる。多くの土墳墓において木棺の痕跡をとらえにくいのは、こうしたことにもよるのであろう。頭位は、土筆山・丸田調査区では東、向原・中屋・野上田調査区では北が優位を占める。池田次郎が指摘するように<sup>4</sup>、全体としては北が優位と言えるものの、各調査区における頭位の偏りは、それぞれの屋敷地





第636図 津寺遺跡中・近世遺構全体図1 1/1,500



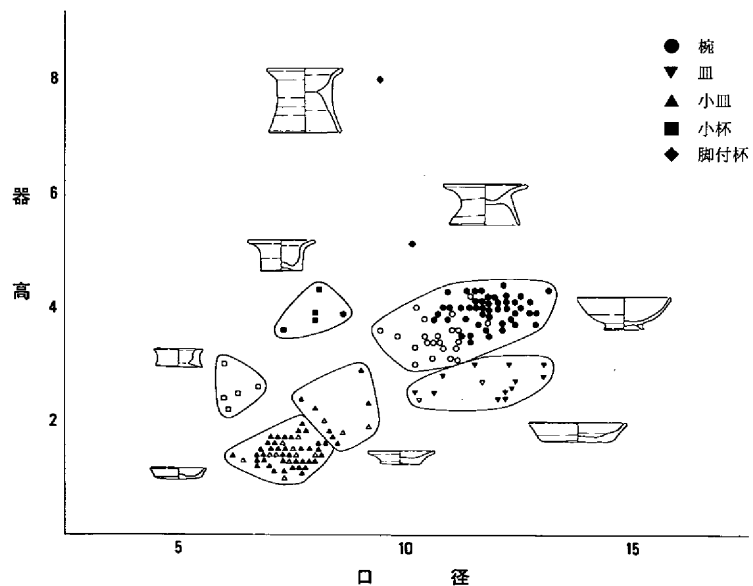
に応じた配置に起因するものと考えられ、むしろ屋敷墓としての性格を反映している可能性が強い。また、埋葬姿勢は右側臥屈葬が一般的である。これは、北に頭位をおく場合、西面することを意味するが、頭位にばらつきが見られることを考慮すれば、どの程度方位が意識されていたのか疑問が残る。また、側臥屈葬に混じって、ごくまれではあるが仰臥伸展葬も存在する。平安中・後期に位置付けられる窪木薬師遺跡や桃山遺跡の土壌墓ではいずれも仰臥伸展葬をとっており<sup>5</sup>、津寺遺跡の一部で見られるこうした埋葬姿勢は、中世以前の古い葬法を伝えるものと言える。しかも、これらの埋葬では輸入磁器や銅鏡など優秀な副葬品をもつものも多く、側臥屈葬の被葬者に対する優位が窺える。こうした副葬品は頭か足元に配されるが、全体から見れば土師器(椀・皿)のほか刀子がある程度で概して少ない。また、これらの副葬品も室町時代に入るとさらに減少する傾向にあり、ごく一部の例外を除けば副葬品から性別などの差異を見いだすことは難しい。

火葬墓は、丸田調査区で1基、中屋調査区で3基検出されている。土筆山調査区の火葬墓は、長楕円形の掘り方をもち、壁面に被熱が認められることからすれば、遺体を茶毘に付してそのまま埋葬したと思われる<sup>6</sup>。中屋調査区のは、長さ100cm、幅30cmを測る釘付けの木棺に火葬骨を収めたものである。また、では、90×60cmの石敷きの上から甕に納められた火葬骨が出土している。これらの状況は、土葬から火葬への改葬を想起させるものである。野上田調査区においても、2体の人骨を収める木棺が検出されており、これらが屋敷墓の形態をとっていることからすれば、屋敷の移動・改葬に伴う改葬行為とも見て取れる。

以上、三手・津寺遺跡で検出された中世墓について概観してきたが、その多くは屋敷墓の形態をとって存在する。これらは、その数からしても特定の人物が葬られたことは明らかであり、初葬はその屋敷の創設者であった可能性は高い。また、その中に含まれる女性や幼児が屋敷の継承者であったことは十分に考えられる。しかしながら、津寺遺跡における屋敷墓は、16～17世紀に比定される建物群の周辺では検出されておらず、少なくとも室町時代後半には消滅していたようである。その背景には、大村遺跡に見られるような火葬墓を中心とした惣墓の形成があったものと思われる<sup>7</sup>。

### 中世の遺物

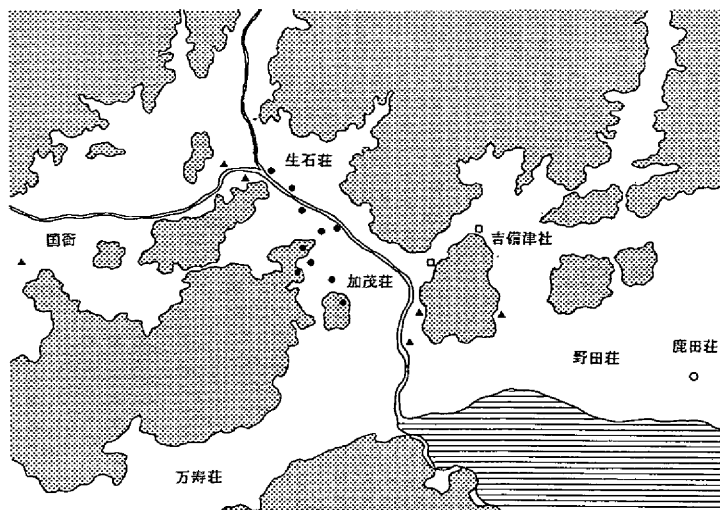
土師器には、椀・杯・皿・小杯・小皿といった供膳具のほか、鍋・竈のような煮炊具がある。供膳具の主体をなすのは、灰白色を呈する椀と小皿である。今回報告した中屋調査区の椀は、口径13～11cm、器高4.5～3.5cmを測るもので、底部には断面矩形をなす高台を貼り付ける。これに対し高田調査区の椀は、口径11～10cm、器高4～3cmを測り、底部に貼り付けた矮小な高台は断面三角形を呈する。また、中屋調査区では口径13～10cm、器高3～2.5cmの皿が見られるものの、高田調査区では



第637図 津寺遺跡出土の中世土器  
(黒塗りは中屋調査区、白抜きは高田調査区)

ほとんど出土していない。小杯においても、高田調査区ではすべてのものに孔が認められた。両調査区の土師器に見られるこうした違いは、時期差によるものと考えられ、今回報告した中屋調査区の土師器は13世紀前半、高田調査区は13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる<sup>8</sup>。

ところで、津寺遺跡で多く出土する小杯はこれまで脚台として扱われることが多かった。これは、底部が粗くヘラキリされたままであり、な



第638図 小杯形土器の分布 (●は出土量多、▲は出土量少)

おかつ多くの場合貫通孔が認められることによる。しかし、前述したように、古相のものでは孔が見られず、容器としての不都合は認められない。また、柱穴などから単独で出土することがあるが、椀や小皿と対になるような出土例はなく、これ自身が容器として機能していた可能性は高い。けれども、時期が下るにつれ口縁部の開きは弱くなり、底部は省略されて円筒状をなすに至る。これが、容器の形骸化を意味するのか、あるいは機能の転換を表すのかについては、系譜関係を含めて今少し議論の余地がある<sup>9</sup>。今後、良好な資料を待って検討すべきであろう。小杯は高塚遺跡を北限に、東は政所遺跡、南は川入遺跡、西は樋本遺跡を限って分布する。中でも分布の中心となるのは足守川流域であるが、この範囲は中世の加茂荘にはほぼ相当する。加茂荘は、東大寺領であった野田荘との争論に名が見えるものの、その実態については明らかではない<sup>10</sup>。しかし、吉備津神社の周辺では特有の土器組成が認められており<sup>11</sup>、この地域にあっても荘園内で完結した土器の需給関係を想定しうる<sup>12</sup>。また、こうした関係は、小杯の出土を見ない総社市周辺(国衙領)や倉敷市北東部(万寿荘)においても成立する余地があり、中世土器の生産・流通を考えるうえで重要な手掛かりになるものと思われる。

(亀山)

## (2) 近世の遺構・遺物

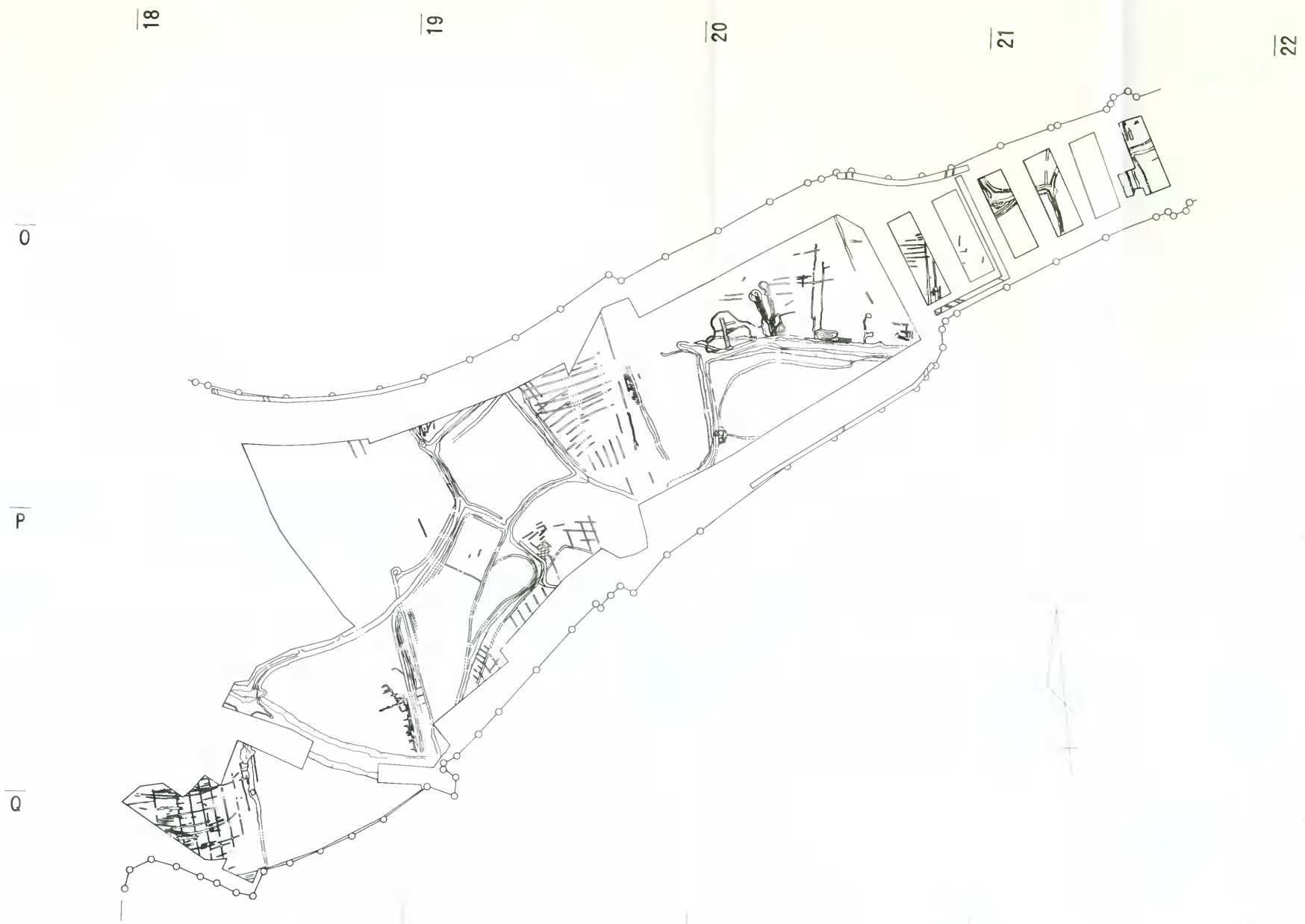
室町時代以後、津寺遺跡では徐々に耕地化が進められて行き、近世にいたるまでの間には一部居住区を残しほとんどが耕作地として利用されている。そのため、今回報告した中屋・高田調査区で該期に属する遺構の大半は耕作に関係すると考えられる溝で、遺物も水田層から多く出土している。

また、居住区として利用されていた地区には掘立柱建物、井戸、土壌が見られるが、いずれも時期を限定する遺物を共伴する遺構は少ない。そのため、遺構周辺の状況から近世16世紀後半以降と判断された遺構を含めて該期のまとめとしたい。

### 近世の遺構

近世の遺構としては掘立柱建物6棟、井戸3基、土壌4基、溝多数がある。

掘立柱建物は、P18区の北東部(中屋調査区)のH群に掘立柱建物-38~40、O20区南部(高田調査区)のI群に掘立柱建物-22~24が見られる。H群の建物は3×1間の東西建物2棟と、2×1間の南北建物1棟の計3棟で構成され、棟方向はN-79°・76°-WとN-6°-Eである。I群の建物



第639図 津寺遺跡中・近世遺構全体図2 1/1,500



は3×1間、2×1間、1×1間が各1棟の計3棟の東西建物で構成され、棟方向はそれぞれN-84°-W、N-83°-W、N-86°-Eである。これらの建物の棟方向は各群である程度のみをまとまりを見せているが、建物群の間でのまとまりは認められない。これは、既に報告された調査区では微地形に左右されたためと考えられており<sup>13</sup>、今回の調査区でも同様な理由によるものと判断される。

また、H・I群の建物は、柱穴の切り合いが比較的少なく、包含層中から出土している肥前陶磁器が16世紀末～17世紀前半とまとまっていることなどから短期間に営まれた集落と判断される。

これらのことから、近世初頭の津寺遺跡では既に報告している西川調査区を中心としたA群とH・Iの3群が互いに直線距離で約150mの耕作地を挟んで居住地として利用されていたと考えられる。

井戸は、中屋調査区の2基の井側が石組みであるのに対して、高田調査区のもは後述する軒平瓦を井側として使用している。西川調査区で確認されている井戸が石組みであることからこの時期石組みが一般的であったと考えられ、高田調査区の井戸の特異性が指摘される。井側に瓦を使用する井戸は、現在のところ当地域における類例を聞かないが、17世紀初頭に大坂城を中心として作られ始め、江戸時代以後広範囲に普及したとされ<sup>14</sup>、この地域においていち早く導入された状況を示していると思われる。また、大阪城や博多遺跡群で見られる同種の井戸は井側専用の瓦を使用しているのに対して、本例は軒平瓦を転用している点で大きく異なっている。これは、本井戸に使用されている軒瓦がその特徴から岡山城下からの供給品であると考えられることから、遺跡近隣に供給され屋根に葺かれていたものを二次的に転用したためと推定することもできる。しかし、軒瓦の時期はその特徴から17世紀初頭前後と考えられ、井戸の使用されていた時期も同時期と考えられる現状においては軒瓦を転用品と即断するには躊躇される。したがって、近世以後の津寺遺跡周辺の同種の井戸の普及状況や瓦の生産、流通を総合的に検討していく必要がある。（杉山）

### 近世の遺物

近世の遺物としては陶磁器、金属製品、木製品と瓦などの土製品がある。

陶磁器は詳細な構成比を明確にしえないが、中屋・高田調査区とも肥前陶器が過半数を占め、それに備前焼、肥前磁器、中国産輸入磁器、瀬戸・美濃陶器が伴う。器種としては、椀、皿を主体として、壺、甕、鉢が見られ、器種と土器の生産地との間には密接な関係が見られる。

陶磁器の時期は、16世紀末～17世紀前半の肥前陶磁器を主体とすることから、肥前において陶器生産が開始されて間もなく消費地の一つとしてこの地が流通経路に乗っていた状況が見られる。

木製品として墨書のある木札が中屋調査区井戸-5から出土している。

この木札には文字と馬の絵が描かれているが、文字についての釈文は附編に収載している。ここでは描かれている絵に注目したい。

木札は折敷きの底を転用したものの表裏に天地逆転した形で墨書されている。この木札は時期を決定できる遺物を伴わないが周辺の状況から中世後期以後に属すると考えられている。馬が描かれていることから絵馬<sup>15</sup>と推定されるが、紐穴が見られず、また集落内からの出土でもあり、本書では敢えて木札と呼称している。

絵馬を含めて、中世後半以降の集落遺跡から馬の絵が描かれた木札の出土例は、県内はもちろん管見に触れる限りない。そこで、古代までさかのぼって出土例を見てみると北条朝彦氏によって集成がされている<sup>16</sup>。これによると8世紀中葉から鎌倉時代まで23例の出土例があり、これらの大半が祭祀もしくは官衙に関連した遺跡からの出土である。出土した遺構は溝、井戸といった水にかかわるもの

が多く、いずれも土器、齋串などが共伴しており、何らかの祭祀に関連するものと判断されている。また、馬の絵が描かれている材も津寺遺跡出土のものと同様に曲物の底板などの転用材も散見される。

津寺遺跡では古代において官衙関連施設が存在していたが、官衙の営まれていた時期に丸田調査区では土馬<sup>17</sup>が出土している。また、高田調査区では溝の東肩、野上田調査区<sup>18</sup>では土壌内で馬の頭骨が出土している。これらはいずれも水に関連した祭祀行為が推定され、古代において材質は異なるものの馬を用いた祭祀行為が汎日本的に行われていたことが推定される。こういった行為が中世以後どのように展開し、地域に伝承されて行くのか<sup>19</sup>は今後の課題として残されているが、津寺遺跡では平安時代から鎌倉時代の状況が不明ではあるが、描かれたものが馬であった点を重要視するならば、この木札が中世後半の段階において祭祀に用いられていたと考えられるのではなかろうか。

しかしながら、木札に描かれた馬と文字との関係が判然としない現状においては、祭祀行為に関連した遺物の可能性を指摘できるのみであり、今後該期の集落内における馬を含めた動物を用いた祭祀行為の形態を明らかにしていく中でその評価を考えて行く必要がある。 (杉山)

土製品として高田調査区を中心に燻し瓦が多く出土している。出土した瓦は平瓦が大半で、丸瓦、軒瓦、道具瓦が少量ずつ見られる。しかしながら、水田層、溝からの出土であり、瓦の全形、調整のわかるものはほとんど無い。ここでは先述した井戸の井側に使用されていた軒平瓦を中心に軒瓦について詳述する。なお、一部中世前半のものについても併せて説明を加える<sup>20</sup>。

軒丸瓦には桐文C37と巴文C40～42・64・65の二種類がある。桐文のC37は五七の桐と見られる飾りをもつもので、岡山城や後期高松城で出土している。巴文はC40は右三つ巴、その他はすべて左三つ巴で尾の巻き込みが長い。C40は頭部が小さく互いに接し、珠文も小ぶりなことから鎌倉時代末頃のものであろうか。C41・42・64・65は頭部がやや大きくなり珠文も大ぶりだが、珠文はまだ比較的密に配されている。また、瓦当上端の反りは強く、瓦当に占める丸瓦の高さも比較的大きいなど総じて古い傾向を示している。丸瓦凹面には鉄線によるコビキ痕や細かい布目を明瞭に止めている。瓦当部と丸瓦の接合方法には、丸瓦の端部に刻みを入れるもの(C42)と、瓦当部の内区上端に刻みを入れ丸瓦の凹面に接合するもの(C64・65)の二者が見られる。両者は瓦当部の型式差から判断すると後者が古いと考えられるが、製作工人差、地域差についても考慮する必要がある。

軒平瓦は均整唐草文を飾るものが5型式見られ、これらはC80・81を除いて近世前半に位置づけられるものである。いずれも瓦当の幅は狭く文様帯も縮小しているが、その断面は台形で比較的厚手の作りとなっている。また、両面を粗いナデで調整しており、近世前半の特徴を示している。

C80・81は菊を中心飾りとするもので、その左右に唐草文がのびる。類例に乏しいが、室町時代前半に位置づけられよう。C30は反転する唐草文を肉厚に表現するもので、県内では今のところ類例は知られていない。しかし、聚楽第や大阪城の軒平瓦に同様のモチーフが認められ、その系譜を引くものと理解されている。C31は中心に宝珠を飾るもので、左右にのびる唐草文は二転する。岡山城上層や後期高松城、総社宮などで同範と見られる軒平瓦が出土している。C33は三ツ葉を中心に飾るもので、左右にのびる唐草文は二転する。三ツ葉の稜は鋭く、播磨系の軒平瓦に近い様相を示す。類例は岡山城や下津井城などに見られるが、特に下津井城の軒平瓦とは同範の可能性がある。C35は五七の桐を中心に飾るもので、左右にのびる唐草文は三転する。岡山城下層(宇喜多秀家～池田利隆時代)から同範と見られる軒平瓦が出土しているが、本例では桐文にくずれが認められることから後出するものと考えられる。

瓦当部と平瓦部と接合方法はC33と同形のC45とC81の状況から平瓦の端部の凸面に上端に刻みを入れた粘土板を貼り付けている。

以上、高田調査区から出土した軒瓦について述べてきたが、このうち近世前半に位置づけられる瓦の組成は後期高松城所用の瓦と近似している。これらは岡山城下で生産、供給されたものと推定されており、今回報告した瓦についてもこれらと同時にたらされた可能性が強い。こうした理解のもとに津寺遺跡の瓦を考えれば、榊原氏の津寺知行所に用いられた瓦が二次的に転用されたか、あるいはこれらを分与された有力農民の居宅といった想定が成り立つであろう。(杉山)

番号	直径	内 区			外区珠文		周 縁		備 考
		文 様	径	巴 幅	直 径	数	幅	高さ	
C37	(14.4)	五七の桐	(9.6)	-	-	-	1.9	0.5	
C40	14.2	右三つ巴	7.1	1.3	0.65	7/14	1.5	0.8	
C41	11.9	左三つ巴	5.3	0.9	0.9	16/16	1.7	0.4	
C42	(14.0)	左三つ巴			0.8	1/	2.2	0.6	丸瓦端部に刻み
C64	13.5	左三つ巴	6.5	1.2	0.65	17/17	2.2	0.7	瓦当内区上部に刻み
C65	13.5	左三つ巴	5.4	0.6	0.9	12/16	2.2	0.6	

巴区径 = 尾部外裾間の径 巴幅 = 巴頭部最大幅 ( ) = 推定復元値

表18 近世軒丸瓦観察表

番号	瓦 当 部						平 瓦 部				段 顎		備 考	
	内 区			外 区			脇区幅	幅	長さ	深さ	厚さ	幅		厚さ
	上弦長	下弦長	幅	上幅	下幅	高さ								
C30	14.6	14.8	1.8	0.8	0.8	0.3	4.0~4.5	21.8	15.5+	2.4	1.4	2.1	1.4	
C31	14.0	14.0	1.7	0.9	0.8	0.2	3.0~3.2	19.6	23.4	2.0	1.1	2.0	1.6	
C32	14.0	14.1	1.65	0.8	0.6	0.2	2.6~4.1	20.3	23.2	1.8	1.1	2.1	1.9	
C33	18.0	16.7	2.1	0.60	0.6	0.3	1.6~2.3	22.0	26.3	1.7	1.8	1.8	1.6	
C34	16.5	16.5	1.9	1.1	0.9	0.2	2.1~3.2	20.4	25.4	2.1	1.5	2.3	1.5	
C35	17.4	17.4	1.9	1.1	0.6	0.3	2.5~3.0	21.8	26.2	2.4	1.5	1.6	1.8	
C80			2.5	1.0	1.8	0.5	(2.2)			2.1	2.2	2.4	2.1	

表19 近世軒平瓦観察表

- 註1. 中野雅美・正岡睦夫・松本和男・岡田博・浅倉秀昭ほか「三手・津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994  
 大橋雅也ほか「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995  
 亀山行雄ほか「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』岡山県教育委員会、1996
2. 松本和男「中世墓について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994  
 これらは、その内容から屋敷地内の土墳墓に対する優位が想定されている。  
 橋田正徳「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究VII』日本中世土器研究会、1991
3. 地村邦夫「大阪府における古代・中世の木棺墓について」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3』財団法人大阪府埋蔵文化財協会、1995
4. 池田次郎「山陽自動車道建設工事に伴う発掘調査による岡山工事区出土の人骨—中世人骨」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994
5. 島崎東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会、1994  
 二宮治夫ほか「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会、1994
6. 火葬墓は、焼き場と葬地との関係から、遺体を焼いてそのまま埋葬する場合、焼骨を拾い焼き場に埋葬する場合、焼骨を拾い別の場所に埋葬する場合に分類できる。

7. 江見正己・柴田英樹ほか「大村遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会、1994
8. 中世の土師器については次のような編年案が出されており、その対応関係を表20にまとめた。  
山本悦世「吉備南部地域における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会、1992  
草原孝典「中世土師質土器について」『小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会、1993  
神谷正義「高台付椀に関する二・三の整理」『三手(庄内幼稚園)遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団、1981  
高畑知功「中世」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告65』岡山県教育委員会、1987
9. 小杯の相形については明らかでないが、早島式土器に祭器としての性格を見る意見にしたがえば、福島県都都古別神社に伝来する銅鉢のような仏器(供養具)を模したものである。
10. 政所遺跡や加茂遺跡周辺は荘家の有力な候補地と言える。
11. 椀、皿、台付皿、小皿からなるが、特に多数を占める皿や台付皿によって特徴付けられる。  
草原孝典「小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告」岡山市教員委員会、1993  
福田正継・武田恭彰・橋本久和「山陽東部」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会、1995
12. 中野雅美「P-9出土の椀・小皿について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会、1975
13. 亀山行雄「津寺遺跡の変遷4. 中・近世」『津寺遺跡3』岡山県教育委員会、1996
14. 鈴木秀典「大阪城を掘る」『よみがえる中世2』、平凡社、1989  
井澤洋一「筑前における中近世瓦の分類試案(下)」『福岡市博物館研究紀要第6号』、福岡市博物館、1996
15. 「絵馬」は「祈願や報謝のために社寺に奉納する絵の額」(新村出編『広辞苑』岩波書店、1995)であり、用途が限定される。
16. 北条朝彦「出土遺物に描かれた動物」『動物考古学』第3号 動物考古学研究会、1994  
北条朝彦「出土遺物に描かれた動物(Ⅱ)」『動物考古学』第6号 動物考古学研究会、1996
17. 岡田博ほか「丸田調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994
18. 光永真一ほか「野上田調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995  
金子浩昌「津寺遺跡出土の動物遺体」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995
19. 静岡県伊場遺跡では奈良時代から鎌倉時代にかけての絵馬が9点出土しており、連絡と伝承されている様子がうかがい知れる。
20. 軒瓦については、岡山市教育委員会 乗岡実氏よりご教示をいただいた。

年代	山本 (鹿田)	草原 (小丸山)	高畑 (樋本)	神谷 (三手)	口径
1150	A 1	1	A	I	16
	B 1	2			15
1200	C 1	3		II	14
		4			13
1250	C 2	5	B	III	12
		6			C D E F
1300	C 3	7	G H I J	IV	10
		8			

表20 中世土師器椀の編年案対照表



岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116

## 津寺遺跡 4

山陽自動車道  
建設に伴う発掘調査

14

(第1分冊)

1997年3月15日 印刷

1997年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 日本道路公団中国支社岡山工事事務所  
岡山県教育委員会

印刷 岡山県農協印刷株式会社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 116

# 津 寺 遺 跡 4

山 陽 自 動 車 道  
建 設 に 伴 う 発 掘 調 査

1 4

(第2分冊)

1 9 9 7

日本道路公団中国支社岡山工事事務所  
岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 116

# 津 寺 遺 跡 4

山 陽 自 動 車 道  
建 設 に 伴 う 発 掘 調 査

1 4

(第2分冊)

1 9 9 7

日本道路公団中国支社岡山工事事務所  
岡 山 県 教 育 委 員 会

附 編  
自然科学的考察

# I. 津寺遺跡出土の墨書木札

比治山女子短期大学

志田原 重人

## 1. はじめに

山陽自動車道建設に伴い発掘調査をした津寺遺跡中屋調査区E1区の石組の井戸-5の下層から発見された墨書木札について、若干知りえたことを述べようと思う。

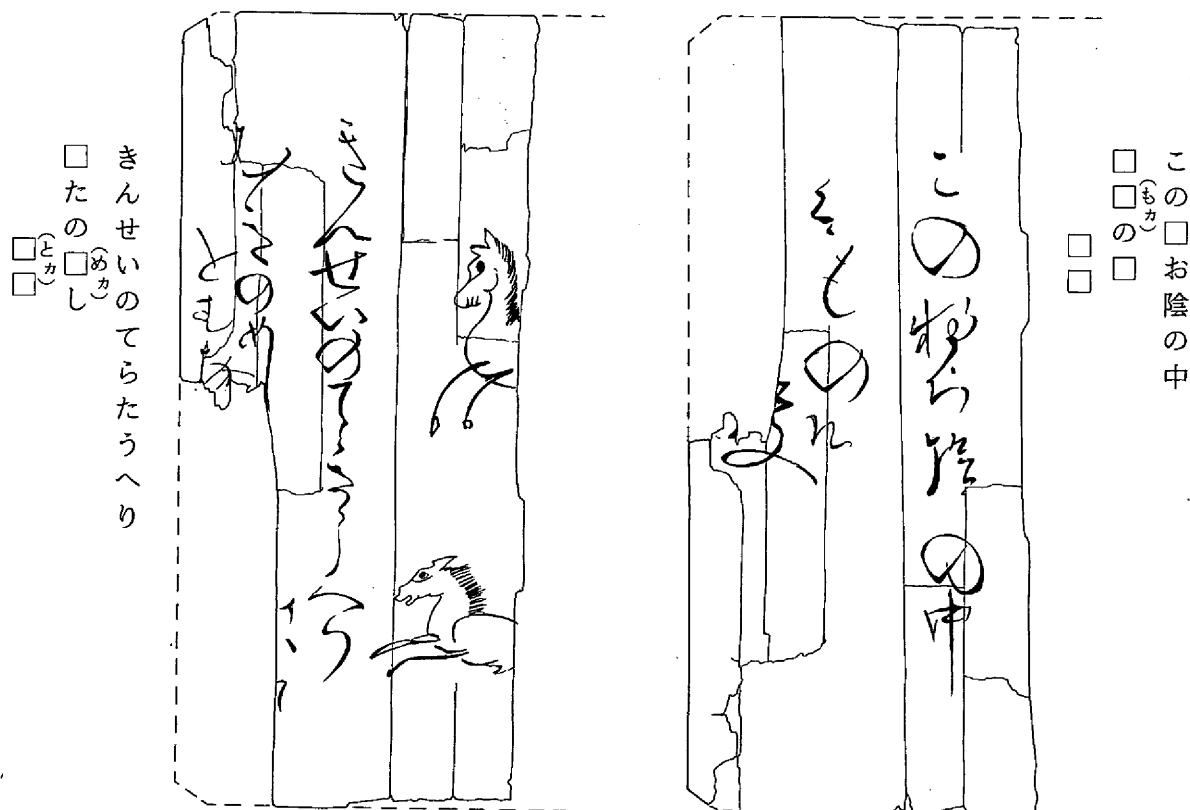
木札は縦20cm×横9cm×厚さ0.2mmを測る。右半分ならびに左辺中央から下端にかけて欠損している。左辺上部には面取りの跡がみられる。元来折敷として用いられていたものを転用したものと思われる。

墨書は表裏両面にわたって認められる。表面の右端には上下にわたって躍動感あふれる2頭の馬が描かれている。この左側に3行にわたって墨書が認められる。内容は判然としないが、1行目の「きんせい」が「欣盛」であるとすれば、「きんせいのてら」は隆盛を極める寺院ということになる。これに続く「たうへり」は「塔辺」であろうか。このように解釈すれば、表面は隆盛を極める寺院に何かを祈願したことを意味すると思われる。一方、裏面には3行にわたって墨痕が認められるが、表面に比べ全体に黒ずんでおり解読が困難である。

ここで祈願の内容を知るうえで重要な鍵を握っていると思われる墨書木札に描かれた馬の信仰についてみることにしよう。馬は神聖なものに使用されるという観念から、神霊の乗物としての面が古くから存在していた。このため神社に生馬を奉納して飼養し、またその代用に木馬を神前に納め、祭儀に馬をひいて奉仕するといった習俗が広く認められる。生馬や木馬を奉納できない階層が板絵を額として納めたのが絵馬の起源であるという説もある。また、馬の行動を神意の現れと判断することから、馬を競走させて年の農作や戦い、その他の吉兆を占う競馬の習俗も各地でみられた。『大百科事典』ウマの項のうち千葉徳爾氏「信仰と習俗」、平凡社、1984年。馬はまた牛とともに雨乞・日乞にも用いられたことが知られる。高谷重夫氏の『雨乞習俗の研究』（財団法人法政大学出版局、1982年）によれば、江戸時代に摂津国箕面（現大阪府箕面市）では大旱魃の際馬の首を切って滝穴を汚したことがみえる。滝壺に馬の骨等を投げ込んで、汚れによって雨神をさそう雨乞法が行われていたことは、すでに16世紀の初めに前関白九条政基が所領の和泉国日根野荘（現大阪府泉佐野市）を自ら管理するためこの地に滞在したときの日記『政基公旅引付』の文亀元（1501）年7月20日条に、「七宝滝に不浄の物（鹿の骨・頭）を入れれば必ず雨が降る」とある。高谷氏によれば、広島県双三郡八幡村では竜王山の麓に大蛇が住むと伝えられる蛇淵があり、雨乞には傍らの竜王を祀った祠に祈った後、淵を汚すときは必ず験があるというので、隣村からひそかに牛馬の骨を投げこみにくるとあり同様な例は他の地方でも見られるといわれている。同氏によれば、祈雨に際し生きた馬に代えて絵馬を祀る例としては、「奈良市（旧添上郡田原村）日笠の天満宮では、雨乞に黒毛の馬を数頭曳いて神社に詣り、境内を駆け廻らせ、日和乞には赤毛の馬（地方によっては白馬が用いられる）を曳く。この馬を揃えることのできない時は絵馬を献じたといい、文政以来の絵馬が数多く奉納されている」とあり、島根県飯石郡赤来町では琴引山で火を焚き、また、琴引社で四方に葉つきの竹を立て、注連縄を張り、藁

の馬と絵馬を献じている。ちなみに雨乞に黒毛の馬、日乞に赤毛ないし白毛の馬を奉納したのは、黒毛が黒雲たなびき雨をもたらす色、赤色ないし白色は太陽を意味しているのであろう。したがって後世、絵馬を奉納する際、黒馬と白馬を一对にするようになったのは、一年間の天候が順調であることを祈願したものといえる。ところで津寺遺跡で今回発見された墨書木札は先述のように石組井戸の下層から出土したものである。墨書木札の内容が不明なため即断はできないが、出土状況からすれば雨乞など水の祭祀に用いられた可能性が考えられよう。

ところで遺跡の近隣には江戸時代までに建立された寺院が3カ寺ある。このうち旧津寺村（現岡山市津寺）の日蓮宗蓮寺はもとは天台宗で、江戸時代、旗本花房氏のときに改宗させられたといわれている。津寺村の南東、旧加茂村（現岡山市加茂）の蓮休寺もこの天台宗で、花房氏のとき日蓮宗に改宗させられている。最も隆盛を極めていたと思われるのは足守川を挟んで対峙する旧新庄村（現岡山市新庄上）の岩崎山（庚申山）の南にある法華宗本門流一乗山本隆寺である。江戸時代に作られた縁起や由緒書によると、嘉吉2（1442）年瀬戸内諸国を巡錫していた京都本能寺開山の日隆が当地に逗留し、新庄村の村民を改宗受法させ、その外護で草堂を仮営したのが開創であると伝え、天保10（1839）年当寺14世日昭や惣代らが連署で本山本能寺に提出した本隆寺由緒（本能寺文書）には享徳元（1452）年開創とある。ちなみに岩崎山は天正10（1582）年の高松城水攻めのとき毛利軍の陣場となったところで、当初は宍戸豊前が、のち吉川元春の陣が置かれたといわれており、このとき多くの堂塔・僧房・楼門を有していた本隆寺は焼失し、元禄4（1691）年再建されたといわれている。津寺遺跡から出土した墨書木札に記された「てら」が具体的にどの寺院を指すかは不明であるが、今後の研究の進展を待ちたい。



第640図 墨書木札と釈文 1/2

## Ⅱ．津寺遺跡出土の人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井上 貴央

### 1. はじめに

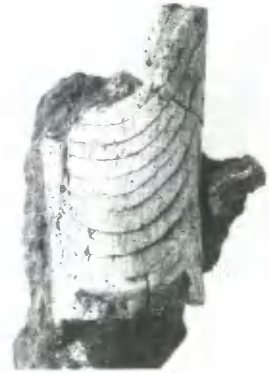
本稿は岡山県津寺遺跡の中屋調査区と高田調査区から検出された人骨に関するものである。同定を依頼された人骨資料は調査担当者によって取り上げられたものであって、人骨の検出状況は確認していない。人骨は保存が悪かったようであり、同定した人骨は検出されたものの一部にすぎないが、これらについて若干の所見を述べることにしたい。

### 2. 概要

#### 中屋調査区土墳墓-12

南北に長軸方向を有する楕円形の墓壇内から鉄釘とともに人骨と土師質小皿が検出され、小皿から推定して中世の遺構と推測されている。北側には頭蓋骨が、南側には四肢骨が検出されたようであるが、骨の保存状況は悪く、四肢骨の部位を特定できないため、埋葬肢位の推定は不可能である。

検出された骨は火葬に付された人骨であって、長幹骨の表面に貝殻状の亀裂が認められるものもある(第641図)。骨の断面を観察すると、表面は白色であるが内部では黒色を呈している。また、火葬に伴って変形、収縮をきたしているものが多く、今回検討した骨で部位を特定できたものはない。検出された骨はすべて火葬骨であり、細片化が著しく、骨の部位の特定は困難であった。今回検出された人骨の性別年齢は特定ができないが、成人骨であることは確かである。



第641図 出土の長幹骨(1/1)

本遺構で注目すべきは、多数の鉄釘が検出されている点である。これは木棺が存在したことを推察させるに充分であり、その大きさは長さ88cm、幅30cmと推定されている。この大きさでは、たとえ埋葬の形態をとっても成人の遺骸を埋納することは不可能であり、火葬に付した人骨を再び木棺に埋葬したものと考えられる。

#### 高田調査区土墳墓-1

北北西-南南東に長軸方向を有する長方形の土墳墓から検出された人骨である。遺物を伴っていないため時期の特定はできないが、周囲の状況から中世のものである可能性が高いと考えられている。北側には頭蓋骨と上・下顎歯が検出されており、南側と東側には四肢骨が検出されたようである。いずれの骨も保存状態が悪く、依頼された資料は上・下顎の部分のみである。下顎は下顎骨が風化してしまい、わずかに下顎前歯の歯冠のエナメル質が残っているにすぎない。歯種を特定することはできないが、成人のものに間違いなく、咬耗はやや進んでいるものと思われる。上顎も歯冠のみが残って

おり、臼歯部であろうと思われるが歯種を特定することはできない。周囲の粘土を慎重に除去していくと咬合面を剖出することができたが、歯冠咬合面が欠損しているようである。咬耗によるものと思われるが、カリエスの可能性も否定できない。保存が悪いため歯冠計測は不可能で、性別の推定はできなかった。埋葬肢位は不明である。

### 3. おわりに

今回検出された人骨は保存が悪かったため、被埋葬者についての詳細な情報は得られなかったが、中屋調査区土墳墓-12で検出された人骨は火葬骨を木棺に埋納したものであり、注目に値するものと思われる。

稿を終るにあたり、本人骨の調査の機会を与えていただいた岡山県古代吉備文化財センターの関係者に御礼申し上げます。



### Ⅲ. 津寺遺跡出土土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科

中野益男、福島道広

(株)ズコーシャ総合科学研究所

中野寛子、明瀬雅子、長田正宏

#### 1. はじめに

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまでに生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと<sup>1</sup>、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子<sup>2</sup>、約5千年前のハーゼルナッツ種子<sup>3</sup>に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した<sup>4</sup>。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

この「残存脂肪分析法」を腐朽分析の進んだ、考古学的実証の困難な遺跡の解明に適用し、出土遺物に残存する脂肪を分析することによって、津寺遺跡から出土した土器の性格を解明しようとした。

#### 2. 土器および土壌試料

出土土器は胞衣壺と推定されており、口縁部が多少破損していた他は原形を留めていた。また土器内からは和同開珎5枚が見つかった。出土土器そのものを試料 No. 1、土器口縁部の破片を試料 No. 2、土器内土壌を試料 No. 3、土器の外側周辺に付着していた土壌を試料 No. 4とした。

#### 3. 残存脂肪の抽出

土器および土壌試料72~1129 gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音

波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表21に示す。抽出率は0.0009~0.0060%、平均0.0028%であった。この値は出土土器を胞衣壺と判定した奈良県平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺内土壌試料の平均抽出率0.0199%<sup>5</sup>よりは低く、古墳時代の胞衣壺と判定された平城京右京三条三坊一坪から出土した土師器試料の0.0039%<sup>6</sup>、出土土器を胞衣壺もしくは骨壺と判定した宮城県郷楽遺跡から出土した土器試料の0.0013%、土器内土壌試料の0.0062%<sup>7</sup>とは同程度で分析には十分量であった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成され、遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリド、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

#### 4. 残存脂肪の脂肪酸組成

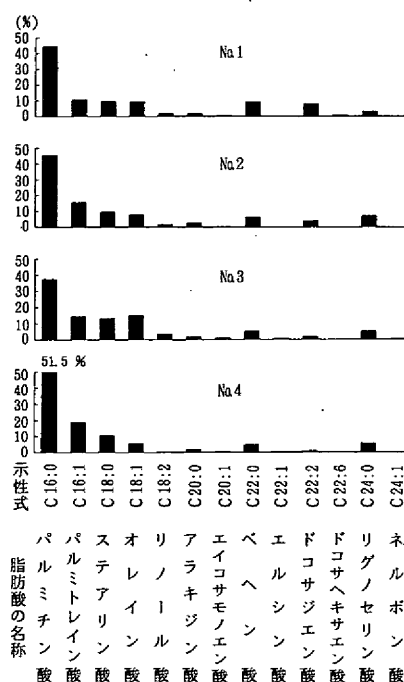
分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサノール-エチルエーテル-酢酸（80：30：1）またはヘキサノール-エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した<sup>8</sup>。

残存脂肪の脂肪酸組成を第642図に示す。残存脂肪から13種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：0）、パルミトレイン酸（C16：1）、ステアリン酸（C18：0）、オレイン酸（C18：1）、リノール酸（C18：2）、アラキジン酸（C20：0）、エイコサモノエン酸（C20：1）、ベヘン酸（C22：0）、エルシン酸（C22：1）、リグノセリン酸（C24：0）、ネルボン酸（C24：1）の11種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

4試料ともにほぼ似た脂肪酸組成のパターンを示した。いずれの試料も主要な脂肪酸はパルミチン酸で約38~52%分布していた。他の低級、中級脂肪酸は試料No. 1からNo. 3でパルミトレイン酸、ステアリン酸、オレイン酸がほぼ同程度分析し、試料No. 4ではこれら3つの

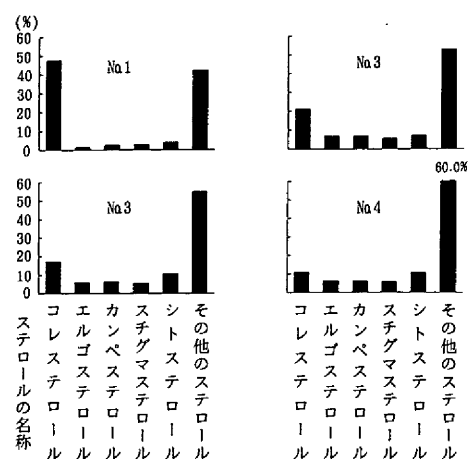
試料No.	試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	土器本体	909.6	10.8	0.0012
2	土器口縁部破片	71.7	2.3	0.0032
3	土器内部土壌	1129.5	10.6	0.0009
4	土器外側周辺付着土	132.7	7.9	0.0060

表21 津寺遺跡高田調査区土器埋納坑-3 出土の土器および土壌試料の残存脂肪抽出量



第642図 土器および土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

脂肪酸が記述順に多い方から少ない方へと分布していた。一般に考古遺物はパルミチン酸の分布割合が高い。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解してパルミチン酸が生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来していると推定される。また、高等動物、特に臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられるベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸は約10~13%分布していた。試料 No. 4 が多少他の3試料とは脂肪酸組成パターンが異なるのは、この試料が土器外側の周辺土壌を採取したものであり、土器内の内容物と土器外の土壌の両方の影響を受けているためと考えられる。



第643図 土器および土壌試料に残存する脂肪のステロール組成

### 5. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサノール-エチルエーテル-酢酸 (80 : 30 : 1) を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸 (1 : 1) を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてから、もう一度同じ展開溶媒で精製し、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第643図に示す。残存脂肪から17~23種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなどの7種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料 No. 1 で47%、No. 2 で17%、No. 3 で21%、最も少ない No. 4 で11%分布していた。即ちコレステロールの分布割合は土器そのもの、土器内土壌、土器上部、土器外側土壌の順に高かった。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2~6%含まれている。試料 No. 4 を除く他の試料のいずれもその数値をはるかに上回っていた。植物由来のシトステロールは約4~11%分布していた。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上<sup>9</sup>、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる<sup>10,11</sup>。土壌試料のコレステロールとシトステロールの分布比を表22に示す。表からわかるようにいずれの試料もその値が0.8以上を示し、特に試料 No. 1 ではその値が12.2という高いものであった。従っていずれの試料も動物脂肪が残存していたことを示唆していることから、土器内には動物遺体が存在した可能性が推定された。

### 6. 脂肪酸組成の数理解析

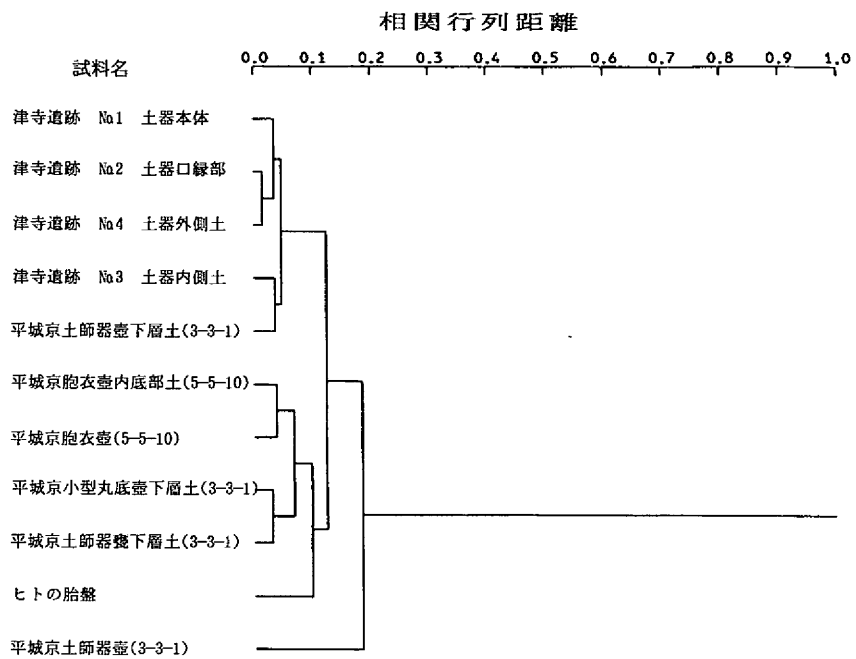
残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に平城京左京(外京)五条五坊十坪から出土した胞衣壺試料、平城京右京三条三坊一坪から出土した土師

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	47.47	3.89	12.20
2	17.25	10.55	1.64
3	21.09	7.23	2.92
4	10.94	10.74	1.02

表22 試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

器試料およびヒトの胎盤試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を第644図に示す。4試料すべてと他のすべての対照試料は相関行列距離が0.2以内で類似度が高いものであった。従って出土土器試料は胎盤を埋納していたものである可能性が高い。

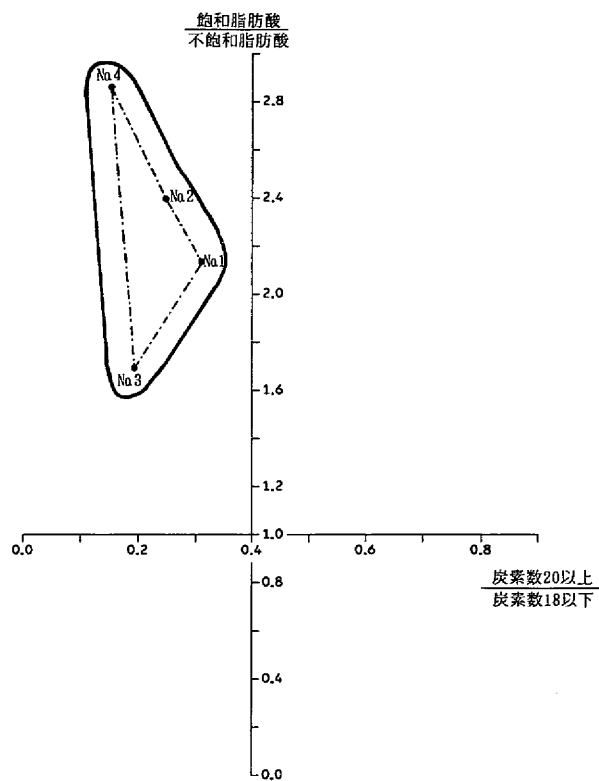


第644図 試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

## 7. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点に離れた位置にヒトの胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を第645図に示す。いずれの試料も第2



第645図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

象限内に分布し、同一群を形成した。この分布位置は高等動物の遺存体を示唆する所である。従って出土土器内には高等動物遺存体が存在した可能性が高い。

## 8. 総 括

津寺遺跡高田調査区土器埋納墳-3から出土した土器に残存する脂肪の分析を行った。残存する脂肪酸およびステロールの分析、数理解析の結果から、この土器試料内には胎盤に類する動物性遺存体が埋蔵されていたと判定できた。

### 参考文献

- 1 R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle : 「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10巻, 1979, pp260.
- 2 D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold : 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292巻, 1981, pp146.
- 3 R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle : 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäßinhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70巻, pp33.
- 4 中野益男 : 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻(6), 1984, pp124.
- 5 中野益男, 中岡利泰, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏 : 「平城京左京(外京)五条五坊十坪から出土した胞衣壺の残存脂質について」, 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書-昭和63年度』, 1989, pp5.
- 6 中野益男, 長田正宏, 中野寛子, 福島道広 : 「平城京右京三条三坊一坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について」, 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書-平成元年度』, 1990, pp79.
- 7 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏 : 「郷楽遺跡から出土した埋設土器に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 宮城県教育委員会.
- 8 M.Nakano and W.Fischer : 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」, 『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.Chem.』, 358巻, 1977, pp1439.
- 9 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教傳, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 眞, 田中 琢 : 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- 10 中野益男 : 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡-農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.
- 11 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子 : 「へロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『へロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第3集, 1987, pp191.

## IV. 津寺遺跡出土の動物遺体

早稲田大学

金子 浩昌

### 1. はじめに

出土した標本の詳細については別表にまとめたので、以下に今回の二つの調査地区である中屋、高田地区のそれぞれの標本について出土の傾向を時期別にまとめておきたいと思う。調査に当たり種々御教示いただいた岡山県古代吉備文化財センターの関係者に御礼申し上げる。

### 2. 概要

#### 中屋調査区－中・近世

検出された動物遺体にはヒトの歯と、シカの角片1、ウマ及びウシの歯牙、四肢骨があった。シカは角片のみで、ウマ、ウシの遺骸は遊離した臼歯とかなり破損した四肢骨であった。また、これらの歯牙、四肢骨に何らかのまとまりを示すような出土の状況はみられず、広範囲に散在するような在り方であった。標本のうち3BU-Iの右側上顎歯は数点のまとまりのあった唯一の例である。

確認された歯牙によるとウシがやや多く残されていたようである。

#### 中屋調査区－古代

検出された遺骸はやや少なく、大部分がウマの歯であった。多くは遊離した臼歯であり、破損した標本も多かったが、左側下顎前臼歯の揃う例、左右下顎骨の揃う例があり、顎骨が水田あるいは溝中に入れられていたことを推測させる。

#### 中屋調査区－古墳時代中期～後期

一点の標本が検出されているのみである。焼骨片である。住居跡からの検出であるので、カマド内からのものであるかも知れない。

#### 中屋調査区－弥生時代後期

種名の確認される標本はない。焼骨片など断片的な標本が2点あるのみである。

#### 高田調査区西半遺構－中・近世

大きな溝に沿うようにして出土している標本が多い。ウマ、ウシの歯牙と四肢骨である。四肢骨ではウマの中足骨などに完存する標本があるが、それ以外の四肢骨は骨体の保存はある程度良好であるが近・遠位部が破損する。またウシ脛骨の例のように金属器で叩き切ったような切痕のみられる標本があり、ウシの解体されたことを推測させる。

#### 高田調査区東半遺構－中・近世

ここでは10点近い歯牙、骨が出土している。歯よりも四肢骨が多い。アカニシが検出されている。

#### 高田調査区西半遺構－古代（第646図）

ウマの臼歯2点とウシの下顎骨がある。また溝-38上層で検出されたウマの上顎歯と下顎骨がある。

#### 高田調査区－古墳後期

この地区では溝中から出土するウマの臼歯と住居跡カマド内出土の焼骨片がある。焼骨は獣骨片で

あるが、種類は確認し難い。

### 3. 総括

中屋及び高田調査区出土の動物遺体について

#### 貝類

高田調査区でアカニシ、ハイガイが検出され、大形のアカニシが目立った。この貝は内湾棲で大形になり味も良い。中・近世の遺跡での出土が多く、内陸部まで運ばれている例もある。本遺跡での出土もそうした例の一つとして興味深い。

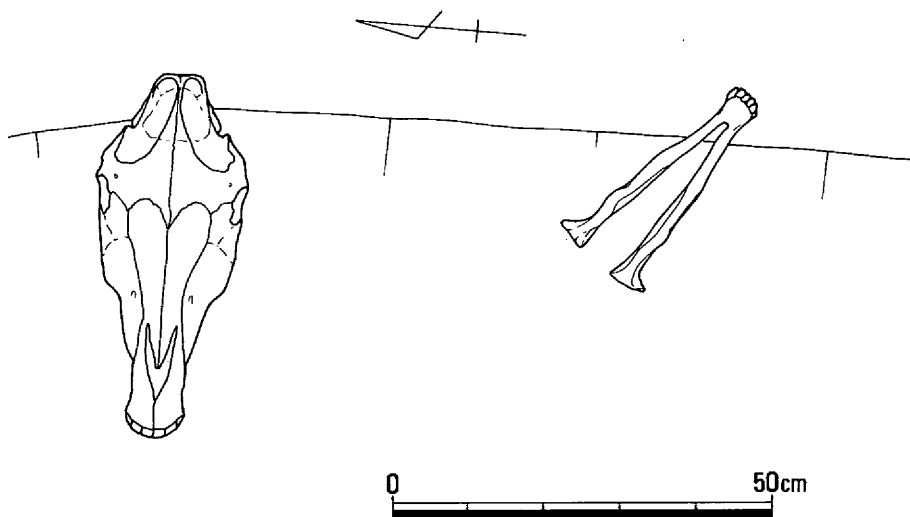
#### 獣類の遺体

弥生期に属すると思われる標本で獣種の確認できた標本はなかった。特にウマ、ウシについては特に注意したがこの時期の包含層には含まれていなかった。この時期ウマ、ウシについては今後の調査によらねばならない。

古墳時代後期の標本は高田調査区の住居跡カマド内の焼骨があるが、これについては種類が確認されていない。しかしおそらくこれにはイノシシ、シカなどの獣骨の焼けたものが含まれるのではないかと思われる。カマド内の灰などの精査によって焼骨の検出される機会は少なくない。今後の調査事例が増えれば当時の動物遺骸についての情報をさらに得ることができるはずである。

古代の獣骨遺体は中屋調査区でやや多かったが、高田調査区では少なかった。全般にウマの歯が目立ち、またこの調査区ではウマの上顎歯と下顎骨が出土している。上顎歯は口蓋面を下にした状態であり、下顎骨は骨質部がのこり、咬面を下にした状態、つまり逆さになるようなかたちであった。上顎歯の並び方から、ここに頭蓋のあったことが推定される。頭蓋と下顎骨はおそらく同一個体であろう。この遺骸は古代の溝-38が埋没する最終段階頃の時期に東肩部に投棄されたものと考えられている。頭蓋と下顎を別々におく例は幾例も知られている。本例もその一つであり、おそらく何か意図的なものがあったに違いない。これまで頭蓋と下顎骨が別々に出土する場合、その共伴関係が問題になることがあったが、おそらくそれは解消されるのであろう。

中・近世に属する獣骨はウマ、ウシを主としてもっとも多く出土している。量的にいずれの種類が多いかは判断し難いのではないかと思われる。



第646図 津寺遺跡高田調査区溝-38 ウマ出土状況概念図

整理 番号	調査区名		調査時遺構名	掲載遺構名	種別	部位	備考
	地区	地点					
1	中屋	H-5	溝2		ウシ	臼歯	臼歯破片
2	中屋	B-3	中世溝		ウマ/ウシ	肢骨	破片
3	中屋	E-1	SD01		シカ	角?	海綿質部のみが残存
4	中屋	E-1	SD01		ウシ	RM <sub>2</sub>	破損、歯冠高37.0
5	中屋	E-1	SD02		ウマ/ウシ	四肢片	四肢片のみ
6	中屋	E-3	中近世水田	-	ウマ/ウシ	肢骨	肢骨片のみ
7	中屋	E-3	中近世水田	-	ウシ	距骨R	ほぼ完存、GL59.57、B43.20、一部焼けた部分あり
8	中屋	E-3	中世水田	-	ウシ	下顎臼歯M <sub>2</sub>	破損、歯冠高35.0±
9	中屋	E-3	溝6		ウマ	LP <sub>4</sub> /M <sub>1</sub>	歯冠高50.0
10	中屋	M12-Ⅲ	中世水田	-	ウシ	LM <sub>3</sub>	歯冠長36.55、歯冠高15.49、歯冠高15.3
11	中屋	M12-Ⅲ	中世水田	-	ウマ/ウシ		破片
12	中屋	M12-Ⅲ	中世水田	-	ウマ	R下顎臼歯	歯冠高28.0
13	中屋	M12-Ⅲ	溝34		ウマ	RM <sup>1</sup> ?	歯冠高63.0
14	中屋	M12-Ⅳ	中世水田	-	ウシ	LM <sub>2</sub>	破損、歯冠高不明
15	中屋	M12-Ⅳ	大溝		ウシ	LM <sup>2</sup>	咬耗顕著、歯冠高19.0
16	中屋	M12-V	SD01		ウシ	臼歯	破片
17	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウシ	R?M <sup>3</sup> 、LM <sup>3</sup>	LM <sup>3</sup> :歯冠高57.0
18	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウシ	LM <sub>3</sub>	破損、歯冠高40.0±
19	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウマ	上顎臼歯	破片
20	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウシ	RM <sub>3</sub>	破片、歯冠長37.04
21	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウシ?		肢骨片(中手骨?)
22	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウマ/ウシ	四肢骨	破片
23	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウマ	LP <sup>4</sup>	歯冠長62.0
24	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウマ	RM <sup>1</sup>	歯冠高75.0±
25	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウマ	RM <sup>3</sup>	歯冠高64.0
26	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウマ	RP <sup>4</sup>	No.43と同一個体か。
27	中屋	3BU-I	中世水田	-	ウマ	RM <sup>1</sup>	No.43と同一個体か。
28	中屋	B-1	奈良溝群	-	ウマ	R?上顎臼歯	一個分か。
29	中屋	E-1	包含層	-	ウマ	RM <sup>1</sup>	歯冠高46.0
30	中屋	E-1	SA04		ウマ	上顎臼歯	破片
31	中屋	E-1	SD10		ウマ	上顎臼歯	破片
32	中屋	E-1	SD10		ウマ	上顎臼歯	破片
33	中屋	E-1	SD10		ウマ	LP <sub>2</sub> ~P <sub>4</sub> (一部の み)	P <sub>2</sub> :歯冠長33.14、歯冠幅14.56、歯冠高37.0 、P <sub>3</sub> :歯冠高49.0
34	中屋	E-3	溝26		ウマ	上顎臼歯	破片
35	中屋	M12-Ⅲ	古代水田	-	ウマ	LM、上顎臼歯	破片、歯冠高64.0±
36	中屋	M12-Ⅳ	古代水田	-	ウマ	LM <sub>1</sub> ?	破損、他に臼歯片あり。歯冠高58.0±
37	中屋	M12-V	SD10		ウマ	R下顎臼歯片	歯冠高46.0
38	中屋	3B-Ⅲ	包含層	-	ウシ	中手、中足、臼歯	破片のみ
39	中屋	3B-Ⅲ	包含層	-	ウマ	P <sub>4</sub> ~M <sub>3</sub> 、左右がそ ろっていたもの	右側がP <sub>4</sub> ~M <sub>3</sub> を残すが、左側は保存悪く部 分的に残存
40	中屋	E-2	No.20住居	竪穴住居-171	ウマ/ウシ	肋骨	焼骨
41	中屋	B-3	SK17	土壌-232	-		焼骨片2個
42	中屋	B-3	SK17	土壌-232	-	椎体	破片
43	高田	3B-Ⅲ	溝1	-	ウマ	RM <sup>2</sup>	破片
44	高田	3B-1	No.5溝	溝-54	ウマ	RP <sub>3</sub> /P <sub>4</sub>	歯冠高55.0
45	高田	M1-Ⅳ	溝2	-	ウシ	L中足	GL22.0±、Bp44.69、SD24.29、Bd45. 45
46	高田	M1-Ⅳ	溝2	-	ウシ		破片
47	高田	M1-Ⅳ	溝2底部	-	ウシ	L?焼骨	破損
48	高田	M1-V	溝2下層	溝-69	ウマ	R上腕骨	近・遠位部破損、SD31.30
49	高田	M1-V	溝2下層	溝-69	ウシ	R焼骨部欠	Bp71.63、SD34.25、遠位部欠
50	高田	M1-V	溝2上層	溝-69	ウシ	RM <sup>2</sup> /M <sup>3</sup>	破損、歯冠高47.0±
51	高田	M1-V	落ち込み1	土壌-6	ウシ	臼歯	破片
52	高田	M1-V	落ち込み1	土壌-6	ウシ	乳歯	咬耗の進んだ乳歯
53	高田	M1-Ⅳ	土壌6	土壌-15	ウマ	LM <sub>2</sub>	歯冠高47.0±
54	高田	M1-Ⅱ	土壌14上面包含層	-	ウシ	RM <sub>3</sub>	破損が顕著、推定歯冠長40.0±
55	高田	M1-Ⅱ	古代落ち込み上層	-	ウマ	下顎臼歯	1~2個分程度の破片
56	高田	M1-Ⅱ	溝10(南側)	溝-58	ウシ	LM <sup>3</sup>	歯冠長30.0、歯冠幅22.0、咬耗の進んだ臼歯
57	高田	M1-Ⅱ	溝6	溝-58	ウシ/ウマ		破片
58	高田	M1-I	土壌24	土壌-11	ウシ	R下顎M <sub>1</sub> ~M <sub>3</sub>	近心部、枝部を破損、咬耗の進んだ臼歯
59	高田	M1-I	溝1	溝-54	ウシ	R上腕骨	SD35.55、近・遠位部欠損、内側に切痕
60	高田	M1-I	溝1	溝-54	ウシ	脛骨?	破片

表23 岡山県津寺遺跡獣骨同定結果一覧(1)



整理 番号	調査区名		調査時遺構名	掲載遺構名	種別	部位	備考
	地区	地点					
61	高田	M1-I	溝1	溝-54	ウマ	R中足骨	GL23.00、Bp41.49、SD23.49、Bd41.70
62	高田	M1-I	溝1下層	溝-54	ウマ	L中足骨	GL250.0、BP26.08、中央径28.27
63	高田	M1-I	溝1下層	溝-54	ウシ	R脛骨	SD37.39、Bd59.74、近位欠損
64	高田	M1-I	溝1下層	溝-54	ウマ	L脛骨	Bd66.30、近位端欠損、中央部外側に切痕あり。
65	高田	M1-I	溝1下層	溝-54	ウマ	R尺骨	遠位部の一部残存
66	高田	P-1	No.14溝	溝-88	ウシ	(臼歯)	咬耗わずか
67	高田	P-3	No.1溝	溝-61	ウシ	中手/中足骨	遠位骨端片
68	高田	P-3	No.1溝	溝-61	-	肋骨	破片、数個分あり
69	高田	P-3	No.1溝	溝-61	ウシ	L脛骨	骨体部残存。SD36.09、BT75.19、近位部欠損
70	高田	P-3	No.1溝	溝-61	ウシ	L上腕骨	SD34.55±、近・遠位破損
71	高田	P-3	No.1溝	溝-61	ウシ	L上腕骨	SD38.67、Bd85.44±2
72	高田	P-3	No.1溝	溝-61	ウマ	R脛骨	SD32.00±、近・遠位破損
73	高田	P-3	No.1溝	溝-61	ウシ	L肩甲骨	頸部部幅52.80、近・遠位破損
74	高田	P-4	No.5溝	溝-61	ウマ	L中足骨	近位端片、Bp47.87
75	高田	3B-III	溝2上層	溝-38	ウマ	頭骨、下顎骨	本文参照
76	高田	M1-VI	溝7	溝-41	ウマ	LM <sup>1</sup>	破損、歯冠高55.0
77	高田	M1-V	溝8と落ち込み5	たわみ-3	ウマ	RM <sub>2</sub>	歯冠高61.0
78	高田	3B-I	No.6住居	竪穴住居-9	ウシ/ウマ?		カマド内出土、焼骨片
79	高田	M1-III	住居8	竪穴住居-61	ウシ/ウマ	肋骨、肢骨、椎体?	カマド内出土、焼骨
80	高田	A1南半	住居4	竪穴住居-71	ウシ/ウマ	肋骨	破片、焼骨
81	高田	M1-III	Pit25	柱穴	-	-	骨器
82	高田	3B-I	No.5溝	溝-54	ウシ	R橈骨	破損

GL:全長、SD:骨体最小径、Bd:遠位端幅

表24 岡山県津寺遺跡獣骨同定結果一覧(2)

整理 番号	調査区名		調査時遺構名	掲載遺構名	種別	部位	備考
	地区	地点					
91	高田	P-4	No.7井戸北	井戸-3	アカニシ		破片
92	高田	M1-V	溝2下層	溝-69	アカニシ	殻口、殻軸	破片、推定殻高140.00
93	高田	M1-IV	D4下層	溝-54	アカニシ	殻軸片	
94	高田	M1-IV	包含層	-	ハイガイ	L殻	破片、殻長45.0±

表25 岡山県津寺遺跡貝類同定結果一覧

整理 番号	調査区名		調査時遺構名	掲載遺構名	部位	備考
	地区	地点				
101	中屋	M12-III	土壌6	土壌-274	臼歯	熟年?一個体分か、上・下顎に植立していたものが別にある
102	高田	M1-V	溝2下層	溝-69	脛骨	近・遠位部欠

表26 岡山県津寺遺跡人骨同定結果一覧



第647図 津寺遺跡出土の動物遺体(1) 92はアカニシ、73はウシ、以外はウマ (番号は一覧表と対応)



58



45



49



71



63



59



70

1/2

第648図 津寺遺跡出土の動物遺体(2) ウシ (番号は一覧表と対応)

## V. 津寺遺跡出土の植物遺体

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1. はじめに

津寺遺跡では、これまでに花粉分析・植物珪酸体分析や住居構築材の樹種同定等が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1995など）。その結果、古墳時代の住居構築材は、調査した試料全点がクリであった。また、花粉分析結果から時代時期は不明であるが、本遺跡周辺にアカガシ亜属を中心とする暖温帯常緑広葉樹林が見られたことが指摘されている。同様の植生は、西川2区で行った古墳時代頃の花粉分析でも確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1995）。これらの調査結果により、本遺跡周辺の古植生や用材選択の一端が明らかになりつつある。

本報告では、中屋調査区から出土した木製品および高田調査区から出土した炭化材の樹種を明らかにし、過去の用材選択に関する資料を得る。

### 2. 木材の樹種同定

#### 試料

試料は、中屋調査区から出土した木製品6点（試料番号1～6）と、高田調査区から出土した炭化材1点（試料番号7）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表27に記した。

#### 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で透過光による木材組織の観察を行い、その特徴から種類を同定する。

炭化材は木口・柾目・板目の3断面の割断面を作製し、双眼実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### 3. 結果

樹種同定結果を表27に示す。炭化材（試料番号7）は、肉眼で組織の痕跡は認められるものの、保存状態が悪く樹種の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹1種類（ヒノキ属）と広葉樹4種類（ブナ属・カツラ・イスノキ・トチノキ）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

#### ヒノキ属 (*Chamaecyparis sp.*) ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞。

#### ブナ属 (*Fagus sp.*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合する。道管の分布密度は高いが、年輪界付近ではやや低くなる。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は大型で対列状～階段状に配列する。

試料番号	掲載番号	調査区	出土遺構	時期	器種	樹種
1	W 8	中屋調査区	溝-70	中世	木器(折敷)	ヒノキ属
2	W 9	中屋調査区	溝-70	中世	木器(漆椀)	トチノキ
3	W10	中屋調査区	包含層	中世	木器(横櫛)	イスノキ
4	W 5	中屋調査区	井戸-5	近世	木器(漆皿)	カツラ
5	W 7	中屋調査区	土壇-328	中世~近世	木器(漆椀)	ブナ属
6		中屋調査区	掘立柱建物-22	古代	柱材	ヒノキ属
7		高田調査区	焼成土壇-2	古墳時代後期	木炭(燃料材)	不明

表27 樹種同定結果

放射組織は同性~異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

**カツラ (*Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.*) カツラ科カツラ属**

散孔材で、管孔は単独、または2~3個が複合、分布密度は高い。晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1~2細胞幅、1~30細胞高。

**イスノキ (*Distylium racemosum Sieb. et Zucc.*) マンサク科イスノキ属**

散孔材で、道管はほぼ単独、横断面では多角形。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性Ⅰ~Ⅱ型、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は帯状または短接線状で、ほぼ等間隔に配列する。

**トチノキ (*Aesculus turbinata*) トチノキ科トチノキ属**

散孔材で管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2~3(5)個が複合する。道管は単線孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1~15細胞高で階層状に配列する。

#### 4. 考察

出土した木製品は、折敷・漆器(椀・皿)・櫛・柱に分類される。折敷にヒノキ属が使用される例は、これまでも各地で確認されている(島地・伊東, 1988; 伊東, 1990)。岡山県においても、百間川原尾島遺跡から出土した平安時代前期の折敷の全てがヒノキ属であった(未公表資料)。製品が薄い板状となることから、仮に加工が容易な樹種が選択されたと考えられる。ヒノキ属は木理が通直で板状の加工が容易であり、加えて耐水性等に優れる。このことが選択された背景に考えられる。

漆器は椀にブナ属とトチノキ、皿にカツラが同定された。いずれも漆器の本地として使用される木材であり、特にブナ属とトチノキは縄文時代から近世まで各地の遺跡で多数確認されている(島地・伊東, 1988; 伊東, 1990)。ブナ属とトチノキは、乾燥が難しく、変形などの狂いも多いが、大量に入手できたために使用量は多かったとされる(橋本, 1979)。近世では漆器の本地として最も安価で一般的な樹種であったと考えられている(北野, 1993)。本遺跡周辺の古植生を考慮すれば、これらの木材は製品または原料として他地域から搬入された可能性が高い。このことは、中世にブナ属やトチノキが漆椀の素材として適材として選択的に利用されていたことを示している。カツラはブナ属やトチノキに比較すると出土例が少ない。橋本(1979)の資料を見ても、カツラを本地として利用してい

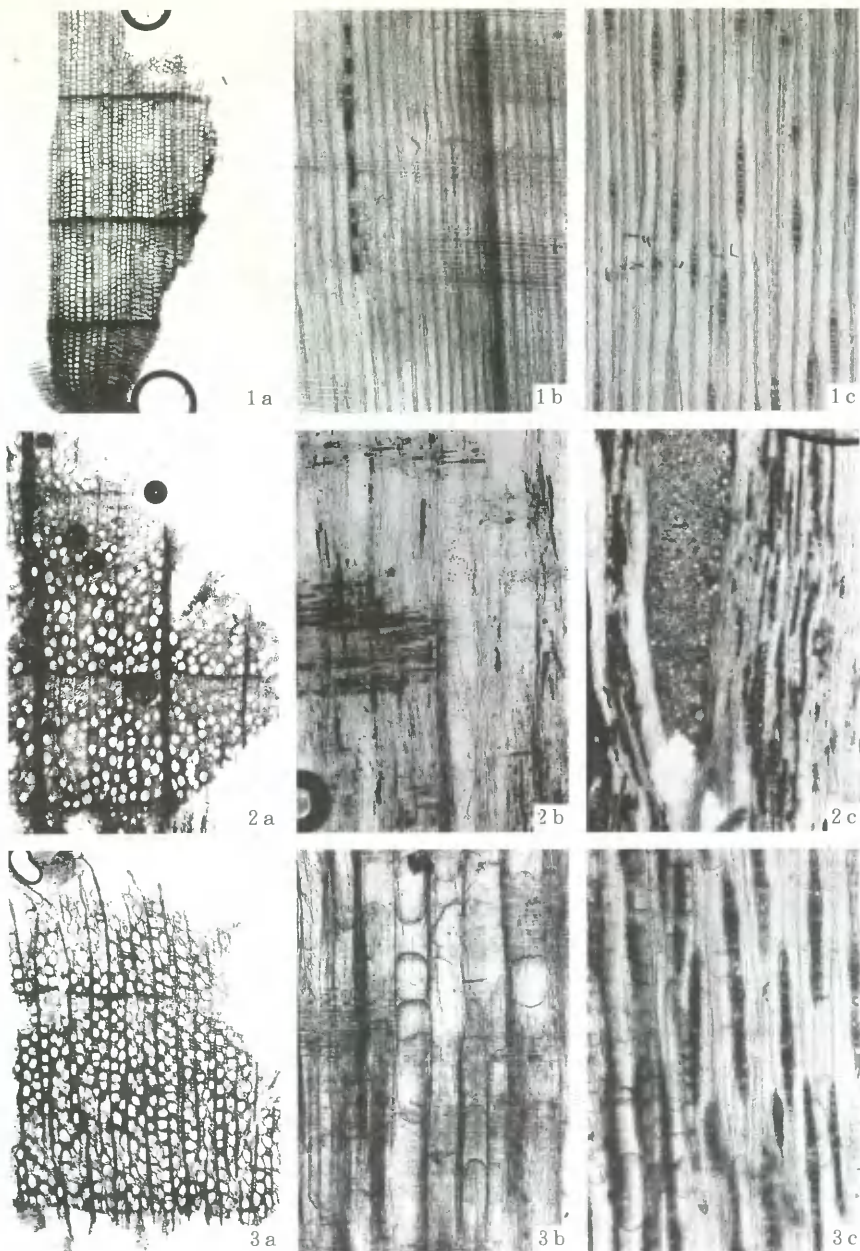
た地域は、ブナ属とトチノキよりも少ない。カツラは欠点の少ない材質を有するから、木地としてはブナ属やトチノキよりも上質といえる。カツラの使用が少ない背景には、分布の問題や欠点が少ないために他の用途にも多く使用されている等の理由が挙げられる。また、漆器としてブナ属やトチノキよりもランクが上の可能性もあり、そのことも確認例が少ない理由として考えられる。現時点では、過去の漆器の用材等に関する詳細が明らかになってはおらず、今後さらに類例を蓄積することが必要である。

櫛はイスノキであった。櫛については、百間川原尾島遺跡でもイスノキ近似種が確認されている（未公表資料）。同様の例は西日本を中心に多数知られており、（島地・伊東，1988；伊東，1990）、過去においてイスノキが櫛の用材として一般的であったことを示している。現在、櫛の材料としてはツゲ（柘植）が最高級品として知られているが、遺跡から出土した櫛にツゲが確認された例は少ない。このことは、過去においてイスノキが最適の木材として認識されていた可能性を示唆する。いつ頃からツゲが多くなるのか、現時点では明らかではない。しかし、当社が行った調査の中には近世の遺跡から出土した櫛の多くがイスノキであった結果もあり、ツゲの使用量が増えるのは新しい時期の可能性もある。今後類例を蓄積することで明らかにできよう。

柱材はヒノキ属であった。ヒノキ属は日本書紀に宮殿の柱材に使用するように用途を定めた記述があるが、平城宮等の調査結果からこの種類が柱材に用いられたことが明らかにされている（伊東・島地，1979；島地ほか，1980）。また、法隆寺に見られるように（西岡・小原，1978）、寺院の構築材としても多数使用されていたようである。このような特殊な建物の柱材に使用された背景には、耐水性や強度に優れること、白木の美しさ、独特の芳香等が挙げられる。今回の試料も特殊な建物の柱材として用いられた可能性があるが、発掘調査では明らかにされていない。

#### <引用文献>

- 橋本鉄男（1979）ものと人間の文化史31 ろくろ. 444p., 法政大学出版局.
- 伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ. 木材研究・資料, 26, p.90-189.
- 伊東隆夫・島地 謙（1979）古代における建造物柱材の樹種. 木材研究資料, 14, p.49-76.
- 北野信彦（1993）日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費. 日本民具学会編「食生活と民具」, p.81-102, 雄山閣.
- 西岡常一・小原次郎（1978）法隆寺を支えた木. NHKブックス.
- 小原二郎（1972）木の文化. 217p., 鹿島出版会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1995）津寺遺跡西川調査区の土壌分析. 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 津寺遺跡2（その2）山陽自動車道建設に伴う発掘調査」, p.629-634, 岡山県教育委員会.
- 島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.
- 島地 謙・伊東隆夫・林 昭三（1980）古代における宮殿・官衙の使用樹種. 古文化財編集委員会編「考古学・美術史の自然科学的研究」, p.249-260, 日本学術振興会.



1 ヒノキ属 (試料番号1)

2 ブナ属 (試料番号5)

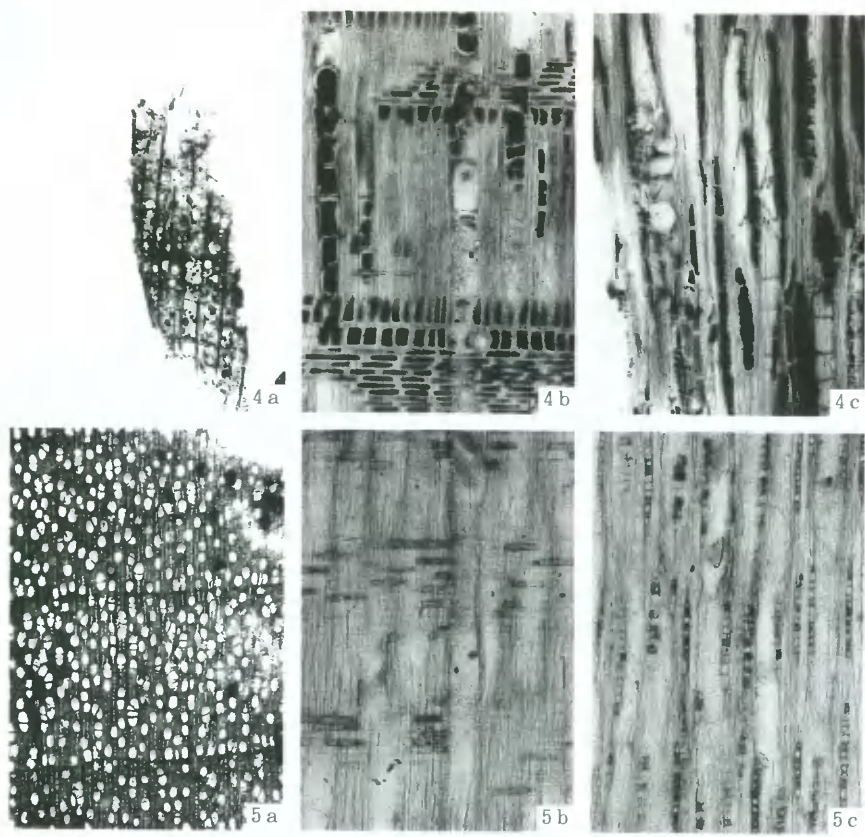
3 カツラ (試料番号4)

a: 木口, b: 柃目, c: 板目

200 μm : a

200 μm : b, c

第649図 津寺遺跡出土の木材(1)



- 4 イスノキ (試料番号3)
- 5 トチノキ (試料番号2)
- a: 木口, b: 柃目, c: 板目

200  $\mu$ m : a  
 200  $\mu$ m : b, c

第650図 津寺遺跡出土の木材(2)



## VI. 津寺遺跡出土柱材の年代および樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1. はじめに

津寺遺跡では、これまでも花粉分析等による古植生変遷の検討や、樹種同定による木製品等の用材選択の検討などが行われてきた（パリノ・サーヴェイ株式会社，1995；未公表資料）。花粉分析結果から、古墳時代頃の遺跡周辺には常緑広葉樹を主とした植生がみられたことが指摘されている。また木製品の樹種同定結果では、櫛にイスノキ、漆椀にトチノキなどが認められている。

本報告では、奈良時代の柱根及び弥生時代中期の炭化材について、放射性炭素年代測定を行い、その年代に関する資料を得る。また、柱材などの用材を明らかにするため、2点の試料について樹種同定を実施する。

### 2. 試料

試料は、中屋調査区掘立柱建物-21（奈良時代）から出土した柱根（試料番号1）と、堅穴住居-125（弥生時代中期）から出土した住居構築材と考えられる炭化材1点（試料番号2）である。各試料の詳細は、分析結果と共に表28に記した。

### 3. 方法

#### 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

#### 樹種同定

試料は、剃刀の刃を用いて、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

炭化材は木口・柾目・板目の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### 4. 結果

年代測定結果及び樹種同定結果を表28に示す。堅穴住居-125から出土した炭化材は、組織の保存状態が良好ではなく、樹種の同定には至らなかった。ヒノキ属の解剖学的特徴など以下に記す。

#### ヒノキ属 (*Chamaecyparis sp.*) ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

調査区	遺構	資料の質	樹種	年代(1950年よりの年数)	Code No.
中屋調査区	掘立柱建物-21	木材	ヒノキ属	1,210±70 A.D. 740	Gak-18928
中屋調査区	竪穴住居-125	炭化材	広葉樹	2,740±90 790 B.C.	Gak-18929

表28 放射性炭素年代測定結果及び樹種同定結果

## 5. 考察

### 年代について

竪穴住居-125から出土した炭化材は、 $2,740 \pm 90$  y. B.P.であった。また、掘立柱建物-21から出土した柱根は $1,210 \pm 70$  y. B.P.であった。前者は誤差範囲を考慮に入れても考古学的所見から推定されている年代観よりやや古い。一方、後者は考古学的所見から推定されている年代観と調和的である。

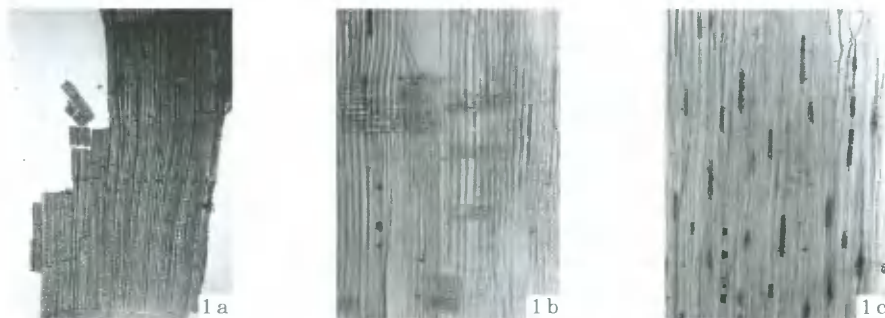
### 用材について

奈良時代の柱根はヒノキ属であった。同様の結果は、同調査区の掘立柱建物-22から出土した古代の柱材でも得られている。これらの結果から、ヒノキ属が柱材として一般的な種類のひとつであったことが推定される。一方、弥生時代中期の住居址から出土した炭化材は広葉樹であった。このことから、奈良時代とは用材が異なっていた可能性がある。津寺遺跡では、竪穴住居-122（古墳時代中期）から出土した炭化材でクリが同定されており、同様に奈良時代とは異なった傾向がみられる。しかし、本地域では住居構築材の樹種に関する資料が少なく、現時点で住居や時代による用材の違いがあったのか否かは不明である。資料の蓄積が望まれる。

### <引用文献>

パリオ・サーヴェイ株式会社（1995）津寺遺跡西川調査区の土壌分析. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98「津寺遺跡2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査10（その2）」, p.629-634, 岡山県教育委員会

島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.



1 ヒノキ属 (SB03) a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200  $\mu$ m: a  
200  $\mu$ m: b, c

第651図 津寺遺跡出土の柱材

## VII. 津寺遺跡の植物珪酸体・花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

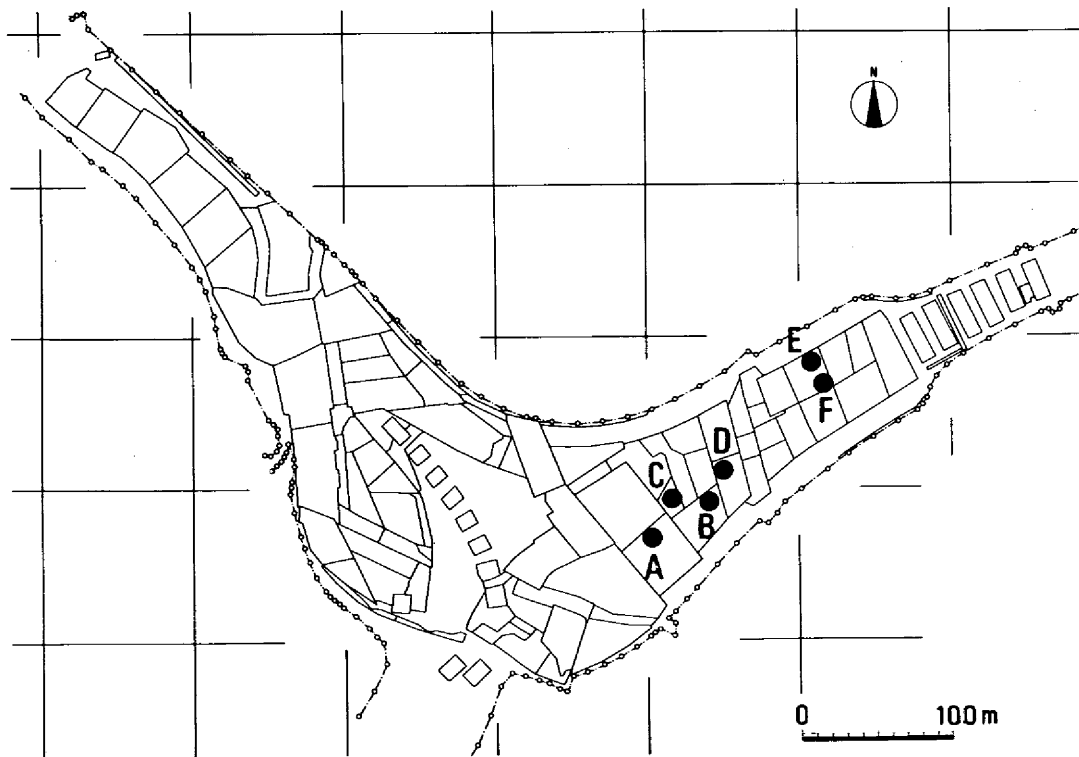
### 1. はじめに

岡山県の地形は、県北部の中国山地、県中部の吉備高原、県南部の岡山平野・倉敷平野などの平野部に大きく区分される。このうち、岡山市から倉敷市にかけて広がる岡山平野は、旭川や笹ヶ瀬川などの数多くの河川が流れている。岡山平野周辺の山地には、山砂利層や段丘礫層などの第四系が分布するとされている（和田，1987）。

津寺遺跡は、岡山平野の北西部の足守川の氾濫原上に立地する。

これまでの発掘調査により、本遺跡では弥生時代～近世にわたる水田址などが検出された。A～D地点（中屋調査区）では、弥生時代の住居址や弥生時代～古墳時代にかけての水田址が検出された。ことにD地点では、弥生時代後期の水田址において「島状高まり」が検出されている。岡山県内では「島状高まり」が水田址に構築されることは稀ではないが、本遺構の性格は不明である。一方、E・F地点（高田調査区）では、古墳時代初頭の水田層やこれを削る旧河道跡が検出された。

今回、本遺跡の水田層を主体的に弥生時代以降中世にわたる遺跡と遺跡周辺地域の古植生や稲作の消長・様態について自然科学分析を応用し検討することを目的として、植物珪酸体分析・花粉分析を実施した。



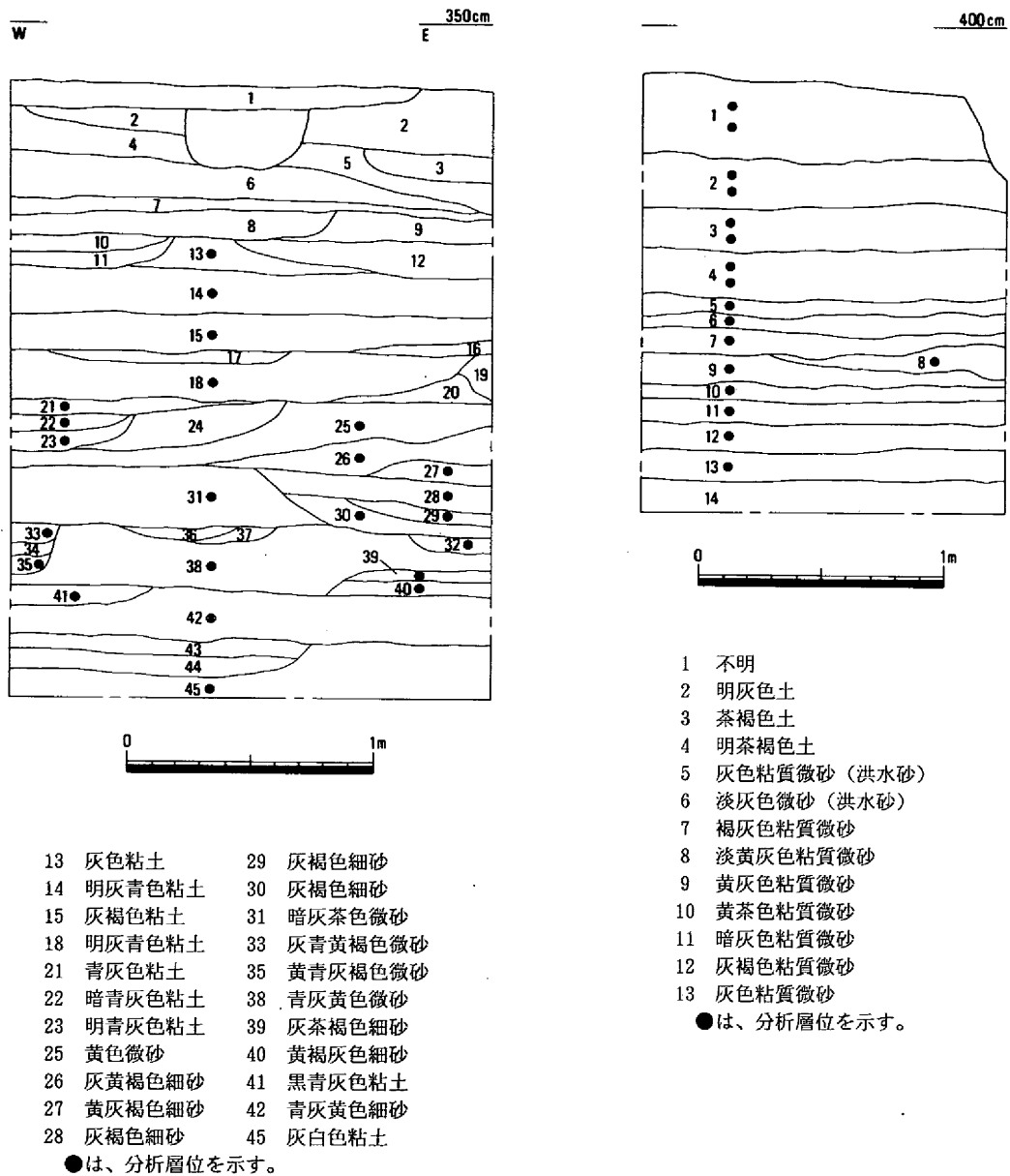
第652図 試料採取地点の位置

## 2. 試料

試料は、A～Fの6地点から同文化財センターにより採取された（第652図）。次に各地点ごとに採取された試料について述べる。

### A地点

本地点の層序は粘土層と砂層からなり、45層に分層されている（第653図）。ただし、層序の詳細な上下関係は、複雑な様相を呈しているため不明である。試料は、上位から13・15・18・21～23・25～35・38～42・45層から各層1点ずつ採取され、植物珪酸体分析の試料とした。各層の時代・時期は、28～45層までが弥生時代中期後半～後期、26層が弥生時代後期の水田層、25層が弥生時代末の床土、6層～18層が古墳時代初頭とされ、とくに6層は洪水性堆積物とされている。

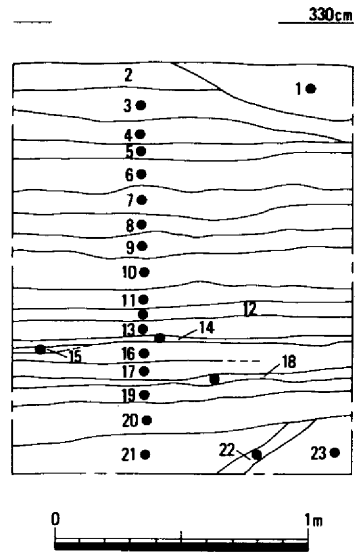


第653図 A地点 資料採取地点の土層断面

第654図 B地点 資料採取地点の土層断面

**B地点**

本地点の層序は砂質の堆積物からなり、14層に分層され（第654図）、洪水性堆積物とされる砂層（5・6層）を挟む。試料は、1～4層が各層上下2点ずつ採取され、5～13層が各層より1点ずつ採取され、合計16点を植物珪酸体分析の試料とした。各層の時代・時期は、8～10層が弥生時代後期と推測され、7層が古墳時代初頭、5層・6層が古墳時代初頭とされている。



- |             |              |
|-------------|--------------|
| 1 灰黄橙色粘土    | 14 暗橙灰色粘土    |
| 3 淡灰黒色粘質微砂土 | 15 にぶい黄橙色粘質土 |
| 5 淡灰白色微砂    | 16 灰橙色粘土     |
| 6 淡灰黒色粘土    | 17 不明        |
| 7 淡青灰橙色粘土   | 18 不明        |
| 8 暗青灰色粘土    | 19 不明        |
| 9 青灰色粘土     | 20 不明        |
| 10 青灰色粘土    | 21 灰黄橙褐色粘質土  |
| 11 淡青灰橙色粘質土 | 22 暗灰橙色粘質土   |
| 12 淡橙青灰色粘土  | 23 暗灰色粘質土    |
| 13 褐色粘質微砂   |              |

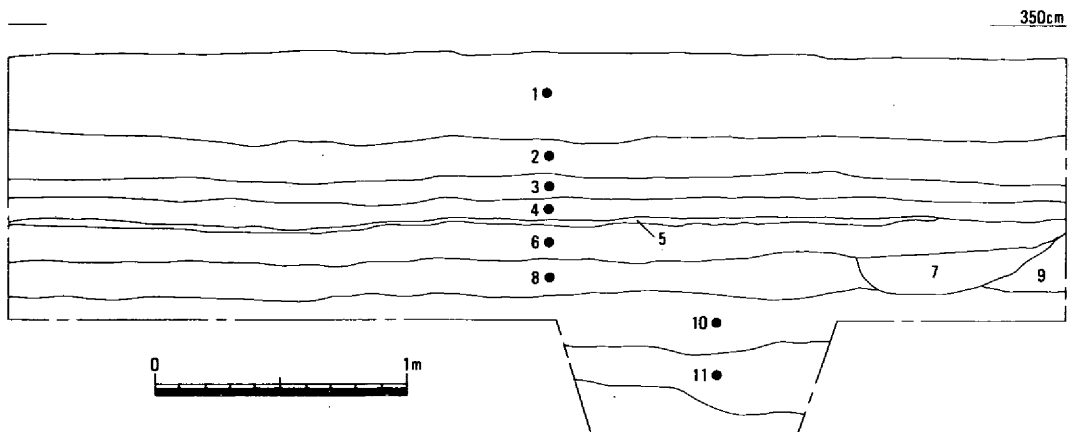
●は、分析層位を示す。

第655図 C地点 試料採取地点の土層断面

**C地点**

本地点の層序は、23層に分層されている（第655図）。発掘調査所見によると、19層以深が弥生時代中期以前、14～17層が弥生時代中期後半、11～13層が弥生時代後期、5～10層が古墳時代初頭、3層が古墳時代後期～奈良時代、1層が奈良～平安時代の水田層とされている。また、溝-320は、中世（13世紀後半）に構築されたと推測されている。

試料は、1～23層および溝-320埋積物からそれぞれ層位試料として合計22点採取された。



- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 明茶褐色粘質土       | 8 灰～灰オリーブ色粘質微砂   |
| 2 明黄茶褐色微砂土（洪水砂） | 9 灰オリーブ色～薄茶色粘質微砂 |
| 3 灰オリーブ色～明黄色粘質土 | 10 灰オリーブ色粘質砂     |
| 4 灰オリーブ色～明黄色粘質土 | 11 灰褐色粘質土        |
| 6 茶褐色微砂         |                  |

●は、分析層位を示す。

第656図 D地点 試料採取地点の土層断面

### D地点

本地点の層序は、11層に分層されており、1層は古墳時代以降の堆積層、2層は洪水性堆積物、3・4層は古墳時代初頭の水田層、5層はその床土とされている（第656図）。なお、8層も水田層の可能性があるとされているが、時代・時期については不明である。

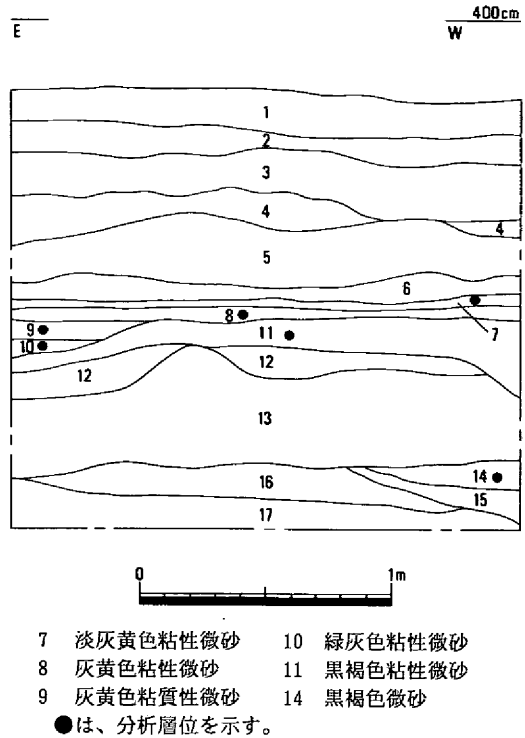
試料は、1～4・6・8・10・11層の各層より合計8点（試料番号1～8）採取され、全点を分析に供した。

### E地点

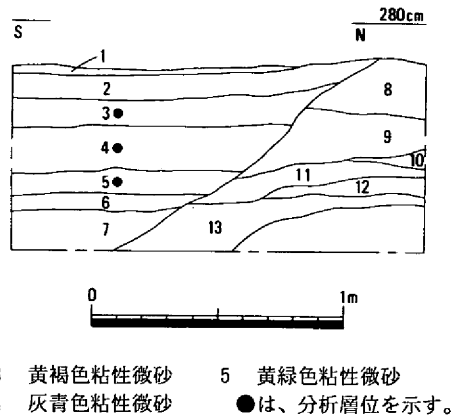
本地点の層序は、複雑な様相を呈しているが19層に分層され、シルトと砂の堆積物からなり、洪水性堆積物とされる砂層を挟む（第657図）。試料は、上位から7～11・14層の各層から採取され、これら6点を植物珪酸体分析・花粉分析の試料とした。各層の時代・時期は、11層が弥生時代初頭と推測され、7～10層が弥生時代後期とされており、その上位に古墳時代初頭の水田層、古墳時代初頭の洪水性堆積物が認められている。

### F地点

本地点の層序は、13層に分層され、8～13層を削って1～7層が堆積する（第658図）。これらの層は、砂質の堆積物からなる。試料は、3～5層から採取され、これら3点を植物珪酸体・花粉分析の試料とした。試料採取層位の時代・時期は、弥生時代後期とされている。



第657図 E地点 試料採取地点の土層断面



第658図 F地点試料採取地点の土層断面

## 3. 分析方法と結果の表示法

### 植物珪酸体

試料約5gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離（臭化亜鉛：比重2.3）を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これをプレパラックで封入して、プレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下で、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と

呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類を参考にして同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類(Taxa)の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で算出する。なお、●○は1%未満を示す。また、機動細胞珪酸体が100個体未満の試料については、植物珪酸体組成が歪曲している可能性があるため、統計的に扱うことを控え、検出する植物珪酸体の種類を+で表示するだけにとどめる。

#### 花粉化石

花粉・孢子化石は、湿重約10gの試料について、KOH処理、篩別(250 $\mu$ m)、重液分離ZnBr<sub>2</sub>:比重2.2)、HF処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離、濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石の群集の組成表として表示する。出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除いた数を基数とした百分率で算出した。なお、図表中で複数の種類をハイフン(-)で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

### 4. 植物珪酸体・花粉化石の産状

#### A・B地点

##### a. 植物珪酸体

A地点の分析結果を表29・第659図に示し、B地点の分析結果を表30・第660図に示す。イネ科起源の植物珪酸体は、全試料とも短細胞珪酸体の占める割合が高い。機動細胞珪酸体は保存状態が悪く、表面に多くの小孔(溶食痕)が認められる。とくにB地点の2層下部・1層下部およびA地点の41・40・38・31・27各層から採取された試料では、機動細胞珪酸体の検出個体数が少ない。以下、各地点ごとに植物珪酸体の産状を述べる。

A地点の短細胞珪酸体の組成には、著しい変化が認められず、各層準ともタケ亜科が多産し、ヨシ属・イネ属・キビ族・イチゴツナギ亜科などが随伴する。また、機動細胞珪酸体の組成は45層でタケ亜科が多産するが、それより上位の層位ではイネ属が高率に検出され、ヨシ属・ウシクサ族を伴う。また、42~14層では稀にイネ属短細胞珪酸体列や稲籾に形成される珪酸体である穎珪酸体も検出される。

B地点の短細胞珪酸体の組成は、全層準ともタケ亜科が多産しており、著しい変化がみられない。これに対して、機動細胞珪酸体の組成は、5層と6層の間を境として変化する。6層~13層では、11層を除いてイネ属が多産する。これに対して、5層より上位になると、イネ属の出現率が低下し、タケ亜科が増加する。この他に、ヨシ属・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などが随伴するが、組成的に大きな変化はない。

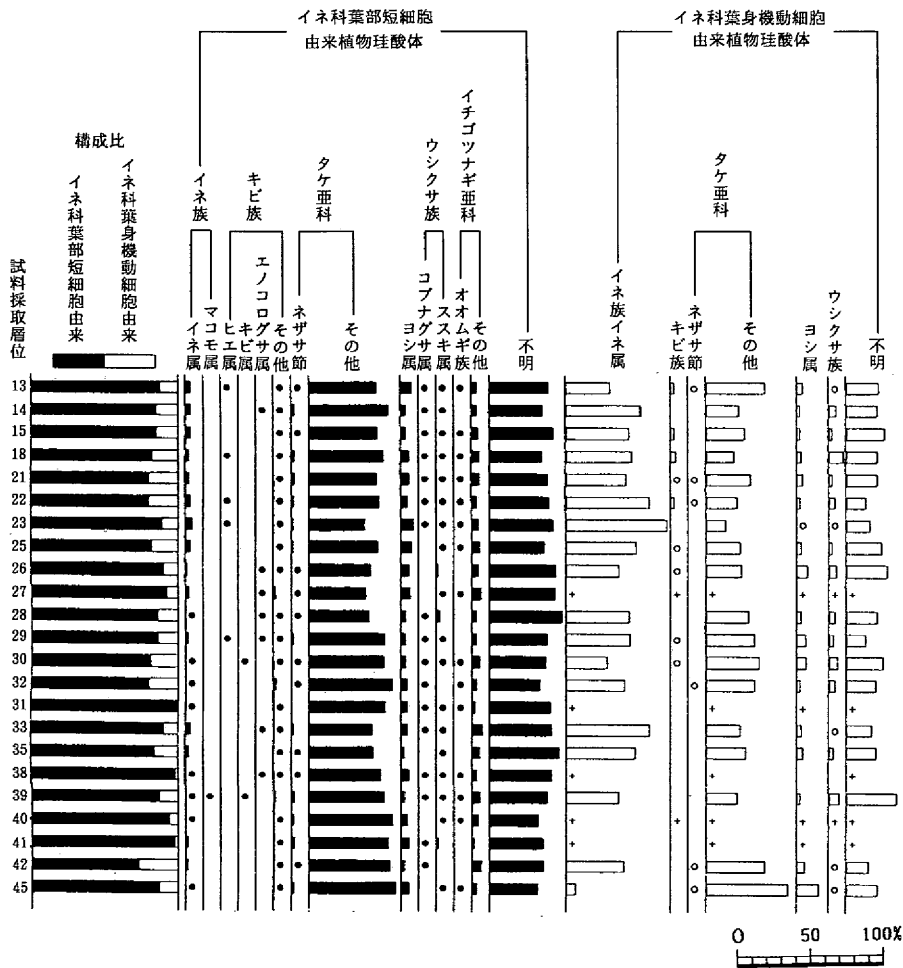
#### C地点

##### a. 植物珪酸体

結果を表31・第661図に示す。短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに保存状態は良好であるが、7層・15層・17層・18層・22層では機動細胞珪酸体がほとんど検出されない。

種類(Taxa)	試料採取層位	13	14	15	18	21	22	23	25	26	27	28	29	30	32	31	33	35	38	39	40	41	42	45
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>																								
イネ族イネ属		22	17	20	7	7	12	34	16	10	14	5	10	4	2	5	25	9	1	3	3	5	3	1
イネ族マコモ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キビ族ヒエ属		3	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族キビ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
キビ族エノコログサ属		-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-
キビ族(その他)		5	12	4	2	2	3	8	2	9	10	2	1	3	5	2	5	1	3	3	7	2	1	3
タケ亜科ネササ節		6	12	3	11	8	5	9	6	7	4	7	10	2	4	-	12	3	3	13	9	8	2	8
タケ亜科(その他)		340	322	303	232	188	198	307	238	395	280	285	369	230	241	275	415	248	240	333	354	248	159	409
ヨシ属		49	18	17	21	22	17	64	37	52	42	22	23	15	15	21	44	12	23	13	28	23	6	36
ウシクサ族コブナグサ属		1	1	1	1	3	2	3	-	-	-	-	3	1	1	2	1	1	1	1	-	2	1	-
ウシクサ族ススキ属		1	2	3	1	1	1	6	1	11	7	15	6	3	-	2	5	2	1	1	3	5	-	3
イネゴツナギ亜科オオムギ族		1	-	1	4	2	1	2	1	-	1	-	-	1	1	1	-	-	-	1	1	-	-	1
イネゴツナギ亜科(その他)		25	18	23	21	23	13	37	27	40	47	25	19	23	11	13	69	28	15	35	28	6	17	19
不明キビ型		106	83	92	70	39	56	180	91	200	152	185	122	76	74	69	149	119	61	151	90	48	52	61
不明ヒゲシバ型		109	87	117	51	52	52	91	60	158	122	108	114	65	48	96	152	73	93	58	73	75	28	108
不明ゲンテク型		83	48	72	43	74	69	86	41	80	48	59	41	36	25	54	110	80	54	43	44	46	26	60
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>																								
イネ族イネ属		31	56	48	45	43	60	72	55	37	32	49	50	30	42	1	60	51	1	37	11	5	43	6
キビ族		2	-	2	3	1	2	-	1	1	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
タケ亜科ネササ節		1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1
タケ亜科(その他)		41	24	29	19	31	22	13	26	25	11	33	37	39	34	1	24	29	3	21	12	4	44	58
ヨシ属		4	2	2	3	4	2	1	3	7	1	4	7	6	2	1	3	4	-	2	1	2	5	15
ウシクサ族		1	5	2	10	2	4	1	2	5	7	5	3	6	4	-	1	3	-	7	1	-	1	1
不明		23	23	29	21	22	14	17	27	29	9	24	15	27	21	1	18	22	4	35	12	5	17	22
<b>合計</b>																								
イネ科葉部短細胞珪酸体		751	610	655	465	421	420	828	520	963	728	717	718	460	428	539	989	575	497	671	635	467	295	709
イネ科葉身機動細胞珪酸体		103	110	112	101	104	105	104	114	104	61	115	113	109	104	4	106	109	8	102	38	16	111	103
検出総数		854	720	768	566	525	525	932	634	1067	789	832	831	569	532	543	1095	684	505	773	673	483	406	812
<b>組織片</b>																								
イネ属短細胞		-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列		-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
タケ亜科機動細胞列		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-

表29 A地点 植物珪酸体分析結果



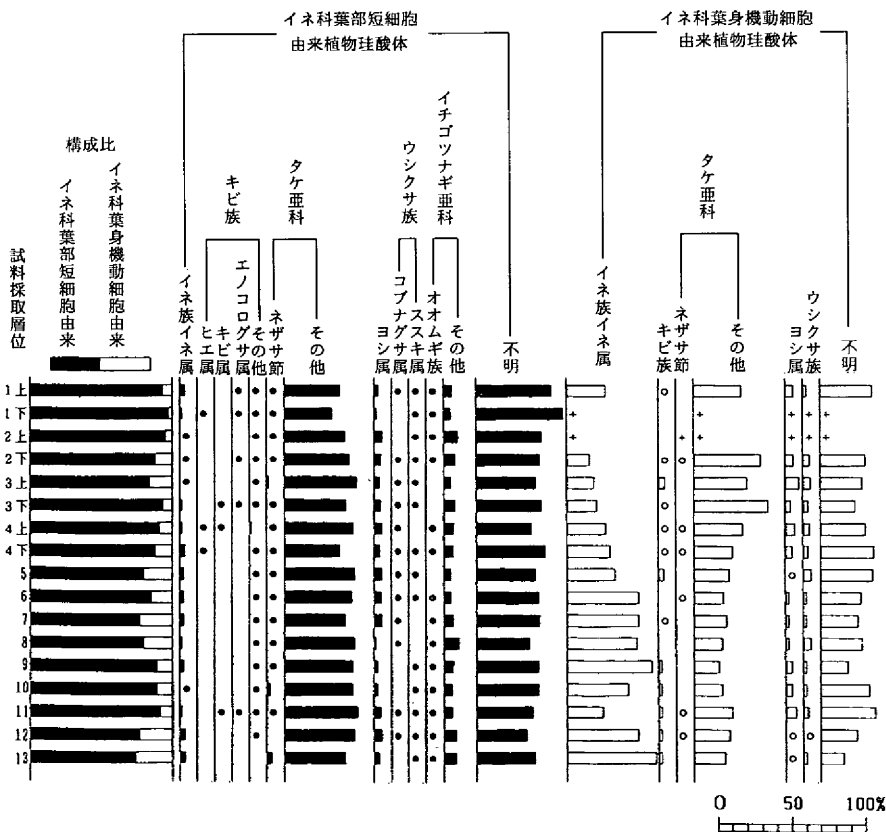
第659図 A地点 植物珪酸体組成の層位的分布

出現率は、短細胞珪酸体は短細胞珪酸体総数を、機動細胞珪酸体は機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を、+は機動細胞珪酸体100個体未満の試料において検出した種類を示す。



種類(Taxa)	試料採取層位	1上	1下	2上	2下	3上	3下	4上	4下	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>																			
イネ族イネ属		43	7	1	2	2	16	11	23	9	14	8	6	15	8	13	11	11	
キビ族ヒエ属		-	1	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族キビ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族エノコログサ属		1	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族(その他)		4	2	1	1	5	8	11	6	1	3	1	4	3	3	5	1	-	
タケ亜科ネザサ節		10	4	3	7	8	12	8	2	4	3	3	4	6	17	8	-	11	
タケ亜科(その他)		542	185	206	351	270	594	480	275	194	268	155	206	387	393	532	165	149	
ヨシ属		27	7	23	34	18	50	55	24	20	21	18	6	16	17	37	18	11	
ウシクサ族コブナグサ属		1	-	-	2	1	4	2	2	1	2	2	-	-	-	1	1	-	
ウシクサ族ススキ属		1	1	1	2	1	4	-	2	1	1	-	-	2	2	3	3	1	
イチゴツナギ亜科オオムギ族		3	1	1	1	-	-	3	1	-	1	1	2	1	1	1	1	2	
イチゴツナギ亜科(その他)		72	26	48	52	22	105	61	44	15	22	23	43	46	43	54	27	29	
不明キビ型		40E	202	87	173	92	251	148	132	60	98	56	63	128	134	173	41	52	
不明ヒゲシバ型		185	85	78	92	62	253	131	116	40	66	45	43	112	117	114	48	51	
不明ゲンチク型		141	58	57	71	65	122	101	96	64	79	58	49	111	105	114	27	38	
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>																			
イネ族イネ属		27	6	4	15	19	20	27	30	33	49	53	51	59	41	24	50	73	
キビ族		1	-	-	1	4	1	1	1	3	-	1	-	2	2	2	2	2	
タケ亜科ネザサ節		-	-	1	1	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	1	1	-	
タケ亜科(その他)		33	6	9	46	38	51	34	27	24	21	24	20	17	19	27	25	26	
ヨシ属		5	2	1	5	10	3	6	4	1	2	2	2	4	4	7	1	1	
ウシクサ族		2	1	1	4	5	3	4	3	5	2	2	5	2	2	3	1	2	
不明		36	6	12	31	30	23	31	37	36	28	28	30	19	33	38	25	18	
<b>合計</b>																			
イネ科葉部短細胞珪酸体		1435	580	506	789	546	1421	1014	726	408	578	370	428	827	840	1057	343	355	
イネ科葉身機動細胞珪酸体		104	21	28	103	106	101	104	103	102	103	110	108	103	101	102	105	122	
検出個数		1539	601	534	892	652	1522	1118	829	510	681	480	536	930	941	1159	448	477	
<b>組織片</b>																			
イネ属珪酸体		1	-	1	1	1	1	1	1	-	1	-	-	-	1	-	1	-	
イネ属短細胞列		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ属機動細胞列		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ダンシク型短細胞列		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	

表30 B地点 植物珪酸体分析結果

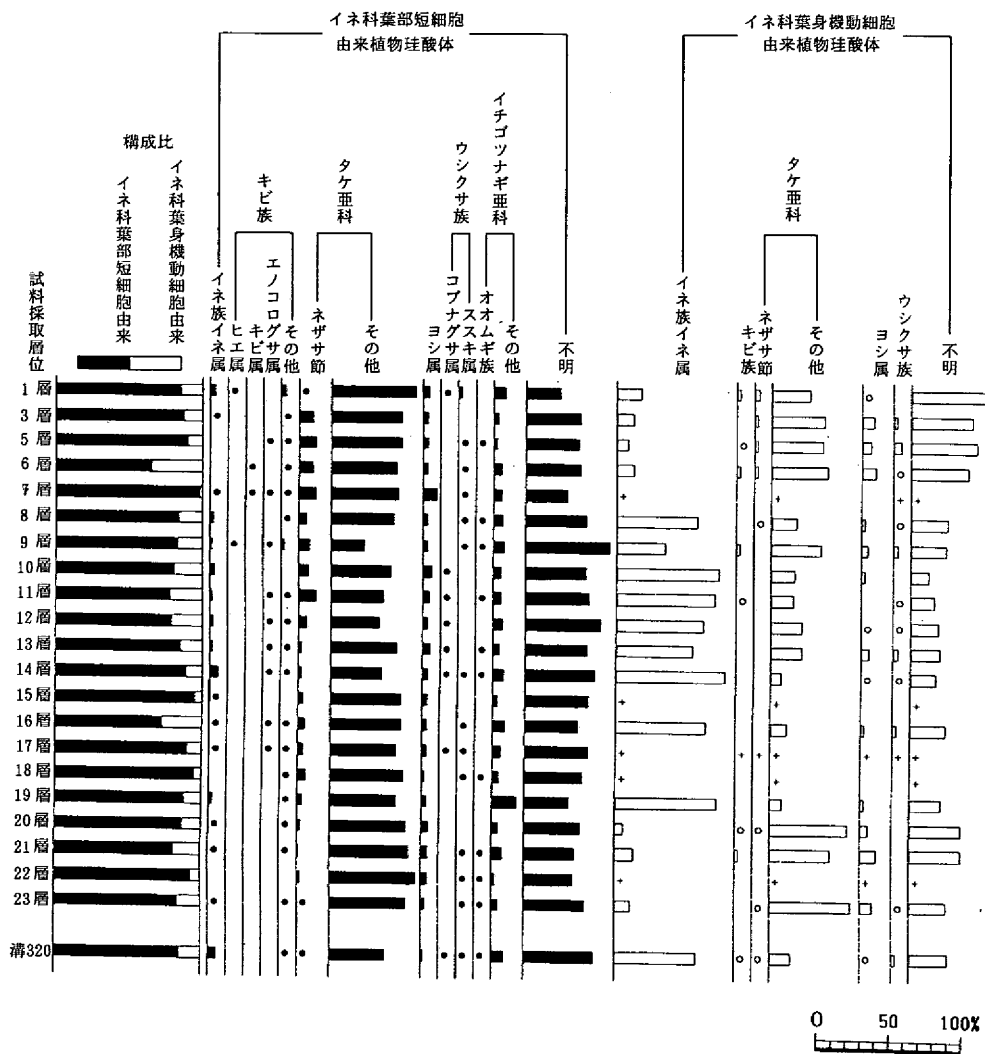


第660図 B地点 植物珪酸体組成の層位的分布

出現率は、短細胞珪酸体は短細胞珪酸体総数を、機動細胞珪酸体は機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を、+は機動細胞珪酸体100個体未満の試料において検出した種類を示す。

種類(Taxa)	試料採取層位	1	3	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	溝320
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>																							
イネ族イネ属		18	2	-	-	6	9	8	12	5	7	9	39	3	2	2	-	17	1	1	-	1	28
キビ族ヒエ属		1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族キビ属		-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族エノコログサ属		-	-	1	-	1	-	-	-	1	1	2	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
キビ族(その他)		18	1	3	2	6	1	10	-	3	1	2	3	-	-	3	1	5	5	2	-	2	3
タケ亜科ネザサ属		2	64	106	22	76	28	40	26	47	21	15	21	16	11	11	28	26	15	5	9	4	6
タケ亜科(その他)		377	330	471	102	314	235	122	181	151	135	272	291	250	132	181	281	337	340	240	243	282	220
ヨシ属		24	19	27	7	59	17	16	27	18	14	29	28	16	9	14	8	26	29	16	18	13	8
ウシクサ族コブナグサ属		4	-	-	-	-	-	-	2	1	1	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
ウシクサ族ススキ属		12	-	2	1	1	2	2	-	-	-	-	3	-	2	2	2	-	-	-	1	2	3
イチゴツナギ亜科オオムギ族		-	-	1	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	2
イチゴツナギ亜科(その他)		53	19	24	12	33	34	40	22	22	24	57	18	22	19	25	120	27	33	8	21	46	
不明キビ型		48	97	119	40	59	100	197	67	80	106	111	178	80	31	67	96	91	89	40	29	39	105
不明ヒゲシマ型		56	72	132	19	63	58	64	47	44	50	76	136	63	33	52	63	56	90	55	53	111	89
不明ダンチク型		48	91	112	27	74	69	56	74	62	58	72	85	87	36	60	66	80	72	57	56	75	90
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>																							
イネ族イネ属		19	12	7	14	8	56	37	77	82	66	55	75	17	64	17	10	72	5	12	2	11	57
キビ族		2	-	1	2	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	2	-	-	1
タケ亜科ネザサ属		4	2	2	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	1
タケ亜科(その他)		31	38	37	48	2	17	38	18	19	23	22	7	3	12	8	12	8	54	42	9	58	14
ヨシ属		1	8	6	11	-	2	5	2	-	1	5	1	-	2	1	-	2	5	11	3	8	1
ウシクサ族		-	2	5	1	1	1	3	-	1	1	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2
不明		60	44	48	49	3	25	27	13	20	21	21	17	8	25	17	10	22	36	36	16	27	27
<b>合計</b>																							
イネ科葉部短細胞珪酸体		661	695	998	233	693	554	560	458	435	418	613	846	533	280	413	571	758	658	451	419	552	602
イネ科葉身機動細胞珪酸体		117	106	106	127	14	102	112	110	123	112	106	101	28	105	46	32	104	102	103	30	106	103
検出回数		778	801	1104	360	707	656	672	568	558	530	719	947	561	385	459	603	862	770	554	449	658	705
<b>組織片</b>																							
イネ属珪酸体		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
イネ属短細胞列		1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
イネ属機動細胞列		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
キビ型短細胞列		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表31 C地点 植物珪酸体分析結果



第661図 C地点 植物珪酸体組成の層位的分布

出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともをそれぞれの総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を、+は機動細胞珪酸体の総数が100個体未満の試料において検出した種類を示す。

植物珪酸体の出現傾向は、19層と20層の間および6層と8層の間を境にして、大きく2回変化する。23層～20層では、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも、タケ亜科が多産し、イネ属・キビ族・ヨシ属・イチゴツナギ亜科が随伴あるいは稀に出現する。19層～8層になると、機動細胞珪酸体の出現傾向に変化がみられ、イネ属機動細胞珪酸体が多産する。6層より上位になると、イネ属の機動細胞珪酸体が減少し、再びタケ亜科機動細胞珪酸体が多産する。

溝-320埋積物中の植物珪酸体組成は、短細胞珪酸体でタケ亜科が多産し、機動細胞珪酸体でイネ属が多産する。

### b. 花粉化石

結果を表32・第662図に示す。木本花粉では、マツ属・スギ属・コナラ属アカガシ亜属が多産する。草本花粉は、総花粉・孢子数の中で占める割合が高く、中でもイネ科が多産する。この他、カヤツリグサ科・ソバ属・カタバミ属近似種・ヨモギ属や水湿地生のガマ属・オモダカ属・サンショウモなどが随伴する。

### D地点

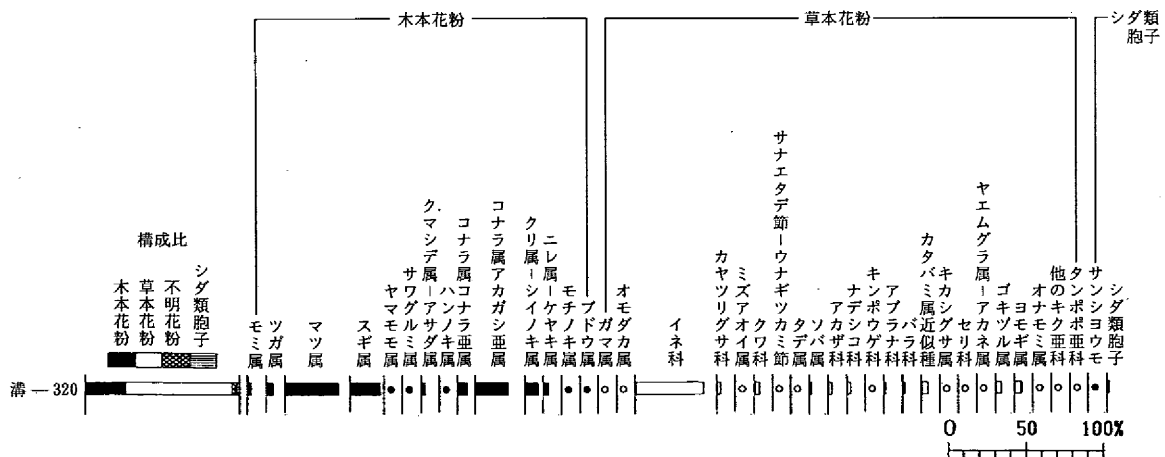
#### a. 植物珪酸体

結果を表33・第663図に示す。イネ科の植物起源の植物珪酸体は、全試料で検出される。保存状態は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに良好である。

植物珪酸体組成には層位的な変化が認められる。試料番号8～4 (11・10・8・6・4層) では、栽培植物のイネ属機動細胞珪酸体が増加し、タケ亜科機動細胞珪酸体が減少する。これに対して試料番号3～1 (3～1層) ではイネ属が減少し、タケ亜科が増加する。また、短細胞珪酸体はタケ亜科が多産し、イネ属・ヨシ属・イチゴツナギ亜科などを伴う。

種類(Taxa)	資料採取層位 溝-320
木本花粉	
モミ属	4
ツガ属	8
マツ属	57
スギ属	38
ヤマモモ属	1
サワグルミ属	1
クマシデ属-アサダ属	3
ハンノキ属	1
コナラ属コナラ亜属	12
コナラ属アカガシ亜属	41
クリ属-シイノキ属	16
ニレ属-ケヤキ属	6
モチノキ属	1
ブドウ属	1
草本花粉	
ガマ属	1
オモダカ属	2
イネ科	314
カヤツリグサ科	14
ミズアオイ属	2
クワ科	23
サナエタデ節-ウナギツカミ節	5
タデ属	2
ソバ属	10
アカザ科	12
ナデシコ科	13
キンポウゲ科	4
アブラナ科	10
バラ科	9
カタバミ属近似種	33
キカシグサ属	4
セリ科	3
ヤエムグラ属-アカネ属	1
ゴキツル属	24
ヨモギ属	28
オサモミ属	2
他のキク亜科	6
タンポポ亜科	4
不明花粉	21
シダ類孢子	
サンショウモ	1
シダ類孢子	11
合計	
木本花粉	200
草本花粉	526
不明花粉	21
シダ類孢子	12
総花粉	759

表32 溝-320埋積物中の花粉分析結果



第662図 溝-320埋積物中の花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除いた数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

E・F地点

a. 植物珪酸体

結果を表34・第664図に示す。イネ科植物起源の植物珪酸体は、全試料で短細胞珪酸体の占める割合が高い。機動細胞珪酸体は保存状態が悪く、表面に多くの小孔（溶食痕）が認められる。

E地点の植物珪酸体組成は、16・7～11層の各層で異なる。16層ではタケ亜科が多産し、ヨシ属・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などが随伴する。また、栽培植物とされるイネ属が低率ながら珪酸体ともに検出される。11層より上位では、タケ亜科珪酸体が減少する。本層より上位の堆積物では、イネ属機動細胞珪酸体が増加し、多産する。また、イネ属短細胞珪酸体も低率ながら検出される。

F地点の5～3層の植物珪酸体組成は大きく変化せず、タケ亜科が多産し、イネ属・ヨシ属・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などが随伴する。

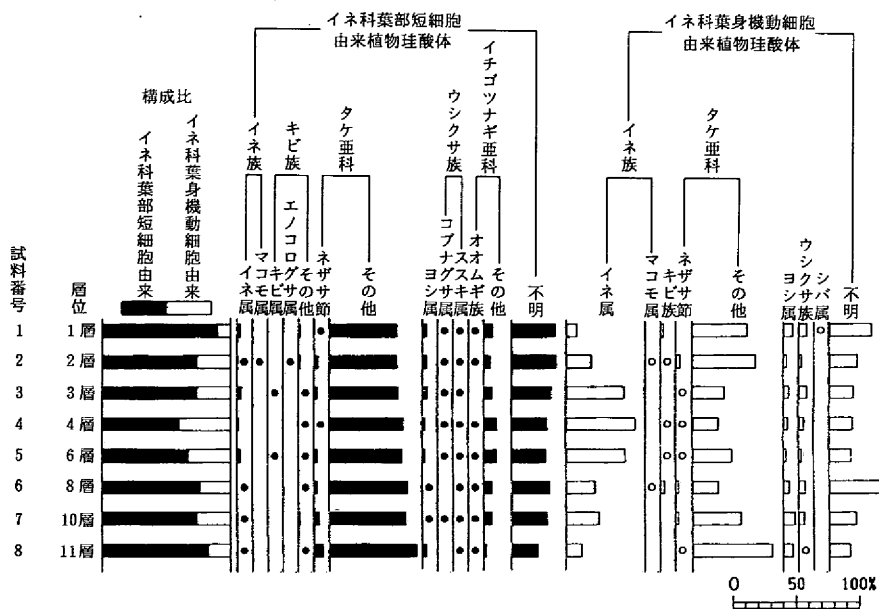
b. 花粉化石

結果を表35に示す。花粉化石は、全試料とも保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れていたりする。しかも花粉化石の検出種類数・検出個体数ともに少ない。

花粉化石は、花粉外膜の保存状態が悪いことを考えると、何らかの原

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>									
イネ族イネ属		15	1	8	3	6	2	1	1
イネ族マコモ属		-	1	-	-	-	-	-	-
キビ族キビ属		-	-	1	-	1	-	-	-
キビ族エノコログサ属		-	2	-	-	-	-	-	-
キビ族(その他)		13	4	3	1	1	2	4	3
タケ亜科ネザサ節		6	8	7	2	5	9	14	37
タケ亜科(その他)		522	166	163	154	152	220	200	337
ヨシ属		29	8	11	6	5	2	3	14
ウシクサ族コブナグサ属		3	2	2	1	1	-	1	-
ウシクサ族ススキ属		2	1	1	1	1	3	1	1
イチゴツナギ亜科オオムギ族		6	1	-	2	1	1	2	2
イチゴツナギ亜科(その他)		70	16	20	28	26	21	22	11
不明キビ型		141	38	33	25	20	51	27	21
不明ヒゲシバ型		111	36	23	21	29	31	25	37
不明ダンチク型		82	33	36	26	22	26	41	41
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>									
イネ族イネ属		9	22	50	96	61	26	29	13
イネ族マコモ属		-	1	-	-	-	1	-	-
キビ族		2	1	-	1	1	3	-	-
タケ亜科ネザサ節		-	3	1	1	1	2	2	1
タケ亜科(その他)		46	57	28	36	41	24	45	66
ヨシ属		8	2	4	5	2	5	11	7
ウシクサ族		6	2	7	7	3	6	5	1
シバ属		1	-	-	-	-	-	-	-
不明		35	25	21	33	23	51	25	17
<b>合計</b>									
イネ科葉部短細胞珪酸体		1000	317	308	270	270	368	341	505
イネ科葉身機動細胞珪酸体		107	113	111	179	132	118	117	105
検出個数		1107	430	419	449	402	486	458	610
<b>組織片</b>									
イネ属珪酸体		1	-	-	-	-	-	-	-
不明機動細胞列		-	1	-	-	-	-	-	-

表33 D地点 植物珪酸体分析結果

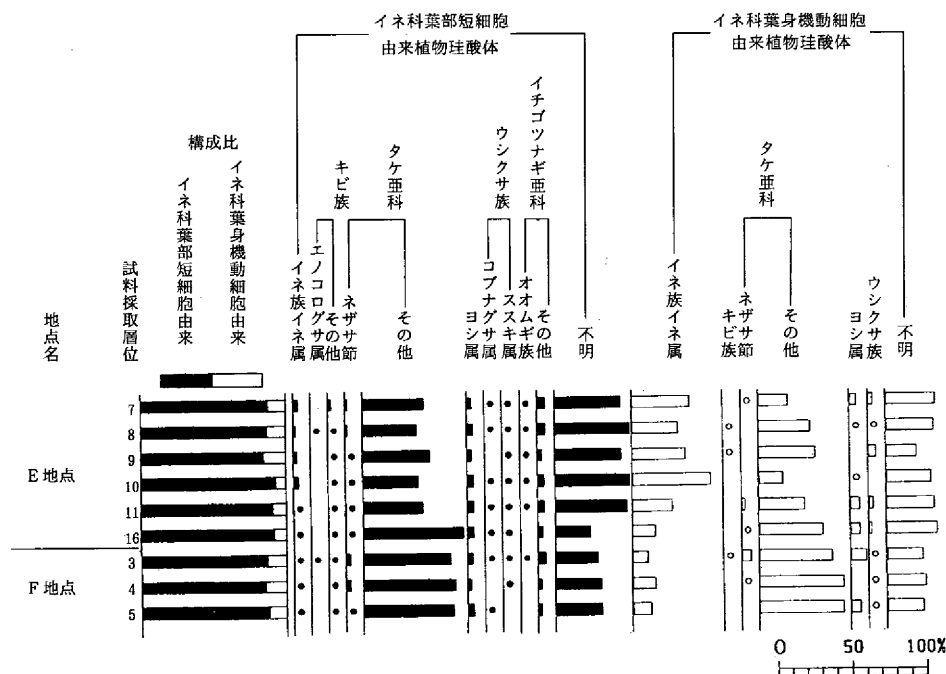


第663図 D地点 植物珪酸体組成の層位的分布

検出個数は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。●○は1%未満の出現した種類を示す。

種 類(Taxa)	試料採取層位	E地点					F地点			
		7	8	9	10	11	16	3	4	5
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>										
イネ族イネ属		20	7	10	33	5	3	1	2	2
キビ族エノコログサ属		-	2	-	-	-	-	2	-	-
キビ族(その他)		12	6	1	7	8	2	3	3	3
タケ亜科ネザサ節		9	10	3	11	5	4	22	20	3
タケ亜科(その他)		313	257	280	496	447	799	428	415	471
ヨシ属		23	26	21	47	40	43	18	11	33
ウシクサ族コブナグサ属		4	1	-	1	1	2	1	-	1
ウシクサ族ススキ属		1	2	1	3	7	1	1	1	-
イチゴツナギ亜科オオムギ族		1	2	1	4	2	-	2	-	-
イチゴツナギ亜科(その他)		34	35	18	51	48	40	33	14	12
不明キビ型		158	181	170	379	331	90	52	57	77
不明ヒゲシバ型		75	64	53	113	85	82	45	52	69
不明ダンチク型		98	102	45	151	104	100	103	88	86
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>										
イネ族イネ属		41	32	37	55	27	15	10	16	13
キビ族		-	1	1	-	-	-	1	-	-
タケ亜科ネザサ節		1	-	-	-	2	1	6	1	-
タケ亜科(その他)		21	36	40	17	31	43	50	59	61
ヨシ属		4	1	-	1	6	6	10	-	6
ウシクサ族		3	1	5	-	3	2	1	1	1
不明		35	33	21	31	32	34	25	27	26
<b>合 計</b>										
イネ科葉部短細胞珪酸体		748	695	603	1296	1083	1166	711	663	757
イネ科葉身機動細胞珪酸体		105	104	104	104	101	101	103	104	107
検出個数		853	799	707	1400	1184	1267	814	767	864
<b>組 織 片</b>										
イネ属珪酸体		1	-	-	-	-	-	-	-	-
不明機動細胞列		-	-	-	-	-	-	-	-	1

表34 E・F地点 植物珪酸体分析結果



第664図 E・F地点 植物珪酸体組成の層位的分布

出現率は、短細胞珪酸体は短細胞珪酸体総数を、機動細胞珪酸体は機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

因により分解・消失したと推定される。とくに花粉分析の外膜を構成する物質（スポロポレニンと呼ばれる物質）の含有量や堆積物の状態により、分解する速度が花粉の種類により異なるとされている（中村，1967）。以上のことを考慮すると、堆積物中の花粉化石群集は歪曲している可能性があり、過去の植生（古植生）を十分に反映しているとはいえない。したがって、今回の花粉分析の結果より、本遺跡周辺地域の古植生について検討することは不可能である。

## 5. 津寺遺跡周辺の古植生および稲作の消長と様態

今回の分析調査では、花粉分析が良好に検出されなかったため、植物珪酸体分析の結果をもとに本遺跡周辺の古植生および稲作の消長について検討する。なお、本遺跡が足守川の氾濫原に位置していることから、度重なる洪水などにより上流域から堆積物が運搬・堆積したと考えられる。したがって、ここで検出された植物珪酸体の中には、上流域から搬入されたものが含まれている可能性がある。このことを考慮して以下の考察を行う。

種類(Taxa)	試料採取層位	F地点			E地点						
		3	4	5	7	8	9	10	11	16	
木本花粉		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉 イネ科		-	-	-	1	-	-	1	1	-	-
不明花粉		-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シダ類胞		42	88	48	6	8	13	17	19	33	
合計											
木本花粉		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
草本花粉		0	0	0	1	0	0	1	1	0	
不明花粉		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
シダ類胞子		42	88	48	6	8	13	17	19	33	
総花粉・胞子数		42	88	48	7	8	13	18	20	33	

表35 E・F地点 花粉分析結果

### A地点

本調査区のイネ属は、最下部の45層から葉部に形成される2形態の珪酸体が連続して検出された。イネ属機動細胞珪酸体の出現傾向は、45層とそれ以浅で異なり、45層が6%と低率であり、それ以浅が30~70%と高率である。このことから、45層が堆積した頃に稲作が行われていたかどうか疑問が残るが、少なくとも弥生時代中期後半から古墳時代初頭とされる頃まで本遺跡あるいは、その周辺で稲作が行われていた可能性は高い。

### B地点

調査地点は、足守川の氾濫原上に位置することから、足守川が上流より運搬してきた堆積物が度重なる氾濫によって堆積しているものと思われる。そのため、ここで検出された微化石の中には、上流域より運搬されたものが含まれていると予想される。このことに注意して以下の考察を進める。

23層~20層が堆積した弥生時代中期後半以前の頃、遺跡の周辺にはタケ亜科・ヨシ属・ススキ属・イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと推定される。この内、ヨシ属が比較的湿った場所に生育することから、遺跡周辺の湿った場所にはヨシ属が生育していた可能性がある。ところで、本層準では、栽培植物とされるイネ属の短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体が検出される。現在の水田で10ha 当たり500kg のイナワラを投入する作業を8年間続けた場合、その水田耕作土層では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%を示すとされている(近藤, 1988)。本層準のイネ属珪酸体の出現率は、短細胞珪酸体が1%以下、機動細胞珪酸体が12%以下であり、現在の水田土壌表層における出現率と比較して低率である。したがって、植物珪酸体の出現傾向からみる限り、本遺跡付近で稲作が行われていた可能性は低い。ここで検出されたイネ属珪酸体は、他の地域から運搬・堆積したかあるいは上位層から落ち込んだものである可能性がある。

19層~8層になると、植物珪酸体は大きく変化し、イネ属機動細胞珪酸体が多産する。その出現率は約50~75%であり、近藤(1988)の調査事例における出現率と比較しても高率である。また、イネ属短細胞珪酸体が低率ながら検出され、短細胞珪酸体列や稲粃に形成される穎珪酸体も稀であるが検出される。これらのことを考慮すると、弥生時代中期後半以降になると、遺跡の周辺で稲作が行われていた可能性が高い。

6層~3層では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率は、近藤(1988)の調査事例と比較してほぼ同率

かもしくは若干低い、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が下位の層準と比べて著しく低率となり、タケ亜科やヨシ属が増加傾向を示す。このことから、稲作の放棄や稲作の様態の変化、あるいは施肥方法の変化などが考えられるが、現時点では詳細は不明である。

中世の溝-320埋積物中の花粉化石群集は、草本花粉の出現率が高率であり、中でもイネ科が多産する。このことから遺跡付近に森林が成立していたとは考え難く、主にイネ科植物が生育していたと推定される。この他にも遺跡周辺の低地にはカヤツリグサ科・アカザ科・ナデシコ科・ヨモギ属などの草本類が生育していたのであろう。ところで、溝埋積物中からイネ属の両珪酸体が検出され、とくにイネ属機動細胞珪酸体が現在の水田耕土表層と比較しても高率に出現する。また、この溝が用・排水路として利用されていたと考えられていることから、溝埋積土には水田土壌が取り込まれたと推定される。そして、オモダカ属・ミズアオイ属・サンショウモなどの水生植物が水田雑草として生育していた可能性もある。また、試料中から畑作植物とされるソバ属の花粉化石が検出されることより、遺跡周辺でソバ栽培などの畑作が行われていたことが示唆される。

一方、後背山地などは、マツ属・スギ・アカガシ亜属などから構成される植生が存在していたと判断できる。岡山県御津郡御津町に位置する原遺跡で実施された花粉分析によると、中世中期の頃になるとアカガシ亜属とシノキ属を中心とした照葉樹林が後退し、アカマツ二次林が増加しはじめたとされている(三好, 1988)。このことから、このマツ属の多産傾向は、人為的な要因に関連している可能性がある。

#### C地点

栽培植物のイネ属は、葉部に形成される2形態の珪酸体が連続して検出された。その出現傾向は、洪水性堆積物とされる5層と6層を境として異なる。したがって、ここでは6層以深と5層以浅について分けて考える。6層以深のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、11層を除き40%以上を示す。これは、前述の近藤(1988)の調査事例と比較して高率である。ところで、10層~6層では水田址が検出されているが、11層では水田址が検出されていない。すなわち、11層~6層のイネ属機動細胞珪酸体の出現傾向は、発掘調査成果と調和的である。このことより、13層・12層が堆積した時期も本遺跡あるいはその周辺で稲作が行われていた可能性もある。

5層以浅では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が洪水性堆積物とされる6層以深と比較して低率となる。このことより、5層より上位で検出された植物珪酸体は、上流域から搬入されてきた可能性があり、稲作が行われていたかどうか不明と言わざるをえない。ただし、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が現耕作土層とほぼ同様かそれ以上であり、また穎珪酸体もほぼ連続して検出されることから、一概には調査地点周辺での稲作を否定できない。もし仮に稲作が行われていたとするならば、ここでのイネ属の出現率の低下は、稲作の様態の変化、稲作の継続期間の短さ、あるいは洪水で耕作土が流失したことなどを原因とするものと考えられる。現段階で詳細を明らかにすることができないが、興味深い点である。

なお、13~1層が堆積するまで本遺跡周辺には、E・F地点と類似しており、タケ亜科・ヨシ属・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科・キビ族などが生育していた可能性がある。

#### D地点

全層準を通じて、栽培植物とされるイネ属の葉部に形成される2形態の珪酸体が検出される。このうち機動細胞珪酸体は、古墳時代初頭の水田層とされる4層まで増加傾向を示す。前述の近藤(1988)

の調査事例と比較した場合、10層～2層のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は19%以上であり、現水田耕作土層と比較しても高率である。

古墳時代初頭の水田層とされる4層・3層のイネ属の出現率は45%以上であり、高率である。また、6層でも古墳時代初頭の水田層とほぼ同様の出現率を示す。このことから本層準でも稲作が行われていた可能性がある。

11層・10層・8層は、イネ属の出現率が洪水性堆積物とされる2層と比較するとほぼ同率もしくはそれ以下である。このことから、11層～7層が堆積した古墳時代以前は、本地点で稲作が行われていたか詳細は不明である。仮にこれらの層位で稲作が営まれていたとすれば、ここでのイネ属機動細胞珪酸体の出現率が古墳時代の水田層のそれと異なっている要因は、植物珪酸体組成の形成過程などに由来している可能性がある。したがって、植物珪酸体の挙動に関して基礎的な研究や他の調査区との比較が、今後は必要である。

また、随伴種のエノコログサ属・キビ族・オオムギ族・イチゴツナギ亜科には栽培植物の種を含むが、それが栽培植物に由来するものか否かは、現段階では植物珪酸体の形態学的特徴から判別できない。そのほか、周辺ではタケ亜科やイチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していた可能性がある。

#### E・F地点

本調査地点では、E地点16層から栽培植物とされるイネ属が短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体ともに検出される。このことから、本遺跡の上流域では、弥生時代後期以前から稲作が行われていた可能性がある。E地点16層のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は15%であり、近藤（1988）の調査事例とほぼ同率の出現率を示す。しかしながら、本遺跡における弥生時代後期の水田層とされる層位では、これまでの資料の蓄積からイネ属機動細胞珪酸体が約30～40%以上を出現することが明らかにされつつある。また、本層位では畦畔など稲作に関連する遺構が検出されていないことから、その様態などに関する検討は充分に行うことができない。

弥生時代後期の堆積層におけるイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、E地点とF地点で異なる。すなわち、E地点ではイネ属機動細胞珪酸体が27～53%出現するのに対して、F地点では15%以下である。しかもF地点の植物珪酸体組成はタケ亜科が多産している。すなわち、ほぼ同時期の堆積層でイネ属機動細胞珪酸体の出現率が異なる。これは、E地点が水田層から試料が採取されているのに対して、F地点が旧河道跡埋積物中より試料が採取されていることに起因していると判断される。すなわち、ここでのイネ属機動細胞珪酸体の出現傾向は発掘調査所見と調和的であり、水田とこれに伴う溝とでは、イネ属の植物珪酸体の遺存状況が異なることを示していると推定される。

一方、周辺には、タケ亜科・ヨシ属・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科・キビ族などが生育していたと推定される。ヨシ属は、現在河川沿いの湿地などに生育していることから、当時周辺の湿った場所に生育していたと考えられる。なお、E地点16層では、他の層位と比較して、タケ亜科の出現率が高い。これに関しては、周辺にタケ亜科が多いことを示しているのか、あるいはタケ亜科の植物珪酸体が他のイネ科植物珪酸体と比較して風化に強く、生産量が多いとされている（近藤，1982：杉山・藤原，1986）ことに関与しているのか、現段階では判断できない。

## 6. まとめ

B・E・Fの各地点で植物珪酸体と花粉分析を、A・C・Dの各地点で植物珪酸体分析を実施した。



その結果、花粉化石は保存状態が悪かったが、植物珪酸体は良好に産出した。したがって、今回は植物珪酸体を中心に本遺跡周辺の古植生および稲作の消長・様態について検討した。以下に、その変遷をまとめる。

- 1) イネ属珪酸体は、弥生時代中期後半～後期の堆積層から中・近世の堆積物まで葉部に形成される2形態の珪酸体が連続して検出される。このことから、本遺跡周辺には、弥生時代中期後半～後期以降に栽培植物とされるイネ属が存在していたと推定される。
- 2) ほぼ同時期とされる弥生時代後期の堆積層では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が調査地点により差が認められ、E地点が低率であるのに対して、その他の調査地点が高率である。これは、試料がE地点が河道埋積物から採取されていることに起因していると推定される。
- 3) イネ属の出現傾向は、古墳時代初頭の洪水性堆積物を境としてその上位と下位で異なる。このことは、水田区画の空間的な広がり、稲作の継続期間や様態の変化、あるいは洪水で耕作土壌が流失したなどのことに起因している可能性がある。これについては、今後調査を実施する際、土壌学的な断面調査を行って攪乱の確認、珪藻分析による堆積環境の把握、地形の発達過程の検討などを行い、さらに発掘調査成果を加えて総合的に解釈する必要がある。
- 4) 弥生時代中期後半～後期以降、古墳時代初頭までの期間、遺跡の周辺低地には、タケ亜科・ヨシ属・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科・キビ族などが生育していた可能性がある。このうちヨシ属は、当時周辺の湿った場所に生育していた可能性がある。
- 5) 中世の頃、周辺にマツ属・スギ・アカガシ亜属などから構成される植生が分布していたが、本遺跡付近は開けており、主にイネ科植物が生育していたと推定された。また、遺跡周辺では、ソバ栽培などの畑作も行われていた可能性がある。
- 6) 中世の溝-320埋積物からイネ属機動細胞珪酸体が多産することから、水田用水あるいはその土壌が溝内に流れ込んだ可能性があることを指摘した。

#### <引用文献>

- 近藤鍊三（1988）十二遺跡土壌の植物珪酸体分析. 十二遺跡発掘調査報告書, 御代田町教育委員会, p. 377-383.
- 近藤鍊三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-64.
- 三好教夫・多田由美子（1988）原遺跡（岡山市御津町）と津島江道遺跡（岡山市）の花粉分析. 鎌木義昌先生古希記念論集 考古学と関連科学, 鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会, p. 437-444.
- 和田温之（1987）岡山平野. 日本の地質7 中国地方, 日本の地質「中国地方」編集委員会編, p. 146.
- 中村 純（1967）花粉分析. 古今書院, 232p.



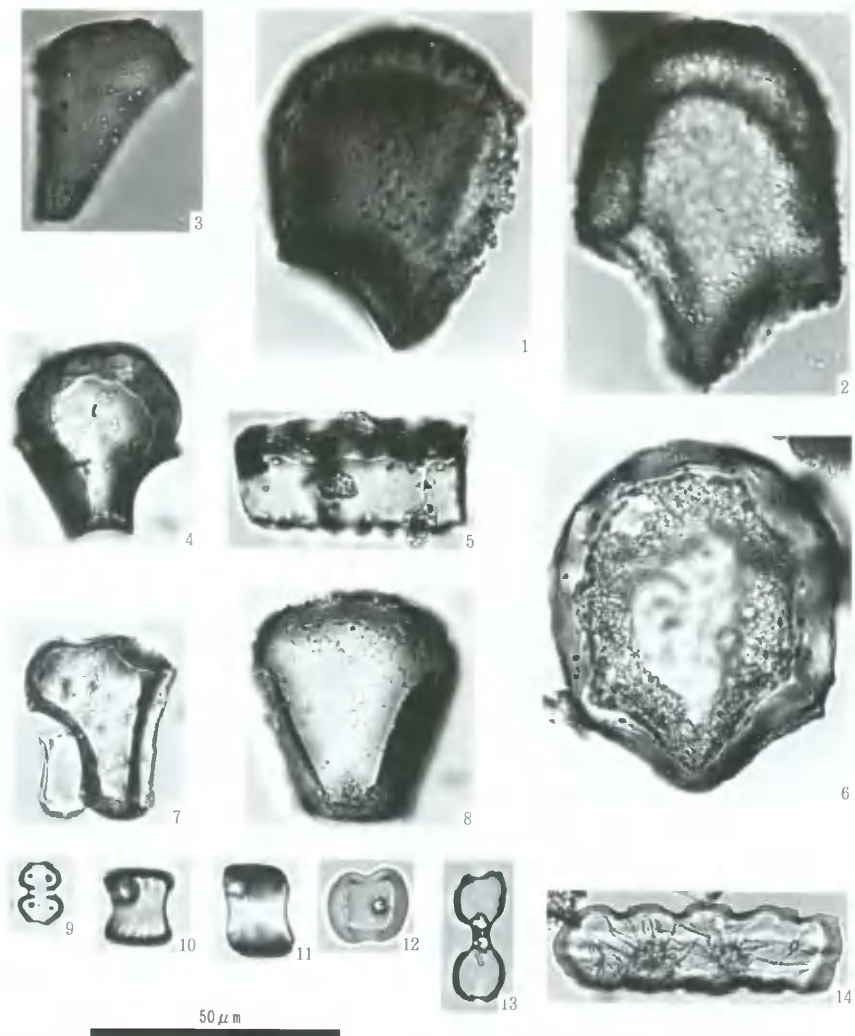
- |    |                       |    |                        |
|----|-----------------------|----|------------------------|
| 1  | イネ属：機動細胞珪酸体由来（21層）    | 12 | オオムギ族：短細胞珪酸体由来（23層）    |
| 2  | ネザサ節：機動細胞珪酸体由来（39層）   | 13 | イチゴツナギ亜科：短細胞珪酸体由来（39層） |
| 3  | タケ亜科：機動細胞珪酸体由来（35層）   | 14 | イネ属機動細胞珪酸体由来（3層）       |
| 4  | ヨシ属：機動細胞珪酸体由来（25層）    | 15 | イネ属短細胞珪酸体由来（9層）        |
| 5  | ウシクサ族：機動細胞珪酸体由来（25層）  | 16 | イネ属短細胞珪酸体由来（9層）        |
| 6  | イネ属：短細胞珪酸体由来（22層）     | 17 | エノコログサ属短細胞珪酸体由来（9層）    |
| 7  | エノコログサ属：短細胞珪酸体由来（39層） | 18 | ネザサ節短細胞珪酸体由来（11層）      |
| 8  | ネザサ節：短細胞珪酸体由来（39層）    | 19 | ネザサ節機動細胞珪酸体由来（9層）      |
| 9  | タケ亜科：短細胞珪酸体由来（39層）    | 20 | タケ亜科短細胞珪酸体由来（3層）       |
| 10 | ヨシ属：短細胞珪酸体由来（39層）     | 21 | タケ亜科短細胞珪酸体由来（5層）       |
| 11 | ススキ属：短細胞珪酸体由来（25層）    |    |                        |

第665図 A地点（1～13）、C地点（14～21）の植物珪酸体



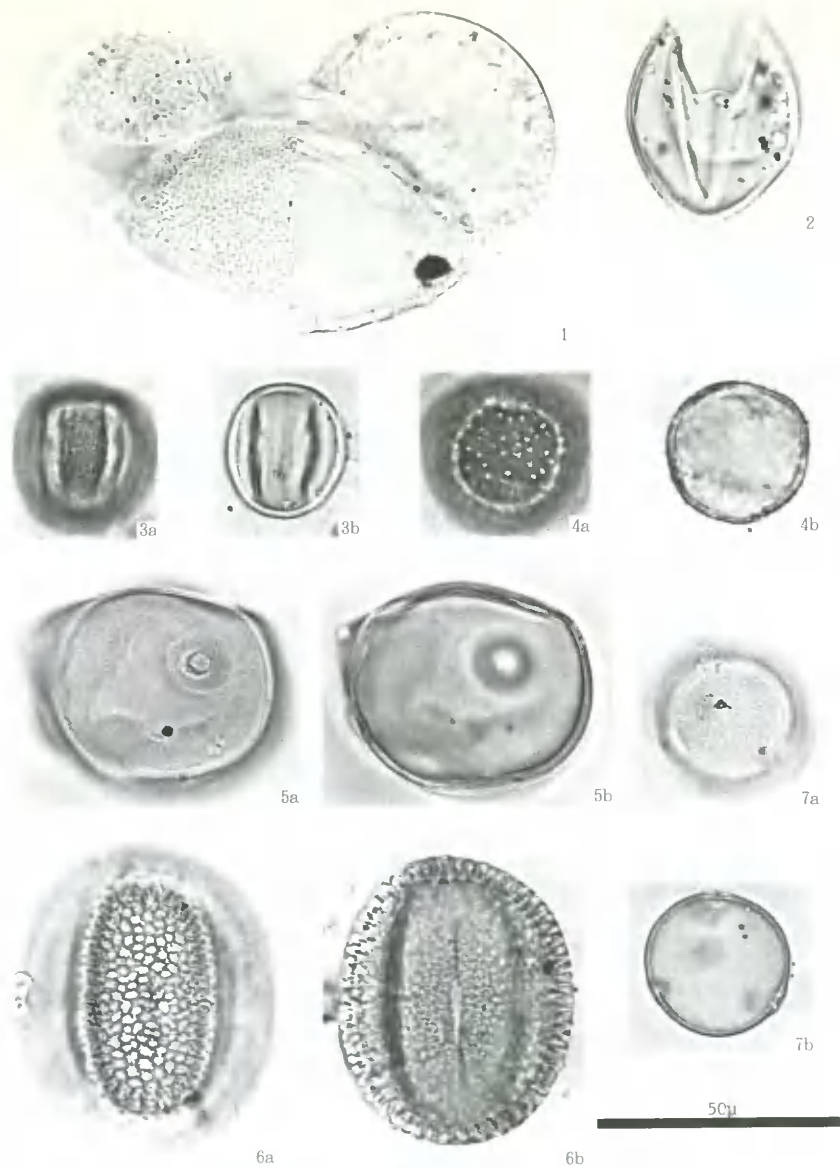
- |                              |                                    |
|------------------------------|------------------------------------|
| 1 タケ亜科機動細胞珪酸体由来 (9層)         | 10 ネザサ節: 短細胞珪酸体由来 (試料番号 2; 2層)     |
| 2 ヨシ属短細胞珪酸体由来 (6層)           | 11 タケ亜科: 短細胞珪酸体由来 (試料番号 5; 6層)     |
| 3 ヨシ属短細胞珪酸体由来 (9層)           | 12 ヨシ属: 短細胞珪酸体由来 (試料番号 2; 2層)      |
| 4 ヨシ属機動細胞珪酸体由来 (13層)         | 13 ススキ属: 短細胞珪酸体由来 (試料番号 7; 10層)    |
| 5 ススキ属短細胞珪酸体由来 (9層)          | 14 オオムギ族: 短細胞珪酸体由来 (試料番号 5; 6層)    |
| 6 イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体由来 (3層)      | 15 イチゴツナギ亜科: 短細胞珪酸体由来 (試料番号 3; 3層) |
| 7 ウシクサ族機動細胞珪酸体由来 (9層)        | 16 イネ属: 機動細胞珪酸体由来 (試料番号 4; 4層)     |
| 8 オオムギ族短細胞珪酸体由来 (9層)         | 17 タケ亜科: 機動細胞珪酸体由来 (試料番号 4; 4層)    |
| 9 イネ属: 短細胞珪酸体由来 (試料番号 3; 3層) | 18 タケ亜科: 機動細胞珪酸体由来 (試料番号 7; 10層)   |

第666図 C地点 (1~8)、D地点 (9~18) の植物珪酸体



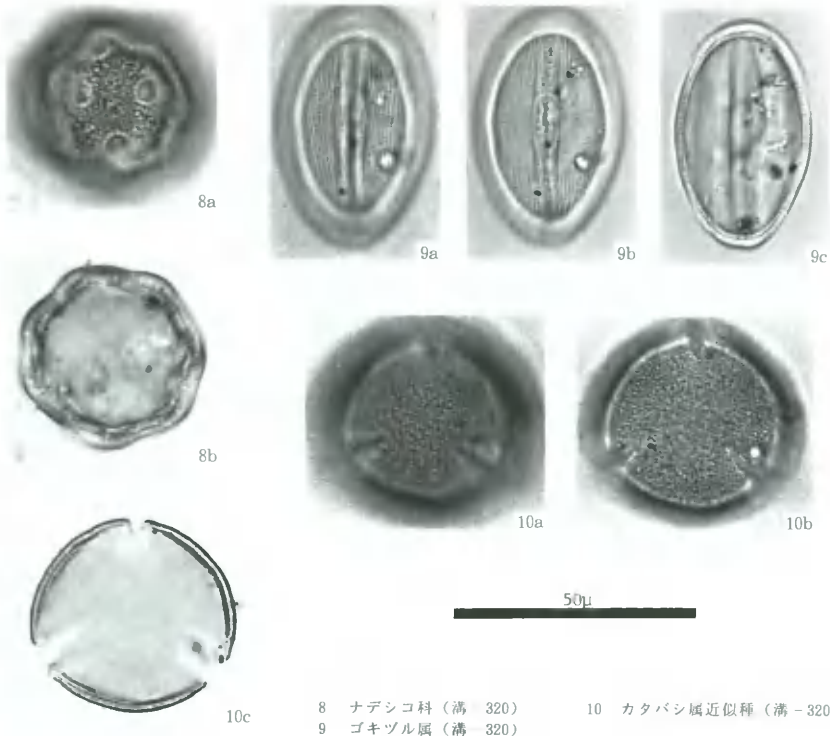
- |   |                           |    |                     |
|---|---------------------------|----|---------------------|
| 1 | ヨシ属：機動細胞珪酸体由来（試料番号7；10層）  | 8  | タケ亜科：機動細胞珪酸体由来（11層） |
| 2 | ヨシ属：機動細胞珪酸体由来（試料番号7；10層）  | 9  | イネ属：機動細胞珪酸体由来（7層）   |
| 3 | ウシクサ族：機動細胞珪酸体由来（試料番号3；3層） | 10 | ネササ節：短細胞珪酸体由来（16層）  |
| 4 | イネ属：短細胞珪酸体由来（7層）          | 11 | タケ亜科：短細胞珪酸体由来（7層）   |
| 5 | キビ族：機動細胞珪酸体由来（9層）         | 12 | ヨシ属：短細胞珪酸体由来（8層）    |
| 6 | ヨシ属：機動細胞珪酸体由来（11層）        | 13 | ススキ属：短細胞珪酸体由来（9層）   |
| 7 | ウシクサ族：機動細胞珪酸体由来（11層）      | 14 | オオムギ族：短細胞珪酸体由来（8層）  |

第667図 D地点（1～3）、E地点（4～14）の植物珪酸体



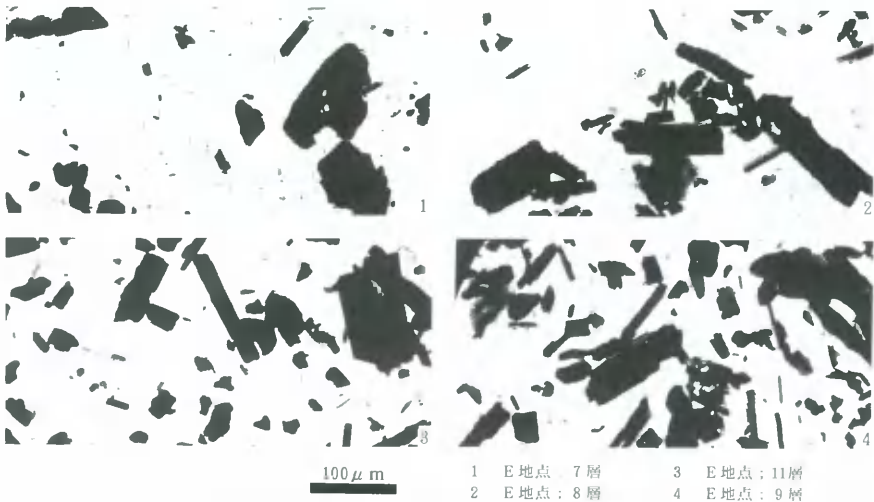
- |                      |               |
|----------------------|---------------|
| 1 マツ属 (溝-320)        | 5 イネ科 (溝-320) |
| 2 スギ属 (溝-320)        | 6 ツバ属 (溝-320) |
| 3 コナラ属アカガシ亜属 (溝-320) | 7 クワ科 (溝-320) |
| 4 オモダカ属 (溝-320)      |               |

第668図 C地点の花粉化石(1)



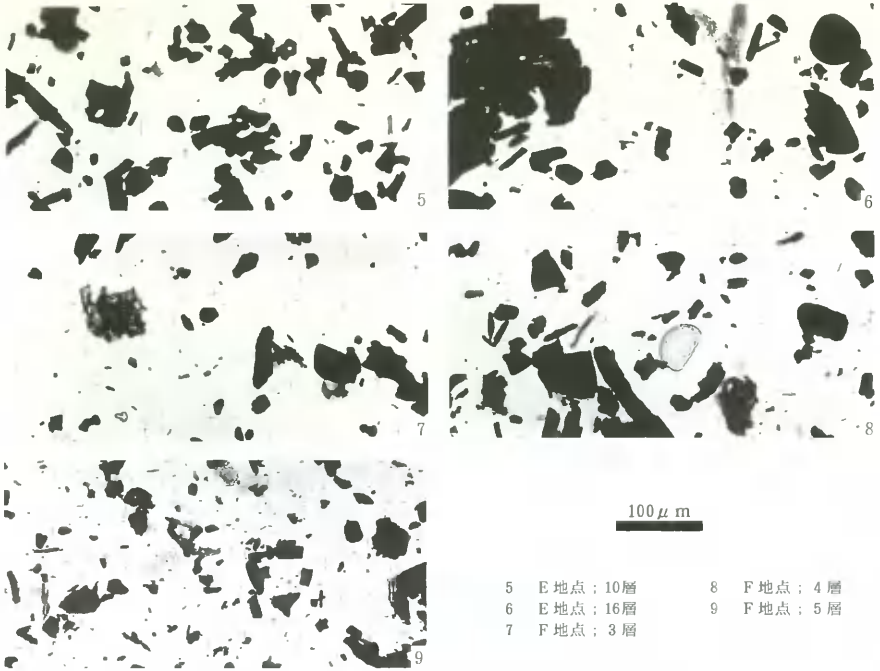
8 ナデシコ科 (溝 - 320)      10 カタバシ属近似種 (溝 - 320)  
 9 ゴキツル属 (溝 - 320)

第669図 C地点の花粉化石(2)



1 E地点: 7層      3 E地点: 11層  
 2 E地点: 8層      4 E地点: 9層

第670図 E地点の花粉分析プレプレート内状況写真



第671図 E・F地点の花粉分析プレパレート内状況写真

## VIII. 津寺遺跡出土の須恵器、土師器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

### 1. はじめに

この胎土分析では蛍光X線分析法により、6世紀末から10世紀頃までの須恵器、土師器の分析を実施し、以下の事柄について検討した。

- (a)高田調査区の竪穴住居から出土した6世紀末から7世紀前半の須恵器・土師器を主として、これら土器の生産地を検討する。
- (b)中屋調査区の官衙遺構周辺から出土した8世紀前半の須恵器の生産地を検討する。
- (c)高田調査区の集落から出土した10世紀の土師器と前代（6世紀末～7世紀前半・8世紀前半）の土師器との胎土の差異について検討する。

### 2. 分析方法および結果

分析方法は、自然科学研究所設置の波長分散型蛍光X線分析装置（リガク電機）で分析し、測定方法・条件・試料の作製は、現在まで行っている方法である。

測定試料は、表38～40に示した高田調査区の6世紀末から7世紀前半の須恵器37点、土師器9点。10世紀の須恵器1点、土師器7点。中屋調査区の8世紀前半の須恵器48点、土師器18点の合計120点である。

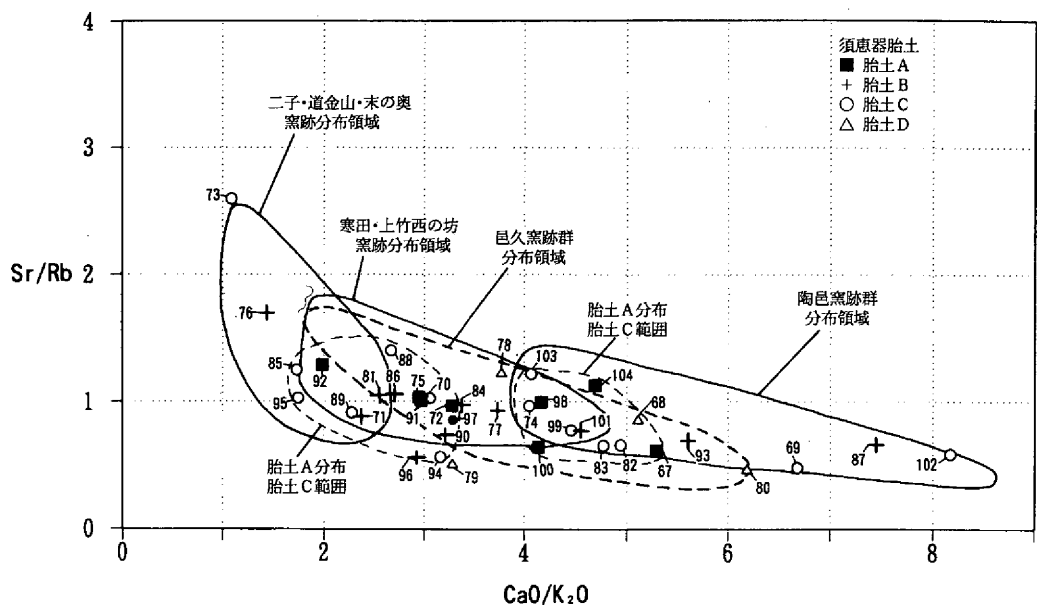
分析の結果、 $K_2O \cdot CaO \cdot Sr \cdot Rb$ の4元素に顕著な差がみられることからこの4元素を用いてX-Y散布図で検討した。

(a)の検討課題である高田調査区内出土の6世紀末から7世紀前半の須恵器（試料番号67～96、98～113）の生産地を推定した。また、この津寺遺跡出土の須恵器は、胎土の肉眼観察により4つに分類されている<sup>1</sup>。そして、生産地として比較する窯跡としては、岡山県南部地域の窯跡と大阪和泉陶邑窯跡群である。岡山県南部地域の窯跡は西から浅口郡金光町上竹西の坊遺跡1号窯、倉敷市寒田5号窯跡、都窪郡山手村末の奥窯跡、同郡山手村道金山窯跡、倉敷市二子御堂奥窯跡、邑久郡牛窓町寒風・土橋、長船町佐府池上池・奥池中池）の6世紀末から8世紀頃までの窯跡である。また、陶邑窯跡群では、8世紀代の窯跡TK-316、MT-26、TG-215、KM-30から出土した須恵器を比較資料とした。

第672図  $K_2O/CaO-Sr/Rb$ の散布図では、6世紀末～7世紀前半の須恵器を胎土別にプロットし、各地域の窯跡群の分布領域もあわせて示した。この結果、肉眼による胎土の差から4つ（A・B・C・D）に分類された須恵器は、広く散漫な分布をし、胎土別にグループをつくる傾向はみられなかった。ただ、胎土A・C類の土器は、二つに別れるような分布を示した。一つのグループは胎土A（試料番号72, 75, 91, 92）、胎土C（70, 85, 88, 89, 93, 94）で、もう一つのグループは胎土A（67, 98, 100, 104）、胎土C（74, 82, 83, 103）のグループである。

そして、前者のグループは岡山県南部の二子・道金山・末の奥窯跡グループと上竹・寒田窯跡グル

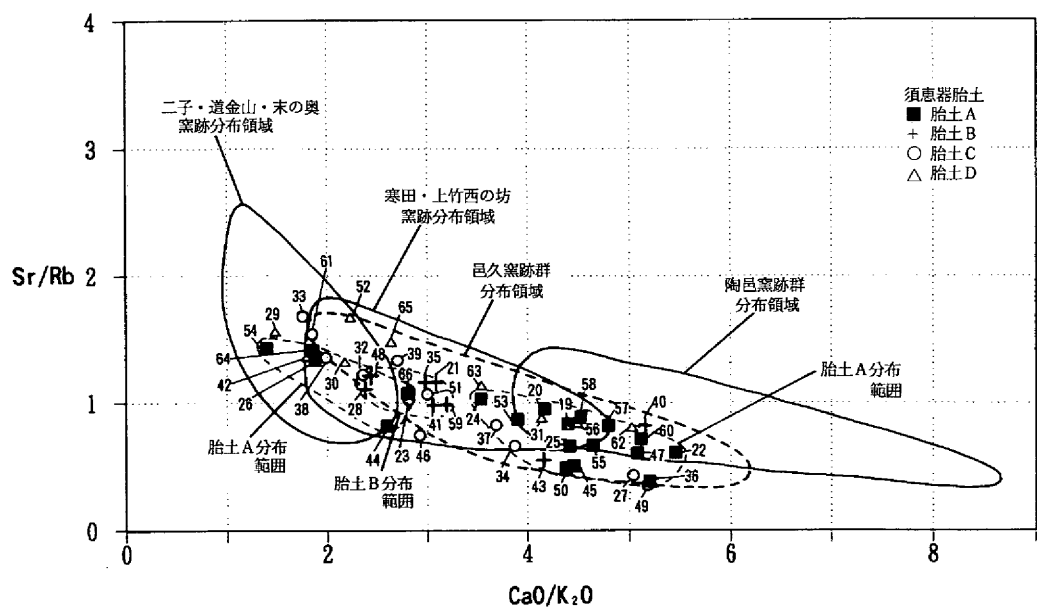




第672図  $K_2O/CaO-Sr/Rb$  散布図 津寺遺跡 6 C末～7 C前半の須恵器と生産地窯跡との比較  
 一および邑久窯跡群グループが重なるところにプロットしている。また、後者のグループは上竹・寒田グループと邑久グループおよび陶邑グループが重なる領域に分布していることがわかった。

(b)の検討課題である中屋調査区の8世紀前半の官衙遺構周辺から出土した須恵器の胎土分析では、第673図  $K_2O/CaO-Sr/Rb$  散布図のような分布を示した。この時期の須恵器も胎土別(胎土A, B, C, D)に検討したが、散布図からどの胎土もあまりまとまりがみられず、広く分布していることがわかる。ただ、胎土Aは二子・道金山・末の奥グループよりに分布するもの(26, 42, 44, 54, 66)と陶邑・邑久グループの領域よりに分布するもの(19, 22, 24, 25, 36, 45, 47, 50, 53, 55, 57, 58, 60)に別れる可能性もある。また、胎土Bでも21, 28, 35, 48, 51, 59が二子・道金山・末の奥グループよりに分布するようである。

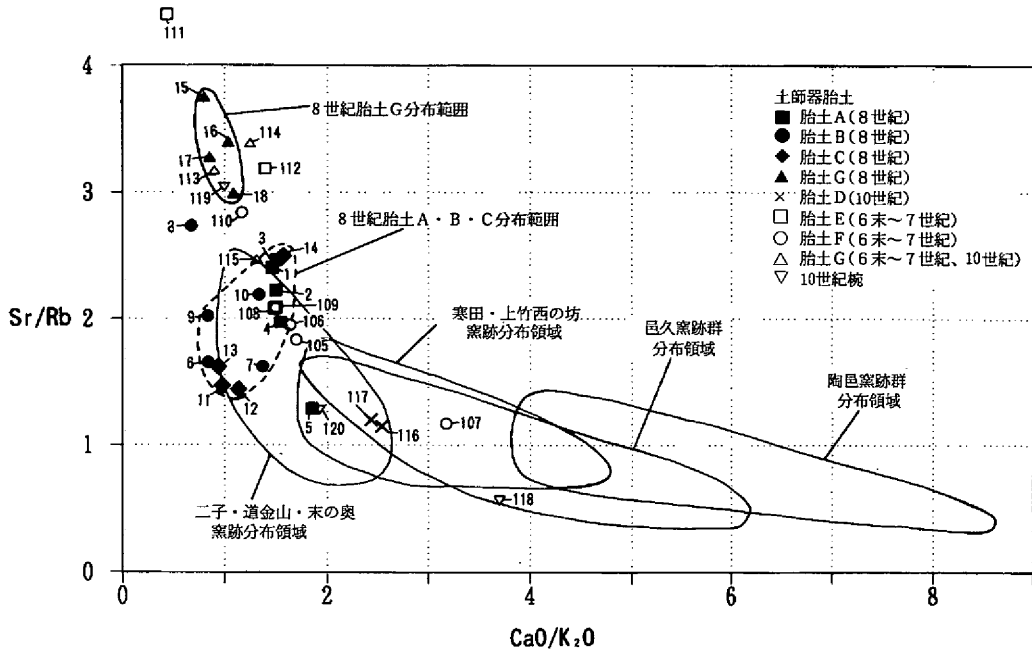
(c)の検討課題である土師器の時期・胎土別ごとでの比較では、第674図  $K_2O/CaO-Sr/Rb$  散布図のように時期別にプロットし比較してみた。この結果、一部の土器を除き6世紀末～7世紀前半・



第673図  $K_2O/CaO-Sr/Rb$  散布図 津寺遺跡 8 C前半の須恵器と生産地窯跡との比較

8世紀前半と10世紀の土器で分析値にほぼ差がみられるようである。特に、杯(116)、杯(117)、碗(118)、碗(120)の土器が、他の土師器と離れてプロットし、識別された。

また、同散布図では、胎土別(A, B, C, D, E, F, G)についても検討した。この結果、8世紀前半の胎土G(15, 16, 17, 18)、6世紀末～7世紀前半の胎土E(112)・F(110)・G(113)、10世紀の胎土G(114)・碗(119)がほぼ一つにまとまる様相を呈している。また、それ以外の8世紀前半の胎土A, B, Cと6世紀末～7世紀前半・10世紀の土器もある程度まとまるようである。



第674図 K<sub>2</sub>O/CaO-Sr/Rb 散布図 津寺遺跡 6 C末～10 Cの土師器の胎土別比較

### 3. まとめ

今回の胎土分析で検討できたことおよび若干の考察を加えてまとめとしたい。

(1)高田調査区の主に竪穴住居跡出土の須恵器(6世紀末～7世紀前半)の生産地推定では、比較試料の生産地の窯跡として、岡山県南部の6世紀末～8世紀代の窯跡がおおきく二つに別れ、一つは二子・道金山・末の奥グループ、もう一つは上竹西の坊・寒田、邑久のグループである。この両者のグループは、完全に別れるのではなく、両方の分布領域が1/3ぐらい重なる領域がある。また、陶邑グループは上竹西の坊・寒田、邑久のグループと分布領域が1/3ほど重なる。このような生産地である窯跡資料を基礎資料として、生産地の推定をした。そして、表36のような須恵器の生産地を想定した。また、胎土の肉眼観察で4つに分類されているこれらの須恵器のうち、胎土Aが寒風および多地域から搬入品と予想されているものは、分析でもほぼ寒風の領域に入っているが、この領域には上竹・寒田の領域でもあり胎土分析では特定できない。

また、この他の胎土B・C・Dの須恵器は広く散漫な分布で、胎土ごとにまとまらなかった。この結果から推測すると、高田調査区の6世紀末から7世紀前半の竪穴住居跡を中心とした遺構から出土した須恵器は、複数の生産地から供給されたことが予想される。

(2)中屋調査区の官衙関連遺構から出土した須恵器(8世紀前半)の生産地推定では、6世紀末から7世紀前半の須恵器と同様に、生産地の窯跡と比較した。そして、表37に個々の須恵器がどの生産地

に分布するか検討している。

考古学的な検討では、この8世紀前半の須恵器のうち胎土Aは寒風あるいは多地域からの搬入品と考えられている。しかし、胎土分析では全体的には広く散漫な分布を示し、ほとんどの須恵器について特定の供給先を推定できなかった。ただ、これらの須恵器は邑久窯跡群、寒田・上竹西の坊窯跡の領域内にほぼ分布していることがわかった。

(3)土師器の胎土分析では、胎土の肉眼観察で7つに分類されたが、胎土分析では、8世紀前半の土師器が胎土別(A・B・C・G)にまとまりをみせ、特に胎土Gは他の胎土と明らかに識別できた。その他の胎土(A・B・C)は、ほぼ一つにまとまる傾向を示した。胎土Cは、肉眼観察で畿内からの搬入品と考えられているが、この胎土分析では特徴ある分布は示さなかった。

また、6世紀末～7世紀前半の土師器は、110(杯・胎土F)、112(甗・胎土E)、113(甗・胎土G)と105(甗・胎土F)、106(甗・胎土F)、108(甗・胎土E)、109(高杯・胎土E)の二つに分かれ、胎土別には分かれなかった。また、10世紀の土師器も114(甗・胎土G)、115(甗・胎土G)、119(碗)と116(杯・胎土D)、117(杯・胎土D)、118(碗)、120(碗)に分かれた。

このように、土師器の胎土分析では、胎土Gのように単独でまとまるもの、時期により分布が異なるものなど、複数の粘土あるいは生産地を想定できる結果となった。ただ、胎土Cは肉眼観察から畿内からの搬入品と考えられているが、分析では識別できなかった。また、この分析では時期・胎土別の試料が少なく測定試料を増やし、検討する必要がある。

このように、須恵器の生産地の推定では生産地自体の各窯跡群の間で、識別が困難な状況にあり、また、各遺構内出土の須恵器も各生産地が重複する領域にプロットされ、どの窯跡からもたらされたか推定するまでにいたらなかった。分析の限界である。

## 註

註1 肉眼観察による胎土の分類は、試料提供者による。なお、胎土は以下のような分類である。

### 須恵器

胎土A 灰白色ないし灰色で、精良なものが多い。焼成堅緻で、壺や杯の一部に多い。黒色粒子を含むものは寒風窯の可能性はあるが、多地域からの搬入品を含むと想定する。

胎土B 暗灰色で細砂を含み、焼成堅緻なもの。壺や杯の一部にみられる。山手村から総社平野での生産を想定する。

胎土C 灰白色で、粗砂ないし礫を多く含む。焼成不良のものが多く、杯Aに特徴的にみられる。遺跡近傍での生産を想定する。

胎土D 灰白色ないし灰色で、細砂ないし粗砂を含む。焼成堅緻で、甗に多くみられる。特徴に乏しく、生産地の推定は不明である。

### 土師器

胎土A 橙色ないし浅黄橙色で、粗砂を含む。皿・杯・鉢など量的に最も多い。遺跡近傍での生産を想定する。

胎土B にぶい橙色で赤色土粒を含む。杯・皿・高杯など一定量みられる。高梁川流域での生産を想定する。

- 胎土C 橙色で、細砂を含む。杯・皿・などごく少量みられる。畿内からの搬入を想定する。
- 胎土D にぶい橙色ないし浅黄橙色で赤色土粒を含む。杯に多く見られる。遺跡近傍での生産を想定する。
- 胎土E 橙色ないしにぶい褐色で粗砂・礫を多く含む。鉢・甕に多く見られる。遺跡近傍での生産を想定する。
- 胎土F 橙色で粗砂を多く含む。甕に多く見られる。遺跡近傍での生産を想定する。
- 胎土G にぶい橙色ないし黄橙色で粗砂や礫を含み、金雲母を特徴的に含む。甕・カマドに限定される。高梁川流域での生産を想定する。

資料 番号	掲載 番号	器 種	胎 土	上竹西の坊 寒 田	二子・道金山 末の奥	邑 久 牛 窓	陶 邑	時 期	備 考
67	-	杯	A			○	○	古墳	
72	-	杯	A	○		○		古墳	
75	120	杯	A	○		○		古墳	
91	-	高杯	A	○		○		古墳	
104	374	壺	A				○	古墳	
92	377	横瓶	A	○	○	○		古墳	
98	-	甕	A	○		○	○	古墳	
100	-	甕	A					古墳	
81	156	蓋	B	○	○	○		古墳	
84	211	蓋	B	○		○		古墳	
86	227	蓋	B	○		○		古墳	
71	272	杯	B	○	○	○		古墳	
76	130	杯	B		○			古墳	
77	186	杯	B	○		○		古墳	
87	275	高杯	B					古墳	
90	-	高杯	B	○		○		古墳	
96	250	甕	B					古墳	
93	353	横瓶	B			○	○	古墳	
101	229	甕	B	○		○	○	古墳	
82	185	蓋	C			○	○	古墳	
83	372	蓋	C			○	○	古墳	
85	226	蓋	C		○			古墳	
69	373	杯	C				○	古墳	
70	422	杯	C	○		○		古墳	
78	-	杯	C		○			古墳	
74	-	杯	C	○		○	○	古墳	
88	-	高杯	C	○		○		古墳	
89	203	高杯	C	○	○	○		古墳	
95	145	甕	C		○			古墳	
102	103	壺	C				○	古墳	
108	-	壺	C	○		○	○	古墳	
94	538	甕	C					古墳	
99	-	蓋	C	○		○	○	古墳	
78	271	蓋	D	○		○		古墳	
79	-	蓋	D					古墳	
80	129	蓋	D			○	○	古墳	
68	225	杯	D			○	○	古墳	

表36 胎土から推定される須恵器の産地（古墳時代）

資料 番号	掲載 番号	器 種	胎 土	上竹西の坊 寒 田	二子・道金山 末の奥	邑 久 牛 窓	陶 邑	時 期	備 考
19	-	蓋	A	○		○	○	奈良	中屋B地点
20	-	蓋	A	○		○	○	奈良	中屋B地点
22	-	蓋	A			○	○	奈良	中屋A地点
57	-	蓋	A	○		○	○	奈良	中屋A地点
36	-	杯A	A		-		○	奈良	中屋B地点
58	-	杯B	A	○		○	○	奈良	中屋B地点
24	-	杯B	A	○		○		奈良	中屋A地点
25	-	杯B	A	○		○	○	奈良	中屋A地点
26	-	杯B	A	○	○		-	奈良	中屋A地点
44	-	壺L	A	○	○		-	奈良	中屋B地点
45	-	壺K	A		-		○	奈良	中屋B地点
50	-	壺L	A		-		○	奈良	中屋B地点
53	-	横瓶	A	○		○	○	奈良	中屋B地点
54	-	横瓶	A		○		-	奈良	中屋B地点
55	-	高杯	A		-		-	奈良	中屋A地点
47	-	甕	A		-	○	○	奈良	中屋B地点
60	-	甕	A		-	○	○	奈良	中屋B地点
64	-	甕	A	○	○			奈良	中屋A地点
66	-	甕	A	○		○		奈良	中屋A地点
21	-	蓋	B	○		○		奈良	中屋A地点
35	-	杯A	B	○		○		奈良	中屋A地点
28	-	杯B	B	○	○	○		奈良	中屋A地点
59	-	杯B	B	○		○		奈良	中屋B地点
40	-	壺A	B		-	○	○	奈良	中屋A地点
43	-	壺K	B		-		○	奈良	中屋A地点
48	-	壺	B	○	○	○		奈良	中屋B地点
41	-	甕A	B	○		○		奈良	中屋A地点
23	-	蓋	C	○		○		奈良	中屋A地点
32	-	杯A	C	○	○	○		奈良	中屋A地点
33	-	杯A	C		○		-	奈良	中屋A地点
34	-	杯A	C	○		○		奈良	中屋A地点
27	-	杯B	C		-		○	奈良	中屋A地点
37	-	高杯	C	○		○		奈良	中屋B地点
38	-	高杯	C	○	○		-	奈良	中屋B地点
61	-	盤	C	○		○		奈良	中屋B地点
39	-	壺A	C	○		○		奈良	中屋A地点
49	-	壺K	C		-		○	奈良	中屋B地点
46	-	壺L	C	○		○		奈良	中屋B地点
29	-	杯B	D		○		-	奈良	中屋B地点
30	-	杯B	D	○	○	○		奈良	中屋B地点
31	-	杯B	D	○		○	○	奈良	中屋A地点
56	-	皿B	D	○		○	○	奈良	中屋A地点
52	-	盤	D	○	○	○		奈良	中屋B地点
42	-	甕	D	○	○		-	奈良	中屋A地点
65	-	甕	D	○		○		奈良	中屋A地点
62	-	壺	D			○	○	奈良	中屋A地点
63	-	甕	D	○		○		奈良	中屋A地点

表37 胎土から推定される須恵器の産地（奈良時代）

試料 番号	旧調査区名	旧遺構名	掲載 番号	種別	器種	時 期	色 調	胎土	焼成	K <sub>2</sub> O	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	Sr	Rb	備 考
1	中屋H3区	包含層	-	土師器	杯A	8c前半	浅黄橙	精良	良好	2.25	5.83	58.99	0.99	18.54	1.51	236	98	外面赤色顔料 胎土A
2	中屋H3区	土壌9	-	土師器	皿B	8c前半	浅黄橙	粗砂	良好	1.98	4.51	59.87	0.63	20.7	1.3	240	107	外面赤色顔料 胎土A
3	中屋H3区	包含層	-	土師器	杯B	8c前半	橙	精砂	良好	2.00	5.75	58.3	0.93	19.7	1.31	241	98	外面赤色顔料 胎土A
4	中屋E1区	溝10	-	土師器	皿A	8c前半	橙	粗砂	良好	1.94	4.72	55.83	0.70	21.44	1.24	198	100	内外面赤色顔料 胎土A
5	中屋E1区	溝10	-	土師器	鉢	8c前半	鈍い橙	粗砂	良好	2.11	4.87	60.02	0.65	19.27	1.13	188	147	外面赤色顔料 胎土A
6	中屋E1区	包含層	-	土師器	高杯	8c前半	鈍い橙	細砂	良好	2.14	11.74	49.81	1.11	16.58	2.52	164	99	外面赤色顔料 胎土B
7	中屋E1区	溝10	-	土師器	杯B	8c前半	鈍い橙	細砂	良好	2.48	7.67	59.36	0.97	17.77	1.78	197	121	内外面赤色顔料 胎土B
8	中屋E1区	溝10	-	土師器	鉢	8c前半	鈍い橙	細砂	良好	1.47	8.78	49.45	0.81	20.66	2.14	231	84	内外面赤色顔料 胎土B
9	中屋H3区	包含層	-	土師器	杯A	8c前半	橙	精良	良好	2.18	11.23	50.46	1.17	16.87	2.55	217	107	内外面赤色顔料 胎土B
10	M12V	包含層	-	土師器	皿B	8c前半	橙	細砂	良好	2.15	7.88	55.61	0.99	18.38	1.59	196	90	外面赤色顔料 胎土B
11	中屋H3区	包含層	-	土師器	皿A	8c前半	橙	細砂	良好	2.41	11.43	54.17	1.18	17.38	2.45	160	109	内外面赤色顔料 胎土C
12	中屋E1区	溝10	-	土師器	皿A	8c前半	橙	細砂	良好	2.38	8.17	54	1.24	21.74	2.06	181	125	内外面赤色顔料 胎土C
13	中屋H3区	包含層	-	土師器	皿A	8c前半	橙	精良	良好	2.23	11.68	52.29	1.23	18.22	2.38	163	100	内外面赤色顔料 胎土C
14	中屋B1区	包含層	-	土師器	杯A	8c前半	橙	精良	良好	1.84	8.4	54.84	0.88	19.42	1.15	185	74	内外面赤色顔料 胎土C
15	中屋H3区	溝10	-	土師器	甕	8c前半	灰褐	砂	良好	1.62	9.22	52.19	0.86	18.88	1.99	184	49	胎土G
16	中屋H3区	溝10	-	土師器	甕	8c前半	鈍い橙	砂	良好	1.83	8.60	53.76	0.81	19.13	1.75	186	54	胎土G
17	中屋H3区	包含層	-	土師器	甕	8c前半	鈍い橙	砂	良好	1.68	8.89	54.71	0.91	18.09	1.94	189	58	胎土G
18	中屋H3区	包含層	-	土師器	甕	8c前半	鈍い橙	砂	良好	2.03	9.13	52.22	0.89	18.63	1.85	192	64	胎土G
19	中屋E1区	溝1	-	須恵器	杯B蓋	8c前半	灰白	砂、精砂	不良	2.63	3.70	73.94	0.74	19.35	0.60	115	139	ツマミ有り 胎土A (寒風か)
20	中屋E1区	溝1	-	須恵器	杯B蓋	8c前半	灰白	細砂	良好	1.94	4.45	69.91	0.85	20.21	0.47	92	99	胎土A
21	中屋H3区	溝群	-	須恵器	杯B蓋	8c前半	灰白	細砂	良好	2.22	6.03	64.82	0.84	22.64	0.72	131	115	胎土B
22	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯B蓋	8c前半	灰白	精砂	良好	2.27	3.96	66.53	0.96	23.38	0.42	88	144	胎土A
23	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯B蓋	8c前半	灰白	粗砂	良好	2.55	6.07	62.3	0.69	22.12	0.91	182	178	胎土C
24	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯B	8c前半	灰白	黒色粗砂	良好	2.19	5.29	71.56	0.87	18.89	0.62	119	117	胎土A、自然釉付着 (寒風か)
25	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯B	8c前半	灰白	細砂	良好	2.06	4.65	71.94	0.75	19.82	0.47	94	144	胎土A、自然釉付着 (寒風か)
26	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯B	8c前半	灰白	黒色粗砂	良好	2.20	7.90	62.93	0.88	19.85	1.17	135	101	胎土A、自然釉付着 (寒風か)
27	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯B	8c前半	灰白	細砂	良好	2.99	3.90	64.68	0.68	23.89	0.60	101	237	胎土C
28	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯B	8c前半	灰	細砂	良好	2.47	6.36	63.84	0.87	20.43	1.04	134	122	胎土B
29	中屋E1区	溝1	-	須恵器	杯B	8c前半	灰	粗砂	不良	1.7	7.51	49.64	0.94	23.35	1.16	207	133	胎土D
30	中屋E1区	包含層	-	須恵器	杯B	8c前半	鈍い黄橙	赤色土粒	不良	2.12	8.59	60.34	1.00	20.66	0.99	122	93	胎土D
31	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯	8C前半	灰白	細砂	良好	2.29	4.4	70.13	0.85	21.05	0.56	106	119	胎土D
32	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯A	8C前半	灰白	砂	良好	2.24	5.25	60.96	0.75	24.76	0.96	208	172	胎土C
33	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯A	8C前半	灰白	赤色土粒	不良	2.09	6.02	60.27	0.8	23.33	1.21	235	140	胎土C
34	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯A	8C前半	淡黄	砂	不良	2.72	5.66	63.56	0.84	22.17	0.71	127	185	胎土C
35	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯A	8C前半	灰	細砂	良好	2.55	5.75	63.97	0.91	22.77	0.86	141	123	胎土B
36	中屋E1区	溝10	-	須恵器	杯A	8C前半	灰白	細砂	不良	2.34	3.97	57.36	0.59	23.3	0.45	79	203	胎土A
37	中屋E1区	包含層	-	須恵器	高杯	8C前半	灰白	細砂	不良	2.98	4.42	65.53	0.74	23.15	0.81	151	184	胎土C
38	中屋M12区	溝10	-	須恵器	高杯	8C前半	灰	粗砂	良好	2.47	4.01	60.94	0.7	24.24	1.26	283	209	胎土C
39	中屋H3区	包含層	-	須恵器	盞A	8C前半	灰白	細砂	良好	2.69	4.27	67.39	0.68	22.28	1	192	144	胎土C
40	中屋H3区	包含層	-	須恵器	盞A	8C前半	灰白	細砂	良好	2.15	6.42	71.62	0.89	18.89	0.42	87	107	胎土B

表38 津寺遺跡胎土分析試料一覧表(%) ただし、Sr、Rbはppm(1)

試料番号	旧調査区名	旧遺構名	掲載番号	種別	器種	時期	色調	胎土	焼成	K <sub>2</sub> O	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	Sr	Rb	備考
41	中屋H3区	包含層	-	須恵器	甕	8C前半	灰	細砂	良好	2.49	8.16	64.75	0.84	20.29	0.82	97	100	胎土B
42	中屋H3区	包含層	-	須恵器	甕	8C前半	灰黄	礫	不良	2.09	5.17	57.39	0.88	26.06	1.17	249	183	胎土D
43	中屋H3区	包含層	-	須恵器	壺K	8C前半	灰白	細砂	良好	2.27	15.69	57.6	1.33	19.39	0.55	49	91	胎土B
44	中屋E1区	溝10	-	須恵器	壺L	8C前半	灰白	細砂	良好	2.11	5.1	60.22	0.72	26.24	0.82	115	142	胎土A
45	中屋E1区	包含層	-	須恵器	壺K	8C前半	灰白	黒色粒子	良好	2.81	4.46	65.19	0.79	23.51	0.64	110	221	胎土A(寒風か)
46	中屋M12-V区	包含層	-	須恵器	壺L	8C前半	灰白	砂	良好	1.8	6.38	66.31	0.82	22.76	0.62	90	122	胎土C
47	中屋M12-V区	包含層	-	須恵器	甕	8C前半	灰白	黒色粒子	良好	1.73	4.94	80.47	0.83	16.32	0.34	59	101	胎土A(寒風か)
48	中屋M12-V区	包含層	-	須恵器	壺	8C前半	灰	細砂	良好	2.32	6.27	66.49	0.85	20.72	0.96	131	109	胎土B
49	中屋M12-V区	包含層	-	須恵器	壺K	8C前半	灰白	細砂	良好	2.43	3.56	61.56	0.73	26.54	0.47	79	220	胎土C
50	中屋E1区	溝10	-	須恵器	壺L	8C前半	灰白	細砂	不良	2.45	3.62	62.61	0.74	25.48	0.57	100	213	胎土A
51	中屋M12-V区	包含層	-	須恵器	壺	8C前半	灰白	細砂	良好	2.09	4.48	67.66	0.81	22.44	0.7	133	125	胎土C
52	中屋M12-V区	包含層	-	須恵器	壺	8C前半	灰白	細砂・粗砂	良好	2.04	5.14	65.99	0.78	22.86	0.93	188	112	胎土D
53	中屋M12-V区	溝10	-	須恵器	横瓶	8C前半	灰白	細砂	良好	2.68	2.97	68.16	0.77	22.83	0.69	118	136	胎土A
54	中屋M12-V区	溝10	-	須恵器	横瓶	8C前半	灰白	礫	良好	1.68	5.15	63.69	0.78	24.44	1.21	160	112	胎土A?
55	中屋H3区	包含層	-	須恵器	高杯	8C前半	灰白	精良	良好	2.77	4.44	62.95	0.84	25.62	0.6	106	161	胎土A
56	中屋H3区	包含層	-	須恵器	皿B	8C前半	灰白	精良	良好	2.14	4.71	69.31	0.96	20.23	0.48	97	116	胎土D
57	中屋H3区	包含層	-	須恵器	杯B蓋	8C前半	灰白	精良	良好	2.12	4.99	67.41	0.96	21.98	0.45	95	116	胎土A
58	中屋H3区	溝13	-	須恵器	杯B	8C前半	灰	精良	良好	2.13	6.55	68.16	0.9	19.83	0.47	94	108	胎土A
59	中屋H3区	溝3	-	須恵器	杯B	8C前半	灰	精良	良好	2.04	5.65	66.06	1.22	21.8	0.64	109	111	胎土B
60	中屋E1区	溝10	-	須恵器	甕	8C前半	灰白	精良	不良	2.12	6.39	71.5	0.9	18.63	0.42	78	112	胎土A
61	中屋E1区	溝10	-	須恵器	甕	8c前半	浅黄橙	細砂	不良	2.07	5.2	55.01	0.78	23.19	1.14	244	158	胎土C
62	中屋H3区	包含層	-	須恵器	甕	8c前半	灰	細砂	良好	2.61	6.23	67.78	0.74	20.68	0.52	91	112	胎土D
63	中屋H3区	包含層	-	須恵器	甕	8c前半	灰白	細砂	良好	2.23	4.7	72.55	0.89	20.46	0.63	131	113	胎土D
64	中屋H3区	包含層	-	須恵器	甕	8c前半	灰	細砂	良好	2.23	6.34	65.97	0.87	19.91	1.21	146	104	胎土A
65	中屋H3区	包含層	-	須恵器	甕	8c前半	灰白	細砂	良好	1.68	5.21	73.5	1	19.88	0.64	128	86	胎土D
66	中屋H3区	包含層	-	須恵器	甕	8c前半	灰白	細砂	良好	2.71	5.75	69.33	0.74	18.72	0.97	123	115	胎土A
67	高田A1区南	P87	-	須恵器	杯身	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	2.77	3.46	74.4	0.57	19.95	0.52	94	155	胎土A
68	高田A1区南	住4	225	須恵器	杯身	6c末~7c前半	灰	礫	良好	1.72	6.06	68.15	0.94	21.29	0.34	72	89	胎土D
69	高田A1区北	溝2	373	須恵器	杯身	6c末~7c前半	赤橙	粗砂	良好	2.04	6.52	76.69	1.09	16.43	0.31	59	123	胎土C
70	高田A1区北	住7	422	須恵器	杯身	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	2.0	5.4	69.18	0.87	21.92	0.66	141	138	胎土C
71	高田P1区	住29	272	須恵器	杯身	6c末~7c前半	灰白	粗砂・砂礫	良好	1.72	9.39	68.04	1.19	19.38	0.73	88	99	胎土B
72	高田P1区	包含層	-	須恵器	杯身	6c末~7c前半	灰白	粗砂	良好	2.39	5.47	70.44	0.76	21.67	0.73	131	135	胎土A
73	高田M1-I区	溝1	-	須恵器	杯身	6c末~7c前半	灰白	粗砂(雲母)	良好	1.68	8.62	49.65	0.91	22.57	1.58	196	75	胎土C
74	高田M1-I区	溝1	-	須恵器	杯身	6c末~7c前半	灰白	(赤色粒と雲母)	良好	2.15	5.72	62.15	0.99	22.45	0.53	104	107	胎土C
75	高田M1-II区	住7	120	須恵器	杯身	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	2.84	4.86	66.2	0.7	22.72	0.97	154	150	胎土A
76	高田M1-II区	住13	130	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	灰白	粗砂	良好	1.95	8.9	62.87	1.17	20.23	1.37	129	76	胎土B
77	高田M1-III区	住8	186	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	青灰	細砂	不良	2.34	4.17	72.66	0.66	19.47	0.63	122	132	胎土B
78	高田P1区	住29	271	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	灰白	粗砂	良好	2.16	8.21	61.5	0.95	22.22	0.58	124	100	胎土D
79	高田M1-III区	住13	-	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	灰	細砂	良好	1.87	6.52	67.93	1.07	21.4	0.57	71	135	胎土D
80	高田M1-II区	住13	129	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	灰白	粗砂	良好	1.94	5.86	65.81	0.96	22.6	0.31	48	99	胎土D
81	高田M1-III区	住9	156	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	青灰	粗砂・細砂	不良	2.78	8.35	65.97	0.92	17.87	1.1	127	121	胎土B
82	高田M1-III区	住8	185	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	灰白	細砂・粗砂	良好	2.13	5.9	67.66	0.86	21.73	0.43	88	133	胎土C
83	高田A1区北	溝2	372	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	灰	粗砂	良好	2	8.09	65.91	0.93	19.65	0.42	69	104	胎土C
84	高田A1区北	住1	211	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	青灰	細砂	良好	2.58	5.4	67.23	0.74	22.39	0.77	135	138	胎土B
85	高田A1区南	住1	226	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	灰	細砂	良好	1.89	7.86	57	0.91	25.12	1.1	126	101	胎土C
86	高田A1区南	住1	227	須恵器	杯蓋	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	1.65	7.76	63.32	1.12	23.02	0.61	88	82	胎土B
87	高田P1区	住28	275	須恵器	高杯	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	2.32	4.06	70.65	0.9	22.2	0.31	78	116	胎土B
88	高田P1区	P135	-	須恵器	高杯	6c末~7c前半	灰白	(角閃石)	良好	2.45	5.59	65.53	0.75	19.84	0.92	147	105	胎土C
89	高田A1区北	住10	203	須恵器	高杯	6c末~7c前半	灰白	粗砂	良好	1.64	7.11	70.86	1.1	18.4	0.72	77	83	胎土C
90	高田M1-V区	南側溝	-	須恵器	高杯	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	1.79	7.5	68.41	1.19	20.28	0.56	87	119	胎土B

表39 津寺遺跡胎土分析試料一覧表(%) ただし、Sr、Rbはppm(2)

試料 番号	旧調査区名	旧遺構名	掲載 番号	種別	器種	時 期	色 調	胎土	焼成	K <sub>2</sub> O	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	Sr	Rb	備 考
91	高田3B-V区	包含層	-	須恵器	高坏	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	2.40	6.45	63.60	0.87	22.66	0.81	125	123	胎土A
92	高田P2区	溝3	377	須恵器	横瓶	6c末~7c前半	灰	細砂	良好	2.54	4.16	60.61	0.72	25.41	1.29	276	215	胎土A
93	高田3B-I区	溝11	353	須恵器	横瓶	6c末~7c前半	灰	粗砂	良好	2.25	6.31	68.64	0.94	21.47	0.40	75	109	胎土B
94	高田P2区	溝4	538	須恵器	鍋	6c末~7c前半	灰白	粗砂	良好	2.26	4.24	59.58	0.76	27.69	0.72	118	207	胎土C
95	高田M1-Ⅲ区	住3	145	須恵器	甗	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	1.63	7.87	53.66	1.05	27.08	0.94	121	117	胎土C
96	高田A1区南	住7	250	須恵器	甗	6c末~7c前半	灰	細砂	良好	2.08	7.60	59.40	0.91	24.21	0.71	89	158	胎土B
97	高田3B区	包含層	578	須恵器	風字硯	10c	灰白	細砂	良好	2.25	5.78	69.16	0.83	20.12	0.69	102	120	胎土D
98	高田A1区北	包含層	-	須恵器	甗	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	2.57	4.42	71.76	0.76	20.34	0.62	130	129	胎土A
99	高田A1区北	包含層	-	須恵器	甗	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	2.94	4.28	68.04	0.70	22.25	0.66	109	141	胎土C
100	高田A1区北	包含層	-	須恵器	甗	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	1.44	5.86	70.06	1.01	21.40	0.35	64	100	胎土A
101	高田A1区南	包含層	229	須恵器	甗	6c末~7c前半	灰	細砂	良好	2.08	7.51	67.12	1.03	21.23	0.46	83	107	胎土B
102	高田M1-I区	住2	103	須恵器	甗	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	2.45	4.00	67.73	1.02	23.45	0.30	82	140	胎土C
103	高田M1-Ⅳ区	黒色溜り	-	須恵器	壺	6c末~7c前半	灰白	細砂	良好	1.44	6.08	68.04	0.98	21.86	0.36	88	72	胎土C
104	高田A1区北	溝2	374	須恵器	甗	6c末~7c前半	灰	細砂	良好	1.60	6.71	69.31	0.94	20.41	0.34	82	73	胎土A
105	高田P1区	住25	283	土師器	甗	6c末~7c前半	橙	細砂	良好	2.44	8.42	62.90	0.95	16.08	1.43	147	81	胎土F
106	高田P1区	住25	-	土師器	甗	6c末~7c前半	橙	細砂	良好	2.35	8.33	65.72	0.99	14.83	1.42	151	78	胎土F
107	高田M1-I区	住5	113	土師器	甗	6c末~7c前半	鈍い褐	細砂	良好	2.57	9.29	64.03	1.05	17.37	0.81	77	67	胎土F
108	高田M1-II区	住3	125	土師器	甗	6c末~7c前半	橙	砂礫	良好	2.56	7.00	57.63	0.58	20.87	1.72	252	121	胎土E
109	高田M1-II区	住5	134	土師器	高坏	6c末~7c前半	橙	細砂	良好	2.05	9.02	58.91	0.99	18.64	1.37	169	81	胎土E
110	高田P1区	住27	280	土師器	坏	6c末~7c前半	橙	粗砂	良好	1.78	12.08	56.15	0.95	19.45	1.52	157	55	胎土F
111	高田M1-II区	住7	122	土師器	坏	6c末~7c前半	明褐灰	細砂	良好	0.78	13.61	48.03	1.30	19.34	2.36	152	28	胎土E
112	高田A1区北	溝3	-	土師器	甗	6c末~7c前半	橙	細砂	良好	1.99	6.17	59.43	0.82	18.85	1.42	290	91	胎土E
113	高田M1-II区	住13	131	土師器	甗	6c末~7c前半	鈍い橙	細砂	良好	1.60	10.16	51.03	1.00	20.29	1.77	175	55	胎土G
114	高田P1区	土器溜り	487	土師器	甗	10c前半	灰褐	細砂	良好	2.40	8.19	58.66	0.72	16.29	1.92	249	73	胎土G
115	高田P1区	土器溜り	486	土師器	甗	10c前半	鈍い黄褐	細砂	良好	2.13	8.18	57.57	0.75	17.97	1.61	179	72	胎土G
116	高田P1区	土器溜り	-	土師器	坏	10c前半	浅黄橙	細砂	良好	2.29	5.49	57.75	0.95	20.97	0.90	198	174	胎土D
117	高田P1区	土器溜り	-	土師器	坏	10c前半	浅黄橙	細砂	良好	2.37	5.28	60.74	0.84	19.43	0.97	212	179	胎土D
118	高田A1区南	包含層	-	黒色土器	碗	10c前半	浅黄橙	細砂	良好	2.49	6.73	60.42	0.76	17.24	0.87	101	185	
119	高田A1区南	包含層	-	黒色土器	碗	10c前半	淡黄	細砂	良好	1.63	6.38	55.78	0.61	19.61	1.62	269	89	
120	高田A1区南	包含層	-	黒色土器	碗	10c前半	灰白	細砂	良好	2.17	6.16	61.39	0.84	17.26	1.14	203	162	

表40 津寺遺跡胎土分析試料一覧表(%) ただし、Sr、Rbはppm(3)



# IX. 津寺遺跡出土の陶製小壺の釉について

奈良国立文化財研究所

村上 隆

## 1. はじめに

岡山県津寺遺跡から出土した陶製の小壺の表面に釉薬の痕跡が認められた。釉薬自体の残りは良くないが、肉眼による観察では、緑色と薄い黄色の存在が確認でき、三彩、あるいは二彩の釉がかかっている可能性があった。非破壊的手法を用いた蛍光X線分析によって、釉の材質を探ることを試み、この小壺には二彩の釉が施されていたと考えられることを確認したのでここに報告する。

## 2. 分析方法

分析は、非破壊的手法を用いた蛍光X線分析法によって行った。使用した装置はテクノス製TREX 650 (エネルギー分散型) である。使用したターゲットはクロム (Cr)。測定条件は、大気中測定では、電圧45kV、電流0.3mA、真空中測定では、電圧20kV、電流4mAであった。どちらの条件においても、X線の照射面積は1mmφ、照射時間は100秒である。

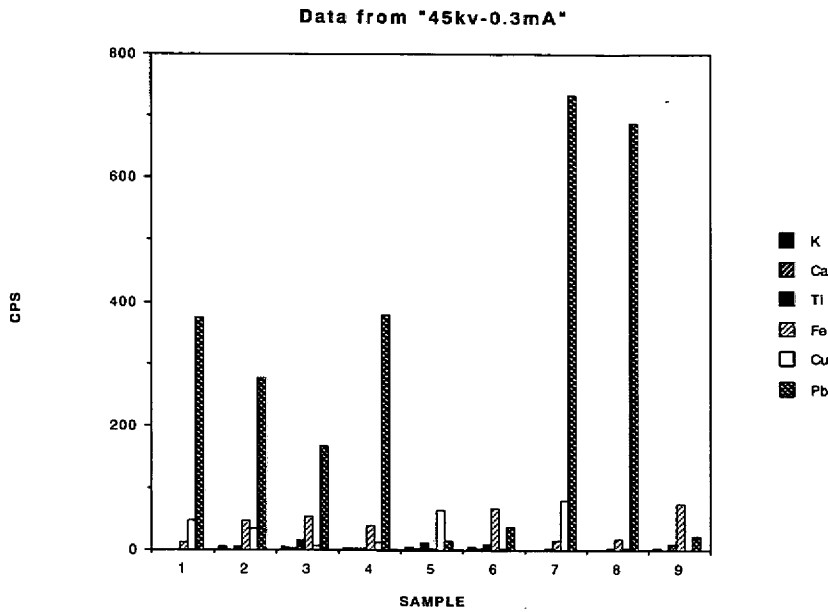
## 3. 結果および考察

分析は、表面の釉薬中に存在する重元素を確認するために、まず大気中で測定を行ったあと、同じ箇所において軽元素の確認のために真空中においても測定を行った。分析した箇所を次に示す。なお、参考のため、二彩釉がかかっているとみられる同じ津寺遺跡高田調査区から出土した小型火舎の破片も分析に供した。

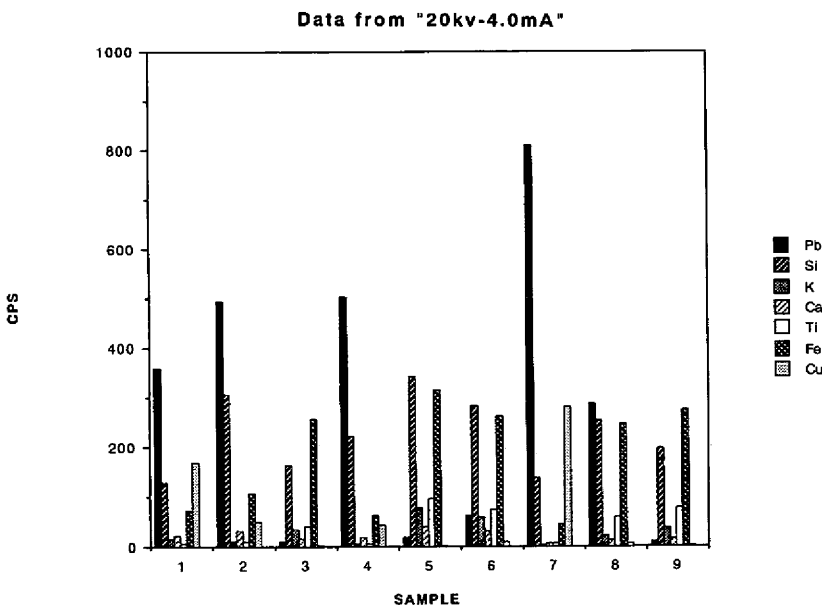
<分析箇所>

- |    |    |    |                  |
|----|----|----|------------------|
| 1. | 小壺 | 胴部 | 濃い緑色             |
| 2. | 〃  | 胴部 | 薄い緑色             |
| 3. | 〃  | 胴部 | 胎土 (釉が欠け落ちた白い部分) |
| 4. | 〃  | 胴部 | 淡黄色              |
| 5. | 〃  | 底部 | 胎土 (高台の部分)       |
| 6. | 〃  | 底部 | 薄い黄色 (底中央部)      |
| 7. | 火舎 | 胴部 | 濃い緑色             |
| 8. | 〃  | 胴部 | 白色               |
| 9. | 〃  | 胴部 | 灰色               |

以上の9箇所に対して得られた結果を、まとめてグラフにした。第675図は大気中における測定の結果を、第676図は真空中における測定の結果を示す。それぞれのグラフにおいて、横軸の数字は上で述べた測定箇所を示し、縦軸はそれぞれの元素のX線強度(cps)を示す。なお、グラフに取り上げた元素は、Pb (鉛)、Si (シリコン)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Fe (鉄)、Cu (銅)となる。



第675図 蛍光X線分析による検出元素の検出強度の相対比較  
(大気中測定)



第676図 蛍光X線分析による検出元素の検出強度の相対比較  
(真空中測定)

さて、津寺遺跡出土の小壺の特徴として挙げられるのが、緑色でも淡黄色でも釉のかかっている個所では相対的に鉛を強く検出することである。そして、緑色の釉から銅が多量に検出される。このことから、緑色の釉は、いわゆる鉛釉に呈色剤として銅を添加したものであることがわかる。また、淡黄色の釉からは銅とともに鉄も若干優位に検出される傾向にある。従って、淡黄釉も基本は鉛釉であり、不純物として含まれていた鉄が呈色剤として機能したと考えてよいのではなかろうか。胎土と比較して、例えば褐釉のように顕著な濃い色の存在を示すような鉄の検出強度が高い個所は認められなかった。また、得られた軽元素の分析データから、特別な結論を引き出せるような違いを認めるには至らなかった。参考資料として分析した小型火舎の場合も、緑釉の残りがよいことから銅の検出強度が相対的に強くなっているものの、全体に小壺と同様の傾向が認められた。

#### 4. まとめ

津寺遺跡出土の小壺の表面に施された釉を、非破壊的手法を用いた蛍光X線分析法によって分析した結果、釉の基本は鉛釉であり、色彩としては三彩というより二彩の釉が施されていた可能性が高いことが判った。

# X. 津寺遺跡出土のガラス滓について

株式会社ニコン・相模原製作所

荻谷 道郎

## 1. 資料および実体顕微鏡観察結果

津寺遺跡中屋調査区の土壌-210出土ガラス滓(資料1)は灰色塊状で多孔質であり、引き伸ばされた筋上の痕跡および圧着された溝状の痕跡がある。実体顕微鏡観察によれば内部に泡と未溶解物を含有する暗緑色のガラスで、表面に砂粒が多量に付着している。

百間川原尾島遺跡(藤原A 4-c区)出土ガラス滓<sup>1</sup>(資料2)は灰色粒状あるいは粉状で、実体顕微鏡観察によれば内部に多量の泡と未溶解物を含有する暗緑色のガラス部分とガラス化が進んでいない焼結体部とがある。また砂粒が多量に付着している。

いずれも以前、百間川今谷遺跡出土の「ガラス滓」あるいは鹿田遺跡出土の「ガラス滓」と同類の資料である。

## 2. 分析結果と組成の推定

資料をエネルギー分散型X線分析装置(フィリップス EDAX9100)で分析した。分析は木戸一博氏、安立伸夫氏(いずれも株式会社ニコン 相模原技術開発部)に依頼した。分析結果を表41に示す。

本分析法ではガラス表面の約1 $\mu$ mまでの組成を半定量分析している。ガラスは不均質であり、本分析法では表面の微小部分を分析しているため、組成として多数点の分析値を示した。

## 3. 考察

資料1および2の主成分の組成を分析法は異なるが百間川今谷遺跡出土のガラス滓および鹿田遺跡出土のガラス滓<sup>2</sup>と比較し表42に示す。

資料1および2はともに百間川今谷遺跡出土のガラス滓および鹿田遺跡出土のガラス滓に較べSiO<sub>2</sub>含有量が少なく、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が多い。資料2はNa<sub>2</sub>Oが少ないが、これは資料が小粒ないし粉状であり、地中埋蔵中に水によってNa<sub>2</sub>Oが溶出したためと考えられる。資料2はFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>含有量が最大22%に達し鉄滓の可能性もあるが、従来発表されている鉄滓の組成と比較するとFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>含有量が少なく、

資料	津寺遺跡中屋出土		
	a	b	c
組成(wt%)			
SiO <sub>2</sub>	52	57	56
Na <sub>2</sub> O	9.8	9.0	7.8
K <sub>2</sub> O	2.6	2.6	1.9
MgO	6.4	4.5	2.8
CaO	3.6	2.6	1.9
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	14	15	17
TiO <sub>2</sub>	0.6	0.9	0.8
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	11	7.7	10
MnO	—	—	—
Cl	0.5	0.6	—

表41 津寺遺跡出土ガラス滓組成分析結果

SiO<sub>2</sub> 含有量が多く、鉄滓と考えにくい。

これらの組成のガラス滓のうち鉄含有量の少ないものは強還元条件で熔解(金属精錬の温度・酸素条件に近い)されると、青色のガラスとなることが実験により判明した。

#### 参考文献

- 1 荻谷道郎「百間川原尾島遺跡出土ガラス玉およびガラス滓」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97』1995
- 2 三浦定俊、荻谷道郎「鹿田遺跡出土ガラス滓—分析結果に関するコメント—」『岡山大学構内遺跡発掘報告第3冊 鹿田遺跡 I』, p463

資 料	津寺遺跡中屋	百間川原尾島遺跡	鹿 田 遺 跡	百間川今谷遺跡
SiO <sub>2</sub>	55±2.2	50.6±3.5	60.7±1.8	62.6±1.8
Na <sub>2</sub> O	8.9±0.8	2.5±1.0	9.4±0.4	11.5±1.2
K <sub>2</sub> O	2.4±0.3	1.5±0.5	2.0±0.6	1.3±0.3
MgO	4.6±1.5	3.3±1.2	5.7±1.3	4.9±1.1
CaO	2.7±0.7	2.3±1.4	3.6±1.0	2.6±0.5
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	15.3±1.2	20.8±5.0	9.7±1.7	9.7±2.0
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	9.6±1.4	14.7±4.2	5.1±1.9	4.2±1.0

(単位：wt%， ±の後は標準偏差)

表42 ガラス滓の主成分の比較

# XI. 津寺遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

大澤 正己

## 1. 概要

古墳時代後期の住居跡15軒から出土した製鉄関連遺物（鉱石、鉄滓、鉄塊系遺物）を調査して次の点が明らかになった。

- a. 出土鉄滓は、荒鉄（製錬生成鉄で表皮スラグや捲き込みスラグ、更には炉材粘土など不純物を含む原料鉄：製錬鉄塊系遺物）の成分調整を行った精錬鍛冶から鍛打作業を伴う鍛錬鍛冶までの作業を裏付ける鍛冶滓が主体であった。なお、これに少量の鉱石製錬滓が存在したが、こちらは炉底塊中の鉄塊抽出の小割り選別で生じた残滓の可能性をもつ。
- b. 鉄滓組成からみて鍛冶に供された鉄素材は、鉱石系と砂鉄系の2通りが想定された。また、鍛冶原料の鉄塊系遺物は、低炭素鋼の亜共析鋼から高炭素含有の鑄鉄まで幅広い素材の調達であった。
- c. 高田調査区では、磁鉄鉱や鉱石製錬滓の検出をみたが、これらは量的に少なく当地が直接の鉄生産地でなくて、周辺近傍での製鉄操業がある事を示唆する。

## 2. いきさつ

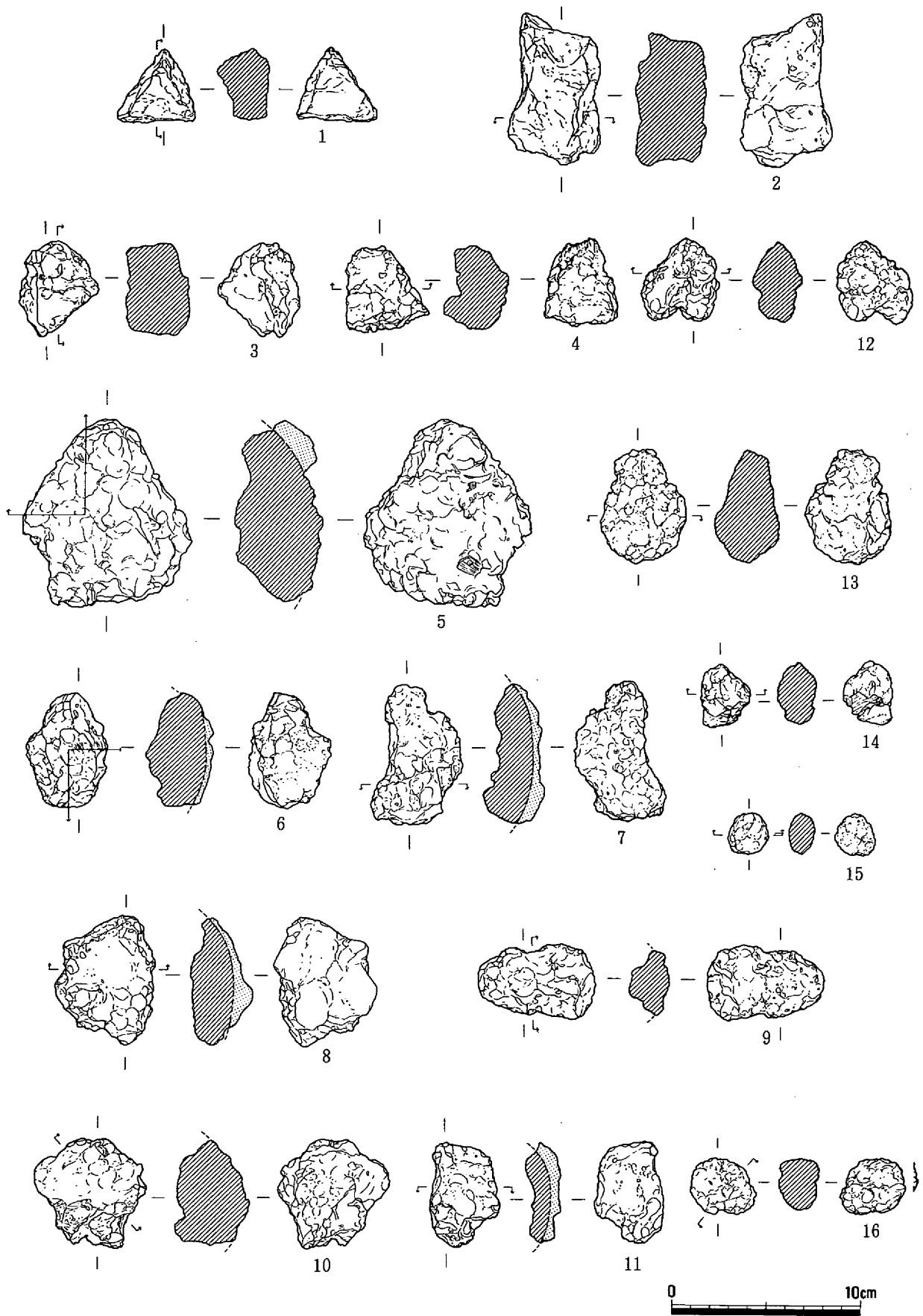
津寺遺跡高田調査区は岡山市津寺に所在する。古墳時代後期遺構（住居跡）出土関連遺物を通して、当時の製鉄事情の実態を把握する目的から金属学的調査の実施となった。

供試材の選別は、筆者が出土遺物を一通り実見して遺構を代表するものを抽出した。

試料番号	試料	出土遺構	時期	計測値		調査項目				
				長さ×幅×厚さ (mm)	重さ (g)	マクロ組織	顕微鏡組成	ピッカース断面硬度	CMA調査	化学組成
TT-1	鉄鉱石	竪穴住居-31	6C末~7C初	3.8×4.1×2.75	56.3		○	○		○
TT-2	製錬滓	竪穴住居-61	6C末~7C初	7.3×4.88×3.75	213.7		○	○		○
TT-3	製錬滓	竪穴住居-59	6C末~7C初	4.8×4.01×3.35	65.4		○			○
TT-4	鍛冶滓(精錬鍛冶滓)	竪穴住居-47	6C末~7C初	4.5×4.3×3.2	69.7		○			○
TT-5	椀形鍛冶滓	竪穴住居-58	6C末~7C初	9.7×8.65×4.6	401.2		○	○	○	○
TT-6	椀形鍛冶滓破片	竪穴住居-48	6C末~7C初	6.1×4.3×3.75	122.8		○			○
TT-7	椀形鍛冶滓破片	竪穴住居-72	6C末~7C初	7.4×3.9×3.15	100.8		○			○
TT-8	椀形鍛冶滓破片	竪穴住居-48	6C末~7C初	6.8×5.15×3.2	92.7		○			○
TT-9	椀形鍛冶滓破片	竪穴住居-68・69	6C末~7C初	3.85×6.2×2.05	60.4		○	○		○
TT-10	椀形鍛冶滓破片	竪穴住居-32	6C末~7C初	5.6×5.85×3.7	97.6		○			○
TT-11	椀形鍛冶滓破片	竪穴住居-23	6C末~7C初	5.4×3.6×1.8	41.2		○			○
TT-12	含鉄鉄滓	竪穴住居-5	6C末~7C初	4.2×4.0×2.6	41.4	○	○			-
TT-13	鉄塊系遺物 (○)	竪穴住居-45	6C末~7C初	6.1×4.5×3.45	90.3	○	○	○		-
TT-14	鉄塊系遺物 (◎)	竪穴住居-51	6C末~7C初	3.25×2.65×2.0	22.3	○	○	○		-
TT-15	鉄塊系遺物 (◎)	竪穴住居-48	6C末~7C初	2.15×2.15×1.35	7.5	○	○	○	○	-
TT-16	鉄塊系遺物 (△)	竪穴住居-46	6C末~7C初	3.0×3.4×2.05	25.7		○			-

鉄塊系遺物 (◎) Metal: 多      鉄塊系遺物 (○) Metal: 中      鉄塊系遺物 (△) Metal: 少

表43 津寺遺跡高田調査区出土供試材の履歴と調査項目



第677図 津寺遺跡出土の製鉄関連遺物分析試料 1/3 (矢印の方向の試料を分析した。)

### 3. 調査方法

#### 2-1. 供試材

表43・第677図に示す。鉄鉱石1点、鉄滓11点、鉄塊系遺物4点の合計16点の調査である。

#### 2-2. 調査方法

- (1) 肉眼観察      (2) マクロ組織      (3) 顕微鏡組織      (4) ビッカース断面硬度  
(5) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査      (6) 化学組成分析

### 4. 調査結果と考察

#### TT-1 : 鉄鉱石

肉眼観察：平面が三角形に小割りされた磁鉄鉱である。茶褐色粘土膜に覆われるが基地には鉄黒色の堅緻で光沢質である。強磁性であり、磁鉄鉱 (Magnetite :  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) の上質含有鉄分は理論値は72.4%であるが、現実には岩石成分やその他の脈石が含まれるため品位は落ちる。近代製鉄においては通常60%前後のものが多く使用される。

顕微鏡組織：第678図の①に示す。全体に淡灰色地が磁鉄鉱であり、黒い斑点や茶色の細い線は脈石成分の不純物である。多くの磁鉄鉱には白い針状の溶離ヘマタイトの縞模様が検出されて、天然の磁鉄鉱の特徴を示すウィッドマンステッテン構造 (Widmannstätten Structure) が認められるのであるが、該品はそれがなかった。

ビッカース断面硬度：第678図の①で顕微鏡組織と併用で硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は淡灰色地で532Hvであった。磁鉄鉱の文献硬度値は530~600Hvであって、この範囲に収まっていれば、磁鉄鉱と同定される。

化学分析組成：表44に示す。該品は脈石成分を多く含み、やや品位の落ちる成分系であった。全鉄分 (Total Fe) は41.37%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.15%、酸化第1鉄 (FeO) が9.56%、大部分が酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) の48.31%の割合であった。不純物のガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) は39.91%と多く、ただし、鉄と滓の分離を促進する媒溶剤の塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) が18.82%と多く、これが、後述していく鉱石製錬滓に影響して高値となって表れている。砂鉄特有成分の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 0.05%、バナジウム (V) 0.01%などは少ない。酸化マンガン (MnO) の0.96%は一般的であり、銅 (Cu) の0.015%も低めであった。また、有害元素の硫黄 (S) 0.01%、五酸化リン ( $\text{P}_2\text{O}_5$ ) 0.13%も少なくして良品である。

#### TT-2、TT-3 : 鉱石製錬滓 (炉底塊)

肉眼観察：2点共箱形製鉄炉の炉底塊の破砕片である。表面は木炭痕を残し、気泡を散在させ、肌は凹凸をもつが緻密質である。色調は灰褐色から灰黒色を呈し、一部は粘土被膜に覆われる。裏面も表面にほぼ準じていた。

顕微鏡組織：第678図の②~⑦に示す。両方共に鉱物組成は、炉底で成長した淡灰色盤状結晶のファイヤライト (Fayalite :  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) と少量の白色粒状結晶のヴスタイト (Wüstite : FeO)、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。鉱石製錬滓の晶癖である。

ビッカース断面硬度：TT-2鉄滓の淡灰色盤状結晶の中の淡く酸化された個所の硬度測定の際の圧痕を第678図の④に示す。硬度値は882Hvであった。淡灰色盤状結晶はファイヤライトとみたが、これ

だと文献硬度値は600～700Hvの範囲である。今回の硬度測定個所は、淡灰色結晶内の淡灰白色結晶を対象としたので、ファイヤライトとは異なる値を得たのである。当結晶はファイヤライト・マグネシアン（Fayalite・Magnesian： $(\text{Fe} \cdot \text{Mg})_2\text{SiO}_4$ ）ではないかとも考えられるが別途確認が必要である。

化学組成分析：表44に示す。両者は近似した値である。全鉄分（TotalFe）は40.07～41.43%、ガラス質成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）が41.46～44.42%、このうちに塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）を7.45～7.75%と磁鉄鉱（TT-1）同様高めである。二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）0.24～0.26%、バナジウム（V）0.01%、酸化マンガン（ $\text{MnO}$ ）0.34～0.62%、銅（Cu）0.010～0.018%であった。磁鉄鉱を始発原料とした製錬滓に分類される。

#### TT-4：精錬鍛冶滓

肉眼観察：鍛冶炉の炉底に堆積した椀形状鉄滓の中核部に相当する破損品である。表面は灰黒色基地に鉄銹が局部的に発生。肌は木炭痕を残し、やや荒れ気味である。裏面は灰色粘土を付着する。

顕微鏡組織：第679図の①に示す。鉱物組成は、大量の白色粒状結晶のヴスタイトと、淡灰色長柱状結晶のファイヤライトを晶出し、それらの粒間を暗黒色ガラス質スラグが埋める。鍛冶滓の晶癖である。荒鉄（製錬生成鉄で、表皮スラグや捲き込みスラグ、更には炉材粘土などを含む原料鉄：鉄塊系遺物）の成分調整の精錬鍛冶で排出された滓に分類される。

化学組成分析：表44に示す。全鉄分（Total Fe）は50.53%に対して金属鉄（Metallic Fe）が0.28%、酸化第1鉄（ $\text{FeO}$ ）が54.93%と主体をなし、顕微鏡組織のヴスタイト量の多量晶出と対応し、酸化第2鉄（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）の10.80%の割合である。二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）0.18%、バナジウム（V）0.01%、銅（Cu）0.013%など脈石成分などは前述した製錬滓とは大差ないが、ガラス質成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）が31.51%と減少し、その中の塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）も3.04%と約1/2以下となる。同じく酸化マンガン（ $\text{MnO}$ ）も0.21%と低減し、鉱石系精錬鍛冶滓としての成分傾向を呈している。

#### TT-5、TT-6：砂鉄系精錬鍛冶滓

肉眼観察：両方共に鍛冶炉の炉底に堆積形成した椀形滓でTT-5は一部欠損するもほぼ完形品に近く、TT-6は中核部で周縁を欠く。色調は両方共灰褐色で表面肌は荒れて木炭痕を残し、裏面は青灰色粘土を付着するが、特に後者が顕著であった。

マクロ組織：第684図の①②に示す。両者の鉱物相は、白色粒状のヴスタイトとマグネタイト（ $\text{Magnetite} : \text{Fe}_3\text{O}_4$ ）及びウルボスピネル（ $\text{Ulvöspinel} : 2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ）などの混在する砂鉄系鉄滓の特徴を呈し、特別の偏析は認められなかった。なお、鉄滓中には0.1～1mm前後の気泡が点在していた。

顕微鏡組織：第679図の②～⑦に示す。2者の鉱物組成は、白色粒状のヴスタイトとマグネタイト、その粒内には微小な淡茶褐色の鉄（Fe）-チタン（Ti）析出物を含み、更には独立ウルボスピネルを共伴する。この後者2つの鉱物相は製鉄原料の砂鉄に由来するのであって、前述してきた鉱石系の鉄素材とは別系統の材料供給のあった事が推定される。

この2種の鉄滓は、砂鉄を原料とした鉄素材の荒鉄の成分調整の精錬鍛冶において排出された鍛冶滓といえる。

ビッカース断面硬度：供試材はTT-5を代表させた。微小析出物を含む白色粒状結晶の硬度測定



の圧痕を第679図の③に、淡茶褐色多角形結晶の圧痕を④に示す。硬度値は前者が513Hvで、後者は608Hvであった。前者の513Hvは、マグネタイトの文献硬度値の500～600Hvの範疇に収まり、後者の608Hvはマグネタイトの上限を越えている。前者はマグネタイト、後者はマグネタイトより硬質のウルボスピネルに同定される。

CMA調査：これもTT-5鉄滓を調査の代表とした。第686図のSE（2次電子像）に示す白色粒状結晶とその粒内微小析出物及び淡茶褐色多角形結晶を分析の対象とした。第686図は特性X線像であって分析元素の存在は白色輝点の集中度によって読み分ける。白色粒状結晶は鉄の酸化物（FeOもしくは $Fe_3O_4$ ）なので鉄（Fe）に強く白色輝点が集積し、その粒内析出物の微小析出物にはチタン（Ti）が検出される。同じく淡茶褐色多角形結晶にも鉄（Fe）とチタン（Ti）に白色輝点が集積し、両者は同系であって、鉱物組成は鉄とチタンの化合物であるウルボスピネル（ $2FeO \cdot TiO_2$ ）が同定される。繰り返しになるがチタン（Ti）は砂鉄特有元素であって、該品は砂鉄系荒鉄の成分調整の精錬鍛冶に際して排出された滓と判定がつく。

化学組成分析：表44に示す。両者は砂鉄特有元素の二酸化チタン（ $TiO_2$ ）が4.88～5.61%、バナジウム（V）0.05～0.09%と前述してきた鉱石系の滓に比べて格段と高い。これは砂鉄系荒鉄の鍛冶に際して排出された滓である。精錬鍛冶は繰り返し工程がありTT-5はTT-6より先行時に排出されている。脈石成分の二酸化チタン（ $TiO_2$ ）が5.61%に対して4.88%、同じくバナジウム（V）は0.09%に対して0.05%、酸化マンガン（MnO）0.53%と0.48%などの成分差にもとづく結果からの指摘である。砂鉄系の製鉄排出物は、生産工程の進行によって、前述した様に特有元素は濃度勾配で表れる。

#### TT-8：砂鉄系鍛錬鍛冶滓

肉眼観察：表裏共に灰褐色を呈する小型（92.7g）碗形滓で周縁部の一部を欠く。表面は木炭痕と気泡を発生しガラス分の多い滓である。

顕微鏡組織：第680図の②に示す。鉱物組成は、灰色盤状結晶と少量のヴスタイトを晶出し、その隙間を暗黒色ガラス質スラグが埋める。鉄錠状半製品や鉄器製作に際して赤熱鉄材の表面酸化防止に粘土汁が塗布されて、これが鉄材と反応してファイヤライトの増加を促進した滓であって、鍛錬鍛冶滓に分類される。前述したTT-5、TT-6の精錬鍛冶滓の後続工程の滓に想定される。

化学組成分析：表44に示す。赤熱鉄材の酸化防止の粘土汁塗布の影響で鉄分少なく、ガラス質成分の多い滓である。すなわち、全鉄分（Total Fe）は34.33%に対して金属鉄（Metallic Fe）が0.70%、酸化第1鉄（FeO）主体の37.02%、酸化第2鉄（ $Fe_2O_3$ ）6.94%の割合である。ガラス質成分（ $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$ ）は52.40%あり、このうちに塩基性成分（ $CaO + MgO$ ）を5.17%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（ $TiO_2$ ）も0.49%と鉱石系精錬鍛冶滓の0.18%（TT-4）よりも2倍以上、バナジウム（V）も0.09%と多くてTT-5、TT-6の後続を表す濃度勾配が認められた。また、酸化マンガン（MnO）の0.24%、銅（Cu）の0.008%などは、鉄素材がTT-5、TT-6と同系である事を察知できる値であった。

#### TT-7、TT-9、TT-10、TT-11：鉱石系精錬鍛冶滓

肉眼観察：このグループの4点は100g以下の楕円小型碗形滓の一部欠損品である。表皮の色調は灰黒色から灰褐色で木炭痕と小さい凹凸をもつものの、一部流動面も認められた。各滓ともに裏面は青灰色粘土を付着する。

顕微鏡組織：第680図の①、③～⑥、第681図の①～③に示す。鉱物組成はいずれも白色粒状結晶のヴスタイト、淡灰色盤状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。

ビッカース断面硬度：TT-9の白色粒状結晶の硬度測定の前痕を第680図の⑤に示す。硬度値は432Hvであった。ヴスタイト文献硬度値450～500Hvの下限を若干割るがヴスタイトに同定される。なお、当ヴスタイト結晶内には微小黒色斑点のヘーシナイト（Hercynite： $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ）の析出が一部の結晶で認められた。高温での精錬作業があったと推定される。

化学組成分析：表44に示す。この4点のグループはほぼ近似した成分系であった。全鉄分（Total Fe）は41.85～45.10%、TT-7とTT-10は錆化鉄を含み、酸化第2鉄（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）が24.26～37.93%と高めが従来みてきたものと異なる。ガラス質成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）は33.04～41.07%、このうちの塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）が4.14～5.96%と高めで精錬鍛冶滓に分類される。二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）は0.21～0.30%、バナジウム（V）0.001%と少なく鉱石系鉄素材の鍛冶を表し、酸化マンガン（ $\text{MnO}$ ）0.16～0.34%、銅（Cu）が0.045～0.085%と前述してきたものとは一線を画して高めであって含銅磁鉄鉱に近い履歴の鉄素材のある事も予想された。

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分	金属鉄	酸化第1鉄	酸化第2鉄	※ 二酸化硅素	※ 酸化アルミニウム
					(Total Fe)	(Metallic Fe)	(FeO)	( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )	( $\text{SiO}_2$ )	( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )
TT-1	津寺	竪穴住居-31	鉄鉱石	6C末～7C初	41.37	0.15	9.56	48.31	20.77	0.29
TT-2	"	竪穴住居-61	鉱石製錬滓	"	41.43	0.18	42.94	11.26	26.53	5.29
TT-3	"	竪穴住居-59	"	"	40.07	0.18	44.94	7.09	29.06	5.67
TT-4	"	竪穴住居-47	精錬鍛冶滓	"	50.53	0.28	54.93	10.80	22.82	4.30
TT-5	"	竪穴住居-58	砂鉄系精錬鍛冶滓	"	43.41	0.27	43.80	13.00	16.73	4.43
TT-6	"	竪穴住居-48	"	"	51.22	0.35	24.54	45.46	13.51	3.31
TT-7	"	竪穴住居-72	精錬鍛冶滓	"	42.81	0.22	32.96	24.26	29.12	5.83
TT-8	"	竪穴住居-48	砂鉄系鍛錬鍛冶滓	"	34.33	0.70	37.02	6.94	36.00	8.58
TT-9	"	竪穴住居-68・69	精錬鍛冶滓	"	45.10	0.21	45.72	13.37	23.03	4.91
TT-10	"	竪穴住居-32	"	"	41.85	0.46	19.12	37.93	22.33	5.16
TT-11	"	竪穴住居-23	"	"	44.31	0.17	50.36	7.14	28.02	6.52

※ 酸化カルシウム	※ 酸化マグネシウム	※ 酸化カリウム	※ 酸化ナトリウム	酸化マンガン	二酸化チタン	酸化クロム	硫黄	五酸化燐	炭素	バナジウム	銅	Σ※		
(CaO)	(MgO)	( $\text{K}_2\text{O}$ )	( $\text{Na}_2\text{O}$ )	(MnO)	( $\text{TiO}_2$ )	( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ )	(S)	( $\text{P}_2\text{O}_5$ )	(C)	(V)	(Cu)	造滓成分	造滓成分	$\text{TiO}_2$
												TotalFe	TotalFe	TotalFe
18.45	0.37	0.02	0.01	0.96	0.05	0.02	0.01	0.13	0.02	0.01	0.015	39.91	0.965	0.001
6.51	1.24	1.21	0.68	0.34	0.24	0.01	0.02	0.36	0.08	0.01	0.018	41.46	1.001	0.006
6.25	1.20	1.54	0.70	0.62	0.26	0.02	0.02	0.43	0.10	0.01	0.010	44.42	1.109	0.007
2.23	0.81	0.80	0.55	0.21	0.18	0.01	0.02	0.31	0.03	0.01	0.013	31.51	0.624	0.004
1.98	0.80	0.67	0.33	0.53	5.61	0.73	0.04	0.80	0.16	0.09	0.008	24.94	0.575	0.129
2.78	0.83	0.96	0.27	0.48	4.88	0.32	0.03	0.54	0.03	0.05	0.018	21.66	0.423	0.095
3.18	0.96	1.24	0.74	0.34	0.30	0.02	0.02	0.28	0.10	0.01	0.045	41.07	0.959	0.007
3.95	1.22	1.65	1.00	0.24	0.49	0.02	0.01	0.42	0.08	0.09	0.008	52.40	1.526	0.014
5.17	0.79	1.28	0.57	0.34	0.21	0.02	0.03	0.63	0.08	0.01	0.048	35.75	0.793	0.005
3.59	0.65	0.89	0.42	0.16	0.23	0.01	0.04	0.32	0.18	0.01	0.085	33.04	0.789	0.006
3.38	0.98	1.35	0.78	0.27	0.28	0.02	0.01	0.29	0.05	0.01	0.043	41.03	0.926	0.006

表44 供試材の化学組成

#### TT-12：含鉄鉄滓

肉眼観察：表裏共に灰褐色を呈した不定形の塊で、局部的に鉄錆と亀裂を走らせ、木炭痕を残した表皮スラグを付着する含鉄鉄滓である。

顕微鏡組織：第681図の④に示す。金属鉄は残存せず、錆化鉄のゲーサイト（Goethite： $\alpha$ -FeO・OH）となる。鍛冶原料の鉄塊系遺物の残滓側に当たるのかも知れない。錆化が激しくて炭化物の痕跡も観察できず、炭素量の推定もできなかった。

#### TT-13：鉄塊系遺物（錆化物）

肉眼観察：紡錘形で全面が土砂と鉄錆で灰褐色被膜に覆われた鉄塊系遺物である。

顕微鏡組織：第681図の⑤～⑦に示す。表皮スラグは白色粒状結晶のヴスタイトと錆化鉄のゲーサイトが共伴し、これに淡灰色盤状結晶のファイヤライトと、暗黒色ガラス質スラグから構成される。精錬鍛冶系の鉄塊に想定される。該品も金属鉄は残存しきれずに錆化鉄のゲーサイトで、鉄素材としての情報を得ることができなかった。

ビッカース断面硬度：第681図の⑦に表皮スラグの白色粒状結晶の硬度測定の前痕を示す。硬度値は、360Hvと軟質である。当結晶形態はヴスタイトに同定される。しかし、ヴスタイトの文献硬度値は450～500Hvであって、時折りこのような軟質値が見受けられる。何に起因するのか明瞭でない。今後の研究課題としなければならないが、王水（塩酸3：硝酸1）で腐食（Etching）すれば黒変する組織であろう。また、同一結晶内でヴスタイトとマグネタイトの混在も予想される<sup>2</sup>。

#### TT-14：鉄塊系遺物

肉眼観察：表裏共に土砂と鉄錆の混合被膜に覆われて灰褐色を呈する丸味を帯びた鉄塊である。亀裂が走り、一部剝落する。地肌露出箇所は赤黒色で気泡なく金属鉄の残存が予測された。

マクロ組織：第685図の①に示す。表皮スラグは残さず亜共晶組成の白鑄鉄がムラなく均等に認められる。2.5mm前後の気泡が1点のみ点在するが、全面緻密質であった。

顕微鏡組織：第682図の①～⑨に示す。丸く黒い部分はオーステナイト（Austenite）より変化したパーライト、蜂の巣状の部分はセメントイトとオーステナイトの共晶のレデブライイト（Ledebulite）である。亜共晶組成白鑄鉄で炭素量は2.0%前後と低いため、比較的徐冷しても白鈍化しやすい。該品は鑄鉄としては炭素含有量が低めの鉄塊である。

①に鉄中の非金属介在物を示している。淡黄色小粒であり鑄鉄特有のもので組成は硫化鉄に分類される。詳しくはCMAの項で述べる。

ビッカース断面硬度：第682図の⑧に白色板状結晶をなすセメントイトの硬度測定の前痕を、⑨はパーライト部の前痕を示す。硬度値は、前者が866Hvと硬質で、後者は306Hvと組織に対応した値を呈している。

CMA調査：鉄中の微小淡黄色の非金属介在物を調査した。第687図のSE（2次電子像）の1の番号を付けた介在物である。白色輝点が鉄（Fe）と硫黄（S）に集中して硫化鉄（FeS）と想定される。定量分析値は、62.7%Fe-36.9%Sであった。同じく繰り返しSEの2で行った。こちらも58.6%Fe-34.9%Sでほぼ近似した組成であった。3.8%Mnの固溶が認められた。該品はチタン（Ti）やバナジウム（V）など砂鉄特有元素の検出がないので鉍石系と推定される。

#### TT-15：鉄塊系遺物

肉眼観察：8g弱の球状鉄塊である。灰褐色を呈した土砂と鉄錆被膜に覆われた塊で強磁性であっ

た。

マクロ組織：第685図の②に示す。表皮スラグは残さず、表層近くの約1/3に腐食消滅空洞を抱える。また、0.5～1.5mm前後の気泡を散在させ、遺存金属鉄は白色フェライトを一部晶出させたパーライトで占められる。

顕微鏡組織：第683図の①～⑤に示す。①は鉄中の非金属介在物で、未鍛打なので球状化したままを留める。当介在物は共析鋼クラスで存在するタイプであって、前述した鑄鉄系のものとは明らかに別系統である。鉄中の炭素量はエリアによって全面パーライトの共析鋼から微小球状セメントイトを析出する個所と、小面積のなかで偏析をもっている。当鉄塊の平均炭素含有量は、0.5%前後となる。

ビッカース断面硬度：第683図の④は全面パーライト部分を、⑤には白色のフェライト部分の多い個所の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は、前者で186Hv、後者が129Hvと組織に対応した値をもつものであった。

#### TT-16：鉄塊系遺物

肉眼観察：土砂と鉄錆被膜に覆われた鉄塊で一部に亀裂を走らせる。26gの塊で丸味を帯びる。

顕微鏡組織：第683図の⑥～⑧に示す。表皮スラグを残し、白色粒状結晶のヴスタイト、淡灰色長柱状結晶のファイヤライトの構成で鉍石系鉄塊である。金属鉄は錆化して遺存せず、僅かにパーライトを析出した痕跡を残す。低炭素鋼（C：0.02%前後）のレベルであった。

## 5. まとめ

6世紀末から7世紀初頭に比定される高田調査区では、鍛冶遺構の検出はなかったが、住居跡から出土した16点の関連遺物の調査結果から次の点が指摘できる。

当遺跡内には、鉍石系と砂鉄系の荒鉄（製錬生成鉄で、表皮スラグや捲き込みスラグ、更には炉材粘土など不純物を含む原料鉄：製錬鉄塊系遺物）が搬入されて、成分調整の精錬鍛冶を主体に行い、また、その一部については鍛打作業を加えた鍛錬鍛冶までの鍛冶一貫作業が想定された。これは取りも直さず、この遺跡周辺の何処かで鉄生産の製錬操業があった事を間接的に証明する。鉍石製錬は、磁鉄鉍（TT-1）の検出と共に鉍石製錬滓（TT-2、3）が存在し、砂鉄製錬の証明は精錬鍛冶滓（TT-5、6）と鍛錬鍛冶滓（TT-8）の検出である。

鉄生産の工程は、製錬→精錬鍛冶（繰り返しあり）→鍛錬鍛冶（反復鍛打）となる。これらの作業で排出される滓は、作業工程の進行具合によって素材に内蔵されていた脈石成分（Ti、V、Mnなどを指標とする）の濃度は漸次減少してゆく。今回の調査で砂鉄系の滓でその減少傾向がよく捉まえられたので表45に記載しておく。また、鉍石系の製錬滓から精錬鍛冶滓の成分移行の1例を挙げて結びとする。

## 註

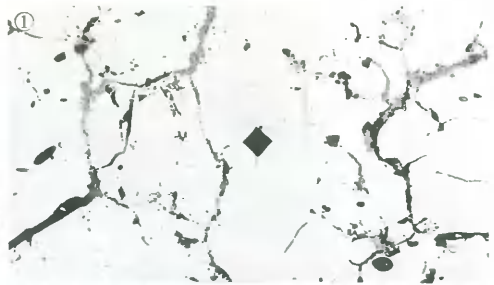
- 1 日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』1968
- 2 大澤正己「南郷角田遺跡出土の酸化膜片に対する一考察」『南郷遺跡Ⅰ』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第69冊）奈良県立橿原考古学研究所 1996

原料 滓区分 組成		砂鉄系			鉍石系		
		精錬鍛冶滓		鍛錬鍛冶滓	鉍石製錬滓		精錬鍛冶滓
		TT-5	TT-6	TT-8	TT-2	TT-3	TT-4
化学組成 (%)	TiO <sub>2</sub>	5.61	4.88	0.49	0.24	0.26	0.18
	V	0.09	0.05	0.009	0.01	0.01	0.01
	MnO	0.53	0.48	0.24	0.34	0.62	0.21
	CaO+MgO	2.78	3.61	5.16	7.75	7.45	3.04
	ガラス質成分	24.94	21.66	52.40	41.46	44.42	31.51
	Total Fe	43.41	51.22	34.33	41.43	40.07	50.53
鉍物組成		W(Fe+Ti析出物)+U+F		W+F	F+W		W+F

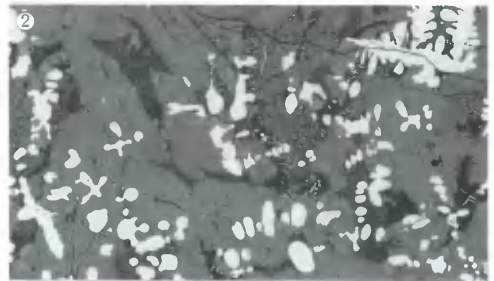
W : Wüstite (FeO)、U : Ulvöspinel (2 FeO · TiO<sub>2</sub>)、F : Fayalite (2 FeO · SiO<sub>2</sub>)

表45 鉄生産における脈石成分の挙動

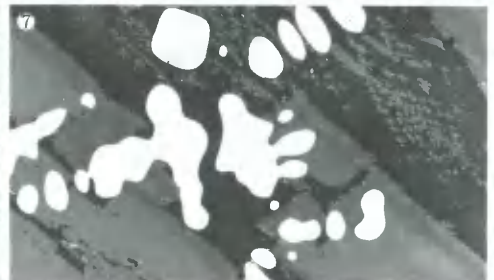
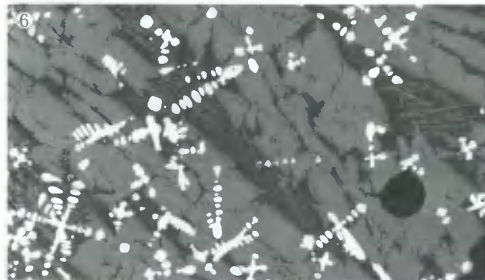
(1) TT-1  
 竪穴住居-31出土  
 鉄鉱石(磁鉄鉱)  
 ①×200 硬度圧痕  
 532Hv: 荷重200g  
 (文献硬度値: 530~600Hv)  
 外観写真×1.2



(2) TT-2  
 竪穴住居-61出土  
 鉱石製錬滓  
 ②×100, ③×400  
 ファイヤライト+ヴスタイト  
 ④×200, 硬度圧痕  
 882Hv: 荷重200g  
 (ファイヤライト・マグネシアン?)  
 外観写真1/1.8

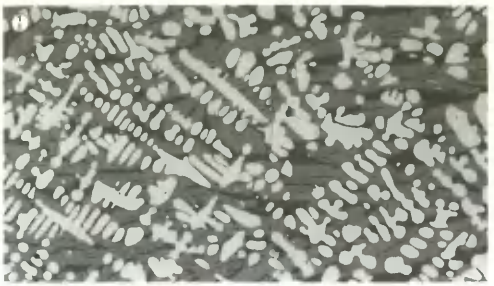
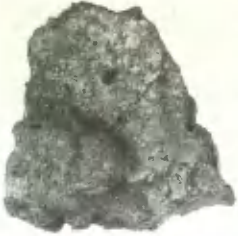


(3) TT-3  
 竪穴住居-59出土  
 鉱石製錬滓  
 ⑤⑥×100, ⑦×400  
 ファイヤライト+ヴスタイト  
 (ファイヤライト・マグネシアン)  
 外観写真1/1.2

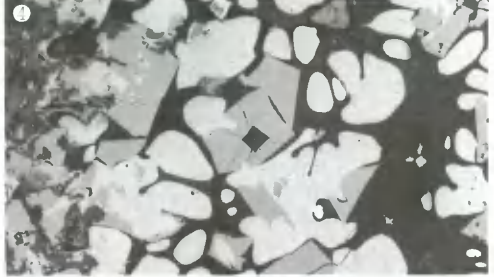
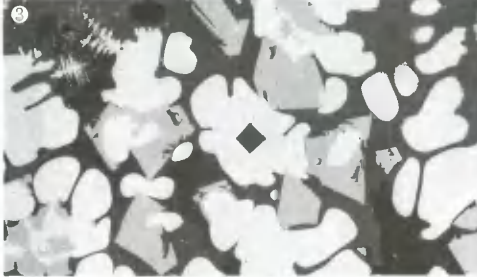
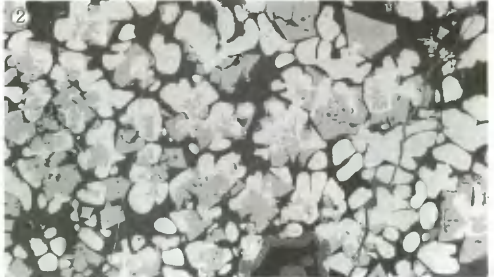


第678図 鉄鉱石・鉄滓の顕微鏡組織

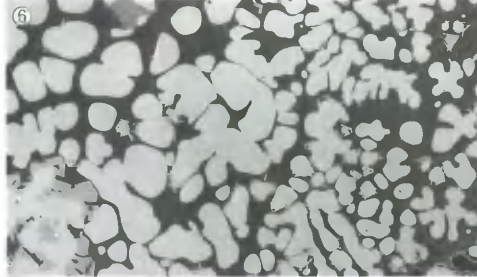
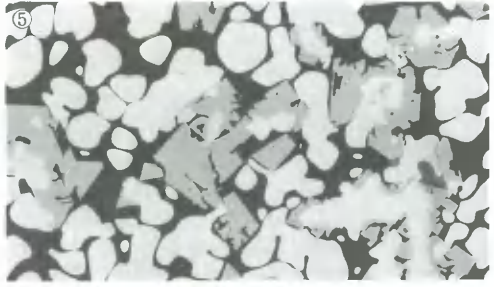
(4) TT-4  
 竪穴住居-47出土  
 鉱石系精錬鍛冶滓  
 ①×100  
 ヴスタイト+ファイヤライト  
 外観写真 1/1.1



(5) TT-5  
 竪穴住居-58出土  
 砂鉄系精錬鍛冶滓  
 ②×100  
 マグネタイト+ウルボスピネル  
 ③④×200, 硬度圧痕  
 ③マグネタイト:513Hv,200g  
 ④ウルボスピネル:608Hv,200g  
 外観写真 1/2.4

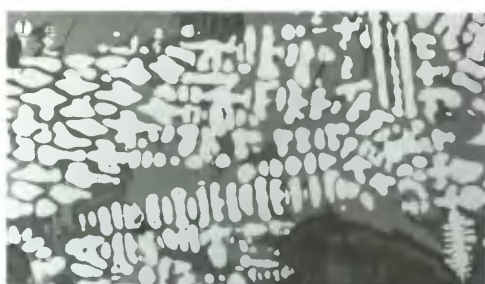


(6) TT-6  
 竪穴住居-48出土  
 砂鉄系精錬鍛冶滓  
 ⑤×100  
 マグネタイト+ウルボスピネル  
 ⑥×100 ⑦×400  
 マグネタイト粒内微小析出物  
 外観写真 1/1.3

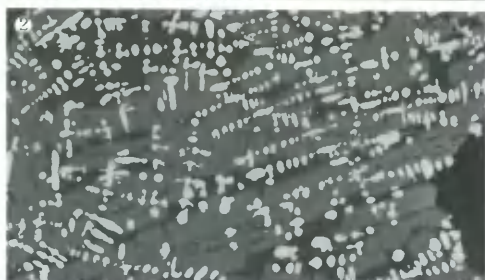


第679図 鉄滓の顕微鏡組織(1)

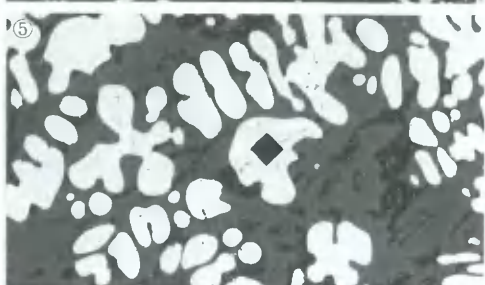
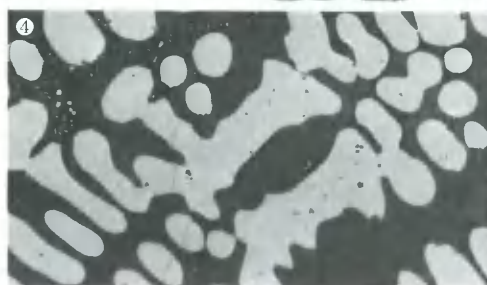
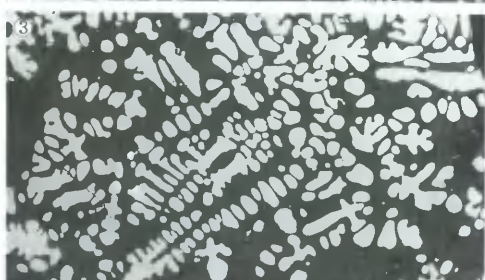
(7) TT-7  
 竪穴住居-72出土  
 鉱石系精錬鍛冶滓  
 ①×100  
 ヴスタイト+ファイヤライト  
  
 外観写真1/1.8



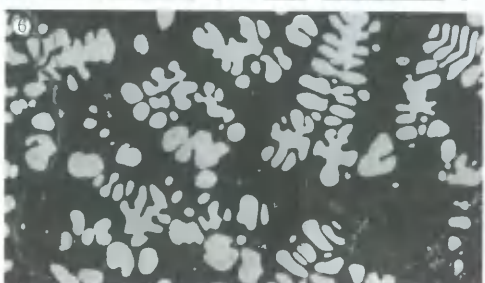
(8) TT-8  
 竪穴住居-48出土  
 砂鉄系精錬鍛冶滓  
 ②<100  
 ヴスタイト+ファイヤライト  
  
 外観写真1/1.6



(9) TT-9  
 竪穴住居-68・69出土  
 鉱石系精錬鍛冶滓  
 ③×100, ④×400  
 ヴスタイト+ファイヤライト  
 ヴスタイト粒内微小析出物  
 ⑤×200硬度片痕  
 ヴスタイト:432Hv、荷重200g  
  
 外観写真1/1.4



⑩ TT-10  
 竪穴住居-32出土  
 鉱石系精錬鍛冶滓  
 ⑥<100  
 ヴスタイト+ファイヤライト  
  
 外観写真1/1.5



第680図 鉄滓の顕微鏡組織(2)



01 TT-11

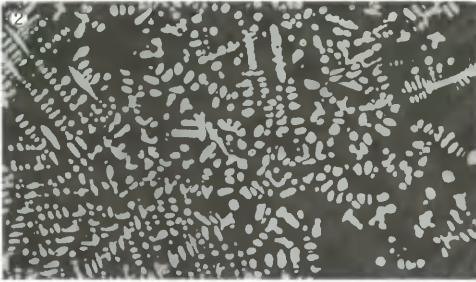
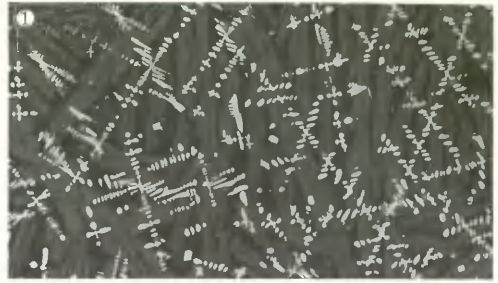
壺穴住居-23出土

鉍石系精錬鐵渣滓

①②×100, ③×400

ヴスタイト+ファイヤライト

外觀写真1/1.3



02 TT-12

壺穴住居-5出土

含鉄鉍滓

④×100

銹化鉄(ゲーサイト)

$\alpha$ -FeO·OH

外觀写真1/1.1



03 TT-13

壺穴住居-45出土

鉄塊系遺物

⑤×100 表皮スラグ

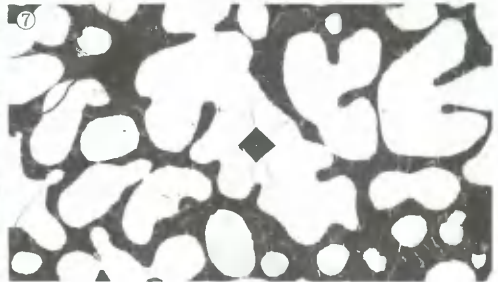
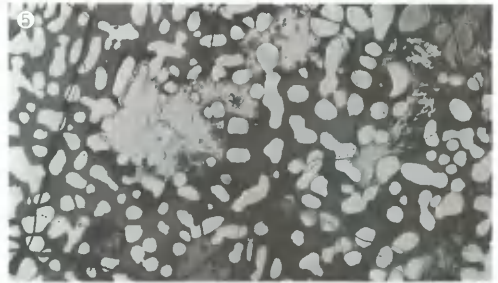
ヴスタイト+ゲーサイト

⑥×100, ゲーサイト

⑦×200, 硬度圧痕200g

ヴスタイト: 360Hv

外觀写真1/1.5



第681図 鉄滓・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

04 TT-14

壑穴住居-51出土

鉄塊系遺物

①×400 非金屬介在物

②×50②×100 ピクラルetch

④⑥×100 ⑤⑦×400

レデブライト+パーライト

⑧⑨×200 硬度圧痕

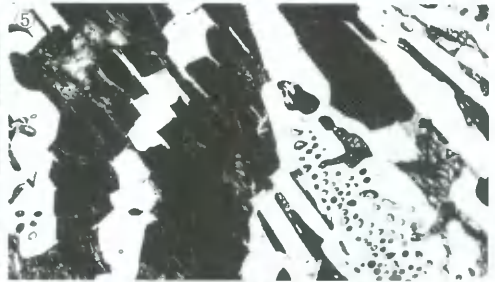
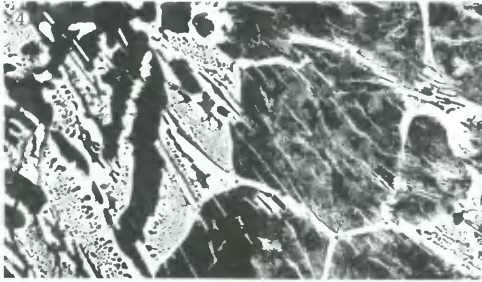
③セメントイト:866Hv 200g

④パーライト:306Hv 200g



① 外観写真×1.3

①



第682図 鉄塊系遺物の顕微鏡組織(1)

09 TT-15

壑穴住居-48出土

鉄塊系遺物

①×400 非金属介在物

②×100 ③×400 ピクルルetch

微細球状セメントイト

④⑤×200、硬度圧痕

④パーライト:186Hv 荷重200g

⑤フェライト:129Hv 荷重200g



外観写真×1.9

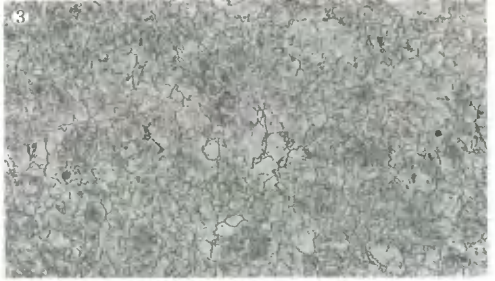
①



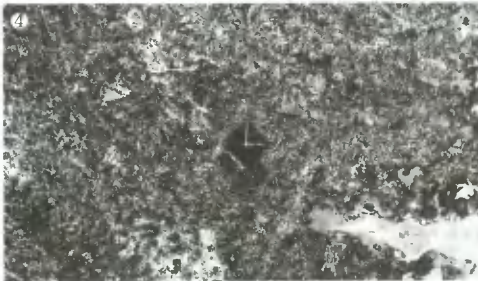
②



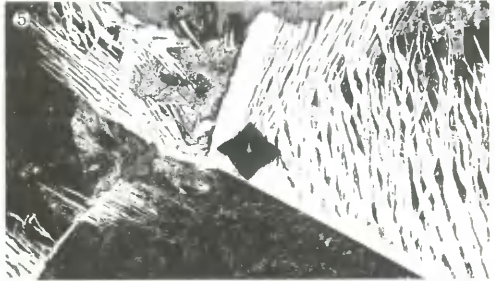
③



④



⑤



06 TT-16

壑穴住居-46出土

鉄塊系遺物

⑥×100, ⑦×400

表皮スラグとゲーサイト

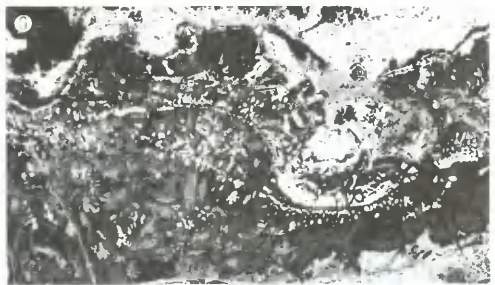
⑧×400 ゲーサイト

パーライト痕跡

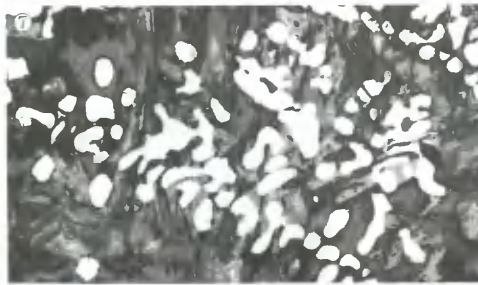


外観写真×1.2

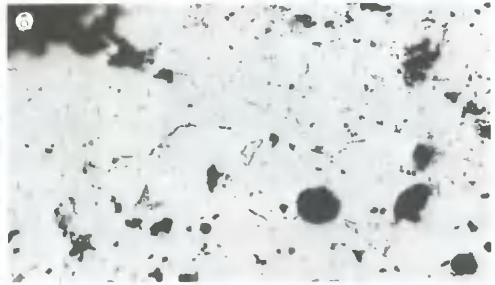
⑥



⑦

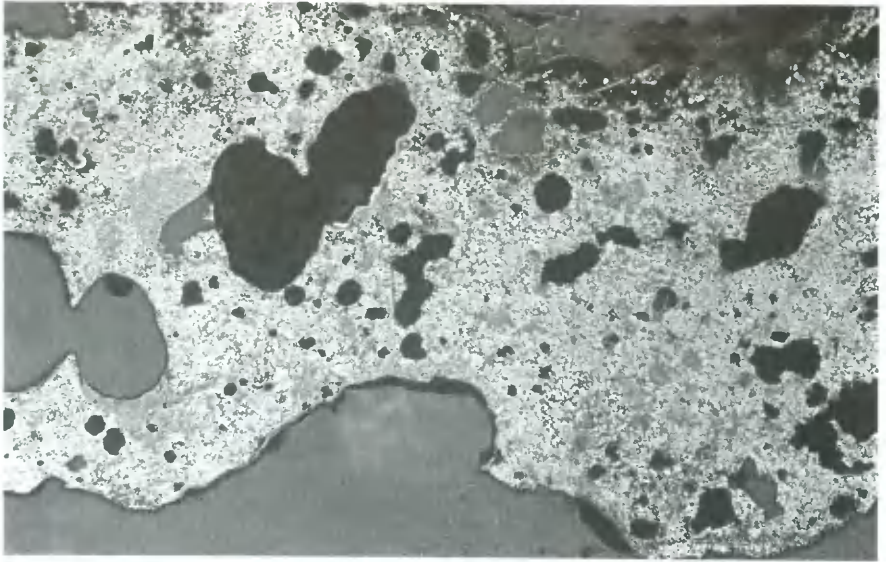


⑧

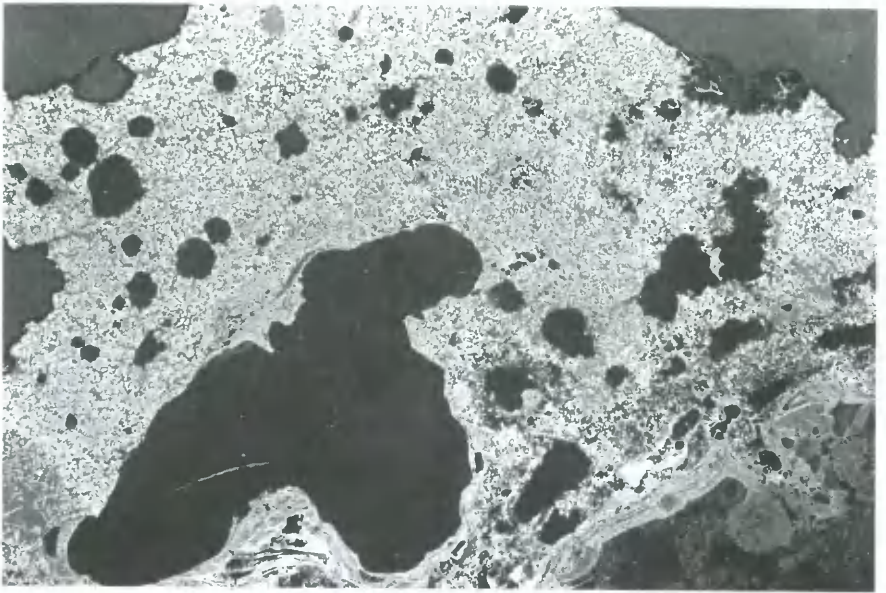


第683図 鉄塊系遺物の顕微鏡組織(2)

TT-5  
×10

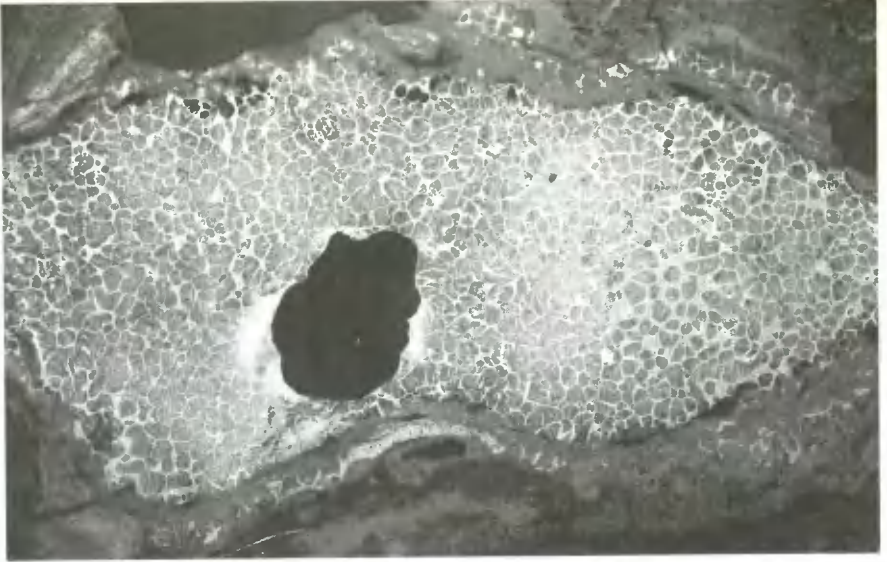


TT-6  
×10



第684図 鉄滓のマクロ組織

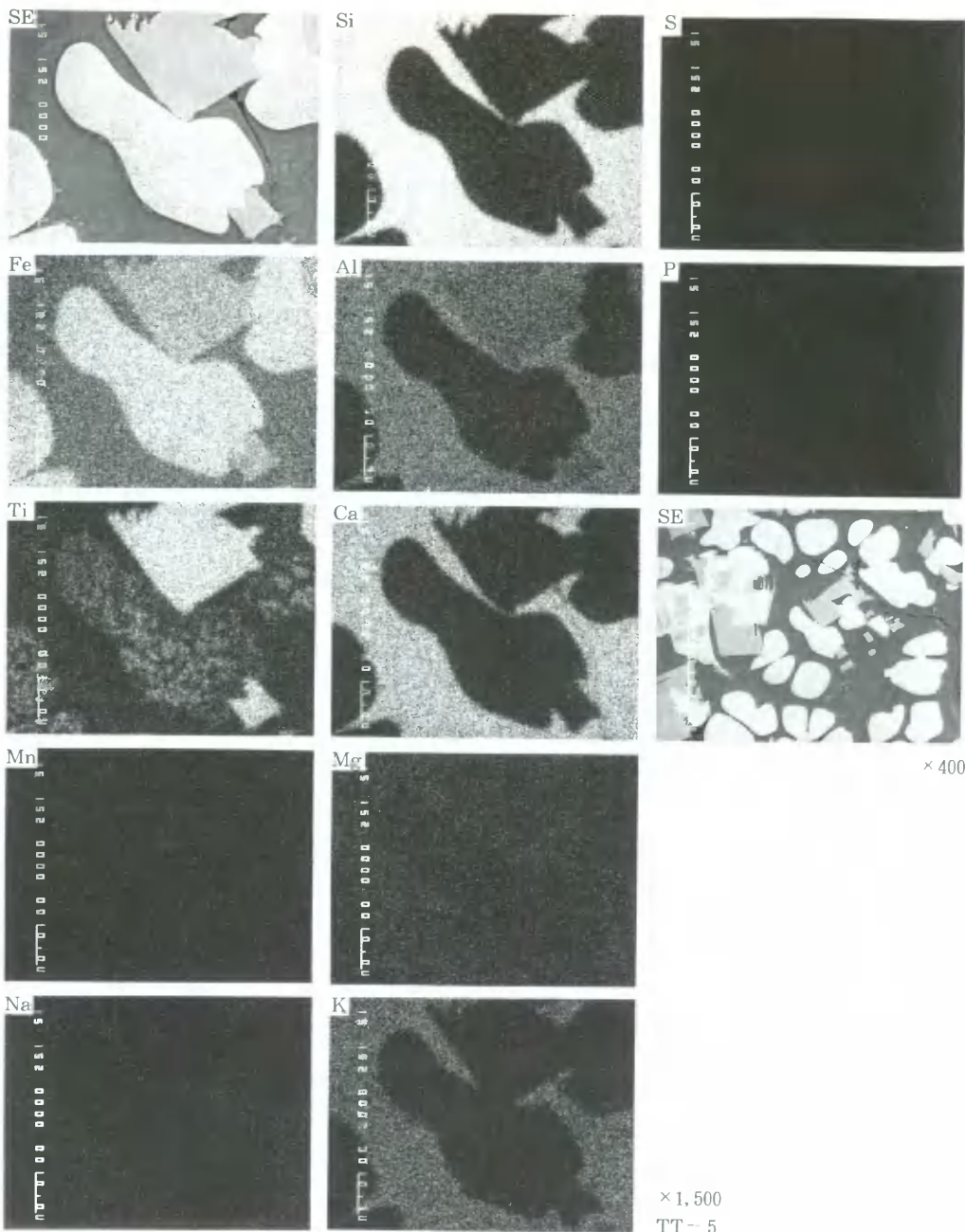
TT-14  
×10



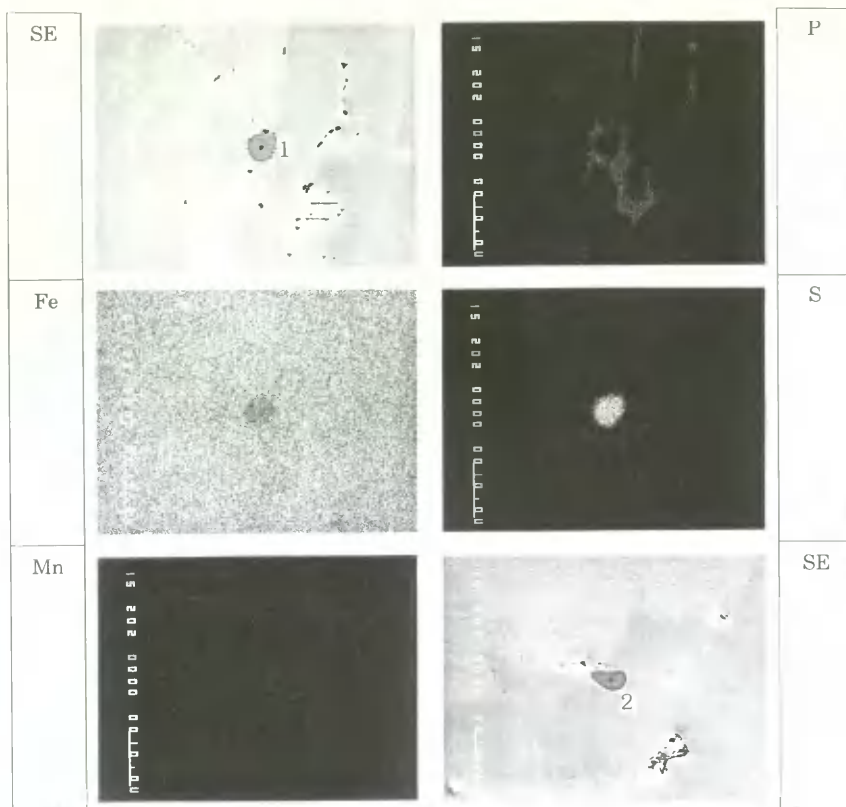
TT-15  
×10



第685図 鉄塊系遺物のマクロ組織



第686図 砂鉄系精練鍛冶滓 (TT-5) の特性X線像 (×1,500、縮小0.6)



SE No.	FE	MN	S	TI	V	TOTAL
1	62.687	0.897	36.881	0.045	0.000	100.509
2	58.578	3.792	34.934	0.000	0.000	97.303

第687図 鉄塊系遺物 (TT-14) 鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値 (×2,000、縮小0.6)

## XII. 津寺遺跡出土土器に遺存する赤色顔料

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1. はじめに.

津寺遺跡では、これまでに赤色顔料の付着した古墳時代前期の土器や石杵が出土している。これらについては、本田光子によって水銀朱であることが報告されており、集落における何らかの祭祀にかかわる遺物であることが想定されている。

今回、中屋調査区から出土した古墳時代前期の鉢形土器に付着する赤色物質の素材について、顕微鏡観察を行うと共に、土器胎土の鉱物組成についても明らかにする。

### 2. 分析の方法

#### 試料

試料は、中屋調査区B-3の弥生時代～古墳時代の遺物包含層中から検出された古墳時代前半期の鉢形土器に付着した赤色顔料1点(資料8)である。

#### 方法

土器片をダイヤモンド・カッターで切断し、厚さ0.03mmの研磨薄片を作製して顕微鏡観察を行った。

### 3. 結果および考察

#### 土器胎土の鉱物組成

##### a. 碎屑片

##### 鉱物片

石英：少量存在し、粒径最大1.0mmの他形粒状を呈する。

カリ長石：微量存在し、粒径最大0.38mmの他形粒状を呈する正長石で、加熱による変化はみられない。

斜長石：少量～微量存在し、粒径最大0.35mmの破片状・板状を呈する。集片双晶が発達し、加熱による変化はみられない。

角閃石：少量～微量存在し、粒径最大0.50mmの半自形～他形の破片状・粒状を呈する。淡緑色～緑色の多色性が顕著である。

緑簾石：きわめて微量存在し、粒径最大0.08mmの他形粒状を呈する。淡緑色の色調を有する。

不透明鉱物：きわめて微量存在し、粒径最大0.2mmの他形粒状を呈する。

##### 岩片

花崗岩質岩：微量存在し、粒径最大0.7mmの亜角礫状を呈する。石英・カリ長石・斜長石・角閃石で構成される中晶質酸性深成岩の岩片である。

##### b. 基質

基質は素地の細粒構成物でいわゆる粘土成分で、主として粘土鉱物・石英で構成される。粘土としては比較的粗粒の碎屑片を含み、淘汰性は不良である。基質は碎屑片の粒間を充填して多量～中量存



在する。

セリサイト：多量～中量存在し、基質粘土の主要構成粘土鉱物となっている。粒径0.03mm以下の鱗片状・繊維状を呈し、含鉄質で定向配列している。

石英：少量～微量存在し、粒径0.03mm以下の破片状を呈し、基質中に散在している。

酸化鉄：微量存在し、粒径最大0.13mmの粒状を示す結核状のものと、粒径1.2mmの粒状を示す範囲内に網状鉱染状で他の鉱物粒状間を膠着状に充填するものがみられる。

### 土器の推定焼成温度

一般に須恵器等では、1,150℃以上の焼成温度では、石英・長石類に加熱変化がみられ、900℃以上ではセリサイトに非晶質化がみられる。また、角閃石は約800℃以上で酸化角閃石化する現象が観察される。

本試料では、鉱物片として存在する石英・長石類・角閃石に加熱変化がみられないこと、および、基質の主成分粘土鉱物となるセリサイトに加熱変化がみられないことから800℃以下の焼成温度と推定される。

### 赤色付着物の素材

塗布物は土器裏面に厚さ最大0.01mm、平均的には0.005mm程度の薄膜状で断続的に付着している。通常の透過光下では黒色であるが、光源を強めた直交ポーラー下では暗赤色の内部干渉色を示す。

反射顕微鏡による平行ポーラー下での高倍率観察では薄膜は微細な灰白色を呈する赤鉄鉱粒の集合となっている。赤鉄鉱粒の単体の大きさは最大0.001mmで、きわめて微細である。直交ポーラー下での観察では赤鉄鉱の単体がきわめて微細であるため、赤鉄鉱の内部反射による赤色でマスクされて薄膜全部が赤色を呈し、赤鉄鉱が本来有する光学性は観察することはできない。

本試料では赤色顔料が示す反射光下での色調と内部反射の色調から赤鉄鉱と同定し、顔料は微粒赤鉄鉱で構成されるベンガラと判定した。

ところで、ベンガラ以外に赤色顔料として知られる辰砂の反射顕微鏡下での光学性は、反射率と反射異方性等が赤鉄鉱と類似し、きわめて微量の場合は判定が困難な場合がある。主な相違点は、反射光での色調が赤鉄鉱が灰白色であるのに対し、辰砂はやや青みを帯びた灰色であること、内部反射は赤鉄鉱が赤色であるのに対し、辰砂は鮮赤色であることである。光学性の差は微妙であるため、赤鉄鉱と辰砂のより正確な鑑定のためには、X線回折または化学分析を併用することが必要である。

### 顕微鏡写真説明

図版中の略記号

Qz : 石英

Se : 含鉄セリサイト

He : 赤鉄鉱

Ho : 角閃石

Rf : 赤色顔料膜

P : 孔隙

FeC : 酸化鉄結核



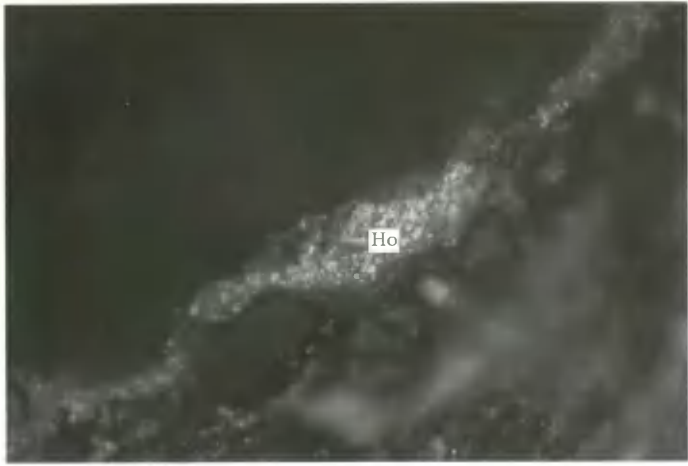
下方ポーラー  
0.02mm



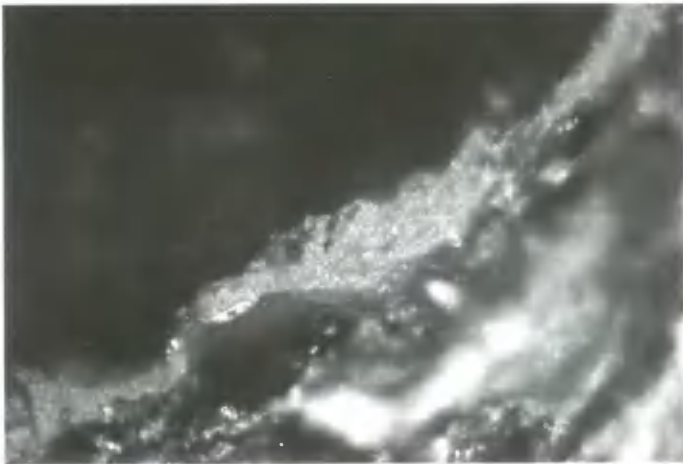
直交ポーラー  
0.02mm



第688図 拡大反射顕微鏡写真(1) (白色部・赤色部は赤鉄鉱集合膜)



下方ポーラー  
0.02mm



直交ポーラー  
0.02mm



第689図 拡大反射顕微鏡写真(2) (白色部・赤色部は赤鉄鉱集合膜)

## XIII. 津寺遺跡の石材についての顕微鏡観察結果

倉敷芸術科学大学教養学部

妹尾 護

### 1. はじめに

岡山県南部の遺跡において、安山岩類の石材を使用した石器、石製品が産出している。この中で、サヌカイトは肉眼的に識別しやすい上、産地も地域的に限定されていることから、石材の原産地推定は比較的可能である。一方、他の安山岩類では肉眼的に詳細な岩石種を決定することが容易ではない。そのために、産地に関する考察も不可能であることは言うまでもない。したがって、ここではこれら安山岩類（一部、玄武岩を含む）の石材に関する岩石学的性格を明確にする目的で、岩石薄片を作製し、顕微鏡観察を行った。以下、その結果を簡単に記述する。

### 2. 結果

#### 試料1 津寺中屋M11 I区

岩石名：カンラン石玄武岩

斑晶鉱物：カンラン石、単斜輝石、斜長石、不透明鉱物

カンラン石斑晶は量的に多く、その粒径は1mm以下である。単斜輝石と斜長石斑晶は共に少量で、大きさも0.2mmより小さい。不透明鉱物は粒径が0.1mmに達し、その含有量は比較的多い。

斑晶鉱物の種類や量比、カンラン石斑晶中の赤褐色クロムスピネルの存在、および石基の組織から、この石材は小豆島の崩鼻に産するカンラン石玄武岩に酷似しているといえる（小豆島の崩鼻で採取した玄武岩の原石の顕微鏡観察結果との比較に基づく）。なお、小豆島のカンラン石玄武岩はMgO含有量が極めて高いなど、その化学組成が特異であるため（例えば、Ujike, 1972）、今後石材の化学分析が行われるならば、より詳細な産地推定に関する議論が可能となるであろう。

#### 試料2 津寺中屋M11 I区

岩石名：古銅輝石安山岩

斑晶鉱物：古銅輝石、単斜輝石、斜長石、（角閃石）

粒径の大きい古銅輝石斑晶は含有されない（0.4mm以下）。石基に褐色ガラスが多い。角閃石斑晶が含まれていたものと思われる（現在はオパサイト化している）。周囲に斜方輝石の反応縁をもつカンラン石結晶が極少量認められる。斜長石斑晶の粒径は小さい（0.3mm以下）。

#### 試料3 津寺中屋B3区

岩石名：カンラン石普通輝石古銅輝石安山岩

斑晶鉱物：古銅輝石、カンラン石、単斜輝石、斜長石

古銅輝石斑晶は量的に多く、またその粒径も大きい（1.5mm以下）。単斜輝石斑晶も比較的多く含まれている。カンラン石斑晶は最大で6mmの粒径で、周囲に斜方輝石（古銅輝石）の反応縁が発達する。斜長石斑晶は少量で、粒径は小さい（0.3mm以下）。顕微鏡下での特徴としては、1）古銅輝石斑晶の

粒径が大きく、またその量も多い、2) カンラン石、単斜輝石斑晶が比較的多く含有される、3) 破壊されている結晶が存在する、4) 結晶集合体が多く認められる、などである。

#### 試料4 津寺中屋M12IV区

岩石名：古銅輝石安山岩

斑晶鉱物：古銅輝石、斜長石、単斜輝石

古銅輝石斑晶は0.5mm以下で、やや小形のものである。一方、斜長石斑晶は比較的粒径が大きく(0.5mm以下)、またその量も多い。一般的に、古銅輝石安山岩中の斜長石斑晶は量的に少なく、その粒径も小さいので(氏家、1970など)、この岩石は特徴的な性格をもつといえる。白石(1991)による吉備地方の竪穴式石室石材の顕微鏡写真と照合すると、造山6号墳からのものに類似している。

#### 試料5 津寺中屋A1区

岩石名：古銅輝石安山岩

斑晶鉱物：古銅輝石、斜長石、単斜輝石

古銅輝石斑晶は比較的大きく(0.9mm以下)、その量も多い。また、斜長石斑晶も多く含有されており、0.6mmの粒径に達するものが存在する。この岩石も粒径の大きい斜長石斑晶を含む点で特徴的であり、既述の白石(1991)による石材の顕微鏡写真の中では、造山2号墳の石材に酷似する。

#### 試料6 津寺中屋M3Ⅲ区

岩石名：古銅輝石安山岩

斑晶鉱物：古銅輝石、斜長石、単斜輝石

古銅輝石斑晶は量的に多く、その粒径は0.8mmに達する。また、斜長石斑晶の含有量も多く、結晶粒径も比較的大きい(0.5mm以下)。この岩石は顕微鏡下で津寺中屋A1区のものと同様の特徴を示し、既に述べた白石(1991)の吉備地方の竪穴式石室石材の中では造山2号墳のものと同様に酷似する。

#### <引用文献>

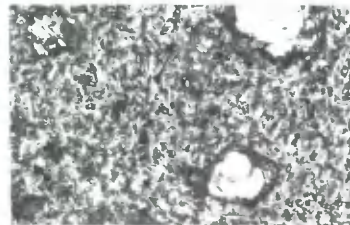
氏家 治(1970) 四国北東部の第三紀火山岩類の岩石学的研究

岩石鉱物鉱床学会誌、第63巻、43-62。

Ujike, O (1972) Petrology of Tertiary calc-alkaline volcanic rock suite from northeastern Shikoku and Shodo-shima Island, Japan. *Science Report of Tohoku University, Ser. 3*, 11, 159-201.

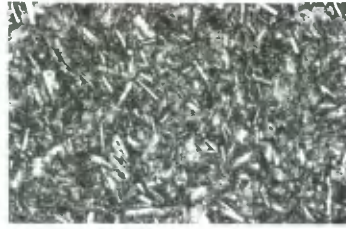
白石 純(1991) 吉備地方の竪穴式石室石材の原産地推定古文化談叢、第24集

試料1

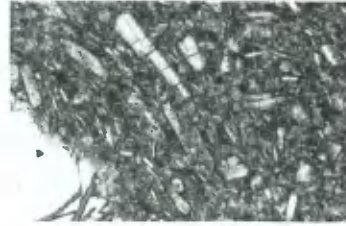


第690図 津寺遺跡出土石材の外観写真(左)および顕微鏡写真(右)(1)

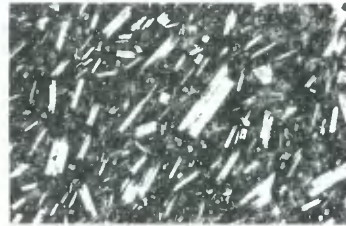
試料2



試料3



試料4



試料5



試料6



第691図 津寺遺跡出土石材の外観写真（左）および顕微鏡写真（右）(2)

## XIV. 津寺遺跡出土ヒスイ製大珠の産地分析

京都大学

藁科 哲男

### 1. はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイの原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法<sup>1</sup> および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法<sup>2,3</sup>が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例<sup>4</sup>が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリとして、精神的な面に重要な作用を与えられられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現しているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉類は岡山市津寺の津寺遺跡出土のヒスイ製大珠1個で、この遺物の分析結果が得られたので報告する。

### 2. 非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している<sup>5</sup>非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大き

さの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。

### 3. ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産<sup>6</sup>、鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、兵庫県養父郡大屋町からの原石、北海道旭川市神居町の神居コタン産、岐阜県大野郡丹生川村の飛驒産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これらの原石の原産地を第692図に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

### 4. ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム (Na)、アルミニウム (Al)、珪素 (Si) などの軽元素<sup>7</sup>で、次いで比較的含有量の多いカルシウム (Ca)、鉄 (Fe)、ストロンチウム (Sr) である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム (K)、チタニウム (Ti)、クロム (Cr)、マンガン (Mn)、ルビジウム (Rb)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr)、ニオブウム (Nb)、バリウム (Ba)、ランタニウム (La)、セリウム (Ce) の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用で



第692図 ヒスイとヒスイ類似岩の原産地



きる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい、しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛驒の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛驒、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するとき有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛驒産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeのピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重をもって他の産地のものと区別できる。また、砒素(As)のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2~3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

## 5. ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行うときの判断基準を原石の分析データから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表46に各原産地ごとの原石の比重と元素比重をまとめた。元素比重の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(2)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイでは Sr/Fe の比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。表47の判定基準(2)には Cr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ce の各元素の蛍

原産地名	分析 個数	蛍光X線法による元素比の範囲					
		比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00~3.35	0.01~0.17	0.01~0.56	0.15~30	0.00~2.94	0.72~27.6
若桜産	12	3.12~3.29	0.01~0.91	0.03~0.59	3.45~47	0.00~0.25	4.33~48.4
大佐産	20	2.85~3.17	0.01~0.07	0.00~1.01	3.18~61	0.00~12.4	3.47~28.6
長崎産	3	3.16~3.23	0.01~0.14	0.17~0.33	0.02~0.06	4.30~16.0	
日高産	22	2.98~3.29	0.00~0.01	0.00~0.02	0.00~0.37	0.00~0.063	5.92~51.6
引佐産	8	3.15~3.36	0.04~0.04	0.00~0.03	0.03~0.33	0.00~0.018	36.3~65.9
大屋産	18	2.96~3.19	0.03~0.08	0.04~0.16	1.08~79	0.02~0.48	0.95~4.81
神居コタン産	9	2.95~3.19	0.02~0.49	0.09~0.17	0.04~0.22	0.12~0.85	2.22~17.3
飛驒産	40	2.85~3.15	0.01~0.04	0.00~0.00	0.02~0.10	0.00~1.24	12.7~28.5
ミャンマ産	26	3.15~3.36	0.02~0.14	0.01~0.26	0.09~2.5	0.01~23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND：検出限界以下の濃度

表46 ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)

原産地名	蛍光X線法による分析元素 (各元素が確認できた個体数の百分率)							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛驒産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

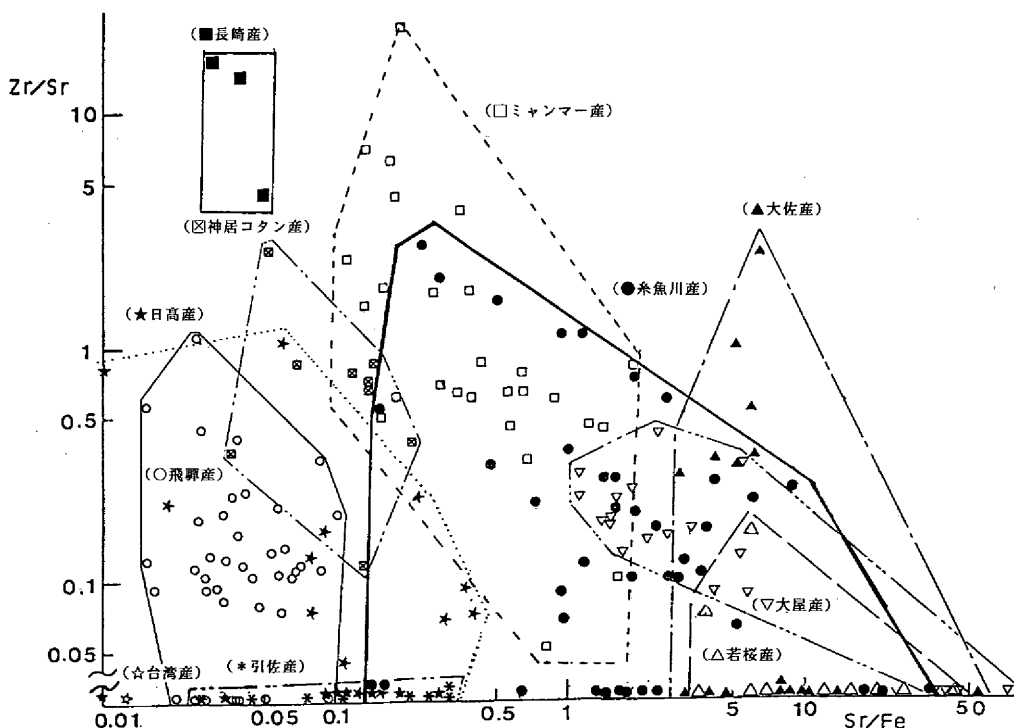
ND：検出限界以下 tr：検出確認

表47 ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)

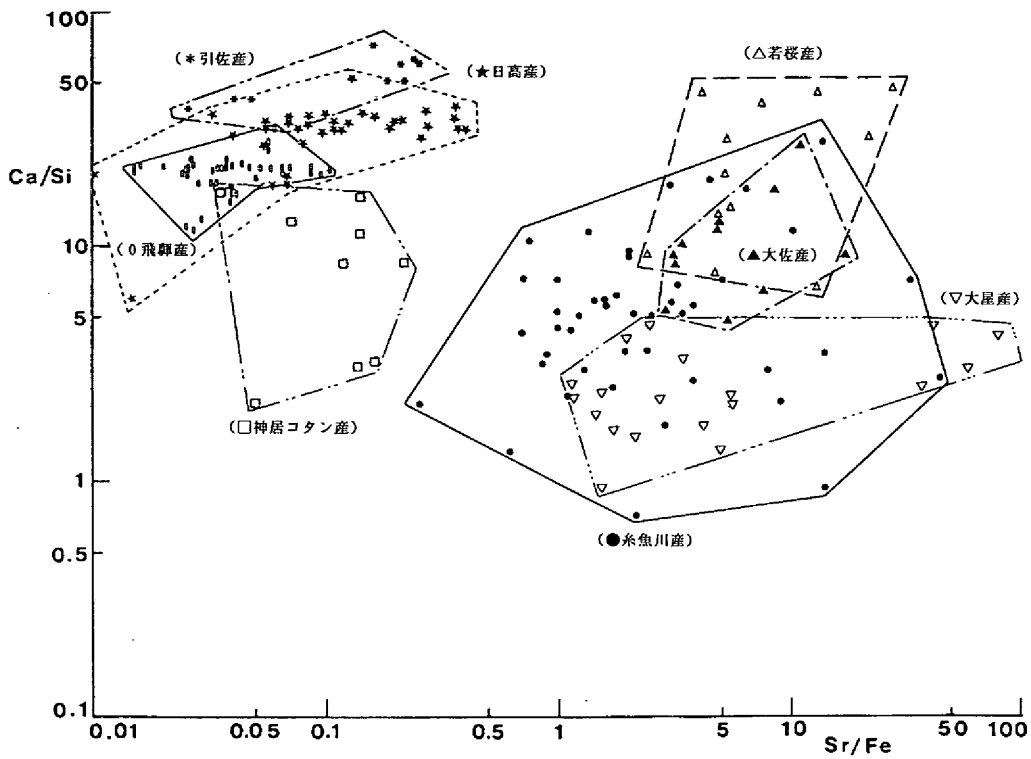
光X線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺跡は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

第693図はヒスイ原石のSr/Feの比の値とSr/Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Feの値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。

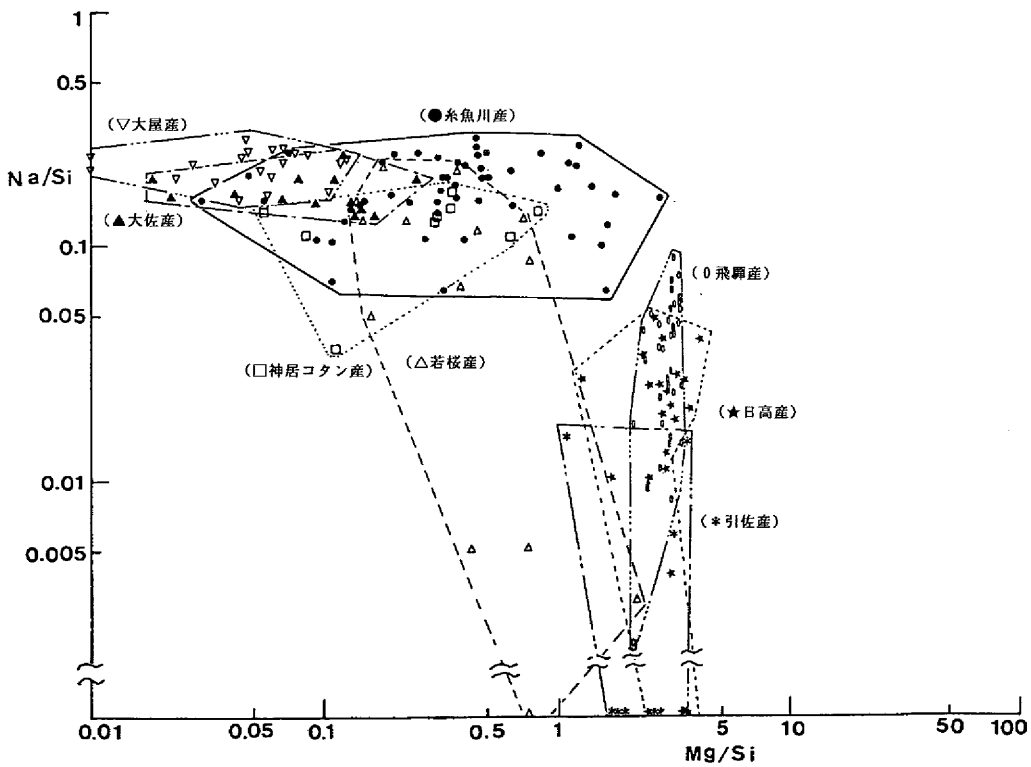
糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピークが見られなかった場合、表2の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産のヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および\*印の引佐産ヒスイの分布の一部が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすることにより(第694図)、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより(第695図)、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。



第693図 ヒスイ原石の元素比值 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布および分布範囲



第694図 ヒスイ原石の元素比值 Ca/Si 対 Sr/Fe の分布及び分布範囲



第695図 ヒスイ原石の元素比值 Na/Si 対 Mg/Si の分布および分布範囲

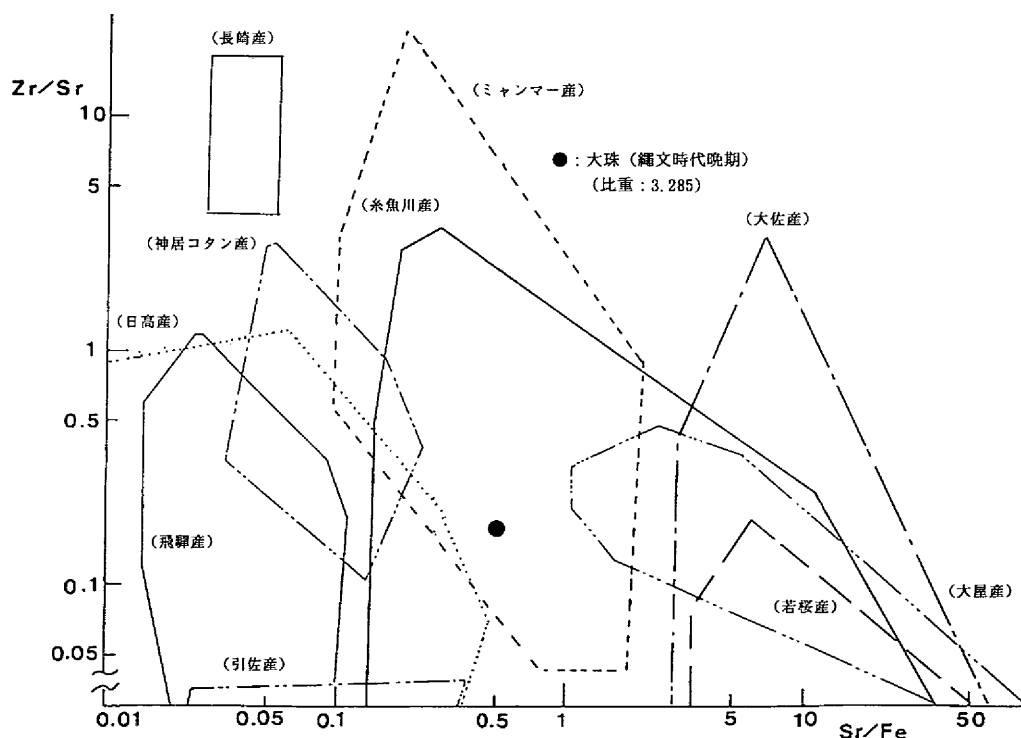
## 6. 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠の分析結果

この大珠の比重は3.285（アルキメデス法）で、蛍光X線スペクトルにはNa元素が観測され硬玉の可能性を示唆している、比重も硬玉の範囲に入る。この大珠の原石産地を明らかにするために、K/Ca、Ti/Ca、Sr/Fe、Zr/Sr、Ca/Si、Na/Si、Mg/Siなどの各比値を求め表48に示し、また各原産地の原石の元素比量の分布範囲と比較し第696～698図に示した。これら図中の中で、Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布範囲では大珠は糸魚川産、ミャンマー産の枠内に入り、Ca/Si 対 Sr/Fe では糸魚川産に、また Na/Si 対 Mg/Si では糸魚川産と若桜産の枠内にそれぞれはいり、常に糸魚川産原石の組成に

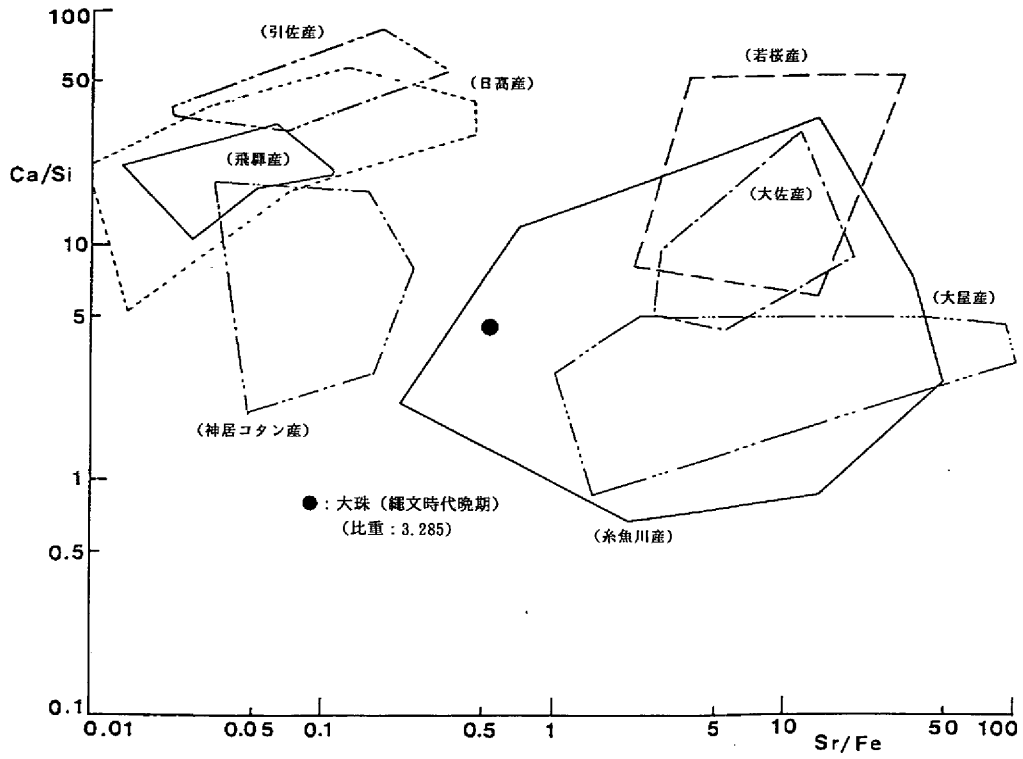
分析番号	元素分析値の比量							分析元素の有無 ○有、△微量、×無			
	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si	Na/Si	Mg/Si	Na	Ba	La	Ce
30830	0.019	0.005	0.538	0.186	4.709	0.210	0.357	×	×	×	×
JG-1 <sup>a)</sup>	1.320	0.271	0.354	0.739	2.412	0.029	0.090	加圧固化整形試料			

a) 標準試料: Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974).  
1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1  
granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical journal*, Vol.8 175-192.

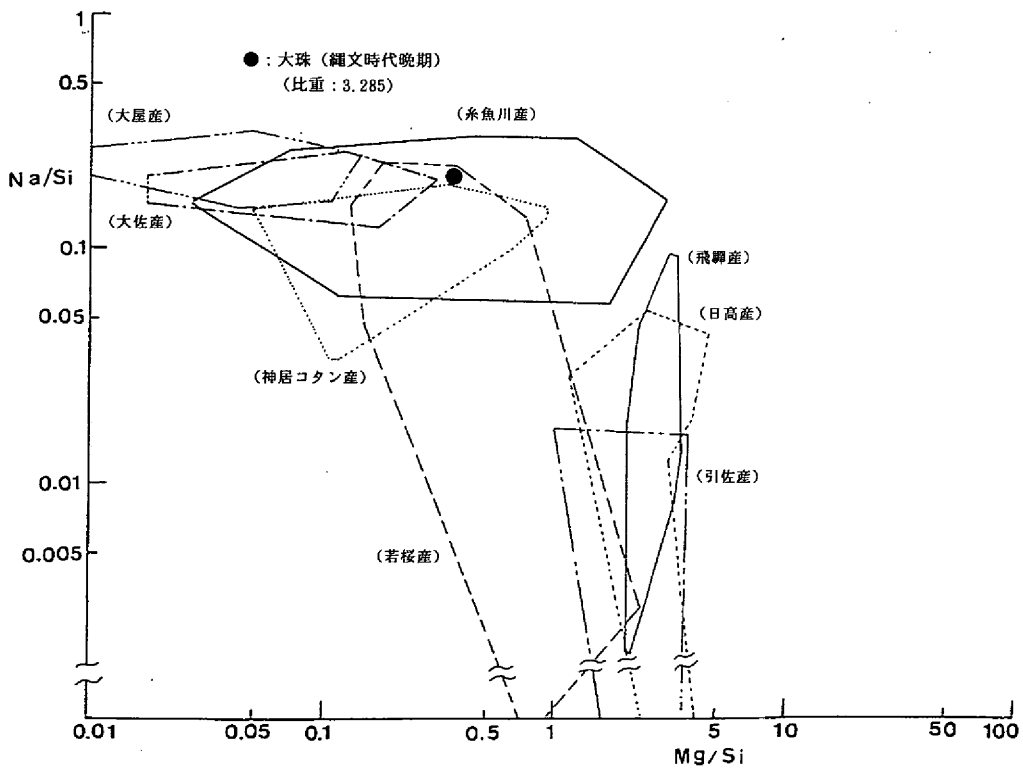
表48 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠の元素分析値



第696図 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠の Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布



第697図 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠の Ca/Si 対 Sr/Fe の分布



第698図 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠の Na/Si 対 Mg/Si の分布

似ることから最も可能性のある産地は糸魚川産地であることが分かる。また、この硬玉の蛍光X線スペクトルはBa元素が観測されないために若桜、大佐の原石の可能性は低いと言える。以上ヒスイの判定基準に従えば糸魚川産ヒスイを使用した大珠であると結論できる(表49)。ヒスイなどの貴重な玉は、権力の強い古代人が入手できると考えると、この玉の持ち主はかなり権力を持っていた可能性を考察しても産地分析の結果と矛盾しないであろう。

分析 番号	品名、遺物番号、層	遺物 重量	遺物 比重	時代 時期	総合判定 原石産地
30830	大珠、中屋 M12-VI、溝	44.630	3.285	縄文時代晩期	糸魚川産

表49 津寺遺跡出土のヒスイ製大珠の原産地推定結果

#### 参考文献

- 1 茅原一也(1964)、長者ヶ原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)、長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2 藁科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析、富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 3 藁科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析、橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』, 14:95-109
- 4 Tetsuo Warasina(1992)、Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 5 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析、考古学と自然科学, 16:59-89
- 6 番場猛夫(1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ、調査研究報告会講演要旨録 No.18:11-15
- 7 河野義礼(1939)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質、岩石礦物鉱床学雑誌 22:195-201

遺構一覽表

遺物觀察表

遺構名称对照表



## 遺構一覧表

### 竪穴住居

- ・平面形は、床面の形状を表す。
- ・規模は、竪穴底面の長・短軸ないし対辺の、壁体溝芯心間の最大距離を表示した。
- ・主軸は、磁北を基準とした竪穴の主軸を表示した。
- ・面積は、竪穴底面ないし壁体溝芯心で囲まれた面積を表示した。ただし（面積）は推定を表す。
- ・標高は、床面最深部の海拔高を表示した。
- ・支柱B/Aは、住居本来の本数をA、検出した本数をBとして表した。
- ・高床部は、1辺につくりつけるものをⅠ類、向かい合う2辺につくりつけるものをⅡ類、隣り合う2辺につくりつけるものをⅢ類、3辺につくりつけるものをⅣ類、周囲につくりつけるものをⅤ類に類型化して記入した。
- ・焼土面は、中央穴を除く被熱箇所数を記した。
- ・カマドは、煙道の形態（竪穴外に延びるものをB類、のびないものをA類）と燃焼部の位置（被熱範囲が壁体から遠いものをⅠ類、近いものをⅡ類）を組み合わせで表した。

### 掘立柱建物

- ・規模は、身舎の桁行と梁間の間数、総長を表す。
- ・柱間は、身舎の桁行と梁間における柱間距離の最大・最小を表す。
- ・面積は、建坪の面積を表す。
- ・棟方向は、身舎の主軸方位を表す。

### 袋状土壇

- ・規模は、上面および底面の長径と深さを表す。
- ・標高は、底面最深部の海拔高を表示した。
- ・断面形態は、壁面形態（上部が広がるものをA、筒状をなすものをB、下部が広がるものをC）と底面形態（平らなものをa、くぼむものをb、盛り上がるものをc）を組み合わせで表した。
- ・底面形は、底部の平面形を表す。
- ・土器は、出土量が多い場合は◎、少ない場合は○、ごく少ない場合は△として表現した。

### 井戸・土壇

- ・規模は、検出面での長さ、幅、深さを表す。
- ・標高は、底面最深部の海拔高を表示した。
- ・平面形は、検出面での形状を表す。
- ・断面形態は、壁面形態（上部が広がるものをA、筒状をなすものをB、下部が広がるものをC）と底面形態（平らなものをa、くぼむものをb、盛り上がるものをc）を組み合わせで表した。
- ・土器は、出土量が多い場合は◎、少ない場合は○、ごく少ない場合は△として表現した。

### 土壇墓

- ・規模は、検出面での長さ、幅、深さを表す。
- ・標高は、底面最深部の海拔高を表示した。
- ・平面形は、検出面での形状を表す。
- ・主軸は、掘り方の主軸方位を表す。
- ・副葬品は掘り方内から出土した遺物をあげた。

## 土器棺墓

- ・掘り方の平面形は、検出面での形状を表す。
- ・掘り方の規模は、検出面での長さ、幅、深さを表す。
- ・標高は、掘り方底面最深部の海拔高を表示した。
- ・開口方向は、棺身の開口する方位を表す。
- ・埋設状態は、棺の姿勢を立位、斜位、横位に類型化して記入した。
- ・器種は、棺の身と蓋を構成する土器の種類を表す。

## 遺物観察表

### 土器・陶磁器

- ・法量のうち、脚台径は底径として表した。
- ・色調は新版標準土色帳を使用した。ただし、陶磁器は釉の色調を示している。
- ・胎土は、含まれる砂礫の粒径が2 mm以上のものを礫、1～2 mmのものを粗砂、1 mm以下のものを細砂として表した。
- ・煤は、全体に及ぶものをA、胴部上半に及ぶものをB、胴部下半にとどまるものをCとし、B・Cにあっても口縁部に煤が見られるものをB'、C'に分類して表した。
- ・黒斑は、口縁部をA、胴部をB、底部をCとして、その部位を示した。
- ・刺突記号は、刺突の方向（横一列をA、縦一列をB、縦横二列をC）と、刺突の数を組み合わせて記入した。

### 石器

- ・法量は、長さ、幅、厚さの最大値を表す。また、(長さ)は現存長を意味する。
- ・重量のうち、(重量)は残存重量を意味する。
- ・色調は新版標準土色帳を使用した。
- ・材質の鑑定は、吉備国際大学妹尾護氏による。

### 土製品

- ・法量は、長さ、幅、厚さ、孔径の最大値を表す。また、(長さ)は現存長を意味する。
- ・色調は新版標準土色帳を使用した。
- ・胎土は、含まれる砂礫の粒径が2 mm以上のものを礫、1～2 mmのものを粗砂、1 mm以下のものを細砂として表した。

### 玉類

- ・法量は、長さ(高さ)、幅(直径)、厚さ、孔径の最大値を表す。また、(長さ)は現存長を意味する。
- ・重量のうち、(重量)は残存重量を意味する。
- ・色調は新版標準土色帳を使用した。
- ・材質の鑑定は、吉備国際大学妹尾護氏による。

### 金属製品

- ・法量は、長さ、幅、厚さの最大値を表す。また、(長さ)は現存長を意味する。
- ・重量は乾燥重量であり、(重量)は残存重量を意味する。

## 中屋調査区竪穴住居

遺構名	平面形	規模 (cm)		主軸	面積 (㎡)	標高 (cm)	主柱	柱間(cm)		付属施設				時期	備考
		長さ	幅					最大	最小	高床部	方形土壇	中央穴	焼土面		
竪穴住居-125	円形	482	453	-	15.1	188	4/4	223	193			○	1		弥・中・II
竪穴住居-126	方形	(375)	344	N-6°-W	(12.2)	320	4/4	217	198						弥・後・I 中央穴に土堤
竪穴住居-127	円形	395	(362)	-	10.9	329	4/4	204	177			○			弥・後・I 焼失住居、中央穴に土堤
竪穴住居-128	円形	-	580	-	-	339	2/4	250	-	-	-	○	-	-	弥・後・II
竪穴住居-129	円形	-	不明	-	-	332	-	-	-	-	-	1	-	-	弥・後・IV
竪穴住居-130A	円形	-	655	-	(32.5)	322	4/4	285	235	-	-	○	5	-	弥・後・II
竪穴住居-130B	円形	-	435	-	(16.2)	312	6/6	265	240	-	-	-	-	-	弥・後・II 中央穴に土堤
竪穴住居-131	円形	-	-	-	-	299	1/	-	-						弥・後・II
竪穴住居-132	方形	227	224	N-7°-W	4.9	500						1			弥・後・IV
竪穴住居-133	長方形	375	298	N-13°-E	10.8	331									古・前・前 北西隅欠く
竪穴住居-134A	長方形	447	350	N-11°-E	14.8	333	2/2	176			○	○	1		古・前・前 北西隅欠く
竪穴住居-134B	長方形	445	345	N-14°-E	14.7	338	2/2	204		IV	○	○			古・前・II 北西隅欠く
竪穴住居-135	方形	357	348	N-7°-W	11.4	304					○	○			古・前・II
竪穴住居-136A	円形	710	700	-	37.8	329	4/4	301	254			○			南西隅欠く
竪穴住居-136B	円形	754	700	-	41.1	335	5/5	312	268			○			古・前・I 南西隅欠く
竪穴住居-137	方形	382	364	N-3°-W	12.7	375						1			古・前・I 北東隅欠く
竪穴住居-138	方形	304	277	N-9°-W	7.9	383						2			古・前・前
竪穴住居-139	隅丸五角形	629	594	-	28.6	334	5/5	259	194						古・前・I
竪穴住居-140	方形	393	373	N-8°-E	14.1	305	2/4	165	159						古・前・前 北東・南東隅欠く
竪穴住居-141	方形	475	448	N-11°-W	20.2	328	2/4	298	229			○			古・前・II 南東隅欠く
竪穴住居-142	方形	337	299	N-11°-W	9.5	348					○	○			古・前・I
竪穴住居-143	方形	-	-	N-12°-W	-	364	-	-	-			1			古・前・前
竪穴住居-144	方形	398	394	N-S	13.3	336	4/4	222	192	V		○			古・前・I
竪穴住居-145	方形	436	432	N-3°-W	18.6	342	4/4	229	193	V	(463)				古・前・I
竪穴住居-146	方形	465	(463)	N-4°-W	(20.3)	345	3/4	278	264						古・前・I
竪穴住居-147A	方形	417	394	N-36°-W	15.1	323	3/4	201	201			○			古・前・I
竪穴住居-147B	方形	415	400	N-38°-W	(30.5)	330	2/4			V					古・前・I
竪穴住居-148	不整形	270	247	N-38°-E	6.1	338	2/2	115	-	-	○	○	-	-	古・前・I
竪穴住居-149	方形	280	250	N-35°-W	(6.2)	333						2			古・前・前
竪穴住居-150A	方形	-	505	N-21°-E	22.7	324	2/2	197		V	○	○			古・前・I
竪穴住居-150B	方形	-	505	N-21°-E	22.7	324				V	-	○	1	-	古・前・I
竪穴住居-151	不整形	502	380	N-3°-W	(13.9)	332	2/2	165	-	-	-	-	-	-	古・前・I 北西隅欠く
竪穴住居-152	円形	-	-	-	-	326	-	-	-						古・前・前
竪穴住居-153	円形	574	545	-	23.7	322	5/5	231	157						古・前・II
竪穴住居-154	不整形	(345)	300	N-30°-E	8.7	328					○	○			古・前・前 南西・南東隅欠く
竪穴住居-155	方形	580	575	N-10°-E	31.2	314	4/4	320	308	IV	○	○			古・前・II 床溝あり
竪穴住居-156	方形	-	(490)	-	-	320					○				古・前・I 南・西辺欠く
竪穴住居-157	方形	-	400	N-6°-E	14.4	321	4/4	213	175	IV	○	○			古・前・I
竪穴住居-158	長方形	382	266	N-45°-W	10.3	345	2/2	147	-	-	○	○	○		古・前・I 焼失住居
竪穴住居-159	方形	(351)		-	-	(413)	-	-	-	-	-	-	-	-	古・前・前 南西隅のみ
竪穴住居-160	方形	-	-	-	-	(403)	1/	-	-	○	-	-	-	-	古・前・前 北・南辺欠く
竪穴住居-161	方形	-	-	-	-	(414)	-	-	-	-	-	-	-	-	古・前・前 東辺のみ
竪穴住居-162	方形	-	-	-	-	(424)	-	-	-	-	-	-	-	-	古・前・前 南西隅のみ
竪穴住居-163	方形	467	412	N-43°-W	19.3	352	1/4	230	200		○				古・中・II
竪穴住居-164	方形	不明	280	N-37°-E	-	356	-	-	-	-	-	1			古・中・II 北西半欠く
竪穴住居-165	方形	491	371	N-39°-E	17.4	347									古・中・II
竪穴住居-166	方形	435	374	N-28°-E	15.6	354	4/4	207	192		○				古・中・II
竪穴住居-167	-	-	-	-	-	372	-	-	-	-	-	-	-	-	古・中・II
竪穴住居-168	長方形	(355)	260	N-38°-E	9.1	365									古・中・II
竪穴住居-169	方形	-	-	-	-	421	1/4	-	-	-	-	-	-	-	古・後・II 南隅のみ
竪穴住居-170	長方形	(459)	(400)	N-29°-W	(17.8)	417									古・後・III 南東隅のみ
竪穴住居-171	方形	-	-	-	-	366	1/4	-	-	-	-	-	-	-	古・後・III カマド下部構造のみ遺存
竪穴住居-172	方形	-	-	N-20°-W	-	397	-	-	-	-	-	-	-	-	古・中・II 北西隅のみ
竪穴住居-173	長方形	445	420	N-42°-E	17.2	(424)	4/4	256	218			○			古・中・II
竪穴住居-174	方形	546	537	N-29°-E	28.0	355	4/4	322	264			○			古・中・II 南西隅欠く
竪穴住居-175	方形	-	-	-	-	342	-	-	-	-	-	-	-	-	古・後・III 南東隅のみ
竪穴住居-176	方形	417	406	N-9°-W	16.7	356	2/4	206							古・後・III
竪穴住居-177	方形	-	-	-	-	354	-	-	-	-	-	-	○		古・後・後 南東隅のみ

中屋調査区竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模 (cm)		主軸	面積 (㎡)	標高 (cm)	支柱	柱間 (cm)		付属施設					時期	備考
		長さ	幅					最大	最小	高床部	方形土壇	中央穴	焼土面	カマド		
竪穴住居-178	方形	-	-	-	-	316	-	-	-	-	-	-	-	-	-	南東隅のみ
竪穴住居-179	方形	380	376	N-23°-W	14.0	350	4/4	217	181					○	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-180	方形	550	-	N-73°-E	-	332	4/4	249	235				1	○	古・後・Ⅱ	西辺欠く
竪穴住居-181	方形	-	(423)	N-69°-E	-	347	2/	210				-	-	○	古・後・Ⅲ	東半欠く
竪穴住居-182	長方形	586	474	N-23°-W	25.1	337	4/4	324	269					○	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-183	方形	508	405	N-30°-W	(19.5)	348	4/4	267	195				1	○	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-184	方形	507	491	N-22°-W	23.8	343	4/4	324	279				1	○	古・後・後	
竪穴住居-185	長方形	570	480	N-32°-W	(27.4)	328						○				南隅欠く
竪穴住居-186	方形	513	443	N-5°-W	21.6	329	4/4	301	170				1	○	古・後・Ⅱ	

中屋調査区中央穴一覧表

遺構名	平面形	規模 (cm)			炭・灰	土埧	焼土	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
竪穴住居-125	円形	66	65	50	○		○	弥・中・Ⅱ	
竪穴住居-127	楕円形	59	45	46		○	○	弥・後・Ⅰ	
竪穴住居-128	楕円形/不整形	不明/38	75/32	15/58		○	-	弥・後・Ⅱ	
竪穴住居-130A	不整形長方形/長方形	75/55	72/40	13/50	○	○		弥・後・Ⅱ	
竪穴住居-134A	円形	48		8				古・前・前	
竪穴住居-134B	不整形円形	46	38	12			○	古・前・Ⅱ	
竪穴住居-135	不整形楕円形	68	48	11			○	古・前・Ⅱ	
竪穴住居-142	楕円形	61	38	7			○	古・前・Ⅰ	
竪穴住居-148	不整形長方形	88	44	10				古・前・Ⅰ	
竪穴住居-150A	円形	-	40	(25)	-	-	-	古・前・Ⅰ	
竪穴住居-150B	円形	-	43	(30)	○		○	古・前・Ⅰ	
竪穴住居-154	不整形円形	96	80	8	○			古・前・前	
竪穴住居-155	円形	47	43	8				古・前・Ⅱ	
竪穴住居-157	楕円形	(63)	38	4	○		○	古・前・Ⅱ	
竪穴住居-158	長楕円形	107	45	15	○		○	古・前・Ⅰ	
竪穴住居-185	不整形	122	68	14			○		

中屋調査区方形土壇一覧表

遺構名	平面形	規模 (cm)			位置	ピット	石敷	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
竪穴住居-133	長方形	85	42	23	南南西			古・前・前	
竪穴住居-134A	方形/方形	70/37	64/34	22/8	南南西			古・前・前	
竪穴住居-134B	方形/方形	70/37	64/34	22/8	南南西			古・前・Ⅱ	
竪穴住居-135	方形	-	55	26	南南西			古・前・Ⅱ	
竪穴住居-142	方形/楕円形	58/50	45/32	9/19	西北西			古・前・Ⅰ	
竪穴住居-148	不整形	50	39	20	南	-	-	古・前・Ⅰ	
竪穴住居-150A	長方形/楕円形	122/85	65/45	7/40	南東		○	古・前・Ⅰ	
竪穴住居-154	不整形楕円形	(68)	(37)	14	南東			古・前・前	
竪穴住居-155	方形/楕円形	150/78	100/65	29/46	南	○		古・前・Ⅱ	
竪穴住居-156	方形	81	54	35	東			古・前・Ⅰ	
竪穴住居-157	不整形長方形	80	60	23	南東	-	-	古・前・Ⅱ	
竪穴住居-158	楕円形	68	45	15	南			古・中・Ⅱ	
竪穴住居-163	長方形	60	40	18	南東			古・中・Ⅱ	
竪穴住居-166	方形	68	41	20	南東			古・中・Ⅱ	

遺構一覽表

中屋調査区カマド一覽表

遺構名	位置	主軸	規模(cm)					類型	支脚	土壌	時期	備考
			全長	袖長	燃焼部幅	煙道幅	煙道傾斜					
竪穴住居-165	北西	L 4°	175	102	51	25	18°	B I	-	○	古・中・II	
竪穴住居-166	北北西	R 1°	-	45	63	-	20°	(A I)	石	-	古・中・II	遺存不良
竪穴住居-168	北東	R 4°	63	79	38	-	-	A I	-	-	古・中・II	
竪穴住居-170	北北西	-	-	-	-	-	-	-	-	○	後・III	
竪穴住居-173	北西	-	-	-	-	-	-	-	-	○	古・中・II	
竪穴住居-174	北北東	R 2°	119	84	31	27	5°	B I	-	○	古・中・II	
竪穴住居-176	北	L 5°	124	90	61	44	17°	B I	-	○	古・後・III	
竪穴住居-177	-	-	61	-	(34)	-	-	-	-	-	古・後・後	
竪穴住居-178	北西	R 2°	70	67	43	なし	なし	A I	-	-	-	
竪穴住居-179	東北東	R 8°	67	44	56	-	-	B II	-	○	古・後・III	
竪穴住居-180	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	古・後・II	下部土壌から推定
竪穴住居-181	西南西	L 1°	107	64	66	58	24°	B I	-	○	古・後・III	
竪穴住居-182	北北西	L 1°	167	76	56	36	6°	B I	-	-	古・後・II	
竪穴住居-182	北北西	L 3°	100	-	-	52	36°	-	-	-		袖無し
竪穴住居-183	北北西	L 1°	124	70	63	35	20°	B II	-	○	古・後・II	
竪穴住居-184	北北西	R 1°	86	60	65	68	20°	A I	-	○	古・後・後	
竪穴住居-186	南南東	L 4°	130	59	58	33	25°	B II	-	○	古・後・II	

中屋調査区掘立柱建物一覽表

遺構名	規模			柱間距離(cm)		面積(m <sup>2</sup> )	棟方向	柱穴掘り方		時期	備考	
	間数	桁行(cm)	梁間(cm)	桁	梁			形	径(cm)			深さ(cm)
掘立柱建物-16	2 × 1	414	198	224~196	198~195	8.3	N-2°-E	円形	37~27	27~14	弥・中・中	
掘立柱建物-17	1 × 1	178	144	178~170	144~127	9.2	N-80°-W	円形	80~60	37~45	弥・後・前	
掘立柱建物-18	3 × 1	395	385	395~390	135~115	14.6	N-81°-E	円形	37~27	35~18	古・中・後	
掘立柱建物-19	3 × 3	523	498	196~133	186~150	25.0	N-38°-W	方形	56~42	30~20	古・後・後	総柱
掘立柱建物-20	3 × 2	546	370	186~175	191~174	20.0	N-81°-E	方形	80~56	81~44	古代	
掘立柱建物-21	3 × 2	490	350	177~141	187~157	17.8	N-82°-E	方形	75~60	70~43	古代	総柱
掘立柱建物-22	3 × 2	496	407	186~150	206~192	20.8	N-21°-W	方形	102~73	81~64	古代	総柱
掘立柱建物-23	3 × 3	(531)	-	(188~164)	-	-	-	方形	100~60	(58~57)	古代	総柱
掘立柱建物-24	3 × 3	547	463	197~155	176~122	24.1	N-17°-W	方形	85~60	56~49	古代	総柱
掘立柱建物-25	2 × 2	346	305	183~157	162~141	12.0	N-42°-E	方形	90~71	54~44	古代	総柱
掘立柱建物-26	2 × 2	417	305	222~195	166~133	12.5	N-30°-W	方形	60~45	29~15	古代	
掘立柱建物-27	2 × 2	361	360	199~166	187~174	13.5	N-44°-W	方形	60~47	11~5	古代	総柱
掘立柱建物-28	3 × 2	545	354	215~154	185~164	18.6	N-86°-E	方形	53~42	48~22	古代	
掘立柱建物-29	3 × 2	579	413	210~160	219~190	22.7	N-82°-E	方形	63~46	52~22	古代	
掘立柱建物-30	- × 2	-	346	151~125	189~132	-	N-86°-W	方形	49~36	62~39	古代	総柱
掘立柱建物-31	2 × 2	293	285	148~134	155~130	7.9	N-78°-E	方形	60~34	32~24	古代	
掘立柱建物-32	- × 2	-	320	160	158~161	-	-	方形	55~48	19~11	古代	
掘立柱建物-33	2 × 2	416	339	219~186	209~170	15.7	N-68°-W	方形	60~48	54~43	古代	総柱
掘立柱建物-34	1 × 1	156	113	156~155	113~106	1.7	N-47°-W	円形	22~20	40~28	中世	
掘立柱建物-35	1 × 1	148	141	148~128	141~138	1.8	N-6°-E	円形	23~15	34~18	中世	
掘立柱建物-36	2 × 2	505	410	255~228	220~179	19.7	N-14°-N	円形	60~35	56~15	中世	
掘立柱建物-37	3 × 1	626	359	230~185	359~356	22.6	N-75°-E	円形	44~31	48~25	中世	
掘立柱建物-38	3 × 1	605	357	228~185	357~348	21.4	N-79°-E	円形	39~22	70~32	近世	
掘立柱建物-39	3 × 1	695	326	254~203	326~316	22.5	N-76°-E	円形	43~30	55~42	近世	
掘立柱建物-40	2 × 1	460	241	232~226	241~226	10.1	N-8°-W	円形	50~25	53~35	近世	
掘立柱建物-41	2 × 1	402	212	207~156	212~193	7.4	N-45°-W	円形	40~35	33~24	中世	
掘立柱建物-42	2 × 1	313	249	181~132	249~215	7.2	N-48°-W	円形	31~28	24~14	中世	
掘立柱建物-43	1 × 1	315	276	315~289	279~276	8.1	N-15°-W	円形	45~41	24~15	中世	
掘立柱建物-44	2 × 2	339	325	200~123	168~147	10.6	N-72°-E	円形	44~36	22~15	中世	
掘立柱建物-45	2 × 1	402	231	249~149	231~200	8.8	N-36°-E	円形	36~32	52~33	中世	
掘立柱建物-46	3 × 3	798	588	304~152	384~382	46.1	N-87°-E	円形	43~20	54~15	中世	
掘立柱建物-47	2 × 1	487	342	247~236	342~334	19.0	N-83°-E	円形	36~26	38~25	中世	
掘立柱建物-48	2 × 1	481	332	254~227	332~328	15.9	N-10°-W	円形	30~26	34~22	中世	

中屋調査区井戸一覧表

遺構名	規模(cm)			底面高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
井戸-3	187	179	123	189	円形	A b	○	中世	
井戸-4	345	300	91	261	不整円形	A b	◎	中世	
井戸-5	163	163	119	320	円形	A a	△	近世	絵馬出土
井戸-6	211	-	-	-	円形	-	△	近世	

中屋調査区袋状土壌一覧表

遺構名	規模(cm)			底面高 (cm)	底面形	断面形	土器	時期	備考
	上面径	底面径	深さ						
袋状土壌-70	114	120	113	240	円形	C b	○	弥・後・I	
袋状土壌-71	(97)	(92)	72	281	楕円形	B b	○	弥・後・I	
袋状土壌-72	110	90	48	321	不整円形	B b		弥・後・I	
袋状土壌-73	(128)	150	65	260	不整円形	C b	○	弥・後・前	
袋状土壌-74	101	94	15	372	円形	B b	○	弥・後・I	
袋状土壌-75	100	120	119	253	円形	C b	○	弥・後・II	
袋状土壌-76	(100)	125	122	264	不整円形	C b	○	弥・後・I	
袋状土壌-77	200	213	93	288	円形	C b	○	弥・後・II	
袋状土壌-78	128	148	(108)	255	楕円形	C b	○	弥・後・I	
袋状土壌-79	122	138	70	291		C b	○	弥・後・前	
袋状土壌-80	90	74	62	315	不整円形	C b	◎	弥・後・II	

中屋調査区焼成土壌一覧表

遺構名	規模(cm)			底面高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
焼成土壌-1	100	96	30	406	方形	B b		古・後・後	
焼成土壌-2	118	81	18	366	長方形	A b		古・後・後	
焼成土壌-3	64	44	5	377	長方形	A b		古・後・後	
焼成土壌-4	71	102	17	324	不整形	A b	△	古代	
焼成土壌-5	103	70	24	304	長方形	A b		古代	
焼成土壌-6	129	126	10	336	長方形	A b		古代	
焼成土壌-7	91	75	20	374	方形	A b		古代	

## 中屋調査区土壌一覽表

遺構名	規模(cm)			底面海拔高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
土壌-192	206	-	29	345	不整形円形	A b	△	弥・後・I	北半欠く
土壌-193	-	90	11	351	楕円形	A a	△	弥・後・前	北東欠く
土壌-194	73	70	23	352	円形	A a	△	弥・後・II	
土壌-195	47	29	33	349	不整形方形	B a	△	弥・後・II	
土壌-196	68	(58)	30	348	不整形円形	A a	△	弥・後・II	
土壌-197	73	59	22	332	楕円形	A a		弥・後・II	
土壌-198	62	41	23	341	不整形楕円形	A a	△	弥・後・前	
土壌-199	134	110	38	329	楕円形	A b	◎	弥・後・II	
土壌-200	80	55	13	347	楕円形	A b	△	弥・後・前	
土壌-201	52	50	22	343	不整形方形	A a		弥・後・前	
土壌-202	63	54	14	354	方形	B b		弥・後・前	
土壌-203	125	57	12	351	楕円形	A b		弥・後・前	
土壌-204	106	36	22	347	楕円形	A a	△	弥・後・II	
土壌-205	54	52	35	322	円形	B a	△	弥・後・前	
土壌-206	104	65	21	333	不整形方形	A a	△	弥・後・前	
土壌-207	114	(105)	55	319	円形	A b	○	弥・後・II	208に切られる
土壌-208	136	97	42	333	楕円形	A b	△	弥・後・II	207を切る
土壌-209	126	94	59	315	楕円形	A a	◎	弥・後・II	
土壌-210	114	82	34	334	楕円形	A a	○	弥・後・II	
土壌-211	70	-	31	322	円形	A a	◎	弥・後・II	南西半欠く
土壌-212	70	65	30	339	円形	A a	○	弥・後・II	
土壌-213	120	67	31	336	楕円形	A b	○	弥・後・II	2基重複か
土壌-214	112	100	42	322	隅丸方形	A a	◎	弥・後・II	
土壌-215	96	87	29	325	円形	A a	○	弥・後・II	
土壌-216	56	51	20	359	円形	B b	△	弥・後・II	
土壌-217	-	78	23	343	楕円形	A b	◎	弥・後・II	北半欠く
土壌-218	-	38	-	-	楕円形	-	△	弥・後・I	
土壌-219	54	44	40	340	円形	A b	◎	弥・後・II	
土壌-220	(90)	-	28	341	円形	A b	△	弥・後・II	南半欠く
土壌-221	170	142	53	319	不整形楕円形	A a	◎	弥・後・II	
土壌-222	114	75	37	332	長方形	A b	△	弥・後・前	北西隅欠く
土壌-223	147	77	60	306	長方形	A a	△	弥・後・II	
土壌-224	120	97	-	-	不整形円形	A b	○	弥・後・前	
土壌-225	72	68	-	-	不整形円形	-	◎	弥・後・II	
土壌-226	242	182	62	302	長方形	A b	○	弥・後・II	南東隅欠く
土壌-227	120	77	57	325	長方形	A b	○	弥・後・II	
土壌-228	(100)	(90)	38	322	円形	A a	○	弥・後・II	東半欠く
土壌-229	130	100	10	337	不整形	A a	×	弥・後・II	南端
土壌-230	153	(97)	32	380	不整形楕円形	A b	○	弥・後・II	
土壌-231	70	75	29	327	円形	A a	△	弥・後・II	
土壌-232	118	105	43	309	不整形円形	A a	○	弥・後・II	
土壌-233	70	60	-	-	楕円形	-	○	弥・後・前	
土壌-234	153	88	29	326	不整形楕円形	A b		弥・後・II	
土壌-235	130	81	29	325	長方形	A b	○	弥・後・II	
土壌-236	-	-	-	-	楕円形	-	◎	弥・後・I	
土壌-237	102	78	55	297	楕円形	A b	△	弥・後・前	
土壌-238	117	89	56	297	楕円形	A b	○	弥・後・I	
土壌-239	196	144	103	317	不整形楕円形	A a		弥・後	
土壌-240	49	(44)	8	370	円形	A b	○	古・前・II	北西側欠く
土壌-241	79	74	16	357	円形	A a	△	古・前・I	
土壌-242	(76)	(45)	22	357	楕円形	A b	△	古・前・II	南西半欠く
土壌-243	100	80	40	362	不整形円形	A b	△	古・前・II	東端欠く
土壌-244	62	42	20	360	楕円形	A b	△	古・前・I	
土壌-245	55	48	24	361	円形	A a		古・前・前	
土壌-246	45	35	34	354	楕円形	B a	△	古・前・II	
土壌-247	66	53	14	368	方形	A a	○	古・前・前	
土壌-248	58	51	18	355	楕円形	A a		古・前・前	
土壌-249	100	73	31	354	楕円形	A b	△	古・前・I	
土壌-250	110	102	21	353	不整形円形	A b	△	古・前・II	
土壌-251	99	80	8	429	楕円形	A b	△	古・前・前	

中屋調査区土壌一覽表

遺構名	規模(cm)			底面海拔高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
土壌-252	(250)	—	25	341	楕円形	A a	○	古・前・I	西半欠く
土壌-253	193	56	11	344	長楕円形	A a	△	古・前・前	2基重複か
土壌-254	(73)	—	26	350	(円形)	A a	△	古・前・II	北東半欠く
土壌-255	—	—	35	336	—	—	○	古・前・I	
土壌-256	172	145	28	351	不整形	A b	○	古・前・前	
土壌-257	—	(295)	40	320	不整形	A b		古・前・前	西半欠く
土壌-258	148	88	47	325	不整楕円形	A b		古・前・前	
土壌-259	137	68	35	328	長楕円形	A a		古・前・前	
土壌-260	125	71	16	358	不整楕円形	A b	○	古・前・前	
土壌-261	127	55	16	358	長楕円形	A b	△	古・前・前	
土壌-262	130	147	16	369	円形	A b	○	古・前・I	
土壌-263	71	61	19	371	円形	A a	△	古・前・II	
土壌-264	53	43	21	283	楕円形	A b	○	古・前・I	
土壌-265	116	110	83	333	円形	A b	△	古・前・III	
土壌-266	48	43	14	337	円形	A b	△	古・前・III	
土壌-267	70	55	15	361	楕円形	A b	△	古・後・II	
土壌-268	252	205	30	338	長方形	A b	◎	古・中・II	
土壌-269	(148)	72	47	354	不整楕円形	A a		古・後・後	
土壌-270	133	82	90	363	不整楕円形	A a		古・後・後	
土壌-271	110	90	25	405	楕円形	A a	△	古・後・III	
土壌-272	61	54	11	299	不整円形	A a		古・中・II	
土壌-273	217	39	13	314	長楕円形	A b	△	古・後・II	
土壌-274	55	48	14	340	円形	A a	○	古・後・III	
土壌-275	127	80	45	338	楕円形	B a	○	古代	
土壌-276	126	73	18	368	楕円形	A a	—	古代	
土壌-277	—	105	25	357	不整形	A a	△	古代	
土壌-278	186	95	18	334	不整形	A b	○	古代	
土壌-279	205	90	14	360	楕円形	A b	△	古代	
土壌-280	108	79	8	363	長方形	A b	○	古代	
土壌-281	392	128	30	268	不整形	A b	◎	古代	
土壌-282	363	250	20	361	不整形	A b	◎	古代	
土壌-283	274	91	17	348	長楕円形	A a	△	古代	
土壌-284	101	70	21	342	楕円形	A a	△	古代	
土壌-285	104	118	47	320	楕円形	A a	○	古代	
土壌-286	280	168	14	351	不整形	A b	○	古代	
土壌-287	172	147	8	348	不整楕円形	A b	○	古代	
土壌-288	300	150	—	—	不整楕円形	A b	○	古代	
土壌-289	(400)	300	—	—	不整円形	A b	○	古代	
土壌-290	136	87	12	345	楕円形	A a	△	古代	
土壌-291	(210)	172	5	365	楕円形	A b	△	古代	
土壌-292	261	114	8	358	不整形	A b	△	古代	
土壌-293	370	190	20	345	不整形	A a	◎	古代	
土壌-294	116	110	14	359	楕円形	A b	○	古代	
土壌-295	221	130	17	359	長方形	A b	◎	古代	
土壌-296	48	45	21	(382)	円形	A a	○	古代	
土壌-297	(114)	91	22	403	楕円形	A b	△	古代	
土壌-298	150	77	17	340	長方形	A b		古代	
土壌-299	452	102	18	338	長楕円形	A b	△	古代	
土壌-300	200	148	43	333	不整楕円形	A a		古代	
土壌-301	(180)	136	39	337	不整形	A b		古代	
土壌-302	(85)	73	18	360	方形	A b		古代	
土壌-303	(341)	55	36	343	長楕円形	A a	○	古代	
土壌-304	113	105	27	342	円形	A b	○	古代	
土壌-305	122	97	33	360	不整円形	A a	○	古代	
土壌-306	(355)	—	20	345	—	A a		古代	
土壌-307	196	142	34	300	長方形	A b	○	中世	
土壌-308	260	203	43	291	不整形	A b		中世	
土壌-309	157	160	31	306	不整円形	A a	◎	中世	
土壌-310	83	55	20	358	楕円形	A a	△	中世	
土壌-311	(360)	265	40	309	不整楕円形	A b	△	中世	



中屋調査区土壙一覽表

遺構名	規模(cm)			底面高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
土壙-312	60	56	10	410	円形	A b	○	中世	
土壙-313	(197)	155	20	369	楕円形	A b	△	中世	
土壙-314	127	100	13	406	長方形	A b		中世	
土壙-315	(160)	42	15	405	長楕円形	A a	△	中世	
土壙-316	195	(125)	15	378	楕円形	A a		中世	
土壙-317	597	328	26	358	不整形	A b	○	中世	
土壙-318	428	330	16	370	不整形	A b	○	中世	
土壙-319	403	288	22	368	不整形	A b	○	中世	
土壙-320	180	45	32	366	長楕円形	A b	○	中世	
土壙-321	95	90	24	417	円形	A a	△	中世	
土壙-322	124	87	8	425	楕円形	A b	△	中世	
土壙-323	140	130	27	406	方形	A a		中世	
土壙-324	112	108	32	400	円形	A a		中世	
土壙-325	124	90	17	416	長方形	A b		中世	
土壙-326	100	72	10	423	長方形	A b		中世	
土壙-327	105	76	90	428	不整形	A b		中世	
土壙-328	177	139	58	418	不整形	A b		中世	
土壙-329	168	95	20	414	楕円形	A b		中世	
土壙-330	(123)	114	13	402	不整形	A a		中世	
土壙-331	132	117	68	243	方形	A b	△	中世	
土壙-332	123	90	20	371	長方形	A b	△	中世	
土壙-333	140	73	10	366	不整形	A b	△	中世	

中屋調査区土壙墓一覽表

遺構名	規模(cm)			底面高 (cm)	平面形	断面形	主軸	副葬品	時期	備考
	長さ	幅	深さ							
土壙墓-12	130	87	17	383	長楕円形	A b	N-10°-E		中世	木棺墓
土壙墓-13	101	54	67	361	長方形	A b	N-12°-W		中世	
土壙墓-14	137	111	29	400	楕円形	A b	N-12°-W		中世	火葬墓
土壙墓-15	206	82	26	388	長方形	A b	N-79°-W	刀子	中世	
土壙墓-16	129	(113)	47	376	不整形	A b	N-36°-W		中世	
土壙墓-17	149	93	22	387	長方形	A b	N-8°-W		中世	火葬墓

中屋調査区土器棺墓一覽表

遺構名	掘り方				器種		開口方向	埋設状態	副葬品	時期	備考
	平面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	棺身	棺蓋					
土器棺墓-9	楕円形	65	(43)	18	壺		南南東	横位		弥・中・Ⅲ	
土器棺墓-10	楕円形	67	56	10	甕	鉢	西	横位		弥・中・Ⅲ	
土器棺墓-11	楕円形	(107)	(82)	32	壺	高杯	北北西	横位		弥・後・Ⅰ	

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
2948	竪穴住居-125	弥生土器	鉢		12.5	(10.7)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	回転台形土器、黒斑C
2949	竪穴住居-126	弥生土器	壺	17.1		(8.9)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
2950	竪穴住居-126	弥生土器	甕		8.6	(28.6)	橙色(2.5YR7/6)	礫	良好	黒斑C、底部穿孔
2951	竪穴住居-126	弥生土器	高杯		12.4	(4.7)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	
2952	竪穴住居-127	弥生土器	壺	11.5	6.2	24.3	橙色(5YR6/8)	礫	良好	完形、黒斑BC
2953	竪穴住居-127	弥生土器	壺	15.6		(23.0)	鈍い橙色(5YR6/4)	礫	良好	
2954	竪穴住居-127	弥生土器	壺	16.4		(19.8)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
2955	竪穴住居-127	弥生土器	甕	14.7	6.4	32.3	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	二次焼成、黒斑A・B・C
2956	竪穴住居-127	弥生土器	甕	16.8		(19.3)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	黒斑A・B
2957	竪穴住居-127	弥生土器	甕	14.2		(26.2)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	ススB
2958	竪穴住居-127	弥生土器	甕	12.8		(6.8)	橙色(2.5YR6/8)	礫	良好	
2959	竪穴住居-127	弥生土器	甕	14.0		(5.8)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
2960	竪穴住居-127	弥生土器	鉢	47.0		(11.5)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
2961	竪穴住居-127	弥生土器	鉢	40.0		(8.7)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	
2962	竪穴住居-127	弥生土器	高杯	12.4	7.8	12.0	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	完形、黒斑A
2963	竪穴住居-127	弥生土器	高杯	20.4	10.4	15.2	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良好	黒斑A・B
2964	竪穴住居-127	弥生土器	高杯	17.4		(4.0)	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良好	黒斑A
2965	竪穴住居-130	弥生土器	甕	17.0		(6.1)	鈍い褐色(7.5YR5/4)	粗砂	良好	
2966	竪穴住居-130	弥生土器	甕	20.0		(6.2)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑A
2967	竪穴住居-130	弥生土器	高杯	23.5		(5.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
2968	竪穴住居-130	弥生土器	高杯	23.3		(8.0)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	
2969	竪穴住居-130	弥生土器	鉢	13.4	4.5	8.7	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	完形
2970	竪穴住居-130	弥生土器	鉢	9.0		(4.3)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
2971	竪穴住居-131	弥生土器	小形壺		4.1	(10.0)	橙色(5YR6/8)	礫	良好	黒斑B
2972	竪穴住居-131	弥生土器	高杯	22.2		(9.6)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	
2973	竪穴住居-132	弥生土器	高杯		17.8	(7.5)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
2974	竪穴住居-132	弥生土器	鉢	9.8		8.4	橙色(5YR7/6)	粗砂、細砂	良好	
2975	袋状土壇-70・71	弥生土器	甕	11.0		(7.0)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
2976	袋状土壇-70・71	弥生土器	甕	14.0		(8.7)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
2977	袋状土壇-70・71	弥生土器	甕	13.8		(7.8)	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	良好	
2978	袋状土壇-70・71	弥生土器	高杯	21.0		(3.8)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
2979	袋状土壇-72	弥生土器	甕	13.6		(6.3)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
2980	袋状土壇-72	弥生土器	甕	14.6	7.5	29.5	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	ススB、黒斑B
2981	袋状土壇-74	弥生土器	壺	12.8		(4.6)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
2982	袋状土壇-74	弥生土器	甕	12.8		(7.3)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	
2983	袋状土壇-74	弥生土器	甕	13.7		(9.0)	灰褐色(5YR5/2)	細砂	良好	
2984	袋状土壇-74	弥生土器	高杯		11.9	(4.1)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	
2985	袋状土壇-75	弥生土器	甕	11.8		(4.2)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
2986	袋状土壇-75	弥生土器	甕	12.0		(5.2)	黄橙色(7.5YR7/8)	細砂	良好	
2987	袋状土壇-75	弥生土器	甕	14.0		(5.0)	橙色(5YR6/8)	礫	良好	
2988	袋状土壇-75	弥生土器	甕	15.7		(11.3)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	
2989	袋状土壇-75	弥生土器	高杯			(12.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
2990	袋状土壇-76	弥生土器	高杯	19.2		(4.7)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	
2991	袋状土壇-76	弥生土器	高杯		15.0	(4.1)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑C
2992	袋状土壇-76	弥生土器	甕	13.2		(21.0)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良好	ススB'
2993	袋状土壇-77	弥生土器	壺	25.4		(10.4)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
2994	袋状土壇-77	弥生土器	壺		9.2	(28.3)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑A・C
2995	袋状土壇-77	弥生土器	甕	13.4		(14.4)	灰褐色(7.5YR6/2)	粗砂	良好	
2996	袋状土壇-77	弥生土器	甕	16.4	10.7	33.4	橙色(5YR7/8)	粗砂、細砂	良好	ススC、黒斑B・C
2997	袋状土壇-77	弥生土器	甕	23.6		(14.5)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
2998	袋状土壇-77	弥生土器	甕	29.0		(9.8)	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂	良好	
2999	袋状土壇-77	弥生土器	甕	14.0		(4.9)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3000	袋状土壇-77	弥生土器	甕	13.4		(4.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3001	袋状土壇-77	弥生土器	甕	12.8		(3.8)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3002	袋状土壇-77	弥生土器	甕	13.9	5.4	25.3	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	黒斑B・BC
3003	袋状土壇-77	弥生土器	小形鉢	6.3	2.9	4.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	手捏ね土器
3004	袋状土壇-77	弥生土器	台付鉢		4.6	(4.4)	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	良好	製塩土器、スス
3005	袋状土壇-78	弥生土器	壺	9.5		(13.4)	橙色(2.5YR6/6)	礫、粗砂	良好	ススA、黒斑B
3006	袋状土壇-78	弥生土器	壺	14.4		(10.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂、細砂	良好	黒斑A
3007	袋状土壇-78	弥生土器	壺	14.7		(10.4)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
3008	袋状土壇-78	弥生土器	壺	15.7		(28.0)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良好	黒斑B・B

遺物観察表

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3009	袋状土壇-78	弥生土器	壺	16.2		(15.5)	橙色(5YR7/6)	礫	良好	ススB
3010	袋状土壇-78	弥生土器	壺	16.0		(14.8)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	
3011	袋状土壇-78	弥生土器	壺		10.4	(20.8)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	黒斑B C
3012	袋状土壇-78	弥生土器	甕	15.2		(15.4)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB、黒斑A B
3013	袋状土壇-78	弥生土器	壺	13.8		(8.1)	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
3014	袋状土壇-78	弥生土器	壺	11.0		(12.0)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	
3015	袋状土壇-78	弥生土器	甕	14.0		(14.4)	橙色(2.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑A B・B
3016	袋状土壇-78	弥生土器	甕	11.6		(14.5)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	ススC
3017	袋状土壇-78	弥生土器	甕	11.2		(8.2)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	黒斑A B
3018	袋状土壇-78	弥生土器	甕	13.6		(5.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3019	袋状土壇-78	弥生土器	甕	13.0		(5.1)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良好	ススB'
3020	袋状土壇-78	弥生土器	甕	10.8		(23.0)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑B
3021	袋状土壇-78	弥生土器	甕	18.3	6.8	38.0	鈍い橙色(7.5YR6/4)	礫	良好	ススB
3022	袋状土壇-78	弥生土器	甕	21.5		(12.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B・B
3023	袋状土壇-78	弥生土器	甕	15.4		(8.9)	橙色(5YR6/6)	礫、粗砂	良好	黒斑A B
3024	袋状土壇-78	弥生土器	甕	15.8		(8.4)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂、細砂	良好	
3025	袋状土壇-78	弥生土器	甕	14.4		(16.5)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
3026	袋状土壇-78	弥生土器	高杯	11.3		(4.0)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	
3027	袋状土壇-78	弥生土器	高杯	21.5		(10.4)	橙色(5YR6/6)	粗砂、細砂	良好	透かし孔4
3028	袋状土壇-78	弥生土器	高杯	22.3	(13.0)	19.6	橙色(5YR7/6)	礫、粗砂	良好	黒斑C
3029	袋状土壇-78	弥生土器	高杯		6.8	(7.5)	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	良好	透かし孔
3030	袋状土壇-78	弥生土器	台付鉢		7.7	(6.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3031	袋状土壇-78	弥生土器	台付鉢	15.0	9.6	16.5	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3032	袋状土壇-78	弥生土器	鉢	31.6		(6.1)	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	
3033	袋状土壇-78	弥生土器	鉢	42.1		(15.3)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	ススC、黒斑B
3034	袋状土壇-78	弥生土器	器台	24.6	22.3	24.9	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3035	袋状土壇-78	弥生土器	器台	30.5	26.0	28.2	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
3036	袋状土壇-80	弥生土器	壺	17.2		34.5	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
3037	袋状土壇-80	弥生土器	甕	12.0	4.0	14.2	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	良好	
3038	袋状土壇-80	弥生土器	甕	17.0	6.8	(10.9)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	ススA
3039	袋状土壇-80	弥生土器	甕	31.2	11.3	45.7	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	黒斑C
3040	袋状土壇-80	弥生土器	甕	14.9		(10.2)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	粗砂	良好	
3041	袋状土壇-80	弥生土器	甕	14.1		(6.2)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良好	
3042	袋状土壇-80	弥生土器	甕	21.8		(7.3)	鈍い橙色(2.5YR6/3)	細砂	良好	
3043	袋状土壇-80	弥生土器	高杯	22.0		(6.5)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3044	袋状土壇-80	弥生土器	高杯	21.5	12.5	14.0	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	礫	良好	完形
3045	袋状土壇-80	弥生土器	鉢	35.2		(14.1)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良好	
3046	袋状土壇-80	弥生土器	器台	33.2		(10.5)	鈍い橙色(5YR6/4)	礫	良好	
3047	土壇-194	弥生土器	甕	11.0	5.0	(15.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B C
3048	土壇-199	弥生土器	壺	6.5		(17.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3049	土壇-199	弥生土器	壺	13.6		(6.2)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
3050	土壇-199	弥生土器	壺	12.2		(9.1)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂、細砂	良好	
3051	土壇-199	弥生土器	壺	12.2	5.8	22.8	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	ほぼ完形、底部穿孔、黒斑B・C
3052	土壇-199	弥生土器	甕	23.5		(16.6)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3053	土壇-199	弥生土器	甕	15.4	7.1	31.2	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	
3054	土壇-199	弥生土器	甕	13.3		(7.4)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
3055	土壇-199	弥生土器	甕	11.9		(8.2)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	良好	
3056	土壇-199	弥生土器	甕	13.8	6.6	22.6	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良好	黒斑B
3057	土壇-199	弥生土器	甕	14.0		(26.8)	橙色(5YR7/6)	礫	良好	
3058	土壇-199	弥生土器	鉢	34.4	10.8	20.0	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	黒斑B C
3059	土壇-199	弥生土器	鉢	6.3		(7.4)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	
3060	土壇-199	弥生土器	台付鉢		4.9	(3.7)	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	良好	製塩土器
3061	土壇-206	弥生土器	甕	9.6		(11.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3062	土壇-207	弥生土器	壺	20.0		(6.4)	橙色(5YR6/8)	礫	良好	
3063	土壇-207	弥生土器	壺	14.8		(5.8)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
3064	土壇-207	弥生土器	甕	15.0		(8.5)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	
3065	土壇-207	弥生土器	壺	13.3		(1.7)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
3066	土壇-209	弥生土器	壺	19.4		(3.2)	鈍い赤褐色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3067	土壇-209	弥生土器	壺	19.6		(6.2)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3068	土壇-209	弥生土器	甕	15.8		(7.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3069	土壇-209	弥生土器	甕	15.0		(6.7)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3070	土壇-209	弥生土器	甕	11.6		(4.1)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3071	土壇-209	弥生土器	甕	12.2		(6.7)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	良好	
3072	土壇-209	弥生土器	高杯		13.6	(8.3)	橙色(2.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑C
3073	土壇-209	弥生土器	高杯	22.0	11.7	14.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3074	土壇-209	弥生土器	高杯	24.3		(3.4)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
3075	土壇-210	弥生土器	壺			(25.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良好	黒斑B
3076	土壇-210	弥生土器	壺	8.0		(6.0)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	
3077	土壇-210	弥生土器	甕	14.4		(8.5)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3078	土壇-210	弥生土器	甕	13.9		(4.6)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3079	土壇-210	弥生土器	甕	11.4	5.8	25.6	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	ススB、黒斑BC
3080	土壇-210	弥生土器	甕	19.0		(7.3)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	
3081	土壇-210	弥生土器	甕	14.5		(6.9)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
3082	土壇-210	弥生土器	高杯	23.4		(3.1)	明褐色(7.5YR7/2)	粗砂	良好	
3083	土壇-211	弥生土器	壺	16.8		(24.0)	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	黒斑BC
3084	土壇-211	弥生土器	壺		8.4	(25.2)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑BC
3085	土壇-211	弥生土器	高杯	20.0		(4.0)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
3086	土壇-211	弥生土器	鉢	12.4		(5.0)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3087	土壇-212	弥生土器	鉢	19.4		(3.9)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3088	土壇-212	弥生土器	鉢	9.4	3.5	5.5	橙色(2.5YR7/6)	粗砂	良好	完形
3089	土壇-213	弥生土器	甕		6	(20.8)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	タタキ成形、胴部穿孔、ススB、黒斑BC
3090	土壇-213	弥生土器	鉢	24.0		(9.0)	黒色(5YR1.7/1)	細砂	良好	黒斑AB
3091	土壇-213	弥生土器	鉢	29.3		(9.0)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	
3092	土壇-213	弥生土器	鉢	33.8		(7.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
3093	土壇-214	弥生土器	壺	14.8		(9.9)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	黒斑B
3094	土壇-214	弥生土器	甕	12.0		(7.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B
3095	土壇-214	弥生土器	甕	12.5		(5.9)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
3096	土壇-214	弥生土器	甕	12.4		(6.1)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	
3097	土壇-214	弥生土器	甕	12.3		(13.8)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	黒斑B
3098	土壇-214	弥生土器	甕	12.5	5.5	26.0	橙色(5YR6/6)	礫	良好	黒斑B
3099	土壇-214	弥生土器	甕	15.6		(12.0)	鈍い褐色(7.5YR5/4)	礫	良好	
3100	土壇-214	弥生土器	甕	14.0		(6.3)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	粗砂	良好	
3101	土壇-214	弥生土器	高杯	21.5		(5.4)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑A
3102	土壇-214	弥生土器	鉢	15.4	6.2	15.2	明赤褐色(2.5YR5/6)	礫	良好	
3103	土壇-214	弥生土器	器台	18.0		(3.2)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	礫	良好	
3104	土壇-214	弥生土器	器台		16.8	(5.2)	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	
3105	土壇-215	弥生土器	甕	11.4		(6.6)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
3106	土壇-215	弥生土器	甕	13.8	6.5	(25.0)	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良好	ススB、黒斑B
3107	土壇-215	弥生土器	鉢	13.0		(5.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3108	土壇-215	弥生土器	高杯		5.8	(6.6)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3109	土壇-215	弥生土器	高杯	22.0		(4.5)	橙色(2.5YR6/6)	精良	良好	
3110	土壇-216	弥生土器	高杯	23.0		(7.0)	橙色(5YR6/6)	精良	良好	
3111	土壇-217	弥生土器	壺	24.3	8.3	42.7	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	黒斑C
3112	土壇-217	弥生土器	甕	11.8	4.0	16.5	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑B・C
3113	土壇-217	弥生土器	甕	15.1	6.6	26.7	鈍い褐色(5YR7/3)	細砂	良好	
3114	土壇-217	弥生土器	甕	16.2	6.2	22.5	鈍い褐色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB、黒斑B・C、底部穿孔
3115	土壇-217	弥生土器	甕	14.0	5.4	25.1	橙色(7.5YR)	細砂	良好	ススB、黒斑C
3116	土壇-217	弥生土器	鉢	14.8		(12.7)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	
3117	土壇-218	弥生土器	壺	16.3		(13.0)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	
3118	土壇-218	弥生土器	台付壺	7.7	11.4	26.4	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	完形
3119	土壇-218	弥生土器	甕	15.0	9.8	33.4	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良好	ススB、黒斑BC
3120	土壇-218	弥生土器	高杯	22.0		(5.0)	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線、黒斑A
3121	土壇-218	弥生土器	鉢	15.0	5.4	13.2	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	完形、ススA
3122	土壇-219	弥生土器	壺	19.5		(15.4)	橙色(5YR7/8)	礫、粗砂	良好	
3123	土壇-219	弥生土器	甕	12.8	4.9	22.5	浅黄褐色(7.5YR8/4)	細砂	良好	底部穿孔、黒斑A・BC
3124	土壇-219	弥生土器	高杯	24.6		(3.4)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
3125	土壇-220	弥生土器	甕	18.4		(7.3)	橙色(5YR7/6)	礫、粗砂	良好	黒斑A・B
3126	土壇-221	弥生土器	甕	10.8		(12.8)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	細砂	良好	
3127	土壇-221	弥生土器	甕	12.4	4.4	18.1	鈍い褐色(5YR7/4)	細砂～礫	良好	ススC、黒斑B・C
3128	土壇-221	弥生土器	甕	13.6		(14.9)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	
3129	土壇-221	弥生土器	甕	17.6	6.9	28.7	黄褐色(7.5YR8/8)	粗砂、細砂	良好	ススC'

遺物観察表

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3130	土壇-221	弥生土器	甕	17.7	6.8	34.5	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B C
3131	土壇-221	弥生土器	鉢	7.9		8.5	赤橙色(10R6/8)	細砂	良好	口縁部に穿孔、黒斑B
3132	土壇-221	弥生土器	高杯	20.6		(4.4)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良好	
3133	土壇-221	弥生土器	高杯	20.0		(4.4)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3134	土壇-221	弥生土器	高杯	22.0		(8.5)	橙色(7.5YR6/6)	細砂	良好	
3135	土壇-221	弥生土器	高杯	21.0		(11.3)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
3136	土壇-221	弥生土器	高杯		12.4	(4.1)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	粗砂	良好	透かし孔7
3137	土壇-221	弥生土器	器台		27.2	(14.1)	鈍い橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3138	土壇-222	弥生土器	甕	13.9		(3.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B
3139	土壇-223	弥生土器	高杯	22.5		(3.1)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
3140	土壇-224	弥生土器	甕	14.5		(5.5)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
3141	土壇-225	弥生土器	甕	15.6		(5.2)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
3142	土壇-225	弥生土器	壺		5.8	(14.5)	暗赤褐色(5YR3/2)	礫	良好	ススB
3143	土壇-225	弥生土器	甕	11.6	4.4	15.5	橙色(7.5YR6/6)	礫	良好	黒斑B C
3144	土壇-225	弥生土器	鉢	33.8		(5.7)	明赤褐色(5YR5/8)	礫	良好	
3145	土壇-226	弥生土器	甕	16.2		(7.1)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3146	土壇-227	弥生土器	壺	16.6		(13.3)	灰褐色(5YR6/2)	粗砂	良好	
3147	土壇-227	弥生土器	甕	15.3		(3.8)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	良好	
3148	土壇-227	弥生土器	高杯	19.6		(3.9)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	
3149	土壇-228	弥生土器	甕	18.8		(7.3)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3150	土壇-228	弥生土器	鉢	18.0	5.0	7.0	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3151	土壇-228	弥生土器	鉢	24.0	7.6	16.0	赤褐色(5YR4/6)	粗砂	良好	
3152	土壇-232	弥生土器	壺	14.3	8.8	35.4	明赤褐色(5YR5/8)	礫	良好	完形、ススB、黒斑C
3153	土壇-232	弥生土器	壺	9.3	3.5	13.5	橙色(5YR7/6)	礫	良好	
3154	土壇-232	弥生土器	甕	13.7	6.0	24.8	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	完形、ススB'、黒斑B
3155	土壇-232	弥生土器	高杯	20.9		(5.6)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	黒斑A
3156	土壇-232	弥生土器	高杯	22.7	13.0	16.5	橙色(2.5YR7/6)	粗砂	良好	
3157	土壇-233	弥生土器	甕	13.5	6.7	23.0	橙色(5YR6/6)	礫	良好	ススB、黒斑B
3158	土壇-233	弥生土器	甕		9.3	(12.5)	橙色(2.5YR6/6)	礫	良好	黒斑B C
3159	土壇-234	弥生土器	甕	13.2		(5.5)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	ススB'
3160	土壇-235	弥生土器	甕	13.8		(5.6)	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	良好	
3161	土壇-235	弥生土器	甕	14.0		(5.3)	褐色(7.5YR4/4)	細砂	良好	
3162	土壇-236	弥生土器	壺	10.0		(8.3)	褐灰色(7.5YR4/1)	粗砂	良好	
3163	土壇-236	弥生土器	壺		5.2	(10.2)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	
3164	土壇-236	弥生土器	甕	13.4	6.2	17.8	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	完形、ススB、黒斑A・B
3165	土壇-236	弥生土器	甕	9.1		(13.6)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	ススB
3166	土壇-236	弥生土器	甕	10.0		(14.8)	鈍い橙色(2.5YR6/4)	粗砂	良好	ススB
3167	土壇-236	弥生土器	甕	14.4	7.4	26.8	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	ススB
3168	土壇-236	弥生土器	甕	14.9	5.6	27.5	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	ススB
3169	土壇-236	弥生土器	甕	13.4		(21.0)	黄褐色(7.5YR7/8)	粗砂	良好	ススC、黒斑A・B
3170	土壇-236	弥生土器	甕	14.0	5.8	28.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	タタキ成形、ススA
3171	土壇-236	弥生土器	甕		14.2	(46.5)	橙色(2.5YR6/8)	礫	良好	黒斑B
3172	土壇-236	弥生土器	高杯	19.4		(6.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3173	土壇-236	弥生土器	高杯		13.8	(10.7)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3174	土壇-236	弥生土器	高杯		12.0	(8.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3175	土壇-238	弥生土器	甕	14.4		(10.6)	橙色(5YR7/8)	細砂	良好	ススB
3176	土壇-238	弥生土器	高杯		13.8	(12.3)	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂	良好	
3177	土器棺-9	弥生土器	壺			(32.0)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑B
3178	土器棺-10	弥生土器	台付鉢	18.0		(17.3)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
3179	土器棺-10	弥生土器	甕	24.2	12.0	55.5	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	ススB
3180	土器棺-11	弥生土器	高杯	19.8	9.6	11.4	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	完形
3181	土器棺-11	弥生土器	壺		12.6	56.7	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	完形、タタキ成形、黒斑B C
3182	土器棺-11	弥生土器	鉢	34.4	11.6	14.9	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	良好	黒斑B
3183	土器溜り-2	弥生土器	甕	14.0		(4.9)	鈍い橙色(5YR6/4)	礫	良好	
3184	土器溜り-2	弥生土器	甕	22.0		(5.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3185	土器溜り-2	弥生土器	器台	36.0		(3.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3186	土器溜り-2	弥生土器	高杯	22.4		(4.6)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良好	
3187	土器溜り-2	弥生土器	高杯		14.1	(7.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良好	
3188	土器溜り-2	弥生土器	高杯		8.1	(5.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	
3189	溝-92	弥生土器	壺	13.4		(7.0)	赤褐色(2.5YR4/6)	粗砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3190	溝-92	弥生土器	鉢		14.0	(7.4)	鈍い赤褐色 (2.5YR4/4)	礫	良好	回転台形土器
3191	水田-2	弥生土器	高杯		7.5	(4.0)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
3192	水田-2	弥生土器	高杯		7.8	(2.7)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
3193	水田-2	弥生土器	壺	14.0		(3.9)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	
3194	水田-2	弥生土器	甕	15.6		(3.0)	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	良好	ススB
3195	水田-2	弥生土器	高杯			(9.2)	淡橙色(5YR8/4)	精良	良好	
3196	包含層	弥生土器	壺	30.3		(9.3)	橙色(7.5YR6/6)	細砂	良好	ヘラ描き沈線
3197	包含層	弥生土器	壺	35.8		(9.8)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	ヘラ描き沈線
3198	包含層	弥生土器	壺			(4.4)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	木葉文
3199	包含層	弥生土器	壺			(2.1)	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良好	
3200	包含層	弥生土器	壺			(2.7)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良好	木葉文
3201	包含層	弥生土器	壺			(3.2)	鈍い褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
3202	包含層	弥生土器	壺			(4.5)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
3203	包含層	弥生土器	甕	24.8		(3.0)	鈍い黄橙色(10YR5/4)	細砂	良好	
3204	包含層	弥生土器	甕	23.4		(8.5)	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	良好	
3205	包含層	弥生土器	甕	21.3		(4.0)	鈍い褐色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3206	包含層	弥生土器	甕			(4.4)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	良好	ヘラ描き沈線
3207	包含層	弥生土器	甕			(6.4)	鈍い褐色(2.5YR6/4)	細砂	良好	
3208	包含層	弥生土器	甕			(6.0)	鈍い褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
3209	包含層	弥生土器	甕			(5.9)	鈍い褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	ヘラ描き沈線、ススB
3210	包含層	弥生土器	甕			(1.9)	鈍い褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
3211	包含層	弥生土器	甕	22.0	6.1	22.7	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良好	底部穿孔、ススA
3212	包含層	弥生土器	甕	15.8		(6.2)	鈍い褐色(5YR6/4)	細砂	良好	ススB'
3213	包含層	弥生土器	甕	19.2		(9.0)	褐色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	ススA、黒斑B
3214	包含層	弥生土器	壺	25.0		(8.7)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	
3215	包含層	弥生土器	壺	24.8		(14.9)	褐色(7.5YR6/8)	礫	良好	
3216	包含層	弥生土器	壺	19.3		(4.2)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	
3217	包含層	弥生土器	甕	11.6		(5.5)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良好	
3218	包含層	弥生土器	壺	10.3		(4.5)	褐色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3219	包含層	弥生土器	鉢	25.6		(3.8)	灰黄褐色(10YR4/2)	細砂	良好	
3220	包含層	弥生土器	壺	8.4		(5.4)	黒色(10YR2/1)	細砂	良好	
3221	包含層	弥生土器	台付鉢			(9.8)	褐色(5YR7/6)	細砂	良好	
3222	包含層	弥生土器	高杯		8.4	(9.6)	明褐灰色(7.5YR7/1)	粗砂	良好	
3223	包含層	弥生土器	高杯	19.0	11.5	18.3	褐色(7.5YR6/6)	礫	良好	完形、黒斑A・BC
3224	包含層	弥生土器	器台		16.2	(4.4)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑C
3225	包含層	弥生土器	壺	25.0		(7.9)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	礫	良好	
3226	包含層	弥生土器	壺	22.0		(7.0)	鈍い褐色(5YR7/3)	粗砂	良好	
3227	包含層	弥生土器	壺	20.0		(5.3)	鈍い褐色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3228	包含層	弥生土器	壺	20.0		(6.3)	褐色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	
3229	包含層	弥生土器	壺	19.7		(6.5)	褐色(5YR6/6)	礫	良好	
3230	包含層	弥生土器	壺	19.2		(5.9)	褐色(5YR6/8)	細砂	良好	
3231	包含層	弥生土器	壺	21.4		(16.5)	鈍い褐色(7.5YR7/4)	礫	良好	
3232	包含層	弥生土器	壺	20.8		(20.0)	鈍い褐色(5YR7/4)	礫	良好	
3233	包含層	弥生土器	壺			(17.0)	褐色(5YR6/6)	細砂	良好	
3234	包含層	弥生土器	壺			(13.7)	鈍い褐色(5YR7/2)	粗砂	良好	
3235	包含層	弥生土器	壺	19.8		(17.8)	褐色(5YR6/6)	礫	良好	
3236	包含層	弥生土器	壺	20.2		(16.9)	鈍い褐色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3237	包含層	弥生土器	壺	17.6		(7.7)	鈍い褐色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3238	包含層	弥生土器	壺	16.6		(9.3)	褐色(5YR6/6)	礫、細砂	良好	
3239	包含層	弥生土器	壺	21.6		(6.4)	鈍い褐色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3240	包含層	弥生土器	壺	18.2		(5.6)	褐色(5YR6/6)	細砂	良好	
3241	包含層	弥生土器	壺	13.5		(10.0)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	礫、細砂	良好	
3242	包含層	弥生土器	壺	13.5		(7.3)	褐色(5YR6/8)	粗砂	良好	
3243	包含層	弥生土器	壺		3.2	(9.3)	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	良好	
3244	包含層	弥生土器	鉢	11.5		(5.9)	鈍い褐色(2.5YR6/3)	粗砂	良好	
3245	包含層	弥生土器	壺		7.5	(20.6)	褐色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑BC
3246	包含層	弥生土器	壺		8.0	(10.0)	鈍い褐色(7.5YR7/3)	礫	良好	
3247	包含層	弥生土器	壺		6.4	(15.6)	褐色(5YR6/8)	粗砂	良好	タタキ成形、黒斑C
3248	包含層	弥生土器	甕	9.2		(5.1)	鈍い褐色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3249	包含層	弥生土器	甕	9.3	4.9	17.1	鈍い褐色(5YR7/3)	細砂	良好	黒斑BC

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3250	包含層	弥生土器	甕	11.4		(6.5)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
3251	包含層	弥生土器	甕	10.4		(4.8)	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	良好	
3252	包含層	弥生土器	甕	11.0		(9.8)	橙色(2.5YR6/6)	礫	良好	黒斑B
3253	包含層	弥生土器	甕	11.1		(4.7)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
3254	包含層	弥生土器	甕	12.6		(7.4)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良好	
3255	包含層	弥生土器	甕		5.4	(3.0)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良好	黒斑C
3256	包含層	弥生土器	甕		4.4	(4.9)	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	ススC
3257	包含層	弥生土器	甕	28.6		(14.5)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	粗砂	良好	
3258	包含層	弥生土器	甕	22.2		(6.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3259	包含層	弥生土器	甕	18.6		(6.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3260	包含層	弥生土器	甕	17.7		(4.2)	鈍い橙色(5YR7/3)	粗砂	良好	
3261	包含層	弥生土器	甕	15.2		(3.5)	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	
3262	包含層	弥生土器	甕	16.7		(4.3)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
3263	包含層	弥生土器	甕	16.0		(6.3)	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	黒斑B
3264	包含層	弥生土器	甕	13.0		(8.7)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良好	ススB'
3265	包含層	弥生土器	甕	15.6		(4.0)	灰白色(10YR8/2)	細砂~礫	良好	
3266	包含層	弥生土器	甕	13.2		11.3	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	ススA
3267	包含層	弥生土器	甕	15.0		(7.9)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	
3268	包含層	弥生土器	甕	14.0		(6.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
3269	包含層	弥生土器	甕	20.0		(10.1)	橙色(7.5YR6/6)	細砂	良好	
3270	包含層	弥生土器	甕	14.4		(5.5)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
3271	包含層	弥生土器	甕	18.8		(4.1)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3272	包含層	弥生土器	甕	20.8		(4.5)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3273	包含層	弥生土器	甕	20.7		(4.9)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	黒斑A
3274	包含層	弥生土器	甕	18.0		(6.6)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3275	包含層	弥生土器	甕	14.4		(3.2)	橙色(7.5YR6/6)	細砂	良好	
3276	包含層	弥生土器	甕	12.2		(3.7)	浅黄褐色(7.5YR8/6)	細砂	良好	黒斑A
3277	包含層	弥生土器	甕	14.0		(4.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3278	包含層	弥生土器	甕	16.0		(7.3)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	黒斑A・B
3279	包含層	弥生土器	甕	12.0		(6.5)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	ススB
3280	包含層	弥生土器	甕	11.7		(5.1)	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂	良好	
3281	包含層	弥生土器	甕	16.4		(5.5)	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良好	
3282	包含層	弥生土器	甕	14.4		(9.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	黒斑B
3283	包含層	弥生土器	甕	13.8		(5.3)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	
3284	包含層	弥生土器	甕	17.2		(5.7)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	
3285	包含層	弥生土器	甕	14.3		(6.5)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	
3286	包含層	弥生土器	甕	16.0		(9.6)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3287	包含層	弥生土器	甕	16.8		(10.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
3288	包含層	弥生土器	甕	16.0		(9.2)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3289	包含層	弥生土器	甕	20.8		(6.3)	橙色(5YR/6)	粗砂、細砂	良好	
3290	包含層	弥生土器	甕	16.4		(3.5)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3291	包含層	弥生土器	甕	15.8		(5.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3292	包含層	弥生土器	甕	12.8		(13.9)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	
3293	包含層	弥生土器	甕	27.6		(6.3)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3294	包含層	弥生土器	甕	24.6		(7.6)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良好	
3295	包含層	弥生土器	甕	25.1		(10.8)	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	良好	
3296	包含層	弥生土器	鉢	19.3	5.4	8.6	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	完形、黒斑B C
3297	包含層	弥生土器	鉢	40.0		(9.5)	橙色(5YR6/8)	礫	良好	
3298	包含層	弥生土器	鉢	47.3		(7.9)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	黒斑B
3299	包含層	弥生土器	鉢	15.5		(9.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	黒斑A・B
3300	包含層	弥生土器	台付鉢			(10.3)	橙色(5YR6/8)	礫	良好	黒斑B
3301	包含層	弥生土器	高杯	19.0		(8.3)	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	良好	
3302	包含層	弥生土器	高杯	11.4		(8.1)	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	良好	黒斑A・C
3303	包含層	弥生土器	高杯	21.8		(9.3)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	
3304	包含層	弥生土器	高杯	20.0		(6.3)	灰褐色(7.5YR6/2)	粗砂	良好	
3305	包含層	弥生土器	高杯	19.2		(2.6)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
3306	包含層	弥生土器	高杯	19.0		(3.2)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3307	包含層	弥生土器	高杯	23.8		(4.1)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	
3308	包含層	弥生土器	高杯	22.0		(4.5)	赤色(10R5/8)	粗砂	良好	
3309	包含層	弥生土器	高杯	23.0		(4.6)	橙色(2.5YR6/8)	精良	良好	
3310	包含層	弥生土器	高杯	21.8		(6.4)	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3311	包含層	弥生土器	高杯	12.8		(4.1)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3312	包含層	弥生土器	高杯		11.0	(6.9)	鈍い橙色(5YR7/3)	礫	良好	
3313	包含層	弥生土器	高杯		12.2	(6.6)	橙色(2.5YR7/8)	細砂	良好	
3314	包含層	弥生土器	高杯		12.2	(9.8)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良好	
3315	包含層	弥生土器	高杯		10.0	(6.9)	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良好	黒斑C
3316	包含層	弥生土器	高杯		12.3	(4.3)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	
3317	包含層	弥生土器	高杯		6.6	(6.8)	橙色(5YR7/8)	粗砂	良好	
3318	包含層	弥生土器	高杯		8.0	(5.4)	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	良好	
3319	包含層	弥生土器	高杯		10.2	(6.6)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	
3320	包含層	弥生土器	高杯		8.4	(6.1)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	礫	良好	黒斑C
3321	包含層	弥生土器	高杯		5.6	(5.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3322	包含層	弥生土器	器台	15.0		(3.3)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
3323	包含層	弥生土器	器台	25.8		(11.5)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	
3324	包含層	弥生土器	器台		32.6	(8.5)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑C
3325	包含層	弥生土器	器台		36.4	(10.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3326	包含層	弥生土器	器台	42.4		31.2	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	良好	
3327	包含層	弥生土器	器台		41.2		明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	良好	
3328	竪穴住居-134	土師器	壺	20.7		(18.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	タタキ成形
3329	竪穴住居-134	土師器	壺			(19.0)	橙色(7.5YR6/6)	礫	良好	刺突文B2
3330	竪穴住居-134	土師器	甕	13.2		19.0	明褐色(7.5YR7/1)	礫、粗砂	良好	タタキ成形
3331	竪穴住居-134	土師器	甕	9.0		8.7	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	
3332	竪穴住居-134	土師器	甕	10.0		(9.2)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	黒斑B
3333	竪穴住居-134	土師器	甕	12.8		(18.0)	鈍い黄褐色(5YR6/3)	細砂	良好	
3334	竪穴住居-134	土師器	甕	12.8		17.5	鈍い黄褐色(10YR7/4)	粗砂	良好	完形、胴部穿孔、ススB
3335	竪穴住居-134	土師器	甕	12.9		21.1	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	
3336	竪穴住居-134	土師器	甕	15.0		(18.3)	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂	良好	
3337	竪穴住居-134	土師器	甕	15.8		(14.4)	灰白色(10YR8/1)	礫、細砂	良好	
3338	竪穴住居-134	土師器	甕	14.8		(14.0)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3339	竪穴住居-134	土師器	甕	15.2		(7.6)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	
3340	竪穴住居-134	土師器	甕	15.0		(10.5)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3341	竪穴住居-134	土師器	甕	16.8		28.0	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑A・B・C
3342	竪穴住居-134	土師器	高杯	(20.2)	(13.9)	(11.9)	浅黄褐色(10YR8/4)	精良	良好	透かし孔、黒斑A・B
3343	竪穴住居-134	土師器	高杯	19.9	13.5	12.6	鈍い橙色(5YR7/3)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A・C
3344	竪穴住居-134	土師器	高杯	(19.0)		(7.5)	橙色(5YR6/6)	精良	良好	
3345	竪穴住居-134	土師器	高杯	18.9		(6.1)	橙色(5YR6/8)	精良	良好	
3346	竪穴住居-134	土師器	高杯	18.7	13.7	13.0	橙色(7.5YR6/6)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A・C
3347	竪穴住居-134	土師器	高杯		13.0	(7.6)	橙色(5YR6/6)	精良	良好	透かし孔4
3348	竪穴住居-134	土師器	高杯	12.9		(12.4)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	精良	良好	
3349	竪穴住居-134	土師器	高杯		(17.2)	(6.3)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	精良	良好	透かし孔3
3350	竪穴住居-134	土師器	鉢	13.2		4.1	鈍い橙色(5YR7/3)	粗砂	良好	
3351	竪穴住居-134	土師器	鉢	15.7		5.2	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	黒斑A・C
3352	竪穴住居-134	土師器	鉢	15.8		(4.4)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
3353	竪穴住居-134	土師器	鉢	15.6		(4.1)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	黒斑B
3354	竪穴住居-134	土師器	鉢	16.2		5.3	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	
3355	竪穴住居-134	土師器	鉢	16.1		(4.7)	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂	良好	
3356	竪穴住居-134	土師器	鉢	14.8		5.0	鈍い橙色(5YR6/3)	粗砂	良好	
3357	竪穴住居-134	土師器	鉢	14.5		4.9	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3358	竪穴住居-134	土師器	鉢	11.8		4.6	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
3359	竪穴住居-134	土師器	鉢	9.7		4.3	橙色(5YR6/8)	精良	良好	完形
3360	竪穴住居-134	土師器	鉢	8.9		5.0	橙色(5YR6/8)	精良	良好	
3361	竪穴住居-134	土師器	鉢	10.2		(4.8)	橙色(5YR6/8)	精良	良好	
3362	竪穴住居-134	土師器	小形壺	13.4		(9.0)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	
3363	竪穴住居-134	土師器	小形壺	10.2		7.4	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	完形
3364	竪穴住居-134	土師器	鉢	10.0		7.0	橙色(5YR6/8)	礫	良好	完形
3365	竪穴住居-134	土師器		12.2		(6.4)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
3366	竪穴住居-134	土師器	鉢	14.8		6.7	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂	良好	黒斑C
3367	竪穴住居-134	土師器	小形器台	9.2	11.6	8.6	鈍い橙色(5YR6/4)	精良	良好	透かし孔3
3368	竪穴住居-134	土師器	台付鉢		4.6	(10.4)	浅黄色(2.5Y8/3)	粗砂	良好	製塩土器、黒斑C、タタキ成形
3369	竪穴住居-134	土師器	鉢	34.5		(16.3)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3370	竪穴住居-135	土師器	甕	11.1		9.5	橙色(7.5YR7/6)	礫	良好	完形、刺突文A2
3371	竪穴住居-135	土師器	甕	12.4		(6.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	



中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3372	竪穴住居-135	土師器	甕	12.1		15.9	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	完形、刺突文A2、ススC
3373	竪穴住居-135	土師器	甕	13.6		(14.5)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	
3374	竪穴住居-135	土師器	甕	14.0		23.2	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	刺突文C3、ススB
3375	竪穴住居-135	土師器	甕	16.0		(5.2)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
3376	竪穴住居-135	土師器	甕	14.8		(6.7)	明赤褐色(5YR5/2)	細砂	良好	非在地系土器
3377	竪穴住居-135	土師器	甕	16.0		(6.8)	明赤褐色(5YR5/6)	粗砂	良好	非在地系土器、ススA
3378	竪穴住居-135	土師器	鉢	14.3		5.3	橙色(5YR7/6)	精良	良好	完形
3379	竪穴住居-135	土師器	鉢	17.4		5.9	橙色(5YR6/6)	礫	良好	完形
3380	竪穴住居-135	土師器	鉢	16.0		5.5	橙色(7.5YR6/6)	礫	良好	
3381	竪穴住居-136	土師器	壺	14.0	4.2	24.2	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	ほぼ完形、タタキ成形、黒斑C
3382	竪穴住居-136	土師器	壺		5.6	(22.5)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑B・BC、非在地系土器
3383	竪穴住居-136	土師器	壺	13.7		(12.2)	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	良好	
3384	竪穴住居-136	土師器	壺	14.2		(18.5)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	表面風化、黒斑B、非在地系土器
3385	竪穴住居-136	土師器	壺	22.2		(17.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3386	竪穴住居-136	土師器	壺	18.4		(6.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良好	非在地系土器
3387	竪穴住居-136	土師器	壺	17.1		(5.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3388	竪穴住居-136	土師器	壺			(4.6)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	畿内系土器
3389	竪穴住居-136	土師器	甕	17.7		(5.6)	明褐色(5YR7/2)	細砂	良好	
3390	竪穴住居-136	土師器	甕	14.2		(7.2)	黄褐色(10R6/8)	粗砂	良好	タタキ成形
3391	竪穴住居-136	土師器	甕	19.4		(21.5)	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	黒斑B・C
3392	竪穴住居-136	土師器	甕	15.4		(7.7)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	
3393	竪穴住居-136	土師器	甕	14.0	4.4	(24.3)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	
3394	竪穴住居-136	土師器	甕	13.1		(10.3)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	底部穿孔、ススB
3395	竪穴住居-136	土師器	甕		5.2	(17.5)	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	良好	
3396	竪穴住居-136	土師器	甕	13.0		(21.7)	橙色(5YR7/3)	細砂	良好	山陰系土器、ススB'、黒斑A
3397	竪穴住居-136	土師器	甕	15.0		(5.6)	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	山陰系土器
3398	竪穴住居-136	土師器	甕	15.0		(4.2)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	山陰系土器
3399	竪穴住居-136	土師器	鉢	11.6	3.7	5.0	灰白色(7.5YR8/2)	礫、粗砂	良好	
3400	竪穴住居-136	土師器	高杯		14.2	(8.9)	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
3401	竪穴住居-136	土師器	高杯	20.0		(12.5)	橙色(2.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
3402	竪穴住居-137	土師器	壺	20.8		(7.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3403	竪穴住居-137	土師器	甕	13.0		(9.5)	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂	良好	ススA
3404	竪穴住居-137	土師器	甕	15.4		(13.9)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	ススA
3405	竪穴住居-137	土師器	台付鉢		3.8	(2.0)	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	良好	製塩土器
3406	竪穴住居-139	土師器	壺	18.0		(4.4)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
3407	竪穴住居-139	土師器	壺	21.8		(2.9)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	
3408	竪穴住居-139	土師器	甕	15.4		(4.9)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
3409	竪穴住居-139	土師器	鉢	42.3		(7.2)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3410	竪穴住居-140	土師器	甕	15.7		(6.2)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3411	竪穴住居-141	土師器	壺	18.3		(30.9)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	刺突文A2、ススA、黒斑C
3412	竪穴住居-141	土師器	甕	(14.3)		(5.0)	鈍い黄褐色(10YR7/4)	細砂	良好	
3413	竪穴住居-141	土師器	甕	11.6		10.6	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3414	竪穴住居-141	土師器	甕	14.5		26.1	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	刺突文A1、黒斑BC
3415	竪穴住居-141	土師器	甕	17.6		(21.8)	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良好	山陰系土器
3416	竪穴住居-141	土師器	鉢	(17.3)		(6.5)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑BC
3417	竪穴住居-141	土師器	鉢	13.8		4.8	橙色(7.5YR4/6)	精良	良好	
3418	竪穴住居-141	土師器	鉢	10.9		7.3	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	ほぼ完形
3419	竪穴住居-141	土師器	小形器台	10.1		(2.9)	橙色(5YR6/8)	精良	良好	
3420	竪穴住居-142	土師器	甕	15.0		(12.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	刺突文A2
3421	竪穴住居-142	土師器	鉢	17.0		5.7	橙色(5YR7/8)	精良	良好	ほぼ完形、黒斑A~C
3422	竪穴住居-142	土師器	鉢	16.4		6.3	橙色(7.5YR6/8)	精良	良好	完形、黒斑A
3423	竪穴住居-142	土師器	鉢	13.4		5.2	橙色(5YR6/8)	精良	良好	完形
3424	竪穴住居-142	土師器	鉢	9.6		4.4	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	完形、黒斑A~C
3425	竪穴住居-143	土師器	壺	17.0		(18.0)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	畿内系土器
3426	竪穴住居-143	土師器	甕	13.6		21.9	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	ススB、黒斑BC
3427	竪穴住居-143	土師器	台付鉢	15.6		(7.4)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
3428	竪穴住居-143	製塩土器	台付鉢		4.2	(4.4)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
3429	竪穴住居-144~146	土師器	壺	18.2		(13.7)	橙色(5YR7/6)	礫、細砂	良好	タタキ成形、非在地系土器
3430	竪穴住居-144~146	土師器	甕	15.0		(4.7)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	
3431	竪穴住居-144~146	弥生土器	甕	11.8		(5.7)	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂	良好	
3432	竪穴住居-144~146	弥生土器	甕	13.4		(4.7)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3433	竪穴住居-144~146	土師器	甕	18.8		(4.0)	灰褐色(5YR6/2)	細砂	良好	
3434	竪穴住居-144~146	土師器	鉢	19.0		(7.8)	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良好	
3435	竪穴住居-144~146	土師器	鉢	15.2		6.7	橙色(2.5YR7/6)	粗砂、細砂	良好	ほぼ完形
3436	竪穴住居-144~146	土師器	鉢	13.4		5.9	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良好	
3437	竪穴住居-144~146	土師器	鉢	10.8		(5.4)	橙色(2.5YR7/8)	細砂	良好	
3438	竪穴住居-144~146	土師器	壺	5.0		(5.7)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	手握ね土器、黒斑C
3439	竪穴住居-147	土師器	壺	11.8		(7.2)	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	良好	
3440	竪穴住居-147	土師器	甕	13.3		(3.7)	鈍い黄褐色(10YR6/3)	細砂	良好	
3441	竪穴住居-147	土師器	甕	14.3		(20.0)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	
3442	竪穴住居-147	土師器	甕	16.6		(14.2)	褐色(7.5YR4/3)	粗砂	良好	
3443	竪穴住居-147	土師器	鉢	40.0		(18.0)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3444	竪穴住居-147	土師器	鉢	6.8		2.5	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	手握ね土器
3445	竪穴住居-147	土師器	鉢	8.5		3.1	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑A B
3446	竪穴住居-147	土師器	高杯	20.2		(7.6)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3447	竪穴住居-147	土師器	高杯		15.6	(9.5)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3、黒斑C
3448	竪穴住居-147	土師器	高杯		8.5	(5.9)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑C
3449	竪穴住居-147	土師器	器台	9.6		9.5	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	透かし孔3
3450	竪穴住居-147	土師器	支脚		8.3	(5.5)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	
3451	竪穴住居-148	土師器	高杯	11.1		(9.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3452	竪穴住居-150	土師器	壺	18.8		(11.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	タタキ成形、非在地系土器
3453	竪穴住居-150	土師器	壺	21.2	11.0	47.2	橙色(5YR6/6)	礫	良好	黒斑C
3454	竪穴住居-150	土師器	甕	12.4		18.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB
3455	竪穴住居-150	土師器	甕	14.0		(11.8)	鈍い黄褐色(10YR6/4)	粗砂	良好	ススB
3456	竪穴住居-150	土師器	甕	16.0		(24.8)	鈍い黄褐色(10YR5/4)	粗砂	良好	ススA
3457	竪穴住居-150	土師器	甕		5.0	(22.8)	橙色(5YR6/8)	礫	良好	黒斑C
3458	竪穴住居-150	土師器	鉢	8.8		6.2	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3459	竪穴住居-150	土師器	鉢	9.6		(8.3)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3460	竪穴住居-150	土師器	鉢	10.4		5.1	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	黒斑A~C
3461	竪穴住居-150	土師器	高杯	20.2		(7.2)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
3462	竪穴住居-150	土師器	高杯	12.5		(7.8)	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	
3463	竪穴住居-150	土師器	小形器台	9.6		(5.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔3
3464	竪穴住居-151	土師器	甕	14.0		(6.3)	橙色(7.5YR7/6)	礫	良好	
3465	竪穴住居-152・153	土師器	壺	18.6		(6.7)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	礫	良好	
3466	竪穴住居-152・153	土師器	壺	19.0		(6.4)	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	良好	
3467	竪穴住居-152・153	土師器	甕	14.2		(9.8)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3468	竪穴住居-152・153	土師器	甕	11.4		(5.3)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	
3469	竪穴住居-152・153	土師器	高杯	19.0		(7.2)	橙色(2.5YR6/6)	精良	良好	
3470	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	11.6		6.4	鈍い褐色(7.5YR6/3)	礫	良好	
3471	竪穴住居-152・153	土師器	小形壺	10.0		(5.2)	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	良好	
3472	竪穴住居-152・153	土師器	小形壺	11.1		(4.8)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3473	竪穴住居-152・153	土師器	小形壺	14.0		(7.0)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	
3474	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	9.2		8.4	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	
3475	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	10.1		6.0	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3476	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	9.6		3.0	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	手握ね土器
3477	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	10.1		3.5	鈍い黄褐色(10YR8/2)	細砂	良好	黒斑C
3478	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	10.1		3.9	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3479	竪穴住居-152	土師器	鉢	13.2		4.9	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	黒斑A B
3480	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	13.8		(4.8)	灰褐色(7.5YR6/2)	粗砂	良好	
3481	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	14.9		(4.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3482	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	15.0		(4.1)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	
3483	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	20.0		(4.4)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
3484	竪穴住居-153	土師器	台付鉢		4.6	(2.8)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良好	製塩土器
3485	竪穴住居-152・153	土師器	鉢	31.4		(10.4)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB
3486	竪穴住居-154	土師器	壺	18.7		(6.4)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	
3487	竪穴住居-154	土師器	甕	14.0		10.7	灰褐色(7.5YR5/2)	粗砂	良好	タタキ成形
3488	竪穴住居-154	土師器	甕	14.6		(9.2)	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
3489	竪穴住居-154	土師器	甕	16.2		(12.0)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	
3490	竪穴住居-154	土師器	高杯		12.5	(8.5)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3、黒斑C
3491	竪穴住居-154	土師器	高杯	16.7	12.5	13.1	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔4
3492	竪穴住居-154	土師器	鉢	12.0		(9.8)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
3493	竪穴住居-154	土師器	鉢	13.6		8.5	灰褐色(5YR6/2)	細砂	良好	黒斑B

遺物観察表

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3494	竪穴住居-154	土師器	鉢		1.7	(4.5)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑BC
3495	竪穴住居-154	土師器	鉢	33.8		(9.5)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	
3496	竪穴住居-154	土師器	鉢	17.0		(5.6)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
3497	竪穴住居-154	土師器	台付鉢	15.0	13.2	20.0	鈍い褐色(7.5YR5/4)	礫	良好	透かし孔4、黒斑B・C
3498	竪穴住居-154	土師器	台付鉢	15.8	13.5	20.4	鈍い橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	完形、透かし孔4
3499	竪穴住居-155	土師器	壺	19.7		(8.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
3500	竪穴住居-155	土師器	壺	19.3		(14.7)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
3501	竪穴住居-155	土師器	壺			(20.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3502	竪穴住居-155	土師器	壺			(11.5)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	畿内系土器、黒斑C
3503	竪穴住居-155	土師器	甕	14.6		22.2	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	山陰系土器
3504	竪穴住居-155	土師器	甕	14.4		(10.3)	灰白色(7.5YR8/1)	粗砂、細砂	良好	
3505	竪穴住居-155	土師器	甕	13.4		(20.8)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	刺突文A2、黒斑AB・B
3506	竪穴住居-155	土師器	甕	14.8		26.4	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	刺突文B2、ススC、黒斑C
3507	竪穴住居-155	土師器	甕	15.2		25.7	灰白色(10YR7/1)	細砂	良好	刺突文B2、黒斑B・C
3508	竪穴住居-155	土師器	高杯	18.5		(7.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	黒斑A
3509	竪穴住居-155	土師器	高杯	17.0		(6.1)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑A
3510	竪穴住居-155	土師器	高杯		12.6	(8.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
3511	竪穴住居-155	土師器	高杯		12.9	(7.5)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔3
3512	竪穴住居-155	土師器	高杯	19.6	14.2	14.9	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4、黒斑C
3513	竪穴住居-155	土師器	高杯	12.9		(5.7)	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	
3514	竪穴住居-155	土師器	椀	13.0		(4.9)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	粗砂、礫	良好	
3515	竪穴住居-155	土師器	鉢	15.6		4.5	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ほぼ完形、黒斑A~C
3516	竪穴住居-155	土師器	鉢	16.0		6.1	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ほぼ完形、黒斑C
3517	竪穴住居-155	土師器	鉢	17.4		(4.6)	褐色(2.5YR7/6)	粗砂、細砂	良好	
3518	竪穴住居-155	土師器	鉢	32.8		16.5	浅黄褐色(10YR8/4)	粗砂~礫	良好	黒斑C
3519	竪穴住居-155	土師器	器台	14.8	14.4	7.0	褐色(5YR7/8)	精良	良好	山陰系土器
3520	竪穴住居-155	土師器	器台	9.0	11.4	8.6	褐色(7.5YR6/8)	精良	良好	完形、透かし孔3
3521	竪穴住居-156	土師器	小形壺		2.1	6.8	黒褐色(10YR3/1)	細砂	良好	
3522	竪穴住居-156	土師器	壺	16.0		(19.9)	浅黄褐色(10YR8/4)	礫、細砂	良好	黒斑A、非在地系土器
3523	竪穴住居-157	土師器	壺	21.8		(26.8)	鈍い褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に竹管文、非在地系土器
3524	竪穴住居-157	土師器	壺	23.1	6.5	36.4	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に円形浮文+竹管文、黒斑B、非在地系土器
3525	竪穴住居-157	土師器	壺	18.4		(9.9)	鈍い黄褐色(10YR7/4)	細砂	良好	
3526	竪穴住居-157	土師器	壺	16.8		(33.0)	鈍い褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	黒斑C
3527	竪穴住居-157	土師器	甕	12.4		11.7	鈍い黄褐色(10YR6/3)	細砂	良好	タタキ成形
3528	竪穴住居-157	土師器	甕	12.8		(8.0)	灰白色(10YR7/1)	細砂	良好	
3529	竪穴住居-157	土師器	甕	16.4		(11.1)	淡褐色(5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	刺突文B3
3530	竪穴住居-157	土師器	甕	14.0		(16.3)	淡褐色(5YR8/3)	粗砂、細砂	良好	
3531	竪穴住居-157	土師器	甕	12.6		18.3	鈍い褐色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB
3532	竪穴住居-157	土師器	甕	13.6		(11.0)	鈍い褐色(7.5Y7/4)	細砂	良好	刺突文B3
3533	竪穴住居-157	土師器	甕	14.6		(14.3)	鈍い褐色(7.5YR7/3)	細砂	良好	ススB
3534	竪穴住居-157	土師器	甕	15.7		(9.3)	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	ススA
3535	竪穴住居-157	土師器	甕	14.0		(10.8)	鈍い褐色(5YR7/4)	礫、細砂	良好	刺突文B3
3536	竪穴住居-157	土師器	甕	13.6		(9.0)	明褐色(5YR7/2)	礫、粗砂	良好	刺突文B3
3537	竪穴住居-157	土師器	甕	12.9		(8.4)	鈍い褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	刺突文A2、ススA
3538	竪穴住居-157	土師器	鉢	24.1		(16.8)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑B
3539	竪穴住居-157	土師器	鉢	11.2		3.8	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	
3540	竪穴住居-157	土師器	台付鉢	14.1	4.7	7.4	鈍い褐色(5YR6/4)	細砂	良好	黒斑BC
3541	竪穴住居-157	土師器	鉢	11.6		6.9	淡褐色(5YR8/3)	細砂	良好	
3542	竪穴住居-157	土師器	鉢	10.6		7.9	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
3543	竪穴住居-157	土師器	高杯		12.7	(6.6)	褐色(5YR6/6)	精良	良好	透かし孔3、黒斑C
3544	竪穴住居-157	土師器	小形器台	10.0	10.6	7.4	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	透かし孔4
3545	竪穴住居-157	土師器	小形器台	9.1	9.5	9.8	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4、ほぼ完形
3546	竪穴住居-158	土師器	甕	12.3		17.6	浅黄褐色(7.5YR8/4)	礫、細砂	良好	ススA
3547	竪穴住居-158	土師器	甕	16.6		(26.1)	鈍い褐色(7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B、タタキ成形、非在地系土器
3548	竪穴住居-158	土師器	台付鉢	17.0	4.5	7.2	灰白色(5YR8/2)	細砂	良好	二次焼成か
3549	竪穴住居-158	土師器	台付鉢	20.4	7.7	8.0	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑A・C
3550	竪穴住居-158	土師器	鉢	6.7	2.6	4.0	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	ほぼ完形、黒斑BC、手捏ね土器
3551	竪穴住居-158	土師器	鉢	35.6		25.6	鈍い褐色(7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑A~C、タタキ成形
3552	竪穴住居-161	土師器	壺	17.2		(6.6)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3553	竪穴住居-163	須恵器	蓋	13.4		(4.0)	灰色(N6/0)	粗砂	良好	
3554	竪穴住居-163	須恵器	蓋	12.4		(3.9)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	
3555	竪穴住居-163	須恵器	杯	9.4		(3.9)	灰色(N7/0)	細砂	良好	
3556	竪穴住居-163	須恵器	杯	11.2		(4.6)	明青灰色(5B7/1)	細砂	良好	
3557	竪穴住居-163	須恵器	杯	10.3		5.1	灰色(N7/0)	礫	良好	
3558	竪穴住居-163	須恵器	壺	12.0		(3.3)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
3559	竪穴住居-163	土師器	甕	13.6		(5.2)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	ススA
3560	竪穴住居-163	土師器	甕	14.1		18.0	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	良好	
3561	竪穴住居-163	土師器	鉢			(4.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	製塩土器
3562	竪穴住居-163	土師器	甕	27.0		(5.9)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	ススA
3563	竪穴住居-164	須恵器	杯	10.4		(4.6)	灰白色(N7/0)	礫	良好	
3564	竪穴住居-164	須恵器	杯	11.2		(3.9)	灰色(N5/0)	細砂	良好	
3565	竪穴住居-164	土師器	甕	13.4		(6.6)	鈍い橙色(5YR6/4)	礫	良好	
3566	竪穴住居-164	土師器	高杯	14.2		(5.3)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	礫	良好	
3567	竪穴住居-164	土師器	鉢			(4.1)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	手捏ね土器
3568	竪穴住居-165	須恵器	蓋	11.4		(4.1)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
3569	竪穴住居-165	須恵器	蓋	13.2		(4.5)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
3570	竪穴住居-165	須恵器	蓋	12.2		(4.8)	灰白色(10YR7/1)	細砂	良好	つまみ付
3571	竪穴住居-165	須恵器	杯	10.0		(4.5)	灰白色(10YR7/1)	細砂	良好	
3572	竪穴住居-165	須恵器	杯	10.6		5.0	明青灰色(10BG7/1)	礫、細砂	良好	
3573	竪穴住居-165	須恵器	杯	10.9		(3.8)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
3574	竪穴住居-165	須恵器	高杯	15.8		(5.2)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	
3575	竪穴住居-165	須恵器	高杯	15.8		(5.4)	灰色(N5/)	細砂	良好	
3576	竪穴住居-165	須恵器	高杯		8.0	(3.8)	灰色(N6/)	細砂	良好	三方透かし
3577	竪穴住居-165	須恵器	高杯		8.2	(5.3)	灰白色(N7/)	細砂	良好	四方透かし
3578	竪穴住居-165	須恵器	高杯		8.8	(4.1)	灰色(N6/0)	細砂	良好	三方透かし
3579	竪穴住居-165	須恵器	壺	15.1		(5.5)	灰色(N5/)	細砂	良好	
3580	竪穴住居-165	須恵器	甕			(9.0)	灰色(N5/)	細砂	良好	タタキ成形
3581	竪穴住居-165	土師器	甕	15.6		(7.6)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
3582	竪穴住居-165	土師器	甕	13.8		(8.6)	淡赤褐色(2.5YR7/4)	細砂	良好	
3583	竪穴住居-165	土師器	甕	13.4		(7.3)	鈍い橙色(2.5YR6/4)	礫	良好	ススB
3584	竪穴住居-165	土師器	甕	19.0		(12.6)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3585	竪穴住居-165	土師器	鉢	4.1		3.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	手捏ね土器、完形
3586	竪穴住居-165	土師器	鉢	6.6		(4.7)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	手捏ね土器
3587	竪穴住居-166	土師器	甕	12.4		(8.7)	鈍い褐色(5YR7/3)	礫	良好	
3588	竪穴住居-166	土師器	甕	15.2		(6.2)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	黒斑B
3589	竪穴住居-166	土師器	甕	16.1		(4.6)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3590	竪穴住居-166	土師器	甕	16.8		(7.5)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3591	竪穴住居-166	土師器	甕	26.3		(6.5)	鈍い褐色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3592	竪穴住居-167	須恵器	蓋	12.7		5.5	灰色(5Y5/1)	細砂	良好	
3593	竪穴住居-168	須恵器	蓋	12.2		(4.7)	灰白色(N7/0)	粗砂	良好	
3594	竪穴住居-168	須恵器	蓋	12.2		4.8	灰白色(N7/0)	礫	良好	
3595	竪穴住居-169	須恵器	蓋	13.0		(4.2)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
3596	竪穴住居-170	須恵器	高杯	13.6		(3.4)	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
3597	竪穴住居-170	須恵器	高杯			(11.4)	灰白色(N7/0)	粗砂	良好	
3598	竪穴住居-170	須恵器	高杯		7.9	(5.3)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
3599	竪穴住居-171	須恵器	高杯			(4.2)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
3600	竪穴住居-172	須恵器	蓋	12.0		(4.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良好	ロクロ逆回り
3601	竪穴住居-172	須恵器	杯	10.0		4.8	灰色(N6/)	細砂	良好	完形、ロクロ逆回り
3602	竪穴住居-172	須恵器	高杯	11.0	8.0	9.5	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ逆回り、三方透かし
3603	竪穴住居-172	土師器	甕	14.0		(8.0)	褐色(5YR6/8)	粗砂	良好	
3604	竪穴住居-172	土師器	甕	12.6		13.8	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂	良好	
3605	竪穴住居-172	土師器	甕	15.0		(19.2)	褐色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	ススC
3606	竪穴住居-173	須恵器	蓋	12.8		(3.9)	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り
3607	竪穴住居-173	須恵器	蓋	12.7		(3.8)	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り
3608	竪穴住居-173	須恵器	蓋	12.8		(4.7)	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り
3609	竪穴住居-173	須恵器	杯	11.5		(4.6)	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り
3610	竪穴住居-173	須恵器	杯	11.0		4.9	灰色(N6/)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
3611	竪穴住居-173	須恵器	高杯		7.7	(6.8)	灰色(N6/)	細砂	良好	三方透かし
3612	竪穴住居-173	須恵器	甕	18.0		(5.7)	灰白色(N7/)	細砂	良好	タタキ成形
3613	竪穴住居-173	土師器	甕	15.2		(7.6)	明赤褐色(5YR5/6)	粗砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3614	竪穴住居-173	土師器	甕	15.2		(19.0)	橙色(2.5YR6/6)	礫	良好	ススA
3615	竪穴住居-173	土師器	甕	17.0		(17.7)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良好	
3616	竪穴住居-173・174	土師器	甕	16.7		(26.5)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	礫	良好	
3617	竪穴住居-174	須恵器	蓋	11.5		6.0	灰白色(N6/)	礫	良好	ロクロ順回り、つまみ付
3618	竪穴住居-174	須恵器	蓋	12.0		6.2	灰色(N6/)	粗砂、細砂	良好	完形、ロクロ逆回り、つまみ付
3619	竪穴住居-174	須恵器	蓋	12.2		6.2	灰色(N6/)	礫、細砂	良好	完形、ロクロ逆回り、つまみ付
3620	竪穴住居-174	須恵器	蓋	12.1		6.3	灰色(5Y6/)	礫、細砂	良好	完形、ロクロ逆回り、つまみ付
3621	竪穴住居-174	須恵器	蓋	12.4		5.5	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ逆回り、つまみ付
3622	竪穴住居-174	須恵器	蓋	12.4		5.0	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り、つまみ付
3623	竪穴住居-174	須恵器	蓋	11.6		5.2	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り、つまみ付
3624	竪穴住居-174	須恵器	蓋	12.1		(4.4)	灰色(N5/)	細砂	良好	ロクロ逆回り、ヘラ記号、つまみ付
3625	竪穴住居-174	須恵器	杯	10.6		4.9	灰色(5Y6/1)	粗砂、細砂	良好	完形、ロクロ順回り
3626	竪穴住居-174	須恵器	高杯	16.0		(6.2)	灰色(N5/)	細砂	良好	杯部に波状文、ロクロ順回り
3627	竪穴住居-174	須恵器	高杯	8.9		(6.8)	灰色(N6/)	細砂	良好	ロクロ順回り、三方透かし
3628	竪穴住居-174	須恵器	高杯	-		(8.7)	灰色(N6/)	粗砂	良好	ロクロ順回り、三方透かし
3629	竪穴住居-174	須恵器	高杯	10.3	8.5	7.9	灰白色(N6/)	粗砂	良好	ロクロ順回り、三方透かし
3630	竪穴住居-174	須恵器	高杯	10.2	8.3	9.7	灰白色(N7/)	粗砂	良好	ロクロ順回り、三方透かし
3631	竪穴住居-174	須恵器	高杯	9.9	8.2	9.4	褐灰色(7.5YR6/1)	礫、細砂	良好	ロクロ順回り、三方透かし
3632	竪穴住居-174	須恵器	高杯	10.8	8.0	8.9	灰色(N6/)	細砂	良好	ロクロ順回り、三方透かし
3633	竪穴住居-174	須恵器	高杯	10.2	8.1	9.3	灰色(N6/)	細砂	良好	完形、ロクロ順回り、三方透かし
3634	竪穴住居-174	須恵器	高杯	10.7	8.5	9.7	灰色(N6/)	粗砂	良好	ロクロ逆回り、三方透かし
3635	竪穴住居-174	須恵器	高杯	10.4	8.3	8.9	灰色(N6/)	細砂	良好	ロクロ順回り、三方透かし
3636	竪穴住居-174	須恵器	甕	24.0		(56.5)	灰色(N6/)	細砂	良好	タタキ成形
3637	竪穴住居-174	土師器	甕	15.0		32.2	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	タタキ成形、黒斑B・B
3638	竪穴住居-174	土師器	甕	-		(25.4)	橙色(7.5YR6/6)	礫	良好	ススB、黒斑B・B
3639	竪穴住居-174	土師器	甕	20.0		(21.3)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	黒斑B
3640	竪穴住居-174	土師器	甕	13.4		19.7	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	完形、ススB
3641	竪穴住居-174	土師器	甕	13.0		17.5	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	ススB
3642	竪穴住居-174	土師器	甕	14.4		16.7	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑BC
3643	竪穴住居-174	土師器	鍋	20.4		25.0	橙色(5YR6/8)	礫	良好	黒斑B・B、把手付
3644	竪穴住居-175	土師器	鉢	5.2		4.7	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	手捏ね土器
3645	竪穴住居-175	須恵器	杯	(12.6)		4.4	灰白色(N8)	粗砂	やや不良	
3646	竪穴住居-176	須恵器	高杯			(4.7)	灰色(N6)	細砂	良好	
3647	竪穴住居-176	土師器	鉢	(13.0)		(6.0)	明褐灰色(7.5YR7/2)	粗砂	良好	製塩土器
3648	竪穴住居-176	土師器	甕	15.6		(8.0)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	
3649	竪穴住居-179	須恵器	杯	(15.0)		(3.0)	灰白色(N7)	細砂	良好	
3650	竪穴住居-180	須恵器	蓋	14.4		3.8	灰白色(N8)	粗砂、細砂	良好	
3651	竪穴住居-180	須恵器	杯	11.5		3.9	黒色(7.5Y2/1)	粗砂	良好	
3652	竪穴住居-181	須恵器	甕			(28.3)	明褐灰色(7.5YR7/2)	粗砂、細砂	不良	タタキ成形
3653	竪穴住居-181	土師器	鉢	17.8		(6.9)	橙色(2.5Y6/6)	細砂	良好	黒斑AB
3654	竪穴住居-181	土師器	甕	26.1		(19.7)	橙色(5YR7/8)	粗砂、細砂	良好	
3655	竪穴住居-181	土師器	甕		13.4	(26.8)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	穿孔4
3656	竪穴住居-181	土師器	支脚		14.7	11.1	橙色(5YR6/8)	粗砂、細砂	良好	背面に穿孔、黒斑AB
3657	竪穴住居-182	須恵器	蓋	13.6		(3.0)	灰色(10Y6/1)	細砂	やや不良	
3658	竪穴住居-182	須恵器	高杯		10.2	(5.2)	灰白色(N7)	細砂	良好	三方透かし
3659	竪穴住居-182	土師器	甕	13.9		(5.8)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
3660	竪穴住居-182	土師器	高杯	15.7		(4.4)	灰白色(10YR8/2)	粗砂、細砂	良好	黒斑A
3661	竪穴住居-183	須恵器	蓋	(14.8)		(3.4)	灰白色(N8)	粗砂	良好	ロクロ順回り
3662	竪穴住居-183	須恵器	杯	12.1		4.2	灰白色(N8)	細砂	良好	ロクロ順回り
3663	竪穴住居-183	須恵器	横瓶	12.4		(4.8)	灰色(N6)	粗砂	良好	タタキ成形
3664	竪穴住居-183	須恵器	横瓶	(12.4)		(29.1)	灰色(7.5Y6/1)	粗砂、細砂	良好	タタキ成形
3665	竪穴住居-183	土師器	甕	14.6		(10.3)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良好	
3666	竪穴住居-184	土師器	甕	(16.5)		(5.9)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
3667	竪穴住居-186	須恵器	蓋	14.4		(3.9)	灰白色(5Y7/1)	粗砂	良好	ロクロ順回り
3668	竪穴住居-186	土師器	甕	(13.7)		(4.1)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	焼け歪み
3669	土壇-240	土師器	甕			(27.0)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	刺突文A2、ススB、黒斑BC
3670	土壇-251	土師器	鉢	10.3		3.3	鈍い黄橙色(10YR6/3)	礫	良好	完形
3671	土壇-252	土師器	鉢	8.6		(4.0)	褐灰色(10YR5/1)	細砂	良好	手捏ね土器
3672	土壇-252	土師器	甕	14.2		(7.1)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	
3673	土壇-252	土師器	甕	16.3	3.8	(21.0)	褐灰色(7.5YR5/1)	粗砂	良好	タタキ成形

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3674	土壇-252	土師器	甗	14.4		(5.2)	灰褐色(5YR5/2)	細砂	良好	
3675	土壇-254	土師器	鉢	7.0		4.9	橙色(2.5YR7/6)	粗砂	良好	手捏ね土器、タタキ成形、黒斑A~C
3676	土壇-255	土師器	甗	15.1		(18.5)	橙色(7.5YR6/6)	礫	良好	タタキ成形、ススB
3677	土壇-255	土師器	甗	12.6		16.7	灰褐色(7.5YR6/2)	粗砂、細砂	良好	黒斑B
3678	土壇-255	土師器	高杯	10.9		(7.1)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3679	土壇-262	土師器	壺	29.2		35.5	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂、細砂	良好	黒斑C、四国系土器
3680	土壇-263	土師器	壺	21.0		36.8	明褐色(7.5YR7/2)	粗砂	良好	黒斑C
3681	土壇-264	土師器	壺	16.9		33.1	明褐色(7.5YR7/2)	礫	良好	黒斑B
3682	土壇-265	土師器	甗	14.2		23.2	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3683	土壇-266	土師器	甗	13.0		14.3	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	刺突文B2、ススB
3684	土壇-267	須恵器	蓋	14.0		4.1	灰白色(N7/0)	礫	良好	
3685	土壇-268	須恵器	蓋	11.7		5.2	青灰色(5B5/1)	細砂	良好	つまみ付
3686	土壇-268	須恵器	高杯	11.4	8.5	9.3	暗青灰色(5B4/1)	粗砂、細砂	良好	三方透かし
3687	土壇-268	須恵器	高杯	11.3	8.0	9.3	青灰色(5B5/1)	粗砂、細砂	良好	三方透かし
3688	土壇-268	須恵器	高杯	10.3		(4.8)	青灰色(5BG6/1)	細砂	良好	三方透かし
3689	土壇-268	須恵器	高杯		8.2	(4.4)	青灰色(5BG6/1)	細砂	良好	三方透かし
3690	土壇-268	須恵器	高杯		9.6	(4.3)	暗青灰色(5B3/1)	粗砂、細砂	良好	三方透かし
3691	土壇-268	須恵器	高杯		8.4	(3.7)	暗青灰色(5BG4/1)	細砂	良好	三方透かし
3692	土壇-268	土師器	椀	9.2		4.3	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	黒斑BC
3693	土壇-268	土師器	甗	13.4		(8.3)	赤色(10R5/6)	細砂	良好	
3694	土壇-273	須恵器	杯	10.4		3.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫、細砂	不良	黒斑AB
3695	土壇-274	土師器	鍋	26.6		29.5	灰白色(2.5Y8/2)	礫	良好	把手付、黒斑AB
3696	土器溜り-3	土師器	壺			(23.8)	橙色(5YR7/8)	細砂	良好	黒斑C
3697	土器溜り-3	土師器	壺	20.6		(5.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	
3698	土器溜り-3	土師器	壺	20.4		(5.8)	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	
3699	土器溜り-3	土師器	壺	18.3		(4.2)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3700	土器溜り-3	土師器	壺	11.4		(5.9)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3701	土器溜り-3	土師器	壺			(9.8)	灰白色(10YR8/2)	礫	良好	
3702	土器溜り-3	土師器	壺	19.5		(31.6)	灰白色(2.5YR8/2)	細砂	良好	黒斑A・B
3703	土器溜り-3	土師器	壺	15.8		12.0	橙色(2.5YR7/8)	粗砂	良好	
3704	土器溜り-3	土師器	壺			(16.8)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	タタキ成形
3705	土器溜り-3	土師器	甗	13.8		(6.3)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	タタキ成形
3706	土器溜り-3	土師器	甗	15.4		(9.6)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	刺突文A3
3707	土器溜り-3	土師器	甗	16.2		(5.0)	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	山陰系土器
3708	土器溜り-3	土師器	甗	14.0		(5.8)	浅黄褐色(10YR8/4)	細砂	良好	山陰系土器
3709	土器溜り-3	土師器	甗	11.4	3.1	11.5	橙色(2.5YR7/6)	礫、細砂	良好	黒斑B
3710	土器溜り-3	土師器	鉢	7.7		7.2	浅黄色(2.5Y7/3)	細砂	良好	ほぼ完形
3711	土器溜り-3	土師器	鉢	11.0	1.6	5.9	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	タタキ成形
3712	土器溜り-3	土師器	鉢	26.1	5.3	(13.5)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	タタキ成形、片口付
3713	土器溜り-3	土師器	鉢	(42.9)		(13.2)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
3714	土器溜り-3	土師器	高杯			(7.0)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	透かし孔3
3715	土器溜り-3	土師器	高杯		13.7	(5.3)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4
3716	土器溜り-3	土師器	器台			(3.3)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	細砂	良好	
3717	土器溜り-3	土師器	小形器台	9.2		(6.0)	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	
3718	土器溜り-4	土師器	甗	16.5		(6.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3719	土器溜り-4	土師器	甗			(23.3)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	底部穿孔、黒斑C
3720	土器溜り-4	土師器	甗			(16.7)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	ススB
3721	土器溜り-4	土師器	甗	12.2		15.5	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
3722	土器溜り-4	土師器	手焙り			(15.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3723	土器溜り-4	土師器	高杯	20.3		(7.0)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	黒斑A
3724	土器溜り-4	土師器	高杯	18.3		(5.7)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
3725	土器溜り-4	土師器	高杯		14.7	(7.4)	淡褐色(5YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4
3726	土器溜り-5	土師器	甗	15.8		(8.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	
3727	土器溜り-5	土師器	甗	14.8		(11.0)	鈍い黄褐色(10YR7/4)	礫	良好	ススB
3728	土器溜り-5	土師器	壺	15.8		(9.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	タタキ成形
3729	土器溜り-5	土師器	甗	16.0		(6.0)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	
3730	土器溜り-5	土師器	甗	13.0		(9.5)	鈍い黄褐色(10YR7/4)	細砂	良好	ススB
3731	土器溜り-5	土師器	甗	13.8		(8.5)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	タタキ成形
3732	土器溜り-5	土師器	甗	18.0		(9.7)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	礫	良好	タタキ成形
3733	土器溜り-5	土師器	甗			(11.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	タタキ成形、黒斑C

遺物観察表

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3734	土器溜り-5	土師器	甗		4.0	(19.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	タタキ成形、ススB、黒斑BC
3735	土器溜り-5	土師器	甗	10.6		(11.4)	橙色(7.5YR7/6)	礫	良好	
3736	土器溜り-5	土師器	甗	12.5		(9.3)	赤橙色(10YR6/6)	粗砂	良好	刺突文A1
3737	土器溜り-5	土師器	甗	14.0		(7.4)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良好	刺突文B3
3738	土器溜り-5	土師器	甗	14.4		(7.0)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	
3739	土器溜り-5	土師器	甗	15.2		(8.9)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3740	土器溜り-5	土師器	甗	12.8		(10.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB
3741	土器溜り-5	土師器	甗	13.9		22.0	橙色(5YR6/6)	礫	良好	完形、刺突文A1、ススB、黒斑BC
3742	土器溜り-5・6	土師器	高杯		14.4	(7.8)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
3743	土器溜り-5・6	土師器	高杯		13.2	(8.2)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	透かし孔4、黒斑C
3744	土器溜り-5・6	土師器	高杯		15.3	(9.8)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	透かし孔4
3745	土器溜り-5・6	土師器	台付鉢		6.2	(4.6)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良好	黒斑C
3746	土器溜り-5・6	土師器	鉢	9.1		(3.7)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	
3747	土器溜り-5・6	土師器	鉢	13.2		5.5	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	黒斑A
3748	土器溜り-5・6	土師器	鉢	17.8		(4.3)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3749	土器溜り-5・6	土師器	鉢	9.3		5.6	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
3750	土器溜り-5・6	土師器	壺	17.7		(5.8)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
3751	土器溜り-5・6	土師器	壺	22.2		(6.4)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3752	土器溜り-5・6	土師器	壺	14.7		(4.1)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3753	土器溜り-5・6	土師器	甗	16.6		(11.5)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良好	
3754	土器溜り-5・6	土師器	甗	17.0		(8.3)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
3755	土器溜り-5・6	土師器	甗	14.7		(8.1)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良好	
3756	土器溜り-5・6	土師器	高杯		12.3	(6.7)	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	透かし孔3
3757	土器溜り-5・6	土師器	鉢	30.6		(8.2)	灰黄褐色(10YR4/2)	細砂	良好	
3758	土器溜り-5・6	土師器	鉢	11.6	3.2	9.1	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
3759	土器溜り-5・6	土師器	台付鉢		4.7	(6.7)	浅黄褐色(10YR8/4)	細砂	良好	製塩土器、タタキ成形
3760	土器溜り-5・6	土師器	支脚		11.4	(7.8)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
3761	土器溜り-5・6	土師器	支脚		8.9	(6.5)	橙色(7.5YR6/6)	細砂	良好	黒斑
3762	土器溜り-5・6	土師器	手埴り			(7.8)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良好	畿内系土器
3763	土器溜り-7	土師器	甗	13.4		16.5	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	
3764	土器溜り-7	土師器	甗	16.1		(16.4)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	黒斑C
3765	土器溜り-7	土師器	甗	12.5		(8.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3766	土器溜り-7	土師器	甗	13.4		(8.3)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	
3767	土器溜り-7	土師器	高杯		14.1	(9.2)	橙色(5YR6/8)	精良	良好	透かし孔4
3768	土器溜り-7	土師器	高杯	10.6		(4.9)	橙色(2.5Y6/6)	細砂	良好	赤色顔料
3769	土器溜り-7	土師器	鉢	13.5	4.3	6.2	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	
3770	土器溜り-7	土師器	鉢	11.7		9.1	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	黒斑BC
3771	土器溜り-7	土師器	鉢	4.8		3.1	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	
3772	土器溜り-7	土師器	鉢	11.4		5.5	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
3773	土器溜り-8	土師器	壺	16.6		(17.3)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	礫	良好	タタキ成形
3774	土器溜り-8	土師器	壺	17.6	7.4	31.9	浅黄色(2.5Y7/3)	細砂	良好	籠目、ススB、黒斑A・C
3775	土器溜り-8	土師器	壺	18.1		(6.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3776	土器溜り-8	土師器	壺	19.8		(16.5)	鈍い黄褐色(10YR7/4)	粗砂	良好	刺突文A3
3777	土器溜り-8	土師器	壺	18.7		(8.7)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	
3778	土器溜り-8	土師器	壺	21.0		34.9	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ほぼ完形、籠目、ススA、黒斑C
3779	土器溜り-8	土師器	甗	14.8		(24.5)	鈍い褐色(7.5YR5/4)	粗砂	良好	ススB'、黒斑B
3780	土器溜り-8	土師器	甗	13.2		15.9	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	タタキ成形
3781	土器溜り-8	土師器	甗	15.3		(12.5)	鈍い黄褐色(10YR6/3)	粗砂	良好	タタキ成形
3782	土器溜り-8	土師器	甗	12.3		(11.8)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	刺突文B2、ススB'
3783	土器溜り-8	土師器	甗			(15.5)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
3784	土器溜り-8	土師器	甗	13.2		(11.2)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
3785	土器溜り-8	土師器	甗	16.0		(14.2)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	
3786	土器溜り-8	土師器	甗	13.6		20.9	鈍い黄褐色(10YR7/4)	粗砂	良好	タタキ成形、ススC、黒斑BC
3787	土器溜り-8	土師器	甗	13.5		(13.5)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
3788	土器溜り-8	土師器	甗	14.8		(11.6)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	ススB、黒斑B
3789	土器溜り-8	土師器	甗	14.4		22.4	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑B
3790	土器溜り-8	土師器	甗	16.0		23.5	灰白色(5YR8/1)	細砂	良好	黒斑C
3791	土器溜り-8	土師器	甗	15.8		22.4	灰白色(10YR7/1)	粗砂	良好	刺突文A2
3792	土器溜り-8	土師器	甗	15.2		(7.3)	橙色(5YR7/6)	細砂、礫	良好	
3793	土器溜り-8	土師器	高杯	14.4		(5.5)	鈍い褐色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3794	土器溜り-8	土師器	高杯	20.0		(4.9)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	
3795	土器溜り-8	土師器	高杯	18.5		(7.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	
3796	土器溜り-8	土師器	高杯		13.6	(8.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3797	土器溜り-8	土師器	高杯		13.6	(7.6)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	透かし孔4、黒斑C
3798	土器溜り-8	土師器	高杯			(9.6)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
3799	土器溜り-8	土師器	鉢	14.0		5.7	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	
3800	土器溜り-8	土師器	鉢	14.0		6.1	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
3801	土器溜り-8	土師器	鉢	10.2		(6.2)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
3802	土器溜り-8	土師器	鉢	34.7		14.0	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3803	土器溜り-8	土師器	鉢	36.7		(17.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3804	土器溜り-8	土師器	台付鉢		6.8	(4.5)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	製塩土器
3805	土器溜り-9~11	土師器	高杯	18.0	13.7	14.4	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3806	土器溜り-9~11	土師器	壺			(12.3)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	山陰系土器
3807	土器溜り-9~11	土師器	壺	7.7		12.5	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良好	ススB
3808	土器溜り-9~11	土師器	壺	16.9		29.9	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良好	タタキ成形、ほぼ完形
3809	土器溜り-9~11	土師器	甕	13.6		(9.8)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	刺突文A1、ススB
3810	土器溜り-9~11	土師器	高杯	20.0		(12.1)	淡褐色(5YR8/4)	精良	良好	
3811	土器溜り-9~11	土師器	高杯	21.7	14.6	15.8	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3812	土器溜り-9~11	土師器	高杯	13.7		(4.9)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	
3813	土器溜り-9~11	土師器	鉢	16.8		5.7	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
3814	土器溜り-9~11	土師器	壺	19.8		33.2	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	良好	刺突文B3、胴部・底部に穿孔、黒斑C
3815	溝-101	土師器	壺	16.2		(6.0)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
3816	溝-101	土師器	壺	18.6		(4.9)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良好	
3817	溝-101	土師器	壺	23.8		(10.6)	橙色(5YR7/8)	粗砂	良好	
3818	溝-101	土師器	壺			(16.0)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良好	
3819	溝-101	土師器	壺	18.0		(6.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3820	溝-101	土師器	壺	18.4		(31.8)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良好	
3821	溝-101	土師器	壺	20.1		(12.5)	橙色(5YR7/6)	礫	良好	
3822	溝-101	土師器	甕	12.0		(5.3)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
3823	溝-101	土師器	甕	12.6		(6.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB
3824	溝-101	土師器	甕	13.4		20.3	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良好	刺突文A3、ススB、黒斑C
3825	溝-101	土師器	甕	12.7		(15.6)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	ススB'
3826	溝-101	土師器	甕	14.6		(10.8)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑A・B
3827	溝-101	土師器	甕	12.8		(10.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB'
3828	溝-101	土師器	甕	15.2		(12.8)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	ススB
3829	溝-101	土師器	甕	16.2		(12.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	礫	良好	刺突文A2
3830	溝-101	土師器	高杯	19.2		(8.0)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
3831	溝-101	土師器	高杯	10.2		(8.0)	橙色(5YR6/6)	精良	良好	
3832	溝-101	土師器	高杯	21.1	14.4	16.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3833	溝-101	土師器	高杯	19.7	15.3	14.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A
3834	溝-101	土師器	高杯		12.9	11.2	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
3835	溝-101	土師器	高杯		13.6	(6.0)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
3836	溝-101	土師器	高杯		13.4	(8.7)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
3837	溝-101	土師器	高杯		12.1	(7.0)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	透かし孔4
3838	溝-101	土師器	高杯		16.1	(7.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3839	溝-101	土師器	高杯		16.0	(7.8)	橙色(7.5YR8/6)	精良	良好	透かし孔3
3840	溝-101	土師器	高杯		17.5	(4.9)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3841	溝-101	土師器	高杯	20.2		(11.7)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
3842	溝-101	土師器	高杯		13.8	(10.7)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
3843	溝-101	土師器	高杯	19.6	14.5	16.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A
3844	溝-101	土師器	手焙り	16.2		16.9	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	良好	
3845	溝-101	土師器	高杯	14.5	7.3	7.5	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
3846	溝-101	土師器	高杯	10.5	5.7	8.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
3847	溝-101	土師器	鉢	4.2		1.8	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良好	完形、手捏ね土器
3848	溝-101	土師器	鉢	11.6		5.7	橙色(5YR6/8)	精良	良好	
3849	溝-101	土師器	皮袋	8.7		10.0	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑C
3850	溝-101	土師器	器台	13.8	11.9	6.4	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	良好	ほぼ完形
3851	溝-102	土師器	壺	16.0		(11.0)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑B
3852	溝-102	土師器	壺	19.5	5.6	40.6	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
3853	溝-102	土師器	壺	18.8		(7.4)	淡褐色(5YR8/4)	粗砂	良好	



遺物観察表

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3854	溝-102	土師器	壺	15.9		(6.6)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
3855	溝-102	土師器	壺	19.5		(31.3)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
3856	溝-102	土師器	壺	22.2		32.8	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	籠目、ススA'、四国系土器
3857	溝-102	土師器	壺	15.7		(19.0)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	畿内系土器
3858	溝-102	土師器	壺	18.0		(8.5)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良好	
3859	溝-102	土師器	壺			(23.5)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良好	黒斑C
3860	溝-102	土師器	甗	13.0		(7.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B
3861	溝-102	土師器	甗	18.8		(5.1)	淡黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	
3862	溝-102	土師器	甗	10.2	2.3	12.0	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	刺突文C3、黒斑B・C
3863	溝-102	土師器	甗	12.6		(14.3)	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	
3864	溝-102	土師器	甗	13.6		(12.9)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3865	溝-102	土師器	甗	13.0		(16.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	刺突文B2、ススB
3866	溝-102	土師器	甗	13.8		21.5	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	完形、刺突文A3、ススC
3867	溝-102	土師器	甗	12.9		(7.9)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	ススA
3868	溝-102	土師器	甗		3.9	(17.1)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	黒斑C
3869	溝-102	土師器	甗	13.6		(8.7)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	刺突文A2
3870	溝-102	土師器	甗	15.6		(10.2)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	刺突文A2、ススB
3871	溝-102	土師器	甗	15.6		(9.5)	灰白色(7.5YR8/1)	粗砂、細砂	良好	
3872	溝-102	土師器	甗	15.6		14.2	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
3873	溝-102	土師器	甗	15.2		(17.5)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	ススB
3874	溝-102	土師器	甗	14.0		(16.7)	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	刺突文A1、黒斑B・C
3875	溝-102	土師器	鉢	10.2		5.6	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
3876	溝-102	土師器	鉢	10.8		(6.9)	淡橙色(5YR8/4)	細砂	良好	
3877	溝-102	土師器	鉢	10.5		6.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	完形、黒斑B
3878	溝-102	土師器	鉢	8.4		7.5	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	
3879	溝-102	土師器	鉢	12.0		(4.7)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
3880	溝-102	土師器	鉢	14.0		(6.1)	灰白色(7.5YR8/2)	礫、粗砂	良好	黒斑C
3881	溝-102	土師器	鉢	17.0		9.2	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	良好	
3882	溝-102	土師器	鉢	16.9		6.5	橙色(2.5YR6/6)	礫	良好	完形
3883	溝-102	土師器	鉢	18.6		(5.6)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑A B
3884	溝-102	土師器	鉢	15.2		5.8	橙色(5YR7/6)	礫	良好	
3885	溝-102	土師器	鉢	15.7		6.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	黒斑C
3886	溝-102	土師器	鉢	11.0		4.0	褐灰色(10YR6/1)	細砂	良好	
3887	溝-102	土師器	台付鉢	10.6	4.4	3.8	灰白色(5YR8/2)	粗砂	良好	
3888	溝-102	土師器	台付鉢		5.0	(9.2)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	良好	製塩土器、タタキ成形
3889	溝-102	土師器	鉢	28.6		(15.3)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	
3890	溝-102	土師器	高杯	20.7	13.2	15.1	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A・C
3891	溝-102	土師器	高杯		12.9	(12.6)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3892	溝-102	土師器	高杯	14.0	12.0	10.9	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3893	溝-102	土師器	高杯	18.8	13.5	14.8	橙色(7.5YR6/6)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A・C
3894	溝-102	土師器	高杯		13.1	(9.2)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	透かし孔3
3895	溝-102	土師器	高杯		12.8	(8.9)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
3896	溝-102	土師器	高杯		14.2	(7.6)	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	
3897	溝-102	土師器	高杯		13.7	(9.6)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	透かし孔3
3898	溝-103	土師器	甗	13.7		(5.1)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
3899	溝-104	土師器	壺	10.2		(9.0)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	
3900	溝-104	土師器	甗	12.9		20.8	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑C
3901	溝-104	土師器	甗	12.6		(7.3)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良好	
3902	溝-104	土師器	鉢			(7.2)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良好	内面に赤色顔料、黒斑B C
3903	溝-104	土師器	鉢	40.6		(15.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3904	溝-104	土師器	三連壺	7.0 7.7 8.0		6.2 6.2 6.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3905	溝-109	土師器	甗	14.0		19.0	鈍い橙色(10YR6/4)	細砂	良好	ススB、黒斑A B
3906	溝-109	土師器	高杯	21.2		(6.4)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	
3907	溝-113	土師器	壺	20.8		34.7	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	黒斑B・C
3908	溝-113	須恵器	壺	31.5		(5.2)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
3909	溝-114	須恵器	杯A	13.3		4.5	灰色(N6/)	礫	良好	黒斑A
3910	溝-116	須恵器	蓋	12.0		(4.2)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
3911	溝-120 a	須恵器	高杯	12.3	10.3	11.0	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
3912	水田	土師器	壺	18.0		34.7	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	刺突文B3、黒斑C
3913	水田	土師器	壺	9.5		(33.6)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	本葉圧痕、黒斑C

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3914	水田	土師器	壺	14.0		(20.2)	灰白色(10YR8/1)	礫	良好	黒斑C
3915	水田	土師器	甗	15.8		26.8	灰白色(10YR7/1)	細砂	良好	黒斑C
3916	水田	土師器	甗	12.9		22.5	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	黒斑A B
3917	水田	土師器	甗	14.2		24.0	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	ススC、黒斑B・BC
3918	水田	土師器	鉢	16.0		(2.8)	鈍い黄褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良好	
3919	水田	土師器	小形壺			(5.1)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	畿内系土器
3920	水田	土師器	小形器台			(8.0)	鈍い黄褐色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
3921	包含層	土師器	壺	15.8		(8.0)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	
3922	包含層	土師器	壺	15.8		(6.5)	褐色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	
3923	包含層	土師器	壺	17.5		(10.0)	鈍い褐色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3924	包含層	土師器	壺	12.6		26.8	鈍い褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	タタキ成形、ススB
3925	包含層	土師器	壺			(30.6)	淡褐色(5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	
3926	包含層	土師器	壺	17.0		(26.2)	鈍い褐色(5YR6/3)	細砂	良好	タタキ成形
3927	包含層	土師器	壺	15.7		(26.3)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑B
3928	包含層	土師器	壺	14.0	4.0	(25.8)	灰白色(5YR8/2)	細砂、礫	良好	黒斑A
3929	包含層	土師器	壺	16.4		(21.3)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	タタキ成形
3930	包含層	土師器	壺	16.4		(30.5)	鈍い褐色(7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B・C
3931	包含層	土師器	壺	17.7	6.5	32.1	褐色(5YR6/6)	粗砂、細砂	良好	洞部穿孔、黒斑C
3932	包含層	土師器	壺	20.0		(30.0)	褐色(5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑B
3933	包含層	土師器	壺	12.4		16.5	褐色(2.5YR6/6)	精良	良好	黒斑C
3934	包含層	土師器	壺	15.4		(20.1)	褐色(7.5YR7/6)	粗砂、細砂	良好	タタキ成形
3935	包含層	土師器	壺	17.5		(7.7)	褐色(5YR6/8)	礫	良好	黒斑A B
3936	包含層	土師器	壺	20.8		(9.7)	褐色(5YR7/8)	細砂	良好	
3937	包含層	土師器	壺	17.1		(20.3)	鈍い褐色(5YR7/3)	粗砂	良好	
3938	包含層	土師器	壺	20.4		(17.5)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	
3939	包含層	土師器	壺	19.0		(30.5)	褐色(5YR7/6)	礫	良好	刺突文、ススB、黒斑B C
3940	包含層	土師器	壺	18.4		(14.2)	鈍い褐色(7.5YR7/3)	礫	良好	
3941	包含層	土師器	壺	18.0		(7.5)	褐色(5YR7/6)	精良	良好	
3942	包含層	土師器	壺			(11.0)	褐色(5YR6/6)	粗砂	良好	
3943	包含層	土師器	壺			(14.5)	褐色(2.5YR7/6)	細砂	良好	タタキ成形、黒斑C
3944	包含層	土師器	壺	23.2		(9.5)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	
3945	包含層	土師器	壺	23.3		(5.3)	褐色(5YR6/6)	細砂	良好	
3946	包含層	土師器	壺			(9.2)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	礫	良好	黒斑B
3947	包含層	土師器	壺	9.6		17.3	鈍い褐色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	完形
3948	包含層	土師器	壺	15.1		(6.9)	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	
3949	包含層	土師器	壺	22.3		7.6	淡褐色(5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	
3950	包含層	土師器	壺	24.0		(11.7)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	礫	良好	
3951	包含層	土師器	壺	24.8		(12.9)	灰白色(2.5YR8/2)	礫、粗砂	良好	
3952	包含層	土師器	壺	12.6		(17.1)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良好	
3953	包含層	土師器	壺	14.0		(20.8)	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	
3954	包含層	土師器	壺	14.5		22.0	鈍い褐色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3955	包含層	土師器	壺	20.8		(8.4)	灰白色(10YR8/1)	粗砂	良好	
3956	包含層	土師器	壺	17.6		(13.0)	明赤褐色(5YR5/8)	礫	良好	備後系土器、黒斑A
3957	包含層	土師器	壺	19.5		(14.4)	鈍い褐色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3958	包含層	土師器	壺	17.8		(12.1)	鈍い褐色(5YR7/4)	粗砂	良好	
3959	包含層	土師器	壺	20.0		38.4	鈍い黄褐色(10YR7/2)	礫	良好	
3960	包含層	土師器	壺	15.6		(19.6)	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂、細砂	良好	赤色顔料
3961	包含層	土師器	壺	19.5		(9.0)	浅黄褐色(7.5YR8/6)	粗砂	良好	
3962	包含層	土師器	壺	19.5		(18.9)	鈍い黄褐色(10YR6/3)	細砂	良好	
3963	包含層	土師器	壺	20.4		(14.6)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
3964	包含層	土師器	壺	19.1		(33.5)	鈍い褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	黒斑B
3965	包含層	土師器	甗	11.6		(6.1)	褐色(5YR6/6)	細砂	良好	
3966	包含層	土師器	甗	14.7		(7.4)	褐灰色(7.5YR6/1)	粗砂	良好	
3967	包含層	土師器	甗	16.0		12.3	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
3968	包含層	土師器	甗	17.4		(13.0)	鈍い褐色(7.5YR5/4)	礫	良好	ススA
3969	包含層	土師器	甗	15.3		(11.0)	鈍い褐色(7.5YR7/3)	礫	良好	ススB'
3970	包含層	土師器	甗	13.2		(9.8)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	礫	良好	タタキ成形
3971	包含層	土師器	甗	13.0		(10.0)	褐色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	タタキ成形
3972	包含層	土師器	甗	14.9		(3.0)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	
3973	包含層	土師器	甗	14.8		(7.7)	浅黄褐色(10YR8/4)		良好	タタキ成形
3974	包含層	土師器	甗	16.0		(8.0)	褐色(7.5YR7/3)	礫、細砂	良好	タタキ成形、スス

## 中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
3975	包含層	土師器	甕	13.0		(4.5)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	
3976	包含層	土師器	甕	13.8		(3.1)	鈍い黄橙色(10YR6/4)	粗砂	良好	
3977	包含層	土師器	甕	13.8		(12.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3978	包含層	土師器	甕	17.0		(12.5)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	
3979	包含層	土師器	甕	16.0		(20.4)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	ススB
3980	包含層	土師器	甕	12.0		(15.2)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	刺突文B2、ススA
3981	包含層	土師器	甕	12.0		(16.5)	鈍い橙色(5YR7/3)	粗砂	良好	刺突文A2、黒斑B
3982	包含層	土師器	甕	12.8		17.9	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	刺突文A1
3983	包含層	土師器	甕	12.6		18.1	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	良好	ほぼ完形
3984	包含層	土師器	甕	12.4		(9.8)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	刺突文B2
3985	包含層	土師器	甕	13.0		(8.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	刺突文A2
3986	包含層	土師器	甕	13.7		(9.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
3987	包含層	土師器	甕	15.8		(13.7)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂	良好	刺突文A2
3988	包含層	土師器	甕	14.1		22.3	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂、細砂	良好	ススB'
3989	包含層	土師器	甕	14.3		(9.4)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良好	刺突文A2、ススA
3990	包含層	土師器	甕	14.8		(13.7)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	
3991	包含層	土師器	甕	14.6		(20.1)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
3992	包含層	土師器	甕	14.8	4.5	24.0	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	ススC
3993	包含層	土師器	甕	13.8		(8.9)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	ススA
3994	包含層	土師器	甕	13.6		(21.2)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	ススB'
3995	包含層	土師器	甕	15.5		24.0	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂	良好	刺突文A3、ススB'、黒斑C
3996	包含層	土師器	甕	13.8		(18.6)	鈍い橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	刺突文A2
3997	包含層	土師器	甕	14.4		(9.6)	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	良好	黒斑A・B
3998	包含層	土師器	甕	17.0		(10.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	ススB'
3999	包含層	土師器	甕	16.0		(9.7)	灰白色87.5YR6/2)	細砂	良好	刺突文A
4000	包含層	土師器	甕	15.8		(10.8)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	
4001	包含層	土師器	甕	15.3		(14.0)	鈍い黄褐色(10YR6/3)	細砂	良好	黒斑A・B
4002	包含層	土師器	甕	14.2		(16.0)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂、細砂	良好	刺突文A2
4003	包含層	土師器	甕	13.9		(4.7)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	山陰系土器
4004	包含層	土師器	甕	14.2		(6.2)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	山陰系土器
4005	包含層	土師器	甕	13.3		19.6	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	山陰系土器
4006	包含層	土師器	甕	16.0		(22.9)	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良好	黒斑A・B'・C
4007	包含層	土師器	甕			(17.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB、黒斑B
4008	包含層	土師器	甕	24.1		(14.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB
4009	包含層	土師器	高杯	21.2		(8.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
4010	包含層	土師器	高杯	21.3		(5.2)	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	
4011	包含層	土師器	高杯	20.0		(5.7)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
4012	包含層	土師器	高杯	19.0		(6.1)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
4013	包含層	土師器	高杯	21.4	14.4	20.1	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔3、黒斑A・C
4014	包含層	土師器	高杯	19.9	13.9	13.8	橙色(7.5YR6/8)	精良	良好	完形、透かし孔3
4015	包含層	土師器	高杯	21.4		(7.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	
4016	包含層	土師器	高杯	20.8		(5.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4017	包含層	土師器	高杯	19.2		(13.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	
4018	包含層	土師器	高杯		15.0	(9.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
4019	包含層	土師器	高杯	20.6	14.0	15.0	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	透かし孔3、黒斑A
4020	包含層	土師器	高杯		14.5	(8.9)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
4021	包含層	土師器	高杯		13.8	(8.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
4022	包含層	土師器	高杯		13.3	(8.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
4023	包含層	土師器	高杯		14.3	(7.9)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	透かし孔2+4
4024	包含層	土師器	高杯		17.9	(5.6)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	透かし孔3
4025	包含層	土師器	高杯		13.5	(9.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3、黒斑C
4026	包含層	土師器	高杯		13.8	(10.5)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	透かし孔
4027	包含層	土師器	高杯		14.0	(8.6)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
4028	包含層	土師器	高杯		15.1	(8.1)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔3
4029	包含層	土師器	高杯		13.1	(6.2)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
4030	包含層	土師器	高杯		14.5	(7.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
4031	包含層	土師器	高杯		13.4	(8.6)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	精良	良好	透かし孔3
4032	包含層	土師器	高杯		14.1	(8.1)	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
4033	包含層	土師器	高杯		13.8	(8.6)	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4
4034	包含層	土師器	鉢	6.6		3.2	鈍い黄褐色(10YR7/3)	礫	良好	手捏ね土器、黒斑A~C
4035	包含層	土師器	鉢	6.0		(2.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	手捏ね土器

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4036	包含層	土師器	鉢	8.1		2.6	明赤褐色(5YR5/8)	細砂	良好	手捏ね土器
4037	包含層	土師器	鉢	8.2		2.3	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	手捏ね土器
4038	包含層	土師器	鉢	9.8		2.8	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	手捏ね土器
4039	包含層	土師器	鉢	9.4	1.6	5.0	浅黄色(2.5Y7/3)	細砂	良好	
4040	包含層	土師器	鉢	11.8		7.1	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	タタキ成形
4041	包含層	土師器	鉢	13.5		6.2	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	タタキ成形
4042	包含層	土師器	鉢	14.8	3.2	5.7	橙色(5YR6/6)	礫	良好	タタキ成形
4043	包含層	土師器	鉢	13.2	2.4	6.5	橙色(5YR7/8)	細砂	良好	完形、黒斑B C
4044	包含層	土師器	鉢	14.7		(5.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B
4045	包含層	土師器	鉢	16.6		8.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	
4046	包含層	土師器	鉢	15.4		5.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
4047	包含層	土師器	鉢	12.4		5.0	明褐灰色(5YR7/2)	細砂	良好	
4048	包含層	土師器	杯	17.9		(4.9)	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	良好	丹塗り
4049	包含層	土師器	鉢	16.8		(3.8)	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	良好	
4050	包含層	土師器	鉢	15.9		4.5	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	内面に赤色顔料
4051	包含層	土師器	鉢	16.0		4.7	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良好	
4052	包含層	土師器	碗	11.7		(6.6)	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	良好	丹塗り
4053	包含層	土師器	高杯	12.5		(6.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	
4054	包含層	土師器	台付鉢	12.4	5.3	7.8	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
4055	包含層	土師器	高杯	16.2		(6.6)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	
4056	包含層	土師器	鉢	19.4	8.1	13.7	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
4057	包含層	土師器	台付鉢		4.5	(3.5)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	タタキ成形、製塩土器
4058	包含層	土師器	台付鉢		5.0	(4.2)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
4059	包含層	土師器	壺	2.6		3.2	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	手捏ね土器
4060	包含層	土師器	小形壺			(4.0)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	手捏ね土器
4061	包含層	土師器	壺	4.5		3.7	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	良好	手捏ね土器、完形、ススA
4062	包含層	土師器	鉢	8.8		(5.9)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	手捏ね土器
4063	包含層	土師器	鉢	8.4		7.3	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	
4064	包含層	土師器	鉢	9.0		6.4	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	黒斑A~C
4065	包含層	土師器	碗	10.2		6.3	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	黒斑A B
4066	包含層	土師器	鉢	8.8		(5.3)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
4067	包含層	土師器	壺	12.8		(6.7)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	精良	良好	
4068	包含層	土師器	鉢	14.0	3.5	9.3	鈍い黄橙色(10YR6/3)	粗砂	良好	完形、黒斑A~C
4069	包含層	土師器	鉢	22.0		(11.3)	黒褐色(7.5YR3/1)	粗砂	良好	
4070	包含層	土師器	鉢	25.5		14.2	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	黒斑B
4071	包含層	土師器	鉢	33.4		(2.7)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	
4072	包含層	土師器	鉢	9.5	4.1	9.1	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	完形、黒斑B
4073	包含層	土師器	小形壺	10.8		7.4	鈍い橙色(5YR7/3)	精良	良好	
4074	包含層	土師器	壺	10.6		10.5	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	完形、丹塗り
4075	包含層	土師器	鉢	12.2		(5.2)	鈍い橙色(5YR7/3)	精良	良好	黒斑A B
4076	包含層	土師器	鉢	32.2	7.2	(28.1)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	黒斑C
4077	包含層	土師器	鉢	35.8		(13.1)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
4078	包含層	土師器	鉢	36.6		24.7	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良好	黒斑C
4079	包含層	土師器	鉢	38.0		(19.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B C
4080	包含層	土師器	鉢	40.0		21.8	鈍い黄橙色(10YR7/4)	礫	良好	黒斑B・A B
4081	包含層	土師器	鉢	21.4	18.0	17.7	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	底部穿孔、黒斑C
4082	包含層	土師器	高杯	8.6	9.4	10.1	橙色(5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
4083	包含層	土師器	高杯	9.4	10.1	10.0	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
4084	包含層	土師器	高杯		10.0	(7.3)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
4085	包含層	土師器	器台	12.3		(7.7)	橙色(5YR6/6)	精良	良好	透かし孔3
4086	包含層	土師器	高杯	12.0		(8.6)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
4087	包含層	土師器	高杯	13.2		(8.1)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
4088	包含層	土師器	支脚	10.6		(8.9)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
4089	包含層	土師器	支脚	9.5		(7.0)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	粗砂	良好	黒斑C
4090	包含層	土師器	支脚	6.4		(6.3)	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	
4091	包含層	土師器	支脚	9.5		(11.2)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	粗砂	良好	タタキ成形、黒斑B C
4092	包含層	土師器	支脚			(11.6)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良好	黒斑A~C
4093	包含層	土師器	支脚		8.5	(13.5)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	タタキ成形
4094	包含層	土師器	手焙り			(6.7)	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂	良好	
4095	包含層	土師器	手焙り			(16.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B・C
4096	包含層	土師器	手焙り		8.2	(17.8)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	黒斑B

遺物観察表

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4097	包含層	土師器	蓋	12.9		2.9	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
4098	包含層	土師器	壺	18.6		34.6	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
4099	包含層	土師器	高杯	18.3	11.8	12.6	明褐灰色(7.5YR7/2)	粗砂	良好	透かし孔3
4100	包含層	須恵器	蓋	11.8		(3.5)	灰色(N6/)	細砂	良好	
4101	包含層	須恵器	蓋	12.4		4.8	青灰色(5PB6/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り
4102	包含層	須恵器	蓋	11.6		5.5	褐灰色(5YR5/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
4103	包含層	須恵器	蓋	12.4		6.0	褐灰色(5YR5/1)	粗砂、細砂	良好	ロクロ順回り、完形
4104	包含層	須恵器	杯	10.0		4.5	灰色(N6/)	細砂	良好	ロクロ順回り
4105	包含層	須恵器	杯	10.9		5.0	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	不良	ロクロ順回り
4106	包含層	須恵器	高杯			(6.5)	灰色(N5/)	細砂	良好	ロクロ順回り
4107	包含層	須恵器	高杯		9.4	(5.6)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4108	包含層	須恵器	高杯	19.9		(5.1)	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	良好	
4109	包含層	須恵器	壺	13.5		(5.0)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4110	包含層	土師器	甕	10.6		14.4	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
4111	包含層	土師器	甕	12.6		(6.4)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
4112	包含層	土師器	甕	14.0		(9.1)	橙色(5YR6/8)	粗砂、礫	良好	
4113	包含層	土師器	高杯	14.4		(6.7)	鈍い橙色(5YR6/4)	礫	良好	
4114	包含層	須恵器	蓋	13.1		4.2	青灰色(5B5/1)	礫、粗砂	良好	
4115	包含層	須恵器	蓋	14.3		(3.5)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4116	包含層	須恵器	蓋	13.0		3.9	灰色(N5/)	細砂	良好	ロクロ逆回り
4117	包含層	須恵器	蓋	11.6		4.2	鈍い黄橙色(10YR6/4)	礫、細砂	不良	黒斑A
4118	包含層	須恵器	蓋	12.7		3.4	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂、細砂	やや不良	
4119	包含層	須恵器	杯	11.8		4.0	灰白色(N8)	粗砂、細砂	良好	ロクロ順回り、ほぼ完形
4120	包含層	須恵器	杯	(13.2)		(3.1)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
4121	包含層	須恵器	杯	12.7		4.1	青灰色(N6/1)	細砂、粗砂	良好	ロクロ順回り
4122	包含層	須恵器	蓋	13.0		4.0	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4123	包含層	須恵器	杯	10.4		4.0	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4124	包含層	須恵器	杯		6.7	(3.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫、細砂	不良	黒斑C
4125	包含層	須恵器	杯	9.4		3.8	灰色(N8/)	細砂	良好	
4126	包含層	須恵器	杯	11.1		4.8	灰白色(N8/0)	細砂	不良	
4127	包含層	須恵器	杯	9.4		4.8	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	不良	
4128	包含層	須恵器	高杯		9.0	(7.5)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4129	包含層	須恵器	高杯		10.1	(7.4)	灰色(N6/)	礫、細砂	良好	
4130	包含層	須恵器	甕			(5.4)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4131	包含層	須恵器	甕	16.0		(6.5)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
4132	包含層	土師器	甕	16.0		(10.0)	鈍い橙色(5YR6/3)	礫	良好	
4133	包含層	土師器	甕	22.4		(20.3)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	
4134	包含層	土師器	甕	23.8		(10.1)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂~礫	良好	
4135	掘立柱建物-21	土師器	杯	14.8		(3.1)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	丹塗り
4136	焼成土壇-4	土師器	甕	18.7		32.1	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	良好	
4137	土壇-278	土師器	甕	19.2		(10.3)	暗赤褐色(2.5YR3/4)	細砂	良好	
4138	土壇-279	土師器	杯	17.8		(4.0)	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	良好	丹塗り
4139	土壇-280	須恵器	杯		9.0	(1.4)	灰色(N6/0)	細砂	良好	自然釉
4140	土壇-280	須恵器	杯	11.4		5.2	灰白色(N8/0)	粗砂	良好	
4141	土壇-280	須恵器	杯	13.0		4.5	灰白色(N7/0)	粗砂	良好	
4142	土壇-281	須恵器	杯	12.6		4.2	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4143	土壇-281	須恵器	杯	13.2		4.1	灰白色(N8/0)	細砂	不良	
4144	土壇-281	須恵器	杯	13.4		4.4	灰色(N5/0)	細砂	不良	
4145	土壇-281	須恵器	杯	13.7	10.4	4.3	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4146	土壇-281	須恵器	杯	15.6	11.6	4.4	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4147	土壇-281	須恵器	杯	15.2	11.1	3.7	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り
4148	土壇-281	須恵器	蓋	14.6		(1.9)	灰白色(N8/)	細砂	良好	ロクロ逆回り
4149	土壇-281	須恵器	蓋	15.0		2.8	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り
4150	土壇-281	須恵器	蓋	15.8		(2.7)	灰白色(N8/0)	細砂	良好	重ね焼き
4151	土壇-281	須恵器	蓋	19.8		(2.7)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	良好	丹塗り
4152	土壇-281	須恵器	蓋	19.8		(2.3)	灰白色(N5/0)	粗砂	良好	
4153	土壇-281	須恵器	皿	20.3	12.3	3.9	灰白色(N8/0)	細砂	良好	内面に当具痕
4154	土壇-281	土師器	杯		12.0	(2.0)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4155	土壇-281	土師器	皿		11.7	(1.9)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	丹塗り
4156	土壇-281	土師器	皿	13.2		2.6	鈍い橙色(5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4157	土壇-281	土師器	皿	15.0		(2.1)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	丹塗り

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4158	土壇-281	土師器	皿	15.9		(2.0)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り
4159	土壇-281	土師器	甕	15.6		(6.1)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
4160	土壇-281	土師器	甕	29.2		(7.4)	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	良好	
4161	土壇-282	須恵器	杯	13.5		4.3	灰白色(N8/0)	粗砂	良好	黒斑A~C
4162	土壇-282	須恵器	杯	14.0		(5.0)	灰白色(10Y8/1)	粗砂、細砂	不良	
4163	土壇-282	須恵器	杯	14.8		4.9	灰白色(5Y8/1)	細砂	不良	
4164	土壇-282	須恵器	蓋			(1.2)	青灰色(10BG6/1)	細砂	不良	
4165	土壇-282	須恵器	高杯			(7.2)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4166	土壇-282	須恵器	杯		13.0	4.1	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4167	土壇-282	土師器	杯	15.3		(2.4)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り
4168	土壇-282	土師器	杯	14.8		(3.3)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	丹塗り
4169	土壇-282	土師器	杯	14.8		3.0	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4170	土壇-282	土師器	杯	15.7		(3.2)	灰白色(5YR8/1)	細砂	良好	丹塗り
4171	土壇-282	土師器	杯	15.2		(3.9)	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4172	土壇-282	土師器	杯	18.2		4.2	橙色(2.5YR7/6)	粗砂	良好	丹塗り
4173	土壇-282	土師器	杯	20.3	15.3	(4.8)	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4174	土壇-282	土師器	皿		12.6	(2.4)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り
4175	土壇-282	土師器	皿		9.4	(2.4)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り
4176	土壇-282	土師器	甕	12.8		(11.5)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	良好	
4177	土壇-282	土師器	甕	16.6		(7.4)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	良好	
4178	土壇-282	土師器	甕	25.9		(17.4)	褐色(7.5YR4/1)	細砂	良好	
4179	土壇-284	土師器	杯	16.6		4.7	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	良好	
4180	土壇-284	土師器	甕	24.1		(13.0)	鈍い赤褐色(5YR4/4)	細砂	良好	
4181	土壇-285	須恵器	杯	12.8		4.7	灰色(N6/0)	粗砂	良好	
4182	土壇-286	須恵器	杯	12.2		5.0	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4183	土壇-287	須恵器	杯	12.4		(3.1)	灰白色(5Y8/1)	粗砂、細砂	不良	
4184	土壇-286	土師器	杯	13.8		3.2	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	
4185	土壇-286	土師器	杯	15.0		(4.0)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	丹塗り
4186	土壇-286	土師器	杯	16.6		4.5	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂、細砂	良好	丹塗り
4187	土壇-286	土師器	鉢	23.1		12.5	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	黒斑B
4188	土壇-286	土師器	甕	28.7		(18.8)	明赤褐色(5YR5/6)	粗砂、細砂	良好	
4189	土壇-286	土師器	甕	27.7		(31.0)	灰褐色(7.5YR5/2)	粗砂、細砂	良好	
4190	土壇-288	土師器	杯	17.2	12.6	3.7	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	完形、丹塗り
4191	土壇-288	土師器	杯	16.0		3.7	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
4192	土壇-288	土師器	杯	17.8		(5.5)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	良好	
4193	土壇-289	土師器	甕	16.1		(6.7)	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂	良好	
4194	土壇-291	土師器	高杯	12.0		(3.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
4195	土壇-292	土師器	甕	26.8		(13.7)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	良好	
4196	土壇-293	須恵器	蓋	16.0		(2.3)	灰白色(N8/0)	粗砂	良好	
4197	土壇-293	須恵器	蓋	16.6		2.9	灰色(N6/)	粗砂、細砂	良好	
4198	土壇-293	須恵器	蓋	17.7		(2.6)	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
4199	土壇-293	須恵器	蓋	15.2		3.3	灰白色(N7/0)	粗砂	良好	ヘラ記号
4200	土壇-293	須恵器	杯		11.0	(1.6)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	不良	
4201	土壇-293	須恵器	杯		9.5	(3.1)	灰白色(N8/0)	礫	良好	
4202	土壇-293	須恵器	杯		11.7	(1.8)	青灰色(5B5/1)	細砂	良好	
4203	土壇-293	須恵器	皿	24.8	16.4	2.5	灰白色(N7/0)	粗砂	良好	
4204	土壇-293	土師器	蓋	16.2		(1.8)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
4205	土壇-293	土師器	蓋	16.7		(2.1)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
4206	土壇-293	土師器	杯		10.7	(3.1)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4207	土壇-293	土師器	杯	15.6	12.4	(2.7)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	丹塗り
4208	土壇-293	土師器	杯	14.5		3.7	橙色(2.5Y96/8)	細砂	良好	丹塗り
4209	土壇-293	須恵器	杯	13.7		3.5	灰白色(N7/0)	粗砂、細砂	良好	
4210	土壇-293	土師器	皿	26.4		(2.0)	赤褐色(2.5YR4/8)	細砂	良好	丹塗り、暗文
4211	土壇-293	土師器	皿	24.4	21.0	2.0	褐色(2.5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4212	土壇-295	須恵器	蓋	15.5		(2.1)	灰色(N6/)	細砂	良好	ロクロ順回り
4213	土壇-295	須恵器	杯	13.1	8.7	4.1	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	
4214	土壇-295	須恵器	杯	14.5	10.7	4.3	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り
4215	土壇-295	土師器	杯	12.8	10.9	(2.6)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	畿内系土器
4216	土壇-295	土師器	杯	13.1	11.7	(3.1)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	丹塗り
4217	土壇-295	土師器	杯	14.9		(4.6)	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	
4218	土壇-295	土師器	皿	18.0	14.4	2.7	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り

遺物観察表

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4219	土壇-295	土師器	皿	15.8	13.0	2.3	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4220	土壇-295	土師器	皿	19.0	16.7	2.4	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
4221	土壇-295	土師器	高杯	18.9		(1.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4222	土壇-296	土師器	杯	8.4	6.0	2.6	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	良好	黒斑B
4223	土壇-296	土師器	杯	10.7	10.3	4.3	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	完形、黒斑C
4224	土壇-296	土師器	杯	11.2	10.6	4.7	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	完形、黒斑B C
4225	土壇-296	土師器	杯	12.0	10.0	4.2	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	完形、黒斑A
4226	土壇-296	土師器	壺	12.0	10.0	10.2	橙色(2.5YR6/6)	礫	良好	完形、底部赤化
4227	土壇-296	土師器	甕	12.0		10.0	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	完形
4228	土壇-299	土師器	杯	15.6		3.4	灰白色(5YR8/2)	粗砂	良好	丹塗り、二次焼成
4229	土壇-299	土師器	蓋	21.7		2.7	灰白色(10YR8/1)	粗砂	良好	丹塗り
4230	土壇-299	須恵器	杯	14.7		(4.6)	灰白色(N6/0)	細砂	良好	
4231	土壇-299	須恵器	杯	13.2		4.8	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4232	土壇-299	須恵器	蓋	6.4		1.9	灰色(N6/)	精良	良好	ミニチュア
4233	土壇-300	土師器	甕	29.8		(11.1)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	ススB
4234	土壇-300	土師質	カマド	28.7	41.5	(38.0)	褐色(7.5YR4/3)	細砂	良好	黒斑C
4235	土壇-300	土師質	カマド	-		(37.8)	鈍い黄褐色(10YR5/4)	細砂	良好	
4236	土壇-329	須恵器	蓋	13.5		(1.6)	灰色(N5/0)	礫	良好	
4237	土壇-329	須恵器	蓋	15.5		1.7	灰色(10Y6/1)	細砂	良好	
4238	土壇-329	須恵器	杯	14.6	10.0	(7.1)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4239	土壇-300	土師器	杯	12.6	9.1	4.6	灰白色(10YR7/1)	粗砂	良好	完形
4240	土壇-300	須恵器	杯	13.1	10.2	4.2	暗灰色(N3/0)	礫、細砂	不良	
4241	土壇-300	須恵器	杯	14.4	11.2	4.1	灰白色(N7/0)	粗砂、細砂	良好	
4242	土壇-300	須恵器	皿		13.1	(2.4)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	不良	
4243	土壇-300	土師器	皿		12.3	(2.4)	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂	良好	暗文
4244	土壇-300	土師器	杯	14.9	13.2	3.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
4245	土壇-300	土師器	杯	14.7	13.2	(3.0)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂、細砂	良好	丹塗り
4246	土壇-300	土師器	皿	15.0	11.8	2.0	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	丹塗り
4247	土壇-300	土師器	皿	17.4	14.4	2.8	鈍い橙色(5YR7/4)	礫~細砂	良好	
4248	土壇-300	土師器	甕	14.5		11.3	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	良好	黒斑C
4249	土壇-301	須恵器	杯	12.9		4.1	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	
4250	土壇-302	須恵器	蓋	12.4		3.4	灰白色(N7/)	細砂	良好	ほぼ完形
4251	土壇-302	土師器	杯	13.8		2.8	淡赤褐色(2.5YR7/4)	細砂	良好	ほぼ完形、丹塗り
4252	土壇-133	須恵器	杯	13.5		(4.8)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4253	土壇-133	土師器	皿	12.9	10.9	1.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
4254	土壇-303	土師器	皿	15.0		2.1	灰白色(7.5YR8/2)	粗砂、細砂	良好	丹塗り
4255	土壇-133	土師器	皿	25.4	24.0	2.0	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂	良好	丹塗り
4256	土壇-304	須恵器	杯	14.1	11.1	4.8	灰白色(N7/)	粗砂	良好	ヘラ記号、ロクロ順回り
4257	土壇-305	須恵器	杯		10.9	(3.3)	灰色(N8)	細砂	良好	
4258	土壇-306	土師器	甕	26.2		32.4	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良好	ススB1
4259	土壇-306	土師器	甕	28.9		(21.5)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	黒斑A
4260	土壇-306	土師器	甕	30.0		(20.7)	明赤褐色(5YR5/6)	礫	良好	ススB、黒斑A
4261	土壇-306	土師器	甕	42.4		(17.8)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	黒斑A・B
4262	溝-128	須恵器	蓋	16.6		2.5	灰白色(N7/0)	細砂	良好	ロクロ逆回り
4263	溝-128	須恵器	蓋	13.2		2.3	灰白色(N5/)	細砂	良好	
4264	溝-128	須恵器	蓋	16.8		(2.2)	灰色(N6/0)	細砂	良好	ロクロ順回り
4265	溝-128	須恵器	蓋	18.0		(1.8)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	陶邑産
4266	溝-128	須恵器	杯		12.6	2.0	灰色(N5/)	精良	良好	
4267	溝-128	須恵器	杯	14.7	10.8	4.5	灰白色(N7/1)	細砂	良好	
4268	溝-128	土師器	杯	14.9		3.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	
4269	溝-128	須恵器	甕	46.0		(12.7)	灰色(N6/0)	礫	良好	
4270	溝-129	須恵器	蓋	16.1		2.4	灰白色(N8/)	粗砂、礫	良好	ロクロ順回り
4271	溝-130	須恵器	高杯	27.1		(14.3)	灰色(N7/0)	細砂	良好	
4272	溝-130	須恵器	高杯			(7.4)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	
4273	溝-130	須恵器	杯	14.0	10.3	3.7	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4274	溝-131	須恵器	皿	25.8	20.6	2.7	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4275	溝-132	須恵器	蓋	14.7		2.8	灰色(N6/)	細砂	良好	
4276	溝-132	須恵器	蓋	17.5		3.4	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4277	溝-132	須恵器	蓋	16.2		(2.6)	灰白色(2.5Y8/1)	礫、粗砂	不良	
4278	溝-132	須恵器	蓋			(2.5)	灰白色(5Y7/1)	礫、細砂	良好	
4279	溝-132	須恵器	蓋	20.5		(2.0)	青灰色(5B6/1)	粗砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4280	溝-132	須恵器	杯	14.0	10.2	3.9	灰色(N6/)	礫、細砂	不良	
4281	溝-132	須恵器	杯	16.0	11.2	3.9	灰色(N6/0)	粗砂	良好	
4282	溝-132	須恵器	杯		12.3	(4.8)	灰白色(N7/0)	粗砂	良好	ロクロ順回り
4283	溝-132	須恵器	杯	14.2		4.4	灰白色(N7/)	粗砂、細砂	良好	
4284	溝-132	須恵器	杯	14.1		4.7	灰白色(N8/)	礫~細砂	不良	
4285	溝-132	須恵器	杯	14.2	9.5	4.7	灰白色(5Y8/1)	粗砂、細砂	不良	
4286	溝-132	須恵器	杯	12.2	8.7	3.3	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	不良	
4287	溝-132	須恵器	皿	15.4		2.3	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	
4288	溝-132	須恵器	皿	23.0	20.0	3.2	灰白色(7.5Y8/1)	礫~細砂	不良	
4289	溝-132	須恵器	皿	26.4	22.0	2.8	灰白色(N8/)	礫、細砂	良好	
4290	溝-132	須恵器	高杯		11.6	(3.7)	灰白色(2.5Y7/1)	粗砂	良好	
4291	溝-132	須恵器	高杯			(5.6)	灰白色(7.5Y7/1)	粗砂	良好	
4292	溝-132	須恵器	高杯			(7.0)	灰色(2.5Y7/1)	粗砂	良好	
4293	溝-132	須恵器	壺	6.0		(4.1)	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4294	溝-132	須恵器	壺	10.8		16.8	灰白色(N7/)	細砂	良好	獣足付
4295	溝-132	須恵器	壺			(7.2)	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	良好	
4296	溝-132	須恵器	壺			(6.5)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4297	溝-132	須恵器	壺		(10.6)	(9.4)	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	不良	
4298	溝-132	須恵器	壺		11.0	(13.5)	灰白色(N7/)	礫、細砂	良好	
4299	溝-132	須恵器	壺		5.2	(2.4)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	ロクロ逆回り
4300	溝-132	須恵器	壺		8.5	(6.6)	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
4301	溝-132	須恵器	壺		8.1	(6.2)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4302	溝-132	須恵器	壺		10.8	(7.0)	灰白色(N7/)	礫、細砂	良好	
4303	溝-132	須恵器	平瓶		12.1	(9.5)	灰色(N7/)	細砂	良好	
4304	溝-132	須恵器	平瓶	11.4		(7.7)	灰色(7.5Y6/1)	細砂	良好	
4305	溝-132	須恵器	平瓶			(6.8)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4306	溝-132	須恵器	平瓶			(7.0)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4307	溝-132	須恵器	平瓶	(13.5)		(8.3)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4308	溝-132	須恵器	壺	22.4		(5.6)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4309	溝-132	須恵器	盤		25.3	(9.0)	灰白色(5Y7/1)	粗砂	良好	
4310	溝-132	土師器	皿	14.2	-	(2.4)	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	良好	丹塗り、暗文
4311	溝-132	須恵器	杯	14.2	11.4	3.2	灰色(5Y6/1)	細砂	不良	
4312	溝-132	土師器	杯	17.5	10.0	7.0	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4313	溝-132	土師器	杯		9.3	(2.8)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂、細砂	良好	丹塗り、黒斑C・B
4314	溝-132	土師器	椀	11.8		4.0	鈍い黄橙色(10YR7/4)	礫、細砂	良好	
4315	溝-132	土師器	椀	11.6		5.4	褐灰色(10YR5/1)	礫~細砂	良好	
4316	溝-132	土師器	杯	9.4		3.4	橙色(5YR6/6)	礫~細砂	良好	ほぼ完形
4317	溝-132	土師器	杯	9.7		3.5	橙色(5YR6/6)	礫、細砂	良好	
4318	溝-132	土師器	杯	12.4		3.1	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	良好	丹塗り、完形
4319	溝-133	須恵器	蓋	17.6		3.5	灰白色(10YR7/1)	細砂	不良	
4320	溝-133	須恵器	杯	13.1		4.5	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4321	溝-133	須恵器	壺		7.2	(7.8)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4322	溝-133	土師器	甕	29.7		(10.7)	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	良好	ススB
4323	溝-134	須恵器	杯	13.0		4.5	灰白色(7.5Y8/1)	礫、粗砂	良好	
4324	溝-134	須恵器	杯	14.4		4.4	灰色(N5/0)	礫~細砂	良好	
4325	溝-134	須恵器	杯	13.3		4.0	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良好	ほぼ完形
4326	溝-134	須恵器	杯	14.6		4.9	灰白色(7.5Y8/1)	礫~細砂	良好	
4327	溝-134	須恵器	杯		11.7	(5.0)	灰白色(7.5Y7/1)	粗砂、細砂	良好	
4328	溝-134	須恵器	杯	14.7	11.0	4.2	灰色(N6/0)	細砂	良好	ほぼ完形
4329	溝-134	須恵器	杯	14.4	10.7	4.4	灰白色(10YR8/1)	細砂	不良	
4330	溝-134	須恵器	皿	16.2		1.6	灰白色(N8/)	細砂	良好	
4331	溝-134	土師器	皿	16.2		(2.6)	橙色(5YR6/6)	粗砂、細砂	良好	丹塗り
4332	溝-134	土師器	皿	18.4		(2.6)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り、黒斑A・C
4333	溝-134	土師器	皿	17.6		2.6	橙色(2.5YR6/6)	礫~細砂	良好	丹塗り
4334	溝-134	土師器	皿		12.2	(1.9)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	礫、細砂	良好	丹塗り、暗文、黒斑C
4335	溝-134	土師器	皿	21.8		(2.8)	橙色(2.5YR7/6)	礫、細砂	良好	黒斑A B
4336	溝-134	土師器	高杯		12.0	(1.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	丹塗り
4337	溝-134	土師器	壺	11.2		(2.9)	淡黄色(2.5Y8/3)	粗砂、細砂	良好	丹塗り
4338	溝-134	土師器	甕	24.4		(27.9)	鈍い橙色(5YR6/4)	礫	良好	
4339	溝-134	土師器	甕	38.1		(12.9)	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	良好	黒斑A B
4340	溝-135	土師器	甕	21.8	-	(23.2)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	粗砂	良好	



中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4341	溝-135	土師器	甕	20.6		(11.2)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂、細砂	良好	ススA
4342	溝-135	土師器	甕	23.0		(18.5)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫~細砂	良好	ススA、黒斑B
4343	溝-136	須恵器	甕	20.6		45.0	灰白色(10Y7/1)	粗砂	良好	ほぼ完形
4344	溝-136	須恵器	平瓶			(7.8)	灰白色(N7)	礫	良好	ロクロ順回り
4345	溝-136	須恵器	横瓶			(25.8)	明青灰色(5PB7/1)	粗砂、細砂	良好	
4346	溝-136	土師器	皿	(25.1)		(2.8)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
4347	溝-136	土師器	甕	26.6		33.2	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑A・B
4348	溝-137	須恵器	杯	12.2	9.2	4.1	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4349	溝-138~227	須恵器	杯	11.4	7.2	(4.4)	灰色(N6/)	粗砂、細砂	良好	
4350	溝-138~227	須恵器	杯	11.8	8.4	4.9	灰白色(10YR8/1)	礫、細砂	良好	
4351	溝-138~227	須恵器	杯	12.9	9.7	(3.8)	灰黄色(2.5Y7/2)	礫、細砂	良好	
4352	溝-138~227	須恵器	杯	12.8	8.6	4.2	灰白色(7.5Y8/1)	礫、粗砂	良好	
4353	溝-138~227	須恵器	杯	13.8		4.2	灰白色(N7/0)	礫	良好	
4354	溝-138~227	須恵器	杯	13.4		(4.6)	灰白色(N8/0)	細砂	良好	ヘラ記号
4355	溝-138~227	須恵器	蓋			(2.7)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	自然釉
4356	溝-138~227	須恵器	蓋			(3.2)	暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1)	粗砂、細砂	不良	
4357	溝-138~227	須恵器	蓋	15.0		(2.5)	灰白色(N7/)	礫、細砂	良好	焼け歪み
4358	溝-138~227	須恵器	蓋	15.2		3.0	灰色(5/0)	礫~細砂	良好	
4359	溝-138~227	須恵器	蓋	17.0		(2.8)	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	ロクロ順回り
4360	溝-138~227	須恵器	蓋	16.9		(1.5)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4361	溝-138~227	須恵器	蓋	17.2		(2.1)	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	不良	
4362	溝-138~227	須恵器	蓋	18.2		(1.8)	灰白色(7.5Y7/1)	礫、細砂	良好	
4363	溝-138~227	須恵器	蓋	20.1		(2.2)	灰色(N4/0)	細砂	良好	
4364	溝-138~227	須恵器	蓋	21.6		(2.9)	灰白色(N8/)	細砂	良好	ロクロ順回り
4365	溝-138~227	須恵器	杯	12.8	7.8	3.1	灰白色(N7/0)	細砂	良好	ヘラ記号
4366	溝-138~227	須恵器	杯	15.6	10.4	3.1	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	
4367	溝-138~227	須恵器	杯	14.5	10.6	4.3	暗青灰色(5B4/1)	礫	不良	
4368	溝-138~227	須恵器	杯	14.7	10.2	4.1	青灰色(5B5/1)	細砂	良好	
4369	溝-138~227	須恵器	杯	16.0	11.4	4.0	灰白色(7.5YR8/1)	粗砂、細砂	良好	ロクロ逆回り
4370	溝-138~227	須恵器	杯	17.3	11.4	7.2	灰白色(N7/0)	粗砂	不良	
4371	溝-138~227	須恵器	椀	21.2	10.7	(7.1)	青灰色(5PB5/1)	細砂	良好	
4372	溝-138~227	須恵器	皿		16.8	(2.9)	灰白色(N8/0)	粗砂、細砂	不良	
4373	溝-138~227	須恵器	盤	24.8	16.8	2.4	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4374	溝-138~227	須恵器	蓋	25.8		(3.7)	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	不良	ロクロ順回り
4375	溝-138~227	須恵器	壺	4.9		(3.3)	灰白色(5Y7/1)	粗砂、細砂	良好	自然釉
4376	溝-138~227	須恵器	甕	22.6		(6.3)	暗緑灰色(10GY4/1)	粗砂、細砂	良好	
4377	溝-138~227	須恵器	甕	20.8		(9.8)	明青灰色(5PB7/1)	細砂	良好	タタキ成形
4378	溝-138~227	土師器	高杯			(3.8)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
4379	溝-138~227	土師器	杯	13.8	10.0	(2.7)	橙色(5YR7/8)	粗砂	良好	丹塗り
4380	溝-138~227	土師器	杯	15.2		(3.2)	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂、細砂	良好	丹塗り
4381	溝-138~227	土師器	杯	19.3	15.8	3.9	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4382	溝-138~227	土師器	杯	20.6	17.5	(3.8)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
4383	溝-138~227	土師器	杯	16.4	12.2	2.7	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	暗紋
4384	溝-138~227	土師器	皿	15.3		(2.3)	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4385	溝-138~227	土師器	皿	18.4		(1.7)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
4386	溝-138~227	土師器	杯	17.6	12.1	(4.8)	橙色(5YR7/8)	粗砂	良好	丹塗り
4387	溝-138~227	土師器	鉢	17.2		(5.8)	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4388	溝-138~227	土師器	杯	17.8	11.4	5.3	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4389	溝-138~227	土師器	杯	19.3		(4.9)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4390	溝-138~227	土師器	杯	19.0		(4.8)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	丹塗り
4391	溝-138~227	須恵器	鉢	20.7		(7.3)	灰白色(10Y7/1)	細砂	良好	
4392	溝-138~227	土師器	甕	31.9		(12.5)	黒褐色(5YR3/1)	粗砂、細砂	良好	
4393	包含層	須恵器	杯	10.8	8.0	(4.0)	灰白色(N8/)	粗砂、細砂	良好	
4394	包含層	須恵器	杯	11.7	8.5	4.6	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	不良	
4395	包含層	須恵器	杯	12.0		(4.2)	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	
4396	包含層	須恵器	杯	11.2	8.6	(3.9)	灰色(N4/)	礫、細砂	良好	
4397	包含層	須恵器	杯	12.4	9.6	(4.2)	灰白色(N8/)	礫、細砂	良好	
4398	包含層	須恵器	杯	12.0	8.9	(4.2)	灰白色(N7/)	礫、細砂	良好	
4399	包含層	須恵器	杯	12.6	8.8	3.9	明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	礫、細砂	良好	ヘラ記号

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4400	包含層	須恵器	杯	13.0	10.0	(4.3)	灰白色(N7/)	粗砂、細砂	良好	
4401	包含層	須恵器	杯	12.4		3.2	灰白色(10YR8/1)	粗砂、細砂	不良	
4402	包含層	須恵器	杯	11.7		3.6	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	不良	
4403	包含層	須恵器	杯	12.8		(3.8)	鈍い黄橙色(10YR/4)	細砂	良好	
4404	包含層	須恵器	杯	13.0		4.5	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4405	包含層	須恵器	杯	12.7		4.4	灰白色(N8/0)	粗砂、細砂	不良	
4406	包含層	須恵器	杯	12.5		4.2	灰白色(N8/0)	粗砂	良好	
4407	包含層	須恵器	杯	12.7		4.0	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4408	包含層	須恵器	杯	12.5		3.8	灰白色(N8/0)	粗砂	不良	
4409	包含層	須恵器	杯	12.8		4.1	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4410	包含層	須恵器	杯	13.0		3.7	黄灰色(2.5Y6/1)	礫	良好	
4411	包含層	須恵器	杯	13.6	9.8	3.5	灰白色(N8/0)	粗砂、細砂	良好	
4412	包含層	須恵器	杯	13.4	8.0	4.4	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4413	包含層	須恵器	杯	14.2	9.9	4.2	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	不良	黒斑A B
4414	包含層	須恵器	杯	14.4	10.4	(3.7)	灰色(N6/)	礫、細砂	良好	
4415	包含層	須恵器	杯	12.4		4.7	鈍い橙色(7.5YR7/3)	礫	不良	
4416	包含層	須恵器	杯	12.6		4.5	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4417	包含層	須恵器	杯	13.3		4.4	灰色(N6/)	細砂	良好	
4418	包含層	須恵器	杯	12.9		4.6	暗灰黄色(2.5Y5/2)	礫、細砂	良好	黒斑A~C
4419	包含層	須恵器	杯	12.6		5.0	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂、細砂	不良	
4420	包含層	須恵器	杯	14.0	9.4	(3.7)	灰色(5Y4/1)	粗砂、細砂	不良	
4421	包含層	須恵器	杯	13.7	11.4	(5.5)	灰褐色(5YR4/2)	粗砂	良好	
4422	包含層	須恵器	杯	13.7		4.6	灰色(N5/)	細砂	良好	
4423	包含層	須恵器	杯	14.7		4.4	灰色(N5/)	礫、細砂	良好	
4424	包含層	須恵器	杯	14.0		4.4	黄灰色(2.5Y6/1)	粗砂	良好	
4425	包含層	須恵器	杯	14.4	10.2	(4.7)	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	
4426	包含層	須恵器	杯	12.0	9.8	(4.3)	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	
4427	包含層	須恵器	杯	12.1		4.7	灰白色(N7/0)	細砂	良好	ヘラ記号
4428	包含層	須恵器	杯	13.2		5.1	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	不良	
4429	包含層	須恵器	杯	13.5		5.0	灰白色(N8/)	粗砂	良好	完形
4430	包含層	須恵器	杯	13.6		4.7	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良好	
4431	包含層	須恵器	杯	13.5		(4.8)	灰白色(N7/0)	粗砂	良好	
4432	包含層	須恵器	杯	13.4		4.5	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	不良	
4433	包含層	須恵器	杯	14.2	9.8	(4.1)	灰白色(10Y8/1)	礫、細砂	不良	
4434	包含層	須恵器	杯	14.0		(4.1)	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	
4435	包含層	須恵器	杯	14.9		(4.0)	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	
4436	包含層	須恵器	杯	15.4	12.5	(4.7)	灰色(N7/)	粗砂、細砂	良好	
4437	包含層	須恵器	蓋	10.8		1.5	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	細砂	良好	
4438	包含層	須恵器	蓋	12.8		(2.0)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4439	包含層	須恵器	蓋	13.7		(1.7)	暗青灰色(5B7/1)	粗砂	良好	
4440	包含層	須恵器	蓋	15.3		(2.0)	灰白色(5Y8/2)	粗砂、細砂	不良	
4441	包含層	須恵器	蓋	15.1		(2.2)	暗灰色(N3/0)	細砂	不良	
4442	包含層	須恵器	蓋	15.0		3.5	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂	不良	
4443	包含層	須恵器	蓋	14.8		2.9	灰白色(N7)	細砂、粗砂	良好	ロクロ順回り
4444	包含層	須恵器	蓋	15.4		3.4	灰色(N6/0)	粗砂、細砂	良好	
4445	包含層	須恵器	蓋	16.0		(2.3)	青灰色(5BG6/1)	細砂	良好	
4446	包含層	須恵器	蓋	16.2		(2.3)	灰色(N6/)	礫、細砂	良好	
4447	包含層	須恵器	蓋	16.2		(2.2)	灰白色(N7/)	礫、細砂	良好	
4448	包含層	須恵器	蓋	16.5		1.7	灰色(N4/0)	細砂	良好	
4449	包含層	須恵器	蓋	14.0		(1.8)	灰色(N6/)	粗砂、細砂	良好	
4450	包含層	須恵器	蓋	13.2		(2.6)	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	不良	
4451	包含層	須恵器	蓋	16.0		(2.0)	灰白色(10Y8/1)	礫、粗砂	不良	
4452	包含層	須恵器	蓋	15.4		2.6	暗青灰色(5B4/1)	礫	良好	
4453	包含層	須恵器	蓋	16.3		2.8	灰色(7.5G/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
4454	包含層	須恵器	蓋	15.3		2.7	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り、完形
4455	包含層	須恵器	蓋	16.2		2.9	灰色(N4/0)	礫、細砂	良好	
4456	包含層	須恵器	蓋	16.1		2.8	灰白色(N8/)	細砂	良好	ロクロ順回り、完形
4457	包含層	須恵器	蓋	16.2		3.2	灰白色(N8/0)	粗砂、細砂	良好	
4458	包含層	須恵器	蓋	17.4		(2.1)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4459	包含層	須恵器	蓋	17.6		(2.1)	黄灰色(2.5Y6/1)	礫、細砂	不良	

## 中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(㎝)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4460	包含層	須恵器	蓋	18.6		(2.5)	灰白色(N7/)	礫、細砂	良好	
4461	包含層	須恵器	蓋	16.5		(2.9)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
4462	包含層	須恵器	蓋	17.8		(2.3)	青灰色(5B6/1)	礫、細砂	良好	
4463	包含層	須恵器	蓋	19.0		(2.4)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	丹塗り
4464	包含層	須恵器	蓋	18.8		(1.6)	灰白色(N6/0)	細砂	良好	
4465	包含層	須恵器	蓋	18.0		2.4	灰白色(5Y7/1)	礫、粗砂	良好	ロクロ順回り
4466	包含層	須恵器	蓋	18.6		(1.8)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	陶邑産
4467	包含層	須恵器	蓋	18.1		(2.3)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	焼け歪み
4468	包含層	須恵器	蓋	18.6		3.0	明青灰色(5B7/1)	細砂	良好	
4469	包含層	須恵器	蓋	19.0		(3.1)	灰白色(N7/)	細砂	良好	焼け歪み
4470	包含層	須恵器	蓋	17.2		2.7	灰白色(N7/)	細砂	良好	焼け歪み
4471	包含層	須恵器	蓋	19.3		3.7	暗青灰色(10BG4/1)	細砂	良好	自然釉
4472	包含層	須恵器	蓋	20.1		4.6	灰白色(N4/0)	粗砂	不良	
4473	包含層	須恵器	蓋	32.1		(2.2)	灰色(N6/)	細砂	良好	
4474	包含層	須恵器	蓋	22.0		4.1	灰色(N6/)	細砂	良好	
4475	包含層	須恵器	蓋	22.6		4.2	灰白色(5Y7/1)	精良	良好	
4476	包含層	須恵器	蓋	16.6		3.0	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4477	包含層	須恵器	蓋	22.0		(1.6)	灰色(N6/)	細砂	良好	陶邑産
4478	包含層	須恵器	蓋	21.8		(1.9)	灰色(N6/)	細砂	良好	
4479	包含層	須恵器	蓋	21.8		(2.5)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	良好	丹塗り
4480	包含層	須恵器	蓋		3.8	4.7	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4481	包含層	須恵器	杯		4.5	(7.2)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4482	包含層	須恵器	杯		5.8	(3.5)	青灰色(5PB6/1)	細砂	良好	
4483	包含層	須恵器	杯	15.8	9.4	7.1	灰白色(N8/0)	粗砂	良好	
4484	包含層	須恵器	杯	16.2	11.7	5.4	黒色(10YR1.7/1)	細砂	不良	
4485	包含層	須恵器	杯	17.4	13.2	6.2	暗灰色(N3/0)	細砂	不良	
4486	包含層	須恵器	杯	17.4	11.9	6.2	灰色(N6/)	細砂	良好	
4487	包含層	須恵器	杯	(18.4)	(12.6)	7.4	灰色(N6/)	細砂	良好	
4488	包含層	須恵器	杯	19.0		(5.2)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4489	包含層	須恵器	杯	19.6	11.2	5.6	灰白色(N6/)	細砂	良好	
4490	包含層	須恵器	杯	(20.8)		(4.9)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
4491	包含層	須恵器	杯	23.0	12.6	6.7	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	
4492	包含層	須恵器	杯	12.0	8.7	3.2	青灰色(5PB6/1)	細砂	良好	
4493	包含層	須恵器	杯	13.0	8.2	3.4	灰白色(5Y7/1)	細砂	不良	
4494	包含層	須恵器	杯	12.7	9.0	3.8	青灰色(5PB6/1)	細砂	良好	
4495	包含層	須恵器	杯	13.0	9.4	4.1	灰白色(10YR7/1)	細砂	良好	ススA
4496	包含層	須恵器	杯		9.4	(2.9)	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4497	包含層	須恵器	杯	15.3	8.7	3.9	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4498	包含層	須恵器	杯	(13.7)	10.0	4.0	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	
4499	包含層	須恵器	杯	13.7	9.3	3.8	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4500	包含層	須恵器	杯	13.7	10.4	4.0	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4501	包含層	須恵器	杯	12.5	9.0	3.9	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4502	包含層	須恵器	杯	16.0	12.2	3.6	灰白色(5Y7/1)	粗砂	良好	
4503	包含層	須恵器	杯	14.5	10.3	3.4	灰白色(N7/0)	粗砂、細砂	良好	
4504	包含層	須恵器	杯	15.7	11.2	3.9	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
4505	包含層	須恵器	杯	14.2	11.1	3.9	灰色(N5/)	粗砂	良好	
4506	包含層	須恵器	杯	14.2	9.8	4.2	灰白色(5Y7/)	細砂	やや不良	
4507	包含層	須恵器	杯	14.9	10.4	3.9	灰白色(10YR7/1)	細砂	良好	
4508	包含層	須恵器	杯	14.5	10.6	3.8	灰色(N5/0)	礫	良好	
4509	包含層	須恵器	杯	14.1	10.4	3.9	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4510	包含層	須恵器	杯	14.3	12.3	4.0	鈍い褐色(7.5YR5/4)	礫、細砂	良好	
4511	包含層	須恵器	杯	14.6	11.7	4.2	暗青灰色(5PB3/1)	細砂	良好	
4512	包含層	須恵器	杯	18.2	14.6	5.1	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4513	包含層	須恵器	杯	13.9	10.0	3.5	灰白色(N8/0)	細砂	良好	自然釉
4514	包含層	須恵器	杯	15.5		(3.6)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4515	包含層	須恵器	杯	15.8	11.0	3.8	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ逆回り
4516	包含層	須恵器	杯	15.1	12.5	4.0	灰白色(5Y7/1)	礫、細砂	良好	黒斑A B
4517	包含層	須恵器	杯	15.0	11.3	4.1	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4518	包含層	須恵器	杯	14.7		3.9	灰白色(5Y8/1)	粗砂、細砂	やや不良	
4519	包含層	須恵器	杯	15.5	10.7	4.2	灰白色(2.5Y8/1)	礫、細砂	良好	
4520	包含層	須恵器	杯	15.8	11.0	4.1	灰白色(N8/0)	細砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4521	包含層	須恵器	杯	15.7	11.8	3.9	灰白色(7.5Y7/1)	粗砂	良好	
4522	包含層	須恵器	杯	16.4	12.4	3.9	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	
4523	包含層	須恵器	杯	20.8	16.0	4.2	灰白色(N6/)	細砂	良好	
4524	包含層	須恵器	杯	12.7	9.0	4.1	青灰色(10BG5/1)	細砂	良好	
4525	包含層	須恵器	杯	13.6	9.4	4.5	暗灰色(N3/0)	細砂	不良	
4526	包含層	須恵器	杯	13.3	9.4	4.3	明青灰色(5B7/1)	細砂	良好	
4527	包含層	須恵器	杯	13.7	10.2	4.7	黄灰色(2.5Y5/1)	礫、粗砂	良好	
4528	包含層	須恵器	杯	14.8	9.5	5.0	灰色(N6/0)	細砂	不良	
4529	包含層	須恵器	杯	15.9	11.2	4.6	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4530	包含層	須恵器	杯	14.4	10.4	4.2	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	
4531	包含層	須恵器	杯	14.2	10.2	4.4	青灰色(5B5/1)	細砂	良好	
4532	包含層	須恵器	杯	14.6	10.9	4.7	青灰色(5PB6/1)	細砂	良好	
4533	包含層	須恵器	杯	15.5	11.7	4.2	灰色(5Y6/)	細砂	良好	
4534	包含層	須恵器	杯	15.7	12.0	(4.5)	灰白色(N8/)	細砂	良好	
4535	包含層	須恵器	杯	16.6	12.3	(4.2)	灰白色(5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	
4536	包含層	須恵器	杯	14.0	10.0	4.5	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4537	包含層	須恵器	杯	14.8	10.2	4.6	灰白色(N7/0)	礫	良好	ロクロ逆回り
4538	包含層	須恵器	杯	14.8		4.6	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	
4539	包含層	須恵器	杯	15.1	10.5	4.4	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
4540	包含層	須恵器	杯	15.8	(10.4)	(4.5)	灰色(N5/0)	粗砂	不良	
4541	包含層	須恵器	杯	17.0	12.9	4.5	灰色(N6/)	細砂	良好	
4542	包含層	須恵器	皿				灰白色(N7/0)	礫、細砂	良好	
4543	包含層	須恵器	皿	19.8		(2.9)	灰白色(N7/0)	粗砂、細砂	良好	重ね焼き
4544	包含層	須恵器	皿	22.9	20.1	(3.4)	灰白色(10YR8/2)	細砂	不良	
4545	包含層	須恵器	皿	35.4		(2.2)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4546	包含層	須恵器	皿	36.2	24.1	3.0	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	細砂	良好	
4547	包含層	須恵器	皿	22.6	15.5	2.8	灰色(N5/0)	細砂	良好	
4548	包含層	須恵器	皿	23.6	22.8	(2.0)	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ逆回り
4549	包含層	須恵器	皿	24.1	20.3	3.0	灰白色(5Y7/1)	精良	良好	
4550	包含層	須恵器	高杯	20.8		(2.5)	灰白色(N7/)	精良	良好	ロクロ順回り
4551	包含層	須恵器	高杯	25.6		(3.5)	灰色(5Y5/1)	細砂	良好	
4552	包含層	須恵器	甕	(33.4)		(4.8)	灰色(N6/)	礫、細砂	良好	
4553	包含層	須恵器	盤		(26.8)	(4.9)	灰白色(N7/0)	粗砂、細砂	良好	
4554	包含層	須恵器	鉢	36.9		(13.9)	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	礫	良好	
4555	包含層	須恵器	播鉢		9.2	(7.2)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	ロクロ逆回り
4556	包含層	須恵器	壺		14.6	(9.0)	青灰色(5BG6/1)	細砂	良好	
4557	包含層	須恵器	壺	9.9	7.2	6.3	灰白色(N7/0)	粗砂	良好	
4558	包含層	須恵器	壺	17.2	14.2	(2.8)	灰色(N6/0)	礫、細砂	良好	
4559	包含層	須恵器	壺	10.9		(3.8)	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	良好	
4560	包含層	須恵器	壺	9.8		(10.8)	灰白色(N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り
4561	包含層	須恵器	壺			(7.8)	灰色(5Y5/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
4562	包含層	須恵器	壺			(8.8)	灰白色(5Y7/1)	粗砂	良好	
4563	包含層	須恵器	壺			(8.9)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4564	包含層	須恵器	壺			(11.8)	青灰色(5B6/1)	粗砂、細砂	良好	
4565	包含層	須恵器	壺	8.8		(13.5)	灰色(N6/)	礫、細砂	良好	
4566	包含層	須恵器	壺		11.8	(8.8)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	
4567	包含層	須恵器	壺		7.2	(8.6)	明青灰色(5PB7/1)	細砂	良好	
4568	包含層	須恵器	壺		10.2	(12.0)	灰色(N6/)	細砂	良好	自然釉
4569	包含層	須恵器	壺			(5.9)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4570	包含層	須恵器	壺			(9.0)	灰白色(N7/0)	礫、細砂	良好	
4571	包含層	須恵器	壺			(5.6)	上灰白色(10YR7/1) 下青灰色(5B6/1)	礫、細砂	良好	自然釉
4572	包含層	須恵器	壺			(6.5)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	刺突文
4573	包含層	須恵器	壺			(3.0)	灰白色(N8/0)	礫、細砂	良好	自然釉
4574	包含層	須恵器	壺		12.1	(4.1)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4575	包含層	須恵器	壺		12.0	(4.3)	灰白色(N8/0)	細砂	良好	ロクロ逆回り
4576	包含層	須恵器	壺		12.4	(6.3)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4577	包含層	須恵器	壺		10.0	(5.0)	灰色(7.5Y5/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
4578	包含層	須恵器	壺		10.9	(5.7)	灰色(N6/0)	礫、細砂	良好	寒風窯

## 中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4579	包含層	須恵器	壺		12.2	(11.4)	暗青灰色(5PB4/1)	細砂	良好	
4580	包含層	須恵器	蓋	9.6		(2.1)	オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	細砂	良好	
4581	包含層	須恵器	平瓶		5.2	(2.3)	灰色(N6/)	細砂	良好	ミニチュア土器
4582	包含層	須恵器	平瓶	8.6		(6.9)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
4583	包含層	須恵器	平瓶	5.5		(4.7)	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	
4584	包含層	須恵器	甕	17.5		(7.4)	オリーブ灰色 (10Y4/2)	細砂	良好	
4585	包含層	須恵器	甕	22.4		(7.7)	灰白色(7.5Y7/2)	粗砂、細砂	良好	
4586	包含層	須恵器	甕	22.0		(3.7)	灰白色(N8/0)	細砂	良好	
4587	包含層	須恵器	甕	21.7		(5.9)	暗青灰色(5B4/1)	細砂	良好	自然釉
4588	包含層	須恵器	甕	21.6		(5.4)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4589	包含層	須恵器	甕	18.8		(5.4)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
4590	包含層	須恵器	甕	19.4		(2.8)	灰白色(N7/0)	粗砂、細砂	良好	
4591	包含層	須恵器	甕	18.4		(3.3)	明青灰色(5PB7/1)	礫、細砂	良好	
4592	包含層	須恵器	甕	17.2		(4.1)	灰白色(N8/0)	細砂	良好	自然釉
4593	包含層	須恵器	甕	19.8		(8.1)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4594	包含層	須恵器	甕	25.6		(4.1)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	
4595	包含層	須恵器	甕	24.2		(5.8)	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4596	包含層	須恵器	甕	22.4		(8.2)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	
4597	包含層	須恵器	甕	45.8		(23.2)	明褐色(7.5YR7/2)	礫	良好	
4598	包含層	須恵器	甕	34.6		(8.4)	灰白色(N7/0)	礫、細砂	良好	
4599	包含層	須恵器	甕	9.7		48.7	灰色(N6/0)	細砂	良好	
4600	包含層	須恵器	硯			(3.1)	灰白色(N7/0)	細砂	良好	自然釉
4601	包含層	須恵器	硯		25.8	(5.3)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	蹄脚円面硯
4602	包含層	土師器	杯	13.0		2.6	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	暗文
4603	包含層	土師器	杯	13.6	11.4	(2.6)	灰白色(7.5YR8/1)	粗砂、細砂	良好	黒斑A C
4604	包含層	土師器	杯	14.0		(3.1)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4605	包含層	土師器	杯	14.2		(2.7)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4606	包含層	土師器	杯	14.4		2.9	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	良好	丹塗り
4607	包含層	土師器	杯	14.6		3.0	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4608	包含層	土師器	杯	14.5		(3.1)	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良好	丹塗り
4609	包含層	土師器	杯	14.4		(3.2)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り
4610	包含層	土師器	杯	14.2		(3.1)	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	
4611	包含層	土師器	杯	14.8		2.9	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4612	包含層	土師器	杯	14.8		(2.9)	淡赤褐色(2.5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
4613	包含層	土師器	杯	15.0		(3.3)	淡橙色(5YR78/4)	粗砂	良好	丹塗り
4614	包含層	土師器	杯	15.8		(3.1)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	良好	丹塗り
4615	包含層	土師器	杯	15.4		(3.0)	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	良好	丹塗り
4616	包含層	土師器	杯	15.8		(3.1)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4617	包含層	土師器	杯	15.8		3.5	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良好	丹塗り
4618	包含層	土師器	杯	15.7		3.6	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4619	包含層	土師器	杯	16.0		(3.7)	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り
4620	包含層	土師器	杯	16.6		(2.6)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4621	包含層	土師器	杯	16.2		(2.7)	淡赤褐色(2.5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
4622	包含層	土師器	杯	16.4		(3.0)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り、暗文
4623	包含層	土師器	杯	17.0	12.0	3.2	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4624	包含層	土師器	杯	16.6		(3.3)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	丹塗り
4625	包含層	土師器	杯	17.0		3.1	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良好	
4626	包含層	土師器	杯	17.4		(3.4)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良好	丹塗り
4627	包含層	土師器	杯	17.4		(3.9)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4628	包含層	土師器	杯	17.6		(3.7)	橙色(2.5YR7/6)	精良	良好	
4629	包含層	土師器	杯	18.2		(3.9)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
4630	包含層	土師器	杯	12.9		(3.1)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	丹塗り
4631	包含層	土師器	杯	13.5		(3.5)	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
4632	包含層	土師器	杯	14.6		(4.0)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
4633	包含層	土師器	杯	16.1		(4.4)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
4634	包含層	土師器	杯	18.4		4.3	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
4635	包含層	土師器	杯	19.0	13.0	4.0	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
4636	包含層	土師器	杯	14.2		(4.0)	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	丹塗り
4637	包含層	土師器	杯	16.4		(3.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4638	包含層	土師器	杯	19.9		(3.9)	鈍い黄橙色	細砂	良好	丹塗り
4639	包含層	土師器	杯	12.9		4.3	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	
4640	包含層	土師器	杯	16.8		5.3	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
4641	包含層	土師器	杯	17.0		5.9	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	
4642	包含層	土師器	杯	18.0		(4.9)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4643	包含層	土師器	杯	16.9	11.8	(4.9)	灰白色(N8/)	礫、細砂	良好	
4644	包含層	土師器	杯	18.0		(5.3)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4645	包含層	土師器	杯	16.2		(5.6)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り
4646	包含層	土師器	杯	17.6		(6.2)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	粗砂	良好	丹塗り
4647	包含層	土師器	杯	20.2		(4.9)	橙色(2.5Y8/2)	細砂	良好	丹塗り
4648	包含層	土師器	杯	19.6		(4.7)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	丹塗り
4649	包含層	土師器	杯	19.9		(4.0)	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	良好	丹塗り、ススA
4650	包含層	土師器	杯	19.0		(5.1)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4651	包含層	土師器	蓋	21.8		(2.2)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂、細砂	良好	
4652	包含層	土師器	蓋	15.8		(1.6)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
4653	包含層	土師器	蓋	15.8		(2.0)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り
4654	包含層	土師器	蓋	16.8		3.1	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4655	包含層	土師器	杯	15.9	11.4	4.1	橙色(2.5YR7/6)	粗砂、細砂	良好	丹塗り
4656	包含層	土師器	杯	17.7	12.6	4.1	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	畿内系土器
4657	包含層	土師器	皿	13.8	11.6	(2.1)	赤褐色(10R6/6)	粗砂	良好	丹塗り
4658	包含層	土師器	皿	14.5	12.2	1.9	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	
4659	包含層	土師器	皿	14.8		(2.0)	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4660	包含層	土師器	皿	16.0	13.1	(2.3)	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4661	包含層	土師器	皿	16.0		(2.4)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	丹塗り
4662	包含層	土師器	皿	15.9		(1.9)	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4663	包含層	土師器	皿	15.9	14.0	(2.3)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4664	包含層	土師器	皿	16.0		2.5	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	良好	丹塗り
4665	包含層	土師器	皿	16.4		(2.2)	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	良好	丹塗り
4666	包含層	土師器	皿	17.1		(2.2)	灰白色(10YR8/2)	礫	良好	丹塗り
4667	包含層	土師器	皿	18.4		(1.9)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4668	包含層	土師器	皿	18.2	15.0	1.6	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	
4669	包含層	土師器	皿	20.4		(2.3)	橙色(5YR6/6)	礫	良好	丹塗り
4670	包含層	土師器	皿	20.8	20.0	2.7	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
4671	包含層	土師器	皿	22.6	18.6	(1.9)	淡黄色(2.5Y8/3)	粗砂	良好	丹塗り
4672	包含層	土師器	皿	23.0		(2.4)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	
4673	包含層	土師器	皿	23.4		(2.0)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	丹塗り
4674	包含層	土師器	皿	24.2		(2.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	良好	丹塗り
4675	包含層	土師器	皿	17.5	8.1	4.1	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	丹塗り
4676	包含層	土師器	皿		9.6	(3.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
4677	包含層	土師器	皿	19.3	9.4	4.0	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4678	包含層	土師器	皿		10.2	(2.8)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
4679	包含層	土師器	皿	20.0	9.8	4.0	赤色(10R5/6)	細砂	良好	丹塗り
4680	包含層	土師器	皿	19.9	12.4	3.4	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良好	丹塗り
4681	包含層	土師器	高杯	23.0		(2.5)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	丹塗り
4682	包含層	土師器	高杯	22.6		(1.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	丹塗り
4683	包含層	土師器	高杯	23.0		(1.9)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
4684	包含層	土師器	高杯	25.0		(1.9)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良好	
4685	包含層	土師器	高杯			(5.9)	灰褐色(5YR6/2)	細砂	良好	
4686	包含層	土師器	高杯			(7.0)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	
4687	包含層	土師器	高杯			(3.4)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	丹塗り
4688	包含層	土師器	高杯			(6.0)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	丹塗り
4689	包含層	土師器	高杯			(2.7)	鈍い橙色(7.5Y7/4)	細砂	良好	丹塗り
4690	包含層	土師器	高杯			(4.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
4691	包含層	土師器	鉢	19.8		(5.0)	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	良好	丹塗り
4692	包含層	土師器	鉢	18.4		(5.2)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	丹塗り
4693	包含層	土師器	鉢	20.0		(7.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
4694	包含層	土師器	鉢	24.0		(7.1)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	丹塗り
4695	包含層	土師器	鉢	18.6		(7.8)	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	不良	
4696	包含層	土師器	鉢	19.9		10.8	灰褐色(5YR4/2)	細砂	良好	ススB
4697	包含層	土師器	甕	13.4		(10.7)	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	良好	
4698	包含層	土師器	甕	13.6		(6.6)	鈍い赤褐色(5YR4/4)	細砂	良好	

遺物観察表

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4699	包含層	土師器	甕	13.4		(8.9)	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂	良好	ススA
4700	包含層	土師器	甕	17.3		(13.9)	暗赤褐色(5YR3/4)	細砂	良好	
4701	包含層	土師器	甕	31.2		(25.7)	鈍い赤褐色(5YR6/4)	粗砂	良好	ススA
4702	包含層	土師器	甕			(6.8)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良好	把手付き
4703	包含層	土師器	甕			(8.2)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
4704	包含層	土師器	甕	20.8		(11.0)	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂	良好	ススB
4705	包含層	土師器	甕	28.4		(9.6)	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂、細砂	良好	
4706	包含層	土師器	甕	32.9		(11.2)	橙色(5YR6/8)	礫	良好	ススA
4707	包含層	土師器	甕	29.0		(7.3)	明赤褐色(5YR5/6)	粗砂、細砂	良好	
4708	包含層	土師器	甕	30.0		(9.4)	鈍い褐色(7.5YR5/4)	粗砂	良好	
4709	包含層	土師器	甕	30.3		(16.7)	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂、細砂	良好	
4710	包含層	土師器	甕	18.4		(10.0)	鈍い黄褐色(10YR7/4)	礫	良好	把手付き
4711	包含層	土師器	甕	24.8	14.1	(30.0)	明褐色(7.5YR5/6)	粗砂	良好	黒斑B
4712	包含層	土師器	カマド	25.6		(14.4)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良好	
4713	井戸-3	土師器	椀	13.8	6.3	5.9	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器
4714	井戸-3	土師器	椀		6.6	3.2	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器
4715	井戸-3	須恵器	椀		8.0	(3.0)	灰白色(N8/)	礫、細砂	良好	
4716	井戸-3	土師器	椀	13.4		(3.7)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	早島式土器
4717	井戸-3	瓦器	椀		6.2	(2.3)	暗灰色(N3/0)	細砂	良好	
4718	井戸-3	土師器	小皿	8.9	7.3	1.5	淡橙色(5YR8/4)	細砂	良好	
4719	井戸-3	土師器	小皿	8.0	6.0	1.4	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂	良好	
4720	井戸-3	土師器	椀		5.6	(2.0)	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器
4721	井戸-3	土師器	椀		5.2	(2.6)	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器
4722	井戸-3	亀山焼	甕	29.2		(9.5)	灰色(N6/)	細砂	良好	
4723	井戸-4	土師器	椀	11.3	4.9	4.3	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器、完形
4724	井戸-4	土師器	椀	12.1	5.4	3.6	灰白色(5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器
4725	井戸-4	土師器	椀	11.2	5.0	3.5	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	早島式土器
4726	井戸-4	土師器	椀	11.8	5.4	4.0	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4727	井戸-4	土師器	椀	11.7	5.0	4.1	灰白色(5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4728	井戸-4	土師器	椀	11.7	6.4	4.0	灰白色(5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器
4729	井戸-4	土師器	皿	12.2	9.4	2.4	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4730	井戸-4	土師器	脚付杯	9.4	9.0	8.0	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4731	井戸-4	亀山焼	甕	31.6		(7.7)	鈍い赤褐色(10R6/4)	礫、細砂	不良	
4732	土壇-309	土師器	小皿	7.0	5.4	(1.3)	灰白色(10YR8/2)	粗砂、細砂	良好	
4733	土壇-309	土師器	小皿	7.2	6.1	1.4	灰黄色(2.5Y7/2)	礫、細砂	良好	ほぼ完形
4734	土壇-309	土師器	小皿	7.4	5.8	(1.3)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4735	土壇-309	土師器	小皿	7.7	6.3	(1.5)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫、細砂	良好	
4736	土壇-309	土師器	小皿	6.9	6.2	1.4	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂、細砂	良好	ほぼ完形
4737	土壇-309	土師器	小皿	7.6	5.7	(1.5)	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	
4738	土壇-309	土師器	小皿	8.5	6.0	1.5	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	ほぼ完形
4739	土壇-309	土師器	小皿	8.2	6.1	(1.7)	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂、細砂	良好	黒斑B C
4740	土壇-309	土師器	小皿	7.8	6.7	1.2	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良好	
4741	土壇-309	土師器	杯	9.6	6.1	(2.8)	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	良好	
4742	土壇-309	土師器	小皿	8.0	6.1	(2.0)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	黒斑A B
4743	土壇-309	土師器	小皿	9.0	6.4	(2.1)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4744	土壇-309	土師器	杯	10.7	6.7	2.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4745	土壇-309	土師器	杯	10.2	7.8	(2.2)	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	
4746	土壇-309	土師器	椀	11.7	4.8	3.0	灰白色(7.5YR8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器
4747	土壇-309	土師器	椀	10.6	4.0	(3.1)	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4748	土壇-309	土師器	椀	10.7	4.6	3.5	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、黒斑C
4749	土壇-309	土師器	椀	10.9	4.7	3.3	灰白色(7.5YR8/2)	粗砂、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き、ススA 3、黒斑C
4750	土壇-309	土師器	椀	11.3	4.2	3.7	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、黒斑C
4751	土壇-309	土師器	椀	11.0	5.0	(3.9)	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、黒斑C
4752	土壇-309	土師器	椀	11.3	4.4	(3.6)	灰白色(10YR8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器
4753	土壇-309	土師器	椀	11.0	4.1	(3.9)	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器
4754	土壇-309	土師器	椀	11.6	5.0	3.8	灰白色(10YR8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、黒斑B C
4755	土壇-309	土師器	椀	12.1	4.7	(3.4)	灰白色(10YR8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4756	土壇-309	土師器	椀	11.8	5.0	(3.4)	灰色(N5/)	礫、細砂	良好	早島式土器
4757	土壇-309	土師器	椀	11.2	5.1	4.0	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4758	土壇-309	亀山焼	甕	(45.0)		(8.3)	灰色(N4/)	礫、細砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4759	土壇-309	亀山焼	甕	(45.7)		(11.0)	灰色(N4/)	粗砂、細砂	良好	
4760	土壇-317	土師器	椀	10.9	5.8	3.5	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4761	土壇-317	土師器	椀		5.5	(3.0)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂	良好	早島式土器
4762	土壇-317	土師器	椀	12.0	5.0	4.3	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4763	土壇-317	土師器	椀	12.1	4.8	4.3	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器、ほぼ完形、重ね焼き
4764	土壇-317	土師器	椀	12.0	5.2	4.0	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4765	土壇-317	土師器	皿	12.2	9.6	2.5	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良好	
4766	土壇-317	土師器	皿	12.1	8.0	2.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4767	土壇-317	土師器	皿	12.3	8.0	2.6	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	
4768	土壇-317	土師器	小皿	7.4	6.3	1.3	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
4769	土壇-317	土師器	小皿	7.4	5.4	1.7	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
4770	土壇-317	土師器	小皿	6.5	4.8	1.1	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
4771	土壇-317	土師器	小皿	6.8	5.4	1.5	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	
4772	土壇-318	土師器	鍋	31.9		(12.6)	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	良好	ススA
4773	土壇-318	土師質	カマド		38.3	(31.0)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	粗砂	良好	ススC
4774	土壇-320	土師器	椀	11.2	4.8	3.6	灰白色(10YR8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、完形
4775	土壇-320	土師器	椀	11.6	5.4	3.6	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、完形
4776	土壇-320	土師器	椀	11.5	5.9	4.2	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、完形、黒斑A B
4777	土壇-320	土師器	椀	11.3	5.4	4.2	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4778	土壇-320	土師器	椀	11.3	4.8	4.3	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、完形
4779	土壇-320	土師器	椀	11.8	4.6	4.1	淡黄色(2.5Y8/3)	礫、細砂	良好	早島式土器、完形
4780	土壇-326	土師器	椀	11.7	4.3	3.7	浅黄橙色(10YR8/3)	礫、細砂	良好	早島式土器
4781	土壇-329	土師器	小皿	7.8	6.2	1.5	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
4782	土壇-330	土師器	皿	9.7	6.4	1.6	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
4783	土壇-331	土師器	椀		5.6	(1.5)	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	早島式土器
4784	土壇-331	土師器	皿	13.0	8.0	3.0	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
4785	土壇-331	土師器	小杯	7.3	5.9	3.6	灰白色(2.5Y7/1)	粗砂	良好	
4786	土壇-331	土師器	小杯	8.0	5.3	3.9	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	
4787	土壇-331	土師器	脚付杯	10.1	8.5	5.1	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	
4788	土壇-331	土師器	脚付杯		7.0	(4.5)	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	
4789	土壇-332	土師器	椀	9.9	4.3	(3.4)	浅黄橙色(2.5Y8/3)	細砂	良好	
4790	土壇墓-13	土師器	椀	11.4	4.4	3.9	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	早島式土器
4791	土壇墓-13	土師器	小皿	7.0	5.7	2.6	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
4792	土壇墓-14	亀山焼	甕			(31.0)	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良好	
4793	土壇墓-15	土師器	椀	14.0	6.8	4.2	灰白色(10YR8/2)	礫	良好	早島式土器、重ね焼き
4794	土壇墓-15	土師器	小皿	6.8	5.8	1.3	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
4795	溝-70	土師器	小皿	6.7	5.2	1.3	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	完形
4796	溝-70	土師器	小皿	8.4	5.8	1.6	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	良好	完形
4797	溝-70	土師器	皿	10.8	7.0	1.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4798	溝-70		白磁 碗		5.8	(2.4)	明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	精良	良好	
4799	溝-70	土師器	椀	10.6	4.4	3.5	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良好	
4800	溝-70	土師器	椀	11.0	4.8	3.3	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	早島式土器
4801	溝-70	土師器	椀	10.8	4.0	3.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	早島式土器
4802	溝-70	土師器	椀	11.8	5.6	3.7	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、ほぼ完形
4803	溝-70	土師器	椀	11.9	5.5	3.4	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4804	溝-70	土師器	椀	11.5	5.7	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器、完形
4805	溝-70	土師器	椀	11.9	4.6	(3.9)	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器
4806	溝-70	土師器	椀	12.0	5.3	4.1	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4807	溝-70	土師器	椀	11.3	5.4	3.8	灰白色(10YR8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器、完形、重ね焼き
4808	溝-70	土師器	椀	12.2	4.8	(3.9)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4809	溝-70	土師器	椀	11.9	4.8	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4810	溝-70	土師器	椀	11.7	5.3	3.9	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4811	溝-70	土師器	椀	12.3	4.9	4.4	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4812	溝-70	土師器	椀	12.2	4.5	4.4	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫、細砂	良好	早島式土器
4813	溝-70	土師器	椀	14.4	6.8	4.8	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	早島式土器、完形
4814	溝-70	備前焼	甕	40.8		(6.3)	赤色(10R5/6)	細砂	良好	
4815	溝-70	亀山焼	甕	41.2		(7.6)	灰色(7.5Y5/1)	細砂	良好	
4816	溝-70	亀山焼	甕	50.8		(6.4)	灰色(N6/)	細砂	良好	
4817	溝-70	備前焼	擂鉢	25.5		(5.1)	褐灰色(7.5YR6/1)	粗砂	良好	
4818	溝-70	備前焼	擂鉢	26.5		(5.4)	赤灰色(2.5YR5/1)	粗砂	良好	



中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4819	溝-70	亀山焼	播鉢	25.6		(6.0)	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	
4820	溝-70	備前焼	播鉢	30.0		(5.8)	灰赤色(10R4/2)	細砂	良好	
4821	溝-320	青磁	碗		3.8	(2.2)	灰色(7.5Y5/1)	精良	良好	
4822	溝-287	白磁	碗	14.6		(2.8)	灰白色(7.5Y7/2)	精良	良好	
4823	溝-288	土師器	小皿	7.0	5.0	1.3	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
4824	溝-289	土師器	小皿	7.3		1.7	灰白色(10YR8/2)	礫、細砂	良好	
4825	溝-295	土師器	碗	12.7	6.0	4.8	灰白色(2.5Y8/1)	礫	良好	早島式土器
4826	溝-295	土師器	碗	10.8	4.0	3.2	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	早島式土器
4827	溝-295	魚住焼	播鉢			(5.9)	灰色(N6/0)	細砂	良好	播目
4828	溝-295	備前焼	播鉢			(6.1)	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	良好	播目
4829	溝-302	土師器	小皿	8.6	6.4	1.5	明褐色(7.5YR8/2)	細砂	良好	
4830	溝-300	土師器	小皿	9.4	6.4	1.4	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4831	溝-302	土師器	小皿	7.9	6.0	1.3	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	
4832	溝-302	土師器	小皿	7.0	6.2	1.2	淡橙色(5YR8/4)	細砂	良好	
4833	溝-302	土師器	小杯	8.1	5.4	4.3	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	
4834	溝-302	土師器	小杯	8.6	-	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
4835	溝-302	土師器	皿	10.2	8.0	(2.5)	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	
4836	溝-302	土師器	皿	10.6	8.4	(2.3)	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	良好	
4837	溝-302	土師器	碗		6.0	(2.7)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4838	溝-302	土師器	碗	11.8	5.6	4.1	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4839	溝-302	土師器	碗		4.6	(2.9)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4840	溝-302	土師器	碗	11.2	4.4	3.4	灰白色(2.5Y8/2)	礫~細砂	良好	早島式土器
4841	溝-320	土師器	皿	10.8		2.8	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
4842	溝-320	土師器	皿	12.4		2.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁に補修痕
4843	溝-320	土師器	皿	13.0		2.8	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
4844	溝-320	土師器	小皿	6.8	5.6	1.5	灰白色(10YR8/2)	粗砂、細砂	良好	完形、焼け歪み
4845	溝-320	土師器	小皿	7.4	5.3	1.4	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂	良好	ほぼ完形、底部穿孔
4846	溝-320	土師器	小皿	7.0	-	1.5	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	早島式土器
4847	溝-320	土師器	小皿	6.2	5.1	1.4	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	
4848	溝-320	土師器	小皿	7.5	-	1.2	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
4849	溝-320	土師器	小皿	7.0	5.4	1.7	灰白色(2.5Y8/2)	礫~細砂	良好	
4850	溝-320	土師器	小皿	7.2	5.7	1.5	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
4851	溝-320	土師器	小皿	7.3	5.9	1.3	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂	良好	底部に板目
4852	溝-320	土師器	小皿	7.2	-	1.5	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	早島式土器
4853	溝-320	土師器	小皿	8.1	6.6	1.4	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	
4854	溝-320	土師器	小皿	8.2	7.4	1.6	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4855	溝-320	土師器	小皿	7.5	-	1.7	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	
4856	溝-320	土師器	小皿	7.6	-	1.2	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
4857	溝-320	土師器	小皿	8.2	-	1.6	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
4858	溝-320	土師器	小皿	7.7	-	1.2	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良好	
4859	溝-320	土師器	小皿	8.5		1.6	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂	良好	
4860	溝-320	土師器	小皿	7.7	5.3	2.0	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	
4861	溝-320	土師器	小皿	9.8	6.7	1.9	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4862	溝-320	土師器	小皿	7.3	5.6	1.4	灰白色(7.5YR8/2)	礫、細砂	良好	ほぼ完形
4863	溝-320	土師器	小皿	8.2	5.9	1.6	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	ほぼ完形
4864	溝-320	土師器	小皿	8.4		(2.0)	灰白色(10YR8/2)	粗砂、細砂	良好	
4865	溝-320	土師器	脚付杯	9.2		(4.7)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
4866	溝-320	土師器	碗	11.8	5.0	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4867	溝-320	土師器	碗	11.4	4.4	3.4	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4868	溝-320	土師器	碗	11.8	4.3	3.5	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	早島式土器
4869	溝-320	土師器	碗	10.7	4.4	(3.9)	灰白色(5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器
4870	溝-320	土師器	碗	11.9	4.6	4.2	灰白色(2.5Y8/2)	礫	良好	早島式土器
4871	溝-320	土師器	碗	11.8	5.7	4.2	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	早島式土器
4872	溝-320	土師器	碗	12.0	5.1	(3.6)	灰白色(5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4873	溝-320	土師器	碗	12.4	5.1	(3.7)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4874	溝-320	土師器	碗	11.8	5.0	4.0	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	早島式土器
4875	溝-320	土師器	碗	11.2	5.0	4.0	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	早島式土器
4876	溝-320	土師器	碗	13.1	5.5	(4.3)	灰白色(5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	早島式土器
4877	溝-320	土師器	碗	11.8	4.9	4.1	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	早島式土器
4878	溝-320	土師器	碗	11.8	4.9	4.2	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4879	溝-320	土師器	碗	12.2	4.7	4.0	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4880	溝-320	土師器	椀	12.8	6.2	3.7	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器
4881	溝-320	土師器	椀	12.7	5.2	3.9	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器
4882	溝-320	土師器	椀	12.2	5.1	4.1	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4883	溝-320	土師器	椀	12.7	5.1	4.1	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4884	溝-320	土師器	椀	12.5	5.1	4.2	灰白色(5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	早島式土器
4885	溝-320	土師器	椀	11.7	5.5	(4.1)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂	良好	早島式土器
4886	溝-320	土師器	椀	12.4	4.9	4.1	浅黄色(2.5Y7/3)	粗砂	良好	早島式土器
4887	溝-320	土師器	椀	12.5	6.0	(4.0)	灰白色(5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4888	溝-320	土師器	椀	12.2	4.6	4.2	灰白色(2.5Y8/1)	礫	良好	早島式土器、重ね焼き
4889	溝-320	土師器	椀	11.4	6.0	4.0	灰白色(10YR8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4890	溝-320	土師器	椀	11.6	6.1	4.1	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4891	溝-320	土師器	椀	9.6	5.0	4.0	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂	良好	早島式土器
4892	溝-320	土師器	椀	11.8	5.8	4.2	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂	良好	早島式土器
4893	溝-320	土師器	椀	11.3	4.6	3.8	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、ほぼ完形
4894	溝-320	瓦器	椀	15.8	6.3	5.6	暗灰色(N3/0)	細砂	良好	楠葉型
4895	溝-320	土師器	鍋	28.2		(14.7)	黒色(5YR1.7/1)	細砂	良好	
4896	溝-320	亀山焼	播鉢	28.5		(5.6)	灰色(N4/0)	礫、細砂	良好	
4897	溝-320	備前焼	播鉢	28.4		(5.9)	鈍い赤褐色(2.5YR4/3)	礫	良好	
4898	溝-320	備前焼	播鉢	31.0		(6.1)	灰白色(N6/0)	礫	良好	
4899	溝-320	備前焼	播鉢	28.0		(5.1)	褐灰色(10YR4/1)	礫、細砂	良好	
4900	溝-320	備前焼	甕			(5.5)	暗青灰色(5PB4/1)	細砂	良好	
4901	溝-320	備前焼	甕			(7.7)	赤灰色(10R5/1)	礫~細砂	良好	
4902	溝-322	土師器	椀	14.3	5.4	5.5	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4903	溝-322	土師器	椀	13.2	5.1	5.2	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4904	溝-382~384	土師器	椀	9.6		2.9	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	
4905	包含層	土師器	椀	10.0	4.2	3.2	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	早島式土器
4906	包含層	土師器	椀	10.6	4.5	3.1	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	早島式土器
4907	包含層	土師器	椀	10.9	3.5	3.1	灰白色(10YR8/1)	粗砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4908	包含層	土師器	椀	10.8	4.2	4.0	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	早島式土器
4909	包含層	土師器	椀	10.9	4.7	4.0	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂	良好	早島式土器
4910	包含層	土師器	椀	10.6	4.8	3.8	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	早島式土器
4911	包含層	土師器	椀	11.0	4.7	3.6	灰白色(10YR8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4912	包含層	土師器	椀	10.9	4.2	3.8	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4913	包含層	土師器	椀	11.4	5.1	3.5	灰白色(10YR8/1)	粗砂	良好	早島式土器、ほぼ完形
4914	包含層	土師器	椀	11.8	5.3	4.2	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4915	包含層	土師器	椀	11.7	6.0	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	早島式土器、黒斑A B
4916	包含層	土師器	椀	11.6	5.6	4.1	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	早島式土器
4917	包含層	土師器	椀	11.8	5.5	(4.2)	灰白色(7.5Y8/1)	礫、細砂	良好	早島式土器
4918	包含層	土師器	椀	11.5	5.6	4.3	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4919	包含層	土師器	椀	10.9	4.9	4.3	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4920	包含層	土師器	椀	11.6	5.4	4.3	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器、黒斑B C
4921	包含層	土師器	椀	11.2	4.9	3.4	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器、黒斑A
4922	包含層	土師器	椀	12.0	4.9	(4.0)	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4923	包含層	土師器	椀	11.5	5.1	4.0	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4924	包含層	土師器	椀	11.7	5.5	4.0	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4925	包含層	土師器	椀	11.6	5.6	3.7	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	早島式土器
4926	包含層	土師器	椀	12.1	4.7	3.7	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4927	包含層	土師器	椀	11.8	6.4	(3.6)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	早島式土器
4928	包含層	土師器	椀	12.1	4.5	4.4	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4929	包含層	土師器	椀	12.4	5.8	4.1	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4930	包含層	土師器	椀	12.4	5.4	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4931	包含層	土師器	椀	12.8	5.7	3.6	灰白色(7.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4932	包含層	土師器	椀	12.4	5.2	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4933	包含層	土師器	椀	12.4	5.0	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4934	包含層	土師器	椀	12.0	5.4	4.1	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	早島式土器、重ね焼き
4935	包含層	土師器	椀	11.8	5.2	4.1	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	早島式土器
4936	包含層	土師器	椀	12.3	5.0	3.8	灰白色(2.5Y8/2)	礫、細砂	良好	早島式土器
4937	包含層	土師器	椀	13.4	6.8	5.0	鈍い橙色(2.5YR6/4)	粗砂	良好	
4938	包含層	土師器	椀	14.4	5.8	4.6	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
4939	包含層	瓦器	椀	17.2	6.0		灰色(N6/0)	細砂	良好	

中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4940	包含層	土師器	杯	9.7		3.4	橙色(5YR6/6)	礫、細砂	良好	黒斑A~C
4941	包含層	土師器	皿	12.3	10.7	3.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4942	包含層	土師器	皿	16.5	13.8	3.4	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
4943	包含層	土師器	小杯	9.0	—	2.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
4944	包含層	土師器	小皿	8.0	4.7	2.2	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
4945	包含層	土師器	小皿	8.4	5.3	1.7	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
4946	包含層	土師器	小皿	7.7	6.0	2.4	橙色(7.5YR6/6)	細砂	良好	完形
4947	包含層	土師器	小皿	9.1	6.2	2.4	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
4948	包含層	土師器	小皿	8.8	5.6	2.6	灰白色(10YR8/1)	粗砂	良好	
4949	包含層	土師器	小皿	6.9	5.0	1.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4950	包含層	土師器	小皿	7.3	5.8	(1.1)	灰白色(10YR8/1)	礫	良好	完形
4951	包含層	土師器	小皿	6.6	5.4	1.3	浅黄橙色(10YR8/4)	礫、細砂	良好	
4952	包含層	土師器	小皿	8.3	7.2	2.0	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
4953	包含層	土師器	小皿	9.2	5.4	2.3	橙色(7.5YR7/6)	精良	良好	
4954	包含層	土師器	小皿	6.8		1.2	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	
4955	包含層	土師器	小皿	7.1		1.1	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
4956	包含層	土師器	小皿	6.6	5.7	1.4	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	
4957	包含層	土師器	小皿	7.1	6.0	1.4	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	良好	
4958	包含層	土師器	小皿	7.0	5.1	1.4	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	良好	ほぼ完形
4959	包含層	土師器	小皿	7.0	5.4	1.6	灰白色(5YR8/2)	細砂	良好	
4960	包含層	土師器	小皿	7.6	6.0	1.5	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
4961	包含層	土師器	小皿	7.2	5.5	1.5	黄灰色(2.5Y5/1)	細砂	良好	
4962	包含層	土師器	小皿	7.2	5.4	1.5	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良好	
4963	包含層	土師器	小皿	6.9	5.3	1.4	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
4964	包含層	土師器	小皿	7.1	6.0	1.5	浅黄橙色(7.5YR8/3)	礫、細砂	良好	
4965	包含層	土師器	小皿	7.3	5.9	1.7	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
4966	包含層	土師器	小皿	7.4	5.2	1.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	完形
4967	包含層	土師器	小皿	7.2	6.4	(1.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4968	包含層	土師器	小皿	7.0	5.3	1.2	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
4969	包含層	土師器	小皿	7.7	5.8	1.1	灰白色(10YR8/2)	礫、細砂	良好	
4970	包含層	土師器	小皿	8.1	6.4	1.5	浅黄色(2.5Y7/3)	細砂	良好	
4971	包含層	土師器	小皿	7.6	6.3	1.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)	礫、細砂	良好	
4972	包含層	土師器	小皿	7.6	6.0	1.5	灰白色(10YR8/2)	礫、細砂	良好	
4973	包含層	土師器	小皿	7.1	5.8	1.6	淡橙色(5YR8/4)	細砂	良好	
4974	包含層	土師器	小皿	8.0	6.8	1.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4975	包含層	土師器	小皿	7.7	6.3	1.3	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	
4976	包含層	土師器	小皿	7.6	6.0	1.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4977	包含層	土師器	小皿	7.8	5.4	1.3	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良好	
4978	包含層	土師器	小皿	7.2	5.8	1.7	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
4979	包含層	土師器	小皿	7.9	6.2	1.5	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	
4980	包含層	土師器	小皿	7.8	6.8	1.8	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	完形
4981	包含層	土師器	小皿	7.8	6.8	1.8	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	焼け歪み
4982	包含層	土師器	小皿	7.7	6.8	1.8	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4983	包含層	土師器	小皿	7.7	7.0	1.5	褐色(7.5YR5/1)	細砂	良好	ほぼ完形
4984	包含層	土師器	小皿	7.8	5.8	1.8	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	ほぼ完形
4985	包含層	土師器	小皿	8.4	7.3	1.8	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	良好	
4986	包含層	土師器	小皿	8.0	6.5	1.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
4987	包含層	土師器	小皿	8.1		1.6	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂、細砂	良好	
4988	包含層	魚住焼	甕	24.0		(12.5)	灰白色(N7/)	細砂	良好	
4989	包含層	土師器	鍋	37.6		(11.5)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	ススB
4990	包含層	土師器	鍋	37.4		(14.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	ススB
4991	包含層	土師器	鍋	39.0		(10.5)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良好	ススA B
4992	包含層	須恵器	椀	14.8	4.8	5.6	灰白色(N7/)	粗砂	良好	
4993	包含層	白磁	碗	15.4		(4.0)	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	精良	良好	
4994	包含層	白磁	碗	15.0		(3.6)	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	精良	良好	
4995	包含層	白磁	碗		5.4	(2.7)	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	精良	良好	
4996	包含層	青磁	碗			(3.5)	灰白色(7.5Y7/1)	精良	良好	
4997	包含層	白磁	碗		7.2	(2.2)		精良	良好	

## 中屋調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
4998	包含層	白磁	合子	4.3	3.2	2.0	明緑灰色(10GY8/1)	精良	良好	
4999	包含層	白磁	碗		7.2	(2.4)		精良	良好	
5000	包含層	青磁	碗		4.6	(2.0)	オリーブ灰色(5GY6/1)	精良	良好	
5001	包含層	青磁	碗		5.8	(3.0)	灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良	良好	
5002	包含層	白磁	碗	13.4		(2.7)	灰白色(7.5Y7/1)	精良	良好	
5003	包含層	青磁	碗	15.0		(4.1)	灰オリーブ色(5Y6/2)	精良	良好	
5004	包含層	青磁	碗		4.8	(5.0)	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	精良	良好	
5005	包含層	青磁	碗		5.1	(3.7)	灰色(10Y6/1)	精良	良好	
5006	包含層	青磁	碗		5.2	(2.0)	明緑灰色(5G7/1)	精良	良好	
5007	包含層	唐津焼	椀	6.6	2.8	4.1	灰白色(2.5Y7/1)	精良	良好	
5008	包含層	肥前磁器	碗		3.3	(2.7)	灰白色(GY8/1)	精良	良好	染付

中屋調査区石製品一覧表

掲載番号	遺構名	遺物名	材質	法量(cm)			重量(g)	時期	備考				
				長さ	幅	厚さ							
S132	竪穴住居-125	石鏃	サヌカイト	2.2	1.2	0.3	(0.6)	弥・中・中	凹基				
S133	竪穴住居-125	石鏃	サヌカイト	2.2	1.7	0.5	(1.4)	弥・中・中	凹基				
S134	竪穴住居-125	剝片	サヌカイト	4.3	2.0	0.4	4.1	弥・中・中					
S135	竪穴住居-125	剝片	サヌカイト	6.6	5.3	0.8	(17.6)	弥・中～後					
S136	竪穴住居-125	砥石	石英斑岩	8.6	4.2	3.7	186.9	弥・中・II					
S137	竪穴住居-125	砥石	半花崗岩	15.1	8.6	6.2	(1253.7)	弥・中・II					
S138	竪穴住居-125	砥石	流紋岩質溶岩	16.7	8.0	5.4	799.5	弥・中・II					
S139	竪穴住居-127	石鏃	サヌカイト	2.3	1.5	0.6		弥・後・I					
S140	竪穴住居-128	石錘	砂岩	(3.6)	(2.5)	(1.0)	(10.5)	弥・後・前					
S141	竪穴住居-130	石鏃	サヌカイト	1.9	1.3	0.3	0.4	弥・中～後	凹基				
S142	竪穴住居-130	剝片	サヌカイト	5.7	4.9	0.9	(31.5)	弥・中～後					
S143	竪穴住居-130	砥石	頁岩	4.8	3.1	1.1	(12.2)	弥・後・II					
S144	土壌-199	石包丁	サヌカイト	6.2	4.2	1.0	25.5	弥・後・I					
S145	土壌-207	スクレイパー	サヌカイト	7.3	3.7	0.7	22.8	弥・後・II					
S146	土壌-215	スクレイパー	サヌカイト	3.70	2.75	3.45	3.30	0.90	0.65	12.5	6.3	弥・後・II	
S147	土壌-217	石包丁	サヌカイト	6.9	4.4	1.0	38.7	弥・中～後					
S148	包含層	石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.3	0.6	弥・中～後	凹基				
S149	包含層	石鏃	サヌカイト	2.7	1.9	0.3	1.4	弥・中～後					
S150	包含層	石鏃	サヌカイト	3.1	1.8	0.4	(1.6)	弥・中～後	凹基				
S151	包含層	石鏃	サヌカイト	1.8	1.1	0.4	0.8	弥・中～後					
S152	包含層	石鏃	サヌカイト	2.1	1.3	0.5	1.4	弥・後・前					
S153	包含層	石鏃	サヌカイト	2.5	1.5	0.3	1.8	弥・中～後	平基				
S154	包含層	石鏃	サヌカイト	1.9	(1.2)	0.3	(0.5)	弥・中～後	平基				
S155	包含層	石鏃	サヌカイト	2.4	1.6	0.5	1.5	弥・中・中					
S156	包含層	石鏃	サヌカイト	(3.4)	2.1	0.7	(4.3)	弥・中～後	平基				
S157	包含層	石鏃	サヌカイト	4.0	2.0	0.6	3.9	弥・中～後	有茎				
S158	包含層	石鏃	サヌカイト	(5.5)	2.1	0.7	(5.7)	弥・中～後	有茎				
S159	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.9)	1.3	0.5	(1.5)	弥・中～後	有茎				
S160	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.7)	1.5	0.4	(1.6)	弥・中～後	凸基				
S161	包含層	石鏃	サヌカイト	(4.1)	(2.4)	0.4	(3.2)	弥・中～後	有茎				
S162	包含層	石鏃	サヌカイト	2.2	1.1	0.3	0.5	古・中・II					
S163	包含層	石鏃	サヌカイト	2.8	1.2	0.5	1.4	弥・中～後	凸基				
S164	包含層	石鏃	サヌカイト	4.3	1.8	0.4	2.9	弥・中～後	有茎				
S165	包含層	石包丁	粘板岩	9.1	4.0	1.0	42.6	弥・中～後					
S166	包含層	石包丁	サヌカイト	8.4	4.3	1.1	52.6	弥・中～後					
S167	包含層	石包丁	サヌカイト	5.3	2.9	1.0	(17.7)	弥・中～後					
S168	包含層	石包丁	サヌカイト	10.8	5.0	1.7	(113.1)	弥・中～後					
S169	包含層	石包丁	サヌカイト	(4.3)	3.9	0.8	(16.5)	弥・中～後					
S170	包含層	石包丁	溶結凝灰岩	(5.6)	4.7	1.1	(40.5)	弥・中～後	磨製				
S171	包含層	石包丁	緑色片岩	10.0	4.6	1.0	(62.0)	弥・中～後	磨製				
S172	包含層	石包丁	サヌカイト	(5.7)	6.3	1.7	(61.5)	弥・中～後					
S173	包含層	剝片	サヌカイト	(6.8)	(4.0)	0.6	(15.7)	弥・中～後					
S174	竪穴住居-134	砥石	流紋岩質溶岩	24.4	10.7	7.5	2690.0	古・前・II					
S175	竪穴住居-135	砥石	流紋岩質溶岩	13.3	3.4	3.6	217.7	古・前・II					
S176	竪穴住居-139	砥石	流紋岩質溶岩	6.0	3.9	1.7	44.7	古・前・前					
S177	竪穴住居-139	砥石	泥岩	8.5	3.3	3.0	(104.0)	古・前・前					
S178	竪穴住居-141	砥石	流紋岩質溶岩	7.4	7.9	6.1	279.2	古・前・I					
S179	竪穴住居-142	砥石	流紋岩質溶岩	4.3	5.2	2.5	68.8	古・前・I					
S180	竪穴住居-148	砥石	流紋岩質溶岩	11.7	6.5	5.2	(514.1)	古・前・I					
S181	竪穴住居-153	砥石	流紋岩質凝灰岩	8.3	4.2	2.8	(72.0)	古・前・II					
S182	竪穴住居-155	砥石	頁岩	6.6	3.6	1.0	(10.8)	古・前・II					
S182	包含層	砥石	頁岩	6.6	3.6	1.0	(24.6)	古・前・II					
S183	竪穴住居-156	砥石	頁岩	6.0	2.9	1.1	19.4	古・前・前					
S184	竪穴住居-157	砥石	砂岩	11.2	5.3	4.2	351.7	古・前・II					
S185	竪穴住居-164	砥石	流紋岩質溶岩	8.1	5.9	4.8	(122.6)	古・中・II					
S186	竪穴住居-166	砥石	流紋岩質溶岩	7.7	6.1	4.8	211.0	古・中・II					
S187	土器溜り-8	砥石	流紋岩質溶岩	5.4	5.3	0.3	(89.1)	-					
S188	土器溜り-8	砥石	流紋岩質溶岩	8.4	5.6	3.1	(171.2)	-					
S189	溝-104	砥石	流紋岩質溶岩	7.2	3.3	2.9	(95.8)	古・前・II					
S190	包含層	紡錘車	滑石	(3.9)	4.0	1.7	(15.1)	古・中・後	截頭円錐形				

中屋調査区石製品一覧表

掲載番号	遺構名	遺物名	材質	法量(cm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
S191	包含層	紡錘車	滑石	3.8	3.8	(1.5)	(31.5)	古・中・後	截頭円錐形
S192	溝-132	砥石	半花崗岩	9.9	6.7	4.0	424.9	古代	
S193	土壇-309	砥石	流紋岩	111.0	50.0	36.0	275.5	中世	
S194	溝-70	石鍋	滑石	99.0	90.0	18.0	264.0	中世	温石
S195	溝-70	砥石	流紋岩	(46.0)	33.0	7.0	(16.6)	中世	
S196	溝-70	砥石	頁岩	(50.0)	34.0	7.0	(22.4)	中世	
S197	溝-70	砥石	流紋岩	79.0	40.0	32.0	124.3	中世	
S198	溝-70	砥石	流紋岩	76.0	40.0	29.0	108.6	中世	
S199	包含層	砥石	流紋岩	74.0	42.0	26.0	149.0	中世	
S200	包含層	砥石	ホルンフェルス	6.1	4.8	3.4	116.7	中世	
S201	包含層	砥石	頁岩	7.8	3.7	2.1	(88.7)	中世	
S202	包含層	砥石	流紋岩質溶岩	6.6	5.1	3.2	(155.9)	中世	
S203	包含層	砥石	花崗岩(細粒)	11.4	4.7	3.4	270.8	中世	
S204	包含層	砥石	流紋岩質溶岩	10.4	4.3	3.4	172.7	中世	
S205	包含層	砥石	頁岩	11.2	2.6	1.9	63.8	中世	
S206	包含層	砥石	流紋岩質溶岩	6.4	4.5	3.8	93.1	中世	
S207	包含層	砥石	頁岩	3.5	2.4	1.2	16.0	中世	
S208	包含層	砥石	流紋岩質溶岩	3.5	2.6	1.6	(19.6)	中世	
S209	包含層	砥石	流紋岩質溶岩	5.0	3.3	1.8	(33.5)	中世	
S210	包含層	砥石	古銅輝石安山岩	5.9	3.9	1.3	46.5	中世	
S211	包含層	砥石	流紋岩質溶岩	8.8	5.4	3.1	(137.8)	中世	
S212	包含層	砥石	流紋岩質溶岩	13.6	8.0	4.5	(609.5)	中世	
S213	包含層	砥石	流紋岩質溶岩	11.2	6.5	5.6	511.8	中世	
S214	包含層	砥石	古銅輝石安山岩	12.2	7.4	2.9	(332.5)	中世	
S215	包含層	砥石	凝灰岩質流紋岩	20.6	12.3	6.3	1713.3	中世	
S216	包含層	砥石	ホルンフェルス	31.4	12.3	7.5	3240.0	中世	

中屋調査区玉類品一覧表

掲載番号	遺構名	遺物名	材質	法量(cm)				重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
J33	竪穴住居-152・153	管玉	碧玉	1.0	0.5	(0.3)	0.3	(0.1)	古・前・前	
J34	竪穴住居-157	勾玉	ヒスイ	(1.2)	0.5	0.3		(0.5)	古・前・II	
J35	包含層	子持勾玉	滑石	(6.1)	(3.2)	(1.6)	0.5	(26.3)	古・中・後	
J36	包含層	大珠	ヒスイ	4.5	3.0	1.6	0.5~0.3	44.7	縄文後期	
	竪穴住居-140	管玉	碧玉	-	-	-	-	-	古・前・I	小片

中屋調査区木製品一覧表

掲載番号	遺構名	遺物名	材質	法量(cm)			時期	備考
				長さ	幅	厚さ		
W3	井戸-4	樋	-	27.3	4.9	1.6	中世	底板
W4	井戸-5	折敷	-	21.1	(9.2)	0.2	中世	墨書(絵馬)
W5	井戸-5	漆皿	カツラ		底径(10.1)	0.7	中世	碁筒底
W6	土壇-328	下駄	-	17.0	(6.0)	0.7	中世	乾燥し収縮
W7	土壇-328	漆椀	ブナ属	口径(11.9)		器高(3.3)	中世	酢漿草紋
W8	溝-70	折敷	ヒノキ属	16.0	15.5	器高1.6	中~近世	俎に転用
W9	溝-70	漆椀	トチノキ	口径(17.2)	底径(7.6)	器高(7.2)	中~近世	
W10	包含層	横櫓	イスノキ	4.0	(4.8)	(9.5)	中世	

中屋調査区土製品一覧表

掲載番号	遺構名	器種	法量(cm)				重量(g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
			長さ	幅	厚さ	孔径						
C 94	竪穴住居-130	勾玉	(1.3)	1.2	1.2	-	(2.1)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良	弥・後・II	
C 95	竪穴住居-130	勾玉	(2.7)	1.1	1.5	-	(6.0)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良	弥・後・II	
C 96	袋状土壇-76	紡錘車	5.0	5.1	0.6	0.8	19.4	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良	弥・後・I	土器片転用
C 97	土壇-199	分銅形	3.3	2.8	0.5	-	7.2	橙色(5YR6/8)	細砂	良	弥・後・II	刺突文
C 98	土壇-234	分銅形	(2.6)	4.1	0.9	-	(11.1)	褐色(7.5YR4/3)	細砂	良	弥・後・II	刺突文
C 99	土壇-235	勾玉	5.4	1.5	1.5	0.4	18.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	弥・後・II	
C100	包含層	分銅形	(5.5)	(6.7)	1.2	-	(38.2)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良	弥・中～後	櫛歯文
C101	包含層	分銅形	(4.4)	5.8	1.2	-	(25.3)	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	良	弥・中～後	櫛歯文
C102	包含層	分銅形	(5.0)	(6.5)	1.2	-	(36.4)	灰黄褐色(10YR4/2)	細砂	良	弥・中～後	刺突文
C103	包含層	紡錘車	3.2	3.3	0.4	0.3	3.7	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良	弥・中～後	土器片転用
C104	竪穴住居-134	土鍾	6.3	5.0	4.9	2.5	134.0	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C105	竪穴住居-134	土鍾	7.1	4.3	4.5	1.9	122.1	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C106	竪穴住居-134	土鍾	6.9	4.4	4.6	2.2	123.9	褐灰色(10YR5/1)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C107	竪穴住居-139	土鍾	7.4	2.8	2.6	1.3	55.1	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C108	竪穴住居-150	勾玉	(2.2)	0.7	0.7	-	(1.3)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	古・前・前	
C109	竪穴住居-152・153	勾玉	4.8	1.3	1.3	0.3	12.7	鈍い黄褐色(10YR6/3)	細砂	良	古・前・前	
C110	竪穴住居-155	土鍾	7.5	2.8	2.7	1.2	65.0	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C111	竪穴住居-155	土鍾	3.9	3.8	2.4	0.3	26.6	橙色(5YR6/6)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C112	竪穴住居-165	土鍾	(3.0)	1.6	1.6	0.5	(9.1)	灰白色(10YR7/1)	細砂	良	古・中～後	管状(紡錘形)
C113	土器溜り-3	土鍾	6.0	2.4	2.7	1.0	(23.6)	褐灰色(10YR4/1)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C114	土器溜り-3	土鍾	7.5	2.2	2.2	1.3	56.3	鈍い黄褐色(10YR7/4)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C115	土器溜り-5・6	勾玉	3.0	1.1	1.5	0.3	8.7	橙色(5YR6/6)	細砂	良	古・前・前	
C116	溝-120	土鍾	(4.7)	2.8	(2.8)	1.0	(22.4)	橙色(5YR7/8)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C117	包含層	土鍾	(6.0)	(5.0)	(5.0)	0.8	(54.8)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良	古・前・前	有溝管状
C118	包含層	土鍾	9.0	4.9	3.1	1.0	(172.5)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良	古・前・前	有溝管状
C119	包含層	土鍾	9.5	5.5	3.4	1.0	201.8	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良	古・前・前	有溝管状
C120	包含層	土鍾	(7.0)	(4.0)	(3.9)	0.8	(52.4)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良	古・前・前	管状
C121	包含層	土鍾	5.2	(5.4)	(5.3)	1.6	(48.9)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良	古・前・前	管状(球形)
C122	包含層	土鍾	4.9	2.6	2.4	0.9	37.1	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C123	包含層	土鍾	6.0	2.7	2.6	1.0	45.9	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C124	包含層	土鍾	6.5	2.4	2.2	1.0	36.5	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C125	包含層	土鍾	6.6	2.9	(2.8)	1.0	(34.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C126	包含層	土鍾	6.6	2.8	2.9	1.1	(51.4)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C127	包含層	土鍾	6.5	(3.1)	(3.0)	1.2	(26.9)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C128	包含層	土鍾	6.8	2.9	2.9	1.1	(52.5)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C129	包含層	土鍾	6.6	2.6	2.6	1.0	(39.0)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C130	包含層	土鍾	6.5	3.5	3.4	1.1	87.5	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C131	包含層	土鍾	6.7	3.4	3.2	1.3	(55.0)	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C132	包含層	土鍾	6.6	3.6	3.6	0.9	107.7	明褐灰色(7.5YR7/1)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C133	包含層	土鍾	7.4	3.5	(3.7)	1.5	(57.9)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C134	包含層	土鍾	7.4	3.5	3.3	1.6	(76.2)	橙色(5YR6/8)	礫	良	古・前・前	管状(円筒形)
C135	包含層	土鍾	7.0	2.7	2.9	1.3	63.1	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C136	包含層	土鍾	7.1	3.0	2.8	1.2	66.4	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C137	包含層	土鍾	5.9	2.7	2.5	1.1	54.7	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C138	包含層	土鍾	(7.4)	2.6	2.6	1.2	(33.2)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C139	包含層	土鍾	7.0	2.5	2.4	1.0	44.9	橙色(5YR7/8)	礫	良	古・前・前	管状(円筒形)
C140	包含層	土鍾	7.5	2.8	2.8	0.9	76.5	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C141	包含層	土鍾	7.9	3.0	2.7	1.5	66.5	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C142	包含層	土鍾	7.0	2.8	(2.8)	1.0	(33.5)	橙色(5YR6/6)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C143	包含層	土鍾	7.4	2.8	2.6	1.2	57.6	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C144	包含層	土鍾	7.8	2.5	2.5	1.1	53.7	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C145	包含層	土鍾	3.5	(2.9)	2.5	0.3	(23.1)	橙色(5YR6/6)	細砂	良	古・前・前	管状(円筒形)
C146	包含層	紡錘車	4.8	4.8	1.1	0.6	31.9	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良	弥生～古墳	円板形
C147	包含層	紡錘車	2.8	(3.8)	(3.9)	0.9	(24.1)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良	古・中～後	截頭円錐形
C148	包含層	紡錘車	2.7	4.7	4.7	0.5	57.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	古・中～後	截頭円錐形
C149	包含層	埴輪	(6.6)	(4.1)	1.5	-	-	鈍い赤褐色(7.5YR5/3)	細砂	良	古・中～後	円筒形
C150	溝-132	平瓦	33.5	(19.0)	2.9	-	(2450.0)	鈍い黄褐色(10YR7/2)	粗砂	良	古代	縄タタキ
C151	溝-132	平瓦	(28.0)	(19.2)	2.7	-	(1900.0)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	粗砂	良	古代	縄タタキ
C152	溝-132	平瓦	(20.0)	(17.5)	2.0	-	(1000.0)	灰色(5Y5/1)	粗砂	良	古代	縄タタキ
C153	溝-132	平瓦	(26.5)	(14.8)	2.0	-	(1090.0)	灰色(5Y4/1)	粗砂	良	古代	縄タタキ

中屋調査区土製品一覧表

掲載 番号	遺構名	器種	法量(cm)				重量 (g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
			長さ	幅	厚さ	孔径						
C154	溝-132	平瓦	26.6	21.8	2.0	-	(1500.0)	褐灰色(10YR6/1)	粗砂	良	古代	
C155	溝-132	平瓦	(31.1)	(15.0)	1.9	-	(1300.0)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	古代	
C156	溝-132	軒平瓦	(19.0)	14.8	5.4	-	(1420.0)	表褐灰色(10YR6/1)	細砂	良	古代	
C157	溝-132	軒平瓦	(5.3)	(8.1)	7.5	-	(430.0)	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂	良	古代	
C158	溝-132	土鍾	(7.5)	2.5	2.2	0.6	35.5	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	良	古代	
C159	溝-138~227	軒平瓦	(12.5)	(10.0)	4.9	-	(650.0)	灰色(5Y4/1)	粗砂	良	古代	
C160	溝-138~227	土鍾	4.9	1.9	1.9	0.6	15.8	鈍い橙色(5YR7/3)	粗砂	良	古代	
C161	溝-138~227	土鍾	(3.2)	1.7	1.7	0.4	(8.1)	褐灰色(10YR5/1)	粗砂	良	古代	
C162	溝-241~284	土鍾	5.4	0.9	0.9	0.3	4.6	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良	古代	
C163	包含層	軒丸瓦	(6.5)	(11.5)	(3.7)	-	(390.0)	灰色(5Y5/1)	礫、細砂	良	古代	平城宮系
C164	包含層	丸瓦	(10.5)	(11.0)	2.0	-	300.0	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良	古代	
C165	包含層	平瓦	(14.2)	(15.0)	3.0	-	(920.0)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良	古代	格子目タタキ
C166	包含層	平瓦	(16.0)	(12.0)	2.2	-	(700.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	古代	縄タタキ
C167	包含層	平瓦	(15.2)	23.0	2.0	-	(1200.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫、粗砂	良	古代	縄タタキ
C168	包含層	平瓦	(21.5)	24.0	3.2	-	(2300.0)	灰白色(7.5YR8/2)	礫	良	古代	縄タタキ
C169	包含層	平瓦	(18.5)	(22.0)	2.1	-	(1150.0)	鈍い黄褐色(10YR6/3)	粗砂	良	古代	縄タタキ
C170	包含層	平瓦	(22.0)	(15.0)	1.9	-	(700.0)	鈍い黄褐色(10YR7/4)	粗砂	良	古代	縄タタキ
C171	包含層	平瓦	(18.0)	(13.0)	1.8	-	(700.0)	鈍い黄褐色(10YR6/4)	粗砂	良	古代	縄タタキ
C172	包含層	平瓦	(18.5)	(12.5)	2.0	-	(750.0)	灰白色(7.5YR8/1)	粗砂	良	古代	縄タタキ
C173	包含層	平瓦	(26.4)	(17.0)	2.1	-	(1000.0)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良	古代	縄タタキ
C174	包含層	平瓦	(27.3)	(14.0)	1.9	-	(1000.0)	褐灰色(7.5YR4/1)	粗砂	良	古代	縄タタキ
C175	溝-70	土鍾	4.7	0.9	0.9	0.3	3.8	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C176	溝-70	羽口	(7.3)	7.2	7.4	2.3	(300.7)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良	中世	
C177	溝-302	土鍾	(3.5)	1.3	1.0	0.4	4.0	黒色(7.5YR2/1)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C178	溝-296	土鍾	(4.3)	1.6	1.6	0.6	(10.3)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	中世	管状(紡錘形)
C179	包含層	土鍾	7.6	3.4	3.3	-	72.0	黒褐色(7.5YR3/1)	細砂	良	中世	有溝(紡錘形)
C180	包含層	土鍾	7.5	3.0	3.0	-	59.0	褐灰色(10YR4/1)	細砂	良	中世	有溝(紡錘形)
C181	包含層	土鍾	8.8	1.5	1.5	0.4	17.7	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C182	包含層	土鍾	(6.6)	1.7	1.9	0.6	(19.3)	灰白色(2.5Y8/2)	礫	良	中世	管状(紡錘形)
C183	包含層	土鍾	5.7	1.8	1.8	0.6	16.7	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂	良	中世	管状(紡錘形)
C184	包含層	土鍾	6.4	2.1	2.1	0.6	23.3	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C185	包含層	土鍾	(5.2)	1.9	1.8	0.5	(15.7)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良	中世	管状(紡錘形)
C186	包含層	土鍾	(4.9)	2.0	1.9	0.7	(17.0)	褐灰色(10YR5/1)	粗砂	良	中世	管状(紡錘形)
C187	包含層	土鍾	5.2	2.0	2.0	0.5	18.7	鈍い黄褐色(10YR7/4)	粗砂	良	中世	
C188	包含層	土鍾	(4.8)	1.3	1.3	0.3	(8.1)	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C189	包含層	土鍾	4.5	1.5	(1.5)	0.4	(6.6)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良	中世	管状(紡錘形)
C190	包含層	土鍾	4.5	1.1	1.2	0.4	5.8	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C191	包含層	土鍾	(4.4)	1.2	1.1	0.4	(5.2)	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C192	包含層	土鍾	4.3	1.7	1.6	0.3	8.8	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C193	包含層	土鍾	3.9	1.4	(1.1)	0.4	(6.9)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C194	包含層	土鍾	(3.0)	1.0	1.0	0.4	(2.2)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C195	包含層	土鍾	3.1	1.2	1.1	0.3	3.8	鈍い黄褐色(10YR7/2)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C196	包含層	土鍾	(3.5)	1.2	1.1	0.4	(5.2)	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C197	包含層	土鍾	(3.8)	1.1	1.2	0.4	(4.3)	黒色(N2/0)	細砂	良	中世	管状(紡錘形)
C198	包含層	土鍾	(3.4)	1.3	0.9	0.5	(5.1)	黄灰色(2.5Y4/1)	粗砂	良	中世	管状(紡錘形)
C199	包含層	円板形	5.2	5.2	2.1	-	66.3	灰色(5Y4/1)	粗砂	良	近世	瓦片転用
C200	包含層	面子	5.3	4.5	1.4	-	48.4	鈍い赤褐色(2.5YR5/3)	粗砂	良	近世	備前焼片転用
C201	包含層	面子	2.5	2.2	1.0	-	6.8	灰色(N6/)	細砂	良	近世	須恵器片転用
C202	包含層	面子	2.7	2.5	0.9	-	6.9	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	良	近世	須恵器片転用
C203	包含層	羽口	(6.0)	(6.6)	(7.7)	(2.8)	(116.6)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	中世	
C204	包含層	軒平瓦	(7.0)	(7.8)	4.9	-	(300.0)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	礫、細砂	良	中世	



遺物観察表

中屋調査区金属製品一覧表

掲載 番号	遺構名	器種	材質	法量(cm)			重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
M101	竪穴住居-128	鍬	鉄	(3.4)	1.4	0.4	(4.2)	弥・後・II	
M102	竪穴住居-130	鍬先	鉄	4.1	(2.0)	0.3	(10.4)	弥・後・II	
M103	土壇-221	鍬	銅	(3.3)	(1.6)	0.2	0.8	弥・後・II	
M104	竪穴住居-143	鈍	鉄	19.0	0.9	0.3	19.6	古・前・I	
M105	竪穴住居-146	鍬	鉄	5.7	1.5	0.3	5.0	古・前・I	
M106	竪穴住居-147	鈍	鉄	14.8	1.0	0.3	19.6	古・前・I	
M107	竪穴住居-153	鈍	鉄	(10.7)	1.1	0.3	(11.5)	古・前・II	
M108	竪穴住居-155	鍬	鉄	(6.0)	(2.2)	(0.7)	(10.0)	古・前・前	
M109	竪穴住居-157	鈍	鉄	(10.0)	0.9	0.3	(11.9)	古・前・II	
M110	竪穴住居-157	鈍	鉄	(4.5)	1.3	0.7	(6.7)	古・前・II	
M111	竪穴住居-163	鍬	鉄	(3.5)	1.5	0.3	3.0	古・中・II	
M112	竪穴住居-164	鍬	鉄	(4.6)	2.0	0.5	(8.2)	古・中・II	
M113	竪穴住居-179	鎌	鉄	(5.7)	2.4	0.3	(10.1)	古・後・III	
M114	竪穴住居-186	鎌	鉄	(5.9)	3.0	0.4	(18.6)	古・後・III	
M115	竪穴住居-186	鍬	鉄	(6.7)	(2.9)	0.4	(17.9)	古・後・III	
M116	土器溜り	鍬	鉄	3.3	1.4	0.4	2.4	古・前・前	
M117	包含層	鍬	鉄	4.3	1.5	0.4	3.5	古・前・前	
M118	包含層	鍬	鉄	(3.1)	1.3	0.3	(2.7)	古・前・前	
M119	包含層	鍬	鉄	(2.8)	1.4	0.3	(2.5)	古・前・前	
M120	包含層	鍬	鉄	(3.4)	1.4	0.3	(2.9)	古・前・前	
M121	包含層	鍬	鉄	(4.6)	2.0	0.4	(3.3)	古	
M122	包含層	鍬	鉄	(6.7)	1.8	0.6	(7.2)	古・前・前	
M123	包含層	鍬	鉄	3.3	1.0	0.8	2.3	古	
M123	包含層	鍬	鉄	7.4	2.1	0.4	16.1	古	
M124	包含層	鍬	鉄	(6.2)	2.2	0.6	(11.9)	古・後~	
M125	包含層	鍬	鉄	(5.6)	(1.8)	(0.4)	(11.9)	古・後~	
M126	包含層	鍬	鉄	(4.8)	(1.4)	(0.4)	(3.8)	古・後~	
M127	包含層	鍬	鉄	(10.2)	1.0	0.4	(11.6)	古・後~	
M128	包含層	斧	鉄	5.3	1.6	0.3	9.3	古・前~	
M129	包含層	斧	鉄	9.1	(3.3)	0.6	(29.0)	古・前~	
M130	包含層	鑿	鉄	10.3	1.2	1.0	(26.4)	古・前~	
M131	包含層	鈍	鉄	(3.9)	1.8	0.3	(6.0)	古・前~	
M132	包含層	鎌	鉄	(5.7)	2.6	0.4	(15.5)	古・前	
M133	包含層	摘鎌	鉄	2.3	(2.3)	0.2	4.7	古・前	
M134	水田	鍬先	鉄	4.0	9.6	0.6	(54.9)	古・前	
M135	包含層	紡錘車	鉄		4.8	0.9	(22.6)	古・中~後	
M136	包含層	紡錘車	鉄	(4.8)	4.3	0.5	(12.7)	古・中~後	
M137	土壇-281	金具	鉄	(4.3)	0.8	0.4	(7.3)	弥・後	
M138	土壇-288	釘	鉄	(7.5)	0.8	0.8	(12.2)	古代	
M139	溝-138~227	釘	鉄	(5.6)	1.5	1.0	(22.1)	古代	
M140	溝-138~227	斧	鉄	7.7	4.3	0.3	(89.5)	古代	
M141	包含層	帯金具	銅	4.1	3.8	0.6	13.8	古代	巡方
M142	ビット	帯金具	銅	2.2	1.5	0.3	1.3	古代	丸靱
M143	包含層	銭	銅	2.4		0.1	(1.5)	古代	萬年通寶(760年)
M144	土壇墓-12	釘	鉄	(5.0)	0.6	0.7	(4.8)	中世	
M145	土壇墓-12	釘	鉄	(4.8)	0.9	1.0	(6.5)	中世	
M146	土壇墓-12	釘	鉄	(4.6)	0.7	0.4	(4.6)	中世	
M147	土壇墓-12	釘	鉄	(5.5)	1.0	1.0	(7.9)	中世	
M148	土壇墓-12	釘	鉄	(6.0)	1.0	0.8	(10.3)	中世	
M149	土壇墓-12	釘	鉄	(6.5)	0.6	0.7	(3.2)	中世	
M150	土壇墓-12	釘	鉄	(5.7)	0.9	0.8	(6.5)	中世	
M151	土壇墓-12	釘	鉄	(6.4)	0.7	0.5	(3.3)	中世	
M152	土壇墓-12	釘	鉄	(6.3)	0.8	0.7	(5.2)	中世	
M153	土壇墓-12	釘	鉄	(7.6)	0.8	0.8	(8.9)	中世	
M154	土壇墓-12	釘	鉄	(8.3)	1.1	0.8	(9.2)	中世	
M155	土壇墓-12	釘	鉄	(6.8)	1.0	0.8	(10.7)	中世	
M156	土壇墓-12	釘	鉄	(8.6)	1.0	0.9	(18.4)	中世	
M157	土壇墓-12	釘	鉄	(9.2)	0.8	1.0	(10.7)	中世	
M158	土壇墓-12	釘	鉄	(9.0)	0.9	0.8	(13.8)	中世	
M159	土壇墓-15	刀子	鉄	(23.0)	2.1	0.7	(53.7)	中世	

中屋調査区金属製品一覧表

掲載 番号	遺構名	器種	材質	法量(cm)			重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
M160	土墳墓-15	刀子	鉄	(5.2)	1.3	0.7	(6.3)	中世	
M161	溝-70	煙管	銅	12.8	1.2	-	20.3	中世	火皿径10mm、吸口径6mm
M162	溝-70	銭	銅	2.3		0.1	2.3	中世	開元通寶(唐621年)
M163	溝-70	銭	銅	2.3		0.1	3.2	中世	嘉祐通寶(北宋1056年)
M164	溝-70	銭	銅	2.5		0.1	3.2	中世	元豊通寶(北宋1078年)
M165	溝-70	銭	銅	2.4		0.2	(2.4)	中世	元祐通寶(北宋1086年)
M166	溝-70	銭	銅	2.5		0.2	2.6	中世	政和通寶(北宋1111年)
M167	溝-70	銭	銅	2.3		0.1	(1.4)	中世	咸平元寶(北宋998年)
M168	包含層	釘	鉄	(5.1)	1.0	0.7	(5.4)	中世	
M169	包含層	釘	鉄	(5.1)	0.7	0.4	(6.1)	中世	
M170	包含層	釘	鉄	(6.0)	0.5	0.5	(7.9)	中世	
M171	包含層	釘	鉄	(5.7)	0.7	0.7	(6.4)	中世	
M172	包含層	釘	鉄	(5.9)	0.6	0.4	(3.1)	中世	
M173	包含層	釘	鉄	(8.8)	0.6	0.5	(14.2)	中世	
M174	包含層	釘	鉄	(7.7)	0.9	0.7	(20.0)	中世	
M175	包含層	釘	鉄	(7.1)	0.7	0.7	(8.2)	中世	
M176	包含層	釘	鉄	(6.6)	0.7	0.6	(6.3)	中世	
M177	包含層	釘	鉄	(5.5)	0.8	0.7	(6.8)	中世	
M178	包含層	釘	鉄	(13.1)	0.7	0.6	(19.2)	中世	
M179	包含層	釘	鉄	2.7	0.2	0.2	0.4	中世	
M185	包含層	貴金具	銅	3.3	2.0	0.5	5.6	中世	
M186	水田	鋤先	鉄	(5.4)	(8.4)	0.2	(43.4)	中世	
M187	包含層	火打金	鉄	(4.2)	2.4	0.5	(26.6)	中世	
M188	包含層	銭	銅	2.4		0.1	3.4	中世	開元通寶(唐621年)
M189	包含層	銭	銅	2.5		0.2	3.5	中世	至道元寶(北宋995年)
M190	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.3	中世	景德元寶(北宋1004年)
M191	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.5	中世	景德元寶(北宋1004年)
M192	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.4	中世	天聖元寶(北宋1023年)
M193	包含層	銭	銅	2.5		0.1	2.9	中世	景祐元寶(北宋1034年)
M194	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.3	中世	景祐元寶(北宋1034年)
M195	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.2	中世	皇宋通寶(北宋1039年)
M196	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.2	中世	皇宋通寶(北宋1039年)
M197	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.7	中世	皇宋通寶(北宋1039年)
M198	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.0	中世	嘉祐通寶(北宋1056年)
M199	包含層	銭	銅	2.4		0.1	4.1	中世	元豊通寶(北宋1078年)
M200	包含層	銭	銅	2.6		0.1	3.4	中世	元豊通寶(北宋1078年)
M201	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.3	中世	元豊通寶(北宋1078年)
M202	包含層	銭	銅	2.4		0.1	3.1	中世	元祐通寶(北宋1086年)
M203	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.9	中世	紹聖元寶(北宋1094年)
M204	包含層	銭	銅	2.4		0.2	3.5	中世	紹聖元寶(北宋1094年)
M205	包含層	銭	銅	2.2		0.1	3.1	中世	元符通寶(北宋1098年)
M206	包含層	銭	銅	2.5		0.1	3.5	中世	聖宋元寶(北宋1101年)
M207	包含層	銭	銅	2.4		0.1	4.9	中世	政和通寶(北宋1111年)
M208	包含層	銭	銅	2.4		0.1	3.1	中世	政和通寶(北宋1111年)
M209	包含層	銭	銅	2.4		0.1	3.0	中世	嘉泰通寶(南宋1201年)
M210	包含層	銭	銅	2.5		0.1	(2.4)	中世	皇宋通寶(北宋1039年)
M211	包含層	銭	銅	2.5		0.1	2.8	中世	紹聖元寶(北宋1094年)
M212	包含層	銭	銅	2.4		0.1	2.8	中世	聖宋元寶(北宋1101年)
M213	包含層	銭	銅	2.4		0.2	3.1	中世	大觀通寶(北宋1107年)
M214	包含層	銭	銅	2.5		0.1	2.0	中世	大觀通寶(北宋1107年)
M215	包含層	銭	銅	2.5		0.1	(3.1)	中世	永樂通寶(明1408年)

遺構一覽表

高田調査区竪穴住居一覽表

遺構名	平面形	規模(㎝)		主軸	面積(㎡)	標高(㎝)	主柱	柱間(㎝)		付屬施設					時期	備考
		長さ	幅					最大	最小	高床部	方形土壇	中央穴	焼土面	カマド		
竪穴住居-1	方形	-	-	-	-	365.0	1/4	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-2	方形	-	-	-	-	370.0	1/4	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-3	方形	420	-	N-25°-W	-	366.0	2/4	182	-	-	○	-	-	-	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-4	方形	520	495	N-30°-W	(23.9)	360.0	4/4	290	232	-	-	-	-	北北西	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-5	方形	438	395	N-17°-W	16.1	363.0	4/4	207	168	-	-	-	2	北東	古・後・Ⅲ	鍛冶炉2基
竪穴住居-6	方形	512	478	N-35°-W	23.0	364.0	4/4	242	225	-	○	-	-	北西	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-7	方形	398	395	N-26°-W	14.5	338.0	4/4	233	172	-	-	-	-	北北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-8	方形	372	285	N-1°-E	10.0	369.0	0	-	-	-	-	-	1	東南東	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-9	不整形	410	353	N-29°-W	13.0	356.0	3/4	205	185	-	-	-	-	北東	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-10	不整形	532	440	N-37°-W	22.4	337.0	4/4	305	210	-	○	-	-	東南東	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-11	方形	350	-	-	-	358.0	-	-	-	-	-	-	-	北北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-12	方形?	(425)	-	-	-	347.0	2/4	160	-	-	-	-	-	北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-13	方形	422	-	N-60°-E	-	340.0	1/4	-	-	-	-	-	-	北北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-14	方形	500	423	N-13°-W	20.1	366.0	4/4	270	191	-	○	-	1	東北東	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-15	方形	465	457	N-11°-E	18.7	362.4	4/4	254	240	-	-	-	1	北	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-16	方形	410	400	N-9°-E	15.1	361.7	4/4	197	174	-	-	-	1	西北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-17	不整形	500	450	N-10°-E	19.6	372.5	4/4	262	226	-	-	-	-	北	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-18	方形	567	(510)	N-6°-W	(26.7)	361.8	3/4	268	248	-	-	-	-	西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-19	不整形	423	420	N-9°-E	(16.6)	371.4	0	-	-	-	-	-	1	北	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-20	方形	537	525	N-1°-E	(27.8)	385.0	0	-	-	-	-	-	1	-	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-21	不整形	457	(395)	N-5°-E	(11.2)	367.0	0	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-22	方形	392	333	N-9°-E	(12.4)	381.0	0	-	-	-	-	-	1	北	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-23	不整形	497	475	N-3°-W	21.8	363.0	4/4	260	215	-	○	-	-	北	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-24	方形	362	305	N-11°-W	(10.5)	380.0	0	-	-	-	-	-	-	北	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-25	方形	(535)	508	N-1°-W	(26.9)	361.0	3/4	288	273	-	-	-	-	北	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-26	方形	(460)	425	N-3°-E	(18.4)	350.0	0	-	-	-	-	-	-	北	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-27	(方形)	-	435	N0°	-	374.0	-	-	-	-	-	-	-	北	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-28	方形	347	(342)	N-1°-E	(11.3)	360.0	0	-	-	-	-	-	-	西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-29	台形	(535)	422	N-5°-E	(19.5)	372.0	1/2	-	-	-	-	-	-	西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-30	不整形	412	395	N-3°-W	14.8	376.0	4/4	212	168	-	-	-	-	北	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-31	不整形	397	310	N-1°-W	(11.1)	374.5	0	-	-	-	-	-	-	北	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-32	方形	415	340	N-41°-W	(14.4)	373.8	0	-	-	-	-	-	3	北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-33	(不整形)	558	-	N-45°-W	-	370.0	1/	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-34	(方形)	360	-	N-36°-W	-	380.0	0	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-35	-	-	-	-	-	365.0	-	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-36	(方形)	350	-	N-33°-W	-	356.0	-	-	-	-	-	-	-	北北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-37	方形	525	450	N-39°-W	(22.1)	360.0	-	-	-	-	-	-	-	南西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-38	-	-	-	-	-	366.0	-	-	-	-	○	-	-	-	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-39	不整形	418	-	N-41°-W	-	359.0	2/4	196	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-40	方形	-	-	-	-	356.0	-	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-41	方形	368	-	N-43°-E	-	356.0	-	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-42	方形	384	375	N-12°-W	13.0	340.0	2/4	193	-	-	-	-	-	東北東	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-43	方形	535	532	N-35°-W	(27.9)	362.0	4/4	192	133	-	-	-	-	北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-44	方形	(412)	410	N-33°-E	(15.4)	366.0	0	-	-	-	-	-	1	西北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-45	台形	490	490	N-27°-E	21.0	359.0	0	-	-	-	-	-	-	南西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-46	方形	515	515	N-42°-E	(25.9)	362.0	2/4	-	-	-	-	-	-	北西	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-47	方形	455	-	N-15°-W	-	366.0	0	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-48	方形	410	398	N-36°-E	(15.6)	362.0	0	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-49	方形	346	-	N-33°-W	-	357.0	2/4	160	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-50	方形	542	365	N-29°-W	(18.7)	348.0	-	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-51	方形	-	-	-	-	364.0	-	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-52	-	-	-	-	-	333.5	-	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-53	-	-	-	-	-	348.0	-	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-54	-	-	-	-	-	352.0	2/4	221	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-55	-	293	-	-	-	341.3	-	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-56	方形	380	347	N-39°-W	(12.9)	362.0	0	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-57	不整形	512	432	N-27°-E	(20.1)	359.0	3/4	280	260	-	-	-	1	西北西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-58	方形	412	375	N-39°-E	14.7	344.0	4/4	182	159	-	-	-	-	北北東	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-59	台形	425	-	N-54°-W	-	358.0	-	-	-	-	-	-	-	西北西	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
竪穴住居-60	方形	370	338	N-45°-W	11.5	360.0	0	-	-	-	-	-	-	北西	古・後・Ⅱ	

高田調査区竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)		主軸	面積 (㎡)	標高 (cm)	支柱	柱間(cm)		付属施設					時期	備考
		長さ	幅					最大	最小	高床部	方形土壇	中央穴	焼土面	カマド		
竪穴住居-61	方形	498	447	N-30°-E	20.9	356.0	2/4	224	-					西北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-62	方形	302	272	N-1°-E	7.0	350.0	0							北	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-63	方形	537	475	N-14°-W	(25.7)	344.0	4/4	276	196				-	-	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-64	方形	440	425	N-10°-W	17.0	339.9	4/4	255	186					北北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-65	方形	500	-	-	-	342.7	-	-	-					-	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-66	方形	450	445	N-16°-W	19.0	342.3	4/4	266	185					北	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-67	方形	-	-	-	-	333.8	-	-	-					-	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-68	方形	410	-	N-88°-W	-	326.0	0							西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-69	方形	510	466	N-18°-W	22.8	325.8	4/4	277	220					北北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-70	方形	400	317	N-22°-E	(11.8)	348.0	0							西北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-71	方形	335	284	N-25°-E	(8.6)	338.0	0							北西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-72	方形	502	455	N-21°-W	20.6	338.0	4/4	225	182					北北西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-73	方形	380	342	N-41°-E	12.5	342.0	2/4	173	-					北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-74	方形	440	357	N-26°-W	14.5	340.0	3/4	187	130					北北西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-75	方形	446	380	N-16°-E	(15.7)	335.2	4/4	240	170					西	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-76	方形	368	340	N-5°-E	12.0	348.0	0						2		古・後・Ⅲ	
竪穴住居-77	不整形	(422)	355	N-23°-E	(14.2)	355.0	0						3		古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-78	方形	480	470	N-1°-W	21.1	340.0	4/4	253	222					西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-79	方形	370	326	N-24°-E	11.0	344.0	0							北西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-80	方形	445	395	N-37°-W	15.6	339.0	1/2	-	-					南西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-81	方形	382	-	N-8°-W	-	338.0	-	-	-					-	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-82	-	-	-	-	-	-	-	-	-					-	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-83	方形	497	-	N-25°-W	-	326.0	1/	-	-					北北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-84	-	-	-	-	-	330.0	-	-	-					-	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-85	方形	(446)	-	N-22°-W	-	328.0	1/	-	-					北北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-86	方形	505	472	N-42°-W	23.5	317.6	4/4	240	205					北西	古・後・Ⅱ	
竪穴住居-87	方形	438	410	N-13°-W	15.7	322.8	4/4	190	145					東北東	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-88	方形	(420)	(350)	N-42°-E	(14.7)	336.0	3/4	252	162					北北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-89	方形	392	373	N-3°-W	13.7	320.6	4/4	223	139					東	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-90	方形	362	345	N-13°-W	11.6	318.7	4/4	175	122					北北西	古・後・Ⅲ	
竪穴住居-91	-	-	-	-	-	316.0	-	-	-					-	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-92	方形	594	435	N-24°-E	(25.5)	327.0	3/4	313	245					西北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-93	方形	440	425	N-25°-E	(19.6)	310.0	3/4	228	210					西北西	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居-94	-	-	-	-	-	336.0	1/(4)	-	-					-	古・後・Ⅱ～Ⅲ	

高田調査区中央穴一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)			炭灰	土堤	焼土	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
竪穴住居-3	円	50	49	35				古・後・Ⅱ	

高田調査区方形土壇一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)			位置	ビット	石敷	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
竪穴住居-6	不整楕円	98	95	11	南南東			古・後・Ⅲ	
竪穴住居-10	楕円	103	47	14	東			古・後・Ⅱ	
竪穴住居-14	方形	97	75	11	南東			古・後・Ⅲ	
竪穴住居-23	楕円	68	59	29	南			古・後・Ⅱ	
竪穴住居-38	方形	130	66	40	南			古・後・Ⅲ	

## 高田調査区カマド一覧表

遺構名	位置	主軸	規模(cm)					類型	支脚	土壌	時期	備考
			全長	袖長	燃烧部幅	煙道幅	煙道傾斜					
竪穴住居-4	北北西	R1°	-	70	84	-	-	-	-	古・後・Ⅲ	袖一部検出	
竪穴住居-5	北東	L2°	55	47	54	-	-	AⅡ	○	古・後・Ⅲ		
竪穴住居-6	北西	R4°	72	28	58	50	30°	AⅡ		古・後・Ⅲ		
竪穴住居-7	北北西	L2°	139	66	58	26	19°	BⅠ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-8	東南東	R2°	162	42	63	33	5°	BⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-9	北東	L3°	150	34	69	43	5°	BⅡ	○	古・後・Ⅲ		
竪穴住居-10	東南東	L5°	92	65	73	25	20°	AⅡ	○	古・後・Ⅱ		
竪穴住居-11	(北北西)	R1°	103	40	61	40	20°	AⅠ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-12	(北西)	R7°	94	66	58	30	12°	AⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ	支脚抜き取り痕	
竪穴住居-13	(北北西)	L7°	86	55	53	36	16°	BⅠ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-14	東北東	0°	84	50	90	47	13°	AⅡ	○	古・後・Ⅲ		
竪穴住居-15	北	L2°	124	46	53	43	21°	BⅡ	○	古・後・Ⅱ		
竪穴住居-16	西北西	R7°	147	63	70	53	10°	BⅠ		古・後・Ⅱ～Ⅲ	支脚抜き取り痕	
竪穴住居-17	北	R1°	114	78	78	48	30°	AⅡ	○	古・後・Ⅱ	支脚抜き取り痕	
竪穴住居-18	西	R3°	207	90	78	43	8°	BⅡ		古・後・Ⅱ		
竪穴住居-19	北	R4°	70	40	46	-	21.5°	AⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-22	北	L2°	60	82	60	33	20°	AⅠ	○	古・後・Ⅲ		
竪穴住居-23	北	R8°	92	68	79	13	28°	AⅡ	○	古・後・Ⅱ		
竪穴住居-24	北	R2°	32	14	42	-	-	AⅡ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-25	北	L1°	129	62	73	61	15°	BⅡ	○	古・後・Ⅱ		
竪穴住居-26	北	R6°	-	-	-	-	-	-	-	古・後・Ⅱ～Ⅲ	袖一部検出	
竪穴住居-27	北	L5°	116	72	69	52	10°	BⅡ	○	古・後・Ⅲ		
竪穴住居-28	西	R4°	114	48	72	47	20°	BⅡ	○	古・後・Ⅱ		
竪穴住居-29	西	L2°	127	65	85	36	14°	BⅠ	○	古・後・Ⅱ		
竪穴住居-30	北	R3°	83	71	57	32	30°	AⅡ		古・後・Ⅱ	支脚抜き取り痕	
竪穴住居-31	北	0°	-	70	-	-	-	-	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ	袖一部検出	
竪穴住居-32	北西	L16°	122	47	-	32	6°	BⅠ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ	袖半分損壊	
竪穴住居-36	北北西	0°	90	44	64	-	-	BⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-37	南西	L1°	46	70	52	-	17.0°	AⅠ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-42	東北東	L2°	-	-	88	50	8°	BⅡ	○	古・後・Ⅲ	袖未確認	
竪穴住居-43	北西	R4°	124	36	69	42	23°	BⅡ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-44	西北西	R5°	139	64	91	62	20°	BⅠ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-45	南西	R2°	119	45	62	43	5°	BⅡ	○	古・後・Ⅱ	支脚抜き取り痕	
竪穴住居-46	北西	0°	132	52	90	-	-	-	○	古・後・Ⅲ		
竪穴住居-57	西北西	R2°	141	82	58	52	28°	BⅠ	○	古・後・Ⅱ		
竪穴住居-58	北北東	R1°	166	46	86	44	2°	BⅡ	○	古・後・Ⅲ		
竪穴住居-59	西北西	R5°	86	80	70	63	8°	AⅠ		古・後・Ⅱ～Ⅲ	被熱なし	
竪穴住居-60	北西	R3°	102	56	70	45	9°	BⅠ		古・後・Ⅱ		
竪穴住居-61	西北西	R1°	90	56	48	40	2°	BⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-62	北	L2°	108	48	65	50	35°	BⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-64	北北西	R11°	92	60	61	-	-	BⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-66	北	R7°	120	68	60	40	8°	BⅡ		古・後・Ⅲ		
竪穴住居-68	(西)	L4°	-	56	77	-	-	BⅡ		古・後・Ⅱ	上半分損壊	
竪穴住居-69	北北西	0°	82	56	71	50	-	BⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-70	西北西	0°	56	48	62	60	20°	AⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-71	北西	R21°	78	28	78	70	30°	BⅡ		古・後・Ⅱ		
竪穴住居-72	北北西	L1°	128	66	96	-	-	BⅡ		古・後・Ⅱ		
竪穴住居-73	北西	0°	94		87	-	-	BⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ	袖なし	
竪穴住居-74	北北西	R12°	72	50	47	32	42°	AⅡ		古・後・Ⅱ		
竪穴住居-75	西	L7°	118	82	72	-	-	BⅡ		古・後・Ⅲ		
竪穴住居-78	西	0°	100	68	59	30	7°	BⅡ		古・後・Ⅱ		
竪穴住居-79	北西	L15°	96	50	72	66	65°	BⅡ		古・後・Ⅱ	被熱なし	
竪穴住居-80	南西	R4°	36	20	43	30	32°	AⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-83	北北西	R2°	84	64	67	-	-	AⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-85	北北西	L2°	126	54	63	44	-	BⅡ		古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-86	北西	R1°	114	63	98	73	23°	BⅡ	○	古・後・Ⅱ		
竪穴住居-87	東北東	R22°	-	50	77	-	-	Ⅱ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ	上半分損壊	
竪穴住居-88	北北西	L4°	100	54	58	42	5°	BⅡ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-89	東	R2°	-	-	75	-	44°	BⅡ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-90	北北西	R1°	100	51	62	50	28°	BⅡ	○	古・後・Ⅲ		
竪穴住居-92	西北西	L2°	121	61	80	48	20°	BⅡ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ		
竪穴住居-93	西北西	L5°	82	60	72	53	18°	AⅠ	○	古・後・Ⅱ～Ⅲ		

高田調査区掘立柱建物一覧表

遺構名	規模			柱間距離(cm)		面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方			時期	備考
	間数	桁行(cm)	梁間(cm)	桁	梁			形	径(cm)	深さ(cm)		
掘立柱建物-1	5×3	1030	590	210~190	230~180	60.6	N-8°-W	方形	56~33	35	平安	東庇、身舎37.0㎡
掘立柱建物-2	(3)×(2)	700	390	235~230	205~185	-	N-85°-E	方形	57~31	37	平安	
掘立柱建物-3	5×(1)	1055	-	220~205	(200)	-	N-86°-E	円	52~35	35	平安	
掘立柱建物-4	-	-	-	-	-	-	N-16°-W	方形	87~50	38	古代	
掘立柱建物-5	4×2	982	520	295~210	267~240	49.6	N-80°-W	方形	217~50	72	古代	総柱か
掘立柱建物-6	2×2	520	465	288~232	260~203	23.8	N-20°-E	円	51~34	42	古代	
掘立柱建物-7	2×(1)	580	(205)	300~280	205~200	-	N-14°-W	方形	94~76	65	古代	
掘立柱建物-8	2×2	415	353	210~200	190~150	15.1	N-11°-W	円	68~52	66	古代	総柱
掘立柱建物-9	2×2	500	463	250	240~190	(23.3)	N-22°-E	円	41~35	41	古代	
掘立柱建物-10	2×2	342	324	190~150	174~148	10.9	N-84°-W	方形	62~25	59	古代	総柱
掘立柱建物-11	3×2	777	525	335~186	270~260	40.6	N-87°-W	方形	95~49	21	古代	総柱
掘立柱建物-12	3×2	692	360	235~205	200~155	24.0	N-73°-W	円	73~29	41	古代	建て替え
掘立柱建物-13	3×2	690	355	245~205	195~155	23.3	N-71°-W	楕円	75~28	45	古代	建て替え
掘立柱建物-14	4×2	835	395	245~185	200~195	33.0	N-4°-E	方形	92~35	71	古代	
掘立柱建物-15	4×3	690	378	180~150	132~99	25.0	N-65°-E	方形	80~37	63	古代	
掘立柱建物-16	(3)×2	-	330	190~108	165	-	N-60°-E	方形	79~42	52	古代	
掘立柱建物-17	4×(1)	746	-	212~160	270	-	N-81°-W	方形	60~50	41	古代	
掘立柱建物-18	(2)×(1)	-	-	263~240	240	-	N-10°-E	楕円	68~27	70	古代	
掘立柱建物-19	2×-	490	-	260~230	-	-	N-7°-E	方形	63~43	41	古代	
掘立柱建物-20	2×2	365	315	190~175	165~142	(11.4)	N-4°-E	円	44~27	37	中世	総柱
掘立柱建物-21	3×3	430	355	130~75	210~110	(14.4)	N-1°-E	円	43~17	-	中世	東庇、身舎10.4㎡
掘立柱建物-22	3×1	880	350	330~225	350	30.7	N-84°-W	円	39~27	33	近世	
掘立柱建物-23	2×1	440	233	255~175	233~225	9.6	N-83°-W	円	39~25	40	近世	
掘立柱建物-24	2×1	285	245	285	245~237	8.1	N-86°-E	楕円	34~27	51	近世	西庇、身舎6.8㎡
掘立柱建物-25	(2)×1	-	392	223~200	392	-	N-36°-E	楕円	45~33	35	中世	
掘立柱建物-26	(2)×2	-	479	202~130	244~235	-	N-38°-E	楕円	39~30	52	中世	
柱穴列-1	4	492	-	136~116	-	-	N-2°-W	円	52~35	11		

高田調査区井戸一覧表

遺構名	規模(cm)			底面海拔高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
井戸-1	(90)	-	(30)	177	(円)	(A b)	○	古・前・II	
井戸-2	80	79	161	226	円	B b	○	江戸	井筒径38cm
井戸-3	101	88	165	126	不整円	A b	△	室町	井筒径48cm(割り抜き)

高田調査区焼成土壌一覧表

遺構名	規模(cm)			底面海拔高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
焼成土壌-1	95	88	20	355	方形	A b	×	古・後	
焼成土壌-2	75/112	53/107	17/21	363/358	方形/方形	A b/A a	△	古・後	2重構造
焼成土壌-3	88/130	66/106	19/23	346/337	方形/不整形	A a/A b	△	古・後	2重構造
焼成土壌-4	115/147	78/95	9/14	350/345	方形/方形	A b/A b	△	古・後	2重構造
焼成土壌-5	122/163	93/131	28/34	311/303	方形/不整形	A a/A a	△	古・後	2重構造
焼成土壌-6	142	63	35	326	長方形	A a	△	古・後	
焼成土壌-7	134	115	34	349	方形	A a	△	古・後	
焼成土壌-8	89	78	16	361	不整円形	A a	△	古・後	
焼成土壌-9	73	65	7	357	不整形	A a	×	古・後	
焼成土壌-10	92	80	9	344	方形	A a	×	古・後	

## 高田調査区土壇一覽表

遺構名	規模(cm)			底面海拔高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
土壇-1	-	-	15	329	-	A b	○	奈良	
土壇-2	97	61	13	335	方形	A b・c	△	古代	
土壇-3	106	87	23	295	不整楕円	A a	×	古代	
土壇-4	128	-	22	348	-	A a	◎	平安	
土壇-5	220	173	27	340	不整方形	A a	×	中世	
土壇-6	460	319	22	357	不整楕円	A b	◎	鎌倉	
土壇-7	234	122	28	223	不整楕円	A a	◎	鎌倉	
土壇-8	103	77	12	377	不整楕円	A b	○	鎌倉	
土壇-9	-	64	10	385	-	A b	○	江戸	
土壇-10	-	-	82	269	-	A a	△	室町	
土壇-11	(308)	-	146	205	-	A a	△	室町	
土壇-12	790	410	116	284	-	A a	△	室町	
土壇-13	320	193	30	370	隅丸方形	A b	×	中世	
土壇-14	221	173	11	377	方形	A b	○	江戸	
土壇-15	288	279	75	264	不整円	A a	○	室町	
土壇-16	202	164	58	322	不整方形	A a	×	中世	
土壇-17	96	92	24	364	円	A a	△	中世	
土壇-18	199	117	104	267	楕円	A B b	×	中世	
土壇-19	668	-	76	292	-	A・a b	◎	室町	
土壇-20	91	101	7	389	(台形)不整方形	A a	×	中世~近世	
土壇-21	69	81	6	390	不整方形	A b	×	中世~近世	
土壇-22	(115)	82	18	371	楕円	A a	△	中世	
土壇-23	115	71	26	363	隅丸方形	A a	○	江戸	
土壇-24	406	308	93	303	楕円	A a	△	江戸	
土壇-25	104	66	15	382	不整楕円	A a	△	中世	
土壇-26	145	95	28	291	隅丸方形	A a	△	中世	

## 高田調査区土器埋納墳

遺構名	規模(cm)			平面形	断面形	出土遺物	時期	備考
	長さ	幅	深さ					
土器埋納墳-1	-	-	-	-	-	土師器皿、甕	平安	胞衣遺構か
土器埋納墳-2	(31)	(21)	(12)	(楕円)	A a	二彩小壺	奈良	地鎮遺構か
土器埋納墳-3	26.2	20.4	18	楕円	A a	須恵器蓋、土師器甕、和同開珎5枚	奈良	胞衣遺構

## 高田調査区土壇墓一覽表

遺構名	規模(cm)			底面海拔高 (cm)	平面形	断面形	主軸	副葬品	時期	備考
	長さ	幅	深さ							
土壇墓-1	97	54	8	370	方形	A a	N-27°-W	-	中世	

高田調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
1	溝-1・2	弥生土器	壺	17.3	7.0	39.0	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	頸部沈線、貝殻圧痕文、黒斑B~C
2	溝-1・2	弥生土器	壺	-	-	(18.0)	鈍橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	刺突文
3	溝-1・2	弥生土器	壺	15.3		(9.5)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	口縁部沈線、頸部沈線
4	溝-1・2	弥生土器	壺	19.0		(10.0)	浅黄色(2.5Y7/3)	粗砂	良好	口縁部沈線、頸部沈線、黒斑B~C
5	溝-1・2	弥生土器	壺			(14.0)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	頸部沈線、刺突文
6	溝-1・2	弥生土器	壺	9.5		(8.7)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	頸部下端刺突文
7	溝-1・2	弥生土器	甕	13.0	-	10.7	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	口縁部沈線
8	溝-1・2	弥生土器	甕	12.6		(5.2)	淡橙色(5YR8/3)	粗砂	良好	口縁部擬凹線、黒斑B
9	溝-1・2	弥生土器	甕	(18.6)		(9.0)	鈍黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部沈線
10	溝-1・2	弥生土器	甕	-	-	(5.7)	鈍橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
11	溝-1・2	弥生土器	甕	19.7		(6.4)	鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
12	溝-1・2	弥生土器	高杯	24.8		(20.3)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	口縁部上面沈線、脚部透かし孔5方向5段、ヘラガキ文
13	溝-1・2	弥生土器	高杯		12.6	(18.5)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	脚部ヘラガキ文
14	溝-1・2	弥生土器	高杯		12.8	(9.6)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	脚部未完通の透かし孔、黒斑C
15	溝-1・2	弥生土器	台付鉢	(10.4)		(9.0)	橙色(2.5YR7/8)	粗砂	良好	
16	溝-1・2	弥生土器	(脚部)	6.1	(6.2)		灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	脚端部沈線状の凹み
17	溝-1・2	弥生土器	台付鉢	(11.3)	4.8	7.3	鈍橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
18	溝-1・2	弥生土器	鉢	10.2	3.7	7.8	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良好	口縁部擬凹線、黒斑A~C
19	溝-1・2	弥生土器	鉢			(20.4)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	内面粗いヘラミガキ
20	溝-5	弥生土器	壺	19.5		(7.2)	鈍黄褐色(10YR7/3)	砂礫	良好	
21	溝-5	弥生土器	壺	23.2		(7.0)	鈍黄褐色(10YR7/4)	粗砂	良好	
22	溝-5	弥生土器	甕	14.0	5.1	(23.6)	灰白色(10YR7/2)	粗砂、細砂	良好	カゴメ、黒斑B~C
23	溝-5	弥生土器	甕	13.8		(6.8)	淡赤褐色(2.5YR7/4)	細砂	良好	器壁磨滅
24	溝-5	弥生土器	高杯	16.8		(6.0)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	スズ
25	溝-5	弥生土器	高杯		12.5	(3.5)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	黒斑C
26	溝-5	弥生土器	鉢	14.1	3.6	7.5	灰白色(7.5YR8/2)	粗砂、細砂	良好	スズB'
27	包含層	弥生土器	壺	-	6.6	(21.1)	鈍橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	器壁磨滅、黒斑BC
28	包含層	弥生土器	壺	-	-	(15.3)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	櫛描沈線、波状文、刺突文
29	包含層	弥生土器	壺	-	-	(4.5)	鈍橙色(2.5YR6/4)	細砂	良好	口唇部刻み目、頸部波状文
30	包含層	弥生土器	壺	-	-	(5.9)	鈍橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	口縁~頸部外面に刻み目、波状文、櫛描沈線
31	包含層	弥生土器	壺	-	-	(15.0)	暗赤褐色(5YR3/6)	細砂	良好	頸部貼り付け突帯、体部刺突文
32	包含層	弥生土器	壺	(22.7)	-	(7.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	口唇部刺突文、頸部貼り付け突帯
33	包含層	弥生土器	壺	8.9	5.5	(16.9)	灰白色(5Y8/2)	細砂	良好	頸部凹線、黒斑B、赤色顔料
34	包含層	弥生土器	鉢	8.7		(4.7)	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	良好	竹管文
35	包含層	弥生土器	台付鉢	-	12.8	(12.0)	鈍橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	透かし孔3
36	包含層	弥生土器	壺	8.0	-	(8.8)	橙色(5YR6/2)	粗砂	良好	
37	包含層	弥生土器	甕	(12.0)	3.6	(9.5)	鈍黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	
38	包含層	弥生土器	壺	12.7	8.5	31.2	鈍橙色(5YR7/4)	粗砂、細砂	良好	黒斑BC
39	竪穴住居-3	須恵器	杯	12.0		(2.0)	赤灰色(5R6/1)	細砂	良好	
40	竪穴住居-3	須恵器	高杯	12.4	8.4	7.4	明青灰色(10BG7/1)	粗砂	良好	ロクロ順回り、完形品
41	竪穴住居-3	須恵器	(脚部)	9.7		(3.3)	灰白色(N8)	粗砂	良好	
42	竪穴住居-4	須恵器	蓋	12.6	-	5.2	灰白色(N8)	粗砂	良好	歪み大、ロクロ順回り
43	竪穴住居-4	須恵器	蓋	13.3	-	4.2	灰白色(N7)	細砂	良好	歪み大、ロクロ順回り
44	竪穴住居-4	須恵器	蓋	13.4	-	4.3	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
45	竪穴住居-4	須恵器	杯	12.3		(3.3)	灰白色(N7)	粗砂	不良	ロクロ逆回り
46	竪穴住居-4	須恵器	杯	11.2	-	4.4	灰白色(N7)	細砂	良好	ロクロ順回り
47	竪穴住居-4	須恵器	杯	10.6	-	3.8	灰色(10Y6/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
48	竪穴住居-4	須恵器	杯	12.5		(2.8)	灰白色(N8)	粗砂	不良	
49	竪穴住居-4	須恵器	高杯		(13.6)	(6.9)	灰白色(N6)	細砂	やや不良	方形透かし
50	竪穴住居-4	須恵器	甕	(30.0)		(13.8)	灰白色(N8)	粗砂	良好	平行タタキメ
51	竪穴住居-5	須恵器	蓋	12.9		4.0	灰白色(N7)	粗砂	不良	ロクロ逆回り、竪穴住居-4と接合
52	竪穴住居-5	須恵器	蓋	(13.4)		(3.8)	灰白色(N8)	礫、粗砂	良好	ロクロ順回り
53	竪穴住居-5	須恵器	蓋	12.5		(3.5)	灰白色(N7)	細砂	やや不良	
54	竪穴住居-5	須恵器	杯	(12.1)		(4.5)	明青灰色(5PB7/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
55	竪穴住居-5	須恵器	高杯	12.6	9.1	8.0	灰白色(10YR8/1)	細砂	不良	ロクロ逆回り
56	竪穴住居-6	須恵器	杯	11.4	-	(3.4)	灰色(N6)	細砂	良好	
57	竪穴住居-6	須恵器	杯	12.7	-	(4.6)	灰白色(10Y7/1)	粗砂	やや不良	外面磨滅
58	竪穴住居-6	須恵器	高杯	14.4	-	(8.9)	灰白色(N8)	砂礫	良好	
59	竪穴住居-6	土師器	壺	10.9	-	(15.0)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	製塩土器、被熱



## 高田調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
60	竪穴住居-6	土師器	甗	22.0	-	(7.9)	橙色(7.5YR7/6)	砂礫	良好	
61	竪穴住居-6	土師器	甗	25.5	-	(15.3)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	砂礫	良好	
62	竪穴住居-9	須恵器	高杯	-	10.4	(9.8)	青灰色(5PB6/1)	細砂	良好	
63	竪穴住居-9	土師器	甗	25.8	-	(29.4)	鈍橙色(10YR7/3)	砂礫	良好	ススC、黒斑B
64	竪穴住居-9	土師器	甗	23.7	-	(18.9)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	粗砂	良好	ススA B、黒斑B
65	竪穴住居-9	土師器	鉢	11.4	-	5.5	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	内外面赤色顔料
66	竪穴住居-9	土師器	鉢	10.6	2.8	5.5	鈍橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
67	竪穴住居-9	土師器	鉢	17.8	-	17.8	鈍橙色(10YR2/7)	粗砂	良好	製塩土器、被熱痕、黒斑A
68	竪穴住居-9	土師器	甗	24.3	-	(25.4)	鈍橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑A
69	竪穴住居-10	須恵器	蓋	14.7	-	4.2	灰白色(N7)	細砂	良好	ロクロ逆回り
70	竪穴住居-10	須恵器	蓋	13.5	-	4.0	灰白色(7.5Y7/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
71	竪穴住居-10	須恵器	杯	12.9	-	3.8	灰白色(N7)	砂礫	やや不良	ロクロ逆回り
72	竪穴住居-10	須恵器	杯	12.4	-	3.4	青灰色(5B6/1)	粗砂	良好	ロクロ順回り
73	竪穴住居-10	須恵器	杯	12.7	-	(3.3)	明青灰色(5B7/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
74	竪穴住居-10	須恵器	杯	12.3	-	4.2	灰色(N6)	細砂	良好	ロクロ順回り、灰をかぶる
75	竪穴住居-10	須恵器	杯	11.6	-	4.0	青灰色(5B5/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り
76	竪穴住居-10	土師器	カマド	-	-	-	灰褐色(7.5YR4/2)	粗砂	良好	
77	竪穴住居-10	土師器	皮袋	5.1~6.9	-	8.2	鈍橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	櫛状工具による文様、穿孔1、黒斑C
78	竪穴住居-13	土師器	甗	26.2	-	(25.0)	鈍橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
79	竪穴住居-13	土師器	カマド	-	-	-	鈍褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	最大長11.0cm、最大幅3.4cm、最大厚3.0cm、黒斑
80	竪穴住居-14	須恵器	高杯	-	-	(6.6)	灰白色(5Y7/1)	細砂	やや不良	
81	竪穴住居-14	土師器	甗	21.2	-	(23.8)	浅黄橙色(10YR8/3)	砂礫	良好	内面磨減、黒斑B' C'
82	竪穴住居-14	土師器	鉢	17.5	-	(9.5)	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	良好	片口
83	竪穴住居-14	土師器	甗	23.8	-	(15.6)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	
84	竪穴住居-15	須恵器	杯	11.6	4.8	4.1	灰色(N6)	細砂	良好	ロクロ順回り、外面灰をかぶる
85	竪穴住居-15	土師器	甗	20.4	-	(14.7)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂、細砂	良好	
86	竪穴住居-17	須恵器	杯	13.4	4.0	3.8	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂、細砂	やや不良	ロクロ順回り
87	竪穴住居-18	須恵器	杯	12.6	4.3	3.7	灰白色(5Y7/1)	粗砂、細砂	良好	ロクロ順回り
88	竪穴住居-18	土師器	甗	14.5	-	(5.5)	橙色(2.5Y7/6)	粗砂、細砂	良好	外面やや磨減
89	竪穴住居-18	土師器	支脚	-	-	(10.4)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
90	竪穴住居-20	須恵器	蓋	15.0	-	(3.9)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り
91	竪穴住居-20	須恵器	蓋	13.9	-	(4.3)	灰色(5Y6/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
92	竪穴住居-20	須恵器	杯	13.4	-	4.7	鈍黄橙色(10YR7/3)	細砂	不良	ロクロ逆回り
93	竪穴住居-20	須恵器	杯	12.2	-	4.3	灰白色(5Y7/1)	粗砂	不良	ロクロ逆回り
94	竪穴住居-20	須恵器	台付椀	11.0	9.6	12.8	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	不良	ロクロ逆回り
95	竪穴住居-20	土師器	甗	20.8	-	(6.9)	鈍褐色(7.5YR5/3)	細砂		黒斑A
96	竪穴住居-22	須恵器	杯	12.4	-	(3.6)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
97	竪穴住居-23	須恵器	蓋	10.0	-	3.4	灰色(5Y5/1)	粗砂	良好	ほぼ完形品、ロクロ逆回り
98	竪穴住居-23	須恵器	蓋	14.6	-	4.2	灰色(5Y5/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り、外面自然釉
99	竪穴住居-23	須恵器	蓋	14.8	-	4.3	灰色(N6)	細砂	良好	ロクロ逆回り
100	竪穴住居-23	須恵器	蓋	7.0	-	(2.2)	灰色(N6)	細砂	良好	外面カキメ
101	竪穴住居-23	須恵器	杯	12.9	-	(3.4)	灰白色(10Y7/1)	細砂	良好	
102	竪穴住居-23	須恵器	杯	13.4	-	5.1	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	やや不良	完形品、ロクロ逆回り
103	竪穴住居-23	須恵器	甗	17.8	-	(7.7)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	外面カキメ
104	竪穴住居-23	土師器	壺	8.5	-	(4.4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	黒斑A
105	竪穴住居-23	土師器	甗	13.2	-	(6.1)	鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	外面磨減
106	竪穴住居-23	土師器	甗	(15.4)	-	(14.3)	鈍褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	
107	竪穴住居-25	須恵器	杯	(14.3)	-	(3.9)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	
108	竪穴住居-27	須恵器	蓋	12.0	-	4.5	灰色(N4)	細砂	良好	ロクロ順回り、天井部外面ヘラキリ未調整、外面灰がかぶる
109	竪穴住居-27	須恵器	杯	-	-	(3.8)	灰色(N6)	細砂	良好	ロクロ逆回り
110	竪穴住居-28	須恵器	蓋	10.0	-	(4.0)	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	やや不良	ロクロ逆回り、内面仕上げナデ
111	竪穴住居-28	須恵器	蓋	14.7	-	4.7	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	不良	竪穴住居-29と接合、ロクロ逆回り、天井部外面ヘラキリ未調整
112	竪穴住居-29	須恵器	蓋	13.5	-	3.6	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り、ヘラ記号
113	竪穴住居-29	土師器	甗	18.0	-	10.9	鈍褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	ススB
114	竪穴住居-30	須恵器	蓋	13.6	-	(3.5)	灰白色(N7)	細砂	良好	ロクロ逆回り
115	竪穴住居-30	土師器	甗	12.0	-	5.8	鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	蒸気孔1残存

高田調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
116	竪穴住居-34	土師器	甗	24.1		(27.2)	橙色(5YR6/8)	細砂	良好	
117	竪穴住居-36	須恵器	甗	21.8		(10.1)	灰白色(10YR7/1)	細砂	良好	
118	竪穴住居-37	須恵器	杯	(12.8)	-	(2.5)	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	
119	竪穴住居-38	須恵器	蓋	(12.7)	-	(2.6)	灰白色(N7)	粗砂	良好	
120	竪穴住居-38	須恵器	杯	-	-	(2.0)	灰白色(N7)	細砂	良好	
121	竪穴住居-38	土師器	甗	16.3	-	(8.9)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良好	内面こげ付き、ススB
122	竪穴住居-38	土師器	鉢	16.8	-	(7.2)	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	タタキメあり
123	竪穴住居-39	須恵器	蓋	12.9	-	(3.5)	灰白色(N8)	粗砂	良好	
124	竪穴住居-39	須恵器	杯		-	(2.4)	灰色(7.5Y5/1)	細砂	良好	
125	竪穴住居-39	土師器	甗	28.4	-	23.3	橙色(5YR6/6)	砂礫	良好	黒斑B
126	竪穴住居-40	須恵器	蓋	-	-	(2.8)	灰白色(N6)	粗砂	良好	
127	竪穴住居-40	須恵器	杯	-	-	(1.8)	灰白色(N7)	細砂	良好	
128	竪穴住居-40	土師器	甗	13.0	-	(4.1)	鈍橙色(5YR7/4)	砂礫	良好	
129	竪穴住居-42	須恵器	蓋	(14.9)	-	(2.8)	灰色(N6)	粗砂	良好	
130	竪穴住居-42	須恵器	杯	9.6	-	(3.3)	青灰色(5B6/1)	粗砂	良好	
131	竪穴住居-42	土師器	甗	-	-	(15.7)	鈍橙色(5YR6/3)	細砂	良好	
132	竪穴住居-44	須恵器	蓋	-	-	(2.8)	灰白色(N7)	細砂	良好	
133	竪穴住居-44	土師器	壺	12.8	-	(4.6)	鈍橙色(7.5YR7/4)	砂礫	良好	
134	竪穴住居-44	土師器	高杯	19.3	-	(7.2)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
135	竪穴住居-44	土師器	甗	-	9.4	(6.0)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	蒸気孔1残存
136	竪穴住居-45	須恵器	蓋	(15.2)	-	(3.8)	灰白色(N8)	細砂	良好	ロクロ順回り
137	竪穴住居-45	須恵器	杯	(15.5)	-	(3.4)	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	良好	ロクロ順回り、黒斑B
138	竪穴住居-45	須恵器	壺	11.7	-	4.5	灰色(N5)	細砂	良好	
139	竪穴住居-46	須恵器	杯	-	-	(2.6)	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	
140	竪穴住居-46	須恵器	壺	7.9	-	(5.4)	灰白色(N7)	細砂	良好	タタキメ
141	竪穴住居-46	土師器	甗	19.6	-	(7.9)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	器壁磨滅
142	竪穴住居-46	土師器	甗	21.5	-	(12.2)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良好	把手欠損
143	竪穴住居-47	土師器	鉢	20.6	-	(7.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂、細砂	良好	
144	竪穴住居-48	須恵器	蓋	13.2	-	4.2	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
145	竪穴住居-48	須恵器	甗	-	-	(13.0)	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	
146	竪穴住居-49	須恵器	杯	14.4	-	(4.2)	鈍黄橙色(10YR7/2)	細砂	不良	ロクロ順回り
147	竪穴住居-49	須恵器	甗	14.6	-	(4.5)	灰白色(5Y5/1)	細砂	良好	
148	竪穴住居-50	須恵器	蓋	(14.7)	-	(2.8)	灰色(7.5Y4/1)	細砂	良好	
149	竪穴住居-50	須恵器	杯	13.3	-	4.2	灰色(N6)	細砂	良好	
150	竪穴住居-50	須恵器	壺	-	-	(9.7)	灰白色(10YR6/1)	細砂	良好	
151	竪穴住居-52	須恵器	蓋	12.4	-	(4.2)	灰白色(N7)	細砂	良好	天井部ヘラキリ、ロクロ順回り
152	竪穴住居-53	須恵器	高杯	13.9	-	(11.1)	青灰色(5PB6/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り、2方透かし
153	竪穴住居-54	土師器	甗	(25.0)	-	(5.3)	淡橙色(5YR8/4)	細砂	良好	
154	竪穴住居-52	土師器	壺	11.4	-	(3.8)	赤橙色(10R6/6)	粗砂	良好	製塩土器
155	竪穴住居-56	須恵器	蓋	-	-	(1.7)	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	ヘラ記号
156	竪穴住居-56	須恵器	蓋	11.9	-	(3.9)	青灰色(5B5/1)	粗砂、細砂	良好	天井部外面ヘラキリ
157	竪穴住居-56	須恵器	杯	12.8	-	(3.8)	灰色(10Y6/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
158	竪穴住居-56	須恵器	杯	13.4	-	3.5	灰白色(7.5Y6/1)	粗砂	良好	ロクロ順回り、歪み
159	竪穴住居-56	土師器	甗	13.4	-	(15.4)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	スス内面、黒斑B
160	竪穴住居-57	須恵器	杯	10.7	-	(2.5)	明青灰色(5B7/1)	細砂	良好	
161	竪穴住居-57	土師器	壺	-	-	(9.2)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	良好	
162	竪穴住居-58	須恵器	蓋	12.0	-	3.8	灰色(7.5Y6/1)	細砂	良好	内面当て具痕
163	竪穴住居-58	須恵器	杯	13.4	3.4	3.2	明青灰色(5B7/1)	粗砂、細砂	良好	底部ヘラキリ
164	竪穴住居-58	須恵器	杯	9.5	5.9	3.6	灰白色(N7)	細砂	良好	底部ヘラキリ
165	竪穴住居-58	須恵器	杯	9.5	6.0	3.2	明青灰色(5B7/1)	粗砂、細砂	良好	底部ヘラキリ
166	竪穴住居-58	須恵器	杯	9.0	-	3.4	灰色(10Y6/1)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
167	竪穴住居-58	須恵器	杯	11.2	6.8	3.2	灰白色(N7)	細砂	良好	底部ヘラキリ、口縁端部外方へ折り曲げる、黒斑B~C
168	竪穴住居-58	須恵器	高杯	18.1	-	(4.4)	明青灰色(5PB7/1)	粗砂、細砂	良好	
169	竪穴住居-58	須恵器	高杯	-	8.8	(6.0)	灰白色(N8)	細砂	良好	
170	竪穴住居-58	須恵器	(胴部)	-	-	-	灰白色(N8)	細砂	良好	内面車輪文
171	竪穴住居-58	土師器	甗	11.0	-	(5.1)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	良好	内面こげ付き
172	竪穴住居-58	土師器	甗	23.5	-	(15.2)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	タタキメ
173	竪穴住居-58	土師器	甗	22.4	-	(10.0)	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B

高田調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
174	竪穴住居-58	土師器	鉢	22.0	-	(11.3)	淡橙色(5YR8/4)	粗砂	良好	
175	竪穴住居-58	土師器	杯	11.2	-	(3.5)	淡橙色(5YR8/4)	細砂	良好	黒斑 A
176	竪穴住居-58	土師器	杯	10.6	-	(3.5)	橙色(2.5YR7/6)	微砂	良好	外面磨滅、水澱粘土
177	竪穴住居-59	土師器	鉢	16.2	-	6.0	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	スス A 3
178	竪穴住居-59	土師器	鉢	17.9	-	(6.7)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	器壁磨滅
179	竪穴住居-59	土師器	鉢	19.1	-	(9.0)	橙色(5YR7/6)	粗砂、細砂	良好	器壁磨滅
180	竪穴住居-60	須恵器	杯	(11.2)	-	(3.2)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
181	竪穴住居-60	須恵器	杯	12.8	-	4.2	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
182	竪穴住居-60	須恵器	高杯	(14.9)	-	(3.5)	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
183	竪穴住居-60	須恵器	提瓶	9.0	-	(7.4)	青灰色(5PB6/1)	細砂	良好	平瓶か
184	竪穴住居-60	土師器	カマド	-	-	-	橙色(7.5YR7/6)	砂礫、細砂	良好	
185	竪穴住居-61	須恵器	蓋	13.3	-	3.9	灰白色(5Y6/1)	粗砂、細砂	良好	
186	竪穴住居-61	須恵器	杯	11.5	-	(3.0)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	ロクロ順回り、別個体融着
187	竪穴住居-61	須恵器	杯	10.7	-	3.7	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	底部ヘラキリ、壺み大
188	竪穴住居-60・61	須恵器	(胴部)	-	-	(1.8)	灰白色(7.5Y7/1)	精良	良好	内面車輪文
189	竪穴住居-61	土師器	(胴部)	-	-	(5.4)	鈍赤橙色(5YR5/3)	粗砂、細砂	良好	ヘラガキ文
190	竪穴住居-61	土師器	甕	15.6	-	(8.9)	橙色(2.5Y6/6)	細砂	良好	磨滅
191	竪穴住居-61	土師器	甕	22.8	-	(9.0)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
192	竪穴住居-61	土師器	甕	(32.2)	-	(7.5)	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂、細砂	良好	黒斑 A
193	竪穴住居-61	土師器	高杯	16.3	-	(5.0)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	磨滅
194	竪穴住居-61	土師器	鉢	10.2	-	(4.9)	鈍橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	製塩土器、被熱
195	竪穴住居-61	土師器	壺	(12.0)	-	(4.2)	鈍赤褐色(5YR5/4)	細砂	良好	製塩土器、被熱
196	竪穴住居-61	土師器	鉢	15.6	-	(9.6)	鈍橙色(5YR6/3)	粗砂、細砂	良好	製塩土器、被熱
197	竪穴住居-62	須恵器	杯	14.5	-	(3.6)	灰色(N6)	粗砂、細砂	良好	ロクロ順回り
198	竪穴住居-62	須恵器	杯	13.4	-	(3.1)	灰白色(N7)	粗砂、細砂	良好	ロクロ順回り
199	竪穴住居-62	土師器	甕	15.0	-	(2.7)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
200	竪穴住居-63	須恵器	杯	-	-	(1.8)	暗青灰色(5BP7/1)	細砂	良好	ヘラ記号
201	竪穴住居-64	須恵器	(脚部)	-	11.1	(2.8)	暗緑灰色(7.5GY4/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り
202	竪穴住居-64	須恵器	提瓶	6.5	-	(5.7)	灰色(N5)	細砂	良好	体部破片あり
203	竪穴住居-64	須恵器	高杯	17.9	-	(4.2)	灰色(5Y6)	粗砂	良好	
204	竪穴住居-64	土師器	甕	20.5	-	(6.3)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
205	竪穴住居-66	須恵器	杯	11.5	-	(4.1)	灰白色(N8)	細砂	良好	ロクロ逆回り
206	竪穴住居-66	須恵器	壺	10.0	-	(6.8)	灰色(N6)	細砂	良好	
207	竪穴住居-66	須恵器	高杯	-	-	(10.0)	灰白色(N7)	細砂	良好	2段2方透かし
208	竪穴住居-66	須恵器	(胴部)	-	-	(5.7)	灰白色(N8)	細砂	良好	内面車輪文
209	竪穴住居-66	土師器	壺	-	-	(6.6)	赤橙色(10YR6/6)	細砂	良好	製塩土器
210	竪穴住居-68	須恵器	蓋	12.6	-	(4.0)	灰白色(N8)	粗砂	良好	
211	竪穴住居-68	須恵器	蓋	12.6	-	(4.1)	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り
212	竪穴住居-68	須恵器	蓋	12.8	-	(3.5)	明青灰色(5B7/1)	粗砂	良好	ロクロ順回り、外面灰をかぶる
213	竪穴住居-68・69	須恵器	蓋	11.8	-	3.5	灰白色(N7)	細砂	良好	外面灰をかぶる、ロクロ逆回り、内面仕上げナデ
214	竪穴住居-68	須恵器	杯	12.5	-	(2.5)	灰白色(N7)	粗砂	良好	
215	竪穴住居-68	須恵器	壺	9.6	-	(3.6)	鈍赤褐色(5YR5/3)	細砂	やや不良	脚部か
216	竪穴住居-67	須恵器	壺	-	-	(7.9)	灰白色(N8)	細砂	良好	内面肩口に葉脈状のオサエ痕
217	竪穴住居-68・69	須恵器	甕	-	-	(12.9)	灰色(N6)	細砂	良好	
218	竪穴住居-68・69	土師器	甕	22.3	-	(3.7)	鈍橙色(7.5YR7/3)	粗砂、細砂	良好	
219	竪穴住居-68	土師器	甕	-	-	-	鈍橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	
220	竪穴住居-68・69	土師器	甕	18.1	-	(14.7)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	砂礫、粗砂	良好	内面磨滅
221	竪穴住居-68・69	土師器	甕	-	-	(14.8)	鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
222	竪穴住居-68	土師器	壺	-	-	(5.0)	橙色(5YR6/6)	粗砂、細砂	良好	製塩土器
223	竪穴住居-70	須恵器	蓋	12.6	-	(2.4)	暗灰色(N3)	細砂	良好	
224	竪穴住居-71	須恵器	甕	-	-	(3.4)	灰白色(N7)	細砂	良好	
225	竪穴住居-71	須恵器	杯	-	-	(3.7)	灰色(N6)	砂礫、細砂	良好	ロクロ順回り
226	竪穴住居-72	須恵器	蓋	(12.8)	-	(4.2)	灰色(N6)	細砂	良好	ロクロ逆回り
227	竪穴住居-72	須恵器	蓋	13.8	-	(3.6)	灰色(N6)	細砂	良好	ロクロ逆回り
228	竪穴住居-72	須恵器	杯	(15.0)	-	(3.8)	灰色(N4)	細砂	良好	
229	竪穴住居-72	須恵器	壺	-	-	(7.6)	灰色(N4)	細砂	良好	口縁部外面ヘラガキ文、内面カキメ
230	竪穴住居-72	須恵器	壺	9.2	-	(4.6)	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良好	外面灰をかぶる
231	竪穴住居-72	土師器	甕	13.6	-	(9.0)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	
232	竪穴住居-73	須恵器	杯	(11.4)	-	(3.2)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り

高田調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
233	竪穴住居-73	土師器	甕	(19.8)		(5.0)	橙色(5YR6/6)	砂礫、細砂	良好	
234	竪穴住居-74	須恵器	蓋	13.0		4.1	灰白色(N7)	砂礫、粗砂	良好	ほぼ完形、天井部ヘラキリ後ナデ
235	竪穴住居-74	須恵器	杯	13.0		(2.5)	灰色(N6)	細砂	良好	
236	竪穴住居-74	須恵器	高杯		10.5	(7.2)	灰色(N6)	砂礫、細砂	やや不良	
237	竪穴住居-74	土師器	杯	12.6		4.5	浅黄橙色(7.5YR8/4)	砂礫、細砂	良好	黒斑A
238	竪穴住居-74	土師器	壺	18.0		(6.2)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	良好	赤色顔料
239	竪穴住居-74	土師器	甕	24.4		(13.2)	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂、細砂	良好	黒斑B
240	竪穴住居-74	土師器	甕	22.2		(10.4)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	竪穴住居-71と接合
241	竪穴住居-75	須恵器	蓋			(1.2)	灰色(N4)	細砂	良好	ヘラ記号
242	竪穴住居-75	須恵器	蓋			(1.7)	灰色(N6)	細砂	良好	外面灰をかぶる
243	竪穴住居-75	須恵器	杯	11.3		4.4	灰白色(N7)	砂礫、粗砂	良好	ロクロ順回り
244	竪穴住居-75	須恵器	壺			(3.5)	灰色(5Y5/1)	細砂	良好	
245	竪穴住居-75	須恵器	高杯	17.1		(4.4)	灰色(N4)	粗砂、細砂	良好	
246	竪穴住居-75	土師器	甕	12.8		13.7	鈍橙色(5YR6/4)	砂礫、粗砂	良好	
247	竪穴住居-76	須恵器	杯	11.8	-	(3.0)	灰色(5Y6/1)	細砂	やや不良	
248	竪穴住居-76	須恵器	壺	-	-	(4.4)	灰色(10Y6/1)	細砂	良好	底部外面ヘラ記号、ロクロ逆回り
249	竪穴住居-78	須恵器	杯	12.6		(3.7)	灰色(N6)	砂礫、粗砂	良好	
250	竪穴住居-78	須恵器	甕	15.3		(5.7)	灰色(N5)	粗砂、細砂	良好	外面カキメ
251	竪穴住居-79	須恵器	杯	(13.1)		(1.7)	灰白色(N7)	細砂	良好	
252	竪穴住居-79	須恵器	(胴部)				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	内面車輪文
253	竪穴住居-79	須恵器	(胴部)				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	内面車輪文
254	竪穴住居-79	須恵器	(胴部)				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	内面車輪文
255	竪穴住居-79	須恵器	(胴部)				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	内面車輪文
256	竪穴住居-79	須恵器	(胴部)				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	内面車輪文
257	竪穴住居-79	須恵器	(胴部)				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	内面車輪文
258	竪穴住居-79	土師器	甕	7.5		(5.4)	鈍赤褐色(5YR5/3)	粗砂、細砂	良好	
259	竪穴住居-79	土師器	甕	22.6		(10.2)	淡橙色(5YR8/3)	粗砂、細砂	良好	
260	竪穴住居-79	土師器	甕	21.2		(31.4)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂、細砂	良好	内面木葉圧痕、ススB、黒斑B・C
261	竪穴住居-80	土師器	甕	14.4		(17.3)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂、細砂	良好	ススB
262	竪穴住居-83	須恵器	蓋	-	-	(2.1)	灰白色(10Y7)	細砂	良好	
263	竪穴住居-83	須恵器	杯	-	-	(2.4)	灰白色(N8)	細砂	良好	
264	竪穴住居-83	須恵器	高杯	-	11.0	(8.0)	灰色(N6)	細砂	良好	
265	竪穴住居-83	土師器	甕	13.4	-	(7.6)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
266	竪穴住居-86	須恵器	蓋	(13.4)		(3.0)	灰白色(N7)	細砂	良好	
267	竪穴住居-86	須恵器	杯	11.6		(2.7)	青灰色(5B5/1)	細砂	良好	重ね焼き
268	竪穴住居-86	須恵器	杯	(13.8)		(2.5)	灰色(N5)	細砂	良好	
269	竪穴住居-86	須恵器	杯	(18.0)		(2.4)	灰色(N6)	砂礫	良好	
270	竪穴住居-87	須恵器	杯	(10.2)		(2.6)	灰色(N6)	細砂	良好	
271	竪穴住居-88	須恵器	蓋	12.8		(3.8)	灰白色(N7)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
272	竪穴住居-88	須恵器	杯	11.6		(4.2)	灰色(N5)	砂礫	良好	ロクロ順回り
273	竪穴住居-88	須恵器	杯	(13.0)		(3.3)	灰色(7.5Y6/1)	礫、粗砂	良好	
274	竪穴住居-89	須恵器	(胴部)				灰白色(N7)	精良	良好	内面車輪文
275	竪穴住居-89	須恵器	高杯			(6.1)	灰白色(N7)	細砂	良好	
276	竪穴住居-90	須恵器	杯	9.6		3.5	灰色(N7)	細砂	良好	外面自然釉、底部ヘラキリ
277	竪穴住居-90	須恵器	杯	10.0		3.8	灰色(N6)	細砂	良好	底部ヘラキリ
278	竪穴住居-90	土師器	甕			(3.1)	鈍黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	
279	竪穴住居-90	土師器	甕	11.0		(2.5)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
280	竪穴住居-90	土師器	杯	11.1		(3.7)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良好	黒斑C
281	竪穴住居-90	土師器	(把手)				鈍黄橙色(10YR7/2)	礫、粗砂	良好	
282	竪穴住居-92	須恵器	杯	13.4		(2.4)	灰色(N6)	礫、粗砂	良好	
283	竪穴住居-92	土師器	甕	19.7		(5.2)	鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
284	竪穴住居-92	土師器	(把手)				鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
285	竪穴住居-93	須恵器	蓋	12.6		(3.9)	灰白色(N8)	細砂	良好	天井部外面ナデ
286	竪穴住居-93	土師器	杯	11.2		(4.0)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	礫、細砂	良好	
287	井戸-1	土師器	甕	13.1	-	23.2	鈍橙色(7.5Y7/4)	細砂	良好	口縁部櫛状沈線、肩部刺突文A3、ススB'、黒斑B~C
288	井戸-1	土師器	甕	14.0	-	15.5	鈍褐色(7.5YR6/3)	細砂	良好	口縁部櫛状沈線、肩部刺突文A3、ススB、黒斑B~C
289	井戸-1	土師器	甕	13.6	-	19.6	明褐色(7.5YR7/2)	粗砂	良好	ススA

## 高田調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
290	焼成土壇-2	須恵器	高杯		7.6	(2.3)	白色	細砂	良好	
291	焼成土壇-2	土師器	鉢	(13.6)		(5.0)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
292	焼成土壇-4	須恵器	壺	(15.4)	-	(2.6)	青灰色(5B5/1)	粗砂	良好	
293	焼成土壇-5	須恵器	杯	13.2	-	3.7	灰白色(2.5Y7/1)	粗砂	不良	ロク口順回り
294	溝-8	土師器	壺	-	4.8	(24.5)	鈍褐色(7.5YR5/3)	細砂	良好	畿内系土器、タキメ
295	溝-8	土師器	壺	21.2		(5.4)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	
296	溝-8	土師器	壺	14.5	-	(6.2)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	良好	非在地系土器
297	溝-8	土師器	甗	15.4		24.2	鈍黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	口縁部櫛描沈線、肩部刺突文C3、ススB
298	溝-8	土師器	甗	17.7	4.7	23.9	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	口縁部凹線1条、黒斑BC
299	溝-8	土師器	甗	16.0	-	(11.4)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	ススB
300	溝-8	土師器	甗	13.0	-	(10.0)	鈍黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	タキメ
301	溝-8	土師器	甗	15.6		(7.4)	明褐色(7.5YR7/1)	粗砂	良好	畿内系土器
302	溝-8	土師器	高杯	17.7	12.7	12.0	橙色(5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4か
303	溝-8	土師器	高杯	15.7	-	(6.1)	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	良好	
304	溝-8	土師器	高杯	12.1	-	4.9	鈍褐色(5YR7/3)	精良	良好	透かし孔3
305	溝-8	土師器	鉢		4.2	(6.6)	橙色(2.5YR7/6)	精良	良好	内面粗いヘラミガキ
306	溝-8	土師器	鉢	9.0	2.9	6.5	鈍褐色(5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑C
307	溝-8	土師器	鉢	(48.2)		(24.2)	淡赤橙色(2.5Y7/4)	細砂	良好	歪み大、黒斑B
308	溝-9	土師器	壺	18.3	7.5	30.7	灰白色(10YR8/2)	砂礫	良好	ススC、黒斑C
309	溝-9	土師器	甗	(12.5)	-	14.7	鈍黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	被熱、歪み大
310	溝-9	土師器	鉢	13.0	3.1	9.2	鈍褐色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑BC
311	溝-10	土師器	甗	11.2	-	12.4	鈍褐色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	ススC、黒斑A~B・C
312	溝-11	土師器	甗	16.8	4.1	27.1	灰白色(5YR8/2)	細砂	良好	口縁部櫛描沈線、内面こげ付き、ススC、黒斑B
313	溝-11	土師器	甗	15.2	-	21.2	明褐色(7.5YR7/1)	粗砂	良好	口縁部櫛描沈線、ススB
314	溝-11	土師器	甗	13.0	-	(18.9)	鈍褐色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部櫛描沈線、刺突文A3、ススC、黒斑B
315	溝-11	土師器	高杯	13.3	17.8	11.1	鈍褐色(7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔3
316	溝-11	土師器	鉢	27.2	3.5	23.1	鈍褐色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	内面こげ付き
317	溝-11	土師器	甗	4.4	-	(4.9)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	手づくね
318	溝-12	土師器	壺	24.6	-	(8.7)	鈍褐色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
319	溝-12	土師器	壺	19.2	-	(5.2)	鈍褐色(5YR7/3)	粗砂	良好	赤色顔料
320	溝-12	土師器	壺	8.6	-	(13.2)	灰白色(5YR8/2)	細砂	良好	黒斑B~C
321	溝-12	土師器	壺	9.1	-	(10.7)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂	良好	タキメ
322	溝-12	土師器	甗	14.4	-	(5.9)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	ススA
323	溝-12	土師器	甗	14.9	-	(24.2)	鈍黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部櫛描沈線、刺突文A1、ススB~C
324	溝-12	土師器	甗	14.2	-	(11.7)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部櫛描沈線
325	溝-12	土師器	高杯	-	-	(8.0)	鈍褐色(5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
326	溝-12	土師器	鉢	20.4	-	8.8	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良好	黒斑A・B
327	溝-12	土師器	鉢	16.2	-	5.1	鈍赤褐色(5YR5/3)	細砂	良好	
328	溝-12	土師器	器台	-	8.8	(6.0)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	透かし孔3
329	溝-12	土師器	台付鉢	-	3.6	(3.0)	赤褐色(10R6/6)	粗砂	良好	製塩土器
330	溝-13	土師器	甗	9.2	-	10.0	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部櫛描沈線、刺突文A2
331	溝-13	土師器	甗	13.5	-	(6.8)	褐色(7.5YR7/6)	細砂	良好	
332	溝-13	土師器	甗	14.9	-	(7.4)	鈍黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	ススA~B
333	溝-13	土師器	高杯	-	13.7	(8.6)	黄褐色(7.5YR7/8)	精良	良好	透かし孔3
334	溝-13	土師器	器台	-	-	(5.7)	鈍褐色(5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔2残存
335	溝-13	土師器	台付鉢	-	6.3	(3.9)	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良好	
336	溝-13	土師器	台付鉢	-	4.8	(2.6)	鈍褐色(5YR7/3)	細砂	良好	製塩土器
337	溝-14	土師器	甗	15.5		26.9	鈍い褐色(7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部櫛描沈線、刺突文B3
338	溝-15	土師器	壺	10.4	-	(6.1)	鈍黄褐色(10YR7/3)	粗砂	良好	赤色顔料
339	溝-15	土師器	壺	-	-	(8.4)	鈍褐色(5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B
340	溝-15	土師器	高杯	-	13.7	(4.5)	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂	良好	透かし孔3方向2段か
341	溝-16	土師器	鉢	11.1	-	(6.6)	鈍褐色(5YR7/4)	粗砂	良好	
342	溝-16	土師器	壺	-	6.9	(5.8)	褐色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
343	溝-16	土師器	高杯	14.8	9.4	13.0	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	
344	溝-16	土師器	鉢	13.5	-	5.2	鈍黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	ススA・B、黒斑C
345	溝-16	土師器	鉢	13.2	-	(5.3)	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	黒斑C
346	溝-16	土師器	台付鉢	-	4.9	(4.5)	赤褐色(10YR6/6)	粗砂	良好	製塩土器

高田調査区土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
347	溝-20	土師器	鉢	11.1	-	7.8	鈍黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	ススA
348	溝-25	土師器	甕	14.8		(3.6)	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	良好	
349	溝-25	土師器	甕	(13.8)		(2.3)	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	良好	
350	溝-28	須恵器	蓋	14.4	-	4.8	灰白色(5Y8/1)	砂礫	良好	ロクロ順回り、内面当て具痕
351	溝-28	須恵器	杯	12.9	-	4.7	灰白色(7.5Y6/1)	砂礫	やや不良	ロクロ順回り、内面当て具痕
352	溝-28	須恵器	高杯	-	8.8	(5.9)	灰白色(N7)	粗砂	良好	
353	溝-28	須恵器	横瓶	-	-	(19.5)	灰色(N4)	粗砂	良好	別個体融着、自然軸
354	溝-29	須恵器	蓋	13.8	-	4.3	青灰色(5B5/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り、ヘラ記号か
355	溝-29	須恵器	蓋	13.1	-	3.8	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り
356	溝-29	須恵器	蓋	13.2	-	3.4	灰白色(5Y8/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り
357	溝-29	須恵器	蓋	11.6	-	3.1	灰色(N5)	細砂	やや不良	ロクロ逆回り
358	溝-29	須恵器	杯	13.2	-	(4.6)	灰白色(2.5Y7/1)	粗砂	良好	ロクロ順回り
359	溝-29	須恵器	杯	11.9	-	4.1	灰色(10Y6/1)	細砂	やや不良	ロクロ回転不明
360	溝-29	須恵器	杯	10.5	-	4.0	青灰色(5B6/1)	粗砂	良好	ロクロ順回り、外面灰かぶる
361	溝-29	須恵器	杯	12.2	-	3.7	灰白色(N8)	細砂	良好	ロクロ順回り
362	溝-29	須恵器	杯	10.6	-	5.4	灰白色(N7)	粗砂	良好	ロクロ順回り
363	溝-29	須恵器	高杯	(12.7)	-	(4.9)	灰白色(7.5Y7/1)	粗砂	良好	
364	溝-29	須恵器	高杯	19.8	-	4.7	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	
365	溝-29	須恵器	高杯	16.0	13.0	17.7	灰色(7.5Y6/1)	細砂	良好	杯内部にオサエ痕
366	溝-29	須恵器	高杯	13.2	9.3	7.4	灰白色(10Y7/1)	細砂	良好	粗雑な造り
367	溝-29	須恵器	(胴部)	-	-	-	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	内面車輪文
368	溝-29	須恵器	(胴部)	-	-	-	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	内面車輪文
369	溝-29	須恵器	平瓶	7.0	-	17.1	灰色(7.5Y6/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
370	溝-29	土師器	支脚	-	-	(9.0)	鈍橙色(5YR6/4)	粗砂	良好	透かし孔、黒斑C
371	溝-29	土師器	支脚	-	-	(9.5)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	透かし孔
372	溝-31	須恵器	蓋	13.7	-	3.2	灰色(10Y6/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
373	溝-31	須恵器	杯	13.9	-	4.2	赤褐色(10R5/3)	粗砂	やや不良	ロクロ逆回り
374	溝-31	須恵器	壺	8.5	-	(3.5)	灰白色(10Y7/1)	細砂	良好	
375	溝-32	土師器	鉢	(13.9)	-	(8.0)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	把手
376	溝-33	須恵器	甕		2.6	(8.3)	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
377	溝-33	須恵器	横瓶	(11.0)		(6.5)	灰色(5Y)	細砂	良好	
378	溝-33	須恵器	提瓶			(5.5)	灰色(N6)	細砂	良好	
379	溝-33	須恵器	高杯		10.4	(6.5)	灰白色(N8)	細砂	良好	
380	水田-1	土師器	甕	15.8	-	(4.0)	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
381	水田-1	土師器	甕	(14.8)		(4.0)	鈍黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	
382	水田-2	土師器	甕	(14.8)		(3.0)	黒褐色(10YR3/2)	粗砂	良好	
383	水田-2	土師器	甕	15.0	-	(5.7)	鈍黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	
384	水田-2	土師器	甕			(3.0)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良好	
385	水田-2	土師器	甕	-	-	(3.5)	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂	良好	
386	水田-2	土師器	甕	12.0	-	(8.6)	鈍黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	
387	水田-2	土師器	甕	-	-	(3.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
388	水田-2	土師器	甕	13.0	-	(2.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
389	水田-2	土師器	甕	9.8	-	(5.8)	灰褐色(7.5YR6/2)	粗砂	良好	
390	水田-1	土師器	高杯	10.8	-	(7.4)	鈍橙色(10YR7/3)	細砂	良好	
391	水田-1	土師器	器台			5.7	鈍黄橙色(10YR6/3)	細砂	良好	透かし孔4
392	水田-2	土師器	鉢	34.8	-	(15.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂、細砂	良好	黒斑A
393	洪水砂	土師器	壺	18.7	-	(6.2)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	良好	
394	洪水砂	土師器	壺	19.6	-	(21.3)	鈍黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良好	内面スス、刺突文B2
395	洪水砂	土師器	壺	17.3	-	(7.5)	鈍黄橙色(10YR6/3)	砂礫	良好	器壁磨滅
396	洪水砂	土師器	甕	13.7	3.4	23.6	鈍橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	刺突文B2、ススBC
397	洪水砂	土師器	甕	13.8	-	21.2	淡黄色(2.5Y8/3)	粗砂	良好	黒斑C
398	洪水砂	土師器	甕	14.0	-	(4.3)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良好	
399	洪水砂	土師器	甕	13.6	-	(3.8)	鈍橙色(7.5YR7/4)	粗砂、細砂	良好	黒斑A
400	洪水砂	土師器	甕	(14.2)	-	(4.4)	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
401	洪水砂	土師器	甕	15.0	-	(3.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
402	洪水砂	土師器	甕	11.0	4.3	14.4	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	ススB'
403	洪水砂	土師器	甕	10.0	3.4	11.7	鈍橙色(7.5YR7/3)	粗砂、細砂	良好	外面タタキメ、黒斑A~B、C
404	洪水砂	土師器	鉢	14.1	3.1	10.2	鈍黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑A

## 高田調査区土器観察表

挿図 番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
405	洪水砂	土師器	台付壺	-	-	(5.6)	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	ミニチュア
406	包含層	土師器	壺	14.3		(28.0)	鈍黄橙色(10YR7/2)		良好	タタキメ、黒斑A~B、B~C
407	包含層	土師器	壺	10.8	-	(16.0)	灰白色(5Y8/2)	粗砂	良好	
408	包含層	土師器	壺	9.4	-	15.0	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	
409	包含層	土師器	壺		3.3	(15.6)	橙色(5YR6/6)	礫	やや不良	畿内系土器、黒斑C
410	包含層	土師器	甗	14.8		(24.0)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	刺突文B2、ススC、黒斑A・B
411	包含層	土師器	甗	11.7	-	(17.6)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良好	刺突文B2、ススC、黒斑B
412	包含層	土師器	甗	15.8	-	(25.3)	鈍黄橙色(10YR6/3)	細砂、粗砂	良好	刺突文B2、ススB、黒斑B~C
413	包含層	土師器	鉢	6.7	-	(5.7)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
414	包含層	土師器	高杯	11.8		(8.2)	橙色(5YR7/8)	精良	良好	
415	包含層	須恵器	蓋	-	-	(1.8)	青灰色(5BG5/1)	細砂	良好	天井部刺突文
416	包含層	須恵器	蓋	14.2	-	6.2	灰色(N5/)	細砂	良好	ロクロ順回り
417	包含層	須恵器	蓋	15.1		5.9	灰白色(N7)	細砂	良好	環状つまみ、ロクロ逆回り
418	包含層	須恵器	蓋	10.8		(5.9)	灰白色(10Y7/1)	細砂	良好	
419	包含層	須恵器	蓋	11.1	-	4.6	オリーブ灰色(5GY6/1)	細砂	良好	
420	包含層	須恵器	蓋	11.5	7.3	4.1	灰白色(5Y8/1)	細砂	不良	内面スス、黒斑B~C
421	包含層	須恵器	蓋	9.6	10.0	3.1	灰白色(N7)	細砂、砂礫	良好	ロクロ順回り
422	包含層	須恵器	蓋	(9.0)	-	2.9	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
423	包含層	須恵器	杯	12.0		3.3	灰色(N6)	細砂	良好	ロクロ順回り、ヘラ記号
424	包含層	須恵器	杯	11.2	13.7	3.9	灰白色(5Y7/1)	粗砂、砂礫	良好	ロクロ逆回り
425	包含層	須恵器	杯	11.4		3.9	灰色(N6)	細砂、砂礫	良好	
426	包含層	須恵器	杯	11.5	-	3.1	灰白色(N7)	細砂	良好	ロクロ順回り
427	包含層	須恵器	杯	9.2	6.7	3.5	灰白色(N7)	細砂	良好	
428	包含層	須恵器	杯	9.3	-	3.5	灰白色(N7)	細砂	良好	
429	包含層	須恵器	杯	9.0	6.8	3.3	灰白色(N7)	粗砂	良好	
430	包含層	須恵器	壺	10.0	-	(3.4)	灰白色(N7)	細砂	良好	
431	包含層	須恵器	壺	6.8	-	7.9	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	粗砂	良好	別個体融着、自然釉
432	包含層	須恵器	不明	(17.9)	-	(3.3)	灰白色(5Y7/2)	精良	良好	
433	包含層	須恵器	甗	24.5	-	(6.8)	灰色(N6)	粗砂	良好	
434	包含層	須恵器	(胴部)	-	-	-	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	車輪文
435	包含層	須恵器	(胴部)	-	-	-	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	車輪文
436	包含層	須恵器	高杯	-	-	(12.2)	灰色(N6)	細砂	良好	2段2方透かし
437	包含層	須恵器	高杯	-	10.1	(8.8)	灰白色(N7)	粗砂	良好	
438	包含層	須恵器	高杯	-	12.1	(8.3)	暗灰色(N3)	粗砂	良好	
439	包含層	須恵器	台付碗	8.6	-	(11.1)	灰色(7.5Y6/1)	粗砂	良好	
440	包含層	須恵器	台付碗	10.3		(8.2)	灰白色(N8)	細砂	良好	
441	包含層	須恵器	台付碗		11.6	(3.0)	灰白色(N5)	細砂	良好	
442	包含層	須恵器	壺	-	-	(9.0)	灰色(N5)	細砂、粗砂	良好	ロクロ順回り
443	包含層	須恵器	器台			(7.4)	灰白色(N6)	細砂	良好	波状文
444	包含層	須恵器	平瓶	-	-	(16.6)	灰色(N8)	粗砂	良好	ロクロ順回り
445	包含層	土師器	甗	19.6	-	(7.7)	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	
446	包含層	土師器	甗	22.6	-	(6.2)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
447	包含層	土師器	鉢	13.6	-	(7.0)	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	良好	片口
448	包含層	土師器	鉢	11.3	-	7.2	鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
449	包含層	土師器	甗	20.4	-	(16.3)	鈍橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	良好	ススB、黒斑B
450	包含層	土師器	壺	14.4		(6.3)	鈍橙色(2.5YR6/4)	細砂	良好	製塩土器
451	包含層	土師器	杯	-	-	-	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	ヘラガキの木の葉文
452	包含層	土師器	支脚	-	-	(8.7)	鈍橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	
453	包含層	土師器	カマド							
454	掘立柱建物-5	須恵器	蓋	(30.0)	-	(1.8)	灰白色(10Y7/1)	精良	良好	外面灰をかぶる
455	掘立柱建物-5	土師器	高杯	-	-	4.1	鈍橙色(5YR6/4)	細砂	良好	丹塗り
456	柱穴	須恵器	蓋	14.5		2.8	灰白色(N7)	粗砂	良好	ロクロ順回り
457	柱穴	須恵器	蓋	13.7		1.8	灰白色(N8)	細砂	良好	
458	柱穴	土師器	杯	11.4		2.4	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	丹塗り
459	柱穴	土師器	蓋	(19.8)		2.5	鈍黄橙色(10YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
460	柱穴	土師器	皿	13.5	6.9	1.2	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	

高田調査区土器観察表

挿図 番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
461	柱穴	黒色土器	椀	12.2	5.9	4.5	橙色(5YR7/6)	細砂	良好	
462	柱穴	土師器	椀	13.8	9.0	4.0	淡橙色(5YR8/4)	精良	良好	
463	土器埋納墳-1	土師器	皿	12.0	9.8	1.7	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	丹塗り
464	土器埋納墳-1	土師器	甕	13.7	-	10.0	褐色(10YR4/1)	粗砂	良好	内面煤、丹塗り、ススA~C、黒斑A
465	土器埋納墳-2	二彩陶器	小形壺	3.9	4.5	4.8	(釉)薄い緑、淡黄色 (2.5Y8/4)、(地)灰白色 (2.5Y8/2)	精良	良好	
466	土器埋納墳-3	須恵器	蓋	15.6	-	3.3	灰白色(N7)	細砂	良好	ロクロ逆回り
467	土器埋納墳-3	土師器	甕	16.6	-	14.5	鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B
468	土壇-1	須恵器	蓋	14.6	-	(2.8)	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	やや不良	内面仕上げナデ
469	土壇-1	須恵器	杯	13.8	8.2	4.3	灰色(5Y6/1)	細砂	やや不良	歪み大
470	土壇-1	須恵器	(胴部)	-	-	(9.9)	灰白色(5Y7/1)	細砂	やや不良	
471	土壇-4	土師器	杯	14.2	8.7	4.3	鈍橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
472	土壇-4	黒色土器	椀	16.9	8.8	5.6	内-黒色(10YR2/1)、 外-鈍黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	
473	土壇-4	黒色土器	椀	20.6	-	(7.3)	内-黒褐色(2.5Y3/1)、 外-鈍橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
474	土壇-4	土師器	皿	13.4	-	2.1	鈍橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
475	土壇-4	土師器	皿	12.3	9.6	1.7	橙色(2.5YR7/6)	粗砂、細砂	良好	丹塗り
476	土壇-4	土師器	皿	12.6	9.4	1.3	鈍黄橙色(10YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
477	土壇-4	土師器	皿	13.3	11.5	1.7	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	良好	
478	土壇-4	土師器	皿	12.5	10.0	1.3	鈍橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	
479	土壇-4	土師器	杯	12.8	8.5	3.0	鈍橙色(10YR7/3)	細砂、砂礫	良好	丹塗り、底部ヘラキリ
480	土壇-4	土師器	杯	12.6	9.2	3.3	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	丹塗り
481	土壇-4	土師器	杯	12.6	8.9	3.3	鈍橙色(5YR6/4)	細砂	良好	丹塗り
482	土壇-4	土師器	杯	12.6	8.8	3.3	橙色(5YR6/6)	粗砂、細砂	良好	丹塗り
483	土壇-4	土師器	杯	12.3	9.1	3.2	淡橙色(5YR8/4)	細砂	良好	丹塗り
484	土壇-4	土師器	杯	12.8	8.8	3.0	橙色(5YR7/6)	粗砂、砂礫	良好	
485	土壇-4	土師器	杯	12.6	8.4	3.5	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂、細砂	良好	
486	土壇-4	土師器	甕	34.8	-	(10.1)	鈍橙色(5YR6/4)	細砂	良好	ススA
487	土壇-4	土師器	甕	18.8	-	(9.4)	暗赤灰色(2.5YR3/1)	細砂	良好	ススA
488	たわみ-2	須恵器	壺	-	12.0	(3.0)	灰白色(N8)	粗砂	良好	高台、ロクロ順回り、仕上げナデ
489	たわみ-2	須恵器	壺	-	-	(4.8)	青灰色(5PB6/1)	粗砂	良好	把手
490	たわみ-2	須恵器	甕	20.0	-	(8.0)	灰白色(N8)	粗砂	良好	
491	たわみ-2	土師器	甕	22.0	-	(8.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良好	
492	たわみ-2	土師器	甕	(32.0)	-	14.3	鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	
493	たわみ-3	須恵器	蓋	14.7	-	3.1	灰白色(N8)	細砂	良好	仕上げナデ
494	たわみ-3	須恵器	蓋	14.7	-	2.4	灰白色(N8)	粗砂	良好	
495	たわみ-3	須恵器	蓋	-	-	(2.1)	灰色(N6)	細砂	良好	環状つまみ、外面灰をかぶる
496	たわみ-3	須恵器	杯	13.1	9.3	3.7	灰白色(N7)	粗砂	良好	高台
497	たわみ-3	須恵器	杯	13.7	9.3	3.9	灰白色(N8)	粗砂	良好	高台、仕上げナデ
498	たわみ-3	須恵器	杯	11.2	8.4	3.4	灰白色(7Y8/1)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
499	たわみ-3	須恵器	杯	12.9	10.5	4.1	灰白色(N8)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
500	たわみ-3	須恵器	皿	16.0	12.9	2.4	灰白色(N8)	砂礫	良好	仕上げナデ
501	たわみ-3	須恵器	皿	14.9	9.2	2.2	灰白色(N7)	細砂	良好	
502	たわみ-3	須恵器	皿	19.4	-	2.5	灰白色(N8)	粗砂	良好	
503	たわみ-3	須恵器	皿	(19.2)	15.4	2.1	灰白色(7.5Y7/1)	粗砂	良好	歪み大
504	たわみ-3	須恵器	皿	21.1	16.8	2.3	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂	良好	内面スス付着
505	たわみ-3	須恵器	皿	24.4	-	3.0	灰白色(N7)	細砂	良好	底部外面ヘラケズリ、内面仕上げナデ、ロクロ順回り
506	たわみ-3	須恵器	皿	(24.6)	17.4	3.7	灰白色(N8)	粗砂	良好	高台
507	たわみ-3	須恵器	椀	18.1	9.7	5.9	灰白色(7.5Y8/1)	砂礫	良好	高台
508	たわみ-3	須恵器	椀	9.3	5.3	5.3	灰白色(N6)	細砂	良好	底部暗文
509	たわみ-3	須恵器	硯	-	(16.6)	(2.5)	灰白色(N7)	粗砂	良好	円面硯
510	たわみ-3	土師器	杯	13.2	-	2.8	鈍橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良好	丹塗り
511	たわみ-3	土師器	杯	14.4	-	(3.3)	淡橙色(5YR8/3)	粗砂	良好	丹塗り
512	たわみ-3	土師器	皿	21.7	-	(2.0)	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
513	たわみ-3	土師器	皿	(23.0)	-	(2.5)	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	丹塗り
514	たわみ-3	土師器	高杯	-	-	(8.2)	橙色(5YR7/6)	精良	良好	
515	溝-38	須恵器	杯	12.3	8.5	(4.1)	青灰色(5B6)	粗砂	良好	
516	溝-39	須恵器	壺	-	16.4	(3.7)	灰白色(N7)	細砂	良好	高台
517	溝-38	須恵器	壺	-	-	(12.0)	灰褐色(7.5YR6/2)	粗砂	やや不良	底部穿孔か



遺物観察表

高田調査区土器観察表

挿図 番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
518	溝-39	須恵器	甕	(14.4)		(5.4)	灰白色(N7)	細砂	良好	口縁端部に沈線
519	溝-38	須恵器	甕	23.0		(10.2)	灰色(N6)	粗砂	良好	頸部ヘラ記号
520	溝-38	須恵器	甕			(20.9)	黒褐色(2.5Y3/1)	粗砂	やや不良	
521	溝-38	土師器	甕	31.4		(7.4)	鈍橙色(10YR7/4)	粗砂	良好	
522	溝-40	須恵器	蓋	14.9	-	2.5	灰白色(5Y7/1)	細砂	良好	
523	溝-40	須恵器	杯	12.3	8.6	3.2	灰色(N7)	細砂	良好	高台外面自然釉
524	溝-40	須恵器	蓋	15.5		(2.8)	灰白色(N7)	粗砂	良好	
525	溝-40	須恵器	壺	7.4	4.7	5.0	灰色(7.5Y5/1)	精良	良好	外面灰がかぶる
526	溝-40	土師器	甕	29.5	-	(15.0)	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂	良好	外面線刻、黒斑C
527	溝-40	土師器	高杯			8.2	橙色(5YR7/6)	精良	良好	脚柱部面取り
528	溝-43	土師器	杯	12.6	8.9	2.9	浅黄褐色(7.5YR3/8)	細砂	良好	丹塗り
529	溝-43	土師器	杯	12.1	8.7	3.2	淡橙色(5YR8/4)	粗砂	良好	丹塗り
530	溝-43	土師器	杯	11.8	5.9	2.9	浅黄褐色(10YR8/4)	粗砂	良好	丹塗り
531	溝-46	須恵器	杯	14.2	8.0	5.3	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良好	ほぼ完形
532	溝-46	土師器	皿	20.8		3.6	淡橙色(5YR8/4)	精良	良好	
533	溝-46	土師器	皿	22.0		3.5	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	
534	溝-47	須恵器	蓋	(10.8)		2.9	灰色(5Y4/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
535	溝-47	須恵器	蓋	15.6		2.9	灰白色(5Y8/2)	細砂	良好	ロクロ順回り
536	溝-47	須恵器	甕	(19.7)		(3.2)	灰色(N6/0)	粗砂、礫	良好	
537	溝-47	須恵器	小形壺	3.9		6.0	灰白色(N7)	粗砂	良好	完形品、自然釉、ロクロ順回り
538	溝-47	須恵器	甕	(29.4)		(12.0)	灰白色(N8)	粗砂	良好	
539	溝-47	土師器	杯	10.9		3.3	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良好	
540	包含層	須恵器	蓋	18.5	-	4.3	灰白色(N8)	粗砂	良好	ロクロ順回り
541	包含層	須恵器	蓋	15.7	-	2.8	灰白色(N8)	細砂	良好	
542	包含層	須恵器	蓋	14.5	-	2.5	灰白色(N8)	粗砂	良好	
543	包含層	須恵器	杯	16.3	11.4	4.9	灰色(N4)	細砂	良好	高台
544	包含層	須恵器	杯	13.4	8.8	4.3	灰色(N6)	細砂	やや不良	内面底部指頭状圧痕、高台
545	包含層	須恵器	杯	12.5	8.6	3.4	灰色(10Y6/1)	精良	良好	高台
546	包含層	須恵器	杯	14.4	11.0	3.5	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	不良	重ね焼き、器壁磨滅、黒斑A
547	包含層	須恵器	皿	(27.0)	20.2	(3.8)	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	細砂	良好	高台
548	包含層	須恵器	高杯	(17.5)	10.9	10.0	灰白色(N8)	精良	良好	
549	包含層	須恵器	高杯	-	11.1	(7.7)	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	良好	
550	包含層	須恵器	蓋	(12.9)	-	2.4	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	良好	
551	包含層	須恵器	蓋	8.5	-	1.6	灰白色(10Y7/1)	精良	良好	ロクロ逆回り
552	包含層	須恵器	壺	(9.1)	-	(9.8)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	自然釉
553	包含層	須恵器	壺	-	-	(12.3)	灰白色(N7)	砂礫	良好	
554	包含層	須恵器	壺	-	16.0	6.0	灰色(N6)	細砂	良好	ロクロ逆回り、底部に刺突文
555	包含層	須恵器	壺	-	-	(8.7)	灰色(N6)	細砂	良好	
556	包含層	須恵器	播鉢	-	8.8	(3.8)	灰白色(7.5Y7/1)	粗砂	良好	
557	包含層	須恵器	播鉢	-	10.8	(5.3)	灰色(N6)	粗砂	良好	底部刺突
558	包含層	須恵器	甕	15.6		(12.2)	灰白色(N7)	細砂	良好	横瓶か
559	包含層	須恵器	甕	23.6	-	7.4	灰白色(N7)	粗砂	良好	頸部ヘラ記号
560	包含層	須恵器	不明	-	-	-	灰色(N6)	細砂	やや不良	
561	包含層	土師器	杯	14.6	8.8	6.0	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	良好	
562	包含層	土師器	杯	(16.6)		(4.5)	鈍橙色(10YR6/4)	細砂	良好	
563	包含層	土師器	杯	18.2	-	(3.9)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良好	丹塗り
564	包含層	土師器	杯	13.3	9.4	3.8	灰白色(5YR8/2)	細砂	良好	丹塗り
565	包含層	土師器	杯	15.1	8.5	6.4	灰白色(7.5YR8/2)	細砂、粗砂	良好	高台、黒斑A~C
566	包含層	土師器	杯	15.6	7.0	5.1	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
567	包含層	黒色土器	碗	-	8.6	(2.3)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	
568	包含層	土師器	高杯	-	-	(10.4)	淡赤褐色(2.5YR7/4)	細砂	やや不良	丹塗り
569	包含層	土師器	高杯	-	-	(8.1)	橙色(2.5YR7/6)	精良	良好	
570	包含層	二彩陶器	小形火舎	7.9	-	2.2	(釉)明緑透明、(地)灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
571	包含層	二彩陶器	小形火舎	-	(6.3)	(1.1)	(釉)緑色、(地)灰白色(2.5Y8/2)	精良	良好	
572	包含層	緑釉陶器	皿	12.1	6.8	1.9	(釉)緑色、(地)灰白色(10Y7/1)	精良	良好	近江産か

高田調査区土器観察表

挿図 番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
573	包含層	緑釉陶器	皿	-	(9.2)	(1.7)	(釉)オリーブ灰色(10Y5/2)不透明、(地)明青灰色(5B67/1)	精良	良好	底部糸切り、近江産か
574	包含層	緑釉陶器	皿	-	6.0	(2.0)	(釉)明緑灰色(5G7/1)、(地)灰白色(2.5Y8/1)	精良	良好	高台端部内側に沈線、内外面釉剥がれ
575	包含層	土師器	カマド	-	-	32.0	橙色(7.5YR7/6)	砂礫	良好	
576	包含層	須恵器	硯	-	-	-	灰色(N6)	細砂	良好	風字硯
577	包含層	須恵器	硯	-	-	-	青灰色(5B6/1)	細砂	良好	風字硯
578	包含層	須恵器	硯	-	-	-	灰白色(N7)	細砂	良好	風字硯
579	包含層	須恵器	硯	-	-	-	灰白色(5Y7/1)	粗砂	良好	風字硯、自然釉、幅6.5cm・長さ11.3cm・厚さ1.2cm
580	柱穴	土師器	碗	13.0	5.5	5.2	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早島式土器
581	柱穴	土師器	碗	-	7.7	3.6	白色	粗砂	良好	早島式土器
582	柱穴	土師器	碗	10.8	4.1	3.5	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	良好	早島式土器
583	柱穴	土師器	皿	10.6	9.0	1.3	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂、粗砂	良好	底部板目
584	柱穴	土師器	小皿	9.4	6.0	1.5	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	良好	
585	柱穴	土師器	小皿	7.8	6.2	1.0	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	良好	
586	柱穴	土師器	小皿	7.8	5.5	1.5	橙色(7.5YR6/6)	細砂、粗砂	良好	底部ヘラキリ
587	柱穴	土師器	小皿	7.8	5.8	1.3	鈍橙色(7.5YR5/3)	細砂、粗砂	良好	底部ヘラキリ
588	柱穴	土師器	小皿	10.9	6.8	1.9	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	良好	底部ヘラキリ、黒斑C
589	柱穴	土師器	小皿	9.5	7.5	1.5	鈍橙色(10YR7/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ、黒斑A
590	柱穴	土師器	小皿	8.0	7.4	1.5	鈍黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
591	柱穴	土師器	小皿	9.6	-	1.1	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	
592	井戸-3	土師器	碗	10.1	4.0	3.5	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	
593	土壌-6	土師器	碗	11.0	3.8	3.6	灰白色(7.5YR8/1)	粗砂	良好	早島式土器
594	土壌-6	土師器	小皿	7.5	5.6	1.5	鈍橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ、黒斑A
595	土壌-6	土師器	小皿	7.2	5.7	1.5	鈍橙色(5YR7/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
596	土壌-6	土師器	小杯	-	4.4	(2.2)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
597	土壌-6	土師器	鍋	(30.6)	-	10.6	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	ススA~B・B~C
598	土壌-7	土師器	碗	10.6	4.6	3.4	灰白色(5Y8/1)	粗砂	良好	早島式土器
599	土壌-7	土師器	碗	10.2	4.4	3.3	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂	良好	早島式土器
600	土壌-7	土師器	碗	10.4	-	(3.8)	浅黄褐色(10YR8/3)	精良	良好	早島式土器
601	土壌-7	土師器	碗	10.7	4.3	3.5	灰白色(5Y8/1)	粗砂	良好	早島式土器
602	土壌-7	土師器	碗	11.0	4.2	3.6	灰白色(7.5Y8/1)	粗砂	良好	早島式土器
603	土壌-7	土師器	碗	9.8	4.2	4.1	灰白色(10YR8/1)	砂礫	良好	
604	土壌-7	土師器	杯	10.4	7.7	3.3	明褐色(7.5YR7/2)	細砂	良好	底部板目
605	土壌-7	土師器	皿	10.3	7.5	2.2	鈍橙色(5YR7/3)	砂礫	良好	底部板目、黒斑A
606	土壌-7	土師器	小杯	6.0	-	(3.0)	浅黄褐色(10YR8/3)	精良	良好	
607	土壌-7	土師器	小皿	8.5	6.4	1.5	鈍黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	
608	土壌-7	土師器	小皿	6.6	5.6	1.0	浅黄褐色(10YR8/3)	砂礫	良好	底部板目
609	土壌-8	備前焼	搦鉢	-	-	(9.2)	褐灰色(5YR5/1)	粗砂	良好	
610	土壌-9	龜山焼	甕	-	-	(5.3)	灰色(N4)	砂礫	良好	
611	土壌-12	土師器	碗	11.4	-	(3.6)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	やや不良	早島式土器
612	土壌-14	唐津焼	皿	12.7	3.8	4.0	鈍褐色(7.5YR5/4)	細砂	良好	目土痕3
613	土壌-14	唐津焼	皿	12.3	3.0	3.3	浅黄褐色(10YR8/3)	細砂	良好	17C初、目土痕4、高台端部糸切
614	土壌-14	唐津焼	皿	11.2	4.3	3.5	鈍黄褐色(10YR7/3)	細砂	良好	目土痕4
615	土壌-14	唐津焼	皿	11.5	3.7	3.8	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良好	目土痕2
616	土壌-14	唐津焼	碗	10.6	3.9	6.6	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	胎土目、1580~1610年
617	土壌-15	瓦器	鉢	(13.6)	-	7.3	灰白色(5Y6/1)	細砂	良好	刻印「上」
618	土壌-15	備前焼	搦鉢	-	-	(9.0)	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂、粗砂	良好	
619	土壌-15	青磁	碗	-	6.1	(3.6)	鈍褐色(5YR7/3)	精良	不良	外底部釉剥ぎ、灰釉
620	土壌-15	白磁	碗	-	5.5	(3.3)	灰白色(N8)	精良	良好	内底面に草花文のスタンプ
621	土壌-19	土師器	鍋	26.0	-	(11.2)	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	良好	ススA1
622	土壌-19	土師器	鍋	33.4	-	(9.8)	鈍褐色(5YR6/3)	細砂	良好	ススA1
623	土壌-19	土師器	鍋	35.4	-	(9.5)	鈍褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良好	
624	土壌-19	土師器	鍋	36.0	-	(12.9)	灰褐色(7.5YR4/2)	粗砂	良好	ススA1
625	土壌-19	土師器	鍋	40.0	-	(13.6)	灰褐色(5YR5/2)	砂礫	良好	ススA3
626	土壌-19	土師器	鍋	(36.0)	-	(13.4)	鈍褐色(7.5YR5/3)	粗砂	良好	
627	土壌-19	土師器	鍋	34.6	-	(10.6)	鈍褐色(5YR6/4)	細砂	良好	ススA1
628	土壌-19	土師器	鍋	(41.8)	-	(7.1)	鈍褐色(5YR7/4)	細砂	良好	
629	土壌-19	土師器	鍋	38.4	-	(13.7)	褐色(7.5YR7/6)	砂礫	良好	ススA1、黒斑A・B
630	土壌-19	土師器	鍋	36.0	-	(12.3)	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	良好	

## 高田調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
631	土城-19	土師器	鍋	(39.2)	-	(12.8)	鈍黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良好	
632	土城-19	土師器	鍋	(36.6)	-	(10.5)	鈍褐色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
633	土城-19	土師器	鍋	(42.6)	-	(10.4)	鈍褐色(5YR6/3)	細砂	良好	
634	土城-19	土師器	鍋	36.9	-	(12.7)	鈍褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	ススA1
635	土城-19	土師器	鍋	38.4	-	(13.1)	鈍褐色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	ススA1
636	土城-19	土師器	小皿	6.5	4.8	(1.4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
637	土城-19	土師器	小皿	7.8	-	(1.7)	鈍褐色(5YR7/3)	細砂	良好	
638	土城-19	備前焼	擂鉢	-	-	(6.5)	赤灰色(2.5YR5/1)	粗砂	良好	
639	土城-23	備前焼	大甕	55.4	-	(21.9)	赤灰色(7.5R4/2)	細砂	やや不良	
640	土城-23	備前焼	大甕	-	42.0	(7.2)	灰赤色(7.5R6/2)	細砂	やや不良	639と同一個体か
641	土城-23	唐津焼	皿	13.0	3.9	3.8	灰白色(10YR7/1)	精良	良好	胎土目
642	溝-54	土師器	椀	13.8	5.9	4.6	灰白色(7.5Y8/1)	砂礫	良好	早鳥式土器
643	溝-54	土師器	椀	(12.5)	5.3	4.5	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良好	早鳥式土器
644	溝-54	土師器	椀	(12.6)	5.0	4.5	灰白色(10Y8/1)	粗砂	良好	早鳥式土器
645	溝-54	土師器	椀	11.8	5.1	4.0	灰白色(2.5Y8/1)	砂礫	良好	早鳥式土器
646	溝-54	土師器	杯	11.5	10.0	3.0	鈍黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	丹塗り、底部ヘラキリ
647	溝-54	土師器	小皿	8.4	6.2	1.7	灰白色(5Y8/2)	細砂	良好	底部ヘラキリ、板目
648	溝-54	土師器	小皿	7.8	5.6	1.6	灰白色(5Y8/2)	細砂	良好	底部ヘラキリ
649	溝-54	土師器	皿	8.4	5.0	2.0	鈍黄橙色(10YR7/3)	細砂	良好	底部糸切り、穿孔、ススA
650	溝-54	土師器	鍋	(30.8)	-	(6.4)	暗灰色(N31)	粗砂	良好	ススA
651	溝-54	亀山焼	甕	(37.0)	-	(6.2)	灰色(N4)	細砂	良好	
652	溝-54	東播系	壺	-	-	(4.6)	灰色(N6)	砂礫	良好	自然釉
653	溝-54	備前焼	擂鉢	(27.2)	-	(6.0)	鈍褐色(5YR6/4)	細砂	良好	
654	溝-54	備前焼	擂鉢	-	-	(7.2)	暗青灰色(5PB4/1)	細砂	良好	
655	溝-54	備前焼	擂鉢	(21.4)	(12.9)	7.7	褐灰色(7.5YR5/1)	粗砂	良好	
656	溝-54	備前焼	擂鉢	(27.6)	-	(5.8)	灰白色(N7)	砂礫	良好	
657	溝-54	備前焼	德利	-	13.8	(23.9)	黒褐色(5YR3/1)	細砂	良好	三ツ巴文の印、体部「いりさけ」銘
658	溝-54	備前焼	甕	38.2	-	(15.6)	灰色(N5)	細砂	良好	
659	溝-54	瀬戸陶器	卸皿	7.2	-	(2.1)	灰白色(7.5Y8/2)	精良	良好	14C代、灰釉、底部糸切り
660	溝-54	瀬戸陶器	皿	-	8.3	(1.3)	灰白色(5Y8/1)	精良	良好	灰釉、糸切り
661	溝-54	唐津焼	椀	10.7	4.9	7.5	灰白色(5Y7/2)	細砂	良好	砂目積、1600~1630年
662	溝-54	京焼風陶器	皿	8.4	2.6	2.0	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	良好	18C、透明釉、底部糸切り
663	溝-54	唐津焼	皿	(14.8)	-	(2.6)	黒褐色(5YR3/1)	精良	良好	18C、ハケメ唐津
664	溝-54	唐津焼	皿	12.4	4.5	3.4	浅黄色(5Y7/3)	精良	良好	目砂痕4
665	溝-54	唐津焼	皿	12.4	3.4	3.0	灰赤色(2.5YR6/2)	細砂	良好	666・667と組、目砂痕
666	溝-54	唐津焼	皿	12.2	3.4	2.7	灰赤色(2.5YR6/2)	細砂	良好	目砂痕
667	溝-54	唐津焼	皿	11.9	3.3	2.8	灰赤色(2.5YR6/2)	細砂	良好	目砂痕
668	溝-54	唐津焼	皿	11.4	3.6	2.9	鈍黄橙色(10YR7/2)	精良	良好	底面に「十」の墨書、目砂痕3
669	溝-54	唐津焼	皿	11.8	3.2	3.2	鈍褐色(7.5YR6/4)	細砂	良好	底面に「十」の墨書
670	溝-54	唐津焼	皿	11.5	2.8	2.9	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良好	目砂痕、底面に「十」の墨書
671	溝-54	唐津焼	皿	11.5	3.8	2.5	灰黄色(2.5Y6/2)	精良	良好	17C前半、目砂痕
672	溝-54	唐津焼	皿	12.2	2.8	2.5	灰色(5Y5/1)	細砂	良好	高台端部糸切り
673	溝-54	唐津焼	皿	11.6	3.0	3.0	鈍黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	目砂痕、底面に「十」の墨書
674	溝-54	唐津焼	皿	12.6	4.3	3.8	白色	精良	良好	17C前半、溝縁、目砂痕
675	溝-54	唐津焼	鉢	(23.5)	-	(9.0)	鈍褐色(7.5YR7/3)	精良	良好	17C後半、絵唐津
676	溝-54	唐津焼	大皿	(29.4)	-	(4.8)	鈍褐色(5YR6/3)	精良	良好	17C後半、絵唐津
677	溝-54	唐津焼	皿	(29.2)	-	(4.0)	鈍褐色(5YR6/3)	精良	良好	絵唐津
678	溝-54	輸入磁器	皿	-	6.2	(0.9)	白色	精良	良好	16C末、外底面に「富貴佳貴」銘
679	溝-54	輸入磁器	碗	-	4.2	(1.9)	白色	精良	良好	明染付、17C前半まで
680	溝-54	国産磁器	小椀	6.5	3.4	4.9	白色	精良	良好	関西か瀬戸美濃、幕末
681	溝-54	輸入磁器	碗	-	5.1	(2.1)	白色	精良	良好	染付、1580~1810年
682	溝-55・56	土師器	椀	11.0	4.2	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	早鳥式土器
683	溝-56	土師器	椀	11.4	4.2	4.2	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	早鳥式土器、重ね焼き
684	溝-56	土師器	椀	11.1	4.4	3.6	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	早鳥式土器
685	溝-56	土師器	椀	11.2	4.1	3.4	灰白色(10YR7/1)	精良	良好	早鳥式土器、重ね焼き
686	溝-56	土師器	椀	10.6	3.9	3.4	灰白色(10YR8/2)	精良	良好	早鳥式土器
687	溝-56	土師器	椀	11.1	4.5	3.0	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	早鳥式土器
688	溝-55・56	土師器	椀	11.0	3.9	3.1	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	早鳥式土器
689	溝-57	土師器	椀	10.2	3.6	3.0	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	早鳥式土器
690	溝-57	土師器	椀	10.8	3.6	3.3	灰白色(10YR8/2)	精良	良好	早鳥式土器

高田調査区土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
691	溝-57	土師器	杯	11.7	8.3	2.7	鈍橙色(5YR7/3)	細砂	良好	底部板目
692	溝-55・56	土師器	小皿	7.3	5.2	1.6	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	良好	
693	溝-58	土師器	小皿	7.3	5.7	1.0	鈍橙色(5YR7/4)	細砂	良好	底部ヘラキリ
694	溝-55・56	土師器	小杯	5.3	4.2	1.9	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	底部板目、内面線刻
695	溝-59	土師器	椀	-	6.0	(2.1)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	早鳥式土器
696	溝-61	備前焼	播鉢			11.8	紫灰色(5P6/1)	粗砂	良好	
697	溝-61	備前焼	播鉢	25.6	12.4	11.9	鈍赤橙色(10R6/4)	細砂	良好	
698	溝-61	龜山焼	甕	46.7		(7.7)	灰色(N5/0)	細砂、礫	良好	タタキメ
699	溝-61	瓦器	鍋	28.8		(5.2)	灰白色(N5/0)	細砂	良好	外耳
700	溝-62	土師器	椀	-	6.6	(1.9)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	精良	良好	早鳥式土器
701	溝-62	土師器	皿	10.0	6.2	1.8	鈍橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良好	
702	溝-107	土師器	椀	10.7	4.0	3.4	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	早鳥式土器
703	溝-107	土師器	椀	11.8	4.5	3.7	灰白色(2.5Y8/2)	砂礫	良好	早鳥式土器
704	溝-107	土師器	椀	9.8	4.4	3.5	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	良好	
705	溝-107	土師器	小皿	7.3	5.7	1.2	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
706	包含層	土師器	椀		6.4	(6.6)	白色(?)	細砂	良好	早鳥式土器
707	包含層	土師器	椀	12.4	5.8	3.8	灰白色(10YR8/2)	砂礫	良好	早鳥式土器
708	包含層	土師器	椀	10.6	3.0	3.1	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	良好	早鳥式土器
709	包含層	土師器	椀	11.1	3.8	3.3	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	早鳥式土器
710	包含層	土師器	椀	10.5	3.3	3.4	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	早鳥式土器
711	包含層	土師器	椀	9.4	4.1	3.6	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良好	
712	包含層	土師器	椀	10.2	4.8	4.0	鈍橙色(7.5YR7/3)	細砂	良好	
713	包含層	土師器	小杯	-	4.8	(2.4)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
714	包含層	土師器	小杯	-	-	2.5	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	
715	包含層	土師器	小杯	6.8	7.2	2.6	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、礫	良好	底部穿孔、ヘラキリ
716	包含層	土師器	小杯	8.0	4.2	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂、細砂	良好	底部糸切り、穿孔あり
717	包含層	土師器	小杯	8.3	5.2	2.5	鈍黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良好	底部糸切り
718	包含層	土師器	皿	10.2	9.2	1.8	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	底部板目
719	包含層	土師器	皿	12.7	6.7	1.6	鈍黄橙色(10YR7/2)	細砂	良好	底部糸切り
720	包含層	土師器	皿	13.8	9.6	1.3	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	底部糸切り
721	包含層	土師器	小皿	8.2	4.8	2.0	灰黄色(2.5Y6/2)	精良	良好	
722	包含層	土師器	小皿	8.6	5.3	1.8	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	
723	包含層	土師器	小皿	9.2	5.3	1.9	白色	粗砂	良好	
724	包含層	土師器	小皿	(8.0)	6.4	1.4	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	良好	底部ヘラキリ
725	包含層	土師器	小皿	7.8	6.5	1.5	灰白色(2.5Y8/2)	精良	良好	底部ヘラキリ
726	包含層	土師器	小皿	7.4	5.6	1.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
727	包含層	土師器	小皿	8.3	6.1	1.8	灰白色(10YR7/1)	細砂	良好	底部ヘラキリ、黒斑A~B
728	包含層	土師器	小皿	7.6	5.9	1.2	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良好	底部板目
729	包含層	土師器	小皿	7.8	6.0	1.2	灰白色(10YR8/2)	細砂、礫	良好	底部ヘラキリ
730	包含層	土師器	小皿	7.1	5.8	1.2	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	底部糸切り
731	包含層	土師器	小皿	7.0	5.4	1.2	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	良好	底部糸切り、板目、黒斑C
732	包含層	土師器	小皿	6.4	5.0	1.1	鈍黄橙色(10YR7/2)	砂礫	良好	底部糸切り
733	包含層	土師器	鍋	26.0	-	(13.3)	黒褐色(7.5YR2/2)	細砂	良好	内耳1残存、ススC
734	包含層	瀬戸陶器	椀	10.6	4.8	4.4	灰白色(5Y8/2)	細砂	良好	平底末広椀(14C初頭)
735	包含層	備前焼	灯明皿	7.0	3.9	1.1	鈍赤褐色(2.5YR4/3)	精良	良好	
736	包含層	備前焼	鉢	(13.4)		(4.4)	明赤褐色(5YR3/6)	細砂	良好	
737	包含層	備前焼	播鉢	28.6	12.0	10.3	灰赤色(2.5YR5/2)	粗砂	良好	
738	包含層	瓦器	鉢	33.7	-	(9.9)	暗青灰色(5BG3/1)	細砂	良好	外面に菊のスタンプ文
739	包含層	龜山焼	甕	(45.2)			灰白色(7.5YR8/1)	砂礫	良好	
740	包含層	青磁	碗	-	-	(4.8)	灰白色(N8)	精良	良好	
741	包含層	青磁	皿	-	3.6	(1.2)	灰白色(5Y7/1)	精良	良好	底部釉剥ぎ、平高台
742	包含層	白磁	碗	(14.8)	-	(2.1)	灰白色(N8)	精良	良好	口縁内面釉ダレ
743	包含層	白磁	碗	-	6.0	(3.6)	灰白色(5GY8/1)	精良	良好	見込み釉剥ぎ

高田調査区石製品一覧表

掲載 番号	遺構名	器種	材質	法量(cm)			重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
J1	包含層	管玉	碧玉	(1.7)	0.8	-	1.7	古墳	片側穿孔、孔径3.5~1.0mm弱
S1	溝-4	磨製石斧	安山岩	7.1	5.6	4.4	263.4	弥生	蛤刃石斧
S2	包含層	石鏃	サヌカイト	(3.2)	1.7	0.4	2.3	弥生	
S3	包含層	石鏃	サヌカイト	2.1	1.7	0.5	1.4	弥生	
S4	包含層	石鏃	サヌカイト	1.6	(1.3)	0.4	0.6	弥生	
S5	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.9)	1.3	0.4	0.7	弥生	
S6	包含層	石鏃	サヌカイト	(1.7)	0.6	0.5	0.4	弥生	
S7	包含層	刃器	サヌカイト	(3.1)	1.7	0.4	1.8	弥生	
S8	包含層	削器	サヌカイト	(4.0)	3.7	0.6	9.1	弥生	
S9	包含層	石皿	安山岩	(20.8)	(13.0)	5.0	1987.3	弥生	
S10	包含層	凹石	花崗岩(細粒)	(11.4)	12.6	2.4	534.6	弥生	
S11	包含層	凹石	安山岩か	7.2	7.2	2.2	176.6	弥生	被熱による変質
S12	包含層	叩き石	閃緑岩(細粒)	6.2	5.3	4.4	197.8	弥生	
S13	竪穴住居-7	砥石	半花崗岩(アブライト)	8.4	12.1	4.9	571.8	古・後・II~III	
S14	竪穴住居-8	石皿	花崗岩	(15.8)	(10.0)	4.5	1125.8	古・後・II~III	
S15	竪穴住居-10	支脚	石英斑岩	16.2	9.8	5.7	1567.3	古・後・II	被熱痕あり、頂部に円形にスス付着
S16	竪穴住居-23	砥石	流紋岩質凝灰岩	5.0	6.8	4.4	125.4	古・後・II	
S17	竪穴住居-38	砥石	頁岩	(6.0)	2.2	2.5	30.7	古・後・III	
S18	竪穴住居-42	砥石	流紋岩質熔岩	3.1	3.9	2.9	45.6	古・後・III	折損品再利用
S19	竪穴住居-45	砥石	流紋岩質熔岩	(13.0)	(3.9)	(3.3)	130.0	古・後・II	
S20	竪穴住居-51	砥石	流紋岩質熔岩	(4.1)	5.1	(3.5)	91.8	古・後・II~III	
S21	竪穴住居-56	砥石	流紋岩質熔岩	(9.4)	5.5	4.0	217.1	古・後・II	
S22	竪穴住居-62	砥石	ホルンフェルス	(15.2)	6.7	7.0	828.8	古・後・II~III	
S23	溝-9	砥石	流紋岩質熔岩	7.3	5.4	3.6	200.0	古・前・I~II	
S24	溝-28	砥石	流紋岩質凝灰岩	6.2	4.8	2.8	78.7	古・後・II~III	
S25	溝-29	叩き石	溶結凝灰岩	10.7	3.9	2.9	190.4		
S26	柱穴	砥石	流紋岩質熔岩	(4.2)	4.4	2.4	54.4	中・近世	
S27	柱穴	不明	流紋岩質熔岩	6.0	2.0	1.8	33.5		全面に摩滅痕
S28	土壇-15	石鍋	滑石	-	-	1.4	285.3	室町	底径153mm、底厚22mm
S29	土壇-15	石鍋	滑石	-	-	1.4	261.7	室町	底径110mm、底厚13.5mm
S30	溝-60	五輪石	大理石	21.3	16.7		7360.0	中世	こごめ石、空・風輪一石造り
S31	溝-61	温石か	滑石	(5.5)	5.2	2.0	79.5	中・近世	頂部側面に突起あり
S32	溝-61	砥石	流紋岩質熔岩か	(9.4)	4.6	3.0	138.0	中・近世	被熱による変質
S33	包含層	砥石	頁岩	(16.5)	5.6	4.8	398.4	中・近世	
S34	包含層	砥石	流紋岩質熔岩	12.7	6.0	4.1	414.0		
S35	包含層	砥石	流紋岩質熔岩	(11.4)	5.7	(2.0)	150.0	中・近世	
S36	包含層	砥石	砂岩	9.8	(8.8)	4.7	459.3	-	
S37	包含層	砥石	流紋岩質熔岩	7.7	(7.1)	2.4	165.2	中・近世	
S38	包含層	砥石	流紋岩質熔岩	9.0	2.7	3.8	61.3	中・近世	
S39	包含層	砥石	流紋岩質熔岩	(8.5)	4.1	4.0	180.5	中・近世	側面に加工痕あり
S40	包含層	砥石	流紋岩質熔岩	(6.7)	8.0	4.2	290.5	中・近世	
S41	包含層	砥石	流紋岩質熔岩	6.4	6.4	2.9	182.9	中・近世	
S42	包含層	墓石か	火山礫凝灰岩	26.7	14.3	9.2	4200.0	中・近世	表面風化が顕著

高田調査区土製品一覧表

掲載 番号	遺構名	器種	法量(cm)				重量 (g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
			長さ	幅	厚さ	孔径						
C1	溝-5	紡錘車	4.6	4.7	0.4	0.5	10.3	表: 灰黄褐色(10YR5/2) 裏: 灰黄色(2.5YR6/2)	細砂	良好	弥・後・IV	土師器甕胴部転用
C2	竪穴住居-56	管状土鍾	(5.7)	2.2		0.7	(26.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	古・後・II	
C3	竪穴住居-58	管状土鍾	10.0	2.5		0.7	56.2	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良好	古・後・III	
C4	竪穴住居-60	羽口	(5.9)	(4.9)	1.7	2.3	(51.1)	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	良好	古・後・II	外面滓融着
C5	竪穴住居-72	紡錘車	-	-	2.1	0.6	47.3	灰色(N6)	細砂	良好	古・後・II	須恵質、上面径3.5cm・下面径4.0cm
C6	竪穴住居-75	管状土鍾	(5.9)	2.1		0.6	23.9	灰白色(2.5Y8/1)	精良	良好	古・後・III	
C7	包含層	円板	4.5	-	-		9.8	橙色(5YR6/6)	細砂	良	古墳	中央に未完通の孔、転用紡錘車未製品か
C8	包含層	羽口	(6.1)	(4.9)	2.4	2.3	(69.7)	褐灰色(10YR6/1)	細砂	良好	古・後	
C9	包含層	羽口	(6.6)	(6.0)	2.7	3.1	(114.3)	褐灰色(5YR5/1)	細砂	良好	古・後	
C10	掘立柱建物-5	管状土鍾	(4.5)	2.9		0.9	(22.3)	鈍い褐色(5YR6/3)	細砂	良好	古代	
C11	土壇-1	平瓦	14.2	9.5	2.0		(480)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	奈良	凸面縄叩き
C12	たわみ-2	平瓦	(13.3)	(11.8)	1.7		(388)	灰色(N4)	砂礫	良	古代	凸面縄叩き
C13	たわみ-3	平瓦	(11.6)	(14.2)	1.5		(380)	明褐灰色(7.5YR7/1)	粗砂	良	古代	凸面縄叩き
C14	たわみ-3	磚	(9.8)	13.6	4.6		(863)	鈍い橙色(5YR7/4)	砂礫	やや不良	古代	
C15	溝-40	軒平瓦	-	-	-		(230)	灰白色(2.5Y7/1)	粗砂	良	古代	平城宮系
C16	包含層	軒丸瓦	-	-	-		(78)	灰白色(N8)	細砂	良好	古代	
C17	包含層	軒丸瓦	-	-	-		(11500)	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂	良好	古代	平城宮系
C18	包含層	丸瓦	(29.2)	15.7	1.9		1580	灰白色(5Y7/1)	粗砂	良好	古代	凸面縄叩き後ナデ
C19	包含層	平瓦	(18.7)	(15.0)	1.4		(582)	灰色(N8)	砂礫	良好	古代	凸面縄叩き
C20	包含層	平瓦	(20.7)	(17.1)	1.9		(973)	黄灰色(2.5Y6/1)	砂礫	良好	古代	凸面縄叩き
C21	包含層	平瓦	(17.5)	(15.0)	1.8		(786)	灰白色(N7)	細砂	良	古代	凸面縄叩き
C22	包含層	平瓦	(16.3)	(13.4)	3.2		(667)	灰白色(2.5Y8/1)	砂礫	良好	古代	凸面縄叩き
C23	包含層	平瓦	(20.0)	(17.1)	2.3		(886)	灰色(7.5Y6/1)	粗砂	良好	古代	凸面平行叩き、凹面模骨痕、線目痕
C24	包含層	平瓦	(10.7)	(10.7)	3.0		(446)	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	良好	古代	凸面格子叩き、隅切り瓦?
C25	包含層	平瓦	(7.6)	(5.7)	1.8		(112)	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	古代	凸面格子叩き
C26	柱穴	管状土鍾	(4.1)	1.8		0.5	(12.2)	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	中・近世	
C27	柱穴	管状土鍾	5.3	1.1		0.4	5.4	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	中・近世	
C28	柱穴	棒状土鍾	6.5	1.2		0.5	11.1	黒色(10YR2/1)	精良	良好	中・近世	双孔
C29	柱穴	円板	5.2	5.2	1.4		48.8	灰白色(N7/)	精良	良好	中・近世	国産陶器椀底部転用
C30	井戸-2	軒平瓦	(15.6)	21.9	1.4		(994)	灰色(7.5Y4/1)	細砂	良好	江戸	燻し瓦/凸面に補修痕
C31	井戸-2	軒平瓦	23.9	19.6	1.1		(963)	灰白色(5Y7/2)	細砂	良好	江戸	燻し瓦
C32	井戸-2	軒平瓦	23.3	20.3	1.1		(1005)	灰色(N4)	細砂	良好	江戸	燻し瓦
C33	井戸-2	軒平瓦	26.5	22.2	1.8		(1600)	灰色(N5)	細砂	良好	江戸	燻し瓦
C34	井戸-2	軒平瓦	25.6	21.4	1.6		(1360)	灰色(N5)	細砂	良好	江戸	燻し瓦
C35	井戸-2	軒平瓦	26.4	21.8	1.5		(1600)	灰色(7.5Y6/1)	細砂	良好	江戸	燻し瓦
C36	土壇-15	管状土鍾	5.7	1.6		0.5	14.1	灰白色(10YR8/2)	細砂	良好	室町	
C37	土壇-23	軒丸瓦	(8.5)	(10.7)			(285)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	良好	江戸	燻し瓦
C38	土壇-23	丸瓦	(23.4)	(11.1)	2.0		(569)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	江戸	燻し瓦/凸面縄叩き後ナデ
C39	土壇-23	平瓦	(14.9)	(11.8)	1.4		(379)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	江戸	燻し瓦
C40	溝-54	軒丸瓦	(8.2)	(13.6)	1.7		(360)	灰色(5Y6/1)	細砂	良好	中・近世	
C41	溝-54	軒丸瓦	(3.7)	-	-		(304)	オリーブ黒色(7.5Y5/1)	細砂	良好	中・近世	
C42	溝-54	軒丸瓦	(14.7)	(12.7)	1.7		(496)	灰色(N4)	細砂	良好	中・近世	燻し瓦
C43	溝-54	軒平瓦	(13.8)	(13.1)	1.5		(412)	灰色(5Y5/1)	細砂	良好	中・近世	燻し瓦
C44	溝-54	軒平瓦	(6.5)	(12.9)	1.6		(258)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	やや不良	中・近世	燻し瓦
C45	溝-54	軒平瓦	(7.2)	(12.9)	1.7		(239)	灰色(N4)	細砂	良好	中・近世	燻し瓦
C46	溝-54	軒平瓦	(9.5)	(11.6)	1.5		(209)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	中・近世	燻し瓦
C47	溝-54	丸瓦	(15.2)	(9.4)	1.7		(390)	暗灰色(N3)	細砂	良	江戸	燻し瓦
C48	溝-54	丸瓦	25.7	14.0	2.2		(1196)	灰色(N6)	細砂	良好	中・近世	燻し瓦
C49	溝-54	平瓦	(17.8)	(22.5)	1.5		(671)	灰色(N4)	細砂	良好	古・近世	燻し瓦
C50	溝-54	円板	6.9	6.2	1.9		93.6	灰色(N6/)	細砂	良好	中・近世	丸瓦転用
C51	溝-54	円板	5.7	5.7	1.4		52.7	黄灰色(2.5Y5/1)	細砂	良好	中・近世	平瓦転用
C52	溝-54	円板	5.7	5.4	1.8		59.3	暗灰色(N3/)	精良	良好	中・近世	平瓦転用
C53	溝-54	円板	7.0	6.3	0.9		62.1	灰褐色(5YR5/2)	細砂	良好	中・近世	土師器底(胴)部転用
C54	溝-54	円板	6.8	6.2	1.5		83.9	暗褐色(5YR3/4)	粗砂	良好	中・近世	備前焼甕胴部転用
C55	溝-54	円板	5.4	4.5	1.3		44.7	鈍い赤褐色(2.5YR5/3)	細砂	良好	中・近世	備前焼甕胴部転用

高田調査区土製品一覧表

掲載番号	遺構名	器種	法量(cm)				重量(g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
			長さ	幅	厚さ	孔径						
C56	溝-54	円板	5.4	5.0	1.3		48.6	灰褐色(5YR5/2)	細砂	良好	中・近世	備前焼壺胴部転用
C57	溝-54	円板	5.7	5.0	1.6		34.2	淡黄色(2.5Y8/3)	精良	良好	中・近世	陶器碗底部転用
C58	溝-54	円板	6.4	5.5	1.4		65.5	淡黄色(2.5Y8/3)	精良	良好	中・近世	磁器碗底部転用
C59	溝-54	有溝土錘	7.8	4.7	3.5	-	102.0	橙色(5YR6/6)	細砂	良好	中・近世	
C60	溝-54	管状土錘	(3.1)	1.3		0.5	(4.0)	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	良好	中・近世	
C61	溝-57	管状土錘	(5.0)	1.8		0.5	14.0	灰白色(10YR8/1)	細砂	良好	中世	
C62	溝-55・56	管状土錘	(4.4)	1.8		0.5	(11.3)	灰白色(5YR8/2)	細砂	良好	中世	
C63	溝-59	管状土錘	(4.5)	1.1		0.6	4.8	黒褐色(2.5Y3/1)	細砂	良好	中・近世	
C64	溝-60	軒丸瓦	-	-	-		(343)	灰色(N6)	細砂	良好	江戸	燻し瓦
C65	溝-60	軒丸瓦	14.9	(3.6)	1.5		(530)	灰色(7.5Y6/1)	細砂	良好	江戸	燻し瓦
C66	溝-61	軒平瓦	(4.9)	(11.3)	(2.1)		(228)	灰色(5Y6/1)	細砂	不良	室町	ハナレ砂
C67	包含層	有溝土錘	8.7	3.9	3.1		99.6	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良好	中・近世	
C68	包含層	有溝土錘	6.1	3.2	2.5	-	44.4	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良好	中・近世	
C69	包含層	管状土錘	(5.7)	(4.9)		(1.9)	(95.0)	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良好	中・近世	
C70	包含層	管状土錘	6.6	2.9		1.2	59.8	橙色(5YR6/6)	粗砂	良好	中・近世	
C71	包含層	管状土錘	6.2	2.7		0.9	52.5	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良好	中・近世	
C72	包含層	管状土錘	6.8	2.1		0.7	25.0	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	良好	中・近世	
C73	包含層	管状土錘	6.3	2.1		0.8	25.5	淡黄色(2.5Y8/4)	細砂	良好	中・近世	
C74	包含層	管状土錘	6.7	1.8		0.7	21.1	褐灰色(7.5YR4/1)	精良	良好	中・近世	
C75	包含層	管状土錘	6.4	1.5		0.3	15.2	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良好	中・近世	
C76	包含層	管状土錘	4.6	1.2		0.5	4.5	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良好	中・近世	
C77	包含層	管状土錘	5.1	1.0		0.3	4.7	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良好	中・近世	
C78	包含層	管状土錘	4.5	1.9		0.6	13.6	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	良好	中・近世	
C79	包含層	管状土錘	4.0	2.2		0.7	19.4	褐灰色(10YR4/1)	精良	良好	中・近世	
C80	包含層	軒平瓦	(8.0)	(15.1)	2.3		(436)	灰色(N6)	細砂	良好	中・近世	ハナレ砂
C81	包含層	軒平瓦	-	(10.5)	-		(116)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	やや不良	中・近世	

高田調査区木製品一覧表

掲載番号	遺構名	器種	材質	法量(cm)			時期	備考
				長さ	幅	厚さ		
W1	井戸-2	碗		-	-	底1.0 体0.5	江戸	内外体部黒漆塗、口径126mm、底径60、器高63mm
W2	井戸-3	蓋		-	径11.5	0.6	室町	巾4~5mm、深1.5mmの溝あり
W3	溝-54	碗		-	-	0.6	中・近世	器高(66mm)、乾燥によるひづみ顕著、底径66mm、内面朱漆、外面黒漆、朱漆による絵付あり
W4	溝-54	蓋		-	径9.0	0.7	中・近世	
W5	溝-58	櫛		6.2	4.8	1.2(齒0.1)	室町	1/2残存、齒19本残存
W6	溝-61	碗		-	-	0.7	室町	内外体部黒漆塗、底径58.0mm、内面に一部朱漆あり
W7	溝-83	碗		-	-	1.1	中・近世	口径148mm、残存高103mm、内外体部黒漆塗、外面に朱漆による草花文
W8	包含層	下駄		129.0	7.2	22.5	中・近世	径9.0mm前後の孔3ヶ所あり

高田調査区骨製品一覧表

掲載番号	遺構名	器種	材質	法量(cm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
1	柱穴	筭	骨	3.7	1.1	0.4	2.5	中世	頭部に径2.0mmの穿孔、焼骨

高田調査区金属製品一覧表

掲載番号	遺構名	器種	材質	法量(cm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
M1	竪穴住居-3	鎌	鉄	(18.4)	(3.6)	(0.5)	(41.6)	古・後・Ⅱ	
M2	竪穴住居-15	針状製品	鉄	(11.0)	(0.8)	(0.6)	(6.7)	古・後・Ⅱ	
M3	竪穴住居-18	鎌	鉄	(18.3)	(3.6)	(0.6)	(63.4)	古・後・Ⅱ	
M4	竪穴住居-18	不明	鉄	(3.6)	(0.9)	(0.4)	(1.4)	古・後・Ⅱ	
M5	竪穴住居-19	鎌か	鉄	(6.6)	(1.5)	(0.4)	(4.3)	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
M6	竪穴住居-20	素材	鉄	(3.2)	(1.7)	(0.3)	(2.6)	古・後・Ⅱ	
M7	竪穴住居-22	鑿	鉄	(6.0)	(2.4)	(1.5)~0.6	(29.7)	古・後・Ⅲ	
M8	竪穴住居-30	不明	鉄	(8.2)	(4.4)	(1.6)	(104.3)	古・後・Ⅱ	
M9	竪穴住居-38	紡錘車	鉄	(25.1)	径4.5	(0.8)	(45.3)	古・後・Ⅲ	幅は紡輪部分で計測
M10	竪穴住居-47	鎌	鉄	(3.2)	(2.8)	(0.4)	(7.0)	古・後・Ⅱ	
M11	竪穴住居-49	摘鎌	鉄	(3.1)	(1.6)	(0.4)	(3.4)	古・後・Ⅱ	
M12	竪穴住居-58	刀子	鉄	(5.8)	(1.9)	(0.9~0.5)	(8.8)	古・後・Ⅲ	別個体付着
M13	竪穴住居-68・69	鑿	鉄	(4.3)	(1.4)	(0.8)	(8.9)	古・後・Ⅱ	
M14	竪穴住居-71	刀子	鉄	(3.7)	(1.1)	(0.5)	(2.2)	古・後・Ⅱ	小柄か
M15	竪穴住居-75	鎌か	鉄	(3.9)	(2.4)	(0.5)	(6.6)	古・後・Ⅲ	
M16	竪穴住居-75	鎌	鉄	(5.0)	(1.2)	(0.6)	(4.9)	古・後・Ⅲ	
M17	竪穴住居-79	刀子	鉄	(12.6)	(1.5)	(0.5)	(14.0)	古・後・Ⅱ	
M18	竪穴住居-86	刀子	鉄	(7.0)	1.3~1.0	0.3	(7.5)	古・後・Ⅱ	
M19	溝-9	鎌	鉄	(6.0)	(1.7)	(0.5~0.3)	(13.0)	古・前・Ⅰ~Ⅱ	
M20	溝-9	刀子	鉄	(9.2)	(1.2)	(0.6)	(6.3)	古・前・Ⅰ~Ⅱ	
M21	溝-28	鎌	鉄	(4.2)	(2.2)	(0.5~0.4)	(5.6)	古・後	
M22	溝-28	摘鎌	鉄	(4.8)	(2.0)	(0.4)	(8.1)	古・後	
M23	溝-29	鎌	鉄	(7.5)	(2.9)	(0.5)	(11.2)	古・後・Ⅱ~Ⅲ	
M24	包含層	鉄滓	鉄	17.3	13.1	6.3	1050.0	古・後	椀形滓2個体融着
M25	包含層	耳環	鉄	2.8	3.0	0.7	17.8	古・後	金銅張
M26	包含層	鎌	鉄	(4.7)	(1.4)	(0.4)	(3.9)	古・後	
M27	包含層	鎌	鉄	3.9	(3.1)	(0.7)	(10.4)	古・後	
M28	包含層	鎌か	鉄	(7.0)	(2.0)	(0.4)	(7.2)	古・後	
M29	包含層	鎌	鉄	(9.8)	(3.8)	(0.6)	(44.4)	古・後	
M30	包含層	鎌	鉄	(8.9)	(2.6)	(0.5)	(19.5)	古・後	
M31	包含層	鎌	鉄	(15.8)	(3.2)	(0.6)	(45.8)	古・後	
M32	包含層	斧	鉄	(5.6)	(3.1)	(0.6)	(43.4)	古・後	
M33	包含層	鑿か	鉄	(5.0)	(1.4)	(0.8)	(11.5)	古・後	
M34	掘立柱建物-11	素材	鉄	(2.0)	(1.4)	(0.2)	1.5	奈良	
M35	掘立柱建物-14	鈍	鉄	(8.5)	(1.7)	(0.7~0.5)	(17.2)	奈良	Pit 4
M36	土器埋納壇-3	銭	銅	2.5	0.2	0.2		奈良	和同開珎
M37	土器埋納壇-3	銭	銅	2.5	0.1	0.1		奈良	和同開珎
M38	土器埋納壇-3	銭	銅	2.5	0.1	(0.3)		奈良	和同開珎、M39と錆着
M39	土器埋納壇-3	銭	銅	2.5	0.2			奈良	和同開珎
M40	土器埋納壇-3	銭	銅		1.1	(0.01)		奈良	和同開珎、破片
M41	たわみ-3	不明	鉄	(13.1)	(3.8)	(0.5)	24.2	奈良	
M42	たわみ-3	鈍	鉄	23.4	(2.4)	(0.7)	(41.5)	奈良	
M43	溝-42	剣か	鉄	(7.6)	(2.6)	(0.6)	(20.2)	古代	
M44	柱穴	銭	銅	2.4	2.5	0.2	3.3	中・近世	元祐通寶(宋1086年)
M45	土壇-8	銭	銅	2.4	2.5	0.2	2.4	中・近世	聖宋元寶(宋1086年)
M46	土壇-9	火打金	鉄	(4.9)	(5.8)	(0.5)	(47.6)	中世	
M47	土壇-12	鎌	鉄	(4.7)	(2.3)	(0.5)	(7.8)	室町	
M48	土壇-14	釘	鉄	(5.3)	(1.5)	(0.9)	(4.9)	江戸	
M49	土壇-14	火打金か	鉄	(6.1)	(7.9)	(0.9)	(51.8)	江戸	
M50	溝-54	火打金	鉄	(6.7)	(2.4)	(0.6)	(10.6)	江戸	
M51	溝-54	刀子	鉄	(9.9)	(2.5)	(0.8)	(26.3)	江戸	
M52	溝-61	繩	鉄	(5.0)	(3.1~2.8)	(1.8)	(20.4)	近世	
M53	溝-88	楔	鉄	(5.0)	3.0		(42.5)	中・近世	
M54	包含層	鎌	鉄	(5.2)	(3.0)	(0.7)	(8.4)	中・近世	
M55	包含層	釘	鉄	(5.9)	(頭)1.2 (基)1.1	(頭)1.0 (基)0.7	(11.8)	中・近世	
M56	包含層	釘	鉄	(5.8)	(1.2)	(0.8)	(8.7)	中・近世	
M57	包含層	釘	鉄	(5.5)	(1.3)	(0.6)	(8.7)	中・近世	
M58	包含層	釘	鉄	(6.7)	(1.5)	(0.4)	(7.8)	中・近世	
M59	包含層	釘(鎌か)	鉄	(4.9)	(1.3)	(0.5)	(3.7)	中・近世	



高田調査区金属製品一覧表

掲載 番号	遺構名	器種	材質	法量(cm)			重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
M60	包含層	釘	鉄	(5.0)	(頭)1.1 (基)0.6	0.6	(3.5)	中・近世	
M61	包含層	鍋	鉄		(5.6)		28.6	中・近世	残存器高(48.5)
M62	包含層	煙管	銅	5.4		0.1	4.6	近世	吸口、孔径(肩)9.5、(吸口)4.0~4.5
M63	包含層	煙管	銅	(6.6)	0.8	0.6	(4.0)	近世	吸口
M64	包含層	銭	銅	2.4	2.4	0.2	3.0	中・近世	祥符元寶(宋1008年)
M65	包含層	銭	銅	2.4	2.4	0.2	2.4	中・近世	元豐通寶(宋1078年)
M66	包含層	銭	銅		2.4	0.2	2.9	中・近世	紹聖元寶(宋1094年)

1. 中屋調査区竪穴住居

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
竪穴住居-125	中屋E3	No.1住居	二宮
竪穴住居-126	中屋M11I	No.102住居	高畑
竪穴住居-127	中屋M11I	No.58住居	〃
竪穴住居-128	中屋B3	住居8	古谷野
竪穴住居-129	中屋B3	住居9	〃
竪穴住居-130A	中屋B3	住居11A	〃
竪穴住居-130B	中屋B3	住居11B	〃
竪穴住居-131	中屋H5	住居2	井上
竪穴住居-132	中屋E1	SH04	岡田
竪穴住居-133	中屋M11I	No.90住居	高畑
竪穴住居-134A	中屋M11I	No.59B住居	〃
竪穴住居-134B	中屋M11I	No.59A住居	〃
竪穴住居-135	中屋M11I	No.60住居	〃
竪穴住居-136A	中屋M11I	No.38下住居	〃
竪穴住居-136B	中屋M11I	No.38上住居	〃
竪穴住居-137	中屋M11I	No.21住居	〃
竪穴住居-138	中屋M11I	No.22住居	〃
竪穴住居-139	中屋M11I	No.52住居	〃
竪穴住居-140	中屋M11I	No.119住居	〃
竪穴住居-141	中屋M11I	No.98住居	〃
竪穴住居-142	中屋M11I	No.67住居	〃
竪穴住居-143	中屋M11I	No.65住居	〃
竪穴住居-144	中屋M11I	No.66C住居	〃
竪穴住居-145	中屋M11I	No.66B住居	〃
竪穴住居-146	中屋M11I	No.66A住居	〃
竪穴住居-147	中屋B3	住居2	古谷野
竪穴住居-147A	中屋M11I	No.18B住居	高畑
竪穴住居-147B	中屋M11I	No.18A住居	〃
竪穴住居-148	中屋B3	住居3	古谷野
竪穴住居-149	中屋B3	住居12	〃
竪穴住居-150A	中屋B3	住居7A	〃
竪穴住居-150B	中屋B3	住居7B	〃
竪穴住居-151	中屋B3	住居10	〃
竪穴住居-152	中屋M11I	No.53B住居	高畑
竪穴住居-153	中屋M11I	No.53A住居	〃
竪穴住居-153	中屋B3	住居6	古谷野
竪穴住居-154	中屋M11I	No.57住居	高畑
竪穴住居-155	中屋M11I	No.110住居	〃
竪穴住居-156	中屋M11I	No.129住居	〃
竪穴住居-156	中屋H5	住居1	井上
竪穴住居-157	中屋H5	住居3	〃
竪穴住居-157	中屋B3	住居5	古谷野
竪穴住居-158	中屋H3	SB03	正岡
竪穴住居-159	中屋H6	住居1	大橋
竪穴住居-160	中屋H6	住居3	〃
竪穴住居-161	中屋H6	住居4	〃
竪穴住居-162	中屋H6	住居2	〃
竪穴住居-163	中屋M11I	No.17住居	高畑
竪穴住居-164	中屋B3	住居1	古谷野
竪穴住居-165	中屋M11I	No.51住居	高畑
竪穴住居-166	中屋M11I	No.54住居	〃
竪穴住居-167	中屋M11I	No.70住居	〃
竪穴住居-168	中屋B3	住居4	古谷野
竪穴住居-169	中屋E2	住居10	光永

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
竪穴住居-170	中屋E2	住居11	〃
竪穴住居-171	中屋E2	住居20	〃
竪穴住居-172	中屋E1	SH02	岡田
	中屋E4	No.10住居	光永
竪穴住居-173	中屋E1	SH01	岡田
竪穴住居-174	中屋E1	SH05	〃
竪穴住居-175	中屋3BII	住居8	光永
竪穴住居-176	中屋3BII	住居5'	〃
竪穴住居-177	中屋3BII	住居6	〃
竪穴住居-178	中屋3BII	住居17	〃
竪穴住居-179	中屋3BII	住居4	〃
竪穴住居-180	中屋3BI	No.11住居	〃
竪穴住居-181	中屋3BI	No.12住居	〃
竪穴住居-182	中屋3BI	No.10住居	〃
竪穴住居-183	中屋3BI	No.9住居	〃
竪穴住居-184	中屋3BI	No.8住居	〃
竪穴住居-185	中屋3BI	No.15住居	〃
竪穴住居-186	中屋3BI	No.7住居	〃

2. 中屋調査区掘立柱建物

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
掘立柱建物-16	中屋E3	SB01	二宮
掘立柱建物-17	中屋B3	建物1	古谷野
掘立柱建物-18	中屋M11I	No.15建物	高畑
掘立柱建物-19	中屋M12V	SB001	岡田
掘立柱建物-20	中屋E1東	SB03	〃
掘立柱建物-21	中屋M12V	SB01	〃
掘立柱建物-22	中屋3BU I	建物3	片山
掘立柱建物-23	中屋3BU I	建物2古	〃
掘立柱建物-24	中屋3BU I	建物2新	〃
掘立柱建物-25	中屋3BU I	建物4	〃
掘立柱建物-26	中屋3BU II	建物2	井上
掘立柱建物-27	中屋3BU II	建物5	〃
掘立柱建物-28	中屋3BU II	建物3	〃
掘立柱建物-29	中屋3BU II	建物4	〃
掘立柱建物-30	中屋3BU II	建物6	〃
掘立柱建物-31	中屋3BU II	建物7	〃
掘立柱建物-32	中屋3BU II	建物8	〃
掘立柱建物-33	中屋3BI	No.21建物	光永
掘立柱建物-34	中屋M11I	No.14建物	高畑
掘立柱建物-35	中屋M11I	No.13建物	〃
掘立柱建物-36	中屋H3	SB1	正岡
掘立柱建物-37	中屋H3	SB1	〃
掘立柱建物-38	中屋E1	SB02	岡田
掘立柱建物-39	中屋E1	SB01	〃
掘立柱建物-40	中屋E1	SB03	〃
掘立柱建物-41	中屋M12IV	建物1	二宮
掘立柱建物-42	中屋M12IV	建物2	〃
掘立柱建物-43	中屋M12V	SB02	岡田
掘立柱建物-44	中屋M12III	SB01	二宮
掘立柱建物-45	中屋M12III	SB02	〃
掘立柱建物-46	中屋3BU II	建物1	井上
掘立柱建物-47	中屋3BU I	建物1	片山
掘立柱建物-48	中屋3BII	中世建物	光永

3. 中屋調査区井戸

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
井戸-3	中屋E1	SE04	岡田
井戸-4	中屋E1	SE02	〃
井戸-5	中屋E1	SE01	〃
井戸-6	中屋H6	井戸	亀山

4. 中屋調査区袋状土壌

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
袋状土壌-70	中屋M11I	No.103A土壌	高畑
袋状土壌-71	中屋M11I	No.103B土壌	〃
袋状土壌-72	中屋M11I	No.100土壌	〃
袋状土壌-73	中屋M11I	No.130土壌	〃
袋状土壌-74	中屋M11I	No.121土壌	〃
袋状土壌-75	中屋H5	土壌8	井上
袋状土壌-76	中屋H5	土壌14	〃
袋状土壌-77	中屋H5	土壌1	〃
袋状土壌-78	中屋H5	土壌9	〃
袋状土壌-79	中屋B3	SK24	古谷野
袋状土壌-80	中屋B1	SK11	〃

5. 中屋調査区焼成土壌

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
焼成土壌-1	中屋E4	土壌7	光永
焼成土壌-2	中屋E2	土壌19	〃
焼成土壌-3	中屋E2	土壌18	〃
焼成土壌-4	中屋H3	炉址1	正岡
焼成土壌-5	中屋E1	SF03	岡田
焼成土壌-6	中屋E2	土壌36	光永
焼成土壌-7	中屋M12V	SK11	岡田

6. 中屋調査区土壌

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌-192	中屋M11I	No.64土壌	高畑
土壌-193	中屋M11I	No.99溝状土壌	〃
土壌-194	中屋M11I	No.69土壌	〃
土壌-195	中屋M11I	No.25土壌	〃
土壌-196	中屋M11I	No.30土壌	〃
土壌-197	中屋M11I	No.115土壌	〃
土壌-198	中屋M11I	No.89土壌	〃
土壌-199	中屋M11I	No.77土壌	〃
土壌-200	中屋M11I	No.87土壌	〃
土壌-201	中屋M11I	No.88土壌	〃
土壌-202	中屋M11I	No.86土壌	〃
土壌-203	中屋M11I	No.85土壌	〃
土壌-204	中屋M11I	No.84土壌	〃
土壌-205	中屋M11I	No.112土壌	〃
土壌-206	中屋M11I	No.116土壌	〃
土壌-207	中屋M11I	No.42土壌	〃
土壌-208	中屋M11I	No.43土壌	〃
土壌-209	中屋M11I	No.41土壌	〃
土壌-210	中屋M11I	No.40土壌	〃
土壌-211	中屋M11I	No.95土壌	〃
土壌-212	中屋M11I	No.72土壌	〃
土壌-213	中屋M11I	No.74土壌	〃
土壌-214	中屋M11I	No.73土壌	〃

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌-215	中屋M11I	No.81土壌	〃
土壌-216	中屋M11I	No.82土壌	〃
土壌-217	中屋M11I	No.128土壌	〃
土壌-218	中屋B3	土壌22	古谷野
土壌-219	中屋H5	P21	井上
土壌-220	中屋H5	土壌13	〃
土壌-221	中屋H5	土壌2	〃
土壌-222	中屋H5	土壌11	〃
土壌-223	中屋H5	土壌6	〃
土壌-224	中屋B3	土壌19	古谷野
土壌-225	中屋B3	土壌18	〃
土壌-226	中屋B3	土壌15	〃
土壌-227	中屋H5	土壌3	井上
土壌-228	中屋H5	P16	〃
土壌-229	中屋H5	土壌5	〃
土壌-230	中屋B1	SK12	古谷野
土壌-231	中屋B1	SK10	〃
土壌-232	中屋B3	土壌17	〃
土壌-233	中屋B3	土壌16	〃
土壌-234	中屋B3	土壌11	〃
土壌-235	中屋B3	土壌4	〃
土壌-236	中屋B3	土壌13	〃
土壌-237	中屋B3	土壌7	〃
土壌-238	中屋B3	土壌6	〃
土壌-239	中屋E1	SE03	岡田
土壌-240	中屋M11I	No.49土壌	高畑
土壌-241	中屋M11I	No.61土壌	〃
土壌-242	中屋M11I	No.47土壌	〃
土壌-243	中屋M11I	No.63土壌	〃
土壌-244	中屋M11I	No.29土壌	〃
土壌-245	中屋M11I	No.56土壌	〃
土壌-246	中屋M11I	No.28土壌	〃
土壌-247	中屋M11I	No.32土壌	〃
土壌-248	中屋M11I	No.68土壌	〃
土壌-249	中屋M11I	No.24土壌	〃
土壌-250	中屋M11I	No.35土壌	〃
土壌-251	中屋M11I	No.19土壌	〃
土壌-252	中屋M11I	No.131土壌	〃
土壌-253	中屋M11I	No.124土壌	〃
土壌-254	中屋M11I	No.120土壌	〃
土壌-255	中屋M11I	No.96土壌	〃
土壌-256	中屋B3	土壌1	古谷野
土壌-257	中屋B3	土壌8	〃
土壌-258	中屋B3	土壌3	〃
土壌-259	中屋B3	土壌2	〃
土壌-260	中屋B1	SK07	〃
土壌-261	中屋B1	SK05	〃
土壌-262	中屋B1	SK08	〃
土壌-263	中屋B1	SK09	〃
土壌-264	中屋M12IV	土壌1	二宮
土壌-265	中屋M12III	No.5土壌	〃
土壌-266	中屋M12III	No.7土壌	〃
土壌-267	中屋B1	SK06	古谷野
土壌-268	中屋H3	SK18	正岡

中屋調査区 遺構名称対照表

中屋調査区

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌-269	中屋E 4	No.14土壌	光永
土壌-270	中屋E 4	No. 8土壌	〃
土壌-271	中屋E 2	No.12土壌	〃
土壌-272	中屋E 1	SF02	岡田
土壌-273	中屋E 1	SF01	〃
土壌-274	中屋M12Ⅲ	No. 6土壌	二宮
土壌-275	中屋B 1	SK04	古谷野
土壌-276	中屋B 1	SK02	〃
土壌-277	中屋B 1	SK01	〃
土壌-278	中屋H 3	SK07	正岡
土壌-279	中屋H 3	SK04	〃
土壌-280	中屋H 3	SK08	〃
土壌-281	中屋H 3	SK09・10	〃
土壌-282	中屋H 3	SK11	〃
土壌-283	中屋H 3	SK16	〃
土壌-284	中屋H 3	SK05	〃
土壌-285	中屋H 3	SK14	〃
土壌-286	中屋H 3	SK15	〃
土壌-287	中屋H 3	SK13	〃
土壌-288	中屋H 3	たわみ 1	〃
土壌-289	中屋H 3	たわみ 2	〃
土壌-290	中屋H 3	たわみ 5	〃
土壌-291	中屋H 3	たわみ 8	〃
土壌-292	中屋H 3	SK06	〃
土壌-293	中屋H 3	SK12	〃
土壌-294	中屋H 3	SK23	〃
土壌-295	中屋H 3	SK22	〃
土壌-296	中屋E 2	No.37土壌	光永
土壌-297	中屋H 6	土壌5	井上
土壌-298	中屋M12V	SK01	岡田
土壌-299	中屋M12V	SD13	〃
土壌-300	中屋E 1東	SK01	〃
土壌-301	中屋E 1東	SK02	〃
土壌-302	中屋E 1東	SK03	〃
土壌-303	中屋E 1	SD12	〃
土壌-304	中屋E 1東	P 6	〃
土壌-305	中屋3 B I	No. 1土壌	光永
土壌-306	中屋M12Ⅱ	土壌1	亀山
土壌-307	中屋B 3	中世大溝内土壌	古谷野
土壌-308	中屋H 3	SK19	正岡
土壌-309	中屋H 3	SK20	〃
土壌-310	中屋H 3	SK03	〃
土壌-311	中屋H 3	SK02	〃
土壌-312	中屋E 1	SK10	岡田
土壌-313	中屋E 1	SK17	〃
土壌-314	中屋E 1	SK15	〃
土壌-315	中屋E 1	SK12	〃
土壌-316	中屋E 1	SK18	〃
土壌-317	中屋E 1	SA01	〃
土壌-318	中屋E 1	SA02	〃
土壌-319	中屋E 1	SA03	〃
土壌-320	中屋E 1	SK10	〃
土壌-321	中屋E 1	SK11	〃
土壌-322	中屋E 1	SK09	〃

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌-323	中屋E 1	SK06	〃
土壌-324	中屋E 1	SK08	〃
土壌-325	中屋E 1	SK03	〃
土壌-326	中屋E 1	SK04	〃
土壌-327	中屋E 1	SK02	〃
土壌-328	中屋E 1	SK05	〃
土壌-329	中屋E 1	SK01	〃
土壌-330	中屋E 2	No. 9土壌	光永
土壌-331	中屋3 B U I	土壌1	片山
土壌-332	中屋3 B U II	土壌2	井上
土壌-333	中屋3 B U II	土壌1	〃

7. 中屋調査区土壌墓

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌墓-12	中屋B 3	ST01	古谷野
土壌墓-13	中屋E 1	SX01	岡田
土壌墓-14	中屋E 1	SX02	〃
土壌墓-15	中屋E 1	SX03	〃
土壌墓-16	中屋E 1	SX07	〃
土壌墓-17	中屋E 1	SX04	〃

8. 中屋調査区土器棺墓

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土器棺-9	中屋E 2	No.35土器棺	光永
土器棺-10	中屋E 2	No.14土器棺	〃
土器棺-11	中屋E 1	SX05	岡田

1. 高田調査区竪穴住居

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
竪穴住居-1	高田3BⅢ	竪穴住居5	亀山
竪穴住居-2	高田3BⅢ	竪穴住居4	〃
竪穴住居-3	高田3BⅢ	竪穴住居3	〃
竪穴住居-4	高田3BⅠ	No.9竪穴住居	中野
	高田3BⅢ	竪穴住居2	亀山
竪穴住居-5	高田3BⅢ	竪穴住居1	〃
竪穴住居-6	高田3BⅠ	No.10竪穴住居	中野
竪穴住居-7	高田3BⅠ	No.8竪穴住居	〃
竪穴住居-8	高田3BⅠ	No.7竪穴住居	〃
竪穴住居-9	高田3BⅠ	No.6竪穴住居	〃
竪穴住居-10	高田3BⅡ	No.13竪穴住居	〃
竪穴住居-11	高田3BⅣ	竪穴住居1	亀山
竪穴住居-12	高田3BⅤ	竪穴住居2	片山
竪穴住居-13	高田3BⅤ	竪穴住居1	〃
竪穴住居-14	高田M1Ⅵ	竪穴住居1	井上
竪穴住居-15	高田M1Ⅳ	竪穴住居3	〃
竪穴住居-16	高田M1Ⅳ	竪穴住居5	〃
竪穴住居-17	高田M1Ⅳ	竪穴住居6	〃
竪穴住居-18	高田M1Ⅳ	竪穴住居7	〃
竪穴住居-19	高田M1Ⅳ	竪穴住居4	〃
竪穴住居-20	高田M1Ⅰ	竪穴住居11	〃
竪穴住居-21	高田M1Ⅰ	竪穴住居12	〃
竪穴住居-22	高田M1Ⅰ	竪穴住居1	〃
竪穴住居-23	高田M1Ⅰ	竪穴住居2	〃
竪穴住居-24	高田M1Ⅰ	竪穴住居4	〃
竪穴住居-25	高田M1Ⅰ	竪穴住居7	〃
竪穴住居-26	高田M1Ⅰ	竪穴住居9	〃
竪穴住居-27	高田M1Ⅰ	竪穴住居6	〃
竪穴住居-28	高田M1Ⅰ	竪穴住居8	〃
竪穴住居-29	高田M1Ⅰ	竪穴住居5	〃
竪穴住居-30	高田M1Ⅰ	竪穴住居3	〃
竪穴住居-31	高田M1Ⅳ	竪穴住居2	〃
竪穴住居-32	高田M1Ⅳ	竪穴住居1	〃
竪穴住居-33	高田H1	竪穴住居2	亀山
竪穴住居-34	高田H1	竪穴住居1	〃
竪穴住居-35	高田H1	竪穴住居4	〃
竪穴住居-36	高田H1	竪穴住居3	〃
竪穴住居-37	高田M1Ⅴ	竪穴住居1	片山
竪穴住居-38	高田M1Ⅱ	竪穴住居7	〃
竪穴住居-39	高田M1Ⅱ	竪穴住居3	〃
竪穴住居-40	高田M1Ⅱ	竪穴住居4	〃
竪穴住居-41	高田M1Ⅱ	竪穴住居8	〃
竪穴住居-42	高田M1Ⅱ	竪穴住居13	〃
竪穴住居-43	高田M1Ⅱ	竪穴住居6	〃
竪穴住居-44	高田M1Ⅱ	竪穴住居5	〃
竪穴住居-45	高田M1Ⅱ	竪穴住居1	〃
竪穴住居-46	高田M1Ⅱ	竪穴住居11	〃
竪穴住居-47	高田M1Ⅲ	竪穴住居4	浅倉
竪穴住居-48	高田M1Ⅲ	竪穴住居3	〃
竪穴住居-49	高田M1Ⅲ	竪穴住居2	〃
竪穴住居-50	高田M1Ⅲ	竪穴住居1	〃
竪穴住居-51	高田A1北	竪穴住居5	〃
	高田A1北	竪穴住居4	〃
竪穴住居-52	高田A1北	竪穴住居8	〃

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
竪穴住居-53	高田A1北	竪穴住居16	浅倉
竪穴住居-54	高田A1北	竪穴住居6	〃
竪穴住居-55	高田A1北	竪穴住居9	〃
竪穴住居-56	高田M1Ⅱ	竪穴住居2	片山
	高田M1Ⅲ	竪穴住居9	浅倉
竪穴住居-57	高田M1Ⅱ	竪穴住居9	片山
	高田M1Ⅲ	竪穴住居5	浅倉
竪穴住居-58	高田M1Ⅲ	竪穴住居7	〃
竪穴住居-59	高田M1Ⅲ	竪穴住居10	〃
竪穴住居-60	高田M1Ⅲ	竪穴住居6	〃
竪穴住居-61	高田M1Ⅰ	竪穴住居10	井上
	高田M1Ⅲ	竪穴住居8	浅倉
竪穴住居-62	高田A1北	竪穴住居12	〃
竪穴住居-63	高田A1北	竪穴住居11	〃
竪穴住居-64	高田A1北	竪穴住居10	〃
竪穴住居-65	高田A1北	竪穴住居14	〃
竪穴住居-66	高田A1北	竪穴住居7	〃
竪穴住居-67	高田A1北	竪穴住居15	〃
竪穴住居-68	高田A1北	竪穴住居1	〃
竪穴住居-69	高田A1北	竪穴住居13	〃
竪穴住居-70	高田A1南	竪穴住居3	〃
竪穴住居-71	高田A1南	竪穴住居4	〃
竪穴住居-72	高田A1南	竪穴住居1	〃
竪穴住居-73	高田A1南	竪穴住居2	〃
竪穴住居-74	高田A1北	竪穴住居3	〃
竪穴住居-75	高田A1北	竪穴住居2	〃
竪穴住居-76	高田M1Ⅰ	竪穴住居13	井上
竪穴住居-77	高田M1Ⅰ	竪穴住居14	〃
竪穴住居-78	高田A1南	竪穴住居7	浅倉
竪穴住居-79	高田A1南	竪穴住居5	〃
竪穴住居-80	高田A1南	竪穴住居6	〃
竪穴住居-81	高田A1南	竪穴住居8	〃
竪穴住居-82	高田北用水	竪穴住居4	〃
竪穴住居-83	高田北用水	竪穴住居5	〃
竪穴住居-84	高田北用水	竪穴住居2	〃
竪穴住居-85	高田北用水	竪穴住居1	〃
竪穴住居-86	高田P1	No.23竪穴住居	江見
竪穴住居-87	高田P1	No.22竪穴住居	〃
竪穴住居-88	高田P1	No.29竪穴住居	〃
竪穴住居-89	高田P1	No.28竪穴住居	〃
竪穴住居-90	高田P1	No.27竪穴住居	〃
竪穴住居-91	高田P1	No.30竪穴住居	〃
竪穴住居-92	高田P1	No.25竪穴住居	〃
竪穴住居-93	高田P1	No.24竪穴住居	〃
竪穴住居-94	高田H2	竪穴住居1	柴田

2. 高田調査区掘立柱建物

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
掘立柱建物-1	高田3BⅠ	No.3建物	中野
掘立柱建物-2	高田3BⅠ	No.2建物	〃
掘立柱建物-3	高田3BⅠ	No.1柱穴列	〃
	高田M1Ⅴ	建物2	片山
掘立柱建物-4	高田3BⅤ	古代柱穴	〃
掘立柱建物-5	高田M1Ⅱ	建物5	〃

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
掘立柱建物-6	高田M1Ⅱ	建物3	片山
掘立柱建物-7	高田M1Ⅱ	建物4	〃
掘立柱建物-8	高田M1Ⅱ	建物2	〃
掘立柱建物-9	高田M1Ⅱ	建物1	〃
掘立柱建物-10	高田M1Ⅳ	建物2	井上
掘立柱建物-11	高田M1Ⅰ	建物1	〃
掘立柱建物-12	高田M1Ⅰ	建物2A	〃
掘立柱建物-13	高田M1Ⅰ	建物2B	〃
掘立柱建物-14	高田M1Ⅲ	建物2	浅倉
掘立柱建物-15	高田A1	建物1	〃
掘立柱建物-16	高田A1	建物2	〃
掘立柱建物-17	高田P1	No.32建物	江見
掘立柱建物-18	高田P1	建物	〃
掘立柱建物-19	高田P2	No.11柱穴列	〃
掘立柱建物-20	高田M1Ⅴ	建物1	片山
掘立柱建物-21	高田M1Ⅴ	建物3	〃
掘立柱建物-22	高田M1Ⅳ	建物1	井上
掘立柱建物-23	高田M1Ⅳ	建物3	〃
掘立柱建物-24	高田M1Ⅳ	建物4	〃
掘立柱建物-25	高田P3	建物2	江見
掘立柱建物-26	高田P3	建物1	〃
柱穴列-1	高田M1Ⅴ	柱穴列1	井上

## 3. 高田調査区井戸

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
井戸-1	高田M1Ⅱ	井戸1	浅倉
井戸-2	高田M1Ⅳ	井戸1	井上
井戸-3	高田P4	No.7井戸	江見

## 4. 高田調査区焼成土壌

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
焼成土壌-1	高田M1Ⅵ	土壌6	井上
焼成土壌-2	高田3BⅢ	焼土壌	亀山
焼成土壌-3	高田M1Ⅴ	土壌2	片山
焼成土壌-4	高田M1Ⅴ	土壌3	〃
焼成土壌-5	高田M1Ⅴ	土壌4	〃
焼成土壌-6	高田M1Ⅴ	土壌6	〃
焼成土壌-7	高田M1Ⅱ	土壌12	〃
焼成土壌-8	高田A1北	土壌1	浅倉
焼成土壌-9	高田A1北	土壌2	〃
焼成土壌-10	高田P2	No.2炉状遺構	江見

## 5. 高田調査区土壌

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌-1	高田M1Ⅰ	土壌21	井上
土壌-2	高田P1	No.18土壌	江見
土壌-3	高田P1	No.28住内土壌	〃
土壌-4	高田P1	No.19土器溜り	〃
土壌-5	高田M1Ⅴ	土壌5	澤山
土壌-6	高田M1Ⅴ	落ち込み1	〃
土壌-7	高田M1Ⅱ	土壌13	〃
土壌-8	高田M1Ⅱ	土壌1	〃
土壌-9	高田M1Ⅱ	土壌2	〃
土壌-10	高田M1Ⅰ	土壌25	井上
土壌-11	高田M1Ⅰ	土壌24	〃

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌-12	高田M1Ⅰ	土壌22	井上
土壌-13	高田M1Ⅵ	土壌4	〃
土壌-14	高田M1Ⅳ	土壌5	〃
土壌-15	高田M1Ⅳ	土壌6	〃
土壌-16	高田M1Ⅳ	土壌9	〃
土壌-17	高田M1Ⅳ	土壌3	〃
土壌-18	高田M1Ⅳ	土壌11	〃
土壌-19	高田M1Ⅵ	土壌5	〃
土壌-20	高田M1Ⅵ	土壌2	〃
土壌-21	高田M1Ⅵ	土壌3	〃
土壌-22	高田M1Ⅰ	土壌2	〃
土壌-23	高田M1Ⅰ	土壌5	〃
土壌-24	高田M1Ⅰ	土壌6	〃
土壌-25	高田M1Ⅰ	土壌9	〃
土壌-26	高田P4	No.1土壌	江見

## 6. 高田調査区土器埋納墳

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土器埋納墳-1	高田M1Ⅴ	土器A	片山
土器埋納墳-2	高田P1	No.31Pit	江見
土器埋納墳-3	高田P1	胞衣容器	〃

## 7. 高田調査区土壌墓

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌墓-1	高田3BⅢ	土壌墓1	亀山

## 8. 高田調査区たわみ

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
たわみ-1	高田M1Ⅰ	黒色粘土溜り	井上
	高田M1Ⅳ	黒色粘土溜り	
たわみ-2	高田M1Ⅴ	落ち込み4	片山
たわみ-3	高田M1Ⅴ	落ち込み5	片山

# 圖 版

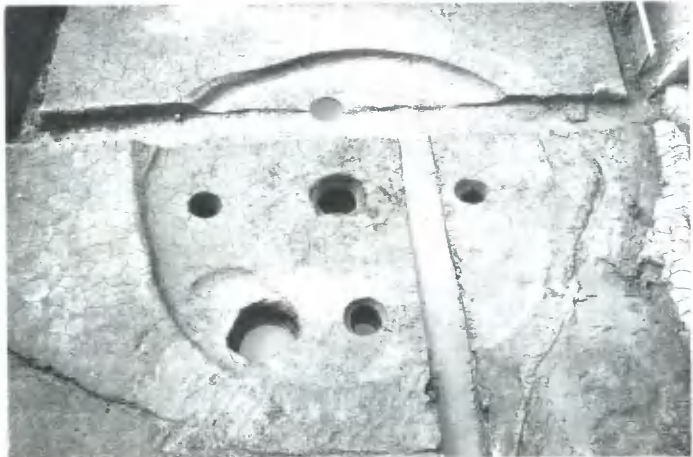
1. 弥生～古墳時代  
全景 (南東から)



2. 竪穴住居-125  
検出状況  
(南東から)



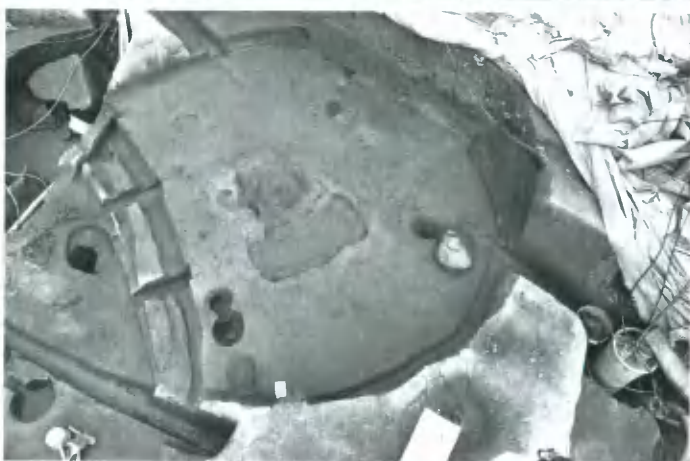
3. 竪穴住居-125  
(南東から)







1. 竪穴住居-126・135  
(南から)



2. 竪穴住居-127  
(南から)

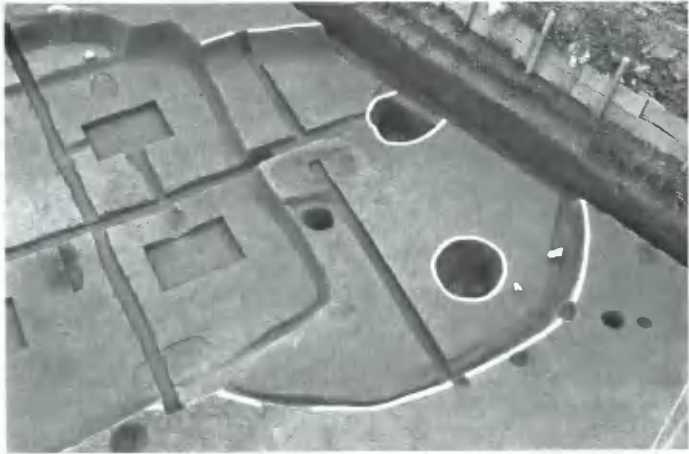


3. 竪穴住居-127  
中央穴(南東から)

1. 竪穴住居-127  
遺物出土状況  
(北西から)



2. 竪穴住居-128  
(北から)

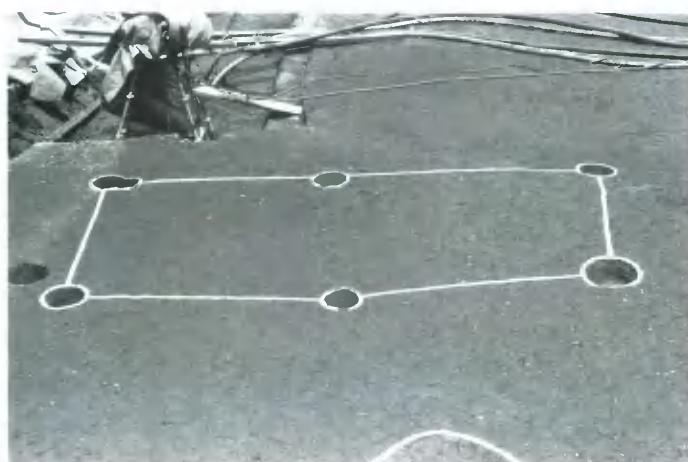


3. 竪穴住居-130B  
(北から)

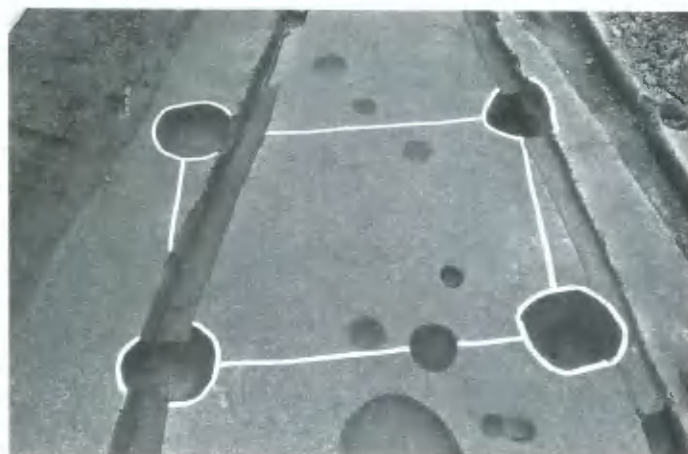




1. 竪穴住居-130  
中央穴(北から)



2. 掘立柱建物-16  
(西から)



1. 掘立柱建物-17  
(北から)

1. 袋状土壙-72  
(南東から)



2. 袋状土壙-73  
(北西から)



3. 袋状土壙-77  
(南から)





1. 袋状土壙-78  
(北西から)



2. 袋状土壙-78  
遺物出土状況  
(北から)



3. 袋状土壙-80  
(西から)

1. 土壙-199 (北から)

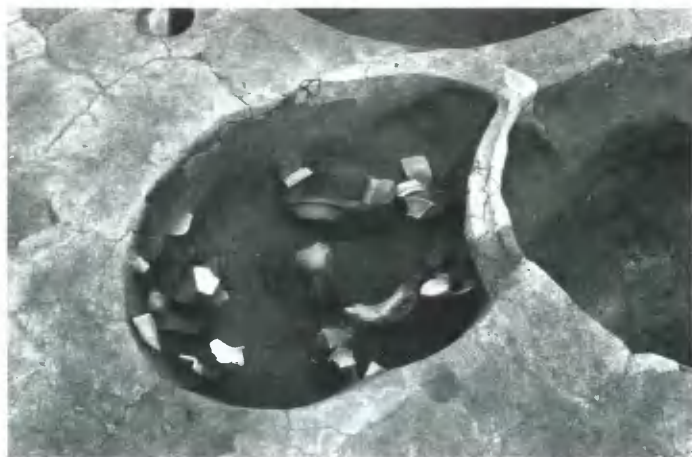


2. 土壙-200 (東から)



3. 土壙-207 (南東から)





1. 土壇-209 (南西から)



2. 土壇-210 (南東から)



3. 土壇-212 (北東から)

1. 土壙-213 (南東から)



2. 土壙-214 (南から)



3. 土壙-215 (南から)



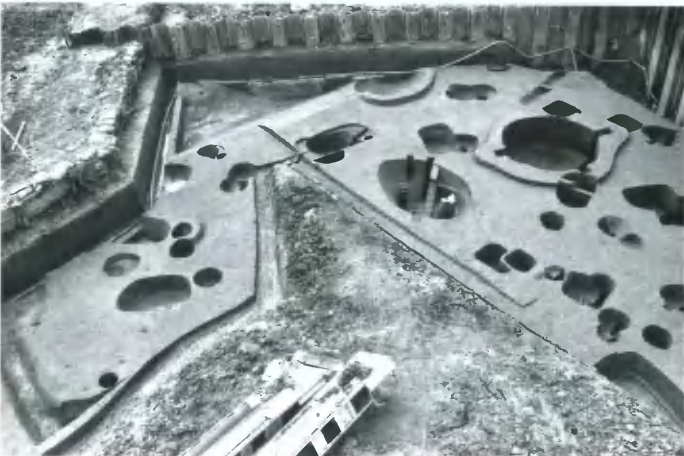




1. 土壙-217 (南から)



2. 土壙-219 (西から)



3. 弥生時代全景  
(北から)

1. 土壇-220 (南から)



2. 土壇-221 (北から)



3. 土壇-224 (西から)





1. 土壇-227 (南西から)

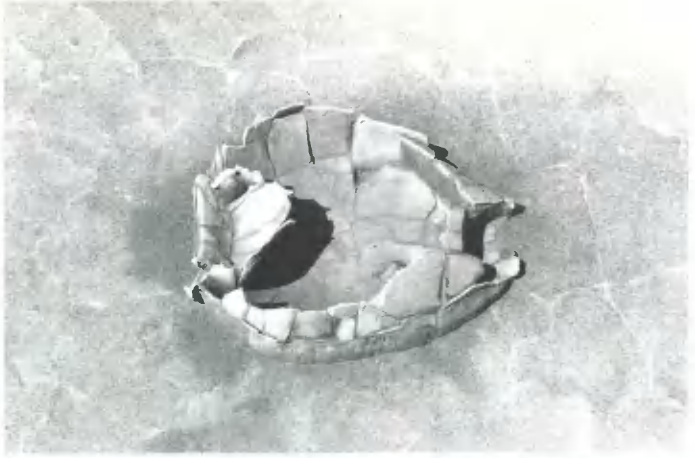


2. 土壇-232 (北から)



3. 土壇-238 (南東から)

1. 土器棺墓-10  
(南から)



2. 土器棺墓-11  
(東から)



3. 土器棺墓-11  
部分(北東から)

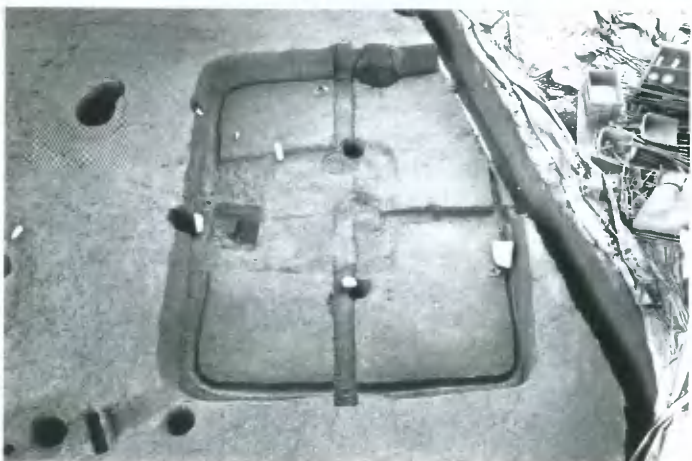




1. 竪穴住居-133~135  
(東から)



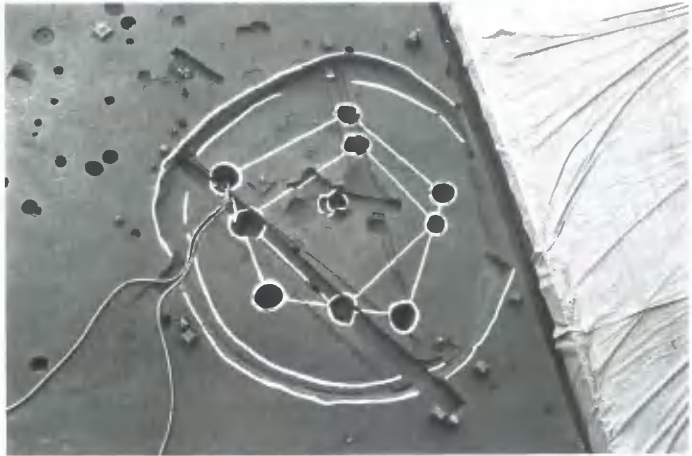
2. 竪穴住居-133~134  
(東から)



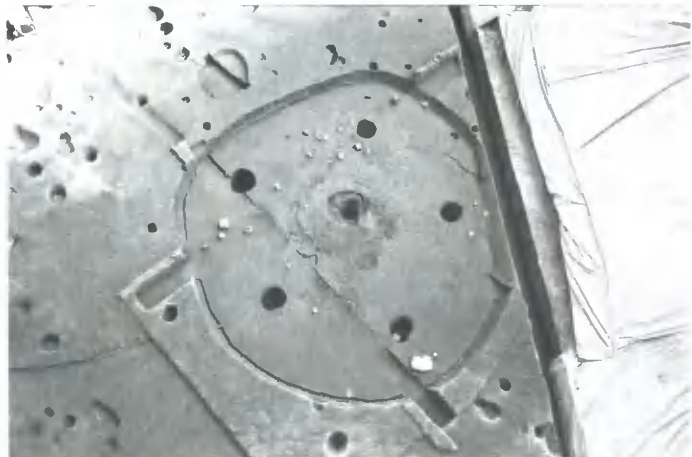
3. 竪穴住居-134  
(東から)



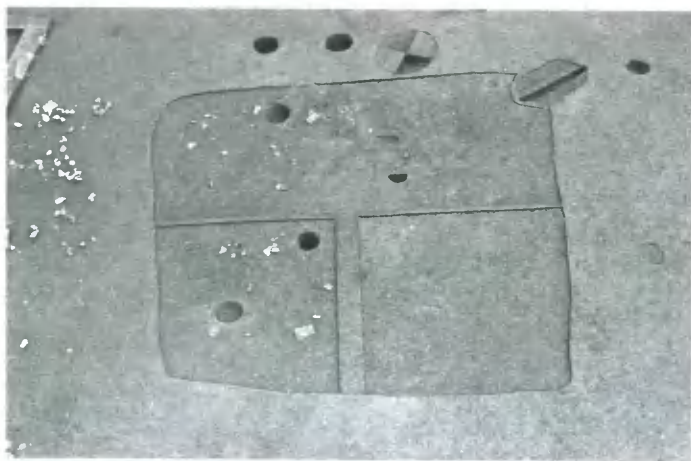
1. 竪穴住居-135  
(南から)



2. 竪穴住居-136A・B  
(西から)



3. 竪穴住居-136B  
(西から)



1. 竪穴住居-137  
(南から)

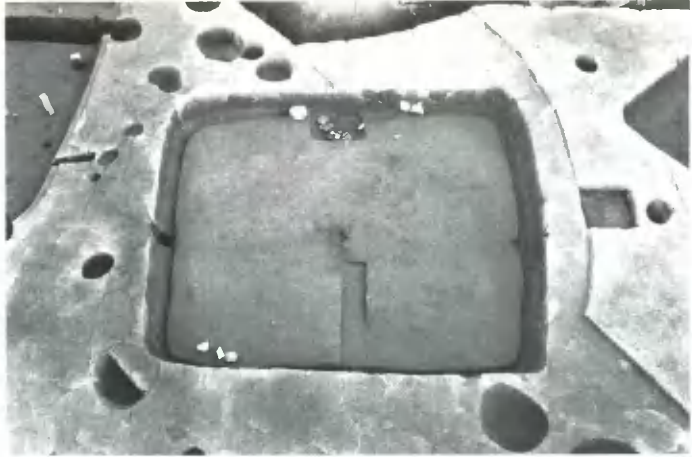


2. 竪穴住居-139~141  
(南東から)



3. 竪穴住居-140~141  
中央穴(北西から)

1. 竪穴住居-142  
(西から)



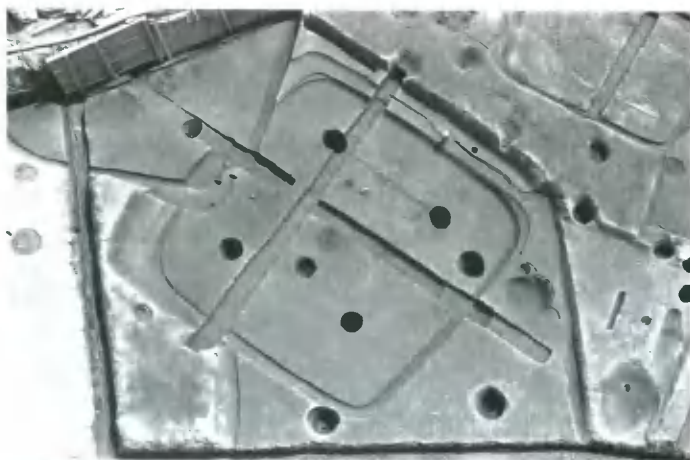
2. 竪穴住居-142  
方形土壇  
(西から)



3. 竪穴住居-143  
遺物出土状況  
(東から)







1. 竪穴住居-144~146  
(北西から)



2. 竪穴住居-144  
中央穴  
(南東から)



3. 竪穴住居-147  
(東から)

1. 竪穴住居-148  
(南東から)



2. 竪穴住居-149  
(南西から)



3. 竪穴住居-150B  
(東から)





1. 竪穴住居-150A  
方形土壇(東から)

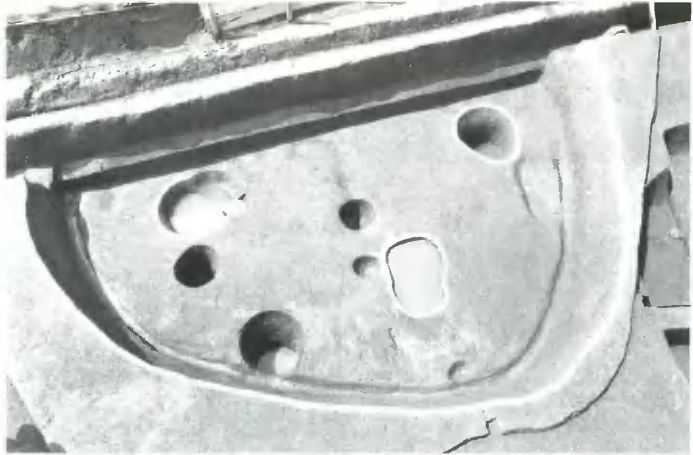


2. 竪穴住居-152・153  
(南から)



3. 竪穴住居-152  
中央穴(北から)

1. 竪穴住居-153  
(北東から)



2. 竪穴住居-155  
(南から)



3. 竪穴住居-155  
方形土壇  
(北から)





1. 竪穴住居-155  
出土遺物  
(南から)

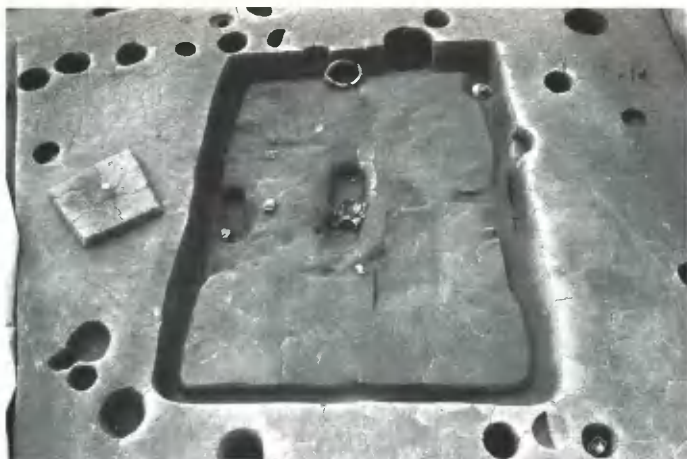


2. 竪穴住居-157  
遺物出土状況  
(西から)



3. 竪穴住居-157  
(東から)

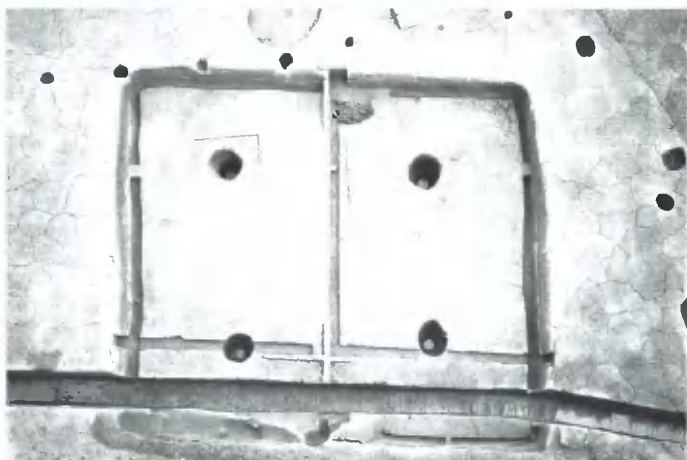
1. 竪穴住居-158  
(北から)



2. 竪穴住居-158  
中央穴(西から)



3. 竪穴住居-163  
(北東から)





1. 竪穴住居-163  
カマド(東から)



2. 竪穴住居-164  
(東から)



3. 竪穴住居-165・166  
(北西から)

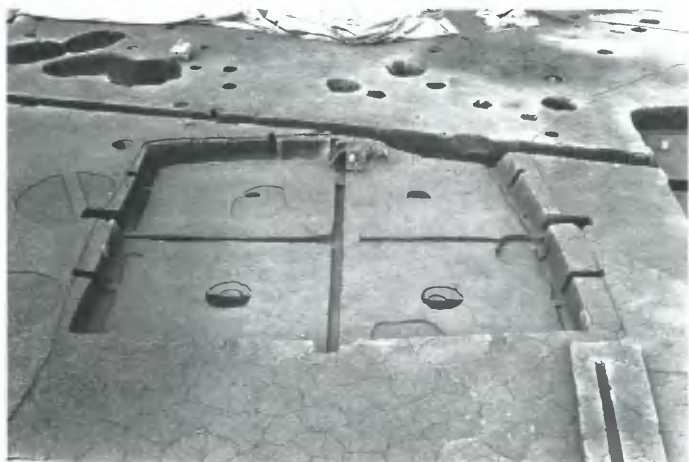
1. 竪穴住居-165  
(南東から)



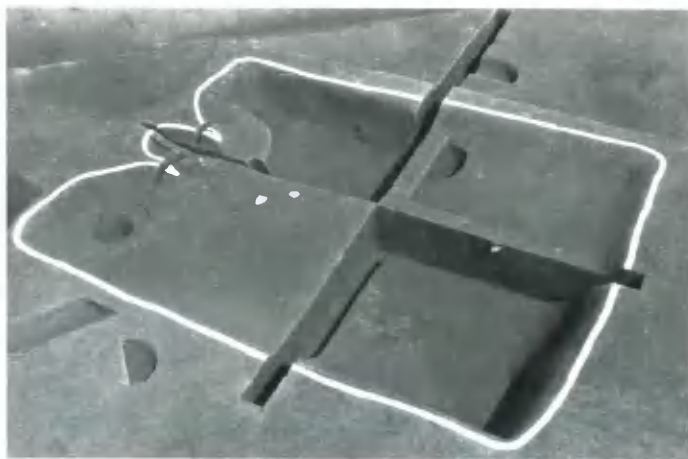
2. 竪穴住居-165  
カマド (南東から)



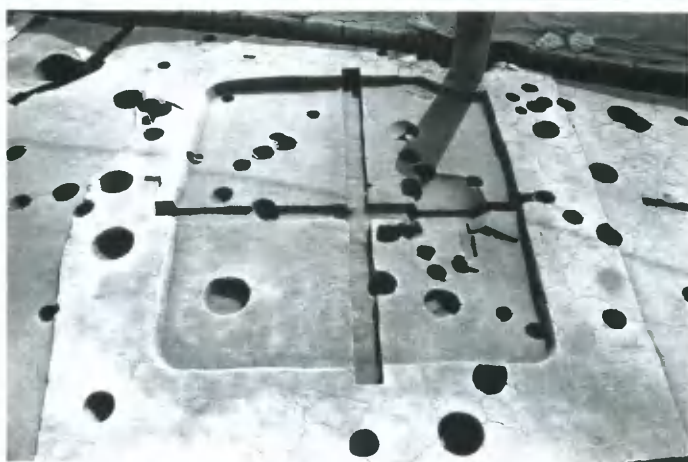
3. 竪穴住居-166  
(南東から)







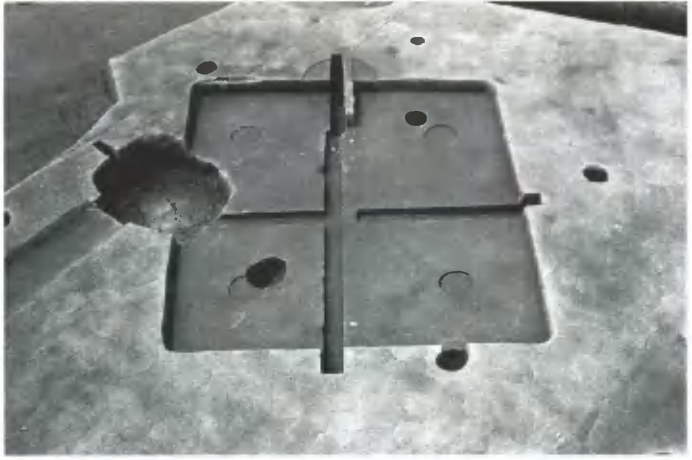
1. 竪穴住居-168  
(西から)



2. 竪穴住居-171  
(東から)



3. 竪穴住居-172  
カマド(南から)



1. 竪穴住居-173  
(南西から)



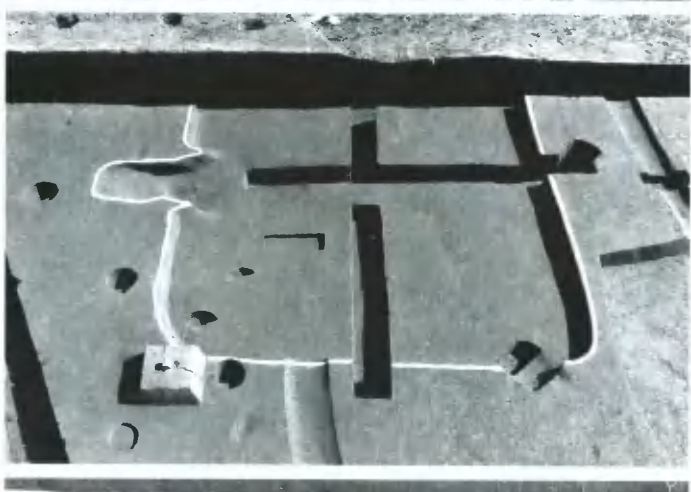
2. 竪穴住居-174  
遺物出土状況  
(北東から)



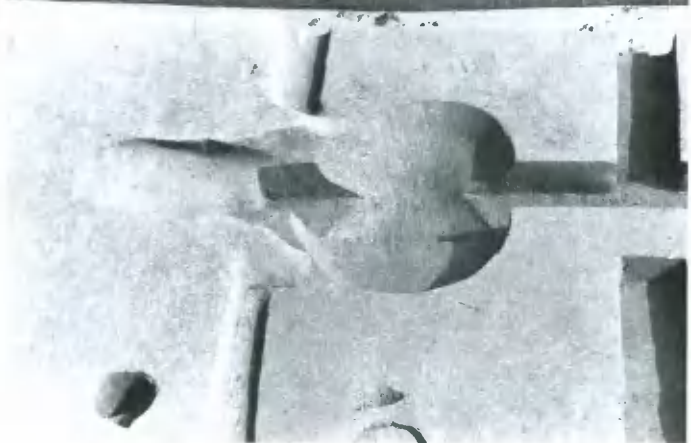
3. 竪穴住居-174  
カマド(南西から)



1. 竪穴住居-174  
(北東から)



2. 竪穴住居-176  
(西から)



3. 竪穴住居-176  
カマド下部構造  
(西から)

1. 竪穴住居-179  
(南西から)



2. 竪穴住居-180  
(南東から)



3. 竪穴住居-181  
(東から)





1. 竪穴住居-181  
カマド(北から)



2. 竪穴住居-182  
(南東から)



3. 竪穴住居-182  
カマド(北東から)

1. 竪穴住居-182  
出土遺物  
(東から)

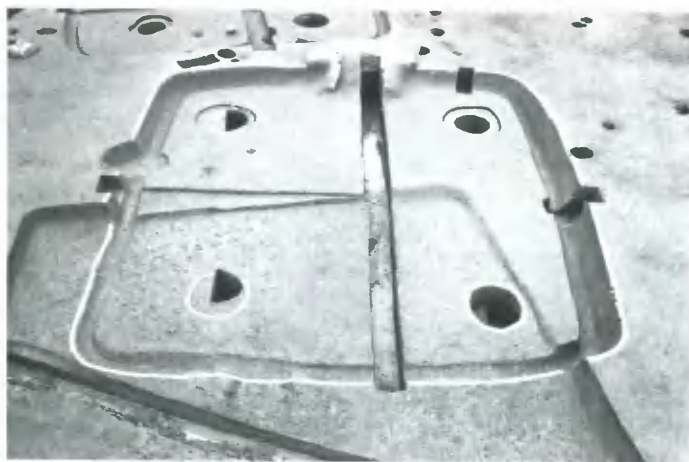


2. 竪穴住居-183  
(南東から)



3. 竪穴住居-183  
カマド下部構造  
(東から)





1. 竪穴住居-184  
(南から)

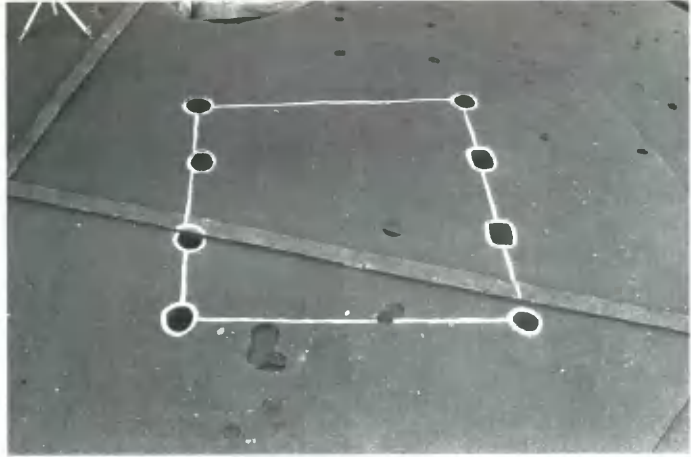


2. 竪穴住居-186  
(北から)



3. 竪穴住居-186  
カマド下部構造  
(北西から)

1. 掘立柱建物-18  
(南から)



2. 焼成土壇-1  
(西から)



3. 土壇-256(北から)







1. 土塊-258 (北西から)



2. 土塊-259 (西から)



3. 土塊-261 (北から)

1. 土壇-262 (北から)

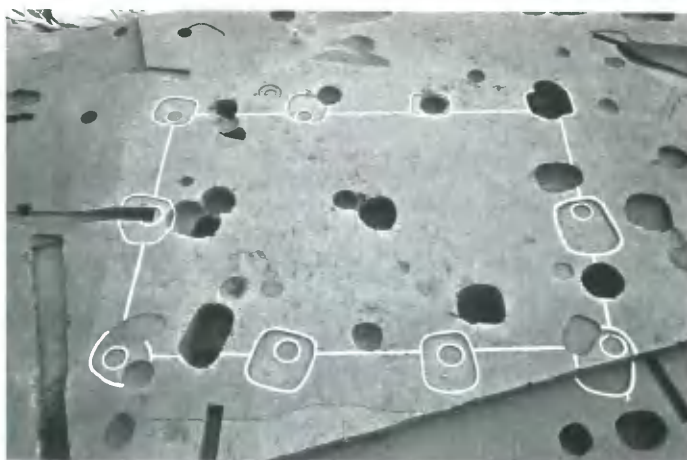


2. 土壇-263 (西から)

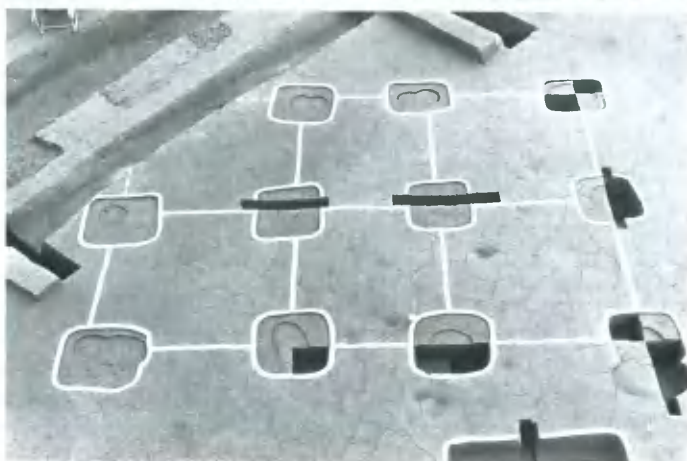


3. 土壇-268 (北から)

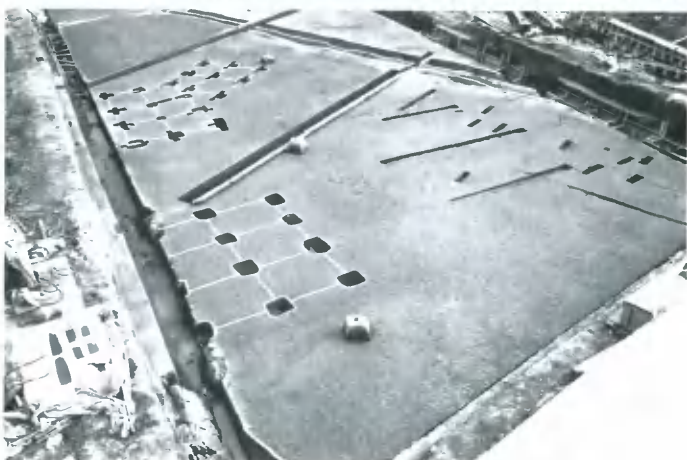




1. 掘立柱建物-20  
(北西から)



2. 掘立柱建物-21  
(北西から)

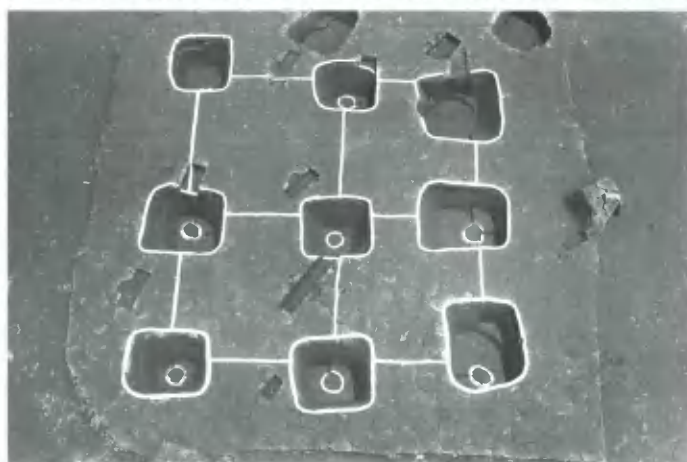


3. 掘立柱建物-22~25  
(北東から)

1. 掘立柱建物—23・24  
(西から)

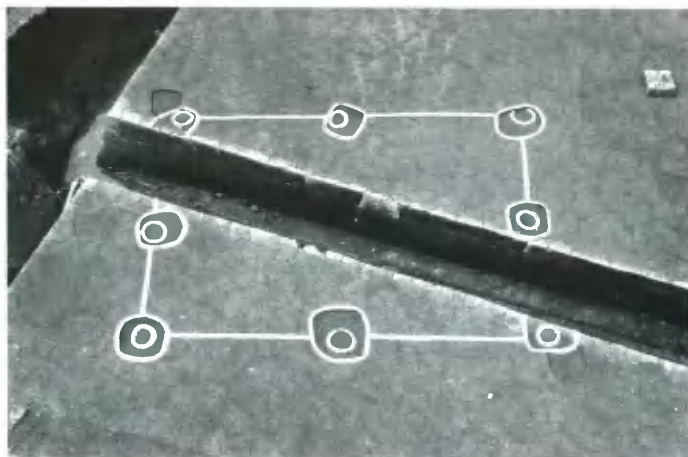


2. 掘立柱建物—25  
(南西から)

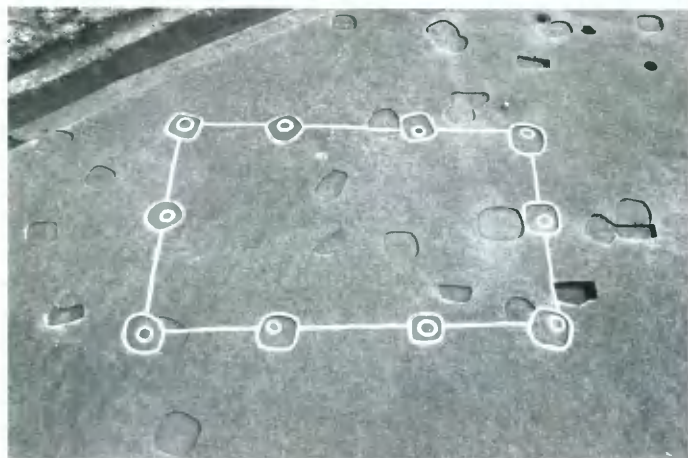


3. 掘立柱建物—26～32  
(南から)

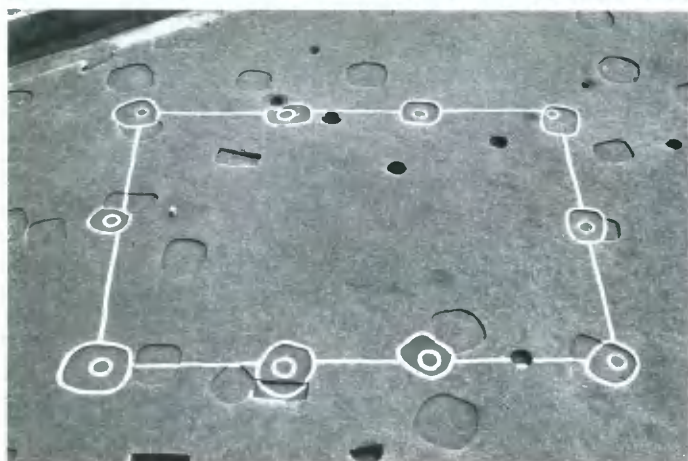




1. 掘立柱建物-26  
(南東から)

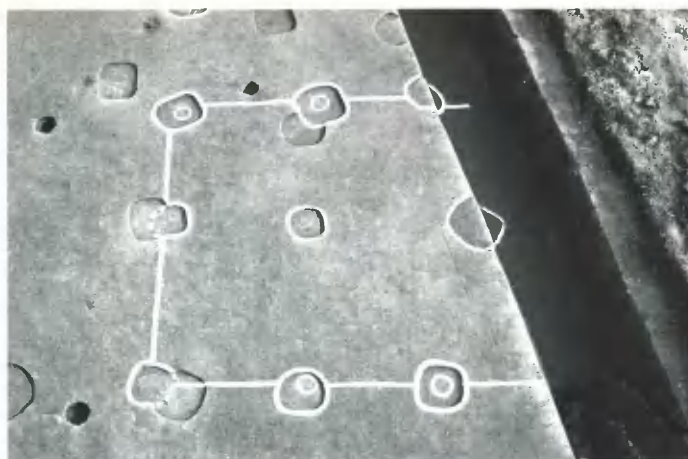


2. 掘立柱建物-28  
(北から)

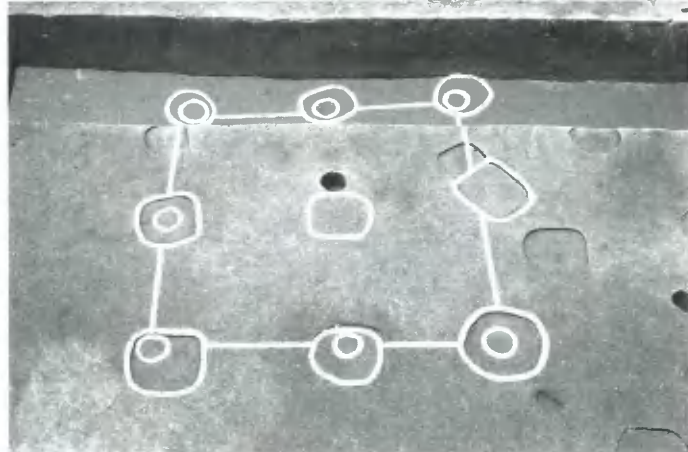


3. 掘立柱建物-29  
(北から)

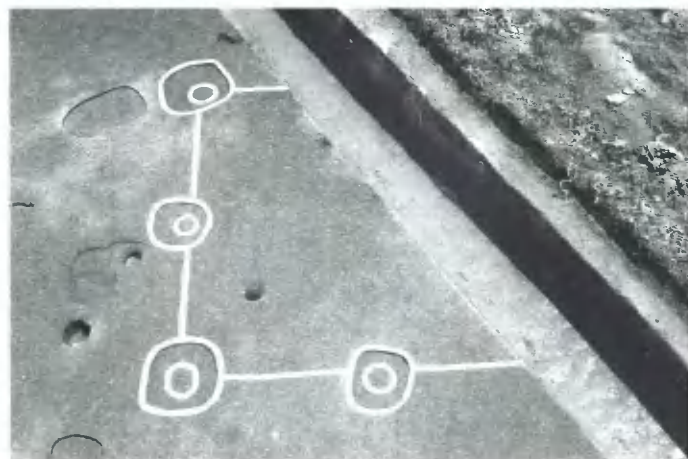
1. 掘立柱建物-30  
(北から)

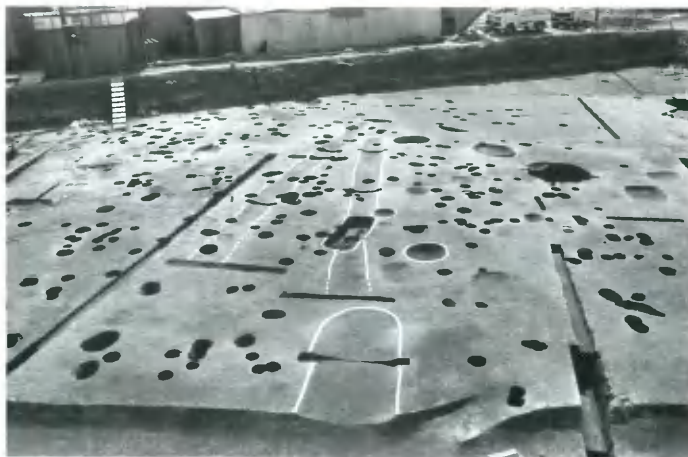


2. 掘立柱建物-31  
(東から)



3. 掘立柱建物-32  
(西から)





1. 中世全景1 (東から)

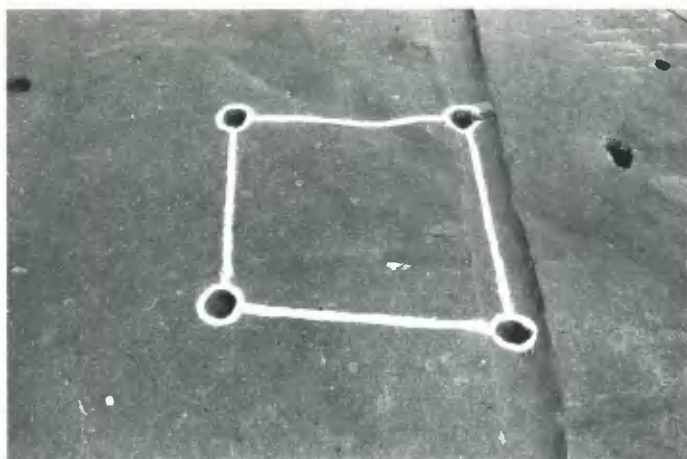


2. 中世全景2 (南から)

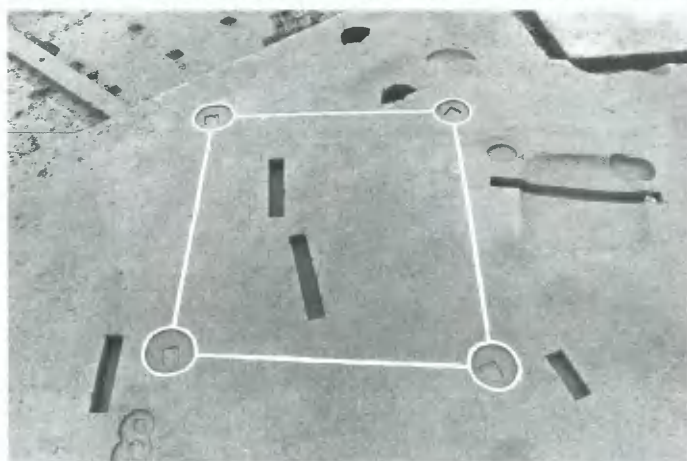


3. 掘立柱建物-38~40  
(北東から)

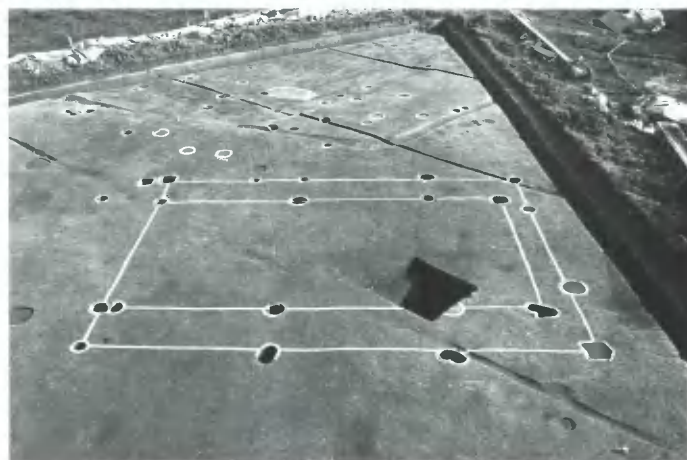
1. 掘立柱建物-35  
(南から)



2. 掘立柱建物-43  
(北西から)



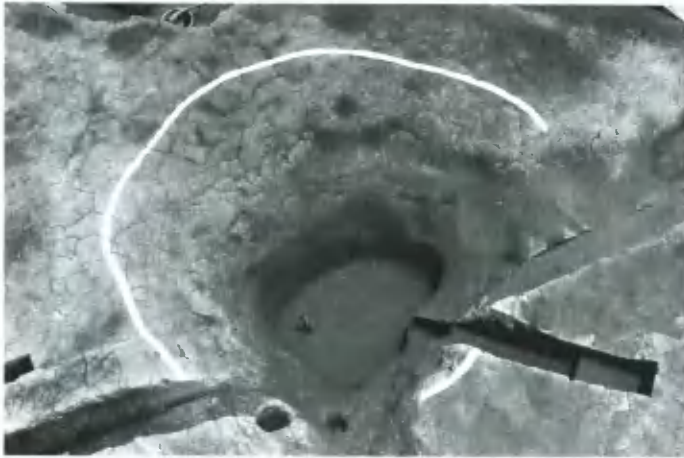
3. 掘立柱建物-46  
(北から)







1. 井戸-3 (北から)

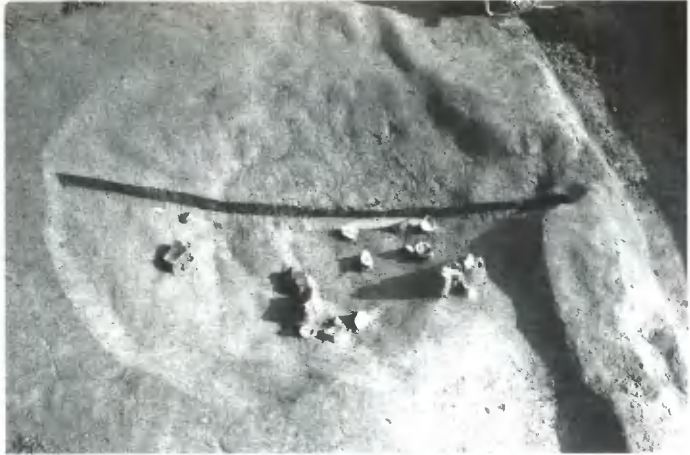


2. 井戸-4 (西から)



3. 井戸-5 (東から)

1. 土壙-309 (北西から)



2. 土壙-330 (東から)



3. 土壙-328  
出土遺物 (南西から)





1. 土壙墓-12  
(東から)



2. 土壙墓-13  
(東から)



3. 土壙墓-14  
(東から)

1. 土壙墓-15  
(北西から)



2. 土壙墓-16  
(北東から)

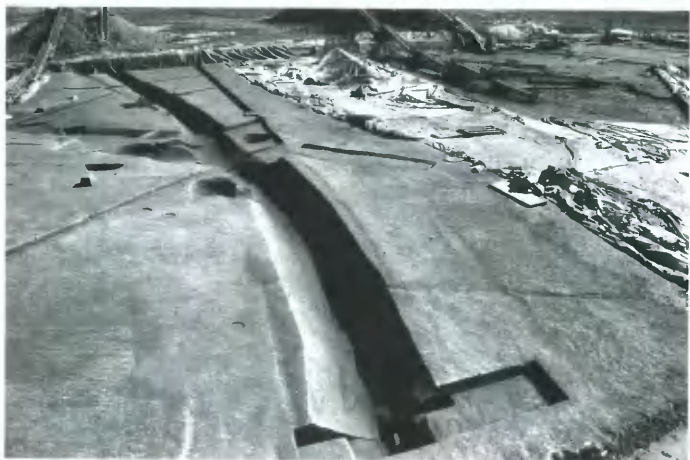


3. 土壙墓-17  
(南から)





1. 溝-320 (東から)



2. 溝-320 (南西から)



3. 溝-440~456  
(北から)



2948

1/3



2953

1/4



2952

1/4



2956

1/4



2955

1/4



2957

1/4



2962

1/3



2963

1/3



2969

1/3



2972

1/3



2974

1/3



2980

1/4



2996

1/4

竪穴住居—127 (2962・2963)  
竪穴住居—132 (2974)

竪穴住居—130 (2969)  
袋状土壘—72 (2980)

竪穴住居—131 (2972)  
袋状土壘—77 (2996)



袋状土壙—77 (3002)

袋状土壙—78 (3008・3012・3015・3021・3025)





3028

1/3



3031

1/3



3035

1/3



3034

1/4



3036

1/5



3039

1/6

袋状土壘—78 (3028・3031・3034・3035)

袋状土壘—80 (3036・3039)



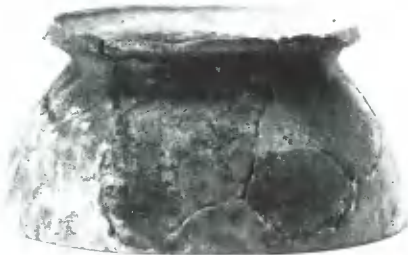
3040

1/3



3051

1/4



3042

1/3



3053

1/4



3044

1/3



3052

1/4



3056

1/4

袋状土壌—80 (3040・3042・3044)

土壌—199 (3051~3053・3056)



3057

1/4



3058

1/4



3083

1/4



3073

1/3



3102

1/3



3079

1/3

土壙—199 (3057·3058)  
土壙—211 (3083)

土壙—209 (3073)  
土壙—214 (3102)

土壙—210 (3079)



3114

1/3



3111

1/6



3115

1/3



3112

1/3



3116

1/3



3113

1/4



土壙一218 (3118・3119・3121) 土壙一219 (3123)  
土壙一221 (3127・3129)



3134

1/3



3130

1/5



3135

1/3



3131

1/3



3143

1/3



3152

1/4



3153

1/3

土壙—221 (3130・3131・3134・3135)  
土壙—232 (3152・3153)

土壙—225 (3143)



3156

1/3



3154

1/4



3157

1/3



3164

1/3



3166

1/3



3165

1/3

土壙—232 (3154・3156・3157)

土壙—236 (3164~3166)



3167

1/4



3169

1/3



3168

1/4



3170

1/4



3171

1/7



3178

1/3





3177

1/4



3179

1/6



3181

1/6



3180

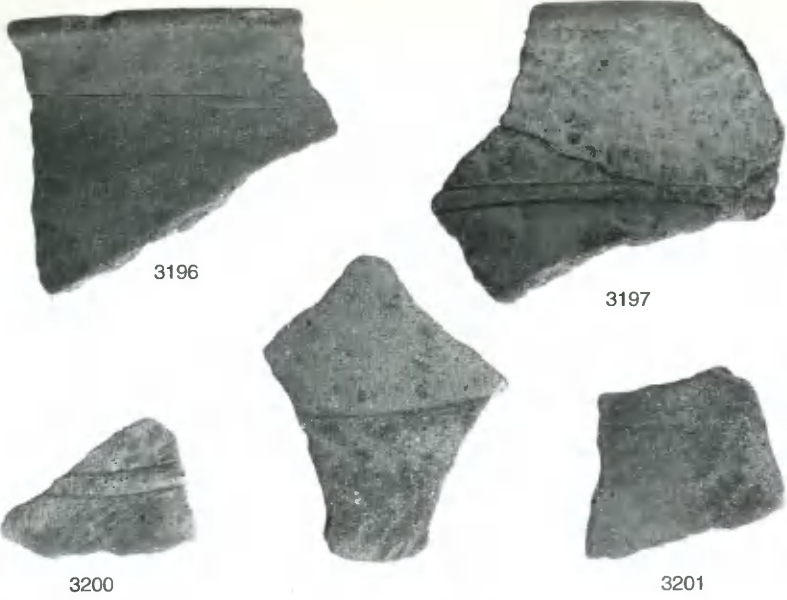
1/3



3211

1/4

土器棺墓—9(3177) 土器棺墓—10(3179)  
土器棺墓—11(3180·3181) 包含層(3211)



中屋調査区包含層出土弥生土器 1 (1/2)



中屋調査区包含層出土弥生土器 2 (1/2)



3328

1/3



3330

1/3



3335

1/3



3333

1/3



3338

1/3



3334

1/3



3341

1/4



3342

1/3



3343

1/3



3346

1/3



3351

1/3



3359

1/3



3358

1/3



3355

1/3



3363

1/3



3364

1/3



3356

1/3

竪穴住居一134 (3341~3343・3346・3351・3355・3356・3358・3359・3363・3364)



3362

1/3



3367

1/3



3368

1/3



3369

1/4



3372

1/3



3379

1/3



3378

1/3



3370

1/3



3374

1/3



3381

1/4

竪穴住居—134 (3362・3367~3369)

竪穴住居—135 (3370・3372・3374・3378・3379)

竪穴住居—136 (3381)



3384

1/3



3391

1/4



3385

1/3



3396

1/3



3401

1/3



3411

1/4



竪穴住居—141 (3414・3418)  
竪穴住居—143 (3425~3427)

竪穴住居—142 (3421~3424)  
竪穴住居—144~146 (3435~3437)



3429

1/3



3441

1/3



3438

1/2



3449

1/3



3451

1/3



3458

1/3



3453

1/7



3452

1/3



3454

1/3

竪穴住居—144~146 (3429・3438)  
竪穴住居—148 (3451)

竪穴住居—147 (3441・3449)  
竪穴住居—150 (3452~3454・3458)





竪穴住居—150 (3463) 竪穴住居—152・153 (3474・3475・3479)  
竪穴住居—154 (3487・3491・3493・3497・3498)  
竪穴住居—155 (3500)





3518

1/4

3519



1/3



3521

1/3



3520

1/3



3522

1/3



3524

1/5



3523

1/4



3531

1/3

竪穴住居—155 (3518~3520) 竪穴住居—156 (3521・3522)  
竪穴住居—157 (3523・3524・3531)



竪穴住居—157 (3526・3527・3529・3535・3540・3542・3544・3545)  
竪穴住居—158 (3546・3548・3549)



竪穴住居—158 (3550)

竪穴住居—163 (3557・3560)

竪穴住居—164 (3565)

竪穴住居—165 (3572・3580)

竪穴住居—166 (3592)

竪穴住居—168 (3593・3594)

竪穴住居—169 (3595)

竪穴住居—172 (3601・3602・3604・3605)

竪穴住居—174 (3617・3624)



3618

1/3



3620

1/3



3621

1/3



3619

1/3



3623

1/3



3625

1/3



3629

1/3



3630

1/3



3631

1/3



3633

1/3



3632

1/3



3635

1/3



3634

1/3



3637

1/4



3640

1/3



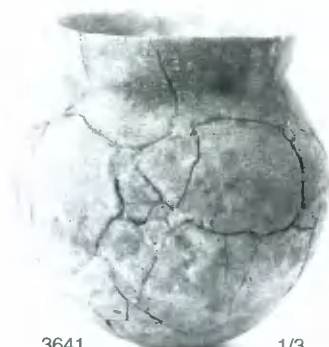
3642

1/3



3643

1/3



3641

1/3



3652

1/4



3651

1/3



3662

1/3

竪穴住居—174 (3640~3643)  
竪穴住居—181 (3652)

竪穴住居—180 (3651)  
竪穴住居—183 (3662)



3663

1/3



3669

1/4



3676

1/3



3677

1/3



3679

1/5



3680

1/5

竪穴住居—183 (3663) 土壙—240 (3669) 土壙—255 (3676・3677)  
土壙—262 (3679) 土壙—263 (3680)





3681

1/4



3682

1/3



3684

1/3



3686

1/3



3687

1/3



3685

1/3



3683

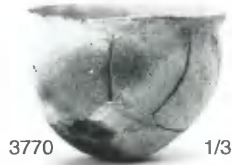
1/3



3695

1/4

土壙—264(3681) 土壙—265(3682) 土壙—266(3683)  
土壙—267(3684) 土壙—268(3685~3687) 土壙—274(3695)



土壇—273 (3694) 土器溜り—4 (3721・3722) 土器溜り—5 (3741)  
 土器溜り—5・6 (3758) 土器溜り—7 (3763・3770) 土器溜り—8 (3773・3774)



3778

1/5



3779

1/4



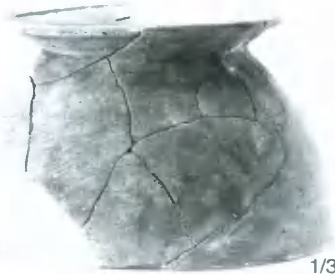
3780

1/3



3786

1/3



3781

1/3



3782

1/3



3789

1/3

土器溜り一8 (3778~3782・3786・3789)



土器溜り—8 (3790・3791)

土器溜り—9 (3805)

土器溜り—10 (3807・3808・3811・3813)



3810

1/3



3814

1/5



3820

1/5



3824

1/3



3821

1/4



3833

1/3



3832

1/3

土器溜り—10(3810) 土器溜り—11(3814)  
溝—101(3820・3821・3824・3832・3833)



1/4



3845

1/3



3841

1/3



3843

1/3



3850

1/3



3844

1/3



3852

1/5



1/3



3848

1/3



3849

1/3



3855

1/4



3856

1/5



3857

1/3



3862

1/3



3877

1/3



3887

1/3



3878

1/3



3866

1/3



3865

1/3



3882 1/3



3884 1/3



3885 1/3



3890 1/3



3893 1/3



3889 1/3



3892 1/3



3902 1/3



3900 1/3

溝—102 (3882・3884・3885・3889・3890・3892・3893)  
溝—104 (3900・3902)





3904

1/3



3907

1/5



3905

1/3



3914

1/3



3909

1/3



3916

1/3



3924

1/4

溝一104 (3904) 溝一108・109 (3905)  
水田 (3914・3916) 包含層 (3924)

溝一113 (3907) 溝一114 (3909)



水田(3917) 包含層(3925~3927・3929・3930)



3931

1/4



3939

1/4



3932

1/4



3943

1/3



3933

1/3



3947

1/3



3952

1/3



3954

1/3



3953

1/3



3960

1/3



3964

1/5



3957

1/3

包含層 (3952~3954・3957・3960・3964)





3995

1/4



4008

1/4



3983

1/3



4005

1/3



4013

1/3



4007

1/3



4060

1/3



4041

1/3



4046

1/3

包含層 (3983・3995・4005・4007・4008・4013・4041・4046・4060)



4014 1/3



4039 1/3



4040 1/3



4064 1/3



4043 1/3



4019 1/3



4070 1/3



4050 1/3



4053 1/3

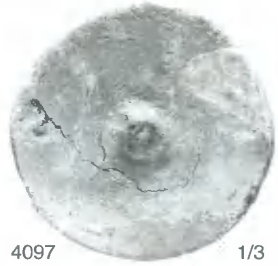


4068 1/3



4076 1/4

包含層 (4014・4019・4039・4040・4043・4050・4053・4064・4068・4070・4076)



包含層 (4072・4073・4074・4078・4080・4081・4092・4093・4097)





4096 1/3



4098 1/4



4099 1/3



4126 1/3



4127 1/3



4101 1/3



4102 1/3



4103 1/3



4114 1/3



4104 1/3



4117 1/3



4119 1/3



4129 1/3



4410 1/3

包含層 (4096・4098・4099・4101~4104・4110・4114・4117・4119・4126・4127・4129)



4136

1/4



4141

1/3



4142

1/3



4144

1/3



4149

1/3



4146

1/3



4169

1/3



4153

1/3



4161

1/3



4173

1/3



4163

1/3



4172

1/3

焼成土壙—4 (4136) 土壙—281 (4142・4144・4146・4149・4153)  
土壙—280 (4141) 土壙—282 (4161・4163・4169・4172・4173)



4176

1/3



4189

1/4



4182

1/3



4199

1/3



4184

1/3



4214

1/3



4186

1/3



4208

1/3



4217

1/3



4203

1/3



4220

1/3



4211

1/3

土壙—282 (4176)

土壙—293 (4199・4203・4208・4211)

土壙—286 (4182・4184・4186・4189)

土壙—295 (4214・4217・4220)



4223

1/3



4224

1/3



4225

1/3



4227

1/3



4226

1/3



4232

1/3



4231

1/3



4229

1/3



4236

1/3



4234

1/3



4238

1/3



4239

1/3



4242

1/3



4249

1/3

土壇—296 (4223~4227)

土壇—299 (4229・4231・4232)

土壇—300 (4234・4236・4238・4242)

土壇—301 (4249)



4245

1/3



4247

1/3



4248

1/3



4249

1/3



4250

1/3



4253

1/3



4251

1/3



4258

1/4



4260

1/4



4263

1/3



4271

1/3



4268

1/3



4273

1/3

土壙—300 (4245・4247・4248)      土壙—301 (4249)      土壙—302 (4250・4251)  
 土壙—303 (4253)      土壙—306 (4258・4260)      溝—128 (4263・4268)  
 溝—130 (4271・4273)



溝—132 (4275・4284・4285・4287～4289・4294・4297・4298・4303・4315・4317・4318)  
溝—133 (4319・4320)



4323 1/3



4324 1/3



4325 1/3



4326 1/3



4328 1/3



4344 1/3



4340 1/4



4343 1/6



4353 1/3



4371 1/3



4372 1/3



4381 1/3



4347 1/5

溝-134 4323~4326・4328)  
溝-135 (4340)

溝-138~227 (4353・4371・4372・4381)  
溝-136 (4343~4344・4347)



4388

1/3



4387

1/3



4402

1/3



4404

1/3



4406

1/3



4417

1/3



4423

1/3



4429

1/3



4427

1/3



4428

1/3



4430

1/3



4442

1/3



4444

1/3



4452

1/3



4454

1/3



4455

1/3



4456

1/3



4457

1/3



4461

1/3

溝一138~227 (4387・4388)

包含層 (4402・4404・4406・4417・4423・4427~4430・4442・4444・4452・4454~4457・4461)





包含層 (4468・4472・4476・4480・4481・4486・4487・4495・4499・4505・4513・  
4516・4518・4525・4526・4528・4533・4537・4538)



包含層(4557・4565・4568・4599・4606~4608・4611・4613・4618・4625・4627・4639)



包含層 (4640・4645・4654・4655・4659・4662・4664・4670・4675・4677・4679・4680・4706)



4723 1/3



4726 1/3



4729 1/3



4730 1/3



4762 1/3



4763 1/3



4785 1/3



4764 1/3



4776 1/3



4786 1/3



4777 1/3



4775 1/3



4788 1/3



4780 1/3



4778 1/3



4787 1/3



4784 1/3



4779 1/3



4791 1/3



4790 1/3



4826 1/3



4794 1/3



4793 1/3

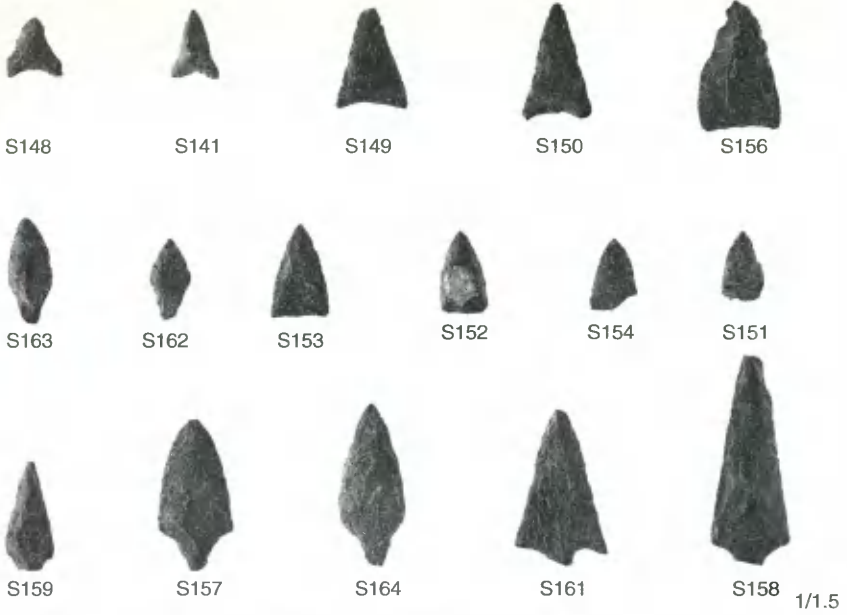


4825 1/3

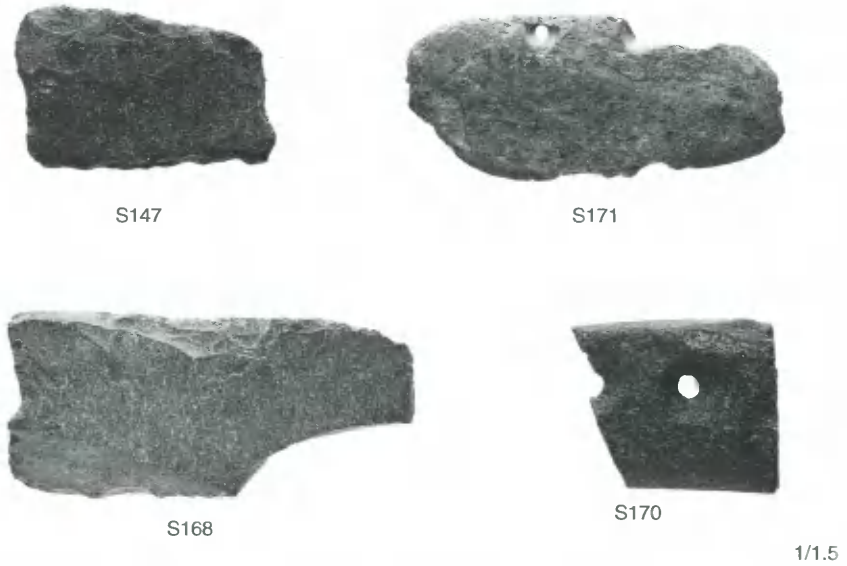
井戸—4 (4723・4726・4729・4730) 土壙—315~317 (4762~4764) 土壙—320 (4775~4779)  
土壙—326 (4780) 土壙—331 (4784~4788) 土壙墓—13 (4790・4791)  
土壙墓—15 (4793・4794) 溝—294・295 (4825・4826)



溝—320 (4870・4877・4878・4893・4894) 溝—322 (4902)  
包含層 (4905・4990・4992)



中屋調査区出土石製品 1



中屋調査区出土石製品 2



S182



S185



S175



S137



S174

1/3

中屋調査区出土石製品 3



J34



J33



J36



J35



S191



S190



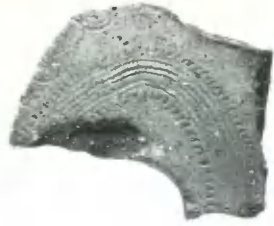
S140

1/1

中屋調査区出土石製品 4



C101



C100



C102



C98



C97

1/1.5

中屋調査区出土土製品 1



C99



C109



C115



C103



C148



C146



C96

1/1.5

中屋調査区出土土製品 2





C179



C180



C118



C119



C141



C140



C106



C104

1/2

中屋調査区出土土製品 3



C135



C137



C132



C130



C122



C192



C187



C162



C183



C184



C158



C181

1/2

中屋調査区出土土製品 4



C163



C157



C156



C159



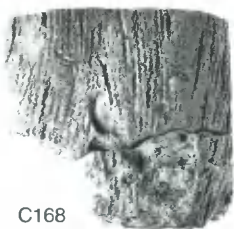
C204

1/2

中屋調査区出土瓦 1



C154



C168



C150



C153



C155



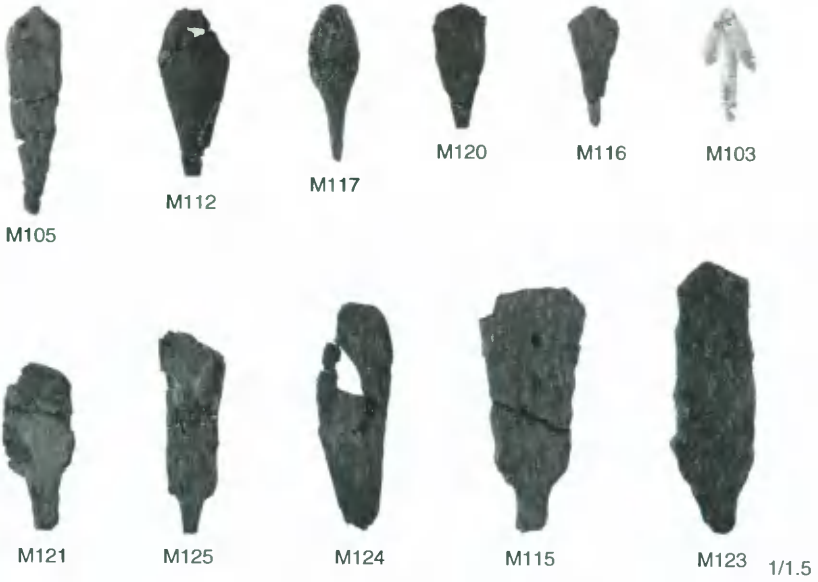
C151



C169

1/6

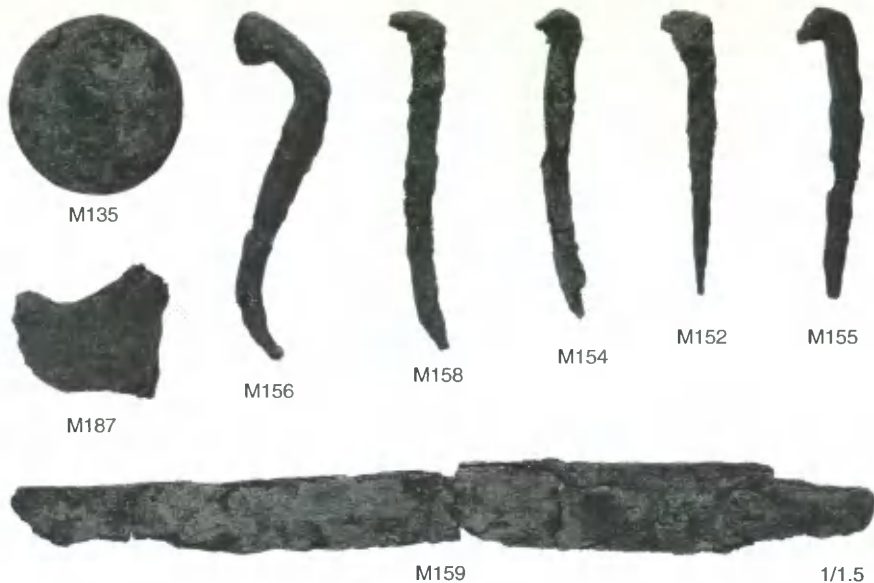
中屋調査区出土瓦 2



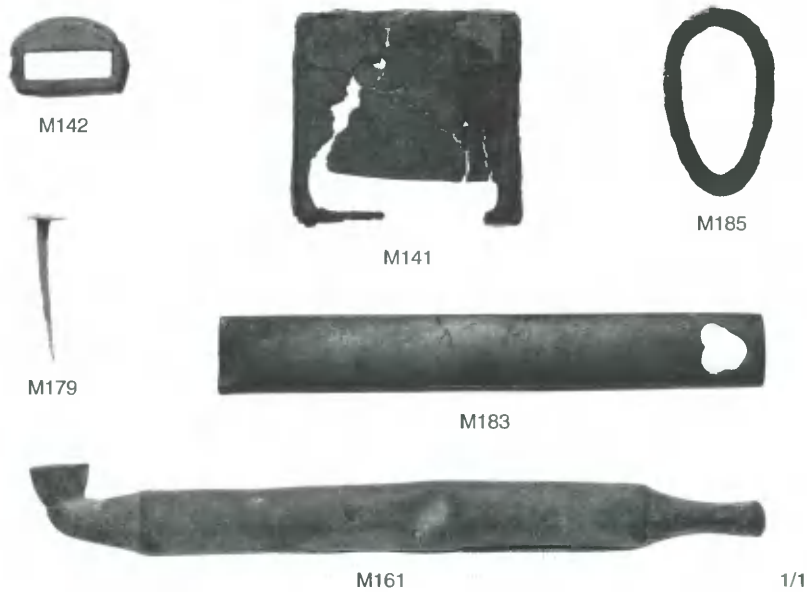
中屋調査区出土金属製品 1



中屋調査区出土金属製品 2



中屋調査区出土金属製品 3



中屋調査区出土金属製品 4



M167



M162



M163



M162



M165



M166



M143



M188



M189



M190



M191



M192



M193



M194



M195



M196



M197



M198



M199



M200



M201



M202



M203



M204



M205



M206



M207



M208



M209



M210



M211



M212



M213



M214



M215



1/1.5



W4



W8

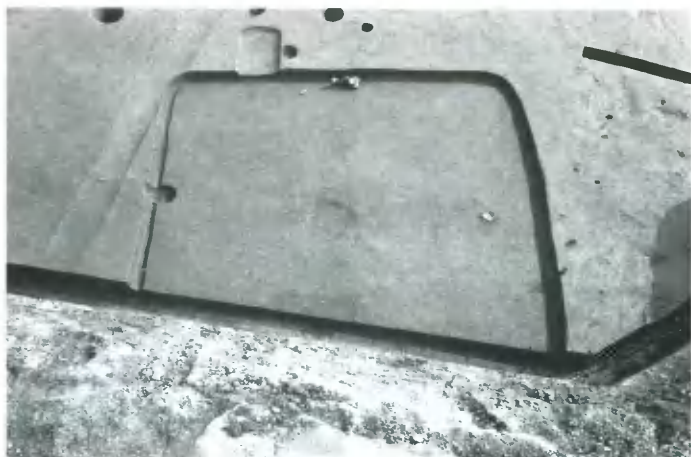


W10



W7

1/1.5



1. 竪穴住居-3  
(北西から)

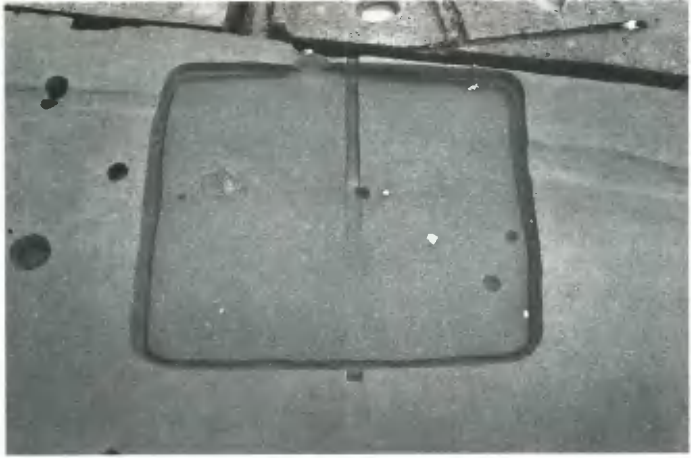


2. 竪穴住居-4  
(東から)

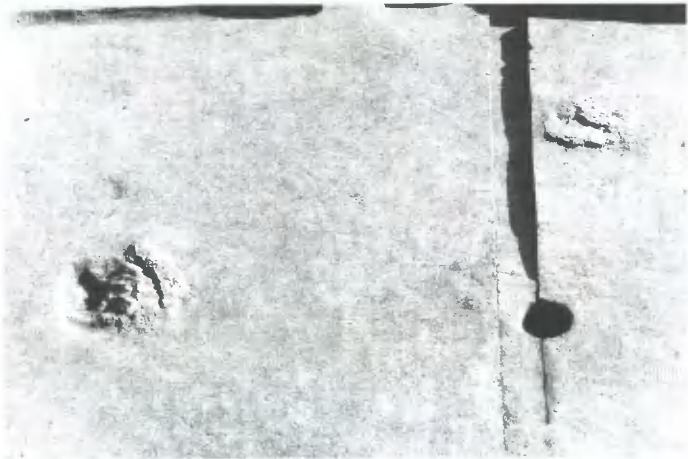


3. 竪穴住居-4・  
6・7・8・9  
(北から)

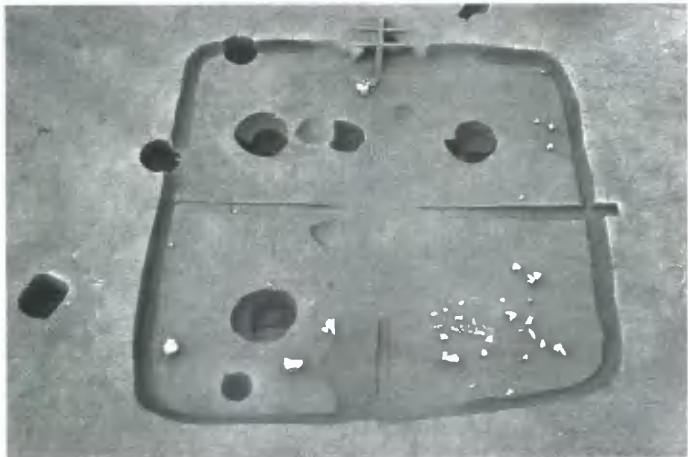
1. 竪穴住居一5  
(南西から)



2. 竪穴住居一5  
焼土面  
(南西から)



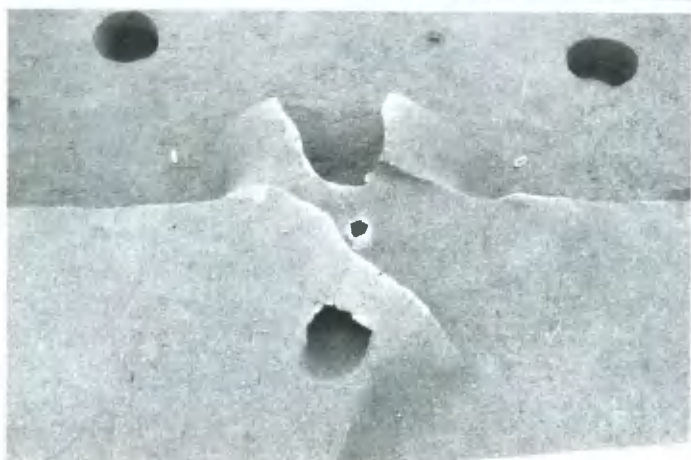
3. 竪穴住居一6  
(南東から)







1. 竪穴住居-7  
(南東から)

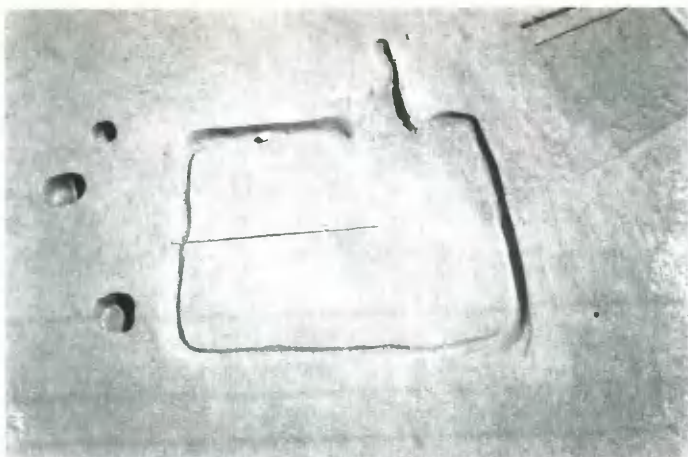


2. 竪穴住居-7  
カマド近接  
(北上から)



3. 竪穴住居-7  
カマド近接  
(南東から)

1. 竪穴住居-8  
(西から)



2. 竪穴住居-9  
(西から)



3. 竪穴住居-9  
カマド  
(北上から)





1. 竪穴住居-10  
(北東から)



2. 竪穴住居-10  
カマド近接  
(北東から)



3. 竪穴住居-14  
(西から)

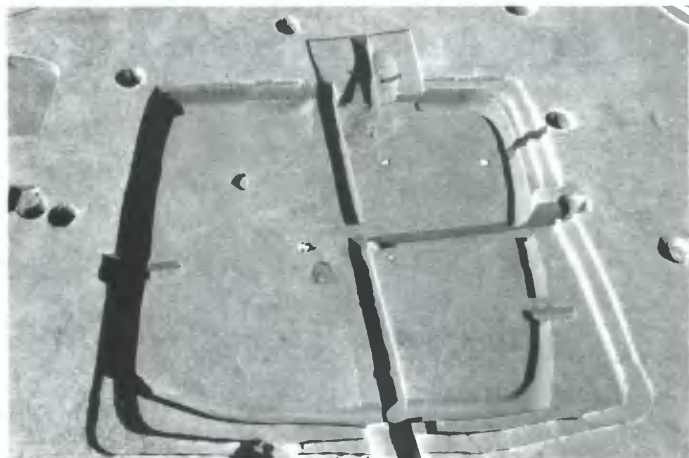
1. 竪穴住居-15~19  
(南東から)



2. 竪穴住居-15  
(南から)



3. 竪穴住居-16  
(南から)





1. 竪穴住居-17  
(南から)

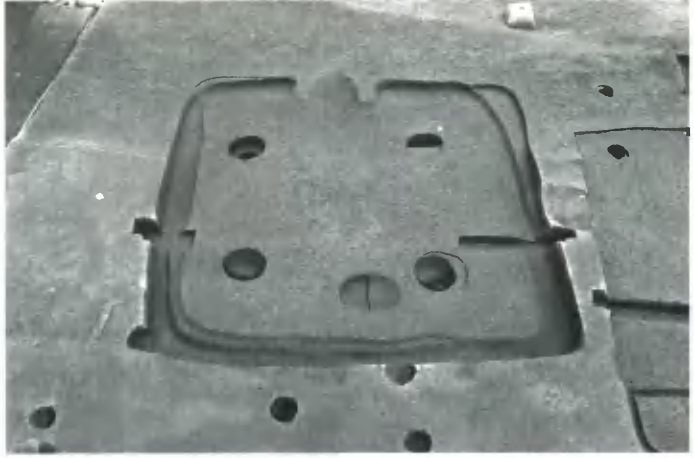


2. 竪穴住居-18  
(東から)



3. 竪穴住居-18  
カマド近接  
(東上から)

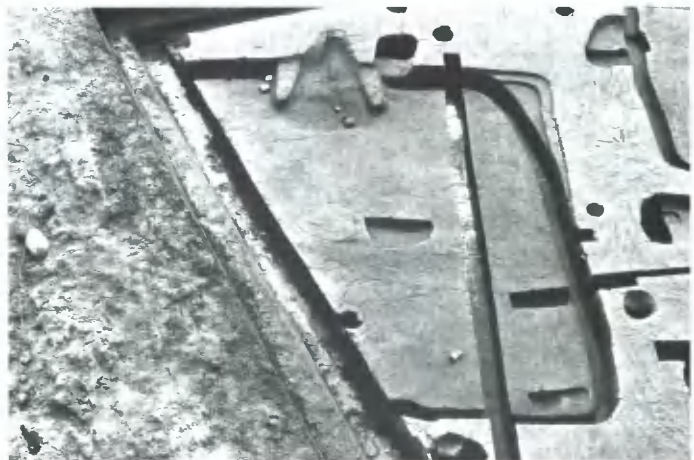
1. 竪穴住居-23  
(南から)

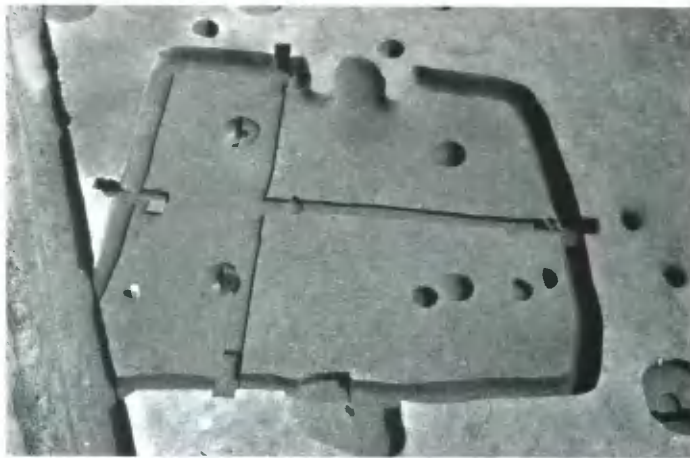


2. 竪穴住居-25~30  
(南から)



3. 竪穴住居-29  
(東から)





1. 竪穴住居-30  
(南から)



2. 竪穴住居-38  
紡錘車出土状況  
(南西から)



3. 竪穴住居-40・  
41・42  
(南から)

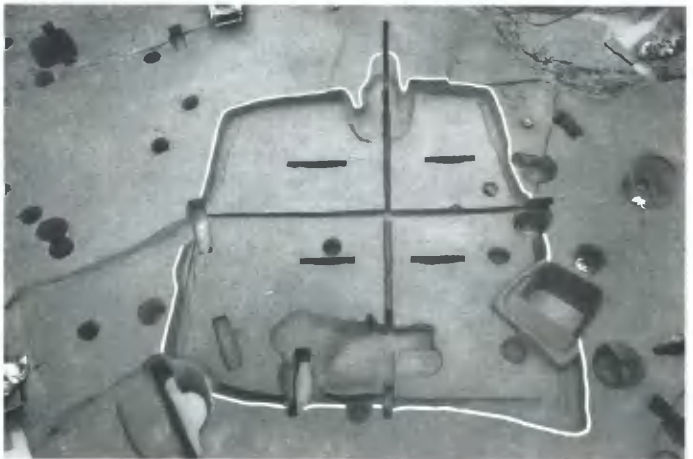
1. 竪穴住居-42  
(西から)



2. 竪穴住居-42  
カマド近接  
(南から)



3. 竪穴住居-45  
(北から)







1. 竪穴住居一  
47～50  
(南から)



2. 竪穴住居一58  
(南東から)

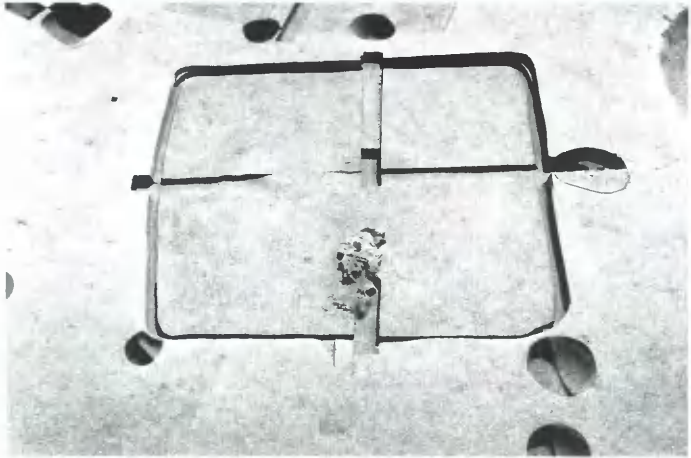


3. 竪穴住居一58  
カマド近接  
(南西から)

1. 竪穴住居-66  
(南から)



2. 竪穴住居-76  
(西から)



3. 竪穴住居-  
70~73・78~83  
(北から)

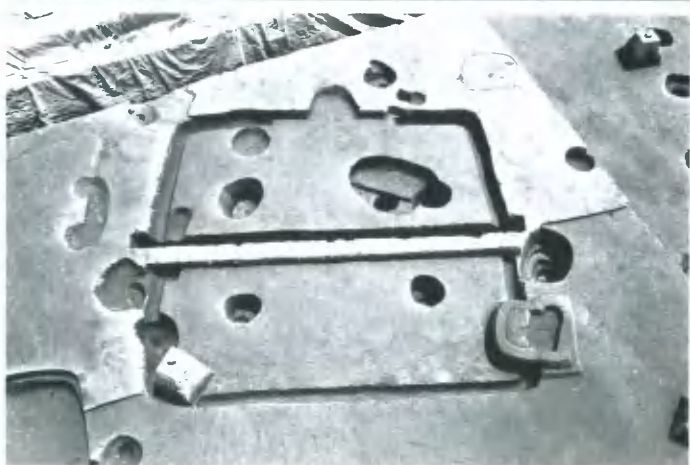




1. 竪穴住居-86  
(南東から)



2. 竪穴住居-86  
カマド近接  
(南東から)

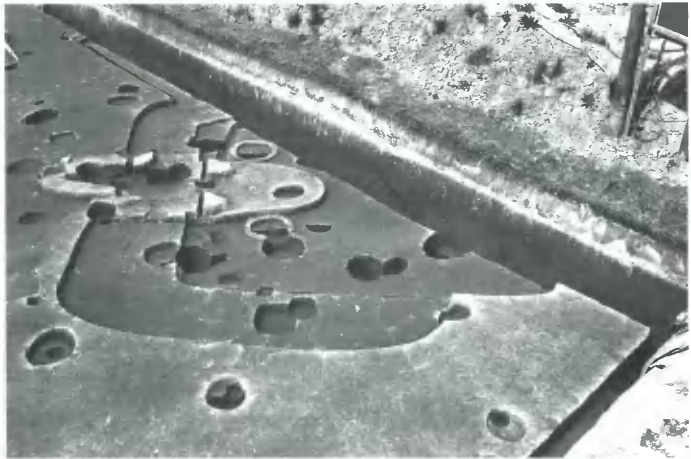


3. 竪穴住居-89  
(西から)

1. 竪穴住居-90  
(南から)



2. 竪穴住居-92・93  
(南から)



3. 竪穴住居-93  
カマド近接  
(東から)

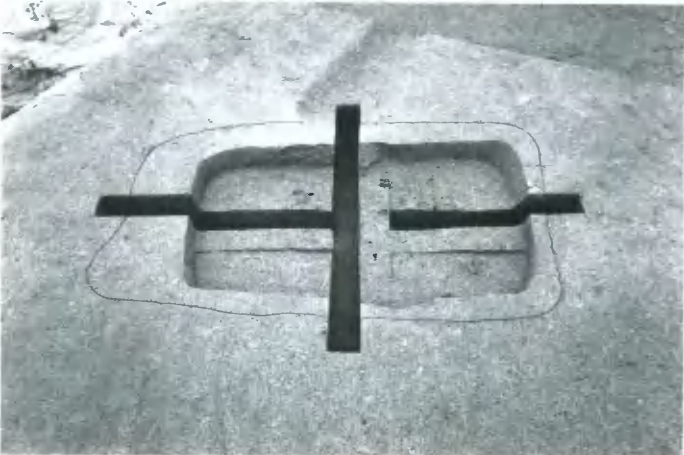




1. 井戸-1  
(南から)



2. 焼成土壇-3  
(南から)

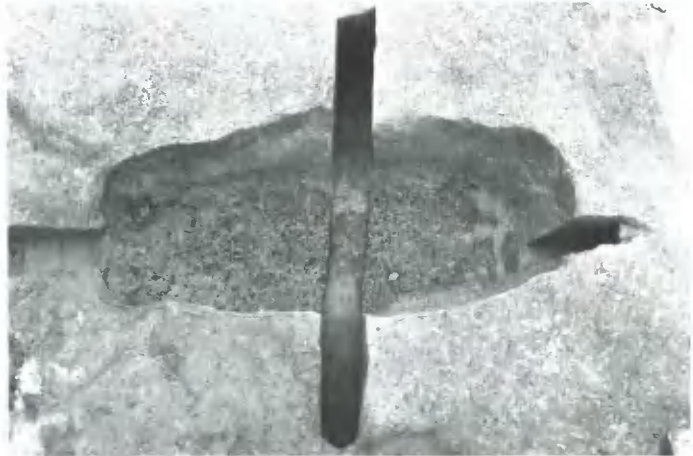


3. 焼成土壇-4  
(東から)

1. 焼成土壇—5  
(北西から)



2. 焼成土壇—6  
(東から)



3. 焼成土壇—6・  
溝—29  
(東から)





1. 溝-1・2北半  
(南から)



2. 溝-1・2南半  
(南西から)



3. 溝-1・2  
土層断面  
(南から)

1. 水田-1  
〈M1 I区〉  
(南西から)



2. 水田-1  
〈M1 Ⅲ区〉  
(南から)



3. 水田-1  
〈P1区〉  
(南から)







1. 水田-2  
〈M1Ⅴ区〉  
(北から)



2. 水田-2  
〈M1Ⅲ区〉  
(北から)

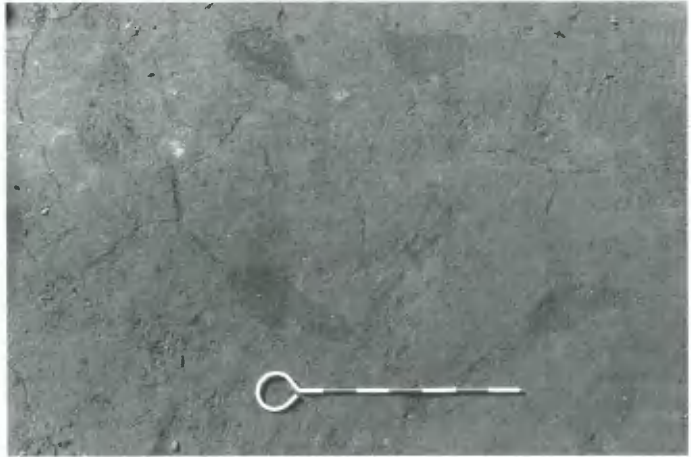


3. 水田-2  
〈A1北区〉  
(北から)

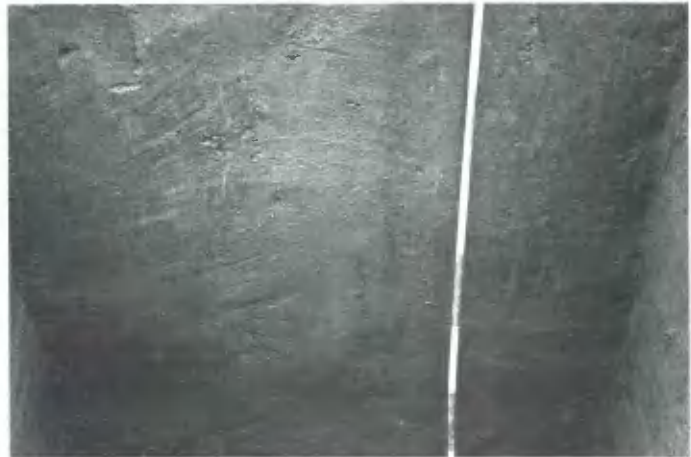
1. 水田-2畦畔断面  
〈P2区〉



2. 水田-1足跡



3. 水田-1杭痕跡

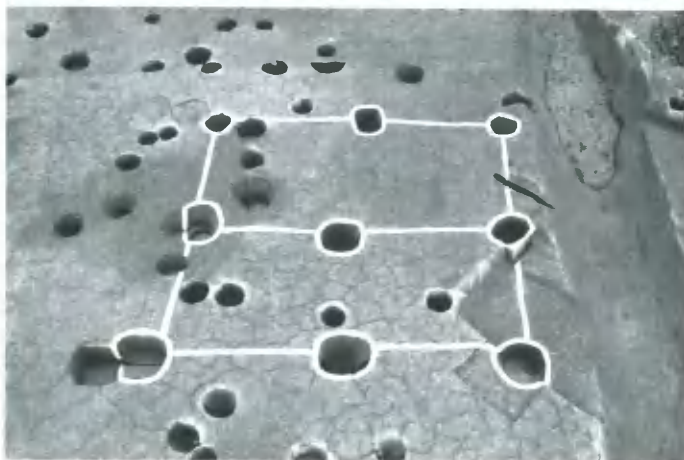




1. 掘立柱建物-1  
(南から)



2. 掘立柱建物-1・2  
(東から)



3. 掘立柱建物-10  
(南から)

1. 掘立柱建物-11  
(北から)



2. 掘立柱建物-15  
(南西から)



3. 掘立柱建物-17  
(南から)





1. 土壙-4  
(東から)



2. 土器埋納墳-1  
(北東から)



3. 土器埋納墳-2  
(西から)

1. 土器埋納壙-3  
(南から)

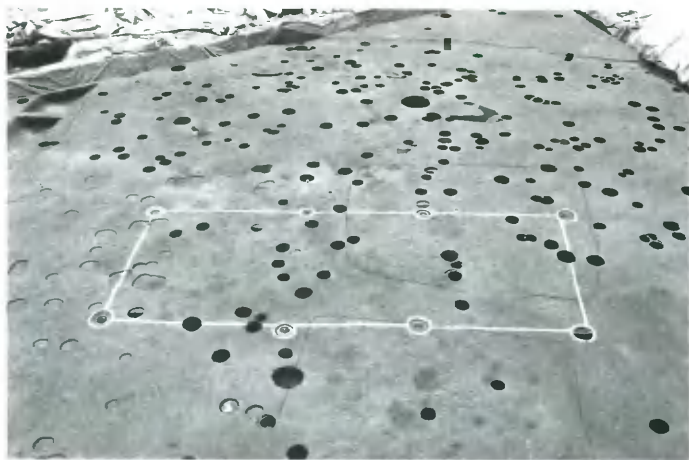


2. 土器埋納壙-3  
(上から)

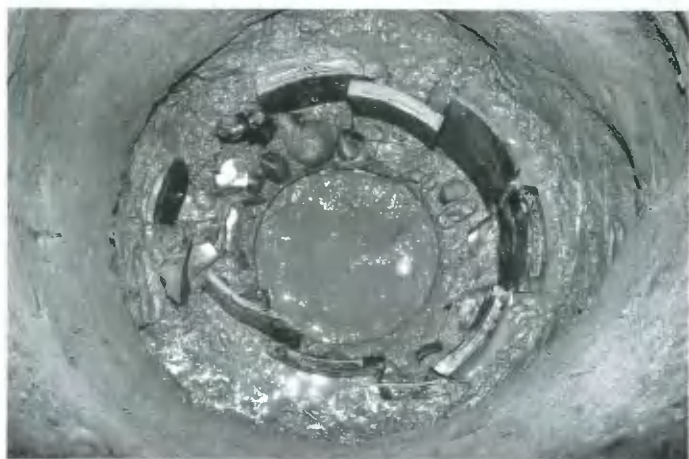


3. 溝-38  
獣骨出土状況  
(北から)





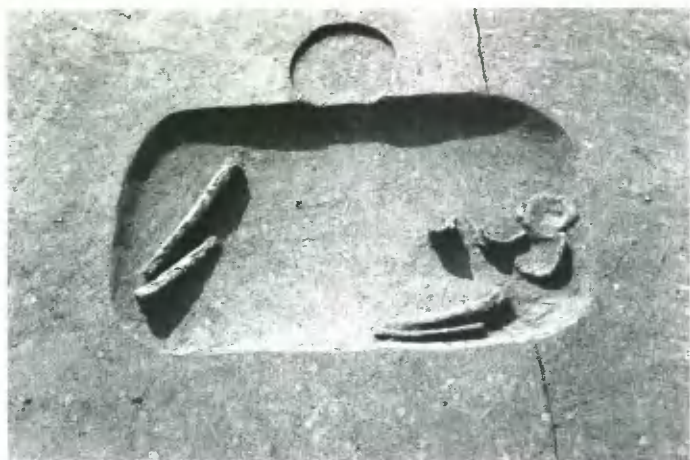
1. 掘立柱建物-22  
(南から)



2. 井戸-2  
(南上から)



3. 井戸-3  
(南から)



1. 土壙墓-1  
(東から)



2. 土壙-7  
(南から)



3. 土壙-11  
(南から)





1. 土壙-12  
(南から)



2. 土壙-12木槨近接  
(南から)



3. 土壙-14  
(東から)

1. 土壙-15  
(南東から)



2. 土壙-19  
(西から)



3. 土壙-23  
(北から)





1. 中・近世遺構全景  
(南西から)



2. 溝-54  
(西から)



3. 溝-61・  
井戸-3  
(北東から)



1

1/6



26

1/3



27

1/3



22

1/3



31

1/3



38

1/4

溝—1・2(1) 溝—5(22・26) 包含層(27・31・38)



40 1/3



42 1/3



43 1/3



44 44



46 1/3



51 1/3



55 1/3



64 1/4



58 1/3



67 1/3



68 1/4

竪穴住居—3(40) 竪穴住居—4(42~44・46) 竪穴住居—5(51・55)  
竪穴住居—6(58) 竪穴住居—9(64・67・68)



69

1/3



70

1/3



71

1/3



72

1/3



73

1/3



74

1/3



77



75

1/3



84

1/3



78

1/4

91

1/3



92

1/3



93

1/3



94

1/3

竪穴住居—10 (69~75・77) 竪穴住居—13 (78) 竪穴住居—15 (84)  
竪穴住居—20 (91~94)



97

1/3



98

1/3



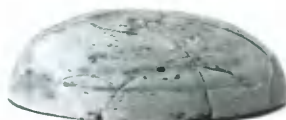
100

1/3



102

1/3



111

1/3



108

1/3



144

1/3



151

1/3



156

1/3



157

1/3



152

1/3



116

1/4



159

1/3

竪穴住居—23(97・98・100・102) 竪穴住居—27(108) 竪穴住居—28(111)  
 竪穴住居—34(116) 竪穴住居—48(144) 竪穴住居—52(151)  
 竪穴住居—53(152) 竪穴住居—56(156・157・159)



竪穴住居—58(162~167・173) 竪穴住居—60(180・181)  
竪穴住居—61(187・196) 竪穴住居—68・69(217・220)





竪穴住居—75 (246) 竪穴住居—79 (253~256・260)  
 竪穴住居—80 (261) 竪穴住居—90 (276・277)



281

1/3



288

1/4



289

1/3



294

1/4



297

1/4



302

1/3



308

1/4



310

1/3



311

1/3



312

1/4



315

1/3



316

1/4



320

1/3



321

1/3



343

1/3



323

1/4



326

1/3



330

1/3



347

1/3



350

1/3



351

1/3



353

1/3

溝-12(320・321・323・326) 溝-13(330) 溝-16(343) 溝-20(347)  
 溝-28(350・351・353)



354

1/3



360

1/3



362

1/3



365

1/3



366

1/3



370

1/3



375

1/3



403

1/3



397

1/3



402

1/3



406

1/4



407

1/3



408

1/3



409

1/3



413

1/3



410

1/4



412

1/4



416

1/3



420

1/3



421

1/3



417

1/3



422

1/3



428

1/3



418

1/3



424

1/3



425

1/3



429

1/3



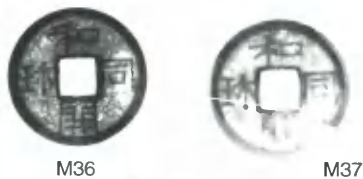
439

1/3



444

1/3



土器埋納壇一(463・464) 土器埋納壇二(465) 土器埋納壇三(466・467・M36～M39)  
土壇一(471・472・474～476・480～485)





493 1/3



484 1/3



508 1/3



496 1/3



497 1/3



499 1/3



507 1/3



517 1/3



519 1/3



522 1/3



532 1/3



525 1/3



533 1/3

たわみ—3 (493・494・496・497・499・507・508) 溝—38 (517・519)  
溝—40 (522・525) 溝—46 (532・533)



540

1/3



541

1/3



545

1/3



557

1/3



557

1/3



548

1/3



564

1/3



566

1/3



579



577



558

1/3



570

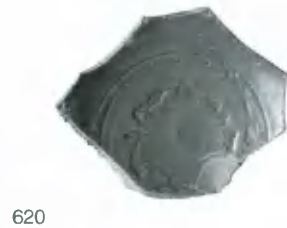
1/3



572

1/3

包含層 (540・541・545・548・557・558・564・566・570・572・577・579)



井戸—3(592)、土壙—6(598) 土壙—7(599~605)  
土壙—14(612~616) 土壙—15(617・620)



621

1/6



622

1/6



625

1/6



627

1/6



629

1/6



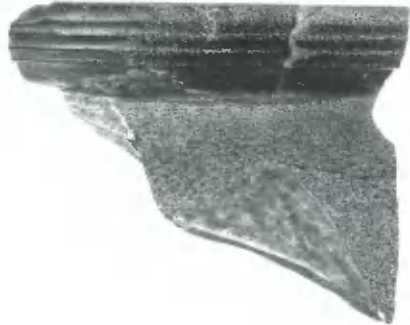
634

1/6



635

1/6



639

1/4



636

1/3



643

1/3



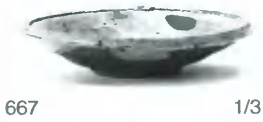
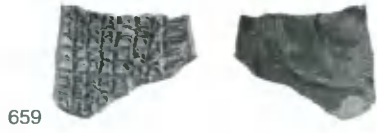
644

1/3



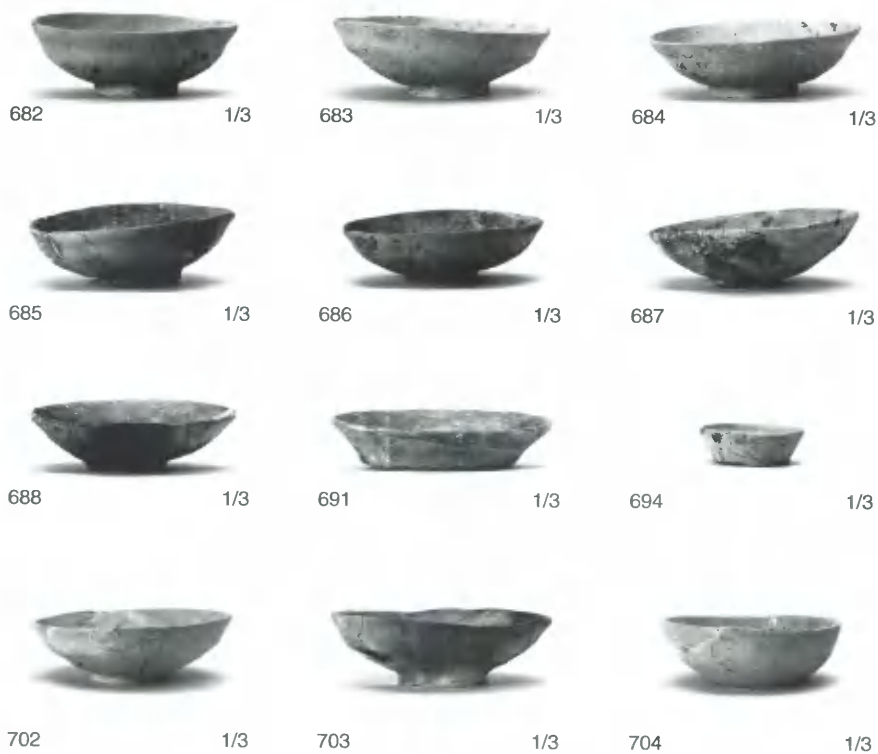
645

1/3





664~673



溝—54 (664~673) 溝—55・56 (682・688・694) 溝—56 (683~687)  
溝—57 (691) 溝—107 (702~704)



709 1/3



711 1/3



712 1/3



717 1/3



718 1/3



719 1/3



721 1/3



725 1/3



727 1/3



733 1/4



734 1/3



741

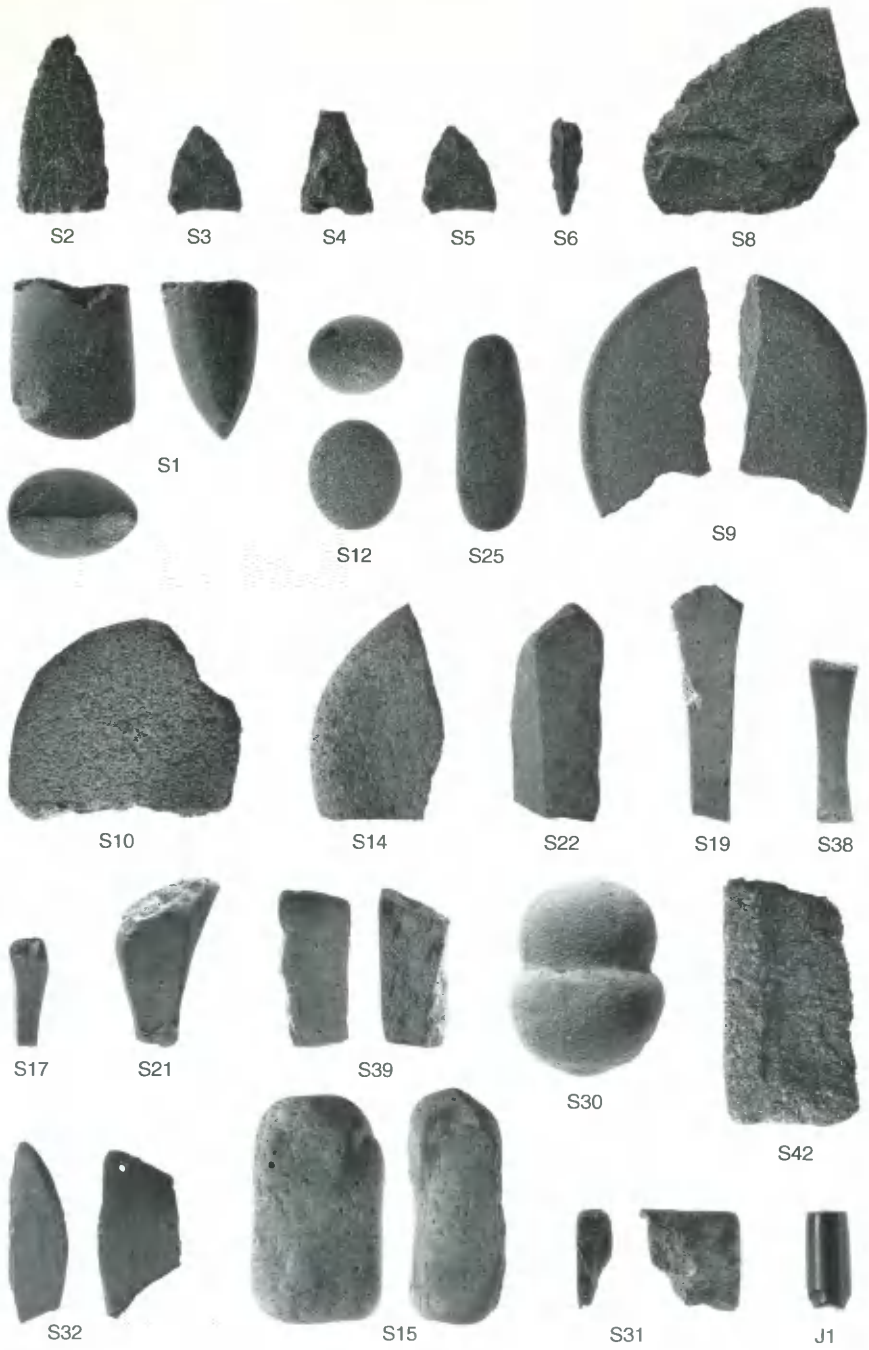


737 1/4



739 1/3

包含層 (709・711・712・717~719・721・725・727・733・734・737・739・741)

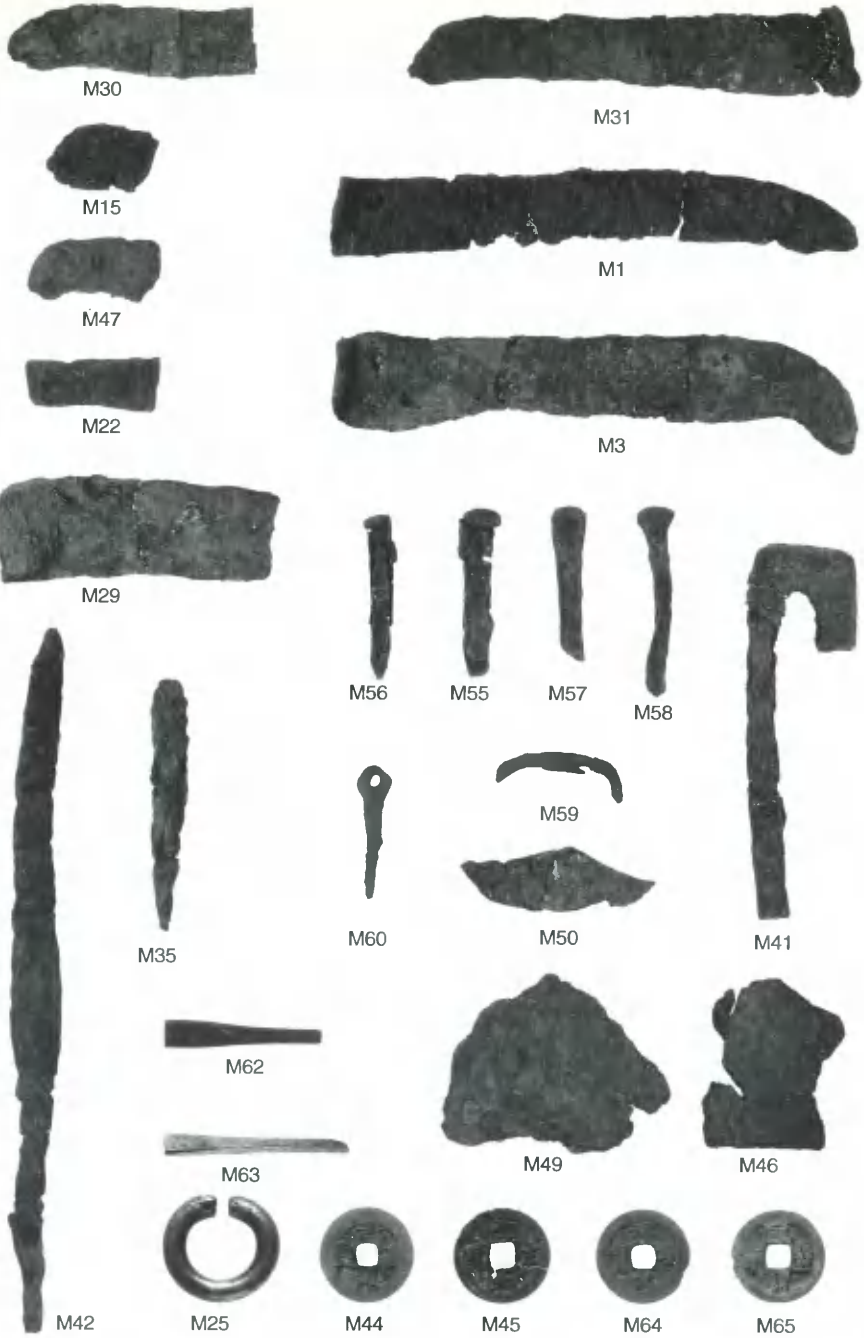


高田調査区出土石製品 (S1 1/1.5、S2~S6・S8・J1 1/1  
 S10・S12・S17・S19・S21・S25・S32・S38・S38 1/3、S14・S15・S22 1/4)

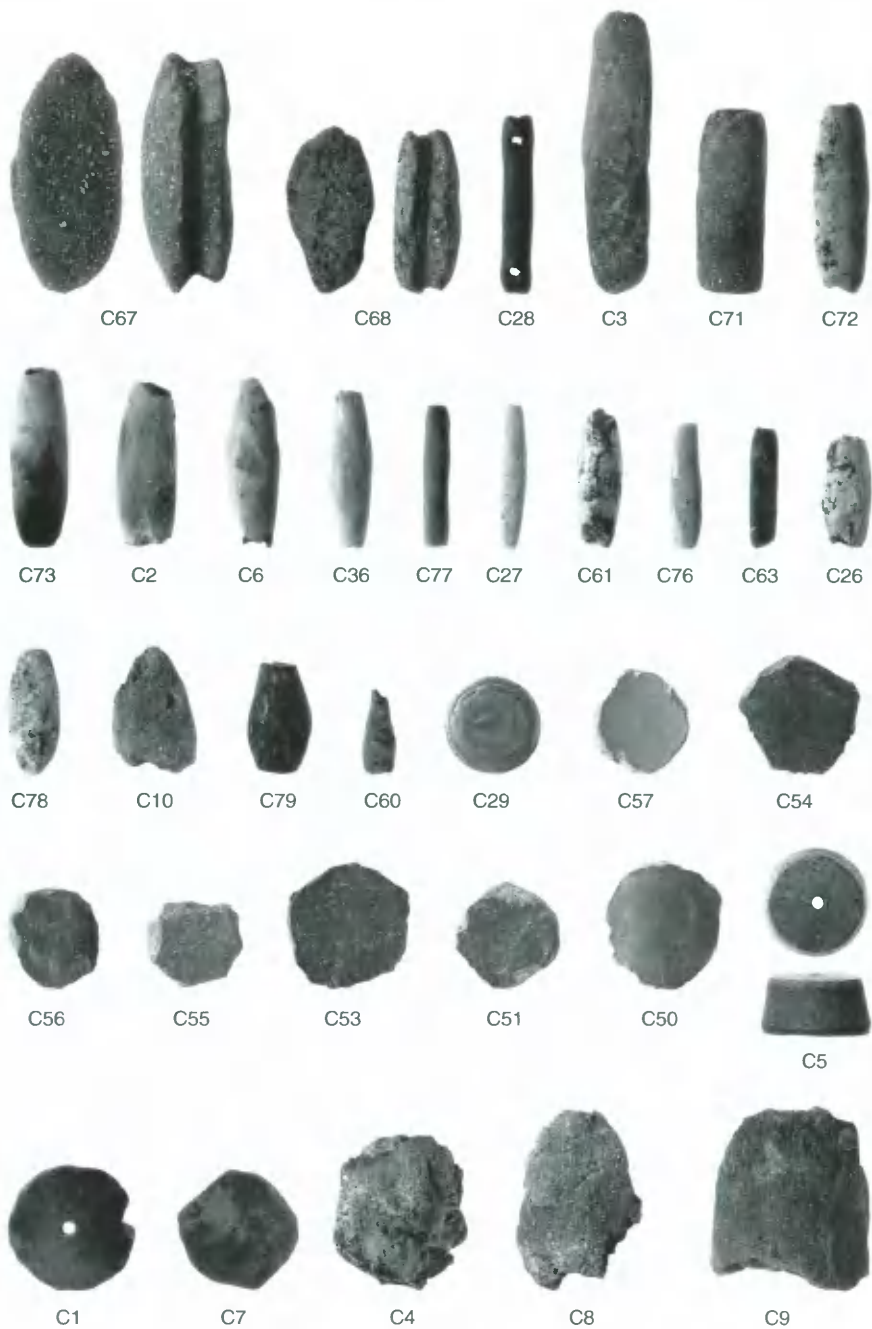




高田調査区出土金属製品(1) (M6・M35 2/3、以外1/2)



高田調査区出土金属製品(2) (M25・M45・M46・M65・M66 2/3、以外1/2)



高田調査区出土土製品(1) (C29・C50・C51・C53~C57 1/3、以外1/2)



C17



C15



C66



C16



C37



C80



C40



C31



C65



C30



C32



C41



C34



C42



C64



C18



C47



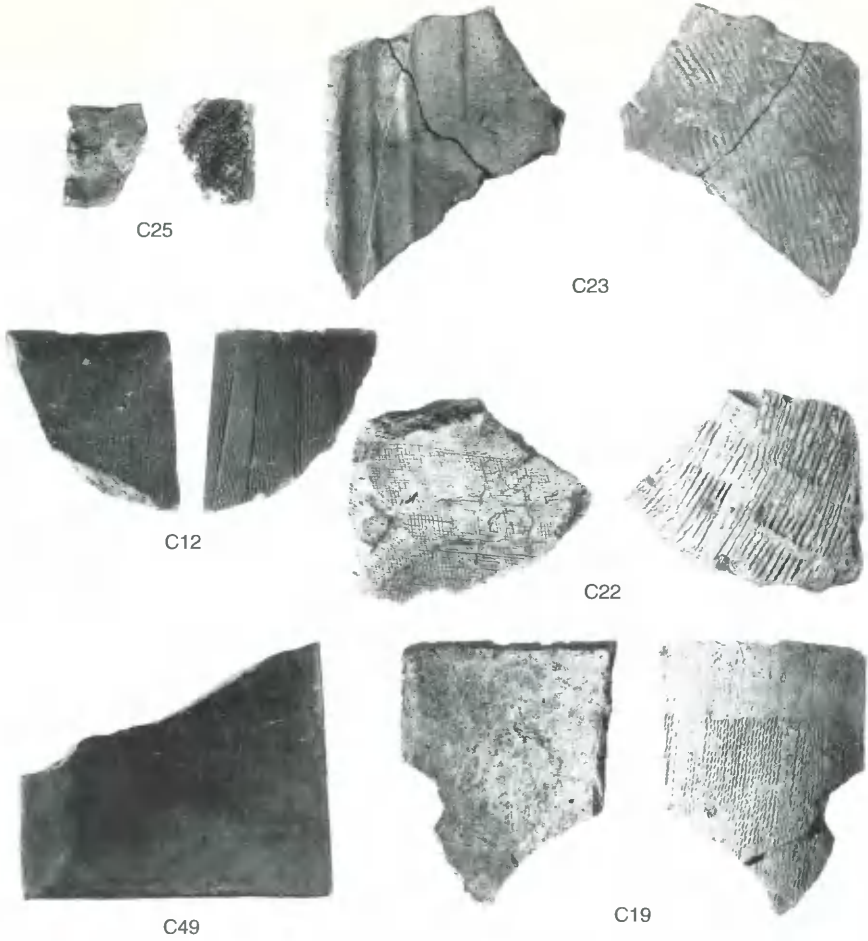
C48



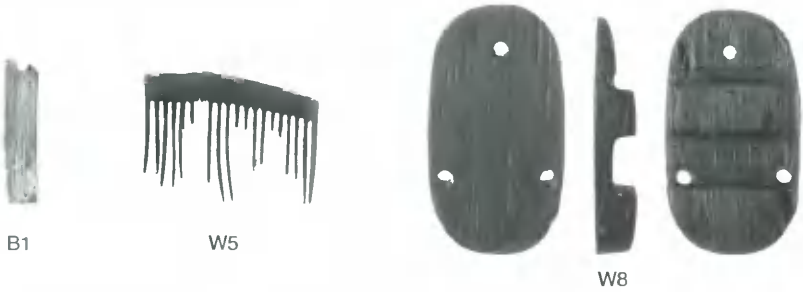
C14



C24



高田調査区出土土製品(4) (1/4)



高田調査区出土木製品・骨製品 (B1 1/1.5、W5 1/2、W8 1/3)

報告書抄録

ふりがな	つでらいせき4						
書名	津寺遺跡4						
副書名	山陽自動車道建設に伴う発掘調査						
巻次	14						
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	116						
編著者名	亀山行雄 大橋雅也 浅倉秀昭 井上 弘 江見正己 岡田 博 澤山孝之 柴田英樹 澁田東美 杉山一雄 高畑知功 中野雅美 二宮治夫 平井泰男 正岡陸夫 光永真一 森 宏之 渡邊(久保)恵里子						
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター						
所在地	〒701-01 岡山県岡山市西花尻1325-3			TEL 086-293-3211			
発行機関	岡山県教育委員会						
所在地	〒700 岡山県岡山市内山下2-4-6			TEL 086-224-2111			
発行年月日	西暦 1997年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	調査期間	調査原因
つでら 津寺	おかやましつでら 岡山市津寺	33201		34度 40分 24秒	133度 49分 20秒	19880401~ 19920430 (掲載分)	22,191 (掲載分) 山陽自動車 道建設に伴 う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
津寺	集落 水田 官衙 墓	縄文 弥生	包含層 竪穴住居9軒 掘立柱建物2棟 袋状土壇11基 土器棺墓3基 土壇48基 土器溜り1基 溝13条 水田	硬玉製大珠 弥生土器・石製品 (石包丁・石鏃・石斧 ほか)・土製品(分銅 形土製品・紡錘車ほ か)・金属製品		弥生時代から中・近世に かけての大規模な集落遺 跡	
		古墳	竪穴住居147軒 掘立柱建物2棟 井戸1基 焼成土壇13基 土壇35基 土器溜り9基 溝50条 水田	土師器・須恵器・石 製品(砥石)・土製品 (土錘・羽口・埴輪) ・金属製品(紡錘車・ 銅鏃・鉄鏃・鉄鎌・ 鉄斧ほか)・玉(勾玉 ・管玉・子持勾玉)		多量の非在地(畿内・四 国・山陰)系土器 古墳時代後期の鍛冶集落	
		古代	掘立柱建物38棟 焼成土壇4基 土器埋納壇3基 土壇36基 溝173条	土師器・須恵器・石 製品(砥石)・土製品 (土錘・瓦)・金属製 品(鉄鏃・鉄釘・帯 金具・銅銭)		大形建物と多量の官衙関 連遺物 二彩小壺や袍衣壺出土	
		中世~ 近世	掘立柱建物14棟 井戸6基 土壇墓7基 土壇49基 溝226条	土師器・陶器(備前 焼・亀山焼・常滑焼 ・瀬戸・東播系ほか) ・磁器(青磁・白磁 ・染付)・石器(砥石) ・土製品(土錘)・ 金属製品(鉄刀・鉄 釘・銅銭ほか)・木 製品(椀・折敷・下 駄・櫛ほか)		本書は5分冊予定のうち の第4分冊 表の数値等は掲載分のみ	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116

## 津寺遺跡 4

山陽自動車道  
建設に伴う発掘調査

14

(第2分冊)

1997年3月15日 印刷

1997年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 日本道路公団中国支社岡山工事事務所  
岡山県教育委員会

印刷 岡山県農協印刷株式会社